『G』の異世界漂流日記

アゴン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、『Ｇ』の日記の主人公が時空振動に巻き込まれて様々な世界で冒険する短編集である。

第７弾は鬼滅の刃編

※この主人公は『Ｇ』の日記（再世篇終了時）のスペックとなっております。

主人公は再生篇を経験している為、度々比較描写があります。その事を留意して下さると有り難いです。

何が何だか分からないという方は『Ｇ』の日記を呼んで下さると嬉しいです。

尚、勘違い要素は若干としてあります。

追記

第４弾以降のボッチのスペックは『Ｇ』の日記(???終了時）のスペックとなっております。

目次

ＩＳ編

その１ 1
その２ 8
その３ 16
その４ 21
その５ 28
その６ 36
その７ 42
その８ 49
その９ 56
その１０ 63
その１１ 68
その１２ 77
その１３ 84
その１４ 90
その１５ 94
その１６ 99
その１７ 103
その１８ 107
その１９ 112
その２０ 121
その２１ 128
その２２ 138
その２３ 143

その24 149
その25 155
その26 162
その27 170
その28 176
その29 182
その30 190
その31 198
その32 210
その33 217
その34 222
◇　登場人物、並びに登場ＩＳの紹介 227
その35 238
その36 245
その37 252
その38 257
その39 265
その40 270
その41 275
その42 283
その43 293
その44 303
その45 309
その46 317
後日談　その1 324

後日談その2 336
後日談　その3 342
後日談　その4 351
クロスアンジュ編
その1 358
その2 365
その3 373
その4 381
その5 389
その6 394
その7 401
その8 410
その9 418
その10 426
その11 434
その12 439
その13 449
その14 456
その15 464
その16 475
その17 480
その18 486
その19 493
その20 499
その21 504

その22 510
その23 517
その24 523
戦姫絶唱シンフォギア
その1 529
その2 537
その3 544
その4 549
その5 554
その6 560
その7 565
その8 570
その9 576
その10 582
その11 589
その12 594
その13 599
その14 604
その15 608
その16 612
その17 619
その18 623
その19 627
その20 630
その21 633

その18 794
その17 786
その16 780
その15 775
その14 768
その13 762
その12 757
その11 751
その10 745
その9 738
その8 732
その7 724
その6 717
その5 711
その4 703
その3 696
その2 689
その1 682
ViVid Strike!編 674
その27 668
その26 663
その25 656
その24 649
その23 642
その22

その19 800
その20 814
その21 821
その22 827
その23 837
その24 844
その25 852
その26 860
その27 866
その28 872
その29 877
ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか
その1 884
その2 890
その3 903
その4 912
その5 918
その6 926
その7 936
その8 943
その9 950
その10 956
その11 969
その12 981
その13 989

その7 1172
その6 1165
その5 1156
その4 1148
その3 1142
その2 1135
その1 1130
Fate／episode B
その30 1123
その29 1113
その28 1099
その27 1089
その26 1083
その25 1076
その24 1070
その23 1063
その22 1056
その21 1050
その20 1038
その19 1029
その18 1021
その17 1013
その16 1007
その15 1002
その14 995

その32	1415
その31	1408
その30	1398
その29	1388
その28	1379
その27	1368
その26	1357
その25	1345
その24	1335
その23	1327
その22	1317
その21	1308
その20	1299
その19	1288
その18	1276
その17	1269
その16	1258
その15	1245
その14	1236
その13	1225
その12	1216
その11	1209
その10	1201
その9	1193
その8	1183

前編 …… 163
その57 …… 916
その56 …… 311
その55 …… 622
その54 …… 161
その53 …… 216
その52 …… 605
その51 …… 159
その50 …… 915
その49 …… 891
その48 …… 581
その47 …… 157
その46 …… 015
その45 …… 621
その44 …… 555
その43 …… 154
その42 …… 315
その41 …… 331
その40 …… 522
その39 …… 151
その38 …… 415
その37 …… 005
その36 …… 149
その35 …… 514
その34 …… 871
その33 …… 478
その32 …… 147
その31 …… 014
その30 …… 611
その29 …… 450
その28 …… 144
その27 …… 114
その26 …… 341
その25 …… 423

その57　後編　1648
その58　1661
その59　1670
鬼滅の刃編
その1　1686
その2　1695
その3　1703
その4　前編　1711
その4　後編　1722
その5　1731
その6　1746
その7　1752
Fate／Grand Order+1
その1　1764
その2　1775
その3　1786
その4　1795
その5　1804
その6　特異点F　1814
その7　特異点F　1825
その8　特異点F　1836
その9　特異点F　1852
その10　1868
その11　第一特異点　1876
その12　第一特異点　1883

その13　第一特異点　18
その14　第一特異点　19
その15　第一特異点　19
その16　第一特異点　19
その17　第一特異点　19
その18　第一特異点　19
その19　第一特異点　19
その20　第一特異点　19
その21　19
その22　19
その23　第二特異点　19
その24　第二特異点　19
その25　第二特異点　20
その26　第二特異点　20
その27　第二特異点　20
その28　第二特異点　20
その29　第二特異点　20
その30　第二特異点　20
その31　20
その32　20
その33　第三特異点　20
その34　第三特異点　20
その35　第三特異点　20
その36　第三特異点　21
その37　第三特異点　21

その38　第三特異点　121
その39　第三特異点　131
その40　第三特異点　139
その41　第三特異点　151
その42　第三特異点　165
その43　第三特異点　181
その44　第三特異点　190
その45　　200
その46　　209
その47　　214
その48　　224
その49　第四特異点　230
その50　第四特異点　238
その51　第四特異点　246
その52　第四特異点　253
その53　第四特異点　258
その54　第四特異点　267
その55　第四特異点　277
その56　第四特異点　285
その57　第四特異点　292
その58　第四特異点　299
その59　第四特異点　310
その60　第四特異点　318
その61　第四特異点　323
その62　　340

その63	
その64	
その65	
その66	第五特異点
その67	第五特異点
その68	第五特異点
その69	第五特異点
その70	第五特異点
その71	第五特異点
その72	第五特異点
その73	第五特異点
その74	第五特異点
その75	第五特異点
その76	第五特異点
その77	第五特異点
その78	第五特異点
その79	第五特異点
その80	第五特異点
その81	第五特異点
その82	第五特異点
その83	第五特異点
その84	
その85	
その86	
その87	

その１１２	第六特異点
その１１１	第六特異点
その１１０	第六特異点
その１０９	第六特異点
その１０８	第六特異点
その１０７	第六特異点
その１０６	第六特異点
その１０５	第六特異点
その１０４	第六特異点
その１０３	第六特異点
その１０２	第六特異点
その１０１	第六特異点
その１００	第六特異点
その９９	第六特異点
その９８	第六特異点
その９７	第六特異点
その９６	第六特異点
その９５	第六特異点
その９４	第六特異点
その９３	第六特異点
その９２	第六特異点
その９１	第六特異点
その９０	第六特異点
その８９	第六特異点
その８８	第六特異点

2757274827392730272227132705269626862680267326662658264826382630262126112604259625892578256925572550

その137	第七特異点
その136	第七特異点
その135	第七特異点
その134	第七特異点
その133	第七特異点
その132	第七特異点
その131	第七特異点
その130	第七特異点
その129	第七特異点
その128	第七特異点
その127	第七特異点
その126	第七特異点
その125	第七特異点
その124	第七特異点
その123	第七特異点
その122	第七特異点
その121	第七特異点
その120	
その119	
その118	
その117	
その116	
その115	
その114	
その113	第六特異点

その162	第七特異点	318
その161	第七特異点	316
その160	第七特異点	315
その159	第七特異点	314
その158	第七特異点	314
その157	第七特異点	313
その156	第七特異点	312
その155	第七特異点	311
その154	第七特異点	310
その153	第七特異点	309
その152	第七特異点	309
その151	第七特異点	308
その150	第七特異点	308
その149	第七特異点	307
その148	第七特異点	306
その147	第七特異点	305
その146	第七特異点	304
その145	第七特異点	303
その144	第七特異点	302
その143	第七特異点	301
その142	第七特異点	301
その141	第七特異点	300
その140	第七特異点	299
その139	第七特異点	298
その138	第七特異点	296

その163　第七特異点　201
その164　第七特異点　321
その165　322
その166　終局特異点　323
その167　終局特異点　324
その168　終局特異点　325
その169　終局特異点　326
その170前編　終局特異点　327
その170後編　終局特異点　328
その171　終局特異点　329
その172　終局特異点　330
その173　終局特異点　331
その174　青空　332
その175　333
その176　334
その177　335
その178　336
その179　電脳楽土　337
その180　電脳楽土　338
その181　電脳楽土　339
その182　電脳楽土　340
その183　電脳楽土　341
その184　電脳楽土　342
その185　電脳楽土　343
その186　電脳楽土　344

ＩＳ編
その１

○月×日

――――前々から思っていたが、自分はもしかしたら面倒事に巻き込まれる体質なのかもしれない。

先の再世戦争でどうにか生き残りはしたものの、身を寄せる場所がない為、拠点を探す事を踏まえてグランゾンで世界中のアチコチを廻っていたら、多元世界特有の現象〝時空振動〟に巻き込まれてしまった。

次元の壁を越えて別世界に転移させられる現象〝時空振動〟これにより破界の王ガイオウやインサラウムといった別世界の存在が現れたりするなど、多元世界の代名詞とも言われるこの時空振動。まさか自分がそれに巻き込まれるとは露ほど思わなかった為、現在絶賛戸惑い中である。

まぁ、こうして日記を書ける分だけ冷静を保てているのだから、自分も結構逞しくなったと思う。

ともあれ、まずは情報収集だ。幸いグランゾンは人目の付かない海底に転移させられていたし、丸一日位ゆっくりと考えた方がいいだろう。

○月△日

昨日一日、グランゾンを通してこの世界について調べてみた結果、色々と面白い事が判明した。まず一つ、時空振動で元の世界に帰って来られたのかなという自分の淡い期待は見事に打ち砕かれたのだが……まぁ、これ自体はさほど気にしてはいないので置いておく。

問題はこの世界の根幹を担うであろうモノ、〝ＩＳ〟なるマルチフォーム・スーツの存在についてだ。このＩＳは制作者である篠ノ之束氏が設計、開発した代物で宇宙での活動を想定して作られた飛行パ

ワードスーツだ。
現在はそんな制作者の意図とは別に【スポーツ】競技に使用される【兵器】として運用されている。
スポーツなのに兵器とはこれ如何に？　と最初は突っ込み所満載に思われたこのスーツだが、その性能を見ればそれも納得だと言えた。
何せこのパワードスーツは人間大のサイズでありながら従来の兵器を大幅に越えた性能を有しており、こんなモノが戦争に使われたら、一方的な展開になるのは目に見えているだろう。
分かりやすく言えばソレスタルビーイングのガンダムと自分が元いた世界の軍事兵器が勝負するようなモノ。核兵器位しか打つ手がなくなるのだ。
しかもこのＩＳ、戦闘能力は凄まじく高い癖に基本的に女性しか動かせない仕組みとなっている為、もし男と女で戦争すれば一月も経たずに男の敗北とされている。
そんな訳でこのＩＳは新たに発足された条約に則り、表向きでは戦争に使用されるのは固く禁じ、スポーツで使われる〝安全な兵器〟として運用される事になったらしい。
他にも色々と調べた事があるのだが、今日の所はこれで終了する事にする。
明日からは実際にこの地に降りて自ら探検しようと思う。いつまた時空振動に巻き込まれるかは分からないが、その時まで自分なりにこの世界で生きていこうと思う。

○月α日
グランゾンを重力の底――――ワームホールに収納し、この世界を散策しようと思った自分は取り敢えず馴染みの深い国、日本へと降り立った。
戸籍や履歴はこの世界にある学校や施設の名前を使って偽造し、身分証明も年齢と名前以外は全て嘘で塗り固められている。
……偽造かぁ。仕方ないとはいえ、ほんの数年前までは考えられな

かった事を平然とやるようになった事に少し複雑な心境を抱く。
ともあれ、自分が作った身分証は思った以上に出来が良かった。警察の人に詰め寄られた時は焦ったが自分の身分証を見た途端、簡単な事情聴取をされただけで解放されたし、あちらの質問に対し観光だと答えれば地図をくれた上に周辺の地理についても詳しく教えてくれた。
ＩＳの存在の所為で女尊男卑の世の中になってしまったとはいえ、こういった親切心は残っていてくれるのは素直に嬉しく思う。
しかし、どの世界にもああ言った輩はいるものだな。今時喫茶店に強盗とか、しかも銃器で武装したりしてまで……。
あそこまで重装備なら、いっそ銀行とか襲えよ。女性ばかり狙って、みみっちい。
あぁ、でも困ったなぁ。幾らお店の修繕費として払ったとしてももう少し出費は抑えるべきだった。
多元世界の頃からこつこつと貯めていた資金、その半分が一気に飛んでしまった。……マジどうしよう。

◇

ＩＳが世に出てきて早数年。その絶対的な力と女性にしか扱えない特性の下、世界は女性有利の男女差別化が深刻化していった。
女は男よりも強い。その風潮は適性のない一市民にまで浸透し、世の中は女尊男卑となってしまった。
下らない。女性警官として普段から世論を見てきた私から見れば、今の世の中はこの一言に尽きた。
女の方が強い？　男の時代は終わった？　バカな、それは現実を直

視出来ていない妄想者の戯言に過ぎない。ＩＳの力が強くても、それが女性にしか扱えなくても、ＩＳは一人の力だけでは動けない。万全のバックアップと有能な支援者達の協力があって、初めてＩＳは運用できるのだ。そしてその有能な支援者達の中には当然男性も含まれている。

世界的パワーバランスは女性側に傾いているが個人の能力としては依然として男性の方が強い。学生同士によるＩＳ無しの喧嘩なら、当然男性の方が有利なのだ。余程訓練した人間でない限り、このバランスを覆すのは無理だろう。

そんな当然の答えも今の世界は気付けていない。今後のこの世界の行方に不安を覚えていると、署から緊急の報せが届いてきた。

とあるショッピングモールにある喫茶店を武装した男性集団が占拠したという。以前の安全大国であった日本からは想像すら出来ない出来事だった。

やはり、ＩＳが出てきてから世の中はおかしくなった。別に前の時代が優れていたとは言えないが、それでも武装した人間に一喫茶店が占拠された事など一度も無かったのも……また事実だ。

恐らくは今の女尊男卑の世の中に不満を持った者達による犯行だろう。ＩＳの存在の所為で男女差別は年々その酷さを増し、傲慢さを増長させた女性によって酷い目に遭わされた男性も少なくはない。

その為、女性に恨みを抱いた男性もまた存在している。犯人グループが占拠した喫茶店は女性も多く訪れている店だ。今回の犯行の動機もそれに関係しているのだろう。

ＩＳ。女性にしか扱えない絶対的な力を持った〝兵器〟それによって生み出された歪み、それが今の様な形となって現れては更なる歪みを生み出しかねない。

当然、警察たる私達も現場へ急行した。本来なら熟練された特殊部隊の到着まで待つしかないのだが……私達が駆けつけた頃には事態は終息していた。

散乱とした店内、しかし銃が撃たれた様子はない。あるのは隅で呆けた様子の店員及び客員、そして……床で延びている犯人グループ

と、中央で佇む一人の男性。
紫色を帯びた頭髪、身に纏った白いロングコート、整った顔立ち、これだけ見れば何てことない普通の一般市民だというのに状況が彼を異質に際だたせていた。
男は私の存在に気が付くと、店の従業員に多額の料金を支払い、私に笑顔を向けてこう言ってきた。
『もしかして警察の方ですか？　ちょうど良かった。犯人グループは無力化しました。其方で事情を説明したいので署まで案内して頂けますか？』
呆気に取られた私が我に返ったのはそれから数秒後、その後気絶した犯人グループを拘束し、彼と現場にいた数名の当事者達に事情聴取の協力をしてもらった。
……彼、白河修司は非常に聡明な人物で此方の質問に淡々と、そして協力的に答えてくれた。身分証も特におかしな所はなかった。勝手な行動をした事に対する厳重な注意に関しても、彼は真摯な態度で謝罪した事からすぐに身柄は解放したのだが……正直、彼をあのまま放置しても良かったものかと戸惑った。
何せたった一人の人間が武装した集団相手に、しかも誰一人犠牲者を出さずに無力化したのだ。本人は少々空手をかじっている程度だと言っていたが、どうも胡散臭い。
他の目撃者の話もいつの間にか犯人グループは次々と昏倒し、気が付けば先の男性――白河修司が悠然と佇んでいた。と、要領の得ない回答ばかり。
店が散乱していたのも最初に現れた犯人グループが暴れたからだと聞くし、聞けば聞くほど不可解な話ばかり。
だが、どれだけ疑っても白河修司が犯人逮捕に大きく貢献した事は変わらない。もっと調べてみたい気持ちもあったが、彼が人格者だった事もあり、これ以上引き留めるのも不味いと思ったので身柄は解放した。
別に彼を悪人だと言うつもりはない。ただ、凄まじく胡散臭かった。今後もし彼が何らかの事件に関与した場合はその時は徹底的に

調べた方がいいのかもしれない。
大体、さほど広くない店内で〝後ろから襲撃余裕でした〟ってなんだ。奴は忍者だとでもいうのか。

○月◇日
いやー、世の中って本当に色んな人がいるよなぁ。人にぶつかって来ておいていきなり服を買えなんて言ってくる女性なんて……人気のある日中の街のど真ん中で言われた為にちょっと引いてしまった。
ＩＳという女性にしか扱えない〝兵器〟が存在することで生まれる弊害、所謂女尊男卑なる風習。女性が圧倒的に有利となったこの御時世、多少の優遇の違いはあるだろうと思っていたが、まさか街中でいきなりカツアゲされるとは思わなかった。
や、マジで。こんな経験は前にいた多元世界でも滅多になかったのに、いきなり……しかも女性に言われるとは思わなかった。
前の時は全員男がヒャッハー言いながら襲ってきたのでその時は適当にあしらう事が出来たのだが、今回の相手は女性、どう対処するか悩んでいた時に――――その人は現れた。
轡木十蔵（くつわぎじゅうぞう）さん。何でも先日の喫茶店での強盗騒ぎに巻き込まれた一人で自分にお礼がしたいと言うことでその時、自分とカツアゲ女性の仲裁をしてくれた。
結局は自分と十蔵さん、それぞれの財布からお金が飛び立ってしまう結果に終わってしまったが……それでも庇ってくれた事自体が嬉しかった。だって周りが我関せずを貫いている中、唯一助けてくれた人なのだ。結果はどうあれ、自分の心は晴れやかだった。
ただ、困った事にその時支払ったお金の為に旅の資金が底を付いてしまった。これでは今日の宿の目処も立たない。仕方がないから野宿でもするかと覚悟を決めた時、十蔵さんがある提案をしてくれた。

〝ＩＳ学園〟そこで用務員として働いている十蔵さんが、そこで仕事を紹介してくれると言ってくれたのだ。しかも三食付きの住み込みという破格の条件、端から見れば怪しさ全開の自分に何故そこまで良くしてくれるのか、疑問や思惑は読めないが……悪意は感じないので自分は十蔵さんのその条件を飲むことにした。

万が一、もし万が一十蔵さんに何らかの思惑があり、自分をそれに巻き込むつもりであるのなら、その時は自分も最大限抵抗するつもりでいようと思う。

尤も、そうならないのが一番良い。人の好意は素直に受け取る事にしよう。

時空振動に巻き込まれて訪れた新たな世界。ここではどんな出会いが待っているのか、期待と緊張感を抱きながら今日の日記は終わりにする。

……因みに、今日の自分の寝床はとある公園。ダンボールを地元のホームレスの方から分けて貰っているとです。

ダンボールって、暖かいよね。

その2

○月□日

ＩＳ学園。篠ノ之束氏が開発したマルチフォーム・スーツ、【インフィニット・ストラトス】を扱う女性を育てる為に日本に設立された特別施設。

ＩＳを開発した束氏が日本人という事もあり、日本にこの学園を置き、世界中からＩＳ操縦に適性を持った女性が集まるこのＩＳ学園。そんな有名な所に今日、自分は来ることとなった。

自分が世話になった公園からでも見れるＩＳ学園。世界中の女性適性者が集まるだけあってその規模は大きく、外観も近未来を思わせる造りとなっていた。

公園で待ち合わせていた十蔵さんの案内の下でＩＳ学園に入らせて貰ったのだが、中の方も最新の設備という感じで普通の学校とは違うものだと印象を受けた。

紹介させて貰うと言う十蔵さんの言葉に従いながら学園の敷地内を歩くこと数分、やってきたのは職員室……ではなく、用務員の人が使用しているとされる宿直室だった。

普通は夜勤の教員が利用される部屋なのだが、この学園が全寮制な事と教員も多くが寮を利用している事から、この学園の宿直室はあまり使われていないという。

そこで行われたのは……十蔵さんとの簡単な面接、しかも面接といっても「君はここで働く気があるかな？」という質問だけだった。

質問の答えは勿論肯定の一言、昨日一晩考えて決めていた答えだった為、十蔵さんの質問には即答で答えられた。それが良かったのか十蔵さんはにんまりと笑顔を向け、自分がここＩＳ学園で働く事を許してくれた。

そんな訳で自分はここで働く事になったのだが……正直不安は尽きない。何せ女性にしか扱えないＩＳ専門の学園だ。構成された教員も殆ど女性だと聞く。

グランゾンを通してこの学園を調べた時もその事は知っていたのだが、まさか自分がその学園に関わるとは思っても見なかった。
また昨日みたいに見ず知らずの女性からカツアゲされたりするのかなぁ……いや、会うなりいきなり銃を突きつけたり殺気を飛ばしてくる顔見知りの女性もいたりするのだから、さほど警戒する必要はないのか？
ともあれ、明日から早速自分も仕事に取り掛かるのだ。十蔵さんもフォローするから頑張りましょうと言ってくれてるし、自分も頑張ろうと思う。
……ところで、十蔵さんって何時自分を学園長や学園のお偉い方に話を通してくれたのだろうか？　話を聞く限りではそんな事聞いた事ないのだが……もしかして、十蔵さんてば結構凄い人だったりするのかな？
――――追記。グランゾンはこの世界でも異質な存在なので、人に悟られない為にも今後はワームホールの使用は控えようと思う。

○月▼日
仕事の初日。与えられた部屋で十分な睡眠を取って英気を養った自分は十蔵さんの指示の下、作業着に着替え、早速仕事に取り掛かる事になった。
十蔵さんと同じ用務員となった自分の仕事は主に学園の整備だ。
整備といっても学園に植えられた草木を管理したり、学園にどこか不具合がないか見回ったり、学園の清潔感を保つためにこまめに掃除をしたりする等々、雑用がメインの仕事だった。
その中で大きな仕事に分類されるのが割れた窓の修繕や電気部品の交換、磨耗した部活動品の新たな発注等である。どれも自分にでも出来る仕事ばかりなので十蔵さんの手はそんなに煩わせてはいないと思う。
そしてその後、困った事があれば遠慮なく聞いて欲しいという十蔵さんの有り難いお言葉を最後に、自分は学園の清掃を開始した。
流石に女子トイレに入るのは抵抗があるのでまずは廊下から。最

初は広い廊下を相手に四苦八苦をしながらも、徐々にやり方に慣れ、頑張れば頑張るほど綺麗になっていく学園に少しばかり楽しさを見出してきた頃、彼女と遭遇した。

〝織斑千冬〟このＩＳ学園の教員の一人である彼女は最初こそ自分を不審者かと問い詰めて来たが、自分が新しく入ってきた用務員だと説明すると、それは済まなかったと謝罪し、これから宜しくと挨拶をしてきてくれた。

どうやら十蔵さんが事前に他の教員に説明していたらしく、自分の事はすんなりと信用して貰えた。広い校舎だから連絡が行き届いていない所もあるのではないかと内心危惧していたが、どうやらそんな心配は無用らしい。

ただ、織斑先生が言うにはまさか自分より年下の男性が来るとは思ってなかった様で不審者と勘違いしてしまったらしい。

まぁ、それはそうだろうなと思う。学校の用務員って自分も年輩の方の軽い仕事ってイメージがあるし、実際若造である自分が掃除用具片手に学園を徘徊していたら、教員としては不審に思えるだろう。

織斑先生の謝罪を受け入れ、気にしないで下さいと返し、その後も自分は学園の清掃を続けた。

……というか、織斑先生ってやっぱりアレだよね。初代ブリュンヒルデのあの織斑千冬だよね。まさかこの世界の有名人がこの学園で教師をしているとは驚きだ。

いや、意外とそうでもないのか？　ＩＳ操縦者で初代ブリュンヒルデの彼女が後の若者達を育てる為にこの学園で教鞭を執っていると考えれば、別に不思議に思わない。

そしてその後、織斑先生と別れた後も清掃を続け、学園を見回った自分は宿直室へと戻り十蔵さんに仕事完了の旨を伝えた。

十蔵さんも自分の仕事を見て特に問題無しと見なしたのか、これからも宜しくとだけ言われ、特に注意される事もなかった。

ただ、近い内にＩＳ学園の入学式が行われるので、その時は忙しくなるよと言われたが、自分としてはやりがいのある仕事が出来るのでさほど問題視はしていない。

……しかし入学式か～。自分もそんな時期があったなとこの歳になってしみじみ思ってしまう。
それにしても織斑先生ってスーツの似合う女性だよな。ザ・出来る女って感じ。
シオさんとは少しばかりベクトルが違うが……やはり出来る人ってのは雰囲気からして違うものなのだな。
ただ、最初気配を消して近付いてきた時は戸惑った。なんであんなやり方で近付いてきたんだろ？　しかもワザワザ見つかりやすい方法で。
……もしかして、織斑先生なりの歓迎の挨拶なのかな？　何だか不器用そうな人だったし。

◇

入学式を間近に控えた頃、浮かれ立つ学園内の生徒達の気を引き締める為、私は日課の学園内の見回りをしていた。
気持ちは分かる。ＩＳという兵器を扱う以上日々の訓練や日常でも生徒とは厳しく接していかなければならない。
入学式はその数少ない息抜きの日、多少浮かれるのは仕方がないが、それでもＩＳ操縦士を目指す以上一定の自覚は持たせなくてはならない。
その意味を込めて学園内の見回りを行っていたのだが……この日、奇妙な輩と出会った。
白河修司。廊下で掃除用具を片手に学内を彷徨いていた彼を、私は最初不審者として対処しようかと考えた。
ＩＳ学園は様々な国の思惑や陰謀が渦巻く厄介な所だ。条約の規定では如何なる干渉も禁じられているとされているが、その裏をかい

て様々なちょっかいを出してくる輩も少なくはない。
目の前の男もそんな一人かと思った私は、いつでも男を取り押さえられるよう身構えながら近付いた。出来るだけ気配を消し、間合いを詰められる距離まで迫り、一瞬で意識を刈り取ろうとした――その時。
『あれ？　アナタは……もしかしてここの教員の方ですか？』
――心臓が、飛び上がった。今は教師として教鞭を取り、実戦とは離れた日々を過ごしてきた私だが、まさかここまであっさりと見つけられるとは思わず、私は内心冷や汗を流した。
ついで理解する。その時の私は奴に気取られ、無様に隙を晒していた事に。手練れの相手ならばこの隙を突いて一気に仕掛けてくるかと思われたが……目の前の男からはそんな素振りは見えず、不思議そうに首を傾げてしまうだけだった。
私の気配を気取ったのは単なる偶然か？　得体の知れない男に内心で警戒を強め、少し険のある態度で問い詰めた所……なんと、彼は先日十蔵さんから聞かされていた新しい用務員だと言うではないか。
流石に恥ずかしい。どこかの国、或いは企業からの工作員だと思い込んでいた私はすぐさま彼に謝罪した。彼の方も気にしないで下さいと私の謝罪を受け入れてくれた。今時珍しい若者だなと思う一方、私は先ほど私の気配を察知したのはやはり偶然なのではないかと思い悩む。
確かに白河は細身の割には鍛えられた体をしている。恐らくその服の下は相当に鍛え込まれた肉体をしているのだろうが……それだけだ。
彼には強者特有の覇気がない。自らを強者と自負している者は無意識でもその身に纏う覇気で分かると言うもの。
それが彼には存在しない。やはり私の勘違いなのだなと納得しながらも彼とはそれから別れ、私は入学式の準備に追われる事になる。
……だが、一つ腑に落ちない点がある。奴は私の事を最初は誰だか分からなかったようなのだ。
織斑千冬。不本意ながら世界的に知られる事になった私の顔は最

早世界中知らない者はいないとされている。別に自惚れるつもりはないが……それでも、どこか気になってしまう自分がいた。

◇

○月β日

ＩＳ学園で働く事になってから早数日。入学式を一週間後に控えた今日、個人的に嬉しい事があった。

なんと、織斑先生と山田先生からのお誘いで略式ながら自分の歓迎会を開いてくれたのだ。入学式の準備の中忙しいであろうお二人からの誘い、当然自分はこの誘いを受け、近場にあるＢＡＲで大人の付き合いをする事となった。

店は落ち着いた雰囲気で中も洒落た内装をしており、一人でも来やすい造りとなっていた。実際、ここには織斑先生もよく来ているらしく、休日などは良くここでお酒を堪能しているらしい。

私服姿で普段とは雰囲気の違うお二人に内心ドギマギしつつお酒を楽しんでいると、二人から仕事には慣れたのかと定番の質問を投げかけられた。

これが大人の社交場なのかと少し焦りながら答えると、山田先生は酔っているのか、朱を帯びた顔付きで可愛いとからかいながら体を寄せてきた。

山田先生――――山田麻耶教諭。酔った勢いで自分に体を寄せてくる彼女を織斑先生が宥めつつ歓迎会は粛々と進み、三人ともある程度

飲んだ所である話題が浮上した。
内容はズバリ、現在の世の浸透している女尊男卑についてである。織斑先生が言うには軍でのＩＳ学園を卒業した操縦者は後に軍に所属し、専用機を持ったその人は通常の軍人よりも高い地位に立っているが、別に皆それを鼻に掛けて慢心している者は少ないとされる。
寧ろ、自分が今の地位にいるのはＩＳのお陰だと考える者の方が多く、自身の立場に見合う実力を備えるよう日々精進しているとの事。
ＩＳ学園はＩＳを徹底して教え込む場所、織斑先生は特にＩＳの扱いに関しては徹底的に厳しく教え込んでいるという。
山田先生もそれには同意見の様で、近年はＩＳ操縦者よりも適性のない女性達が増長している傾向が強いと危惧するほどだ。
現在は女の方が男よりも優れているという風潮が流行っているが、それは間違いであるという事を教え込むのもＩＳ学園の教師の責務なのだと織斑先生は語る。
……この間違った風潮を手っ取り早く糾す方法は一つだけある。自分がグランゾンを呼び出し、世界の敵として君臨すれば、世界中の男女は争うのを止め、一つに纏まるだろう。
ソレスタルビーイングがやろうとしたこと。〝世界共通の敵〟を作り出せば、世界は意外と簡単に纏まる。
尤も、それを実行するには余りにもリスクが高いし、グランゾンを出せば色々台無しになる気がするのでこの方法は万が一にも取らないが……。
それ以降も織斑先生達の教師故の苦労話を聞いて良い感じに酒が回り始め、そろそろ帰ろうかと席を立った頃に……それは起きた。
店内に設置されたテレビ、ありきたりなメロドラマが突然中断され、いきなりニュースキャスターがテレビに映り込んできた。
テレビ越しからでも伝わってくる尋常じゃない雰囲気、三人して足を止めてテレビに注目し。
『人類初の男性ＩＳ適性者発見！　その人物の名は織斑一夏!!』
テロップと共に映し出される一人の少年。中学を卒業したばかりであろう少年がテレビにデカデカと写し出された時。

織斑先生は真顔のまま何もない床でスッ転んだ。
どうやら、今年の新入生は一波乱ありそうである。頑張れ、先生！

その3

◇月Σ日

桜が舞い散る麗らかな季節、春。新入生達も無事このＩＳ学園に入学し、それぞれ新たな生活をスタートさせていた。

本当ならこの日は毎年変わらず、教員の皆さんは忙しそうにしているのだが、今回はその忙しさは度合いが違っていた。

〝織斑一夏〟これまで出現する事のなかった人類初の男性ＩＳ適性者。女性にしか扱えなかったＩＳを男が乗れるという事で一躍時の人となった彼は……なんと、織斑先生の弟だという。

初代ブリュンヒルデの弟、一夏君までもがＩＳを扱える事に作為的なモノを感じるが、どうあれ彼はこの世界の最重要人物の一人となってしまった。

織斑先生は一夏君をＩＳに関わらせるつもりはなかったと話していた。ＩＳとはスポーツ競技に使用される代物だが、世界に対する影響力は限りなく大きい。

故に、このＩＳ学園には毎年有能な操縦者を獲得しようと勧誘を試みる国の幹部、或いは企業の偉い人が学園の催しに必ず参列されるという。

女性にしか扱えなかったとされるＩＳ。それが織斑一夏というイレギュラーが加わった事で、世界のパワーバランスは崩れる危険性を孕む事になる。

当然、今までＩＳは自分達の物だと考えていた女性達は面白く思わないだろう。過激な思考の持ち主なら一夏君を亡き者にしようと考えたりもするかもしれない。

本人がどんな意図を持ってＩＳに搭乗したのかは分からないが、これから一夏君は世界から狙われる立場に置かれてしまった。条約によって外部からの干渉を防ぐ事の出来るＩＳ学園なら、卒業まで手出しされる事はない……と、思いたい。

どちらにせよ、今後の彼の人生は大きく変わる事だろう。織斑先生の弟君という事もあるし、自分も暇があれば様子を見てみようと思う。

……所で、新入生の女子っていうのは皆あんなにキャーキャー騒ぐ物なのだろうか。外にいる自分まで喧しく思えるとか、相当なものだぞ。

◇月γ日

今日、学園の屋上を掃除していたら偶然一夏君を見かけた。テレビで見るよりも男前な彼は自分を見るなり連れの女の子を放って自分の所に駆け寄ってきた。

彼が言うには自分以外に男がいるとは思わず、嬉しくなったと言う。クラスには常に女子の視線が突き刺さり、休み時間も他のクラスの女子が押し掛けて来て堪ったものではないと一夏君が嘆いていた。

まぁ、分からなくはないかもしれない。いきなり女子校であるＩＳ学園に叩き込まれた一夏君は異世界に叩き込まれた異邦人に等しい。彼の心境は自分も理解出来るので相談位なら乗ると励ました。

目に見えて明るくなった一夏君はその事で自分に礼を言うと時々宿直室に遊びに行きますとだけ言い残し、教室へと戻っていった。

思ったより明るく、素直な子だと感心した。あの分なら邪な考えでＩＳに関わった訳ではないだろう。今後は彼に色々協力してみてもいいかもしれない。

ＩＳについては自分もまだ分かっていない事が多いので知識面では役に立てないが、身体的能力については色々アドバイスは出来るかもしれない。

客観的に見た感じ、一夏君は剣道に携わっているのだろう。足運びや体捌きが剣に関係した動きのソレだったからだ。

織斑先生程鍛えている訳ではないので詳しくは分からないが、それでも一度彼の身体的能力を拝見してその上でアドバイスした方がいいのかもしれない。

十蔵さん以外男のいないこのＩＳ学園、同じ男同士仲良くしていき

たいものである。
ただ、連れの女の子をそのまま放っていくのは少々頂けないと思う。お陰であのポニーテールの少女に睨まれてしまったではないか。
もしかして彼女は一夏君に対し何らかの想いを抱いているのだろうか？　だとすれば悪いことをしてしまったなぁ。
その後、自分は一年の学生寮に赴き、１０２５室の壊れた扉の修繕作業に取り掛かった。十蔵さん監視の下で行われた作業は特に問題なく終了した。
手際が良いと十蔵さんは褒めてくれたが、自分としてはただ扉を外してはめ込んだりしただけなのでなんだかこそばゆい感じだ。

◇月β日
一夏君がイギリスの代表候補生と決闘する事になった。
……うん、訳が分からないね。何がどうなれば昨日今日ＩＳに関わったばかりの子がいきなり代表候補生と勝負をする事になるんだろう。
山田先生曰く、クラス代表を決める際に皆が一夏君を推薦し、納得がいかないと怒り心頭のイギリスの子が暴言を吐いたのが事の発端らしい。
やれ日本は後進的だとか、やれ猿にそんな役割をさせるなとか、感情的に色々暴発してしまったらしいのだ。
……なんだか一夏君よりもそのイギリス代表候補生の子の方が心配になってきた。何故ならＩＳ開発者の篠ノ之束博士は日本出身、ＩＳ関係で総本山とされる日本で敵に回す様な発言をかましてくれたのだ。これによる危険性はこの世界に来て日が浅い自分でも理解出来る事だ。
もし万が一彼女の発言が録音されていたりしたら大事だ。織斑先生が現在抜き打ちで寮の各部屋に乗り込み持ち物検査を行っている事から、結果が出てくるのは早いだろう。
生徒のフォローにまで回る織斑先生、大変だとは思うがどうか頑張って欲しい。

そして肝心な一夏君の方はと言うと……正直、代表候補生に勝てる見込みはかなり低いと思う。技量もそうだが彼はＩＳに対する知識が余りにも足りていない。

ＩＳは兵器に分類される代物だ。正しい知識と正しい扱い方を身につけなければいつか手痛いしっぺ返しを受ける事になる。自分の立場を今一理解出来ていない一夏君は、いつか悲惨な事故に巻き込まれてしまうかもしれない。

ＩＳ学園の数少ない男性をそんな形で失うのは余りにも忍びない。自分も何か手助けが出来ればいいのだが、生憎今の自分はただの用務員。あまり出過ぎた真似は出来ない。

このまま対戦日まで不干渉を貫くしかないのか、そう思った時、意外にも十蔵さんからＯＫを貰った。織斑先生からも贔屓にならない程度で面倒を見て欲しいという事で自分も時間の許す限り一夏君の協力者になることとなった。

早速今日から始めたいと思い、まず始めたのが……幼なじみの箒ちゃんによる剣道の稽古だった。

何でも箒ちゃん――篠ノ之箒ちゃんは中学の剣道大会で全国優勝する腕前であり、一夏君とは幼い頃同じ道場で剣道をしていたのだという。

全国優勝を果たした箒ちゃんに対し、中学時代は帰宅部だったという一夏君。二人の力量差は歴然で箒ちゃんに終始一方的に叩き込まれる形でその日の特訓は終了した。

後から聞いた話によると、一夏は幼い頃両親に捨てられ、織斑先生に育てられてきたという。中学に入りあることがきっかけで一年程一人暮らしを始めたという一夏君は少しでもお姉さんの負担を軽くさせるよう必死にバイトをしていたのだとか。

まだ遊びたい盛りだろうになんて良い子なんだろうか。そりゃ織斑先生も頑張る訳だよ。以前の酒の席でも一夏君のことそれとなく褒めてたし。

やれ帰ってくると暖かいご飯と共に笑顔で迎えてくれるのが嬉しいとか、掃除洗濯なんでもこなせる万能主夫だとか、普段は見せない

にやけた顔で自慢してきた時は驚いたけれど、そりゃそうなるよ。
たった二人の家族。今後一夏君には頑張って欲しいものだ。
ともあれ、自分も参加する事になった一夏君の特訓。自分も知識不足だが、それでも何とか一夏君を支えたいと思う。
目指すは打倒セシリア＝オルコットちゃん。

ＰＳ
そういえば、前に扉を壊した犯人は箒ちゃんだったらしい。学園の備品は大事にしようねと懇切丁寧にお願いした所、快く承諾してくれた。
何度も首を縦に振って二度としないと誓ってくれたし。やはり、人間に対話って必要だよね。

その４

◇月Ｊ日

一夏君がイギリスの代表候補生に決闘を挑む事になって早一週間、いよいよ決戦の日がやってきた。箒ちゃんや自分も一夏君を勝たせるようあれこれ助言をしたりしたのだけれど、やはりＩＳというモノをイマイチ理解出来ていない一夏君では理論的特訓を施す事はなかなか出来なかった。

箒ちゃんも剣の手合いという事で一夏君の為にアレコレ尽力してくれたみたいだけど、やはり相手が代表候補生というだけあって不安は拭えないようだ。

代表候補生というのはその名の通り、その国を代表するＩＳ操縦者の候補生達の事だ。過酷な審査や試験を乗り越え、国家代表の一歩手前にまで登り詰めた強者達。ＩＳの専用機を持ち、錬磨を絶やさないできた彼女たちはＩＳに関しては紛れもなくエリートの存在だろう。

そんな代表候補生の一人であるセシリア＝オルコットちゃんは紛れもなく強敵だ。彼女の価値観や考え方は兎も角、一夏君の勝率は限りなくゼロに近いだろう。

自分も力になれれば良かったのだが、生憎この世界に来て自分はまだ日が浅い。ＩＳのコアネットワークや量子変換機能については未だ分からない点がある為、下手に口出す事は出来なかった。

精々訓練機である打鉄の使用許可の申請や箒ちゃんとの剣の打ち合いの際にチョロッと口出しする程度である。日本政府から専用機が渡されると一夏君から聞かされたが、その合間にＩＳに触れないというのは余りにハンデが大きい、許可の降りた機体で練習試合をさせたりしたのだが、やはり時間が足りないのが痛かった。結局満足な手助けも出来ず、一夏君を送り出してしまう事となった。

もうじきセシリアちゃんとの決闘が始まる。現在自分は休憩中の為、宿直室の映像端末から試合の行方を見守ろうと思う。

――――――勝負の結末は結果的に言えば試合は一夏君の敗北に終わった。一夏君も良い具合に代表候補生と渡り合えていたのだが、あと一歩の所で負けてしまった。

後から箒ちゃんから聞いた話によると、何でも一夏君の専用ＩＳである〝白式〟の武装である雪片弐型は当たると一撃必殺の威力を誇るのだが、ＩＳの防御壁であるシールドエネルギーを大量に消費してしまう欠点の存在する使い勝手の難しい武装なのだとか。

その為に雪片弐型の特性を理解出来なかった一夏君はセシリアちゃんの懐に飛び込み、一撃を放とうとした所でエネルギー切れを起こし、自滅という形で試合に幕を引いた。

……なんというか、色々残念な結果となってしまったなぁ。織斑先生は機体特性も理解せずに調子に乗ったアイツが悪いと言っていたが、自分は流石に無理があると思った。

昨日今日ＩＳに触れたばかりの素人にぶっつけ本番で機体を理解しろとか、無茶振りにも程がある。何も知らない子供にマニュアル無しで機動兵器に乗り込み歴戦の戦士（パトリックさんとか）に勝てと言っているようなものだ。

流石に無理難題だろうと思うけれど、これから一夏君に待つ数々の試練を思えば、織斑先生が彼に厳しく接するのも仕方がないのかもしれない。

人類初の男のＩＳ操縦者、その肩書きはこの世界に於いて色んな意味で重い。学園を卒業する迄には自分の身は自身で守れるようにならなくては……。

頑張って欲しい。一夏君には、是が非でも。

……所で、セシリアちゃんのＩＳ〝蒼の雫（ブルー・ティアーズ）〟の武装にあった自立機動兵器、あれってアムロさんやキラ君の使うファンネルやドラグーンに似てるよね。

いや、形状からしてドラグーンかな？　確かグランゾンにストライクフリーダムの戦闘データとかあったから、もし彼女が拒否しなければこのデータを提供してもいいかもしれない。彼女も自身の機体を十全には使いこなせていないし、参考になればいいかな。

敵に塩を送るようだけれど、一夏君には好敵手が必要だ。自身の実力を高めて貰う為にも彼と戦い、且つ同じクラスであるセシリアちゃんには一夏君の良き好敵手になって欲しいから。

ただ、口では厳しい事いってたけど、織斑先生は頑張った一夏君に対して人知れず微笑んでいた。やっぱり優しい所もあるのだと、不器用な優しさを持つ織斑さんに自分も吊られて笑ってしまった。

その直後、何がおかしいと睨まれてしまったけどね。

◇

――――正直、俺はＩＳに興味はなかった。女性しか扱えないＩＳに幾ら拘っても意味はないと、そんな風に考えていた。

ふとした切っ掛けでＩＳに乗れるようになった俺は、あれよあれよという内にＩＳ学園へと入学させられていた。

望んだ訳でもないのにこんな所に連れ込まれ、興味もないＩＳに関わって、女子達には珍獣扱いされる。……幼なじみの箒がいなかったら、多分心が折れていたと思う。

セシリアに喧嘩……ＩＳによる決闘を挑んだのも、半分は自棄だったのかもしれない。どうにでもなれと、そんな思いで箒と特訓をしていた時、意外な人が助っ人に現れた。

白河修司さん。このＩＳ学園で数少ない男性で俺と年の近い男の人、千冬姉より若いその人はセシリアとの決戦の日まで殆ど付きっきりで特訓につき合ってくれた。

自分だって用務員の仕事があるのに俺の面倒を見てくれて、ＩＳの

事だって俺にも分かるように教えてくれた。山田先生も教え方は上手かったけれど、それでも修司さんの教え方はすんなりと頭に入ってきた。

ＩＳは人間の体の延長。機械として扱うのではなく自身の体の一部として扱うのだと教えてくれた修司さん。箒も昔やっていた剣道の勘を取り戻すべく放課後はいつも付き合ってくれたし、部屋も同じだからってＩＳについて自分の知る限りの事を俺に教えてくれた。

戦う相手、セシリアのＩＳに関する情報を持ってきてくれたのも修司さんだった。仕事で忙しい中、訓練機の用意だってしてくれたのに……負けてしまった。

あれだけ協力して貰ったのに、二人とも付きっきりで教えてくれたのに……俺は、そんな二人の期待に応える事が出来なかった。

機体の特性が理解出来なかった。素人だから、なんて言い訳はしない。俺が負けたのは……俺が弱かったからだ。

情けなくて、悔しくて、誰もいないロッカーで、俺は……久し振りに泣いた。それが気取られるのが嫌で、箒には先に寮に帰って貰った。

修司さんは次は勝とうと言ってくれた。千冬姉には何度も負けるなよと言われた。箒は次こそ勝とうと言ってくれた。

……負けたくない。この日の敗北を、俺は絶対に忘れない。

だから……。

「箒」

「な、何だ一夏、戻って来るなりいきなり……」

「俺、次は勝つよ。勝って見せる。けど、俺はＩＳに関しては素人も同然だ。だから――――」

「……」

「これからも、俺を助けて欲しい。力を貸して欲しい。頼む」

俺は、この日から前を向こうと思う。自分の立場やこれからの事を、逃げないで見つめ続けようと思う。

その為に、強くなろうと思う。誰の為でもない。まずは……自分の為に。

「ま、まぁお前がそこまで言うのなら仕方がない。暇がある時は私も出来るだけ協力しよう。だ、だが勘違いするなよ！　お前に協力するのはあくまで同じ門弟であるお前が情けないからで――――」
「あぁ、分かってる。俺は弱い。色々迷惑を掛けると思うけど……宜しく頼むよ」
「――――っ！　そ、そんな顔で笑うな！　……私がバカみたいじゃないか」
「ん？　何か言ったか？」
「な、何でもない。……全く一夏め、急に大人っぽくなって、何だあの笑顔は、反則ではないか」
　何やらボソボソと呟いている幼なじみ、恐らくは今後の剣道の鍛錬メニューを考えてくれているのだろう。数年会わなかった仲だけれど、箒も頼もしくなったものだ。
（修司さん、俺、頑張るよ）
　今度こそ修司さんの期待に応える為、自分の大切なモノを守れる様になる為、明日から頑張ろうと思う。
　……そう言えば、どうして修司さんはあんなにＩＳに詳しいんだ？
　ＩＳ学園にいる人は皆あんなに詳しいものなのだろうか？
　ＩＳの特性だけじゃなく重力制御の事、後は量子変換機能にもかなり突っ込んだ話をしていたし、相当ＩＳに関して理解しているんだろうなぁ。
　気さくで、物知りで、頼りがいのある人。
　俺も、あの人みたいになれるのかな。

◇

α月〇日

新入生も新たな環境に馴染み、日々の生活に慣れ始めた頃。自分も自身の環境に漸く慣れ始めてきた。
最初の頃は自分と十蔵さん、そして一夏君しか男性がいない学園で珍獣扱いされてきた自分達だが、流石に時間が経過すれば女生徒の皆も慣れ始め、日々の生活も穏やかさを取り戻しつつあった。
尤も、一夏君はクラス委員にもなった事で他クラスの女子からは注目されているので、平穏を手にするのは当分先になりそうだが……。
そうそう、先の試合で行われたセシリアちゃんとの決闘なのだが、あれ以降一夏君とセシリアちゃんは和解したらしく、良くアリーナで箒ちゃんと一緒に一夏君の特訓に付き合ってくれているらしいのだ。
最初はどちらが先に始めるか少しばかり揉めたらしいが、一夏君がその日の必要に応じて箒ちゃんとセシリアちゃんにそれぞれ頼んでいるらしい。
自分の足りないもの、必要なものに対して自分から進んで挑んでいく。前とは変わった気構えに自分も安堵し、織斑先生も一皮剥けた一夏君に相変わらず厳しくありながらどこか嬉しそうに話していた。
授業態度も真剣で、分からない事があれば休み時間に山田先生に聞きに行ったりするなど積極性を見せていたり、クラス委員の責任感から良くクラスの生徒達から頼られているらしい。
時々ミスをしたり、危ない所も見かけるみたいだが、意識変革を果たした一夏君を取り敢えず見守っていくつもりのようだ。
山田先生も副担任ながら頼られたりする事が嬉しいらしく、学園で顔を合わせた時は良く一夏君の話を聞いたりしている。セシリアちゃんとの試合で一夏君は負けたが、代わりに得るものも多かったようだ。
セシリアちゃんという事で思い出した事がある。以前話していた自立機動兵器関連のデータの件、モノは試しにストライクフリーダムの戦闘データをＩＳ関連用に変換し、自分なりに手を加えてセシリアちゃんに渡してみたのだけれど、受け取ったセシリアちゃんはデータ内容を見るなり酷く狼狽し、戸惑っていた。
やはり見ず知らずの男からいきなり戦闘データを見せるのは拙

かったか、このデータを何処で手に入れたのか等質問してくるセシリアちゃんに、自分もＩＳには興味があるからと誤魔化したが、流石に誤魔化し切れず、渋々データを受け取りつつも疑いの眼差しは晴れる事はなかった。

まぁ、別に良いけどね。疑われる事を知った上で渡した訳だし、データを受け取ってくれたという事はそれだけ自分を受け入れてくれたという事に他ならない。

仮に自分の素性が疑われて他国から狙われたとしても、このＩＳ学園にいれば表向きは干渉される事はない。もし裏で干渉してきたとしても、その時は穏便に話し合うだけだ。

どんな相手でも対話というものは必要である。それが多元世界で自分が学んだ事の一つだ。

そう言えば、今日ツインテールの女の子に学園内を案内させられた。学園の制服を来ていた事から……恐らくは転校生なのだろう。

背が小さいのに態度は大きいものだから、それが可愛くてつい笑ってしまった。

その5

α月G日

一夏君がクラス委員となって数日、相変わらずドタバタで忙しい日々を過ごしているようだが、それでも毎日頑張ろうと一生懸命な為、ここ最近は比較的落ち着いて学園生活を送れているようだ。

セシリアちゃんが辞退した事で決まってしまったクラス委員、一方的に決めてしまった事に対して一夏君一人に全てを任すのは流石に忍びないと思い、クラスの子達も積極的に協力しているようでクラスの空気はとても良い感じになっている。

時折元気が有り余って一夏君を取り合う事も少なくはないが、そこは織斑先生が上手く仲裁をしているようだ。――――殺気を飛ばすのが仲裁と言えるのかは兎も角として。

放課後の特訓もセシリアちゃんが加わった事で一夏君の操縦技術は着実に上がっている。専門的知識を叩き込んでもそれを行動に移せなければ意味がないので、暫くは感覚的にＩＳの動きを体に染み込ませる作業に集中した方がいい。

一夏君の武装である雪片弐型はＩＳのシールドエネルギーを使用しての一撃必殺の武器だ。当たれば必勝は確実だが、逆に言えば当たらなければ意味のない武装だ。

出しているだけでもエネルギー消費の激しいこの武器を一夏君はどうするべきか悩んでいたが……正直、これはそこまで悩む必要はない問題だ。

出しているだけで負けてしまうのなら、いっそ出さなければいい。要するに、触れただけで相手に致命傷を与えられる攻撃なら、当たる瞬間だけ雪片弐型を使えばいいだけの話である。

故に、一夏君の選べる戦闘スタイルは大きく二つ〝殺られる前に殺る〟か〝相手の懐へ潜り込んで叩き込む〟である。

前者は瞬時加速（イグニッションブースト）を使用して相手に成す術を与えず斬り伏せる戦闘法、後者が相手の動きを見切って隙を突いて懐に潜り込み斬る方

法。どちらも難易度の高い戦い方だが、幸い近接と遠距離、両方の協力者がいるので戦い方の学習には事欠かない事だろう。
セシリアちゃんも自分の渡したデータを参考に色々試している様だし、この調子で互いに錬磨して欲しいものである。
……どうでもいいけど、一夏君の白式ってクワトロ大尉の百式と呼び方が似てるんだよね。

α月γ日
新入生がＩＳ学園に入学してもうすぐ二ヶ月近く経とうとしていた。自分もＩＳについてはそれなりに知識を付けたし、これからは一夏君にももう少し突っ込んだ助言も出来ると思う。
近い内に一年生達の現在の実力を計るトーナメント戦が開催される予定だし、こういった催しが生徒達の実力を高めさせるんだろうなぁ。
教員達だけではなく、イベントでは用務員である自分や十蔵さんも駆り出されるみたいだし、また忙しい日々が待っていそうである。それ自体は望む所なのだけれど……。
最近、一人の生徒がＩＳの整備室に引きこもっているみたいなのが個人的に気になった。学園の見回りをしている所、一人の生徒が夜遅くまで整備室に籠もりっきりで、専用機らしい機体を弄くっているのを見かけたのだ。
彼女の名は更識（さらしき）簪（かんざし）ちゃん。その時は早く寮に戻るよう注意をするだけだったけど……どうやら何か悩みを抱えているみたいで終始暗い顔をしていた。
なんだか訳ありっぽいし、暇を見つけたら様子を見に行ってもいいのかもしれない。一夏君も暫くは大丈夫そうだし、彼の事は箒ちゃんとセシリアちゃんに任せてみようと思う。

α月Σ日
簪ちゃんの事で織斑先生から話を聞いた所によると、どうやら簪ちゃんは日本の代表候補生でこのＩＳ学園の生徒会長さんの妹さん

らしいのだ。
本来なら彼女も専用機を持ち、近日開かれるトーナメントに参加する予定だったのだが、倉持研というＩＳの開発機関が簪ちゃんの専用機の開発を中止し、そのまま放置されてしまったという。
原因となったのは……一夏君だ。日本政府からの依頼で男性操縦者である一夏君の専用機を優先して作るよう要請し、完成させるよう指示を出した。
けれど、一夏君の専用機である白式が完成した今も倉持研は白式の戦闘データを取るのに忙しく、簪ちゃんの専用機には手を出していないのだという。
……なんともまぁ、色々と複雑な話だと思った。唯一の男性適性者である一夏君の事を調べたいという気持ちは分かるが、それでも日本代表候補生の機体開発を蔑ろにするとか、ちょっと無神経に過ぎると思った。元々は簪ちゃんの方が先だというのに、どうして彼女の機体に手つかずなのか。
散々先送りにされ、遂には開発中止にまでなった事で簪ちゃんは激怒し、倉持研から開発途中の打鉄弐式を引き取って以後は自分で開発に打ち込むようになったとか。
それの所為で簪ちゃんは整備室に籠もる様になり、誰とも関わりを持とうとしないらしい。それのおかげで簪ちゃんは入学以降殆ど人と接しないで生活しているのだという。
織斑先生も時々声を掛けてはいるが、自分の弟が原因という事もあって、あまり彼女には関われないでいるのだとか。
任せて……というのはおかしな話だが、自分の方から話をしてみる事を織斑先生に話すと、先生はニヒルな笑みを浮かべて「お人好しめ」と言われた。
学生時代というのは後の人生に於いて大切な思い出に残る時期だ。折角の青春なのだから、彼女もこの一時を堪能して欲しいのだ。
……書いてみると、確かにお節介に思えるかもしれない。けれど決めたのだ。簪ちゃんの為に自分も一肌脱ごうと。
や、実際は脱がないよ？　俺の体傷だらけだし、見たら普通に引く

と思うから。
あ、聞いてない？　……スミマセンでした。

α月Ω日
簪ちゃんの所へ通うようになって数日、仕事の合間や終わりに顔を出し続けていたら、どうにか彼女の心を少しばかり開かせる事に成功した。
最初の内は此方の話を聞こうとせず、整備室も入れさせてもらえない門前払いの扱いだったが、一日二日と根気よく接し続けてみた所、しつこいなと呆れられつつもどうにか整備室の中へと入れる様になった。
整備室の中央に置かれたＩＳ〝打鉄弐式〟未完成品らしく所々にパイプが繋がれ、モニターが数多く設置され、様々な数値がずらりと並んでいる光景を目にし、ここがＩＳ開発の光景かとちょっぴり感動した。
その後、簪ちゃんの許しの下で打鉄弐式を調べさせてもらった所、出力系や電圧系、各システムの伝達具合が少し遅れている程度で、時間さえあればどうにでもなる問題だった。
ここまで来るのに相当大変だったろうに……凄い子だ。頑張ったんだねと素直な感想を口にする自分に対し、簪ちゃんの反応は暗かった。
話を聞いてみた所、簪ちゃんのお姉さんである生徒会長は所謂何でも超人みたいな人で、学園最強の座に就いているだけじゃなく、自身の愛用する専用機を自分一人の手で完成させたのだという。
そんな姉に自分は守られている。見下されると思い込んでしまった簪ちゃんはお姉さんを少しでも見返す為、一人で整備室に籠もり作業に没頭していたのだという。
優秀過ぎるお姉さんを持つと大変なんだな。自分は一人っ子だったから、姉や弟のない自分には今一つ理解出来ない心境だ。
ただ、お姉さんを見返してやりたいという簪ちゃんの想いは真剣だったので自分も簪ちゃんの力になりたいと思った。最初は自分の

申し出に困惑していた簪ちゃんだったが、自分がどうしてもと何度も懇願している内に向こうも根負けし、遂に自分も簪ちゃんのＩＳの開発に協力させて貰う事になった。
協力といっても横で助言をする程度で基本的には何も手出しは出来ていない。ただ、どうしても行き詰まり作業が捗らない場合は自分も直接手を加えたりしている。
そうする事で作業を続けて三日後、遂に打鉄弐式が完成した。と言っても、完成したのは弐式そのもので武装面はまだまだ手つかず。残念ながら次のトーナメントには間に合いそうになかった。
役立たずで申し訳ないと謝罪すると、簪ちゃんは笑顔で許してくれた。この分なら次のタッグトーナメントには間に合いそうだからと語る簪ちゃん。
ここまで来たからには次の対抗試合には間に合わなくてもタッグトーナメントには万全な……いや、それ以上の状態で望んで欲しい。お姉さんに追い付くためにも自分も全力を尽くそうと思う。
そうと決まれば武装だ。幸いグランゾンにはＺＥＸＩＳの戦闘データがまだまだ沢山記録されている。以前はセシリアちゃんにフリーダムのデータを渡したから、今度はもっと別のモノを渡そうと思う。
いや、いっそのこと簪ちゃんにデータを見て貰い好きなモノを選ばせるのもアリかもしれない。自分の戦闘に合ったモーションパターンでなければ打鉄弐式も本領を発揮出来ないから。
……まぁ、流石にそれは冗談として、簪ちゃんにあった戦闘データを選ぶのは意外と重要かもしれないので覚えておくのはいいかもしれない。
明日はいよいよ対抗試合だ。一夏君もやる気満々になってるし、簪ちゃんも気分転換で見てみようともいっているし、色々楽しみな日になりそうだ。

α月Ｓ日

――なんというか、今の自分は少しばかり気分が悪い。折角この

日の為に皆頑張ってきたのに、邪魔が入って台無しにされたからだ。
事の発端は本日の対抗試合。宿直室にある映像端末に映し出された一夏君が中国の代表候補生と戦っていた光景、一進一退の攻防、会場も大きな盛り上がりを見せた時に……それは起きた。
謎のＩＳの襲来。突如として襲いかかってきた謎のＩＳによりアリーナは騒然。観客の生徒達も閉じ込められるなどの異常事態が発生し、ＩＳ学園に非常事態宣言が発生させられた。
一夏君の戦いは中々だった。箒ちゃんとセシリアちゃんの手助けもあって最初の頃と比べて動きは段違いとなり、中国の代表候補生相手に予想以上の奮闘振りを見せつけてくれた。
衝撃波を飛ばす龍砲の見えない攻撃を段々見切り、相手の猛攻を捌き、防ぐ。あのまま打ち合えばいずれ一太刀浴びせられたかもしれない。
そんな良い所で現れる謎のＩＳ。正直自分としては現れた怪物の様な機体に恐れるよりも空気を読まない奴に怒りを覚えた。
今すぐ乗り込んで叩き潰してやりたかったが用務員の責務を果たすべく、自分は閉じこめられた生徒達を救出すべくアリーナへと向かった。
上級生徒の子達は十蔵さんに任せ、自分はアリーナへと急行。途中で箒ちゃんと合流し、扉をこじ開け、生徒達を無事全員救出する事に成功した。
謎のＩＳの方も一夏君達が無事撃破し、その時の騒ぎはそれで終了した。謎の機体を一刀で両断した一夏君、そこまで至る際の中国の代表候補生と破れたシールドから狙撃による援護を決めたセシリアちゃんも見事だったし、観客の生徒達も全員怪我もなかった。
簪ちゃん達も無事だったし、結果的には万々歳なのだが……それでも、今後行われる筈の試合はなくなり、対抗試合は中止となった。
この日の為に頑張ってきた生徒達、今日はそんな頑張ってきた成果を大いに発揮する日でもあった。
やるせない。……いや、許せないという気持ちが今は大きい。どこの誰が、何の目的であんな事をしたのかは定かではないが……。

少しばかり、話をする必要がありそうだ。

◇

篠ノ之箒はアリーナの司令室から出て、アリーナを駆け巡っていた。今外で戦っている一夏の負担を少しでも軽くする為、何か出来ないか模索していた。

だが、謎のＩＳが襲撃してきたと同時にアリーナは何者かによってハッキングされ、どこに行っても扉は固く閉ざされており、自分の力ではどうしようもなかった。何も出来ない自分に憤りを感じる箒、こうしている合間にも幼なじみは危険な目に遭っているのに……。

「私は、私には……どうすることも、出来ないのか！」

どれだけ己の非力を嘆いても現実が変わることはない。折れそうになる心に渇をいれ、もう一度アリーナを走り回ろうとしたとき……彼が現れた。

「そこに立たれると危ないぞ」

白河修司。用務員である筈の彼が、閉ざされた扉の前に立って両手を翳すと……次の瞬間、扉の隙間部分に両手を突き入れたのだ。

そこからギギギと音を立てて開く扉。レベル４に設定された扉は遮断フィールドと呼ばれる防護幕に覆われており、ＩＳの攻撃にも耐えうる強度を誇っている。

それが、ただの用務員によって破られた。その事実を知るものはこの場にいる篠ノ之箒ただ一人のみ。開いた扉で待っていた生徒も自分が解放された事でそれどころではなく、目の前の男が開けた事に気付けていない。

一体彼は何者だろう。修司と共に生徒達を避難誘導していた箒は取り敢えず――。

（千冬さんと同様、あの人は迂闊に怒らせない方がいいかもしれん）

取り敢えず、そう心に決めた。

その6

β月＊日

先の謎のＩＳ……ゴーレムと呼ばれる機体が対抗試合に乱入してきて数日。漸く落ち着きを取り戻したＩＳ学園は今日も平和な時を過ごしていた。

学園に襲撃してきたゴーレム。織斑先生の判断により機密扱いとなった今回の一件は全校生徒に箝口令を命じ、この件に関する一切の情報を公開することを固く禁じる事にした。

一見横暴にも聞こえる今回の話だが、広い視野で語れば決して軽くはなく、織斑先生の判断は妥当とも言えた。

何せ通常なら考えられないＩＳのコア、それが新しく発見され、尚且つ無人機としてＩＳ学園に襲撃してきたと知られれば、世界は軽く大混乱に陥るからだ。

ＩＳの中心部分となるコア、それを製造出来るのは現段階において開発者である篠ノ之束博士以外に存在せず、故にＩＳはコアを含めた４６７機が絶対数となっており、それ以上増える事はないとされている。

何故４６７機なのか、コアを生成する事が出来る束博士の気紛れなのか、それとも何かしらの意図が絡んでいるのか、そこら辺も含めて謎の多い人物なのだが……まぁ、凡人である自分には天才の思考など読める筈もない為、その辺りは捨て置く事にする。

その４６７が絶対数となるＩＳ、そのコアが新たに一つ増えたとなれば世界各国の企業や軍事組織はこぞってコアの獲得を狙う事だろう。

そうなればＩＳ学園の条約も大国のごり押し政策で撤廃される事もあり得る。そうなってしまえば……ＩＳ学園は存亡の危機にまで及ぶ危険性がある。

だから織斑先生は学園の全生徒、教員に今回の件に関する全ての情報の公開を禁じた。無論、自分達用務員もその対象だ。

まぁ別にそれは構わない。例のゴーレムは一夏君がコアごと両断

したし、今更それを気に掛ける必要もない。
解せないのは束博士だ。何故博士はワザワザ学園にゴーレムなんて無粋なモノを送り込んで来たんだ？　目的は……やはり一夏君なのか？
それとも、博士以外の人間がコアの謎を解き明かしたのか、疑問や疑惑は尽きないが、今はそれは置いておこう。ぶっちゃけ興味ないし。
それよりも、現在気になるのは一夏君のその後と簪ちゃんのこれからだ。簪ちゃんの武装は簪ちゃんにあったモノでないといけないため彼女の意見も聞き入れなければならない。
通常の用務員からは逸脱した行いだが……まぁ、別にいいだろう。織斑先生も黙認してくれてるし、何より簪ちゃんがやる気になっている。今は彼女の打鉄弐式の調整を手伝っている程度だが、そろそろ本格的に手を加えてもいいかもしれない。
一応元となるデータには幾つか候補がある為そこは問題ない、後は簪ちゃんがどれに興味を示すかだ。
――――最近、やたら視線を感じる。明らかに敵意を持っているけど……別にいいか。
だって、視線の犯人は大体見当ついているから。確かに妹に自分みたいな無骨な男が近付けば気になるだろうけど、言いたい事があれば直接言いにくれば良いのに。
最初の時の織斑先生といい、この学園の実力者の間では分かり易く気配を消す事が流行っているのだろうか？

β月※日
今日、簪ちゃんのお姉さんに遭遇した。更識楯無（さらしきたてなし）ちゃん。ロシア代表のＩＳ操縦者でこの学園の生徒会長であり、通称ＩＳ学園最強の人。
何でも妹の簪ちゃんに悪い虫が付かないよう自分を監視していたらしく、ここ最近自分の後を付け回していたのだとか。
尤も、まさか自分に後ろを取られるとは思わなかったのか、出会っ

た時は酷く狼狽していた。
多元世界ではガモンさんや不動さん以外に見つかる事の無かった数少ない自分の特技、通称〝かくれんぼモード〟。この世界でも通用するかもと試しに更識家の当主に使用した結果……効果は抜群のようだった。
その後は尊大な態度で自分に警告をする彼女だが、最初に彼女の驚いた顔を見てしまった自分としては笑いを堪えるのに必死だった。
ともあれ、一介の用務員が生徒の長である彼女に反抗的な態度をするのは流石にまずいので、適当に相槌を打った後、簪ちゃんの待つ整備室へと向かった。
後ろを振り返ればグヌヌと表情を歪める楯無ちゃん。ちょっぴり悪ふざけが過ぎたなと後悔しつつ、簪ちゃんの下へと向かった。
因みに簪ちゃんの武装はこの時決まった。試しに幾つか提示した戦闘データが彼女の興味を大いに惹きつけたらしく、こんな風にしてみたいという彼女の強い要望の下、作業は進むこととなった。

β月Ｖ日
今日、一夏君のクラスに転校生がやってきた。フランスの代表候補生にしてデュノア社の令嬢で、男として学園にやってきた才女、シャルル＝デュノアちゃん。
最初シャルルの名を聞いて自分は焦った。かのブリタニア皇帝みたいな子だったらどうしようと、あのロール頭を揺らしながらＩＳを操縦したりするのだろうかと戦々恐々の思いだった自分は、一夏君の紹介で会ってみると……普通に可愛い子で凄く安堵した。
本人はあくまで男性として振る舞っていたが…ぶっちゃけバレバレである。声帯や顔付きもそうだが、何より体つきがこの歳の男性とは余りにも違っていた。女性特有の体付きをしているデュノアちゃんに自分は最初は危惧したが、織斑先生が黙認している所をみると、どうやらこれは色々思惑が絡んだ厄介な事例のようだ。
確かデュノア社はＩＳの開発で一役買った大手の会社のようだが、近年は次世代の機体の開発に伸び悩んでいると聞く。

三世代のＩＳ開発に幾ばくか遅れを取っているデュノア社は近い内にＩＳ開発の権利を剥奪されるという噂もある事だし、シャルルちゃんを送り込んできたのも大体はそんな所なのだろう。
大方男性操縦者の一夏君のデータを取り、情報を独り占めしようと画策しているのだろうけど、見通しが甘すぎる。懸命に男として振る舞っているシャルルちゃんだが、端から見れば違和感ありまくり、あれではバレるのも時間の問題だろう。
それを知り、自分から告白する事を願って織斑先生も敢えて黙認しているのだろう。一夏君や山田先生も気付いていないフリをしているし、自分も暫くはそっと遠巻きから様子をみようと思う。
因みに、自分の最初どうして今まで男の操縦者の存在を隠していたのかという質問に対し、本人は社会的混乱を防ぐ為と尤もらしい事を言ってるが……果たしてそんなバレバレな偽装がいつまで保つのやら。

β月Ｏ日

――――今日、またもや転校生が現れた。今度の転入生は煌びやかなブロンドヘアーなシャルルちゃんとは正反対の艶やかな銀髪の少女、ラウラ＝ボーデヴィッヒちゃん。ドイツの代表候補生で現役バリバリの軍人さんで、なんと、あの織斑先生の教え子なのだという。
織斑先生の教え子という事もあり、厳格そうな雰囲気を纏うこの娘、どうやら転校初日にいきなりやらかしてしまったようなのだ。
ＨＲの最中、自己紹介が終わった直後、有無を言わさずに突然の平手打ちを一夏君にかましたのだという。突然の事態に誰もが呆然し、殴られた一夏君自身も何が何だか分からなかったという。
その時はクラスが騒ぎ出す前に織斑先生が鎮め、暴力を働いたラウラちゃんにも戒めの言葉を送り、その場はひとまずそれで収まった。
……なんというか、ラウラちゃんも随分ぶっ飛んだ子だよなぁ。個性的というか何というか、軍人が一般人を殴りつけて大丈夫なのかとか、色々心配事は尽きないけれど、当事者ではない自分が割り込んでも話がややこしくなるだけなのでこの事はあまり干渉しない方がい

いだろう。
何やら混み合った話のようだし、織斑先生も自分が原因の様だからそれとなく話をしておくと言っていたし、今はそっとしておこうと思う。
――――と、最初はそう考えていたのだが、この日の特訓で事態は少しばかり変わってしまった。ここ暫く簪ちゃんにばかり構っていたので今日は一夏君の様子を見る事になった自分は、簪ちゃんに今日は休むように言った後、アリーナに訪れた。
箒ちゃん、セシリアちゃん、そこに中国の代表候補生である凰鈴音（ファン・リンイン）ちゃんとシャルルちゃんを交えた四人による特訓は一夏君に色々と刺激を与える事だろう。
ただ、シャルルちゃんを除いた三人は指導にやや不向きのようで一夏君は苦労していたが……まぁ、直接手を合わせただけでも経験にはなるのでそれは別にいいだろう。
その後、シャルルちゃんを交えて一夏君に助言する事になったのだが、その途中彼女が乱入してきた。
ラウラちゃん。彼女の専用機である〝シュヴァルツェア・レーゲン〟を纏い、ピットに佇んでいた彼女は一夏君を認識すると同時にいきなりレールガンをぶっ放してきたのだ。
突然の事に反応が遅れてしまった一夏君達、箒ちゃん達三人はＩＳを纏っていなかった事もあって非常に危ない所で、自分は咄嗟に三人娘の前に立ち、グランゾンを出す準備をした。
放たれた弾丸は一夏君達に当たる事なく地面を穿ったのだが、それでも砕けた礫が飛んでくるのでそのまま回し受けや蹴り、正拳突きなどして防いでいたのだが……一つ、壊し損ねた礫が自分の額に直撃した。
避ける事も出来たのだが、それだと後ろの女の子達に当たってしまうと思い敢えて受ける事にしたのだが……これが少しばかり効いてしまい、情けなくも怪我を負う事になってしまった。
怪我自体は大した事がなく、血も少ししか流れず、止血もすぐに出来たのでそんなに騒ぐ事はなかったが、一夏君にとっては許されない

事らしく、珍しく彼は激しく怒っていた。
その時は自分が一夏君を止め、駆けつけてくれた教員がラウラちゃんを諌めた為大事にならずに済んだのだが……ラウラちゃんは態度を改める事はなく、寧ろ怒った一夏君を挑発するように笑みを浮かべていた。
……ホント、今日は色々マズったなぁ。自分が余計な事をした所為で一夏君達を焚きつけてしまったし、簪ちゃんにも心配を掛けさせてしまった。仕事も途中で休む事になってしまい十蔵さんに負担を掛けさせてしまったし、織斑先生に至っては頭を下げさせてしまった。
平和な世界にきて色々安心していた自分だが、どうやら少しばかり弛んでいたらしい。明日からは簪ちゃんの手助け以外にも自分を鍛え直した方がいいのかもしれない。
グランゾンも全然動かしていないし、偶には自分の機体の整備をしてもいいのかもしれない。

その7

β月Ｙ日

ラウラちゃんの過激な高校デビューから数日、自分が額に受けた傷は癒え、万全の状態となった。そして、タッグトーナメントを間近に控えた今日、遂に簪ちゃんの打鉄弐式が完成した。

自分も少し手助けをしたとはいえ、自分の力で成し遂げた専用機の完成を前に簪ちゃんは目に涙を浮かべてまで喜んでいた。

勿論、自分もこれには大いに喜んだ。これまで何度も挫折し、苦しい思いをしてきた簪ちゃんが漸くそれらから解放されたのだ。これまで簪ちゃんは姉を見返す為の土台すら無いと嘆いていたが、これで晴れて一歩前進したというのだから。

後はタッグトーナメントまで試験運用と調整を繰り返し、丹念に仕上げるのみ。完成した打鉄弐式に乗って空を舞う彼女の姿は……とても眩しく見えた。織斑先生も整備室から出て来て明るい表情となった簪ちゃんを見て、どこか嬉しそうに笑っていた。

因みに、自分がした手助けというのは大きく分けて三つ。打鉄弐式の安全性の向上と、運動性能の改善、並びに火力の向上だった。

まずは打鉄弐式の最大武装である〝山嵐〟複数の敵をロックするマルチロックオン・システムを搭載した武装なのだが、これは比較的簡単にクリア出来た。グランゾンに蓄積されたＺＥＸＩＳの戦闘データにはフリーダムの他にマルチロックオン・システムを搭載した機体が幾つも存在している。

例えばアルト君やオズマさん達の乗るバルキリー、ＹＦシリーズもミサイル発射の際には目視による多数ロックを掛けている。他にもヘビーアームズ改のフルオープンアタックのモーションパターンも参考にしたし、その気になれば前面に対して大きな制圧力を誇る事になる。

他にも背中に搭載された二門の荷電粒子砲〝春雷〟も連射機能だけでなく、収束や圧縮も可能なので火力面もアップさせている。

欲を言えば背中の荷電粒子砲はダブルエックスのツインサテライ

トにしたかったのだが……流石に今の自分には短期間で造れないのでボツとなった。
そもそも、サテライトキャノンは月にマイクロウェーブの発生装置を設置しないといけないから、どちらにしても無理な代物だが……いや、エネルギー供給をＧＮドライブに置き換えればいける……のか？
まぁそれはさておいて。
最後は近接戦闘の武装〝夢現〟これは対複合装甲用に開発された武装で、造型は薙刀とされている。複合装甲に対して有効な攻撃手段とされなければいけない為、超振動により切断能力を上げなければならないのだが、当然ＺＥＸＩＳにはこれに関するデータも存在している。
〝エクシア〟破界事変の頃に刹那君が搭乗していたガンダムで、メイン武装たるＧＮソードは対ガンダム戦を想定したモノで、その切れ味は折り紙付きであり、再世戦争の時も発展武装としてダブルオーに搭載されていた。
これにより火力面の問題は解消されたが、安全性が向上した訳ではない。この頃はまだ時間的猶予も残されていたので用務員の仕事がお休みの合間は外出届けを出して自分はある所に出張っていた。
そのある場所というのが――宇宙。地球から一時離れ、自分はグランゾンと共に宇宙へと出掛けていた。
流石に人に見られては拙いので、ワームホールで一気に跳躍した自分は地球から最も近いとされる惑星、火星へと赴いた。
簪ちゃんの安全性を高めるに必要な素材は地球では手に入らないので、ワザワザ宇宙へと赴いたのだが……いやー、これを開発したコロニーの博士達は紛れもなく天才だね。以前ＺＥＸＩＳでガンダムの整備の時に調べてなかったらとてもじゃないけど精製は不可能だったよ。
打鉄弐式の安全と防御面を底上げに使用した素材、その名も〝ガンダニュウム合金〟宇宙環境でしか精製出来ない特殊合金。トレーズさんの駆ったトールギスⅡにも使用されたこの宇宙合金は宇宙という特殊環境でしか精製できず、尚且つ重力変化によって造られるので

製造するのは容易ではない。
その為にグランゾンを駆り出し、宇宙に出張ってきた訳だが……いやー疲れた。試しに火星の鉱石で精製を開始したのだけれど、これがもう滅茶シンドイ。ちょっとでも出力を間違えれば簡単に圧壊してしまうし、かといって下手に抑えてしまえば合金は合金の素材として成り立たない出来損ないになってしまう。
データや精製方法は分かっているのに、完成までに至る道のりがかなり遠い。しかも太陽の電磁波の影響も常にチェックしながら作業をしなければいけないので精神的にもキツいものがある。
本当なら余裕があれば一夏君の分まで造っておこうかなと思っていたが……流石に時間が無くてそこまで用意する余裕がなかった。
けれど、丸一日費やしただけあってガンダニュウム合金は会心の出来映えとなった。軽く、それでいて耐久力も高いガンダニュウム合金は打鉄弐式のコアに適合し、更に出力の向上も確認できた。
この合金のお陰で出力も安定し、打鉄弐式に搭載された全武装も問題なく使用出来るようになり、強く、速く、堅い、三拍子揃った機体が完成した。
あくまでＩＳ基準に設定してある為、出力は抑えているけれど、それでも現時点でＩＳとしての性能はこの時点で他の第三世代の機体性能を大きく上回る出来映えだ。それにリミッターを外し、ＩＳとしての本領を発揮すれば単独で大気圏を突破、突入が可能となる。ガンダニュウム合金の性能も十二分に発揮され、出力も更に向上し、安定する。
その際には全身装甲の開発も視野に入れなければならないのだが……まぁ、今は横に置いてもいいだろう。
ともあれ、これで打鉄弐式は完成した。近い内に自分のプレゼントも完成するし、その頃には簪ちゃんも自分の機体に馴れ始める事だろう。
簪ちゃんは自分に感謝をしていたが、自分はそれを丁重に断った。自分がした事は簪ちゃんの手助けをし、少しばかり後押しをしただけだ。実際システムの殆どは簪ちゃんが組み上げたもので、自分はそこ

に不具合が出た時、横から口を出した程度だ。
ガンダニュウム合金に関しては……まぁ、自分がはっちゃけた結果なのでノーカンの方向で。
兎も角、これで下地は出来た。後は簪ちゃん自身の問題だ。お姉さんを越える為にヒーローになるのか、お姉さんに負けてヒーローに憧れるだけなのか、それはこれからの彼女次第だ。
尤も、それは彼女の表情を見れば一目瞭然なのだが……一夏君といい、簪ちゃんといい、若い子は一皮剥けるのが早く、そして頼もしい。
彼らの取り巻く環境は未だに大変だが、それでも頑張って欲しいと思う。
あぁ、でももう少しＩＳを弄ってみたかったなぁ。グランゾンに蓄積されたＺＥＸＩＳのデータを見ていると、男の子の心がムズムズするぜぃ。
ツインバスターとかサドンインパクトとか、ＧＮドライブとかくっつけてみたかったなぁ。
ＧＮドライブは無理か。あれ木星でないと精製できないし。流石に散歩気分で行ける距離じゃない。ネオになれば楽に行けるけど……いや、やっぱりやめておこう。
あれってトロポジカルディフェクトとか、色々条件が揃ってないと造れない代物だし、まだそこまで細かな作業は自分には出来ない。

β月Ｔ日
例の問題児、ラウラちゃんがまたもやらかしてしまった。
今日の放課後、その日最後の仕事としてアリーナの清掃をしていると、鈴音ちゃんとセシリアちゃんがラウラちゃんにボコボコにされている所に遭遇してしまった。
二対一という不利の状況の中でああも圧倒的に立ち回れるその技量は見事なものだが、それにしても彼女はやりすぎた。鈴音ちゃんとセシリアちゃんのＩＳはボロボロになり、シールドエネルギーがゼロになってもラウラちゃんは二人に攻撃を加え続けた。
このままでは絶対防御もその機能を停止し、最悪命の危険性が出て

くる。すぐさま戦闘を中止させようと呼び掛けたが……それよりも早く、一夏君がアリーナの遮断フィールドを破り、ラウラちゃんの所へ突貫していった。

彼にとって二人は大事な友人であり、ＩＳについて教えてくれる師匠の様なものだ。そんな二人が傷つけられ、命の危機にまで及ぶとあっては、流石に黙っていられなかったのだろう。

鬼気迫る勢いで切りかかる一夏君だが、ラウラちゃんのＩＳに搭載された特殊機能によって防がれる。その後はシャルル君の手助けもあってセシリアちゃんと鈴音ちゃんは大事なく、ラウラちゃんの方も駆けつけた織斑先生によって止められ、互いにタッグトーナメント戦までアリーナの使用を禁じた事によってその場は一応の幕を引く事になった。

織斑先生はアリーナのフィールドを破った一夏君に何らかの罰を負わせようとしていたが、自分が事情を話す事で何とか納得してもらい、一夏君へのペナルティーは無いものとしてくれた。

それよりも注意をしなくてはならないのはラウラちゃんだ。どんな理由があれ、二人の生徒を命に危機に瀕するまで追い詰めたのはどう考えてもやりすぎだ。元教え子だろうとなんだろうと、そのあたりはしっかりケジメを付けなくてはならないと思う。と、気が付いたらそんな事を口にしていた。

……今にして思えば、流石にあれは言い過ぎたよなぁ。幾らその場に居合わせた人間の一人とはいえ、明らかに用務員の役割から逸脱した言い方だったから、言い放った瞬間クビを覚悟したものだ。

幸い織斑先生は自分の発言に驚きはしたものの、その後は自分の言い分を快く受け入れ、ラウラちゃんに厳しく言っておくと言ってくれた。

十蔵さんからもあの織斑先生に文句を言いきった事を賞賛してくれたが……自分としては冷や汗ものだった為、あまり喜ぶ事は出来なかった。

それにしてもラウラちゃんか……この分だと次のタッグトーナメント戦でも一波乱ありそうだな。

因みに、今回のアリーナの使用禁止で一番割を食ったのは簪ちゃんだった。アリーナが使えないことにむくれる彼女を宥めるのに苦労したと追記しておく。

β月J日

今日は、一夏君と織斑先生に恥ずかしい所を見せてしまった。以前言っていた自分を鍛え直すと言っていた自分は、早朝……まだ朝日が昇っていない時間帯で学園の近くにある海岸にまで足を運んでいた。

そこで行った鍛錬法は……錬気、つまりは気を練り上げて肉体の調子を整えるモノだ。詳しい説明は省いて簡単に説明すると、特殊な呼吸方法で体の新陳代謝を上げ、体の調子を整えながら内側から鍛えていくというもの。

これは外気の空気を感じて適度に行う必要がある為、その時の自分は上半身裸で海岸に立っていた。

端から見れば波打ち際の砂浜に立っている男が上半身裸でコーハーと息を吐いているのである。

……うん、バリバリ不審者だね。もし警察の人に見つかったら職質確実な光景である。尤も、知り合いに見つかれば恥ずかしいでは済まない気持ちになるのだけれどね。

そして、そんな恥ずかしい思いをこの日体験する事になる。アリーナが使用禁止となった事でタッグトーナメント戦までＩＳを使う事がなくなり、仕方がないので体を鍛えようと走り込んでいた一夏君と遭遇し、気分転換と称して同じくジャージ姿の織斑先生と出会してしまった。

もうね、その時は恥ずかしさと申し訳なさとでイッパイイッパイだったよ。端から見たら怪しさ全開な事をしている自分と傷だらけの小汚い体を見せる事になって、本当に参ったよ。

一夏君も織斑先生も引いてたし……そりゃ引くよね、自分の体、明らかに剣で斬られた様な傷跡が二つもあるし、腹には銃痕まであるのだ。二人の反応は当然とも言えるだろう。

その場は何とか体裁を取りつつ明日のタッグトーナメント戦の話

を少しだけ触れて終わりにしたが……変な風に思われていないだろうか。それだけが心配である。

気を使わせたかもしれないし、一夏君へのガンタニュウム合金のプレゼント、真面目に考えてもいいかもしれない。

その８

――――私は、何も出来ない臆病者だ。姉の影に隠れ、いつも一人で俯いていて……弱く、脆い。そんな人間だった。

更識の家に生まれ、国の為に裏で人生の全てを捧げると誓った姉。何者にも勝り、何者よりも強い私の姉は、私にとって、何よりも重い影となった。

勉学に優れ、肉体的にも強く、精神的にもタフな私の姉、最初の頃はそんな姉が誇りであり、自慢だった。

いつか、どこかの誰かが口にした言葉。『姉と比べ、妹はお粗末だな』その言葉は端から聞けばなんてことない戯れ言に聞こえるが、私にとっては……これ以上ない呪いとなった。

呪いは時が経つと共に重く、巨大に膨れ上がった。時が経過する事に私と姉の差は広がり、明確なものとなり、今では姉に勝てるモノは何一つとしてなかった。

ＩＳ学園の頂点に君臨し、そのＩＳすらも一人で組み上げたその才能は最早異端の域に入っていた。才能の塊である姉、その姉に僅かでも追い付こうと日本の代表候補生となった私は、開発中断となった専用機を引き取り、一人整備室に籠もっていた。

姉に出来て私に出来ない道理はない。そんな根拠の無い強がりを吐きながら、私はＩＳの組み上げ作業に没頭していった。

逃げていた。と言った方が適切かもしれない。ＩＳの組み立て作業に集中している時は、姉の影に怯える事もなかったから……。

けれど、その現実逃避も間もなく終了した。ＩＳの組み立ては難航し、何度もミスをしては打鉄弐式は強制停止した。

……結局、私は姉に何一つ勝てやしないんだ。更識簪は自分の姉である更識楯無にどの分野においても敗北する運命なんだと。

何もかもがいやになった。大きすぎる姉の影に隠れ、私の存在が消えてしまいそうな錯覚に陥った時――――あの人が現れた。

白河修司。自らを通りすがりの用務員と名乗るその人は、何が面白

いのか、私なんかを構う様になった。
最初は鬱陶しかった。何度も整備室の門を叩き、私に構ってくる修司さんを、私は何度も拒絶した。彼を私から遠ざける為に、何度も酷い言葉を吐いた事もあった。
偽善者と、何も知らない男が知った風なことを言うなと、更にはそれよりも酷い暴言を吐いた気がする。けれど、修司さんは私の言葉に嫌な顔などしないで、ニコニコと笑っていた。当時の私は、それすらも私をバカにする作り笑いだと思い込み、工具を投げつけた。
けれど、それでも離れていかない彼に遂に根負けしてしまった私はある日、彼を打鉄弐式に触れさせてしまった。しつこい彼にこれで納得するだろうと思い込んでいた私は、次の瞬間、驚きに我が目を疑う事になる。
あの打鉄弐式が、作業を進めれば途中必ず強制停止をしていた私の専用機が、修司さんにイジられた途端見違えるように稼働し始めたのだ。
稼働だけじゃない。各パーツの連動性も飛躍的に向上したし、駆動部分も何ら問題は無かった。
何をしたのだと彼に問い質すと、帰ってきたのは「何も」の一言。そんなバカなと問い詰める私に修司さんは丁寧に打鉄弐式について教えてくれた。
それは、普段の私ならば間違える事のない部分だった。各武装の信号パルスを平行して伝達させる部分の設定を間違えていたのだ。これによりＩＳは起動するのは危険と判断し、自動的に強制停止が働いていたのだ。
こんな簡単な事にも気付かない自分に恥ずかしくなったが、同時に頭は冷えていった。落ち着いて物事を見れば視野が広がる事を修司さんは教えてくれたのだ。
それから私は修司さんの監修の下、打鉄弐式の組み立てに集中した。落ち着いて周りを見て、時には修司さんの指摘を受けながら、作業は順調に進んでいった。
それにしても、修司さんは一体何者だろうか。本人は唯の雇われ用

務員だと言っていたけれど、虚先輩の話ではあの人は十蔵さんが直接雇ったと聞く。
ＩＳ学園の運営責任者、その人が直接連れてきたという事は何らかの訳ありだと思うけど……まぁ、今はどうでもいいか。
あの人はＩＳに関して豊富な知識を持っている。私なんか比較にならないほどの……それこそ、一人でＩＳを作り上げられる程の技量を持っていながら、それでも、私の為に力を貸してくれる。
きっと、修司さんは私に教えてくれようとしたのだろう。才能よりも大事なものがあることを。
「かんちゃん、平気？　緊張していない？」
隣にいる見慣れた女の子が私を心配そうに顔をのぞき込んでくる。いけないいけない。どうやら考え事をしていたのを勘違いさせてしまったようだ。
「大丈夫だよ本音、私は平気」
「ホントにホント？　無理しちゃダメだよ」
いつからこんな心配性になったのか、何度も大丈夫かと訊ねてくる幼なじみに私は平気と応え、その頭に手を乗せた。
サラサラとしてて柔らかい。彼女の性格を現した髪の感触に私は笑みが零れた。
彼女がここまで心配しているのは偏に私の所為だ。変に意固地になり、自分の殻の中に閉じこもり、何も見ようとしなかった私の責任だ。
だから、という訳ではないけれど。
「本音」
「ん？　なに？　かんちゃん」
「私、強くなるよ。他の代表候補生にも……お姉ちゃんにも、誰にも負けない位に」
私は目の前の幼なじみに宣誓する。強くなると、小さくも、はっきりとした言葉で……それを聞いた幼なじみは一瞬だけ目を丸くさせ――。
「うん！　かんちゃんならきっとなれるよ！」

そう、満面の笑顔で受け入れた。
『これより、ＩＳ学園学年別タッグトーナメント戦を開催します』
アリーナにナレーションが流れると、アリーナ中に割れんばかりの大歓声が巻き起こる。その熱気に当てられ、私の手が微かに震える。
……大丈夫。怖くない。私はもう、ヒーローに憧れるだけの子供じゃない。
私には打鉄弐式がある。修司さんと私、二人で造り上げたこの機体があるし、何より隣には私をいつも支えてくれる最高の幼なじみがいてくれる。
だから負けない。絶対に、勝つ。
『簪ちゃん、君はヒーローに憧れるだけかい？　それとも……ヒーローになりたいのかな？』
昨日言われた修司さんの質問、正直この問いにまだ答えられない自分がいるけれど、この戦いが終わればきっと胸を張って言えると思う。
私の、私だけの答えを。私は、多くの人のお陰でここにいる。沢山の人に支えて貰えたから、ここにいられる。本音、虚先輩、修司さん、そして……お姉ちゃん。
まずは、私の今を見て貰おう。どこかで覗いているだろうお姉ちゃんに、自分の今の全力を。
だから――――。
「本音、援護は任せたよ」
「まっかせてよ！」
『それでは、第一回戦第一試合……開始します』
鳴り響く試合開始の合図。私は打鉄弐式を、本音は訓練機のラファールに身を包んでピットから飛び出し、共に空へと飛翔した。

◇

β月Ｏ日
ンンンンヤッフォオオオイ!!　トロピカルヤッフォオオオイ!!
ヒャッハー祝杯だー！　酒持ってこーい！
……突然のハイテンションすみません。現在時刻が夜中を差している為、日記の中でだけテンション高くしていこうと思いましてハイ。
いやー、それにしても良かった。今回のタッグトーナメント戦は簪ちゃんの初陣となる戦いなので見ている此方は終始ハラハラしていたのだが、結果的には完勝だったので固唾を呑んで見守っていた自分はひとまず肩の荷を降ろす事が出来た。
何だかお偉いさん方が来ていて思ってた以上に大きな大会だったから雰囲気に呑まれないか心配していたのだけれど、そんな素振りは微塵も見せていなかった。相方ののほほんちゃんとの連携もスムーズに行われていたし、相手側の動きもよく見ていた。打鉄弐式の機体性能を充分に引き出した訳じゃないけれど、そんな事を差し引いても見事な戦いだった。
本当嬉しかった。遠巻きから見ても簪ちゃんの戦い方に迷いはなく、寧ろ自信に満ち溢れていた。一皮剥けた簪ちゃんに自分はただおめでとうの一言である。
試合が終わった直後、カメラに向かってブイサインを出していたのもまた可愛らしくて良かった。今録画しておいた記録映像を六回ほど見直しているが、やはり……うん、見ていて感動すら覚える。
欲を言えば二回戦、三回戦と代表候補生相手との試合も見てみたかったけど、途中でアクシデントが起こった為、タッグトーナメント戦は一時中断となってしまったのが残念だった。
というか、ラウラちゃんの専用機に仕掛けたあのシステム、絶対ドイツの思惑が絡んだシステムだよな。何だよＶＴシステムって、あんなんチートやチート！　世界最強のＩＳ乗りのデータをトレースさせて使うとか、よくも無粋極まりない代物を思いつくものだ。

まぁ、そのシステムも一夏君の一太刀で真っ二つに両断された訳なんだけどね。簪ちゃんの戦闘ばかり目が行ってたけど、一夏君も前よりずっと腕を上げていたものな。

やっぱり一夏君にも何かプレゼントを上げた方がいいかもしれない。あんなに頑張っているんだもの、多少贔屓しても構わないだろう。

ドイツの方は……まぁ、いいか。一応ドイツの主要基地や施設にハッキングしてある程度の黒い情報は押さえているから。

現在はグランゾンのデータベースに大切に保管させて頂いております。もしこの情報を開示する際は蒼のカリスマとして動いた方がいいのかもしれない。

まぁ、そんな事より今は簪ちゃんだ。今後の彼女の成長も一夏君と同様に注目していきたいと思う。

◇

ＩＳ学園生徒会室。普段は人が出払っているこの教室に、現在二人の人間が明かりを付け、備え付けのテレビを眺めていた。

テレビに映し出されているのは……今日行われたタッグトーナメント戦、第一試合の内容だ。

日本の代表候補生である簪が手にした薙刀で相手の武器を両断し、そのまま舞うように連撃を叩き込んでいき、遂には相手のシールドエネルギーをゼロにする。

鳴り響く試合終了のアナウンス、湧き起こる歓声とカメラに向けて笑顔でブイサインを向ける簪に……。

「ヤダ、ウチの妹……カッコ良すぎ」
　目をキラキラ輝かせて、口元を両手で押さえる学園最強がいた。
「お嬢様、その台詞はこれでもう５０回目です」
「何言ってるの、まだ５０回よ。我が妹の勇姿をこの目に焼き付けないでどうするというの！」
「しかし、時間はもう二時を回っています。明日も生徒会長としての仕事もありますからそろそろ休まれても……」
「大丈夫、その時は休むから」
「おいコラ」
　堂々と仕事を休むと宣言する楯無に戒める虚だが、当の本人は聞き入らず再び試合内容を最初から見直している。自分の立場を考えるのなら本当ならもっと厳しく注意をしなければならないのだが、目の前の彼女たちの姿を見てその気にはなれなくなった。
　画面に映し出される妹と目の前で喜ぶ姉、どちらも同じように笑う姉妹に虚もまた頬笑ましく思えた。一皮剥けた妹とそれを喜びと思える姉、二人の確執もいつかは取れるだろうと思い、虚はそれが嬉しく思えた。
（白河修司さん、でしたか。彼には一度お礼を言った方がいいのかもしれないわね）
　二人の仲が改善出来る切っ掛けを与えてくれた男、その人物に感謝しつつ、虚は目の前のお嬢様を見守るのだった。
「あぁん、今すぐ簪ちゃんの所へ行って抱きしめてペロペロしたいわ！　いや、それよりもファンクラブの結成ね。まずは外堀から埋めるのが優先よ。あ、虚、この映像保存用と観賞用、布教用って保存しておいて、高画質で」
　……訂正、どうやらこの駄姉、余計なモノを拗らせたようだ。

その9

Σ月※日

波乱のタッグトーナメント戦から数日が経過し、再び穏やかな日々を取り戻しつつある今日、今回はこれまで起こった出来事を簡易ながら記していこうも思う。

まず最初、シャルルちゃんが遂に自ら女性である事を皆に告白し、女の子としてＩＳ学園に再編入される事となった。

これ自体は別にいい。自分も知っていた事だし、織斑先生もやっとかという思いのようだったし、多少の混乱はあったものの一夏君のクラスはいつも通りの授業をこなしていた。

まぁその最中、話を聞きつけた二組の鈴音ちゃんが教室の扉を派手にぶち壊したりしたようで中々壮絶だったらしいが、それを治めたのは……意外にもあのラウラちゃんだった。

タッグトーナメント戦以降大人しくなっていた彼女は一夏君の婿(？)になるべくＩＳ学園で引き続き授業を受けるのだとか、学園の方はドイツにＶＴシステムについて説明を求めたっぽいが……まぁ試験管ベビーなんて作る輩の事だ。社会的動きを見せていない以上、知らぬ存ぜぬで通しているのだろう。

シャルル――――いや、シャルロットちゃんに関してもそうだ。フランスのデュノア社は彼女の性別の隠蔽について特に言い訳する訳でもなく黙秘を続けているようだ。

もうね、他人事とはいえ流石の自分もこれには腹が立ったよ。政治的に干渉してくるなら兎も角あんな姑息な手段をしておきながら申し開きの一つもないとはどういう事だよ。

シャルロットちゃんに関しては『一夏君のデータが欲しくてついやっちゃいました。テヘペロ♪』みたいに謝れば他は兎も角少なくとも自分は溜飲を下げたものを……。

何せあんな稚拙な変装なのだ。あんな丸わかりの変装、まるで見破って下さいと言ってるようなものじゃないか。……いや、これについては最早仕方ない。自分達もシャルロットちゃんの事は知ってて黙認したんだ。早い内に自分から告白してくれるのだろうと。そう気遣ったつもりが……逆に彼女を追い詰めてしまった。

近い将来、デュノア社はＩＳ事業から撤退する事になるだろう。下手をすれば倒産の可能性も考えられるが、自業自得の為こちらからなにか言うことはない。

シャルロットちゃんに関しては……まぁ織斑先生の采配によるだろう。先生から聞いた話だと卒業後日本に帰化する事を条件に保護する事を検討してもらうとか言っていたし、元日本代表のブリュンヒルデの頼みとあらば日本政府も断る事は出来ないだろう。

ラウラちゃんに関しては流石にブラックな部分に深く関わっている為、あまり迂闊な事が出来ないというのが政府の内心のようだが……前にも言った通り、現在グランゾンのデータベースには自分がハッキングをした事で入手したドイツの黒々とした情報が数多く蓄積されている。

内容が内容の為に慎重に扱わなければならないが、時がくれば日本政府の信用出来る人に渡してみようと思う。その時はやはり蒼のカリスマとして動く事になるのだろうけど。

まぁこれらに関してはこんな所でいいだろう。今回の最大の問題は鈴音ちゃんだ。壊した教室を自分が直したのだが、どうやら鈴音ちゃんはこの事を反省しておらず、また同じ事が起こったら大変なので箒ちゃんの時と同様、彼女に対し真摯な態度で懇切丁寧にお願いし、学校の備品を壊さないよう説得した。

箒ちゃんもそうだけれど、この歳の子は思春期の所為もあってやや落ち着きがない。年頃の女の子という事もあって色々思う所はあるけれど、ここは色んな子が学ぶ学舎でもあるのだ。ＩＳを展開し、もし他の生徒を巻き込んだりしまったら大変だ。その所を特に厳重に注意した所、鈴音ちゃんは快く承諾してくれた。その場に居合わせたラウラちゃんにも念の為同じようにお願いした所、彼女も敬礼しなが

ら了承してくれた。
流石織斑先生の教え子だけあって礼儀正しい子だ。鈴音ちゃんも直立不動で了解していたし、やっぱ皆基本的に話せば分かる子達なんだよな。ただ年頃な時期の為やや気難しい所があるだけなのだ。
カレンちゃんやヨーコちゃんもそうだったし……いや、今は彼女達の話は止めよう。背筋が寒くなってきた。
ともあれ、タッグトーナメント戦も一段落して簪ちゃんも華麗にデビューを決めた事だし、暫くはのんびりとした日々になるだろう。
一年生はもうすぐ臨海学校もある事だし、日頃のＩＳの訓練の日々もこれを機に英気を養って欲しいものだ。

Σ月α日
梅雨の時期も過ぎ、季節は夏を迎えていた。ＩＳ学園の制服は通気性も高く、殆ど衣替えをする生徒がいないが、それでも一年生の子達は迫る臨海学校の日に胸を踊らせている様子。学園の休みの日には水着を買いに行くために外出届けを出す生徒が多いし、十蔵さんも毎年生徒の皆はこの日を楽しみにショッピングモールに買い出しに行くと言っていた。
ＩＳという兵器を扱うからには生半可な訓練は許されないＩＳ学園。しかし学園という事だけあって普通の学校らしいイベントも季節ごとに用意されている。これもＩＳ学園の倍率が毎年高い理由の一つだろう。
しかも今年は唯一の男性操縦者である一夏君もいるので女子達の熱気は相当なものだろう。
織斑先生も引率大変ですねと昨日までは他人事の様に言っていた自分だが、今日、信じられない事を十蔵さんから告げられた。
なんと、明日の臨海学校に自分も引率側として同席して欲しいと頼まれてしまったのだ。一介の用務員に過ぎない自分がどうして同席しなければならないのか、今一つ理解出来ない話に自分は訊ねると、以下の理由が返ってきた。
今年は例年に比べて生徒数が多く、教員一人に掛かる負担が大きい

とされており、男手が必要だという事と、男が自分しかいない一夏君の精神的負担を軽くしてあげると言う大きく二つの点が挙げられた。
織斑先生も今年はいつもより生徒数が多くて大変だと愚痴をこぼしていたし、一夏君も時々自分の所に来て肩身が狭いと相談を持ち掛けて来ている。
今回の臨海学校は一つのビーチを貸し切ると聞くし、生徒数も多いことから相当な規模になる事だろう。教員も女性ばかりだし、確かに男手も必要な時があるだろう。
腕っ節なら織斑先生という頼もしい人がいるが、それでも彼女一人に全部任せるのは忍びない。一夏君も自分がいることで気持ち的に余裕が出るのならば自分としては断る理由はない。
ただ、問題は自分がいない合間用務員の仕事は全部十蔵さんに押し付ける事になってしまうが……大丈夫だろうか？
十蔵さんが言うには生徒会の子達と連携して何とかすると言っていたけど……まぁ、楯無ちゃんも協力してくれるなら構わないか。
取り敢えず同行する事を承諾した自分は貯めておいた給料を使い、水着を買いに行く事にした。臨海学校のしおりをみると、学園の関係者は全員例外なく水着を必ず持参することを強く明記されていたからだ。
何気にノリが良い時あるよねこの学園。と、まぁそんな訳で自分もショッピングモールに行くことになり水着を購入したのだが、途中色々な出来事に遭遇した。
一夏君と一夏君の同級生の弾君とその妹の蘭ちゃんやシャルロットちゃんと会ったり、一夏君を尾行するセシリアちゃん達を見かけたり、自分と同じ目的で買い物に来ていた織斑先生と山田先生と会ったり、中々楽しい時間を過ごせた。
ただ夜、アリーナで見回りをしていたら一人佇む箒ちゃんと遭遇し、不思議な事を訊ねられた。『好きな人の隣にいるにはどうすればいい？』と、いや、恋愛経験ゼロの自分に訊ねられてもかなり困るのだが……年上の威厳を保つ為に自分の言葉やある少年の言葉を交えて真剣に答えたつもりだが……果たして上手く伝わっただろうか。

それにしても、あの箒ちゃんがねぇ。相手はやはり一夏君なのだろうか？　青春しているなぁ、俺って高校時代の頃は普通にバカばっかやってたからなぁ。

大学に入ってからもニコちゃんから時々世話になってたし……ニコちゃん、憧れていたアイドルにはなれたのかな？　ニコちゃんが高校生になってから、結局ライブには一度も見に行けてないや。

確かμ☒sってグループを立ち上げた所まで知っているけれど、果たしてどうなっているのやら。

兎に角、明日は臨海学校だ。生徒の安全を守る為に自分も頑張りますか。

◇

――今日、私は人から決して褒められる事のない卑怯な事をしようとしていた。人類最高の頭脳の持ち主である姉に頼み、自分の専用機を強請ろうとしたのだ。

代表候補生や代表者にのみ与えられる事を許される専用機。想い人の一夏を振り向かせる為、私は開発者の姉に電話を掛けようとした。

卑怯な事は分かっている。狡い事も承知している。だけど、それでも一夏に自分を見て貰えない事を思うと……怖くて仕方がなかった。

唯一肉親の私だけに記された姉の番号、夜もふけて誰もいなくなったアリーナで静かに姉への通信回線を開こうとした……その時だ。

彼が……修司さんが私の背後から現れた。

心臓が飛び出るかと思った。拙い所を目撃されてしまった私はどう言い訳したものかと慌てふためいていた。無様で滑稽な私、そんな

私をあの人は決してバカにする事はなく……。
『明日は早い。君も、早く部屋に戻りなさい』
そう、優しく叱ってくれた。夜遅く外出していた私を厳しく追求する事なく、今見たのはなかった事にしようと修司さんは踵を返した。
――――大きい背中だった。一夏とは違う。幾つもの困難に立ち向かい、そして乗り越えていった大人の背中。いつかは一夏もこんな風になるのかと、そう思った私は、修司さんを呼び止めてついあんな事を口走ってしまった。
好きな人の隣にいるにはどうすれば良いのか。どうしようもなく、不器用な私が出せる最大限の気持ちを用務員の彼に告白した。
すると、彼は一瞬戸惑った風に首を傾げると……。
「強請るな、勝ち取れ、さすれば与えられん」
「え？」
「これは俺が知るとある少年の言葉だ。想いにしろ、物にしろ、それら全ては自分の手で手に入れなければ意味を為さない。この少年は最後まで足掻き、もがき、時には苦しみながら懸命に手を伸ばし続け、想い人と結ばれた」
「……」
「篠ノ之箒ちゃん」
「は、はい！」
「君が想い人に対する気持ちが本当に誰にも負けないものだというのなら、強請るのは止めなさい。もがき、無様でも足掻いて見なさい。結果はどうあれ、それは君の人生に於いて最も得難いモノになると思うから」
「……」
――――重い言葉だった。後悔したくないのなら、例え力不足でも自分の全力を出し尽くせ、そう語る彼の言葉は私の胸の中にストンと落ち、ジワリと溶けていった。
何だか、胸の内のモヤモヤが晴れた気がする。スッキリした気分となった私に修司さんは笑みを浮かべ。
「それに、良く言うだろ？　命短し恋せよ乙女。君達が華でいられる

時間は余りにも短い。この一瞬一瞬を……大事にしなさい」
少々親父臭いと思ったが、何よりも気持ちの籠もった修司さんの言葉に私は即返事をした。分かりましたと、そう返答する私に満足したように頷くと修司さんは今度こそアリーナから出て行った。
きっと、私はこの日の事を感謝するだろう。もしこの時姉の連絡先に通信を入れ、あの人に頼ってしまったら、きっと私は心のどこかで皆に負けた気持ちを持つことになっていた。
リンもセシリアも、シャルロットにラウラも、皆自分の努力で代表候補生になり、専用機を勝ち取っているのだ。
凄い奴らだ。きっと一夏はそんな一生懸命な女性に惹かれる事だろう。頑張っている人は、ただそれだけで輝いているのだから。
私も輝いてみたい。いや、輝いてみせる。いつか一夏に自分を認めて貰う為に……私の想いを伝える為に。
姉さん、ごめんなさい。私はあと一歩で、アナタを都合良く扱う道具にしてしまう所だった。不肖な妹を、どうか許して欲しい。
手にした携帯の電源を切り、私もアリーナを後にする。結局は他の皆に一歩出遅れる形となるのだが……まぁ、別にいいだろう。
何せ最近の一夏は鈍感な上に勘違いを起こしやすい。実力を付けてきた事に比例するかのように、その症状はドンドン悪化していくようだ。
故に、まだ私は負けていない。負けていないのだ。
「強請るな、勝ち取れ、さすれば与えられん」
寮に戻る途中、教えられた言葉を紡ぐ。この言葉を発する少年はきっと私以上に困難が降り注いでいたのだろう。
それを乗り越え、想い人と結ばれる。私も、そんな風になれる事を願って。
だが、この時私は気付かなかった。電源を落としていた筈の携帯に着信が入ってきたという事に――。

着信件数一件。着信者――篠ノ之　束

その１０

Σ月Ｇ日

夏。鬱陶しい梅雨の季節は過ぎ去り、日がこれでもかと照らし出す時期、今日自分は学園の一学年の生徒達とその担任の教員達と共に臨海学校の場所として、とあるリゾート地に来ていた。

海が近くにある旅館に荷物を降ろした後、自由時間の時、教員の皆さんの監視の下で生徒達は自由に海を満喫していた。普段は厳しい訓練と授業により抑圧されていた鬱憤を晴らす様に遊ぶ彼等を見て、自分達引率側ははあまりハメ外しないよう、適度に監視し、注意を促した。

砂浜で遊ぶ子供達、悠々と波に漂う者もいれば友人達と共に波打ち際で水を掛け合ってたりして皆、それぞれの楽しみ方でエンジョイしていた。

一夏君も女子に囲まれながらも楽しそうに遊んでいた。……若干振り回されているようだったけど、それでも友人達と一緒に遊ぶ彼の顔は本当に楽しそうで安心した。

簪ちゃんもタッグトーナメント戦で見せた勇姿が他の女子生徒達に深く印象を与えたのか、自分のクラスの子達に囲まれ、皆と楽しく遊んでいた。ただ、今までクラスとの交友が無かった為にその時の簪ちゃんはドギマギと緊張した様子だった……。

尤も、タッグトーナメント戦の時とは別人の彼女とのギャップが女子達の琴線に触れたらしく、簪ちゃんは暫しもみくちゃにされていた。本人は嫌がっていたが……満更でもないような顔をしていたので取り敢えずスルーしていた。彼女の従者と自称する布仏本音――――のほほんちゃんも、嬉しそうにしていたし、別に大丈夫だろう。

箒ちゃんも特に変わった様子もなく……いや、前よりも明るい調子で皆と遊ぶ彼女の姿に自分もひとまず安心する事が出来た。余裕……というものが出来たのかもしれない。一夏君が他の女の子と遊んでいる所を見ても取り乱さずに、楽しそうに遊んでいる一夏君を見

て嬉しそうに笑っている箒ちゃんを見て、自分も何だか喜ばしく思えた。

自分はというと、終始監視の立場に専念する為に海には入らなかったのだが、途中拙いハプニングが起きたので急遽海に駆り出す事になった。

一夏君と競争していたのか、遠い沖合まで出ていた鈴音ちゃん。その時は少し波も高くなっていたし、大丈夫かなと自分が心配になったその時、突如発生した大波に体を呑まれ、鈴音ちゃんは海の底へと呑み込まれてしまった。

しかもその時は間が悪く、織斑先生を含めた他の教員が近くにいない為、自分が対処する事になった。パーカーを脱ぎ捨て、速やかに駆けた自分は鈴音ちゃんが沈んだ所に到達すると同時にダイブし、彼女のライフセイブに乗り出した。

一夏君の手助けもあり、大事には至らなかった鈴音ちゃん。ただ水を呑んでいたので、彼女は落ち着くまでセシリアちゃんに任せ、旅館に一時戻って貰った。その後も自分は引率として監視に集中したのだが……いやー良かった。海での――というか、ああいった事故は一分一秒が人の生死に大きく影響する為内心少々焦ったが、目を覚ました後の彼女も特に異常は見受けられなかった。あの分だと、鈴音ちゃんの容態は殆ど心配いらないだろう。

織斑先生や山田先生にもこの事は報告しておいたし、山田先生が様子を見に行っていたから、本当に大丈夫なのだろう。

しかし、やはりああいった現場を目撃したのは皆なかったのか、鈴音ちゃんが溺れた時のビーチの一部は一時騒然となった。当然か、何せ同じ学友の生徒が海に溺れ、一時意識を失っていたのだから。

引率の一人と監視という立場があった為に自分は咄嗟に動けたが、もし自分が観衆の一人だったら、きっと何も出来ず呆然としていた事だろう。

ただ、人工呼吸をする際に騒ぎ出すのはいただけない。人工呼吸とは言わば人に出来る最小限且つ最大限の人命救済処置なのだ。決して遊び半分で学ぶべきものではない。

駆けつけた織斑先生もそれが分かっていた為に、騒いでいた生徒達を厳しく叱っていたのだ。これを教訓に彼女達もその辺りのことしっかりと学んで貰いたいものだ。

遊び終えた皆はその後、旅館の宴会場で夕食を取る事になるのだが、一組のクラスが相変わらず賑やかだった。直後に織斑先生が叱りにいったりして此方も相変わらず忙しそうだった。

因みに旅館における一夏君の部屋は自分と同室だった。今回の臨海学校での男性枠は自分達だけなので織斑先生が二人が同じ部屋になるよう取り計らってくれた。

その後、一夏君が織斑先生の部屋に呼ばれたりしたりしたけれど、それ以外は特に変わった事がなく、その日は多少のアクシデントはあったものの、総じて楽しい一日となった。

ただ、鈴音ちゃんからは「アレはノーカンですから！」と、意味不明な事を言われてしまった。顔色も何だか赤かったし、もしかしたら事故の後遺症なのかもしれない。織斑先生からは大丈夫だろうと言われたが、万が一ということもあるので学園に帰ったら精密検査をするよう自分の方から保健の先生に言おうと思う。

◇

――朝。まだ日が昇りきっていない薄暗い世界、まだ生徒の誰もが起床していない時間帯、一人の影が旅館内をさまよっていた。

パタパタと旅館の従業員が動き出す足音に混じり、一人の男が従業員の人達とすれ違う度に旅館内で慎ましい挨拶の声が静かに響き渡る。

「さて、朝食にはまだ時間があるし、旅館周辺の見回りでもしてくるか

な」

男――――白河修司は己の役割を果たすべく旅館の周辺の見回りを自ら買って出る。数少ない男手、少しでも他の先生達の負担を軽くすべく、自ら行動を開始する。

既に従業員の人達には事情を話した。早いところ見回りを終えて朝食を取ろうと、旅館から一歩外に出たとき……。

「――――やぁ、君が……白河修司であってるかな？　あってるよね？」

――――彼女が、いた。フリフリのドレスに身を包み、頭にはピコピコと兎の耳を形取ったデバイスを取り付けた女性が、極大の敵意と殺意を身に滲ませて修司の前に現れた。

音も無く、気配もなく、幽鬼の如くユラリと現れる彼女に修司の視線が集中する。

何だコイツは……と、警戒心を露わにする修司をまるで面白いものを見るように目の前のアリス（天災）は口元を歪める。

「アレアレ？　どうしてお返事してくれないのかな？　あ、もしかして自分のコレまでの行動が全部隠せていると思っていたのかな？　プッククク～、君って結構抜けてるんだね～」

クスクスと笑みを浮かべているも、その実笑顔とは程遠い冷たい目をしている天災に修司は身構える。一触即発の空気、いきなり頂点を決める戦いが勃発しようとした時。

「クッフフ、やだなーシーちゃん。冗談だよ♪　そんな怖い顔をしないでしないでー♪」

天災は顔を満面の笑みに染め上げ、バンザイとばかりに両手を挙げる。敵意も殺意も微塵も残さず四散させる天災を前に修司は拍子抜けた様子に面食らう。

「今回私が来たのは妹にプレゼントを渡すだけなんだー、だからシーちゃんと遊ぶのはまた今度」

アハハハと、無邪気に笑う天災。表情をコロコロと変える目の前の存在を計りかねた時。

「けど、いつかお前の化けの皮……引き裂いてやるからな」

その整った顔から、再び巨大な悪意を覗かせた。それに反応して修

司が対応しようとするも、不自然な風が修司の視界を遮った。ホンの僅かな合間、それこそ一秒にも満たない時間だったのに、既に目の前に人影はなく、昨日自分達が通ってきたアスファルトの道が続いているだけだ。

朝日が水平線の向こうから顔を覗かせる。人気のない道路にただ一人佇む修司は……。

「なんだ……今の。もしかしてアレが……最近良く耳にするメンヘラな女性という奴なのか？」

たった今現れた天災を修司はただの変質者として片付けるのだった。

篠ノ之束　その名を知らない人間は殆どいないが、その容姿は本人が行方を眩ませる際に各国家から行き先を悟られぬよう全てのデータを自ら消去している為、彼女の姿と名前を一致させる事が出来る人間は意外といない。

その11

「不審者だと？」

とある海辺にある旅館。朝食後、本日の予定について会議室代わりとして割り振られた部屋で集まり、それぞれ確認していたＩＳ学園の教職員達が織斑教員のその一言により一気に緊張が高まった。

女性教員達の視線が部屋に入ってきた学園の数少ない男性の一人、白河修司に集中する。女性ばかりの部屋に男一人、普通なら気負ってしまう状況だが、修司なる男はそんな事気にも止めずに話を続けた。

「はい。今朝五時前、自分が旅館の周辺見回りの為に旅館から出た所で遭遇しました。様子もおかしく、言動もちょっとアレでしたので流石に不気味と思い、報告させて頂きました」

修司の淡々とした報告の内容に教職員の誰もが戸惑いを見せる。ＩＳ学園の生徒とは即ち後のＩＳ業界の礎となる人材達だ。現社会の代名詞たるＩＳ、そしてその先駆者となるＩＳ学園の生徒達は企業や国の人間にとっては宝に等しい人材だ。

ＩＳの知識を徹底的に叩き込まれた彼女達の価値は何もＩＳ操縦技術だけに留まらない。豊富な知識に得られた内容はＩＳの技術拡大や向上に大きく貢献している。

このＩＳ学園の生徒達は言わば金の卵だ。それを狙い各国家陣営が裏で様々な思惑を巡らせており、ＩＳ学園の教員達は生徒達への授業だけではなく、日夜そう言った思惑と戦っているのだ。

故に、今朝聞かせられる修司の話は教員達にとっては中々ショックな出来事だった。何度も何度も臨海学校の現地を選び直し、時にはブラフの情報を流したりして各国の動きを調べたりした。

度重なるシミュレーションを繰り返して漸く立ち上げた今回の臨海学校の企画、その計画が根底から揺さぶられる事実に教員達……特に、山田先生は落胆を露わにしていた。

「織斑先生、どうします？」

「……」

修司の問いに千冬は思案するように目を瞑り、腕を組む。最悪臨海

学校の中止を視野に入れるべき案件の為に他の教員達は息を呑んで織斑教員の判断を注視した。
　生徒達の安全を考えるのなら中止が最も効率的だ。しかし、普段厳しい授業を受けてきた生徒達はこういったイベント行事が数少ない楽しみ、それを奪うような真似はしたくないというのも、また本心だった。
　静まり返る部屋、誰もが考える千冬の様子に固唾を呑んで見守っていた時、彼女の目がゆっくりと開かれて……。
「……幸い、本日二日目の日程は丸一日ＩＳの各種装備の試験運用とデータ取りだ。対象は専用機持ちや武装の申請を出した生徒、一部の生徒は座学や自習の形となっている」
「非武装の生徒達を複数のグループに分けて監視すれば、不審者への牽制になると？」
「察しが早くて助かる。その通り、生徒達の数を複数に分けて監視すれば生徒達の安全も不審者への牽制も行いやすい。上手く行けば不審者を捕らえて目的を吐かせる事も出来るだろう」
　織斑教員の提案に教員達は安堵する。中止という最悪の結末を回避出来た事を喜び、その後は警備と監視体制の強化と生徒達に注意するよう呼び掛ける事を決定し、その場は解散となった。
「それにしても、修司さんには本当に助けられてますね。まさか旅館の見回りをしてくれてたなんて……」
「数少ない男なので色々気を回してみたつもりなのですけど……スミマセン、何だか問題を増やしてしまったみたいで、その場で取り押さえようかとも考えたのですが、向こうは複数で来ているのかすら分からない状態でしたので……結果的に見逃す事になってしまいました」
「いや、充分過ぎる対応だ。お前の話を聞く限り、どうやら相手は相当の手練れのようだ。我々の警戒態勢を潜った上でお前の前に現れてみせた。恐らくは複数の人間が関与していると見て間違いないだろう」
「それに、下手に相手を刺激してしまって強行行動に移られたら、最悪被害者が出るところでした。修司さんの判断、私は間違っていないと

思います」
「……そう言って下さると、気が軽くなります。ありがとうございます」
「大体、お前はもっと自分に自信を持つべきだ。折角優秀な能力と力を兼ね備えているんだ。少し位胸を張ってもバチは当たるまい。それに、謙遜が過ぎると逆に嫌われるぞ」
「そうですよ。昨日も鈴さんを助けた時、迅速な対応をしていてくれたじゃないですか。その時私たちは別の所にいたので……皆、本当に感謝しているんですよ」
「そ、そうですかね？　自分としてはやれることをしているだけなのですが……」
「まったく、生真面目な奴」
　頭を掻き、イマイチ分かっていない風に首を傾げる修司に千冬は呆れた様子で笑みを浮かべる。
「所で、その変質者という女性はどんな格好をしていたのですか？　変わった格好だと言っていましたけど……」
「あ、はい。その女性……名前は名乗らなかったので分からなかったのですが、コスプレという奴ですかね？　フリフリのエプロンドレスを着ていて頭にはこう……兎の耳を形取ったカチューシャみたいなモノを付けていました」
「……」
　修司の語る不審者の人物像、それを耳にした時織斑千冬の笑みが固まった。
「それで確か……お前の化けの皮を引き裂くとか言っていましたね」
「ウワー、それは相当アレな人ですね。聞いただけで不気味さが伝わってきますよ。了解しました。他の先生達にも伝えておきますね」
「特徴的な格好でしたからね。口頭でも充分伝わるでしょう。私も手伝いますよ。折角の臨海学校、無事に終わらせたいですから」
「分かりました。織斑先生、それでは私達も……」
「……あー山田先生、それに白河、いきなりで申し訳ないが、この一件私に預けて貰えないだろうか」

「「え？」」
「白河の見かけたという不審者なのだが……実は、私に心当たりのある人間の可能性が高い」
気まずそうにそう口にするＩＳ学園のブリュンヒルデ。歯切れが悪く、申し訳なさそうに語る彼女に山田真耶と修司は固まった。

◇

Σ月@日
今朝出逢った謎の不審者。様子もおかしく、自分の事を知っている風に語る女性に自分は最初新手のストーカーかと思っていたが、織斑先生が言うにはどうやら違うようだ。
知人だという織斑先生の言うことに戸惑う自分と山田先生だが、ブリュンヒルデの彼女が心配ないと言っている以上、自分達も余計な事はしない方がいいのだろう。
しかし、言葉を濁してはっきりしない以上他の先生達に示しがつかないと山田先生は打ち合わせでの方針は変えないと言っていた。織斑先生もその山田先生の言葉に対し特に反論する様子はなく、寧ろそれで頼むと言うくらいだ。あの不審者である女性が知人という割には冷たい対応する織斑先生だが……あくまで心当たりがあるだけで本当に知り合いとは限らない。と、言っていた。
自分達に知人であるかもしれないと話したのはあくまで可能性の一つとして自分達に報せたかっただけなのだろう。いるかいないか分からない知人より目の前の生徒を守る事を選択した織斑先生は、正しく教師だった。……尤も、指導の仕方は軍人のソレだったが。
兎も角、自分もいつもより警戒心を高めて生徒達の皆を監視しようと思う。自分の担当は旅館の宴会部屋で行われる講義、その周辺の警

備なので生徒達を守る為にしっかりと警備をしていく所存だ。
本音を言えば外の警備に加わりたかったが、武装試験運用のデータ取りは機密扱いになる為、用務員である自分は参加出来ないと言われてしまった。
機密と言われれば大人しく引き下がるしかないが……まぁ、向こうは織斑先生を初めとした腕の立つ先生達が担当しているし、専用機持ち皆にも話していたから、安心してもいいだろう。
けれど油断は出来ない。織斑先生も言っていたが相手はふざけた格好をしていたが実力は確かだ。ガモンさんや不動さん程でないにしろ、強敵である事に変わりはない。正直荒事は苦手だが、事態が事態だけにそういう訳にはいかない。
そろそろ交代の時間だ。担当の先生と代わって今度は自分が生徒達を見守る番だ。日記の方も一時中断した方がいいだろう。
もし、厄介な組織が生徒達を狙っているのだとしたら……その時は自分もその気になるしかないだろう。
グランゾン。この世界ではオーバースペックの超兵器……使わずに済めばいいのだけれど。

――――何やら大変な事が起こっているようだ。現在旅館は物々しい雰囲気に包まれ、生徒の皆も不安な様子で部屋で待機している。専用機持ちの子達もなんだか険しい表情をしているし、どうやら事態はかなり深刻のようだ。
自分が生徒達の警備の番に回ったと同時刻、織斑先生から緊急事態発生の報せを受けて以降、部屋で待機を命じられた自分には外の情報を得る術はない。
本当はいけない事なのだが、何だか嫌な予感がするので旅館の備え付けられたパソコンを借りてネットワークにハッキングを掛けてみ

た所、どうやら、アメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）』が制御下を離れて暴走してしまったようなのだ。

何故軍用ＩＳが開発されているのか、アラスカ条約で禁止されている事をおもっくそ破っている大国の考えはともあれ、この銀の福音なるＩＳが暴走してしまったのが臨海学校の一時中断に繋がっているようだ。

しかも更に調べてみれば、どうやら銀の福音は今から約一時間程でここから近くの空域を通過するようなのだ。……恐らくは、一夏君達専用機持ちの子達もこの軍用ＩＳを止める為に織斑先生に呼び出されているのだろう。

正直、子供達を戦場に出すのは自分の心情的には反対だ。ＩＳには絶対防御という安全装置が搭載されているが……武器や兵器を持って戦うのは紛れもない事実。人が兵器を扱う以上、必ずどこかで間違いが生じる。

ハッキングされた銀の福音の操縦者は現在意識不明の状態だという。意識の無い人間に武器を向けるのかという疑問も当然あるが、話の焦点はそこではない。

どんな理由や事情があっても、一夏君達が行うのは人と人の争い……即ち、戦争に他ならない。ＩＳという兵器を用いてのそれはこれまでの戦争とはかけ離れた規模のモノになるだろう。

無論、織斑先生は分かっているのだろう。ＩＳという兵器の有用性とその裏側に潜む危険性を。

モンド・グロッソというＩＳの世界大会も情報を持ち帰る事で各国家の軍事兵器に大きく向上させている事も……。

篠ノ之束博士は今の世界にどんな思いを抱いているのだろう。自身が心血を注いで生み出したＩＳは宇宙に進出される事無く、軍事兵器として利用されている事を。

未だに博士の思惑は分からない。世界がこうなる事を見越して放置しているのか、それともどうにか変えようと裏で色々考えているのか、……それとも、そもそもそんな事など興味がないのか。

ともあれ、今回は自分も動くべきだろう。幸い自分の部屋は旅館の

隅、意図して来ないと殆ど人なんて来やしない所だ。最低一時間は寝ているふりで誤魔化せるだろう。
一夏君達にもしもの事のないようこれから自分は仮面を被り、グランゾンと共に目標座標に向かう事とする。

◇

『一夏ぁぁぁぁっ!!』
燃え盛る爆炎。衝撃によって意識を断たれ、海面へと落ちていく一夏に篠ノ之箒は慟哭の叫びをあげながら駆け寄った。
『一夏、一夏！　目を覚ましてくれ、一夏！』
抱き寄せ、想い人の名を何度も呼ぶが、腕の中で眠る彼は目を覚まさない。一体どうしてこうなってしまったのか……。
きっかけは今朝、二日目の臨海学校で果たした姉との再会だった。最後に見たときと変わらない笑みで自分を呼ぶ彼女は妹の誕生日プレゼントという事で箒専用のＩＳ〝紅椿〟を渡してきたのだ。
嬉しかった。姉の目的がなんであれ、家族の誕生日を覚えてくれていた事、それ自体が箒にとって何よりも嬉しい事だった。
だが、箒はこれを断った。自分が代表候補生、或いはそれに並ぶ実力者になるまで紅椿は受け取らないと。
その直後、担任である織斑千冬から緊急事態の報せを受け、専用機を持った一夏達もコレに参戦。一応紅椿の所有権は自分にある事もあり、箒もまた参加条件を満たす対象となってしまった。
そこからとんとん拍子で進む銀の福音の撃破作戦。本来なら束曰

く、第四世代相当のスペックのＩＳを持つ簪がメインで一撃のダメージが大きい白式を持つ一夏が参加する予定の筈だったが、簪の専用機である打鉄弐式が突然の機能停止に陥ってしまったのだ。原因は不明、整備も兼ねている簪は打鉄弐式にもたらされているコアネットワークの情報になんらかの異常が発生したと考えている。

これにより千冬は〝彼女〟に対して疑惑を深める事になるが……いずれにしても、これで簪・一夏のペア案は事実上なくなり、代案として控えていた箒・一夏のペアが銀の福音撃破のメインパーティーとなってしまった。

まるで予め用意されていたような展開。しかし、状況が千冬の考えを待ってくれる筈もなく、福音は時が経つにつれて此方に接近してきている。

最早悠長な考えは許されない。千冬は箒と一夏それぞれに命じ、彼女の親友でありＩＳ開発者の篠ノ之束の協力の下、作戦は開始される事になった。

箒は戸惑った。自分の力で勝ち取った訳でもない。身内だからというだけで得られた力を果たして揮っていいのかという疑問に終始囚われる事になってしまった。

それでも第四世代のＩＳの力は伊達ではなく、その能力、性能は現行するどのＩＳをも凌駕するものとなっていた。その為に福音ともある程度渡り合えていたのだが……ここへきて、更なる不安要素が紛れ込んできたのだ。

密漁船。他の教職員の手によって封鎖されていた海域にいてはならない者達が潜んでいたのだ。

恐らくはどこかで隠れていたのだろう。作戦行動範囲に巻き込まれたしまった密漁船、これを守るべく、一夏と箒は密漁船を庇いながら戦う事になるのだが……福音の前ではそれは自殺行為に等しかった。

広範囲殲滅機能を有した福音の力は凄まじく、二人しかいないこの海域では庇いながらの戦闘は余りにも分が悪かった。それに相まって紅椿を碌に慣らしていなかったツケがこの時発生した。慣れない

機体、訓練機とはまるで性能が違う紅椿に翻弄されてしまう箒は、遂に福音に狙いを定められてしまう。
回避も出来ず防御も間に合わない。直撃は免れない思われた時、一夏が箒と福音の前に割って入ってきた。
福音の攻撃を受け、気を失ってしまう一夏。雪片弐型がシールドエネルギーを大量に使ってしまう事も災いし、シールドエネルギーが無くなった。
一夏の体から血が流れ出る。それを目にした時、箒の頭が真っ白になり、何も考えられず、何も出来なくなった。
しかし、そんな状況になりながらも福音の攻撃が止まる事はなかった。一夏と箒を排除すべき敵と認識した福音はそのまま落ち行く二人に追撃を開始した。
このままではやられる。そう思われた時、箒の目の前に〝壁〟が現れた。
――否、壁と見られたソレは壁とは全く違うものだった。
『……手、だと？』
目の前に現れた巨大な手。それに包まれた時、箒の意識はそこで途絶え……。
『やはり、このような展開になってしまったか』
どこかで聞いた事のある声が箒の耳に入ってきた。

その12

――――――銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）。アメリカとイスラエルの共同開発によって生み出された第三世代機。顔もフルフェイスの仮面で覆われ、隙間もない全身装甲となった体は銀色の光沢を放つ。それはまるで見る者全てを魅了させる蠱惑（チャーム）であり、畏怖を植え付ける福音でもあった。

開発の途中、ある者の介入により暴走する事になった福音は搭乗者を己の内に封じ込め、研究所を飛び出し、空へと飛翔した。

福音は戸惑った。何故自分がここにいるのか、何故自分が外へ飛び出しているのか。生まれて間もなく、碌に考えることも出来ない幼き福音、混乱する思考、混濁化する自我。混沌の渦に思考が晒されながらも、それでも彼女はたった一つの答えを見出していた。

ナターシャ（相棒）を守る。自分と共に空を飛ぶ事を約束した彼女を、全てから守ると決めた。自分に残された力の全てを使って、あらゆる外敵から守ると誓った。

それは、傷ついた母を守る為に恐怖と戦いながら立ち上がる子供と同じものだった。無くしてはならないと、本能のまま動く福音は近付いてくる二機のＩＳと戦い、これに勝利した。

危なかった。自分よりも速く、自分よりも力のある白と紅の攻撃は途轍もなく鋭く、重かった。後少し連携による甘さとこの戦いに対する迷いがなければ、自分はもっと苦戦を強いられていただろう。

だが、それでも負ける訳にはいかないと、福音は自らの力をフルに使い、隙を突いて白と紅の閃光を打ち払った。

ここで終わる訳にはいかない。この二人は危険だと、そう判断した福音は追撃を開始する。自らの内に封じた相棒を守る為にはこの二人……特に白いのは今後の自分の大きな妨げとなる。

故に、福音に迷いはなかった。己に課した命題を果たす為、命の限りを尽くして飛ぶ。……それが、予め定められた〝シナリオ〟だとも知らずに……。

本来なら、二人は福音により撃墜され、白のパイロットは意識不明

の重傷者になる筈だった。
しかし――――。
『――――っ!!?』
この瞬間、彼の者の思惑は崩される事になる。
目の前に突如として現れた黒い穴。空間に開かれた黒い穴はまるで奈落を思わせるほどに暗く、見ている者を吸い寄せているようだった。
そして次の瞬間、黒い空間から出てきたのは……巨大な〝手〟だった。余りにも異質、余りにもこの世界の規則(ルール)からかけ離れた事象を前に福音は攻撃の手を止め、翼に力を入れて急旋回をし、その場から離脱していく。
そして福音は十分な距離を取ってから後ろに振り返るが、そこには既に何もなく、青空と雲が広がっているだけだった。
だが、自分に攻撃を仕掛けてきた白と紅姿が見えない。故に、福音は今の現象を見間違いなどと片付けなかった。穏やかな風と時間が流れる中、福音は黒い空間が現れた箇所の一点を見つめ……そして。
『――――っ!!』
来た！　福音が身構えると同時に前方の空間は歪み、空気が消し飛び、穏やかだった風の流れが一変する。
黒い穴。世界に穿たれた様に広がったその穴は世界を浸食しようと徐々に広がり、絵の具を重ね塗りする様に世界を塗りつぶしていく。
黒の奥から這い出るのは――――巨人。見上げる程に巨大な蒼き魔神が、福音の前に現れた。同時に黒い穴は波を引くように消えていき、巨人がその姿を完全に表す時と同時に穴は完全に閉ざされていく。
――――理解不能。暴走した思考の中で、途切れていく自我の中で、福音は目の前の存在が全く理解できず、同時に……途方もなく畏れを抱いた。
機械であり、兵器であり、軍用として開発された自分が畏れを抱くのはおかしな話だと思われるが、それでも、そう思わずにはいられな

いのだ。
目の前の魔神が恐ろしい。理解出来ないという存在はそれだけで畏怖の対象になるというが、目の前のソレはそんな生易しいモノではなかった。
……震える。自身の中に埋め込まれたコアがアレは相対するものではないと囁いている。事実、福音もそれだけは十分理解できた。目の前の存在は自分達の枠とは完全に別な所にあるのだと。
しかし、それでも福音は引かなかった。相棒を守る為、自分の全てを使い切ると誓ったのだ。例え相手が人智を越えた魔神であろうと例外ではない。
そう、相手がどんな存在だろうと、最早福音には関係ないのだ。邪魔する者は全て排除する。己の心を壊し、自我も失いつつある今、福音に残された存在意義はそれだけなのだから……。
福音が……空を駆ける。流星となって魔神を突き破ろうとする彼女に――――。
『……グラビトロンカノン、発射』
次の瞬間、福音は一切の抵抗も出来ず、強制的に全ての機能を停止するのだった。
あぁ、自分の命はここで尽きるのか。消え行く自我の中で……。
『安心しなさい。アナタの翼は折れてませんよ。いつかまた羽ばたけるよう、今はゆっくりと休みなさい』
そう、自分を安心させる……優しい声が聞こえた気がした。

◇

「モニターの復旧はまだか!!」
「ダメです！　衛星からの映像出力が完全に途絶えてしまった様です。映像復旧できません！」
旅館の内部にある宴会室に設置された対福音の特設作戦室に織斑千冬の怒号が響き渡る。表情や声には焦りや迷いといった感情はない。必死に己の内に押し隠し、他の教員達に悟られないようにしているのだ。
指揮官としてこの場に立っている以上余計な感情は見せられない。旅館の従業員と生徒達は自室で待機してもらい、福音撃破の為に千冬は最善の選択を選んだつもりが……ここへきて、予想外の事態が次々と起こってしまった。
福音の撃破に選ばれた箒と一夏が現地に向かって二時間、作戦開始一時間は通信が出来ていたのだが、その一時間が経過した時、突然通信機能が遮断され、二人からの連絡が途絶えてしまったのだ。此方からの通信は一切受け付けず、向こうからの連絡も全く届かない状態。
それが一時間も続けば誰だって焦りが募ってくる。唯一連絡が出来る包囲網を敷いているＩＳを装備した教職員と連携して捜索を進めようとしているが、依然として有益な情報は掴めていない。
一体あそこで何が起きているのか、ＥＲＲＯＲと表示されるモニターを睨みつけて数分……。
「織斑先生、少し宜しいですか？」
「誰だ？」
「白河です。外の警備を担当していた先生が一夏君と箒ちゃ……篠ノ之さん、並びに福音の搭乗者らしき人物を発見したと仰っていたのでその報告に来ました」
「っ、なんだと!?」
襖越しから聞かされる新たな情報、それが進出した二人の事だと知ると、千冬の表情が驚愕に染まった。
その後、一夏と箒、そして福音の搭乗者であるナターシャ三名が旅館の近くにある浜辺で保護された。発見当時は酷い怪我だった一夏

は幸い命に別状はなく、翌日の朝には目を覚まし、体調も快復へと進んでいった。
暴走したＩＳに振り回されたナターシャも意識を回復し、自分の専用機が無事だと知ると心底安心し、気が抜けた様に溜息を吐いていた。念の為に銀の福音のコアを篠ノ之束に調べさせた所によると、どうやら外部から手が加わったらしく、コアネットワークにアクセスされた形跡があるという。
それの所為かどうかは定かではないが、コレにより福音は安定した様子を保っており、この状態を維持できれば再び稼働させる事が出来るだろうという。
ただ、その際に篠ノ之束は憎悪に近い怒りを露わにしていたが……それは今は関係のない事なので割愛させていただく。
そして最後、最後まで意識があったとされる篠ノ之箒に当時何が起きたのか聞いた所、巨大な〝手〟が現れたのだという。
一夏が怪我をしてしまい、酷く気落ちしていた事から教師達の大半はストレスによる幻覚を見たのだと結論付けていたが、織斑千冬だけはそれは違うと断じていた。
一夏と箒との連絡が途絶えた一時間、その間彼等の所に確実に何かがいたのだ。衛星をハッキングし、教員達の駆るＩＳのハイパーセンサーから逃れる程の力を持ったナニカが。
唯一の手掛かりとされるのは箒の語る巨大な手。その存在に危惧しながら、千冬は今回の報告書をまとめるのだった。

◇

Σ月Z日
いやー、一時はどうなる事かと思ったけど、一夏君や箒ちゃんもなんとか無事だったし、福音とナターシャちゃんも何事もなく祖国に帰れた事だし、自分的には満足の行く結果だったと思う。
久し振りにグランゾンを動かしたけど問題なく扱えたし、加減の難しいグラビトロンカノンも福音の機能を強制停止させる程度に留める事が出来た。
その後はグランゾンを通して福音のＩＳコアにアクセスしてコアネットワークにアクセスし、暴走の原因となった悪性プログラムも消滅できたし、福音のストレス傷害も取り除く事が出来た。
いやー、ＩＳって凄いよな。操縦者の適正に合わせて独自に進化したりするんだもの。しかも戦闘によってストレスを感じたりそれが成長とする糧となったりするんだから、ある種の生命と分類してもいいのかもしれない。篠ノ之博士は本当にトンでもないモノを生み出したのだなっとコアネットワークに接続して改めて実感させられた。
ただ、今回の福音の感じたストレスは成長の阻害にしかならないので綺麗に除去、暴走している間のデータ、記憶と言い換えればいいのかな？　それがなくなり、福音自身の問題は今回の暴走の一件は悪い夢を見ていたというだけで片が付くだろう。
それに、アメリカやイスラエルも無事である福音を見ればそう簡単には解体したり初期化したりするなどの強行手段は取らない筈。ナターシャさんも福音には思い入れが強いみたいだし、きっと悪いようにはしないだろう。
重傷だった一夏君も回収した時には傷の治癒が始まっていた事が何気に大きな衝撃だった。調べてみた所、どうやら白式のコアは他のコアと比べて少しばかり特殊なようで、そのコアには搭乗者の生体修復装置なるものが備わっているのだ。
自分のグランゾンにも似たような機能が搭載されているが、白式のは少し毛色が違うらしく、こればっかりは詳しく調べてみないと何とも言えない。

その後は一夏君に一応の手当を施し、気を失っている三人をつれて旅館付近の浜辺に連れて行き、外の警備をしている先生が見つけやすい位置に横に寝かせるだけ。

その後は隙を見て衛星に掛けたハッキングを解いたりなんだりして過ごしていたのだけれど……流石に今回は気が付く人が多いだろうなぁ。自分がハッキングしたのはあくまで衛星からの望遠映像の遮断だけだし、包囲網を敷いていた教職員のＩＳはきっとハイパーセンサーでグランゾンの姿を捉えている事だろう。

まぁ、だからどうしたという話なのだが、取り敢えず今回の事は自分も頭の隅に置いておこうと思う。

一夏君も回復し、臨海学校も無事再開された。落ち込んでいた箒ちゃんも一夏君から誕生日プレゼントを貰った事で少し立ち直った事だし、今後は自分も見かけたらフォローしていこうと思う。

色々あった臨海学校だが、無事に終了。めでたしめでたし……と、言いたい所だが、最後の最後で嫌な人に会った。

帰りの支度、最後に忘れ物がないか旅館を見回っていた所……再び、例の不審者な女性と遭遇したのだ。

今度はこうはいかないとか、次は覚悟しろとか言ってきたけど、当然心当たりの無い自分には分かる筈もなく、なのに目の前の女性は更に挑発してきた。

急いでいた所に不審者と遭遇したものだから思わず自分もムキになってしまった。幾ら不審者とはいえ直接手を出してきた訳でもないので少しばかり悪いことをしてしまったと思う。

ただ、これに懲りたら少しは反省して欲しいと思うのも、また事実な訳なので……。

取り敢えず、明日からまた用務員としての仕事が始まるので今日はこれで終わりにしようと思う。

その１３

一学期の期末テストも終え、季節は夏真っ盛り。一年生は高校初めての夏休みを前に少しばかり浮かれている時期、今日も今日とて織斑先生の厳しい指導が飛び交うなか、私黛薫子はある人物についての調査を行っていた。

白河修司。新入生が入ってくるのとほぼ同じ時期にこのＩＳ学園で用務員として働きだした数少ない男性職員。

年配の十蔵さんの紹介で入ってきたとされる彼、織斑先生よりも若い男の人、当時の学園は自分達と年の近い男性職員に戸惑いもしたが、意外にも修司さんは紳士的な態度で常に接してくれた為、女子生徒や女性職員からは割と高評価を得ていた。

仕事の手際も良いらしく、先のゴーレム襲来事件の際にもいち早く生徒達の所に駆けつけ、閉ざされた扉をこじ開けて生徒達を救出したという逸話も出てきている。箝口令が敷かれ、私達上級生にも情報規制が施されているので真意は定かではないが、インタビューに応じてくれた女子生徒の反応を見れば、あながち間違ってはいないみたいだ。

というか、前にアリーナの扉を直している彼の姿を見かけた事があるのだが、もしかしてアレがそうなの？　……他にも、白河修司にまつわる逸話は幾つも存在しているのでここで軽く紹介していこうと思う。

曰く、アリーナの扉を素手で破った。

曰く、日本代表候補生の専用機の完成に大きく貢献した。

曰く、臨海学校で溺れた生徒を助ける為に海上を走って見せた。

曰く、その体には幾つもの戦いの爪痕が刻まれているため、どこぞの特殊部隊の生き残り説。

この様に、挙げてしまえばこれだけの逸話の数々がこの学園で打ち立てられている。他にも、彼と直接話をした事のある人物に話を聞いてみた所、面白い内容を聞くことが出来た。

ケース1　剣道娘さんの場合。
あの人は……そうだな。見た目に反して厳しい所はあるけれど、私にとって標となるモノを示してくれた恩人でもある。未だ私は未熟で戸惑う事も多いが、いつか、彼に恩返しが出来ればいいと思う。
ケース2　チョロコットさんの場合。
何だか、もの凄く悪意を感じるのですけれど……まぁいいですわ。彼の人柄についてですが、まぁ普通に紳士的な方ですわよ？　女性には慎ましく接し、時には窘める。用務員というよりも執事に近い気質の持ち主でしたわね。
もし今後行く場所がないのなら、私の屋敷に執事としてスカウトするのもアリかもしれませんわね。
……ただ、何でしょう？　あの方を見ていると何だかこう、嗜虐心がムズムズします。
ケース3　酢豚大好きっ娘さんの場合。
あれは……そうね、一言で言えば世紀末に出てきそうな覇者の風格を持った存在ね。……意味が分からない？　そりゃそうよ。これは直接味わった人間にしか分からない感覚よ。ラ〇ウと敵対したヒャッハー達って、こんな心境だったのかしら。
……は？　ファーストキスを奪われた感想って、誰から聞いたのよそんな話！　あれはそんなんじゃないっていってるでしょうが!!
つーかその類の話、あの人の前ではマジで止めた方がいいわよ。あの人、こういう事には凄く真面目に考えているから、下手に挑発すると痛い目見るわよ。
ケース4　ロリッ子軍人。
まさか、この極東の地で教官と同じ覇気を持った人間がいたとは驚いた。……しかもあの身のこなし、恐らくは相当な修羅場を潜り抜けて来たのだろう。私だって軍人の端くれだ。そのくらい分かる。
クラリッサはああ言った歴戦の戦士の風格を持った人間を〝むせる〟と呼んでいたな。むせる傭兵白河修司……うむ、案外いけるな。
あぁそうそう。パパラッチをするなら覚悟した方がいい。あの人

は半径二百メートル程の範囲なら簡単に此方の気配を探知してくるぞ。私も腕試しのつもりで彼の後ろに回り込もうとしてみたが、悉く失敗したからな。

というか、追っていた筈が気が付いたら背後に回り込まれていたとか、どういうことなんだ？　教官ですらそんな事はしなかったぞ。……ハッ!?　もしや彼はジャパニーズ忍者!?

ケース５　男の娘

ひ、酷いなぁその呼び方は……まぁいいけどさ。で、あの人について何か知っていないかって？　う～ん、僕ってあの人と直接話をした事なんて殆どないからなぁ。

ただ、悪い人ではないと思うよ。以前僕が階段を踏み外した時、後ろから倒れないよう支えてくれたりしたから。

……あれ？　そういえばあの時の修司さん、外の花壇に水やりをしていたんだけど、どうやって来たんだろ？　本人は扉が開いてたからって言ってたけど、僕のいた階って――三階なんだけど。

ケース６　眼鏡っ子

恩人。あの人を一言で表すならこれ以上の言葉はない。私に向き合う事の辛さと大切さを教えてくれて、前に進める切っ掛けをくれた人だから。

私の専用機、打鉄弐式もあの人のお陰で完成したようなものだから……ただ、性能が凄すぎてどこまで情報開示すればいいのかが今の悩み所なんだけどね。

倉持研からの誘い？　勿論断った。あの人達は織斑君のデータを集めるのに忙しそうだから、あまり煩わせるのも忍びないと思ったから。

打鉄弐式の事も修司さんから教えて貰って整備の方も出来るようになったし、これからはもっと頑張ろうと思う。目標は……卒業までに日本の代表になる事かな。そこまで来て漸く、私もお姉ちゃんの妹だって胸を張って言えると思うから。

……それにしても、修司さんって凄いなぁ、ＩＳのコアネットワークのアクセス方法も教えてくれるなんて。触り程度って本人は言っ

てたけど、これって篠ノ之束博士以外出来ない事だと思ってたから、本当にビックリした。
まぁ、修司さんって事で納得しているって部分もあるんだけどね。……あ、今の部分オフレコで、この事世間に知られると多分先輩も危なくなりますよ？

ケース７　最強生徒会長

修司マジ許すまじ。

ケース８　唯一の男性ＩＳ操縦者

これって偽名の意味あるんですか？　……まぁいいや。修司さんについてですよね？　そうだなぁ、ＩＳについて色々詳しく教えてくれたり、俺に戦い方の指導も時々してくれるし、もう基本的に何でも超人って感じですね。千冬姉も凄い人だけど、修司さんは家事もこなせるからなぁ。
俺も家事には結構自信あったけど、修司さんと意見交換していく内に色々出来る事も増えたし、料理のレパートリーも増えた。昼休みになると皆で昼食の際会話も弾む様になったし、ホント、助けて貰ってばっかです。
この学園に来た当初は愚痴も聞いて貰ったり、諭して貰ったりしたこともあったし……もし兄貴がいたならああいう人が良いかなぁって思ったり。
これ、前に千冬姉の前で言ったら殴られたんですよね。アレ、一体どんな意味だったんだろう？

……色々おかしな点はあったものの、情報を提供してくれた彼女達のお陰で白河修司なる存在の人物像が少しだけ明らかになった様な気がする。引き続き調査をし、いつか必ず彼の正体を暴こうと思う。
ふふふ、記者としての血が騒ぐぜぇぇっ!!

（二年の黛薫子さん、最近俺の事を調べ回っているよな。別にいいんだけど、彼女のインタビューは少し強引だって聞くし、今度注意した方がいいかな）

後に、黛薫子は白河修司の調査を断念する事になる。

◇

怒濤の一学期が過ぎて季節は夏。高校生活初の長期休みを前に生徒達は心から楽しみにしていた。様々な出会いを経て成長していく少年と少女達、これからの日々の中で、彼等は果たしてどこへ向かうのか。

そして……。

「さて、それじゃあ私達もそろそろ動くとしましょうか。オータム、M、準備はいいわね？」

「おうよ。こちとら暴れたくてウズウズしてるんだ！　今から出番が待ち遠しいぜ！」

「……どうでもいい。私は私の目的を果たす為だ」

世界の裏側で暗躍する闇が表に混沌を運ぼうとしていた。そしてその一方で。

「白河修司、お前の存在は……私が認めない！」

天災（アリス）を模した兎は目の前のモニターに映る深淵の継承者に呪詛に似た言葉を吐くのだった。

そして、天災の憎しみの対象となってしまった者は……。
「あ、ここにもシミが」
「修司君、そこ終わったら次はアリーナの点検宜しくね～。私は花壇の方に行ってるから～」
「了解です十蔵さん」
一人、暢気に平和な日々を送っていた。

その１４

＊月※日

一学期も終わり、ＩＳ学園も夏休みに突入して早一週間、自分は今日も用務員として仕事をこなしていた。

高校生活の最初の長期休暇。基本的に学園の生徒は寮で生活する事になっているが、寮に外出届けを出せば実家に帰省する事も許可している為、夏休み中……特に一年生は実家に戻り、一学期の報告をしたりして帰省しているようだ。

その為毎年一年生の寮は人気が少なく、一年の寮はガランとしているのだが、今回は一夏君が入学した為に割と多くの女子が残っている。

夏休みという事で浮かれている生徒達、それに比例して教職員の先生達は次の学期に向けて色々準備をしなくてはならないから、殆ど休む暇の無い生活を送っているらしく、山田先生がよく自分に愚痴をこぼしていた。

自分も炎天下の中麦わら帽子一つで仕事をしているので仕事の大変さというモノはある程度理解出来る。お互い、頑張っていこうと思う。

……そういえば、何不自由なく仕事をしていられるのって、何気にこれが初めてなんじゃないか？　今更だけど。

＊月α日

今日、箒ちゃんから相談を受けた。何でも篠ノ之博士から紅椿を押し付けられたのだけれど、どう対処すればいいか分からない。だそうだ。

どうやら先の臨海学校で外の試験運用組の所に篠ノ之束博士が来たらしく、妹である箒ちゃんに誕生日プレゼントとして専用のＩＳを渡してきたらしいのだ。

まぁ、自分はあの時の現場にいた訳だから箒ちゃんが専用機を持っ

ていた事は知っていたが……まさか束博士が直接組み上げたモノだったとは思ってなかった。
いや、箒ちゃんの立場を考えれば分からなくもないか。希代の天災と謳われる篠ノ之博士の妹、彼女を手中に収めればそれは博士自身を手中に収めるのも同意。
良からぬ輩から身を守る為、博士自ら機体を造り上げたと考えれば、そんな不思議な話じゃない。専用機を持てば代表候補生になれる可能性だって出て来る。そうすれば国に保護される立場となって他国の連中からおいそれと狙われる心配はなくなる筈だ。
当然、危険がゼロとは言えない。裏でコソコソと狙っている連中がいるのはどこの世界だって同じだし、だからこそ博士は最強の戦乙女の目が届くこの学園に彼女を入学させ、そして卒業する間での合間紅椿を使いこなさせようとしている。そう考えれば色々辻褄が合う。
箒ちゃんの誕生日に合わせてプレゼント形式で渡して来たのも、博士なりの償いなのかもしれない。ＩＳという代物を作り、その所為で家族をバラバラにしてしまった事への……せめてもの償いとして。
うわぁ、そう考えると切ないなぁ。世界の為にＩＳを作ってみたらその所為で世界はしっちゃかめっちゃかになり、家族はバラバラ、自分の居場所さえ失ってしまうとか。
確かに博士は天才なんだろうけど……理想が高すぎたんだろうなぁ。織斑先生の話だと、束博士は織斑先生位の人でＩＳも高校の頃……いや、下手したらもっと前か？　その位前に完成させて世界に発表したんだとか。
まだ過去の記事を全て調べた訳じゃないから何とも言えないけど、博士は多分色々先走っちゃったんだろうなぁ。そして今はそのツケを支払う為に一人奔走して色々画策しているっと……。
前々から思ってたけど、もしかして博士って不器用な人？　天才故に責任感も強く、世界を変えてしまった事に対する償いもしたりして……うわぁ、なんか自分の中の博士像がトレーズさん以上にめんどくさい感じになってくぞぉ。
兎も角、箒ちゃんには彼女の意見も取り入れ、夏休み中は訓練機を

使用してＩＳ操縦に慣れ、自信が付いてから紅椿に乗ってみるよう説得しておいた。
望むと望まざるとにかかわらず、手にしてしまった以上はそれは彼女の力だ。箒さんは自分の実力で勝ち取ったモノではない事に不満を感じていたが、だったらその不満が無くなるまで自分を磨けば良いだけのこと。
幸い夏休み中でも申請を出せばアリーナの使用は出来るし、付き添いの人の監視の下でなら練習試合だって可能だ。しかも今年は専用機持ちが五人もいる。誰かに頼んで特訓につき合って貰うのもいいかもしれない。
その時は自分も出来る範囲だけ手伝うと言って、その場はそれで終わった。箒ちゃんもこれから自分がどうするべきか気付いた様子で、最後辺りは納得した様子で頷いていた。
さて、早速明日から実践してみよう。日記を書く前に何人か専用機持ちの子に協力を要請して殆どの子が快く返事をしてくれたから、いきなり濃い特訓になるだろう。
簪ちゃんにラウラちゃん、一夏君に鈴音ちゃん、そしてシャルロットちゃん。唯一セシリアちゃんからは断られたが……一旦祖国に帰らなければならないらしいのでこれは仕方ない。寧ろ、参加出来なくて申し訳ないと謝られてしまった。
気を使わせてしまったし、今度何かしらの形でお礼した方がいいかもしれない。勿論その時は一夏君達を交えての全員に。
ともあれ、織斑先生にも許可を貰えた事だし、明日からが楽しみである。

＊月β日
今日は概ね良かったと思う。一夏君を含めた五人の専用機持ちとの特訓は箒ちゃんに対して良い影響を与え、打鉄という訓練機でありながら専用機持ち……国家代表候補生に食いつけるのは素直に見事と言いたい。
ただ、最初の方は一夏君と微妙に距離を開けていた事が気になっ

た。まぁ、恐らく彼女が気にしているのは先の臨海学校での出来事だろう。いきなり第四世代型のＩＳに乗せられて機体性能に振り回され、その結果一夏君の足を引っ張ってしまい、一夏君に重傷を負わせてしまった。箒ちゃんが一夏君に対して負い目を感じているのは大体そんな所だろう。

先の臨海学校の最終日の夜にその辺りは解消したと聞いたけど、そう簡単に割り切れる訳もないか。人一人を死なせかけておいて回復したからチャラと簡単に片づけたら、それは人としてどうかと自分でも思うもの。

多分、一夏君と剣を合わせる度一夏君が傷を負った光景を思い出しているんだろう。顔も青かったし、彼と打ち合う時だけ凄まじく動きが悪かったもの。

それ以外の子とは普通にやり合えてたんだけどなぁ。鈴音ちゃんの衝撃砲だって発射タイミングを見切ってたし、シャルロットちゃんの弾幕も弾道を予測して回避していたし、ラウラちゃんの停止結界にも間合いを読んで掴ませなかった。

恐らくはあと一歩なんだろうなぁ。アレさえ克服すれば箒ちゃんは紅椿への抵抗感も無くなるし、より一層強くなれる。

簪ちゃんは切っ掛け一つで大きく変わると言ってたし、実際その通りなんだろう。その切っ掛けを掴むのが頗る大変そうだが……なに、夏休みはまだある。慌てずに着実に進んでいこう。

――――ところで話は変わるのだが、シャルロットちゃんのラファール・リヴァイヴが装備している楯殺（シールド・ピアース）しだっけ？　あれ、いいよね。

特に個人的には撃ち出す際に使われるリボルバー炸裂式、あの辺りに是非自分も手を加えたいと思ったが……流石に余所様のＩＳに手を加えるのは拙いよね。最近、こんな妄想ばかり広がって落ち着かない自分がいる。

いっそのことＩＳの技術資格でも取ってみようかな？　フリーの改造屋として働くのも面白いかもしれない。

まぁ、普通にダメだろうけどね。

その15

＊月γ日

箒ちゃんの特訓に付き合う事になって数日、日に日に打鉄での操作技術が向上していく箒ちゃんに感心する反面、一夏君との特訓の時は落ち着きがなく、隙が多くなっている事態に日々頭を悩ませる自分がいる。

一夏君は悪くない。無論箒ちゃんも悪い所はない。一夏君に大怪我を追わせて、その原因となったのは自分……箒ちゃんは責任感の強い子だから、そう自分に言い聞かせて無意識に自分を追い詰めてしまっているのだろう。

自分も似たような経験があるのである程度共感出来るが、前にいった通り、これは本人が乗り越えなければならない事だ。

ともあれ、焦らず行こうと思う。簪ちゃん達専用機持ちの子達も協力的だし、織斑先生や山田先生も気に掛けてくれている。特に山田先生は自分自身の仕事で忙しいだろうに、自分が仕事をしている合間は変わって彼女達の指導をしてくれている。

皆も頑張っているし、箒ちゃんも必死にもがいている。今が踏ん張り所なのでどうか耐え抜いて欲しいと切実に願う。

＊月Ω日

一皮剥けた。今日の箒ちゃんの活躍を見るに当たって、まさにその言葉が適切といえた。

今日の訓練、相変わらず一夏君以外の相手とは良い線行っている箒ちゃんだが、やはり一夏君相手では上手く動けず、太刀筋も鈍っていた。

やはり刷り込まれたトラウマというモノはそう簡単に払拭出来る筈がなく、一夏君との試合も克服の意味を成さないならば別の方法を模索するしかない。夏休み中に克服するという課題は叶わなくなったが、それでも箒ちゃんの事を考えれば安全な方法を取るしかないと思われた時……彼女が現れた。

織斑千冬。第一回モンド・グロッソの覇者にして戦乙女（ブリュンヒルデ）の名を冠し、現在ＩＳ学園の教師を務めているその人が、訓練機である打鉄を纏いながらピットから出てきた際は……その場にいた全員が度肝を抜かれた事だと思う。

織斑先生が言うには箒ちゃんのトラウマを払拭させるには生半可なやり方では無理そうなので、当時の状況を作り出し、自ら殻を破るしかないとの事。

所謂ショック療法なのだが……正直自分は反対した。確かに織斑先生の言う事も一理あるが、それは最後の最後、もうこれ以上トラウマを克服する手段がないという段階で使われるべき手段だ。ショック療法というのは効果は高いが、同時にリスクも高い。下手をすれば新たにトラウマを植え付け兼ねない事態を引き起こしてしまう危険な賭けなのだが……このままでは箒ちゃんのトラウマがより深い部分に定着してしまう可能性があるのもまた事実。

そうなればＩＳ適性値にも影響が及び、最悪の場合ＩＳに乗る事が出来なくなってしまう。そうなれば先日日記に記した通り、各国の政府機関や裏組織の連中に狙われ、箒ちゃんの今後の人生に大きな危険をもたらしてしまう。

本人達の希望もあり、自分と山田先生、それに他の教員の方達や専用機持ちの子達の協力を得て徹底的な監視の下、一夏君と箒ちゃん、そして織斑先生が相手の練習試合は開始された。

状況の再現という事なので箒ちゃんは紅椿に搭乗し、状況は二対一の圧倒的優位なモノだったのだが……流石というべきか、試合の流れは終始織斑先生の圧倒的優勢となっていた。

専用機持ち二人を相手に赤子の手を捻る様にあしらう技量。訓練機だというにも関わらず、第四世代型の紅椿の攻撃を簡単にいなしてしまう事から織斑先生のブリュンヒルデとしての実力が伺える。

というか、ただの訓練機が専用機を相手に真っ正面から打ち勝つってどういう事だよ。そりゃパーソナルデータは織斑先生に合わせて変更しているそうだけど、それだけでＩＳっていうのはああも劇的に変わってしまうものなのか。織斑先生に後から聞くと〝ＩＳでの戦

闘はどれだけＩＳの事を理解してやれるかで決まる〟という。
うぅむ、ＩＳに乗った事のない自分には何とも耳の痛い話である。コアネットワークにアクセスしたり、ＩＳの組み立て作業に関わったりとそれなりに理解していたつもりだが、どうやらまだまだだったようだ。
それは兎も角として、試合は最初から最後まで織斑先生の優勢となり、当時は誰もがこのまま二人は敗北するものだと思われた。幾ら銀の福音に近しい状況に追い込む為とはいえ、流石にブリュンヒルデ相手では無理だと……誰もがそう思っていたが。

この時、二人に変化が起きた。後一歩で織斑先生の手に掛かり二人とも撃墜かと思われた時、箒ちゃんの紅椿から光が溢れ出し、二人を包んだのだ。
〝絢爛舞踏〟紅椿が覚醒した箒ちゃんの単一能力（ワンオフアビリティ）。ＩＳのシールドエネルギーを回復させる特性を持ったこの能力が二人を窮地から救い、反撃のチャンスを作り出した。
エネルギーを得て、零落百夜を発動させる一夏君。織斑先生とせめぎ合い、その後も何度も打ち合い、箒ちゃんと一緒に織斑先生と戦う様はまるで白と紅の流星の様だった。
その後、何度も打ち合った所為で織斑先生の持つ近接ブレードは悲鳴を上げながらへし折れ、武装が無くなったという事で試合はそこまでとなった。結果だけを見れば結局二人は織斑先生に一太刀も当てる事はなかったが、箒ちゃんが苦手意識を克服した事、一夏君も今回の事で更に腕を上げたし、何より自分もこの結果には満足したし、取り敢えずはこれで良しという事にしておこう。
あと、これも後で箒ちゃんから聞いた話だが、何でも織斑先生にトドメを刺される際、二人はＩＳを通じて意識を通じ合わせ、このまま負けるのは嫌という想いが強くなり、気が付いたらあのような単一能力を発動させていたらしい。
箒ちゃんから話を聞いた話で推測するに、一夏君と箒ちゃんの意識、或いは緊張感が最高潮に高まった時、ＩＳの中枢であるコアネッ

トワークと同調し、付近にいるＩＳとネットワークによるパイプラインが構築され、これにより繋がった二人の意識が共有し、共通したのではないかと思われる。ＩＳは搭乗者の成長に合わせて独自に進化すると聞くし、強ち間違ってないないかもしれないし、織斑先生の言うＩＳを理解するという話もここから来ているのかもしれない。

ともあれ、織斑先生の扱きを受けて箒ちゃんはトラウマを見事克服。更なる成長を果たす事になった。箒ちゃんも今回の一件で紅椿を受け入れたみたいだし、無事この件は解決したと言ってもいいだろう。

努力が報われ、また一歩前進した箒ちゃんに皆も喜び、アリーナは一時ちょっとしたお祭り騒ぎとなった。織斑先生も注意はするが、諸手をあげて喜ぶ生徒達にどこか思う所があるのか、それ以降は早めに寮に帰ることだけを伝えてそそくさとアリーナから出て行ってしまった。

不器用な人だなぁ。直接口にすると怒られそうだから言わないけど、アリーナから立ち去る際、嬉しそうに微笑む織斑先生を見ると、どうしてもそう思わずにはいられない自分でした。

＊月@日

夏休みも残り僅か、十蔵さんから言われた事もあって一日休みを貰えた自分は今日、最近新しく出来たレジャーランドに行ってきた。

新しく出来たとあって夏休み終盤の今でも大勢お客さんが来ていたが、それ以上に施設が広々としていたので狭苦しい事はなく、悠々と満喫する事が出来た。

ただ、パーカーの着用が禁止されている区域があるとは思わなかった。何でも脱いでそのまま忘れてしまう人がいる人に対しての仕様だと聞いたが、まさか上半身をさらけ出してしまうとは思わなかった。……まぁ、プールなんだし別にどうって事はないんだけどね。

けど、その所為で他のお客さんが萎縮してしまい少しちょっと悪い事をしてしまった。なんかグラサン掛けた厳つい人からも避けられてたし、ちょっと悪い事をしてしまったかもしれない。

その後も、ウォータースライダーに並ぶ際に足を滑らせて落ちた子を助けたり、流れるプールで足を吊って溺れかけた老人を助けたり（水も飲んでなかったし、意識もはっきりしていた為救命処置はなし）、水中で喧嘩する子達を仲裁した事以外大した出来事もなく、朝早くから来ていただけあって施設の殆どを回ることが出来た。

どれも大した事じゃなかったから良かったんだけど、水中で喧嘩していた二人、あれは宜しくなかった。幾ら広いとはいえ暴れられたら他のお客さんの迷惑になる。喧嘩するなら陸……もとい外でやって欲しいものだ。

まぁ結局、その二人も自分の話で分かってくれたらしく、その後は仲良く施設を巡ってたから別にいいんだけどね。

その後、同じく休みだった織斑先生と山田先生を案内したり、一夏君達と出会ったり、夜は祭りの屋台を巡ったり、花火を見たりして夏の最後の思い出も無事に作る事が出来た。……殆ど一人だったけどね。

色々楽しむ事が出来たけど、少し残念な事……というか、悔しい事があった。何でもあのレジャーランドには大きなアトラクションが幾つもあったらしく、今日の来客の人達はそれで盛り上がっていたのだとか。

おっかしいなぁ、あの施設は粗方回ったけど、そんなアトラクションなんて目にしなかったぞ？　う～む、どこでやってたんだろ？　見たかったなぁ。

ともあれ、あと二日で新学期。これからも忙しくなりそうだし、しっかりと気を引き締めていこうと思う。

その16

Ｊ月@日

夏休みも終わり、新学期に入って数日。高校初の長期休暇を体験した事によりここ数日は夏休み気分だった生徒達も織斑先生の指導の下修正され、学園内は夏休み前と同じいつも通りの雰囲気を取り戻していた。

そういう自分はというと、夏休み前と変わらず用務員として仕事に精を出し、日々ＩＳ学園に貢献している。花壇の整備やアリーナの点検、各教室の見回りや学園内のゴミ拾いなどを繰り返して行っている。

端から見れば当たり障りの無い詰まらない仕事だと思われるが、これが意外とそうでもない。花壇の整備をしていると花や植物の知識も豊富になってくるし、土に紛れて珍しい昆虫も見つけたりする。時には吐き気を催す害虫が出てきたりもするが……その時は無心となって駆除をしている。

他にもアリーナの整備をしている時、放課後は他の生徒達もこのアリーナを使用して日夜ＩＳ操縦の訓練に励んでいるから、自分にとってアリーナ整備は連日特等室で観戦している様なモノ、ただでＩＳの試合を見ているのだから、アリーナの整備位どうって事無い。

……こんな事をいうと、十蔵さんから苦笑いで叱られるんだけどね。仕事に差し支えしない程度にしてくれって。勿論そのつもりだし、大抵は仕事を終わらせて観戦しているので、そこらに辺に抜かりはない。

ゴミ拾いに至っては……まぁ、特に語る事はないので割愛しよう。普通に埃とかゴミを拾って捨てるだけだし。……まぁ、時折外から工作員（粗大ゴミ）が夜中に紛れ込んで来る時があるけれど、あれって何なんだろ？　一応その時は後ろから不意打ちして気絶させてからワームホールで太平洋のど真ん中にポイしてるけど……アレ？　これ立派な環境破壊じゃね？　もしかして俺、やっちゃった？

……まぁともあれ、そんな訳で自分もこの学園で用務員として日々を満喫している。二学期には学園祭とか色々なイベントが目白押しだし、今年の一年生には修学旅行が控えている。

修学旅行には流石に同行出来ないだろうが、学園祭の時は手の足りないクラスに自分達用務員がある程度手伝いをする事になっている為、自分的にはそちらの方が楽しみである。

自分が高校の頃は大した出し物が出来ず悔しい思いをしたから、これを機にリベンジをしたいと思う。そう意気込んでいると……何故か簪ちゃんから釘をさされてしまった。

解せぬ。……そもそも、簪ちゃんは自分の何に対して自重しろと言うのだろうか？　そこら辺がいまいち分からない。

Ｊ月Ｖ日

最近、例の生徒会長が一夏君にちょっかいを出しているようだ。簪ちゃんの話によるとどうやら一夏君のＩＳ指導者として生徒会長自ら動く事になり、一夏君を鍛えるらしいのだ。しかも本人の承諾もなしに勝手に決めたという。

何とも強引な話だと思うが、一夏君の立場を考えれば強ち間違いな話ではないのも事実。一夏君はこの世界で唯一の男性ＩＳ適性者だ。織斑先生（ブリュンヒルデ）の弟という事も相まって、その価値は絶大。人道から外れた者ならばＩＳの解明の為、どんな手を尽くしても手に入れたい〝代物〟に見えるだろう。

卒業後も一夏君の安全は完全に無事だと言う事は保証できない。その為に白式という専用機を与えられたのだが、如何せん一夏君はほんの数ヶ月前までＩＳの事は全く知らないド素人だ。

それでも彼の成長は著しいのだが、どうやら生徒会長としては物足りないらしい。あまり強引な手段を取らないといいのだが、この学園には何人か曲者がいるからなぁ、前の二年の薫子ちゃんも強引なインタビューもしていたし……自分よりも彼女達の方が自重すべきではないだろうか。

織斑先生も生徒会長には手を焼いているらしいし、もし一夏君が本

気で嫌がる様なのであれば自分も何らかの手立てを考えた方がいいのかもしれない。
……ところで、簪ちゃんっていつからお姉ちゃんと仲直り出来たのだろうか？　そんな疑問に対し、生徒会の先輩から聞いたとあっけらかんと答えた。
相変わらずお姉さんの事になると態度が変わるが……まぁ、此方の方は時間が何とかしてくれるだろう。
……なるよね？

Ｊ月Ｄ日
今日は嬉しい事があったので報告させて頂く。先日言ったＩＳの技術資格の話、あれ以降話題に出す必要はないと思い、これまで書いてこなかったが、記念という事で書かせて貰う。
夏休みの前日からコツコツと続けていた資格試験、用務員の仕事と箒ちゃんの特訓の合間の僅かな時間で行ってきたこの試験、ここまで至るのに長く険しい道のりだったが、遂に、合格という形で幕を降ろす事となった。
いやー、良かったよ。一応全ての問題に対して答える事は出来たけど、ケアレスミスが無いか不安で仕方がなかったんだよね。こういう緊張感って高校の受験の時以来だから、受ける方は半端なく緊張するんだよね。
ここＩＳ学園では生徒もこういった試験資格を受けられるシステムを導入しており、在学中に幾つもの資格を受けられるのだとか。
卒業後、生徒達が就職活動する際に有利になるよう学園が取り計らった制度らしいが、まさか用務員である自分まで受けられるとは思わなかった。この事を教えてくれた十蔵さんには本当に頭が上がらない。
因みに、自分が取った資格は〝総合ＩＳ管理資格〟簡単に言えばＩＳの整備、点検、制作、運営、その他諸々とＩＳに関する全ての資格を一つにまとめたのがこの資格だ。
他にも整備だけのものとか、点検だけのものとか、項目毎に複数に

分けられた資格があるのだが、この資格があればＩＳ委員会からコアの所有優先権が進呈されるとあったので、ホイホイとこの資格を選んでしまったのだ。

その為に試験は連日行われ、思わぬ事態に内心焦ってしまったのだが、結果として一発合格出来たので良かった事にする。織斑先生や山田先生、十蔵さんも自分の合格に喜んでくれたし、自分的には万々歳の一日である。

ともあれ、これで晴れて自分もＩＳ制作者の一員だ。今すぐ政府からコアを貰える訳ではないので、焦らず自分の想像するＩＳを模索していこうと思う。

題して〝ぼくがかんがえたさいきょうのあいえす〟計画。バカっぽく聞こえるが、実際その通りの内容なので計画の全容は心の内にしまっておく事にする。

……時々、シャルロットちゃん達専用機持ちの子達のＩＳを弄ってみたい衝動に襲われるが、ここはグッと我慢する。流石に勝手に余所のＩＳに手を出したら国家間の問題になるからね。そこら辺はキチンと考えないと。

あぁ、でも早く作りたいなぁ、自分だけのＩＳ。ここ最近自分がＩＳを作る光景を夢に見る。ゲッターロボを作った早乙女博士、ＧＮ粒子を生み出したイオリア博士、他にも兜博士といった多元世界の博士達はこう言った気持ちを抱いたりしてたのだろうか？　だとしたら、天才というのは意外と単純に出来ているのかもしれない。

もしかしたら、シュウ博士も……そう思うと、何だか博士達の事が少し身近に感じるような気がする。

……所で、どうして山田先生はあんなひきつった笑みを浮かべていたのだろうか？　織斑先生や十蔵さんも何だかぎこちない感じだったし、もしかしてどこか体調が悪かったのかな？　だとしたら申し訳ない事をした。今度改めてお見舞いを兼ねてお礼しにいこうかな。

その17

γ月＊日

最近、学園にマスメディアの連中が校門前に群がっている。何度も何度も追い払っても群がってくるそいつ等は十蔵さんが言うには総合資格をとった自分に対し、何らかの言葉が欲しくて各報道機関から来ているのだとか。

普通に勉強し、普通に資格を受け、普通に合格した自分としてはそれを聞いた時はなんだそりゃと呆れてしまった。まだ世に知れ渡って十年も経っていないのに、たかが一人資格を取った程度で騒ぎ立つ世間に、自分は何だかやるせなくなった。

自分は別に名声が欲しくて取得した訳じゃないんだけどなぁ、まだＩＳをどのように製作するのかも決まってないのに……放っておいて欲しいものだ。

大体、何で資格一つでこうも大騒ぎしなくてはならないのか、自分以外にもこの資格を取った人は何人もいるのに……と、そこまで考えて自分はあることに気が付いた。

なんと、この総合ＩＳ管理資格なるモノは企業や国で取得するモノらしく、個人が取るべきモノではないとしているのだとか。

やられた。きっとコレまでこの資格を取得した人は企業や国の研究機関に入り込んだ事でその企業や機関の名前を借り、本名を出さない事にしているのだ。どうりで過去の取得者達を調べても人の名前が出てこない訳だよ。この会社が取りました～と答えればそれだけでその話は終わりだもの

うわ～ハズい。まるでフェイスブックやツイッターで自分の素性を大々的に公開しているモノじゃないか。

ＩＳ委員会に送った写真も連日テレビで流されているし……流石に自分のまとめた論文までは公開されなかったけど、そんな事をされ

てしまった日には恥ずかしさのあまりグランゾンで火星に移住する所だったよ。
世間が大いに騒いでくれたお陰で、これまで自分が必死コいて築き上げてきた〝頼れるお兄さん〟的イメージが台無し。自業自得とはいえ、流石にこれは精神的にキツいモノがある。
皆との関係を修復する為にも何とかしなくてはならない。こうも連日校門前に群がられては学園側も迷惑になるだろうし、早急に対策を練らねばなるまい。
一応案はある。織斑先生や他の先生達からも許可と協力を得られたから、後は明日を待つばかりである。
そろそろ学園祭の時期に入るし、生徒達の迷惑になる前……早い内に決着を付けたい所だ。

γ月※日
今日、ＩＳの記事を書く記者さん達を招いてちょっとした記者会見を開いた。記者会見なんて人生初の出来事だった為、内心緊張と焦りで一杯だったけれど、幸い目立ったミスもなく、会見は滞りなく終わる事が出来た。
時間は約一時間、学園の体育館を使わせて貰って粛々と行ったこの会見は予想通り記者達の質問責めから始まった。カメラは兎も角、映像端末は断らせて貰った以上、向こうの質問を無下にする事は出来ず、簡潔にだが粗方答える事にした。
……しっかし、どうもメディアというのは苦手だ。特に情報関係。多元世界では地球連邦が散々自分を悪者に仕立てた挙げ句、情報統制やねつ造、事実隠蔽など世界中の至る所にある都合の悪い事をひた隠しにしていた事もあった所為か、マスメディアに対して拒絶反応みたいなモノを感じる時がある。
別にメディアが嫌いという訳ではないが……どうもゴシップ関連には毛嫌いを見せてしまう。先の会見の時もマイクに仕込んだ小型映像端末を手にしていたゴシップ記者を問答無用で追い出してしまったのだから。

ともあれ、これで連中の気も少しは満足しただろう。好き勝手に書かれることも多少は覚悟して、取り敢えずこの件はこれで一応の決着という事にしておこう。

それよりも、まずは来週から始まる文化祭の準備についてだ。今回自分がこの体育館を使用した事により、体育館を使う予定だった他のクラスが遅れてしまう事になる。今後はそんなクラスの下へ行き、手伝いをしていこうと思う。

一応政府にはコアが欲しいと打診してはいるが……どうせ政府からコアを提供されるのは当分先、ならばその間用務員としての責務を全うする事にしよう。無論、コアが届いたとしても用務員としての仕事をサボるつもりもないが。

そうそう、記事という言葉で思い出した。何でも一夏君、箒ちゃんと一緒にファッション雑誌のモデルをする事になったらしい。

何でも、専用機持ちの子にはこう言ったお仕事もあるらしく、結構羽振りが良いらしいのだ。裏では国家の思案が絡んでいそうだが、こういったモノは見ているだけで楽しいものだからね。

簪ちゃんもいずれこう言った雑誌に取り上げられるのだろうか？

もしそうなら一冊買ってみてもいいのかもしれない。

〝週間ＩＳ増刊号〟　ＩＳにまつわる様々な記事や情報を乗せた一冊の雑誌。大手会社が発行するこの雑誌はある人物の事で埋め尽くされていた。

〝白河修司〟本来なら企業が持つべき資格の取得をたった一人で成し遂げてしまった希代の才児。その表紙にはその時会見で発せられたある一言が大きく取り上げられていた。

『ＩＳをあるべき姿、あるべき場所へ帰す』

この一言により、世界は彼の動向を否応なしに注目する事になる。

その18

γ月M日

先の記者会見でどうにかメディアの連中を満足させる事が出来たようで、世間は落ち着いた様子でいる。相変わらずメディアの方は大袈裟に自分の事をアレコレ尾ひれを付けて社会に垂れ流してくれるが、人々はそんな事さほど気にも留めない様子で、変わりなく生活している。

大体、一人の人間が資格を一つ取った程度で世間が騒ぎ立つ筈もないのだ。そりゃアイドルとか有名人の人が資格を取ったら話題の一つにもなるだろうが、生憎自分の様な一般人が資格を取った位で普通は見向きもしないモノである。

精々「ふ～ん……で、誰そいつ？」な感じである。そもそも、〝篠ノ之束の後継者現る!?〟という見出しを書いた雑誌も見かけるが、コレばっかりはホラ吹きも大概にしろという感じである。

お陰で箒ちゃんから同情の眼差しを受けたし、ホントメディアって勝手な事ばかり言うよな。これでは会見を開いた意味が無いではないか。

……まぁ、この大仰な宣伝のお陰で世間は半信半疑の状態となり、逆にあまり気に掛けられる事も無くなったから別に良いんだけどね。そもそも、こう言った事を書かれる事を承知の上で会見を開いたのだから、これ以上の愚痴は止めておく事にしよう。ある程度騒いだらメディアも落ち着くと思うしね。

さて、そんな事よりも今話題にしたい話は学園祭の事だ。ちょうど今日から準備期間に入るようなので、各クラスから熱気の様なモノを感じ始めている。

こう言った準備期間も学園祭の醍醐味の一つ、自分も用務員の仕事と並行して手の足りないクラスに向かい、出し物製作の手伝いを施した。

芸術品の展示会や舞台、お化け屋敷など、鉄板の催し物の類があれば、屋台や喫茶店、レストランなど食べ物を出すクラスもチラホラ見

受けられる。
一夏君のクラスの出し物は執事喫茶らしく、学園唯一の男子生徒という強みを活かした出し物をするらしく、皆衣装やメニュー作りにあれこれ考えを出し合っていた。
本当なら自分ももっと全面的に協力したかったのだが、学園祭はあくまで学生達が主役。大人達はちょっとした手助け程度にしなさいと十蔵さんに釘を刺されてしまった。
そう言われてしまえば自分に反論出来る筈もなく、少しばかり寂しいが……ここは生徒達の自主性を重んじて見守る事にする。
ただ、体育館を使用するクラスは幾分か遅れがあるようで、先の記者会見で使わせて貰った以上、そこだけは自分もある程度手伝うことにした。十蔵さんも納得してくれたし、邪魔にならない程度に自分も学園祭に参加しようと思う。
けど、ちょっと不思議に思った事がある。生徒会が催すとされる舞台の白雪姫、何で童話の中の白雪姫の話に青竜刀とかスナイパーライフルが出て来るのだろう？　アレって中世のドイツ辺りが時代背景じゃなかったっけ？　何故に現代兵器や中国の武器が出て来るの？
まぁ、アレンジされた白雪姫という事なのだろう。そのこと自体は自分も文句はないが……流石に実物は拙いだろ。ライフルをモデルガンに置き換え、青竜刀やサバイバルナイフといった凶器は刃を潰した安全仕様のモノにすり替えておいた。
学園祭に死人を出すのは洒落にならないからね。生徒達も間違って発注したのだろう。ここＩＳ学園は警備という名目で結構武器が補充されているし、今回の実物もそこから紛れ込んできたのだろう。
事情を説明したら織斑先生も進んで武器を預かって安全な所に置いてきてくれたし、これなら安心してもいいだろう。
明日も文化祭の準備だ。邪魔にならない範囲で自分も手伝って行こうと思う。

γ月Ａ日
今朝、日本政府から通信があった。何でもＩＳ委員会が自分の事を

認めたらしく、近い内に自分宛にコアを届けようと約束してくれたのだ。
うーん、こうも早くにコアが届けられるとは流石に予想外だった。数に限りのあるＩＳコア、５００にも満たない希少なものだから届くにしてももっと先の事だと思っていたから、少しばかり戸惑う自分がいる。
いや、別に良いんだけどね。自分がどんなＩＳを作るのかは頭の中で大体出来上がっているし、必要なモノも多少めんどいが生成可能だし、時間さえあればいつでも作業に移れるんだけどね。
自分が作ろうとしているＩＳは少々手間が掛かる代物で、製作期間は予想だと大体一ヶ月程掛かってしまう。流石にいち用務員が一ヶ月も仕事を放り出す訳にもいかないし、けれど折角ＩＳを作れる立場を得たのだから妥協もしたくはない。
色々構成を練って作業に取り掛かりたいのだが、やはりどう考えても無理があるんだよなぁ。流石にＩＳ製作と用務員の二足の鞋は厳しいモノがある。
どちらも片手間で済ませたくないし、かといって一月も仕事を放っておく訳にもいかない。もし万が一ここでの仕事がクビになったら、今度こそ自分は路頭に迷う事になるのだ。
ＩＳ学園ほど環境が整った所はそうそうない。簪ちゃんの専用機を作る際もここの施設にはお世話になったし、使い方も分かっている。そういった意味でもこの仕事は手放せない。
……そう言えば、最近倉持研って所から良くウチに来ないかって誘いのメールが来てるんだよね。別に行くつもりはないけど。
だって倉持研って簪ちゃんの専用機の製作を打ち切った所でしょ？　幾ら一夏君のデータ取りに人員が割かれたからって、打ち切りはないでしょう。結構有名な所らしいし、何人か専門の人が応援に駆けつけたりすれば少しはイメージが違ったのにそれすらしないんだもの。正直、自分の中での倉持研に対するイメージはそんなに良くない。
そんな訳で倉持研には近い内直接伺わせてもらいキッパリ断ろう

と思う。こういうのって早い内に済ませた方がいいから……次の休みには伺おうと考えている。
　またコートを出さなくちゃなぁ。トレーズさんから渡された大事なモノだし、あまり汚す機会は増やしたくないんだけどなぁ……。
　いっそ代わりに白衣でも着てくか？　そうすれば少しは俺も技術者っぽく見えるかも。……いや、キワモノみたくなるか。
　まぁでも、考えておくのもいいかな。

◇

〝倉持研究所〟　通称倉持研。ＩＳの出現以降、日本でのＩＳ開発を一手に引き受け、今や日本の大手ＩＳ開発機関となったこの倉持研に一台のリムジンが研究所の前に停車する。
　そのリムジンを前に倉持研のスタッフ達が集結する。何れもＩＳに関しては一級の知識を持った人材達、そんな彼等が挙って集まるのは……リムジンに乗っている一人の青年を待っていたからだ。
　扉が開く。開かれたドアから足が伸び、地面へと踏み締める。
　そして、リムジンから出てきたその青年に誰もが息を呑んだ。純白の白衣を身に纏い、紫炎の様な髪を揺らしながら現れる一人の青年。
　これが、若き天才。あの篠ノ之束の後継者とも言われ、自分達が漸く手に入れた総合ＩＳ管理資格を個人で得た鬼才の男。
「ほ、本日は遠い所からお出で頂き、まことにありがとうございます。白河修司殿」
　〝白河修司〟　そう呼ばれた青年は差し出された研究員の手を謹んで握り返し。
「敬語は結構ですよ、篝火ヒカルノさん。あなたも今日はこんな若輩の為にはるばる倉持技研第二研究所からお越し頂き、ありがとうござ

います」
「っ!?」
「おや？　自分の名前が知られている事が意外でしたか？　あなた方は私にとってＩＳ開発に関する先輩です。後輩としての礼儀として、皆さんの名前は一通り覚えさせて頂きましたよ」
汗が、こぼれ落ちる。目の前の青年は自分よりも年下の筈なのに、言い表す事の出来ないナニカを感じる。
そんな事を見透かしたのか、目の前の青年は口元を弛め……。
「では、改めまして――――白河修司です。本日は私の為にこのような場を設けて頂き、誠に感謝致します」
そう、不敵に笑うのだった。

その19

日本が誇る日本最大のＩＳ技術開発機関、倉持研究所。ＩＳに関わる多くの才ある技術者達が集うこの施設に一人の青年が訪れた。
倉持研が迎えとして寄越したリムジン、その中から現れた紫色の髪が特徴的な青年の名は――――〝白河修司〟
本来なら企業が一丸となって取得するべき総合ＩＳ管理資格をたった一人で掴み取った異常なる者。既に世間からは真性の天才と言われ、一部ではあの篠ノ之束の後継者とも言われている存在。
そんな彼が今、自分達の目の前で優雅に紅茶を啜っている。落ち着きがあり、品がある彼の態度に倉持研の所長である男性と第二研究所所長の篝火ヒカルノは緊張した面持ちで眺めていた。
いい加減何か喋ってくれ。研究所の応接室に案内してからまだ一分も経っていないが、凄まじい緊張感が彼等に襲い、時間の感覚を鈍らせているのだ。
一分が一時間だと錯覚し始めた頃、目の前の天才は紅茶の入ったティーカップをテーブルに置き、穏やかな笑みと共に言葉を紡ぎ始めた。

「……良い紅茶ですね。香りも良いし、気持ちも落ち着きます。流石は倉持研、一流の方はこう言った嗜みも一流なのですね」
「き、恐縮です」
「紅茶は前に友人と何度か嗜んだ事があるので味や香りにはある程度理解がありますが……いや、本当にこの紅茶は美味しい。皆さんもこう言ったモノを口にしているから、日々大きな技術発展に貢献しているのですね」
「は、はぁ……」
テーブルに置かれたカップに視線を落とし、どこか懐かしそうに語る修司に篝火は反応に躊躇した。確かにこの紅茶は一級品だ。それも最高級の農園から栽培される最高級の一品であり、かのエリザベス

女王も愛用されている代物。
この日の為だけに用意された特別な代物、本来なら自分達ならどんなに伸ばしても手の届かない一品、それが何故目の前の若造の為に用意せねばならないのか。それは日本政府から言い渡された依頼が原因だ。
『白河修司なる男を必ず我が国の財産とせよ』政府から言い渡されたこの依頼は倉持研全職員に通達され、政府から前金として莫大な資金を受け取っている。
これらの資金を使って白河修司を此方に引き入れろという政府の意向に別に異論などない研究員達は当然これに賛同したのだが……。
（どう見ても、金なんかで動く様なタイプじゃないわね）
隙がない。目の前で再び紅茶を啜る青年を篝火はそう評価した。ただ紅茶を口にしているだけなのに全方位に対して注意を向けている。しかも周囲に気付かせないようさり気なく、且つ浸透させるような気配り。
現に、自分以外にこれに気付いている者はいない。自分の隣にいる所長や護衛と称して部屋に連れてきているガードマン達も違和感は全く感じていない。
何故技術者である篝火ヒカルノがその事に気付けたのか、それは彼女が嘗て現役時代の織斑千冬と面識があり、その実力の一端を見せて貰った事があるからだ。
伊達に倉持研究所の第二所長という肩書きは持っていない。当時は織斑千冬の専用機を何度か調整した事もあるし、訓練と称して彼女の手合わせに付き合った事もある。ＩＳ関係で技術者の拉致も珍しくはないこの世界で、一人でもある程度対抗出来る実力を彼女は有していた。
だが、それを引き合いに出しても目の前の男は異質だった。篝火でも余程注意深くしないと察知出来ない気配。まるで限りなく薄く、それでいて鋭い刃に巻き付かれている様な感覚。
何より、この気配に気付いている自分に対し……。
「……クク」

「っ!?」
目の前の男はその事を知った上で放置しているのだ。不気味。目の前の男の底知れない迫力に篝火は手の震えを抑えるだけで精一杯だった。
希代の天才？　あぁ確かにそうだろう。ＩＳを開発した篠ノ之束も大概だが、目の前の白河修司なるこの男もそれに迫る化け物だ。
この男を見ていると、底の見えない井戸をのぞき込んでいる気分になる。真っ暗で何も見えず、けれど吸い込まれそうな……危険な感覚。
果たしてこんな存在を引き入れて良いのだろうか。仮に招き入れた所で、この倉持研は……いや、日本はこの怪物を御しきれるのだろうか。
不安と恐怖が混ざり合い、胃の中で渦巻いている。やがて篝火が言いしれぬ悪寒に気分が悪くなった時、紅茶を啜っていた修司の口が再び開いた。
「……本日、この倉持研にお邪魔させてもらったのは他でもありません。先日からあなた方から受けたお誘いについてですが……確かに、悪くはない条件のようです」
「っ！」
「……」
「ＩＳを開発する環境も申し分ありません。最高にして破格の待遇。これを断る者はそうそういないでしょう。日本最大のＩＳ開発機関倉持研、それに選ばれた事、嬉しく思います」
「お、おおっ！　では……」
「はい。残念ですがお断りさせて頂きます」
……時が、止まった。目の前のにこやかに誘いを断った修司に所長だけではなく隣の篝火、護衛のガードマンまでもが驚きの表情のまま固まっていた。
一秒、二秒、やがて修司が口にした言葉を理解した所長は壊れた錆び付いた機械の様にギギギとぎこちない動きで目の前の天才に問いただした。

「それは……どうしてですかな？　不満があればすぐに改善させますが」
「いえ、不満はありません。先程も仰いましたようにここの施設の開発環境は総じて高いレベルにあります。通常のＩＳを開発するには持って来いの場所でしょう。――しかし」
「貴方の求めるＩＳは、ここでは造れないと？　そう言いたいのですか？」
「そうですね。そう受け取って貰っても構いませんよ」
　そう言って不敵に笑みを浮かべる修司、大胆不敵とも言えるその態度に普通なら文句の一つでも口にする所だが、先のＩＳ関連の雑誌に記載された例の言葉、それを思い出した篝火は……ただ目の前の男を見つめる事しか出来なかった。
　〝原点回帰〟――嘗て篠ノ之束が世界に向けて言い放ったＩＳの存在理由。これからの世代で宇宙環境に適応すべく人類に向けて発信したメッセージ。
無限の成層圏（インフィニット・ストラトス）。遙か彼方の宇宙まで地球の成層圏内にしてしまおうという篠ノ之束博士の大きすぎる野望。
　それを、目の前の男は実行し、実現させようとしているのか。篠ノ之束という天才を越えた天災に挑み、理解し、そしてそれすらも越えてみせると、この男はそう言っているのか。
　……無理だ。この男は一国に収まる程小さな器ではない。近い将来、篠ノ之束はこの男の手によって表世界へと引きずり出される事だろう。
　そこまで考えが過ぎった時、目の前の天才は席を立つ。それが変わらない答えだと知った所長と篝火は力ない足取りで修司の後に続いた。
「今回はお忙しい所、時間を作って頂き感謝します。倉持所長、篝火さん」
「……此方こそ、わざわざご足労させて頂いて申し訳ない」
「それならお気になさらず。今日は仕事の休みを頂きましたので……それに、何度もお誘いを受けておきながら口答で済ませるのは些か失

礼かと思い至った訳ですので……」
　完璧な紳士的対応。イヤミの一つすら言わせて貰えない会話術に二人は苦虫を噛み締める思いを味わう。すると、そんな彼等の内心を見越したのか……。
「では、また近い内に、あなた方と再びお会いする日を楽しみに待っていますよ……ククク」
　来たときと同様、不敵に……且つ大胆に、彼は笑って見せていた。その笑みは何を意味するのか。篝火は結局その事を理解出来ず、研究所から遠ざかっていくリムジンを見送るのだった。

◇

Σ月※日
　いやー、昨日は緊張した。例の倉持研って所は結構遠い所にあるらしく、徒歩じゃ時間が掛かるというから向こうさんから移動手段を手配してくれると聞いていたけれど、まさか朝早くからリムジンに乗るとは思わなかった。
　多元世界にいた頃、再世戦争の時に中華連邦でシュナイゼルの奴の強引な誘いに乗った時以来だけど、今回のリムジンもそれに負けないくらい豪華で寛げる造りとなっていた。迎えに来てくれるだけで有り難いのに、まさかリムジンを用意してくれるとは思わなかったので、終始自分は緊張しっぱなしでした。
　差し出された飲み物にも手を付けなかったし……いや、出せる訳ねぇよ。唯でさえ向こうはリムジンなんか出してくれてるんだぞ？
　その上車内で飲食したらスゲェいやしんぼみたいに見えるじゃな

いか。
ちゃんと朝食を摂った自分は飲み物を勧めてくる運転手さんにやんわりと断り、倉持研へと向かった。……そう言えば、食堂のおばちゃんのおにぎり、あれは美味かったなぁ。一夏君が絶賛しているだけあって、味も確かなものだったし、ああ言うのがお袋の味っていうのかなぁ。しかも自分の時間に合わせて握ってくれたし、マジ良い人。俺の中のベストお袋さんに認定だな。
そんなこんなで倉持研に着いたのだが、これがまた凄いのなんのって。研究所は予想以上に大きかったし、設備もＩＳ学園以上に充実してたし……なによりも中にいる人達全員が自分の到着を待っていたのだ。
もうね、何事かと思ったよ。何で日本最大のＩＳの技術開発機関が総出で若手の自分を出迎えに来てるんだよ。一周回って落ち着いてしまったよ。
その後、篝火さんと倉持研の総責任者である倉持所長を交えて、護衛の人達が見守る中話し合いをしたのだけど……ざっと三十分程かな？　適当に話をした後にキッパリと倉持研からのお誘いを断って研究所を後にした。
話をまとめれば大体こんな所だけど、実は所々厄介な事が合ったんだよね。
来る途中と会談中、そして帰る最中、時折自分を監視する様な視線が所々から感じられたんだよね。なんでもＩＳの技術者は凄まじく貴重な人材で、日夜企業同士で人材の奪い合いをしているんだとか。中でも人材に乏しい所は強行手段を取ってくる話もあるらしく、実際拉致を受けて行方不明となった技術者ってのは少なからずいるそうなのだ。
恐らくはどこかの弱小企業が傭兵崩れを雇って自分を狙っていたと思われるが……こんなＩＳ経験に乏しい自分を必要にしているとか、余程切羽詰まった所なのだろう。
おかげで会談中少しばかり気を立ててしまったし、それを察知したのか篝火さんは渋い顔で自分を睨んでいた。その時は笑って誤魔化

したけど……やっぱり非常識だったかなぁ？
護衛の人達も気にしてない様子だったし、自分ももう少し気を抜けば良かったかな？　折角美味しい紅茶を振る舞ってもらったんだし、もっとちゃんと味わえば良かったなぁ。
シュナイゼルが見たらマナーがなってないって呆れられそうだ。アイツ、こういうマナーって結構口うるさいから、何回か注意を受けた事がある。
それでその後、帰りのリムジンに乗ってる間も露骨に分かり易く視線をぶつけてくるし、もうなんなんかな？　アレかな？　例のゴシップ記者が自分の動向に探りを入れてきてるのかな？　勘弁して欲しいものである。
おかげで運転手さんも不機嫌そうにしていたし、やっぱり女性だけあってああ言った視線には敏感なのかな？　幸い学園に戻ってくる頃には視線も感じなくなったからいいけど……今度またあの視線を感じたら容赦なく注意しに行ってもいいのかもしれない。
……しっかし、今時のゴシップ記者って良いところに場所とるのな。視線の先を流し目でチラッと見た所、どうやら視線の主は高級そうなホテルにいるようだ。
もしかしたら編集長クラスの人が泊まっているのかな？　もしくはどこかの有名人があそこのホテルに泊まって、記者会見を開いているとか。
まぁ、そんな話はどうでもいいとして……いよいよもうすぐ学園祭、自分も本番に向けて気合いを入れようと思う。
……尤も、警備員の真似事位しか出来そうにないんだけどね。や、別に良いけどね。
学園祭が終わったら自分もいよいよＩＳ開発に乗り出すんだし、改めて気を引き締めようと思う。

◇

――――とある高級ホテルの一室。広々とした空間で街を一望出来るスイートルーム。一部の人間しか入ることが許されないその一室は、現在複数の女性が使用していた。
「クソッ！　あの野郎、私の事に気付きながら見逃しやがって、私を……虚仮にしやがって！」
「落ち着きなさいオータム」
　苛立ちを露わにし、運転手の格好をした女性が部屋に入った途端帽子を床へと叩きつけた。尋常じゃない程に怒る女性を金髪の女性が宥める。
　腰にまで伸び、ウェーブの掛かった長い金髪、それを揺らしながら豊満な体を揺する女性の姿は……妖艶の一言に尽きる。
　女性さえ魅了してしまうその魅惑に、オータムと呼ばれた女性はその怒りを鎮めるが、悔しさは未だ残ったままで不服そうな面持ちで下を向く。
「今は焦らなくてもいいわ。幾ら得体のしれない男だろうと、所詮ＩＳの敵ではないわ。貴方は予定の通りに動いて頂戴」
「……分かったよスコール、けど、あの男、白河修司は私が貰う。奴を叩きのめすのはこの私だ！」
「殺しちゃダメよ。彼の頭脳は私達の為に使って貰わなくちゃならないんだから」
「なら、頭以外潰しても問題はないって事だよなぁ」
　自分の仕込んでいた薬入りドリンクを呆気なく看破し、挙げ句の果てには見逃して貰った始末。プライドをこの上なく傷つけられたオータムは獰猛な笑みを浮かべながら部屋を後にする。
　そんな彼女をやれやれと肩を竦めながら見送るスコールは、壁によりそう少女に目を向ける。

「そういう訳だからM、貴方も当日は指示に従ってね？」
「……了解した」
スコールの言葉に素っ気ない態度で答え、Mと呼ばれた少女も部屋を後にする。
性格に難ありな彼女は扱いこそ難儀するが、〝性能〟はお墨付き、あとは彼等の祭りに便乗し、此方も派手な花火を挙げるのみ。
「ふふふ、織斑一夏と白河修司、どっちも私の好みね」
手にした二つの写真。それを片手にスコールは妖しい笑みを浮かべるのだった。

その２０

Σ月Ｖ日

先の倉持研へ訪れてから数日。相変わらずゴシップ記事には好き勝手書かれているが、取り敢えずいつも通りに過ごしています。

倉持研の所へお邪魔してから大体一週間ほど経過した現在。学園祭の準備もいよいよ大詰めとなり、学園の空気も何だかいつもと違っていた。

各部活動の方もそれぞれ特徴的な出し物をするみたいだし、それぞれのクラスも中々見応えのある風貌となっている。お化け屋敷も素人が作ったとは思えないリアルさがあったし、本物の化け物が出てきたかと思い結構驚かされた。

やっぱこういうのって独特の怖さがあるよな。インベーダーやアンチスパイラルとはまた違った恐さ……まぁ、こんなの比較する方がおかしいか。

一夏君のクラスの方も喫茶店らしい雰囲気となっていたし、一夏君の執事服も中々似合ってた。箒ちゃん達もメイド服が様になってたし、これは当日自分もお邪魔させてもらおうかな。一応用務員も見回りを兼ねて学園祭に参加する事を許されているし、十蔵さんも構わないと言ってくれたから、当日が楽しみになってきた。

鈴音ちゃんのクラスもチャイナ喫茶なる店を開くみたいだが、此方は執事喫茶とはまた違った趣もある為、中々楽しそうだった。鈴音ちゃんもチャイナドレス似合ってたし、やはり可愛い子というのは何着ても似合うのだなと改めて思った。

女子高生のコスプレか……そういやカレンちゃんも高校生だし案外似合ったり、ヨーコちゃんも――――いや、ないな。お出迎えの挨拶と共にアイアンクローや蜂の巣にされそうだし、この話はやめておこう。うん。

それは兎も角、これまでの自分の行動を報告しようと思う。学園祭が終わった後、政府からＩＳのコアを渡される予定である自分は、コ

レに備える為に少しばかりグランゾンと共に宇宙を放浪していた。
何するにしても拠点というモノは必要だ。学園の施設も使わせてもらうつもりだが、他の生徒達も使用する以上独占は許されない。学園の負担を少しでも軽くしようと時間が空いた時に火星や月などに赴いて簡単な拠点造りをしていた。
多元世界にある立派な基地と比べると物置小屋みたいな施設だが、空調も完備だし、人が活動出来る環境も整えた。機材も一通り揃えた事だし、ひとまず開発施設としては及第点だろう。出来映えも地球の衛星軌道上に漂う宇宙ゴミを使った物にしては中々だし、余った資材で簡単な自律ロボを作る事も出来た。
宇宙ゴミというのは各国が宇宙開発前に打ち上げたロケットや人工衛星の残骸の総称で、その数は凄まじく、自分の世界でもちょっとした環境問題となっているモノだ。
この宇宙ゴミを使って研究施設を作ったのだが……いやー、中々骨が折れた。この宇宙ゴミを回収する為に付近の人工衛星にハッキングを施して、且つそれに気付かせないようにすり替えの映像も流したりして細かい作業が続いたけど、苦労した甲斐あって回収した宇宙ゴミは中々価値のあるものだった。
殆どはグランゾンの発する高重力によって新たな素材に変換させて使用したけれど、中には結構使えたりするものがあって、こういうのはチョコッと手を加えるだけに留めて管理システムに使用したりしている。
そうすることで作られた火星と月の開発施設。月の施設は見つからないよう月の裏側に設置し、ちょっとした光学迷彩を施して、火星の方は地中に埋めて秘密基地という仕様にしている。
自分がいない合間、施設整備の為に例の自律型のオートマトンも何台か造っておいたし、ＩＳのコアが届くまでの準備は大体完了する事となった。
……本音を言うなら木星にも拠点を置きたかったけれど、流石に時間がなくて断念せざるを得なかった。前にも言ったがネオになれば早く木星に辿り着くが、流石にグランゾンの力を出し過ぎるだろうか

ら、少し自重した方がいいのかもしれない。
ともあれ、此方も準備は万全となった。後は明日の学園祭を無事に終わらせる事に集中する事にしよう。
それと、十蔵さんから学園祭後の一ヶ月の合間、休んでも良いという特別休暇をもらえた。勇気を持って十蔵さんに相談した所、学園長に掛け合ってもらい、許可を出してもらったのだ。
言った時は酷く驚いた十蔵さんにダメかと諦めかけたけど、受け入れてもらえて安心した。仕事を一ヶ月も放って申し訳ないと思ったけれど、それくらいの合間は何とか出来ると十蔵さんは笑って許してくれた。
その笑みが少し引きつっていたのが気になったけど、今は一ヶ月も休みを貰えた事を喜ぶとしよう。

Σ月L日
今日は待ちに待った学園祭。現在自分は休憩という事で自室に戻りこの日記を書いている。
学園の皆で頑張って作った学園祭。一つの集大成がこうして実を結んだ事を喜ばしく思いながら、その思い出を忘れないよう日記に書き込む事にする。
まず最初に訪れたのは簪ちゃんのクラス。簪ちゃんは専用機を作ることに無我夢中で殆どクラスに顔を出さなかった為、最初の頃はクラスの子達と距離があったけど、先のタッグトーナメントで大活躍を果たし、それがきっかけでクラスの子達と打ち解ける事ができ、クラスの皆と一緒に出し物を作っていた最中もとても楽しそうにしていた。
そんな簪ちゃんが皆と一緒になって作ったのはお化け屋敷だ。前に日記に書いた出来映えの良いお化け屋敷とは簪ちゃんのクラスの事だったのだ。
ただ、どうも出来が良すぎた為に中に入っていった生徒達は皆失神して運び出される始末。お化けの格好をした生徒が担架を担いで気絶した生徒を運ぶ光景は……色々シュールだった。

自分も試しに入ってみたのだが……うん、予想以上に凄かった。雰囲気も出てたし、何よりお化けのリアルさがアリアリと出ていた事に素直に驚いた。

妖怪といった怪物系のお化け屋敷ではなく、日本特有の怪異、怨念や怨霊を題材にしたお化け屋敷は学生が作ったレベルとは思えなかった。

いやマジで。夜中にあの中に迷い込んだら間違いなく泣き喚く自信がある。例えて言うのなら……そう、リ〇グと呪〇が良い感じに混じり合った様な、そんな感じのお化け屋敷だった。

故に、担架で運び出す際もお化け衣装に驚いて腰を抜かした生徒もいたらしく、織斑先生がやりすぎだと注意していた。

次に向かったのは一夏君のクラス。執事喫茶という一風変わった喫茶店をする事になった一夏君のクラスは他のクラスよりも人気が高く、結構な行列が出来ていた。

自分の後ろにも客が並んでいたし、一夏君と二、三話したら出て行こうかと思われたのだけれど、何故か自分も執事をやる事となり、そこで結構足を止められてしまった。

何でも一夏君だけでは男手が足りないという事で密かに自分も参加する様に織斑先生に掛け合っていたらしいのだ。当日まで秘密という事で今まで黙っていたのだという。

織斑先生は申し訳なさそうにしていたが、自分としては生徒の皆と一緒になって学園祭を体験出来たので全然オッケーである。一夏君も自分というもう一人の執事役が現れた事で動きに迷いがなくなり、率先して接客をしていた。

自分も織斑先生と山田先生をもてなしたのだが……流石にお嬢様扱いは不味かったのか、織斑先生は終始眉間に皺を寄せて黙り込んでいた。

結構自分も調子に乗っちゃったし、生徒の前で少し悪ふざけがすぎたかもしれない。今度顔を合わせた時はそれとなく謝っておくとしよう。

その後も二年や三年生のクラスを一通り巡り、各部活の出し物にも

顔を出した。午後からは生徒会の大規模な演劇を行う予定だし、自分も見回りだからと気を抜かずしっかりやろうと思う。
……ただ、ＩＳ関連の人達も来ているとは思わなかった。見回りの際は生徒の皆が自分を彼等から引き離してくれたお陰で絡まれる事は少なかったけど、彼等があの程度で諦めるとは思えない。
一夏君もいきなりそういった話題に触れられて困っていたし、自分も気を付けようと思う。
そろそろ時間の為、ひとまず日記はここで中断する事にする。

◇

――――今日は、とても楽しい一日になる筈だった。皆が今日という日の為に頑張って作業し、皆で作り上げた大切な一日。
学園祭。厳しいＩＳの訓練を受けて必死に頑張ってきた皆に対する、学園からの囁かな贈り物。皆で作り、皆で築き上げたその日を……目の前の理不尽がぶち壊した。
「お前、一体何なんだよ！　何の為にこんな事をする!?」
「私が何者かって？　見てわかんねぇのかよ？　企業の人間になりすました……謎の美女だよ！」
怒りを露わにする織斑一夏、普段は見せない憤怒に満ちた表情を浮かべる彼に対し、目の前の女はただ愉しそうに笑う。
女が纏うのは……蜘蛛。獲物を絡め取り、衰弱させ、ジワジワとなぶっていくその様は、まさに彼女の性を現すのに十分な姿だった。
蜘蛛に絡め取られながらも、一夏は必死に足掻いた。こんな奴は許さないと、許してはいけないと、怒りに震えながら抗った。

しかし……。
「無駄だぁ、お前が暴れれば暴れるほど、蜘蛛の糸は深くお前の体に食い込んでいく。そんな事も分からないのか三下がぁ！」
「くそ、こんのぉっ!!」
卑下た笑み。フルフェイスのマスク越しでも分かる挑発。一夏はそれが目の前の女の罠だと知りつつも怒らずにはいられなかった。
現在自分達のいる所は更衣室。目の前の女の突然の襲来に学園はまだ異変に気付けていない。
援軍も期待出来ないこの状況を打破するのは……いやできるのは自分しかいない。なのに、その自分が今、手も足も出せないでいる。
（畜生、ちくしょう!!）
悔しい。目の前の女をブン殴りたいのに、今の自分はそれすら出来ない。
「さて、お前のＩＳ、白式を頂こうか。その後にじっくりと……殺してやるよ」
蜘蛛の手が一夏に迫る。せめて気迫で負けてたまるかと睨みつけるが、それすらも女は己の愉悦とし、己の快楽を貪る為に一夏を殴りつけた。
一発、二発、無抵抗の相手を一方的に叩きのめす快感に浸りながら、女は一夏を殴りつけた。
白式のシールドエネルギーをジワジワと削り、絶対防御まで作動しなくなった時に見計らってＩＳを奪い、そして殺す。
アァ、なんて素晴らしいのだ。女（自分）より強いと思い込んでいる男を一方的に壊す事が出来る。なにものにも勝るこの悦楽を自分だけ味わう事ができる。
そろそろフィナーレといこう。女は蜘蛛の手を広げ、白式に触れようとした時……。
「そこまでにしていただけませんか？」
「っ!?」
「う、ぐぅ……」
自分達以外誰もいない筈の更衣室に第三者の声が響きわたる。ハ

イパーセンサーを作動させ、周囲に警戒を向けると……。
崩れたロッカーの上に佇む一人の影が、自分達を見下ろしていた。
「学園内ではＩＳの無断接触、並びに無断使用はしてはならないと一般開放する際に厳重に注意させて頂いたのですが……どうやら聞き逃していたようですね」
「テメェ、何者だ!?」
壊れた蛍光灯の光りが逆光となり、目の前の人間を影にする。雄叫びと共に女は弾丸を撃ち放ち、影を撃ち抜いた。
しかし……。
「私ですか？　私は名乗る程の者ではないのですが……まぁ、聞かれたのなら答えましょう」
影は女の後ろに現れ、笑みと共にその姿を現して――。
「私の名は白河修司。ここＩＳ学園で用務員として働いているしがないなんちゃって技術者です」
「っ!?」
「あぁ、貴方は名乗らなくても結構ですよ。聞くつもりも、覚えるつもりもありませんから。……さて、折角の学園祭をぶち壊してくれたのですから」

〝覚悟は出来てるんだろうな？〟

その表情を一夏以上の怒りで染め上げていた。

その21

――――ＩＳ学園、アリーナ管制室。普段はアリーナの管理室として使用される部屋、学園祭の為本来なら使われる事のないこの部屋は……現在、物々しい雰囲気が漂っていた。

「学園に向かって接近してくる機影あり、これは……ＩＳです！」

「チッ、この忙しい時に手間を掛けさせてくれる」

管理室の中でオペレーターを勤める山田真耶の声が響く、それを耳にして状況を正しく認識した織斑千冬は厄介だと苦々しく呟く。

既に非常警戒態勢は発令された。学園祭も一時中断され、現在生徒会や上級生が主体となって学内にいる生徒や記者、一般人達を避難させている。

接近してくる機影の速さは依然として収まる様子はなく、このままではＩＳ学園に五分と経たずに接近されてしまうだろう。

千冬は管制室に設置されている通信端末を手に、専用機持ち達に連絡をいれる。本当なら教員クラスが対応すべきなのだが、どのクラスの教員も避難誘導に人員が割かれており、動ける者は限られていた。

まだまだ危なっかしい所はあるが、今学園に戦力と言える存在は彼女達しかいない。千冬は一瞬の迷いも見せず、一年生の各専用機持ち達に接近してくるＩＳの迎撃命令を下した。

と、同時に……。

「高出力のエネルギーを感知、これは……そんな、既に別のＩＳが学園内に侵入しています！　しかもこの場所には一夏君と白式も一緒です！」

「何だと!?」

真耶から伝えられる最悪の状況に千冬は愕然となる。最愛の弟がテロリストと接触してしまった。慌てて一夏のいる場所へ通信を繋がろうとするが、向こうの通信設備が破壊されたのか、甲高い雑音が

聞こえてくるだけだった。
急いで現場に向かうか？　ＩＳを持たないこの身なれど、大抵の相手には遅れを取らない自信はある。……いや、ダメだ。現在の作戦指揮は自分に持たされている。指揮官が持ち場を離れれば指揮系統は乱れ、テロリスト達のつけ込む隙となってしまう。
だが、このままでは一夏が危ない。姉としての立場と教師としての立場、臨海学校に続いて二度目となる葛藤に千冬の思考は追い詰められていく。
と、そんな時だ。手にした通信端末から別施設からの通信が入ってきた。こんな時に何だと端末の向こう側にいる人物に八つ当たり気味に訊ねると。
『織斑先生ですか？　此方は白河です』
『っ、白河だと!?　貴様、そんな所で何をしている！』
『申し訳ありませんが、今は私の事で質問される時間はありません。簡潔に言いますのでどうか聞いて下さい』
耳朶に響いてくる低い声、自分の知る白河修司なる人物の声とは質が異なっている事に気付いた千冬は、言葉を発せずに驚愕していた。自分の知る白河修司という人物は、性格は明るいものの落ち着きがあり、人当たりも良い人格者だ。生徒からも評判はいいし、弟の一夏からも慕われている人物。
その人物がまるで正反対の様に暗く、低い声で自分に言葉を投げ掛けている。何故ここまで人が変われるのか、聞きたい事は山ほどあるが……今は、そんな事が許される状況ではなかった。
『……了解した。なら手短に話せ、此方も外からの襲撃者に備えなければならんのでな』
『やはり、テロリストは複数で攻めて来ましたか……了解です。なら私は一夏君の方へ向かいますので織斑先生と専用機持ちの子達は外の襲撃に専念して下さい』
『なんだと？　おい白河！』
『それでは失礼します』
一方的に切られる通信に呆然となる千冬。色々考える事はあるだ

ろうが、まずは襲撃者に備えるのが優先と判断し、織斑千冬は鈴音とセシリア、そして簪と念の為にラウラを襲撃者に向かわせ、残りのシャルロット、箒を一夏の元へと向かわせる事にした。
これは白河修司が一夏の下へ駆けつける三十秒前の出来事であり、更にその三分後、事態は大きく動く事となる。

◇

学園内更衣室。普段はトレーニングやＩＳでの特訓を終えた生徒達が使用する為の施設。本来なら整頓され整備や掃除が行き届いて綺麗にされている筈が、現在ＩＳを使用する何者かの手によって無惨な瓦礫へと変えられていた。
「テメェは!?」
「う、く……修司……さん」
その瓦礫の中で一人の青年が辺りを見渡し、深々と溜息を零す。呆れと失望が入り混じった溜息、それが何を意味するのか、ＩＳを纏った蜘蛛の女は理解しようともせず、男に向けて罵声の声を挙げた。
「白河修司、テメェ、なんでこんな所にいやがる！」
「たった今説明したではありませんか。私はここの用務員として働き技術者も兼任しています。用務員は学校施設に関する知識に秀でた者、ならばその用務員が今ここにいても、大した問題はないでしょう？」
「んだと？　テメェ、私をナメてるのか!?」
「別にナメてる訳ではありません。というか、どうしたらそんな結論に達するのか些か理解に苦しみますね。いや、そもそも……テロリスト相手に常識を求める事の方が、おかしな話だったか」

「っ!?」
雰囲気が、変わった。先程まではただの人間の男だったものがまるで底無しの沼の様に、底の見えない井戸の様に深く、得体の知れないナニカへと変貌した。外見は何も変わってないのに……中身が、全く異質なモノへと変化したのだ。
汗が吹き出してくる。まるで巨人の様な迫力を持った目の前の人間に蜘蛛の女は微動だに出来なかった。そんな彼女を見て、修司は僅かに口元を吊り上げ……。
「どうした。仕掛けて来ないのか？　お前が今乗っているそれは現存する最強の兵器なのだろう？　何を躊躇する必要がある？」
そう、挑発的な言葉を不敵な笑みと共に口にした。蜘蛛の女……いや、オータムは気の長い女ではない。ＩＳという力を得て男よりも遙かに強い存在だと思い込んでいる女尊男卑の典型的な女性。
故にその気性は荒く、いっそ分かり易い程に獰猛な人格である為……。
「……上等だぁ。本当ならテメェはスコールの前に引きずり出すつもりだったが、予定変更だ。そこの白式のクソガキと一緒に、テメェもここで殺してやるよォォォッ!!」
ＩＳという兵器を躊躇なく生身の人間相手に行使できるのだ。
「危ない、逃げてくれ修司さん！」
修司に迫るＩＳという名の凶器。一夏は蜘蛛の巣に張り付けられた状態で必死にもがくが、彼の手が修司に届く事はなかった。
修司の首へと延びる蜘蛛の腕、このままでは握り潰されて殺されると思われた時。
「……ククク」
修司の口から笑みが零れ……そして。
「塵旋回し受け」
伸ばされたＩＳの腕を掴み取り、そのまま捻る様に回して見せたのだ。独楽の様に回転しながら宙を舞うオータムに一夏は目を点にする。ＩＳってあんな風に動けるんだと呑気にそんな事を考えていた瞬間。

「――――ふっ」
オータムのＩＳが宙を舞うと同時に修司も飛び跳ね、彼女の腹部に回し蹴りを叩き込んだのだ。腹部に伝わってくる衝撃、それを受けたオータムはＩＳと共に吹き飛び、更衣室の壁へと叩きつけられる。
崩れ落ちて床へと這うオータム。肉体的ダメージは全くないが、代わりに精神的ダメージを大きく受けたらしく、その表情を驚愕に染め上げていた。
ＩＳというのは起動する人間からすれば自分の手足の様に動かしている為重さなど全く感じないが、他の人間が触れるとなると話は大きく変わってくる。
腕だけで数十キロの重量を誇るＩＳのパーツ。総合すれば数百キロにも達し、武装によっては数千キロの域へと突入する程の規模であり、通常なら人の手で触れようとは思わないモノだ。

なのに、目の前の男はそれを覆した。文字通り手玉に取り、あまつさえ蹴り飛ばす目の前の男にオータムの思考は激しく混乱していた。
ＩＳというのは兵器だ。その重量と硬い装甲から殴りつけただけで人を殺せる凶器だ。それを突き出した腕を掴み取り、機体ごと投げる事なんて……果たして人間に出来る事なのだろうか。
……いや、問題はそこではない。確かにそれも重要な事かもしれないが、オータムにとっては目の前に表示される数値こそが彼女にとって驚愕すべき事実だった。
「その様子だとシールドバリアが発動したらしいな。流石は篠ノ之博士、蹴り破るつもりがまさか防がれるとは……しかし」
「っ!?」
「逆を言えば今程度の攻撃を浴びせ続ければ、シールドエネルギーは底を尽き、そのＩＳは活動限界に陥り最終的には機能を停止するという事。テロリストを生け捕りにして諸々吐かせるつもりならばそれも選択の一つなのだろうが……それだけでは些か物足りないよな」
自分の考えていた事を突き付けられ、フルフェイスのマスクの奥でオータムの瞳が大きく見開いて揺らぐ。冷たい眼差しで自分を見下

ろす男の瞳はまるで養豚場の豚を見る様で、それは感情の籠もっていないモノだった。
「し、修司さん？」
いつもとは違う様子の修司に一夏は戸惑う。一夏の知る白河修司と呼ばれる青年は気さくで人当たりも良く、自分の愚痴や相談事を嫌な顔一つしないで聞き入れてくれる懐の大きい人間だった。
今の修司は本当に自分の知る白河修司と同一人物なのか？　そんな疑問を抱く一夏に対し、当の本人である修司は何だか考え事しているのか、一人うんうんと頷き……。
「しかし……ふむ、これはこれで得難い経験になるか――一夏君」
「は、はいっ!?」
「これも良い機会だ。これから私は対ＩＳ戦闘に於いて幾つかレクチャーを行うので、どうか聞いてて欲しい。分からない所や難しかった所は常時質問を受け付けるから気を楽にしてくれても構わないよ」
「あ、あの、一体何を――」
言ってるんです？　そう言葉が続く前に跪いていたオータムは立ち上がり……。
「死ねぇぇぇっ!!　クソ野郎ぉぉぉっ!!」
振り上げたＩＳの腕を、修司に向けて振り下ろした。背後からの奇襲、あれでは避けられないと一夏が口を開いたその時。
「ｌｅｓｓｏｎ１」
オータムの振り抜かれたＩＳの腕は床を抉り、地面を叩き割った。硬い装甲と多大な重量によって振り抜かれたＩＳの腕はそれだけで生身の人間相手を死に至らしめる。
砂塵が舞い散る更衣室の中で、一夏と、そして振り抜いたオータムも修司の死を確信した時。
「狭い空間でのＩＳ装備は圧倒的な制圧面を誇る反面、時と場所次第では大きな欠点になりやすい」
「っ!?」
「何故なら、ＩＳの本領はあくまで遮蔽物の少ない広域空間での多彩な機動と高速移動こそが最大の武器である為、限られた空間では限ら

れた挙動しか出来ないからだ」
　横から伝わってくる痛烈な一撃、それが二度三度と続いていく内にオータムのＩＳに表示されたシールドエネルギーの数値がドンドン少なくなっていく。
「故に、万が一こういった動きの限られる状況の場合は無闇にＩＳを呼び出すのではなく、部分展開などで対処した方が良い場合があるという事」
「ぐ、この！」
「続いてｌｅｓｓｏｎ２」
　殴られた衝撃で頭が揺さぶられる。痛みは無いのに理不尽な衝撃だけが自分の体を蝕んでいく事実に、オータムは思考を混乱させながらも、怒りで以て混乱する思考を塗りつぶし、ＩＳの体を振り回した。
　鉄の塊による暴風、掠れただけでも致命傷は避けられず、しかも場所は動きに制限の掛かる更衣室。これでは逃げられないと一夏は再び修司の名を呼んだ時。
「密室空間でＩＳと遭遇した場合は距離を取るべきか。いいや、この場合は接近こそが正しい。確かに距離を開けて様子を見る事も重要だが、その場合は相手の術中にハマる事も少なくはない」
　それに……と、修司は言葉を続けながら鉄の暴風をかいくぐり、オータムとの距離を詰めて――――。
「ＩＳとは基本構造上は人体の延長として作られる事が多い。リーチも長く、それは確かに有利なことだが……同時に、懐に潜り込まれれば対処がし辛くなるという欠点が生まれてくる。――――このように」
「が、あぁぁぁっ!!?」
　オータムの全身装甲の腹部部分、がら空きとなった腹へと拳を乗せると、修司の足下が突然抉られ、更衣室全体が揺らぎ……。
「――――フンッ！」
　震脚と共に打ち出される零距離での正拳突き。地面を割り、更衣室全体に亀裂を入れる程の衝撃は修司の拳へと集約していき、やがてそれはオータムの腹部を貫いて蜘蛛女は再びＩＳと共に壁へと叩きつけられる。

「と、大きい相手というのはそれだけで有利な立場に身を置いていますが、同時にそれはこちらの有利な条件を提示しているも同じ事、一見不利に思えても良く相手を観察すれば勝機は見えてくるという事は大事な事なので覚えておきなさい」
「は、はぁ……」
目の前でドヤ顔で話を進めていく修司に一夏は半分聞こえていなかった。現在最強の兵器の名を欲しいままにしているＩＳが、生身の人間……それもたった一人を相手に一方的に袋叩きされている光景を目にしてしまえば、その気持ちも分からなくはない。
しかも、シールドバリアという堅牢な防御システムで守られているＩＳを素手で削っているというなら尚更だ。呆然としている一夏に訝しげに首を傾げる修司、虚ろな顔で引きつった笑みを浮かべている一夏を体調でも悪いのかと安否した時。
「ふざ……けるな」
「ほう？　まだ動けますか。流石はＩＳ、中々しぶといですね」
「シラカワ……シュウジィィィッ!!」
蜘蛛の形をしたＩＳはユラユラとふらつきながらも立ち上がる。しかしその眼にはもはや光りは宿っておらず、オータムは最大限の殺意を振りまきながら修司へと突貫していく。
その手には鋭い刃が握られていて、壊れた蛍光灯の光りに反射して妖しく煌めく。これで殺してやるとオータムは絶大な殺意と共に目の前の男に切りかかる。
しかし……。
「やれやれ、怒る事に夢中で我を忘れましたか。本当ならここからＩＳの解体作業を教えていくつもりでしたが、流石にこうも暴走されては手の打ちようがありません」
口振りでは己の不利を語っているようで現実はその真逆。迫り来る刃を寸での所で避けてみせる修司に一夏は最早言葉もなく、ただ乾いた笑みを浮かべるしかなかった。
本来なら、シールドバリア越しからでも出来るＩＳの解体作業に移りたかったが、相手が思考することを放棄して暴れられたらそれもか

なわない。
相手の目的や行動、目の前の女の正体について色々聞きたい事があったが、こうなってしまってはそれも叶わない。少々挑発し過ぎたなと反省し、修司は目の前の女を見据え……振りかざす刃に向けて拳を振り抜いた。
正気か？　ＩＳの扱う刃に対して修司が放つのは自身の拳のみ、喩えどんなに鍛えた所でＩＳの武器に生身で砕くのは不可能だ。と、そこまで一夏が考えた時。
「白刃流し」
拳と刃がぶつかり合う瞬間、修司の拳は回転し、そのままオータムの顎を撃ち抜く。拳と刃が交差される一瞬の出来事、シールドバリアが展開されるよりも速く攻撃された事によりオータムの顎は砕かれ、フルフェイス越しにも関わらず脳が揺さぶられる。
その衝撃により後退るオータム。隙だらけとなったその瞬間を当然修司は見逃す筈もなく、腕を脇にまで引き絞り……。
「猛羅総拳突き」
瞬間、一夏は見た。ＩＳが拳の弾幕に呑まれ、壁ごと破壊され、吹き飛んでいく様を。
しかし、修司の行動はそこで終わりではなかった。ハイパーセンサーで知覚の拡大と思考が加速された世界で一夏が見た更なる光景、それは……。
破壊された壁、そこから更に吹き飛んでいくオータムを追って間合いを詰めていた修司の姿だった。
「人越拳――――霞獄！」
修司が何かを呟いた瞬間、辺りは爆発と轟音に包まれ、周囲は砂塵に包まれる。視界の悪くなった世界。次いで襲い来る凄まじい衝撃に体を揺さぶられる一夏だが、そのお陰で蜘蛛の糸から解放されて自由の身となる。
一体、何が起きたのか。混乱する思考を落ち着けながら修司のいる方向へ視線を向ける。
やがて砂塵は晴れていき、視界も回復していく。修司は無事なのか

と一夏は焦燥する気持ちを抑えながら白式と共に駆け出すと……。
「と、対ＩＳによる実戦のレクチャー（条件限定編）は大体こんな所ですね。どうですか一夏君、理解出来ましたか？」
　幾つも空いた巨大な穴、それが学園の外壁である事とその先に広がる海、そしてその中で浮かぶテロリストの姿と、良い笑顔でサムズアップしてくる修司に……。
「……ハイ。スミマセン」
　一夏はただ、そう答える事しか出来なかった。彼の胸中に抱くモノ、それを知ってか知らずか。
「急に謝ってどうしたのです？　おかしな子ですね。君も、ククク……」
　修司は一人、クスクスと笑みを浮かべるのだった。

その２２

○月▲日

謎の組織の襲撃から数日、どうにか落ち着きを取り戻したＩＳ学園は少し緊張感を抱きながら、いつもと変わらない時間を過ごしていた。

織斑先生や多くの先生方のその後の生徒達への対応も的確であった為、不安を顔に出す生徒はいないが、それでも何人かに一人は表情を暗くさせる子がいた。

自分も相談相手として生徒達の話を聞かせて貰っているが、それの多くは学園祭の事だった。一年生にとっては高校最初の、三年生にとっては高校最後の学園祭が、誰とも知らないテロリストによって台無しにされて悔しいという話ばかり。

皆、あれだけ一生懸命に学園祭の為に準備していたものなぁ。それがテロリスト達の勝手な思想で台無しにされたとあっては……悔しいに決まっている。

あの後、どうにかテロリストの一人を撃退する事が出来たのだが、その後に現れた見たことのないＩＳによって蜘蛛女を連れ去られてしまったのだ。何でもあのＩＳはサイレント・ゼフィルスと呼ばれる機体で、それはイギリスから強奪された実験機らしく、あの機体を目にしたセシリアちゃんは「何故あれがここに!?」と、酷く狼狽していたのを覚えている。

その後は合流した箒ちゃん、簪ちゃん達専用機持ちのメンバーで囲んで二人まとめて捕まえようと思っていたが、例のスコールと呼ばれるもう一人が姿を見せていない事や、不安材料を残したまま強行手段に移るのはリスクが高いと思い、自分の独断で奴らを逃がす事となった。

たかが用務員が独断でそんな判断を下すのは間違っていると思うのは百も承知だ。しかし、テロリストという輩は本当に厄介な連中で、自分達の主義主張を貫く為にはあらゆる手段を用いる事も辞さな

い事で有名だ。
爆弾や自爆、人質を使っての脅し、様々な手口や手段を用いてくる。下劣にして最悪な存在、個人的にはインベーダーやアンチスパイラル並に恐ろしく、そして腹の立つ存在だ。
そんな奴らの内の一人が、未だ姿を現さずにいる。どこか遠くで見ているのか、それとも既に学園内で爆破物の設置に成功しているのか、避難している他の生徒達や来賓の方々を巻き込んでしまう可能性がある以上、無理な行動は控えた方がいいと判断し、自分は奴らを逃がす事にした。
その後は周囲に敵影がいない事を確認した後に先生達と一緒に学園内を隅々と見回した所、どうやら危険物を仕込まれた様子はないらしく、取り敢えず安心した。
一夏君や他の皆を危険な目に遭わせておきながら犯人達を見逃すという愚考、当然専用機持ちの子達から何らかの苦情や文句は来るかと覚悟していたが……何故か、そんな言葉は一言もなかった。
ラウラちゃんも自分の言葉に賛同してくれてたし、セシリアちゃんや鈴音ちゃんも笑って誤魔化してばかり、シャルロットちゃんと箒ちゃんに至っては目を逸らして自分と視線を合わせようとしない。
やはり自分の勝手な判断が皆に不満を抱かせているのだろう。今回自分は織斑先生に事の顛末を報告して用務員の役割から余りにも外れた行為の償いをする為、壊れた学園の外壁を全部自分で直す事にした。
織斑先生は自分の判断は間違ってなかったから気にするなと言ってくれるが、理解は出来ても納得できないのが人間の性だ。皆の悔しい気持ちを少しでも和らげる為に自分は自分の出来ることを全力でこなす事にしようと思う。
それに、学園の壁を破壊したのは他ならぬ自分だ。ならば壊した壁を直すのもまた自分の仕事だと言えるだろう。
学園の安全面に関して大きく見直す事になるかもしれない今回の一件、余計な事かもしれないが、今度織斑先生と相談し、政府に自分が学園の防衛システムに手を加えても良いか打診してみようかと考

えてみる。
前々から考えていたＩＳ学園に対する安全面、期間的に手を出すのは例の一ヶ月が過ぎた頃になるだろうか……幾つか既に案はあるので、ＩＳ制作と平行して頑張ってみようと思う。
……けれど、やっぱり皆テロリストに襲撃を受けてどこか不安に思う所があるんだろうなぁ。気丈に振る舞っているけれど、彼女達がいつも通りの笑顔を取り戻すにはもう少し時間が掛かるだろう。
特に専用機持ち達、みんな自分が話しかけると何故か挙動不審になる。ラウラちゃんに至っては自分を見かける度に敬礼するし……。
箒ちゃんとシャルロットちゃんも自分と合流した時は白目剥いて立ったまま気絶していたし、今も自分を見かける度に涙目になっている。一度、キチンとカウンセラーの人に看てもらった方がいいと思う。
まぁ、この件は一夏君にそれとなく頼んでおいたし、律儀な彼の事だからきっと聞き入れてくれた事だろう。
それに、人は衝撃的な事実を受け入れる事によってそれに見合った強さを得ていくもの、自分もそういった経験をしてきたから、きっと皆も今回の事を乗り越えて強くなっていくのだろう。
そう思うと、一ヶ月後が楽しみに思えてくるな。

○月Ｌ日
今日、政府からＩＳのコアが届いた。壊した外壁の修理も終えてこれから月と火星方面に向けて出立しようと思う。
本当はテロリストからの襲撃を受けた為に出立しようか迷ったが、織斑先生の後押しもあって結局行く事にした。山田先生と織斑先生、そして十蔵さんに見送られて自分は暫し学園を離れる事にする。
自分がＩＳ学園から離れて一ヶ月、時期的に帰りは専用機持ち同士のタッグマッチトーナメント戦と重なるだろうけど、ギリギリ間に合わないと思う。自分の考えるＩＳは目的はシンプルだがそこまでに至る過程が長い。二度三度の制作失敗は覚悟した方がいいだろう。
今、自分はとある海洋の海底でグランゾンのコックピットに座って

いる。横にあるケースは厳重に封印されており、幾つものロックが施されている。
これを使って自分なりのＩＳを作りだし、世間にＩＳの本当の役割を思い出させる。それが、篠ノ之束博士の手助けになる事を信じて……。
――――しかし、篠ノ之博士はそもそもどうして姿を消したのだろう。前も色々考えてはみたが、どうも原因となるモノが足りない気がする。
もしかしたら、例のテロリストと何らかの関係があるのだろうか。連中は一夏君のＩＳを狙っていたし、彼のＩＳコアにも何らかの秘密があるようだ。
……篠ノ之博士と一夏君の白式、そしてテロリスト。これらが繋がっているように想えるのは自分だけだろうか？
帰ったら織斑先生と相談してみようと思う。その為にも、まずはこれからの一ヶ月、しっかり乗り越えよう。

◇

「ぐぬぬぬぬ～！　白河修司めぇ！　なんちゃって用務員の癖に生意気だぞ～！」
薄暗い空間、幾つもの電子モニターが浮かび上がる異質な空間にキーボードを叩く音が響きわたる。女性がキーボードを叩く速さは異常だった。幾つものパネルをドラム奏者の様に叩きながら、様々なプログラムを作り出す光景は他の者から見てると圧巻とも言えた。
「何がＩＳをあるべき姿に帰すだよ！　余計なお世話だってんだ！　余所者は余所者らしく大人しく隅で引っ込んでろよ！」

苛立ちと悪意を乗せた罵倒の数々が部屋の中で木霊する。憎たらしい奴を倒すため、その算段と方法を頭の中で構築させていくのは世界を変えた一人の天災、篠ノ之束その人だった。
気に入らないから潰す。そんな単純な思考の中で生まれる情報量は膨大。幾つものプログラムを生み出す彼女の手は未だ止まることはない。
そんな時、束の後ろにある扉が開かれ、奥から一人の少女が現れる。その人物に気付いた時、束は先程までの怒りの表情を一瞬の合間に四散させ……。
「あ、クーちゃんだ！」
「お待たせしました束様、お昼のご用意が出来ましたのでお呼びに上がりました」
「あっはは～、ありがとう！　でも私の事はいい加減ママって呼んで欲しいかな～？」
満面の顔で座っていた椅子から飛び上がり、後ろに控える少女に抱きつく。少女はそれに驚きこそしても、決して束を拒絶する事なく、戸惑いながらも彼女を受け入れた。
と、そんな時だ。抱きつかれている少女の目にある人物の姿が入ってきた。映し出されているのはモニターに映る一人の青年。紫色の髪が特徴的な青年が不敵な笑みで画面中央で佇んでいる光景だった。
「束様、あちらの方は……お知り合いですか？」
「知り合い!?　全然違うよクーちゃん！　アイツはね、敵だよ！　私の邪魔をするムカつく敵！」
「……敵？」
首を傾げて訊ねる少女に束はウンウンと頷いて肯定する。それを受けた少女は閉じた目で再び画面へと視線を戻し……。
（あの男は束様の敵、それは同時に私の敵であるということ……ならば）
（白河修司、いずれ貴方の命を貰い受けます）
開いた彼女の目は黒と金で覆われていた。

その２３

〝ＩＳ〟インフィニット・ストラトスと略称される存在が世に出てきて早十年弱、ＩＳのお陰で飛躍的に技術向上が成し遂げられた人類は表側は比較的平和な時を享受していたが、ＩＳの開発者である篠ノ之束博士の失踪によりＩＳは混迷の時代を迎える事になる。

現在は束博士の妹である篠ノ之箒氏と唯一の男性ＩＳ操縦者である織斑一夏氏、この両名が乗る第四世代のＩＳが次世代機とされている。

やはり篠ノ之束博士しか最先端のＩＳは作る事はできないのか……各企業も肩を落とし始めた時、ＩＳ業界に一筋の風が入り込んできた。

ＩＳ業界に名乗りを上げた一人の若き天才、白河修司。本来なら国のバックアップを受けた企業が団体として受けるべき〝総合ＩＳ管理資格〟を史上初の個人取得を果たし、世界で最も注目されている人物の一人、現在の日本代表候補生である更識簪の専用機に手を出したのも彼だという。

そんな彼は現在ＩＳ学園で用務員と技術者の役割を兼任しており、日夜ＩＳ研究に励んでいるという。我々はそんな白河氏の人物像を把握すべく、ＩＳ学園に取材の許可を頂き、関わりのある複数の生徒・教師から話を聞くことに成功した。

・一人目、最強の戦乙女

ん？　白河について知っている事を教えて欲しいだと？　個人のプライベートを探る様な真似は許せんが……まぁ、好き勝手書かれるよりはマシか。

そうだな、奴は最近の若者と比べて大分落ち着いていて細かい事にも良く気が付く。基本的に人格者であるから生徒からも慕われている様だし、用務員として働かせているのは勿体ないと思うくらいだ。

……多少天然気質が入っているようで、時折人の予想を上回る事を

しでかすのが玉に瑕だがな、本人がその事に気付いていないから余計に質が悪い。
あれこれ言ったが、私としてはプラスマイナスでゼロと言った所かな。完璧な人間なんていうわけがないし、程良く欠点があった方が人間味があるものだ。
これが、一週間前までの私の感想だ。
今はどう思っているって？　……聞くな。

・二人目、眼鏡ドジッ娘教師
わ、私別にドジッ娘じゃありませんよ！　そりゃ確かに時々ヘマをする時もありますけど……でもだからってドジッ娘はないでしょう！　私、こう見えて二十歳過ぎてるんですからね！　修司さんより年上なんですから！
え？　その修司さんについて聞きたい？　し、失礼しました。……コホン、私から見た修司さんは普通に良い人って感じでしたね。格好いいし、性格も良いし、頭も凄く良くて、オマケに人当たりも良い。この間の学園祭の時だって生徒達の無茶振りにも笑顔で応えていましたから、きっと悪い人ではないんだと思います。
悪い人では……ないんですよ。ええ、ただ少しばかり天然な所があって時々私達の度肝を前振り無しで抜きに来る時があるんですよね。
しかもその規模が無駄にデカい。お陰で私はここ最近、胃薬を常備しているようになりました……。知ってます？　胃薬ってレモンを付けて飲むとメロンの味がするんですよ～（オメメグルグル）

・三人目、専用機持ちその1
こ、今度はまた随分と大雑把に纏めて来ましたわね。まぁ別に宜しいんですけど……で、白河修司さんについてでしたわよね？　前に先輩の方にもお答えしましたが、基本的に紳士的で人当たりの良い御仁ですわ。
……ただ、敵に回しては絶対にダメだという事。決してあの方を怒

らせてはならないという事。それさえ守れば決して悪い人ではないと言う事、私から言えるのはそれだけですわ。
では、これで失礼致しますね。少々悪寒がしてきたものですので。お、オホホホホ……。

・四人目、専用機持ちその２
えっと、うん。普通に良い人だよ。僕が学園に来て間もない頃、一夏――君と一緒になって色々良くしてくれた人だったから。
授業の分からない所はないかと聞いてくれるし、僕なんかよりも凄くＩＳに詳しかったりしたからね～。
それに……アハハ、ＩＳって人間の手で飛んだり回転したり跳ねたりする事も教えてくれたしね。ホント、オモシロイヒトダヨネー？
……人間って、何だろ？

・五人目、専用機持ちその３
白河修司さん？　あぁ、良い人だ、……ん？　アレ？　人？　人って……何だ？　ヒトと言うのはＩＳを素手で殴り飛ばせるモノだったか？　オカシいな、アレ？　何故か最近あの人の事を思い出すと震えが止まらなくなる……。アレ？　どうしてだ？
あの人は私の恩人で、標を示してくれた人なのに……何故躯が震えるんだ？
あ、千冬先生、スミマセン。今インタビューの最中でして……え？　そんな事は良いから休め？　何故です？　私は別に疲れてなんか……（インタビューはここで途絶えている。

・六人目、専用機持ちその四
やっぱりね。私の読み通りの人だったわね。あの人をどうにかするには千冬さん位しかいないわよ。
え？　何の話かって？　こっちの話よ。気にしなくていいわ。……あぁでも、もしあの人にちょっかい出そうとするのなら悪いこと言わないわ。やめておきなさい。

――死にたくなかったらね。

・七人目、専用機持ちその五

既に他の者達から粗方聞いていると思うので、私は短く纏めたものにしておく。私はこの学園に来て……いや、あの人から学んだ事が一つある。

それは〝悪い事をしたのなら心の底から謝る〟という事だ。社会において自分の非を認めることは簡単な様で難しい。子供ならば叱られて終わりになるが、大人はそうはいかない。自分が悪いと認めても責任というモノを負わねばならないからだ。

そして私は軍人だ。子供として扱われる事はない。故に、私はあの人の言葉は教官の言葉と同意義にするつもりだ。

既に私はあの人に許されないことをしてしまった。この学園に来て間もない頃、知らず知らずの内にあの人に怪我を負わせてしまったのだ。

――覚悟は出来ている。後はあの人が帰ってくる一ヶ月後を待つばかりだ。既に部隊の後任はクラリッサに任せるよう、一ヶ月後に退役届けを出す準備も済ませている。

悔いはない。自分の不始末に片を付けるだけなのだから。――あぁ、けれど……もう少し、生きていたかったなぁ。

・八人目　専用機持ちその六

私から言えるのは一言だけ。

白河修司さんは良識あるけど常識が無い人。

あの人を表すのはこれが一番適切だと思う。

・九人目　専用機持ち七

――俺は、あの人に対して思い違いをしていたのかもしれない。

気前が良くて、人当たりが良くて、俺の悩みを一つ一つ真面目に聞き入れてくれる頼りがいのある人、そんな風に決めつけていたのかもしれない。

学園祭の時、俺は知った。強さっていうのはなんなのかを、そしてあの人は身を以て俺に教えてくれた。
人は、強さというのは、自分を極限にまで高め、その果てに見つける自分の答えなのだと。努力という言葉だけでは届かない極地。それを目の当たりにして漸く俺は知ることが出来た。
あの人も、きっとそんな極限の領域を何度も体験してきたんだろう。何度も死にかけて、死ぬような思いをして、その果てに自分の答えを得た。
俺が目指していた頂は遙か高く、そして遠かった。けれど、道は出来た。自分が目指すべき頂きに続く道が……。
いつか、俺もあんな背中になれるように……こちらからも止まらず研鑽を続けていこうと思う。
……え？　結局俺から見た修司さんはどんな人かって？
――フッ、言葉で現せる程、あの人は浅くはないよ。

・十人目、学園生徒会長
解せぬ。

・十一人目、学園の元祖用務員。
ティンと来たので。

――以上、11名からインタビューを受けたのだが……こんなんどう記事にしろってんだよ!?
まともに応えてくれたのは数人しかいないじゃねぇぇかぁぁぁ!?
というか白河修司、あんた一体ここでなにしたんだよぉぉぉ!?　ただの用務員じゃねぇぇのかぁぁぁ!?　何で専用機持ち三人もトラウマ抱えているんだよぉぉぉっ!?

結論：白河修司の人物像は……色々強烈な人？らしい。

「いっきし！　何だ？　誰か噂してる？」

その２４

Ｉ月γ日

自分がＩＳ学園から出立して早一週間、現在自分は火星に設置した仮設施設にてＩＳを自作する環境を整えていた。月の方にも一応何度か顔を出したが、今回作るＩＳは火星の環境で行った方が効率が良いのでこちらの方で制作する事にする。

……本音を言えば火星で作業していると落ち着くって言うのが一番の理由なんだけどね。何故だかは自分でも分かってはいないんだけど。

火星と言えば思い出すのはインサラウムの連中とアサキム、そしてガイオウとの最終決戦の場所なんだけど……どうしてそんな所が落ち着くのだろうか？

まぁそれはどうでも良い事だから置いておく事にして、まずはこの一週間自分がなにをしてきたか具体的に説明しようと思う。

まず最初に手を付けたのは例のガンダニュウム合金、簪ちゃんの時に精製した特殊金属をもう一度作り上げる事にした。今回は時間もあり、施設も予め用意していたからグランゾンの使用も最小限に抑える事が出来た。

お陰でガンダニュウム合金は前と同じ……いや、それ以上の出来映えとして完成した。量も申し分ないし、これならＩＳ制作作業に支障をきたす事は無いだろう。

ガンダニュウム合金という下地が出来上がった事で、次に自分はこの特殊合金を作った全身装甲（フルスキン）の制作作業に入った。

全身装甲と言うのは先の第三世代の銀の福音の様な頭の先から爪先までスッポリと覆われた機体の事を指しており、宇宙環境に適応する為の形態だと言われている。

自分はガンダニュウム合金をふんだんに使用し、全身装甲のＩＳを基本骨格に設定する事にした。ガンダニュウム合金程の特殊合金を全身装甲に転用すれば操縦者の人も安心且つ安全に運用できるだろ

うし、どの環境にも自信を持って挑める筈だ。
いずれは簪ちゃんのＩＳも全身装甲にするよう施さなければならないし、練習という意味合いも込めて作業は続いている。
一応制作過程で自分が装着し、実際に宇宙環境でどれほどなのかテストするつもりだが……ここで一つ問題が出てきた。
いやほら、女の子――――特にＩＳ学園にいる子達って皆年頃で思春期真っ盛りの時期じゃん？　男が一度着たモノをそのまま着る事になるなんて……もし知られたらどうしよう。最近はそれが悩みの種となっている。
一応合金の方は伸縮性も確認されていて、サイズの方は問題無いのだが……やはり、一度消臭剤を買いに地球に戻った方がいいだろうか。
まぁ、その問題は頭の隅に置いておく事にして次は武装についてだ。以前は時間がなくて作ることは叶わなかった武装だが、今回は時間も多く残されているから今後はじっくりと考察しながら作り上げていきたいと思う。
特にロジャーさんの乗っているビッグオーのサドンインパクト、あれは自分が求めるＩＳに必要不可欠な存在なので必ず作り上げたいと思う。
サテライトキャノンは……まぁ、のんびりと考えようと思う。あれってマイクロウェーブの射出施設が必要だし、流石に地上で使用するに訳にはいかないと最近気付いたから。
もしすべてのＩＳが宇宙に進出して人類が外宇宙へ目を向けるようになったら、その時は改めて作ってもいいのかも知れない。
しかし、こうして書いてみると意外と作れるモノは少ない。現段階で一応一つの武装は完成したけど、それでも現在のＩＳにはイマイチバリエーションが少ない気がする。
ツインバスターライフル。自分が火星に来て初めて作った代物、前の時は作れなくて悔しい思いをした憧れの一品。どうにかＩＳサイズで再現できたし、威力調整も可能になったけど……いやー、やっぱいいなぁツインバスター。

構えて撃つ度に聞こえてくる〝ブッピガン〟どうしてもアレが再現したくてついガンダニュウム合金で作ってしまったけど……ま、いいか。まだまだ合金の数は余裕があるし、さっきも言ったが威力も調整可能だ。

最大出力でブッパすれば小隕石位打ち抜けるけど……大丈夫だよな、うん。試し撃ちの時も別に問題箇所は無かったし、心配する様な事はなにも無いな。

でも、一応確認しながら作業を続けていこうと思う。こういう制作段階って気を抜いたら大事故に繋がる危険性が大いに含まれているからな。作業要員も自分一人だけだし、ロマン武装が作れたからといって気を抜かず、しっかり引き締めていこうと思う。

明日も作業で忙しくなるし、今日はこれで終わりにしよう。一夏君へのプレゼントも考えなければならないしね。

Ｉ月β日

更に一週間が経過し、自分の作るＩＳは大体形が整ってきた。ガンダニュウム合金による全身装甲も問題なく制作できたし、入念な試験運用と各武装のテストも無事終わったし、ここまでは順調に来ている。

流石グランゾンに蓄積されたデータが優秀なだけあって作業は難なく進むし、前に作成したオートマトンも良い感じに手助けしてくれる様になっている。

火星と月、それぞれに建設した施設には自律型のロボ、オートマトンを複数設置させている。念の為に侵入者撃退用のシステムとある程度の武器が搭載されてあるから安全面もしっかりさせてあるけれど……このオートマトン、実は何気に凄いシステムが搭載されている。

多元世界のオートマトンは人を殺めるキルモードなんて物騒なシステムが積まれてあったが、自分の作ったオートマトンはあくまで撃退用。銃弾はゴム弾を使用されているし、侵入者を捕縛する為のネットやスタンガンも搭載されているし、何より自律神経――つまりは、

ちょっとしたＡＩを積んでいるため、オートマトンの一体一体が皆それぞれの判断で独自に動いたりしているのだ。
　これはブラックオックスの思考データを参考にしているが、流石にあそこまで性質の良いデータは再現するのが難しく、オートマトンに仕込んだモノはアレより少しばかり精度が落ちる代物となってしまった。
　けれど、学習機能はちゃんと作動していたので最初の時のように壁にぶつかったりなどせずにちゃんと自分の言う事を理解して行動してくれている。
　チョコチョコと自分の考えで動き回るオートマトン、それが何だか愛らしくてついつい整備をしてしまう自分がいるが……何事も息抜きも必要なので良しという事にする。
　月にも同じようなシステムを搭載したオートマトンがいて日夜施設の整備をしているのだが……数はここと同じ三機、たったの三機しか配置されていないのだ。
　ここのと合わせてざっと六機、月と火星という広大な敷地でたったの六機しか兄弟がいないのは流石に寂しく思える。だから、ＩＳ学園に戻ったらまずはこのオートマトンを配備させようと考えている。
　ＩＳ学園の程良く広い敷地内ならオートマトンも充分に稼働できるし、警備システムとしても役立てる。兄弟も増えるし、オートマトン達も喜ぶだろう。心はないかもしれないが彼らには考える意志がある。言葉は発せられずとも、何かを感じる事ができると自分は考えている。
　最近は自分が独自に組み上げた建設データも上手く活用出来ているし、少しずつ成長しているみたいだ。
　火星の施設も大分広くなってきたし、最近じゃグランゾンを出せる程広い格納庫らしい場所も建設してるし、ホント、良く働いてくれているよ。
　この分だと月の方のオートマトン達も頑張っているだろうし、近い内にメンテナンスしてもいいのかもしれない。
　因みに、現在ＩＳの制作過程は既に八割を越えている。武装も一通

り試したし、全身装甲も完成し、〝別の動力〟による試験運用も概ね完了した。
後はコアをはめ込んで最後のテスト運用をしようと思っているのだが、その前にやることがある。
コアの解析。以前臨海学校で陥ったとされる簪ちゃんのＩＳの機能停止やナターシャさんの福音の暴走についても究明していかないといけないし、頂いたコアのコアネットワークにウィルスを流し込まれた時の対処法も考えなければならない。
コアに関してはまだ手を出せないと思っていたけれどＩＳ制作が思ってた以上に捗った為、この件も力を入れて調べる事が出来そうである。これも後から考えていた追加武装を制作しながら進めていこうと思う。
それに…もしかしたらコアネットワークの先にあの人に会えるかもしれない。篠ノ之束博士、世界に変革を促そうとした天才。
織斑先生が言うには篠ノ之博士は女性らしいのだが、果たして彼女はどんな想いでＩＳを生み出したのか。
気になる所ではあるが、今日の所はこれで終わりにしようと思う。何事も、詰め込み過ぎるのは拙いからな。
……もう二週間も経過しているが、ＩＳ学園の皆は元気にしているだろうか？

◇

「……」
――薄暗い闇の中、黒髪の少女は思案する。先のとある場所に襲

撃を仕掛けた際の、思い浮かぶある光景。
深く抉られた学園の壁、吹き飛ばされ、地面を、海面を何度もバウンドしながら飛んでいく同僚の姿を見たときは……悪い夢を見ている気分だった。
ＩＳを生身の人間が圧倒する。室内はＩＳの機動が制限されるからといってその事実は彼女にとっても信じがたい出来事だった。
海に浮かぶ同僚、彼女を救出する時、少女は見た。大きく開いた穴から這い出る様に姿を現す男の姿を……。
それは、まさに混沌。紫炎の髪を揺らしながら現れる様は旧き魔を連想させられた。
差し詰め――――魔人。大凡人とは思えぬ覇気を纏った男を少女は人ならざるモノと見定めた。女尊男卑となった今の世界では信じられる者など皆無に等しいだろうが、だが少女は確信する。近い将来、あの男がこの世界を大きく揺るがす事になる事を……。
「Ｍ、入るわよ」
「……」
「次のミッションが決まったわ。すぐに支度しなさい」
「……オータムの方は平気なのか？」
「顎を撃ち抜かれているから流石に無事ではないけれど、あれから時間も経った。普通に動く分には問題ないわ。……ただ」
「なんだ？」
「彼女、どうやら記憶が混濁しているようなの。何故自分が顎を砕かれているのか、何故自分のＩＳがボロボロになっているのか、それすら分かっていない様子なの」
「……」
自分の定めた目的は未だ遠い。果たして自分の果たすべき目的は達成されるのだろうか。
（……どうか、今度学園に行くときはあの男がいませんように）
Ｍと呼ばれた少女は首にぶら下がったロケットを握り締めてそうあることを願った。
――――ワリとマジで。

その２５

Ｉ月@日

火星で自分がＩＳの制作を開始してから既に二週間が経過し、もうすぐ約束の１ヶ月が終わろうとしている。

自分の作ったＩＳも殆ど完成したと言ってもいいだろう。度重なる試験運用と武装の運用、並びに予備として作った別動力との適合率も安定領域に入っているし、これまで予想外の不手際やトラブルには遭っていない。

ただ、追加武装制作と平行していたＩＳコアの解析をしていた最中、自分はある事実と直面したのだ。

ＩＳの中枢を担うとされているＩＳコア、それを調べていく内に自分は何やら意志のようなモノと遭遇した。自分とは画面越しで、相手の姿は見えなかったが、確かに自分はコアの内に秘められた意志と遭遇したのだ。

モニターに映し出された〝あなたはだれ？〟という言葉、突然言葉を投げ掛けられた事に驚きながらも、自分はそのまま言葉を交わし、幾度か質問をしながら相手の素性を探った。

言葉遣いや態度、性格からして相手は女の子と分かり、しかも彼女はまだ自我が芽生えたばかりの幼子という事まで判明した。

何故ＩＳのコアに彼女の様な人格を持った超高性能なＡＩが搭載されているのか、疑問は尽きなかったが、これらは彼女との対話を重ねていくにつれて幾つか解消する事が出来た。

彼女が言うにはどうやらコアの深層部分に住む存在で、自分達がＩＳを起動する際に必要な存在なのだという。彼女達が見定めた者……即ち女性が自分達を扱うに相応しい存在だと認識し、ＩＳを使える様にしているのだとか。ＩＳに選ばれたのが何故女性なのか。自分の抱くその疑問は次の彼女の一言により大いに納得する事が出来た。

〝男というモノが分からない〟一見すれば「なんだそりゃ」と思われるかもしれないが、彼女達の事を考えれば強ち否定的に思えない話

だった。
ＩＳの中枢を担う最重要機密部品〝コア〟４６７という限られた数の中に眠る人格は全て彼女と同じ女性らしく、しかもその全てが男という生き物について理解出来ていないという。
故に、自分達の知らない男性よりも自分達と同じ女性の方が理解はし易く、適合もまたし易いのだという。分かり易く砕けた言い方をしてしまえば、要するにＩＳのコアというのは言うなれば女子校なのだ。
コアネットワークで形成され、ＩＳという校舎で作られた女子校という乙女の花園、男子禁制を掲げる女子校では当然男性なんて入っていける訳がない。
以前にこちゃんの所の学校に忘れ物を届ける為に一度女子校へ赴いた事があるが……そりゃあもう肩身の狭い思いをしたものだ。物珍しさに常に周りから好奇の視線を受けていたし、金髪の外国人女子生徒からは職質紛いな事もされたし、トドメに学園の理事長さんに事前連絡もせずに自分が来た事で視線だけとはいえ怪しい人間ではないか疑われた事もあった。散々不審者扱いされる中、唯一癒されたのはあの学校で飼育されていたアルパカなのだが……まぁその話は今はどうでも良い事だ。
兎も角、要点だけ纏めれば彼女達はこれまで男性という存在と接点がなかった為に彼女達は男性という生き物を知らない存在として認識し、戸惑い、拒否をし続けてきたのだという。では何故一夏君だけはＩＳに適合出来たのか、自分の次なる質問に彼女はこれまた簡潔に説明した。
〝お姉さまの適合者の弟さんだから〟彼女の言うお姉さまというのは嘗て白騎士事件の際に出てきたＩＳのコアに眠る人格ＡＩの事であり、現在一夏君が駆る白式にも同じコアが適用されているらしいのだ。
本来、ＩＳのコアというモノは操縦者が引退、もしくは使用されなくなった時に初期化され、次の持ち主に合わせるよう調整を促すらしいのだが、どうやらその白騎士のコアは完全には初期化されておら

ず、ある程度残された形で存在しているのだとか。
その為に白騎士のコアに眠る人格ＡＩは前の適合者の影響を受け、一夏君の事を良く知る存在の一人として一夏君を容認し、ＩＳに適合する事が出来たのだとか。
ＩＳというのは操縦者と一心同体の関係でパートナーの様なものだと山田先生は言っていたっけ。その言葉を信じるならば、白騎士のコアも織斑先生と共にいることで成長し、独自に進化していった事になる。
そして何らかの強い想いで初期化から逃れた彼女は一夏君の白式のコアに使用され、織斑先生の血を引いた彼を新たな主として認め、今も稼働しているという。
これならば何故一夏君が現役時代の織斑先生の単一能力を使用出来るのかもある程度理解する事が出来る。
白騎士事件、その当事者である白騎士が織斑先生であった事も驚きだが……今は論ずる所はそこではないので、取り敢えず横に置いておく事にする。
で、だ。その一夏君という初めての男性適合者が現れた事により外社会だけでなく他のコアネットワークを通して内側に存在している人格ＡＩまで波紋が広がり、未だ動揺が収まっていないのだという。
まぁ気持ちは分かる。幾ら自分達のお姉さまが選んだ人間とはいえ相手は男。人格も若く、未だ自我が幼い彼女達からすればどう対処すればいいか分からないのも頷ける。
言うなれば天子ちゃんやナナリーちゃんの体に見ず知らずの野郎が乗る様なモノだ。そんな事中華連邦の紳士達やルルーシュ君が許す筈もないし、勿論自分も許しはしない。そんなの見かけた瞬間速攻縮退砲ブッパである。
……まぁ、少々表現は間違っているかもしれないが、大体そんな所だろう。彼女達もそうだが今の世界はまだまだ危うい所もあるし、問題も山積みとなっている。それらが解消するまではもう暫く様子を見た方がいいかもしれない。
しかし残念だ。もしコアの解析が上手く行って男性でも扱える様

になれば女尊男卑に染まった今の世の中を変える切っ掛けになれたかもしれないのだが……どうやら事はそう上手く運べないようだ。
相手が幼い女の子であるならば尚の事慎重に対処しなくてはならない。一応強制的に従える術はないことも無いが、それでは余りにも外道が過ぎるだろう。というか、そんな事をすれば次元の壁を越えて中華連邦の紳士達が殺しに来そうである。
彼女達もどうやら完全に否定的ではないみたいだし、もう少し静観してもいいのかもしれない。と、そこでコアとの接続を解除しようとした時、彼女は言った。
〝自分を、貴方のモノにしてもいいよ〟と。
……どうやら、彼女は自分の作っているＩＳのコアになってくれるというらしい。しかも、自分に適合する様に調整もしてくれるとの事。
素直に有り難いし、これがネットワークの向こうにいるＡＩ達に対して男性も受け入れる切っ掛けにもなりそうだし、嬉しい事には違いないのだが……。
彼女が言うと、何だかもの凄く嫌な感じがする。中華連邦的な意味で。
ま、まぁおかげで自分の作るＩＳもおかげで本当の意味で完成する事になるだろうし、彼女もネットワークを通じて他の娘達に男性の事を理解してもらおうとしている。互いに築けた協力関係、彼女の事も含めて今後も大切にしていこうと思う。
やっぱり、何事も対話って必要だよね。

Ｉ月◇日
約束の１ヶ月まで残り僅か、期限が迫ってきた中、自分の制作するＩＳが遂に完成した。人格ＡＩのＡ子ちゃん（仮）の協力もあって自分もＩＳを使用する事が可能となり、武装の方もＩＳコアとの適合率が非常に良く、各武装も問題なく使用する事が出来た。
お陰で武装の量子変換機能も備わったし、拡張領域も幾分か余裕を残す事も出来た。完成度として問題はないが、ここでもう一つ自分な

りの拘りを付け足したいと思う。
ＩＳは元々は宇宙開発を目的に作られたモノ、宇宙での作業は困難を極めるだろうし、喩え絶対防御があっても絶対に安全とは言えない環境だ。
シールドエネルギーも底をつけば行動に大きく支障を来す。その為に他者と連絡を取り合えるコアネットワークが存在しているのだろうが、それだけでは足りないと思い、自分はＩＳコアとは別に動力パーツを取り付けて緊急時の動力源を付け足す事にした。
その動力源となるのがＧＮドライブ……の、劣化版〝擬似太陽炉〟こと擬似ＧＮドライブだ。赤い粒子が放出され、ソレスタルビーイングの太陽炉とは似て異なる性質の素粒子。
緊急用の動力源として使用されるそれは扱い次第では単体で大気圏突破も可能となる。加えて本物の太陽炉とは異なり時間もさほど必要とせず生産性が高い代物だ。
ただ、多元世界にいた頃から分かっているがこの擬似太陽炉には危険物質が検出されており、破界事変の頃には人体に有害とされている。再世戦争辺りからはその問題も改善されてきて人体への影響も少なくなってきているとされているが……やはり、人間に対し有毒な事には変わりない。
そこで、自分がこの擬似太陽炉に手を加え、あくまで機動動力として使用する事にした。擬似太陽炉の使用中はバスターライフルなどの火器は使用出来なくなるが、変わりにサドンインパクトを始めとした接近戦の武装は変わりなく使えるので、ある程度のカバーは出来るだろう。
本当ならスザク君のランスロットに使用されるユグドラシルドライブとかもっと安全性の高い動力源を使用したかったが……アレってサクラダイト鉱石じゃないと精製できないからなぁ。アレって地球産の鉱石だし、今自分がいるのは火星だから精製するのは難しい。
ＧＮドライブを搭載した機体が発動させる〝あのシステム〟に憧れて作った代物だが……やはり今の自分では再現は難しいようで、僅かな合間しか作動させる事が出来なかった。武装や火器管制は再現

できても、こういった動力システムはまだまだ見直す点が多いなぁ。
シュウ博士にも参考として見て貰ったが、送られた言葉は〝及第点〟の一言。武器や機体との連動性は見事だが、やはり自分が懸念した通り動力システム辺りが未熟という指摘を受けた。
博士は及第点と言ったが、実際はギリギリ赤点を免れた位だろう。マシンというモノは心臓部分である動力源を完璧に仕上げてこそ初めて安全に動かせるモノ、誰だってエンジンに不具合のある乗り物になんて乗りたくはないだろう。つまりはそういう事である。
あの早乙女博士や兜博士もゲッター線や光子力エネルギーという未知のエネルギーを動力源としてあのスーパーロボットを作り上げたのだ。それまでに至る道のりは生半可なものではないだろう。
期限の最終日までまだまだ時間はあるし、ギリギリまで調整を続けていこうと思う。最近はオートマトンも自分の手助けをしてくれているし、Ａ子ちゃん（仮）も協力的だ。最後まで望みを捨てずに頑張ろうと思う。
そう言えば、もうすぐＩＳ学園では専用機持ち同士によるタッグマッチ戦が開催される頃だよなぁ。三学年全員が参加する予定みたいだし、当然簪ちゃんも参加するのだろう。
そうなればお姉さんである生徒会長とも戦う事もあり得るし……あぁ、やっぱり生で見てみたいなぁ。二人の戦い。
山田先生には一応録画を頼んでおいたけど、やはりこういうのは生で観戦したい所である。簪ちゃんも最近専用機の扱いに慣れてきたみたいだけど相手はロシア代表、そう簡単にはいかないだろう。
なんて、二人が戦う事を前提に考えているけど、まさかそうそうぶつかる訳ないよね。お姉さんも生徒会長の仕事が忙しいと思うし、運営側として働かなきゃいけないだろうから、こういった催しモノには参加できないだろうけど……期待する位はいいよね。
そして最後に。Ａ子ちゃん（仮）のコアにもちゃんと対策として防衛プログラムを投入する事にした。ファイヤーウォールとウィルスを撃滅するワクチン入り、ＩＳに負荷の掛からないよう思考を巡らせて作った何気に自慢の一品である。

Ａ子ちゃん（仮）も気にならないと言っていたし、オートマトンの皆にも念の為に入力しておいた。

武装といいＩＳといい、そしてプログラムといい、前々から思っていたけど、自分ってもしかして――物作りに嵌まるタイプだったのかな？

その２６

Ｉ月▼日

期日の１ヶ月まで残り三日を切った今日、今度こそ本当の意味で自分が制作するＩＳは完成したと言っていいだろう。

問題だった擬似太陽炉の有毒性も調整を重ねる事によって無効化させ、遂に動力源と出力に問題なく、且つ人体に影響が出ない所にまで漕ぎ着ける事に成功した。

本物とは大きく異なるサイズの差、出力調整や各武装との連動率、駆動率等々を全てを同一させなければならないので最初の頃は作業も中々捗らなかったが……ある日、自分は多元世界にあったＧＮドライブにまつわるもう一つのシステムを思い出し、自分はグランゾンに蓄積されたデータから引っぱりだした。

そのデータというのが〝ツインドライブシステム〟二つの太陽炉を連結させて作動させるＧＮドライブ搭載機の中でも異色の力を有するシステム。

一方の擬似太陽炉で出力、動力で作動させるのに対し、もう一方の擬似太陽炉で調整、調節を計ってみた所……なんと予想以上の出力を叩き出し、更に安定性まで見事確保してみせたのだ。

その後もどちらか一方に出力、調整を任せるのではなく、互いに出力を出し、調整させる事で更に効率は上がり、運用性も桁違いに上がっていた。これならば単騎で大気圏を突破、突入した後も余裕は生まれ、宇宙空間での活動も大幅に上昇傾向で見直される事になるだろう。

ただ、逆を言えばＭＳクラスのサイズには擬似太陽炉は一つで充分だが、ＩＳサイズで作る時は太陽炉は二つ必要になってくるという事、しかもツインドライブとして両立させなければいけないからＩＳの方が手間が掛かるという話になる。

その辺りは今後の課題になりそうだが……今は機体を完成させた

事を喜ぶとしよう。〝例のシステム〟もツインドライブを同調させる事により一分から三分へと時間を伸ばす事を達成出来たし、皆のお陰で成功、完成させる事が出来たのだから。

そう、今回のＩＳ制作で最も貢献してくれたのが、オートマトンこと自分の子供達だ。思考の方も大分成長してきており、一人で出来ない所を二人で協力し合う事を覚え、その姿を見て自分はツインドライブシステムを思い出す事に成功した。

無論、コアの中にいるアリカちゃんに対しても感謝している。電子面で彼女が手助けしてくれた事によりツインドライブシステムが制御し易くなったのだ。彼女本人は大した事はしていないと謙遜していたが、そんな事はないと自分は胸を張って言える。彼女の頑張りのお陰でツインドライブはコアとの適合率も見事にマッチしているし、武装との連動率も過去最高数値を記録している。

ここにいる皆のお陰で完成した自分のＩＳ。完成したハイテンションに身を委ね、自分は暫く悶えていた。オートマトン……いや、モモやハナ、ミンミンちゃん達の機体もピカピカに磨いたし、アリカちゃんにも最大限の喜びを伝えるためにコアネットワークに電脳ダイブして彼女に直接会って感謝を伝えた。

……うん、冷静に考えたら普通にキモイやこれ。格納庫で佇むグランゾンの冷ややかな視線で我を取り戻したが、うん。やっぱりキモイな。

早めに我を取り戻してよかった。あのまま本能のまま動いていたらアリカちゃんや子供達にまでどん引きされてしまっていたかもしれないけど……まぁそれは兎も角、取り敢えず今回で自分のＩＳは完成した。後は最後の二日は綿密な調整を続け、最後の仕上げに入りたいと思う。

少し早いが、今日はゆっくり眠ろうと思う。火星に来てから四日に四時間のペースでしか睡眠を取っていないので、流石に頭が疲れている。シュウ博士からは寝過ぎと呆れられてしまったが……まぁそう思われても仕方ないよね。多元世界にいた時は一週間起きてても平気だったし、やっぱり体動かしてないのが原因なのかなぁ。一応日課

の鍛錬は欠かさなかったけれど……やっぱ肉体的疲労と精神的疲労は違うのだなと思った。
そうそう、ウチのオートマトンとコアのＡＩの娘、名前が無いと色々不憫だと思いそれぞれに名前を付ける事にしました。
オートマトンの三機はモモ、ハナ、ミンミンと名付け、Ａ子ちゃん（仮）はアリカと名付けた。オートマトン達は自分のインスピレーションに従っての命名で、アリカちゃんの方はＡＩのＡから取っている。
本当はアリスという名前にしたかったのだけれど、それだと例のウサ耳メルヘン女を思い出してしまい却下、そこから一文字だけモジってアリカという名前を付けてみたのだ。
アリカちゃんも存外悪く思ってないらしく、自分の名前を覚えるように何度も反芻していた。オートマトン達の方もいつもより賑やかに動いていたし、皆喜んでくれた事だと思う。
しかし、篠ノ之博士が作ったＡＩに自分が勝手に名前を付けて良いのだろうか？　それだけが不安に思うが……アリカちゃんは構わないと言っていた。
ＩＳのコアは原則として適合者から離れる場合企業や篠ノ之博士といった技術者に初期化される為、名前を付けられる事はないという。
通常は専用機の名前をそのまま自分の名前として認識されるようだけれど、個人で名前を付けられたのは自分が初めてだとアリカちゃんは言う。
……初期化かぁ、やっぱりそれって彼女達にとって殺人に近しい行為なのかもしれない。記憶を自我諸共消されればそりゃＩＳのコアが成長する筈もない。折角自分という自我を持てて適合者と一緒に空へと飛び立てるのだから、その時の景色は永遠に覚えていたい事だろう。
消される運命、それが嫌だから白騎士のコアは初期化されきれずに白式のコアとして今も生きている。そう考えると……何だか凄く運命を感じてしまい、同時に切なくなる。

ＩＳの初期化の義務、これも何とかしてあげたいと思うのは、果たして自分のエゴだろうか。
けれど、ＩＳのコアに命が存在していると知れば、地球の皆も少しは考えを変えるかもしれない。都合の良い解釈だと博士は笑うだろうけど、自分は信じてみたいと思う。
まぁ、それもこれもこれからの自分と一夏君次第だ。ＩＳに搭乗し、アリカちゃんを通して他の娘達に男性の事について理解して貰うために、まずは目の前の事を着実にこなしていこうと思う。

Ｉ月Ω日
とうとう期日は残すところ後一日となった。火星から場所を変え、現在自分は待機状態となったＩＳと共に月の基地へと赴いていた。
最後の仕上げの場所として使用する事にした月の仮設基地、地球から近い事もあってこの場所にやってきたのだが、ちょっと驚くべき事があったので記しておく。
自分が月に建てた仮設基地、最初は精々休憩拠点として使用するつもりだった掘っ建て小屋が……なんと、ＩＳ学園の一年の学生寮並の大きさとなって聳え立っていたのだ。
マジ驚いた。確かにオートマトンのＡＩには自分の建設の独自理論をデータとして入力しておいたが、まさか１ヶ月そこらでこれほど立派な基地を作り上げるとは思ってもみなかった。
一応火星でも様子が見れるよう監視カメラを設置していたけど、最初の場所以外取り付けてはいなかったので余り詳しいことは分からなかった。取り敢えず三機とも元気に稼働していたし、供給用の設備も簡易だが置いてあったから燃料も困る事はないと、そう思っていたが……まさか、自分が来るまで建築作業を止めないとは思わなかった。
当然三機ともボロボロとなり、不具合を起こした箇所が幾つかあった。資材は幾らでもあったが体力知らずのオートマトンだって消耗するのだ。月に来て自分がしたことはボロボロとなった子供達のオーバーホールから始まった。

躯の部分の幾つかを新しいモノに付け替えて、汚れた箇所を徹底的に洗浄し、元の状態へと戻してオートマトン達を休ませた後に自分は考えた。

何故オートマトン達は休まなかったのか。機械だって人間よりも頑丈といっても、そこまで差違がある訳でもない。使えば使うほど消耗し、関節部分は磨耗するのだ。それはグランゾンとて例外ではない。

ＡＩに不具合が生じたのかと危惧したが、どうやらそれは杞憂らしく、整備を終えて全快したオートマトンはそれぞれ問題なく稼働していた。

ひとまず三機とも今後は無茶をしないように教え込ませてその場それで終わったが……どうも不安だ。オートマトン達は自分が作った初めての人工知能搭載型のマシンだ。元となったデータの劣化版に思えるかもしれないが、それでも自分にとっては胸を張れる子達なので……どうか、長い間元気でいて欲しいものだ。

ブラックオックスを作った不乱拳博士もこんな気持ちだったのかな。今は休んでいるオートマトン達を見て、何となくそう思う自分がいる。

兎も角、あの子達には今後無茶をさせないよう徹底的に教え込む必要がある。自分のＩＳも今日で一段落した事だし、明日の最後の一日はこの子達の為に使おうと思う。

そうそう、一応名前も考えた。ここにある三機はそれぞれサキ、メイ、タンポポと火星の三機と同様自分のインスピレーションに従って名付けた。

センスは兎も角として、どれも自分なりに気持ちを込めた名前だ。特に１号機のタンポポには自分の好きな花の名前を付けたので今後も無理しない範囲で頑張って欲しいものだ。

……というか、自分オートマトン達を女の子である事を前提に名前を付けちゃったけど、問題あるかな。アリカちゃんからは気にしなくても良いと言われたけど、流石に無関心ではいられない。男女両方に使える名前は思い付かず、ネーミングセンスの無い自分をこの時程恨

んだ事はなかった。
話は変わるが、そろそろＩＳ学園では専用機持ち同士によるタッグマッチが開催しようとしている。本当は簪ちゃんの為にアリーナで応援していたかったが……どうしよう、今から行って様子だけでも見てこようかな。
いやでも、期日までまだ一日あるし、それが終わるまでに戻っても『本当に出来たのか？』と変に疑われるかもしれない。十蔵さんに無理言った休暇だからちゃんと消化しないと不味いだろうし、あぁでもやっぱり皆の姿を間近で見たいと思う自分がいるわけで……。
ホントどうしよう。あと一時間したら試合も開始されるだろうし、早く決断しないと――――（日記はここで途絶えている。）

◇

――――ＩＳ学園・アリーナ。本来なら専用機持ち同士によるタッグマッチが行われる筈だった場所、この日の為に切磋琢磨し続けてきた専用機持ち達の独壇場になる筈だったのだが、現在、ＩＳ学園は危機的状況に陥り、それどころではなくなってしまった。
アリーナを含めて数カ所の場所で学園の敷地内で暴れる化け物、幾つもの腕を生やしたその風貌は以前のクラス対抗戦で見せたゴーレムの面影があった。
コキャコキャと嫌な音を立てながら襲い来る無人機のＩＳ、襲い来るゴーレムの魔の手を一閃の下で両断する人物の姿があった。
「簪！　無事か！」

「私は大丈夫！　それよりも一夏は他の皆の所へ行って上げて！」
「分かった！　頼んだぞ！」
ゴーレムⅢを横一閃に切り裂いたのはＩＳ学園の一年生、更識簪とその愛機打鉄弐式だった。
迫り来るゴーレムⅢから生徒達を守るべく動く、機体性能をフルに活かして刃を揮う。彼女の持つ薙刀の〝夢現〟は白河修司の手が加わった事により特別性となり、その切れ味はリミッターを外せばシールドバリアーを切り裂き、纏った装甲ごと斬り捨てる鋭さを持っている。
普段は絶対に使用することはない力、けれど相手が手段を選ばない無人機なのであれば話は別、簪がＩＳの腕を揮う度に、ゴーレムⅢの躯は切り裂かれ、なにも言わぬ骸と化した。
学園に撒かれたゴーレムⅢの数は既に計り知れない数になっている。指揮官である織斑千冬とオペレーターの役割を担っている教員達も総動員して事に当たっているが、それでも数の差によって徐々に学園側は追い詰められていた。
乱戦となった状況、学園の施設は所々から煙を上げていて学園敷地の至る所から戦闘による轟音が響いてくる。
今の所は他の生徒達に怪我人が出たという情報はない。しかし数で此方が劣り、しかも乱戦で皆と離ればなれになってしまった以上、劣勢であることは否めない。
このままでは皆が危ない。冷静な思考でそう判断する簪が急いで他の皆の所へ合流しようと打鉄弐式を急がせた――――その時。
『つ、続いて海上からゴーレムⅢの増援！　数は……そんな、２７！』
「っ!?」
通信で聞こえてくる山田真耶の報告に簪の表情が焦りで歪む。ゴーレムⅢは唯でさえ装甲が厚くて近接戦闘以外ダメージが通りにくい厄介な無人機、それが更なる数を持って押し寄せてくる現実に心が折れそうになる。
だが、ここで諦めてはいけないと誰もが意気込んだ。一人は目指すべき人の背中に追い付く為、一人は自分の願いを勝ち取る為、そして

簪も己の目的を果たす為に弱腰の自分に喝を入れる。
逃げちゃダメだと、簪は向かってくるゴーレムⅢ群に単身で迎撃しようとアリーナから飛び立った……その時だ。
此方に向けて海上を疾走するゴーレムⅢ、それを一柱の光が貫いた。
『っ!?』
突然の光景に学園内にいる全員が驚愕で目を見開いた。爆散し、光の中へと消えていくゴーレムⅢの群、撃ち漏らしはあるようだがそれでも彼女達にとっては異様な光景だった。
一体何が起きた？　当然沸き上がる疑問を全員が抱いた時――。
『が、学園の敷地に新たな熱源が接近！　これは……あ、ＩＳです！場所は――上!?』
耳朶に響いてくる山田真耶の声に全員の視線が上に向けられる。あるのは真っ青な空だけで他は何もない――と、思われた時。
『お待たせしました』
遙か上空で橙色の光が瞬いたと同時に、この一ヶ月聞くことの無かった人物の声が聞こえてきた。

その27

――――空から降り注がれる一柱の光。増援として送られたゴーレムの群を撃ち抜いた光は海面を貫き、その熱量によって蒸発した海面の水蒸気がＩＳ学園を包み込んだ。

突然の事態に学園の敷地内にいる全員が目を見開いた。一夏や箒、ラウラにシャルロット、セシリアと鈴音、そして簪と楯無がそれぞれの戦場にいながら、同時に静まり返っていた。

教職員、更にはゴーレム達も光があった方角に視線を向けながら固まり、乱戦となった学園は静寂に包まれている。

唯一、管制室で指揮を取っていた織斑千冬だけは驚愕しながらも隣の山田真耶と共に学園の上空の映像を睨みつけていた。

空から飛来する一つの影、それがアリーナに降りたって姿を現した時、千冬と山田は目を見開かせた。

――――蒼。常闇の様に深く、奈落の様な深淵を思わせる深い蒼の人型の機械がボロボロのローブを纏ってアリーナ中央に佇んでいる。異様に膨らんだ両腕、肘部分からは太くて黒い杭のようなモノが飛び出ており、背中にはスラスターらしき巨大な黒い羽が揺らいでいて、更に両肩にはそれぞれ黒い突起物の様なものが取り付けられている。

そして両手に握られた大型のライフル。武装の造形も、そしてそれを手にしている蒼い機人もこれまでのデータには存在しないモノだった。ゴーレムとも全く意匠が違う。唯一理解出来ているのは、真耶が言ったようにあの機人はＩＳであるという事。

全身装甲で身を包んでいるのは誰なのか、千冬は頭の中でこんな事をしでかす人間は一人しかいないが……ここ最近、もう一人当てはまりそうな人間が彼女の脳裏に刻まれていた。

『白河……なのか？』

千冬は自分の中にある直感を信じて恐る恐る通信を開いて蒼き機人に呼びかける。危険だと思われる行為だが隣の山田真耶は何も言わない。恐らく彼女も気付いているのだ。アリーナの中央で佇む機人の正体が誰なのかを。

十秒にも満たない沈黙、それが長い沈黙だと錯覚する程、二人は返ってくる返事に意識を集中させていると……。
『その声は織斑先生ですか。その様子だと無事のようですね』
返ってきたその声に心臓が跳ねた。やはり、という安堵とやっぱりという焦燥感。一ヶ月という長いようで短い休暇を終えて帰ってきた用務員はとんでもないものとなって帰ってきた。
隣の真耶も絶句し、信じられないと言った顔でモニターに映る機人……いや、白河修司を見つめている。ゴーレム達の乱入、生徒達の迎撃、混乱し、混戦状態となった学園に第二の男性ＩＳ適合者の発覚。
多すぎる情報量に遂に山田真耶の許容量は限界を越えそうになっているが……それも無理もない話だった。
だが、織斑千冬だけは違った。白河修司という新たな男性ＩＳ適合者という目の前の現実を欠片も予想は出来ていなかったが、それでも想像は出来た。やりかねないと、手段や方法は全く考えられなかったが、それでも千冬には白河修司に対してそれに近い形の予感を抱いていた。
故に――――。
『……白河、何故お前が空から現れて何故ＩＳに乗れるかは最早問わない。だが、一つだけ聞かせて欲しい』
『……何です？』
『お前の、お前の作ったＩＳは現在学園に蔓延るゴーレム共を倒せるか？　それが可能なら……頼む、力を貸してくれ』
千冬はアリーナに佇む蒼き鎧に願い出る。学園を守って欲しいと、ＩＳ学園に蔓延る奴らを駆逐して欲しいと、そう願いを口にする。
そんな彼女の言葉に、修司は――――。
『無論、その為に私はここへ帰って来たのですから』
そう即答で返し、その答えに呼応する様に修司が纏う蒼い鎧の双眸が〝ギュボォン〟と音を立てて輝いた。
『簪さんも、今まで良く耐えました。ピットに一度戻り補給を受けなさい。貴方のシールドエネルギーもそろそろ限界の筈でしょう？』
『え？　あ、はい』

唐突に呼び掛けられた事に驚きながらも簪は答えた。見れば確かにシールドエネルギーは残り一桁となっており、直ぐに回復させた方が良い状況にまで追い詰められていた。

言われるがままにアリーナのピットに向かう簪、スラスターを噴かせて飛ぼうとしたその時。

『――――』

アリーナの内部へ侵入した一体のゴーレムが、簪の背後に回り込んでいた。白河修司という援軍に気を緩めた所為か今まで気付かなかった簪はゴーレムの機械的な声で振り返り……。

『し、しまっ！』

自身に迫る無機質な手に目を瞑った時――――。

『私の目の前で、好き勝手出来るとは思わない事です』

ローブを靡かせた蒼い魔人が、ゴーレムの腕を横から掴み取っていた。アリーナの中央から自分のいる壁際の所は些か距離が開きすぎている。一体どうやってここまで一瞬で距離を詰めたのか、理解出来ない簪を余所に、蒼き魔人はもう片方の腕を掲げた。

その動作と連動して肘部分にあった黒い杭は撃鉄の様に引き絞られ……。

『穿ちなさい、牙鐵（がてつ）』

振り抜いた拳がゴーレムに触れた瞬間、杭は撃ち込められ、その衝撃は拳からゴーレムへと伝わり――。

あれほど迄に強固さを誇っていたゴーレムが絶対防御を撃ち抜かれ、たった一撃で粉々に砕け散った。

その光景に簪の目は大きく見開く。相手のシールドエネルギーをゼロにする処か一撃で粉々に粉砕して見せた蒼い魔人に簪は驚きを隠せずにいた。

その後、修司はバランスを崩した簪を担いでピットにまで送り届ける。誰もいないピットに簪を預けた修司は……。

『さて、初のＩＳ戦。気合いを入れていくとしようか。なぁ、〝蒼鴉（ブルー・レイブン）〟』

〝蒼鴉〟そう呼び掛ける自身の機体と共に修司はスラスターに光

を灯して空へと飛翔した。その様子を半ば放心しながら見送る簪、すると、彼女の視界にある物体が映ってきた。
コロコロと転がりながら彼女の足元にやってくる灰色の球体、それを先ほど蒼い魔人が破壊したゴーレムのＩＳコアだと理解するまで簪は数十秒の時間を要する事となる。

◇

――――ＩＳ学園に迫る謎の機体の群を確認して早数分、グランゾンの力を借りて地球の大気圏へと転移し、学園の真上にさほど時間を掛ける事なく辿り着く事が出来た。
大気圏より若干外側に出てきた事によりＧＮ粒子による大気圏突入の試験運用も同時に試せた。ＧＮ粒子も問題なく稼働し、この蒼鴉を大気圏の空気摩擦から守れた事だし、大気圏突入の試験は合格と見なしてもいいだろう。
バスターライフルを始めとした各武装も問題なく使用できるし、各システムも問題はない。残る課題はと言うと……強いて言うなら実戦の経験位だろうか。本来なら宇宙空間での活動を目的にこの蒼鴉を開発したのだが、状況が状況の為にこの際仕方がないだろう。
それに、相手が一年のタッグマッチ戦の時のゴーレムと関わりがあるのなら此方も黙っている訳にはいかない。出来る限りゴーレムに搭載されたコアを摘出し、回収する事にしよう。ゴーレムに積まれたコアのネットワークに介入すれば、犯人の手掛かりが掴めるかもしれない。
『そうする為にも、まずは学園を守り切らねばならないか、一夏君達とも合流しておきたい所だが……ん？』

ＩＳのハイパーセンサーが九時の方向より高熱源反応をキャッチする。反応した数は九つであり、それらが全て学園に送られてきたゴーレムなのだと認識する。
ゴーレムの群から一斉に発射されるミサイル。雨となって押し寄せてくるミサイルの弾幕を、修司は蒼鴉と一体となって飛翔し、空へと舞い上がる。
『ふむ、やはり追尾機能を搭載したミサイル群か。中々味な真似をしてくれる』
押し寄せてくるミサイルの群をスラスターを巧みに操りながら回避し、回避し、回避していく。時には爆風を利用し、時には瞬時加速やＩＳ操縦の技術を駆使して空を舞う光景は、端から見ればサーカスに見えた。
変則的な軌道を描きながら空を舞う蒼き魔人。ミサイルの群に誘導されている事を知りながら、修司は左手にバスターライフルの片割れを手に、迫り来るミサイル群を諸共撃ち抜いた。
強力な閃光が辺りを照らして学園上空を覆う。その様子を隙と見定めたゴーレム達が束となって蒼鴉へと襲い掛かる。
『マスター、総勢１２機のゴーレムが一斉に此方に来ます！』
『学園に投入された残存兵力の全てを此方に回して来たか、何故俺を集中的に狙ってくるのかは分からないが……まぁ、学園から奴らを引き離せる事を考えればかえって好都合か。――アリカちゃん』
『は、はい！』
『これより試作段階だった〝アレ〟を発動させる。ＩＳコアと蒼鴉とのリンクを一時切断してくれるかな？』
『は、はい！　了解ですマスター！』
『ありがとう。あぁそれと――』
『？』
『マスターは止してくれ』
迫り来る総勢１２機のゴーレム達、多対一という圧倒的不利な状況の中、修司はコアの中に居るパートナーに機体とのリンクの切断を命じる。

ＩＳコアという核の機能を停止させた今、蒼鴉を支えるモノは何もない。唯の鉄屑となり果てた鴉は海面に向けて自由落下していく。
一体何を考えているのか、学園から蒼鴉の戦闘を眺めていた一夏達が驚愕に目を見開いた時、彼らの所へ一通の通信が送られてきた。
『――――通信設備、壊れたらごめんなさい』
理由も検討も出来ない意味不明な文面、それに誰もが首を捻った時、突如、全ての通信設備の回線が途切れてしまった。
突然の事態に狼狽するＩＳ操縦者達、これも彼の仕業なのかと再び蒼鴉の方角へ一斉に振り返ると……。
『擬似太陽炉との連結及び起動を確認、稼働率９５％に上昇。――――さぁ、始めるとするか』

両肩に埋め込まれた二つのコブ、そこからオレンジ色の光と粒子が勢い良く放出された瞬間。
『――――トランザム！』
蒼い鴉が紅蓮の光を纏った瞬間、１２機いたゴーレムが１１へと数を減らしていた。

その２８

ＩＳ学園に突如として襲い掛かってきた謎の無人機、ゴーレム。先のクラス別対抗で猛威を揮い、学園の生徒達に恐怖と混乱を叩きつけた存在は新たな姿となり、数を揃え、更なる暴威として学園に再び襲撃してきた。

すぐさま学園の専用機持ち、並びに教職員もＩＳを纏って応戦するが、ゴーレムの一体一体は基本性能が高く、ＩＳに精通した教職員ですらも苦戦を強いられていた。

それぞれが第三世代の能力を有したゴーレム達、数も多い事から徐々に学園側が窮地に陥った時、彼が現れた。

白河修司。学園では唯の用務員だった筈の彼が自前のＩＳを纏って学園上空から現れた時は誰もが混乱し、戸惑った。何故男がＩＳに乗っているのか、何故彼が空から現れるのか、整理できない状況に誰もが戸惑う中、更に状況は変化していく。

今まで自分達に猛威を揮っていたゴーレム達、その全てが修司が駆るＩＳへと飛びかかっていったのだ。まるで狙っていた獲物に飛びつく様に、目の前の自分達を放って空を飛翔する修司に我先にとゴーレム達は襲い掛かる。

多対一という危うい状況、一夏達が援護をしようと修司の下へ急ごうとしたその時、突然学園内にある通信設備の全てが機能不全に陥った。

学園の通信機材は勿論、ＩＳの通信機能すら麻痺してしまった。ここへきて予想していなかった事態に一夏達は再び混乱の底へと叩き込まれる。一体何が起こったのか、原因の分からない通信弊害に戸惑った時――ふと、シャルロットがある事に気付いた。

自身のＩＳに記録されているとある一文、それが通信が遮断される直前だと知った彼女は近くにいるラウラに呼び掛け、文面を開いた。

記されていたのはたった一言、『通信設備、壊したらごめんなさい』という理解不能な文面、彼女達はこの通信が誰からのものなのか今一つ理解出来なかったが、その瞬間。

空を蹂躙していたゴーレムが一機、一瞬の間もなく爆散した。一体何事だと全員が空を見上げた時、蒼だったＩＳは紅蓮となり、残る１１機のゴーレム達を蹂躙し始めたのだった。

◇

『これで五機目、残る残存兵力は七機……と』

学園の上空を超高速で飛翔する蒼鴉。その姿を蒼から紅へと変貌させ、圧倒的速さでゴーレムを駆逐し、残りは半数近くと追い詰めていた。

〝ＴＲＡＮＳ（トランザム）―ＡＭ〟破界事変の頃、エクシアに乗っていた当時のパイロットの刹那＝Ｆ＝セイエイが発現させたＧＮドライブに秘められた力。

イオリア＝シュヘンベルグが託したとされるこの力はＧＮドライブから発せられるＧＮ粒子を極限にまで圧縮させたモノを全面展開させる代物で、これを発動させたガンダムは既存の機体性能の数倍を誇る力と速さを見せつけた。

だが、強力な奥の手であるが故にリスクは大きい。トランザムには限界稼働時間という制限が存在し、限界時間を越えてしまうとトランザムはその機能を停止、更にその反動でＧＮドライブを搭載した各ガンダムの性能は使い切った粒子が再生成されるまでの間大きく下がる事となってしまい、当時はトランザムを使用する際はタイミングが重要視されていた。

再世戦争の際にはその問題は幾分か改善され、トランザムも時間さえおけば再び使用する事が可能となっている。しかし、修司の作ったＩＳ蒼鴉にはトランザム使用後の対処は施されてはいない。

トランザム使用後の蒼鴉はＧＮ粒子の残量も著しく低下し、コアとの連結が行われていない今、最悪の場合は身動きすら出来なくなってしまう。
ＧＮドライブだけの稼働ならＩＳコアとも併用して使用する事は可能、しかし、トランザムを使用する際はどうしてもＩＳコアとの連結を一時的に切らなければならなかった。そうでなければトランザムの力はコアの力とぶつかり合い、最悪両方とも暴走する恐れがあるからだ。
しかも、ＩＳコアとのリンクを切断した事により量子変換機能は失われ、拡大領域（バス・スロット）からしまい込んだバスターライフルや他の武装が取り出せない状況となっている。
まだＩＳを制作して一月しか経っておらず、この様な欠点を残す事となった蒼鴉。故にシュウ＝シラカワは彼の作ったＩＳを及第点と評したのだ。
しかし、逆を言えばそれだけ。それぞれの動力源を自立させればコアとＧＮドライブの両方を問題なく使用可能で、トランザムさえ使用しなければそれぞれの動力源は並列に稼働し、宇宙空間での長時間活動も可能となっている。
――それに、修司自身はそれ自体に対し別段危惧してはいなかった。トランザムを使用する際の問題点は後に蒼鴉を改修する事で直せば良いだけだし、何よりこれはトランザムを使用しての〝実験〟だ。
既にトランザムの活動限界は二分を切っている。しかし、それでも修司の頭には戦いの最中にある不安など微塵も存在してはいなかった。
彼の頭にあるのは今後の課題とその改善方法のみ、多対一という状況に晒されながらも彼は現状を不利と認識せず、淡々とした調子でゴーレムに攻撃を加える。
『ほれ六機目、これで後半分っと。さて、ちゃっちゃと片付けるとしようか』
巨大な拳がゴーレムを貫き、爆散。煙から出てきた蒼鴉は無傷のま

ま空の飛翔を続けている。手にしたコアは既に六個、このまま数を減らしコアを回収しようと思った時。

『――――ん？　なんだ？』

残り半数となったゴーレム達の動きが突然おかしくなった。何かのブラフか？　自分への追撃を止めて挙動が変わったゴーレムに修司が訝しげに思ったその時。

突然ゴーレム達は自ら躯を崩壊させ、海へと落下していった。突然の事に流石の修司も目を丸くさせる。

自爆のつもりだったのだろうか？　これでゴーレムの戦いが終わりなのかと思われた時、ゴーレム達が落ちた海面が盛り上がり、次の瞬間――――大爆発が起きた。

海面から浮上してくるのは巨大なゴーレム。これまで撃破したゴーレム達が残骸となった他のゴーレム達と融合し、巨大な存在へと自ら生まれ変わらせたのだ。

巨大ゴーレムの全身から放たれるミサイル群。先程とは桁違いの物量のミサイルが修司唯一人に向けて押し寄せてくる。

『――――フンッ』

迫り来るミサイルの群を修司は鼻で笑い、再び蒼鴉を飛翔させる。再び押し寄せてくる圧倒的物量を前に修司は再びゴーレムに自身の舞いを魅せつけた。

避ける。避ける。先程よりも多くの物量で攻めているのに依然として当たらない蒼鴉。それに業を煮やしたのか、ゴーレムは更にミサイルだけではなく光学兵器――――ビームを放ち始めた。

ミサイル群に続いて放たれるビームのシャワー、まるでハリネズミの様だと修司は内心で呟いた。

トランザムの限界時間も残り一分を切った。早いところ決着を付けたいと思いながら、修司はあくまで冷静さを崩さず、落ち着いてゴーレムを観察する。

そして同時に見つけた。巨大ゴーレムの胸元に輝く六つのコアを、あれが巨大ゴーレムの心臓部分だと瞬時に理解した修司は、ＧＮドライブの出力を最大限に高めて蒼鴉と共に上昇する。

『さて、トランザムの限界時間も残り僅か、お前との戯れもここまでにしておこう。――どこの誰だか知らないが、折角の学園の催しを邪魔しやがって』

修司の目は巨大ゴーレムを通してその背後にいる何者かに狙いを定める。この借りは必ず返すと、皆の気持ちを踏みにじった黒幕に対して絶対に消えることのない怒りの炎を灯らせて……。

巨大ゴーレムに向かって、一直線に降下した。

策も何もあったものではない真っ正面からの特攻。凄まじい勢いで相手の距離を詰める蒼鴉に対し、巨大ゴーレムは口を開いて光を収束させる。

そして次の瞬間、巨大ゴーレムの口から巨大な光が矢となって放たれた。

周囲の雲を蒸発させる程の熱量、直撃すれば唯では済まない一撃に対し、修司は蒼鴉の肘の杭を限界まで引き絞らせる。

バスターライフルが取り出せない今、修司には長距離攻撃の術がない。が、彼には既にこの問題に対する打開策を閃いていた。

装備の限定された中使える、一発限りの弾丸……それは。

『〝閂（かんぬき）――捻り貫手（ぬきて）〟!!』

自分自身。弾がなければ自分が弾になれば良いじゃないという。修司の独創的な発想から生まれた奇怪過ぎる一撃は巨大ゴーレムの放つ光とぶつかり合い。

『穿て――牙鐵!』

叩き込まれた杭の勢いが加わり、巨大な光を撃ち破り、砲弾となった蒼鴉はそのまま巨大ゴーレムの胸元を撃ち抜いた。

核となるコア部分を撃ち抜かれた事により巨大ゴーレムは瓦解し、海中へと沈んでいく。一方、ゴーレムを撃ち抜いた一羽の鴉はそのまま滑空し、学園の敷地内へと着地させ――。

『任務及びコアの回収――完了』

その手には12個のコアが抱えられており、その後ろで海中に沈んだ巨大ゴーレムが爆発した。

事の一部始終を目撃していた一夏達はただただ呆然となって佇む

蒼鴉を見つめ……。
『トランザム残り時間は三十秒か、試作段階とはいえ、まずまずの性能かな。――あ、一夏君。ただいま』
『……お、おかえりなさい。修司さん』
『疲れてる所申し訳ないんだけど、織斑先生に連絡してくれない？このコア達の事について話しておかないといけない事があるから……あ、通信機能なら回復している筈だから、お願いね』
『……は、はぁ』
ただ、そう答える事しか出来なかった。

その２９

Ｄ月π日

所属不明のＩＳ無人機、ゴーレムなる存在達がＩＳ学園に襲撃してきて早数日、学園の敷地内にあった破損個所は大体修理を終え、生徒達も落ち着きを取り戻していた。

幸い生徒達の中には怪我人はおらず、教職員の方々も大した事はなく、専用機持ちの皆の奮闘のおかげで学園の損壊も思ったほど酷くはなく、修理の方はさほど時間は掛からなかった。

生徒達の方もこれまで無人機や禁止指定システムを搭載した機体の暴走等様々なトラブルに遭遇した為か心身共にタフな物となり、たった数日しか経過していないのに普段と変わらずに生活している。

やはり人間環境に慣れるものだなと安心していた一方、自分は自分で少々面倒な事になっていた。

ＩＳ技術資格を持つ人間は長期に渡って属する国から離れる際、政府に報告する様義務付けされているのだという。山田先生が言うにはこの制度は技術者の安全を保つ為のものであるとされ、一ヶ月以上音信不通の場合は国が各治安機関に通達し、その身柄を確保する為に動き出すと言うのだ。

まぁこの世界の中心となっているＩＳを研究し、開発する人間は世界全体を見てまだまだ少ないみたいだし、先も言ったけれどここではＩＳ技術者の拉致や誘拐は珍しい事ではないので政府が懸念するのも理解出来る。

技術者の端くれを名乗り、コアを使ってＩＳを制作した以上政府の意向にはある程度従うべきだろう。そう思い、出張から帰ってきたという連絡を政府へ通達を入れると、政府は自分に対して記者会見という場を開いて話を聞かせて欲しいと言ってきたのだ。

まぁ、女性にしか適合されない筈のＩＳが男の自分に適合されたという話を聞けば、奴さん達が慌てるのも無理はないのだろう。記者会見を開いて欲しいというのも、メディアを通して全国にＩＳ適合について話して欲しいというのが本音だろう。

一ヶ月前に記者会見を開いたばかりなので多少は抵抗あるが、確かに自分の言う事を世間に聞いて貰うためにはそれが必要だと思う為、了承する事にする。

場所はやはりＩＳ学園、今度も十蔵さんや教職員の皆さんの力を借りて用意する事にした。途中で政府の人達が手伝いに来たけれど……彼等が到着する頃には既に作業は終わっていた。別に頼んだ覚えはないので悪くは言わないが、やってきた政府関係者の中にやたらと偉そうな人がいたのが少し気になった。

何でもその人はドイツの偉い立場にいる政治家さんで日本政府とも深い繋がりのある人物とされていて、彼の言葉一つで国が動くと言われており、この時までは自分の中ではただの偉い人が視察に来ているのだなという見解だった。しかし、この政治家さんはどうやら少し毛色の違う人間で、女子生徒や女性教職員の人達を下品な目つきで見つめているのだ。

挙げ句の果てには公衆の面前でセクハラを働く始末。織斑先生がいない所を見計らって山田先生の臀部に触れたその人を自分は躊躇なく追い出した。

その最中、お前は唯では済まないぞとか言っていたが……そんな事は知った事じゃない。権力に物を言わせて好き勝手やる人間に遠慮をする必要など微塵もない。

ただ、今後逆恨みされては今後の自分の活動に差し支える恐れがあるので、その日の夜に例の政治家さんよりも上の人と――国家元首の人と話をし、彼を政界から追放させて欲しいと伝えた。

最初はいきなり何者だと警戒されたが、ドイツに関しては盛り上がる話題が事欠かないので、ドイツの国家元首さんは自分の話に耳を傾け、聞き入れて貰えた。

しかも国家元首さんによると自分の話した幾つかの事例は全く知らないモノであったらしく、特に試験管の……デザインベイビーの話については素で驚いていた様子だった。

どうやらドイツも一枚岩ではないらしく、国家元首さんも知られていない事実があり、突き詰めようにもいつも後一歩の所で逃げられて

しまうと愚痴っていた。
　しかもあの政治家も関わっている事から決め手となる手段もなく、今まで歯痒い思いをしていたと言っていた。そこで現れた自分からの情報提供に国家元首さんはこれで決め手が出来たと喜んでくれた。あの政治家を政界追放する事を約束し、通信を切った。
　これでドイツの方もある程度の膿は出せる事だろう。後はロジャーさん次第だが（多元世界のあの人ではない）……まぁ、あの人なら心配ないだろう。見たところかなりのやり手っぽいし、自分の印象はシュナイゼルと多元世界のロジャーさんを足して2で割った感じだ。
　ロジャーさんはこの借りは返すと言ってくれたが、その必要はないと自分は答えた。何せ後一歩の所まで連中を追い詰めた人だ。合成なしの証拠映像や、復元された研究記録まで渡せば後はどうとでもなるだろう。
　しかしラウラちゃんには本当に同情する。自分が生まれた経緯にあんな輩が関わっていると知ったらタフな彼女でも気持ち的に滅入る事だろう。今回の事は彼女に伝えない方がいいな。うん。真実を知ることも大事だが、世の中には知らなくても良いこともあるのだと自分は思う。特に、どうでも良い話は。
　それにしても、ロジャーさんてばダンディーな人だよな。多元世界のロジャーさんと顔とか全然違うけれど、どことなく雰囲気が似ていた。黒い服も似合ってたし、ロジャーと名のつく人は皆あんな感じなのだろうか？
　――あ、そうそう。ラウラちゃんという事で思い出したが、ラウラちゃんが今日自分に会うなりいきなり頭を下げて謝ってきた。
　なんでも前にアリーナでいきなり砲撃をぶっ放した際、自分に傷を付けた事を気に病んでいて軍人としてのけじめを付ける為に自分が帰ってくる日を見計らって謝罪したかったのだという。
　いやー、良い子だなぁラウラちゃん。最初の頃は酷く尖っていたけれど、今は全くその様子は見えないし、今日も終わった事なのにワザワザ謝りに来てくれている。

やはり軍人とはいってもラウラちゃんも女の子、あの頃は慣れない外国で気が張っていたんだな。こうして謝ってきてくれた事だし、怪我も大した事なかったから、自分は素直にラウラちゃんの謝罪を受け入れた。

――――ただ、その時ラウラちゃんが白装束を纏っていたのが気になった。彼女が言うには部下からの助言を参考にしているとだけ言っていたが……一体何を言ったらあんな風に思い詰めた表情になるのだろう？

謝罪も受け入れた後も酷く狼狽していたし……けど、部屋から出て行く頃にはすごく晴れやかな表情していたから別に良いか。

Ｄ月@日

記者会見を明日に控えた今日、自分は用務員の仕事を早めに切り上げさせて貰い、織斑先生の計らいで蒼鴉の整備を行っていた。

やはり蒼鴉に搭載された擬似太陽炉とＩＳのコアとの連動率は高いが、いざトランザムを使用するとなると太陽炉側にシステムが持っていかれ、どうしてもＩＳ側が弾かれてしまう。無理に同調させようとすれば過剰な相互干渉により暴走に陥ってしまい、蒼鴉が自爆してしまう可能性が出てくる。

アリカちゃんは自分の力不足と言うが、そもそも擬似太陽炉のトランザムは半ば暴走状態にあるようなものなので気にする必要はない。問題があるとするならばこれを作っておきながら打開策を見つけていない自分にあるのだ。

尤も、その打開策は今日見つける事が出来た。二つの擬似太陽炉におけるツインドライヴ、これにＩＳコアを並列に使用する為には間を繋げるモノが必要になる。

ツインドライヴによるトランザム状態は謂わば手綱のない暴れ馬の様なモノ、アリカちゃんと一緒に作動させるにはアリカちゃんがトランザム状態のツインドライヴを乗りこなす必要があり、その為には手綱が必要となってくる。

ＩＳコアとツインドライヴとトランザム、これらを繋ぐ為に必要な

モノ――――即ち、〝オーライザー〟の存在だ。
オーライザーとは再世戦争にて刹那君の駆るダブルオーの専用支援機で、これらが合体する事によりツインドライヴシステムはより安定された稼働率を誇り、トランザムを使用した際は恐るべき性能となっている。別に蒼鴉もそれほどの性能が出せるとは思わないが、ツインドライヴによるトランザムとＩＳコアが完全に同調すれば、かなりの性能向上も見込める事だろう。
蒼鴉のツインドライヴは現時点でも安定した稼働を行えているが、それでもトランザム状態となった時は少しとは言え危うさが残る。別にトランザムの使用に拘る必要はないかもしれないが、それでも自分以外の人間が扱う事を想定するのであれば、不安要素は可能な限り無くさなければならないのも、また事実である。
アリカちゃんもあまり無理はさせたくない。篠ノ之博士によって生み出された存在ならば、彼女は篠ノ之博士の娘とも呼ぶべき存在だ。篠ノ之博士の娘さんであるならば、いち技術者である自分も敬意を持って接し、大事に扱うべきだろう。
いや、扱うべきなのだ。電子とはいえ彼女には意志があり心がある。ならば無闇に初期化という疑似殺人をするのではなく、経験を重ねて自分達人間を知ってもらうべきなのだ。明日の記者会見の時はそこら辺を丁寧に説明したいと思う。
さて、そんな訳で見つける事が出来た今後の課題。取り敢えず蒼鴉に合ったオーライザーを作成する事にしたが……ここで一つ問題が出てきた。
アリカちゃん。蒼鴉のコアとなっている彼女が最近は自分の事をマスターと言って止めないのだ。前に何度も止めようとしたが、そうすると今度はお父様やらお兄ちゃんやらと余計変な呼び方になってしまう。
自分はまだ父親という歳でもないし、お兄ちゃんと呼ばれて喜ぶ特殊性癖の持ち主でもない。名前呼びでも構わないのにアリカちゃんは頑なに頷こうとしない。仕方がないのでマスターという呼び方にして貰っているが……別に自分がアリカちゃんのマスターじゃない

んだけど、なんとかならないかな。

Ｄ月α日

疲れた。今日は本当に疲れた。主に精神的な意味で。

政府からの要望で再び学園の体育館で行われた記者会見、会見の時間は一時間も満たない短い間のモノだったが、会場を埋め尽くす人だかりに自分は若干吐き気を催していた。

終始カメラのフラッシュが立ちこめる体育館の会場内、記者関係者達が次々と投げつけてくる質問に答え、時にはＩＳの事について報告したりしながら時間をしていたが、その度に記者連中は驚きの声で体育館を震わせた。

もうね、鼓膜が破けるかと思ったよ。驚く気持ちは分かるけど、まだ授業中のクラスもあったんだ。もう少し落ち着きを持って欲しいモノだ。体育館に張られた特殊強化ガラスに皹入るとかドンだけだよ。あれ貼り替えるの何気に大変なんだぞ？

それと、当然自分のＩＳについて質問されたが……答える事は出来ないと告げた。難色を示すメディア連中だが、現在自分のＩＳはまだ完成されていないのだ。試作段階の機体データを開示させた所でＩＳ委員会や学園に迷惑を掛ける事になるだろう。

それに、他の国から情報偽造だと難癖付けられるのも癪だ。別に決めつけるつもりはないが、色々裏で怪しいことをしている世界だ。下手に隙を見せずにちゃんと正しい情報を開示するべきだと思う。

それに、ＩＳ委員会からも情報を開示すべきＩＳは原則として完成されたモノにするとされている。ＩＳ自体は完璧とは言えない存在だが、それでもコンセプトに沿った機体を完成させるのがＩＳ開発に携わる者の義務というものだ。それが出来ていない自分はまだまだ未熟者という事なのだろう。

けれど、今回で自分が果たすべき義務は終えた。政府への報告も済ませたし、ＩＳ委員会への理論提出も完了した。後は技術者の末端として、用務員として働いていくだけである。

寧ろ、これからの方が大変だ。蒼鴉の改修に用務員の仕事、それに

学園の警備システムの強化の事もあるし、やることは目白押しである。

そうそう、蒼鴉の待機状態の事も報告があった。色々悩んでみたモノの、アリカちゃんという電子生命体がコア内部に存在して意志と意識がある以上、彼女の事も尊重するべきと思い、自由に動ける動物タイプにしてみた。

モデルは梟。フクロウのクロウと鴉の別の名称であるクロウを掛けたモノで待機状態の蒼鴉は蒼い梟へと変化させている。

これならアリカちゃんも独自で動けるし、空を飛ぶことも出来るという代物だ。アリカちゃんも喜んでくれたし、自分としても満足出来る代物である。

自衛の為に一応待機状態でも一部の武装は使用可能としてあるが……まぁおいそれとそんな事態には陥らないだろうし、そんなに心配する必要もないだろう。

――それにしても、ＩＳ委員会も早く結論を出して欲しい所だ。先のゴーレム襲撃の際に回収したＩＳコアの件について未だに返事が貰えていない。今は自分が責任持って管理しているけれど、海に沈んだゴーレム達のコアの回収もしなければならないのだから、早くして欲しいものである。

まぁ、あちらも彼方の都合もあるし、自分は自分の出来る事をしようと思う。

それと、何だか山田先生を始めとした先生達の顔色が最近悪い。山田先生に至っては倒れたという話も聞いているし、やはり先のゴーレム事件で気持ち的に参っているのだろう。山田先生も教師として生徒の事で常に気を張っていなければならないし、やはり大変なのだろう。

織斑先生も心なしか疲れた顔を時折見せているし、皆さんの負担を軽くする為にも用務員として頑張っていこうと思う。

記者会見から数日後、白河修司の名は全世界に知られる事になる。
『白河修司が予言!!　ＩＳはいつか男女共有になる!?』
記事に載った写真と共に大きく報じられるこの言葉、これにより世界は再び大きく揺れ動く事になる。

その３０

――――白河修司。年若い年齢でありながらＩＳ最上級の資格を唯一個人で修得した鬼才の人間。当初は総合ＩＳ管理資格という企業でしか持ち得ない資格を個人で修得した事で世間を騒がせたが、今回の記者会見で用いられた彼の一言により世界は再び震える事になった。

〝ＩＳが男女共有化される可能性〟現在は女性にしか扱えないとされるＩＳ、常識として、一般知識として知られている世論が根底から覆される事を提示する白河修司の発言に世界は様々な反応を見せた。

ある専門家は判断つかないと言葉を濁し、ある評論家は否と、またある批評家は若者の妄言と断じ、夢物語と一蹴した。しかし、どんなに白河修司の言葉を否定しても、彼がこの世界における二人目の男性ＩＳ適性者であることは揺るぎない事実である事は変わらない。

世界の常識を根底から揺るがした白河修司なる男、彼の者をどうにかしようとあらゆる組織が狙う事になるが、その悉くが失敗に終わった。

貴重な男性適性者、本来ならモルモットとして様々な実験に使いたいと外道な事を考える科学者もいるが、彼自身が非常に優秀な技術者である事や、どんな干渉も認められないＩＳ学園に所属している為、国や企業も手を出す事は出来ないとされている。

それならばと手段を問わずに強攻策を用いる者達もいたが、いずれも全て失敗。学園に潜入した工作員のその悉くは行方不明者となっている。

一体あの学園では何が起きているのか、学園の外で常に監視を行っている様々な国々の政府組織の面々は依然として掴めない修司の存在に一種の不気味さを抱いていた。

他にも、ＩＳ委員会から渡されたコアを受け取って何の成果も挙げ

られていないと一部の女性は修司を強く非難するが、流石に一ヶ月程度でＩＳなど完成する筈もなく、その女性は無茶を言い過ぎだと逆に非難される事になる。

しかし、第二の男性ＩＳ操縦者が現れた事により一番揺れて、そして憤慨したのは彼女たちだろう。ＩＳによって築かれた〝女尊男卑〟の社会、これが覆されてしまう可能性を突きつけられた女尊男卑の思想に染められた彼女達は近い将来トンでもない強攻……いや、凶行に乗り出すかもしれない。

果たしてその時、白河修司はどのような行動を取るのか、その事も含めて世界は彼の動向に注目するのだった……。

◇

Ｄ月β日

記者会見から数日が経って季節も秋に差し掛かってきた今日、自分は用務員と技術者の仕事の両方を何とかこなしていた。

午前は用務員として、午後は技術者として活動している自分の生活は毎日が目まぐるしく過ぎて行ったが、それに比例して充実した日々を送っている。

それに目まぐるしいと言っても、火星と月からそれぞれオートマトン達を連れてきている為、仕事の方は滞る事なく進んでいる。最初の頃は戸惑った生徒も多かったが、皆オートマトンの可愛いさに心を許し、今では学園の人気者として愛されている。

いつまでも人気のない月や火星に置いておくのも忍びないと思い、ＡＩの成長を促す為に連れてきたが……うん、今はそれが正しかったと思っている。

最初の頃は学園にいる人の多さにオートマトン達も戸惑っている様子だったが、日が経つに連れて徐々に慣れ始め、今ではすっかり生

徒達と打ち解けている。
　因みにオートマトンを連れてきている合間、火星と月に設置した基地はそれぞれ自分なりのやり方で隠している。火星の方は元々地中深くに建設していた為に見つかる事はなく、月の方も光学迷彩の領域を広く設置した事により肉眼では見えない事になっている。
　基地のシステムは基本的に落としているし、至る所に自分の生体データがないと動かせない仕組みとなっており、無理に稼働させようとすると基地自体が爆発する仕組みとなっている。オートマトン達が一生懸命に作り上げた基地だが、悪意を持った人間に好き勝手使われるよりはマシと思い、このシステムを導入した。
　――――さて、話を戻して……ＡＩの方も環境が劇的に変わった為に判断力が向上したのか、現在は掃除や窓拭き、ゴミ捨てまで用務員の仕事をこなしている。これでは自分の仕事が無くなってしまうと十蔵さんは嘆いていたが、そう言う割には嬉しそうにしていた。
　学園の方もオートマトンの存在は受け入れて貰えたし、今度は懐の深い学園の為に一肌脱ごうと思う。まずは前々から懸念されていた学園の防衛システムについてだが、織斑先生達の助言もあって大体形にすることが出来た。
　まずは外側への防衛機構、先のゴーレム達の襲撃で学園の防衛力が低いと判断した自分は、学園内にあるＩＳコアを用いて学園全体を覆う遮断シールドの構築案を考えている。
　これは学園内にあるＩＳを連結させる事で学園の敷地内をシールドバリアで覆うモノであり、これにより外側からの攻撃をある程度は防げるという構成だ。勿論これは言う程簡単ではないし、この防衛システムを作るためにはまず敷地内にバリアを展開させる装置が必要になってくる。
　バリア装置の方は此方で何とかなるが、問題はＩＳの方だ。現在アリカちゃんがコアネットワークで学園内の訓練機に搭載されたコアに赴き、一つずつ話をしていて、彼女達全員と話を終えるのは少し時間が掛かると言っていた。
　コア同士を連結させる事によって学園を覆う強力なシールドバリ

ア、理論だけ言えばその強度は核を撃たれても耐えきれる代物であり、敷地内にいる生徒達の安全とされるモノ。

しかし、この案には当然の如く欠陥が存在している。連結させて同調する事により強固になるシールドバリアだが、それを可能とするにはコア同士による意志疎通が必要となり、コア達が一致団結しなければこの防衛システムは成り立たないのだ。その為にアリカちゃんが現在必死にコア内部にいるＡ子ちゃん（仮）達を説得しているが……先程も言ったようにまだ時間が掛かりそうである。

まだコアの事は誰も話していない今、これは慎重に扱うべき案件だ。織斑先生辺りに相談してみようと思うが……織斑先生も修学旅行に備えているのか、最近忙しそうだからなぁ。あまり負担をかけたくはない。

記者会見の時もそうだったが、自分はＩＳコアの秘密について明確な事は一切話していない。いやね、ここの世界の連中――特に科学者の連中は裏で結構ゲスな事を考えているっぽくて、コアの解析に余念がないっぽいんだよね。前に一夏君からも聞いたけど、彼の場合は自分がＩＳが動かせると知られて数日後に解体させてくれというバカな事を言う輩が出てきたみたいなんだよね。

そんな連中にコアの秘密を話してみろ、絶対善からぬ考えを抱きながら善からぬ手段で持って実行し、ＩＳを無理矢理支配下に置いたりするぞ絶対。賭けても良い。

そんな訳で現在ＩＳの女子校説は未だ世間に発表してはいない。記者会見ではＩＳの男女共有化に関する可能性と初期化する事によるリスクの関連性を少しばかり話しただけだ。

この学園でもその事について話しているのは織斑先生と山田先生、あとは信用の出来る人達に限られている。アリカちゃんもそう言った人達以外の所では喋らないよう注意している。窮屈で申し訳ないと思ったが、アリカちゃんは笑顔一つで了承してくれた。

代わりと言ってはなんだが、待機状態の時の彼女にはある程度の自由を約束している。改修する時とかは呼んでいるが、それ以外の時は基本的に不干渉で通っている。

その所為か空を自由に飛んでいたり、街までいって人間を観察したりするなど、彼女なりに楽しい事を見つけている。時々渡り鳥の群と遭遇して一緒に空を飛んでいる時はとても楽しいと言っていた。

――――ＩＳコアというのは適合者と共に成長するモノ、ならば余計な手出しをせず、ゆっくりと変革を促せばいいのだ。白式のコアの娘やアリカちゃんもそうする事で男性を理解しようとしてくれている訳だし、慌てずに進んでいけばいい。

勿論、ＩＳが男女共有化されるように自分も頑張っていこうと思う。篠ノ之博士も今の世界に変わって欲しいという思いを抱いていると思うから。

と、何だかだいぶ話がズレてしまったが、アリカちゃんが他のコアにいる娘達と話を終えるまでこの案は保留と言う事にしておこうと思う。

……そう言えば、織斑先生に白騎士について話をしたかったのだが、これまで忙しい日々だったからつい聞き逃していた。

まぁ、さっきも書いたけど最近の織斑先生は修学旅行の準備やらで忙しそうだから、話を聞くのはもう少し後にしてもいいかな。

Ｄ月Ｆ日

今日、織斑君を始めとした専用機持ちの皆に蒼鴉のデータ取りに付き合って貰った。付き合って貰ったと言っても別に模擬戦とかした訳じゃない。

部分展開とかＩＳを操縦する際に必要な技術、そう言ったモノを学ぶ為に今日は皆をアリーナに呼ばせて貰った。一応頭では理解しているが、こういった訓練は体に直接叩き込んだ方が理解が早いし、自分の操縦技術が常に蒼鴉にアップロードされ、アリカちゃんもそのデータを下に学習し、成長を促す事に繋がってくるのだ。

けれど、ただ手伝うだけでは皆も割に合わないだろうから、操縦技術を教えてくれた後、模擬戦をする事で蒼鴉のデータを取らせて上げる事にした。

本当は非常時以外蒼鴉を戦闘に使用したくはないが、此方から頼ん

でいる以上ある程度の譲歩は必要だ。まだまだ完成には届かない蒼鴉だが、この機体のデータによってセシリアちゃん達の国のＩＳ開発に少しでも役立てるなら幸いだ。

――――と思っていたのだけれど、どうやら皆今日は体調が悪いらしく、一夏君と簪ちゃん以外の子達は揃って辞退されてしまった。

体調が悪いのなら無理する必要はないのに……これも国家代表候補生の義務だと言ってくれるセシリアちゃん達は本当に良い子なんだなと改めて実感した。何も見返りはないのに協力的なセシリアちゃん達、彼女達を代表候補生にした国の政府の人は人の見る目があるのだと思う。

そんな訳で始まった専用機持ち達によるＩＳ操縦技術。基本的には皆の見せる軌道を再現するというやり方だが、予想以上に皆の見せるＩＳ操縦が見事だった為、自分も再現にさほど苦労する事は無かった。

超高速飛行による姿勢制御といった戦闘姿勢はグランゾンを通してこれまで何度も行ってきたからその辺りは問題ないが、ＩＳとしての操縦技術は初心者だった為、皆が見せてくれた飛行技術は物凄く為になった。

これならＺＥＸＩＳの戦闘モーションも幾つか再現が可能かもしれない。……いや、もしかしたらＩＳの操縦飛行とＺＥＸＩＳの戦闘モーションを融合させて新たな機動、旋回技術も生まれるかもしれない。

例えば、瞬時加速からのバルキリーの旋回技術とか、デスティニーの回避モーションからのアクセル・ターンとか、他にも様々な動きが生まれてくるかもしれない。

操縦技術のモーションが増えればそれだけ宇宙での活動範囲が広くなる。ＩＳの新たな発見に自分はテンションが上がりまくりである。付き合ってくれた一夏君達には本当に感謝しても足りない。

ただ、その後ちょっとした問題が起こった。厳密に言えば問題ではない話だが、自分が一夏君と簪ちゃんと模擬戦しようとした時に、意外な人物が待ったを掛けてきたのだ。

その人物の名は更識楯無。なんでも自分の蒼鴉のデータ取りに生徒会長自ら付き合ってあげると言われたのだ。

生徒会長やロシア代表、そして更識家の当主として色々忙しい筈なのに、ワザワザ協力を申し出てくれた楯無ちゃん。ＩＳ学園の中でも随一の実力を持つ彼女なら操縦技術の腕前も卓越されたものだろうと思い、これを受けた。

最初は付き合ってくれた一夏君達に申し訳ないと思ったけれど、セシリアちゃん達から気にしないで下さいと言われたので、自分はこの厚意に甘える事にした。しかし、自分から呼びつけておいてこの対応は剰りにも失礼なので、今度セシリアちゃん達には何らかの形でお詫びしたいと思う。

――――しかし、楯無ちゃんも随分と回りくどい事をするものだ。ＩＳの操縦技術を見せてくれるだけで良かったのに向こうは日時を告げるだけでアリーナから出て行っちゃうし、やっぱり生徒会長やお家の仕事が忙しかったりするのだろうか。

とはいえ、折角学園最強の人が自分の為に協力を申し出てくれたのだ。定められた日時の日まで自分はゆっくりと楽しみながら待ち望む事にしよう。

何せ自分はＩＳを稼働させて２０時間にも満たない時間しか動かせていないのだ。代表である楯無ちゃんのＩＳ操縦技術は今後の自分に多くの事を学ばせてくれる事だろう。

その日に備えて、蒼鴉の整備も淡々と進めておく事にしようと思う。

……それにしても、やっぱ蒼鴉の支援機にする予定のオーライザーもＩＳコアが必要になってくるなぁ。

二つのＩＳコアとツインドライブシステムによる力は未知数だが、理論だけなら安定された運用と更なる出力の向上も見込める筈。

政府からどうにかしてもう一個貰えないか申請してみようかな。でもなぁ、まだ結果を出せてないし、通るのは無理っぽいよね。

独学でなんとかできるかなぁ？　それとも、博士に相談してみるか？『それ位自分で考えなさい』と一蹴にされそうな気もするけど。

兎も角、焦らずに頑張っていこうと思う。

その３１

Ｄ月γ日

今日は久し振りにグランゾンの整備をした。ここの所碌に相手をしてやれなかったし、今日の午後はずっとグランゾンに付きっきりでいた。

グランゾンは多元世界で数々の死線を共に潜り抜けてきた相棒だ。幾ら比較的平和な世界だからといって無碍な扱いをする訳にはいかないだろう。

人目に付くのは拙いからオートマトン達も連れて月で整備を行った。基本的なシステムや駆動系の手入れは自分で行ったが、外装の磨きはオートマトン達にやって貰ったおかげで大分作業が捗った。

グランゾンも久々に体がピカピカにされたお陰か、心なしか嬉しそうに見える。やはり相棒であるグランゾンには常に万全な状態でいて欲しいから、こういった整備には手を抜きたくない。

そして今日はオートマトン達のお陰で時間が結構余ったから、残りの時間はオートマトン達の整備をする事で時間を潰す事にした。

言葉とか出せる機能がないからコミュニケーションは出来ていないが、代わりにこの子達は体全体の動きを使って感情を表現してくる為、ある程度は意志疎通が可能となっている。学園の生徒達と触れ合った事でオートマトンのＡＩにも変化が起きているようだ。

良い傾向だ。このまま人と接して成長していく我が子達に嬉しさを感じ、そろそろ新しいボディでも作ろうかなと思う。確かグランゾンのアーカイブ内にモームちゃんのデータも入っていた筈だから彼女を参考に人間的なボディも作ってもいいかもしれない。

ただ、オートマトン達は意志はあっても人格や自我というものが曖昧な為、モデルとなる性別パターンは男女両方用意した方がいいだろう。自分は一人っ子だった為個人的には一緒にサッカーやキャッチボールが出来るよう男の子を選んで欲しい所だが……まぁ、そこら辺はあの子達の自由意志を尊重すべくノータッチで行こうと思う。

そんな訳で今日は久々にのんびりした一日を過ごす事が出来た。明日は楯無ちゃんにＩＳ操縦のレッスンを受ける予定なので今日は早めに就寝しようと思う。

……ただ、月から帰ってきた時簪ちゃんから呆れの溜息をされたのだが、アレは一体どういう意味だったのだろうか？　そこら辺がよく分からない為、少しばかりモヤモヤした気分になった。

Ｄ月Ω日

今日は楯無ちゃんとのＩＳ操縦訓練、学園最強と謳われる彼女から学べば色々為になるだろうと思い楽しみにしていたら……何故か、模擬戦をする事になった。しかも学園の生徒達も観戦に来ていたし、言われるがまま来た自分は終始ワケワカメな状態でした。

普通にＩＳの操縦技術を見せてくれると思っていただけに驚いたが……どうやら食い違いがあったらしい。戸惑いながらも自分は楯無ちゃんとの模擬戦を受ける事になった。

結果は敗北。自分としてはまぁまぁ善戦していたと思うし、戦闘中も為になるデータが取れたのでよしという事にしておこう。ガンダニュウム合金のお陰で蒼鴉に傷もないし、楯無ちゃんの機体も壊す事はなくて良かった。

しかし、やはりＩＳというのはＭＳとは感じが違うな。前の時のゴーレム戦とは擬似太陽炉を使用しながらの戦闘だったし、ＩＳとして戦うのは何気に今回が初だった。

しかし、楯無ちゃん強かったなぁ。幾ら此方が武装を殆ど使わなかったとは言え、まさかああも見事にやられるとは思わなかった。楯無ちゃんのＩＳ、〝霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）〟って言ったっけ？　ナノマシンで構成された水で戦闘するとか、中々風情ある戦い方をするよなぁ。

負けてしまって悔しい気持ちはあるけれど、シールドエネルギーがゼロになっても別動力である擬似太陽炉の方は無事稼働できたし、これで宇宙環境で問題が発生されたとしても擬似太陽炉で動かせるという事が証明できた訳だ。ここは前向きに受け止めておくとしよう。

しかも、楯無ちゃんの操縦技術を間近で見れた事でＩＳの操縦も大

分モノにする事ができた。この調子で行けば蒼鴉もＩＳとして完成される日は近いかもしれない。
と、ここで終われば実りのある話で終わっていたのだけれど、試合後、何故か自分は楯無ちゃんに問い詰められてしまった。
何故全力で戦わなかったのかと、馬鹿にしているのかと激昂する楯無ちゃんに自分は一瞬目を丸くしてしまった。セコンドとして来て貰った簪ちゃんが言うには自分の主要武装である牙鐵（サドンインパクトの事）や重砲（ツインバスターライフルの事）を使わなかった事に対して不満に思っているという。
……いや、ね。簪ちゃんのその言葉を聞いた瞬間、何というか申し訳ないと思ったと同時に何言ってんの？　みたいな感想が頭を過ぎってしまったよ。
だって自分の作るＩＳは宇宙活動を目的にした機体だよ？　巨大デブリの破壊とか、暗礁宙域で活動領域を確保する為のモノとか、自分の作るＩＳの武装はそういうモノだからね？　対ＩＳを想定している代物じゃないからね？
大体、ＩＳサイズに性能をダウンさせたとはいえその火力は依然として凄まじいものだ。そんなモノを人に対し使うことなどあるわけないだろう。ゴーレムとか無人機相手なら兎も角。アリーナで重砲とか撃ったら試合処か死傷者が大量に出るわ！
……と、この時の楯無ちゃんには言っても素直に信じて貰えなかったので、少し言葉を変えて事情を説明したのだが……何故か逆効果になってしまった。
挙げ句の果てには楯無ちゃんてば目に涙を浮かべながらどっか行っちゃったし、ホントどうしよう。簪ちゃんがそれとなくフォローしておくと言ってくれたからその時はその言葉に甘える事にしたけれど……う～ん。俺、何か悪いこと言ったかな？
謝ろうにも簪ちゃんから止めた方がいいと止められてしまったし……けれど、流石に女の子を泣かせたまま放置しておくのは流石に拙いよな。でも、理由が分かってないのに謝っても相手に対して失礼だと思うし……う～む、カレンちゃんといいヨーコちゃんといい、年頃

の女の子というのは分からないなぁ。
織斑先生や山田先生にも事情を話して相談したのだが、何故かそっとしておけの一言しか貰えなかった。ああいうのも青春だと織斑先生はいうけれど、それがその場を凌ぐ為の誤魔化しに聞こえてしまうのは何故なんだろう。
兎も角、楯無ちゃんに対しての謝罪は織斑先生や山田先生、簪ちゃんの言う事を参考に少し間を置く事にした。
その間、何もしない訳にもいかないので頭を冷やす事も含めて海底に沈むゴーレムのコアの回収を進める事にした。未だ政府からなんの応答もないけれど、少しは此方も自由に振る舞ってもいいよね。
出来ればオーライザー制作の為にもう一個コアが欲しい所だけれど、流石にちょろまかすのは拙いよな。

◇

――夜。人気の無くなった学園内、暗闇で閉ざされた生徒会室に彼女達はいた。頭を机に伏せたまま顔を上げない生徒会長、今回のＩＳによる模擬戦でその自信の全てを喪失した彼女は横にいる親友にして従者の人物に疑問を投げ掛けた。
「……ねぇ、虚」
「何ですか？　お嬢様」
「私って、あの男に勝てたのかな？」
生徒会長――更識楯無の言う〝あの男〟それは今年に入って学園に雇われた単なる用務員……だった男。
白河修司。企業で取るべき資格を一人で修得し、誰よりもＩＳに詳

しく、篠ノ之束の後継者とも言われるべき世界が注目する第二の男性ＩＳ適合者。ふとした切っ掛けで彼と戦う事を決意した彼女は今日、彼とＩＳでの模擬戦を行った。

結果は彼女の勝利。その卓越した操縦技術を駆使して蒼い鴉を討ち取る様は誰から見ても楯無の勝利を認めている。事実、彼女は今日の模擬戦で白河修司に勝利した。なのに、当の楯無本人は納得出来ていなかった。

自分は奴に勝てたのか。そう訊ねてくる彼女に虚は即答で答えた。

「結果的に見れば、あの模擬戦はお嬢様の勝利に思えますが？」

「一見すればね。けど、実際は違う。あの模擬戦で終始あしらわれていたのは私の方だった。碌な武装を使用せず、ただのワイヤーアンカーで私を圧倒し、操縦技術の方だってその時は私が勝っても次の瞬間には負けていたわ。今日の試合で勝てたのは殆ど運みたいなモノよ。たまたま放ったクリア・パッションが偶々奴のＩＳに当たっただけ。……ねぇ虚。アイツが例の武装、重砲と牙鐵を使わなかったのは何故だと思う？」

「さぁ、存じていませんが……」

「これは模擬戦であって実戦ではない。障害ではないモノに撃っても意味はない。だそうよ。アイツにとって私との試合は単なるデータ取りの実験でしかなかったのよ」

自分は脅威ですらない。そう間接的に言われた楯無は学園最強のプライドをこれ以上なく打ち砕かれた気分になっていた。

今回行われた試合、結果的に見れば楯無の勝利であったが、楯無自身から見ればこの上なく敗北と言えるモノ、ＩＳに乗り始めて日が浅い人間に追い詰められたという事実は今後の更識としての活動に多少なり差し支える事になるだろう。

学園最強のプライド、更識家当主としての威厳、今回の模擬戦で色々失ったモノは多いが、その代わりに得るものもまたあった。

今後、白河修司の名は世界中に刻まれる事になるだろう。あれほどのＩＳを作り上げ、更にまだ磨き上げようとしている。

いつか、世界は彼の下に跪くかもしれない。十年前、篠ノ之束に

よって世界が平伏したように。
そして――――。
「ですが、そのお陰で簪様と仲直り出来たではありませんか。あの後、彼女に慰められたのでしょう？」
「そうなのよ！　簪ちゃんてば私の為に、私の為に！　私を思って慰めてくれたのよ。あの子の手で頭を撫でられちゃって……もう当分この髪は洗わないわ」
「……」
「ホント、最初の頃はあの野郎（白河修司）が簪ちゃんと親しくしていたから呪い殺してやろうとも思ったけど、そのお陰か簪ちゃんてば妙に男らしくなっちゃうんだもの、お姉さん簪ちゃんの勇姿を見てもう毎日がドキムネ抜刀斎よ！」
やっぱ、もっと徹底的に叩いて貰うべきだった。先程までとは嘘のようにテンションを上げてくる更識楯無に従者の虚は冷めた目で彼女を見下ろしていた。
しかし、元気を取り戻した彼女を見て、これはこれで良かったのかもしれない。相変わらず白河修司という人間は分からない事が多いが、今はそれよりも調子を取り戻した主を諌める事から始めようと思う。

◇

D月※日
おっはラッキー！　皆元気にしてるー？　白河教室を始めるよー！

……うん、初っ端からハイテンションで非常に気持ちが悪いなコレ、でもこういったテンションでないとやってられないんだよね。
結果的に言えば自分は――――現在捕まっちゃってますハイ。場所はとある山奥にある廃墟、吹き抜けの天井から綺麗なお月様が見えていますハイ。
事の発端は数時間前、久し振りに手料理をする為に商店街で買い物をしていたのだけれど、その最中突然一台のワンボックスカーが自分の目の前に現れ、中から銃器を突きつけて車に乗れと脅してきたのだ。
こうして聞くと、捕まるっていうかまんま拉致だね。確かにこの世界には女性権利団体やら女性主義者なる者達がいるとは知っていたけれど、まさか真っ昼間から人……しかも公衆の面前で実行してくるとは思わなかった。
蒼鴉の改修や整備ばかりしていたのでここの所休む暇も無かった自分に十蔵さんから有休を消化する意味も含め、今日は休みを取るよう勧められたのだが……それが見事に裏目に出てしまった。
しかも一般人を巻き込んでしまったし。……十蔵さん、気に病んでいるだろうなぁ。あの人も最近疲れているみたいだし、恩人である十蔵さんにはこれからも元気でいてもらいたいから手料理をする為の材料も買い込んだのに、全部パァになってしまった。
巻き込んでしまった五反田君にも申し訳が立たない。一夏君の友人である五反田君は完全に自分の巻き添えになってしまっている。幸い連中は自分にしか痛めつけていないので五反田君は無事な様子だが、いつ連中の八つ当たりに巻き込んでしまうか分かったものじゃない。
つーか、女性主義者やら女性権利団体とか知らないが、真っ昼間の公衆の場で銃器を使用してくるとか正気の沙汰じゃないよな。あの場で自分がＩＳを装着して抵抗することを想定していないのか？他にも大勢の人間が目撃していたし、通報される事も頭に入れてなかったのだろうか？
まぁ、それは今考えても仕方のない事だ。時計も奪われた事から正

確な時間は分からないが、空が暗くなっているから結構な時間が過ぎた事なのだろう。それだけ時間が経過しているにも関わらず学園側からの救助が来ていないという事は……恐らくは連中が何らかの手段で自分の情報を隠蔽しているのだろう。
色々考えるべき事はあるだろうが、まずは今の状況から脱する事を優先するとしよう。

◇

「あ、あの、白河さん、大丈夫ですか？」
暗がりの中にある廃墟、何処ともしれない山奥で手足を縛られ、身動きを封じられている少年こと五反田弾は自分の代わりに痛めつけられた白河修司の事を案じた。
１０分にも及ぶ女性集団からの一方的な暴行、蹴られ、殴られ、防御する事すら許されない彼はひたすら彼女達の理不尽な暴力を受け続けていた。
女性主義者。所謂ＩＳの恩恵を受けて女性こそが至高の存在だと思い込んだ者達。彼女達による蛮行を間近で目撃した弾は情けなくも身動き一つ取ることも出来ず、みすみす連中の人質になってしまっていた。
自分の所為で目の前の男に怪我を負わせてしまった。その罪悪感から修司を気遣う弾だが。
「えぇ、心配は無用ですよ。幸い手や足で殴られただけですから、然程大した傷ではありません。お気遣い、ありがとうございます」
その本人たる白河修司はケロッとした様子で壁に寄りかかっていた。しかもよく見れば手には日記帳らしきものがあり、どこから出したのかペンを手にスラスラと書き綴っている。
というか、いつのまにあの束縛された状態から脱したのだろうか。目の前の男には手錠や荒縄、様々な拘束具で身を固められたというの

に、まるでそれがなかったかのようにリラックスした状態で日記を書き続けている。
隣には拘束具らしきモノが残骸として落ちている。月の光でそれらを確認した弾はアングリとした様子で目の前の男を見つめていた。
すると、日記を書き続けていた男は徐に立ち上がると、日記を懐にしまい込んで辺りを見渡すと弾へと視線を映した。
「さて、そろそろ帰ると致しましょうか。五反田君の御家族も心配している事でしょうし、日付が変わらぬ内に退散するとしましょう」
「……え？」
突然言われた言葉に弾の思考が固まる。状況が理解出来ていないのか、それともやはり殴られた所為で頭がおかしくなったのか、修司の言葉によって混乱する弾。するとそこへ……一羽の梟が屋根の無い天井から降り立ってきた。
『マスター！』
「あぁ、アリカちゃん。来てくれましたか」
『来てくれましたか。じゃないですよマスター！　どうして私をすぐに呼んで下さらなかったのですか！　蒼鴉とマスターの力があればあんな奴ら三秒で挽き肉にできるのに！』
「こらこら、あまり物騒な事は言うものではないですよ。それにアナタと蒼鴉は宇宙活動を目的としたＩＳです。無人機相手になら兎も角、人間相手に使うわけにもいかないでしょう。それに向こうはＩＳを装備した者が何人かいるようです。戦闘に陥った時、被害を受けるのは此方の方ですよ」
『で、ですけど！』
「それよりも、アナタには彼をエスコートして欲しいのです。今外にいる見張りの気配はありません。裏側から通って山を下れば街に続く道へ出る筈です。お願いできますか？」
『え!?　そ、それは別に構いませんが……マスターはどうするつもりですか？』
「私は彼女達に少し用がありますからね。それが終わり次第私も合流しますよ。……ククク」

『……あっ、そ、そうですか』
含み笑いを浮かべる修司に何を察したのか、梟はそれ以上何も言う事はなく、弾の方へ視線を向けた。
『アナタが五反田弾さんですね。これからマスターの指示に従いアナタをエスコートさせていただきます。さ、行きますよ』
「え？　ちょ、ちょっと!?」
目の前の喋る梟に混乱する弾。状況に理解が追い付いていない彼を容赦なしにアリカは引っ張っていく。外見こそ鳥類に過ぎない彼女だが元がＩＳであるだけにその力は強く、何か言っている弾は抵抗出来ずに引き摺られる形で廃墟を後にする。
それから暫くしてやってきた複数の女性達。背後にＩＳを装備させた者達を控えさせた彼女らは下卑た笑みを浮かべて廃墟の中へと押し入ってきた。
廃墟にいたのは拘束していた筈の男が部屋の中央で空に浮かぶ月を眺めていた。しかも同じ部屋にいた筈の人質の男がいない事から、女性達はすぐに表情を一変させる。
「おいお前！　どうやって拘束具から抜け出した！」
「赤髪のガキもいないだと!?　どうなっている！」
「おい答えろ！　貴様、一体何をした！」
剣呑とした剣幕でまくし立てる女達、今にも手にした銃で発砲しそうな彼女達に白衣を身に纏う男は溜息と共に振り返った。
「その前に、幾つか聞かせて頂いても宜しいですか？　何故アナタ達は自分の主義主張をそうまでして押し付けるのです？　ＩＳを使えるのがそんなにも凄い事なのですか？　ここへ来てから何度か考えた事はあるのですが、どうしてもその答えが分からないのです。知っているのなら教えていただけますか？」
「はっ！　そんなもの、我々が選ばれた存在だからだろう。ＩＳは男性よりも女性を選んだ！　故に、女性が優遇されるのは当然の事だろう」
「選ばれたのはその人個人であって女性そのものではないと思うのですが。……まぁいいでしょう、それで？　何故アナタ達は私を誘拐し

たのです？」
「決まっている。貴様の存在は我々の世界に必要がないからだ。何がＩＳの男女共有化だ。そんなもの、断じて認める訳にはいかない」
「つまり自分達には都合が悪いから消す、と。では最後の質問です。――何故関係のない人達を巻き込んだ」
最後の質問で修司の雰囲気が変わる。無機質で機械的、されどその奥で眠るマグマの如き激情に女達は気付く事なく、修司の質問を鼻で笑った。
「何度も言わせるな。我々は女だ。最強であるＩＳに選ばれ、世界の舵を握った存在だ。寧ろ我々の道具となり役に立てたのだ。感謝こそされても恨まれる筋合いはない！」
「……そうかよ」
「言いたい事はそれだけか？　なら死ね。お前の存在はこの世界に必要のないモノだ！」
女が手にした銃、それが修司に向けられて銃弾が放たれた。真っ直ぐに伸びた銃弾が修司の額に向けて突き進んだ時――――突然暗闇が修司の前に広がり、銃弾を呑み込んだ。
「？」
目の前の修司に銃弾が命中していない事に女は首を傾げる。外したか？　そう思い女は二発、三発と続けて銃弾を放つが、いずれも修司には届かず、暗闇に呑まれる様に消えていった。
「な、なんだ？　何が起きている？」
「どうした？　私は立っているぞ？　さっさとその銃で私を撃ち抜いたらどうだ？」
「だ、黙れ！」
おかしい。何かがおかしい。間違いなく自分は銃を撃ち、その狙いは確実に修司を狙っていた筈だ。なのに、平然と立っている修司に女は言い知れない恐怖に包まれ、その恐怖を拭い去るように叫んだ。
「あ、ＩＳ部隊全機かかれ！　空からコイツを蜂の巣にしろぉぉっ!!」
女が廃墟から出て行くと同時に命令を実行に移したＩＳ部隊がその手に握られたマシンガンで上空から修司を狙い撃つ。軍用機体と

して知られる第二世代ＩＳ〝ラファール〟その機体から繰り出される銃器の威力は凄まじく、ものの数秒で廃墟をただの瓦礫の山へと変えてしまった。

これでは修司の死体は確認出来まい。既に肉塊となった修司を思い浮かべた女は高笑いを上げながら砂塵の舞い上がる瓦礫の山を指さす。

ざまぁみろと、女に逆らうからこんな目に遭うのだと、中傷的な暴言を吐く彼女がみたモノは……。

「どうした？　急に笑い声を出して、何か面白い事があったか？」

巨大な手に守られた修司の姿がそこにあった。

今度こそ、女達の思考は停止する。理解できない現象を前に……。

「あぁそうだ。一つあなた方に言い忘れていた事がありました。実は私はこう見えて短気でしてね。喩え相手が女性だろうと必要であるならば……」

〝グーで殴れる人間なのですよ〟

満面の笑顔でそう口にする修司、暗闇の奥から這い出る様に現れる巨大なナニカを女性達が目にした時。

幾つもの発砲音と断末魔が山奥に木霊するが、その数秒後――何の音もしなくなり、山は夜の静寂に包まれるのだった。

その３２

Ｄ月@日

女性権利団体の人達の襲撃を受けて三日、無事に弾君を家へと送り届けた自分は再び弾君達のいる五反田家に赴いた。理由は詳しい事情を彼の家族に話す為にある。

幾ら弾君を怪我なく送り届けたとはいえ、相手は真っ昼間から人を襲う集団だ。自分に巻き込まれた形になったとはいえ、今回の件で弾君が狙われる可能性もゼロではない。家に彼を送り届けた後、すぐに織斑先生に連絡を入れて政府に話を通し、弾君の家の周りを警護してもらった。

その後、女性権利団体の人達や政府の人達に話をしていた為に碌に事情を説明できず、今まで放置する形となってしまっていた。

弾君や五反田家の人達には本当に申し訳ないことをした。特に厳さんは食堂の店主という立場もあり、自分の説明にも終始表情をしかめていた。

まぁそれも当然だ。幾ら数人のＳＰが影ながら見守る程度の警護だからって四六時中監視されてたら誰だって気が付く、厳さんからしたら営業妨害に等しい行為だろう。

本当はもっと大々的に人員を動かして欲しかったけれど、諸々の事情があって数人程度しか動かせなかったのはキツい、弾君は一夏君の親友でもあるのだから、安全面はしっかりして欲しかったんだけどなぁ。

どうやら女性権利団体の連中は自分が思っていた以上に大きな組織らしく、あの日起きた昼間の事件は全て無かった事にされている。各メディアから政府中枢に至るまでとあらゆる機関に根深く存在し、裏側で色々手引きしているらしいのだ。今回の件について問い質しても彼女達は知らぬ存ぜぬの一点張りで此方の話をまるで聞こうともしなかった。

しかも、連中はＩＳ学園にもある程度の発言権があるらしく、あま

りしつこいと学園に圧力を掛けるぞと遠回しの脅迫をしてきやがった。

何者からも干渉される事は条約で禁止されている筈なのに……もう、権利団体というより一種のカルト教に思えてしまっていた。最終的には何も起きていないのだから五反田家を警護する正当性がない。

連中の代表格の女性は自分にそう言い切ったのだ。これには流石の自分もプッツンしそうだったが、ここでキレては向こうの思う壺と思い、情けないと思うもグッと堪えることにした。

けれど、それだけで済ませるには自分は兎も角として五反田家の皆さんとしては納得がいかない所があるだろうと思い、巻き込んだ事に対するせめてもの償いとしてアリカちゃんを監視役として五反田家の皆さんの所へ送った。

並のＩＳならばアリカちゃんだけでも対応できるし、万が一連中が強行手段をとっても通信で自分に連絡が来るよう教えたし、此方でもある程度の状況把握が出来るようにしてある。何よりも弾君と触れ、話をしたことで自分や一夏君以外の男性についてある程度理解したアリカちゃんは限定的でありながら他の男性とのＩＳの使用制限を解除できる様になっている。

いざというときは弾君が蒼鴉の使用者になって貰うつもりだったが……幸いそう言った出来事はなく、自分としてはホッとしていたりする。

ともあれ、五反田家の人達に多大な迷惑を掛けてしまった自分は頭を下げて非礼を詫びてこれからも監視と警護を継続するというお願いと事情説明を行った。

幸いにも五反田家の皆さんは人柄の良い人達ばかりで、戸惑いながらも自分の説得に応じてくれた。厳さんもＳＰの人達に関しては店の料理を食べてくれたり、時々手伝いをしてくれるなら何も言うことはないと聞き入れてくれた。

ＳＰの人達にも自分がお願いをすると意外にも聞いてくれた。彼等も自分の仕事に対して誇りを持っているようで、任せて下さいと張り切ってくれていた。女性権利団体というふざけた連中もいれば、こ

うして助け合ってくれる人もまた存在している。トレーズさんみたいな事を言うつもりはないが、人間の世の中というのはままならなくも暖かみのあるものだとシミジミ思う自分でした。

そうそう、あの日自分達に襲いかかってきた女性権利団体の刺客達が有していたＩＳ、そのコアは無事抜き取ったのでコレを使用してオーライザーの作成に入ろうと思う。

向こうから何も知らないと言っていたし、この三つのコアは自分が散歩していたら偶然見つけたという事にしておこう。その方があちらさんにとっても都合の良い話だろうしね。返還を求めてきた場合は何故自分が持っているのかと逆に問い詰めればいいだけだし。

それでも難癖付けてきた場合は……まぁ、その時は本気で考える事にしよう。

しかし、ゴーレム襲撃の時の１３個のコアと今回の三個、更に海に沈んだコアも回収中だから今後はもっと増える事になるな。アリカちゃんは姉妹が増えて嬉しいと喜んでくれていたけれど……日本政府の皆さんは大変だろうなぁ。一応あそこは学園の敷地内の範囲らしくて今の所余所の勢力が干渉してくる様子はないが、早いところ全部回収してしまおうと思う。

それにしても弾君か。一夏君同様、彼も好青年みたいだし、今度個人的に何らかのお詫びをした方がいいかもしれない。自分の身を守ると言う意味でも何か自衛装備でも作ってみようかな。

弾君はシューティングゲームが得意みたいだし、それをコンセプトとした装備……となるとケルディム辺りの装備がいいかな。まぁ、流石に今すぐは無理だから彼に対する非礼の詫びは今後時間のある時にチョクチョク進めていこうと思う。

さて、明日も早い事だし、そろそろ眠るとしよう。明日は道端に落ちていた三つのＩＳについて調べなければいけないから。

襲い掛かって来た女性達？　さぁ？　自分は何の事やら……ただ、そろそろ寒くなってくる季節だし、この時期の太平洋横断は中々気骨のある人達だなとだけ言っておく。

しかし、織斑先生達にも申し訳無い事をした。自分が不甲斐ない所

為で先生方にも迷惑を掛けたし、十蔵さんにも余計な気苦労を与えてしまった。こんな事がもう起こらないよう、女性権利団体の人達とは近い内にケリを付けておこうと思う。

そう言えば、自分が拉致された所から学園に戻ってくる時、弾君を家に送った後一人の少女が自分に声を掛けてきたんだよね。月明かりに照らされてラウラちゃんみたいに綺麗で長い銀髪が印象的だったから今も覚えている。

その時の自分は襲われた事もあり少しばかり気が張りつめていたから名前以外覚えていないのだが、確か……クロエちゃんだったかな？　彼女にも悪いことをしたなぁ。一言だけとはいえ思いっきり怒りをぶつけちゃった訳だし。

何だか彼女、自分に用があるみたいだし、今度会う時があればちゃんと謝ろうと思う。

D月（・д・）日

今日、織斑先生から護衛につける人間について幾つか話をされた。何でも先の拉致事件で深刻な状況と考えている一部の先生方が自分を警護する人間を付けたらどうかと意見を出している様なのだ。

……もうね、申し訳なくて頭が上がらないよね。心配掛けた事もそうだが、こうして自分の事を気に掛けてくれている学園の皆にはどんなに言葉を尽くしても足りない様な気がする。

織斑先生の気遣いは普通に嬉しいし、有り難い気持ちも当然あるのだけれど、その心配は一夏君に向けて欲しいと言い自分は織斑先生の提案をやんわりと断る事にした。

今回の拉致事件……実際は何も起こらなかったと闇に葬り去られたが、それでも女性権利団体の連中からしたら面白くない話みたいだし、今後は八つ当たり気味で一夏君まで狙う可能性もある。だから彼を鍛える意味でも腕利きの人間を彼の側に置いておくといいだろう。

特に生徒会長である楯無ちゃん。彼女ならば一夏君の良き指導者になれるし、彼女の影響を受けて他の生徒達の良い刺激にもなるだろ

う。ラウラちゃんも楯無ちゃんの腕前を賞賛していたし、簪ちゃんもＩＳの操縦指導は大したモノだと素直に認めていたのだから、期待も自然と大きくなる。

自分はほら、こう見えて破界事変や再世戦争をどうにか生き抜いて来たし、その気になればワームホールで脱出なり逆襲するなり出来るから心配はいらない。いざという時になれば蒼のカリスマにでもなってグランゾンを出せば良いだけだし、一人でも大抵の状況はどうとでもなる。

というか、一人でないとその手段が使えないんだよね。他の人と一緒だと余計なリスクを負いかねないし……。

――――あれ？　もしかして俺、自分からボッチになりに行ってるんじゃ……。

……。

ま、まぁそんな訳でひとまず護衛の話は断る事にしたのだし、暫くは外出を控えて学園内で大人しくしておこうと思う。

自分の身を案じてくれて護衛の話を出してくれた先生方には後日食堂で自分の手料理を振る舞う事で謝罪と感謝の言葉を送りたいと思う。

Ｄ月（っ、ω、ｃ）日

今日、散歩の途中で手に入れたＩＳコアを解析していた所、アリカちゃんと同じく意志を持った電子生命体の少女と遭遇した。

名前はアミカちゃん。アリカちゃんと同様ＡＩの頭文字からとってこの名前を付ける事にした彼女はアリカちゃんとは違い、おっとりした天然っぽい女の子だった。

目覚めて間もない所為でその時は話の殆どは聞けなかったが、どうやらアリカちゃんとは事前にコアネットワークで知り合い、ある程度自分の事について聞いていたらしくて自分に協力すると自ら申し出てくれたのだ。

そしてアミカちゃんが完全に覚醒した後、彼女をオーライザーに搭載させるか否かアリカちゃんを交えて話をしてみたら、なんと即答で

了承を貰えた。
何でも前のＩＳに搭載されていた頃は乱暴に扱われていた事をうろ覚えながら記憶しているらしく、戦闘に関与しない自身の待遇に満足し、自分の計画に協力してくれるそうなのだ。
しかもアリカちゃんと協力してコアネットワークを通して学園内のコアに男性について教えてくれそうなので、そちらの方も大変助かる事になった。
ただ、学園の所有物を勝手に使用するのは流石に拙いので織斑先生を初めとした先生方にも事情を説明して学園の訓練機、打鉄とラファールに搭載されたコアのネットワークを介した接触の話をする事にした。
織斑先生や山田先生といった一部の先生にしか伝わっていなかったＩＳコアのネットワーク事情。最初の内は納得していなかったのか殆どの先生達が眉間に皺を寄せていたが、自分が懸命に説明している内に皆理解してくれて結果的には許可を頂く事に成功した。
ただ、訓練機を使用する際は放課後に限り、その時生徒達とぶつかった時は自分達で話し合って決めるよう条件を付けられた。
別に自分としては構わない。寧ろ、学園の所有物を自分にも使わせてくれた事に対して嬉しさと罪悪感のある自分としては万々歳である。アミカちゃんもこれからオーライザーの制作に協力してもらう事になるし、訓練機のネットワークに接触する時は諸々片付けた後になりそうだ。
しかし、毎回織斑先生にはお世話になっているし、そろそろ自分も何かしらお返しを考えた方がいいのかもしれない。前の時のような他の先生方に振る舞った手料理も良いかもしれないが、織斑先生には特に負担を掛けさせてしまっているみたいだし、もっと手の込んだ料理を振る舞うしかないのか。
無論山田先生も、最近また疲れた顔をする時が多いみたいだし、何か元気の出るモノを差し上げた方がいいのかもしれないな。
……そう言えば、一夏君てば誕生日を既に迎えているんだよね。ここの所忙しくて彼の訓練にも顔を出せていなかったし、プレゼント

を渡す序でに彼の成長ぶりを見に行こうと思う。
学園の防衛システムもネットワーク面では完成したし、息抜きも兼ねて明日はゆっくり休んでもいいかもしれない。

その３３

Ｄ月（。Д。；）日

修学旅行まであと一ヶ月を切り、一年生の皆も修学旅行を期待で胸を膨らませていた今日、自分の目標の一つである学園の防衛システムが遂に完成した。尤も、ネットワーク等の電子面は兎も角として防衛の為のバリアシステムの方は借りられる訓練機に限りがある為に稼働範囲は限定的なモノとなっているのだけどね。

訓練機に搭載されたＩＳコア同士による連結と、その相乗効果によって生まれるバリアフィールドシステム。本当なら完成までもう少し時間が掛かると思われていたが、電子生命体のアミカちゃんが覚醒した事が大きな起因となっている。

アリカちゃんだけでは他の訓練機への対話する期間は長かったのだが、アミカちゃんという新たな因子が対話に加わった事により、説得力が大いに強まって訓練機のＩＳコアも協力的になってくれたのだという。

学園側から借りた訓練機は三つ、アリーナに使用許可を貰い早速試験運転を行った所……見事に防衛としての機能を発揮させる事に成功した。

ＩＳコアの連結させた事による相乗効果を受けたシールドバリアの強度は中々で、一年の専用機持ちの子達が総掛かりで攻撃してもビクともせず、またシールドエネルギーの方も三機がそれぞれ補い合っている為、消費量の方も最低限のモノとなっている。

唯一例外となっているのが一夏君の専用機、白式に搭載されている雪片弐型のシールド無効化攻撃なのだが、ラウラちゃんの専用機によってその問題は解消された。

ラウラちゃんのＩＳ、シュヴァルツェア・レーゲンにはアクティブ・イナーシャル・キャンセラー――通称ＡＩＣ、または慣性停止結界と呼ばれ、これは元々ＩＳの基本システムであるＰＩＣを発展させたもので、簡単に言えば物体が運動する際に生じる慣性を停止させる能

力で、これによりミサイルやマシンガンといった実弾系の武装に対して絶対的な効力を発揮する。
慣性を止められるのでその効力はＩＳだけではなく全ての事象に適応されるし、一度捕まれば蒼鴉ですら抜け出すことは難しいだろう。欠点があるとすれば停止結界の発動中は身動きが取れない事と光学兵器には弱いという事、それと停止させる対象が一つだけというものだが、それは乗り手の腕と機体の出力次第でどうとでもなる為、あまり問題にはならないと考えている。
そんなシュヴァルツェア・レーゲンを組み込んでの稼働実験、それによって齎した結果は中々面白いモノとなった。これまで攻撃を防ぐだけだった三機のシールドバリア、そこへラウラちゃんのＩＳが加わった事によりある変化が起きたのだ。
僅かではあるもののＩＳのシールドバリアの中からＡＩＣ、即ち停止結界と同様の性質をもったエネルギー数値を検出されたのだ、
原因は恐らくシュヴァルツェア・レーゲンという新たな情報を得て電子生命体が学習し、ＡＩＣの再現をＩＳを通して試みたと考えられる。
ＡＩＣはＰＩＣの発展型、基本構造が似ていると思い、コア内部にいる彼女達がラウラちゃんの専用機の真似を試みたのだと思われる。
今回の試験運転で得られた結果と情報を多く得られた。ラウラちゃんの助力のお陰で今後自分の想定する防衛システムは大きく変わる事になるが……まぁ、これもＩＳの更なる発展を思えば安いもの、オートマトン達の力を借りながらやり遂げてみようと思う。
理想的な構造はＡＩＣ、シールドバリア、そして絶対防御による三段階層の防御壁。今回の件で絶対防御の稼働限界時間も大幅に引き延ばせる可能性も出て来たし、本当に今回の試験は色々為になった。
ただ、その為に三機の訓練機に少しばかり不具合が起きた。どうやらラウラちゃんの専用機と無理に結合しようという意志が働き、三機ともオーバーブロウ――――過剰出力によるちょっとした熱暴走を起こさせてしまった。
アミカちゃんとアリカちゃんが言うには三機――いや、この場合は

三人か――が、目を回して気絶しているだけで大事はないと言っていたが、自分は少しばかりハシャギすぎたなと猛省する事にする。
彼女達は電子〝生命体〟だ。アリカちゃん達のようにコア内部でも怒ったり笑ったりしている。自分が行っている実験は人体実験と変わりないのだ。
故に、今度はもっと安全性を高めていこうと思う。使用する人間に対してだけではなく、コア内部に存在している彼女達の事も考えた上で……シュウ博士からは甘いと言われたが、自分はこのスタンスを崩さないようにいこうと思う。
そういえば、ラウラちゃんのＡＩＣってドイツが開発したシステムなんだよな。今度ロジャーさんの所へＡＩＣの使用……いや、応用か？　それの許可を貰いに行った方がいいかもしれない。
ラウラちゃんからは許可を貰ったけれど、やはり国家の代表候補生なのだから国家元首にも説明をした方がいいだろう。筋を通す的な意味も含めて。
それに、あれからドイツ国内では結構揺れているみたいだし、そこら辺の事も含めて話を聞きにいってみようと思う。一応自分が原因だしね、そういう意味でも話をした方がいいだろう。ロジャーさん自身とも話をしてみたかったし。
新たに生まれた今後の課題、そこにやりがいを感じながら今日はこれで終わりにする。

Ｖ月（、日、）日
それは数日前、用務員の仕事がお休みの為に午前中から蒼鴉のデータ取りとオーライザーの制作作業に入っていた時、途中で一夏君の来訪によって作業は中断される事になった。
何でも一夏君のＩＳは度重なる戦闘によってダメージが蓄積されているらしく、あまり良くない状態らしいのだ。このままでは大事に至る可能性が出てくる為、急遽自分の所にメンテナンスを頼む事にしたのだという。
自分としてはいっこうに構わないのだが、一夏君の白式は倉持技研

のモノだ。自ら誘いを断っておきながら余所様のＩＳを勝手に触れるのは抵抗があったが、一夏君が言うには、そこら辺は織斑先生が話を付けてくれたらしく、自分が白式のメンテナンスをしても構わないという許可が予め出ていたのだという。

恐らくは自分がどの程度ＩＳに詳しいかお手並みを拝見させて貰う的な思惑が絡んでいるのだろう。資格を取ったりコアを頂いたりしているが、未だにＩＳの発表とかしていない事が一部の人間に反感を抱かせているのだろう。

謂わば、今回のコレは一夏君の機体の整備を通して自分の技術者としての腕前を確かめる抜き打ちテストみたいなものだ。

だったら全力で挑むしかないなと自分は意気込み、オーライザーの作業は一時中断にして自分は白式の整備をする事にした。

急な事だった為に突貫作業となってしまったが、それでも集中して整備を行った為、かなりの出来映えであると自負している。

外装をすべて外しての徹底整備、日数にして約四日程の時間だが、オートマトン達やアリカちゃん達の協力を得て、最高の仕上がりとなった白式。

それに、今回はサプライズとしてあるモノを一夏君の白式に仕込む事が出来た。コアとの適合率も問題ないし、稼働する事も出来るだろう。

〝サイコフレーム〟月にいた頃に偶然の産物として生まれたソレはＩＳのまるまる一機分だけ精製する事に成功した。このサイコフレームなら一夏君の白式も最大限の……いや、それ以上の性能を誇る事が出来るだろう。

かなり遅れた一夏君への誕生日プレゼント。その説明は一夏君がサイコフレームを発現させた時に話す事にしよう。

……あー、ダメだ眠い。流石に丸四日一睡もしないのは流石に堪える。これまでもあまり睡眠時間は取らなかったし、コレを気に少し眠ろうと思う。

まだ夜の１０時だし、明日の朝までゆっくり眠ろうと思う。

おやすみなさい。

◇

――――私は、篠ノ之束様の人形。あの人に命を救われた時から私はあの人の為にすべてを費やしてきた。

あの人の為なら単独で各国の主要基地に潜入し、破壊工作もしよう。あの人の役に立てるのであれば今水面下で動いている亡国企業にも特攻しよう。ありとあらゆる存在があの人の前に立ちふさがるのならば、私はそれを破壊する爆弾にもなろう。

……だけれど、アイツはダメだ。白河修司。あの男は私たちの理解の外側にいる存在だ。紫炎の様に揺れる頭髪、白衣の下から見える肉体は幾つもの死地を潜り抜けてきた戦士のソレ。

だが、奴を奴たらしめているのはそんなモノじゃない。奴の背後にいる〝モノ〟それこそが奴の本性であり奴の真の姿だ。

アレの前では現存する全ての兵器は無力となる。核も、ＩＳも、奴が出て来た瞬間全てが無価値となる。

……束様はアレの存在を知っているのだろうか。もし全てを知っていてアレと敵対するのなら、正直私程度では役に立てる自信がない。

アレは魔なる者だ。アレも、そしてアレを使役する白河修司も、揃って人の枠組みから外れた人外の者達だ。

幾ら女性権利団体の連中を焚きつけても意味が無かった訳だ。あんな化け物、逆立ちしたって勝てるものではない。私の生体ＩＳを通して知ったあの光景、私は生涯忘れる事はないだろう。

私に出来ることはただ一つ、束様の為の刃や楯、爆弾になるのではなく、一日も早くあの化け物がどこか遠くへ行ってくれる事を……願うばかりである。

その３４

Ｍ月α日

一夏君の白式を整備して早三日、あれから時間があれば一夏君の様子を見に行っているが、白式は特に問題なく稼働している。

ただ一夏君が言うには反応速度がこれまでとは桁違いに速くなっていると戸惑っているらしく、馴れるのに時間が掛かりそうだと愚痴をこぼしていた。けれど一夏君もＩＳ学園で学んだり鍛えたりしているから適応能力は高く、白式の反応速度に徐々に対応している。

鈴音ちゃんやセシリアちゃんといった専用機持ちの子達に対しても勝ち星を増やしてきているし、この分だと白式に搭載されたサイコフレームの発現も近い内に見られる事だろう。

箒ちゃんも臨海学校が終わってから紅椿での訓練に余念がないし、剣道の腕前も更に磨きが掛かっているようで、近い将来生身の戦闘では楯無さんに迫るのではないかと囁かれている。

簪ちゃんに至ってはいつの間にかお姉さんと仲直りしたのか、楯無ちゃんと時折模擬戦をしているのを目にしている。未だに勝つことは出来ていないけれど、偶に良い感じに追い詰める所があるので、これからもその調子で頑張って欲しいものである。

いやー、やっぱり学生が頑張っている姿を見ていると励みになるよね。なんというか元気が貰えるっていうのかな？　最近じゃあアリーナで用務員の仕事をしながら観戦しているとついつい見入ってしまう時があるんだよね。

一夏君達から元気を分けて貰えた事で用務員の仕事を早めに終わらせ、今日は作業の途中だったオーライザーの制作作業を行う事にした。

オーライザーは蒼鴉のツインドライヴシステムとアリカちゃんのＩＳコアの連動率を安定させる為の制御装置みたいなモノ、常に各システムのバランスを調節しながら造り上げなければいけないので作業中は凄まじく神経を使う為、終わった後はいつも疲弊しており、必ず１０分以上の休憩を挟んでいる。

ソレスタルビーイングのイアンさんもこんな過酷な作業をしてきたのだと思うと、やはり多元世界の技術者の人達は凄いと思い知らされる。

けれど、オートマトン達やアリカちゃん達の協力もあってどうにか完成に近付く事が出来た。後は蒼鴉と連結させて実際にトランザムとＩＳコアを同調させ、調整と調節を繰り返すだけ。

漸く見えてきた一つのゴール。けれど同時に大事な場面である為、より一層気を引き締めて行こうと思う。

Ｍ月（＊゛ω、＊）日

オーライザーの制作作業もいよいよ大詰め、明日に蒼鴉との連結稼働試験を控えた今日、意外な人物がＩＳ学園に訪れてきた。

ロジャー＝アルベルト。ドイツの首相さんで何でも自分に用があるといってお忍びでＩＳ学園にやってきたのだ。

国家元首のいきなりの登場に当然学園の生徒達も驚いていたが、織斑先生を初めとした先生達が上手く対応してくれたお陰で、あまり騒ぎになることはなかった。あの様子だと事前にお忍びで来る事を知っていたのだろう。修学旅行も近いのに……ホント、お疲れ様です。

ロジャーさんもお忍びで来たという事もあって情報管理は徹底しており、ロジャーさんがここに来ていることは一部の人間以外知られていないそうなのだ。といっても、護衛の一人も連れてこないのは流石に拙いのでＩＳを扱える女性を二人ほど私服姿で連れてきているらしい。

その内の一人がラウラちゃんの部隊にいるクラリッサさん。黒兎隊の副隊長を務める彼女はラウラちゃんと同様に凛とした佇まいでロジャーの側に控えていた。

その後、ロジャーさんが学園内を一通り回った後に自分の借りている整備室に訪れると、いきなりお礼を言われてしまった。

何でも自分の送った例の資料が決定打となり、ドイツに巣くっていた膿の多くが一掃されたのだという。今までは内政の編成作業に追

われていて碌に礼を言うことは無かったが、先日それが終わり、新たな議員連盟を構築出来たのだという。ひとまずの決着も終え、一日だけ時間を作る事が出来たロジャーさんは自分に礼を直接言いたい為にワザワザ日本のＩＳ学園に訪れたのだという。

なんともまぁ律儀な人だよな。自分は通信越しで済ませようと考えていたのにワザワザ自分の所に来るなんて……けれど、そんな人だからこそドイツでの支持率が高いのだろう。ロジャーさんから言い渡されるお礼の言葉を自分は素直に受け取る事にした。

……まぁ、元々は自分がドイツのネットワークにハッキングを掛けたのが原因な訳だから気持ちとしては少し複雑なんだよね。後悔はしてないけど。

その後、色々談笑した自分はロジャーさんにあるお願いをする事にした。内容はラウラちゃんの専用機であるシュヴァルツェア・レーゲンに搭載された停止結界についてだ。

あの機能は宇宙活動だけでなく様々な地形と状況に対応できる応用力が秘められている。あの技術の一端を自分にも是非扱わせて欲しいというモノ。

以前にも記したがシュヴァルツェア・レーゲンはドイツの専用機だ。幾らラウラちゃんから許可を頂いてもそれはラウラちゃんが許せる範囲の事であって自分が何でもしていいという訳ではない。もし自分がＡＩＣ搭載型を自作してドイツにとってそれが良くないモノだと判断すれば、許可を出したラウラちゃんに全責任を背負わせる事になるのだ。

だからドイツの国家元首であるロジャーさん自ら許可を頂きたいのだが、今回ロジャーさんは非公式としてＩＳ学園に来ている為、あまりそういった確約は出来ないとの事。流石にいきなりは無理かと思われたが、ロジャーさんは明日自分が行う蒼鴉の試験運転を見学し、その出来映えを見たら約束しようと言ってきた。

ロジャーさんはＩＳ……というよりメカ的なモノに目がなく、整備室に置かれた蒼鴉を見て蒼鴉の動く姿が見てみたいと言ってきたのだ。

まぁ、トランザム使用の前にまずは蒼鴉には準備運動もさせたかったし、調度良いタイミングと言えた。とは言え、蒼鴉はまだ完成されていない機体なので記録に残る様な行為だけはしないで欲しいと注意し、ロジャーさんの話を受ける事にした。

しかし、ロジャーさんも中々話の分かる人だ。蒼鴉の武装の一つである牙鐵を見てああも目を輝かせるとは……やはり、ロマン武装は世界の境界線を越えて全男子の憧れなのだなとシミジミ思うじぶんだった。

さぁ、明日はいよいよ蒼鴉とオーライザーの試験運用だ。気合いを入れて頑張るとしよう。

M月（（（（；。Д。））））日

一言で言うなら、今日の蒼鴉とオーライザーとの連結稼働試験は成功した。それはもう大成功と呼べる程に。

ロジャーさんや織斑先生、クラリッサさんといった護衛の人を含めて行われた今回の実験、特に怪我人等は出ずアリカちゃん、アミカちゃんと言った電子の方でもこれといった変化はなく、試験は順調に進み、順調に終了した。

オーライザーを介してのＩＳコア、並びにツインドライヴシステムもコレと言った拒絶反応もせず、アリカちゃんとアミカちゃんが上手くツインドライヴと合わせてくれたお陰で、実験自体は頗るよかった。

ただ……ね、ツインドライヴとオーライザーによって齎されたＧＮ粒子が予想以上に多く噴出され、学園が一時オレンジ色の光に包まれちゃったんだよね。

特にそれらしい問題は起こらなかったが、突然学園が光に包まれた事により生徒達は軽いパニックになり、授業は一時中断、色んな先生方に迷惑を掛ける事になってしまった。

その後はＧＮ粒子の影響で全校生徒に体調不良を訴える人はいないか調査を行う事にして、今回の実験は終了。ロジャーさんも凄いモノが見れたと終始ハイテンションのままドイツに帰国、色々騒がしい

日となってしまった。
全校生徒に関しては近い内に身体測定が行われるのでその時についでに調べるよう織斑先生から言い渡された。今回の実験で多くの人達に迷惑を掛けた事になってしまったが、実験自体は大成功という事で今は納得する事にしよう。
後は細かい調整を何回か行い、テスト運行するだけである。取り敢えず今日はアミカちゃんとアリカちゃんにお疲れ様の言葉を送り、今日はこれで終了することにする。

そして、修司の自作ＩＳ蒼鴉。それが本当のお披露目を迎えた時、世界はまたもや大きく揺れ動く事になる。

◇　登場人物、並びに登場ＩＳの紹介

登場人物紹介

・白河修司

本編の主人公。多元世界から時空震動にＩＳが主流となる世界へ転移し、多少は戸惑いもするがすぐに順応。現在はＩＳ学園の用務員兼技術者（本人はなんちゃってと呼ぶ）として働いている。

基本的に一般人としての感性を持ち合わせているが、こと技術面と身体能力面に関しては多元世界にいた所為か若干（？）ズレが生じており、無自覚のまま日常的に色々やらかしている為、ＩＳ学園にいる教師達は皆胃痛に苛まされている。

普段は温厚な性格で誰にでも対等に接するが、理不尽な暴力を揮ったり、無闇に人の自由を縛り付けたり、更には勝手に利用する者がいたりすれば容赦はなくなり、相手の態度が余りに度が過ぎる場合『Ｇ』を使用して事象の彼方に送る事も辞さないつもりでいる。

雇ってくれた轡木十蔵と織斑千冬や山田真耶を始めとした教師達には普段から世話になっている為、時折自慢の手料理を振る舞っているが、それが彼女達の更なる胃痛の源になっているとは本人は気付かない。尚、最初に振る舞った麻婆豆腐の犠牲者となったのは山田。

自身の制作したＩＳ〝蒼鴉（ブルー・レイヴン）〟は宇宙活動を目的としたＩＳである為、競技や軍用に使用される時はロックが掛かる様予め仕掛けを施している。コアに眠っていた電子生命体アリカからはマスターと呼ばれ、本人は束を差し置いて主と呼ばれる事に若干の抵抗を感じている様子。

現在は学園の防衛システムとゴーレムのコアの回収に時間を費やす毎日を過ごしている。用務員としての仕事も行っている為、休む暇は殆どないが、多元世界の時のような殺伐とした世界ではない為、本人は楽しみながら日々を謳歌している。

因みに、ドイツの国家元首であるロジャーとはメカの趣味で意気投合し、結構仲の良い間柄となっている。また防衛システムの完成の他

にオートマトン達の別ボディの作成と完成を目標にしている。
これまで比較してきた者がいずれも桁外れな存在の為、感性の一部分がおかしくなっている。彼の行動を止める者は果たして現れるのだろうか？
現れない。

・織斑一夏
原作の主人公。偶然ＩＳを動かしてしまった史上初の男性ＩＳ操縦者。当初の頃はいきなり男子禁制の女子校に編入された事に戸惑いと肩身の狭さに悩んでいたが、歳の近い修司の存在によってその悩みは解消される。
最初の頃はＩＳの操縦には義務感に近い思いで行っていたが、自分の為にあれこれ尽くしてくれた修司と幼なじみの箒に報いる事が出来ずに敗北したのを切っ掛けに以来ＩＳとは真摯な態度で接し、授業中も積極的になり、肉体的鍛錬も良く剣道場を使わせて貰っている。
クラス委員に抜擢されている為、正式な部員ではないが、来年度は本格的に剣道部に入ろうか考えているとの事。何事も直向きに努力を続けている彼の姿に幾人もの乙女が恋心を抱いているが、本人は自身の腕前を上げる為に必死であるのと凄まじく鈍感な為に彼女達の想いに気付く事はない。
専用機となるＩＳは白式。武装は雪片二型と呼ばれる近接戦闘の武器一つのみ。しかし修司の助言により独自の戦闘方法を身に付けた事により、その性能を最大限に引き出し、国家代表候補生と互角に渡り合ったりするなどめざましい成長を遂げている。
特に修司の整備を受けてからは機体性能が飛躍的に上昇し、最初は戸惑いこそしたものの、自分の思った通り以上に動ける様になった白式に新たな可能性を見出し、今なお成長を続けている。
――――彼が人類の革新者になる日も近い。
かもしれない。

・篠ノ之箒

所謂武士娘で融通の利かない場面も最初の頃は多々あったが、学園での一夏の変化と修司の助言によりその暴力性はなくなり、ここ最近では良く笑顔を見せる様になった。

また想い人である一夏に対しても驚く程に素直になり、現在は彼女が一歩リードしている様子。料理の腕前も回を重ねる毎に上手くなり、最近は恋敵である鈴音からも中華を教わるなど強かさを持ち合わせるようになった。いつかは姉や両親に自分の料理を食べて貰うことが現在の彼女の目標である。

一夏の病的なまでの鈍感さに最初の頃はヤキモキしたが、修司の助言によって視野が広くなった今では心の余裕を持つようになり、他の女の子と仲良くしても嫉妬する事はなくなった。

今の彼女を一言で表すなら〝武士の性質を持った大和撫子〟である。

けれど、そんな彼女も学園祭以降は少しばかり挙動不審となる。特に修司を前にすると動揺が激しくなったりするなど大和撫子とは思えない姿となっている。現在は落ち着きを取り戻しているが、どうしてああも取り乱していたのかは今も謎のままである。

専用機は第四世代型の紅椿。白式の雪片二型の技術を下に全身を展開装甲にしている為、その性能は極めて高い。現在は紅椿の全性能を引き出す為に日々努力をしている。

・セシリア＝オルコット

イギリスの代表候補生。亡き両親が遺した遺産を守る為に戦い続け、自らの実力で代表候補生にまで登り詰めた実力者。過去の出来事で男性に対し強い嫌悪感を抱いていたが、ＩＳ学園にて一夏と修司と出会いその考えを改める様になった。

専用機はブルー・ティアーズ。蒼い雫の名を冠する機体で、武装は遠距離タイプのスターライトｍｋⅡと全方位の攻撃が可能なＢＴ兵器を使用している。

修司がドラグーンみたいな兵装だという事でストライクフリーダ

ムの戦闘データを加工して渡したが、スーパーコーディネーターの戦闘データが参考になる筈もなく、依然として有効活用される事はない。修司本人も改めて見直してみたところ、どちらかと言えばケルディム（最終決戦仕様）と気付き、ちょっぴり後悔している模様。

箒同様一夏に恋する乙女だが、一夏自身が凄まじい鈍感の為にその想いが届く事はない。しかし、懸命に物事に打ち込む一夏の姿勢に恋を抱いているのもまた事実な為、諦めずにアタックを仕掛けている。

因みに、一度修司から料理を教わり、その時にもの凄く怒られた事から料理をする時はレシピに忠実に従う事と味見をする事を誓っている。後にそれが一夏の胃袋を救う事になる。

・シャルロット＝デュノア

フランスの代表候補生であり、デュノア社のご令嬢。当初は一夏に近付く為に男のフリをしていたが後に日本に帰化し、日本政府に身を預ける事で今後の安全を約束し、これにより女子として学園に再編入する事になる。

ある意味修司の巻き起こす騒動から一番離れた位置にいる人物だが、彼女の専用機であるラファール・リヴァイヴに搭載された楯殺しに興味を抱かれてロックオンされている。

また学園祭の時に修司の身体能力を間近で目撃し、箒同様に一時期情緒不安定な時期がある。

・ラウラ＝ボーデヴィッヒ

ドイツの代表候補生。現役の軍人で嘗ての織斑千冬の教え子だった人物。自身の生まれと環境、そしてそこで自分を教え、鍛え、導いてくれた織斑千冬に心酔しており、それ故に彼女の栄光に傷を付けたと見なして一夏には当初絶対的な敵意を抱いていた。

タッグマッチトーナメント戦を経て一夏とは和解しているが、一夏を嫁と称して隙あらば一夏の部屋へと潜り込もうとするが、寮長である千冬に折檻されて以降自重する様になった。

当時のラウラは修司の事を有象無象の一つと断じていたが、彼の起

こす騒動によりその見方は変わり、学園祭での事件を最後に彼女は修司を千冬同様絶対に逆らってはいけない人間の一人に認定。
以前巻き込んで怪我をさせた事を思い出した時は本気で自害する覚悟をしていた。
また、自身の専用機であるシュヴァルツェア・レーゲンに搭載されているＡＩＣ……停止結界が今後の学園の防衛システムの要になると修司から言われ、度々彼の手伝いをする事になる。
その時、お忍びで学園に訪れていたロジャーから直々に我が国の為に頑張ってほしい等と直々の言葉を受けているため、その日以降、彼女の胃も教師陣と同じように痛める日々を送ることになる。

・凰鈴音
中学の代表候補生で所属は二組。元々は日本に住んでおり、一夏のもう一人の幼なじみの少女。臨海学校の時に海で溺れ掛けて一時気を失い、修司に人工呼吸として初めてのキスを奪われる事になる。
しかし、修司本人がアレは人命処置だと強く言っている為、彼女もその事に関しては触れないようにし、ノーカンという事にしている。
専用機は甲龍。空気を圧縮させて放つ第三世代の兵装を備えており、これは修司のＩＳである蒼鴉の武装〝牙鐵〟のヒントにもなっている。
普段は誰に対しても態度が大きいが、千冬と修司に対してだけは態度を変える。本人曰く〝本能がアレに逆らうなと叫んでいる〟との事。

・更識簪
所属は四組で日本の代表候補生。当初は姉の楯無の影響で鬱屈とした性格だったが、修司のお節介により立ち直り、彼の助言と渡されたデータ、そして特殊な合金を使用して自らの手でＩＳを完成させる事に成功し、日本代表候補生の更識簪をスタートする事ができた。
早い段階で専用機が完成され、学園の行事にも参加する事が出来た為、一夏に対してさほど嫌悪感は抱いておらず、割とあっさり和解す

る事になる。彼女の専用機である打鉄弐式は修司の手も加わっている為、基本性能が高く、それは第四世代すら上回るとされている。
尚、修司の所業を間近で見ていた為に彼の事を一番理解していると言っても過言ではない。彼女の修司に関して言い放った〝良識はあっても常識がない〟はあまりにも有名。
尚、姉の楯無とは一度ガチンコでやり合えた事で和解し、今は彼女の教えを請いながらＩＳの操縦技術を磨いている。目標は国家代表と打倒楯無。

・織斑千冬
本編での苦労人その1。第1回モンド・グロッソの覇者であり初代ブリュンヒルデの称号を獲得した女傑。その実力は現役を退いていながらも訓練機で第四世代の専用機を圧倒する程の腕前。その凛とした佇まいと風貌で学園の女子生徒の憧れの的となっている。
当初の頃修司に対し疑惑を抱いていたが、彼の真摯的な態度と仕事に対する直向きさに幾分か心を開いていたが、世界のトップ企業が取るべき資格をユーキ○ン的なノリで取得したり、ＩＳコアの解析を進めていたり、遂にはアリカと呼ばれるコアに住む電子生命体との邂逅を果たしている等とトンでも事実を前に最近では〝ま　た　シ　ラ　カ　ワ　か！〟で納得したりしている。
現在は修司の無茶ぶりに応えながら教師としての仕事もしなくてはならないので以前から酷かったズボラな所が更に悪化している為、最近はそれが悩みとなっている。
副担任である山田真耶とは仕事で共に支え合うパートナーとして日々修司の無茶ぶりに対応している。日々ストレスの掛かる時間を過ごしていながら彼女の胃が未だ健在なのは既に知り合いに天災がいる為、多少耐性があるからだろう。
最近では弟である一夏にＩＳの指導を通して触れ合う事が唯一の癒しとなっている。

・山田真耶

本編での苦労人その2。童顔で見事な巨乳を誇るＩＳ学園のブルンバスト。童顔である為他生徒から軽く見られる事があるが、元代表候補生である為その実力は本物。第二世代のラファールを用いて代表候補生のセシリアと鈴音を相手に圧倒してみせた。

現在は一年一組の副担任として日々教師としての仕事に追われているが、最近では修司の起こす騒動により他の教師達と同様非常に胃の痛む毎日を送っている。あまりにも常識外れな行動を起こしている為に何人かの教師が修司に自重するよう呼び掛けを試みているが、修司自身が自分達とは比較にならない仕事量をこなしている為、言いたくても言えない状況となっている。

そこに普通の人間らしい気遣いもする事から余計に質が悪いとされ、胃痛で倒れそうになっても彼の作る栄養豊富な手料理（お粥等）によって無理矢理体調を万全にさせられてしまう為、倒れて休む事も出来ないでいる。だったらその料理を断ればいいって？　それが出来れば苦労はしない。

しかも先日ドイツの国家元首であるロジャー＝アルベルトが学園に来日している事から、山田を始めとした教師達は日々胃痛と闘う毎日を送っている。

現在彼女の唯一の癒しは休みの日に素敵な男性と過ごす妄想をする事。誰か彼女に救いの手を差し伸べてやってくれ。

・轡木十蔵

ＩＳ学園で用務員として働いていて修司をＩＳ学園に招き入れた張本人。カフェで強盗に巻き込まれた所を修司に助けられ、その時の直感に従い彼を学園に雇う事を決めた。

用務員として働くのは表の顔であり、実際は学園の運営を取り締まる存在。尚、修司はその事に未だ気付いてはいない様子。

登場ＩＳ紹介

・蒼鴉（ブルー・レイヴン）

白河修司が自ら手掛けた純白河製ＩＳ。従来のＩＳとは異なり宇宙での活動を想定して造られた機体。
機体性能は勿論のこと、このＩＳの最大の特徴はその装甲の堅さにある。シールドバリアや絶対防御に頼らず、単機での大気圏突破、突入を可能とし、単体での宇宙活動も可能とされている。これは白河修司が操縦者の安全性を重視したものであると考えられている。
動力源は主にＩＳコアによって賄われているが、必要な状況に合わせて擬似太陽炉――通称擬似ＧＮドライヴも稼働させている。通常運転する際にはどちらも、或いは両方稼働させて出力を安定させたり向上させたりするが、ＴＲＡＮＳ―ＡＭを使用する時は擬似太陽炉がメイン動力源となり、ＩＳコアとの同調も切らねばならなくなる。
ＴＲＡＮＳ―ＡＭ使用の最中は基本性能が数倍に跳ね上がるが、ＩＳコアとの接続を遮断している為に量子変換機能が使用不可となる。もし重砲といった別装備を使用する時は予め出しておく必要がある。
ＴＲＡＮＳ―ＡＭ使用後は機体性能が著しく低下する為、使用の際は緊急時と定められている。
他にも擬似太陽炉稼働の際に起こる通信妨害の件も考えなければならないので、何気に問題点の多い機体でもある。現段階における蒼鴉は未だ試作段階である。

尚、シュウ＝シラカワ博士はこの段階の蒼鴉を及第点と評している。

・武装
牙鐵（がてつ）
近接での使用を目的とした対デブリ装備。巨大なデブリを砕く事を目標にしている為、その威力は強大。超高密度に圧縮された空気圧によって打ち出される一撃はＩＳのシールドバリアを簡単に打ち抜ける程。モデルはビッグオーのサドンインパクト
人（ＩＳ込み）に向けてはダメ絶対。
尚、宇宙空間での使用は蒼鴉に搭載される酸素生成装置から供給さ

れる予定。
少量で使用可能にする為、今後は宇宙で使用しながらデータを集める模様。

重砲（じゅうほう）
遠距離での使用を目的とした対デブリ装備。暗礁宙意域での活動範囲を確保する為に使用する事が主な目的であり、本来は前に構えて撃つのではなく、左右に広がる様に回転しながら撃つのが正しい使用方法である。
尚、この装備を使用する際には周辺の状況を良く見て、確認しながら使う事。一応人に向けられて撃たないようロックを掛けられているが、注意一秒怪我一生になるので、使用する時は本当に気をつけて欲しい。
構える度に〝ブッピガン〟となるのは様式美となるのであしからず。モデルはウイングゼロのツインバスターライフル。
牙鐵同様、人に向けてはダメ絶対。

ワイヤーハーケン
蒼鴉に新たに追加された兵装。両腕と両腰のそれぞれ二つずつ取り付けられており、遠くの物体に射出して投げ飛ばしたり引き寄せたりする事が可能。
宇宙空間での主な活用目的はデブリなどに射出して三次元的な機動や活動する際トラブルに巻き込まれて身動きの取れなくなった同僚機の救出作業に用いられるとされている。
護身という意味も兼ねて唯一対ＩＳ戦闘を認められた武装だが、戦闘に使用する際は相応な操作技術が求められる。修司は対楯無戦に於いてこの武装だけを使用している。モデルは枢木スザクのＫＭＦランスロット・アルビオンで、モーションパターンも彼のデータを流用している為クルルギスピニングキックも再現可能。

・オーライザー

蒼鴉の支援機。コアにはアミカという電子生命体が住んでいる為、厳密には無人機ではない。ビームマシンガンと最低限な武装は積んであるが、オーライザーの本来の目的は蒼鴉との連結と制御にあるので戦闘能力は勿論宇宙空間での作業能力も皆無である。
しかし、このオーライザーはＶＦシリーズのデータを使用している為、加速と機動は従来のＩＳから大きく逸脱した性能を誇っている。リミッター付きでＭ４、宇宙で起動する際はＭ７に迫る。
因みに蒼鴉の最高速度はＭ６とされるが、単機での大気圏突破を目的としている為、加速度だけはオーライザーに勝る。

・レイヴライザー
蒼鴉とオーライザーの連結した時の呼称。オーライザーと連結した時にＩＳのコアと擬似ＧＮドライヴの完全同調が可能となっている為、安定した出力を誇り理論上そのままの状態でも現在存在する全てのＩＳを凌駕する性能となっている。
尚、この姿の時はツインドライヴシステムやＴＲＡＮＳ―ＡＭシステム、そして二つのＩＳコアが完全に同調する事が可能だが、機動テストは行っていない為に未知数な部分が多い。稼働実験の時に見学したドイツの国家元首、ロジャー＝アルベルト曰く。〝ＩＳを越えたＩＳ〟という。
因みにレイヴライザーというネーミングは修司と共に考えた模様。

・打鉄弐式
更識簪が白河修司の手を借りて造り上げたＩＳ。特殊合金であるガンダニュウムを使用して生み出されたこの機体は当初予定していた能力値から大きく外れる事になる。
各武装も修司がもたらしたデータを下に造られており、どれも完成度の高い仕上がりになっている。中でも近接戦闘を目的とした夢現は切れ味が良すぎる為、普段は機体にリミッターを掛ける事で威力を

落としている。
　このＩＳも蒼鴉同様に単機による大気圏突破、突入を可能にしているが、まだ簪自身の能力がそこまでの段階に届いていない為、まずは機体性能に馴れる事から始まる。

・白式
　織斑一夏の専用機。ＩＳのコアは元々白騎士に搭載されていたもので、単一能力も姉である織斑千冬と同じ零落白夜となっている。
　本来なら第二次移行の際に新たな姿へと変身する事が可能となっているが、白河修司の手によって改修……否、整備をされた為今後どのような進化を辿るのか全く予想出来ない状態となっている。
　しかし、新たに搭載されたサイコフレームとは同調率が良好の為、案外〝彼女〟もまんざらではない様子。

・『Ｇ』
　言わずと知れた修司の愛機。多元世界で破界事変、再世戦争と大きな闘争の中で共に死線を潜り抜けてきた相棒。
　今回の時空震動で転移した世界は比較的安全な世界の為、『Ｇ』を動かす事は殆どない。
　けれど修司にとっては長いこと一緒に戦ってきた良きパートナーである為、時間が空いた時は必ずといって良いほど整備を受けている。常に万全な状態でいる為、修司の『Ｇ』に対する敬愛の深さが伺える。

その３５

　某国某所。一流の飲食店が立ち並ぶ繁華街、庶民では到底入る事は叶わないとされる高級料理店に彼女達はいた。
「――――では、本当に協力して頂けるのですね？　篠ノ之博士」
「しっっこいなぁ、だからいいよって言ってるじゃん。あ、ウェイターさーん、これお代わりちょーだい」
　機械仕掛けの耳をピコピコを動かしながら出される料理を遠慮なしに口にしているのは天災と謳われ、恐れられる篠ノ之束その人。無邪気に料理を楽しむ彼女の前に相席するのは紅いドレスを着た淑女だった。
　淑女――――いや、スコールはウェーブの掛かった長い金髪を揺らし、女性は目を丸くさせて目の前で料理を楽しむ天災を見つめている。あの天災の篠ノ之束の協力を、世界中の国々が求めている彼女の力をこうも簡単に得られた事に未だ信じられない気持ちだった。
　やがて全ての料理を食べ終えた束は満足そうに締めのワインを飲み干した後、うっすらと目を細めて口を開く。……冷たい目だ。あの無邪気な表情から一転して冷酷な顔つきとなった束にスコールはゾクリと悪寒を感じた。
「それで？　君達は……えと、亡国機業（ファントム・タスク）だっけ？　私にＩＳを作って欲しいっていうけれど、一体どんなのがいいのかな？　近接特化？　それとも遠距離特化？　特殊能力関連は先天的な特性とかが関係してくるからあまりオススメはしないよ～？　まぁ、束さんは天災だからそこら辺はチョコチョコっと調整すればどうにでもなるからいいんだけど……で、どんなのにするの？」
「そ、その話は我々の所に来て貰わないと……こちらとしても話をしようもないので」
「ふーん。私を呼びつけておきながらマトモに話も出来ないとか、束さんが言うのもなんだけど――――ちょっと失礼だよね？　そう思わない？」
「……申し訳ありません」

「ま、別に良いけどね。最初から君達にはさして興味ないし……あぁ、けれど一つだけ頼みがあるからそれだけは聞いてくれると嬉しいかな」
「……なんでしょう？」
「白河修司の抹殺」
「っ!?」
天災の口から告げられる言葉にスコールは目を見開く。〝白河修司〟史上初個人で国際資格を取得した若き天才。一部では篠ノ之束の後継者とも呼ばれる彼の殺害依頼にスコールは面食らう。
冗談……いや、目の前の天災は本気だ。本気で彼の者の抹殺を心より望んでいる。白河修司は今や全男性の希望とも呼べる存在だ。その存在を亡き者にしては世界は再び混乱の境地に立たされる事になる。
目の前の天災はその事に気付いていないのか？　……いや、気付かない筈がない。彼女ほどの頭脳を持った存在が世界の動きに対して予測出来ない事はない筈だ。なら何故彼女は修司の抹殺を依頼する？　その理由はただ一つ、邪魔だからだ。
白河修司と言う存在が邪魔、だから消す。自分達にそれを依頼してくるのは単に自分から赴くのは面倒なだけ、世界も他人も関係ない。全ては自分という揺るがないルールの上で成り立っている篠ノ之束の精神構造にスコールは絶句する。
彼女と協力関係を結んだのは早まったかもしれない。そう彼女は後悔するも……。
「じゃ、そういう訳で宜しくね～♪」
満面な表情でそう口にする天災を前にスコールの選択の余地はなかった。

◇

――――季節は秋。花は散り、紅葉が目立ち始めた今日、ＩＳ学園の一学年は本日修学旅行の日を迎えていた。
空は曇りなき晴天。絶好の旅行日和となった今日、一組の副担任である山田真耶は元気な声で生徒達に呼び掛ける。
「それでは皆さん、今日から三日間は修学旅行となります。京都では他の観光客の人達も大勢いらっしゃると思われますので、ＩＳ学園の生徒として恥ずかしくない節度ある行動を心掛けましょうね」
「「はーい！」」
元気良く返事を返してくれる生徒達に山田の表情も明るくなる。あぁ、先生をやってて良かったなと思ったその時、生徒の一人が手を挙げて質問を投げ掛けてきた。
「山田先生、修司さんがまだ来ていないみたいですけどー？」
修司という名前を聞かされた時、山田の動きがピシリと止まる。考えたくても考えたくなかった存在の名前に山田は知らない内に拒絶反応をするようになってしまっていた。
白河修司。今回の修学旅行で特別枠として招待される事になった人物。一夏同様希少な存在である為、ひとまとめにした方が護衛しやすいという政府からの要請があって一緒になる事になったのだが、依然としてその姿は確認できていない。
まだ時間は充分あるが、以前女性権利団体なる集団に拉致された事もある為に安心出来ない。政府直属のＳＰが数人護衛する事になっているが、このままでは山田真耶を始めとした教師陣の胃が不安で悲鳴を上げる事になる。今から戻って白河と合流すべきかと千冬が悩んだ時――――。
「申し訳ありません。遅くなりました」
ホームの端から白衣を靡かせて此方に歩いてくる一人の男性、紫色の髪が特徴的なその青年、白河修司は一組の所に合流すると、頭を下げて謝罪の言葉を口にした。

「織斑先生、遅くなってしまい誠に申し訳ありません。一応は時間には間に合うつもりなのでしたけれど……」
「いや、まだ時間には余裕がある。が、お前が最後とは珍しいな。何か問題でも起きたか？」
「いえ、政府から派遣してくれたＳＰの方々が手を貸してくれたので特に問題はありません。……実は、〝娘達〟の事で少々時間を取られてしまいましてね」
　遅れてきた事を訊ねると変わった言葉が返ってくる。娘達とは何なのか千冬の頭に疑問符が浮かんだ時、彼の後ろから六人の少女が現れた。
　どの娘も１０～１４といった小さな子供、何故こんな少女達が白河修司の背後から現れるのか、そんな疑問が千冬の脳内に埋め尽くされていく。
「父上、いつまで話をしてる！　私は早く新幹線に乗ってみたいぞ！」
「ダメよメイ、お父様の話を邪魔しちゃ」
「相変わらずタンポポは優等生ね。そうやってマスターのポイントを稼ごうとするんだから」
「あざとい！　タンポポあざとい！」
「なっ、べ、別に私はそんなんじゃ……もう！　変な事言わないでよサキ！　ミンミンも悪のりしないの！」
「おぉ！　しんかんせん！　スゲー！　カッケェ！」
「危ないよぉ～ハナちゃん。落ちたら怪我するよぉ～」
　姿を見せるやいなや、ホームの中を走り回ったり、新幹線の所へ近付いたりしてはしゃぐ六人の少女、格好はＩＳ学園の制服を纏っている事から学園の関係者だと思われるが、あんな少女達は見たことがない。
　一体どういう事なのだと修司に問い詰めようとした時、その本人たる修司はニコリと微笑み。
「驚かれるのも無理はありません。彼女達は皆、今日初めて体を手に入れたのですから」
「今日……体を手に入れた？」

「オートマトン。ほら、私が学園に戻って来る際連れてきた自律型のマシンだった存在ですよ。彼女達には蒼鴉開発の際に色々手伝って貰いましたからね、プレゼントとして自由に動ける体を作ってみました。時間的に厳しかったですが、どうにか間に合う事が出来て良かったですよ。おかげで睡眠時間一日１０分を切ってしまいました。自己新記録更新ですよ。ハハハ」
「いや、作ってみましたって……」
　確かに、ここ数日修司が整備室に籠もっていた事は知っている。だが、まさか人の体を造っている等と一体誰が予想出来ようか。
　というか、人の体というモノは夏休みの工作気分で作れるものなのか？　そんな疑問を抱く千冬を余所に、修司はハシャぐ六人の少女達を呼び集めた。
「はいはい皆さん。ハシャぐのはそこまでにして自己紹介をしなさい。これからお世話になる人達に失礼の無いようにするのですよ」
「「はーい！」」
　呆然となる千冬、そんな彼女にそれぞれお辞儀をするなどして横を通り過ぎる六人の少女達は一夏達の前へと出て自己紹介を始めた。
「初めまして、オートマトン一号の……いえ、長女のタンポポです。不束者ではありますが、皆様、宜しくお願いします」
「二号改めサキ、一応次女って感じらしいけど……まぁ適当に宜しく」
「元三号メイ！　私は父上より造られた最高傑作！　つまり、私は父上より優れているという事を覚えておくがいい！」
「ミンミンはミンミンだぞ！」
「あはは！　皆同じ服着てる～！　変なの～！」
「は、ハナちゃんダメだよ。ちゃんと自己紹介しないと……あ、わ、私モモと言います。あ、元々は六号と呼ばれていたのでこの中では末っ子に……なるのかな？」
　それぞれ個性豊かな自己紹介を終えると、最後は宜しくお願いしますと声を揃え、律儀に頭を下げる。色々言いたい事は多々あるが取り敢えず悪い娘ではなさそうだと判断した生徒達は細かい詮索は後回しにして可愛らしい少女達に近付いてそれぞれ談笑を楽しんだ。

と言っても、既にそれほど時間が余っていた訳ではなく、乗車する時間は刻一刻と迫っている。乗り遅れては他のクラスの迷惑を考えた千冬は生徒達に新幹線に乗車するよう促した。

そんな中、山田真耶の姿が見えない事に気付く。一体どこに行ったのかと辺りを見渡した時、新幹線の乗車出入り口付近で修司と話をしている彼女を見つけた。

「では、この車両一つが丸々私達専用に用意されたと？」

「はい。修司さんは少々特殊な事例なので皆さんとは少し離れた位置となってしまいましたが、通路にＳＰの人達が護衛として配置されていますので、何かあればその人達に声を掛けてください」

「そうですか。乗車券は必要ないと言われたので購入しなかったのですが、そういう訳でしたか。何から何まで申し訳ありません」

「いいえ～。それと宿泊施設に関してもですが此方も新幹線と同様分けられる事になりますが……宜しいですか？　あ、勿論娘さん達やアリカさん、アミカちゃんもご一緒になりますよ」

「何から何までありがとうございます。事前に連絡を入れたとはいえ、まさかここまで良くして頂けるとは……山田先生、本当にありがとうございます」

「気になさらないで下さい。では、娘さん達ともども良い旅を堪能して下さい」

「はい。それでは――――さ、行きますよ」

「「はーい！」」

修司の言葉に従い、一列に並んで新幹線へと乗車していく。途中蒼い梟と黒い燕が滑り込む様に中へ入っていくが、山田はその事に気にも留めずに、新幹線に乗り込む修司達に手を振る。

――――おかしい。白河修司に対して色んな意味で苦手としている山田が、ああも饒舌に彼と会話をしている。

その事に疑問を抱いた千冬は生徒達全員が乗車した時を見計らって彼女に声を掛けるが……その時、彼女は絶句した。

「あ、織斑せんせー、見ててクレマシタ？　私、チャンとお見送りデキマシタよー」

「や、山田先生……」
「修司さんテ、娘さんがいらしたんですＮＥー、私知りませんデシタＹＯー。でもでも、家族揃って旅行ナンテ修司さんも家族さーびすするお年頃なんですＮＥー、素敵ＤＥＴＨ」
「……」
　彼女の、山田真耶の瞳には光が無かった。何も映らない虚空を見つめる彼女を見て、千冬は全てを察してしまった。
　山田真耶という人間は良くも悪くも真面目な人間だ。人の好意に甘えたり、時には遠慮したり、人との距離を自分なりに計りながら、それでも生徒達の為に奔走する彼女は教師の鏡とも言えた。
　だが、ここへ来て遂に限界を迎えてしまった。……いや、元々彼女は意志の強い女性だ。本当はとっくに限界を越えていながらも、健気に職務を全うし続けていたのかもしれない。
　けれど、その気力も最早尽きた。六体のアンドロイド、しかも人間と大差ない姿と人格を有したオートマトンだった彼女達を前にして、とうとう彼女の精神が底をついたのだ。
　企業が取るべき国際資格の個人取得、従来の性能を大きく逸脱したＩＳの単独開発、コアの解明と電子生命体の確認、学園の防衛システムの改修と新たなプログラムの構築、他にも様々な出来事が彼女の精神に負荷を与え続け、やがて彼女の心は限界を迎え――。
　そして、山田真耶は――――考えるのを、止めた。
「……織斑先生」
「……何だ？」
「私、この修学旅行から帰ってきたら、彼に告白するん……だ。――――ガク」
「山田？　……山田ぁぁぁぁぁっ!!　しっかりしろ山田ぁぁぁ！　お前にそんな男はいなかっただろう！　帰ってこい山田ぁぁぁ!!!」
　修学旅行初日、ＩＳ学園の教師陣達の苦悩は……まだまだ終わらない。

　終わらせない。

その３６

――――京都。日本に旧くから伝わる歴史ある街として知られており、毎年多くの観光客で賑わっている。雅のある風景や趣のある建物の外観、その独特な文化は外国人観光客の心を掴んで放さない。

風情のある古の街。修学旅行の定番とも言えるこの街に向けてＩＳ学園の生徒達が降り立った。織斑千冬を始めとした教師達の引率を受け、古都を往く。

嘗てここがこの国の中心である事を学びながら、旅行を楽しんでいる。ＩＳ学園には海外からの留学生が多く在籍している為、学生達は目を輝かせながら旅行を楽しんでいた。

そんな中、ある複数の少女達が地元の人達の目に留まった。他の生徒達と同様に制服を身に纏っているが、その小さな体躯から高校生には見えず、彼女達の存在は地元の人達から見て浮いている様に思えた。

「ふわぁ～、これが金閣寺なんだ～。ホントに金ピカだぁ～」

「あれって全部金箔なんでしょ？　昔の人ってばなんでワザワザそんな事に貴重な資源を使うかなぁ。威厳の為？」

「インゲン？　サキはインゲン豆が食べたいのか？」

「インゲン豆？　ミンミン食べたーい！」

「あぁもう！　メイもミンミンも少しは静かにしなさい！　他の人の迷惑になるでしょ！」

「そういうタンポポが一番うるさいけどねー」

「何か言った!?」

「別に～」

五人の少女達がそれぞれはしゃぎながら観光地を堪能している。少々騒がしくは思えるが、長女らしき女の子がどうにかまとめている事から、地元の人達は生暖かい目でその様子を眺めていた。

確かにこの少女達は他の生徒達と比べてやや体格が小さい様に見える。しかし、それは彼女達の体質故の事であって実際はもう少し歳を重ねているのかもしれない。幼く見えるのも姉妹と一緒にいるだ

けであって、別にさほど問題に思う所はない。
というか、幼い体躯をした少女は他にもいるではないか。長い銀髪の少女に至っては他の女子生徒より一回りほど小さい。それこそ、先の五人の少女達と近しい体格だ。
やはりただの体質の違いか。地元の人々はこれから健やかに成長するであろう少女達を見守りながら散ろうとした……その時。
「あ～、お父さんだ～。お父さん、こっちだよ～」
少女達の中でも一番おっとりとした少女が父と呼ぶ人間に向けて手を振っている。修学旅行に父兄も参加しているのか？　そう不思議に思いながら少女の視線の先にいる人物に目を向けると――――地元の人達は一斉に噴き出した。
人垣を越えて少女に歩み寄っていく一人の青年。その肩には青く両サイドに分けたツインテールの髪型が特徴的な少女を乗せている。これだけを見れば仲むつまじい親子の姿に見えるだろうが、問題はその肩車をしている青年にあった。
紫炎の様に揺らめく頭髪、身に纏う白衣はその人間そのものの在り方を現しているかのように、知的で冷静さを体現しているようだった。

白河修司。世界で二番目の男性のＩＳ操縦者であり、世界を現在進行形で揺るがしている男。そんな彼が父と呼ぶ少女の所へと歩みを進めていくではないか。
あまりの光景に周辺の人間の口が開いたままの状態となっている。端から見れば仲睦まじい親子の様子なのに親である人間の所為でシュールな光景にしか見えない。
というか、娘？　結婚していたの？　まさか紳士な世界の住人の人？　混乱する思考で様々な憶測を立てている彼らに対し、目の前の親子達は団欒の時を過ごしていた。
「お父さんってば～、どこに行ってたの～？　もしかして～、迷子だったの～？」
「違うよ。実は俺も学生の頃に修学旅行で京都に来ていてね、あの頃

は無計画で所構わず見ていくのを観光だと勘違いしてね。折角の機会だし今度はじっくりと見て回ろうと思ってたんだよ」
「お父さんの学生時代～？　あはは～、お父さんってば面白い冗談を言うんだね～」
「……モモちゃん、それってどういう意味かな？」
「ていうかハナ、いつまで父さんに乗ってるの！　早く降りなさい。父さんが困っているでしょ！」
「えー？　いいじゃん別にい～！」
「次！　次ミンミンが乗るー！」
「ハイハイ順番にな、その前にまずは記念写真を撮ろうか。折角京都に来たのだから思い出として残しておこうな」
「ふふん！　父上がそこまで言うのなら仕方がない。特別に私が隣に来てやるから感謝するのだぞ！」
　親子仲良く金閣寺の前に立ち、学園の生徒に写真を撮ってもらっている。家族揃っての観光らしくそれ自体は微笑ましいモノに見えるが、修司の存在感によりその微笑ましさがどこか遠い所へ吹き飛んでしまっている気がする。
　写真を撮っている生徒は別段慌てた様子もなく淡々とした様子で彼らの写真を撮っている。一体ＩＳ学園では何が起こっているのか、その疑問ばかりが周辺の人間の脳内に埋め尽くされていた。
「ちょっとハナ！　アナタいつまで父さんに乗ってるの！　いい加減降りなさい！　怒るわよ！」
「いーじゃん別にこのまま映っても！　あ、もしかしてタンポポも父ちゃんに肩車して欲しいのか？」
「な、ななな！　何を言ってるのよいきなり！」
「ダメだよ！　次はミンミンの番だよ！　タンポポ、割り込みダメ！」
「べ、別にそんなんじゃ……」
「そうは言ってもやっぱり肩車して欲しいと思うタンポポでした」
「なっ!?　サキ、アナタねぇ！」
「コラコラ、ちゃんと全員肩車してあげるから喧嘩するんじゃありません。サキも、後で高い高いしてあげるからふてくされるんじゃあり

ません」
「ぶっは⁉　な、何で私だけそんなオプション付けてるのよ⁉　つーか何よ高い高いって、私は赤ちゃんか⁉」
「？　何か変か？　実際お前達は生まれて三日も経ってないんだ。オートマトンの頃の時間も合わせても精々三ヶ月ちょい。乳幼児扱いしても可笑しくないだろう？」
「だからって……ああもう！　好きにすればいいでしょ！」
「ふわ～、サキちゃんお顔真っ赤～」
「うるさい！」
　賑やかな光景。聞こえてくる会話も別段おかしい所はないし、見てる限りではどこも不信な所はない。しかし……。
「ほら、あまり騒ぐと他の観光客の皆さんに迷惑になりますよ。私達も早いところ行くとしましょう」
「「はーい！」」
　やはり、白河修司という人間の存在感がその微笑ましい光景を吹き飛ばしてしまっている。周辺の人間は特に何か言う事はなく、去っていく修司の後ろ姿を見つめる事しか出来なかった。
　……というよりも、関わりたくないというのが本音だった。

◇

　京都の修学旅行を楽しんで既に時刻は夜の８時過ぎ、現在自分達は学園の皆とは別の所にある旅館で娘達と共に過ごさせて貰っている。共にとは言っても同じ部屋ではなく、隣の部屋を割り振られているから厳密には違うけれど……そんな事気にしない程に悠々と過ごさせ

て貰っている。
　娘達も初めての旅館やら料理、更には露天風呂を堪能したりと思う存分楽しんでくれていたし、この旅館を貸し切る形で場所を提供してくれた織斑先生や山田先生には本当に頭が上がらなくなった。
　他の先生方も自分達の事を気遣ってくれてよく娘達の様子を聞いてきてくれるし、この旅館にも護衛の人を何人か付けて貰っているし本当に学園の人達は気配りの出来る良い人ばかりだ。学園の理事長も自分の事を気に掛けてくれてるって十蔵さんも言ってたし、本当に何から何まで有り難い。
　自分の置かれている恵まれた環境に感謝していると、夜空に二つの光が瞬いた。それが彼女たちの帰還の合図だと知っている自分は窓を開け、彼女達を招き入れた。
　風を切りながら部屋へ入ってくる二羽の鳥。蒼い梟と黒い燕は部屋内でクルクル旋回すると、部屋の中央に置かれたテーブルへと着地した。
　蒼い梟は蒼鴉であるアリカちゃん、それに対してアミカちゃんは燕をモチーフにした待機状態となっている。アリカちゃんの様に自由に空を飛べるようイメージしてこの様な形にした。
　何故燕かって？　いやね。ホントは鷲とか鷹とかにしたかったよ？　けどさ、そういう大型の鳥ってどちらかと言えば男の子向けじゃん？　女の子には向かないと思うんだよね。燕なら女の子でも受けがいいかなーって、……すんません。フツーに偏見ですねコレ。
『お待たせしましたマスター、アリカとアミカ、ただいま戻りました！』
『ましたー』
「ご苦労様。それで、首尾はどうだった？」
『はい。この旅館と生徒の皆さんがいる旅館を基点に半径１０キロに渡って索敵を行ってきましたが、特にこれと言った不審な人影は見当たりませんでした』
『私も路地裏とかアチコチ見て回って来ましたけど、特に変わった所や人は見当たりませんでした。他にも建物内部とか怪しい所とか確

認してきましたけど……やっぱりその、特に問題は見受けられませんでした』
「なるほど、分かった。二人ともこんな雑用を押し付けてしまって悪かったね。後は羽を休めるなり好きに飛んできても構わないよ」
『あ、ありがとうございますマスター。けど、本当に大丈夫なのでしょうか。連中、マスターの命をそう簡単に諦めるとは思えないのですけど……』
　不安そうに語るアリカちゃん、アリカちゃんのいう連中というのは十中八九女性権利団体の事だろう。昼間から堂々と人を拉致する様な連中だ。嵐の前の静けさの様に何の動きも見せない連中に少しばかり気味悪がっているのだろう。
　事実、俺が警戒しているのも奴らに関してだ。人目も憚らない強行姿勢。手段を選ばないやり方はテロリストとしては実に合理的で有能な手段だ。故に二人にはそんな事をしでかす連中がいないか予め探りを入れさせてもらったが、どうやらそれが余計な不安を煽ってしまったらしい。
『って、すみません。折角の旅行なのに私、変な事言って……』
「気にすることはないよ。アリカちゃんの気持ちは俺も分かるからね。……完全に安全とは言えないけれどここには政府からＳＰが俺達を守ってくれる為に何人も人員を派遣してくれているし、ちょっと離れているけれど織斑先生や山田先生、そして生徒会長の楯無ちゃんも来てくれている。そう不安に思う事はないよ」
『で、ですが……ってマスター、どうしてあの生徒会長が来ているって知ってるんです？』
「？　どうしてって、普通に分かるじゃん。ちょくちょく俺の方を物影から見てくるし、時々一夏君の様子も見に行ってるじゃないか。まぁ、どうして側で護衛したりしないのかって思う時もあるけれど……あぁそうか、二年で生徒会長である自分が来ている事で他の生徒達に気を遣わせない様に気を付けているのか。流石更識家の当主、社交性も高いなぁ」
『……』

「ん？　どうしたアリカちゃん。そんな目を丸くさせて」
『えー……いや、その、何というか』
『マスターって、本当に色々鈍いなぁって』
　何故か二人から呆れのため息が零れる。鈍いとは一体何の事だろうか？　これでも周囲に不審人物がいないか常に気を張らせているのだけれど……。
　そう不思議に思う自分を余所に扉からノックの音が鳴り、次の瞬間勢い良く扉が開かれる。
「父上、私が遊びに来たぞ！」
「おー！　アリカとアミカがいる！」
「ホントだー！　どこいってたのー？」
『あわわわ、いっぺんに来ないで下さいー！』
『ミンちゃん、強く抱きしめないで、く、苦しい……』
　部屋へなだれ込むように様にやってくる娘達。揉みくちゃにされているアリカちゃんとアミカちゃんに助け船を出しながら、俺は落ち着くよう呼び掛けた。
「みんなその辺にしておきなさい、二人も苦しんでいるだろう。幾ら他にお客さんがいないからってあまり騒ぐのではないよ」
「うー、分かったよー」
「むぅ、父上が言うなら仕方ない」
「その代わり、後で俺がそっちの部屋にお邪魔するから、それまで大人しくまっていなさい」
「ホント!?　絶対だからね！」
「待ってるよー！」
　ドタバタと騒がしく部屋を後にする娘達に自分は自然と笑みが零れる。彼女達から元気を貰った自分は床で目を回しているアリカとアミカをテーブルに寝かせると、とある書類を広げた。そこに描かれているのは設計図、――――宇宙活動において必ず必要となってくる代物。
　長距離航空宇宙艦。それが今後の自分が目指すべき頂きである。

その３７

――修学旅行が始まって二日目、問題らしい問題は起こらず、旅行の過程の半分を消化しつつある現在、ＩＳ学園の生徒達は引率の教師達によって清水寺へと足を運んでいた。

京都で最も知られているであろう観光地、そこから見える景色に生徒達はいつもよりテンション高めでアチコチ見て回っていた。

そんな生徒達を諌めながらこれからの自由行動について織斑千冬と山田真耶の両名から説明を話し始めた。

「さて、皆もう知っているとは思うが今から夕方まで班での自由行動に移る。他の観光客の迷惑にならぬよう考え、単独で勝手な事をせず、慎ましい行動を心構えるように気を付けろ」

「各地で他の先生方を配置させていますから、もし迷ったり班からはぐれた時は近くの先生に頼って下さいね。集合場所はホテル、そこで班ごとの点呼を終えた後に各自部屋に戻って本日の日程は終了となりますから、それまでには戻って来て下さいね」

「「はーい！」」

千冬と真耶、二人の教師から告げられる注意事項と連絡内容を聞いた生徒達はそれぞれ目的地に向けて行動を開始する。

時刻は既に１１時過ぎ、これからどこで昼食を取り、どこから散策に向かうか。誰もが京都での探検を楽しみにしている中で、ある一つの一団がある些細な事で揉めていた。

「えー！　お父さん、私達とは一緒にいけないのー？」

「どうしてだ父上！　昨日私と京都の和菓子巡りをする約束をしたではないか！」

「だから昨日言っただろう。午前は一緒に行動するが午後からは野暮用で少し別行動を取るって」

「で、でもでも、それだと私達は一体どうすれば……」

修司（父）から告げられる別行動。自分達にとって最も親しみやすい存

在の別離に少女達は戸惑いを隠せないでいた。そんな彼女達を安心させる様に修司は笑みを浮かべ、一番近くにいたモモの頭に手を置いた。

ゴツゴツしながらも暖かみのある手、安心感のある温もりに目を細めてモモはコレを受け入れた。そんなモモに姉妹の羨望の眼差しが集まるが、そんな事気にも留めずに修司は言葉を続けた。

「班については心配するな。既に織斑先生を始めとした各先生方には話を通している。……と、言ったそばから来たようだな」

修司か向けられる視線、それに吊られて姉妹達も振り向くと、複数のグループが自分達の方に向かって歩み寄ってきていた。

「修司さん、お待たせしました」

「来たよ～♪」

「簪ちゃんに箒ちゃん、セシリアちゃんと鈴音ちゃん、シャルロットちゃんにラウラちゃんか、君達が班の代表として来てくれたと言うことは他の班の子達は皆納得してくれたのかな？」

「はい。みんな彼女達の事に興味津々で、二つ返事で了承を頂けました」

「布仏の班にモモ、セシリアの班にハナ、簪の班にはサキ、鈴音にメイ、箒の班にはミンミンで私とシャルロットの班にはタンポポ、という形になった次第であります」

「そうか。既に話し合いだけではなく担当する班も決めていたとは有り難い。助かるよ」

「ハッ！　恐縮であります！」

「ラウラの奴、どうして修司さんの前だとあんな仰々しくなるのかしら」

「まるで織斑先生を前にしたリンみたいだね」

「……反論出来ないのが悔しいわね」

「では皆さん、本日は娘達の事を宜しくお願いします。みんなも、迷惑にならないよう楽しみ、交流を深めて下さいね」

「「……は～い」」

箒達の班に新たに加わる事となったタンポポ達。最初こそは納得

出来ていない彼女達であったが、各班での自己紹介を終える頃には意気投合し、和気藹々となってその場を後にしていく。
残された修司もその用事を果たす為にその場を後にしようとする。
……が、その前に。
「さて、そろそろ生徒達の姿も見えなくなって来たことですし、そろそろ出てきてもいいと思いますよ。　楯無さん」
「……完全に気配は消していたと思うのだけれど、どうして気付かれたのかしら」
背後の建物の影から現れる学園最強の人物。忍者の様に現れる彼女に本来なら騒ぎになる所だが、予め修司が人気のなくなった所を見計らって呼び掛けた為か辺りに人影はいない。
その用意周到さに眉を寄せて不機嫌さを露わにする彼女に対して、修司は柔らかな笑みを浮かべる。
「確かに、貴女の気配の消し方は見事なものです。けれど相手の背後に回るのであれば相手の呼吸音や気配に合わせないとあまり意味はありませんよ」
「もうやだこの用務員」
笑顔のままでサラリと超級の暗殺術を教えてくる修司に楯無はげんなりした。しかし、そこは学園最強。だれる姿を一瞬で引き締めた彼女は鋭い眼光で修司を射抜く。
「……で？　私を呼びだして一体なんの用？　私これから一夏君の護衛を兼ねて様子を見にいかなくちゃいけないんだけど」
「そんなに慌てる必要はありませんよ。一夏君の方はアリカちゃん――私のＩＳ達が監視しているので、万が一彼に何かあっても彼女達が対処してくれます。危険が迫れば織斑先生にいち早く連絡が行くよう手筈は整えていますので、その辺りも心配はいりません」
「――――ホンット、ムカつく位用意周到ね。完璧よ。パーフェクトだわ白河修司さん」
「感謝の極み」
楯無の皮肉を目の前の白衣の男は簡単に受け流す。仰々しい礼もその容姿と合わさって似合っているものだから楯無も何も言えなく

なってしまう。
　この男、前から思っていたが天然なのか？　狙っているならかなりの策士だなと勘ぐりながら、楯無は進まない会話に釘を刺す。
「いい加減に話を進めるわよ。私は本来ならこの旅行に存在しない人間、簪ちゃんにでも見つかって嫌われたら大変だもの」
「あぁ、その心配なら必要ありません。既に私の方から話しておきましたから」
「んなっ!?」
「大丈夫。キチンと訳は話しておきましたし、簪ちゃんも自分の前に姿を現さない事を条件に納得しましたから、アナタが何も知らないフリして彼女の前に姿を現さなければなんの問題もありませんよ」
「〜〜〜っ!!」
「？　どうしました楯無さん。そんなに顔を赤くさせて？　何か私の言葉におかしな点がありましたか？」
「……どうして簪ちゃんに話したのよ」
「隠密行動に於いて必要なのは周囲の人間のバックアップです。織斑先生も気付いていたみたいでしたから大丈夫だとは思いますが、いつ予想外のトラブルに巻き込まれるか分かりません。その時の状況に対処する為に織斑先生以外の人物の協力も必要になると思います。ですので、更識家の人間であり貴女の行動にある程度理解できる人物という事で簪さんを選んだのですが……何かおかしいですかね？」
「……」
　不思議そうに首を傾げる修司に楯無は怒り心頭となる。これでは妹にドッキリを仕掛ける事など出来ないではないかと内心で酷く憤慨するが、相手の指摘が尤もな為に楯無は反論する事が出来なかった。
「さて、戯れもこの辺にしてそろそろ本題へと移りましょう。更識楯無さん、貴女を呼び掛けたのは他でもありません。この国の暗部として働く貴女に聞きたい事があるのです」
「聞きたい事？　……今更アナタに知らないモノなんてある――――」
「白騎士事件、並びに第二回モンド・グロッソの最中で起きた織斑一夏

の誘拐事件。この件にはある組織が関わっていると私は睨んでいます」
「っ!!」
「亡国機業（ファントム・タスク）、この前の学園祭や無人機のゴーレム達による襲撃もこの組織が絡んでいるのではないですか？」
「――――アナタ、一体どこまで、何を知っていると言うの？」
――――更識楯無はこの時初めて目の前の存在に畏怖を抱く。一般の人間は知られていない筈の情報を、本来なら知ってはいけない世界の裏側を、目の前の男は眉一つ動かさないで平然と口にしている。
そんな驚愕した彼女に対し――――。
「そんな驚く必要はありませんよ。私はただ――――知ってる事を知っているだけですから」
そう、不敵に笑みを浮かべるだけであった。

その３８

Ｊ月@日

修学旅行二日目。楯無ちゃんから有益な情報を得られた自分はこの事を忘れない為に日記に記す事にした。娘達は構ってくれない自分にやや不満気味のようだが、大事な事であると何とか宥める事にした。

幸い今度の休日に埋め合わせをする事で納得して貰えたが……子供の機嫌を損ねるとああも大変だと言うことが身に染みて学べたのは、ある意味収穫とも言える一日だった。

……話が逸れた。自分が楯無ちゃんから得られた情報は二つ、亡国機業（ファントム・タスク）なる組織の存在とその組織が織斑一夏の誘拐事件を始めとした数々のＩＳ絡みの事件に関与している事実だ。

そもそもおかしいと思っていた。何故ＩＳ学園に何度も狙った様に無人ゴーレムが襲撃してくるのか、確かにＩＳ学園はＩＳ関連で最先端を往く施設で各国もその事に関心を示しているのは分かる。当時の自分はこんな事件が過去に起こった事があるのかと先生達や十蔵さんに訊ねた事があるが、返ってきた返事は全てＮＯ。こんな事は初めてだと皆口を揃えてそう応えた。

自分は最初、一夏君の生体データを狙ったどこかの国の過激派な連中が送り込んできたモノだと思い込んでいたが、先のタッグトーナメント戦で起きたゴーレム達の襲撃によってそれはないと確信した。理由は単純、コストとリスクが高すぎるからだ。

ＩＳ学園は日本人だけではなく多くの海外留学生が在籍している学園だ。その中にはセシリアちゃんやラウラちゃんといった代表候補生がいるのでもし万が一の事が起きれば、問答無用にその国は世界中から敵視される事になるからだ。

そうなればＩＳ委員会によりＩＳ開発の権利剥奪、国連に属する国ならば発言権など多くのモノを失う事になる。幾らデータが欲しいと言ってもそんな表立って大胆な行動など起こせる訳がない。だか

らこそＩＳ学園は不干渉を約束された場所であり、だからこそＩＳ学園は各国の注目を集めているのだ。
それにＩＳ学園には時々裏でこそこそと鼠（工作員）が入り込んでいるから、逆にそれがゴーレム関連に関わっていない証明ともなっている。一応気絶させた工作員は全て身柄を調べているからこの件は確かな話だと思う。
他にもそのゴーレムを調べて分かった事なのだが、以前海で撃墜したゴーレムにはいずれも登録されてないコアが搭載されており、あのコアにはアリカちゃん達の様な電子生命体は存在していないという事だった。
ただ、これまでのゴーレム達の戦闘データを見ている限り、どうやらゴーレム達は各国の代表クラスの戦闘データを元に強化されているようで、クラス別対抗と専用機持ちのタッグトーナメント戦とではかなり性能が違っている様なのだ。
篠ノ之束博士以外精製は不可能だと言われるＩＳコアの製造、それは恐らくアリカちゃんといった電子生命体が存在している故に困難だと自分は推測している。
鈴音ちゃんは原則的にＩＳは人が乗る事で初めて稼働できると言っていたが、自分は無人機を限定にすれば違うと考えている。アリカちゃん達電子生命体は所謂乗り手の選抜機能を有しており、自分達にとって最も理解出来る女性を選んできた。
その電子生命体を抜き取る……或いは始めから電子生命体は搭載しない形でコアを精製し、動力源として使用すれば、無人機を作り出すのはさほど難しくはない。
現に、自分もあのコアの精製は可能だ。生成方法は面倒な為に省かせてもらうが、以前試しに蒼鴉にアリカちゃんのコアを外して入れ替わりに搭載してテスト稼働してみた所……結果は散々、本来の機体性能の五割程度も引き出す事が出来なかった。恐らくこれは蒼鴉自体がアリカちゃんのコアという存在に適合しているからだと思われる。
そしてこれも推測だが、無人機は無人機だからこそ中身のないコアと適合し、〝そういうモノとして稼働している〟のではないかと思わ

れる。無人機自体造った事がないから確証は持てないが、そう考えればある程度理解できる。
だが、無人機に搭載された空っぽなコアとはいえ、ソレを創り出すのにはＩＳについてそれなりに理解しなければならない。他のＩＳ企業について把握している訳ではないので何とも言えないが……少なくとも倉持技研の人達ではないと思う。
だってやる意味が無いもの。倉持技研は一夏君の専用機白式の担当部署でもあるし、白式に蓄積されたデータを調べる為に日々忙しいみたいだから、そんな事をする余裕もないだろう。
では、一体誰がこんな事をしているのか。そこで出てきたのが亡国機業という秘密結社だ。情報の出所はロジャーさん、彼の所にいる諜報員の話によると亡国機業と思える連中がイギリスのサイレント・ゼフィルスなる第三世代のＩＳを強奪したらしいというのだ。
ロジャーさんが言うには亡国機業はその組織の全容こそ明らかにされていないが、調べた限りでは相当古い組織であり、遡っていけば第二次世界大戦頃に既に亡国機業と思われる組織が暗躍していたのだという。
それだけ古い組織が存在するとなれば様々な国に何らかの繋がりが持っていても不思議ではない。組織というのは維持するだけに様々な繋がりを必要とするのだからイギリスの第三世代機強奪の件も案外裏でイギリス政府の関係者が手引きしていたのかもしれない。
ロジャーさんの情報のお陰で知り得る事が出来たこの亡国機業なる組織。この組織の存在が出てきた事により自分の中にある疑問について殆ど説明する事が出来るようになる。
まずは白騎士事件。織斑先生と篠ノ之博士の二人が首謀者だと思われてきたこの件、始めの頃は単にＩＳという存在を世界に知らしめる為のデモンストレーションだと思われていたが、亡国機業の存在によりその考えは大きく覆る事になった。
何せ一世紀近くの間、裏社会で存在し続けてきた組織だ。第三世代機を強奪出来た手際の良さを考えれば各国の重要拠点を網羅し、ハッキングによってミサイルを一斉発射させるのもそうは難しくないだ

ろう。その理由も篠ノ之博士の作ったＩＳを宇宙開発にではなく、軍事力として、或いはそれに連なる新たな力として世界に確立させる為だと考えれば案外分からなくもない話だ。

恐らく、奴らは狙っていたのだろう。篠ノ之博士がＩＳを世界に向けて発表した時……いや、或いはそれ以上前の段階から、博士の作るＩＳを付け狙っていたのだ。

宇宙開発として作られたＩＳ。それを力として扱う為に連中は各国のミサイル基地にハッキングを行い、日本に向けて発射。当時まだ亡国企業の存在について知らなかった織斑先生と篠ノ之博士は日本を――――いや、家族を守る為に白騎士なるＩＳでこれを撃滅して見せた。

白騎士の凄まじい戦闘能力のお陰でどうにかミサイルを全て破壊して見せたが、その戦闘能力の高さは世界中に知られる事になり、ＩＳは宇宙開発にではなく、新たな抑止力として使われる事になった。

ＩＳの力を世界に見せつける。それが目的だった亡国機業の目論見にまんまとはまってしまった篠ノ之博士は奴らにワザと捕まる事で箒ちゃんを始めとした家族の皆を守る事を選んだ。

何故博士が亡国機業に捕まったのか、その根拠は連中の技術力の高さにある。篠ノ之博士以外には不可能とされてきたコアの精製をあも見事にやり遂げたのだ。

自分のはあくまで独学のモノ、所謂模造品だ。別に偽物が本物に劣るなんて考えないが、本物に近い方がより精度が高いのが事実だ。奴らは篠ノ之博士を長期間に渡って拘束し、技術を学んだ事により相当の力を得たのだと思われる。

――――というのが、白騎士事件とこれまでの無人機襲撃に関する自分の見解。しかもこの時に博士からコアの生成を聞いていたと考えれば無人機に搭載されたコアの事も納得できる。

長期間に渡って奴らに拘束されていた博士はどうにか自力で脱出するも、連中に追われる立場となっている為、誰かに頼る事もせずに一人身を隠す事を選んだ。

何故博士は誰にも頼らずに身を隠す選択を選んだのか、恐らくこれ

には女性権利団体が関わっているのだと思われる。それと言うのも恐らく連中が亡国機業の尖兵に近い組織だからだ。

そもそも、何故亡国機業は女性にしか扱えないＩＳをワザワザ兵器として狙ったのだろうか？　これも自分の推測に過ぎないが、恐らく亡国機業というのは女性の面々で構成された組織だと思われるからだ。

だからこそ、発表当時欠陥品だと掃き捨てる各国が反応する中で唯一ＩＳに興味を持てた。奴らがＩＳの価値を兵器として見出したのはそこら辺の事情が関わっているのだろうと自分は考える。

ＩＳは女性である自分達にこそ相応しい。そういう風に考える連中は亡国機業にとっては動かしやすい駒なのだろう。各国の政府機関にまで潜り込ませる事でより世界と同化していく亡国機業の組織の規模は恐らく多元世界におけるアロウズの様な存在になっているのやもしれない。

そして、その女性権利団体の幹部が亡国機業と深く関わっており、一夏君の誘拐や自分の拉致の時の様に大胆な行動をとっても真相を闇の中へ葬る事が出来たという訳だ。

女性至上主義を唱える女性権利団体、そして亡国機業。これら二つの組織が世界中に網羅している為に篠ノ之博士は誰かに頼る事も出来ず、一人戦い続ける事しか出来なかった。

ＩＳ委員会やロジャーさんを始めとした亡国機業の存在を察知した人達はアラスカ条約なる法則を新たに発足する事でＩＳの軍事利用の阻止に成功しているが、それはあくまで表側の話。

これもロジャーさんから聞いた話だが、女性にしか扱えないというＩＳの欠点であり利点でもある弱点を利用して強引な手段をとっている女性権利団体の一部が、裏で怪しげな軍事実験を行っていたのだと言う。

……どうやら、女性権利団体は自分が思っていた以上に厄介な組織のようだ。規模の大きさ、それだけでも面倒だと言うのに連中はある意味自分にとってアロウズよりも厄介な存在になりつつある。

女性権利団体は良くも悪くも烏合の衆だ。例えその場で連中を叩いても亡国機業は女性権利団体をトカゲのしっぽ切りの様に切り捨てるだけで終わる。その徹底した秘密主義によって連中も自分達が秘密結社と通じている事を知っている者は少ないだろうし、例え尋問をした所で得られる情報はないだろう。

というか、ロジャーさんがその辺りの情報を逃しているとは思えない。自分に話したのはあくまで亡国機業という存在に関してだけだが、あの人程の手腕の持ち主が何もしていないとは思えない。恐らく自分にあまり情報開示しないのは国や自分の立場を考えての行動なのだろう。

亡国機業の存在自体世界中の国々にとってタブーの様な存在なのだろう。でなかったらＩＳを強奪する連中を各国が放って置く事はあり得ない。

一夏君の誘拐事件に関してもそうだ。楯無ちゃんが言うには当時一夏君の誘拐事件にはほぼ間違いなく関与しているとの事、流石は日本政府直属の暗部と言った所だが、これにより事情はより複雑なモノとなっている。

織斑先生がＩＳの選手として活動していたのは偏に一夏君との生活を守る為、モンド・グロッソという世界的に大きな大会に出れば賞金も大きいものだと思われるし、当時代表者だった彼女ならその権限で篠ノ之博士の行方も独自に追っていたのかもしれない。

織斑先生と篠ノ之博士は旧知の間柄だと聞いている。友人を助けるために色々動いていたのだろうが、その事が亡国機業に目を付けられる原因となってしまい、一夏君の誘拐事件が起きたものだと思われる。

その後ドイツにＩＳ操縦の教官となり、一年間ドイツで滞在した後、ＩＳ学園に教師として赴任。せめてＩＳを学ぶ生徒には女性権利団体の様な偏った思考を持たないように今日まで徹底した指導と教練を行ってきたのだろう。

一夏君にＩＳについて何も教えなかったのも亡国機業との関わりを持たせない為の予防策みたいなものだと考えれば理解出来る。予

め話しておけは良いと思えるかもしれないが、織斑さん達の事情を考えれば仕方がないと自分は思う。
何せ織斑先生と一夏君は幼い頃に両親から捨てられており、織斑先生は女手一つで一夏君を育てて来た。謳歌すべき青春や普通の女の子らしい生活、それら全てを捨てて一夏君の為だけに生きてきた彼女を……責める事は自分には出来ない。
当然他の人にも助けて貰ったりしてきたのだろう。五反田家の様な昔馴染みの人達もいるみたいだし、色んな人達の手助けもあったと思う。一夏君の話ではＩＳが登場して人々に浸透する間は五反田家の人達意外にも当時クラスメイトで幼なじみだった鈴音ちゃんの家族にもよくお世話になったと聞いている。
そんなお世話になった人達にこれ以上迷惑を掛けられないと思ったのだろう。織斑先生はああ見えて頑固な所があるし、亡国機業の事や白騎士事件に対する負い目もあってＩＳ関連には触れさせたく無かったのだろう。
けれど、ここで間の悪い巡り合わせが起こってしまった。一夏君の高校受験の際に起きてしまったＩＳの起動事件。これは恐らく篠ノ之博士の手引きによる所が大きいだろう。
当時設置されていたＩＳ。それを遠隔操作で予め起動させる様に設定した後、一夏君を男性初のＩＳ適合者によって仕立てて亡国機業に対する反撃を行った。その後はＩＳ学園に教師として働いている織斑先生に一夏君を鍛える様に仕向けて、同じくＩＳ学園に入学している箒ちゃんにも亡国機業に対抗する為に専用機を作り上げた。
あの時は自分は旅館の警備に当たっていた為に会うことは無かったが、恐らくは篠ノ之博士にとってその時こそが亡国機業の目を僅かでも逸らされる唯一のチャンスだと思ったのだろう。
臨海学校の開催地は学園から離れたリゾート地だ。当時は腕利きの教師達がいることから亡国機業も迂闊に手を出すことも出来ず、あの時初めて篠ノ之博士の反撃は成功したのだと思われる。
そしてそこへ現れる銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）暴走と言うには少々おかしな点があったし、何よりもタイミングに不可解さを感じていた。恐らくは亡

国機業の手回しによる妨害工作だったのだろう。
あの時の一夏君達の力ではやや危ない相手だったし、事実一夏君は危険な状態に一時的にとは言え陥っていた。亡国機業の方もやはりかなりの技術力を有していると思われる。
篠ノ之博士という希代の天才と関わった事により連中の組織力と規模は相当膨れ上がっていると考えてもいいだろう。
そしてそんな連中の唯一懸念に思っている事が、一夏君の存在と自分に他ならない。女性限定とされるＩＳに男性の適合者が現れた事により盤石になりつつある現世界情勢に綻びが生じ始めているのだから、きっと奴らは今後も自分達を付け狙ってくるだろう。
そして例の如く学園の行事に狙いを定めて……今日の所は妙な動きはなかったが、恐らく連中は明日、特に修学旅行の帰りに仕掛けてくる事だろう。
あくまで可能性の話だが、その可能性自体が極めて高い。一応楯無ちゃんを通して更識家に警備の強化を頼んでおいたから安全面は強化しておいたけれど……正直当てには出来ないだろう。
何せ相手は昼夜場所を問わずに仕掛けてくる連中だ。最悪の場合、京都全体が巻き込まれる危険性も考慮した方がいいだろう。
やれやれ、多元世界から時空振動で飛ばされた当初は比較的平和な世界だと思って安心していたけれど、何だかんだでここも危険が一杯である。
織斑先生や他の先生の方々にも予め警戒心を強めるよう呼びかけているが……流石に街一つ丸々守るのは無理がある。
……となると、やっぱりグランゾンの出番かなぁ、色々台無しになる気もするけれど、背に腹は代えられない。人命に関わってくるなら尚更だ。
念の為に仮面の方も準備しておくかな。何だかんだで蒼のカリスマの時の自分って、割と正体見破られる事は殆どなかったし。
と、いう訳で明日に備え、今日はこれで終わりにしようと思う。

その39

――――修学旅行最終日。日本の古都京都で歴史文化を学ぶ為に訪れていたＩＳ学園一年生達は修学旅行最後の旅を楽しんでいた。
各班に別れての行動。二日目と同じ自由行動となった今日、街のアチコチでＩＳ学園の制服を身に纏った女子生徒を見かけられていた。
そしてＩＳを操縦できる唯一の男性である織斑一夏も他の生徒同様、修学旅行の最終日をカメラを片手に楽しんでいた。
皆との思い出を作る為に彼はカメラ係として選ばれており、時には他の班と行動を共にしたり、時には違うクラス、或いは教師達と一緒にいたりと彼は幅広く行動範囲を広げていた。
そんな彼は現在ある一人の少女と共に行動していた。紅葉で満ちる並木街道、一夏は隣を歩く少女に声を掛けた。
「所で、本当に良かったのかタンポポちゃん。俺と一緒に行動していて、修司さんの所へ行かなくてもいいのかい？」
「いいんです。気にしないで下さい。一夏さんを今日一日お守りするのがお父さんから課せられた使命ですから」
「でもさ、他の娘達は修司さんの所に行ってるんだろ？　幾ら長女だからって別に何でも我慢する必要はないんじゃ……」
「いいえ、どうやらお父さんは今日も何か大事な用事があるとの事で一人で行動しています。朝出掛ける時までは一緒でしたけど、それ以降は私もお姿を見かけていませんので……」
「そ、そうなんだ」
「はい。ホント、参っちゃいますよね」
隣で笑顔を浮かべながら気にしないでと口にする元オートマトンだった少女に一夏の胸中が罪悪感で痛む。まだまだ親である修司に甘えたい年頃だろうに、必死にそれを隠そうとする彼女に一夏は居たたまれなくなった。
今日一日彼女に護衛されながら京都の街を歩き回ってみたが、依然として特に変わった様子はなく、前の時みたいに無人機に襲われる事

もなかった。
　そろそろ集合時間の時刻に差し掛かる頃合いだろうし、せめて最後くらい父親である修司と一緒にいさせて上げたいと考えていたが……。
「でも、お父さんは言ってました。私達はまだまだ学ぶ事が多くあると、自分だけに拘るのではなく、広い視野と思考を持つ為に君達は多くの人と交流すべきなのだと――きっと、お父さんは自分以外の人と触れ合わせる事で私達の成長を促したいのだと思います」
「……そっか」
　嬉しそうにそう語る彼女に一夏はそれ以上語る事はなかった。彼女達の行動をちゃんと考え、彼女達の為になる事を真摯に考えるその姿勢に一夏は修司の事を改めて見直した。
「それに、今の私にはアミカちゃんとアリカちゃん、二人のＩＳが付いていますので厳密には私一人ではないんですよ」
「……え？」
「ほら、あそこです」
　タンポポの言葉に一瞬呆然となる一夏、彼女の指さす方向に視線を向けると一本の木の枝に止まる梟と燕の姿があった。向こうも自分の事に気付いたのか、視線を向けてくる一夏を見るとパタパタと翼を振って挨拶をしてきた。
　……手を振っているであろう彼女に一夏も引きつった笑みを浮かべながら手を振り返す。
「現在、私はお父さんの指示で彼女達の装備基準第一位になっています。万が一危険が迫ってきた時は私が蒼鴉を装備してお守りします」
「そ、そうなんだ」
　タンポポの平然と自分も使えます発言に驚きつつも、一夏は流石は修司と自分に言い聞かせて納得させる。しかし、それでは修司は現在自分の身を守る術はないのではないか？　不安に思って一夏はタンポポに訊ねると、彼女はひきつった笑みを浮かべて露骨に視線を逸らし……。
「それは、その……結論を言えば大丈夫、と言えなくもないのですが」

「？」
「もしお父さんに危険が迫った時、どちらかと言うとその危険の方が危ないと言うか、ご愁傷様というか……」
　いまいち要領の得ない言葉を呟くタンポポに一夏は不思議に思い首を傾げる。何か拙い事を聞いたのか、タンポポは一夏の質問にマトモに返そうとはしなかった。
「と、兎も角、お父さんの方は大丈夫ですから、一夏さんは自分の身の安全だけを考えて下さい」
「お、おう」
　遂には無理矢理に話を終わらせてしまう始末。ツッコミ所は多々あるが、修司という人間の異常性をこれでもかと知っている為、一夏もこれ以上問い詰める様な真似は避ける事にした。
「と、所で一夏さん。他に行きたい所はありませんか？　集合時間までまだ少し時間はありますし、宜しければ付き合いますよ」
「そうだな。皆との写真は一通り撮ったし、後は何処か景色の良いところとか回ってみたいかな。近くに良い所があればいいんだけど」
「分かりました。ではお父さんから渡されたこの旅のしおりを頼りに散策してみましょう。簡単な地図も表示されていますから、迷う事はないので安心して下さい」
　さり気なく見え隠れする修司の親バカぶりに一夏に苦笑いが浮かぶ。先頭をタンポポに任せ、いざ進もうとした時。
「――――貴様が行くべき所など、一つしかあり得ない」
「っ！」
「なんだ、おまえ？」
　一夏達の前に現れる黒い影、ローブを羽織ったその人物は不敵な笑みと共に顔を上げ……。
「私の名前は織斑マドカ。貴様を殺す者の名だ」
　マドカと名乗る少女の顔、彼女の姉とそっくりな顔とその手に握られた拳銃を見て、一夏はその目を大きく見開かせるのだった。

◇

人気のない石垣道。周囲には竹林で囲まれており、人の姿はどこにもない。そんな場所に白河修司はいた。

「……そうですか。やはり列車には爆弾が仕掛けられていましたか」

『一応解体は済ませたわ。ボーデヴィッヒさんの停止結界のお陰で解体作業も落ち着いて出来たし、騒ぎもさほど大きくならなかったわ』

「お疲れさまです。では、アナタはそのまま駅を中心にもう一度警戒態勢に当たって下さい。他の先生方も既に行動に移しているでしょうし、それに合わせる形でアナタも動いて下さい」

『……それは別にいいけれど、一夏君の方は大丈夫なの？　確かにアナタの作ったＩＳは強力でしょうけど、だからといって完全に安心できるって訳じゃ……』

「タンポポには私に教えられるＩＳ操縦技術の全てを叩き込んであります。加えて現在蒼鴉の主は彼女に設定している為、有事の際はＩＳを装着出来るよう許可を出しています。加えて、一夏君の現在位置は待機状態となっている蒼鴉を通して各教師達の携帯端末に送られる仕組みとなっています。何か異常を関知すれば近くの先生がすぐに駆けつけてくれる事でしょう」

『……毎度毎度思うのだけれど、いつのまにそんな通信設備を作っていたの？　一応、アナタからも目を離したつもりはないんだけれど？』

「時間というモノは一見無限にありますが、その時の中で生きる生物は有限です。時は金なり。時間を消費する時は何事も有意義に使用する方が得だと私は思いますがね」

『……質問の答えになってないけど、まぁいいわ。それじゃあ私は引

き続き街の見回りに行ってるから、何かあったら――――』
「……楯無さん？　どうしました？」
突然通信端末から発せられるノイズに通信回線が一方的に切断される。突然の事態に修司は一瞬戸惑うが、すぐさま原因解明に思考を回転させた。
通信端末の故障？　それとも楯無の方で何かトラブルでも起きたか？　考えられるあらゆる可能性を模索する中、修司はある結論に到達した。
手にした端末を白衣の内ポケットへと仕舞い込み、確信しながら背後へと振り返る。彼の視線の先に立つのはエプロンドレスを身に纏う一人の女性が佇んでいた。
「ヤッホー、しーちゃん久しぶりー♪　元気だったかなぁ～？」
「……お前は」
笑顔で手を振ってくる一人のアリス。満面の笑顔で悪意を振りまきながら佇む彼女に修司は自然と警戒を強める。
しかし――――。
「もう、そんなに警戒しなくても、私の事は束ちゃんって呼んでくれても構わないんだよ。……まぁ、実際呼んだら殺すけどね」
不気味に微笑みながらそう口にするアリスに修司は驚愕に目を見開くのだった。

その４０

――――修学旅行最終日、生徒達の安全を守る為に各教師達と同じく周囲の見回りを担当していた白河修司はこの時、奇妙な人物と出会していた。

ヒラヒラなエプロンドレスに頭部から見える機械仕掛けの兎耳、明らかに普通とは異なる風貌をしたその女性は以前臨海学校の時に会った不審人物だった。

一体何故彼女がここに？　そう疑問に思う修司だが、彼女の口から聞かされる言葉に更に思考を乱す事になる。

「束……だと？　まさか、アナタが篠ノ之束だと、そう言うつもりですか？」

「そだよー。って、アレアレ？　もしかして君、私の事分かってなかったの？　なーんだ。天才とか色々騒がれているけれど、実際は大した事はないんだね。君」

見下す様な下卑た笑みを浮かべる天災に対し、修司は思考する。混濁する思考回路を丁寧に修復し、これまでの状況推理を照らし合わせる事で自分なりの結論を紡ぎ合わせた彼は次の瞬間には落ち着きを取り戻す。

一度深呼吸してから目を開き、怒りを秘めた眼で目の前の天災を見据えた修司は落ち着きのある丁寧な言葉遣いで天災に言葉を紡いだ。

「……それで、その篠ノ之束博士が私に何のご用です？　ただのいち用務員でしかない私ですが、今はＩＳ学園から引率の役目を担っている身、これから生徒達の所へ行かなければならないので急ぎの用でなければ手短にお願いしたいのですが」

「えー？　別にあんな有象無象の連中がどうなろうと別にいいじゃん。しーちゃんは私に対してもっと有効的に時間を使うべきなのだと束さんは思うのです」

人を小馬鹿にする様なふざけた口調。二パーと笑う彼女の笑顔に苛立ちを募らせも、修司は毅然とした態度を崩さず、もう一度束と名

乗る女性に声を掛けた。
「……理解できていないようなのでもう一度言います。私は今、非常に急を要する立場にいます。用件がないのであればお引き取り願いたいのですが」
嫌な予感がする。多元世界の頃に培った勘がここにいてはダメだと告げている。早々に一夏の所へ向かいたい修司だが、目の前の存在はそれを許さない。
「ぶー、しーちゃんってばせっかちさんだなぁ。そんなに私とお話するのは嫌い？」
「時と場合によりますね。そして今はその時がない事態です。残念ですが……」
「そっかー、なら……しょうがないよね」
「っ！」
女性から笑みが消え去り、突き刺さる殺意が押し寄せてくる。人が変わった様に殺気を剥き出しにしてくる彼女に踵を返し掛けた修司は向き直る。
ここで仕掛けてくるのかと周囲が身を構えた――その時、周囲四方は先日学園を襲ってきたゴーレム達が姿を現した。
一体どこに奴らが潜んでいたのか、ゴーレム達が出てきた所を注視してみると、窪んだ地面から奇妙な設置跡が残されるのを見かけた。（予め無人機を待機状態にしておいて地面に仕込んでおいたのか）
無人機と一般的に知られるＩＳの構造は基本的に似ている部分が多い。量子変換機能や拡張領域からの武装の取り出しといった行動は無人機のＡＩの知数が低いからと思われているが、いざ使おうとするなら可能といえる。
当然、待機状態にも変えられるこの機能を使えば、待ち伏せなどの搦め手も可能だ。今更気付くゴーレムの応用性の高さに修司は舌打ちを打った。
周囲四方のゴーレム、彼らの手に握りしめられたライフルに狙いを定められた次の瞬間、ゴーレム達は一斉に引き金を引いて修司に向けて撃ち放った。

巻き起こる轟音、舞い上がる砂塵と爆炎を前に天災アリスは高らかに謳い上げる。
「アッハハハハ！　言った筈だよ。今度会うとき迄にお前のその化けの皮を引き裂いてやるって！　叩き潰してやるって！　……見なよ、粉々だ。ハッハハハ、散々私の邪魔ばかりして、目障りったらないんだよ」
女尊男卑？　女性主義？　どうでもいい。全ては世界というおもちゃ箱で自分の思うとおりに動く玩具でしかない。愛しい妹、親友、そしてその親友の弟はそんな自分を退屈させない為の舞台装置だ。
役のないエクストラは早々に退場を願う。ＩＳの本来の目的？　人類の宇宙進出？　そんな目的などとうの昔に忘れ去った今の自分にとっては、どうでもいい理想だ。
「分かったかな。これが私だ。篠ノ之束だ。どこの誰だかは知らないけど、いい加減邪魔だったからさ、消えて貰うことにしたよ」
冷めた目で燃えさかるその場所を見据える天災。呆気ない、これが自分の跡を継ぐと噂される天才なのかと天災がその目に落胆の色を落とした時。
「……アナタの事情は知った事ではありませんが、私も臨海学校の時に言った筈ですよ」
「っ!?」
聞こえてきた声に天災は耳を疑い、辺りを見渡す。周辺には隠れる様な遮蔽物もなければ障害物も存在しない。一体何処へ消えたのかと天災は自身が作った索敵機を取り出し、周辺を調べ尽くす。
そして見つけた。索敵能力機に捕まったその反応は自身の真後ろを示している。天災が驚愕しながら振り返ると……。
「私の邪魔をするのであれば、どこの誰だろうと全力で排除する。――アナタも、その例外ではないですよ」
蒼い仮面を被った魔人がコートを靡かせて佇んでいた。嘗て多元世界で恐怖の代名詞となっていたテロリスト、不気味さと禍々しさを兼ね備えた怪物に天災は冷や汗を掻くのを確かに感じた。
「……成る程、それがお前の本性って訳」

「本性……という言葉が適切かどうかは分かりませんが、この姿の私も私である事に変わりはありません」
「……そう、ならやっぱり私のやることは変わらないや。お前をここで殺し、私だけの物語を進める為に！」
突然吹き荒れる磁気嵐。彼女の足下から包み込むように吹き荒れる磁気の嵐は放電現象をまき散らしながら周囲の木々を薙ぎ倒していく。
折角綺麗な所を良くもこんな無粋なモノで汚してくれるものだ。風情ある京都の景観を己の欲望だけで壊していく目の前の天災に魔人は仮面の奥で冷ややかな眼となって見つめていた。
やがて磁気嵐は収まり、その中から現れる存在に魔人は眼を鋭くさせる。吹き荒ぶ嵐の中から現れるのは――紅。鮮烈さと苛烈さを併せ持った強烈な色彩を放つソレは声高に広がる笑みと共に魔人を見下ろしていた。
『さぁ、始めようよ異世界からの旅人さん。私の〝紅錦〟で――篠ノ之束の最高傑作で葬ってあげるよ』
紅錦と呼ばれるＩＳが唸る。両手に握られた刀からは紅い稲妻が迸り、周囲の空気を灼いていく。対峙するだけで常人ならば尻込みするであろうその光景に、しかし魔人は動じた様子はなく、淡々とした口調で言葉を紡いだ。
「――成る程、素晴らしい性能だ。確かにこれほどの機体を造り上げる貴女は篠ノ之束を名を騙るに相応しいのでしょう」
『……あ？』
「しかし、残念ながら今の私は頗る機嫌が悪い。幾度となく生徒達の思い出を邪魔する〝アナタ方〟は最早私達にとって害悪でしかない。――故に」

〝ここで、終わらせて頂きましょう〟

瞬間、蒼き魔人の背後より空間に穴が開き、そこから蒼き魔神が姿を覗かせる。
篠ノ之束という天災が白河修司という存在を自分の障害だと確信した様に、白河修司もまた目の前の天災を見て確信した。
やはり篠ノ之束はその昔亡国機業によって拘束され、その技術を盗まれているのだと。目の前の存在は篠ノ之束という名を借りた魔女なのだと。
あぁ、確かにこの魔女は天才なのだろう。ゴーレムという無人機を多数作り出し、専用機を持った代表候補生達を幾度となく追い詰めたその手腕は悔しいが認めざるを得ない。
しかし、だからこそ彼女達は早々に諦めるべきだった。テロリストという肩書きを捨て、これから始まる時代に備え社会に出来る限りの貢献をするべきだったのだ。
惜しい。魔人は内心でそう悔やむが、彼女達が戦う意志を見せた今、魔人は自身の平穏（大切なモノ）を守る為に全身全霊を掛けて挑まなければならない。
亡国機業という世界のテロリストに対して宣戦布告をする様に、今この京都にいる全ての視線を集める為に……。
「さぁ、目覚（おき）めなさい。――――グランゾン」
蒼き魔人は重力の井戸の底から蒼き魔神を顕現させた。

その41

「織斑マドカ――――だと？」
　人気のない並木道、夕日を背に現れた織斑マドカという少女を前に一夏は混乱していた。自身の唯一の肉親として知られる織斑千冬と似た容姿、まるで姉の生き写しの様な彼女に彼は心底動揺していた。
　向けられた銃口、そこから感じる剥き出しの殺意。本当ならば逃げるなりの対応をしなければならないのに、目の前の異質の存在に一夏の思考が一手遅くなる。
「――――死ね」
　有無を言わさずに言い放つ死刑宣告、それと同時に撃ち出された弾丸は真っ直ぐに一夏の胸元目掛けて突き進んでいく。
　このままでは殺される。刹那の合間に一夏がそう思考した時、横に割って入る人物がいた。
「アリカちゃん！」
　ガキィンッと、金属の弾く音が響きわたり、小さな火花が散る。何だと思い視線を少し下げると、そこには左腕に部分展開を施したタンポポが一夏の前に佇んでいた。
「……ほう、まさか今のに反応するとは、ＩＳ学園の連中も多少は出来るようだ」
「そう言うアナタは例のテロリストの方ですか。目的は一夏さんの殺害、ですか」
「ふん、ソイツを殺すのはあくまで通過点に過ぎん。私の本命は織斑千冬ただ一人だからな」
「千冬姉ぇだと！　何故お前が千冬姉ぇを狙うんだ！」
「一夏さん、落ち着いて下さい」
　不敵な笑みで自分の目的を明らかにするマドカに一夏は過剰に反応する。唯一の肉親を殺すと明言している輩が目の前にいるのだか

ら、この彼の反応は当然だと言えた。
　それを分かった上でタンポポは一夏を制止する。何故なら連中の目的が一夏である以上、迂闊に相手の思惑に乗るのは危険だからと判断しているからだ。相手は一人の様だが他に仲間が潜んでいる可能性がある以上迂闊な事は出来ない。せめて此方に向かってきているであろう教師の人に合流するまでは下手な行動は控えるべきだとタンポポは考えるが……。
「私が織斑千冬を狙う理由などお前には関係ない。――――言った筈だろう。お前の命はここで終わると」
　次の瞬間、タンポポは己の先読みの甘さを痛感する事になる。幾ら人気のない場所だからといってここは日本の古都である京都だ。少しでも騒ぎを起こせばすぐに人は集まってくる。
　故にテロリストという存在を甘く見ていた。テロリストというのは極論を言えば自分達の主張を力押しで押し通す輩の総称、知識としては知っててもその意味を理解出来なかったのは、まだ彼女が生まれて間もない幼子故の弊害だった。
　――――マドカと名乗る少女を目映い光が包み込む。それがＩＳを装備する際の光なのだと知ったタンポポは驚愕しながら口を開く。
「そんな、ここでＩＳを使用するなんて……正気ですか！　ここにはまだ多くの人達がいるんですよ」
「あら？　アナタ達は私達の事を聖人君子の集団とでも考えていたのかしら？」
「っ!?」
　突如横から聞こえてくる第三者の声にタンポポの意識が逸れる。見ればそこには黄色いサソリを模した全身装甲のＩＳを身に纏った女が自分に向けて銃口を向けていた。
　女から放たれる炎の銃弾。それがタンポポ達に着弾すると、辺りは火の海に包まれ、木々は爆発と炎に薙払われる。女がこれで終わったのかと思われた時、砂塵の中からオレンジ色のバリアが見え、その中にそれぞれ蒼と白のＩＳが佇んでいた。
　そのバリアを展開する蒼いＩＳを前にサソリの女はフルフェイス

のマスクの奥でほくそ笑む。
「これはこれは、まさかその機体は蒼鴉かしら？　白河修司の第一ＩＳを扱うなんて、アナタは一体何者かしらねぇ？」
「まさか、テロリストがもう一人いたなんて……」
「経験が足りてないわねぇ。テロリストというのはいつだって姑息で、ずる賢くて、卑怯な連中の総称よ。そのくらい当然の知識でしょうに……アナタのご両親ってばもしかしてお人良し？」
「っ、父さんをバカにしないで」
首を傾げてサラリと毒を吐くサソリ女にタンポポは静かに闘志を燃やす。だが、どんなに怒りを募らせても状況が変わる事はない。目の前のＩＳの性能が未知数である限り下手に動くことは出来ないとタンポポは判断するが……。
「スコール、私の邪魔はしないでもらおう」
ＩＳの装着を終えたマドカが静かに殺意を滲ませてスコールと呼ぶ女性を睨み、それを受けたスコールはハイハイと肩を竦めて一歩下がる。
――黒。彼女の、織斑マドカの纏う異質なＩＳに一夏は目を見開いた。フルフェイスのマスク、蝶の羽を模したスラスター、外見こそ異質なモノだが、マドカの纏うＩＳはどこか騎士の様な気品の高さを漂わせていた。
まるで、十年前の白騎士のような……そこまで思考が回った時、一夏の眼前に黒い槍が突き立てられる。
「さぁ、始めるとしようか織斑一夏。私とお前、白と黒、どちらがより強いのか」
「くっ！」
「それじゃあ、私達の方も始めるとしましょうか。白河修司……篠ノ之束の後継者と噂される彼の作ったＩＳがどれほどのモノか、見せてもらいましょう」
「……っ！」
白と黒、蒼と黄、京都の街の一角でテロリストとの戦闘が始まった。

◇

一夏とタンポポ、二人がテロリスト達と遭遇している一方、オートマトン姉妹の末っ子モモは同じ班の布仏本音達とはぐれてしまっていた。

「ふぇ～、ほんちゃん～みんな～、どこ～？」

その目に涙を滲ませ、おっかなびっくりな様子で京都の街を一人歩くモモ、不安と怖さで怯えているものの、折角できた友達を失う訳にはいかないと彼女は一人皆を探す。

そんな時、モモの前に一人の女性が現れる。顔に包帯を巻き付け、獣の様な鋭い眼光、大凡普通とは言えない出で立ちに直視してしまったモモは恐怖で震え上がった。

「ふえ～！　お化けだ～！」

「誰が化け物だ！　……て、そう言うテメェはＩＳ学園のガキか。成る程、こりゃちょうどいい。このガキを人質としてクソ白河の前に突き出せばそれだけで私らの勝ちになるなぁ」

モモの存在に気付いた包帯の女、言動からしてテロリストの一味だと思われるその女は動転して腰を抜かしてしまったモモに一歩ずつ歩み寄っていく。

早くここから逃げ出さなければ、そう考えても体が言うことをきかない。徐々に近付いてくる包帯女に恐怖でどうにかなりそうだった時。

「モモ、無事！」

「探しに来たよ！」

「リンリンちゃん～、シャルちゃん～、来てくれた～ありがとう～助かったよ～」
　モモの前に凰鈴音とシャルロット＝デュノアがそれぞれＩＳを装備して降りたった。突然現れる二人の代表候補生の登場に僅かに驚く包帯女だが、次の瞬間にはその顔に獰猛な笑みを浮かばせている。
「全く、本音からアンタがはぐれたと聞いた時は心臓が飛び出す事かと思ったわよ」
「ごめんね～。私おっちょこちょいだから～」
「まぁこうして無事だったからいいよ。……それよりも、僕はそこの人の方が気になるかな。織斑先生が自らＩＳの使用許可を出すほどの事態、この状況って、もしかしなくてもアナタ達が原因だよね？」
　目の前の不気味な包帯女に対し、シャルロットは対ＩＳ用の銃口を突きつける。動くなという警告と威嚇を表した彼女の対応を前に包帯女は動じた様子はなく、不気味に笑っている。
「クハハハ、まさかフランスと中国、二カ国の専用機が私の前に現れるとはなぁ。今日はツいてるぜぇ」
「はぁ？　なに言ってるのアンタ」
「状況が上手く認識出来ていない？　いや、それにしたってこの自信は一体どこから……」
　二機のＩＳを前に変わらず自信のある態度を崩さない包帯女。一体この女のどこにこんな自信がでてくるのか、理解出来ない女の態度に二人が戸惑っていた時。
「なら、まずはテメェ等のＩＳを奪って殺す事から始めようかぁ！　出てきやがれ、ゴーレム共！」
「「っ!?」」
　突如として周囲を囲むように無数のゴーレム達が現れる。学園に幾度となく襲撃してきた無人機達の出現に鈴とシャルロットは驚愕に目を見開いた。
　形勢は逆転され、危機的状況へと陥ってしまった三人、無数のゴーレムが囲んでいるだけでも状況は不利だというのに、目の前の包帯女は高らかに笑い声を上げ。

「私の……このオータム様のクソ白河に対する復讐はまだ始まったばかりだ。精々楽しませてくれよ、クソガキ共ぉぉぉっ!!」
包帯女は蜘蛛のようなＩＳの鎧を身に纏い、二人に向けて襲いかかった。

◇

――――京都の空を目映い光が照らし出す。幾度となく広がっては瞬いては消えゆく閃光はまるで季節外れの花火のようだ。
しかし、実際はそんな甘い代物ではない。ＩＳという地球最強の兵器を用いての戦闘、蒼と白、黄と黒のＩＳ同士の激突による戦いは暗くなっていく京都の空を色とりどりに彩っていく。
『ふふ、流石は白河修司が手掛けたＩＳね。機動性、速さ、耐久力、そしてパワー、どれをとっても現存するＩＳを大きく凌駕しているわ』
『そう思うのなら、降伏したらどうです。この蒼鴉はアナタのＩＳの性能を大きく上回っています。痛い目に遭わない内に大人しくした方が身の為ですよ』
『あら怖い。けど、確かにアナタの言うとおりね。此方の機体も篠ノ之束博士によって改修されているけれど、それでもアナタの機体には適わない。やっぱり一から手掛けて貰わないと大して変わらないものね』
『だったら！』
『けれど、幾ら機体が良くても乗り手が未熟なら話は別よ。事前情報によればアナタのＩＳ蒼鴉は相当な性能を有している筈よね。それこそ、私程度なら瞬殺出来る程に――なのに私はこうしてピンピンし

ている。……何故かしらね』
『っ！』
スコールの言葉にタンポポはフルフェイスのマスク越しに表情を歪ませる。確かに自分はこの京都にくる前に生みの親である修司からＩＳに関する教練を一通り受けている。その合間こそは短かったものの、タンポポ自身濃密な時間だったと自負している。
ＩＳの操作技術も時間のある夜中に修司自ら指導を行っていた為、タンポポの技量も相当なモノへと至っている。
しかし、それは訓練機に限っての話。当時改修中だった蒼鴉は修司以外誰にも触れられる事はなかったのだ。蒼鴉に関しては最低限の操作方法とスペック能力しか知られていない彼女にとって見れば三輪車しか乗った事のない子供がいきなり説明書を渡されＦ１マシンに乗れと言われているものである。
それだけでも大変だというのに、この蒼鴉の基準設定は修司設定のまま、その反応は非常に過敏でタンポポは終始蒼鴉の姿勢制御だけで一杯一杯だった。その上更に武装を使用する事は相手の死を意味する為、基本的にタンポポは丸腰状態。それ故に現在タンポポは蒼鴉本来の五割にも満たない性能しか引き出せないでいたのだった。
対する相手は戦闘経験豊富なテロリスト。機体性能の差は大きく開いているのにスコール自身の戦闘能力がその差を縮めている。
経験の差。二人の間にある決して埋まることのない差にタンポポは己の不利を感じた。このままでは拙いと、どうにかして戦況を変えて一夏の応援に向かわなければならないと考えたその時、上空から目映い光が降り注がれた。
それがＩＳの光学兵器だと察したタンポポは一瞬回避をしようとするが、下が人が多くいる街である為その選択は即座に捨て、蒼鴉にバリアを纏わせる。
上からの攻撃を防ぎ、光のあった方角へ視線を向けると、タンポポの目は大きく見開いた。
『どうしたスコール、随分手間取っているようだが？』
『あらＭ、そう言うアナタの方は……どうやら終わったみたいね』

『あぁ、二重加速（ダブル・イグニッション）などと姑息な技を使われた所為で多少は手こずったが……まぁ、こんなものだ』
『そ、そんな……一夏さん』
黒い騎士が嘲笑の笑みを浮かべる。彼女の左手に握られた槍の切っ先には貫かれた一夏の姿が――――。
『一夏さぁぁぁぁん!!』
タンポポの悲痛な叫びが木霊した。

その４２

一夏とタンポポがテロリスト達の襲撃を受ける数分前、京都駅周辺にある広場には集合時間に合わせてＩＳ学園の生徒達が集まっていた。

本来ならもうじき駅のホームに移動しなければならない筈の時間帯、しかし彼女達は一行にその場から動こうとしなかった。いや、そもそも駅内部から人の気配すらしない。観光に訪れた人やコンビニ店舗の従業員、駅の係員すら見当たらない。

殆ど無人状態となっている駅内、それに比例して駅の周辺は物々しい雰囲気に包まれていた。複数のパトカー、救急車、消防車、更には自衛隊と日本の防衛機構の全てが駅周辺に集まっているのを前に、学園の生徒達は不安そうに見つめていた。

事の発端は数分前に遡る。そろそろ集合時間の頃だと思い生徒達の点呼を兼ねて一足早く集合場所へたどり着いた千冬は楯無と遭遇し、そこで爆弾が仕掛けられてある可能性の旨を聞かされた。

以前から修司にも似たような事を聞かされていた事、学校行事になると必ずといっていいほどに襲撃を受けていた事を教訓に千冬は山田真耶と数名の教師陣と共に駅長の所へ事情を説明し、駅内にいる全ての人間を外へ避難するよう呼び掛けた。

駅内の人間を避難させた後も、既に京都知事に連絡を通していた為に警察の協力も得られ、爆弾発見の際には救急車や消防車、更には自衛隊の爆弾処理係りの面々も迅速に駆けつける事が出来た。

爆弾が発見されたという報告があってから早３０分。そろそろ何らかの動きがあるだろうと千冬が目を細くした時、駅の出入り口から複数の男女が出てくる姿があった。

自衛隊の爆弾処理係とドイツの代表候補生であるラウラ、そしてロシアの代表である楯無が駅から出てきた。彼女達の報告を聞くべく

千冬は二人に駆け寄った。
「二人ともご苦労だった。報告を聞かせて欲しいのだが……構わないか？」
「勿論です。織斑先生」
「現在駅内に逃げ遅れた者の姿は確認できませんでした。ＩＳを展開し周囲を隈無く探してもその姿が無かった事から、どうやら我々以外人はいないようです」
「爆弾の方も爆弾処理の方々とラウラちゃんのＩＳのお陰で早期に発見、対処、処理する事が出来ました。他に爆弾が仕掛けられた様子は無いことから、どうやら私達が乗る予定だった列車に取り付けられた爆弾が最初で最後だったようです」
「そうか、まだ気を抜けないがひとまず乗り越えられたか。自衛隊の皆さんや警察、消防の皆さんも協力ありがとうございました」
ラウラと楯無の報告にひとまず安堵した千冬は駆けつけてくれた応援の人達に向けてドイツ仕込みの敬礼で感謝を示し、爆弾処理係の面々もにこやかに微笑みながら敬礼を返す。
早期発見と早期処理、これにより被害を一切出さずに収束させた事に安心するが、まだ警戒を解くわけにはいかない。警察や消防の人達には解散してもらうにしても自衛隊の方々には引き続き待機して貰おうかと千冬が思案した時、大慌ての様子の山田真耶が箒と簪、本音を連れて駆け寄ってきた。
「お、織斑先生！」
「どうしました山田先生、何か問題が起こりましたか？」
「じ、実はここに来る途中サキさん達が突然単独行動をしてしまって」
「止めようとしたのですが、何でも皆モモとタンポポが危ないと言い出して」
「あっという間に跳んでちゃったんですよ～！」
真耶と箒達、彼女から聞かされる報告に千冬の目が大きく見開いた。こんな時になんて事をしでかしてくれるのか、早い所彼女達を探さなければと思い通信機器にスイッチを入れようとした時、京都の空に目映い光が照らし出された。

「な、何今の！」
「今の光、もしかしてＩＳの戦闘が!?」
突然の事態に箒達が動揺するが、千冬は手にしていた通信端末に記されたある事が原因で彼女達よりも動揺していた。
彼女の手にしている通信端末は白河修司手製のモノ、何かあった時に教師達の合間で連絡が取り合えるよう渡されたこの端末にはある細工が施されている。
それは、織斑一夏の生命状態についてだ。護衛を任されているタンポポを通して伝わってくる情報の為に細かい所までは伝わりはしないが、それでも、送られてくる一夏の状態を知り得るには重要な役割を果たしている。
そんな端末から送られ来た情報は……白式の生体反応の消失、一夏の死を告げていた。
その事実に千冬は足元が崩れ落ちる錯覚に襲われた。そんなバカなと、有り得ないと彼女は何度も端末を見直すが……それでも映し出された生体反応消失という文字は消えなかった。
何かの間違いであって欲しい。そう願う彼女の空で再び光が爆ぜるのだった。

◇

『――――あれ？　ここは何処だ？　俺、確かマドカって奴と戦ってた筈じゃあ……』

どことも分からない場所、空と水で満たされた世界に織斑一夏は佇んでいた。つい先程まで京都でテロリスト達と戦っていただけに今いる自分の世界はあまりにも静かすぎると感じた。

『確か俺、タンポポちゃんと分断されて……それからアイツの槍に体を貫かれて……って、もしかしてここがあの世って所なのか？』

この世界に立つまで自分の身に起きた出来事を思い出した一夏はここが死後の世界なのかと思い込んだ。ここがあの世というならこんなにも静かと言うのも納得出来る。このまま闇魔の所へ向かうのかと思った時、自分の前にＩＳを身に纏った一人の少女が降り立った。

白。自分と同じ真っ白なＩＳを身に纏った少女、どこか姉に似ている風貌をした彼女に一夏は思い当たる一人の存在を思い出した。

――白騎士。十年前、日本に向けて発射された二千ものミサイル群をたった一機で打ち落とした規格外の存在、日没と共に姿を消し、以来行方不明となっていたＩＳが何故今になってここにいるのか。

不思議に思った一夏が白騎士に歩み寄った――その時。

『なっ!? あ、が!?』

突然白騎士は一夏の首を締め上げた。ＩＳの絶対的な力に抗う事の出来ない一夏は、為す術なく白騎士に締め上げられてしまう。

一体何故白騎士がこんな事をするのか、戸惑いながら一夏が彼女に視線を向けた時、彼女に起きている異変に一夏は更に目を見開く事になる。

目映い程に真っ白な鎧。見惚れる程に美しかった白が黒く塗りつぶされていく。白騎士だけでなく、空、水、全てが暗闇に包まれていく。

まるで人の悪意が押し寄せる様に、白と青で包まれていた世界が黒に支配された時、白騎士の少女は口を開いた。

『――――死ね』

『っ!?』

『死ね、死ね、織斑一夏、死ね』

それは呪詛の様だった。悪意と憎悪の塊から発せられる死の言葉、

締め上げられている首に更なる力が加わり、意識が朦朧とし始めた時
――それは現れた。
〝光〟　一夏と白……いや、黒騎士の間に現れたその光は翡翠色に輝き、不可思議に形を変えていた。意識が朦朧としている為か、何処か虹色に輝いても見えるその光、今度は何だと一夏が思った時、頭に直接声が聞こえてきた。
『……どうしたい？』
酷く曖昧で、けれどハッキリ聞こえてきた声。どうとでも捉えられるその言葉に一夏は微かに言葉を紡ぎ始めた。
『……俺、は、今まで、色んな人達のお陰で生きてこられた。千冬、姉ぇや箒、束さんや鈴、鈴の両親や弾、五反田家の皆、他にも沢山の人達のお陰で俺は今まで生きてこられた』
一夏に声の主の言葉の意味を理解している様子はない。ただ自分の思った事を、自分がこれまで生きてきた軌跡を、目の前の光に吐き出しているに過ぎなかった。
だが、光がそれを否定することは無かった。静かに、ただ自身の想いを吐き出す一夏の様子を見守り続けた。
『俺、は！　ここで死ぬ訳にはいかない。沢山の人達から受け取ったモノを、少しでも返していく為に、俺は……生き続けなくちゃいけないんだ！　――――だから！』
『だから？』
『白式、俺に力を貸せ！』
力強く吐き出される想い。その言葉を受け取った時、光はより強い輝きを放った。
右手にはいつの間にか白式のブレスレットが装着されていた。それを掲げた時、光はブレスレットと共鳴し、虹色の光が世界を再び塗り替えた。
黒騎士が光に呑まれて消えてゆく。自身の意識も薄れゆく中、一夏は最後に言葉を耳にした。
『なら、信じて。アナタの内に在る可能性を、頑張って……一夏君』
光の奥から聞こえてきたその言葉を最後に一夏は完全に意識を手

放した。その刹那、光の中で小さな女の子が嬉しそうに……笑った気がした。

◇

『一夏さん！　応答して下さい！　一夏さん！』

京都の空でタンポポの悲痛な叫びが響きわたる。テロリストの槍に貫かれ、微動だにしない一夏に何度も呼び掛けるタンポポにマドカの非情なる言葉が突き刺さる。

『無駄だ。私の攻撃はバリア無効化攻撃が備わっている。ＩＳに携わるお前なら、この意味分かるだろ』

『っ！』

バリア無効化攻撃。それは文字通りＩＳに備えられているバリアを無効化し、そのまま攻撃を加える事。シールドバリアという障壁を貫通して通すその攻撃はまさしくＩＳ殺しの一撃だ。

一夏の白式に搭載された雪片弐型という武装にも同じ無効化攻撃が実装されているが、黒騎士の手にしている槍はその上位変換の代物。より殺傷力のある攻撃によって貫かれた一夏の体は既に死んでいるのも同然だとマドカは吐き捨てる。

『それでもこの男が欲しいと言うのなら……そら、くれてやるよ』

『っ!?』

無造作に振り抜かれた槍は一夏の体を遠心力で引き離されていく。重力に従って落ちていく一夏をタンポポは無我夢中で追いかけた。

落下する一夏に追い縋るタンポポ、マドカはそんな二人が合わさる

瞬間を狙って、槍の先端で狙い定めていた。
『壊しちゃダメよ。あの蒼鴉は私達の方で回収するのだから』
『……ふん、分かっている』
背後から注意してくるスコールの言葉に了解しながら、マドカは狙いを絞っていく。――――既に目的の半分は達成した。後は何処かにいる織斑千冬を殺し、完全なる達成を果たすのみ。
前の時は白河修司というイレギュラーの所為で断念しまったが、今回は違う。天災に天災をぶつけた事により邪魔者はいなくなった。これで自分の目的は果たされるのだと、マドカは確信しながら重なる二人に向けて紫色の光を放つ。
槍の先端から放たれる閃光は光の槍となり真っ直ぐ一夏にトドメを刺すために向かっていく。これで終わりだと、マドカはフルフェイスのマスクの奥で満面の笑みを浮かべた時――――それは起きた。
『なん……だと?』
当たる筈だった。間違いなく直撃コースだった。ほんの数瞬前まで自身の勝利を疑っていなかった織斑マドカは、目の前で起きている現象に我が目を疑った。
自分が放った光の槍が一夏に当たる直前、突然白式から放たれる輝きに阻まれて光の槍は消滅、これだけでも驚愕すべき事実だというのに……。
『奴のＩＳが……変わっていくだと!?』
一夏のＩＳ白式が全身装甲へ変形……いや、変身していく様を見て、マドカとスコールはその表情を驚愕の色に染め上げる。第二次移行（セカンドシフト）？　いや、あの変わりようはこれまで事例のあるＩＳの第二次移行とは異なりすぎている。
まるで全身が展開装甲の様な造形、紅椿にも全身が展開装甲に施されているという情報はあったが、白式のは全く別物だと見て取れる。
展開された装甲から放たれる翠色の光、その光からは従来のＩＳとは全く別の力が観測されているからだ。
一体アレはなんなのか、そして奴の身に何が起きているのか。ただ、分かっている事が一つあるとすれば……。

『そうだよな。俺もお前も、こんな所で終わる訳には……いかないよな』
自身の目的を達成させる為にはまだ手が届かないという事だ。

◇

『ハッハァ！　どうしたどうしたぁ!?　さっきまでの威勢はどこへ行ったクソガキ共ォ！』
『く、クソォ……』
『やっぱりこの状況じゃあ被害を抑えるだけで精一杯か』
一夏が死の淵から復活を果たし、再び黒騎士と戦闘を開始していた頃、街から離れた山の奥地で巨大な蜘蛛と化したオータムと無数のゴーレム達によってシャルロットと鈴音は窮地に立たされていた。
京都という街を守る為、周囲の人間を巻き込まない為、火力のある武装は極力控えていたが、ゴーレム達の猛攻により二人は終始不利な状況に追い込まれていた。
そんな彼女達に出来たのはテロリスト達を京都から引き離す事だけ、幸いにも挑発に乗りやすい相手だった為に誘導事態は容易かったが、戦局は不利のまま、地形や障害物を利用してゴーレムを何機か撃墜したが、それでも状況が変わる事はなかった。
何とかしなければ、鈴音とシャルロットは状況を変えるために思考を巡らすが、それを許さないとばかりにオータムが仕掛けてきた。
蜘蛛を模した足の部分を切り離し、ＢＴ兵器の様に宙を舞う。二人を囲むように展開されたそれは高圧電流を流し込み、二人に永続的な

痛みを与え始めた。
『あ、あぁぁぁっ！』
『うううう……っ!!』
『アヒャヒャヒャ！　どうだい、私の全方位高圧電流のお味は？　痺れるだろう？　イきそうだろう？　なぁに、他の連中もすぐにイかせてやるよ。アタシの優しさに咽び泣きなぁ！』
　苦しむ二人を楽しみながらなぶるオータム。脱出しようにも既にシールドエネルギーか尽き掛けている以上、彼女達の抵抗は出来ないに等しかった。
（くそ、クソォ！　こんな、こんな奴に一方的にやられるなんて……）
　悔しさと惨めさに鈴音の目に涙が浮かぶ。それがオータムの嗜虐心を更に擽り、電圧を更に上げようとした……が。
「どうして……」
『……あぁ？』
「どうして二人をそんなに虐めるのぉ？　シャルちゃんも鈴ちゃんも～悪いことしてないのに～、どぉ～して虐めるのかなぁ～？」
　突然聞こえてきた第三者の声にオータムの手が止まる。同時に高圧電流から解放された二人は力なく地面に倒れ込み、声のした方へ顔を向け、そして絶句する。
　そこにはいない筈のモモが佇んでおり、オータムに睨んでいたからだ。何故彼女がここにいるのか、丸腰で佇んでいるモモに鈴音とシャルロットは必死に逃げろと呼び掛ける。
『バカ、アンタ何でここにいるのよ！』
『モモ、早く逃げて！　コイツは危険だ！』
　何故モモがこんな所にいてどうやってここまで来たかは分からないが、兎も角彼女をここにいては危険だ。テロリストに捕まらないよう早く逃げろと二人は呼び掛けるが、本人は聞こえていないのか不機嫌な様子でＩＳを身に纏っているオータムに問い続けた。何故二人を虐めるのかと、真剣な表情で訊ねるモモに対し……。
『決まってんだろぉ？　憂さ晴らしだ。コイツ等は身の程も知らずにアタシに突っかかって来やがった。邪魔な虫けらは叩き潰すに限る

だろぉ？　つまり、そういう事なんだよぉ！』
オータムは下卑た笑みでモモの質問を一蹴する。自分の憂さ晴らしの為、街を焼くことも厭わないテロリストに対し……。
「ふ～ん、そういう事言うんだぁ～。だったらぁ～」
モモは目の前の害悪に仕置きをする事を決めた。京都に来る途中、必要な時以外決して使用する事を修司から禁じられていたあの力を行使する事にした。
彼女を包むように光が集まる。一体何が起きるのだと鈴音とシャルロットが目を手で覆う。一瞬で消える光、二人がオズオズと視界を開けると……。
「私がアナタに何をしても、なんら問題はないって事よねぇ？」
ボンテージ姿の女王様が鉄鞭らしき凶器を片手に佇んでいる光景に――――。
「「だ、誰だぁぁぁぁっ!!??」」
シャルロットと鈴音はそう叫ばずにはいられなかった。

その43

――――某国某所。とある重要軍事施設、他国からの密偵は勿論、蟻の子一匹すら侵入を許さない厳重な警備により管理されてきた施設である一つの重大な事件が起こっていた。

基地に響きわたる緊急事態を報せるサイレン、尋常でない事態を前に司令室で指示を飛ばしていた将校は目の前に疑いながら口を開いた。

「一体何が起きている！」

「基地内のシステムが何者かに侵入されています！」

「現在全システムの７０％がダウン！」

「バカな、十年前の白騎士事件以降厳重に厳重を重ねた防衛システムだぞ！　そんな容易く破られる筈が――――」

「し、システムの８０％が掌握されました！　そんな……嘘だろう」

「どうした!?」

「か、介入してきたウィルスがミサイルのロックシステムを解除し、日本に狙いを定めようとしています！」

「何だと!?」

オペレーターから告げられる新たな事実に男性将校は驚愕に目を見開く。それだけはさせてはならないと男性将校は全オペレーターにミサイルシステムの防衛を命ずるが……。

「ファイヤーウォール突破されました！　ミサイル、発射されます！」

「そんなバカな、これでは十年前の白騎士の再現ではないか」

愕然とした面持ちで崩れ落ちる将校。基地から撃ち出される長距離弾道ミサイルの様子を見て、彼は十年前の白騎士事件の事を思い出す。

基地から撃ち出される数十のミサイル群。だが、彼は知らない。自分達のミサイルが日本に向けて撃ち出される中、世界中のミサイル所有基地にハッキングが掛けられていた事を――――。

その数、総勢５０００発。白騎士事件よりも上回るミサイルの量、日本は再び、滅亡の淵に立たされようとしていた。

◇

『――何故だ。何故貴様は生きている』

京都上空。摩訶不思議な現象を目の当たりにし、殺した筈の〝人の形をした白き獣〟に向かって織斑マドカは問い掛ける。

手応えはあった。奴のシールドバリアを破り、絶対防御すら度外視して振り抜いた自分の槍は、間違いなく織斑一夏の腹部を貫いた筈だった。

天災篠ノ之束の手によって生み出されたバリア無効化攻撃、シールドバリアは疎か絶対防御すら無効にしてしまうその力は殺しに特化したモノ。白式の雪片の上位変換とも言える一撃を受けておきながら生き長らえている目の前の現実にマドカ思考が混乱していた。

しかも、白式と呼ばれていた奴のＩＳが全身装甲となって復活している。どんな手品を使ったのか、一体どうやって傷を修復させたのか、そもそも奴の機体の節々から見えるあの翠色の光は何なのか、混乱する彼女に対し、一夏は酷く冷静な態度でマドカの質問に答えた。

『……さぁな、俺にも良くは分からないさ。気付いたら俺はここにいて、こうしてお前と相対している。――一つ分かる事があるとすれば』

『？』

『俺も白式（コイツ）も、むざむざお前なんかに殺されるつもりはないって事位かな』

『――っ!?』

一夏のその言葉を挑発と捉えたマドカはバイザー越しに激昂する。ふざけるなと、何も知らない一夏に対して理不尽な感情を吐き出しながら、彼女は再び槍を手に白式へ接近する。

『死ねぇぇっ！　織斑一夏ぁぁぁっ!!』

憎悪を撒き散らしながら黒騎士が白き獣へと肉薄する。振り抜かれ、迫り来る槍を前に……。

（――――見える！）

一夏は自らを包み込むＩＳを己の手足の如く稼動させ、両手でこれを掴み取る。高速で接近し、隙の無いモーションで繰り出した必殺の一撃をあっさりと見切られた事実にマドカはバイザーの奥で大きく目を見開かせた。

『バカな、何故この一撃に対処出来た!?　さっきまではあんなに……』

『あぁ、全く見えなかったよ。けど、今は違う。白式を通してあの子が俺に力を貸してくれている。頑張れって言ってくれている。だから！』

『なんだ、何を言ってるんだお前は!?』

『俺は、何度だって頑張れる！　俺達なら、どこまでもいける！　そうだろ、〝一式（いっしき）〟!!』

一夏の言葉に応える様に彼の機体から翠色の光が溢れる。その輝きの奔流に圧され、黒き騎士は弾き飛ばされる。

〝一式〟　壱ではなく、零でもなく、始まりを案じる最初の〝一〟

その言葉に込められた意味は――――無限の可能性。

第二次移行（セカンド・シフト）を経て人の形を為した可能性の獣、これからの自分と全ての人類に送るエール。

自分達はまだいける。そう信じて疑わない少年は自分の中に眠る可能性を信じ、黒き騎士に向けて加速した。

『なっ!?』

弾き飛ばされ、体勢を整える暇もなかったマドカは白き獣に押され上空へと押し上げられる。抵抗しようにも一夏と彼のＩＳによる飛翔速度は音速を越えており、空気による圧力がシールドバリア越しに彼女の機体が抑え込まれてしまっていた。

為す術なく遙か上空へ押し上げられてしまう黒騎士、空気の圧力から解放された時は雲の海の上へと出た時だった。
遙か彼方まで見通せる絶景。沈み往く太陽と雲の海が合わさって幻想的とも言える空間だが、マドカにはそれを堪能する余裕などなかった。
胸の内にあるのは織斑一夏に対する憎悪だけ、この男だけは殺さなければならないと、それだけを頭に入れてマドカは一夏へと切りかかる。
『織斑、一夏ぁぁぁっ!!』
憎しみに凝り固まった叫び。端から見ればおぞましく、見るに耐えない光景だと言うのに、何故か一夏はそれが助けを求めている様に見え、憎悪でしかない彼女の声が慟哭の様に聞こえた。
理由は分からない。自分を一方的に敵視し、更には殺そうとしてくる相手を前に内心で自分に疑問を抱く。何故自分は目の前の少女に対しそんな事を思えるのか、根拠もないその理由に……。
『――――今、助けてやるからな』
一夏は根拠もなく、彼女を助ける事を決めた。あれ以上あの機体に彼女を乗せる訳にはいかない。己の直感に従いそう決めた彼はこの時初めて戦闘態勢に移行し、彼女に向けてバーニアを噴かせる。
『あぁぁぁぁっ!!』
振り抜かれる黒の槍。直撃した相手に死をもたらす黒槍を一夏と一式は寸での所で回避し、そのまま黒騎士の間合いへと飛び込んで槍に手刀を突き刺す。
対ＩＳ用の近接武装、それがただの手刀によって破壊された事に驚愕しながらマドカは槍から手を離す。爆発し、散っていく自分の武装に舌打ちを打ちながら距離を開け、もう一振りの槍を手に取る。
この距離なら外しはしない。黒槍の……ランサービットから放たれる閃光が未だ爆煙の中にいる一式に向けて発射される。
煙を吹き飛ばし、周囲の雲を蒸発させる高出力の一撃、並のＩＳなら一撃でシールドバリアをゼロにしてしまう威力を誇るその一撃を、一式は翠色の力場……バリアーらしき障壁で防いでいた。

『またか！　一体、その光はなんなんだ！』
シールドバリアとも絶対防御でも違う。全く別のエネルギーが一式を守っているとしか思えない現象にマドカは目の前の存在に理不尽すら感じた。
『……さて、俺もいつまでこの形態を維持できるか分からないからな、そろそろ終わらせてもらうぜ』
『っ！　バカにして！』
余裕とも言える一夏の言葉にマドカは更に怒りを募らせる。その余裕さを消してやると言わんばかりに黒騎士は腕に取り付けられたマシンガンを放つが、圧倒的速度と加速を誇る様になり、視覚は疎かハイパーセンサーでも一式を捉える事は適わず、マドカは焦りと怒りで思考が混乱していった。
一体このＩＳは何なのか、第二次移行に至ったとは言え、ああも性能が跳ね上がるモノなのか？　混乱するマドカだが彼女はこれまで多くの実戦を経験してきた猛者だ。自身が不利となる状況を幾つも体験してきた彼女は呼吸を整えて思考を安定させる。
当たらないのなら、せめて此方に一直線に来るよう誘導するのみ、マドカは最後の一振りとなった黒槍を手放し、スタビライザー部分に手を伸ばす。
単なる姿勢制御装置かと思われてたスタビライザーは巨大な大剣となり黒騎士の手に握られる。あれこそが彼女のＩＳの主武装なのだと一夏は理解しながら、マドカへ一直線へと突き進む。
振りかぶる大剣、そこから発せられる圧力にこれまで以上の力を感じ取った一夏は手を鋭くさせ手刀の形に変える。すると、彼が纏うＩＳから再び翠色の光が放ち始め、やがて一夏の手刀に集まり始める。
収束されていく光は刃という形となる。翡翠色の剣を手に一夏もまた黒騎士に向けて加速する。
『織斑、一夏ぁぁぁぁぁっ!!』
『はぁぁぁぁっ!!』
ぶつかり合う白と黒、拮抗したのは僅か一瞬の合間、やがて翡翠の剣が黒き剣に亀裂を入れ……一夏の放った一撃は大剣ごと黒騎士を

切り裂いた。
『そんな……バカな』
砕け散るバイザーフェイス、そこから見える彼女の表情にはただ驚愕という色で染まりきっていた。一体何故自分は敗北したのか、理解出来ない現実と黒騎士が破壊されたショックによって織斑マドカは意識を暗転させてしまう。
意識を無くし、ISの機能も奪われた彼女は地上へ向かって落下していく。そんな彼女を受け止めたのは一式の形態を解き、白式状態へ戻った一夏だった。
意識を失い、自分の腕の中で眠る彼女に対し、一夏は呟く。
『……目が覚めたら、改めて話をしような。その時は千冬姉ぇも一緒に』
彼の呟きが届いたのか、眠っている筈の彼女がピクリと反応した様な気がした。

◇

『――――バカな』
織斑一夏と織斑マドカ、二人の戦いの様子をハイパーセンサーで視ていたスコールは目を大きく見開かせて驚嘆していた。
織斑マドカ……Mに不備はなかった。篠ノ之束という強力無比な協力者のお陰で彼女の機体は第四世代に匹敵、或いは凌駕する性能を持つようになり、M自身の実力も合わさって織斑一夏は勿論、理論上は国家代表クラスすら凌げる実力者となった筈だった。
なのに結果は真逆、織斑一夏が復活して不思議な光を放つようになってから全てが狂うようになってしまった。このままでは拙い。Mが敗れ、回収が不可能な状況となった今、スコールはすぐさま撤退

までの行程を模索する。
その為にはオータムの協力も不可欠、なのに一行に繋がらない通信に苛立った時、彼女の前に蒼鴉を纏ったタンポポが降りたった。
『……これでお終いです。さぁ、抵抗せず降伏して下さい』
拳を突きつけて降伏する様促してくるタンポポにスコールは表情を歪める。Ｍという此方の最有力戦力を失った今、自分達の目的を達成する事は不可能となった。
逃げるしかない。目の前の蒼鴉は性能こそ脅威ではあるが乗り手は未だ未熟、ならば逃げ切ることも可能だと判断するスコールはフルフェイスのマスクの奥で笑みを浮かべる。
『――――ごめんなさいねぇ、私はまだこんな所で捕まる訳に行かないの』
『逃がさない！』
逃亡を図ろうとするスコール、そんな彼女の動きを察知してタンポポはソレを阻止しようとするが……彼女のＩＳから放たれる無数のミサイル群によって阻まれしまう。
蒼鴉の装甲はガンダニュウム合金、多少の無茶は無視する事が可能な硬さを持っている。この程度なら突っ切ってテロリストを捕獲する事が出来るとタンポポは判断するが、次の瞬間それは間違いだと思い知らされる。
向かってくる筈のミサイル群は全て下を向き、地上に向けて放たれていく。スコールの狙いを理解したタンポポはその姑息なやり方に嫌悪しつつも、地上にいる人々を守る為にミサイルを追って降下する。
ＧＮフィールドを展開し、自ら突っ込む事でミサイルを全て破壊する事に成功したが、その為にスコールは既に空の彼方、追い付こうとしても手段を選ばない奴の事だ。恐らくはまたミサイルや武装を地上に向けて放ち、関係のない人々を巻き込もうとする事だろう。そうなれば自分一人では対処仕切れず、いずれは余計な被害を出してしまう。
どうすればいい。せめてバスターライフルでも使えればとタンポ

ポは考えるが、父親である修司から固く禁じられている以上、使用することは出来ない。
残された手段はＴＲＡＮＳ―ＡＭシステムだけだが、アレもツインドライヴシステムとＩＳコアの制御を行いながらでないと上手く作動出来ない代物だ。造り上げた白河修司なら可能だろうが、自分にはそこまで高度な処理能力は備わっていない。
自分一人では何も出来ない。そこまで自虐的になった時、タンポポの脳裏にある言葉が浮かんできた。それは昨日修司から蒼鴉を受け取る際に交わした会話だった。
『――いいかいタンポポ、この蒼鴉はツインドライヴとＩＳコア、二つの動力源を両立させる事で初めてその性能を十二分に引き出す事が出来るんだ。決して自分一人で動かしてると思い上がってはいけないよ』
最初は父の言っている意味が分からなかった。けれど、ここへ来て漸くその意味を理解したタンポポは蒼鴉の中に居るもう一人の味方に声を掛けた。
『……アリカさん、今まで無視してごめんなさい。今更ではありますけれど、どうか私に力を貸しては頂けませんか？』
『――もっちろん！　幾らでも貸しちゃいますよー！』
自分の声に答える様に返事を返すアリカにタンポポはありがとうと呟いた。ＩＳコアに眠っていた電子生命体、アリカという共に戦ってくれる相棒を得られた事で蒼鴉に変化が起きる。
〝多目的移行（マルチ・シフト）〟専用機に備えられた操縦者に適した形状、システムとなるＩＳの適合システム。これまでとは違い人それぞれに合った適合を施す為にと修司の独自理論に基づいて改修し、組み込まれた新たなシステムはタンポポという新たな操縦者をアリカが理解し、学習する事で発動する事に成功した。
見た目こそは変わっていないものの、その中身はまるで違う。自分の体や挙動にフィッティングを施されたこのＩＳはある意味でタンポポ専用の機体となった。
機体出力、加速、どれも今までとは違う事にタンポポは驚きながら

もこれを受け入れた。自分は一人で戦っている訳ではない。ＩＳ操縦者としての本当の意味で理解した彼女は蒼鴉を稼動させ、逃げ往くスコールの後を追う。

テロリストとの距離は依然として開いたままだ。奴のＩＳのステルス機能を身を以て知っているタンポポは遂に彼女を呼び寄せる事を決める。

『アミカちゃん！』

『はいなー！』

名を呼ぶと同時に現れる一羽の燕、自分の出番だと喜びを露わにする彼女は遂に蒼鴉の真価を発揮する時だと待機状態から姿を変える。

〝オーライザー〟ツインドライヴシステムとＩＳコア、その二つの動力源を完全に同調させる為に作られた蒼鴉の支援機。

蒼鴉の背中へドッキングを果たし、更なる機体性能を向上させる。

〝レイヴライザー〟蒼鴉（ブルー・レイヴン）とオーライザーが合体した事で付けられた名称。額に表示される二つのＲ、ＲａｖｅｎとＲＡＩＳＥＲの文字が浮かび上がる。

オーライザーとドッキングした事で飛行速度は加速度的に増していくが、それでもまだ足りない。まだまだこの機体の限界はこんなモノではないとタンポポは更に機体性能を引き上げる。

『いきます。トランザム！』

その音声を認識すると共に蒼鴉に紅蓮の炎が纏う。爆発的に加速する一羽のレイヴンは瞬く間にスコールへ迫り。

『な、何だこの速さは!?　こんなの、聞いてないわよ！』

『もう逃がしません！　ワイヤーアンカー射出！』

『っ!?』

『モーションパターン〝Ｋ〟　必殺！　クルルギスピニングキイイイック!!』

放たれるワイヤーアンカーにより四肢を封じ、頭部へ加速を付けての回し蹴りを叩き込む。その威力は従来の武装であるサドンインパクトやツインバスターよりは低いものの、シールドバリアは勿論絶対防御にまで影響が及び、何より伝わってくる衝撃によってスコールの

意識は強制的に途切れる事になる。
割れるフルフェイスのマスク、そこから見える白目を剥いて気絶したスコールを見て己の勝利を確信したタンポポは小さくガッツポーズを取った。
『お父さん、みんな、私やったよ』
勝利の余韻を浸りたい所だが、相手は手段を選ばないテロリスト。気絶している間に身柄を拘束しようと落ち行く蠍を回収したその時、タンポポの視界に危険を知らせるモニターが浮かび上がる。
何だと思いその画面を開いた時、タンポポの目は驚愕に見開いた。
『そんな……嘘、でしょう？』
京都……いや、日本に向けて発射されたとされる無数の機影、それが全てミサイルだと知ったタンポポは急いで父に報せようと蒼鴉を加速させる。
このままでは日本が危ない。急いでこの事を伝えなければと急いだその時。
『その心配はいりませんよ』
まるで、全てを見越した様に京都に蒼き魔神が姿を現した。
それを見て一言――――。
『……あ』
全てを察したタンポポは乾いた笑みを浮かべながらゆっくりと帰路に着くのだった。

その４４

――――京都上空で行われていたＩＳ同士の戦闘。最初は空に浮かぶ光を花火か何かと錯覚していたが、聞こえてくる爆音と炸裂音が普通と違うと知り、人々はそれがテロリストによる行いだと知る。
千年の歴史を持つ京都がＩＳという兵器によって破壊されてしまう。住民達はその事に恐怖し、一時はパニックに陥り掛けたが、駆けつけた自衛隊と警察の的確な避難誘導によってパニックは沈静化された。
上空で続いていたテロリストとの戦闘もやがて収まり、人々は安堵のため息を零した。
だが、まだ終わっていない所があった。京都の街から離れた郊外、森林に覆われた深い山の中で彼女達は戦闘を続けていた。
「どうしたのぉ？　もうお終いなのかしら？　見た目の割には淡泊なタイプなのねアナタ、トンだ期待外れだわ」
いや、それは正確には戦闘とは呼べなかった。片方の存在が片方の存在に対して一方的に攻撃する様は蹂躙という言葉に相応しい光景だろう。
ボンテージ姿の女が蛇腹に変形する鉄の鞭で蜘蛛の女をいたぶる。重くも鋭く、ＩＳを纏っていながら確かなダメージを負わせてくる。女王の風格を持った女はその表情を恍惚に染め上げながら防御している蜘蛛女をなぶり続けた。
「ほらほらほらほらぁ！　もっと私を楽しませてよ、もっと醜く抗って私を滾らせて頂戴！」
『ぐ、このっ！　クソアマがぁっ!!』
「アッハハハ！　蜘蛛の癖に人間の言葉喋ってるぅ～、やだー、気持ち悪～い」
常に変化を続け、軌道を読ませない鞭の攻撃、それにより既に蜘蛛の関節を使用しての特殊兵装は全て破壊されてしまい女が残された

武装は近接用のブレードただ一つ。勿論この武装にも篠ノ之束の手が加わっている為に普通のブレードではないのだが、相手が一定の距離まで近付いてこないのでそれを披露することも叶わない。
　防戦一方。為す術なく打たれ続けるオータムは悔しさと憎しみの声を洩らす。そんな彼女の声が心地良いのか、女王様――――モモは至上の悦びを感じながらもっと聞かせてと鞭を揮う。
「まだまだ終わらないわよぉ？　鈴ちゃんやシャルちゃんを大勢で寄ってたかって虐めるんだもの。さぁ、更に上げていくわよぉ！」
『あ、あぐぁぁぁっ!!』
「アッハハハハハ！」
　遂に防御を破った鞭の一撃がオータムに向けて放たれる。直撃を受けたオータムは苦悶の表情を浮かべるが、モモはそんな彼女の苦痛を糧にして、何度も何度も鞭を揮う。
　そんな光景を見ていたシャルロットと鈴音、二人の代表候補生は内心で思う。
（どっちが悪者だっけ？）
　一方になぶり続けるモモを見て二人はそんな疑問を浮かべる。何故彼女がいきなりあんなにも成長したのか、その武装は何処からだしたのか、他にも疑問に思う事は多々あるが、目の前で殴られ続けるオータムを見てそんな疑問は既に頭の隅へと追いやられてしまった。
　テロリスト相手にＳＭプレイを楽しむモモ、そんな彼女にドン引きしていた二人はセンサーが関知するある異変に気が付いた。
　〝ゴーレム〟ＩＳ学園にとって因縁の多い存在が背後からモモに攻撃しようと攻めてきたのだ。オータムに攻撃することに夢中で気付いていない様子のモモに声を上げて伝えようとするが、時既に遅く、彼女の背後には森林を突き抜けてきたゴーレムが一機、モモに向けて銃口を向けていた。
　背後に迫るゴーレム、その様子を一部始終見ていたオータムはこれは好機だと口元を歪める。ゴーレムの銃口に集まる光、危ないとシャルロットが声を上げた時――――桜色の閃光がゴーレムの胸部を貫いた。

音を立てて崩れ落ちるゴーレム、予め知っていた風な態度を取りながらモモ（女王様）は視線だけ背後に向ける。
「もう、あんまり焦らすものだから少し焦っちゃったじゃない。サキちゃんてばテクニシャンなんだから」
『仕方ないでしょ。ここからじゃそっちの様子はよく見えないんだから、ったく、マスターもトンだ鬼畜ね。一番高い所から狙い撃てだなんて……ここからそこまでドンだけ離れていると思うのよ。五キロよ五キロ！　全く、私はゴ〇ゴじゃないってのに』
耳朶に聞こえてくるサキの声、生みの親に対する文句や愚痴が聞こえてくる中、自分達の所にも聞こえてくる彼女の声に鈴音とシャルロットは困惑の表情を浮かべる。
一体彼女は何をやっているのか、サキの愚痴や文句の中から聞こえてくる単語から察するに援護射撃を行っている様子。
最早何が起こっているのか分からない状態。そんな二人を察してかサキはシャルロットと鈴音にある言葉を送った。
『あー、多分そこにいる鈴達は分かっていないようだから端的に説明するわね。私達は有事の際に備えてマスターからある程度の訓練を受けているの。有事の際には的確に対処するようにって、……まぁつまり一言で言うと』
『言うと？』
『これも白河修司って奴の仕業なんだよ』
――一瞬だけ、ほんの一瞬だけ時が止まる。サキの白河修司という男の存在を一言で表したその言葉にシャルロットと鈴音、オータムすらも固まる。
唯一モモだけはあんまりな扱いの父に腹を抱えて笑っているが……誰もその事に突っ込む者はいなかった。
『そっかー、うん、分かったよ』
やがて時が動き出す。サキの言葉を耳にして瞳から光を失ったシャルロット＝デュノアは乾いた笑みと共に納得する。
学園祭の時の様に壊れた笑みを浮かべるシャルロットを不憫に思いながら、凰鈴音は目尻に涙を浮かべる。悪くはない。お前は何も悪

くないんだと鈴音は必死にシャルロットに呼び掛ける。
最早テロリストの事など忘れ去ってしまっている二人、そんな二人に悦な笑いを浮かべているモモは思い出したという風にオータムへ振り返る。
「ごめんなさいねぇ？　シャルロットちゃん達があんまりにも面白いモノだからついアナタの事を忘れちゃってたわぁ」
『こ、このアバズレがぁ……』
何度も鞭打たれて既に機体はボロボロ、自身も満身創痍の為に最早逃げる事もままならない。
このドSがと、オータムは内心で毒づく。このままやられたままで終わらせないとオータムは通信でゴーレム達を呼び寄せる。
さっきは狙撃手で一撃で沈められたが、今度は複数で襲わせる。街中に散らばったゴーレム達を呼び寄せようとするオータムだが、一行に向かってこないゴーレム達。
何故こない。言うとおりに動かない人形達に苛立ちを募らせながら何度も呼び掛けるオータムだが、ここで再びサキから声が掛けられる。
『――あー、折角手下を呼び寄せている所悪いんだけど、それ無理だから』
『……あぁ？』
『アンタが街を焼き払う為に分散させたゴーレム達だけど、こっちの方で処理させて貰ったから』
『なぁっ!?』
信じられない。自律思考のない人形といえどゴーレム達は篠ノ之束によって作り出されたどれもこれも一級品の性能を持っている。
これまでＩＳ学園に何度も襲わせた事によりゴーレム達は学習し、その度に恐ろしい力を持つようになっている。その力は既に代表候補生を凌駕し、国家代表クラスと渡り合えるまでに成長している。
そんな怪物とも言えるゴーレムをあっさり……信じられないと否定したいオータムだったが、次に聞かされる通信の音声により彼女の絶望はより深いモノとなる。

『ミンミンだよー！　こっちは終わったー！』
『メイだ。少々手間取ったが……まぁ父上に作られた私にとっては造作もない事だがな！』
『死ぬぞー、僕を見た奴は死んじまうぞー！　……あり？　もうお終い？』
　通信越しから聞こえてくる陽気な声、その声色からしてミンミン、ハナ、メイの三人らしき少女達の声が聞こえる。それぞれがゴーレムは片付いたという報告が聞こえると同時に各所から爆発音が聞こえてくる。
　それが此方の全ての兵力が破壊された事だと知ると、オータムの表情は驚愕に染まる。
『そう言うわけだからモモ、後はアナタの方だけだからあんまり時間は掛けないでよ』
「え～？　それじゃあつまんないじゃない。折角だからサキちゃんも来なさいよ～、一緒に可愛がってあげるから」
『冗談。今のアンタに近付くほど、私はバカじゃないわ。それじゃね』
「あん。もう、サキちゃんてば照れ屋さんなんだから～。……さて、それじゃあ私の方もフィニッシュとイクとしようかしら～？」
『っ!?』
「あらぁ？　どうしてそんなに怯えているのかしら？　もしかしてこれで終わりだと思った？　ざ～んねん、まだまだ終わらせないわよ～♪」
　満面の微笑みを浮かべながらオータムへ一歩、まだ一歩近付いていくモモにオータムの表情が恐怖で歪む。心の底から沸き上がる恐怖心、同じ感覚をついこの間体験したオータムは二重に襲い来る恐怖に震え……。
「さぁ、続きを始めましょう。もう二度とこんなお痛が出来ないように――――徹底的に、ね」
『――――ひっ！』
　心の底からの悲鳴は掠れる程に小さかった。

◇

京都の街にある文化遺産に登録された由緒ある建築物、五重の塔。歴史的文化遺産であるその建物の屋上で少女が一人佇んでいた。

「――――さて、これで大体の厄介毎は片付いたかな。後はマスターの方だけみたいだけど、まぁ心配するだけ無駄か。後は織斑先生達と合流して事情説明をしないと」

手にした狙撃銃を肩に掛け、これからの自分の行動を確認するサキ。水色の髪を揺らしながら塔から降りようとした時、彼女の正面に電子モニターが映し出される。

モニターに映し出されているのは日本の全体地図と日本を囲みながら接近してくる無数の赤い点滅。これが現在近付いてきているミサイルだと察したサキはすぐさま修司に連絡入れようとした――――その時。

「――――目覚(おき)めなさい。グランゾン」

京都の街に現れる巨大な魔神を前に、サキはただ一言。

「……うわぁ」

その言葉には彼女の胸中にある様々な感情が収束されていた。

その４５

京都の街をセシリア＝オルコットは走る。テロリストの襲撃という異常事態に於いて代表候補生である彼女はその責務を果たす為に京都中を走り回っていた。

先程まで上空で行われていたＩＳ同士の戦闘も沈静化したのか、現在は静寂を保っている。同じ代表候補生であるシャルロットや鈴音の方も逃げ遅れた人がいないかＩＳを使用し空から見ている筈、近い内に上空で戦っていた他のＩＳ操縦者と合流する頃だから、此方も急いだ方がいいだろう。

「あぁもう！　修司さんはこんな時にどこへ行ってしまったのですわ！」

自身の目的である人物が見つからない事にセシリアは苛立ちの声を上げる。白河修司なる人物は今や世界中から注目される存在だ。テロリストの目的は定かではないが、恐らくは彼も連中の標的の一つなのだろう。多くの組織が狙っている彼の技術力を独占すれば、それは世界を牛耳るに近しい意味合いを持っている。

そんな彼の身柄をいち早く確保する為にセシリアはシャルロット達と分かれて単独で京都の街を走り回っていたが、やはり自分一人では無理がある。駅周辺にいる筈の他の専用機持ち、或いは織斑先生に援軍の申請をしようかと考えた――――次の瞬間。

「――――なん、ですの？　これは……？」

目の前を突如として覆った影。まだ日は落ちきっていない筈なのに妙だなと思い顔を上げた瞬間、セシリア＝オルコットは絶句した。

――――〝蒼〟　深く、奈落の様に深い蒼を模した巨大なソレは何の前兆も予兆も見せず唐突に、そして突然に自分の前に現れた。蒼く巨大な機械人形、ＳＦアニメに出てきそうなソレは自分の存在に気付かない様子でフワリと宙に浮く。

見上げる程に巨大な物体。その質量は計り知れず、挙動一つで周囲

の建物に大きく影響を与えてしまう筈。なのにその巨大な蒼が飛び立った所は質量で押しつぶされるどころか目立った傷跡もない。精々大きな足跡位しかないその事実にセシリアの思考はこの上なく混乱に染まっていた。

一体あの巨人は何なのか、そんな事を考えながらもセシリア＝オルコットは遂に思考を振り切ってしまい、目を回しながら倒れ伏すのだった。

◇

――――数カ月前、篠ノ之束が拠点にしている〝我が輩は猫である〟（名前はまだない）である事象の変動を観測した。

世間では小さな地震として処理された事例、普通なら気に掛ける必要など皆無なその事象、だが、この日暇つぶしに地球を観賞してた彼女の目と頭脳はそれがどれだけ異常な事なのか瞬時に理解した。

空間、時空がねじ曲がって引き起こされた現象。普通ならば有り得ない事象に流石の天災も目を見開いた。穴の様に広がる空間、そしてそこから現れる巨大なナニカ、当時大気圏外からその様子を見ているだけだった束はそのナニカに接触する為に久々に下界に降りたった。

測された座標地点は海の中、それも海底の深くだと知った束はすぐに海底調査船を作り上げ、その場所へと向かった。

しかし、その地点には何も無く、観測された重力変動の異常数値も既に正常値へと戻ってしまっている。自分の測定器が故障したのか、当時の束は酷い肩透かしをくらった気持ちになり当時は酷くやる気を失っていた。

自分の知らない存在に会える。まだこの世界には自分の知らない未知で溢れている。そう嬉しく思い、また興奮した。

――だが、この時の彼女の気持ちは唐突に現れる第三者の存在にて水を差されてしまった。

白河修司。突然現れた天才技術者、史上初個人で総合ＩＳ管理資格保有者になった事から自分すら把握し切れていないＩＳの事を解明した存在。東の後継者とも言われているこの男の存在は東にとって見過ごすことの出来ない目障りな存在になっていった。

奴の正体を探るべく、あらゆる手段で調べ尽くした彼女はやがてある事実に気付く。それは奴、白河修司は本来ならこの世界に存在しない筈の人間という事実だ。

数カ月前に起きた地震。開いた空間から現れた巨大なナニカの正体、戸籍を偽造した上にＩＳ学園に用務員として赴任した事、これら全て関わりがあると察した東は白河修司を自分から居場所を奪いに来た侵略者の様に思えた。

通常なら有り得ない思考転換。言い掛かりも甚だしい言い分だが、篠ノ之束はそうは思わなかった。あの日、世界に穴が開いた時から奴は虎視眈々と自分を世界から追い出そうと画策していたのだと、そう信じて疑わなかった。

異世界からの侵略者、それならば自分以上の知識を持っていてもさして不思議はない。天才である故にそう判断した束は彼をこの上ない敵として認識する様になった。

そして今、その時が来たのだと束は歓喜する。自身の手で作り上げたこの最高傑作で奴を一瞬で消し炭にしてやる。そう息巻きながら彼女が赤い稲妻を手にした刃に逆らせながら切りかかろうとした――

『ワームスマッシャー』

目の前の蒼い巨人から聞こえるそんな呟きと共に天災が築き上げた最高傑作が地に落ちる。何が起きたか理解出来ないという風に地面に倒れる彼女は目を大きく見開きながら機体の損傷をチェックする。

眼前に現れるのはシールドエネルギー残量０という文字とスラスター各部位が全て破壊されたという報告、あの一瞬で何が起きたのか理解出来ないでいた天災は悔しさに目尻に涙を浮かべながら目の前の魔神に言葉をぶつける。

『……んだよ。何なんだよ、お前はぁぁぁぁっ!!』

慟哭にも似た天災の雄叫び。世界が自分を中心にある様にし向けた希代の才能はその実力を示す暇もなく敗れた。その事実を認めたくないと、束は叫び続けるが魔神はそれに答える事はなかった。

その態度が余計天災の神経を逆撫でる。このままでは済まさないと癇癪を起こした子供のように感情を振り切り、彼女は電子モニターを弄くり回し、最後の手段に打って出る。

電子モニターをタッチパネルを加速度的に叩く束、その様子を見て魔神の方も察知したのか、今更ながら彼女の方へ視線を落としていた。

……恐ろしい顔だ。確かにこれほどまで凶悪な風貌をしているなら、クロエがあそこまで心が折れるのも頷ける。

――しかし、と。邪悪な兎は自分の最後の手段が起動した事に薄ら笑いを浮かべながら魔神へと目線を向ける。

『……今、全世界のミサイル基地に設置されていた弾道ミサイルを発射させた。数は５０００発、この膨大な物量での同時攻撃を君は一体どう捌く？　ええ？　蒼き魔神さん』

『……』

『この国の防衛機構を全て駆使しても阻む事は出来やしない。ましてやお前は一人、そんなデカブツじゃあ音速を越える弾道ミサイルには

対処できないだろう』
　無言で見下ろす魔神を束は笑みを浮かべて見据えていた。ざまぁ見ろと、そんな意味合いを込めた笑みを浮かべる彼女に対し、魔神はただ一言だけ口にした。
『そろそろ、夢から覚める頃ですよ。不思議の国のアリスさん』
『……なに？』
　理解出来ない言葉を吐かれると同時に魔神の頭上に穴が開く。同時に紅錦から表示される重力の異常変動数を見て、彼女の目は大きく見開き、同時に確信する。
　やはり奴はあの地震の際に現れた侵略者なのだと、束は開いた空間の中へと消えていく魔神を憎悪すべき対象として睨み付けながら見つめ続けるのだった。

◇

「やれやれ、皆と楽しみながら学ぶ筈だった修学旅行がトンだハプニング尽くしになっちゃったなぁ」
　久々に座るグランゾンのコックピット内、そこから見える日本上空の雲海。臨海学校での事件以来乗ることの無かったこの場所で自分こと白河修司は散々な結果になってしまった修学旅行に残念な気持ちを吐き出していた。
　愚痴とも言える言葉の数々、けれど修学旅行を楽しみにしていた生徒達の事を思うと、こんな気持ちになるのも仕方がないと心の内で言い訳しておく。

一夏君達も大変な思いをしたみたいだし、織斑先生を始めとした先生方や自衛隊、消防隊、救急隊の人達も多大な労力を支払う事になっただろう。けどその甲斐あって幸い京都の街や重要文化財には一部を除いて被害は受けておらず、人的被害も皆無の事だから流石はＩＳ学園の先生達だと思う。

自衛隊の人達との連携も見事なモノだった。織斑先生を始めとした学園の先生達はある程度軍事教練も受けているみたいだし、自衛隊の方々と上手く連携出来たのもここら辺が大きいのだろう。しかし、どうやら事の問題は自分が思っていた以上に大きくなっている様だ。

先程の篠ノ之束博士の名を騙る女といい、世界中のミサイル基地にハッキングを施した事といい、どうやら亡国機業という秘密結社は自分が想像していたよりも遙かに厄介な組織の様である。

やはり篠ノ之博士から技術提供を受けているだけあって連中の技術力はかなり高い。この分だと今後も面倒事に巻き込まれそうであるが……。

「後手に回るのは、今回で最後だ」

自分の愛機であるグランゾンを出した以上、自分に敗北は許されない。篠ノ之博士の憂いを断つ為にも今後は自分も亡国機業打倒の為に積極的に動く必要があるだろう。

連中を許しておけない。だが、今はそれ以上にやるべき事がある。

「さて、そろそろミサイル群が日本の領空域に入りそうだし、いい加減迎撃するとしますか」

音速を越えて飛来してくるミサイルの群、既に日本の防衛機構がミサイル群を撃ち落とす為にそれぞれの地域で稼動しているが……正直、全てのミサイルを撃ち落とす事は不可能だろう。

音速を越える総数５０００のミサイル。シチュエーション的には嘗ての白騎士事件を思わせる展開だが、ミサイルの数と規模は１０年前の二倍以上、現存する全てのＩＳが協力体勢を敷いても結果は同じだろう。

嘗てない危機に晒される日本――しかし。

「ワームスマッシャー」

グランゾンから放たれる無数の光の槍、それがワームホールを通して全てのミサイルの撃墜を確認すると、俺は再びグランゾンを走らせ、日本上空より離脱した。
確かに５０００という数字は大きい。それが全て他国の重要拠点、或いは施設に向けての弾道ミサイルだと知れば、誰だって不安に思う事だろう。あの兎耳の魔女だってそう判断したからあれだけの数のミサイルを日本に向けて発射させた訳だし。
所が残念、スペック的には６５０００を越える同時攻撃が行えるグランゾンにとってはそれほど驚愕する数字じゃないんだよね。グランゾンの性能を引き出せばこのくらいの事はさほど難しくない。
……なんて、グランゾンの性能に頼り切っている自分に言えた事ではないか。そろそろ皆も駅に集まる事だし、帰りに備えて自分も戻るとするかな。
「っと、その前にセシリアちゃんを拾って行かないとな。驚かせて気絶させてしまったみたいだし、責任持って回収しないと」
今後の事も考えなくちゃな。と、そんな言葉を吐きながら俺はグランゾンと共に夜の空を飛翔した。

――――突然引き起こった今回のミサイル事件、白騎士事件を遙かに凌駕するこの大事件を政府上層部は公開するまで丸三日悩み続ける事になった。
５０００もの数のミサイルを一瞬に、且つ同時に破壊する規格外の性能をもった謎の巨大ロボ。衛星から映し出されたその映像に当時の関係者達は驚愕し、大きく困惑した。
後に魔神事件と称される今回の事件。一体この巨大ロボは何なのか、各国は裏で巨大ロボを調査しているが、確証を得られる様なモノは何一つとして存在しない為、やがて各国の政府上層部はこの事件の

全容を明らかにせず、闇へと葬られる事になるのだった。
ただ一つ気掛かりがあるとすれば、当時例の魔神出現の折、白河修司の姿が一時的に確認されていなかった事である。
魔神と白河修司、一時は彼が魔神と深く関わりがあるのではないかという説も出てきたが、これも結局確証は持てずとなり、事件共々闇へと消える事になる。
果たしてあの魔神は何なのか、そして今後ＩＳはどうなるのか。その先行きを知るものは一人を除いて知る者はいない。

その４６

――――京都で起こったテロリスト介入とミサイル強襲事件から数ヶ月。世間はいつもと変わらぬ日常に戻り、人々もまた平穏な日々を過ごしていた。

何者かの手引きにより引き起こされた５０００発のミサイル。表では日本政府が対応した事で全て撃墜したという事にされている。

音速を越えて飛行する５０００発ものミサイル群、本当に日本だけで対処出来たのかと疑問に思う所だが、誰もがその事に追求する事はなかった。

一部のメディアは事実究明の為に日本政府に説明を求めているが、事件の真相が明るみに出ることはほぼあり得ないだろう。

なにせ、当時の張本人たるその人物が、今回の事件に関してさほど重要視していないのだから……。

既に事件は過去の出来事として処理されている日々、人々がそれぞれ思い思いの毎日を過ごしている。そんな中、五反田家の長男である五反田弾も事件も事件後と変わらない日々を送っていた。

「おにぃ、何か小包みが届いたよー」

「はぁ？　俺、通販とか頼んだ覚えねぇーんだけど？」

「知らないわよ。なんか宛先とか書かれてないし……なんか危ないモノを買ったんじゃないでしょうね？」

「するわけないだろ！」

部屋にノックもせずに入ってきて、散々な事を口にする妹が去っていく様子を見ながら、弾は投げ渡された小包みに視線を落とす。

一体この中身は何が入っているのか、不安に思いながら包みを開けた彼が目にしたモノは……。

「……鳥？」

掌サイズの小さな鳥。模型の様な手触りのソレに暫し呆然となって見つめていると……再び、妹の五反田蘭が部屋へと入ってきた。

「お、おおおおにぃ！　た、大変！　大変だよー！」
「今度はなんだ？」
酷く慌てた様子の妹に困惑する弾。先ほどとは全く違う異なった様子の妹に戸惑っていると、蘭は乱れた息を整えながら兄にテレビを付ける事を促した。
一体何なのか、そう不思議に思いながらリモコンでテレビに電源を入れた次の瞬間。
『――――全ての人類に報告させていただきます』
画面一杯に映し出されているその人物に弾はその目を大きく見開かせる事になる。何故なら、その人物は数ヶ月前に女性権利団体から助けて貰った事のある恩人とも言える人物だったからだ。
そんな人が全世界に向けて声明を出している。その事実に釘付けとなっている彼は、自身の手の内で眠る小鳥がピクリと動いた事に気付かなかった。
また、小包みに小鳥と一緒に同封されていた手紙にも同様に気付かないままで、その手紙の内容に後日知る事になった弾は今後自分の人生に大きく左右される事になると知り、かの男に対して複雑な心境を抱く事になる。
その手紙の内容はと――――。
〝五反田弾様へ――。
急な事で申し訳ありませんが前々から約束していた貴方へのお詫びをお送りします。護身用のＩＳですが、普段は大人しい穏和な人格なので彼女から説明を受けつつ使いこなしてみてください。尚、名前の方もお手数ですかそちらで付けて下さると嬉しいです。今後、もし興味がありましたら私の方へ連絡を入れて下さい。
白河修司より〟
ご丁寧に連絡先まで記入されているその手紙、後に弾は連絡先を暗記した直後、この手紙を焼却する事になる。

◇

「……ふぅ、平和だな」
「なに退役後の老兵みたいな事言ってんのよ」
ＩＳ学園にある食堂、生徒達の憩いの場として知られるこの場所で織斑一夏といつもの女子メンバーが集まっていた。
午前の授業は終わり、午後のＩＳの実施訓練に備える為に英気を養っている彼らはそれぞれ思い思いに過ごしていた。
「まぁ、気持ちは分かるけどね。京都でのテロリスト事件では僕達散々な目にあったし」
「でもそれって数ヶ月前の話でしょ。連中もあれ以来ちょっかい出してこないし、案外もう潰れてるんじゃない？」
鈴音の語る連中、それは十中八九亡国機業（ファントム・タスク）を指す言葉だが、その言葉に対し過剰に反応する者はいない。彼女の言うように亡国機業はあれ以来学園に手出しをしてくる事はなかったが、それ以上に既に壊滅している可能性も十分に考えられるからだった。
何せ京都の時に仕掛けてきたテロリスト達〝二人〟が既に捕まっているのだ。しかも片方は人格すら破壊された酷い状態。そこまで悲惨な状態に追い込んだ彼女とその生みの親である彼の事を考えれば十分に有り得る事の為、一夏達は鈴音の言葉に反応する事無く、乾いた笑みで誤魔化すしかなかった。
そんな固まった空気を解きほぐす為、篠ノ之箒は露骨だが話題を変える事にした。咳払いをした彼女は隣に座る一夏へと訊ねる。
「そ、それで一夏、マドカの方はどうなのだ？　もうすぐ退院だって聞いたが……」

「あ、あぁそれなら本当だ。機密事項って事であんまり詳しくは話せないけど、退院後は監視って事も含めてＩＳ学園に転入させるらしい」
織斑マドカ。本来なら彼女も他のテロリスト二人と同様刑務所へ収監される筈だったが、ある人物の手助けによりテロリストに加担していたのではなく、テロリストに利用されていたという立場まで漕ぎ着ける事に成功していた。
その証拠に彼女の体からは監視を目的としたナノマシンが注入されており、更には非人道的な改造手術が彼女の体に施されていた事が判明され、その後も詳しく調べた結果、織斑マドカには並々ならぬ事情があるとされ、上記の様な立場に収まる事が出来た。
テロリストに加担ではなく利用されていたという立場は法的にも有利に働き、裁かれる存在ではなく、保護されるべき存在へ昇華されていった。監視という言葉が出てくるのも便宜上での建前という奴である。
その為、彼女の身柄はＩＳへの高い適性も相まってＩＳ学園に預かる事となり、後見人として織斑千冬が面倒をみる事になったという。現在は彼女は体に負担の掛かる毒素を摘出する為にある治療を受けている最中である。
織斑マドカは姉である千冬となにかしらの接点がある。細かい所までは分からないが京都での一件以来そういった事柄を察することが出来るようになった一夏は家族になるかもしれない少女の帰りを心待ちにしていた。
「しっかし、白河さんも相変わらず凄いよね。幾らテロリストに利用されていたからって普通そこまで立場を逆転する事なんて不可能に近いわよ」
「あの人曰く、法とは理屈と屁理屈が融合したものと仰っていましたからね」
「しかも、新たな治療法として何とか粒子ってのを体に浴びせるやり方を新たに編み出したみたいだしねぇ、ホント化け物だわ」
「失礼だぞリン。それになんとか粒子じゃなくＧＮ粒子な」

「確か、タンポポさんの扱う蒼鴉にも同じ粒子を生み出す動力が付いてましたわよね？」
「ＩＳの動力を医学用に転化させるとか、ホント凄いよねあの人、もう何でも超人って感じ。今はまだ殆どの人が知らないけど、マドカか退院したら一気に広まりそうじゃない？」
「あぁ、本当に凄い人だよ。けど、だからこそなんでだって気持ちになるな」
「一夏……」
「白河さん、どうして学園を辞めてしまわれたのでしょう」
沈んだ面持ちとなる一夏、セシリアは彼の落ち込んだ原因となった修司の学園辞職の話を口にする。
数ヶ月前、京都から無事帰ってきた翌日、彼は娘であるタンポポ達を置いてＩＳ学園から姿を消した。詳しいことは何も説明されず、推測でしか語られなかった修司は生徒達の間では辞職したという説が高くなっている。
彼がいなくなってから学園は少し静かになった気がする。山田真耶を始めとした教職員の人達は何故か彼がいなくなった日を境に徐々に元気になっていくのが気になったが、総じてＩＳ学園は少しばかり静かな日々を過ごしている。
もうじき新学期が始まり自分達は二年生になるというのに、一夏や修司の事を気に入っていた生徒達は少し憂鬱な気分となっていた、
一体彼は今どこで何をしているのか。タンポポ達ですら分からない彼の行方にやきもきした時。
「み、みなさん、大変ですー！」
「タンポポ、それにモモ達も……一体どうしたのよ？」
廊下の向こうから酷く慌てた様子で駆け寄ってくるタンポポ達に一夏達は揃って面食らう。何事かと鈴音が訊ねると、タンポポ達は息を整えながらテレビを見るよう言葉を吐きだした。
一体何なんだと思いながらも一夏が食堂にいる生徒達に了承を得て備え付けのテレビに電源を入れると、次の瞬間――――その目を大きく見開かせる事となる。

『――全ての人類に報告させて頂きます。私達は〝ＺＥＸＩＳ〟宇宙進出と開発を目的とした私設運営組織です。先日のドイツの協力の下、遂に宇宙航空艦〝インフィニット・アヴァロン〟が完成した事を機に、ここに乗組員の募集を行う事を宣言致します』

その言葉に誰もが耳を疑った。画面一杯に映し出されるその人物に誰もが言葉を失った。ある者は絶句し、ある者は理解出来ないと言うように何度も瞬きを繰り返し、またある者はとうとうやっちまったかと呆れの溜息をこぼしていた。

静まり返る食堂、誰もが言葉を発することを躊躇った時。

「……というか、隣に立っているのってラウラじゃない？」

「あ、ホントだ。本国に召集されたとか言っていたから心配してたけど、案外元気そうだね」

ヤツレた表情で彼（修司）の隣に立つラウラを見て、一同はそんな言葉しか出てこなかった。

学園のどこかで山田真耶が倒れた気がした。

――――――数ヶ月前。

「えーっと、まずは宇宙航空艦におけるＩＳコアの実用理論の構築でしょ？　んでもって弾君へのＩＳのプレゼント、ロジャーさんには既に幾つか土地を借りる事が出来たからそこを拠点に活動するとして……あとはマドカちゃんの体調を整える為に太陽炉の開発と学園への休職届けを出す位かな。やること一杯あるけれど、頑張るとしますか！」

この日を境に世界は知る事となる。行き過ぎた善意は下手すれば明確な悪意よりも質が悪いことに……。

知らないのはいつだって当事者だけである。

後日談　その1

――ドイツ。首都ベルリンから離れた郊外、雑木林が生い茂る人気のない場所で複数の影が蠢くように疾走していた。
時刻は既に真夜中の時間帯、不気味な程に静まり返った林の中蛇行しながら走る影の動きはさながら獣の如く俊敏で、その統一された動きは熟練された軍人のソレだった。
「そろそろ情報にあった目的地の場所だ。今回の任務について再確認を始めるぞ」
複数の影の中から飛び抜けた一人の少年が耳につけたアイコンを通し、周囲に散った部下達に連絡を通す。
「任務内容は目標地点の座標にいるターゲットからＩＳの情報を得ること、それが叶わない場合はターゲットの身柄を拘束、この場合ターゲットの身柄の確保が最優先で手段は問わない。また、それすらも叶わず、また情報が他へ漏洩される危険性が考慮された場合――」
「標的、白河修司を――抹殺せよ」
淡々と、機械的に任務内容を口にする少年の眼は薄暗く、濁っていた。

◇

五年前、嘗ての俺には人並みの幸せを満喫していた時間があった。父と母、そして妹に囲われての生活。穏やかな時間、決して裕福な家

庭とは言えなかったが、俺には嘗て幸せだったと言える時期があった。

しかし、そんな穏やかで暖かな日々も長くは続かなかった。〝ＩＳ〟

極東の島国出身のとある女博士が生み出したという新たな兵器が現れてから、この世界はおかしくなった。混乱する世情、覆る世論の価値観、書き換えられる新しい常識は全て国を巻き込み、大きな波紋となって広がった。

波打つ波紋は大国を揺るがし、大国の近隣諸国は大きな力を持つ国の力を借りないとその存在すら維持できない状態にまで陥ってしまっていた。

ＩＳという嘗てない波紋に揺れ動く世界。俺達の住まう国もその例に溢れず、動乱の時代に突入した。ＩＳという従来の兵器とは何もかもが違うその力は中東にある一つの小国を二つに引き裂き、内戦という最悪の事態を引き起こしてしまった。

ＩＳを受け入れるか否か、良くも悪くも古い俺の国、頭の堅い連中によって引き起こされた人災は父と母を殺し、そして妹を死の淵へと叩き落とした。

そこから先は地獄だった。運悪く生き残った俺の様な子供は軍に強制的に入隊させられ、俺は兵士……いや、兵器として〝調整〟される事になった。

人を殺す手段を叩き込まれる日々、拒絶すれば反逆罪として処刑され、見せしめとして公に晒される。その恐怖に俺達は抗うのを止め、生き延びる為に淡々と人を殺す機械になるように自ら追い詰めた。

人としての矜持を捨て、畜生となった俺達はその後も地獄のような訓練に耐えてきた。時には生き残った子供同士で殺し合いをさせられたが、その時も人としての感情を削ぎ落とす事でどうにか潜り抜ける事が出来た。

訓練が終えた後も過酷な任務を強制的に課せられ、捨て駒として扱われる日々、死ぬかと思った事もある。任務の過酷さに心が折れ、裏切りを目論んだ者の排除を任された時もある。助けてくれと命乞いをする者の心臓を貫いた事もある。

心がすり減っていく様な日々、しかしそれでも俺が正気を保っていられるのは偏に妹のお陰だった。妹という生きる目的があるために、俺は人を捨てておきながら人でいられる事が出来た。妹がいたから、俺はＩＳを憎むこともなく、今を生きることに執着出来ているんだ。

けど、先週から妹の容態は急変という報せが届いた。内戦により感染症を患った妹は満足な治療も受けられずに今も汚いベッドの上で苦しんでいる。

このままでは妹が死ぬ。妹を助けるには最新の設備が整った病院と医者が必要だ。その為には多額の金が必要になる。その金を手にいれる為に俺は今回の作戦に自ら志願し、俺と似たような境遇を持つ連中の隊長に任命される事になった。

「……彼処か」

指示された目的地に辿り着くと、其処にはただの廃墟があった。端から見れば今にも崩れそうな唯の廃墟、恐る恐る廃墟の中を覗いてみても朽ちた建物の姿があるだけ。

しかし俺は確信を持てた。ここにヤツが、白河修司がいる。これまで培ってきた戦いの勘に従い、俺は俺以外の奴を一人選び、残りの三人を周囲の警戒に当たらせ廃墟のなかへ突入した。

中はやはり覗いた時と同じ、特に変わった様子は無かった。朽ちたリビング、ひび割れた壁、何度見てもそこは人の気配のない廃屋でしかなかった。

だが、俺には分かる。恐ろしく巧妙に作られているが、これは只のフェイク。本来の姿を隠すための隠れ蓑でしかないことを。以前、似たような任務で敵対組織のカモフラージュを見抜いた時と同じだ。壁伝いに手を置いて、白河修司なる男の心理を読み取りながらその場所へ向かって歩くと……。

「ここか」

手の感触から伝わってくる感覚、それが他のものとは違うと感じ取った俺は、コンコンとノックする要領で壁を叩き、そして発見する。

極めて精巧に作られた一枚の壁、どう見ても汚れにしか思えないその部分に手を翳すと、かちりと音がなり、壁だった所は開かれ、その

中から地下へと続く階段が姿を現した。
随分大掛かりな仕掛けだと嘆息しつつ、これから待ち受ける罠の事を考えると軽く鬱になりそうだ。これだけの仕掛けを施した男、恐らくはこの先でも相当な規模の罠が待ち受けているに違いない。随伴する部下に突入の意を示すと、俺達は階段を降りていった。
――――――――おかしい。長く続く階段を降りて人工的に作られたとされる通路を歩きながら、俺は今の状況を不信に思っていた。
静かすぎる。本来なら侵入者である自分達を亡きものにしようと様々な迎撃システムが自分達に襲い掛かる筈だ。なのに、ここにはそれらしきモノは一つとして存在しない。
……いや、あるにはあった。正直奇抜し過ぎて罠と判断しにくいモノが、一つだけ。ゆっくりと横にある壁に視線を向けると。
〝修司の部屋は此処から５００メートル真っ直ぐ進んだ後右だよ。迷わないように気を付けて（はぁと）〟
可愛らしい少女の絵がプリントされた張り紙を見て、俺はここから先進むかどうか本気で迷った。
これは、新手の心理攻撃なのだろうか？　にこにーと微笑んでいる少女の絵を見て俺はどうすればよいか本当に迷った。振り返ると部下の方も混乱しているらしく、張り紙を見て目を点にしている。
……十中八九罠、なのだろう。しかし、この張り紙に書かれている様にこの通路は非常に入り組んでおり、一度迷えば永遠とさ迷うことになりそうな程に混沌としている。
成る程、どうやら俺達は既に虎の口の中に入っている様だ。となれば進むしか無いだろう。妹の治療費を稼ぐためにも俺の中には撤退の二文字はなかった。
非常に不本意だが、この張り紙の指示に従うしかない。警戒を最大限にしながら通路を進んでいくと……。
〝この先を３００進んだ先、今度は左だよ。ここまで来たら後少し、頑張れ♪〟
先程とは違う金髪の少女がチアリーダーの格好をしているプリントだった。……何だろう。何故侵入している筈の自分達が労い

を受けているのだろう。
精神的に疲弊を感じながら再び歩き出す。張り紙の指示に従い、次の場所に続くと。
〝ここまでよく頑張ったね。目的の修司の部屋はこの先真っ直ぐ進んだ先にあるよ！〟
最後に描かれたプリントにはファイトだよ！と、応援してくる男の絵がプリントされてあった。……恐らくは白河修司の姿を模したものなのだろう。

「そこは女の子にしとけよ」
思わず口に出てしまったが、後ろに控える部下も似たような心境なのかウンザリした表情をしている。何だか凄く疲れたが、この先に目標であるヤツがいる事に自然と緊張感が高まる。相手はＩＳの生みの親、篠ノ之束の後継者と言われる人物だ。油断は禁物だろう。
俺達は気持ちを切り換え、脚に力を込めて一気に通路を駆け抜けていく。張り紙の指示した先には目的の場所と思われる扉があった。
先手必勝、そう自身に言い聞かせ、扉を施されているだろうセキリュティごと手榴弾で爆破させた俺は部下と共に破壊された扉の先に侵入し、その先にいる人物に向けて拳銃を突き付ける。
「……シュウジ＝シラカワだな」
自分の口とは思えない冷たく、機械的な声が出てくる。同時に心が冷えていく。
任務の内容は標的の確保、もしくは抹殺。前者は彼の者の技術力を祖国繁栄の為に、後者はこれ以上ドイツに甘い汁を吸わせない為に。
自分の利益にならないものはどんな手段を用いてもこれを抹消する。恐ろしく合理的でそして吐き気のする祖国のやり方。
だが、そこに個人の感情は介在しない。自分はただ与えられた任務を遂行するのみ。
軈て煙りは晴れ、視界が晴れていく。未だ動かない人影に拳銃の引鉄が引き絞られていくと。
「随分と乱暴な来客もいたものですね。そんなに慌てなくても御用が

あれば対応しますのに……」
其処には白衣を纏った稀代の天才、広々とした部屋の中央で白河修司が佇んでいた。拳銃を突き付けられているにも関わらず、変わらず笑顔を浮かべ余裕の態度でいる修司。
流石トラブルの絶えないＩＳ学園に所属していただけあって胆が据わっている。ある意味予想通りの反応に俺は銃口を奴に向けたまま訊ねた。
「Ｍｒ．シラカワ、祖国の技術発展の為に我々と来てもらおう」
「お断りします」
俺の言葉に間髪を容れずに断る奴に合わせ、此方も部下と同時に引鉄を引き絞る。打ち下ろされる撃鉄と吐き出される薬莢、そして撃ち出された銃弾は寸分違わずに奴の眉間と心臓に向かって直進していく。
これで自分の任務は達成される。そう思った時、甲高い音が響き渡り、同時に俺と部下の側に何かが当たり、抉れる様な衝撃が伝わってきた。
何かと思い視線を向けると、そこには今しがた俺が撃った筈の二つの銃弾が深々と床にめり込んでいた。まさかと思い奴の方へ視線を向ければ、両手で中指を弾いた仕草をしている白河修司がニコニコと、悪戯を成功させた子供の様に笑っている。
その姿に俺は戦慄を覚えた。唯の一技術者でしか過ぎない人間が、デコピン一つで銃弾を弾くなんて……デタラメも良いところである。
部下も同じ思いなのか青褪めた表情で目を大きく見開いている。……化け物だ。目の前の白河修司という男に対する認識を改めた時、背後から複数の気配が近付いてくるのを感じた。
振り向けば迷彩服を着用した少年少女達が物々しい雰囲気を纏わせながら部屋へ押し入ってくる。皆マスクを被っているから顔は確認できないが、その体形から察するに俺と同年代、或いは少し下という子供ばかりの集団で、その彼等の腕には外で待機させていた筈の部下達が抱えられていた。

「白河先生、外で仲間だと思われる連中の身柄、確保しました」
「ご苦労様。と、言いたい所ですが……ダメじゃないか、そんな危ない事をしちゃ」
「ご、ごめんなさい」
まとめ役の子供を嗜める修司、するとソイツはマスクを外し、シュウジに向かって頭を下げている。
その際に目にしたソイツの顔を見て俺は驚愕に目を見開いた。金髪の長い髪、血の様な眼をしたソイツは確か金色の闇と裏社会に名を轟かせている暗殺のプロ、そんな大物が何故此処にいて且つ奴に従っているのだろうか？
他にもマスクを外していく子供達、その全員が以前の任務で殺し合いをしてきた強敵揃いの連中だった。人体改造を施された者、遺伝子操作で人工的に産み出された者、何れもマトモな出自をしていない人間社会の闇の部分によって生み出された者達。そんな奴等が何故揃いも揃って此処にいるのか。
混乱する思考、高鳴る心音、自分の命運はこれ迄かと近付いてくる奴の足音にいよいよ覚悟を決めた時、奴は俺の横を素通りし、金色の闇達の所へ向かっていった。
「ほら、その子達を下ろして君達も帰りなさい。特にヤミちゃん、君の所には今日お母さんが来る予定でしょ？　早く顔を出してあげなさい」
「で、でも……」
「私なら大丈夫さ、彼等と少し話をするだけ。君の時と同じさ」
そう言って金色の闇の頭を優しく撫でた後、奴等はペコリと頭を残して部屋を後にした。
今、この場にいるのは俺達と奴のみ、しかし奴は俺達を拘束する処か武器すら奪わず、それどころか拘束されていた他の部下達の縄もほどいていく。
呆然としている俺達、そんな事お構いなしにシュウジは俺達の前に立ち。
「さて、色々君達には訊きたい事があるが、まず最初に訊ねておこう」

一体何を聴くつもりなのか。緊張する俺達を前に奴は手を差し出し……。

「私と……友達にならないか？」

◇

？月？日

ヤッハロー！　皆元気ー？　俺？　メチャメチャ元気ー！

……久し振りの日記に思わずテンションが上がってしまった。しかし、文字で感情表現しないと今一ヤル気を出せないとか、何だか最近変な癖が付いてきたな、俺。

まぁそれは兎も角。現在ドイツの国境付近、ロジャー氏のご厚意で地下基地を建設することを許された自分は宇宙航空艦作成に励む毎日を送っている。

思いきっての長期休職、当時は十蔵さんに怒られるかもと思ったのだけど、思いの外アッサリと休職届けは受諾された。織斑先生も頑張れと応援してきたし、山田先生からは満面の笑顔で見送られたりもした。

そんな経緯があって地元の人であるラウラちゃんと共にやってきたドイツ。最初は土堀から始まったこの作業、ロジャー氏に要請してもらい受けたスコップを片手に一通りの深さを掘った自分は再びオートマトンを作成し、皆と共に作業に取り掛かった。

以前造り上げたタンポポ達（娘）のデータを基に造った今回のオートマトンはとても働き者で自分が別件で離れている合間も休みなしで働いてくれている。

そんな彼等のお陰で出来た新しい基地、そこで改めて宇宙航空艦の

作成に手を出したのだが……如何せん、手が足りない。航空艦の基盤となるモノは幸いグランゾンのデータベースに残されているから資料という点では事足りる。

だが、今回自分が手を出そうとしているのは人類の方舟とも言える宇宙航空艦だ。人手が足りなくて完成には至らないとあっては土地を貸してくれたロジャー氏に対して申し訳ない。

本音を言えば何人かＩＳの技術者に依頼を出したかったのだけれど、日々ＩＳの研究に勤しんでいるドイツの技術者の手を借りようとするのは如何なものかと思いこれを諦め、じゃあＩＳの知識に詳しい者、即ちＩＳ操縦者である人達に協力をと思い再びドイツ政府に依頼した。

が、これも先の技術者と似たような内容で却下になっている。……まぁ、仕方ないよね。その国にとっては国防の要とも言えるＩＳ操縦者を貸して欲しいとか、流石に通る筈もなかった。

唯でさえロジャー氏には色々貸しがある。これ以上彼に負担を掛けまいと思い、ドイツの話を受け入れた。

しかしそれが原因で唯一協力的だったラウラちゃんは自分の手伝いと自身の仕事に疲弊し、倒れてしまった。本人は大丈夫と言っていたが、年頃の女の子にこれ以上無理をさせる訳にも行かず、ラウラちゃんは暫くの間病院で療養してもらう事にした。

積極的に手伝ってくれたラウラちゃんがいなくなり、本格的に人手不足に頭を悩ませた頃、ある情報がドイツ政府の情報局から俺の耳に入ってきた。

何でも近隣諸国、特に中東方面では最近自分を手にいれようと色々画策しているらしいのだ。何とも、こんなしがない技術者一人にご苦労な事だと思いながらも自分はある画期的な提案を思い付く。

名付けて、〝手が足りないなら他から手を貸してもらう作戦〟その名の通り、自分を狙いを付けている国に対してワザと情報を流し、自分の所に来てもらうという内容である。

ＩＳ関連の技術は別に流れても構わない。寧ろ男女平等にＩＳを扱える様にするにはそれくらい広まってくれないと実現できない可

能性が最近出てきた為、自分としては技術を取りに来てもらうのはウェルカムなのである。来てくれる代わりに此方の手伝いをしてくれるというのなら自分としては別に構わない。
それに、自分の技術でその国の、国民の人達の生活の糧に繋がるのならそんなに悪い気はしない。それに自分の技術を以て、更なる発見とか成し遂げてくれるのなら、此方としても張り合いが出てくるというものだ。

そんな訳で上記の事をロジャー氏に伝えると、何故か『君は実にクレイジーだな！』と大笑いされた。笑われるのは不本意だが怒らせて折角の案を却下されるよりはマシかと思い口には出さなかった。
そしてドイツ政府協力の下で他国の侵入者達の誘導を始めた。一体どんな人達が来るのだろうかと気分は面接官な俺は次に訪れる侵入者達を待った。
けど、待っていたのは自分とは全く違う現実だった。情報に煽られてやってくる侵入者、それら全てが年端もいかない子供だった時は流石の自分も驚きを隠せなかった。時には真っ先に襲ってくる子もいたが……まぁ、それはそれで体が鈍らない程度に相手をしたから別に良い。
で、その後子供達の相手を終えた自分は事情を訊ねた。内容は……まぁ、その国らしい厄介な問題を抱えたモノばかりで、それ自体は多元世界の頃から聞き慣れたモノだった。
任務を失敗した事により国に戻る事もできない子供達、そんな彼等を事の発端である自分が責任を取る形でどうにかする事にした。
有り体に言えば……教育である。今まで軍事的能力しか養って来なかった子供達を本当の意味で独り立ち出来る様に、自分は彼らに一通りの教育を施す事にした。
といっても、教えるのは精々語学力や家庭科程度で後は適当に遊んだりするだけなんだけどね。俺教育免許なんてもってないし。
幸い侵入してきた子は皆賢くて素直な良い子ばかりで、特に問題らしい問題は起きなかったから、此方としては有り難かったけどね。中

には自分の手伝いをしたいと積極的な子もいるし、自分のやってる事に興味を持った子なんかは子供ながら理解し、これが結構役立ったりしている。
少し予定と異なったがお陰で艦の製作は順調、やはり子供というのは凄い可能性を持っているんだと改めて思った。これならいつか国に帰っても大丈夫だなと思ったが、子供達は何故か帰りたくないと言い張ってしまっている。
まぁ、その国で受けた仕打ちの事を考えれば解らなくもないが、問題はそんな彼等の今後だ。幾ら任務失敗で死亡者扱いを受けても、彼等がその後狙われる可能性は全く無いとは言えない。
ここまで関わった以上何とかしてやるのが引き受けた俺なりの責任の取り方……なのだと思う。ロジャー氏にも相談したが、やはり自分で考えるべきだと言われてしまう。その際に出来ることがあれば協力するという確約も得られたからいいが……。
そんな風に悩んでいた時、つまり今日やって来た侵入者の子供達によって俺の腹は決まった。子供達を教育し、且つ安全を保証され、そして自分の研究に役立てる場所。
その名もＩＳ学園、日本に続く第二のＩＳ学園の設立計画書を今日、ＩＳ委員会に提出した。
これからまた忙しくなるぞ。多忙になる日々に不安を覚えると同時に高揚感を覚える俺だった。

ＰＳ．
今回侵入してきた子供達、その隊長の妹は後日自分の研究所に連れてきて即ＧＮ粒子に漬からせました。
擬似ではなく本物の太陽炉、その力は既にマドカちゃんで立証済み。軍事的ではなく医療からその存在を知らしめる事にしたＧＮ粒子。イオリアさんが聞いたら怒るかな？
まぁ、その時は彼女の笑顔に免じて許してもらおう。流石のイオリアさんも幼女の笑顔を前では怒ることは出来ないだろうから。

ですから、どうか化けて出てこないでね。

後日談その２

「平和だな」
「平和ですねぇ」
　ＩＳ学園職員室。ＩＳ学園に在席する生徒達を正しい知識と心構えを教え、そして将来、社会に貢献出来る様に導く。そんな金の卵達を育てる先人達は現在一時の安らぎを満喫していた。
　注がれた湯呑み碗を手にズズズと熱い緑茶を啜る二人の女教師、平和な日常を噛み締めるその姿はまるで激戦を潜り抜け、生き延び、そして退役した老兵のソレである。
　とても二十代の女性とは思えない姿、しかし事実彼女達はほんの数ヶ月前までは戦場の最前線に匹敵する激務を体験したのだから強ち間違いではない。
　数ヶ月前、修学旅行中に起きた事件。テロリストである亡国機業により一時は騒然とした京都、５０００発のミサイルの強襲や蒼い巨人の出現など人類の歴史が４回位引っくり返りそうな出来事を体験し、更には彼の者が残した子供達の対応に追われた。
　その日々は激務を越えた激務、対策と対応に追われ、多くの教職員は体重が激減したりと多大なる被害を受けた。退職しようにも人が減ればその分自分達に掛かる負担が大きくなる。その事を良しとしないＩＳ学園の職員は互いに逃がしてなるものかと常に監視しあっていた。
　そんな激動の日々を経て漸く掴んだ平和な日常、学園の職員一同はこんな日々がいつまでも続いて欲しいと切に願いながら毎日を過ごしていた。
「タンポポちゃん達もクラスの皆と無事に馴染めているし、私としてはこんな日々が卒業まで続いて欲しいんですけどね」
「同感だ」
　アハハと頬笑む山田真耶に織斑千冬は深く頷いて同意する。タン

ポポ、サキ、メイ、ミンミン、モモ、嘗てオートマトンとして学園の設備を修繕するモノだった存在は、白河修司の手により人格を有したガイノイドとして生まれ変わり、モノから者へと至った。

人間と変わらぬ理性、知性、感情、そして心を持った彼女達は通称白河チルドレンと呼称され、表向きは修司が孤児として引き取った子供達とされている。尤も、それは学園の外にいるメディアの目を誤魔化す為だけの策であり、その一方で学園の生徒達は全員その事を知った上で受け入れている。

人と何も変わらず、そして個性的な彼女達はその外見とは異なる実力をそれぞれ有しており、それも相まって実力主義であるＩＳ学園における人気者となっている。通常そんな存在にはどこにおいても面白くないと裏で画策するものが現れたりするのだが……不思議とそんな事はなかった。

いや、どちらかというと必然かもしれない。何せ彼女達は白河修司が文字通り自ら生み出した存在なのだ。手塩に掛けて生み出した彼女達に手を出したらどんな結末が待っているか、想像に難しくない。というかしたくない。

そんな訳で無事にクラスに馴染めるようになった白河チルドレン。因みに彼女達の入学手続きや入学金、学費は全て修司が負担し、面倒を見ている。更には娘達をよろしく頼むと担当する教員の人達に一人一人頭を下げにいったのだが、それが彼女達を更に追い詰める一因になった事を本人は自覚していない。

有人格ガイノイドとの高校生活、どうなる事かと最初は危惧したが思いの外上手くいっている彼女達に教員達は肩の荷が降りた気持ちだった。

白河チルドレン（タンポポ達）を新たに迎えた学園生活、その時間はとても充実しており、穏やかで、そして安らぎに満ちていて、教職員の女教師達はそんな日々に癒されていた。

修司のいないＩＳ学園。用務員（自称）が一人いないだけでこんなにも心が安らげるなんて、教師となった時の頃は想像出来なかった。

「もうじきマドカさんも退院してＩＳ（ウチ）学園に来るんですよね？」

「……あぁ」
山田真耶の口から出てくる名前に千冬の表情が僅かに曇る。織斑マドカ、自身と同じ顔を持ち、弟と自分と同じ性を持つもうひとりの織斑、その素性は謎に満ちており、先の学園祭と京都での襲撃で襲ってきた亡国機業の構成員の1人。
何故自分と弟である一夏を狙ったのか、その理由は未だにハッキリとしていない。が、今はあの時とは違ってさほど心配していない。何せ彼女の身を預かっているのはあの白河だ。マドカの素性こそ明らかにしていないが、どこで何をしている位の情報はリアルタイムに此方に流してくれている程で、此方が訊ねれば大抵の質問には答えてくれた。
時折国家機密レベルの情報をさらっと渡してくる時は血の気が引いた。何だGN粒子って、何で粒子が人体に作用して細胞を活性化させたり治癒力を高めたりするんだ。しかも確かそれってお前のISの動力だったよな？　こっちが本物？　まるで意味がワカランゾ。
と、軽く心が磨り減る様な事をしでかす修司だが、その実直さは素直に尊敬できるし、色々と気が付いたりするのは異性としてもポイント高いし、何より信用出来る。これでやることの規模をもう少し小さくしたり、自分達の胃にダイレクトアタック（直接攻撃）するような真似を減らしてくれれば言うことないのだが……。
（まぁ、気遣いが出来たり、他人をちゃんと対等に認識出来ている辺り、あの兎よりはマシか）
自分の考えている事が思いの外我が儘だと気付いた千冬は小さく溜息を溢し、湯呑み碗に入った残りの茶を啜る。
あぁ、滲みるなぁ。とても二十代の女性とは思えない落ち着き振り、このまま平穏な時間が長く続けばいいなと誰もが思った時――それは起こった。
『――全ての人類に、報告させて頂きます』
「む？」
「ふぇ？」
ふと、聞き慣れた声が職員室に響き渡る。現在は休職届けを出して

ＩＳ学園にはいない筈の彼の声、それを耳にした全ての教職員はまさか！という表情で備え付けのテレビに視線を向ける。
本来ならお昼の番組が放映されている筈の時間帯、しかしそこに映るのは質素な椅子に座る彼の者とその側に控えるドイツの代表候補生。
寝れた彼女とは対称的に画面中央に座る男は、不敵な笑みを浮かべてテレビの向こうにいる全人類に向けてメッセージを送る。
『私達は〝ＺＥＸＩＳ〟、宇宙進出と開発を目的とした私設運営組織です。先日ドイツ政府の協力の下、遂に宇宙航空艦〝インフィニット・アヴァロン〟が完成した事を機に、ここに乗組員の募集を行う事を宣言致します』
その言葉と一緒に映し出される巨大な艦、それが彼のいう宇宙航空艦だと知った千冬は、あの野郎遂にやりやがったと顔を机に伏せ、山田真耶は倒れて気絶した。
後に山田真耶は語る。最近、自分の理解能力を大きく越えた出来事に直面した時、よく気絶するようになった。目から光が消え失せ、アハハと笑いながらそう口にする山田に対し、それが彼女に出来る精一杯の自己防衛だと悟った千冬は思わず涙を流してしまった。

◇

――――それから数日。再び世界を驚愕と混乱の渦に叩き落としたその張本人たる男は、現在日本におけるＩＳ学園の校門前にまで来ていた。
側に控えるのは黒と銀の二人の少女達、共にＩＳ学園の学生服を着

用し、その姿はどこからどうみても立派な女子高校生だった。
「さて、後は手続きを済ませるだけだな。ラウラちゃん、マドカちゃん、今更だけど忘れ物は無い？　もしあったら言ってね。ロジャーに頼んで超特急で届けて貰うから」
「い、いえ！　自分は大丈夫であります！」
「私もだ。……というか、ワザワザ忘れ物届ける為だけに国家元首を頼るな」
「そう言われても、これはロジャーが直接言ってきた事だしなぁ」
　さらりとドイツの首相をフレンドリーに呼び捨てにする修司にマドカはため息を溢す。彼に身柄を委ね、白河修司という人間を嫌という程思い知った彼女に最早抵抗する意思は無かった。
　当時、身柄を拘束され、修司の下に送られたばかりの頃のマドカは手負いの獣の如く暴れた。私に触れるなと、織斑一夏を殺すと、その狂犬振りに流石のラウラも手を焼いた。
　手負いとはいえ相手はテロリスト、訓練された動きとそれに見合った殺意は殺し屋のソレ。このままでは埒があかない。そんな織斑マドカに待っていたのは、修司による対話（物理）だった。
　そんなに暴れたいなら相手をしてやると白衣を脱ぎ捨てマドカの前に立った修司はマドカの拘束を解いた。テロリストとして仕込まれたマドカは俊敏な動きで修司に襲い掛かる。ＩＳなんてものが無くとも人１人殺せる程度の膂力を有しているマドカ、しかしそんな彼女の力は修司に一切通用せず、終始遊ばれる形で終わった。
　疲れ果てた彼女が次に待っていたのは不思議な粒子に満たされた部屋、後にＧＮ粒子と知るそれに漬かる様に入ったマドカは暫くの合間その部屋で過ごす事になった。
　密閉された空間、少し息苦しさを感じる程度のこの部屋で数日過ごしたマドカは三日目辺りから己の体調に変化があることを感じた。
　何でも、あのＧＮ粒子というのはＩＳを始めとした兵器に隔絶した力を与えるだけでなく、人体にも影響を及ぼすのだとか。ＧＮ粒子によって変化したマドカの体は優良健康児の如く清潔なモノに変わっており、今まで自身の肉体を蝕んできた亡国機業のナノマシンも老排

出物と共に流れ出ていったという。
人間の肉体を造り変える。そんな神の所業に等しい事をやってのけた修司に対し、マドカはこの時既に刃向かおう等とは思わなくなった。
その後、暫くのリハビリ生活を経て完全回復を果たしたマドカは用務員に復帰する事となった修司と共にＩＳ学園へとやってきたのだ。
「というか、本当に大丈夫なのか？　お前の言う宇宙航空艦の乗組員の募集の話、まだ全然話が纏まっていないんだろう？」
「そうなんだよねぇ。掛かってくるのはＩＳ委員会からの抗議の電話ばっかで、碌に募集の話がこないんだよね。……アレかな、宣伝効果ってのが足りないのかな？　やっぱＣＭ用に幾つか撮るべきだったか」
グヌヌと悩んでいる修司にマドカは心の中で一言、「ちげーよ」と口にする。どうもこの男はやることの規模（スケール）の大きさに対して考えることが庶民じみている。
ズレている。と言った方が正しい。以前一度だけ会った篠ノ之束も大概ズレていたが、この男も負けてはいない。天才と言うのは皆こうも何処かおかしい一面を待っているのか。
「けど、まぁ大丈夫だと思うよ。ロジャーは募集の締め切り次第連絡来るようにしていたし、集計の方も準備は進めている。ある程度の事は終ったから、次はこっちの事を進めたいと思うんだ」
「こっちの事？」
一体、なんの事だろう。不思議に思ったマドカが無意識に訊ねると……。
「女性権利団体の人達と亡国機業の対処。いやぁ、用務員の仕事も大変だよ。ゴミが多くって……ククククク」
とてもそうは思えない口振りと最後の笑みにマドカは全身総毛立った。やはり、この男には敵対しない方がいい。そう思った彼女はこれから始まる学園生活に期待と不安を抱きながら共に学園の門を潜るのだった。

後日談　その３

ダリル＝ケイシー、ＩＳ学園の三年生に在席している彼女はアメリカの代表候補生として選ばれており、専用のＩＳを所持している事からその実力は高く、相方であるフォルテ＝サファイアとの連携は国家代表レベルに通用されているとされており、今後の活躍に多くの期待を集める人間の１人である。

スタイルも抜群で、露出度の高い改造制服を愛用している彼女は良くも悪くも自由の国の人、多少の不真面目さは有るものの、日頃の素行は悪くなく、誰とでも話せて、年下相手にも対等に話せるその人柄は他の学生にとって親しみある人物だった。

そんな彼女は現在職員室前の廊下で窮地に立たされていた。それも絶体絶命の大ピンチ、嘗て無い脅威を前に全身総毛立ち、汗が滝の如く噴き出してくる。ダリル＝ケイシーにとって絶望とも言える恐怖の象徴……それは。

「やぁ、お久し振りですね。ケイシーさん、元気そうで何よりです」

「お、お久し振り……です。か、帰って来てたんですね」

慣れない敬語で、吃りながら挨拶を交わすダリル。普段の彼女からは想像できない緊張したその姿に目の前にいる白衣を着た男、白河修司は笑みを溢す。

「ククク、相変わらず堅い娘だ。年上だからと言ってそんなに緊張しなくてもいいんですよ？　たかが年齢が上ってだけで威張り散らせる程、大した人間では無い事は君も良く知っているでしょうに、以前のようにシーちゃんと呼んでも構いませんよ？」

「あ、アハハハ……」

出来るわけねぇだろ。ダリルは目の前の人物の言葉に内心悪態付き、数カ月前の自分を殴り飛ばしたくなった。あの頃の修司はまだＩＳの事に目立った知識もなく、用務員として雇われて日が浅かった

為、当時は自分の様な年上相手でも軽い態度を取る人間に良く絡まれていた。
男性、それも年若く自分達と近い男の用務員の就任、それは自分達の興味を大きく刺激するモノだった。最初は仕事一辺倒のつまらない男だと思っていたが、中々ユーモアで時折地として出てくる素の言葉遣いの修司は普段の敬語の時とは違う男らしさがあった。
顔も悪くなく、人付き合いも良く、更には仕事にも誠実で男らしいとあれば良い印象はあっても不愉快に思うことはない。
しかし、修司がＩＳの資格を取った途端に彼と関わろうとする人間は激的に減っていく。当然だ。通常なら国の支援と大手の企業が一丸となって漸く受ける事が出来る資格を夏休みの宿題感覚で、しかも個人で取得した怪物相手に並の人間がこれまでと同じように接する事なんて出来る訳がない。
その後１ヶ月程姿を消したかと思えば新型のＩＳを引っ提げて宇宙から帰還してきたと言う。トドメにその新型の力で当時学園を襲ったゴーレム等を瞬殺した光景は今も瞼の裏にこびりついて離れない。
当時襲ってきたゴーレムに対抗する為にダリルは相方であるフォルテと共に専用機で相手をしてきた。故に理解できる。アレほどの力をもったゴーレムを相手に単機で粉砕していく修司はまさに化物、ダリルにとって織斑千冬以上の人外であり、先の文化祭の騒動と修学旅行の件で関わってはいけない接触禁止級の化物、恐怖の象徴にクラスアップした。
そして京都での一件以来〝組織〟との連絡は完全に途絶えてしまっている。以前から組織からの招集に応じない事もあったし、恐らく既に自分は裏切り者扱いになっているだろう。五月蝿いほど寄越してきた組織からの連絡が一週間程まえから一切無くなった事がその証拠である。
嗚呼、何故こんな怪物と関わってしまったのか、数ヵ月前の軽い自分を殴ってでも止めてやりたいが……悲しいことに未だこの世界の人類は時間旅行が出来るだけの力を有してはいない。

「おぉ、久し振りじゃのう修司君。元気そうで何よりじゃ」
「十蔵さん、お久し振りです。すみません、手続きの方は終わったのですが、少し話し込んでしまいました」
「別に大して待ってないから、気にする事はないのじゃが……相変わらず真面目じゃのう」
　ナイスタイミング、廊下の向こうから現れる初老の男性の登場にダリルは内心で安堵する。これで話の流れは変わった。ダリルはこのまま合わせて隙を見てこの場から立ち去ろうとする。
「そ、それじゃあ私はこれで……」
「あぁ、そうそう。ダリルさん、後で話があるので少し時間を戴いても宜しいですか？」
「え？　い、いやでも……」
「なに、そんなに時間は取らせません。貴方さえ協力してくれれば此方の用件はすぐに終わります。お願いしますね。――――レイン＝ミューゼルさん」
「っ!?」
　踵を返し、急いでその場から立ち去ろうとする彼女の耳に小声で聞かされる名前、それが組織内での自分のコードネームだと聞かされたダリルは驚愕に目を見開かせて修司を見やる。
　そして理解する。既に自分に帰る場所はなく、同時にあの怪物から逃げられない事に……ダリル＝ケイシーは十蔵と共に去っていく修司の背中を見つめながらぼんやりとその場に立ち尽くしていた。

◇

「ヤァーーッ!!」

パシンッ。ＩＳ学園の剣道場に竹刀同士がぶつかる甲高い音が鳴る。裂帛の気合いを込めて放つのは白河チルドレンの一人、長女のタンポポだった。互いに防具服を脱いでの実践形式を模した一騎討ち、そんな彼女の一撃を対峙している織斑一夏は軽く呼吸を整え、難なくそれを受けきって見せる。
「よっと、今のは中々早かったぞ。少し焦った」
「そうです……かっ！」
再び繰り出される攻撃、しかしその悉くが一夏には届かず、外し、捌かれ、打ち払われてしまう。浮き彫り出てくる自分と目の前の少年の実力の差、されどタンポポの目には疲弊の色は見えていない。
（こここっ！）
打ち下ろされる一撃、それを読んでいたとばかりに防御の姿勢を取る一夏、それはこれまで幾度も繰り出された事でタンポポの攻撃を全て見切っていた証だった。
しかし、敢えてそうなる事を狙ったタンポポは防がれる瞬間、手首を返して竹刀の刀身の軌道を変え、狙いを一夏の胴回りに狙いを定める。
一夏の目は見開き、周囲のギャラリーはざわつき出す。ここへ来て動きを変えての一撃はまさに奇襲と言えた。漸くこれで一本取れる。タンポポは自身の勝利を確信した時。
「太刀筋が寝惚けているぞ」
「っ！」
それまで無防備だった脇腹付近に竹刀の刀身が割って入ってくる。防がれた！　渾身の奇襲が防がれた事に動揺してしまったタンポポ、当然一夏はそんな隙を見逃す筈もなく、彼女の頭部に試合終了の一撃を見舞った。当然、手加減して。
パコンッ。と乾いた音が道場に響く。先程までとは違う気の抜けた竹刀の音、しかしそれは試合を終わらすには十分な威力を持っており、受けてしまったタンポポは涙目になりながら頭部を押さえた。
「はぅー、また負けてしまいましたー」
「ダメじゃないかタンポポ、急に動きを変えたりしたら。手首、大丈夫

か？」
「あ、はい。少しジンジンしますけど大丈夫です」
「後でテーピングと氷嚢貸してやるからちゃんと冷やしておけよ」
「あ、はい。ありがとうございます一夏さん！」
ペコリと頭を下げて一旦下がる一夏、壁際に下がる彼女を見送った後、次の相手であるメイに向き直る。
「さて、次の相手はメイだったか？」
「おうさ、覚悟しろよ一夏。俺はタンポポの様に甘くはないぞ！」
ヌフフフと不敵に笑うメイに一夏はあははと乾いた笑みを浮かべ、二人の打ち合いは始まった。
「お疲れタンポポ、ほら、スポーツドリンクだ」
「あ、ありがとうございます箒さん。すみませんワザワザ」
「なに、私の方も一通り走り込みは終ったからな。休憩がてら様子を見に来ただけだ」
打ち合っている一夏とメイ、邪魔にならないよう壁際にまで退いて座り込んだタンポポに箒が歩み寄る。手に待ったスポーツドリンクを手渡し、礼を言いながら一口貰うタンポポ、ゴクリと喉を鳴らして美味しそうにドリンクを飲むその様子はどこからどう見ても人間そのものの動きである。
良くできた……とは思わない。箒にとって最早タンポポ達は同じ学園に席を置く仲間であり、共に激戦を潜り抜けた戦友でもある。今更ガイノイド等と言う小さな事で特別視するつもりはなかった。
ただ、どんなに食べても太らないというのは個人的に気になったりはするが……。
「いやぁ、一夏さんって強いですね。まさか一度も当てられないなんて……ちょっと悔しいですよ」
「まぁ、アイツもここに来てから努力を重ねてきたからな。実戦とも呼べる危険な状況を何度も潜り抜けてきたし、あれくらいは出来て当然だろう」
口では厳しい評価ではあったが、内心では箒は嬉しく思っていた。

嘗ては同門で自分とは同等以上の実力者だった一夏は当時の箒にとって目標であり、良きライバルでもあった。再会してからは腕が鈍り、一時は自分と一夏の間にある実力差に落胆したりもしたが、今ではその差は覆り、勝ち星の数ではすっかり負け越してしまっている。

当然悔しくもあったが、それ以上に箒は嬉しくもあった。剣道に直向きに打ち込んでいる彼の姿はまるであの頃に戻ったみたいだったから。尤も、他人の気持ち、特に恋心に気付かないのは今も昔も変わってはいないが……。

「しかし、まさかお前が体験とはいえ剣道を始めるなんてな。お前のＩＳは近接戦闘向きじゃないんだろ？　ましてや剣術なんて……」

タンポポの使うＩＳ〝蒼鴉〟は厳密に言えば戦闘用のＩＳではなく、宇宙開発を目的としたＩＳでそれ故に公式戦に出ることは許されず、その出力の高さと全性能を解放させた時の力の未知数から〝ＩＳを越えたＩＳ〟と評され、世界中から色んな意味で注目されている機体である。

そんな世界最高峰の機体である蒼鴉には刀剣を用いた戦闘行動は想定されておらず、また今後搭載される予定はない。なら何故その蒼鴉の乗り手であるタンポポは剣術に拘るのか、素直に疑問に思った箒が訊ねると。

「お父さんが……父が言ったんです。学びなさいと」

「修司さんが？」

「はい。――お前達は生まれてまだ間もない。確かに常識や知識は人並み程度に修めてはいるが、一番大事な体験する事を不足している。それでは己の視野を狭め、可能性を自ら縮めるだけだ……と」

それは修司がＩＳ学園を去る直前に娘達に残した課題という名の指針、自らの可能性を広める為のアドバイス。

学ぶ事を尊べ、体験する過程を楽しめ、生まれた結果に恐れず、受け入れ、糧とし、次の学びに活かしなさい。お前達にとってこの世界こそが学ぶべき題材だと、修司は娘達に語り、そして聴かせた。

相変わらず凄いことを言うものだと、箒は本心から称賛する。普段からナチュラルにやらかす彼の姿を知る者としては複雑な思いだが。

けど、確かに彼女達はここ最近活発になってきている。タンポポとメイは剣道を始めとした運動部に頻繁に顔を出す様になり、サキやハナは家庭科の子達と料理を学び、ミンミンとモモは学年問わず様々な人達と交流を楽しんでいる。

体験し学ぶ事、それが娘達に示した教育方針であり、彼女達の可能性を広げるアドバイスなのだと箒は感心しながら理解する。やっぱり凄い人だと痛感する箒、そんな時、酷く慌てた様子の本音達のクラスメイトが道場に雪崩れ込んできた。

「本音、それに鷹月に相川まで……どうしたのだそんなに慌てて」

「どうした？　何かあったのか？」

呼吸を乱し、肩で息をする三人に箒だけでなく一夏まで歩んでくる。道場の中央を見れば頭を押さえたメイが「また負けたー！」と悔しそうに叫び、タンポポに慰められている。

「か、かかか……」

「蚊？　なんだ刺されたのか？」

「いや、たぶん違うと思うぞ」

「帰ってきたんだよ、あの人が、修司さんが！」

息を絶え絶えにしながら、それでも叫ぶ本音の一言に剣道場にいる全員が固まり。

「それで、修司さんが織斑先生に……け、けけけ」

「決闘を申し込んだみたいなの！」

その言葉に再び剣道場の空気は凍り付いた。

◇

ＩＳ学園、アリーナ。ＩＳの実技や催し物で使われる競技場。通常の競技場とは規格が異なり、全てが最新の設備と敷地の広さを誇るこのアリーナで二人の人間が対峙していた。
「織斑先生、戻ってきて早々今回の私の我が儘に付き合ってくださり、ありがとうございます」
「なに、頼んでくる相手がお前であるなら私としても望むところだ。それにお前には普段から恩があるからな。弟の事や例の黒騎士の娘の事も……それが少しでも返せるのであれば私に異論はない」
自分の我が儘で迷惑をかけたと思い、頭を下げてくる修司に相変わらず生真面目な奴だと千冬は苦笑う。確かに修司から頼みを聞くのはこれで初めてだが、千冬はそれを不思議とは思わない。確かに目の前の男はやり過ぎる所が多々あるが、どこぞの兎と違い筋というものを曲げたりはしないし、それが好ましいと思えるから千冬も素直に修司の頼みを聞き入れようと思った。
……いや、本音を言えばそれだけではない。千冬が彼の願いを聞き入れたのはもう一つ個人的な理由がある。
「しかし、驚いたぞ。まさかお前が自ら私に試合を臨んでくるとはな」
「……」
試しに殺気を飛ばし、圧力を掛けてみる。初代ブリュンヒルデと呼ばれ、世界の頂点に君臨した者の威圧が修司の身に突き刺さる。
しかし、修司はそんな千冬の威圧を平然と受け止め、なんて事無さそうに佇んでいる。やはり、只者ではないと千冬は認識し、修司が自分に出した依頼を思い出す。
一対一での模擬戦。それが帰ってきた修司が千冬に頼み込んだ依頼の内容だ。当然、修司の口からその事を頼まれた時は驚いた。実力面での話ではない。白河修司という人間の人格を考慮すればそんな頼み事をするのは無いと今まで思っていたからだ。
けれど、同時にこれは白河修司という男の本当の実力を計れる良い機会だ。戸惑う他の教職員の言葉を聞き流しながら千冬は修司と共にアリーナ中央へ降り立った。

既に学長である轡木十蔵の許可をもらっているという。やはり彼の素性を知っていたのか、そして相変わらず用意周到の修司に千冬は流石だと舌を巻く。
「それで、得物はどうするんだ？　生憎今の私は丸腰だし、お前も何かを装備している様子もない。流石に素手で殴り合うのは……」
そう言って肩を竦めると修司から何かを投げ渡される。何かと思い掴み取るとその手には刀の鍔らしきモノがあった。
「……これは？」
「それは過去の世界大会で貴方と共に活躍した愛機、暮桜に極限にまで近付けた模造品です」
「っ!?」
「織斑先生……いや、白騎士さん。不躾で誠に勝手ながら貴方に挑ませて貰います。私の専用機が果たして貴方と篠ノ之束博士にどれだけ近付けたのかを」
修司の懐から取り出すのは剣の紋様（エンブレム）が施されたバッチ。それを空に掲げると。
「起きろ――A・（アメイジング）トールギス！」
光がアリーナを包み込んだ。

後日談　その４

――――走る。織斑一夏と箒、そして彼の者の娘達はＩＳ学園の敷地内で剣道場とは正反対の位置にある競技用アリーナに向けて全速力で走り抜けていく。

着のみ着のまま、胴着姿でアリーナへ辿り着いた一夏達はそのまま会場に向けて更にその足を加速させる。やがて会場に続く関係者専用の通路に差し掛かると、一夏達が気掛かりに思う事はこの先にいるであろう二人の規格外の戦いの行方、まだ続いているのか、それとももう終わってしまっているのか。果てし無い不安な気持ちに苛まれながら駆け抜ける彼等がアリーナへ突入した時。

交差する蒼と白の閃光、その際に生じた衝撃が波となってアリーナ全体に響き渡る。砂塵を巻き上げ、押し寄せてくる爆風はアリーナにやって来た一夏達にまで襲い掛かった。その時咄嗟にＩＳを展開した一夏が盾となる事で衝撃は緩和され、箒達に被害が及ぶ事はなかった。

軈て晴れていく砂塵、開かれた視界に彼等が次に目にしたのはアリーナの中心地で互いに背中合わせで得物を振り抜いた姿勢で制止する二人の姿があった。

「――――流石、ですね」

「ふぅっ、ふぅっ、ふぅっ……」

白と蒼、嘗ての白騎士を思わせる甲冑を纏う女性、その手には身の丈に迫るほどの大剣が握り締められている。一方の蒼、背中と脚部に巨大なブースターが備わっている事以外対して特徴は無さそうな蒼の戦士の手には何も握られてはいなかった。

すると、ヒュンヒュンと風切り音が何処からか聞こえてきて交差する二人の間の地面に突き刺さる。それは鍔のない無機質な一本の刀、野太刀と呼ばれる日本が生み出した独特の刃がアリーナの中心地点に突き刺さり、同時にそれが二人が行った戦いの終わりを告げてい

た。
「いやはや、少しはＩＳについて理解出来たと思っていたのですが……まだまだという訳ですか」
蒼の鎧を解かれると同時に地に刺さった刀も粒子となって消えていく。バッチとなったＩＳを片手に振り返るのはＩＳ学園の用務員にして技術者、白河修司だった。自身の敗北を認めていながら何処か晴れ晴れとした顔の修司に対し、白の鎧を解いた織斑千冬は息も絶え絶えで呼吸を整えるのに精一杯だった。
今の闘いは間違いなく千冬の勝利の筈、だというのに二人の状態の差はまるで正反対、一体どちらが勝者と言えるのだろうか。
「織斑先生、今回は私の機体のデータ取りに付き合って下さり、ありがとうございます。そのお礼、という訳ではありませんが、そちらの機体は貴方に差し上げます。名前はまだ付けておりませんのでどうか付けてあげてください」
それだけ言って修司は千冬に頭を下げ、アリーナを後にする。一夏達とは正反対に位置するもう一つの出入口から去っていく彼を見送ると一夏達は千冬の下へ駆け寄っていく。
（私の……勝ち、だと？）
遠くから自分の名前を呼ぶ一夏の声を耳にしながら織斑千冬は思い知る。自分と彼の間にある明確な〝差〟というものを。
あぁ、確かに自分は勝った。奴のシールドエネルギーをゼロにして奴の唯一の武装である刀を弾き飛ばした。状況的に、そしてＩＳを用い公式戦のルールを則って見れば万人が千冬の勝利だと口にするだろう。
だが、千冬自身はそうは思わない。何故なら奴は終始公式戦として……スポーツとして戦っていたに過ぎないからだ。戦い方も戦法もルールに殉じて行われたもの、実戦を想定したモノではなかった。
まるで自分を小馬鹿にするような戦い方だった。最初はただ受け身で自分の動きを観察するしかしなかった修司に千冬は自身の纏うＩＳの性能の高さからつい現役時代の時のように気持ちが昂り、彼に

挑発してしまったのだ。
この程度か？　と。もっと全力でやれ、こんなものではないだろうと、千冬が煽った瞬間……それは起こった。良いのか？　そんな風に目線で語りかけてくる蒼の戦士に千冬は心底怖気を感じた。
針の筵、全身に突き刺さってくる殺意。嘗て感じたことのない濃厚な殺気に圧され、千冬は後ろに飛び、そして驚愕した。
〝ゼロシフト〟　停止状態から最高速度の合間を極限にまでゼロに近付けたＩＳの技術の中でも最高難度の代物、それをまるで当たり前のスキルだとばかりに修司は千冬が開けた距離を一瞬でゼロにした。
そこから先は一方的だった。個別連続瞬時加速（リボルバー・イグニッション・ブースト）を始めとした難易度の高い技をポンポンと繰り出し、更にはそれらを組み合わせて独自の技に昇華させ、千冬を着実に追い詰めていた。
千冬の纏うＩＳは作った本人が白騎士に近付けたと珍しく豪語するだけあってその性能は本物だった。反応速度も悪くなく、久し振りのＩＳ戦であっても十二分にその実力を発揮出来る程度には織斑千冬は絶好調だった。ただ、そんな千冬よりも白河修司という人間の方が何段も先に行っていた。
そんな彼に対抗出来たのは偏に彼の持つ武装に他ならない。彼も自分と同じ刃の一振りだけを使用し、接近戦に持ち込んできているからだ。これまで培ったＩＳの戦闘技術をもってすれば修司の動きをある程度の予測する事も可能だし、それに併せてカウンターを狙うことも出来たし、事実その戦法のお陰で千冬は修司に勝利する事ができた。
けれど、それでも千冬は自分の勝利だとは思えない。何故なら、奴は自分と自身の機体性能を測る事に専念していたからだ。自分がどれだけ篠ノ之束に追い付けたのか、それだけを気にして戦っていたから。
だから修司は自分の勝敗に拘らない。何故ならそこに彼の求める答えはないから。もしこれが実戦で互いに命を賭けたモノだとするならば……恐らく、彼は本当の牙を己に突き立ててくるだろう。

つまり、白河修司は結局の所、全力であっても本気ではなかったという事、奴の深淵を覗くことは出来てもそれを引き出すのは自分であっても不可能だという事。
これが、自分と白河修司の間にある〝差〟、それを認識した千冬は悔しそうに、悲しそうに、そして……同情するように去っていく修司の背中を見つめるのだった。

◇

？月？日
漸く帰ってこれたＩＳ学園、数ヵ月もの間休んでいただけに少々不安に思っていたけれど、学園の皆さんは以前と変わらず温かく自分を迎え入れてくれた。
山田先生を始め、数名の教職員の方達は仕事中であるにも関わらず自分を労ったり、暫くの間休みなさいと気を遣って貰ったりした。その心遣いはとても嬉しいし、素直に受け取りたいとも思ったけど、生憎今の自分にはあまり時間が残されておらず、ＩＳ委員会から言い渡された期限というモノを守らなければならない身、故に山田先生達の心遣いを丁重に断りを入れながら自分は織斑先生に折り入って頼み事をした。
いくらデータ取りの為とは言え流石に不躾に過ぎるかと思われたけれど、意外にも織斑先生は自分の願いを聞き入れてくれて自分との模擬戦の申し出を受け入れてくれた。
アリーナで行われた自分と織斑先生の模擬戦は織斑先生の勝利で幕を下ろした。それなりに本気でやっただけに負けて悔しいと思い

もするけれど、それ以上に得たモノが多かったので自分的には満足した結果である。
自分が新たに製作したＩＳ、これは以前学園に襲ってきたゴーレムのコアを独自のルートでドイツにある自分の研究所に持ってきて貰い、それを使用して作ったモノ、アリカちゃん達の様な電脳生命体の存在しないコアであるから当然各システムとの連動率は落ちるがそこは自分の操作の腕でカバー。蒼鴉の操縦で培ったＩＳ操縦技術により、どうにかマトモに使える様になった。
織斑先生のも同様で自分と同じ電脳生命体のいないただの動力源でしかないコアだ。けれどこれには白騎士という予め用意していた情報を基に造り上げたので自分のＡ．トールギスほど難しくは無かった。
真似るだけでは芸がないので自分なりのアレンジを加えて完成させた白騎士Ｖｅｒ２（仮）、装甲は例の如くガンダニュウム合金を使用、ハイパーセンサーの感度も通常の数倍引き上げ、その人の動体視力に併せ最大限の性能を発揮出来るシステムを着けている。
それに対して自分の研究所にトールギスのコンセプトは単純明快、ただ速く動くこと。それだけに特化した機体で装甲も皆と同じガンダニュウム合金であること以外さして特徴の無い機体である。
唯一拘りがあるとすれば唯一の武装である日本刀を模した剣の一振りのみ、グランゾンを使い高重力を用いて造り上げたその一振りは我ながら中々の出来栄え、何回も何回も失敗してその果てに漸く完成した一振りなだけに出来上がったばかりの時は感動で思わず泣き掛けた。因みに織斑先生に差し上げた白騎士Ｖｅｒ２（仮）の剣もこれと同じ製法である。
ＩＳでは素手を用いての戦闘は基本的に無いから一応作っては見たのだが……如何せん使い方がイマイチ分からない。
刀剣の扱いを得意とする友人なんてトレーズさんしか知らないからなぁ。多元世界の時に使っていたグランゾンの剣だって斬るというより叩き潰すといった感じだから剣術とはいえない。
そこで剣術の達人でもある織斑先生に模擬戦を頼んだのだけれど、

いやぁ流石元世界最強、前線は退いてもその腕前は変わらず、終始自分は決定打を浴びせる事は敵わなかった。機体性能を使って挑んでは見たけれど、どれも一歩及ばず全て叩き落とされてしまった。
剣術というものはこういうモノか。織斑先生のお陰でまた一つ自分は学ぶ事が出来た。あとは本番に向けて自分を磨くだけである。用務員の仕事との二足の草鞋状態だが……まぁ、十蔵さんに訳を話せば許してもらえるだろう。あの人、ここの学園長らしいし。
もしかして、自分をこの学園に招き入れたのは本職である学園長という役職に専念したかったから？　だから後釜である自分を必要だと？　それはそれで別に構わないが……なんというか、水臭い話である。
自分は十蔵さんに拾ってもらった身だ。その恩に報いるまでは大抵のいう事には従うし、協力もする。まぁ、十蔵さんの立場は色々複雑そうだし、言うに言えなかったという部分もある様だから追及はしないけどね。
そんな訳で遂に完成した自分の専用機、出力も問題ないし、織斑先生直々に稽古も着けて貰ったから自信もついた。後は来るべきその時に備えるだけである。

◇

「っと、こんなものかな」
用意された用務員用の一室、以前と変わらず用意してもらったその部屋で本日の日記を書き終えた修司は軽く体を伸ばす。
その時ドアの向こうから聞こえてくるノックの音と次に聞こえてくる娘達の声により漸く彼女達に声をかけ忘れていた事に気付いた修司は慌てて扉に駆け寄っていく。
その際に机の上に置かれていた情報端末からある大会参加受諾の報せが届く。それは痺れを切らした女性権利団体がその権力を用い

て無理矢理ＩＳ委員会に了承させたモノ。
〝ＩＳ世界大会の参加を承認〟そう一文だけ記された文字が修司の情報端末に表れていた。

クロスアンジュ編
その1

○月○日

唐突に起こった時空振動、それに巻き込まれ放り出されてしまう形で別世界へと跳ばされてしまった自分は、ここ暫くショッキングな出来事が多すぎた為、日記を書く手を止めてしまっていた。

理由は様々だが、一つ目の理由としては……現在自分のいるこの世界には自分以外人間が存在しないという事。これは自分のいる世界に人間が元々いなかったという意味ではない。

現在自分が拠点にしている場所は……東京都永田町。嘗て日本の心臓部だった国会議事堂があった地区の付近だ。時空振動でこの世界へと跳ばされた自分は戸惑いながらも情報収集の為にあちこちを探索して回ったが、人らしい人は見つけられず、取り敢えず寝床と拠点を確保する為に周囲を散策する事に徹していた。

その最中で自分は案内係のロボットと遭遇し、彼の案内に従って地下へと続く巨大なシェルターに案内された。

そこで待ち受けていた事実は……今から５００年程前に大きな戦争で人類が滅んだという重たい現実だった。勿論最初は信じないという気持ちもあったが、彼女の――――シェルターに搭載された人工知能の女の子から聞かされる映像と言葉、そしてシェルターに放置された人々の亡骸を見て、自分は受け入れざるを得なかった。

度重なる世界大戦と汚染、その果てに生み出されたラグナメイルと呼ばれる戦略兵器の使用により地球に大きい爪痕を残した地上は最早人の住める環境ではなかった。

何故汚染された地上で自分は生きているのか。グランゾンから降りる際に調べた時は特に異常は検出されなかったけれど……時が経つに連れて汚染は浄化されたのかな？

映像で見かけた戦争の規模的に５００年やそこらで環境が整えられるとは思えないんだけど……まぁ、その辺は別に放っておいてもい

いだろう。どうせ自分以外人間なんていやしないんだ。少しくらい思考を休めても問題はないだろう。
因みに何故人類が自分以外存在しないのか、その理由に付いてだが……どうやらこの避難用シェルターは世界中のシェルターとリンク出来るらしく、お互いに無事の有無を確かめる事が出来るのだという。
そう語る彼女から聞かされた状況は……現在生存している人類は自分だけという簡単な一言で締めくくられた。しかも、とびっきりの笑顔と共に。
もうね、流石に笑えなかったよ。自分以外に人間がいない事、人類が既に滅んでいて、自分以外誰もいないという事。数日ばかり憂鬱になっても仕方がないと言い訳しておく。
まぁ、それも今日で終わりだ。人類が自分以外生存していないならここに自分がいても仕方がない。この星に誰もいないのなら自分なりに調べて自分なりに生きていく事を考えていくしかない。
現在、自分が拠点にしている場所は〝夢有羅布楽雅〟と呼ばれるホテルだ。シェルターから色々部品を拝借し、それで発電機を作ったので当分は電力に困る事はないだろう。
それにしても今日は疲れた。シェルターで亡くなった人々を埋葬するために思った以上に手間取ってしまった。明日に備える為にも今日はこれでお開きにすることにしよう。
……ていうか夢有羅布楽雅ってホテルさ、これ完全にアレだよね？
もしかしなくてもラブホだよね？　５００年前の建築物で一番保存状態がいいのがラブホとか、どうなってるんだよ一体。それを利用する俺も俺だけどさ……しかも一人で。
この世界に来て早数日、ショッキングな出来事に数多く見舞われたが、拠点とする場所は確保したので取り敢えず今後も探索を続けていこうと思う。

○月△日
今日は拠点とする夢有羅布楽雅を中心に半径２０キロ程探索した

結果、中々面白いモノを発見した。国会議事堂から少し離れた位置にある巨大なクレーター、水が貯まり湖と化したそこの中心地点に高く聳え立つ塔が建設されていたのだ。といっても、塔は半分程倒壊している為聳え立つという表現は誤りかも知れない。

塔の事を以前シェルターで人工知能ちゃんから見せて貰った映像から思い出し、当時の事を推察すると、恐らくあの塔は当時この国のエネルギーを抽出する場所だったのではないかと思われる。

映像ではラグナメイルと呼ばれる機動兵器が戦略武装のものらしき攻撃であの塔を破壊する場面が映し出されていたし、それが原因でこの地球は一時期滅びの時を迎えていたと話していたから、多分間違いないと思う。

中へ入ってもっと詳しく調べてみたいと思うが、崩れる危険性がある為塔への探索は止めておく事にした。グランゾンで調べれば問題は無いと思うかもしれないが、あの塔は謂わばこの世界、この地球での象徴とも言える存在だ。興味本意で刺激を与えて完全に倒壊させてしまっては忍びない。あの塔を調べるのはこの世界の事を調べ回り、最後に残して置くことにしようと思う。

その後自分はあちこち調べ回ったが……為になりそうなモノは殆ど見当たらなかった。大きなショッピングモールとか調べて見たけれど、特に活用出来そうなモノは残っていなかった。電子版とかイジって電力を回復させようにも電源も酸化で殆ど錆びてしまっている為、電力を回復させるにはかなりの労力が必要になってくるだろう。

……電力もそうだけど、今自分にとって必要なモノは食料だ。グランゾンに保管してある非常食も限りはあるし、水は塔の所にある湖から拝借すればいいから由として、問題は食べ物だ。

水はろ過や火で加熱し、人体に有害な細菌が無いか調べれば良いだけだから別にいいが、食料はそうはいかない。最悪の場合そこら辺に生えている草木や苔を食べなければならないだろう。

……苔って、食えるのかなぁ？　暗黒大陸にいた頃も流石に苔は食べた事はなかったし、色々不安だ。

シラカワシステムを起動させて博士に聞いてみようかな？　……いや、止めておこう。博士に食用の苔の事を聞いて困らせるのもアレだし、仮に聞いたとしても博士を困らせるだけだろう。

――――知っていたら知っていたで反応に困るしね。

○月▼日

――――ヤベェ。今日の事を振り返って出てきた表現はこれしか思いつかなかった。

もうね、ビックリしたよ。多元世界で様々な出来事を経験し、大概の事には驚かなくなった自分だけど、今日見たモノは自分が経験してきた中でもトップ１０に入る出来事だった。

〝ドラゴン〟空想の生物で物語の中にしか存在しないと思われていた巨大生物。今日街を探索していた自分は偶然このドラゴンなる生命体と遭遇してしまった。

……夢かと思ったよ。目の錯覚だと信じたかったよ。でもね、何度目を擦っても、何度瞬きをしても目の前のドラゴンちゃんは消える事は無かったよ。

勿論、別の生き物かとも思ったよ？　けどね、あの体躯を見たら誰だってドラゴンだって思うんだ。巨大な躯、鋭い爪、荒々しい牙、つーかあのシルエットでドラゴンじゃないって言われたら逆にキレるよ俺。

しかも何か取り巻きの小型ドラゴンみたいなものもいるし、ホント怖かった。小型といっても大人の倍以上の体躯を持っているし、そんなのが取り巻きで十数匹もいるし、ホント怖かった。

オマケに聴覚も優れているらしく、動揺し足下にあった枝を踏み抜いてしまった所為でさあ大変。枝を踏んだ音で気付かれた自分は無数のドラゴンとまる一日鬼ごっこをするハメになってしまった。

ハチャメチャが押し寄せてくるというレベルではない。無数のドラゴンが頭の真上を通り過ぎた時は心臓の鼓動が五月蠅くて叶わなかった。その後はかくれんぼモードをフルに活用してどうにかドラゴン達を蒔くことに成功したが……まさかあんな生物が地球に跋扈

しているとは思わなかった。
　これからどうしよう。もしまた今回のようにドラゴン達が襲ってきたら流石に無抵抗のままではいられない。自分の身を守る為、最悪グランゾンで応戦しなければならなくなるが……なるべくならそういう事はしたくない。
　ドラゴン達からすれば自分は余所者の侵略者に見えると思うし、実際この地球には人類が生息していないのだから事実上この星はドラゴン達のモノと言えるのかもしれない。
　複雑な心境だがドラゴン達と接触するのは今後控えるべきかもしれない。もしかするとここら辺はあのドラゴン達の縄張りかもしれないし、早々にここから立ち去った方がいいだろう。
　……しかし、久し振りに全力疾走したなぁ。最後辺りは空中三角跳びまで出してしまったし、こりゃ明日は筋肉痛確定だな。
　それにしても、ドラゴンなんて実際初めて見たけれど結構格好良かったなぁ。某ハンターゲームでは割と見かけるけど、やっぱ生で見ると迫力がダンチだわ。
　……真ドラゴン？　アレはほら、ゲッターだから。厳密にはゲッターロボの集合体でドラゴンじゃないから。ノーカンノーカン。
　次元獣にも似たようなのいるけど、アレは獣であってドラゴンじゃないから。うん。

◇

　修司のいる地点から遠く離れた所にある集落。ドラゴン達の集っているその場所に複数の女性達が大広間に集まっていた。
「それは……真か？」

「はい。目撃者の話によればその者は敵対する意志はなく、斥候隊と遭遇した直後逃亡いたしました」
跪く女性の報告に大広間にてざわめきが広がる。
「……ナガタチョウに現れた謎の人間、しかも長年存在する事のなかった男とは」
「何か良からぬ災いの前触れなのだろうか」
「アウラ奪還の前にこの様な事が起きようとは……」
女性の口から伝えられる報告、その内容は彼女達にとって信じられない事ばかりであり、また不安に駆られる内容だった。
彼女達にとって未知の存在とも言える謎の男性、その男に対して今後どのような対応を取るべきか大広間にいる女性達が頭を悩ませていた時、一人の女性が立ち上がった。
「大巫女様、その男への対処は私に任せてはいただけませんか？」
「サラマンディーネ、そなた自ら出向くのか？」
サラマンディーネと呼ばれる少女、彼女が男性に対して対処すると名乗りを挙げる事で大広間に更なる波紋が広がる。不敵とも呼べる笑みを浮かべながら、彼女は大巫女と呼ばれる少女に向き直り言葉を続ける。
「その男は人間体でありながら我々の追尾を振り切ったと聞く事から相当な手練れである事は明白。彼の者の目的を聞き出す為には彼の者に近しい実力者でなければ叶わぬ事でしょう」
まるでこの中で一番強いのは自分と言う様な台詞。だが、事実サラマンディーネと呼ばれる少女はそう自負する程の実力と才能を有しており、多くの者もその事を認めているし、そんな彼女に信頼を寄せている者も多い。
そんな彼女が名乗りを挙げる事で波紋の広がった大広間にも静寂が戻り、彼女に一任しようと言う言葉が出始める。
相手が未知の存在であるならば此方も全力で事に当たらねばならない。大巫女と呼ばれる少女は数秒の思案に耽った後……。
「――――承った。その任、そなたに任せるとしよう。サラマンディーネ」

「ありがとうございます」
「ただし、手荒な真似はするでないぞ。こちらはアウラ奪還を控えた大事な時期、事を荒げず穏便にすませるのじゃぞ」
「委細承知しております」
　大巫女から正式に任を受けた事でその場はこれで解散となる。広間から抜け、自室へと戻る最中、サラマンディーネは久しく覚えなかった高揚感を抱いていた。
「突然現れた謎の男、果たして彼の者は一体何が目的でここにきたのか……フフフ、興味が尽きませんわ」

その2

○月×日

今日、再びドラゴン達と出会してしまった。縄張りを刺激しないようグランゾンを使用せず徒歩で歩いていた所に見つかってしまい、今日も一日追いかけ回される事になってしまった。

空中三角跳びの影響で右足が筋肉痛で満足のいくパフォーマンスは出来なかったが、昨日同様かくれんぼモードをフルに活用した為、どうにか振り切る事が出来た。

おかげで永田町から離れる事に成功出来たし、これでドラゴン達から追いかけ回される事も無くなるだろう。尤も、ドラゴン達の生態系が分かっていない以上、本当に引き離したかは疑問の残る所だが……。

しかし解せない。何故ドラゴン達は自分をああも付け狙うのだろう？　縄張り意識が強いから？　一応昨日出会した時から縄張りを刺激しないよう出来るだけの配慮をしてきたつもりなのだが……うーん、分からん。

しかもドラゴン達の動きがかなり練度の高いモノになっていた。取り巻きの小型ドラゴンが大型のドラゴンに命令された様に動き、自分をしつこく追ってきた時は驚いた。あそこが複雑に入り組んだビル街の都心ではなく開けた場所だったら、恐らく自分は捕まっていた事だろう。

一体、どうしてドラゴン達は自分を目の敵にするのだろうか？　漫画やアニメなんかではドラゴンは知性の高い生命体であるとされているから、もしかしてそれが原因で自分を知らない存在＝敵として認識しているのだろうか？

……そう思うとやや凹むが、悔やんでも仕方がない。今後はドラゴン達には自分の事を理解して貰う事を目標に少しずつコミュニケーションを取っていこうと思う。

まぁ、それは当分の目標として、今は新たな拠点作りに専念しよう。

例のラブホテルにはまた来るかも知れないという事で発電機を置いたままだし、取り敢えず安心して眠られる場所を作る所から始めなければ。

今自分がいるのは草木が生い茂る森の中、グランゾンの索敵によって周囲にドラゴン級の巨大な熱源反応は感知されなかったし、当分は落ち着いて生活出来ると思う。

まずはセーフハウスを作る事から始めよう。ここは木々がある森、良い木材が沢山あるので拠点となる家も性質の良いモノになる事だろう。

近くには川もあるし、周囲には兎の様な小動物も多く生息している。食べられそうな木の実も今後調べていけば分かりそうだし、今後は楽しみながら探索を続けられそうだ。

○月α日

都心だった廃墟から離れ、森の奥深くに居を構えて数日、今の所自分は健康状態に異常なく毎日を過ごしている。

川の水も有毒な細菌の有無を調べた後ろ過、加熱を繰り返す事で使える様になり、木の実も有害なモノでないことから食用に使える事も発覚し、兎や猪の様な動植物達も自分の命の糧として有り難く頂戴している。

勿論食べる時はこの世の食材に感謝をする所作も忘れてはいない。破界事変の頃、暗黒大陸にてキタンさん達黒の兄弟から徹底して教わった事のあるソレは今も自分の血肉となって生きている。

こういうサバイバル生活をしているとつくづく思い知る。一個体として生きていける生命体なんてこの世に存在せず、一つ一つの命が支え合って生きていて初めて世界は成り立っているのだという事を。

大袈裟だと以前の自分なら鼻で笑うけど、今はそうは思わない。今日狩った猪らしき動物、その命を喰らった事により今日も自分は生き長らえているのだから……。

一度滅んだ世界、自分以外人間が存在しない世界。弱肉強食がこの世界のルールであるならば自分はその摂理に従おうと思う。自分し

か人間がいない世界、だからこそ自分はこの世界で矜持をもって生きなければならないのだ――――――（日記はここで途絶えている）

○月β日

……やっちまった。昨日散々あんなご高説な事を食っちゃべっていたのに、その直後暴れ回ってしまった自分が嫌になってしまう。

実はあの後、気持ちのいいまま日記を終えようとした自分の所に突然ドラゴン達が襲ってきたのだ。お陰で自分のセーフハウスは滅茶苦茶、折角丸一日掛けて建築した拠点が一瞬にして潰れてしまった事と、そのドラゴン達が例の都心で襲い掛かってきたドラゴンと同種である事から自分はブチ切れてしまい……つい、やっちゃったんだＺＥ★

うん。反省している。幾ら相手がドラゴンとは言え生き物なんだ。話し合いこそは出来なくてももう少し冷静に対処すべきだったと後悔している。

……ただね、言い訳させて頂くならば向こうがしつこいという事も原因の一つだと自分は思うんだ。ドラゴン達に刺激を与えないようワザワザ遠く離れた所に移動したというのに、これでは意味がないではないか。

しかもいきなり殺る気満々の攻撃も仕掛けてくるし……しかし驚いた。この世界のドラゴンって攻撃する時はブレスだけではなく魔法みたいな攻撃も仕掛けてくるのね。おかげで今回は逃げ回る事も出来ず自分も反撃するしか無かったんだけどね。

せめて慰めになるのは今回の戦闘でグランゾンを使わなかった事かな。向こうも取り巻きの小型ドラゴンが少なかった事から森中に張り巡らせた罠もフル活用出来たし、周囲にさほど被害を出さずにドラゴン達を殺さずに制圧する事が出来た。

小型ドラゴンの方は……まぁ両手足で頸部分を締め上げて落としたり、頭部に強い衝撃を与えて気絶させる事が出来たから良いとして問題は大型の方だ。

先も述べた様に大型のドラゴンは口から火を吐き出すだけじゃな

く魔方陣を開いてそこから光の弾丸を飛ばしてくるものだから苦戦を強いられてしまった。しかも好き勝手暴れ回るモノだからここで再びプチンと来た自分は大型ドラゴンの脳天にある技を叩き込んでしまったのだ。

それも〝不動砂塵爆〟、ガモンさんから教わった空手の必殺とも呼べる技の一つで自分はコレをドラゴンの脳天に思いっきり叩き込んでしまったのだ。

あの時はデカい図体だしこの位平気だろってノリで喰らわしたのだが、この技は内側へダメージを通すモノだから生身の相手に使用する際は慎重に選べって釘刺されていたんだよなぁ。

ドラゴンも不動砂塵爆を受けた直後、激しく痙攣して倒れてしまい以降ピクリとも動かない。呼吸はしているだろうから死んではいないだろうが……正直、不安で一杯です。

別に勢い余って殺しても向こうが殺す気で来る以上良心は痛まないが……昨日無益な殺生は控えると誓った今、いきなり無用に命を奪うのは抵抗がある。というか、仮に殺したとしてもその先になにがある。ドラゴンの肉なんて食えるかどうか分からないし、もし自分がドラゴンを殺した事を他のドラゴン達に知られてしまえばそれはドラゴン達との戦争を意味することになる。

そうなればグランゾンも使わざるを得ないし、そうなってしまえば大虐殺を行ってしまう。流石にそれだけは避けたい。

やはり逃げるしか無いのだろうか。けれど仮に逃げたとしても一体何処へ……ここもダメだとするならば今度は相当遠くへ逃げなければならなくなる。

それはそれで後の面倒を避けるのに良いかもしれないが……うーん、分からん。兎も角今はこのドラゴンの様子を見ながら考える事にしよう。

グランゾンをいつでも出せる準備をしながら自分はドラゴン達の様子を看ている事にした。

○月γ日

今、自分はとあるコンテナ内部にいる。この一日で何が起こったのか混乱に思う事だから順を追って説明しようと思う。
まず第一に――――朝日が昇る頃、一人の女の子が自分の所に訊ねて来てくれたのだ。女の子、そう、人間の女の子だ。長い黒髪に独特の民族衣装を身に纏った女の子が自分の所にやってきたのだ。
自分しか存在しない筈の人間、突然現れたその少女に当然自分は驚いた。何せ５００年前に滅んだとされる人類が生きていたのだ。
当然自分は内心でテンションが最高潮だった。あまりの嬉しさに思わず笑みが零れてしまったが、初対面の人相手に失礼だなと思いすぐさま表情を引き締めた。
女の子の名前はサラマンディーネ。フレイヤ族という由緒ある家柄の出身の娘で自分を都に迎える為にこうして来たのだと言う。
都、つまりは自分以外の人間が数多く存在することを意味するその言葉に自分は嬉しくなり、感極まってしまった。人類は滅んでなんかいなかった。あの人工知能め、嘘を吐いたなとこの時自分は憤ったが、それは仕方がない事だなと後から気付く。
何せあの人工知能――――管理コンピュータひまわりちゃんはシェルターに存在する人類は存在しないとだけ言ったのだ。よくよく考えれば５００年もの間人類が同じ場所に居続ける筈がない。汚染が無くなったのであれば外に出て独自の文明を築く事だって出来る事だろう。
地球上の人間は滅んだと言っていたが、あれだってシェルターに存在する生体反応を基準にしての事だって思えば納得もいく。
騙された様な気もするが、こればっかりは言葉の意味をちゃんと理解しなかった自分が悪い。恥ずかしくなる思いだがこの事は自分の胸の内にしまって置くことにしよう。
それでサラマンディーネちゃんの誘いを断る理由も無い為自分は受ける事にしたのだが、ここで一つ問題が発生した。
何でもサラマンディーネちゃん達現在の人類はドラゴン達と共存している関係にあるらしく、ドラゴン達をノシてしまった自分に大層驚かせてしまったのだ。

そりゃそうだよなぁ、共存している者達を倒してしまったと聞けば誰だって不快に思う事だろう。それが長い間共に過ごしてきた存在だとするならばその怒りは自分の比ではない。

侍従らしきナーガちゃんとカナメちゃんが怒りを表すのも無理のない事だなと思った自分だが、サラマンディーネちゃんはそんな自分を許してくれた。どうやら自分の事情を聞き入れてくれてその上で仕方がない事だと判断してくれたらしいのだ。

器の大きな娘だなぁ。流石名家の令嬢だと関心しながら自分は用意されたコンテナに入り、大型ドラゴンによって都に向けて出発している。

一体都にはどんな人達がいるのだろうか。サラマンディーネちゃんという礼儀正しい娘もいるのだからきっと良いところに違いない。

あ、そうそう。例のノシてしまったドラゴン達なのだけれどサラマンディーネちゃん達が来た時と同時に目を覚ました事を追記しておく。

どうやら彼等はドラゴンの中でも気性の荒い者達らしく、よく他のドラゴン達と喧嘩しているらしいのだ。けれど名家であるサラマンディーネちゃんの言うことには素直に従うらしく、彼等はそれ以降特に暴れる様子もなく大人しくしている。

ドラゴンと人間の共存、まるでお伽の国の話だなと思いつつ都に期待を膨らませながら今日の所は終わりにしようと思う。

◇

「……ナーガ、目標の様子は？」
「依然として沈黙を保ったまま、特に暴れる様子はないみたいです」
「そう」
大型ドラゴンの頭部、そこに立つ彼女達はドラゴンの首に掛かったコンテナを一瞥する。
どこからともなく現れた謎の男。ドラゴン達を使って彼の行方を追っていたが彼女達――――サラマンディーネとその従者二人はある時遂に彼の行方を掴む事に成功した。
けれどその男は気性の荒いバハムート族に追われ、現在地から離れ、山奥の中へと消えていった。バハムート族は気性が荒い上に粘着質として知られる一族、戦場では頼もしい存在だが同時に厄介者でもある彼等に狙われては一人の人間なんて紙切れに等しい。
急ぎバハムート族を追い、男の行方を追った彼女達が辿り着いた先には……信じられない光景が広がっていた。
蹂躙された森林、大きく窪んだ大地の中心にはバハムート族の大型ドラゴンが仰向けになって倒れていた。取り巻きの小型ドラゴン達も同様に倒れていて、更にその傍らで佇んでいた例の男を見てサラマンディーネ達は我が目を疑った。
悠然とドラゴン達を見下ろす男、その男の服装は焦げ目こそ付いてはいるものの、傷らしいものは一つとして見当たらない。目の前の状況からして分かる事はただ一つ、荒くれ者のドラゴン達がたった一人の人間体の男によって無力化されていたという事。
しかも命を奪わず意識だけを刈り取って……信じられない事実に当初彼女達は目の前の男が同じ人間とは思えなかった。
人の形をした怪物ともいえる存在にサラマンディーネは声を掛ける事を躊躇ったが、神殿で自分が対処すると大見得切った以上何もする訳にもいかず、思い切って声を掛けた。
いきなり出て来て付いてこいと言う自分の言葉に対し、男は二つ返事で了承した。本来なら檻の意味でもあるコンテナにも彼は何の疑いも見せず乗り込んで行ったのだ。

……気味が悪い。従者であるナーガとカナメ、二人の不安を少しでも軽くする為にサラマンディーネは言葉を尽くして安心させようとするが、彼女自身不安で心許なかった。
（……もしかしたら、私達はトンでもない存在に出会ってしまったのかもしれない）
隣で飛翔するバハムート族のドラゴン達はあれから暴れる様子はなく、寧ろ酷く脅えた様子で時々コンテナの方へ視線を向けている。
あれだけ気性の激しい彼等がどんな目に遭えばあそこまで脅えるのか、それが一層彼女達に不安を与えながら一行は大巫女のいる都へと向かうのだった。

その3

○月β日

サラマンディーネちゃんに都へと連れられて早三日、あの廃墟の所にいた時とは嘘のように不自由のない生活を送っている。

飲み水も清潔だし、食べ物も豊富、与えられた部屋は武家屋敷の一室みたいに広々とした所だし、至れり尽くせりな日々である。

客人として招き入れてくれたサラマンディーネちゃんを始めとしたここの人達には本当に感謝している。自分の事情を話した事で大巫女様というこの都で一番地位の高い人からも滞在する許しを得られたみたいだし、ホント万々歳だ。

だけどいつまでも世話になりっぱなしというのは流石にどうかと思う。美味しい食事や水、安心して眠れる寝床まで用意してくれたのだ。ここで暮らしている以上、自分も彼女達に協力していくべきだろう。

どうやら男手が足りていないみたいだし、見聞を広める意味を込めて街の方に降りては人々の手伝いをしている。手伝いと言っても水汲みやら力仕事関係ばかりなんだけどね。

しかし、この都に来てからは女性にばかり出会っているが、男の人はいないのだろうか？　自分以外の男性なんて見かけないから不思議に思っているのだけれど、サラマンディーネちゃんもその内教えるとばかりで詳しく話そうとしない。

……まぁ正直な話、その件は自分の中で大体の見当は付いている。何故自分以外男性の姿がいないのか、何故この都ではドラゴン達は大人しくしているのか、その理由も事情も自分の中にある推論が答えとなる事だろう。

別にソレ自体は間違いではない。寧ろ自分としては人類が自らの

手で滅びから免れていた事を嬉しく思っている位だ。サラマンディーネちゃん達の先祖達は賢明で勇敢な判断をしたのだと言ってもいいだろう。
サラマンディーネちゃんも明日には詳しい事情も話をすると約束してくれたし、自分も気持ちの整理だけはしておこうと思う。
……というか、今更ながらよくここの人達は自分の話を信じてくれたな。多元世界という全く別世界からの異世界人だなんて、普通は正気を疑う話だぞ。
それともここでは〝そういった話は珍しくない〟のだろうか？
まぁ、その辺りもサラマンディーネちゃんが詳しく話してくれるだろうからその点も留意しておく事にしよう。

○月※日
今日、サラちゃんからこの世界の人類の歴史について学ぶことが出来た。
大規模な世界大戦によって滅びの一途を辿った人類、ただ死を待つだけだった人類は大きく二つの種族に分かれ、それぞれのやり方で生き長らえたのだという。
一つはサラちゃん達〝真地球〟の民達による生態系の変質。汚染された地球で生き抜く為に自ら遺伝子操作を行い、ドラゴンとして生まれ変わった種族。男は大型のドラゴンに、女は人間体としても生きられる小型のドラゴンへと変質し、汚染された地球を少しずつ浄化しながら独自の文明と文化を築きながら今まで生きてきたのだという。
そしてもう一つの種族である〝偽地球〟に移り住んだ人達なのだが……どうやらこの種族の人間達は並行するもう一つの宇宙にある別の地球へと移住し、生きているのだという。なんとも壮大な話だが、多元世界で似たような話を何度も聞いてきた自分としては今更な事なのでさして驚く事もなく受け入れる事が出来た。大巫女様やサラちゃん達もこう言った事情を経験していたから自分の話も受け入れてくれたのだろう。
二つに別れ、それぞれのやり方で生きてきた人類。ここで話を途切

れば壮大ながらもまとまりのある話で終わりそうなものだが、そうは問屋が卸さなかった。
何でも偽地球とされるもう一つの地球から、突如全てのドラゴンの始祖たる〝アウラ〟を強奪した略奪者が現れたのだという。
〝エンブリヲ〟忌々しそうにその名を口にするサラちゃんは深い怒りと憎しみの顔をしていた。そのエンブリヲなる人物は超常の力で向こう側と此方側との世界を繋げる門を開き、一方的にアウラを奪っていったのだという。
男のドラゴン達は地上の汚染された部分を喰らい、体内で〝ドラグニウム〟なるエネルギーの結晶体を精製しているらしく、エンブリヲは膨大なドラグニウムを有するアウラを自分達のいる地球でのエネルギー源として利用しているらしいのだ。
酷い話だと思われるがサラちゃんの話はこれで終わりではなかった。アウラを奪還すべくドラゴン達は定期的に開くことになった門、特異点を通して向こうの地球へと侵攻し、アウラ奪還の足掛かりを作ろうとしているらしく、多くの同胞が向こう側の地球へと向かったのだという。
しかし帰って来れたモノは一人もいないという。恐らくは向こうの地球の防衛機構に全滅させられたとサラちゃんは語る。現在はリザーディアと呼ばれる女性が諜報員として活動し、時折此方に向こう側の情報を流しているとの事。
アウラ奪還を目的として活動する彼女達に非はない。寧ろ彼女達を怒らせたエンブリヲこそが戦いを引き起こした元凶とも言えるだろう。
サラちゃん達の行動は理解出来る。自分も出来る事なら彼女達の力になりたいと思っているが……俺は、協力して欲しいという彼女の願いを断った。
別に利用される事に嫌悪した訳ではない。衣食住を提供してくれたサラちゃん達には感謝してもしきれないし、その恩義に報いたいとも思っている。
ただ、彼女の話だけでは判断がつかないと言うべきか、誤解のない

よう言っておくが、彼女の言葉に嘘があるなどとは思っていない。サラちゃんは良い子だ。それはこの都に来て彼女の人柄を理解すれば分かる。ならば何故かと訊ねてくるサラちゃんに自分はまだ向こう側の事情を知らないから判断が出来ないとだけ答えた。

エンブリヲが戦いを引き起こしてる元凶なのは分かった。ならば何故そのエンブリヲという人物はアウラを奪いエネルギー源にしようとしているのか、サラちゃん達に協力するのであれば自分はその事についても知らなければならない。

故に直接的な協力は出来ませんと事情を説明する自分にサラちゃんは少しばかり不機嫌になるも自分の話を受け入れてくれた。

けれど、このままただ都で世話になるのは忍びないので自分は彼女に対してある案を出してみた。それはズバリ彼女達ドラゴンの始祖であるアウラの居場所についてである。

先程もリザーディアなる女性が向こうの人間達に紛れて諜報活動を行っていると聞いたが、一人では何かと不便だろう。故に自分が彼女の手伝いをする事で少しでも負担を軽くさせようというのが自分の提案だったりする。

向こうの側の地球の事情も知れてアウラの情報も得やすくなる。お互いにとっても悪くはないと思うこの提案をサラちゃんは暫し思案した後、大巫女様に進言してみると答えてくれた。

まぁ、幾ら言葉で訴えても自分の言葉は所詮余所者のモノ、この提案も向こうが自分の事を信頼してなければ成り立たない案だ。

無論、自分はサラちゃん達を裏切るつもりはない。向こう側の地球にどんな事情があってもアウラの居場所を突き止める事だけはやり遂げるつもりだ。

そこから先は知らない。という無責任な事も言わない。必要であるならばその時は自分もグランゾンでサラちゃん達に加勢するつもりだし、アウラ奪還に協力する事も考えている。

もし彼女達が自分の言葉を信じてくれるならば向こう側に行く際にグランゾンを見せるようにしよう。自分の手の内を晒す事で上辺だけでも信用してくれるならば、この位安いものだ。

自分の事を理解して欲しいならばまずは此方の方から真摯な態度を取る。これも多元世界の時に習った対話に関する重要なファクターである。

◇

――――最初の頃、都にいる皆は彼の存在に酷く戸惑っていた。当然だろう。ドラゴン達の中でも一際凶暴で知られるバハムート族がたった一人の成人男性によって制圧されたと聞けばそんな態度を取るのも仕方がない。

大巫女様も酷く不安に思われていた事だろう。しかし、そんな我々の気持ちに反し、彼は真摯な態度で我々に接してきた。食事の際や人と接する時、様々な面において彼は礼儀を絶やさなかった。

その後も彼は特に怪しい素振りは見せず、都に繰り出しては民達の手伝いをしたりするなど好印象に思える行動を取り続けた。疑り深いナーガは彼の策略だと言っていたが、当然私もその事を視野に入れていた。

しかし、彼の事情を聞いた時、それは違うのではないかと思うようになった。神殿に連れて行き、大巫女様を始めとした幹部の方々の前で話した彼の瞳には一点の曇りもなかった事から私達は彼の言葉を信じるに値すると判断した。

〝多元世界〟様々な世界が入り交じった不安定なその世界では絶えず争いが巻き起こり、人類は常に不安と恐怖に苛まされていたという。

宇宙から現れる破壊魔、別世界からの侵略者、そして人類同士の争

い。怒りと憎しみにより包まれたその世界で人類は何度も滅びの危機に直面したのだという。
けれど諦めなかった一部の人間が立ち上がった事を切っ掛けに再び人類は一丸となり、外界からの侵略者達を退け、平穏を勝ち取ったと彼は言った。
何とも壮大な話だ。作り話というには矛盾が無く、また我々も次元の壁を介してもう一つの地球と面している事から彼の言葉に疑問を持つ者は少なかった。
様々な世界が融合された多元世界。そこでは私達が経験した以上の大戦が勃発した事だろう。であるならばそんな世界で生きてきたシュウジ・シラカワも歴戦の戦士として生き抜き、バハムート族のドラゴンを一蹴に沈めた事にも理解出来る。
故に私は思った。様々な死線を潜り抜けた彼ならば私達の事情も理解してくれて共に戦ってくれるのではないか、と。
翌日、嘗てアウラがいたとされる場所で私は彼に話した。この世界の実情と怨敵であるエンブリヲの事、それら全てを話し終えた後、私は彼に頼んだ。
協力して欲しいと。彼の人格に付け入る様で卑怯だとは思うが、アウラをエンブリヲの手から奪還する為には彼の力も必要になると判断した私は、彼に頭を下げながら助けて欲しいと頼み込んだ。
……返ってきたのは断りの言葉だった。自分の話だけでは判断出来ないと語る彼は否定ではなく保留という言葉で私の願いを一時的に断ったのだ。
煮え切らない男、とナーガは批判するが私はそうは思わない。彼は直接的な協力は出来ないと言ったが、裏を返せば間接的には協力すると言っているのだ。
彼からしてみれば私達の世界についてまだ知らない事だらけ、一つの視点や考えに捕らわれないように立ち回ろうとする姿は個人的に好ましく思える。
思慮が深く、義理堅い人間。それが今日まで彼の姿を見てきた私の見解だ。彼はきっと私達を裏切るような真似はしない事だろう。

これから、特異点が開く。それに合わせて彼はここから向こう側の世界にまで飛び立つ事だろう。本当なら私も彼を門まで送り届けてあげたい所だが、私には龍神器を完成させるという使命がある。
不満に思う所はあるが、これも自身に課された役目を全うする為、神殿から彼の事を見守ることにしましょう。
けれど、少し不思議に思う点がある。向こう側に行く時は基本的に海面が広がる大海原だ。彼はドラゴン達の力も必要とせずにいるみたいだし、一体どうするつもりなのだろう？

◇

「……ここまでで結構です。ナーガさん、カナメさん、今までお世話になりました」
朱雀の門と呼ばれる場所から開かれる事になった特異点。円上の枠が空間を裂くように開かれ、その向こうには青く広がる大海原が広がっていた。
こうやって世界を行き来しているのか、目の前に広がる超常現象に僅かにテンションが高くなる。これではイカンと首を振った俺はここまで送ってくれた二人の女性に礼を述べた。
「ふん。此方としても厄介者の貴様がいなくてセイセイする」
「もうナーガってば……ごめんねシュウジ、ナーガは頭が固いからいつも君に強く当たっちゃったから大変だったでしょ？」
「いいえ、そんな事はありません。里にとって私は異物の様なモノ、彼女の態度は決して間違ってはいません」
「そう？　そう言ってくれると私も嬉しいわ。……はい、通信機。ここと向こうを繋げる数少ない装置だから大切に扱ってね」

「しかし、ここからどうやって行く気だ？　向こう側には何もない大海原だぞ？　まさか、泳いで渡っていく気か？」
「その点ならご心配には及びません。私にも相棒と呼べるものがいますから……ククク」
　特異点の先に広がる大海原、一体ここからどうやって渡っていくのかと二人が不思議に思った時、シュウジの背後から巨大な黒い穴が広がっていく。
　そこから現れる蒼い巨人。深い奈落を思わせるその色と禍々しい風貌の魔神が現れた時、ナーガとカナメの二人は口と目を大きく見開かせ、アングリと言った様子で驚愕した。
「サラマンディーネさんと大巫女様に伝えて下さい。必ずアウラの手掛かりを見つけてみせると」
　それだけ言い残すとシュウジは魔神へと乗り込み、特異点の向こう側へと飛び立っていった。
　残されたナーガとカナメ、そして見送りに神殿から事の一部始終を眺めていたサラマンディーネと大巫女は後に大きな不安に駆られる事になる。
　〝彼を一人で行かせてしまって大丈夫だろうか？〟
　色々な意味で不安に思う彼女達の予感はここから数ヶ月後、悪い意味で的中する事になる。

その4

遙か世界の果て、周りが海で囲まれた一見すれば孤島の島にも見えるその場所に彼女達はいた。
〝アルゼナル〟兵器工廠と呼ばれる対ドラゴンの軍事基地として機能されている島、その島のブリッジ……所謂司令室と呼ばれる場所で複数の女性達が表情をしかめて通信から聞こえてくる声に耳を傾けていた。
「……本当に、ドラゴンの姿はないんだな？」
『だから何度も言ってるじゃないですか司令、警戒態勢の発令から一時間、ドラゴンどころかトカゲの一匹も見つかってませんよ』
『司令、ゾーラ隊長の言うことに間違いはありません。あれから私達もずっと索敵を行ってきましたが、ドラゴンの姿は確認出来ていません』
「……」
部下であり第一中隊の隊長と副隊長それぞれの報告を耳にして司令と呼ばれる右腕が義手の女性は思案する。
ドラゴンというのはゲートが開くと同時に間違いなく此方の世界に侵攻してくるものだ。そこに例外はなく、常に自分達はそのドラゴン達と〝戦わされてきた〟のだから間違いない筈。
可能性としてはゲートの開閉を観測する連中が誤って報告したのか、それとも姿を消すという新種のドラゴンが現れたのか。
後者の可能性を憂慮して今まで彼女達に警戒することを呼び掛けてはいるが、それももう限界。一度補給する為に基地に戻らせる事を決定した隻腕の女性は通信器の向こう側にいる部下達に連絡を入れる。
「各員、補給の為に一度基地に戻れ、その後は第二中隊と交代しながら周囲の警戒を続けろ。エマ監察官殿は観測班に連絡を入れ、誤報でないか確認をお願いします」

『了解。さぁ、野郎ども行くよ！』
『あらほらさっさー！』
「全く、こんな夜更けに手間の掛かる事を……」
　通信越しから伝わってくる部下達の了承の声、隣に座っていた監察官と呼ばれる女性もブツブツと文句を言いながらも確認の為に司令室を後にする。
　残されたのはレーダーで敵影がないか確認しているオペレーターの娘と司令官である自分のみ、女性は本当に誤報だったのかどうかを見極める為に頭の中で推理を重ねていた。
　だが、どんなに考えても辿り着ける答えは限られている。その内二つが先程述べた誤報であった事、姿を消しているドラゴンという説で残された可能性はただ一つ。
（……ゲートから出て来たのはドラゴンじゃない？　これまでとは得体の知れない何かが我々の追跡を振り切ったとでも言うのか）
　浮かび上がるその可能性に女性はそんなバカなと吐き捨てる。ゲートから出て来たのはいずれもドラゴンだけ、種類が違ったり固有する能力が異なったりと多種多様のドラゴンをこれまで見てきたがドラゴン以外の存在が現れたという前例は存在していない。
　仮にドラゴンで無かったとしたら、現れたのは一体何だったのか、女性はほんの僅かだけその事に思考を割くが、次の瞬間には詮無きことだと切り捨てる。
（出て来たのがドラゴンだろうとそうでなかろうと既に人間達の世界に赴いたとするならば、それは私の知る所ではない）
　自分達の役割は人類の天敵とされるドラゴン達を世界の果てとされるこの場所から出さないで殲滅するという事、裏を返せば既にこの海域から姿を消したのであればそれはもう自分達の役割ではない。
　あとは〝人間達〟でどうにかすればいい。不敵に笑みを零す女性は書類仕事に着手する為、ブリッジを後にするのだった。
　人間達に対する復讐劇（リベルタス）を完遂する為に……。

◇

○月Σ日

サラちゃん達の地球から出発して翌日、現在自分はもう一つの地球のミスルギ皇国と呼ばれる国へとやってきている。

他にもローゼンブルム王国やエンデラント連合といった様々な国があったりして機会があればそちらの方にも行ってみたいと思う。

で、何故複数の国がある中でミスルギ皇国という国を選んだのか、訳はというと、サラちゃん達向こう側の地球から来たとされるリザーディアさんなる女性工作員がここミスルギ皇国で活動を行っているという理由だ。

何でも皇室の偉い人の側近らしき立場にいるらしく、此方から接触するのは難しいと言われている。確かにアウラというドラゴンを探り当てるにはこの国のトップに接近する必要があるだろう。

リザーディアさんに関しては既にサラちゃんの方から事情を伝えているみたいだし、後は自分がいつ彼女に近付くかだ。国のトップの近くにいるというなら迂闊に近付く事も出来ないが、夜になれば少しは隙が出来るだろう。

既に皇宮の場所と内部構造は把握した。幾つも抜け道があって中々面白い所のようだが、自分が侵入する際はこれらを活用しようと思う。

まんま不法侵入だが、相手はドラゴンを強奪した連中だ。正攻法のやり方が通じないのであればこういう手段も致し方ないだろう。無論、これ以下の手段は極力取らないよう十分に気を付けるつもりだけどね。

……しかし、この国の経済事情は一体どうなっているのだろうか？

飲み物は勿論食べ物、衣服、その他諸々の一切が全部無料とか、正

直正気の沙汰とは思えない所業だ。
いやね、ちょっと小腹が空いたから近くのファーストフード店に立ち寄った時に気付いたんだけどね、自分お金持ってないんだよね。ここまで殆どサバイバルだったし、ついついファーストフード店の雰囲気に誘われて入ったんたけど……料理を注文した所で自分が無一文だという事に気付いたんだ。
お金は一応あるにはあるけれど、それは多元世界にいた頃の貨幣だ。世界も変われば通貨も変わる。このままでは無銭飲食で捕まると思った俺は店の人に正直に話してここで一日働かせて貰う事で事なきを得ようとした。
しかし、返ってきたのは〝何言ってるのおまえ？〟みたいな反応だった。無一文な自分を呆れたり怒ったりするのは分かるが、まるで自分の言っている事が分からないと言った風な反応の店の人に俺はどうしたらいいか分からなくなった。
他のお客さんを見ていると誰も支払いなどはせずに皆笑顔のまま店を後にする。訳が分からなかった俺はひとまず苦笑いを浮かべて誤魔化し、他のお客同様料金を支払わず店を後にした。……店員さんからの訝しげな視線が痛かった。
その後街を一通り回ってみたけれど、なんともまぁ凄いこと凄いこと、洋服店や雑貨店、他にも色々なお店が建ち並んでいるのに料金を支払っている所をみたのは一度もない。
どうやらこの国では貨幣システムが存在しておらず、皆好きなモノを好きなだけ貰ったり渡したりしているらしいのだ。……ホント、どうなっているんだこの国は？
それだけじゃない。ファーストフード店でも見かけたが、ここの人間は皆〝マナ〟という万能エネルギーを使用し、物を浮かしたり運んだりしている。さながら魔法のようだとこの時自分は我が目を疑った。
どうやらマナの光と呼ばれるエネルギーはこの国だけじゃなく、世界中に広がっておりその量は無限に近く枯渇するものではないらしい。このマナという万能のエネルギーのお陰で世界から争いはなく

なり、貧富の差もなくなったのだという。
……理想郷。と、そう呼ぶには自分にはどうしても胡散臭く思えた。確かに端から見ればこの国は楽園みたいなものだが、エンブリオなる男がアウラをエネルギー源として攫ったと聞くとどうしても勘ぐってしまう。もしかしたら、このマナの光というエネルギーはアウラと深い関わり合いがあるのかもしれない。
それともう一つ気になる事がある。このマナという万能エネルギーは使う人間を選んでしまう性質があるのだろうか？　この国……いや、この世界に来てから一度もそんなモノを発動した事はないけれど、もしかしたらマナってエネルギーは国民証明書みたいな役割を果たしているのかもしれない。
まぁその辺りもおいおい探っていこう。アウラ奪還の為にはまずはリザーディアさんと合流しなければならない。明日の夜にでも皇宮に侵入するつもりで準備をしておこうと思う。

○月▼日
……今日、胸糞悪くなる出来事に遭遇した。夜に皇宮に忍び込もうと脱出ルートを確保する為にアチコチ歩き回っていると大通りに人垣が出来ており、興味本意で覗いてみると、信じられない光景を目の当たりにしたのだ。
母親から子供……いや、赤子を取り上げようとしていたのだ。それも強盗とかの類ではない。政府公認の役人が、だ。
我が目を疑った。身柄を抑え込まれた母親と泣きじゃくる赤子、どうみても異常な光景なのに周囲の人間は止める処か汚物を見るような目で赤子を見下ろしているのだ。
俺は彼等の所に割って入った。何をしているんだと、この人達が何をしたんだという自分の問いに、彼等はただ一言、〝ノーマだから〟と返してきた。
ノーマ。この時まだ理由を知らなかった。……いや、理由を知った今でも彼等の行動が理解出来ないでいる俺は母親から子供を奪おうとした役人達に止めるよう声を張り上げた。

するとその時目の前の人垣が割け、道路の向こうから一人の女性が歩み寄ってきた。高貴な振る舞いと佇まいからかなり身分の高い人だと思われたその人の名はアンジュリーゼ＝斑鳩＝ミスルギ、このミスルギ皇国の第一皇女殿下だった。

美人で麗しく、民達からも多くの指示を得ていた彼女は十戒の様に割れた人混みの向こうから出て来て自分に、そして母親に向けてこう言い放った。

『ノーマはマナの光を破壊する反社会的で野蛮な化け物。今すぐ隔離すべきです』

……何を言っているのか分からなかった。目の前の皇女様の言っている事が理解出来なかった俺は怒りよりも先に頭が混乱した。

赤子だぞ？　赤ちゃんだぞ？　言葉を発する処か両足で立つ事も出来ない未成熟な子にコイツは何を言ってるんだ？

人格なんてその後の親の教育次第じゃないか。俺と母親が皇女様の言葉に愕然としていた時、彼女は更なる爆弾を投下していきやがった。

『今産んだ子の事は忘れ、新たな赤ちゃんを産んで下さい。その時はノーマではなく、正しい人類の子を……』

……この時、殺意が沸かなかった自分が今でも不思議で仕方がなかった。いや、恐らくは殺意どころかこの時の俺は思考が停止したのだろう。

何せ、気が付いたら皇女様を殴り飛ばしていたのだ。近付いてくる役人達も全員ブチのめしてしまい我に返った頃は軍隊に囲まれていた……。

やりすぎたと反省もしている。軽率な行動を取ったとも自覚している。丸腰の女の子に拳を振るうなど言語道断だけど、あの時の自分の行動に後悔はしていない。あの時動いていなければきっと俺は心の底から後悔していたと思うから。

現在自分がいるのは皇宮の地下深くの牢屋だ。あれだけ皇宮の周りを調べて侵入する気満々でいたのに……何とも、皮肉な話である。

どうやら明後日に俺は死刑にされるそうだ。それも公開処刑、まぁ

皇女様を殴り飛ばしたとあっては当然の処遇だ。寧ろあの場で撃ち殺されなかったのが嘘のようである。

何故明後日なのかというと、明日は例の皇女様が誕生日に伴って神聖な儀式を執り行うらしくそれどころではないらしい。儀式が執り行われる合間は向こうに人員が割かれる様である。

だからといってここの警備が薄れる事はないだろうけどね。何十人って警備の人が辺りをうろついているし、皇居は自分がやらかした出来事で更に強固となっている事だろう。

リザーディアさんに申し訳ない事をした。自分が軽率な行動を取った事により彼女に負担を掛けさせてしまった。チラッとしか見ていなかったけど皇族が乗る車にリザーディアさんらしき人を見かけたから間違いはない筈だ。

リザーディアさん、今頃参っているだろうなぁ。酷く驚いていたみたいだし、ホント悪いことをしてしまった。

……リザーディアさんの事もそうだが、あの親子はアレから無事逃げ切れただろうか。自分が起こした騒動のどさくさに紛れて姿を消していたし、どうか上手く逃げていて欲しい所だ。

それにしても、この国は……いや世界か。おかしい所が多いよな。なんつーか、上辺だけの……劇みたいなモノを見ている気がしてすげぇイライラする。

あの親子の一件でより強くそう思ってしまった。これは久し振りに蒼のカリスマとして色々動いてみた方がいいのかもしれない。

◇

ミスルギ皇国の皇居、国が一望できる皇居のバルコニーで頬に湿布

を張った少女が佇んでいた。
少女の名はアンジュリーゼ＝斑鳩＝ミスルギ。神聖なる洗礼の儀を明日に控え、緊張の面持ちで国を見据えていた彼女の後ろにアンジュリーゼの母親たる女性が姿を現した。
「アンジュリーゼ、眠れないのですか？」
「お母様。……いえ、洗礼の儀に関しては思う所などありません。私が憂いているのはノーマについてです」
アンジュリーゼは語る。何故ノーマというおぞましく恐ろしい存在がこの世に存在するのか。有史以来かつて無い程の繁栄と安寧を得られたこの人類社会に必要のない存在が生まれてしまうのか。
「ノーマは反社会的で暴力的、恐ろしい存在だというのに未だその存在が途絶える事はありません。それどころか、あのようにノーマを庇いたてする輩が現れる始末」
その事を心底信じられないという様子のアンジュリーゼはバルコニーの柵の上に置いた手に力を込める。彼女の語る輩というのは現在地下深くに幽閉した男の事だろう。
自分は正しい事を言っているだけ、なのにあの男は皇女である自分に対し人目もはばからずに殴りかかってきたのだ。
今は腫れの引いた頬に触れ、アンジュリーゼはその赤い瞳に怒りを滲ませる。一刻も早くノーマのいない世界を作らなければ。為政者としてこれからは政治に携わる身としてアンジュリーゼは心からそう誓った。
その様子を見て悲しげに微笑む母のことなど気付かないまま……。

その5

○月Ω日

〝ノーマ〟マナという万能のエネルギーが社会基盤となっているこの世界において、ノーマと呼ばれる存在は最大の禁忌とされている。

万能である筈のマナの光を打ち消し、破壊する。性質を持つこのノーマは現在の社会における絶対悪とされ人々に恐れられ、また差別してきた。

故にノーマの存在の有無を調べるのはこの世界において必要不可欠な習わしであり、ノーマの人間社会からの追放はもまたこの社会において必要な処置である。

……と、いうのがこの世界の大雑把な事情なのだが、正直自分は反応に困って何て言っていいのか分からなかった。だって、自分が生きてきた環境とはあまりにも差が有りすぎるんだもの。

一番近いモノで言うならばこの世界は嘗てブリタニアに支配された旧日本の時みたいなモノだろうか。ただし、此方の世界は名誉ブリタニア人という救済制度などは一切なく、ノーマは全て例外なく役人達の手により何処かへ連れて行かれてしまっている様なのだ。

それも殆どが生まれて間もない赤子、もし彼女達が今も生きているのなら彼女達は親の顔すら知らないまま生きているという事になる。

……ノーマというだけで何故ここまで迫害されなくてはならないのか、彼等の日々の生活を見て、自分は何故かその様子が酷く歪んだモノに見えてしまった。

成る程、確かにこの世界は一見すれば楽園そのものに見えるだろう。病めることもなく、悩みもなく、誰もが幸福であるこの社会はまさしく人間社会の理想郷なのだろう。

完璧なる社会。マナの光という万物のエネルギーを得られた現在の社会はまさに有史以来成し得なかった世界なのだと、自分を見張っていた憲兵は言った。

それを耳にした自分は、ただただ笑ってしまった。完璧な社会？　理想郷？　だったら何故ノーマという存在が生まれるのか？　いや、問題はそこじゃない。

ノーマという存在が生まれていながら、何故社会はそれに対応しようとはしなかったのか。完璧である社会ならばノーマという社会問題にも難なく対応出来るのではないだろうか。

ただどこかへ追放するだけで変えようとしない。ノーマを人間として扱わないとかそんなものは対処ではない。単なる逃避だ。

と、そこまでいった所で俺は憲兵達に暴力的に黙らされ、暫くの合間リンチを受けてしまうのだが……まぁこれはアロウズに捕まった経験がある自分としては今更な事なので自分はスルーして思案を続けた。

先程ノーマに関する問題に付いて触れた時もそうだが、この世界の連中はことノーマの問題に関しては極力触れない様にしている素振りがあるのが個人的に気になった。確かに連中からしてみればノーマは許されない存在だろうが、だからといって誰も不思議に思わないのは何でだ？

嘗てアロウズも情報統制という形で人々を欺いて来たが、この世界の人々はそれとは比較にならないほどノーマが悪という認識が強い。まるで刷り込みの様ではないかと思うが、ここまで思考して俺は気付いた。

そう、この世界の平和はまるで〝与えられた〟モノに見えるのだ。与えられた平穏、与えられた幸福、まるで整理整頓された部屋の様にこの世界は不気味な程に整っているのだ。

……そこまで考えてしまった俺は唐突に吐き気を覚えた。まるで舞台装置のように動く人々、楽譜の様に生きている人間。本当の意味で〝機械の様な世界〟に俺は吐き気だけでなく眩暈すら覚えた。

歪んでいる……というより狂っている。こんな世界にしたモノは自分を神様かナニかと勘違いしているのか？　洗脳よりも質の悪い事をこの世界の全人類に仕込む奴、もし自分のこの説が正しければソイツは嘗て自分が戦った連中の中でも極めて厄介な奴に違いない。

……そろそろ皇女アンジュリーゼの洗礼の儀の時間だ。今後の事を冷静に考える為にもまずはここから脱出する事から始めるとしよう。

◇月π日

現在、自分はミスルギ皇国から抜け出し、グランゾンと共に海底深くで身を隠している。これからの行動方針を定める前にまずは今日起きた出来事をまとめていこうと思う。

ミスルギ皇国の姫君、アンジュリーゼ＝斑鳩＝ミスルギを殴り飛ばしてしまった自分はこの上ない不敬罪にて皇居の地下牢獄に幽閉されていた。

公開処刑から免れる為にアンジュリーゼ皇女の１６歳の誕生日に行われる洗礼の儀とやらの行事に合わせて脱走を試みたのだが、ここへきて予想外の出来事に見舞われてしまう。

なんと、皇女であるアンジュリーゼがノーマとして全世界に向かって暴露されていたのだ。誰もが予想だに出来ておらず、本人すらも戸惑っている中、長兄であるジュリオ＝斑鳩＝ミスルギがアンジュリーゼを捕まえる指示を飛ばし、あれよあれよの内に皇女だったアンジュリーゼはノーマの烙印を押されミスルギ皇国から追放されてしまった。

この大騒ぎに乗じて思っていた以上に簡単に牢獄から脱出できた自分はここである人物と出会うことに成功した。

リザーディアさん。ここではリィザと呼ぶよう注意を促された俺は彼女とコレまでの話を端的に聞いてひとまずこの国から出て行く事を勧められた。

大騒ぎとはいえ皇居は憲兵の連中が多く警備されている所。限られた時間の中で彼女との遣り取りを果たした俺はそのまま皇居を後にし、ミスルギ皇国から出て行った。

そして現在、グランゾンのコックピットでサラちゃんから渡された通信機を使用し、リィザさんから話を聞いた俺は今後の事について思案していた。

やはりあの後皇女アンジュリーゼはノーマと断定されており、今は世界の果てにあるとある施設に輸送されているというのだ。その後は自分の事について少しばかり話し合われたようだが、ノーマは人間ではないという事で自分の罪は免除されるかもと思いきや、皇居から抜け出した事実は変わりないので自分は世界中に指名手配される事になったのだという。

で、その時この決定を下したのが例の皇族の長男様、ジュリオ＝斑鳩＝ミスルギで犯罪者だった自分を取り逃したとあっては皇室の権威が下がるとかで自分の処遇は見つけ次第捕まえる様各国に呼び掛けているとの事。

しかも生死を問わずに（Dead or Alive）、だ。まさか多元世界の時と同じ扱いを受ける事になろうとは思わなかった自分はこの時に思わず笑みをこぼしてしまった。

とはいえ、これで方針は決まった。自分の素の顔で居場所がばれるというのなら、素ではない顔で動けばいいと察した自分はこの時から蒼のカリスマとして動いていく事を決意した。

そして諸々の動きを知る為、自分はこれより世界の最果てにあると言われる〝アルゼナル〟と呼ばれるノーマの収容所に向かおうと思う。

リィザさんが言うにはその場所でノーマ達が収容されているみたいだし、そこでサラちゃんの所のドラゴン達が日々戦っていると事。

普通の女の子としての幸せを奪っておきながら戦いの道具に仕立てるとか、思う所はあるけれど、今はアウラ奪還の為に堪える事にしよう。それに自分のしでかした失態は大きいし、リィザさんの負担を軽くする為にも自分の出来る事をしていこうと思う。

……しかし、今更だけどアンジュリーゼ皇女ってよくよく考えれば可哀想な人だよな。まさか皇女である自分がノーマとか、この間の彼女の言動を思い出すと気分がスッキリするどころかより憂鬱になってしまった。

どうやら彼女は自分がノーマだと国民に知られた途端掌返しの態度をされていたみたいだし、今頃は彼女もこれまでのノーマ達と同様

理不尽な扱いを受けているんだろうなぁ。
しかし、よく見れば見るほど滑稽だ。ノーマと呼ばれる子達も同じ人間でしかないのに……そもそも、彼等は気付いているのだろうか？ノーマである彼女達を迫害する時、自分達の表情が酷く歪んだ顔となっている事に。まぁ、気付いているのなら今頃ノーマとか差別なんて無くなっているだろうけどね。
〝そう言う風に〟この世界は作られている。そう思うとこの世界の人達は皆哀れに思えてしまう。大変な環境ではあったけれどこれではサラちゃん達の地球の方が余程住みやすい世界ではないだろうか？
まぁ、これは自分の勝手な想像なので基本的にこういった考えは自分の胸の内にしまっておこうと思う。
――――――まもなく夜が耽る。暗闇になる頃を見計らってリィザさんから受け取った座標を目的にグランゾンを発進させようと思う。

……しっかし。あのジュリオなる皇族の人、良くもまぁ自分の妹にあんな仕打ちをしたものだなぁ。何でもアンジュリーゼ元皇女がノーマだった事も予め知っていたっぽいし、もしかして良からぬ事を企んでいるのかな？
野心を企てるのは良いけれど、あんまりそういうのは止めた方がいいと思う。そういう事を企む奴に限って悲惨な運命を辿るものだからなぁ。グレイスしかりリボンズしかり。

その6

◇月（；´Д｀）日

リザーディアさんからアルゼナルへの座標地点を受け取って数日、ここ暫くの合間に起こった出来事を順を追ってまとめていこうと思う。

まず最初にアルゼナルへ向かう為にグランゾンを走らせて目的地に辿り着いた自分は司令官であるジルさんに出会った。当然アポイントなんか取っていなかった自分は蒼のカリスマという怪しさ全開の格好でいた事もあって速攻通報されそうになったが、どうにか聞き入れて貰えた。

この時自分とジルさんが話した内容は主にドラゴンとの戦闘の事、ドラゴンと戦う為に作られたこのアルゼナルという施設には数多くのノーマが収容されており、彼女達はドラゴンと戦う為だけに生かされている。……なんとも胸糞悪い話だが、本題からズレてしまう為感情論は少し横に置いておく。

で、そのドラゴンとの戦いに関する話だが、自分はジルさんとドラゴン側……つまりサラちゃんや大巫女様達とで手を結んで欲しいというお願いをジルさんに思い切って打ち明けてみた。

ノーマの人達はこの世界の人類様によって強制的に戦わされている。ジルさんの執務室にあった報告書を不躾に思いながら調べて見たら、つい先日第一中隊なる部隊で三人もの犠牲者を出してしまったと記されている。

ノーマ達はこの世界の人間達によって強制的に戦わされている。だが、ドラゴン自体には恨みはない筈。当然殺し殺されという憎しみはあるだろうけれど、そこら辺は自分が徹底的にフォローに回って何とかしていきたいと思う。

対するドラゴン……サラちゃん達はアウラ奪還という目的の為に此方側の地球に日々攻撃を仕掛けている。此方もアウラをエンブリヲから取り返す為に侵攻しているだけであって別にこの世界を滅ぼ

すつもりはない。
　それにサラちゃん達ならばきっとアルゼナルの人々とも分かり合える筈だ。異世界からの転移してきた自分に対しても色々気に掛けてくれたのだ。時間は掛かると思うがきっと分かり合えると信じている。
　ノーマ、そしてドラゴン。今は戦い合う二つの存在だがこの二つは好きで戦っている訳ではない。お互いに少しずつ歩み寄ればきっと分かり合う事が出来る。ジルさん達の企てている目的にも釣り合う事だし、悪くない提案ではないかと思われた自分のこの案は……『くだらない戯言だ』と一蹴にされてしまった。
　……まぁ、ダメだとは思ったよ？　いきなり部屋へと侵入した不法侵入者が物知り顔で（仮面被ってたけど）あれこれ語ったら誰だって不審におもうでしょうよ。
　ジルさんの対応は間違ってはいない。……けど、もう少し穏便に済ませてくれてもいいと思うんだ。言葉で断るならいざ知らず、鉛玉のオマケ付きとかホント洒落にならん。
　しかもその後結局通報されたし……まぁ、あそこの施設って割と抜け道多かったから特に苦もなく抜け出せたから別にいいんだけどね。
　しかし、どうにかしてドラゴンと人間との戦いは止められないものか。いや、ドラゴンも人間なんだけどね。
　サラちゃん達も恐らくは此方に侵攻してくるのも止めないだろうし……根拠？　もしスパイの一人や二人潜り込んだ所で攻撃が止まるならとっくの昔にサラちゃん達は此方の地球に攻め込んではいないからだ。リザーディアさんという皇室にまで潜り込んでいながらドラゴン達の攻撃が止まないのはそういう事だ。
　ホント、マジで何とかしたいものだ。人間同士の殺し合いがどれだけ虚しいのか、多元世界から嫌と言うほど見せられた自分としては放って置くわけにはいかない。
　それに、この人間同士が殺し合っている構図、自分にはどうも作為的なモノを感じる。多元世界でもアイム＝ライアードが裏で色々やっていたように何者かが意図して作り出しているように見える。

恐らくはこれもエンブリヲなる輩が考えた策略なのだろう。
ノーマという反社会適性者をドラゴンと戦う道具に仕立て上げ、アウラを取り戻そうとしているドラゴン達を迎撃する。……何とも合理的で吐き気のする構造だ。
このままではエンブリヲとかいう奴の思惑どおり人間同士で殺し合いは続き、いずれは共倒れしてしまう。ジルさんはその事を理解しているのだろうか？
〝リベルタス〟なんて計画を練っている位だし、当然分かっているのだと思うけど……もしかしてノーマである自分達で成し遂げなければ意味がないとか、そんな拘りを持っていたりするのだろうか。
気持ちは分からなくもないけれど、あんまり意固地になるのは良くないと思うなぁ。あの計画、素人の自分から見てもかなり強引なモノだし。
それにどんなにお題目を並べてもノーマを利用して戦おうっていうのだからそれはこの世界の人間と同じ事、絶対反発する子が現れると思うのだけど……大丈夫だろうか？
まぁ断られた以上自分が彼女達にあれこれ言える資格はない。一応サラちゃん達にも連絡を入れる事にして今日は終わろうと思う。
……そう言えば、例の皇女殿下様。随分印象が変わってたな。髪もバッサリ切ってたし、野性的になった感じがする。
けれど、どうやら他の娘達とは仲良く出来ていないみたいだ。遠巻きからだったから良くわからなかったけど、複数の女の子と言い争っていたし、とても友好的とは見えなかったな。
あのままじゃボッチ街道まっしぐらだぞ？　まぁ、これも自分ではどうしようもないし放っておく事しかできないんだけどね。
……ひとりぼっちは寂しいんもんな。

◇月（、д、）日
今日、とある無人島でサラちゃん達に連絡を入れて例のノーマ達との和解策について話をしたんだけど……なんというか、もう大体自分の予想通りの答えに通信中であるにも関わらず笑いそうになっ

ちゃったよ。
どうもサラちゃん達の所にいる大巫女様の側近達は自分を嫌っているらしく、自分の案に大多数の人達から反対されてしまった。
理由はアウラ奪還を一刻も早く成し遂げたいとか色々あったけど、多くに挙げられたのが自分が余所者だという事だ。
しかも自分がミスルギ皇国で騒動を起こしていた件も既にリザーディアさんから知られていた事もあって自分の言葉を信用出来ない者も少なくはなかった。
その為に自分はサラちゃん達から非常に疎まれており、一部の人間は自分をエンブリヲの遣いとまで言ってくる人が現れる始末だ。サラちゃんは流石にそこまで疑っている様子ではなかったけど、自分の軽率な行動の所為でアウラの捜索に影響を与えかねなかったので今後自分はミスルギ皇国に近寄る事を禁じられてしまっている。
……まぁ、仕方ないよね。自分の勝手な行動で工作員仲間の足を引っ張るようではそんな工作員は必要としない。寧ろこの程度の扱いで済んで良かったと言うくらいに思った方がいいのかもしれない。
しかし、これでいよいよ自分に出来る事は少なくなってきた。ノーマとドラゴンの和解もアウラの捜索も手伝えなくなった以上、自分にやれる事はマジで無くなってしまった。
いっその事、リザーディアさんがアウラを発見次第蒼のカリスマとなりグランゾンと共に無理矢理奪い返すのもありかなと思えてきた。……流石にこれは最後の手段ですので迂闊に使う事はしないけどね。
となるとやはり当初の予定通り諸国巡りのオチになるのかな。名前の方は尋問（という名の拷問だったけどね。主に鞭打ちとか）を受けても教えなかったし、世界にバレているのは顔だけ、蒼のカリスマとして動くのならばそう難しい事ではないからこれは別に良しとする。
それに自分はエンブリヲという輩の素性を未だ知っていない。アウラ探しはリザーディアさんに任せるとして、今後自分はこのエンブリヲを探した方がいいのかもしれない。
というか、それ位しか出来る事ないな。うん。もしエンブリヲとい

う奴と遭遇したら話をそこそこにしてＢＨＣブッパでもいいかもしれない。
聞く限りかなりヤバい奴みたいだし、油断なく、確実に倒すよう勤めていこうと思う。
あ、そうそう。最初無人島にいると言ったけど、アレは訂正させてもらう。厳密に言うと自分以外にもう一人利用者（？）がいました。
タスク君。何でも冒険家と名乗る彼はこの無人島を拠点に世界巡りをしているとの事、なんだか多元世界にいた頃の自分と似たような事をしているし、何だか親近感の沸く子である。
最初は見知らぬ自分に警戒心を抱いていたけど、皇女を殴って島流しにされたという半分嘘を混ぜた誤魔化しに最初は驚かれたけどそれ以降警戒される事はなかった。
尤も、そこに至る詳しい事情を話すまで手にした銃を下ろす事はなかったけどね。けれどタスク君が自分の価値観と同じで良かった。此方の世界の野郎には胸糞悪い所しか見せられていないので彼の様な好青年は貴重だ。
……いや、もしかしたら彼は今のこの世の中が嫌で世間から飛び出したのかもしれない。マナが使えないという理由だけで迫害し、差別するのはあまりにも理不尽だからと。
まぁ、余所様の事情を詮索するのはこれ以上はマナー違反なので今日はここまでにしておく。現在自分はタスク君のご厚意に甘えて彼のセーフハウスに厄介になっております。
洞窟を利用したセーフハウス。これはこれで趣があるなと感心しながら今日は終わろうと思う。

◇月＊日
ここ最近、なんだか色々ハプニングな出来事が多かった。エンブリヲを探す為にグランゾンと一緒に世界中を巡っていた帰り、ある機体が島に流れ着いていたのだ。
〝パラメイル〟アルゼナルに配備されている対ドラゴンの機動兵器。何故ここにこんなものがあると疑問に思いながらタスク君がい

るアナグラに戻った所……何ともまぁうらやまけしからんな出来事が起こっていた。
縛られている裸の女性、そしてその女性の股間に顔を埋めているタスク君。自分としてはどう反応していいか分からず、取り敢えずごゆっくりとしか言えなかった。
しかもその相手が元ミスルギ皇国の第一皇女様と来たものだ。やるねぇタスク君。まさか君がここまでプレイボーイとは思わなかったよ。……爆ぜろ。
後から分かった事だけど、どうやらアンジュリーゼ改めアンジュちゃんは同じ部隊の娘に嫌がらせを受けており、今回もその一環として海に落とされたのだという。
……どういう過程でそうなったのかは知らないが、嫌がらせの一つとして済ませていい話じゃないよね？　女の子ってマジこぇぇ。
で、彼女のパラメイル……ヴィルキスが直る。もしくは仲間が迎えに来てくれるまで彼女はここに住むことになったのだが、少し困った事が起きてしまった。
どうやら彼女、自分に殴られた事をまだ根に持っているらしく、事ある毎に自分に襲いかかってくるのだ。……性的な意味ではない。正真正銘命を狙った意味でだ。
ある時は素手、ある時はナイフ、流石に拳銃を持った時はそれなりに仕置きをしているが、彼女は何度も自分に向かってきた。……鬱陶しい。と、最初は思ったけど今は自分に向かってくる度に強くなっていく彼女を楽しみに思っている自分がいたりする。
けれど元がお嬢様だった為か、まだまだ雑な部分が多い。負けん気が強い性格らしいから呑み込みは早いが、跳ねっ返りも強い為自分の言葉を聞きやしない。おかげで動物に芸を仕込む調教師みたいなやり方で彼女と稽古をする日々を送っている。
自分もこの世界に来てからあんまり動いていないから準備運動として助かっているが……もう少し素直になれないものか、こんな調子だから敵ばかり作って今回みたいに仲間からも狙われるって事を彼女は理解しているのだろうか？　……してないんだろうなぁ。

けど、あのお嬢様がここまで野性的になれた事が個人的には驚きだ。人の事を「化け物」とか「怪物」とか、それ以外にもお下劣な台詞が彼女の口から出て来た時は目をパチクリさせてしまう程に驚愕した。

……逆を言えばそれほどになるまでの衝撃的な出来事が彼女に起こったという訳だ。

彼女はメイルライダー。パラメイルのパイロット、ドラゴン達と戦い殺す機械に乗っている少女。ノーマとして生まれ、ノーマとして生きていく彼女には今後も大変な事だろう。

だったら、自分はせめて彼女を少しでも生きながらえさせる術を叩き込むとしよう。彼女が生き残るという事はそれだけドラゴン達を……サラちゃんの仲間を殺す事に繋がるが、それでも自分は死なせないよう徹底させるつもりだ。

アンジュリーゼ……いや、アンジュ。どうか彼女に人並みの幸せがあらんことを……。

て、魔人が神頼みってのもおかしな話か。

その7

◇月×日

今日も元皇女殿下様はじゃじゃ馬っぷりを遺憾なく発揮していた。朝はモーニングコール代わりの奇襲、昼はご飯を食べていた時に奇襲、夜は自分が寝静まった所を見計らって奇襲。

奇襲ばかりで意外性はないが、自分が何度も彼女に稽古をしていた為か少なくとも一撃でやられる事はなくなった。

この間も書いたが彼女は生粋の負けず嫌いで自分に勝つ為にあれこれ策略を立ててくる。時には自分をタスク君ごと崖から突き落としたりするので個人的には彼女の独創的な発想に驚かされたりしている。

まぁ、こちらとしては咄嗟の判断力が身に付くので彼女の突拍子な行動は自分としてもありがたい。そういう時はすぐさま彼女の下に馳せ参じ、お礼としてガモンさんから学んだ体術を教えている。

……なんか、こういうのって良いよな。ガモンさんが言っていた〝弟子は師から学び師は弟子から学ぶ〟と聞かされていたが、それはこういう事なんだなって思う。

まぁ、自分はあくまで護身術程度しか修めていないのでアンジュちゃんとは師弟関係とは呼べないけど、せめてアドバイス位はしてやろうと思う。今は全然アレだけど、呑み込みの早さからいって彼女の実力は将来相当のモノになると思う。

実力者といえば向こう側の地球にいるサラちゃん。彼女もまた発展途上みたいだし、磨けばもっと光り輝く事だろう。彼女も負けん気が強い方だし、アンジュちゃんとはいいライバル関係になれるかもしれない。

そうなる為にも自分も今後はよく考えて行動する事にしよう。

この無人島に来てから数日、アンジュちゃんというじゃじゃ馬娘が来たことで退屈する事はなくなったが……一つばかり面倒な事がある。

タスク君とアンジュちゃん、どうやら歳が近い事もあり、よく二人っきりでいる事から互いに意識し始めているご様子なのだ。時折目を離せば良い雰囲気になっているこの二人、その時は自分も気を利かせてその場から離れたりしている。
シュウジ＝白河は空気の読める男、これくらいの気配りなど造作もないのだよ（キリッ
まぁ、別にそれはいい。年頃の男女はこういう事になっても不思議ではないだろう。しかし、所構わず求め合おうとするのは正直どうかと思う。
タスク君とアンジュちゃん、この二人が一緒にいるとかなりの高確率でアレな事になってしまう。具体的に言えばタスク君がアンジュちゃんの股間にダイブしているのだ。
一体この二人は何がしたいのだろうか。アレか？　バーストリンクでもしようというのか？　アンジュちゃんの股間の先には電脳な仮想世界でも広がっているのだろうか？　それとも因果とかアカシックレコードにでもそうなるように仕組まれているのか？
兎も角二人は上記の様にＴｏ　ＬＯＶＥるな体勢になる事が頻繁に起こり、その度にアンジュちゃんは激昂し、自分はそれに巻き込まれたりしている。
はた迷惑な話だが……まぁ、さっきも述べたが退屈とはほど遠い日々を過ごしているから別に良いんだけどね。

◇

「っあーもう！　腹立つわね！　なんなのよあの男は！」
「ど、どうしたのアンジュ、いきなり大声だして」
夜が更ける頃、川沿いで飲み水を汲んでいたアンジュとタスク、唐

突に叫び声を上げるアンジュに驚きながらも、タスクは彼女に何があったのか問いた。
「大声も出したくなるわよ、何なのよアイツ！　シュウジ＝白河って男は！　私の攻撃をいつもいつも余裕そうに避けちゃって！　腹立つったらないわ！」
　水汲みようのバケツを手にワナワナと震えるアンジュを見て、タスクはやっぱりかと苦笑いを浮かべる。
「余裕そうというか、実際余裕だったよね。彼、アンジュの攻撃なんて掠りもしなかったし」
「あぁん？」
　思い付いたように事実を述べるタスクだが、その事実にアンジュは凄みを効かせてタスクを睨みつける。その迫力にタスクは短く悲鳴を上げるが、アンジュは手を出すことはせず、溜息をこぼして俯いた。
「……まぁ、実際その通りよね。アイツ、私の攻撃や奇襲、全部先読みしていたみたいに避けちゃうんだもの。この間の崖に突き落とした時だって振り返った時は既に満面の笑顔で佇んでいたんだもの、殆どホラーよ、アイツ」
「あ、あはは……」
　その崖落としに自分も巻き込まれたんだけどね。と、タスクは笑顔の裏で嘆く。シュウジの気を逸らす為に生贄として選ばれた彼はアンジュの蹴りを受け、シュウジ諸共崖の上から真っ逆様へ落ちてしまった。軽く死を覚悟したタスク、しかしこの時シュウジの驚異的な身体能力を発揮された事により九死に一生を得たタスクは今後崖淵には近付かないことを誓った。
　しかもこの時助けて貰ったシュウジから此方の身を案じるというイケメンっぷりも見せつけられたタスクは彼のその容姿も相まって一瞬だけときめいてしまった。散々な目に遭いながらアンジュに対して不満を言わない（言えない）タスクはある意味で紳士の鏡と言えた。
「……でも、彼って面倒見が良いよね。そんなアンジュに対しても甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるんだから」

「……そう、ね」
タスクの話題変えのつもりで口にした言葉はアンジュの表情を曇らせるには十分な威力を持っていた。目に見えて落ち込んでしまったアンジュにタスクは訳の分からないまま謝罪すると、アンジュは違うとタスクの謝罪を否定して淡々と自分の事について語り始めた。
「……アイツってさ、本当になんなのかしら。初めて出会った時は人の事を殺す気かって位の勢いで殴ってきた癖にさ」
「……」
アンジュの語る話にタスクも真剣な顔で聞き入る。皇族だった頃、自分の言動に激しい怒りを露わにしたシュウジは感情のままにアンジュを殴り飛ばした。
それこそ殺す勢いで。記憶が飛ぶ程激しく殴り飛ばされたアンジュは今も心の何処かで怯えていた。当然だろう。生まれてはじめて体感した人の殺意というモノを受けてしまったアンジュにはこの時のシュウジの怒りは剰りにも刺激が強すぎた。彼女がシュウジを執拗に攻撃するのも心の中にある彼に対する怯えがあるからこその防衛本能が働いているに過ぎなかった。
過剰なまでの暴行、しかしシュウジは彼女の感情を受け流すのではなく、真っ正面から向き合って受け止めてみせた。奇襲も暗殺染みた行いも彼は笑って受け入れてくれた。
だからこそ分からない。あれほど自分に怒りを感じていた彼が、どうしてノーマである自分を対等に扱ってくれるのか。
ノーマは反社会的な化け物。なのに彼はタスクの様に自分と普通に接してくれている。その事がよく理解できていないアンジュはシュウジとの距離を見定められずにいた。
「……これは、僕の勝手な想像だけど、もしかしたらあの人にとってそんな事はどうでもいいんじゃないかな」
「そんな事？」
「ノーマとか、人間とか、マナの光とか、丸々ひっくるめて……かな」
自信なさそうに微笑むタスクを見てアンジュは何だか胸の内に何かがストンと収まった気がした。マナの光という万能のエネルギー

に満たされ、何一つ不自由のないこの世界をどうでもいいと――そんな風に言ってのけるシュウジを幻視してしまうアンジュだが不思議と違和感は感じなかった。
だったら自分に対する態度も納得できるかもしれない。もしあの時の彼の態度が現在の社会情勢を無視したものだとするならば彼があの時自分に怒った理由も……何となく理解できる気がする。
もしかしたら、あの時彼が見ていたモノはノーマを産んだ母親に危害がないよう隔離している光景ではなく、お腹を痛めて産んだ我が子を取り上げる悪行に見えたのかもしれない。
「……気に入らないわ」
「アンジュ？」
「あの男は気に入らない。私を殴ったし、私の仕返しを悉く返り討ちにしてくるし、本当に心の底から腹の立つ奴だけど……憎いとか、そういう気持ちはない、かな」
ボソリと呟くアンジュにタスクも笑顔が零れる。少しだけ素直になったアンジュに声を掛けようとした……その時。
「アンジュ、伏せて！」
「ちょ、何すんのよいきなり!?」
唐突に押し倒してくるタスクにアンジュの顔色が赤面へと変わる。何の脈絡もないタスクの行動に混乱するアンジュだが、次の瞬間目に映った光景に彼女は言葉を失った。
「……なに、あれ」
呆然としたまま呟くアンジュ、彼女達の上空には複数の輸送機が氷付けにされたドラゴンを運んでいく光景があった。
まるで周辺を警戒するかのようにライトを辺りに照らしていく輸送機。光に捕まらないよう身を伏せる事で周囲に擬態するようにしているタスクの行動の理由は分かったが、アンジュは氷付けにされたドラゴンを見てそれどころではなかった。
あのドラゴンはパラメイルに搭載された凍結バレットで氷付けにされたドラゴンだ。ここまでで既に何度も見たことのある光景に驚く彼女だが、問題はそこではなかった。

一体あのドラゴンをどこへ連れて行くのか。アンジュの頭の中にはその事に対する疑問に溢れていた。一体連中は何をするつもりなのか、ダメもとでタスクに訊ねようとした時、輸送機の一機が爆発した。

「っ!?」

突然爆発する輸送機、その一機に続き次々と撃墜されていく輸送機を見てアンジュ達は更なる混乱に叩き落とされる事になる。

一体何が起こっているんだ？　島の向こう側へ墜落し、爆発する輸送機らの末路を目の当たりにしたアンジュは原因を突き止めようと一歩前に出ようとした時。

「アンジュ、待て！」

何かの接近にいち早く気付いたタスクがアンジュの腕を引っ張り、前に出かけた体を無理矢理に引き戻す。唐突に襲い来る慣性の力によろめくアンジュだが、アルゼナルで鍛えた身体能力を活かしてなんとか踏みとどまった。

何をする！　突然の行動に文句を言いそうになったアンジュだが、目の前に立つ存在にそれ処ではなくなり、またタスクが自分を引き寄せた理由に納得がいく瞬間を迎えていた。

ドラゴン。先ほどの大型のドラゴンとは違う傷だらけで小型のドラゴンが目の前にいた。パラメイルで幾度となく撃ち落としてきた雑魚とも呼べる存在だが、それはパラメイルというノーマの鎧があって始めて成り立つ図式である。

当然その膂力はその体躯に合わせて凄まじく、人間個人が立ち向かえる相手ではない。幾ら目の前のドラゴンが満身創痍でもその構図は変わらず、平和に過ごしていたアンジュ達は唐突に危機を迎えてしまっていた。

トドメを刺すとばかりに銃を乱射するアンジュ、しかしドラゴンの図太い肉質には通らず、小さな穴が空き、少しばかりの血を流すばかりである。

また、ドラゴンはその生態上生命力は高い。故に弾切れになってもドラゴンを仕留めるには至らないと察したタスクはアンジュの腕を

引いて逃げようとする。
「そんなものじゃあドラゴンは倒せないぞ！」
「だったら、黙って喰い殺されろって言うの！」
　このままではいずれにしても二人とも喰い殺されてしまう。どうにかしなければとタスクは思考を巡らせた時――――彼は現れた。
「パラメイルの所へ向かいなさい」
「っ、アナタは！」
「シュウジ！　一体どこから出てきてんのよ！」
　音もなく、気配も読まさずに二人の背後から現れるシュウジ。どこからともなく現れる彼に二人は驚くが、すぐさまそれどころではないと我に返る。
「パラメイルって、ヴィルキスの所？　でもあれってまだ修理中じゃあ……」
　アンジュの指摘通り、ヴィルキスは現在修理中だ。同じ部隊の仲間から嫌がらせとして機体の出力部分に下着類を入れられて故障してしまっているヴィルキスは現在元の様に戦闘をこなせる状態ではない。
　一体そこへいって何をさせようというのか。訳が分からない二人だがシュウジの一言によって更に混乱する事になる。
「あぁ、それなら問題ありません。ここへ来る前に既に修理は終わらせましたよ」
「「……へぇ？」」
「タスク君が予め手を入れていたのが幸いでした。おかげであのヴィルキスなる機体の大部分を理解する事ができましたから。通信等の機器もじきに動くと思いますよ。――いやぁ、それにしてもあの機体は凄いですね。あれだけのサイズにまさかあのような仕掛けが施されていようとは、あの機体を造り上げた人物は紛れもない天才ですね」
「い、いやあのシュウジさん？　そういう問題ではないと思うのですが……」
「？　……あぁ、これは失礼しました。勝手に工具を使用してしまい

申し訳ありませんタスク君　何分機械弄りには自分も心得があるものでして、つい興味本位で触れてしまいました」
　そう言って深々と頭を下げてくるシュウジに対し、タスクは頭が痛くなってきた。色々と突っ込み所がある言動だが、今はそれどころじゃない。ヴィルキスが動いてくれるのならあのドラゴンの一匹位どうって事ないと高を括ったアンジュは急いでヴィルキスの元へ向かおうとするが。
「あぁ、それと。このドラゴンの対処は私に任せて貰います。手出しは無用ですよ」
「はぁ!?　相手はドラゴンよ！　喰い殺されたいの!?」
　手出しは必要ないと言い張るシュウジに今度はアンジュが噛みついてくる。相手は人類より遙かに膂力に優れたドラゴンだ。基本的な力は勿論向こうは飛んだりしてくる。幾らシュウジが強いと言ってもドラゴン相手では分が悪すぎる。
　と、そんな風に思っているアンジュの思考を読んだのか、シュウジは不敵な笑みを浮かべてアンジュの頭に手を乗せた。
「私の心配は無用です。既にアレくらいの相手とはやり合っていますからね。ある程度の対処方は心得ていますよ」
「〜〜〜〜っ!!」
　まるで駄々を捏ねる子供をあやす様に優しく諭すシュウジ、彼の掌から伝わってくる熱に一瞬だけ目を細めてしまったアンジュは、次の瞬間目を大きく開かせて震えながらシュウジの手を払いのけた。
「いいわ、そこまで言うなら精々頑張りなさい。もし喰われたりするなら笑ってやるんだから！」
「ククク、相変わらず勇ましいですね。……さぁ、早くおいきなさい」
　猛り狂うアンジュを適度に相手にしつつ、シュウジはドラゴンと向き直る。人とドラゴン、そのサイズ差から既に勝敗は見えている筈なのに何故か殺される未来が見えない。そんなシュウジを後に置き、タスクとアンジュはヴィルキスの下へ急ぐのだった。
　――その後、ヴィルキスと共に戻ってきたアンジュとタスクはドラゴンとシュウジがいる筈の場所へと戻って来るのだが、そこには既

に彼らの姿はなく、静かに川の水が流れているだけだった。

その8

▲月※日

現在、自分はエンブリヲなる輩の事を調べる為にこの世界の諸国を巡っている。あれからドラゴンと遭遇した自分は傷だらけとなったドラゴンを助けるべく治療を施し、彼女が快復するまで側にいる事にした。

この時にアンジュちゃん達から隠れる為にすぐ様あの場所から離れたのだが……いやー、ドラゴンってやっぱ重いね。体格から分かるとおり人間とは比べものにならない重量だからおぶって移動しようとしたけれど、ドラゴンの重さに潰されそうになった。

危うく戻ってきたアンジュちゃん達に見つかりそうになったので自分は慌ててグランゾンのいるワームホールへ飛び込み、アンジュちゃん達が無人島から去っていくのを待った。

ワームホールの内部は常に重力に包まれている空間だ。グランゾンに乗り込む自分は兎も角ドラゴンである彼女は重力に押し潰されてしまう事態になってしまう。一緒にコックピットに乗せようとしても流石に狭いので自分はアンジュちゃん達が去る時まで重力の底でドラゴンが押し潰されないようにグランゾンを制御する事に専念する事になっていた。

その後アンジュちゃんは迎えにきた仲間達と一緒にアルゼナルへ戻り、タスク君もパラメイルの様な機械と共に無人島から飛び立っていった。その様子を見送った自分は重力の嵐から守りきったドラゴンと共に再び無人島に降りたった。

で、その後はドラゴンの傷を治す為にアレコレ手を尽くすのだが、この時からドラゴンは意外な程に静まり返っていたのだ。

まだ自分と相対したばかりの時は敵意剥き出し、殺る気満々のハツラツした様子だったのにワームホールから出てきた時は驚くほど大人しくなってしまっていた。

やはり体に刻まれたダメージが深刻だったのだろう。仲間を人間達から取り戻した時に精魂も尽きた彼女は端から見ても弱り切っていたからなぁ。そこへワームホールに力ずくで押し込んでしまったのだ。彼女が弱るのも無理はない。

その後、傷薬になる薬草を島中にから集めて（傷薬になる薬草はタスク君から教えて貰った）彼女の傷に塗り込んだり、海蛇のシチューといった食べ物を与えたり、ドラゴンの看病を続けた。ドラゴンに人間の看病が役に立てるのか不安に思ったが、彼女達だって人間だ。今はドラゴンの姿となっているが、彼女達の世界にはドラゴンと人間の二つの姿に身を変えられる技術が存在しているのだ、決して無駄ではないと自分に言い聞かせた。

そしてその翌日、看病し続けた甲斐あってドラゴンは見事快復。どうにか空を飛べる体力まで取り戻すことに成功した。

やはりドラゴンだけあって生命力は凄まじい。殆ど完治している状態の彼女は今にも外へ飛び出しそうな勢いだったが、ここで俺は待ったを掛けた。

ここはドラゴン達にとって敵とも言える世界だ。ここからアルゼナルは近いみたいだし、もし見つかったりすれば今度こそ彼女は殺されてしまう。

折角拾った命だ。もう少し大事にして欲しいので自分はこの時彼女に次の特異点が開くまでここで大人しくしておくよう説得を試みた。

最初は渋っていたが、自分の必死な思いが届いたのか、段々ドラゴンは態度を変え、遂には自分の言葉を聞き入れてくれるまでになってくれた。

この無人島には幸いに水と食料が豊富だ。木の実やキノコも生えてるし、魚も充実している。勿論毒キノコや毒性のあるモノには気を付けるよう言い聞かせていたが……そもそもドラゴンに毒って利くのかな？　某狩りゲーでは結構有効な手段だけど……。

ま、まぁそれは兎も角として、なんとかドラゴンを助けられた自分はグランゾンと共に無人島を後にして現在は最初にも述べた諸国を

練り歩いている。
早い所エンブリヲなる輩からアウラを取り戻さねば。この意気込みを絶やさない為、明日も一生懸命に頑張っていこうと思う。

▲月γ日
今日、久し振りに胸糞悪くなる場面と遭遇した。エンブリヲの情報を少しでも集められるよう各国を旅して回っていた俺だけど、この日、俺はアンジュちゃんとの初邂逅以来感じることの無かった怒りを覚える事になった。
エンデラント連合。この世界の国の一つであり、ミスルギ皇国よりも面積の大きい国、そこで俺は信じられない場面を目撃したのだ。
農業が盛んだと思われるとある土地、広々とした大地と両脇にリンゴ林のある小道、何とものどかな土地でこれで空が晴れていたらなと思っていた時、目の前に人垣ができており、何だと恐る恐る覗いてみれば……一人の女の子が警官達にボコボコにされている場面だった。
しかもその時警察官が女の子の顔を踏みにじったモノだから俺の中にある怒りメーターは瞬時に振り切り、その場にいる警官達を全員叩きのめしてしまった。
……一時の感情に流されてまたもや暴力を振るってしまった自分が情けないが、アンジュちゃんの時と同様、その時も今も後悔はしていない。
動けなくしてやった警官達を尻目に、自分は女の子を助け起こす。この時女の子は一瞬目をパチクリとさせるが、次の瞬間には敵意剥き出しの表情となり、自分に殴りかかってきたのだ。
……余程人に恨みを持っているのだろう。憎しみまみれの彼女の拳は大した威力はないものの、酷く冷え切っていた。自分を殴った後力を使い果たした女の子はそのまま気絶してしまった。
このままでは風邪を引かせてしまうと思い、俺は彼女と一緒にグランゾンに乗り込み、人気のない場所へと移った。
その後人気のない森の中にまでやってきた俺はそこそこ古い空き家を見つけ、少しばかり借りる事にした。暖炉もあるし、近くに水辺

もある。寝具も埃まみれだがまだ使える状態になっているし、一休みするには十分な環境だった為、自分は彼女を横に寝かしてドラゴンの時と同様に看病を始めた。
今は自分の後ろで健やかに寝息を立てている。脱がした服も暖炉で乾かしていることだし、朝には目を覚ますだろう。
……一応言っておくが、彼女の服を脱がしたのは風邪をひかせない為の必要な処方であってやましい理由や気持ちなど断じてない。
そもそも意識の無い女の子に手を出すなど外道の所業。精神的にも弱っているみたいだしこのまま一晩様子を見ることにしようと思う。

▲月Σ日
翌日、元気を取り戻した様子の赤髪ツインテールの女の子、ヒルダちゃんから寝起きのシャイニングウィザードを受けそうになった所から今日の出来事を綴ろうと思う。
ヒルダちゃんは元々ノーマの生まれらしく、ついこの間までアルゼナルに収容されていたのだとか。過酷な環境の中で当時六歳だったヒルダちゃんはキツい訓練を受け、第一中隊というアルゼナル屈指の戦闘部隊に配属されたのだという。
ドラゴン達を駆逐し、仲間や上司に取り入る事で今日まで生きてきたというヒルダちゃん。全ては母親に再び出会うという目的を果たす為、これまでなんでもしてきたというヒルダちゃんはその後、自虐的な笑みを浮かべて話を続けてくれた。
……その内容は酷いものだった。ある時フェスタと呼ばれるイベントの日に今日まで備えてきたヒルダちゃんは隙を狙って脱走、遂に母親の所へ辿り着くのだが。
待っていたのは自分の娘を化け物と蔑む母親の姿だった。
自らお腹を痛めて産んだ我が子に対して化け物と罵倒する母親、しかもヒルダちゃんの母親は既に別の子を産み落としており、そちらの方にヒルダちゃんの本当の名前を付けて育てていたのだという。
まるで自分という存在など元から無かったかのように……。そう

言って疲れたように笑うヒルダちゃんに俺は何も言えなくなった。
……ノーマというだけでどうして人々は恐れ、嫌うのだろう。お腹を痛めて産んだ我が子さえも化け物として蔑むこの世界に対して、正直俺は異常性を感じていた。
もはや歪んでいるとかのレベルではない。ノーマというだけで差別するこの世界の人間は自分から見てまるで操り人形の様だった。
……洗脳、と言っても良いだろう。
ノーマというだけでまともに話も聞かず、一方的に弾圧するその姿勢。まるで誰かから命令されているような彼らの姿に俺は改めて怖気を感じた。
――そう考えると、この世界がどういう仕組みで成り立っているのか、何となく分かる気がする。マナという万能エネルギー、ノーマ、エンブリヲ、そしてアウラ、これらは恐らく繋がりがあるのだろう。ていうか、そうとしか思えない。
となると、やはりエンブリヲの正体とその目的を明らかにするのが一番の近道なのかもしれない。こちらの世界に来てそろそろ一月が経つ。いい加減手掛かりの一つくらいは手にしたい所だ。

◇

「さぁ、スープが出来ましたよ。熱い内に食べなさい」
「あ、ありがとう……」
時刻は夜の七時を回った所、辺りは暗闇に閉ざされ、小屋から溢れる光だけが闇の森に光を灯していた。

渡された木製の皿とスプーンを手に取り、注がれたスープを一口啜る。口に広がる芳醇な香りと味付けにヒルダは夢中になって食べ始めた。
そんな彼女を見て白いコートを着た男性、シュウジは微笑む。元気を取り戻した様子の彼女に嬉しく思うシュウジは妹を見守る兄の心境で彼女を見つめていた。
そんなシュウジの視線に気付いたのか、ヒルダはシュウジの方へ視線を向けると同時に表情を強張らせる。明らかに不機嫌ですよと物語る彼女の表情にシュウジはバツが悪そうに苦笑いを浮かべる。
やがてスープを全て胃の中に入れたヒルダは満足とばかりに腹をさすった。
「はー、食った食った。こんなに食べたのは久し振りだ」
「満足していただけた様で良かったです。朝の寝起きからのシャイニングウィザードといい、どうやら本当に体調は良さそうですね」
「うるさいよ。誰だって見知らぬ男が自分の寝顔を覗き込んでいたら驚くだろうが」
「それもそうですね」
品性の欠片もない態度、着ている服はお洒落なままなのに野生児の様に振る舞うヒルダだが、シュウジはそんな事を気にも留めていなかった。
「さて、お腹も膨れた様なのでこれからの事を話したいのですが、……ヒルダちゃん、貴女はこれからどうします？」
「……別に、私はノーマだ。この世界にノーマの居場所がない以上、どこにも行く宛なんてないさ」
「……アルゼナル、でしたか？　そこへ戻れば友達だっているのではないのですか？」
「友達ぃ？　ハッ、そんなものいるわけないだろう？　私が今日まで生きてきたのはママに会うため、ロザリーもクリスも私の目的を達成する為に合わせてやってただけだよ」
だから自分に居場所などない。そう口にするヒルダは笑みを浮かべている。しかし、その笑顔はどことなく疲れているようにも見え、

シュウジはそんな彼女の表情に落ちる影を見落とさなかった。
自嘲気味に笑うヒルダ、友達を騙してでも母に会いたかった彼女の想いはその母親によって砕かれ、今の彼女の心境は暗い奈落の底、即ち絶望へと叩き落とされていた。
そんな彼女の気持ちは自分程度ではどうする事も出来ない。しかし、生きる事を諦めつつある彼女も放っておく事が出来ないシュウジはある人物の話をするのだった。
「……嘗て、私の知り合いにも貴女と似たような人がいましたよ。目的の為なら手段を問わず、人を騙し、欺き続けた一人の男がね」
「……」
「彼がそこまで他人に嘘をついていた理由、それはたった一人の肉親を、妹を守る為だったのです」
それは嘗て多元世界にいた頃、再世戦争と呼ばれる争乱の時期にシュウジが出会った一人の男。幼き妹を守る為、居場所を作る為に世界を相手に嘘を吐き続けた男は、やがて世界から見放され、遂には妹さえ敵に回してしまった。
妹の居場所を作るつもりが、逆に自分の居場所を失ってしまった。人を騙し、裏切り続けてきた代償。男は遂に自棄を起こしかけた。
「けど、彼は最終的にはその道を選ばなかった。……何故だと思います？」
「さぁな、私に分かる訳ないだろ？」
「……彼には、友達がいたのですよ。親友だった一人の男――時には敵対し、騙し騙され、憎しみ合っていた彼が友人を助ける為にもう一度手を差し伸べたのです」
シュウジが思い返すのは再世戦争末期の頃、バジュラ本星付近で始まった戦いでの事。そこで二人は互いの心に触れた事で和解し、嘗ての関係を取り戻す切っ掛けを手にした。そこまでくるのに少しばかり手間取ったが、当時のシュウジには仲直りを果たした二人が眩しく見えた。
ついでに言えば嘘吐き少年（ルー・シュ）の自棄を止めたのは自分だが、問題となる所はそこではないので適当に流す事にした。

やがて男の話を終えたシュウジは再びヒルダへと向き直る。すると彼女はもの凄く納得がいかないといった様子でシュウジを睨みつけていた。
「……で、そんな話を私に聞かせて、一体何が言いたかったんだよ」
「ククク、ここまで言えば聡明な貴女なら理解していると思うのですが、まぁいいでしょう。これまでの話をまとめて要点だけを話すのならば……もう少し、素直になればいい。という事ですよ」
自分が悪いというのなら自分から謝ればいい。例え受け入れられなくてもそこから自身の態度次第だとシュウジは続けた。
何とも身も蓋もない話である。だが、その身も蓋もない話こそが大事な事であるとヒルダ自身も理解していた。
つくづく気に入らない奴。まるでこちらの気持ちなどお見通しと言わんばかりのシュウジにヒルダはお返しという風に皮肉を口にした。
「ったく、ノーマである私を匿ったり余計な事言ったり、アンタ本当に何者？　まさか神父様とでも言いたい訳？」
「まさか、聖職者などと私には程遠い役職ですよ。……それに」

〝私はそもそも、神という存在（モノ）を信用してはいません〟

ほんの皮肉のつもりで漏らしたヒルダの一言、しかしそれが目の前の人物のナニカに触れたのか。彼の浮かべる笑みはヒルダをゾクリとさせるのだった。

その9

▲月Ω日

エンブリヲに関する情報を求めて世界諸国を巡りながら探して回って数日、それらしい情報は未だ掴めないまま自分は途方に暮れていた。

これだけ探しても見つからないという事はもしかしたらエンブリヲはこの世界に於いて重要な席に座る重鎮みたいなものではないかと最近は予想している。

だから自分は諸国を巡りながらその度にその国の首相官邸やら国家機密等を調べたりしたのだが、エンブリヲに繋がる情報は一切得られなかった。

まぁ、サラちゃん達の世界に単身で乗り込んでアウラを強奪する様な奴だ。世界から自分の痕跡を消して行方を眩ませるのは奴にとってさほど難しい事ではないのだろう。

これ以上の情報は足で探し回っても得られる事はないだろう。となると、ここから自分が出来る範囲はかなり限られてしまう。自分の憶測と推測に合わせて山勘レベルの当てずっぽうで探してみるか、それともグランゾンの力でこの地球全土の地殻を掘り返してエンブリヲを力付くで引きずり出すかだ。

後者は冗談だとしても実際それくらしか出来る事がない。けど、世界各国の官邸を調べて回っていた結果、この世界の仕組みについて分かった事があるので今日はそれをまとめていこうと思う。

まず、この世界を構成しているのに必要不可欠とされているマナだが、アレはこの世界の人間だけが使えるというより、この世界の人間に〝しか〟扱えないと言った方がいいだろう。

どうやらこのマナというのはこの世界の人類と脳波レベルで繋がっているらしく、マナの光で物を浮かせたり、障壁を張って防御に使えるだけじゃなく、思考通信やら統括ネットワークにアクセスする事でリアルタイムで情報を共有したりする事ができる様で人々はそ

れを使って電話も通信機も無しに遠くにいる人と連絡を取り合ったりしているのだという。
　これは便利だと普通なら思う所だが、自分はそうは思わなかった。何せこの相互通信システムというのは自分の知るある者達と似たようなシステムを使っているからだ。
　イノベイター……いや、イノベイドか。再世戦争の頃、アロウズを使って好き勝手に地球を荒らしまくってた連中、奴らも脳量子波というモノでお互いの存在を認識していたというからあながち間違いという訳でもないだろう。
　そしてもう一つこのマナを使った通信システムを持つ存在がいる。それが〝バジュラ〟彼等の生態系を理解すれば寧ろこちらの方がこの世界の事情に当てはまると思う。
　フォールド波と呼ばれる特殊な波でお互いを理解し合っているバジュラは基本的に群で行動し、互いの存在を認識し、外敵に襲われればフォールド波を伝って全てのバジュラへと伝達される。
　また外敵が自分達より強い存在であるならばフォールド波を通して伝わってきた情報を基にバジュラは進化していく。そしてこれらバジュラのネットワークの頂点に君臨するのがバジュラの女王だ。
　嘗てこのバジュラクイーンを利用して全てのバジュラを支配下に置き、銀河の支配を目論んだ女がいた。自ら神と名乗ったそいつは自分とグランゾンで大好きな銀河と共に消して上げたけど、実際奴のやり方は合理的で厄介なモノだった。
　バジュラ達を統括する女王に寄生し、バジュラのネットワークに介入。バジュラ達を意のままに操ろうとした奴の言動は今でも苛立たせてくれる。
　ここの人間はそんな支配されたバジュラ達と似ているのだ。以前にも刷り込みやら洗脳だとか言っていたが、これでいよいよこの世界が胡散臭いモノだと確信した。
　思考ネットワークにも繋がる事の出来るマナの光ならば、それを通してなら人々に常識や意識差別等といった認識情報を弄くる事も可能だろう。

これならば何故ノーマという存在に対し、人々があそこまで差別的になるのかも理解できるが、これだけではエンブリヲの所在を特定する事は叶わない。

よってもう一つ推測を立ち上げてみるのだが、ぶっちゃけ、これしかないと自分は考えている。

〝アウラ〟サラちゃん達の世界にいたドラゴンの始祖。始まりのドラゴンでありサラちゃん達の象徴とも呼べる存在、アウラこそがマナという万能エネルギーの源だと自分は考えている。

というか、薄々そんな気はしてた。エネルギー資源としてエンブリヲが連れ去ったとサラちゃんは言っていたが、そもそも何故エンブリヲはアウラをエネルギーにしたのか。

恐らくはアウラの体は膨大なドラグニウムというエネルギーを有しているのだろう。まだ汚染に満ちていたサラちゃん達の世界は巨大化した雄のドラゴン達が汚染された部分を食べ続けていた事により世界を浄化する事が出来たと聞いている。アウラはそんな昔から存在し続けるドラゴンだ。その体内からこの世界の人々が使用する分のマナを取り出し供給し続けているのだろう。

だが、それだけでは世界中の人々を賄う事など不可能、自らドラグニウムを生み出す訳ではないアウラに対しエンブリヲは更なる仕組みを築き上げた。

それがノーマであるアンジュちゃん達とドラゴン達が戦っている理由に他ならない。世界から不要と断じられてしまった彼女達は世界の果てにあるアルゼナルでドラゴン達と戦う事を強いられ続けた。

対するドラゴン達もノーマ達に殺されてしまい、大型のドラゴンに至っては氷漬けにされてしまっている。……あの無人島で見た氷漬けにされたドラゴンを見た時、何故殺さずにどこかへ運ぶのか気になったが、最近漸くその理由に気付けた。

ドラゴン達は汚染された草木や大地を喰らって体内にエネルギー結晶として貯蔵している。つまり、エンブリヲは狩ったドラゴンの腸を引き裂いてアウラの放つマナの光の供給源としているのだ。

全く、よくもまぁこんなふざけた世界にしてくれたものだ。そのエ

ンブリヲとかいう奴は自分の事を神かなにかかと思っているのだろうか？　悪趣味にも程があるだろう。
まぁ、これは自分の推測に過ぎないから断言はできないが、それでも自分は殆どこの流れで間違いないと思う。
後はそのアウラの居場所を突き止めるだけ、自ら乗り込んで強奪する位だ。アウラの所へ行けば自ずとエンブリヲもその姿を現す事だろう。
さて、残った問題はそのアウラの所在なのだが、実は自分に心当たりがある。何でも各国の首都には〝アケノミハシラ〟と呼ばれる巨大な塔が建設され、そこに代々塔を起動させる事を義務づけられた皇族達が自国の人々が使う分のマナの光を放っているとされている。
恐らくアウラはいずれかの塔の地下に幽閉されているのだろう。そしてそれは今の所ミスルギ皇国である可能性が一番高い。
根拠はミスルギ皇国の皇室にリザーディアさんが潜入しているからだ。恐らくは彼女も自分と同じ結論に至り、各国のアケノミハシラへと潜入し、アウラの所在を探していたのだろう。
そしてその候補の一つとして選ばれたのがミスルギ皇国だった。彼女が自分に世界を巡ってエンブリヲの情報を集めて欲しいと言ったのも、自分だけでは手の回らない他のアケノミハシラを調べて欲しいという意味だったに違いない。
それならそうと言って欲しいというがアウラはこの世界にとっても重要な存在、恐らく皇室には常にエンブリヲの目が向けられている事だろう。いうなればリザーディアさんは常に敵の懐に単独でいるようなモノ、そこからくるプレッシャーは相当だろう。そう考えれば彼女が当時自分の事を疎ましく思っていたのも頷ける。
そりゃ皇室や元凶であるエンブリヲの目を誤魔化し続けなければならないのだ。寧ろ自分の為にあれこれ助言をくれた事に感謝すべきだろう。
これでひとまずこれまでのまとめと今後の方針は決まった。明日はミスルギ皇国に向かい、早速あそこの国のアケノミハシラを調べてみようと思う。

因みに、既に他の国のアケノミハシラは調べてある。連中、マナの光に頼ってばかりで見つかってしまっても簡単に振り切る事が出来る。ヘリや装甲車が動く前に此方は国境へ逃げ込む事ができるのだから楽なものである。

多元世界に来たばかりの頃、世界を相手に逃げ回っていた自分を舐めないで欲しいものである。

……うん、威張れる事じゃないね。

それと追記。ヒルダちゃんは無事アルゼナルに届けました。恐らくは反省房の中にいる事だと思うが……彼女の事だ。きっと今頃は向こうの友達とも仲直り出来ている頃だろう。

勿論その時はグランゾンをワームホールから出す際、ヒルダちゃんメッチャ驚いていたな。最初の頃の自分を見ているようで何だか懐かしくなってしまった。

で、そのあとはヒルダちゃんと共に急行。人気のない基地の砂浜に送り届けた後、自分はミスルギ皇国へ向かってグランゾンを走らせている。

明日からは忙しくなりそうだ。漸くこの世界に来て働ける気がしてきたので頑張っていこうと思う。

◇月＊日

アウラを求めてやってきたミスルギ皇国。現在自分はアンジュちゃんの処刑台前へきております。

え？　何を言っているのか分からないって？　安心して欲しい。自分も何を言っているのかさっぱり分からないから。

……まぁ、大体予想は出来る。何でもミスルギ皇国は現在第一皇子ジュリオ君が王位に即位しており、長いことアンジュちゃんをノーマだと隠していた皇室の威厳を取り戻す為に実の父親を処刑したらし

いのだ。
母親の方はアンジュちゃんがノーマだと知られた時の騒動で亡くなったと聞く。幾らノーマである事を隠していたとはいえ、実の父親を殺すとは……どうやらこのジュリオ君は自分が思っていた以上に碌でもない野心を抱えていたようだ。
それが皇室を皆殺しにするという触れ込みがアンジュちゃんの耳にも入ってきたのだろう。どうやって伝わったかは定かではないが、時期的に考えて恐らくはヒルダちゃんと一緒にアルゼナルから脱走したものだと考える。
で、大事な家族が殺されると危惧したアンジュちゃんはホイホイと兄ジュリオ君の罠に嵌まり現在に至る……と。いやぁ、それにしても自分の威厳を立たせる為に実の妹すら利用するとは、皇室っておっかないなぁ。シュナイゼルの所の皇室もあんな風にドロドロしていたのだろうか？
しかもアンジュちゃんの妹らしい車椅子の少女から何度も鞭を振るわれているし……一瞬鞭を振るうナナリーちゃんを幻視してしまったじゃないか。
ともあれ、そろそろアンジュちゃんを助け出す準備に入ろうかな。タスク君も向こうで準備をしているだろうし、手助けくらいはしてもいいだろう。
本当ならこの騒動に乗じてアケノミハシラへ乗り込みたい所だが……まぁ事態が事態だし、仕方ないだろう。

◇

（……これが、平和を愛するミスルギ皇国の民なの？　まるで家畜、豚じゃない）
処刑台の前に立たせられていたアンジュは目の前に広がる嘗ての級友達、吊せ、吊せと呪詛の様に繰り返す彼等を見てアンジュは憤りを感じずにはいられなかった。
最愛だった妹にも裏切られ、兄の策略に嵌まったアンジュは後数分もしない内に処刑されるだろう。己の権力の為に父を殺した兄、そしてマナが使えないノーマというだけで話も聞かずに差別する人間共。
もう、そこには嘗て理想だったアンジュの世界はない。まるで肥溜めでも見ている様な感覚となったアンジュはそれでも絶望せずに怒りを糧としていた。
（殺せるモノなら殺してみなさい。ただし、私は絶対に諦めないわよ！）
諦めない意志。それは自分がノーマだと知り渡った時、死に際の母が遺した遺言だった。
アンジュは――――歌を歌った。永遠（トワ）語りと呼ばれる母から受け継いだたった一つの繋がりを口にしながら、アンジュは自ら処刑台へと足を進める。
既に彼女の覚悟は完了した。後はその時を待つばかりだと悟った――――その時。
『中々、良い歌でしたよ』
――――そいつは現れた。
爆発する処刑台、首に掛けられた縄は引きちぎられ、アンジュは重力に引っ張られ、地面へと落下していく。
しかし、衝撃はなかった。何故なら彼女の体を仮面を被った男が抱き抱えていたのだから。
「き、貴様、何者だ！」
突然現れた仮面の男に処刑台の前は騒然となる。予兆もなく、前振りなく現れた謎の存在を前にジュリオは動揺しながらも問いただした。

「……名、ですか？　生憎、今の私にはあなた方に名乗る名前は持ち合わせていないのですが」
「な、何だと!?」
「それでも敢えて名乗るのならば――――蒼のカリスマ、とでも名乗っておきましょう」
多元世界で猛威を揮った孤高（ボッチ）の魔人――――蒼のカリスマが今、ここに再び姿を見せるのだった。

その１０

アケノミハシラ。各国の象徴とも呼べる塔の前、爆破された処刑台の前、突然起きた出来事に誰もが愕然としていた。

ミスルギ皇国の人々も、処刑を命じたジュリオ皇帝も、その妹であるシルヴィアや潜入工作をしていたリザーディア、助けられたアンジュ本人もその侍女モモカもアンジュを助けようとしたタスクも、誰も彼もが舞台の上に佇む仮面の男を凝視していた。

その男の名は……蒼のカリスマ、自らそう名乗り、仮面の奥で笑う彼は間違いなくこの場の支配者だ。ジュリオ皇帝やアンジュではなく、正体不明の仮面の男がこの舞台の主役となっていた。

白いコートで身を包み、空や海よりも深い蒼の仮面。異様な佇まいと風貌は明らかに異常者のそれ、しかし、悠然と佇む彼の姿勢から何故か目を逸らす事が出来なかった。

本来主役になる筈だったジュリオはその事実に気付く。他者よりも人一倍自己顕示欲の強いジュリオ皇帝は感情のままに近衛兵に命令を下した。

「な、何をしているか！　早くあの不届き者を捕らえよ！」

「は、ハッ！」

ジュリオの命令に従い、複数人で一斉に取り押さえようとする近衛兵達。包囲されながら突っ込んでくる彼等に蒼のカリスマは再び仮面の奥で含み笑いを浮かべ……その場で跳躍し、近衛兵達の包囲から脱出する。

「な、なぁ!?」

その光景にジュリオは愕然とした声を漏らす。当然だろう。何せその場に立っていた筈の人間が垂直に五メートルも跳んだのだ。彼が驚くのも無理はないだろう。事実、非常識な身体能力を持つ蒼のカリスマに国民達は呆然としていた。

跳んだ時と同様に難なく地面へと着地する蒼のカリスマ。この時

漸く我に返ったアンジュはいつまでも離そうとしない仮面の男にいい加減離せと訴えた。
「ちょ、いつまで抱えているつもりよ！　さっさと離しなさい！」
「ん？　あぁ、これは失礼した」
腕の中で暴れるアンジュ、力一杯暴れているにも関わらず、まるでビクともしない男の腕力に驚いていた瞬間、蒼のカリスマは簡単な謝罪と共に彼女を解放した。
突然離された事により自由落下するアンジュはそのまま地面に尻を付き、衝撃と痛みで短い悲鳴を上げる。
アンジュが無事。一連の出来事の末に慕っていた彼女の身を案じていたモモカは仮面の男にギャーギャーと噛みつくアンジュを見て安堵する。
だが、依然として状況は不利のまま、大多数の近衛兵に囲まれていた状態では危機を脱したとは言えない。それに加え、ここでジュリオは目の前の仮面の男とアンジュの両方を捕まえる策を閃く。
確かにあの蒼のカリスマなる男の身体能力は凄まじい。アンジュもあの世界の果てで生き抜いていた事から相当腕に自信がある事だろう。
しかし、まだジュリオの手には切り札が残されている。近衛兵に挟まれたモモカを一瞥したジュリオは二人に届くように声を張り上げる。
「そこまでだ！　それ以上動けば、この小娘の命はないぞ！」
「っ！」
「なっ!?」
予想通り。二人とも動きを止めた事にジュリオはしてやったりと笑みを浮かべる。勝利を確信したジュリオは再び主役へと返り咲き、ノーマと反乱分子を始末し、国民の支持を得ようと瞬時に画策するが……。
「この、モモカをはな――――」
アンジュがモモカの身柄を解放しろと言い切る前に、彼女の横を何かが飛んでいく。同時にモモカの両側にいた近衛兵の銃を持つ手に

何かが突き刺さり、近衛兵達は悶絶し一瞬だけモモカから離れてしまう。
一体何が起きたのかとジュリオは混乱する。悶絶している近衛兵二人をみると、彼等のそれぞれの手の甲に五寸釘相当の木材の破片が突き刺さっていた。
その様子を見て近衛長のリィザは気付く。あれは爆破された際、砕けた処刑台から手にしたもので奴はそれを使いモモカを人質に取ろうとした近衛兵二人だけに向けて投擲したのだと。あれだけの一瞬の出来事にここまで対応出来る仮面の男に戦慄を覚えるリィザだが、この時既に状況は彼女の考えていた一歩先へと進んでいた。
手の甲に突き刺さる木材に悶絶する近衛兵、当然そんな隙を見逃す筈もない蒼のカリスマは己が脚力を最大限に活かし、踏み込んだ瞬間、モモカのいる所へ移動してみせた。
「――――せ」
蒼のカリスマの一連の行動、速すぎてまともに目視できなかったアンジュは呆然となりながら最後の台詞を呟いた。その頃にはモモカを拘束していた近衛兵二人は地に倒され、彼女の身柄を確保していたのだった。
「ひ、ひぃぃぃっ！」
倒れた近衛兵を見て、車椅子の少女シルヴィアは絶叫を挙げて気絶する。唐突に起こった事態、まるで演劇を見ているような景色に国民達は暫く呆然としていたが、血を流して倒れる近衛兵と悲鳴を挙げて気絶するシルヴィアを目の当たりにして彼等の感情は一斉に吹き出してしまう。
「う、うわぁぁぁっ！」
「ば、化け物！」
「逃げろ！　殺されるぞぉぉぉっ!!」
蒼のカリスマという謎の人物の乱入、それにより生まれた悲劇。これらによって思考をかき乱されたミスルギ皇国の国民達は我先へとばかりにその場から逃げていく。
パニックを起こした嘗ての自国民に若干引き気味のアンジュだが、

ほんの少し……1ミクロン程同情してしまう自分がいた。
「全く、化け物とは随分ご挨拶ですね」
「あ、あの……アナタは？」
「貴女も、そんな事を気にしている場合ではないでしょう？　さぁ、早く彼女の下へ……」
「は、はい！　ありがとうございます！　カリスマさん！」
助けられた事を理解し、助けてくれた蒼に頭を下げて礼を言い、モモカはアンジュの所へ走り寄る。アンジュの手によってマナの光による拘束具から解放されたモモカは泣きじゃくりながらアンジュに何度も謝り倒した。
恐らくは自身の知らない間にアンジュをここへおびき寄せる餌になっていた事を悔いているのだろう。何度も謝るモモカの頭をアンジュは撫でながら気にするなと囁いている。
麗しい友情だ。寄り添っている二人を見て少しばかり感慨深くなるが、今はそんな事を許される状況ではない。さてと、と周囲を囲んでいる近衛兵達を一瞥しながら、蒼のカリスマはここにいない誰かに言葉を投げかける。
「さて、もうそろそろ良いでしょう。出てきても良いですよ」
一体誰に向けての言葉なのか、アンジュ達が一瞬頭に疑問符を浮かべたその時、処刑場に閃光弾が投げ込まれた。
炸裂する光と音、蒼のカリスマを除いた全員が音と光にやられた時、処刑場から少し離れた所から一機のパラメイルが姿を現した。
蒼のカリスマの言葉に合わせて現れたパラメイルのパイロットは機体の出力を調節してジュリオ皇帝に肉薄し、彼の手にしていたアンジュの指輪を奪い返した。
突然の衝撃と痛みにジュリオは堪らず指輪を手放す。肘にまで伝わってくる痛みに悶えながらうずくまると、漸く視力を取り戻したのか視界に絵が映し出されていく。
一体何が起こったのか、アンジュは取り戻しつつある視力で目を開くと……。
「た、タスク!?　どうしてアナタがここに!?」

「ごめんアンジュ、出てくるタイミング逃しちゃって……」
パラメイルに乗っているのはいつぞやの無人島で出会った少年、タスクだった。突然過ぎる再会に戸惑うアンジュだが、今はそんな場合ではない。そろそろ視力を取り戻した近衛兵が再び自分達に襲いかかってくる頃だ。
「それよりも今は早く乗って！　この国から脱出するよ！」
「わ、分かった。モモカ、行くわよ！」
「は、はい！」
アンジュとモモカ、二人が乗り込んだ事によりタスクのパラメイルは満員となる。早い所逃げなければならない状況だが、彼等にはまだ気掛かりが残されている。
近衛兵の包囲網の中、悠然と佇む蒼のカリスマ。命の恩人である彼をこのまま置いていいのかとアンジュは葛藤するが……。
「私の事はいいから、早くいきなさい。――アンジュちゃん」
「っ！　アナタ、まさか……」
彼の口からこぼれる口調にアンジュは蒼のカリスマが何者なのか理解する。此方の神経を逆撫でする様な丁寧語、まるで自分を子供扱いする様な態度、そんな風に自分に接してくる奴はアンジュの知る限り一人しかいない。
「こんの……バカにして！　今度会ったら覚悟しなさい！　絶対にブン殴ってやるんだからぁぁっ!!」
「ヒルダちゃんに宜しくねー」
憤慨したままミスルギ皇国を去っていくアンジュ達を見て、蒼のカリスマは呑気に手を振って見送った。……今この場に残っている者はミスルギ国民を除いて己一人、既に四方八方に近衛兵達に囲まれており、銃器で狙われている。
しかし、蒼のカリスマはそんな事など意に介さぬ様子で皇帝であるジュリオに声を掛けた。
「さて、これで私の役割の八割は終了しました。後は残った二割の対処をするだけですが……ジュリオ皇帝陛下、一応訊ねますが……このまま私達を見逃してくれるという選択は、ありませんかね？」

「……」
蒼のカリスマから放たれるその言葉にジュリオ皇帝からプチンと何かが切れる音が聞こえた。これはアカン。皇室に侵入してから見た事のないジュリオの表情に側に控えていたリィザはこれから起こる出来事に巻き込まれないよう距離を取った。
――自らの野望を打ち砕き、妹を逃がし、あまつさえ見逃せというテロリストに遂に神聖ミスルギ皇国の初代ジュリオ皇帝は遂に堪忍袋の緒が切れた。
「――ぶっ殺せぇぇぇぇっ!!」
最早品性の欠片も感じられない雄叫び、しかしこの時のジュリオに逆らう意志のない近衛兵達は命令のまま、目の前の仮面の男の抹殺を行う。
飛び交う強襲ヘリ、地ならしをしながら迫り来る装甲車、ミスルギ皇国の全兵力があつまりつつある中……。
「ふむ、やはりこうなってしまいましたか。此方としてはもう少し穏便に済ませておきたかったのですがね」
迫り来る装甲車が蒼のカリスマに迫っていく。
「正直、荒事は苦手ですが……アンジュちゃん達が逃げ切るまでの時間稼ぎは必要ですし――仕方ありませんね」
このまま押し潰してやる。装甲車に乗る近衛兵が丸腰の相手に愉悦に浸った瞬間……。
「――前蹴り」
蒼のカリスマを押し潰す筈だった装甲車は地盤ごとめくり上げられ、亀の様にひっくり返される。
目の前で起きたこの出来事に再び周囲の空気は凍り付く。誰もが目を剥かせる程目を見開く中で。
「では、少しだけ相手させて頂きましょうか」
仮面のテロリスト、蒼のカリスマはその仮面の奥で不敵に笑みを浮かべていた。

◇

◇月π日

アンジュちゃん達を何とかミスルギ皇国から逃がした翌日、現在自分はアルゼナル近くの海域に潜伏しています。

あの後どうにかミスルギ皇国から抜け出した自分だけど、いやーしつこかったねジュリオ君。あのしつこさは多元世界で見かけたカン＝ユーと似ている所があるよね。一度しか見かけてないけど。

しかしあの装甲車、思っていたより軽かったよな。もしかして機動性を高める為に軽量化もしているのかな？　だとしたらあんな簡単にひっくり返るのも頷けるけど……ねぇ。

幾ら重心をずらしただけとはいえ、あんな風になるなんて普通は有り得ないぞ？　個人的なイメージだが装甲車や戦車というモノは堅くて重いという印象があるからな。確かに軽ければ機動力もあるけれど、その為にちょっとした衝撃でひっくり返るとか、笑い話にもならない。

まぁ、そのおかげで自分もミスルギ皇国から逃げ切れたのだから別に良いんだけどね。

しかし、今後ジュリオ君の国はどうなるのだろう。流石にここまで失態を犯せばこの世界での発言力とかに影響出てきそうだし、あの様子では暫く落ち着いた政務も出来そうにないからなぁ。

つーか、ぶっちゃけジュリオ君てば皇帝の器じゃなくね？　個人の能力とかそういうの抜きで。

いやね、自分が抱く皇帝ってイメージはどうもジュリオ君とは合わないんだよね。これも自分の勝手なイメージだけど皇帝というのはもっと凄い奴だと思っているからさ。

かのシャルル皇帝とか。あの人も直接会ったのは一度しかないから何とも言えないけど、威厳は滅茶苦茶あったよね。後はトレーズさんとかかな？　あの人もカリスマ性は半端ないし。

ああ、ナナリーちゃんもかな？　可愛いは正義とか良く言ったものである。この理屈なら五飛君も納得するのではないだろうか？

……話がだいぶ逸れたので戻す。結局自分はミスルギ皇国のアケノミハシラには潜入する事は叶わず、アウラとエンブリヲの捜索は次回に持ち越す事になった。

取り敢えずそれまでにサラちゃん達と連絡を取ってコレまでの調査報告をしたい所なのだが……一体特異点はいつ開かれるのだろうか？　出来れば早めにして欲しいものである。

後はアルゼナルの司令官、ジルさんにもこの事を伝えた方がいいのかもしれない。彼女の企てるリベルタスなる計画にもアウラ奪還は必要になってきそうだからな。

とすると、今度自分がすべき事はサラちゃん達とアンジュちゃん達、二つの世界の反抗勢力を一つにするよう架け橋にする事かな？

難題だけど出来ないことはない。気持ちを強く持って積極的に行こうと思う。

その11

◇月α日

アンジュちゃん達を逃がし、アルゼナルの様子を見ようと以前訪れた無人島にやってきて一週間、現在自分は開かれたとされる特異点に向けて急行中である。

何故急いでいるのかというと、今回開かれた特異点の座標はアルゼナルの真上、どうやらサラちゃん達はアルゼナルの人達をアウラ奪還の為の最大の障害として認識した様なのだ。

このままではアルゼナルの人達もサラちゃん達のドラゴンもただでは済まない。お互いの敵がエンブリヲである以上、この戦いは何としても回避させる必要がある。今の自分ではドラゴン達に言葉は届かないと思われるが、こちらには協力者がいる。

以前治療した小型のドラゴン。自分の手当とその後の養生のお陰で元気になった彼女はドラゴン側の仲介者として自分の言葉を伝える役目を担って貰っている。

もし自分の考えている案が上手く行くならば、ドラゴンとアルゼナルの共同戦線が張れる事も難しくない筈、楽観的な考えは危険だが、そうなる様に上手いかせるのが自分の役割だと思っている。

……そろそろアルゼナルに着く頃だ。万が一の状況に備える為、自分はコレよりグランゾンと共にワームホールに突入。グランゾンの掌に乗せたドラゴンを解放し、先行しようと思う。

どうか、この行動が武力介入という物騒な事態に繋がらない事を切に願う。

◇

――――突然アルゼナル上空に開かれたシンギュラーポイント。ドラゴン側との世界が繋がれる扉が唐突に自分達の真上に開かれた事態にアルゼナルのノーマ達は慌ただしくも迎撃の用意を開始していた。

　嘗て無いドラゴンの数を前に基地の対空装備、パラメイル、メイルライダー、アルゼナルの全てを集結、総動員させてノーマ達は総力戦を開始、互いに接敵するまで後僅かとなった時、アルゼナルの基地司令部のオペレーターはある異変を感知した。

「し、司令！　アルゼナル上空に重力の異常数値を検出しました！」

「なんだと？　まさか、シンギュラーポイントがもう一つ現れるとでも言うのか！」

「ええ!?」

　アルゼナル司令、ジルの驚愕の叫びに隣に控えていた監察官エマ＝ブロンソンは信じられないと言う表情で絶句する。

　通常、シンギュラーポイントは一カ所しか開かないのが鉄則。これまでの事例からシンギュラーポイントは二つも開くことは無いとされてきた。

　だが、その常識が今破られようとしている。現時点でも手一杯の状況なのに更にドラゴンの波状攻撃を受ければアルゼナルは一溜まりもない。唐突に追い込まれた状況の中、司令官であるジルはある一つの決断を迫られていた。

（どうする。もし本当にシンギュラーポイントが開くのであればこのアルゼナルは確実に崩壊する。だが現在の状況でリベルタスを発動させても部下達を混乱させるだけだ）

　しかし、このまま何も対策を立てなければ全滅は免れない。ジルは前線が混乱する事を承知の上でリベルタスの発令を出そうとした……その時だ。

「シンギュラーポイント、開きます！　数は……一つです！」

「っ！」

オペレーターの言葉に司令部に緊張が走る。ドラゴン達が出現する門の他に黒い穴の様なモノが広がっている。その光景を目にした途端、パラメイルを駆るノーマ達やドラゴン達も突然の事態に混乱し、動きを停止させていた。一体何が起こるのか、誰もが緊張に支配される中……ソイツは現れた。

ソレは、一言で言うならば――――魔神。奈落の底、深淵より出るのは蒼を強調とした巨大な魔神。突然現れた存在にパラメイル隊は勿論、ドラゴン達ですら戦慄し、固まってしまっている。

動いたら狙われる。目を付けられたら殺される。そう思わせてしまうほどに禍々しい風貌をした魔神を前にその場にいる全員が何も出来なくなっていた。

そんな時だ。この海域にいる全ての者に聞こえる様に魔神から人の声が響き渡る。

『両陣営、そのまま動かないで下さい。突然で大変申し訳ありませんが、この場は私に仕切らせて貰います』

魔神から発せられたと思われる人の声、それも若い男性らしき声色にアルゼナル内にざわめきが起こる。突然現れて戦闘を止める魔神にドラゴン側とノーマ側は動揺していた。

さて、ここからどうしたものか。魔神――――グランゾンのコックピットでどう話を切りだしたら良いものかと仮面の男、蒼のカリスマは頭を悩ませる。

今ドラゴン達やノーマ達が止まっているのは突然グランゾンが現れている事に驚いているだけ、此方に戦う意志はないと知られれば再び彼女達は戦いを始めるだろう。そうなれば此方も武力介入をしなければならない。

早い所話を切り出さねば。そう思った時、グランゾンの通信回線に女性の声が入ってきた。

『此方アルゼナル司令、ジル。そこの蒼い機体に乗った貴様、貴様は何者だ』

疑惑と疑問に満ちた声、明らかに此方を敵視した声色だが、ジルという女性を知っている蒼のカリスマは待ってましたと言わんばかり

に彼女の通信に答えた。
　失礼のないよう注意を払いつつ、此方に敵意が無い事を伝えなければならない。一言一句間違えないよう気を付けて、正直に話すべきだと思い、まずは久し振りに会った気安さで話しかけようと蒼のカリスマ―――シュウジ＝白河は口を開いた。
『クククク……、お久しぶりですね。ジル司令官』
『その声は、まさか……蒼のカリスマか!?　一体なんの為にここに来た！　それに、その機体はなんだ！　何が目的だ！』
『私の目的、ですか？　それは以前にも言った筈ですよ。ドラゴン達との戦闘を停止させ、アウラ奪還の為に私達に協力して頂きたいと』
　蒼のカリスマの放つ言葉に両陣営に波紋が広がる。通信越しからでも聞こえてくる監察官の叫び声を音響に向こう側からの返事を待っていると、今度は別方向……シンギュラーポイントから通信が割って入ってきた。
　それもモニター通信。一体誰からだと訝しげに思いながら通信を開くと、鬼の形相をしたサラマンディーネが映り込み、同時に三機のパラメイルがシンギュラーポイントから姿を現した。
『……どういう事か、説明していただけますか？』
　低く、くぐもったサラマンディーネの声、殺気を押し殺し、敵意剥き出しで睨んでくる。彼女の当然の反応にシュウジは仮面の奥で眉を顰める。
　だが、これはこれでチャンスだ。何故パラメイルを彼女達が有しているのかは分からないが、ここを乗り切れば自分の目的が達成出来る。ピンチはチャンスだと自身にエールを送りながら、シュウジは彼女に説明した。
『勿論、その為にこの場を用意させて頂きましたからね。私の対談に是非アナタにも参加して欲しいのですよ。近衛中将、サラマンディーネ様』
『まるで、何もかもお見通しな言い方ですのね』
『まさか、私はそこまで万能ではありませんよ。知るべき事を知り、語るべき事を語る。私はただ全力を尽くすだけですよ。全てはアウラ

奪還の為に……ね』
『……良いでしょう』
渋々とした様子でも自身の話しに乗ってくれたサラマンディーネにシュウジはコックピットで小さくガッツポーズ。
『さて、話は聞いて貰えたでしょうか。ジル司令官、そろそろアナタ方にも答えを聞かせて欲しいのですが……』
『……良いだろう。席は此方で用意してやる』
『ご協力、感謝致します』
フンッと、明らかに不機嫌な様子で通信を切るジルだが、シュウジはよっしゃと声を漏らした。これでドラゴンとノーマ、二つの種族が同じ席に座り、話し合いの場を設ける事が出来た。
あとは自分の采配しだい。二つの陣営の仲を取り持つ為に、シュウジは気合いを入れ直し、サラマンディーネのパラメイルと共にアルゼナルへ降りたった。

その12

突然起こったシンギュラーポイントの発生。予報もなく、唐突に開かれる門とそこから現れる大量のドラゴン達。アルゼナルのノーマ達はドラゴンの軍勢を迎撃すべく、総力を挙げてこれに抗おうとした。

突然開始される総力戦、このままドラゴン達と交戦を開始されるかと思われたその時、黒く開かれた穴……虚空を思わせるその空間から突然一機の魔神がドラゴンとノーマ達の間に降りたった。

自らを蒼のカリスマと名乗り仮面を被った男はドラゴンとノーマ、二つの陣営に割って入り、戦闘の停止を要求した。

有無を言わさずの力押し、当然両陣営からは非難の声が上がったが、直接彼にその事を伝える者はいなかった。

恐れたのだ。その場にいる誰もが、突然現れた巨大な蒼き魔神に、禍々しくも荒々しいその風貌にドラゴン達ですらおののき、ノーマ達は反抗する意志すら出せなかった。

そんな圧倒的とも言われる魔神の迫力に呑まれてしまった両陣営はその事を悔しく思いながらこれを承諾、互いに代表格を選出したそれぞれの陣営はアルゼナルの会議室に集められる事になる。

ドラゴン側からはサラマンディーネと彼女の侍女であるナーガとカナメが、ノーマ側からは司令官であるジルとノーマ監察官のエマ＝ブロンソンが会議室に出頭し、会談は開始されようとしていた。

「さて、これで代表者は全て出揃った様ですが、サラマンディーネ様、特異点とドラゴン達についてですが」

「……特異点を通して此方に侵攻してきたドラゴン達は全て帰還しました。今頃はアナタが向かうよう指示した彼の者の手引きによって大巫女様方にも事情が伝わっている事でしょう」

「成程。賢明な判断、ありがとうございます」

「私の方も質問、宜しいですか？」

「私に答えられる範囲でならば」
　サラマンディーネから突きつけられる鋭い眼光、刀剣にも似た鋭い視線に晒されながらも、仮面の男は特に気にした様子もなく、彼女の視線を真っ正面から受け入れた。
「そもそも、何故アナタは私達の戦いに割って入ってきたのですか？
　アナタには直接的な介入を控えて貰っていた筈です」
「では逆に聞きましょう。アナタはノーマとの戦いを意味のない偽りの戦いと呼んでいましたが、その偽りの戦いを長引かせるのがあなた方の本意なのですか？」
「それは……」
　蒼のカリスマの言葉にサラマンディーネは口を閉ざす。彼女達が何よりも優先するのはアウラの奪還だ。エンブリヲを倒し、アウラを自分達の地球に取り戻させる為には立ち塞がる障害は排除、或いは回避していかなければならない。
　そして今、その最大の障害になりつつあるアルゼナルの勢力との衝突が避けられようとしている。ならばこの場はこの男に委ねるしか選択はないのかもしれない。個人の感情はひとまず置いておく事にして、サラマンディーネは近衛中将という責任ある立場の人間として今は静観する事を決めた。
「そっちの話は終わりか？　ならば今度は私の質問に答えて貰おう。蒼のカリスマ……いや、シュウジ＝白河だったか？」
「おや？　耳が早いですね。いや、その様子だとアンジュさん達から既に聞き及んでいた様ですね」
「正確にはヒルダからだ。何でもあの蒼い巨人はお前の所有物みたいじゃないか。一体アレは何なんだ？　そっちのドラゴン娘の反応を察するにアレはそちら側でもかなり特殊な機体の様だが？」
「その話は長くなるので出来れば後にして欲しいのですが……まぁいいでしょう。あの機体の名は〝グランゾン〟私の愛機であり、私の相棒です。動力やシステムについては、残念ながらお話する事はできませんのでご了承下さい」
　蒼のカリスマから語られる巨人の名称に両陣営揃って反芻する。

まるで物語に出てくる魔神の様だとサラマンディーネが畏怖した所で、再び蒼のカリスマが話を切り出した。
「さて、最初の質問はこんな所でしょうか。ではこれよりドラゴンとノーマの協力体制を敷くための会談を行いたいと――――」
「いい加減にしなさい！」
「Ｍｓ．エマ、何か質問が？」
「質問？　質問じゃないわよ！　一体何なのアナタ達は!?　ドラゴンとの協力体制!?　冗談じゃないわよ！　これは明らかに私達人類に対する反抗だわ！」
　まるで火山の噴火の如くはやし立てるエマ、隣に座るジルはそう言えばコイツもいたなと言うような様子で特に気にした様子もなく、煙草を咥えて火を付けた。
　このアルゼナルで唯一の人間として居座るエマ、彼女の役目は不審な態度や企みを目論むノーマ達がいないか監視し、報告する事である。目の前で堂々と人類への反抗を企てる彼等に遂に彼女の我慢に限界が訪れた。
　肩で息をし、ゼハゼハと呼吸を乱すエマ、そんな彼女の様子を見ていた蒼のカリスマは一瞬だけ思案し、彼女に向けて言葉を発した。
「……Ｍｓ．エマ、幾つかアナタに質問しても宜しいですか？」
「な、なんですか？」
「アナタはノーマを悪と断定しているようですが、何故ノーマは悪と見なすのですか？　何故、彼女達をこの世界の果てにまで追いやり、ドラゴン達と戦わせるのです？」
「はぁ!?　そんなの決まっているでしょう！　ノーマはマナが使えない反社会的で暴力的な化け物！　隔離されるのは当然じゃない！　ドラゴンと戦わせるのもノーマにはそれしか取り柄がないからよ！」
　まくし立てる様に言葉を吐くエマにジルは眉を寄せて不快感を顕わにする。また自分達と戦ってきた彼女達（ノーマ）の壮絶な事情、リザーディアからある程度の話を聞いていたが、自分達の予想を遙かに上回るノーマ達の境遇にサラマンディーネ達は同情と憐れみの籠もった眼でジルを見た。

「成る程、では何故このアルゼナルの存在を世間に隠しているのです？　そこまで断言できるのであればドラゴン達の存在やこの施設の事も公表しても構わないのではないのですか？」
「そ、それは……アルゼナルの存在は国家機密事項に関連するから」
「何故、国家機密にする必要があるのです？　公表すればいいではありませんか。ノーマを絶対の悪とするならば隠す必要もないと思いますがね」
　蒼のカリスマの指摘の通りこのアルゼナルの存在は公には公表されておらず、ノーマ達の収容施設があるとしか発表されていない。本当にノーマ達に非があるとするならばそう言った情報も開示できる筈。
　言葉を詰まらせるエマ＝ブロンソン、しかし彼の質問は終わらない。
「そもそも、あなた方はノーマを暴力的で反社会的な化け物と言いますが、どの辺りが化け物と言えるのです？　姿ですか？　在り方ですか？　私が調べた所によるとこのアルゼナルには乳幼児の頃に連れてこられる子が殆どだと聞いています。マトモに人格が形成されていない赤子を反社会的な化け物と称するにはあまりにもおかしな話だとは思いませんか？」
「そ、それはノーマが成長し、暴れられるのを防ぐ為で……」
「何故暴れると決まっているのです？　仮にそうなる事が決まっていたとしても、そうならない様に更正させるのがより完璧な社会と言えるのではないですか？　マナの光に満ちた人間の社会は完全に調和されているのでしょう？　ならばノーマというマナの使えない娘達に対して隔離以外の対処も出来た筈ではないのですか？　そもそもあなた方は――」
　そこから先は延々と続く蒼のカリスマの質問責めだった。次から次へと押し寄せてくる疑問の波に精神的に追いつめられたエマ＝ブロンソンの思考は追いつかなくなり、やがて混乱し、遂には泣き出してしまう。
「だってぇ、だってぇ、ぐす、パパが言っていたんだもん。ノーマは皆

悪い奴だから気を付けなさいって」
　そして最終的には幼児退行までしてしまう始末。度重なる質問と有無を言わせない蒼のカリスマの迫力に呑まれ、三歳児並みの思考まで落とされたエマ監察官はジルによって呼び出された医務官のマギーによって医務室へ連れて行かれていく。
「私とした事が少々大人気なかったかな？　しかしこれで少しは話が捗るでしょう。私達も話を続ける事にしましょうか」
　会議室から出て行くエマを見送り、邪魔者はいなくなったと暗に語る蒼のカリスマに両陣営のトップはドン引いた。その事に気付かず、青のカリスマは淡々と話を進め……。
「では、まずは私が集めた情報から開示する事にしましょうか」
　仮面の男を主軸にした会談は恙なく進行していくのだった。

◇

「ふぅ、これでひとまず情報は一通り集まったな。後はこれらをまとめて今後の行動を皆で話し合うだけだ」
　あれから数時間、一通りの話をし終えた自分達は現在これまでの情報をまとめる為に現在少しばかりの休息を取っている。
　ジル司令官もドラゴン側の話をアンジュちゃん達に伝える為に会議室から出てるし、サラちゃん達も自分達のパラメイルの所へ戻り、機体の整備点検をしている。今この会議室にいるのは自分ただ一人だ。
　本当なら自分もサラちゃんの機体の整備を手伝ってやりたかった

けど、彼女から強く断られてしまった。
「まぁ、仕方ないよなぁ、サラちゃん達から見れば俺ってばかなり勝手な事をしている厄介者だと思われてるだろうし……」
　実際、自分がやった事は前線を混乱に貶めていた。もし出てくるタイミングが遅かったら、ドラゴン側もノーマ側ももっと被害を出していた事だろう。
　けど、ああでもしなければ今頃両陣営は互いに殺し合いをしてお互いに大変な損害を被っていた事もまた事実だ。やり方は凄く強引だったかもしれないが、あの時の自分の行動は間違っていないと信じたい。
「……まぁ、こんな事を考えている時点で自己中だって認めてる様なモノだよなぁ」
　と、そんな風に一人反省会を開いていると、会議室のドア過が開かれる。サラちゃん達が戻って来たのかなと扉の方へ視線を向けると、そこから色とりどりの髪色をした女性達……というか、ヒルダちゃん達が会議室に押し入ってきた。
「よぉシュウジ、久し振りじゃん！」
「ヒルダさん、一週間ぶりですね。それと、今の私は蒼のカリスマとしてここにいます。名前を呼ぶのであれば其方の方で呼んで頂けると嬉しいのですが」
「はぁ？　……面倒くせぇなぁ、何だよそのキモい設定は」
「名というのは存在を顕すモノ、一種の自己暗示の様なモノです。名前を変え、姿を変える事により人は自分以外のナニカになれるモノなのですよ」
「……で？　結局何が言いたい訳？」
「要は形から入るだけで気持ちも変わるという事ですよ」
「ふぅん、まぁどうでもいいや」
　自分なりの変身というものを解説したらどうでもいいと切り捨てられました。まぁ、確かにどうでもいいけどね。
「それで、先ほどから其方にいるのは……もしかして、例の第一中隊の面々ですか？」

「ん、まぁそうなるかな。こっちの黄色いのがロザリー、銀髪のがクリス、あっちの四次元バストがエルシャでそこにいる青いのがアタシ達第一中隊の隊長、サリアだ」
　ヒルダちゃんの紹介に合わせて第一中隊の娘達は軽く会釈してくる。と言ってもエルシャさんやサリアちゃん位なんだけどね。マトモに目を合わせてくれるのは。
　ロザリーちゃんとクリスちゃんは……なんか怯えられてる？　脅すような事はしなかった筈だけど……何でだ？　サリアちゃんに至っては心なしか目をキラキラさせてこっち見てるんだけど、俺の気のせい？
「後はヴィヴィアンと痛姫……アンジュの奴がいるんたけど、今どっちも席を外しててさ、取り敢えずコイツ等だけ紹介しておく事にした」
「初めまして、エルシャです。なんでもヒルダちゃんの事を助けてくれたみたいで、素直じゃないヒルダちゃんに代わってお礼させて頂きますね」
「な、なぁヒルダ、ホントにコイツ大丈夫なのかよ」
「なんかこの人、すっごいヤバい感じがするんだけど……」
「大丈夫だって、コイツ、弱ってる私を襲わない位ヘタレな奴だから、こっちから仕掛けない限り無害さ」
　ピンク髪が特徴的な女性、エルシャさん。何だか母性的な人だ。話をしてみるとアルゼナルの子供達の面倒を見ているらしい。一言で現すと保母さんみたいな人だ。
　ロザリーちゃんとクリスちゃんは……相変わらずヒルダちゃんの後ろでヒソヒソ話しているし、つか内容聞こえてるし、何気に酷いこと言われてるし。ヒルダちゃんが説得（？）みたいなこと言ってるけど、効果薄そうだ……。
　なんか凹むなぁ、女の子に陰口言われるとこんな気持ちになるものなのか、そんなどうでも良いことを考えていると真剣な表情をしたヒルダちゃんが自分に声を掛けてきた。
「でさ、アタシ等一応司令から話を聞いたんだけど、あの話ってマジな

の？」
　ヒルダちゃんの言うあの話とは恐らくここで出し合った情報の事だろう。ドラゴンは実は人間で自分達はエンブリヲなる一人の男の策略に乗せられていた事、それらの事実を確かめる為に自分の所に来たのだろう。
「……ええ、全て事実です」
「そっか、……ねぇ、アンタはこれからどうするのさ、あのサラマンディーネって奴と一緒にエンブリヲとかいう奴と戦うのか？」
「そうですね。私はそのつもりでいますよ。エンブリヲという輩の考えはまだ計りかねていますが、いずれは彼の思惑を全て吐かせるつもりです」
「ふぅん。大人しそうな顔して意外と過激な事言うじゃん。アタシ、そういうの嫌いじゃないよ。アタシとしてもこの世界はぶっ壊してやろうって考えてたんだ」
　そう言ってヒルダちゃんは野生地味た獰猛な笑みを浮かべている。
……それにしてもこの世界を壊す、かぁ。
　ただ単に壊すだけならグランゾンと自分だけで事足りそうだよな。縮退砲をブッパすればそれだけで色々終わりそうだけど、それじゃ多分解決したとは言えないだろう。
　というか、個人的にそんな事はしたくない。この世界は確かに色々おかしいけれど、この世界だって地球である事には変わりないんだ。世界こそは違うけど自分も地球で産まれた以上、そういう手段は執りたくない。
　つーか、この世界にはあの親子だっているんだ。今どこで何をしているのかは分からないけど、あの親子が一緒にいる可能性がある限り、その手は最後の最後の最後の手段として扱いたいと思う。
　ヒルダちゃんはもう少し視野を広く持って貰いたい。言葉を選び、どうにか考えを変えて貰おうと説得を試みた時、アルゼナル基地全体に警報が鳴り響いた。
　警報と共に聞こえてくる音声、どうやら逃げ遅れたドラゴンが一頭ほど基地内に紛れ込んだらしく、サラちゃん達を筆頭に至急確保する

よう通達が届いてきた。
「ドラゴンが紛れ込んでいた!?」
「全員向こう側へ戻ったんじゃねぇのかよ！」
「ここで話をしても仕方ないわ。総員、ドラゴンの確保に向かうわよ」
「殺すんじゃないよ。銃の弾は麻酔弾に変更しときな！　それじゃシュウジ、また後でね」
そうヒルダちゃんは言い残し、第一中隊の娘達は会議室を後にする。
……タイミングを逃してしまった。ここで待っていても仕方ないし、自分もドラゴンの確保に向かうとするかな。
ヒルダちゃんの後を追おうと会議室のドアの前に立つ……その時だった。
「君かな？　私の事を嗅ぎ回っていた狼は」
「っ！」
「いや、狼というよりも魔人か。こんな怪物が存在するなんて、君のいたという世界は私の想像を絶する所のようだね」
背後から聞こえてくる聞き覚えのない男の声、自分以外いる筈のない存在に自分の心臓は一瞬高鳴った。
何故、どうやってこの部屋にいる。……いや、大事な事はそんな所じゃない。サラちゃんやジル司令官が敵対する〝大将自らがここへ乗り込んできたという事実〟それこそが自分にとって危惧すべき重要な事だった。
……向こうからしかけてくる様子はない。相手の呼吸や動作を注意しつつ振り返ると。
「初めまして、シュウジ＝白河。いや、今は蒼のカリスマだったかな？」
美しく長い金髪の髪、翡翠色の双眸から覗かせる憂いの色、まるで友人に会いに来た態度で声をかけてくる男。
間違いない。姿を見るのは今回で初めてだが、目の前のこの男こそ全ての元凶であると自分の勘がそう告げている。

一見紳士的に見えるコイツこそが。

「初めまして、Ｍｒ．エンブリヲ。アナタと会える時を楽しみにしていました」

その13

アルゼナル内部に設置されている会議室、本来なら対ドラゴンの為に使われる施設だが、現在この会議室は異様な空気に包まれていた。
仮面を被り、素顔を隠している男……蒼のカリスマは目の前の存在から目を逸らせずにいる。金の長髪、翡翠色の双眸、身に纏うスーツとその佇まいからかなり身分の高いと思われる男、この男こそがノーマとドラゴン、二つの陣営から敵視される元凶だと蒼のカリスマは察した。
エンブリヲ。サラマンディーネ達からアウラを奪い、この世界に利用した張本人。元凶が自ら乗り込んできた事に驚きながらも蒼のカリスマ――――シュウジは冷静に己を保ち続ける。
「私に会うのを楽しみにしていた……か。それは私の台詞でもあるな。魔神を駆る魔人よ。君との出会いは私にとっても大きな意味合いを持っているのだから」
「それは光栄……とでも言えばいいのかな？　楽しみだとは言ったけれど、生憎此方はアナタとお茶を楽しむつもりはないのだけどね」
「それはつれないな。君との談笑しながらのティータイムはとても有意義になりそうだと思ったのだがね」
シュウジの言葉にどこか面白いと思える所があったのか、エンブリヲは己の額に指を当てるとクスリと笑う。
女性は疎か男性すら魅了するであろう彼の者の微笑み、しかしシュウジにはエンブリヲのその笑みが何よりも不気味に見えた。
……笑っていないのだ。目の前の男は、現に薄ら笑みを浮かべているのにシュウジには何故か笑っている様には見えなかったのだ。
――――おぞましい。一言でエンブリヲという男を現すにはこれほど的確に表せる言葉はないと、シュウジは半ば確信する。まだ出会って五分も経っていないのに、シュウジは本能的に目の前の存在がどういうモノか理解出来たような気がした。
そして、その事を察したのかエンブリヲはその笑みを更に深く、濃

くさせる。
「流石だ。これだけの逢瀬で私の存在をそこまで正しく認識出来るとは、やはり君は素晴らしいよ。知識に長け、知略に長けた君こそが私の相方に相応しい」
「……あぁ？」
「単刀直入に言おう。蒼のカリスマ――――いや、シュウジ＝白河、私の友となれ。君と私、ラグナメイルと魔神の力を持ってすれば世界の創り直しは最早成ったも同然だろう」
　唐突に手を差し伸べて友になれと口にするエンブリヲにシュウジは仮面の奥で面食らい、思わず素に戻ってしまう。けれどすぐさま我に返った事で状況を正しく認識したシュウジは警戒心全開で訊ねた。
「……それは、アナタの下に降れ、という意味か？」
「いいや。友、と言ったのだよ。私達は対等になれる間柄だ。共に助け合い共に支え合う。人間が他者と解り合う際に築く人間関係、それが私が君に求める関係だ」
　笑顔を浮かべて両手を広げるエンブリヲ、彼のその態度に悪意は感じない。恐らくこの男は本気でシュウジと友達になりたいと考えている。
　そもそも世界を創り直すという事はどういう意味なのか。仮にそんな事が可能だとしてもそれを実行できるこの男は……一体何なんだ。
「創り直し、か。それは言葉のままの意味か？　それとも……単なる言葉遊びか？」
「無論、そのままの意味だよ」
「大それた事を言うものだ。この世界にはまだ人が大勢住んでるってのに……神になったつもりか？」
「そんな陳腐な表現は好きではないな。私は創造主、世界の音を整える調律者なのだよ」
　どっちも似たようなものじゃねぇか。と、シュウジは内心そう零す。自ら創造主と名乗っている奴に限って碌な奴がいない。多元世界を通じてその事をイヤという程理解しているシュウジは仮面の奥

でエンブリヲに対する警戒レベルを引き上げる。
「悩んでいるようだから返事を聞く前に……何故私が世界を創り直そうと思い立った経緯から話すとしよう。なに、時間は取らせない。すぐに済ませる」
「っ!?」
そう言ってエンブリヲがパチンと指を鳴らした瞬間、部屋の様子が一変する。周囲が全天モニターの様に広々とした空間となり、至る所から景色が広がっていった。
映し出されているのは以前シュウジがサラマンディーネ達の世界で見た戦争の映像、ドラゴニウムという画期的なエネルギー資源を見つけておきながら戦争の道具としか使わなかった人類にエンブリヲは嘆きと怒りの表情で当時の出来事を語った。
「人間は愚かしい生き物だ。それが誤りだと知っても、尚他者から奪おうと必死になる。他者より強く、他者より先へ、他者より上へ！そうして膨らんでいった人間の欲望の前に遂に世界の方が限界を迎えた」
その言葉と共に映し出されたのはラグナメイルと呼ばれるパラメイルのルーツとなった機体による世界の破壊だった。このままでは人類は滅んでしまうと危惧したエンブリヲは新たな地球と新たな人類を創る事で人類の救済を行おうとした……らしい。
「他者から奪わなければ気が済まないというのなら、奪う気にならないほど与えればいい。文化、文明、そしてエネルギー、尽きることのない資源を前に人類は今度こそ繁栄の道を築いていくのだと思っていた」
だが、人間は堕落してしまった。与えられてきた事で与えられる事を当たり前だと思いこんでしまった人類は思考する事すら放棄し、ただ命令のまま、言われるがままに動く人形に成り下がってしまった。
そう語るエンブリヲは心底人間に怒りを覚え、憎悪の表情をしていた。創造主と名乗る割には感情表現が豊かな奴だなと、そんな事を考えながらシュウジはエンブリヲの言葉に耳を傾けた。
「どうしようもない。あぁ、つくづくどうしようもない種族だ。人間

と言うものは、だから私は決めたのだ。今のこの世界を壊し、新しき世界を創り出すと」
「だから、壊すのに私の力が必要だと？」
その通り。そう示すかの様にエンブリヲはシュウジに手を差し出す。恐らくは握手を求めているのだろう。世界の破壊と再生、それにより生み出される新たな人類。まるで神話の話を聞かされる事になるとは思わなかった。自分がその片棒を担がされる事になる事も……。
「……幾つか質問をさせて欲しい。何故ノーマという存在が産まれてくる？　マナと言うエネルギーが使えないからといって、何故ノーマ達を差別対象として処理させる？　アンタが本当に調律者って言うのなら、その程度の問題は簡単に解決出来るんじゃないのか？」
例えば、ノーマは差別対象としてではなく、侵略者であるドラゴンと戦う為に選ばれた特別な存在だとマナを通して人々に刷り込ませれば少なくともノーマの差別問題は無くなり、反抗しようと目論む人達は劇的に減るだろう。
だが、この男はそうはしなかった。ノーマを絶対の悪として人々に刷り込ませ、差別し、赤子であろうとも容赦しない。そんな社会に仕立て上げた。
シュウジはエンブリヲなる男の本質を〝理解した上で問いただした〟何故ノーマをそこまで差別するのか、返ってきた言葉は……。
「当然だろう。ノーマは嘗て自ら滅びを選んだ愚者達の血を引いた化け物だ。猿以下の知性しか持たない劣等種を何故人間社会に溶け込ませる必要がある？」
「……そうかよ」
あぁ、やはり。エンブリヲの何気ない――――けれど、この上ない本心の言葉を耳にした瞬間、シュウジの疑問は確信へと変わった。
「さて、そろそろいいだろうか。君の話を聞かせて貰おう」
まるで自分の答えは分かり切った様な、確信した表情で見つめてくるエンブリヲにシュウジもまた仮面の奥で笑みを浮かべてくる。
差し伸べた手、これを握れば晴れて自分は創造主と対等、友になる

事が出来る。シュウジはエンブリヲの差し出した手に手を伸ばし……。
「ふざけんじゃねぇよ」
　その手を、思いっ切り払いのけた。弾かれた自身の手を見つめるエンブリヲの表情は驚きに目を見開かれている。創造主の素直すぎる反応にシュウジは仮面の奥で吹き出した。
「人間は猿以下の知性しか持たない？　ノーマは化け物？　サラちゃん達からアウラを奪っておきながら良くもまぁそんな台詞が言えたモノだな」
「なん……だと？」
「しかもお次は自分の手で人間を創っておきながら自分の思い通りにならないからまた壊して一から作り直すときたもんだ。……なぁ、お前自分で言ってて気付かないのか？　そういう所ってお前が嫌う人間と全く一緒って事によ」
「っ!!」
　シュウジの言葉が逆鱗に触れたのか、エンブリヲの表情が憤怒に染まる。余程怒りを覚えたのだろう。自ら憎んでいる人間と同じと言われ、エンブリヲの手にはいつの間にか銃が握りしめられている。
「……そうか、残念だよ。君と一緒ならより良き世界を作れると思ったのだがね」
「世界って言うのは誰かに創られるモノじゃないだろ。ましてや、自分の都合の通りに世界を創ろうだなんてそんな事単なるガキの戯言だ」
「はっきり言わせて貰うぞ。エンブリヲ、お前は調律者でも創造主でもない。ただ自分の思い通りにならなくて喚いて駄々を捏ねているガキそのものなんだよ」
　シュウジがそう言い切った瞬間、会議室に銃声が響いた。

◇

ドラゴンの出現、その報せに驚く事になったノーマ達がサラマンディーネという協力者と共に総員でドラゴンを探し回っていた頃、二人の少女が会議室に続く通路を歩いていた。
「ね、ねぇロザリー、本当に良いの？　いきなり押し掛けるなんて事して」
「大丈夫だって、ヒルダが言うにはアイツ、相当なヘタレっていうじゃん。別に殴り込みに行く訳じゃないんだ。あの仮面の下にある面を拝んだらズラかるよ」
「で、でもさ……」
「大体さ、素顔を晒さない様な奴を信じられるかっての、ヒルダもなんかやたらとドヤ顔でアイツの事話すしさ、腹立つったらないよ。クリスもそう思うからここまで来たんだろ？」
「そ、それは……」
「なぁに、見せてくれないってんなら少しだけ脅かせばいいだけの事さ、あの化け物みたいな奴を飼ってても飼い主まで化け物とは限らないんだ。日頃ドラゴン共と殺し合ってたアタイらだ。今更仮面ぐらいでビビるかよ」
「う、うん……そうだね」
押しの強いロザリーにクリスは根負けし、彼女に合わせる事で納得した。個人的にはあまり拘わらない方がいいと思うクリスは良い意味でも悪い意味でも思いやりのある娘だった。
そうこうしている内に二人は会議室の前へとたどり着く。誰かが来ている様子もなければ出て行っている事もない。蒼のカリスマと名乗る仮面男はこの中にいる。そう確信したロザリーは悪戯小僧の笑みを浮かべる。
「こういう時は最初が肝心だからなぁ、ゴラァ！　って位の勢いで行

くよ。へへ、あのすかし野郎、ビビってチビったりしてな」
「うん。泣き叫び、許しを請うくらいに、徹底して追い詰めてやろう」
すっかりロザリーに同調したクリスも彼女以上の凄惨な笑みを浮かべる。凄みのあるクリスの笑みに若干引きながらも、いよいよ突撃だと扉に手をかけた――――

『猛羅――総拳突き!!』

瞬間、会議室だった部屋は爆散し、壁が砕かれる。砕かれた壁から人の様なモノがすっ飛んでいき、次の瞬間にはアルゼナルの通路に暴風が吹き荒れる。
吹き荒れた暴風に髪をグシャグシャにされるロザリーとクリス、けれど二人に髪を直す余裕などあるわけがなく、顔を青ざめてガクガクとふるえていた。
何故なら、そこにいるのはヒルダの語るヘタレなどではなく……。
「今のは、お前の都合で母親から引き離されたノーマ達の分だ。この程度で終わると思うなよ。覚悟しろ。エンブリヲ!」
あの魔神にも等しい位におっかない魔人が会議室の中から姿を現し。
その姿を見た時、二人の足下には黄色い水溜まりが出来ていた。

その14

「しっかし、まさかヴィヴィアンがドラゴンだったとは……」
「はい。驚きでした」
　アルゼナル上層部。緑が生い茂げ、鉄と硝煙の匂いがしない開けた自然の土地。ドラゴン騒動でアルゼナル総動員で探していたドラゴンの正体にアンジュや他のノーマ達は皆信じられないといった様子で全裸で眠る少女を見下ろす。
　そんな彼女をマギーが抱き抱え、担架に乗せると医療班と共に医務室に向かう。そんな彼女達を見送りながら、ドラゴン側の代表であるサラマンディーネがアンジュとモモカの所へ歩み寄る。
「これで、私達の話は信じて貰えたでしょうか？」
「まぁ、間近でドラゴンが人間になる所を見せられたら……ね」
「じゃあ、私達は人間相手に殺し合いをさせられてきたの？」
　遺伝子操作の話やサラマンディーネ達の世界の話が事実である事に探索に来ていたエルシャは愕然とした様子で俯く。驚いていたのは彼女だけではなく、探索の為にその場に来ていたノーマ達全員が人同士の殺し合いにまんまと利用されていた事実に驚き、戸惑い、困惑していた。
　けれど、自分達が戦っていたのが人類を守る為でない事に次第に彼女達の内側から言い現せない怒りがこみ上げてきたのも、また事実だった。
「しかし、解せません。何故この星の民が我らの星の歌を知っているのです？」
「歌って、永遠語りの事？　この歌は私がお母様から送られた代々ミスルギ皇国に伝わる歌よ。それがどうしたの？　まぁ、確かにドラゴンのヴィヴィアンが元に戻った事は不思議に思ったけど……」
「その歌は嘗てエンブリヲが残したモノ、我々の世界を破滅に追いやった元凶の一つですわ。そしてそれはラグナメイルの本来の力を

引き出す鍵でもあるのです」
「なん……ですって？」
サラマンディーネから突き付けられる新たな事実、自分の歌声が嘗て自分達の世界を滅ぼしたと語るサラマンディーネにアンジュが驚愕した時、突然アルゼナル全体に強い衝撃がはしる。
まるで地震の様に揺れ動く基地にアンジュ達はバランスを崩し、その場に倒れた。
「何事か!?」
唯一衝撃に耐え、踏みとどまったジルが司令部にいるオペレーターに状況報告を促した。
『アルゼナル三階から衝撃音と爆発音が感知！　恐らくは会議室が発生源だと思われます！』
「何だと!?」
オペレーターからの報告にジルの表情が険しくなる。今会議室にいるのは蒼のカリスマただ一人、ジルはこの爆発か彼が起こしたものだと確信し、側にいる部下達に銃器を持たせて一緒にいる事を命じた。
一体何が起きているのか、事態を把握仕切れていないアンジュ達はサラマンディーネ達と一緒にジルの後に続くのだった。

◇

砕けた壁、崩れる会議室、整備された通路には幾つもの皹や亀裂が入り、頭上からはパラパラとコンクリートの破片が降り注いでくる。
壊れた壁から這い出てくるのは仮面の男蒼のカリスマ、ヒルダからはヘタレと言われているその男は仮面越しでも分かる程に怒りをた

ぎらせていた。
　まるで魔人。唯でさえ異質な風貌に怒りが合わさった事により更なる恐ろしさを際だたせる。どこがヘタレだよ。幽鬼の様にゆらりと通路を歩く蒼のカリスマを見て、ロザリーはヒルダに内心で愚痴をこぼす。
「ロザリーさん、クリスさん」
「っ!?」
「ひゃい!?」
「今すぐ、ここから離れてサラマンディーネ様とジル司令官に伝えて下さい。エンブリヲが来たと」
「え？　エン……鰤？　魚がどうしたって？」
「早く！」
「「ひっ!?」」
　突然掛けられる言葉と伝言、状況が合わさって未だ混乱の縁にいるロザリーとクリス。しかし蒼のカリスマには詳しい事情を話す余裕がないのか、凄まじい剣幕で早く行けと命じる。
　言われるがまま、彼の剣幕に呑み込まれた二人は目尻に涙を溜めて逃げるようにその場から立ち去っていく。これで良い。蒼のカリスマ――シュウジは尻目に二人を見送り、次の瞬間には目の前の瓦礫に意識を向けた。
　砕けた壁、崩れ落ちる瓦礫、自分の放った拳によって吹き飛んだエンブリヲは未だそこから出てきていない。
　手加減はしていない。手応えも確かに感じた。しかしこの程度で終われる相手ではない事をシュウジは本能で理解している。エンブリヲの動きを見逃してはならないと注意深く瓦礫を睨んだ――その時だ。
「まさか、銃弾より速く動けるとはね。驚いたよ。君の身体能力は既に私の知る人類を超越している」
「っ!?」
　横から聞こえてきたエンブリヲの声、そんなバカなと目線で振り返った時、既に自分のコメカミに銃口を突きつけたエンブリヲが勝利

を確信した笑みで佇んでいた。
「だが、この距離ならば外しはしない。さらばだ。蒼き魔人よ」
そう言ってエンブリヲは引き金を引き絞る。距離的には絶対に外しようのないこの瞬間、シュウジの脳内麻薬は勢いよく分泌され、その思考速度と反射能力を加速度的に高める。落とされる撃鉄、放たれる銃弾、銃身を通して発射される鉛玉、そこまで至る一連の動作をスローモーションの様に体感したシュウジは体を捻り、回転させる事で一瞬に勝る刹那の時を回避してみせた。
そしてその刹那の合間にエンブリヲとシュウジの視線が交差する。信じられないモノを見ているように大きく目を見開くエンブリヲとシュウジ、永遠とも思える時間の中で先に動いたのは……シュウジの方だった。
「ゼァッ！」
「ごがっ!?」
床に手を手を着いて、回転した勢いのままエンブリヲの腹部を蹴り飛ばす。血の混じった吐瀉物をまき散らしながら吹き飛んだエンブリヲは壁を粉砕し、その向こう側まで飛んでいく。
先の経験でエンブリヲを見失ってはならないと直感的に悟ったシュウジは体勢を整えてすぐさま壁の向こう側へと走り抜ける。
崩れた壁の向こうに広がっていたのは食堂と思われる場所だった。開けた敷地、更向こうには海が一望できるテラスがある。こんな状況でなければ一休みしたい所だが……。
「まさか、あの距離ですら避けてしまうとは……君は本当に人間かい？」
再び横から聞こえてくる声、またかと思いつつ目線を向けると、階段の上に佇むエンブリヲが呆れた様子でシュウジを見下ろしていた。
ゆっくりとした様子で階段から降りてくるエンブリヲ、その姿と姿勢から全くダメージらしきモノを受けていない。恐ろしく打たれ強いのかと最初は思ったが、それだけではあの瞬間移動の説明にはならないし、蹴り飛ばした筈の腹部になんの痕跡が見あたらないのもまた不自然だ。

まるで最初からそこにいたように、気配すら感じさせずに間合いに入ってくる。相手がガモンや不動レベルの相手だというなら話は別だが、エンブリヲにはその移動した形跡すら存在していない。
「シュレディンガーの猫？　いや、どちらかと言えば存在が不安定と言えばいいのか？　クソ、学のない自分が悔しいぜ」
「ほう？　まさか初見でそこまで私の本質を見抜くとは、流石だと言っておこう。やはり君は聡明だ。どうだね？　先程の非礼を詫びるのなら君を友として迎えるのも吝かではないのだが？」
「友ってのは対等な立場じゃなかったのかよ」
自ら優位な立場にいる事を絶対と信じて疑わないエンブリヲの勧誘にシュウジは皮肉で以て答える。遠まわしな言い方の分知的であるエンブリヲには効果的だったのか、彼の眉間に皺が寄る。
しかし、状況的に不利なのは変わらない。相手の手の内が分からない以上、迂闊に仕掛ける訳にもいかない。だからといってこのまま後手に回っていてはいずれ奴の瞬間移動で殺される。
どうにかこの状況を変えなければとシュウジが思考を重ねた時、階段側の通路から見知った顔ぶれが現れた。
「ちょっと、何なのよこの騒ぎは」
「こっちからスゲェ音したぞ」
「あ！　アンジュリーゼ様！　いました！　カリスマさんがいましたよ！」
金と黒と赤、それぞれ特徴的な髪色を持つ少女達が食堂に足を踏み入れた。既にここは戦場と化しているというのにそうとは知らずに入ってくる少女達にシュウジは素の状態で声を張り上げる。
「来るんじゃない！　アンジュちゃん、ヒルダちゃん、すぐにここから出て行くんだ！」
「はぁ？　何よいきなり大声だして……」
「ていうか、ちゃんって……」
普段の敬語とは違う素の状態のシュウジに二人は困惑する。そんな彼女達を見て、エンブリヲの表情に笑みが生まれた。
「成る程、君がアンジュリーゼか。ヴィルキスを動かした特異な存在、

君にも会いたかったよ」
「――――え？」
　呆然となるアンジュの前にエンブリヲが現れる。瞬間移動の如く転移するエンブリヲに反応できなかったヒルダとモモカもアンジュ同様に呆然となっていた。
　時が止まるというのはこういう事かもしれない。誰もが突然現れた金髪の男に思考が止まった時、唯一シュウジだけが反応してみせた。
　それはエンブリヲの瞬間移動に反応したという事ではない。エンブリヲという存在の思考を読み、次に奴が何をするか予測し、事前に体を動かしていたのだ。
　思考の先読み、この短時間でエンブリヲという存在がどういうモノなのか、ある程度理解した上で可能となる代物。
　アンジュに触れようとしているエンブリヲの手、その手を阻もうとシュウジはエンブリヲの手首を掴み取る。
　次いで、残った手でエンブリヲの首を掴んだシュウジはそのまま壁に叩きつけ、エンブリヲの身動きを封じた。
　そこまでの動作を瞬間的に見せつけられたアンジュ達は当然驚愕に目を見開いた。
「え？　え？　ちょ、何なのよいきなり!?」
「てかそいつだれ？　どこから湧いて出やがった？」
「二人とも、悪いが説明は後にして欲しい。兎も角今はジル司令官とサラちゃん達を呼んでくれ、出来るだけ早く」
　二人の疑問に答えられる程、今のシュウジに余裕はない。もしエンブリヲがシュウジの予想通りの存在だとするならば、ここで奴を手放す事は二人を危険に巻き込む事にも繋がるからだ。
「な、成る程、こうして私に干渉し続ければ、私の転移は防げると、そう思ってのコレか」
「あぁ、お前が〝どこにでもいてどこにでもいない〟というのなら、〝ここにいる〟という事実で固定しちまえばいい。我ながら拙い作戦だが、間違ってはいないみたいだな」

「あぁ、及第点と言っておこう。しかし――――」
シュウジの手の内で微笑むエンブリヲ、この状況の中でどうして笑っていられるのか疑問に思った時、シュウジの背後から衝撃が伝わってきた。
軽く、けれど冷たい重さ。一体何だと振り返った時。
「モモカ？　何を……しているの？」
包丁の柄を手にしたメイドがシュウジの背中に寄りかかっていた。突然自分の従者の奇行に困惑するアンジュだが、顔を上げて光の無い彼女の眼を見た時、シュウジだけは彼女の身に何か起こっているのか理解した。
「エンブリヲ、テメェ、まさか！」
「言った筈だよ。シュウジ＝白河、この世界の人類は私が創ったものだと。創造主が自ら創り出したモノを扱えないという道理はあるまい？」
「何が創造主だ。この、ペテン師が！」
首を絞めたまま、シュウジはエンブリヲを投げ飛ばす。床に叩きつけられ、受け身も取らなかったエンブリヲだが、次の瞬間には投げつけられた隣の位置で姿を現していた。
やはり、自分の見解は間違ってはいなかった。沸き上がる痛みに堪えながらも、シュウジはエンブリヲから目を逸らさなかった。
「モモカ、アナタ、一体何をしているの!?」
「へ？　あ、あれ？　私は……一体」
「シュウジ！」
アンジュに触れられた事で意識を取り戻したメイド、しかし次の瞬間、目の前の背中に突き刺さっている包丁を見て、彼女の表情は一瞬にして真っ青になる。
「人の意識を無断で乗っ取るとか、トコトンやり方がガキ臭いな、創造主とか聞いて呆れるぜ」
「そうかな？　では次はとある母子でも使うとしようか？　児戯は児戯らしく、楽しく戯れるとしようか」
母子、その言葉を聞いて浮かぶのはシュウジが最初に出会った人達

だった。お腹を痛めて産んだ母、ノーマであろうとその子を守ろうと必死になって闘っていた母、そんな彼女を今のメイドの様に〝使う〟と目の前の男は言ってのけた。
「この、腐れ外道がぁ！」
シュウジの中で怒りのボルテージが上がっていく。それすらも楽しみだと言うようにエンブリヲの顔には笑みが浮かんでいる。
明確に殺意を抱くシュウジ、拳を固く握り締めてエンブリヲに向かって感情のままに殴りかかろうとするが。
『こちらは、ノーマ管理委員会直属国際救助艦隊です。ノーマの皆さん、本日もドラゴンとの戦いご苦労様でした』
突然、アルゼナル全体にアナウンスが流れ始める。ここへきて人間達の介入に戸惑うシュウジだが、エンブリヲだけは彼等の意図を知っているのか、やれやれと言った表情で溜息を漏らした。
「やれやれ、無粋なものだ。やはり人間というモノは愚かしい。創った所でその辺りは変わらんか」
「……テメェが創ったんだろうが」
シュウジの怒りの籠もった皮肉、しかしエンブリヲには聞こえていないのか痛みに耐えるシュウジを鼻で笑いながら、もうここには用はないと言うように彼等に背中を向ける。
「舞台の第一幕は降りた。次は第二幕と行こう。シュウジ＝白河、次は君の魔神の力を見せて欲しい」
そう言ってエンブリヲは掻き消える様に姿を消し、そこには静寂だけが生まれていた。アンジュとヒルダ、そしてモモカが今まで起きた出来事に理解出来ず混乱する中で……。
「――――上等だ。そんなに見たいなら見せてやるよ」
シュウジ＝白河は仮面の奥で怒りを燃え盛らせていた。

その15

アルゼナル近海、国際救助艦隊旗艦エンペラージュリオ1世。艦隊の中央部分に位置する巨大強襲揚陸艦のブリッジ、そこには神聖ミスルギ皇国の皇帝、ジュリオ＝斑鳩＝ミスルギが愉悦な笑みを見せて目の前に浮かぶ孤島アルゼナルを見つめていた。

「フフフ、漸くこの時が来たか。目障りなノーマ達を駆逐するこの時が。待ってろよアンジュリーゼ、もうすぐお前の首を落としてやるからな」

皇国で起こったアンジュリーゼの処刑失敗の事件。これによりミスルギ皇国の皇族達の威厳はますます地の底へと転落し、世界に対する発言力を失ってしまった。何とかしなくてはと内心焦るジュリオは、とある会議において自身の汚名を返上できる切っ掛けを得ることになる。

〝今の世界を壊し、新しい世界を創造する〟　自ら憧れるエンブリヲの言葉に感銘を受けた彼はそこで行われていた国家間の会議に自らその先兵になると名乗りを上げる。

今の世界を壊す。それは即ちノーマ達の存在を抹消する事だと信じて疑わないジュリオはすぐさまアルゼナルに向かう為の艦隊を編成する。選りすぐりの人員と艦、無数の無人機を搭載したこの艦隊に死角はない。今すぐにでも消してやりたい衝動を抑えながらアルゼナルの反応を見ていた時。

「アルゼナル、応答ありません」

「対空兵器の起動を確認しました！」

「ふん、野蛮な猿共め、此方が平和的に解決してやろうと言うのに……愚かな事を」

そう口にするジュリオの表情は先よりも深く、そして歪んでいた。アンジュリーゼと蒼のカリスマ、二つの存在に己の自尊心を深く抉られている彼の目には最早自身の汚名を返上する為の手柄しか映っていない。

哀れな。彼の隣に控えるリザーディアは自らの目的の為に利用し

てきたとはいえ、自ら貶めている事にも気付いていないジュリオに憐れみの視線を送っていた。
　そんな彼女の視線にも気付かず、ジュリオは艦隊に命じる。人類に対して反逆行為を行うノーマ達を粛正せよ、と。

◇

「も、申し訳ありませんカリスマ様！　私、何とお詫びを申したらいいのか……!!」
「いえ、アレは仕方のない事です。モモカさんに非はありませんよ」
　アルゼナル食堂、ノーマ達が食事を摂取する際に使われる開けた空間。エンブリヲがいなくなった事で静まり返っていた空間にアンジュの筆頭侍女であるモモカの咽び泣く声が響く。
　そんな彼女に非はないと自分なりのフォローを口にする蒼のカリスマことシュウジは現在ヒルダの手によって応急処置を受けていた。
「これで、一応止血は出来たけど、あんま無茶な事すんなよ。アタシの応急処置は所詮治療班の真似事だ。あのエンブリヲって化け物とやり合った時の様な滅茶苦茶な動きするとあっという間に傷が開くからな」
「えぇ、心得ていますよ。ありがとうございますヒルダさん。治療してくれて感謝します」
　意識を失ったモモカによって負傷したシュウジ、幸い咄嗟に〝内臓上げ〟という秘技を用いて臓器の損傷は回避した為、致命傷は受けていない。唯一問題だった出血もヒルダの手によって食い止められた為、シュウジの生命活動には何の支障ももたらされていない。
　しかし、それでもやられた事に変わりない。まだ年端のいかない少

女の意識を奪うエンブリヲのやり方に憤りを感じるシュウジだが、今は怒りに身を任せる時ではない。自分の治療が済んだ事で今まで黙っていたアンジュが口を開いた。
「ねえ、そろそろ教えてくれない？　あのいけ好かないナルシストの事、何の目的でここに乗り込んで来たの？　それに、一体モモカに何をしたっていうのよ！」
　怒りを滲ませた表情で問い詰めてくるアンジュにシュウジは素直に答えた。最早奴はノーマやサラマンディーネ達だけの敵ではない。多くの人にエンブリヲに関する情報を共有して貰う意味も含めて、シュウジは三人に事情を説明した。
「アンジュさんの言うナルシスト、恐らく……いや、間違いなく奴こそがエンブリヲと呼ばれる存在です。目的は私を、より正確に言えばグランゾンを狙った行動かと思われます」
「アイツが、エンブリヲ!?」
「この世界を造り、ノーマを追いやった張本人！」
「しかも、奴は恐らく時間や空間といった事象に干渉出来る力を有している。そしてこれは推測ですが、奴はマナを扱える全ての人間を支配下に置けるのだと私は考えます」
「っ!?」
「そんな、嘘でしょう？」
「残念ながら、ほぼ間違いないでしょう。事実、彼女が私を背後から刺した時、彼女に意識や意志を感じる事はありませんでしたので」
　シュウジの口から出てくる最後の言葉にアンジュとモモカは驚愕に目を見開く。特にモモカに至っては誰とも知らない人間に好き勝手操られ、人を刺してしまった事に酷く怯えてしまっている。
　しかもエンブリヲのあの様子ではいつどんな時でも人間達を操れると言った風な態度を取っていた。恐らくはそれも事実なのだろう。またいつ操られるか分からないモモカは自分の意識が他人によって乗っ取られる恐怖に苛まれてしまう。
「アンジュリーゼ様、私、私は……」
「大丈夫よモモカ、アナタは私が守るから」

怯えた様子で自身を抱き留めるモモカにアンジュが抱き包む。自分の侍女は私が守る。そう自分に言い聞かせるアンジュと彼女の温もりに包まれて少しばかり安心した表情を見せるモモカ、抱き合う二人に何か思う所があるのか、シュウジは一瞬思案すると、脳内で再びある仮説を立てた。
「……モモカさん。怯えさせてしまった所申し訳ありませんが、今は何ともないのですか？」
「え？　あ、はい。アンジュリーゼ様のお陰で……何とか落ち着きました」
「ノーマ……成る程、となると何故エンブリヲがノーマを隔離しようとしたのか、少しばかり理解できますね」
「おい、何一人で納得してんだよ。なにか知ってんなら教えろよ」
一体何に気付いたのか、一人でうんうんと唸るシュウジにヒルダが問いただす。
「あぁ、いえ。そんな難しい話ではありません。モモカさんの言うとおり、今彼女が正気を保っていられるのは他ならぬアンジュさんのお陰という事ですよ」
「あ、あぁ？」
「マナという高度情報ネットワークによって構築された社会。そのマナは人の思考……つまりは脳にまで干渉を受け、他者と意志疎通し、物を浮かせたり、情報を共有し合ったりしている。ここまでは知っていますね？」
「え、えぇ……」
「そしてあのエンブリヲにはそのマナを全て扱える術を持っている。彼の手によってノーマは絶対の悪として刷り込み……つまり、意識への意図的な介入が出来るという事、これらを使い奴はこの世界の人間達を自分の言う事に絶対服従な人形に仕立てあげたのです」
「そんな……そんな事って」
「それが本当なら、マジで洒落にならないクソ野郎だな」
あくまでこれらはシュウジの憶測による推論でしかない。だが、実際にモモカが操られた所を見たアンジュとヒルダとしては信じたく

なくても受け入れるしかない現実だった。
「ですが、そんな奴にも誤算が生じた。それが……」
「私、ノーマって事ね」
「そう。マナを拒絶し、マナを破壊してしまうアナタ達の存在はエンブリヲにとっても予想外だった。マナによる思考ネットワークを介しての支配が出来ない以上、奴にとっては不都合な存在。故にノーマは反社会の化け物とか色々尾鰭を付けてアナタ達を外界から隔離し、ドラゴン達と闘わせる先兵に仕立て上げた」
「……つまり、幾らエンブリヲがモモカを操ろうとしても私が側にいる限り、モモカはあのナルシストの言いなりにはならないって事ね」
「多分、そうなのでしょう。その証拠に彼女はアナタに触れた途端正気を取り戻しました。より綿密に言えば頭に触れた時、マナとの接続が一時的に途切れた事によりエンブリヲの支配から逃れたのだと思います」
「じゃ、じゃあ私、アンジュリーゼ様のお側にいても大丈夫なのですね!?」
「けれど、常にモモカさんの頭にアンジュさんが触れている訳にもいかないでしょう。その辺は次にエンブリヲと見える間での課題として、今はこれからどうするか考える事から始めましょう」
今、ノーマ管理委員会と名乗る組織が艦隊を率いてすぐそこまで来ている。何故このタイミングで来るのかは不明だが、去り際のエンブリヲの様子を察するにどうやらただ救助しにきたという訳ではないのだろう。
嫌な予感がする。エンブリヲが第二劇の幕を上げるという言葉も気になるし、意外と奴との再戦は近いかもしれない。
「お、おい。まだ動いちゃダメだっ――!?」
立ち上がろうとするシュウジにヒルダが待ったを掛けた瞬間、爆発音がアルゼナル全体に響いたと同時に衝撃がシュウジ達を襲った。突然の攻撃に驚く彼等は駆け足で食堂のテラスへ出ると、そこには空を覆う程のミサイル群が艦隊から放たれる様子が目に入って来た。
救助艦隊と言っておきながらの攻撃、連中からの初撃によって殺さ

れるノーマ達、人間達からの理不尽な攻撃によりアルゼナルの屋外の大地は瞬く間に燃やされてしまう。
　その光景を目の当たりにしたシュウジは嘗てのリモネシアを思い出す。何の理由もなく、ただ自分をおびき寄せる為にリモネシアを焼いた連邦軍、あの日の出来事と被ってしまうアルゼナルの状況にシュウジは仮面の奥で歯を食いしばる。
「二人とも、モモカさんを連れて今すぐここから離れて下さい。彼等の相手は……私がします」
「ちょ、おい。一人でアイツ等と戦う気かよ」
「その方が色々都合が良いのですよ。私の愛機は多対一に特化した殲滅型、中途半端に編成を組もうものなら、最悪互いの足を引っ張る事になります。……それに、連中の目的は恐らくノーマの殲滅にあります。今頃は突入部隊が水中からアルゼナルに攻めようとしていると思われます」
　こういう手合いの奴らは外からだけでなく内側からも攻めてくる。武装した突入部隊がノーマの殲滅の為に動いているのだとしたら、まずは自衛の手段の無い子供達を狙う筈、つくづく苛つく連中だと内心で零しながらも、シュウジは平静を装ってアンジュ達に指示を出す。
「アンジュさんとヒルダさんは自分の部隊の人達と合流次第アルゼナル内に侵入してくる部隊の迎撃、モモカさんは出来るだけアンジュさんから離れないようにして下さい」
「……そう、ね。悔しいけど今はそれしかないみたいね」
「アンジュリーゼ様……」
　本来なら自分も好き勝手やってくれたエンブリヲに報復してやりたい所だが、モモカという大切な従者が事実上の人質として取られている以上無理する事は出来ない。渋々といった表情で納得するアンジュに対し、ヒルダは彼の提案を断った。
「アタシは行くよ。創造主だがなんだか知らないが、アイツの所為でアタシ等はノーマなんて呼ばれて蔑まれて来たんだ。あのナルシストの顔面に拳を入れてやらなきゃ気が済まないよ」
　瞳に憎悪の炎をたぎらせるヒルダ、自分の境遇の元凶が全てエンブ

リヲにあると知って感情を振り切らせているのだろう。
ノーマを差別対象とさせ、人間の社会から追放、最愛の母と無理矢理に決別させられ、その母からもノーマというだけで拒絶された。居場所も信じていたモノも、皆全て一人の男の都合によって奪われた。
彼女の抱いている憎しみの強さは自分では到底推し量れない。けれど、彼女の境遇を知る者としてシュウジは彼女に思い留まって欲しい為に敢えて彼女の行動に口を挟んだ。
「……ヒルダちゃん。君のその感情は正しい。君のその考えはきっと間違ってはいない。けどさ、今の君には何もないという訳じゃないんだろ？」
「な、何がだよ」
「ロザリーちゃんとクリスちゃん……だっけ？　あの二人は友達なんだろ？　だったら、今は彼女達の為にすぐにでも駆けつけてあげるべきなんじゃないかな」
「っ！」
シュウジの口から聞かされる友達という言葉、１１年も昔にアルゼナルに連れてこられ、過酷な環境の中で出来た友達。
最初は……いや、つい最近まで友達と思っていなかった。いつかここから飛び出す為の手段の一つとしてしか見ていなかった彼女達、だが、母から拒絶され、アルゼナルに戻り、反省房のなかでうずくまっていた自分に二人は声を掛けてくれた。
当然、二人とも自分の事を裏切り者だと思っていた事だろう。けれど、目の前の男から言われた事を思い出し、思い切って事情を話してみたら……。
『そっか、お母さんに会いたかったのか。……なら仕方ねぇよな』
ロザリーからそう言われた時、思わず目を見開いた。裏切り者である自分を仕方ないと言って許してくれた彼女にこの時のヒルダは信じられなかった。
『ロザリー、それ、本気で言ってるの？　この女は私達を裏切ったんだよ！』
『けどさ、それは別にアタシ等の事が嫌いだからって訳じゃないんだ

ろ？　アタシには親なんてのがいないから分からないけどヒルダにはそれがあった。それだけの理由でここから飛び出しちまう位の気持ちがずっとコイツの中にはあったんだ』

だから仕方ないと、利用されていた事も理解した上で少し寂しそうに笑うロザリーを見て、ヒルダは思った。二度と彼女達を裏切る様な事はしないと。その後もクリスとの仲を取り持ってくれたロザリーに心の内で精一杯の感謝の言葉が溢れ出した。

普段は何も考えていないバカな女、誰かに寄生して媚び売っておかないと生きていけない小心者。と、そんな風に自分がロザリーの事を分かっていた様にロザリーもまた自分の事を分かっていてくれた。

それがどんなに嬉しい事なのか、ノーマとして差別され続けてきた彼女が中で得たものはこれまでのどんなモノよりも儚く、尊い。

その事を思い出したヒルダは、アンジュ同様渋った表情でシュウジの指示を受け入れた。

「……分かったよ。言うとおりにする」

「ん、ありがとう。……気を付けてね」

「うっさい。てか、頭撫でんな」

いつの間にかヒルダの頭に乗せられていた掌、ゴツゴツしながらも暖かい温もりに浸っていた事を今更知ったヒルダは頬を朱に染めながらシュウジの手を払いのける。

「じゃ、アタシ等行くから、アンタも精々気を付けなさいよ。ほら、痛姫とメイド、行くわよ」

「……ねぇ、ヒルダ。アンタってもしかしてマザコンだけじゃなくてブラコンの気もあったの？」

「あぁ!?　いきなり喧嘩売ってんのかテメェ!?」

「お、お二人とも落ち着いて～！」

ギャーギャーと騒ぎ立てながら食堂を後にする三人、そんな彼女達を見送って少しばかり落ち着いたシュウジは再びテラスへと戻り、相変わらず攻撃を続けている艦隊をにらみつけ――。

「――こい、グランゾン」

重力の底に眠る己が愛機を呼び寄せるのだった。

◇

「各艦ピレスロイドを射出、メイルライダーの確保に移ります」
「いいか、第一目標はヴィルキス第二目標はアンジュリーゼ、そこの所間違えるなよ」
ノーマの掃討作戦を開始して五分、自身の名を冠した旗艦のブリッジでジュリオ皇帝はほくそ笑む。忌々しいノーマを大手を振って殲滅出来る切っ掛けを喜びに震え、苦渋を舐めさせた実の妹に復讐出来る口実を得られた事に歓喜していた。
他のノーマもついでとばかりに皆殺しにする。目の前で焼かれるアルゼナルを前にジュリオは一切の罪悪感を感じないまま、妹だったアンジュリーゼの捕縛の結果を待つ。
直情的な妹だ。すぐに我慢できずに出てくるだろうとたかをくくった時、ブリッジのオペレーターから不穏な報せが届く。
「レーダーに高エネルギー反応あり！　……なんだこの大きさは、パラメイルの比じゃないぞ！」
「……何だと？」
上空か開かれる黒い空間、シンギュラーポイントとは違う穿たれた空間から現れるのは深く禍々しい蒼き魔神だった。
天空から現れる蒼き魔神、人の形を模した巨大なソレを前に艦隊は一瞬静かになる。あまりにも異質な存在の登場に艦隊の全体に動揺が広がっていく。このままでは拙いと判断したジュリオは既に危機を察して艦から逃げ延びたリイザに気付かず、魔神に向けて攻撃を命

じる。
「な、何をしている！　さっさとアレを撃ち落とさないか！」
「しかし陛下、あの機体にはこれまでのデータに記載されていません。ここは一度下がり体勢を整えた方が……」
「たかが一機に何を臆しているか！　既に賽は投げられたのだぞ！」
そう、ジュリオ皇帝が言うように既に賽は投げられた。新たに世界を創り直す。その大望を叶える為に自ら先兵になるよう決意した彼に最早後退の文字はない。もしここで退いてしまったら、皇室の威厳は地に落ち、皇族である自分に民衆は付いてこなくなる。
己の名誉の回復の為に発動させた今回の作戦、たかがイレギュラーが一機増えた所で止める訳にはいかなかった。
「良いから撃て！　撃って撃って撃ちまくってあの機体ごとアルゼナルを撃ち落とせ！　ピレスロイドも向かわせろ！」
「りょ、了解しました」
追い詰められたジュリオの剣幕に圧され、艦隊の一斉砲撃の指示が各艦に伝達される。その旨が伝わった艦隊はたった一機の魔神に向け、全てのミサイル、弾幕を放つ。
向けられるミサイルの雨、面となって押し寄せる弾丸、更には四方から無数のピレスロイドが魔神に向かってくる。嘗て無い波状攻撃、逃げ場を失った魔神にジュリオが歪んだ笑みを浮かべた時。
『ワームスマッシャー』
瞬間、魔神に向けて放たれたそれら全てが閃光の槍によって刺し貫かれた。爆発するミサイル、爆発によって巻き込まれる弾丸、空を縦横無尽に掛けていたピレスロイドの全てが一瞬にして撃破される。
その有り様にジュリオだけでなくアルゼナルにいるサラマンディーネやジル、全員が唖然となっていた。
静まり返る戦場、再び沈黙が蔓延し始めた時、宙に佇んでいた魔神が動き出す。
『この武器は空間と時間、全てを歪曲し、破壊する。――――さぁ、覚悟はできたか？』
〝ディストリオン……ブレイク！〟

開かれた魔神から放たれる一筋の閃光、それが幾重にも重なったワームホールを通過した時、光は極大のレーザーとなって艦隊を貫く。

魔神の放ったその一撃は空と海、更には地表すら抉り取り、艦隊を呑み込み消し飛ばしてしまった。

神聖ミスルギ皇国ジュリオ1世。世界に己の力と権力を示すはずだった男は断末魔の叫びすらあげられずに光へと呑まれ。

艦隊のあった場所に巨大な光の柱が天を貫いていた。

その16

砕かれた海、割れた空、抉られた地表。蒼き魔神が放ったその光はノーマ達の虐殺を命じたジュリオ諸共艦隊を呑み込み、全て……文字通り消し飛ばした。

やがて海水は抉られた地表を呑み込んで元の海へと戻っていく。人も機械も全てが消され、まるで最初から何もなかったかのように風景だけが戻っていく。

その光景を目の当たりにして最初に我に返ったのはアルゼナルの危機を察知して駆けつけた少年、タスクだった。

「なんだ、あの機体は……」

彼が呟くように口にするその言葉は誰もが思っている事だった。ノーマ達を殲滅せんと放たれた人間達の兵器は一瞬にして破壊され、大規模に展開された艦隊も蒼き魔神が放つ光によって消滅した。

艦隊を指揮していたジュリオも光に呑み込まれ戦死、自分達の大将が艦隊と共に消滅した事で戦線は瓦解。アルゼナルに潜入していた兵士達も悉く返り討ちを喰らい、人間と称していた者達は事実上この戦域から抹消された。

圧倒的過ぎる戦力を誇る魔神――――グランゾン。彼の者の存在に誰もが度肝を抜かれる中、グランゾンの前に一機のパラメイルが降りたった。

『成る程、それが君の機体の力か。いやはや恐ろしいね。単騎……しかも一瞬で一国の艦隊を消滅させるとは、もはや戦術兵器の域を超えているな』

『そういうお前の機体こそ、随分大仰な仕掛けを施しているみたいじゃないか』

「っ！　エンブリヲ！」

機体の肩に佇み、余裕の笑みを浮かべて見下ろすエンブリヲにタスクの胸中に怒りの感情が込み上げる。嘗て自分達の一族を不要と断

じて追いやり、父と母を殺した憎き仇を前にタスクの顔は怒りと憎悪の混じった鬼の形相となった。
だが、此方の声が向こうに届く訳がない。彼の存在に彼等は気付く事なく、魔神と創造主は互いに敵意と殺意をぶつけ合う。
『……今一度問おう。蒼のカリスマ、シュウジ＝白河。魔神と共に私の所へ来い。君さえ良ければその世界を君に与えよう。それほどまでに人間を憂う君だ。きっと今よりも良い世界に出来るのだろう』
『俺に神の真似事をしろと？　冗談じゃない。俺は調律者でもなければ創造主でもない。ただこの機体を操るだけの極々平凡な人間だ。つーか、俺言ったよな。世界は誰かの手に委ねるモノじゃない。その世界で生きる一人一人が決める事だ。……それにな』
『……？』
『お前のやってる事は所詮〝ゴッコ〟遊びなんだよ。そんな駄々っ子に付き合ってやる程、こちらは暇じゃない　』
『そうか……残念だよ』
怒りを交えたシュウジの挑発、それがエンブリヲの逆鱗に再び触れたのか、それ以降彼の口から言葉が出てくる事はなかった。
このまま二人の戦闘が始まるのか、そうなった場合果たしてアルゼナルは彼等の戦いによる余波に耐える事が出来るのか。アルゼナル司令官がノーマ達全員に予め用意してあった潜水艦に乗り込むよう指示を飛ばしているが、それが間に合うかどうか分からない。
魔神が勝つのか、それともエンブリヲが勝つのか、いずれにしてもこの一帯が余波に耐えられる保障はない。誰もがここから一刻も早く離れようと行動に移した時、それは聞こえてきた。
『……歌、だと？』
突然歌い出すエンブリヲにシュウジは眉を寄せて訝しむ。荘厳で壮大で、終わりと始まりを思わせる終末の詩、奴が詩を口にすると共にエンブリヲのパラメイル……いや、ラグナメイルはその形状を変化させる。
『重力係数に異常？　まさか、奴の機体は……！』
グランゾンから検出される異常な数値にシュウジは目を見開かせ

る。肩部分に展開され、収束されていく力場を見て、その力が嘗てサラマンディーネの世界を滅ぼした機体の一つだと察した。
　このままではアルゼナルが危ない。しかし、現状奴の攻撃を防げるのはグランゾンの最後の武装しか存在しない。一瞬だけ己の選択に思考を割くシュウジだが、次の瞬間にはアルゼナルが巻き込まれる事を考慮した上でアレの使用を決意した。
『このままじゃあどっちにしてもアルゼナルは巻き込まれる。だったら、こっちもやるしかないよな！』
　グランゾンの胸部が展開され、魔神の周囲に異常な重力力場が形成せれる。圧縮されるのは剥き出しの特異点、時空すら蝕む禁忌の一撃。
『収束されたマイクロブラックホールには、特殊な解が存在する。剥き出しの特異点は、時空そのものを蝕むのだ……』
　圧縮し、凝縮され、一点に収束されていく重力の嵐。溢れ出した重力の力場は時空すら蝕む牙となり、アルゼナル周辺の海と空を引き裂いていく。
　やがて掲げられた特異点は魔神の力により更に圧縮され、それはさながら黒い太陽の様だった。
『何人も、重力崩壊からは逃れられれん！』
『ブラックホールクラスター……発射！』
　そして遂に放たれる黒き太陽はエンブリヲの機体が放つ白い光の暴風と衝突し、周囲は光に包まれる。
　二つの機体によって放たれた膨大なエネルギーの奔流は世界に悲鳴を挙げさせ、やがて世界に亀裂を作り。
　世界の壁に大きな風穴をこじ開けるのだった。

◇

※月（。Д。；）日

エンブリヲの奴と一度目の戦いからどうにか生き延びられた今日、現在自分はヒルダちゃん達と一緒にこれからの事について話し合っている。

あの時エンブリヲの乗ったパラメイル――――恐らくラグナメイルと思われる機体と撃ち合ってその衝撃によって恐らく世界の壁を壊してしまったのだろう。現在自分は再びサラちゃん達の世界へと戻ってきてしまっていた。

ヒルダちゃん達は最初、見知らぬ世界にいた事に酷く慌てていたが、自分と再会し、自分の話を聞いていく内に納得してくれて今はどうにか落ち着きを取り戻している。

自分も何故ここにヒルダちゃん達がいるのかと疑問に思ったが、アルゼナルに進入してきたミスルギ皇国の連中を一通り片付けた後、自分に合流し、援護しようとしていたらしいのだ。

本当ならすぐにでも逃げて欲しかったのだが、まぁ気の強い彼女の事だ。そうなるだろうと何となく予想はしていた。

で、グランゾンの放つＢＨＣと奴の放つ光の暴風が衝突した際に起こった時空の崩壊に巻き込まれ、いつの間にかこの地で気絶していたのだという。

あの衝突の規模的に恐らくはアルゼナルも巻き込まれている可能性は高い。多分、皆もこっちに来ている筈だ。その事をヒルダちゃん達に話すと三人とも少しは安堵したのか、ホッと胸をなで下ろしていた。

明日からは早速皆の探索に乗り出そうと思う。エンブリヲに好き勝手やられて悔しい思いが自分の胸中に渦巻いているが、今は自分達に出来ることを優先させようと思う。

大巫女様やサラちゃん達に話したい事もあるし、ジル司令官にも今回の出来事を機にサラちゃん達との協力関係を本格的に考えて貰おうと思う。別にジル司令官を疑っているつもりはないが、なんかどー

も引っかかる部分があるんだよね。やたらとヴィルキスでエンブリヲを殺す事に執着しているっぽいし。

聞けばジル司令官はノーマ反抗作戦の中心的人物だったみたいだし、もしかしてその事が関係してるんかな？

その17

※月（、・ω・、）日

ヒルダちゃんとクリスちゃん、ロザリーちゃんの機体を一通り弄った後、他にアルゼナルの面々がいないか上空から探索を行った。

本当なら自分がグランゾンと共に周辺を調べるつもりだったが、何故かクリスちゃんとロザリーちゃんに激しく拒否られてしまい、終始自分はヒルダちゃんの機体のお荷物となっていました。

女の子の体に抱き付くという一歩間違えばセクハラ紛いで訴えられる状況の中、一人緊張していた自分は運良くアンジュちゃん達を発見、合流する事に成功した。

そこにはタスク君とモモカちゃんもいて、全員無事な事に安堵したが、何故タスク君がここにいるのか不思議に思い訊ねてみると、色々彼も複雑な事情を抱えている事が分かった。

どうやら彼は五百年前、エンブリヲと共にサラちゃん達の地球から脱出し、世界の壁を越えて向こうの側の地球へ移民した人間……〝古の民〟の末裔らしいのだ。

エンブリヲに見限られた事で追いやられる事になった旧人類。自分達を弾圧し、亡き者にしようとしたエンブリヲに復讐しようと生きてきた彼等は世界の果てに追いやられていたノーマ達の存在を知り、共に向こう側の世界に反旗を翻そうと日々戦いと暗躍の日々を過ごしていたらしい。

けれど度重なる戦闘により古の民は残り少なくなり、今ではもうタスク君一人だとか。壮絶な彼の人生に自分は何も言えないが、それでもアンジュの騎士である事に誇りを持っているのか、仲間達の事を語るタスク君の表情は明るかった。

何故アンジュちゃんの騎士なのか、この時自分は不思議に思ったが、年頃の男女が同じ所にいるのだ。加えて彼等の陥っていた状況を鑑みれば何も知らない異世界に放り込まれた様なモノ、その時のシチュエーションを考えれば二人の仲が急接近するのも無理もない事

かもしれない。
けど、自分という年長者がいるからにはここから先の不純異性交遊は許しませんけどね！　許しませんけどね!!
エッチィのはいけないと思います！
ま、タスク君という数少ない男仲間が出来た事に今は喜んでおこう。オマケに彼はパラメイルの整備が出来るみたいだし、人手が増えるのは素直にありがたい。明日も早くから皆を捜索して合流する為に行動を起こさなければならないし、頑張ろうと思う。
……どうでもいいけれど、どうしてロザリーちゃんとクリスちゃんは自分がグランゾンに乗ることを酷く反対するのだろうか。反対というよりも、寧ろ遠慮？　みたいな感じか？　自分がグランゾンを呼び出そうとする度に止めようとしてくるし……自分、何か怖がらせる様な事をしただろうか？
しかも二人とも常に自分には敬語だし、部下でもないのに敬礼してくる。自分としてはヒルダちゃんやアンジュちゃんみたいにもっとフレンドリーに接してくれてもいいんだけどなぁ。

※月＊日
パラメイルって、随分と開放感のある機体だよね。飛行形態に変形すればコックピットは丸裸だし、もう少し安全性を考慮した設計は出来なかったのだろうか？
タスク君の協力の下、皆の機体を一通り整備し終えた自分達はアルゼナルの皆を探すべくパラメイルを飛ばし、周囲を探索した。
この時に自分はタスク君のパラメイルに乗せて貰ったのだが……いやー、開放感も凄いけど風が良く通ること通ること、パラメイルってまさに空を飛ぶバイクみたいな感じだよね。
男仲間が一人増えた事によりタスク君と良くセット扱いされる自分達、まぁ男同士の方が気が楽になる事も多いし、その事に別に異議はない。タスク君のパラメイルも操縦させてもらえたし、寧ろ得られた経験を考えれば良かった事が多かった。
パラメイルの操縦性、応用性、各種性能、これらが分かった事によ

りアンジュちゃんのヴィルキスの性能を知り得る事が出来た。
恐らく、アンジュちゃんのヴィルキスはラグナメイル。嘗てこの世界を滅ぼした機体の内の一つなのだろう。何せあの程度のサイズにあれだけの出力を有する機体だ。あれを普通のパラメイルと同格と言うにはあまりにも無理がある。
タスク君から聞いた話ではアレこそが沢山の犠牲を払った末に手に入れたリベルタスにおける切り札で、エンブリヲを殺す為に必要な武器なのだとか。そしてそのヴィルキスを扱えるのは現状アンジュちゃんただ一人、つまりは彼女こそがリベルタスにおける中枢人物だと言えるだろう。
道理でジル司令官があそこまでアンジュちゃんに拘る訳だ。ヴィルキス――――即ちラグナメイルでなければ殺せないというのが本当ならば、彼女がアンジュちゃんの身柄を最優先に考えるのも頷ける。……あの人にはそれ以外に理由がありそうだけど。
因みに、アンジュちゃんはこのリベルタスの内容には猛反対なのだとか。まぁ、色々騙されてきた彼女だ。利用されるだけ利用してくる輩は反吐が出る程大嫌いなのだろう。嘗て利用された事のある自分としては彼女のリベルタスに対する反応は共感できる。
それに、もしエンブリヲを倒せる理由がラグナメイルに搭載されているあの武装にあるのだとすれば自分にもチャンスはあるかもしれない。アンジュちゃんが自分にエンブリヲを譲ってくれるのであれば、その時は自分がグランゾンと共に本気且つ全力で奴を葬る事にしようと思う。
……と、上記の事を言ったら、何故かアンジュちゃんに拒否られた。モモカちゃんの件で自分もエンブリヲには借りかあるという彼女の目は獰猛な肉食獣を思わせる。相変わらず向こう見ずな女の子だと思いながらそれが頼もしく思える自分がいる。彼女もアルゼナルで様々な人と関わりを持った事で人として成長したのだろう。
けれど、やはりまだ自分に殴られた事は相変わらず恨んでいるようで、今も時々襲われる。しかもその時は筆頭侍女のモモカさんも自分が主を殴った事だから一緒になって襲って来る。そんな訳だから余

計にややこしくなる始末、尤もその程度でどうにかなる程柔な鍛え方はしてないので返り討ちにしたけどね。

――――今日もアルゼナルの人達を見つける事は出来なかった。明日も早めに起床して行動を開始しようと思う。

ＰＳ．

今気付いたのだが、タスク君のパラメイルでタスク君と二人乗りしていた時、クリスちゃんの息遣いが荒かった気がする。風邪でも引いたのだろうか？

環境も変われば体調も変わり、疲労度も増していく。今は薬になるようなモノは持ち合わせていないからもう少し頑張って欲しい所である。

※月γ日

ヒルダちゃん達と再会し、アンジュちゃん達と合流してから二日、遂に自分達はアルゼナルの皆と合流する事が出来た。

というか見つけた。複数人となった事から人数を分けて編成し、自分とアンジュちゃん、ロザリーちゃんの三人のメンバーで探索していた所、アルゼナルごと転移していた彼女達を見つけたのだ。

しかもその場所はサラちゃん達の故郷である都のすぐ近く、まさかアルゼナルが丸ごとこの世界に転移していた事に驚いたが、すぐに皆を呼びに引き返し、再びアルゼナルに戻った。向こうも自分達の接近に気付いたのか、多くのノーマ達が自分らを迎え入れてくれた。

久し振りの皆との再会、エルシャさんも他の第一中隊の娘達と再会出来た事から、目尻に涙を溜めながら再会を喜んでいた。アンジュちゃんも皆に迎え入れられた事から満更でもない様子だったし、引率しているつもりだった自分としても照れ臭そうにしている彼女が微笑ましかった。

まぁ、そんな再会の喜びも自分が出てきた瞬間にピタリと止んだけどね。や、別にいいんだけどね。ハブかれてるのは慣れてるし、避けられてるのも慣れているから別にいいんスけどね。

唯一ヴィヴィアンちゃんだけが笑顔で蒼スマって渾名で呼んでく

れたのが救いだった。危うく中華連邦の一員になりかけた事も追記しておく。
で、合流した自分達は司令官代行を名乗るジャスミン女氏との話し合いをする事になった。話し合いと言っても自分と奴、エンブリヲの機体とグランゾンがぶつかり合った以降の話を照らし合わせただけなんだけどね。
ジャスミン女氏らノーマはいつの間にかアルゼナルごとこの世界に放り出され、当初は右も左も分からず軽くパニクったそうな。けれどいち早く自分達の世界に戻れた事に気付けたサラちゃん達は事情を説明すべく現在都へ向かっているとの事。
その合間アルゼナルでは機体の整備、弾薬の補給と負傷者の治療になり、また手の空いている者は犠牲者達の埋葬に人員を割けていたという。
犠牲者、恐らくはミスルギ皇国の兵士達によって命を落とした娘達だろう。連中の素早い展開力によって侵入を許してしまったアルゼナルは何名かのノーマを死なせてしまう事になる。唯一救いだったのはその犠牲者の数が少なかった事と幼年部の子供達が全員無事だった事、中には怪我をしている子もいるそうだが、皆命に別状はなく、今は元気にアルゼナル内で走り回っているとの事だ。
犠牲となった娘達の事は凄く残念だが、今は生き残った事を喜ぼう。後で自分も出来る事があれば手伝いますと伝えるけど、何故か断られてしまった。
しかもその時のジャスミン女氏の顔が物凄くひきつっていた事もありちょっと気になるが……まぁ、彼女達から見れば自分はドラゴン側の人間なのだろう。幾ら協力関係を結べたといってもそう簡単に信頼関係を築けるのは流石に無理だ。
サラちゃんにも話を伺いたい所だが、流石に夜中である今の時間帯に向かうのは色々拙いだろう。都に向かうのは明日にして今日はゆっくり休むことにしよう。
……つーか、このアルゼナルって基地は結構性に関してオープンな所なのね、幾ら夜だからといってまさか艶っぽい声が聞こえてくると

は思わなかった。
しかも女の子同士、まだチェリーボーイである自分には刺激が強いので外に出て風に当たってこようと思う。前にもいったと思うが、今日はこの一言でシメらせていただこう。
――――エッチなのはいけないと思います！

ＰＳ．
そういえば、ジル司令官はどうしたのだろう？　ジャスミン女氏が言うには執務室に引きこもっていると聞いたけど……もしかして彼女もクリスちゃんと同様に体調を崩しているのか？
もしそうなら司令官が倒れる可能性もある。明日辺り何か栄養のある美味しいモノを届けた方がいいかもしれない。

その18

※月π日

自分達がアルゼナルに合流して一日目、まだサラちゃん達……都での話し合いが続いているのか、自分は今日一日アルゼナルを見て回るだけとなってしまっている。

一応まだ物資が残っているのかアルゼナルの食堂に出される材料は豊富だ。水も近くに川が流れているから不足にならないし、食用に出来る動植物も生息している事から食べ物にも困らないだろうし、今の所不具合な所はない。

現在は待機状態となっているアルゼナル。戦うべきドラゴンも協力関係を結んでいる事から襲って来る事はないし、現在ノーマ達は平和な時間を過ごしている事だと思う。

そんな平穏な時間の中、何もしないというのも気が引けるので上記でも述べた通り自分はアルゼナルを見て回りながら各施設のお手伝いを開始した。

まず最初に手を出したのは……食堂、どうやらここアルゼナルでは当番制で食事が作られており、日々彼女達はここで栄養を補給しながら戦いの毎日を乗り越えて来たのだという。

ただ、目的が栄養の補給である事からあまり味付けは考慮していないらしく、どれもみんな酷いモノだった。唯一マトモそうなのがエルシャさんのカレー位なものなので見かねた自分は飛び入りする様に厨房へ乗り込み、料理を揮わせて貰った。

限りある食材と自分の腕を以て揮われた料理は彼女達の口にあったらしく、中にはお代わりしてくる娘も出てくる程に盛況なものとなった。

本当なら自慢の麻婆豆腐も振る舞いたかったのだが、肝心の豆腐が品切れだった為断念、仕方なく海老チリで中華類はこれで穴埋めとなった。

他にも数々の料理を提供した事で食堂のメニューも増え、ノーマの皆にも好評な昼食会となった。アンジュちゃんも元皇女だった為にグルメな舌を持っていたらしいが、それでも自分の料理は中々のものだと褒めてくれたりと自分にとっても有意義な時間となった。

……ただ、アンジュちゃんの従者であるモモカちゃんは自分をライバルとでも認識しているのか、味付けが濃いなどと姑みたいな事を言ったりと結構ツンケンな態度だった。

その後もジャスミン女氏が経営するジャスミンモールと呼ばれる雑貨店に顔を出して棚卸しを手伝ったり、マギーさんの所に行って負傷者の治療を手伝わせて貰ったりした。

その際にマギーさんから改めて自分が刺された部分を治療してくれたし、〝情けは人の為ならず〟っていう言葉の意味を痛感する事が出来たりするなど、貴重な体験を経験する事が出来た。

今の自分は居候の身、出来る事があるなら進んでやらないとね。因みにタスク君はアルゼナルの整備班と一緒にパラメイルの整備をしていた。本当なら自分も手伝ってやりたい所だけど、何故か断られてしまった。

まぁ、自分とタスク君は数少ない男性だ。普段は見ない男を前に変に警戒しているのだろう。整備班長のメイちゃんはまだ幼い子供みたいだし、そういう事情が絡んでこれ以上男を増やさないようにしているのだろう。

機体の整備は精密な作業だ。断られた以上は長居しても邪魔になると思い、そそくさとその場から退散させてもらった。

そして最後にグランゾンの整備を終え、今日の出来事は終了となる。この世界に来てから色々あってずっと手を着けないでいたグランゾンの整備、いつまたエンブリヲの襲撃が来るかは分からないのでこの日は入念に相棒の調子を整える事にした。

しかし、本当にエンブリヲの奴は何故自分達に何もしてこないのだろうか？　奴なら世界の壁なんて楽々越えられそうなものだけど……今頃は良からぬ事を考えているのかもしれない。

グランゾンの一撃で破壊された次元の壁もいつの間にか修復され

ていたし、もしかしたら向こう側で既に動いているかもしれない。
……こちらもそろそろ対抗策を考える時期かもしれない。

ＰＳ．
どうてもいいけど、ジャスミンモールって色々売ってあるのね。女性物の下着から列車砲まであるとか……。
つーか飾ってあったあの兵装、どこかで見たことあるんだけど……気のせいかね？

※月Ω日
サラちゃん達が都の方へ戻ってから三日、今日ここアルゼナルに大巫女様の遣いとして再びサラちゃん達が戻って来てくれた。
なんでも向こうでの出来事を話している内に少しばかり遅くなってしまったと語るサラちゃんは大巫女様に会って欲しいと言ってアルゼナルの司令官であるジルさんと第一中隊の面々、そして自分が選ばれる事になり、大巫女様の所で話をする為、明日都へ向かう事になった。
ドラゴン達の巣とも呼べる都に向かう事になった第一中隊……特にロザリーちゃんとクリスちゃんは不安と緊張で震えていた。まぁ、今まで殺し合いをしてきた彼女達からすれば幾ら協力関係を結ぶ為とはいえ、心の内ではまだ抵抗意識があるのだろう。
自分もそれとなく気を紛らす様声を掛けたりしたけど、どうも二人からは堅さが消えない。ヒルダちゃんが何とかすると言ってくれたから大丈夫だとは思ったけど、やはりちょっと心配だ。
心配という事でもう一つ気になる事があるのだが、どうもジル司令官はこの世界に来てからというものの、少しばかり様子がおかしい気がする。頻りにエンブリヲの名前を忌々しそうに呟いたり、ヴィルキスがどうのとか口にしたりして今一つ情緒が安定していない様子。
第一中隊の隊長であるサリアちゃんも様子のおかしいジル司令官に不安を抱いているのか、それとなく声を掛けているみたいだが、ジル司令官はマトモにサリアちゃんを見ようともしない。

自分がそれとなくフォローをしておいたけど、あまり効果はなさそうだ。捨てられた子犬みたいに俯く彼女をこのまま放置するのはどうかと思い、取り敢えず世間話をしたりして気分を変えて貰おうと色々話をしたりした。

その中で自分の蒼のカリスマとしての格好について聞きたい事があるとサリアちゃんは質問してくるのだが……いやー、まさかサリアちゃんが蒼のカリスマの衣装に興味を持つとは思わなかった。

しかも蒼のカリスマたる仮面に目を着けるとは中々いいセンスをしておられる。今あの仮面は自分用の一つしかないから上げる事は出来ないが、要望があれば好きなデザインを持ってきて貰い自分の手製の物で手を打って貰うことにした。

サリアちゃんも楽しみにしていると言っていたし、作る側である自分も同じ仮面仲間であるサリアちゃんの今後の活躍を楽しみにしていきたいと思う。

なんだかジル司令官の話しから大分逸れてしまったが、サリアちゃんが元気になった事で取り敢えず今回の話しはこれで良しとしておく。

……それと、これは割とどうでもいい話なのだが、アルゼナルの監察官だったエマさん。どうも彼女はアルゼナルで同じ人間から命を狙われた事が相当堪えているのか、酒浸りの毎日を送っている。

マギーさんも治療班の班長という立場からエマさんの飲酒を止めようとしているが、酔っ払いの彼女には言葉が届かず、中々言うことを聞いてくれないと困り果てているらしい。

今も食堂にある調理用の酒を煽っているみたいだし、流石にこれ以上は放置できないのでこれから自分も彼女の説得に向かおうと思う。

グランゾンの掌に乗せてそこら辺を一周すれば元に戻るだろう。酒によって浮かれた熱は夜風で冷やすのが一番良い。エマ監察官も落ち着けば話を聞いてくれる人間だし、酔いが醒めた後は自分がつきっきりで話をしようと思う。

※月（。Д。）日

色々あった。今日はこの一言に尽きる一日だったと思う。昨日サラちゃん達の言うとおり都へ向かう事になった自分達は都の心臓部である神殿内部へと案内され、大巫女様との話し合いの下、ノーマとドラゴンは同盟を結ぶ事になった。

これだけで済めばこれからの対エンブリヲ対策を二つの陣営で建てていく方針になるのだが……一体何がいけなかったのかここでちょっとした問題が起きてしまった。

大巫女様の下に集う神官達。旧くからアウラとその直結の子孫達に仕えてきた彼女達が突然自分にグランゾンについて説明するよう求めてきたのだ。なんでもサラちゃんからグランゾンの力に付いて話を聞いたらしく、当時の彼女達の口調は物凄く剣呑としたものだった。

おかしい、確か自分はアンジュちゃん達の世界に向かう時にグランゾンを見せた筈、何も騙してはいないではないかとその時自分は思ったが、よくよく考えれば詳しいスペックとか伏したままだったと思い出し、後日グランゾンの性能に付いてのレポートを提出したいと思う。

で、その後無事に同盟の締結を行い、晴れて戦い合う関係になれた両陣営、自分も用意された部屋でグランゾンのレポートを書き写していると、突然乱入者が部屋へと乗り込んできたのだ。

銃を持って乗り込んできた乱入者はジル司令官。ノーマ側の代表とも呼べる彼女の乱入に自分は一瞬驚いたが、向けられた銃口にすぐさま反応し、彼女を気絶させる事でどうにか騒ぎを鎮める事に成功した。

〝拳眼鉄砲打ち〟側頭部に拳を当てる事で無力化させたのだが、近くを通りかかったサラちゃんに気付かれてしまったため事情を話し、ジル司令官を拘束する事になった。

同盟を結んだばかりだというのに突然襲うジル司令官を不審に思ったサラちゃんは大巫女様達に気付かれないよう秘密裏に彼女の事情を知る者を集め、自分の部屋で急遽話し合いをする事になった。

その時に集められたのが第一中隊の隊長サリアちゃんにアンジュ

ちゃん、アルゼナルからジル司令官の親友であるマギーさんとアルゼナル前司令官であるジャスミン女史、そしてタスク君だった。
なんでもジル司令官は前のリベルタス……ノーマの反抗作戦が行われた際のメンバーの中心人物でエンブリヲを倒す為に皆からの期待を全て背負っていたらしく、第一次リベルタスが失敗に終わってからはエンブリヲ抹殺の為に前以上の執念でリベルタスの準備に取り掛かってきたのだという、
けれど、自分とグランゾン、そして奴のラグナメイルの放つ光によってリベルタスの計画は水泡に帰そうとしている。アルゼナルもそして古の民が使用していたとされる艦、アウローラが此方の世界に来た事によりリベルタスを発動する際に使用する拠点を無くし、そしてリベルタスの中心的役割を持つヴィルキスとアンジュが自分達の計画に反対している。
ここまで何一つ思い通り事が運ばない現状に苛立ちを覚えたジル司令官は遂に自分を殺そうとする凶行を企てる事になった。
何故自分を狙うのか、恐らくそれは自分の愛機であるグランゾンが奴の機体と互角に戦った事が理由だと思われる。ヴィルキスが使えないのであれば自分を殺し、グランゾンを自分のモノにしようと考えたのだろう。……無鉄砲に思えるが長い間蓄えてきた自身の作戦が突然現れた何者かに台無しにされればそりゃ怒りもするなと自分は一応納得できた。
ただ、彼女のあの様子だと他にもまだ理由がありそうだが、ひとまず騒ぎは納まった事だし、取り敢えず今回はこれで終わりにしようと思う。今後は彼女に近衛隊の人達が監視に付くみたいだし、彼女も今回の様な行動は控えるだろう。サリアちゃんも心配していたし、自分としてもあまり無茶な行動は止めて欲しいものである。
大きく分けてこの二つが今回の出来事だった。どちらも大事な案件だし、早急に対処していきたいと思う。
で、本当ならここで終わる所なのだがもう一つ事案が発生したのでそこら辺を追記していきたいと思う。
その事案というのは……タスク君だ。この世界では人間体である

青年男性は殆ど見かける事はなく、珍しいという事で裸にされてベッドに縛り付けられている所にアンジュちゃんと共に遭遇、助け出そうとするアンジュちゃんだったがここでＴｏ　ＬＯＶＥるな罠（トラップ）が発動し、タスク君は半殺しな目に遭う。まぁ、結果的には助かったし、別にいいよね。

けど、あんな目に遭ったのが彼で良かったと思っている自分がいる。タスク君には悪いがあんな標本みたいに扱われては自分は羞恥心等の感情でおかしくなり、都諸共吹き飛ばしていたと思うから。

……因みに、そのあとボロボロとなったタスク君を回収し、部屋へと戻る所にクリスちゃんと遭遇。やたらと目をキラキラさせて息遣いが荒い彼女がちょっぴり怖かった。

その19

＊月（＊゛ω゛＊）日

自分とアルゼナルの面々がサラちゃん達の都にお世話になってから二日、今の所ノーマ側とドラゴン側のいざこざは起こっておらず、今の所は良好な関係を結べていると思っている。

ノーマの幼年部の子供達もドラゴン側の子供達と意気投合し、毎日外で元気良く遊んでいるし、彼女達の面倒を見ているエルシャさんも子供達から慕われている事から母親の皆さんからも結構な信頼を寄せられている。

エルシャさんはドラゴンも自分達と同じ人間だったと最初の頃はショックを受けていた様だが、ドラゴン側の子供達の面倒を見ている内に自分達と何も変わらない事に気付き、今では幼年部共々可愛くて仕方がないという。

この調子で両陣営共々仲良くなって欲しいなと思っていた時、サラマンディーネことサラちゃんは歓迎会と称してある催し物を提案してきた。

なんでも今まで殺し合いをしてきた相手といきなり仲良くなんか出来ないという反発の声がチラホラ出て来ており、このままでは両陣営の間に深い溝が出来てしまう事を恐れたサラちゃんは勝負をする事で日頃の鬱憤を晴らそうと思い至ったのだという。

慣れない環境でストレスが溜まっていたノーマ側もストレスを発散させる為にサラちゃんの提案を受諾、思う存分暴れるとみんな意気込んでいた。

で、その勝負をする場所なんだけど……まさかラウ○ド1がその舞台だとは思わなかった。サラちゃんはラ○ンド1が太古の人々の決闘場と勘違いしていた。娯楽施設がローマ時代のコロシアムみたいな扱いをされている事に何とも言えなくなったけど、折角盛り上がっている空気を台無しにするのは気が引けるのでこの件について自分

は黙っておく事にした。
ノーマ側とドラゴン側、それぞれの陣営から三名程代表者を選んで行われる事になった今回の催し物。ドラゴン側からはサラちゃん、ナーガちゃん、カナメちゃんの三名でノーマ側はアンジュちゃん、ヒルダちゃん、サリアちゃんが選出される事になり勝負は始まった。
最初はテニスから始まり、野球、サッカー、ドッジボール、ボウリング、カーレース、ＵＦＯキャッチャー等々様々な分野で行われ、どちらも一進一退の激しい戦いとなった。
個人的には突っ込み所満載な勝負だったが、場の空気も盛り上がっていたし、サラちゃん達やアンジュちゃん達も最終的には楽しそうにしていたから……まぁ、良いという事にしておこう。
勝負の結果は引き分け、どっちつかずの中途半端な幕引きに両陣営は不完全燃焼で不満に思うかと危惧していたが、アンジュちゃん達同様に他のノーマやドラゴン達も大きく盛り上がり、互いに認め合っていた。
いやぁ、こういうのはいつ見ても良いものだ。憎み合っていた仲がふとした切っ掛けで分かり合い認め合う。そこから生まれる可能性はまさに無限大、あの時の光景は今後の彼女達の活躍に期待する瞬間でもあった。
その後、サラちゃん達が灯籠流しでこれまでの戦いで死んでいった仲間達に黙祷を捧げる事で今回の催しは終了する事になった。空へと飛んでいく灯りの群、幻想的とも言えるその光景に誰も余計な言葉を発さず、皆静かに彼方へと消えゆく灯り達を見送った。
まさかこの世界で自分と同じモノが見れるとは思わず、少しばかり涙腺が緩んだのは内緒だ。今回でノーマとドラゴンは和解し、自分達の目的の為に皆手を取り合う事だろう。
いつかジル司令官もこの輪の中に入れる事を願い、今日は終わりにしたいと思う。
ＰＳ．
今回の催し物、自分とタスク君は何もする事無く暇だったので、皆が異様な盛り上がりを見せている中、二人でテニスやらボウリングや

ら楽しんでいました。
……時折こちらを見つめるクリスちゃんの目が怖かった。

＊月（、・ω・、）日
大巫女様方から言われていたグランゾンの説明、自分の愛機であるグランゾンを知って貰う為にレポートにまとめて提出したのだが、自分が説明下手なのがいけないのか、神官達共々あまり理解してくれる人はいなかった。
唯一機械に詳しいサラちゃんも自分の提出したレポートを見ると何故か気絶してしまう始末。そんなに俺の字って汚いのだろうか？
……いや、パソコンで打ち出したモノだからそんな酷いものじゃないはずなんだけど……まぁ、その後意識を取り戻してくれたサラちゃんが大巫女様達には自分から言い伝えておくといってくれたし、この事はもう終わりにしよう。
その後、お疲れな様子のサラちゃんにお昼の料理を作って午前は終了、その後は自分が前から懸念していたマナの干渉を防ぐ装置の制作を行っていた。
マナはエンブリヲが作り出した万能のエネルギー。奴によって生み出されたシステム、この高次元ネットワークは人々の意識に張り巡らされ、これにより向こう側の世界の住人は例外なくエンブリヲの操り人形と化してしまう。
流石に世界を跨いでのマナの使用は出来ないのか、現在モモカちゃんとエマ監察官はマナが使えない状態になっている。この二人の状態を利用し、自分はマナの干渉……つまりはエンブリヲの魔の手から二人を守る手段を模索していた。
最初はデカいヘルメットのモノ、重くて使い勝手が悪いと酷評を受けていた試作品も何回も改良する事でサイズと性能は変わり、今ではモモカさんはカチューシャ、エマ監察官には帽子レベルにまで至る事に成功した。
二人の脳波に干渉する事でマナエネルギーを相殺させ、無効化させる。因みにその干渉させる波というのはドラゴンの叫び声を元にし

ている。
　ドラゴンの叫びはマナの流れを乱すという事でナーガちゃんとカナメちゃんの協力の下、一応の完成となったソレは今後の二人を守る防護壁となる事だろう。
　奴が干渉してくる度に装置が作動する仕組みとなっている為、その時にならないと分からないが、八割の確率で成功すると確信している。何故ならこの技術の出所はこの世界の文献に記されたモノだ。嘗てドラグニウムのエネルギー波を遮断し、無効化させるという当時机上の空論でしかなかった理論を自分なりのアレンジを加えたのが今回完成させた装置だ。机上の空論とはいえ実際はかなり信憑性の高いシステムである為、ある程度の自信は持てる。
　だが、まだこれだけでは心許ない。エンブリヲの奴を徹底的に追い詰める為にも中途半端に満足せず、追求を続けていこうと思う。

＊月α日
　今日、少しばかり腹の立つ出来事が起こった。別にアンジュちゃんやサラちゃん達に対して怒っている訳ではない。これは浅はかだった自分に対してと本格的に手段を選ばないエンブリヲに対しての怒りだ。折角ヴィヴィアンちゃんが実の母親と再会出来たというのに、色々台無しである。
　事の発端は午後、エンブリヲ対策の為に研究室で考え事をしていた時の事、第一中隊のヴィヴィアンちゃんが実はドラゴン側の人間だったという事で彼女の実家に招かれた時が始まりだった。
　幼い頃に一族と一緒にアルゼナルに侵攻し、その時の戦闘によってはぐれてしまった彼女はアルゼナルでノーマとして働き、今日まで生きていた。まだ幼かった頃のヴィヴィアンちゃんは記憶が定かではなく、この世界に来て当初は彼女の母親であるラミアさんを親として認識出来ないでいた。
　けれど人懐っこいヴィヴィアンちゃんは本能的にラミアさんを自分に親しい存在だと無意識に理解し、部隊として召集されない限り常に一緒にいる程仲良くなっていた。

この分だと親子に戻るのも時間の問題だ。親しげに話をする彼女達に自分も思わず頬を緩ませてしまった時、それは起きた。
自分が体験した経験に基づいた言い方をすれば、アレは多元世界でも現れる時空振動に近しいものだと推測する。突然都に現れる時空の歪み、浸食する様に広がる歪みに呑み込まれる人々を見て、自分は即グランゾンを呼び出し、時空の歪みを押し留める為に行動を開始した。
けれど向こうは時空振動にも似た事象だ。迂闊に触れば自分も巻き込まれると判断した自分は如何なる事象にも干渉できる重力、即ちグラビトロンカノンの範囲を限定的に絞り、時空の歪みを押し留めるという選択を取った。
ＢＨＣで空間そのものを消し飛ばすという手段もあるが、それでは都までもが巻き添えを受けてしまう。せめて皆が避難するまで持ちこたえようとした時、アンジュちゃんとサラちゃんがそれぞれの機体に乗って駆けつけてくれた。
そこで彼女達が取った行動は……歌、例の永遠語りという歌を重ねる様に歌い上げる事で本来の力を発揮し、彼女達の機体からそれぞれ収斂時空砲と呼ばれる兵器を用いて時空の歪みを相殺させる事に成功した。
彼女達の活躍により被害は最小限に防げたが、それでもゼロではない。時空の歪みに巻き込まれ、命を落とした者がいる。彼女達の亡骸を葬った際、自分の中で怒りが渦巻いているのが分かった。
こんな事をするのはエンブリヲしかいない。そう断言するタスク君は以前にも同じ様な事象に巻き込まれご両親を亡くしたと聞く。
えげつない手段を使ってくるエンブリヲに嫌悪感しか湧かないが、今回の件とタスク君の話で奴の目的が少し見えてきた気がする。
あのあと現場を調べると本来この世界にない筈のモノが多数向こうから流れ着いている事が判明した。アンジュちゃん曰くエアリアと呼ばれる競技に用いられる乗り物が紛れ込んでいる事から、恐らく自分の仮説は間違いないと思う。
奴……エンブリヲの最終目的は向こう側とこちら側、二つの地球を

融合させる事だと思われる。奴が保有するラグナメイルは一機一機が次元に影響を及ぼす収斂時空砲を搭載されていると思われる。
奴が作り上げたラグナメイルとドラグニウムをマナとして放出するアウラ、これらを用いて二つの地球を統一し、新たな世界を生み出そうとするのが奴の計画なのだと理解した。
融合される際に二つの文明は崩壊し、そこに生きている人々も例外なく抹殺される。破壊と創造、一見すれば確かに神の所業に思えるかもしれないが、実際奴と話している自分としては吐き気のする大量殺戮にしか思えない。
今回の一件は奴にとって実験程度にしか思っていないのだろう。だから人を見下しもすれば分かり合おうとする素振りも見せない。結局奴は、自分の都合でしか物事を考えられていない。嘗てのリボンズ＝アルマークやグレイス＝オコナーの様に。
だったらまずは示さなければならない。猿と断じて見下してきた人間の底力というモノを……。
次に奴と戦う際は出し惜しみはしない。最悪、向こう側の地球ごと滅ぼすつもりで奴と相対しようと思う。……博士からも賛成を得られたし、遠慮なくいこうと思う。
追記、後から聞いた話だとどうやらラミアさんは無事だった様子。一時期はヴィヴィアンちゃんを庇って危機的状況に陥っていたらしいが、ノーマとドラゴンの皆が手を貸すことによって窮地を脱せたらしい。
二人の無事にアンジュちゃん達も胸をホッとなで下ろしていた。

その２０

※月ｏ（、ω、＊）ｏ日

エンブリヲからのいらぬ攻撃を受けて翌日、被害を受けて亡くなった女性達の亡骸を埋葬した自分はタスク君からエンブリヲを倒す為の方法に付いて聞き出す事に成功した。

聞き出す……と言っても、別に脅したりした訳ではない。長年エンブリヲと戦ってきたタスク君の一族なら奴の弱点に何か知っているのではないかと思い、自分なりに必死に訊ねただけである。

……まぁ、奴のやり方に内心怒り心頭でついついタスク君を追い詰める様な言い方をしてしまったので今は反省している。聞き出そうとする際に壁を叩いたりして驚かせてしまったり、逃げ場を防いだり端から見れば脅す様に見えてしまった事だと思う。未成年相手に大人げない事をした。この日記を書き終え次第謝りに行こうと思う。

で、そんなタスク君から得られた情報なのだが、結構自分が予想していたモノと一致していた部分か多かった。奴の不死性、殺しても次の瞬間には復活している奴の特性は不確定要素を含んだ質量のある分身……に近いモノだと自分は考えている。

量子論の一種とでも言うべきなのか、詳しく話すと長くなるので少し省きながら説明すると……要するに奴の本体が姿を消すことで世界の認識から逃れ、自らを不確定の存在として固定し、何処にでもいて何処にでもいないシュレディンガーの猫状態していると思えばいい。

不確定なのに固定とか色々矛盾している理論だとは思うが、奴の不死性を鑑みれば強ち間違いではない事だと思う。奴のあの能力を見ればどうしようもない程の無敵性を有していると思えるが、この仮定が正しいとなると自分達にもまだ勝機があると考えられる。

存在を隠しているのであれば何処かに奴の本体ともいえるモノがそこに在る可能性が高い。恐らくは奴は時空位相の異なる所に身を

隠しているモノだと推測しているが、この可能性の信憑性は正直五分五分と言った所だろう。
何せ奴の能力は時空を操るのだ。所構わず出現し、消えたりするのであれば今頃は誰もが予想できない場所に転移している可能性も充分高い。
だから時空に干渉する収斂時空砲なる兵装がアンジュちゃんのヴィルキスやサラちゃんの焔龍號に搭載され、エンブリヲを殺せる武器とされているんだけどね。
もしこの理屈が正しいのなら奴の本体を引きずり出す事もグランゾンならば可能かもしれない。あらゆる事象、物質に干渉できる重力を操るグランゾンなら空間を高重力で歪ませ、奴の本体にまで一気に手が届くかもしれない。
問題は奴の本体が何処にあるかなのだが……やはり、あの時奴が乗っていたあのラグナメイルが関係しているのだろうか？　それならそれで問題はないのだが、そんな簡単に行くとは思えない。
それに残りのラグナメイルの存在も気になる。タスク君の話ではアンジュちゃんのヴィルキスも元々はエンブリヲの下にあった一機を奪った代物らしいし、残る他のラグナメイルは奴の管理下に置かれていると考えた方がいいだろう。
奴のラグナメイルが放つ収斂時空砲、咄嗟に撃ち出したとはいえＢＨＣと同等以上の威力を持つ武器、それが向こうにはまだ複数残っている。そう考えればやや此方の戦力に不安が残る所だが、嘆いても仕方がない、最悪自分が全部対処するつもりで相手するしかないだろう。
もうじき奴との最後の戦いが待っていると、多元世界で培った勘がそう囁いている。恐らくはその時は近い、疲れを残しておく訳にもいかないので今日はこれで終わりにしたいと思う。

π月※日
本日未明、向こう側の地球でスパイ活動をしていたリザーディアさんからアウラの所在に関する報告が来た。現在アウラはミスルギ皇

国にあるアケノミハシラの地下深くに幽閉されているらしく、今もそこで拘束されている。
やはりそうかと自分が納得している一方、大巫女様達は歓喜の表情で盛り上がっていた。これでアウラ奪還の目処が立つ、急いで出撃準備に取り掛かろうとした彼女達を前に……自分は待ったを掛けた。
エンブリヲは何でもアリの反則的な奴だ。オマケに奴の性格上此方が攻め入ろうとした所を最悪のタイミングで邪魔してくる可能性もある。まだアルゼナル側の準備が整っていない以上迂闊に攻め込むのは危険だと思われる。
以上の提言を大巫女様達の前で口にした所、返ってきたのは無礼の一言、まぁこれまで自分がしてきた事を考えれば当然の反応なので仕方がないんだけどね。それにいつまた奴のあの時空融合の攻撃が来るか分からない以上、悠長に構える訳にもいかない。その後の大巫女様達とやりとりを経てどうにか二日という時間を戴いた自分は、すぐさまアルゼナルに急行し整備兵であるメイちゃんと共に各パラメイルの整備を行った。
他にもアウローラと呼ばれる艦の整備を行ったのだが……いやー、何気に凄いよねあの艦。潜水だけでなくまさか飛行航空艦としても機能を有しているし、珍しい性能を持つアウローラに結構驚いた。
けれどこれから必要とされているのは優れた航空機能を有する機体だ。海を渡って行くよりも空を飛んで一直線に目的地に行ける方が今後は必要になってくると思われる為、ジャスミン女史の監修の下、アウローラの改修作業に取り掛かった。
元々が優秀な艦だった為にさほど時間は掛けずに作業は終了、改修と言ってもエネルギー供給の効率化とか飛行速度や加速といった所だけなので外見は別段変わった所はない。本当なら試運転でもしてみたい所だが、それをするには時間が限られている為、アウローラの飛行運航はぶっつけ本番となってしまった。
時間は掛けなかったとは言っても、手を抜くような事はしないから心配はないと思うけど――――いや、訂正。ちょっと不安かもしれない。

アウローラの機能変更に付いてカタログスペックをジャスミン女史に確認を込めて拝見させた所、何故か苦笑いで返されてしまった。もしかしたらどこか不安に思える箇所があったかもしれない。
ジャスミン女史は何でもないと言っていたが……果たして本当に大丈夫だろうか？　もし詰めが甘い所があるのなら明日もう一度アウローラを見た方がいいのかもしれない。
勿論他のパラメイルに関してもだ。一応各ライダーの身体能力や癖に合わせて最高の状態に仕上げたと思うが……何分相手が相手だ。油断せずに気を抜かないでいこうと思う。

π月＊日
向こう側の地球に攻め込むまであと一日、最後の追い込みという事で自分とメイちゃん達整備班は朝早くから各機体の最終チェックに勤しんでいた。
どの機体も全てオールグリーン、ヒルダちゃん達にも確認という事で乗って貰い、それぞれ満足のいく返事を受け、今日のは後の仕上げとなった。その後自分達は最後の戦いに備えて各自心身を休める事に勤め、自由行動に各自思い思いに生活させて上げる事にした。
ノーマ側の代理代表格であるジャスミン女史からも許可を貰った事だし、皆それぞれゆっくりと休んでいる中、第一中隊の隊長であるサリアちゃんが自分の所に訪れてきて唐突に自分に頼み込んできた。
ヴィルキスに乗せて欲しい。真剣な表情でそう告げる彼女に対し、自分は何故だと聞き返した。聞く所によるとあの機体……ヴィルキスは本来ならジル司令官から譲り受ける筈だった機体らしく、後からやってきたアンジュちゃんに取られたのだと彼女は言う。
……いや、何故それを自分に言う？　俺ってそんな事を許可出来る人間じゃないよね？　と、再びサリアちゃんに訊ね返した所、そのジル司令官から自分に聞けと突っぱねられたという。
どうやらジル司令官は自分にリベルタスの計画が滅茶苦茶にされた事を根に持っている様だ。まぁ自分がやった事だから仕方がない。とは言え、ヴィルキスはラグナメイルというパラメイルの元となった

機体だ。指輪や歌という特殊な制御装置も施されているし、正直サリアちゃんではヴィルキスを十全に扱うのは無理だと思う。
無論、これはサリアちゃんに限った話ではない。ヒルダちゃんやクリスちゃん、ロザリーちゃん達にも言える事だ。けれど、今までヴィルキスを乗るのは自分だと思っていたサリアちゃんからすればアンジュちゃんはヴィルキスを自分から奪った盗人にも見えるだろう。この事が後の禍根に繋がる事だと感じた自分はその後、サリアちゃんと納得するまで話し合う事になった。
数時間程格納庫で話し合った結果、どうにか理解して貰える事に成功した。サリアちゃんはヴィルキスに乗る事に拘らず、今の機体で頑張ると言ってくれたし、彼女のやる気に応える為にも自分も最大限に……いや、それ以上に頑張っていこうと思う。
……それにしても、ジル司令官てばいつまで怒っているのだろうか？　確かに自分も悪いと思うけどもうすぐ最後の戦いが始まるのだ。上の立場に立つのならそろそろ気持ちを切り替えて欲しいのだけれど
まぁ、自分が言う事じゃないから放っておくしかないんだけどね。

その21

――――決戦前夜。アウラ奪還の為にノーマとドラゴン、二つの陣営は明日に備えて今日まで出来る限りの事を尽くしてきた。向こう側の地球に送り込んだ事にリザーディアからアウラの居場所を突き止めたドラゴン達は明日、いよいよアウラをエンブリヲの手から取り戻すために行動を開始する。

シュウジ＝白河という人間が提案した準備段階を経て、遂に進軍する目途の立ったサラマンディーネ達を始めとした幹部達は既に都周辺に多数のドラゴン達を呼び集めている。

その数はこれまで敵対していたアルゼナルの者達が驚愕するほどまでに増え、今も空を埋め尽くす程のドラゴンの軍勢が都に向かって集結している。全てはアウラを取り戻す為、その一点に目的を集中しているサラマンディーネを始めとしたドラゴン陣営の面々はその瞳に既に準備は万全となっていた。

それに対しノーマ達は出撃するメンバーに付いて多少だが揉めてしまっていた。これまで世界を守る為、人間達を守る為だと思い込んできた自分達がていの良い捨て駒扱いされていたという事実を前に多くのノーマ達が戦意を喪失していたのだ。

無理もない。幼い頃から……それこそ、まだ自我なんてモノが存在していない赤子の頃よりそのような在り方を刷り込まされてきた彼女達にとって存在意義を失ったも当然なのだから……。

けれど、騙された事に対し怒りを覚えて闘志を燃やすノーマも確かに存在した。よくも好き勝手やってくれたと、人間に対する怒りと憎しみをたぎらせて立ち上がった彼女達は皆ドラゴン陣営と協力する事を良しとした。

ノーマ達の代理代表であるジャスミンもまたドラゴン陣営に協力する事に賛成している。今度こそノーマ達を解放し、自由を得るのだとやる気を持つノーマ達をまとめ部隊編成に乗り出した。

ノーマ達を解放する為、アルゼナルからアウラ奪還の協力する事に

なったジャスミンは任意でこの作戦に協力する者達を集った。
　戦力は多い方に越した事はない。しかし戦う気力の無い者達にまで戦いを強要させてもそれは足を引っ張る要因にしかならない。幼年部の子供達は仕方がないにしてもジャスミンはやる気のない者達を無理矢理連れて行く事はしなかった。
「エルシャ、本当にいいの？」
「ええ、あの子達に必要なのは守る事じゃない。自由という未来に続く為の道よ、そしてそれはあの子達の側にいるだけでは成し遂げられないから……それに、子供達は都にいるヴィヴィちゃんのお母さんやここに残るドラゴンさん達に面倒を見て貰える事になったから、安心して任せられるわ」
　アウローラの格納庫内でアウラ奪還作戦に参加する事になったエルシャ、自分にとって宝当然である子供達を守る為に悩んだ末に出した結論にヴィヴィアンは嬉しそうに笑った。
「けど、そういうヴィヴィちゃんの方こそいいの？　折角お母さんに会えたんだからもっと甘えてきてもいいのよ？」
「うん、それは帰ってきてからするー！　帰ったらまた皆でバーベキューしようねー！」
　エルシャの返しの質問に対し、ヴィヴィアンも笑顔で言い返した。明日行われる作戦はこれまで行われたどの戦いよりも規模の大きい戦闘になる筈、しかしヴィヴィアンには皆で帰ってくるという決意を固めている。いや、既に勝った気でいると言った方がいいかもしれない。
　相変わらずな彼女に対し、エルシャは一瞬呆気に取られるが、変わりない少女にエルシャもまたクスリと微笑んだ。
「いよいよ明日か～、アタシ、生き残れるかなぁ？」
「何だよロザリー、今頃ブルってんのか？」
　一方、最後の決戦を前に緊張で身を固めるロザリーにヒルダが茶々をいれていた。ロザリーからしてみれば明日行われるのは今まで自分達を支配してきた人間達との戦争、緊張するなと言う方が無理な話である。

「大丈夫だよロザリー、ロザリーの事は私が守ってみせるから」
「く、クリス？」
　そんな彼女に意外や意外、これまで物静かな女として知られてきたクリスが大胆な言葉遣いでロザリーに迫ってきた。これまでとは違いキリッとした表情をするようになったクリスにロザリーは思わずドキッと胸を高鳴らせてしまう。
「必ず皆で生き残るんだ。ヒルダや私第一中隊の皆……うぅん、明日戦う皆で戦って人間達に思い知らせるんだ。私達を舐めるなって」
　やだこのクリス格好いい。これまでの印象とは違いやたらと逞しくなった彼女にロザリーはまたもやキュンと胸が鳴り、隣にいるヒルダも思わず見とれてしまった。
　しかし……。
「そしてその後は世界中に教えてやるんだ。シュウジ×タスクの素晴らしさをズキューンでバキューンでシャバドゥビタッチヘンシーンな素晴らしき世界を皆に教えて上げるんだ。ウフフフ」
　不気味な笑みと共にそんな事を口にするクリス、そんな彼女に二人は心の中で距離を取った。何を言っているのか全く理解出来ずにいるヒルダとロザリー、しかし明日生き残るつもりでいるクリスに幾分か元気を分けて貰えた事にロザリーは苦笑いを浮かべる。
　その手からは既に緊張の震えは止まっていた。
「アンジュはさ、明日の戦いが終わったらどうするのさ？」
「何よタスク、藪から棒に」
　唐突に訊ねられるタスクからの質問にアンジュは訝しげに眉を寄せる。これまでアンジュは必死に生きてきたアンジュにとって未来という言葉はあまり意味を成さなかった。殺し殺されるが当たり前の日々、今日を生きる事に全力だった彼女は先というモノに目を向ける余裕などなかったから……。
　しかし、明日行われる作戦が上手くいけば全てが変わる。迫害され続けてきたノーマも人間から解放され、自由を手にする事が出来る。既に多くのノーマ達がこの地球での生活に慣れ始めている。ドラゴン達との蟠りも無くなりつつあるからここで生活を続けていけば自

ずと平穏は得られる様になる。
　ならその後はどうするか、アンジュは腕を組んで少しばかり悩んで見せるが、すぐに何か思い付いたのか、表情を明るくさせてタスクに言う。
「あいつを、シュウジ＝白河をブン殴る。今は取り敢えず、これを目標にしてみるわ」
　未だ初対面の時のことを根に持っているアンジュ、彼女の悪戯の混じった笑みにタスクもまた笑みを浮かべるのだった。

◇

「……それで？　一体私に何をさせようっていうんだ？」
　アルゼナル反省房。部隊で規律を乱した者や命令を違反した者が放り込まれる反省房という名の牢獄、柵に囲まれた牢屋の中で元アルゼナル司令官であるジルは柵の向こう側に佇む男――――シュウジ＝白河を敵意剥き出しで質問する。
「ジル司令官、アナタは優秀な指揮官だ。明日の戦いでは戦力だけでなく優秀な指揮官も必要となります。戦局は混乱を極める事でしょう。一人でも多くの仲間を生還させる為、今一度司令官の立場に戻ってきてはくれませんか？」
　シュウジの口から告げられる言葉、司令官に戻れという言葉にジルは一瞬目を見開くが、次には興味はなさそうに視線を逸らし、独房から見える空を眺める。
「既にジャスミン女史とマギー医務官から許可を戴いています。アナタが戻ってくれるのなら、サリアさんを始めとした部隊の皆さんの士気も上がる事でしょう。ですから……」

戻ってきてください。そう口に仕掛けた時、遮れる様にジルが口を開く。
「既に私達のリベルタスは崩壊した。貴様の所為でな……最早私に出来る事はない。ジャスミンを指揮官にとっとと片付けてしまえばいい。お前の機体、グランゾンだったか？　アレを使えばアウラとやらもさっさと取り戻せるのだろう？」
だからもう私に構うな。そう言外に語るジルはそれ以降口を開こうとせず、シュウジに目を向ける事はなかった。彼女のあからさまに拗ねた態度、まるで自分の思惑通りにいかない状況に拗ねるジルにシュウジは一度だけため息を吐き……。
「どうやら、私の言い方に問題があった様ですね。ならば改めて言います。このまま負け犬になりたくなければ、今すぐにそこから出て来なさい。アレクトラ＝マリア＝フォン＝レーベンヘルツ」
「っ!?」
自分の本当の名前を呼ばれた事にジルの目は大きく見開かれる。何故自分の素性をこの男が知っているのか、驚きと苛立ちを露わにする彼女は無意識に舌打ちし、殺意の混じった視線を目の前の男に叩きつけた。
しかしそんな彼女の殺気をモノともせず、シュウジは冷ややかな目線で彼女を見下ろしていた。
「自分の名が知られた事がそんなに驚きですか？　ガリア帝国元第一皇女殿下」
「貴様、どこでその名を」
「なに、大した話ではありません。アウラの所在を探るためにあちら側の世界で調べ物をしていた際、偶然見かけたから覚えていただけです。……アレクトラさん、いえ、ジル司令官。アナタがあちら側の世界でエンブリヲに何をされ、何をしていたのか敢えて問いません。ですが、もしその時の雪辱を願うのであればアナタは最後まで見届ける義務があるのではないのですか？」
「私に……何をさせるつもりだ」
「言ったはずですよ。見届けさせると、アナタはこれまでリベルタス

の総指揮官として活動してきた。ならば最後の時まで付き合うのが筋というものでしょう」
「だが……私のリベルタスは終わった。お前によって終わらされてしまった」
「だが、まだ私達のリベルタスは終わってはいません。違いますか？」
私達のリベルタス。そう言われて俯いたままだったジルの顔が上がる。牢の前で佇む男の表情にはエンブリヲとは別のベクトルの恐ろしい程に綺麗な笑みを浮かべていた。
「アナタ達はアウラを奪還してエンブリヲの目的を防ぎ、私がエンブリヲを討つ。この二つの復讐をやり遂げて初めて私達のリベルタスは完遂される。……アレクトラ＝M＝F＝レーベンヘルツ、今一度問います。ここから出て私達のリベルタスに幕を下ろしませんか？」
柵の間から伸ばされる手、それはジルから見て悪魔との契約の瞬間に思えた。嘗てエンブリヲに籠絡された時も似たように手を指し伸ばされたが今回のは違う。此方の意志を試すかの様な挑発的な手、そして不敵に笑みを浮かべるシュウジの笑み、まるで此方の考えることはお見通しだと言わんばかりに微笑むその顔に……。
「……いいだろう。シュウジ＝白河、貴様達のリベルタス（復讐劇）に付き合ってやる」
いつかこの拳を叩き込む。そう決意したジルは義手である鋼の手でシュウジの手を掴むのだった。

その22

ドラゴン陣営本拠地、竜の都。アウラの奪還という最大にして最後の目的の為に今日まで堪えてきた彼女達はこの日、全てに決着を付ける為に最後の戦いへと挑もうとしていた。

都へ集められた大型小型を合わせた総勢数万に至るドラゴンの軍勢、飛行形態へと移行したアウローラとそれに載せられた精鋭達、全てはアウラ奪還とノーマの人間からの解放、目的は異なってもそこに至るまでの過程が同じである事を理解した両陣営は手を組むことで全ての元凶たるエンブリヲに最後の戦いを仕掛けようとしていた。

もうじき全てを決する戦いが始まる。決戦を前に緊張を高ぶらせる両陣営だが、ある一人の男がこの場にいない為、出撃命令が下されずにいた

一体あの男はこんな大事な時に何をしているのか。不安と苛立ちが募り始めた頃、都の神殿から医師を引き連れたシュウジ＝白河が謝罪の言葉と共に姿を現した。

「遅れてしまい申し訳ありません。皆さん、準備はできていますか？」

「ええ、アナタで最後ですわ」

「そうですか。それはよかった」

迎えにきていたサラマンディーネの皮肉も目の前の男には通じず、シュウジは後ろで控える様に佇んでいた女医師に向き直る。

「ではＤｒ．ゲッコー、戦いが終わりアウラを取り戻したら例のモノをドラゴンの皆さんに投与してあげて下さい」

「は、はぁ……しかし、本当に大丈夫なのでしょうか？」

「成功確率は八割といった所でしょうか。副作用はないので仮に失敗しても害はありません。もし不安があるのでしたら一緒に渡しておいた抗薬剤も投与する事をお勧めしますよ」

「は、はぁ……」

「いったい何の話です？」

「此方の話ですよ。さ、そろそろ行くとしましょう。これ以上待たせ

るのは流石に拙いですからね」
サラマンディーネの質問に何も語らず誤魔化すシュウジ、不思議に思った彼女が医師のゲッコーに視線を向けてもゲッコーは顔にひきつった笑みを浮かべるだけだった。
一体なんの話をしていたのか、気にはなるが今はアウラ奪還に集中しようとサラマンディーネは愛機である焔龍號に乗り込んだ。
シュウジも重力の底からグランゾンを呼び出し、アウラ奪還作戦の戦線へと参加する。アウローラを旗艦とした軍団は目の前に開かれるだろう特異点の出現を待つ。
既に出来る限りの手は尽くした。エンブリヲのマナを介しての人間の操作を防ぐためにエマとモモカにマナの遮断装置を渡し、アンジュのヴィルキスを始めとした残存する全てのパラメイルの改修作業も終わった。特にヴィルキスに至っては乗り手……即ちアンジュの意志次第で本来の力を引き出せるよう細工をしておいた。
アウローラのブリッジには昨夜の説得の甲斐あってジル司令官も艦長席に座っている。準備は万全といっていいだろう。
目的を達成させる決意もある。生き残る覚悟も既に完了しているしエンブリヲがどのような手段を取ってこようが一歩も引かない強い意志を持っている。
後は来るべき時を待つだけ、それぞれが持ち場に着いて特異点が開かれるのを待っていると、遂にその時がやってきた。
前方に開かれる特異点、円状に広がる空間の裂け目を目の当たりにした瞬間、ドラゴン達の長である大巫女が出撃の号令を掛けた。
瞬間、ドラゴン達は雄叫びを上げて特異点へ向かっていく。アウローラやサラマンディーネ達の龍神機もそれらに続き、全てに決着を付けるべく特異点の向こう側にある偽の地球へ攻め込んでいく。
空を埋め尽くす程のドラゴン達の軍勢、その壮観たる光景に誰もが希望を抱く。きっとアウラを助け出すと、自分達の光を取り戻してくれると信じて疑わないドラゴンの民達はその事を信じて特異点の向こう側へと消えていくドラゴン達を見送った。
しかし、グランゾンのコックピットに座るシュウジだけは眉間に皺

を寄せて疑問に思っていた。エンブリヲという男は用意周到な男、果たしてのこのこ敵本陣にやってくる自分達をそのまま迎え入れるだろうか。

リザーディアによって得られたアウラの居場所、確かにそれは正しい情報の様だが、その事を奴が知らないとは到底思えない。奴の時空を操る能力の事も考慮するなら最悪、向こう側に辿り着いた先が見知らぬ土地に転移される事も想定しておかなければならないだろう。

勿論この事は大巫女を始めとした神官達、サラマンディーネやアンジュ達にも伝えている。その対策に物資は多く積んでいるし、いざとなればグランゾンのワームホールで一気にミスルギ皇国中心地に転移する方法もある。

まだ色々と不安材料があるが、実戦は常に不確定要素が付きまとうもの、ここから先は自分達次第だと悟ったシュウジはやる気を漲らせて特異点を通過しようとする。

いよいよ決戦だ。アウラ奪還と向こうで待っているだろうリザーディアの回収に急ごうとした……その時。

『残念だが、君の出番はここまでだよ。魔人』

特異点の向こう側にある地球に出ようとした瞬間、どこからともなく聞こえてきた奴の声を耳にした瞬間……シュウジとグランゾンは二つの地球から姿を消した。

◇

多元世界にいた頃を振り返ると俺って大事な戦いの時に限って邪魔される事が多いよね。陰月が落とされる時もアサキムやアンチス

パイラルに邪魔されたし、火星での時だってやたらデカい次元獣に宇宙まで叩き出されたし……もしかして俺、そんな呪いでも掛けられているのか？　烙印（スティグマ）的なモノでも知らない内に刻まれてるんじゃなかろうか？

そんな事を考えながら周りを見渡すと、アンジュちゃんのヴィルキスみたいな機体が無数に存在している。その外見と奴等から検出されるエネルギー値の高さから見て、どうやらこれら全てがラグナメイルである可能性が高い。

恐らくは今自分達がいるこの空間に関係しているのだろう。明らかに普通じゃないし、辺り一面広がる虹色のマダラ模様からみてここが地球ではない事は明白だ。

『久しいな蒼き魔神とその主よ。その様子だとここがどこなのか漠然的にだか理解している様だね』

そんな事を考えていると聞き慣れたムカつく声が聞こえてくる。顔を上げてみれば予想通り、例の黒いラグナメイルの肩に奴……エンブリヲの奴が佇んでいた。

『……一応聞いておく、ここはどこだ？　何故俺をこんな所に引き込んだ？』

『ここは時空の狭間、何者も干渉出来ず、時が止まった永遠の空間。君をここに連れてきたのは彼女達の中で一番強力なのは君だけだったという話さ』

『……』

『君とその機体は確かに強力だ。次元の壁すら破壊してしまうその力は過剰と言ってもいい。しかし、所詮は有限の力、無限の力を操れる私の前では意味を成さないよ』

見下しと勝利の確信の笑みを浮かべるエンブリヲに対し、俺は無言で見上げた。確かに奴の言うとおり、奴の能力は厄介だ。この空間に連れて来たのも自分が勝てる事を確信した上での行動だろうし、事実数だけみれば圧倒的不利なのは明らかだ。

だが、ここに連れてこられた事で分かった事がある。奴が持つ特異的な能力、それはこの空間とそれを引き出す奴の機体が答えなのだろ

う。奴やアンジュちゃんの駆るラグナメイルは時空間に干渉する機体だ。恐らく奴は自身と己の機体を何らかの手段を用いる事で同調し、この空間……つまりは不確定世界の力を引き出している事であの無敵性を有しているモノだとした。

だが、それは誰にも知られない事が前提となる技術だ。量子論の一つにもあるがそこに在るという確定した情報があれば不確定は不確定でなくなり第三者に届くまで堕ちる事になる。それを覚悟した上で自分を引き込むのは少しばかりリスクが高すぎるのではないだろうか？

……まぁ、状況から見るに自分をこの戦力でどうにか出来ると思っての行動なのだろうが。

『本来なら君をここにおいて永遠の時の流れに封じる事も考えたのだが、それでは余りに味がない。絶望を味わわせる為に君にはあるモノを見せたいと思う』

そういって奴の隣に映し出された空間に俺は息を呑んだ。特異点を越えてミスルギ皇国に向かったとされるドラゴン達とアンジュちゃん達が奇妙な嵐に飲み込まれようとしていたのだ。

『もうじき二つの地球は一つとなり新たな世界に生まれ変わる。君が守りたかったノーマやドラゴン達ももうじき消えて無くなるのだ。どうだい、絶景だろう？』

下卑た笑みを浮かべてくるエンブリヲに操縦桿を握る力が強くなる。二つの地球を一つにする事で新しい世界を創る。聞くだけでは何とも壮大な話だが、実際にみれば大量虐殺だ。何せ世界を融合させてしまうのだ。その余波に巻き込まれてしまう人間や生命は為す術なく命を落としてしまうだろう。何せ規模はサラちゃん達の地球で起きたモノと比べものにならないのだ。あれだけの規模の時空災害が起きてしまえば二つの地球に住む命は全て滅んでしまう。

……あぁ、漸く理解した。目の前にいる男は人間や他の生命体を命として見ていない。必要としているのは自分が使えると判断した駒だけだ。

『心配することはない。君もすぐに彼女達の後を追わせてあげよう。

――――』

歌が聞こえる。奴が奏でる滅びの歌が時空の狭間に響き渡る度に奴の機体からエネルギー値が上昇していく。

他のラグナメイルも奴の機体に共鳴し、肩部分の武装を展開、光を収束し、時空収斂砲の発射態勢に入り……そして。

『それでは、さようならだ。異世界からの旅人よ』

奴が紡ぐ別れの言葉を口にすると同時に全方位から光の嵐が放たれ――――。

〝オン・マケイシヴァラヤ・ソワカ〟

時空の狭間に光があふれた。

◇

『……バカな』

その光景にエンブリヲは唖然となる。確かに自分が放った一撃は余すことなく魔神に直撃した筈だ。言葉によって油断を誘い、この空間の力を引き出す事により生み出したラグナメイルの軍勢によって魔神は討伐された筈だ。光に呑み込まれ、奴は跡形もなく消し飛んだ

筈だ。
なのに何故、攻撃をした筈のラグナメイル達が無惨な残骸となって宙を漂っているのか。理解が及ばない光景に唖然となるエンブリヲの視界に……ふと、光が差し込んできた。
一体何だ？　かぶりを振って見上げた彼の視線の先にいたのは――――。
日輪を背負う蒼き魔神の姿だった。

その23

アウラ奪還とノーマの自由の為に偽りの星と呼ばれるもう一つの地球へ侵攻していったドラゴンとノーマの混合軍団、特異点と呼ばれるゲートを潜り抜けた先で待ち受けていたのはミスルギ皇国の大地と空、そして予め待ちかまえていたこの星の軍隊だった。

各国の軍を集結させた大規模の軍勢、それはミスルギ皇国の大地を埋め尽くす程の数にまで迫ったが、予めこの程度の障害は想定済みだった両陣営は構うことなく前進、ドラゴンとノーマによる同盟軍は真っ正面から人間達と交戦した。

物量では人間達の方が圧倒的に有している為、最初は圧され気味だったノーマとドラゴン達だが、アンジュがヴィルキスに秘められた力を引き出した途端に戦線は覆され、ドラゴン達の力も合わさってあっと言う間に戦況はアンジュ達の優勢となった。

シュウジが手を加えた事によりヴィルキスやパラメイルも強化され、旗艦とされるアウローラにもバリア耐久値に手を加えられていた事もあり被害は最小限に食い止められた。

その後もアウローラに搭載された主砲によってミスルギ皇国の象徴であるアケノミハシラは破壊され、アウラがいるとされる地下への道が開かれる。

当初の予定通りサラマンディーネがアウラ奪還の為に地下へと突入し、その一方でナーガとカナメがこの地球に送り込んだリザーディアの捜索に乗り出した頃、それは起こった。

「な、何だよアレ！」

「竜巻？　うぅん、もっとヤバそう……」

ロザリーが指さした方に現れる巨大な暴風雨、雷を纏わせながら此方に近付いてくる嵐に誰もが驚き、戸惑った。

あの嵐が普通のモノではないと知ったのは近くにいたドラゴンを呑み込んだ直後だった。二百メートルに及ぶ大型のドラゴンを成す

術なく呑み込んでいく嵐にその場にいる多くのノーマ達が恐怖に呑み込まれ掛けた。
一体アレは何なのか、徐々に近付いてくる嵐に恐怖が伝播しようとした時、アケノミハシラ跡地の空洞から光が溢れ出した。
空を覆うほどの輝きを放つ光の正体は……アウラ。ドラゴン達の始祖と呼ばれる始まりのドラゴンの出現にノーマ達は危機的状況に晒されながらもその光に一瞬見取れてしまっていた。
『我が子らよ、そしてノーマの民達よ、私をエンブリヲの永きに渡る呪縛から解放して下さり誠に感謝します』
「喋った!?」
神々しい姿に相応しい丁寧な言葉で礼を口にするアウラ、まさかのドラゴンが言葉を話せるという事にノーマ達が戸惑う中、永い間宿願だった目的が果たせた事にサラマンディーネを始めとしたドラゴン達は感激に打ち震えていた。
だが、状況はそれを許さない。母なるドラゴンとの感動の再会を後回しにしたサラマンディーネはアウラに今この地球がどうなっているのか訊ねた。
「教えて下さいアウラよ。今、この地球では一体何が起こっているのですか?」
『……エンブリヲは私と複数のラグナメイルを使用し、時空融合を開始しました。間もなく二つの地球は時空融合によって統一され、全ての命は破壊し尽くされてしまうでしょう』
アウラの口から聞かされる終わりの言葉、次元の壁で隔たれていた二つの地球が時空融合で一つにする事で新しい世界となる。全ての命が犠牲となる事で生まれるという歪んだ世界が、もうすぐそこまで来ている。
そう報せるアウラの言葉にノーマもドラゴン達もただ呆然とした面持ちで聞いていた。
「ざっけんじゃないわよ。じゃあ私達は死ぬ為にここに来たって言うの? そんなの冗談じゃないわよ!」
認められない。そう声高に叫ぶアンジュは憤怒の形相でアウラを

睨みつけた。まだ生きる事を諦めてない彼女はこの状況をどうにかする為の解決方法を考えた。
しかし、どうする事も出来ない。システムを作動させる為の歯車の一つでしかなかったアウラは申し訳ないと頭を垂れ、ただ済まないという言葉しか出せなかった。
作動したシステムを止めるには全ての元凶であるエンブリヲとその機体を同時に破壊するしかない。しかしそのエンブリヲ本人は既に時空の狭間と呼ばれる異空間へと避難している為、手出し出来ない所にいる。
既に世界の八割が時空の嵐に呑まれている。このままでは自分達も嵐に呑み込まれ、跡形もなく消されてしまう。徐々に押し寄せてくる死に恐怖する一行だが、ふとここでヒルダはある事に気付く。
「……そういえば、シュウジの奴はどこ行った？」
ここまで激戦続きだった為に一番戦力として期待していたシュウジとグランゾンがいない事に気付けなかったヒルダは辺りを見渡した。
ヒルダの言葉にそう言えばと他の面々も今更彼がいない事に気付き、こんな時にどこへと周囲を見る。と、その時だった。
すぐそこまで押し寄せてきた時空の嵐は突然吹き飛ぶように掻き消え、次の瞬間空間に亀裂が入り、眩い程の光が彼女達を呑み込んでいった。

◇

――――――嘘だ。目の前に広がる光景にエンブリヲはただ否定の言葉を口する。嘘だと、有り得ないと、こんな事は何かの間違いだと、世界の調律者と自称する男はワナワナと震えながら自身の愛機である

ヒステリカに寄りかかる。
眼前に広がるモノ、旧世界を滅ぼした機体が無惨に粉砕される光景にエンブリヲは絶句し、言葉を失った。
此方の戦力は無限、時空の挾間という不確定から成り立つその量は無限、文字通り底のない軍勢だというのに、エンブリヲの愛機ヒステリカの分身ともいるラグナメイル達はたった一機の魔神によって蹂躙されていた。
『ネオグランビーム、発射』
奴の額が光り閃光が迸る瞬間、射線上にいたラグナメイル達が跡形もなく蒸発し、光の中へと消えていく。
『グランワームソード』
虚空から現れる剣を楯に分身達の攻撃を防ぐ魔神はお返しとばかりに剣を横に薙払う。まるで紙細工の様に両断されるラグナメイルは周囲の機体群を巻き込みながら爆発し、四散していく。
このままでは埒が空かない。奴の動きを止める為、今度こそ屠る為だとエンブリヲは再び歌を紡ぎ出す。既に破壊されたラグナメイル達は補充され、新しい別のモノに置き換えられている。
そうだ。この空間中で自分の力は絶対、ここでは何者も自分には及ばず、何者であれ刃向かう事は許されない。自分こそが世界の調律者であり、絶対の存在なのだと、自らを奮い立たせてエンブリヲは歌を紡ぎ出す。
再びヒステリカの肩部分の武装が展開され、時空を揺るがすエネルギーが集約されていく。それに合わせて魔神を囲むラグナメイル達も肩部分の装甲が展開し、魔神に向けて攻撃の合図を待っている。
この距離なら外しはしない。エンブリヲが勝利を確信した笑みを浮かべ、一斉発射を命じようとした時。
『――――グラビトロンカノン、発射』
高重力の雨がラグナメイル達に降り注がれ、魔神を囲んでいた調律者の遣い達は成す術なく圧壊し、爆破していく。
その光景に再びエンブリヲは絶句する。勝利を確信した笑みを浮かべたまま硬直する彼は、次の瞬間憤怒の形相で目の前の魔神……ネ

オグランゾンを見上げた。
時空の狭間、まだら模様の空間に佇む蒼き魔神。その背に輝く日輪を負う蒼く神々しい魔神は下で睨む調律者を見下ろしている。
そこにいるな、私を見下すな。己の自尊心を深く傷つけられたエンブリヲは唇を噛みしめて怒りという感情を押し留める。忘れてはいけない、幾ら奴の力が増そうがここでは自分こそが絶対、敗北などは間違っても有り得ないのだ。
『く、ククク、それで勝ったつもりかね。幾らラグナメイルを破壊しようがここでは何の意味もない。それに見るがいい、もうじき向こうの世界は私の統一理論によって一つとなる。――――私の勝ちだ』
見せつけるようにして魔神の前に映像を映し出すエンブリヲの顔には先程とは別の狂気に染まった笑みが浮かび上がっていた。
もうじき二つの地球は一つになり、新しい世界が生まれる。ここで仮に自分は魔神に殺されても奴はもうあちら側に干渉出来ない。目の前で自分が大切にしていた者達が死に逝く様を見せつけてやるとエンブリヲは高笑いと共に魔神を仰ぎ見る。
『絶望したか？　後悔に打ち震えたか？　だがもう遅い。私が貴様をここに引き込んだ時点で既に私の目的は完遂している。幾ら貴様の力が強化されようが、既に手遅れだ。簡潔に言おう蒼き魔人よ、貴様は何も守れやしない』
魔神の奥で此方を見ているだろうシュウジ＝白河を前にエンブリヲは今度こそ自身の勝ちを確信する。しかし、そんな自分の言葉に魔人は何も反応を示さず、ただ上空へ垂直に浮かび上がった。
『……一つ勘違いしているから言っておくぞエンブリヲ、俺は別に誰かを守ろうと思い上がった事を考えちゃいない。俺はただあの世界で自分が出来る事を自分で考え、実行してきただけだ』
『なに？』
『アンジュちゃん達は強い子だ。仮に俺がこの世界に来なかったとしても、自分達で窮地を乗り越え、お前を倒した筈さ。俺はただその埋め合わせをしたに過ぎないんだよ』
『この世界だと？　……まさか、貴様は!?』

『さぁ、これで終幕だ』
シュウジの言葉に何か気付く事があったのか、世界の調律者と自称する男は驚愕の表情を浮かべ機体と共に後ずさる。後悔と絶望、二つの感情によって染まるエンブリヲはそんなバカなと目の前の現実を逃避する。
『相転移出力、最大限』
『縮退圧、増大……』
魔神の背負う日輪が輝きを放ち、周囲の空間が重力によってねじ曲がる。全ての事象、因果が歪曲し、圧縮されていく中、エンブリヲは信じられないといった表情で目を見開いた。
アレを撃たせてはならない。即座にそう判断したエンブリヲは時空の狭間を埋め尽くす程のラグナメイル達を顕現させる。無から有を生み出す彼の力は確かに神と呼ばれるに相応しい力を持っているのかもしれない。
しかし、彼は魔人。神聖なるモノを滅する深淵の遣いである。
『重力崩壊臨界点、突破……』
光が、圧縮される。空間が歪み、周囲の天体を引き寄せつつある魔神の中心に集約されていくのは全てを破壊し尽くす滅びの球体が美しく輝いており。
『お前の存在を、この空間ごと抹消してやろう。――――眠るがいい』
『や、止めろ。止めてくれ……』
『縮退砲……発射！』
『やめろぉぉぉっ!!』
エンブリヲの下へ投げ入れた次の瞬間、時空の狭間は天地開闢の一撃に呑み込まれ……。
エンブリヲは絶叫と共に光の渦へと呑み込まれていった。

その２４

「……は？」
アンジュの口からそんな間の抜けた声が聞こえてきたのは視界から光が晴れて凡そ十数秒経過した後だった。
先程まで自分達は故郷であるミスルギ皇国で最後の戦いを行っていた筈、なのに今自分達がいるのは見渡す限りの大海原の真上にいる。
一体自分達に何が起こったのか、アンジュ達は混乱しながら必死に思い出そうとした時、頭上から聞き慣れた声が聞こえてきた。
『……ここは私達の世界、真なる地球のようです』
声の主であるアウラの言葉に再びアンジュ達は混乱の底に叩き込まれてしまう。何せつい先程まで自分達は向こうの地球で戦っていたのだ、驚くのも無理はないと言える。
しかし、アウラの言葉も嘘ではなかった。各機体とアウローラのレーダーとソコに映し出されている座標が都のすぐ近くだと示している。
直後、アウローラに通信が入る。艦長席にいたアレクトラが繋げるよう指示すると、目の前の電子モニターにアウラの子孫である大巫女が映し出されている。どうやら本当に自分達はドラゴン達の地球へ戻ってきた様だ。
「けど、一体何がどうなって……」
『私も混乱している為、確かな事は言えませんが……恐らく我々がここにいるのはエンブリヲが倒された事に関係があるのだと思います』
「エンブリヲが、倒された!?」
アウラの口から聞かされる衝撃的な言葉にアンジュの隣で愛機のパラメイルに跨がっていたタスクがこの上ない驚愕の表情を浮かべており、アウローラの艦長席に座していたアレクトラもそんなバカなと言いたげな表情で席から立ち上がった。

これまで長い間怨敵と定めてきたエンブリヲがあっさりと倒されたと聞かされればタスク達の反応も無理もないもの、しかしアウラからは嘘を吐いている様子はなく、信じられないといった様子のタスクに向き直り、淡々とその理由を述べた。
『先程まで世界を覆わんとしていた時空嵐、アレは私とエンブリヲが生み出した複数のラグナメイルを起動キーに発動させたモノ、一度発動させてしまえばエンブリヲとその機体を諸共破壊しなければ止める事は不可能とされています』
「エンブリヲとその機体って、あの変にゴツゴツしたパラメイルの事？」
アンジュの何気ない質問にアウラは頷き、言葉を続けた。
『エンブリヲは時空の狭間と呼ばれる空間から無限に等しい力を有する異質な存在、此方から干渉することは事実上不可能とされてきました』
「けれど何らかの理由でその無敵性は崩れ、何者かの手によってエンブリヲは倒され、時空融合は阻止され僕達は生き残った。そういう解釈でいいのかな？」
『というより、そうとしか説明が出来ない。と言った方が正しいかもしれません。皆さんに心当たりがあるのではないのですか？　単騎でありながらエンブリヲと戦えるだけの力を有した者がいることを』
アウラから言われてアンジュ達は思い出す。散々此方を振り回しておきながら一番大事な時に姿を消していた奴の事を。
まさか彼がやったのか。一人で全てに決着を付けてしまった彼に対してそれぞれが複雑な心境で顔を俯かせた時。
「さ～て、ここでクイズです。今アタシ達がここにいるのはどこでしょう？」
「はぁ？　なに言ってんだよヴィヴィアン、そんなの地球に決まってんじゃん」
「では続いてもう1問、アレはな～んだ？」
ヴィヴィアンの指さした方角へ全員が視線を向けた時、アウラを含め誰もが驚きの表情を浮かべていた。そんな彼らの視線の先にある

のは……地球。偽地球と呼ばれるもう一つの地球がそこにあった。

◇

――荒廃した大地。建物や文化、人の営みの何もかもが破壊し尽くされた世界、瓦礫の山となったミスルギ皇国があった場所で一人の少女が複数の男から逃げまどっていた。

少女の手にあるのは僅かな食料、世界が時空嵐によって破壊され、マナが世界から消えたその日から人々は劇的に変わってしまっていた。

それが悪かどうかは分からない。世界が壊されて立ち上がった者もいれば嘆くだけの者がいる。強者が弱者を虐げる弱肉強食の世界に最早正義の在り方を示す者など存在してはいなかった。

「あうっ」

瓦礫に躓いた少女が地面へと転がる。手にした食料は倒れた拍子に手放してしまい、それらは運悪く男達の下へと転がってしまう。

ゲラゲラと下卑た笑みを浮かべながら少女の食料を拾う男達、その顔には少女に食料を返す様子など微塵もなかった。

「か、返して下さい。その食べ物は妹達の分だから……」

「うるせぇよ」

お腹を空かせている妹達が待っている。姉として守っていかなくてはと少女は悪漢達に挑むが、マナという絶対的力が世界から失われた今、少女が腕力で勝る悪漢に勝てる筈もなく、少女は振り抜かれた悪漢の拳によって殴られ、乱暴に地面に倒されてしまう。

頬を殴られた痛みによって少女には涙が浮かぶ。一体何故こんな

事にと悔しさと悲しみで涙を流す少女、そんな彼女に悪漢達は何が面白いのか、再びその表情を歪ませ悦の孕んだ笑みを浮かべる。
彼らの思考にあるのは欲望に忠実に生きる事のみ、マナという力が失った今、最早頼れるのは己の力のみ、多党と組んで生き延びようとする彼らの姿勢は弱肉強食を全てとする今の世の中としてはある意味正しい姿なのかもしれない。
しかし……。
「一人の女の子に対し複数の男が囲む。やれやれ、まさかこんな漫画みたいな展開に遭遇するとは、人生というモノは分からないモノですね」
蒼き仮面を被った魔人はその様子を良しとはしなかった。建物だったものの壁に寄りかかり、これまで誰にも気付かれなかった仮面の男……蒼のカリスマはゆっくりと悪漢達に向かって歩いていく。
声を掛けられるまで全く気付けなかった悪漢達は懐から拳銃を取り出して蒼のカリスマに狙いを定める。しかし彼等が引き金を引くよりも速く動いて見せた蒼のカリスマは擦れ違い様に悪漢達の首に手刀を浴びせ、彼等の意識を断って見せた。
「荒廃した街に欲望のまま蠢く悪漢達……一体どこの世紀末だっての、全く」
バタバタと倒れていく悪漢達に少女の目は丸くなる。目の前の出来事に理解仕切れない少女、そんな彼女の前に仮面の男から手が伸ばされる。
その手には悪漢達に奪われた妹達の食料が置かれていた。状況から見て自分に食料を取り戻してくれたのだと悟った少女は戸惑いながらも蒼のカリスマに礼を言い、食料を受け取った。
「これから先、この星は混迷の時代を迎える事になる。君達にとって辛い日々になるだろう。もし妹達を守りたいと願うのであれば私達の所に来る気はないか？　無論、それ相応の労働はやって貰う事になるが……」
「え？」
仮面の男からの唐突な問い掛けに少女の目はまたもや丸くなる。

先の時空の嵐によって両親と離ればなれになってしまった少女にはもう頼れる人間などいなかった。
手を取ってしまいたい。目の前の仮面の男の手を取ることで妹達の安全を得られるのであれば少女は迷うことなく一緒に行くことを望むだろう。
「……でも、私達大した力もありません。マナが使えなくなった今、子供である私にアナタの役に立てる事なんて――」
少女は幼いながらも既に今の世界についてある程度の察しが付いていた。現在世界を支配しているのは力、弱き者は強き者に淘汰される弱肉強食の力によって成り立っている。そんな世界で自分達が役に立てるとは到底思えない。重い物も運べないし、料理も満足に作れない自分ではとても目の前の男の役に立つことは出来ないだろう。
故に断るしかない。そう思いながら口を開いた少女に……。
「勘違いしてはいけない」
仮面の男……いや、シュウジ＝白河は仮面を外しながら少女の言葉を遮った。
「俺が君を誘ったのは俺個人の為に働いて欲しいからじゃない。俺達の為にその力を貸して欲しいからだ」
「で、でも私達じゃ……」
「人というのは時に一人で立ち上がらなくてはならない時がある。けれど、人は一人じゃ生きていけない。他者と寄り添い、助け合い、支え合う事で漸く生きていける脆くて弱い生き物だ。それは俺だって例外じゃない」
だから、と、そう言葉を紡ぐシュウジは再び少女に手を伸ばし。
「君の力、少しばかり俺達に貸してくれないだろうか？」
そう言ってもう一度自分の力を貸して欲しいと差し伸べてくる男の手を……。
「――――はい」
少女は強い決心の下、男の手を握り締めた。
どこまでも澄み渡る青空、太陽ともう一つの地球が浮かぶ空をみながら、少女は大地から立ち上がった。

「まぁた女の子口説いてる。いい加減その悪癖止めた方がいいんじゃないですか？」
「シルヴィアちゃん、いきなり出てきて人をロリコン扱いすんの止めてくんないかな!?」

戦姫絶唱シンフォギア
その1

「くそっ、時限式はここまでかよ！」
人のいなくなったステージ、異形の怪物たちを屠りながら槍の歌姫は毒づいた。
――――こんな筈ではなかった。本当なら今頃自分は相方であるもう一人の歌姫と共に最後までこのステージで歌いきり、気持ちよく終わる筈だった。
それが今はどうだ。あれほど燦々としたステージは見る影もなく荒れ果て、あれほど喝采の声を上げていた観客の人達は一人残らず死に絶えた。
〝ノイズ〟　出てきた理由も不明、目的もなくただ人間を殺す為だけに出現する災害、奴等のせいで自分達の歌を楽しみに来てくれた人達が炭となり消されてしまった。
私達の所為だ。そんな訳もなく自分を責め立てながら槍の歌姫は怒りと悲しみを乗せて戦場の中で唄い続ける。
そんな時だ。背後から瓦礫が崩れる音と共に女の子の悲鳴が聞こえてくる。振り返ればもういないと思われた生存者が蹲ったまま動けずにいた。
生きている。自分達の歌を聴きに来てくれた人がまだ生きている。槍の歌姫は一直線に少女の元へ駆けだした。
「駄目よ奏！　離れては！」
背後から聞こえてくる相方の制止の声も振りほどき、少女の下へ走る。少女に近付くノイズを蹴散らしながら歌姫は高らかに叫ぶ。
「立て、立って走れ！」

「あ、あの……」
「駆け抜けろ！」
有無を言わさず、ただ逃げろと口にする歌姫に少女は怯えながらも必死にその場から立ち去ろうとする。しかし、瓦礫が崩れた際に足を挫いたのか、その足取りは重い。このままではいずれノイズに追い付かれ、殺されるだろう。
「させっかよ。アタシらの、ツヴァイウィングの歌を聴きに来てくれた皆を、これ以上殺させて堪るかよ！」
押し寄せてくる死の波に向かって少女は吼える。手にした槍をフルに使い、逃げ行く少女に近付けさせないと不退転の覚悟の下に歌姫は少女を背にしてノイズ達の前に立ち塞がる。
歌姫の力はまさしく無双、適性者でないにも関わらず、気持ちでノイズを蹴散らし、少女を守るその姿は正しく防人だった。
しかし、既に限界に差し掛かっていた歌姫には最早戦えるだけの力は残されていなかった。時間が経過する毎に力は半減していき、衰退していく。際限なく押し寄せてくるノイズ、圧倒的物量の前にとうとう押し負けた歌姫は大型のノイズが吐き出す体液を防ぐだけに留まってしまう。
「奏！」
遠くから相方の悲鳴にも似た叫びが聞こえてくる。向こうも向こうで忙しいらしく、蔓延るノイズの相手をするだけで精一杯のようだ。この分だと援護を期待出来そうにない。
（やってやる。喩え紛い物でもアタシはシンフォギア奏者なんだ！女の子の一人救う位、アタシにだって！）
「ぐぅぅぅぅぅあああああっ!!!」
また一体、更に一体増えてくる大型のノイズ。吐き出される体液は濁流となって歌姫に押し寄せてくる。徐々に圧され、纏う鎧に罅が入り、綻び、軈て砕けていく。破片となっていく歌姫の鎧は戦場の爆風に乗って飛んでいく。
流れ弾となった破片、それは運悪く少女の所にも飛び散り、一度だけ振り返った少女の胸に突き刺さってしまう。

鮮血が舞い、地面に倒れ伏す少女。それを目の当たりにした歌姫は悲痛な叫びを上げて少女に駆け寄った。
「駄目だ！　おい、しっかりしろ！　目を開けてくれ！」
〝――――生きるのを諦めるなッ!!〟
それは歌姫の願いだった。死なないでくれ、生きてくれ、少女の胸元から流れる血を押さえ付け、必死に呼び掛ける歌姫。
そんな彼女の願いが通じたのか、少女はうっすらとその目を開ける。まだ生きている。弱々しくて今にも消えてしまいそうだけど、それでも必死に生きようとする少女に歌姫は心から嬉しく思った。
けれど、そんな命を狩り取ろうとノイズ達は着実に歌姫の所に迫ってきている。逃げようにもこれだけ疲弊してしまった自分では少女を連れて逃げることも出来ないし、相方も頑張っているけれど如何せん数が多すぎる。今の彼女一人ではどうやっても自分達の所まで来るには時間が足りないだろう。
（……ゴメンな、翼。アタシの所為でお前にまで迷惑を掛けちまった）
自分の向こう見ずな行動の所為で相方にまで危険に晒した事に今更ながら申し訳なく思う歌姫。相方も自分の事で手一杯、通信も通らず、おまけに自分には最早戦えるだけの力はない。ないない尽くしの絶体絶命、追い詰められている現状に、しかして歌姫は笑っていた。
「そっか、ここがアタシの……最期のステージなんだ」
それは自分の死に場所を見付けた者の眼だった。諦めた訳じゃない。抗う気力も無くした訳じゃない、ただこの状況で残された手段が自分の命を引き換えにするというだけの話。
いつか、おもいっきり歌を歌ってみたかった。もっと大きなステージで相方と一緒に、両翼揃ったツヴァイウィングで動けなくなるくらいに歌い続けてみたかった。
復讐する事しか頭になかった自分に、初めて生まれた願い。遂にそれは叶う事はなく、歌姫にとってそれだけが心残りだった。
後悔はないと言えば嘘になる。けれど、この状況を打破するために禁忌の詩を口にすることに迷いはなかった。幸いに今目の前には多

くの観客(ノイズ)がいる。これだけの数を相手にすれば自分の気持ちも少しは晴れやかになるだろう。
――――遠くで相方が叫んでいる。恐らくは自分がこれから何をしようとしているのか気付いたのだろう。
(ゴメンな翼、アタシはここまでみたいだ)
涙を流しながら止めてと叫ぶ相方に、相変わらず泣き虫だなと歌姫は笑う。
嗚呼、寂しいな。決意の下、一斉に攻撃してくるノイズに向かって遂に歌姫が最期の詩を口にしようとした時。

『ワームスマッシャー』

空から降り注がれる光の槍が全てのノイズに向けて射ち放たれた。槍の歌姫に向かって突撃したノイズ達は全て余さず貫かれ、炭素と化して崩れていく。相方の方も同様に無数の光の槍が撃ち込まれ、あれだけいたノイズは一瞬にして消えてなくなった。
何が起きたのか理解できず、呆然とする二人の歌姫、すると頭上から自分達を見てくる視線の様なものを感じた。未だ状況が理解できていない二人が揃って空を見上げると……。
「なんだ……アレは?」
日が落ち、夕焼けが空を照らす中で佇む一体の蒼。巨大で強大で、圧倒的な存在感を放つソレは何をする訳でもなく、静かに歌姫達を見下ろしていた。
まさか、アレがノイズをやったのか? 見ているだけで、こうして相対しているだけで腰が抜けてしまいそうになる。一体アレはなんなのかと混乱する歌姫達を前に蒼いソレはまるで興味を無くした様に上空に浮かび上がり、忽然と姿を消した。
まるで、夢を見ていた気分だ。しかし、今自分はこうして生きているし、相方も無事、更には後ろにいる少女も後で無事生還を果たし、今

回起きた凄惨な事件は一先ず幕を下ろした。
一体あの巨人は何なのか。後に歌姫の報告により蒼の巨人について日本のある組織が秘密裏に捜索、捜査する事になるのだが、二年たった今でも何一つ分かることは無かった。
ただ一つ言えるのは、あの時、私は……天羽奏(あもうかなで)はあの蒼い巨人のおかげで今も歌えているという事、大切な相方と一緒に大好きな歌を歌っていられること、それだけはハッキリしている。

◇

@月@日
時空振動に巻き込まれ、この世界に訪れてから早二年、漸く念願の自分の店を持つようになった事もあり、記念という事で再びこの日記にこれまでの出来事を簡潔にだが記していこうと思う。
二年前、なんの前触れもなくグランゾンと共にこの世界に降り立った自分は、取り敢えず最低限の生活を得る為に戸籍を偽造し、全国を渡り歩きバイトの日々を送った。
そんな毎日の中で出会ったお好み焼きの専門店〝フラワー〟店長である女将さんの計らいのもと住み込みで働ける様になった自分はそこで二年近く世話になり、彼女の弟子としてお好み焼き作りに精を出していた。
女将さんの作るお好み焼きは地元の人達に好評で、値段も手頃であるからお年寄りから子供、特に食べ盛りの中高生が良くこの店に来ていた。
特に女子高校生の立花響ちゃんとそのお友達はフラワーの常連さ

んで、店に来ては見ていて気持ちよくなる位に食べていってくれている。
　そんな女将さんの下でコツコツと働き続け、貯まった資金で漸く建てた念願の店、フラワーさんと同じ商店街で店を構えた事により地元の人達にも馴染めるようになったし、最近はここで腰を下ろすのも悪くないと思っている。
　商店街の皆さんも自分がフラワーで働いている事を知っているからなにかと良くしてもらったし、自治会の人達なんか店を開きたいという自分の言葉に対しわざわざテナントを紹介してくれた。
　いや、本当に有り難い。やはり人との繋がりってのは大事だよね。女将さんや商店街の皆さんの心優しい支援に感謝する一方、最近物騒な話を耳にする事が多くなってきている。
　〝ノイズ〟　特異災害の代名詞として知られる災厄、それがここ最近になって良く出現するという事例が相次いでいる。
　ノイズというのは二年前、とあるコンサート会場で自分が出会した化け物なのだけれど……コイツら、惚けた姿形をしている割りに厄介な性質を持ち合わせていやがるのだ。
　〝位相差障壁〟　自分の存在を自在にコントロールし、物理的な干渉を減衰、或いは無効化させる厄介にして面倒な特殊能力。銃弾や斬撃は勿論、爆薬による広範囲攻撃もすり抜けてしまうこの厄介な能力、これによりこちら側の攻撃をすり抜けてしまうノイズは太古の昔から現代に掛けて人類種の脅威となっている。
　一応打開策はある。連中は攻撃してくる際には存在の比率を上げて此方に干渉、接触し、諸とも自壊してくるので此方に干渉してくる時、それに合わせて攻撃すればいい。用はカウンターの要領である。
　二年前のコンサート会場でもその事を分析し、理解できた事でグランゾンに乗っているという事もあり、楽に対処できた。が、触れれば即アウトなノイズを相手に生身で挑むのは自殺行為に等しい。ガモンさんから教えてもらった空手もノイズ相手には意味を為さないという。
　まぁ、別に直接殴らなくてもやりようは幾らでもあるからそんなに

落ち込んではいないけどね。極端に言えば連中が襲ってきた時、其処らのゴミとか投げ付ければ一緒に灰となって消えていく訳だし……。

そんなノイズがここ最近頻繁に現れている。何だかまた近い内に騒ぎが起きそうな気もするが……まぁ、自分の出る幕は無いだろう。この世界には特異災害に対抗する手段を持つ組織があるそうだし、自分は今回大人しく引っ込んでいる事にしよう。

何せこの世界には歌って踊れて、その上戦える頼もしいアイドル達がいるのだから……。

◇

「さて、そろそろ開店時間だ。お客さん、来てくれるといいんだけどなぁ」

店の鍵を開き、店内に明かりを付ける。新装開店を控えたこの店は小さくはあっても清潔感に溢れている。

奥へと進み、ロッカーに仕舞った専用の制服に身を包み、備え付けの鏡を見て身嗜みをチェックする。顔も髪型も店内同様に清潔感を保っている事に満足した自分は顔を軽く叩き気合いを入れる。

今日から自分も一人の社会人、頑張るぞーと意気込んでいると、店の外から声が聞こえてくる。

もうお客さんが来てくれたのか。来店してくれたお客さんを待たせないよう慌てながらカウンターの前に出ていく。

いらっしゃいませ。そう口にしてお客さんを見ると、そこには今はもう見慣れた歌姫達が店の前に佇んでいた。

「チッス、白河の兄ちゃん。今日開店だって聞いて冷やかしに来たぜ」

「もぅ、そういう事は思っても言わないの。ごめんなさい白河さん」
「ハハハ、別に気にしてないよ。それよりも二人とも、今日はお仕事はもう終わったの？」
　自分の言葉に対して笑顔で頷くツヴァイウィングの二人。彼女達の歌声はとても心地よく、自分も良く耳にしている。そんな二人が実はノイズを相手に大立ち回りをしている戦士というのは自分だけの内緒の話である。
「兄ちゃん、この店にもあるんだろ？　兄ちゃん特製の激辛なアレが！」
「ちょっと奏、まさかそれを頼む気？　以前同じもの頼んで卒倒したのもう忘れたの？」
　好戦的な笑みでアレを出せとせがんでくる奏ちゃん、隣の翼ちゃんは止めておけと促しているけれど、本人はヤル気満々で引こうとしない。
　そんな彼女にクスリと笑みが溢れる。コホン、咳払いを一つしてカウンターに座る彼女たちに向き直り。
「ようこそ、喫茶シラカワへ」

その2

「へいきへっちゃら」

机に書かれた口汚い罵倒の文字、所狭しと油性で書かれた呪いの文字を少女は涙を笑顔で隠しながら拭いていく。

あの日、親友の誘いで初めてアイドルのコンサートに向かい、そこでノイズという特異災害に遭遇してから、少女の日常は一変した。生死の境をさ迷いながらも、何とか生還出来たのはいい。リハビリも辛くて大変だったけれど、母や祖母、そしてその親友がお見舞いに来てくれる度に頑張る元気を貰った。

皆が私の帰りを待っててくれる。そんな希望を胸に日常に戻った少女に突き付けられたのは……無情なまでの世間の冷たさだった。

特異災害ノイズによって引き起こされた悲劇、その生存者として世間は嫌でも少女とその親族に注目し、メディアの容赦のなく心ない質問責めはどんなに強く拒絶しても止まる事はなかった。

そしてノイズという災害に遭遇し、危険な目にあった少女に対する様々な特別待遇は、より身近に、学校での生活を激変させてしまう事になる。自分達よりも厚待遇な扱いだと勘違いした者達による陰湿な虐め、教師達はその事を咎める事なく、見て見ぬふりを続けていた。

『ねぇ知ってる？　隣のクラスの立花さん。なんでもノイズに遭遇したからって学校の宿題全部免除なんだって』

『えぇー、なにそれズルーい』

『しかも、政府から色々援助してもらってる噂もあるって話だ。あーあ、ノイズに襲われただけで人生イージーモードとか、俺もノイズに出くわしてみたいものだよ』

陰湿な陰口は止まらず、虐めも収まる気配はない。どんなに止めてと叫んでも少女の声は届く事はなかった。政府にこれ以上の援助はいらないと言い、止めて貰った所で、彼等の言葉は止むことは無かっ

た。心がすり減っていく日々、唯一休める家族との時間も世間の陰湿さが牙となって襲ってくる。
『この人殺しー』
『逃げろー、殺されるぞー！』
笑い声と共に投げ込まれる石礫、家の塀に書かれた呪いの言葉の数々、〝お前だけが生き残った〟〝お前の所為だ〟〝人殺し〟〝お前が死ねばよかった〟
（私、どうして生きてるんだっけ？）
誰も自分が生きている事を望んではいなかった。自分が生き残った所為で親友は自分を責め続け、父は逃げ出し、母と祖母は苦しんでいる。
疲れた。消えてしまいたい。心が壊れてしまいそうな毎日に憔悴仕切っていた少女、もういっそ本当に消えてしまおうか。そんな風に考えていた時、その人は現れた。
『ゴメンな……ゴメンな』
ある日、家に帰ってきた少女をある人物が待ち構えていた。赤く、強く、熱いナニかを宿しているその人、何処かで見たことあるような気がする。どちら様と口にした瞬間、少女は赤い少女の腕に抱かれていた。
何故、この人は謝っているのだろう。何故、この人は泣いているのだろう。混乱する少女に赤の少女は安心した様子で……。
『生きててくれて、ありがとう』
その言葉に少女の世界は再び変わった。色褪せた世界に色が戻り、少女の瞳に光が灯る。――嗚呼、自分は生きていて良かったんだ。赤の少女の言葉が胸に沈んで溶けていくのと同時に……少女は久し振りに声を出して泣きじゃくった。
悲劇のライヴから一年とちょっと、立花響と天羽奏の出会いは涙と鼻水まみれの抱擁から始まった。

◇

――――月日は流れ、あの惨劇から二年。地元を離れ、とある音楽女学院に通う立花響は本日発売のＣＤを買いにＣＤショップに向けて駆けていた。今日は待ちに待ったツヴァイウィングの片翼、風鳴翼のシングルの発売日、特典もついてなにかとお得な限定ものを是非とも手に入れる為、響は猛烈ダッシュで街を駆け抜けていく。

そんな時、見慣れた赤と青の姿が響の視界に映る。今はもう慣れ親しんだ先輩達、今日はお仕事だったのでは？　と、気になった響は二人に向けて進路変更、勢いも弱めてトテトテと歩み寄っていく。

「翼さん、奏さん、こんにちはーって、どどどどうしたんですか奏さん！　口がタラコさんになってますよ!?」

相方の肩を貸して貰いフラフラな様子の奏、どうしたのだろうと気になり覗き込んだ響が目にしたのは唇を大きく腫らせた奏が、目を回してグッタリしていた。これはひどい。アイドルとしての体面なんてまるでない奏に響はどうしたのだと隣の翼に訊ねる。

「あぁ、立花か。なに、今日は白河さんの店が開店した日というのは知ってるな？　その記念に来店１号と先日のリベンジを兼ねて例のアレに挑んだのだけど……」

「あぁうん。何となく全部分かりました」

剰りにもしょーもない理由に流石の響も苦笑う。相変わらず向こう見ずな所のある人ダナーとある意味で尊敬の念を奏に贈る響。翼の言う例のアレ、それは修司が最も得意とする料理、激辛に激辛を重ねた超法外的な辛さを持つ麻婆の事で、作った本人は眼鏡が割れる美味さと良く分からない自信に溢れている。

更に言えばこの料理を完食できた者は一人たりとも存在しておらず、嘗てフラワーで働いていた頃にこの料理を出すとその度におば

ちゃんに怒られているなど中々強い印象を植え付けられている。以前フラワーで同じものを食べた奏を見て、響の親友はこう語る。
『食べ物で火を吐く人初めて見た。生命の神秘だね』
「所で、立花は何処か行くんじゃなかったの？　なにか急いでいたみたいだけど……」
「あっ！　そうでした。私これから行くところがあって……それじゃあ二人とも、また明日ー！」
そう言って再び駆け出していく響、道行く人にぶつからないように気を付けろと注意を促した翼は生返事な後輩の後ろ姿を見つめながら苦笑いを溢す。
「翼ァ、どうやらアタシ本格的にヤバいみたい。響の声の幻聴と幻覚を見ていた気がするー」
漸く気が付いた相棒に翼はやれやれと溜め息を漏らす。相変わらず無鉄砲で真っ直ぐな相棒、良く自分を困らせたり意地悪な一面もあったりするが、それもまた自分達らしい付き合いの仕方だ。
……あの時もそうだ。二年前のノイズの襲撃で生き残った響を探すため、アイドル活動の合間を縫って一人活動していた奏、自分も手伝うと言ったのにこれはアタシの問題だからと決して誰かに頼る事はしなかった。
恐らく、自分の我が儘に付き合わせてしまうと思っていたのだろう。単純に見えて天羽奏という人間は色々気が付く人間だ。普段からお世話になっている大人達も当時はまだ組織編成に追われて時間が割かれてしまい、殆ど顔を合わせる事はなかったから。
だから変に遠慮したのだと思う。そんな奏から話を聞き出すには随分苦労したものだ。こんな時くらい素直になればいいのに、人には言って自分はそうしない奏に翼は当時相当ヤキモキしたものだ。
そうして二人で探して漸く突き止めた後輩の所在、そして同時に突き付けられた現実の非情さに翼は怒りにうち震えた。虐めという言葉では片付けられない鬼畜どもの所業、けれど憔悴仕切った響を前に翼はなにも言えなくなった。
彼女をあんなにしたのは自分達にも責任がある。自分達がアイド

ル復帰やらライヴツアーに勤しんでいた合間、彼女は一人地獄を見ていたのだ。生きる屍、当時の響を語るにはこの言葉が最も適しているだろう。そして、そんな彼女をまた救ったのも奏の言葉だった。

今まで放っておいてゴメン、生きててくれてありがとう。心の底からの言葉に響は再び息を吹き替えした。

そしてそこからはあっという間だった。奏は周囲の大人達に事情を話し、頭を下げて懇願する事で自身の要望を聞きいれて貰い、その結果響は地元を離れ自分達と私立リディアン音楽院に転入し、彼女の親友も卒業後後を追うように同じく進学してきて、同じ部屋に過ごすようになった。因みに二人が同室になったのも奏による計らいである。

けれど、二人はその事を知らない。知らされていない。理由は奏によるもので、理由を訊ねると自分の自己満足に付き合わせたくないとの事、相変わらず変な所で頑固だなと翼はそんな相棒に呆れるしかなかった。

だけど、そんな奏のお陰で自分達は友達になれた。アイドルという垣根を超えて、本音で言い合える後輩兼友人を得られた事は自身にとっても嬉しい出来事だった。

彼女達を通して今まで知らなかった世界を知ることが出来た。そこで生まれる人との繋がりに接する事が出来た。己が身を剣と見立てて鍛え続けてきた自分に人としての暖かさが宿った気がした。

……まぁ、時折刺激的な出来事があったりするわけだが。

充実した日常、流石に彼女達に自分達の本当の姿の話をしてはいないが、それでも翼にとって響達との時間は何物にも換えがたいかけがえのないモノになっていた。

しかし、そんな翼に一つだけ気になる事がある。

(そう言えば、結局響達に仇なした者達を始末したのは……何者だったんだ?)

響が音楽院に転入する際に最も難解だったもの、それは響の母と祖母についてだった。当時奏は是非二人もと奥方と祖母をこっちに来るよう呼び掛けたが、二人はそれを断った。

何故かと問うと、何も悪くないのにこの土地から逃げ出すのはおかしいという負けん気の強いものだった。今ここで逃げ出せば自分達を置いて逃げ出した父と同じになり、何より自分達にも罵詈雑言を投げ掛ける者達に屈する事になる。そう奥方と祖母は自分達に告げ、決して退かない道を選んだ。

別れの際は心苦しかった。転入しても数日は元気の無かった響に自分達も気が気でなかった。しかし、それから数日後、後に進学してくる小日向からの報告により向こうでの状況が激変したことを知る事になる。

今まで響に虐めを行ってきたクラスメイト全員の急な転校、虐めを容認してきた教師達の懲戒免職、更に響の実家に石を投げ付けたり、塀に心ない落書きと貼り紙を押し付けた連中は皆その行為の光景をネットに実名と住所諸とも公開され、世間から袋叩きにされてしまい、地元から姿を消したと言う。

立花家に悪事を働いたものは皆すべからく不幸に見舞われており、それによりこの家に手出しをするものはいなくなった。呆気ない幕切れ、しかし鮮烈な報復に翼は奏に何か知らないかと訊いてみた。

訊ねた結果は初耳だと驚愕する相棒、他の大人達に訊ねても皆知らないと言う。一体誰が……なんて思っても平穏を取り戻した響とその家族の喜ぶ姿を見てはそんな事はどうでもよくなった。

やり方としては少々強引さを感じるが……まぁ、それだけ響に酷いことをしたのだと考えれば当然の報いか。親友の小日向も物凄く良い笑顔で当時の転校していった学生達と職場を失った教師達の事を語ってたし。

幾つか気になる点が残っても現状なにも困った事はない。順風満帆な日々だと翼が今の日常に満足していると、懐にしまった通信端末から音がなる。

端末を手に取り耳に宛がうと自分達の上司である男性からノイズが発生したという話を受ける。自分達の出番だ。男性からの要請を承諾した翼は端末を再び仕舞い隣にいる相棒を見やる。

そこにはツヴァイウィングの天羽奏ではなく、自分と戦場を共にす

る頼もしき相棒の姿があった。戦士の目をした奏、普段はおちゃらけた性格をしているのにこういう切り替えは見習いたい。……未だにタラコ唇なのが非常に残念だが。

街中にノイズ発生の警報が鳴り響く。シェルターへ避難する人々の中を青と赤の戦士は駆けていく。

そしてその時、二人はもう一人の激槍の担い手に出会う事となる。それは皮肉にも失ってはならないと誓った日溜まりの中から……。

「ちょ、折角の開店日なのに！　おのれノイズ、許さん！」

その3

あと、どれくらい走ればいいのだろう。あと、どれだけの距離を走り続ければこの苦しみから解放されるのだろう。走れども走れども背後から迫る死（ノイズ）は止まる事なく真っ直ぐ此方に向かってきている。

イヤだ。死にたくない。楽になりたい。そうは思っても少女は手に握った幼子の手を確り繋いだまま離さない。一人になれば逃げ切れるだろうに、少女が手にした手を離せば、少なくとも自身は助かる確率は上がる。

ノイズは明確な意思も理由もなく、ただ人間だけを殺すために存在する災害。近くに人間がいればそれを優先して狙ってくるのが奴等の習性の一つ、それを利用し、活用すれば未だ体力に余裕のある少女だけは助かる可能性も生まれてくる。

しかし、そんな選択肢など初めから少女の中には存在しなかった。それが自己犠牲から来る葛藤なのか、それとも単なる正義感から来たものなのかは定かではない。

〝繋いだこの手は離さない〟　我武者羅に走り続ける少女の内にあるのはただそれのみ、生き延びる為の打算や考えなど、最初から少女の頭の中には存在していなかったのだ。

目的もなく、理由もなく、ただ走り続け、やがて歩けなくなった幼子を背負いながら、それでも走り続けた少女が最後に行き着いたのは……人気のなくなった工場、その屋上だった。

ここに来て体力の限界、痙攣して動けない己の足を恨めしく思いながら、少女は背負った幼子を下ろして乱れた呼吸を整える。

込み上げてくる吐き気を堪えながら少しでも体力を回復させようと勤しむ少女の耳に入ってきたのは自分よりも一回り以上小さい女の子の嗚咽の声。

「私……死んじゃうの？」

「……っ、」

それは掠れながらも生への執着の声だった。怖くて怖くて仕方がなくて、それでも生きたいと願うちっぽけだけど確かな叫び、その声を耳にした瞬間、少女の――――――響の胸の内側から熱い何かが脈動した。

ノイズ(死)が顔を覗かせてくる。追い詰めたと四方から迫ってくるノイズ達に二人は寄り添うように身を寄せ会う。

嫌だ。死にたくない。お母さんに会いたい。助けて、そう叫ぶ幼子を守るように響はその手を離さず握り締めた。

そんな時だ。二年前にも確か似たような事があったなと、響は一瞬当時の事を思い出す。それは虚ろで、不確かなもの、鮮明に思い出すことも出来ず、色褪せてしまった過去の悲劇。

けれどその時、確かに受け取ったモノがある。それは何処までも暖かくて、力強くて、死の淵にいた自分を呼び戻してくれた魔法の言葉。

〝生きるのを諦めないで！〟

その言葉がトリガーとなった瞬間、響の肉体は変質する。胸の奥から沸き上がってくる熱く激しい衝動は、響の肉体を突き破り、彼女の肉体そのものを変化させていく。

変異し、変質していく肉体。衝動が収まる頃には響の姿は一変していた。まるで特撮のヒーローが着る様なパワースーツ、一体全体何がどうなっていると混乱していると。

「お姉ちゃん、格好いい！」

「え？　そ、そう？」

隣で目を輝かせている幼子を前に響は取り敢えずまぁいいかと自身を納得させた。それよりも何とかしなければならないのは今の状況だ。ジリジリと自分達を追い詰めてくるノイズ達から逃げるために響はまだ走り続けなければならない。

だが、不思議と疲労は無かった。それどころか全身に力が満ちていき、今も体の奥底から溢れてきて止まらない。いや、力だけではない。胸の奥から込み上げてくるソレ(歌)を口ずさみながら響は幼子を抱え、空高く跳んだ。

人の限界を超えた驚異的な脚力による跳躍力、自身に起きた劇的な

変化に戸惑いながらもどうにか下へと降りていく響。
一度の跳躍で随分距離が稼げた。これなら逃げ切れる。そう思い安心しながら前に振り向いた響が目にしたのは見上げるほどに巨大なノイズだった。
「――――嘘」
まるで怪獣。ただそこにいるだけで前方が塞がれ、頭上からは先程撒いた筈のノイズが雨霰となって降り注いでくる。このままではこの娘まで――――そう思って響が自らの体を楯にしようとした時。
「よく頑張った」
そいつは現れた。
男性特有の低い声、自分達以外はいない筈の第三者、何だと思い顔を上げた響が目にしたのは蒼い仮面を被り、白いコートを身に纏った男が自分と大型ノイズの間に割って入っていた。
普通とは明らかに異なった雰囲気を纏う男、すると男は頭上から降り注いでくるノイズを一瞥した瞬間。
「――――ふっ！」
一呼吸の直後、男が自らの脚に力を込めた瞬間、男を中心に地面に亀裂が走り、広がった亀裂は段差を造り上げ、大地を切り裂いた。
〝震脚〟後に響が師と仰ぐ人物から教わる武術の歩法、これにより大型ノイズはバランスを崩したのかその場で膝を突き、その間震脚を放った影響で舞い上がった石礫を男は頭上から降ってくるノイズに向けて蹴り放った。
回し蹴りの要領で撃たれた石礫、その全ては襲い掛かってくるノイズの全てに激突し、ノイズは男が放った石礫と共に炭化し消滅。響と幼子の少女はどうにか助かる事になった。
だが、まだ全て終わった訳ではない。膝を突いた大型ノイズが再び立ち上がろうとしている。さて、これからどうしよう。立ち上がる大型ノイズを前に男は呑気にふーんと考え事をするように仮面越しに顎を擦ると、大型ノイズの背後から一振りの槍が貫き、次いで青の衝撃波が大型ノイズの体を両断した。
倒れ、爆散していくノイズ。爆風に視界が奪われた響が次の瞬間目

にしたのは今の自分と似たような恰好をした二人の先輩の姿だった。
「立花、お前……なのか？」
「え？　翼さん、奏さんまで……何が一体、どうなってるの？」
混乱する響、後に彼女が連れられるある組織で自身の肉体の事、そして親しかった先輩達の本当の姿を目の当たりにした響は後に今後の人生において重大な選択を突き付けられる事になる。
故に、響は気付かない。自分を助けてくれた仮面の男がいつの間にか消えていた事に、彼女達の遥か上空、燦々と輝く月を背に蒼く巨大な魔神が響達を静かに見下ろしていた事に、最後まで気付くことはなかった。

◇

@月＊日
ノイズ発生から翌日、どうにか無事生き延びることが出来た自分は今日も元気に店の運営に勤しんでいた。売り上げの方は上々、仕事の合間に休憩に来たりするサラリーマンの人達に珈琲を差し出したり、特製麻婆を勧めたり、断られたり等をして店への貢献はそれなりのものとなった。
新しく開店したという事で興味本意で来たお客さんが殆んどだけど、今回の対応でお客さん達には随分好印象を与えられたと思う。昨日はノイズの邪魔が入り初日の営業は儘らなかったけど、今日はその分の遅れも取り戻せたと思う。
こういうお客の流れというのも商店街ならではという話もあるし、今度の休みの日には商店街の皆さんに親睦を兼ねて珈琲のご馳走の

お誘いをしようと思う。こういう御近所付き合いって大事らしいしね。

フラワーの女将も今度ウチにくる学生の子達にも紹介してあげると言ってくれたし、今後は客層も厚くなりそうだ。実にやり甲斐がある。

そう言えば客層で思い出したが、特異災害ニ課だっけ？　日本政府からその扱いづらさから〝突起物〟　なんて揶揄される組織（トコ）の司令官さんが来たのは流石に驚いた。

意外とご近所さんなんだな。なんて思いながら注文を訊ねると、このお勧めをと言われたので自分の得意料理である麻婆を大盛りでご馳走した。無論、大盛りは新装開店記念に無料、値段の方も通常の五割以下に設定、開店から一週間という期間限定の一品である。

赤く煮えたぎる麻婆、旨さと辛さを極限にまで詰め込んだ至高の一品、未来ちゃんや響ちゃんからは酷評を受けている料理だが通の人には分かる筈。そんな自慢の一品を司令官さんは残さず完食、この世界に来て史上初完食してくれたその人に自分は感心と共に惜しみ無い拍手を送った。まぁその後テーブルに伏して動かなくなったんだけど。

暫くした後、黒スーツの男性が店にやって来て驚きながら司令官さんを連れて店を後にした。あの足運びといい、体捌きといい、あの黒スーツの人は恐らく自分と同じかくれんぼを得意とする人なんだろう。

なんか、この街で上手くやっていけそうな気がする。そんな希望を抱きながら自分は明日の仕込みに備える事にした。

その4

@月√日

先のノイズ出現の騒動から数日、あれから特に変わった事は……まぁ、あるにはあった。一週間の内に何度も現れるノイズ、その出現頻度の多さに最近は夕方以降外に出歩く人は極端に少なくなっている。

人が出歩く事がなくなったお陰で店の売上事情は芳しくない。喫茶店を始めてまだ一月も経っていないのに早くも閑古鳥が鳴き始めている事実に自分はこれが経営の難しさかと辛い現実に打ちのめされていた。

つーかノイズ達出張り過ぎ、この世界の人達はノイズを災害として扱っていてあまり感心が無いみたいだから言わせてもらうけど、ここ最近のノイズ出現率の異常な高さは絶体第三者が関係してるだろ。

しかも響ちゃんがシンフォギア奏者とやらになってからピンポイントでこの街を周辺に出現しているものだからまず間違いないと思う。一体どこの誰だか知らないけど、人様の商売を邪魔するなんて良い度胸である。見つけ次第縮退砲をブッパしてやる。

ま、縮退砲云々は冗談として、今の状況はあまり宜しくないと自分は考えている。店の売上に関してもそうだけど何より響ちゃん達の今の関係が非常に宜しくない。何故なら普段アレだけ仲が良かった響ちゃんと奏ちゃんが喧嘩をしてしまっているのだ。しかも割りと深刻的に。

その事を知ったのは昨日の事、店に来てくれた響ちゃん達に麻婆を勧めようとした時に未来ちゃんから辛辣な言葉と共に却下された辺りからだ。一見普段と変わらない様子の彼女達だが、時が経つにつれて響ちゃんと奏ちゃんの間にある空気の様子が違う事に気付いた。

それとなく訊ねても翼ちゃんはいつもの事だと言う。だけどこの剣呑とした雰囲気は只事ではない。未来ちゃんも隠し事をしている響ちゃんに思う所があるのか、あまり話に参加しようとしない。

響ちゃんと奏ちゃんの仲の良さは自分がバイトに明け暮れていた頃から知っている。奏ちゃんが一足早く卒業した後も二人の仲の良さは変わらず、端から見れば本当の姉妹の様に見えていた。

そんな訳だから喧嘩をしたと聞いた時は素直に驚いたが、彼女達の事情を知る者としてはそらそうだよなぁと変に納得している自分がいた。

天羽奏にとって立花響は本当に妹の様な存在なのだろう、そしてその逆も然り。恐らくはシンフォギア奏者になった事で自分も奏ちゃん達の様にノイズから皆を守りたい、なんて言い出してそれを奏ちゃんが大反対をしていると、大方そんな事だろう。

「そんな事をやらせる為にあの日お前を助けた訳じゃない!!」声を大にしてそう叫ぶ奏ちゃんが目に浮かぶ。けれどそんな奏ちゃんの願いとは裏腹にノイズの出現頻度は上がり、二人だけでは対応しにくくなっていく。それ故に響ちゃんが出張っていく事になる。

助けた筈の人間が命懸けの戦場に出てくること、それが奏ちゃんにとって堪らない事なのだろう。響ちゃんもああ見えて頑固な所があるからなぁ、きっと反対する奏ちゃんに対しても正面から言い返してるんだろうなぁ。

そんでもって響ちゃんは響ちゃんで未来ちゃんにノイズ関連について説明出来ず、その事が未来ちゃんからみて親友だった幼馴染みが自分に隠し事をしているように感じてしまってるんだろう。

……うん、想像してみたけれどキッツイなこの状況、三人に対して常にフォローを入れるしかない翼さんマジ苦労人。奏ちゃんと響ちゃんが喧嘩して一番割りを食ってるのはこの人なんじゃなかろうか？

気分転換と称して自分のお店に来てくれたけど、この日仲直りは結局出来ず、終止ギクシャクしたまま四人は店を後にした。帰り際疲れた表情で謝ってくる翼さんに思わずホロリと来た。今度来たときはサービスしてあげようと思う。

ＰＳ．

シンフォギアシステムやらノイズやらの情報は二年前、この世界に

来た当初からグランゾンを用いてのハッキングで大体は取得しているので大抵の事は知っているけれど、どうやらもう少し探りを入れた方が良いみたいだ。
主にシンフォギアシステムについて、どうもこのシステム人によって得られる効果が疎らで使用者によっては時間制限がついているみたいだ。そんな人が絶唱なんて口にしたら確実に死に至るらしいのでそうならないよう自分も頭を使おうと思う。

@月α日
今日は少し不味い事が起こった。今もニュースで話題になっているけれど、ツヴァイウィングの片翼である翼ちゃんが緊急入院したらしいのだ。
原因は多分ノイズ関係。しかしシンフォギアの適性者である翼さんがたかがノイズにやられるとは思えない。となると恐らくノイズを裏で操る第三者の陰謀か？　あの時は単なる推測に過ぎなかった話が今回でいよいよ信憑性が増してきた。
だが、一体誰がなんの目的でノイズなんざを操っているのだろう。アレは人間だけを執拗に狙う殺戮兵器、あんなものを操って出来る事なんてたかがしれている。それこそノイズを使っての人類の支配か抹殺くらいしか使い道はない。
それともノイズ自体が囮？　第三者の介入というのもそういう風に思考を誘導する為の芝居？　色々推測や仮説を立てたりしているけれど今の段階では情報が不足している為考えた所で意味はない。
そんな事よりもこれから大変なのは奏ちゃんと響ちゃんだ。翼ちゃん不在という穴は大きい。奏ちゃんも相方が入院した事から今後のアイドルとしての活動にも影響してくるだろうし、響ちゃんも今後は一人で戦う可能性が出てくる。未来ちゃんに事情が話せない今、響ちゃんは精神的にも肉体的にもキツい時期になると思われる。
あぁ、やっぱり自分も外を見回れば良かったかな。けどお店を放っておくのも出来ないし、かといって響ちゃん達お得意様（予定）を放

置しておくのも心苦しい。
……最初の頃は必要ないと思ってたけど、やっぱバイト募集しようかなぁ。

@月β日
翼ちゃん入院の騒動から数日、どうにか響ちゃんと奏ちゃんはノイズと戦っていられる様だ。未だぎこちない所はあるけれど、二人して協力出来ている事から本当にどうにかという感じだ。
このまま上手く行って仲違いを治し、翼ちゃん復活の際には強力なチームになってくれるのが一番好ましい展開だ。あと未来ちゃんとの和解も。
そうなれば自分も下手な手出しはしなくて済むし、例の司令官さん達も安心して彼女達を見守れるだろう。ホント、是非そうなって欲しいものである。
そして朗報が一つ、ここ数日情報を集めながら店を経営していた自分だが、ここ最近新しい常連客をゲットした。
雪音クリスちゃん。綺麗な銀髪が特徴的な少し変わった女の子、男勝り……と、言うべきなのか、お昼時に店の中をチラチラと覗き込んでくる彼女を見兼ねてご飯を御馳走したのがクリスちゃんとの出合いである。
最初は声を掛けただけで逃げられたり睨まれたりしたのだが、ご飯を目の前にちらつかせて食べたいならどうぞと根気よく続けたら警戒心をバリバリ抱きながら店の中へと入ってきた。
この頃はお昼時でも人が入ってこないし話し相手が欲しかった事から彼女をタダ同然にご飯を食べさせてみたところ、いやぁ食べるわ食べるわ。その食べっぷりは見てるこちらも気持ちがよくなる程だ。……テーブルマナーがアレなのが少し気になるけど。
そして食べ終わった後はもう此処には用はないと言うように店を後にするクリスちゃん、店から出ていく際には「お前じゃなくお前のご飯を信用したんだからな！」とよく分からない捨て台詞を残していく。その後ろ姿はまるで野良猫のソレ、これが餌付けかと思っても止

められないのが動物好きの性か。
　クリスちゃんがウチの店に食べにやって来て早3日、未だにお金は貰ってないが……ま、自分の飯代と思えばいいだろ。少々高くついたが。彼女の様な可愛い娘がウェイトレスとして働いてくれればお店の売上ものびるんだろうけど……無理だよなぁ。
　――因みに、麻婆豆腐は一口たりとも食べてくれませんでした。出された瞬間命の危機を感じたとか言われたし、最近の娘は色々とオーバーである。こんなに美味いのに。

その5

私立リディアン音楽院――――の、地下。数百メートルにも及ぶ地下深くに特異災害対策機動部二課、その本部があった。

人類の天敵とも呼べるノイズに対抗する為、様々な技術の粋を集めた日本政府の特殊機関。その特異災害対策機動部にある一室にて一人の女がその目を鋭くさせながら眼前のモニターに映る〝ソレ〟を睨み付けている。

女の名は櫻井了子。アップに纏めたロングヘアーと知的な眼鏡、そして身に纏う白衣が特徴的なこの女性は二課において重要な役割を担っていた。特異災害ノイズに対抗しうるシンフォギアを開発する所から始まり、古の聖遺物を起動させる櫻井理論を提唱させるなど、自身が誇示する通り天才的な能力を有している彼女は専門的な考古学者であると同時に二課の主要技術を一手に担っている。

自他共に認める天才学者、しかしそんな彼女の頭脳を……いや、これまで培ってきた知識を以てしても目の前のモニターに映る〝ソレ〟を理解する事は出来なかった。

「……一体、何なのかしらね。コレ」

櫻井了子がその目を刃の如く鋭くさせた瞳に映る蒼い巨人。それは二年前に起きた災害の時、突如として現れノイズを一瞬にして撃滅せしめた怪物。

ノイズは位相差障壁と呼ばれる機能を駆使し、コチラ側の物理干渉を減衰、或いは無効化させる特異能力を持ち、これによりノイズと出会った人類は殆ど成す術なくノイズに呑み込まれ炭となって消滅していった。

シンフォギアを除いて現状ノイズに対抗出来るのは奴等が此方に攻撃を仕掛けてくる一瞬、一秒にも満たない時間の中、高速で飛来してくるノイズに物理干渉を施すしかない。

現代の銃弾と同等以上の速さで接近してくるノイズに物理干渉を施す。そんな事が可能なのは過去の英霊と評される者達か人外の領域にまで己を鍛え上げたウチの司令官の様な人種位しか出来ない芸当だ。

しかし、そんな人外の力を必要とするやり方をこの怪物は一瞬でやり遂げた。それも無数のノイズの全てに対して……。

恐らくこの巨人は自分が知る先史文明とは異なるルーツから生み出された代物だろう。しかし、問題はそのルーツとなる部分だ。

米国程度がアレほどの兵器を単独で開発出来るとは思えない。……唯一可能性としてあるのは自分が研究するモノとは別の、それこそ錬金術位しか思い付かない。

一体何処の誰がアレほどの怪物を造り出したのか、今後の自身の活動の妨げになるやもしれない存在を前に了子は忌ま忌ましいと呟く。

「了子さん、いるー？」

そんな時、背後の扉から聞き慣れた声が聞こえてくると同時に女はニ課の誰もが知る櫻井了子へと姿を替える。その目には先程までの剣呑な様子は欠片もなかった。

「はぁい。皆大好き櫻井了子さんよー。って、あれ？　奏ちゃんじゃない。どうかしたの？」

「あぁうん。大した用じゃないんだけど……邪魔しちゃったかな？　アタシのリンカーについて話があるんだけど……ソレ、もしかして二年前の？」

どうやら大事な調査中だったらしい櫻井了子に奏の表情は申し訳なさそうに曇る。モニターに映る蒼い巨人は奏にとっても他人事じゃない案件だ。それを邪魔してしまったという事に奏は自身の間の悪さを恨めしく思い、少なからず後悔する。

そんな奏に了子は気にしないでと口にする。どうせこれ以上調べても意味はないから、とは言わないで。

「そんな事よりもどうしたの？　リンカーに関してはって事はもしかして体に合わなくなったとか？　でもデータを見る限り不具合の様子は見受けられてないみたいだけど？」

「いや、別にリンカー自体は悪くないんだ。ここの所体調もそんなに悪くないし、調子の良い時だってある。けど、だからこそ今のアタシにはリンカーの改良が必要なんだ」
〝Ｌｉ（リン）ＮＫＥＲ（カー）〟　それは聖遺物、またはシンフォギアを纏うに至らない者を人為的にシンフォギア装者に仕立て上げる制御薬の事、確かにこのリンカーを用いれば最低限の適合係数を持たない者でもシンフォギアを纏う事は可能。
　しかし、無理矢理にシンフォギアに体を合わせる為その負荷は凄まじく、オマケに時間制限も着いており、使用法を間違えれば死に到るという欠陥品。現在は横流しした別組織がこの薬品の改良に勤しんでいると聞くが、それがどの程度なのかは依然として不明のまま。
　確かにリンカーの起源となったｍｏｄｅｌ　Ｋを開発したのは了子だ。その後も暇を見ては改良を続けていたし、より効率的に、負荷も可能な限り軽減出来るように努めてきた。しかし……。
「響ちゃん、の事かしら？」
「……」
　真っ直ぐ見つめながら響の名を口にする了子に奏は押し黙る。
「ねぇ、奏ちゃん。翼ちゃんが絶唱を口にしたことで入院したのが自分の所為だと思っているのなら、響ちゃんを戦わせているのが自分の所為だと思っているのなら……それは違うと思うわよ。翼ちゃんがあの時絶唱を口にしたのも、響ちゃんが戦うって決めたのも自分の意思で決めた事、嘗て貴女がシンフォギア装者になると決めたのと同じように、それはきっと誰かが口を挟める事じゃないと思うの」
「そんなの、分かってるよ。けど、どうしても思わずにはいられないんだ。あの時アタシにもっと力があれば、あの時もっとアタシが頑張っていれば、翼が絶唱を歌うことも無かった。二年前、あの日にアタシが上手くやれてればもしかしたら響がシンフォギア装者になることもなかったって……」
「奏ちゃん……」
「傲慢だって分かってる。アタシなんかの力が全ての人間を救えるなんて思っちゃいない。けど、アイツは、響はこっちに来ちゃダメなん

だ。アイツや皆が陽だまりの中でアタシ達を待っていてくれているからアタシは戦ってこれたんだ」
最初は復讐しかなかった。両親を殺したノイズが憎くて、ノイズの全てを皆殺しにするまで止まらないと今日まで戦ってきた。けれど歌いながら戦うにつれて、自分の歌を聞いて頑張れると言ってくれた人達がいてくれたお陰でいつのまにか復讐から誰かの為にと戦う理由が変わっていった。
復讐に駆られた自分の歌が誰かの為に役立ってくれるのなら、こんなに嬉しいことはない。ここへ来て漸く天羽奏は自分以外の他に戦う理由を見付けた気がした。
本音を言えば響と一緒に戦える事を喜んでいる自分がいる。あの日砕けたシンフォギアの一部が響の中に眠っていた事、その力が目覚めた事に奏はまるで自分の後継者が現れたのだと思った。
憎しみではなく、誰かの為に戦うと決意した響、それがまるで自分の想いを継いでくれた事のように思えて……嬉しかった。
けど、だからこそ今の響には戦わせられない。誰かの為にと豪語した一方で自身の事を蔑ろにしている響を命を掛けた戦場に立たせたくなかった。
故に天羽奏は櫻井了子に願い出る。翼が倒れた以上、自分が戦うしかない。と、未だ戦うことの意味を理解しきれていない後輩に少しでも教え導く為に天羽奏は血反吐を吐きながら歌うことを決めた。
それを聞いた了子は深い溜め息を溢す。
「……分かったわ。出来る限りリンカーの性能を上げてみる。けれど約束して、響ちゃんを自分の代わりに思わないこと、それは貴方にとって、そして響ちゃんにとってもマイナスでしかないわ」
「はい」
「そしてもう一つ約束、必ず生きて帰って来なさい。誰かの為じゃなくて自分の為に……折角女として産まれてきたんだもの、一度位恋しないと損ってものだからね」
「は、はい」
「声が小さいわよ?」

「ひゃい！」
唐突に恋の話を振られて狼狽する奏、そんな彼女を面白おかしく弄りながら部屋を追い出した了子は再びモニターへと目を向ける。そこに写し出されているのは先程までの蒼い巨人ではなく、天羽奏の身体データだった。
嘗ては肉体がボロボロとなっていた奏、数多の戦場でノイズを屠り、その度にリンカーを使用していた彼女は既に余命幾ばくも無かった。
しかしここ最近彼女のバイタルは徐々に変わってきていた。死にかけた細胞が活性化しはじめ、ここ最近では日常生活に支障がないほどに回復してきている。
これも櫻井了子の理解しがたい案件の一つ。一体何故、どうやって彼女は肉体を回復させているのか。
依然として謎は謎のまま時間だけが過ぎていく。軈てまぁいいと、自分の計画には問題ないと捨て置きながら櫻井了子はこの件を無視することにした。それが後に大きな間違いになることなど想像も出来ずに……。

「ねぇ、クリスちゃん。一度でいいから麻婆食べてみなって、絶対損はさせないから！　絶対美味いから！」
「しつっけぇなぁ、いらねぇって言ってんだろっ！　アンタの造る料理は確かに美味いさ、おかげでここ最近体の調子も良い気がする。けどなぁ、アンタの麻婆だけは無理だ。何だよあの禍々しいくらいの赤さは!?　目にしただけで命の危険を感じるってどんだけの香辛料をいれてんだよ。デスソースをリットル単位でいれてんのか!?」
「失敬な！　あんな劇薬に頼るほど俺は落ちぶれちゃいない！　全ては厳選された素材によるものさ！　……確かに個人的な調理法をしてはいるけど、それも食べる人を考えての事、一口食べれば汗が

吹き出し、これにより老廃物は排出され、二口食べれば細胞が活性化し元気になる！　コレほど優れた料理が未だ嘗てあったか？　いやない！」
「なんか、聞いてる限りヤバい薬にしか思えないんだが？」
「ムキー！　この食わず嫌い子ちゃんは！　ちょっと未来ちゃん、君からも言ってあげなよこのツンデレ銀子ちゃんに！」
「……修司さんの麻婆は人類にはまだ早いと思うな。具体的には三世紀位」
「孤立無援!?」

その6

@月γ日

今日、未来ちゃんから珍しく相談を受けた。内容はここ最近の響ちゃんについて、何でも近頃の響ちゃんはよく外出をしており、帰ってくるのも夜遅くて酷く疲れている様子なのだとか。

遠回しに話を聞こうとしても笑って誤魔化してくるばかり、親友だと思っていた響ちゃんの突然の変化に戸惑うばかりと未来ちゃんはいう。

……うん、まぁ、なんというか。来るべき時、問題が遂に来たか、という感じである。いや、未来ちゃんの不安も分かるよ？　年頃の女の子が毎日夜遅いとか、事情を知らない者が聞けば普通に事案発生だからね。

というか、良く学校側に話さなかったものだ。……いや、それも響ちゃんが予め口止めしていたのかもしれない。心配は要らないとか言って……こう言っちゃあなんだが、未来ちゃんって響ちゃんに対して結構甘い所があるからそれも重なってその結果口止めになったんだろうなぁ。

彼等の拠点も学院の地下にあるみたいだし、その繋がりで学院側に対して追求しないよう手を回したのかもしれない。けれどだからと言って納得出来ないのが人間だ。理解と納得は別、心に溜まったストレスを流せる程、未来ちゃんは大人ではなかった。

ま、スルー能力の高いのが大人と言うわけではないから気にする必要は無いんだけどね。寧ろ下手に溜め込んで爆発する方が厄介だ。誰も知らない所で暴発すればその時の被害は自分だけでなく周囲まで巻き込んでしまう。そう考えれば愚痴でもある程度吐き出せる方が結果的に良い方向に向かうといえる。

因みに響ちゃんは溜め込む方で、序でに言うと危険度の高さは寧ろ彼女の方がある。普段から彼女の姿を見ていると想像しにくいけど、

ああ見えて響ちゃん結構抱え込む癖があるからなぁ。
二年前に見掛けた時も相当追い詰められていた筈なのに未来ちゃんの前では笑顔でいたしね、あの時はマジで焦ったね。あの頃は「そういやあの娘今何してるかなー」な感じなノリで遠巻きから眺めていたんだけど、あの時無理矢理笑顔を作って見せてる響ちゃんがもう見てらんなくて、ついつい手を出してしまった程だ。
今も時折響ちゃんの地元に顔を出しているが、今はもうあんな事をやらかすような人間はいないし、響ちゃんのご家族も今は無事に平穏な暮らしを取り戻している。尤も、そんな輩は二度と出てこないよう徹底的に掃除したのだから当然とも言えるけどね。
自分、乗っている機体もあって消すことは人一倍得意ナンス（キリッ
閑話休題。

と、そんな訳で未来ちゃんの相談（愚痴）を聞いた上で自分の出した結論はというと……ぶっちゃけ、どっちとも言えませんでした。
未来ちゃんの響ちゃんを大切に思っている気持ちも分かる。幼馴染で親友の二人だ、急に変わってしまった友達を心配するのも分かる。けれど、響ちゃんのやっている事もまた理解出来てしまう。響ちゃんは今、発生確率が高くなっているノイズへの対抗に終われている毎日で酷く疲れている。
かといって翼ちゃんが入院してしまっている現在の状況では奏ちゃん一人に任せるのも響ちゃんの気質を考えれば出来ないだろうし、それこそノイズがいつまた未来ちゃんやその友人達に危害を加えるか分からない以上手を抜く訳にはいかない。
まさに堂々巡り。結局の所何処かで誰かが妥協しなくてはならないのなら、それはきっと未来ちゃんの方だと思う。だからそれっぽい事を言って無理にでも納得させてみようと試みたのだが……未来ちゃん、分かってくれたかなぁ。
なんか如何にも納得出来ていないって顔してたしなぁ。まぁ、あの年頃の娘ならああいうものかもしれない。ニコちゃんも俺の話聞か

ない事度々あったしそう言うものだと納得する事にしよう。
未来ちゃんも響ちゃんも自分にとって大事な常連様だ。今後も自分の店に来てもらいたいからあの二人はこれからも仲良くしてほしい所である。

――――PS.
最近クリスちゃんを見掛けないけど、一体どうしたのだろう？
元々野良猫みたいな娘だったからもしかするともうこの地にはいないのかもしれない。
自由奔放なのはいいけど、それならそれで一声掛けて欲しかった。
折角未来ちゃんと友達になれたのだから。

@月〆日
今日、久し振りにノイズ警報が発令された。この街では久々のノイズの発生、フラワーの女将さんと偶然居合わせた未来ちゃんと一緒にシェルターに逃げようと避難するが、道中で少しばかり面倒な事になった。
蛸のような外見をした中型のノイズ、音に合わせて動く特殊性を持ったノイズは厄介な事に未来ちゃんと女将さんに狙いを付けたのだ。見た目によらず結構な俊敏さを持ったこのノイズ、下手すれば袋小路に追い詰められる危険性がある為、急遽自分が囮役を担う事になった。
未来ちゃんは自分がやると言うけれど、子供にそんな役回りをさせる訳にも行かないし何より危険すぎる。本人は元陸上部だから平気ですと言うけれどそんなものは問題じゃない。
色々言ってくる未来ちゃんを無理矢理黙らせて女将さんに預けた自分は適度に蛸ノイズを挑発しながら街から離れる事にした。
元々体力には自信があったし、逃げる事と隠れる事には定評のある自分がノイズ程度に追い詰められる訳がない。人気の無くなった所でグランゾンを出して適当に消しておこうと思った矢先、その人は現れた。

天羽奏ちゃん。シンフォギアを纏って紅い髪を靡かせながら手にした槍で蛸ノイズを駆逐した彼女、思わぬ展開に戸惑いこそはしたけれど彼女がここにいるという事は街のノイズは粗方片付いたのだろう。そう思いながら彼女に礼を言って近付くと、待っていたのはバカ野郎の一言だった。

どうやら話は未来ちゃんを通して響ちゃんから聞いていたらしく、ノイズの反応を辿って自分の所に駆け付けた様だ。その特性上誰かが囮にならなければならないというのはあの場では仕方がなかった事だが、確かに奏ちゃんの言うとおり自分の行動も軽率だったのも事実、心配させた事も含めこの時は素直に謝ってどうにか許して貰えたけど終始ソッポ向かれたままで果たして聞き入れてもらえたかどうか。

ともあれシンフォギアの姿を見てしまった以上自分には今後政府からの監視が付くことになる。何せシンフォギア関連は日本政府にとって極秘事項だ。それを他国に知られないよう配慮するのは当然だろう。

ノイズに対する有効手段、それが現状シンフォギアを纏った装者しかおらず、その技術を確立させたのは今の所日本しか確認されていない。ノイズ対策は全人類が急務としている所、それをいち早く日本が確立させたと知れば近隣諸国は勿論アメリカといった大国も黙ってはいないだろう。下手をすればシンフォギア装者の拉致の可能性だって出てくる。

上記の事を考えれば寧ろ監禁されないだけ有り難いと思うべきかもしれない。もしも強行手段に出られていたら自分はもうこの街――いや、この国にいられなくなっていただろうから。

尤も、頼まれたって話す気は無いけどね。奏ちゃん達は自分にとって大事なお客様だ。自分の収入源となる人を売るなんて行為誰が出来ようか。

そんな訳で自分が奏ちゃん達の知り合いの事もあり、彼女達の上司で二課の司令官である弦十郎さんとも顔見知りであった為、自分の事は二課の皆さんにも知られる事になった。以後、自分は未来ちゃんと

同じ協力者として接することを許してもらえた。
そうそう、未来ちゃんの方もあれから響ちゃんと仲直りを果たしており、今はもうすっかり前と同じ仲良しさんになっている。仲良き事は美しきかな、良かった良かった。
……さて、話は唐突に変わるがそろそろマジで自分も裏で潜んでいる輩の炙りだしをしていこうと思う。
恩人である女将さんや一般人の未来ちゃんまで巻き込みやがって……絶対許さねぇ。

その7

Σ月β日

一連のノイズ騒動、その裏で暗躍しているだろう黒幕を炙り出す事を考えて仕事をしながら考察して早二日、正直に言おう。手詰まりである。

いや、手詰まりというには語弊がある。正確には分かっていながら手が出せないといった方が正しいのだが、内容が殆んど自分の推察と推測でしかないことから確証はない。

まずは確信したモノから先に述べておこう。人類の天敵とされている特異災害ノイズ、その性質を自分なりに調べ、考えた結果遥か太古の頃、先史文明の人間が他の人類種を抹殺する為に造られた兵器だと言う事。

まぁ、災害と呼ばれる存在が人間にだけ狙いを絞って仕掛けてくるってのが個人的に引っ掛かってきたのでこの辺は割りと考えもついていたから調べた後も然程驚かなかった。大体、ノイズが人間だけ狙うなんて事自体おかしな話だ。何せ人間だけを狙うという事は人間だけを狙う〝理由〟があるという事に他ならないからだ。

その理由についても先史文明の頃、ある神話を参考に考察すると割りと察する事が出来た。

嘗て、世界がまだ一つになっていた頃、当時の人々は自分達を生み出した創造主である神に近付く為、天に迫る塔を築こうとした。しかし自分達に近付こうとする人間に神は怒り、塔を破壊し思い上がった人間達に罰を与えた。

〝バラルの呪詛〟　統一言語、即ち共通の意思疏通の言語を奪った事で元々一つだった人類種は分断され、人々は神に近付く処か互いの共通認識さえ保つことが出来なくなり、別々の文明をそれぞれ築いて行くことになる。

しかし、統一言語を失った事で理解出来ない相手に不安を抱いた人間が自分達以外の人間を抹殺すべく自然にクリーンな兵器を開発し、自分達以外の人類を滅ぼす事にした。それこそがノイズでありノイズが生まれた経緯である。

……うん、諸々省いて簡潔に纏めて書いても思ったけど、これバベルの塔の神話だよね？　特に塔が壊されて共通言語を無くした下りなんてそのまんまじゃねぇか。　つーか、相手がなに考えているか分からなくなっただけで人類抹殺の兵器を開発するとか、短慮しすぎませんかねぇ先史文明の人。まぁ、そんなことを言ったら戦争に勝つ為だけに核を使う現代人も同じか。

そして次に分かっている事なのだが、これは上記のノイズ云々の話より確証は薄い。というか、俺自身あまり自信が持ててない。何せ犯人は先史文明に深い関わりのある人物とされているのだ。

遥か太古の人間が現代に関与している。相手がバジュラや人間じゃない種族なら可能性はあるかもしれないが、生憎この世界に来てそんな話は全く耳に入ってこない。

普通なら馬鹿げた話だと一蹴する所だけど、見方を変えればそうとも言い切れない。何故なら現代にノイズに対抗できるあるモノが実際に存在しているからだ。

〝シンフォギア〟　櫻井了子さんが提唱する櫻井理論を基に開発された対ノイズの切り札。人間を殺す兵器に対抗する武器、勿論これだけで結論付けたりはしないが、どうにも自分には対ノイズとは別の意図があるように思えるのだ。

シンフォギアは聖遺失物である古の武具の欠片を基に生み出されている。翼ちゃんの天之羽斬、奏ちゃん響ちゃんのガングニール、これらも聖遺失物を基に生み出されている。端からみればノイズに対抗するために古の武具を用いて対ノイズの刃を造り出した！　と捉えるだろう。

しかし、シンフォギアの製作目的がノイズの対抗ではなく遺失物の起動にあるのなら、そこに込められた意味や意図は大きく異なってくる。もし先史文明の人間が関わって、遺失物を動かそうとしているの

ならその目的は大体絞り込めてくる。
バラルの呪詛からの人類の解放、おそらく黒幕の狙いはここら辺にあるのではないだろうか？　ノイズを操り自作自演の演出をしているのもシンフォギアを通して遺失物の稼働実験を試しているとするならば……少なくとも一笑に付せる話ではない。
櫻井了子。ここまでの自分の推測が正しいのなら恐らく彼女が今回の黒幕、或いはその関係者なのだろう。少なくとも今回の騒動の根幹部分に触れているのは間違いない。
本来なら今すぐにでも殴り込みにいって問い質す所なのだが……彼女が拠点にしているのは響ちゃん達の通う学院の真下、下手に手を出してしまえば学院の娘達にまで被害が出てくる危険性がある。
彼女が二課にいる間は此方から手を出すことは出来ない。今は外出する時を待つしかないのが非常にもどかしい。
――しかし、気になる事がある。仮に自分の推測が正しいのなら、彼女は一体どうやってここまで大掛かりな自作自演を成し遂げているのだろう？　もし協力者がいるならそれは多分一人二人ではない。もっと大きな規模の組織の力が必要になってくる。
櫻井了子に手を貸せるだけの大きな力を持つ組織力、それでいて彼女と交換条件を呑める程の相手は――――。

お前か、アメリカ。

◇

「深淵の淵を覗く度胸もない小僧が、強請るのだけは一人前だな」
街から離れた郊外、深い森の奥先にある廃墟となった屋敷内でその女性は呟いた。眼下に広がる炭、人だったものの成れの果てを冷たく見下ろし、その体には黄金に輝く鎧を身に纏っている。
これまで行ってきた己の策略、確かに一人で成し遂げるのは少々面倒だったし、手を貸してくれたアメリカ政府には多少なり感謝している。
が、だからといって女性に最初から彼等に対して働いてくれただけの報酬を渡す気は更々なかった。いや、既にある程度の情報と活用のあるブツを横流ししているのだからこの顛末は寧ろ好都合と言い換えるべきかもしれない。
強請るだけの愚図にくれてやる施しなどない。それにこれから自分の計画は既に最終段階に移行している。今更何か渡してやった所でそれを活かしきれるだけの時間など今の人類には残ってはいない。
さぁ、最後の締め括りに入ろう。残された問題も後僅か、このまま一気に押し進めてやろうと女性が屋敷を後にしようとした時……。
「成る程、やはりアメリカと協力関係にありましたか。では、先程日本の防衛大臣である広木威椎氏を襲われたのも貴女の策略でしたか」
「……なに？」
唐突に聞こえてきた男の声。二課の忍者以外で自分にここまで気配を感じ取らせなかった事に女性は驚きながら振り返った。
彼女の視線の先に佇むのは白いコートと蒼い仮面を被った見知らぬ人間ただ一人、その佇まいと身に纏う覇気から何処と無くあの人外司令官に似ていると女性は感じ取った。
「成る程、確かに貴女のやり方は姑息で狡猾だ。それ故に隙は少なく、効果的に立ち回る。その手際の良さは流石と言えるでしょう。しかし、大臣の安否を確認しなかったのはミスですね」
「なんだと？」

「彼は既にその身柄を然るべき場所に預けています。偶々通り掛かった際にその場に居合わせたのでね。泳がすつもりを兼ねて適当に相手をしてあげた次第です。ある意味貴女には感謝してますよ、これで一つ日本政府に貸しが出来ました」

淡々と語る仮面の男に何を言っていると混乱していると、女性はふとある事に気付く。そういえばここに来る際、やって来た連中はやたら数が少なかった。何やら酷く慌てていた様子だったし、最初は何かトラブルに巻き込まれていた程度に思っていた。

（まさか、コイツが？　一人であの連中を？）

奴等は政府の犬だ。しかし犬故に政府の意向には忠実で、それに見合う実力も備わっている。特殊部隊と言われるだけの実力を持つ精鋭を相手にたった一人で相手に取れる事は可能なのか？

目の前の人間は異端技術の力を持っているようには見えない。ならば奴の言っていることは狂言か？　そう断じるには目の前の男は剰りにも異質で――――。

「まぁ、彼を助けるまで多くの人間に怪我をさせてしまいましたが……そこら辺は上手く目を瞑ってくれるよう此方から取り計らうしかありませんね。まぁ、そんな事はさておいて――――」

「なんだ。何者なんだ……貴様は？」

「蒼のカリスマ、今からお前をブチのめす者だ」

瞬間、女性の纏う鎧から一本の鞭が伸び、男ごと地面を打ち砕いた。

その8

砕かれた床、破片と砂塵が舞い上がる廃墟の屋敷内、黄金の鎧を纏う女性はその眼光を鋭くさせて砂塵の奥を視線で射抜く。

〝ネフシュタンの鎧〟　彼女が身に纏うのは二年前のライヴで起きた惨劇の際、秘密裏に回収した完全聖遺物。欠片から生み出されたシンフォギア装者の聖遺物とは異なり、古の時代から寸分変わらず存在する世界的に見ても稀少な物。

完成された聖遺物、そこからもたらされる力は底知れず、シンフォギアとは桁違いとされている。更には適合係数、即ち完全聖遺物を纏う際に必要とされる適合率は不要とされており、理論上人間であるなら誰でも使う事が可能とされ性質、出力、そしてその潜在能力も文字通りシンフォギアの上位互換の聖遺物、それが彼女の纏うネフシュタンの鎧である。

鎧の力を手にした女性の力はまさに人ならざる者の具現、ノイズを相手にして余りある力は正真正銘生きる災厄そのもの。それこそ理論上シンフォギア装者が束になっても敵わない程の力であり、それを自在に操る事が可能である。

――なのに、そんな力を手にしてあまつさえ容赦なく奮ったというのに、何故目の前の男は傷一つなく立っていられるのだろうか。

晴れていく視界の中から浮かび上がる無傷で佇む男を前に女性の頬を一滴の水滴が流れた。

いや、理由なら分かっている。恐らく此方が攻撃を見舞う瞬間、半歩下がり半身逸らしたのだろう。女性と男の間にある間合いの距離は開かれている。恐らくはその合間に此方の攻撃を見切ったのだろう。

だが、それがただの人間がそんな芸当が出来るのか？　喩え距離があってもそれを補って余りある初動の速さだった筈。狙撃銃の弾丸よりも速く動く鞭の動きを事前に察知したとでもいうのか。

「貴様、何者だ」
「言った筈ですよ。私は貴女をブチのめす者だと」
「ほざくな！」
此方の質問に答える気など無いように仮面の男はおどけて見せ、その瞬間女性の纏う鎧からもう一振りの鞭が出現する。
乱雑に舞う二振りの鞭、その軌道は複雑にして強大で、触れた瓦礫を粉微塵に変えていく。その様は標的となった仮面の男の末路でもあった。力の暴風、人の力で具現化されたそれは一種の天災。
しかし、その暴風の中を仮面の男は自ら飛び込んだ。自ら挽き肉になるとしか思えない自殺行動、女はつまらん幕引きだと思いながらも次の瞬間目を剥いた。
力の暴風の中を突き進む仮面の男、その様子は嵐の中に佇む柳の如く女の振るう鞭を避けている。
「なっ――――っ!?」
驚愕の声が女の口から漏れる。しかし、その驚きは次の段階に移っていた。暴風の中を避けながら近付いてきた仮面の男は女の間合いにまで後少しに迫った瞬間、急激に加速し瞬く間に二人の距離を縮めた。
「今度は、此方の番だな」
「っ!?」
呟きと共に放たれた正拳は女の腹部にめり込み、女は血反吐を吐きながら吹き飛んでいく。壁に激突した衝撃で無理矢理空気を吐き出された女は力なく地面を這い、苦しそうにえずきながら男を――――蒼のカリスマを睨み付けた。
「完全聖遺物を圧倒するだと……一体、どういう了見だ」
「何も特別な事はしていません。普段から規則正しい食生活を心懸け、早寝早起きをすればこの程度は造作もありません。継続は力なり。貴女も研究ばかりではなく、少しは健康というものに目を向けてはどうです？」
「ふざけるなァッ！　なんだその超理論は、バカにするのも程度があるぞ！」

女の慟哭にも似た非難の叫びに蒼のカリスマは面食らった様に戸惑った。本人からは至って真面目な話だというのに頭から否定されるとは思っても見なかったのだ。仮面越しに目をパチクリさせて「嘘じゃないんだけどなぁ」そう呟きながら頭を掻く蒼のカリスマは暫し思案して……。

「そうですね。敢えて言わせて貰うなら……飯を食って風呂に入り、特撮見て寝る。男の鍛練はそれだけで充分なのですよ」

「黙れぇっ!!」

本人にとって本当の事を言ったつもりだが、どうやら相手には逆鱗に触れただけで終わった様だ。鬼の形相で鞭を振るい、天井床下お構いなしに振り回す女に蒼のカリスマはヤレヤレと嘆息しながら飛び退いた。

先程以上に暴れまわる力の奔流は屋敷を砕く勢いで更に威力を増していく。形振り構わず、ただ目の前の人間を破壊し尽く、その為だけに奮われる極大の力を……。

「いけませんね、闇雲に力を奮った所で当たるとは限りませんよ。曰く、当たらなければどうという事はない。確かに今の貴女の力は脅威ですが、それが戦いの場において決定的差になることはありません」

増した力の渦をしかし蒼のカリスマは避け続ける。女の攻撃を全て見切ったという風に、常人には視覚に捕らえられない鞭の軌道を蒼のカリスマは読み切っていた。

化け物め――内心で理解の外側にいる仮面の男に毒づきながら女は熱くなる思考を急速に冷却させていく。目の前の男は確かに脅威だ。此方が完全聖遺物を纏い、更にはそれを全力で奮った所で男の命を刈り取る処か勝てるイメージが湧かない。

認めよう、この男は強い。強さという点においては二課の司令官と同等かもしれないが……それだけだ。此方の内情を知っていた風だったが、これから自分が起こす計画の全貌についてまでは知らない様子。

もし奴が本当に自身の計画を全て知っているのなら、ここではなく学院の方に出向き全てを破壊していた筈。それをしないという事は

此方の計画の全てをまだ把握仕切れていないという事に他ならない。だからこそこの男はこれ以上の企みを阻止するべくここへ攻めて来たのだ。
成る程、確かにこの男は優秀だ。此方の情報を秘密裏に集め、分析し、解析し、答えを導く能力の高さは普通の人間の限界値を越えている。そしてその高い判断力と行動力も舌を巻く一級品だ。恐らくはさぞ名のある工作員なのだろう。この男を育てた輩にはよくもこんな化け物を生み出してくれたなと皮肉混じりに称賛したい所だ。
しかし、それだけでこのフィーネを止めることは敵わない。どれだけ優れていようと、どれだけ強かろうと人の身であるなら限界がある。出来ない事がある。
「そう！　最早どんなに足掻こうとこのフィーネを止める事は敵わない。カ・ディンギルは既に完成しているのだから！」
「っ！」
突然叫ぶフィーネに蒼のカリスマは面食らう。やはりカ・ディンギルの事に関してはなにも知らないらしい。いきなり投げ渡された情報に戸惑うその隙をフィーネは見逃さず、側にある壁に手を伸ばし、その一部をカチリと押し込んだ。
瞬間、屋敷内に閃光が迸り、次いで大規模な爆発が屋敷を屋根ごと吹き飛ばした。爆風に紛れながら離脱を図ったフィーネは隠し持っていた杖を手に地面に着地する。
瓦礫と化して崩れる屋敷、最早この拠点にいる意味は無いと踵を返した時。
「何処へ行くんだ？」
「っ!?」
「猛羅――――総拳突き」
砂塵の中から無傷の姿を現す蒼のカリスマに再びフィーネは驚愕に目を見開いた瞬間、眼前を覆い尽くす拳の弾幕が飛び込んできた。
全身を貫く無数の衝撃、それらの悉くが己の肉体を鎧ごと破壊していく。なんてデタラメな、想像の上を行く魔人の頑強さに驚き、吹き飛びながらもフィーネは内心で感謝していた。

「ふ、ふふ、フハハハハ！　掛かったな小僧！」
「？」
「貴様はしてやったりと思っているだろうがそれは違う。これこそが私の逃走経路、貴様はこのフィーネとの知恵比べに負けたのだ！」
「っ！」
　吹き飛ぶフィーネの言うことに一瞬理解が及ばなかったが、直ぐ様その事を察した蒼のカリスマはしまったと内心で舌を打つ。自分の放った攻撃は確かにフィーネに直撃した。手応えも感じ、吹き飛んでいくその様子にこれで終わったと確信した。
　しかし、蒼のカリスマは――――シュウジはフィーネの纏うネフシュタンの鎧の性能を理解しておらず、解した瞬間には既に手遅れだった。決定的に思われたフィーネのダメージはネフシュタンの鎧の力によって再生され、砕けた鎧諸とも修復されていく。
　あれではまた直ぐに動けてしまう。逃げられる前に追撃しようと脚力に力を込めるが、眼前に現れる特異災害の出現に否応なく足止めされてしまう。
　何故このタイミングでノイズ、見ればフィーネの手にしている杖からノイズが溢れるように次から次へと現れていくではないか。
（アレがノイズを操っていた小道具かよ、くそ、下手打った）
　本当なら奴がノイズを操る前に片を着けたかった。奴が何かしら行動に移す前に手を打ち、全てにケリを着けたかった。
　だが、元凶たるフィーネは既に姿を消し眼前にはノイズの大規模の群れが此方に迫ってきている。逃げ切るのは簡単だ。しかし、逃げたら標的を見失ったこのノイズは次の獲物（人間）を求め、そして襲い掛かるだろう。
　このノイズを出させたのは自分の失態だ。ならばその責任を取らねばならない。
「自分の不手際なのに泣き付くみたいで情けないが、ここを放って逃げる方がもっと情けないな。こんな俺で申し訳ないけど――――グランゾン、力を貸してくれ！」
　魔人の呼び掛けに応え、重力の魔神が空間を切り裂いて姿を現す。

速いところノイズを片付けてフィーネの後を追おうとシュウジはグランゾンに乗り込んだ。
その一方で。
「な、何だよあのデカブツは!?」
嘗てフィーネと共に世界を変えようと奮闘していた銀色の乙女は突然現れた蒼い巨人に度肝を抜かれていた。

その9

それは、突然の出来事だった。ノイズの大規模発生、史上稀に見る特異災害の大群に街の人々は混乱の底に叩き落とされた。我先にとシェルターに逃げ込む者、親とはぐれ泣きじゃくる子供、怪我をして動けない者、その様子は正しく阿鼻叫喚の地獄絵図、この世の地獄の再現だった。

だけど、私をはじめとした奏さんやクリスちゃん、退院した翼ちゃんと共に何とかノイズの軍団は全て撃退出来た。特に空を飛ぶ大型のノイズにクリスちゃんの攻撃は効果覿面で瞬く間に倒していく光景は見てて爽快だった。

度重なる戦いを経て漸く分かり会えた私達とクリスちゃん。奏さんは翼さんの事もあってまだ蟠りは残っているみたいだけど、それもきっと無くなると思う。

そんなクリスちゃんはノイズを全部倒した事を確認した瞬間、その場を後にして何処かに行っちゃった。何でも決着を付けなければならない相手がいるそうで、その時のクリスちゃんからは並々ならぬ強い意思、みたいなものを感じた。

本当は私も手伝いたかったけど、未来からの突然の連絡、それも二課の皆さんから頂いた特殊通信端末からの緊急連絡に私は嫌な予感を感じた。

私立リディアン音楽院にノイズが現れた。その通信を最後に未来の声が途切れ、私の頭の中はグチャグチャになった。

皆が危ない。そこまで考える頃には既に私の身体は動いていた。奏さんも翼さんも、自分が過ごしてきた学舎の危機にいち早く駆け付けようとそれぞれが先んじ、結果として私達は三人揃って学院に戻ってきた。

そこで待っていたのは……凄惨な光景だった。嘗ての学舎はその姿を失い、周囲にはノイズが暴れた痕跡である炭の海が落ちてい

た。恐らくは対応に駆け付けた自衛隊の人達だったのだろう。嘗て私が経験した二年前の悲劇と同じ現場に私は沸き上がる吐き気を堪えるのに精一杯だった。

奏さんも翼さんもそれぞれ学院を破壊した犯人に対し怒りに打ち震えていた。誰がやった。絶対に許さない。見ている此方が怖くなる程の怒りを見せる二人、そんな私達の前に……犯人は現れた。

櫻井了子さん。髪の色や身に纏う鎧から最初は分からなかったけど、アレは間違いなく了子さんだった。何度も何故と問う奏さん達に了子さんは淡々と答えた。嘗て櫻井了子と呼ばれた人間の魂は消滅し、今まで櫻井了子として親しんできた者は古の巫女フィーネであると。

最初、了子さんが何を言っているのか分からなかった。何故私達を騙したのか、何故学院を、皆を巻き込んだのか、幾ら訊ねても了子さんは笑うばかり。まるで悪い夢を見ている気分だ。頭の中がグルグル回り始め、混乱する私、しかし了子さんのある一言が奏さんの逆鱗に触れた。

嘗て奏さんの両親が亡くなった事件、アレは突発的に発生したノイズが原因とされてきているが、その裏では了子さんが関わっていて意図的にあの事件を起こしたのだという。

その話を耳にした奏さんは痛々しい程に恐ろしかった。信じてきた者が、力を与えてくれた人間が自分の両親を殺した仇であった事、この時の奏さんの胸中は私には到底理解できないものだった。

飛び出した奏さんを皮切りに否応なく始まる了子さんとの戦い。研究一筋だった了子さんでは数多の戦場を、修羅場を、死線を潜り抜けてきた奏さんの相手には成り得ない。そんな私の考えは恐ろしく甘いものだったのだと次の瞬間思い知る事になる。

ネフシュタンの鎧という完全聖遺物は私達が纏うシンフォギアとは完全に次元が違っていた。瞬く間に奏さん、翼さんは倒され、私もまた呆気なく倒された。この時の私は二人がやられた事による怒りと動揺に我を忘れ、心と体も真っ黒になった。所謂暴走、未熟な私が無闇に暴れた所為で学院だった場所はより破壊されてしまった。

あぁ、私ってやっぱりバカだったんだな。奏さんと同じ力を得られて、自分にも出来る事があるんだと自惚れて、その結果皆の足を引っ張ってしまった。

暴走は奏さん、翼さんの二人の手でどうにか収まった。お前の力はこんな事に使うものではないんだろ？　暴れまわる私をそう言って抱き締めてくれた奏さんの身体はとても暖かくて、心地よかった。

だけど、私を止める為に力を使い果たした奏さんは倒れてしまう。翼さんも一人で了子さんの相手をしていた為に力を使い果たし倒れてしまった。

力が抜けていく。戦う気力を無くした私はシンフォギアを纏う力すら失い、その場に力なく座り込んでしまう。そんな私を見て了子さんは笑いながら私に近付いてきた。

きっと、私を殺すつもりなのだろう。さっきから私の事を用済みみたいな事を言ってたし、利用価値がなくなったから始末するのだろう。

まるで師匠がよく見る映画のワンシーンみたいだ。どこか他人ごとの様に思いながら静かに目を伏した時。

「やれやれ、君はもう少しガッツのある娘だと思っていたのですが……意外とナイーブなのですね。君くらいの歳の娘は失敗するのは当たり前なのだから、イチイチ振り返る必要なんてないのに」

「いや、振り返るのは大事だろ。寧ろお前が振り返れよ立ち止まれよ。なんでアンタはいつも意味不明な位にカットんでるんだよ」

「ふむ、確かに振り返るのは大事ですね。過去を振り返るのは即ち自己の根源に立ち返るのも同意義、迷ったり不安に思った時に過去の誓いを思い返せば自信に繋がるというのはよくある事、どうやら私は少々自惚れていたようだ。感謝しますよ雪音＝クリス嬢」

「そうじゃなくて……いや、もういい。もう疲れた。これ以上アンタの相手をするのはもう止める」

「む、あの屋敷からここまで来る程度で疲れたとは、やはりどこか無理をしていたのですか？　それはいけない。過度の疲労は人体にも悪影響がでます。唯でさえ貴女はシンフォギア装者として日々ノイズ

と戦う危険性を伴っています。そんな生活の中で自己管理というのは大事ですよ。そういう訳で……麻婆、食べません？」
「食べねぇよどっから出したその劇物！　アンタ喋り方とか雰囲気は変わったのに根っこの部分はまるっきり変わってねぇじゃねぇか！」
……酷く場違いな声が聞こえてくる。沈み行く私の気持ちとは裏腹にどこまでも明るい声、まるでこの悪夢みたいな状況を吹き飛ばすようなその声に振り返ると、先程まで別行動していたクリスちゃんと、見たことのない赤いナニかを手にした仮面の人が肩を並べて此方に向かって歩いてきた。
一体誰なのだろう。不思議に思う私を他所に仮面の人は了子さんと対峙した。
「しかし、まさかこんな事をしでかすなんてね。どうやらここで全てに決着を付けたいようですね。フィーネ」
「……そういう貴様こそ、随分と早かったな。まぁ、仕留めたとも思っていなかったが」
「生憎、私には心強い相棒がいましてね。おまけに対ノイズのスペシャリストも駆け付けて下さいましたし、ノイズ駆除はさして問題なく片付きましたよ」
対ノイズのスペシャリスト、その言葉を耳にした了子さんは手を貸したであろうクリスちゃんを見る。その瞳には何の感情もなく、まるで使えなくなったモノを見るような冷たい眼だった。
「よもや飼い犬に手を噛まれるとはな。しかも恩を仇で返すとは、私の見る眼もたかが知れたという事か」
「フィーネ、アンタには確かに借りがある。力をくれたこと、世界を本当に変えるには何が必要なのか、私はその全てに納得し、一度は受け入れた。けどな！」
「痛みを解せぬ輩に語る言葉はない。お前もそこの男共々、早急に消えるがいい」
了子さんがそう言うと地面が突然隆起し、次の瞬間、大きな塔が地下から這い出てきた。見上げるほどに巨大な塔、了子さんはその塔をカ・ディンギルと呼んだ。

「成る程、それが貴方の切り札。バラルの呪詛とやらを打ち破る兵器ですか。それもデュランダルというエネルギー源を使って……」
「何もかもお見通しという訳か。そう、このカ・ディンギルこそバラルの呪詛を打ち砕く塔（シンボル）にして月を穿つ砲台！　この力を用いて私は統一言語を取り戻す！」
　月を壊す。その言葉に私もクリスちゃんも驚愕を露にするけど、仮面の人はまるで納得したという風に頷いている。
「成る程、貴方の企みは大体分かりました。しかし解せませんね。そんな貴方の企みは弦十郎氏辺りが阻止するものだと思っていましたがね。貴女程度の輩に遅れを取るとも思えません」
　どうやらこの仮面の人、師匠の事も知っている様だ。本当に何者なのだろう？　不思議に思う私とは別に了子さんから鼻を鳴らす音が聞こえる。
「フン、所詮は奴も男だという事。それを軽く利用しただけで容易く御せたよ」
「そうか。なら、これ以上貴女に訊ねる事は何もないな。櫻井了子女史……いや、終わりを司る巫女、フィーネ。――消えなさい。過去の亡霊がいつまでも現代に干渉するな」
「ハッ、漸く本性を現したか。しかし無駄。人である以上、貴様には私を阻む事は敵わない」
　不敵に笑う了子さんが取り出したのは一本の杖、ソロモンの杖と呼ばれるノイズを操る聖遺物。それを空に向けると無数の光が空に放たれて了子さんの頭上に物凄い数のノイズが降り注いできた。
　溢れんばかりに落ちてくるノイズ、押し寄せてくる特異災害の波に呑まれそうになる直前、仮面の人が私を抱き抱え、近くのビルまで跳躍した。
　見渡せば既に奏さん達を回収したクリスちゃんがいる。良かったと私が安堵したのも束の間、私達が先程までいた場所は学院ごとノイズに呑み込まれていった。
　やがてノイズはカ・ディンギルをも取り込み、一体の赤いナニかに変貌する。まるで怪獣映画に出てくる某怪獣王みたいだ。

『これが、この力こそが私の望み、ここから発せられる痛みが人を一つに纏めるの！　過去の因縁を断つ為に……神よ！　今こそ私は貴方をその御座から引きずり下ろそう！』
　赤いナニかから発せられる声、了子さんの叫びはその全てが歓喜に染まり、狂喜に満たされていた。色々頭の足りない私でも分かる。今の了子さんは自分の言う事全てを叶えられるだけの力を持っている。
　ノイズという肉に、カ・ディンギルの骨を、そしてデュランダルという心臓を手にした了子さんはまさしく人ならざるモノに変貌を遂げていた。
　状況を見れば絶体絶命の危機、しかしそれでも出来る事がある筈、諦めきれない思いが私を動かそうとしたとき。
「じゃあ、クリスちゃん。約束通り彼女達と二課の人達を宜しくね」
「……分かったよ。けど、これだけは守ってくれよ。ソロモンの杖は――」
「出来る限り回収する。分かっているとも。しかし、もしアレが思った以上に暴れた時は――」
「あぁ、その時は……フィーネもろとも消してくれ」
「了解した」
　それだけの言葉を交わした後、クリスちゃんは私の言う事を無視して私達三人とも抱えてその場から離脱する。どんどん離れていく仮面の人、一体何をする気なのだと視線を彼に向けた瞬間。
『――来い、グランゾン』
　空間を引き裂いて蒼い巨人が姿を現した。

その10

――――二年前、立花響は一度死にかけた。夕日に照らされたステージの上で、必死に死ぬなと呼び掛けるあの人の泣きそうな顔は、朧気ながらも今でも覚えている。

生きることを諦めるな。まるで願うように、祈るようにそう口にする先輩（天羽奏）の姿を、立花響は生涯忘れる事はないだろう。

そんな美しくも残酷な記憶の中、響の記憶に一つの影が落ちる。天羽奏の背後、頭上に忽然と姿を現した蒼の巨人。禍々しく聳え立つその姿は、まるでこの世の絶望を具現化したような異質な雰囲気を纏っていた。

嗚呼、きっと神様というのはああ言うものを言うのだなと、曖昧な意識の中響は何となく思った。どんなものも、何者にも染まらない深淵の蒼。

それはまるでどこまでも続く宙（ソラ）の様で、全てを呑み込む孔の様だったから――――。

◇

『――――貴様、だったのか』

私立リディアン音楽院――――跡地。嘗ては女学生の活気に溢れていた学院は巨大な大穴の形に穿たれ、影も形も無くなっていた。

代わりにあるのは天まで届く巨大さを誇る赤いモノ、無数のノイズと融合し、カ・ディンギルを呑み込んで、更には完全聖遺物であるデュランダルを吸収した事により肥大化したソレは、古に語られる赤い竜、黙示録に記された神話の怪物だった。

その核となっている魔女(フィーネ)は納得した様に吐息を漏らす。二年前、ネフシュタンの鎧の稼動実験の折に突然現れた蒼い巨人。その圧倒的な力でノイズを一瞬にして殲滅して見せたその力は圧巻の一言に尽きた。

あの日以来相見える事のなかった蒼い巨人が目の前にいる。……いや違う。正しくは呼び出されたのだ。先程まで自分を見上げていたあの蒼い仮面の男によって。

蒼い巨人が魔神というのなら、あの蒼い仮面の男は魔人と呼ぶに相応しいだろう。魔神を従えた魔人、フィーネは眼前の巨人を見て、頬に水滴が流れるのを自覚した。

『――――フィーネ、終わりの名を冠する者よ。先ずはこれまでの暗躍、お見事と言っておきましょう』

『なに？』

『貴方の企みは正しく効率的で、貴方の話術は恐ろしく効果的、先史文明期の頃より存在し続けてきた貴方は人間と言うものを良く理解している。だからこそこの様な騒動も引き起こす事が出来た。その周到さは一周回って清々しくあります。しかし――――』

『これ以上、貴方の思い通りになる事は何一つありません。何故ならば、私達が貴方の前に立ち塞がったからだ』

『っ、』

『終わりですよ、櫻井女史(フィーネ)。その名の通り貴方はここで終わりなさい』

『私の恋慕を、小火(ボヤ)騒ぎと同列に扱うか！　小僧！』

仮面の男、蒼のカリスマの挑発的な言葉がフィーネの逆鱗に触れる。激昂と共に現れる巨大な触手、最早街の全てを見下ろせる程に巨大化した赤い竜、それに比例して鞭のように繰り出される触手もまた巨大だった。

一振りで街を凪ぎ払う事が可能なその一撃、その数は無数、空を覆い街全体に影を落とすほど肥大化した竜の一撃をしかして魔神はその場から動こうとせず、正面から受けきってみせた。

いや、正確には受けてすらいない。魔神を包むようにそこにある歪んだ空間によって、竜の攻撃は魔神に届いてすらいなかった。

『空間歪曲だと？　まさか、貴様の、その機体の力は――――』
『ご明察、お見事です。察しの通り我が愛機グランゾンは重力を操る。その応用性と汎用性の高さは貴方もご存じかと思います』
〝重力〟　それは森羅万象この世で発生する有りとあらゆる事象に干渉、更に破壊する事が可能な地球（ほし）に住む生命体にとって最も身近に在る存在（モノ）。
それを操ると聴いたフィーネの表情は蒼くなる。もし本当にそれが事実であるならば、あの魔神はこの世界に存在するどの聖遺物よりも危険である事に他ならない。何よりもフィーネが脅威に感じているのは、そんな魔神をたかが人間が御している事にある。
認めよう。目の前の魔なる者共は自分にとってこの上ない脅威となる。ならばこそ、全力でこの存在を屠るしか自分に道はない。
更に触手を生やして魔神に襲いかかる。質量と物量の嵐、先程の廃墟の屋敷とではやり方は同じでも規模と破壊力は桁違いの威力を誇るその一撃は、周囲の大地を抉りながら魔神に向けて放たれる。
しかし、そんな破壊の嵐を魔神は虚空から取り出した一振りの剣で応戦。横凪ぎに払われたその一撃は襲い掛かる触手の群れ、その全てを切り払って見せた。
『っ！』
『貴方が取り込んだノイズの力、確かにその力は脅威的だ。位相差障壁、存在する力をコントロールする事により物理的干渉を減衰、或いは無効化する。近代兵器を扱う現代の人類にとってまさしく天敵。それほどまでに巨大化し、質量を得ていながらその機能も備わっているのは流石と言えるでしょう。――――しかし』
『言った筈ですよ。我がグランゾンは重力を操る。如何に存在を操作しようとも――――我々が操る重力からは逃れられれん』
――――悪寒が走った。先程までとは異なる雰囲気を纏う蒼のカリスマに、フィーネは全身が震え上がるのを感じた。
フィーネが感じた悪寒の正体、それは殺気。グランゾンを通して蒼のカリスマから滲み出てくる殺意の奔流が、フィーネを本能的に忌避

を感じ取らせたのだ。
『アンタ、さっき恋慕とか言ってたよな？　じゃあ何か？　アンタは自分の恋が報われたいが為にこんな騒動を引き起こしたってのかよ。沢山の人を殺して、大勢の人間を巻き込んで、この街の人達を危険に晒して……』
『それがどうした。遥か古から続く私の想い、たかが人間の小僧が知った風な口を叩くな！　貴様には分からんだろう。誰かを愛する気持ちの尊さを、その気持ちを切り捨てられた時の痛みと怒りを！貴様ごときに、理解できるものかァァァッ!!』
　切り裂かれた触手をネフシュタンの鎧の力によって再生され、炉心となったデュランダルのエネルギー供給によりその力を増幅させる。再生され、増幅された触手は束ねられて一本の槍に姿を変える。増幅されたエネルギー質量を圧縮され、放たれた槍はグランゾンの歪曲フィールドに激突し、尖端だけとはいえ突破する事に成功した。
　赤い竜の槍、膨大なエネルギーを有した一撃、尖端だけとはいえ歪曲フィールドを突破したその力は脅威に値するだけの威力を秘めていた。
　だが、それだけ。グランゾンの剣であるワームソードで受けた蒼のカリスマには衝撃は伝わってもそれ以上の干渉を許すことはなかった。
『成る程、確かにアンタの気持ちを理解するなんて俺には出来ない事だろう。彼女を作ったことはおろか恋愛すらしたことのない俺にはアンタの想いとやらを汲むことなんて土台無理な話だ。――――尤も、知りたいとも思わないが』
　グランワームソードに与した重力の密度を高め、触手を圧壊させていく。
『アンタはさ、フラレた腹いせをしたいだけなんだろ？　バラルの呪詛を破壊して統一言語を取り戻すとか尤もらしい事を嘯いているけど、端から見てるとアンタ、ただ自分をフッた男に仕返したい女にしか見えないぜ』
『????ッッッ!!』

手にした剣に力を込めて振り払う様に横に薙ぐ、渾身の一撃を破られた事と己の本心を抉られたフィーネは逆上し、声にならない叫びを上げる。

すると、そんなフィーネの心情に聖遺物が呼応したのか、赤い竜の姿が変貌する。巨大化した胴体に身合うような翼が生えるのを見ると、赤い竜は大地から飛び出し、空に向けて飛翔した。

フィーネの爆発した感情に引き摺られる形で変質を遂げた赤い竜は、大地に根付いた体躯を引き抜き、ある一点目指して昇っていく。

蒼い魔神に目もくれず、彼女が向かう先にあるのは――――月、バラルの呪詛そのものとされる月に向かって一直線に飛び立っていく。

その様子を見て蒼い魔人は好都合だと口許を三日月の形に歪めるのだった。

◇

――――大気圏を超え、月に向けて進み続ける赤い竜、その核となっているフィーネには既に思考と呼べる程の理性は残されていなかった。

無限の回復力と再生を持つネフシュタンの鎧と無尽蔵のエネルギーを抽出するデュランダル、二つの完全聖遺物を過剰に稼動させ続けてきたフィーネの肉体は既に限界を迎えつつあり、それに伴い理性も精神が削られると共に削ぎ落とされていった。

けれど、ここまで来た以上最早己の肉体に気を分ける必要はない。仮にここで朽ちた所で、自分にはまだやり直しが幾らでもできるのだから。

それに、目的の達成まであと僅か。バラルの呪詛、月到達までもう目の前に来ていた。

赤い竜の口を開けて最大限のエネルギーを収束させる。嘗てないエネルギーの奔流に宇宙が震えているような気がした。
この一撃で全てが決まる。これによって月は破壊され、世界は再び統一言語を取り戻す事ができる。――あの方に通じる道がもう一度開かれるのだ。
――それなのに。
『まだ、邪魔をスルノカァァァァァ!!』
眼前に佇む魔神（グランゾン）を前にフィーネは血を吐く想いで叫んだ。邪魔をするなと、私の願いを阻むなと、叫ぶ魔女に対して魔神を操る魔人はただ静かに。
『言った筈だぞ。ここから先アンタの思い通りになる事は何一つない』
蒼のカリスマと呼ばれる怪物は何処までも冷静に、フィーネの願いを斬って捨てた。
『さぁ、報いを受けろ』
魔神の胸部が開かれ、膨大なエネルギーが圧縮されていく。一点に集約された重力の力場は軈て、一つの事象を具現化させる。
『――収束されたマイクロブラックホールには特殊な解が存在する。剥き出しの特異点は時空そのものを蝕むのだ』
それは滅びの光、星の最後に現れる超弩級の重力崩壊。顕現される黒い太陽にフィーネはただ雄叫びを上げながらエネルギーを収束させ――。
『何人も、重力崩壊からは逃れられん』
『ガァァァァァッ!!』
『ブラックホールクラスター、発射！』
放出されるエネルギー、星を穿って余りあるエネルギーの奔流、その威力は紛れもなく呪詛を破壊するに足るモノだった。
しかしそれすらを呑み込み、喰らい尽くした黒い太陽は、赤い竜ごとフィーネを呑み込んだ。事象の彼方へ消えていく赤い竜、二つの完全聖遺物とソロモンの杖から切り離される事を自覚しながらフィーネは思う。

〝この化け物め〟　侮蔑と恐怖を込めた彼女の呟きは二つの魔に届くこと無く、闇の中へと消えていった。

何もなくなった宇宙、あれほど巨大さを誇った赤い竜は消滅し、宇宙は変わらず静寂に包まれた。これで漸く終わった。やりきった達成感に瞑目しながら噛み締めていた蒼のカリスマ――――白河修司はふと気付く。

『やっべぇ、ソロモンの杖、クリスちゃんに渡す約束してたんだった！』

やり過ぎた。ついいつもの調子でやってしまった自分の行いに冷や汗を垂れ流し、悔やみながら魔人と魔神は約束したソロモンの杖を探すべく一晩中その宙域をさ迷うのだった。

また、この戦いの影響で軌道上にあった各国の複数の人工衛星がダメになった事に修司（おバカ）が気付くのはそれから数ヵ月後の話。

その11

日本で起きた超大型ノイズの発生から約1ヶ月、慌ただしく且つ騒がしかった世界は現在鎮静化し、現場となった街の人々は比較的平和な日々を一日一日噛み締める様に謳歌していた。

あの日、街を覆うほどに巨大な赤いノイズが発生した時、当時シェルターに逃げ遅れていた市民の一人は軽く絶望し、生きる望みを捨てかけていた。

その直後に現れた蒼い巨人、巨人とノイズの戦いに鉢合わせをした市民はまるで怪獣映画のワンシーンの様だったと語る。

激闘の果てに消滅した赤いノイズ、その際にその一部を人工衛星の映像を通してその様子を見ていた各国の代表は蒼い巨人のその戦闘能力の高さに戦慄し、恐怖した。

あの規格外とも呼べる赤いノイズを一撃の下に粉砕し、消滅させたのだ。それも一部の専門家達が総出で調べた結果、あの蒼い巨人が最後に放った一撃がマイクロブラックホールだと知った時は国家代表の椅子から転げ落ちる程の衝撃を受けた。

直後、怪物達の戦いを眺めていた人工衛星の損傷を期に各国は日本に向けて事情説明を強く求めた。あの蒼い巨人は何なのか、何処で、どの様にして造られたモノなのか、日本ではアレを用いて何を企んでいるのか、各国の――――特に、大国の代表格とも言えるアメリカは自国の人工衛星が破壊された事を理由に日本に対し強行的とも言える姿勢で日本の代表に説明と蒼い巨人に関する詳しいデータの情報開示を求めた。

これに対し、日本の防衛大臣である広木威椎氏は以下の事を述べた。

『先に現れた超大型ノイズを消滅させた蒼い巨人の詳細の有無は現在総力を上げて現在調査中、詳しいことが分かり次第開示する』

当然、アメリカはこれに反発した。日本だけに任せては置けない。

アレだけ強力な力を目の当たりにしている以上、放っては置けないと尤もな理由を着けてアメリカ政府は日本に対し調査の介入を要求した。

もしこれを断れば貴国に対し相応な態度を取らねばならないと、大国らしい台詞も添えて……。

しかし、そんなアメリカの態度を待っていたと言わんばかりに広木威椎氏は次の情報を開示した。それは以前広木氏にアメリカの諜報部隊が強襲した際に撮られていた映像で、当時の顛末の様子が映し出されていたモノだった。

しかもご丁寧に酷く画質向上された映像で粗さもなく、繊細な所まで事細かく記録されており、当時広木氏を襲った者達の名前や住所、経歴や家族構成、更には彼等に命じた当時の人間の名前とその背後にいる自分達の事までその全てが記されていた。

吃りながらアメリカ側は出鱈目だと弁明するが、日本の幾らでも解析して構わないという強気な姿勢に黙るしかなかった。何せ日本は解析を依頼する場合は公平に第三者、しかも複数の国に回すと言っているのだ。この事が世界中に知られればこの世界でのアメリカの立場は一瞬にして瓦解してしまう。それは複数の国で成り立っていた合衆国の崩壊を意味している。

『幸いこの事を知っているのは私（日本）と貴方（アメリカ）達だけです。この事は他言無用と致しますのでどうかこれからも良き隣人でありますよう、宜しくお願いします』

そう言って頭を下げながら通信を切る広木氏にアメリカの代表は口惜しさに歯軋りをした。その様を一瞬だけ目にした広木防衛大臣は久し振りに胸がスッとしたと語るが、あまりそう呑気にもしていられなかった。

何せ、今回アメリカを黙らせる情報を渡してきたのは蒼のカリスマと名乗る男、先の超大型ノイズを消滅させた蒼い巨人のパイロットだという。

『この情報を渡す代わり、私の素性を探すフリを可能な限り続けてください』

当時、ノイズ関連の書類整理に突然送られてきた電子文。国家最高レベルの電子守護領域（ファイヤーウォール）を突破して一方的に送り付けてきた彼の者の実力に広木氏は背筋に悪寒を感じた。

蒼のカリスマ、それはアメリカの諜報部隊に襲われた際に助けてくれた仮面の男、素性こそ明らかにしていないから充分怪しいと思っていたが、まさか本人から告げられるとは思っても見なかった。

だが、今回の事でハッキリとした事がある。蒼のカリスマなる人物は此方から手を出さない限りその牙を向けない温厚な人間であると同時に、不義理をすれば全てを破壊する凶悪且つ凄まじく恐ろしい人物であるという事。

恐らく、彼の者はあの街に……複数のシンフォギア装者がいる街にいるのだろう。少なくとも日本国内にいるのは間違いない。でなければ態々探すフリ等と勿体ぶった言い回しはしない。

しかもメールの内容にはこうも書かれていた。〝日本政府内部にのみこの情報を開示することも構わない〟と。

恐らく、蒼のカリスマは自分という人間を通して日本政府の内部事情を把握……いや、掌握するつもりなのだろう。防衛大臣を初めとした各部省の大臣らは大きな権力を持つ代わりにそれ相応の情報を把握し、管理する責任もある。それを一方的に知られるという事はそれは蒼のカリスマに日本が手綱を取られる事に等しい。

文面では構わないと言っているが、それはこの事を　他の大臣達に報せなくてもどうとでもなるという事、つまり、自分は試されているのだ。蒼のカリスマという一人の怪物に協力するか否かを。

広木防衛大臣は考える。この悪魔の契約にも等しいメールの内容をどうやり込むべきか、正体不明の魔人の策略の攻略に広木防衛大臣の葛藤は胃痛で倒れるまで続いた。

尚、メール送った本人は『アメリカの悪い情報も与えたし、これ位我が儘言っても良いよね？』という空ぶった思考の下に送ったことを彼は病院に担ぎ込まれた現在も未だ知られていない。

その後、原因不明の人工衛星修復という報告に再び世界が混乱の淵

に立たされる事になり、その原因に心当たりのある広木防衛大臣は勘弁してくれと病院のベッドの中で一人泣き出した。

◇

二年ぶりにグランゾンでの戦いを経てから数日、現在自分は自ら開いた店の経営に毎日汗水流して盛り立てている所である。

あの日、フィーネとやらが出したノイズの集合体との戦いの余波で街が少しばかり壊されてしまい、暫くの合間営業停止を余儀なくされたが、復興作業は順調に進みここ最近漸く自分達の商店街の地域が立ち入り禁止区域から解除され、少しずつお客も戻ってきてくれている。

まぁ、お客が増えたのはもうひとつ理由があるんだけどね。

「な、なぁ、本当にこの格好で接待すんのかよ。絶対似合わねぇって」

「既にお客様を相手にしているのにまだ言うか。いいじゃない、どこも可笑しくないし、似合ってるって」

あの日、グランゾンで一応の幕引きに成功した自分は各国の人工衛星の修復を施した後店に戻り、これからの事について考えていた。あれだけの大きな騒ぎだ。ノイズが大量に発生したとされるこの地に人が寄り付くことは暫くないだろうから、小遣い稼ぎも込めてまたバイトの旅に出ようかなと、そう考えていた時、彼女が――――雪音＝クリスちゃんがここでバイトをしたいと申し出てきてくれたのだ。

シンフォギア装者や二課、ノイズに僅かながらでも関係のある自分は彼女達の協力者という立場にいる。彼女の住居が手配される暫くの合間、彼女の後見人として身柄を預かってほしいという弦十郎さんの頼みの下、彼女を預かることにしたのだ。

そんなクリスちゃんは現在ウチの店の看板娘として働いてもらっている。着ている服は勿論メイド服、彼女の体型にあったオーダーメイドの特注品であるこの品物は二課の皆さんからの差し入れでもある。

膝の所まで伸びたスカート、フリフリなドレスエプロン、おしとやかさの内に秘められたカジュアルな造り、このメイド服には匠の魂が感じられた。元の素材からして最上級なクリスちゃん、そこにメイド服という人類が生み出した聖遺物を着させてみろ……無敵である。

彼女という最強決戦兵器を手にした自分の店は徐々に繁盛し、その波を受けて商店街にも活気が戻りつつあった。クリスちゃんはこの商店街にとっての救世主……いや、女神である。

まぁ、そんなクリスちゃんの可愛さに吊られて柄の悪い虫が時折湧き出すが、そこは害虫駆除と同じ、徹底的に痛め付けてお店の外にポイである。

勿論、それだけでは商店街のイメージも損なうのでアフターサービスも万全、身も心もズタボロになった彼等には最後に特製の麻婆豆腐を食べてもらう事になっている。その甲斐あってクリスちゃん目当ての悪い虫、その全てが改心して二度と彼女に近付く事はなかった。

「ほら、今日は響ちゃん達が来てくれるんだろ？　だったら、ちゃんと相手してあげないとダメじゃないか」

「それが嫌だってんのに……これだから大人は嫌いなんだ」

いつも通りの悪態、いつも通りの照れ隠し、頬を僅かに紅く上気させ、恥ずかしがっている彼女に癒されつつ、店に入ってくるお客様に笑顔で迎え入れる。

『ようこそ、喫茶白河へ』

喫茶白河、本日も絶賛営業中。

その12

γ月＊日

一人の恋する女性が起こしたノイズの騒動から早1ヶ月、騒動は一応収まり表向きは平和な日々となっている今日この頃、クリスちゃんという看板娘によって店の景気は上昇傾向のままで、それに伴い商店街にもまちまちだが人が集まりつつあった。

クリスちゃんは男勝りな気質だが、根は優しく何事にも気が利く女の子で普段は自分の店でバイトとして働き他にも業務時間外、つまりプライベートな時は外に出て困っている人を見掛けたら積極的に関わり、手助けをしている。

本人は気が向いただけと誤魔化しているが、お年寄りを助けたり、困っている人の手助けをしている時のクリスちゃんの顔はとても良い表情をしていた。

そんなクリスちゃんだが、最近周りが慌ただしくなってきた。けれどそれは悪い意味ではなく、寧ろ良い方向に進む変化の表れだった。

以前から懸念されてきたクリスちゃんの住まいが遂に決まった。場所は住宅街にある大きなマンションで設備や安全機構が施された――所謂一等地の所である。

特に安全面に関してはクリスちゃんがシンフォギア装者という事もあり二課のある一定の監視環境が設けられており、不審者や得体の知れない輩がこのマンションに近付いた瞬間、速攻で二課の人達に報せる仕組みになっている。

監視とはいうがそれはマンションの玄関口や通路、エレベーターやベランダに監視カメラ（赤外線を始めとした多機能付き）という程度で私生活やプライベートは映さないよう心配りがされている。

日本政府としては貴重なシンフォギア装者であるクリスちゃんには雁字搦めで監視、いや監禁すらさせたいだろうに……それをこ

こまで人道的な配慮に留めることに成功させた二課のトップ、弦十郎さんの手腕は流石の一言に尽きた。
いや、もしかしたら〝風鳴〟さんの方から手を回したのかもしれない。直接会った事はないがあの人も中々の切れ者と聞く、年頃の娘の一人暮らしと聞いて何か思う所があり、気紛れ的な配慮なのかもしれない。

本音を言うなら自分にもクリスちゃんの居住関係に口を挟みたかったが、あまり関わりすぎるのもウザがられる要因になる為自重する事にした。
とまぁ、そんな訳で今週中にはそのマンション先に引っ越す事となったクリスちゃんは現在荷物を整理中。元々荷物の少なかったクリスちゃん、これからの生活では沢山荷物が増えることを祈っている。彼女のご両親がそうあって欲しいと願った様に……。

γ月Ω日
本日も喫茶白河は絶賛営業中、クリスちゃんという看板娘の効果と自分の作る料理、そして口伝てによる宣伝効果によって少しは知られる様になった自分の店は毎日行列が出来る程――ではないけれど、何回か満席に成る程の人気を持つようになった。
そんな今日、制服姿のクリスちゃんが店へとやって来た。何でも今日から響ちゃんや翼ちゃんと同じ学校に転入する事になり、晴れて学生として青春を謳歌する事になったらしいのだ。
一緒にやって来た響ちゃんが嬉しそうに自分に教えてくれて自分も響ちゃんと同様に学生に、普通の女子高生になれた事に素直におめでとうと口にした。
けれど、肝心のクリスちゃんはなんだか心ここにあらずといった感じ、気になったので後で話を聞きたいとクリスちゃんに伝え、転入祝いを兼ねて二人にご馳走を振る舞った。
で、客足も途絶え始め、迎えに来た未来ちゃんが響ちゃんを連れて先に帰った所を見計らってクリスちゃんに話を聞いてみることにし

た。
聞いた話の内容は……まぁ、ありふれたと言えばありふれたモノで、だけど本人にしてみたらどうしても拭いきれないモノ、過去に諸々の理由と経歴から両親を殺され、フィーネに拾われたクリスちゃんはシンフォギア装者としての高い素養に見込まれ、戦う術というモノを叩き込まれてきた。
汚い仕事も幾つも経験してきたし、血を見ない日は無かったと言えるほど殺伐とした世界を渡り歩いてきた。そんな危険な自分が果たしてあの輪の中にいてもいいのだろうかと、幸せになってもいいのだろうかと、泣きそうな声でクリスちゃんは言った。
確かにクリスちゃんの過去は万人が悲惨と答える程に熾烈なモノだったのだろう。両親を殺され、殺した奴等に身を委ねた時は恐怖と怒り、悔しさで一杯だっただろう。その思いから生まれたクリスちゃんの世界に争いを無くすという願いはきっと間違いじゃないし、正しいことなのだろう。
けど、クリスちゃんのやり方は、争いを無くす為に争う奴等を徹底的に潰すという極論で、簡単そうに見えて実は結構難しい。争いを争いで無くすという矛盾、それによってクリスちゃんが行った行為は火種を消すどころか更に燃え広がせる結果に繋がった。
人間というのは良くも悪くも争うことに秀でた種族だ。他者より強くなりたいから他者より優れていたいから、そういった強い欲求から人は争うことになり、大勢の人間を巻き込んでいく。
自国の為、利益の為、他者の為、自分の為、様々な理由で争う人間がいるなら何の理由もなしに戦えてしまうのも人間だ。そんな人間から争いを無くすには人類そのものを抹消するしかない。
だから、クリスちゃんのやり方は間違っていた。争いを嫌っていながら人を憎みきれずにいたクリスちゃんでは世界から争いを無くす事は出来ない。本人もその事を理解していた。だからこそ彼女はフィーネに縋るしかなかった。
雪音＝クリスは間違っていた。本人もその事は強く理解している。そんな彼女に自分が言えることは責める事でも諭す事でもない。

〝学ぶ〟という事を教えるだけだ。人間は過ちを繰り返すことで前に進む生き物だ。学習能力もマチマチで人によっては何度も間違って漸く物事を覚える者もいる。

けれど、それは決して悪いことではない。間違えた事で何かを学び、覚える事はそれだけで意味がある事なのだから。過去の自分に悔いるのも良い、そんな自分を許せなくても良い。

けれど、何もかも諦める前に学んで欲しい。学んで、考え、自分がどうしたいか、何がしたいのか、その果てに自分がやりたい事を見付けたとき、きっとそれはこれまでクリスちゃんが培ってきた全てが形になったモノだと思うから。

と、それっぽい事を色々言うとクリスちゃんはもう少し今の生活を続けると言ってくれた。……まぁ、自分の言っている事は結局の所〝好きに生きろ〟と言っている様なモノ、無責任もいいところな物言いである。

けど、そんな無責任な言葉でも誰かの負担を軽くする事が出来るのだと、今日、俺は学んだ。何せ店を出て行く際に見せたクリスちゃんの笑顔は思わず見惚れてしまう程に綺麗で可愛かったのだから。

けれど、立ち去る際に言った彼女の一言で俺は凍り付く事になる。

「そろそろ二課の連中にソロモンの杖渡したいから返してね」って。

やっべぇ、すっかり忘れてた。

◇

「……なぁ、修司さん。アタシ、ソロモンの杖を出しといてって言ったよね？」

「……うん」

「それじゃあ、今アタシの目の前に置かれているこれ、なに？」
「……ソロモンの、杖」
「杖？　珠じゃなくて？」
「……うん」
　テーブルの上に置かれた紫色の珠、それがソロモンの杖の成れの果てと知らされた時、店内に雪音＝クリスの怒声と一人の男の情けない涙声が響き渡った。

その13

α月※日

クリスちゃんにソロモンの杖を渡し、変質したソロモンの杖だったモノについて厳しい折檻を受けてから数日、今日も今日とて自分は喫茶店のマスターとして日々働いている。

さて、先ずはソロモンの杖――――いや、もうソロモンの珠か見た目的に――――についてだが、残念な事にその性能は未だ健在、ノイズの発生から操作、自壊に至るまでノイズに関しての扱いなら何でもござれな状態になっている。

フィーネを葬る際にＢＨＣでデュランダルやカ・ディンギル、ネフシュタンの鎧もろとも消したと思っていたのに……案外頑丈なモノだ。と、回収した時はそう思った。

実は一度、ソロモンの珠の状態を知る為と月を知る為に店が休みの日に合せソロモンの珠の起動実験を月面で行った。ここなら人気もないし、フィーネが言ってたバラルの呪詛なるものを調べられるだろうと思い月面へと降り立ったのだが、その時色々知る事が出来た。

先ずはソロモンの珠、当初は自分の所為で形が変質したと思われていたソロモンの珠だが、実はこれフィーネの奴が自分にソロモンの珠を渡さないように計らった最期の抵抗なのではないかと思っている。

根拠、と呼べるか怪しいが、何回かソロモンの珠でノイズを出したり自壊させたりを繰り返して気付いた事なのだが、どうやらこのソロモンの珠はノイズを呼び出すというより〝ノイズがいる場所に繋げる〟様な所、つまり本来これは鍵のような役割を担っているのではないかと思われる。

そもそも分かり合えない人類を抹殺しようと先史文明時代の人類が造り出したとされるこの兵器、造り出したという事は当然その兵器をしまう格納庫らしきモノがあるわけで。人類なら誰彼構わず襲う性質を持つノイズ、同士討ちを避けるべくその格納庫を同時期に生み

出している筈。
　しかもその格納庫はただ場所に固定されたモノではなく位相差空間、言うなればノイズと同じ存在を曖昧にし、通常は此方からは干渉できない状態にあるのではないかと自分は考えている。
　そうなるとあの時、ＢＨＣに呑み込まれる直前に自分がやられる事を悟ったフィーネは咄嗟にソロモンの杖を使い、ノイズのいる格納庫の扉を開け、自分の手に渡らないように格納庫の中へと放り込んだ。とも考えられる。
　杖が珠へと変わったのも当時のノイズと一体化していた状態から無理矢理引き剥がした事による弊害なのだとすると、一応杖が珠へと形状変化した事も頷ける。
　で、ノイズの格納庫にしまったのはいいが、ＢＨＣによる一撃は思いの外強力で、折角閉じられた格納庫の扉も無理矢理開かれ、珠となったソロモンの杖は再びこちら側に戻って来ることになった。というのがソロモンの珠に関する自分の考察である。
　ただ、一つ気になる事があるとすれば自分の仮説が正しかった場合、その時起こしたフィーネの行動の意味についてだ。もし本当に自分の考えの通りなのだとするならフィーネは何故ソロモンの珠を自分の手に渡らないよう最後に小細工を弄したのだろう？
　ただ単に自分の手に渡るのが癪なだけ？　確かに追い詰められた人間は時折理解しがたい行動を起こすときがある。だが、相手は先史文明の頃、太古の時代から策略を用いてきた輩だ。何の意味もなしに行動を取るとは思えない。
　先史文明については自分もまだ分かっていない部分が多いから断言は出来ないが、もしかしたらフィーネは自身が死んだ後も何らかの方法で再生、或いは復活する用意があるのではないだろうか？
　聖遺物も先史文明についても同様に分からない部分が多い所がある。それに昔は巫女として活躍していたらしいし、今頃案外あの世から復活する算段を立てているのかもしれない。クリスちゃん辺りなら奴の事で知ってる事もありそうだが、クリスちゃんにとってフィーネは幼い頃から共に過ごしてきた……所謂親代わりのようなモ

ノ、小さな存在ではない筈だ。そんな彼女にいきなり問い質しても教えてくれるとは限らないし、何より傷を抉るような真似はしたくない。

そんな訳でフィーネに関する件は今の所保留の状態だ。そして月の件に関する話だが……正直、此方も詳しいことは分かっていない。ハッキリした事があるとするなら、この世界にある月は自分の知る月とは全くの別物と言うことだ。

遺跡、強いていうならそう呼べるあの月はその内部に自分の知るどの言語にも当てはまらない文字（象形文字？）が所狭しと刻まれており、人工的に造られたとされる空洞が幾つも見てとれた。

グランゾンのスキャンからそれが遥か太古の時代からの代物で先史文明時代のモノだという事は理解した。どうやらフィーネの語るバラルの呪詛云々の話はどうやら間違っていないようだ。

人工的に造られた呪い、それが現在のあの月ならばどこか別の所に本物の月があるのかもしれない。嘗て多元世界の様に異空間に月が収納されていた様に月も隠されているのではないか、そう思ってグランゾンのスキャニング能力を使い周辺宙域を調べたのだが……それらしいモノを発見する事は出来なかった。

もしかしたらノイズの格納庫を開く鍵がソロモンの杖だった様に、月を隠した場所を開くための鍵――――即ち、聖遺物が存在しているのかもしれない。ありそうな場所……例えば日本が保有する海底神殿にある聖遺物収集所とか、それっぽいのは見付かりそうだ。日本政府には貸しがあるし、今度見てこようかな。

そんな訳でソロモンの杖改めソロモンの珠、フィーネの画策や月の呪詛についての話は以上となる。どれも中途半端でモヤモヤ感が残る結果に終わったが、次回調べる際には色々分かってくると思うので今回はこれで終わりにしようと思う。

ＰＳ．

そうそう、この間の戦いの影響の所為で少しばかり月の軌道がズレていたのでついでに直しておいた。いやー、このまま忘れてたら他の国にこの事を知られてしまい〝月が地球に落下！〟なんて騒がられ

たりする可能性があったから早々に解決出来て良かった。
……まぁ、気付くまでに少し時間が掛かった為、多分何人かには気付かれたと思うけど、大丈夫だろう。月も元に戻したし、気付いた人も誤作動だと認識を改めるだろうし、うん。特に問題はないな。

α月Σ日
今日、響ちゃんの同級生からお誘いがあった。何でも近いうちにこの街で世界的有名なアーティストがやって来てライヴを披露するのだとか。それもツヴァイウィングのコラボレーションで。
その事を語る響ちゃんの同級生、板場弓美ちゃん。ハイテンションのままそう語る彼女に圧倒される一方で一緒に来ていた安藤創世ちゃん、寺島詩織ちゃん、そして未来ちゃんにも勧められ、ライヴの日に自分も行くことになった。
何で自分が誘われるのか、理由を訊ねた所、自分は彼女達と同じシンフォギアについて多少なりとも関わった間柄、ツヴァイウィングの二人からライヴのお誘いもあったしこれを機会に親睦を深めよう。というのだ。
まぁ、その後に弓美ちゃんが呟いた保護者枠と言うのが正しい所なのだろう。ライヴ時間は結構あるだろうし、終わる頃には夜も深くなっている頃合いだ。年頃の女の子を夜道の中出歩かせるのも気が引けるし、自分も奏ちゃんからのお誘いを無下にする事も無くなったから別に構わない。
で、クリスちゃんにもライヴ一緒にどうかなとバイトに来ている時に誘ってみたのだが、どうやらその日、ちょうど二課の任務が入っている為一緒には来られないのだとか。
何とも間が悪い。とぼやきたくもなるが、クリスちゃんが自ら志願した事らしいし、問い質すのも野暮なので無理はしないように軽く小言で済ますだけに留まった。
どうやらソロモンの珠に関する任務らしいし、ソロモンの珠に固執するクリスちゃんの事だ。きっと心中穏やかではないだろう。響ちゃんもそんなクリスちゃんが心配で今回の任務で一緒に行くみた

いだから大丈夫だと思うけど……無理だけはしないでほしい。
まぁ、話を聞く限り大した任務じゃなさそうだから心配はしてないけどね。上手くいけばライヴに間に合うみたいだし、合流出来る事を楽しみに待っている事にしよう。
――それにしてもこのマリア某さん、何でまた急に日本でライヴする事になったんだろ？　日本に何か特別な思い入れがあるのだろうか？

◇

「いよいよ、世界最後の舞台の幕が上がるのね」
「私達の使命は大きく、そして重い。油断してはなりませんよ」
「大丈夫デス！　マリアは私達が必ず守るデスよ、だから安心してください」
「キリちゃんは少し能天気過ぎ、もう少し緊張感持とう」
「いや、眠たそうにしている調に言われたくないデスけど？」
（もうすぐだ。もうすぐ僕が英雄になる物語の第一歩が始まる）
月軌道の変更、月の落下という空前絶後の大災害を前に一つの小規模な組織が世界に宣戦布告する。
――その災害が既に解決されているのは未だしらないままで。

その１４

　世界の歌姫であるマリア＝カデンツァヴナ＝イヴと日本を代表する歌姫、ツヴァイウイングの二人による夢のコラボレーションの為に設けられたこの会場は数万人規模の観客で埋め尽くされ、これから始まる歌姫達の歌声に皆、今か今かと待ちわびていた。
「いやー、遠巻きに見ても凄い熱気だわー。流石音に聞こえた世界的有名アーティスト、その知名度はマジ半端ないわー」
「翼さんも奏さんも負けてないと思うけど、この人気の高さは予想外ね。今度の学園祭に向けて参考にしようと思ってたけど、ちょっと無理っぽいかな」
「ぽいというより絶対無理だと思いますよ」
　大勢の観客が歌姫達を待ちわびている一方、会場の全てを見渡せる位置にあるＶＩＰルームにて四人の女子高生と一人の保護者枠がゆったりとした室内で寛いでいた。
　この場にいる全員が響と奏、翼といったシンフォギア装者に縁のある者達で先のノイズ騒動の際、巻き込まれた者達でもある。シンフォギア装者と関わった事により政府から多少の管理下に置かれていた彼女等は普段から僅かながらでも窮屈な思いをしてきた。その礼、或いは詫びとして今回この会場に無償で招待される事になった。
　何とも分かりやすいご機嫌とり。だが、それがシンフォギア装者である響達や民間人である未来達の身柄を守る為の処置である事もまた事実。それなら今は余計な詮索はせず、シュウジはこれから始まるライヴを楽しみに待つ事にした。
「……それにしてもビッキー、遅いな」
「未来、ビッキーから何か連絡来てない？」
「うぅん、何も……シュウジさんの方はどうなんです？　クリスから何か連絡来ていませんか？」
「うーん、特にないかなぁ。出掛ける前は簡単な任務だから心配はい

らないって言ってたからそんなに心配はしてないけど……」
「してないけど？」
「いやね。前々から思ってたけど二課の仕事って夜の時が多いよね？
　夜中での活動って本人が思っている以上に体にキツイんだ。それを年頃の女の子に課しているってのが個人的に気掛かりで……学業も疎かに出来ない学生の身分が夜勤というのは少々苛酷過ぎるんじゃないかなって思ってさ」
「おぉう。シュウジさんの心配の仕方がまるでお母さんの様だ」
「まぁ、確かにそれもありますよね。クリス先輩、シュウジさんのお店に今もバイトとして出てるんでしょ？」
「住み処が決まるまでの間で良いって言ったんだけどねぇ。あの娘、まだ無銭飲食した事気にしてるみたいなんだよ。別に良いって言ってるのに律儀な娘だよ。……あぁ、なんかクリスちゃんの話をしてたらやっぱり心配になってきた。ちょっと席を外したいけど良いかな」
「もう、良い大人がウロチョロしないでください。恥ずかしいから」
「そういう未来も心配で仕方がないくせにー」
「くせにー」
「も、もう！　からかわないでよ」
　年頃の女の子達と他愛ない話を続けて暫く経つと、唐突に会場を照らしていた照明が消え、ステージ上に一人の女性が降り立った。派手なパフォーマンスで現れたのは世界を熱狂している歌姫、マリア＝カデンツァヴナ＝イヴだった。
　彼女が現れると同時に流れ出す音楽、それを皮切りにライヴは開始され、会場内の雰囲気は一気に最高潮に高まって見せた。
　歌唱力もさることながらパフォーマンスも凄い。会場の演出がそうさせているのか、彼女の一挙一動が観客達の目を釘付けにしている。
「確かに、これは凄いな。デビューから僅か2ヶ月で世界的大ブレイクとか最初は眉唾物だと思っていたけど……これなら納得だ」
　マリアの声から発せられる歌声、それは世界を通して震撼させるも

の、で中には画面越しの映像に涙を流しながら拝んだり祈る人がいるらしい。パワフルで活力のある歌声、その歌はファイヤーボンバーの熱気バサラや銀河の妖精シェリル＝ノームに似ている。
「へぇー、シュウジさんも音楽に詳しいんですね」
「詳しいって程ではないけどね。知り合いにちょっとしたアーティストがいてね。その人の歌をよく聞いてたんだ。他にも幼馴染もよく歌ってたっけ」
「……シュウジさん、幼馴染とかいたんだ」
「なんか、今日一番驚いたかも」
「……前々から思ってたけど、君達って割と容赦ないよね？　俺なんか悪いことした？　俺の事嫌いなの？」
「ホラホラお喋りはそこまでにして、次はツヴァイウイングの番ですよ」
その後もライヴは順調に進み、マリアから翼ちゃん奏ちゃんのツヴァイウイングの二人、そして三人がコラボした今回初お披露目の新曲等、様々なサプライズで会場を熱狂の渦に巻き込んだ。
彼女達によるライヴのおかげで会場は嘗て無いほどの盛り上がりを見せ、喝采と歓声が途切れる事なく三人に降り注がれていた。
『私の歌を世界中の人達にくれて上げる！　振り返らない、全力疾走だ！　付いてこられる奴だけ――付いてこい！』
大胆なマイクパフォーマンス。大胆不敵にも聞こえる言葉だが、しかしてその傲慢さを補って余りある魅力が彼女にはあった。だからこそ短期間で世界的に有名なトップアーティストにもなれたのだろう。
翼ちゃんや奏ちゃんも負けてはいないと思う。けど、既に世界で活躍しているマリアと二人の間には僅かだが差があった。本人達も恐らくその事を自覚している筈。
しかし、そんなマリアを前にしても全く動揺していないのは流石とも言える。翼ちゃんもそうだが奏ちゃんも良い表情で笑っている。奏ちゃんの笑顔が少々好戦的なのは……まぁ、良きライバルに巡り会えた事に対する武者震いみたいなものだろう。

今回この三人がコラボしたのは決して間違いではない。今回を通して二人が世界に目を向けたとき、それはツヴァイウイングの翼が新しい可能性に向けて羽ばたける事を意味している。彼女達を応援している自分としてはこれからもあの三人には仲良くしていて欲しい。

――――そう、願っていたのだが。

「何よ……これ」

「うそ、ノイズ、なんで!?」

唐突に現れたノイズ、人類の天敵である特異災害の出現に歓声を挙げていた観客達は一転、悲鳴の断末魔に切り替わる。

瞬く間に混乱に変わる会場内、二年前の惨劇を彷彿とさせる目の前の光景を前にシュウジは立ち上り部屋を後にしようとした。しかし。

『狼狽えるな!』

混乱する人々に言い聞かせる様に言い放ったのはノイズを操っているとされる一人の歌姫、マリア＝カデンツァヴナ＝イヴだった。

『我が名はフィーネ、終わりの名を冠するものだ!』

フィーネ、そう声高に叫ぶ彼女はその後世界に向けて宣戦布告をし、世界の全てを敵に回す事となる。

その15

@月Γ日

〝フィーネ〟　終わりを意味する名を自称する団体からの宣戦布告から数日、今のところ世間はこれといった混乱に陥らず日々平穏の時を過ごしている。

あのライヴの時、あわや二年前の惨劇の繰り返しになるかと思われたが、今回の首謀者であるマリア女史は意外にも人質の解放を許し、自分や未来ちゃん達を含めた全ての観客達を場外に逃がすまでノイズ達に手出しをさせなかった。

その後は未来ちゃん達を守ることに意識を割いていたから詳しくは分からないが、どうやら彼女の狙いは翼ちゃんや奏ちゃんにあるらしく、自分達が退場した後、派手にやり合った様だ。

世界中に中継されたあの状況でシンフォギアなんて纏えるのか不安だったが、そっちの方は緒川さんが上手くやったらしく、映像中継を断ち、世界中の人々にシンフォギア装者である二人の事を知らされずに済んだみたいだ。

その後も合流した響ちゃんとクリスちゃんによってどうにかマリアちゃんを撃退したみたいだけど……いやぁ、彼女達のやることはド派手だね。ライヴ会場から放たれる虹色の光の柱が夜空を穿つように立ち上った所を見た際は乾いた笑みを浮かべたものだ。

アレは多分……絶唱の力なのだろう。気になって後日、人気のなくなった時間帯にてグランゾンを出して現場を調べて見たら４つの絶唱が一つに集約された様な非常に高いエネルギー数値が観測された。

これも櫻井理論の中にあるシンフォギアに関する確立された技術の一つなのだろう。そうでなければ四人分の絶唱を一つに集約してブッパするなんて自殺行為もいいとこである。

尤も、それだけ当時の事態は切迫していたという事なのだろう。戦いという現実の中でその身を晒す彼女達の事だ。その手段を用いた時は少なからず迷った筈。

やっぱあの時、自分も出張った方が良かったかなぁ。後先を考えずにグランゾンを出せば取り敢えずその場はどうにか出来ただろうし、以前ソロモンの珠を解析した時、その特性もある程度理解したからノイズを出されても対処する事も可能になったから人的被害を出す心配もなかった。

未来ちゃん達を守る為……ていうのもなんだか彼女達を言い訳にしているみたいで気が引ける。――やっぱ、自分も少しは手助けをするべきかもしれない。

それにマリア……彼女が本当にフィーネだというのなら尚更自分がケリを着けるべきだろう。前の戦いの時に一応葬ったつもりでいたが、まさかここまで早く復活するとは思わなかった。

というか、フィーネの復活は何を以て復活としているのか、これもやはり先史文明の成せる業なのだろうか。人格や記憶、所謂魂のみの復活とはいえそんな事まで可能としているなんて先史文明の異端技術は本当にデタラメだ。その内錬金術とか出てこないよな？

@月β日

先のテロの時の事も兼ねてバイトに訪れたクリスちゃんに自分も〝フィーネ〟の探索、捜査に協力しようかと訊ねたら余計なことはするなと怒られた。

まぁ、確かに彼女の言う通りだ。世界的有名なアーティストが起こした世紀の宣戦布告、まだそれほど月日が経っていない今の日本の世情は混沌としている。唯でさえ情報が錯綜としている中、唐突な第三者からの情報提供はかえって捜査の邪魔になる可能性がある。

やはりいつも通りに単独で捜査するしかないか。余計なことはするなと言われたが、だからと言って何もするなとは言われていない。二課には優秀なオペレーターがいると聞く、情報が纏まった際に彼等に送りつけるだけでも意味はあるだろう。

彼等も政府を通して蒼のカリスマの存在は聞き及んでいる筈だし、その名を使えば少なくとも無視はされない筈、あとは自分の情報と彼等の情報を照らし合わせれば捜査の効率は格段に良くなる筈。

そんな訳で早速マリア＝カデンツァヴナ＝イヴ、彼女の過去を洗いざらい調べて見たのだが、色々キナ臭い事が判明した。当時、両親のいない彼女は亡き妹と共に米国が保有する聖遺物研究機関〝Ｆｅｄｅｒａｌ　Ｉｎｓｔｉｔｕｔｅｓ　ｏｆ　Ｓａｃｒｉｓｔ〟通称Ｆ．Ｉ．Ｓ．に所属、レセプターチルドレンとして活動していたとの事。

レセプターチルドレン、過去の出来事を基に推察するのならば、恐らくこれは……いや、Ｆ．Ｉ．Ｓ．という組織そのものがフィーネが用意した駒の一つなのではないだろうか。

いや、この場合駒というよりも保険という表現が的確か。当時アメリカと通じていた奴はアメリカに聖遺物に関する知識と技術を提供する代わりに一つの組織を設立させる事を要求した。それが米国が保有する聖遺物研究機関Ｆ．Ｉ．Ｓ．の成り立ち。恐らく奴は自分が復活するに足る適合者を探す為にこの組織を用いたのだろう。

そして今の自身がしくじった際にその代替え品として用意されたのがレセプターチルドレン。聖遺物研究の環境が整った所で復活すれば色々好都合と言うわけか。

流石先史文明の魔女、やることに卒がなくて吐き気がする。なんでよりによってあんなのが俺の婆ちゃんと同じ名前なんだよ。悪意すら感じるぞこの巡り合わせには。

まぁ、そんな訳でマリア女史の過去を調べるついでにＦ．Ｉ．Ｓ．なる組織とフィーネの狙いに付いて判明したが、一番肝心な事が未だ抜けている。今までフィーネが復活している事を前提に話を進めているが、一体どうやって奴は復活しているのかだ。

肉体は完全に消滅している。これは間違いない、肉体という器が滅び魂という中身が次の器を探してさ迷うのか、それとも先史文明の頃より連なるフィーネの血筋が器となり人格や精神ごと乗っ取ってしまうのか。どちらにせよ亡霊と言うことは変わり無い。

ここら辺はクリスちゃんが知っている筈なんだけどなぁ。話を聞こうにもなんでそんなことを聞く、なんて質問されたらこっちが困るし、余計なことはするなと言われたばかりだから気が引けるんだよね。

べ、別に怒られるのが怖い訳じゃないんだからね。余計な心配をさせたくないだけなんだから勘違いしないでよね！

なんて、ツンデレっぽく誤魔化せば目を瞑ってくれないかな……ないか。

寧ろ蜂の巣にされそう。

@月Σ日

そう言えば、そろそろクリスちゃんの学院は文化祭の時期か。クリスちゃんああ見えて引っ込み思案だし、遠慮がちな所があるから上手くクラスに溶け込めているだろうか。

いや、クリスちゃんの事だ。多分クラスの皆から誘われてもその気質から逃げてしまう事が多いんだろ。どうせ「自分はこんな所にいても良いのだろうか」なんてセンチな事を考えているに違いない。

まぁ、クリスちゃんの事は響ちゃんと翼ちゃんに任せよう。同じ学校だし、学年は違っても顔を合わすこと位はあるだろ。

それにしても文化祭かぁ、俺もやったなぁ。クラスごと、部活ごとに出し物あって結構楽しかったっけ。

……そういや、一つ面白い部があったっけ。奉仕部だったかな？　俺は行ったこと無いけど、割りと相談出来たり、悩みを解決したりと結構活躍してて時々耳にしたっけ。

その16

@月＊日

先のノイズ騒動で校舎が崩れ当時の生徒達はその出来事に酷く落胆していたが、以前使っていた旧校舎の存在が明らかになった事により廃校の危機は免れ、現在クリスちゃん達はその旧校舎にて青春を謳歌している。

旧校舎といっても外観や内装が少し老朽化している程度のモノで校舎自体はそう悪いものではない。近代的な前の校舎とは違い趣がある建物と言える。

そんなクリスちゃん達が通う私立リディアン音楽院、もうすぐ文化祭という事で現在多くの学生達が準備に勤しんでおり、放課後生徒達の賑わいの声が聞こえてくる。

学院の出す催し物は様々で屋台からお化け屋敷といったスタンダードなものからメイド喫茶といった色物店までとその内容は幅広く、当日が楽しみなラインナップになってくる。

何故そんな彼女達の文化祭について知ってるか。それは何を隠そう、旧校舎の老朽化の整備や文化祭の出し物に自分も一枚噛んでいるからである。

旧校舎の方は政府が建て直しに手を回していて人手を集めて修復していたが、その際に地域交流という名目で有志に人を集めて簡単な作業を手伝うという内容の告知が回覧板を通して自分の所に来たのだ。所謂ボランティアである。

調度建築物に関する知識はある程度持ち合わせていたのでその手伝いに駆り出される事になった。久し振りの建築作業、リモネシアでの復興以来となる建物修復作業に結構張り切って参加したら、思いの外高評価を受け、政府が集めた専門職の人達からも太鼓判を押された程度には高評価だった。

文化祭の出し物に付いてもそんなボランティアから来るもので旧

校舎修繕の時に何人か学院の先生と顔見知りになり、その伝で手伝ってみませんかと誘いが来たのだ。
これも地域交流の一つ、これを機にうちの店の宣伝にもなると思い参加した自分は屋台といった出店組に飲食店に関する知識と段取りをある程度教えることにした。
何人かは自分の店に来ている生徒もいて、彼女達の計らいのお陰で話し合いは順調に進み、段取りや手順の確認もつつがなく消化していった。……本当なら自分の秘伝の麻婆もメニューに加えようと思ったのだが、多くの生徒達に反対され却下されてしまった。
しかも未来ちゃんや響ちゃんといった常連客達にである。剰りにも必死に止めてくれと言うんだもの、少し泣けてくる。特に未来ちゃんは笑顔で止めろと言うのだからもう号泣ものである。あんまりだ。
ま、そんな訳で自分も少し手伝った事もあり文化祭当日は結構完成度の高いモノになるだろう。尤も、そんなに完成度が高くなったのは偏に生徒達のやる気の高さにあるんだけどね。やはりノイズに学び舎が壊されたことに少なからずショックを受けた子もいるらしく、学院から去った生徒も少なくはない。
でも、そんな時だからこそ楽しく文化祭をやり遂げようという生徒達の熱意は本物だった。そんな彼女達だから楽しみと思える文化祭が出来るという事に自分は少なからず感銘を受けた。
今度の文化祭は一般公開もされるというのでその時は是非とも自分も参加したいものである。こう言う行事はただ見ているだけでも充分楽しいものだから。

@月Ω日
クリスちゃんが文化祭の日に皆の前で歌う。先日響ちゃんから耳にしたその話をクリスちゃんに直接話してみると、顔を真っ赤にさせてこれを否定した。
何を恥ずかしがっているのか、どうやらクリスちゃんは人前で歌うのを苦手としているらしく、文化祭にある催し物の歌唱大会に出ないと言い張るのだ。

シンフォギアで戦う時はノリノリで歌ってたのに何故今更恥ずかしがるのか、そもそもお店でバイトをする時時折鼻唄を歌っているのを気付いていないのだろうか。鼻唄しながら仕事をこなすクリスちゃん、そんな彼女を目的に来るお客もいるというのに……全く、困った娘だ。まぁ、それも彼女の魅力の一つなのだけどね。

そんなクリスちゃんの説得は同じクラスの娘達に任せよう。彼女達もクリスちゃんの歌声にゾッコンみたいだし、きっとクリスちゃんを説き伏せる事だろう。それにクリスちゃんも歌う事は大好きな娘だ。今は戸惑っても近いうちにクラスの娘達と仲良く出来る事だろう。

さて、そうなったら文化祭に向けてビデオカメラの準備をせねば。折角のクリスちゃんの晴れ舞台である。最高画質に取り留めておかねば！

@月F日

今日も今日とて平和な一日だった。〝フィーネ〟という団体から宣戦布告されて早くも一月近い時間が経っているが、あれから連中に怪しい動きはなく、表向きは目立った動きは確認していない。

まぁ、実際は裏で色々やっていそうなんだけどね。先日もとある廃病院で派手にやりあったみたいだし、僅かとはいえノイズの反応も検知した。恐らくは先のソロモンの珠の護送の際に行方不明となったウェル某の仕業なのだろう。

シンフォギア同士の激しいぶつかり合いもあったみたいだし、まだこの騒動は続きそうだ。自分も手を出すべきなのなだろうが……生憎時間がない。

最近お客さんの入りが良くなってきているし、少しでも顧客を獲得するために無闇に休むわけにもいかない。クリスちゃん達には申し訳ないが、自分の参加はもう少し待っていて貰おう。

さて、そんな物騒ながら普段と変わらぬ日々を送っていた自分だが、今日は奇妙な客人と出会った。クリスちゃんがバイトに入ってくる前の時間、自らを調と切歌と名乗る二人の少女がお腹を空かせて店

の前に立っていたのだ。グーグーとお腹を鳴らせる彼女達を見兼ねて店の中へ入れてみたのだが、いやね、もう凄かった。
警戒心が半端じゃないんだもの。特に調というツインテの娘は店から出ていく際も敵意バリバリで自分を睨み付けていたんだもの。そりゃあいきなり「食べてくかい？」なんて誘う俺も悪かったと思うよ？　お代もいいとかそんな話を聞けば俺の方が怪しいやつだもん。それは認めるよ？
けどさ、店の前で腹の虫を鳴らしながら棒立ちをしている彼女達を袖にするのも気が引けるし……クリスちゃんという前例があったから自分はそんなに気にしていない。が、彼女達はそうでもなく終始自分には隙を見せない佇まいだった。
こんなところまでクリスちゃんそっくりだ。なんて内心にやけていると、切歌ちゃんがオズオズと自分に声を掛けてきてテイクアウトは出来ないかと訊ねてきた。
勿論ＯＫを出した自分は二人がカレーライスを食べている間に準備を進め、二人が食べ終えるのを見計らってそれを手渡した。
何でも自分達が母親同然の様に想っている人が最近体調を崩しているのだとか。そんな話を聞かされれば放っておける筈もなく、自分は腕を降るって調理をした。尚、会心の出来映えである。
特別と書かれたタッパーにそれを詰めて切歌ちゃんに渡す。調ちゃんの方には他にもいるらしい同居人の人達の分を渡しておいた。特別仕様のタッパー以外は大したモノではないが、それでも栄養面に気を使った一品ばかりである。
そんな自分の手土産を戸惑いながら受け取った調ちゃんと切歌ちゃん、ぎこちないながらもきちんと礼を言えるのは育てた親の教育の良さが知れた気がする。
そんな訳で相変わらず一文にもならない話だけれど、自分は後悔していない。勿論クリスちゃんには話してないし、話してもまたかと呆れられるだけだ。
さて、そろそろ寝るとしよう。明日も早い。営業というのは日々の行いが信用に関わるのだから、気を引き締めて頑張るとしよう。

◇

「……いやぁ、まさか冗談半分でいったテイクアウトが本当に通じるなんて、あのお兄さんも中々のお人好しデスね」
「……そうだね」
「あー、調？　さっきのお兄さんの言った事、まだ気にしているデスか？」
「……」
　拠点に向かい早足に向かう二人の少女、その手に握られたテイクアウトのお弁当を見て調と呼ばれた少女は悔しそうに口を結ぶ。
　思い返すのは先程喫茶白河なるお店でのやり取り、店の店長からの善意を真っ向から否定する調が次に耳にするあの言葉、それが彼女をどうしようもなく苛ただせる。
『別に善意でやっている訳じゃないよ。君達の話を聞いて俺がそうしたいからそうするだけ、だからこれは偽善ですらない。調ちゃんが気にする事なんて無いんだよ』
　幼子を諭す様な言い回し、男の善意を必死に否定する自分を彼は笑みを浮かべてそれを受け入れた。まるで分かっているような言い回し、何もかもを見通しているようなその笑みが調を不快にさせていく。
　何も知らないくせに。自分勝手な人間が多いこの世界で少女が受けた傷は決して小さくはない。これ以上自分と同じ境遇の子を出さないために自分は今日まで戦い続けてきたというのに、あの男は自分を子供扱いにした。
　そんな呪詛の様な呟きを口にしながら辿り着いた拠点、ここで待つ自分達の大切な人が待っている事に調は取り合えずあの男に関する

考察はやめにした。
「マム、ただいまデス！」
「ただいま」
「おやおや、二人とも遅かったですね。何か楽しい事でもありましたか」
　そう言って自分達を笑顔で迎えてくれるのは調べと切歌にとって母親と呼べる人物だった。専用の車椅子に乗りながら近付いてくるマムと呼ばれる初老の女性に切歌と調は笑顔でソレを差し出した。
「これ、お土産デス！」
「これは、随分手の込んだ料理……二人とも、これを何処で？」
「景気のいいお兄さんから貰ったデス！」
　嘘はついていない。怪しむように見てくるマムに自分達は無実だと主張する切歌、実際盗んだモノでもなく、切歌のいう通り戴いた物なので二人は自信満々に頷いた。
　尤も、心優しい二人がそんな事などする筈がない。そう結論付けた女性は説教も程ほどに彼女達の本日の成果を快く受け取った。
「ほらほらマム、早く食べてみてください」
「あの人が言うにはこれが最もスペシャルな料理」
「しかし、まだマリアが戻ってきてませんよ。ウェル博士だって折角の御馳走を食べたいでしょうに」
　急かすなと遠巻きに口にしても純粋な笑みを浮かべる二人の少女達を諌めるにはイマイチ迫力が足りない。早く食べてとせがんでくる彼女達に仕方ないなと女性は今はここにいないもう一人の娘に内心で謝罪しながら特別と書かれたタッパーの蓋を開けた。
　目の前に広がるのは色鮮やかな朱。その下には白米らしきものが敷き詰められている。恐らくは麻婆をベースにした料理なのだろう。白米とセットにしているのは分かっている。日本料理、中でも白米を好物にしているマムは久し振りのちゃんとした料理に作ってくれた人、そしてそれを届けてくれた娘二人に感謝した。
「それじゃあ、一足お先に戴きますね」
「召し上がれ！　デス！」

「召し上がれ、マム」
　あぁ、自分は幸福者だ。そう実感しながらマムは備え付けられたレンゲを手に紅い物体を掬い……そして、口にいれた瞬間。

「辛ッッッッらァァァァァァァァっ!?!?!?」
「ま、マムゥゥゥッ!?」
　マムは口から盛大に火を吐き、白目を剥いて気絶した。

「いやぁ、やっぱ良いことした後の麻婆は上手い」
「……ホント、どんな舌してんだこの人」

その17

β月※日

月も変わり、今日は待ちに待ったリディアン音楽院の文化祭、学院の生徒達が総出で贈るこの催し物に自分を含め沢山の一般客が参加し、祭りは賑わいを見せ、その盛り上がりは大成功と言わんばかりだった。

一般公開を許した今回の文化祭、お化け屋敷や展示物、屋台の飲食品など一通り見回った自分は本日のメインイベントである歌唱大会、その舞台となる講堂に足を運んだ。

音楽院の生徒から一般客まで、乱入ありの音楽イベント、何れも歌唱力の高い音楽院の生徒達による歌の祭典はそのレベルも高く、毎年多くの人がこの大会を楽しみにしているのだとか。

そんな音楽の大会にクリスちゃんが出場する。事前に響ちゃん達から情報を受けていた自分はこの日の為に用意していたカメラと集音声の高いマイクを駆使し、初舞台となるクリスちゃんのお披露目を永久保存する事にした。

そして迎えたクリスちゃんの番、退場する創世ちゃん達の後に出てきたクリスちゃんが満を持して歌声を奏でた瞬間――――講堂は感動の沈黙に包まれた。

もうね、素晴らしいの一言に尽きた。歌は言語という壁を越えて人の心を揺さぶると聞いていたが、クリスちゃんのあの歌は正にそんな感じだった。自分を支えてくれた人達への感謝、不器用ながらも自分の想いを精一杯歌うクリスちゃんの姿はどこかあの日の幼馴染と重なって見えた。

自分の為に歌い、同時に周りの人の為に歌う。これまでの自分とこれからの自分、そして一緒に歩いていく仲間達に向けて捧げられた彼女の歌声は講堂にいる全ての人達に伝わり、何より美しかった。彼女が歌い切ると講堂は拍手喝采に包まれる。

勿論、自分も諸手を挙げて喜んだ一人である。年甲斐もなくはしゃ

ぐ自分に隣で一緒に見に来ていた奏ちゃんはドン引きしていたけど、そんな事などお構いなしだった。

クリスちゃんの歌は全部余すことなく撮り終えた。後は保存用、観賞用、布教用と分け頼まれた人達に配るだけである。特に弦十郎さんはクリスちゃんの学院生活を心配していた人の一人だから映像加工はせず、そのままの映像で彼の下へ転送した。

その後、満足した自分は早足に講堂を去った。カメラに収まった映画を確認したかったし、何よりクリスちゃんの番が最後だったから乱入する人もいないだろうと判断したからだ。

けれど、自分が講堂から抜け出した直後、なにやら二人の女の子が乱入したらしく、暫定チャンピオンのクリスちゃんに挑戦したらしいのだ。

で、その挑戦者というのが先日自分の店にやって来た調ちゃんと切歌ちゃんだった。外で映像をチェックしていたら走っていく二人を見かけたので興味本意で後を追ってみたら、響ちゃんやクリスちゃん達に挟まれ、身動きが取れなくなっていたのだ。

何だか剣呑な雰囲気だったから気になって声を掛けてみたのだが、自分を見掛けた瞬間切歌ちゃんは大声を挙げて自分を指差してきたのだ。

何でも自分の作った麻婆のせいでマムとやらが火を吐き昏倒、その後は妙にハツラツとして元気が出てきたのだとか。

成る程、どうやら自分の作ったスペシャル麻婆が効果を発揮したらしい。怒っているのか礼を言いたいのか良く分からない態度の二人に取り敢えず自分はどういたしましてと返した。

すると、切歌ちゃんはグヌヌと押し黙り、調ちゃんはプクーと頬を膨らませ、その後二人は覚えていろと何故か捨て台詞を吐いて学院を後にした。自分達のやり取りを見て呆然としていた響ちゃん達はしまったと我に返るも時すでに遅し、二人の姿は既に確認出来ない所まで逃げていた。

自分は悪いことをしたかなと翼ちゃんに謝るが、気にしないで下さいと返される。けれど流石にこのまま放置って訳にも行かないので

今夜、決闘の場所であるリディアン音楽院（新）の跡地に向かおうと思う。

……何故自分がそんな事を知ってるのかって？　言った筈だ。この日の為に集音声の高いマイクも用意していたと。

◇

「立花ァァッ!!」

満月が照らし出す大地に翼の悲痛な叫びが響く。彼女の視線の先に映るのは片腕を化け物に喰い千切られた響とそれを遠巻きに眺めて歓喜するウェル博士の姿があった。

何故、こんな事になった。捕獲型のノイズの粘液によって身動きを封じられていた翼は抱き抱えている気絶したクリスに視線を落としながら己の無力を嘆いた。遠くではノイズの大群によって足止めされた奏が怒りの雄叫びを上げながらノイズを蹴散らしている。

この現状を作り出した元凶、ウェルはその手に握られたソロモンの珠を掲げながらしてやったりと叫ぶ。その顔には有らん限りの欲望が渦巻いており、彼の胸中には自らが英雄になるための物語が既に完成されつつあった。

月落下の阻止という大義名分を掲げる彼等を止めるものは誰もいないのか、腕を喰われたショックで再び響が暴走状態に陥りかけたその時、――――ソイツは現れた。

「やれやれ、こんな月が綺麗な夜に随分と血生臭い事をするものだ」

「な、何だお前は!?」

蒼い仮面を被り、白のコートに身を包んだ謎の男、明らかなイレ

ギュラーな存在の登場に途端にウェルの表情は焦りで曇る。
狼狽する彼を前にして仮面の男は鼻で笑いながら言葉を紡ぐ。
「私の名は蒼のカリスマ。Ｆ．Ｉ．Ｓ．とやらに所属していた貴方ならば私の事は多少知っていると思いますが？」
「あ、蒼のカリスマだとォォッ!?」
「そしてもう一つ、貴方方にお伝えしたい事がありましてね。月の話についてですが……聞きたいですか？」
いきなり現れておいて何故か疑問系の男、蒼のカリスマと名乗るその男にウェルは手にしたソロモンの珠を使い彼の周囲に無数のノイズを展開する。
シンフォギアを纏わなければ抗うことすら出来ないノイズの軍勢、しかし蒼のカリスマはそんな死の大群を前に……。
「さて――――対話の時間だ」
襲い来るノイズの群れに拳を握って構えるのだった。

その18

〝ノイズ〟　それは遥か太古の昔、先史文明と呼ばれる人類の黎明期の時代に当時の人間達が同じ人類を駆逐する為に生み出した古代兵器。

存在を操る力によって物理的干渉を減衰、或いは無効化させるその力は現代に至るまで人類の天敵として君臨し続けてきた。古代の力を以て誕生した特異災害（ノイズ）に対抗出来うるのは同じ古代の力、聖遺物の欠片によって生み出されたシンフォギアのみ。

それが今日にまで仲間達と共有する風鳴翼の認識だった。

「なんだ……これは、一体何がどうなっているのだ」

ならば、今自分の目に映っているこの光景は何なのか。捕獲型のノイズによって身動きの取れない翼は己の腕の中で気絶しているクリスを抱き抱えながら呆然としていた。

多数のノイズに囲まれ、孤立した仮面の男。自らを蒼のカリスマと名乗った仮面の男は襲い掛かるノイズの群れを相手にいとも簡単に撃破、ウェルが出した全てのノイズを炭素に変えてしまった。

男は襲い来るノイズに合わせ、震脚と思われる踏み抜きで地面を抉り、その反動で男を囲むように隆起する大地の楯を用いて防ぐという並みの人間では到底不可能な離れ業をやってのけたのである。

確かにノイズは触れたモノを自分もろとも炭化させ自壊する

まるで司令（叔父様）の様な奴だと翼は愕然とする。その一方、自分と同じ心境なのか、足止めのノイズを全滅させた奏も口をあんぐりと開いて驚きを露にしていた。

「な、なぁ、ナァァァァッ!?」

ノイズを自在に呼び出し、操る事が出来るとされるソロモンの杖……今は珠となっているそれを手にしたウェルはノイズを相手に無傷で凌いで見せた蒼のカリスマを前に恐怖でその端整な顔を歪ませていた。

「さて、本来ならば貴方達の頭目であるマリア某さんとも話を付けたかったのですが……出てこないならば仕方ありませんね。一先ず貴方の持つソロモンの珠を回収し、ノイズの拡散を防ぐことから始めましょうか」

一歩、また一歩近付く仮面の男に比例してウェルの顔は青ざめていく。人類の天敵たるノイズを一瞬で片付ける目の前の蒼のカリスマがウェルにとってノイズ以上の化け物に見えた。

「ね、ネフィリィィィムッ!! この化け物を喰らえっ！ この怪物を食べるんだァァッ!!」

断末魔にも似た叫び声を上げながら英雄願望の狂人擬きは暴食の巨人の名を呼ぶ。生きた完全聖遺物、奴ならばと思いネフィリムを呼び寄せようとするが、その巨人たるネフィリムは二人の間をすり抜けるようにぶっ飛び、岩壁に叩き付けられていた。

何だと思い振り返ると、そこに立つのは黒に染まった少女、人型の破壊衝動と化した立花響が血に染まる双眼でウェルと蒼のカリスマを見据えていた。

「????ッ!!」

「ビィィィィッ!!」

人の理性を完全に失った暴走状態、狂戦士（バーサーカー）となった今の彼女は本能のままに暴れ狂う獣、そんな彼女が次に目につけたのは吹き飛んだネフィリムではなく悠然と佇む仮面の男だった。

本能的に仮面の男がネフィリムよりも脅威と認識した響はその破壊衝動に従い跳躍し、蒼のカリスマに向けて蹴りを放つ。一切の容赦もなく放たれるその一撃は完全聖遺物すら屠れる威力を秘めている。そんなものを生身の人間が受ければ次の瞬間挽肉となるのは火を見るより明らか、止めろと声高に叫ぶ奏と翼の声を無視しながら響は目の前の敵に向けて蹴りをぶつける。

だが、響の一撃が男の間合いに入った瞬間、響は独楽の様に周り、背中から地面に叩き付けられていた。

「――塵旋回し受け。幾ら力があろうともそれが理性無きただの暴力である限り受け流す事は容易い事」

仰向けに倒れ付している響を見下ろす蒼のカリスマ、破壊衝動の塊である響を相手に全く余裕を崩さない男に翼と奏は今度こそ言葉を失っていた。

そんな仮面の男の態度を挑発と捉えたのか、響は黒に染まっていながらも犬歯を剥き出しにして威嚇しながら跳び跳ね、男との距離を取った。

「ほう、理性を失っていながら相手の出方を観察するとは流石シンフォギア装者ですね。……いや、この場合は彼女の師である風鳴弦十郎の手腕を褒めるべきですかね」

理性を失い、剥き出しの闘争本能となりながら、それでも戦う所作というモノを忘れないでいる響に蒼のカリスマは感心した様に頷く。

そんな彼の背後に復活したネフィリムがその口を大きく開いて襲ってきた。音を消しての接近、強襲に成功したネフィリムにウェルの表情は歓喜に変わる。

頭から齧り付け、捕食しろ。これで正体不明な怪物を仕留めてやったとウェルがザマァミロとネフィリムの勝利を確信した――瞬間。

「やれやれ、こんなタイミングで襲われては迎え撃って下さいと言ってる様なモノだと言うのに……生体聖遺物と言っても知性が有るわけではないのですね」

〝――渦廻斬輪蹴（うずまわしざんりんげり）〟

振り向き様に放った蹴りの斬撃、軸足を渦のように回転しながら放たれたその攻撃はネフィリムをミキサーに放り入れた蒟蒻の如く、切り刻んでいく。

瞬く間に肉片と化したネフィリム、人一人呑み込める程に巨大化した巨人は最後に心臓部分らしきモノを残して四散、コロコロと転がり落ちていくネフィリムの残骸を見て、茫然自失となったウェルは力なく座り込んでしまった。

そんな彼の様子を見て蒼のカリスマは一つ片が着いたと頷き、未だ暴走状態である響に向き直る。その際にビクリと一瞬怯んだ様に見えたが、そこは暴走状態。頭を振って突進してくる彼女に男は両の拳を握り締めた。

（やっぱ、荒療治が必要か）
向かってくる黒い響を前に仮面の男は少しばかり本気になった時――。
「悪いが、そこまでだ」
紅い隕石が二人の間を割って入るように乱入してきた。
舞い上がる戦塵の中立ち上がる紅、それは黒に染まった響をまるで子供扱いの如く脇に抱え。
「お前が蒼のカリスマか。悪いがお前には色々聞きたい事がある。お前の知っている事全てを吐いて貰うぞ」
特異災害対策本部、二課の司令官にして最高最強戦力、風鳴弦十郎が蒼のカリスマ――――白河修司の前に降り立った。

その19

β月Γ日

昨夜、ウェル某博士と色々話をつける為にリディアン音楽院(新)の跡地に向かっていたのだが、先に辿り着いていた響ちゃん達がウェル博士が呼び出したノイズと戦っていた為、暫く事の経緯を見守ることにした。

しかし、途中出てきた気色の悪い怪物が響ちゃん達に襲い掛かり、その所為で響ちゃん達は動きを乱されてしまい、奏ちゃんは三人から引き剥がされ、クリスちゃんと翼ちゃんは拘束され、響ちゃんに至っては気色の悪い怪物――――ネフィリムによって左腕を喰われてしまった。

自らの腕を喰われた事によるショックで暴走してしまう響ちゃん、破壊衝動に呑み込まれた今の彼女ではネフィリムには勿論、仲間である翼ちゃん達にまで危害を加える可能性がある。

ここまで来てしまっては流石に見ているだけで終わるわけにはいかず、自分も戦場へと乱入、少し強引だがウェル博士の企みを潰す事にした。

ネフィリムも細かく切り刻んだし、譬えコアの部分が無傷だとしても動くには幾分かの時間を必要とする筈、その間にウェル博士の身柄を拘束し、響ちゃんの暴走を何とかした後でマリアさん達の居場所を吐いて貰おうとした時、彼が現れた。

風鳴弦十郎。響ちゃん達が所属する組織の長であり、あの〝風鳴〟さんの血縁者。自分と暴走する響ちゃんの間に割って入ってきた弦十郎さんは自分の目的を聞き出すため司令自ら戦場にやって来た理由を丁寧に話し、自分に大人しく投降するよう呼び掛けてきた。

まぁ、弦十郎さんが懸念に思うのも無理はない。自分は日本政府に今の所敵意は抱いていないが、国の重鎮である大臣に一方的にメールを送り込んでいたし、やっている事はサイバーテロの様なモノだ。そんな自分は同じ国を守る立場にいる弦十郎さんにとって捨ててては置

けない存在になっているのだろう。
とはいえ、此方としても理由があって動いている訳だからそうそう頷く訳にもいかない。よって彼の呼び掛けを丁重に断ったら……まぁ、解っていたが戦う《バトる》事になった。
戦うと言ってもお互い一度だけ拳を放っただけなんだけどね。けれどそのお陰で地面は陥没し、その余波で響ちゃんは吹っ飛び、ウェル博士も何処かへ消えてしまっていた。
仕方がないからその場はそこで退散する事になった。弦十郎さんは自分と決着を付けたがっていたが、暴走する響ちゃんや動けない翼ちゃん達を放置する訳にもいかず、ノイズを片付けた奏ちゃんと一緒に事に当たっていた。
何だか引っ掻き回す事になって申し訳ないが、どちらにせよ当時の状況ではウェル博士の身柄を拘束するのは難しいから、個人的にはあまり気にしていない。
その後、響ちゃんが元に戻った事を確認した自分は追い掛けてきた忍者の人と少しの間鬼ごっこに興じた後、家に帰ることにした。
しかし、弦十郎さんも意外に律儀な所がある。あの時、拳をぶつけ合わせた時に忍者の人に奇襲を頼めば自分を捕らえられたかも知れないのに、まさか一対一《サシ》で挑んで来るとは……これには流石に予想外だった。
忍者の人、緒川さんだったか？　あの人もクナイを投げ付けてくるだけで特に追い詰めようとする意志は感じられないし、もしかしたら向こうは自分の事をそんなに敵視していないのかもしれない。
それとも単に泳がせているだけなのか、まぁそれはどっちでもいい事、向こうが必要以上に敵意を見せなければ対応の仕方はある。それに、自分としても弦十郎さんとはガチでは戦り合いたくはない相手、このまま穏便に進めれるのなら、自分としても好都合だ。
だって弦十郎さんてば結構マジで強いんだもの、一度拳を交えて解った。あの人ただの司令官じゃねぇ。
もしあのまま続けていたら俺も弦十郎さんも無事では済まなかった。そういう意味でも彼処で撤退したのは我ながらナイスな判断で

ある。
　さて、残す問題はやはりウェル博士の方になる。あれから姿を消しているが一体どこへ逃げたのやら。まぁ、大体目星は付いてるから次くらいには見付けられると思うけどね。
　あぁ、でもやっぱあの時言えなかったのは残念だったなぁ。月の軌道修正のデータも折角前もって準備していただけに悔しいモノがある。
　……いっその事、クリスちゃんに渡して貰うか？　クリスちゃん経由に弦十郎さん辺りに持っていって貰えれば事態も動くだろうし。
　いや、それだけはやめておこう。元を正せば今回の騒動の半分近くは自分が原因なのだ。筋を通す意味を込めてこれは自分がやり遂げるべき案件だろう。
　というか一つ気になったのだが、あのウェル博士って人、月軌道の定期観測とかしてないのかね？　アメリカの宇宙機構の組織にハッキングすれば割とあっさり分かると思うんだけど……。

β月β日
　今日、クリスちゃんに月の件について問い詰められた。物凄い剣幕で迫ってきた彼女がめっちゃ怖かったから自分は大人しくゲロるしかなかったですハイ。
　やっぱアレだね。綺麗な顔をした人は怒ると人一倍怖いんだね。よく解ったよ。
　その後、自分の話を聞いたクリスちゃんは暫く店の隅っこで頭抱えた後、何事も無かったようにバイトを始めた。帰り際に達観した目で「私は何も聞いていない」というセリフを残して。
　……俺、なんか悪いことした？

その20

「――――蒼のカリスマ、か」

東京湾、深海。特異災害対策二課の仮設本部である特殊潜水艦、迅速な事態への対策として政府から設けられた移動式対策室。そのブリッジと呼ばれる場所で二課の長と呼ばれる司令の風鳴弦十郎は先日見えたテロリストの名を口にする。

眼前に広がる巨大モニターには今しがた口にしたテロリストの姿が映し出され、まるで此方の意図を見通している様に顔を向けている。

フルフェイスの仮面に覆われて表情、思考等は把握出来ないが弦十郎には何故かその仮面が挑発する笑みを浮かべている様に見えた。

「申し訳ありません司令、僕が彼を見逃していなければ……」

「いや、それは奴の実力――――奴の意図を見出だせなかった俺の責任だ。お前が気に病む必要はない」

側に控える緒川の自責を弦十郎は気にするなと諌める。

「彼の意図……ですか？」

「あぁ、翼と奏君から聞いた話だが、どうやら奴の目的はウェル博士の方にあったらしくてな、シンフォギア装者である彼女達にはなんの興味も示さなかったらしい」

シンフォギア装者、現場特異災害に対する唯一の対抗手段である彼女達は同じ特異災害に頭を悩ます諸国にとってどんな手段を用いても手に入れたい存在とされている。

それ故に装者に関する情報は日本政府により徹底的に秘匿され、国家の情報の中でも最上級の機密とされている。勿論この秘匿の中には装者達の安全を考慮した意味も含まれている。

そんな彼女達に政府の上層部の人間、中でも一部の者にしか知らされていないテロリストが彼女達の前に現れた。当時の状況と思惑が定まっていないとされてきた彼の登場、これにより事態は更に悪化したものと判断し、弦十郎は仮設本部である潜水艦から飛び出し現場へ

と急行した。
　仮面の男、蒼のカリスマの真意が分からず、またその戦闘能力の高さと当時の状況から自分が出るしかないと判断した弦十郎の考えは間違いではなかった。もし蒼のカリスマの目的がシンフォギア装者にあるのだとしたら、もし彼の目的が〝フィーネ〟と名乗る者達……いや、ウェル博士の思惑に通じていたら事態は自分達が考えている以上に最悪な方面へと転がり落ちていたのかもしれないから。
　以上の事を踏まえて、弦十郎の判断は間違いではなかった。しかしその結果ウェル博士は取り逃がし、蒼のカリスマも見失ってしまった。唯一手懸りと思われるモノは逃走する最中の蒼のカリスマを必死な思いで漸く撮りとめた緒川が残した一枚のみ、それは今現在巨大モニターに映し出されている。
「彼の目的が奏さん達ではないのなら、一体何故彼はあのタイミングで出てきたのでしょう」
「正直な所、俺にも分からん。だが、今の所奴に悪意や敵意といったモノは感じられなかった」
「それは、拳を合わせた者同士の特有の直感……ですか？」
「そこまで奴と分かり合うつもりはない。が、そう感じたのもまた事実、暫くは放置しておいても構わないだろう。仮に再び奴が現れたとしても」
「彼が敵対する可能性は低いと？」
「それもある。が、それ以上に俺が捕まえるつもりだ」
　ヤル気満々といった様子で拳を握り締める風鳴弦十郎、司令官が前に出過ぎる事に思う所はあるが、現在の戦力では心許ないのも事実。
　そして更に蒼のカリスマには他の誰にも持ち得ない超常の力があるとされている。
　〝魔神〟　先のリディアン音楽院跡地で起きたノイズ騒動の首謀者とされるフィーネこと櫻井了子、ノイズと融合し、巨大なノイズと変貌を遂げた彼女を屠った存在。
　その全貌は不明で弦十郎でさえも把握仕切れていない超常の存在、その怪物をたった一人の人間が制御している。

以上のことから蒼のカリスマは弦十郎や二課の人間にとって最も警戒すべき相手でもあり、最も敵対したくはない相手でもあった。
けれど、弦十郎は心の何処かで期待しているのかもしれない。蒼のカリスマの目的が自分達と同じモノである事を。
自身の握り締めた拳を見て、弦十郎はそうであってほしいとただ願うだけであった。

さて、一方その頃、話題の中心人物である本人はというと。

「全く、白昼堂々の真っ昼間からノイズを出すとは、しかもアメリカ兵達だけに飽きたらず通りすがりの子供達まで始末しようとするその根性、ますます気に入りませんね」
「ひ、ヒィィィィッ！」
「こんな、こんな事って……」
「シンフォギア装者三人を相手に無傷……」
「どういう理屈デスか！」
「少し、頭を冷やしなさい」
誰もが知らない処で、一人王手に手を掛けていた。

その21

「蒼のカリスマさん、かー。どんな人なんだろ?」
「いきなりどうした立花」
旧リディアン音楽院での本日の学業を終え、久し振りに行き付けのお好み焼店であるフラワーへやって来た響達、学生ではない天羽奏も本日は仕事も休みでフラワーでは珍しく二課のシンフォギア装者全員が揃いぶみを果たしていた。
〝フィーネ〟なる組織とそのシンフォギア装者との苛烈な戦い、そんな中偶々訪れた平和な時間、せめてこの時くらいは戦いの時を忘れようと皆が談笑しながら会話を弾ませていた。
そんな時、不意に響の口からある人物の名前らしき名称が溢れる。幸い店長である女将は席を外しており、店には時間帯的に自分達以外のお客がいないから誰かに聞かれるという心配は無かった。
響が口にする蒼のカリスマ、それは日本政府の中でも一部の者しか知らされていない謎多き人物、その正体も目的も全てが明らかにされていない。正体不明でまるでＵＭＡの様な存在、しかし彼の者は実在しており、かの超大国であるアメリカに政治的に干渉、翻弄したというのだから驚きだ。
勿論響達はその全貌を知る由もない。ただ危険な人物かもしれないから注意しろとしか伝わっておらず、漠然としか把握出来ていなかった。
故に……いや、だからこそ響は気になった。それほど迄に恐れられている人間が、何故あの時自分達の窮地に助けてくれたのか。無論、結果的にそうなっただけというのは分かる。偶々あの状況に居合わせただけ、確率的に言えば他の者が言ってるようにそうであった可能性は高い。

しかし、どうも響は納得出来ないでいた。直接見たわけでも話した訳でもないのに、ただ勘というだけで疑問に思い、そして口にしていた。
「翼さんと奏さんは見たことあるんですよね？　その蒼のカリスマって人を。どんな人だったんですか？」
「どんな……と、言われてもな」
「奴さん、仮面を被って素顔を隠してたからなぁ。ただ、物凄く強い奴ってのは見ててわかった」
「も、物凄く強いんですか？」
「えぇ、私は奏より近い所にいたから鮮明に覚えているけど到底常人とは思えない動きだったわ。物理干渉の効かないノイズを相手に無傷で対処した挙げ句、弦十郎叔父様……いえ、司令とマトモに打ち合えていたんだもの、その実力は計り知れないわ」
「し、師匠と打ち合えた？　マジですか」
真剣な表情で語る翼に響は唖然となる。響の師匠でもある風鳴弦十郎は響にとってある種の絶対的存在でもあった。というか、シンフォギア装者になり、ある程度の実力を身に付けた段階で響は弦十郎の異常性を嫌でも分かるようになってしまった。
助走なしの垂直跳びで三階建てのビルに匹敵する脚力を有している事から始め、以前ふとした事で参加した模擬戦で垣間見た戦闘能力、そのどれもが常軌を逸したものであり、生身の人間とは思えない身体能力を備えており、正直響は自分の師を普通の人間として見れなかった。
というか、見れる訳がない。一体どこの世界でシンフォギアを纏う装者相手に無双できるのだ。とどめに亡き櫻井了子が完全聖遺物を鎧として纏い、自分達に襲いかかってきた時も単身で圧倒してみせたと聴く。
そんな色んな意味で出鱈目な自分の師と拮抗する実力を持つ者がいる。それが先程響自身が話題に起こした蒼のカリスマその人である。響はクラリと目眩がした。
「けれど、立花が気になるというのも分からなくはないの」

「翼さん？」
「……実はもう一つ、蒼のカリスマに関する情報があるんだ」
「え？」
「翼、それもしかして二年前のアレか？　いいのか？　話しても」
「司令には既に許可を戴いているわ。それに、これからも蒼のカリスマという輩が出てくる可能性がある以上、話しておく必要があると思うの」
「けどよ……」
「奏、貴女の気持ちも分かるわ。だから一度立花に訊ねましょう。――立花、これから話すのは二年前のあの日、私達のライヴに起きた悲劇に纏わる話だけど……聞きたい？」
　二年前のライヴ、その言葉を聞いた響の視界が一瞬揺れる。忘れる訳がない。あの日、あの地獄で自分はツヴァイウイングの二人に命を助けてもらったのだ。
　もうダメだと思い諦め掛けていた時、薄れ行く意識の中で聞こえてきた奏の生きることを諦めない意志の声を。
　だから、こうして今も自分は生きていられる。あの日の二人が在ったから、自分はこうしてここにいられる。
　あの日、あの地獄は響にとってトラウマであり、忌まわしき事件であり。今までの自分が今日まで生きてこられた転換期でもある。だからこそ、響は翼の問いを〝ハイ〟と即答出来た。
　響の覚悟を受け取り、改めて語り始めた翼、静かになる。フラワーの店内で淡々と翼の語る言葉だけが紡がれていた。
　彼女が口にしたのは〝蒼い魔神〟という単語と二年前に起きた出来事の全て、勿体振っておきながら話の内容はそれほど多くなく、しかしそれに反して響に起きる衝撃の大きさは計り知れなかった。
「蒼い魔神って、それって了子さんの時にも現れたって言う」
「あぁ、そして二年前の時もあの蒼い魔神は予兆も前兆も前触れもなく唐突に現れ、全てのノイズを消滅した後、何もなかった様に姿を消していた。アレほどの巨大な存在を事前に認識出来なかった事も不可解だが、分からない事はそれだけではなかった」

一体どこの誰があんな兵器を造り出したのか、アレほどの巨大で強大な人型兵器を他国に気取られず完成させるなど不可能に近い。だからいっそ、アレは何か特別な力を持った完全聖遺物なのではないかと当時の日本政府は結論付けた。
「けれど、どんなに思考を巡らせてもあの魔神に関するモノは何一つ見出だせていなかった。そんな時に現れたのが――――」
「蒼のカリスマ、ですか」
響の言葉に翼は無言で頷いた。
自らを魔神の担い手と告白する蒼のカリスマ。当時彼の言葉を耳にした某大臣はその衝撃に胃をやられ、入院したと聴く。
何故今更になって自ら名乗り出たのか、その事も含めて分からない事だらけだが、しかし響は一つあることを思い付いた。
「……もしかして、蒼スマさんって割と良い人、なんじゃないですかね？」
「どうしてそう思うんだよ。てか蒼スマって……」
「だって、そう思った方が一番しっくり来ると思うんですよ。二年前のあの日だって私達の事を見掛けて助けたのだとしたら、了子さんの時やこの間の事だって説明できますよ」
〝人助け〟　自分と同じ、ささやかなモノの為に戦っているのではないか、と響は蒼のカリスマなる人物をそう考えた。明らかに楽観が過ぎる考えだが、不思議と彼女達も否定する事はしなかった。
特に今まで口を開かないで聞き入っていたクリスは何ともやりきれないと言った表情で苦笑いを浮かべている。明らかに何かを知っている風な彼女だが、顔を響達とは別方向に向けているため彼女達がそれに気付く事はなかった。
「もしそうならきっと分かり合えると思うんですよ。私達なら、きっと蒼スマさんとだって仲良くなれる筈です！」
「そうだなー、そうなるといいなー」
「むむ、クリスちゃんてばやけに棒読み、さては私の事まぁたバカにしてますな！」
「いやぁ？　別にンなこたぁねぇよ？　そうだな。どうせなら話し合

おうって聞いてみたらどうだ？　案外ノリノリで話し合いの場を設けてくれそうだぜ。綺麗なテーブルとか茶菓子とか付けてな」
何やら意味深に笑うクリス、その目が何やら遠くを見つめている彼女に響達は不思議に互いに顔を見合わせるのだった。
「それよりも、小日向はどうなってんだよ。アイツまだ遅くなるのか？」
「あ、そうだった。メール打ったのにまだ返って来ないんだよね」
「何か、トラブルでもあったのか？」
「便所じゃね？」
はしたない物言いをする相方を小突きつつ、翼はもう一度連絡するよう響に促した。みんな待ってるよ。その内容のメールを送った瞬間、小日向未来の未来は最悪な方向へ向かっていく事も知らずに。

◇

（どうしよう。不味い事になっちゃった）
小日向未来、立花響の幼馴染みにして彼女の親友でもある少女は物陰に隠れ、おそるおそる視線の先に映る光景を目の当たりにし、軽く絶望を覚えた。
今は誰も使わない廃棄された倉庫、人気もなく、市街からは離れた位置にあるこの場所で最初未来はこんな所に立ち寄らず、真っ先に親友が待つフラワーに向かうつもりだった。
しかし、涙と鼻水まみれのぐしゃぐしゃな顔で死に物狂いで逃げ惑う子供達の姿を見て、未来は無性に嫌な予感を感じた。もしかしたら、そんな思いで子供達が逃げてきた方向を見つめ、未来は身を竦ませながら廃倉庫へと向かった。
いつでも親友を呼べるように携帯を手にしながら進む彼女の先に待っていたのは、予想通り……いや、予想以上の光景が展開され

ていた。
フルフェイスの仮面を被り、白いコートに身を包んだ男性らしき人間が無数のノイズとシンフォギア装者を相手に圧倒する光景、未来の知る常識とはかけ離れた光景に彼女は思わず近くのコンテナに身を隠した。
おそるおそる覗き込んで見ると、そこには三人のシンフォギア装者が仮面の男の踏み込み(震脚)によってノイズ共々吹き飛ばされていた。
遠巻きから眺めている自分にまで及んでくる衝撃波、その事に悲鳴を上げること無かったのは先のノイズ騒動で無駄に度胸が付いたからか、それとも悲鳴を上げる暇もなかったのか。いずれにしても自分の存在を知られる事が無さそうだったのは不幸中の幸いだった。
自分が落ち着きを取り戻している最中にも状況は変わらず、仮面の男は余裕の態度を崩さず疲弊仕切って地に膝を着けている三人のシンフォギア装者を見下ろしていた。
仮面の男、彼が何かをした訳ではない。少なくとも未来がこの場に訪れてこの光景を見ていた限りでは仮面の男は自ら手を出した様子は見当たらなかった。
三人のシンフォギア装者――――以前自分達の学園祭の時に現れた二人の少女と先のライヴで有名人となったマリアには目立った怪我もない。ただ酷く疲れているようには見えるが……。
「これで分かって戴けた筈です。あなた方に危害を加えるつもりはないと、私が用があるのは其処にいるウェル博士だけです」
「ヒッ!?」
「ジョン・ウェイン・ウェルキンゲトリクス、貴方が手にしているソロモンの珠は人の手に委ねるべきではない危険な代物、それは然るべき所に然るべき対応で封印、または破壊すべき聖遺物だ。一人の人間の野望で使って良い代物じゃあない」
「う、五月蠅い黙れ！　僕は英雄になるんだ。人類を救済し、英雄になり、世界に僕の名前を刻み込むまで邪魔される訳にはいかないんだ！」
「英雄は至(な)るモノではなく語られる存在(モノ)だというのに、野望というよ

り妄想の類いだったか、どちらにせよ厄介である事には変わらない、か」
「ほら、お前達もいつまで休んでいる。さっさとそいつを殺っちゃえよ！　さっき渡したＬｉＮＫＥＲがあるだろぉっ!?」
「そ、そうだ。私達にはやり遂げなければならない使命がある」
「その使命というのは、無関係な子供まで犠牲にしてまでやり遂げる程、重要な事なのでしょうか？　私はそんな使命なんてモノを掲げた事なんて無いから理解できませんが……正直、不快ですね」
「五月蠅いデス、お前みたいな強い奴が、大人が私達の何が分かると言うのデスか！」
「知りませんし興味もありません。大体、自分達は他者を偽善者呼ばわりしているではないですか。いざ追い詰められたら開き直るなど、あなた方の掲げる大義名分もたかが知れている。それではあなた方の嫌う偽善な人間と、一体どこが違うというのです」
「それはっ！」
「そもそも、君達のいう偽善とは前提からして間違っている。人間とは元々自分の為に行動するモノ、人助けを趣味としているとある少女もただ自分がそうしたいからそうしているだけにすぎません。人類を救済しようとするあなた達も本質的な所はなにも変わらない」
　誰かの為に、何かの為に、聖人も悪人も、勇者も英雄も自分が望んだ願いや想いの為に行動をし続けた存在だ。人間の根底には誰にでも僅かながら揺るがない〝我〟というものがある。確かにこの世界は偽善な人間で溢れているだろう。彼女達の語る偽善者という話にも仮面の男は少なからず共感出来る。
　だが、偽善とは必ずしも悪ではないという事も知っている。自分の思わぬ行動に誰かが助かったりする事もあるし、その逆もまた然り。良い意味でも悪い意味でも世界は理不尽に溢れていた。
　この世界はそう言うモノで出来ている。それを理解するには彼女達は少々純粋に過ぎた。
「しかし、それが悪だとは思いません。彼女の人助けが自分の心の内から出てきた本物であるように、君達の抱く想いもまた嘘ではないの

だから。ですから私は非難はしても否定はしません」
　ですが、と言葉を紡いだ仮面の男はウェル博士に向けて一歩足を踏み出す。
「Ｄｒ．ウェル、貴方は自分の目的の為に他者を蔑ろにし過ぎる。自分の野望の為と謳うなら、せめて自分の命位は張って見せろよ」
「うっ」
「英雄になりたいなら、一度くらい自分の手を汚して見せろよ。道具に頼り仲間に縋り、何かに求めるだけがあんたの語る英雄像か？　少なくとも俺はそんな英雄は一人として思い当たらないぞ」
　まるで人が変わった様に口調の変わる仮面の男に調と切歌は何だか既視感を感じた。何処かで聞いた事があるような、そんなデジャヴに浸っている二人を他所に仮面の男はウェル博士に一歩ずつ詰め寄っていく。
「まぁ、尤もアンタの英雄の道は始まる前に終わってるんだけどな」
「な、何っ!?　それは、どういういみだ？」
「月の落下、確かそれがアンタ達の行動の目的だったな。月の落下から地球人類を救う。それが〝フィーネ〟の理念、けれど残念だったな。月の軌道修正はとっくに――――――」
　その時、仮面の男の背後のコンテナから携帯電話特有の着信音が鳴り響いた。この場においてあまりにも似つかわしくないその音は一瞬だけとは言え、場の空気を一変させる程の破壊力を持ち合わせていた。
　振り返ると、其処には自分の店の常連客でもある小日向未来が固まった表情で立ち尽くしている。次いでウェルの方へ視線を向けると獲物を見付けた肉食獣の如く、最高に歪んだ笑みを浮かべている。
　仮面の男――――蒼のカリスマが駆け出すのと、ウェル博士がソロモンの珠を用いてノイズを呼び出したのは殆ど同時だった。しかし、ウェル博士がノイズを召喚し、未来に向けて襲わせる様に仕向ける頃には蒼のカリスマは未来を守るようにノイズの前に立ち塞がっていた。
「前蹴りッ！」

攻撃態勢となり、矢となって襲い来るノイズの群れを地盤ごと蹴りあげた蒼のカリスマの一撃が衝突する。地面の雪崩に呑み込まれたノイズ等はそのまま炭化と化し、風に乗って消えていく。
「未来ちゃん、大丈――――」
後ろに控える未来の安否を気遣う蒼のカリスマは無事である筈の彼女に視線を向けようとその一瞬隙を見せる。ノイズの背後から彼の様子を窺っていたある者はその隙を見逃さなかった。
未来は無事だった。怪我一つなく、ノイズに触れた様子の無い彼女に蒼のカリスマは心の底から安堵する。……それが、致命的な隙であった事も知らずに。
未来が何かに驚いている。自分ではなく、自分の背後を見て驚愕に表情を染め上げる未来に蒼のカリスマはまさかと振り返る。
そこにいたのは邪悪な笑みを浮かべている調だった。見たこと無い表情を浮かべて刃を降り下ろしてくる彼女に蒼のカリスマはその刹那、全てを理解する。
（そうか、そういう復活の仕方か！　クソッタレめ！）
瞬間、大きな鋸に切り裂かれた蒼のカリスマは胴体から大量の血を吹き出して地に落ちた。
「い、いや……イヤァァァァァッ!!」
凄惨な光景を前に小日向未来の叫びが倉庫街に響き渡る。しかし、そんな彼女の叫びは誰かに届く事なく、虚しく空へ溶けていった。

その22

β月（・┼・）日

あーあ、俺ってばいっつもどこかで何かしらのヘマしてるよなぁ。幾ら一対多数の状況だからって、もう少し周囲に気を配るべきだったか。

幸い未来ちゃんは傷一つ無いし、何回か話している内にある程度元気を取り戻している。やはり顔見知りの相手との会話は心の負担というものが幾分か軽減される様だ。

その代償に自分の素性も知られてしまったけど……そこはまぁ仕方がない。自分の身位自分でどうにでもなるし、いざとなったらまた日本から出ていけば良い。フラワーの女将さんや商店街の皆には不義理を働く事になるけれど、自分がいる所為で皆に迷惑が及ぶ方が不義理と言える。そうなった時はほとぼりが冷めた頃合いを見計らって謝りに戻るのも選択の一つだ。

尤も、未来ちゃんもクリスちゃんと同様に言いふらす様な子じゃないからそんなに心配は無いけどね。

しかし、問題なのは今自分達が置かれている状況だ。連中――――いや、ウェルの奴は自分が傷を負って動けない事を良いことに自分の首に爆弾を巻き付けやがった。一見すればお洒落なアクセサリーに見えなくもないが、此方が不審な動きを見せれば即座にボカンとさせる気満々みたいだし、お陰でマトモに動けやしない。

オマケに仮面まで奪われてしまう始末。一応まだ自分に利用価値を見出だしている内はいきなり殺されたりはしないだろうが、それでも油断ならない状況なのは変わらない。

しかし、何も悪いことばかりではない。仮面を奪われた事により素顔を晒してしまった自分の事を知って貰った切歌ちゃんはあれから自分の所によく顔を出しに来ている。

何でも自分の居場所が無くなった事に酷い喪失感を感じているらしい。自分の見張りをと言って連中の所から抜け出して来るみたい

だが、実際は部屋の隅に座り込み一日中其処で蹲っているだけだ。
――――無理もない。無二の親友である調ちゃんがクソッタレなフィーネに肉体を乗っ取られているのだ。親友が本来マリア某に発現すると思われたフィーネの覚醒によって人格ごと塗り潰されたと知れたら、その気持ちの辛さは計り知れないものがある。
最初は碌に会話も出来なかった自分達だが、自分の根気強い（しつこいとは言わないで）説得と、自分のフィーネの魂を調ちゃんから消滅させる方法と作戦を話す内に彼女は自分にも心を開くようになってくれていった。
まず、何故塗り潰された筈の調ちゃんの人格……いや、魂が残っていると思うのか、それは切歌ちゃんから聞かされる話にあった。何でも切歌ちゃんは調ちゃんがフィーネに乗っ取られたと知った最初の内は縋る様に何度も話し掛けていたらしく、それに対し調ちゃん――――いや、フィーネはそれを酷く嫌がったらしい。
恐らく、まだ調ちゃんの魂をまだ完全に塗り潰せてはいないのだろう。自分という障害を消すのにあの時の奴にとってあの瞬間は絶好の好機の様だったからな。目覚める期間や準備と言うのが足りなかったのだろう。
そして、本来なら充分な根を植えて覚醒する筈のフィーネの魂が、中途半端な覚醒によって十全な力を発揮できず、調ちゃんの魂を完全に上書き出来ず、その為彼女の親友である切歌ちゃんの呼び掛けに調ちゃんの魂が引っ張られてしまう。だからフィーネは切歌ちゃんとのやり取りを拒んでいるのかもしれない。
勿論、理由はそれだけではない。どうやら切歌ちゃんはフィーネの力の一部を行使出来るらしいのだ。シンフォギアを纏わずバリアを展開出来る所から見ると、多分それもフィーネが調ちゃんを完全に乗っ取れなかった要因になっているのだろう。
シンパシー、或いは波長とも言える二人の間にある何か、それがフィーネの力を分散させて弱らせているのであれば、フィーネの魂を調ちゃんから切り離す事も可能かもしれない。
推論と推察、そして切歌ちゃんの持つシンフォギアの特徴と本当の

使い方を教えていく内に切歌ちゃんはみるみる内にその表情を明るくさせていた。
勿論、これは分の悪い賭け、そもそも話した作戦の内容は妄想にも似た机上の空論だ。しかし切歌ちゃんはそんな自分の話を最後まで聞き入れ、最後にはなるようになるデス！と開き直っていた。
開き直っちゃダメだろと思うが、現状それしか思い付かないのもまた事実。切歌ちゃんは調ちゃんを守りフィーネに完全に乗っ取られない様に気を付けるように言い付けてしかるべき時が来るまで待つように促した。
これで、一つの憂いは消えた。後は自分の事のみだ。幸いにも自分の怪我はナスターシャ教授とマリア某さんの手解きによって最低限の治療は受けている。怪我自体もあの時咄嗟に後ろに下がった事によって直撃であっても致命傷は避けられていた為、全力で動けるようになるまでもうそこまで時間は掛からないだろう。実際、日記を書ける位には回復してるしね。
となると、やはり目下問題となるのは首に付けられた首輪と自分と一緒に捕まった未来ちゃんの安否だけ。
自分の首輪はどうにかなるが、問題は未来ちゃんだ。昨日から別区画の場所に連れていかれてしまい未来ちゃんの居場所が分からなくなってしまった。
切歌ちゃんに訊ねても分からないらしい。どうやらこの大型ヘリ、自分が思っている以上に入り組んでいるようだ。

下手に今動いても此方が不利になるだけ、よしんば首輪が自力でどうにかなっても、その後に未来ちゃんを人質に取られてしまったら意味がない。
やはり、もうしばらく様子を見るべきか。自分の不甲斐なさに情けなくなるが、これ以上事態の悪化は避ける為、今は大人しくする事にした。

β月Ω日

ウェルの野郎、マジで許さねぇ。よりにもよって未来ちゃんをシンフォギア装者に無理矢理仕立てあげるとか、頭がイカれているとしか思えない所業だ。

確かにリディアン音楽院に集められた生徒はシンフォギアに適する可能性が高いとされてきている。そういう意味では未来ちゃんも響ちゃんや翼ちゃん達と同様にシンフォギアに適する確率は高いのだろう。

しかし、だからといって強制的にシンフォギアを纏うのと自らの意思で纏うのとではその意味は大きく変わってくる。ウェルの野郎はそこら辺自信があるようだが、未来ちゃんはなんの訓練も受けていない普通の女の子だ。いずれはシンフォギアの負荷に耐えられなくなり、最悪の場合彼女の肉体は限界を超え、ノイズと同様に自壊……死に至る事になる。

つまり、あのくそ野郎は未来ちゃんを急造品に仕立て上げやがったのだ。代替品ともいう。どちらにしても胸くそ悪くなる話には違いない。未来ちゃんに何を吹き込んで彼女を言い様に操っているのかは知らないが、本当に良い度胸している。

まぁ、そんなウェルの悪知恵も響ちゃんのお陰で破られる事になる。神獣鏡（シェンショウジン）と呼ばれる聖遺物は魔を祓う特性を有しており、それによりシンフォギアの能力を著しく低下させ、海中に沈んでいたフロンティアなる古代遺跡を甦らせてしまったが、フロンティアを浮上させる直前、集束されていた神獣鏡の光に飛び込み、以前遭遇した忍者の人によって救助されていた。

遠くから眺めていただけで状況は詳しく分からなかったけど、どうやら響ちゃんも何やら事情を抱えているようで、未来ちゃんと戦っている最中ずっと苦しい表情をしていた。極限に高まった神獣鏡の光に自分から呑み込まれていった時は流石に焦ったけど、忍者の人に海面から助け出された時は二人とも特に怪我はなく、未来ちゃんに至っては正気を取り戻した様にも見えた。

恐らくは神獣鏡の凶祓いの力が幸となったのだろう。鏡とは本来在りのままの形を映し出すモノとされ、古の時代では祀りの重要な配

置にあったとされている。きっと響ちゃんがあの時光に自ら飛び込んだのは未来ちゃんの中にある悪いモノを取り除いてやりたいという一心から生まれた行動なのだろう。
響ちゃんもシンフォギアこそ纏えていなかったが、忍者の人に抱えられていた際の表情は穏やかだった。きっと、何かが上手くいったのだろう。
さて、これで憂いは取り除かれた。後は自分の目的を果たすのみである。切歌ちゃんも先程ヘリから飛び降りてウェルとフィーネの魔の手から逃れたみたいだし、これで思う存分動くことが出来る。
尤も、本格的に動くのはまだ先の話だ。ウェルのクソ野郎が最高潮に調子に乗った所から一気に地獄へ叩き込んでやる。
その為に一芝居打つ事になるが……まぁ、あの人ならば適任だろう。二課の司令官であるあの人ならば。
待っていろジョン・ウェイン・ウェルキンゲトリクス、お前のにやけたその顔に渾身の正拳突きをプレゼントしてやる。

◇

「全くこういう無茶は俺の役割だというのに」
「帰ったら、キツく叱ってやらなくちゃいけませんね」
「あぁ、特大のをくれてやる！」
F．I．S．、今はフィーネと名乗る組織の手によって復活を果たした古代遺跡フロンティア。超常なるその力でアメリカの艦隊を全て破壊し尽くした先史文明の遺産は高度を徐々に高く昇り積めていき、今も上昇を続けている。
そんな中、二課の司令官である弦十郎と緒川は先の騒ぎで投降してきた切歌と共に先走り、フロンティアへと先んじてしまっていた響の

後を追っていた。
今の響はシンフォギアを纏えないただの小娘、故に敵に接触する前に早めに連れ戻す必要があるのだが、恐らくは間に合わないだろう。
彼女は困っている誰かを見捨てる事のできない人間だ。それが譬え自分と敵対している者であろうと揺らぐことはない。本来なら甘ったれた理想だと断じる話だが、弦十郎はそうは思わない。
助けられるものがいるならば、全力で助けに行きたい。響の掲げる人助けは弦十郎にとっても理想だったからだ。だからこそ弦十郎は口では怒っているフリをしているが、内心では嬉しさに満ち溢れていた。
自分の弟子が、誰かの為に頑張ってくれる。そう思うだけで弦十郎の口端は自然と緩んでしまっている。
しかし、そんな彼の表情も次の瞬間には強張ったモノになる。
「――――緒川」
「了解です」
恐らくは隣で運転する部下も気付いているのだろう。目の前の丘から感じられる凄まじい迄の闘気、それに当てられ大粒の汗を額から流しながらも緒川は車を停止させた。
現れたのは――――蒼、フルフェイスの仮面を被った魔人が弦十郎の前に立ちはだかった。
「まさか、お前の方から出てくるとはな。探す手間が省けた」
「たまには運動しませんと体が鈍ってしまいますからね。定期的に動かさないとどうも落ち着かない性分でして」
「フッ、いいだろう。どちらにしてもお前を倒さなければ進めないのなら、相手をしてやるまでだ。緒川！」
「はい！　先行して響さんの後を追い、ウェル博士の身柄を拘束します！」
司令の指示に部下である緒川は再び車に乗り込み、下された命令に従うために動き出す。横を通っていく緒川に目もくれず静かに弦十郎を見下ろす蒼のカリスマ、互いに隙を見せられない状況の中、ただ無音だけが二人を包み込んでいく。

静まり返る空間、それに反して二人の集中力は極限に高まり――――――刹那。

二人の姿は唐突にかき消え、衝撃によりフロンティアの大地は穿たれた。

その23

「あの、本当に良かったの？　私まで一緒に来ちゃって……」
「今更それを言うデスか？　人助けをしたいって付いてきたのはそっちなのに」
　封印されていたフロンティアの復活、可動した古代遺跡は先史文明の技術の目覚めと共に浮上し、空に向けて今も上昇を続けている。重力の制御という破格の力を有するこの遺跡は近付くモノを許さない鉄壁の要塞と化していた。
　そんな中、先の戦闘で自ら投降してきた暁切歌と共にフロンティアへと潜入した立花響は力のない場違いな自分に一抹の不安を抱いていた。
　今の自分には以前の様なシンフォギアの力を有してはいない。先の戦闘で操られた未来を救うために祓いの力を持つ神獣鏡の光に親友と共に飛び込み、未来を洗脳状態から救いだし、その時に己の身を蝕んでいたガングニールの欠片も綺麗に消滅していった。
　ガングニールの消滅。自分の相棒であり、これまで共に苦難を乗り越えてきた響にとってその事実は些か寂しいモノがあった。しかし、自分の命を蝕んでいた諸刃の剣でもあった欠片が綺麗に無くなった事で消費される筈だった自分の命は救われた。それ自体は決して悪いことでは無かったし、同じガングニールのシンフォギア装者である天羽奏に至っては号泣する勢いだった程だ。
　シンフォギアと融合した事で絶大な力を手にしてしまい、更にはその為に死にかけた響。ガングニールの欠片から解放された事で同時に戦いの宿命からも解き放たれた彼女はもう戦場に立つ必要も意味も無くなっていた。
　ならば立花響は止まるのか？　否、そうじゃない。そもそも立花響にとってシンフォギアを纏うことは戦う事への決意ではない。〝人助け〟それこそが立花響という人間の行動理由であり、自分の内側から湧き出る本物の衝動。故に、師であり二課の司令官である弦十郎の

制止を振り切って戦場に降り立つ立花響は正しくお人好しの塊であった。
自分の出来ること、やりたいことの為に行動する。しかし、今の状況は少々困難を極めている。それ故に先程までイケイケだった響は途端に表情を曇らせ、目の前に立ちはだかる少女に目を向ける。
「……調ちゃん」
「ほう？　まさか立花響も一緒とはな。折角ガングニールの呪縛から解放されたというのにワザワザ戦場に立つとはな。これもお前の大好きな人助けとやらの衝動の所為か？　随分とまぁ、難儀な悪癖だな」
あの大人しそうな少女からは想像出来ない邪悪な笑みが浮かび上がり、響の身を震え上がらせる。その口調と彼女の纏う雰囲気は嘗て信頼し、そして敵対したあの女性そのもの。
間違えるはずがない。目の前にいる少女は調という少女に取り憑いた先史文明の怨霊。
「了子さん……！」
櫻井了子……いや、先史文明の巫女であるフィーネは怯えた表情を浮かべる響に更に歪んだ笑みを浮かべた。しかし、そんな彼女を前に暁切歌が鎌を突き付け立ち塞がる。
「き、切歌ちゃん？」
「早く行くデス」
「え？」
「今、あなたがやるべき事はここでみっともなく震える事デスか？　違うでしょう。あなたは一緒に来る前に言いました。人助けがしたいと、だったらここで立ち止まってる暇はない筈デス」
だから早く行け。今助けを求めているのは自分ではない。そう語る切歌の瞳に後押しされた響は力強く頷くと同時に駆け出し、フィーネ（調）の後ろにある遺跡に向かって全速力で走る。
そんな響に目もくれず、調に取り憑くフィーネはほくそ笑む。お前に親友が斬れるのかと、暗にそう語るフィーネに切歌は凶暴な笑みを浮かべる。

「私の大好きな調に取り憑いて、挙げ句の果てに好き勝手振る舞って……覚悟するデスよオバサン！」
「生意気な小娘だ。良いだろう。ならば友である我が宿主の刃に葬られて散るがいい。小娘」
「やれるものならやってみるデス！　人に寄生する事しか能がないオバサンはとっとと退場するデス！」
二度もオバサン呼ばわりされた事によりフィーネの額に青筋が浮かび上がる。事実だけに言い返せないフィーネは振る舞いこそは落ち着いているものの、心の内は般若の如く激怒していた。
これで最初の揺さぶりは完了した。後は〝彼〟が教えてくれた方法でフィーネから調を解放するだけ。ここからが大事だと、切歌は頬から伝わる汗を拭いながら手にした鎌に力を込めて親友の刃を受け止めた。

◇

大地が砕かれ、大気が弾ける。先史文明の人類が造り上げたフロンティアという巨大浮遊島、その端にあたる外縁部。そこでは二人の人間の激闘による余波で永年形を保ち続けてきた外縁部は崩壊の危機に瀕していた。
焔の様な髪を揺らしながら拳を奮うのは元シンフォギア装者である立花響の師匠にして特異災害対策機動部二課の長である風鳴弦十郎。対して彼の拳を捌きながら返しの蹴りを放つのは正体、目的、共に不明とされている仮面の男、蒼のカリスマ。
特殊な歩法で身体の動きを加速させ、目にも映らぬ速度で戦う二人。拳がぶつかり合い、蹴りが打ち合う度にフロンティアの大地は抉

られていく。
「チィッ！」
「ヅアッ！」
一進一退の攻防、互いに全力を出しているのにも関わらず、戦局は拮抗し動かない。純粋な肉弾戦に於いて二人の実力は全くの互角だった。
その広がらない差を広げるべく、蒼のカリスマは攻撃の手を弛めない。同様に弦十郎も引いてなるものかと進撃を止めない。
互角だから、拮抗しているからこそ弛める事を許さない状況。今ここで下手に小手先を弄すればそれは相手の付け入る隙となり、これまで無かった差が一気に広がる事となる。それが分かっているからこそ、二人の攻撃の手は止むことは無かった。
「いい加減、落ちなさい！」
「それは、こっちの台詞だ！」
流星の如く奮われる蒼のカリスマの拳。鋭く、速く、そして重いその一撃は受けるだけでも弦十郎の表情を曇らせる威力を秘めていた。骨身に染みる蒼のカリスマの一撃、しかしそれを完全に受けきった弦十郎は背負い投げの要領で地面に叩き付ける。
「ガハッ」
自ら放った拳、そこに乗せた勢いごとそのまま地面に叩き付けられた蒼のカリスマから苦悶の声が漏れる。その隙を逃がさんと追撃を目論む弦十郎だが、その瞬間彼の腹部から全身に鈍い衝撃が伝わってきた。
「ヌグッ」
見れば、蒼のカリスマが放った蹴りが深々と弦十郎の腹部に突き刺さっていた。なんて足癖の悪い奴、悪態を付きながら反撃能力の高い蒼のカリスマを讃美しながら、弦十郎は受けた衝撃を殺すためにワザと後ろに吹き飛んで見せた。
ダメージは最小限に抑えた。しかし全くの無傷ではない。口元から流れる血を乱暴に拭いながら弦十郎は眼前にいる仮面の男を睨む――――が。

（なに？）
いない。そこにいる筈の仮面の男、蒼のカリスマが姿を消している。嫌な予感がすると直感に従い、頭上を見上げる彼の視界に映したのは、空高く跳躍する仮面の男の姿があった。
「沈みなさい。胴回し――――踵落とし」
ギュルンと、冗談みたいに凄まじい回転音と共に繰り出される踵落とし。その速さに回避不能と判断した弦十郎は両腕を交叉させ、防御の姿勢に入る。
瞬間、隕石が激突したと思えるほどの衝撃がフロンティアを襲った。フロンティア全体に及んだその衝撃は戦いの最中であろうシンフォギア装者達の足場を激しく揺らし、フロンティア中枢に潜んでいるウェル博士は起こる筈のない衝撃に断末魔に似た悲鳴を上げていた。
陥没し、隆起したフロンティアの大地。着弾地点の中心地点であるそこは正に隕石が落ちた疵の如く、巨大なクレーターを造り出していた。唯の人間が生身で引き出したとは到底思えない破壊力、しかしそんな威力を有した恐るべき一撃であっても、二課の司令官であり立花響の師でもある大人の膝を折るには至らなかった。
（……マジでか、頑丈過ぎないかこの人）
自信あっただけに大して効いていない様子の弦十郎に仮面の奥で引き吊った笑みが溢れる。まさかここまでとは、予想を大きく上回る弦十郎の実力に蒼のカリスマ――――白河修司――――は戦慄を覚えた。
「ヌゥ……ラァァァァッ!!」
驚愕し、僅かに動揺した蒼のカリスマの隙を弦十郎は見逃さなかった。足を掴み、空高く投げ放つと同時に弦十郎も後を追うように跳躍する。
空中ならば逃げ場はない。これで終いだとお返しとばかりに拳を放つ……が、弦十郎の拳が蒼のカリスマを捉える事はなかった。
〝空中三角飛び〟　自身の筋力のみで無理矢理空中での三次元機動を可能にした物理法則を度外視した動き、虚を突かれた弦十郎を次

に襲い掛かったのは、右頬から貫かれる重く鋭い衝撃だった。
「がっ!?」
「ぐっ!?」
死角からの蒼のカリスマの一撃は正しく弦十郎を捉えた。一度きりの奇襲の成功、しかし蒼のカリスマの一撃に僅かに反応した弦十郎のひじ打ちが、蒼のカリスマの左頬を捉えていた。
相打ちの形となった二人、クロスカウンターの要領で互いを打ち抜いた一撃は一瞬だけ意識を失う。しかし、それも地表に向かう自由落下の内に回復し、意識を喪失していた事などお構い無しに再び激しく打ち合う。
地表に激突する直前に弾かれた二人、互いにボロボロの状態で向かい合う彼等が心中で抱くのは自分とここまで渡り合う相手への心からの称賛だった。
「驚きましたよ。まさかいち組織の長がこれ程の実力を持っていたとは、流石に驚きです。私も護身術程度とは言え多少武術に携わっていましたが……やれやれ、これでは自信なくしますね」
「どの口がいう。それ程の力を持っていながら護身術程度だと？　相手を騙すならもう少しまともな嘘を吐くんだな」
「騙し討ちで貴方を討ち取れるなら、私は最初から貴方の前に立っていません。こう見えて人を見る目はあるつもりですから」
「そうか？　だったら何故、お前は彼等の……いや、ウェル博士の味方をする。お前の眼が本当に見る目があるのなら、そもそもこんな事にはならなかったんじゃないのか？」
弦十郎からの手厳しい指摘に蒼のカリスマは参ったなと頭を掻く。彼のいう〝こんな事〟は恐らく今自分達が立つ現在の状況そのものの事を差しているのだろう。
やはり、彼の直感は馬鹿に出来ない。でもだからこそ仕込みは完了したと蒼のカリスマは仮面の奥でほくそ笑む。
「さて、貴方との問答は中々有意義でしたが……そろそろ幕引きとしましょう。この後にも私には色々やるべき事が多くありましてね」

天地上下の構え。ここへ来て初めて見せる蒼のカリスマの構えに弦十郎もそれに対するように身構える。
「風鳴弦十郎、貴方は強い。故にここで終わらせましょう。私の持つ全力の一撃で以て」
「ならば此方も真打ちをくれてやる」
空気が死ぬ。風も掻き消え、不気味な静けさだけが二人の空間を支配する。極限に高まる集中力、音も、色も無くなった世界で二人の呼吸が一瞬重なった時。
「――――両手（もろて）・猛羅総拳突き」
繰り出されたのは、拳の嵐。その一つ一つに必殺の威力を乗せた死の嵐を前に弦十郎は全身に力を込めて一直線に突き進んだ。
肉が削がれ、骨が砕かれる。肉体がバラバラになる痛みに耐えながらも弦十郎は足に力を込めて進み続ける。これで決める両腕にありったけの力を込めながら突き進み、遂に弦十郎は拳を潜り抜けた。
しかし、其処に待っていたのは絶望だった。拳の嵐という死から逃れられた弦十郎が待っていたのは全方位に及んだ貫手の檻。
「人越拳奥義――――千手、観音貫手」
無数の貫手が弦十郎目掛けて放たれる。先程の拳の嵐はブラフ、この貫手の檻こそが蒼のカリスマが仕掛けた最後の一撃。
迫り来る絶望を乗り切った先に待つ更なる絶望、希望なんて見えやしない、そんな危機的状況で弦十郎は笑みを浮かべていた。何を企んでいると、蒼のカリスマが疑問に思った瞬間。
「オラァァァァッ!!」
渾身の力を込めて降り下ろされた弦十郎の左腕が足元の地面を穿ち、その衝撃でフロンティアの大地が爆発する。爆発で無数の貫手は消え去り、残されたのは蒼のカリスマ本人ただ一人。
「そこだァッ!!」
「シャオォッ!!」
振り向き様に放たれる弦十郎の右拳、互いに必殺となった一撃は止まることなく相手の急所へと向けられ――――。
互いの首下へと放たれるのだった。

その２４

フロンティア内陸部。二人の超人が外縁部で死闘を繰り広げられていた最中、遺跡付近の内陸部の荒野では二人の少女が互いに刃をぶつけ合わせていた。

彼女達が奮う鎌と鋸、どちらも命を切り裂く凶悪な凶器であるそれは躊躇なく目の前の相手へと降り下ろされる。ぶつかり合う剣戟、その度に散る火花は二人の神経が削られる様を表している様。

……いや、実際に神経を磨り減らしていたのは鎌を操る切歌の方だった。殺す気で手にした鎌を奮いながら相手に悟られぬよう急所を外すという離れ業、それを打ち合う度に繰り返しているのだから切歌の戦いへの集中力は既に切れつつあった。

それに対し、全力で此方を殺しに来ている少女は切歌と違い情けも容赦なくその刃を奮ってくる。その顔に凶悪な笑みを張り付けて……自分の知る調とは似ても似つかないその姿に切歌の内に煮え滾った激情が沸き上がる。

親友が、命を賭けて護ると決めた親友が邪なる者に取り憑かれている。その顔で、そんな風に嗤うな。目の前の少女に憑いた怨霊が嘲笑を浮かべる度に切歌の思考は焼けた鉄の様に熱くなっていく。

けれど、それでも切歌は内なる激情を理性で押さえ付けた。ここで感情に流されれば全ては無駄になる。思い出せ、己が響達に下る前に彼と交わした言葉を、その意味を。

『良いかい。今の調ちゃんはフィー……いや、先史文明のＢＢＡによってその意識を乗っ取られた状態にある。そう、意識だけだ。今調ちゃんはあのＢＢＡに魂が強制的に休眠されている状態だ。徐々に消えつつもあるが、完全に消えた訳じゃない。前に切歌ちゃんが声を掛けた時酷く拒絶したって言ったろ？　あれは調ちゃんの魂が目覚めようとするのをＢＢＡが嫌がったからだ』

『だとすれば話は簡単だ。君が調ちゃんに呼び掛けて彼女の魂を目覚

めさせればいい。成功する可能性は高くはないが、賭けるだけの価値はあると思う』
『けれど注意してくれ。恐らくあのＢＢＡはきっと調ちゃんの意識を乗っ取ろうと再び出てくる筈、そうなった時重要になるのは……君のタイミング次第だ』
簡単に言ってくれる。目の前の怨霊からの攻撃を防ぎながら切歌は彼に対して少しだけ毒づく。だが、今頼れるのは彼の大雑把な推察に頼るしかない。
「調、聞こえてるデスか！　聞こえてたら返事してください！」
「無駄だ！　既に宿主の魂は私の魂によって塗り潰されている。如何に貴様が呼び掛けようと、もはや応える事はない！」
「っ!?」
「貴様の企みに気付かないとでも思ったか！　おおかた奴に唆されて悪知恵を働かせていたようだが、所詮は小娘の浅知恵、その程度の先読みが出来ぬと侮った事が貴様達の敗北だ」
調はもういない。そう告げてくる目の前の怨霊の一言に切歌の足元はぐらついた。嘘だ。そんな筈はないと動揺する彼女の隙を怨霊（フィーネ）は容赦なく喰らい付いた。
弾き飛ばされる切歌、大地に叩き付けられ、一瞬身動きが取れなくなった彼女に調だった者が踏みつける。これで最後だと、振り上げる回転刃を前に切歌は……してやったりと笑みを浮かべた。
「？」
何がおかしい？　絶望の真実を耳にして気が触れたか？　怪しむ怨霊が眉を寄せた時、切歌の肩の装甲部分がパージされ、拘束具となって怨霊を調ごと動きを封じた。
「拘束だと？　今更こんなものがなんの役に……」
そこまで言いながら怨霊は口をつぐんだ。切歌が手にしているシリンダーを見て、彼女が次に何をしようとしているのか理解したからだ。
絶唱。シンフォギア装者が持つ最大にして最後の一撃、彼女の持つ聖遺物（イガリマ）は魂を切り裂く死神の鎌。成る程、確かにそれならば自分の魂

を二度と転生出来ないよう屠る事も出来る。
「ほう？　ここへ来て絶唱とはな？　確かに魂すらも切り裂くイガリマの刃なら私を切り裂く事も出来よう。だがいいのか？　それはお前の大好きなあの小娘の魂も消すという事だぞ？　出来るのか、お前に？」
挑発的な笑みを浮かべる怨霊、自分を消せば調も死ぬ。ここへ来て試される切歌の覚悟。しかしそんな葛藤する様子を見せないまま、切歌は怨霊の所へ歩み寄る。
そして怨霊は気付く。あれ？　Ｌｉｎｋｅｒってあんな赤かったっけ？　劇物にも似た鮮明な赤い何かが入ったシリンダー、キュポンと音を立てて蓋を開いてそれを振り上げた切歌は……。
「調……ごめんなさいデス！」
フィーネ（調）の口の中へ叩き込んだ。勢い良く捻り込まれたシリンダーの中身はそのまま彼女の口の中へ入り、舌――――味覚を蹂躙する。
――――瞬間。
「「かっらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?!?!?!?」」
文字通り火を吹きながら悶えるフィーネを見て、切歌は額に大粒の汗を流しながら、引きつった笑みを浮かべていた。
『え？　もし調ちゃんが完全にＢＢＡの魂に塗り潰されていたらどうするって？　う～ん、確かにそれだと手遅れみたいに聞こえるけど、多分大丈夫だと思うよ？　魂を塗り潰すという事は塗り潰すだけの労力があるという事、仮に奴がそう言ったとしても……いや、そう口にするという事自体が君の希望を消すのに必死になっているという事に他ならない』
『さっきもいったけど、諦めるにはまだ早いと思うよ。今調ちゃんは必死に耐えているんだ。だったら親友である君が諦める訳にはいかない、そうだろ？』
『でも困ったな。もしそうなってたら調ちゃんを奴の魂から引き剥がすだけの衝撃が必要になる。それが一番問題なんだけど……うん？　それについては心配いらない？　なんだか妙に自信ありげだ

けど、本当に大丈夫なの？』
（まさか、ここまで効果覿面だったとは、流石マムを昏倒させた劇物ＥＸ、その破壊力は凄まじいＤＥＡＴＨ）
火を吹きながら悶絶する親友に切歌はドン引く。彼女が今親友に流し込んだのは嘗て自分達がマムに美味しいものを食べてもらいたいと恵んでもらった劇物中の超劇物である修司特性激辛麻婆豆腐、そのルーだった。
結局食べ切れなかったそれを最初は捨てようとしたが、食べ物を粗末にするなとオカン気質全開なマリアに止められ他の食糧同様大切に保管されていたものである。
数日経過した今でも変わらない辛さを持つ麻婆、物理的に火を吐かせるこの劇物は料理というより一種の兵器に近かった。塗り潰された魂を甦らせる程の辛さを秘めた麻婆、正直これを平気で造り上げる彼の神経を疑った。
けど、その頭のおかしい人のお陰で今千載一遇のチャンスが来たのだ。切歌はもう一つのシリンダーを医療用注射器にセットし、自らの首にＬｉｎｋｅｒを撃ち込み、今度こそ絶唱を歌い上げる。
そして、その頃になって漸く正気を取り戻したフィーネ、まさか一度塗り潰した魂が復活する事に驚愕を覚える彼女が必死にもう一度調の魂を塗り潰そうとして……目の前の巨大な大鎌を振り上げる切歌に愕然とした。
「二つ、お前に伝言デス」
『お前の敗因はフラれた事をいつまでも根に持ち、前を向くことも過去を振り返る事もしなかった事だ』
『自分の事ばかりで他人を利用し続けて来たお前を、好ましく思う奴がこの世界のどこにいる。自分の行いを省みながらとっとと消えちまえ』
『このクソＢＢＡ!!』デス！」
「あ、が、ああァァァァッ!!!　オノレェェェ!!　しらかわ、シュウゥゥゥジィィィィッ!!」
怨叉の声をブチ撒きながら、フィーネの魂はイガリマの鎌に刈り取

られ、この世を去った。ガクリと項垂れる調を抱き抱えながら彼女の名を呼び続ける切歌、やがて目を覚ました調に泣きながら抱擁する。
「……ねぇ、切ちゃん。なんだか口の中が酷く痛いんだけど？」
「気のせいデス！」
「それに唇もなんだかヒリヒリするし……」
「気のせいデス！　全てはあのオバハンが調の魂を乗っ取った副作用デス！」
「……なんか、切ちゃん隠してない？」
「で～す！」
自分の追究を必死に誤魔化す切歌、後で徹底的に問い詰めてやろうと固く誓った調が取り合えずここから離れようと立ち上がったその時。
フロンティアの遺跡中枢から眩い光が迸った瞬間、暴食の巨人が遺跡の天蓋を突き破り、全てを破壊してやると蹂躙を開始した。

◇

「もう、いい」
眼前に佇むシンフォギア装者たちを前にして英雄になることを望んだ男は口にする。もうイヤだ。拒絶の言葉を口にする彼の胸中に渦巻くのは世界に対する憤りと達観、そして諦めだった。
自分が英雄になれない世界などいらない。そう決意して彼が行ったのは完全聖遺物、ネフィリムとの融合だった。
自らをネフィリムの餌として取り込まれた男、ウェル博士は最早月の落下などに興味はなかった。しかし、彼は決意してしまった。英雄になれない世界など必要ないと。
自棄を起こした彼が起こしたのはフロンティアの更なる浮上、その

為に必要なエネルギーを用いて彼は衛生軌道上よりも更に向こう側にある月にまで手を伸ばし、月も鷲掴みにしそれを支えにフロンティアを急浮上させた。
　物理法則に従い浮上するフロンティア、それに合わせて月もこれまでにない位の速度で落下を開始する。
　早く止めないと、動こうとする翼達だがそれをさせまいとウェル博士はネフィリムと共にフロンティアを吸収し、巨大化していく。
　軈て遺跡を突き破って出てきたソレは足下に蔓延るシンフォギア装者達を前に高らかに笑い挙げた。
『アッハハハハ！　小さい、小さい小さい小さい小さい！　そんなモノで僕に逆らおうってのか！　そんな矮小なＦＧで僕に抗おうってのか！　身の程知らずにも程があるよ！』
「クソッ、あの野郎自分がでかくなったからってすっかりその気になってやがる！」
「しかし、決戦を挑もうにもまだ響達が……」
「翼さん、奏さん！」
「みなさん、お待たせしました」
「立花、それに緒川さんまで」
　崩れ行く遺跡の中から飛び出すように現れたのは新たにガングニールのシンフォギアを纏った響、彼女の腕の中には全裸となったマリアが抱き抱えられており、緒川の方にはマリア達の司令塔であるナスターシャ教授が抱えられていた。
「どうやら、役者は揃ったみてぇだな」
「しかし、それでも相手は未だ強大、イケるか、我々だけで」
　自分達の目の前にいるのは完全聖遺物と融合し、巨大化したウェル博士のみ、しかしネフィリムという暴食の巨人と融合してしまった彼は最早世界の全てを喰らい尽くすまで止まることはない。
　そして今も巨人は本能のままにフロンティアを喰らい続け、その体を膨張し続けている。果たしてあの怪物に自分達が敵うのか。
「なに、心配はいらんさ」
「なにも貴女達全員に押し付けるつもりはありません。安心しろ、な

んて言いませんが、そう固くなる必要もありません」
聞き慣れた声、まさかと思い振り返る彼女達が目にしたのは……。
「「私(俺)が来た」」
ボロボロになりながらも微塵も揺るがない闘志を秘めた大人と魔人がそこにいた。

その２５

「師匠!?」
「何故旦那がここに、それに……そいつは」
　背後から現れた二人の登場に装者達からは驚きの声が上がる。風鳴弦十郎は二課の司令官でありシンフォギア装者達の上司でもある人間だ。彼自身の戦闘能力はずば抜けてはいるが、それでも余程の理由がなければ表立って戦場で戦うことは原則として禁じられている立場の筈。
　その彼が何故ズタボロの格好で戦場に立っているのか、装者達の視線が自然と彼の隣に佇む仮面の男に向けられる。
「隠す必要がないから一応紹介しておく、こいつは蒼のカリスマ。先程まで理由あって俺と戦っていた輩だ」
　自分がここにいる理由と隣にいる仮面の男の紹介により緒川やナスターシャ教授は勿論、装者達も驚愕の表情を浮かべる。唯一クリスだけは乾いた笑みを浮かべているのが気になるが、今はそれどころではないと弦十郎は続きを蒼のカリスマに促した。
「自己紹介をいただきました蒼のカリスマです。本当なら貴女達とは然るべき場所でキチンと対応しなければならないのですが……現状況は芳しくありません。故に無駄な話は全て省き、必要な事だけを分かりやすくお伝えします」
　自分達が前にしているのは山の様に巨大な暴食の巨人、未だにふくれ続けるアレは際限なく周囲のあらゆる物質を喰らい続け、今も巨人化の一途を辿っている。もしアレが欲望のままに喰らい続け、いつか臨界を超えてしまったら……そうなった時の被害は計り知れない。
　だから蒼のカリスマは口にする。今自分達に出来ることを、今自分達がすべき事を、簡単に、丁寧に伝えた。
「エクスドライブモード?」
「ええ、櫻井了子が提唱する櫻井理論の一説に机上空論としてその様な項目があったことを以前日本政府のデータベースにハッキングを

した事で知った事があります」
（サラリとハッキングとか言ったぞコイツ）
説明の合間に爆弾発言を繰り出す蒼のカリスマ、雪音クリスを始め何人かの装者達は色々やらかし過ぎている蒼のカリスマに言葉を失う。されど、自分達のトップである弦十郎が目を伏し、黙して聞き入っている為、誰も彼の説明に余計な口出しをすることはなかった。
ＸＤ（エクスドライブ）モード。それはシンフォギアの元となる聖遺物に限界を超えるフォニックゲインが集束された末に起こる形態。
されどその形態に至るまでに蓄えるべきフォニックゲイン（ＦＧ）は膨大で、とても個人の唄で賄える代物ではない。仮に絶唱でブーストを計った所でそれはただのシンフォギアの強化程度にしか成り得ないだろう。
決して成される事はない奇跡の形。それが櫻井理論が示した机上の空論であるＸＤモードの正体である。
「しかし、今この場の状況に於いて、それは不可能ではありません」
「え？　でも一人の力では出来ないって……」
「そうですね。響さんの言うことも尤もだ。けれど逆説的にこう考えればいい。一人の力で至れないのなら、多くの人々の力を借りて至ってしまえば言い」
「――――成る程、レイラインですか」
緒川に抱えられているナスターシャ教授、どこか納得した様子で頷く彼女に蒼のカリスマはＥｘａｃｔｌｙ（その通り）と答えて見せた。
レイラインは地球全体に通る血管の様なもの。蒼のカリスマが地球上のエネルギーの通り道だというソレを利用し、世界中からＦＧを集めようというのだ。
元々フロンティアはレイラインに沿った場所で眠っていた遺跡だ。譬え海上から出ても高度が違うだけで理論上では届かないという事はない。寧ろ、集めようという意志が高い地点にある事でレイラインを通して出てくるＦＧはより勢いを増し、一転集中の形で集まってくるだろう。
元は微量なエネルギーしか通せないとされるレイライン、それが世

界中の人々から集めようというのだからその総量は計り知れない。
　そんなエネルギーに耐えるためには受け止めて束ねるだけの器が必要になってくる。今、この場に置いてその役割に最も適しているのが……。
「君だよ、立花響さん」
「わ、私ですか?!」
「貴方のアームドギア……いえ、シンフォギアの最大の能力は〝想いを束ねる〟事にある。ＦＧも根っこの部分でいえば人の想いから来るもの、それを受け止めて一つになるよう束ねることが出来るのは、今この場に置いて君以外ありえない」
「けど、それじゃあ響だけ負担が大きすぎる事になっちまうだろ！響一人だけで世界中の人達のＦＧを受け止めるなんて耐えられる訳が――――」
「心配するのは無理ないですが、結論を速めてはいけませんよ天羽奏さん。私は別に響さんだけに押し付ける訳ではありません。さて、ここで問題です。何故立花響にだけ皆さんの様なアームドギアという武装が無いのでしょう?」
　そこまで言われた彼女達に響の力の本質に気付かない事はなかった。立花響には風鳴翼の様な全てを断ち切る刃もなければ天羽奏と同じ万物を穿つ激槍もない。彼女のその手に握るのはいつだって誰かの手を握り締める世界で一番優しい拳だけだ。
　蒼のカリスマの言わんとした事を理解した奏は照れ臭そうに笑みを浮かべながら響の手を取った。
　奏から翼、翼からクリス、後から合流してきた調と切歌も簡単な事情説明を受けてから互いに頷き合い、響達と手を取り合った。
「さて、これで下準備は完了。後は最重要ポジションであるＦＧを集め、喚起させる歌い手だけですが……マリアさん、お願い出来ますか?」
「――――ここまでお膳立てをされて今更後には引けないでしょ?良いわ。私の全てを懸けて世界最高の舞台にしてあげる」
「……良い顔です。先日まで泣きべそかいてた女の子とは思えま

せんね」
「ほ、ほっときなさい！」
蒼のカリスマの茶々にマリアは顔を真っ赤にさせて反論する。泣きべそという言葉に不思議がる響は奏と顔を見合わせて首を傾げており、クリス達は苦笑いを浮かべている。
これまでの自分の行いがどういうモノだったか、思い出したマリアは顔を朱に染めて俯いてしまっているが、次の瞬間には吹っ切れたのか、壊れたシンフォギアの首飾りらしきものを握り締め、〝セレナ〟と口にすると、普段着を身に纏う世界最高の歌姫、マリア＝カデンツァヴナ＝イヴがそこにいた。
これで此方の準備は完了した。後は彼女の唄を世界に届ける為の設備だが――――。
「カメラの準備、完了しました！」
「今回の主役はマリア＝カデンツァヴナ＝イヴだ。しくじるなよ緒川！」
「ツヴァイウィングではなくマリアさんをプロモーション。何だか変な感じですが、やってやれない事はないですよ！」
「私もフロンティアとＦＧの観測を行い順次サポートさせて頂きます。私も見てみたいですからね。星が音楽となる瞬間を」
『バックアップは任せてください！』
『お役所仕事、見せてやりますよ！』
どうやら、あちらはあちらで準備は万端の様だ。不敵な笑みを浮かべる弦十郎に対し、蒼のカリスマも仮面の下で笑みを溢す。
舞台は整った。音響も、演出の為のライトアップも、全て完了した。あとは奇跡が起こす為のライヴの幕上げを告げるだけ。
しかし、そんな舞台を前に異常事態（アクシデント）発生。ライヴを前に待ちきれなくなったマナーの悪い乗客が早く始めろと騒ぎ始めた。
『僕、ハァァ、ボクはぁぁぁっ、英雄に、なるんだぁぁぁっ！』
最早理性すら喰い尽くされた英雄志願の男は膨れ上がる暴食の巨人の一部に成り果てている。理性もなくし、フロンティアをまるごと喰らい尽くそうとする巨人は暴食というより悪食のソレである。

「さて、それでは私達はライヴが始まるまでの間」
「奴を足止めするか」
『ボクはぁぁぁ、英雄ダァァァァッ!!』
巨人から吐き出される炎の塊、膨大な熱量と質量を持つ超常の災害を前に……。
「人越拳、受けの奥義。――――万物流転」
仮面を被る蒼のカリスマは真っ正面から受け止め――――
「返すぞ」
その勢いのまま、巨人へと投げ返した。
こうして世界最高のライヴが始まるまでの五分間、二人の人間と一体の巨人との決戦が幕を上げた。

その26

フロンティア。先史文明の時代により建造された大遺跡、英雄となることを夢見た野心家の策謀によって復活を遂げたかの理想郷は暴食の巨人に貪られながらも未だ上昇を続けている。

それに相対し徐々に高度を落としていくのは地球の衛星である月。フロンティアの涌き出るＦＧ（フォニックゲイン）によって足場となった衛星は物理法則に従い地球に近付いていく。

月による激突、それは地球人類と文明の死滅を意味している。最早各国の領域侵犯云々の話ではない。人類存亡の危機が現在進行形で進んでいた。

そんな状況を打破すべく、手を取り合って立ち上がる歌姫達、元激槍ガングニールの装者であるマリア＝カデンツァヴナ＝イヴを中心に世界中の人々からＦＧをかき集めて喚起させるという一大作戦が行われようとしている。

だが、それを阻もうと暴食の巨人は雄叫びを上げる。英雄に成れないことに絶望し、自ら人類を滅ぼす魔王となることを決意した彼の者は取り込まれた巨人に理性すらも捕食され、今や破壊の巨人と化している。

既に世界を救う為のライヴは始まった。しかし時間が足りない。彼女達が世界中の人々からＦＧを集める間は彼女達は無防備に等しい。今彼の巨人の腕の一振りでも受ければ壊滅は必至、全滅は免れないだろう。

そんな彼女達を守る為に二人の男が巨人の前に降り立つ。片方は蒼い仮面を被る男、もう一人はシンフォギア装者達の上司である紅い男。

蒼のカリスマと風鳴弦十郎、共に傷付いた体でありながらソレでも微塵も臆す事なく、巨人の侵攻を防ぐように立ち塞がっていた。

「しかし、意外でしたね」

「何がだ」

「先程の戦闘の事ですよ。確かに私は自分の首元に攻撃が通るようある程度の流れを用意しましたが、まさかあそこまで見事に乗ってくるとは思わなくて……罠だとは思わなかったのですか？」
　思い返すのはここに来るまでに行われた蒼のカリスマと弦十郎の死闘、互いに互いを滅ぼすつもりで行われたあの激闘の流れを自ら用意した作為的行動である事を蒼のカリスマは語る。
　戦いの最中、命のやり取りをしながらでも〝流れ〟というものを作り出している蒼のカリスマには驚嘆を越して異常と呼べるだろう。しかし弦十郎は何だそんなことかと溜め息を溢す。
「別に、そんな大層な理由はないさ。お前の拳からは殺意は感じなかった。だから違和感を感じ、お前の誘いに乗った。――それだけの話だ」
「……割と本気で殺す気だったのですが？」
「殺意と殺気というのは似てるようで異なるものだ。殺気は殺す気迫ではあるが、殺意は明確な意志のもとで相手を殺すモノ、言葉遊びとも言える話だがあの時のお前からはそんな意志は感じられなかった。お前、実はウェル博士に無理矢理従っていた口だろう？」
「……さぁ、どうでしょう？　理由があれば私は彼等と組んでいた可能性もありますが？」
「お前が誰かの言いなりにワザワザ成り下がるタマか。それに仮にそうだとしても逆を言えばそうなるだけの理由があった。例えば、知り合いの女の子を人質に取られ、仕方なくあの首輪を嵌める事になった――とかな」
「――――」
「お前、実は結構分かりやすいタイプだな？　お前の事を少し分かっただけでもお前の誘いに乗った価値はあった」
　勝ち誇った様にドヤ顔をする弦十郎、自分の推理が的中したと分かった彼は子供のように無邪気に笑って見せる。そんな彼に対し、蒼のカリスマは仮面越しでも分かるくらい呆れた溜め息を溢した。
「――――お喋りはここまでです。来ますよ」
「お前から振ってきた話だろうに」

言われて弦十郎の顔が真剣な顔立へと変わる。既に眼前の巨人は自分達に狙いを定めている。山の様に巨大な怪物がたった二人の人間を相手に敵として認識している。それは本能的にシンフォギア装者を纏う彼女達よりも危険だというネフィリムの本能だった。

嗤う。怪物に見下ろされていながらも二人の人間は嗤う。来ないのか？と、口元を歪め、嘲笑の声音を漏らす二人に巨人は雄叫びを上げながらその巨腕を振り下ろす。

回避は出来ない。出来る筈がない。今自分達の後ろには無防備な少女達がいる。今ここで避けてしまえば巨人の攻撃による衝撃が響達に襲い掛かる。彼女達を守る為に立ち上がった二人には巨人と対峙した時点で回避と言う選択は存在しなかった。

ならば、自分達に出来るのは一つだけ、二人の男はそれぞれに握り締めた拳を掲げ――――。

「ぜぇらぁぁぁぁっ!!」

「だらぁぁぁぁぁっ!!」

渾身に込めた一撃を迫る巨腕に向けて打ち放った。衝撃でフロンティアの大地は揺れる。衝撃が爆発し、嵐の様な暴風が吹き荒れる。

しかし、巨人の攻撃はマリア達に届くことはなかった。唄を歌う彼女を中心に手を取り合う響達には埃一つ届かない。巨腕の下にいる二人の男、彼等の眼が妖しく輝きを放つのを見て理性なき巨人は見るからに動揺し、一歩後ずさった。

「オオオオオオッ!!」

「はぁぁぁぁぁっ!!」

瞬間、僅かに巨腕に込められる力が緩む。その隙を突いて呼吸の合った二人の蹴りが巨人の腕を蹴り上げる。押し返されるネフィリム、仰け反った巨人が次に目にしたのは、自分の前に足を振り上げた二人の姿だった。

回転し、勢いを乗せた二人の蹴りが巨人の眉間に突き刺さる。その攻撃はネフィリムの体の内部まで浸透し、取り込まれたウェルにまで伝達される。貫かれる衝撃、尋常ならざるその一撃に巨人もウェルも声にならない叫びを上げる。

地面に叩き付けられた衝撃でフロンティアが揺れる。舞い上がる砂塵の中から出てきた二人、一度様子見の為に離れた蒼のカリスマと弦十郎はネフィリムの次の行動に合わせる為、砂塵の中に隠れる彼等を睨み付ける。

軈て砂塵が晴れ、二人の前に現れたのはフロンティアの大地を埋め尽くす程の巨人の群れだった。ネフィリムの大きさ程ではないが、壁の様に聳え立つ巨人の軍勢を前に流石の二人も言葉を失う。

『これは……ネフィリムの模倣体!? そんな、自身の分身をこんな短時間で生み出すなんてっ!?

『ネフィリムの模倣体をネフィリム・レプリカと呼称します! それよりも何て数だ! 千……二千、まだ増えます!』

「成る程、単体で敵わないと見て数でゴリ押ししてきましたか」

「ネフィリムの力、だけではないな。恐らくはウェル博士によって備わった新たな機能という事か。理性を無くしてもその知識は失われることはない……か」

最早フロンティアと完全に同化したと思われるネフィリムはフロンティアの大地を使って己の分身を無数に生み出していく。

「全く、こんな応用を思い付く位ならもう少し世の中の為に使えばいいものを」

「だが、向こうが本気になった以上こちらも手を抜く訳にも行くまい」

「なら、そろそろこっちも……」

「本気になるとするか」

シンメトリーに構える二人、気を高め、気力を、気血を練り上げていく二人の体からそれぞれに白い炎が立ち上っていく。幻覚か？遠巻きから二人の戦いを眺めているナスターシャ教授が目をパチクリさせた瞬間――――。

『ネフィリム・レプリカの反応、五千を超えました!』

「たかだか五千!!」

大地を蹴り、二人は巨人の群れに対して正面から突っ込んだ。数の暴力による蹂躙、通常なら撤退を余儀なくされるこの状況をしかし二人は真っ向から受けてたった。

無数の巨人から連なるネフィリム・レプリカの軍勢、それは暴力という津波であり、天災その物と化している。けれどその天災の蹂躙に二人の人間は抗い続けた。
無数に奮われる巨人の豪腕。それを捌き、受け流し、返していく蒼のカリスマに対して全て己の力で打ち砕いていく弦十郎。二人の体から燃える白い炎はやがてそれぞれ紅と蒼に変換されていく。
巨人の津波を紅い稲妻と蒼い閃光が駆け巡る。巨人の頭部を、胴体を、脚を、時には巨人の体もろとも粉砕していく。
「――両手・網羅総拳突き」
「ヌオォォォッ!!」
蒼のカリスマがその拳で巨人の軍勢を割り、弦十郎の蹴りが巨人の津波を引き裂いていく。数の暴力を個の理不尽で蹂躙していく様にナスターシャ教授は言葉を失っていた。
軈て巨人の数は激減し、五千を超える巨人の軍勢（ヘカトンケイル）は五十にも満たなくなっている。他者を圧倒する巨人達が唯の土塊へと返っていく。その中心で佇むのは二人の怪物。
「次の相手は――」
「どいつだ？」
不敵に嗤う二人、彼等を見て巨人は思う。何なのだと、この理不尽は何なのかと理性なき巨人は愕然する。これでは一体どちらが化け物だというのか。
と、そんな時だ。二人の背後から巨大な光の柱が立ち上ぼり、純白のシンフォギアを纏う歌姫達が降臨した。漸く自分達の出番は終わりだと察した二人はそれぞれ体を休めるように――――巨人の目の前で――――ストレッチを始める。
「どうやら、俺達の出番は終わった様だ。後はあいつらに任せるとしよう」
「では私もこれで、落下する月の軌道修正も行わなければなりませんので」
「まぁ、今回ばかりは仕方がない、か。今日の所は見逃すが、次に会ったときは……」

「あぁ、そう言うのはいいんで早く部下の皆さんの所に行ってあげて下さい。ここ、間もなく崩れると思いますので巻き込まれない内に離脱した方がいいですよ」
「ムゥ……」
　此方の話を一方的に切っていく蒼のカリスマに思う所はあるが実際に時間がないのも事実、ネフィリムの暴走と二人の人間が暴れまわった事による衝撃でフロンティアは既に崩落のカウントダウンに入っていた。
　納得がいかないという様子でその場から去る弦十郎、彼を一瞥した後に蒼のカリスマ――――いや、白河修司はウェル博士《ネフィリム》へと向き直り……。
「それではさようならウェル博士、貴方の空回りっぷりは見ていて笑えましたよ」
「あ、アァァァァ……」
「別れついでに教えてあげます。貴方が発見したとされる月の落下軌道予測、実はあれ既に私が直しておいたんですよ」
「っ!?」
「月の落下を阻止して英雄になる？　残念ながら、貴方の目的は始まる前に既に終わっていた。貴方がしてきた事はなんの意味もない茶番でしかなかったのですよ。まぁ、先史文明の亡霊《フィーネ》を滅ぼす機会に巡まれたという意味では決起した甲斐はありましたけどね」
「アァァァ……アァァァァァァァァァァッ!!」
「それでは今度こそサヨウナラ。英雄、なれると良いですね」
『■■■■■■■■■■■■ッ!!!』
　蒼のカリスマの最後の言葉に遂に最後の人間性まで失ったウェルは断末魔に似た叫びを上げる。そんな彼を背後に蒼の魔人は巨人に向かって飛び立つ歌姫達を見ながら悠々とその場から歩き去っていくのだった。

その２７

フロンティア事変。そう呼ばれる全世界を震撼させた騒動から数日後、事後処理やら何やらで世界は未だ慌ただしくはあるものの、世間は――――特にこの街は少しずつ元の穏やかさに戻りつつあった。

何かを失った訳でもなく、誰かを亡くした訳でもない。立ちはだかる障害を然るべき組織が然るべき方法で解決させた……前代未聞でありながら、しかし特別起伏のない有りがちなハッピーエンド。

いや全く、終わりよければ全てよしとは良く言ったものである。

「良くないわよハッピーじゃないわよ何を勝手に爽やかに話を終わらせようとしてるのよ貴方は！」

「マリア某さん、余り大声を出すのは感心しませんよ？　確かに昼時が過ぎて客足が途絶えて来たからといっても、全く居ないわけではないのです。申し訳ありませんが自重してください」

「あ、はい。ごめんなさい……じゃなくて！　どうして貴方がここで！　呑気に！　皿洗いなんかしてるのよ!?」

「ん？　何かおかしな所がありますか？　私はこの喫茶店の店長、自分の商売道具を洗っているだけですが？」

「～～～～っ!!」

本気で意味がわかっていない。首を傾げて惚けた顔をする目の前の男に世紀の歌姫マリア・カデンツァヴナ・イヴは言いし難い苛立ちに頭がおかしくなりそうになっていた。

数日前、確かに自分達は世界の窮地を救っただろう。一時は迷走し、暴走し、危うく道を外れる所だった自分を助けてくれた周りの皆にも本当に感謝している。

世界中の人々から託されたＦＧを使って生み出されたＸＤモード

とフロンティアを吸収し、巨大な熱量の塊と化したネフィリムの撃破とノイズを呼び出すソロモンの珠の完全消滅。
　これらの偉業を成し遂げられたのは自分だけの力ではない。支えてくれた人達と敵対していた筈の彼女達の助力のお陰で成り立った紙一重で起きた奇跡、そのお陰で自分は今もこうして平穏無事に過ごしていた……筈だった。
　目の前にいる人の皮を被った魔人と出会うまでは……。
「私は、蒼のカリスマである貴方が、どうしてこんな喫茶店で経営しているのかを聞いているの!!　」
　今日、自分は非番の筈だった。二課に身を寄せて歌手としての活動を続けて、その最中に生まれた久し振りの休日、マム達と買い物する為の待ち合わせ場所に選んだ此所でまさかかの魔人と鉢合わせになると思わなかったマリアは出会い頭にそれはそれは間抜けな声を上げてしまったものである。
　そのお陰でその時まであったウキウキ気分は消し飛び、あるのは拭い切れない困惑と敵愾心だけだった。それも惚けた反応をし続ける目の前の自称店主の所為で萎えつつあるが……。
「マリアー、その人にその手の話を振っても無駄ですよー?」
「そしてなんで貴女もここで働いているの切歌！　なんで馴染んでるの、どうして疑問に思わないの!?」
「マリア、私もいる」
「あぁ、ごめんなさいね調。貴方のことを無視した訳じゃないの、そのウェイトレスの服とっても似合ってて可愛いわってそうじゃなーい！」
「ダメですよマリア、淑女たるもの常に余裕を持って優雅に振る舞わなければ……あ、マスター。コーヒーのお代わりをお願いしてもいいですか?」
「畏まりました」
　慣れた手付きでカップにコーヒーを淹れる店長、その姿は確かに自他共に認めるごく普通の喫茶店の店長だ。
　ただ、その店長が問題だった。フロンティア事変の際に起きた月の

落下、それをただ一人……いや、1機で食い止めて押し返してみせた魔神の主なのだから。
世間をこれでもかと騒がせている蒼のカリスマ、それが目の前にいる。ともすればマリアの過剰なまでの反応は当然とも言えた。
なのに、何故誰もその事で騒いだりしない？　此所にいる皆は目の前の魔人の正体を知る者達ばかり、なのに誰もその事を追求する事はなく、質問は愚か調と切歌に至っては雪音クリスと共にウェイトレスの格好をして働いているではないか、隣にいるマムも特に気にした様子でいるわけでもない。
え？　これ自分がおかしいの？　自分が間違ってるの？　誰も何も言い出さないこの状況にマリアは混乱していると、見かねたナスターシャが何かに気付き、そう言えばと話を切り出した。
「そう言えばマリア、国連に拘束されていた間、何か妙な事がありませんでしたか？」
「妙な事？」
唐突に促される国連に拘束されていた頃の話、当時首謀者の一人として調と切歌と共に捕まっていた時の事だ。
正直、余り思い出したくはない。特に国連の……アメリカの犬となって自分達に貢献しろと脅してきた政府の役人と話をした時なんかは怒りで頭がどうにかなりそうだった。
自分達の秘密を隠すため、自分達のしてきた事に目を向かわせない為に奴等は調や切歌、挙げ句に恩人である響まで巻き込もうとしてきたのだ。その見返りに待っているのは偽りの自由、メディアを操り情報を操り、全ての事実を覆い隠す。当時従う他選択肢が無かったマリアは無念に思いながら政府の役人の話に乗った。……乗るしかなかった。
そこからトントン拍子で進む自分達の釈放、日本への移籍、歌手への復帰、その全てが終わる頃には既にその事はマリアの記憶の片隅へと追いやられていた。
――――待て、ふとマリアは思った。今まで忙しくて気づかなかったが、何故自分には未だアメリカ政府からの連絡が来ないのだ？　い

や、そもそも何故自分達はああもすんなり日本に移住することが決まったのだ？
シンフォギアというのはノイズに対抗できる唯一の術として各国家が喉から手が出る程欲する技術の筈、幾らノイズをバビロニアの宝物庫から呼び寄せるソロモンの珠が消滅したといっても、シンフォギアは人の常識を越えた力を持たせる超常の力、欲しがらない国などないのに……。
そこまで考え、マリアの思考は停止する。まさかと思い顔を上げた彼女の視線の先に立つのは自らをただの店長と名乗る白河修司の肩を竦めた姿だった。
まさか、まさかまさかまさかまさか……この男がそうだというのか？　アメリカと秘密裏に接触し、此方が自由の身となるように取り計らったと、そう言うのか？
なら、自分が自由でいられるのも、未だに歌手として活動出来ているのも……全て、この人のお陰？
何故、どうして？　理解できない男の行動にマリアの口からは自然と言葉が漏れる。
「……どうして？」
「さて、私には分かり得ぬ事ですから訊ねられても困るのですがね」
やはり男は自分の質問に答える気は無いようだ。どれだけ此方が訊ねてもあれでは暖簾に腕押しの如く受け流されて終いだろう。
というか、彼は怖くないのだろうか。ここにいる者は皆彼の正体を知る者ばかり、誰かに密告され、自身に危険が及ぶことを考えたりしないのだろうか？
それとも、自分達が密告した所で然して問題はないと思っているのか……確かに彼にはそれだけの力がある。だが、それは些か慢心がすぎるのではないだろうか？
――――いや、違う。そんな大層な話ではない。彼が自分やマム、己の正体を知る者に口封じを施さないのは慢心から来るものではない。単に……そう、信じているだけなのだ。
でなければ、彼が自分達を助ける理由はない。いや、実際はあるの

かもしれない。アメリカに貸しを作るとか、自分には計れない策謀が彼の胸中に渦巻いているのかもしれない。
　では何故自分は目の前の魔人に対してそう思うのか、根拠は……これもまた至極単純で。
「こちら、エスプレッソとイチゴのケーキになります」
　彼の、お客にコーヒーを出す姿がとても真摯的に見えたから。
「さて、と。そろそろ時間だな。調ちゃん、切歌ちゃん、こっちはもういいからそろそろ上がりなよ、ナスターシャさんと買い物しに行くんでしょ？」
「ホントデス！　クリス先輩、お先に失礼するデス！　調、早く行くデスよ！」
「待ってよキリちゃん」
「二人とも、店の中で走るなよー。ったく、しょうがねぇなぁ」
　着替える為店の奥へと消えていく二人を眺めて微笑む男を見てマリアは思う。この人はもしかしたら自分が思ってる以上に優しい人間なのではないかと。
　だから訊ねた。――――貴方は何のために戦うのかと。否定されてもいい、答えてもらえなくてもいいと、矛盾を抱えながらもマリアは目の前の男に問うた。
　隣に座るマムも黙っている。気が付けば店の中が静寂に包まれている。雪音クリスも外へゴミ出しに出ている事から今この場にいるのは自分達だけだ。
　ゴクリと、自身の生唾を呑み込む音が耳に響く。緊張するマリアが目の前の男の――――修司の返事を待っていると。
「……ククク」
「っ!?」
　魔人が顔を覗かせた。
「何のために……ですか。では逆にお訊ねしましょう。貴女は何か理由がなければ戦えないのですか？　他者の為？　平和の為？　成る程それは大義名分としては申し分がないでしょう。何かの為に戦える人間というのは必然的にそれに見合った重荷を背負う事となる。

それは時に枷となり、時に絶大な強さとなる。成る程、何かの為に戦うというのはきっと素敵な事なのでしょうね」
　しかし、そう続ける男には先程の様な穏やかさはなく、苛烈なまでの殺気が滲み出ていた。対峙するだけで気圧される圧倒的な威圧感、それはこれまで幾度となく戦場に立ち続けてきたマリアでさえ体験したことのない異質なモノだった。
「マリアさん、貴女は……いや、貴女達は正しい。誰かの為に動き、何かの為に努力し、目的の為に研鑽を続ける貴女達の姿は私から見ても非常に好ましく見える。眩しいと、そう感じる程に……」
「貴方は……違うのですか？」
「――――世の中にはね、いるのですよ。己の為だけに行動し、他者を省みず、ただ本能のままに生きる獣の様な人間が。その者達に理屈はなく、矜持もなく、自己満足の為だけに生き続けるという勝手気ままな人間が。そういう意味では私も連中と然程変わらないことでしょう」
　魔人は語る。誰かの為に戦える者もいれば自分の為だけに、それだけでしか戦えない人間がいるという事を。尊い者のために涙を流すものがいれば、己の為だけに他者を利用する者も存在するということを。
　マリアも心当たりがある。英雄志望の狂気の科学者、そして自分の恋の為に無関係の人間すら巻き込んだフィーネ、どちらも自分の目的の為に行動し、そして世界を混乱に陥れた。
　無論、マリア自身も……故にマリアは反論できなかった。コーヒーカップを片手に此方を見据えてくる魔人の瞳をただ見つめ返す事しか出来ず。
「故に、貴女の質問にはこう答えましょう。私は己の心が命じるままに戦うだけだと」
　不敵に笑い、自分の為に戦うと言い切る魔人を前にマリアは何も言い返せず、ただ聞き入ることしか出来なかった。

◇

「よぅし、これで明日の仕込みは完了っと。いやはや、数日店を空けていたから客足が途絶えちゃうのかと危惧していたけれど、杞憂に終わって良かったよ。商店街の皆さんには頭上がらないなぁ」

夜も更け、人気も無くなってきた時間帯、明日の仕込みを終えて帰宅の準備をしていた自分はふと今日お昼に話したマリアさんとの会話を思い出した。

何かの為、マリアさんは自分にそう質問してきたけど、ぶっちゃけそんな大した理由なんて無いんだよね。自分がそうしたいからする。ただそれだけの為に行動しただけなのだから質問された所で祿に返答出来る訳がない。

でも、真面目なマリアさんの事だ。きっと納得しないだろうと思い色々言い回しをした為半分誤魔化す形になってしまった。

まぁ、言いたいことは話したから良いんだけどね。マリアさんも納得したのかあれから特に質問してくる事もなかったし、自分も仕事に集中出来たのだから。

それにしても理由……かぁ、これまで必死に生きてきたばかりであまり意識してなかったけど、自分って何かの為に戦った事って今までであっただろうか？

唯一心当たりがあるとすれば、自分が多元世界にいた頃……シオニーさんをリモネシアに送り届けるためガイオウの野郎とガチンコ勝負をした時、位か？

分からん。そもそも人って何故イチイチ理由を求めるのだろうか？　別にいいじゃんと開き直るつもりはないが、誰かを巻き込んだり、不快にさせず、自分だけの課題として動くのであれば特に非難さ

れる謂れもないと思うんだヨネー。
まぁ、そうなった結果多元世界で知らない人はいない世紀のテロリストとして認識されてるんだけどね。なんとも自業自得な話である。
自業自得といえば、アメリカ政府の役人と話し合った時もそうだ。本当なら色々と裏で好き勝手してきた連中がいざその事を指摘されると慌てふためくのはどこの世界も一緒らしい。悪いことをしたと自覚があるならばそのまま大人しく裁決をまっていれば良いのに。
ま、そのお陰でマリアちゃん達は釈放され、日本側もアメリカからの追求を逃れた形になるので結果を見れば万々歳な結果に終わったと見える。事の発端であり元凶とされるウェル博士も死亡したとされているから、今のところ彼女達に不審の目が向けられる事は殆ど無い。
人工衛星という情報源を通して集まってくる情報、そのお陰で自分は大国と渡り合い日本側に貸しを作ることが出来ている。
この生活が長く続くとは思わない。けど、もう暫くはこの喫茶店で店長として過ごすのも悪くない。
「とと、さっさと片付けて帰ろっと。明日も早いし――って、誰だこんな時間に」
唐突に戸を叩く音が聞こえてくる。店の出入り口には閉店の看板が掛けてあるし、時間的にも客が来るとは考えにくい。
となれば恐らくはクリスちゃん辺りが忘れ物をしたのか？　仕方ないなぁと思いつつも俺は扉を開けた。
目にしたのは――――青、深い海の色を思わせる青と病的な迄に白い肌を晒す目の前の少女に僅かだが思考が停止する。
「今晩はアーンド初めまして、そしてさようなら。可愛いガリィちゃんが貴方の思い出を戴きに来ました♪」
「なに？」
瞬間、彼女の手から陣の様な模様が浮かび上がると膨大な水が突然押し寄せ……。
喫茶シラカワなる店を完全な迄に蹂躙するのだった。

ＶｉＶｉｄ　Ｓｔｒｉｋｅ！編
その１

――――新暦７５年９月１９日。
第一管理世界ミッドチルダ。魔法発祥の地であり、魔法文化が最も栄えているこの世界は現在、大きな災厄に呑み込まれようとしていた。
首都クラナガンの上空を行き、今尚上昇を続けている巨大飛行戦艦――――通称、〝聖王のゆりかご〟。旧暦の時代、古代ベルカの遺産にして超級の危険指定とされているロストロギア。一度は世界を滅ぼしたとされる火力を誇り、更にミッドチルダの衛星である二つの月から魔力供給を得れば時空間への攻撃すら可能となり、それは時空を守護する者達にとって最悪の事態を意味していた。
首謀者の企みを阻止する為、聖王のゆりかごに突入した一人の女性魔導師が広大な戦艦内部を飛翔する。その途中で立ちはだかる障害を蹴散らし、己の体に負担を掛けながら、それでも女性は最奥で待つ彼女の元へと急ぐ。
（ヴィヴィオっ！）
女性の脳裏を過るのは自分を母と呼ぶ幼い少女、利用する為に作られ、生み出された偽りの命。自分との関係も、所詮はその目的の為に彩られた、偽りのモノだったのかもしれない。
しかし、女性にとってそんな事はどうでも良かった。泣いている。あの娘が、自分を母と呼ぶあの娘が泣いているのだ。女性が己の体に鞭を打つ理由なんて、ソレだけで充分だった。
軈て女性はゆりかごの最奥――――玉座の間へと辿り着く。そこで彼女が目にしたのは……。
「おや？　随分外が騒がしいと思ったら、どうやら私以外にもここに来ていた方がいたみたいですね」

蒼の仮面を被り、白のロングコートで身を包んだ……これまでの情報には該当しない謎の人物が玉座の間の中央に陣取っていた。仮面の男の足下には壊れた眼鏡を掛けて目を回している戦闘機人が転がっており、男の腕の中には――。

「ヴィヴィオッ！」

自分を母と呼んで慕ってくれる愛娘が自分の知るままの姿で静かに眠っていた。見ればヴィヴィオと呼ばれる少女に外傷は見当たらず、まるで熟睡している様に見える。気持ち良さそうに寝息を立てているから心配は無さそうに見えるが、それでも警戒を緩める事は出来ない。何故なら目の前の仮面の男は、これまで自分が対峙してきた相手と全く異なる存在だからだ。

辺りを見渡せば、その事が良く分かる。窪んだ壁、亀裂が刻まれた天井と床、その破壊の痕を見れば、ここで熾烈を極める戦いが起きていた事など嫌でも理解できる。

そして、これだけの惨状を作り出して尚且つ平然としている輩が目の前にいる。状況的に考えて、目の前にいる仮面の男が最も厄介だと瞬時に理解した女性魔導師……高町なのはは、武装を解かず、警戒の様子で男に向き合った。

杖を構え、何者かと訊ねようとする――。

「もしかして……この子の知り合いの方ですか？　ならば今すぐこの子を連れて安全な所まで避難して下さい」

「――え？」

「最初顔を合わせた時は酷く暴れたりしましたので、やむ無く武力で対応しましたが、極力怪我を負わせない様に配慮したので目立った外傷はありません」

「え？　え？」

「彼女を洗脳していたとされる輩も無力化させて彼処で伸びています。その少女に施された特殊な施術も私なりに治療しましたが、如何せん私はこの世界に来て間もない。どうか専門の人に診て貰って下さい」

「ご、ご丁寧にありがとうございます」

囃し立て、捲し立てる様に言葉を紡ぎ、抱えていたヴィヴィオをなのはへと手渡す男。紳士的なその対応になのはは戸惑いながらも、男へ感謝の言葉を口にした。

――――イヤ違うそうじゃない。

目の前の男の予想外の対応に一瞬呆けてしまうが、相手が正体不明で、目的や動機などが一切分からない輩だというのは疑いの無い事実だ。その正体が明らかにされない以上、警戒を緩める訳にはいかない。

幸いな事に向こうには敵対する意思はなさそうに見える。仮面をしているからその表情は窺えないが、少なくとも今ここで暴れる素振りは微塵もない。どうにかして任意同行に同意して貰えないか、今一度なのはが口を開こうとした時……。

「なのはさん！」

「助けに来ました！」

壁を抉じ開け、玉座の間へと突入してきた一台のバイク、そこに跨がる二人の教え子の登場になのはは一瞬安堵した。通信からゆりかごの動力部の破壊が成功したという報告も部隊長である八神はやてから聞いたし、これで脱出の手立ては完了した。後はヴィヴィオと、そこに転がる戦闘機人を連れて離脱するだけである。

――――そこでなのはは、目の前にいた筈の仮面の男が既に姿を消した事に気付く。何処へ消えたのか、辺りを見渡しても仮面の男の姿は影も形もなく、教え子達に聞いても分からないと言われ、索敵魔法を飛ばしてもそれらしき情報は何一つ得られなかった。

一体、あの仮面の男は何者だったのだろうか。なのはの疑問は最後まで解かれる事はなく、彼女達はゆりかごから離脱、巨大飛行戦艦も後からやって来た時空管理局艦隊の一斉砲撃を受けて消滅。首謀者達とそれに与する者達、その全てが捕らえられ、ミッドチルダに平和が戻った。

こうして、後にＪＳ事件と称される大事件は幕を降ろすのだった。

――――しかし、一つだけ気掛かりな事がある。それは高町なのはが遭遇したとされる仮面の男。はたしてこの者の目的、正体は一体何

なのか、何故あの事件の起きた場所で誰にも悟られずにいられたのか。
その全容は未だ解けず、仮面の男の存在を知った一部の人間にとって、それは消えることの無い痼となって残るのだった……。
それから、幾つかの時が流れ――――。

◇

――――新暦８０年。ミッドチルダ首都クラナガン。
夜の帳が降り、暗闇がより濃くなっていく時間帯。建設現場の跡地にて大勢の男性達がバイクのエンジンを吹かして集まっていた。所謂族の集り、彼等のリーダーと思われる男性は手にした暴徒鎮圧用の銃を手にし、見せびらかしながら地面に正座させている下っ端達に訊ねた。
「……で？　お前らは二人がかりでありながらその女一人にこてんぱんにノされたと？」
「は、はい。……すみません」
「アホだなぁ。魔法適性の高い奴相手に正面から殴り付ける奴が何処にいる。折角世の中にはこういう便利なモノがあるのに、使わなければ勿体無いだろ？」
一人の女の子相手にボコボコにされ、チームに縋ってきた舎弟達。しかし男はそれを不快には思わなかった。自分達はそこそこ大きくなったチームだ。人も増え、その分出来る事が増えた。自分に従う子分が増えてきた事で男の顕示欲は満たされる。ならばその子分達の面倒を見る位悪くはない。寧ろこの件で自分の力を誇示出来れば、チームに於ける自分はより象徴と呼べる高みに昇る。
くつくつと笑みを浮かべ、余裕の笑みを浮かべて男は訊ねた。その女はいつ来るのかと、既に呼び出しは済ませた。向こうがどれだけ

腕っ節に自身があるかは知らないが所詮は生身の人間、身体の芯まで痺れさせれば後はどうとでもなる。
ザシャリッ。
誰かが砂利を踏み締める。自分達のモノではない音、音のした方へ視線を向けると、其処には自分達よりも二回り程小さい少女が、影から飛び出してきた。
迷いの無い動き、少女の鋭い眼光はケンカ慣れした悪ガキのモノ。間違いない、下っ端の話を聞いてコイツこそが自分達に牙を向ける女なのだと男は確信する。
同時に、バカだコイツと少女を見下す。これだけの人数相手にたった一人で立ち向かうなんて、正気の沙汰じゃない。だったら望み通り沈ませてやると笑みを浮かべた男は、手にした銃の引き金を引き絞り、対象者の動きを抑制させる銃弾を射出させた。
しかし、男が射った銃弾は少女に当たる事はなかった。外した？否、少女は迫り来る銃弾を眼で見切り、銃弾の射出角度を本能で予測し回避したのだ。男とは１０ｍも離れていない至近距離、まさか避けられるとは想像すらしていなかった男は先程の勝利を確信した笑みを崩れさせ、その顔面を驚きと恐怖で歪ませる。
飛び跳ねる少女、その手には魔力を込めた拳が握られており、男の顔面へと叩き込んだ。幾本もの歯が折れ、地に伏して意識を失った。小さいプライドに固執した者のそれらしい末路である。
「いい加減にしろお前ら！　お前らの余計なちょっかいのお陰で折角ありつけた飯の種がパァじゃ！　どうしてくれる！」
「そ、それはお前が殴ってきたから……」
「先に手を出してきたのはお前らじゃろうが！」
そこから先は乱闘だった。たった一人の素手の少女一人を相手に十数人の男がそれぞれ凶器を手にして殴り込む。端からみれば一方的な暴力、しかし少女は意外にもこれに抵抗してみせた。
一人、また一人と男を殴り飛ばす少女。しかし彼女もまた限界が近く、半数を叩きのめした頃には既に体力が無くなっていた。
「今だ！　囲んで上から押し潰せ！」

男達の一人が声を張り上げるのに合わせ、残りの面々が少女に覆い被さっていく。チームとしての対面もプライドもかなぐり捨てた戦法、しかしこの場合はイヤという程に効果覿面だった。
体力の限界を迎えた少女はこれに抗う力は無く、男達のプレスに呑まれ押し潰されてしまう。
(くそ、またか。またワシは奪われるままなのか。変わってない、ワシはあの頃から何一つ……変わっていない!)
少女の脳裏に浮かぶのは、これ迄幾度となく自身に見舞われた理不尽の数々。親に捨てられ、奪われ、踏みにじられてきた苦い記憶。唯一守りたいと願った幼馴染すら失い、少女は己の不運と力の無さに嘆き続けた。
(でも、それももう疲れた。ここで終わっても……いいのかもしれん)
泣き、喚き、嘆き続けてきたこれまでの自分。そんな自分にはもう疲れた。いっそ、ここで消えてしまいたい。……そんな考えが過った時。
「いやぁ、流石にこの状況は見過ごせないでしょー。一人の女の子相手にそこまでやるかね? 普通」
今、自分達のいる場所には似合わない間延びた声が少女の耳に入ってきた。身動きの取れない少女は振り返る事も出来ず、ただその声の主に耳を傾ける事しか出来なかった。
「あぁ? なんだテメェ! 一体何の用だ!?」
「いや、別に用があるって訳じゃ無いんだけど……ほら、その子女の子じゃん。それも随分と若い。君達の間に何が合ったのかは知らないけど、流石にこれは無いんじゃないの? 色々キツいよ、絵面的に」
間延びした男性の声、事情も知らず勝手な事ばかり口にする男性に苛立ちを募らせた男は、ズカズカと彼の元へ歩み寄り……。
「見せ物じゃねぇ! とっとと失せろ!」
手にした鉄パイプで男性の頭を強打した。鈍い打撃の音、血が飛び散り、地面を赤く染めていく。これで調子付いた口調も収まるだろ。暴力によって満たされた欲求に男が愉悦の笑みを浮かべると……。
「……はぁ、仕方ない。荒事は苦手だが、やるしかないか」

「あ？」
瞬間、男は宙を舞った。１０ｍ程の高さを舞い、錐揉み回転をしながら地に落ちる男。その顎は砕かれ、無惨に歪められている。
突然の出来事に言葉を失う男達、下敷きにされている少女も吹き飛んだ男の無惨な姿に言葉を失い、目を丸くさせていた。
ギギギと錆び付いたブリキ人形のように振り返る男達、其処には手をパキパキと鳴らせた男が凶悪な笑みを浮かべて佇んでいた。
「さて、警邏隊の人達が来るまであと数分弱。時間は然程ないが……なに、年上らしく全員まとめて相手をしてあげよう」
「さぁ、覚悟は良いかな十代諸君。お兄さんのお仕置きは……少しばかり痛いぞ（はーと）」
その後、警邏隊が騒ぎを聞き付けて駆け付ける頃には男性と少女の姿はなく、残されていたのは全裸で鉄骨に磔にされた男達が夜の工場跡地に吊るされていたという、色々酷い光景だけだった。

その2

『――――生意気なんだよお前！』
『親無しが逆らってんじゃねぇよ』
――それは、まだワシ等がまだ院で世話になっていた頃、親に捨てられたという理由で近所の悪ガキ共に絡まれ、謂われない悪意をぶつけられ、それに反発する様に喧嘩を続けていた毎日。
悔しかった。情けなかった。降り掛かる理不尽に抗えず、ただ踏みにじられるしか出来ない自分に、いつもワシの後で泣く親友を禄に守ってやれなかった自分に……。
そして――――。
『もう、私はフーちゃんが知ってる私じゃない。邪魔しないで』
変わってしまった親友を、止めてやれなかった自分の無力に……腹が立って仕方がない。
そんな自分を変えたい。変わりたい。けれど、どんなに強く願っても、何もない私にはそんな機会すらない。
でも、それでもと思ってしまう。大切なモノを取り零さないように、少しでも守れる様にと……。
手を伸ばして、願わずにはいられない。それがこのワシ、フーカ＝レヴェントンの心からの――――。

◇

「……知らない天井じゃ」
フーカ＝レヴェントンの目に最初に映ったのは、見知らぬ天井だった。木材で出来ており、何処かお洒落な雰囲気の空間、これまで自分が使っていた寝室とは全く違う風景にフーカは戸惑いながら起き上

がる。
　モダンな空気、広すぎず狭すぎず、人が居心地良くなるのに最適とも言える間取り。天井同様、やはり木材で作られたその部屋は、やはりフーカの記憶には無いモノだった。
「ここは……一体、確かワシは……」
　昨夜の出来事を思い出そうと頭を唸らせるフーカだが、扉の向こうから漂ってくる鼻孔を擽る匂いにその思考は中断される。良い匂いだ。暖かく、優しい匂い、その甘美な匂いに刺激され、フーカの腹部から小さな音が漏れる。
　男勝りな性格の彼女でも流石に腹の音が鳴った事に恥ずかしさを覚えたのか、その頬を僅かに紅潮させて腹部を両手で押さえ付ける。けれど、どんなに力強く抑えても彼女の腹の虫は収まる事はなく、寧ろ抑え込むにつれて腹の音は強く響いてしまう。
「うぅ……ここ暫く食べてなかった弊害がまさかここで現れるとは」
　だが、何時までもここにいるわけにもいかない。自分がここで寝ていたという事は、自分をこの部屋に連れて来て誰かが寝かせてくれたのだろう。頬や手足の汚れは落ちているが、服を脱がされた形跡はない。恐らくは人の良い御仁が自分を助けてくれたのだろう。
　その御仁に礼を言って、汚してしまったベッドの弁償を約束してからここを後にするべきだ。そう考えて決意したフーカは扉を開いて廊下に出る。
　やはりというべきか、通路もやはり木材で作られており、自分のいた部屋は二階に位置していたらしい。というか、部屋にあった窓を見て確認すれば良いのに何故そうしなかったのか、自分が思っていた以上に焦っていたことに気付いたフーカは深呼吸して、改めて突き当たりにある階段を伝って一階へ降りていく。
　一階に降りた彼女が目にしたのは幾つもの四角いテーブルと椅子、そしてカウンターテーブル、その空間の空気と充満する匂いにフーカはここが喫茶店の類いなのだと思い至り……。
「おや、もう目が覚めたんだね。身体の方はもう大丈夫かい？」
「え？　あ、はい」

カウンターテーブルの向かい側で佇むエプロン姿の男性が、フーカの姿を見て歩み寄ってきた。人当たりの良さそうな雰囲気、その顔付きと人柄から、この店の主で自分を助けてくれた人なのだと察したフーカは佇まいを正し、深々と頭を下げた。
「あ、あの。自分はフーカ＝レヴェントンと言います。この度はその、ご迷惑を御掛けして申し訳ありませんでした。それと、ベッドを貸してくれてありがとうございます」
「あぁ、これはどうもご丁寧に。若いのにしっかりしてるね」
「き、恐縮です」
「さて、起きたのなら好都合だ。今賄いの食事が出来るから食べてってよ。今の時間帯はお客さん来ないし、ゆっくりできるよ」
「い、いえそんな！　これ以上厄介になる訳には……それにこれからワシは仕事――――」
そこまで言って、これまでの経緯の全てを思い出したフーカは我に返り、表情を強張らせる。彼女が今何を考えているのか察したエプロンの男は、取り敢えず席に座るよう促した。
「実はその事について話があってね、取り敢えず座ろうか」
「……はい」
意気消沈、すっかり元気を無くしたフーカはガックリと音が聞こえてきそうな程に肩を落とし、トボトボと捨て猫の如く足を進めて、フラフラと席に付いた。
テーブルカウンターに座るフーカを見ると、男は厨房の奥へ姿を消す。そして数分と経たずに戻ってきた彼の手には二つの皿、白い皿には透明なスープが注がれており、その皿の隣にある小皿にはフワフワで美味しそうなパンが添えられていた。
テーブルに置かれたスプーンを手に一口啜る。瞬間、口の中に様々な味が広がってフーカの身体に染み渡っていった。美味い。身体だけでなく心にまで染み渡りそうなスープにフーカの頬は弛みきってしまう。その様子に満足気に頷く男は、隣のパンを浸して食べてごらんと勧めてくる。
言われるがままにパンを一つ取り出し、スープに浸して食べる。す

るとどうだろう、パンに染みたスープが別の味となってボロボロのフーカの身体を満たしていくではないか。あっさりとしたスープがパンの中に仕込まれたバターを溶かし、濃厚な味わいとなってフーカの食欲を満たしていく。
「はぁ～～～」
皿の全てを食べきる頃にはすっかり蕩けきったメシの顔をするフーカに、男はお粗末さまでしたと皿を下げる。これまで食べた事の無い味に舌鼓を打つフーカ、しかし何時までも呆けている訳にもいかない。皿を片付けていく男に対し姿勢を正して話を聞こうとするフーカ、男はそんな覚悟を決めた彼女に、一つ一つ、昨晩起きた出来事を語りだした。
結論を言えば、フーカは仕事をクビにされ、無職になってしまった。度重なる喧嘩を起こし、遂に面倒を見切れなくなった仕事先の雇い主が、彼女の荷物とこれまでの働きに見合う給料を手に、ここまで届けてきたのだ。
顔を出さなかったのは、フーカの顔を見たら怒鳴ってしまうかもしれないという雇い主の意向と、出来れば目が覚めるまで寝かせてやってほしいという店主の気持ちによるもの、もう別れは済ませてしまったらしい話の流れ、せめてこれまで掛けた迷惑の謝罪と世話になった礼を言いたかっただけに、この話をされたフーカの表情は暗かった。
その後も、今回の騒ぎの元凶となったチームとの乱闘の件も男から話を聞かされるが、再び気落ちするフーカの耳には入っておらず、暗くなる一方のフーカに男はうーんと頭を悩ませた。
そんな時、男の頭に一つの名案が浮かび上がる。
「ねぇフーカちゃん。もし行くところが無いのなら一つ提案があるんだけど」
「え？」
「フーカちゃん、ウチで働いてみない？　勿論給料は払うよ」
「そ、それは願ったり叶ったりですけど……い、良いんですか？」
「勿論、フーカちゃんなら大歓迎さ」
「で、でも……」

「寝床も保証するし、賄いの料理もその都度出すよ？」
「宜しくお願いします！」
捨てる神あれば拾う神あり、この日フーカ＝レヴェントンは無職になり、そして喫茶店のウェイトレスとなった。
喫茶シラカワ。首都クラナガンにひっそりとある喫茶店、そこに一人の看板娘が誕生した。
「あ、そうだった。自己紹介がまだだったね。俺はシュウジ＝シラカワ、この店の店長をしている」
「は、はい。ワシ……じゃなくて、自分はフーカ＝レヴェントンと言います。宜しくお願いします」
明るくなったフーカにウンウンと頷くシュウジ、取り敢えず今日はエプロンをして簡単な接客をする事から始めようと、二階に上がるシュウジにフーカも付いていく。
そこで初めてフーカは違和感を覚えた。自分の新しい雇い主となったシュウジの声、どこかで聞いた気がする。はて、何処だったか？
そしてシュウジという名も何処かで聞いた事がある。この違和感は一体なんなのか、考えてみても思い出せないという事は別に対したことではないのだろう。そう自分に言い聞かせ、フーカはシュウジの後を追った。

◇

――――フロンティアジム。数多くの有名格闘競技選手を輩出した名門ジム、その地下トレーニング室でサンドバッグを揺らし、剛腕を奮う一人の少女がいた。

「ラストよリンネ、フィニッシュ！」
「はぁっ！」
ドゴンッと、大きな音を立ててサンドバッグが縦に揺れる。リンネと呼ばれた少女は息を荒くさせ、長い銀髪を揺らし、膝を手について満身創痍でいた。
しかし、そんな状態になっても、彼女の瞳に宿る炎は微塵も翳りを見せていない。その事を良しとし、少しばかりの休憩を言い付けたトレーナーの女性は笑みを浮かべながら、リンネの隣に座り込んだ。
「お疲れ様でしたリンネ、今日のメニューは終了よ」
「お疲れ……様、でした」
途切れ途切れでもキチンと挨拶を返すリンネ、しかしその言葉とは裏腹に、彼女の口調はどこか暗かった。
「リンネ、貴方は才能がある。それも半端なモノではなく万人が羨む絶対的な才能が。努力を惜しまずその才能を極限にまで開花させれば、あなたはもっともっと強くなるわ。それこそ、誰も貴方に勝てなくなるくらい」
リンネという少女には天賦の才があった。これ迄の女性が見てきた中で、どの選手よりも強く輝く才能がこの少女には秘められていた。それも自惚れや贔屓ではなく、純然たる事実として。
その才能を開花させるのが自分であることに、リンネのコーチであるジル＝ストーラは確かな喜びを感じていた。
「それは、本当ですか？」
「ええ、貴方ならきっとその頂点に立てるわ」
「じゃあ、あの人にも勝てるようになりますか？」
「……」
リンネの口にした〝あの人〟それを聞いたジルは押し黙り……。
「勿論よ」
一瞬の間を開けて肯定した。それを横目で見ていたリンネは立ちあがり、ジルに一礼するとシャワー室へと向かう。恐らくは自分の嘘を見破ったのだろう、悪いことをしたなと、ジルは頭を掻いて己の失敗を反省した。

リンネは天才だ。それは誰もが認め、誰よりもジルが認めている。しかし、それでも〝あの男〟と比べると、その自信が少しばかり曇ってしまう。

――――嘗て、ＤＳＡＡ総合魔法戦・格闘競技のＵ２５にて無敗を誇る王者がいた。流星の如く現れ、チャンピオンになるや即座に引退を表明し、表舞台から姿を消した幻の選手。

Ｕ２５世界王者（ワールドチャンピオン）シュウジ＝シラカワ。三年前に一度だけの大波乱を巻き起こした謎の多い選手、そんな彼がクラナガンの町でひっそりと喫茶店を営んでいることは……意外と知られていない。

その3

ＶｉＶｉｄ月Ｓｔｒｉｋｅ日

時空振動に巻き込まれて自分がこの世界に来て早数年、この世界の文化や文明にも大分慣れ、店も漸く軌道に乗り出してきた。これを気に、これ迄の出来事を簡潔にまとめていこうと思う。

いやー、最初の頃は焦ったね。時空振動に巻き込まれたかと思ったら飛行戦艦の中、それも何か玉座っぽい所にいるから内心結構焦ってたっけ。しかもあの時はなんかＪＳ事件？　みたいな大きな騒ぎが起きていた最中の出来事だったし、あの時の自分は、兎に角その場から離れる事ばかり考えていたっけ。

だというのに、目の前の玉座に座る幼い娘が突然大きくなったかと思うといきなり襲ってくるし、仕方がないと思いながら迎え撃ったのだけど……これ、傷害罪に問われたりしないよね？　正当防衛の内に入るよね？

や、確かに迎え撃ったよ？　でも相手は大きくなっても中身は幼女っぽかったから可能な限り手加減したし、然程傷はつけなかったはず。人を影から散々煽ってきたメガネの女も何か首謀者っぽいから軽く打ちのめして無力化したし、幼女も内側にある原因らしき力？みたいなのを不動砂塵爆で破壊、そんなに暴れまわることなく鎮圧出来た。

その後、駆け付けた女性の人に幼女とメガネ女を引き渡し、ワームホールで即座に戦艦から離脱。どうにか抜け出す事に成功した。

で、その後はこの世界について色々調べたんだけど……いやー凄いね、まさかこの世界に魔法なんてものが実在するなんて、最初知った時はテンションが爆上げしたものだ。

他にも、時空管理局という組織やロストロギア等の遺失物、管理世界や管理外世界に無限書庫という様々な情報をグランゾンを経由して調べ、そして学んでいった。

人が世界を管理するとか大変な事をするなぁとか、無限書庫とかそれちゃんと管理できてんの？　把握仕切れてるの？　とか、色々疑問

に思った事はあるけれど、それ以外は自分の知る世界と良く似ているので、余り気にする必要はなかった。

で、それから色々考えて、腰を下ろしてゆっくり出来る場所が欲しいという理由から、自分はリモネシアにいた頃から夢見ていた喫茶店を開くことに決めた。

本当は時空管理局に勤めるなんて選択肢もあったんだけどね。ほら、この世界って次元漂流者なんて単語が出てくるから、自分みたいな人間でも求めれば可能な限り受け入れてくれるみたいな感じだし、戦艦で遭遇したあの女の人……高町なのはさんだっけ？　に頼めば多分色々面倒を見てくれたのだと思う。

それも確かに悪くはないのかもしれない。魔法という物にも興味はあったし、魔導師にでもなれたら、これまで出来なかった事が出来るようになるかもしれない。

だが、自分はそれをしなかった。時空管理局という組織に別段思う所はないのだが、如何せん此方にはグランゾンという相棒がいる。なのはさんみたいな人の良さそうな局員もいれば、グランゾンを見て危険だと一方的に決め付けてくる輩もいるかもしれない。そうなったら自分だけでなく、自分の所為で迷惑を掛けてしまう人が出てくるかもしれない。

そんな訳で管理局に入るのは止めて、自分らしい一般市民としてこの街、クラナガンでひっそりと暮らしていくことに決めた。その際に時空管理局のデータベースにハッキングして、自分の個人情報を偽装して入力したのだけど、どうやらこの世界って魔法というには科学よりのモノらしく、結構分かりやすく出来ていた。

そのお陰で偽装の方もうまく出来たし、五年経過した今でもその事に気付かれていない。そんな訳で無事にこの世界で生きていける下準備が出来た自分だが、ここで一つ問題が起きた。

お金だ。やはり文明があり人との交流がある以上通貨というのは必要不可欠なモノで、当時無一文に等しかった自分はそれはもう焦った。今思えば、バイトでもして地道にお金を稼ぐべきだったのに、この時自分は何を思ったのか、たまたま近くにあった魔法格闘技大会な

る勧誘ポスターを目にし、試合に出るとお金が出ると知った自分はこれしかないと決断、決意して近くのジムに雪崩れ込んだ。
当時から古く、今ではもう廃業して無くなってしまったジムだが、そこの会長さんは人が良く、デバイスの作成作業とか自分の事を住み込みで面倒を見てくれた。
そこから先はトントン拍子で話は進み、プロになり幾つかの大会に出て、更にトーナメントを勝ち進み、遂にはチャンピオンの人とのタイトルマッチに挑み、これに勝利した。
まさかここまで上手く行くとは思わなかった。いや、皆強かったよ？　対戦相手の人は色んな魔法使ってきて驚いたし、一、二回程良い一撃を受けたりした。
ただ何というか……脆かったんだよね。こう、某ボクシングマンガの如く足を止めて打ち合う人は殆どいなくて、皆遠くから魔法をボカスカ撃ってくるだけ、一応自分も一つだけ収束魔法と呼ばれる技を使えるが――――ぶっちゃけアレ、ネタだしね。威力は収束魔法だけあってそこそこあるけど、本家に比べたら全然だし。
……でも、撃てた時は嘗て無いほどテンションが上がったっけ、魔法なら再現出来るかなと思って試しにやってみたけど、いやぁ嬉しかったなぁ。まさか〝かめ○め波〟を撃てる日が来るなんて想像すら出来なかったから、初めて試合で使った日は興奮して眠れなかったっけ。
他にも、カートリッジなる魔力増強システムを参考にした界○拳とか使ってみたりした。思えばこの世界に来てから、あの頃が一番楽しかった時間だったのかもしれない。
――――閑話休題。
で、そんな遠くから撃ってるだけの相手に人越拳の拳が負ける筈もなく、試合の多くは近づいて一撃ドンという、分かりやすい内容だった。
そしてチャンピオンになった自分だが、果たして自分なんかがチャンピオンでいていいのだろうかと思い、ＤＳＡＡの運営の人達に事情を説明してベルトを返上。チャンピオンの座から降りる事にした。

いやね。そもそも自分はお金が欲しくて大会に参加していただけで、別にチャンピオンとかベルトとかに固執してた訳じゃないんすよ。そりゃお金はあった方が良いけど、タイトル戦の時点で必要なお金は揃ってたし、自分のようなお金目的の下衆よりも、もっと高尚な志を持った人の方がチャンピオンに相応しいと思い、引退を表明した。

会長とは元々そういう契約だったから特に何も言われる事はなかったけど、せめてお世話になったお礼をしたいという事で、タイトルマッチでの賞金の半分を渡す事にした。

会長さんは最後に夢を見させてもらったから良いと言ったが、それでは此方の気持ちが収まらない。ベルトのレプリカと賞金の半分を受け取って貰い、今度こそ自分は喫茶店を開くことにした。

会長さんは現在息子夫婦の家で厄介になっていて、孫に囲まれて幸せに生活しているという。ジムを畳み、故郷で過ごしていてもたまに連絡を取り合う位には、自分と会長さんとの付き合いは深い。

そんな紆余曲折を経て漸く喫茶シラカワを開業し、自分は毎日充実した日々を送っている。子供からお年寄りの方まで、幅広い年齢層が自分の店を来てくれるのは、自営業者として本当に有難い。

お陰で近年は黒字が続いているし、気持ち的にも余裕が出てきた。近所のボランティアにも積極的に参加しているし、最近は孤児院に顔を出したりして料理を振る舞っている。

やっべー、今の俺超リア充じゃん。誰がどう見ても立派なリア充じゃんよぉ！　……でも、そんな充実した日々を送っても、一つだけ気掛かりがあった。

まだ店を開いて間もない頃、この店にはあるお爺さんが良く来ていてくれた。名前も知らず、顔も知らない人だが、自分の出すコーヒーを上手いと言ってくれたお爺さん。

良く孫娘の事を自慢に来る優しいお爺さんだが、ある日突然逝去してしまった。自分も割りとお爺さんとは話をしていたから、お爺さんの顔写真を新聞で見て逝去された事を知った時は、結構ショックだった。

そしてその後、とある学校で傷害罪事件が起こり、その起こした娘がお爺さんが良く自慢していた孫娘だと知り、自分は更にショックを受けた。

理由はその孫娘ちゃんが苛めを受けていたからという話だが、世間は孫娘ちゃんをやりすぎだと批難している。

お爺さんから聞いた孫娘ちゃんは、とても大人しく優しい娘だと聞いている。もしそんな娘がそこまでの怒りを募らせていたのだとしたら、問題はその苛めをしていた三人組にあるのではないだろうか。

詳しく調べてやって世間に事実を晒してやりたいが、既にこの件は両者の親御さんが示談で話を付けている。孫娘ちゃんも別の学校へ転校する事で話が終わっているから、部外者の自分が話を拗らせる訳にいかない。

色々思うところがある嫌な事件。けれどそんな孫娘ちゃんは現在ＤＳＡＡの選手として活躍し、元気にしているのだとか。

随分思いきった娘だなと思うも、本人がそれで良いのなら余計な詮索はしないでおこう。もし彼女がこの店に立ち寄る事があるのなら、その時にでもお爺さんの話で盛り上がりながら珈琲を奢ってやるのも悪くない。

そして時は更に流れて新暦８０年。先日自分はある女の子のスカウトに成功した。その娘の名前はフーカ＝レヴェントン、快活で活発な当店自慢の看板娘である。

スカウトまでの流れで色々あったが……まぁ別にその話はしなくて良いだろう。実際そんな大した話ではないし。

愛想も良く、礼儀正しく、仕事に対しても一生懸命。こんな良い娘を尽くクビにしてきた人達って、ぶっちゃけ見る目無くね？

今は慣れてないメイド服の格好でたどたどしいが、顧客の皆さんからは寧ろそれが良いと好評だ。

しかし、そんなフーカちゃんにも心配な所がある。彼女から聞いた話だと、どうやらフーカちゃんはマトモに学校に通った事がなく、学歴というモノを一切持ち合わせていないらしいのだ。

これはいかん。この世界の社会は学歴だけが全てではないが、それ

でも小学校にも通えていないというのは非常に不味い。これからの長い人生でモノを言うのはその人が、これまで培ってきた知識と経験だ。フーカちゃんの事を物知らぬ娘だとは思わないが、将来で有利になる知識なんて持ち合わせていないのも事実。

ここは雇い主として少しばかり勉強を教える必要があるのかもしれない。だって心配なんだもの、仕方ないよね。

そんなわけでこれから今後のフーカちゃんの予定を考えるので、今日はこれまでにしようと思う。

◇

――――時刻はお昼過ぎ。人気も無くなり、今はシュウジとフーカだけとなった店内。シュウジの出した賄い料理を堪能していたフーカはモジモジしながらシュウジに訊ねた。

「あ、あの店長。本当にこの格好で仕事をしなくちゃなりませんかね？」

「そうだけど？　どうしたの？」

「いや、その……やっぱりワシには似合ってませんって、折角の綺麗な服なのに勿体ないですよ」

「そんな事ないって、フーカちゃん良く似合ってるよ。お客さん達からも評判良いよ」

「で、でも……恥ずかしいですよぉ」

頬を赤くさせ、うっすらと目尻に涙を滲ませるフーカ。これまでの人生の中でこんなフリフリな格好などしたことがない彼女にとって、メイド服はかなり難易度が高かった。

どうやら本当に恥ずかしがっている様だ。客の前では健気に冷静さを装っていたが、それも限界に近いらしい。どうしたものかと頭を

悩ませるシュウジはあることを思い付いた。
「そうだね。君一人を衆目に晒すのは不味かったかもしれない。ならば俺も一肌脱ごう」
「へ？」
「俺も女装しよう。二人で奇抜な格好をすれば何も怖くない。お客さんからの評判は落ちるかもしれないが、これもフーカちゃんの為、俺も一緒に衆目に晒そう！」
「え、えええっ!?」
　頑張る方向を全力で間違えていくスタイルのシュウジ、そんなカッ飛んだシュウジに動揺しながらもフーカが止めようとすると、一人のお客が店内へと入ってきた。
「ほ、ほら店長、お客さんですよ。アホな事言ってないで仕事に戻って下さい！」
「ええー……」
「ええーじゃないですよもう！　大変失礼しましたお客様、お席にご案内します……ので」
　お客の来店に慌てながら愛想を振り撒くフーカ、しかしその客人の顔を見た瞬間、彼女の表情は歪み出す。
「リン……ネ」
「フーちゃん？」
「ん？　お知り合い？」
　嘗て親友だった二人、場の空気が張りつめていく中、シュウジはやはり平常運転だった。

その4

「フー……ちゃん？」
「リン……ネ」
お昼過ぎの時間。人気もなく、賄いの料理も食べ終わり、夕方頃にやってくるお客への準備を進めていた時、一人の少女が喫茶シラカワの戸を叩いた。
慣れてきた調子で接客しようとするフーカ、しかし訪れた少女の姿を目にした瞬間、その表情は時が止まった様に固まる。
嫌でも思い浮かぶのは二年前のあの日、変わってしまった幼馴染みを問い詰めようとして返り討ちにあった日、自分の全てが打ち砕かれた。守りたかった人、守りたかったモノ、その全てが取り零れ、消えてしまった。
今、目の前にいる嘗ての親友は、そんな現実を拳という形で叩き付けてきた。悔しさと惨めさ、己の力の無さを嫌と言うほど痛感させられた。
その彼女が今目の前にいる。鼓動が早くなり、視界が狭まってくる。もう味わいたくなかった想いと感情が、フーカの内側から溢れてくる。
「フーカちゃーん？」
そんな時だ。後ろから声投げ掛ける店長の一言にフーカは我に返った。そうだ。昔は因縁があったけれど今の自分は喫茶シラカワの従業員、店長のご好意で働かせて貰っている以上、個人的な感傷は今は控えるべきだ。
「……申し訳ありませんでした。お客様、お好きなお席へお掛け下さい」
フーカは必死に平静を装いつつ、マニュアル通りに対応した。しかしリンネと呼ばれる少女の方は依然として無反応、もしかして、自分がこの格好をしている事に面喰らっているのだろうか。だとしたら色々複雑な気分である。

振り返って少女の方へ様子を伺うと、リンネはその瞳を大きく見開かせ、驚愕に打ち震えていて、まるで信じられないモノを見るかの様だ。
「うそ、どうしてここに……」
リンネの視線の先にいるのはフーカの後ろ、店長であるシュウジだった。何故店長を見て驚愕しているのかフーカは疑問に思うが、当のシュウジ本人も何故リンネに凝視されているのか判らず、不思議に首を傾げていた。
沈黙する空気、すると漸く我に返ったリンネは一度咳払いをして、空いているカウンターの席へと座る。その頬は少し赤かった。
メニュー表を手にするリンネ、その表情は無表情でありながら何処か強張り、見るものを威嚇するトゲの様で、昔の彼女を知るフーカとしてはそんな顔を見て寧ろ痛ましくさえ見えた。
「えっと、ご注文は何にします？」
「……その前に、一つ聞いても良いですか？　昔、ここにロイ＝ベルリネッタがよく来ていたと言うのは本当ですか」
「ロイ？　あぁ、あのお爺さんね。うん、来ていたよ。店が出来たばかりの頃は短い間だったけどよく贔屓にしていてくれたっけ。お嬢さん、あのお爺さんの知り合いかい？」
「はい。ロイ＝ベルリネッタは私の祖父です」
「マジで？　じゃあ君がベルリネッタさんのお孫さんかぁ、いやー成る程、あの爺さんが自慢する訳だよ。まさかこんな可愛い娘だったとは」
「そ、そうなんですか？」
「あぁ、店に来ては毎回君の話を聞かせてもらっていたよ。自慢の孫だって」
「そうですか……お爺ちゃんが」
思わぬ話題に花を咲かせる二人、フーカは話の中身を理解できていないが、どうやらリンネが里親に引き取られた後は幸せの日々を過ごせていたらしい。祖父の話を聞いて久し振りに頬笑むリンネを見て、フーカは何となくそう思った。

しかしそんなリンネの表情も直ぐに元の仏頂面に戻り、鋭い視線でシュウジを射抜く。中学生とは思えぬ覇気を纏い、急に様子の変わった少女にシュウジもまた訝しむ。
「――ＤＳＡＡ、Ｕ２５世界王者。シュウジ＝シラカワ」
「!?」
「嘗て、次元世界最強と言われた無敗のチャンピオン。生ける伝説とまで呼ばれた貴方が、まさか喫茶店を営んでいるとは思いませんでした」
突然リンネの口から出てくる突拍子の無い単語、無敗？　チャンピオン？　一体何を言っている？　混乱するフーカだが、しかし当の本人であるシュウジは顔色一つ変えずに、静かにリンネを見据えている。
「え？　俺ってそんなに有名なの？」
「少なくとも、この街にいる格闘技をしている人で、貴方を知らない者はいません」
「マジでか。いやー、まさかそんなに有名になっちゃうとは、どうしようフーカちゃん。俺テレビに出ちゃうかもー」
「え、ええ……」
この男、目の前の少女に持ち上げられて一丁前に照れていやがる。年甲斐なく照れ臭そうに笑うシュウジを見て、フーカはなんとも言えない脱力感に襲われる。というか、普通に認めているし。
そう言えば、シュウジという名前もＤＳＡＡ関連で聞いたことがある。初めて彼と話をして感じた違和感が漸く紐解けた事に、フーカは納得した。
「そんな貴方にお願いがあります」
「ん？　なんだい？」
「もう一度チャンピオンになって下さい。ＤＳＡＡに復帰してチャンピオンになって、そして――私と戦って下さい」
「なっ!?」
「ごめん無理」
「なぁっ!?」

突拍子の無い願いを口にするリンネもそうだが、そんな彼女の願いを即答で切り捨てるこの男も相当である。もしかしたら自分の新しい雇い主は色んな意味でヤバいのでは？　この店に雇われて数日経過しているが、フーカは依然としてシュウジという男に慣れていなかった。

「……すみません、今のは流石に突拍子が無さすぎました。忘れてください」

「あ、そう？　分かった」

そう言って黙り込むリンネ、己の感情のまま、思わず出てしまった言葉に彼女自身戸惑っていた。目の前にいる格闘技界の頂点に君臨していた男、この男に挑戦すれば、それだけで自分の悲願が叶えられる気がした。

本音を言えば何としてでも戦いたい。Ｕ１５でもＵ１９でもなく、次元世界最強と謳われた目の前の男性と挑発してでも戦い、自分の強さを証明したい。

そうすればきっと誰も自分をバカに出来なくなる。見下されることもなくなり、理不尽に抗うことが出来るようになる。

けれど、リンネはそんな事は口に出来なかった。大好きだった祖父の事を少なからず知っていて、その祖父が自分の事を自慢と言ってくれていた。その事を教えてくれた人を相手に、今はこれ以上強く言えない。

ただ祖父が通っていた喫茶店があると知って興味本意で訪ねただけなのに、衝撃的な出会いにリンネは少し混乱していた。

「しかしこんな可愛い子が格闘技かぁ、リンネちゃんもやってるんだ？」

「は、はい。年齢階級はＵ１５でランキングは一位です」

「そりゃあ凄い。一位の人ってチャンピオンに一番に挑戦できる権利を持ってる人だよね？　その若さで大したもんだよー」

自分の店を贔屓にしていたお爺さん。他界し、今はもう会うことは叶わないが、その孫娘である少女が今日来店してくれた。この巡り合わせに感謝したシュウジ、フーカの出したお冷やを片手に暫く談笑し

ていると、時計を見たリンネは席を立ち、出入口へと足を進める。
「あの、今日は突然来てしまってその……ごめんなさい。お爺ちゃんの話が聞けて嬉しかったです」
「それはいいけど、もう行くの？　結局何も出してあげられなかったけど」
「いいえ、これから私もジムでトレーニングがあるので……それに、まるで冷やかしに来てしまったようで――――」
そう言ってリンネの視線がフーカに向けられる。冷たい目だ。自分の知る嘗ての幼馴染みとはまるで違うその目に、フーカは言いし難い怒りを覚えた。
「それではシュウジさん、私はこれで……近い内にまたお願いしに来ます」
「あ、それよりもちょっと待って……」
「え？」
「これ、賄いの余り物で悪いんだけど、良ければ持っていってくれない？」
扉を開きかけて、しかしいつの間にか間合いを詰めてきたシュウジにリンネは呆けてしまう。気を反らしていたつもりも油断していたつもりもなかった。なのに、自分とは距離の開いていた相手に何の違和感もなく潜り込まれてしまった。余りにも自然に、剰りにも無意識に。
嘗ての次元最強、その実力の一端に触れた気がしたリンネは渡されたバケットを言われるがままに手にして店を後にする。外には既に家の者が車で迎えに来ており、リンネは戸惑いつつも車に乗り家へ帰っていった。
そんなリンネを見送りつつシュウジは思う。色々危なっかしい娘だと、ベルリネッタの翁とは大分掛け離れているリンネの人物像にシュウジは少し心配になった。
見ればフーカの方も気落ちしている。この二人はやはり過去に何か合ったのだろう。会話の流れ的に二人一緒の時は敢えて指摘しなかったが、リンネが去っていった事で漸く話が聞けるようになり、

シュウジは自分のしている事が余計なお世話だと思いつつも、フーカに訊ねた。
　そしてその後、店を客を捌き終え、夕飯を食べ終えた二人は二階のリビングで話し合う。
「変わってしまった幼馴染み……か」
「すみません。こんな事、シュウジさんに話しても迷惑なだけなのに……」
「迷惑なものか、嫌がる君を強引に聞き出したのは俺の方だよ。君が気にする必要はない、そんな事よりも問題なのは君の方だ。今のリンネちゃんは俺から見ても少し危ない節がある。そんな彼女をどうにか出来るのは多分君だけだ」
「それは……その」
「確かにこの件は俺には何の関係もない。店に益があるわけでも無いし、フーカちゃんもそれは過去の事だと切り捨てる事ができる。けれど、もし君が今のリンネちゃんを変えてやりたいと願うのなら、俺も君に協力しよう」
「ど、どうしてシュウジさんは、そんなにも私達の事を気遣ってくれるんですか？」
　フーカの疑問は当然だった。確かにフーカとリンネの間には浅からぬ因縁があり、その痼は今も根強く残っている。しかしそれはシュウジにとって知らなくても良いこと、どれだけ算段を立てても彼の得になるような話は微塵もない。なのにどうしてそこまで自分達を気遣ってくれるのか、フーカはそれが分からなかった。
　――確かに、シュウジにはフーカに加担する理由も義務もない。それだけの間柄であるわけでもない。しかし思い出してしまった。嘗て自分にも仲違いをしたまま死に別れてしまった親友がいた事を。
　幾年の月日が流れようとあの時の事は忘れもしないし、今でも思う。もしあの時、自分の拳がトレーズに届いていたのなら。
　もしあの時、トレーズの真意に気付けていたなら、今頃はもっと違った未来が待っていたのかもしれない。
　目の前のフーカにはそんな思いはさせたくない。せめてなにか

切っ掛けだけでも作ってやりたい。シュウジの二人に対する思い入れは、既にそんな余計なお節介をするまで深くなっていた。
「フーカちゃん、君の疑問は尤もだ。けれど今はその事に答えられない事を許して欲しい。今俺が聞きたいのは、君がどうしたいかだ」
しかし、それを口にすることは出来ない。もしその事を口にすれば、フーカは同情されたと思い、気持ちを閉ざしてしまうかもしれない。
けれどフーカは元々勘が鋭く、人の機微に敏い娘、シュウジが何かを隠しているのかはその言葉だけで充分理解できた。
それを敢えて口にしない辺り、フーカもまた気配りが上手だった。分かりましたと言うフーカに、気を使わせたなとシュウジは苦笑う。
「……シュウジさん、ワシは、リンネを止めたい。涙で腐った目をしたアイツを、どうにかして戻してやりたいんじゃ。お願いします。ワシを、ワシをどうか強くしてください」
「その言葉が聞きたかった」
フーカの心からの叫びにシュウジは即答で返す。この日、首都クラナガンの隅で小さな師弟コンビが誕生した。

◇

――――数日後、首都クラナガンはナカジマジム。
近年開業したばかりの格闘技ジム。新設したばかりでありながら多数のランキングホルダーを抱えた有望ジム。
フィットネスクラブとしても運営されており、若者からお年寄りまで幅広い年齢層が利用しているジムに一組の男女が入ってくる。見

慣れない顔だ。……いや、男性の方は何処かで見たことがある気がする。バイトリーダーのユミナ＝アンクレイヴは自動ドアを潜り、目の前に立つ男性に言葉を失う。
「すみません、こちらのジムの入会手続きをしたいんですが……」
「ふ、ふぇぇぇっ!?」
格闘技界最強だった男の突然の来訪に、ユミナはパニックに陥った。

その５

「もうすぐウィンターカップの申し込み期日ですねぇ」
「そうですね。早いものです」
――――所属学校であるＳｔ．ヒルデ魔法学院からの帰り道、翡翠と金の髪を揺らして所属ジムに向かう二人の少女、互いに其々異なる色を持った瞳をしている彼女達は、嘗ての古代ベルカにて覇を競った王の血を引いていた。
高町ヴィヴィオとアインハルト＝ストラトス、互いにその血にまつわる因縁から当初はぎこちなかった二人だが、周囲の協力と本人達の努力のお陰で蟠りは解け、今では同じ格闘技を嗜む善きライバルであり、友となっていた。
親友達と周囲の人達の支えもあって漸く過去の因縁から解放されたアインハルト、現在はＵ１５の世界王者として次元世界格闘技の覇者として君臨し、日々挑戦者達と切磋琢磨をして充実した毎日を送っている。
「あーあ、今回のウィンターカップが終わったらアインハルトさんもＵ１９に移っちゃうのかぁ。少し寂しいなぁ」
「フフ、なら今年最後の思い出に、ちゃんと勝ち進んで勝負しなくてはいけませんね」
「ですね。よーし、今年も頑張って勝ってアインハルトさんに挑戦するぞーー！」
元気よく拳を振り上げて意気込みを顕にするヴィヴィオ、そんな親友を頼もしく思っていると、ふとアインハルトの視界に見馴れた人物が入ってきた。
「あれって……コロナにリオ？　何してるんだろ？」
「ジムの様子を覗いているみたいですが……」
コロナ＝ティミルとリオ＝ウェズリー、二人ともヴィヴィオとアインハルトにとって大切な親友であり、ヴィヴィオにとっては同じ学年で同じ教室で日々勉強を共にしている学友達、ヴィヴィオと同じ格闘

技を学んでいる二人がジムに入らずにいる。
　その様子から、何やらナカジマジムに変わった出来事が起きている様だ。面白いことなら率先して首を突っ込むリオが大人しい事から、どうやら余程の事なのだろう。
「二人とも、何やってるの？」
「誰か来ているのですか？」
「ヴ、ヴィヴィオにアインハルトさん！」
「び、ビックリしたぁ……」
「あはは、ごめんごめん。でも本当にどうしたの？　ジムに入らないで」
「アレだよアレ！」
　リオに勧められるがまま二人してジムを覗き込むヴィヴィオとアインハルト、するとそこには受け付けで何かを話しているユミナと一人の男性がいた。どうやら男性の様子からして、隣にいる女の子の入会手続きに付いて話をしている様だ。
　別にそんなに珍しくない光景だが、ユミナの方は態度がおかしく、落ち着きのある彼女らしくない慌てた様子でその男性に応対をしている。どうしたのだろうとヴィヴィオが疑問に思った時、男性の正体に気付いた。
「ね、ねぇ！　あ、あアレって、もももしかして!?」
「だよね！　絶対そうだよね！」
「シュウジ＝シラカワ……！」
　伝説の世界王者がナカジマジムに来ている。その事実を前にヴィヴィオ達は動揺し、アインハルトはその目を大きく見開かせて驚きを露にしていた。

◇

「こ、ここちら申し込み申請書にななりましゅ」
「あぁ、どうもありがとう。はい、フーカちゃん」
「あ、どうもです」
「それと君、もし会長さんがいるのなら話があるんだけど、会長さんって今いらっしゃるのかな？　少し話したい事があるからお会いしたいんだけど」
「ななナカジマ会長そその、現在は留守にしておりましててて」
「ありゃ、タイミング悪かったかなぁ。一応今日はお店はお休みだから良いんだけど……どうしよう。かといって居座ってたらジムの邪魔になるし、出直すかな？」
「シュウジさん、その時ワシはどうします？」
「うーん、そうだなぁ」
　リンネと戦う為、取り敢えずＤＳＡＡに選手登録をしようと近所のジムへとやって来た二人、先ずはジムへの入会を済ませて、その後ジムの会長であるナカジマ会長と色々話をしようと考えていたシュウジだが、不在の報告にその目論見は外れてしまう。
　来るまで時間を潰すにはどうすれば良いか、そんな事を考えているシュウジに背後から声が掛かる。
「あの！」
「うん？」
「シュウジ＝シラカワ選手ですよね。Ｕ２５世界王者の」
「元、だけどね。もうタイトルは返上して引退したし……所で君は？」
「失礼しました。私はアインハルト＝ストラトス、気軽にハルにゃんとお呼び下さい。――それよりも、嘗ての世界王者が今日はナカジマジムに一体何のご用でしょうか？　良ければ私達が伺いますよ」
　振り返れば其処にはフーカと年齢の近しい少女達が四人、シュウジの後ろに佇んでいた。フーカといい目の前のこの少女といい、最近の子は礼儀正しい娘達が多いんだなと、シュウジは感心する。
　しかし残りの三人、何れも特徴的な外見をしている其々の少女達は皆、アインハルトの後ろに隠れてしまっている。チラチラと此方の様

子を伺っている事から、どうやら変に嫌われてはいないようだ。
「それは有り難いけど……良いのかい？　会長さんの許し無しで勝手なことして」
「あ、その点は大丈夫です。ノーヴェ――――じゃなくて、ナカジマ会長から私達にある程度の許可が許されてますから」
「ここで立ち話も何ですから、どうぞ此方へ。そちらにいる貴女も是非見学していって下さい」
「あ、ありがとうございます！」
「それじゃあユミナ、後は宜しくね」
「う、うん！　会長が来たら伝えておくね」
なし崩し的にアインハルトに付き従う様にその場を後にするシュウジとフーカ、自分よりも一回り以上年下であろう少女達に連れられるという事になんとも複雑な心境になりながらも、シュウジは大人しく彼女達の後を付いていくのだった。

◇

そして、二人が連れて来られたのはジムの奥階段を少し下りた先にある広々とした空間、リングを中央に備えた選手用のトレーニング室。
受け付けでも見掛けたが、機材の隅々まで手が届いており、従業員の管理能力の高さが伺える。ジムの空気も悪くないし、最初は不安に思っていたが、どうやら心配は無さそうだ。
初めて目にするリングの大きさにオォーッと感慨深そうに声を漏らすフーカを横目に、シュウジは安堵する。
すると、更衣室からジムのジャージを着たアインハルト達がやって来た。

「では、一通り体を暖めたら一度スパーをしてみましょう。フーカさん、如何です？」
「え、ええ!?　いきなりスパーリングですか!?　まだ入会してないのに!?」
「手続きは済ませたのでしょう？　それに貴女は今度のウインターカップに出てあのリンネ選手と戦うことを決めている。ならば早い段階で相手との試合形式を学んだ方がいいかと思いますよ」
フーカのジムへの入門理由は、移動する最中でそれとなく伝えている。まだ詳しいことは話していないが、アインハルト達もフーカと同様に察しの良い娘で、彼女達の気持ちは早くも一つになろうとしていた。
強力なライバルになるかもしれない相手に自ら手解きをする。お人好しではあるが、それ以上に優しい彼女達を見て、シュウジはフーカをナカジマジムに預ける事を決めた。
「フーカちゃん、やってみるといい。今の君がどれ程出来るのか、彼女達と手を合わせることで確かめてみるといい」
「シュウジさん……オス！　やってみます！」
シュウジの後押しもあって、目の前の少女達と手合わせする事に決めたフーカ、軽くストレッチをして身体を解した後、更衣室へ入り、予め用意していたシュウジお手製の胴着に着替える。
山吹色の胴着、左胸と背中に亀の一文字を刻んだシュウジ特性のトレーニング用の胴着。一体なんの何処の道場の胴着なのだろうかと、アインハルト達は訝しむ。
因みに胴着に関しては完全にボッチの趣味であり、ボッチの胴着には界の文字が刻まれているのはどうでも良い話。
さて、そんな訳でアインハルト達と一通りスパーリングをする事になったフーカだが、結果だけ見れば惨敗。何れも試合慣れをして場数を踏んできた彼女達にフーカが敵う筈もなく、彼女達との最初の手合わせはフーカの全敗で幕を下ろした。
「うぅ、すみませんシュウジさん。負けてしまいました」
「まぁ、分かりきってたけどね」

「そんな!?　じゃあワシは一体何の為にあんな特訓をしたんですか！」
「ただの正拳突きの一つを覚えた程度で勝ち上がれる程簡単な世界ではないという事さ。それに、今回のスパーリングは君にＤＳＡＡの格闘技選手というものがどういうモノかを知ってもらう事にある。お陰で少しは分かっただろ？　彼女達の強さと言うものが」
　自分の負けた事にあっさりと頷くシュウジにフーカは少し文句を言いたくなったが、彼の口にした言葉に納得して押し黙ってしまう。何せ彼の口にする言葉は、全て自分の事を考えての思慮深さがあったからだ。真剣な表情でそう言い含めるシュウジにフーカは渋々納得し、分かりましたと頷いた。
　そんなフーカにシュウジは彼女の頭を撫でる。まだ知り合って一月も経っていない間柄だが、既に二人の間には師弟としての確かな絆が芽生えていた。そんな二人を何処か羨ましそうに見つめるヴィヴィオ達、するとリング中央に一人の女性が降り立った。
　アインハルトだ。強化魔法で身体を擬似的に成長させ、外見年齢１８歳となったＵ１５の世界王者が、真剣な表情で佇んでいた。
「え？　アインハルトさん？」
「どうしたんです？　試合用の格好をして……って、まさか!?」
「シュウジ＝シラカワさん、折り入ってお願いがあります」
「ん？」
「私と、闘ってください」
　世界王者からの突然の宣戦布告に凍り付く一同、そんな中シュウジは……。
「そうだね。たまには運動するのも悪くない」
　笑顔で、快く受け取るのだった。

その6

「ふぅ、少し遅れちまったな。チビ共達はもう練習してるんだろうなぁ」

ナカジマジム専用駐車場、車から降りてジムへと早足で急ぐのはジムの会長であるノーヴェ＝ナカジマ、その複雑な出生事情から当初は酷く粗っぽい性格だったが、周囲の人間環境のお陰で社会貢献が出来るまで更正し、今ではＤＳＡＡの選手達を複数育てるという、立場ある人間へと成長を遂げた。

今度開催される格闘技のウィンターカップ、その諸々の手続きをしていて少しばかり遅れてしまった為、ノーヴェはこの時焦っていた。

裏口からジムに入り、更衣室で専用のジャージに着替え、会長室には寄らず選手達が待っているだろうトレーニング室に向かう。その時、やたら慌てた様子のユミナと遭遇した。

「か、かかか会長！」

「な、なんだユミナ、いきなりどうした？」

「よ、よよよ良かったぁ！　会長来てくれたぁ！」

「だから落ち着けって、何をそんなに慌ててるんだ？」

「ち、ちちちチャンピオンが、世界王者が！」

「チャンピオン？　アインハルトの奴がまだ何かしでかしたのか？」

ユミナが動揺した様子でチャンピオンと口にするから、またアインハルトが何かをやったのかとノーヴェは嘆息する。数年前からの付き合いで、既にノーヴェの中では問題児筆頭となっているアインハルト、しかしどうやら違うようで、必死に首を横に振って否定するユミナにノーヴェは訝しむ。

「き、来たんです。ここに、元世界王者……シュウジ＝シラカワ選手が！」

「……はぁ!?」

この業界に入って既に何年も経っているノーヴェ、当然様々な選手を見てきており、その中には当然シュウジの事も入っている。しかし

試合の中でしか分からず、その人物像は一切不明。その謎に満ちた伝説のチャンピオンが今、ナカジマジムを訪ねてきている。
ユミナからシュウジが自分の事を呼んでいたという追加の事実を聞いたノーヴェは、高まる緊張感を抱きながら彼女の案内に従い、選手達の下へ急ぐ。
ほぼ駆け足で急ぐノーヴェ、扉を開き、選手達がいるであろうトレーニング室にやって来た彼女が目にしたのは――――。

◇

「んっと、よ……っと」
アインハルトの要望に応え、久し振りに身体を動かすことになったシュウジ、入念にストレッチをする事で筋を伸ばしながら、己の肉体の調子を整えていく。
そんな彼を尻目にリング中央で静かに待つのは、U15の現役格闘技選手にして世界王者であるアインハルト＝ストラトス。彼女側のニュートラルコーナーには、ヴィヴィオ達がアインハルトの様子を伺っていた。
「アインハルトさん、まさか本当に挑むなんて……」
「で、でもアインハルトさんならきっと良い所まで行くと思うよ」
「そ、そうだよね。同じチャンピオンだし、それに向こうは引退して結構時間が経っているから、もしかするともしかするかも！」
アインハルトの集中を乱さないよう、敢えて小声で話す三人。同じ格闘技を競うライバルであり仲間、アインハルトの嘗て無い挑戦。同じチャンピオン同士という夢の対決を前に、彼女達の緊張は最大限に高まっていた。
実際、アインハルトがシュウジに勝てるのか？　と聞けば、多くの

者は分からないと答えるだろう。アインハルトの実力は本物だ。それはヴィヴィオ達を始め彼女と闘った事のある者達や見た者、その全員が認めている。格闘技の世界に本格的に入ってから全ての試合を勝利で飾っている彼女の強さは、十代最強女子であるエレミアさえ太鼓判を押すほどだ。

肩書きだけを見ればシュウジと変わらず、寧ろ試合回数だけを見れば、アインハルトの方が上と思える。覇王イングヴァルトを祖先に持つ覇王流の担い手、彼女が引退した相手に負ける要素は何処にもなかった。

しかし、対するシュウジ＝シラカワという男に関してはアインハルトの経歴など全く意味を成してはいなかった。相手の選手を悉く1Rで倒してしまう圧倒的破壊力、魔法をメインにした戦いでも殆ど魔力は使わず、己の技量だけで相手を圧倒する技術力の高さ。

唯一放った収束魔法の威力も凄まじく、その強大さはヴィヴィオの母親である高町なのはのスターライトブレイカー（S.L.B.）にも勝るとも劣らない。

力と技、そのどちらもが飛び抜けておきながらその全てを出し切った事は一度もない。数少ない試合の映像で、彼が汗一つ流さなかった場面がそれを物語っている。

今のアインハルトが負ける所は想像できないが、同じくらい目の前の男が負ける姿は想像できなかった。相手を等しく1Rで打ち倒し、その多くが謎に満ちた元世界王者――――格闘技界の中で呼ばれる彼の異名は〝魔人（デスペラード）〟。

その魔人に覇王が挑む。勝てる確率は不明、しかしヴィヴィオ達は期待していた。彼女なら、アインハルトなら成し遂げるのではないかと。嘗ての魔人を相手にもしかするとがあるのかもしれないと。

「ごめんごめん、待たせちゃったかな」

「いえ、全然」

ストレッチを終え、準備を万端に整ったシュウジがリングに降り立つ。フーカと同じ山吹色の胴着を身に纏い佇むその姿は、映像で見たあの姿と重なって見えた。

もうじき二人の戦いが始まろうとしている。この状況をせめて記録だけでもしておこうと、コロナとリオはデバイスを起動させて映像記録に努めている。
「ヴィヴィオさん」
「は、はい！」
「合図（ゴング）をお願いします」
「あ、了解です！」
アインハルトに言われ、ゴング役を買って出るヴィヴィオ、己のデバイスであるセイクリッドハートを呼び出し、その機能を使って時間制限を設けた。
3分1R、実際の試合形式とほぼ変わらない対戦方式。ヴィヴィオが、コロナが、リオが、そしてフーカが固唾を飲んで見守る中……。
〝カーンッ〟
試合開始のゴングが鳴り……。
「お前ら何やってるんだ!?」
「ナカジマ会長っ!?」
「ノーヴェ!?」
「え？　会長さん？」
突然乱入してきたナカジマ会長にアインハルトを除いた全員の視線が集まる。ゴングが鳴ったと同時に間合いを詰めて拳を繰り出すアインハルト、既に打ち放った拳はアインハルト本人でも止められず……。
「へぶらっ!?」
「あっ」
渾身の右ストレートがシュウジの顔面を捉えた。まさかのクリーンヒットに誰もが言葉を失う。アインハルトすら想像してなかった事態、ナカジマ会長が戻ってきた今これ以上続けるべきか迷う中。
「……フッ」
一撃を受けて、それでも尚余裕の笑みを浮かべるシュウジに、アインハルトは続行を決断した。
「お、おいアインハルト！」

遠くからナカジマ会長の制止の声が聞こえてくる。が、既に闘志に火が灯ったアインハルトの耳には届いてはいなかった。足に力を込めて追撃を開始するアインハルト、折角入れた一撃を活かせぬまま終わるわけにはいかない。この好機を逃してなるものかと、アインハルトは怒涛のラッシュを見せる。

しかし当たらない。アインハルトの乱打をまるで全て見切っているかのように避けるシュウジに、ナカジマ会長を含めた全員が息を呑む。アインハルトの拳、蹴り、その全てを紙一重で回避し続けているシュウジ、二人が闘うのはこれが初めての筈、なのにこうまで見切られてしまうのか。

（分かっていた事、ならばこれはどうです！）

手合わせして初めて分かる相手との差、しかしそんな事は既に分かっていたこと、敢えて手を出し続け、相手に自分の攻撃を慣れさせたアインハルトは次の攻撃の最中にフェイントを混ぜ込んだ。

相手の目が優れていればいるほどに嵌まりやすい手段、本来なら優れた眼力を持つヴィヴィオに対して用意していた仕込み技だが、アインハルトは出し惜しみなしでこれを繰り出した。

「っ？」

（こここっ！）

目まぐるしい乱打からの突然のフェイント、体が僅かに反応したシュウジの動き、ここが勝負の分かれ目だとアインハルトは更に懐に潜り込もうと――

「っ!?」

した瞬間、衝撃がアインハルトの顔面を貫いた。何が起きたか分からなかった。しかしこの体には突き抜けた衝撃の感触が確かに残っている。

見ればそこには構えを取っているシュウジの姿があった。先程までのノーモーションではなく、オーソドックスな構え、その姿は何処と無くコロナと似ていた。

試合の映像にすら映ってなかったシュウジが見せる初めての構え、これがシュウジの本来の戦い方なのか、驚きながらも体勢を整えよう

とするアインハルトだが。
「あぐっ！」
目の前のシュウジの拳が大きくなると同時にアインハルトの顔に被弾する。何かされた訳ではない、ただ単純にシュウジの放つ左拳が正確で、そして速かっただけだ。
（この左は芯に来る！　これ以上受けたら不味い！）
安全面を考慮してＤＳＡＡのリングには総じてダメージ軽減の設定が施されているが、そんなモノなど意味は為さないかの様にダメージを与えてくるシュウジの拳にアインハルトは戦慄する。もしこれが実戦形式なら、もしこれが安全面が考慮されてない場所だったら……。
（私はもう、とっくに倒されている！）
「くっ、あぁぁっ！」
降り注がれる拳、その一発一発がアインハルトの身体を打ち、響かせ、破壊していく。攻守が逆転し、一方的になるアインハルト。ここまで違うのか、ここまで実力が離れているのか、見せ付けられるシュウジという男の実力にヴィヴィオ達が絶句していた時。
「覇王、断空――」
後ろに飛ぶことでシュウジから離れ、遂に一か八かの勝負に出たアインハルト。腰だめに構えた拳には膨大な魔力の渦が集約されていき……。
「け――――」
しかし、それが打たれる直前、一瞬の間に間合いを詰められ、左の拳の連打をアインハルトはマトモに浴びてしまう。
直後、ラウンド終了のゴングが鳴ると同時にシュウジはアインハルトに背を向ける。立ったままのアインハルト、結局は圧倒されてしまったが、それでも倒れる事のなかった覇王にヴィヴィオ達は駆け寄っていく。
「アインハルトさん！」
「凄いよアインハルトさん！」
あの魔人を相手に倒れず、１Ｒ保って見せたアインハルト。ヴィ

ヴィオ達はそれぞれ彼女に声を掛けるが、アインハルトはその呼び掛けに応えずに前進し、目の前のシュウジと打ち合おうとする。
「ちょ、アインハルトさん!?」
「終わりました。終わりましたよ！」
「アインハルトさん!!」
「え？　あ、あれ？」
　ゴングが鳴った事に気付かず、意識を刈り取られていたアインハルト。左手一つで圧倒された事実に周囲の人間は絶句する。
「ひ、左手一つだけでも超一流かよ」
　見事過ぎて言葉が見付からない。試合を止める事も忘れ、見入っていたノーヴェが何気無しに溢した一言。しかしそれは残念ながら当てはまらない事に彼女達は気付かない。
　何故ならシュウジが本領を発揮する戦い方は丁寧なファイトスタイルではない。今のシュウジが披露したのは、先程フーカと闘ったコロナが見せたスタイルを独自にアレンジしたモノである。
　適度な運動で体を慣らした事で満足そうにリングを降りるシュウジ、その際フーカに向き直り。
「そうだ。フーカちゃん、君に一つ格言を教えよう。これはＤＳＡＡに於ける基本にして真理、覚えておいて損はないよ」
「か、格言ですか」
「うん、それはね……」
　〝左を制する者は世界を制す〟
　それは、今この場に於いて最も相応しい一言だった。

その7

荒廃した大地、空は荒れ、暗雲が立ち込め、世紀末を彷彿とさせる世界で二人の人間が睨み合う。

空で滞空し大地を睨む者、彼の者の視線の先に立つのは山吹色の胴着を着たＤＳＡＡの新参者。彼はプロになって初めてのトーナメント戦に出場し、その規格外の体術と常識外れの技術力で並みいる強豪達を１Ｒで打ち倒してきた猛者。

最早彼をルーキーと侮る者はいない。このＤＳＡＡに於いては年齢を除いて全てが公平にジャッジされる。女も男も魔法という力と格闘技という技を使い、その腕を競い合っていく。

故に彼女も形振り構わず勝負に出た。大気に宿る魔力を集め、自身の得意魔法である広域殲滅魔法を使い出す。

大気が震え、大地が騒ぎ出す。その高密度の魔力により試合会場の舞台である無人世界で大規模な魔法が使役されようとしている。

――――なのに、男は微塵も揺るがない。圧迫し、圧倒してくるプレッシャーを前に、山吹色の胴着を着た男は不敵に口角を吊り上げる。

「勝負を決める気か、ならば此方も切り札を出そう。――――かぁ……」

両手を腰だめに構え、蒼白い魔力を圧縮させていく。その様を見て女はアレは撃たせてはダメだと悟る。向こうの魔法が放たれる前に一気に勝負を決める。大規模な魔力を放出させ、広域殲滅魔法を発動させた女は周囲諸とも男を潰しに掛かった。

放射線状に放たれる魔力は周囲の岩を引き裂き、砕き、抹消していく。明らかに一つの試合で許される魔法の範疇を超えた力、しかしその嵐の様な魔力の中を男は危なげなく駆けていく。

「めぇ……」

降り注がれる魔力の奔流、それを紙一重で避ける男。肘が、肩が、

紫炎に揺れる髪が掠める中、それでも男の瞳は揺るぎなく女を捉えて離さない。
「まだまだぁッ!!」
足下目掛けて女の魔力が放出される。砕かれる足場、浮き上がり、無防備になった男に再び魔力の波が一つの濁流となって押し寄せる。直撃コースだと思われたが、男はあろうことか一緒に浮かび上がる岩を足場にして魔力の一撃を避けてみせた。
どよめく観客席、安全を考慮された筈なのに、伝わってくる戦いの迫力は見る者を震わせる危険な匂いが立ち込めていた。実況者も解説者も最早語る言葉を失い、二人の戦いを見守り続けている。
女の魔力は未だ尽きる事がなかった。無尽蔵とも思える魔力、しかしその顔色は焦りに満ちていて、されど彼女の攻撃は確実に男を追い詰めていた。
「はぁ……」
男が回避する度に足場にしていた岩石は砕け、逃げ場は無くなっていく。比例して女との距離は必然に縮まるが、最早関係ない。最後の足場が砕け、完全な無防備となった男に女は自らの勝利を確信した。その両手にはこれ迄温存していた彼女の魔力の全てが集約される。
「空中に逃げ場は無いぞ！　これでぇ、終わりだぁぁぁッ!!」
「めぇ……」
男には飛行魔法を使用する素振りは無い。元々使えないという話ではあったが、仮に使えたとしても時既に遅い。どんなに速く動けてもこの一撃を避ける事は不可能だ。
放たれる極光、渦となった魔力が一点に、一斉に放出される。今度こそ逃げられない。観客が、実況者が、解説者が、画面を通して試合を観ていた若き格闘技者達も、男の敗北を確信した。
――――しかし。
「っ!?!?」
女の放つ魔力の奔流を足場に男は、自ら圧縮した魔力で滑るように避けて見せる。曲芸の如き軽業、しかし誰も思い付かない方法で女の一撃を避けて見せた男は、その様子に絶句する彼女に向けて。

「波ァァァァッ!!」
濃縮に凝縮を重ね、更に圧縮した超特大の魔力砲撃を叩き込んだ。余波で大地が砕け、暗雲が消し飛び、女を女の魔力ごと呑み込んだ。
軈て男の放った魔力も収まり、辺りに静寂が訪れる。吹き飛んだ暗雲、荒野だった大地は荒野を通り越し不毛の地となり、深々と抉れ陥没した大地の中心には目を回して気絶し、無惨な格好となった女が寝ていた。
両選手の持つデバイスにはそれぞれ安全面を考慮した非殺傷設定が施されているが、それでも女が生きている事に驚きを隠せない。言葉を失う観客席、そんな中澄み渡る青空に向けて拳を突き上げる男に実況者は我に返りマイクを握り締める。
『な、何という激戦！　ＤＳＡＡの実況を努めて長くなる私ですが、この様な戦いは今まで見たことありません！　白熱したバトル、本日の戦いを見事制したのは突如現れた超新星――――シュウジ＝シラカワ選手だぁぁぁッ!!』
実況者の言葉に観客席から大歓声が溢れ出す。熱狂を超えた熱狂、常識を覆し、打ち破り、そして勝利して見せた男に、観客席から惜しみ無い称賛の声が投げ掛けられる。そんな観客達からの声援に、男はやはり不敵に笑って見せるのだった。
「――――やっぱ、すげぇなぁ。シュウジ選手」
「リーダー、また例の試合を見てたんスね」
暗い部屋の中で当時の試合映像をうっとりとした表情で眺めるのは、赤いポニーテールを揺らす高学年の少女、既にＵ１９の選手として活躍し、周囲にその名を轟かせるファイター。
ハリー＝トライベッカ。炎熱系の魔力を操り砲撃魔法を得意とする生粋の格闘技者、背後から聞こえてくる妹分の声にも耳に入らず、彼女の目には試合の勝敗を決めたシュウジ＝シラカワの最後の一撃しか入っていなかった。
「ちょっとリーダー、聞いてるッスか？　無視は流石に傷付きますよ」
「うぉっ!?　吃驚した。なんだいたのかよ」
「さっきからずっと呼んでましたよ？　シュウジ選手の試合映像にか

ぶり付くのも良いですけど、もうじきお昼ッスよ。そろそろ食べに行きましょうよ」
「か、かぶり付いてねーよ！　でもそうか。もうそんな時間か。なーんか作るのも気分じゃないし、たまには何処か食べに行くか」
妹分に言われ、時刻が既にお昼過ぎを指している。空腹で腹の虫も鳴り始めたし、気分転換も兼ねてハリーは妹分達と共に外食に出た。
砲撃番長の異名で知られるハリー、不良を自称しておきながら面倒見が良く、その容姿と性格から多くの女性ファンが付いている彼女。いつかＮｏ．１の座につく為に日々努力を重ねているハリーだが、ここ最近ある技を会得する為に特訓の毎日を積み重ねていた。
「それでリーダー、最近どうスか？　シュウジ選手のあの技、使える様になりましたか？」
「んにゃ、まだまだ実用性がねぇなぁ。なんつーか、使って違和感が拭えねぇんだよ」
「あー、何か分かるかも。リーダーってば殴りの延長な感じで砲撃出してますもんね」
「シュウジ選手のは両手の掌ですからねぇ。つーか収束魔法ってコントロールするのメチャ難しいって聞くんですけど、その上であの動きって出来るもんなんすか？」
「専門家によると殆ど不可能に近いらしいッスよ。特に相手の魔力を使って滑る所なんか相手との魔力の摩擦で消し飛ぶのが普通だって、前にテレビで見たッス」
「マジッスか。流石は魔人、端から聞けば人間じゃないッスね」
「ふふーん、だろ？　シュウジ選手はスゲーんだ！」
「……何故、リーダーが得意気なんス？」
後ろから聞こえてくる妹分達の話に自分の事の様に嬉しく思うハリー、彼女にとってシュウジ＝シラカワの戦い方は理想とも言うべきモノだった。相手との打ち合いに応じればそれに打ち勝ち、遠距離から厭らしく攻めてくる相手にも真っ正面から挑み勝利する。自信と気迫に満ちた迫力のある戦い方は、初めての目にした時からハリーの心を掴んで離さない。

残されている数少ないシュウジの試合の映像も全て保存し、日夜その戦い方を学び、己の力にしていく。その甲斐あってか近年は勝ち星が増え、最近では戦い方がシュウジに似てきたと言われて、その時は嬉しくて跳び跳ねそうになる程だ。

ハリーにとってシュウジ＝シラカワという男は指針であり目標だ。それ故に引退した事を知った時は三日三晩塞ぎ込んでいたが、今はもう過去の話。もしいつか何処かで出会う時が来たらその時は色々話をしたり、自分の技を見てもらいたいし、教えを乞いたいものだ。

そんな来るわけの無い日を妄想しながら歩くハリーの目に、ふとある店が入ってきた。いつの間にここに喫茶店ができたのだろうか？

不思議に思うハリーだが、そう言えばここ数年ここら辺は通って無かったなと思い出す。

「へぇー、中々洒落た店だな。うっし、なら今日の昼飯はここにするか」

「サ店スか。リーダーにしちゃ珍しいスね」

「喫茶シラカワかぁ、案外あのチャンピオンがやってたりして」

「アホ、んな訳あるか。いい加減腹減ったし早く入ろーぜ」

既に時刻は一時近くを指している。時間的に人は来てなさそうだが、今日は生憎の休日。最悪見知らぬ誰かと相席する事になるだろうが、空腹を満たす為には仕方がない。少しばかりの憂鬱な気分を抑えつつ店内に入ると……。

「いらっしゃいませ。何名様でしょうか？」

「……はひ？」

出会い頭に出会わす男性、それが自身が尊敬して止まない選手だと気付くのに、ハリーは数分ばかり時間を用した。

◇

リリカル月マジカル日

フーカちゃんをナカジマジムへ預けて早一週間、今日も今日とて喫茶シラカワは平常運営中である。

フーカちゃんは店のお手伝いとジムでの特訓、その両方を両立させていて、その甲斐あってか少しずつだが強くなっている。ナカジマ会長の手腕によるものか、それともアインハルトちゃん達先輩の皆から手解きを受けたのか、自分との組手をする際のフーカちゃんの動きは、日を追う毎にドンドン洗練されていく。

まだ本格的に格闘技を初めて一週間なのに、その成長速度は驚愕に値する。未だ自分との組手でマトモに返してはこれていないが、それでも凌いで反撃を試みる強かさは生まれている。この調子ならウィンターカップが開催される頃には、リンネちゃんといい勝負が出来るかもしれない。

流石は数多くのランカー選手を有するナカジマジム、ナカジマ会長に念を押してお願いした甲斐があった。

本来ならそこへ勉学を教えていきたい所だが、生憎そこまでの時間はまだ取れていない。お店も放って置くわけにもいかないし、何よりフーカちゃんにそこまで負担を掛ける訳にはいかない。少なくともウィンターカップが終わるまでは。

それでも試しに出す問題集に手を付ける辺り、フーカちゃんはやっぱり真面目な娘なんだなぁ。ホント、あんな娘を捨てた何処そのご両親の正気を疑うね。

お店とジムの両立を頑張ってこなしている上、更には勉強も頑張るフーカちゃん、もしウィンターカップで良い成績を出せたなら、その時は何かご褒美を出してもいいかもしれない。

そんな訳で今回はそんなフーカちゃんの頑張った話で終わりにしようと思ったんだが、実はこの日変わったお客がやってきたのだ。

ハリー＝トライベッカちゃん。アインハルトちゃん達と同じＤＳＡＡの総合魔法戦格闘技選手で年齢階級はＵ１９で――――なんと、俺

のファンらしいのだ。
動揺のし過ぎで禄に会話はしてないが、彼女の舎弟らしき娘からは、ある試合から自分の大ファンで、最近は自分の技を真似しながら試合に臨んでいるのだとか。
まさか自分なんかの試合を参考にしているとは露程思わず、思わず照れてしまう。砲撃番長として知られている彼女だが、その事を知ったのは彼女が店から出た後、何気なく調べたネットに記載されていた。
他にも様々な選手の事が掛かれており、その中には当然の如く自分の名もあった。こうしてみれば選手一人一人に特徴があり、結構楽しめるものだ。
現役の頃は相手の名前と戦い方位しか覚えておらず、今にしてみれば勿体ない日々を送っていたのかもしれない。誰かの試合を参考にした事とかなかったからなぁ、少し悔いが出来てしまう。
その後、しどろもどろなハリーちゃんとそれとなく話をしながら料理を食べてもらった。近くまた来るというハリーちゃん達を見送りながら、俺はこの世界にやって来て充足感を覚えるのだった。

リリカル月ＶｉＶｉｄ日
なんか最近、ＤＳＡＡの娘がやたら出入りしている気がする。この前ハリーちゃんが来たと思ったら、今度はヴィクトーリアちゃんというお嬢様がやって来た。話の内容は単なる世間話だが、何故か自分の事を様付け呼ばわりされてしまう。
俺ってばそんな大した人間じゃないから敬語はいらないと言っても聞いてくれないし、今度知り合いの娘を連れてくると言って出ていっちゃうし……。何か俺、良からぬ企みに巻き込まれつつある？悪意とか利用するつもりは無さそうだから静観するけど……大丈夫だよね？
心配だから同業者の娘さんであるミウラちゃんに相談を持ち掛けたんだけど、何故か遠い目をして溜め息を吐かれた。理由を訊ねてみるとなんとミウラちゃんもＤＳＡＡに所属し、選手として活躍し

ているらしいのだ。
この店を開いて結構経つし、ミウラちゃんのご両親には会長の次に世話になっているからこの事実は中々ショックだった。なんかミウラちゃん終始不機嫌だったし、もしかしたら自分がフーカちゃんの事で相談しなかったのが仲間外れにされたと思い拗ねてるのかもしれない。
うーん、この埋め合わせはどうすれば良いのか。年頃の娘相手に四苦八苦する自分なのでした。

その8

――ワシ事　フーカ＝レヴェントンの朝は早い。日が昇り、太陽が顔を出し始めた時間帯、カーテンの隙間から差し込んでくる日差しの光で覚醒したフーカは枕元に置かれた目覚まし時計が鳴り始めた瞬間に止め、欠伸をしながら目を覚ます。

店長が用意していた胴着に着替え、顔を洗って歯を磨く。全ての身支度を終えて外に出ると、既に準備を終えて待っている店長ことシュウジさんがいた。

「おはようフーカちゃん、その様子だとゆっくり眠れたみたいだね」

「はい。お陰様でバッチリです」

「それは重畳。じゃあ行こうか」

「オス！」

朝起きたワシとシュウジさんが最初にするのはランニング、片道10キロの道のりで最初は完走するのも大変じゃったけど、今では準備運動となっており、シュウジさんと世間話が出来る程度には身体が慣れてきている。

清々しい朝、今まではその日その日を生きていくのに精一杯でそんな余裕はなかったから知らなかったが、朝日に照らされたクラナガンの街並みは幻想的で朝焼けの色となった建物を見たときは少し感動したものじゃった。

シュウジさんが言うにはそう言う得した気持ちや経験を〝早起きは三文の徳〟というらしい。三文と言うのはシュウジさんの出身世界の昔の通貨の事らしく、微々たる違いだがそれでも得るものはあるという中々深い意味のある言葉なのだとか。

シュウジさんは頭も良い。普段からワシに試す物言いをする人じゃが、それは頭の出来が悪いワシを見下すモノじゃなく、考えればワシでも理解できるモノで且つワシの将来に役立つモノばかりで、悩むワシを見てはそれとなく教えてくれる優しい人じゃ。

けれど優しさだけがシュウジさんではない。時には厳しく、それこそどんなに悩んでも手を貸すことは無いときはざらにある。悩んで悩んで悩み抜いて、それで漸く出来た答えをあの人は笑うことなくちゃんと見て、そして間違った所をどうして間違えたのかを懇切丁寧に教えてくれた。優しさと厳しさを兼ね備えたお人、それがワシから見たシュウジ＝シラカワという人間の在り方じゃった。

――――いたことが無いから分からんが、もしワシに父親がいたならこういう人なんかな。偶にそう思える位にワシはシュウジさんに心を許していた。ワシの為に親身になって応えてくれる人、ナカジマジムの皆さんもそうじゃが、最近のワシの周りは少しお人好しが過ぎる人が多い気がする。

けれど、それを心配とは思わない。何故ならジムの先輩達は皆ワシなんかよりもずっと強い。シュウジさんに至っては嘗ての世界王者というのだから心配するだけ無駄というものじゃろう。

そんな強くて優しい人達に巡り会えた今のワシは、間違いなく幸せ者じゃ。そんな皆の想いに応える為にもワシは強くなる。強くなって、リンネの目を覚まさせてやる。

――――その為には。

「よし、着いた。それじゃあ軽くストレッチをした後はいつもの組手をしてみようか。フーカちゃん、遠慮は無用だよ」

「お、おおおオッス!!」

辿り着いた浜辺、海風は穏やかで気持ちが良く、これ迄の嫌な思い出を全部消えてしまいそうな程に空気は澄んでいた。……それなのに何故震えた声が出てしまうのかって？　そんなの分かりきっている。

シュウジさんは優しくはあるけど甘くはない。ワシを強くすると言った以上妥協はしないと言った。それはつまりワシをリンネと闘うギリギリまで徹底的に鍛え上げるつもりなのじゃろう。目の前に立つシュウジさんからは普段の温厚な雰囲気は微塵も感じない。今ワシの前には嘗ての世界王者が立っている。

つーかいつも思うのじゃが、シュウジさんの周りの空間歪んでね

？　魔法の力なんて微塵も感じないのにこの圧力は一体なんなんじゃろ？

ワシは恵まれている。恵まれて、幸せで、まるで夢を見ている気分じゃ。

「て、テリャァァッ!!」

「初動が遅い！　カメムシの方が万倍速く動けるぞ！」

「ジェロにィィィィッ!!??」

まぁ、それに見合う地獄があるのも事実なんじゃけどね。良いことと悪いこと、それの両方がいい具合にバランスが取れている。シュウジさんの扱きに色々磨り減っていたワシはそう思うことにした。

その後、シュウジさんとの組手を乗り越えたワシはヘロヘロの身体で店に戻り、シュウジさんの作る朝御飯を堪能してから仕事に入る。この時いつも思うのだけどシュウジさんの作る料理には何か特別な滋養作用があるのだろうか？　朝の組手で何れだけ疲れても料理一つで全快になるのは流石におかしいと思うのじゃが……。

特に劇薬とかヤバい薬を使った様子はなく、あれが普通の手料理と言うから驚きじゃ。どうやら此処に来るお客さんもそれが目的で、良く年配の方や仕事に疲れたサラリーマン風のお客が来るのはそういう理由があったらしい。

本人は真心以外変わった事はしていないという。一度その事が噂になりその噂を聞き付けた警邏隊の人が事情聴取に来て家宅捜査しに来たという大騒ぎがあったらしい。

結果は当然の如く白。危険薬物の類いは一切なく、シュウジさんの容疑は無事に晴れた。その後も管理局の局員さんが来て詳しく調べたが、やはり怪しい所はなく、常連の人達も中毒反応は検出されなかった事からシュウジさんは無実となった。

というか、格闘技以外にも色々伝説を作ってたシュウジさんにワシは驚きを通り越して呆れてしまった。だから時々渋い顔のおじさんが来てたんじゃな。明らかに堅気の雰囲気じゃなかったから驚いた。

その後、お昼を過ぎて夕方に差し掛かる時間帯。一足早く店をあ

がったワシは荷物を手にナカジマジムへと向かい、ナカジマ会長やハルさん先輩たちと一緒に練習に励んでいる。
シュウジさんとの組手もあってどうにかハルさん達の練習に付いていけて、スパーリングの方も何とか彼女達と打ち合えている。見切りと身体の反応速度、そして身体全体のパワーが桁違いに上がっていると皆さんは言うけれど、あまり実感は湧かない。何せどんなに自分で速く動いたつもりでもシュウジさんには一つも当たらないのだから。
その事を皆さんの前で口にすると何故か羨ましがられた。特にハルさんは一度シュウジさんにコテンパンにされた事もあり、是非もう一度手合わせしたいと凄みを増してワシに詰め寄ってくる。
お店もあるからとやんわり断ってもうーうー唸って納得しようとしないハルさん。普段は凛として格好いいのにこの時のハルさんは少し可愛く見えた。
で、結局諦めきれなかったハルさんはワシのデバイスを作る代わりにもう一度勝負してくれと頼み込んできた。確かＤＳＡＡの試合にはデバイスの持ち込みが必須というからいつかは何とかしなくてはならない課題だが、まさかハルさんからそう言われるとは思わなかった。
グイグイと詰め寄ってくるハルさんにシュウジさんに伝えておきます位にしか言えなかった。いやだって滅茶苦茶怖かったんですもの、ハルさんの目が血走ってたんですもの。ヴィヴィオさん達めっちゃ引いてましたよ？
その後、シュウジさん経由で知り合ったミウラさんに何とか宥めて貰いその日はそれで解散となったのじゃが……うぅ、シュウジさんに何て言おう。
そんな年相応の悩みと充実感を得ながら、今日もワシの日常は終わっていくのだった。

◇

メカリル月ウィッシュ日

フーカちゃんとの共同生活を続けて早2ヶ月、そろそろウィンターカップの予選が始まる頃。今日も自分はいつも通り喫茶店でお客様を相手に商売を営んでいた。

今日はハリーちゃんもヴィクトーリアちゃんも来ておらず、久々に落ち着きのある時間だった。賑やかなのも良いが此処は他のお客さん達が憩いの場にしている喫茶店、静かなのが好ましい。

そんな今日の店に訪れてきたのは久し振りの常連さん、ゲンヤさんが来てくれた。ゲンヤさんは以前自分にある容疑が掛けられた時に色々手を尽くしてくれた人で、そんな経緯があってかこの人とはそれなりに話をする仲となっている。

交わす話の内容は専ら世間話で時々親父臭い事を言う人だが、こう見えてこの人は現在六人の娘を抱えており、その内五人は管理局に勤めているという。

あのナカジマ会長もゲンヤさんの娘さんらしく、独立し、立派に子供達を育てている彼女をゲンヤさんは誇らしく語っていた。

後は何処か男でも見付けて結婚してくれれば文句はない何て愚痴りながらもゲンヤさんの表情は凄く穏やかだった。まぁ、彼の娘はどれもこれも訳有りだ。その事を考えればゲンヤさんが危惧するのも無理はないと言えるだろう。

でもナカジマ会長を見ている限りだとその心配は無いと思うけどね。昔はヤンチャだったかもだけど今は落ち着きのある子に育ったし、そこら辺の事情はゆっくり様子を見てもいいと思う。

その後は怒らせてしまったミウラちゃんの事とか色々相談に乗って貰い、気分良く帰って貰った。

フーカちゃんも帰宅し、今日の出来事を聞きながら店の後片付けを始める。その際にフーカちゃんからアインハルトちゃんの再戦の

話を聞かされたのだけれど……正直困っている。
いやね、アインハルトちゃんもそうだけど自分と戦って欲しいと言う子が最近増えてきているんだよね。今後こう言う事が増えてきたら店への影響も出てきてしまうからなるたけ避けたい所なんだけど。
何か良い案は無いものか、悩んでいた自分はある教会修道女の人に通信で相談した。この人も先の容疑者騒動で世話になった人で、偶に自分の店に顔を出している。彼女はシャッハと呼ばれ、浮浪児の子供達の面倒を見たりなどとても頼れる女性だ。
夜分遅く、失礼だと思いながらも相談した自分を快く受け入れてくれたシスターシャッハ。そんな懐の深い彼女に相談したところ、何とも微妙な解決案が返ってきた。
本当にこんな事で何とかなるのだろうか？　疑問に思う所だが……いや、思慮深い彼女の事だ。きっと意味があるに違いない。

――その後、条件付きで再戦を承諾したシュウジ、意気揚々とその条件に挑んだアインハルトだが、結局彼との再戦を叶える事はなかった。
〝自分と戦いたければこの麻婆を完食してみせよ〟
その条件を引き換えに挑んだアインハルトは一口目で撃沈。その凄惨たる光景に誰もが口を閉じ、無闇に彼と戦って欲しいと言うものはいなくなった。
ただ、条件を出したシュウジ本人は何処か納得出来ない様子で首を傾けていたとか。
……尚、この麻婆を完食出来たモノはとある修道女が唯一だと噂が立つのはそれから暫く後の話である。

その9

G月J日

シスターシャッハの提案でどうにかアインハルトちゃんのリベンジを回避出来て更に数日、ここ最近起きた出来事をさらりと書いていこうと思う。

まずフーカちゃんのデバイスだが、色々騒動があったけれど結局はアインハルトちゃんが人を伝ってその手の技術力を持つ専門の人に作って貰う事になった。自分と闘う事を条件にしていたから疑問に思ったが、何でも自分へのリベンジに燃えて後先考えなかった事を申し訳無く思い、せめてもの罪滅ぼしにと自ら買って出てくれたらしい。

別に店に直接被害があった訳じゃないからそんなに気にしてないが、どうやらその事でナカジマ会長にしこたま怒られたのも理由の一つらしい。まぁこれも若さによる経験から来るものだと思えば可愛いものだ。後日やって来て平謝りするナカジマ会長に気にしないでと自分も受け入れこの事はこれで終わりにした。

さて、そんな訳でフーカちゃんのデバイスだが、これがまた可愛らしい白虎のぬいぐるみでパッと見れば仔猫の様にも見える。名称はウラカンでフーカちゃんに愛称としてウーラと呼ばれている。

自立型のデバイスでその性能は高く、フーカちゃんの高い魔力の制御を完璧にこなしていて今ではすっかり彼女の相棒となっている。彼女のデバイスを用意できなかった事に少々寂しさを感じるが、まぁ自分にはウーラの様なデバイスは作れないからこれはこれで良かったんじゃないかと思う。

――ただ、初めてウーラと自分が顔を合わせた時、いきなり仰向けになってお腹を見せてきた時はビックリした。自分はあまり動物には懐かれない方だから驚きと嬉しさと合わさって何とも言えない心地だった事を覚えている。

それ以来フーカちゃんと一緒に店の手伝いをする事になったウー

ラ、ポジション的には店のマスコットキャラ、フーカちゃんに続いて癒し枠が増えた事でお客の反応も上々、最近はウーラ目的に若い娘達も来ているから店に結構貢献してくれている。

さて、デバイスを手にして大会に向けての準備は万端となっているフーカちゃんだが、実はリンネちゃんからナカジマジムに招待状が届いているらしく、今度の休日で彼女の試合を観に行く事になっている。

しかもその招待状は自分にも来ていたりする。それもリンネちゃん本人から。丁度その日は店も休みだし、必要な買い出しも終わっているから別に構わないから良いが……何だろう、先のヴィクトーリアちゃんといい最近の自分は良く流されている気がする。

まぁ、ロイ翁の孫娘たってのお願いだし拒む理由もないから彼女の誘いを受けることにしたんだけどね。その日はフーカちゃんがジムから帰ってくるまで彼女と色々話をしたりして時間を潰した。

ロイ翁の話をしているリンネちゃんは年相応の顔をしているけれど、店を出る時はやっぱり何時もの無表情となっていた。年頃の娘があそこまで追い込まれるなんて相当だ、あの子の笑顔の為にもフーカちゃんには是非頑張ってもらいたい。

◇

――そして、大会当日。リンネの招待状の案内に従い特別観戦室、所謂ＶＩＰルームに通されたシュウジはそこで待っていた彼女達に一瞬面食らう。

「君達は……」

「お久し振りですシュウジ様、ご壮健そうで何よりです」

「お、お久し振りッス！」

気品ある振る舞いで礼を返してくるのは雷帝の血を引くヴィクトーリア＝ダールグリュン。格式高い貴族らしく丁寧に挨拶をしてくる彼女にシュウジも少し気圧されながら挨拶を返した。
「これはご丁寧にどうも、ヴィクトーリアちゃん。ハリーちゃんも元気そうで何よりだ」
「ヴィクターで結構ですわ。嘗ての伝説の選手にこうして再び見えた光栄、心から感謝しています」
「元だよ。今ではしがない喫茶店の店主さ。……所で、そちらのお二人は？」
「は、はひぃぃぃっ！　わ、私はエルス、エルス＝タスミン。得意魔法は拘束魔法、将来の夢は警邏隊です」
　シュウジという生ける伝説を目の当たりにして混乱しているハリーとエルス、特にエルスの方はシュウジと初対面の分この中にいる誰よりも挙動不審に陥っていた。
「そしてこちらが……ほら、ジークもご挨拶なさい」
「じ、ジーク。ジークリンデ＝エレミア……です」
　ヴィクターの背後に隠れながら挨拶をしてくる黒を強調とした少女、彼女の自己紹介に心当たりのあるシュウジは先日の調べで得た知識をフル稼働させて脳内で照らし合わせていく。
「ジークリンデ……もしかして、君がＵ１９の？」
「は、はい。一応ワールドチャンピオン、だったりしてますぅ」
　鉄腕と呼ばれ、総合・格闘の両方のタイトルを保有している十代女子最強の少女、試合の時とは違い今は非常に大人しい彼女にシュウジは再び面食らった。
「ちょっとジーク、もう少しシャキッとしなさいな。少しは人見知りが治ったんでしょ？」
「む、無理やよぉヴィクター、だってこの人世界王者やよ！　チャンピオンやよ！　そ、そんな人相手に真っ正面から何て、ウチには無理ぃ」
「あなたもチャンピオンでしょうが！」
　ジークとヴィクター、互いに親しみを込めて呼び合う彼女達。二

人は似ても似つかないが何故か姉妹や親子のように見えるのはヴィクターのその面倒見の良さから来ているのだろう。
　その後も少しずつ話をしながら彼女達の緊張を解していくと、時刻は既に次の試合へ差し掛かり、リンネの出番となった。彼女の登場に観客席は大いに沸き立つが、それに反してリンネの表情は無愛想のまま。余程試合に集中しているのか、それにしては彼女の視線は別方向へ向けられている。
「リンネちゃん、どうしたんだろ？」
「恐らくはヴィヴィオさん達がいる所でしょう。彼女達は私達とは別のＶＩＰに通されていますから、恐らくはそれを気にしているかと」
「目の前に対戦者がいるってのに、ふざけた奴だぜ」
「ちょ、ハリーさん！　シュウジさんの前ですよ!?」
　前々から気に入らなかったリンネの態度にハリーの何時もの悪態が出てしまう。ハッと我に返って口を両手で塞ぐハリーだが、シュウジは彼女の言葉使いに気にするなと笑って流す。
　そして始まる試合、終始相手選手を圧倒するリンネはキャリー＝ターセルを反撃を許さぬまま瞬殺。１ＲＫＯ、その劇的な瞬殺劇に観客席は会場が奮えるほどの大歓声を挙げる。
　投げ、打撃、蹴り技、そのどれもが高レベル水準で同年代で彼女に比肩する破壊力の持ち主は現状アインハルトだけと言われている。
　そんな彼女の戦いを見てシュウジは思う。危ういと、初めて見た時から何処か追い詰められている節がある彼女だったが、今回の試合を見て確信した。今のリンネ＝ベルリネッタは非常に危うい部分があると。
「ヴィクターちゃん、一つ聞いて良い？」
「はい。……リンネの事ですね」
「彼女はいつからこんな戦い方を？」
「……初めから、デビューしてからずっとです」
　目を伏せ、何処か申し訳なさそうにしているヴィクターにシュウジはうーんと唸って腕を組む。リンネの戦い方は勢いがあって見るものを興奮させる豪快さがある。それは理解できるし、それが彼女に

合った戦い方だというのは理解できる。
　彼女のコーチであるジル＝ストーラも優秀な人なのだろう。リンネの類い稀な才能を十全に活かせる育て方をしている。彼女の今の動きから察するに、今のリンネはタフネスを鍛える為のトレーニングを重視しているのだろう。それは別に良い、間違ってないし、寧ろ良くそこまで気付けたと称賛を送りたい程にジルの格闘技に於ける教育理論は完璧だった。
「でも、そこじゃあないんだよなぁ」
　リンネ＝ベルリネッタは強い。もって生まれた素質の高さもそうだが、それを上手く自分でコントロールしている。己のコーチを信じていないと彼女までの戦い方はしないだろう。
　ジルとリンネ、この二人は遠からずＤＳＡＡにその名を刻む名コンビになるだろう。尤も、そこまで勝ち続けられたらの話だが。
「やはり、分かりますか？」
「え？　あぁうん。まぁ分かるっちゃあ分かるかなぁ。今のリンネちゃんは危ない、具体的に言えば必死過ぎる。もう少し肩の力を抜かないといつかポッキリ折れるぞ」
「そうなんですよねぇ。私も遠回しに言っているのですが、どうも上手く伝わらなくて」
「こればっかりは本人が気付かないとなぁ」
　そうなんですよと深い溜め息と共に吐き出されるヴィクターにシュウジは彼女からオカンの性質を感じ取った。いや、どちらかと言えばクロウ＝ブルーストの様な貧乏クジの苦労人気質に近いかもしれない。
　若いのに大変だなぁ、と他人事に考えるシュウジだが、この時騒がしい事に気付く。恐らくは何処からか聞き付けたメディア連中だろう。奴等に出会すのは少々面倒だと察したシュウジは席から立ち上り扉の前に出る。
「もうお帰りになるのですか？」
「あぁ、取り敢えず見るものは見えたし、フーカちゃんの今後の課題も分かった。明日の店の仕込みもあるから今日はこれで失礼するよ」

「そうですか。シュウジ様、本日はお忙しい所ありがとうございます。機会があればまたお会いしましょう」
「しゅ、シュウジさん、今日はありがとうございました！」
「お疲れ様です！」
「ど、道中お気をつけて～」
　優雅に見送るヴィクターを初め、直立不動から９０度の見事な直角具合で頭を下げてくるハリーとエルス、その後ろでは未だに慣れてない様子のジークの別れの挨拶を受け取ったシュウジはメディア達が雪崩れ込んでくる前に部屋を後にする。
　その後、フーカと一緒に帰ろうと会場の周辺をアチコチを見て回るシュウジ、時間も過ぎて空は夕焼けに染まり、全ての試合を見終えた観客達がゾロゾロと会場を後にしている。そろそろフーカ達も出てくる頃合いだろう。タイミングを見計らって再び会場に足を運ぼうとする彼に声が掛かる。
「シュウジさん、来てくれたんですね」
「リンネちゃんか、今日は誘ってくれてありがとう。試合、見てたよ。凄かった」
「そ、そうですか。ありがとうございます」
　声を掛けてきたのは先程まで話題に上がっていたリンネ、その本人だった。相変わらずの無愛想な表情だが、シュウジと話している時は比較的柔らかく見える。それは彼が嘗ての世界王者なのか、それとも亡き祖父を知る数少ない人間の一人だからなのかは定かではない。
「でも、ちょーっと惜しい部分があったかなぁ」
「……そうなんですか？」
「あぁ。君、右ストレートを出すとき左腋が開いてたでしょ？　あれじゃ力は分散して大したダメージにならないよ」
「あ、それジルコーチにも言われました」
「だろ？　忘れない内に身体で覚えようか。ほら、試しに打ってみ」
「は、はい！」
　思いがけず即興でミット打ちをする事になった二人、シュウジに言われた指摘を意識しながら彼の掌に向けて拳を打ち込むリンネ、パ

シンパシンと小気味の良い音が辺りに響く。
「うん、今ので大体矯正出来たかな。後はコーチの指導に従いながら自分で磨き上げていくと良い――――」
そこまで言って自分のしてきた事が敵に塩を送る行為だと気付いたシュウジは今更ながらしまったと己の不注意さを呪う。どうもフーカの相手をしてきた影響で誰彼構わず指導する悪癖が出来てしまっているようだ。
早くこの癖を直さないと。そう思いながらその場を後にしようとするシュウジだが。
「……やっぱり」
「ん？　リンネちゃんなんか言った？」
「シュウジさん。もし、もし今度のウィンターカップで私が優勝したら、ジルコーチと一緒に私を鍛えてくれませんか」
「ごめん無理」
リンネの突然のスカウト、彼女の思いきった誘いにシュウジはやはり即答で返すのだった。

その１０

「――――どうしてもダメ、ですか」
空が夕焼けに染まり、夜の帳が下がり始めた頃。自分の心からの誘いを即答で断られた事に少なからずショックを受けたリンネは動揺しながらも今一度シュウジに訊ねた。
しかし、そんな彼女の訴えにシュウジは首を横に振る。喩え大金を積まれたとしてもシュウジは彼女の要望に従う事はない。少なくとも今のリンネにはどれだけ頼まれようと受ける気はなかった。
「今の俺はＤＳＡＡの格闘技選手じゃない、しがない喫茶店の店主さ。今回だってここに来たのは君のお呼ばれに応えただけ、本来俺は此処にいるべき人間じゃないんだよ」
「……」
諭すようなシュウジの言葉にしかしリンネは納得出来ないといった様子で俯く。何故そこまで自分に拘るのか今一つ理解出来ていないシュウジがどうしようかと頭を悩ませていると、後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。
「シュウジさん、此処にいたんですか。お待たせしまってすみま――――リンネ!?」
「フーちゃん……」
会場から出てくるフーカとナカジマジムの会長と選手達。二人の邂逅、因縁ある両者が顔を合わせた事でその場空気が一気に重くなっていく。
「リンネ、お前またシュウジさんに突拍子の無いお願いを言いに来たんか」
「……フーちゃんには関係ないでしょ」
「関係あるわ！　シュウジさんはワシの雇い主じゃぞ！」
「私が話しているのはシュウジさんだよ。邪魔しないで」
「お前こそシュウジさんとは何の関係も無いじゃろうが！」

「あれ？　もしかして俺初めてのモテ期到来？　　親戚の子供に遊ぶのをせがまれる叔父さんって、こんな気分なのかな？」
「シュウジさん、今真面目な所だから口を閉ざしてね」
　険悪な雰囲気で言い合う二人、その主題となっているのは今二人の間に立たされているシュウジだ。端から見れば二人が自分を取り合っている様にも聞こえてくるから思わずそんな事を口にしてしまう。そんな彼を呆れながら諌めるのはヴィヴィオ達と一緒にいたミウラだった。
　格闘技選手としてではなく、世話になった親御さんの娘というある意味この中の誰よりも親しい間柄の二人、それ故に彼女のシュウジに対する言葉には色々と刺があった。
「あ、ミウラちゃんおひさー。この間はゴメンね。色々と相談しないで」
「いえ、それはもう気にしてませんので。格闘技の事に関しても私の方から黙っているようにお父さん達に話してましたから」
　他の選手達の時とは違い砕けた言葉遣いをするミウラとシュウジ、互いに遠慮のない物言いから二人の仲の良さが伺える。尤も、それが男女関の艶めいたモノではなく、年の離れた親戚の様なものであると見てとれる。
「しかし、ミウラちゃんも大したもんだよねー。その若さでワールドランカーとは、若い子の成長は凄まじいなぁ」
「シュウジさんがそれを言いますぅ？　でも、えへへ。悪い気はしませんね」
　険悪なフーカとリンネを置いて談笑する二人、おろおろするヴィヴィオ達を見てそろそろ止めようかとシュウジが動こうとした時、リンネの手がフーカの首へ伸びた。
「何度も言わせないで、私はフーちゃんとは違う。フーちゃんみたいに誰とでも仲良くなることなんて出来ないし、ヘラヘラと笑い合う事なんて出来ない。私の事は、もう放って置いて！」
「このっ！」
　ギリギリと首を絞めてくるリンネの手をフーカは魔力を手に込

め、脚から腰、腰から肩へ力を伝わらせる。それは以前シュウジの無茶ぶりで教わった必殺の一撃を放つ為の力の伝達法である。
奇しくも、それはアインハルトの持つ断空拳に良く似ていた。短い間だが骨身の芯にまで叩き込まれたフーカの一撃、それはリンネの手を弾くだけには留まらず、彼女の体を風圧だけで退かせてみせた。
フーカの飛び抜けた打撃力、それを目の前で見たリンネは一瞬だけ驚愕の色に染まる。アインハルトやヴィヴィオ達も驚きに目を見開かせる中、シュウジだけは満足そうに頷いていた。
「リンネ、ワシは言った筈じゃ。辛いときは一人で抱え込まずワシを頼れ、辛いなら辛いとハッキリと口にすればいいじゃろう」
「……フーちゃんには言っても分からないよ」
フーカの説得の言葉をリンネは受け入れない。何故彼女がここまでフーカを拒むのか、言葉だけでは伝わらない。やはり力付くでも分からせてやるしかないと誰もが思った時、彼女達の間にシュウジが割り込んでくる。
「あー、ゴメンね話の途中で」
「し、シュウジさん？」
「……」
「何だか話を聞いている限りだとこのままじゃお互い平行線のままで埒が明かないからさ、一つ賭けをしようじゃないか」
「か、賭け？」
「シュウジさん、何を？」
突然二人の間に入って話を仕切り出したシュウジ。何だか嫌な予感がすると苦労人気質のノーヴェが察しても時既に遅し。
「そうだね。今度のウィンターカップに関係なくリンネちゃんはフーカちゃんと戦って欲しい。もしリンネちゃんがフーカちゃんに勝てば、君の望みに応えよう。君が俺を専属コーチとして雇いたいと言うのなら、俺は喫茶店を畳み、君が望む限り君の為に尽くすことを約束しよう」
「なっ!?」
「……本当ですか？」

「勿論、男に二言は無いさ。けれどフーカちゃんが勝った時、その時は……分かってるね」
「……良いでしょう。それならば私にも異存はありません。それでは皆さん、ご機嫌よう」
シュウジの突然の提案に一同は言葉を失う。対してリンネは自分にとって思いもよらない好条件に不敵な笑みを浮かべてこれを承諾する。丁寧な挨拶をしてその場から立ち去るリンネ、それを見届けたシュウジはフーカの方へ振り返り……。
「そんな訳でフーカちゃん、俺達も頑張ろうか」
笑顔でそう言い切るのだった。

◇

「だからゴメンって、フーカちゃんとリンネちゃんの話を聞いているといてもたってもいられなくてさー」
「だからって、あんな条件を出すなんてシュウジさんの正気を疑いますよ！」
大会の会場を後にして数分、シュウジの運転する車内。あれから方々の追求を回避しながら帰路に就いたシュウジは助手席で不貞腐れた様子で頬を膨らませるフーカに頭を悩ませていた。
自分とリンネを戦わせる。ただそれだけの為に己の店すら賭けの対象にする。自分が負ければこれまでシュウジと一緒だった……これまでの全ての出会いの原点だったあの居場所が無くなってしまう。その重圧よりもあっさりと己の店を掛け金として支払うシュウジにフーカは憤りを感じていた。
「あの店は、シュウジさんがチャンピオンの座を捨ててまで手に入れたかった場所じゃなかったんですか！　そんな簡単に手離すほどあ

の店は軽いんですか!?」
「え？　いや、うん。まぁ、そうだね？」
　言えない。個人的には別にそれほど苦労して手に入れた覚えなどないなんて、フーカちゃんの為に質に入れる程度位に軽く考えてましたなんて、口が裂けても絶対に言えない。だってこの世界に来たばかりの頃なら兎も角、今ならその気になればお金を稼ぐ方法なんて幾らでも見付かるんだもの、仕方ないじゃない。
　しかしそんな自分の心境を知らず涙眼で睨んでくるフーカにシュウジはどう言い繕うかその頭をフル回転させる。
「でもねフーカちゃん、俺は後悔してないよ。店を賭けにしてでも俺はフーカちゃんとリンネちゃんを戦わせてやりたい。君達二人の仲を取り持ってやりたい、そう本心から言える位に俺は君達に入れ込んでいるんだ」
「どうして、どうしてワシ等の為にそこまで……」
「それは、俺の方が少しばかり大人だからだ」
「大人……だから？」
「子供が必死になってるんだ。それを少しでも支えてやりたいというのが大人というものだ。まぁ、こう言った遠回しみたいな事しかできないがな」
　大人という便利ワードを使っての言いくるめ、我ながら汚いやり方だなと自分に呆れながらも横目でフーカの様子を伺う。
　俯いて辺りが暗くなってきたからその表情は読み取れないが、どうやら怒ってはいないようだ。もしかしたら店を賭けた事にプレッシャーを感じているのかもしれない。頭を撫でて気にするなと口にするシュウジにフーカは小さく涙声で返事をした。
　この日、フーカは己に誓った。今よりもずっと強くなって、リンネやジムの人達にも認められ、プロになって成功したら。この人に恩返しをしよう。自分の為にここまで尽くしてくれるシュウジ＝シラカワという男の為に今度は自分が返していこう。
　頭に伝わる無骨ながらも暖かい掌の温もりに包まれながらフーカは決意した。

――そして、時は過ぎて季節は冬。ウィンターカップが遂に開幕される。

その11

――――夢を、見た。私がまだ小さかった頃、薄暗い玉座に縛り付ける様に座する……私にとって最も痛くて辛い記憶。
助けてと叫んでも誰も来てはくれなかった。泣いても、叫んでも、聞こえてくるのは私を此処に縛り付けた女の人の怖い声。
怖くて怖くて、けれど誰も助けてはくれない。ママもその手を伸ばしてはくれなかった。――――そんな時だ。目の前に突然光が溢れ出して、あの人が現れたのは。
仮面を被り、白と蒼を身に纏うその人は辺りをキョロキョロと見渡すと溜め息を吐いて私を見据える。
『まさか時空振動に巻き込まれるとは、これも因果応報という奴か。流石にあの形態のまま通常空間でハシャグのは不味かったか。……やれやれ、これじゃあＺＥＲＯさんやゲッペラーさん達の事を強く言えないな』
『突然現れたかと思ったら、何ですかね貴方は？』
『む？　いや、失礼した。私は見ての通りただの通りすがりでね、邪魔をしたのなら謝罪しよう。声だけのお嬢さん』
唐突に現れて自らを通りすがりと称する仮面の人、その声には微塵の緊張感は無く、それは正しく自分の置かれた状況を理解してはいなかった。
『全く、計画の最終段階でゴミ掃除しなくてはならないなんて災難だわ～。……そうだわ。ねぇ陛下ぁ～？　折角の力を引き出す前に先ずは準備運動から始めましょうかぁ？　対象はぁ、目の前の仮面の変態さん。遠慮無しにぶち殺しましょう～！』
『待って、仮面被ってる＝変態という認識は流石に横暴ではないかな？　出来るなら訂正を求めたいのだけど？』
『これから死ぬ人の戯れ事なんて知りマセーン。さぁ陛下、目の前のゴミを片付けて早く私たちの目的を叶えちゃいましょう？　ち・

な・み・に、拒否権はありませーん』
『いやぁ、イヤァァァッ!!』
　力が流れ込んでくる。私の内側に仕込まれた核に向かって力という名の濁流が押し寄せてくる。自分が自分で無くなり、ヴィヴィオという存在が消えていく。黒い衝動に心が塗り潰そうになり、恐怖で自我が消滅しようとしている。
『助け、助けて……ママァ』
　誰も助けに来てはくれない。ママも、ママの友達も、誰も私を助けに来てはくれない。力に呑まれ、私という全てが消えていく――――。
　力が膨れ上がり、其処に立つのはヴィヴィオではないヴィヴィオ。嘗ての古代ベルカの時代に聖王として君臨した一人の王が玉座に佇んでいた。
『ふむ、状況は相変わらずさっぱり分からないが、どうやら複雑な事情が絡んでいる様だ。少しばかり手を出すことは憚れるが……さて、どうするか』
『うふふ、さぁ陛下。その力で全ての人間に思い知らせましょう？聖王の力を、ゆりかごの力を、遍く全てに貴女の力を知らしめるの！』
『うん。やっぱり決めた。そこの君、少々手荒になるかもしれないが、我慢出来るかい？』
　玉座の間に溢れんばかりの魔力が突風となって吹き荒ぶ。並みの人間ならば相対するだけで体が恐怖で竦む圧倒的力を前に仮面の人は臆す事なく言い切った。
　勝つ気処か自分を助けるつもりでいる仮面の人、何で？　どうして？　見ず知らずで、今が初対面である自分にどうしてそこまで手を伸ばそうとするのか、言葉には出来ない。ただ視線でそう訴える私に仮面の人はフッと笑みを溢した……そんな気がした。
『子供が、それも小さな女の子が涙を流して助けを求めているんだ。大人として見過ごす訳にはいかないだろ？』
『あっははは！　バカじゃないの!?　デバイスも持たず、このＡＭＦで満ちた空間で魔力も禄に使えないアンタに何が出来るの!?　』

『男が窮地を脱するのに余計な小細工は無用だ。まぁあるにはあるが、それをここで出すには些か野暮ってものだ。――じゃあ、行くよお嬢ちゃん、君を必ずお母さんの所へ連れていく。何故ならば』

〝――私が、此処にいる〟

優しい声の人だった。いつか、この人に会えたらその時は絶対お礼を言おう。助けてくれてありがとうと、貴方のお陰で私は今日も元気でいます。

涙と痛みでサヨナラする筈だった私の命を繋いでくれてありがとう。嘗て呑み込まれた力の濁流、その暗い闇の嵐を切り裂いたのは、強くて大きい拳の一撃だった。

次に私が目を覚ましたのはなのはママの腕の中だった。泣きながら私の無事を喜んでくれるママ、そんなママに私もつられて泣いちゃって、助けに来ていたスバルさん達は慌てていた。

無事にゆりかごから脱出出来た私達。その後病院で何度か検査したけれど体の方は何ともなく、埋め込まれたレリックも綺麗さっぱり消滅しちゃったみたい。これもあの人の力によるものなのだろうか。

いつか、何処かで会えたりしないかな。そう願いながらも、私高町ヴィヴィオの1日は今日も始まるのでした。

◇

――ウィンターカップ開催日。その当日に訪れた俺は現在選手達がいる控え室に向かっている。店を早く閉めたのは少々心が痛むが、フーカちゃんの応援の為だと思えば大した事はない。

既に選手会長であるヴィクターちゃんによる開会式は終わっており、もうすぐ第一試合が始まる。即ちフーカちゃんデビュー戦。試合直前の前に些か不謹慎かと思われるが、彼女には一言言っておきたい事があった。

選手控え室の扉を開き、中に入る。そこには既に準備万端のフーカちゃんが軽いシャドーで体を慣らしていた所だった。

「し、シュウジさん、来てくれたんですか!?」

「試合直前に少し不謹慎かと思ったけどね。どうしても一言言いたくて……ナカジマ会長、良いですかね？」

「構いませんよ。何なら出ています？　時間が来れば教えますけど……」

「いえ、流石にそこまでしていただく必要は無いですよ。直ぐに終わりますので……」

コホンと咳払いをして場を整える。仮にも自分の指導も受けているから自分とフーカちゃんの間柄は師弟関係みたいな感じになっている。そんな自分から聞かせられる言葉に緊張しているのか、先程から彼女は直立不動のままだ。

「まずは、君に謝らせて欲しい。俺の余計なお節介の所為で要らぬ重荷を背負わせた事、済まないと思っている」

「……あっ」

「今更気にするなと都合の良いことを口にする気はない。リンネちゃんの前で啖呵を切った以上、その重荷は必然的に君にまで背負わせる事になってしまった。本当に申し訳ないと思う」

「そんな、そんな事は……！」

フーカちゃんに向けて俺は頭を下げた。リンネちゃんと戦わせる為とは言え、……いや、どんなに言い訳をした所でフーカちゃんに要らぬ重荷を背負わせた事実には変わらない。彼女の事だからどんなに言葉で気にするなと言い含めても心の何処かで痼になって残る。自分の所為でと自責の念に囚われてしまうだろう。それほどまでにフーカという少女は正直で優しい女の子なのだ。

「だから、気にするなとは言わない。だけど忘れないで欲しい。今君

が此処に立っているのは他ならぬ自分自身の意思だと言うことを」
「……シュウジさん。ワシは此処に来るまで多くの人達に支えて貰いました。ハル先輩やヴィヴィオ先輩達、ナカジマ会長。他にもミカヤさんやハリー選手、本当に沢山の人に支えて来られました」
「……」
「だから思うんです。皆に鍛えられた今のワシの力を皆の目に見せてやりたい。それが皆さんに返せる最大の恩返しなんだと、今のワシの思いはそればっかりです」
　真っ直ぐ自分を見詰めて言い切るフーカちゃん。その目には暗い色は微塵もなく、正しく絶好調の様子だった。
「……参ったな。どうやら俺の心配は完全に余計だったみたいだ。なら、俺から言えることは一つだけだ。全力で、全開で、ハートの全部でぶつかって――――楽しんでこい」
「オスッ!!!!」
　自分の心配は完全に余計なモノだった。元気よく返事をして控え室を後にするフーカちゃんに俺は激励を一つ口にするだけで精一杯だった。弟子を取ると師も成長すると言うのは本当らしい。ガモンさんもこんな心境だったりするのだろうか。
「大丈夫ですよ。フーカさんならきっと勝てます」
「ミウラちゃん……」
「だってフーカさん凄く頑張ってましたもん。それはシュウジさんだって良く知ってる筈ですよ」
「あぁ、そうだな。信じて待つのも師匠の務め、か。……ごめんねミウラちゃん。君も試合が控えているのに情けない所を見せちゃって」
「そうですよー。ヴィヴィオさんやアインハルトさんが席を外してて良かったですね。私じゃなかったらきっとガッカリされてましたよ？」
「うぐ、本当に申し訳ない」
　どうやら自分はヴィヴィオちゃん達にとって一種の憧れの存在らしい。こんなポッと出のなんちゃって元格闘技選手に随分な入れ込み様である。

しかしミウラちゃんの様子は大丈夫なのだろうか。彼女が今回の大会で最初に戦うのはあのリンネちゃんだ。ミウラちゃんの素質は決してリンネちゃんにも引けを取らないが、不安要素が無いと言えば嘘になる。

けれどミウラちゃんはその事を承知している上で尚自分が勝つ気でいる。当然だ。此処にいるのは生粋の格闘技選手、皆可愛い顔をしているがその胸の内には自信と闘志とやる気で満ちている。ここで余計な口出しをするのはそれこそ野暮と言うのだろう。

「そうだね。ミウラちゃんの試合もまだだし、何かして欲しい事はない？　俺で良ければ力になるよ」

「本当ですか？　ならストレッチの手伝いをお願いしますか。ナカジマ会長達もう行っちゃいましたし、ヴィヴィオさん達が来るまでいいので」

「お安いご用さ」

控え室に備わっている映像を見ながらフーカちゃんの試合を見守る俺とミウラちゃん。試合は無事にフーカちゃんが勝利し、一回戦突破に俺は年甲斐なく大いに喜んだ。

その後、二人が戻ってくる前に控え室を後にした俺は、観客席で遠くから試合の様子を見守る事にした。次に始まるのはミウラちゃんとリンネちゃんの試合、果たしてどちらが勝つのか、他人事の筈なのに俺の手には緊張の汗が握られていた。

その１２

――――僕がその人の試合を最初に見たのは、二年前のＵ２５のトーナメント。多くの格闘技選手が世界王者を目指して開かれるＤＳＡＡ最大規模の武道大会。格闘技の大会と称しておきながら大規模魔法の使用を許された文字通り何でもありのその大会で……彼がいた。

並みいる強豪を己の肉体と体術のみで打ち倒し、絶体絶命の危機を難なく突破するその姿は当時私達の中でも大きな話題となっている。その戦い方はヴィヴィオさんやアインハルトさん、私を含めた大勢の格闘技選手達の心を掴んで離さなかった。

そして決勝戦を勝ち抜き、全次元世界が注目したタイトル戦。当時の現チャンピオンも物凄く強い人で、格闘技選手として最高水準の力を持っていた。そんな二人が戦う姿に僕はテレビにかぶり付くように眺めていた。

繰り出される拳と蹴り、魔法と魔法、力と技の凄絶なぶつかり合いに僕は息をするのも忘れて見入っていた。

速すぎる攻防、目では追い付けず、理解することも困難な激しい戦い。戦いの舞台である無人世界を縦横無尽に駆け回りながら戦う二人はさながらお伽噺に出てくる伝説の戦士達の様だった。

彼等の戦いに誰もが心を奪われた。鮮烈で、苛烈で、だけど何処までも楽しそうに戦う二人に僕達は自分の理想を重ねた。いつか、自分もあんな風に戦ってみたい。

――――そんな二人の戦いは唐突に終わりを迎えた。チャンピオンの攻撃を１、２回程受けた彼はダメージが大きいのか体をふらつかせていた。

それがチャンピオンにとって好機に見えた。無論、僕達もその瞬間試合の流れが完全に決まったと思った。最後の技の為に〝溜め〟をするチャンピオン、きっと現場では物凄い迫力なのだろう。画面越しからでも伝わってくるチャンピオンの気迫、空を染め上げる程に巨大な魔力を前に、彼は悠然と佇み。

『１０倍界王拳ンンンンッ!!!』
　その力の全てを爆発させた。
『かぁ～めぇ～はぁ～めぇ～……』
『私の、勝ちだァァァッ!!』
『波ァァァァァッ!!!』
　ぶつかり合う魔力と魔力、その威力は凄まじく、余波で周囲の環境を破壊し、観客席からはどよめきの声が、実況者の人は実況する事を忘れて解説の人と一緒に悲鳴を上げている。
　軈て画面の全てが白に染まり、光で埋め尽くされた。しばらくして収まる光、その中央で佇んでいたのは……上半身のバリアジャケットが全損し、その肌を露にした彼が拳を天高く掲げている。その彼の向かい側には目を回して気絶している現チャンピオンの姿があった。
　新たな世界王者の誕生に観客席からは大きな歓声が沸き起こった。実況の人も、解説の人も、感動と感激で何を言ってるのか分からない程に興奮していた。
　きっと、当時の僕達も同じ気持ちだったのだろう。新たな世界王者シュウジ＝シラカワ選手、Ｕ２５というどの格闘技大会でも最も過激とされるＤＳＡＡ最高峰の舞台。その頂点を極めた人が新しく誕生した事に僕は自分の事の様に盛り上がった。
　それから暫くはヴィヴィオさん達とはこの話題で持ちきりだった。アインハルトさんも是非一度本気で手合わせしたいと目を輝かせていたし、ハリー選手に至ってはシュウジ選手の大ファンとなり彼の戦い方の研究をしている程だ。
　エレミア選手もヴィクター選手も、彼には決して小さくはない興味を抱いていただけに、シュウジ選手の突然の引退には酷く落ち込んだ。どうして引退したのだろう。記者会見等を開かず、淡々と引退した事だけを告げて去っていったシュウジ選手。
　派手な戦いをする割に謎の多い彼に多くの諸説が浮かんでは消えた。曰く、古代ベルカに伝わる伝説の戦士の末裔。曰く、その戦士本人。曰く、世界を越えて現れた迷い人。
　突拍子もないその諸説は結局どれも的を得たものはなく、やがて話

題は薄れ、世間も彼の事を忘れて僕自身も忘れようとした時に……。
『初めまして、本日から暫くの間ここで働かせて頂くシュウジ＝シラカワです。接客業は結構得意ですので、宜しくお願いします！』
平然と、笑顔でやって来た彼に僕は思わず変な声が出た。
半年という長いようで短いバイト期間、ヴィヴィオさん達に紹介しようかずっと悩んでいた間に気付けばバイトを辞めていて、そして新たに喫茶店を開いた彼に僕は言葉にし難い感情を覚えた。
それからだろうか。彼に対して割と容赦のない言葉を口にするようになったのは。嘗ての世界王者がクラナガンの隅でひっそりと喫茶店を営んでいるなんて、一体誰が想像できるだろうか。
驚きを通して軽く悪夢だと思うのは僕だけじゃない筈、しかも理由を聞けばお金が欲しかったからという単純な動機で格闘技を始めたというから余計に質が悪い。
――――――でも、ＤＳＡＡの大会に出たときは楽しかったと語るシュウジさんに僕は何も言えなかった。笑顔で、子供みたいに当時を語る彼に僕はもう納得するしかなかった。
やっぱり、彼は伝説の世界王者なんだなと改めて思う。世界一強いチャンピオンはきっと誰よりも格闘技に、魔法の戦いに夢中になった人に送られる称号なのだから。
だから、僕も目一杯楽しもうとする。これから始まる試合に勝つために、そしてもう一度ヴィヴィオさんと戦う為に……いつか、彼と一緒に格闘技を楽しむ為に。
『それではこれより第二試合、リンネ＝ベルリネッタ選手とミウラ＝リナルディ選手の試合を始めます。両選手、入場！』
ミウラ＝リナルディ、全力で頑張ります!!

◇

Ｇ月Ｇ日

フーカちゃんが勝った。昨日のウィンターカップ最初の試合でルーキーながら鮮烈な勝利を飾ったフーカちゃんの実力はその日の内に格闘技界に知れ渡る事になった。

１ＲＫＯという鮮烈で強烈なデビューを飾ったフーカちゃん、しかもその体捌きと身のこなしから自分に縁のある者ではないかと早速噂になっているらしい。幸い店にそう言った話は来ていないからまだバレてはいないだろうけど、そろそろ自分の事を隠し切るのは難しくなってきているみたいだ。

まぁ別にバレてもいいんだけどね。隠しているつもりはないし、知ったら知ったで堂々としてりゃあいいしな。フーカちゃんも今更その程度で動じたりはしないだろうし、もしメディア連中が押し掛けてもその時はアインハルトちゃんの時みたく俺の特製麻婆を完食する事を条件にすればいい。……個人的にはこの条件は凄く納得いかないが、今は他に代案もないから仕方ないものとする。

で、大会はナカジマジムの娘達は無事に勝ち進み、アインハルトちゃんは勿論ヴィヴィオちゃんも無事に次の試合に進める事に成功した。

ただ、ミウラちゃんだけは残念な事に次の試合に勝ち進む事は出来なかった。別にミウラちゃんに悪いところはなく、ただ対戦相手のリンネちゃんがその上を行っただけだ。

しかし驚いた。まさかミウラちゃんの抜剣、あれをマトモに受けても打ち返せる耐久力を身に付けているなんて、どうやら彼女の専属コーチであるジル＝ストーラさんの手腕は飛び抜けて優秀らしい。効率良く選手を育成する事に関してだけ言えば、ナカジマ会長の手腕を大きく越えているんじゃないだろうか。

強いわけだ。しかし逆に言えば勢いがありすぎるというのがリンネちゃんの虚を付ける隙に成り得る筈。

次のリンネちゃんの対戦相手はヴィヴィオちゃんだ。彼女の眼な

らきっとその隙を突いて突破口を開ける筈。

――――あー、惜しい。もし俺が彼女のコーチだったらその目の良さを活かしたジョルトカウンターとか教えてあげられたのに……言っても仕方がないとは言えそう思わずにはいられない。

で、肝心なミウラちゃんだが、今は病院で大人しく治療を受けている。其処には優秀な治癒の魔法使いの娘が付いててくれるみたいだから、そんなに心配はしていない。自分も顔を出したが、泣くのを精一杯我慢している彼女にこれ以上邪魔をするわけにも行かず、フーカちゃんと一緒に帰路に就いた。

フーカちゃんに限らず、何かに一生懸命な子は何度も挫折を経験し、涙を流し、そして立ち上り強くなっていく。涙の数だけ人は強くなれる。月並みの言葉だが、少なくとも俺は信じている。

だって、嘗ては泣きじゃくるだけで何もできなかった娘が、今では立派に格闘技をしているのだ。きっとミウラちゃんも立ち上り、次に向けて足を進めるのだろう。

次に彼女がウチの店に訪れることがあれば、その時は暖かく迎えてやろう。以前彼女の店で自分がそうして貰ったように……。

その13

「それでは店長、先にいってます！」
「あぁ、片付けが終わったら俺も会場に向かうよ。試合、頑張れよ」
「オス！」
　陽が沈み始め、空が赤くなり始めた時間帯。今日は大会の第二試合が始まる日でそこまで勝ち抜いた選手達が次のステップに向けて競い合う日である。
　既に店内に客はおらず、売り上げも上々。これなら店を早く閉めても問題はないのかもしれない。常連の人達もフーカちゃんが試合に出ると聞いて応援してくれてるし、気を利かせて早めに店を後にする人が増えてきた。
　店の都合でお客を追い出しているように思えて自分としては少々複雑だが、ウチに来るお客さんは皆理解のある気のいい人達で、ウィンターカップの開催期間中という期間限定という事でこの件には納得してくれている。
　店を早く閉めるからサービスという事で色々提供させて貰っているが……何故か受けが悪い。中でも丹精込めて作った麻婆を一皿無料で提供しようという渾身のサービスだが、誰もこれに手を付けてはくれなかった。――シャッハさんだけだぞ喜んでくれたの。
　――話が逸れた。そんな訳で多くの人達の支えによって成り立っている喫茶シラカワは本日も勝手な都合ながら店を早仕舞いする事にした。腕時計に視線を落とせばまだ時間は余裕があり、これならばヴィヴィオちゃん達の試合にも間に合うだろう。
　片付けも終え、私服に着替えた自分は戸締まりや諸々の確認をした後、裏口から出て車に乗り込もうとする。そんな時、横から聞きなれない女性の声に呼び止められた。
　一体誰だろう？　ワザワザ裏口から来たという事はお客さんではないようだ。誰かと思い振り返ると、そこにはリンネちゃんの専属コーチであるジル＝ストーラさんが佇んでいた。

「初めましてシュウジ＝シラカワ元選手、私はフロンティアジム所属、リンネ＝ベルリネッタ選手の専属コーチを努めさせて戴いているジル＝ストーラです。もし宜しければご一緒に会場に向かいませんか？」
「……アッハイ」
　笑顔の割には有無を言わせない彼女の迫力に、俺はただ頷く事しか出来なかった。
　……え？　俺、何か悪いことした？

◇

「この度は私の勝手な誘いに応えて下さり、ありがとうございます。シュウジさん。お帰りの際にはタクシーの手配をさせて戴きますので、ご容赦下さい」
「あぁいや、流石にそこまでして戴く必要はないですよ。元とはいえ私もアスリートの端くれ、走って帰る位余裕ですから」
　ジルさんが運転する車に乗らせて貰い一緒に会場へと向かうシュウジとジル。互いに社交辞令の挨拶を交わし、端から見れば良い雰囲気の男女の逢い引きにも見えなくもない。
　しかし、車内の空気はそれに反して非常に重く、それはまるで愛機の起こす超重力の中にいる様な錯覚に陥る程だ。助手席から見る限りでは笑顔の筈なのに、その目は笑っていないジル、理由を考えても全く心当たりのないシュウジは必死に話題を探そうとして……。
「そ、そう言えば前回の試合は凄かったですね。リンネ選手大分打たれた様子でしたけど……大丈夫ですか？」
「大丈夫ですよ、そんな柔な鍛え方はしてませんので」
（怖ぇぇぇぇっ！　何、この怖さ!?　え!?　俺が悪いの!?　俺が悪い

ことになるのこれ!?）
　言葉の端から見え隠れするジルの冷たい当たり、心当たりも無く、理不尽にすら思える彼女の態度に流石のシュウジも泣きそうになるが、次に彼女が溜め息を吐き出すと雰囲気は一変し、冷たかった彼女の態度も変わっていった。
「……すみません。我が儘言って同行して貰ったのに不適切な態度を取ってしまって、このお詫びはいつか必ずしますので」
「い、いえ。誤解が解けた様で何よりです。……しかし、随分苛立っていたようですけれど、何かあったのですか？」
　不当な扱いを受けるのはこれ迄の体験で慣れてしまっているシュウジはジルの謝罪を快く受け取り、水に流す事にした。ただ何故そこまで自分を敵視するのか気になった、再びあの冷たいジルが復活するのを承知で思いきって訊ねて見ると、彼女の態度は先程の様な強気なモノではなく、頬を僅かに紅くさせていた。
「そ、その、先日リンネから訊いたのですけど、今ウインターカップに出場しているフーカ選手と大会とは別に試合をした件に関してなのですが……」
「……あっ」
　ジルに言われた事で何故彼女が彼処まで怒っていたか漸く理解できた。確かにリンネとシュウジは約束をした。ウインターカップの大会とは別にフーカとリンネを戦わせ、そこでリンネが勝った場合彼女の専属コーチになると。
　自分の店を畳んでまで賭けに出た大きな博打、それを肝心なリンネの専属であるジル＝ストーラに何の断りも入れてなかった事に漸くシュウジは思い出した。
（やっべー、そう言えばストーラさんにその事に付いて一言も話して無かったわ。そりゃそうだよ、勝手にリンネちゃんの指導者になるとか、ストーラさんという専属コーチが既にいるのに、そりゃ怒るわけだよ！）
「あ、いえ。その事につきましては情報伝達不足で……その、すみませんでした！」

ジルの怒りの原因に漸く気付いたシュウジは深々と頭を下げる。どう考えても自分が悪いから認めるしかない。どんな罵倒も受け入れるつもりでいたが、ジルから返ってきたのは意外な反応だった。
「思い出してくれたのでしたら幸いです。此方も受け入れ態勢を整えなければなりませんからね。約束の反古さえしなければ、此方から言うことは何もありません」
「……え？」
意外、というより剰りにも淡白なジルの反応にシュウジは拍子抜けの声が漏れる。思っていたモノとは別の反応、どちらかと言えば勝手な約束をした事に対する言及があるのかと思っていたが、ジルの言葉はまるでシュウジを既に彼女の所属しているジム……フロンティアジムに引き入れる準備をしている様に聞こえてきた。
「いや、あの。ご迷惑ではないんですか？」
「何故です？　貴方の実力や肩書きはＤＳＡＡで知らない者はいません。それに試合の最中にリンネの違和感に気付き、それを指摘し矯正する指導力の高さも聞き及んでいます。そんな能力の高い方を引き入れない理由はこちらにはありませんが？」
「いや、でもそれはリンネちゃんがフーカちゃんに勝てたらの話で――」
「勝ちますよ。リンネは」
「――――っ」
即答。二人が試合をするという約束を守る処か既に勝ったつもりでいるジル。その眼には驕りや慢心の色はなく、ただ純然たる事実としてそこにある。その強い意思は彼女の瞳を強く輝かせていた。
「確かにフーカ選手は将来有望な選手です。きっとリンネとは切磋琢磨出来る数少ない選手になるでしょう。しかし、今の段階ではリンネの敵には成り得ません。彼女とリンネとでは格闘技選手として培ってきた経験の差が違う」
無論それだけではない。リンネの素質は他の選手達と比べてもずば抜けており、その元から生まれた格闘技としたの才能はジルをして１００年に一人の逸材と言われている。

故に彼女は断じる。フーカではリンネの敵に成り得ないと。才能というモノを重点にしているジルに取ってそれは覆る事の無い自論、その根拠となるが他ならぬ嘗ての自分自身になのだから。
「……成る程、貴女の言いたい事は分かりました。確かにリンネ選手は強い、恵まれた才能、力のある肉体、格闘技選手として文句なしの逸材だ。才能だけで言うのならアインハルト選手やエレミア選手にも決して引けを取らないでしょう」
「そうですね。そこに私の理論と貴方の指導があれば、リンネは今よりずっと強くなれます」
「尤も、その才能を開花させるには些か問題があるみたいですけどね」
「――――何ですって？」
ジルの声が低くなる。既に車は会場の駐車場へと辿り着く、車を止めて助手席に座るシュウジを睨むジルだが、彼の顔には不敵な笑みが浮かび上がっていた。
「格闘技選手に拘わらず、全てのアスリート選手達は日頃の練習や特訓で積み重ねをし、それを大会で披露し、活かし、結果を出す。才能も必要だし、才能を引き出す努力も当然必要だ」
「……リンネが、その才能だけの選手だと言いたいのですか？」
「いいや、彼女は常日頃から努力していると思いますよ。だからこそ彼女は彼処までの動きが出来る。あれほどの戦いを維持できている」
分からない。この男は一体何を言っているのだろうか？　要領の得ない言葉遊びで此方を煙に巻くつもりなのではないだろうか。
「だが、彼女は折角培ってきた努力を糧に仕切れていない。アスリートならば誰もが得られるソレを機械的に処理をしている。……いや、拒んでいると言っても良い」
「何を……言ってるんです？」
「体を痛め、自身を追い詰めるだけが格闘技選手の全てですか？　違うでしょう？　そうではないでしょう？　選手達は皆、苦しみの先にあるソレを目指して日々切磋琢磨をしている。……貴女ならば、それを良く御存知の筈ですよ。ジル＝ストーラ選手」
「っ!?」

「ここまで送ってくださり、ありがとうございます。それでは自分はこれで……」
頭を軽く下げ、車から降りたシュウジは会場に向けて歩き出す。その背中を見つめるジルの顔は険しく、その瞳は何処までも剣呑なモノになっていた。
「分かった様な事を言って！」
昔、自分にも選手として活躍していた時期があった。しかし才能が無く、怪我もしやすかったジルは１５の頃には万全な状態でリングに立つ事はなく、漸く辿り着いたタイトル戦を目の前にして引退を余儀なくされてしまった。
だから3年前、流星の如く現れたシュウジ＝シラカワという選手に酷く胸を高鳴らせた。見たこともない戦い方、才能だけでなく努力の賜物であろう肉体は嘗て選手だった自分にとってこれ以上無い理想だった。
チャンピオンになりＤＳＡＡの頂点に君臨したシュウジ、彼ならばきっと不動の世界王者に居続けるだろう。全ての格闘技選手達にとって憧れで、目標であり続けるだろう。
しかし、その世界王者は己が頂点に立った事で格闘技に見切りを付けた。突然の引退表明、彼は自分がその世界の王者になると同時にＤＳＡＡに興味を示さなくなった。
一度も防衛をせず、一度もチャンピオンとして戦わないまま勝手に終わった気ままな王。ジル＝ストーラにとってその王は仇にも近いモノだった。
自分ではとても届かない高みを簡単に手にしておいて、それを守ることもせずに一方的に捨て去った。それが自身の理想の押し付けだとは分かっている。しかし、それでもジルはシュウジという男が許せなかった。
「良いでしょう。ならば証明してみせます。私が、私とリンネが貴方の思い上がったその性根を叩き折って差し上げます」
眼鏡の奥で燃やす怒りの炎、彼女の瞳には最早シュウジ一人しか映ってはいなかった。

その１４

ジル＝ストーラによって会場へと辿り着いたシュウジ、時刻もまだ幾分か余裕があり、このまま会場入りしておこうかと思ったが、その前に選手控え室に寄ろうかと考えた。

一時的にとは言え、今の自分はナカジマジムのちょっとした関係者という扱いになっており、ジムの控え室には一応出入り自由の身となっている。

先日と同様フーカに激励の一つでも掛けてやろうかと思ったが、既に彼女には先の初試合で充分な言葉を送っている。今は気持ちも昂り、試合への意気込みとやる気も充実している頃だから下手な呼び掛けは却って彼女の集中を乱す事になるだろう。

ならばヴィヴィオやアインハルトには声を掛けた方が良いだろうか？　……いや、それも余計なお節介だろう。格闘技選手としての経験はフーカとは比べる必要も無いほどに充実しており、試合前の気持ちの切り替え方も慣れたものの筈、今頃はフーカ共々ナカジマ会長との最後の打ち合わせみたいな話し合いをしている事だし、邪魔をする訳にはいかない。

シュウジがナカジマジムの関係者なのはあくまでも仮だ。フーカという身内が出場し、シュウジが曾ての格闘技選手であるから例外的に認められた立場でしかない。そんな自分が折角集中している彼女達の邪魔をするのは些か不謹慎である。

……やはり、ここは大人しく試合が始まる時まで待つしかないか。選手控え室に向かうのを諦めたシュウジは一般用の出入り口を潜り、会場へと入る。まだ時間は早いが、既にあちこちには他の観客達が席に座り込んでいる。このままでは立ち見になりそうだ。シュウジが買ったチケットは自由席のモノだが、このままでは良い席は埋まってしまうかもしれない。

自分も早く席に座ってその時が来るのを待つとしよう。シュウ

ジが早足で適当な席に座ろうとした時、一人の男性が彼を呼び止めた。
「お待ちください。もしかしてあなた様はシュウジ＝シラカワ様でしょうか？」
「うん？　確かに自分はシュウジ＝シラカワだが、君は……？」
「突然の御呼び掛け失礼致しました。私はエドガー、ダールグリュン家に仕える執事でございます」
「あ、これはご丁寧にどうもです」
　振り返った先に立っているのは自らを執事と名乗る燕尾服の青年、ダールグリュンという家名から彼がヴィクトーリアの関係者だと察したシュウジ、執事らしい丁寧な挨拶をしてくる彼にシュウジも戸惑いながら返した。
「さてシュウジ様。宜しければ席をご案内させて欲しいのですが如何でしょうか？　幸いまだ決まった席は見付けてはいないご様子。差し出がましいかと思いますが、ＶＩＰの席をご用意させて頂いております」
「い、いやぁ、先日も御世話になったのにまたご厄介になるのはちょっと、自分は所詮小市民の一人でしかありません。ご令嬢であるヴィクトーリアさんの迷惑になるのは少し憚れると言いますか……」
「何を仰いますか。貴方様の経歴は誰もが認めております。それにお嬢様はシュウジ様の見識眼を高く評価しており、今回お誘いしたのもその深い考察に肖りたいのが理由です。どうか、お嬢様のお力になっては下さいませんか？」
「で、ですがね。流石に年下の子に集るような真似はちょっと……いや、別にヴィクトーリアさんを小娘扱いとかそんな風には思ってませんよ？　ただ、良い歳した大人がまだ成人を迎えてない娘の厄介になるのは人としてどうかな～と思いまして、それに自分既にチケットは買っちゃいましたので、ご厚意は嬉しいのですけど――――ねぇ？」
「分かりました。ならばそのチケットを言い値で買いましょう。そしてシュウジ様には堂々と指定された席へご案内させて頂きます」
「へ？　い、いや待って!?　なにか、何か可笑しくない!?」

「申し訳ございません。お嬢様は是が非でもシュウジ様との試合観戦を望まれておりますので、最悪の場合今回の観客の席を全て買い取ってでもそれを実現なさるおつもりです」
――本来ならばこんな真似はしないんですけどね。と、苦笑いで付け加えるエドガーだが、対するシュウジは戦慄する。
ブルジョワやべぇ。年下の娘に一度ならず二度も御世話になるのは気が引けるから遠慮しようかと思ったのに、まさかの大反撃にシュウジはグゥの音もでなくなる。
これが雷帝の本気、格闘技としての実力は兎も角として、善良（自称）で小市民（笑）なシュウジは今回彼女に完全敗北する事となった。どんなに強くなったと言っても所詮は一市民、ガチセレブなお嬢様に金銭勝負で勝てる道理はなかった。
「……わ、分かりました。宜しくお願いします」
「ご理解頂き、ありがとうございます」
肩を落として敗北を認めるシュウジ、そんな彼を見てエドガーは同情の笑みを浮かべるのだった。

◇

「ごきげんようシュウジ様、この度も私の我が儘に付き合ってくれてありがとうございます」
「あぁうん、どうも」
エドガーの案内で通されるＶＩＰルーム、部屋に入るとダールグリュン家の令嬢、ヴィクトーリアが満面の笑顔を浮かべてシュウジを出迎えた。誰もが見惚れるだろう美しい笑顔、先程までセレブの恐ろしさを体験してなければシュウジも彼女の笑みに絆されていただろ

う。
　辺りを見ればハリー選手とエルス選手も同席している。ただ二人とも疲れているのか笑顔を浮かべている筈なのに表情がげんなりしている、きっと今の自分も同じ顔をしているのだろう。
「そして謝罪を。今回の私の我が儘で気分を害されたのであれば、後日当家へご連絡下さい。ダールグリュン家総出で改めて謝罪させて頂きますので……」
「い、いや、もう本当大丈夫なんで、全然平気なので……その、勘弁してください」
　もしかしたら今回、初めてシュウジは勝てる気がしない相手と言うものを体験したのかもしれない。ハリーとエルスが御愁傷様と言わんばかりに苦笑いをしているから、きっとシュウジが抱いたヴィクトーリアへの印象は間違いではないのだろう。
　自分の誘いを受け入れた事に安心したヴィクトーリア――――今後はヴィクターで統一――――はニコニコと笑みを浮かべながらシュウジを招き入れる。既に観念しているシュウジも言われるがままに部屋へと入り、眼下に見えるリングを見下ろす。
「それで、早速ですがシュウジ様。今回の試合の事ですが……いえ、ここまで来ていただいたのです。余計な建前は省きましょう。単刀直入にお尋ねします。今回のヴィヴィオさんとリンネさんの試合、勝つのはどちらだと思います？」
　余計な言い回しはせず、間髪入れずに本題を叩き込んでくるヴィクター。今回誰もが注目している試合、ヴィヴィオとリンネの戦いにヴィクターは勿論ハリーとエルスもシュウジの答えに耳を傾けていた。
「その質問に応える前に、一つ君達に問わせて貰う。君達は一体何の為に格闘技を始めたのかな？」
「うぇ？」
「そ、それは……その……何というか」
「少し気恥ずかしいかな？　なら質問を変えよう。君達が試合で初めて勝った時、どんな気持ちだった？」

質問に質問で返すという礼を失する行為を敢えて行うシュウジ、彼の質問に少しばかり戸惑うハリー達だが、当時の事をゆっくりと思い出し、少しずつ語るように応えていく。
「お、オレって頭が悪いし、自慢出来るのは腕節位だから、それを活かせる舞台に立てて、勝ったら拍手が雨のように降り注いで来て……その、嬉しかったです」
「私もそうですね。強くなれたという一番実感できる瞬間ですし、これまでの努力が報われた証明ですから、その時の喜びは例えようがありません」
「私も二人と概ね一緒ですわね。最初は雷帝の子孫だから、貴族だから力を示さねばならないという使命感で続けていましたが、戦う時の高揚感や勝利した時の達成感は最高級の美酒に酔いしれる以上の心地ですわ。無論、まだ未成年なのでお酒は飲んでませんが……」
三人とも表現は異なるが概ね似たような所感を口にしている。多少恥じらいながらも質問に答えてくれたハリー達にシュウジは満足そうに頷き、改めてヴィクターの質問に応えた。
「そうだね。格闘技選手だけでなく多くのアスリート達はそういう努力の報われた瞬間――勝利の美酒を味わう為に日々邁進している。寧ろ、それが前提で弛まぬ努力を重ね続けている」
納得いかない結果に反骨心を燃やし、闘志を抱いて今度こそはと身体を鍛えたり、今度はもっと良い結果を残したいとアスリート選手は毎日己を磨き、高めていく。
人はそれを〝夢中〟という。何かに夢中になり、それを成し遂げたいと欲望が生まれ、それが原動力となり人は努力を続けるのだ。努力の先に待つ結果に報われたいから人は頑張れるのだ。
何かに夢中になり、目標に到達する為に邁進する事、人はそれを〝糧〟という。
「今ここで試合の行方を口には出来ませんが、少しだけ指摘出来るものがあるとすれば……ここまでの格闘技選手としての人生でどれだけ夢中になれたのか、ヴィヴィオちゃんとリンネちゃんの勝負の行方は突き詰めればそこに辿り着く事でしょう」

「夢中……ですか」
「ど、どうしようエルス。オレ、シュウジさんがなに言ってるか全然分かんねぇ」
「分からないなら黙ってましょうよ！　大丈夫です。私も良く分かってませんから！」
　ハリーとエルスが疑問に首を傾げる中、ヴィクターはシュウジの言葉の意味を理解したのか、その表情を暗くさせる。夢中になる事、それは今のリンネからは一番遠く何よりも難しい言葉だった。
　リンネとヴィヴィオ、二人の選手がアナウンスと共に入場する。高まる緊張感と沸き立つ観客達の歓声、因縁ある二人の試合に会場の盛り上がりは既に最高潮に達しつつあった。
「と、所でシュウジさん」
「ん？　なんだいハリーちゃん」
「う、噂で聞いたのですけどもし今回の大会リンネが優勝したら、リンネの専属コーチになるって本当なんですか？」
「え？　……うーん、詳しくは違うけど、まぁ大体合ってるかな？」
　本当は試合に優勝ではなく、フーカと戦い勝つことなのだが、このままリンネが勝ち続き優勝すれば結果的には同じ事だ。今回のフーカの相手も彼女が遅れを取る相手ではないし、このままリンネが勝ち進めば二人の戦いは実現する事になる。
　故に、シュウジはハリーの質問を特に否定する事はしなかった。するとハリーはプルプルと肩を震わせ。
「ヴィヴィオぉぉぉっ!!　絶対勝てよぉぉぉっ!!」
　突然大声でヴィヴィオへのエールを送るのだった。耳元で叫ばれた事に怒りを露にするエルス、二人がギャーギャーと騒ぎ立てるなか、シュウジはリングに佇む二人を見つめる。
（とは言っても、勝負の行方は最後までどうなるかなんて分からない。実際肉体面に関してはヴィヴィオちゃんは目が良いこと以外リンネちゃんに勝てる要素はない）
　シュウジは断言する。ヴィヴィオという選手は格闘技には向いていないと、正面からリンネという強者と打ち合うには彼女は剰り

にも非力だった。
彼女はどちらかと言えば魔法を主にする分野で活躍する人間だ。有り体に言えば後方支援タイプ、自分以外の仲間がいて初めてその役割を全う出来る縁の下の力持ち。それが高町ヴィヴィオの特性だ。
とてもではないが真っ正面からリンネと打ち合える選手ではない。しかし、そんなことはナカジマ会長もヴィヴィオ本人も理解している。それを承知の上で努力を重ね、夢中になって今日まで自分を磨き上げてきた。
それを無駄の努力と笑う人間もいるだろう。シュウジも自分がヴィヴィオの立場なら、早い段階で別の道を模索している。
けれどヴィヴィオはそうしなかった。そうしないだけの理由があった。あの日玉座で泣いていた幼子が、リンネという強者を前にしても笑顔で立ち向かえる強さを得ている。
「――見せてもらおうか。君が選んだ選択、その結果とやらを」
いつの間にか、ワクワクしている自分がいる。二人の試合の行方がどうなるのか、それはきっと神様にも分からない。
――今、試合開始のゴングが鳴る。

その15

――――試合開始のゴングが鳴り、戦いの口火を切ったのはヴィヴィオだった。鋭い左でリンネの顔面を強襲、速くて鋭い上に変則的な軌道を描く多変化な左ジャブ。フリッカースタイルから繰り出される変幻自在なファイトスタイルで序盤の試合の流れはヴィヴィオが掴み取った。

「成る程、カウンタースタイルか。確かにそのやり方ならヴィヴィオちゃんでもリンネちゃんにダメージを与えられる」

「はい。その通りです」

繰り出されるヴィヴィオのフリッカージャブ、彼女のその構えとリンネとの距離の計り方でシュウジはヴィヴィオの戦い方を看破する。フリッカージャブという長距離の弾幕で相手を牽制し抑え込み、無理矢理突っ込んできた所へカウンターを合わせる。これならば非力なヴィヴィオでもリンネと対等以上に渡り合えるだろう。

格闘技選手として非力なヴィヴィオだが、彼女の目の良さから組み立てられた戦術はシュウジから見ても見事と言えた。端から見れば単純かもしれないが、リンネという生粋のインファイターを相手に彼処まで見事に捌ける選手は彼女の年代では中々見かけないだろう。ヴィヴィオの格闘技選手としての技量の高さ、猛獣の如き猛るリンネを相手にやり過ごすその姿はさながら闘牛を相手取る闘牛士。

しかし、リンネも負けてはいなかった。ヴィヴィオの左でどんなに打たれても怯まず、少しずつその間合いを詰めていく。プレッシャーを与えつつジリジリと追い詰めるリンネ、相対するヴィヴィオには恐ろしいほどの圧力となっているだろう。

そして、ヴィヴィオがリンネの射程内に入った瞬間、彼女の剛腕がヴィヴィオの頬を掠めた。剛力、正しく力の嵐であるリンネの迫力にヴィヴィオの背筋に悪寒が走る。

距離を取らなくては、後ろに下がるヴィヴィオだが、それを逃さんとリンネの左手がヴィヴィオの襟を掴んだ。近距離でのリンネの一撃、彼女の放つ一撃は遂にヴィヴィオを捉えた。

腹部に重くて鈍い衝撃と痛みが走る。大人モードとなり、ヴィヴィオの相棒（デバイス）であるセイクリッドハートのお陰でダメージは思った程入ってはいない……が、ソレ以上に不味い事があった。
ヴィヴィオの退路を絶つように現れたコーナーポスト、足を使ってカウンターを狙うヴィヴィオにとってそこは正に死地だった。
コーナーポストを背にリンネと向き合うヴィヴィオ、ガードを固くさせて致命傷を防ぐ事に徹底させるが、ガード上からでも伝わってくるリンネの重い一撃にヴィヴィオはその表情を曇らせる。
しかし、ヴィヴィオも一方的に打たれる訳ではなく、ガードの上からでもリンネの様子を観察していた。腕が痺れる程にリンネの打撃力は重く強い、しかしコーナーに追い詰め、捩じ伏せる事に固執したリンネはつい大振りの瞬間を晒してしまう。
そしてヴィヴィオがそれを見逃す筈もなく、割り込ませる様にカウンターを叩き込む。突然の衝撃に怯むリンネ、彼女が見せたその隙を突いてヴィヴィオはコーナーから脱出する。
「巧いな。相手の動きを良く見ている」
「ヴィヴィオさんの眼の良さは私達の中でも群を抜いていますからね」
「しかも記憶力も良いと来た。いいなぁ、オレもヴィヴィオ位頭が良ければ学校の勉強も楽なのになぁ～」
「いや、そこは自分の力で何とかしましょうよ」
リンネとヴィヴィオの白熱した攻防、その一方で和気藹々と談笑するハリーとエルスにシュウジは苦笑う。本当なら一瞬も眼を逸らせてはいけない大事な試合、ヴィクターの咳払いで我に返る二人は再びリングへと視線を向ける。
幸いこの時の二人はまだ睨み合った状態、談笑している間に試合が大きく動いていなかった事に安堵し、ハリー達は今度こそ眼を逸らすことないようジッと観戦に集中する。
ヴィクターも二人の様子を見守る中、シュウジはふと違和感を覚えた。
（ヴィヴィオちゃん、何を話してるんだろ？）

相変わらず睨み合うヴィヴィオとリンネ、しかしヴィヴィオの口元は動いており、それに合わせてリンネの目が僅かに細くなる。言葉を使って相手の集中力を割く、ヴィヴィオが今やっているのは所謂減点対象のやり方だ。

リンネの反応から挑発している様にも見えるヴィヴィオ、しかし普段から彼女を見ているシュウジとしてはヴィヴィオがそんな事をする人間には思えない。

隣をチラリと見ると、シュウジと同じくヴィヴィオのやっている事に気付いたヴィクターが困った様に苦笑いを浮かべている。自分よりも遥かにヴィヴィオの事をよく知るヴィクターの反応からして、やはり挑発のつもりでやっている訳ではなさそうだ。

――恐らく、ヴィヴィオは対話を試みているのだろう。試合の最中にそんな事をするのは正直どうかと思うが、お人好しな彼女の事だ。きっと相対しているリンネに思う所があって彼女なりのお節介をしている所なのだろう。

そして激情に駆られ、襲い掛かるリンネにヴィヴィオのカウンターが炸裂する。ダメージで倒れるというより衝撃に驚くように仰け反ってリンネは堪らず地に膝を突いた、瞬間ダウン判定が入り、観客達から大きな声援が沸き上がる。

カウントが5を過ぎた辺りで立ち上がるリンネ、ダメージも然程通ってない様子でその表情には微塵も翳りがない。構えて再び打ち合おうとする所でゴングが鳴り、1Rは終了した。

◇

『――リンネ選手って、格闘技はあんまり好きじゃないですよね』

先程の試合の最中に聞かされる彼女の言葉に少しばかり苛立ち

を覚える。何も知らず、ズカズカと人の心に踏み入ろうとする彼女の言葉に多少心が乱されたが、今は既に落ち着いている。

そもそも、私が誰かの言葉に惑う必要なんてないのだ。私が求めるのはただ一つ、誰にも負けず、誰にも見下されず、全てを圧倒する強さだけだ。

――――私には二人、目指すべき頂点が存在する。一人は同年代で今年のウィンターカップでＵ１５を卒業する全試合無敗の世界王者、アインハルト＝ストラトスさん。彼女の強さに魅せられ、この人の様に強くなれば、誰からも傷つけられずに済むと、そう思った。

そしてもう一人の頂点、シュウジ＝シラカワさん。二年前に突如として格闘技の世界に現れて瞬く間に世界王者となった伝説の選手。ジルコーチが保存していた彼の当時の試合映像を見て、私は圧倒された。

〝強い〟ただただ〝強い〟。シュウジ＝シラカワさんの圧倒的な強さに私は何も考えられず、ただ試合に勝利する画面越しのシュウジさんを見詰めていた。

凄いとしか言えなかった。凄いとしか思えなかった。アインハルトさんやＵ１９の世界王者であるジークリンデ＝エレミアさんも肩書きは同じなのにシュウジさんの試合だけは他の人達とまるで違って見えた。

楽しそうに戦うシュウジさん。この人はきっと誰かを悲しませたり、奪われたり、傷付けたりしなかったのだろう。私の様に大切な人を悲しませたり……しなかったのだろう。

あの人と私は根本的に違う。悪意に泣いて蹲るのが私なら、あの人はきっと悪意そのものを打ち砕くのだろう。どんなに私が強くなってもこの人には絶対になれない。

私はシュウジさんに憧れた。憧れ、そして打ちのめされた。私ではきっと、彼のようにはなれないのだろう。だって私は――――〝笑ってはいけない〟のだから。

あぁ、認めよう。私は格闘技を楽しんではいない。ここまでに至る練習だって辛く、苦しい日々としか思っていない。でも、それでいい。

私は、リンネ＝ベルリネッタはそれでいいのだ。
強く、ただ強く。どんな悪意にも屈せず、いかなる理不尽にも負けない強さを得る。その為だけに私は格闘技を始めたのだ。
「大丈夫ですかリンネ」
「大丈夫ですコーチ。私はいけます」
笑顔で首肯くコーチ、しかし私には今のジルコーチがどんな顔をしているのか良く見えていなかった。
私は強くなる。強くなって、勝ち続けて、優勝して、チャンピオンに勝つ。そうすれば、きっと誰も私をバカにしたり出来なくなる。誰からも見下されなくなる。……悪意に涙を流すこともなくなる。
そうなったら、ジルコーチと一緒にシュウジさんも私の所に来てくれる。私を認めて、ジルコーチと一緒に私を今よりずっと強くしてくれる。
誰よりも強くなって、チャンピオンになったら……その時がくれば、私は笑えるのだろうか？　笑っても、良いのだろうか。
今は分からない。けれど、必ずそこへ辿り着いて見せる。私の所為で傷付いたお父さん、お母さん、そしてお爺ちゃんの為にも。
（絶対に……勝つ！）
第2ラウンドのゴングが鳴り、リンネはヴィヴィオに吶喊する。打ち出される弾丸のように飛び出すリンネを前にヴィヴィオはしっかりと彼女を見据えるのだった。

その16

序盤から波乱が巻き起こるリンネとヴィヴィオの試合、２Ｒのゴングが鳴ると同時に吶喊を仕掛けるリンネにヴィヴィオは落ち着いて迎え撃った。

１Ｒの時と同じ展開、しかし自ら打って出たにも関わらず、リンネはガードをして防御を固くさせた。プレッシャーを掛けながらヴィヴィオの大振りを誘発させ、その隙を突く作戦なのだろう。

しかし、それはヴィヴィオにも分かっていた。ガードを固めたリンネに執拗に連打を重ね、大振りを見せ掛けて打ち返してきたリンネに合わせて丁寧にカウンターを当てていく。

「先程のラウンドより連打が速い。ギアを上げて来たか」

「加えてフットワークも軽い。どうやら先程のダメージはまだ致命的では無いようです」

１Ｒの終盤で幾つかリンネの攻撃をマトモに受けていたが、それも今では完全に快復している。恐らくヴィヴィオの相棒であるデバイスが余程優秀な性能を有しているのだろう。

連打を重ね、隙あればカウンターを放ち、危険を察知すれば後ろに下がる。広いリングを上手く活用した戦術、ヴィヴィオの眼を最大限に活かした戦い方にシュウジは素直に感心した。

（だが、あれだけ打たれてもリンネちゃんは平然としている。やはりヴィヴィオちゃんの力では決定力に欠けるか）

ヴィヴィオの拳を悉く浴びてもリンネの動きは微塵も揺るがない。ヴィヴィオのフットワークにもラウンドを重ねれば対処法も分かるだろうし、この試合の終盤には体力面で優秀なリンネが猛威を奮うだろう。

「今回のウィンターカップは立ち技が主体だから、寝技とか組み付きはダメなんだっけ？」

「はい。蹴りや投げは許されますが、基本的には打撃がメインです」

「成る程、リンネちゃんは確かに全方面に向けて高いレベルで完成さ

れているが、逆を言えばその力を十全には発揮しきれていない。という事か」
　シュウジの言葉に隣に控えるヴィクターは頷いて肯定した。ＤＳＡＡの格闘技界に於いて立ち技、寝技、投げ技が主体にしており、勿論そこには魔法の使用といった次元世界ならではのオリジナルのルールが成立されている。
　現大会のウィンターカップは立ち技と投げ技をメインにしていて寝技は今回は禁じられている、それはリンネの武器を一つ封じられている状態でもあった。
　対してヴィヴィオは立ち技特化で打撃戦を大の得意としている。軽快なフットワーク、鋭くも正確な打撃、蹴りも出来て加えて相手との距離の計り方も絶妙と来ている。嘗てシュウジが経験した大会とは違い、様々な制限を設けられた今回の大会では寧ろヴィヴィオの様な器用な選手こそが活躍できる舞台なのだ。
（ホント、こうして観るとまんまボクシングだな。ルールも似通ってる所多いし、本当に地球は管理外世界なのか？）
　自分の知るボクシングのルールと良く似ている今回の大会、そんな比較的どうでも良いことを考えていると、シュウジの視界にリンネの手がヴィヴィオの胸倉を掴んでいる瞬間が飛び込んできた。
　このまま一気に流れを引き戻すか？　ミウラとの試合同様掴んだ所からの至近距離による強烈な一撃、しかし拳を握り締めたリンネの一撃は届くことはなく、読んでいたとばかりにヴィヴィオの左右のフックが彼女の顔に直撃する。
（組み付きはダメなのに掴みはＯＫか、うーん。良くわからん）
「しかし、良く避けますねぇヴィヴィオさん」
「ヴィヴィオさんも以前リンネと試合をしたときより強くなってますね」
「当て勘も避け勘もやべぇからなぁ。ああなったヴィヴィオは手がつけられねぇぞ」
　ハリー達がヴィヴィオの技術力の高さを称賛する中、シュウジはリンネの動きを注目する。確かにヴィヴィオのアウトボクサーとし

ての才能は凄まじい。非力とは言ったが、ヴィヴィオにはそれを補って余りあるほどの目の良さがあり、今の戦い方は彼女を最大限に活かせている。
　カウンターの打ち込みも見事である。カウンターパンチャーは相手のリズムを見切るというのが強みというが、今のヴィヴィオはそんな彼等と遜色のないレベルにまで登り詰めている。
　これがヴィヴィオとナカジマ会長二人による最強の戦い方なのだろう。しかし、それはリンネとジルにも同じ事が言える。練習に練習を重ね、長い時間を掛けて肉体改造を施してきたリンネ、天性の肉体を最大限に活かした鍛え方は彼女の強さを一つの段階へと引き上げさせている。
　第2ラウンド終了のゴングが鳴る。結果から見れば最初の時と同じ終始完封された形となったが、今回限りはそれは当てにならない。幾らポイントを取っていようが、リンネのパンチはそんなモノを幾らでもひっくり返せる破壊力を持っている。
　前回と同様に判定勝ちを狙うのか？　仮にヴィヴィオ達の作戦がそうだとしても一度それを経験したリンネが許すとは思えない。
「次のラウンドが勝負だな」
「ですね」
「……うー！」
「ど、どうしたんですハリーさん」
「エルスぅ、ヴィクターの奴シュウジさんを独占してるぅ～、オレもシュウジさんと色々話したい事あったのにぃ～」
「貴女さっきからそうやって話し掛けようとしては失敗してるじゃないですか！　今回は素直に諦めて、また次にお話しましょ？　ね？」
「うー！　うー！」
「涙目でお二人を指差さない！　こっちまで切なくなるでしょ、そんなに嫌ならもう一度話し掛けてごらんなさいな」
「やだ。恥ずかしいもん」
「乙女か！」
　隣でハリーとエルスが何かを話をしているが、今は試合観戦に集

中したいので後回しにする。横ではまだ二人がギャーギャーと騒いでいるが、そこは仮にもプロの格闘技選手。ゴングが鳴り、３Ｒが始まるとその表情はプロ格闘技選手の顔になる。

ＶＩＰルームにいる全員が真剣な表情で試合を見守る中、ゴングが鳴ると同時にリンネが駆け出す。先程と全く同じ展開、ヴィヴィオが突っ込んでくるリンネに合わせて丁寧にフリッカージャブで牽制するが、リンネはそんなのお構い無しとばかりにダッキングしてヴィヴィオの懐に潜り込もうとする。

「ちょリンネ選手、強引過ぎません？」

「上手く自分の戦いが出来なくて自棄を起こしたか？　あれじゃあヴィヴィオのカウンターの餌食だぞ」

今までよりも強引に攻め込むリンネ、打ち出された彼女のパンチに合わせてヴィヴィオはカウンターを取った。

「タイミングバッチし！」

「これは当たればキツいぞ！」

「いえ、これは……」

完璧なタイミング。リズムを読み、持ち前の目の良さで放たれるヴィヴィオのカウンターは完全にリンネの顔面を捉えた。今までのラウンドを振り返っても完璧なタイミング、これなら効いただろとエルスとハリーが絶賛する中、ヴィクターは不安に眉を寄せ……。

「――これは、不味いな」

シュウジの呟きが漏れた瞬間、ヴィヴィオの一撃はリンネの顔へと直撃した。誰もがリンネへのダメージを確信した。これで流れは完全にヴィヴィオへと傾くと。

――しかし。

「――――ッ！」

ギリィッと、歯を喰い縛る音をヴィヴィオは確かに聞いた。自分のカウンターは完璧だった。タイミングも申し分なく、今の自分が打てる最高の一撃だった。

だが、それを耐えた。ヴィヴィオの最高の一撃を耐えたリンネは口元から流れる血を構う事なく、お返しとばかりに渾身の力を込めた―

――下から突き上げる様な肝臓打ち（リバーブロー）を叩き込んだ。
ミシミシと軋む助骨、ミチミチと悲鳴を上げる内臓、息苦しさと気持ち悪さで動きを止めたヴィヴィオ、再び振り抜かれるリンネの右拳せめて顔だけは守らなければとガードを高くするが、再び腹に伝わってくる衝撃にヴィヴィオは悶絶した。

呼吸が止まる。動きが停止する。そんなヴィヴィオに今度は脚へリンネのローキックが強襲する。振り抜かれた右のローキックは確実にヴィヴィオの左足を捉えた。骨が軋む音と其処から伝わってくる痛み、自身の強みである脚に強打が入りこの時点でヴィヴィオは悟った。この大会で自分はもう満足に動けないと。
そして、そんなヴィヴィオにリンネはトドメを刺しに来る。遠心力を加えた右のストレート、これをマトモに受ければ一撃で失神してしまうだろう。
何とか直撃を防がなければ。咄嗟に出した左手で防御するが、その程度でリンネのパワーは止まらない。防御に出したヴィヴィオの左手を破壊しながら、リンネは彼女をマットの底へ叩き落とした。
知恵と技、努力と根性で積み上げてきたヴィヴィオを圧倒的な力で薙ぎ倒したリンネ、小細工など不要と、リング中央で佇むリンネに会場は騒然となった。
先天的な強者の才能、それを存分に見せ付けてきたリンネ、改めて分かるリンネの強さにハリー達が戦慄を覚える一方、シュウジは一人リンネに同情の視線を向けていた。
（リンネちゃん。そんなに君は自分が許せないのかい？　自分を痛め付ける様な戦い方をして、それでお爺さんが喜ぶと……本気で思っているのかい？）
自分を擲って勝利を掴もうとするリンネ、周囲はそんな彼女に羨望と畏怖の眼差しを向ける。確かにリンネは格闘技の選手として類い稀な才能を持った将来有望な人間なのだろう。今の戦い方も今の彼女にとって最適なのかもしれない。
だが、それをシュウジは正しいとは思えなかった。戦い方の問題で

はなく、それ以前にリンネはアスリートとして大事なモノが欠如しているのだから。

――ふと、ジルコーチと視線が合う。どうやら向こうもシュウジがこの席にいることを事前に知っているようで、シュウジを見る彼女は不敵な笑みを浮かべていた。その笑みには一体どんな意味が込められているのか、それはきっと彼女にしか分からない。

「ジル……」

そんなジルにヴィクターは悲痛な面持ちを浮かべ、ハリーもエルスも静まり返った時。

「君達、まだ試合は終わってないよ」

静まり返るＶＩＰルームにシュウジの一言が響く。彼の言葉で我に返った彼女達はまさかと思いリングの方へ視線を向けた。

今、この場にいる誰もが様々な事を考えているだろう。同情、怒り、情熱、憐憫、そして歪んだ達成感、あらゆる感情が渦巻いているのだろう。しかし、敢えて言わせて貰おう。そんなものに意味を成さないのだと。

何故ならば……。

「ここからだ。ここからが本当の戦いだ。ここからこそが戦いの真に面白い所だ」

リングに佇む二人の選手、彼女達こそがこの舞台の主役なのだから。

立ち上がるヴィヴィオを見てシュウジは満足そうに呟いた。

その17

――――分かっていた、私の体が格闘技に向いていないことは。パワーがない、打たれ弱い。何度も言われ続けて来た。

本当は、私も欲しかった。ミウラさんの様な強い打撃とか、アインハルトさんの様な頑丈で強い体が。

持って生まれた才能。練習や努力をどんなに重ねても決して手に入らない、そんな事は何度も思い知らされた。

だけど、無いものを欲しがってもしょうがない、今ある自分の持てる力を伸ばしていけば良い。そう教えてくれて、何度も私の練習に夜遅くまで付き合ってくれた。

強いパンチが打てなくても、打たれ強い頑丈が無くても、戦える。戦えるように、皆が強くしてくれた。――その全てを、私は今出し切れているか？

（まだまだ、全然、これっぽっちも――――出していない！）

脚の痛みで立つのが覚束無い。打たれた手首からはもう痛みすら感じ取れない。腹部を強打された事で呼吸は辛いし、今すぐ横になって楽になりたい。

でも、私はまだ出しきれていない。ノーヴェと、皆と一緒に培ってきた力を、全てを出し切っていない。

カウントが進む中、何とか立ち上がって見せた。膝は震える、踏ん張りも利かない、マトモなパンチも打てなくなった。それでも、高町ヴィヴィオの闘志には一切の揺らぎは無かった。

◇

手応えはあった。これまでの相手なら今の一撃で沈んでいた。ガードの上からでも充分な程に伝わってきた衝撃にリンネは己の勝利を確信していた。

なのに、それが覆った事にリンネは大きな動揺を受けた。これがアインハルトやヴィクター、名だたる強豪の選手ならばまだリンネも納得できた。しかし、打たれ弱さという弱点を抱えたヴィヴィオが現に自身の前で立ち塞がっている。

何故立ち上がる。どうして立ち上がれる。立つのもやっとな満身創痍の癖して、どうしてそこまで戦える。

「リンネ、落ち着きなさい！　状況は貴女の方が俄然有利よ！」

リングの外から聞こえて来たジルの一言にリンネは落ち着きを取り戻す。そうだ、何を驚く必要がある。相手は既に死に体、今の連打をもう一度浴びせれば今度こそ彼女はマットに沈む。

残り時間はあと一分、充分倒しきれると判断したリンネ、ジルからもゴーサインが出てきた。試合再開の合図と共にリンネはヴィヴィオに弾丸のごとく飛び掛かった。

ダウン前の様に左で牽制を図るヴィヴィオ、しかし軸足だった左足を負傷した事で踏ん張りが利かず、唯でさえ弱かった左が今ではもう牽制にすらならない。

強引に懐に潜り込んだリンネ、再び撃ち抜かれる腎臓打ち（リバーブロー）、重い打撃に加えて踏ん張りも利かなくなってきたヴィヴィオはリンネに押し出される形でロープ際に張り付けられる。

降り注がれる連打、ガードの上からでも響いてくる衝撃、少しでもガードを下げればその瞬間またあの恐ろしい打撃が急所に襲い掛かってくる。そうなったら、今度こそヴィヴィオは立てなくなる。

リンネの打撃、その一つ一つを必死に耐えるヴィヴィオ、時に体幹をずらして致命傷を避ける彼女には長年の格闘技選手としての技能の高さを感じさせていた。

対するリンネは渋く耐え続けるヴィヴィオに徐々に不快感を募らせていた。

（――――この子の事は知っている。エリート公務員の親に育てられて、教会系の名門校に通っている）

それは、初めてヴィヴィオと試合をする事になり、どういう子なのかと気になり、少しだけ調べた時だった。

（優しい大人達に囲まれ、何不自由なく育ってきた。生まれつきのお嬢様）

何もかもが違ってた。親に捨てられ、孤児だった自分とは、根本的に違っていた。裕福で、暖かで、きっと悪意をぶつけられた事なんてないのだろう。

（格闘技には向いていない。非力で脆い体の持ち主、なのに――――）

倒れない。どんなに連打を加えても、どれだけ有効打を浴びせても、決して倒れないヴィヴィオにリンネの不快感と苛立ちは更に積もっていく。

許せない。自分とは違って何もかもを持っている癖に、格闘技なんかやらなくても良いのに、リンネから見て、何もかもが恵まれているヴィヴィオを見て苛ついて仕方がなかった。

（帰れる家があって、友達がいて、幸せなんでしょ!?　我慢する必要なんてないでしょ!?　――――だったらいいでしょ！）

リンネの拳がヴィヴィオのボディに突き刺さる。その衝撃に体をくの字に折り曲がる。

（私は違う。強くならなきゃ、全てを失う。――――だから！）

思い浮かぶのは、嘗て自身の受けた陰湿な虐め。悪い事を悪い事だと認識せず、ただ良いようにリンネを甚振る三人の悪魔。

傷つけられ、養子となった家から譲り受けた大切な物を汚し、遂には大好きな祖父の危篤に行かせて貰えなかった。

降り掛かる悪意が許せない。見下し、暴力を奮う輩が許せない。悪を悪と認識しない者達が許せない。リンネが抱いた気持ちはそんな悪意に対する絶対なまでの反骨精神だった。

しかし、彼女は気付かない。悪意に負けない為に必死に強くなろうとしている己自身が、そんな悪意を持つ輩になり掛けている事を彼女はまだ自覚していなかった。

故に、フーカはそんな親友の変化をいち早く気付いたからこそ、一度は彼女の前に立ち塞がった。悪意に対して自ら悪意になろうとしているリンネをフーカは本能的に察したのだ。

自分は負けられない。強くなくてはならない。そんな強迫観念から来るリンネの大振りをヴィヴィオは見逃さなかった。

瞬間、リンネの顔が跳ね上がる。今までのモノとはまるで違う鋭くて重い一撃、衝撃と驚きで大きく距離を離されたリンネはいつの間にか変わっていたヴィヴィオの構えに目を見開く。

(右足と左足が逆……スイッチしてる!?)

前になっている右足、軸足を変えた事で先程とはまるで別人の様な打撃力を打てるようになったヴィヴィオ、彼女から繰り出される連打は最早今までの非力なモノではなかった。

(ご先祖様から受け継いで、ママに育ててもらったこの身体はいつだって、私の無茶を聞いてくれる。思った通りに動いてくれる!)

利き腕である右が突き出る形となり、これまで牽制だったジャブが防御するリンネの腕に突き刺さる。

ノーヴェ=ナカジマと高町ヴィヴィオ、何度も挫折し、それでも必死に考えて二人で編み出した変幻自在のサウスポースタイル。

軌道の読めない打撃、速さも重さもこれ迄とは訳が違う威力、リンネは再びヴィヴィオに封殺された。

「リンネ、打ち合って!」

ジルの激にリンネも構わず前に出る。左と右が変わった事で距離感は狂わされたが、向こうだってダメージはある。あの厄介なフットワークがなければどうという事はない。

何発か貰いつつも、強引に攻めこんだリンネは半ば無理矢理にヴィヴィオの腹部に拳を捩じ込む。痛みで仰け反り、顔を上げるヴィヴィオ、そこへ止めとばかりにリンネの左ストレートが押し寄せてくる。

(リンネさんを救えるのは、きっと私じゃない。リンネさんにはちゃんと勝ちたかったし、フーカさんやアインハルトさん達とも戦いたかったけど……仕方ないや。私の冬は、ここで終わり)

(――――その代わり)

しかし、それを読んでいたとばかりにヴィヴィオの右のアッパーがリンネの顎をカチ上げた。右のカウンターによる押し出し、距離が開けられたリンネが次に目にしたのは両手に虹色の魔力を纏わせたヴィヴィオの姿。肩と同じ高さに構えて、佇むその姿はまるで虹の翼を持った天使の様……。

「っ!?」

（今の私に出来ること、ここで全部――――っ!!）

（耐える。耐えきって、打ち返す！）

ガードを交差させ、守りを固めるリンネ。ヴィヴィオの繰り出す技を耐えて、隙を見せた所で一気に決める。

「アクセルスマッシュ！」

しかし、ヴィヴィオはそんな守りを固めるリンネのガード、その隙間を的確に射抜いた。跳ね上がるリンネの顔、その隙を逃がさないとヴィヴィオは持てる力の全てを使いリンネに打ち込んでいく。

二発、三発、四発と体力が許される限り繰り出されるヴィヴィオの必殺パンチ、彼女の目は常にリンネの急所を捉えて離さない。

「あ、がぁっ!?」

「リンネっ!?」

そして、とうとうガードを固める力すら奪われたリンネに叩き込むダメ出しの一撃、それはリンネの意識を断つには充分過ぎる威力だった。

髪が跳ね、眠るようにリングへ倒れるリンネ。審判が試合続行か確認するが、首を横に振り、両手を交差する。

――――試合終了の合図。即ち、それはヴィヴィオの勝利を意味していた。

◇

「成る程、サウスポースタイルか。確かにいきなりアレをやられれば大抵の者は戸惑うだろうな」
　二人の激闘を目の当たりにした観客から大きな歓声が沸き上がる。全ての力を使いきり、試合終了の合図が鳴るとほぼ同時に倒れるヴィヴィオと彼女に駆け寄るセコンド達を見て、シュウジは感想を口にする。
「えぇ、慣らされたタイミングを狂わせるだけでなくカウンターの強みも活かせる様になった」
「更に今回は怪我をした左足を庇う事にも繋がった。という訳ッスね」
　強打を打てる右を前に出す事により、牽制として使われたジャブが武器にもなった。試行錯誤の果てに辿り着いた彼女のファイトスタイル。並々ならぬ努力の果てに会得したのであろうヴィヴィオにシュウジは心からの称賛を送った。
「けれど、それでもリンネ選手ならば対応出来ただろうね。彼女がもし万全なら、試合の結果は逆になっていたかもしれない」
「へ？」
「シュウジさん、それはどういう？」
　折角の勝戦ムードの中、水を差すような事を口にするシュウジ、嘗ての世界王者の意味深な台詞に三人が注目する。
「試合が始まる前に君達に聞いた事、覚えているかな？　君達格闘技選手は何を目標に頑張り、糧にしているのか」
　シュウジの言葉に黙して頷く三人、しかしどうしてそんな話が今回の勝負の行方を左右するのか、今一つ理解していないハリー達を置いてシュウジは話を続けた。
「格闘技選手に限らず、アスリートというのは目標に向かって努力を重ねるもの、この点に関してはリンネ選手も皆と大して変わらない。

けれどね、彼女はある一つの事が他の選手と剰りに違っていた」
「ある事？　　それって……」
「――――〝喜び〟だよ。彼女は試合に勝利しても決してその事を喜ばない。寧ろそれを拒絶していると言っても良いだろう」
　誰だって、自分のこれ迄の記録を塗り替えたり、超えたり、大きな大会で優勝すれば歓喜するだろう。何せ自分のこれ迄の努力が報われた事を意味しているのだから。
　その喜びが次の目標に向けての原動力になる。挫けても、悩んでも、またもう一度頑張ろうと言うやる気に繋がっていく。
　しかし、リンネはそれを淡々と機械的に処理していた。自分の才能を開花させ、何度も大会で優勝し、勝利を重ねてもリンネはそれを自ら喜ぼうとしなかった。
　ただ闇雲に強さを求めるリンネ。確かに強さを求める事、それ自体は悪くはない。強くなればそれだけ目指せる目標が高くなるし、それに合わせてまたやる気も沸いてくるものだ。だが、リンネはそうじゃない。
　孤児だった事、陰湿なイジメ、そして彼女に襲い掛かる悲劇、そんな過去の自分を殺す勢いで強くなろうとするリンネは強迫観念に囚われていた。
　過去の自分を払拭する為に強くなろうとするリンネと、過去と向かい合い、それでも前に進んで歩き続けるヴィヴィオ、両者の差は恐らくそこだけだろう。
　もしリンネが過去と折り合いを付け、感情を自由に表現出来きていたなら、きっと今回の試合の結果は別物になっていただろう。
　そしてそれを見抜けなかったジル＝ストーラ。リンネという外面（才能）に目を奪われ、その内面（心）までは見ようとしなかった。
　未だに信じられない様子で狼狽するジル、必死にリンネの名を呼ぶ姿はいつもの冷静な彼女とはかけ離れていた。
（ジルさん、リンネちゃん。君達の境遇は同情するべき事なのだろう。しかしここは未来に向けて自分の全力を出し合うリングの上だ。過去の自分に嘆く場所じゃあないぜ）

ジルとリンネ、今後この二人には大きな障害が残る事だろう。しかし、今は彼女達の事ばかり気に掛ける場合ではない。
そろそろ次はフーカの試合の番だ。寧ろ自分はこのためにここに来ている。折角の良い席なのだからちゃんと見て上げなければ。
「さて、それでは私はこれで失礼します」
「あれ？　ヴィクターちゃん、もう行くの？」
「はい。大変名残惜しいですが、向こうの様子が気になりますので、派手に心配は無いとは思いますが一応は病院で検査の手続きをしてきたいので……こう見えて私、選手会長ですから」
「あ、それじゃあ私はヴィヴィオさん達の方へ顔を出しに行きますね。勝ったとは言えヴィヴィオさんかなりダメージはあると思いますから」
「あ、じゃ、じゃあ俺も行く！　ヴィヴィオの奴を褒めてやらねぇとな」
「え？　え？」
「あぁ、シュウジ様はそのままゆっくりして頂いて結構ですよ。元々この部屋はシュウジ様の為に貸し切ったものですので、後で使いの者を寄越しますので、どうぞ最後までご堪能下さい」
「あっ、はい」
次々と席を立ち、それぞれやるべき事を果たしに行くヴィクター達。残されたシュウジは突然一人に残された事を寂しく思いながら、残りの試合の様子を眺めていた。

その１８

Ｇ月Ｘ日

ヴィヴィオちゃんとリンネちゃん。互いに全力を出し切っての壮絶な戦いを繰り広げて翌日。今日の自分はいつもと変わらず店で営業を続けていた。

ヴィヴィオちゃんはリンネちゃんの打撃をマトモに受けてしまった腕と脚に無視できないダメージを抱えてしまった為次の試合を棄権。フーカちゃんも自身の試合を勝ち残り同じブロックだった事もあって、結果的にはフーカちゃんが一足早く決勝へ進むことになった。

アインハルトちゃんも何の問題もなく次の試合へ駒を進めたし、彼女の事だから次の準決勝戦も無事に勝ち進む事だろう。そうなれば決勝戦はナカジマジムの同門対決という事になる。

相手がＵ１５の世界王者と言うから家に帰る時から既に緊張していたフーカちゃんだが、既に自分という人間と毎朝組手をしている事もあり、一晩が経った今日には案外すんなりと気持ちに余裕を持つことが出来るようになっていた。

まぁ、引退して格闘技の世界から身を引いたと言ってもこっちも元は世界王者だからかな、フーカちゃんからしたら慣れたモノなのだろう。大きな大会で初めて世界王者と戦うから変に意識をしたから緊張してしまっていたのだろう。

気持ちを落ち着かせたお陰で今日の特訓にも身が入る様になり、自分との組手でも集中出来ている。この調子で行けばきっとアインハルトちゃんが相手でも良い試合が出来るだろう。

けれど、そんなフーカちゃんも仕事中時折ボーっとしている事が多かった。流石にお客が来ている時はそんな様子は無かったが、客足が減り、比較的暇な時があるとひっそりと上の空でいる時が多かった。

理由は分かっている。リンネ＝ベルリネッタ、彼女との試合が無くなり、済し崩し的に決勝に進む事になったから、自身の複雑な気持ちに戸惑っているのだろう。

別にヴィヴィオちゃんに負けて欲しかった訳ではないだろうけど、本来なら次で戦う筈だったヴィヴィオちゃんもリンネちゃんとの試合の怪我で出場を断念、お陰で次の決勝まで時間が出来てしまったから、変に気持ちが抜けてしまったのだろう。

所謂燃え尽き症候群。本人は気付いていないだろうが、ちょっと今のフーカちゃんはメンタル的に不味い状態だ。まぁ本人はリンネちゃんやヴィヴィオちゃんを相手に特訓を頑張っていたから気持ちは分からなくもないが、このままの状態が続けばきっと次の決勝ではマトモにアインハルトちゃんと打ち合えなくなる。

何とかしなければ、強くなりたいと願うフーカちゃんの気持ちに応える為にも、自分も出来る限りの事をしようと思う。だから明日にでもナカジマ会長に相談しようと思い今日の所はこれで終わりにする。

G月XX日

昨日の記述通り、客足の少ないお昼過ぎにナカジマ会長に通信を入れる事にした。向こうも昼食を済ませている事だから失礼だとは思ったが、こう言う相談は早めに済ませて対策を練った方がいい。

運良くナカジマ会長とは話が出来たが、どうやら向こうも何か問題があったらしく、気丈な彼女にして珍しい困惑顔だった。通信にはアインハルトちゃんやヴィヴィオちゃん達も映っており、皆ナカジマ会長と同じ表情をしていたから不躾に思いながらも訊ねてみた。

少し戸惑いながらも話してくれたナカジマ会長からすると、どうやらリンネちゃんてば格闘技を辞めるつもりでいるらしい。……まぁ、そうなるわなと自分は思った。

同じ相手に二度も敗北、それも一度目は判定負けという形だったが、先日の試合ではリンネちゃんのKO負け、どんなに言い訳しても覆らない完全なるリンネちゃんの敗北だった。

そのショックからリンネちゃんは格闘技を続ける意味を無くし、今

は家で塞ぎ込んでいるらしいのだ。一度は専属コーチであるストーラさんと話をしたみたいだけどリンネちゃんの気持ちは変わらず、このままだと彼女は過去に縛られたまま終わる事になってしまう。

現在、フーカちゃんはナカジマジムに向かっており、会長達から詳しい話を聞くつもりだ。店を閉めるにはまだ時間が早いけど……まぁ、今回ばかりは仕方がない。

それに自分の方にもヴィクターちゃんが迎えに来ている。何でもリンネの説得に自分にも協力して欲しいのだとか。既にリンネちゃんの親御さんにも話は通しており、ベルリネッタ夫妻も自分がやって来るのを待ち望んでいるらしいのだ。

いやね、自分も最初は戸惑ったよ？　幾ら手を回したと言っても自分はリンネちゃんのご両親とは初対面な訳で、幾らそのご両親が承諾してもいきなり女の子の部屋に乗り込むのはどうかと思ったよ？

だから店番を理由にそれとなーく断ろうとしたのだけれど、ヴィクターちゃんてば信じられない行動に出やがったのだ。懐から取り出そうとするブ厚い札束、本日の店の貸し切りという名目でトンでもない強行策に乗り出した彼女に自分は半ば強制的に従うしかなかった。

幾ら同じジムの後輩だからってやり過ぎじゃありません？　て訊ねれば、「後輩の為に家の財を投げ出す事に躊躇はありません」と言って退けてきた。言ってることは格好いいかもしれないけど、一市民からしたら恐怖でしかねーよ。

そして妥協案として今日1日店の方は彼女の執事であるエドガー氏に預けることにした。彼ならば家事スキルも高そうだし、料理全般も任せられそうだ。そんな訳で自分の車にヴィクターちゃんを乗せる事にした自分は、これからベルリネッタ家へお邪魔する事になる。

◇

――――――お金持ちって、怖いんダナー。

――――ベルリネッタ家。
リンネが養子として迎え入れたベルリネッタの邸、広々とした敷地内に場違いな程に小市民感溢れた一台の車が用意された来賓用の駐車場に降り立つと、車内から二人の男女が降り立った。
「でっか、分かってたけどデッカ！　やべぇよ、絶対間違ってるよ、一市民の俺が来るところじゃないって、ねぇヴィクターちゃん。俺スーツに着替えてくるから出直してきて良い？」
「いい加減落ち着いて下さいシュウジ様。大丈夫ですから、ベルリネッタ夫妻は勿論メイドの皆さんも懐の深い優しい方達ばかりですから」
「本当に？　俺昼間に思い切り麻婆食べちゃったんだけど、麻婆臭いって思われたりしない？　麻婆ディスられたりしない？」
「何故麻婆の心配!?　大丈夫ですから、その程度で麻婆ディスったりしませんから！　皆麻婆大好きですから！　……多分」
「よっしゃ任せろ。同じ食を嗜む紳士だ。絶対にリンネちゃんを思い留まらせてみせるから」
最後のヴィクターの呟きを耳にしなかったシュウジは臆する事無くベルリネッタ家の玄関へと向かった。開かれる扉、礼儀正しく畏まるメイド達、玄関からでも伺える素朴だが価値のあるベルリネッタ家の内装の凄さを前に……。
「ごめんヴィクターちゃん。やっぱ先に行ってくれません？」
「シュウジ様、もしかしてわざとやってません？」
すっかり小市民として怯えるシュウジに流石のヴィクターもイラッとした。
そんなやり取りの後、メイドに案内されながら二階へと昇る二人、ベルリネッタ夫妻とは結局顔を合わせなかったが良いのかなとシュウジが疑問に思う中、遂に二人はリンネの私室の前へと通される。
「お嬢様、ヴィクター様とシュウジ様がお見えになられました」

扉越しのリンネにそう伝えると、メイドはシュウジとヴィクターに頭を下げて一階へと戻っていく。後は自分達に任せるという意味なのだろう。
「リンネ、私です。ヴィクターです。……入っても良いでしょうか？」
リンネちゃんからの反応はない。典型的な引きこもりかなと思ったが、意外にも部屋に鍵は掛けられていなかった。中へ入っても良いという事なのだろうか？
ドアノブを回して部屋へと入るヴィクター、続いてシュウジもリンネの私室へと入るが、嘗ての幼馴染以来初となる女の子の部屋に入った事で、その表情は少し緊張気味だった。
部屋の中ではベッドの中で膝を抱えるリンネが朧気な表情でモニターに映るＤＳＡＡの試合映像を眺めていた。映像は先日のウィンターカップのモノ、そこには豪快なＫＯで勝利を飾るフーカちゃんが映し出されていた。
「ヴィクター……さん？　それに、シュウジさんまで、どうして？」
ヴィクターが映像を消したことで漸く自分達の存在に気付いた様子のリンネ、生気がなく、朧気な表情の彼女にヴィクターは一瞬息を呑んだ。
まさかここまで拗らせていたとは、自身の後輩が自らを追い込んでいた事にヴィクターがやるせなさを感じていた一方、シュウジは「あーあ」と思っていた通りの彼女の様子に少しばかり呆れていた。
その後、リンネは少しずつだが口を開いて話してくれた。分からなくなったと、一所懸命に練習して、吐いて気絶して、それでも立ち上がって、辛くて苦しい練習を重ねて試合に勝っても何も感じなかった。それなのにヴィヴィオとの試合で惨めに負けたらこんなにも虚しい気持ちになるのかと。
勝っても何も感じないのに、負ければ虚しくなる。あんなに辛く苦しい練習をしても、強くなろうとしても、結局自分は何も変わらなかった。故に自分がこれ以上格闘技を続ける意味はあるのか、分からなくなったとリンネは語る。

それは、紛れもなくリンネの叫びだった。歪み、捻れ、拗れた彼女の心の奥底に眠る彼女の歪なＳＯＳ信号だった。甘えるなと叱咤するのは簡単だ。諦めるなと言葉にするのは簡単だ。

でも、どんなに言葉を尽くした所で実行するのはリンネ本人だ。ただ言葉だけで彼女を動かすと言うには少しばかり無責任な話では無いだろうか。

言葉は時に簡単に人を傷付ける刃になる。それこそ酷い虐めを経験し、それと同じくらい打ちのめされている今のリンネには下手に言葉を選んでしまえばそれだけで彼女を更に追い詰める事になる。

一体どうすれば、悩むヴィクターが言葉に詰まらせていた時、これまで黙っていたシュウジがリンネの下へ歩み寄る。

一体何と言うつもりなのか、ヴィクターが一人緊張する中……。

「リンネちゃん」

「……」

「ちょっとお兄さんと一緒に遊びに行こうぜ♪」

「「……は？」」

テヘペロ顔で遊びに誘ってきたシュウジにリンネもヴィクターも言葉を失った。

その19

「リンネの奴、負けたからって格闘技辞めるとかメンタル弱すぎだろっ!?」

ナカジマジム会長室。そこではリンネの格闘技引退の危機を聞き付け、彼女を知る多くの選手が駆け付けていた。ヴィヴィオやアインハルト、ミウラ達ナカジマ所属の選手だけでなく、ハリーやエルスと言った仲の良い選手、そしてジムの顧問取締役であるミカヤ＝シェベルまでもが今回の騒ぎを聞き付け会長室にやってきている。

皆、リンネについて思う所があるのだろう。自分の所為で格闘技を辞めようとしているリンネ、責任を感じて少し思い詰めた顔のヴィヴィオ。そんなリンネを軟弱者と激怒するハリー、リンネの気持ちも少しは分かるとエルスが同情するなど、会長室の雰囲気は騒がしくも重かった。

「会長、ここはやはりリンネさんと直接お話した方が良いかと思います。確か向こうにはヴィクターさんがいらっしゃるのですよね？」

「あぁ、一応は向こうから連絡があってから繋ぐつもりだが……少し遅いな」

塞ぎ込んでいるリンネの説得を自ら買って出たヴィクター、その彼女からの通信が未だに来ていない。やはりリンネの説得には時間が掛かるかと長丁場を覚悟していたノーヴェに一本の通信回線が繋がれる。

ヴィクターからだ。待ちわびていた彼女からの通信、回線を開いて電子モニターを宙に開き、皆に見せる様に可能な限り大きくさせる。

いきなり辞めると言い出したリンネに一言文句言ってやろうと凄むハリーが皆の間を割ってモニターの向こうにいる彼女に声を荒げようとするが……。

「ゴラァリンネ！　テメェ、いきなり辞めるとかふざけた事言ってんじゃ……って、あれ？」

「リンネ選手が……いない？」
　画面の向こうにいるのは困り顔で引き吊った笑みを浮かべるヴィクターだけ、背景にはリンネの私室らしい部屋が映し出されているが、そこに彼女の姿がなかった。……どういう事なのだろうか？
「えっと、ヴィクター？　そこにリンネがいる筈だと聞いてたんだけど？」
『その事なのですが……その、実はシュウジ様がリンネを遊びに連れていかれまして』
「「はい？」」
　申し訳なさそうに、絞り出す様にリンネ不在の理由を端的に述べるヴィクター、彼女のその言葉にモニター越しのヴィヴィオ達からは何とも間の抜けた声が漏れて――――。
「あ、アイツぅぅぅッ!!　何て羨ましい事をぉぉぉっ!!」
　ハリーの私情に塗れた雄叫びが会長室に響き渡った。彼女の叫びを口火に違う意味で騒ぎ立つヴィヴィオ達、伝説の格闘技選手であるシュウジがリンネを誘って遊びに出掛けたのだ。シュウジ本人はどうかは分からないが、ヴィヴィオ達からすれば完全なるデートである。
　先程の重い空気とは打って変わって騒ぎ出すヴィヴィオ達、チビッ子達の乱痴気騒ぎを鎮めようとするノーヴェ達だが、男女の恋愛に関してど素人処か未経験である彼女達にとってこの話題の沈め方は知りもしなかった。
　画面の向こうで騒いでいるヴィヴィオ達を尻目にヴィクターは思う。彼ならば、シュウジ＝シラカワという男なら、彼女の心を少しでも揺り動かす事が出来るのかも知れないと。
　何故なら彼女の心の叫びを聞いた時、誰よりも悲痛な顔をした彼が、彼女の心の内を理解していない筈が無いのだから。
（兎も角、今は彼女達を落ち着かせないと。後はジルにもこの事を伝えないとね）
　リンネの事をシュウジに託したヴィクター、今は取り敢えずこの騒ぎを何とかしようとモニターの向こうで今も騒いでいるヴィヴィ

オ達に声を掛ける。
（シュウジさん、一体なにを考えておるんじゃ？　――ん？）
そんな中、シュウジの考えに理解が追い付かないフーカの所にウーラを介しての音声通信が入ってきた。通信先の相手は今話題で持ちきりのシュウジだった。
今この場でこの通信に出るのは不味い気がする。誰にも気付かれないようにコッソリと会長室を後にしたフーカは回線を開き。
「はい。はい……分かりました。会長にはワシから言っておきます。はい。それではまた」
通信越しからのシュウジの言葉にフーカは安心した様に微笑んでいた。

◇

――喫茶シラカワ。シュウジが経営する喫茶店、その裏手の出入口でかれこれ5分待たされているリンネ、今彼女の頭に浮かぶのはこれ迄の自分の経験してきた過去だった。
何故、私はこんな所にいるのか、どうして、自分は今まで痛くて辛くて苦しい思いをしてまで強くなろうとしていたのか。高町ヴィヴィオという年下の子に二回も負けたから？　違う。きっと自分はもっと前からその事に気付いていた。
気付いていながらも目を背け、自分を騙し、欺けてきた。向かい合おうとせず、ただ逃げ先を強くなるという事で誤魔化して来ただけだ。
分かっている。こんなことは誰も望んでいないと、父も母も、そ

して大好きな祖父も自分がこうなる事を願っていない事なんて、分かっていた事だ。
なら、どうすれば良かった？　大好きな人達からの贈り物を壊されて、汚されて、悪意を振り撒く連中を相手に泣き寝入りする事が正解なのか？　過ぎ去ったモノだと、過去の思い出だと笑って受け流せば良いのか？
出来ない。そんな事をしてしまえば、きっと自分は二度と立てなくなる。受け入れてしまったら、二度と祖父に顔向け出来なくなる。
分かっていながらも解決出来ない堂々巡りの思考、何処まで考えてもマイナスにしか行き付けないリンネが自らの負に呑み込まれようとした時。
「いやーゴメンゴメン。ちょっと用意するのに手間どっちゃった」
「……いえ、平気です」
リンネの覆う心の闇を文字通り一言で凪ぎ払ったのは彼女が尊敬して止まない伝説の元格闘技選手、その両手に持った荷物を手にリンネに笑い掛けてくる。脳裏にこびり付く奴等とは違い彼の笑みにはどこか安心する暖かさがある。
何処かで見たことある気がする。シュウジの笑顔に何故か既視感を覚えるリンネ、思わず頬が弛みそうになる自身の表情を無意識に抑え付け、目線を反らしてしまった。
「そ、それで、一体何処へ行くんです？　言っておきますけど、幾らアナタでも私は格闘技を続けるつもりは……」
「あぁ、いいからいいから、今はそういうのいらないから、先ずははいこれ」
「な、何ですか」
手渡されたのはオレンジジュース、透明のプラスチックの容器に蓋をされ、ストローの差し込み口のある――一見すれば何の面白味もないごく普通のオレンジジュースだ。
「ふっ、ただのオレンジジュースだと思うなかれ、これは我が喫茶シラカワが誇る最高のオレンジジュースだ。製造方法は極秘だから話せないけど、大人から子供まで幅広い年代から人気のある至高の一品さ

！」
「はぁ」
「おっと、時間が勿体ない。早速向かうとしよう。さ、乗りたまえ」
ジュースを受け取り、流されるまま車へと乗り込むリンネ、乗車するのはいつもシュウジが使う一般の自家用車ではない。その隣にある白のスポーツカー、ＦＣ３Ｓ　ＲＸ―７だ、
しかも前の世界（多元世界）の時に培った技術力をフルに活かしており、見た目は一世代前の古びた車種だが、中身は数々のオーバーテクノロジーを兼ね備えたなんちゃってマシンである。それなのに法的違反は何一つ触れていないから質が悪い。
そんなモンスターマシン……もとい、愛車の助手席に疑うことなく乗ったリンネ、何だか乗せられた気もするが特にやることもないので手にした容器にストローを差し込んで一口啜ると……。
「あ、美味しい……」
口に広がる甘酸っぱい味わい、濃厚なのに口当たりはさっぱりで喉越しも綺麗に溶けていくようで幾らでも飲めてしまう。思わず出た言葉にハッとなって隣を見ると、ニマニマと笑みを浮かべたシュウジがリンネを見ていた。
「な、なんでもありません！」
「いやー、良かったよお口に合った様で」
「～～～～っ!!」
何だか言い様に誂われている気がする。悪意はないが、人をおちょくって楽しんでいるシュウジにリンネは頬を赤くさせて膨らませた。
その反応を年相応の女の子らしいと思いながら、敢えてそのまま放置する事にしたシュウジ、エンジンを起動させ、店を後にした二人はそのまま気の向くままにクラナガンの街を散策した。
ある時はバッティングセンターで。
「ハァッ！」
「おおスゲェ、あの子またホームランだ」
「女の子なのに大したもんだなぁ」

「それに比べ……」
「ダァラッシャァァァッ!!」
『ストラーイク』
「何故だぁっ!?」
「あっちのお兄さんは総スカン、当たってもゴロばっか」
「見えてはいそうなのに寧ろなんで当たらないんだ？」
「つーかあの人どっかで見たことあるんだけど」
　ある時はカラオケで。
「～～～～～っ♪」
「やべぇ、この子普通に歌上手いわ。つーか俺アニソンしか知らないんだけどどうしよう？」
　またある時はゲームセンターでプリクラを撮り。
「にっこにっこにー♪」
「な、何です、それ？」
「俺の幼馴染曰く、最強のあざ可愛いポーズらしい。さぁ、リンネちゃんもご一緒に！」
「に、にっこにっこにー？」
「声が小さい！　にっこにっこにー♪」
「に、にっこにっこにー！」
「もっと相手を誑かすつもりで！　にっこにっこにー♪」
「にっこにっこにー！」
　様々な出来事、様々な遊びで1日を費やしたリンネ。シュウジとの間で培ったこの時間はリンネがこれまで経験した事のない出来事ばかりで、あっという間に時間は過ぎ、気付けば辺りは暗がりに包まれていた。
　もうすぐ夜になる。思えば、リンネがこの時間まで遊び出歩くのは初めてな気がする。……いや、そもそも遊びに出歩くのが初めてだ。
　どんなに記憶を遡ってもこんなに遊び更けるのはなかった。微かに覚えているのは幼い頃、孤児院にいた頃にフーカと一緒に少し外をぶらついた程度、その後ベルリネッタの養子になった後も精々祖父と一緒に外へ散歩をしに出掛ける位だ。

あの時が退屈だった訳ではない。大切な人と、大好きな人と一緒にいるだけでリンネにとっては幸福だった。しかし、今日の様な出来事もリンネにとっては未知で、刺激的な時間だった。

外を見れば辺りはすっかり暗くなっている。遠くから見える街の明かりが夜空を照らしていく。今自分達がいるのはそんなクラナガンを一望できる何処かの峠にいた。

ドンドン上へと登り、それに合わせて街並みも小さくなっていく。一体何処へ行くつもりなのだろうとリンネがシュウジに訊ねようとした時。

「きゃぁっ!!」

爆音と共に追い抜いていく一台の車が唐突にリンネの前に出た。何度かブレーキランプを灯して挑発し、去っていく。悪辣な運転で周囲に迷惑を鑑みない相手の乱暴な運転にこれ迄の気分が台無しになったリンネは眉を寄せて不機嫌を露にする。

「ほう？　随分と面白い真似をしてくれるじゃないか」

「……へ？」

隣から聞こえてくる低い声、見ればこれまで穏やかな表情を崩さなかったシュウジが、凶悪な笑みを浮かべている。明らかに怒っているであろうシュウジにオズオズと話掛けるリンネだが。

「リンネちゃん、これからちょっと運転荒くなるけど、なるべく負担を掛けないようにするから」

「え？　あ、はい」

頭に手を乗せ、心配ないと撫でてくるシュウジにリンネは何も言う事なく頷いた。瞬間、爆発的加速がリンネを襲い、二人を乗せたFCは白き流星となり峠を掛け昇った。

◇

「アッハハハハ！　見たかよ今の、傑作だったろ！」
「もうター君たら乱暴～、でもそんな所も素敵イ！」
「おいおいお二人さんよ。イチャつくのはいいが安全運転で頼むよ」
「おいおい、さっきの車をイケすかねぇって言ってたのお前じゃねぇか！　良くないぜ～、責任転嫁ってのは」
「――――ムカつくんだよ。大した腕も無い癖に一丁前に良い車乗って調子付いてる奴、ああいう奴を見てるとグチャグチャにしたくなる」
「おぉ、怖い怖い。俺なんかよりよっぽど危ねぇ奴じゃねぇか」
　ギャハハと笑いながら走るのは赤いランサーエボリューションX（通称ランエボX）の若き運転手、とあるツテで管理外の世界からこの車を購入した彼は気分も高々となり、彼女とその友人を連れてドライブに来ていた。
　その言葉遣いから分かる通り素行は悪く、これまで何度も違法行為を繰り返しては暴力騒ぎを起こしてきた彼は、これまで自分の思う通りに生きてきたし、これからもそうするつもりだ。歯向かう者には等しく暴力を、昔から腕力にモノを言わせて生きてきた彼にとって世界は自分の為の道具に過ぎなかった。
　そんな彼の背後から運悪く追い付いてきた一台の車、景気良くコイツも脅そうとわざと急ブレーキを掛けてぶつけてやろうと企てる。これで追突して謝礼金を溜まり毟り取ろう、そんな事を企みながらブレーキを踏んだ瞬間。
「なぁっ!?」
　そんな彼を嘲笑うかのように、その車は横に逸れて追突を避けて見せた。横を見れば白い車が自分の横を通りすぎ、そのまま過ぎ去っていく。

その際にフリフリと車体を揺らす様はまるで此方を挑発している様だ。上等だ。挑発された事を受けて唯では済まさないと鼻息を荒くさせ、男はアクセルを踏み込んだ。

激しいエンジン音が鳴り響く。先行く白い車を追い越そうと必死になるが、その差は縮むことはなく、寧ろ広がっていく。

「ち、ちょっとター君、何やってんの！　向こうドンドン先行っちゃうよ！」

「うるせぇ！　今やってんだよ！　目一杯飛ばしてんだよ！」

どんなにアクセルを踏み込んでも前の車に追い付けない。バカなと狼狽する男に助手席に乗った友人が信じられないと言った様子で口を開いた。

「あの車、ＦＣ？　だとしたら運転手（ドライバー）は……まさか、白き流星（ホワイトスター）か!?」

白き流星（ホワイトスター）それは今から少し前、突如として現れた黒の閃光（ブラックライトニング）と対を成す走り屋の間では知らない者はいない伝説の走り屋、過去類を見ない走りで数多の走り屋達を打ち倒してきた経歴、人物像、その全てが謎に包まれた者達。

そんな二人が遂に勝負をした時の光景は凄まじいモノだったと聞く。白と黒が交差しながら峠を攻め行く様はまるでダンスを踊っているようだと、走り屋達の間では都市伝説の如く語られている。

その伝説の片割れが今自分達の前を走っている。厄介な相手に目を付けられた――――処の話ではなかった。

「ふ、ふざけんな！　あれはどっかの走り屋バカがでっち上げた都市伝説だろ！」

〝ゴァキャァァァァッ!!〟

轟音と共にヘアピンカーブをドリフトでこなし、峠を掛け上っていく白のＦＣ、間違いない。あれこそが伝説の走り屋だと友人が先へ消え行くＦＣに見とれた瞬間。

「ま、前、前ー!!」

「うぉぉぉぉっ！　と、止まらねぇぇぇっ!!」

スピードを殺しきれず、ガードレールに激突したランエボX、派手な音を出しての衝突事故。その後、駆け付けた救急隊によって救出され、三人とも骨折などの重傷を負っているが、いずれも命に別状は無かったという。
更にはこの事を機に、男はこれ迄の狂暴性な性格から一変して温厚な性格となり、友人と男の彼女も真面目になるというが、割とどうでも良い話である。

◇

「よっと、着いた着いた。さ、リンネちゃん」
「――――わぁ」
峠を越え、とある丘の上までやって来た二人。シュウジの案内でやって来たリンネが目にしたのは――――絶景だった。
人が作ったクラナガンの街。明かりで彩られ、眩くその光景は人の営みが作った宝石箱だった。更に言えばシュウジ達の住む地区は海に面しており、二人の立つ場所からは海と月も一望出来ていた。
綺麗だなと、リンネは素直に感激した。こんな光景など見たこと無かった。昔からこの街に住んでいたのに、初めて見る街の風景にリンネは言葉を失っていた。
「――――この街に、こんな一面があったなんて、知りませんでした。私、ずっと格闘技ばかりやってたから、何かを見付ける事なんてしたことなかった……」
「でも、これからはそうじゃないだろ？　何かを見付け、何かを成し遂げる。それは別に格闘技だけに限った話ではないさ」
「……反対、しないんですか？」
「どうして？　リンネちゃんが自分なりに考えて出した結論だろ？

だったら俺が口を挟むべき話じゃないさ」
　クラナガンの街並みを見下ろしながらそう語るシュウジにリンネは意外だなと驚いた。てっきりヴィクターと同じ自分を説得しに来たかと思っていただけに、格闘技を辞める事に反対しないシュウジにリンネは戸惑った。
「格闘技を辞めたくなったら辞めればいい。心変わりで始めたくなったらまたやればいい。後悔先に立たずなんて言うけど、それと同じくらい人にはやり直せる機会は幾らでもあるのさ」
「……何だか、少し無責任な言い回しですね」
「他人の言う事は総じて無責任なモノさ。どんなに言葉を重ねようと、説得に熱をいれようと実行するのは本人だけ。周りの人間に出来るのはそんな本人の気持ちを尊重して、支えてやるか見守る事くらいしか出来ないさ」
「でも、私が辞めようとすると、また周りの人達が……」
「周りは周り、自分は自分さ。そんなに周囲の人達の言う事が気になるなら、俺も一緒に説得するよ。言ったろ？　周りの人間に出来る事なんて限られてるって」
「なら、どうしてシュウジさんは私と一緒に今日一日遊び歩いたんですか？　私の説得でないのなら、一体何の為に……」
「だってリンネちゃん、全然笑わないんだもん」
「っ!?」
　シュウジの指摘する何気ない一言にリンネの心臓が跳ね上がる。
「君くらいの子はね、何もしなくても勝手に笑ったりするもんなんだよ。下らない下ネタだったり、お笑い芸人の寒いネタだったり、どんな理由だろうと些細なことで人は簡単に笑える」
「わ、私は……そんな事は」
「家族の前では笑えてるって？　それは違う。笑っているとは言わない。それは単に笑顔という仮面を張り付けているだけだ。そういうのはどっかの腹黒皇族のお家芸であって、君みたいな子がする事じゃない」
　シュウジの思い描くのはブリタニアの皇族、シュナイゼル＝エル

＝ブリタニア。かのブリタニア皇帝の第二皇子でありながら国の宰相であり、数多の仮面を持ち合わせる微笑みの貴公子。
彼は意図的に仮面を作り、時には笑顔で人々を魅了し、時には悲しみの顔で扇動し、またある時には怒りの顔で人々の頂点に君臨した。自ら空虚な器と定め、これまで仮面の裏にその真意を明かしてこなかったトレーズとは別な意味での怪物。それがシュウジの数少ない友人の一人であるシュナイゼルという男だ。
自分と出会う事で空虚な器から中身のある何かへ変わりたいという願望を持った男で今でこそ単なる腹黒皇子で済んでいるが、それ以前の頃の彼は世界の全てが灰色に映った事だろう。それは本心とは全く異なった顔をしてきたからなのか、それとも幼少の頃から多才だった神童故の欠落なのかは定かではない。
ただ一つ言えることはリンネの様な子供が本心とは異なる仮面を被り続けると心と感情がその矛盾に耐えきれなくなり、いつか悲惨な未来を突き進む事になるという事だ。
子供とは心の赴くままに感情を吐露し、喚き、騒ぎ立つ事を許されている。心も体も未発達な今だからこそ、自らの感情に素直になるべきなのだとシュウジは思う。当然限度はあるだろうが。
「なぁリンネちゃん。今日一日俺と遊び回ってどう思った？　楽しかったかい？　煩わしかったかな？　どちらにしてもそれは君自身が抱いた感情だ。否定したり、誤魔化すモノじゃない」
「……あ、う……」
「ぶっちゃけるとね。君が格闘技を続けようが辞めようが俺は別にどっちでもいいんだ。俺が君に望むのはたった一つ――――素直になること、人並みの我が儘を言えるようになること、ただそれだけなんだ」
「そんなの、そんなの……」
「出来る訳がない。か、まぁ、それもそうだよな」
リンネは自分が許せない。悪意を振り撒く輩よりも、理不尽をぶつけてくる連中より、そんな奴等に屈した自分自身が許せない。だから力を求めた。誰からも見下されない強さを欲した。どんなに辛く

ても、どんなに苦しくても、誰にも負けない力を、強さを得ようとした。
全ては、大切な人達を守れる人になりたいと、それを願ったリンネの気持ちは……間違いなんかではないのだから。
「――シュウジさん」
「うん？」
「確か、貴方は言いましたよね？　ウィンターカップに関係なく、フーちゃんと戦って欲しいと」
「うん、言ったね」
「受けます。私、フーちゃんと試合をします」
顔を上げるリンネの顔は以前と変わらず無愛想な表情のまま、フーカが嫌う他人を見下す強者の顔。
しかし、その瞳には今までとは違う何かが宿っていた。弱々しくも確かにそこにある小さな光、それを目にしたシュウジは小さく笑みを浮かべる。
「……だってさ、聞いてたかい？　フーカちゃん」
「オス、しっかりと」
ここにはいない筈の人物の声、リンネが振り返るとそこには不敵な笑みを浮かべるフーカと彼女を此処まで送ってきたであろうナカジマ会長が後ろに控えている。
どうやら自分は上手く乗せられたらしい。いや、この場合はそう言う風に流れたと言った方が正しいか。どちらにせよ、リンネがやることは決まっている。
「さて、詳しい日時は後日伝えるとして、先ずは賭けの確認をしよう。リンネちゃん、君が勝てば俺は君の要望に何でも応えよう。けれどフーカちゃんが勝った場合、その時は――」
「それは無いですよ。勝つのは、私ですから」
「……ＯＫ、ならリンネちゃんが負けた場合は保留にしておこう。お互い、今はそれでいいな？」
「オス！」
「はい」

一度は折れ掛けたリンネの闘志、それが再び持ち直した事にシュウジは一先ず安堵する。
そうだ。これでいい、彼女を救えるのは自分ではなく、彼女の友人であるフーカの役目だから。今回の自分はその舞台を少しでも整えられる裏方でいい。――それに何より。
（二人の試合を見るの、実は結構楽しみなんだよね）
闘志を滾らせる二人を見て、シュウジはやはり嬉しそうに笑うのだった。

その２０

シュウジのサプライズのお陰か、それとも再びやる気を取り戻したのか、一度は格闘技を辞めるつもりでいたリンネだったが、フーカとの練習試合の申し込みを受け入れた。

今はまだ本当の意味で吹っ切れてはいないだろうが、少なくとも切っ掛けは掴めた。後はフーカに託すのみだとシュウジは自分の役目を終えた事に満足した。

今のリンネに想いと言葉を届かせるにはシュウジでも難しいだろう。仮に言い聞かせてもそれは一時の処置でしかないし、何よりそれではリンネとジル、二人の為にはならない。

今のリンネを本当の意味で救えるのはフーカしかいない。そしてリンネを通して自分の過ちに気付くのはジル本人しかいない。きっと今回の試合は二人にとっての転換期になるだろう。

不安と期待、それ以上の試合への高揚感が漂うなか。

「いやー、まさか二日で試合会場が整うとか、ホテル・アルピーノって凄い所だなぁ」

シュウジは目の前に広がる大自然を前に、呑気にそんな事を口にしていた。

事の発端は二日前、リンネとフーカが互いに試合をする事を決めた時、通信越しで話を聞いていたアインハルト達がじゃあ試合をする場所が必要ですねという一言から始まり、その後はトントン拍子で話は進んでいった。

流石に二日後は急過ぎるのではないかと思った。せめてウィンターカップが終わった後でも良いのではないかと思ったが、今の気の抜けたフーカでは自分の好敵手には足り得ないというアインハルトの厳しい指摘に誰も反論できず、フーカが思う存分決勝で戦える為に二日後という日程になったという。

厳しい日程ではあるが、ナカジマジムの皆がフーカのサポートに回るというから心配ないだろう。後は二つの試合に備えてフーカの

調子を上げていくだけである。
「さて、皆が来るにはまだ時間がある。今の内に体を暖めておくか」
「オスッ!!」
　既に荷物をホテルに預けた二人、お馴染みの山吹色の胴着を着用し、二人は日課である軽い組手を行った。
　蹴り、突き、体を動かし、思うがまま打撃を繰り出すフーカ、初めて出会った時とは違う、練度が高くなってきている彼女の体捌きをシュウジは嬉しそうに見つめていた。
「うん、良いね。動きにキレが乗っている。この調子ならきっとリンネちゃんにも負けないよ」
「オス、ありがとうございます！」
　フーカの鋭く重い打撃を涼しい顔で受け流すシュウジ、そんな朝日の下で体を動かす二人の下へ一人の少女が歩み寄る。
「シュウジさーん、フーカー、ナカジマ会長達が来たよー」
「お、来たか。それじゃあフーカちゃん、今日はここまで、軽く汗を拭いて準備してきなさい」
「はい！」
　シュウジの指示に素直に頷いたフーカは、シュウジと報せてくれた人物に頭を下げると、予め準備して置いた手拭いを手にして流れ出る汗を拭き取っていく。
「いやー、まさか我がホテル・アルピーノに嘗ての世界王者が来てくださるとは、経営者の一人として感慨深いですなぁ～」
「いやいや、そっちこそこの短時間で良く此方の要求を呑んでくれたよ。その手際の良さ、同じ経営者として見習いたいよ」
　汗を拭いて体を解すフーカを余所に話す二人、人懐っこい笑顔でそれほどでもと照れ隠しをするのはホテル・アルピーノの看板娘、ルーテシア＝アルピーノ。
　彼女もまたＤＳＡＡの選手であり、格闘技に幅広い知識を有するヴィヴィオ達の良き理解者、見た目の若さとは裏腹に建築業にも深い感心を示すこの歳の子には珍しいアクティブな娘だ。
「ジークリンデちゃんも久し振り、君も此方に来てたんだね」

「は、はい。私もここで練習してたりするんで、……その、お世話になっています」
　木々の間から現れるジークリンデ＝エレミア、気配を消していたというのにアッサリと見破られた事にジークは戸惑うが、シュウジからしてみれば隠れている内に入らない為、隠れていたジークに対して言及はしなかった。
　サラリと現役チャンピオンの気配遮断を看破するシュウジ、引退してもその底知れない強さは健在かと軽くルーテシアが戦慄していると、彼女の下に一通の通信が入る。
「うん、うん。分かった。今から行くね。シュウジさん」
「ナカジマ会長達が来たかな？」
「はい。それとリンネ達も……」
「分かった。此方も行くとしよう。フーカちゃん」
「オス！」
「行けるね？」
「――――はい！」
　フーカに訊ねた一言、そこから伝わるシュウジの問いの真意に自分なりに察したフーカは表情を引き締めて強く頷いた。迷いの無い目だ。そんな彼女の目を正面から見据えたシュウジはフッと小さく笑みを浮かべ……。
「よし、行くか」
「オス！」
　フーカと共に皆の所へ合流するのだった。

◇

そして、場所はホテル・アルピーノが管理する修練場へと移り、廃墟となった都市を舞台にリンネとフーカは対峙している。試合開始まで後数分、合図のゴングが鳴るのを二人が静かに待つなか。
「いやぁ、悪いね俺の分まで席用意して貰っちゃって」
「そんな、賭けの対象はシュウジさんなのですから、特等席で見守るのは当然ですよ」
「いやでも、何もエレミアちゃんとヴィヴィオちゃんの間に置かなくても良いんじゃない？」
「それはほら、見栄えってのがあるじゃないですか」
「良い歳した大人が子供に挟まれる絵面とか、一体誰得なんですかねぇ」
両隣に女子、前後も女子、観客席として作られた即興の観覧席にはシュウジを除いて全員女子で埋め尽くされていた。てっきり試合の様子をホテル・アルピーノ内で生中継するのかと思っていただけに、用意された席の上でシュウジは早くも辟易としてきた。
「そんな遠慮する事はないですよ。かの伝説の世界王者の実況が聞けるというなら、寧ろ此方からお願いしたい位ですもの！シュウジさんが気になさる事ではありませんよ」
そう言うのはナカジマジムの元気印であるリオ、シュウジの辟易した表情を見て何を勘違いしたのか、彼女の言葉はシュウジへの気遣いばかりである。リオの一言に完全に同意しているのかヴィヴィオ達もウンウンと頷いている。
本心から、それも善意でそう言っているのだから今更こんな席は嫌だと言えないシュウジは大人しく用意された席で二人の様子を見守ることを決意する。
「そちらの子達は初めてだったね。俺はシュウジ＝シラカワ、一応格闘技経験者だ」
「あ、初めまして、私はイクスで……」
「私はファビア」
「そしてアタシはシャンテ＝アピニオン、アンタの事はシスターシャッハから聞いてるぜ。年齢通りに落ち着きを持った良い大人っ

てな。アタシも安心したぜ、伝説のチャンピオンていうからどんな奴かなと変に緊張しちゃったけど、話しやすそうなおっちゃんで安心したよ！」

「グフッ、お、おっちゃん……」

ニコニコと笑みを浮かべながら最後に心にグサリと来る一言を叩き付けてくるシャンテ、本人からは別段悪気があった訳ではないが、それ故に彼女の放った一つのワードはシュウジの心を深く抉った。

格闘技の現役時代すら無かった悲痛なる一撃、もし彼女と試合で戦っていたら負けていたかもしれない。そう思わせる程、彼女の一言はシュウジにとって凄まじく重かった。

しかしそこは仮にとは言え元チャンピオン。シャンテの刺のある一撃を受けながらも何とか持ち直したシュウジは改めてヴィヴィオに今回の試合のルールを訊ねた。

ルールの内容は投げと掴み技、関節技の制限なし、有効以上の投げ技はダウンと判定。端から見れば打撃も投げも使えるリンネにとって有利の内容だ。しかしそれはとことんリンネと戦り合いたいと口にしたフーカたっての希望の内容だし、シュウジもその事に関しては納得しているし口出しはしていない。

ダウン制限も試合時間も無制限、正真正銘何でもありの一騎討ち、勝敗の判定はどちらかが動けなくなるか気を失う迄である。

完全なるデスマッチ、試合じゃなくて死合かな？　なんて少しばかり心配になったのはシュウジだけ、魔法という便利パワーのお陰でリンネとフーカの立つフィールドにはダメージ制限の設定が施されており、どんなに酷い倒れ方をしても後の活動に支障は出ないようにしているとの事。

シュウジ達の前に巨大モニターが幾つも開かれる。様々な角度から二人の様子を見られる様にルーテシアが配慮した遠距離通信である。

二人の準備は万端、青コーナーと赤コーナー、それぞれの陣営のセコンド達に最後の確認をすると、ファビアは二人にデバイスのセット

アップを促す。
魔力の奔流に包まれ、それぞれの試合用の衣装に身を包む二人、試合開始のカウントダウンが流れ、緊張が最高潮にまで高まった瞬間――。

〝カァァァンッ！〟

試合開始のゴングが甲高く鳴り響いた。
瞬間、リンネが開始と同時に雪崩れ込む様に走り抜けていく。瞬く間に距離を詰められた事に驚くフーカはガードを固めるが、リンネの剛腕にガードを破られてしまう。
バランスを崩れた所へすかさずに胸元を掴んだリンネはそのまま豪快に投げ飛ばし、フーカを雑居ビルの壁に叩き付けた。
めり込む外壁、崩れ落ちる瓦礫、試合開始早々強引に試合を運ぶリンネに、観客席も青コーナーからもその光景に息を呑んだ。
瓦礫の中に埋もれるフーカ、ダウンする彼女を尻目にリンネは画面を通してシュウジを見る。〝分かってますね？〟　そう言いたげな彼女にシュウジはフッと笑みを溢す。
瞬間、瓦礫から押し退けながら現れるフーカにリンネの目は否応なく彼女に向けられる。
『思った通りじゃ。お前、弱いのう』
どうやら映像だけでなく音声も一部繋いでいるらしい。のっけから倒されておきながら尚強がりを口にするフーカ、瓦礫から這い出て、構えると同時に駆け出し、リンネの懐へと潜り込もうとする。
させるものかと左のジャブを放つが、予めその動きを読んでいたフーカは易々とリンネの懐に入り――。
『覇王――――』
「「断空拳!!」」
その拳をリンネの腹部へと叩き込んだ。痛烈なフーカの一撃、マトモに受けたリンネは背後にあった破棄されたコンビニへと吹き飛んでいく。まるで先程のお返しとばかりにやり返すフーカに観客席

のヴィヴィオ達は盛り上がりを見せる。
『立て、リンネ』
『っ！』
『人を見下して貶める癖に、辛くなったらすぐに投げ出す。――その腐った性根、ワシがブチこわしてやる！』
最早二人を止めるものはいない。思う存分に戦える舞台にやっと立てたフーカは自身の思いをリンネにぶつけるのだった。
フーカの啖呵に益々盛り上がる一同、そんな中……。
（断空拳、最終的には愛の力で悪しき空間を断つのかな？）
一人、見当違いの感想を思うバカがいた。

その21

「飛びましたねー」
「あぁ、フーカのパンチ力だな」
　フーカとリンネ、二人の試合は開始直後から迫力のある試合運びになっていた。リンネが殴ればフーカも殴る。やられたらやり返すというシンプルで派手な試合、素人目線からでも楽しめる二人の戦いに観客席に座るハリー達も感心の声を漏らした。
「負けていませんね、フーカさんも」
「はい。フーカさん今日の為に一杯練習してましたもん！」
　二人の試合を見届ける為に用意された観客席、そこから二人を見守る彼女達はフーカの目覚ましい成長振りに素直に喜んでいた。成長の裏で重ねていたフーカの努力、それを知っているからこそ、ヴィヴィオ達はフーカの強さを理解していた。
　破壊力、純粋な力も互角に拮抗している様に見える二人、ここからの試合の展開にワクワクしていると、ビルの中からリンネが這い出る様に現れる。
『……前にも言ったでしょ、フーちゃんには何も分からない。私の事も、家族の事も、私がどんな思いでやって来たか！　フーちゃんだけじゃない。他の誰にも分からない！』
『分からんのは、お前が伝えようとせんからじゃろ！』
『っ！』
『本音を隠して内に籠って、自分の不運を嘆いているだけで――――周りが分かってくれると思うなよ！』
『っ!?』
　リンネの吼えるような感情の現れ、荒ぶれる彼女の言葉にフーカもまた吼え返す。誰も分からないと口にするリンネにフーカは正論でもってこれを打ち破る。
『今回の事だってそうじゃ！　ジムにもコーチにもあんなに期待されているお前が、たった一度負けるだけで辞めるなんぞ言い出して、な

のにシュウジさんの優しさに甘えた途端にやる気を出しおって、心が弱いからそうやってふらつくんじゃろうが！』
フーカのその言葉はリンネの逆鱗を刺激するのに充分な威力を秘めていた。的確に、そして遠慮なく踏み込んでくるフーカにリンネは蹴りで以てこれに返す。
ガードの上からでも伝わってくるリンネの打撃力、脚を地面に確りと着けておきながらも尚鑪を踏むフーカ。
『競技も格闘技も、好きでやっていた訳じゃない！　私の勝手でしょ！　強くなれれば、強くなったって思えれば、それで良かったんだから！』
『お前の言うその強さとやらは、嫌な事から、忘れたい事から逃げ出す為の言い訳と違うんか!?』
何が分かる。誰かに虐められた訳でもない。自分の様な思いも、悔しさも味わった事もない癖に、フーカに本心を突かれたリンネの頭の中を占めるのはそんなフーカに対する苛立ちだけだった。
目を剥かせ、殺気を混じらせながら放たれるリンネのラッシュ、フーカのガードを強引に抉じ開けさせ、そこから魔力を込めた痛烈な一打を受けたフーカはその威力に押し負け、転がり地面に這いつくばる。
二人の口から吐き出される感情、そんな二人の応酬を各陣営のセコンド達も観客席に座るシュウジ達も茶化す事なく静かに見つめ続けていた。
『フーちゃんには関係ないでしょ！　私が何をしてようと、何を思っていようと！　大体、フーちゃんは兄弟でもないし家族でもない。孤児院で偶々一緒だけだった人に、お説教されたくない』
「――――」
リンネの吐き出される言葉に反応したのは意外にもシュウジだった。兄弟でもなければ家族でもない。フーカのリンネに対する想いを知っているだけにその言葉を口にする彼女にシュウジは初めて苛立ちを覚えた。
『私の事を、家族だって言ってくれた人がいるの。生まれて初めて家

族に逢えた。幸せだった。けれどその信頼を、愛情を、私は裏切った！　一番やっちゃいけない形で、一番酷い形で！』
『悪意を以て人を傷付けるやつが嫌い。人を見下す奴、貶める奴、そんな奴等にもう見下されない様に！　奪われないように、強くなるって決めたんだ！』
　それがリンネの格闘技をやる理由、それこそがリンネが今日まで格闘技に身を置いていた理由だった。全てはあの日、悪意に負けた自分に打ち克つ為のリンネなりの精一杯の足掻きだった。
（でもリンネちゃん。それならば君は尚更向かい合うべきなんじゃないのかい？）
　本当にリンネが過去を払拭したいと、過去の自分に打ち克つと言うのなら、それこそリンネは自分の感情に素直になるべきだった。養子とは言え家族と言ってくれる両親に素直に自分の気持ちを吐き出すべきだった。
　そうすれば少なくともリンネはここまで自分を追い込む事はしなかっただろう。両親という甘えられる人がいるのだから、遠慮せずに二人の優しさを受け入れるべきだった。甘える事は悪ではない。優しさに包まれる事は悪ではない。
　大事なのは自分は一人では無いことを正しく認識する事だった。それを変に頑なになって、拒んで捻れてしまった。それが今のリンネ＝ベルリネッタの歪んだ在り方の正体だ。
　最早言葉では今のリンネには届かない。届かせるには、振り向かせるには、今のリンネの心の壁を完膚なきまでに破壊し尽くす力が必要だ。
　立ち上がるフーカ、多少ふらつきながらも相変わらず彼女の瞳には光が宿っている。まだまだ続けられるフーカに安堵するヴィヴィオ達だが、そこへだめ押しとばかりにリンネが飛び掛かる。
　振り抜かれるリンネの拳は容赦なくフーカの頬を殴り飛ばす。重く、鋭く、そして痛いリンネの一撃、しかし負けてなるものかと返し刀でフーカはリンネの腹部を殴り付けた。
『えぁっ』

衝撃が体を突き抜けていく。思わぬダメージに嘔吐するリンネ、耐久力の塊である筈の彼女が悶絶するほどの一撃、その光景にヴィクターを除いたジル側のコーチ達はそんなバカなと息を呑んだ。
『強くなったらええじゃろ、幾らでも。格闘技も立派なスポーツじゃ、色んな人達が全力で関わって色んな形の夢を見とる。そこで強くなる事でタイトルや勝ち星を積み上げる事がお前の心の支えとなるならそれでええ』
『あ、あっぐ……』
『けれどお前は、違うじゃろうが！』
フーカの一撃に未だ回復しきれていないリンネ、呼吸も儘ならない彼女に今度はフーカが遠慮なしの蹴りを放つ。
吹き飛び、ビルの柱にぶち当たり、壁へと叩き付けられるリンネ、ガラガラと崩れる瓦礫に埋もれる彼女にフーカが静かに歩み寄る。
『辛い過去から逃げ出して、目先の目標にだけ縋って、心を閉ざして、自分の事も周りの事も見ようともせん。お前は、自分の周りの全てが、世界中が敵にでも見えたんか!?』
「よぉし良いぞフーカ！　もっとやれぇ！　もっと言ってやれあのアホに！」
フーカの凄絶な一撃と共に吐き出される言葉に観客席のハリーが焚き付ける様に叫びだす。しかし猛る彼女に反して周囲の反応は冷やかだった。
「……でも、アタシは何となく分かるかな。リンネの気持ち」
「え？　シャンテさん？」
「アタシも孤児でさ、親がいないって理由で色々言われたよ。今は暖かい人達に囲まれて、美味しいご飯が食べられて、胸を張って幸せだって言える。けどさ、アイツは引き取られた先でもずっと悪意に晒されて来たんだろ？　確かに今のリンネは恵まれてるよ。でもさ、その裏でアイツが受けてきた虐めの事も忘れちゃいけないと思うんだ」
「で、でもよ……」
「アタシ、これでもシスターだからさ、結構皆相談しに来るんだよ。学校での虐め、家庭での不協和音、親との確執、数えただけでもきりが

ない。でもさ、アタシ達はそんな経験ないじゃん。なぁハリー、あんたの両親は元気かい？　ミウラん所のお店は上手くいってる？　ヴィクターやリオなんてひもじくて死ぬような思いなんてしたことないでしょ？」

　嘗て、シャンテは親無しの浮浪児だった。親も知らず友もおらず、あるのは全てが敵という理不尽で不条理な環境だけだった。そんな日々の中でシャッハに出会ったのは彼女にとって転換期であり、望外の喜びでもあった。だからこそ嘗て同じ孤児だったシャンテにはリンネの拗れる事に理解してしまっていた。

　ここにいる多くの人達は裕福な家庭に育てられ、大事に、暖かく、すくすくと成長してきた。勿論そうでない者もいるのだろう。しかし頼れる家族と友達がいる。それ自体がどれだけ恵まれている事なのか、その事を正しく理解出来ていない人間が最近多くなってきているのも、また事実である。

「だからさ、リンネの過去を体験した事のないアタシ達が兎や角言うのは、ちょっと違うって言うかさ……ごめん、上手く言えないや」

「……お、オレも何か悪ぃ、つい口が滑っちまった」

　シャンテのその言葉に思う所があったのか、先程の荒々しいのが嘘のように鎮まって縮こまってしまうハリー、その所為かすっかり観客席の空気は重苦しくなっていた。皆が押し黙り、まるで通夜の様に静まり返る彼女達を見かねたシュウジがある話を切り出した。

「人は皆、平等ではない。平等こそが悪なのだ」

「……え？」

「これはとある超大国の皇帝が口にしていた言葉でね。言ってる事は中々辛辣だけど同時に真理でもあると俺は思うよ」

　ヴィヴィオ達が呆けた様子で聞き入る中、シュウジは続ける。嘗てブリタニアという超大国で絶対の象徴として君臨していた男の話を。

「足の早い者、遅い者、富の有るもの、無い者、頑丈な者、病弱な者、全ての人間は皆違っている。その中で足掻きもがいた者こそ、未来を勝ち取れる。彼の言うことは強者の視点だけれど、同時に人の本質を

的確に捉えていた」
　生まれながらにハンデを背負っている者、不慮の事故で自由を失う者、嘆く者や喚く者も多いだろうが、その中では自分の不条理に抗う者も確かに存在している。かのブリタニア皇帝のあの言葉はそんな社会的弱者の人達に向けた彼なりのエールのつもりだったのかもしれない。
　本人にそのつもりは無くとも、そう受け取る人もいるかもしれない。たった一つの出会いで人生を変える者もいれば、たった一言で絶望を希望に変える人間もまた存在する。
　そしてリンネとフーカ、二人が今戦っているこの瞬間こそが彼女達の今後の人生を大きく左右するのだと、シュウジの言葉を通して全員が理解する。
　コロナが祈り、リオが固唾を呑む。ヴィヴィオとミウラの額には緊張で大粒の汗が滲み出てくる。重くなった空気を少し真面目な話で紛らわそうとしていただけなのに逆効果処では無くなった彼女達にシュウジは「もしかして俺、いらんことした？」と息を呑む。
　そんな時、二人の様子が変化する。見れば今まで殴りあっていた二人が距離を開けて睨み合っていたのだ。一体どうしたのだろうと訝しむヴィヴィオ達、すると眼の良いヴィヴィオがその異変に気付いた。
「あ、あれ？　フーカさんの構え、なんか変わってる？」
　今までのファイティングスタイルとは異なり、両手を上下に置いたフーカの変わった構え、彼女の見たことないその構えにヴィヴィオ達が目を丸くさせる中、シュウジはほう？　と声を漏らす。
「天地上下の構え、この場面で出してくるか」
『フーちゃん、何、それ？』
『リンネ、お前が自分一人で戦っているつもりの中、ワシが一体何をしてきたか、その集大成を見せてやる！』
　今までとは何かが違う。フーカの全身から滲み出る自信を不快に思いながらもリンネはフーカに向けて駆け出した。

その22

――――それはウィンターカップ開催より一月前、日課であるランニングと正拳突きによる海割りを終え、これから組み手に入ろうとしていたフーカにシュウジから待ったを掛けられる。
『型、ですか？』
『うん、俺の師匠から教わった型……要するに構えの事なんだけど、最近フーカちゃんメキメキ上達してきたからさ、そろそろ型の一つでも教えても良いかなーって』
『シュウジさんの流派にも構えとかあったんですか？』
『じ、地味に失礼な事を言うね。そりゃ護身術程度だけど俺も一端の格闘家なんだから構えの一つくらいあるよ』
『いや、でもシュウジさん、ＤＳＡＡの試合ではどれも構えなんてしてませんでしたよね？　ハル先輩達にもシュウジさんの当時の試合の映像を見させて戴きましたけど、構えを取っていた映像なんて一つもありませんでしたよ？』
『ええ？　嘘ぉ？』
フーカからの指摘にシュウジは当時の事を思い返す。シュウジにとって魔法を使った格闘技の試合は鮮明で印象深く、どれだけ一瞬で終えていようとシュウジはその試合の内容の全てを記憶している。
うんうんと首を傾げる事数十秒、デビュー戦からタイトル戦、その全てを思い返し、パチリと目を開いたシュウジが口にしたのは。
『ホントだ。俺全然構えとかしてねぇや』
まさかの全肯定にフーカは何もない所でコケそうになる。これまで全ての試合を覚えているシュウジ、魔法を使い、これまでの格闘技とは一線を画すＤＳＡＡの魔法戦技。故にシュウジは思い出したＤＳＡＡの試合の時はガモンから教わった空手の業ではなく、お世話になった会長の教えと自分なりのアレンジを加えた我流でやってみ

ようという試みで挑んできた事を。
『あぁ～、そうだった。俺ってば魔法を使えることにばっかり浮かれて、肝心な空手を何一つ出して来なかったんだ。魔法が使えればこれまで夢見るだけだったあーんな技やこーんな技を覚えられるようになるかもって、なんで俺この事を今まで忘れてたんだろう……』
頭を抱えて恥ずかしそうに俯くシュウジ、やがて羞恥心も収まり、放っておいていたフーカに軽く謝罪し、改めて彼女に訊ねた。
『ま、まぁ俺の事はさておいて、これから教える型は攻めに特化した構えだ。覚えればウィンターカップでの隠し玉になるかもしれないし、フーカちゃんの戦い方もグンと変わっていくだろう。どうかな？』
『え、えっと……？』
正直、この時のフーカは迷っていた。ウィンターカップまでもう1ヶ月しかなく、フーカも試合に向けての最後の仕上げに入りつつある。何より彼女は既にアインハルト達からそれぞれ型というモノを教わってしまっている。
彼女達から教わった技術もまだ完全に自分のモノにしていない。そこへ更にシュウジの空手の構えまで教わったら、覚えきれずに折角教えてくれた皆の技術を台無しにしてしまうかもしれない。
フーカの抱く不安。俯き、下を向く彼女にその心境を察してしまったシュウジは余計な事をしたなと頭を掻く。――その時だ。フーカの脳裏にある閃きが思い浮かんだのは。
『あー、ごめんフーカちゃん。やっぱこの話は無しで――』
『いえ、教えて下さい』
『ふぇ？』
『シュウジさんの教え、ジムの会長や先輩達の教え、ワシはこれらを絶対に無駄にしたくないんです。だからシュウジさん、お願いします』
頭を下げて是非にと懇願してくるフーカ、そんな彼女を見てフーカが何を考えているのか何となく察したシュウジは……。
『分かった。なら今日から少しばかり夜練も増やしていこう。必然的にキツくなってくるけど――付いてこれるな？』
『オスッ!!』

真っ直ぐに自分を見詰めてくるフーカの瞳、迷いのない彼女の瞳にシュウジはフーカの頼もしさを感じた。
『じゃあどうせだから、もう一つフーカちゃんに技を伝授しておこうかな』
『え、ええ!? シュウジさんの技ですか!?』
『あぁ、と言っても然程難しい技じゃない。反復して練習すればフーカちゃんにも扱える代物さ』
頼もしついでに構えだけでなく技も一つ教えようと首肯くシュウジに、フーカは何となく嫌な予感がした。
そして彼女の予感はこの後的中する事になる。

◇

両手を上下に大きく開かせるフーカ、これまで戦ってきたどの相手とも全く違う構えを見せる彼女にリンネは油断なく身構え、警戒する。
リンネのセコンド側のジル＝ストーラも見たことのない構えに戸惑うが、しかし相手は格闘技を初めて半年も満たないルーキーだ。如何に才能が豊かであろうと急拵えのファイトスタイルを上手く扱える訳がない。
だが、前回はその驕りでリンネはヴィヴィオに敗北した。同じ轍を踏むわけには行かない。慎重に相手の出方を見て、先ずはその動きを見定めなければ。
『――来ないなら、此方から行くぞ！』
『っ!?』
ジルからの通信による指示で慎重にと身構えたリンネの下へフーカが突っ込んでくる。ガードを固くさせ、防御を厚くさせるリン

ネ、しかしフーカの打撃は堅牢なリンネの防御すら破壊し、その拳はリンネの顔面を撃ち抜いた。
　このままでは不味い。妙な構えに及び腰になってしまったが、打ち合いに挑むというのなら望む所、ガードを下げて殴り合いに挑むリンネだが、ここで再びフーカの構えが変わる。
　左のワンツー、ストレートとフックを小さくさせたその攻撃はリンネの動きを一瞬だが止めさせた。そこへ繋がる右のアッパーがリンネの顎を跳ね上げる。
　ストライクアーツの動き、それはヴィヴィオやコロナが得意とするＤＳＡＡの格闘技に於いて最もメジャーな立ち技だ。フーカが所属しているのもそんなストライクアーツを主軸にしているジムである。
（でも、今のタイミングも覚えた。覚えてしまったら対策は幾らでも出来る！）
　先程の構えもそんなフーカの技の少なさを誤魔化す苦し紛れのモノなのだろう。そうなれば話は早い、今度はその小細工が出来ない程に間合いを詰めればいい。
　踏み留まったリンネが再びフーカへ殴り掛かる。
『なっ!?』
　瞬間、リンネの腹部に衝撃が貫いた。見れば両手の掌をフーカが押し出すように突きだしている。先の構えと同じ見たことのない技と違うパターンで繰り出すフーカにリンネはまたもやタイミングを狂わされる。
　その隙を逃がさないと連打を打ち込むフーカ、幾つもの衝撃がリンネの体を貫き、持ち直そうとしていた彼女の勢いは完全に殺されてしまった。
　そこへだめ押しの回し蹴り、鋭くて重いその蹴りの一撃はウィンターカップの一回戦で戦ったミウラ＝リナルディを彷彿させる。しかし、予めまだ何かあると予見していたリンネはこれを歯を食い芝って耐えてみせた。
　お返しとばかりに着地際を狙って間合いを詰めて拳を放つリン

ネ、タイミング完璧、完全にフーカの顔面を捉えていた彼女の一撃は――。

『……えっ？』

当たることなく、逸らされてしまった。抵抗なんて無かった。自分の拳は確かにフーカの顔を捉えていた筈、手応えの無さと今起きた現象に混乱するリンネ、そんな彼女の隙をフーカは見逃さない。

腰だめに構えて魔力を拳に集める。魔力の流れに気付いたリンネが急いで距離を取ろうとするが――遅い。

『ダラァッ!!』

『っ?!?!?』

それはフーカがシュウジに教わった最初の一撃である正拳突き、出会って、格闘技を習い、シュウジに師事してからずっと行っていた海割りの一撃。

衝撃がリンネを貫いた。背中まで突き抜ける様に放たれたフーカの一撃はリンネを貫き、その後ろのビルの壁にはクッキリと拳の痕が刻まれていた。

痛みと衝撃でリンネの視界に火花が散る。足下がふらつき、膝を地に突けるリンネ、腹部を押さえて痛みに耐える彼女の反応に専属コーチのジルは戦慄する。有り得ないと。

古流武術と近代格闘技を平行で覚えさせるなんて、通常の選手では絶対に無し得ないフーカの戦い方は長年ＤＳＡＡに携わってきたジルからみても異常だった。

『どうじゃリンネ、これがお前が一人で戦ってきたつもりでいた合間にワシが培ってきた皆の力じゃ！』

◇

「す、凄い凄い！　凄いよフーカさん！」

「まさか覇王流だけでなくストライクアーツ、それに更にリオさんの流派まで会得していようとは」
「一人多国籍軍かよ、アイツ」
　リンネの強靭な耐久力を、その力と技で捩じ伏せたフーカにヴィヴィオ達から歓声の声が湧き上がる。
「特に最後のリンネさんの拳を逸らしたアレ、一体何なんですかね？　見たことない動きをしてましたけど……」
「それもですけど最初の構えも不思議でしたよね？　なんなんでしょう？」
「構えの方は空手の型の一つでね、名称は天地上下の構えというんだ。受け流した時の技は回し受け、どちらも俺のいた故郷では割りと知られているモノさ」
　見たことない構えと技を繰り出すフーカにあれやこれやと意見を出し合う彼女達にシュウジが答えを投げ掛ける。伝説の世界王者が伝授したとされる構えと技、それを聞かされたヴィヴィオ達は信じられないといった表情でシュウジを凝視する。
「し、シュウジさんの故郷の技⁉　は、初めて見た！」
「あ、あれ？でもあんな構えや技、試合で使った事ありませんでしたよね？」
「も、もしかして非公式の試合で一度だけ使った幻の技だとか？」
「幻の技って程じゃないけど……そうだね。公式の試合では使った事はないかな」
　敢えて詳しくは説明しないシュウジに、ヴィヴィオ達は目を輝かせてシュウジを見る。純粋な憧れの視線を向けてくる彼女達にシュウジは罪悪感で胃の辺りが痛くなってきた。
　だって実際に試合で使ったこと無いもの、シュウジがこれまで空手を使ってきた現場は命を掛けた鉄火場ばかりなんだもの、そんな話純粋素直なヴィヴィオ達に言える訳無いじゃない。
　何とか誤魔化せた事に安堵したシュウジは再び二人の試合へ目を向ける。未だ立ち上がれないでいるリンネ、そのダメージの深さから助骨の数本が折れたと見える。普通ならここで試合は終わるだろう。

カウント制限が無い今回の試合、判断はセコンドであるジル達に委ねるしかない。
(それにしても、まさか彼処まで完成させてくるとは、幾ら天地上下の構えが呼吸法の一種だとしても、これは素直に驚いたな)
型とは格闘技に於ける法であり、構えとはその人のタイミングをリズムを整える格闘技に於ける呼吸だ。構えを切り替えたり、打撃を繰り出したり、或いは捌いたりと構えた呼吸により臨機応変に対応していく。
その空手の構えの特性をフーカは自分なりにアレンジをして見せた。天地上下の構えという土台から古流武術と近代格闘技を見事融合させたのである。無論、それを為し遂げたのは彼女一人の力ではないのだろう。
ジムの会長であるナカジマ会長、彼女は確かにジルと比べてコーチとしての技量は低いのかもしれない。しかし彼女にはジルには無い選手と向き合って一緒に悩み、一緒に答えを出して行くという選手一人一人と向き合っていくやり方なのだろう。
選手の才能ではなく、選手の気持ちと想いを尊重しての導きの教え。ナカジマ会長の教え方にシュウジは頭が下がる思いだった。何せここまでフーカを鍛えてきたのだ。その苦労と心労の方は計り知れない。
(ナカジマ会長、無理言わせてスミマセン。そしてありがとうございます!)
恐らくは今日この日まで苦労の連続だったのだろう。彼女に掛かった負担を想像したシュウジは心の中で合掌し、礼を言った。
その最中、フーカのセコンド側ではナカジマ会長の大きなくしゃみが響き渡ったという。
そんな中、試合の方も動きを見せ始めた。蹲って痛みに耐えていたリンネが、遂に立ち上がって見せたのだ。
しかし、その動きはやはり鈍い。痛みもそうだがフーカの与えた正拳突きの一撃がリンネに重いダメージを負わせている。
それでも構わず打ち合う二人、殴り殴られ、それでも負けたくない

と必死に打ち合うリンネに再び空気は重くなっていた。
――――雨が、降り始める。ポツリポツリと緩やかだった雨足が、徐々に激しく、打ち付ける様に降り注いでくる。それはまるで誰かの涙の様に……。

◇

――――分かっていた。自分のやっている事が逃げ道を作る言い分けでしか無いことに、フーちゃんに言われる迄もなく、気付いていた。
――――気付いていた。私の強さが弱さを覆うだけのちっぽけなモノだって事、とっくの昔に気付いていた。
どうしようもないのは、私の方だった。強くなりたいと言葉だけ口にして、その為に手段は選ばないと変に意地を張って。
だって、そうでもしないとどうにかなりそうだった。私の所為でお父さんとお母さんを悲しませて、苦しませて、お爺ちゃんが喜んでくれる訳無いのに、罪悪感に押し潰されてしまいそうだった私、その逃げ道に選んだのが格闘技だった。
コーチにも酷いことをした。散々と迷惑を掛けて、困らせて、そしてまた……迷惑を掛けた。
私は、世界で誰よりも私が嫌い。悲しませるばかりで、泣かせてばかりで、そんな自分が大嫌いだ。
そして今も、目の前にいる幼馴染を泣かせている。お説教なんてらしくない真似までさせて、私の為に一生懸命頑張っている。
ゴメンね。ゴメンねフーちゃん。ダメな私でゴメンね。

嗚呼、いっそこのまま消えてしまいたい。フーちゃんに殴られて、それで消えるのなら、それもまた悪くない……かなって。
あぁでも、それじゃあジルコーチの期待を裏切っちゃう事になるのかな？　それともコーチも今回で私が負けたら、私の事を見限っちゃうのかな。
……分からない。もう、なにも考えられないや。

〝……ね、ンね！〟
〝？〟
〝ここよ、打って来なさい、リンネ！〟

◇

激しい雨が降り注がれる中、打ち合う二人。その中でフーカの一撃は確かにリンネの意識を断った。
崩れ落ちるリンネ、その光景に一人を除いてリンネの敗北を悟った。これで終わりだと、やりきれない思いと共にこの試合は幕を下ろすのだと、シュウジ以外の誰もが確信した。
しかし、聞こえてきたのは大地を踏み締める音、倒れそうになっていたリンネが拳を構えて打ち出してきた。
咄嗟に防ぐフーカだが、これまでとは速さと重さが桁外れのリンネの拳にフーカのガードした腕が弾き飛ばされる。
不味い、と思っても既に其処はリンネの距離、地面に力を込めて打

ち出されたその一撃は……。
〝今よリンネ、地を蹴って！〟
「あぁぁぁぁぁっ!!!」
フーカの顎を打ち抜き、彼女を空高く打ち上げた。リンネが踏み込んだアスファルトは砕かれ、陥没し、破壊されていく。
フーカにはこの痛みには覚えがあった。この衝撃には覚えがあった。この一撃は、この拳はまるで……。
（シュウジさんと、同じ……っ!!）
脳天を撃ち抜く衝撃はフーカの意識を根刮ぎ刈り取った。空高く舞い、備え付けの廃車に落下、その後打ち付けられる様に地に落ちたフーカ。
その光景に会場にいる誰もが言葉を失う。しかし誰よりも驚いているのは打ち抜いたリンネ本人だった。全身から突き抜ける衝撃に目をパチクリさせている彼女にシュウジは弟子が吹き飛んだにも拘わらず、その顔に笑みを浮かべた。
（リンネちゃん。確かに君のこれ迄の思いは間違っていたのかもしれない。悪意を許さないと言っておきながら、その悪意と向き合ってこなかった君は確かに間違っていた……けどね）
過去は消えない。それがどんなに認めたくない事でも、目を逸らしたくても、過去は変わらないし変えられない。けれど同時にこれ迄培ってきた経験もまた消えないのだ。
何故なら、強くなりたいと願ったリンネとジルとの間に培ってきた時間もまた――――間違ってはいないのだから。

その２３

――――それは幼い頃、リンネとワシがまだ院の先生方の世話になっていた頃じゃ。

親に捨てられ、行き場も無く、誰からも必要とされてこなかった時代、孤独感と空腹で毎日が苦しかった。苛ついて、ムカついて……寂しかった。

そんな時じゃ、ワシがアイツと、リンネと出会ったのは。

『イライラするのは、お腹が空いているからだよ。はいこれ、私の半分上げる』

歳が近い事と院に入ったのが同じ時期だったから、良くワシとリンネは一緒に扱われてきた。最初はいつもニコニコ笑う奴だと、何が面白くて笑っているのかと、苛ついて仕方がなかった。

だから、ワシはリンネの事は最初は気に入らなかった。自分と同じ親に捨てられたのに、孤児であるワシ達にマトモな未来なんて無いのに、どうして其処まで明るく振る舞えるのか。

『だって、一人で食べるより皆で食べた方が美味しいでしょ？』

そう言って差し出してくる院から支給される数少ないおやつの菓子をリンネは笑顔で渡してくれた。バカな奴だと思った。お人好しで、明るくて、ワシの様な捻くれたガキにも正面から向き合ってくる。

甘くて、鈍くて、お人好しで、そして優しいリンネ。アイツの分け与える優しさにワシは救われた。初めてワシは自分がマトモな人間に成れる気がした。

だから決めた。涙で目を腐らせるアイツを、リンネをあの日の様に笑えるリンネに必ず戻して見せるって！

『ならば立ちなさい。立って、自分の気持ちを、想いを伝えなさい。君の彼女に抱く気持ちが本気ならば――――』

あぁ分かっとる。分かっとるよシュウジさん。シュウジさんか

ら、ジムの会長や先輩達から教わった事、全部出し切るまで終われんからな。
だから――――。

◇

降り頻る雨、ゲリラ豪雨となった雨粒は試合の舞台となっている廃墟の街に容赦なく打ち付ける中、一つの特大の轟音が雨音をかき消した。
リンネの無意識に放った一撃。雑念も無くなり、余計な力も無く、幾千幾万の回数を熟してきたリンネの一撃はこの日、最高の形で現れた。
圧倒的な一撃だった。フーカの打撃が当たる所が急所となる神撃の領域に踏み入れているなら、リンネの一撃は神をも粉砕する超打の一撃。たった数ヵ月でリンネと打ち合えるフーカの才能と実力も凄まじいが、そんな彼女をたった一発の打撃で吹き飛ばすリンネもまた凄まじい。
観客席に座るヴィヴィオ達もその光景に言葉を失った。フーカが引き出したリンネの力、それを目の当たりにした彼女達は戦慄し、吹き飛んで地に落ちたフーカの安否が気掛かりとなっていた。
「……フーカの奴、死んだか？」
「縁起でもない！」
割りと洒落にならないハリーの呟き、エルスはそんな彼女を諌めるが彼女自身その事を否定仕切れてはいなかった。
「意識がトンで、体に染み付いた動きが自然と出てきたみたいだね。流石はジルコーチ、教え子に彼処まで仕込むなんて、やっぱ名門ジム

のコーチは凄いなぁ」
「し、シュウジさんそんな呑気な！」
「ここで更にパワーアップなんて洒落になりませんよぉ!?」
　人一人を吹き飛ばす大打撃を見せながら、尚且つ平然と感想を述べるシュウジにコロナ達がツッコンだ。確かに今の一撃は不味かった。当たり処が悪かったし、地面に落ちる時もコロナ達から見てやばいと思えるモノだった。最悪、このまま意識を失っていてはフーカの敗北は免れない。
　しかし。
「心配いらないよ、フーカちゃんはああ見えて頑丈で打たれ強い。何よりあの位の打撃なら日常的に喰らってるしね」
「……ふぇ？」
　心配そうにしていたコロナの目がシュウジの何気なく口にした一言に点になる。今、この人はなんて言ったのだろうか？　なんだか酷く聞捨てならない事を口にしていた気がする。
　ハリーもエルスもヴィヴィオ達も、そしてＵ１９の世界王者であるジークも目を丸くさせていた時、意識を失って倒れていたフーカに変化が起きる。
『心配掛けたなウーラ、ワシは平気じゃ』
　立ち上り、リンネの方へと振り返る。その見た目から決して小さくはないダメージだが、それでもフーカの瞳には強い光が宿っていた。
『今のは流石に効いた。ワシの知る限り今の拳を繰り出す怪物はシュウジさんに続いてリンネ、お前で二人目じゃ』
『っ!?』
『リンネ、お前凄い奴じゃの。ワシと同い年なのに、お前はもうそこまで強くなったんか』
『私は、私は……』
『なぁリンネ、お前が今の一撃を出せてまだ自分は弱いと思うんか？
　強くはないと言い切れるんか？　　いや、そんな事よりも……お前はまだ、自分を許せんのか？　　色んな大会で優勝したりしたの

に、多くの人がお前の姿に拍手を送ったりしてたのに、お前は本当に――嬉しくも何とも感じないのか？』
『っ!?』
『ワシは嬉しかった。楽しかったと思ってる。先輩達や会長、そしてシュウジさんの扱きも辛くて苦しい事が多かったけど、それ以上に強くなっていると分かって凄く嬉しかった。――なぁリンネ、お前が大会で優勝した事を喜んでくれるコーチの人達を見て、お前は本当に何も感じないのか？』
　これ迄の挑発や煽りとは違う。リンネの放ってきた格闘技の技の数々にフーカは心からの称賛を送った。そして、だからこそ訊ねた。今の自分を、ここまで鍛えて来た自分を、君はまだ許せないのかと。
『お前がワシを他人だと思うのならそれでもいい。自分が許せないと言うのならそれでもいい。だったらワシは無理矢理にでもお前の側にいる。嫌われても、邪険にされても、ワシは絶対にお前の味方であり続ける』
『なんで、どうしてフーちゃんはそこまで……』
『友達だからじゃ、ワシの大好きな親友が涙で目を腐らせるのが我慢ならん。ワシがお前の前に立つのはそれだけじゃ』
『――――』
　全てはあの日、自分に分け与える優しさで救ってくれた親友に少しでも報いる為、あの無垢な笑顔に戻って欲しいというフーカの身勝手な願望（エゴ）である。
（そっか、フーちゃんの拳が、痛くて強いのは……きっと）
『行くぞリンネ。お前を負かして、こっちの話を聞いてもらう！』
『させないよ。フーちゃんに勝って、シュウジさんをフロンティアジムに引き込むんだから！』
　自分の想いは、まだ伝えきれていない。けれど、今の一撃を放てた事で、リンネの気持ちに幾分か変化が起きたのか、その表情はどこか晴れやかだった。
　互いに限界も近い。体は満足に動けないし、意識も途切れ途切れ

だ。けれど、二人は止まらない。まだだと、もっとだと、自分の想いと言葉を乗せて――ただひたすらに殴りあった。
「ちょ、マジですかあの二人!?」
「回避も防御もない。真っ向からの殴り合い」
「い、いいんでしょうかね？　アレ」
「ええんとちゃう？　二人とも楽しそうだし」
「よっしゃ良いぞ二人とも、もっとやれぇ！　もっと熱くなれぇ！」
　いつの間にか、観客席に座る彼女達も二人の戦いに当てられて盛り上がっていた。もう先程の重苦しい空気はなく、彼女達の頭の中にはこの激しい打ち合いを制するのがどちらかという疑問だけ。
　そんな格闘技選手らしい彼女達を微笑ましく思いながら、シュウジはリンネとフーカの二人に目を向ける。
（楽しそうに殴り合う。か、端から見たら俺達もそうみえたのかな？　なぁ、トレーズさん）
　殴られたら殴り返す、必死に、ただ相手を打ちのめす打撃の応酬、傷だらけの二人を見てシュウジは嘗ての親友と殴りあったあの日の事を思い出す。
　結局、自分はトレーズには勝てなかった。友人の為にと奮起しておきながら、最後まで彼の真意を汲み取る事が出来なかった。最初はフーカに自身の過去の影と重ねて見ていた時期があったが。
（そうだよな。俺とフーカちゃんは違う。君ならばきっとリンネちゃんを、親友を――）
　そこから先の言葉はいらなかった。殴り合う二人を見て、シュウジは昔を懐かしみ、そして待った。訪れる二人の決着の瞬間を。
「――雨、止んだな」
　どちらが勝っても後悔は無い。きっと、そう思えるだけの結果が、この先にあると信じて、シュウジはただ二人の行く末を見守り続けた。

◇

――――格闘技なんて、痛くて辛くて苦しいだけ、そう思っていた。嫌な事ばかりで、良いこと何て何もない。ただ自分が強くなる為の作業でしかない。ずっと、そう思っていた。

でも、技を覚えるのが楽しかった。練習は辛かったけど、今まで出来なかったことが出来るようになった事が、嬉しくて楽しかった。コーチ達が褒めてくれた事でやる気になれた。

大会で勝って、優勝した時、コーチが喜んでくれたことが……嬉しかった。今までずっと振り回してきたジルコーチ、私の我が儘に付き合ってくれて、いつも私の無茶に応えてくれていた。そんなジルコーチが、今も私の勝利を願ってくれている。

お父さんもお母さんも、いつも私の事を心配してくれている。私が悩んでいることを知っているから、血の繋がりが無くても、本当の親子じゃなくても、二人にとって私がベルリネッタの娘だから。

そうだ。嬉しかったんだ。楽しかったんだ。これ迄の私は変えられない過去を言い訳にして、死んだお爺ちゃんを言い訳にして、周りから逃げていたんだ。

……でも、良いのかな？　今更私が格闘技を楽しんで、笑っても、良いのかな？

過去は変えられない。それがどんなに悲しくて辛い事でも。――――でも、これからなら、現在（今）からなら。

（変わって、いけるのかな？　笑っても、良いのかな？）

〝――――当たり前じゃろ？　リンネは笑っている時が一番可愛いのじゃからな〟

「っ!?」
　それは幻聴だったのかもしれない。単なる空耳だったのかもしれない。けれど、確かにリンネの耳に届いた。死んだ筈の祖父の声が、もう聞こえないと思っていた祖父の言葉が。
（あぁ、やっと、やっと……）
　リンネの瞳から涙が溢れた。今まで涙で腐らせていた瞳を新しい涙で洗い流す様に。そこから見えるリンネの瞳は何処までも澄んでいた。
　それは、あの日フーカがリンネによって救われた彼女の見せた笑顔と同じ瞳だった。
　リンネから渾身の一撃が放たれる。先程と同じ、フーカを一撃で吹き飛ばしたあの一撃、威力だけならシュウジの放つ一撃（手加減）と同等のモノが再びフーカの顔に目掛けて飛んでくる。
　紙一重、頬を掠らせ、風圧が突き抜けていく。その瞬間、返し刀の如くフーカは己の右拳に全ての魔力を注ぎ込み……。
（やっと、戻ってくれたの……）
「覇王、断空拳!!」
　その拳をリンネの腹部に叩き込んだ。突き抜ける衝撃、魔力の残滓が花弁の様に舞い散る。フーカの一撃は確かにリンネの意識を断ち切った。
　崩れ落ちるリンネ、抱き抱え、堪えきれなかったフーカは二人と一緒に地面に横たわる。
　隣を見れば眠るように気絶しているリンネの顔があった。憑き物が落ちた様な、安らかな寝顔。そんな彼女を見てフーカは満足そうに笑みを浮かべて……。
「あー、疲れた」
　雨は止み、晴れ渡った青空を仰ぎ見た。
　――勝者、フーカ＝レヴェントン。

その２４

リンネとフーカ、二人の激闘はフーカの勝利という形で幕を下ろした。互いに全力で、打ち出す拳一つ一つが全開だった二人、限界に限界を超え、自身の力を全て使いきった彼女達は夜になった今もホテル・アルピーノの一室で眠っている。

疲労困憊で満身創痍、試合終了の直後迎えにやって来たシュウジ達を目にした途端、それまで意識を保っていたフーカも気を失ってそのまま眠りに付いている。

回復魔法を得意としているイクス達からは取り敢えず心配は無いと言うが、一応今日一日ゆっくり眠らせておこうという事で付き添い人であるシュウジも済し崩し的にホテル・アルピーノの厄介になっていた。

今頃は同じベッドで同じ夢を見ているであろうフーカとリンネ、目が覚めたらきっと二人の関係は昔の頃に戻っているのだろうと察したシュウジは、その時を楽しみにしながらホテルの施設を満喫していた。

「いやー、いい湯だなぁ」

ホテル・アルピーノに備えられている温泉、出された食事に舌鼓を打ったシュウジは、その後アルピーノ親子に勧められるがままにホテル自慢の露天風呂に浸かっていた。

時間帯には男性が使う時間、しかし自分以外男性客はいないので実質この露天風呂にはシュウジ一人しか利用する客はいない。所謂貸切状態、贅沢だと思っても実際自分以外男性客はいないので、今は細かい事は抜きにしてシュウジはこの贅沢を堪能した。

――いや、訂正。正しくはシュウジ一人だけではない。

「……あの、そこに立っているのも疲れると思いますけど、良かったらご一緒します？」

背後に佇む一つの影、其処に申し訳なさそうに視線を向けるシュ

ウジ、その視線の先には何処かの特撮に出てくるダークヒーローの様な怪人が佇んでいた。
シュウジの誘いを首を横に振って拒否する怪人、後で聞いた話だが、この怪人はアルピーノ親子の娘の方の召還獣らしく、名はガリューと言って現在はホテル・アルピーノの従業員の一人として生活しているのだという。
体をもう一度流そうと湯船から出るシュウジ、その彼を無言で後を追うガリュー、一体何をしてくるのかと少し怖くなったシュウジだが、どうやら自分の背中を洗ってくれるらしいのだ。
これもホテル・アルピーノなりのサービスなのだろうか。物凄く戸惑ったが、結局は背中を流してもらう事になったシュウジ。魔人と呼ばれる人間の背中を黙々と洗い流す怪人、その光景はそれはそれはシュールな絵面だった事だろう。
その後、温泉に浸かっていた筈なのに何故かどっと疲れた様子のシュウジ、用意された浴衣に着替え、コーヒー牛乳を片手にロビーに出る。広々とした空間、ここも自分以外にいないと思っていたが、一人以外な人物がロビー中央に佇んでいた。
「あれ？　ジルコーチ、この時間に外へお出掛けですか？」
其処にいたのはトレーナー姿のジル＝ストーラだった。何処か疲れた表情の彼女の目元にはうっすらと涙の後があり、普段の強気な彼女とは正反対の姿を晒す彼女にシュウジは声を掛けるタイミングを間違えたかと自覚する。
その呼び掛けに案の定シュウジに気付いたジルはハッとした様子で眼鏡を外して目元を乱暴に拭い、平静を取り繕う。
「あー、何かスミマセン。変なタイミングで声を掛けてしまって」
「いえ、大丈夫です。ちょっと外に出ていただけですから」
外というと、恐らくは今日戦った二人の舞台となった場所へ行っていたのだろう。激闘となった場所を直に見ることで当時の試合の様子を彼女自身が追体験をし、その中で改善点を見つけ、今後の課題にしていく。恐らく彼女もそうしていたのだろ。
「――――情けないですよね」

「ん？」
「リンネの、あの子の才能にばかり目が眩んで、私はこれまで彼女の内面をずっと見ようとして来なかった」
「……」
　才能がなく、怪我で引退を余儀なくされてきたジル＝ストーラ。勤勉で、これまで自分が培ってきた知識と理論で選手達を育成してきた彼女にとってリンネは正しく太陽だった。自分には無い多くの才能と恵まれた資質を持ったリンネにジルは大きな可能性を見出だしていた。
　自分の格闘技の理論とリンネの類い稀な才能、これらが合わさった時、自分達は嘗て無い格闘技の高みへと登れるんじゃ無いだろうか、教えれば教えるほど強くなり、数々の大会で優勝してきたリンネを見て、ジルの期待は確信へと変わっていった。
　だから気付かなかった。いや、見ようとしなかった。リンネの大きな才能に目が眩み、彼女の心に隠していた本当の気持ちに今日まで向き合ってこなかった。
　そんな自分が、果たしてリンネのコーチでいて良いのだろうか、彼女を育てる資格なんてあるのだろうか。
　まるで懺悔の様に自分の気持ちを口にするジル、相手は自分が一番嫌っていた相手なのに、何故か自分の本心を口にしてしまう。そんな彼女にシュウジはこれまで黙っていたが……。
「……ジルコーチ、失礼だが貴女は幾つか勘違いをしている」
「え？」
「まず、俺は宣教師でもなければ神父でもない。貴女の気持ちは推し量れないし、俺には分からない。リンネちゃんの事に関してもそうだ。それは彼女が目を覚まして、改めて貴女の口から言うべき事だ。俺に言っても仕方がない事だと思うぞ」
「……」
　シュウジの尤もな言葉にジルは押し黙る。それもそうだ。こんな事、彼に言った所で意味は無い。一体自分は何をしているのだろうか、どうやら思っていたよりも気持ちが参ってしまっていた様だとジ

ルが自嘲の笑みを溢した時。
「――――まぁ、教える人間は大なり小なり教え子に自分を重ねたりするもの、あんまり気にする必要もないと思うぞ」
「――――あ」
「それじゃあ、おやすみなさい。ジルコーチ、よい夢を」
　それだけ言い残してシュウジはその場を後にする。ジルは遠くなっていくその背中をただずっと見つめ続けていた。
「――――なによ、分かった風に言って」
　しかし、その口振りとは裏腹に彼女の表情はシュウジと遭遇する前より、幾分か晴れやかだった。

◇

「さて、特にやる事もないし、俺もさっさと寝るかな」
　明日も店があるしね。と、用意された部屋へと戻ってきたシュウジは早くも就寝しようとした時、突然部屋に電子モニターが展開された。
　誰からだ？　夜遅く……って程ではないが、既に時刻は夜の９時を過ぎている。この時間から一体誰が何のために自分に用があるというのだろう。
『夜分遅く申し訳ありませんシュウジ様、ヴィクターです。少しお話があるのですが、いいでしょうか？』
「……」
　モニターの先に映るのはここ先日の大会ですっかり苦手意識を持つようになってしまった貴族のお嬢様、申し訳なさそうにしている彼女にシュウジの表情は一瞬固まった。

「あ、うん。イイヨ」
思わず片言になってしまう。
『ありがとうございます。――――ほら、ジーク』
『あ、あのシュウジさん。いきなりのご連絡、スミマセン。ジークです』
切り替える様に画面に映ってきたのは、Ｕ１９の世界王者であるジークリンデ＝エレミアだった。相変わらず異性相手には挙動不審な彼女、黒髪のツインテールを靡かせながら頭を下げる彼女にシュウジの妙な緊張感は一気に解きほぐされていく。癒される。ともいう。
『実はその、一つお訊ねしたい事がありまして……』
「構わないよ、君とはあんまり話が出来なかったからね。何か聞きたい事があるなら俺で良ければ聞くよ」
彼女なら貴族のお嬢様と違って無茶ぶりはしてこないだろう。見た感じ大人しい子だし、きっとＵ２５の選手階層に付いて色々と聞きたい事があるのだろう。
元とは言え、自分はＵ２５の世界王者だ。あまり専門的な事は言えないが、それでも今後の彼女達の成長の糧になるのなら喜んで話し相手になろう。いい時間潰しにもなるだろうし――――。
『あの、その……わ、私と、ウチとも是非一度戦って下さい！』
「」
訂正。この歳の娘達はどうも人に無茶ぶりをするのが好きなようだ。顔を赤くして一世一代の告白の様に戦って下さいとせがむ女の子にシュウジは心の中が真っ白になった。
「……あー、えーと、エレミアちゃん？　申し訳ないけど俺ってばもう引退した身なんだし、もう表舞台には出ないようにしているんだ。悪いけどそういうお誘いはちょっと遠慮したいというか」
『こ、公式ではないんです！　　明日、午前中に一度だけで良いんです！　　少しだけ、先っちょだけで良いですから！』
「何が先っちょだけかこのおバカちゃん。確かに俺は元格闘技選手だし、今も腕を衰えさせないように鍛えている。でもね、それは別に再起を狙っているからじゃない。これまで培ってきた経験を死なせな

い為なのと、自分に格闘技を教えてくれた人達に対する俺なりの礼儀だからだ」
『で、でもシュウジさん一度はハルにゃんと勝負したって……』
「それを言われると弱いが、だからこそ君みたいな娘と余計なトラブルを避けるために極力断る事にしているんだ」
　シュウジの容赦の無い断りに涙目になるジーク。格闘技選手として、純粋に相手と競い合いたいと願う彼女を無下に扱うのは心が痛むが、だからと言って今それを許せばきっとまた今後も自分に勝負を挑もうとする輩が増えてくるかもしれない。
「此方には店もある。明日も休みにするのは常連の人達にも失礼だし、何より君は俺に挑戦できる権利を得ていない。残念だが諦めてくれ」
『なら、その条件に挑戦させてください』
　しかし、自分を真っ直ぐに見つめてそう返してくる彼女の瞳にシュウジは折れるしかなかった。
　そして、それから一時間後。シュウジへの挑戦権として彼が作る激辛麻婆を食する瞬間がやって来た。場所はホテル・アルピーノの厨房、どうやら話を聞いていたアルピーノ親子が既に準備していたらしい。
　嘗ての世界王者に挑戦できる権利を得る。その為にエレミアだけでなくハリーやエルス、リオにミカヤ、更にはヴィクターと再戦を熱望するアインハルトも参加すると言い出したのだから、厨房はちょっとした騒ぎになっていた。
　すっかり騒動に巻き込んでしまった事に何度も頭を下げてくるナカジマ会長、心底申し訳なさそうにして謝ってくる彼女に流石のシュウジも受け入れるしかなかった。
　そして作り出されるシュウジ特製麻婆、材料も器具も完璧に揃えていた為、普段食するモノと寸分違わぬ出来映えに満足したシュウジは自信満々に彼女達に差し出した。
　お待ちどう。そう言いながら渡されたお椀に並々注がれた麻婆を彼女達が口にした瞬間――――。

「うわぁ！　なにこれウッマー！」
　周囲の人間が撃沈する中、唯一エレミアだけは満足そうに麻婆を頬張っていた。
　驚愕に震える一同、アインハルトは当然ながら気を失い、ハリー達も同様に昏倒し、エルスに至っては眼鏡が割れている。そんな中で一人美味しそうに麻婆を食べるエレミアに応援に来ていたヴィヴィオ達は開いた口が塞げずにいた。
「ほ、本当に、本当に美味しいと思うかい？」
「はい！　とっても、これなら毎日食べたい位です！」
　満面の笑みでそう答えるエレミアにシュウジは年甲斐もなく泣きそうになった。シスターシャッハ以外に理解者はいないと思われていただけに、美味しいと言うエレミアはシュウジにとって望外の喜びだった。
「――――全く、こんな夜遅くにそんなカロリーのあるモノ食べちゃって、太っても知らないよ」
「大丈夫です。それ以上のエネルギーを明日、消耗させるつもりなんで」
　不敵に笑うエレミア、見事シュウジへの挑戦権を獲得した彼女はシュウジに向けて手を差し出し。
「ならば俺も、君の熱意に応えよう」
　シュウジもまた彼女の差し出す手を握り締めるのだった。

◇

――――そして、翌日。舞台はフーカとリンネが戦った廃墟の街。
シュウジとジーク、元世界王者と現役世界王者、嘗ての次元世界最

強と十代最強女子がヴィヴィオ達の観衆の下で対峙していた。

その25

「――――う、んん」

心地よい微睡みの中から朝日の日差しによって目が覚めるフーカ、うっすらと開いた視界に映るのはいつもとは違う見知らぬ天井。

一体此処は何処なのか、未だ意識がはっきりしないフーカは寝惚けたまま周囲を見渡して、そして思い出す。

「あぁ、そっか。ワシ、勝てたんじゃな」

自分の隣で静かに寝息を立てているリンネを見て、フーカは感慨深そうに呟いた。全力で戦い、内に秘めた想いを互いにぶつけながら殴りあった。リンネの言葉に多少なりとも傷付いたフーカだが、最後の打ち合いの瞬間、確かにリンネは己を取り戻していた。

それだけで充分だった。隣に眠るリンネの姿、安らかで、心から安心した様子で眠る彼女の様子はフーカにとってどんなベルトよりも価値のある宝物だった。

「ん、んぅ？　あれ？　フーちゃん？」

「おはようリンネ、ちゃんと眠れたか？」

「あ、うん。……そっか、あれから私達眠っちゃったんだ」

リンネの方も自分が置かれている状況を正しく認識出来てきたのか、段々顔が赤くなっていく。彼処まで互いに本音の言葉と本気の力で殴りあったのだ。本来大人しい性格であるリンネにとって色んな意味で耐え難いモノがあるのだろう。

対するフーカもそんな反応をするリンネに自身も少しばかり羞恥心で頬を赤くさせる。気まずさと照れ臭さ、互いに何て言えば分からず無言のまま、ベッドの上で正座でお見合いをしていると。

「おいーっす。フーカ、リンネ、起きてるかー？」

「し、シャンテさん？」

「は、はい。起きてます」

「お、二人ともその様子だと体の方は大丈夫みたいだな。良かった良

かった」
　ノックもしないで入ってくるシャンテ、少々マナーに欠けてはいるが、それは二人が眠っていた時に対する彼女なりの配慮である為、フーカは敢えて指摘しなかった。
　一方でリンネは自分の体の調子が試合前より良くなっている事に気付く。どうやらあのイクスという少女が自分達に回復の魔法を掛けてくれたらしい。どこまでも対応の良い彼女達に内心で感謝しながら、リンネはシャンテに訊ねた。
「あ、あのシャンテさん。もしかしてワザワザ起こしに来てくれたんですか？」
「んにゃ、ちょっと違う。正確にはこれから面白い試合が始まるから二人を呼びに来た。と言った方が正しい」
「し、試合ですか？」
「ワシ達以外にここで試合をする人が？」
　二人の問にアハハと笑うシャンテ、その表情は何処か引きつっている様にも見えるが、全貌が見えてこない二人はただ首を傾げるだけである。
「まぁ、どうせ後で分かるから今言っちゃうけどさ。我等が十代女子最強と二十代男性最強が戦うと言ったら……分かるよね？」
　十代女子最強と二十代男性最強、その言葉に当てはまる人物はそれぞれ一人しか知らない。まるで夢のような戦いに寝起きにも関わらずリンネの目は輝きが宿る。やはり彼女も格闘技が好きなのだろう、漸く年相応に表情を変えるリンネにシャンテは内心嬉しく思った。
「まだ試合には時間があるからさ、二人とも今の内に風呂に入ってきな。体の汚れとか落としたけど、気分的に流しておきたいだろ？」
「は、はい！　ありがとうございます！　フーちゃん、私先に行ってるね！」
「お、おう」
　シャンテに促され、早足に部屋を後にするリンネ、余程あの二人の試合を観るのが楽しみになのだろう。ワクワクと言った表情で脱

衣場へと向かうリンネをシャンテが満足そうに見送る中。
「……で、お前はいつまでそうしている訳？」
ベッドの上で頭を抱えて踞るフーカに苦笑いのシャンテ。
「あのシュウジさんに挑む？　悪い予感しかしない！」
これから起きるであろう出来事に早くも戦々恐々な思いのフーカ、そんな彼女を見てシャンテはただ同情しか出来なかった、

◇

ホテル・アルピーノの露天風呂で一通り体を洗い、気分的に爽やかになった二人は待っていたシャンテの案内で昨日ヴィヴィオ達が観戦していたであろう観客席へとやって来た。
既に観客席にはヴィヴィオ達が待っており、快復したであろうフーカ達に駆け寄っていく。労いの言葉をフーカに投げ掛ける一方で、リンネとジルが何回か言葉を交わしている。
「ジルコーチ、その……私」
「今は止しましょう。折角注目の試合が観れるのですもの、先ずはそれを楽しむ事から始めましょう。話をするのはきっとその後でも遅くは無いわ。そうでしょ？」
「ジルコーチ、……はい！」
リンネ達もどうやら大丈夫みたいだ。二人のやり取りを離れた所で眺めていたナカジマ会長は、自身の腕時計を見て、そろそろ試合が始まる頃だと察し、全員に席に座る様に呼び掛ける。
「はいはい。皆話したい事は色々あるだろうけど今は横に置いておけ、そろそろ試合が始まるぞ」

手を叩き、まるで学生の引率者の様に促すナカジマ会長、そんな彼女の言葉に素直に従い、ヴィヴィオ達はそれぞれ用意していた席に座る。

今回の試合にセコンドはいない。時間制限は設けられているが、ダウン制限もカウントもなく、魔法の使用も許されている何でもアリの総合戦技。互いの全てを披露し合い、技と力がぶつかり合う実戦方式の試合、

試合というより実戦に近いルール、時間制限の事を除いてはＵ２５の試合形式に近いその内容に誰もが緊張と興奮で昂ってきた。

もうじき見れる。十代女子最強であるジークリンデ＝エレミアと、生ける伝説シュウジ＝シラカワの試合が。どちらが勝つのか、魔法込みで行われるこれからの戦いを前にヴィヴィオ達は速くなる鼓動を抑えずにはいられなかった。

（所で、なんでハル先輩達唇が腫れとるんじゃろ？　……あっ）

隣で観戦に集中しているアインハルトの口元を見て、何となく今回の試合の全貌を察したフーカは敢えてその事を指摘するのを止めた。

◇

リンネとフーカが戦った廃墟の街、ヴィヴィオ達が見守るなか、もうじき始まる試合に二人はそれぞれ準備を済ませる。

自身の髪色と同じく、全身を黒の衣装で統一しているＵ１９の敵無しで敗北無しの世界王者、〝鉄腕〟ジークリンデ＝エレミア。

対峙するのはＵ２５無敗の帝王、元世界王者〝魔人〟シュウジ＝シラカワ。試合の前に体を解しながらその時を待つ彼にジークが申し訳なさそうに声を掛ける。

「シュウジさん、今回はウチの我が儘に付き合って下さり、ありがとうございます」

「なに、気にする事はない。確かに最初は君の強引な誘いに少しムッとしたが、今はこれで良かったと思っている。噂のＵ１９世界王者の実力というモノにも興味はあったし、何より君は俺の出した条件をクリアしている。君が気に病む事はないさ」
「そう言ってくれるとウチも安心です。ウチもＵ２５の世界王者の実力が――――シュウジさんの事が知りたくて今回挑ませて貰いましたから。……シュウジさん」
「うん？」
「格闘技、好きですか？」
　ジークからの質問、その問いに僅かばかりの動揺を見せたシュウジ、同時に試合開始のゴングが鳴り、ジークは瞬く間にシュウジとの距離を詰めた。
　シュウジの動揺を誘ってからの攻撃、端から見れば不意討ちにも取られるジークの先制、しかし今回の試合には映像は流されても音声までは拾ってはいない為、誰もその事を指摘する者はいない。
　……いや、もし不意討ちだと糾弾する者がいてもシュウジはその事を追及したりしない、元より戦う事を許したのは自分だ。喩え不意討ちだろうとそれは自分を倒そうとする相手の努力によるもの、嘗ての戦いでもっと汚くてキツイ不意討ちを受けてきたシュウジにとってジークの行った不意討ちを不意討ちとは思わなかった。
　しかし、一瞬の隙を突かれた事で回避する事に遅れたシュウジは、咄嗟に腕を交差させてジークの一撃を防ぐ。
「ほう？」
　重い打撃だ。体格差をモノともせず、自身を後退させるジークの一撃にシュウジは感心の声を漏らす。
「はぁぁぁぁっ!!」
　続いて繰り出されるラッシュ、鋭くて小さく、けれど凄まじい威力を秘めたジーク連打。並みの相手ならばそれだけで圧倒してしまいそうなジークの攻撃を、しかしシュウジは避け続けた。
　たった一度、一度だけ相手の攻撃を受けただけでまるで見切られた様に避けるシュウジ、鋭くて速いジークの拳を難なく避け続ける彼に

観客席からは感嘆の言葉が漏れる。
「まだまだぁっ！」
「へぇ？　まだ上があるのか」
　更に回転力を上げ、勢いを増していくジーク。鋭さも重さもより増していく彼女の打撃にシュウジは再び感嘆の声を上げた。
　しかし、勢い付かせるのもここまでだ。一種の台風と化したジークにシュウジの拳が突き刺さる、下手なカウンターではその拳諸とも粉砕してしまいそうな勢いのジークを、シュウジは的確に貫いて見せた。
　衝撃がジークの脳天を貫く。両側に縛ったツインテールの髪が巻き上がり、ジークの勢いは完全に停止した。あれだけの打撃の雨に晒されながらも尚カウンターを決めていくシュウジ、その眼の良さは最早神眼の域を超えている。淡々とこなす絶技、カウンター使いであるヴィヴィオでも決して真似できない一撃を、目の前の男性は難なくやってのけた事に観客席に座る彼女達は薄ら寒いモノを感じた。
　まさか、これで終わるのか？　シュウジのカウンターを受けてピクリとも動かないジークにヴィヴィオ達が言葉を失った時。
「……漸く、捕まえた」
「？」
　拳を額で受け、そこから血を流すジーク。鮮血が彼女の顔を染めるが、対して彼女の笑みは獰猛な肉食獣の様だった。
　シュウジのカウンターは完璧だった。しかし、ジークは最初から読んでいた。魔人と呼ばれる彼ならばこれくらいの芸当はやってのけると、予めカウンターを読んでいたジークは敢えてシュウジのカウンターを受ける事で彼との間合いを詰めたのだ。
　咄嗟に距離を開けようとしても、既にそこは彼女の領域内。低いタックルでシュウジの足を掴んだジークはそのまま地面へ叩き付けるように投げ落とす。
　一見地味だが、直接受けるとダメージは確実な攻撃、この試合で初めてシュウジに攻撃を通した事にヴィヴィオ達からは大きな声援が沸き起こった。

しかし。
「いやー、凄いな。まさかここまで見事に投げ技を受けるとは、エレミアちゃんて立ち技以外も出来るんだね」
立ち上り、平然としているシュウジに分かっていながらもジークはショックを受けた。受け身もできずにマトモに地面に叩き付けられたのに、まるで堪えた様子の無いシュウジ、体が大きければ大きいほどダメージが大きくなるジークの柔の技、だが、相手は首をコキコキとならすだけである。
ならば、もう一度投げ飛ばすだけである。幸いにも構えていない今のシュウジに飛び込むのは容易い。姿勢を低くして更に勢いを乗せてシュウジの足に掴み掛かるジークだが。
「っ!?」
――――山。シュウジの足を掴み取った瞬間、そんなイメージがジークの脳裏に過った。動かない処の話ではない。文字通り一ミリもビクともしないシュウジにジークは額から大粒の汗を流した。
「さて、折角投げ技をしてくれたんだ。場の空気を盛り上げるために俺も投げ技で返すとしよう。――――見様見真似〝大雪山おろし〟」
瞬間、ジークは空を舞った。激しい回転を掛けられ、自分がどの位置に在るのか、どこを向いているのか、その感覚が麻痺してしまった彼女は抵抗も受け身も出来ないまま、地面へと激突する。
痛みと衝撃で呼吸は無理矢理停止され、意識が吹き飛びそうになる。歪む視界と意識、平行感覚すら奪われた彼女は立ち上がろうとしても、再び地面に倒れ伏す。
観客席にいるヴィヴィオ達も言葉を失っている。見たこともない投げ技、人が台風に見舞われた木葉の様に吹き飛ぶ様を目の当たりにして、彼女達の誰もが絶句していた。
静まり返る試合会場、そんな中シュウジはジークの下へと歩み寄り。
「さて、先程の質問に答えようか。俺が格闘技が好きかどうかについてだね？　確かに俺はＤＳＡＡに参加して一度チャンピオンになった。その日々は長いようで短く、そしてとても充実していた」

「でも、好きかどうかと聞かれたら……正直微妙かな？」
自分なりに真剣に考え、そして答えを出したシュウジ、その何となくな態度のシュウジに彼女の闘志に火が付いたのか。
「そう、ですか。なら、ウチが全力で楽しませて上げる事にしましょう!!」
「あぁ、宜しく」
立ち上り、構えを見せるジークにシュウジはそう来なくてはと笑みを溢すのだった。

その26

シュウジとジーク、嘗ての世界王者と現役世界王者の戦い。ジークリンデ＝エレミアという十代女子最強が、伝説となった相手を前にどう挑むのか、誰もが興味を抱き、興奮した。

ハリーもエルスも、ミカヤもミウラも、リオにコロナにヴィヴィオとヴィクター、そしてアインハルトにシャンテ達、ナカジマ会長とジルも二人の試合に心の底では楽しみにしていた。

嘗てない試合が見れると、自分達が尊敬して止まない格闘技の頂点に君臨している二人が、満を持して拳を合わせた。

盛り上がる筈だった。熱い激闘が予想され、白熱した戦いに心が揺れて、きっとこの試合も綺麗に終わるモノだと誰もが思っていた。

――――なのに。

「ウソだろ。こんな事って……」

「確かに簡単には行かないとは思っていたけど……」

「でも、こんな事って……」

ヴィヴィオ達の前に映し出されている通信映像、先のリンネとフーカの試合の時のように音声を除いた全てが彼女達の前に映されている。

そこに映る光景にヴィヴィオ達は絶句していた。多種多様な技を繰り出すジーク、彼女は投げも打撃も関節技も強く、オマケに魔法も得意としている完全なるリンネの上位互換。しかし片手一本でその技全てをカウンターで撃ち落とすシュウジの絶技。ジークの技を一つ一つ丁寧に返していくシュウジ、圧倒的処の騒ぎではない。

手加減されている。試合映像で見た構えの無いやり方ではなく、どちらかと言えばコロナの様な正当なストライクアーツの構え、その構えにアインハルトは先日ナカジマジムでの自身とのスパーリングの事を思い出す。

手加減している。それも相手を対等の選手としてではなく、まる

で教え子に基本から格闘技を教える様に。
　彼は、最初から本気で戦うつもりが無かったのだ。ただ挑まれたから、義務感として処理しているだけ、そこに格闘技選手としての矜持はなく、ただ作業として相手をしているだけに過ぎない。
　先のジークの投げ技でシュウジに一撃を与えたのは良かったが、それから返される一撃に為す術無く地に倒れ付したジーク、そこから立ち上り、闘志を燃やすのは良かったが、以降はずっとこの調子、シュウジの左手に良い様に翻弄されてしまったジークはその表情に悔しさを滲ませている。
　初めて見せるジークの顔に彼女の事をよく知るミカヤ達は表情を曇らせる。強すぎる。まだ魔法の一つも出していないのに、左手一本で倒れそうになっている十代女子最強、同じ肩書きで格闘技選手としての経験も此方が圧倒的に多いのに、まるでそれらを嘲笑うかの様にジークの攻撃を避けていく。
「か、格闘技って、こんな事が出来るの？」
「やってることは私達と大して変わらないのに、それなのに……」
「シュウジさんが何をしているのか、全然分からない」
　やっている事は自分達と対して変わらないのに、シュウジ＝シラカワという男が実行すると、まるで別物の様に変わってしまう。暴風の様に繰り出されるジークの打撃の連打、その境目を、針の穴の如く小さな彼女の一瞬の隙をシュウジは確実に刺していく。
　顔が跳ね上がり、ズザザと後退るジーク。ダメージ判定はルーテシアとファビアで高く設定している筈なのに、まるでお構い無しにとばかりに深刻なダメージを積み上げていく。
　シュウジの普段は見ない戦い方にフーカは訝しむ。何故態々慣れないやり方であのジークリンデと試合をしているのか、相変わらず読めない師匠の考えにフーカは首を傾げた。
　そんな時だ。弾かれ、後ろに下がった拍子にジークの手から何かが放たれる。黒い魔力の渦、〝ガオン〟と音と共に周囲の建物が抉れる様に消失している。
　そうだ。これがあった。今回の試合はリンネとフーカの時の様

な格闘技のみを前提にしたものではない。魔法という本来のＤＳＡＡらしい戦い方にヴィヴィオ達は皆ジークに希望を見出だした。
彼女の放つ魔法は少々特殊で、当たればどんな人間も無事ではすまない。現に回避しているシュウジも少し動揺している様にも見える。
そうだ。まだ終らない。彼女の全てはまだ出し切っていない。ジークが、黒のエレミアが、鉄腕の彼女がそう簡単に負ける筈がない。どれだけ打たれても闘志を燃やす彼女にアインハルト達は声援を送り続けた。

◇

――――シュウジ＝シラカワにとって格闘技とは手段に過ぎない。何かをする為に、何かを成し遂げる為に、自分の出来る事を精一杯行う。格闘技とは彼にとってそんな目的の為に必要な道具の様なもの。
だから格闘技の試合に出場する際、嘗ての師から教わった空手ではなく、所属していたジムの会長から古流武術とストライクアーツを学び、自分なりにアレンジして独自の格闘技を会得した。
嘗ていた世界のシュウジとしてではなく、この世界に生きるシュウジとして、一から鍛え直して行こう。お金目的で始めた格闘技、汚い理由で始める自分が行えるせめてもの誠意として。
フーカに空手の技、その一部を教えたのは尊敬して止まない師の武術を多少なりとも伝えていきたいシュウジなりの弟子心だったのかもしれない。
そんな自分を尊敬してくれると言った子供達がいる。目を輝かせて、純粋に敬意を示してくる彼女達の期待を裏切らない自分であり

たい。
彼女達の期待に応えたい。そんな思いにシュウジは遂にこんな事を思い付きやがった。
――――そうだ！　基本的なやり方なら皆にも分かりやすく伝わるんじゃね？
自分を尊敬してくれる幼い子供達、未来に希望溢れる彼女達に少しでも指針となれるようにジークとの試合でシュウジは基本に忠実に行こうと決めた。
ヴィヴィオ達の中でストライクアーツに最も基本的な動きをするコロナ、彼女をモデルとしたやり方なら、彼女達もきっと参考になる事だろう。
相手の動きをよく見て、リズムを読み取り、タイミングを見切って拳を放つ。これなら年若い彼女達にも上手く伝わる事だろう。
実際はそんなシュウジの親切心は一ミリも伝わっていないが、試合中の彼にはそれすらも伝わらない。
スパァンッと音と共に重い一打がジークの顔に入る。既にボロボロ、満身創痍と化しているジークに流石のシュウジもこれ以上の試合続行に疑問を抱く。
少々大人気無かったかもしれない、立っているだけでやっとなジークにシュウジの手が止まる。これ以上は気が引けた。幾ら魔法の力で安全に設定されていても年頃の女の子を痛め付けるのはシュウジにとって心苦しい。
いっそ意識を断って無理矢理にでも終わらせるか？　そんな考えが脳裏を過った時、ジークの口から笑みが溢れた。
「は、はは。やっぱり強いなぁシュウジさん、分かっていたけど本当に強いわぁ。ウチ、結構強くなったと思ってたけどまだまだやったわ」
「……」
「でもなシュウジさん。今の貴方はまるで本気じゃない。それは今に始まった事じゃない、現役の頃からずっとや」
「っ！」
「シュウジさん、今まで本気で試合に臨んだ事ないやろ？　全力だっ

たのかもしれない。戦うからには勝つ気でいたかもしれない。でも貴方は何処か遠慮して、本気で誰かと打ち合った事なんてないやろ？」

「――どうして、そう思うのかな？」

「だってシュウジさん。窮屈そうなんやもん」

それは違う。と、シュウジは思った。魔法という力に触れて、以前の自分とは出来る事が増えて興奮し、楽しかった。だからこそ思ったのだ。この世界では自分が培ってきた技と力、そして相棒の力は必要ないのだと。

差し迫った状況で無い限り、魔神（グランゾン）の力も師匠（ガモン）の技も必要ないのだと。それで良いと思った。これで良かったのだと納得した。しかし目の前の少女はそんなシュウジの心の奥を見事に突いて見せた。

「成る程、窮屈そう、か。確かにそう見えたのかもしれない。けれど仮にそうだとしても、今の君にそれを見せる必要があると思うかい？」

「思わないやろうなぁ。残念ながら今のウチじゃあシュウジさんには届かへん。――だから」

瞬間、ジークの雰囲気が変わった。全身を突き刺す様な鋭く重い圧力。〝殺気〟これまでの彼女とは何もかもが違う事に一瞬戸惑ったシュウジが次に目にしたのは、自分の間合いまで詰めてきた彼女の拳を振り上げる姿だった。

〝ガオンッ!!〟

拳に乗せた魔力、彼女から発せられるその力にシュウジは不味いと思った。自身の本能に従い横に回避すると同時にジークの拳は振り抜かれ、轟音が辺りに響き渡った。

「……今のは、イレイザー級魔法？　いや、少し違うな」

先程まで自分のいた場所を見る。抉られたアスファルトの地面、深々と抉れ、溝と化した試合舞台にシュウジは彼女の力の正体を探る。

「シュウジさん、貴方がどんな考えで格闘技をしていたのか、どうして本来の戦い方で試合をしなかったのか、ウチには検討もつきません。勝手な事やと思ってます。でも、どうしてもウチは本当のシュウジさ

んと戦いたいんや」
「ジークちゃん……」
「せやから、ウチの全部をお見せします。シュウジさんの本当に見合う様に、ウチの、ジークリンデの、鉄腕と、黒のエレミアの名に懸けて」
「エレミアの神髄。その全てで、貴方の本気を引き出します！」
ジークの内側から溢れる覇気。彼女の魔力が渦となり、舞台である廃墟の街全体を震わせる。一つの台風が人の形を成した瞬間を前に。
「――――最近の娘って、みんなこうなの？」
物凄く熱血しているジークに素で困惑するのだった。

その２７

――――試合の流れが変わり始めた。これまでシュウジの独壇場だったのが、ジークが己の内に眠る力を解放させた事によって発動させる彼女の先祖から代々受け継ぐ戦闘技術、通称エレミアの神髄。

公式の試合では殆ど使おうとしなかった。この状態のジークはご先祖の経験してきた５００年の昔から溜めていた古代ベルカの戦闘技術の全てが詰まった人を破壊する為の技を惜し気もなく使ってしまう。

自分である筈なのに自分では無い感覚、沸き上がる破壊衝動のままに目の前の相手を壊し尽くすジークにとって禁じ手の技。幼い頃からこの力を使いこなせずに、ジークもその周囲すらも傷付けてきたから、彼女自身この状態になることは酷く嫌がっていた。

友人達の励ましとジーク自身の努力により、今では当時程の拒絶はしていないが、それでも自分の力ではないこのエレミアの力を彼女は進んで使おうとはしなかった。

――――そんな彼女が今、自分の意思で自ら発動させた。先祖代々受け継ぐ黒のエレミアの力、即ちエレミアの神髄を一人の人間相手に躊躇無く発動させた。全ては目の前の相手、元Ｕ２５世界王者に本気で戦って欲しいという身勝手な願いの為に。

三年前、ジークは試合会場で直接彼を見た。鮮烈で、眩しくて、誰よりも圧倒的に勝利し続けてきたシュウジという一人の人間を、何度も見てきた。

誰よりも試合を楽しみ、誰よりも自分の技術に素直な彼。どんな相手でも真っ正面から戦い打ち勝ち、どんなに試合内容が短くてもジークはその試合を全て記憶していた。速すぎて試合記録にも残らないその様子を彼女は脳細胞の全てを駆使して自身の脳に焼き付けた。

今でも彼がこれまで行ってきた試合の全てを覚えている。始まりから終わりまで、デビューから引退まで、シュウジ＝シラカワとい

う選手の全てを記憶している。
だから、だろうか。彼の戦い方に違和感を覚えたのは、シュウジが引退して暫く後の事だった。端から見れば馴染み、完璧に使いこなしている数々の仰天技。他人が真似を試みても決して使いこなせない絶技の数々。
けれど……いや、だからこそジークは違和感に気付いた。シュウジのＤＳＡＡでの格闘技が長年使い続けてきたモノではなく、まるで思い付いた技をただその場で使っている様な奇妙な感覚。
大観衆の前で高々と拳を掲げるシュウジ、しかしジークにはその彼の姿が酷く窮屈そうに見えた。無理矢理自身を型に填めて抑え込んでいる様な戦い方、拒絶とは違う。
謂わば……そう、彼は遠慮しているのだ。それが一体何の為で、どういう理由で遠慮してしているのかは定かではないが、ジークはそんなシュウジが非常に気になった。
シュウジ＝シラカワに特殊な背景はない。ごく普通の一般家庭に生まれた普通の人間、その手の専門家に調べて貰ったから、その辺りの情報は間違っていない筈。自分の様な古代ベルカ時代の記憶や知識を受け継いだ自分とは違う彼が、どうして格闘技の試合で遠慮しているのか。
確かめたい。それが自分の醜い我儘なのだとしても、ジークはシュウジに問い質したかった。だって、格闘技はＤＳＡＡはこれまで培ってきた人達が全力で自分の力を出し合う場所、それなのに……。
（自分だけそれが出来ないなんて、そんなの……寂しいやないか！）
だからジークはシュウジに全力を出してもらおうと彼女自身全力で彼と相対した。投げ技も打撃も効かない。関節技も仕掛けようがない。だったら後は自身の最後の切り札、エレミアの神髄を使い、死力を尽くすまで。
「だぁぁぁッ!!」
「っ！」
激しい攻防、ジークのイレイザー級の魔法を乗せた打撃が容赦なくシュウジに襲い掛かる。勢いも速さもこれ迄とは桁外れの彼女の強

さにシュウジは回避ではなく、受け流す事に専念していた。
襲い来る拳を掌でいなして流す。イレイザー級の魔法で包まれた拳を触れた瞬間に受け流すその技量の高さは相変わらず底が知れない。しかし。
「まだまだぁぁっ!!」
「ぐっ」
拳だけの連打から蹴りを混ぜた乱打に切り替わる。更に激しさを増していく攻防、触れただけでダメージを負ってしまうイレイザーの魔法を纏わせた打撃の嵐に流石のシュウジの顔も曇る。
このままでは押し切られてしまう。一度距離を開けて砲撃魔法(かめはめ波)を放とうとするシュウジに……。
「させません!」
「っ!?」
距離を開けようと後ろに跳躍するシュウジにジークもピッタリとくっついて離れない。既にシュウジの今の戦い方を熟知しているジークは次に彼が何をしようとしているのか手に取る様に分かった。
エレミアの神髄、５００年に渡って受け継がれてきた黒のエレミアの真骨頂、漸く伝説の世界王者と対等に勝負が出来るようになった事にジークは先祖達に感謝した。
遂にジークの攻撃を防御する様になったシュウジ、魔力を纏わせた腕を交差させ、息も出来ない乱打を前に完全に為す術を失っていた。
そこへ……。
「デヤァァァッ!!」
地面を踏み割り、その勢いで振り抜いたアッパーがシュウジの体ごと浮かばせる。崩れる体勢、外された防御、全く無防備となったシュウジに……。
「ガイスト・クヴァール!!」
全身全霊、渾身に渾身を込めた必殺の〝殲撃〟がシュウジの体を撃ち抜いた。衝撃が背中を貫き、勢いのまま吹き飛ぶシュウジ、背後に会った高速道路の柱をぶち抜き、幾つものビルを破壊しながら吹き飛び、やがて吹き飛ぶ勢いを失った彼は最後に崩れるビルの中へと消え

ていった。

◇

「マジかよ、ジークの奴」
「シュウジさんを、吹っ飛ばした……」
　崩れ落ちる瓦礫と化した幾つものビル、砂塵が舞い散り、舞台となった廃墟の街は一時砂埃に包まれる。今の攻防を終始見ていた彼女達は最後に見せたジークの一撃に言葉を失っていた。
　改めて見せられる十代女子最強の力、これが自分達の頂点だと、これが鉄腕の力なのだと、見事見せ付けたジークにヴィヴィオ達は憧憬と畏怖、そしてその凄さに圧倒されていた。
「シュウジさん、まさか……本当に？」
「フーちゃん……」
　自身が師事している人間が致命的とも言える一撃を受け、吹き飛んだ光景にフーカはショックの色が隠せずにいた。隣にいるリンネも同じく彼に強い憧れを抱いていただけに衝撃は大きい。
　未だ晴れてこない砂塵、そろそろ試合時間も終わりに差し迫っている。このままジークの勝ちなのかとまさかの展開に誰もが戸惑っていると……。
（……あれ？　何だろう、この熱気）
　ふと、ヴィヴィオは観客席に充満している熱気に気付いた。これまでハリー達が熱狂している影響かと思われていたが、それとは少し違う熱気にヴィヴィオは首を傾げた。
　その時だ。舞い上がる砂塵の中、うっすらと輝く光が彼女達の目に入ってきた。

「何だろう、あの光？」
「シュウジさんの魔力光か？」
「けれど、それにしたって魔力なんて微塵も感じないけど？」
やがてその光は徐々にジークの方へと近付いていく。その様子にまだ試合は終わっていない事を察した彼女達は再び黙して二人の様子を見守り続けた。

◇

――――――今のは、自分に放てる最強にして最高の一撃だった。
舞い上がる砂塵の中から現れる彼にジークは油断なく構える。
音を立てて崩れる瓦礫、雨の様に降り注がれる石礫の中をそれでも平然と歩いてくる彼にジークは妙な焦りを覚えた。破壊されたバリアジャケット、山吹色の彼の胴着は上半身が吹き飛び、その肌を露にしている。
その姿を見て、ジークは以前自身が彼に抱いた違和感の正体を何となく理解した。肩から脇腹に掛けて付けられた大きな刀傷と幾つもの銃創、専門家に調べて貰った彼の普通という印象は、間違いだった。
（それにあの輝きは一体、魔力の光やなさそうやな。しかもこの熱気、これもシュウジさんが？）
目の前のシュウジを前に思考を巡らせても視線は外さない。ゆっくりと此方に向けて歩み寄ってくる彼にジークがいつ飛び出そうかタイミングを見計らっていると。
「――――大したものだ」
「っ!?!?」
背後からの声にジークの息は一瞬止まった。振り返るよりも飛

び退いた彼女は前転しながら距離を開け、地に膝を突けながらシュウジに向き直る。
息が荒くなる。呼吸が整えられない。先程とは打って変わった様子の彼にジークは必死に目の前の相手を睨み付けた。
「聞いたことがある。古代ベルカの時代、当時の戦闘技術の知識と経験をそのまま受け継いだ麒麟児がＤＳＡＡにいる、と。そうか……君だったのか」
「はぁ、はぁ、はぁ……」
「君の熱意と決意、確かに受け取った。ご先祖達の力を借りてまで俺と戦おうとする君の気持ち、素直に嬉しく思う。――――故に」
〝返礼しよう〟
シュウジの全身から滲み出てくる熱さと輝き、紫炎の髪を揺らし、その瞳も光を宿らせるシュウジはゆっくりと構えをみせる。
天地上下の構え。フーカとリンネの戦いで見せた構え、それを目の当たりにしたジークは確信を得る。これが、この姿が、目の前の男の本当の姿、正真正銘彼の本気なのだと。
「君の今の一撃に対し、ここからは俺も少し……本気でやろう」
これまで体験した事の無い領域、そこに踏み込んだジークは必然的に彼に向けて駆けるのだった。

その２８

競技というのは参加する人間が大なり小なり闘争心を胸に秘めて挑むもの、日頃高めた己の実力を試合という形で披露し、研磨し、切磋琢磨していく。

負けたくないという勝ち気な気持ちと、勝利の先にある栄冠と名誉を手にする為に人は己に克つを入れて挑んでいく。格闘技はその最たるモノの一つ、目の前の相手を倒す為に、多くの格闘技選手は勝利を手にする為、確たる意思を以て挑んでいく。

ヴィヴィオもアインハルトも、フーカもリンネも、相手に勝つという明確な意思を拳に乗せて勝利に向けて邁進している。無論、十代女子最強の世界王者であるジークもその例に溢れない。格闘技をしている選手にとって、闘争心とは切っても切れない間柄だ。

――その筈なのに。

（なんて、静かなんや）

目の前の男……シュウジからは闘争心というモノは微塵も感じられなかった。いや、在るには在るのだろう。信じられないのは闘争心が在るにも関わらず、微塵も荒ぶる闘志を表に出さない彼の心の境地だ。

機械的に闘争心を封じ込めているのではない。自然に、無意識に溶け込ませる事で彼は通常とは異なる極致に到達している。彼の体から発せられる熱気と光、魔法とは異なる力の発露にジークはただ呆然と眺めていた。

古代ベルカ、５００年の年月の知識と経験を受け継いでいるジークリンデ＝エレミアでも今のシュウジがどのような状態にあるのか、彼女には検討もつかない。

――ただ一つ分かる事があるとすれば。

（今のシュウジさんは、本気や！）

これはジークが心から願っていた展開だ。窮屈な思いをしているシュウジを僅かでも楽にしてやりたいというその彼女の想いは嘘

ではない。
しかし、それ以上に彼の本気と戦ってみたいという格闘技選手としての部分が強くあったのも……また事実である。
次元世界の格闘技界に於いて誰も目にする事が出来なかったシュウジの本気、それを目の当たりに出来てその上挑む事が出来る。
心が高揚する。魂が昂る。嘗て無い強敵を前にジークだけでなく彼女の内に眠る先祖達すらも歓喜に打ち震えている様だ。
「シュウジさん……行きます！」
速攻。一言呟いた瞬間、ジークは地面を踏み締め一発の弾丸と化した。踏み締めたアスファルトの大地は砕かれ、風すら置き去りにした彼女の一撃は誰にも避けられない不可避のモノだった。
当たればどんな相手でも倒せるまさに一撃必倒、振り抜かれた彼女の拳は確かにシュウジを捉えていた。ジークの拳がシュウジの前髪に触れる。ジークも、観客席に座る彼女達も彼の直撃を確信した。
――なのに、何故ジークの拳は空を切っているのか、時間の流れの感覚が緩やかになっていく。極限にまで高まった集中力の中でジークが目にしたのは空振った事で体が流れる己を見下ろすシュウジの姿だった。
不可避の一撃、それは動体視力に優れたヴィヴィオでも予見出来ない超高速の一打。イレイザー級魔法を纏わせ、防ぐのは勿論触れただけでも相手に深刻なダメージを負わせるジークの必殺にして得意技、〝殲撃〟。最高の威力を乗せ、最高の速さで繰り出されたジークの一撃、避けることも防ぐことも叶わない彼女の拳を、しかし彼は難なく避けていた。
勢いのままに体が流れていく。無防備の体勢、次の瞬間には立て直すであろうジークの体にシュウジの拳が触れる。
トンッ。打ち抜くというより触れるような、まるで勢いの無いシュウジの一打がジークの脇腹に加えられる。到底人を倒せるとは思えない静かな攻撃だった。
――瞬間、凄まじい衝撃がジークの体を貫いた。腹部を通して臓器を貫き、蹂躙する様な衝撃が彼女の肉体に襲い掛かる。数瞬の

遅れで彼女の背後にあったアスファルトの地面は抉れ、吹き飛び、その先にあるビル郡すらも撃ち抜いていく。
　ドサリと今の一撃で意識が飛びそうになったジークはそのまま地に落ちる。何度も飛んでいく意識を懸命に繋ぎながら、膝を震わせながら、それでも彼女は立ちあがり、シュウジに向けて構えを見せる。
　まだやる気なのか？　　なんてシュウジからは決して口にはしない。一撃、たったの一撃で満身創痍となっても、その上で自分と戦おうとするジークにシュウジは止められる言葉を持ち合わせていないし、何より彼女自身がそれを望んではいない、
　世界王者という肩書きは抜きにしＤＳＡＡの格闘技選手として、ジークは最後までシュウジの相手をする事を決めている。そう、彼女は待ち望んでいたのだ。彼の、シュウジ＝シラカワの本気を。
　　――――故に。
「どうした？　もう終いか？」
「……ぁぁぁぁぁぁっ!!」
　彼女は挑む。何度でも、何度でも、全力で駆け上がってもそれでも尚届かない遥か高みに手を伸ばす。何故なら彼女もまた血気盛んな格闘技選手だからだ。
　闘志を剥き出しに放たれる魔法の一撃、イレイザー級の魔法を込めたその砲撃魔法は、周囲の空間を削りながらシュウジへ向けて突き進んでいく。人一人を軽く呑み込める程に巨大な黒い極光、渦を巻き、鈍い光を放つその閃光を前に……。
「人越拳受けの奥義――――万物流転」
　光がそのままジークへと跳ね返る。何の脈絡もなく、前触れもなく、光が鏡で反射する様にジークの放ったイレイザーの砲撃はそのまま彼女へと返される。
　爆発と轟音が廃墟の街を染めていく。観客席から眺めているヴィヴィオも二人の戦いを前に言葉を口に出来ずにいた。……いや、正確には戦いにすらなっていない。ジークの繰り出す技を魔法を、シュウジは己の肉体のみで返していく。
　そんな中、唯一ヴィヴィオだけは既視感を覚えていた。シュウジの

繰り出す技、それらが何故か彼女には何処かで見覚えがある気がするのだ。
あれは、一体何処だっただろうか。……ダメだ思い出せない、どんなに頭を悩ませていてもヴィヴィオの記憶には何も浮かばない。
そんな時だ。自身の魔力の全てを使いきってまで放った必殺の砲撃を放ち、それを返されたジークの体が崩れ落ちた。膝から糸の切れた人形の様に地に落ちようとする。最早彼女に動ける力はないと判断したシュウジは彼女を抱き留める。
「ナイスファイト、楽しかったぜ」
――本音だ。終始一方的だった試合展開だったが、彼女との試合は久し振りに心が踊った。命のやり取りではなく、純粋に競い合う為に技を出せた事にシュウジはこれまで経験したことがない充足感を感じていた。
嘗て、自分はこの拳で多くの人間を殺めてきた。それを後悔していないし、反省もしていないが、いざ公の場で出すとなると躊躇われてきた。だからシュウジは考えた。格闘技の試合に出る時は人越拳の技ではなく、自分の技で出場すればいいのだと。
それからは公の場で、人の前では見せることは無かった嘗ての自身の技、この世界にいる限り二度と陽の目が見ることは無いのだと、安堵していながらも……何処か、寂しく思える自分がいた。
その寂しさが今日、少しばかり和らいだ気がした。その切欠をくれたジークに、自分の本気を出せる舞台を用意してくれたヴィヴィオ達にシュウジは心の底から礼を口にした。
――トン。
「ん？」
ふと、腹部に違和感が生まれる。何だと思い視線を下げると、手を拳の形に変えたジークがシュウジの腹部に当てている。
「――漸く、掴まえた。零距離全開!!」
ヴァイツァー・ガイスト。
それは正真正銘ジークの最後の一撃だった。これまでの戦いの中で疲弊し、ダメージを負いながらも何とか出せた攻撃、何度も何度も

練習を重ねて自分と先祖達と向き合いながら生み出した彼女の最後にして究極の一撃。
拳の一部分、そこ一点に凝縮された彼女の一撃の凄まじさと重さは計り知れない。打てば必中、当たれば必倒、正しくそれは彼女の必殺だった。
――なのに。
「……驚いた。まさか、君にこんな隠し玉があったなんて」
何故、目の前の男は自分の一撃を防いでいる。予見なんて出来る筈もない。予想だって出来る筈がない。しかし、現にジークの拳はシュウジの差し込んだ掌に遮られている。
全身全霊の一撃を放った側のジークの表情が驚愕と畏怖で歪む。バカな、それはジークを含めた全員の心境だった。
（攻撃の速さもタイミングも完璧だった。そこへ蓄積されたダメージが今少し軽ければ、或いはこの拳は俺に届いたかもしれない）
ジークの勝利への執念、そして忘れかけていた戦いでの作法、どんな時でも油断慢心は控えるべきだという事を自分よりも年若い少女に教えられたシュウジは自身を情けないと思う一方、改めてジークに感謝を述べた。
「ありがとうエレミアちゃん。君のお陰で嘗ての気持ちを取り戻す事ができた。――故に」
もしどこかで尊敬する選手は？　と聞かれたら、きっと自分はこう答えるだろう。
「俺も、全霊で以て返礼しよう」
――それは、自分よりも小さく、そして勇敢な少女、黒のエレミアを引き継いだ若者だと。
「……く、くそぉ」
「人越拳――霞獄」
お休みなさい。ジークリンデ＝エレミア。
光が廃墟の街を覆い、次の瞬間にはジークは空を舞った。

その２９

――――シュウジさんとジークさんの試合、苛烈に苛烈を極めたお二人の勝負はシュウジさんの勝利で幕を卸した。結果だけみれば今回の試合はシュウジさんの圧勝、まだまだ未熟な格闘技選手であるワシでも分かる程に試合は終始シュウジさんが圧倒して終わった。結局、ＤＳＡＡの……格闘技の世界に於いてシュウジさんが最強だという事は揺るぎようの無い事実だった。

しかし、二人の試合を無意味だったとはあの場にいる全員が思わなかった。確かに試合はジークさんの敗北で終わり、ボロボロの彼女に対してシュウジさんは平然としていた。

そんなジークさんがシュウジさんの本気を引き出した。現役時代では一度も見せたことがなかったシュウジさんの本気を、ジークさんは死に物狂いで挑み、そしてシュウジさんを本気にさせた。

過去、誰も見たことがないシュウジさんの本気。それを目の当たりに出来たワシ等はきっと幸運じゃった。嘗て世界の頂にいた男の正真正銘の本気、伝説とまで謳われた人の本気を間近で目撃出来た。だからジークさんは目を醒ました後もずっと興奮していたのだろう。

圧倒的力の差を見せ付けられても、まだ挑む事を止めない。それは彼女が黒のエレミアの後継者だからではなく、ジークさんが格闘技が大好きなジークリンデ＝エレミアだからだ。

ジークさんだけじゃない。ヴィヴィオ先輩もハル先輩も、ハリー選手もヴィクター選手も、皆二人の試合を観て興奮していた。当然、リンネとワシもじゃ。

ナカジマ会長とジルコーチはそんなハル先輩に呆れていたけど、きっと内心では喜んでいたと思う。伝説の選手の本気を目の当たりにしたのと、二人の試合を目の当たりにした事で皆がやる気に満ちていたことが、きっとお二人も嬉しかったのだとワシは思う。

そんな中、唯一シュウジさんは困った様に笑っていた。どれだけ実

力の差があろうと挑む事を諦めない彼女達に、最初こそは戸惑っていたシュウジさんだが。

『――――あぁ、懐かしいな。昔を思い出す』

そう言って優しそうに頬笑むシュウジさん、その言葉がどんな意味を持つのかはワシには推し量れないが、きっとシュウジさんにとって駆け換えの無い大切な事なのじゃろう。

そしてその後、ワシとリンネは改めて二人で話し合った。孤児院での事、里親に引き取られる際に二人で話した事、辛かった事、悔しかった事、悲しかった出来事を全て話し、ワシとリンネは漸く嘗ての頃に戻れた。

過去は変えられない。大事なのはその過去と向き合い、未来に繋いでいくこと、今回の事で皆からそう教わったとリンネは言った。ワシもそうじゃと思う。親に捨てられて理不尽な目にあった事は腐るほどあったが、それでも未来に向けて進んでこれたのは、周囲の皆のお陰だからじゃ。

ワシは、きっとこれからも何かを間違って生きていく。その度に叱られて諭されて、自分の道を生きていく。

帰りの車内でシュウジさんにその事を伝えて改めてお礼を言った。ワシの始まりは全部この人に出会えてから――前に進める指針を示してくれたシュウジさんにワシは何度も感謝した。

きっと、いつになるか分からないけど、この人にこれまで受けた恩を返していこう。恩を返しながら自分のこれからの人生を見つめていく。それがきっと、今後のワシの生き方なのじゃから……。

……と、そう思っていたんじゃがなぁ。

「それでは、皆さんに新しいお友達をご紹介します。それではフーカさん、自己紹介をお願いね」

「ふ、フーカ＝L＝シラカワです」

シュウジさんとジークさんの試合から数ヶ月、今ワシはリンネと

同じ学校、同じ教室で自己紹介をしている。
……本当に、どうしてこうなった？
やっぱあれかな？　まだガキの癖に人生悟った様な言い回しをしたのが行かんかったのかなぁ？　いい雰囲気で「ワシも、これからの自分の人生に真剣に向き合っていきます」なんて言ったら。
『だったら、今後の人生の選択肢を増やせるように学べることは学んでおこうか』
と、良い笑顔で返され、あれよあれよと言う間に学校へ通う事になっていた。反対しようにも口下手なワシではシュウジさんの正論を打ち負かす事も出来ないし、先輩方に助けを求めても微笑ましく見守られるだけ、恩返しをしていくつもりがドンドン取り返しの付かない事になっていく。
学費の事や店の手伝いも気にするなとシュウジさんは言う。それはワシの事を思ってなのか、それとも本当に大丈夫なのかはワシにはわからない。けれど、一つ確かなのは……、
シュウジさんの、お義父さんの娘になれて良かったという事、家族に出会えて心から嬉しいと思えた事、色々問題はあるかもしれない。けれど、今くらいはこの幸せを噛み締めても……良いよね。
レヴェントンの姓は捨てない。いつか自分の姓に気付いた私の本当の親にワシは幸せだと胸を張って言える様に。
「特技は格闘技です！　宜しくお願いします！」
フーカ＝L＝シラカワは新しい気持ちを胸に今日も1日頑張ります！

◇

「フーカさん、無事に学校へ転入出来たって！」
「本当？　良かったぁ」
「フーカさん、勉強頑張ってたもんねぇ」

授業の休み時間、転入試験を終えて無事に学校へ通えるようになったというフーカからの報せにヴィヴィオ達はホッと胸を撫で下ろす。幼馴染みと無事に仲直りも出来たし、フーカもシュウジという家族を得られた。

これまで辛い事ばかりだったフーカ、きっとこれからはそんな過去が霞んでしまうくらい幸せに溢れた日々が待っているのだろう。格闘技でも互いに切磋琢磨し合えるし、此からの生活に益々楽しみが増えた事にヴィヴィオ達は素直に喜んでいた。

しかし、ヴィヴィオには一つ気になる事があった。シュウジとジークの試合、後半で見せたシュウジの動きをヴィヴィオはどこかで見た気がするのだ。

一体、何処だったのだろう。どんなに思い返しても出てこない記憶にヤキモキしていると、親友二人から声がかかる。我に返ると、次の授業を報せるチャイムが鳴っていた。

少し後ろ髪を引かれる思いだが、思い出せないものは仕方がないと割り切り、教室へと戻る。そして今後、思い出そうとする度にヴィヴィオはやりきれない気持ちを抱えることになる。けれど、今はそれで良い。

――――誰だって、ワザワザトラウマを呼び起こしたくはないだろう？

◇

「しかし、本当に宜しかったのですか？」

「ん？　何がだい？」

「フーカの事です。確かに彼女は親無しですが、今では立派にこのお

店の従業員として働いています。住み込みで働いているのなら、ワザワザ学校へ行かせる必要など無いのではありませんか？」
　店内のカウンター席で食器を洗うシュウジの背にヴィクターは素直な疑問をぶつける。その尤もな彼女の指摘にシュウジは小さく笑みを浮かべながら彼女の質問に答えた。
「俺の故郷ではね、一定年齢までは義務教育が課せられているんだ。フーカはまだその時期を抜けきっていないんだ」
「……」
「それに、彼女はまだ自分が何が出来るのか、本当は何がしたいのかまだ分かっていない。格闘技の才能はピカイチかもしれないけど、それ以外の才能があるかもしれない。ＤＳＡＡという一つの枠に囚われず、彼女には色んな可能性を見出だして欲しいんだ」
「可能性……ですか？」
　ヴィクターの言葉にシュウジは静かに頷いた。様々な可能性に触れて、自分の未来を広げていく。格闘技という一つの光に従うまま進むのではなく、寄り道や回り道をしながら、ゆっくりと自分の道を進んで欲しい。それもまた命の輝きの在り方の一つなのだから。
「フフ、随分親バカなんですね」
「当然さ、かわいい娘の為なんだ。バカにもなるよ」
「では、そんな親バカなシュウジ様に一つ提案をしたいと思います」
　彼女の手から差し出されるのは一通の手紙、それを受け取ったシュウジは中身を見ると訝しむ様にヴィクターを見る。
「ヴィクターちゃん、これは？」
「管理局の広報部から渡されたモノです。出てくだされば今後のこの店の宣伝に協力してくれると先方は仰っていますが……」
　どうしますか？　と訊ねてくるヴィクターにシュウジは溜め息を吐く。ふと、視界の端に一枚の写真が入ってきた。それは先のウィンターカップでの集合写真だ。
　互いにボロボロの姿となっているアインハルトとフーカ。二人の間には優勝トロフィーが置かれており、その周囲をヴィヴィオ達が囲んでいる。とても楽しそうにしているフーカにシュウジも笑みを

溢し。
「……そうだね。前向きに検討しておこうか」
そう言葉で濁してもシュウジは受ける気満々だった。
そして、時間は流れ深夜。明日の店の仕込みも終わり、フーカが眠った事を確認したシュウジは山吹色の胴着を身に付けて店の地下へと足を進める。特殊な加工で封鎖されていた地下室への階段、ヴィクターの執事であるエドガーでも気付かない精巧な仕掛けの先にある広大な地下室にてその魔神はいた。
「や、相棒。久し振り、待たせて悪かったな」
シュウジの呼び掛けに魔神は言葉では返さない。ただ静かに駆動する相棒にシュウジは微笑みながら訊ねた。
「早速で悪いけど、アレ、またやってくれないかな？　ちょっと近々に試合が決まってね。鈍った体を鍛え直したいんだ」
シュウジがそんな言葉を口にした瞬間、地下室は唐突に広大な荒野へと早変わる。映像投射によるシミュレーションではない。シュウジは今喫茶シラカワから無人の荒野へと転移したのだ。
背後からジャリッと大地を踏み締める音が聞こえる。振り返ったシュウジの視界に映るのは何れも人の形をした怪物達。
十傑の衝撃、常勝不敗の先代キングオブハート、若き修羅の王、破界の王、他にも様々な怪物達がシュウジを見定める様に不敵な笑みを浮かべている。過去に戦った強者達、それらを前にシュウジは軽く体をならし……。
「んじゃ……いっちょやるか！」
大地を踏み締めて、彼等へと突き進む。

ヴィクターから受け取った手紙、そこに記されているのは……。

戦技披露会への参加申し込み申請書。

対戦相手、高町なのは。

まだ見ぬ強敵を前に己を鍛える。そんなシュウジもまた、強くなることに貪欲だった。

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか
その1

地下迷宮（ダンジョン）。それはこの世界の人々にとってあらゆる希望であり羨望でありそして絶望だった。
ある者は永劫続く名声の為に。
ある者は決して絶えない富の為に。
またあるものは唯一無二の力の為に。
野心を、野望を、欲望を以てこのダンジョンへと挑んでいく。全ては己が望む物を勝ち取る為、ダンジョンの攻略を往く者達――――冒険者は今日も己の全てを懸けてダンジョンへ挑んでいく。
――――地下５０階層。様々な怪物が蠢くダンジョン内に於いて、安全階層（セーフティーポイント）として知られるこの階層、辺りは灰色の木々で埋め尽くされている場所だったが、この時異常な光景で埋め尽くされていた。
「戦えるものは前に出ろ！　防ぐものであれば鍋蓋でも構わん！
兎に角押し留めるんだ!!　後方支援の者は矢を惜しむな！」
押し寄せてくるのは向かってくる芋虫の様なモンスター、嘗てない事態とモンスターの群れにロキ・ファミリアの幹部リヴェリア＝リヨス＝アールヴは戸惑いと焦燥に駆られながらも、懸命に前線の維持を繋げていた。
レベル６。数多いる冒険者の中でも指折りの実力者であり九魔姫と呼ばれ世界にその名を轟かせている彼女はロキ・ファミリアの副団長、突如押し寄せる異常事態を前にそれでも彼女は前線の指揮を執り、戦線の維持を勤めているが……如何せん相手が悪かった。
力があるだけのモンスターならまだ良かった。喩えどんなに強力なモンスターが襲い掛かってきてもロキ・ファミリアにはそんな脅威を真っ向から迎撃出来る用意があった。これまで幾度となく修羅場

を潜り抜けてきた迷宮都市（オラリオ）の中でも屈指の戦闘能力を有しているロキ・ファミリアにはそれだけの自信と自負があった。
しかし、今回の相手は毛色が違いすぎた。吐き出す溶解液はファミリアのあらゆる装備を溶かし、矢で仕留めた所で死体となったモンスターの体は膨張して爆発する。止めてもダメ、仕留めてもダメという悪循環の中、主戦力のいないロキ・ファミリアは徐々に追い詰められつつあった。
――いや、打つ手ならある。九魔姫と恐れられ世界最強レベルの魔法の使い手とされるリヴェリアにはその名の通り九つの魔法を操る力がある。その中の一つである氷の魔法を用いれば活路を見出だせる。
しかし、その魔法は威力こそ絶大だが発動させるのに些かの詠唱（溜め）が必要になる。地表に近い階層であるならば兎も角、５０階層という深層で、それもこの戦況下で、悠長に詠唱を唱えられる時間は果たしてあるだろうか。
もうじき芋虫の群れが戦線を崩す頃合いだろう。果たしてその合間に詠唱は終われるのか、仮に可能だとしても味方を巻き込まずに済めるのか？　いや無理だ。しかしもう時間は残されていない。止めどなく押し寄せる蟲の軍勢、全滅よりも僅かばかりの可能性に懸ける事にしたリヴェリアは手にした杖を掲げて賭けに出る。
と、その時だ。５１階層に続く道が突然爆発した。何かと思いそこへ注視する彼女の視界に映った人物達を見て、リヴェリアは安堵の表情を浮かべる。他の団員達も同様で、こちらに向かって駆けてくる複数の人影にその目を希望と涙で溢れさせた。
「団長だ。団長達が戻ってきたぞぉぉぉっ!!」
「よし、あと少しだ！　今こそロキ・ファミリアの気概を見せる時だぞ！」
「「うぉぉぉぉぉっ!!」」
リヴェリアの声に合わせて団員達が吼える。武器や防具は無くとも、神の恩恵を授かり数多の修羅場を潜ってきた戦士達。勢いを取り戻した彼等は残った力を振り絞る様に芋虫達を押し戻そうとする。

これならいける。もうじき此方に合流してくる仲間達を見てリヴェリアがほんの少し息を吐き出したのも束の間、事態は再び急変する。

巨大。天を仰ぎ見る程に巨大な図体をしたソレが自分達の眼前に現れた。何だアレは？　その色合いから芋虫達の同類と思われるソレは全身から鱗粉に似た分泌物を放出し、少しずつ此方に向かってきている。

瞬間、爆発が巻き起こる。その爆発は仲間達のいた付近で起こり、大きな砂塵となって立ち上っていく。何て規模の爆発だ。あれもあのモンスターの仕業なのか。信じたくない事実を前にリヴェリアの頬から大粒の汗が流れ落ちる。

――――仲間達は無事だった。幸い間一髪で爆発から逃れられた彼等を見てリヴェリアは胸を撫で下ろす。そして彼女は決意する。魔法の詠唱を。氷の力を解放する。

「皆、これより私は詠唱に入る。キツいと思うが……何とか耐えてくれ」

それは絞り出すような声だった。指示というには剰りにも拙いソレを、しかし団員達は微塵も揺らぐ事はなく頷いた。何故なら彼等は知っているからだ。我等が副団長の魔法は世界最強だと。彼女が腹を括ったのであれば自分達もそれに付き合うだけだ。

無謀とも言える賭け、しかしそれを即答えてくれる仲間達に感謝しながら彼女は詠唱を開始する。それは全てを凍て尽かせる氷の極限、対象の時間そのものを奪うロキ・ファミリアに於ける最強の攻撃魔法。

しかし、彼女の詠唱は最後まで紡がれる事はなかった。詠唱に間に合わなかったのか？　否、その必要がなくなったのだ。

消えたのだ。あれほど存在感を示していた巨大なモノが、天高く聳え、階層を食い破らんとする怪物が忽然と姿を消したのだ。しかし、異常なのはソレだけじゃない。

今さっきまで団員達が押し留めていた芋虫達も、その全てが掻き消されていた。まるで最初から其処にいなかった様に……。

（いや、違う！　奴等は消えたのではない。消されたのだ!!）
何が起きたか、リヴェリアがそれを察した瞬間。階層全体を揺るがす程の衝撃と轟音がロキ・ファミリアを襲った。

◇

「これは……どういう事だ？」
ロキ・ファミリアの団長、フィン＝ディムナもまた目の前の光景に戸惑った。先程まで自分達を追い詰めていた芋虫、その強化種と思われる存在がいきなり現れたかと思えば、突然その姿を消した。
アレは厄介な存在だった。強竜（カドモス）すら殺しきり、口から吐く溶解液はアダマンタイトで出来た強靭な武具さえも溶かし尽くし、得物を抱えて闘う多くの冒険者にとってあのモンスターは天敵とも言えた。
しかし、厄介なのはソレだけではない。倒し、絶命した芋虫のモンスターは少し時間を置くだけでその体を膨張させて破裂し、内に溜め込んだ溶解液を撒き散らす爆弾となる。それの強化種となればその爆発規模も相当なものだと予想できた。
故に、フィンはファミリアの撤退を決断した。団員達と今回の遠征、それらを天秤に乗せてロキ・ファミリアの団長は５０階層からの即時撤退を他の団員達に伝え、そして一人の少女に殿を命じた。
反論もあった。もう一度一考の猶予と懇願する者もいた。しかしそれら全てを却下して、フィンは少女に謝罪と共に命じた。
少女――――アイズ＝ヴァレンシュタインはそれを快く承諾した。彼女の扱う魔法ならあの強化種と渡り合う事が出来る。長年培ってきた経験に基づきそう判断したフィンはアイズに芋虫の強化種の討伐を命じたのだ。
結局、その命令は果たされぬまま終わった。倒すべき強化種は掻き消され、残されたフィン達は舞い上がる砂塵をただ見つめ続けるしかなかった。

軈て砂塵は晴れ、景色が顕になっていく。警戒しながら奥へと進むアイズが次に目にしたのは……。
「なに……これ？」
それは――――孔(穴)だった。直径数百メドルにも及ぶ巨大な孔が強化種のいた場所にできていた。
否、それは孔ではなくクレーターと呼ばれるモノだった。巨大な孔と呼べる程に広く深く抉られた大地、その超常たる現象を前にアイズだけでなく他の団員達も言葉を失っていた。
見れば、副団長達のいる拠点付近にも似たような現象が起きている。一体何が起きたのか、混乱する彼等が戦慄を覚える中で……。
ソイツは現れた。
「やれやれ、いきなり芋虫が出てくるモノだからついやってしまった。一応虫だけを狙って撃ち込んだけど……誰か巻き込まれたりしてないよな？」
背後から聞こえてくる声に全員が振り返る。バカな、あり得ない。この深層に於いて自分達以外の人間がいるはずがない。混乱から更なる驚愕へと突き落とされたアイズ達は自分達が出てきた所、51階層へ続く洞窟へと視線を向けると……。
「サポーターの皆さん、大丈夫ですか？」
「り、リリは大丈夫ですぅ～～」
「お、俺達も大丈夫ですぜ旦那ぁ」
「も、もうダメ……」
「バッカ！　お前ちゃんと返事しろ！　また旦那の善意に巻き込まれたいのか!?」
蒼が現れた。白い外套に蒼色の仮面を被って現れたその男の背後にはサポーターと思われる複数の獣人を引き連れて。
「安全階層に着きましたので今日は其処で夜営にしましょう。皆さんも疲れた事でしょうし、今夜は私が料理を振る舞わせて貰いますよ」
「い、いいいですぜ旦那！　そんな気を使わなくたって！」
「遠慮することはありません。君達のお陰でドロップアイテム集めが捗ったのですから、これは報酬の上乗せも検討に入れなければなりま

せんね。それと次の依頼の事も……」
「そ、そそそれなら尚の事あなた様には手を休めて貰いませんと！
料理の事なら他の方に任せるとして、蒼スマ様には打ち合わせに参加してください！」
「よっしゃ良く言った！　じゃなくて、ソイツの言う通りですぜ旦那！　旦那は一先ず休んでくだせぇ！　一番働いたのは旦那なんですから！」
「いやしかし……」
「いいからいいから！」
「本当に、勘弁してください」
ワイワイと賑やかに会話しながら此方に近付いてくる。すると向こうも此方に気付いたのか、視線を此方に向けて。
「どうも、こんにちは」
ペコリと、呑気に場違いなほどに穏やかな声色で会釈してくる蒼の仮面の男に。
「あ、どうもこんにちは」
「こんにちは？」
フィンやアイズ達（一人の狼人を除いて）もまた釣られて会釈をするのだった。

その2

リリルカ＝アーデにとって世界とは地獄であった。幼い頃に両親を亡くし、二人の娘である自身もファミリアにとって金を集める消耗品でしかなかった。

才能がないからと冒険者としての資格を剥奪され、サポーター（負け犬）として扱われてきた。気に入らないからと殴られ、目についたから蹴られ、面白いからと嬲られ、意味もなく暴力を振るわれる。

手を差し伸べる者はいなかった。冒険者を絶対とするこのオラリオで、一般市民が彼等に意見する事は出来ない。嘗て正義を謳うファミリアが存在したが、そんな彼等でさえ荒くれ者が多い冒険者の本質を変えることは出来なかった。

冒険者の本質、彼等は皆奪う者だ。弱者から全てを奪い、踏み躙り、破壊する。冒険者が多く存在するこのオラリオは彼女にとって正しく地獄だった。

故に、彼女もまた奪う事にした。自分を虐げる冒険者を、自分を蔑む冒険者を、敵としてリリルカ＝アーデは決意した。己の欲望に忠実な冒険者（モンスター）から生き延びる為、彼女は奪われる者から奪う者へなって見せると決意した。

そして今日も、呑気で間抜けな冒険者を鴨にしようとした時――

――ソイツが現れた。

『失礼、サポーターの方ですか？　もし宜しければ私のお手伝いを頼みたいのですが……如何でしょう？　報酬は弾みますよ』

今思えば、彼との出会いは結果を見れば良かったのかもしれない。彼との出会いを果たせた事で自身に置かれた環境は激変し、リリルカ自身も強さを得られたから。

未だに素性を明かしたことはないが、それでも彼との出会いは間違ってはいなかった。……しかし、それでもリリルカ＝アーデは今でも思う。

おいバカやめろ早まるな！　もし今の自分が過去に戻れるのならば、どんな手を尽くしてでも差し伸べてきた彼の手を阻もうとしただろう。
そして、出された彼の手を取ったリリルカは獲物を手に入れたハイエナの如く、歪んだ笑みを人知れず浮かべる。
尚、その笑顔が恐怖で更に歪ませる事になるのはこの後ほんの数分の事である。

◇

「溶解液で皮膚を火傷した方は此方の塗り薬をどうぞ。少々匂いは強いですが、その分効果は期待出来ますよ。　副次効果によりモンスターも近付き難くなりますので、ポーションの節約を図りたいのであれば是非お使い下さい」
「あ、あぁ。ありがとう。助かるよ」
「では私は向こうの人達の治療の手伝いに向かいますので、何か他にご用があれば声を掛けてください」
地下階層――――５０階。大量の芋虫型のモンスターによる強襲という異常事態から何とか乗り越えたロキ・ファミリアは撤退の準備を進めながら負傷者の治療に当たっていた。
そんな中で団長であるフィン＝ディムナは他の団員達と混ざって治療を行っていく仮面の男の背中を見て、困り顔を浮かべながら渡された薬品の瓶をクルクルと掌で回していた。

「それで、どうするんじゃフィン？　あやつの素性を問い詰めるのか？」

後で控えていたガレス＝ランドロック、ロキ・ファミリアの最古参の一人であり重傑（エルガルム）の二つ名を神々により与えられたオラリオの中でも一、二を争う怪力の持ち主。

そんな彼が呆れた表情で見るのはやはりフィンと同じ仮面を被った謎の男だった。普通なら素性を明かさない男からの薬品なんてどう考えても罠と思う方が正しいし、そもそも向こうこそが自分達との接触を拒む筈だ。でなければワザワザ仮面という手段を用いて素性を隠す意味が薄れていく。

色々聞きたい事があった。問い詰めたい事があった。自分達より先にいたファミリアの存在なんてそんな情報など耳に入ってこなかった。そもそもここは深層、オラリオの数多くあるファミリアに於いてもここへ来れる集団は限られている。

それが見たことも聞いたこともない人間が当然の様に深層を闊歩している。しかも彼のサポーターである数人の獣人を引き連れて。

限られた人数、限られた手段の中で来れるほどダンジョンは甘くない。しかもサポーターという重荷があるのならば尚更だ。尽きぬ疑問、疑惑、それら全てを解消しようとフィンは可能な限り友好的な態度で彼等に接触しようとしたが……。

『むむ、何やら大変な事態であったご様子。どうやら向こうの皆さんも被害を受けているようですし、もし宜しければ何か手伝わせてくれませんか？』

友好的に接触しようとした所、寧ろ向こうから近付いてきた事に流石のフィンも戸惑った。その経験豊富な観察眼と話術からあらゆる交渉の場で相手より有利に立てる自信を持つ彼でもコレには対応出来なかった。

仮面を被り素性を隠す者、そんな人間なら普通は他者との接触は避ける筈、それなのに向こうから紳士的に近付かれてしまっては、流石のフィンも戸惑うしかなかった。

そんな彼の口から出てきたのは遠慮の言葉、一度距離を置いて相手

の出方を見ようとしたが。
『なに、遠慮は無用ですよ。幸いな事に我々の荷物は然程消費もしておりませんので。幾つか治療用の薬品とポーションも余ってますし、どうか皆さんに分けてあげてください』
『い、いやしかしそれではあなた方に迷惑が……』
『困った時はお互い様ですよ。コレも何かの縁ですし、後からの請求なんて無粋な真似も致しません。皆さんの撤退準備が整う迄で良いので、どうか手伝わせて貰えませんか？』
　更に詰め寄ってきた為、フィンはただ頷く事しか出来なかった。以降の会話で入手出来た情報は仮面の彼が相当なお人好しである事と、彼の名称の二つだけだった。
「蒼のカリスマ、か。どう考えても偽名じゃろ？　　良いのか？　このままアイツに手伝わせて」
「だったら君が聞いてきてよ。あそこでせっせと団員達を手当てしてくれている彼に、お前は何者なんだってさ」
「バカ言うでない。我等にとっての恩人にそんな無粋な真似が出来るか」
　そう言って肩を竦める戦友にフィンはこの野郎と内心で呟く。幾ら相手が仮面で素性を隠そうと長年冒険者として経験を積み重ねてきたフィンは、会話だけでもある程度のその人物像を推測する事が出来る。それはあの蒼のカリスマという得体の知れない相手でも例外ではない。
　信じられない事に、あの仮面の男は正真正銘善意として行動している。勿論、それがブラフで本当の目的は別にあると考えられるが、しかしその為のリスクがまるで釣り合っていないのだ。
　先の芋虫のモンスター達を殲滅した力と見知らぬアイテムを譲ってくれた事、そして今尚団員達の手当てに尽力してくれる行動力、いっそロキ・ファミリア（自分達）に取り入ろうとするのが目的だと言われた方が納得する程に蒼のカリスマという男の行動は親切的だった。それこそ冒険者には不釣り合いな程に。
　疑って然るべき。しかし、幾ら疑っても向こうから話してこなけ

れば会話の糸口すら見付けられない。仮に声を掛けてもまた彼の慈善的な行動に会話の流れは掴むことは許されないだろう。
　これが狙ってやっているのであれば相当のやり手だ。しかし、フィンにはそれだけの人物に心当たりがない。幾つもの可能性を模索するフィン、何て声を掛けるべきかと悩んでいる内に一人の少女が彼に近付いてきた。
「蒼スマさん蒼スマさん、助けてくれてありがとうね！　　貴方がくれた薬のお陰で皆の火傷も治まって来たよ！」
「それは何よりです。貴女は確か……ティオナ＝ヒリュテさんで宜しかったでしょうか？」
「うん、そうだよ！　　ねぇねぇそれよりもさ、どうして仮面をしてるの？　　貴方ほどの冒険者なら別に堂々としていればいいのに、なんで？」
　ロキ・ファミリアの第一級冒険者（Ｌｖ５）、大切断（アマゾン）の二つ名で知られる双子の妹がおくびも出さずに訊ねた。誰もが思っていた事を平然と口にする彼女に団員の多くが彼女に憧れ、痺れた。
「それは勿論、素性を知られたくないからですよ。後は少し人見知りなのも理由の一つですかね」
　しかし、そんな彼女の追求を蒼のカリスマは難なく避けてみせる。当たり前と言えば当たり前な事、しかしそんな堂々と答える仮面の男にティオナはそっかーと納得してしまう。
（もっと、もっと突っ込むんだティオナ！　　君の図々しさはそんなものじゃない筈だ！）
　身内に対して割りと本気で失礼な事を考えるフィンは、心の底からティオナにエールを送る。彼女の天真爛漫な性格ならきっとあの仮面の男と相性が良い筈だ。一縷の望みを懸けて二人を見守るフィン、すると其処へ一人の狼人（ウェアウルフ）が歩み寄っていく。
「どけ絶壁女、談笑したいなら余所でやれ」
「んなっ!?　　ベート!?」
　暴言をティオナに叩き付けて割って入ってきたのは彼女と同じくＬｖ５の冒険者、その過剰なまでの実力史上主義で凶狼（ヴァナルガンド）と団内か

らも恐れられている彼は憤慨するティオナを押し退けて蒼のカリスマの前に出る。
「てめぇ、一体何をした？」
「はい？」
「惚けんなよ。あの芋虫野郎とデカブツ、お前が殺ったのは知れてんだ。あれほどの規模の魔法、それも重力のだ。一体どこからどのタイミングで詠唱してた？　　随分用意周到じゃねぇか、あんな滓を潰した程度で英雄気取りかぁぁ!?」
　ティオナとはうって変わって乱暴な口調で捲し立てるベート、確かに彼の言っている事は誰もが気になる所だが、それにしたって些か乱暴に過ぎる。止めに入ろうか逡巡するフィンだが……。
「は？　　詠唱？」
　演技でも無ければわざとでもない、心底間の抜けた声が仮面の男の口から零れ落ちた。そのまるで詠唱という言葉そのものを知らないという風な口振りにベートは勿論周辺の団員全員が固まっている。
　あ、遠くでリヴェリアが絶句している。長年冒険を共にしてきた仲間の珍しい表情がフィンの視界に入り込んできた。
「ちょ、ちょっと待ってくださいね」
　固まり、絶句しているベートに異変を感じた蒼のカリスマはいつの間にか手にしていた手帳のページをペラペラと捲り、詠唱詠唱と口ずさんでいる。
「あっ」
　おい、今コイツあって言ったぞ。
　手帳に書かれている何かを確認したその仮面の男はゴソゴソと懐にそれをしまい、コホンと咳き込んでベートに向き直り……。
「え、えぇ。勿論存じていますよ。詠唱、魔法を行使するにあたって事象を具現化させる呪文。当然私も唱えていましたとも」
「ただ、私の魔法は少々特殊でして、えーっと、短文詠唱？　　という部類に入るようなので、えぇ、そんな大した代物ではありませんよ」
「――――――」
「そう言う事なのでその……すみません。詳しくは言えません」

てへ♪

仮面を被っていても分かる男のその仕草にベートの中の何かがキレた。
「ナメてんのかテメェェェェェ!?」
「ヒェ」
怒髪天を衝く勢いで憤慨するベート、その勢いに圧されて変な声を漏らす蒼のカリスマ、ベートの態度は明らかに恩人に対するモノではないが、何故だろう？　あの仮面の男に対してはそれで良い気がしてきた。
あ、リヴェリアが頭を抑えて呻き声を上げているリヴェリアに彼女の弟子であるレフィーヤが駆け寄っていく、そんな光景を視界の隅に収めながらベートを宥めに行こうとするフィン、その後もなんやかんやありながらロキ・ファミリアの追及をのらりくらりとかわし、遂に撤退の準備が完了した。
「それでは我々はここで失礼させて頂くが……その、本当に大丈夫なのかい？　幾ら君が只者ではないとは言え彼等の面倒を見ながらここに留まるのは些か大変じゃないのかな？」
「ご心配ありがとうございます。が、それには及びません。彼等もサポーターではありますが一介の冒険者、レベルの差違はあれどダンジョンにおいてそれなりの気持ちは心得ていますよ。それに、私はこう見えて尽くすタイプの人間でして、契約の間柄とは言え彼等をみすみす死なせるような真似はしませんよ」
「アハハ、そうか。うん、なら僕から口を出すことはもう無いかな。じゃあ、僕達はもう行くよ。地上で会ったら酒でも奢るよ。その時は洗いざらい話して貰おうかな」
「では、私もその時を心待ちにしておきましょう。さようなら、ロキ・ファミリア、道中お気をつけて」
そう言って最後に言葉を交わしてロキ・ファミリアは５０階層を後にする。途中でベートが此方を睨んだり、金髪の少女がチラチラと

視線を送ったりしてきたが、概ね予定通りに彼等は安全階層から去っていった。
　彼等の姿が見えなくなるまで見送った蒼のカリスマはさてとと呟き背後にいるサポーター達に向き直る。
「さて、本当ならここで夜営に入りたい所ですが……正直、そんな気持ちではありませんよね。今回は少々早いですが、私達も引き上げる事にしますか」
「やっ、やったぁぁぁ～～」
「か、帰れる。俺達のホーム(家)に帰れるぞ！」
「ステイタスの更新とかどうでも良い！　早く皆に会いてぇよぉぉ～～」
「早く帰ってシャワー浴びたい」
　それぞれ泥だらけとなっているサポーターの面々、地上に戻れるという喜びに打ち震えている彼等に蒼のカリスマは仮面の奥で苦笑いを浮かべながら何もない虚空へ手を伸ばす。
　翳した手から現れるのは……孔だった。孔は徐々に大きく広がり、軈ては数十M(メトル)の巨大な空間が出来上がっていた。
「では、ソーマ＝ファミリアの皆さん。この後は予定通りの行動を心掛けましょう。今日は色々あって疲れているでしょうけど、どうかそれが終わるまで頑張ってください」
「「お、おぉ～～」」
　力なく答える面々、そんな彼等を見て頷いて仮面の男は孔へと足を進める。彼に続き孔へと入っていくサポーター達、慣れた様子で孔を潜る彼等が次に目にしたのは……空と太陽がある地上だった。

◇

天を衝く白亜の巨塔、摩天楼施設(バベル)。ダンジョンの蓋として機能しているバベルの近辺、比較的人通りの少ないその場所で、蒼のカリスマはサポーター達の帰りを待っていた。
「だ、旦那。お待たせしました」
「換金、終わってきましたぁぁぁ～～」
「ご苦労様です。申し訳ありませんね、毎度毎度使い走りにさせてしまって」
「い、いいえいいえ全然！　この程度何てことありませんぜ旦那！」
明らかに肩で息をしてフラフラな様子なのに、それでもサポーターとしての務めを果たそうとする彼等に蒼のカリスマは関心を抱く。親切な人達だ。彼にとってソーマ＝ファミリアの彼等は初めて会った時からその印象は変わっていなかった。
「では、早速今回の分配をしましょうか。リリルカさん、今回の稼ぎは幾らになりましたかね？」
「は、はい。ちょうど７５００万ヴァリスになります」
「なら、私を含めた五人で１５００万で分けれますね。本当ならキリよく８０００万までは頑張りたかったのですが……」
「し、仕方ねぇですぜ旦那、今回はドロップアイテムをメインでしたし、俺達は今回の報酬にも何の不満はありませんよ！」
「寧ろ今回でもう終わりにしても良いくらい」
「シィーッ！」
「そうですね。今回は異常事態(イレギュラー)にも遭遇しましたし、こんなものだと割り切りましょう。さて、それでは次にドロップアイテムの分配に移りましょう」
「へ？」
各々に均等に報酬を分け、受け取った彼等はコレで終わりにするつもりだった。しかし、仮面の男の何処からともなく取り出した巨大なバックパックにサポーターの彼等の表情は固まった。
「だ、旦那。今なんて？」
「ん？　言ってませんでしたっけ？　今回の依頼は従来の報酬の他にドロップアイテムも報酬として割り振るつもりだと」

(((聞いてねぇよ!?)))

ドロップアイテムというのはダンジョンに棲むモンスターから時折ドロップするアイテムの事、階層が深ければモンスター達の性質も強さも段違いに跳ね上がり、それに比例してドロップアイテムもその価値を大きく変動させていく。

バックパックの中から取り出した幾つものドロップアイテム、爪や鱗、牙や角、他にも透き通った液体の入った小瓶等様々な豪華絢爛なアイテムが彼等の前に並べられていく。

そんな眩しいほどの宝の山を前にサポーターの一同は対照的に暗くさせていた。

ソーマ＝ファミリアは謂わば弱小ファミリアだ。ファミリアの団員達はあるモノの為に必死になって毎日金を稼ごうとしていた。時には他者を蹴落とし、自分が利益を得る為に同じ団の仲間にまで騙し討ちをする始末。

そんな色んな意味で汚れきったファミリアはある日を境に突然変貌を遂げる。他人を追い詰め、騙し、金を奪い合う欲望に塗れたソーマ＝ファミリアはまるでアットホームな家庭の様にキレイになった。

彼等の身に何があったのか、それを知る人間はいない。何せソーマ＝ファミリア自体がその事を隠そうと必死になっていた。

団員全員のレベルアップ、更に一部の団員はもう一段階階位（レベル）が上がったなんて知られれば、ソーマ＝ファミリアは他のファミリアから色んな意味で袋叩きに合ってしまう。主神であるソーマと団長は今もこの事にどうすれば良いのか必死に頭を巡らせている最中である。

つまり、ソーマ＝ファミリアにとって目の前の仮面の男は希望であり絶望の化身だった。嘗て利用して使い捨てるつもりだった得体の知れないバカは自分達では手に負えない怪物（モンスター）だったのだ。

唯でさえ最近の金回りの良さに周囲から疑惑の念が向けられているのだ。今回も換金に来たときはギルド職員から尋問紛いな質問もされた。そろそろいい加減何とかしなくてはいけないと思った矢先にドロップアイテムの贈呈という目の前の状況にソーマ＝ファミリアの団員達の胃は悲鳴を上げ始めていた。

「い、いやー旦那ぁ。流石にそれは貰えませんよ。俺達は旦那には日頃から世話になりっぱなしだからよ、これ以上受けとるのはその……野暮ってもんでさぁ」
　リーダー格の男の言葉に他の面々はよく言ったと称賛する。これ以上余計な負債を抱え込むのは避けたい。何としてもこの状況を打破しなくては。
「コイツのいう通りですぜ旦那、確かに俺達冒険者は荒くれ者が多いが、それだけ〝筋〟と言うものは通しているつもりだ！」
「数日前の俺らからすればどの口がって話だけどね」
「お前さっきから何なの!?　一人だけ楽になるつもりなの!?　そんなの絶対に許さないからね!?」
「ともあれ、そのアイテムは受け取れねぇよ。それは依頼主であるあんたのモノだ」
「ふむ、成る程確かにあなた方の言うことも尤もだ」
（（よし！））
「しかしですね。私があなた達の雇い主である以上、今回に限って言ってしまえばそれは通用しないんですよ」
「「へ？」」
「今回、我々は異常事態であるあの極彩色の芋虫のモンスターと遭遇、コレにより本来行われるべき依頼の労働時間は多少なりとも削られてしまった。故に雇用主である私はその損害に見合った保障を用意しなればならないのです」
「ほ、ほしょう？」
「えぇ、あなた方はサポーター。つまりは冒険者のダンジョン攻略を円滑に行う為の支援者、更に言えばソーマ＝ファミリアという外部の人間、そんなあなた達の時間と命を預からせてもらっている以上、私にはそう言った有事の際の為の保障の支払いを行う義務と権利があるのです」
　理解できましたか？　と最後に訊ねてくる蒼のカリスマにソーマ＝ファミリアの面々は押し黙る。……というより、反応出来なかった。良く分からない理屈による良く分からない結論、しかしそ

んな仮面の男の理屈倫理に対抗する術を持たない彼等は……。
「そう言う訳で、受け取ってくださいね♪」
「ア、ハイ」
　ほぼ思考停止の状態で蒼のカリスマからドロップアイテムを受け取るのだった。
「おいリリ、コレやるよ」
「いりません」
「遠慮すんなって、お前には散々酷いことしちまったからよ。その詫びとして受け取ってくれや」
「明らかにリリに押し付ける気でしょーが!!」
　ワーワーギャーギャーと騒ぎ立てながら大通りを横切っていく彼等を見送り仮面の男もバベルから離れていく、幾人もの人とすれ違って……。
　瞬間、男の装いは一変する。仮面を被り、素性を明かさない謎の男は紫炎の髪を揺らし、この世界の人間とは少し変わったジャージという衣装を身に纏う。
　彼の向かう先にあるのは一つの屋台、そこから見えるツインテールの少女を視界に収めながら、男は口を開いた。
「ごめんヘスティアちゃん。少し遅れた」
「君が遅れるなんて珍しいねシュウジ君、て言うかいい加減神をちゃん付けで呼ぶのは止めないか」
「アハハ、すみません。神を敬称で呼ぶとか蕁麻疹が出ちゃうので生理的に無理です」
「生理的に!?」
　シュウジの冗談（？）に愕然となるのはギリシャ神話の中で神の一柱として知られるヘスティア神。
「うぅ、相変わらず君は涼しい顔してトンでもない事を口にするね。僕じゃなかったら君大変な事になってたよ？」
「そうかな？　まぁ、一応気には止めておくよ」
「ホントにもう。とっ、それよりもそろそろお客さんが来る頃だ。今日も頼むよシュウジ君！」

「おっけい任せな！」
　ここは、迷宮都市オラリオ。モンスターと冒険者、そして……
神々が住まうお伽噺の世界である。

「さて、今度こそこのじゃが丸くん麻婆味を――――」
「止めないか！」

その3

＊月△日

ちょっとした息抜きのつもりでこの世界に降り立ってもうすぐ1ヶ月、最初の頃は神々が降り立つ世界と知って上手くやっていけるか心配だったが、今の所はどうにかやっていけている。

ギリシャとか北欧とか、日本とかメソポタミアとか、様々な神話体系の神々が地上に降りているとか、最初耳にした時は悪夢としか思えなかった。だって神よ？　あの無遠慮で傍若無人で、無責任に力を行使するあの神よ？

自分達は好き勝手振る舞う癖にいざ人間の中から目立った奴が現れれば手を出し、その人の運命を掻き回すあの神よ？　そんな奴等が地上で人と同じ生活をするとか、最初は本当に疑問と困惑で一杯だった。

特にギリシャと北欧。あの連中が大人しく人らしい生活を送るとか絶対嘘だろ。と、最初は思ったものだ。

一応自分が元いた世界に伝わる神々とは違うかもと一縷の望みを掛けて見聞を広める意味も込めて一番神々が多く住まうこの迷宮都市オラリオにやって来たのだけど……。

いやーもうアレだね。何処の世界の神もやっぱ似たようなもんだわ。下界に降りる前提ルールとして神の力は使わない様にしているかもしれないけど、あんま変わってないわ。少なくとも自分の知る限りでは、だけど。

まぁ、神の恩恵を人々に授けてダンジョンから湧き出すモンスターを狩る為っていう一応筋の通ったシステムを遵守している様だからそんなに目立った事はしていないけど、面白そうな事や人には率先してちょっかいだそうとする性質は殆ど変わってない。

寧ろ恩恵を授けた人間を眷属と称して手駒にしている辺り、ある意味自分が知る神よりも質が悪い気がする。少し前に闇派閥（イヴィルス）とかいうテロ組織みたいな連中が跋扈していたと聞くから、尚の事悪印象が目

立つ。
と、此処までこの世界の神に対する印象を述べてきたけど……うーん、どうも神を相手に考え事をすると極端な方へ思考が傾いちゃうな。これまで神と自称する輩に碌な奴はいなかったから、その弊害もあるのかな。
自分の中で比較的マトモな神はマジンガーのモデルとなったとされるZマジンガーことゼウスとか、その辺りしかいない。
ゼウスといってもギリシャのアレとは全くの別存在だけどね。アレはマジンガーの世界線に於ける唯一の例外みたいなモノだし、ハーデスに関しても自分の故郷の伝承とは真逆の評価をされているし。
まぁ、そんな神々とその眷属達が跋扈するここオラリオだが、此方から近づかない限り害は無いと思い、職場体験なノリで暫くこの街で気ままに過ごしていく事にした。
それにいざ絡まれたり厄介ごとに巻き込まれそうになったらこの街から出ていくだけだしね。昔から逃げる事だけは得意だから（キリッ
さて、そんな訳で自分もこのオラリオで一から生活をする事になるのだが、生きていく上で通貨は必要になっていく。取り敢えず目下の目的は最低限の生活環境の確保という事で手っ取り早く稼ぐ為に自分も冒険者となりダンジョンに潜ろうとしたのだけど……。
ダンジョンって潜るのに神の眷属になるのが前提条件なのね。
ダンジョンに潜ろうとしていた自分を慌てた様子で呼び止めてきた眼鏡を掛けたエルフちゃんの話によると、ダンジョンに潜る時は最低でもいずれかのファミリアに加入し、神の恩恵を授かる必要があるのだとか。因みにこれを破ると結構なペナルティを受けることになるみたい。
おいおい初っ端から詰んだんですけど？　神という存在を根底から信用していない自分にハードル高過ぎるんですけど？
でもって神の恩恵を受ければ眷族として凄まじい力を得られる様になり、その力を以て冒険者達はダンジョンを攻略していく事になるみたいだけど……。

いや無理だわー。神の眷族になるとか死んでもごめんだわー。俺が神の下僕になる？　自己嫌悪で死にたくなるわ！　最悪ゲッペラーさんやＺＥＲＯさんに介錯頼む案件になる。

序盤から手詰まりを覚えた自分だが、忘れてはいけない。自分には蒼のカリスマというもう一つの別の顔があるのだ。これを上手く使えば自分は蒼のカリスマとして冒険に乗り出し、シュウジとしてオラリオでの生活を満喫出来るという訳だ。

そんな訳で夜、ダンジョンの入り口兼建造施設であるバベルに向かった自分は早速ダンジョンを冒険する事にした。

一階から三階、三階から八階、八階から十数階、途中やたら広い空間に出てそこにいた巨人に遭遇し、適当に倒して更にその奥へ向かってその先にあったリヴィラという街やダンジョンの奥深さに驚いたりしながら、自分は順調に階層を下っていった。

初日から十二分に堪能し、コレからの冒険に確かな高揚感を感じていると、ふとあることに気付いた。冒険者にとって最大の収入源である魔石、それを換金してお金に代えるという話だが、その魔石の換金場はあのエルフのお姉さんがいるギルドの受付のすぐ近くにあるのだ。

しかも換金は人の手によって行われる。魔石を適当に流し込んでその量に添ってお金が貰える訳ではない事に今更ながら気付いた自分は、道中折角手に入れた魔石に膝を折った。

しかし、ここで諦める自分ではなかった。なんと冒険者にはサポーターという冒険者の支援者がいるらしく、彼等は通常よりも大きめのバックパックを背負い、冒険者の冒険を円滑に行う為に魔石やらドロップアイテムを率先して集めてくれるらしいのだ。

まさに渡りに船。取り敢えずその日はダンジョンから撤退し、地上に戻り適当な場所で野宿する事にした自分は、翌日ワームホールでダンジョンとの行き来を出来た事を確認した後、サポーター探しに乗り出した。

因みに今回俺の相棒であるグランゾンは極力控えさせようと思う。今の所そんな危機に陥った事はないし、下手に出して騒ぎになっ

てしまうとそれこそ神々の目に留まる事になる。連中との関り合いを可能な限り無くすための致し方ない処置である。

閑話休題。

そんな訳で二日目はサポーターのスカウトに乗り出した。流石に人目が多い真っ昼間から仮面を被って彷徨くのは不味いので、この日は手製のジャージ姿というラフな格好でオラリオの街を探索した。

遠巻きから見ても巨大な都市であるオラリオ。カジノや歓楽街、港町と様々な色合いを見せるこの都市は確かに冒険者の夢とロマンに溢れていた。まぁ、その一方で裏側は相当根深そうだけどね。

オラリオの街並みを楽しみながらサポーターを探していると、遂にその人物らしき人を見付けた。巨大なバックパックを背負い、路地裏を歩く一人の少女、小人族（パルゥム）のリリルカ＝アーデちゃん。

その種族の名を示す通り小柄な彼女だが、神々の恩恵とスキルとやらのお陰で自分よりも大きな荷物や武器も持つことが出来る正に縁の下（サポーター）の力持ちの少女、彼女を見掛けた自分はそのまま後を追い、人気の無くなった所で仮面を羽織り彼女の前に出た。

最初は自分の格好に警戒していたけど、報酬の事と前金の事を話すと徐々に警戒心を薄め、自分の手を取ってくれた。

金の話を聞いて態度を変えるなんて軽薄な人間と思われるかもしれないが、本来冒険とは命懸け、ダンジョンといういつ命を落とすか分からない場所に頻繁に挑まなければならないのだから、彼女の反応は別段おかしい事じゃない。

寧ろそのがめつさに見合うサポーターとしての経験が彼女にあると思えば、この契約は悪くないと思える。そんな彼女と無事に契約を結べた自分は前金として昨日回収した魔石の全てを彼女に渡した。

こう言った交渉は最初が肝要、自分の実力を示す事で相手からの信用を得るものだとその昔シュナイゼルから教わった気がする。

最初に渡された魔石に戸惑いながらも受け取ってくれたアーデちゃん。取り敢えず今日は様子見として３０階層辺りに赴く事にした。勿論ワームホールを使って。

で、結論から言えばこの日の探索は大成功だった。特にアーデちゃんが魔石集めだけでなく自ら囮になって自分の所にモンスターを集めてくれたお陰で資金集めは順調過ぎる程に円滑に進み、探索も別段危機に陥る事もなく気が付けばこの日の内に安全階層と呼ばれる５０階層まで潜ってしまっていた。いやー、人間夢中になると時間の経過を忘れちゃうね。

本音を言えばもっと深くまで潜りたかったけど、今回はアーデちゃんと初めて組んでのダンジョン攻略なので自重する事にした。取り敢えずこれで自分の実力は計って貰えただろうし、報酬も色を付けるという事で納得してもらったアーデちゃんは、今後も自分とダンジョン攻略に付き合って貰える約束をする事になった。

この日はそれで解散となり、魔石の換金もアーデちゃんに任せて報酬もキリよく半々で済ませる事になった。アーデちゃんというサポーターを引き連れて最初の攻略だったから少し控えめに終わったけど、今回の調子で行けば数日籠るだけで十桁は稼げるのでは無いだろうか？　勿論、その日のモンスターとの遭遇率に左右されるから確証は得られないけど。

そんな訳で次回以降もお願いしますとアーデちゃんに頼んだ所、何とか了承して貰えた。その際にやたら間を置かれたりしたから不安になったけど……やっぱ彼女位のサポーターになると色んな冒険者から声が掛けられるのだろうか？

そんな彼女を一日中引っ張り回してしまったから、少し悪い気がする。だから報酬の方ももう少し多くしようかと進言したら、これまた凄い勢いで拒絶されてしまった。

必要以上の報酬は戴けませんとか、マジでプロ根性の凄い娘なんだな。と、改めてサポーターの有用性と頼もしさを痛感した自分は、次回のダンジョン攻略の際のサポーターも引き受けてもらい、今度こそ解散する事になった。

そして次の日からアーデちゃんだけでなく、彼女と同じ団――――即ち、ソーマ＝ファミリアの方々とダンジョンに籠る事になった。何でも彼等はアーデちゃんから話を聞いて自らサポーターとして自

分に付き添ってくれるというのだ。
アレかな？　ソーマ＝ファミリアって初心者の冒険者に対して何らかの援助をしてくれる凄い親切な方達なのかな？　彼等の献身的な活動につい感激してしまった自分は、彼等の期待に応える為に頑張ることにした。
結果、この日の探索も大成功。桁は惜しくも十桁には届かなかったけど、それでもドロップアイテムとかが多目に手に入ったから万々歳な結果である。特に58階層、ドラゴンという王道なモンスターが沢山出てくる階層だから魔石もドロップアイテムもその分多く手に入れる事が出来た。
サポーターの皆も今回の結果には満足してくれたのか、互いに肩を抱き合って喜んでいた。ただやはり彼等も必要以上の報酬は受け取ろうとしてくれず、戻ってからの話し合いは結構難航した。
ソーマ＝ファミリアの人達ってプロ意識高過ぎない？　そう思える程に頑固なアーデちゃん達だったが、ソーマ＝ファミリアの皆さんと仲良くしたいという自分の願いに漸く折れてくれて、この日はそれで解散となった。
その日以降もソーマ＝ファミリアの皆さんとは良くして戴いている。日を重ねる事に増える団員さん達、ある日には遂に彼等のトップである団長のザニスさんも一緒に来てくれたりして、自分とソーマ＝ファミリアの人達の関係はまさに良好と言えた。
その証拠にザニスさんからソーマ＝ファミリアの名産であるお酒をご馳走になったりした。流石に人前で仮面を被る事はせず、取っている宿で戴いたけどね。確かソーマってお酒や霊薬の神様なんだっけ？
味の感想は普通に美味しかった。拙い感想だったけどそれ以外の言葉は特に思い浮かばなかったので、ザニスさんに後日そう伝えたのだけど……なんか凄い驚いた様子なんだけどあれは何だったのだろうか？
もしかして自分結構失礼な事言ったかな？　神に対する礼儀は持ち合わせてないけど、お世話になっているファミリアの皆さんは別

だ。粗相をしたのか不安だったけど、ザニスは気にしないでくれと言っていたけど、やっぱりお世話になった人達に不義理を働くのは良くないよね。

そんな訳でこの日も張り切ってダンジョン攻略に勤しむことにした。結果は勿論上々、これでザニスさんも機嫌を直してくれれば良いのだけど……。ソーマ＝ファミリアの皆さんとは今後も仲良くしていきたいから、気を付けないとな。

さて、そんな感じでダンジョン攻略という偏った話ばかりをしてきた自分だけれど、地上での生活はおざなりなのかと言うと、これが意外とそうでもないのだ。

地上には地上で沢山の見処があったりする。都市中央のバベルは勿論、カジノの様な娯楽施設も沢山あったりするし、観光スポットらしい場所があったりする。ダイダロス街とかまるで迷路みたいでワクワク心が刺激されてしまう程だ。

そんな見所満載なオラリオで、自分はダンジョンに潜らない日はじゃが丸君というファーストフード店でバイトしていたりする。其処にはヘスティアというギリシャ神話の中でマトモな処女神がいるのだが……なんかこの神、やたら先輩ぶってくるのだ。

いや、実際先輩だよ？　でもさ、じゃが丸君が売れ残る度に俺に買ってくれって泣きながら頼むのは流石にどうよ？　しかも買ったじゃが丸君をこの駄女神勝手に一部持ち帰ってるし。まぁ、売れ残るのは精々一個か二個位だから別にいいんだけどさ。

しかしその事もあってヘスティアちゃんにはタメ口で話をしたりする。まぁ、先にも述べた通り神に礼儀なんて持ち合わせていないから、別に何か変わった訳ではないけどね。

そしてバイト帰りには豊穣の女主人という冒険者御用達のお店で夕飯を食べて宿に帰る。ありきたりだけど実に充実な冒険者と一般市民の両立生活、けれど自分のオラリオでの一日はこれで終わりではない。

これ迄ダンジョンで得たドロップアイテムを使い、自分はある武具を作ろうとしている。モンスターを狩り、そこで得たアイテムを使い

強い装備を生み出していく。
そう、自分はこのオラリオで冒険者としてだけでなく、モンスターハ??ターとして活動しようとしているのである。まぁ、売るんだけどね。
けれど再現率は割りと高いんじゃ無いだろうか？
防具もそうだが武器の方も結構出来は良いし、着心地もバッチリだ。これならばあの芋虫モンスターにも対抗出来るのではないだろうか？
明日は何やら祭りが催されるみたいだし、噂のヘファイストス＝ファミリアに挑戦を含めた売り込みに行ってみようかと思う。

◇

「くっ、コイツ硬い!?」
「武器なしでコイツ等相手にするのキツいんだけど!?」
怪物際（モンスターフィリア）。ガネーシャ＝ファミリアが主催として行われる年に一度の祭り、その最中で起きる異常事態に繰り出されたロキ＝ファミリアの女性メンバーは突如として現れる食人花のモンスターに苦戦を強いられていた。
硬く、速いモンスターの攻防。打撃では有効なダメージになり得ない。加えて魔力に反応するという性質により、俊敏な動きが増えてレフィーヤはそのモンスターの奇襲攻撃をマトモに受けてしまう。
「あ、ぐぷ？」
「レフィーヤ！」
下からの強襲、意識外からの攻撃を脇腹に直撃してしまったレ

フィーヤは唱えていた詠唱を中断させられ、体を地面に強く打ち付けてしまう。
呼吸と血を吐き出して悶絶するレフィーヤ、そんな弱った冒険者を放置するほどモンスターは甘くはなかった。
花が広がり、奥から鋭い牙が剥けられる。涎を垂らして獲物を捕食しようとするモンスターにレフィーヤの心は折れていく。
助けて、助けて、無様に悶えながら助けを求めるレフィーヤ、ロキ・ファミリアの中でも随一の剣の実力を誇るアイズが、その身に風を纏わせて駆けるも、他の食人花がそれを阻むように彼女の前に現れる。
「っ、レフィーヤ逃げて！」
「あ、あぅぅぅ……」
地を這い、何とか逃げようとするレフィーヤ、しかし捕食に掛かろうとしたモンスターから逃げられる訳がなく、レフィーヤという一人のエルフの少女は――――。
瞬間、爆炎がレフィーヤとモンスターの間で燃え広がった。何が起きたと目を丸くさせるアイズ達、軈て爆炎が収まりそこから現れるソレに再び彼女達は目を大きく見開いた。
其処には――――竜がいた。紅く、その全身に炎を纏わせ、食人花を焼き殺す紅い竜が。
いや、アレは竜ではない。人だ。人の形をした竜がその身より巨大な剣を地面に突き立てる事で食人花の攻撃を防ぎ、そして焼き殺したのだ。
オラリオの中でも最強の一角として数えられるアイズ＝ヴァレンシュタインから見てもその竜人の姿は異質だった。
軈て竜人は地面に突き立て剣を一呼吸で引き抜き、肩に担ぐ。
「少女よ、もう大丈夫だ。――――何故って？」
〝――――私が、来た〟
その堂々たる佇まいに、アイズ達は嘗て語り継がれてきたお伽噺の英雄達を幻視した。

その4

炎が空を灼く。燃え盛る炎は食人花を灰も残らず焼き尽くし、辺りには静寂だけが残った。
「ちょっと、何よアイツ」
「すっごー、あんな大剣見たことないよ。今度ゴブニュ・ファミリアの人達に頼んでみようかな」
突然現れて食人花を焼失させた謎の鎧の男にアマゾネスの姉妹はそれぞれ違った反応を見せた。姉は困惑と警戒を、妹は驚きと好奇心、武具が手元には無いからと言ってロキ・ファミリアの上位冒険者である自分達が苦戦したモンスターをあの男は瞬殺して見せた。
「ねぇちょっと、そこのあなた！」
「ちょっとコイツ等片付けるの手伝ってくれないかな!?」
それを加味した上で姉妹は男にモンスターの討伐の協力を要請した。得体も素性も知れない相手、簡単に協力を許すには分が悪い賭け、けれど妹のティオナは彼が悪い人には見えなかった。
レフィーヤを守ってくれた。鎧の男を善人と判断するには剰りにも不釣り合いな理屈、姉のティオネはどうでるか観察しようとした時。
「勿論」
鎧の男は二つ返事で彼女達の言葉に応えた。
「と、その前に……はい、お嬢さん」
「え？」
渡されるのは一本の小瓶、それが回復薬（ポーション）だと理解するのに数秒ほど時間が掛かった。
「見たところ怪我をしているみたいだから渡しておく、本当なら万能薬（エリクサー）の方が良いだろうが、生憎今は手持ちが無くてね」
「え、あ、その……」
「飲んだらひとまず離れていなさい。巻き込んでしまったら申し訳ないし」

それだけ言って男はのた打ち回る食人花達に向かって歩み出て、モンスターも男に向き直る。今の一瞬だけの攻防で竜の男をこの場の誰よりも危険な敵だと認識したのだ。今この場で最も排除すべきはこの男だと。

食人花が束になって押し寄せる。大きさも数も、上層のモンスターとは規格が違う怪物の波。しかし男は気にする素振りも見せず大剣を振り上げる。間合いに入った瞬間振り下ろそうとする――が、食人花は男の攻撃を読んでいたかのように、束ねていた体を分離させ、左右から襲い掛かる。

「ほう？」

モンスターの理性染みた動きに男の口から感心の声が漏れる。左右からの同時攻撃、アイズが助太刀しようと駆け出そうとするが……。

「とう」

男は振り下ろす途中だった姿勢をそのままに跳躍した。食人花もその後を追うが、途中男は追い縋る食人花に向き直り……。

「さて、これならどうかな！」

手にした大剣をモンスターに向けて投擲した。冒険者にとって己の武具は己の命を預ける相棒、レフィーヤやアイズ達からしてみれば男の行動は自ら命を手放すのも同じ。

そして彼女達の予想通りに食人花は再び分離して投擲された大剣を躱す。躱された大剣は地に突き刺さり、丸腰となった男は呆気なく食人花に捕食されるしかない。

そんな未来を、男は難なく避けてみせる。牙を剥いて喰らいつこうとする食人花を、男は足場にして回避した。重厚な鎧を着ているに反して恐ろしい程の身軽さ、向かってくるモンスターの牙を躱しながら降下し、軈て着地した男の手元には先程投げ飛ばした大剣と……。

「アレは、もしかして」

「あのモンスターの……」

「根だ」

そこで三人は男の狙いを理解した。男は食人花の花を狙ったの

ではなく、食人花の根幹たる根の部分を探していたのだ。しかし、食人花は地下深く根付いてしまっている。ここからどうやって巻き返すつもりなのか。

「雑草の駆除は根っこからが基本」

すると男は食人花の茎を掴み、無造作に引き上げる。ゴゴゴと唸る大地が次の瞬間には盛り上がり、更にそこから食人花の根らしき球根部分が姿を晒した。男の常識外れの怪力、先程もそうだったがこの男、明らかに並の冒険者ではない。

最低でもＬｖ５。自分達と同等か或いはそれ以上の強者、武器や防具の性能を度外視しても男の実力は底が知れなかった。

無造作に投げ棄てられ、宙を舞う食人花。支柱だった根も文字通り根刮ぎ引っこ抜かれたそのモンスターに最早自由に動ける術はなく。

そして、眼下には大剣を携えた鎧の男がいた。燃え盛る炎をその身に纏い、大剣を構えるその姿はまるで特大の息吹（ブレス）きを吐き出す竜の様で……。

「行くぞ即興必殺、烈火・一文字斬り！」

再び跳躍し、振り抜いたその一撃は今度こそ食人花を切り裂き、花のモンスターは根っこごと焼却された。

◇

「いやー、ごめんね。結局あなた一人に任せちゃった！　私達も手を貸すべきだったのにゴメンね」

「気にしないでくれ、俺もこの鎧と大剣の性能を試したくて割って入っただけだからさ」

それから少しして、食人花のモンスターの襲撃という予期せぬ事態も無事に乗り切り、怪我人もレフィーヤだけで、その彼女も渡されたポーションのお陰で回復出来ている。
事態の収集もモンスターによる被害も、最小限の被害で抑えられた事に安心したロキ・ファミリアの面々は、次に紅い鎧の男へと視線を向けた。
結局、この男は何なのだろう。話を聞く限り偶々此処を通り掛かっただけの様だが、それにしたってタイミングが良すぎる。装備の性能を試したいと言うから、もしかしたら今回の件の騒動はこの男が関わっているのかも知れない。
しかし、それを面と向かって口にするにはティオネには難しかった。何せあの男は結果的には苦戦している自分達を助けているのだ。しかも怪我したレフィーヤにポーションを無償で渡したりとその善人ぶりは凄まじい。
もしここで空気も読まずにそんな事を言ってしまえば相手の機嫌を損ねるだけ、戦力的にも精神的にもそれは無理があると察するティオネ、そんな彼女の心情を知らずにティオナは呑気に核心に触れる。
「ねぇねぇ、あのモンスターってさ、あなたをしつこく狙ってたみたいだけど、なんか心当たりってあるの？」
「いや、全く身に覚えがないな。そもそもあのモンスターとは初見だったし」
「そうなんだ。じゃあさ、あなたのその剣に付いて教えてよ！　その鎧もだけど大剣からも炎出してたし、もしかして魔剣だったりするの!?　砕けない魔剣ってアタシ初めて見たよ！」
「うーん、何て言ったら良いのやら。多分魔剣の類いでは無いかな？　どちらかと言えば属性だな」
「ぞ、属性？」
「あぁ、しかし上手くいって良かったよ。武具なんて初めて作るから不安だったけど、結構いい線いってたな」
「ええ!?　これあなたが作ったの!?　ファミリアの仲間じゃなくて!?　それも初めてで!?　すごーい！」

「はは、まぁ製造方法がちょっと独特だからな」
向こうで愚妹が頭が痛くなる会話をしている。しかも応えてる男も男で何やらトンでもない言葉を口走っている気がする。どうしよ、これ絶対団長に報せなきゃいけない案件よね。上手く伝えられるかなぁ。
愚妹が無自覚に相手の情報を引き出そうとしているけど、情報の量が多すぎる。唯でさえ今回は食人花という見慣れないモンスターの襲来があったと言うのに、考える事が多すぎて上手く思考が纏まらない。
姉のティオネがどうするか頭を悩ませていた時、向こうから手を振って駆け付けてくる人影があった。それはモンスターの襲撃の際に逃げ遅れた子供を終始肩車しながら逃げ惑っていたロキ・ファミリアの主神、ロキである。
「おーいみんなー、無事やったかー？」
「あ、ロキ！　うん、皆平気だよ」
「レフィーヤが少しダメージ受けちゃったけどね。それよりもロキ、あの子はどうしたの？」
「親御さんの所に返して来たでー？　んで、そっちのゴツい兄ちゃんがさっきの炎ボンボン大立回りしてた奴か？」
飄々としていながらも、あの騒ぎから子供を無事に親元へ届ける行動力の高さは流石は神と言った所か。
興味津々と鎧の男を見つめる彼女の視線を彼は鬱陶しそうに視線を避け、彼女と目を合わせようとしない。そんな男に訝しながらロキは怪我をしたレフィーヤに歩み寄っていく。
「レフィーヤも大丈夫かぁ？　なんか怪我したって言うたけど？」
「あ、はい。でももう大丈夫です。彼がポーションを分けてくれましたから」
「ホンマかぁ？　何や随分とウチの子が世話になったなぁ。なぁアンタ、良かったらウチラの家に……来て……」
危険な所を助けてもらい、その上回復薬まで分けて貰った。借りを作るの何だし、礼を返すついでに色々話を聞き出そうと自分達の

ファミリアに誘おうとするロキだが、振り返った先には既に先程の鎧の男の姿はなかった。
「あ、あれ？」
「さっきの人、いなくなってる？」
「うそ、全然気付かなかった」
ティオナ、ティオネ、そしてアイズ。ロキ・ファミリアの精鋭が揃って男の姿が消えたことに気付けなかった。視線を外したのは最初だけ、それもほんの僅かな一瞬の間に。
逃げようとする素振りを見せれば、即座に行動に移せるだけの反射能力が彼女達にはあった。しかし、三人は鎧の男の姿を消す瞬間も行動に移す動きすらも感知できなかった。
一体、あの男は何者なのだろうか？　悪人ではないのだろうが、それにしたって不可解にすぎる。食人花と鎧の男とそして仮面の男、立て続けさに出会う異常事態にアイズ達はこれから起きる出来事に少しずつ不安を募らせていくのだった。

数日後。
「あの、この間の鎧の人の装備、ヘファイストス・ファミリアのショーウィンドに飾ってありましたよ？」
「「ぶふぅぅぅっ!?」」
尚、価格は非売品で売り物ではなく、客寄せの飾りとして置かれていた模様。
更に言えばその装備を飾ってからと言うものの、ヘファイストス・ファミリアの団長は暫くの間燃え尽きたように大人しくなり、後日鬼気迫る勢いで鍛冶に打ち込んだのだとか。

その5

「うわー、本当に置いてある」
「非売品……これ、売り物じゃないんだ」
　オラリオの北東にあるメインストリート、工業地帯として知られ、オラリオの利益の大元である魔石製品が作られている地帯。工具や様々な用品を取り扱う専門店が建ち並ぶオラリオ最大貿易の一区にて、その派閥（ファミリア）はあった。
　ヘファイストス・ファミリア。作られる武具の多くが一級品、オラリオの中でも超の付くブランド品。オラリオの冒険者ならば誰もが憧れる逸品の揃った迷宮都市最高峰の武具店――その本店。
　バベルにも幾つも支店を置く最大手のファミリアだが、何故か今はその栄光は見る影もなく、店内の様子はその綺麗な洋装とは対照的に、どこか暗かった。受付の団員も心なしか顔が窶れているし、普段は活気づいている店内も静まり返ってしまっている。
　レフィーヤから齎された情報を元にダンジョンに潜る序でにヘファイストス・ファミリアへやって来たアイズ達、最初この店に訪れてその有り様に動揺していたが、店の中央に飾られたソレを見てどうして天下のヘファイストス・ファミリアが沈黙しているのかが分かった。
　レフィーヤの話ではショーウィンドに飾ってあるとされていた武具。紅色で、まるで生きた炎が具現化したかのような圧倒的な存在感を放っている威容に満ちた一式の装備。それは以前、怪物祭で見かけた鎧の男のモノ。
「アイズ達の話を聞いても最初は半信半疑に思ったが、成る程。確かにこれは凄まじいな」
「よく見れば鎧の外側が炎で覆われている。凄いな、結構近付いているのにまるで熱くない」
　数多くの名刀名剣、装備の数々を生み出してきたヘファイスト

ス・ファミリアだが、それでもこの装備は異質な存在感を放っていた。見る者全てが憧れ、敬い、畏れてしまいそうな圧迫感、飾りと呼ぶには剰りにも不釣り合いなモノがこの装備から感じ取れていた。

ダンジョンに付き添いがてら話し半分にやって来たフィンとリヴェリアも目を丸くさせてその装備を見つめている。見事な造形だとリヴェリアが称賛の言葉を漏らしていると、ティオナは不思議に思った事を口にした。

「あの人が折角の装備を売り払ったのもそうだけど、どうしてこれ非売品なんだろ。ヘファイストス・ファミリアなら結構な値段で売り捌けそうなモノだけど」

「それが無理なのだ。何せその装備は人を選ぶのだからな」

「椿？」

ティオナの疑問に応えるように店の奥から現れたのは黒髪に褐色肌、そして眼帯という特徴的な容姿をしたヘファイストス・ファミリアの団長、椿＝コルブランド。その眼帯と長身により単眼の巨師（キュクロプス）と呼ばれ神を除けばオラリオ随一の鍛冶師である。

「椿、それはどういう意味だい？」

椿が打った装備はそのどれもが一級品、その腕前をよく知るフィンにとって彼女の言葉は無視できなかった。リヴェリアも同様で彼女に続きを話して欲しいと促した。

「言葉通りの意味さ、その装備は《生きている》。生半可な者が着ようとすれば、その武具に宿った竜の怒りを買い魂ごと焼却されるじゃろう」

「し、焼却？」

「生きている……ですか？」

その言葉に今一つ理解できないでいるアイズ達に椿は更に話を続けた。

「少し前にな、この武具が欲しいという輩が現れてな。元々売られた装備だからそんなに拘っていたわけでもないし、ワシもその時は工房に籠っていて詳しい話を聞いた訳でもなかったから取り敢えず試着という形で一度着させてやったのよ」

「そ、それで？」
「燃えたよ。文字通り、この鎧はその男の身を包んだ途端、突然装備した人間ごと発火したのだ」
　椿のその言葉にアイズ達は驚愕した。装備が突然燃えだしたという話は彼女本人から聞いても尚信じられない。だって有り得ないだろう？　一体何処の世界に所有者を自らの意思で決める武具がある？
　ダンジョンに於ける鍛冶師の装備は冒険者にとっての命を預ける……文字通り運命共同体のモノだ。その武具が所有者を選び、あまつさえ殺しに掛かるなんて――――。
　そんなの、まるでお伽噺に出てくる神話の武具みたいじゃないか。
　アイズ達は押し黙り、唯一ティオナだけは目をキラキラさせて今は沈黙している装備を見つめている。
「成る程、そんな危険な代物が置いてあるなら客が寄り付かないのも頷けるな」
「でも、それならどうしてこんな所に置いてあるんです？　装備すれば所有者を焼き殺してしまう防具なんて、あなたのファミリアからすれば迷惑でしかないんじゃあ……」
「それは、その防具がこの子にとって新しい目標だからよ」
「神ヘファイストス」
　レフィーヤの呟きに応えるように現れたのはこの派閥の主神であるヘファイストスだった。呆れた表情を浮かべながら椿の隣に立つ彼女に対し、椿は照れ臭そうに苦笑いを浮かべた。
「この子、最初は自分以外でこの防具が誰かに作られて生み出された事実に打ちのめされたのに、数日したら元通りになったのかと思えば、この武具を本店の中央に置くって言い出したのよ？」
「大変だったのよ？」と、主神たる彼女は受付の団員へと視線を向ける。吊られてアイズ達も目を向ければ、そこにはウンウンと首を縦に振る団員達がいた。
　聞けば、どうやらこの鎧は力無き者が近付けばそれだけで激しく燃え出して手が付かなくなるのだとか、お陰でヘファイストス・ファミ

リアの上位鍛冶師が総出で移動に手間を掛けてしまう始末、しかもその間団長たる椿は鍛冶に打ち込むことになってしまったのだから余計に質が悪い。
　団員達だけでなくフィン達すらもジト目で椿を見る。口笛を吹いて誤魔化そうとする彼女にヘファイストスが拳骨を落とした。
「あれ？　でも団長やリヴェリアが近付いた時はそうでもなかったわよ？」
「え!?　じゃあもしかして二人なら着れるって事？」
「あぁいや、恐らくそれは二人を品定めしただけだ。私の時もそうだったからな」
「椿さんの時？」
「うむ」
　そう言うと椿は徐に上着を脱ぎ、上半身を露にした。ドワーフとヒューマンのハーフという割には見目麗しい体型の椿、一体何をと一同は訝しむが彼女の背中に刻まれた生々しい火傷の痕を目にして、レフィーヤは息を呑んだ。
「実は少し前に一度着てみてな、この傷はその時負ったモノだ」
　一体何が嬉しいのか、ニコニコ顔で語る椿だが、対するフィン達は戦慄してソレどころではなかった。
　椿は上位の鍛冶師であると同時にレベル５の第一級冒険者だ。直接的な戦闘能力ではアイズ達に劣るかもしれないが、それでもオラリオでも指折りの冒険者として知られる彼女だ。その実力は確かなもの。
　冒険者はその階位（レベル）を上げることで肉体的にも以前とは比べ物にならない強さを得られる。筋力、俊敏、耐久と、あらゆる面で能力が大幅に底上げされる。
　当然個人差はあるものの、彼女はレベル５。生半可という分類には当てはまらず、その強さはあのベートすらも認めている。
　そんな彼女が一介の鎧に軽くはない痛手を受けた。ポーションで治そうとしているのか、その傷は癒されつつあるが、それでもその火傷は痛々しかった。それを目の当たりにしたアイズ達はこれ迄の彼

女の言葉が真実だと思い知らされる。
「本当ならもう少し安静にしていなくちゃいけないのに、この子ってば槌を振るうって聞かないのよ？」
「それは仕方あるまいよ主神殿、これまで貴方しかいなかった私の目標が、更にもう一人増えたのだ。此れを喜ばずに、槌を振るわずにいられるか。現にヴェル坊も張り切って槌を振るっているぞ」
主神（親）の心配も何処吹く風、全く懲りた様子の無い椿にヘファイストスは頭を抱えた。
「うわぁ、そんなに凄い代物なんだこの装備は」
「凄いっていうより最早ヤバいでしょそれ」
「因みに、ヘファイストス様はこの武具って造れたりは……」
「少なくとも、神の力（アルカナム）無しでは直ぐには無理ね。最良にして最高の素材を惜しみ無く使って、四……いや、五～六年程工房に籠れば何とかって所かしら？」
「そ、そんなに!?」
「永久的な魔法付与（エンチャント）に不壊属性に並ぶ耐久性、トドメに大剣の方も同じときた。一体どんな製法で造ったらこんなのが生まれるのか、鍛冶師として興味が尽きんよ」
やれやれと肩を竦めて呆れるヘファイストスと、興味津々な様子で鎧を見つめる椿、オラリオ最高峰の鍛冶師二人から告げられる惜しみ無い称賛。彼女達の口からさらっと溢れた鎧のトンでも性能にアイズ達は言葉を失っていた。
「……椿、そして神ヘファイストス。一つ質問しても良いかな？」
そんな中、一つの疑問を抱いたフィンが彼女達に問い掛ける。
「君達が絶賛して止まないこの鎧、持ち込んだのは一体どんな人間だったのかな？　頼む、教えてくれ」
それは当たり前と言えば当たり前な質問だった。オラリオという世界の中心と言われる迷宮都市で最高峰の鍛冶職人として知られる椿とヘファイストス、その両者から見ても規格外な性能を有している鎧と大剣。
ならばとフィンは思う。こんなバカげた武具を一体誰が造り、そし

てどういう意図で手放したのか。疑問は尽きないし、同様に興味もまた尽きなかった。
　本来なら顧客の情報を口にするのは商品を賄う人間にとって禁忌（タブー）だが、同じ最大手の派閥でヘファイストス・ファミリアを贔屓にしてくれているロキ・ファミリアの団長の頼みと言われれば断りづらい。
　他言無用で頼むわよと、予め釘を指すヘファイストスに勿論だよと、笑顔で応えるフィン。そんな彼等のやり取りを尻目に、再び椿は鎧を見上げる。
　思い返すのはこの鎧を受け取った日の事。
『貴方、一体何者なの!?　どうやってこの武具を手にいれたの!?』
『主神殿?』
　主神の部屋から聞こえてきた彼女らしからぬ酷く慌てた声、何事かと思い部屋に入ってみると。
『残念ながら、私にはあなたの質問に応える事は出来ません。私はただの仲介人、頼まれた事を実行しているだけなのですから』
『でも、だからってこれは……』
『自分が貴女に求めるのは二つ、この武具を買うのか、買わないのか。それだけです』
　その男は紫炎の髪を揺らし、神であるヘファイストスに大胆不敵に交渉していた。

◇

「――――聞いているのかいシュウジ君！」
「あぁ、ごめん。全然聞いてなかった」

「だからね！　最近僕のベル君が冷たいんだよ！　やれダンジョンだそれダンジョンだって、彼の態度が素っ気ないんだよ」
「良かったじゃないか。その分だと独り立ちも近いんじゃないのか？　眷族（子供）が成長していくのはお前にとっても嬉しい話だろ？」
「そうだけど……うわーん！　ベル君行かないでー！」
「めんどくせぇなこの駄女神」
「アハハ、君も相変わらず辛辣だね」
　オラリオのとある酒場、ダンジョンでの稼ぎを終えた冒険者達が集まり、飲んで騒いだりする迷宮都市では見慣れた光景、店の外側にある小さな席で二神と一人の人間が揃って酒を呑んでいた。
「しかし、珍しい事もあるものだ。神嫌いを自称する君が私達の誘いを受けるなんて」
「今日はこれ迄の成果が出たからな。元々打ち上げも兼ねて何処かで呑むつもりだったんだよ。最近は豊穣の女主人にばかり通ってたし、気分転換も含めて」
「我々に付き合ってくれたと？」
「それを口にするのは野暮ってもんだぞ、ミアハ」
　長髪の優男、医療の神ミアハの指摘にシュウジはムスッと頬を膨らませてエールの入った酒瓶を傾ける。
　ミアハは最初こそ神相手に尊大な態度を取り続けるシュウジを不思議に思ったが、眷族や普通の一般市民の人々には優しく接しているのを何度か見かけた事があるから、神に対して嫌な出来事があったのだと思い、大して重く受け止めてはいない。
　それに神を嫌っていると言っても、別に暴力に訴えたりはせず、こうして話はしてくれるし、何だかんだ言いながら同じ神であるヘスティアの面倒をみている。
　今もヘスティアをナジッたりしているが、会話の節々で彼女の眷族であるベル＝クラネルを労る台詞が出てきている。神を嫌っていても誰かを思いやれる優しい人間、それが神ミアハのシュウジに対する見解だった。
「ていうか、別にベル君が誰を好きになろうとお前には関係ないじゃ

ん。告白したわけでも無い癖に、厚かましいにも程があるだろ」
「ぐぅぅぅ、酷いよシュウジ君！　君は僕の味方をしてくれるんじゃないのかい!?」
「はっはっはっ、抜かしよる」
「ぬか!?」
（優しい子、そう、きっと優しい子なんだ）
「あ、因みに僕今日持ち合わせがないから、シュウジ君頼んだ」
「あ？　お前この前も似たような事言って俺に集ったよな？　なに？　狙ってんの？」
「ふぐぁぁぁぁっ!?　か、神の鼻に指を入れるなぁぁぁぁっ!?」
物臭な言い方のヘスティアに軽くイラッとしたシュウジは二本の指を彼女の鼻に突き入れて持ち上げる。幾ら弱小ファミリアが相手でも流石に神相手にやりすぎだとミアハは仲裁する。
「ま、まぁまぁシュウジ君。ここは穏便に、今回は私が払うから」
「アンタもいい加減自ら厄介事に首突っ込むの止めろって言っただろうが!!　またナァーザちゃんを泣かしたいのか!?　そんなんだからアンタの所の借金は膨らむ一方なんだろうがこの駄神！」
「酷い！　でもグゥの音も出ない！」
鼻フックで持ち上がる女神に崩れる男神。その異様な光景は周囲の客をドン引きさせ。
「神様～、只今戻り……って神様ぁぁぁぁぁっ!?」
それは女神の眷族が戻ってくるまで続いた。

因みに、結局この日の酒代はシュウジ持ちだったりする。
「これだから神は」

その6

「さて、そろそろ終わりにするとしようか、お前の相手をするのも面倒だ。来て貰うぞ【アリア】」
「ぐっ、うぅ……」
　ダンジョン18階層。冒険者達の街、リヴィラにて起きたガネーシャ・ファミリア団員の殺害事件、そこから更に正体不明のモンスターである食人花による突然の強襲。
　混乱に包まれた街と冒険者達の建て直しの為に、ロキ・ファミリアの面々が先頭に立ってモンスターの相手をしていた最中、【剣姫】アイズ＝ヴァレンシュタインの前に赤髪の調教師（テイマー）らしき女性が立ち塞がった。
　アイズをアリアと呼んで、何処かへ連れ去ろうとする赤髪。当然アイズは彼女に抵抗したが、二人の実力差は明確な程に開いていた。アイズの剣戟にいとも容易く順応し、対応し、そして凌駕せしめる赤髪。アイズの魔法である【風】を使用しても尚、その差は埋まる事はなかった。
「いい加減暴れるな。面倒が増えるだろう」
「あ、がぁぁぁっ！」
　圧倒的な実力差、それでも諦めはしないと足掻く剣を握るアイズの手に赤髪の足が踏み躙る。Ｌｖ５（自分）以上の膂力による蹂躙、足掻こうとしても尚押し潰そうとする彼女に。
「――仕方ない、腕の一本位は貰っておくか」
　手を刃の様に鋭くさせた手刀が、アイズの腕目掛けて振り下ろされ――
「――なに？」
　――る、事はなかった。
　腕が動かなかった。腕を引き千切り、アイズの戦意を完全に挫こうとしていた赤髪の女の手刀はいつの間にか現れた蒼い仮面の男に

腕を掴まれて阻まれていた。
何だこいつは？　自分の腕が難なく掴み取られているのもそうだが、ここまで気配なく近付いていた仮面の男に赤髪はこの一瞬完全に動きを停止させていた。
そして、その一瞬の隙をアイズは見逃さなかった。風を使い、乱暴に女の足から逃げ延びた彼女は、手の感覚を確めながら赤髪にその剣先を向ける。
「ちっ、邪魔だ！」
対する赤髪は邪魔が入った事に憤りを覚え、捕まれた腕をその膂力にモノを言わせて乱暴に振り払う。
「おっと」
しかし、当然の如く男はヒラリと避けて、女との距離を開ける。
「乱暴だなぁ。女の子なんだからもう少しお淑やかに振る舞っても良いだろうに……それはそうとヴァレンシュタインさん、大丈夫でしたか？」
「あ、はい。何とか」
いきなり現れて自分と赤髪の女の戦いに介入して見せた仮面の男、蒼のカリスマの乱入にアイズは混乱したが、それでも助けられた事への礼を言えたのは流石冒険者と言った所か。
「さて、この騒ぎの元凶は貴女と見て間違いなさそうですが、取り敢えず抵抗を止めることをお勧めしますよ。貴女には少々聞きたいこともありますしね」
「いきなり割って入ってきて……何だお前は？」
「おっと、自己紹介が遅れましたね。私の名前は蒼のカリスマ、察しの通り偽名です」
「ふざけた奴だ」
アリアという標的を前に現れた奇妙な乱入者、あと一歩の所で邪魔が入った事で、怒りを顕にした女は脚力に力を込めて地を踏み締め、砲弾の如く蒼のカリスマへ突撃した。
瞬く間に距離を詰めてくる膂力、人一人を粉砕して余りある暴力の剛腕が蒼のカリスマへと迫る。一秒後の惨劇、しかしアイズの予感

は次の瞬間覆される事になる。
　蒼のカリスマをその両腕で握り潰そうとした女が、突然あらぬ方向へ吹き飛んだのだ。その事実にアイズの目は大きく見開き、信じられないといった様子でその光景を見つめていた。
「ぐっ、あの仮面、一体何をした」
　壁へと激突し、クラクラする頭を押さえながらも女は再び蒼のカリスマへと降り立つ。苛立ちはより濃く、その鋭い眼はより殺意を滲ませて、女は仮面の男を睨み付ける。
「貴様、一体何者だ？」
「ん？　先程名乗ったではありませんか。私の名前は蒼のカリスマだと」
「だが偽名なんだろ？」
「ええ、本名を知られるとちょっと不味いですからね。主にギルド関連で」
「何処までも虚仮にしてくれるな、お前」
「そうですか？　これでも真面目にしているつもりなのですけど……」
　人をバカにしてる。そう暗に示してくる女に蒼のカリスマは心外だと肩を竦める。この男を殺さねばアリアに手が届かない、今度はもう奇妙な小手先の技は通用しないと、女は全身に力を漲らせる。
　明らかに変わった女、姿勢を地面に着くほどに屈ませ、片足を伸ばす。アイズと戦ったときとはまるで違う獣の構え、全身を引き絞り、更に速さに特化しているだろう女の構えに蒼のカリスマはまるでチーターだなと、内心思う。
　この一撃で決める。背後では巨大化した食人花が猛威を奮っているが、もうじきロキ・ファミリアの面々によって駆逐されるだろう、そうなる前にアリアだけでも手に入れようと、女は最後の勝負に出る。
　ありったけの殺意と敵意を乗せた一撃、その威力は触れた小石を芥子粒に変え、全ての命を砕く凶悪さを孕んでいる。当たれば即死、迫りくる死の暴力を前にしかし男は狼狽える事なく――――手を翳して

一言、言葉を紡いだ。
「【グラビトロンカノン】」
瞬間、全てが潰えた。女も、街を襲う巨大モンスターも、その全てが抵抗する事もなく地に消えた。モンスターはその魔石ごと圧壊し、女は指一つ動かせないまま大地にめり込んでいる。
「ぬっ、ぐ、あぁぁぁぁぁっ!!??」
有無を言わせぬ圧力、目にも見えず、避けることも抵抗さえも許さない絶対的な力に押し潰され、遂に女は苦悶の声を漏らす。
「動かない方が良いですよ。下手に力を加えれば手足が折れるだけでは済みませんよ」
「ぎ、ぐ、……ぎ、ぎざまぁぁぁぁっ!!」
それでも立ち上がろうと藻掻く女に蒼のカリスマから冷ややかな言葉が送られる。少しでも動けばあのモンスターと同じ末路を辿る事になると、その言葉の裏に隠された意図に気付いた女は怒りと悔しさの声を吐き出す。
この男は手を抜いている。自分を止めるのに全力は要らないと、此方が殺すつもりで挑んでも目の前の仮面の男は毛ほども脅威には感じていないと。仮面の奥で見える冷めた瞳が、そう語っているように聞こえた。
「く、そ、がぁぁぁぁっ!!」
屈辱だ。女にとってその事実は耐え難い屈辱だった。手足がビキビキと悲鳴を上げる。どんなに抗っても敵わない力の圧力に、されどここで終わるものかと女は抗い続けた。無様を晒すなら死を選ぶ、そう体言する女の抵抗に蒼のカリスマは溜め息を吐いて……。
「やれやれ、そこまで抵抗されては仕方ありませんね。その様子だと此方の質問に答えるつもりも無いでしょうし……ならば、望み通り終わらせてやろう」
「っ!?」
「貴様も、ダンジョンの染みになれ」
女は、死を目の当たりにした。抗いようがない、絶対的なまでの死、今までの圧力とは桁違いな力が、女の命を圧し潰されようとして

――。
「レヴィス！」
　しかし、その死は新たな乱入者によって阻まれる。蒼のカリスマの死角から毒の塗られたナイフが投擲されたのだ。並の冒険者ならその不意討ちの一撃により死は免れぬだろうが、されど相手は実力と素性、共に不明の怪物である蒼のカリスマ。通常なら予期せぬその投擲されたナイフを振り返る事なく難なく摘み取る。
　そして次の瞬間には摘まんだナイフを蒼のカリスマは投擲した者に向けて投げ返す。一瞬だけの攻防、しかし蒼のカリスマの間の無い返しの反撃はナイフの持ち主の肩に突き刺さる。
　しかし、この時一瞬だけレヴィスと呼ばれた女から意識を外した事により、彼女を抑えていた圧力が弱まった。その刹那の隙を全力を用いて抜け出したレヴィスは全身の骨が折れていようと構わず逃走を図る。
「ふむ、やはりお仲間がいましたか」
「ちっ、余計な真似を」
「あまりそう言う物言いは口にしない方が良いですよ。折角助けてもらったのに、失礼だと思われますからね」
「生憎と、そんな睦まじい間柄ではないのでな」
「ふむ。とすると、貴女には幾つかの協力者がいると見て間違いなさそうですね。例えば――――今は姿を消した闇派閥の残党だとか」
「っ！」
「おや？　その反応だとどうやら当たりだった様ですね。私なりの推察と考察による単なる思い付きだったのですが……となると、他にもまだ隠し事はあるようですね」
「例えば――――協力者用のダンジョンに続くもう一つの出入り口がある。とか」
「なっ!?」
　ダンジョンにバベル以外からの侵入経路がある。その指摘にレヴィスは歯を食い縛り、アイズは驚愕に目を大きく剥かせていた。
　迷宮都市の成り立ち、闇派閥による暗黒時代、そして目の前で起

きている異常事態とその関係者、数々の推察と考察を繰り返し、蒼のカリスマは一つの結論を導きだした。
「成る程、貴女方の目的は迷宮都市（オラリオ）の崩壊……いや、ダンジョンの解放ですか。そうするとあの極彩色のモンスターはその為の兵器、と言った所でしょうかね？」
「貴様は……危険だ。余りにも、危険だ！」
迷宮都市の崩壊。嘗て神々が降り立つ事で塞ぎ、今日までその平穏を保ち続けてきた世界の中心。千年に渡って守られ続けてきたモノが、崩壊の危機にある。耳にすれば多くの者が有り得ないと一蹴するだろう、しかしアイズはそう思えない。思えるだけの材料がなかった。
対してレヴィスは計画を知られた事にその表情を曇らせる。目の前の男は危険だ。冒険者としての力ではなく、この男は余りにも察しが良すぎる。鋭いなんてレベルではない、此方の思考を読み取っているかのようなその冴えにレヴィスは今更ながら恐怖を覚えた。
「お前は、殺す。殺さなければならない。貴様の存在は我々にとって余りにも危険だ」
「おっ、〝我々〟という言葉が出たという事はどうやら間違いでは無かった様ですね。この分ならギルドにいる大神との良い交渉材料になりそうです」
「っ！」
「情報のご提供、感謝しますよ」
「くそが！」
最後まで情報を明け渡してしまった事に悔しさを覚えつつも、レヴィスは離脱していく。この男とは面と向かって話すだけでも厄介だ。急いでこの場から……いや、蒼のカリスマから離れなければならない。
「ま、待って！」
猛烈な勢いで離れていくレヴィスをアイズは風を纏って追い縋る。自分を【アリア】と呼んだ事、【アリア】を知っている事、それらを問い詰めたくてレヴィスを追うが、結局彼女を問い詰める事は出来

なかった。
（さっきのナイフの奴も逃げたか、追おうと思えば追えるけど……まぁ、今は別に良いかな。あの様子だと巣に戻って力を蓄えるだろうし、暫くの間は変な動きは見せないだろ。問題は彼女達の協力者である闇派閥の連中だ）
蒼のカリスマは敢えてレヴィス達を泳がせる事を選んだ。あれだけ一方的にやられた以上、向こうは力を溜める事に専念しそうだし、その間にオラリオの各派閥に迎撃させるだけの準備を進めさせれば良い。神々に手を貸すのは癪だが、この都市に住まわせて貰っている以上最低限の協力はしておくべきだろう。
あくまで神々等ではなく、この世界に住まう人々に対して、世話になった人達の恩義に報いる為に。取り敢えずギルドにいる大神ウラノスに話しておこうと、蒼のカリスマは踵を返し。
「……その前に、貴殿方にも話しておいた方が良さそうですね」
「そうさせて貰えると助かるよ」
後からやって来たロキ・ファミリアに仮面の男はその情報の全てを彼等に伝えるのだった。

◇

β月β日
先日の18階層での騒動から二日ほど経過した今日、自分は相も変わらずこの世界を満喫している。先のレヴィスと呼ばれる女性から得た情報を元に彼女達と闇派閥の目論見をそれとなく大神ウラノスに伝えた自分は、晴れて冒険者としてダンジョンに挑める様になった。
出会った当初のウラノスは自分に警戒を顕にしていたけど、自分の事情をある程度話し、ダンジョンに潜む悪い連中の情報を全て話した

事により何とか此方の要求を受け入れて貰えた。
と言っても、認められたというより黙認というモノ。ギルドからの追求と正体がバレた際に起こるペナルティを免除してもらうだけの内容だが、それでも今までと比べてダンジョンに潜りやすくなったのも事実だ。
これなら仮にバレたとしても自分に課せられる罰はない。つまりこれまで自分の我が儘に付き合ってくれたソーマ＝ファミリアの皆さんにも迷惑を掛ける事もない。
彼等には世話になったから、今度ダンジョンに潜る以外で何かしら報いた方が良いのかもしれない。まぁ、最近のソーマ＝ファミリアは何かと忙しそうだし、暇を見付けて声を掛けてみるか。アーデちゃんも、最近はベル君のサポーターで頑張ってるみたいだし、今は余計な手出しは控えておこう。
さて、何だかんだ付き合いのあるヘスティア＝ファミリアだが、現在彼処の紐女神にはベル＝クラネルという眷族ただ一人だけという。彼は最近創設されたばかりのファミリアの唯一の団員で、何かと苦労が絶えないそうな。
無名のファミリアで頑張るベル君、彼の苦労を労おうと食事を誘おうかと思ったけど、彼にも冒険者として一端のプライドがある。そんなお情けみたいな誘いは彼にも抵抗があるだろう。かといって武器や防具を作って渡そうにも、彼には既に立派な黒いナイフが常備されているし、身に纏う軽装の防具も装備されている。
彼は駆け出しで成長途中の冒険者だ。時には痛い目を見ることで学習し、成長させるのも大事だろう。なら、やはりアレ位しかないかな。

◇

早朝、オラリオの外壁部。迷宮都市の街並みを一望できる場所に二人は対峙する。
「何かゴメンなベル君。強引な誘いをしてしまって、やっぱ迷惑だったかな？」
「そんな！　シュウジさんにはいつも神様がお世話になっているのに、迷惑だなんて全然！」
「アハハ、そう言ってくれれば此方としても有り難いよ。さて、それじゃあ始めようか。時間は有限、有効的に使わないとね」
「そ、それなんですけど……本当に大丈夫なんですか？」
白髪赤目の少年、ベル＝クラネルは目の前の男性の安否を気遣う。ベル達冒険者は神の恩恵を受けた眷族でそれがＬｖ１だろうと恩恵を受けていない一般市民とは隔絶された力の差があるとされている。
事実、この迷宮都市では一部の自らの力に過信した冒険者が、時折その暴力を市民に向けた事があり、恩恵の受けてない市民の人々は冒険者達の振る舞いに屈するしかなかった。今でこそアストレア＝ファミリアという正義を謳う者達の尽力もあり、その様な狼藉ものは激減しているが、それでも冒険者同士の衝突に巻き込まれ、怪我を負うものは少なくない。
そんな力の化身と化した冒険者の一人であるベルは、恩恵を受けていないシュウジに体術を乞うべきか未だに悩んでいた。下手に力任せで挑んでは怪我をさせてしまうのではないか。そんな不安がベルの脳裏に過るが。
「アッハハハ！　気持ちは分かるがベル君、これでも昔は俺も結構ブイブイ言わせて来たんだ。無用な心配は要らないよ。でも、ありがとう」
「え、えっと……」
「なに、此方には一応怪我に備えたポーションを用意してあるから、大丈夫さ。それに……駆け出しの冒険者にやられる程、落ちぶれちゃいないさ」

「！」
「さぁ、お喋りは終わりだ。そんなに疑問に思うのなら、先ずは君自身で確かめて見ると良い、その上で今後どうすれば決めなさい」
「分かりましたシュウジさん……じゃあ、行きます！」
「来い」
　朝日がオラリオの街を照らすなか、二人の男が拳を交える。一人は挑む為に、もう一人は育てる為に。シュウジは自分の押し付けな善意に笑顔で応えてくれたベルに報いる為、彼に体術を仕込むのだった。

「……あの男、目障りね」

その7

（な、ななな、何なんだよこのステータスの上昇具合はぁぁぁぁっ!?）

夜。夕餉を終え、冒険者達が各々のファミリアに戻って1日を疲れを癒す時間帯。寂れた教会の地下の共同部屋にて女神ヘスティアの言葉にならない悲鳴が駆け巡った。

自身の唯一の眷族であるベル＝クラネル、彼のステータスの更新を行おうとその背中に跨がり、神の血を一滴垂れ流し、冒険者の力の源であるステータスを閲覧した時、それは起きた。

（上昇値トータル２０００オーバー!?　其々の値が軒並みＡを超えてる！　敏捷に至っては……なんだよＳＳって!?）

冒険者のステータスは力、耐久、器用、敏捷、魔力、幸運を基本に個人の成長具合によって変化している。ステータスの伸び代も然り、冒険者はダンジョンにてモンスターと戦いそれを経験値の糧にする事で成長し、その強さを増していく。

ベル＝クラネルはレアスキル憧憬一途（リアレス・フレーゼ）によって通常より成長を促進させているが、それにしたって今回は異常が過ぎる。昨日までＡだった敏捷が、限界値であるＳを超えてＳＳに至っているなんて、ヘスティアにとって何かの冗談にしか思えなかった。

そもそもな話、今日ベルはダンジョンに潜っていない。ある人物に誘いを受けて今日は1日彼に付き合っていたから、こんなに伸びるのは有り得ない筈だ。

（ていうかこれ、そのままベル君に伝えても良いのか!?）

余りにも上がりすぎるステータスにヘスティアは己の眷族にそのまま伝えるか悩む。この事が他の神々に知られれば絶対厄介事に巻き込まれるのは間違いない。娯楽の為にはあらゆる手段を選ぶことも辞さない暇を持て余した神々だ。何をしてでもベルを手に入れようと画策してくるだろう。

（仕方ない、心苦しいがベル君には騙されてもらおう）

ベルの背中に記された超級のステータス、それを暫く眺めながら考え込むヘスティアは苦渋の決断を下すことにした。
ステータス値、オール３００オーバー。口頭でそう伝えられたベルは自身の女神の言葉に疑いもせず、やったー！と全身を使って喜びを顕にしていた。そんな彼に一抹の罪悪感を覚えたヘスティアはどうしてここまでステータスを上げれたのか、心当たりは無いかとベルに問い掛けた。
「え？　ここまでステータスを上げられた心当たり……ですか？
うーん、やっぱりシュウジさんとの特訓ですかね？」
「し、シュウジ君との特訓？」
「はい！　シュウジさん、凄かったんですよ！　冒険者でもないのにモノ凄く強くて！　僕の攻撃全部避けちゃうんですよ！
ヒラリヒラリってまるで蝶の様に舞って、でも繰り出す拳一つ一つが凄く重いんです」
「へ、へぇ～」
「何度も意識が飛びそうになったけど、その都度負けるもんかって気持ちになれて……何て言うんだろう。シュウジさん相手にドンドン自分が変わっていく様な、強くなっていく様な、そんな感覚に染まっていくというか！」
瞳をキラキラさせて今日一日行われたシュウジとの特訓を語るベルに、ヘスティアはただ相槌を打っていた。
「そ、それじゃあベル君は明日も彼の所で特訓していくつもりかい？」
「はい！　あ、でもシュウジさんが言うにはやっぱり実践に勝る経験はないからダンジョン攻略も頑張るようにって言われましたから、明日は午後からの特訓になるみたいです」
「ご、午後からって、君いつもクタクタになってダンジョンから帰ってくるじゃないか！　大丈夫なのかい？」
「はい。何でもシュウジさん曰く、〝実戦はいつも不測の事態の連続、万全の状態で困難に立ち向かえる方が稀なのだから、出し切った力を更に引き出せる努力をしなさい〟だそうです」
「な、何というスパルタ……」

シュウジの容赦ない特訓内容にヘスティアの頬が引き攣る。ダンジョンに不測の事態は付き物、故に逆境に陥った際に自分やパーティー仲間を守る為に時には限界を超えるのも必要。
《冒険者は冒険してはならない》迷宮都市にてこの様な言葉が出てくる程にダンジョンは過酷だが、その災厄がいつベルに降り注ぐか分からない。シュウジのベルに施している特訓はそんな事態に備えての底力を鍛える事にあるのだとヘスティアは悟った。
シュウジのやっている事は確かに厳しい、だがそれらは全てベルの事を思いやっての事だし、それがどれだけ有難い事なのか理解できるから、ヘスティアも彼を悪く言うことは出来なかった。
しかし。
(で、でもだからってこの伸び代は異常に過ぎるよ！　シュウジ君、なんか危ない薬とか危険な施術をベル君に施しているんじゃないだろうなぁ!?)
『ん～？　強化のツボはここかなぁ～？』
『あ、あ、うがぁぁぁぁっ!?!?!?』
『おやぁ？　これは失敗だったかなぁ～？』
ヘスティアの脳内で行われるベルとシュウジのやり取り、特訓を称しての肉体改造（物理）を想像した女神の顔が真っ青に変わっていく。そんな筈はないとシュウジにある意味で信用しているヘスティアは失礼な事を考えたとその考えを振り払うように頭を横に振った。
「ね、ねぇベル君、一つ聞かせて欲しいのだけれど、君って彼と特訓する際、何か変わった事があったりしない？」
「え？　いえ、特にそんな事は……強いて言えば特訓が終わった後に飲まされるポーション位でしょうか？　シュウジさん曰く特製のポーションなんだとか。今度ミアハ様の所で正式に出されるみたいですよ？」
「ミアハの？　なんでまた」
「さぁ、何でも普通のポーションじゃああありきたりだから、ちょっと工夫を凝らしたポーションで客引きをしようっていうシュウジさんの提案らしいですよ？」

「彼、色んな事に挑戦し過ぎじゃない？　……　因みにそのポーションってどういうの？」
「なんかシュワシュワしてました。凄く美味しかったです」
「あぁそう」
　満足気に語る眷族にヘスティアはただ項垂れ、そして思った。
（彼に関して、今は考えるのは止めておこう）
　何だか考えれば考えるほどドツボに嵌まっていく気がする。
　そしてそれから数日後、ミノタウロスに再び遭遇したベル＝クラネルは見事これを打ち破り、遂にＬｖ２へ至るのだった。

◇

「最近、ソーマの様子がおかしい？」
「あぁ」
　迷宮都市最大派閥（ファミリア）の一角、ロキ・ファミリアの庭園にて、主神たるロキと他派閥の主神であるディオニュソス。二柱による極彩色のモンスターと魔石に関する話し合いを終えた二人の関心はディオニュソスのそう言えばという言葉から始まったソーマへと移っていた。
「この前彼と会ったんだ。本拠地（ホーム）に引き篭もりがちだった彼が眷族を連れて外に出ていたのが目についてね、調子を訊ねる序でに聞いてみたのさ。酒を作るのに夢中だった君がどうしたんだいって」
「ほんで？」
「なんか、凄い曇った顔をしていたよ。笑顔の癖に目が死んでいて、何

か怖かった」
「なんやそれ？　アイツの目が死んでるのはいつものことやないか」
何を今更と、鼻で嗤いながら眷族から出された紅茶を飲み干すロキ、確かにソーマが本拠地から出てくるのは珍しいが、それだけであって別に面白くも何ともなかった。
「彼の様子に気になったから眷族の子に訊ねてみたんだけどね、どうも彼最近とんでもない挫折を味わったらしいんだって」
「は？　挫折？」
ソーマは迷宮都市（オラリオ）の中では知らない者はいない酒の作り手、眷族に関心を示さず、ただ黙々と酒を作り続ける男。そんな男神が挫折を味わった。その事に興味を抱いたロキはディオニュソスに続きを話すように促した。
「何でも、彼の酒の完成品……それもこれまでとは比べ物にならない純度の作品が出来たと知って、彼等の団長がある仮面の男にそれをプレゼントしたんだって」
「仮面の男やと？」
「あぁ、それでその酒をソーマが作った完成品の酒だと知らずに飲んだその男は、翌日団長にこう言ったらしいよ〝普通に美味かった〟って」
「……は？」
ディオニュソスの困惑した顔から告げられるその言葉に、普段細目をしたロキの目が大きく見開かされる。
ソーマの酒は神々にとって最高の品だが、眷族（子供）達にとって猛毒でしかない。ガレスの様な種族的にも酒に強く、尚且つレベルの高い冒険者なら楽しんで飲めるかもしれないが、その完成品ともなれば話は別だ。
市場にたまに出回る失敗作とは違う、ソーマの完成品。その味は神々すら魅了し、もし市場に出回れば凄まじい値が付くソーマの神酒。それを欲する為にあの男神の眷族達は血眼になって金を集めているのだ。酒のみで築かれた派閥、それがソーマ＝ファミリアだか

ら。
　そんな完成品を呑んでおいて普通に美味しいと語るその仮面の男にロキは興味を通り越して戦慄した。神の舌をも魅了するソーマの神酒を呑んでおいて、普通で済ませるその男の異常性にロキは言いし難い不気味を覚えた。
　それに何より。
「なぁ、ディオニュソス。その仮面の男ってもしかして蒼のカリスマって言わへんかった？」
「ん？　あぁ、そう言えばそんな名前だったような……ロキ、その仮面の男に付いて何か知ってるのかい？」
「まぁ、な」
　ここ最近耳にするようになった仮面の男にロキは頬杖を付いて思考を巡らせる。５０階層で極彩色のモンスターと共に遭遇した謎の男、その素性も目的も何もかもが不明の存在。
　１８階層のリヴィ（街）ラでアイズを助けた事や、レヴィスを名乗る闇派閥の協力者と迷宮都市の崩壊という計画を教えてくれた情報提供者。これまで様々な面で助けてくれた仮面の男だが、そろそろロキにとって無視できない存在になりつつあった。
（もし、見掛ける事があったら声をかけてみようか）
　余りにも読めないその行動、何を以て動き、何を目的としてこのオラリオにいるのか。浮かび上がる疑問、それらを解消するために取り敢えずロキはこの件を保留にする事にした。
「あ、そうそう。そのソーマなんだけど、最近酒作りは止めて化粧品を作ることに専念する事にしたんだって」
「は？　化粧？」
「なんでもその蒼のカリスマからの提案らしくてね。美味いお酒を作れるのだから、美容に良い石鹸も作れるんじゃないかって、ソーマの奴最近それに嵌まったらしくてさ、作った酒を使って更に化粧品を作ってるみたいだよ」
　これが試作品ね。そう言っておかれた化粧水の入った小瓶と石鹸、それを手にしたロキはマジマジとそれを見つめ。

「因みに、女性が使えば体の一部が成長するらしいよ。例えば胸――」
「もろたで」
音速の速さでそれを懐にしまうのだった。

◇

Δ月×日
ベル君の特訓の帰りになんか知らない連中に襲われた。理由を訊ねても何も言わないし、一方的に武力を行使してきやがった。折角いい気分の所を邪魔されたから、そいつらはワームホールで適当に跳ばし、連中の主神には鼻フックしておいた。
割りと力を入れたから当分は元に戻らないだろう。美の女神だがなんだか知らないが、喧嘩を吹っ掛けておいて只で済むと思うなよってんだ。
一応初犯で、いい気分の帰りだからこの程度で済ませてやるが、次同じ事したら今度こそ消してやる。
――でも、何より一番腹が立ったはベル君に対してあの女神と似たような事を考えた自分自身なのだと、数日後俺は思い知る事になる。

その8

「あぁ、あぁ！　美しい。何て美しい光景……！」

摩天楼施設（バベル）。ダンジョンの蓋として機能し、迷宮都市の象徴として街の中心部に聳え立つ白亜の塔、その最上階に彼の女神のプライベートルームがあった。

神々は人の嘘を見破るが、この女神は人の魂の色まで見透す。見透し、見初め、気に入った魂の持ち主達を自分のモノにしてきた。そうして出来上がったのが、迷宮都市最強の派閥フレイヤ・ファミリアである。

その派閥の主神、フレイヤは自身の目に映る光景に心奪われていた。泣き虫で、弱虫で、誰よりも透き通っていた純粋な魂、自分のファミリアのモノ達ならば片手間で吹き飛ぶような脆弱な人間。しかし、その人間が今大きな危機に直面しながらも必死に足掻いて見せているのだ。

自分の所為で傷付いた仲間を守る為に、遥か高みに挑む為に、その魂の持ち主は今冒険をしている。魂がより高みへと至る為の偉業へ彼は挑んでいるのだ。

美しい。女神フレイヤから紡がれるのはただそれだけだった。それ以上の言葉は入らないと、それ以外の言葉は入る余地がないと、彼女の視線は終始その魂の持ち主に釘付けとなっていた。

軈て闘争は終わり、彼の少年は全てを出し切った事で意識を失っている。後は側で見守っていたロキ・ファミリアの者達に任せておこう、自分と同様に彼の戦いぶりに見惚れていた彼等ならきっとあの子を無下には扱わないだろうから。

「これで、あの子の魂はより輝きを増していくわね。さて、残る問題は……」

フレイヤがそう口にした途端、彼女の眉間に僅かな皺が寄り、その口元からギリッと音が鳴る。美の女神と称される彼女からしてみ

れば、それは有り得ない――――あってはならない光景だった。
普段は微笑みを絶やさず、見る者全てを魅了し魂まで虜にする彼女が憤怒の形相に満ちている。その尋常ならざる彼女を間近で控えていた筋骨隆々とした男性が隣にまで近寄って跪く。
「フレイヤ様、御用命があれば私が即座に……」
「……ふぅ、少し昂り過ぎたわね。これもあの子の魂の輝きに感化された影響かしら。みっともない所を見せたわ。ごめんなさいねオッタル」
自身の眷族の言葉に我に返ったフレイヤは慈愛の微笑みを浮かべて男に謝罪する。そんな彼女に対し、オッタルと呼ばれた男は「いえ」と即座に且つ短い返事で返す。
男、オッタルは数ある冒険者の中でも頂点として君臨しており、その強さを示す高みは7。文字通りオラリオの中でも唯一と呼ばれる存在だった。
彼が尽くす神は女神フレイヤにおいて他になし。彼女が望む者ならばどんな難行にも偉業にも挑む覚悟がオッタルにはあった。大地を砕けと命じられたら即実行し、ロキ・ファミリアを殲滅せよと命令されたら即命を懸けて吶喊するだろう。
オッタルにとって女神フレイヤは全てである。彼女が煩わしく思う悩みの種があるのならば、即座に駆り立てる準備が彼にはあった。
しかし、フレイヤはそんなオッタルに大丈夫とだけ口にし、彼の昂りを鎮める様にその手をオッタルの肩へと置いた。美女と野獣、正しくその通りな光景。そこにはフレイヤとオッタルにしかない神と眷族の絆があった。
「あの男にはアレンと【炎金の四戦士】を向かわせたわ。一先ずはあの子達が帰ってくるのを待ちましょう」
「御意に」
女神フレイヤが疎ましく思う男へ送ったのはＬｖ６とＬｖ５の何れも最強クラスの戦士達、オッタル同様女神フレイヤに絶対な忠誠を誓う彼等は女神フレイヤのお願いに応え即実行に移し、男へ強襲している。

本来なら側に控えているダークエルフ達も主神の願いに応えたかっただろうが、自分達には女神を守護するという使命がある。オッタルがいれば大丈夫という甘い考えを抱く様な者はこの場にはいない。

しかし、彼等の関心は既にアレン達が戻ってその報告を耳にする事だけにあった。相手は随分と腕が立つ人間だと聞いているが、それでもそれは〝恩恵なしにしては〟の話である。迷宮都市の中でも指折りの実力者である彼等が相手では、きっと一分も保たないだろう。

男に対する同情は無かった。女神の機嫌を損ねたその男こそが元凶なのだから、故にオッタルを含めた女神フレイヤを守護する彼等は気付かなかった。

「その必要はありませんよ」

穿たれた空間の孔から、仮面を被った魔人が現れた事に。

時が止まった様だった。いる筈の無い人間、何故此処にいるのか、どうやって此処へ来たのか、混乱する思考が頭の中で巡り、都市最強派閥の面々の動きを阻害していく。

唯一反応し、女神を庇うように動けたのはオッタルのみだった。自分の使命は女神を守護する事、ただそれだけを頭に入れていた彼だからこそ動けた。目の前にいるのは嘗て無い敵だと。

オッタルは背にした大剣ではなく、その鍛え上げた肉体による突撃を選択した。躊躇などしない、出来る相手ではない。仮面を被り素性は明らかではないが、タイミングで言えばこの仮面の男は先程主神が口にしていた者と同一人物で間違いはない。

アレンと炎金の四戦士（ブリンガル）が出張ったと言うのに、この男はここへやって来た。つまりはそういうことだ。オッタルは出し惜しみをせず、ありったけの力を込めて仮面の男に体当たりを見舞う。この男を女神フレイヤから可能な限り遠ざける為に、――しかし。

「失礼」

瞬間、男は腕を横へ凪ぎ、飛び出したオッタルを包み込む様に異空間を広げた。咄嗟に拘わらず回避行動に移るオッタルだが、其処にも既にワームホールは広げられており、迷宮都市最強の戦士は声を上

げる間もなく姿を消した。
　残る二人のエルフ達も呆けた間にワームホールで転送、意識外からの強襲により迷宮都市最強の派閥は音もなく主神の目の前で姿を消した。
　気が付けば、自身が誇り、自慢だった精鋭達が音もなく消え去った事に、彼女が理解して驚愕したのは事が終わって数秒後だった。
「さて一応お尋ねしますが、貴女がフレイヤ・ファミリアの主神で間違いありませんね」
「……ええ、そうね。そう言う貴方は最近迷宮都市へやって来た異邦人の人間で合ってるかしら？」
「ええ、合っていますよ」
　そう言って男は仮面に手を伸ばし、それを外す。カシュッと独特の音を出して外された仮面の中から露になるのは紫炎の髪を揺らす男性だった。
「自己紹介は必要ですかね？」
「ええ、お願いしようかしら」
「では、改めまして。――俺の名前はシュウジ＝シラカワ、先日からここ迷宮都市で世話になっているしがない旅人だ。そんな俺がどうしてここにいるのか、もう分かってるよな？」
「フフ、怖い顔。でも中々端整な顔をしてるのね。もう少し近くで見せてくれないかしら」
　怒り心頭なシュウジに対して、女神には余裕の笑みが浮かんでいる。目の前の彼がどうして怒っているのか分かっている癖に、この女神は敢えて彼の下へと歩み寄った。
　自分は美の女神。様々な神々の中で唯一許された美しさの化身、その自分の前ではあらゆる異性は屈するモノだと自負していた。神の力など無くとも万人の多くは自分の美しさの前にひれ伏す事になる。
　要約すれば、フレイヤは神であると同時に女でもあった。浅ましいだろう、疎まれるだろう、だがそれでも女神は己の女としての部分を否定したりはしない。美の女神は美しさの化身であると同時に女の

最たる具現者でもあったから。
　挙動の一つで女神は全てを魅了する。整った顔と肢体、その全てが黄金の比率で完成された女神が一歩ずつシュウジへと近付いていく。
　軈て、二人の間の距離は口付けが可能な程に近付いていく。
「ふふ、照れてるのかしら？　　凄い力の持ち主なのに……意外と初心なのね」
「……」
「でも、貴方に私の寵愛を授ける訳にはいかないわ。貴方はあの子の輝きを引き出してくれているけど、同時にあの子の全てを喰らい尽くす危険性を孕んでいるの、残念ながらね」
　女神フレイヤはその眼で人間達の嘘だけでなく、その魂すらも見透していてその対象はシュウジにも及んだ。
　彼女が眼にしたシュウジの魂、それは全くの〝未知〟であった。彼女が愛おしくて止まないベル＝クラネルとは似ても似つかない極限の魂。
　分からない。そう、未知という言葉から察する通りフレイヤにはシュウジの魂が分からないのだ。何せ、他の魂とは比較にならないほど巨大なのだから。
　その大きさも漠然としていて分からない。ただ一つ言えることはこの男が何かを成す時、彼に巻き込まれた者は多大な被害を及ぼすのだから。
　それはオラリオよりも巨大な怪物が、市内を探索するようなモノ、子供の様にはしゃいで、騒ぐだけで迷宮都市を蹂躙する傍迷惑な存在。それが女神フレイヤから見たシュウジの正体だった。
　そんな馬鹿げた存在が、自分が愛でるベル＝クラネルに近付いている。目障りという表現でさえ、今となったら足りなかったとフレイヤは思う。
「だからね、貴方には消えて貰いたいの。誰にも悟らせず、誰の記憶にも残らない様に」
　甘い声でフレイヤは囁く。お前はこの街には必要ないと、女神と

しての自身をフル活用しながらシュウジの耳元で囁く彼女が手応えありと改めて彼の顔を見ようとした時。
「言いたい事はそれだけか？」
「へ？　フギュッ!?」
女神の鼻に二本の指が突入した。
「確かに、俺は傍迷惑な人間なんだろう。現に俺はこれ迄沢山の人達に迷惑を掛けてきた」
シュウジが思い返すのはソーマ＝ファミリアの面々、この街に来たばかりの頃にはリリルカを始めとした彼等に自分の我が儘に随分振り回してきた。彼等のレベルが上がればと思い、５０～５８階層への連続タイムアタックを行ったりした。今思えばあの時の彼等の鼓舞するような雄叫びは必死に命を繋ぎ止める悲鳴だったのかもしれない。
善意の押し付けは、度が過ぎれば悪意にも勝る。以前、ある反逆皇子が口にしていた似たような言葉を思い出す。嗚呼、確かにシュウジがしてきた事は余計な善意だったのかもしれない。
しかし。
「けどな、それでも彼等は俺に言ってくれた。ありがとうってな」
長い間レベルアップも出来ず、底辺で燻っていた自分達が漸く前に進めた。今までの酔いが醒めた気分だ。ソーマ＝ファミリアの全容を知らないから、その言葉にどれだけの意味が込められているのかはシュウジには分からない。
だが、シュウジと出会った事で無理矢理に死地を体験し、生き延びたソーマ＝ファミリアの眷族達はその性根を破壊し尽くされ、月並みな言葉だが改心した。これ迄心を荒んでいたリリルカも言葉にこそしてはいないが、それでも自身を囲む環境を変えてくれたシュウジには感謝している。
シュウジには人の気持ちは分からない。ハッキリと言葉にしなければ伝わらないし、指摘する者もいないから直しようがない。けれど、だからこそ言われた言葉は大事にするのだ。彼等の口にしたありがとうという感謝の言葉を。

「俺はただ、そんな彼等に恥ずかしくない自分でいたいだけだ」
　フンッと軽く腕を奮い、女神を投げ飛ばす。
「今日はベル君との特訓でいい気分だったからな。お前の眷族達の献身を含めて今回はこれで終わりにしてやる」
「だが、次はないからな」
　シュウジは思い知る。自分の強引さと善意の押し付けに、今回の女神フレイヤからの強襲はそれらを知る良い機会だったのかもしれない。
　だけどそれはそれ、キッチリ落とし前を付けたシュウジは鼻を大きく開かせて気絶する女神に言いたいことを言い放つと、彼女のプライベートルームから姿を消すのだった。
　――――尚、数日後突然オラリオの外側からやって来たオッタルを始めとしたフレイヤ・ファミリアの面々に都市は何事かと大いに騒ぎ立つ事になり、更には鼻を物理的に整形されて当分治りそうにない事から部屋に引き篭もる様になった鼻の女神もとい、美の女神フレイヤの存在も知り渡り迷宮都市が騒然となるのはこの時誰も予想出来なかった。
　そして、この騒動を機に複数の派閥が動き出す。闇に蠢く者、下克上を狙う者、様々な野心野望を抱く人間と神々。
　迷宮都市オラリオ、激動の日々はこれから始まり……。
「ベル＝クラネルとシュウジ＝シラカワか、良いね。彼等はこのアポロンが戴くとしよう」
　そしてその第一幕が、もう間もなく開かれようとしていた。

その9

@月@日

ここ最近自己嫌悪で凹んでいた為書いて来なかったが、今回ベル君にお祝いの席に招待されている為、これではいけないと自分を奮起させ、ここ暫くの出来事を書いていこうと思う。

まずベル君のレベルが上がった。これがあの某冒険ゲームだったら心地よい音楽が流れていそうだが、現実はそんなに甘くはなく実際に彼は死ぬ思いをしてきた。

詳しくは分からないが、本来中層に生息している筈のミノタウロスが上層に出てくるのはほぼ有り得ないとされており、ベル君が何故ミノタウロスと遭遇したのは未だにハッキリしていない。

恐らくは、あのフレイヤとかいう女神の差し金だろう。あの女の眷族であるオッタルが中層で何かしていたという目撃情報があったのは知ってたし、多分奴はオッタルに鍛え上げられたミノタウロスを当て馬としてベル君にぶつけたのだろう。

その目的はレベルアップ、数多くの冒険者達が挑んでいる己の限界突破、魂をより上位に昇華させ、更なる強さを得るための儀式。

困難を乗り越えて偉業となる。恐らくはあの女神はトラウマだったミノタウロスをベル君に超えさせ、それを偉業としてレベルアップを図ったのだろう。結果は見事奴の目論見通り、ベル君はミノタウロスを打ち倒し、見事レベルアップを果たして見せた。

なんというマッチポンプ。人が知ればヤラセとかインチキと揶揄しそうな話だが、正直な話それを聞いて自分は然程それが悪いことだとは思えなかった。

ベル君は自分が強くなる事を望んでいた。追い付きたい高みがあるからと、その為にはどんな困難にも挑む決意と覚悟があった。

だから俺も思った。今のベル君ならミノタウロスをぶつけてみて

も構わないだろう、と。ミノタウロスと出会った事で彼の心にトラウマが刻まれた。ならばそのトラウマを乗り越えれば彼は彼の目指す高みへ一歩近付いていけるのではないかと。

余計な算段は無かった。ベル君は頑張り屋さんだし、それ位のお節介はしてもいいかなーなんて考えていた。

でも、違う。困難は用意されるモノではない。用意された困難は単なる試練に過ぎない。困難とは降り注がれる自然の災厄であり、偉業とはそれを乗り越えた者に送られる最大の賛辞だ。

そもそも、人を死地に送り出そうという発想自体が間違っている。その事を思い知らされた事と自分があの女神と同じ事を考えていた事実に酷くショックを受けた自分は、その日1日は新居の布団の中で丸まりひたすら自己嫌悪していた。

それからウダウダと自己嫌悪に浸り続けて数日後、仲間と共にパーティーを組んでダンジョンに挑んでいたベル君達が音信不通という事で女神ヘスティアからクエストが発注された。

当然、自分もそのクエストに参加しようとしたのだが、恩恵を受けていない自分では行ける訳もなく、受付の人の却下という一言により沈む事になる。仕方がないので蒼のカリスマとして動く事にして、自分はヘスティア達とは別に個人でベル君達を探索する事にした。

結果的に言えばベル君達は無事に保護された。18階層という安全階層に辿り着き、ロキ・ファミリアの保護の下で何とか元気に過ごしていた。その後も後からやって来たヘスティア達もベル君達と合流し、和気藹々としている所を遠巻きに見守る事にした自分は、取り敢えずリヴィラの宿で落ち着く事にした。

それで翌日、下手にベル君達とは干渉せずにいた自分だが、ここで不味い事態が発生した。ベル君の比較的早いレベルアップに面白くなく思っていた一部の粗暴な冒険者達がヘスティアを人質にしてベル君を窮地に追いやったのだ。

一瞬ヘスティアは見捨てようとも考えたけど、ベル君の事を考えると流石に見過ごす事も出来ないのでヘスティアの方には自分が向かい、縄で身動きを封じられていた彼女を解放させた。その際自分の事

について訊ねようとしたが、眷族は放っておいて良いのかと告げてその場を後にした。
　そしてベル君はベル君で魔法のアイテムで姿を消していた荒くれ者の位置を自力で見切り、逆転勝ちを納めていた。自分が教えていた姿の見えない相手の対処法をちゃんと覚えていた様で安心したのも束の間、仲間の一人が返り討ちに遭った事により不満を爆発させた冒険者達が一斉にベル君達に襲い掛かってきたのだ。
　ベル君の仲間達と荒くれ者達の大乱戦、戦況はリューちゃんがいるベル君側に傾きつつあるが、相手は数で押し潰そうとしてくる。このままではどちらも唯では済まない事態に成り得る――という所で、彼女が現れた。
　女神ヘスティア。普段とは違う神々しい雰囲気を纏っているのは彼女が神の力（アルカナム）を解放させたからだろう。神の力を発現させた彼女の前に荒くれ者達は蜘蛛の子を散らすが如く逃げていった。
……何というか、初めて神を神として感心した気がする。自分の眷族の為に本来なら固く禁じられている神の力を使ってまでベル君を助けようとする彼女に自分は初めて彼女の事を認めた気がした。
　神と言っても、やはり一人一人違うんだって改めて知った気がした。邪神の様な神もいればヘスティアの様な神もいるのだと。……今まで神と名乗る連中に録な奴がいなかったけど、うん。凄く、すごーく納得がいかないし、ひじょーに業腹だがその認識は改めた方が良いのかもしれない。
　でも、そんな自分の反省も束の間、ヘスティアの神威に反応したのか上層にいた階層主の巨人がいきなり天井を突き破って降ってきたのだ。やっぱ神って余計な事しかしねぇな！
　と、まぁそんな訳で自分はゴライアスの所為で塞がれてしまった出口を直したり、冒険者に襲い掛かるモンスターを処理したり、その最中に自分を窮地に追いやった荒くれ者達を助けるベル君に感心したり、マスクしててもバレバレなリューちゃんと一緒にモンスターを処理していたり、目があったアーデちゃんに手を振ったりしていた。
　ゴライアスの方は荒くれ者達とベル君達が協力してこれを撃破、相

変わらず余計な仕事を増やす女神ヘスティアだが、彼女の眷族に対する想いの深さに免じて、余計な口出しをしないでおくことにした。
但しヘルメス、テメーはダメだ。そもそも荒くれ者達に余計な口出しと魔法のアイテムを授けたのはコイツで、荒くれ者達はその口車に乗った程度、荒くれ者達にも当然非はあるが、ゴライアスを討伐したあとはベル君に素っ気なくはあるが礼と謝罪を口にしていたから自分も気にしない事にしているが、コイツはどう考えてもギルティである。
ベル君がゴライアスに止めを差している事にやたら興奮しているようだが、そんな奴を正面から鼻フックで吊し上げ、振りかぶって適当な所にぶん投げておいた。神をダンジョン内で放り投げるのはどうかと思うかもしれないが、奴にはアスフィーちゃんという健気な眷族がいるのでまぁ大丈夫だろう。
そんな訳でこれ迄の自分の悪いところとここ数日の出来事を書き記した訳だが、取り敢えずはこんな所だろう。自分の悪い所、良ければという押し付けをせず、まずは相手の気持ちを知ることから始めよう。俺は神ではなくベル君達と同じ人間なのだから。
あ、でも明日の宴には参加出来ないことだけはベル君に伝えないとな、確か神の宴だっけ？　今回は太陽神アポロンが主催するみたいだけど……。
ジャガ丸屋台で臨時に出る様になったんだよね。店長には今住んでいる家の紹介とかしてもらったし、世話になっているから余り断りたくないんだよね。
まぁ、ベル君なら分かってくれるだろ。女神ヘスティアも彼と二人でデートに行けるんだから、そんなに口うるさく言ってこないだろ。問題は自分にまで誘ってきたアポロンだが……うん、大丈夫だろ。
太陽神なんだから太陽の如く明るい神格者かもしれないし、俺のところの神話ではアレだったけどこの世界でもそうだとは限らない。宴の誘いを断った事を謝罪するのは次の日辺りでもいいだろう。
うん、そうしよう。

◇

――――燃えていた。

ジャガ丸屋台の店長の紹介で住むようになったこの世界でのマイハウス。埃まみれで、掃除するのが結構大変だったけど、意外と住み心地がよくてこれからの生活が楽しみになってきた家。

どんな風に彩ろうか、どんな風に飾り立てて、改装してみようか。ワクワクと年甲斐もなく楽しみにしていたのに、何故かその家は今ゴウゴウと音を立てて燃え上がっている。

「貴様が悪いのだ」

横から、聞きなれない男の声が聞こえる。

「貴様がアポロン様の寵愛を断り、無下にしたから神罰が下ったのだ」

「ヒュアキントス、此方の方も終わったぞ」

「分かった。……精々、自分の愚行を呪うがいい」

そんな台詞を吐き捨てて、アポロン・ファミリアの面々は去っていく。

彼は、ヒュアキントスは気付かない。自分が一体誰に喧嘩を売ったのかを。

ヒュアキントスは気付かない。今まで燃え上がる家を眺めていた男の目が、感情を失ったその目で彼等の背中をジッ見ていた事に。

――――後に、ヘスティア・ファミリアとアポロン・ファミリアによる戦争遊戯（ウォーゲーム）が起こり、そこへある仮面の男が参加し。

オラリオは今までにない危機感に襲われるのだった。

尚、戦争遊戯までの数日間、ある予知夢の少女が嘗てない悪夢に正気を失い掛けたりしたという。

その10

――――戦争遊戯（ウォーゲーム）。

それは、娯楽好きな神々によって行われる派閥（ファミリア）同士に起きる代理戦争。神が他の神に自らの要望をぶつける為に行われる迷宮都市公認の決闘システム。そしてそれは退屈が嫌いで娯楽が何よりも好きな神々にとって最高の余興の一つでもあった。

今日はヘスティア・ファミリアとアポロン・ファミリアとの戦争の日、朝日が迷宮都市オラリオを照らす中、市街壁の上にて一人の少年と二人の少女達が対面していた。

「アイズさん、ティオナさん、今日まで本当に……ありがとうございました！」

二人の少女に向けて深々と頭を下げるのはヘスティア・ファミリアの唯一の団員であるベル・クラネル、自分の為に今日まで鍛えてくれた二人にベルは最大の感謝を示した。

そんなベルにロキ・ファミリアの一級冒険者、アマゾネスの少女ティオナはニッコリと笑みを浮かべる。

「だからぁ～、気にしなくっていいってば～、アルゴノゥト君は本当に律儀だな～」

「でも、二人のお陰で僕は……」

「私達は、私達がそうしたいたから君を鍛えた。だから気にしなくていい」

「アイズさん……」

「でも、それでも君が納得出来ないと言うのなら、今日の戦争遊戯で見せてほしい。君の頑張りを、君がこれ迄培ってきた全てを、私に見せてほしい」

アイズは知りたかった。急速に成長していくベルの強さに、まるでお伽噺の英雄の様に強く、逞しく、それでいて純粋なままでいられる彼の強さの秘訣を。

裏があるようで気が引けた。でも、それでもアイズは誰かの為に強くなれるベル・クラネルに自分でも理解できない感情に逆らうことは出来なかった。
だから、今日の戦争遊戯で君の全てを見せてほしい。あの日あの時、ミノタウロスを倒して見せた目の前の少年の強さを、アイズはもう一度見てみたかった。
そんなアイズの言葉にベルは「はい！」と力強く返事を返すと、もう一度深く頭を下げて決戦の地に向けて走っていく。瞬く間に小さくなっていく少年の背中、それを少し寂しく思いながらも二人の少女は見送った。
「彼、勝てるかな」
「一対一なら、彼の強さはもうＬｖ２の範疇には収まらない」
ティオナの言葉にアイズはアッサリと応える。そう、ここ数日の中で二人に手解きを受けたベルは驚異的な速度でその強さを増していった。ティオナに叩かれれば叩かれるほど、ベルは打たれ強さと回避能力を増していき、アイズに扱かれればされるほど彼の身体能力は上がっていた。
戦い方次第なら、きっとベルはＬｖ３にも勝って見せる。二度も敗北したというヒュアキントスというアポロン・ファミリアのエースにもきっと負けないだろう。……そう、一対一の戦いなら　。
「それにしても酷いよ、女神ヘスティアのファミリアってあの子一人だけなのに、どうして他の神々はあんなルールに納得しちゃったのさ」
「……」
表情を暗くさせ、俯いてしまうティオナにアイズはなにも言えなかった。アポロンとヘスティア、この両名が行われる戦争遊戯のルールは唯一つ。
殲滅戦である。攻城戦ではなく、一騎討ちでもない、双方どちらかのファミリアが全員戦闘不能になるまで戦い合う戦争遊戯最大の種目。
ヘスティア・ファミリアとアポロン・ファミリア、両派閥の戦力は

圧倒的。多くの眷族達を抱えるアポロンの派閥にヘスティア達が勝てる見込みはほぼゼロに等しかった。
故に、二人は訝しむ。娯楽好きとして知られる神々がどうしてそんな分かりきった戦争の内容にしたのか、ティオナは憤った。納得いかないと、だったら自分もヘスティア・ファミリアに協力者として参加してやると、己の主神であるロキに直談判した。
返ってきたのは却下の一言、色々腹黒い所はあるが、それでも善良な神として知ってきた己の主神の薄情さにティオナは益々憤りを覚えたが、次に出てきたロキの意味深な言葉にその怒りは急速に萎えていく。
『もしかしたらこの戦争遊戯、何か裏があるやもしれん』
どういう事かと訊ねても詳しくは分からないというロキ、しかし彼女が口から出てきた神の名前にティオナはおろかロキ・ファミリア全員が戸惑い、困惑した。
大神ウラノス。迷宮都市オラリオの中でもギルド創設の神として知られる神が、神会（デナトゥス）の時に今回の戦争遊戯の種目を殲滅戦に変えろと訴えてきたのだ。まさかの大神からの介入にヘスティアだけでなくアポロンまでもが驚愕した。
一切の弁明も弁解もせず、ただそうしろと命じてくるウラノスにヘスティアは怒りアポロンは嗤った。決まり切った勝敗の行方に神々は詰まらなそうにしているが、迷宮都市の元締めであるウラノスに異を唱える神々は少ない。
一方で他の知略に長けた神々はウラノスの様子を訝しんでいた。普段はギルドの祭壇の奥に引っ込んでいるウラノスが、声だけとはいえ介入してきたのか、それも派閥同士の抗争にまで首を突っ込んでくるのは嘗てない程だ。
最近では自分達に匹敵するファミリアの主神であるフレイヤが本拠地の奥で引きこもっていると聞くし、最近のオラリオの異様な動きに注視していたロキは今回の戦争遊戯で何かが起きるかもしれないと睨んでいる。
故にロキは事の成り行きが収まるまで静観してほしいと眷族達

に言い渡した。ティオナも事が終わればベル＝クラネルの奪還に協力するという主神の約束に納得し、取り敢えず今回の戦争遊戯が終わるまで大人しくする事にしてきた。
「……今は、信じよう。あの子を、ベル＝クラネルを」
「アイズ、うん。そうだね」
　いくら考えても分からないなら、今はこれから戦う彼の力を信じよう。それに、きっと大丈夫。これまで繋いできた彼等の絆はきっとベルの力になってくれる。アイズは根拠の無い自信を、しかし確信をもって信じていた。
　ただ、一つ分からない事といえば。
（そう言えば彼の師匠、結局来なかったな）
　ベル＝クラネルを最初に鍛えたという人物、彼がついぞ今日まで姿を見せなかった事にアイズは不思議に思うのだった。

◇

「それではソーマ様、今までお世話になりました」
「あぁ」
　ソーマ・ファミリアの本拠地（ホーム）、その最奥にて寝れた男神とサポーターの少女が互いに正座して向き合っている。
　リリルカ＝アーデは本日を以て団から脱退する。何故なら今日は自分が惚れた男の最大最悪の危機を迎える日、自分の為に体を張ってミノタウロスから守ってくれた少年に少しでも恩を返す為、彼女は自らの意思でソーマ・ファミリアから抜け出す事を決めた。
　思えば、自分もあの時ミノタウロスに立ち向かえば良かったのかもしれない。あの仮面の魔人の無理矢理過ぎる強行軍（デスマーチ）によってリリ

ルカ＝アーデのレベルはギルドに報告しているモノよりも上回っている。単純なステイタスならば彼の足手まといにはならなかった筈だ。

それなのに出来なかったのは自分が何も出来ないサポーターと偽り、ミノタウロスを前に竦む彼を庇ってモンスターの攻撃を直撃してしまったから。大怪我をした自分に、泣きながら呼び掛けてくれた彼の顔が今でも脳裏に焼き付いて離れない。

彼に無用な疵を付けてしまった。その侘びと恩を返す為、リリルカはソーマ・ファミリアから離れ、ヘスティア・ファミリアに改宗（コンバート）する事を決めたのだ。

既にギルドには話を通し、支払うべき罰金（ペナルティ）も済んだ。戦争遊戯が始まる頃には正式な形として発表されるだろう。後顧の憂いは無い、あるとすれば今までレベルを偽ってきた事に対するリリルカ自身の負い目だけだろう。

しかし、これは自分の問題だ。この数日の自身への問答で答えは出たし、後は彼に本当の事を正直に話すだけだ。彼にどんな風に思われても、口にされても、その全てを受け止める覚悟は既に出来ていた。

真っ直ぐに見つめてくる自らの眷族にソーマは嬉しく思い、そして後悔した。もっと早く眷族の皆と向き合っていれば、酒などに拘らずに己自身の力でファミリアを支えていれば良かったと、ソーマは酷く後悔した。

今日、自分のファミリアから一人の冒険者が飛び立つ。その事を阻んではならないと、ソーマもまた見届ける覚悟を決めた。

「リリ、君には随分酷い仕打ちをした。主神として何もせず、ただ己の趣味に没頭する毎日。許せないと思う。憎む気持ちもあるだろう、私にはそれら全てを受け止める責任がある」

「そうですね。確かにリリにはあなた様を恨んでいました。神なのになにもしない貴方を、超越存在（デウスデア）なのに眷族に向き合わない貴方を、誰よりも憎み、恨みました」

「……」

「ですが、今はそれだけではありません。随分と遅くはなりましたけ

ど、主神様は改心し自分なりにもう一度ファミリアの皆さんと向き合う様になりました。正直に言えばもっと早くそうして欲しかったですけど、取り敢えずリリはそれで納得しています。アレから団の皆さんも雰囲気が変わりましたし、リリに頭を下げて謝ってくださいました。私も人様には言えない汚いことをしてきましたし、これでおあいこって事で受け止めています」

「そうか」

優しく、ニンマリと頬笑む彼女に主神であるソーマも笑みを溢す。少しの後悔を胸に抱きながら、ソーマはリリルカ＝アーデの脱退を認めた。

「ではリリルカ＝アーデ、これ迄派閥（ファミリア）に貢献してくれた礼とこれからの餞別に、少ないけどこれを渡そう」

「あ、いりません結構です。それではリリはこれで失礼しますね」

横にあった小包をソーマが出そうとした時、リリルカ＝アーデは早々と別れの言葉を口にして立ちあがり、本拠地を後にしようとした。そんな彼女を逃がすまいと、主神と側に控えていた団長ザニスが彼女の足に飛び付いてきた。

「逃げんなよぉぉぉ、逃げんなよぉぉぉっ!!」

「ほら、これあげるから！　このドロップアイテムあげるから！

向こうの皆の役にきっと立てるから！」

「えぇい！　鬱陶しいですね！　そんなのは要らないとリリずっと言ってたじゃないですか！　リリはもう清い体に戻ったんです！　ギルドにお金を払ったお陰で！」

泣きながら縋り付くようにリリルカの脚に引っ付いてくる団長と主神、その悍ましくもシュールな光景に団長の秘書役である少年はアチャーと天を仰いだ。

先程までのしんみりとした雰囲気は何だったのか、もうなんだか色々と台無しである。

「自分だけ楽になって、私知ってるんだからね！　自分の負債の払拭の為に自分のドロップアイテムまで市場に売りに出したって！

お陰で都市の業者の一部の人達から時折凄い目で見られてるんだ

からね！」
「何ですか、またリリルカに罰金を支払えって言うんですか!?」
「要らねぇぇんだよぉぉぉっ！　もう金なんて要らねぇんだよぉぉぉぉ!!　何だよ幾ら使っても減らない金って!?　アポロン・ファミリアから誘われてた謀りを断った代わりに多額の金を払ったのに２割も減らないってどういう事ぉぉぉ!?　て言うかお前が市場にあのドロップアイテムを売った事によって更にお金が増えたんですけどぉぉぉ!?」
　ソーマ・ファミリアは現在、嘗てない資金に恵まれている。それはもう団員全員が生涯遊び倒しても使いきれない資金がソーマ・ファミリアの地下に眠っている。以前ある仮面の男と深層５０～５８階層の連続タイムアタックというふざけた蛮行の所為で、団の懐事情は嘘の様に潤っている。いや、潤い過ぎて沈没しそうですらある。
　ならば使えばいい。死ぬほど使って豪遊すればいいと誰もが思うだろう。しかしここは迷宮都市オラリオ、世界の中心とも言われる場所で、物価の流通や金の流れをどこよりも先に感知できる場所である。
　ほんの少し前まで中小派閥でしかなかったファミリアが、団員のレベルは勿論金銭事情まで別となっていると知られたら、ギルドの追求は勿論他の派閥からの追求も逃れられないだろう。仮に罰金（ペナルティ）として蓄えの全てを支払ったとしても、噂を聞き付けたあの仮面の魔人がきっと再びやって来るのだ。
『大丈夫ですか？　良ければもう一度私の依頼を受けてみませんか？　今度はそうですね……一気に７０階層辺りまで行ってみましょうか？』
「逝きたくないよぉぉぉっ！　私はまだ生きていたいよぉぉぉっ!!」
「良い大人が号泣しないでくださいよ！　て言うかアンタそんな人間じゃなかったでしょ!?　あぁもう！　脚に鼻水を着けないでください！」
　仮に全ての金を支払っても、ソーマ・ファミリアにはまだドロッ

プアイテムが残されている。しかも此方も金銭同様凄まじい数を誇り、鍛冶師が見たら仰天して飛び付く程の品が本拠地の地下(二階)に眠っている。

しかも中にはこれまでギルドの報告にすら上がっていない希少なモノがゴッソリあったりする。何だよ崩壊竜の天鱗って？　何ですか極翔竜の宝玉って？　なんで強竜(カドモス)の体液が虹色に光ってんの？　え？　滅多に拝めないレアアイテム？　いらねぇよバカ野郎。

もしこれ等の品が表に知られればどうなるか……その事を恐れたソーマ・ファミリアの団長とその主神はずっとその事で頭を悩まし続けていた。

だからせめて、せめてその数を少なくしようと派閥から脱退するリリルカにレアなドロップアイテムを渡そうとした。後はどうにでも好きにして良いから、何なら捨ててもいいからと、懇願染みた言葉を添えて。

「立つ鳥跡を濁さずって言葉を知らないんですか!?」

「濁していけよぉぉ！　濁していけよぉぉ!!」

以前、その仮面の男を誑し込めようとソーマの酒を呑ませた事があった。神々すら魅了するソーマの神酒の完成品を、団員達が求めて止まない一度飲めば中毒必須のソーマを仮面の男に渡した事がある。

そんな人間にとっては毒でしかない神の酒を、この男は〝普通〟で済ませてしまったのだ。仮面の奥から垣間見た正気の保った奴の眼を見て、ザニスがはこの時心の根っこからポッキリ折れてしまった。

以降、ザニス及びソーマ・ファミリアは仮面の男の言葉に逆らえないでいる。ソーマの神酒を呑んでおいて普通で済ませる化け物に、どうして抗えるのだろうか。今後も増える心労を少しでも減らす為、彼等はリリルカに縋り付いてみせた。

そんな彼等の懇願に遂に折れてしまったリリルカは渡されたアイテムの半分を受け取る事で納得してもらい、無事ソーマ・ファミリアから脱退した。

外では既に自分を待っていた仲間達がいる。恐らく中で騒動が聞

こえていたのか、その表情は困惑で満ちていた。
「お、おい。大丈夫なのかリリ助、なんか凄い騒ぎだったけど？」
「大丈夫です。問題ありません。さ、リリ達も急ぎましょう」
「お、おう」
　達観した顔のリリルカに突っ込む事を止めたヴェルフは、先行く彼女を追ってベルの元へ急ぐのだった。
　Ｌｖ３。リリルカ＝アーデ、出陣。

◇

　晴天、見惚れるほどの大空と目映いまでの太陽が照らす天の下で、太陽神アポロンは手にした赤ワインを片手に悦に入った笑みを浮かべている。
　彼の眼下に広がるのは広大な草原、その向こうには自分が今いる場所と同じ古城がひっそりと建っている。これから始まる戦争遊戯、そこで行われる蹂躙劇を脳裏に浮かび、自身の決まった未来に笑いを堪えるので必死だった。
「戦力は圧倒的、数も質もヘスティアの所とは段違い。加えて此方にはソーマ・ファミリアから徴収した資金によって魔剣も団員全員に装備させている。最早、この戦いは始まる前から終わっているな。ウラノスには感謝しておくか」
　月桂樹の冠を弄りながら、愉悦にそう溢すアポロン。何故あの大神が神会に介入したのかは知らないが、あの神が殲滅戦を提案したのとロキが口出しをしなかったお陰で、全ては自分の望む……いや、それ以上の展開となった、

ただ一つ我が儘を言うのならば、向こう側にアポロンのもう一つの狙いである彼がいないこと。まぁ神の恩恵を受けていないことを考えれば此処に来れないのは仕方の無い話ではあるが、それでも自身の眷族達を相手に何処まで戦えるか見てみたかったので、残念と言えば残念な話だ。

更に言えば、ベルを追い詰めるついでに彼の家を燃やしたのも悪手だった。お陰で彼の現在の所在は未だ掴めておらず、彼の下へ直接赴く事が出来なくなってしまった。

(けれど、それも案外悪く無いのかもしれん。家を失い途方にくれた所へ私が慈悲の手を差し伸べれば、案外コロッと落ちるかもしれんしな)

そんな未来を幻視して、アポロンは頬笑む。側に控えているヒュアキントスから、もうじき戦争遊戯が始まるという報告を受けて、かの神の昂りは頂点に達しようとしていた。

「あぁ、もうすぐだ。もうすぐあの光景が手に入る」

思い浮かべるのはあの日、ベルとシュウジが特訓をしていた時の事、偶々朝の散歩に出掛けていたアポロンが偶然目にした眩しい光景。

太陽を背に特訓する二人、その憧憬に手を伸ばし。

「あぁ、私もそこに混ぜておくれ」

もうじき手に入るその光景にアポロンは恍惚としていた。

◇

「みんな、僕達の為に……来てくれて、ありがとう」

今日の為に派閥を抜けてまで駆け付けてくれた戦友達にベルは今一度深々と頭を下げた。
「よせよベル、俺達はもう仲間だ。同じパーティーで同じ死線を潜り、そして生き残った戦友(ダチ)だ。ダチ相手に頭を下げるなんて、無粋な真似は止しておこうぜ」
「ヴェルフ殿のいう通りです。この一年限りではありますが、私もヘスティア・ファミリアの一員、それに何よりあなたには以前お世話になった恩がある。その恩を少しでも返せるのであれば、私はいつでもあなた方の側に馳せ参じます」
「私も、18階層であなたが見せた勇気に報いる為に此処に来ました。故に、貴方が頭を下げる必要はありません。貴方は胸を張って貴方が成すべき事を果たしなさい」
「ヴェルフ、命さん、リューさん……」
今日の為に駆け付けてくれた戦友達、立場もレベルも派閥も越えて、ベル＝クラネルただ一人の為に集まってくれた彼等、これまでの繋がりは決して無駄ではないと知ったベルは、目頭が熱くなるのを覚えた。
「ベル様、リリはベル様に謝らなければなりません」
「リリ？」
「リリは嘘をついていました。自分の我が身可愛さにベル様にレベルを偽り続けてきました」
ある人物のお陰（？）でリリルカ＝アーデは長い間Ｌｖ１から一気に３へと成長させている。本来ならサポーターとしてでなく、ベルと一緒にダンジョンに挑むべきだった。そうしていれば、ミノタウロスを相手に二人で協力して戦うことも出来た筈なのに……。
自責の念に駆られるリリの肩に手を置き、ベルはゆっくりと首を横に振る。
「リリ、それは違うよ。あの時、君が庇って僕を助けてくれた。ミノタウロスに怯えて動けなかった僕を君が身を呈して守ってくれた。君を死なせたくないから戦えた。君がいたから僕はあの時冒険出来た。君にも色々あったかもしれない、けれどあの日あの時、僕がミノタウ

ロスに立ち向かえて打ち勝てたのは、間違いなく君のお陰なんだ」
「ベル様……」
「だから、改めてお願いするよ。リリの……いや、皆の力を僕と神様に貸して欲しい」
　真っ直ぐに。今度は頭を下げず、共に戦う仲間としてベルは皆に頼んだ。力を貸してくれと。そんな彼の言葉にヴェルフ達は即答で応えた。当然だと。
　場の空気が暖まってきた。圧倒的戦力差にも関わらず、ヘスティア・ファミリアの陣営の士気は高まりつつあった。負けない、勝って見せると、そう意気込む彼等の前に。
「遅くなって申し訳ありません」
　そいつは現れた。
「あ、貴方は？」
「こんにちは、そして初めまして　ベル＝クラネル君。私の名前は蒼のカリスマ、我が盟友であるシュウジ＝シラカワの頼みにより、本日は今回の戦争遊戯に参加すべく参上致しました」
「あ、貴方がシュウジさんの言っていた！　は、初めまして、ベル＝クラネルです。今日は宜しくお願いします！」
　いつそこにいたのか、どこから現れたのか、その一切が認識出来ない内に現れた仮面の男にベル達は戸惑いを隠せずにいる。
　助っ人がもう一人来ることはベルから聞いていた。戦友であるベルが信頼する人物の紹介だから然程心配はしていないが、素性を明かさない仮面の男にヴェルフは少し不安を覚えた。
　左を見ればリューと呼ばれる女性が酷く狼狽した様子で目を見開いている。命もヴェルフと同じで、素性を明かさない仮面の男に少しばかり露骨に訝しんでいる。
　そして右にいるリリルカ＝アーデを見れば。
「お、おいリリ助、お前どうしたんだよ」
　光を失った目で乾いた笑みを浮かべるリリルカがいた。
　それぞれの反応を見せているベル＝クラネルのパーティーメンバー、彼等の様子を一瞥した蒼のカリスマは、背後にいるアポロン・

ファミリアの軍勢を見やると、今度は空を仰ぎ見て。
「空は快晴、風も心地よくまさに絶好の戦争日和――――さぁ」
もう間もなく戦争は始まる。どちらか一方が殲滅されるまで続くオラリオ最大の見せ場が。
「恐怖劇（Grand Guignol）を始めよう」
この日、一つの派閥の命運が決まった。

その11

戦争遊戯（ウォーゲーム）が開始され、ヘスティアとアポロン二つの派閥の激闘が始まった。雄叫びを上げ、士気を高めながら突っ込んでくるアポロン・ファミリアの軍勢に対し、ヘスティア・ファミリアの眷族ベル＝クラネルは疾走し、広大な草原の大地を駆けた。

ベルがアポロン・ファミリアへ吶喊を援護するのは、ファミリアの為に魔剣を打つ事を決意したヴェルフ＝クロッゾ、通常の魔術師が放つ魔法よりも強大な魔剣の一撃がアポロン・ファミリアに向けて放たれる。

先手を取れた事で勢いに乗ったベルはそのままアポロン・ファミリアの軍勢に突っ込み、持ち前の敏捷を最大限に活かして撹乱しながら相手冒険者を一人ずつ倒していく。

早くも混戦状態となった戦場、自ら敵派閥の陽動役を担ってくれたベルの負担を、少しでも軽くさせる為、助っ人であるリューと新しくヘスティア・ファミリアの眷族となったリリルカと命が確実にアポロン側の冒険者達を叩いていく。

「ベル様、調子良さそうですね」

「先日までの彼とは明らかに違う。凄い成長速度です」

離れた所で派手に暴れるベルに命は驚愕し、リリルカは安堵する。圧倒的不利な戦力差であるにも関わらず、拮抗以上に戦って見せるベル。体術の技術も底上げされているし、何より二人の一級冒険者によって鍛えられたベルはＬｖ２の域を早くも抜け出せそうになっている。普通に考えれば異常な迄の成長の早さだ。

「成長速度と言えば、貴方の成長速度も異常ですね」

「貴女は……」

囲んできた冒険者達を蹴散らしながら二人に合流したのは、豊穣の女主人の所で働く給人と知られるリュー＝リオンだった。

「貴女もこの間まではＬｖ１だったと聞いています。サポーターとして生きてきた貴方が、どうしていきなりＬｖ３に？」

それは尋問の様な問い詰めではなく、純粋に疑問に思っての質問

だった。今朝方ギルドから発表されたリリルカ＝アーデの異常なランクアップ、これまでＬｖ１だった者が２を飛ばして３に至るなど、普通に考えれば有り得ない話だ。
　しかしリューはそれを追及したりはしない、他人を詮索する資格は自分には無いし、そもそも今は戦いの最中だ。囲みながら襲い掛かる冒険者達を捌いて、ふと思った事をつい口に出してしまった事にリューが反省していると。
「その、言葉にするのは難しくて端的に言うと……まぁ、ちょっと地獄を見てきたとしか言えないですね」
　返されるとは思ってなかった返事にリューは一瞬キョトンとなる。見ると、何かを思い出したのかリリルカの表情から感情が消えていた。静かに、淡々と冒険者達を処理していくリリルカ、その手際はとても鮮やかで、いっそ機械的でもあった。そんなリリルカにリューはちょっぴり引いた。
　一体彼女の身に何が起こったのか、気になるところではあるが、今はそんな事を気にする場合ではない。絶え間なく襲ってくる冒険者達をまとめて一掃するべく、リューは戦いながら魔法の詠唱を開始する。
「そう言えば、あの御仁の姿がさっきから見ていないが、本当に大丈夫なのか？」
　命が語るあの御仁とは蒼のカリスマと名乗る仮面の男、自分達の味方であると豪語しておきながら、今の所活躍している様子は微塵も見えない事に彼女の中の懐疑心が膨らんでいく。
　素顔を隠し名前を偽る。凡そ信頼に足り得る要素が一つもない蒼のカリスマに命はこのままで良いのか迷う。本当にあの男を仲間として認めて良いのか、一体自分達が戦っている間に彼は何をしているのか。
「あぁ、多分命様が考えている様な事は絶対に無いので安心してください」
「アーデ殿？」
　そんな命の疑問の心を両断するかの如く言い切るリリルカ、まる

で彼がどういう人物か知っているかのような口振りに命の動きが止まる。
「あの人は多分、リリ達に見せ場を譲っているのだと思います」
「み、見せ場？」
それは命が思っていたモノとは確かに違っていた。〝見せ場〟だと、自分達が今必死に戦っている様子を見せ場としてあの仮面の男は見ていると。その言い方はまるで、いつでもこの戦争を終わらせる事が出来る様な、そんな風に聞こえてしまう。
「あの人にはリリ達に対する悪意はありませんよ。あるのは底無しの善意だけ、……まぁ、だから怖いんですけどね」
最後だけ小声だったから聞こえなかった。ただ疲れた様に笑うリリルカに命はこれ以上その事を詮索するのはしなかった。これ以上突付けば自分も唯では済まないような、そんな気がして……。
「そんなわけであの人に関する心配事は無いとだけ言っておきます。それよりも私達は私達で、ベル様のお役に立てる事だけを考えましょう」
そう言ってリリルカは命の背後から寄ってきた冒険者に向けて飛び蹴りを放つ。動きを止めてしまったが為に敵に囲まれつつあった。
『ルミノス・ウィンド!!』
遠くで風の矢が冒険者達を蹂躙し、包囲網の一部が瓦解する。この隙を逃す手はないと、二人は並走しながら戦場を駆け巡った。

◇

「ほう、あれが並行詠唱ですか。中々凄いことをしますね、彼女も」
アポロンがいる居城とは対になる城の上層階で、戦場を見下ろしていた仮面の男蒼のカリスマは感心した様に呟く。
並行詠唱とは魔法を覚えた冒険者が技量によって行使する技術、魔法を詠唱する冒険者はその間膨大な魔力をその身に宿らせている為に動きづらく、また失敗すれば魔力爆発という悲惨な結果を生み出してしまう危険性を常に孕んでいる。
そんな詠唱の最中行われる高速戦闘、謂わば爆弾を抱えながら戦闘をするような状態。それでも容易く行えてしまうリューに蒼のカリスマは心の底から感心していた。
「き、君は行かないのかい？」
そんな仮面の男の横でハラハラと眷族達を眺めていたヘスティアが訊ねる。何故君は此処にいるのだと、助けに来てくれたのでは無いのかと、そう暗に聞いてくる女神ヘスティアに蒼のカリスマは一瞥すると、すぐにまた興味を失った様に視線をベル達のいる戦場に向ける。
応えるつもりは無いのだろうか、そう思えるほどの時間が過ぎた時、蒼のカリスマから言葉が漏れる。
「言われなくても、彼等の事は私が責任を以て守りますよ。こう見えて一度交わした約束はなるべく守るよう心掛けていますので」
「そ、そうなんだ。うん、有り難う」
「……」
ヘスティアの礼の言葉にも仮面の男は少しも耳を貸そうとしない。明らかな拒絶した対応、シュウジ以上の神に対する塩対応にヘスティアは無性に泣きたくなった。
「あ、あの……どうして君は今回ワザワザ僕達を助けようと思ったんだい？」
「理由は彼等と合流する際に説明しましたが？」
「あ、うん。そうだったね」
「……」
（か、会話が続かねぇぇぇぇ!!）

戦場で戦うベル達の事も気になるが、隣で立つ仮面の男の存在感にも気になって仕方がない。というか、この男はどうやってアポロン・ファミリアの眷族達を倒すつもりでいるのか、今だって自分の眷族であるベル達が死物狂いで戦って拮抗を維持しているが、それがいつまで続くか分からない。

アポロン・ファミリアの眷族は１００人以上で対するヘスティア・ファミリアの戦力は蒼のカリスマ含めて経ったの６人、その差は以前として埋めがたいモノだ。上位の冒険者であるリューも並行詠唱という切り札を用いて凌いでいるが、彼女の体力にも限りがある。

そんなアポロン・ファミリアの軍勢に果たして彼一人でどうにかなるのだろうか、名前を偽り素性を明かそうとしない彼が、一体どうやって戦うと言うのか。

そんな事を考えている内に草原の大地から爆発音が轟いた。またヴェルフが魔剣を使ったのだろうか？　いや、違う。

（まさか、アポロン・ファミリアにも魔剣が!?）

瞬間、ヘスティアの懸念が的中したかの様に次々と魔剣の光が草原の大地を蹂躙した。凍てつく氷、吹き荒ぶ風、燃え滾る炎、炸裂する爆発、アポロン・ファミリアから放たれる無数の魔剣の力が放たれ、ベル達を圧倒していく。

「ベル君！」

ここからでも見える白髪の少年、自身の最初の眷族であるベルが、魔剣に吹き飛ばされている。傷だらけの体、血は流れ、息も絶え絶えな彼にヘスティアから悲痛な声が溢れた。自分の眷族なのになにもしてやれない、そんな無力感に襲われていた女神ヘスティアに。

「おい、幾つか質問しても良いか？」

隣にいた仮面の男から声を掛けられる。その口調とは先程までとは別人の様に荒っぽく、しかし視線は未だベル＝クラネル達の方へ向いていて、女神であるヘスティアを見ようとしない。

神々を軽視しているどころではない。憎み、蔑んでいるとすら思える仮面の男の態度だが、しかしヘスティアはそれを追及する余裕はなかった。

「お前は、神々は、どうして地上に降りてきた？　モンスター達に蹂躙される人間達を哀れに思ってか？　それとも己の欲求を満たすためか？」
それは、たぶんどちらもそうなのだろう。千年もの昔、神々は地上に降りてきた。モンスター相手に必死に戦う人間達（子供）を見掛けて、気紛れを起こして地上に降り立ち、人間達の味方になる事を決めた。
打算があった。野心もあった。人間達を駒として扱い、玩具の様に弄んできた。でも、その中でも共に生き、一緒に笑って泣いて、その上で生きていくと決めた神々がいるのもまた事実で。
だから……。
「僕は、僕達は、惹かれたんだ。人間に、君達に、絶望を前にしても抗い輝く人の子に」
「……」
「確かに僕達神々は勝手な奴が多い。というか殆どそうだろう。僕もそんな彼等と似たようなモノだったし、現在進行形で眷族の子達に迷惑を掛けている」
「そうだな」
「でも、そんな彼等に報いたい。支えて上げたい、力になってあげたい！　一生懸命に頑張るあの子を、目標に向かって必死になっている彼を、僕は助けたいと思っている。この気持ちも、嘘じゃないんだ！」
「だからお願いだ。君の力を貸して欲しい。僕の為じゃなくていい、彼の、ベル＝クラネルとその仲間達の為に、どうかその力を……！」
そう言ってヘスティアは深々と頭を下げた。自分の為ではなく、眷族の為に助けて欲しい。必死の訴えだった。そんな彼女に対し……。
「……ここで拒否すればそれこそ神々（お前達）と同類になるか。良いだろう、お前の訴えに免じて、私もその気になってやる」
「っ！　あ、ありがとう！　本当にありがとう！」
「礼を言われる筋合いはない。お前も言った筈だ。彼等の為に助けて欲しいと」
「それでも、だよ！」

目尻に涙を浮かべて満面の笑みでそう返すヘスティアに仮面の男からチッと舌打ちをする。やりにくい、そう聞こえないように小声を漏らした蒼のカリスマは右手を前に出すと、そこから一瞬だけワームホールを展開させる。

「そろそろ交代だな」

瞬間、蒼のカリスマの姿は掻き消え、まるで入れ違うかのようにベル達が現れる。何が起きたのか分からないでいるベル達、呆然としている彼等を余所にまさかと思いヘスティアが草原の方へ視線を向けると。

アポロン・ファミリアの軍勢に向けて仮面の男が呑気に闊歩していた。

◇

「……何者だ」

ヒュアキントスは現在この上なく苛立ち、そして憤りを覚えていた。彼が敬愛する太陽の神アポロンの慈悲をはね除け、無下にするベル＝クラネルとその仲間達を漸く制裁を下せると思っていたから。

確かに、ベル＝クラネルは強くなっていた。一週間前に彼等の本拠地を焼いて追い詰めた時に比べれるとまるで別人の様になっていた。他の仲間達も想定していたより強大で、魔剣の一族であるクロッゾとサポーターでしかなかった筈の小人族の女がＬｖ３になっていた事も含めて、全て此方の想定を大きく上回っていた。

だが、戦争とは数である。幾ら高レベル（リューリオン）の冒険者を味方に付けた所で所詮は数人程度の弱小ファミリア、数と金をものに言わせて準備し

てきたアポロン・ファミリアに付け焼き刃の助っ人程度で勝敗が揺らぐ訳がない。
　これが攻城戦、もしくは一騎討ちだったならば結果は変わっていただろう。いや、一騎討ちならばきっとヒュアキントスは負けていた。そう思わせる程、ベル＝クラネルは強くなっていた。
　故に、だからこそ許せない。それだけの強さを彼の……太陽神アポロンの為に尽くさないのか、ヘスティアという女神に拘るベル＝クラネルの思考がヒュアキントスには理解できなかった。
　自分を押し退けてアポロンに愛されておきながら、それでも抗うベルにヒュアキントスは苛立って致し方がなかった。だから、今回の戦争が殲滅戦と聞いたときは喜びと嬉しさでどうにかなりそうだった。
　あの忌ま忌ましい兎の小僧を、アポロン様の愛を受けようとするベル＝クラネルを合法的に痛め付ける事が出来る。痛めて傷付け追い詰めて、何故自分が【太陽の光寵童（ポエブス・アポロ）】と呼ばれているのか、思い知らせてやろう、そうと思っていたのに。
（つくづく、ヘスティア・ファミリアは私を苛立たせてくれる！）
　その整った端整な顔を憤怒に染めてヒュアキントスは悠然と歩み寄ってくる仮面の男を睨み付ける。
「此方の被害は？」
「ぜ、全体の４割近くが戦闘不能に追い詰められましたが、皆まだ戦えます。魔剣の数も十分です」
　しかし、そこは一つの派閥を任された人間。冷静さを装い団の損害を確認する所は伊達に団長を勤めてはいなかった。
「た、ただカサンドラの奴が仕切りに逃げろと言って聞きません」
「構うな、妄言を垂れ流す女の言葉など聞くに値しない」
　戦争遊戯開始と同時に早々に倒されたカサンドラは戦場の邪魔になると今頃はこの舞台の隅で転がされているだろう、予知夢という不確かなモノにすがり、哀れな女というのがヒュアキントスによるカサンドラという少女の評価である。
　聞くに値しないと断じ、ヒュアキントスは一歩前に出る。歩くのを止めてただ此方を見据えるだけの仮面の男にヒュアキントスは乱暴

な口調で問い詰める。
「何者だ貴様、いや。確か蒼のカリスマ等というふざけた奴が参加していたな。貴様がそうか？」
「はい。ご紹介に預かりました蒼のカリスマ、満を持して登場させて戴きました」
　いっそ白々しい程の紳士的な振る舞い、口調は明るく、それでいて不遜な態度の仮面の男にヒュアキントスの怒りのボルテージは更に上昇していく。
「ベル＝クラネル達を何処に隠した？」
「彼等は随分と頑張ってくれたので、今は彼方の城で休ませて戴いております。彼等を倒したくば、先ずは私を片付けてから進むのが宜しいでしょう」
　親指で背後の城を指す蒼のカリスマ、未だ多くの軍勢を有するアポロン・ファミリアを前に大胆にも宣戦布告をする彼にアポロン・ファミリアから多くの笑い声が響いてくる。
　これだけの数を相手に尚平然としていられる豪胆さは認めよう、しかしそれは剰りにも愚かな話だ。現実を正しく認識できていない、そうとしか思えない仮面の男の言動にアポロン側の冒険者達から嘲笑と罵倒の声が溢れてくる。
「ほう？　ならば調度良い。すぐに貴様を下し、早々に奴等を女神諸とも粉砕しよう。これは殲滅戦、奴等の主神を誤って傷付けても誰も責めはしないだろう」
　それは、ヒュアキントスの遠回しな神殺しの発言だった。彼は女神ヘスティアを殺すつもりでいる。アポロンの求愛を無下にし、あまつさえ敵対している彼女はヒュアキントスにとって許されざる存在だ。
　しかし、そんなヒュアキントスの殺気を受けて尚、仮面の男に怯んだ様子はない。その仮面を引き剥がして化けの皮を這い出やろうと全軍に突撃を指示しようとした時。
「あぁ、その前に一つだけお訊ねしても良いですか？　時間は掛けませんので」

「……何だ？」
「いやなに、最後に皆さんには投降をオススメしておこうかと思いまして、もし投降をしていただければ、私が皆様に危害を加えるとこはないと約束しまし――――」
　仮面の男の言葉を最後まで聞く前に、ヒュアキントスは魔剣を放った。聞くに耐えない妄言、現実はおろか自分達すら見えていない狂言。下らない時間を浪費した。あらゆる蔑みを込めて魔剣の炎に包まれた蒼のカリスマを見て。
「これが返答だ下郎。太陽の神の威光をその身に受けて死ね」
　アポロン・ファミリアの団員達から更に罵倒の声が上がる。無様、みっともない、無知蒙昧、ありとあらゆる罵声が飛び交うなか。
「――――そうか、了承した」
　その声はやたら耳に響いてきた。戦場が静まり返った。バカな、そんな筈はない。魔剣の力をマトモに受けて、無事でいられる筈がない。ヒュアキントスをふくめたアポロン・ファミリアの全員が動揺する一方、消えていく煙の中でソイツは佇んでいる。
「ならば此方ももう容赦はしない。――――では、終わりにしようか」
　瞬間、世界が凍り付いた。
「収束されたマイクロブラックホールには、特殊な解が存在する」
　それは詠唱だった。男が言葉の一つを重ねるに連れて、周囲の空間は捻れ、大気は歪み、天の理すら覆い隠していく。
　燦々とした太陽は暗雲に呑み込まれ、戦場は暗闇に包まれていく。ただ事ではない事態を前に、アポロン・ファミリアは言葉を失っている。
　そしてその余波はその戦場に留まらずオラリオ全体に広がっていく。突発的な暴風、大地を揺るがす地震、雷は逆り、あらゆる天災が迷宮都市を覆っていく。
　そして、その中心にいる蒼のカリスマの胸元に一つの黒い球体が精製される。それを目の当たりにした時、アポロン・ファミリアの団員達から笑みが消えた。
「剥き出しの特異点は、時空そのものを蝕むのだ」

「そ、総員魔剣を放て！　あの男に詠唱させるな！　あの球体を射たせるなァァァァあっ!!」
ヒュアキントスの冒険者としての本能が最大の警報を鳴らす。あれを完成させてはならないと、形振り構わず彼は団員達に命令を下す。
その命令に異を唱える者はいなかった。彼等も分かっているのだ。いや、正確には何が起こるかは予想も出来ていない。彼等が全力で一人の男を殺しに掛かろうとするのはただ己が生き残りたいという生存本能に従っての事だった。
全員が魔剣を向ける。雷、氷、風、炎、あらゆる属性の力が一人の男を倒すためにその力を放っていく。
「何人も、重力崩壊からは逃れられん」
重力の渦が形となって荒れ狂う。ただそれだけで降り注がれる魔剣の雨を消し飛ばす。悪夢としか思えない光景に、ヒュアキントス達の表情は凍り付く。
恐怖だ。目の前にあるのはあらゆる災厄を詰め込んだ魔の星だ。具現化した絶望を前に団員達は逃げ出そうとするが……既に遅い。蒼のカリスマが唱えた一節の通り、何人たりとも重力崩壊から逃れる術はない、既に賽は投げられたのだ。
黒いそれが掲げられた時、球体は急激に膨れ上がり、衝撃が戦場を蹂躙した。
「事象の地平に消え去るがいい」
「や、止めろ。止めて……」
それは、誰の懇願だったか。ヒュアキントスの降伏の声か、それとも誰かの命乞いか。はたまた遠巻きで見ていた太陽神の怯えた声だったのか、それはもう定かではない。
「ブラックホールクラスター、発射！」
黒い球体が大地を抉りながら包み込む、地を、空を、アポロン・ファミリアを、彼等の主神がいる居城すらも呑み込んで、黒い球体は天に昇る。
時間の流れが緩やかになった気がした。まるでこの惨状を全ての

神々に見せ付ける様に、黒い球体は徐々に圧縮されていき……。
瞬間、オラリオは白に塗り潰された。
「最初から決まっていた事だ」
音と光で覆われる中、世界と神々は思い知る。蒼のカリスマという魔人の存在を、この日を境に彼等は畏れるようになる。
【魔なる者】、それは娯楽に飢えた神々に恐怖を抱かせた怪物の、最初の二つ名だった。

その12

――アポロン・ファミリアとヘスティア・ファミリアとの戦争遊戯から数日、仮面を被った謎の男蒼のカリスマが放った大魔法の余波を受けた迷宮都市（オラリオ）も多くの冒険者達とギルドの尽力により、オラリオに住む人々は表面上いつもと変わらなく過ごしている。

アポロン・ファミリアに勝利したヘスティア・ファミリアには、勝者への贈呈としてアポロン・ファミリア達が以前使用していた屋敷を手に入れる事になった。最初は自分の力で勝利した訳ではないから、受け取って良いか悩むベルだったが、新しく眷属になった仲間達の今後の住まいを考えると、受け取らない訳には行かず、結局贈呈された屋敷を手に入れる事になった。

しかし、ただ荷物を移動するだけでは味気がない。太陽の神と彼の多くの眷族達がああなってしまったし、気持ちや厄祓いの意味を込めて女神ヘスティアの提案の下、元アポロン・ファミリアの屋敷ではある計画が実行され、そして完了した。

「ふぅ、終わったー！　完成だー！」

「おめでとうございます。神様」

顔中に汚れを付けたヘスティアが、生まれ変わった屋敷を前に身体全体で喜びを顕にしている。嘗てアポロン・ファミリアの屋敷だったソレに面影はなく、ヘスティア・ファミリアの本拠地（ホーム）として生まれ変わった建物が其処にあった。

飛び跳ねるヘスティアの横でベルが小さく手を叩く、その後ろでは屋敷の改造に携わった眷族達とその協力者が感慨深そうに屋敷を見上げていた。

「やれやれ、屋敷の内装を変えるなんて言うから最初はどうなる事かと心配していたが、上手くいって何よりだ」

「ですねぇ」

「リリは屋敷の改装なんて初めてでしたから、色々と新鮮で楽しかっ

たですよ」
　新たにヘスティア・ファミリアの眷族となったヴェルフ＝クロッゾ、ヤマト＝命、リリルカ＝アーデ。屋敷の改装（リフォーム）という初めての体験に最初は色々と不安だったが、やっていく内に段々と楽しくなっていき、最終的には割り触れられた自室まで自分好みに改造してしまうほど、三人はのめり込んでいた。
「それもこれも、アンタの教えがあったからだ。ありがとうな、シュウジの旦那」
「気にする必要はないさ、俺はただ君達に改装のやり方を教えただけ、そこから生れた創意工夫の拘りは君達の手から生み出されたモノだ」
　ヴェルフが後ろを振り返り、三人の視線の先に立つのは変わった手袋をした（軍手というらしい）シュウジ＝シラカワその人。同じアポロン・ファミリアに襲われた仲という事で今回屋敷の改装に手を貸し、ヘスティア達に改装（リフォーム）の極意を授けた人物である。
　ヴェルフの礼の言葉を丁寧に返すシュウジ、今回珍しくその言葉の通り彼等には改装改造の知識しか授けておらず、それ以上の過分な手助けはしていない。精々必要な資材の調達と改装に行き詰まったヴェルフ達に彼等の技術に見合ったアドバイスをする程度、自分の力だけでやり遂げたヴェルフ達にシュウジは改めて祝福の言葉を紡ぐ。
「おめでとう、これで君達の本拠地（ホーム）は完成だ」
　シュウジからの言葉に三人は素直に受け取った。自身も家を建てるのに忙しいのに、それでも協力してくれた彼に、三人は改めて礼を言う。気にしなくていいのに、そう苦笑うシュウジに今度は女神と彼等の団長が駆け寄ってくる。
「シュウジ君！　君も手伝ってくれてありがとう！　お陰で僕達の本拠地が完成したよ！」
「僕からも改めて言わせてください。シュウジさん、僕達の為に力を貸してくれて、ありがとうございます」
　礼なら既に受け取っているというのに、相変わらず礼儀正しいベルにシュウジは苦笑いを浮かべる。
「だからそう何度も改めなくてもいいって、それよりも大変なのはこ

れからだ。ファミリアとして大きく成長した君達には今後も大きな困難にぶつかる時があるだろう、そんな時に皆で乗り越える為にも今は力を付けておくべきだ。……それに」

そう言って、シュウジはベルの隣にいる女神に視線を向けて。

「何処かの駄女神が拵えた借金を返済する為にもね」

「ふぐぅ!?」

ジト目のシュウジが口にした思い出したくない言葉にヘスティアは胸元を抑えて地面に踞る。ベルが現在使用しているナイフはヘスティアがヘファイストスに土下座までして作って貰った超の付く一級品、女神ヘスティアの眷族でなければ使用する事は不可能とされる特殊なナイフだが、その条件もあって性能は破格、所有者と共に成長するというある意味一心同体とも取れるナイフはそれ故にかなりの値が張っている。

アポロン・ファミリアとの戦争遊戯に勝利し、本拠地を手にいれた事で顕になったヘスティア・ファミリアの資金難。この話のお陰でこれまで冒険者として派閥に入ろうとしていた者達は全員辞退し、今ではたった四人という弱小ファミリアに戻ってしまっている。

「それなら心配はいりません。リリにお任せ下さい」

「り、リリ？　それは一体」

「どういう事？」

借金地獄に頭を悩ませていたファミリアに唐突に降って湧くリリルカからのその言葉にベルとヘスティアは目を丸くさせる。一方でシュウジはリリルカが何を話そうとするのか大体察している為、一人納得した様子で彼女を見つめていた。

恐らく、彼女は今まで稼いだ資金でファミリアの借金返済に貢献するつもりだろう。別にそこに異論をはさむ余地はないしするつもりもない、そもそもアレは彼女が蒼のカリスマである自分に付き合い、苦労した果てに手に入れたお金とレアアイテムだ。彼女自身が納得して使うのなら、そこに他人が口出しする謂れはない。

（俺も、これからは必要以上に誰かに干渉するのは控えた方がいいかもな）

これ迄の自分に反省し、勝手な善意を押し付けるのは控えるようにしよう。ミアハという反面教師もいることだし、これからは他人に対する余計な干渉は控え（尤も、助けを求められればその場限りではないが）、自分の望むままに生きていこうと思う。

他人に迷惑掛けない程度に、なんてそれっぽい事を語ってはいるが、その内容は今までと然程変わらず、要するに余計なお節介は控えるという一種の戒めという奴だ。自分が思うまま、望むままに生きる。それはシュウジが今日まで抱く誓いの様なモノ。

「さて、それじゃあ俺はもう行くよ。俺も自分の家の資材を調達しに行かないとね」

「あ、シュウジさん、それなら僕達の本拠地に泊まって下さい。今は何もないけれど、精一杯おもてなししますから！」

「それはそれで魅力的な話だけど、今回は止めておくよ、これから荷物を運び込むんだろ？　忙しいのはまだ続くんだから、今は自分達の事に専念しなさい」

「良いじゃないか！　同じ災難に遭った仲なんだから遠慮しなくてもいいじゃないか！　この際君も僕の眷族になっちゃいなよ！」

「お前はお前で調子に乗りすぎだ」

それだけ言ってシュウジはヘスティア・ファミリアの新しい本拠地を後にする。その際に一度だけ後ろへ視線を向ければ、名残惜しそうにいつまでも手を振ってくるベル達がいる。義理堅い人達だ、その一方でヘスティアは寂しそうな、悲しそうな笑みを浮かべている。その微笑みは何を意味しているのか、神ではないシュウジには想像出来ない。

だが、何となく察する事はできた。

「俺を知った上でそれでも誘ってくるとか、神というのは厄介なモノだな」

きっと、彼女は知っている。自分が何者であの戦争遊戯の日に何をしたのかを。自分を抱え込んだらきっともっと大きな面倒ごとに巻き込まれるのに、それを承知した上で眷族に誘ってくる女神にやはり神は面倒な生き物だと、シュウジは改めて思い知るのだった。

「さて、それじゃあたまには遠出をしてみるかな。家の資材を集めるのもそうだけど、その前にまずはもう少しこの世界を堪能しないとな」
そう言ってシュウジは道端にあった木の棒を適当に手に取り、地面に突き立てて手を離す。重力の物理法則に従い落ちた木の棒が指し示す方角は……南西だった。
「南西か、確か彼処にはデカイ湖があったよな。メレンとかいう港街があって、魚料理が盛んだとか」
初っ端から家の資材調達とは掛け離れた場所だが、折角の機会だ。観光気分で遊びに行くのもいいかもしれない。
「金はまだまだあるし、たまには遊びを優先しても良いよな」
誰かに語り掛ける訳でもなく、そう呟いたシュウジは足取り軽くメレンの港町へ足を進る。そこで待つ神々の陰謀があることも知らずに……。

◇

巨大汽水湖――ロログ湖の湖岸沿いに栄える港街、メレン。オラリオとの距離は3ｋ（キルロ）程離れてはいるが、事実上オラリオの海の玄関口として知られている街。
普段から人の活気で賑わう港街、その喧騒から少し離れた路地裏にある小さな酒場、その地下にて二つの派閥が顔を合わせていた。
カーリー・ファミリアとイシュタル・ファミリア、両者とも女神が統括している一大派閥である。
特にイシュタルはオラリオの歓楽街を牛耳っており、日々莫大な利益を上げている。彼女が従えている眷族達も皆実力者が多く、その規

模の大きさから迷宮都市に対する影響力は大きい。
対するカーリーもアマゾネスの国を統治している女神であり、彼女が従えている眷族も何れもオラリオの冒険者達にも引けを取らない猛者が揃っている。
特に双子の姉妹は共にＬｖ６へと至っており、既に組織としての純粋な力は迷宮都市の最強格にも匹敵するだろう。
互いの利害と目的の一致により同盟を結んだ現状に於ける最悪の組み合わせ、計画の擦り合わせを終えた両者が睨み合うように互いの眷族達を値踏みしていると、徐に女神カーリーが口を開いた。
「しかし、先日のオラリオでは大層な騒ぎがあったらしいのぅ、何でも仮面を被った謎の男が太陽神アポロンを滅ぼしたとか」
「耳が早いな。いや、この場合は知っていて当然と言うべきか」
「そりゃあそうじゃろうて、神を殺す輩は今までに何人か現れたが、完全に滅ぼしたのは今回が初じゃからな。皆、その男に一目会いたくてウズウズしておるよ」
神殺し。それはこの世界の歴史を紐解けば確かに何人かの英雄と呼ばれる者達が成し遂げている。しかし、今回違うのは神を殺したのではなく滅ぼしたという事、一度死した神はその魂を地上においておけず、天界へ強制送還という形で送り返されてしまう。
故に、神は不滅不変の超越存在として知られており、殺すことは出来ても勝つ事が出来ないとされてきた。
しかし、つい先日その常識は覆された。蒼のカリスマと名乗る仮面の男が齎した黒い球体はアポロン・ファミリアの大部分を消滅させ、主神であるアポロンすらも消し飛ばしてしまった。天界に送還されたという報告もなく、ベル＝クラネルを執拗に狙ったかの太陽神は今もその魂の行方は不明のままとなっている。
故に神々は思い至った。アポロンは死んだのではなく、消されたのではないかと。死して尚世界に在り続ける神としての常識が消え去った事実に迷宮都市の神々の多くは戦慄し、内心怯えていた。
「……一応言っておくが、余計な真似はするなよ。アレは神々（我々）ですら知り得ない【魔なる者】だ。下手に手を出したらどうなるか、予測が

つかん」
「なんと、かの美の女神が何とも情けない。これからあのフレイヤ・ファミリアと一戦交えるというのに、なんという弱腰か」
「貴様はアレを見ていないからそんな事が言えるのだ！」
蒼のカリスマという男が齎した災厄は神々に恐怖というものを叩き込んだ。不滅とされていた者が滅びる。不変と謂われた存在が消されてしまう。未知と娯楽を求めて降り立ったイシュタルを含めた神々が恐怖というものを抱くのは初めての経験だった。
もしかしたら、あのフレイヤを追い詰めたのも件の仮面の男の仕業なのかもしれない。先日の戦争遊戯を見た後ならフレイヤがあぁなるのも納得できてしまう。
そんなイシュタルをカーリーは嘲笑う。情けないと断じる女神に合わせて、彼女の眷族達からも蔑みの笑みが溢れていく。
しかし、そんな彼女達に一度だけイシュタルは憤慨しても、それ以上憤る事はなかった。寧ろ嘲笑うカーリー・ファミリア達に哀れみの感情さえ芽生えさせていた。
「兎も角、くれぐれも余計な真似だけはしないでくれ。それさえ守れれば我々は協力に対価を支払うのは惜しまないつもりだ」
そう言って店から退出していくイシュタルとその眷族達、張り合いがないと鼻で嗤いながら彼女達を見送るカーリーは、【魔なる者】へと恐れを抱く女神イシュタルに届かない小声で言葉を漏らす。
「それは難しい相談じゃ。何せ妾は闘争と殺戮の女神カーリー、故に見てみたいのじゃ、かの【魔なる者】がもたらす闘争の行方を、お主達もそうじゃろ？」
後ろにいる己の眷族達に訊ねると、彼女達からは愉悦に満ちた嗤い声が聞こえてくる。闘争と殺戮、その二つの世界でのみ生きてきた彼女達には最早理屈理性では止められない。
故に、その結末は必然だった。突付かなくてもいい藪蛇を、一つのファミリアが豪快に踏み砕く。
そして迷宮都市は、オラリオは、人は、神は知ることになる【魔なる者】が従える深淵の魔神の存在を。

そしてその一方で……。

「いらっしゃいませー、本日は何をご所望――――って、おおおおおオッタル!!?!?」

「おいおい!? オラリオ最強様が一体何の用だ？　悪いが今お前さんが満足出来る品は置いて無いぞ？」

「あるだろ。そこに、店の中心に佇むアレが」

「お主……本気か？」

「無論、そこにある鎧と大剣、このオッタルが買い取りたい」

一人の冒険者が一つの決断を己に下していた。

その13

――――迷宮都市オラリオ、北西のメインストリート周辺に建てられた白亜の万神殿（パンテオン）、オラリオの運営を一手に担い迷宮探索の利益を都市に反映させ、冒険者達に対する諸情報や知識を公開しサポートするこの世界に於ける最も重要な拠点。

《ギルド》。長年続くオラリオの歴史の中でも最も健在し続ける迷宮都市唯一の施設、その最奥にてダンジョンを鎮める為の祈祷を捧げ続け、決して其処から動かない大神が座していた。

ウラノス。ギルドの創設者にして世界の行く末を見守る者、荘厳にして寡黙な老人はある出来事の顛末に付いて頭を悩ませていた。

「そしてフェルズ、アポロン・ファミリアの眷族（子供）達はどうなった？」

大神のその言葉に呼応するかのように暗闇の中から影が生まれる。全身を黒で覆い、顔も見えず幽鬼の如く佇むその者は、ウラノスの質問にため息混じりで答えた。

「一先ず、生き残っていた者達は全員それぞれ他の派閥（ファミリア）へ無事に移籍している。ベル＝クラネル達に倒され、気絶してあの惨劇を目の当たりにしなかった者達なら既に冒険者稼業に勤しんでいるよ」

「そうか」

フェルズと呼ばれる影の主の言葉に大神ウラノスは天を仰いで目を瞑る。それは何処となく安堵している様で、その顔も少し嬉しそうにも見えた。

思い返すのは先日行われた女神ヘスティアと男神アポロンの戦争遊戯（ウォーゲーム）。本来なら殲滅戦ではなく、ヘスティア側にも勝機のある内容にするべきだった。彼女の眷族であるベル＝クラネルとその仲間達が力を合わせればアポロンの眷族達にも決して引けを取らず、戦いの行方と最後はきっと今と別の形を迎えた事だろう。

しかし、そんな結末を彼の【魔なる者】は許さなかった。彼のアポロン・ファミリアから受けた仕打ちの事を考えれば、その怒りは当然

とも言えた。
だが、それでも彼はやり過ぎた。彼が放った大魔法により迷宮都市全体に決して小さくはない被害が出たし、住んでいる人々にも不安を与えてしまっている。表面上こそは平然としているが、現在のオラリオはちょっとした恐慌状態。なにせ普段は新しいものや珍しいモノにはとことん耐性が無い神々が恐れ慄いているのだ。住民達が不安に思うのも無理はない。
そこまで神々が彼の【魔なる者】に恐れる理由、それは先程も述べた件の大魔法にあり、彼が放った黒い球体に呑み込まれたアポロンとその眷族達は未だにその身柄を確認されてはいない。アポロンに至っては天界にもその存在を確認出来ていなかった。
地上にも天界にも神の姿はいない。地上で死ねば天界に強制送還される神が、戻る事なくその姿を消されてしまっている。そこに彼と眷族の契りを結んだ他に生き残った眷族達からアポロンの契約が消えていた事もあって神々の【魔なる者】に対する恐怖はより深く刻み込まれてしまった。
彼を怒らせてしまえば神ですら消滅させてしまう。アポロンの眷族から解放された人間達が存在している事実に余計にその恐怖が煽られ、中小規模の派閥は震え上がってしまっている。それでも中にはどうにか彼と接触しようとする動きを見せる派閥があり、ウラノスは連中が再び彼の逆鱗に触れないことを祈るばかりである。
「しかし、良いのかウラノス。今回の騒動の件の所為で我々と彼との繋がりを疑う者達が出てくるかもしれないぞ」
「それは当然だろうし、その時は正直に全てを話すだけだ」
自分達と蒼のカリスマの関係性、戦争遊戯への介入と蒼のカリスマの暴れっぷりにより当然疑う者達は出てくるだろうし、ヘルメスやロキといった知謀に長ける神々が直接ここへ乗り込んで話を聞きに来るだろう。そうなれば全てを話して納得して貰うだけだと、ウラノスは肩を竦めて口にする。
というより、これは蒼のカリスマからの提案でもある。自分とウラノス達の関係を疑問に思う者がいれば、正直に全てを話すといいと、

彼本人から言われているのだ。
　要するに、彼からすれば自分達は戦争遊戯で太陽神アポロンを直接屠る為の舞台を整える。ただそれだけの為に利用されたのだ。しかもそれで自らの素性が明らかになってもいいという、己の身の安全に無頓着なのではない、仮に素性がバレて明らかになっても、彼にとってはそんな事己の危機たり得ないのだ。
　そして神を、それも大神を利用せんとする豪胆さ、あれだけの猛者がどうして今まで表に出てこなかったのか、幾ら思考を巡らせても答えは一考に出てこない。
「それに、本当に彼を信用してもいいのか？　彼が卓越した魔法の使い手なのは分かった。その実力が確かなのも最早疑うまい、だが、それでも……」
「フェルズ、お前が不安に思うのも分かる。だが、今は彼を信じるしかない」
　黒衣の魔術師、フェルズの声色が小さくなる。彼の【魔なる者】の実力は理解した。いや、知ってしまった故に、その危険性に不安を覚えてしまう。そして大神ウラノスもそんなフェルズと同じ心境だったのは言うまでもない。
　――思い出す。彼が初めてここへ来たときの事を。
『……何者だ？』
『初めまして、大神ウラノス。私は蒼のカリスマと名乗る者、実は貴方に一つ聞きたい事があって伺わせて戴きました』
『――何だ？』
『２０階層に潜む言葉を話すモンスターの群れ……いや、村かな？
　アレは迷宮攻略に於いて無視しても良いモノと見なしてもいいのか、一応確認しておきたくて』
『!?!?』
『どうやらその反応だと、私の判断は間違っていなかった様ですね。
――あっぶね、危うく他のモンスターみたいにやらかす所だった』
　あー良かった。と、態とらしく安堵する彼の仮面の男、それ以降

彼とは一応対等な協力者として接しているが、果たして自分達の関係は上手く行っているのか、彼等の話をするに当たって蒼のカリスマは自らの素性を自分達にだけ明かしているが、それが交渉材料になるのかは今となっては微妙な所である。

とは言え、彼が表面上でも自分達に協力してくれる以上無下に扱う事は出来ない。今は兎に角情勢を見守りつつ、適当にあしらうしかないだろう。……それが出来るかどうかは別にして。

「それでフェルズ、今彼は何処にいる？」

「確か、今はメレンの港街で観光している筈だ」

「ここ最近アレスの所の国が動きを見せているというのに、呑気な男だ」

いや、そもそも彼にはあの国の事など歯牙にも掛けないか、そう思いため息吐くウラノスだがその時黒衣の魔術師の袖に白い紙が張り付いていた事に気付く。

「フェルズ、それはどうした？」

「え？」

ウラノスの指摘に狼狽えながら張り付いていた紙を取ると、そこに書かれていたモノにフェルズは絶句する。

どうしたと訊ねるウラノス、するとフェルズは何も言わず紙を手渡し、大神は不思議に思いながらその紙を摘み、そこに共通語（コイネー）で書かれた文面に目を通し。

《私の事を気に掛ける気持ちは分からなくは無いですが、監視も程ほどにしてくださいね》

やはり、大神も言葉を失うのだった。

「……組んで、大丈夫だったのかなぁ」

何だか取り返しのつかない事をしている気がすると今更ながら後悔するウラノスだった。

◇

迷宮都市、オラリオの港街《メレン》。喧騒から離れた街の路地裏で複数の冒険者がたった一人のアマゾネスによって蹂躙されていた。
「あ、う……ぐ」
「レフィーヤを、放……せ」
「ほほう？　中々頑張るのう。幾ら加減をしているとは言えバーチェはＬｖ６、こやつの攻撃に耐えるとは流石はロキ・ファミリアの眷族達じゃ」
叩きのめされ、それでも仲間を助け出そうと気概を見せるロキ・ファミリアの面々に女神カーリーはカラカラと愉快そうに笑みを浮かべる。
「しかし、そろそろお暇しないとロキに気付かれるやもしれん。早急に終わらせるとしよう――バーチェ」
己の主神の命令に従い、意識を断とうとアマゾネスは動き出す。レフィーヤという人質を抱えながらも尚ぶれない体幹、そして無駄のない動きに満身創痍の彼女達がそれに抗える筈もなく。
「っ！」
「なんじゃと？」
――故に、カーリーとバーチェは目の前の人物に目を見開いていた。先程まで影も形もなかった全く見知らぬ紫髪の青年、気配も感知させず、なのにバーチェの前に立ち、彼女の拳を受け止めていた事に、一人と一柱は一瞬呆けてしまった。
「やれやれ、賑かな街なのは此処へ来て知っていたつもりだけど、まさか冒険者同士で喧嘩とか、これもメレンの風物詩なのか？」
何処か呆れた様子の青年、加減したとはいえＬｖ６のバーチェの攻撃を受け止めた男に、バーチェは言いし難い危機感に掻き立てられ

慌てて飛び退いて主神の隣まで引き下がった。
普段は寡黙なバーチェが呼吸を荒くして大粒の冷や汗を流している。アマゾネスの本能が目の前の男の何かに触れたのか、気になったカーリーは興味本意で男性に訊ねる。
「お主、何者じゃ？」
「シュウジ＝シラカワ、何処にでもいるただの観光客だ」
あっけらかんと、それでいて堂々と言ってのけるシュウジにカーリーは俄然興味が湧くのだった。

その14

「なんや……これは？」

港街メレン、人の活気に溢れた街の裏路地で騒ぎを聞き付けてやって来たロキ・ファミリアの主神ロキは、同じく騒ぎを聞き付けた神ニョルズとその眷族達と共にその場所へ駆け付けたのだが、目の前の光景に一瞬呆けてしまっていた。

傷だらけの姿で横たわる己の眷族（子供）達、痛みに魘され呻き声を上げる彼女達にロキの内側から沸々と怒りの感情が沸き上がってくる。天界にいた頃には悪神と畏れられてきた女神、彼女の怒りを目の当たりにしたニョルズは笑みを浮かべながら殺意に満ちたロキの顔に悪寒を覚える。

しかし、そんな彼女の怒りも次の瞬間には鳴りを潜める。鎮めたのではなく一旦保留することにしたロキは自身の眷族達を甲斐甲斐しく介抱してくれている青年に話を聞くべく歩み寄っていく。

「すまん、ちょっとええか？　ウチはこの子達の神（親）をやっているロキっちゅうモンやけど……」

「悪いけど少し待ってて貰えるか？　今少し手が離せないんだ」

「お、おう。邪魔してすまんな」

視線を此方に向ける事もせず、せっせと怪我をしている冒険者へ的確に包帯を巻いていく。その手際は実に鮮やかでその熟れた手腕から何処かの医療系派閥（ファミリア）の子かなとロキは訝しむが、目の前の青年はロキにも見覚えがなかった。大手の医療系派閥にいたことも記憶に無かった。

「よし、一先ずこれで痛みは引いていく筈だ。後は暫く安静にしていれば無事に完治するだろう。それで、この場合どちらのファミリアに預ければいいんだ？」

「ん、それならニョルズ、一旦この子らをアンタの所の眷族（子供達）に任せてもええか？　ウチはまだこの辺の土地勘が無いさかい、頼まれて欲し

いんやけど」
「あぁ、その程度なら問題ない、彼女達はお前が仮拠点にしている宿屋まで運んでおこう。ついでだ、その時に事のあらましを俺の方からしておくよ」
「頼む」
　ロキの頼みをこころよく引き受けたニョルズは眷族達に指示を飛ばし、横たわるロキの眷族達を丁寧に運び出していく。彼等の手際の良さにも感心しながら、ロキは目の前の青年に向き直る。
「さて、これで漸く話しやすくなったか。話を聞く前に一つ言わせてくれ、ウチの眷族達を介抱してくれてありがとな」
「そんな礼を言われる程の事じゃないさ、俺も偶々近くを通り掛かっただけだし、……一人、助けられなかった娘がいる」
「……」
　青年の最後の言葉にロキも顔を俯かせる。ここに倒れていた者は今朝方ロキの指示に従い街の調査に出ていた者達だ。そしてその人数の中に一人欠けた者がいる。
「レフィーヤ……か」
「もしかして、それはエルフの？」
　青年の言葉にロキは頷く。レフィーヤはロキ・ファミリアの中でもリヴェリアに次ぐ魔法の使い手だ。彼女という可愛い眷族が拐われた事実にロキの内側から再びマグマの如く怒りと殺意が溢れ出る。
「あんのクソチビィ、ウチに喧嘩売りよったな」
　しかし、それも直ぐ様呑み込んでいつも通りの剽軽な態度に変わる。どんなに怒りに震えても今は目の前の恩人から少しでも話を聞く事の方が重要だ。平静を装いながらロキは青年に頭を下げる。
「と、済まんな。恩人の前に不躾な真似をしてしまった。この通り堪忍してや」
「気にしなくてもいいさ、……それに、申し訳ないのはこちらの方だ。本来なら彼女も取り返したい所だったが、下手に動けば彼女達も巻き込みかねなかったからな」
　そう言って、青年はその時の出来事の詳細を語った。青年が騒ぎ

を聞き付けてやって来た頃には既にレフィーヤは気絶し他の眷族達も叩きのめされた後だと言う。レフィーヤを回収しようにも動けない者達を放っておけないし、相手側のアマゾネスも相当な使い手な以上迂闊な真似は出来ない。

故に、青年は無傷のレフィーヤよりも外傷の酷い他の冒険者達の安全を優先し、アマゾネス達を見逃す事になった。後で必ず助け出すつもりでいても見捨てる形となってしまった事実に青年は頭を下げてロキに詫びる。

「悪い、アンタの所の眷族。助けてやれなかった」

「いいっていいって、それこそアンタが気にする事やない。アンタはウチの子達を助けてくれた。色々聞きたい事はあるけれども、アンタのした事は間違ってない。感謝こそしても責めるなんてありえへんよ。だから頭上げてーな」

「……そうか」

レフィーヤを一撃で気絶させたというアマゾネス、恐らくは最近Ｌｖ６になったという姉妹の片割れだろう。ならばレフィーヤ達が束になっても敵わないのは仕方がない事、それは別に良いし、青年が下した選択も間違ってはいない。寧ろ、ワザワザその場に留まって眷族達の介抱もしてくれたのだから、青年にとやかく責める資格はないだろ。

だがそれ以上に気になるのは目の前の青年の口振りはまるでそのアマゾネスを単純な戦闘力では上回っているという事、そして何より驚くべき事なのはこの青年の言っている事が全て嘘ではないという事だ。

目の前の青年の事などロキの記憶には存在しなかった。それだけの強さを持っている冒険者がいれば即座に迷宮都市を通して世界中に知れ渡るだろうし、実際にオラリオの外から来たアマゾネス姉妹の情報も比較的早く手に入れる事ができた。

なのに、目の前の青年の情報なんてロキの記憶の何処にも無かった。最近彼女の記憶に刻まれたのは先日大暴れした彼の【魔なる者】くらい……。

「……しかし、少し意外だな」
「ん？　何がや？」
「アンタ、天界にいた頃は悪神なんて言われてたんだろ？　暇さえあれば神々を殺し合わせるとか、そんなおっかない神がまさかそこまで眷族に入れ込むなんてな」
「う、自分ヒト神の黒歴史をさらっと抉りよってからに」
　思考の海に浸っていたロキだったが、青年の溢した大昔の黒歴史により半ば強制的に意識を浮上されてしまう。
「まぁ、確かにあの頃のウチから見れば想像出来ないやろなぁ。でも、今はこんな生活でもウチは結構気にいってるんや。下界に住む子供達が、可能性に溢れた子供達の営みが、側で眺めるのが今のウチの楽しみや」
「……子供、か。確かに、永久不滅な神々からしたら人間の命なんて一瞬の輝きみたいなものだろ。けどアンタ、分かっているのか？　子供は何れ親から離れるものだ。自立し、親である神々お前らもいずれは必要とされなくなる。それでも――」
「それでも、や。ウチはそんな子供達が可愛くて仕方ないんや」
「……」
　両手を頭の上で組んで笑うロキに青年は押し黙る。上辺だけの言葉ではない、ロキ・ファミリアの主神である目の前の神は喩えいつか自分達が必要とされなくとも、それを受け入れる覚悟があった。
「……やっぱ、神と人は似てるんだな」
「ん？」
「いや、何でもない。……さて、それじゃあ俺は行くよ。元々此処へは観光巡りに来ただけだしな。いい加減家の資材を調達しなくちゃいけないし」
「あ、その前にアンタの名前教えて貰うてもええかな？　次いつ会えるか分からんし、せめて名前だけでも知っておきたいんや」
「シュウジ、シュウジ＝シラカワ。乗り掛かった船だ、あのレフィーヤとかいうエルフのお嬢さんは俺が責任もって助け出すよ」
「……なんやて？」

踵を返し路地裏の奥へ歩き出す背中、その名前にロキには覚えがあった。それは以前、ヘファイストス・ファミリアが経営する本店でその主神である彼女から聞いたモノ……。
「自分、まさか……！」
「ロキ、何かあったの？」
「あ、アイズたん」
背後を見ればいつの間にか人垣が出来ており、その中からロキ・ファミリア最強の剣士であるアイズが現れる。自分の中でも指折りのお気に入りの登場に一瞬だけ意識が青年から外れてしまう。
すぐに視線を前に戻すも、既に青年の姿はそこにはなかった。シュウジ＝シラカワ、その名前を再び耳にしたロキはその頭脳をフル稼働させ、次々とこれまで迷宮都市で起きた出来事を重ね合わせていき、そして一つの仮説へと辿り着く。
最近話題騒然となっている【魔なる者】蒼のカリスマ、そして自分の眷族を助けてくれたシュウジ＝シラカワ。
仮説だけの話だ。推測で、憶測で、確証のない話。しかしロキにはこの二人が全くの無関係だとはどうしても思えなかった。

◇

国家系派閥（ファミリア）、テルスキュラ。主神を女神カーリーとした国家系の派閥が利用する仮拠点。
その最奥で女神は頬笑む。もうじき自身が望む闘争、二つの姉妹が起こす殺し合いが見れる事に彼女は嬉しくて堪らなかった。
二つの姉妹が互いの生存を賭けて殺し合う。その果てに何がある

のか、神を以てしても分からぬ未知の結末に女神は手にした葡萄酒を片手に悦に浸る。
「しかし、あの若造も相当のモノだったな。バーチェを相手にまるでモノともしないとは。いやはや、迷宮都市とは恐ろしいな」
　恐ろしいと言っておきながら女神の口許は笑みで弛んでいる。闘争と殺戮を愛する彼女からすれば強者は須らく尊ぶモノであり愛でるもの、かの女神にとってシュウジとは脅威ではなく次のアマゾネスの種となる存在でしかなかった。
「バーチェ、少しは落ち着け」
　しかし、そんなカーリーも目の前でウロウロしているアマゾネスにいい加減うんざりしたのか、その表情を曇らせる。
「でも、でもカーリー、私、落ち着かない。あの男と会ってから胸がドキドキする。こんなの、初めて、だから……」
　拙い共通語（コイネー）でどうすればいいのかと呻くアマゾネスにカーリーは悪戯に笑みを浮かべる。
「バーチェ、それは恐らく恋という奴じゃ」
「――――コイ？」
「そう、強い雌がより強い雄に惹かれるのは自然の摂理、おめでとうバーチェ。主は漸く主が求める伴侶を見付けたのだ」
　コイ、恋。カーリーに指摘されたバーチェは件の男性を思い出す。突然自分の目の前に現れ、自分の攻撃を難なく受け止めた紫髪の彼を。
　騒ぎを聞き付けてロキ・ファミリアの面々が現れるまでの間に行われた彼との攻防、自分の攻撃を全て躱す彼の動きはまるで舞踊の様だった。
　そう、自分は奪われたのだ。あの光景に、あの男性に、視線が、心が、想いが、その全てが奪われてしまったのだ。
「シュウジ＝シラカワ、シュウジ、シュウジ……！」
　何度も名前を呼び、はにかむ笑顔を浮かべるバーチェ。果たして彼女はこの恋を成就させる事が出来るのだろうか？

「なんだ!?　急に悪寒が……!?」

その15

「う、う……ん」
　肌に刺さる寒さに身を捩るレフィーヤが目を覚ます。何故自分が寝ているのか、覚醒したばかりの朦朧とした意識の中でレフィーヤは自身の身に起きた出来事を思い出す。
「そうだ。私は……確かアマゾネスの人に襲われて――――」
　其処まで思い出し、そして目の前で行われている殺し合いを目の当たりにした瞬間、レフィーヤの意識が一気に覚めていき、同時に自分に置かれている状況も思い知らされる。
「ティオナさん!?」
　巨大な船の上、揺れる足場をものともせずに拳を繰り出すティオナ、相手は自分を一撃で気絶させたアマゾネスの女性、どうして彼女達が戦っているのか、自分の置かれた状況を冷静に分析した結果、目の前の光景が自分の所為で行われているのだと察したレフィーヤは申し訳ない気持ちで一杯になった。
　何とかしたくても今の自分は檻に囲われており、更には首輪まで繋がれてしまっている。頼みの杖も奪われてしまい手を出したくても出せない、自身の無力さに悲観していると、レフィーヤが囲われている檻の隣から声が聞こえてきた。
「おや？　目が醒めたかエルフの娘よ。もう少し眠っているのかと思いきや存外タフなんじゃな。流石はロキの所の眷族よな」
「貴女は、カーリー・ファミリアの……」
「然り。妾がアマゾネスの国であるテルスキュラを統べる女神、カーリーである。悪いことは言わん、今は大人しく籠の鳥として振る舞っておけ、そうすればお主の身の安全は保証しよう」
　横にある即席の玉座で殺し合っている二人のアマゾネスを愉悦に満ちた表情で笑みを浮かべる女神にレフィーヤは怒り以上の怖気を感じた。彼女の知る女神は自身が所属しているロキ・ファミリアの

主神である彼女位で、時折底知れぬモノを感じるが、この女神からはそれとは別の禍々しさを感じられる。
　これが同じ女神なのか、神々という超越存在を前にレフィーヤは萎縮しそうになるが、懸命に堪えて睨み付ける。そんな彼女の気丈な振る舞いに気を良くしたのか、カーリーの口元が更に愉悦に歪む。
「呵呵呵呵、良い眼だ。やはりロキ・ファミリアの……いや、この迷宮都市には粒が多い。よもやここまで楽しませてくれるとは、あの若造と言いまっこと愉快な事じゃ」
　カーリーの語る若造が誰の事なのかはレフィーヤには分からないが、このままこの女神の思い通りにしてはいけない事だけは理解できた。これだけ大きな船、それも二隻も用意した事で騒ぎは大きくなっていく。そうなれば直に団の皆も駆け付けてきてくれる頃合いだろう、そうなれば自分にもここから抜け出すチャンス(隙)が必ず巡ってくる筈だ。
（諦めちゃダメだ！　ロキ・ファミリアの一員として、私も出来ることをしなくちゃ！）
　その眼に闘志を宿らせるレフィーヤだが、次の瞬間状況は大きく揺れ動く事になる。アマゾネス最強の姉妹、その片割れであるバーチェとロキ・ファミリアのアマゾネス姉妹の片割れであるティオナが己の拳を互いの急所にめり込ませ……いや、貫いてしまっている。
　血反吐をぶちまき地に伏す両者、危険な状態だ。如何に第一級冒険者であるティオナでも一刻も早く治療しなければ命に関わってくる。レフィーヤの絶叫が辺りに木霊する。同じ派閥の仲間を救うべくレフィーヤは檻に手を伸ばして力付くでこじ開けようとするが、檻は特別製の素材で出来ている所為か恐ろしく頑強でレフィーヤの力では抉じ開ける事は敵わなかった。
「止めておけ、それはここオラリオで手に入れた稀少な素材で出来た特別製だ。何でもどこぞの冒険者が金銭稼ぎの為に流したモノでな、溶けやすく加工しやすい割りに他の金属と混ぜ合わせて冷やせばバーチェとアルガナの二人がかりでもびくともしない強度を持っている。生半可な力では輝を入れる事すら無理な代物よ」

その分、金は掛かったがなと快活に嗤うカーリーだが、その目は笑っていなかった。二人のアマゾネスの死闘、その結末が自分の想定していたモノとはかけ離れていたが故の落胆だった。

カーリーが求めるのは殺戮と闘争の果て、互いに互いを喰らいて貪り、殺し合いの死闘の果てに待つ結末を見たいが為にテルスキュラから態々此処まで来たのだ。

二人が死ぬのは仕方がない事、それは互いに死力を尽くしてその果てに生れた結果だ。それならばカーリーも笑って受け入れるが、互いに生き残っているのはどういう了見か。

つまる所、カーリーはつまらなく思ったのだ。レベルではバーチェに劣るティオナが何故Ｌｖ６のバーチェ相手に引き分けを選んだのか、ティオナの想いと気持ち、そして強さを知りながらそれでもカーリーはつまらないと吐き捨てる。

「双方、立て。まだ闘争は終わってはおらぬぞ」

「なっ!?」

カーリーが見たいのはあくまで二人の闘争、その果てにある。こんなものは自分が見ていた結末じゃない、自分が望んでいた結果ではない、故にカーリーは闘争の続きを促していく。これが神なのか、レフィーヤは己の眷族を平然と殺し合わせる女神に改めて恐れを抱き、同時に彼女の放つ極大の敵意をぶつける。

しかし、そんなレフィーヤをカーリーは最早気にも止めなかった。立ち上がるバーチェ、血を流し、フラフラで、今にも倒れそうな程に追い詰められながらも、彼女は立ち上がろうとするティオナに一歩ずつ歩み寄る。

「バーチェ、貴女は、本当に、これでいいの？　こんな生き方で、本当に、満足なの？」

掠れた声でティオナが紡ぐのは問いの言葉だった。これまで自分達は闘う為に生きてきた、殺す為に、生きる為に、モンスターを、家族を、同胞を、幾度となく殺し続けてきた。

当然だと、バーチェは口にしたかった。それがアマゾネスとして産まれた自分の宿命なのだと、そこに疑問を挟む余地はない。強さに飢

え、強さを求め続けるのがアマゾネスの性（サガ）なのだと。
　それなのに、それなのに、どうして今自分の脳裏には別の光景が浮かんでくるのだ。どうして、物語を読んで聞かせて欲しいと強請るあの頃のティオナと自分を思い出すのだ。
「私は……私……は」
　挑んでくるものは、立ち塞がるものは、皆須らく敵であり、己の命を脅かしてくるモノだ。故に殺せ、闘い、殺し、己の糧にしろ。それこそがアマゾネスの本願であり宿命なのだ。幼い頃からずっと言い聞かされてきた。物心が付く前よりもそう教えられてきた。父も知らず、母も知らない。殺戮と闘争だけが自分達の全てだ。
　だから、殺す。眼下にいるティオナをバーチェは拳を振り下ろして殺す。その眼に涙を無自覚に滲ませ、慈愛の笑みを浮かべるティオナを殺そうとバーチェは渾身の力を込めて振り抜き――――。
「――――もう、其処までにしておけ」
「!?」
「なん……じゃと?」
「――――え?」
　気が付けば、バーチェの手は掴み取られてしまっていた。レフィーヤが戸惑い、ティオナが目を丸くする。カーリーが絶句しバーチェが戸惑う。何の前触れもなく唐突に現れた第三者にその場の誰もが言葉を失った。
　否、バーチェとカーリーはその人物と面識があった。ヒリュテ姉妹を誘い出す為にレフィーヤを拐う際に現れたその名前以外一切不明な人物。
「本来ならもっと早く介入するつもりだったが、一対一（タイマン）の邪魔をするのも無粋と思ってな、勝負が終わるまで敢えて手出しは控えさせて貰った。――――けどな」
「流石にこれ以上は笑い事じゃ済まなくなる。口約束とは言え一度は交わした約束だ。ロキ・ファミリアの主神、ロキとの約定に従いシュウジ＝シラカワ、これより強制介入を執行する」
　シュウジ＝シラカワ。紫の髪を揺らした青年がバーチェではなく、

彼女達の主神であるカーリーを睨み付け。
「女神カーリー、年貢の納め時だ」
「呵呵呵……」
その言葉に女神カーリーはこの上なく上機嫌に嗤うのだった。

その16

嗤う。己の前に立つ紫髪の青年、シュウジ＝シラカワが放つ微かな怒気を孕んだ視線を一身に受けておきながら、それでも闘争の女神カーリーは愉快そうにその口角を吊り上げる。

「呵呵呵、まさかこのタイミングで主が出てくるとはのぅ？　それほどまでにロキ・ファミリアが大事か？」

「まさか、かの眷族達は部外者に守られる程弱くもないし、如何なる苦境にも立ち向かえる勇気と知恵が備わっている。俺がここへ来たのは厄介事に首を突っ込んだ俺自身へのケジメだ」

「フフフ、見込み通り難儀な性分しておるのぅ。まぁ、だからこそあのエルフの小娘を態々衆目を集めるこの場所に晒していたのじゃがな」

女神カーリーの一言にシュウジの目は細く鋭くなっていく。剥き出しの刃の様な眼光、ベートやキレたティオネよりも深く怒りに満ちた彼の眼に女神の隣で踞るレフィーヤは怖気を覚えた。

なんて冷たい眼をするのか、人には勿論間違っても神に向けるべき物ではない……不遜というには余りにも度が過ぎる態度、レフィーヤが予感を感じていた通り、シュウジは女神カーリーに対して殺意を抱いていた。

何せ、この女神は自分という人間を呼び出す為にレフィーヤという少女を利用したのだ。当然其処にはロキ・ファミリアの眷族であるヒリュテ姉妹を誘い込む意味も含まれているだろうが、己の欲望の為に躊躇なく他者を利用する女神。そこにシュウジは吐き気を催す邪悪さを感じ取った。

命を弄ぶ神、それはシュウジにとって最も許せぬ存在だ。身勝手な話かも知れない、彼のこれ迄の過去を知らぬ者からすればシュウジの怒りは見当違いにも思える。

しかし、それでもシュウジは怒りを覚えずにはいられない。己の欲求の為に自分の眷族（子供）達を殺し合わせる。成る程、確かにヒリュテ姉妹

はアマゾネスでアマゾネスは戦闘種族と呼ばれる人種だ。戦えば戦う程に強さを増し、その強さにアマゾネス達は喜びを覚える。
強さを得ることに悦楽を感じるアマゾネス、そう言う意味ではカーリーという女神はアマゾネスにとって理想的な神かも知れない。だが、悲観の笑みを浮かべるティオナと涙を浮かべるバーチェを見て、闘争(それ)が全てではないという事は遠巻きから見ていたシュウジでも理解できた。
「あぁ、そうだよな。神も人も生きているんだ。違っていて、異なっているのは当たり前なんだ」
故に、シュウジはお節介をする事に決めた。レフィーヤという少女を救出する為に、ティオナの気持ちに報いる為に、シュウジは自分がしている事が望まれていない事だとしても、己自身の意思に従い余計なお世話をする事に決めた。
一度だけ、これまでこの世界に来て自身が行ってきた事を思い返し、反省するように目を伏せる。その仕草に意図を見出だせず対するカーリーは何がしたいのか理解できないでいた。すると目を開け改めてシュウジは女神を睨み付ける。
一瞬、カーリーは全身が包み込むような悪寒に襲われた。目の前の男の殺意が増した？　いや、男の様子は先程とは違い寧ろ柔らかい雰囲気に変わっている。殺意もなく、怒気も然程は感じられないのに、何故かカーリーにはそれがとても信じられなく思えていた。
殺意も怒りも薄いのに凄味だけが増している。まるで超越存在(自分達)よりも強大な何かに睨み付けられている様な……。
竦み、後退るカーリーを他所にシュウジはバーチェとティオナに懐から取り出した万能薬(エリクサー)を振り掛ける。
「そら、これで大分動けるようになった筈だ。余計な手出しをした詫びに後の始末は俺が片付けておく、向こうにいる君達の姉妹も俺が送っておくから君達は早く離れると良い」
「え？　あ、ありがとう、ございます？」
突然現れていきなり場の空気を支配し、一方的に傷を癒していく。死を目前に覚悟を決めていただけに今のティオナの気持ちは困

惑に満ちていた。
　目の前の青年は余計な介入に申し訳ないと語るが、それ以上に状況に頭が追い付けないティオナはただ傷を癒してくれた事に感謝するだけだった。
「あ、あぁ、あぁぁぁ……」
「バーチェ？」
　一方、バーチェの方は頬を赤く染めて潤んだ瞳でシュウジを見ている。あ、これアカン奴だとティオナは悟るが、彼女の静止が間に合う筈もなく、バーチェはその目をハートに変えてシュウジに飛び掛かる。
「見つけた、見つけた、見つけた見つけたミツケタ、私の――――シュウジ！」
　アマゾネスの本能、強い雌はより強い雄を求める。カーリーに指摘され、自らの恋心に目覚めたバーチェはこれ迄培ってきた理性と自制の心を振り切ってシュウジに抱き着かんとする――――が、しかし。
「俺にはもう心に決めた人がいる。もう決して叶う事はない恋路だが、それでもこの想いを忘れる事は出来ない。――――だから、君の気持ちには応えられない。……ゴメンな」
　バーチェの顎下が僅かにブレると、彼女の体はまるで糸が切れた人形の様に崩れ落ちる。何が起きたのか分からない、しかし体は言うことが聞かず、まるで石の様に固まってしまっている。
　Ｌｖ６のアマゾネス。Ｌｖだけを見るならばロキ・ファミリアの団長であるフィンや大幹部のガレスに匹敵する彼女が、何もできずに倒される。その事実に気が付くのにレフィーヤは凡そ１０秒程の時間を消費した。
　しかし、そんな事実などバーチェには関係なかった。初めて恋心を抱いた相手には既に心に決めた人がいるという。正面からバッサリと切り捨てられたバーチェは動けない体のまま、地に伏したまま終わった己の恋に涙する。
　何だか悪いことをした。アマゾネスという種族を触り程度しか知らないシュウジは涙を流して泣きじゃくるバーチェに後ろめたさを

覚える。アマゾネスは他種族の男性に対して少し惚れやすい気質があるというのは知っていたが、自分の何処にそんな要素があるのか分からないシュウジは、どうすればいいのかとあたふたしている。

何だか締まらない光景だが、シュウジが動揺している姿はすぐに終わりを迎える。何かを察したシュウジがもう一隻の船の方へ視線を向け、それに合わせるようにバーチェを除いた面々もそちらへと目線を向ける。

見れば、バーチェの双子の姉であるアルガナがティオネによって倒されている場面だった。Ｌｖ５がＬｖ６を上回る。その劇的瞬間を目の当たりにしたカーリーは感嘆の声を漏らす。

「どうやら、向こうも終わったみたいだな。じゃあ、此方もそろそろ幕引きに差し掛かるとしよう。レフィーヤちゃん、そしてティオナちゃん、これから其処にいる神を除いた君達全員を陸地に戻す。最初は混乱するかもしれないが、どうか落ち着いて自分の派閥に合流して欲しい」

「へ？」

「い、いきなり何を言っ――――」

何を言っている。それは誰もが思う疑問だった。既にこの船は河を下り始めており、陸地からは遠く離れてしまっている。万全な状態であるヒリュテ姉妹ならば脱出は容易いが、ティオナは兎も角ティオネはアルガナと死闘を演じた為に満身創痍となっている。

一体どうやってここから抜け出すというのか、倒れる姉と牢獄に囲われ身動きの取れないレフィーヤ、どちらから救えば良いのか一瞬だけ迷うティオナが、血の海に沈む姉を優先させてレフィーヤに一言ゴメンと口にし、姉のいるもう一隻の船に向かって跳躍した瞬間――――。

「……あ、あれ？」

ティオナ達は陸地に立っていた。

混乱――――――処の話ではない。この瞬間ティオナは思考が完全に停止した。今自分は姉を助け出す為に船に向かって跳躍した筈、なのに何故自分は今陸地に立っているのか。

「てい、ティオナさん？」
「レフィーヤ？　え？　どうして？」
隣を見ればそこには地に座るレフィーヤが酷く戸惑った様子で自分を見上げている。きっと自分も同じ顔をしているのだろう。そして彼女の側には傷だらけで動けなくなっているティオネとアルガナ、そして泣きじゃくるバーチェがいる。
混沌とする空気、遠くからは同じファミリアの仲間達の声が聞こえてきた為、ティオナは混乱する思考をどうにか落ち着かせ、一先ず一連の出来事は忘れる事にしてレフィーヤと共に三人の手当てに勤しむのだった。

◇

「成る程、お主だったのか」
今はもう自分達以外誰もいなくなった船の上でカーリーは一人嗤う。
眼前にいるのは正真正銘の【魔なる者】。仮面を張り付け、白の外套を身に纏うその人物にカーリーは愉快そうに笑みを浮かべる。
「惜しいのう、もっと早くお主に気付いていれば、より濃密な闘争を楽しめたと言うのに」
女神は嘲笑う。惜しかったと、もっと闘争を楽しみたかったと、達観の感情を隠しもせず、座する玉座に凭れて空を仰ぎ見る。
「で？　妾も消すのか？　貴様が消したアポロンの様に、この妾を地上からも天界からも。やれやれ、人の子はいつの間にここまで恐ろしくなったのやら」

「……一つ、聞かせろ」
「ん？」
「何で、お前はアマゾネス達を戦わせようとする。聞いた話だとテルスキュラなる国では延々とアマゾネス達を殺し合わせているみたいだが、何故そこまでする。あの子達はお前の眷族、子供なんだろ？」
「何を言うのかと思えば、存外退屈な男じゃの。そんなもの、妾が見たいからに決まっているだろうが、親しい者達が殺し合う。親も子も、姉妹も、敵ならば殺し、自らを高め合う。闘争と殺戮、その果てにある未知を永遠に知りたいが故に」
「――――そうかよ」
　押し黙り、沈黙するシュウジ改め蒼のカリスマにカーリーは失望し、溜め息を溢した。神を消滅させたと言うからどんな怪物かと思えば、これでは単なる甘いお人好しではないか。
　自分が求めていたモノとは違う。蒼のカリスマに小さくはない失望を覚えたカーリーが、殺るならさっさとしろと目の前の【魔なる者】に挑発も含めて急かそうとした時。
「――――いいだろう。そんなに見たいなら見せてやる」
「なに？」
「起きろ――――グランゾン」
　瞬間、カーリーの足元から孔が穿たれ、そこから巨大な手が出現する。硬く、大きく、そして得体の知れない手、それがカーリーを逃がさんと掴み取ると孔の奥からソレは現れた。
「な、なん、なんなのだ、これはぁ!?」
「案内人だよ。今回に限ってはな　」
「!?」
「女神カーリー、永遠の闘争と殺戮を望む者よ。喜べ、貴様の願いは漸く叶うぞ」
　迷宮都市の港街、自然豊かなこの地に於いて一柱の魔神が顕現した。

その17

――捕捉した二隻の船に向かってロキ・ファミリアの団長であるフィンと幹部であるベートが駆ける。道中カーリー・ファミリアのアマゾネスがロキ達を行かせんと立ち塞がり、特殊な術によって強化された者によって手こずらされたがそこは迷宮都市オラリオを代表するダンジョン（迷宮）攻略最大派閥。

卓越した技と力でカーリーが差し向けてきた眷族達を悉く退けてきた彼等は、遂にヒリュテ姉妹がいるであろう二隻の船を捉える事に成功した。

「全く、あの姉妹にも困ったモノだ」

「これで例のアマゾネス共に殺られていたら指差して笑ってやる」

ベートの乱暴な物言いは聞き流し、フィンは遂に二隻の船を自分の手が届く範囲まで補足する事に成功する。ここまで近付けば一度の跳躍で船へと辿り着く筈、脚に力を込めてフィンが船へと跳躍しようとした時――。

「何だ……あれは？」

二つある船の内、片割れの方から巨大な腕が天に向かって突き出ている。唐突に現れたその腕にメレンの港街は騒然となり、ソレを目にした者は呆然と見上げている。

あまりにも突飛、あまりにも唐突過ぎる事態に流石のフィンの思考も一瞬だけ停止する。しかしそれも次の瞬間には我に返り、呆けている場合ではないと隣で同じく茫然自失となっていたベートを叱咤する。

一体彼処で何が起きているのか、ティオネとティオナ、そしてレフィーヤは無事なのか、冷静を装いながらも戸惑いを隠せないフィンは三人の無事を祈りながら再び駆け出そうとする。

「あ、フィン！」

「ティオナ!?　ティオネ、レフィーヤも無事だったのか!?」

フィン達が駆け出そうとする直前で聞き慣れた声がストップを掛

ける。振り向けばズタボロのティオネ達に治癒を施しているレフィーヤとティオナの姿があった。言いたい事も聞きたい事も多々あったが、取り敢えずは大事ない仲間達を前にフィンはホッと安堵する。

ティオナ達の下へ駆け寄る二人、其処にはティオナ達だけでなくヒリュテ姉妹と死闘を演じたバーチェとアルガナの姿もあった。

「で？　なんでカーリーの所のアマゾネスもいやがるんだ？　お前ら殺り合ってたんだろ？」

敵対派閥のエースが揃って地に伏している。状況から見るに二人とも倒した後だと察するが、それでもベートは違和感が拭えなかった。ヒリュテ姉妹が死闘を演じていたのは分かる、レフィーヤを連れて脱出したというなら彼女達が此処にいるのも理解できる。

なら、何故敵対派閥の二人までもが一緒にいるのだろうか？

片方が血塗れで倒れているのに対し、もう片方の妹が傷一つ無いのもおかしく見える。よく分からない状況、ティオナ達も困惑しているのかベートの質問に何て答えればいいのか図りかねている。

そんな時だ。船の方角から周囲を圧倒する超越存在の気配が爆発的に膨れ上がった。

「ぐっ、これは……!?」

「これってまさか、カーリーの〝神威（アルカナム）〟!?」

それはあらゆる事象の具現化とされる超越存在、神が放つ〝畏れ〟だった。この世界において絶対的な力、天界における神の力が発動したことにフィン達を含めたメレンの人々は畏怖を抱く。

一体、あの船で何が起きているのか。フィンはそんな興味を抱き事すれ、そこへ近付こうとは思わなかった。彼処へ、あの船の所へ行けば取り返しの付かない事態に巻き込まれる気がしたから、何より。

フィンの虫の報せを告げる親指が、この事態を前に何の反応も示さないでいるのが何よりも恐ろしく思えるのだ。

ベートも動けない。目の前の絶対的不変な力が脈動している事に本能的に理解した彼は、目を見開かせて犬歯を剥き出しにして唸る事しか出来ない。何者も侵せぬ領域、今メレンの港街では誰も介入でき

ない空間が出来上がっていた。
そして次の瞬間、腕だけだったソレは全貌を明らかにする。巨大、ゴライアスやダンジョンに跋扈するかの魔物達とは明らかに違うその存在にオラリオは再び戦慄を覚えるのだった。

◇

「貴様は、貴様は一体何者なんじゃ!?」
穿たれた空間、其所から現れる巨大な手に捕まり身動きを完全に封じられたカーリーは船の甲板の上で佇むシュウジに声を荒げて問う。
自分を掴んで離さない巨大な手、強固にして強大なその力を前に力を封じられたカーリー、神の一柱である彼女から見てもシュウジという男は異質だった。
何故ただの人の子でしかない奴がこれ程の力を従えている。神という超越存在(デウスデア)を前にしても全く媚びず揺るがないシュウジに当初カーリーは度胸のある若者程度にしか認識していなかった。
それが今ではカーリーの目には正体不明の怪物にしか見えないでいる。何故これ程の怪物を今まで神々は気付けなかったのか、分からない事だらけで混乱するカーリー。そんな女神を嘲笑うかの様にシュウジという男は口角を吊り上げて不敵に笑う。
「お前達神々は娯楽、ひいては未知を楽しむんだろう？　教えるのも吝かではないが、それでは少々物足りないのではないかな？」
それはこれ迄庇護の対象だった筈の子供からの明確な挑発だった。神という存在を理解し、熟知した上での挑発。教えてやってもいいがそれでいいのかという圧倒的上から目線、神という超越存在に対

して余りにも大それた態度。
それは追い詰められたカーリーの琴線に触れるには充分過ぎるモノだった。
「な・め・る・な・よ!!　人間がぁぁぁぁっ!!」
追い詰められ、煽られ、その怒りを怒髪天の勢いで昂らせたカーリーは遂に禁じられた力を解放する。神の力(アルカナム)、神々が下界に降りる際に前提条件として定められる神を縛る鎖。如何なる理由を以てしても破ることを重く禁じられている絶対不可侵の掟。他の神々の許しもなくその力を解放すれば天界へ強制送還される事もあるその掟を、カーリーは怒りという感情のみで破って見せた。
圧倒的存在感がメレンの街に解放される。如何なる者も反発する事は許されない超越存在、それが正しく顕現された事実に港街の人々は畏怖に呑み込まれようとしていた。
神の力を正しく取り戻したカーリーは後の事などお構い無しにその権能を奮おうとする。最早彼女を縛るものはない。抵抗し、巨大な手から逃れようとするカーリー。
「無駄だ」
「っ!?」
「大人しく運命を受け入れるがいい」
しかし、巨人の手がより強大になりカーリーの動きを封じてみせる。顕現した神の力を上から押し潰すように強大になる。その事実にカーリーの目は驚愕に大きく見開いた。
穿たれた空間から巨人の全貌が明らかになる。蒼く巨大で強大な機械仕掛けの巨人、これ迄永い時の中でも未知の存在を前に、カーリーは己の奥底から……歓喜よりもさらに深い恐怖が涌き出てくるのを感じた。
恐怖、それは命持つものならば避けられぬ根源的感情。しかしそれは超越存在として永い時を生きる神々にとって最も遠い感情のモノ、退屈を何よりも嫌い、未知を追及してきた神々がよりによってその未知に恐怖するのは何という皮肉だろうか。
しかし、ソレだけではない。自身を掴んで離さない巨人の手を通

して伝わってくる力の波動、それは天界にいた頃に感じた彼の大神と似ている事にカーリーは気付いた。
　嘘だ。有り得ない。カーリーが思い浮かぶのはありったけの否定の言葉、しかし目の前の巨神から感じられる力は間違いなくあの方と比類する。
「貴様は、まさか……シヴァ神様に連なる者だと言うのか」
　巨神から感じられる気はあの方――――彼の破壊神に良く似ている。シヴァが地上に降りたという話は聞いていない、ならば一体この巨神は何だと言うのか。
　そして、その巨神を使役しているこの男は何なのか。未知が恐怖となり、軈て絶望へと変異していく中でカーリーは縋る様に問い掛ける。
「いいや、俺の相棒は神から与えられたものじゃない。正真正銘、人の手によって生み出された存在だ」
「っ!?」
　目の前の巨神が人の手によって生み出された存在だと知り、カーリーは顔を青褪めて絶句する。これが人の為せる業なのかと、もしこの男の言うことが全て真実ならば、人という種は何と業が深い生命体なのか。
「お前は命を、可能性を余りにも軽んじている。これまでお前が弄んできた命の分まで……報いを受けろ」
「あ、あぁぁ……」
　引き摺り込まれていく。暗闇の中へ、奈落よりも尚深い深淵へ、為す術なく沈んでいく。嗚呼、どうして自分がこんな目に合わなければならないのか、こんな事になるならもっと、もっと……。
（戦い以外の可能性、そんなもの考えもしなかっ――――）
　懺悔の言葉もなく、カーリーは巨神と共に深淵へと消えていく。音もなく、悲鳴もなく、最初から何もなかったかのような静寂だけが包み込んで行く。
　その後、巨神が姿を消した事を確認したフィン達が船へと突入するが、其処には誰も何もおらず、無人の空間だけがあるだけ。

女神カーリーの消失。その事実が後日オラリオを駆け巡り再び神々を震撼させるのだった。

◇

――其処は、流転の世界。

――其処は、停止の世界。

如何なる事象も混在し、錯綜し、伝播し、そして消滅していく世界。其処は、紛れもなく混沌の世界。根源が渦を巻く果ての世界だった。

全てが加速し、消滅し、そしてまた生まれていく。生と死が織り混ぜ、闘争によって彩られていく。

そう、其処は闘争の世界だった。カーリーが望んで止まない殺戮と闘争に満ちた闘いの世界、女神カーリーにとってこの世界こそが己の望む世界――――。

「なんだ……ここは？」

その、筈だった。

それは例えるなら蠱毒の壺の中、闘い、喰らい、貪り合いながらより上位の存在へと至る進化の世界。進化に見初められ、認められ、この世界へと招かれた怪物達が、来るべき戦いに備えて喰らい合う。

其処に果てはない。この闘争に果てはない。この殺戮に終わりはない。永遠の闘争と殺戮、それを正しく具現化した世界に女神カーリーは絶望する。

こんなものは闘いではない。星を薙ぎ、星雲を消し、銀河すら補食する怪物達。神も人も、そこで培ってきた文明の全てがその怪物達によって一瞬で蹂躙されていく様を目の当たりにしてカーリーの正気

は徐々に失われていく。
　中でもひときわ巨大な存在感を放つ二体の巨神がカーリーの前に現れた。黒く、禍々しい様相の鉄の魔神と進化の力を取り込んだ皇帝、二体の巨神が瞬くと星々を食い物にしてきた怪物達を一瞬にして消し飛ばしてしまう。
「は、ははは」
　カーリーは理解した。否、理解してしまった。この世界に終わりは無い。あるのは無限の闘争のみなのだと、総てがこの二体の巨神を育てる為のモノなのだと。何故？何のために？二体の巨神が待っている運命の最果て、それをカーリーが目の当たりにした瞬間。
「あは、あはは、あひひひ、あへあはあはあはあはあはは!!」
　彼女は自ら自我の崩壊を選択した。永遠の時を生きる女神、死ぬことも叶わずもとの世界へ戻る手立てもない彼女はこの闘争の世界を怪物に喰われ、消滅するまで特等席で眺め続けていた。

『？』
『ドウシタ？　ゲッターノ』
『今、何か彼処にいなかったか？』
『我ハ特ニ何モ感ジナカッタガ？』
『そうか、まぁいい。どちらにせよ些細な事だ』
『フン、貴様トイイ奴トイイ、人ヲ捨テキレナイ者ハ悉く甘イナ。奴モ己ノ愛機ト一体トナレバヨリ強大ナ力ヲ得ラレルトイウノニ』
『まぁそう言うな。人としての器を持つというのも色々と便利なモノだぞ。それに、お前も〝V〟と〝X〟の世界を体験して改めて知った筈だろ？　人が持つ可能性というモノを』
『――アレハ、我ノホンノ一部。末端ノ端末デシカナイ』
『それでも、彼等は乗り越えて見せた。喩えお前にとっては小さな力

だとしても。その価値と意味が分からない程、無知ではあるまい？』

『――フン、話ハ終イダ』

一方的に話を終わり、先行する鉄の魔神を進化の皇帝の乗り手は嘆息する。彼等の前に現れるのは無限とも呼べる怪物の軍団、星々を喰らいながらも成長を続ける怪物の成れの果て達。

そんな奴等を前にして乗り手の顔には獰猛な笑みが浮かんでいる。そう、自分達の闘いに終わりはない。永遠に闘争し、喰らい合い、殺し合う。進化の果ての果てへと至り、そこで待つ■■■に挑む為に。

彼等の闘争は今も尚、続いている。

その18

γ月Δ日

カーリー・ファミリア……いや、カーリーとの決着から数日開いた今日、自分のマイハウスが完成した記念の意味を込めてここ数日起きた出来事について簡潔に纏めていこうと思う。

まずカーリー・ファミリアだが、主神であるカーリーが消失したことによって派閥としての機能は完全に失い、奴の眷族であるアマゾネス達の多くは神の恩恵を失い只人と化していた。眷族としての力を失い、途方に暮れていたアマゾネス達の多くは故郷であるテルスキュラへと戻り、今後どうするか話し合う様だ。

ただでさえ強力な力を持つアマゾネス達、カーリーという神との契りを断たれたとは言え、再び別の神の眷族となれば力は元に戻る。迷宮都市の外にはカーリーの様な国家としてのファミリアを持つ神も存在する。主神を失ったアマゾネス達をこれ幸いにと吸収を目論む神が現れても不思議ではない。

これを危惧した神々がテルスキュラへの監視を求めたが、意外にも殆どのアマゾネス達は別の神に鞍替えようとはせず、改宗が許される一年後までは大人しくしておくことをギルドに約束した。

何故彼女達がそこまで大人しくなったのかは定かではない。自分も直接見た訳ではないから知らないが、どうやら彼女達の多くはあの日メレンの港街で〝ナニカ〟を目にしたらしく、その表情は皆青くして震えていたのだとか。

戦闘種族として知られるアマゾネス、そんな彼女達が何を恐れたのかは知らないが……まぁ、厄介ごとが解消されたのは良いことだ。自分には一ミリも関係ないが。

けれどアマゾネス達に関する話はこれだけでは終わらない。なんとカーリー・ファミリアのエースであるアルガナとバーチェなるアマゾネスの双子の姉妹はロキ・ファミリアへの改宗を希望したのだと

か。
　アルガナは自分を降したティオネの力の源を知る為、バーチェはメレンで出会った運命の人を見付ける為、各々の目的の為にオラリオに留まることを決めた。当初は彼女達の提案に渋るロキ・ファミリアだったが、二人を他の派閥に入ってしまったらそれこそ後々面倒な事になるし、そちらの方が厄介と判断したロキ・ファミリアは他の派閥や迷宮都市に住まう人々の迷惑にならないことを条件に自分達の派閥に参入させることを決定した。
　と、カーリー・ファミリアの顛末はこんなモノで他は然程関係の無い話だ。バーチェ、アマゾネス姉妹の片割れがシュウジなる人物を探しているという噂を耳にした様な気もしなくもないが……ま、俺の気のせいだろう。ハッハッハ。
　そして一方自分の方はと言うと、その後資材の調達も無事に済ませ、金銭の支払いも終わらせて自分の住まいの建築に取り掛かった。費やした時間は二日と割りと時間を掛け、その分趣向を凝らせた造りとなっている。
　本当は一から作るのではなく元々あった建物を自分の好みに改装してみたかったのだが、まぁどちらにしても凝り性である自分にはモノを作ること自体は嫌いではないので、結構集中して建築に勤しむ事が出来た。
　そんなこんな完成したマイハウス、今後はここを拠点に迷宮都市での冒険を楽しんでいこうかと思う。

γ月Ω日
　念願のマイハウスが出来て翌日、気持ちの良い朝日を浴びながら起床し、身支度を整えて朝食を済ませると、玄関から呼び鈴が鳴ったので誰かと思い戸を開けると、先日お世話になったロキ・ファミリアの団長と副団長、そして主神であるロキが自分の家にやって来た。
　話がしたいという彼等の要望に応えてリビングまで招き、取り敢えず話を聞くことにしたのだが……何て言うか間が悪い。もう少し時間があればお茶請けの一つも出してやれたのだが、生憎その時間は

無かった為、お茶の一杯しか出してやることが出来なかった。
フィン団長達は突然押し掛けたのは自分達だから気にするなと遠慮していたし、話も進まないから取り敢えずお茶請けの話は置いておく事にした。
先ず、フィン団長達は先日メレンの港街でレフィーヤちゃん達を助けてくれた事に対して深い謝罪と感謝の言葉を送ってきた。自分達の派閥のイザコザに巻き込んでしまった事と、怪我をした団員達の介抱とレフィーヤとヒリュテ姉妹の救助してくれた事、頭を下げて礼を述べる彼等に自分は困った時はお互い様とだけ応えた。
でも、彼等の話はこれだけでは終わらない。この謝罪とお礼の言葉を皮切りに始まった彼等との歓談の時間はフィン団長の然り気無い一言により凍り付く。
『君は、一体何者なのか』
唐突の話題の切り替えに一瞬呆けてしまうが、よくよく考えれば……いや、そうでなくとも彼等の疑問は当然とも言えるだろう。
彼等からすれば何処の馬の骨とも分からない人間が、デカイ顔してファミリア同士の抗争に介入する厄介者、結果的に助けられたとしても彼等からすれば面白くない話だし、実際そう思われても仕方がない程の事を自分は仕出かしてしまっている。
何せベート君の様な血気盛んな冒険者達を数多く抱える派閥だ。その代表としてこうして足を運んできたフィン団長達はきっと自分では推し量れない程の労力があったに違いない。
うわー、どうしよう。どう弁解すればいいかと悩んでいると、フィン団長は更なる言葉を紡いできた。
『もしかして君は、先日の魔神の関係者。または、最近巷を騒がせている蒼のカリスマに関わりのある人間なんじゃないのか？』
関係者処か本人です。現在相棒であるグランゾンは地下に建設した格納庫にて整備中です。なんて言えるわけもなく、訝しむ彼等に自分はお茶を呑んで誤魔化すしかなかった。
とは言え、此処には嘘を看破するロキ[神]の目もあるし、迂闊な事は言えない為自分はこの時即興ながらある作戦に出た。

まぁ、作戦と言っても単純に遍在を以てフィンに達の目を欺く程度なんだけどね。外から新たに戸を叩く音がしたから、来客が来たことを装って戸を開けると仮面の男が入ってくる。その様子に神を含めた団長達が目に見えて狼狽していたから、多分自分の目論みはうまく嵌まったのだろう。

『君は彼の協力者なのか？』

フィン団長の質問にこれまた自分は苦笑いを浮かべて誤魔化した。そしてその後は遍在として編み出した蒼のカリスマを外へと追いやり、周囲に誰もいないことを確認してから彼を消し、その後何気ない表情で自宅へ戻る。

フィン団長達は外で自分達が何を話していたのかを追及することはなく、副団長と主神共々お茶を呑み終えた後にご馳走さまとだけ言葉を残しニ、三言葉を交えた後自分達の本拠地へと帰っていった。

動揺を隠せない様子の彼等を騙し討ちした事には罪悪感はあるが、今はまだ真実を伝える訳にはいかない。せめて異端児達の問題が片付くまではこの事は彼等に伏せておく必要がある。

あー、でもいざという時に話せなくて敵対するのもどうかもだしなー。敢えて真実を話すことで協力を求めるのも……ありと言えばアリ、なのか？

いや、これは極秘事項だし、下手をすれば迷宮都市をパニックに陥れる案件だ。噂では闇派閥の連中も何やら動きがあるみたいだし、もう少し状況を様子見してからの方が良さそうだ。

――あ、因みに今日の夕食はヘスティアの所のベル君達が家の完成祝いに食材を持って遊びに来てくれました。友人を家に誘うなんて経験滅多になかったから、この日自分は思いきって腕を振るうことにした。皆も喜んでくれたし、総じて見れば大満足な一日でした。

……ただ、自分の渾身の一品である麻婆豆腐だけは誰も手を付けなかったのが心残りではある。唯一食したヘスティアも大袈裟に悶絶した後動かなくなった所為でベル君達も変に警戒してしまったし。

全く、神というのは本当にアレだな。色々失礼しちゃうよな。プンプン！

◇

「フィン、彼の言動どう思う」
「――――――蒼のカリスマ、その関係者である事は間違いないだろう。君も見た筈だ彼と一緒に並び立つ蒼のカリスマの姿を」
　ロキ・ファミリアの本拠地、団長であるフィンはガレスを始めとした幹部を集め彼の執務室で会議を始めていた。蒼のカリスマとシュウジ＝シラカワ、同一人物かと思われた者が別人だったという事実に派閥の誰もが驚愕していた。
「まさか、団長の予想が外れるなんて」
「それは買い被りだよティオネ。確かに僕はほぼ確信を以て彼と蒼のカリスマを同一視していた。でもそれはあくまでも僕の勝手な予想から来る推測だったし、今回はそれが外れただけ。寧ろ彼と蒼のカリスマが協力関係があるという明確な事実が分かっただけでも儲けものさ」
「でも、それじゃあ蒼のカリスマって結局何者なんだろ？　何度も私達の事を助けてくれたし、いい加減直接お礼を言いに行きたいんだけどなぁ」
　両手を頭に組んで残念に思うティオナにフィンは苦笑う。確かに蒼のカリスマという人物の正体は気になるが、それでもフィンは頭の何処かでシュウジと蒼のカリスマを結び付けていた。
（……もしかしたら、あの蒼のカリスマは彼が用意した影武者なのかもしれない）

そもそも、蒼のカリスマは人名を指す名称ではなく、どちらかと言えば記号の様なもの。人の名前が体を表しているのならば蒼のカリスマは体を表す為に在る名前。あの蒼い仮面を被り、白の外套を身に纏えば誰もがそれを蒼のカリスマとして認める事だろう。

ロキという嘘を看破する神がいれば簡単に決着が着くかと思われた今回の件、まさかここまでややこしくなるとは思っていなかっただけに、フィンは頭が痛くなる思いだった。

「ケッ、なぁにをゴチャゴチャ言ってやがるんだよ。そんなに奴が気になるなら、直接会って問い詰めりゃあいいだろうが。それこそ力づくでよぉ」

「ベート……」

ロキ・ファミリア随一の問題児、ベートのその言葉に場の空気は凍り付く。蒼のカリスマはロキ・ファミリアにとって何度も窮地の際に助けてもらった恩人だ。確かに素性を詮索するのは野暮な話かも知れないが、それでも一度は腹を割ってキチンとお礼をしたいロキ・ファミリアの総意によるもので決して事を荒げる為ではない。ベートの乱暴を通り越して余りにも無作法な物言いに幹部達全員の冷たい視線が彼に突き刺さる。

「ベート、それではダメだと何度も言ってるだろうが」

「うるせぇよジジイ。俺は別に奴に恩を、施しを受けた覚えはねぇ。全部アイツが勝手にやった事だろうが」

ガレスの諌めの言葉にも全く耳を貸さないベート。

「そもそもだ。奴の素性を暴くと言ったのは他でもないテメェだろうがフィン、奴の素性を暴いて俺達の前にその面を晒させる。その為に今日はあのシュウジって奴の所に行ったんだろうが」

「それは違うでベート、ウチらは別に蒼スマの素性を暴こうとしとるんやない。奴さんの情報を集めたいだけや」

「同じ事だろうが！　俺がソイツに問い詰めるのとお前らが話を聞くのと一体何が違う!?」

「ぐふぅ、ベートに論破されたぁ」

「ロキ、ちょっと黙ってろ」

「ベート、僕達は彼にとても大きな借りがある。５０階層での異常事態にも、怪物祭の時にも、１８階層での騒動や今回の事でもロキ・ファミリアは多くの借りを彼によって凭れている。それらの返済を前に事を荒立てては……」
「言った筈だぞフィン、俺は奴に、あの仮面野郎に恩も施しも受けた覚えはねぇ」
　それ以上は何も語ることはなく、ベートは執務室を後にする。これでは本当にベートはシュウジの下へ突撃していかねない。友好的な関係を結びたいと思った相手にこれでは不味いと思ったフィンはヒリュテ姉妹とアイズ達にベートの監視を言い渡す。
　これで出来れば何事もなければいいのだが、そんなフィンの淡い期待は翌日儚く崩れ落ちて行くのだった。

◇

γ月β日
　翌日、何かロキ・ファミリアの所のベート君が鼻息荒くしてやって来た。お昼前だった事もあり客人を饗す意味も重なって取り敢えず話はお昼ご飯を食べてからにしようと提案し、ベート君に昨日の残りを加工したものを差し出した。
　随分渋りながらも何とか一口食べてくれたベート君、これで彼も少しは落ち着いてくれるだろうと思った瞬間。
　彼は倒れた。自分が用意した手作りの麻婆豆腐の肉マンの一口を口に入れた瞬間、彼は白目を剥いて倒れた。なんだと思い不思議に思っていると、様子を見に来たと語るヒリュテ姉妹がやってきてベー

ト君を回収、二人は自分に先日のお礼を言うとそそくさと帰って行ってしまった。

……一体、なんだったのだろう？

その19

√月β日

ロキ・ファミリアのベート君が自分の家に訪れてから更に時間が流れた。その間もここ迷宮都市オラリオでは様々な出来事があった為、今回はその事について自分視点で説明しておこうと思う。

まずは、ラキア王国の侵攻について。何でもこのラキア王国は一柱の神によって振り回され、定期的に迷宮都市に戦争を吹っ掛けて来ているのだとか。で、今回もその神によってラキア王国はオラリオに侵攻し、オラリオ側も最強の派閥の一角であるロキ・ファミリアや他複数のファミリアで迎え撃った。

数と規模はテルスキュラよりも圧倒的でその数は千を上回っているとか。その全員がアレスの恩恵を受けて冒険者並の戦闘能力を有している為、決して侮れない相手ではある。戦争は数、その言葉はこの上なく正しいが、それはその数を的確に且つ有効的に活用できてこそ意味があるモノ。ただの突撃一辺倒ではまるで意味がない。

これがルルーシュ君やシュナイゼルだったら幾らでも逆転の一手を指せるものだけど、生憎アレスという神は脳筋らしく、その様な搦め手を仕掛ける程の考えは持ち合わせていないらしい。ソイツの副官や仕えている人は本当に気の毒に思う。

で、結局今回の戦争もオラリオ側の勝利に終わり、ラキアの戦士達はトボトボと自国へと帰っていった。その裏ではヘスティア・ファミリアのヴェルフ＝クロッゾ君が何やら不穏な気配に巻き込まれつつあったが、仲間であるベル君達の活躍によりどうにか乗り切れたみたいだ。

そうそう、そのベル君達だけど何だか最近またレベルを上げたらしく、現在メキメキと頭角を表す新勢力として注目されているみたいだ。彼等には少なからず関わりのある自分としては何とも嬉しい話である。

レベルアップと言えばソーマ・ファミリアの人達もチラホラと上がっている。ベル君達と比べ話題性はそこまでないから注目されてないが、これも自分にとって嬉しい話題の一つである。

と、まぁラキア王国との戦争話はこれで終わり。終わってしまえば然程面白い所はなく、どちらかと言えば今回はベル君達やソーマ・ファミリアの人達のレベル昇華（アップ）の話の方が大きい気がする。

……そして、これは完全に蛇足なのだが、ラキア王国がオラリオに戦争を仕掛けて来る間自分はバーチェとか言うアマゾネスの女性に終始追いかけ回されていました。ハイ。

追いかけ回されたと言うより、付け回されたという方が正しい。ラキア王国やヴェルフ君に関しては今回自分の出る幕はないと思い迷宮都市の街を散策していたのだが、行くとこ行くとこ彼女に出会してしまうのだ。しかも物陰からソッと見つめてくる感じで。

流石に不気味に思い何度か問い詰めようとしたのだが、もし自分の思い違いだと思うと言い出しにくく、結局最後まで放置してしまったが今思えばアレ完全に俺をストーキングしていたよな!?　ボッチ特有の自意識過剰による弊害かなって自分に言い聞かせていたけど、アレ絶対ストーキングだよね!?

いや、でも別に襲い掛かってくる様子はなかったし、アマゾネスは自身が伴侶としたい異性にはトコトン貪欲になると聞いたから、多分そう言った理由では無いのだろう。ていうか、どうして他の団員達はラキア王国相手に戦っているのにあの娘は自分を付け回しているのさ。

まぁ、それでも帰宅するときには完全に撒いてからワームホールで転移している為追跡はされていないと思う。

と言うか、されていないと思いたい。何せ此処は一度ロキ・ファミリアの団長達が訪れたのだ。同じ団員である彼女が知らない筈がない。それとも自分の居住に関する情報は一部の団員のみに公開されて他には厳重に秘密としているのだろうか。

何だか気を遣わせてしまい申し訳なく思う。先日もベート君には満足に饗してあげられなかったし……と言うか、どうしてベート君

はあれ以来自分の所に来ないのだろうか？　彼の気質を考えればもう一度位来てくれるかと若干期待していたのに……。
まぁ向こうも色々ありそうだし、変に詮索するのは止めておこう。

√月α日
今日、日課になりつつある異端児達の観察＆報告の帰りにダイダロス通りへと向かった自分は人造的に造られたとされる迷宮、クノッソスへそう言えばここは通ってなかったなと観光気分で潜入した。
クノッソスが人造迷宮と呼ばれる理由はその昔奇人ダイダロスとその子孫達によって造られた文字通りの人造迷宮で、その名称は迷宮都市の一部として使われる程に有名であり、何でもバベル以外にダンジョンに繋がるもう一つの出入口なのだとか。
最初は昔の偉人が造った建築物がどういうモノなのかと興味本位で訪れただけなのだが、どうやらこのクノッソスという人造迷宮、自分が思っていた以上に厄介ごとが待ち受けているようだった。
クノッソスに潜って暫くすると、戦闘音らしき物音がしてきたので気付かれない様に覗いてみると、なんとロキ・ファミリアの人達が見慣れない連中と戦っているではないか。しかも状況は見るからに劣勢、どうやら彼等の団長さんや幹部の人達は分断されてしまったらしく、彼等は所謂二軍の人達だったのだ。しかも何やら厄介な罠に掛かった様で彼等の動きも十二分ではなさそう……と言うか、何人か死にそうになっていた。
何だかロキ・ファミリアとは最近こんな出会い方をしているなと思いつつ、見殺しにする訳にもいかないので取り敢えず襲っている連中を重力操作により固定し、動きを封じ込めた。
突然蒼のカリスマである自分が割って入ってきた事で一度ロキ・ファミリアの面々は騒然としていたが、取り敢えず話は死にかけている⊠達の手当てを優先という事で彼等の治療を行った。特に眼鏡っ娘の容態が酷くあわや死ぬ間近だったが、自分は常日頃から回復薬の類いを一通り揃えていてある程度の医療の知識がある為、何とか彼女は持ち直す事が出来た。

で、その後は遅れてやって来た団長さん達に改めて事情と自分が此処にいる事の成り行きを説明すると、彼等は皆一同に自分に頭を下げてきた。自分としては偶々観光気分で潜っていただけだし、消費した回復薬の件についてもストックならまだまだあるし別に気にする事はない。

なんて（または音変化前の「などと」）言ってもロキ・ファミリアがそれを容認する事はなく、これまで受けた恩を返す意味を含めて自分はこの日、ロキ・ファミリアの本拠地で厄介になる事となった。無論、自分の事は何一つ詮索しない事を条件に。

ロキ・ファミリアの本拠地に向かう途中団長さんからクノッソスの話を聞いたのだが、上記にも記した通りあの人造迷宮は迷宮に繋がるもう一つの出入口となっており、バベルを通さずにダンジョンに出入り出来る事から犯罪組織や闇派閥の御用達になっている迷宮都市でもとびきり厄介な場所になっているそうなのだ。

犯罪組織云々は初めて聞いたのでそんな物騒な所は早々に埋め立てるべきだろうとは思う。が、これは自分一人では判断出来ない案件なのでこの事はウラノスにも話しておくことにしようと思う。自分はこれでも社会人だからね、報連相位は出来るのだ。えっへん。

さて、そんな訳でロキ・ファミリアの本拠地で厄介になり、現在来客用の部屋で寛いでいる自分なのだが、知り合いの家にお泊まりなんて経験はあまり無い為、少々手持無沙汰だったりする。ロキ・ファミリアの本拠地である〝黄昏の館〟、オラリオでも奇抜な造形の建物として有名だから、内部がちょっと気になる自分としては少し館内の探索をしてみたいというのが正直な気持ちだ。

まぁ、余所様の家で厄介になっている以上あまり勝手な事は出来ないしね。夕飯の時にはアマゾネスのティオナちゃん辺りが呼びに来てくれるというし、それまで大人しくしておこうと思う。

……そして次に一つ懸念事項があるのだが、例のアマゾネスであるバーチェさん、彼女俺の事に勘づいたりしてないよね？　一応出掛ける際は用心して手製のファ??リーズで匂い消しを徹底させているけど、バレたりしないよね？

それだけが不安だ。

――――あ、因みに件の襲撃者達はロキ・ファミリアに預け、その身柄を厳重に拘束してもらっている。一応自分が預かってても良いけど、尋問とかあまり得意じゃないし、取り敢えず暴れられないように手足を重力操作でへし折って彼等に渡しておいた。

ウラノスにも話が通るようギルドにも報告させてもらう手筈になっているし、今後余程過激な手段を取らない限り闇派閥も目立った動きは見せてこないだろう。まぁ、追い詰められた獣は凶暴で危険というし、今後も慎重に事の成り行きを見守る必要はありそうだが。

……ただ、一つ気になったのが連中を手渡す際はエルフの娘、レフィーヤちゃんがドン引きした様子で自分を見つめるのが少し心に来た。

仕方無いじゃない。犯罪組織の連中になにもさせずに大人しくさせるなんてこの方法位しか思い付かないんだもの。……でも、やっぱり少し野蛮に過ぎたかもなぁ次からは気を付けておこ。

◇

――――蒼のカリスマ。それはロキ・ファミリアにとって色んな意味で無視できない存在。仮面を被り、その素性は明かにせず謎が謎を呼ぶ不可思議な☒だが、少なくともその人物に悪意はなく彼の☒は常に善意を以てロキ・ファミリアと接してきた。

端から見れば不審人物としか見えないが、その見た目に反して中身は紳士的で迷宮都市でも中々お目にかかれない人格者と言うのは先の人造迷宮で明らかになっている。尤も、先のアポロン・ファミリアとヘスティア・ファミリアとの戦争遊戯で見せた圧倒的な力も垣間見

た事もあり、未だに団員の多くは畏怖に近い感情を抱いている。
しかし、それでも自分達の為に高価な回復薬を惜しみ無く使い、命を救われた☒が多数いるのも事実で、恐れよりも感謝という気持ちの方が強かった。
アマゾネスの中でも友好的なティオナは勿論の事、ガレスやリヴェリアというロキ・ファミリアの幹部達でさえも蒼のカリスマを気に入っている節がある。誰に対しても対等に接し、自身の素性を除いて基本何でも応えてくれる彼に次第に誰もが気を許しつつあった。
まぁ、人造迷宮で深手を負った団員達は自室で療養してもらっているが。こればかりは仕方がないだろう。

団長であるフィンや主神であるロキも基本的には蒼のカリスマを良き☒として見ている。当然疑問や懸念は尽きないが、それでも彼と関わる事は借りを返す機会という意味でも悪くはない。今こうして彼を黄昏の館の食堂で催された宴会に誘ったのもその借りを返し、彼との友好関係を築きたい意味も含まれている。
特にロキの方は己の眷族達の命を救ってくれた人物を邪険に扱う事はせず、酔った勢いで絡むことはあっても礼を失しない程度に済ませている。恐らくはあれも彼女なりのコミュニケーションの一つだ。
因みに彼は飲食を行う際に口元だけを開けている。無駄に機能が多い仮面にちょっと引いてしまったが、まぁそこは別にどうだっていいだろう。
誰もが彼を認めていた。蒼のカリスマという人間を、謎は多く素性も明らかではないが、それでも善性に寄っている彼を毛嫌いする☒など、ロキ・ファミリアにはいない。
……ただ、一人を除いて。
「おい、仮面野郎」
「ん？」
「テメェ、気に入らねぇな」
「おい、ベート」
これ迄黙り込んでいたベートが鋭い剣幕で蒼のカリスマに迫っ

ている。今まで何も言わないからてっきり部屋に戻っていたのだとばかりに思っていただけに、フィン達の対応が遅れてしまった。ガレスが宥めるように言い聞かせようとするが、ベートの耳には届かない。

酒に酔っている訳ではない。だというのに凄まじい剣幕……いや、いっそ殺気とも呼べるソレをベートは周囲に関係なく撒き散らし、宴会で賑わっていたロキ・ファミリアの面々は押し黙り、宴会で盛り上がっていた空気が一気に沈下してしまっている。

「ふむ、私こう見えても人には失礼のないように心掛けているつもりですが、何か貴方の気に障る言動をしましたかね？」

「そうだ。そう言う所が癪に障るんだよ、一度とならず二度も余計な手出しをしやがって、テメェは一体何様だ。いつ俺達がテメェに助けてくれなんて頼んだ。あぁ!?」

「ちょっと、ベート！」

「テメェ、マジでいい加減にしろよ」

ベートのあまりにも無茶苦茶な言い分にヒリュテ姉妹が怒りを露にする。相手は自分達の窮地を二度も助けてくれた恩人、その人物に対して失礼処では済まない彼のベートの絡みに食堂の空気は騒然となる。

「うーむ、そうは言っても５０階層では私も巻き込まれただけですし、先の人造迷宮でもただ目についた状況にちょっと手を出させて貰っただけなので……もしそれが気に入らないというのなら謝罪します。ご免なさい」

そう言ってアッサリと、さも当然の様に頭を下げる蒼のカリスマに再び周囲は息を呑む。一方でベートの顔はより一層憤怒の表情に染まっていた。

自分達を助けておいて平然とし、あまつさえ素直に頭を下げる目の前の蒼のカリスマにベートは言い様の無い激情に駆られていた。

「テメェ、ふざけてんじゃねぇぞ!!」

「よさんかベート！」

「いい加減頭を冷やせ！」

頭を下げる蒼のカリスマを前に飛び付こうとしていたベートをガレスが押し止める。筋力的にガレスに及ばないベートだが、怒りを力に変えて蒼のカリスマを食い殺さんと牙を剥く。
「ふーむ、どうやら余程私は彼に失礼な事をしてしまった様子。一体どうしたら納得してくれるのか」
一方でベートの殺気を一身に受けている筈の仮面の男はどこ吹く風といった様子で考え込んでいる。迷宮都市でも上位の位置にいるＬｖ５の冒険者であるベート、彼の殺気を受けても平然としている彼にロキ・ファミリアの面々は息を呑んだ。
「うーん、やはりこればっかりは考えても解りませんね。ベートさん、一体どうすれば私を認めてくれるんですか？」
その言葉にベートの動きは止まり、そして次には待ってましたと口許を三日月の形に歪ませ、剥き出しの牙を見せ付けながら笑みを浮かべる。
「勝負しろ。俺とテメェでタイマンだ」
「あぁ、それくらいなら良いですよ」
睨みを利かせて言い放つベートにフィン達は諌めようとするも、それよりも早く蒼のカリスマが即答で応えてしまう。
即決で決まってしまった決闘。当然周囲からは止めろと声を飛ばすが、ベートはその言葉を撤回する様子はない。
「……ほんまにやる気か？」
今まで事の流れを静観していたロキが蒼のカリスマに訊ねる。本気でベートとやり合うつもりなのかと。
確かに蒼のカリスマは強い。それこそアポロンという神を殺し、この世界から抹消させる程度には。だが、彼が相手にしようとしているのはロキ・ファミリアの中でも随一の速さを誇るベートだ。蒼のカリスマが例の黒い太陽を生み出すよりも速くベートの牙が届くだろう。
だが、それでも蒼のカリスマという得体の知れない相手には危険が過ぎる。アポロン・ファミリアの様にベートも消されてしまうのではないか、どうにか止められないのかと遠回しに懇願するロキに対し。
「まぁ、多分大丈夫でしょう。ある程度相手をすれば彼も納得するで

しょうし、その間は怪我をさせないように気を付けますので」
平然とそう宣う蒼のカリスマにロキ・ファミリアは言葉を失う。
ベート＝ローガという一流の冒険者を相手に大言壮語とも取れる言い草、当然それを耳にするベートはその表情を大きく歪ませ。
「……上等だ。ぶち殺してやるよ」
遂に、蒼のカリスマに対して宣戦布告をするのだった。

その２０

ベート＝ローガにとって、弱さとは罪である。己の弱さに涙し、命乞いをするだけの弱者をベートは嫌悪し、憎悪する。

戦う意思も無く、立ち上がる気力もなく、誰かに縋り、求め、依存するだけの弱者をベート＝ローガは許さない。

吠える事も立ち上がる事も出来ないなら、冒険者なんて止めてしまえ。ただ脆弱である事を由とする雑魚にこの世界で居場所はない。

この世界は残酷で、冷酷で、どうしようもなく理不尽だ。そんな不条理なこの世界で生き抜くには強くなるしかない。故に、ベート＝ローガは弱者を軽蔑する。

弱者とは即ち、生きることを放棄した⊠。生き抜くことを放棄し、諦めた⊠達。そんな奴等を嫌悪して何が悪い、軽蔑して何がいけない。

だから、ベート＝ローガには目の前の仮面の男が頗る気に入らなかった。弱者を助け強者を挫く、まるでお伽噺の英雄譚を見せ付けられている様で、誰もかも、何もかも救えるのだと宣っているみたいで。ベートにはそれが何故だか気に入らなくて仕方がなかった。

◇

「ほぉ？　中々良い広さを持った場所ですね。流石は音に聞くロキ・ファミリア、練武場一つ取っても大したモノですね」

案内された練武場、ロキ・ファミリアが日夜鍛練する場所として設けられた施設に蒼のカリスマは感心の言葉を漏らす。その佇まいに緊張感は一切無く、他所の派閥に喧嘩を売られたとは思えない程の自然体な姿をフィン達の前で晒していた。

頑丈な造りとなっている練武を惜し気もなく称賛する仮面の男、そんな彼に対しロキ・ファミリア幹部の面々はまるで通夜の如く静まり返っていた。

先程までの宴で賑わっていたロキ・ファミリア、しかしベート＝ローガという一人の狼人（ウェアウルフ）が齎した空気によって賑わっていた宴会は沈下し、他のロキ・ファミリアの面々は早々に自室へと戻っていった。

本来ならベートをリヴェリア辺りが説教をする流れだったが、彼の決闘を蒼のカリスマ本人が快く承諾してくれた為にそれも叶わない。当事者同士による合意の決闘、ロキ・ファミリア団長であるフィン＝ディムナは親指の疼きとは関係なく嫌な予感をヒシヒシと感じていた。

「ベートの奴、大丈夫かなぁ？」

「別にどうだっていいわよあんな奴、いっそのこと蒼のカリスマにズタボロにされればいいわ。そんなことよりもアンタ、看病の方は良いの？」

蒼のカリスマと対峙するベートを吐き捨てるように口にするティオネだが、すぐにその凶暴さは鳴りを潜めて隣に座る妹のティオナに話を傾ける。看病というのは先の人造迷宮で強襲を受けた際に重傷者として担ぎ込まれた⊠達の事。

現在は蒼のカリスマの回復薬により一命を取り留めた為に死傷者はおらず、治療系の派閥で面倒を見て貰っている。交代制で看病する流れであり今の時間帯はティオナ達の番の筈、不思議に思ったティオネが訊ねると。

「うん、レフィーヤ達が代わってくれたんだー。多分こっちの方を優先してくれって意味だと思う」

妹の返事にティオネは成る程と納得する。確かにティオナは大雑把でとてもではないが看病には向かない。誰かを思いやる優しさ

はあるが、その想いと行動が伴っていない辺りアマゾネスは何とも可哀想な生き物か。
「……バーチェは普通に看病しているんだけどねー」
「言わないでよ、悲しくなるから」
今は此処にはおらずレフィーヤ達と同じく看病側へと回っているバーチェにヒリュテ姉妹は何だか負けた気持ちになる。同じアマゾネスなのにどうしてこうも差があるのか、因みにそのバーチェは昔から怪我をした同胞を手当てしていた等の実績があり結構な多才である為、戦力以外な面でもロキ・ファミリアでは重宝されている。
「なぁリヴェリア、お主はあの者の事はどう思う？」
「……人柄的な意味でなら、お前とそう変わらんさ。お人好しで人格者、凡そ冒険者とは思えん人物だ」
ガレスの問いにリヴェリアは淡々と言葉を返す。彼女の言葉はロキ・ファミリアの大部分の総意であり、ガレスやフィンという大幹部から見てもほぼ同意見の内容だった。
「だが、あの一件以来そのイメージは大きく覆りつつある」
あの一件。そう言葉を口にした途端、当時の光景を思い出したリヴェリアはその整った顔を青色に染め上げる。アポロン・ファミリアとヘスティア・ファミリアの戦争遊戯、その戦いで目撃した蒼のカリスマが放つ黒い太陽。それは長い間エルフの王族として生きてきたリヴェリアを以てしても全く覚えのない未知の魔術だった。
全てを消失せしめる災厄の星、たった一度世に顕れただけでアポロン・ファミリアは壊滅し、主神であるアポロンは消滅した。それだけに留まらずかの災厄の星はただ顕現しただけで迷宮都市に多大なる被害を齎した。
神を滅する【魔なる者】、確かに蒼のカリスマの人格は善性なのかもしれない。恩義もある、叶うのならばよき隣人としてこれからも適度な関係でいたいもの。
しかし、あの一件以来リヴェリアの蒼のカリスマに対する印象は随分と変わってしまっている。気を許せばいいのか、敵対者として警戒すれば良いのか、蒼のカリスマという圧倒的力を持つ存在を前に

【九魔姫（ナインヘル）】と呼ばれるリヴェリアでさえも計りきれずにいた。
いや、もしかしたら迷宮都市随一の魔道の実力者であるリヴェリアだからこそ、迷い戸惑っているのかも知れない。頭を抱える彼女に悪いことをしたなとため息混じりに謝罪するガレスは練武場の中央で相対する二人と、審判役であるフィンに視線を戻す。
本来なら自分達の主神であるロキにも話を聞きたい所だが、当の主神は彼女のお気に入りであるアイズの側から離れようとしない。付きまといながらアイズに拒絶される。いつも通りのありふれた光景にガレスは少し安堵した。

◇

「それじゃあ、本当にいいんだね」
「ええ、此方はいつでも構いませんよ」
「何度も同じこと言わせんなフィン、とっとと始めろ」
二人の激突……いや、ベートによる衝突はもう避けられない。溜まりに貯まった彼の憂さを晴らすのは当人同士のぶつかり合いでしか解消されない。
フィンは二人に最後の確認をしようとする。本当に始めるのか、制止を込めた彼の呼び掛けを片や完全に受け流し、片や乱雑に突っぱねる。そんな真逆の対応の二人にフィンは諦めの溜め息で切り上げる。
蒼のカリスマには悪いことをした。その目的や素性は未だ分からない事だらけだが、それでも今はロキ・ファミリアにとって頭の上がらない恩人であることには変わらない。二度も窮地に現れ、無償で他人を助けるその姿はまるでフィン自身が欲する英雄の姿の様で、フィンにはとても眩しく見えた。

故に現状況はフィン自身にとっても不本意なモノ、本来ならベートには厳重に罰を言い渡し自粛して貰いたい所だが、蒼のカリスマ本人が受けてしまったとなればもうフィンではどうする事も出来ない。
恩人だからこそ、その人物相手に強く出れないでいるフィン、責めて謝罪だけでもと決闘前に蒼のカリスマに頭を下げようとするが、それすらもやんわりと断られてしまった。
本人が気にしていないと語る以上、フィンからは何も言えない。責めてこの決闘が致命的な結果に終わらないことを祈るのみである。
いざとなったら無理矢理にでも二人の戦いを止める。その意味合いを兼ねてフィンは練武場の端に座るリヴェリア達に視線を向ける。団長の視線の意図を汲み取った彼等が頷くのを見て、フィンは二人から離れていく。
ベート＝ローガ、蹴り技を主体とする彼の脚部にはヘファイストス・ファミリアの団長、椿が作った最上級の特殊武装（スペリオルズ）が装着されており、彼の本気さが伺える。
油断も慢心もなく構えるベート、対する蒼のカリスマは刃の潰れた片手剣を手にボーッと突っ立っているだけである。
彼の手にしているのは練武場に用意された練習用のモノ、それもかなり使い古された代物で完全武装のベートに対し明らかに不釣り合いな武装を前に、ベートは一瞬呆けて、次に激昂する。
「……テメェ、一体何の真似だ？」
「ん？　あぁ、これですか？　自分が無手なのもどうかと思いまして、折角だからあそこから少しお借りしました。団長さんから既に許可は頂いているので、問題はない筈ですよ」
蒼のカリスマが指差す方へ視線を向けると、そこには廃棄する予定の品が入ってあるゴミ箱がおかれてある。何か得物になるようなモノはないかとフィンに相談した際に案内された場所、武器庫で見付けたものである。
勿論、フィンは蒼のカリスマにゴミを押し付ける気は毛頭なく、ちゃんとした武具を勧めるつもりだったし、何よりそんな使い古された練習用の得物を武器として用意するなんてフィンの頭脳を以てし

ても読める訳がなかった。
　ベートの額に幾本モノ筋が浮かび上がる。完全に舐めている、処の話ではない。完全に相手を叩き潰すつもりでいたベートにとって蒼のカリスマの言動、その一つ一つが彼の神経をこれでもかと逆撫でしてくる。
「それに、これならお互い怪我をせずに済むでしょうし、ちょうどいいかなって思いまして」
「……」
　その言葉を最後にベートは蒼のカリスマに何かを言うのを辞めた。見下している。虚仮にしている。そんな上等な話ではない、蒼のカリスマはベート＝ローガを文字通り脅威として見ていない。
　蒼のカリスマの不遜過ぎる態度にティオナ達は若干引いている。悪意がないのは分かる。彼は、蒼のカリスマは正真正銘本気でそう思っている。だからこそ質が悪い言動に、最早誰も突っ込もうと思わなかった。
　血の雨が降るのは避けられない。どこか諦めた様子で開始の合図をフィンが出した時――――ベート＝ローガは風になった。
　初手の全力、余計な知略も策略もない正面からの一点突破。ロキ・ファミリア随一の脚力を誇る狼人のベートによる高速移動、その速度は音速を越えるに至り、ベートのいた場所が衝撃で爆ぜる。
　避けることは不可能、その仮面にキツイのを見舞ってやる。勢いに乗せた跳び蹴りを放ったベートが己の一撃が入ることを確信し……。
「……は？」
　気が付けば、ベートは練武場の天井を見上げていた。一瞬の意識の空白、何が起きたか理解できていないベートはこの瞬間呆けた顔を晒す。なぜ自分が倒れているのか、頭で理解するよりも本能で察した彼はガバリと勢いよく飛び上がり、蒼のカリスマと距離を開けた。
　自分は今、何をしていた。冷静を装おうとするにも何をされたのか理解できていないベートは、ただ息を荒くして呼吸することしか出来ない。大粒の汗が流れる。

目の前の仮面の男は動いた様子はない。いや、動いた気配が読み取れない。
「テメェ、今何をした」
「何を……と、言われましても。私はただ貴方の蹴りを受け流しただけですよ？　転ばせるつもりはありませんでしたけど」
こう言う風に、と手にした剣をクルリと弄びながら答える蒼のカリスマにベートは戦慄する。意識は集中していた。途切れた覚えも意識を途絶えさせたつもりもない。なのに受け流したと語る蒼のカリスマの動きは読めなかった。知覚する事も認識する事も出来なかった。
「しかしまさか転倒するとは、少し加減を誤ったかな？　それにしてもベート君、倒れるにしてももう少し早く次の行動に移さないと。起き上がるまで一秒弱、これがダンジョン……実戦だったなら、今ので君は五回は死んでますよ？」
それは蒼のカリスマからすれば単なる注意事項、警告ではなく、あくまでベートより年上である自分からのほんの些細な助言。しかし言われた本人からすれば挑発以外の何物でもない。獣の如く姿勢を低くさせ、その脚力を活かした瞬発力で以て仮面の男に肉薄する。
今度は同じ手は通用しない。蹴りを放つ……と、見せかけての拳の攻撃、フェイントを混ぜての更なる強襲。剣で受け流そうとするなら、その剣を掴み取って薙ぎ倒す。
「ふむ、先程よりかは速くなりましたね。ですが」
「っ!!」
「少し、正直過ぎますね」
そんなベートの策を嘲笑うかのように彼の体はクルリと一回転し、地に這うように落とされる。痛みは無かった。優しく、まるで割れ物を扱うように丁寧に倒されるベート、またもや蒼のカリスマの動きが見えなかった。いや、それよりも何故自分はこうまで丁寧に扱われているのか。
再び仰ぎ見る天井、今度は即座に立ち上り背後にいる蒼のカリスマに回し蹴りを放つも、当然の如くいなされて、ベートは三度仰向けに

なる。
三度倒され、それでも尚痛みはなく、懇切丁寧に倒してくる仮面の男にベートは怒りでどうにかなりそうだった。
ふざけるな、何様のつもりだ。何故痛め付けない、叩き潰そうとしない。情けを掛けているつもりか、人を見下すのも大概にしろ。怒りは頂点を超え、塞き止めていた感情が溢れ出る。激情のまま言葉を発するベートに……。
「うーむ、そう言われても君の事は彼の主神と既に約束してしまいましたからねぇ、怪我はさせないで終わらせると。……あぁ、でもそうすると決闘の終わり方が定まらないか」
困ったなぁと首を傾げる蒼のカリスマに主神であるロキを含めたフィン達は言葉を失いベートはワナワナと全身を震わせる。
この男はベートを脅威として見ていない。そもそも敵として見ておらず、彼の中でのベート＝ローガという男はあくまで余所のファミリアの眷族の一人でしかない。親しげに、慎ましく接し、彼の横暴を快く快諾する。
格下として見ている？　違う、敵として見ていない？　違う。蒼のカリスマにとってベート＝ローガは〝仲良くしておきたい人物の一人〟、ただそれだけに他ならない。
（ベート君は悪い所、矯正すべき所を改善すれば今よりもっと強くなれる。今回は向こうから仕掛けてきた事だし、これくらいのお節介は別にいいよね）
と、戦慄するロキ・ファミリアの面々とは対照的に蒼のカリスマは一人呑気に考える。ベート＝ローガは強さに餓えていて、今も尚自分の強さを求めて止まない。それはきっと全ての冒険者にとって誰もが求める一種の必須的要素なのだろう。
ならば僭越ながら自分が標を定めよう。彼がもっと強くなれるように、いざという時に大事な人達を守れる様にと、踏み潰す気でいたベートに対し蒼のカリスマは寧ろ踏み台になる気でいた。
それからもまたベートは蒼のカリスマに噛み付いた。折れてなるものか、挫けてなるものか、屈してなるものか、必ずそのすかした仮

面ごと顔面を叩きのめしてやる。脚に力を込めて、何度もベートは蒼のカリスマに迫っていく。その姿はまさに狼人に相応しい獰猛さを雄弁に物語っていた。

そして、そんな狼に対し。

（おっ、まだ来るか。よーし、俺も頑張っちゃうぞー！　あ、怪我だけはしないようにしないとね！）

蒼のカリスマはその仮面の奥でにこやかに笑みを浮かべるのだった。

◇

「……なによ、これ」

目の前で起きている光景を前に遂に耐えきれなくなったティオネが言葉を漏らす。一体二人の決闘が始まってからどれだけの時間が経過したのだろうか、どれだけ同じやり取りが繰り返されてきたのだろうか。

ベートは本気だった。Ｌｖ５としての力を十二分に発揮し、その脚力を以て蒼のカリスマに食らい付いた。何度も何度も、惜しみ無くその力を奮わせ、時には魔剣さえ取り出し身に纏う武具を最大限に活用して勝ちに行った。

我武者羅に、形振り構わず勝利をもぎ取ろうとしたベートの姿に内心ヒリュテ姉妹は応援していた。普段はソリが合わず、喧嘩ばかりをしている彼女達だが、必死に挑んでいるベートを二人は応援していたのだ。

二人だけではない。同じ派閥の仲間として、アイズもまたベートを

応援していた。普段なら見せないベートの顔が、あの兎の様な少年と何処か重なって見えたから。
　しかし、そんな彼女達の応援は時が経つにつれて萎えていく。その間にベートは幾度となく己の限界を超えた。その光景にアイズ達は勿論フィンですら驚嘆し、感動を覚えた。
　ベート＝ローガは強くなった。この一度の決闘で誰もが認める程に強く、成長し、そして――――絶望を知った。
「よし、また少し速くなったね。良い調子ですよベート君」
　攻撃がいなされて転ばされる。蹴りが届かず転倒させられる。拳がいなされ転倒されてしまう。何度も、何度も何度も何度も

半ば強引に終わらせると、ベートは切れた糸のように崩れ落ちてフィンがそれを抱き止める。普段なら余計なお世話だと突っぱねる所なのに、何も言わずされるがままなベートの様子がどれ程疲弊したのかを物語っている。

「おや？　宜しいのですか？　中途半端な結果はベート君にとっても良くないのでは……」

「いや、ベートはもう充分頑張った。少し休ませてやらないと」

言われてみれば、と今更ながらベートの様子に気付いた蒼のカリスマはアチャーと頭を掻くような仕草を見せ、申し訳ないとフィンに謝罪する。

Ｌｖ５が相手と思って少々やり過ぎたらしい。これがベル＝クラネルだったらもっと加減が出来たのに、これは失敗したなと蒼のカリスマは人知れず反省する。

体力回復のポーションはどうですか？　とせめてもの詫びとして差し出そうとするも、これもまたやんわりと断られてしまう。どうやら思っていた以上にやらかしてしまった様で、漸く蒼のカリスマは練武場を包む空気に気が付いた。

これはもう黄昏の館に厄介になる空気ではないな。やり過ぎてしまった事への謝罪を最後に、館を後にしようとする蒼のカリスマ、練武場の外に続くドアへ向かう途中もアイズ達に道を譲るように避けられてしまう。

このままでは不味い。と、最後に何か言葉を、せめて感謝の気持ちだけは残して行こうと思った蒼のカリスマは扉の前に一度だけ立ち止まって振り返り。

「今回は宴に御呼びいただき、誠にありがとうございます。とても楽しい一時でした」

それでは、と今度こそ立ち去る蒼のカリスマ。彼にとっては感謝のつもりだった。事実、蒼のカリスマにとって黄昏の館での時間はとても有意義だった。

宴会での催しもの出される食べ物も、そしてベートとの決闘の時間も蒼のカリスマにとっては全て得難く、充実し、そして楽しかった一

時だった。
　そしてその言葉はベートの最後の自尊心（プライド）を砕くには充分過ぎる一言だった。
「あ、あぁぁぁ、あぁぁぁぁぁぁっ!!!」
　蒼のカリスマが黄昏の館から出て暫くした後、練武場では一匹の狼の慟哭が鳴り響いた。

その21

√月※日

ロキ・ファミリアでお世話になって数日、ダンジョンにも潜らず平和的日々を送っていた自分の耳にある気になる情報が入り込んできた。

なんでも、ヘスティアの所の命ちゃんが悩みを抱えている様でここ最近連日に歓楽街を彷徨っているらしいのだ。神々の中でも比較的マトモな神格として知られるタケミカヅチの元眷族、彼の教育もあって生真面目な性格として知られる彼女が歓楽街という場所を彷徨うのは余程の理由があるのだろうか？

情報の発信源は偶々ヘスティア・ファミリアへ顔を出した際にベル君だが、彼も実際は目にしておらず彼等が日頃から厄介になっている〝豊穣の女主人〟で又聞きした情報らしい。

命ちゃんの様な娘がファミリアの皆に黙って歓楽街に赴くなんて尋常じゃない。間違ってもそういう話ではないと信じたいが、ベル君達が言うには此処の所の彼女の様子はおかしく、普段はその素振りは見せないが時折思い詰めた表情をしていた様で、聞かされた情報の件と合わせて彼女本人に聞くのは戸惑われる。という事らしいのだ。

こう言う時こそベル君達の主神であるヘスティアの出番で、実際何か悩みはないかとそれとなく話を聞こうとしたのだが、やんわりと断られてしまったらしい。

で、このままでは埒が明かないから今夜命ちゃんの後を付いていく事にして、事の真相を確かめに行くんだとか。未成年であるベル君が歓楽街に赴くのは個人的に……というか、自分の心情的にアウトなので見学という体裁を装い、保護者という事で自分も同伴する事にした。

最初は無関係な自分を巻き込みたくはないと遠慮していたベル君達だが、ああいった場所に耐性の無いベル君を一人で行かせるのも無

理な話で、年齢だけ積み重ねている自分ならある程度のフォローが出来るという事で納得してもらった。
歓楽街への突入組は自分とベル君、歓楽街近辺にはヴェルフ君とリリルカちゃんが外から街の様子を監視するという事で待機して貰う手筈になりその際に自分は二人にあるものを手渡した。
何て事はない、ただの双眼鏡と通信イヤホンである。この数日暇を持て余した自分が異端児達の様子を遠巻きから眺められる様にと思い作った代物で、倍率機能も搭載されておりイヤホンと合わせれば外で待つヴェルフ君たちもリアルタイムで此方の様子を確認出来るだろう。
イヤホンの方も可能な限り小型化に成功しているので装着しても周囲の人目には気付かれないだろう。尤も、外れてしまっては元も子もないので可能な限り大事に扱って欲しいのだが……まぁ、その辺りは状況次第だろう。
本来なら互いの居場所を知れる為にＧＰＳ機能も付けておきたかったけど、流石に材料と時間が足りなかった。こんな事になるならもっと頻繁にダンジョンに潜れば良かったかなぁ？
と、反省は此処までにして人数分のイヤホンとヴェルフ君とリリルカちゃん、二人分の双眼鏡を手渡し、自分達は今夜命ちゃんの後を追って歓楽街に向かう事になった。
……ただ、一つ気になった事は双眼鏡と通信イヤホンを渡した時のベル君達の反応だ。確かにこう言う機械的な品はこの世界では中々見掛けないが、この迷宮都市には【万能者】なる発明家がいるし、彼女に至っては空を飛べる靴を作るのだから彼女と比べたら大した品では無いと思う。
まぁ、今回はいずれ至る彼女の発想を自分が先駆けしたという所だろうか、彼女ほど聡明な人物ならダンジョンで仲間と離れ離れになっても冷静に対処できる様に～なんて経緯から作ってしまえそうなものだしね。
ていうか、既に作っていそうでもある。彼女がその品を世に出さないのはダンジョンという特殊環境に合わせた代物を作っているか

ら、という理由ならば未だに通信端末の一つも出ていない事も理解できる。
話は逸れたが、これで最低限の連携は取れる筈だ。自分達の目的は命ちゃんの尾行、並びに彼女の回収、見付けてもすぐには声を掛けずばれない程度に距離を保ち、最悪の状況に備えて即離脱の準備を心掛ける事。
この事を踏まえて自分達は今夜、歓楽街に乗り込む。童貞の自分には刺激が強いと思い敢えて近付かなかった未知の街、果たして何が待ち構えているのか。
……ヘスティア？　彼女はお留守番です。マトモな逃げ足も無い奴が来ても邪魔になるだけだし。そもそもアイツは眷族の帰ってくる家を守るという大事な使命がある。神としての力を封じ、只人と変わりない神が出来る事なんて、精々そのくらいだろう。
眷族達の帰りを信じて待つ、力を失った神がやることはそれくらいで充分だ。

――――因みにこれは余談だが、ヘスティア・ファミリアへの入団希望者はある理由で今のところゼロらしく、その理由が〝蒼のカリスマと関わりがありそうだから〟である。
解せぬ。
あとリリルカちゃん、人の顔を見てまさかとガクブルするの良くないと思うよ？　何気に傷付き易いからね僕。

√月∂日
少し面倒な事になった。昨夜の歓楽街での命ちゃんの追跡ミッションで知り得た情報だが、何やらベル君がまたもや厄介ごとに首を突っ込んで行きそうな雰囲気なのだ。
先ず昨日の出来事を順に説明すると、潜入自体は滞りなく進んだ。事前に渡した通信イヤホンと二人に渡した双眼鏡も上手く作動したし、二つの品が上手く連動した事により命ちゃんの発見と尾行も驚く

ほどすんなりいけた。
途中トラブルに見舞われたが監視に徹していたサポート二人によって自分も然程派手に動かずに済み、命ちゃんと一定の距離で保つことが出来た。
命ちゃんの後を追うこと数分、何やら大きな建物の前に辿り着いた彼女は意を決してそのたてものへと乗り込もうとした所へ自分達が間に入り彼女を回収。慌てふためく彼女を他所に取り敢えず自分達は人気の無い所へ落ち着く事になった。
最初は自分の都合に申し訳なく思っていた命ちゃんだが、ベル君の必死の説得に応じて事情を話してくれた。そしてその理由の件なのだが、思った通り中々面倒な事になっていた。
命ちゃんが入ろうとしていた店、そこでは命ちゃん達タケミカヅチ・ファミリアの眷族達が昔から仲良くしていた狐人（ルナール）がいるようで、彼女を助け出そうとしていたらしいのだ。
その狐人の名前はサンジョウノ＝春姫ちゃん。何でも由緒正しい家柄の娘だったらしいのだが、とある理由で家から勘当され、身売りによってこの迷宮都市の歓楽街まで飛ばされてきたらしいのだ。
そう言う理由なら仕方ない。色々と思い切りよすぎる所はあるが、要するに昔の親友を助ける為に命ちゃんは単身でその春姫ちゃんを助けようとしていたのだ。やはり命ちゃんは間違っていなかったと安堵するベル君達、自分も知り合いの子が酷い目に合っていなかった事に安心し、ちょっと小言を言うだけにしておいた。
で、その春姫ちゃんだが。今は娼婦としてイシュタル・ファミリアの経営している店で働いているらしいが、詳しい居場所はまだ分かっていない。自分一人が潜入してイシュタルと交渉するのもいいが、それでは親友の為に動いていた命ちゃんの想いを踏み躙る事になる。
そこで自分は一つの計略を試すことにし、取り敢えず今日のところは一先ず退散し、明日改めて潜入する事にした。
久しぶりの潜入、腕がなるゾー！

◇

僕、ベル＝クラネルにはこれ迄沢山の人達に支えてもらって今日まで何とか生きてきた。

神様、ヴェルフ、リリ、命さん、ファミリアの皆だけでなくリューさんやシルさん、〝豊穣の女主人〟の皆さん、ミアハ様や他にも色んな人達が僕達を助けてくれた。

シュウジさんもその一人で、その類いまれなる知識と力で僕だけじゃなくファミリアの皆の手助けをしてくれた。掛け替えのない恩人の一人、今回も僕達の問題を助けてくれる為に色々と尽くしてくれて、どんなにお礼を言っても足りないくらいの恩があった。

圧倒的知識量と経験から紡がれるその言葉はいつでも僕達の力になってくれた。だから、今回もきっと道を示してくれると、そんな風に思っていた。

今思えば、それは甘ったれた考えだったのだ。どんなに間違っていたとしても、僕達は自分の力で何とかするべきだったのかもしれない。

――――だって。

「き、貴様ら、本当に我がファミリアの入団希望者なのか？」

「ええ、そうよ。三女ベール、次女ヴェルチア、そしてこの私長女リン。名高き女神イシュタルとその眷族達の噂を耳にして遥々迷宮都市の外からやって来たの」

「人呼んでベルリン三姉妹。さ、女神イシュタルにお目通りを願おうかしら？」

今、僕達は女装をしてイシュタル＝ファミリアに正面から乗り込もうとしているのだから。

……なんでええええ!?!?

その22

女神イシュタルは美しい。それはここ迷宮都市オラリオでも多くの人、神々が認めていてイシュタル本人もそれを信じて疑わない。

あらゆる人間、神、全ての種族が己の美貌に酔いしれ、ひれ伏すのだと女神イシュタルは絶対の自身を持っていた。そう、自身と同じ美の女神として称されるあの忌ま忌ましいフレイヤが己の目の前に現れるまでは。

美の女神と言えば、と聞けばフレイヤと答えるものが多くなった。何故自分ではなくフレイヤなのか、イシュタルは妬んだ。妬み、僻み、そしてそれは軈て憎しみと呼べる程の激情となってイシュタルの内側で暴れまわっている。

そのフレイヤが本拠地（ホーム）で引き籠もっていると知った時は少しばかり溜飲が下がったが、それでも自分がこれまで受けてきた屈辱の事を考えると腹の虫は収まらず、寧ろ今こそがフレイヤを眷族諸ともオラリオから追放するチャンスなのだとイシュタルは考えた。

自分こそが美の女神なのだと、誰よりも美しい自分こそが世界に讃えられるべき存在、準備は既に整っている。春姫という得難い駒を手に入れた事で打倒フレイヤ＝ファミリアがより現実味を帯びてきた。

協力者であるカーリー・ファミリアが消えた事は大きな痛手だが、今は代わりに闇派閥（レヴィス）の連中もいる。寧ろ裏世界に精通している奴等と手を組んだことで計画はより完璧に近くなったと言える。

後は邪魔なフレイヤを人間界から物理的に追放するだけ、自分の計画に穴はない。そう確信していたイシュタルは……。

「まずは、お目通りを許してくれた事に感謝の言葉を送らせて戴きますわ。名高き美の化身女神イシュタルよ」

「あぁ、うん。どうも」

目の前の矢鱈筋肉質な女……女？　にイシュタルは現在思考を停止していた。

いや、混乱しているのは主神である彼女だけではない、彼女を守る

ために集められた選りすぐりの幹部達、戦闘民族の種族として知られるアマゾネス達の彼女等も目の前の珍獣に困惑していた。
　自らをイシュタル・ファミリアの入団希望とやって来た三姉妹ベール、ヴェルチア、そしてリンという自称ベルリン三姉妹、末っ子のベールが可愛らしい外見をしているのはまぁ分かるが、それでもあとの二人は色々無理があるだろう。
　特に長女を自称するリンに至ってはお前本当に女のつもりかと疑うレベルだ。鍛え抜かれた四肢を惜し気もなく晒し、見たくもないバキバキに割れた腹筋とヘソを露にしていている。明らかなアマゾネスを真似たその格好にイシュタルとその眷族達は色んな意味で度肝を抜かれていた。
「えっと、それで？　　お前達がその……私のファミリアに入りたいって言う入団希望者？」
「ええ、門番の方からお話があった通り我々ベルリン三姉妹が己の美と女を磨くべく遥々遠くからやって来た次第です」
　目の前の自称女が何か言っているがイシュタルの耳には余り入ってこない。衝撃的過ぎる長女の格好に未だ見慣れていない彼女では彼女（？）の言葉の真偽を確認する事だけしか出来ないでいる。
「うん、まぁお前達が私の眷族になりたいのは分かった。しかし何故お前だけがその……格好がアレなんだ？」
　アマゾネスを意識した格好の長女に対し、次女と三女は大人しい服装となっている。膝下よりも長いスカート、上着の服も地味めで色合い的にも目立つ所は見当たらない。普段ならば地味な女と笑い飛ばしていた所だが、長女のお陰なのか然程気にはならなかった。
「本来ならこの子達にも相応の格好をさせてやりたい所だったのですが、次女は環境の所為もあって男勝りな性格となり女としての自覚は薄く、末っ子に至ってはまだ年若い為に未だに女らしい格好になれておりませんの。故に強く美しい種族の代表格であるアマゾネスの皆さんあやかり、私が格好だけでも真似る事で二人の模範となるように努めてきましたの」
　お前がそんな格好しても模範になんねーよ。という言葉をイ

シュタルは精一杯呑み込んでみせた。何でよりによってお前なんだよ、と。お前が後ろの二人みたいに着込んでいろよ、とか様々な感情が駆け巡ったがそれらの疑問やツッコミをイシュタルとその眷族達は全力で飲み干して見せた。
「あぁうん、取り敢えずお前達が私の眷族になりたいと言うのは分かった。けれど今此方は色々立て込んでいてな、今すぐお前達を私の眷族に加える事は出来んのだ」
「むむ、そうですか。それはタイミングが悪かったですね。しかしこれは困りました。今私達には宿を探す余裕もなく、路銀もありません。近くに格安の宿舎施設があれば良いのですが……」
「それに関しては心配するな。この娼館にはまだ空きの部屋がある。事が済むまでそこで休んでおけ」
「おや、それは有難い。ですが良いのですか、我々のような外部の人間を簡単に置いてしまって」
「――――侮るなよ。我が派閥は単なる娼婦に非ず、戦いにも秀でた戦闘娼婦で成り立っている。お前達がおかしな言動すれば即座に処理する事も可能だ」
　長女リンの挑発めいた言葉に敢えて強気で対応したイシュタルは自身が築き上げてきた眷族達を以て威嚇する。数多くいる冒険者達の中でも上位に位置する戦闘娼婦のアマゾネス達、彼女達が放つ威圧に呑み込まれそうになる次女と三女、そんな中唯一長女のリンだけは二人を庇うように前に立ち、平然と彼女達の威嚇を受け流していた。
　やはり只者ではない。ふざけた格好をしているが目の前の長女は己の眷族達の殺気を受けても平然としている。その姿勢に少なからず興味を抱いたイシュタルはフレイヤ・ファミリア打倒後は彼女達を引き入れる事を決心した。
「ふふふ、成る程大した胆力だ。その度胸に免じ、此度の件を終えればお前達を我が派閥の一員になることを許そう。それまでは用意した部屋で休んでおれ」
「ご配慮、感謝致します」
「うむ、アイシャよ案内してやれ」

「はいよ。そら、此方だよ」
頭を下げ、感謝の言葉を口にする姉に倣って二人の妹も頭を下げる。あの三人がファミリアに入る事を色んな意味で楽しくなってきたイシュタルはこれから自身が待つ栄光の日々に夢想する。
あの姉妹、特に長女は底知れない何かを感じる。まるでかの【魔なる者】の様な、刺激的で、未知に溢れ、それでいて恐ろしいあの魔人を何処か彷彿とさせている。
もし奴を自分の配下に加えたら、きっと己の派閥はもっと大きくなる。きっとフレイヤ・ファミリアに成り代わって新たなるオラリオ最強の派閥が生まれるに違いない。
その未来を夢見て、イシュタルは不敵に笑いその時が来るのを心待ちにしていた。

◇

ヴェルフ＝クロッゾは目の前ソファーで寛いでいる長女リンことシュウジを見てつくづく底知れない人だと戦慄した。
女装をしてイシュタル・ファミリアに堂々と乗り込むという離れ業を平然とやってのけたと思えば、言葉を巧みに操ってイシュタルの神としての嘘を見抜く眼を欺いてしまった。
いや、詳しく言えばシュウジは嘘を言っていない。その日の内に抜け出すという前提があったとしてもイシュタル・ファミリアに入りたいと希望したのは本当だし、遠い所から来たという出自に関する話も嘘ではない。ただ本当の事を話していないだけでこうもあっさり上手く行くものなのか。
トドメにはイシュタル・ファミリアの眷族達、団長を除いた彼女達からの殺気に怯む様子は全く無く堂々とした佇まいもそうだ。一体

どんな体験をすれば彼処までの度胸が身に付くのか。
（おまけにこんなスゲェマジックアイテムも作っちまうと来た。一体何なんだこの人は）
事前に手渡された通信端末、耳に備え付けられたこの品も結局はイシュタル・ファミリアにバレずに済んでいる。耳の穴に填まる様に作られたこの装置を軽く触れただけで歓楽街の外にいるリリルカ達と言葉が交わせるというのだから驚きだ。
一体この人……シュウジ＝シラカワは何者なのか、疑問に思うヴェルフだが今はそれよりもこの館に囚われている春姫なる狐人を助けるのが先だと、ヴェルフは頭を横に振って気持ちを切り替える。
「さて、我々がこの館に潜入した時点で目的の三分の一は完遂した。後は春姫なる狐人の少女を誘拐……もとい、この館から連れ出してほとぼりが冷めるまで俺の家で匿う手筈だけど、二人とも逃走経路の方は頭にいれてるかな？」
「はい、シュウジさんが用意してくれたこの館の見取り図が分かりやすくて覚えるのも簡単でした」
「それは良かった。でも来る前にも言ったけどこれはあくまで俺が音で計測して図ったモノだから、あまり過信しないように気を付けてくれ、万が一は大きな声を出して居場所を報せる様に、最悪そこからは俺が何とかするからさ」
「でも旦那、本当にフレイヤ・ファミリアの連中はここへ来るのか？
確かに女神イシュタルは同じ美の女神のフレイヤを面白く思っていないのは分かったけど、向こうには【猛者】がいるんだろ？」
「その【猛者】を抑えるための用意がイシュタル・ファミリアにはあるのだと思うよ。そしてそれこそが春姫なる狐人を厳重に囲っている理由なんだろうさ。それに神なんて者は総じて身勝手極まりない輩が多い。自分の目的が達成されると知れば何を犠牲にしても取りに来る。そして矛先を向けられた時は遠慮無く報復する。故に断言するよ、フレイヤ・ファミリアは必ず来る。というか、【猛者】がそれを許さないだろうしね」
確信した様子で断じるシュウジにヴェルフは二の句も言えずに

押し黙る。神に対して不遜とも言える物言いだが、そう言わせるだけの経験があるような言い方にヴェルフはなにも言えなくなった。
益々深まるシュウジへの疑問。自分達に協力してくれるのは有難いが、それでもヴェルフのシュウジへの疑念は消えることはない。悪意がないのは分かる、しかし自分達の為に無益と知りながらもここまで献身的になってくれる目の前の男にヴェルフはどうしてもそれが拭えなかった。
するとその時、扉の方から足音が聞こえてくる。重く、響くような足取りだ。相当な巨体を思わせるその足音の主は部屋の扉をノックせずに開け、その姿を露にする。
それは、まるでヒキガエルの様なモンスターだった。イシュタル・ファミリアはモンスターも飼い慣らしているのか、驚愕に打ち震えるヴェルフとベル、よく見れば人にも見えなくもないがその風貌はダンジョンの奥で潜むと言われる階層主の様……。
「ゲゲゲッ、イシュタルが珍しく良い拾いものをしたなんて言うから来てみれば、なんだい相変わらずブサイクばっかりかよ。美の女神とか言われている割には大した事はないねぇ」
ヒキガエルの様な風貌のアマゾネス、イシュタル・ファミリアの団長であるフリュネ＝ジャミールはその巨大な口を大きく広げて嗤う。己を絶世の美女と信じて疑わない彼女達は己の前に立つ全ての女がブサイクに見えてしまう。
【男殺し（アンドロクトノス）】、男性であるならば一級の冒険者からも恐れられる彼女を前にヴェルフとベルは震える自身の体を抑えるだけで精一杯だった。
「無粋ですよ。貴女もイシュタル・ファミリアの人間ならば少し弁える事も覚えた方が良いですよ」
「あぁ？」
そのフリュネの視線が一人の女（女装）へ向けられる。またブスが私に負け惜しみを言いに来たな、と。新人の癖に生意気だと思いながらドスの利いた声を漏らしながら振り向くと。
フリュネは絶句した。
引き締まった肉体、一切の無駄を省き躍動感溢れる筋肉、睫毛は

長く見るもの全てが平伏してしまいそうな威圧感、フリュネが目指す美の究極がそこにあった。

膝から崩れ落ちるフリュネ、自身を絶世の美女と信じてきた女が初めて痛感する挫折の瞬間。味わった事のない彼女が次に口にしたのは。

「……頼む」

「ん？」

「アタイを、アタイをアンタの……弟子にしてくれ！」

「「……はぁぁぁぁぁぁっ!!??」」

当然ながら、ベルとヴェルフは絶叫した。

その２３

膝から崩れ落ち、縋るように懇願するフリュネ＝ジャミール。イシュタル・ファミリアの団長にしてＬｖ５の女傑であり【男殺し（アンドロクトノス）】として迷宮都市の多くの男性を震え上がらせてきた傑物、カエルに似た顔を更に歪ませてフリュネはリン改めシュウジに弟子入りを求めた。

当然の事ながらベルとヴェルフは困惑した。戸惑い、混乱し、思わず叫び声を上げてしまう位には動揺していた。何故こんな事になってしまったのか、未だに理解できない二人はただその様子を眺める事しか出来ないでいる。

というか、関り合いたくないというのがヴェルフの本音である。

「弟子入り、それは私の美しさの秘訣を知りたい。という意味かしら？」

「あ、あぁそうさ！　悔しいけどあんたの美しさは本物だ！　鍛え抜かれた四肢、長い睫毛、まるで男が女装しているような頑強さ！

一級の冒険者にだってアンタのような奴はいないだろうさ！」

（（正解！））

フリュネの的確すぎる指摘にベルとヴェルフは口を両手で塞いで噴き出すのを堪える。そこまで言い当てるならいっそ女装していると見破っても良さそうだというのに……しかしバレていないなら好都合、ここは余計な事は口にせずもう暫く様子を見ていても良いだろう。

「アタイ以上の美貌を目にするなんて夢にも思わなかった。でも事実アタイは認めちまったんだ。アンタの美しさに、アタイは負けたんだってな！」

「勝手な事を言っているのは重々承知している！

でもどうしても知りたいんだ！　どうやったらそこまでの美貌を手に入れられる!?　どうすればアタイはもっと美しくなれる!?

頼む、一欠片でもいいから、その秘訣をアタイに教えてくれ！」

両手足を地に張り付け、頭を下げる。それは所謂土下座というものだった。嘗て女神へスティアがヘファイストスに眷族への武器を作って欲しいと嘆願した際に繰り出した一部の神々と人々にしか伝わっていない頼みごとに於いての秘奥義。

自らの美しさに絶対の自身を持つフリュネ、故に美しさに誰よりも貪欲なアマゾネスの戦闘娼婦、そんな彼女の訴えに何か思う所があるのか、シュウジは遂にその口を開いた。

「美しくなりたい。貴女は今、そう言ったのね。なら一つ聞かせて頂戴、貴女にとって美しさとはなに？」

「肉体の強さ。頑強で力強く、何者にも折れず屈せず、己を己としていられる絶対的象徴！」

必死に、けれど言葉は選ばずに自分の思う通りに美しさに対する気持ちを露にするフリュネにベル達は意外なモノを見たような気持ちで眺めていた。

フリュネにとって美しさと強さはイコールで結ばれている。強ければ強いほど人は美しくなるものだと信じ、故に頑丈な外見である自身を誰よりも美しくあると信じて疑わない。

そんな必死なフリュネをシュウジ――――否、リンは慈愛に満ちた笑みを浮かべていた。

「成る程、美しさとは強さ。それもまた真理なのかもしれない。突き詰められた強さは時に芸術の様な輝かしさを放つもの、貴女の言う美しさもそういう意味では正しいのかもしれない」

「じゃ、じゃあ！」

「でもね、それだけではないと私は思うの。だって強さだけが美しさの証明になるなんて、そんなの寂しいじゃない」

寂しい。フリュネの語る美しさの原点をそう論じるリンにフリュネは頭をガツンとハンマーで叩かれた様な衝撃を覚えた。美しさとは強さ、逆を言えばそれしかないと無意識に断じてきた彼女にとってリンの言葉は剰りにも衝撃的だった。

「私にとって美しさとは万華鏡の様なもの、視点を、見方を、在り方を変えればそれだけ人は美しくなる。貴女の言う美しさに対するぶれ

ない気持ちも素敵だと思うわ。でも、それは岩石や彫刻の様な完成された美しさ、確かにその美しさも人々は惹かれると思うけど、私からすれば少し寂しいと思うの」
「……」
「ねぇ、貴女は恋をしたことってある？」
「恋？」
「誰かを好きになる事。思いやって、焦がれて、それでいて胸が締め付けられる位辛くなる。そんな甘くも苦い感情の事」
　恋という言葉を耳にしたとき、フリュネはゆっくりと首を横に振った。自分はこれまで多くの男を喰らってきた。無遠慮に、無差別に、無理矢理に、泣いて許しをこう男達をフリュネは愉悦を抱きながら喰らい尽くしてきた。自分の美貌をより美しくする為、【男殺し】なんて二つ名を手にしたときなんかは男が自分には勝てないという絶対の自信の裏付けされたのだと歓喜に震えた程だった。
「恋を以て愛を知る。人はそれを【恋愛】と呼ぶのよ」
「れん……あい？」
「そう、そして恋愛は女をより強くさせる。それこそ誰にも負けない程に、ね」
　その言葉は何故かとても実感の籠った言葉だった。まるでその事を目の当たりにしたかの様な口振り、優しく笑みを浮かべているリンを、シュウジをこの場にいる誰もが綺麗だと思った。
（あぁ、そうか。アタイは……間違っていたのか）
　シュウジの微笑みに全てを察したフリュネは自分がこれまでしてきた事が間違いであったと思い知った。他者を貪り、強さを求めるだけの美学。けれどそれだけでは限界があるのだと、この日フリュネは知ることになった。
　フラフラと覚束無い足取りで立ち上がり部屋を後にするフリュネ、その際に一度だけ立ち止まり。
「ありがとうよ。アンタのお陰で少しわかった気がするよ。アンタ達が何の目的でウチに来たのかは知らないけど、精々気を付けな」
「ええ、そちらこそお元気で」

それだけの言葉を交わしてフリュネは今度こそ部屋を後にする。恐らくはフレイヤ＝ファミリアとの戦争に備えに向かったのだろう、人気は無くなり遠くから騒音が聞こえてきた頃合いを見計らって……。

「さて、それじゃあ我々も動こうか」

「うす！」

「はい！」

三人は春姫を奪還する為に行動を開始した。

――無論、女装のままで。

◇

雨が降っている。歓楽街は闇派閥（イヴィルス）とイシュタル・ファミリアとフレイヤ・ファミリアの抗争によって半壊し、あちこちから悲鳴と怒号が溢れている。

フリュネは己の武器を手に立ち上がっていた。息は荒く、身体中に傷を付け、体力も限界に差し掛かり、それでもなお彼女の瞳には強く光を灯している。

「ほう、中々しぶといな。それも例のレベル・ブーストの恩恵か？」

その彼女が今前にしているのは――《龍》だった。身に纏う鎧は燦々と燃え上がり、手にしている剣はそれ以上の焔を纏わせている。

ただ身に纏うだけで死に至る呪われた龍の甲冑、内に眠れる龍を下し、新たに主と認められし者。

【猛者】。最近になってより高み（Lv8）へと至った迷宮都市最強の冒険者が、己の属する派閥を愚弄する輩に鉄槌を下すためにこの歓楽街へと足を踏み入れた。

「あの小娘のスキルなんて関係ないさね。アタイはアタイの力でアンタを倒すと決めたのさ」
　鎧は砕かれ満身創痍のフリュネ、情報にあったスキルに頼らず、ただ己の力で窮地を覆そうとする女に【猛者】オッタルは冒険者としての在り方を見た。
「……そうか、ならば最早言葉は無用。貴様が抗い俺が潰す。この上ない単純な構図、俺も全霊を尽くすとしよう」
「ハッ！　悪いがアタイはまだ死ぬつもりはないよ！　　より美しくなるために、恋を、誰かを愛する事を知るために、アタイはこれからも生き続けるのさぁ！」
　武器を構えてフリュネは跳躍する。その一撃に全てを掛けて吶喊してくるアマゾネスの戦士、その一撃に報いる為にオッタルもまた全力を奮う。
　瞬間、歓楽街に一頭の龍が顕現した。全てを灰に還す劫火の一撃は軈て歓楽街を呑み込んだ。
　この日、イシュタル・ファミリアは壊滅した。多くの眷族達は散り散りとなり、主神であるイシュタルは天界へと強制送還された。
　その裏で暗躍していた闇派閥もロキ・ファミリアに所属するベート＝ローガが単身で連中を撃破し、多くの市民の命を護っていた事が後に判明。また、この時の調査でベート＝ローガはＬｖ７に昇格していた事がわかり、現在ギルドに報告している模様。
　異例な二重昇格（ダブルアップ）そんな彼の側には一人のアマゾネスの少女がいたという。

◇

√月Ω日

いやー、色々あったけど無事に春姫ちゃんを救出できて良かったよ。イシュタル・ファミリアもフレイヤ・ファミリアによって完全崩壊したし、春姫ちゃんも同郷の友人である命ちゃんがヘスティア・ファミリアに属している事もあってギルドも彼女がヘスティア・ファミリアに属する事も認めてくれた。

結果を見れば万々歳な出来事、歓楽街から脱出する際に見掛けたベート君も元気になっていたし、良かった良かった。

ただ一つ気になることがあると言えばフレイヤ・ファミリアの所の【猛者】オッタル、どうやら彼が自分が以前へファイストス・ファミリアに売りに出した鎧の購入者になってくれたらしいのだ。

結構使いこなしている見たいで製作者としては嬉しいかぎりだけど、個人的には少し複雑かな。この間は一方的に襲い掛かってきた相手だし、まぁ今はそんなに気にしてはいないんだけどさ。

それよりも今は鎧の方だよ。何でも彼が着用している鎧、つまりは俺が作った作品なんだけど、なんだかアレ、所有者を自身に見合った者じゃないと焼き殺す呪われた武具として扱われていたらしいのだ。噂で聞いた話だけど。

あれってそんな機能あったっけ？　確かに重力操作による加工の他に色々継ぎ足した代物だけど、そんな呪い要素は欠片もなかった筈だぞ？

鱗とか爪とか牙とか宝玉とか、某ハンティングゲームに沿った一品。炎を出せる機能はあっても所有者を選んだりとか、ましてや燃やして殺す物騒な仕様ではなかった筈だ。

だって自分で確かめたモノ、着心地とか色々試したんだもの、俺が着ている間はそんな様子は微塵もなかったんだよ!?

まぁ、でも噂とはいえそう言う話がある以上へファイストス・ファミリアには一度話した方がいいかもなー。知らなかったとはいえ、不良品を押し付けた様なものだし、もしかしなくても詐欺だよなぁこれって。

お金を返品しただけじゃあ納得……してくれるかなぁ。うーん、

どうしよう。
取り敢えず明日早速謝りに行こう。喩え神が相手でも自分の非には素直に認めないとな。

◇

昔々、あるところにカエルの戦士がいました。カエルの戦士は多くの人々から醜いと後ろ指を指され、孤独に一人寂しく生きていました。
しかしある日、カエルの戦士はある魔人と出会います。魔人は言いました。
〝恋を知りなさい。恋を知り、愛を知ることで人は美しくなるのです〟
それから、カエルの戦士は戦いました。恋を知るために、愛を知るために、カエルの戦士はいつも誰かの為に戦い続けました。
自分よりも弱い人を守り、どんな相手にもカエルの戦士は戦い続けました。あらゆる理不尽から、不条理から、力のない人々の為にカエルの戦士は戦い続けました。
軈てカエルの戦士は親のいない子供たちの親代わりとなり、彼等を守り続けました。
そしていつしか戦士は聖母と呼ばれる様になり、子供達をいつまでも見守りましたとさ。
――――醜いカエルの戦士より抜粋。

その２４

――――ヘファイストス・ファミリア本拠地、応接室。

大手鍛冶派閥として知られるヘファイストス・ファミリアの本拠地、来客との取引や大手迷宮攻略派閥との商談の際に使われる応接室は、現在重苦しい空気に包まれていた。

備え付けのテーブルを挟んで片側の席には派閥の主神であるヘファイストスと団長椿が座り、その反対側には件の戦争遊戯の時に迷宮都市全体に知れ渡る事になった仮面を被り謎に包まれた人物、【魔なる者】蒼のカリスマ。

不滅とされてきた神を屠り、未だその全てを明かしておらず、その存在自体が神々にとって禁忌（タブー）として位置付けられている。

その存在が、自分達ヘファイストス・ファミリアに接触してきた。何のために、どう言った目的でここへ来たのか。外で顛末を待ち続ける眷族達が固唾を呑んで応接室のドアを見つめていると。

「謝罪をしにきたぁ？」

間延びした椿の声がドア越しから聞こえてきた。突然聞こえてきた団長の声に動揺する眷族達、すると今度は主神であるヘファイストスがジト目で椿を大人しくするよう叱咤する。

視線に気付いた椿が苦笑いを浮かべて体を縮める。その姿にヘファイストスは溜め息を溢してそれ以上の追及は止めておくことにした。

それに、気持ちは分かる。神殺しという偉業（禁忌）を成し遂げた怪物が自分達の所へ来たと思えば、いきなり謝罪をさせて欲しいと願い出てきたのだ。目の前の魔人に謝られる心当たりは無いのだからヘファイストス達は困惑するしかないのだが。

「先日、私の盟友がある装備を貴女達に売り払った装備一式についてです。どうやらあの鎧は私が想像していたモノよりも厄介な品だったらしく、粗悪品を売ってしまった事に対する謝罪をさせて戴きた

く、こうして参上に参った次第です」
　そう言って頭を下げてくる魔人に目を点にしながらもヘファイストスは何の事なのか直ぐに思い出した。隣の椿も同様に気付いたのか、手を叩いて閃いた素振りを見せている。
「成る程、あの鎧と大剣の製作者はお主だったか。うむ、何となく納得したぞ」
「付きましては、その間にヘファイストス・ファミリアが被った被害額、ならびに売却した際にそちらから受け取った金銭を返金、賠償する事で示談を成立させて戴きたいのです」
　そう言ってテーブルの上に出されるのは二つの風呂敷、丁寧に畳まれた風呂敷中には大小二種類が用意されており、それぞれが今回蒼のカリスマが用意したものだと分かる。
　大きい風呂敷は恐らく鎧を売却した時の金を金塊という形にしてきたのだろう。金塊は物価の変動があってもその価値を余り崩されることはなく、資金を管理する際に何気に有効だったりしている。
　なら、小さい風呂敷の方はどうだろう。話の流れからしてこれはどうやら鎧を置いてあった間に被ったとされる被害に対しての品なのだろう。
　正直、被害云々の事はヘファイストス側はそんなに気にした事はない。確かにあの鎧と大剣の所為で一時期僅かに客足が遠退いたが、それ以上に椿を始めとした有力な鍛冶職人の眷族達をやる気にさせてくれた。ヘファイストス自身も神器に等しい武具を目の当たりにした事で創作意欲も増したし、これにより売り上げが何時もより三割程増したりしている。
　ヘファイストス達にとって蒼のカリスマの謝罪よりも彼の鍛冶技術の方が気になっていた。あれほどの武具を生み出せる技術、鍛冶に携わる者ならば人間、神問わずに気になる所。
「別に、被害と呼べるほどの損害は出ていないから気にしなくてもいいのよ？　実際あなたが造ったとされる武具はフレイヤの所の眷族（子ども）が買い取ってくれたし、うちの子達のやる気を引き出してくれる起爆剤にもなってくれた。貴方にとっては違うかもしれないけど、貴

方の作品は確かに私達の糧になってくれたの。だから、賠償なんて必要ないわ」
「……そうですか」
だからお金はいらない。そう言ってその代わりに貴方の技術を教えて欲しいとヘファイストスは続けた。相手の気持ちを逆手にとる様で心苦しいが、鍛冶職人としての好奇心が勝ってしまっている。
「私の鍛冶としての技術、ですか」
「ええ、貴方の製作した武具は常軌を逸脱している。相手を選ぶ武具なんてそれこそ古の英雄達が使っていた伝説級の代物、私ですら神としての権能を用いれなければ作れない。人の身でありながらそこまでの境地に踏み込めた貴方の技術力に興味が引かれたの。どうかしら、貴方さえ良ければ私達の派閥に入って欲しいのだけれど……勿論、無理にとは言わないわ」
それは、神としてではなく職人という技術を扱う者としての勧誘だった。優れた技術を用いる者がいて、その者から教えを請い自らの力とする。そしてそれは椿やヘファイストス・ファミリアに属する全ての眷族達の望みでもあった。
そんな彼女の言葉に満更でもない自分がいる。蒼のカリスマは仮面の奥で笑みを浮かべながら……。
「申し出は嬉しいのですが……申し訳ありません。その誘いには応えられません」
鍛冶の女神、ヘファイストスの誘いを丁重に断った。ヘファイストスからの追及もなく、彼女もまた「そう……」の一言で終る。
隣に座る椿は納得出来ていないのか、頬を膨らませてブー垂れている。しかし、蒼のカリスマからすれば今後の事を考えると、巻き添えになる可能性は極力無くしてしまう方が後腐れなくて動きやすいのだ。
「では、せめて此方を受け取って下さい。これはダンジョンで偶々拾ったドロップアイテム、少々レアモノで余り市場にも出回らない代物ですが、鍛冶職人の貴女達ならばきっと活用してくれる事でしょう」

そう言って小さな風呂敷を前に出して蒼のカリスマは席を立つ。謝罪は終わり、渡すべき品も渡せた。ならばもうここに長居をする事はない。

踵を返して部屋を後にしようとする蒼のカリスマをヘファイストスは見送ると言って付いてくる。軈て本拠地の出入り口へとたどり着いた二人、それではこれで失礼しますと向上を述べて蒼のカリスマは立ち去ろうとするが。

「……最後に、一つ聞かせてくれないかしら」

「私に答えられるものであれば」

「貴方は、きっととてつもなく強いのでしょう。ロキの所の【勇者(ブレイバー)】や【猛者】よりも、だから分からない。どうして貴方はそれほどの強さを有していながら、迷宮攻略を目指さないの？」

迷宮攻略は全ての冒険者達の……否、人類の願いである。千年も昔から存在し、人々に恐怖と未知を植え付けたこの世界に於ける最大の謎。神々すら知らない未開の世界。

多くの伝説が生れた。英雄が、神話が、英雄譚が誕生し、その多くがダンジョンに纏わるものだった。その多くが人とダンジョンの物語であり、同時にダンジョンへの謎を深める要素となっている。

未だにダンジョンの全てを知るものはいない。その規模も大きさも千年経った今でも解明されてはいない。だが、今は違う。

永い時が流れた事で、今この迷宮都市には多くの英雄達が誕生している。勇者、猛者、剣姫、他にも多くの英雄が日々迷宮攻略に勤しんでいる。彼等の中にいつか神友の眷族である白髪の少年が加わる日も近いだろう。

そして何より、目の前の魔人は神すら屠る規格外の力の持ち主だ。彼ならばロキやフレイヤの眷族達が限界を感じた階層であっても、楽々と踏破してしまうのだろう。故に分からない、それだけの力を持っていながら、どうしてこの男はそれをしないのか。

そんな女神の疑問を蒼のカリスマはなんてこと無い様に口を開く。

「――――」

そしてその言葉を耳にした瞬間、足元が崩れる錯覚を覚えた。

嗚呼、これが絶望という奴か。遠くなっていく蒼のカリスマの背中を見つめるヘファイストスは初めて覚えた感情に自嘲の笑みを浮かべるのだった。

◇

――――――迷宮都市。とある酒場にて。

「あぁ？　蒼のカリスマについて知りたいだぁ？　止めとけ止めとけ、あの人に関わったら命が幾つあっても足りねぇぞ」

「命っつーより、常識の方じゃね？　足りねぇの」

「砕かれるからってか。上手くねえっての」

「で、なんでそれを俺達に聞くんだよ？　あ？　噂で聞いた？　ちっ、誰だよ余計な噂を広めたのは。……わぁーったよ。ただしくれぐれもこの事は秘密だからな。もしうっかり誰かに話してみろ」

「その時はお前の所にレアドロップアイテムの波が押し寄せてくると思え。いいな、これは警告だ。絶対に忘れるなよ」

「で、あの人の何が知りたい？　はぁ？　あの人の武勇伝は大体知ってる？　なら何で俺達に話を聞きに……」

「そもそもな話、それだけの力を持っていながらロキ・ファミリアに迷宮攻略の階層更新を先越されている訳がない。ねぇ」

「残念ながら坊主。お前はあの人の事を分かっていねぇ、あの蒼のカリスマの怖さを全く以て分かっちゃいねぇ」

「俺も聞いたさ。それだけ強いのにどうして迷宮攻略を目指さないのか、ってな。そしたらあの人、何て言ったと思う？」

『だって、そんなの悪いじゃないですか』

「あの人は出来る出来ないじゃなく、〝悪い〟と言ったんだ。自分が先に迷宮を攻略するのは気が引けるってな」
「つまり、あの人にとってダンジョンは名声を勝ち取る所でもなく、莫大な富を手に入れる狩場ですらねぇって事だ」
「あの人には散々心折られてきたが、砕かれたのはあの時が最初だったな」
「坊主、覚えときな。世の中にはな、モンスターなんぞより恐ろしい本当の意味での化け物ってのがいるもんなんだよ」

その気になれば、天にあるお星さますら呑み込んでしまう。そんな化け物がな

その２５

　イシュタル・ファミリアとフレイヤ・ファミリア、迷宮都市オラリオでも有数の大手派閥として知られる両陣営の激突から数日の時が流れた。
　二大派閥の激突、これにより歓楽街は崩壊しフレイヤ・ファミリアと対立してきたイシュタル・ファミリアも主神が天界へ強制送還された事により壊滅、長きに渡って対立してきた二つの派閥がこの日一つの決着を迎えた。
　イシュタル・ファミリアの多くが恩恵を失った事により迷宮都市から離れ、その中である者は別の派閥に吸収され、またある者は別の神に恩恵だけを授かりオラリオをはなれた。
　前者は兎も角後者の方、特にそれがイシュタル・ファミリアの戦力の要である団長にその様な扱いは危険だと声高に叫ぶ神は多くいた。イシュタル・ファミリアの団長のＬｖは５、そんな彼女を恩恵を授けたまま自由にするのは余りにも危険だと。
　そんな神々を説得し、擁護をしたのは意外にもイシュタルと対立していたフレイヤだった。彼女には此方に対する敵対意識はない。万が一再び彼女が自分達に牙を向けてきたならその時は自分達が責任を持って処理しよう。神々が集う【神会】で堂々とそう語るフレイヤに他の神々は押し黙るしかなかった。
　また、その時の【神会】でのフレイヤは何故かマスクをしていたらしいが、その事を追及できる神はいなかった。
　そして、フレイヤとイシュタルの二大派閥の激突、そしてその裏で暗躍していた闇派閥と連中と激闘を繰り広げていたロキ・ファミリア、これにより多くの冒険者達が更なる高みへと至った事により迷宮都市は嘗てない程に盛り上がりを見せていた。
【大切断（アマゾン）】、【怒蛇（ヨルムンガント）】、【千の妖精（サウザント・エルフ）】、これらのロキ・ファミリアの冒険者達はＬｖ６、４へとそれぞれ昇格し、【凶狼（ヴァナルガンド）】であるベート＝ローガは前代未聞の二段階昇格（ダブルアップ）という偉業を成し遂げている。
【猛者（おうじゃ）】オッタルに続き冒険者の頂点へと至ったロキ・ファミリアの凶

狼、当時歓楽街にて彼の戦いぶりを間近で目撃したとある冒険者は鬼気迫るを通り越して圧倒的過ぎる程に暴れまわるベート・ローガに神話で語られる怪物を幻視したという。

短い間で途轍もない成長を遂げる凶狼に誰もが問い詰めたくなったが、神々は新たに領域を開拓した【猛者】にそれどころではなくなっていた。

Ｌｖ８。これまではＬｖ７こそがこの世界に於ける人類の到達点なのだと神々は半ば諦めていた。ここまでが人類（ヒト）の限界なのだと、達観して敢えてその話題には触れないでいた。

その限界を乗り越えて至った新たに伝説を生み出した冒険者の出現に神々が湧かない訳がなかった。【リトルルーキー（ベル＝クラネル）】を始めとした突然のレベルアップの豊作、闇派閥という不安材料は在りはするが、それ以上に沸き立つ神々は気にも止めなかった。

オッタルなら、ベートなら、多くの冒険者達が、きっと何とかしてくれる。無責任ながら事実その通りであり、多くの神々はこれからの未来に胸を膨らませていた。

これから自分達が待つ未知はきっとワクワクするものなのだと、彼等は決して疑わない。

故に神々はその日を忘れない。未知というのが決して希望に満ちた物ではないという事を、未知というのは希望と絶望の表裏一体であるという事を。

――――異端児事件。後にそう呼ばれる騒乱の日、一人の魔王が誕生した。

◇

「Ｌｖ７への昇格、おめでとうベート」
「おう」
　ロキ・ファミリアの本拠地、黄昏の館に於ける団長フィンの執務室にて、フィン＝ディムナとベート＝ローガの二人がソファーに座り顔を合わせていた。
「やれやれ、まさかこんなにも速く追い抜かれるとはね。どうだい？　君さえよければ団長の座を譲るけど？」
「アホ抜かせ、俺が団長なんて柄かよ。唯でさえ自分（てめぇ）の体を制御するので手一杯だってのに、団長なんて面倒極まる役職なんか就くかよ」
「あらら、それは残念。三割位本気だったのに」
　肩を竦めるフィン、三割程度とはいえ本気で団長の座を譲るつもりだった彼にベートは目を丸くさせて絶句する。フィン＝ディムナという男は冒険者としての経験が長いことから人を見る目は確かなモノ、幾らレベルが上回ったとはいえ上がったばかりのレベルに未だベートは慣れきっておらず、そしてそんなベートを御せぬほどロキ・ファミリアの団長は甘くないし軽くもない。
　何より派閥の団長という役職は強さ以上にその人柄を重要視される。中にはイシュタル・ファミリアの様な強さのみを追及した派閥もあるし、ロキ・ファミリアの対となるフレイヤ・ファミリアもその例に漏れないが、多くの派閥は強さ同様に人柄も重きに置いている。
　中でもフィン＝ディムナは強さだけでなくその頭脳もずば抜けており、直感と経験則からこれまで幾度となくファミリアの窮地を切り開いてきた。そんな彼の後釜を継げる者は今のロキ・ファミリアには存在しない。ベート自身もレベルが上回っただけでフィンを越えた等と微塵も思えていない。
「ったく、下らねぇ冗談を言いにワザワザ俺を呼んだのかよ」
「うーん、完全に冗談って訳でもないんだけどねぇ」
「あぁ？」
「だってベート、あの一件以来少し変わったのだもの」

フィンの語る〝あの一件〟というのは間違いなく先の歓楽街での事だ。そこでベートは一人のアマゾネスの少女と出逢い、彼女の優しさに触れた事で立ち直れた。ある者は単純なやつだと笑うだろう、ある者は情けないと侮蔑するだろう。しかしそんな事をする人間はいない、何よりあの夜の出来事を知っているのは自分達を除いてファミリアの幹部達だけだ。

蒼のカリスマという怪物と戦いとは呼べない戦いを経験し、ベート＝ローガの牙は砕かれた。しかし、そんな絶望とも呼べる挫折の中から彼は再び立ち上がってみせた。二段階昇格という破格の偉業をぶら下げて。

人類の限界点だった場所への到達、これにより迷宮都市は沸き立ち、団員達も大いに喜んだ。

そして、それ以降ベートの力なきモノに対する態度が比較的軟化したのも彼を慕う者が増えてきた原因の一つとなっている。相変わらず口は悪いが、自らの成長に伸び悩んでいる者達をただ罵倒せず、進んでその者と模擬戦をして成長の糸口を掴ませる切っ掛けを行っているのだ。

元々面倒見が良かったのか、口は悪くとも以前より刺は少なくなり良い兄貴分となりつつあるベートに最近他の団員達も彼を慕うようになってきている。

「他の団員達から中々好評だし、リヴェリアも誉めてたよ？　ベートの指導の能力はアイズ達と比べて段違いだって」

「はっ、それはアイツ等が教えるのがド下手くそってだけだろ」

鼻で笑い飛ばすベートにフィンは苦笑いで誤魔化す。アイズやティオネ達は感覚に頼る部分が多い所がある為、教導には向いていない。

ベート＝ローガは他者を見下している。しかし逆を言えばそれだけ〝弱者をよく見ている〟という言葉の裏返しにもなる。誰よりも弱者を見下し、弱い者を見てきたベートだからこそ、その人の欠点と補う方法を熟知していたのかもしれない。

現に、ベートの指導を受けた団員はメキメキとその実力を上げてき

ている。中にはレベルアップも間近という団員も出てきているし、現在ロキ・ファミリアは飛躍の時を迎えようとしている。
　その発端となったベートをフィンだけでなくリヴェリアやガレス、そしてロキも高く評価している。まだまだ粗さは目立つし未熟な点は多々あるが、それでもベート＝ローガという男が一つの派閥を預けるに足る人物に育ってきているのもまた事実。
　ベート＝ローガの復活、その切っ掛けとなったアマゾネスの少女、レナ＝タリーには感謝するべきだろう。元はイシュタル・ファミリアの戦闘娼婦だった彼女は現在ロキ・ファミリアの一員として活動している。
　そしてレナと同様にベートに想いを抱いているリーネは恋敵として日々ベートを取り合っている。なんて光景も今ではロキ・ファミリアの日常の一つと化している。
　あの悪夢のような夜を越えてベートだけでなくロキ・ファミリア全体が良い方向へ向かおうとしている。両手を上げて喜ぶのは流石に控えるが、それでも結果的に言えばベート達の成長の躍進の切欠となってくれた蒼のカリスマにはレナ以上に感謝すべきなのかもしれない。
「もういいだろ。人を持ち上げるだけなんて気持ち悪ぃ真似しやがって、このあとアホ姉妹（ヒリュテ姉妹）からの喧嘩（模擬戦）があるんだ。俺はもう行くぜ」
「あぁ、話に付き合ってくれて済まないね、もう行っていいよ。あと、くれぐれも鍛練場を壊さないようにね」
「当然、軽く捻って来てやんよ」
　片手をヒラヒラと揺らし、意気揚々と執務室を後にするベート、去っていく足音が遠ざかっていく彼を確認した後、フィンは先程までとは売って変わって真剣な表情になる。
「結局、聞けなかったな」
　フィンにとって訊ねたかった事、Ｌｖ７というこれまで人類の限界と定められてきた到達点、そこへ至ったベートにフィンは改めて問いたかった。
『今の君なら、蒼のカリスマに勝てるのか』

二段階昇格という前代未聞の偉業を成し遂げ、今も目覚ましい成長を続けているベートとロキ・ファミリアの団員達、喜ぶべき事だ。受け入れる巾話だ。

だが、それを齎したのは誰だ？　レナ？　リーネ？　それともアイズやティオネ達？　いいや違う。

蒼のカリスマだ。かの仮面の魔人の手によって今のロキ・ファミリアの状況は出来上がっている。蒼のカリスマがベートを叩きのめしたから、あの【魔なる者】が自分達と関わったからだ。

思えば、彼とはロキ・ファミリアが窮地に陥った際に悉く姿を現している。５０階層での異常事態（イレギュラー）の時も、地上で食人花と遭遇した時も、１８階層でレヴィスなる闇派閥の人間が出てきた時も、そして先の人造迷宮でも、彼は自分達の前に現れた。

まるで、巨大な掌の上で踊らされている様な気分。全ての状況が意図的に産み出された様な錯覚さえ覚えてしまう。有り得ない事だとは分かっている。しかし、それでもフィン＝ディムナはつい考えてしまう。

これ迄の出来事は全て蒼のカリスマによる仕組まれた流れなのではないかと。

「まるで、ダンジョンみたいな男だな」

どれだけ思考を巡らせても考えが纏まらない。どんなに予防対策をしてもその上をゆく蒼のカリスマにフィンはダンジョンの未知なる領域に挑む時の様な緊張感を覚えた。

――――物語は加速する。人と神、精霊とモンスター、そしてダンジョン。

この世界はこの日、一つの転換期を迎える。人とモンスターとダンジョン、これらの関係性が崩れた時。

「シュウジ＝シラカワ、お前に伝えたい事がある」
「何でしょう？」
「ベル＝クラネルが異端児と接触した」
「ほう？」

人は、神は、果たしてどの道を選ぶのか。

『さぁ、選ぶがいい』

その26

δ月＊日

昨日、フェルズからベル君と異端児（ゼノス）と思われる竜女（ヴィーヴル）の娘と接触したと言う報告を受け、現在自分は異端児達のいる隠れ里に来ている。

突然の仮面を着けた胡散臭い男の出現に当然警戒心を露にする異端児達、最初は会話をする事すら難しいかと思われたが、自分が仮面を外して異端児達の代表の代理と名乗るリドなる蜥蜴人（リザードマン）のお陰でどうにか話し合いの席に座ることが出来た。

話し合いの最中、一応の信頼の証と言うことで仮面を外して素顔を晒していたが、やはり人間相手には警戒心を払拭するのは難しいらしく、何人かは最後まで心を開かせる事は出来なかった。特に石竜（ガーゴイル）のグロス君からは時々ここに様子を見に来ていたと言う自分に、人間と良からぬ繋がりがあるのではないかと最後まで疑心暗鬼だったっけ。

まぁ、そんな訳で彼等と一応意思疏通を試みた訳なのだが、結果としては結構充実したと言うべきだろう。異端児達の言葉遣いも所々片言ではあるものの総じて流暢だし、自分達の立場、種族としての在り方、現実的問題を加味して、それでも自身の意見を前向きに語る彼等に自分は久し振りに感激した。

そして彼等の要求は自分……というより、地上に住まう人間達に対して異端児である自分達も地上に住まう許可がほしいとのこと。

正直難しい問題ではある。これ迄この世界の歴史はダンジョンと共に存在してきた。ダンジョンでのモンスターとの戦いは英雄譚として語り継がれており、モンスター＝人類の敵という不変的立場を確立してしまっている。

そんなモンスターが人の言葉を話して地上に進出し、地上で棲みたいと願っている。これを許せる人間は果たして地上にどれだけいるだろう？　いや、俺は全然ウェルカムですよ？　だって話してみて彼等は随分親しみ易いし、地上に出たいという願いもあってその努力

を惜しまないでいる。
そんな彼等を地上に出てくるのを許さないと言うのなら、それは人々が未だにダンジョンという地下世界に依存しているという事だ。
この世界の住人は色んな意味でダンジョンに依存し過ぎているキライがある。物価の流通もお金の流れも人の密集の高さもこの迷宮都市に集中し過ぎている。
頼りすぎている、とも言えるかもしれない。ダンジョンと共に時代を過ごしてきたこの世界……もし仮にダンジョンが消失したら、この世界は果たしてどうなってしまうのか？
文明の停滞？　或いは衰退？　何れにせよ文明の基盤をダンジョンと共に作り上げてきたこの世界にとってダンジョンとはなくてはならない伴侶の様なもの、その事を正しく理解している人間は神々を含めて何人理解しているのだろうか。
異端児と呼ばれる彼等の出現はもしかしたらそんな未来を案じる転換期の到来を意味しているのかもしれない。ダンジョンという巨大なモンスターの苗床、レヴィスとかいう怪人（クリーチャー）の出現、そして異端児達。
この迷宮都市に再び激動の時代が訪れるのかもしれない。まぁ、そうなった場合、自分はバリバリ異端児達の味方をするんだけどね。
と言うか、彼等が望めば今すぐにでも地上に出してやれるし、人気のいないところにワームホールで転移させて、フェルズとウラノス、あとはガネーシャ・ファミリア辺りと協力してその住処を守り時間を掛けながら徐々に人々に認知させて行けば良いだけだし。
その事を軽く話したらリド君絶句しちゃった。今までの苦労は何だったのかって。
とはいってもそれは他の協力者達から同意があったらの話だ。異端児の事については大分理解してきたけど、ウラノスがまだ自分達に隠し事がある可能性がある以上おいそれと話は出来ないし、ガネーシャ・ファミリアに関しては自分が一方的に知っているだけの関係だ。彼処の主神と話しをする以上、先ずは自分の方から話をしに行かなければならない。

ウィーネちゃんという新たな異端児が生まれた事によって事態は加速していく。取り合えず、自分はこれからウラノスの所へ戻りガネーシャ・ファミリアの主神と話を合わせたいという旨を伝えたいと思う。

色々あってやることが増えたが、これもこの世界で世話になる為の礼儀だ。自分にやれることならなんでもやるとしよう。

――因みにこれは最終的手段だが、自分の案の中にダンジョンごと異世界に再び転移させる。という強引な作戦がまだ残っていたりする。ほら、人々の恨み辛みや様々な問題がダンジョンにあるならさ、そのダンジョンがまるごと無くなったら色々解決しそうじゃない？　まぁ、幾らなんでも無理矢理過ぎるし、先に述べた様にそんな事をしたらこの世界の人類に大打撃を与えかねないからやらないけどね、多分。

いっそのこと、異端児達の為の派閥とか作ったりしたらどうなのだろう？　まぁ、そんな物好きな奴が神の中にいるわけないし、無理な話か。

そんな訳で異端児達との話し合いを滞りなく済ませた自分は、親愛の証として彼等に自分特製の回復薬を渡して帰路に着いた。もし万が一の時にはこの薬を使って窮地を脱しろという自分の提案を、リド君は快く受けとることを確認する事で友好の証とした。

δ月Ω日

失敗した。イケロス・ファミリアのディックスなる冒険者が、俺がガネーシャとの話を詰めていた最中に異端児達の隠れ里に強襲し、ウィーネちゃんを連れ去っていきやがったのだ。

その時に奴の襲撃によって致命傷を受けた何人かの異端児達は自分が渡した回復薬によって何とか一命を取り止めたのが、不幸中の幸いと言えよう。

だが、事態は未だ良くはない。寧ろ奴がウィーネちゃんを連れ去り、他の異端児達がウィーネちゃんを取り戻そうと地上に出たことで騒ぎはいよいよ大事になってきている。

異端児の中でも腕利きのアステリオス君が迅速に事態の収拾に向かっているが、多分事態はあまり変わらないだろう。取り合えずイケロス・ファミリアを軽く殲滅した後、自分も動くことにしよう。
それに、多分ベル君達も動く。困っている人がいるならば絶対に助けようとする彼ならば、きっとウィーネちゃんを確保してくれている筈、少し博打気味だが、後顧の憂いを断つ意味合いを兼ねてイケロス・ファミリアは直ぐ様ご退場願うとしよう。

◇

「……どうして、どうして君、なの？」
「あ、アイズさん……」
降り頻る雨の中、その光景を目の当たりにしたアイズ＝ヴァレンシュタインは言葉を失う。モンスターの侵攻という異常事態により混迷を極める迷宮都市、ロキ・ファミリアの面々も事態の終息に乗り出そうと総出で事に当たっているなか、アイズは最悪のタイミングで最悪の場面を目撃する。
数多の冒険者達から襲撃を受けていたベル、その彼の後ろには涙で顔を濡らしている竜女が隠れていた。彼が、ベル＝クラネルがモンスターの少女を守っている。自分ではなく、倒すべきモンスターを。
「なんで、どうしてソイツを守ってるの？　だってソイツ、モンスターだよ？　私達の敵で、人類の敵で、倒さなきゃいけないモノなんだよ？」
「ダメだよ。ベル、君はそっちじゃないでしょ。ほら、こっちにおいで……」
「アイズさん……ごめんなさい。それは、出来ません」

伸ばしかけた手を、ベルは静かに拒絶する。その言葉を受けたアイズは一瞬何を言われたのか理解出来ず……。
「――――え？」
「この子、泣いてたんです。泣きながら、助けを求めていたんです。悪い人に拐われて、傷付いて、悲しんで……だから僕は」
〝――――やめて〟
「この子を、異端児の皆を、守りたいと思ったんです」
その一言にアイズは自分の中にある何かが音を立てて崩れる様な気がした。またいなくなる。自分が大切に思っていた人が、真っ白で、綺麗な眼をした人が、また自分の前からいなくなる。
嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！
それだけは許されない。それだけは許してはいけない。彼をこんな風にしたのは誰だ。彼をここまで追い詰めたのは誰だ。
「――――お前か」
「っ!!」
その眼は、光を写していなかった。あるのは目の前の敵を滅ぼすという殺意のみ、彼の背後にいる竜女を殺す。アイズはそれ以上言葉を発する事はなく、鞘に納めていた細剣（レイピア）を抜き放つ。
「アイズさん、止めてください！」
「退いてベル。ソイツ、殺せない」
ベルの懇願を振り切り、アイズは石煉瓦で出来た地面を踏み抜く。風を纏い、瞬く間に突進してくるアイズにベルは刹那の判断を委ねられる。
逃げるか、諦めるか、どちらも選べないベルはせめてウィーネだけでも守るという一心で彼女を抱き締めた。自分ではなくモンスターを守ろうとするベル、その光景に言葉に出来ない苛立ちを覚えたアイズはその光景ごと吹き飛ばそうとして。
「――――ふぅ、どうやらギリギリ間に合った様ですね」
――――振り抜いたアイズの剣先は、しかし何も当たらず空を切るだけだった。
「え？　あ、貴方は？」

「蒼ノ……人？」
いつの間に其処にいたのか、この場にいるアイズを含めた冒険者達全員が、その仮面の男の出現に気付けなかった。
抱えていた二人を地面に下ろし、大丈夫かと訊ねる。ベルとウィーネは事態に思考が追い付かずただ頷く事しか出来なかった。
「おっと、ウィーネちゃん怪我しちゃってますね。化膿するといけないし、今の内に消毒しちゃいましょう」
「ウ？」
周囲が唖然とするなか淡々と応急処置をする仮面の男――――蒼のカリスマ、彼はウィーネに一通りの処置を施すとアイズに向き直り。
「さて、そう言う訳で申し訳ありませんが……手を引いて下さいませんかね？」
平然と異端児達の味方をする蒼のカリスマにアイズは言葉を発する事なく斬りかかった。

その27

――その鎧を纏った時、男を襲ったのは赤い龍による焔の洗礼だった。肉体を、血を、魂すらも灰塵に帰す劫火は身に纏う全ての人間を等しく燃やし尽くした。

相応しく無い者が着れば瞬く間に灰となり、資格あるものが纏ってもその焔は試練となって襲い掛かってくる。

抗えば抗うほど、鎧の所有者はその鎧の精神とも呼べる深奥へ呑み込まれ、更なる焔に焼かれていく。

所有者――オッタルはそこでこの鎧の正体を見た。巨大な龍、その顎から炎を溢し、試すように此方を見下ろす複数の巨龍。そう、鎧に宿る龍の魂は一頭だけではなかったのだ。

一頭だけでも迷宮都市に大打撃を与えそうな怪物が複数、しかしオッタルの意思は微塵も揺らぐ事なく佇み、四方から襲う焔の波をその身だけで受け止めた。

――長い時間炙られ続けてきた。肉体はとうに溶け落ち、骨も炭となり魂も蒸発仕掛けていた。

しかし、オッタルの心は折れなかった。肉体を失い、剥き出しの魂だけとなっても彼は決して龍の焔に屈せず、己を貫き通したのだ。

全ては、自分を導いた美しき女神の為に――そして、奴を越える為に。

『龍共よ、俺にひれ伏せ』

その言葉に龍達は頭を垂らし、目の前の猪人を己の主と認めた。覚醒していく意識、オッタルが目を醒ますと、外の時間が7日程過ぎていた。

少しばかり惰眠を貪りすぎた。本来ならば有り得ない失態、断りなく不在にしていた事を謝罪しようと、オッタルは己の女神の前に頭を垂れる。

あの日以来、女神には辛い目に合わせてしまっていた。自分達の力

が及ばず、至らぬ所為で麗しき美の女神に小さくない疵を残してしまい、女神は外界との繋がりを断ち切ってしまった。
全ては自分達の不徳が致す所、故に自分達に今一度チャンスを、雪辱を果たす機会を与えてほしい。新たなる力を手に入れ、せめてもの慰めになるためにオッタルは女神に嘆願した。
女神は――――美の女神は歓喜に震えた。自分の眷族が新しい力を手に入れただけでなく、自身の魂をより高位の次元に高めた事実に。
健気で、美しく磨きあげた己の眷族に女神は今一度立ち上がる決心をした。今一度前に進もうと、今度こそあの魔人を打ち倒そうと、美の女神は完全とは行かないまでも眷族達と共に立ち上がってみせた。
自分達の飛躍はここから始まる。オッタルのレベルアップを間近で目の当たりにしたフレイヤはそう強く確信した。
〝Ｌｖ８〟　新たな領域に到達したオッタルが迷宮都市に轟く前日の物語である。

◇

「おっと」
「っ――――」
降り頻る雨の中、雨粒を弾きながら迫り来る細剣（レイピア）の刃を仮面の男
蒼のカリスマは体を僅かに逸らす事で難なく回避する。
「いきなり斬りかかるとは、穏やかではありませんね、おまけに剣先も僅かに鈍っている。意外ですね、貴女ほどの冒険者が心を乱すとは」
いきなり斬りかかってきた事に怒りもせず、初めて見たときより僅かにその腕を鈍らせている事に疑問を抱いた蒼のカリスマは、鼻息荒く睨んでくる剣姫を疑問に思い首を傾げた。
「どう、して――――」

「うん？」
「どうして、ソイツを庇うの？　ソイツはモンスターだよ」
「ふむ、至極当然の疑問ですね。確かにベル君が庇っているのは一般的にはモンスターと分類される生物、貴女方冒険者からすれば彼女は狩りの対象になるのでしょう」
「ならどうして！」
「なに、大した理由ではありません。私は彼等異端児をモンスターとは見なさなかった。故に助ける、それだけの話です」
　激昂するアイズの問いを更に煽る様な形であっさりと即答する蒼のカリスマ、目の前の仮面の男には剰りにも多い《借り》がある。しかし、今のアイズにそれを計算できるだけの思考能力はなかった。
「ふむ、疑問に思うことはあっても何故貴女がそこまでモンスターを……いや、ベル君達を憎むのか」
　蒼のカリスマは背後で硬直しているベルを一瞥し、アイズが何をそんなに怒っているのか理由を推測しようとするが、流石にこの場で口にするのは憚れるだろう。今は取り敢えずこの混沌としている迷宮都市の状況を何とかする事を優先するとしよう。
「まっ、今はそれは置いておきましょう。取り敢えず今はこの状況を何とかしませんとね」
　そう言って蒼のカリスマはパチンと指を鳴らすと、ベル達の背後から穿たれた様に巨大な孔が広がっていく。見たことの無い事象の具現にその場にいる冒険者達は慄き、ベル達を残して引き潮のように下がっていく。
　孔から落ちる様に現れたのはベルの仲間であるヴェルフ達と無数のモンスター――――否、異端児達だった。迷宮都市のアチコチで騒ぎになっていた彼等が蒼のカリスマが開くワームホールを通して一同にここへ呼び寄せられたのだ。
　周囲から悲鳴が上がる。突然のモンスター達の出現、中でも第一級冒険者でないと太刀打ち出来ない強大な力を持っているモンスターがいることから、蒼のカリスマがいる場所は阿鼻叫喚に包まれた。
　対する異端児達は突然自分達のいる場所が変わった事に呆然とし

ていた。中には冒険者に殺されかけたものがいた為、自分が生きている事に放心状態になったものまでいたりする。
「バカな。俺達は今、違う広場にいた筈」
「やぁアステリオス君、君も無事だったか」
「お前は……そうか、これもお前の仕業か」
「ええ、事態の終息の為に取り敢えず関係者達を一ヶ所に集める事にしました」
「終息……出来るのか？」
　漆黒のミノタウロス――――アステリオスが周囲を見渡せば自分達を囲んでいた冒険者達が恐怖で尻込みしていた。あのアイズですら躊躇している事からアステリオスの実力はどんなに少なく見積もってもＬｖ６以上なのは確実だ。
　異端児達の中でも最強の部類に入るアステリオスの登場に尻込みしていた冒険者達は今度は逃げ腰になり。一人、また一人とその場から姿を消していく。
「ふむ、どうやら事情を察してくれた方達が退いてくれた様ですね。説明が省けて助かります」
「絶対に違うと思うのだが……」
　アステリオスと蒼のカリスマ、二大巨頭の出現により命が惜しくなった冒険者達は我先へと逃げ出すが、それを蒼のカリスマは此方の事情を察して退いてくれたと過大過ぎる解釈をして一人勝手に納得して頷いている。アステリオスの小さな呟きは残念ながら雨の音に消されてしまって届かない。
「さて、そんな事よりも先ずは怪我の手当てを、その為にも先ずはダンジョンに戻りましょう。リド君にはここへ来る前に里で待つよう伝えてありますし、直にフェルズも合流してくるでしょう」
「あ、あの、蒼のカリスマさん……」
「ベル君、今回も君に助けられてしまったね。巻き込んでしまったついでに良ければ君達も着いてきてはくれないでしょうか？　異端児達の傷を癒す人手が欲しいのですが……勿論、報酬は弾ませて戴きますよ」

「そ、それは……」
「俺は構わねぇぜ。ダチが命懸けで助けると決めた相手だ。最後まで見届けなくちゃ寝覚めが悪いしな」
「ベル様が行くのならリリも反対はしません。……まぁ、貴方に真っ向から突っ掛かる連中は限られてますし、ここはその方が最善でしょうし」
「某も異存はない、何よりベル殿には春姫を救ってくれた恩義がある。断る理由はない」
「ヴェルフ、リリ、命さん……」
　自分の我が儘に付き合ってくれた仲間達が自分の為に背中を押し出してくれる。その事を嬉しく思ったベルが目尻から溢れる涙を拭い、蒼のカリスマに同行する旨を伝える。
「決断、感謝します。ならばフェルズにはベル君達の拠点の防衛を任せる事にしましょうか。彼も元は一端の使い手、異端児の皆さんの手当ての完了する間までは何とか持ちこたえてくれるでしょう」
　では行きましょう。と、一歩踏み出そうとした蒼のカリスマの前に小さな勇者が現れる。
「悪いけど、そうはさせないよ」
「うん？」
　フィン＝ディムナ、迷宮都市における最大派閥の一つでありその団長である彼が幹部達を引き連れ蒼のカリスマの前にアイズと共に立ち塞がった。
「これはフィン＝ディムナ氏、そしてロキ・ファミリアの皆さま方、先日はどうもお世話になりました。ベート君も立ち直れた様で何よりです」
「けっ」
「今晩は蒼のカリスマ。久し振りの再会に取り敢えず祝福しておくよ、生憎折角の雨なのは残念だけどね」
「ククク、その程度なんの事はありませんよ。それで？　一体本日のご用件は何用で？」
「単刀直入に言おう、そこのモンスター……いや、異端児達を引き渡し

て欲しい」
「お断りします」
　にこやかな挨拶からの要求と即答の断り、迷宮都市オラリオでも最強の一角の強さを誇る彼を前に蒼のカリスマは一切遠慮なく断った。
　空気が一気に張り詰める。その空気に触発されたベル達は身構え、ベート達も静かに得物を手にして構えを見せる。
「正気かい？　言葉を話せるからとは言え彼等はモンスター、これまで人類と不変の敵対構図を作り上げてきた存在達だよ？　どうしてそこまで肩入れできる？」
「その答えは唯一つ、物事に絶対はなく永遠に変わらないものは無い。それが今回異端児という出現に繋がった。ただそれだけの話です」
「答えになってないよ？」
「失礼。生まれたばかりの可能性（異端児）を一方的に潰すのは早計だと判断した。と、付け加えておきます」
「だがモンスターだ」
「しかし理性も知性もある」
　交わらない平行線、モンスターは滅ぼさなければならないというフィンの主張は正しい。それはこの世界における絶対の理であり、法である。これを覆すという事は自身が世界の敵になるという事に他ならない。
「君は、自分が何をしているのか分かっているのかい？」
「無論」
「この世界の基盤が崩れるかもしれないんだぞ」
「寧ろ今までが安定し過ぎていた。確かにただ日々安寧を過ごすことは大事でとても尊い事、繰り返される日常がその実尤も掛け替えのない宝だという事は私も良く理解しているつもりです」
「だったら！」
「しかし、私は知ってしまった。異端児と呼ばれる彼等は誰かを思いやる理性もあり、誰かを疑う知性を持ち、そして……外に出て、日に

当たる場所で生きてみたいという細やかな願いを持っている。そんな彼等だからこそ、肩入れしたいと私は思ったのです」
フィン＝ディムナの追求を蒼のカリスマは真っ向から言い放つ。それは精密な理論（ロジック）からの論破ではなく、感情的で何処までも直情的な短絡的な暴論だった。
モンスターだとか、異端児だとか、自分がそうしたいからそうするまで。世界の常識や常套など一切顧みず、己の心に従い行動する。大胆不敵に言い切る蒼のカリスマにフィン＝ディムナは言葉を失った。
「――そうか、残念だよ。君はもっと理知的な人間だと思っていた」
「それは買い被りというモノですよ。私は元々、自分の心に正直に生きているだけの俗物ですからね。故に気に入った相手は肩入れしますし、そうでないものには容赦はしません。フィン＝ディムナ、自らを【勇者】として位置付けた悲しき小人よ、それでも尚君は私の前に立つというのかな？」
「無論」
――――最早問答の時間は過ぎた。ここから先は互いの主張を押し通す為の暴力の時間。ロキ・ファミリア達全員が戦闘体勢に移行し、闘気を滲ませる。
迷宮都市最大派閥、その主力メンバーから放たれる圧倒的威圧感。それを前にしたベルは言葉を失い、ウィーネを抱き締める手に力が込められる。
フィン達の実力を本能で推し量ったアステリオスは自分も参加して少しでも蒼のカリスマの手助けになろうと一歩前に踏み出すが、当の本人はそれを片手を上げて制止する。
「アステリオス君、気持ちは嬉しいけどこの場は私に任せて貰えないだろうか。私が彼等の相手をしている間、君はベル君達と一緒に同胞達の手当てをしておいてくれ」
「し、しかし」
「いいんですよ。それにここだけの話ですが、私はどうもそそっかしい所があるみたいで、その気になると自身の攻撃で味方を巻き込んでしまうみたいなんです」

大変遺憾なのですがね。そう愚痴る蒼のカリスマは踏み出した一歩を戻すアステリオスを見送ると、改めてフィン達に向き直った。

ロキ・ファミリアという迷宮都市オラリオに於いてフレイヤ・ファミリアに並ぶ最大級の力と規模を誇る巨大派閥、蒼のカリスマと相対するのはその中でも選りすぐりの幹部達で、その誰もが世界にその名を轟かす実力を有している。

アイズ、ベート、ティオネ、ティオナ、リヴェリア、ガレス、そしてフィン。迷宮攻略において幾度となく壁を乗り越えてきた猛者達、そんな彼等を一人で相手をするなど、普通なら自殺志願者にしか思えないだろう。

しかし、フィン達はそれを微塵も自分達を舐めているなんて思わなかった。何せ相手は【魔なる者】、アポロン・ファミリアを単独で見たこともない魔法で壊滅に追い詰めた規格外の魔人、未だ謎が多く、それこそダンジョンの如く未知に溢れた怪物を相手に気を弛める事など出来はしない。

特にベートは嫌と言うほどその実力差を思い知らされている。牙を剥き出しにして敵意を――否、戦意を滾らせているがその頬には大粒の汗が流れ落ちている。

本来なら戦う手を止めて蒼のカリスマに説得を試みるつもりだったティオネも、手にした大双刃（ウルガ）を握り締めて闘志を剥き出しにしている。

皆、気付いているのだ。今自分達が前にしているのはこれまで戦ってきたどの怪物よりも強大なのだと、脅威度で言えば恐らくはあの【穢れた精霊】以上……もしかしたら、あのゼウスとヘラ、二つの派閥を壊滅に追いやった黒龍に匹敵する程の。

「さて、それでは始め――――っ」

いよいよ戦いが始まる。そう思われた時、反射的にワームホールを開いた蒼のカリスマはそこから一本の剣を取り出して頭上に掲げた。

瞬間、無数の雨に紛れて赤い焔の塊が蒼のカリスマ目掛けて降り落ちる。激突の衝撃で周囲の家屋は吹き飛び、ベル達も踏ん張りが利か

ずに煽られて倒れ込む。
「ほう？」
予想外の襲撃、されど難なく防いだ蒼のカリスマは折れた己の剣を見て関心の声を漏らす。
舞い上がる砂塵が収まると、そこには――――龍がいた。赤い気炎を立ち昇らせ、手には凄まじい熱量を孕んだ大剣を手にしている。
その姿はアイズ達にとって忘れる事の無い姿だった。
「邪魔するぞ、フィン」
「オッタル、どういう風の吹き回しだい？　この戦いに介入してくるなんて」
赤い龍を模した鎧から聞き慣れた声が聞こえてくる。その事を少なからず驚くフィンだが、団長としての部分が目の前の最強に問い詰めろと囁いてくる。
「これは、我等の女神に付けられた傷を癒し、泥を濯ぐ為の戦いだ。故にフィン＝ディムナ（勇者）よ。今は互いの立場を忘れ、手を組むことにするぞ」
オッタルの言葉にフィンだけでなくロキ・ファミリア全員が驚愕を露にする。敵対していた派閥との唐突の協力体制、しかしオッタルの言葉を裏打ちするように遅れてフレイヤ・ファミリアの主力達が到着する。
【女神の戦車（ヴァルナ・フレイア）】、【炎金の四戦士（ブリンガル）】、他にもダークエルフのヘグニ、エルフのヘディン、ロキ・ファミリアに比肩する迷宮都市オラリオの最強の面々がここに現れた。
「そう言うわけだ蒼のカリスマ、悪いが俺達全員を相手にしてもらおう。卑怯と蔑んでも構わん、だが我等の使命の為に……貴様は今日ここで果てるがいい」
燃え盛る大剣を突き付けて言い放つオッタル、勇猛果敢に言い切る彼の姿に知らない内に感化された冒険者達は戦意を漲らせる。
そうだ、自分達は戦える。相手がどんなに強大だろうと、自分達には迷宮都市最強が着いている。【勇者】と【猛者】、相容れない二人が並び立っている光景に冒険者は、迷宮都市に住まう人々は希望を見出

だして――。
「く、ククク、クハハハハハ。いやはや、壮観ですね。迷宮都市にその名を連ねる冒険者達が私の前に立っている。何とも、胸が熱くなる展開ではないですか」
「良いでしょう、ならば私も貴方達の気概に応える為に精一杯頑張ると致しましょう。あぁそうそう、私の手元には沢山の回復薬がありますので、どうか気兼ねなく、遠慮せずに――」

〝掛かってきて下さいね〟

その言葉を皮切りに、迷宮都市最大級の戦いが始まった。

その28

――――雨が、重い。

その日、迷宮都市は未曾有の危機に包まれていた。モンスター達による地上への侵攻、本来ならば有り得ない事態を前にオラリオの人々は恐怖と混乱の底へと叩き込まれていた。

冒険者やギルド、多くの派閥によって成り立っていた絶対の前提条件。嘗て黒龍や今は討伐され滅んだ怪物達が齎した大災厄、今迷宮都市は当時の記憶に苛まされて怯えきってしまっている。

だが、事態はそれだけに留まらなかった。侵攻してきたモンスター達、本来ならば冒険者――――否、地上の人間達には絶対の敵対心を持っていたダンジョンの怪物達があろうことか言葉を発したのだ。

人間の様に流暢に、そしてただ言葉を口にするだけでなく同じダンジョンで生まれたモンスターをまるで仲間や家族に接する様に並び立ち、支え、助け合っているのだ。

それを目の当たりにしたレフィーヤはこれ迄培ってきた常識が根刮ぎ崩れた錯覚を覚えた。足元から崩れるような、延々と奈落の底へ落ちていく様で――――体が動かなくなっていた。

レフィーヤは自分がどんなに弱いのか、自分がどれだけ周囲の人間に支えられ、助けられてきたのか理解している。アイズやベート、ティオネやティオナ、フィン団長にガレス、そしてリヴェリア。多くの仲間達のお陰で自分はここまで強くなれたのだと胸を張って言える。

故に、そんな仲間想いのレフィーヤだからこそ、怪我したモンスターを庇う様に立つモンスターに酷く動揺してしまった。だって、その光景はまるで自分達と同じ人間の姿であるように思えたから。

その直後、そのモンスター達は足元に現れた黒い孔に吸い込まれ姿を消す。呆然としながらも止めを刺さなかった事に無自覚に安堵したレフィーヤは、団長達が向かっている筈の迷宮都市の大広場へと駆け出した。

――――そもそも、何故出撃を命じたフィンは幹部達と共に大広場へ向かうと言い出したのだろうか？　当時元々外へと出掛けていたアイズが偶然の産物でその場所にいるのはまだ理解できる。しかしフィンは騒ぎを聞いた瞬間騒ぎの元凶が大広場であることをピタリと言い当てた。

フィン＝ディムナにはその経験から疼き出す親指によってその時の吉兆を予感する能力へと昇華技能を持っている。冒険者として長い間体験してきた経験、その集大成の表現として親指がうずくのだと以前リヴェリアが言っていたことを思い出す。

だから、今回もその親指の疼きで元凶の居場所を掴んだのだとレフィーヤは解釈したのだが――――現実はその真逆である。

当時、フィンは騒ぎが起きた時親指が嫌に疼き出すのを感じた。ブルブルと、何かに怯える様に広がる疼きの波紋は軈て親指だけでなく左手全てに伝播していく。

嘗てない事態が起きようとしている。前例のない災厄が訪れようとしている事を察したフィンは、次の瞬間違和感を覚える事になる。

親指の疼きが収まったのだ。パタリと、先程の震えが嘘のように、何事も無かった事のように彼の手は平静を保っていた。今まで起こらなかった現象を前に不思議に思ったフィンは、ふと窓から外を見る。大広場、迷宮都市オラリオにおいて最も巨大としられる広場、そこへ続く道を目の当たりにしてからフィンの親指は震えが止まっていた。

瞬間、その場所こそがこの騒動の原因が居るところなのだと、フィンは確信する。根拠はない、だが確固たる自信があった。

まるで黒に塗られたキャンパスの上でそこだけが白くくり貫かれた様な、或いはその真逆の様な、言い知れない不気味な静寂さが其処にあったからだ。

自分は【勇者】、ならば迷宮都市に生まれた危機から人々を守る責務がある。フィンは今此処にはいないアイズを除いた全ての団員達に出撃命令を下し、フィンは幹部達と共に大広場へと向かった。

流石団長、レフィーヤはこんな状況でも冷静に立ち回る自分の団長

に尊敬の念を抱く。そうだ、自分達は迷宮都市の中でも最強最大手の派閥として知られるロキ・ファミリアだ。これまで何度も窮地に陥ったし、その度に仲間と共に切り抜けてきた。

だから今回も大丈夫、例え相手が【穢れた精霊】だろうときっと打開して見せる。これまでの体験と経験で自信を着けてきたレフィーヤはそれを強く確信する。

――――成る程、彼女の意見は尤もその自信も自負もこれ迄彼女が体験してきた事を鑑みれば当然の事であり、誇りに思える事だろう。事実、彼女が思っていた通りフィンは震えの収まった親指が示す方向、大広場に元凶と思われる輩が存在した。

ただ、その元凶が自分達には知覚出来ないほどに強大であった。ただそれだけの話、空を飛ぶ小鳥が太陽の熱さを認識出来るか？　水辺に漂う微生物が大海の広さを知覚出来るか、フィンの親指の疼きが止まったのは、〝危機を危機として認識できなかった〟事が理由など、フィン自身を含めて誰も理解する事はなかった。そう、二段階昇格という偉業を成し遂げたベートですらも……。

故に、レフィーヤは想像出来なかった。今回の事件の裏に何があったのか、これから何が起こるのか、想像も出来なければ予想も出来なかった彼女はその大広場で。

「アイズさん！　皆さん！」

きっと今頃全てが終わった後なのだと、喜色の混じった声を漏らしながら大広場へ訪れたレフィーヤが目にしたのは――――。

ただただ目の前に悪夢（現実）の光景が広がっていた。

◇

剣先が空の光を浴びて凶悪な煌めきを放ち、魔法が戦場を彩っていく。豪腕が戦斧を奮い、鋭い細剣（レイピア）が標的を穿つ。それは冒険者達から見ても尚、絶技と知られる業の数々だった。

ロキ・ファミリアとフレイア・ファミリア、共に迷宮都市オラリオに於いて最強の一角として知られ、その名を世界中に轟かせる。謂わば人類達にとっての彼等は希望であり、羨望の対象であり、憧れの存在であった。

普段は対立し、その裏で幾つもの謀略画策を繰り返して互いに牽制しあってきた両陣営、完全に敵対すれば後には引けなくなる。一度戦ってしまえば両者勿論、この迷宮都市にも桁違いの損害を齎す明確な敵対は控えていた。

――――故に、そんな彼等が手を組む事なんて有り得なかった。ロキ・ファミリアもフレイア・ファミリアも、数多の冒険者達も、そして迷宮都市に住まう人々もそれは有り得ないと思い込んでいた。

今日という日が来るまでは。

オッタルとフィン、互いに一つの派閥の代表としてこれまでファミリアを背負ってきた両者が、肩を並べて戦っている。【炎金の四戦士（ブリンガル）】とヒリュテ姉妹が、【女神の戦車（ヴァルナ・フレイア）】とベートが、ロキ・ファミリアの主力とフレイア・ファミリアの主力が互いに協力しながら戦っている。

彼等の間に余計な言葉は少なかった。元々対立していた彼等は馴れ合いの為にここにいるのではない。全ては眼前に佇む標的を屠る為、自分の信じたモノを押し通す為に此処にいる。

迷宮都市のこれまで保ってきた秩序を保つため、自分達の女神の雪辱を果たす為、受けた借りを返す為、それぞれの想いを胸に彼等は戦っている。

しかしそれでも充分だった。互いに対立していた者同士が今だけの、今回だけの共闘なのだとしても、冒険者達にとって大きな希望になっていた。

嘗て、この世界にはゼウスとヘラの二つの派閥が君臨していた。しかしそんな彼等も黒龍と称される規格外の化け物を前に壊滅し、迷宮都市は一時期混迷の時代を迎えていた。

そんな時に台頭してきたロキとフレイアの二つの派閥、時にダンジョンにて窮地に立たされ、時に他派閥の奸計に惑わされ、それでも彼等は必死に戦い生き抜いて来た。

その彼等が手を組んで戦っている。その光景に憧れる者もいれば、特別とされる彼等に嫉妬の感情を抱く者もいる。しかし、何れにせよ彼等にはある確信があった。

今後、この世界の行く末を決めるのは彼等なのだと、その戦いを目にした冒険者達は確信していた。きっと彼等ならばどんな困難も乗り切れると、どんな苦境にも負けないのだと、見守る事しか出来ない彼等はそんな情景を抱いていた。

――――彼等と相対する仮面の男が相手だと知るまでは。

【炎金の四戦士（ブリンガル）】の洗練された刃が仮面の男、蒼のカリスマに迫る。四方向からの同時攻撃、相手を逃がさず確実に追い詰め仕留める、その連携の苛烈さはＬｖ５だった彼等の力をＬｖ６の領域に届かせる迄に至っていた。

逃げ場などない、次の瞬間には彼の者の首が胴体から離れていると、遠巻きで見詰める冒険者達は確信を抱いた。

「ふむ、中々良い連携ですね。四人という限られた人数でここまで洗練された動きが出来るとは、素直に感心しますね」

――――しかし。

「ですが、それは逆を言えば一人でも欠けてしまったらその連携も崩されるという意味合いも込められている。冒険者足るもの常に次を想定しなければいけませんよ」

そんな四戦士の連撃を仮面の男――――蒼のカリスマは容易く食い破った。迫る白刃を誰にも悟られぬ様にいなし、一瞬の隙を晒す四戦士の片割れを手玉に取り、他の三人が重なった瞬間を狙って投げ放つ。

吹き飛び、地面を転がる四戦士。それにすれ違いに現れるのはティオナとティオネのアマゾネスの双子姉妹。先のカーリー・ファミリアとの戦闘によってＬｖ６へと登り詰めた彼女達、手にした得物を振りかざし、同時に跳躍。

蒼のカリスマの頭上まで飛んだ二人はその膂力で以て隕石の如く落下する有無を謂わさぬ力業に出る。
「くたばれ仮面野郎ォォォッ!!」
「いっくよー!!」
「ふむ、何とも豪快だ。しかし、些か極端に過ぎる。真っ直ぐなのは良いことだが、時には駆け引きも重要だよ」
特大の威力を持った二人の一撃を、蒼のカリスマは臆する処かわざと紙一重で避けて、その掌を各々の腹部に添え当てる。カウンターの要領で入った一撃はヒリュテ姉妹の体を容易く吹き飛ばす。分かっていた事だ。目の前の【魔なる者】があの程度で抑えられない事は。
「目覚めよ(テンペスト)」
思案するフィンの横で剣姫が風を纏う。荒れ狂う暴風を身に纏い、相手を射殺さんとばかりに眼に殺意を滲ませるアイズをフィンは一瞬危惧するが、今はそれどころではないと迷いを振り払う。
「アイズ。あと少しでいい、時間を稼いでくれ!」
「うん」
短い返事と共に飛び出す。風を纏い、暴風と化したアイズは降り頻る雨粒を消し飛ばし、ただ渾身の力を以て蒼のカリスマに全てをぶつける。
「〝リル・ラファーガ〟!!」
アイズの付与魔法である〝風(エアリアル)〟の最大出力による必殺の一撃、並のモンスターであれば触れただけでミンチとなる彼女にとっての最大攻撃。
「〝風〟ですか。なんとも《彼》を連想させられる攻撃ですが、残念ながら貴女の風はそこまででは無いようだ」
「な……にを?」
「何より、今の貴女はまだ自分自身と向き合えていない部分がある。己の内に迷いがある者に討たれるのは、流石に私も遠慮したいですね」
刃を振り下ろす瞬間、アイズは蒼のカリスマが何を言っているのか

一瞬理解できなかった。何よりその意味を解する頃にはアイズの風は彼の何気ない腕の一振りで簡単に掻き消されてしまっていた。
「っ!?」
「そら、そうやって気持ちが定まっていないから簡単に消されてしまうのですよ」
自分の全力が簡単に消された事にショックを受けるアイズ、晒された隙を蒼のカリスマが見逃す筈もなく、トンと彼女の額に指を軽く当てて意識を削ぎ落とす。
迷宮都市随一の剣の使い手の敗北、その事を見守る人々が理解するのに数秒の時間が掛かり、そしてその間に事態は更に動く事になる。
フレイア・ファミリアの主力、【女神の戦車(ヴァルナ・フレイア)】達がフィンの思惑にのっかり、自ら囮を買って出た。
何とか回復した【炎金の四戦士】を含めたフレイア・ファミリアの総攻撃。速さと技巧、そして力を含めた彼等の攻撃が蒼のカリスマに一太刀浴びせようと必死に抗う。突き出された刃は蒼のカリスマの体に触れようと――。
「惜しい、今のは結構良い線行ってましたよ」
その悉くを、蒼のカリスマは武器破壊というおまけ付きで彼等を吹き飛ばす。各々の鳩尾に一撃だけ加えた事により一時的な戦闘不能状態に陥るフレイア・ファミリア。
高レベルの冒険者である彼等の肉体を容易く貫く一撃。もし蒼のカリスマが何の恩恵も受けていない人間だと知った日は、多くの冒険者達はその心を砕かれるかもしれない。
たった一瞬で最大手派閥を壊滅へと追い込んだ蒼のカリスマ、悲鳴の声が聞こえてくる。冒険者達は勿論異端児達すら言葉を失う光景、誰もが絶句するなかただ一人動き出す者がいた。
フィン=ディムナ、【勇者】と称される彼が愛用の槍を手に横合いから斬り付ける。小人族という小柄な体躯をフル活用しながらの連撃、一呼吸に4回という攻撃を仕掛ける彼の技巧は正しくオラリオ随一の実力を証明していた。
されど蒼のカリスマは当然の如くこれを捌く。横合いからの一撃

を受け流し、鼻先に向けられた薙ぎを躱し、足元を狙ったソレを跳躍し、そこを狙った一突きを全身を捻って躱していく。
「流石団長殿、相手の躱す先々を狙った的確な攻撃、お見事ですね」
「よく言うよ、全部避けきった癖に」
　蒼のカリスマの心からの称賛を素直に受け取れなかったフィンは、苦笑いを浮かべる。
　既に此方には前線で戦える人材はいない、最後の三本の矢の準備が整うまで自分が堪えるしかない。自らを犠牲にすることで活路を見出だすフィン、身構えて反撃に備える彼に対し、蒼のカリスマは仕掛けて来ようとしなかった。
「……何のつもりだい？」
「いやなに、そろそろそちらの準備が整う頃だと思いましてね。それを待っているのです」
「っ!?　気付いていたのか」
「大気を震わせる程の魔力の波動、寧ろ気づかない方がおかしい」
　そう言って蒼のカリスマが視線を向けるとその先には呪文を唱え終えたリヴェリアとその彼女を守るガレスがいる。此方の狙いを読んだ上での放置、明らかに此方を下に見ているが、それを指摘する程の余裕はフィンにはなかった。
「噂の【九魔姫（ナインヘル）】の力、興味がないと言えば嘘になる」
　そう口にしながら蒼のカリスマはフィンから離れていく。逃げるつもりではない、彼は近くで倒れるティオナ達を巻き込まないよう善意で離れているだけなのだ。
　それをフィンも承知していた。故に彼が自分達が巻き込まれない距離まで離れた瞬間を狙って――――。
「今だリヴェリア！　特大のをくれてやれ!!」
「《レア・ラーヴァティン》!!」
　瞬間、蒼のカリスマの足元から魔法陣が広がり、天を灼く程の業火が広がった。エルフの王族として知られるリヴェリア＝リヨス＝アールヴが持つ魔法の威力を底上げし増大させるレアスキル、並びに

威力を高める為の連結詠唱。
彼女の魔力の全てを注ぎ込んだ魔法は確実に蒼のカリスマを呑み込んだ。天を灼き、周囲の建物が熱で融解していく。人がいる場所では決して使えない【穢れた精霊】にも多大な傷痕を刻んだ九魔姫（ナインヘル）の必殺が、地上の大広場にて炸裂する。
熱が周囲を蹂躙し、膨張した空気が弾けて暴風となって荒れ狂う。地にへばりつく姿勢で耐えるベル達、彼等を守るためにアステリオスが前に立って盾になる。
軈て納まる火炎の渦が消えていくと、リヴェリアの魔法によって刻まれた惨劇が露になっていく。石畳の煉瓦は砕かれ、周囲にあった建物は跡形もなく消し飛んでいる。大広場だった場所は巨大なクレーターとなり、自らが生み出した光景にリヴェリアは苦悶の表情を浮かべる。
果たして、ここまで徹底する必要があったのだろうか。たった一人の人間を相手に、しかも地上で放ってしまったリヴェリアの最大魔法、人が長年の時間を掛けて生み出した風景を己の手で消してしまった。
手を抜くべき相手ではないのは理解している。敵対してしまった以上徹底的に倒すというフィンの言葉は理解できる。しかし自身の行為に迷いと悔恨が生まれつつあった彼女が次に目にしたのは――平然と佇む蒼のカリスマの姿だった。
「ふむ、中々の効果範囲ですね。確かにこれ程の規模なら矢鱈目鱈射ち放つのは難しいでしょう。私も思いきって射つことは無いので、少し親近感が湧きますね」
焼失処かただ体のあちこちに焦げ目が付いただけの状態。ダメージらしいダメージは通っておらず、淡々とリヴェリアの魔法を評価している。
というか、蒼のカリスマの衣服はどういう素材で出来ているのか、仮面は疎か白の外套も僅かな焦げ目しか付いていない事実にリヴェリアは眩暈を覚えた。
「ふむ、そろそろこれで終わり――――」

そろそろ手打ちか、そう思われた時に感じる肌を刺すような威圧感に蒼のカリスマは仮面の奥でほくそ笑む。
「そうそう、君がいましたね。いや失敬、中々登場が遅いので失念してましたよ」
蒼のカリスマの視線の先、手出しが出来ずにいた冒険者達の前に獣の如き姿勢で力を溜める凶狼が一匹、牙を剥き出しにして戦意を高めている。
Ｌｖ７という人類最高峰の領域へ踏み込んだベート＝ローガ、Ｌｖ７へ至り新たに〝力を溜める〟というスキルを会得した彼はこれまで戦闘には参加せずただひたすら力を溜め続けていた。
しかし、これだけでは一手足りない。喩え全ての力を出し切った処であの化物には叶わない。故にベートは己の力と武具を信じある賭けに出た。
「ベートさん！　準備出来ました！」
「タイミングはこっちがやる。下手こくんじゃねぇぞレフィーヤ!!」
「はい！」
彼の背後には魔法を放つ段階に入ったエルフの少女、手にした杖を握り締め涙目混じりの瞳で蒼のカリスマを睨んでいる。
良い眼だ。自分という敵対者を前にしても決して怯まず、挫けないに彼女の姿勢に蒼のカリスマは頼もしく思った。
瞬間、ベートは有り余る膂力を以て飛び出した。それは放たれた銃弾の如く、溜めに溜めた跳躍力は容易く地面を抉り、蒼のカリスマとの距離を瞬く間に縮めていく。
「今だ！　やれぇ！」
「《ウィンフィンブルヴェトル》!!」
ベートが蒼のカリスマの間合いに入った瞬間、エルフの少女は詠唱の完了した魔法を発動させる。純粋な魔力だけならリヴェリアにも匹敵するロキ・ファミリア第二の火力砲台、レフィーヤ＝ウィリディス。彼女の放った魔法はベートの特殊武装（スペリオルズ）に吸い込まれていく。
魔法を吸収するという特殊な性質をもったベートの武装、しかしその特注品にも限度があるのかレフィーヤの放った魔法を吸収した所

為で今にもはち切れそうな程に膨張している。
溢れた魔力がベートの脚を凍てつかせる。しかし構わずベートは渾身の力を込めた脚を振り上げ。
「受けろや！　蒼のカリスマァァァァァッ!!」
全ての込めた一撃を蒼のカリスマへ叩き込んだ。この時、初めて腕を交差させて防御の姿勢を見せるが、それすらも弾き飛ばしてベートは極大の魔力を秘めた一撃を蒼のカリスマへと見舞う。
だが、ベートの攻撃はダメージを与える事ではない。確かに倒す積もりで攻撃をしたが……残念なことに本命は別にある。
「これは……」
この時、初めて蒼のカリスマは驚嘆の声を上げる。受けた箇所から瞬く間に広がっていく氷、次の瞬間氷の侵食は蒼のカリスマの体を呑みこみ、周囲の燻る火の跡ごと覆っていく。
そう、ベートの狙いは蒼のカリスマにダメージを与える以上に蒼のカリスマの動きを封じるという役目があった。レフィーヤの魔力では足りない部分をベートの力を蓄える力で補い、結果、かの魔なる者の拘束に成功した。
「猪野郎！　さっさと決めやがれ！」
「感謝するぞ、ベート＝ローガ」
それは圧縮された焔の塊だった。手にした大剣を掲げ、身に纏う武具に眠る龍達に語りかけ、その力の全てを解放させる。
荒れ狂う焔が大剣に凝縮されていく。熱を帯びた大剣は光となり、未だ降り続ける暗雲を蒸発していく。
その光景に人類は希望を見た。この混沌渦巻く迷宮都市に一筋の光となるよう、まるで、祈りが込められているようだった。
「いけ、いけぇぇ！」
「やっちまえオッタル！」
「決めてくれ！」
「アンタの力で、この戦いを終わらせてくれ！」
祈りが、束ねられる。想いが、託されていく。
人が、冒険者達が、オラリオに住まう（一部を除いた）全ての人々

がオッタルに希望を託していく。
「この一撃、我が女神に捧げる」
それは、ダンジョンという星の大地によって造られ、鍛えられた一振りの剣。その剣に断てぬモノはなく、その剣に屠れぬ者はいない。
一度振れば勝利のみが約束される。故に、その一撃の名は――――。
「《エクス……カリバァァァァ》!!」
熱を極限に圧縮した光の斬撃、それは蒼のカリスマを呑み込み、天へと昇り、迷宮都市オラリオを包む暗雲を諸とも消し飛ばし。
――――光が、迷宮都市を包み込んだ。

◇

「なんて……奴だ」
目の当たりにした光景にアステリオスは驚嘆の言葉を漏らす。暗雲が消し飛んだ空には青空が広がり、戦場となった大地を照らしている。
そこには、何もなかった。広場にあった噴水も、通路に敷かれた石畳も、通路に沿って建てられた数々の露店も消滅し、その先にあるオラリオの外壁も消し飛んでしまっている。
そして蒼のカリスマの姿も、舞い上がる砂塵の中にいるのか確認出来ていない。
誰かが、勝利の言葉を口にする。次いでまた誰かが勝利を確信し、オッタルの成し遂げた偉業を前に喜びに打ち震えた。
喝采。【魔なる者】を打ち倒したと確信した冒険者達が悪しき者を

討ち果たしたオッタルに称賛の喝采を口にした。
やれやれと肩を竦めるフィン達、リヴェリアは溜め息を溢し、守りに徹していたガレスは出番が無かったと一人拗ねる。そんな彼等を見て笑みを浮かべたフィンは槍を支えにズリズリと地面に座り込む。
ベートは大の字になって倒れ、レフィーヤは倒れているアイズ達に治療を施そうと駆け寄っていく。
そしてオッタルも己の汚点と彼が全てを捧げると誓った女神の誇りを取り戻せた事に満足し、静かに瞑目している。
これから、自分達はどうなってしまうのか？　不安に怯え始めた異端児達とは対称的に冒険者達の表情は何処までも明るかった。
万歳と、勝利を祝う人類。やったぞと、平和はまもられたのだと誰もが確信した。

〝――――――見事〟

故に、その呟きは何処までも浸透し、全ての人類に恐怖を植え付けた。
「いやはや、まさかここまで見事な一撃を貰うとは正直予想出来ませんでしたよ。てゆーか、オッタルさんの持つその大剣にそんな機能があったなんて驚きです」
その声は何処までも能天気で、何事もなく、至って平静な声音だった。
外套は焼失し、服は破れ、上半身が顕になったその肉体は、しかし、全くの無傷であった。
仮面に亀裂が入る。綻び、崩れ落ちていく仮面。明らかになる蒼のカリスマの素顔にベル＝クラネルは誰よりも驚愕する。

「さて、折角そちらの全力を見せて貰ったんだ。生憎俺達の全てを見せてやることは出来ないが……その代わり、俺自身の全霊を披露する事で返礼するとしよう」

力を込める。瞬間、男からは静かな熱気が溢れだし、見たことのない輝きを身に纏う。

瞬間、世界は制止した。

その29

――――時が止まる。そう錯覚させる程の静寂。
見守っていた冒険者達は何が起きているのか理解できず放心し、異端児達もまた言葉を失い、その光景に目を奪われている。
その中でベル＝クラネルはその人物を見てこれ迄の出来事を思い出す。自分を鍛え、甲斐甲斐しく世話を焼き、自分が起こす騒動にも嫌な顔一つしないで協力を申し出てくれた彼の事を。
「シュウジ……さん？」
切り引かれた暗雲、降り注がれる陽の光が当たる道を悠然と闊歩する蒼のカリスマ――――否、シュウジ＝シラカワは熱気と淡く輝く光を纏い、フィンとオッタル達と対峙する。

◇

「やはり、君だったか」
頬から流れる汗、引き攣った口角は歪んだ笑みを造り、見開かれた双眸でフィンは眼前に佇む男を見据えた。
シュウジ＝シラカワ、オッタルが纏う武具の開発に携わったと目されてきた謎の多い男、出自も経歴も迷宮都市に訪れる前の形跡もその一切が不明とされてきた人物、彼と蒼のカリスマは繋がっている処か同一人物だった。
そこに驚きはない。何故ならフィンもその可能性は考慮していたからだ。蒼のカリスマとシュウジ＝シラカワの両名は同じ人間なのではないかと、故にこの事実に然程驚きはしない。

ならば、彼の家を訪れた際に現れた蒼のカリスマは一体何だったのか、一番に考えられるのは協力者の存在だが何故かその事を考えてはいけないと本能が叫んでいる気がする。
しかし、今はそんな過去の疑問は問題ではない。今確かなのはアポロン・ファミリアを一撃で壊滅させたあの魔法を放つ者がシュウジ＝シラカワという男で、それが今目の前にいるという事だ。
「あの時は騙してしまって申し訳ありません。あの時は面倒ごとを避けていた時期でしたので、あなた方の追求を逃れる為に小細工をさせて戴きました」
「……大したものだよ。それだけの才覚があるのだもの。きっと君はさぞ高名な派閥（ファミリア）の人間だったのだろう。いやはや、世界は広いなぁ。これだけの存在が無銘だなんて」
「……？」
フィンの言っている事にシュウジは訝しく首を傾げる。一体何に疑問を持ったのか、不思議そうにしている彼にフィンは一瞬言いし難い悪寒を覚えた。
何か、間違っている気がする。前提として決定的な何かが。その間違いに気付いた瞬間、これまで自分達が築き上げてきた全てが崩壊するような、そんな最悪の未来をフィンは幻視した。
「お喋りはそこまでだフィン、野郎が何者か関係ねぇ。奴が俺達の敵って言うのなら……噛み砕くまでだ」
犬歯を剥き出しにして戦意と力を高めるベート、自分達の全力の攻撃を受けても尚倒れぬ強大な相手を前に、彼の闘志は微塵も萎えてはいない。
何せ彼は既に思い知っている。目の前の敵がどれだけ強かろうと、冒険者を名乗っている以上自分達は常に前に進むしかないのだと。それが喩え相手が自分では推し測れないほど、正しく認識出来ない程強大であったとしても。
「その姿がテメェの本気って訳か。成る程、そんだけの実力があればあんな風に人を虚仮にすんのも頷ける。いけすかねぇ、心底いけすかねぇがテメェにはそれが許されるだけの強さがある。嗚呼認めてや

るよ、テメェは俺達が出会ってきた中でも最強の人間だ」
「その称賛、素直に受け取るとしよう。ただ一つ訂正するのであれば、俺は君を虚仮にした覚えはない。対等に、仲良くなりたい一人の友人としてお節介を焼かせて貰っただけだよ」
「それがよォ、世間一般では虚仮にしてるって言ってんだよぉ!!」
凶狼が吼え、地を駆ける。十数メドルはあった距離を一瞬の内に詰め、先程以上の力を込めてベートはシュウジに向けて蹴りを放つ。
速力、タイミング、そして威力。それら全てが完全に一致していた。階層主すら一撃で屠れる威力を秘めたＬｖ７の必殺の蹴り。
それをシュウジは容易く上回る。神速に迫る凶狼の蹴りをただ体を横にずらすだけで避けてしまう。
無論、ベートの攻撃はこれだけではない。喩え避けられても次の打ち込む一撃が用意されている様に彼は常日頃から己を鍛え続けている。Ｌｖ７という一つの到達点に至ったベートは、続けざまに回し蹴りを放とうとして。
「ならば、今回はそのような誤解が生まれないよう。――俺も、技を見せるとしよう」
その僅かな合間、一秒にも満たない刹那の時間にベートの脇腹にシュウジの拳が添えられる。
「〝不動――――砂塵爆〟」
シュウジの足元に亀裂が生まれ、大地が窪む。彼の全身から生み出されたエネルギーが行き場を求めて大地を蹂躙していく。その事に驚く冒険者達だが、次の瞬間更に目を疑う光景が生れた。
ベート＝ローガが消えた。否、正しくはシュウジの放つ技の衝撃に耐えきれず遥か彼方へと吹き飛んだのだが、それを知覚出来るものはいなかった。大広場を抜け、外壁を突き破り、数里の距離を飛翔し、迷宮都市から離れたとある山の麓にある小さな村の畑に激突する事で漸く止まった。
既に彼の意識はない。その口元は血で染まり、白目を剥いて一見事切れている様に見えるが、技を放った者の技量の高さもあり、冒険者特有のしぶとさのお陰で何とか存命出来ている。

今のベートの実力に見合ったギリギリの加減、彼ならばきっと生き延びるだろうというシュウジの一方的な信頼。誰もが呆然としている中、シュウジはフィン達へと視線を向け……。
「どうした。得意の詠唱はしなくてもいいのか？」
その姿を誰にも感知される事なく、リヴェリアの眼前まで押し進める。認識も、知覚も出来ず、リヴェリアさえも声を駆けられるまでシュウジの接近に全く気付けなかった。
速さ――だけではない。あの熱気を、あの輝きを纏うようになってからシュウジ＝シラカワという存在を上手く認識出来ていない。一体アレは何なのか、どんなスキルでどんな効果があるのか、理解できない事象を頭の隅へと置き去りにして、フィンは戦友の名を叫ぶ。
「ガレス!!」
「っ！　ヌォォォォォッ!!!」
呼ばれた己の名に半ば条件反射で斧を振り被る。手にした戦斧は大型のモンスターを容易く両断するほどの鋭さと頑強さ、そして重量を有している。
ガレス＝ランドロック【重傑（エルガルム）】という名を示す通り迷宮都市の中でも指折りの怪力で知られる冒険者、嘗て浅瀬に乗り上げたガレオン級の船をその身一つで持ち上げたとされる彼の渾身の一振は、文字通り大地を砕く。
その一撃を以てすればあのオッタルにも通用する。だからシュウジにもきっと通じるのだと、見守るだけの他の冒険者達は縋るように見守り――。
「良い一撃だ。豪快で迷いがない。積み重ねられた年季の重みが感じられる」
その希望は砕けた戦斧と共に霧散する。振り抜いたガレスの斧がシュウジの拳を受けた瞬間砕け散る。粉砕するべき斧が逆に粉々にされた事実にガレスは目を剥き……。
「だが、少しばかり速さが足りなかったな。もう少し踏み込みを鋭くしておけば、この身に届いただろうに」
瞬間、顎先を知覚できぬ速さで手の甲で撃ち抜かれたガレスはその

まま意識を失い地に伏して倒れ込む。何故ガレスが倒れたのか、それを理解できる者はこの場にはいない。端から見ればシュウジと対峙したガレスが独りでに倒れた風にしか見えなかった。
だが、直感で理解する。冒険者として幾度も危機を脱してきた彼等が培ってきた経験にガレスは倒されたのだと嫌でも思い知らされる。今度はリヴェリアの番だ。そう言うように彼女に近付くシュウジにリヴェリアが選択した行動は……。
「我々を、ロキ・ファミリアを舐めるなよ！」
手にした杖による槍を真似ての攻撃だった。突いて、薙ぎ、払う。フィン程の鋭さや速さは無いが、魔法を駆使して闘う後衛に位置する者としてはリヴェリアの槍捌き……いや、杖捌きは洗練していた。それこそ並みの冒険者が相手ならばそれだけで圧倒出来るほどに。
しかし当然の如く、彼女の攻撃は当たらない。彼女の力ではシュウジに一太刀浴びせることも出来はしない。だが、そんな事は百も承知だった。
「【――――終末の前触れよ」
「？」
「白き雪よ。黄昏を前に風を巻け。閉ざされる光、凍てつく大地」
攻撃を繰り出しながらの呪文詠唱、魔法を扱う者にとって最上級の技巧として知られる平行詠唱。ただ闇雲に攻撃していたのではない、相手が此方の出方を伺う受け身の姿勢を利用してリヴェリアは自分なりの逆転の一手を掴もうとしていた。
「吹雪け、三度の厳冬。――――我が名はアールヴ】!!」
大気が凍てつき始める。凍り、固まり、対象を永久凍土に封じ込めるリヴェリアが有する極大魔法の一つ。この魔法で今一度目の前の怪物を拘束しようという彼女の目論みは……。
「残念だが、その魔法はもう見た。一度受けた魔法を二度も受けるほど、俺は優しくはないぞ」
「あ……が……」
パンッと、軽い音を立ててリヴェリアの放とうとしていた魔法は四散する。絶句、喉元に指先を捩じ込まれ、文字通り言葉を発声出来な

くなったリヴェリアは苦悶の顔を浮かべてシュウジの指先から逃れようと必死に藻掻く。
「炎と氷、それ以外の技があれば見届けても良いかと思ったのだがね。少し、残念だよ。エルフの王女、リヴェリア＝リヨス＝アールヴ」
僅かな失意を滲ませながら、喉から指を引き抜く。その瞬間アイズにしたように額に指先を置くと、電源が切れた様にリヴェリアも地面に倒れ伏す。
「さて、後は……」
周囲を見渡して次に誰が自分と闘うのか、フィンは仲間が一瞬の内に悉くやられた事がショックなのか動けず、先程ベートに援護していたレフィーヤは座り込んで失禁してしまっている。
何故自分がここまで怯えられなくてはならないのか、甚だ疑問に思うが――――いや、今はよそう。
「あぁ、そう言えば」
瞬間、シュウジの頭上から大剣が振り下ろされる。爆発する大地、爆風が周囲を吹き飛ばし、辛うじて原型を留めていた建物を破壊していく。
砂塵の中で佇むオッタルは、手応えの無さに内心で舌打ちを打つ。
「そう、君がいたな。オッタル君」
「――――まだ、戦いは終わっていない」
「あぁ、そうだろうとも。君は君の信ずるものの為に戦っている。ならばそれを折らない限り、君は止まらないだろう」
「貴様に折れると思うなよ。シュウジ＝シラカワ！」
全霊の不意打ちすらも容易く避けられてしまう。必殺の一撃は通用せず、最早自分達には目の前の怪物を倒す術はない。しかし、それでもオッタルは挑み続ける。
自分を信じる女神の為、ファミリアの仲間と、冒険者である己の為に。この巨大な壁を超え、更なる高みに到らんとするオッタルは正しく【猛者（おうじゃ）】。
何度でも挑み続ける。いつか、この怪物に打ち克つその日まで、オッタルは戦い続け――――。

「所でオッタル君、話は変わるが君は物を創るという意味合いを何処まで理解しているかな？」
　振り上げ、振り下ろす。全霊を懸けて倒すと覚悟を決めた最強の冒険者の一撃を、その怪物は片手で受け止める。何事もなく、当然の様に。
「――な、にを……言っている」
「イヤなに、そこまで貪欲に強くなろうとしている君に感動してね。一つレクチャーしてやろうと思ってね」
　止められた剣を取り戻す為に全力でシュウジの手から逃れようとするオッタルだが……抜けない。相手は微塵も力を込めていない様子なのに、まるでその手から離れようとしない。
　まざまざと見せ付けられる力の差、それでも抗うことを諦めないオッタルは懸命に足掻き続けるが……。
「これは鍛冶に限らず物を造るという行為の全てに言える事なのだが、何かを造るということはそれ即ち物質同士の結合と融合に他ならない」
　しかし、放れない。オッタルは歯が砕かれんとばかりに食い縛り、全身の筋力を総動員させても微動だに出来ないでいる。汗が滲み出る、オッタルの足下は陥没し、声にならない叫びだけが周囲に響き渡る。
「その結合、融合の度合いが深ければ深いほどその強度は増していく。だが、逆を言えばその度合いが浅ければ――」
「物というのは、呆気なく瓦解するのだ」
　コツンと、軽い音が鳴る。ノックをするように、親しみと慈しみを込めての、そんな挨拶をするようにシュウジがオッタルの持つ大剣を叩いた瞬間――。
　〝砕けた〟
　彼が手にし、彼が勝ち取り、信頼し、Ｌｖ８という高みへと導き、己を預けた必殺の大剣が、鍛冶の女神をして至高と断ずる一振りが呆気なく砕け散った。パリンと、ガラス細工の様に砕ける己の剣を間近で見せ付けられたオッタルは、一瞬何が起きたのか理解できず思考が停

止する。
「――っ、オオオオオオッ!!」
吼える。吼えて、吼えて、最早吼える事しか出来ないオッタルは逃走という己の闘争本能を捻じ曲げ、シュウジに拳一つで殴り掛かる。
「見事、剣という相棒を失っても尚萎えないその不屈の精神、良いものを見させて貰った」
どんなに追い詰められても自身を曲げず、懸命に抗う姿勢を見せるオッタルにシュウジは感銘を受けた。――故に。
「ならば俺も、深奥を以て応えるとしよう」
初めて、彼は構えを見せる。両手を上下に広げて、攻撃を繋ぐ為の、相手を打ち倒す為の必殺を放つために。
「〝千手――――観音貫手〟」
瞬間、オッタルは無数の貫手に覆われた。

◇

「――――」
気付けば、全てが終わっていた。ティオネ、ティオナ、アイズ、リヴェリア、ガレス、ベート、フレイヤ・ファミリアの精鋭と最強の冒険者であるオッタル。
皆、等しく地に沈んでいた。歴戦の冒険者が、次代の英雄と称される彼等が、たった一人の人間によって全滅していた。
否。彼は、フィンだけは違った。派閥の仲間と対立してきた派閥が地に倒れている中で、彼だけは今もシュウジと睨みあって槍を手にしている。

「さて、後はロキ・ファミリアの団長殿だけか。どうする？　まだ続けるか？」
「――――」
　既に彼にはあの熱気も輝きも消え失せている。仲間達を瞬殺し、あの頑強な鎧を纏っていたオッタルは砕かれた武具共々血の海の中で沈んでしまっている。
　この場に戦おうとする者は既にいなかった。一部始終を眺めていた冒険者達は打ち砕かれた希望に疲弊し、力なくその場に座り込んでしまっている。
　もう、彼等に異端児を迫害する力も気力もないし、その異端児達すらも意気消沈となった冒険者達に同情的な視線を向けている。
　そしてフィンにもこれ以上戦うだけの意思は残されていない。シュウジの問い掛けに僅かばかりの思案を巡らせるが、既に答は出てしまっている。
「――――完敗だ。ここまで打ちのめされた以上、もう僕達に出来る事はない。異端児達からは手を引くよ」
「ありがとう」
　対立し、敵対してしまった以上もう彼等との友好関係は望めないだろう。せめてもの礼儀として礼を口にするが、構えを解いて力なくその場に座るフィンにシュウジの言葉は届かない。
　異端児達へと向かう。その最中にシュウジはフィンとすれ違うが、この時フィンはある違和感を覚えた。
　エンブレムが……ない。神の眷族へと成り、冒険者としての存在証明とも言える眷族特有の紋章がシュウジの背中には無かった。
　施錠（ロック）を掛けているのか？　素性を隠すために不特定多数の冒険者が施している隠しの秘術、彼のような存在もまたその例に漏れないのだろうと一瞬フィンは察するが、どうもそれは違う気がした。
　――――何かが、ハマった気がする。同時にフィンの本能が大音量で警鐘を鳴らす。止めろ、それ以上踏み込むな。しかしそんなフィンの本能に反し。
「シュウジ＝シラカワ、君、エンブレムはどうした？　神々から与えら

れた恩恵は、どうしたんだ!?」
遂に、その疑問を口にしてしまった。
「ん？　神々の恩恵？　そんなモノはありませんが？」
余りにもアッサリと、余りにも残酷な一言をシュウジは意に介さず口にする。
瞬間、その場にいる冒険者達は絶望という奈落の底に叩き落とされた。嗚咽を漏らすもの、狂った様に笑い出すもの、突然豹変した彼等に戸惑うシュウジはフィンの前に幾つものポーションを置く。
「これは俺の我が儘に付き合ってくれた礼だ。この回復薬は皆に使ってくれ。それと、オッタル君には後で新しい武具を用意すると伝えてくれ。弁償しなければいけないし」
ゴメンね。と、シュウジは愛嬌混じりで謝罪するがフィンは全く反応しない。項垂れる彼にきっと団長として色々考えているんだろと一人納得したシュウジは、今度はアステリオスへと声を掛ける。
「さて、それじゃあアステリオス君。俺はこれからベート君の治療をしに行くから、ベル君たちの本拠地で待機しててくれ、フェルズが待っているだろうし、事情の説明をお願いね」
「あ、あぁ……」
困惑し、ただ了承するしかないアステリオスに満足気に頷いたシュウジは、周囲の視線を顧みずに相棒の力の一部を解放し、宙を舞う。
一瞬の浮遊からの加速。一瞬の内に空の彼方へ飛んでいった彼に最早冒険者達からは言葉を発することも出来なかった。

――――この日、全ての冒険者達は、神々は、モンスターは、迷宮都市オラリオは、たった一人の怪物に……敗北した。

その30

――――それから、数日の時が流れた。
人の言葉を話し、人のように振る舞うモンスター……異端児(ゼノス)と呼ばれる者達が地上に現れた事で引き起こされた〝異端児事件〟。
この事件の際に起こった戦いはオラリオ史上類を見ない激戦と成り、迷宮都市は甚大な被害を被ることになった。
幾つもの露店、大手派閥の店、そしてオラリオを囲む巨大外壁。これ等を巻き込んで且つ甚大な被害を出してしまった迷宮都市は現在復興作業の真っ只中にあった。
冒険者やそうでない者、都市に住む人々が総動員での復興作業は順調だが、それでも人手が足りていないのか、街のあちこちでは戦いによって刻まれた爪痕が今も深く残ってしまっている。
ある事実によって多くの冒険者達が失意の中にいる時、一つのファミリアが復興の指揮を進んで取ることになった。ソーマ・ファミリア、今まで下位の派閥として神々の間でも然程注目されなかった彼等が、自ら資金提供をする事を確約し、迷宮都市復興の足掛かりとなったのだ。
「ザニスさん、この資材は何処でしたっけ？」
「あぁ、それは〝豊穣の女主人〟の所だ。女将さんには既に話を通してあるから、そのまま運んでくれ」
「ザニスさん、ヘファイストス・ファミリアから応援を呼ばれてるんだけど……」
「了解した。そちらに三人ほど送ろう。少々時間をくれと伝えてくれ」
困惑し、どうしたらいいか迷っている人々をテキパキと指示を飛ばして動かして復興の頭となっているのはソーマ・ファミリアの団長、ザニスである。復興に関しての全ての指揮とその際に起きる資金提供を請け負う事になった彼等に疑う者はいても反発するものはいない。

一体どこから其処までの資金が出てくるのか、多くの神々はソーマに対し疑念を抱くが、実際復興の全てを任せてしまっている以上、彼に文句を口にすることは出来ない。
普段は謀略や画策には喜んで乱入するロキも酷く落ち込んでしまった多くの眷族達のフォローに回って其れ処ではなく、フレイヤ・ファミリアも未だ怪我を治しきれず、身動き出来ないオッタル達の看病の為に干渉出来ないでいる。
現在迷宮都市は事実上ソーマ・ファミリアの支配下となっているが、彼等自身は微塵もそんな事は考えてはいない。復興の陣頭指揮を担っているのはソーマ・ファミリアの団長ではあるが、何も全て彼等に任せている訳ではない。
他にも被害のあった地区との情報の共有をするためにギルドや協力的な派閥と一緒に情報交換をしたり、足りない資材を運搬する為に人手を貸したり借りたりしている。ザニスが自ら復興の陣頭指揮を任したのは資金を提供したいという一心から来るもので、別に今後のオラリオでの活動を見越してとか、そんな下手な野望は微塵もない。
もし他の派閥が陣頭指揮の座を明け渡せと要求してきたのなら、資金提供を続けさせてくれるのならば喜んで明け渡すつもりでいる。最も、自ら名乗り出て下衆な企てもせず、真摯に復興に打ち込み、派閥の財産全てを復興に擲つ彼等の姿勢に、絶大な信頼を向けているオラリオの人々がそれを認めるのは有り得ないだろう。
もしザニスをその座から奪う者が現れれば、それは迷宮都市の全てを敵に回すに等しくなるだろう。
（団長、いい感じですぜ！　この調子で行けば地下金庫の財産の四割は固いですぜ！）
（バッカお前バッカ！　顔に出すな顔に！　にやけているぞ！　）
（団長だって！）
そんな信頼を受けているとは露知らず、自分達の金庫からあの悪夢のような金貨が消えていく事にザニス達は大いに満足していた。大量に有り余る金貨の山、ギルドにも怪しまれ多くの派閥からの視線を掻い潜りながら隠してきた無数の財宝。

これ等の多くが消えていく。それはザニス達にとってあの地獄の様な日々との訣別にも思えて、その顔はとても晴れ晴れとしていた。この分なら四割、いや五割の金が消えてなくなるのではないか。肩の荷が降り、体が軽くなるような感覚。

これまでの人生で使った事のない額に金が煙の様に消し飛んでいく。しかしそれで構わない、真っ当な金の使い方に満足し、一種の高揚感を満喫していたザニスは心の中で喝采を上げていた。

（ふはははは！　見たか蒼のカリスマめ！　これで我々は自由の身だ！　これからは一つのファミリアとして真っ当に冒険者として生きていくのだ！　ふはははは！）

いい感じに出来上がっているザニスだが、彼は気付かない。今回の復興におけるソーマ・ファミリアが迷宮都市に齎した無償の施しはこの街に生きる人々から多大な信頼を勝ち取っているという事実に。

何せソーマ・ファミリアにとって金を使うこと、それ自体を目的としている為、どんなに怪しんでも裏が取れる訳がなく、その金の出所を探った所で彼等にとって痛くも痒くもない。寧ろ、彼等の背後に蒼のカリスマの存在が僅かでもちらつけば、大抵の者は即座に手を引いていくだろう。

崩壊しかけた迷宮都市を率先して復興し、その為の資金を提供してくれたソーマ・ファミリア。彼等の行いにより多くの人間が救われ、これによりソーマ・ファミリアは他の派閥とは異なった立場を築いていく事になる。

異端児事件の終結後、迷宮都市の為に尽力したソーマ・ファミリア。彼等の崇高な行いは軈て都市外にも広がり、かの派閥に加わろうと多くの人種がソーマ・ファミリアに雪崩れ込んでいく。

また、復興に非常に協力的だった事からギルドにも認められ、眷族も大幅に増えた事でソーマ・ファミリアはロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリアをも凌ぐ一大派閥へと成長していく事になる。

また、派閥の主神であるソーマが研究し開発した酒を元にした美肌化粧水がバカ売れし、ファミリアの金庫は更に潤う事になる。更にその金を消費する意味で借金持ちの派閥に無期限で金を貸したりする

のだが、そのお金も何故か倍返しとなって返金させられてしまう。
自分達は要らぬ金を押し付けただけなのだが、借金持ちの派閥からすれば義に厚い者からの施しに他ならない。特に人の良さで借金を背負う事になった彼等は恩義のあるソーマ・ファミリアに報いようと必死になってお金を返金してくるのだ。焦らなくても良いのに、寧ろ返さず、踏み倒しても良いのに、そんな彼等の祈りは届かずにファミリアの金は留まるところを知らない。
だったら別の使い方をするまでだと、ザニスは新しく入ってきた眷族達が使う装備を賄う為、金と同じくらいの量を持つレアドロップアイテムを消費するために、それらの素材を使って武具の作成に当たる。
ヘファイストス・ファミリアやゴブニュ・ファミリアへ特注の装備を作って貰う事で消費させていく。
しかし、それも自分の為に専用の装備を用意してくれた団長と主神の好意に報いる為に迷宮攻略に勤しむ眷族達によってザニス達の目論見は大きく外れる事になる。瞬く間に成長していく眷族達、中には少数パーティーで深層に挑める冒険者も増え、彼等が持ち帰ってくる多くのドロップアイテムによりファミリアの倉庫はパンパンになって溢れそうになる。
どんなに使っても減る事のない金、どんなに消費しても戻ってくるドロップ・アイテム。資金と素材、人材と規模、信頼と実績、これら全てを兼ね備えたソーマ・ファミリアはロキやフレイヤだけでなく嘗てのゼウス、ヘラの二大派閥すらも越える史上初の超巨大派閥へと至る事になる。
晩年のソーマ・ファミリアの団長、ザニスは後にこんな言葉を残す。
〝どうしてこうなった〟と。
蒼のカリスマが齎した善意の螺旋（スパイラル・ネメシス）、喩え齎した本人の手から逃れられてもその因果からは決して逃げられない。
そんな未来が待っているなど欠片も知らないザニスはファミリアの仲間達と共に今日も汗水流して働き出す。
「労働って、いいよね！」

◇

「ふぅ、これで拠点の方の修理は終わったかな」
「神様ー、ただいま戻りましたー！」
「おぉ！　お帰りベル君！　皆もお疲れ様ー！」
　我が家へと戻ってきたベル達、彼等の主神であるヘスティアは笑顔で彼等を迎え入れた。
「今日は〝豊穣の女主人〟の所だったんだろ？　どうだったんだい？」
「はい、どうにか今日一日で形にはなったそうです」
「明日からは炊き出しもやるみたいだしな」
「ヘスティア様、女主人の女将から賄いを頂いてきましたよー」
　眷族達からの報告と、賄いの食料を頂いた事によりヘスティアの機嫌は更に上昇していく。
「しかし、我々も運が良い。あれほどの騒ぎが起こったと言うのに敵意の視線が全く向けられて来ないとは」
　命の呟きにベル達は押し黙る。異端児事件、人の言葉を口にして人のように振る舞うモンスター達。千年の歳月を越え、幾度の転生を重ねる事によって漸く現れたモンスターの新たな可能性。
　人にとって絶対の敵として見なされてきたモンスター、そんな彼等の味方をするという事は人類の敵になることを意味している。
　そして、異端児達を助けるという決断を下したベル達も当然駆逐される対象になる筈だった。人間でありながらモンスターの味方をするという禁忌、当然オラリオにベル達の居場所はなくなる。主神は強制送還され、その眷族達も迷宮都市から追放される事になっただろ

う。
しかし、そうはならなかった。自分達以外に異端児達の味方をしていたかの仮面の男により、迷宮都市の全ての敵意は彼に向けられ、その敵意もまた彼の手によって粉々に砕け散ってしまった。
何より彼が齎した衝撃的過ぎる事実により迷宮都市の意識は異端児達から離れつつある。その中で中小規模に過ぎないヘスティア・ファミリアが注目される事はなく、精々蒼のカリスマに巻き込まれた可哀想な派閥としか認識されていないだろう。
自分達に関心の目が向けられない。それ自体はベル達にとって有難い話だ。今は下手に目立ちたくはないし、仲間や敬愛する主神にこれ以上迷惑を掛けたくないのだから。
でも……ベルは後ろ髪が引かれる思いで足を止め、バベルの方へ振り返る。
「……シュウジさん」
異端児事件の際に唯一傷付かなかった白亜の塔、ベルが見上げるかの塔では現在、歴史的瞬間が起ころうとしていた。

◇

――神々は知る。世界には自分達では知り得ない未知なるモノが存在している事を。
――神々は思い知る。退屈を嫌い、未知を求め続けてきた彼等が、その未知により恐怖を覚える事に。
――神々は思い出す。神と対になる魔物達の王の存在を。
「それでは皆さん、改めてご挨拶としましょう」

神会にて集った数多の神々、敵意を剥き出しにする者、恐怖を顕にするもの、怯え、震えるだけのもの、頬を引き攣らせ苦笑いを浮かべる者、そんな神々を一切モノともせず。
「私は異端児達を束ね、統率するゼノス＝ファミリアの首魁となる者」
「【魔王】シュウジ＝シラカワ、若輩者ではありますが、何卒宜しくお願いします」
不敵に笑みを作り、その様子はまるで……宣戦布告をする様だった。

Ｆａｔｅ／ｅｐｉｓｏｄｅ Ｂ
その１

――燃えている。

建物が、街が、父が、母が、人だったモノが、そこにある全てが燃えていた。

――其処は、地獄だった。炎と死で溢れ屍と救いを求める怨嗟の声で満たされたその場所は、正しく地獄の具現だった。

少年は、空を仰ぎ見ていた。闇に閉ざされ、死と屍で埋め尽くされたその場所で、少年は空に浮かぶソレを見て――――否、睨んでいた。

「お前が……やったのか」

炎に巻かれて呼吸なんて出来る訳がない。一息吸い込めば熱した空気が肺を焼き、ガスとなった空気が少年の意識を刈り取ってくる。

だが、少年はそれを歯牙にも掛けなかった。肺が焼け爛れようと、ガスで意識が朦朧としても、少年の内に満ちている感情が、少年を奮い立たせていた。

〝――何故、こんな事になっている〟

〝――どうして、こんな事になっている〟

〝――誰が、こんな事をした〟

いつの間にか、少年の思考は何故という理由探しから、誰という元凶探しに移行していた。穏やかな日々を、日常を、平和を、壊したのは一体誰だ。

当然、少年にはその答えなど分かる筈もなかった。この、後に冬木の災害として知られる一連の事件がある儀式を行った末に起きた人災なのだと、少年が理解することなど有り得なかった。

〝ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな、ふざけるな！〟

何故壊されなくてはならない。どうして奪われなければならない。土地を、建物を、日常を、人を、命を、どうしてこんな風に一方的に踏みにじられなければならない。

「許さない」
少年の内側から溢れ出るもの、その正体は――――〝怒り〟だ。
街をこんな風にした奴を許さない。人を殺し、命を奪い、一方的に踏み躙る不条理が、理不尽が、許せない。
そして、天に浮かぶソレを見て、少年の怒りは膨れ上がる。穿たれ、丸く、月の代わりに浮かぶ黒いソレ。
月があんなに黒い訳がない。故に少年は幼い知能と思考で宙(ソラ)に浮かぶアレこそが元凶なのだと結論付ける。
「お前だけは……絶対に許さない！」
涙と鼻水でグチャグチャになった相貌で、しかしその二つの眼は宙に浮かぶソレを捉えて離さない。絶対に許さない。全身の力を込めてそんな蚊の鳴くような声しか出せないでいる自分を恨めしく思いながら、それでも少年は黒い月を睨み続けていた。
――――死が、近付いてくる。意識はドンドン遠退き、呼吸が止まりそうになっていく。
ふざけるな。死にたくない、自分はまだ死ぬわけにはいかない。まだ自分はなにもしていない、この惨劇を生み出した元凶を、まだ自分はやり返していない。父と母を殺し、祖母と生きたこの地を汚した不条理(敵)を、自身はまだ殴り飛ばしてもいないのだ。
死ぬわけにはいかない。されど幼い少年に死という不条理を覆すには何もかもが足りなさすぎた。
己の不甲斐なさに、未熟さに、悔しさと怒りが沸いてくる。弱い自分が許せない、自分に、もっと自分に力さえあれば。
悲しく俯くあの娘も、救えた筈なのに……。
「ほう？　良い気迫ではないか、それに……中々面白いモノに魅入られているな、小僧」
「――――？」
ふと、頭上から声が聞こえてきた。この地獄の中で耳に蔓延する怨嗟の声を押し退けて、ハッキリとした口調で、少年に言葉を投げ掛けてきた。
誰だ？　途切れかけた意識を繋ぎ止め――――――一歩でも動け

ば倒れそうな癖に――――この惨劇に負けたくない一心で少年は限界を越えた己の体に鞭を打ち、少年は声のした方へ向き直る。
　其処には黄金がいた。暗鬱なこの世界でただ一人その男だけは黄金に輝いていた。
「……眩しい」
「おっと、我が王気（オーラ）が無意識に漏れだしたか。許せ、そして誇るが良い。この世界で我に見出だされた栄光を」
「――――だれ？」
「ふむ、本来であればその無知蒙昧さに斬首として素っ首叩き落とす所だが、まぁ童（わっぱ）とは無知で然るべきモノ、そして無知とは恥であっても罪ではない。しかし、礼儀がなっとらんな、小僧。我の名を問う前に先ずは己の名を口にするのが礼儀なのではないか？」
　目の前の黄金の男の指摘に、ソレもそうかと少年は納得する。地獄の中での自己紹介、そんな事している場合ではない癖に、意識が朦朧としている所為か、そんな事など微塵も疑問に思わず少年は己の名前を口にする。
「しゅうじ、しらかわ、しゅうじ」
「ならばシュウジよ。問おう、アレが――――許せぬか？」
　そう言って男が指差す方に視線を向けると、其処には変わらず黒い月があった。両親を奪い、街を破壊しただけに留まらず、今も尚宙で此方を見下ろしてくるソレ。
　許さない、許せるわけがない。男と出逢った事で萎えていた感情が、一瞬にして噴き出してくる。
「許さない、僕は……俺は、アレが許せない！」
アレが何なのか、少年には分からない。なにも知らず、何も分からず、男が言う様に無知蒙昧なシュウジ――――否、修司ではアレの正体なんて検討もつかない。
　だが、そんな事などどうでもいい。アレの正体が何なのか、何処の誰様で、どんなに凄くてヤバいのか、修司にとってそんなモノは些末な事でしかない。
　絶対に許さない。そう宣言し、男に誓いを立てるように吼える修

司、口から血が溢れる。今の叫びで喉がやられたのか……しかし、口許の血を拭うだけで少年は男の赤い眼を見て離さない。
――身の程知らずにも程がある。男から見た修司はその一言で片付いた。己の矮小さを顧みずにただ叫び、吼えるだけの少年。それが男――英雄王ギルガメッシュの修司に対する最初の評価である。
しかし、それでも充分すぎた。この死に溢れた世界で、埋もれず、屈せず、そして吼える事の出来る年若い童に、英雄王は修司に対する可能性を見た。
怒りに震え、魂を輝かせる。その輝きに本来このままこの地を去るつもりだった英雄王は慟哭に吼えるこの少年(獣)に目が止まった。
修司に宿るモノ、それを差し引いて尚も高まる修司への評価、英雄王の赤い蛇の様な双眸は喜悦に歪む。
「よく吠えた。ならば我も応えてやろう。我が真名はギルガメッシュ、ウルク(世界)を統べる英雄王である」
「王……様?」
「然り、そして貴様は今日より我の臣下となる。喜ぶがいい、貴様は今、この世で最も偉大な栄誉を賜っているのだぞ?」
「……」
限界だ。血を吐き出した反動か、いよいよ以て意識を保つのが難しくなってきた。まだ自分はなにもしていないのに、何も成し得ていないのに、悔しい、悔しくて悔しくて、どうにかなりそうなのに。
無念と憤りに溺れながら、少年は倒れ――の、寸での所でその幼い肢体は抱え上げられる。
「先程の啖呵の褒美だ。暫し、我の腕の中で眠る事を許そう」
そう言いながら英雄王は虚空に浮かぶ金色の波紋から一枚の毛布――の、様なものを取り出して修司の体を包み込んでその場を今度こそ後にする。
――その背後で巨大な影が遠くなっていく二人の様子を眺め続けていた。

――――白河修司、本来であれば別の世界で穏やかに生きていく筈だった少年はそれから１０年後、新しい戦いに身を投じていく事になる。その身に刻まれた因子と共に。

〝喜べ少年、君の願いは漸く叶う〟

その2

――王様、ギルガメッシュと名乗る人物に拾われて早数年。俺の住む街、冬木の街の人々はあの時の災厄から外面的には立ち直り、現在は穏やかな日々を過ごしている。

今年で中学に入る俺、白河修司もあの日の災厄――《冬木の大火災》から生き延びた一人で今は王様の庇護の下で不自由の無い生活を送らせて貰っている。

王様は変わった人で、俺一人を生活させる為にワザワザ会社を興して冬木の新都に大きいマンション建てて其処に住まわせてくれたり等の普通の人には中々出来ない事をやってのける人だ。

最初はそんな王様に気後れしたが、王様に「王の施しを拒むなど、今の貴様にはその資格はない」と一蹴され、俺は選択の余儀なくここに住むことになった。

初対面の時から思ったが、王様は一見気難しい人に思えるけどその懐はとても深くて大きく、俺のような孤児が相手でも関係ないとばかりに平等に接してくれている。

――まぁ、その分時折無茶振りをかましてくる時もあるのが悩みの種なんだけどね、いきなり外国に行って悪漢を駆逐してこいとか、野生のライオンを捕まえてこいとか。――それも自分の成長を促す為のモノだと考えれば……受け入れられるかな。

ともあれ、王様ことギルガメッシュさんのお陰で今日まで俺は平穏無事に生きて来れた。その日々の中で王様の知り合いの人らしき神父に護身術である中国拳法を習ったり出来た。

他にも外国に赴いた際にエルメロイさんに助けてもらったり、ル、ルル……金髪ツインドリルの娘にも色々世話になったりして人との繋がりの大切さを学ぶことが出来た。

あの日、あのまま朽ちて死ぬだけかと思われた自分を救ってくれただけでなく、厳しくも温情のある日常を送る事が出来た。そんな王様に少しでも恩返しがしたいと色々模索しているのだが、中々上手くい

かない。
「そんな訳で、何か良い案ありませんかね？　言峰師父」
「相変わらず、余計な気の回しをしているな、お前は」
　迫り来る鉛の様な拳を避け、懐に潜って返しの蹴りを放つ。体勢が流れた所への一打、確実に入ったと思われたソレはしかして虚しく空を切るだけに終わる。
「いやね、最近このままじゃ不味いと思うんですよ。王様に面倒見て貰って早数年、衣食住のみならず自分に成長の機会をくれた人に何らかの恩返しをしたいと思うのが人情って奴じゃないですか」
「あの荒唐無稽な無茶振りを成長の機会と捉えるか」
　呆れの口調とは正反対に男の放つ拳には一切の遠慮がなかった。自分よりも二回り近い年下の少年に向けて放つには剰りにも殺意に満ちた一撃、しかし少年にはその拳の軌道が完全に見えていた為それを受けることは有り得なかった。
　ワザと紙一重で避け、体を回転させて裏拳を放つ。体躯の差を技術で乗り越え、威力を上乗せさせてのその一振りは１９０を超える成人男性を右へ吹き飛ばさせるには充分なモノだった。
「っ、」
　これまで涼しげだった男の表情が初めて歪むが、男も並大抵の者ではなく、追撃してくる少年の動きに対応する。点から線、線から円、男が修める技の術利に因んだ緩急の付いたその動きに少年もまた応戦する。
「ならば、またいつぞやみたいに手料理を振る舞うか？　それならば私も協力を惜しまないが？」
「うーん、それも考えたんだけど、王様って麻婆嫌いみたいなんだよね。あの時は臣下が作ったモノだからと完食してくれたけど、何か凄い無理をしていたみたいだし」
　思い返すのはまだ自分が王様の庇護下に入ったばかりの頃、当時はまだ家事全般に馴れておらず四苦八苦していた自分にあの黄金の王様はいきなりとんでもない無茶振りを振ってきたのだ。
『シュウジ、今度の休みまでにお前が至高と信ずる料理を一品用意せ

よ』

まだ料理の〝さしすせそ〟も覚えきれていない子供にいきなりの無茶振り、当時の自分はどうしたら良いか分からず、取り敢えず渡されたお金を手に街へ散策に出掛けるが、料理の深さなどまるで理解できていない自分には王様の要求は正に雲を掴むような話で、このまま捨てられるのではないかとその時は滅茶苦茶不安に思ったっけ。

それでも天は自分を見逃さなかったのか、時たま公園で項垂れていた自分を見付け相談に乗ってくれた言峰師父のお陰で自分の信ずる至高の一品に辿り着く事が出来た。冬木の商店街に今も在る老舗の中華店【紅州宴歳館泰山】の麻婆豆腐、幼くもその味に魅了された自分は師父の指導の下でその味に近付けるように必死に修練を重ねた。

その結果、王様の言う自分なりの一品を出すことが出来たのだが、どうにも王様の舌には合わなかったのか、酷く悶絶するだけで味の感想とかはなかった。その後、王様の裁定は有耶無耶に終わり、王様の最初の無茶振りはグダグダのまま終わった。

おかしいなぁ、言峰師父からは太鼓判押されたのに……何がいけなかったのだろう？　以降、王様は俺を家の中での麻婆作りを全面的に禁止にしてきた。解せぬ。

「勿体ないよなぁ、あの麻婆美味いのに」

「――――まぁ、機会はこの先あるだろう。焦らず気軽に考えると良い」

そう言う師父の口元には何故か笑みが浮かんでいた。……前々から思ってたけど、この人も何て言うか色々難儀な所があるよね。

人の頑張る姿を見るのが好きみたいだけど、どこか歪なんだよなぁ、なんて内心思いながらも二人の組み手は更に速さを増していく。一介の少年と教会の神父では決して辿り着けない境地、更に言うならば神父の方は通常とは異なる術理を使ってブーストを掛けているのに対し、少年は素のままで追い縋っていく。

軈て二人の組み手は互いの拳がぶつかり合うことで終局を迎える。ひび割れた石畳、窪み、抉れたその場所で本日の少年の稽古は終わりを迎えた。

「いちちち～、相変わらず硬いなぁ師父は。ダイヤモンドかってぇの

！」
「そう言うお前も速さが昨日より上がっているが？　全く、イチイチ捉えるのに此方がどれだけ苦労したと思っている」
「そりゃ成長期だからね、速くもなるさ。て言うか師父のあの硬さって何？　何か秘訣でもあるの？」
「呼吸法の一つだ。それ以上は自分で調べろ」
「チェ、相変わらずスパルタだなぁ。まぁいいや、自分で調べて学ぶのも学問の一つってね。それじゃあ言峰師父、今日もご指導ありがとうございましたー！」
「あぁ、気を付けて帰るといい」
　速足で駆け抜けて教会を後にする。少年の後ろ姿を一瞥し、片付けを始めようとする言峰はあの日初めて少年と出会った日の事を思い出す。
『ギルガメッシュ、何だ、その子供は』
『何、気紛れに拾い物をしただけの事よ。それよりも綺礼、この童とのパスを繋げろ』
『正気か？　こんな子供、１日と持ちはしないぞ？』
『さて、それは結果を御覧じろ。と言いたい所だが、我の見立てではこの童、中々面白い事になりそうだぞ？』
　あの日、英雄王の魔力の餌になる筈だった少年は今も平然と生き長らえている。最古の英霊に魔力を注ぎ続けると言う拷問に身を置きながら、当の本人はなんて事ないように振る舞っている、それがどれだけ異常な事なのか、最早喜劇的にすら思えてしまう。
　更に言えばあの白河修司という少年はそんな状態でありながら他国へ渡り、修行と称して死徒を三体屠っている。まだ１０歳になったばかりの少年が、魔術とは何の繋がりも持たない筈の子供が、死徒を悪漢と断じて倒している。
『一体何なんだったんだろうアレ、いきなり襲ってきたかと思って蹴り飛ばしたらいつの間にか消えてるし、最近の悪漢と言うのは逃げ足が速いな～』
　何なんだとは此方の台詞である。幾ら不完全な死徒だとは言え、通

常の人間とは力の出力からして異なっている。化生に落ちた魔術師を何も知らない子供が一蹴するなど悪夢以外の何者でもない。太陽の加護でも付いているのか？

修司に関する全ての情報を揉み消した言峰は当時の忙しさを思い出してやるせなさを覚える。が、それ以上にワクワクしていた。あれほどの未知なる存在が、今後どのような道を辿るのか、その果てに何が待ち受けているのか。

興味が尽きない。あれが今後どのようにして苦難に苛むのか、そしてその苦難は世界にどの様な変化を齎すのか。予想も想像も出来ない結末に言峰綺礼は高鳴る筈のない胸元を抑える。

「さて、次は妹弟子の方か。やれやれ、隠し事をしながら師匠面をするというのも、難儀なモノだ」

その口振りとは逆に言峰の口許は喜悦に歪んでいた。

◇

――冬木の新都、深山町とは反対方向に位置する新都。其処に近年新たに建てられた巨大なマンションが存在する。地下三階、地上２０階建ての冬木には似合わない浮き彫りの高層マンションは其処に住むことを許されたある会社の従業員数名と自分こと白河修司で構成されていた。

あらゆる脅威に対する完備されたセキュリティ、耐震対策も万全で全国の住みたい物件栄光の第一位を獲得した今話題の住居。

その最上階に向けて修司は階段を掛け上がっていく。息を切らさずペースを落とさず、その手に途中で手にした買い物袋を持ちなが

ら、落ちていく陽射しよりも早く最上階へ昇っていく。
「よし、大体時間通りだな」
夕焼けに照らし出される冬木の街並みを見下ろしながら、用意された部屋へと入っていく。何故自分の部屋が最上階なのか、このマンションの所有者曰く『有象無象の雑種を見下ろす悦を知れ』とのこと、よう分からん。
「ただいまー」
「帰ったか」
部屋に入るとテレビの前のソファーに座る自分の保護者兼上司がいた。
「あれ？　王様がいるなんて珍しい。会社の方はもういいの？　確か重要な会議があるってシドゥリさんが言ってた気がするけど？」
「その様な些末ごと疾く終わらせたわ、今日は他に目にするに値するものが無くてな、気晴らしに立ち寄った迄だ」
「じゃあ何か食べてく？　帰る途中運良くタイムセールに遭遇してさ、大抵のモノなら作れるよ」
「ほう？　言ったな、この我の食指が動く程の品と言うのなら、生中の品では満足出来んぞ？」
「ならやはりここは秘伝の麻婆を――」
「おいよせやめろ」
額から大粒の汗を大量に流しながら止めに入る王様に修司は苦笑いで冗談だと軽く流す。命拾いしたと深々と息を吐く王様、それを尻目に修司は夕飯の準備に取り掛かる。
手際のよい動き、そこに一切の無駄はなく一人の料理人と化した修司、王様に言われ日頃から料理をする事になった今年中学二年になる少年は、偉大なる王の舌による厳しい裁定と審査により三ツ星レストランで働いても遜色ない実力を有する迄に至った。
「――なぁシュウジ、貴様今年でいくつになる？」
「んー？　１４だけど？」
「そうか」
そんな短い遣り取りに修司は一瞬疑問に思うが、それよりも重要な

のは鍋の方だ。折角恩人に手料理を振る舞う以上半端な品は出せないと意気込む修司にはその時の王の意図など知る由もなかった。
「――」
　黙したまま、ガラスの外にある街並みを見下ろす王、その瞳の色には退屈の文字が滲み出ており、内心でつまらんと吐き捨てる。
　太陽は沈み夜の帳が街を覆いあちこちで光が点り、それに向けて人々は帰路に着く。その様が光に群がる⁇の様でそれが非常に――。
「王様ー、出来たよー」
「うむ、佳いぞ。我の前に差し出すことを許す」
「ははー」
　街に住む人々とは対照的に明るい声色で王は修司に振り返る。ワザとらしくふんぞり返る王に修司もまたワザとらしく頭を下げる。
　出された品はビーフシチュー、肉は柔らかく口にしただけで蕩けてなくなっていく。味付けも上品で確かにそれは王が食するに相応しい気品を持ち合わせていた。
「どうかな王様、今回は割りと自信ありだけど」
「たわけ、味付けに今少し踏み込みが足らんわ。６０点」
「くぅー、相変わらず厳しい！」
　しかし、今の時点で満足させるわけにはいかないと王は敢えて厳しい裁定を下す。この臣下にはもっと上へ目指して貰わなくてはならない、料理でも勉学でも武術でも、全てに於いて上を目指してもらわなければならない。
　何せ、あと数年後にはこの街に戦争が起きる。己という最上の英霊に魔力を注いでいる以上、魔術の類いに頼ることはできず、来るべき戦に挑むのなら目の前の臣下にはもっと成長して貰わなければならない。
　いずれ来る愉悦の時まで。

その3

『初めまして！　俺、白河修司って言います！』

それはあの大災害の時から数えて三度目の邂逅だった。自衛の手段として私が嗜む八極拳を学びたいという少年、当時の私はこの少年の底の深さをまるで見通せていなかった。

我ながら酷な修練をさせたと思う。師としての私の言うことを正しいと盲信し愚直な迄に従う少年、その年相応の浅はかさにつけ込んで、私はこの少年に大人でも音を上げる修練を課した。

しかし少年はこれを乗り越えた。手足の皮が割け、爪が捲れ、骨が折れようとも痛みで泣くことはあっても喚くことはなかった。私の課す理不尽とも呼べる課題を齢十にも満たない幼い少年は屈する事無く全て成し遂げた。

英雄王に言われ仕方なく面倒を見る事になり当時は辟易としたが、その年齢に似合わない必死な少年に私は問わずにはいられなかった。何故そこまで強さを求めるのかと。

少年は応えた。理不尽を許さないと、理不尽に、不条理に他者を踏みにじる輩を許さないと、その為の強さが欲しいと、少年は強い意思を秘めた瞳で私を見た。

成る程、あの大災害から生き残りあの英雄王に見初められるに相応しい解答だったと私は納得した。

そして同時につまらないとも思った。目の前の少年はあの大災害に生き延びて置きながら、疵らしい疵を負っていない。人格を変質させ、感性を歪ませず、真っ当に真っ直ぐに成長している。

つまらない、あれだけの体験をしておきながらなんて面白味の無い少年だろう。口にしている言葉は立派だが、それは真に強い者だけにしか許されぬ【英雄】の在り方だ。あんな悲劇に見舞われた人間がそんな純粋である筈がない。

故に私は今一度少年に……修司に試練を課した。用意した巨大な岩石を砕き、破砕して見せろと。これ迄の修司ならばギリギリ乗り越

えられる試練とはまるで違う。確実に、絶対に乗り越えられない試練を前に流石の彼も息を呑んだ。
自分の身長にも勝る岩石、生半可な力では太刀打ちなど出来はせず、下手をすれば拳の方が砕かれてしまう。戸惑い、困惑する修司に私は愉悦を覚えた。
我ながら業の深い悪癖である。しかし、これを乗り越えなければどのみち理不尽になど抗えはしない。何故なら理不尽や不条理とは、人の身では抗えられぬ運命そのものだからだ。これも迷える者を救う聖職者の勤め、先達者の役割なのだと尤もな理想論を掲げて必死に岩石に拳を打ち込む少年を肴に愉悦を満喫して数時間――――。
『出来たー！　師父ー、出来ましたよー！』
『おっふ』
変な声が出た。
え、ちょっ、なんで出来るの？　何で出来ちゃってるの？　その岩石、一応魔術で強化された代物なんですけど？　ていうか、今の動きなに？　私そんなの教えてませんけど？
両手を血に染め上げ、涙を流しながらもやり遂げた自身の偉業に喜んで飛び上がる修司に私は言葉を失っていた。修司の前には岩石だった粉粒、そしてその傍らには事の顛末を見ていた英雄王が腹ただしい程のドヤ顔をこちらに向けていた。しばきたい。
『王様ー！　来てたの!?　見てたの!?』
『フハハハハ！　おうとも、見てたぞ修司、この我自ら貴様の奮闘を全てこの目に映していたとも、そして見事であった。よくぞそこの性悪神父の目論見を打ち破った！』
嘘つけ、お前来たの数分前じゃん。
『フハハハハ！　さて、試練を乗り越えた勇者にはそれに見合った褒美を授けなければならん。さぁ修司よ、我が臣下よ、お前はこの英雄王に何を求む？』
『え？　んーと、えーと……まーぼー豆腐が食べたい！　泰山の！』
『おっふ』
今度は英雄王から変な声が出た。

『フフフ、良いだろう。ならばここは私が奢ろう。そもそも弟子に試練を課したのは私だ。ならば私こそがこの場を持つのが道理だろう』
『こ、言峰!?』
『え!? いいんですか師父!』
『勿論だ。なんだったらお代わりも三杯までなら良いぞ』
『大盛りでも!?』
『無論だ』
『こ、言峰、貴様ァーッ!』
『何を憤る英雄王? この少年は試練を乗り越えた。であるならば褒美を取らせるのは当然、よもや親愛なる臣下の頼みを無下にする訳ではあるまい?』
『王様、こないのー?』
『ぐぬぅ!?』
褒美を授けると言った手前自尊心の塊である英雄王が臣下の前で前言撤回など出来るはずもなく、最後はおのれおのれと呪詛を吐きながら泰山の暖簾を潜った。
出された品を旨いと頬張る少年、この日私は十にも満たない少年に敗北したのだった。

◇

＊月※日
日々の振り返りとして唐突だが手帳を二つほど購入し、今日から日記とメモを書いていく事にした。最近変な夢を見たりして気になったその内容を書いたりするから、どちらも実質日記兼手帳の様なモノ

だ。
それで今日の、というかこれ迄の出来事なのだが……生憎自分は王様の無茶振りの件もあって表向きでは保護者の都合で度々海外に出向く事になっている多忙の人間として知られており、学内では気安く会話を出来る友人はほぼいない。
いるとすれば違うクラスにいる赤毛が特徴的な衛宮士郎だったり、海藻類みたいな髪をした間桐慎二だったり……あれ？　もしかして俺、友達少ない？
ま、まぁともあれ少なくとも二人ほど悪友と呼ばれる友人が二人いる為ヨシとしよう。ただこの二人、自分が言うのもなんだけど少々癖が強く、衛宮に至ってはそのお人好しさが災いしてよくトラブルに巻き込ま……いや、首を突っ込んだりしている。
何でも正義の味方を目指しており、困っている人を見過ごしておけないのだとか、色々突っ込みたい所はあるが、そんなお人好しな衛宮のフォローしたりするのが俺達三人の付き合い方だったりする。
間桐は間桐で陰湿な部分はあるけれど悪いやつではなく、非常に分かりにくいがお人好しな衛宮に気遣う所を何度か目にしたりする。最初は自分にも結構突っ掛かってきた時もあったが、勉学の成績を競いあったりする内に程々に接していくようになった。相変わらず嫌味を口にする奴だが、これはこれで味のある面白い奴なのだ。
そしてそんな間桐には妹さんがいる。間桐桜という名前で自分達より一つ下の後輩、髪色と雰囲気が大分変わってたから最初は気付かなかったが、彼女とは以前別の所で出会っている。
昔、冬木の大災害よりも前に俺は大好きだった祖母、フィーネお婆ちゃんを亡くしたばかりの俺はその事実に向き合えず、近くの公園で毎日不貞腐れていた。
不貞腐れていじけて、自分の殻に閉じ籠っていた自分、そんな自分を救いだしてくれたのが彼女だったのだ。献身的で麗しく、優しい少女、そんな彼女に慎二の紹介で再び出会えた事に俺は柄もなく舞い上がり恥ずかしくも噛み噛みになってしまった。恥ずかしィッ！
ただ、向こうは自分の事など覚えていないのか、不思議に首を傾げ

るだけだった。……うん、まぁ仕方ないよね。桜ちゃん――――いや、間桐さんも俺もまだ小さかったし、覚えてないのも無理ないよね。

そんな訳で一応友人二人をゲットした自分は程々な付き合いで程々に遊んだりしていた。ただやはり衛宮は衛宮で率先して面倒ごとに首を突っ込む為、程々と言うわりには結構濃い日々を過ごしている。

この間なんて中学生を苛める高校生に向かって突っ込んでいったし、相手も不良みたいだったから下手すれば騒ぎになっていたぞ。幸いにも相手側が大人で自分の説得(物理)に免じて許して貰えたけど、このままじゃいつか衛宮の奴、潰れちまうぞ？　衛宮とは折角家事の事で話せる数少ない友人なのだ。つまらない事で潰されるのは困る。

もう少し慎二を見習って欲しいものだ。慎二は慎二でズル賢いから、ああいう修羅場を切り抜けるの得意そうだし、いずれにせよ、衛宮はもう少し考える事を覚えてもらいたいモノだ。

それを本人に毎回口を酸っぱくして忠告するのだが、あまり効果はない。いい加減気付かないといつか大事なものを見失いそうで見ていておっかないんだよなぁ。

正義の味方という目標も良いけど、それを見ていて悲しむ人がいるってこと、分かっているのかなぁ。

まぁ、そんな訳で自分のこれ迄と友人二人の話をした所で今回は終わりにする。

……あれ？　俺の話題、あまり無くね？

◇

「――――眠ったか」

日記を書き終え、就寝して夢の中へと旅立った臣下を確認し、英雄王は音を立てずに部屋へ堂々と侵入する。
彼の目的は修司が書いた日記――――ではなく、その隣に置かれた落書き帳と書かれた一冊のノートだった。それを手にして部屋を出てリビングのソファーに腰かけ、手にしたノートを広げると、そこには複雑に記された図面と専門用語の数々が所狭しと書き殴られていた。
「ほう」
その記された図面と思われる絵と数式、そして専門用語の数々に英雄王は上機嫌になる。それは全てこの世ならざるもの、今の現代では絶対に存在しない科学技術の結晶達。
特殊な粒子とそこから生まれる合金、太陽光発電や軌道エレベーターの建築の工程、他にも様々な超技術の代物がこのノートには記されている。
端から見れば子供の乱雑な落書きと見られてしまうモノ、しかし英雄王は違った。最古の王でありながら……いや、人類の裁定者である彼だからこそ確信出来た。これに書かれたモノは一部を除いて多くが実用可能な代物なのだと。
もしこれ等全て実用化されれば地球の文明は数世紀ほど進む事になる。昨今停滞気味だった人類が一気に先の時代へ進む事になるのだ。
始めは奇妙な夢を見たという臣下の証言から始まった。何だか妙な知識が頭の中に浮かんできてそれらを書かないと落ち着かないという臣下からの相談に興味本位で助言したつもりだが、想像を遥か斜め上を行く内容に英雄王ギルガメッシュはワクワクしていた。
「やはり、お前は面白い奴よの」
何故修司がそんな夢を見ているのか、そんな事はどうでもいい。重要なのは今後この臣下が何処まで自分を愉しませてくれるのか、成長し、向上し続ける臣下に英雄王はその行く末を楽しみにしていた。

その4

――現代の魔術師は魔術だけでは生きていけない。そう思い、私は大変不本意ながら父の弟子である言峰に中国拳法の一つである八極拳を学んだ。

第四次聖杯戦争が始まるまでの三年、魔術の修練の合間に八極拳や料理、魔術師としても人としても重要なモノは全て自分の糧にして、私なりに必死に努力を重ねてきた。

そして第四次聖杯戦争、父が死去し、後に母も亡くなった私は後見人である言峰に色々と生活の援助をしてもらっていた。

けど、それも私が高校に入るまで、そこから私は自分の力だけで生きていかなくてはならない。不安は……まぁ、あると言えばあるが、父が残してくれた財産のお陰で一人立ちするまでには保つだろうし、何よりこれ以上父を守れなかったエセ神父の世話になるのが嫌だった。

言峰と顔を合わせなくなり、疎遠となっていたある日、高校の試験問題に備えて一応の資料を集めに奔走していた時、偶々教会の近くを通った私は気紛れにあの死んだ魚の様な目を拝んでやろうと思い付く限りの嫌味を頭の中へ思い浮かべて、その門を潜った。

そして、そこで私が見たものに言葉を失った。

『――なに、この岩』

教会の半分の大きさに迫る巨大な岩石が教会前の広場に鎮座していた。門を潜るまでは認識阻害の結界が張られていたからか気付かなかったが、これだけの岩石、一体どこからどうやって持ってきたと言うのか。

『む、凛か。お前が自らここに来るとは珍しい。一体、私に何用かな？』

岩石の影からひょっこりと顔を出してくるのは最後に顔を合わせたときと変わりのない死んだ魚の目をしたエセ神父だった。

『何用かな、じゃないわよ！　何なのよこの岩!?　アンタこれを使っ

てテロでも起こすつもり!?』
『失礼な、これは立派な鍛錬用のモノだ。まぁ、流石に大きすぎるから周辺への気を使って人払いと認識阻害の結界を張っているが……』
『鍛錬って……アンタ、今までこんな派手なモノを使ってたっけ?』
この男は鍛錬するときは人目に映らないように影で功夫を行っている。確かにこの言峰綺礼という男はエセ神父だが、こんなこれ見よがしな武力誇示をするような真似をするような奴ではなかった筈だ。
そんな私の疑問に何を思ったのか、言峰は一瞬だけ珍しく呆けた顔を晒すが、次の瞬間には人を小馬鹿にするような薄ら笑いを浮かべている。
『まぁ、一応は気を付けておこう。それよりも凛、お前もそろそろ高校への進学の受験の筈だろう? ここで油を売ってていいのか?』
あからさまな話題反らしだが、これ以上この男と話をしても無意味だと判断した私は時間を無駄に消費した事を後悔しながら踵を返す。
無論、受験には今の実力でも充分余裕で合格出来るが、遠坂家の家訓である〝余裕を持って優雅たれ〟の実行の為に更に追い込みを掛けるつもりだ。
しかし、そんな私に言峰は一度だけ呼び止める。
『凛、下らないと思うかもしれないが、一度だけ質問に答えてくれないか?』
『なに、私、忙しいんだけど?』
『ここへ足を運ぶ程度には余裕なのだろう? それとも、遠坂家の家訓はお前には荷が重いか?』
相変わらず嫌味ったらしい言い回しに腹が立つが、ここで無視を決め込んでは後で何を言われるか分からない。次の聖杯戦争が始まるまでに教会側との余計なイザコザは可能な限り抑えておくべきだ。
『――――なによ』
『お前は、この岩を一撃で粉砕出来るか?』
『――――は?』
『だから、お前の拳はこの岩石を一撃で破砕出来るかと聞いている』
『……拳だけで?』

『拳だけで』
『……魔術なしで？』
『魔術なしで』
　言峰が私へ投げ掛けた一つの質問、それは私にとって言峰綺礼という人間を見損なうのに充分な威力を秘めていた。教会の半分を覆うほどの巨大な岩石、それを一撃で砕く？　魔術無しで？　人の拳だけで？
『バッッッカじゃないの？　そんなの、出来るわけないじゃない』
　言峰綺礼という男はもっと現実的な人間かと思っていたが、どうやら違ったらしい。あんな巨大な岩を破砕するとか、そんなの埒外の化け物かそれこそ英霊にしか出来ない所業じゃないか。あの男は英霊になりたい願望でもあるのか？
　それはそれである意味人間らしく思えるが、それを言及するほど私は暇じゃない。
『そうか、出来ないか。うむ――時間を取らせたな』
　何か一人で勝手に納得している様だが、そんな事知った事じゃない。本当に時間の無駄だった。こんな男に時間を割いた事を後悔しながら私は教会を後にする。
　そうだ。私には果たさなければならない使命がある。聖杯戦争に勝利する為に私は、遠坂凛は立ち止まる訳にはいかないのだ。

『師父、どうしたんです？　圏境まで使って人目を忍んでこいとか、そんなに大事な話なんですか？』
『いやなに、今回呼び出したのはいつぞやの試練の焼き増しだ。この岩を一撃で粉砕してみせろ』
『分かった。と、その前にちょっといい？　気合い入れたいから着替えたいんだけど……』
『構わんが……おい待て、何だ？　その山吹色の胴着は』
『いやー、前のジャージも破かれて久しかったしさ、やっぱ形から入っ

た方が気持ちが引き締まるし、高校へ進学する自分へのご褒美も兼ねて思いきって作ってみたんだ。師父の分もあるけど着る？』
『いらん。というか、お前は高校受験は良いのか？　勉強しなくて』
『最低限の勉強はしたし後は応用を抑えれば問題ないさ、それに追い込みが過ぎるのも効率悪いし、ガス抜きは定期的にしないとね』
『――――そうか』
『じゃ、いきますよ！』
その日、冬木の街はちょっとした地震に襲われた。

◇

δ月β日
中学へ進学して早二年、自分と同学年の生徒達は迫る高校進学の為の受験勉強に勤しんでいる事だろう。勿論、自分もその一人だ。
自分は相も変わらず王様の無茶振りに追われ、海外で悪漢をしばき倒しながら世界各地を回っていた。
その道中インドでは以前出会ったカレー推しのシスターことシエルさんに昼飯奢って貰ったり、中国では項羽推しの読書愛好家であるヒナコさんが迷子になった自分を道案内してくれたり、イギリスの首都ロンドンでのウェイバーさんに至っては宿を探していた自分をワザワザ御自宅に何日か泊めてくれたりと、色んな人に助けて貰ってたりした。
最初の頃は言語の問題でマトモに現地の人達とコミュニケーションが取れなかったけど、何日か過ごす内に自然と覚える様になり、今では大抵の言語を訛り混じりだが話せるようになった。やっぱ人間は環境に慣れるものである。

で、王様に言われた難題の事だが、悪漢の方は何とかなった。薄暗い道や地下、胡散臭い所を歩いてれば自然と沸いて出てくるし、適当に張り倒しておけば後はそそくさと逃げ帰ってくれる。
ただ、悪漢は逃げ足だけは皆矢鱈と足が速くていつもその様子を見逃してしまうんだよなぁ。元々薄暗い事もあって暗闇に目が馴れる前に襲ってくるし、馴れる頃には皆何処かへと逃げていってしまう。その場にお決まりの小さな煙だけを残して。
シエルさんに聞いても変に苦笑いを浮かべて誤魔化すだけだし、……まぁ、端から見れば自治体気取りの中坊の小僧が生意気言ってるみたいだから、シスターさんも返答に困るよな。
他にも中国では无二打（にのうちいらず）で有名な李書文先生の真似事をしながら悪漢をしばいていたのだが、これが中々上手くいかない。まぁ元々殺す気もないし殺す度量もないから当たり前だが、どんなに強く踏み込んでも精々吹き飛ばす事しか出来ないのだ。
悪漢は吹き飛んでいる最中に煙だけを残して逃げてしまうし……というか、俺、悪漢逃がしてばっかりじゃん。王様はそれでいいと納得してくれているが、一度も警察の人に突き出していないから、イマイチ社会に貢献できているのか不安になる。
そんな訳で逃がした悪漢を追うべく街を彷徨い、迷子になったところでヒナコさんと出会った訳だ。ヒナコさんは物静かで読書が好きな人なんだけど、昔の偉人……中でも嘗ての覇王と呼ばれた項羽の話になると途端に饒舌になったりする。
ただこのヒナコさん、出会い頭の初対面の印象が悪かったのか、人の顔を見るなりゲッて口にしていたから、あまり好く思われてはいないみたいだ。ああいう物静かな人は静寂を邪魔されるのが嫌いみたいなので自分の知る場所まで送ってもらったらそれっきりになったんだよね。いつかお礼をせねば。
そしてロンドンだが、ここでは悪漢よりもそこに住む人々に手間を掛けられた気がする。地元の人達は皆好い人ばかりなんだけど、喧嘩っ早い人も多くいるらしく、自分はその争いに運悪く巻き込まれてしまったのである。

そこで以前にも知り合ったウェイバーさんと金髪ドリルの女の子と出会い、その場の流れで彼等と同行する事になった。何でもウェイバーさんは所属する組織の偉い人で、組織内にある各派閥の人達がどんなに脅してもどの派閥に属するかハッキリしないウェイバーさんに業を煮やし、一部の人達が強行手段に訴えて来たのだとか。金髪ドリルの人――――ルヴィアさんは完全に巻き込まれた側らしい。ウェイバーさんってもしかしてヤの付く人？

そしてその後、自分もその争いに巻き込まれたりするのだが……何というかこの人達、怖いんだか怖くないんだか良く分からない事をしてくるのだ。何か奇妙な呪文？　的なことを唱えたり、骨を使って攻撃してきたり、他にも色々仕掛けてきたり、挙げ句の果てには紙吹雪なんてものを使って攻撃？　をしてくるのだ。

いや、可愛いかよ。何かの手品のクラブかな？　てっきりヤの付く人達の抗争かと思って緊張していただけに彼等の行動に思わず肩透かしを食らった。え、この人達相手に本気で殴りかかろうとしていたの？　俺。

あれかな、ウェイバーさんが狙われたのって所謂手品サークルの勧誘みたいな話なのかな？　大学とかの、俺大学とか行った事ないから知らないからなー、凄いんだなイギリスの大学って、確かウェイバーさんの大学って時計塔って言うらしいし。もしかしてビッグベンの近くに合ったりするのかな？　今度調べてみよう。

で、その後もゴチャゴチャあって何か味方と自称する獅子劫　なんて人も来た。ウェイバーさん曰く助っ人らしいのだが、この人はめっちゃ厳ついし手品なんて合わないと思ってたんだけど……。

ルヴィアさんはプロレス技で相手を地面に沈め、獅子劫さんはショットガンに動物の指詰めてブッパしてた。怖いわ。

いやどんな仕組み？　何でワザワザ銃弾に動物の指詰めてるの？

普通に鎮圧用の弾でええやん。いや、紙や骨を使ってくる人達には有効かも知れないけどさぁ、そこはせめてゴム弾とかでええやん。ルヴィアさんに至っては俺と同い年位なのに本気で相手をプロレスで沈めてたし、怖いわ。

お陰で抗争（勧誘？）は長引きそうだし、これ以上ロンドンだけに留まるのもあれなので思い切って自分もそのイザコザに参加する事にした。
と言っても軽めに何発か殴るだけなんだけどね。中国での修練で圏境を身に付けた事により上手く相手の懐に潜り込めた自分はそのまま相手側を鎮圧、どうにか怪我人を出さずに終わらせることが出来た。
ウェイバーさんには後日泊めてくれたお礼をすると言って自分はそのままロンドンを後にし、取り敢えず日本に帰ることになった。
今回の事、特にロンドンでの出来事を王様に説明したら大爆笑された。気持ちは解るけど笑いすぎ、何も死にかける程笑わなくてもいいじゃん。

◇

「一体どういう事だ」
時計塔の一室、召喚科学部長を勤める老魔術師は人払いを済ませた部屋で忌々しくその表情を曇らせる。
最初は些細な切欠だった。新たに〝ロード〟となったウェイバーにどの派閥に加わるかちょっとした脅しを仕掛けただけだった。
所が相手が予想より抵抗してきたモノだからつい此方も熱くなってしまい、ちょっとした抗争まで発展仕掛けた時だった。
獅子劫界離が参戦してきたのは良い、相手はフリーランスの魔術師だ。奴が抗争という飯の種に寄ってきてこれに参加したのは良い、エーデルフェルトの娘も下見に来ていただけで騒ぎを大きくしないと言っている。まぁ、これもいいだろう。小娘に要らぬ貸しを作った

のは不本意だが、致命的なミスには至らない。
が、こればかりは無理だ。どうあっても無視出来る内容ではない。何故５０人もの魔術師が何もできずに無力化されているのだ。
彼等はいずれも選び抜かれた精鋭、老魔術師が認める時計塔屈指の戦闘集団。それが相手にもされず一蹴されたとあっては魔術協会の、引いては此方の失態に他ならない。
何とか揉み消さねば、思案する老魔術師だったが……。
「お邪魔するよ、ロッコ＝ベルフェバン卿」
「っ、ライネス＝エルメロイ嬢……」
扉の向こうから現れる小悪魔、その隣には件の中心人物であるロード＝エルメロイ二世がげんなりとした様子で苦笑いを浮かべていた。

「――シュウジ＝シラカワ、良いでしょう。貴方をこの私、ルヴィアゼリッタ＝エーデルフェルトのライバルとして認めましょう！」
その頃、こっちはこっちで変なフラグが建っていた。

その5

俺がその男と出会ったのは中学一年の秋、文化祭の看板作りをしていた時だった。
『ちょっと君、一人でなにしてるん？』
上級生と文化祭の役割について少し揉めて、流れで俺が看板作りをする事になり、仕方ないなと思いながら作業に入った最中、後ろで見ていた後の悪友である間桐慎二の更に後ろからソイツは現れた。
『あん？　何だよお前、コイツに何か用なのかよ』
『いやね、俺の役割早めに終わっちゃってさ～、暇だから他にやることないかなって学内をブラついてたんだよね。で、そこの赤毛の少年一人で何してるんだ？』
『コイツ、バカな上級生にワザワザ楯突いたのさ、その所為でコイツが代わりに文化祭の看板を作ることになったってワケ』
『まるで意味がわからんぞ』
『僕だって知るもんか』
後ろで慎二の呆れに満ちた溜め息が聞こえてくるが、構わず作業を続ける。どう言われようが関係なかった、〝誰かの為に何かが出来る〟なら外の声は気にならなかった。
『フム、どうやら塗料と木材が足りないようだな。よし、ならこれから調達してこよう。そこのワカメ君、ちょっと手伝ってくれるかい？』
『あぁ？　何で僕まで手伝わなきゃいけないんだよ、やるならやりたい奴だけやればいいだろ？』
『そうだぞ、これは俺が勝手に決めた事なんだから、アンタが手を貸す事なんて――』
『いやだって暇なんだもん。いいじゃないか、これも思い出の1ページになると思えば。俺、王様――保護者の無茶振りで海外にいることが多いし、あまり皆との思い出がないからさ～』
『海外に行ってるって、お前、もしかして4組の――』
確か聞いたことがある。確か一年の四組には校内でも指折りの秀才で勉学に於いては学年どころか全国でもトップに立つと言われ、

運動能力も卓越し文武に長けた怪物、その凄まじい傑物ぶりから並び立つ者がいないという畏怖を込められて冬木では一部恐れられている者がいると。
『お前が【ボッチ】の白河か！』
『オイィ？　誰だその不名誉極まりない渾名付けたの？　初耳なんだけど？　え、本当にそんな渾名が罷り通ってるの？』
　明らかな蔑称を一周回って名誉の称号にまで昇華させた本人は初めて耳にした渾名にショックを受けて地面に項垂れる。まぁ、普通はそう思うだろうなぁ。
『グフ。ま、まぁいい、それは今は置いておこう。その渾名を付けた元凶はあとで縛り上げるとして――』
　どうやら白河は精神面も割りとタフな方らしい。いや、ダメージ自体は負っているみたいだが……。
『ま、まぁそんな訳でさ。俺も学生の内には出来るだけ皆と共有出来る思い出が欲しいのさ、そう言うわけで、俺も手伝うよ。勿論、そこのワカメ君もね』
『まぁ、そこまで言うなら良いけど…』
『はぁ!?　何で僕まで!?　勝手に巻き込むんじゃ――』
『逃がさんぞ、お前にはあとで俺の渾名について話して貰わなきゃいかんからな』
『ヒッ』
　先程とは明らかに異なる異質な気が彼から放たれる。成る程、傑物と言うのはどうやら間違いでは無かったようだ。中学生が放つモノとは思えない圧力に慎二は小動物の様に縮こまっている。
『さて、それじゃあ始めようか。一人よりも二人、二人よりも三人、折角だからそのバカな上級生では絶対作れないようなド派手な看板を作ってやろうぜ！』
『お、おー』
『なんで僕まで……』
　と、そんな訳で強引に決まった即席の三人でのチームは俺が考えていたよりも凄まじく効率良く動けた事もあり、日が傾いて暗くなり始

める頃には全ての作業を終わらせることが出来た。それも、最初に想定していたよりもずっと出来映えの良い代物として完成したのだ。
資材を白河が集めて俺が組み立て、慎二が装飾を飾り付ける。三人がそれぞれ手際よく出来た品物はそのギミックの豊富さとクオリティの高さからちょっとした話題となったのだ。
何せ完成品は文化祭とは名ばかりのド派手さで、とても中学生が作ったとは思えない出来映えだった。確かに俺達も途中から看板作りから作品作りという意識に切り替わり、つい夢中になって打ち込んでしまったのも原因の一つだろう。
けれど、それでも正直やり過ぎた気がする。キラキラと輝く装飾品、自動開閉となった門、その両端には何処から持って来たのか恐竜とロボットの巨大模型、恐竜の口からは炎を吐きロボットの方には目と胸元が光るギミックがそれぞれ搭載されていた。
最早看板という枠組みから逸脱した代物に俺達は焦ったが、やっちまったモノは仕方ないという事でその時は逃げるように其々の家へ帰った。
当然、文化祭当日にはその派手さから学校は大騒ぎとなり、来場する人達の中には県外からもやってくる人もいたりした。文化祭にそぐわない看板兼門にＰＴＡの人達の耳にはいるのは自然な流れで、当然俺達もその流れに呑まれる事になる。
が、当時校長だった人が良識のある大人だった為に俺達自身に罰則が課せられる事はなく、寧ろ俺達に仕事を押し付けた上級生に罰を強いられる事になった。
晴れて無罪となった俺達
『はぁー、ったく、こんな騒ぎに巻き込まれるの、僕は二度とゴメンだからな！』
『まぁまぁ、良いじゃないか。三人とも怒られる事なく済んだんだから』
『それに慎二だってあの上級生が怒られるのを見て笑ってたじゃないか』
『当然さ、元凶が痛い目を見たんだ。スカッとしたよ』

それからだ。この日を境に俺達が友人関係になれたのは、慎二や修司と知り合えて慎二の妹である桜とも知り合えた。
今年で三年、俺達も受験に備えて準備をしなければいけない。俺達は三人とも穂群原学園へ進学する予定だ。
そこで始まる学校生活、そこで待っているのが平凡な毎日か、それとも非日常の連続か、どちらにしてもきっと退屈にはならない日々が待っているのだろう。
――ただ一つだけ、修司から聞かされた言葉の中に今でも引っ掛かる事がある。
『なぁ士郎、特撮のヒーローモノって基本的に戦隊モノとライダーモノが二種類あるじゃん。あれって、一見別物に思えるけど、実は結構似てる部分があるんだぜ？』
昔から切嗣の跡を継ぐ為に、正義の味方になる為に行動していたから、そう言った娯楽に手を出してこなかったから、修司の言っている意味が理解できなかった。
修司は一体何が言いたかったのか、それとも意味など何もないのか、高校受験が間近に迫った今でも俺には理解できていなかった。

◇

×月△日
高校受験も無事終わり、後は卒業を待つばかり。海外へ出向く事が多い俺だが、中学が義務教育なのと王様が学校に口添えしてくれたからどうにかこうにか卒業まで漕ぎ着ける事が出来た。
で、折角卒業までの間衛宮達とどこか遊びに行こうと一人計画を立てていた俺なのだが、例の如く王様に海外出張（笑）を命じられてし

まった。
いやまぁ、いいんだけどさ。衛宮も藤村組の人達とお祝いするみたいだし、間桐兄妹もなんか忙しそうにしてたし、どちらにせよ計画立ててたの意味なかったし、中学最後の休みも特に予定無かったし。べ、別に寂しくなんかないんだからね！
と、そんな俺の嘆きなど知ったことじゃないと始まった今回の海外遠征、相変わらず悪漢退治かな？　と気楽に考えていた俺なのだが、今回はちょっぴり毛色が違っていた。
まず、前回相手した手品師の人達がどこから話を聞いてきたのか俺に同行しろと勧誘を強行してきたのだ。いや、俺手品とか出来ないし無理ですから、そんな俺のやんわりな断りとはお構いなしに話も聞かず襲い掛かってきたのだ。例の如く、良く分からない勧誘方法で。
いやいいから、そんな骸骨剣士を差し向けられても困るから、糸を鳥とか狼に変えられても驚きはしても怖くはないから、どちらかと言えば前回の獅子劫さんやルヴィアさんの方が怖かったから。
穏便に済ませようとしてもしつこく襲ってくるので、仕方なく応戦、圏境からの不意打ちアタックで無力化しておいた。
しかし驚いた。今俺がいるのはブラジルなのに手品師の人達って何処にでもいるもんなのな、もしかして俺が知らないだけで手品って今世界的に大流行してたりするのかな？　今度王様に聞いてみよう。
そもそも今回の王様からのお題はいつもよりあやふやで〝その目で世界を見てこい〟というものだった。いつもより真剣な眼差しで言うものだからいつもより確りと準備してきたのに、何だかちょっぴり拍子抜け――――（日記は此処で途切れている）

×月Ω日
ビックリした。昨日珍しく取れた宿で日記を書いてたら、いきなり窓から女の人が乱入してきていきなり殴りかかって来やがったのだ。
その女性はバゼットと名乗り、何か良く分からない理由で俺を捕らえようとしているらしく、中坊である俺に容赦なく殴りかかって来たのだ。

バゼットさんは細い外見とは裏腹に結構重い打撃を打ってくる。師父との対人戦を学んで置かなかったら、もう少し苦戦したかもしれない。が、師父から以前教わった呼吸法と八極拳により、何とか無力化させる事が出来た。

壊された宿の窓の請求はこの人にして貰うことにして、俺はブラジルを出て今度はドイツに向かうことにした。

×月α日

予想してた通り、ドイツはやっぱ寒かった。季節も冬真っ只中だし、寒さが日本と段違いだ。でも寒い所は景色が綺麗と言うし、ちょっと冒険も兼ねて俺は余り人が寄り付かないとされる森の奥へ進むことにした。

そしたらスゲーでかい城があるからもうびっくらこいた。カメラとかあったら速攻撮りたい位見事な景観だった。これなら王様や衛宮達にもいい土産話が出来るなーなんて思いながら周辺をさ迷ってたら、何か複数のメイドに襲われた。

何でいきなり襲ってくるの!? と一瞬考えたけど、俺ってバリバリの不法侵入者なんだよね。良く考えたらこんな立派なお城がある所なんだもの、私有地に決まってるじゃない！ 俺のバカ！

すぐに許してもらおうと頭を下げて謝罪しようにも、メイドの皆さんたら殺意マシマシで鈍器やら刃物とか容赦なく振り下ろしてくるんだもの、コミュニケーションの成立以前の問題だ。

というか、メイドの人って皆あんなに戦闘に秀でているもんなの？

先日のバゼットさん程でないにしろ、普通そう言う戦闘が得意なのって執事の人なんじゃなかったの？ ソースはこの間見たアニメから。

襲ってくるメイドさん達を何人か無傷で無力化し、全力で街へ引き返し宿に戻った俺は外国のセキリュティの高さに感心の涙を流すのだった。

×月＊日

ドイツからフランスへ赴いて二日目、今回最初の悪漢＝サンに遭遇。金髪長髪のお嬢さんに襲い掛かって言いたから軽めの挨拶をしながら一蹴、相変わらず煙だけを残して逃げた悪漢を尻目に俺はお嬢さんに声を掛けた。

お嬢さんはレティシアさんと名乗り、歳は俺とそんなに変わらない様で、俺を悪漢から救ってくれたお礼という事でフランスの首都ことパリの案内をして貰うことになった。

何とも有難い話だが、レティシアさんは男性恐怖症らしく終始俺との距離を開けていた為、あまり親交を深める事はなく、あくまで助けてくれたお礼として義務感として街を案内してくれたみたいだった。……人との距離感に少しだけ泣きそうになったのはここだけの話。

それでレティシアさんは友人と来ているらしく、俺も同じ宿に泊まることとなった。勿論部屋は別だゾ♪

そして翌日、昨日では回れなかった箇所を巡る為に今日はその友人と一緒にパリを巡る事にしたのだが、ここで問題発生。

何と昨日追い払った筈の悪漢が今度は数を揃えてお礼参りにやって来やがったのだ。一緒に来ていたレティシアさん達は当然怖くなって悲鳴を上げていた。

まぁ、日記で書いているから大した事の無いように思えるけど、初見さんや馴れてない人が見ると確かに怖いよね。顔色悪いし、明らかに目がヤバイし……て言うか、コイツら絶対クスリやってるよね？それも結構ヤバめの。あ、書いていて何か分かった気がする。王様が俺を海外に行かせる理由が。

多分、王様は俺を使って悪漢達を暴走させている麻薬の出所を突き止めようとしているんだ。確か王様の会社って今ではもう世界的に有名な程に規模が大きくなってきているってシドゥリさんが言ってたし、それに伴って不安要素が出てきたとも言ってた。

王様ってあぁ見えて凄腕の経営者みたいだし、その手腕に嫉妬した一部の薬品会社が王様を貶める為に世界中にヤバイ薬をばら蒔いたとか。……いやねぇわ、バイオのやり過ぎだな、俺。

どちらにせよ、レティシアさん達を守るために悪漢達を迎え撃った

俺なのだが、流石に数が多くて少々難儀していた時、一人の女性が突然上から舞い降りてきた。
何だか面白そうだから私も混ぜてよ、何て言いながら悪漢達を吹き飛ばしていくお姉さん、風のように疾走するお姉さんに負けじと俺も追随した。て言うかこのお姉さん外見は華奢に見えるのに腕力が凄いの何の、腕の一振りで悪漢達を薙ぎ倒していくんだよね。端から見れば無双ゲーである。
乱入してきたお姉さんのお陰で何とか窮地を切り抜けた俺は、お姉さんに助けた事への礼を口にすると、〝人間の癖に中々やるじゃん〟なんて言いながら俺の頭を撫でてきた。
いや、あんたも人間じゃん。なんて生意気混じりに言うと、お姉さんは嬉しそうに笑い〝生意気だー〟と頭をワシャワシャしてきた。
助けたお礼がしたいと名前を訊ねると、お姉さんは少し戸惑い、短くアルとだけ名乗ってくれた。
アルさんのお陰でレティシアさんとその友人を守れた俺は、取り敢えず宿屋に戻り何故襲われたのか事情を説明した。すると、お姉さんは一度考え込み、暫くすると俺達に事の顛末を教えてくれた。
何でもここ数年の悪漢の発生の多さはとある薬品会社に於ける陰謀で、その会社が世界中にばら蒔いた麻薬の所為だという。おい、まんまバイオじゃねーか。
今は有志者達の協力で何とか抑え込んでいるが、それもいつまで続くかは分からない。幸い連中の本拠地は特定しているから何とかなるが、時計塔の連中は様子を見ているだけだし、頼りにならないから仕方なくアルさんが本拠地のあるここパリの何処かにある地下へ乗り込んで明日元凶を倒しにいくのだとか。
いや、あの手品クラブに頼むのは酷じゃね？
何とも大きくなった話に俺自身戸惑いを隠せないが、アルさんが嘘を言っている様子は無いし、何より俺自身がここ数年の悪漢との遭遇率の高さを実感しているのでアルさんの話には充分信憑性があった。
話を聞いたレティシアさん達は絶句し、俺も何とも言えなくなった。アルさんは街がどうなるか分からないから俺達に明日の早朝に

フランスから逃げるように言ってくれるが、俺は何故か従う気になれなかった。
理不尽が、不条理がこの街を襲おうとしている。冬木で起きた大災害の時と同じく、理由なき悪意が無関係の人に覆い被さろうとしている。
許せない、許せるわけがない。沸き上がる怒りの衝動が抑えられず、俺はアルさんにその本拠地に乗り込む為の同行を求めた。
最初は渋っていたアルさんだが、先の悪漢達との攻防で最低でも足手まといにはならないだろうと思ったのか、最後は俺に同行することを許してくれた。
今夜、俺はアルさんと一緒に麻薬をばら蒔く薬品会社の本拠地に乗り込む、まるで映画の様な出来事だが、笑い話で済まないと言うのはガキの俺でも分かっている。
王様の会社、秘書のシドゥリさんには電話で話を通した。シドゥリさんも王様にはすぐに連絡すると言ってくれたし、これで保険を掛ける事には成功した筈だ。
中学最後の長期休み、その終わりまであと僅か、白河修司、人生初めての冒険が始まる。

その6

夜が深くなる時間帯、レティシアさん達の安全の為に彼女等を駅に送り届け、何とか間に合った終電の列車へ乗り込んで列車が街から離れていくのを確認すると、俺はアルさんと一緒に薬品会社の本拠地があるとされる場所へ向かった。

向かった先にあるのはパリでも有名なエトワール凱旋門から少し離れた位置にある街並み、エトワール凱旋門を中心に12本の道路が放射線状に広がっており、中でも有名なシャンゼリゼ通りの通路の中にその店はあった。

端から見ればなんて事のない普通の薬品店、ショーウインドウに並べられた薬も一見すれば特に問題無さそうに見えるが、アルさんはスタスタと店の脇に続く路地裏を進んでいく。

「こっちよシュージ、着いてきて」

アルさんを先頭に進むこと数分、行き着いたのは重ねた年季を思わせる灰色の壁、日々一つないピッシリとした壁が聳えていた。アルさんはここに壁があるとは思わなかったのか、目を丸くさせて首を傾げている。

「あ、アレレー？　おっかしいなぁ、シエルの話だと確かにここに地下通路への扉があるって……」

「シエルさんが？」

アルさんの口から出てきたのは以前悪漢を退治していた際に偶々遭遇したカレー好きのシスターさん、どうしてアルさんからシエルさんの名前が出てくるのか不思議だが、今はそれを指摘している場合じゃない、何やら腕を振り上げて「せーの」と掛け声をしている。あからさまな強行突破な姿勢の彼女に俺は直ぐ様待ったを掛けた。

「アルさん、アルさんストーップ」

「と、なにシュージ、いきなりどしたの？」

「どうしたのはこっちの台詞ですよ。アルさん、今何しようとしてました？」

「何って……普通に抉じ開けるつもりだけど？」
「今深夜、アルさんの力で抉じ開けたらそれだけで近隣住民が驚いて警察に通報されちゃうでしょ」
「えー？　人間のケーサツなんて私簡単に振り切れるわよ？」
「そう言う問題じゃないからね？　それに騒ぎを聞き付けて件の犯人が逃げ出したらどうするんですか、俺達に今求められてあるのは潜入捜査（スニーキングミッション）で、討ち入りじゃないからね？」
　俺の必死な説得にもアルさんは納得出来ていない……というより、イマイチ理解出来ていない様だ。何と言うか、酷く単純に物事を捉えようとしている。いや、アルさんの身体能力を考えればそれが最も効率的なのだろうけど……。
「兎に角、ここは一つ俺に任せて下さい。こう言うのは何か仕掛けがあるのが定石だと本とかで書いてありましたから」
「そう？　なら任せちゃうけど……フフ、シュージもまだまだお子様ね、本のお話を参考にするなんて意外と可愛いところあるんだから」
　微妙に小バカにされている気もするが、まぁアルさんが言っている事も分かるので取り敢えず無視をして、俺は壁を調べ始めた。
　隅から隅まで丹念に、見落としが無いように隈無く調べる。すると右手にうっすらと微かな窪みらしい感触を感じて見てみると、うっすらと針の穴程の小さな窪みが其処にあった。
　ビッシリと輝すら無い程に整理された壁に僅かな穴、それもこの一ヶ所だけしかない事に疑問を抱いた俺は、後ろで手を組んで鼻唄を歌っているアルさんに訊ねる。
「アルさん、何か細い針の様なモノとか持ってたりしません？　何かここに小さな穴がありまして、調べておきたいんですけど……」
「針？　んー、持ってないけど……あ、これなら良いかな？」
　そう言うとアルさんは自身の頭髪から一本の髪の毛を抜き取り、フッとそれに息を吹き掛ける。するとキラキラ輝く金の頭髪が全てを穿つとばかりにピンとなる。それをハイと渡されたので手に取ってみると、普通の髪質とは異なる硬い感触が伝わってきた。
「アルさんの髪って、随分頑丈なんだね」

「フッフーン、髪は女の命って言うからね」
マジか、確かにそう言う話は日本でも結構耳にしているけど、あれって美しさって意味だけじゃなかったのね。正に頭部を守る命綱というそのものの意味だったとは……女性というのは俺が思っていたよりもずっと強い生き物だったんだな。
そんな大事な頭髪を拝借した俺は、アルさんの髪を使って穴の奥へと通す。何回か穿る様にしているとカチャリと音がなり、壁だったモノが奥へ沈むように消え、差し変わるように下へ続く階段が姿を表す。
良く作られた仕掛けだな、何て感心しているとアルさんも驚いた様に声を漏らしている。
「へー、今時の魔術師ってこんな手段を弄してくるんだ～、時代は進んでるのね～」
「アルさん？」
「あ、うぅん、何でもない。それよりも凄いじゃないシュージ、一発で仕掛けを解くなんて」
「アハハ、昔からこう言う仕掛けというか物を扱うのが得意でしたから。――さ、行きましょう」
「オッケー、男の子が活躍したんだもの、今度は私が魅せる番よ～」
そう言いって腕をブンブン回しながら地下への階段を進んでいくアルさん、先程何を言ったのか気になる所だが、今はそれを言及する余裕はない。気分良く先行くアルさんに付き従い、俺も地下へ続く階段を降りていく。
階段を降り、幾つもの通路を通り、そこそこ本拠地の中心部に近付いて来た頃、今までとは異なり大きな通路に出た自分達を待っていたのは……まぁ、大方予想していた通り、俺がこれまで悪漢だと思っていた麻薬の被害者たちが警備代わりに襲い掛かってきた。
「■■■■■ッ!!」
叫び、と言うよりも断末魔の様な雄叫びを上げながら襲ってくる被害者達、見れば見るほど人とはかけ離れた様相、これが麻薬に苛まされた人の末路なのか。

これまでただの悪漢だと思っていただけに俺の心に躊躇が生まれるが、ここで迷ってしまえば俺の方がやられてしまう。
俺は、アルさんに付いていくと決めた。それは別にアルさんに守って貰えるからという甘えから出た言葉ではない。王様に言われて世界を巡り、少なからず彼等と因縁を持ったのは俺だ。だから最後まで関わり通すと決めた。
覚悟というにはチッポケなモノだが、それでも一度自身の口から自身の想いとして言葉にしたのだから、ここで退く訳にはいかない。襲ってくる被害者の横っ面に裏拳を叩き込み、師父直伝の突きで並んで押し寄せてくる被害者達を諸とも吹き飛ばす。
「おぉ、シュージってばやるじゃん」
「そういうアルさんだって」
見ればアルさんの方も襲ってくる被害者達を腕の一振りだけで鎧袖一触に吹き飛ばしている。俺の様に術理を用いての技じゃない、腕力だけで並みいる被害者達を吹っ飛ばしているのだ。
「ん？　まぁ、私は特別だからねー、これくらい出来なくちゃお話にならないわよー」
カラカラと笑うアルさんは自身を特別だと口にする。そこにどんな意味が込められているのかは俺には分からないが、きっとアルさんはアルさんできっと沢山の経験を積んできたのだろう。俺とそんなに歳も変わらないだろうに、色々すごい人なんだな。
そう話している内に被害者達は煙を残して姿を消していた。きっとこの施設の何処かに逃げたのだろう、予想していたよりも規模が大きい施設みたいだし。
その後も襲ってくる被害者達を退けたり、殺意の高い仕掛けを回避したり、飽きたといって施設を壊そうとするアルさんを宥めながら進んでいくと、明らかに施設の終着点らしき広々とした空間に出た。
その中央には施設の主らしき白衣を来た男が一人佇んでおり、眼鏡の奥から気持ちの悪い視線を向けてきている。
「いやはや、この夜分遅くに来客とはね。饗す準備が遅れてしまった

よ」
「アンタがネルロク＝マルケル？」
「如何にも、元時計塔に属していたしがない魔術師さ。今は此処で根源に至る為の研究をしている。それで？　我が工房に一体なんのご用かな？　麗しいお嬢さん」
「――色々言いたい事があるけど、アンタが世界中に撒いた死徒擬きに変異する薬、アレを何処から持ってきたの？」
「その話をするには今から三十年程昔、ある島で行われた実験まで遡る」
　男は淡々と語った。嘗てアリマゴ島と呼ばれる小さな島で其処では細々ながらも島民達が慎ましやかに生活していたのだという。
　しかし、ある日島に訪れた外界からの来客の所為で数年後、島はある悲劇に見舞われる事になる。その来客が作っていた薬により、一部の島民は暴徒と化し、薬の被害は爆発的に拡大され更なる規模の拡大を恐れた裏の組織によって島民は駆逐され、アリマゴ島と呼ばれる島は世界地図から姿を消したという。
「私は当時、その島民達を排除に赴いた者の一人でね、ノリカタ＝エミヤの研究には個人的に興味があったからね。最初は暇潰し程度のモノだったのだよ、しかし研究が進むにつれて楽しくなってきてね、ついついのめり込んでしまったよ。しかし、彼も酔狂な題材を選んだモノだ。吸血衝動を抑えた死徒化とは、お陰でこの研究に難儀したモノだ」
「成る程、じゃあ貴方に取って世界中で起きている死徒騒動は単なる実験結果でしかないわけね？」
「これでも配慮はしたのだよ？　お陰で感染率は著しく低下し、被験者達の自我も僅かだが残るように設定してある。それに、私が薬と称して売っていたのは身寄りのない人間ばかり、社会に貢献できない屑を一掃出来たのだ。寧ろ感謝してほしいくらいだ」
　男は語る。愉しそうに、愉快に、快活に、まるで思いがけずに価値ある玩具を見付けた子供の様に、邪悪に嘲笑う。
　アルさんから殺気が滲み出る。今にも飛び掛かりそうなのにそう

しないのは、俺と言う子供が隣にいるからなのか。
「しかし、お陰で微かだが根源に至る道筋も見えた。通常の肉体なら無理だが、死徒化すれば最低でも時間の問題は解消される。単純な答えだが、割りと使える答案だ。そう言う意味でもノリカタはやはり優秀な男だったようだ。故に残念だよ、協会に封印指定のレッテルを張られなければ私も協力してやったものを」
「そう、ならもう思い残す事は無いわね。時間もないし手っ取り早く――シュージ？」
　気付けば、俺はアルさんより一歩前に出ていた。
「ネルロク＝マルケル、アンタには容疑が掛けられている」
「うん？」
「違法麻薬の製法、並びに麻薬の分配、アンタには司法の裁きを受ける義務がある。弁護士も必要なら此方で手配してやろう」
「え？　ちょ、シュージ？」
「ほう？　私に人の法を受けさせると、中々人道的ではないか少年。いや、もしかしたら裏の世界を知らないのかな？」
「ご託はいい、裁きを受けるつもりはあるのか？」
「勿論、答えはＮＯだ。更に言えば君達を此処から逃がすつもりもない。君達の手によって被験者達が何人も消されたのは残念だが、二人の様な健康的な検体を手にいられるなら悪くない」
「――そうかよ」
「だから、まずは大人しくしてもらおうか」
　にやけた顔を更に歪めて、男は懐から一丁の銃を取り出す。迷わず撃ちだされる銃弾は迷いなく俺の方へ飛んでくるが――遅い。
「噴ッ!!」
「――ッ!?」
　飛来する銃弾よりも速く踏み込み、奴との距離をゼロにする。師父直伝の震脚からのダッシュ、足場になった床は砕け、その手応えに比例して奴の懐へ瞬時に潜り込む。
　驚く男へ視線を向けること無く拳を叩き込む、震脚によって生まれたエネルギーをそのまま捩じ込み、男は壁へとその体を叩き込ませ

る。人工的に作られたコンクリート製と思われる外壁をぶち破り、男の姿が見えなくなる。
「いや、実は安心していたんだ。お前が大人しく法の裁きを受けるなら俺達じゃあもう手出し出来なくなる」
尤も、俺にはそれが出来る程の権利はないから、一般的な法的処置を準備してやる事は出来ないかも知れない、まぁ、王様に頼めば用意してくれるかもしれないが、流石にこんな雑事に王様を巻き込むのは憚れる。俺はあの人の臣下であって寄生虫ではないのだ。
それに、お陰で自分にも出来ることができた。後ろで呆けているアルさんには悪いけど、此処から先の修羅場は俺が仕切らせて貰う。
先程から体の内側から荒れ狂う様に沸き上がってくる感情、そうだ、今俺は怒っているのだ。あの日以来、思い出す事の無かった炎の如き燃え上がる――――人間にとって忘れ難き感情。
目の前にいるのは何も知らず、他者を、社会的弱者を、自分の都合だけで利用する〝吐き気すら覚える邪悪〟。向こうが罪を償わないと言うのなら、此方も怒りで以て叩き潰すまで。
裏の世界？　知るか、相手が力業で来るのなら、此方も力で捩じ伏せるのみ。誰も奴を裁けないと言うのなら、今この場にいる俺が裁くまで。他者が俺を傲慢と蔑み、糾弾するならすれば良い、だが、今の俺は言葉では止まらない。
後ろを見ればやれやれと肩を竦めながら笑みを浮かべるアルさん、あの様子からどうやら止めるつもりは無いようだ。彼女の様な出来た大人に逢えて、本当に良かった。
立ち上がり、血反吐を吐きながら此方を睨むネルロ某、悪意に満ちたその相貌を俺は真っ直ぐ受け止め、宣言する。
「来いよ外道、テメェはこの白河修司が直々にぶちのめす」

その7

花の都パリ、フランスの首都であり人の繁栄を今日まで築き上げてき文明の街。その地下深くに悍しい程の邪悪が、蠱毒の壺の如く蠢いていた。

その邪悪に相対するはまだ年若い少年、顔には幼さが残り、社会にすら出ていない未熟者が決意に満ちた眼差しで敵を見据える。それを滑稽と嘲笑う者はおらず、仮にいたとしてもその嘲笑は彼が振り抜いた拳により粉微塵に消し飛ぶだろう。

アルは少年の背中を見ていつか魅せられた情景を思い出す。嗚呼、こう言う人間がいたのだと。どれだけの苦境苦難に覆われても、それに挑み覆してきた人間がいた事を。――その背中を見て月の姫君は決めた。彼の戦いに一切の干渉をしない事を。

だって、見てみたいと思ったから、これから目の前の少年が、魔術師でもない腕っ節だけの子供が、どれだけの事をしでかすのか今から楽しみで仕方がない。

「――ぶちのめすとは、中々大きく出たものだ。先程の言動といい、確かに腕は立つようだが……神秘には程遠い。魔術のなんたるかをも知らぬ小僧が、あまりつけあがるなよ」

「ご託は良い、お前は此処で終らす。ぶちのめして、お前の食い物にされた人達に死ぬまで詫びを入れさせてやる」

「ククク、つくづくおめでたい小僧だ。これ程身の程知らずな愚か者は久しく見ていない。――良いだろう、その愚昧さに免じて私の研究の粋を見せてやる」

不気味な含み笑いを浮かべながらネルロクが懐から取り出したのは一本の注射器、中の容器の液体は琥珀色に燦々と輝き、それはまるで自然界に於ける猛毒の類いの色合いだった。

瞬間、男はその注射器を何の躊躇もなく自らの首筋に突き立てる。その様にギョッと息を呑む修司だが、何をするつもりだと問い詰める

前に男の肉体に変異が起きる。
「ぬ、ぐ、ガァァァ……ッ!!」
苦悶の雄叫びを上げぶ男からボコボコと凡そ人体から出てくるとは思えない音を発し、それに比例して男の肉体が盛り上がっていく。
肥大化した体躯、右腕は歪に変形し右目は眼球がギョロリと剥き出しとなる。死徒と言うより別物の怪物へ成り果てるネルロク、初めて目にする異形の存在、死徒とは違う人外の怪物を前に修司の頬が引き攣った。
「……主様が嵌まってたバイオゲームの方がまだ凝ってたな」
「フフ、強がりも其処まで言えば立派だな」
歪な相貌の中に潜む確かな理性――――否、狂気に静かに見据えていたアルは内心で僅かだが感心する。吸血衝動の塊である死徒としての本能を抑制し、自我を保っている。歪で醜悪な外見になるのと引き換えに知性を得たと言うのなら、確かにネルロク＝マルケルの研究は進歩していると言えるだろう。
姿が変わった事で気分が高揚しているのか、不気味に笑うネルロクに対し、修司は静かに相手を見据えている。胆が据わっている、初めて目にする人外の存在に動揺しても畏れを表に出さない修司にもアルは感心した。
「さて、初めての死徒化に成った訳だが、このまま君を殺すのは少々味気ない。幾つかの性能を試してみよう」
「ッ!!」
瞬間、ネルロクのいた場所が爆発する。視界から奴の姿が掻き消えたと同時に修司の危機察知能力がフル稼働する。咄嗟に横へ跳ぶと修司の横腹にあった服の布が千切れ、鈍い痛みが全身を駆け巡り見れば其処には赤黒い痣が出来上がっていた。
「ほう、今のを初見で躱すか。やはり君の身体能力は他よりも大分優れているようだ。その優れた肉体、是非私の研究に欲しい」
「……嫌だね。誰がお前の研究なんかに協力するか」
「君の意思は関係ない、これは既に決定事項だ。君の肉体を使って私の研究はより高みへ至るだろう」

随分な上からの物言いに腹が立つが、それに気を配る余裕はない。何せ直接当たらず掠っただけで此処までダメージを負ってしまったのだ。直撃は絶対に避けねばならない。
「さて、最初に肉体の機能向上は確認できた。次は私の魔術を見せてあげよう」
「ああ？」
「固有時制御・二重加速（Time alter double accel）」
ネルロクが何かを呟いた瞬間、背後から殺気を感じ、同時に視界の左から影が飛び込んでくる。咄嗟に反応できたのは日頃の鍛練の賜物か、防御するように左腕を上げて右腕を支えにするが、影から伝わってくる衝撃は修司の想像の遥か上をいっていた。
衝撃に耐えきれず、修司は身体ごと吹き飛び壁へと叩き付けられる。全身から伝わる衝撃は確実に修司にダメージとなって刻まれ、押し出された肺からの空気が血と混じり吐瀉物となって吐き出される。
視界に火花がチカチカと瞬き白に染まる。呼吸が出来ず何が起きたか分からない修司に更なる追い討ちが襲い掛かる。
眼前に迫る歪となり肥大化した腕、振り下ろされるそれは間違いなく必死の威力を秘めた一撃だった。混乱する思考をそれでも回避へと全フリし、形振り構わず横へ飛ぶ。
瞬間、爆発の様な衝撃が修司を襲う。勢いに流され、受け身もとれずに地を転がるもそれでも体勢を瞬時に整える辺り、師からの薫陶は確かなものだと伺わせた。
「ハァーハァーハァー……」
混乱する思考、あの瞬間何が起きたか理解出来なかったが、今はそれよりも大事な事がある。――左腕が動かない。ネルロクの奇襲に咄嗟に反応し防御に徹した左腕はピクリも動かず、その肌色を黒みの強い紫色へと変質させてしまっている。
伝わってくる痛みに汗が噴き出してくる。呼吸は乱れ、意識も揺れ動いているが、それでも目の前の敵から視線を逸らすことはなかった。一度でも逸らしてしまったら今度こそ殺されるという確信があったから……。

「フフフ、どうやら魔術の方も問題なく運用出来た様だな。これでノリカタの研究は正しかったと証明された訳だ」
「――」
「フフ、何が起きたか理解出来ていないようだな。宜しい、冥土の土産に種明かしをしてやろう。私の魔術は少々特殊でね、他者の魔術を模倣する事が出来るのだよ。我が家系は中々の怠け者でね、自分で根源に至るより他人の力で根源に至る事を模索したのだ」
「次代を重ねる毎に我が魔術は力と経験を重ね、複雑な条件付きではあるが他者の魔術をそのまま自分のモノに寸分違わず扱える事ができる。今の魔術はノリカタの息子であるキリツグが己の家系の魔術を戦闘用に特化させたものだ。彼は魔術師殺しで有名な男だったから、情報を得るのに随分苦労したよ」
「……」
「けれど、その苦労あって彼の魔術を完全に自分のモノに出来た。更に死徒化へ至った事でこの魔術による負担も実質ゼロとなった。流石に吸血衝動を完全に消す事は叶わなかったが、それでも充分だ。――さぁ、長くなったからこれで終わりにしよう、苦しませるのは私としても不本意だからね」
「固有時制御・三重加速（Time alter triple accel）」
慢心しているつもりはなかった。修司は油断なく相手を見据え、傷付いた身体でも全力で迎え撃つつもりでいた。決して負けない、しかしそんな修司の決意とは裏腹に彼は眼前に迫る拳に反応仕切れず、顔面から伝わる衝撃により意識を閉ざした。

◇

「――死んだか、出来れば生きたまま生け捕っておきたかったが、

まぁ仕方あるまい。ホルマリン漬けにする事を念頭に保存方法を考えておくとしよう」
　ネルロクの放った一撃は確かに修司の顔を貫き、彼の身体は再び壁へと突き刺さり崩れた瓦礫の下敷きとなっている。死した少年の最期に材料としての価値が下がったとネルロクは嘆くが、死徒となった事で前向きな思考となっているのか、それよりもと気持ちを切り替えて相変わらず佇むアルに向き直った。
「さて、待たせてしまって申し訳ないね。麗しいお嬢さん」
「――」
「お友達が死んだことに動揺したかな？　なに、心配することはない。直ぐにそんな事はどうでもよくなる。安心して私に身も心も任せると――」
「ねぇ」
「ん？」
「アンタ、私の事、本当に分かってないの？」
「――あ？」
　アルから告げられる一言にネルロクは呆けた顔を晒す。何を言っているのか最初は理解できなかったが、彼女の全身から滲み出る覇気と何より死徒となった事により初めて伝わってくる感覚にネルロクの本能による警告が騒ぎたった。
「ば、バカな、何故真祖の姫が……」
「うわー、本当に気付いてなかったんだ。いや、気付かなかったと言うより、此処にいる筈がないっていう確信からくる思い込み……て奴なのかな」
　金色の髪がサラサラと揺れて、緋色の瞳が喜悦に歪む。ネルロクにとって……否、地球に住む全ての生命の天敵の存在がまるで童女の様に笑みを浮かべている。
「何故だ。何故、お前がここに、私の隠蔽は完璧だった筈、お前が此処にこない為に私は今まで秘密裏に動いていたのに」
「ええ、アンタの目論見通りつい最近まで貴方の目的は知ることもなかったわ。けれど、二年前位かしら、一人の男の子が死徒を殺して

回っているていう埋葬機関の知り合いから話を聞いて、興味本位で調べたの」
「ま、まさか……」
「そう、シュージがあの頃からせっせと死徒を斃して回っていたから私にも耳が入ってきたわけ、まぁ、尤も私はシュージの方に興味があっただけで、アンタの方はオマケだったんだけどねぇ」
カラカラと笑うアルに対し、ネルロクの顔色は何処までも青かった。思いも知らない所で露になった自身の計画、悔しさと憤りで雄叫びを上げそうになるが、それを遮るようにアルが言葉を続けた。
「あぁでも安心して、今回の件で私はこれ以上深入りしないから、アンタが逃げるのなら私は追ったりしないわよ」
「な、なに？」
「だって、アンタの相手……まだ終わっていないんだもん」
自分を見逃すというアルにネルロク目を丸くさせるが、次いで出てきた言葉にまさかと全身から失った機能である筈の鳥肌が立つ。
恐る恐る背後を見れば、瓦礫から立ち上がる一人の影、その顔を鮮血に染め上げ、それでも意思の強さをその瞳に宿した修司がネルロク＝マルケルを睨み付けていた。

◇

――――それは、欠けた夢の中だった。
襲い来る巨大な影、空を覆い、地を埋めつくし、大海を汚す破壊の化身達、立ち塞がるは一体の巨神、人の手によって生み出された魔なる神。

【■の■】
【■■交■り】
【■の行き■】
【火の■■】
その言葉はあらゆる箇所が欠けていて、あまり聞き取れなかった。分かっているのは、それが人の、命にとって大切な言霊で――――。
人類の、先に往く為の■■■の軌跡だという事。

◇

「バカな、何故生きている。何故立っている。いや、そもそもな話、何故貴様の首が未だに付いている!?」
加減はしなかった。振り抜き、振り抜いた一撃は確かに修司の顔面を捉えた筈だ。人間に耐えられる威力ではない、首から上は吹き飛び、絶命した筈の命が未だ存命している事にネルロクは衝撃を禁じ得なかった。
(あ、危なかった。咄嗟に呼吸法を変えて防御に専念してなかったら、今ので死んでいた)
今は呼吸もままならず、死に体となってはいるが、それでも呼吸一つで肉体を硬化させる術を教えてくれた師父に修司は内心で感謝した。
力の方ももうとっくに失っていたと思っていたのに、今では不思議と身体の内側から力が涌き出てくる。ネルロクに顔面を打たれた事で頭のネジが何処か吹っ飛んでしまったようだ。
だが、今はそれも有難い。まだ戦える力が残っているのなら、最後

までそれを貫くだけだ。拳を握り締め、一歩前に出す修司に――。
「いい加減、死んでおけ小僧！」
魔術を使って加速したネルロクの暴威が押し寄せる。振り抜かれた巨大な腕、今度こそ受ければ死は免れない。生と死の狭間の中で修司が選んだ選択は――――〝脱力〟、極度の緊張感の中で力を緩めた修司は風に流される木の葉の如く、ヒラヒラとネルロクの懐に潜り込み。
「――フッ」
「っ!?」
置くように振り抜いた肘の一撃、？打頂肘によってネルロクの胴体を撃ち抜いていく。
突然の衝撃にネルロクの巨大な体躯が数歩退く。その顔には驚愕の文字がアリアリと浮かび上がり、困惑が汗となって噴き出していく。
「ば、バカな、私の時間加速にたかが人間が反応できる筈が……」
「……どういうカラクリか、今一つ分からないが。どうやらアンタは今は加速した体感の速度をそのまま動けるらしい。それ自体は凄いことだと思うぜ。ただな」
「お前が倍速で動くのなら、それを弁えた上でその動きに対処すればいい。少しばかり時間が掛かったが、もうお前の攻撃は――――当たらない」
「!?」
未だ成熟しておらず、未熟な少年が満身創痍の癖に断言した。お前の技は見切ったと、これ迄長い期間の自分の研究を踏みにじられたネルロクは驚愕に満ちた表情を憤怒に変える。
「宣うなよ、小僧！」
固有時制御・三重加速。更に速さを重ねてネルロクは修司に肉薄する。しかし、その判断は悪手だった。武術を得意とする修司にとって死地と思われる肉弾戦こそ活路、如何に速さはあってもそれに見合う技が無いネルロクの暴威は修司にとって最早脅威ではなかった。
振り抜かれる数多の暴力を修司は回避し続ける。死徒という人間

とは異なる力をもった化生の力を修司は人間の技によって捌いていく。その様子をアルが目を輝かせて見つめていた事に修司は気付かない。
「疾(シ)ッ!!」
「ッ!!!?」
大振りになったネルロクの腕を掻い潜り、踏み抜いた震脚の力をそのまま乗せた鉄山靠が彼奴の巨体を跳ね除ける。
ダメージはない。そもそも死徒となった事で痛覚は無いに等しいネルロクに人の技は意味を為さない。やはり奴では自分に勝ち得ない、そう確信するネルロクだが次に見せた修司の構えに違和感を覚えた。
修司は脱力していた。距離を開け、相手の強みを最大限活かせる間合いにも関わらず、その姿勢は何処までも自然体だった。余計な力は必要とせず、ダランと脱力する修司にネルロクだけでなくアルも目を丸くした。
疑問に思うアルとは対照的にとうとう力尽きたと思い込んだネルロクは、ここぞとばかりに勝負を決めに来た。
「固有時制御(Time alter square accel)・四重加速!!」
それは音を置き去りにした一撃だった。全身に力を込め、死徒としての力を最大限に発揮した吶喊、一種の砲弾と化したネルロクはその巨体と質量で以て修司を押し潰そうとするが――。
その突進は何て事なく、あっさりと横にとんで回避される。最初の様に掠る事もなく、ネルロクの攻撃は虚しく空を切る。
「ば、バカな――」
それは、一瞬の交差だった。
「当たり前だろ、そう何度も見せられたら嫌でも見切れるに決まってるだろうがたわけ」
呆れに満ちた瞳、自身の行動をたわけと貶し、見切れると断じる少年にネルロクの自尊心は砕け散る。だが、それだけでは終わらない。
「これで、終いだ」
刹那のやり取りの中で、修司は構えを見せた。それはこれ迄の旅路

の中で修司が研鑽し、積み上げてきた一振りの槍だった。思い描く理想に少しでも近付ける為に、愚直なまでに繰り返してきた窮極の一撃。

「七孔噴血――撒き死ねぇ!!」

決して人には打ってはならないと、時計塔に絡まれ、バゼットに襲われ、メイド達に襲われても、それでも尚絶対に奮わなかった修司の禁技。

无二打（にのうちいらず）。踏み抜いた地面は割れ、振り抜いた拳はメルロクの胴体を確かに捉え――――。

フランスのパリはこの日、数少ない地震に襲われる事となった。

◇

「ひゅー、スッゴいわね」

その光景を見てアルは心の底から賛辞を述べた。工房だったらしきネルロクの本拠地は跡形もなく破壊し尽くされ、そこにはただドデカイ空洞が広がっているだけだった。

其処にいるのは全ての力を出しきり、息も絶え絶えな修司とネルロクの残骸らしき肉片だけ、その肉片も主を失った事により灰となって消えていく。

――――アルは、最初は今回の騒動に興味が無かった。どこぞの輩が死徒を闇雲に増やしている事に余計な仕事が増えたと多少の苛立ちはあったが、それ以上の関心はなかった。

それが情報が出てきた理由が年若い一人の少年だという噂から興味を抱き、犬猿の仲であるシエルから詳しい話を聞いて、情報を頼り

にフランスへ訪れて、このパリで出会えた。
一目で分かった。この少年が普通なのに全く普通ではないと言うことに。魂の総量が普通とは次元が違い、今も成長の最中でいる彼にアルは興味を抱かずにはいられなかった。一体、彼がこの先どんな人生を歩むのか、彼女の興味は尽きることはない。
「ふふ、嗚呼、楽しみだな」
未知なる未来に期待で胸を膨らませ、アルは修司へ歩み寄る。
「――やっぱ、なーんか、違うんだよなぁ」
すると、自分の打った一撃に満足いかないのか、修司は不満げな様子で倒れ伏す。その途中でアルは抱き抱えるも、向上心が凄まじい少年に彼女は呆れた笑みを溢す。
「さぁって、後は教会の連中に任せて、トンズラしますかね」
抉れて出来た巨大な孔、それを尻目にアルは修司を抱えてその場を後にする。――と、その前に。
「ま、これくらいはしておくか」
修司が最初にネルロクを吹き飛ばして出来た穴に向けてアルは一条の紅い閃光を放つ、其処には奴のこれ迄の研究の全てが隠されており、アルの放った光によりその全てが消滅していく。
仕事をやり遂げたアルは、軽い足取りで鼻唄混じりで今度こそその場を後にするのだった。

その8

×月δ日

気が付いたら、病院のベッドの上にいた。

化生と化したネルロ某との死闘から丸一日経過した今日、俺は王様が手配してくれたという病院で安静に過ごしていた。王様が用意してくれたというだけあって病院の設備は充分に備わっており、至れり尽くせりな休養を過ごさせて貰っている。

それであれから、俺がネルロ某を倒してからの出来事だが、どうやらあの後はアルさんが色々と上手く事を運んでくれたらしく、パリに住む人々は何時もと変わらぬ日常を送っている。精々が突然起こった突発的な地震に驚いた程度の話で、奴が作った麻薬等の危ない劇薬の数々もアルさんの手によって完全に消滅、街中にそれらが出回るという危惧もなくなったようだ。

悪漢達――いや、奴の薬による被害者達もアルさん達が上手くやっておくという事で件のバイオハ〇ード擬きな事件は決着し、今回の件で俺に出来る事は完全に無くなった。

……これ迄の旅、別に意識してきた訳ではないが今まで関わっていた事件の一つが解決した事に不謹慎だが、俺は何処か寂しく感じていた。でも、これで全部が終わった訳ではない、自分の人生はまだまだ続くし、いつまた王様の無茶振りが飛んでくるか分からない。

その時に備えてまた、一から自分を鍛えていこうと思う。

あぁそうそう。俺の腕、ネルロ某に潰された俺の左腕だけど、原因は善く分からないが凄い勢いで快復に向かっているとお医者様から言われた。奴の腕の勢いや潰された腕の感触から複雑骨折は免れないと思っていただけに、この報せには純粋に安堵した。この調子なら高校入学前にはギプスは外れるだろうと言うのもお医者様からのお言葉だ。

流石は王様が手配した病院、良い仕事してるなぁ。俺も大人になったらそう言う人間になれるだろうか。

明日もう一日養生し、その次の日には退院という手筈となっている。迎えにはシドゥリさんが来てくれると言うし、中学最後の帰宅は大人しいモノになりそうだ。
……あ、パリの名物何も食べてないや。

◇

――そして目覚めてから二日後、病院で朝食を済ませ、帰る身仕度を整えた俺は忘れ物が無いか、部屋の最後のチェックを行う。
「――お忘れものはございませんか？」
「うん、大丈夫。全部確認した」
「では、参りましょうか」
病室への入り口で俺の準備が終わるのを待っていてくれているのは褐色のお肌が特徴な王様の秘書であるシドゥリさん、口元をベールで覆っている何処か神秘的で俺にとって姉の様な人は無事に退院となった俺を見てニッコリと優しく微笑んだ。
シドゥリさんと肩を並べて通路を歩く、シドゥリさんは結構背が高く、今の俺でも彼女の肩くらいにしか届かない。先日のアルさんといい、出来る女というのは皆総じて背が高いのだろうか。
「修司様、此度の旅もお疲れ様でした」
「いや、まぁ確かに大変だったけどそれと同じくらい楽しかったですよ。今回だって其処に住む人や世界の景色を堪能できたし」
「それは何よりです」
「シドゥリさんにも詳しく話すよ、信じられないかも知れないけど、面白い話もあったからさ」
「では、それを私の前に是非王へお話して下さると良いかと、あの方も日頃から退屈に辟易としているご様子、修司様の体験談にはきっと心

揺さぶられる事でしょう」
「そうかなぁ、王様って基本的に俺の話を聞いても笑ってばっかりなんだけど？　この間だって死にかける程に爆笑してるし」
「それだけ、王は貴方の話を楽しみにしているのですよ」
　本当かなぁ？　何て微笑むシドゥリさんと談笑しながら通路を進むこと数分、エントランスに着いたのだがそこで感じた違和感に頚を傾げる。
　人気がない。普段は患者や看護師、受付の人で溢れている筈のエントランスが静謐に包まれていた。何だか、嫌な予感がする。不気味なまでの静寂さに思わず息を呑む。何かが来る。今までの旅の中で培ってきた直感が確信へと変わった瞬間――それは来た。
　自動ドアが開かれ、其処から現れるのは黄金、派手という言葉では足りない綺羅びやかなその光景に――――。
「フハハハハ！　役目ご苦労だったな修司！　この我自ら出迎えに来てやったぞ！」
「王様、恥ずかしいから止めて」
　まるで父の洗濯物と一緒に洗われるのが嫌な、思春期の女子見たいな毒が出た。何だよ豹柄のコートって、そんなデザインの服今まで見たことねぇぞ。
　と言うか、何故この王様はイチイチ派手に着飾るのか。いや、王という立場からすれば派手な衣装は権威を示すのに必要不可欠なのは分かるよ？
　でもここ病院、騒ぐ所じゃないから。そんな俺の非難を込めた視線など何のその、相変わらず高笑いを続ける王様に退院する筈の俺に疲弊がのし掛かってきた。しかも後から聞いた話、この病院は王様が建てたモノでその権威として一時的にエントランスを人払いして貸し切り状態にしたのだとか、職権乱用ってレベルじゃねぇーぞ。
　ふと隣を見れば頭痛を患っているのか、シドゥリさんは頭を抑えてため息を吐いていた。
「王よ、貴方には確か別の重要案件があった筈では？」
「フン、あの様な些末ごとここに来るまでに終わらせたわ」

どうやらお仕事自体はキチンと終わらせている様だ。なんだかんだ言いながらもこの王様も仕事が出来る凄い人で、だからこそこの人の起こす行動にシドゥリさんは毎回頭を悩ませているんだろうなぁ。天才に振り回されるって、こう言う感じなのか。

「そもそも、世界の危機を救った勇者を前に王が出張らずに何とする。シドゥリ、貴様はこの我に恥という泥を被れと言うのか？」

俺でも震え上がりそうな王様の鋭い眼光、この睨みを前にしたら大抵の人間は蛇に睨まれた蛙になる。俺でも中学に上がるまではこの睨みに何度黙らせられたことか。

しかし、そんな王様の眼光にもシドゥリさんは全く堪えた様子はなく。

「……はぁ、そこまで言われるのでしたら私からはもう何も言う事はありません。ですが、ここは病院、多くの人々が詰め掛ける場所です。あまり戯れる事なき用、お願い致します」

引き下がる様でそれでもお小言を残していく辺り、シドゥリさんも相当肝が座っている。俺の周りの人間って、色々と凄くて出来る人多すぎない？

「フハハ、分かっておる。ちょっとしたＡＵＯジョークよ。修司、貴様も何時まで固まっておるか、ここは盛大に笑うとこだぞ？　フハハハ！」

「アーハハ、そうっすか」

もう、何でも良いから早く行こう。踵を返す王様に続き俺達も病院を後にする。その途中お世話になった病院に一礼し、内心でお礼の言葉を述べると、やって来た迎えの車に絶句した。

リムジンである、王侯貴族や政府のお偉いさん、または一部の金持ちしか持ち得ない最高級のお車さんの登場である。あ、王様も金持ちだったわ。

それが２台、しかも矢鱈と長い。設計とかどうなってるの？　とか、曲がり角とか大丈夫なの？　とか、何よりこんな車に今から乗ることに不安を感じていると、使用人らしき人が車のドアを開け、俺達に乗るように促してくる。おい、赤い絨毯まで出てきたんですけど、

こんなの映画やテレビでしか見たことないんですけど？
「お待たせ致しました。どうぞ此方へ」
「うむ」
使用人への言葉は少なく、赤い絨毯（レッドカーペット）を踏み締めて真っ先にリムジンに乗り込む王様、使用人の人は戸惑う俺を不思議そうに見つめて来るが……いや、普通躊躇うだろ。確かに俺は王様の下で生活の面倒を見て貰っているが、別にお金を自由に使っている訳じゃない。
日頃から節約は意識しているし、買い物だって基本的に安売り狙いだ。高級な品を買うのは基本的にあまり家に帰らない王様の為に振る舞うものだけであり、普段は一般家庭と変わらないお金しか使っていない。
今までの旅や今回の旅だって、余計な出費を出さない様自分なりに工夫しているのだ。移動手段だって長距離の移動以外では基本徒歩だ。マラソンとも言う。
「どうした修司、あまり王を待たせるモノではないぞ？」
戸惑う俺の様子に何を思ったのか、王様はニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべる。この人アレだ、普段こう言う待遇されるのを馴れていない俺の反応を見て愉しんでやがる。師父といい王様といい、変な所でスイッチ入るな。
「修司様、もう諦めた方が宜しいかと。私も諦めました」
そんなシドゥリさんの言葉に俺も大人しく投降する。おかしい、これから俺は厚待遇に家まで送られる筈なのに何故その心境は拘置所に送られる罪人の気持ちなのだろう？
「所で王様、あっちのリムジンは何であるの？」
「この我が貴様をただ出迎える為に来たと思ったか？」
「あぁうん、何となく今ので分かったからいいや」
ふと背後に着いてくるリムジンを見れば、運転手さんの後ろで沢山の荷物が敷き詰められていた。何故リムジンをワザワザ荷物入れにしたのか、贅沢の使い処間違ってません？
「後日、貴様の部屋に海鮮の類いも贈られる故な、精々腕を奮えよ」
ニヤケた笑みを更に深めてそう言い放つ王様、どうやら向こうに着

いたら暫くウチの献立はフランス料理尽くしになるようだ。……今度士郎や慎二も呼んでお裾分けしよ。
「さて、此度の旅も無事終わりを迎えそうだが修司よ、今回はどのような旅路であったか？」
「それよりもさ、さっき王様が言ってた世界を救った勇者って何の事？」
「言葉通りの意味よ。修司、貴様は己の成し遂げた偉業に気付いていない様だが、その道の界隈ではお前の名は中々有名になっているようだぞ」
王様の厭らしい笑みはより深くなり、まだ理解しきれていない俺を面白おかしく見詰めてくる。
最初王様の言葉を不思議に思ったけど、それは少し考えれば分かることだった。あのネルロ某は自身の作った薬を世界中に撒き散らし、沢山の人達を利用してきた。当然それは各国の警察機関にも知れ渡り、奴の凶行を止めるべく今日まで捜査や調査を調べてきた筈だ。あのアルさんもそう言った組織の一人で自分にそう言うのを悟らせない為にわざと能天気な素振りを見せていたと仮定すれば、強引だが辻褄は合ってくる。
俺が世界を救ったと言うのは薬を撒き散らしていた大元を叩いたから、でもそれは元々はアルさんがするべきだったお仕事だった訳であって……そうなると、自分はそんな世界中の警察の人達の邪魔をした事になるのか。うわぁ、なんかとんでもなく余計な事をしちゃったかも。アルさん、上手いこと処理しておいてくれないかなぁ。
（こやつ、まぁた妙な勘違いをしておるな。まぁ面白いから別に構わんが……）
王様の愉快な視線に気付く事無く思案に耽っていると、ふと視界の端にある人影が見えた。それは現在俺が考えていた人で、その人は少し離れたビルの屋上で此方の事など知る由もなく呑気に笑いながら手を振っている。
俺も別れの挨拶と無事の証明をする為に手を振って応える。すると向こうは自分に気付かれるとは思っていなかったのか、その笑みを

より人懐っこくしてブンブンと勢いを増して手を振ってくる。
隣の人が何やら慌てて止めに入っているけど……何でシエルさんも一緒にいるんだ？
「修司様、いかがなされました？」
「あ、いやね。知り合いの人が手を振ってくれたんだ。折角旅で知り合った人だから挨拶しておこうと思って、ほらあそこに……」
「は、はぁ……」
俺がアルさん達のいるあろうビルの方へ指を差すが、シドゥリさんには見えない角度なのか、何とも言えない表情をしている。
「それよりも修司、いい加減此度の旅の事を詳しく話せ、我はいい加減退屈だぞ？」
先程のニヤケた顔から如何にも退屈だとブー垂れる王様、空港に辿り着くにはまだ時間が掛かりそうだ。本当なら飛行機に乗るまで止めておこうと思ったけど、王様が望むのなら仕方がない。
空港に辿り着くまで俺は王様に今回の旅路の経緯を事細かに説明した。特にドイツの森でのメイドさん達に襲われた話は予想通り王様のツボにはまり、空港に着くまで車内は王様の笑い声に支配された。
――追記、王様が迎えに来たから薄々覚悟していたけど、どうやら足りなかったらしい。――この人自家用機を所有していた処か空港そのものを貸し切りやがった!!
お願いだから人の迷惑も考えて!!
こうして、中学最後の俺の旅は色々と騒がしいまま終わりを迎えるのだった。

◇

「――聖堂教会、並びに魔術協会は彼に借りを作ってしまいましたね」
通りすぎていく2台のリムジン、それを遠巻きかにビルの屋上から眺めている二つの影、深い青色の髪した女性は掛けている眼鏡をクイッと吊り上げ、やや疲れたように呟く。
今回の事件で魔術協会は静観を決め込み、聖堂教会は解決に勤しむも元凶を仕留め損なうという失態を犯してしまっている。魔術協会側はネルロク＝マルケルの研究成果をギリギリまで観察しようと干渉を最低限に留め、聖堂教会側は死徒の対応に追われそれどころではなかった。
故に、今回の魔術協会に貸しを作る意味を込めて教会側はある真祖に協力を求めたのだが……。
「全く、貴女ならこんな面倒事になる前に簡単に決着を付けられたのに――」
「えー？　だって頑張ってる男の子を邪魔するなんて気が引けるじゃない、シエルだってあの子には気に掛けていたんでしょ？」
「それは……まぁ、そうですが」
本来なら真祖によって幕引きされる筈だったが、彼女はネルロク＝マルケルの処理には一切手を貸さず、あろうことか魔術も神秘も知らず、現地の人間ですらない少年に任せてしまったのだ。
これが少年が返り討ちにあったというのであれば話はそこで終わったのだが、何と長年研究に明け暮れていた魔術師を返り討ちに遭う処か打ち倒してしまった事で事態はさらにややこしい方向へ進んでいく。
相手は魔術という存在を認知すらしていない一般人、しかもそれが以前から死徒を悪漢と思い込んで斃して回っていた少年で、更に言えば魔術協会が一方的にとは言えその肉体に興味を持ち、一部の魔術師が執拗に狙っていた事実も判明した為、魔術協会は色んな意味でその

少年に頭が上がらなくなっていた。力付くで抑え込まれたとも言う。
聖堂教会（裏の部分）もその少年の勧誘に乗り出そうとするが、巷ではかの少年がさる大企業の秘蔵っ子という噂があり、そんな現世に影響が強い人物を強引に勧誘する事など出来るはずもなく、しかし死徒から人々を守っていた少年に此方もまた手を出しにくくなっていた。
世界を牛耳る裏の大派閥の内、二つも黙らせてしまった少年にシエルと呼ばれた修道女は頭を悩ませる。あの純朴そうで真面目な少年が瞬く間に世界の中心に置かれようとしている。
対して隣の猫の様な気ままな女はケラケラと笑うばかり、人がこんなに悩んでいるのにお気楽に笑う女にシエルは殺意を覚えた。
「っ、貴女は自分が何をしたのか分かっているのですか？」
「大丈夫だって、シュージなら自力で何とかするわよ。私が保証するもの」
「どの口で言って……」
「寧ろ、私はこれからちょっかい出そうとする輩を気の毒に思うわよ。シュージってば、その裏――うぅん、中でとんでもないモノを飼ってるみたいだし」
「……え？」
ケラケラと笑う口元とは対照的にその目は何処までも冷ややかだった。この吸血鬼は何を言っているのか、――――いや、何を見てしまったのか、滅多に目に掛からない真祖の姫君の顔付きにシエルは小さくなっていくリムジンを見やる。
既に此方からは見えない程に小さくなっていくリムジン、あの中にいる少年には一体どんな秘密が隠されているというのか、シエルは問い質そうと視線を再び隣に移すが……。
「バイバーイシュージ、また会おうねー！」
「……はぁ」
止めておこう、今この女に問い詰めても禄に返答されることはないと察したシエルは諦めの溜め息を溢した。
「あっ、此方気付いた。シュージー！　バイバーイ！」

「ちょ、いい加減止めなさいこのアーパー！」
二人の遣り取りは何処までも青い空へ溶けていった。

それから、白河修司の名前は裏の世界で知れ渡っていく事になる。
「流石私が認めた男、そうでなくては！」
ある者はライバルへ（一方的に）闘志を燃やし。
「シュージ＝シラカワ、次こそは必ずこの拳を貴方に届かせて見せよう」
またあるものはリベンジを誓い。
「し、師匠、このシュージ＝シラカワなる人物と師匠にどんな関係があるのでしょうか？」
「頼むグレイ、暫くは私の前でその名前は出さないでくれ、クッ、胃が痛い」
ある者はその人物の名前に胃痛を患わせていた。
予期せず裏の世界でその名が知られるようになっていく一方――。
「どーよ、王様。今回の出来映えは！」
「深みがない、５０点」
そんな事に露知らず、呑気に日常を満喫していた。

その9

――――王様の無茶振りで世界を巡り、様々な出会いとトラブルと遭遇して世界中に麻薬を撒き散らしていた悪の元凶をぶちのめして早数ヶ月、中学を卒業し、穂群原学園の高校に入学して暫く経過した今日、腕の方も完治し、身体も成長した俺はある学校行事（イベント）に内心でワクワクしていた。

体力測定、通称スポーツテスト。現代に生きる学生達が現在の自分の限界を知る為に日本スポーツ協会が齎した協定である。

これ迄自分を鍛えて来た猛者は高校デビューに華を添えようと必死になり、運動を苦手とする者はこの日が来る事を恨めしく思ってたり、思い思いの時間を過ごす事となる。

だが、この俺白河修司の目的は違う。確かに日々鍛練に励んできた俺からすれば体力測定なる学校行事は児戯にも等しい、その気になれば一学年の中でトップクラスの実力を示すことも夢じゃない。無論、王様に期待していると言われている為、その目的は確実に達成する。

けれど、俺にとって体力測定……いや、全ての学校行事はそれだけに終わらない。何故なら、学校行事とは俺にとって他の学年と友好関係を築く数少ない社交場だからだ！

中学の頃は酷かった。王様に言われて世界中のあちこちを飛び回り知識や経験を積む事はできたが、地元である冬木では友人と呼べる人が殆どいない、というか避けられてる。未だに士郎と慎二だけだぞ？　俺の家に誘うこと出来たの。

その慎二と士郎も高校に入ってから付き合いが悪い、士郎はお人好しさに磨きが掛かり、慎二に至っては憎み口を三割増しに増やして周囲の男子と壁を作ってしまっている。それでも女子にはモテるルックスがあるから、羨ましく思えてしまうのだが。

高校に入ってからそれぞれの成長を遂げている俺達、きっとこれからもこうやって古い友人と呼ばれる者達と別れを経験するのだろう。……まぁ俺にはその友人すらいないんだけどねＨＡＨＡＨＡ！

――自虐ネタは止そう、思っていたよりキツイ。
そんな訳で、いつまでも士郎や慎二に頼ってばかりもいられない、広く浅い友人関係を築く為に、俺はボッチではないことを証明する為に！　見てろよ王様、俺にも社会性があるって所を見せてやる。
「次の者、早く来い」
教師に急かれて準備運動もそこそこに前に出る。すると目の前にあった人垣が道を譲る様に割れていく。
あ、すみません。ワザワザどうも、社会性のある者は礼儀を忘れない。軽く会釈する程度に同学年の皆に頭を下げ、教師に言われた位置に出る。おい、何でちょっと距離取るんだよ先生、アンタが呼んだんでしょーが。
最初に行われるのは５０Ｍ走、正確に距離を測定されて敷かれた白線、向こうにはタイマーを持った生徒とその横には計測された記録を書き写す生徒、計二名の女子生徒がいる。片方は地味目だが、もう片方は長い銀髪が特徴の氷室がいる。
入学当初からその容姿から多くの男子生徒から遠坂凛に続いて羨望の眼差しを受けている女子、その彼女は今日運動しやすい様にその髪型はポニーテールとなっている。
「そ、それでは位置について」
教師の指示に従い走る準備を行う。構えはスタンダードなクラウチングスタート。ふふふ、この日に備えてイメトレはバッチリ、そもそも中学でも体育はあったのだ。これくらいの最低限の知識は知っている。
――溜める。一瞬の静寂の内に備えて力を溜める。まだか、まだかまだかまだかまだかマダカ。僅か数秒にも満たない刹那の合間、心音の音が高鳴った瞬間。
音が鳴る。パァンと、空気が爆ぜる音に合わせて両脇の同級生が走り出そうとしている。俺も負けられない、年相応の闘志を燃やして脚に力を込めて加速の為の腕を振り抜き――。
（――地面？）
おかしい、今俺は前を向いていた筈、地上と空で構成された視界か

らいつの間にか茶色の地面一色に塗り潰されている。困惑するも受け身も取れなかった俺はそのまま顔からグラウンドへダイブする。
「ぶべべべべ!?」
顔で地面を走行する事数メートル、漸く止まった所を見計らって何が起きたと後ろを振り返ると、俺がいたと思われる地点に人集りが出来ていた。
「ちょ、おい何だよこれ」
「穴だよ穴！」
「地盤緩んでたのかなぁ～？」
「ローラー掛けてンのか陸上部～」
俺がいたとされる場所には直径５Ｍ程の窪みが出来上がっている。周囲の目が完全に俺から離れていたから計測はやり直しと思われたが……ふとその時、氷室と目があった。無表情で無感情、まるで能面の様な彼女の顔に少し不気味に思うが、それ以上に気になる事がある。
まさか……計測しているのか？　嫌な予感を感じた俺は小走りで彼女の下まで歩みよって訊ねた。え？　いや、イヤイヤイヤ、オイオイオイオイ、やり直しだろ？　やり直しだよね？　まさかあのまま続行とか、どう考えても――――。
「１分２７秒５１。凄いな白河、その身体で５０Ｍ走１分超えとは、ある意味才能だぞ」
「バカな!?」
バカな!?
穂群原のグラウンドに悲鳴に似た絶叫が轟いた。
そして、その後再三に渡る俺の抗議は虚しく終わり、この時の記録が高校一年の俺の公式記録となった。バカな!?

「ふ、フフフ、挫けるな俺、白河修司は挫けない。大丈夫だ。大丈夫だ。冷静に冷静になれ、そう、ＣＯＯＬになるんだ」
「お、おい修司、大丈夫か？」

「加減下手くそ過ぎるだろ、アイツ」
後ろで友人二人の慰めもあり、どうにか立ち直れた俺は次の種目に向けて気合いを入れる。今度の種目は走り幅跳び。これは走る勢いを付けて跳ぶだけの競技、先程の失敗を経て加減は覚えた。地面が抉れる様な事はない、これならば先程の様な無様は晒さないだろう。ククク、やったぞ王様、この戦い俺の勝利だ。
「次、白河」
「ハイ」
教師に従い移動する。見れば見るほど小さい砂場だ。まるで子供の遊具、ククク、この白河にとってこの程度の砂場を越えるなど容易い事、今度こそ良い記録を出して「修司、お前凄くね？」「俺にもコツを教えろよ」「えぇ～？　困るでござるよぉ～」という素敵コミュニケーションから友人関係を広げていくんだ！
脚に力を込めて走る。加減した力で踏切位置まで走り、その瞬間だけ力を込める。適当な力加減で跳んでの移動は瞬く間に俺の身体を砂場から遠ざけていく。
着地して振り返ると、其処には唖然とした同級生達があんぐりと口を開いている。その横には計測用の紙を挟んだバインダーを手にした教師が此方に歩み寄ってくる。
フフン、どうやら漸く教師も俺の実力を認めて――。
「痛っ」
突然頭頂部に襲う痛み、何だと思い目を開ければ、其処には呆れた顔の教師の顔があった。え？　な、何ぞ？
「越えてどーすンだよ、砂場に入らなきゃ計測出来ないだろうが！　やり直しだやり直し！」
――ば、
「バカな!?」
その後、加減に加減を加えた俺の走り幅跳びは他の同級生にも抜かれてしまう味気ない位置になってしまった。解せぬ。
「だ、大丈夫だ修司、まだ慌てるような段階じゃない。そう、ＣＯＯＬ

になるんだ。白河修司は狼狽えない」
「し、修司？　本当に大丈夫か？」
「コイツ、自己暗示を掛けて平静を装ってやがる!?」
後ろからの友人達の慰めもあって、俺の心は再び持ち直す、そう、まだ終わりじゃあない。俺の活躍の場は、まだ終了しちゃいない！
諦めたら試合終了？　ならば諦めない限り、俺のターンはずっと続くという事だ！（超理論）
次は懸垂！　定められた回数をこなすだけの簡単な作業！　説明終わり！
「次、白河」
「ウッス！」
既に二度も失敗を重ねてしまっている。だがまって欲しい、失敗というのは成功という結果を生み出す為の土台、つまり俺は他の人よりも確かな土台を手にしている事に他ならない。そう、全てはこの時の為の布石。行くぞ鉄棒よ、強度の具合は充分か？
「でさ～、お前彼女出来た？」
「そう見えるか？」
ブンッ
「？」
「あれ、今？」
フッ、完璧だ。誰が見ても文句の付けようが無いほどにやり遂げたぞ。何か周囲の同級生がポカンとしているが、別に何か不正をした訳じゃない、俺は堂々とした足取りでその場を後にする。
「おいおい白河、何勝手に離れてンだ。懸垂は？
」
「え？　終わりましたけど？」
「ハァ？　……オイ、本当か？」
「え？　イヤ、その……」
「ぶら下がってたのは……見てましたけど」
オイオイオイオイ、マジかよ。まさかの見逃し？　別に見逃せるような速さじゃなかったでしょ？　ちょっと勘弁してよぉ。まぁ、一回

くらいのやり直しなら良いけどさぁ……。
言われて渋々鉄棒にぶら下がる。何故か周囲には人の目が俺に注目していた。な、何故だろう、望んでいた展開なのに身体に余計な力が入ってしまう。
早くしろと目で訴えてくる教師に急かされ、鉄棒を握る手に力を込める。先程と同じ要領で懸垂に励もうとした――――瞬間。
鉄棒が、外れた。バキャンと音を立てて支えの柱からスッポ抜けた鉄棒と共に宙を舞った俺はそのまま地面に着地、悲痛な沈黙が辺りに漂い始めてきた。
「白河ァッ！　誰が鉄棒を壊せと言ったァッ!?　悪巫山戯をするのもいい加減にしろ！」
「ヒィッ!?」
教師の怒りの迫力に後退る。え、え？　これ、やっぱり俺が悪いの!?
「……なぁ」
「鉄棒って、悪巫山戯をしたら壊れるモノなのか？」
瞬間の生徒がざわつくなか、教師による俺への説教は続いた。こ、こんな筈ではなかったのに……！

「もうダメだ、おしまいだぁ……」
「し、修司!?　しっかりしろ！」
「止めてやれよ衛宮、そっとしといてやれって」
その後の体力測定は散々だった。ハンドボール投げは飛ばす処か余計な力を加えてしまった事で地面に深々と突き刺してしまった事で飛距離は１０Ｍにも届かず、最後の１５００Ｍ走ではメンタルが弱った所為で何れくらい走ったか数えておらず、教師が止めるまで走り続けてしまう始末。
散々な結果で終わった体力測定、今度改めて測り直しかな、また教諭の人達に怒られるんだろうなぁなんて意気消沈していた俺だが、最後の１５００Ｍで良い記録を出せたのか、あまりお小言を言われずに

すんだ。
ただ、その代わり壊れた鉄棒やめり込んだハンドボール、抉れたグラウンドの穴埋めを命じられた為放課後は居残る事になった。うぅ、どうしてこうなった。
あれかな、変に目立とうとしたからバチが当たったのかな？　俺なりに頑張ったんだけどなぁ、何がいけなかったのだろう？
その後、一人トボトボとグラウンドの整備をしている中、士郎が手伝いに来てくれた。慎二は先にとっとと帰ったらしい、あのワカメ今度〆る。
ワザワザ手伝いに来てくれた士郎、相変わらずのお人好しで普段なら断っている所だが、今日の俺のメンタルはちょっとボロボロだったので、大人しく彼の好意に甘える事にした。
尤も、士郎に任せたのは鉄棒の修理だけでその間に俺が全部片付けて置いたけどね、流石に士郎に負担を掛ける訳にはいかないしね、片付け自体もそんな大変じゃなかったし。
ただ、士郎は俺が片付けを終わらせるのが早いとは思わなかったのか、少々不満そうにしてたっけ。
そんな訳で片付け終えて帰宅する最中、士郎に部活の事で話をしてたら慎二の妹、買い物帰りの桜ちゃ――――間桐さんと遭遇した。会話自体もそんなしたわけではないけど、久し振りの彼女との会話はそれだけで俺の心を満たしてくれた。
間桐さんも進学は穂群原学園みたいだし、勉強で分からないところがあったら教えるとそれとなく誘ってみたけど……にべもなく断られた。そうだよね、間桐さん所士郎と同じく深山町だし、俺の家新都だし、会うの面倒だよね。うん、仕方ないよね。
べ、別に誘おうとか不純な動機とか無かったし、単に後輩になる娘にアドバイスしようとしただけだし、うん。
そんな会話を最後に俺達は其々の家路に着くのであった。
――――これはあとで聞いた話だが、どうやら王様、入院したらしい。原因は腹筋の吊り、どうやら笑いすぎて病院のお世話になったらしい。

笑い上戸なあの人らしいけど、なにやってんだよ。

◇

――煩い人、煩わしい人、私にとって白河修司という男はただそれだけの人間だった。興味も無く、他の人と同じ、バカみたいな人。

一体、何が面白いのだろう。一体、どうして私なんかに構うのだろう。

知らない、興味もない。精精何処かで何かで失敗してそのニヤケ面を崩せばいい、そう思う程度の感情しか湧かない。

兄の紹介で表面だけは普通に接しているけど、正直この人とは……あまり関わりたくない。

私は、白河修司という人間が嫌いだ。いつもヘラヘラ笑って、私に話を掛けてくる。

私は、白河修司という男が嫌いだ。あんな風に話し掛けて、笑い掛けてくるなんて、そんなの――。

「さて、桜よ。今宵も修練を始めるぞ。次の戦争まで残り少ない、気張るのだぞ」

「はい、お爺様」

そんなの、それじゃあまるで、私の事を――。

その１０

Ω月√日

高校へ入学して早数ヶ月、新生活にもいい加減馴れて来た今日この頃、他の生徒達は其々の部活動に勤しみ、日々青春を謳歌している。士郎と慎二も同じ弓道部に所属し、学友や先輩方と一緒に己を高めている。

そしてこの俺、白河修司も遂に陸上部へと入部を果たした。朝練に精を出して疲れた身体で授業に挑み、空腹の腹に弁当をかっ込み午後の部活動に臨む。

最後には疲れきった身体で帰宅し、自宅で夕飯を食べて風呂入って寝る。そして翌日の朝に宿題をしていなかった事に気付き急いで登校してクラスメイトにノートを写させて欲しいと懇願する。

何と言う素晴らしい日常、これから俺が過ごすのはそんな平凡ながらも慌ただしく実に充実した毎日――――の、筈だったのだが、どうやら俺には結構無縁な話だったらしい。

そもそも学校の部活動程度で息切れ起こさないし、そういや俺小さい頃から言峰師父の扱きや王様の無茶振りで体力は人一倍有り余っているんだった。朝早く起きるのも馴れてるし、弁当も夕飯の作り置きをアレンジしたモノ、剰りにも淡々に部活を熟すモノだから当初は三年の先輩に目の敵にされたっけ。

いや、あれでも手を抜いてるんだよ？　下手に加減忘れたら体力測定の時の二の舞になるし、まぁ、その時の話もあって一時期は色んな人達からやっかみを受けたっけ、特に上級生から。

部活の終わりには俺一人に後片付けしろなんて言われたりしたが、先輩方が帰る頃には全部終わらせてしまっているのでイビっている意味がない。ならば次は靴を隠してやろうと企てたりするが、師父との修練で俺の素足は鋼の様に硬くなっており、裸足で部活に参加したりした。まぁ、その時は流石に異変に気付いた顧問の先生がイビりの常習犯である上級生に厳しい指導をしてくれたお陰でその事件は終

わったが。
　そして、その時に知り合ったのが同じ陸上部の氷室鐘、蒔寺楓、三枝由紀香の三人、氷室は体力測定の時に既に顔見知りで今回の先輩からのイビりの対処を影ながら行ってくれた人物である。まぁ、靴を隠した先輩達の様子をカメラで隠し撮りしていただけらしいが……。因みにこの時の作戦立案が氷室で実行者が蒔寺である。三枝？　彼女は普通に先生に訴えてくれた人です。
　端から見る限りでは面白い三人娘、氷室は普段の真顔から分かりにくいが結構話しやすいし、三枝は家計のやりくりという事で士郎と同じ家事の話題で話せたりしていて高校生活に於ける俺の潤滑油の一部になっている。
　蒔寺？　知らん、俺の知り合いに珍獣はいない。つーかあの女が俺に【ボッチ】の噂を流した張本人だった。いつかしばく。
　と、そんな訳でここまでは順風満帆な俺の高校生活、少々不完全燃焼感はあるが割りと充実している。王様からの無茶振りもあれからめっきり減っているし、帰宅後は時折見る夢とそこから頭に浮かんできた図面やら絵を別の手帳に書き移したり、八極拳の修練を独自で行っている。最近は師父も忙しそうにしてるし、俺も自分の事は自分でやらねば。
　そして王様だが、ここ最近あの人も忙しいのか此方に帰ってくる様子はなく、何やら外国で色々やってるらしい。らしいと言うのは王様が経営していると思われる会社の名前が時々テレビに出てくるからだ。
　そういや、会社は大分有名になってきたのにテレビには王様の名前って出てこないよな。まぁ、他の有名企業のお偉いさんの名前とかあまり聞かないからそれと似た事情なんだろうけど、目立ちたがり屋なあの人がそんな理由で自重すると思うと違和感が凄い。
　シドゥリさんが言うには忙しくも元気でいるらしいから心配はしてないけどね。その間自分は王様のいきなりな無茶振りに応えられる様に自分磨きを怠らない様にしよう。

γ月※日

この日、久し振りに王様が帰ってきた。しかもシドゥリさんと一緒に、珍しく仕事で疲れているらしい王様にどうしたのか訊ねると、これを作っていたと一つの封筒を渡された。

封筒の中にあったのは手帳、しかも給料明細と記されたモノだった。何でも海外遠征に勤しんでいた俺に対する報酬らしく、この日俺は初めて給料というモノを手にした。まだ学生でしかない俺が給料なんてモノを貰って良いのか甚だ疑問に思うし、何よりあの海外出張は個人的に楽しんでいた部分もあるから、どちらかと言えば旅行の気分で行っていた。

だからこの上給料まで貰うのは気が引けたが、王様曰く俺の働きに見合った金額だから安心しろとの事。それならば余計な心配だなと手帳を開いてみれば――――。

あら不思議、そこには0が9コも付いた金額が付属されているじゃああありませんか。

我が目を疑った。目をこれでもかとひん？いて何度も目を擦って確認しても桁数は一桁も変わらない。何だこれはと王様に訊ねるも王様も何か不服かと目を細めるばかり。

いやいや不服じゃねぇよ、いやある意味不服だけども！　此だけの額を高校に上がったばかりのガキに何スンナリ預けようとするの？

ていうかこれだけの金額の分働いた記憶がないわ、世に働きに出ている社会人の皆様に申し訳ないわ！

何て言っても王様はどこ吹く風、寧ろ呆れた様に溜め息を吐かれた。

そこから先はシドゥリさんが付け足してくれたが、どうやらあのネルロ某が引き起こした麻薬事件は思っていた以上に関係各所に影響を及ぼしていたらしく、問題の鎮静化の功労者である俺に是非謝礼がしたいと言い、一番分かりやすい金銭という形で頂いたのだとか。

いや、それでも此れだけの金額は受け取れない。だったら王様の会社に役立てて欲しいとしたが、その程度の端金あった所で意味がない。と一言で両断されてしまった。

これ以上断りを続けたら逆に王様の機嫌を損なう可能性がある。王様の怒りがまだ爆発されない内に俺は手帳を懐に仕舞い、後にシドゥリさんに預かってもらう事で事なきを得た。

その後は何時もの夕食会、今日は珍しくシドゥリさんも来たことから手料理を振る舞う事にした。

ラム肉を使ったシチューは意外にも王様の舌に合ったのか、この日俺はまたもや珍しく王様の口から美味いという言葉を戴いた。シドゥリさんも気に入ってくれた様だし、多めに作ってあったシチューは三人で平らげてしまった。

その後、王様に言われた。〝夢を持て〟と、身の丈に合った理想に殉じるのは美学ではあるが、それも過ぎれば己の器を縮める悪癖に繋がると。故に大きな夢を抱けと、大望を抱いて己を磨き邁進しろと、就寝前の王様は俺にそう語ってくれた。ワインを片手に外を観る王様の目は普段のおちゃらけた雰囲気とは違い、何処までも先を見ているようで、改めて俺は王様の凄さを思い知った。

――夢、かぁ。これ迄俺は王様の臣下という形で何となく生きてきたが、高校に上がった今、それを明確に顕す必要がそろそろ出てきたのかもしれない。

取り敢えず、先ずは陸上で好成績を出すことから始めよう。

因みに俺の得意としている種目は１５００Ｍ走を主軸に他諸々、普段は高校記録を抜けるか抜けないかの力加減でやってます。リレー？　メンバーから外されてますが何か？

――そういや、体力測定でダメ出ししてきた教師、あれから姿を見てないな。どうしたんだろ？

δ月Δ日

先日、ちょっとした事件があった。弓道部のエースである士郎が突然部活を辞めたのだ。俺は士郎と慎二とは別クラスだからその事を知るのに1日遅れたが、何でも士郎がバイト先で火傷を負ったらしく怪我自体はそんな酷いモノではないが慎二の奴が何か言ったらしく、それを真に受けた士郎がアッサリと弓道部に退部届けを出したのだ

とか。
いや、確かに大会が近いこの時期に怪我を負う士郎だが、まさか慎二に何か言われた程度で辞めるとは思ってもいなかった。後で本人に直接聞いたら「バイトも忙しい時期に入ってきたから丁度良かった」と呑気に言ってる始末。
……前々から思ってたけど、士郎の奴ちょっとズレてね？　幾らお人好しだからといって限度ってモノがあるだろ、高校の大事な大会にバイトを優先させるか普通？
この間も学校のプール掃除を頼まれたからって一人でやろうとしたし。その時は偶々一緒にいた俺が手伝ったから良かったものを。士郎には自分の中にある優先順位というモノがないのだろうか？
そして慎二の方にもコッソリ話を聞いた。幾ら士郎をムキにさせたいからって退部を勧めるのはダメだろ、と然り気無く諭すつもりで言ったが、コッチはコッチで話をマトモに取り合ってくれなかった。
何て言うか、慎二の奴も変わった。中学の頃も嫌味な所はあったが、それでも人に対する配慮はあった筈だ。士郎を怒らせて人間味を引き出させる為とは言え、あぁも底意地の悪いことは言ったりしない……と、思ってたんだけど。
尤も、まさか本当に部活を辞めるとは思っていなかっただけに引っ込みが付かなくなったのもあるかも知れない。何れにせよ、弓道部の人間じゃない俺がとやかく口出しするのは筋違いだ。当人が納得しているのなら、外部の人間が口出ししても意味がないだろう。
願わくば藤村先生辺りが上手く矯正してくれればいいのだが。
それはそれとして、俺の方も陸上の大会が控えている。高校最初の公式レース、王様は忙しそうだから見には来ないだろうけど、恥ずかしい結果にはしないように結果は残していこうと思う。

◇

「白河、お前凄いなぁ！　まさか大会初参加でいきなり複数の種目で優勝するとは！　この分なら、全国へ行っても活躍は間違いなしでしょうなぁ」
「まぁ、体調も良かったからな」
「このぉ、クールぶりやがって！　知ってんだからな！　お前が控え室で掌に人の字書いて落ち着こうとしてたの！」
「ま、蒔ちゃん、その辺にしよ？　白河君も困ってるよ」
「そうだぞ蒔の字、白河は今や陸上部のエースなんだ。下手に絡んで怪我でもさせたら事だぞ？」
「私は一向に、構わんッ！」
「おい、それは俺が怪我しても構わないって意味か？　ネタでも時と場合によっては洒落にならんと躾けたつもりだが、些か足りなかったらしいな？」
「ヒェッ。わ、悪かったって！　そ、そんじゃあ私此方だから！　じゃあな！」
「あ、私も向こうだからもう行くね。バイバイ白河君、次の試合も頑張って」
「同じ学友、せめて武運を祈っておく」
「あぁ、サンキュ」
　珍獣一匹と学友二人との別れを済ませ、俺も自宅への帰路に着く。空は既に夕焼けに染まり、山の向こうでは太陽は既に隠れようとしている。
「結果は上々、全国への切符も手に入ったし高校一年目の活躍としてなら……まぁ、悪くはないだろ」
　とは言え王様に経過を報告するつもりはない。あの人なら地区予選で勝ち上がった程度で褒める様な台詞は言わないだろうし、せめて全国で優勝、もしくは新記録を打ち立ててから報告した方がサプライズになるだろう。
　しかし、勝って兜の緒を絞めよ。なんて格言もあるし、学友達の期待も背負っている以上、慢心はしない。全国では今以上に気を引き締

めて望むべきだ。
　そんな事を考えていると、視界の端に士郎が住んでいる武家屋敷の門が入ってきた。そういやここ数日部活動に集中していたから士郎がどんな様子で生活していたのか全然知らなかった。肩の火傷は其処まで酷くはないと聞いたが、それでも暫くは安静にしなければならない筈、片手が動かせない以上日常生活でも支障があるだろうし、何より自慢の料理も満足に奮えないだろう。
　士郎には藤村先生が付いてるから大丈夫だと思うが、藤村先生ズボラな所があるからなぁ、心配だ。
　俺は士郎の様子が気になり門へと向かう。もし火傷が痛むなら家事を手伝ってやるし、材料があれば料理も代わってやろう。中学からの付き合いのある友人だし、その位はしてもバチは当たらないだろう。
　そう思って門を潜ろうとして――――。
「今日もありがとうな、桜。助かったよ」
「いいえ、先輩には高校でもお世話になりますから、この位はさせてください」
　思わず隠れてしまった。え？　な、何故桜ちゃんが士郎の家に？　何で？
　恐る恐る覗き混んでみると、其処には肩から腕に掛けて包帯を巻いた士郎と、中学の頃より髪と背が延びた間桐さんちの桜さんが楽しそうに玄関前で笑い合っていた。
　何故彼女がここにいるのか、何故士郎の家から出てくるのか、気になるところは多々あるが、正直そんな事はある事実の前ではどうでも良かった。
　桜ちゃんが、笑っている。楽しそうに、嬉しそうに、俺の前では決して見せなかったその表情に俺は何か決定的な敗北を味わった気がした。
　そして理解する。彼女の笑顔を見て俺は確信した。間桐桜、彼女は衛宮士郎という男に恋をしているのだと、頭ではなく心で理解した。
　手足が震える。涙が溢れそうになる。絶叫したいほどに狂おしい

感情が駆け巡るが、それでも俺は呑み込んだ。だって、あんな楽しそうな彼女を今まで見たことなかったから。
きっと、彼処には彼女の幸せが詰まっているのだろう。俺には其処に触れる事なんて出来ない、だったら、俺に出来ることは一つ。
「白河修司は――――クールに去るぜ」
その場から最初からいなかった様に消えるだけだ。
夕焼けの街並みが目に染みる。今日の夕飯何にしよう。瞼から溢れる涙を拭いながら俺は家に向かった。

「――――今の白河君？　な、なにあの哀愁に満ちた背中」
その様子を某あかいあくまは困惑しながら眺めていたとか。

――――オマケ――――

「おい修司、何だこの夕飯は？　我は普通の飯を所望した筈だぞ」
「――――キュケオーン」
「は？　いや、そうではなく」
「キュケオーンを食べろよ」
「し、修司？」
「キュケオーンをたべろよぉぉぉぉっ!!!」
「ぬわーっ!?」
その日の白河さんちの夕御飯はそれはそれは凄惨な有り様だったとか。
「ハッ!?　今愉悦の波動があった様な……」

その11

A月γ日

季節は巡って春、麗らかな日取りとなった今日は新たに穂群原学園に新入生が入学する時期、俺や士郎、慎二は無事に二年へと進級し、間桐さんも無事にこの学園に入学する事となった。

高校生になった事で少し大人な雰囲気を纏うようになった間桐さん、俺は遠巻きから眺めていただけだったが、士郎や藤村先生とも仲良くやっているみたいだし、何より随分と明るくなった。

相変わらず俺には気難しい態度を取ってはいるが以前ほどトゲは感じなくなったし、俺も先輩後輩としての間柄ではあるがそれなりに話せるようなったから、これはこれで健全な関係と言えるだろう。

……やっぱ、好きな人と一緒にいられるだけで人間というのは変われるモノなんだなぁ。ただ、一方で慎二との関係は悪化しているみたいで妹が入学してきたってのに慎二の奴は間桐さんとはあまり関わろうとはせず、専ら新入生のナンパに勤しんでいた。訊ねて見たところ、イチイチそんな事で話すかよ。と、此方も一蹴されてしまった。

まぁ、兄弟のいない俺には分からないが、出来の良い妹を持つとそれをネタに弄られたりするらしいから、それが嫌で慎二もあの場に近付こうとしなかったのだろう。

――――そう言えば、遠坂も遠くから間桐さんを何度か眺めていたな。俺と目が合うとそそくさとその場から去っていったから確かとは言えないが、間桐さんに何か用件でもあったんだろうか？　俺が言えた事ではないが。

そんなこんなで始まった新学期、今年も部活動や勉学で忙しいだろうし、鍛練も欠かせない。クラスには氷室や三枝といった気心知れた連中もいるし、今年も目一杯学生生活を楽しんでいこうと思う。

序でに、高校陸上の全国大会では取り敢えず出場した全種目の高校

記録を塗り替えておいたと書いておく。あの頃は初めての失恋で立ち直れず半ば自棄糞になってたし、その所為であまり加減できなかったからね。是非もないよネッ！

取り敢えず次の全国ではその上を行けるよう頑張ろう。目指すは三年連続高校新記録。

γ月※日

そう言えば、うちのクラスの葛木先生って古武術でも習ってんのかね？　体幹は良く鍛えられてるし、佇まいにも隙がない。以前俺がついうっかり圏境使って後ろから声を掛けたら、凄い反応で距離取られたし、その時の構えみたいなのも独特なモノだった。

ありゃアレだな。あの時の構えから察するに掴んだモノを抉ったり潜ったりする初見殺しの類いの武術だな、自然とそう言う事が出来るって事はきっと葛木先生も幼い頃から実直に鍛練を重ねて来た実直な人なのだろう。

もしかして葛木先生ってマイナーだけど立派な道場の跡取り息子とか何かだったり？　もしくはその初見殺しな流派から何処かの暗殺集団の秘密兵器だったりとか？　――なわけないか、どこぞのゴ○ゴ１３じゃあるまいし。

――あぁそうそう、そう言えば全国模試の発表も先日あったんだった。結果は一位、前回はケアレスミスがあって二位だったから努力が実ったと実感できて良かった。

その事を偶々俺の様子を見に家に来たシドゥリさんに報告したら結構喜ばれた。王様も喜ぶから報告なされたらと言われたが、生憎そのつもりはない。何せ王様は大企業の頂点に君臨する人だ。そんな人の時間をイチイチ割くような真似は出来るだけ避けたい。報告するとしてもそれは高校卒業の間際で一度に報告した方が簡潔でいいだろう。

王様も忙しいそうだし、極力あの人を煩わせるような真似はしたくない。そう言葉にするとシドゥリさんはなんとも言えない表情で苦笑うと、それは違うと諭されるように言われた。

王様は確かに忙しい人だけど、それ以上に慈悲深い御方でもある。臣下であるモノの言葉ならどんな些細な報告でも中身があれば耳を傾けてくれると。何より俺と言う人間の活躍を誰よりも楽しみにしているのだと、シドゥリさんはその言葉を最後に笑顔で締め括った。

――――まぁ、確かに俺は王様に日々弛まず励めと言われてきてるし、俺の話を笑い半分だが聞いてくれる。何より結果を出しているのなら些細な事でも報告するのは臣下の役割、それを不要か断ずるのは王様の役割だ。

取り敢えず今日は王様に全国模試で一位を取った事を言っておいた。王様はそうかとただ一言口にしただけだったが、不要とか報告は無用とか言われなかったので次回も学校で何らかの結果を出せたらその都度報告しておこうと思う。

――――その夜、王様はシドゥリさんと話をしていた。何を話していたかは分からないけど、二人の様子はとても楽しそうだった。

Ω月＊日

――――最近、夢を見る。

中学の頃は不鮮明で曖昧で、ハッキリとした内容では無かったのに、此処の所結構ハッキリとした感じで夢を見る。

何か……と言うより、何処か機械的な空間、コックピットとかそう言う類いの場所に座り、目の前には多くの怪物達が波となって押し寄せてくる夢。

怪物の多くは悍しい姿をして、中には機械的な――――そう、巨大ロボットが眩い光線やらミサイルやらで襲ってくる。しかし、俺が乗っているロボットは余程頑丈なのか、それらを受けても全くびくともせず、反撃の一撃で敵勢力を殲滅してしまう。

全く現実味のないモノ、まぁ夢なのだから当たり前なのだけどそれにしてはリアリティがあった。現実味が無いのにリアリティとはこれ如何に？

何であんな夢を見たのだろう？　この間見た日朝のヒーローモノを見ていた所為かなぁ？

そしてこれも最近如実に露になってきたのだが、日記帳とは別の手帳に書かれた落書きのような図面や専門用語の意味が段々分かるようになってきた。
特殊な環境で生成される粒子とそれによって生み出される装甲や武器の数々、他にも量子型演算処理システムやら、コロニー型外宇宙航行母艦やら、他にも様々な知識がその手帳に記されていた。
しかもその設計図がビッシリと書かれているのだから更に驚き、色々突っ込みたい所は多々あるが、確かに言える事は一つだけ。
これ、クラスの連中には絶対に見せられん。特に蒔寺には、これをもしアイツに見られたら絶対に学校中へ広めるに違いない。そうなった時、俺はアイツを殺すかもしれん。
王様はこの手帳を読んでいるみたいだけど、そろそろ止めて貰おうかな。明らかに黒歴史だしこれ。
そう思い王様に進言したら、笑顔で却下された。クソォ、人の恥部を曝してそんなに愉しいか!?

Ω月γ日
高校に入ってそろそろ二度目の冬が訪れようとしている今日、部活動の陸上も無事に目的を果たし勉学の方も順調に進んでいるし、初心に還る意味も込めて俺は今日久し振りにあの人の下へ訪れた。
久し振りに教会に立ち寄り言峰師父に稽古を附けて貰ったのだ。師父とは時折泰山で麻婆を食べながら近況を報告しているが、八極拳の稽古は随分久し振りになる。最後に稽古を附けて貰ったのは――中学の頃、高校受験の前の時以来か。
師父は既に中学の頃に師父を超え、教えることはないと言うが、一度でも師と仰いだ以上最低限の礼儀を持つのが筋と言うもの、これからも俺は師父を師父として慕っていくつもりだ。
とは言え、言峰師父も普段は神父としての仕事がある身、この頃随分教会に籠ってたり忙しそうにしてるみたいだし、あまり時間を取るわけにも行かないから、この日の組手稽古は一時間も満たずに終わった。

その後、付き合ってくれた師父に礼を言って教会を後にすると、言峰師父から奇妙な事を質問された。〝叶えたい願いは無いか〟と。
以前に王様から言われた夢を持つことに似た質問だが、意味合いは少し違うみたいだ。何故師父がそんな事を訊ねるのかは定かではないが、まぁ教会の神父として悩みがあれば聞いてやると言う師父なりの気遣いだろう。
俺は取り敢えずその事を保留し、教会を後にした。

◇

「しかし願い、かぁ。師父も難しい事を聞いてくるもんだ」
本日の日記を書き終え、背凭れに寄り掛かりながら師父に言われた事を思い返す。願い。それは人が持つ願望、心の底から成し遂げたいと想いを乗せ、抱く感情の様なもの。
王様が語る夢とは似て非なるモノ、果たして俺には叶えたい願いなど在るのだろうか？
「お金……は王様から渡された給料があるだろ？　物……欲しい圧縮鍋ならあるけど願いでは無いし……師父の言う願いとは違うだろうなぁ」
そう思い巡らせる思考は軈て深みへと誘われていく。俺の願い、白河修司が願う本来の願望、それは――――。

――――其所は、地獄だった。建物が燃え、人が燃え、命が無慈悲に奪われ、消えていく。
――――天には、此方を見下す黒い星が不気味に瞬いていた。それを

目の当たりにして幼き俺が抱いたのは何だったか。
『僕は、俺は、お前を絶対に――許さない!!』
そうだ。それこそがあの時白河修司が抱いた紛れもない本当の――。

「いっつ！　な、何だぁ？」
思考を巡らせていたら不意に左手から鋭い痛みが走った。何だと思い視線を下に向ければ自身の手の甲に赤い痣の様なものが浮かび上がっている。
まるで蚯蚓脹れ……いや、入れ墨のようなそれ、独特な紋様にも見えるそれを何が起きたとマジマジと顔を近付けると。
「い、イダダダァッ!?」
突然、左手の甲から先程以上の痛みが襲ってきた。皮膚をベリベリと剥がされる様な、神経を電気の力でまるごと引き抜かれるような、痺れるような痛みが左手に広がっていく。
突然の痛みに仰け反っていると、椅子から転げ落ちて頭を強打してしまう。ゴンッと鈍い痛みが耳朶を通して脳内に広がり、視界を白い火花で覆っていく。
一体何なんだろうか、困惑しながら頭を擦って今の流れの元凶である左手を見れば、其所に先程のような赤い痣は綺麗さっぱり無くなっていた。まるで最初からそんなもの無かった様に。
「いててて、何なんだよ一体、静電気？」
静電気にしてはやけに激しかったが、辺りを見ても焦げ目が付いたり何か変わった様子はない。気になる所だが夜も更けてきた以上、近所迷惑の事も考慮して騒ぐのは止めておこう。……まぁ、この階には基本的に俺と王様位しかいないんだけどね。
今起きた事は後日調べるとして、今日の所はもう寝よう。明日は朝練もあるしね。陸上部のエースとしてはサボることは許されないのだ。

「ほう、聖杯からの令呪をよもや弾き飛ばそうとは、あの憑き物は余程修司の事が大事と見える」
「だが、その過保護もいつまで保つかな、此度の戦争は中々面白いことになりそうだぞ」
愉悦の笑みを浮かべる黄金の英雄王、その手に握られた一枚の紙にはたった一言、ある文面が書かれていた。

――フランスにて裁定者（ルーラー）のサーヴァントの顕現を確認。

同日、日本・羽田空港。
「日本、此処に彼がいるのですね」
その拳を握り締め、バゼット＝フラガ＝マクレミッツ――日本上陸。

その12

春が過ぎ、夏が駆け抜け、秋が巡り、現在冬木は他の地域と比べて幾分か暖かな冬の寒さに突入しようとしていた。
新都と深山町を繋ぐ冬木の大橋、その歩道橋を走る一人の影、道行く車と平行して走り抜くその様は一部の界隈では見慣れた風物詩だった。
冬特有の透き通った空気、風を切りながら深山町にある学校へ向かう修司にとってこの時期の空気は嫌いではなかった。大橋を渡り終えると修司はペースを落として坂道を駆けていく、時間帯もまだ早く登校する生徒もいない。人気もなく不気味な程に静まり返る深山町だが、古い家が多くあり雰囲気も合わさって場所によっては何だか映画のワンシーンに迷い込んだ気持ちになる。
高校生活が始まってすっかり慣れた通学路を進むこと数分、緩やかな坂を乗り越えて修司は穂群原学園の校門を潜る。住んでいるマンションから此処へ来るまでノンストップでのランニング、呼吸こそは全く乱れていないがその額にはジンワリと汗が滲み出てきた。
「オッス、相変わらず早いな修司。その様子だと今日もバス使わないで走ってきたのか？」
「オッス、そう言う美綴の方も朝練か？　精が出るな」
「どっかの誰かさんが結果を出しまくってるからな、お陰で他の運動系の部活は大変なんだぞ？　何かある度に比較されてんだから」
気安い感じで挨拶をしてくるのは同学年で同じクラスの美綴綾子、男勝りな性格で口調も粗っぽいが面倒見は良く、そのさっぱりとした性格もあって年下や部活の仲間からは大変良く慕われている。
そんな彼女がまるで責める様な口振りだが、そんな軽口を言い合える人すら少ない修司にとって美綴綾子という女子との遣り取りは男友達の様に親しみが感じ取れた。
「て言うか、お前の方は朝練無い筈だろ？　たまには休んでも良いだろうに、て言うか休め。アタシ等がゆっくり出来ないだろ」
「仕方ないだろ習慣なんだから、それにこれでも前より遅く来てるつ

もりなんだ。身体に染み込んだ習慣はそう簡単に抜け出せたりしねぇよ」
「か～、陸上のエース様は言うことが違うねぇ。新都からの通学路のマラソンを習慣にしちまうとか、マジ化け物染みてるわ」
「誉めるか貶すかどっちかにしろよ」
　そんな慣れたやり取りをしながら、修司は屈んで足首に手を伸ばす。制服のズボンの裾を捲って覗かせるのは良くトレーニングに使われる重り、それも特注と思われる代物で、幾つもの金留めを外すとゴトンと音を立てて地に落ちる。落ちた音からしてキロはいっている重量に美綴は頬を引き攣らせた。
「て言うか、アンタ何で部長やらないのよ？　実力もあるし、後輩たちからもそれなりに慕われているじゃない。なんで？」
「平の部員が実は一番の実力者って、ちょっとかっこ良くね？」
「……アンタ、そう言う思考って蒔寺と似てるって自覚ある？」
「そんじゃな」
「あ、逃げた」
　美綴の鋭い指摘を敢えて無視し、彼女と別れて修司は校舎へと向かう。背後から「また教室でな」という美綴に掌をヒラヒラさせて返事をする。
　下駄箱に靴を仕舞い校舎へ入り教室へと向かう。修司のクラスは二年Ａ組、其処には同じ陸上部である三枝や氷室、蒔寺がいたりするが生憎今日は朝練がない。普通の学生にとって朝練がない日は大抵朝早く登校することはない。
　教室の扉を開ければ予想通り無人な空間が出来ていた。人気もなく、誰もいない教室を独り占めできるこの些細な時間が修司は何気に気に入っていた。読書をしたり勉強したり、居眠りをしたり、その日の気分によって過ごせると言うのは、割りと贅沢な事ではないかと思い始める程度には好ましく思っている。
　今日は何をしようか？　勉強か居眠りか、それとも学校内で散歩でもするか、はたまた生徒会にソーラーシステムの製作をどう頼み込むかを思案するか、考えに勤しむこと数分、教室の扉が再び開かれる。

「あら白河君、おはよ。相変わらず早いのね」
「ん？　遠坂か。オッス、今日はそっちも早いな」
　左右に揺れるツインテール、防寒対策の赤いコートを羽織って教室に入ってきたのは穂群原学園でも有名な淑女、遠坂凛だった。
　優雅という言葉を体現したかのような立ち振舞いで同学年だけでなく一年、三年と多くの学生から羨望の眼差しを受ける学園のマドンナ。彼女とも同じクラスで時々ではあるが勉学について幾つか会話を交わす程度には面識があった。
「たまには早起きもいいかなって。人の少ない教室って不思議と集中できるから、今の内に予習でもしておこうかなって」
「そっか、じゃあ俺も勉強にしておくかな。五月蝿くしないつもりだから、お互い気兼ね無くやっていこう」
　そう言って最低限の会話を交わした後、二人は勉学の方に意識を移し、他の生徒達がやってくる時間帯まで悠々自適に過ごしていた。
　そして時間は過ぎていき、昼食も食堂で食べて午後の授業も終了し、残すは放課後の部活動のみとなった。今日もあと少しだからガンバるゾイと気合いを入れて校庭に向かおうと教室を出たとき、ある男子生徒に声を掛けられる。
「やぁ修司、今日も部活かい？」
　気障った調子で声を掛けてきたのは士郎に並ぶ長い付き合いのある友人、間桐慎二だった。高校に入ってから互いに部活動で忙しい事もあり、士郎との一件もあってあまり顔を合わせるのも少なくなっていたが――――そんな彼からのまさか声を掛けられるとは思っていなかった修司は僅かに目を見開かせる。
「慎二か、珍しいな。お前から話し掛けてくるなんて」
「まぁね、以前は衛宮の事で変に意識して顔を合わせにくくなったし、僕も副部長として忙しかったからね」
「まぁ、副部長って影ながらのサポートってイメージあるし、実際大変そうではあるよな」
「そうなんだよね。ホント参っちゃうよ、後輩達も中々言うこと聞かないしさぁ、使えないのなんのって」

「そう言う奴をキチンと育ててこそ、お前の凄さが分かるってもんだろ？　折角実力で副部長の座まで昇り詰めたんだめげずに頑張れよ」
「……ま、それもそうだ。僕の実力が本物なのは疑いようもない事実だけど、後進を育てるのも先輩の役割ってね。時間を取らせたね修司、僕もそろそろいくよ」
「あぁ、またな」
　結局、慎二はなんの為に修司を呼び止めたのか、単に部活の話をするだけなのか、相変わらず天の邪鬼で素直ではない男だが、あまり意味のない事をする輩ではない。
　けれど人の心の内など分かる筈もなく、修司は慎二の真意を探るようにその背中が曲がり角へ消えるまで見つめ続けていた。

◇

　――そして、部活を終えて帰り道。夕飯の買い出しをしようと商店街へ立ち寄り、本日の献立を考えながらスーパーへ赴き品物の品定めをする事にした。
「さって、今日の夕飯は何にしようかなっと、明日は学校も休みだし、作りおきが出来る奴がいいんだけど……と」
　頭の中で家にある残ったモノを掛け合わせて今晩の夕飯のメインを考える。今日は野菜が安いし、野菜たっぷりのキノコシチューにでもしようと材料を買い物籠に入れていくと、近くのおばさま方の声が聞こえてきた。
「ねぇ、聞いた？　新都の方でまたガス漏れ事故があった見たいよ？」
「またぁ？　今朝もテレビでその話題があったばかりじゃない」
「幸い意識不明者はいても死者は今の所居ないみたいだけど、この分だとまだまだ似たような事故が起きそうよね」

「不安よね。アタシも家を出るときはちゃんとガスの元栓閉めるのを忘れないようにしなきゃ」
――またか。今月にはいってこれで四件目、テレビではガス漏れ事故と称しているが、俺にはどうもそれが何かを隠す為の嘘のように思えてしまう。一時は周囲の人間もそれで納得するモノだからそう言うものだと思っていたが、こう立て続けに同じ事故が起こると何か別の事件に繋がっているのではないかと変に勘繰ってしまう。
思えば、この冬木には不可思議な事件事故が相次いで引き起こっている。十年前には少年少女の無差別連続殺害事件なんて悍しい事件が起きていたり(犯人は既に亡くなっているが)、その年の冬にはあの忌まわしい大火災も起こったりしている。
自然の恵みは山と海で囲まれているから充実していそうなのに、何故そう言う恐ろしい事故や事件が起きてしまうのか、冬木市ってもしかして何かに取り憑かれてたりするのだろうか?
会計を終えてスーパーを後にするが、頭の中ではそう言った後ろ向きな考えばかり思い浮かんでしまう。これではいかん、気持ちを切り替えようと思いすぐ目の前にある鯛焼きの屋台に向かおうと足を進めると――。
「ねぇ其処のお兄ちゃん、アレってなぁに?」
「ん?」
幼く、それでいて綺麗な声に足を止めて声のした方へ視線を向けると、白い雪のような少女が興味深そうに宝石の様な紅色の瞳で此方を見ていた。
日本では見掛けない独特の格好、外人であるのは明白でその若さで流暢に日本語を話せることに驚くも、訊ねられた以上答えねばと紳士らしく振る舞うことにした。
まず、目線を女の子に合わせるように屈む。
「こんにちはお嬢さん、アレってあの車屋台の事かな?」
「アレ、ヤタイって言うの? 何か彼処でお買い物してるみたいだけど、一体何を買ってるの?」
「彼処にはね、鯛焼きっていう日本のお菓子が売ってあるんだ。中に

はあんことかクリームが入っていてね、出来立ては熱いんだけど甘くて美味しいんだ」
「ふぇー、そうなんだー」
おお、何だか思っていた以上に食い付いてきた。甘いお菓子と聞いて目ぇキラキラさせてらぁ。
「良かったら、一個食べてみる？」
「え？　良いの？」
「俺も丁度甘いものが食べたくなってね。じゃ、ちょっとここで待っててね」
ワクワクと目を輝かせる少女を背に屋台へ向かう。購入するのは鯛焼き二つ、どちらもあんこだ。この店の鯛焼きはどれも上手いが、個人的にはつぶ餡の食感が美味しいノーマルの鯛焼きが一番だと思っている。――以前、蒔寺にしつこくせがまれて奢ってやったのを思い出す。
珍獣の餌やりを美少女との出会いで上書きしてやろう。受け取った鯛焼きの入った袋を手に少女へ戻る。
「はいお待たせ。熱いから火傷に気を付けてね」
「わー、ありがとうお兄ちゃん。わ、本当にお魚の形をしてるのね。不思議」
興味深々と鯛焼きを一通り眺めるも、冷めると旨さが半減してしまう。そう悟ったのか、少女はカプリと一口頬張り……。
「――美味しい」
と一言、それでも感慨深そうにしているその子の様子に俺も自然と頬が緩む。癒されるとはこう言う事を言うのだろう。あんこという甘物の割りにその甘さはしつこくなく、それでいて後を引く旨さに少女は瞬く間に手にした鯛焼きを食べ尽くす。それでも上品さが崩れない所を見ると、どうやら結構育ちの良いお嬢様の様だ。
「ありがとうお兄ちゃん、美味しかったわ」
「気に入ってくれたようで何よりだ」
さて、これからどうしたものやら、どうやら今はこの娘一人みたいだし、親御さんは一体何処で何をしているのやら、最悪警察の方へ相

談にいかなくてはいけないかも……なんて考えていると、少女は踵を返して去ろうとしている。
「あ、おい君、一人で大丈夫なのかい？」
「平気、だって私にはとっても強い味方がいるんだから」
呼び止めようとするが、少女は微笑むばかりでマトモに答えようとしてくれない。いや、強い味方がいるって言ったからもしかしたら何処かでボディーガードの人がいるかもしれない。
もしかしてこの娘、想像以上のお嬢様でいらっしゃる？　何やら気品みたいなのも感じるし、お忍びで日本に来日したお姫様か何かかな？　だとしたらこれ以上の干渉は色々不味かったりするのだろうか？
すると、少女一度だけ此方に振り返り。
「そうだ。鯛焼き買ってくれたお礼にお兄ちゃんに一つアドバイスをしてあげる。夜になったら出来るだけ出歩かない方がいいよ、でないと」
〝運が悪かったら、殺されちゃうよ〟
「――――」
年相応な可憐さで、けれど凄惨な言葉を口にする少女に俺は一人固まっていた。
気が付けば、少女の姿は既に消えていた。まるで幻の様に。
――手にした鯛焼きは既に冷めていた。

◇

――――一体、あの少女は何だったのだろう。
先程の出会いがまるで幻だったかのように、何時もの日常の空間が其処にはあった。買い物で行き交う人々、そんな人々とスレ違いながら先程少女が口にした言葉を思い出す。

運が悪かったら殺される。それは一体何を意味するのか、あの少女の口振りではまるでこれから人が死ぬ様な出来事が起こるような、そんな予言めいた言葉にも聞こえる。
いや、予言と言うよりも寧ろ確信な意味合いが強いかも知れない。十年前に起きた連続殺害事件の様な出来事がまた引き起こされる可能性が示唆されているのなら、このまま黙って見過ごす訳にはいかない。
「でもどうする？　流石に俺一人じゃ手が回らないし、誰かに話した所で信じてもらえるか分からないし……明日、せめて氷室に相談してみるか。アイツ確か市長の娘だった筈だし」
自分一人で騒いだ所で真面目に取り合ってくれる筈もない、王様にも連絡したいしシドゥリさんにも相談したい。
俺は自分に出来る限りの事を思案するが、その思考は一時中断される。商店街に備え付けられた小さな公園、其処に何処かで見覚えのある金髪の女性がいたからだ。
人違いかも、何て思いながら近付くと何やらブツブツと呟いているのが聞こえる。――やっぱ人違いかも。
「――あぁ何て事、まさかお財布を落としてしまうなんて、あれには今回の旅費全てが入ってたのに、ご飯も食べてないのに……主よ、これも試練だと言うのですか」
頭を抱えて絶望に打ち拉がれている女性、本当に声を掛けるべきか悩む所だがここで見捨てるのも後味が悪い、人違いだったらそれはそれで考えるべきだと開き直り、俺はその人の名前を口にする。
「えっと、もしかして――――レティシアさん？」
「ふぇ？」
「やっぱレティシアさんじゃないですか。なにやってるんですかこんな所で」
「あ、貴方はもしかして――――修司、君？」
あれ？　この人ってこんな感じだったっけ？　男性恐怖症で距離があった筈なのに……克服したのかな？　て言うか君って。
「何か、お困りの様ですけど……大丈夫ですか？」

「え、ええ平気です！　私の事はお気になさら――〝グギュルルルゥ〟」
「……」
「……」
レティシアさんのお腹から食べ物寄越せの大合唱が鳴り響く。聞かなかった事にしようにもレティシアさんは顔を真っ赤にしてるし。
「えっと、俺も夕飯これからなんで……良かったらご一緒します？」
「……」
それから少しばかりの沈黙が訪れた。十秒か、二十秒か、或いはそれ以上の時間を掛けて――。
「よ、宜しくお願いします」
顔を真っ赤に染め上げるレティシアさんの声は涙声に震えていた。

その13

――今回の聖杯戦争、凄まじく不味い事になる可能性がある。

聖杯によって告げられた曖昧な啓示、しかしそれが世界の崩壊、或いはそれに連なるモノであるならば見過ごす訳にはいかない。聖杯によって選ばれたサーヴァントであるルーラーことジャンヌ＝ダルクは依り代となったレティシアの協力の下、様々な手順を行い開催国である日本へ向かった。

何故、聖杯による現界ではなく他者への憑依なのか、疑問に思うことはあるが彼女自身の身の安全は聖杯によって守られているから……納得し難いが、今は頷いておこう。

有事の際は奇跡の力により彼女の身柄は憑依している自身が消滅した瞬間に回復、脅威の及ばない安全な地帯へ転移される手筈となっている。

一体日本という極東の島国で何が起きようとしているのか、不安に思う部分は多々あるが、それでも彼女――聖杯に選ばれた聖女ジャンヌは決して挫けない。

聖杯戦争を正しく運用する為、聖杯戦争に巻き込まれる無関係な人々を守る為、オルレアンの乙女は強い決意の下、日本へ降り立ち――。

（どうして、こうなってしまったのでしょうか）

「どうかな、一応フランスの味付けに近付けたつもりだったけど……お口に合ったかな？」

「あ、はい。とても美味しかったです」

そして現在、オルレアンの聖女はレティシアの知己たる一人の少年の自宅で夕食のお世話になっていた。

テーブルの上に並べられた皿、そこにあったシチューは綺麗に平らげてしまい気が付けばお代わりを所望してしまう始末。あぁ、聖杯の危機に喚ばれた自分が、どうしてこんな呑気にしていられるのか、自分の短絡ぶりにジャンヌは頭を抱えた。

（彼は――確か三年ほど前にフランスで死徒の殲滅を行った人物、

外見と人格は完全に一般人のそれ、私をレティシアであると認識している以上、どうやら本当に魔術に関わる人間ではないみたいですね）

食べた食器を鼻歌混じりで洗う修司を見てジャンヌはその人となりを分析する。彼の事はレティシアの記憶を通して既に知っている。人の身でありながら数多の死徒を殲滅し、その元凶を討ち果たした傑物、魔術による神秘の力を持ち入らず己の肉体のみで討ち果たしたという話だが、それを嘘と断じ、疎ましく思っている魔術師が少なからず存在しているとか。

しかしそれをジャンヌは嘘とは思わなかった。レティシアの記憶に在る彼の戦いは僅かだが認識しているし、それが通常の人間の枠から逸脱しているのも熟知している。もし彼が魔術師としてサーヴァントを使役し、聖杯戦争に参加したら他のマスターにとって恐ろしく手強い相手になるだろう。

（しかし、どれだけ強くても彼は魔術師ではなく陽の当たる場所で生活する一般人、聖杯戦争に……血腥い戦いに巻き込む訳にはいきません）

そうだ。自分がここに来た目的を忘れるな、この聖杯戦争にはイレギュラーな事態がこれから起こるか、或いは既に起きているかもしれないのだ。自分はそんなイレギュラーに巻き込まれる無関係の人々を守る為にこの地に赴いた。ならば、此処で過ごす目の前の少年を巻き込んでしまう可能性は出来る限り削ぎ落とすべきだ。

ならば話は早いと、ジャンヌは席から立ち上がる。

「修司様、ただいま戻りました」

しかし、その気概も突然の第三者の出現により大きく削がれてしまう。ドアを開けてリビングに入ってくるアジア系の女性の登場にジャンヌはタイミングを失い席に座り直す。

「あ、お帰りなさいシドウリさん。すみません、急に呼び立ててしまって、まだお仕事も途中だったのに――」

「いえいえ、此方の方はキリの良い所で片付きましたし、あの御方からも修司様の面倒を見るようにと命じられておりますので……」

「あ、そうですか。なら良かったです」

「はい。それで、其方の方が例の――」
「うん、この人はレティシアさん。以前フランスに赴いた際に色々お世話になった恩人。レティシアさん、こっちはシドゥリさんで王さ――俺の保護者と一緒で俺の事を何かと世話を焼いてくれる秘書さんだ」
　修司から告げられる紹介にジャンヌは今度こそ立ち上がり、失礼がないよう気を付けて佇まいを直す。
「は、初めまして。私はジャ――レティシアと申します。修司君にはフランスで悪漢に襲われそうになった所を助けて頂いて……」
「まぁ、流暢な日本語でどうもご丁寧に――その節は修司様がお世話になった様で、どうもありがとうございます」
「い、いいえいいえ此方こそ」
「いえいえ此方こそ」
　二人とも外国人の筈なのにまるで日本人のように謙遜し合っている。それが何だか面白くて暫く傍観したままでいたいが、彼女が戻ってきた以上話を進める必要がある。軽く咳払いをして場を整えると修司はシドゥリの方へ向き直る。
「それでシドゥリさん、さっき電話で話してた事だけど……王様、何て言ってた？」
　恐る恐ると言った様子で不安そうにシドゥリに訊ねる修司、ジャンヌは何の話をしているのか分からず首を傾げる。それに対してシドゥリはニコリと微笑み。
「ええ、あの御方も特に反対はしておりませんでしたよ。食費や生活費、滞在費やその他諸々の負担を修司様が補うのであれば、特に言うことはないと仰ってました」
「なっ!?」
「あ、そうなんだ。じゃあ問題ないや」
「ななぁっ!?」
　淡々とした様子でとんでもない事を本人の承諾無しに進めていた二人にジャンヌは衝撃の叫び声を上げる。一体いつの間にその様な算段を企み、完遂していたのか、思わず抗議の声を上げる。

「ちょ、一体何の話をしているんですか!?」
「何って、此方にいる間のレティシアさんの滞在拠点の話だけど？」
「聞いてませんよ！　何を勝手に話を進めてるんですか!?」
「えっ？　　ちゃんと聞いたよ？　レティシアさんが夕飯が出来る前に用意した前菜のサラダを頬張っている間に」
「……う、うそ」
「嘘なんて言わないさ、俺が訊ねたらレティシアさんてば普通に〝お任せしますぅ～〟って言ってたじゃん。シチュー食べてる時にも念押しに訊ねたら同じ台詞が返ってきたけど？」
「私のバカァ～～ッ!!」
　何と言う事だ。彼の作る料理に舌鼓を打ち、堪能している間に既に話は進んでいたとは。何と言う失態か。
　……いや、だって美味しかったんだもの。生前は勿論、現界してからあんなに美味しい料理を食べたのは初めてだ。衝撃的な程に甘美な味わい、空腹だった事を差し引いても一流シェフと言われても納得してしまう修司の手料理にジャンヌの胃袋は完全に鷲掴みにされていた。
「で、ですが、それでもそこまでお世話になるわけには参りません。私にだって多少の蓄えは――――」
「さっきレティシアさん、財布無くしたって言ってたじゃん」
「グフゥっ！」
「幸いパスポートや身分を証明するモノは失くしてないみたいだけどさ、この時期の夜は冷え込むよ？　一文無しで飢えていたレティシアさんに宿無しの生活は厳しいと思うけど」
「はくぅ!?」
　ここへ来て正論の暴力がジャンヌを打ち負かす。そもそも財布を失くした事が全ての始まり、冬の時期である冬木市は他の地域と比べて比較的暖かいと言われているが、それでも雪が降り積もる程度の寒さは訪れる。霊体化出来るのならいざ知らず、肉体を持ち一文無しのジャンヌに宿無しで過ごすには厳しい条件だった。
「で、ですが……」

それでも仮にも聖女として現世に喚ばれた矜持を以て最後まで抗議しようとするが……。
「それに、俺って今ちょっと金を持て余しちゃってさ、使い所を考えていた所なんだよね。過度な金銭の貯蓄は経済に悪影響を与えるって言うし、そう言う意味も含めてレティシアさんにはいて欲しいっていうかさ」
「――――」
「ほら、レティシアさんには結局世話になった礼を言いそびれちゃったから、そのお詫びも兼ねて……さ」
申し訳なさそうに呟く修司に今度こそジャンヌは何も言えなくなる。誠実な人だ。裏など無く、ただ善意として提案してくる彼の人格、これ以上断るのはそれこそ彼に対する失言だと察したジャンヌは苦笑いを浮かべて頭を下げる。
「――――此方こそ変に意地を張って申し訳ありません。そして今更ではありますが、貴方のご厚意に甘えても宜しいですか？」
そう言って手を差し出す聖女に――。
「勿論、大歓迎だとも」
修司は笑みを浮かべてその手を取った。

◇

――――翌日。修司の住むマンションを拠点として確保できたジャンヌは朝食後、彼に一つ頼みごととして街の案内をお願いした。
冬木に来たばかりで土地勘が無く、迷ってしまうのではないかという語るジャンヌに修司は学校が休日で部活も無いことから彼女の頼みを快く承諾した。
そんな笑顔で構わないと即答する修司にジャンヌの良心は痛む、

土地勘が無いというそれ事態は嘘ではない。しかしその一方で打算的な目的があるというのもまた事実、聖杯戦争の審判役として遣わされたルーラーである自身にはこの街の構造を可能な限り把握しておく必要がある。

冬木という土地は龍脈が潤沢でそれ故に聖杯戦争の舞台に選ばれた土地、本来ならばセカンドオーナーである遠坂家に話を通しておくべきではあるが、聖杯戦争の公平さを保つにはそれは些か悪手な気もする。

故に妥協案としてレティシアの知己であり冬木にて大変お世話になるであろう修司にお願いした。唯でさえ住居の関係で世話になっているのに更に今度は街の案内を頼む事になってしまうとは……良心の痛みでジャンヌは悲鳴を上げそうになるのを必死に堪える。

「あの、昨日といい今日といい、本当何もかもご迷惑をお掛けして申し訳ありません」

「気にするなって、昨日も言ったけどレティシアさんにはフランスで世話になったんだからさ、これくらいはさせてくれよ」

「で、ではせめて夕飯の買い出しには手伝わせて下さい。私、これでも荷物持ちには自信が――――」

「あぁ、それも心配はいらないよ。今晩はシドゥリさんが夕飯作ってくれるみたいだから。今日の買い出しは彼女がやっておくってさ。シドゥリさんの料理も旨いから、期待してていいよー」

「おっふ」

良心の呵責に耐えきれず、自分にも何かやるべき事があるのではないかと具申するジャンヌだが修司にとって彼女はあくまでゲスト、折角フランスからワザワザ極東の島国に観光に来てくれた彼女に良い思い出を一つでも提供しようと、精一杯饗してやろうという修司の心憎い気遣いにオルレアンの乙女の良心は死にそうになる。

一切の悪意は無く、あるのは心からの善意のみ。修司の心遣いに感謝しながらも憔悴するジャンヌを不思議に思いながら、修司による冬木の街案内は続く。

「ごめん、レティシアさん。少し寄り道しても良いかな？」

「……え？　ええ、それは大丈夫ですけど」
不意に彼が足を止めたのはとある広い公園だった。人気もなく、季節の影響もあってか草木に活力も無く、端から見れば寂れた印象を持つその公園。
しかし、その公園を目の当たりにしたジャンヌは目を見張った。この公園に存在する死者の怨念、その濃さにジャンヌはここで何があったのか瞬時に悟った。
（そうか、ここが前回の聖杯戦争が齎した惨劇の地なのですね）
１０年前に起きた冬木の大火災。何故、どうしてそうなったのか原因そのものは彼女には分からないが、それでも当時の聖杯戦争の影響で多くの無関係な人間が巻き込まれたと言うのは間違いない。
自分が来たからにはその様な間違いは起こさせない、改めて決意を堅くさせジャンヌは修司の後をついていく。
辿り着いた先にあったのは慰霊碑だった。其所にはこの地で亡くなった人々の名前が記されており、其所には幾つもの献花が供えられていた。
「今から１０年位前かな、ここで大きな火災があってその所為で多くの人達が亡くなってね。時々こうして色んな人達が冥福を祈って献花を添えてってくれるんだ」
「そう、なんですか」
「何故あんな大火災が起きたのかは今でもハッキリと原因は明かされてなくてね、色々とモヤモヤする事件なんだ」
「――――」
「でも、１０年もあれば人は前を向ける。当時冬木の街は悲しみに暮れたけど、今はもう先を見据えて進んでいる。レティシアさん、あのビルってその後に建てられたんだよ。凄くね？」
その昔、悲しい事があった。多くの人々が絶望の死に絶え、残された人々も悲哀に陥り嘆きに沈んだ。
しかし、それでも未来に向かって歩み進める人の強さを修司は凄いと評し、自身もまたそう在ろうとしている。どれだけ打ちのめされても立ち上がっては前に進む在り方、ビルを指差し感慨に耽る修司の横

顔にジャンヌは微笑みを浮かべる。
だから、ではないが。ジャンヌはここで祈りを捧げる事にした。彼女が信奉する神にではなく、今だ現世に留まってしまっている怨念達を在るべき場所に導く為に……。
「あなた達に、安らかな眠りが在らん事を――」
慰霊碑の前に跪き、手を組んで祈りを捧げる。すると怨念達の気配は薄まり、辺りに静謐な空気へ変わっていく。
「……あれ？なんか、空気が軽くなった？」
それを感じ取った修司は辺りを見渡して頬を掻く、これ迄とは違う澄んだ空気に戸惑うと、祈りを終えたジャンヌは立ち上がる。
「修司君、どうかしましたか？」
「いや、何か以前よりここの空気が澄んだ様な気がして……俺の気の所為かな？」
「多分、それは修司君や冬木の人々の祈りが亡くなった人達の魂に届いたからではないでしょうか」
「俺、無宗教なのに？」
「宗教の有無は関係ありません。祈りとは心の所作、誰かを思い慕う気持ちがあり、それを捧げられるのであればそれは正しく祈りとなるのですから」
「へぇー、やっぱ信仰深い人は言うことが違うなぁ。レティシアさんてば昔歴史で学んだジャンヌって聖女みたいだ」
「そ、そそそんな訳ないじゃないですかー」
〝グクゥゥゥ――〟
「……あ」
突然の真名バレの危機に吶ってしまうハラペコ聖女、その様子に不思議に思う修司だが次に聞こえてくる空腹の音にその疑心は霧散する。
「く、クク……さて、それじゃあそろそろお昼にしようか。実は今日お弁当を用意したんだ。簡単なモノだけど味は保証するよ」
「あ、ありがとうございます」
その後、二人は近くのベンチで昼食を済ませ、再び街の案内へと戻

る。観光となる名所、宿泊施設や娯楽施設、レジャー施設（わくわくざぶーん）といった各所を一通り回る頃には既に日は沈みかけていた。
そして最後、お世話になったという事で信仰深いレティシアに修司は冬木教会へ案内する事にした。自身が日頃世話になっている人も神父を生業としている人物、きっと話も合うだろうと思い修司は教会へ目指す。

そして坂道を進んだ先にある教会へ辿りつき、扉を叩く修司であったが、ここで一つ違和感に気付く。
「ありゃ、人の気配がない。師父今日は留守にしてるのかな？」
「ここの神父は、そんなに留守にされる方なのですか？」
「え？　うぅん、普段は大抵教会にいるはずだよ？　あぁでも最近なんか忙しそうにしてたし、今日もその用事かなぁ」
「――」
扉の前でうーんと唸る修司を他所にジャンヌは思案に耽る。教会の神父、即ち聖杯戦争の監督役である者はこの街で行われる英霊同士の衝突による事後処理を一任されている人物だ。その人物が聖杯戦争の前に姿を消すのは考えられないが、もしかしたら神秘隠匿の為の根回しが上手くいっていないのかもしれない。
「ほぅ、珍しいな。お前が女を連れて此処に来るとは」
「あ、師父。今晩は」
そう考えを巡らせていた時、背後から声が掛けられる。呑気に返事をする修司とは対称にジャンヌは警戒して声の主に振り返る。
其処にいたのは幽鬼の様な男だった。背は高く背筋は規則正しく延びているのに何処か歪んで見えるその男、まるで泥のような眼を向けられたジャンヌは人間を相手にしているのに背筋が凍った。
「師父、此方レティシアさん。以前話したフランスで世話になった人だよ。そんでレティシアさん、此方が言峰綺礼神父、この冬木教会の管理人で俺の八極拳の師匠だ」
「は、初めまして――」
「あぁ、初めまして。君がそうか、その節は私の弟子が世話になったそ

うだが……」
「いえ、その……はい。その時に修司君とは知り合いになり、彼のご厚意に甘えて今は彼の家でお世話になっています」
「そうか、色々と積もる話はあるだろうが、今日はもう帰った方がいい。最近何かと物騒だからな、話をするなら後日にするとしよう。その方がそちらも都合がいいだろう？」
「そう、ですね」
「？」
　笑みを浮かべる言峰に一瞬だけこちらにチラリと視線を向けてその直後、何処か睨むような視線を言峰に送るジャンヌ、二人の会話に一体どんな意味があるのか理解できていない修司は不思議に首を傾げるだけだった。
「では、来てもらって済まないが今日はお引き取り願おう。修司、彼女をちゃんと送ってやるんだぞ」
「あぁ、分かってる。そんじゃあ俺達も今日は帰るよ。ごめんな師父、急に押し掛けて」
「なに、気にする必要はない。ではな、精々夜道に気を付けろよ」
　それだけいって言峰は教会の中へと消えていく。ギィィと音を立てて閉まる扉、それを警戒の目で見送ったジャンヌは彼に対して一抹の不安を覚えた。
「さて、それじゃあ俺達も帰ろっか」
「え、えぇ……」
　そう言って教会を後にする二人、後ろ髪を引かれる思いだが、今は仕方がないと溜め息を吐くジャンヌ。先程とは少し様子のおかしい彼女に修司が不思議に思った――――その時。
「漸く、漸く会えましたね。シュウジ＝シラカワ」
「？」
　帰りの下り坂に差し掛かった頃、下の方から声が掛けられる。そちらに視線を向ければ男性もののスーツを身に纏う女性が、手袋を嵌めてゴキゴキと指を鳴らしている。
（っ！　あれは、魔術師（マスター）!?　まだ日が落ちていないこの時間帯でいき

なり仕掛けるつもりですか!?）
目の前の女性は明らかに礼呪を宿したマスター、しかもその側には既に召喚されているであろうサーヴァントが控えている。戦意が滾り殺意を全開にしている女性をジャンヌは止めようと前に出るが。
それよりも早く、女は修司との間合いを詰める。何と言う速さ、現代の人間では到底出し得ない速度、唖然とするジャンヌが振り返る先には既に女は拳を振り抜く姿勢に入っていた。
「修司君、危ない！」
声を張り上げて危機を告げるジャンヌ、しかし女の拳は止まらない。最悪の結末を前に僅かでも抵抗しようとするジャンヌだが。
女が振り抜いた拳を修司は軽く避けて。
「いきなり人に殴り掛かるなんて、危ないでしょーが！」
「へぶぅ!?」
返しの平手打ちを女の頬目掛けて打ち抜き、それを目の当たりにしたジャンヌは盛大に転げ落ちた。

その14

――――私が彼と出会ったのは今からおよそ三年ほど前のブラジル、魔術協会からある少年の身柄を拘束するという依頼を受けた事から始まった。

何でもその少年はある魔術師によって生み出された死徒を悉く殲滅しているのだとか、聖堂教会にスカウトされる前に何としてもその少年を自分達の所に連れてきて欲しいと言うのが連中の総意だった。

正直な話、最初はそんなに乗り気ではなかった。幾ら魔術の人間とはいえ子供を連中に売り渡すような真似は気が引けた。しかし、その少年がいつ己の魔道にのめり込み、周囲に災厄を撒き散らすのかは定かではない。

魔術の世界に年齢は関係ない、そして道徳や倫理観の類いの感情も必要とされていない。もしその少年が自分の力に溺れ神秘の隠匿をしなくなったら、それこそ魔術協会だけでなく世界にとって災いとなってしまう。

故に、私はその少年を捕まえる事に決めた。魔術協会の封印指定執行者として、伝承保菌者（ゴッズホルダー）として、その少年を魔術協会に引き渡す事にした。

協会は可能な限り穏便にと言っていたが、それは正直難しい話だろう。何せ相手は不完全ながらも死徒を殲滅する少年だ。多少なり手傷を負わせる事になるのは確実だろう、それこそ最悪その命を断つ程度には……。

そして、私は彼の居場所を見付けて即座に強襲、一撃の下で戦闘不能にしようとして――――気が付けば、私は穴の空いた天井を見上げて大の字となって寝ていた。その後　宿屋の主人に聞いた所、突然大きな音と共に二階の部屋から落ちてきたのだと言う。

同時に思い出す。私は、バゼット＝フラガ＝マクレミッツは自分よりも年若い少年に完膚なきまでに敗北したのだと。

私の拳はその悉くが捌かれ、蹴りは受け流され、あらゆる攻撃が届かなかった。意識を失う直前に眼にしたのは、避けることも防ぐことも敵わない完成された一撃だった。

そして私に宿屋の修繕を押し付け、少年はその場を後にした。少年――後に名前を知った私は彼を、シュウジ＝シラカワへのリベンジをこの日に誓ったのだ。

その後、自分を磨き依頼を受け続けた私に再び協会からある依頼が舞い込んできた。協会側の参加者として日本で開催される冬木の聖杯戦争に参戦せよ、と。

同時にその冬木の地にシュウジがいると教会側の監督役である言峰神父に教えられ、私の意欲は大きく刺激された。日本に、冬木に、シュウジがいる。この時既に聖杯に対する興味は失せていた。私の中にある願望はただ一つ、私を打ち負かしたシュウジに雪辱を果す。

冬木に到着し、エーデルフェルトが残した屋敷に拠点を構え、サーヴァントであるランサーを召喚して数日、遂に私は彼と再会した。

嗚呼、漸く会えた。漸く出会えた。隣に金髪の女性がいるのが多少気になるが、そんな事は関係ない。邪魔をするならばもろとも叩きのめすだけだと、私は地を蹴り駆け出した。

背後からサーヴァントの制止の声が掛けられるが、知ったことではない。私は今日、この日の為に己を鍛え続けてきたのだ。それに彼が魔術側の人間であるならば、彼だってマスターになっている可能性がある。いや、寧ろそう考えた方が自然だ。

全てはこの一撃を放ってから考える。この一撃を届かせて、そこで漸く私の歩みは前へ進める。私の目標で宿敵である男、シュウジ＝シラカワよ、今こそ覚悟――

「いきなり人に殴り掛かるなんて、危ないでしょーが！」

へぶぅ!?

私の横頬を衝撃が打ち抜いた。ば、バカな、全く見えなかった。

さ、流石私が認めた日本男児、シュウジ＝シラカワ……。

◇

「ったく、あービックリした。いきなり殴り掛かってくるモノだから反射的に手ェ出しちゃった。レティシアさん、大丈夫？」
「あ？　え、ええ、私は大丈夫です。ちょっと転んだだけですから」
　踞る女性を尻目に修司はジャンヌに手を伸ばし助け起こす。
「で？　お宅一体何処の誰よ？　見ず知らずの女性にいきなり殴られる謂れはないんだけど？」
　振り返り、ジャンヌに危害が加えられぬ様、修司は前に出る。その眼には疑心と敵意を滲ませ、次にまた女性が殴り掛かってきても対応出来るように僅かに身構えて女性に問い詰める。
　すると女性は自分を知らないと言う言葉に反応して目を見開かせる。
「私を、私を覚えていないのですか？　私はバゼット、三年前に協会からの依頼で貴方を拘束しようとしたバゼット＝フラガ＝マクレミッツです！」
　眼を剥かせ、訴えるように叫ぶバゼット。彼女の必死な形相を前に流石に不思議に思った修司は記憶の底を漁り始める。
「バゼット……バゼット……あ、もしかしてアンタ、ブラジルで俺に殴りかかってきた人？」
　そして漸く思い出したのか、当時の事を語る修司にバゼットはブンブンと首を縦に振る。心なしかジャンヌにはその眼がキラキラと輝いているように見えた。
　対して修司は眉を寄せて疑心をより深くさせる。自分に良く分からない理由で殴り掛かってきた人物が再び自分の前に現れ、攻撃してきたのだ。修司のバゼットに対する気持ちは正当な感情である。
「……おい、じゃあ何か？　アンタはその時俺に負けた腹いせをしにワザワザ此処まで追ってきたと言うのか？」

「厳密には違います。が、概ねその通りです。三年前に私は貴方に敗北し、そして誓いました。自分を鍛え、強くなり再び貴方に挑み今度こそ打ち勝とうと、故に――――」
そう言ってバゼットは手を拳の形に握り締め。
「シュウジ＝シラカワ、貴方に再戦を申し込みます。よもや、断ったりはしませんね？」
不敵に口角を吊り上げるバゼット、当然ジャンヌはそれを許さないと前に出るが、それよりも修司の反応は早かった。
ズボンのポケットから取り出すのは一個の携帯端末、機械に疎い魔術師であるバゼットにはそれが何なのか理解するのに一歩遅れ、その間に修司は１．１．０．と番号を押し。
「もしもし、警察ですか？　不審者です」
流れるような仕草で国家権力に問い合わせた。
「なっ!?」
「し、修司君？」
突然公的組織に問い合わせる修司にジャンヌもバゼットを眼を丸くさせる。バゼットには通報されるとは本気で思ってなかったのか、修司の行動に本気で驚いていた。
「な、何故警察に問い合わせるのですか!?　私が一体何をしたと言うのです!?　私との勝負は!?」
「何でアンタの思惑にワザワザ乗って上げなきゃなんねーんだ。バカか？　いきなり人に殴り掛かる人間なんか即行通報するに決まってるだろうが」
そう言って修司は眼を鋭くさせる。その眼には明らかに怒りの色が滲んでおり、学生らしからぬ迫力にバゼットは押し黙る。
「大体、アンタは少々勝手が過ぎる。仕事の依頼だか何だかしらねーが、当時中学生だった俺にいきなり殴り掛かるのは人としてどうなんだよ？　アンタ、見た限り二十代だろ？　社会の常識を弁えてねーのか？　一体どんな育て方されりゃあそんな思考になっちまうんだよ」
まさか年下の男の子に説教されるとは思ってもみなかった。続け様に告げられるダメ出しの数々にバゼットは目を丸くし、ジャンヌは

居たたまれなく目を泳がせている。
バゼットからすれば同じ魔術師である修司から全うな倫理を説かれているようなモノ、魔術師とは人としての倫理観等の価値観を捨て去り、自分の探求に何処までも貪欲な生き物、当たり前に社会常識を説く修司にバゼットは漸く自身がこれまで抱いてきた勘違いに気付く。
チラリと隣のジャンヌの方に目を向けば何とも言えない表情を浮かべて頷いてくる。稀有な才能を持った魔術師だと思われていた少年が、まさかの一般人であった事実にバゼットは本日二度目の衝撃を受けた。
「大人しく法の裁きを受けろ。なに、被害届は出さないさ、精々警察の取り調べを受けて少しは社会人としての常識を学びな」
「ま、待って下さい！」
「あまり抵抗しない方がいいぞ、すればするほどアンタの余罪は増えてくるかもしれないからな」
「う、うぅ……」
バゼット＝フラガ＝マクレミッツ、まさかの戦線離脱の危機である。魔術師だと思っていた少年は神秘のしの字も知らない一般人で尚且つ自分はそんな一般人の少年に二度も敗北した。封印指定執行者や伝承保菌者という肩書きも全て打ち砕かれた様に感じたバゼットは地面に大人しく蹲る。
それを見ていたルーラーことジャンヌは修司に思い直す様に言い含めようとしたが、それは無理だと半ば諦めかけていた。だってこの上なく正論なんだもの、仕掛けてきたのは向こうで修司が行ったのは正当防衛の範疇、彼からすればいきなり殴り掛かる暴行犯でそれも二度目ときている。
彼が今しているのは人間社会に生きる者として当然の責務を果たしているに過ぎない、聖杯戦争の審判役であるジャンヌだが、修司に納得して引き下がって貰うほどの言葉を持ち合わせていなかった。
このまま警察の厄介になってしまうのか、打ち拉がれているバゼットの処遇を警察に伝えようとする修司に第三者が待ったを掛けた。

「あー、悪いが坊主。それはちっと待ってもらえるか？」
「っ!?」
　不意に横から掛けられる声に修司は驚愕して飛び退く。気付かなかった。バゼットに殴り掛かられ、意識を集中していたにも関わらず、意識の隙間から這い出る様に突然現れたアロハシャツの男に修司は目を見開かせて身構えた。
　その反応を見て「おっ、いい反応だ。悪くねぇ」と呑気に語る男、飄々としながらもまるで隙が見当たらない。
「ら、ランサー？　なぜあなたが、あなたには待機を命じていた筈ですよ」
「いやだってマスターの危機なんだもの、流石に見過ごせねぇよ。まだマトモに参戦してねぇってのに警察の世話になるのはゴメンだぜ？」
　呆れたように横目で見てくる男にバゼットは「ウグゥ」と蚊の鳴く様な声で再び地に蹲る。
「……アンタ、この人の保護者か？」
「あ？　あー、まぁ似たようなもんだ。ソイツは仕事柄俺の相方でな、ここへ来たのもその関係の一つな訳よ。ソイツを連れてかれるとこっちとしても困るからよ、出来れば穏便に済ませてはくれねぇか？」
「いや無理だろ。この人、いきなり人に拳を向けてくるような人間だぞ、また顔を合わせたら同じ事やらかしそうだし、何より信用できない」
「そう言われるのも仕方ねぇが、どうかそこを曲げて一つ聞いちゃくれねぇか？　俺もソイツにはキツく言っておくし、俺がいる間は二度と坊主には手を出させねぇと誓う」
　だから頼むと、自分よりも年上と思われる男性に頭を下げられ、修司はどうするべきか悩む。本当は今すぐにでもこのような危険人物は警察に預けるべきだと思うし、今後他の人に同じ事をしないと限らないし――。
「あの、修司君。私からも良いですか？」

「レティシアさん？」
「本当に、本っっっ当に私が言えた事ではないのですが、彼女達に猶予をあげては貰えませんか？　どうやら彼女も本当に反省されてる様子ですし」
　まさかの人物からの擁護に修司の目は丸くなる。何故彼女がこの二人を擁護するのか、けれど確かに項垂れて打ち拉がれている様子から彼女が心の底から反省しているのは何となく分かる。殴り掛かって来たのは事実だが、此方に被害があった訳ではない以上……まぁ、少しは妥協するべきなのかもしれない。
「……はぁ、分かりましたよ。レティシアさんが其処まで言うのなら」
　そう言って修司は携帯の通話口に自身の勘違いである事を告げ、軽い謝罪の後に通話を切った。それを見た青いアロハの男は笑みを浮かべ、バゼットは間の抜けた顔を晒している。
「んじゃ、そう言う訳だから、くれぐれも同じ事はやらかさないでくれよ？　また同じ事をしようものなら――」
「あぁ、分かってる。坊主には二度と手を出させねぇと誓うぜ。ほらバゼット、いい加減シャンとしろって」
「シュウジ＝シラカワ、この度は誠に失礼を……」
「アンタにも事情はあるんだろうけどさ、いきなり殴り掛かるのはもう勘弁してくれよ。そんなに組手相手が欲しいなら――――まぁ、前もって言ってくれれば付き合ってやるからさ」
「ほ、本当ですか？」
「俺も師父との組手はここ暫くしてなかったからさ、別の流派の人と拳を交わすのは……まぁ楽しかったし？　ちゃんとアンタも筋を通すなら俺もこれ以上煩く言うつもりはねぇよ」
「あ、ありがとうございます。その時は是非お願いします！」
「良かったなぁバゼット、んじゃ坊主、そっちの嬢ちゃんも気を付けて帰れよー」
　修司の最後の提案に意気消沈していたバゼットの顔が晴れやかなモノになる。現金ではあるが敢えてその事を口にせず、坂道を上がっ

ていく二人を見送り……ふと修司は思う。
「あの二人、教会に何の用だったんだ？　もしかして師父の客人だったのかな？」
　何となく思った疑問、今度機会があればそれとなく聞いてみようと思った。そして、気付けば辺りは暗く更けていて、時刻の方も間もなく夕食の時間を差していた。
「やべ、もうこんな時間じゃん！　シドゥリさんの用意が終わっちまう。レティシアさんそう言う訳だから今日はここまで……て、どうしたのレティシアさん、死にそうな顔をしてるけど？」
「だ、大丈夫です。問題ありません」
　胸を抑え、蹲る彼女を見れば表情を青ざめて死にそうになっているジャンヌに修司はギョッと目を見開かせる。
　彼は知らない。彼女が擁護したのは反省しているバゼットに猶予を上げて欲しいと言ったのが聖杯戦争を正しく実行しようとしているルーラーという立場から来るものなのだと、修司の人としての当たり前な行動を自分の都合でなかった事にしてしまった事実。
　ルーラーとしての責務と聖女と呼ばれたモノとしての良心、それら二つの心情に挟まれた彼女の良心は罪悪感により死にかけて断末魔を上げていた。
「問題ないって、全然そんな風には見えないけど……本当に大丈夫？　なんなら家まで背負ってやるけど？」
「お願いですから、これ以上私に優しくしないでください！　本当に……勘弁してください」
「え、えぇー…」
　今にもギャン泣きしそうなジャンヌ、彼女のその必死な様子に終始気になる修司だが、シドゥリが作った夕食を満足そうに頬張る彼女を見て安堵に胸を撫で下ろすのだった。

　――その翌日、冬木の街はある事件により震撼する。
　深山町で起こった悲惨な殺人事件、その事件を切欠に冬木の街に不

穏な気配が漂い始めるのだった。

その15

「レティシアさん、本当に一人で大丈夫か？」
翌日、朝食は終わり学校への登校の準備を終わらせ、修司は玄関口に立って見送りに来たジャンヌに問い掛ける。
本来ならもう一日時間を掛けて今度は深山町方面へ案内したい所だが、生憎今日からは普通に授業がある日だ。皆勤賞を狙っている修司としても逃すつもりはないし、部活の朝練の時間も迫っている。
どうするかと頭を悩ませていると、彼女本人がここからは自分の足で冬木の町を探索すると言ってきた。元々彼女は一人で回るつもりだったし、学業がある人間にこれ以上世話になるのは申し訳ないと語り、本人がそう望むのなら仕方がないと思い、修司は納得する事にした。
だったらせめて途中でお腹が空いても大丈夫な様にとお弁当を作り、更には小遣いを渡そうとするが、ジャンヌはこれを固辞した。
「もう、心配しすぎですよ修司君。私なら平気です。これでも多少の心得があるんですから、そこら辺の悪漢に後れを取ることはありません。お弁当も頂いた事ですし子供じゃないんですから、これ以上のお世話は不要ですよ」
「レティシアさん何処か抜けてる所があるからな～、そう言われても心配しちまうよ」
初日に財布を盗まれて凹んでいる姿を目撃してしまっている以上、イマイチそう思えないのが修司の本音である。遠回しにポンコツ呼ばわりされていることを不服に思うジャンヌだが、今は敢えて堪え忍ぼう。
いや、寧ろ財布を見つけ出してこの居候状態から早く抜け出すべきなのだ。自分は聖杯戦争の審判役、いつまでも彼等の好意に甘える訳にはいかない。そう、譬えこの家の料理が食べられなくなったとしても。
「だ、大丈夫ですよ。私は修司君より年上なんですから！　年上とし

てちゃんとしてるって所、見せてあげます！」
「ヨダレ、せめてヨダレを拭き取ってから言って、色々台無しだから」
今日まで体験した修司の所で食した料理の数々、昨夜のシドゥリが作った品も大変美味でそれを思い出してしまったジャンヌは無意識に口端からジュルリとヨダレを溢す。慌てて拭き取り無かった事のように胸を張って振る舞うが、肝心の修司は彼女のポンコツ疑惑を確信のモノにしていた。
「大丈夫ですよ修司様、何かあれば私の方から使いを出しますので、レティシア様の安全は保障します」
「え？」
「具体的にどうやって？」
「昨晩、夕食後に備えという事でレティシア様にお渡しした携帯にはＧＰＳ機能が付いております」
「え？」
言われて確かに昨日の夕食後に何かあった時の備えとして携帯電話を一台貸して貰っている。が、まさか其処まで気遣いが行き届いているとは知る由もなかったジャンヌはサラリと口にするシドゥリに言葉を失う。
「流石シドゥリさん、仕事が早い。じゃ、俺はもう行くよ」
「はい。お気を付けて」
「い、いってらっしゃい」
呆然としながらもそれでも修司を見送るジャンヌ、扉が閉まり残った家事を片付けてしまおうとシドゥリはリビングへ向かうが。
「あ、あの、シドゥリさん」
「はい？」
「その、私にも何か手伝わせて下さい。何もせずにこのまま街に向かうのは……流石に」
重々しくそう口にするジャンヌ、このままなにもしなければそれこそ居候以下の穀潰しに他ならない。ルーラーである以前に世話になった身である以上、食器洗いだけでなく最低限の家事を手伝わなければ申し訳ない。

そんなジャンヌにシドゥリは笑みを浮かべて――。
「では、部屋の掃除をお願いしても？」
「は、はい！」
リビングへ向かうシドゥリを追ってジャンヌもまた家事の手伝いをするのだった。

◇

「――まさか、朝から修羅場を目撃してしまうとは」
一方、いつも通り軽いランニング気分で学校に到着した俺は陸上部の朝練を終え、現在は午後の授業に備えて昼食――を食べる為の居場所を探していた。
と言うのも、教室では昨日自分とジャンヌが揃って出掛けていたのをよりにもよって蒔寺達に目撃されてしまい、休み時間は殆どそれに関する質問攻めにあっていた。せめて昼飯位は静かに過ごしたいと思い屋上に向かう途中だった。
思い返すのは朝練を終わり教室に戻ろうとした時だ。玄関前で言い合いをしている二人がいるので何かと思って近付けば、慎二と遠坂がいた。言い争いというよりは言い寄ってくる慎二を遠坂が軽くあしらっている風に見えるが、自分の姿を見た途端遠坂は自分に軽く挨拶をするとそそくさと去っていく。慎二の方へどうしたと訊ねれば、「うるさい！」と声を上げて何処かへ行ってしまう。
慎二の奴、なんだって彼処まで遠坂に固執するのだろう？　確かに遠坂は綺麗だし、今後数年で美人と称される大人になるだろうけど……別にそこまで拘る程かなぁ？
まぁ、人の趣向は人それぞれだ。第三者が口を出すべき話でもないだろう。精々事案にならないよう静かに見守っておこう。

そう思い次の曲がり角を進むと――――。
「きゃっ」
両手にプリントを抱えた間桐さんがいた。ぶつかりそうになるのを反射的に避けようとしたが、驚いてバランスを崩した彼女の両手からプリントが落ちていく。これでは不味いと判断した瞬間、俺は弁当を放り投げて持ち前の動体視力と反射能力で舞い落ちるプリントをキャッチしていく。
桜ちゃ――間桐さんが気付く頃には俺の両手にはプリントと弁当、それぞれを手にしていた。ポカンと目を丸くさせる彼女に申し訳なく思いつつ、手にしたプリントを差し出し。
「いきなりゴメンな。ハイこれ」
「え？　は、はい。ありがとうございます。白河先輩」
未だ呆然している間桐さんにプリントを渡し、逃げるように屋上へ続く階段を昇る。だ、大丈夫だよね？　間桐さん怪我とかしてないよね？　嫌われてないよね？
……女々しいな。そんな可能性あるわけないのに何故未だに彼女の気を引こうとしているのか、若干の自己嫌悪を抱きながら屋上の扉を開くとその空は何処までも蒼く澄んでいた。
そして昼飯を食べ終え教室に戻ると、其処には案の定待ち構えていた珍獣こと蒔寺が自分の方へ押し掛けてきた。
「やっと戻ってきたか修司ー！　さぁ吐け、直ぐ吐け、お前と一緒にいた美人さん、一体何処の誰なのかさっさと白状しろぉー！」
「うるっせぇな。何度も同じ事言わせんなよ、あの人は中学の時に海外で世話になった人で、こっち来て困ってる所を偶々再会しただけだっての」
「ふっ、それは嘘を吐いている味だな」
「……それ以上近付いたらテメーの顔にこの拳を叩き込むからな？」
舌をレロレロしながら近付いてくる蒔寺に分かりやすく拳をちらつかせる。コイツ、どれだけ肉体言語で語っても次の瞬間には復活して懲りなく同じ事をしてくるから質が悪い。幾ら此方が手加減しているとはいえ、流石はあのタイガーの二代目と目される奴だ、その生

命力は計り知れん。いや、全然褒めてないけどね？
「いい加減にしてやれ蒔の字、白河も困ってるだろ。命が惜しければそれ以上からかうのは止めてやれ」
「私は一向に、構わんッ!!」
「本当に懲りねぇなコイツ」
　この一瞬の刹那を生きようとするコイツの性根はもしかしたら凄いのかもしれない。尤も、見習おうとは欠片も思わんが。
「ご、ごめんね白河君。蒔ちゃんがいつも迷惑を掛けて……」
「あぁもう馴れたよ。で、一体何の用なんだ？　午後の授業もあと少しで始まる。出来れば手短にして欲しいんだけど？」
「あぁ、済まない。実はな――」
「今朝、深山町で殺人事件があったのさ」
「美綴？」
　背後からの声に振り向けば暗く、それでいてやりきれない顔をした美綴綾子が俺の後ろに立ち、小声でそう語りかけてきた。
「……今の話、本当なのか？」
「あぁ、このあと帰りのＨＲで言われるけどさ、何でも住宅街の一角で殺人事件があったらしいんだ。両親と姉弟の四人家族、その内両親と姉が殺されたって……もう、その近所では有名な話になってるよ」
「それで急遽学校の方も対策を取ってな、暫くは午後の部活動は中止にするらしい。学生はなるべく早く下校するように、あとで沙汰が届くはずだ」
　美綴も氷室も三枝も、三人共表情を暗くさせている。蒔寺ですらも何処か覇気がない。
　無理もない。冬木の街は１０年前の大火災以降、特に目立った事件は無かったのに此処へ来て突然の凄惨な殺人事件、それは否が応にもあの出来事を連想させる。
　冬木の大火災の前に起きていた少年少女連続誘拐殺人事件、最悪にして今も冬木の人々に恐怖を植え付けた日本史上希に見る大事件。犯人は既に死亡しているが、当時を知る者にとって今回の事件はその時の再来にも思えてしまうだろう。

「まぁ、そう言う訳だからさ。氷室達も帰る時は気を付けて帰れよ？
修司も、その脚力を活かして早めに帰るようにね」
「……あぁ、そうだな」
そうして、午後の授業も終わり帰りのＨＲでは、美綴達が言っていた様に下校時間が短縮され、生徒達は早足に帰る事になった。
そんな中、夕暮れに染まる深山町を歩きある場所に訪れる。そこは立ち入り禁止のテープで覆われた……事件があったとされる民家だった。
このテープの先には未だに血痕の跡が残された凄惨な事件現場がそのままにされている。残された少年の気持ちを考えると……やるせない気持ちと怒りで頭の中が沸騰しそうになる。
どうして、この家の人達が殺されなくてはならない？　この家族が何をした？　普通に生きているだけなのに、どうして無惨に命を奪われなければならない。
母が殺され、父を殺され、姉を殺され、残された少年は今後何を思って生きていくのか、誰を頼りに生きていくのか、想像するだけで怒りが込み上げてくる。
「――ふざけやがって」
犯人は未だ捕まっていない。その事実が更に俺の中の怒りを燃やしていく。もし犯人がこの街にまだ潜伏して、もしまだ同じ事件を繰り返そうと言うのなら……。
「殺してやる」
理不尽を振り撒く輩が許せない。不条理を押し付ける輩が許せない。だから、その犯人も許さない。叶うのなら、この手で――。
「修司君」

「っ、」
ふと、横から声が掛けられて振り向くと、制服の様な格好をしたレティシアさんが不安に満ちた表情で自分を見ていた。
「あ……れ？　レティシアさん、どうしてここに？」
「私はちょっと探索の続きを――それより貴方こそどうしたんです

か。このような所で立ち尽くして」
「あぁ、うん。ゴメン」
「……この家の、残された男の子を考えてたんですか？」
心配そうに此方を見てくるレティシアさん。すると彼女は事件のあった民家に視線を向け、その顔を悲しみに歪ませていた。
「……噂で、聞きました。まさか、この様な凄惨な事件が起きるなんて」
「あぁ、酷い話もあったもんだよ。しかも犯人は未だ捕まっていないって話だし、もしかしたらうちの学校も近い内に一時休校――なんて事になるかもしれないな」
笑えない話である。そもそも、これだけ派手に事を起こしておいて、どうして犯人に繋がる手掛かりが無いのか、まずその時点でおかしい。日本の警察はこと調べる事に関しては世界でもトップクラスだと聞く、幾らそれがどんな難事件でも一欠片の情報も得られないというのは少しおかしな気もする。
何か、普通とは違う何かが関与している気がする。それこそオカルト染みた何かが。
「――修司君、帰りましょう。もうすぐ夜になります。早く帰ってシドゥリさんを安心させてあげましょう？」
「うん、そうだな。そうしよう」
後ろ髪を引かれる思いでその場を後にする。レティシアさんの微笑みに幾分か気持ちは晴れたが、それでも心の何処かで怒りの炎は燻り続けていた。

◇

その後、夕食も終えて後片付けも終わり、後は風呂に入って寝るだ

けとなった時、俺とレティシアさんとシドゥリさんでちょっとした家族会議が行われた。議題は当然、例の殺人事件に関してだ。

シドゥリさんは当分の間このマンション……というか、俺と同じ部屋で同居する事になった。外出は明るい午前だけにして午後は比較的家の中で会社からの仕事は簡単な雑務をするだけにしておくという。

出掛ける際も同じマンションに住む住人達と一緒という事にしたとシドゥリさんは語る。シドゥリさんは会社の中でも王様の秘書という重要なポジションにいる人だ。その事を考えれば彼女の対策は当然とも言えた。

ただ、それでは王様に負担が大きくなるからそれはどうなるのか？

聞けばここ数ヶ月先は大きな仕事はなく、王様も出張と称してあちこちに遊び歩いているらしい、端から聞けば職権乱用だが、出張の合間にも雑務と称して仕事を淡々と熟す人だから文句を言う人はいないだろう。

最近は仕事面もＩＴ化し、大きな仕事がない限り専らＰＣでの作業が多いらしく、離れていてもシドゥリさんの仕事はあまり影響ないらしい。

以上シドゥリさんの方は何とかなったが、問題はレティシアさんの方だ。彼女はフランスからの旅行客、殺人事件なんて起こる地にいつまでも長居させる訳にはいかない。折角遠い異国の地からやって来てもらって申し訳ないが、彼女には明日辺りにでも帰国してもらった方がいいだろう。

そう思って提案したのだが……彼女はこれを断固として拒否してきた。自分はまだやるべきことがあると、頑なに拒んで受け入れようとはせず、それ処か今までお世話になりましたと出ていこうとする。

流石に無一文の人を放り出すわけにもいかず、何とか思い止まって欲しいが、『どうか』と彼女にしては強い口調で言ってきて、それを聞いたシドゥリさんは仕方ないと諦めてしまった。

シドゥリさんは王様が認める出来た人だ。そんな人がアッサリと

引き下がるなんておかしいと思ったが、今は彼女を引き留めるのが優先だ。せめて事件が集束するまで目の届く所にいてもらわないと、此方としても困る。
そう思い交渉を続けようとするこの時の俺を見るレティシアさんの表情は不思議なモノだった。まるで信じられないものを目の当たりにしたような、自分の常識が通用しなかった様な、そんな顔をしていた。
その後、お互い冷静さを取り戻し、改めて妥協案に乗って貰う事にした。レティシアさんはこのまま冬木市に残り、やるべき事をやり遂げる事、そのやるべき事には極力詮索しない事、その事を条件にレティシアさんには我が家を拠点にする事にした。
もし、今後レティシアさんの〝やるべき事〟とやらが長引く様なら、マンションの空いている部屋に移って貰う事も視野に入れるべきなのかもしれない。シドゥリさんがいるとはいえ、余所の女の子と同じ屋根の下で生活するのも流石にアレだし……。
問題はそうなった時の王様への説得なんだけど……上手くいくかなぁ、王様は報酬といって俺に色々良くしてくれているけど、それは俺が前もって結果を出しているからで、なんの成果も出していないのに、果たして俺の我儘は聞き届けてくれるのか。難しいが……何とかしよう。
そして時刻は深夜を回り、明日に備えて俺も床につく。明日も朝練だ。早いところ寝てしまおうとベッドの上で瞼を閉じると……。
「――――ん？」
ふと、違和感を覚えた。家の中にある気配が一つ消えた様な、居なくなった様な感覚。不思議に思い自室から出ると、その違和感はより強く感じられる様になった。
「シドゥリさん……は、いるな」
紳士としての振る舞いではないが、今は仕方がないと自分に言い聞かせ、来客用の一つである部屋にはシドゥリさんが規則正しい寝息を立てて眠っている。
ではまさかレティシアさんが？　嫌な予感がしてもう一つの客間

に足を踏み入れると……的中、そこにレティシアさんの姿が無かった。
作業用の机の上にはごめんなさいの書き置きがあり、備えられた窓は開いている。大きい窓で人一人なら余裕で通れる位の窓だが、それは高い位置に取り付けられている。普通の人間ならまず届かないその窓からは外気の空気が入ってきている。
「嘘だろ？　ここ２０階だぞ!?」
俺は即座に自室に戻り、上着を羽織り外へ出た。最悪の事態を想像したが其処にレティシアさんの遺体は無く、一先ず安堵するが……問題と疑問はより多く残ってしまった。
「レティシアさん、何処に行ったんだ？」
今、この時間帯で出歩くのは非常に危険だ。まだ例の犯人が捕まっていない以上、深夜の冬木を徘徊するにはリスクが大きすぎる。
遠くからサイレンの音が聞こえてくる。未だ嫌な予感が収まらない俺は、レティシアさんの安否を確認するべく夜の冬木の街中を駆け出した……。

◇

「くっそ、レティシアさん。マジで何処行ったんだ!?」
冬木の街を走って数分、新都方面を隈無く探し今は大橋の所、未遠川沿いの土手まで来ているが、ここに来るまでレティシアさんの姿は影も形も見当たらなかった。
何処か別の場所を見落としているのか？　いや、それにしたって動きが速すぎる。俺がいるマンションは新都の中でも山沿いに建てられている。女性が夜道を一人で歩くには早々遠くまで来ない筈だ。
でも、だとしたら一体何処に……。

「まさか、深山町に行ったのか？」
それこそ有り得ないだろう。レティシアさんがどんなに強い足腰していてもマンションから大橋までどんなに急いでも俺でも五分は掛かる。高速やら建物といった障害物を無視すればもう少し時間は縮められるだろうが……。
「……考えても、仕方がないか」
こうなったら冬木市全体を走り回るしかない。明日の朝練に起きるのがキツくなるが、レティシアさんを放っておく方が危険だ。俺は携帯を取り出して警察に助けを請おうと１１０番を押す。
しかし、通話は繋がらなかった。聞こえてくるのはツーツーという途切れた音だけ、不思議に思い画面を見ると、其処には圏外と文字が記されていた。
「嘘だろ、此処って電波通らないのかよ」
まるで何かに遮られているような、そんな不可思議さが感じられる。仕方がないと気を取り直し、取り合えず大橋まで向かおうと脚に力を込めた時。
――ガコォンッ!!
地を揺さぶる程の衝撃と轟音が土手を揺るがした。
「な、なんだぁっ!?」
突然の衝撃に鑪を踏む。バランスが崩される程の衝撃に目を剥けば、海沿いの方から土煙が上がっている。確か、あっちにはコンテナ置き場があった所だ。
先に起きた殺人事件といい、レティシアさんの失踪といい、一体この冬木に何が起きているんだ？
「まさか、レティシアさんは彼処にいるのか？」
だとしたら、彼女の身が危ない。冷静に物事を判断するのは後で良い、今は彼女の安否を確認するのが最優先だ。
地を駆け、立ち入り禁止の柵を飛び越えて現場に辿り着くと……そこで繰り広げられる光景に、目を疑った。
「……何だよ、これ」
其処では――闘争が起きていた。蒼い閃光が地を奔り、黒い巨人

が周囲のコンテナ諸ともその剛腕で吹き飛ばしていく。
　ＣＧ加工や映画の特殊演出ではない。耳にする鋼の音、抉られる地面の悲鳴、吹き飛ぶコンテナが音を立てて落ちていくその様子が嫌でも現実なモノだと思い知らされる。
「アイツは、アイツ等は、一体何なんだ？」
「サーヴァントだよ」
「っ!?」
　背後からの突然の声、反射的に距離を開けて振り返れば、そこには先日鯛焼きを奢った白い少女が年相応の笑みを浮かべて此方を見ていた。
「こんばんは。お兄ちゃん、今日は良い夜ね」
「――君は、あの時の」
「あの時はありがとうね。お陰でセラもリズも喜んでくれたわ。タイヤキ……だったかしら？　お陰で私達の間でちょっとしたブームになっちゃった」
　彼女の口から紡がれるのは何て事はない世間話、後ろで繰り広げられる戦いとは余りにも不釣り合い。しかし、俺の本能が叫んでいる。今、この場で最も危険なのは目の前にいる少女なのだと。
「お兄ちゃんには感謝しているわ。それは本当に本当よ？　――でもね」
「っ!?」
「言った筈よ。夜になったら無闇に出歩かない方がいいって」
　瞬間、背筋に悪寒を感じた。振り返る事無く横へ跳べば、次の瞬間俺のいた場所は爆発した。
「ぐぅぅぅっ!?」
　視界が瓦礫と石礫に染められる。腕を交差させて防いではいるが、衝撃が凄まじく呼吸をする事すら出来ない。
　何メートル転がっただろうか、何度も地面を跳ね、それでも体勢を整えようと体に力を込める。今の衝撃で携帯は粉砕され、上着は消し飛ばされた。今着ているのは寝巻き様にもう一着拵えた山吹色の胴着（寝間着）である。

「ふぅん、今のを避けちゃうんだ。お兄ちゃん、もしかして結構すごい人？」
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
前を見据えれば白い少女の隣には先程の黒い巨人がその手に巨大な剣とも斧とも分からない得物を手にしている。アレをマトモに受ければ死は免れない、即座に逃げようと試みるが、あの黒い巨人から発せられる迫力に膝が震えて上手く動けない……。
「ランサーは……逃げられちゃったか。何もせずに逃げたって事は、私に任せたって事なのね」
やれやれと溜め息を吐く少女、その目には苛立ちと倦怠、そして僅かな忌避感の様なモノが混じっている気がした。
「神秘の隠匿は魔術師にとって当然の義務、こんな事になって本当に残念に思うけど……」
「ごめんねお兄ちゃん。死んでくれる？」
瞬間、黒い巨人は地を蹴って俺に向かって掛けてくる。その速さは俺の全力よりも速く、音速の壁を越えて俺との距離を零にする。
全ての光景が緩やかになっていく。振り下ろされる凶器、見下ろす相貌、殺意と敵意に満ちたその顔に俺は混乱しながらも一つ消えただけ確かな真実に気付く。
戦う。戦わなければ生き残れない。今この瞬間、この刹那、俺はそれだけを理解した。

その16

「チッ、邪魔が入ったか」

修司がコンテナ街へ訪れたと同時、黒い巨人ことバーサーカーと殺し合いをしていた蒼い槍兵はその手にしていた朱色の槍を肩に担ぎ、間が悪く乱入してきた人間に舌打ちを打った。

聖杯戦争に於ける予期せぬ乱入者、そしてその乱入者がいた場合大抵の人間は口封じの為に消される。神秘の隠匿という題目でこれまで魔術に関わってきた多くの人間は消され続けてきた。

今回もその例に漏れず、目撃された以上始末しなくてはならない。嘗て英雄として己の勇猛さを示し続けてきた蒼い槍兵（ランサー）――――クー・フーリンはその乱入者を目にして……己の運の悪さにウンザリした。

「ったく、よりにもよってテメェかよ。坊主」

眼前の先で呑気に自分達に背を向けているのは、昨日自分の相方を打ち破り見逃した……現代に於いて稀有な英雄の卵、修司だった。

初めて目にした時からその強さに注目した。封印指定執行者という肩書きを持った相方を一瞬で返り討ちにしてしまう様は今でも鮮明に思い出せる。

あのまま鍛練を続ければ、数年後には間違いなく自分達の領域にまで足を踏入れる。ランサーから見ても傑物だと分かる少年がよりにもよってこの様な血腥い戦場に来てしまった。

第三者が現れた以上、ここでの戦闘は直ぐ様中止し、身を隠すか口封じの為に動く必要がある。だが、ランサーには躊躇があった。

彼とは誓いを交わした。相方であるバゼットを見逃して貰った代わりとして自分が彼女のサーヴァントである限り、修司には決して手は出さないという誓いを。

それを破ることは喩え令呪を以てしてもあってはならない。何より、彼の成長を楽しみにしていたランサーとしては彼を殺すのは些か以上に抵抗があった。

『――――どうしたランサー？　動きが止まっているようだが、何か

あったか？』
　そんな時、脳内に心底胸糞悪い相方の代理人からの念話が届く。眉を寄せ、不機嫌さを隠そうともせず、仕方なくランサーは代理人の念話に応答する。
『ちょいとばかしトラブルがあっただけだ。場が白けたし、今日は此処までにさせて貰うぜ』
『その様子だとトラブルとやらは一般人が乱入してきたか？　ならば神秘の隠匿の為に始末せねばならないな』
『その必要はねぇ、バーサーカーの野郎が動いた』
『ほう？　アインツベルンが……もしや、その乱入者とは面識があったのかな？』
『俺が知るかよ』
　主に命令が下されたのか、自分と相手する事を止めて修司へと呐喊する狂戦士。あれほどの馬力と強さを誇る今回の聖杯戦争に於いて最も強力なサーヴァント、奴に目を付けられた以上修司に勝ち目は無い。
『それで、その不運な乱入者は何者かな？　完全な一般人であるならば、聖職者として後日冥福の祈りを捧げねばなるまい』
　死に逝く者へのせめてもの手向け、言葉だけ見るのならば彼の台詞は正しく聖職者のもの、しかしその口調の節々から感じられる愉悦の笑みにランサーは代理人の性悪さを垣間見た気がした。
『――――山吹色の胴着を着たガキだよ。あんな戦士でもない小僧すら殺さなきゃならんとはな、これが英雄とは笑わせる』
『――――』
　ランサーが大まかな人物の特徴として修司の身に纏う衣服に付いて説明すると、念話の向こうにいる代理人は言葉を失った様に沈黙していた。先程まで悦に入っていた声色から一転して消沈する代理人にランサーは不思議に思うが……。
『……そうか、あい分かった。ランサー、お前はそのまま各陣営の敵情視察に専念しろ。くれぐれも妙な気は起こさない事だ』
『――――嗚呼、分かってるよ。その代わり俺の相方には』

『フフフ、それはお前の今後次第だ』
その言葉を最後に代理人からの念話は途切れた。やはりあの男とは心底相容れない、だが現状奴の言葉には従わなきゃ行けない。聖杯戦争に勝ち残る為に、何より相方の命を守るために……。
「悪いな坊主、恨んでくれよ」
ランサーは霊体となって姿を消す。コンテナ外に残されたのは暴力の化身である狂戦士とそれを従える少女、そして……まだ何も知らない少年、修司だけだった。

◇

――――選択したのは、前進だった。迫り来る死を前に俺が選んだのは真っ向からの打ち合いだった。少しでも臆せば死が己を蹂躙する、コンマ数秒後に訪れる絶対的な運命を俺は全身全霊を懸けて抗う事に決めた。
目の前の黒い巨人が振り下ろされる武器、それが僅かでも掠ればそれだけで致命傷になりかねない。俺が挑むのは接近戦ではない、満足に拳が振るえなくなる程の超接近戦。
「ダラァッ!!」
地面を踏み砕き、跳躍し、巨人へ詰める。まさか自分から来るとは思っていなかったのか、一瞬巨人の表情が虚を突かれた様に呆けたモノになる。その隙を逃しはしない、脚力の勢いで威力に上乗せさせた拳を巨人の顔面向けて打ち抜いた。
「っ、かっ!?」
かてぇ、何て硬さだ。拳から伝わってくる頑強さはこれ迄俺が相対してきたどんなモノよりも硬く、それは殴り付けた俺自身の拳に痛みが走ってくる程の強靭さだった。

「――――」
「っ！」
巨人との視線が重なる。歯を剥き出し、怒りを顕にする巨人。その迫力で仕掛けた事を僅かながら後悔し、無理矢理昂らせた気持ちが萎え始める。
けれど、もう引き下がれない。向こうが未だに俺の命を狙ってくるのなら立ち向かって抗うしかない。
そうだ。俺が師父の下で武術を習ったのはなんの為だ！　護身術としてだけでなく、理不尽に、押し寄せる不条理を、あの時の様な悲劇を打ち破る為だろうが！
「ハァッ！」
体勢を替え、巨人の首目掛けて蹴りを放つ。人一人の首を吹き飛ばすには充分な威力だが、この巨人には僅かなダメージも与えられないらしい。そのまま奴の顔を足蹴に後方へ回転しながら着地、追撃に警戒するが巨人からの攻撃は無かった。
「――――驚いた。お兄ちゃんって凄いのね、バーサーカー相手に二秒も持ち堪えるなんて」
巨人の背後からは目を丸くさせて驚いた様子の少女が心底感心した様子で称賛の言葉を贈ってくる。この少女、どういう仕掛けかは知らないがこの黒い巨人とは主従の様な関係にあるらしい。
明らかに人間の枠を越えている人の形をした怪物が、一体どうやって従えているのかは定かではない。が、依然として巨人からは殺意は消えていない。生き延びるには余計な考えは辞めるべきだ。
「でもね、幾らお兄ちゃんが強くてもバーサーカーには勝てないわ。だってバーサーカーは――――世界で一番強いんだから」
「やっちゃえ、バーサーカー」
それは、明らかな命令だった。ただ先程までとは違う惰性混じりの指示とは違う、己の狂戦士に立ち向かい、反撃した修司に対する少女なりの敬意。そう、少女は彼を、白河修司を有象無象の石ころではなく、排除すべき障害と認識した。
――――故に、殺す。惰性で始末するのではなく、序でにと消すので

はなく、魔術師としてサーヴァントを従えるマスターとして修司を殺す事に決めた。

「■■■■■■ッ!!」

瞬間、巨人の咆哮が大気を揺らした。音は突風となり、周囲のコンテナを吹き飛ばし、周囲の障害物を吹き飛ばしていく。

(マジ、か!? 音圧だけで、こんな……!)

巨人の咆哮、それは俺の動きを一瞬封じるには充分な威力だった。足が竦み、膝が震える。振り切った筈の恐怖が再び修司の体を蝕み始めた。

――――気付けば、眼前には既に黒い巨人が肉薄していた。音の壁を超え、一瞬にして間合いを詰めてくる狂戦士。俺は己の体をフル稼働させて横に跳んで回避を行う。

回避自体は成功した。しかし、巨人の突進は音速の壁を超え、彼の通った後には破壊の跡が刻まれている。当然のそれに巻き込まれ、狂戦士が生み出した衝撃波(ソニックウェーブ)によってその体を切り刻まれた。

「あ、……がっ」

胴着は弾け飛び、コンクリートの上に叩き付けられた俺は全身から血を流して地に這いつくばる。桁違いの強さ、得物を奮うまでもなく、ただ突進だけで相手を粉砕する破壊力、明らかに先程とは違う強さに俺は痛みに苛まされながらも、呆れた様に笑みを浮かべた。

(へ、へへ……師父の下で何年も鍛えて少しは強くなったつもりだったけど、まさかこれ程までに強い奴がいたとはな、世界って広いや)

思い知る俺と巨人との圧倒的力量の差、ここまでくるといっそ清々しい程に巨人の力は圧倒的で、そして絶対的だった。

まさに理不尽の塊にして不条理の体現者、こんな怪物を相手にしたら大抵の奴は逃げ出すか、惨殺されるかの二つしか選択肢は残らないだろう。

しかし。

(でも、だからこそ、諦めるわけには、いかねぇんだ。不条理に屈する事が悪いんじゃない、理不尽に負けることが恥なんじゃない。負けたままで、屈したままでいることが、いけないんだ!)

だからこそ、俺は諦めない。負けたままで、屈したままでいるのは誰よりも俺自身が許さない。奴の衝撃波で身体中の至る所から悲鳴が上がるけど、構うことなく俺は拳を握り締めて一撃を放つ準備を入れる。

イメージするのは、エネルギーの集約。思い出すのは三年前にフランスでやり合ったネルロ某との死闘で放ったあの一撃。全てを出しきるのではなく、全てのエネルギーを叩き込む、一点集中の極致。

「■■■■■ッ!!」

巨人が迫る。地を踏み砕き、爆薬でも使ったような爆発を上げて再び俺に迫り来る。音の壁を超え、周囲のコンテナを吹き飛ばし、得物を振り上げて吶喊してくる。

凄まじいプレッシャー、しかし恐怖で動けない訳じゃない。これを成さねばどのみち俺に待っているのは死だけである。その事実が逆に俺の思考を落ち着かせていく。

決めるは一瞬、放つのは一合、奴が間合いに入り、その得物を振り下ろした瞬間を見計らって――一歩、前に出る。

押し寄せる音速の衝撃波、それが届いてくる前に放つ一振りの拳、雷の如く放たれたその一打は間違いなく巨人の腹部を捉え――。

「七孔噴血――撒き死ねぇい!!」

◇

「ハァー、ハァー、ハァー……げふっ、ごほっ」

乱れた呼吸を必死に抑え、ボロボロになりながらもやり遂げた修司は右半身が吹き飛んだ巨人を見て安堵する。

危なかった。もしあの時の放った无二打が通じなかったら、僅かで

もタイミングがズレていたら、死んでいたのは自分の方だ。直後に襲ってくる衝撃波に再び身体中を蹂躙されたけど、それでも生きていられるのは他ならぬ己の賭けが打ち勝った事に他ならない。
巨人の方は……動かない。当然だ。不十分な无二打とは言え、その威力は巨人の半身を吹き飛ばしたのだ。生きている事、それ事態が有り得ない。
とは言え、一つの命を奪ったのもまた事実。殺らなければ自分が殺されていた――とは言え、法律的にそれが許されると言えば……NOである。自己を守る為の防衛行為とは言え、殺人を認める訳にはいかない。
（あぁ、これで俺も前科者かぁ。王様、怒るかなぁ……）
仮に前科者にならなくてもこれからの自身の経歴に付いて回るのは間違いない。ネルロ某との戦いでは相手が明らかに人間とは異なるバイオ擬きになったから、仕方ないと言う言い訳も出来たが、今回は多分そうはいかないのだろう。未だ興奮で思考は定まらないが、これから自分がやるべき事は分かっているつもりだ。
人を殺めた以上、法からの裁きを受けるべきだ。その時に受ける沙汰に今から怖くなる修司。しかし、嘆いてばかりもいられない。この場には自分だけでなくもう一人別の人間も此処にいるのだから。
「そうだ。さっきの子、あの子にも謝らないと」
襲ってきたとは言え、あの巨人は白い少女と主従関係にあった輩だ。そう思い少女を探すために修司が辺りを見渡した――その時だ。
「――驚いたわ。まさかバーサーカーを二回も殺しちゃうなんて、お兄ちゃんって本当に強いんだね」
「っ！」
ふと、背後から声が聞こえてくる。ゆっくりと其方に振り向けば、右半身から煙を上げて再生し始める狂戦士の側で目を細めて微笑む白の少女がいた。
「本当、惜しいなぁ。あの時にお兄ちゃんがここまで強いと知ってたら、私の陣営に迎え入れる事も考えたのに、そうしたらシロウも簡単

に手に入れただろうし」
「――――」
言葉がでない。何故、巨人から煙なんてモノが出ている？　どうして、身体が元に戻っている？どういう理屈で立ち上がり、得物を手にして立ち上がれる？
目の前で起きている事象に思考が追い付かない。麻痺していると言っていい、信じられない光景に恐怖よりも困惑で動けなくなった修司に――。
「バイバイ、お兄ちゃん」
――――巨人の得物が振り下ろされた。

……
……
……
――あぁ、知ってる。俺は、この感覚を知っている。
これは――――死だ。十年前に体験した紛れもない死の感覚だ。
あの時は、王様に助けられた。けど、今はあの人は此処にはいない。
――結局、俺に理不尽をはね除ける力なんてなかったのかな？
不条理を乗り越える力なんて……無かったのかなぁ。
レティシアさんも見付けられなかったし、シドゥリさんにも何も言えてない。王様にも……助けてもらった恩を返せてない。
結局、俺は何も、成し遂げられていない。
嗚呼、……悔しいなぁ。

……
……
……
……

――適合者の負傷を確認。
――肉体の再生を起動……エラー……。
――全システムの凍結を確認。解凍を実行……
エラー……。
――エラーの原因を索敵……照合を確認。
――システム解凍の為、因子を増幅……完了。
――適合者を搭乗者へ変更……承認。
――全システム解凍実行……承認。
――シラカワシステム……起動確認。
――全システム、オールグリーン。
【グランゾン】――――起動します。

◇

「本当、貴方にはつくづく驚かされるわ」
地に伏し、血の中に沈む修司に少女は心底呆れ、そして称賛した。
目の前の何も知らない一般人に魔術師として、アインツベルンの最高傑作として巻き込んでしまった修司に一方的な敬意を抱いた。
己の最強の相方であるバーサーカーに怯え、竦んでも、次の瞬間に

は迷いや恐怖を振り切って立ち向かい、その不可思議な術理でバーサーカーの命を二度も奪った。
これだけでも凄まじいと言うのに、目の前で倒れている少年は臓腑を撒き散らしながらもその息を絶やさずにいる。恐らくは、バーサーカーの一撃が放たれる際に僅かに後ろに下がって直撃を避けたつもりなのだろう。
このままでも、この少年はいずれ息絶える。しかし、苦しませる時間を無駄に長引かせるのは申し訳ないし、そう思えるだけの興味と好意を少女は修司に抱いていた。
故に。
「今、楽にしてあげるね。バーサーカー」
彼の生をこの場で終わらせる。巻き込んでしまった己の不手際と修司の不運を呪いながら、少女はバーサーカーに命じる。
振り下ろされた得物、意識のない修司に避けるのは不可能。せめて戦争の間はその死に様を覚えていようと少女はその様を見届けようとして――。
「――え？」
その紅い双眸を大きく見開かせた
。
――そこに在るのは、壁だった。バーサーカーの振り下ろされた得物を受けて、罅一つ付けられない壁が、いつの間にかそこに顕れていた。
瞬間、バーサーカーは壁に吹き飛ばされる。押し寄せ、押し凪ぎ、バーサーカーをまるで羽虫の如く空高く吹き飛ばす。
その光景に少女――イリヤスフィール＝アインツベルンは息を呑んだ。
壁だと思われたのは……巨大な手だった。黒い孔が空を穿ち、その中から手が顕れ、バーサーカーを吹き飛ばしたのだ。
「――なに、これ」
魔術師として知識を持ち、魔術というモノをよく知るイリヤスフィールであってもその存在は未知なるものだった。

孔から顕れ出(イズル)もの、それは深く蒼い重力の巨人、この世ならざる鋼の巨神。

重力の魔神――グランゾン、冬木の街に顕れたその存在は否応なしに冬木の聖杯戦争を震撼させていく。

その17

「どうアーチャー、サーヴァントの気配は在る？」
「いや、ないな。恐らくどの陣営も今は様子見を決め込んでいるのだろう」
　冬木市・新都、誰もいない筈のビルの屋上で一組の男女が深夜の冬木の街を見下ろしている。
　黒髪のツインテールを揺らし、赤を強調とした衣服を身に纏うのは穂群原学園のアイドル、遠坂凛。彼女の側で付き従うのは主人と同じ赤色の外套を纏う弓兵、彼女が高い位置より街を見下ろすのは自分達が戦うべき敵達を索敵する為。
　遠坂凛は魔道の娘、遠坂家の悲願を叶える為にこの十年間魔術の研鑽を積み重ね、今日まで磨きあげてきた。全ては聖杯戦争を勝ち抜く為、彼女の頭には自身が勝ち抜く為の思い付く限りの戦術戦略が築かれていた。
「そう、やっぱり初戦は様子見か。まぁ普通はそうするわよね。流石に序盤で手札を見せる訳ないか」
「その気概は買うがねマスター、あまり前のめりになりすぎない事だ。突っ込む事しか脳がない猪は狩人にとって最適の的だ。私の眼があるとは言え、慢心は禁物だぞ」
「分かってるわよ。ただ、少し拍子抜けただけよ。聖杯戦争、七騎の英霊による戦い。歴史に名を残す英霊達がその武勇を競うって話だから、少し舞い上がっちゃってたわ。ゴメン」
　赤い弓兵の皮肉混じりの忠告を凛は戒めて納得する。十年間の時間を費やし、英霊の中でも三騎士と呼ばれる弓兵を引き当てた。当時は不都合が重なり狙っていたサーヴァントを引き当てる事は出来なかったが、これはこれで良かったと凛は前向きに受け取った。
「ならいい。が、別に事態は鎮まった訳ではない。君も気付いているだろ？　最近耳にする新都での昏睡事件、恐らく件の下手人は――――」

「キャスター……でしょうね」
　ここ最近冬木で頻繁に起こっているガス漏れ事故による昏睡事件、世間からはガス会社の不備による事故だと認識しているが、遠坂凛の考えは違った。この騒動の背後にはサーヴァント、聖杯戦争の参加者で、魔術に特化した英霊――即ちキャスターがいてそのマスターが騒ぎの犯人だと睨んでいる。
弓兵（アーチャー）と共に事件のあった現場を調べ、魔力の流れから下手人は深山町方面にある柳洞寺にいると半ば確信している。
　冬木の管理者（セカンドオーナー）としてもかのサーヴァントとそのマスターによる蛮行は赦せるモノではない。やはり今は他サーヴァントの同行を探るより、キャスターに対する対策を講じた方が得策かもしれない。
「問題は、私達がキャスターを相手する間に他の陣営が手出ししてこないかって所ね。狂戦士（バーサーカー）や槍兵（ランサー）ならまだしも、暗殺者（アサシン）を警戒しなくちゃいけないとなると、此方の負担は予想より大きくなるわ」
「なんだ。君にしては弱気だな、戦いがある所に馳せ参じ、その全てをもぎ取るのが君の願いではなかったのかね？」
「分かってる癖に挑発しないの。今キャスターは冬木にいる全ての人間を魔力の貯蔵庫にしようとしている。キャスターを倒さないとドンドン街の被害は増えていくわ。それこそ、昏睡程度ではなく、何れは死ぬ事だって――」
　今でこそ、キャスターの魔力獲得方法――即ち魂喰いは人を死に追い詰める程無遠慮ではない。しかし、いつキャスターが魂喰いを完食するまで冬木の人々を喰らい尽くさないとも限らない。
　早い段階で何か手を打たないと、最悪別陣営との同盟を結ぶことも選択肢に含み始めた頃、アーチャーの方がいやに静かな事に気付く。
「ちょっと、アーチャーどうしたの？　何か見付けた？」
　振り返って見れば、そこには変わらずアーチャーが隣で待機している。しかしその目は大きく見開かれており、その顔は信じられないものを目にした驚愕に染められていた。
「あ、アーチャー？　本当にどうしたの？　貴方凄い顔をしてるわよ」
「何だ……アレは？　私は――俺は、一体何を見せられている」

何やら錯乱している様子のアーチャー、相方の様子が尋常じゃない事に戸惑いながらも、凛は彼の指差す方へ視線を向け――――絶句した。

ここからコンテナ街との距離は近く、比較的目の良い遠坂にも視認できた。視認し、知覚し、そして絶句する。いっそ見なければ良かったと思える程にその存在は埒外に過ぎた。

コンテナ街から起き上がる巨人、巨大で強大な蒼の魔神はただ其処にいるだけで他者を圧倒した。――――幸い、時間的意味もあって一般人なら出歩いておらず、その存在は未だ誰かに認識されてはいないが……そんな事は関係ない。

「な、なななな……」

「なんなのよ、あれぇぇぇ!!??」

恥も外聞も捨て去った夜の空に響く遠坂凛の叫び、それはかの魔神を目撃した全ての者の心情を代弁するものだった。

◇

「……何なのよ、一体」

穿たれた黒い孔より現れた闇のような蒼い巨人、魔神とすら呼べる巨神の出現にイリヤスフィール＝フォン＝アインツベルンは混乱の窮地に立たされていた。

何故、こんなモノがこの冬木の地に現れるのか、何処か別の陣営の仕業？　今回のサーヴァント全員の能力を把握した訳ではないから定かではないが、それでも彼女に課せられた使命はただ一つ。聖杯戦争を勝ち抜き、聖杯を手に入れる。

だったら、目の前の障害は打ち倒すしかない。

「っ、少し大きいからってバカにして！　バーサーカー!!」

「■■■■■ッ!!」

少女――――イリヤの叫びと共に狂戦士は崩れるコンテナの中から跳躍し、その膂力で以て蒼の魔神と同じ目線の高さまで瞬く間に到達する。
手にした得物に力を込め、全霊を以て打ち込む。相手はまだ上半身だけ孔から出ている状態、即ちまだ完全な状態ではないと判断したイリヤは孔から完全に出てくる前にその機械の体を鉄屑にしてやろうと意気込む。
しかし、狂戦士の刃は届かなかった。魔神の周囲を覆う重力力場、可視化されて目視出来るほどに認識出来る重力の波、歪曲し圧壊せしめる魔神にとっての守護領域。
それに触れてしまった狂戦士の得物は、甲高い悲鳴の様な音を立てて歪み出す。歪み、捻れ、圧壊していく己の武器、このままでは己自身すら巻き込まれかねないと直感に従い武器を手放すが、そこへ振り抜かれた魔神の拳がバーサーカーの肢体を捉える。
無防備なまま跳躍した事により逃げ場を失ったバーサーカー、魔神の拳から逃れる術はなく、かのギリシャの大英雄はその直撃を受け、彼方へと吹き飛んでいく。
コンテナ街を抜けて、幾度と無く水面をバウンドしていく狂戦士は沖合いまで吹き飛び、沈んでいく。大きな水飛沫をあげるその様を目撃したイリヤは呆然とその様を眺めていた。
「なん、で……どうして、こんな」
バーサーカーは生きている。魔力によるパスの流れからそれは間違いない、問題なのはこれからどうやってこの魔神から逃げ延びるかだ。
イリヤスフィールは永年に渡りアインツベルンがその技術の粋を集めて生み出された過去最高の作品。故にその思考は早く、状況を加味し瞬く間に現状に於いて最上の選択肢を選び抜く。
撤退か、闘争か。無論、現実を見れば撤退する事が最優先だろう。目の前の魔神は自分達では敵わない、あの空間すら歪ませる守護領域を破るには最低でも対軍宝具級の威力が必要だ。
この魔神は何なのか、何が原因で現れたのか、何の因果でこの極東

の国に召喚されたのか。あれもサーヴァントの類いなのだろうか。未だ混乱し続ける思考の中でそれでも少女はこの場から生き抜く為の最善を尽くそうとする。
ふと、その時気付く。目の前の魔神からの攻撃は未だ無く、静かに己を見つめているだけという事に。
「……もしかして、お兄ちゃんを守ってるの？」
思えば、この魔神が現れたのはあの少年が倒れた時だ。関連性があるのは明らかで、事実目の前の魔神はこちらに向かって進んで攻撃しようとはしていない。
そして少年――――修司の方へ視線を向ければ、その傷が何事もなかった様に消えているのが分かる。肉を裂いて骨を砕き、臓腑を抉り出されたというのに、周囲には夥しい血の跡があるだけで修司には傷一つ付いてはいなかった。
どういう理屈かは分からない。けど、この魔神が自分達を倒すのではなく助ける為だけにこの場に現れた事に少女は何となく気付いた。
「……そう、今の貴方は私達を倒すのではなく、そこのお兄ちゃんを護る事を選んだのね」
目の前の機械的な魔神に言葉が通じるとは思わない。しかし、その巨きな佇まいが自身の信じる相方に何処か被って見えてしまう。だからだろうか、勝てる勝てない以前に修司と目の前の魔神とは敵対する意思が無くなってしまった。
「どうやら、余計な事をしたみたいね。ごめんなさい。今日の所は私達が引き下がるわ。――――バーサーカー」
海に沈む相方を霊体化させて呼び戻し、少女は踵を返す。
「それじゃあ、バイバイ。また会おうね。お兄ちゃん――――そうそう、お詫びといってはなんだけど、この街で騒ぎを起こした奴は私が片付けておくね」
それだけいって少女はコンテナ街を後にする。今度会ったら同盟を組むことを視野に入れて、イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルンはその場を後にする。
少女が去り、遠くから旗持ちの聖女が跳んでくる。それを確認した

魔神は孔の中へ沈むようにその姿を消していく。
「くっ、逃がしましたか。今の巨人は一体……」
　これ迄冬木の街に異常がないか確認の為、夜の深山町を探索していたジャンヌ、修司の通う学校に他者を巻き込む悪質な魔術師による罠が無いか調べようと穂群原学園に向かおうとした所、コンテナ街から巨大な気配が動いたのを感じ取った。見れば其処には蒼い魔神があり、バーサーカーらしきサーヴァントと戦っている。明らかに聖杯戦争とは逸脱している光景にジャンヌは驚愕した。
　そして急いで現場へと向かえば、バーサーカーとそのマスターは既に去り、魔神の姿は無くなっている。残されているのは――。
「……なんで、どうして、貴方が此処にいるんですか！　修司君っ！」
　恩人である筈の修司が大量の血の跡の上で倒れている光景だけだった。

◇

「成る程、あれが修司に取り憑いていたモノの正体か。成る程、成る程成る程――」
　冬木の遥か上空、黄金の船に跨がり下界の様子を眺める一人の王がいた。
　その口元は喜悦に歪み、初めて目にする存在にその心は本人が自覚出来ないほどに高鳴っていた。
「人類は、人は、其処まで至れるか。その領域に踏み入れる程の高みへ至れるのか。ふふ、フハハハ、フフハハハハハハッ!!」

「何と言う傲慢！　不遜！　不敬！　だが良い。それで良い！　人間とは傲慢なもの、人とは度しがたいモノ、己が生き延び、力を示すのに必要であるというのなら、それもまた許そう」
　それは王自ら認めた讃美だった。人類という無価値と定めた存在が生み出した極大の宝、傲慢でありながら挑み続けた人の技術の結晶。それを目の当たりにした黄金の王は呆れと喜びの笑みを溢れさせる。
「――しかし、修司よ。我が臣下よ、弁えているか？　貴様が悪と断じ、絶対に許さないと語る理不尽の有無を」
　しかしそれも束の間、英雄の王はその目を細くさせ、聖女に抱えられてマンションへ戻る臣下を見る。
「理不尽を、不条理を超えるというのは即ち己自身が他者にとっての理不尽となる事。それを理解した時、貴様は果たしてその道を進み続けるのか――此度に行われる聖杯戦争を以て、見定める事としよう」
　黄金の王の視線の先、それは臣下の行く末を案じたモノか、はたまた別のモノか。何れにせよ、修司がこの先戦いに巻き込まれていくのを王は確信していた。
　魔術師でもなく、サーヴァントでもなく、マスターでもない白河修司の聖杯戦争はこの時より始まった。

その18

――夢を、見た。剰りにも突飛で、剰りにも壮大な……まるで、映画のワンシーンの様な光景。

――そこは、無限の宇宙を往く鋼の艦であり要塞。人の願いと思い、そして闘争とその終焉を願い、託された宇宙の方舟。これから始まる壮大な戦い、戦争の前に二人の男が向き合っている。

『――』

『――』

何か口論をしているようだけど……聞こえない。片方の男は何か口調を荒立てているようだけど、対するもう一人の男はそれを微笑んで静かに首を横に振るだけだった。

微笑んでいる男には、何か大きなモノを背負っている様に思えた。富か、名声か、はたまた命そのものか、分かっているのは相対する友人の言葉程度でこの男の覚悟は微塵も揺るがないという事。

そして、男は飛び出した。戦争を仕掛け、死に場所を求めて出立する友を止める為に、男は一直線に駆け出し、友人に向けて拳を放ち――その拳は届くことはなかった。

斬られ、地に伏し、意識を失う際に男が発した最後の言葉――。

『ありがとう。最期に君と出会えて……本当に良かった。去らばだ』

〝我が友、シュウジよ〟

それは何処までも慈愛に満ちた友愛の微笑みだった。

――【獣の血】

それは闘争による進化。生きるという行為に於いて最も原始的な欲求、生きる為に戦い、生きる為に勝利し、生きる為に進化する。

――【水の交わり】

それは融和による進化。男と女、人と■■、異なる種族が、存在が、共に繋がって融和となる事で生命は新たな境地へ至る。

――【風の行き先】

それは開拓による進化。一つに留まり逼塞(ひっそく)するのではなく、心のままに新たな場所、新たな何かを求める為に立ち止まらず、我武者羅に突き進むこと。

――【火の文明】

それは文明による進化。人が生み出したものは人に新たな力を与え、与えられた力を用いて人は更なる何かを生み出し、生み出した何かが人に力を与えていく。

それら全てを踏破し、高みへ至る事によって、人は命は【太陽の輝き】へと至れる。

他者を理解し、受け入れ、共に歩む。そう、それこそが《■■■■》の極致、即ち――。

《■■》なのだ。

――欠けた夢を、見た気がした。

「――う、ん」

微睡みの中から意識が浮上する。瞼をうっすらと開き、視界に入ってくる見慣れた天井を目にした時、漸く意識は完全に覚醒する。

「――ここは、俺の部屋……だよな？」

辺りを見渡せばそこはやはり見慣れた自室だった。年相応のそれ

なりに彩られた部屋、閉ざされたカーテンからは日差しが溢れ、否応無く朝の訪れを認識させられる。
「――夢、だったのかな」
昨夜で起きた出来事がまるで夢の様で、今思い返しても現実味がまるでなかった。黒い巨人と白の少女、巨人との死闘と敗北。もしあれが事実ならば自分はとっくに死んでいる事になる。
――でも、あの時この身体に刻まれた痛みも紛れもなく覚えていて、何より。
「――マジ、か」
まるで鋭い刃に切り裂かれた様な袈裟斬りに刻まれた傷跡が、あの日の夜が嘘ではない事を告げていて、髪の一部もうっすら変色していた。

◇

『――それでは次のニュースです。昨夜の深夜未明、コンテナ街で起きたガス爆発に付いてです。これにより多くのコンテナが無惨に破壊されてしまいましたが、幸いこのコンテナの中には薬品や食品といった資材物資は積載されておらず、ガス爆発による弊害もないとされていますが、現在市は暫くの間コンテナ街の封鎖を表明しました。幸い怪我人は出ずに終わりましたが専門家によりますと――』
朝食も済ませ、後片付けをしながらテレビで報道されているニュースに耳を傾ける。どうやら世間ではアレがガス爆発によるモノである、という風にする事にしたらしい。明らかに隠蔽工作の類いだろうが、その件にガッツリ関わっている俺としては有難い話だった。
そして同時に、これでハッキリした事がある。昨夜のあの戦いには一定数の人間の思惑が関わっている、ということ。それがどれだけいるかは定かではないが、昨夜の戦いが知られるのを嫌がる者が確実に

存在しているのは確かだ。問題はその者達が何を目的としているのかだ、下手をすれば自分の様に巻き込まれる人間が出てくるだろう。更に問題なのがその戦いを目撃したものが何の躊躇いもなく消されてしまう、という事だ。

あの白い少女がそうだった様に、目撃者は殺されるのが決定付けられている。――――正直、ふざけるな。と、声を大にして言ってやりたい。

何故この国で、冬木の街で殺し合いなんかしなくちゃならない。なんで偶然目にした人間を殺さなくてはならない。殺し合いをするのなら誰もいない所で勝手にやればいいだろ。

殺し合いに巻き込まれた恐怖よりも、一方的な理由で殺しにかかる者たちに対する怒りの方が勝った。怖くないと言えば嘘になる。が、それ以上に連中の理不尽さに怒りを覚えた。

だけど、怒りで思考を停止させるわけにはいかない。この事態を早急に終わらせる為にも冷静に考えを纏める必要がある。疑問に思うのはそもそも何故連中はこの冬木で殺し合いなんかしているのだろう？

連中――――思い返すのはコンテナ街で戦う二つの影、片方は自分を殺そうとした黒い巨人と青い閃光のように矢鱈と速い男。あの二人だけが殺し合いをしているのか、それとも他にもまだいたりするのか、それすらも分からない。

（分からないと言えば、レティシアさんもなんだよなぁ……結局何をしていたんだ？　この人）

隣をチラリとフランスからの旅行客であるレティシアさんを見れば黙々と食器洗いを手伝ってくれる。昨夜は置き手紙なんか残して姿を消すから慌てて外に飛び出したが、今にして思えば不可解な点が幾つかある。

何故か冬木の地にいることを執着している事、タイミング的に考えれば彼女にも何か秘密があるのではないかと、変に勘繰ってしまう。フランスで受けた恩を返す為にもあまり余計な詮索はしない方がいいのだろうが、どうしても嫌な考えばかり横切ってしまう。

お陰で、朝の朝食ではあまり彼女とは話ができていない。レティシアさんも何だか少食だったし、シドゥリさんには余計な心配を掛けさせてしまった。このままでは不味いよな、どうにかして話を切り出さないと……。
「あの、修司君。今少し良いですか？」
「な、なに？」
そんな事を考えている内に向こうから切り出していた。思わず吃ってしまう俺。
「修司君は……その、今日も学校で部活があったりします？」
「え？　い、いや。多分今日は部活は無い筈だよ、まだ例の犯人が捕まったって話もないし、まだ当分放課後の部活動は再開されないと思う。まぁ、帰りに夕飯の買い物をしなくちゃいけないから、少し遅くなるかもだけど……」
「出来れば、早く帰ってきてもらえませんか？　昨夜の事で大事なお話があるんです」
――ドキリ。と、心音が高鳴った気がした。綺麗なレティシアさんの顔に……ではなく、核心を突くような彼女の言動に。
やっぱり、この人は昨夜の出来事に付いて何か知っている。それも今回の騒動の中心部分を、だ。何故ここで自分にだけ聞こえるように言うのか、幸いシドゥリさんはパソコンに向き合っていて此方に気付いた様子はない。
何を、と改めて聞いてもそれ以降彼女の口が開かれる事はなかった。ただ、迷っているような、不安に思うようなその表情をする彼女をただ見守ることしか出来なかった。
そして少しだけ食後の小休止をした後、登校する為に玄関を出る。今日は朝練も無く、比較的ゆったりできる貴重な日だ。シドゥリさんとレティシアさんに見送られて外に出ると……ふと、違和感に気付いた。
「――あれ？　俺んちって、こんなに低かったっけ？」
下を見ればそこにはコンクリートで出来た地上が見える。昔なら怖くて下を見ることも出来なかった。中学に入り、高校へ進み、身長

が伸びるに連れて住んでいる家との高低差にも馴れてきて、今は特に平気になったのだが……。
今は、そんな地上との距離がそんなに無いような気がするのは……一体どういう事だ？　此処から飛び降りても無傷で済む。そんな、よく分からない確信を抱いてしまう。
と言うか、何か身体が変に軽く感じる。昨日の自分がまるで石像に思えてしまう程に今日の俺は調子が良すぎた。
「っと、呆けてる場合じゃない。俺も早く学校に向かわないと」
自身の身体なのに別物になった気分だ。……なのに、不思議と不快感はない。あるのは本能的に肉体機能を抑えなければいけないもどかしさくらい。
……そう言えば、何か不思議な夢を見た気がした。今になって何故そんな事を気にしてしまうのか、しかし、思い返そうにも夢の内容は全く思い出せそうにない。
ハッキリとしているのはその夢が少しだけ悲しかったという事だけだ。

◇

それから変わってしまった一部の頭髪に教師やクラスメイトからツッコミがないか危惧していたが、幸いこれに気付いたモノは殆どいなかった。変色したと言っても本当にうっすらとだし、黒い頭髪の自分には目立った変化ではない。
そもそもうちの学校にはもっと派手な髪色をした奴がいるし、仮に髪を染めても誰も文句は言わないだろう。土郎とか間桐兄妹とか。
気付いた藤村先生も「あらイメチェン？　似合ってないわねー」と言われただけだし、葛木先生も「程々にな」なんて言われる程度だ。

クラスメイトの連中に至っては全くのノータッチである。
……あれ？　もしかして俺、皆に興味を抱かれてない？　空気みたいな扱いになってたりしてない？
と、ともあれ、これといってトラブルも無く学校も無事に終わりそろそろ下校しようかって時に……厄介な場面に遭遇した。
「なぁ頼むよ衛宮、助けると思ってさ」
両隣に下級生の女子を侍らせた慎二が士郎に弓道場の掃除を任せようとしていた。幾ら士郎が底抜けのお人好しだからって……いや、人間性を引き出したいからって、その言い方は無いだろうに――。
「あぁ、いいよ。構わないさ」
そしてコイツも馬鹿正直に真に受けるんじゃないよ。
「慎二、いい加減にしとけよ。幾らなんでもやりすぎだ」
「修司？」
「し、修司。……なんだよ、お前には関係ないだろ！」
「関係ないわけ無いだろ。士郎は弓道部とは無関係と言ったのはお前だろうが、それに今日の掃除当番はお前だって聞いたぞ？　――なぁ、一体どうしたんだ慎二、ここの所のお前、少し変だぞ」
「うるさい！　お前なんかが僕に命令してるんじゃない！　くそっ、今にみてろよ……！」
そう息巻いて慎二は廊下をズカズカと進み曲がり角へ消えていく。他二名の女子も俺達に頭を下げて後を追う。
――あの様子だと帰ったんだろうなぁ。美綴からそれとなく話をしてやってくれって頼まれたのに、まるでダメだった。
と言うか、本当に慎二の奴どうしたんだ？　あの必死の形相、あれじゃあまるで高校入学当初の頃に戻った様な――。
「じゃあ、俺もそろそろ行くよ。修司も気を付けて帰れよ」
「って、ちげーよ、そうじゃないだろお前も」
「？」
自分がどうして呼び止められたのか、士郎は本気で分かってないように首を傾げる。前々から思ったけど、人からの感情に鈍すぎないか？

「お前もお前だ。なに慎二の嫌味を真に受けてんだよ、あんなの普通断るだろ？」
「いや、けど放っておけないだろ？　あのまま放置してたら慎二の奴怒られるぞ？」
「その方が良いんだよ、お前が気に掛ける事じゃない」
「そうも言ってられないだろ？　慎二が怒られてまた癇癪起こしたら、それこそ弓道部の後輩たちが被害を被る事になる。お前も聞いただろ？　遠坂にこっぴどくフラれた慎二が後輩一人をいびり倒して退部に追い込んだ話」
　それは確かに俺も聞いた。というか美綴から聞かされた。俺と士郎、慎二は中学からの付き合いだし、慎二も何だかんだで俺の言葉には耳を傾けてくれる。それもあって美綴は昼休みに俺にも相談を持ち掛けたのだけれど……これじゃ申し訳が立たないな。
「そん時は俺がしばく」
「それで陸上のエースが暴行容疑で大会の出場停止なんかになったら、それこそ皆迷惑が掛かるだろ？　慎二が言うようにどうせ暇なんだから、お前も気にすることないだろ？」
「――――」
　あーもー！　このブラウニー坊っちゃんがぁぁぁっ！　なんでこうも頑固なんだ！　どうしてここまで言って妥協するという事をしないんだ!?
　お前には、家に帰ったら桜ちゃんという天使が待っているんだろうが!?　あの微笑みを浮かべて、「お帰りなさい、先輩（はぁと）」と言って帰りを待ってくれる素敵後輩がいるんだろうが!!　クッソネタマシイ……。
　お前に何かあったら桜ちゃんが悲しむだろうが!!　桜ちゃんだけじゃない、藤村先生も、俺も、慎二も、学校の皆だって悲しむ！　最近冬木が物騒な空気に包まれ始めてるの知ってるだろうが！　何で自分の身を案じない!?　アレか？　コイツには何か強迫観念的な何かがあったりするのか？　昔のコイツに何があった!?ここまで意固地になる理由は一体なんだ!?

いっそのこと、昨日俺が体験したことを全部ぶちまけてやろうか？
そうすれば流石のコイツも危機感を抱いて早めに帰ろうと思うだろ。……いや、ダメだ。どう言っても「夢でもみたんだろ？」の一言で両断されて終わりになる未来しか見えない。俺自身未だに夢なんじゃないかって思ってるんだもん、説得できる気がしない。
「……はぁぁぁぁ、仕方ない。俺も手伝うよ」
「え？　な、何でそんな話になるんだよ？」
「士郎一人に任せたらそれこそ時間掛かるだろ。一人より二人の方が効率はいい、俺も何度か弓道部に出入りしてるし勝手は分かる。そら、早く行くぞ、俺だって今日人を待たせてるんだからな」
「なら、やっぱ俺一人で片付けた方が……」
「うっせ、口答えすんな」
「???」
このまま話をしても拉致が明かない。言葉よりも行動で示した方がまだコイツには効果があると判断した俺は、後ろで遠慮の言葉を吐き続ける士郎を無視し、弓道場へ向かった。

◇

――――そして、二人で掃除をした事により弓道場の整理は問題なく終わった。士郎が弓矢の整備をしている間に俺が掃除を終わらせ、残った雑務も二人で行った事で無事に終了した。
二人でやりきった事で予定よりも早めに終わったが、それでも道場を出る頃には学校に人気もなく、空も大分暗くなっていた。
（あーあ、完全に遅れちゃったよ。レティシアさんに何て言おう）
何か大事な話があったらしいのに、これでは余計に心配を掛けるばかりだ。これならレティシアさんに連絡先聞いておくんだった。

「士郎、戸締まりは終ったか？」
「あぁ、ちゃんと確認した。しかし修司、何だってお前まで残るなんて言い出したんだ？　確かにお前の手際の良さは知ってるし、俺一人でやるより効率は良いんだろうけど……何だって手伝ってくれたんだ？」
「……お前に何かあったら、桜ちゃんが悲しむだろ」
「……なんでそこで桜が出てくるんだ？」
「はぁぁぁぁぁぁ……」
　色々言いたい事はあるけれど……今は止めよう。いい加減帰って夕飯の準備もしなければいけないし、不思議に首を傾げる士郎を無視して帰路に着こうと一歩踏み出すと。
「あっ、しまった。教室に弁当箱忘れちまった！　悪い修司、先に帰っててくれ」
「……おい、まさかお前」
「違うって、本当に忘れ物を取りに戻るだけだ。ありがとうな。それじゃあ、また明日」
　そう言って士郎は踵を返して校舎に向かう。小言の一言でも言ってやりたいが、そもそも教室に戻らず一方的に弓道場に向かったのは俺だ。
　本来なら校門で待っているべきだろうが、生憎今日はレティシアさんに先約を取られている。これ以上の遅れはしたくない。一人学校に残す士郎を申し訳なく思いながらも、俺は一人帰路に着くのだった。

◇

「――やっぱ、なんか変だ。身体の調子が良すぎる」

何時もより早く大橋を抜けて新都へ辿り着いた。普段ならこのペースでここまで来たら流石に呼吸の一つも乱れるのに、今は全くその気配がない。
身体から力が溢れてくる様だ。もしやこれが噂に聞くランナーズハイという奴なのか？　……いや違うな、あれは長時間の運動によって引き起こされる陶酔感だ。そもそもそこまで疲弊してない俺にランナーズハイなんて現象が起きる筈がない。
やっぱり、昨日のアレで箍が外れたのだろうか。人間は普段脳のリミッターが掛けられてるって言うし……アレ？　確かそれはここ近年で間違いだって立証されなかったっけ？
「まぁ、先ずは家に帰ることが重要だよな。今頃レティシアさん心配してるだろうし」
そう思い速度を上げようと脚に力を込めて……その光景を目にしてしまった。
「……アレって、慎二と……美綴か？　アイツら何して――」
人が行き交う歩道で二人の男女、慎二と美綴の姿を目撃した俺は、ふと気になり脚を止める。遠巻きから見てるだけだったが、何やや雲行きがおかしい。何やら言い合いをしている二人、と言っても捲し立てるのは美綴の方で慎二は涼しい顔している。
軈て鬱陶しくなったのか、慎二は美綴を振り切って路地裏へと消えていく。美綴も言い足りていないのか、自分を無視する慎二を追って路地裏へと向かっていく。
……いやな予感がする。消える二人に一抹の不安を感じた俺は内心レティシアさんに謝り、俺も二人の後を追うことにした。
路地裏の奥へ進むにつれて人気は少なくなっていく。もしここで慎二の悪い友達に絡まれたりしたら、流石に美綴でも危険が伴う。確かに美綴は様々な武術を習っていると本人から耳にしているが、それでも多勢に無勢では不利がある。
俺ならば美綴一人くらい抱えて逃げるのもわけないので最悪そうするかと気持ちを固めていた時。
「きやぁぁぁあっ!!」

「っ！」
向こうの角先から美綴と思われる女性の悲鳴が聞こえてきた。瞬間、俺は脚に込め力を強めて一呼吸の合間に悲鳴があった場所へ到達する。
見れば、其処には横になって倒れ伏す美綴の姿があった。何かあったのかと不安に煽られて駆け寄ろうとするが、不自然に浮いている美綴の首回りを見て違和感を感じた。
「あれー？　何で修司もいるんだ？　もしかして、僕達の後を追って来ちゃったのかなぁ？」
通路の奥、ビルに備え付けられた階段からゆっくりと降りてくる一人の男、如何にも事情を知っていそうなその男は不敵な笑みを浮かべて俺を見下ろしてくる。
「全く、神秘の隠匿は魔術師の義務とはいえ、流石に顔見知り二人も相手にしなくちゃいけないなんて、僕はなんてついてないんだー」
白々しく語る慎二、その手にした本が妖しい光を放つと、美綴の身体が浮き上がり彼女を咥えていたモノの正体が顕になる。
「――やれ、ライダー。記憶があやふやになるまで搾り取れ」
それは手足が長く、身長の高い女だった。華奢な体躯、しかし俺は直感で理解する。目の前の女は昨夜の黒い巨人と同質な存在なのだと。
女が手にしている得物は……鎖、相手を逃がさず決して離さない鎖の鞭。しなる身体を翻し、突っ込んでくる女に対し、俺は意識を戦闘体勢に移して迎え撃つのだった。

「――ククククク、そうか、アレが昨夜の魔神を飼っている小坊主か」
「此度の聖杯戦争、中々面白くなりそうじゃわい」
蠢く蟲の中で腐った悪意が動き出す。

その19

――あぁ、そうだ。俺はこれを知っている間近に迫り、そして今俺の心臓を今一度食い破ろうとしてくるモノ。それは……死だ。
「しかし分からねぇな、機転は利くくせに魔術はからっきしときた。筋はいいようだが……まだ若すぎたか」
目の前に突き付けられた朱い槍、それは間違いなく俺に狙いを定めていて……そしてそれは決して外される事はない。俺の、衛宮士郎はここで終わる。何も出来ず何も為す事なく、抵抗らしい抵抗が出来ないままに終わる。
――ダメだ。それは認められない、認める事が出来ない。
「もしやと思うが――お前が七人目だったのかもな」
死んでしまったら、義務が果たせない。誰かの手によって俺が救われたのなら、それ以上の人達を救わなければならない。それが出来ずに死んでいくのは他ならぬ自分自身が許さない。
「ま、だとしてもこれで終わりなんだがな」
世界から消えていく感覚、免れぬ死の運命。でも、それでも俺は足掻く事を選んだ。
「ふざけるな！　俺はこんな所で意味もなく、お前みたいなヤツに、殺されてなんか――やるものか！」
「七人目のサーヴァントだと!?」
――瞬間、風が吹き荒れた。
気付けば、其処に槍の男はいなかった。代わりに其処に立つのは月の光を浴びて何処までも幻想的で神秘的な――剣の騎士。その光景にただ見惚れていた俺は。
「――問おう、あなたが私の……マスターか？」
その日、運命と出逢った。

◇

――――鎖が縦横無尽に駆け巡る。左右上下に張り巡らせるソレは、獲物を逃がさない蜘蛛の巣の様。そこを駆け巡り修司を撹乱しようと動き回るのは目隠しをしたボディコン姿の女性、長い髪を翻し長身を活かして鎖の上を疾走する姿は蜘蛛というより蛇に近かった。

「悪く思うなよ修司、悪いのはノコノコここへ来たお前なんだからな。なぁに、殺しはしないよ。僕は優しいからね、精々二、三日動けなくなるだけさ！　これに懲りたら人に指図するのを控えるんだなぁ！」

捲し立てる慎二に対し、修司は何処までも平静だった。その視線は鎖の上を奔る女性に向けられており、その視線は一度も外れる事はない。

その様子を怯えて何も言えないのだろうと察した慎二はその笑みをより歪に歪ませる。勉学でも身体能力でも誰も修司という人間に勝てた者はいなかった。慎二は勿論、穂群原学園のマドンナと言われる遠坂ですら白河修司の前では一歩劣る。

しかし、魔術という人の枠外の力を以てすれば目の前の男など路傍の石ころに過ぎない。どれだけ腕っ節が有ろうと、どれだけ喧嘩が強かろうと、所詮は学生、同じ土俵にすら立てない相手を一方的に蹂躙する。

嗚呼、それは何て罪深く抗い難い甘美なのだろう。初めて人に行使する力に酔しれる慎二は目の前の友人を間抜けな獲物に貶めた。

「やれ！　ライダー！」

慎二の手にした本が妖しく瞬き揺らめくのと同時に女の動きに変化が生まれる。加速し続けてきた動き、慣性の法則に従い勢いを増したその速さは一本の鎖へ着地し、その勢いを一点に集約させる。

ギリギリと引き絞られる鎖はさながら弓矢の弦の様相のそれ、そして矢となった女にその手に短剣を握り締め――――今、放たれた。

真上からの強襲、素人に避けるのは不可能。刹那の後の惨劇を前に

慎二の目が歓喜に大きく見開かれた時。
ライダーと呼ばれた女性は慎二の横を通り過ぎ、ビルの壁へと激突した。
「――――へぇ？」
眼前に広がる光景、そこにはライダーによって蹂躙される友人の姿は無く、慎二の視界に映るのは左足を突き出して堂々と立つ修司の姿だった。
ライダーの短剣による突きを寸前で横に回避し、無防備となった腹部に軽めの蹴りを放っただけ、昨夜の黒い巨人の突進に比べたら何て事ない女の襲撃を修司が難なく対処しただけ、それを理解するのに慎二の脳は数十秒の時間を有した。
（――咄嗟に蹴っちゃったけど、大丈夫だよな？　仕掛けてきたのは向こうだし、凶器も持ってたし、軽めに蹴っただけだし、正当防衛の範疇……だよな？）
一方で修司の方は困惑しながらも冷静に状況を整理していた。自分が相手にしたのは妖しい格好をした女、その手には凶器を持っており理由もなく襲い掛かってきた所を反撃、普通に考えれば正当防衛だ。
ただ一つ異なっているのは自身の放つ蹴りが異常な威力を持っていたという所。加減はしたつもりだった。吹き飛ばすのではなく、あくまで動けなくなる程度、当たり処が悪ければ肋骨の骨が一、二本折れる――その程度の威力のつもりだった。
しかしそれが十数メートルの距離があるビルの壁に激突し女性はごみ置き場へ倒れ、その口元には血が吐き出されている。端から見れば正当防衛ではなく過剰防衛にシフトしそうな光景、せめて寸止めしておけばよかったと後悔する修司の脳内の裁判官が有罪の紙を広げようとした所で、発狂染みた慎二の声が響き渡った。
「なんで、何でお前が勝ってんだよぉぉっ!?　お前人間だろ!?　唯の人間だろぉっ!?　ちょっと僕より勉強が出来て運動が出来るだけの人間が、どうして僕のライダーを倒してるんだよぉっ!?」
「おぉう？」

慎二の断末魔に似た叫びに思わず後退る。確かに思っていたより強く蹴りすぎたのは認めるが、それでも此処まで取り乱すとは思わなかった。吹き飛んだ女から感じられた異質なモノ、それは昨夜の黒い巨人と同質な存在なのだと……それだけは確かだ。

けど、それにしては今のボディコンの女は弱かった。鎖を用いて撹乱しようとするのは……まぁ、悪くはない。が、それ以上に遅すぎる。あの黒い巨人とは雲泥の差だ。あれでは中学の時に戦ったネルロ某の方がまだ手強かった。

（いや、考えるべきはそこじゃない。慎二が従えていた女性はあの巨人と同じ存在（モノ）、それはつまり）

目の前の友人はあの白い少女と同じ立場にいる。その事実に気付いた修司は未だ狼狽する慎二へ向き直り、眼を細めて問い詰める。

「慎二、聞かせて貰えるんだろうな」

「っ！」

「まさか、此処までの事をしておいて……オメオメと帰れると思っているのか？」

眼を細め、修司は僅かばかり怒りを顕にすると、慎二の表情が憤怒の形相から怯えの色に染められる。自身がけしかけた使い魔がアッサリと返り討ちにあった事実に未だ整理が出来ていない。そんな彼に追い討ちするように慎二の手にした本が火が灯り、瞬く間に燃え広がっていく。

「あ、あぁぁぁぁっ!!　燃える！　僕の令呪が燃える！　消えろ、消えろ！　消えろよぉっ！」

「お、おい慎二……」

燃えて灰になっていく本をそれでも慎二は未練がましく縋ろうとする。事情も何も知らない修司だが、友人の見たことのない必死さに怒りよりも憐憫の気持ちが沸き上がってきた。

「あ、あぁぁぁぁ……」

結局、慎二の持っていた本は燃え尽きて灰となり消えていった。それに呼応するように倒れていた女は光の粒子となり、霧散するように消えていく。まるで最初からそこにいなかった様に――――しかしど

こか違和感があった――――消失する女、初めて目の当たりにする現象に修司は眼を見開くと、周囲に聞き慣れない老人の声が響き渡る。
『可可可可、よもや我が代からの参加者が最初に脱落するとはのぅ。しかも相手は巻き込まれただけの一般人と来た。慎二に魔術師としての才が無いのは疑いがないが、それもここまで来るといっそ清々しい。いやはや、愉快愉快』
「ひっ！　お、お爺様！」
「お爺様？」
　慎二がお爺様と呼ぶ割にはその表情は恐怖で満ちていた。気付けば辺りには蟲の羽音やら鳴き声、ギチギチと顎を動かす咀嚼の音が響いている。
　先程まで蟲なんて何処にもいなかったのに……と、思考は一時中断させて、修司は何処から強襲されても対応出来るように美綴の側まで駆け寄って身構える。
　すると、ビルの影から一人の老人が姿を表した。外見はヨボヨボ、押せば倒れると思われる程の高齢な老人。杖を付き、無防備を晒しているというのに修司は言いし難い怖気を感じた。
「慎二、よもや遊び半分で挑んでおきながらこの体たらくとはのぅ、呆れてモノも言えん。どうやら血筋だけでなくその精神まで間桐は途絶えてしまったようじゃ、残念無念」
「ち、違うんだお爺様！　僕はまだ、まだ負けてない！　ライダーが、あの女が雑魚なのがいけないんだ！」
「いずれにせよ、間桐の敗北よ。……しかし、驚くべきはお主よ。少年、名は何と言う？」
「……白河、修司」
「ほうほう。よもや人間の中からお主のような強者が生まれるとはのぉ。知っておったら早々にこちら側へ引き込んでおったのに……全く、残念で仕方ないわい」
「……で、これからどうする」
「ん？　どうするとは？」
「俺はあんた等からすれば余計なイレギュラーなんだろ？　目撃者は

消す。昨日の白い少女みたいに俺の口封じをしようとはしないのか？」
今の自分の側には美綴がいる。彼女を巻き込まない様に、可能な限り刺激しないように構え、修司は老人を見据える。
「ふふふ、怖い怖い。そう睨んでくれるな。サーヴァント相手に大立ち回りする人間を襲おうなど愚かな事はせんよ。それに、下手に追い詰めた所でアレを呼び出されてはそれこそ敵わんからのぅ」
（アレ……だと？　一体何を言ってるんだこの爺さん）
目を細め、その笑みを深める老人に修司は黙して見据える。老人が語るアレとは一体なんなのか、昨夜の出来事を断片的な部分が思い出せない。
思い出せるのはあの黒い巨人に殺されかけ、そして死にかけたという事。切り裂かれたのは間違いない、あの日体験した痛みは全てこの身体が覚えている。
――なら、何故自分は生きている？　過去の出来事を思い出そうとして。

蒼い魔神の姿が脳裏を過った。

（――なんだ、今の幻影（ビジョン）は？）
それは強烈なイメージ映像だった。あらゆる破壊魔を掃討し、あらゆる悪意を消滅し、あらゆる怪物達を粉砕する。脳を駆け巡ったその映像に立ち眩みを覚えた修司は、足元をふらつかせて膝を地に付ける。

しかし、それでも目の前の老人から視線を逸らす様な事はしない。今ここで一番危険なのはこの老人なのは間違いない、一瞬でも気を逸らせばその瞬間餌食になる。そう危機感を抱ける程度の圧が目の前の老人から感じられた。

「……さて、儂等も引き上げるとしよう。ではな白河の、再び見える日を楽しみにしておるぞ」

そう言い残し、老人は出てきたビルの影へと戻り姿を消していく。何かが蠢く音と羽ばたく音が鳴り、それもすぐに消えていき老人の気配はなくなっていた。

「あっ、ま、待って、待ってくれよお爺様！」

「おい、慎二！」

老人の後を追って慎二もその場から逃げ出す。そうはさせないと呼び止める修司だが、未だ眩暈は収まらず、脱兎の如く逃げていく慎二を止める事は出来なかった。

（慎二の爺さん、確か間桐臓硯……だったか？　深山町では名士として知られ俺達の学校のＰＴＡの会長――それほどの人物もこの件に関わっているのかよ。でも、じゃあまさか、桜ちゃんも？）

冷静に状況を整理しようと思考を巡らせるが、次に頭に浮かぶ可能性に修司の心音は跳ね上がる。慎二という中学からの友人もサーヴァントとかいう良く分からない輩と結託してクラスメイトを襲っていた。なら彼の妹の間桐桜、彼女もまた今回の件に関わっているのか。

その不安が修司の思考を巡らせる。が、今はそれよりも優先しなければならない事がある。後ろで倒れている同級生に向き直って腰を下ろし、その身体を抱き上げると、その身体が冷たくなっているのが分かる。

「おい美綴、俺が分かるか？」

「――あ、う」

刺激を与えないよう揺らさずに声だけ飛ばして呼び掛けるが、彼女からの返答は無かった。虚ろな瞳で焦点が定まらず、明らかに尋常ではない状態。幸い息はしているようだが……ここはやはり病院に運

ぶべきだろう。
「修司君ッ！」
　その時、背後から声が掛けられた。振り返れば鎧を身に纏い旗を持った金髪の少女が此方に向かって駆け寄ってくる。
「れ、レティシアさん？　何でこんな所に？　　て言うかなんだよその格好」
「修司君がいつまで待っても帰ってこないから心配で……偶々近くで魔力のざわめきがあったのでそれを追って来たんです。あと、私の格好についてはあとでご説明します」
「あ、そっか。ごめんレティシアさん。本当は俺もすぐ帰るつもりだったんだけど……ちょっと巻き込まれちゃって」
「今はその事に付いて言及はしません。それよりも彼女、少し看させてもらって良いですか？」
　言うや否や、鎧の乙女は修司の了承の確認を取らず美綴の額に手を当てる。触診のつもりだろうかと訝しむ修司だが、生憎彼に医学……特に内科の知識はあまりない。それで何か分かるのだろうかと少し不安に思った時。
「良かった。どうやら魂喰いはあまりされて無いようですね」
「へ？　た、魂？」
　目の前の少女からサラリと恐ろしい単語が出てきた事に修司は面食らう。けど、その安堵の様子からどうやら美綴に心配が無いというのは本当の様だ。
「一応、彼女を教会に連れて行きましょう。彼処の神父に診せれば恐らく確実かと」
「き、教会？　病院じゃなくて？」
「修司君」
　戸惑う修司に聖女の凛とした声が響く。
「詳しいことは其方でします。不思議に思われるでしょうが、今はどうか堪えて下さい」
　その眼は何処までも真剣だった。巫山戯ている様子も自分を騙そうとする意思も目の前の少女からは微塵もない。恐らく今朝彼女が

話していた大事な要件とやらも向こうで話すつもりなのだろう。
「――分かった。じゃあ、行こう」
「ありがとう修司君、では彼女を此方に。私ならば道なりでいけば此処から10分も掛かりません」
「いや、それじゃあ遅い。道なりで進んだりしたら、信号とかに捕まって余計遅くなる。――仕方ない、今は非常時だからと割り切るか」
そう言って修司は美綴を抱えたままビルの壁を蹴って屋上へ昇っていく。その光景に乙女は一瞬呆けるが、首を振って慌てて修司の後を追う。
(は、速い!? もうあんな所に!?)
屋上へ昇れば既に修司の姿は遥か遠くへ進んでいた。ビルの屋上を蔦って掛けていく、障害物を遣り過ごし、一切速度を落とさずに夜の新都を掛けていく姿にジャンヌは言葉を失ってしまう。
急いで修司の後を追う。この身はサーヴァントの筈なのにしかし彼との距離は一向に縮まらない、結局追い付いたのは教会の門の所で、息を切らす自身に修司から心配の言葉が掛けられるのだった。

◇

「師父! 師父! スミマセン、居たら此処を開けてください!」
夜も更け始め、新都の明かりも届かなくなってきた冬木の教会。辿り着いた教会は暗闇に包まれ、もしかして不在かと焦る修司が扉を忙しなく叩くと、程無くして教会から灯りが灯る。開かれた扉の先には僅かに不機嫌そうな神父が顔を覗かせていた。
「何だ修司、この夜更けに。深夜徘徊は感心しないぞ」

「すみません師父、でも急患なんです！」
「急患？　私は医者ではないが？」
「そ、そうなんですけど……その、彼女に言われて、念の為に此処へ連れてけば安心だって」
「……なに？」
　修司の必死の弁明に一瞬目を開き、次に修司の後ろで旗を握り締める聖女に視線を向ける。悔しそうな、悲しそうな、僅かに怒りの感情を募らせている彼女の表情を見て言峰の顔が喜悦に歪む。
「――良いだろう。彼女を中へ連れてこい、可能な限り診てやる」
「あ、ありがとうございます！」
　中へ入るよう促してくる神父に付き添い教会へ足を踏み入れる。躊躇無く踏み入れる修司に心配しながら、ジャンヌも彼の後を追った。
　その後、美綴を手渡し、祭壇の奥の部屋へ引っ込む言峰を見送った後、修司は椅子に座って同級生の無事を祈った。不安に包まれながら黙すること三十分、ガチャリと戸を開けて出てくる言峰に修司は漸くかと立ち上がる。
「安心するがいい、彼女は無事だ。少々深く昏睡しているが、数日もすれば良くなる。一応、病院にも連絡しておいた。直に救急車も来るだろう」
「そ、そうですか……はぁぁぁぁ、良かったぁぁぁ」
　深い溜め息と共に脱力した修司は再び椅子に腰掛ける。その様子を微笑ましく思うジャンヌだが、次に言峰から紡がれる一言に表情を引き締める。
「さて、では修司よ。一体何があった？　何故魂喰いをしているサーヴァントに出会して、お前は無事でいられた？」
「……っ！」
「師父？」
「あぁいや、成る程。そう言えばお前は何も知らないのだったな。魔術の事も、神秘の事も、何もかもが」
　サーヴァント。昨夜から何度も耳にする単語に修司の目が見開か

れる。対する言峰は久し振りに目にする唖然とした弟子の表情にその口元を歪ませ……。

「修司、お前は――――聖杯戦争という殺し合いを知っているか？」

遂にその時が来たと、極上の愉悦に身を震わせるのだった。

その２０

「――聖杯……戦争？」
　夜の冬木の教会で修司の間の抜けた声が響く。初めて耳にしたその言葉に訝しんでいると、眼前の神父はその口角を僅かに吊り上げて頷いた。
「そう、この冬木の地で聖杯を巡って幾度と無く繰り返されてきた過去の英霊を持ち込んでの血腥い殺し合い。あの少女はその聖杯戦争に巻き込まれた被害者なのだろう」
「ち、ちょっと待ってくれよ師父。いきなり情報が多すぎて何が何だか……それに過去の英霊って何だよ、それって昔の偉人達の事――なのか？」
「そうだ。ある儀式によってこの世に招かれた七人の英霊、通称サーヴァントと呼ばれる使い魔達を用いての魔術師同士の殺し合い。それが聖杯戦争だ」
　過去の英霊、サーヴァント、魔術師。いきなりのオカルトに修司は目が回りそうだった。聖杯？　万能の願望器？　七人のサーヴァントと魔術師による殺し合い？　まるでフィクションの様な話だ。目の前の師父の人の悪さは十年の付き合いでそれなりに理解しているが……これは少々度が過ぎてる。
　ふざけるなと一蹴してやりたいが、言峰が嘘を吐いている様子はない。嘘にしては話が出来すぎているし、何より彼には嘘を吐く意味がない。
　戸惑う修司を前に尚笑みを浮かべる神父、戸惑い、迷い、動揺している弟子の態度に彼の歪んだ欲望は大いに刺激された。
　そんな言峰の心境を見透かした様に、今まで黙していた聖女が口を開いた。
「――信じられないのも無理はありません。ですが、これは事実なのです。修司君」

「レティシア……さん？」
「この世界には神秘を行使するための魔術という技能が古くから存在し、その魔術を修めた魔術師なる存在が確かに存在しています。貴方も身に覚えがある筈です。嘗て貴方が世界中を旅して死徒……いえ、悪漢達を倒して廻りそしてその元凶と戦った時の事を」
聖女のその問い掛けに呼応し、修司の思考は過去に向く。フランスの首都であるパリの地下、其処で人々を悪漢に仕立て上げる麻薬をばら蒔いた元凶、その男は自らを魔術師と名乗り、それを知った自分を殺そうとしてきた。
当時はただのオカルトマニアのイカれた男かと思っていた。黒魔術に傾倒し、それを真似て模倣しただけのサイコ野郎、しかしその認識はどうやら誤りだったようだ。
「……マジか」
目を見開き、呆然となる修司にジャンヌは申し訳なさそうに頷いた。漫画やアニメでしか知り得なかった魔術、それが実在していると知って動揺してしまうが、いつまでも慌てふためいてばかりもいられない。
話の流れからして、自分はどうやら今回の事件の入り口にすら立てていなかった様だ。事態を正しく認識する為にも修司は言峰の話に聞き入る事を選んだ。
「では、続きを――――いや、話を戻そう。七人のサーヴァントを聖杯の力で召喚し、魔術師同士が殺し合う。では、サーヴァントとは何か？
修司、お前は過去の偉人と言ったが、具体的にはどんな人物だと思う？」
「え？　えーっと……織田信長とか、豊臣秀吉とか、徳川家康とか、外国ならニコラ・テスラとか、エジソンとかあとは……ダ・ヴィンチとか？」
「そう、何れにせよこの世界に偉業を果たして名を刻んだ者、伝説、神話、伝承、それらに記された者も全て聖杯に召喚される可能性のある者達、それが英霊でありサーヴァントなのだ」
「伝説や神話……て、それじゃあ何か？　その聖杯戦争にはアーサー

王とかアレキサンダー大王とかが参戦してくる可能性があるって事かよ」
「然り」
「――――」
アッサリと肯定する神父に修司は今度こそ言葉を失う。伝説、神話、過去の偉人どころかもっとヤバイ連中が召喚される可能性を示唆された修司は呆然とその二人が対峙する様を想像する。
光輝く聖剣を携える騎士達の王と、世界を征服せんと遠征に遠征を続けた大王。……アカン、この戦いの勝敗がどちらに傾くのか、想像力の乏しい自分では考えられない。
「何を呆けているのか知らんが、実際お前の隣にいる聖女もその一人だぞ。オルレアンの乙女と言えば分かる筈だが？」
「――――嘘」
言われて振り向けば、苦笑いのジャンヌが頬を掻いている。オルレアンの乙女、それを言われて分からない人間などそうはいない。これまでレティシアと思われていた人物がイギリスからフランスを救ったとされる猛者だったとは……。
「え？　で、でも最初に会ったときはレティシアさんだって……」
「私の召喚は少々特殊ですので彼女を依り代にして現界させて戴いているんです。……その、今まで黙っていてご免なさい」
そう言って頭を下げてくる彼女に修司は別段怒り等の悪感情は抱かなかった。確かに自身をレティシアと偽ったのには不思議に思うが、彼女の人となりはここ数日一緒に過ごして少しは分かったつもりだ。
彼女は悪人ではない。少なくとも切り裂きジャックや嘗てのフランス軍の元帥ジル＝ド＝レェや悪名高い偉人に比べたら彼女は断然イイ人だ。少しポンコツ気味だけど。
「……まぁ、その事は別に良いさ。別に気にしていない。黙ってたってのも俺やシドゥリさんに余計な心配をさせたくないって所なんだろ？　なら、良いさ」
「修司君……」

「まぁ、聖女様にしては少々抜けてる所があるしな。財布を盗まれて途方にくれる聖女様とか、ちょっとレア過ぎる」
「そ、それは！　わ、忘れてください！」
　旗を握り締めて顔を赤くさせて抗議してくる聖女を余所に、修司の思考は一気に冷静さを取り戻していく。
　そして同時に自分が目の前の神父に訊ねるべき問いも決めた。落ち着いた思考を循環させ、情報を脳内の棚に収め、次に得られる情報を整理させる為に修司は言峰に言葉をぶつける。
「師父、聖杯戦争ってのがどういうモノなのかは理解できた。その上で幾つか質問したいのだけど……いいか？」
「良かろう。話してみるといい、答えられる範囲でなら応えよう」
「まず一つ、その聖杯戦争は過去に何度も行われてきた様だけど、今回で何度目だ？」
「五度目だ」
「これまで五回の間で聖杯って奴を手にした奴はいるのか？」
「……前回では聖杯に手を掛けたモノがいたが、結果を言えばＮＯだ」
　前回、そこで僅かに言い淀む言峰に違和感を覚え、そして確信した。震える手に力を込めて平静を装いながら、修司は質問をより深く切り込ませていく。
「その、前回の聖杯戦争ってのは……一体、何年前の話だ？」
「修司君？」
　どうやら声が少し震えていたらしい、修司の様子が変だとその質問で何となく察したジャンヌ。対して言峰はその質問に対してその口元を愉悦に歪ませて……。
「１０年前だ。あの日、冬木で起きた大火災。その原因となったのが聖杯戦争。つまり、嘗てのお前は当時の聖杯戦争に全てを奪われた被害者という事になる」
「っ!?」
　明かされる真実にジャンヌは言葉を失い、修司の眼が怒りに染まる。思い浮かぶ光景、忘れもしない死と炎に包まれた地獄の世界。父と母を殺し、祖母との思い出の地を汚し、多くの犠牲者を出した災厄。

その元凶が聖杯戦争。自分の望みを叶える為に手前勝手な殺し合いをした挙げ句、冬木を地獄に変えたふざけた儀式。この時、修司は自分が何をしたいのか、何をするべきなのか分かった気がした。
「――そっか、ありがとう師父。色々教えてくれて」
「そう思うのなら、今度は私の問いにも応えて貰おうか。白河修司、我が弟子よ。今の話を聞いてお前はこれからどうするつもりだ？」
「決まってる。〝ぶっ潰す〟んだよ、その聖杯って奴も、それに群がる魔術師も、二度とそんなふざけた儀式が出来ないように跡形もなく潰してやる」
それは、修司にとって当然とも言える選択だった。嘗ての地獄を生み出した元凶が、今この冬木の地で蠢いている。許せる筈がない、聖杯戦争を行うという事は再びあの地獄を具現化させるという事、それは修司にとって何よりも許せない所業である。
「ふふふ、ぶっ潰すと来たか。しかし修司よ、分かっているのか？　お前はサーヴァントを使役しておらず、マスターでもなければ魔術師ですらない。唯の一般人でしかないお前が聖杯戦争に参加するというのか？」
「――それは違うぜ、師父。一般人なのに聖杯戦争に首を突っ込むんじゃない。魔術師でもマスターでもない、一般人な俺だからこそ聖杯戦争に乱入出来る資格がある」
聖杯戦争とは、魔術師同士による秘密裏で行われる。神秘の秘匿の為、部外者を不必要に巻き込まない為に。……けれど、それはあくまで魔術師側の理屈だ。
既に冬木は巻き込まれている。大火災だけの話ではない、１０年前の子供達ばかり狙った胸糞悪い連続殺人事件も、サーヴァントとそのマスターによって引き起こされた可能性がある。魔術師側に止める意思が無いのなら、無関係と思われる一般人が正面切って言い切るしかない。
殺し合いがしたいなら、誰もいないところで勝手にやれ。自分達の願望の為に無関係な人間を巻き込むな。と、具体的に分かりやすく突き付けるしかない。それでも魔術師達が戦争を止めないと言うので

あれば……。
「魔術師が他人に理不尽を振り撒こうというのなら、その不条理を捩じ伏せてやる」
　喩え、それで己自身が誰かの理不尽になったとしても、修司はこの戦いに首を突っ込む事に決めた。
「成る程、道理だな。なら貴女はどうだ聖女ジャンヌ、裁定者（ルーラー）として顕現した以上、貴女には聖杯戦争が正しく運営されるのを見届ける義務がある。貴女の立場からすればこの男の言葉は無視できない筈だが？」
「――――私がこの聖杯戦争に召喚されたのは偏に今回の聖杯戦争に異常を感知したからです。私はそれを見届ける義務があるし、場合によっては阻止する責任があります」
「ほぉ？　聖杯戦争を審判するものが聖杯戦争を阻止すると？」
「その戦争が、罪もない人々を巻き込むのであれば……」
　言峰の問いにジャンヌは凛とした姿勢で即答する。敵に回るかと思われていたジャンヌが、思わぬ形で味方になってくれた。これから一人で昨夜の黒い巨人みたいな化け物を相手すると思うと辟易としてくる修司だが、オルレアンの乙女が協力してくれると言うのならこんなに心強い事はない。
「い、良いのかジャンヌさん。俺、多分滅茶苦茶首を突っ込むと思うんだけど……」
「だから、ですよ。貴方みたいな無鉄砲な男の子を放っておいたら、それこそ何が起こるか分かりませんもの。せめて私の眼が届く範囲であれば、何かあった時対処できますから」
「な、なんかその……ゴメン。でも、ありがとう」
「ふふ、まるで手の掛かる弟を持った気分です」
　「互いに戦う意味と意義を見出だせた様で何よりだ。それで？　他に聞きたいことはないのか？　無いのなら早急に去るといい。間もなく救急車もくる。事情を説明するにはお前たちは少々邪魔だ」
　その言葉は棘だらけだが、確かにそろそろ救急車が此方に向かってくる頃だ。彼に事情の説明を頼むのならばここに自分達がいるのは

好ましくない。限られた時間で修司は他に訊ねる事はないか模索し……。
「――――いや、ないよ。ありがとう師父。じゃ、俺はこれで」
「そうか、ならば精々気を付けると良い。マスターでもなければ魔術師でもない。只人であるお前がこの聖杯戦争に何を齎すのか、見届けさせて貰おう」
その言葉を最後に修司はジャンヌと共に教会を後にする。残された神父はその背中を見届けて――――。
「ない……か、相変わらず。嘘が下手な男だ。本来ならもう一つ位あっただろうに、変な気を遣う所も相変わらずか」
その稚拙な隠し事に呆れの笑みを溢した。

◇

――――冬木の教会を出て、少し離れた所にあるベンチに腰かける二人。遠くから聞こえてくる救急車のサイレンの音に耳を傾けて暫く無言を貫いていた二人、その沈黙を破ったのは修司の方だった。
「――――しっかし、聖杯戦争かぁ。とんでもない事に首を突っ込んじまったなぁ」
「なら、今からでも撤回しますか？　私は構いませんよ？　むしろウェルカムです」
「まさか、一度決めたことをやりもしないで撤回したら、それこそ王様に殺されるよ。一度吐いた言葉はある程度結果を出すまで撤回してはいけない。俺ん家の数少ない教訓なんだぜ？」
軽口を叩き、微笑む二人。どうやら自身が決めた事に迷いは無さそ

うだとジャンヌは安堵する。
「でも、レティ――ジャンヌさんだって本当に良いのかよ。アンタも願いによって召喚されたサーヴァントなんだろ？　俺に付き合って本当に大丈夫なのか？」
「……先程も少し触れましたが、私の召喚は少し特殊なんです。肉体であるレティシアを依り代に現界していますから、分かりやすく言えばレティシアという肉体に私という魔力を纏っている。みたいな感じです」
「それ、レティシアさんは？」
「彼女は全てを知った上で了承してくれました。でも安心してください、一応安全機能はあるんですよ。私が万が一聖杯戦争の最中死亡する事があれば、彼女は安全な場所に転移される手筈となっていますから」
「緊急脱出装置……みたいなもんか。そっか、なら俺から言うことは何もないな」
「納得して戴いて何よりです。……ですが」
「？」
「不安材料が、ないと言えば嘘になります。今回の聖杯戦争は何かがおかしい。そもそも、ルーラーである私が聖杯大戦でもない戦争に召喚される。それ自体が異常な事なんです」
「せ、聖杯大戦？」
　またもや出てきた新しい単語、聖杯大戦とは一体何だと悩ませている修司を余所にジャンヌは昨夜目にした蒼い魔神の事を思い出す。
　あの魔神は修司が起因しているのは間違いない。しかし今朝の様子から彼がその事に気付いている様子はない。本人にも分からないナニか、あの魔神は何なのか、人並外れてサーヴァントの領域に至りつつある非常識な身体能力も関係しているのか、疑問に思う事は幾つもあるが分かっている事は一つ。
　修司から、可能な限り目を離してはならない。彼の存在が今回の聖杯戦争の異常に関係しているのなら、彼の動向を監視する責任が自分にはある。恩義はある。負い目もある。けれど聖杯戦争の審判役と

して召喚された以上、その責務を果たす義務がある。
けれど、彼の事が心配なのもまた事実で。
（どうか、彼の往く道に光が在らんことを――）
混乱する修司の隣でその行く末を祈るジャンヌ。
「修司、お前こんな所で何をしてるんだ？」
そこへ第三者達が訪れる。
「あれ？　士郎？　お前こそ何してんだよ。家に帰ったんじゃなかったのか？　それにそっちは……遠坂？」
赤毛の少年と紅い衣服の少女、互いにいるはずのない人物に目を丸くさせ。
「気を付けろ、凛」
「下がってください、士郎」
何処からともなく現れた赤い外套の男と、レインコートを脱ぎ捨て、顕になる乙女の騎士が三人の間に割って入ってきた。

その21

「士郎、遠坂、お前等魔術師だったのか」
　自身の前に立つ二人の戦士、その見てくれと出で立ちからサーヴァントだと理解した修司は彼等を従える魔術師（マスター）が気心知れた友人と学校のクラスメイトであった事実に少なからずショックを覚えた。
「――――で？　そう言うアンタもマスターだったわけ？」
　しかし、遠坂凛は戸惑いと言うよりも敵意に近い眼差しで修司を睨むように視線を向けてくる。クラスでは見たことのない学園のマドンナの態度に修司の目は丸くなる。
「……いや、俺はマスターじゃないぞ。ついでに言えば魔術師でもない」
「この状況でそのような言葉が通ると思っているのか」
「同感だな。相手を偽り欺くのは魔術師にとって常套手段だ。何よりサーヴァントを引き連れておいてその言い訳は流石に無理がある」
　嘘偽りなく本音で語ったと言うのに、何故か喧嘩腰で否定してくるのは見えない何かを掴んだ素振りを見せる騎士甲冑の少女、その目には遠坂凛以上の敵意を滲ませており、紅い外套の男に至っては呆れた様に皮肉を飛ばしてくる。
　彼等の言動に僅かな怒りを覚える修司だが、そう言えばと思い冷静に自分の今の状況を客観的に見直すと、思っていた以上に自分に非がある事が分かった。
　夜、人気のない教会付近、そこでサーヴァントを引き連れた自分が待ち構えている。……うん、どう考えても宣戦布告に来た敵対マスターだ。
　言われて自分の現状に気付く修司、どうにかして自身の潔癖を証明しなくてはと腕を組んで考えを模索していると、横にいる聖女が修司を庇うように前に出た。
「彼はマスターでもなければ魔術師でもありません。それはルーラー

であるこの私ジャンヌ＝ダルクが真名を誓って保障します」
「っ!!」
「ジャンヌ＝ダルク、しかもルーラーですって？　……そうか、そう言えば綺礼がそんな事言ってたっけ」
　ルーラーという名前が余程説得力があったのか、サーヴァント二人と遠坂は驚きそして納得している。士郎の方は何が何やらと言った様子で混乱しているが、それは修司の方も同じだった。
「修司君、彼等に両手の甲を見せて上げてください」
「へ？　そ、そんなんで誤解が解けるのか？」
「ええ」
　ジャンヌの言葉を不思議に思いながらも遠坂達に掲げる様に両手の甲を見せると、それが決め手になったのか士郎は安堵の溜め息を吐いて騎士の少女の方は何かを握っていた手を緩め、レインコートを羽織直した。
　だが、対する遠坂はそうはいかなかった。敵意の様な強烈なモノではないが、それでも責めるような視線は未だに解けてはいない。
「……いいわ。ルーラーの言うように彼が唯の一般人だってのは認める。でも、だったら何故彼は此処にいるのよ？　神秘の秘匿は魔術師の義務、その様子だと聖杯戦争の事は色々と知ってるんでしょ？　なんだって綺礼は彼をそのままにしているのよ」
　それは魔術師である遠坂凛にとって当然の質問だった。神秘を行使する魔術師は神秘を薄めない為に魔術の存在を秘匿する義務がある。一般人にバレたりすればそれは魔術を行使する為に必要な神秘が薄れる事を意味している。
　それを防ぐために魔術師は目撃された一般人の口を封じる必要がある。なのに、目の前の少年にはその様に施された様子は何処にもない。此処にいると言うことは彼が教会に立ち寄ったのは間違いない、何らかの形で聖杯戦争に巻き込まれ、そして事情を知った修司とそれを呑気に教えた言峰に遠坂凛は如何ともしがたい怒りを覚えた。
「……まぁ、ちょっと事情があってな。俺も聖杯戦争に乱入する事になった」

「し、修司!?」
巻き込まれただけの一般人が、よりにもよって聖杯戦争に乱入と言い切った事に士郎は勿論騎士甲冑の少女も驚きに目を見開いている。
「此処にいるって事はお前等も教会に行って色々と話を聞いてくるんだろ？　なら、詳しい話は明日にしよう」
「――そうね、色々と……本っっっ当に色々とツッコミたい所はあるけれど生憎此方も今日中にやらなきゃいけない事があるし、貴方に関しては明日問い詰める事にするわ」
（凛、いいのか？）
（いいわけないでしょ、彼に関してはあのエセ神父に問い詰めるとして、今は衛宮君をどうにかする方が先決よ。彼にはどうやらルーラーが付いているみたいだし、今は下手に関わらない方がいいわ）
ルーラーというエクストラクラスを前に慎重な姿勢を取る遠坂に相方のサーヴァントは異議を唱えることはなかった。寧ろ、彼の都合を考えればルーラーとのいざこざは今は極力避けるべきだ。
真名看破。ルーラーという特殊なクラスが保有する対象のサーヴァントの真名を知ることが可能という聖杯戦争に於いて反則レベルのスキル。他にも各クラスのサーヴァントに令呪を二画保有する神明裁決など、審判役として相応しいスキルを有している。
そんな彼女を前に事を荒立てる程、遠坂凛という魔術師は間抜けではない。尤も、そのルーラーが何故修司と行動を共にしているのか不思議ではあるが。
衛宮士郎の方はジャンヌと自身のサーヴァントの顔が何処と無く似ている事に未だ混乱しており、そのサーヴァントに至っては「顔しか似てないじゃないですか、あの魚面」等とよく分からない恨み言を溢している。
「んじゃ、俺等は帰るわ。士郎、遠坂も、一応気を付けろよ」
「あ、あぁ……」
修司の気軽な別れの挨拶に答えたのは士郎だけだった。騎士の少女はブツブツと何かうわ言を繰り返すだけで遠坂と紅い外套の男は沈黙を保っている。彼女達からすれば自身はこの聖杯戦争において

厄介な乱入者でしかない、故に彼女達の反応も当然だと思うが……紅い外套の男の顔を見て、ふと疑問に思った修司が去り際に士郎に問い掛ける。
「……なぁ士郎、お前兄弟か親戚っていたりするのか？」
「は？　な、なんだよ急に……」
「いや、なんかそこの紅い兄ちゃんとお前が――「ゲフンゲフン、ウォッフン！」と、なんだよいきなり」
「いやすまない、少し噎せただけだ。それよりも小僧、帰るならさっさと帰った方がいい。ここから先は魔術師同士の殺し合いの時間だ。巻き込まれない内にさっさと家に帰れ」
やけに皮肉に煽ってくる紅い男、だがこれから殺し合いをするかも知れない彼等を放っておく訳にもいかない。やはり自分も少し辺りを見回るべきか？　教会へ進む士郎達を見送る中、悩む修司が次に耳にしたのは何とも可愛らしい空腹を告げる音だった。
「……あー、そう言や夕飯まだだったな。シドウリさんも待ってるだろうし、早い所帰るとするか」
「う、うぅぅぅ……」
隣で赤面となっているだろう聖女にはなるべく見ないようにして二人は帰路に付くのだった。

◇

――翌日。奇妙な夢を見る事もなく、気持ちのいい朝を迎えた修司は朝食の片付けを済まし、朝練の時間が迫るまでの僅かな間、リビングのソファーに座りテレビで今朝の冬木で起きた出来事をチェックしていた。

あれから遅く帰ってきた事を追及してくるシドゥリを何とか捌き、深夜の冬木を見て回ったがこれと言った変化は街中では起きていなかった。

しかし、それは魔術の知識を持たない目視で見た修司からの感想であって聖杯戦争に巻き込まれた被害者は確実に存在している。今テレビでは建物内で昏睡状態の人々が救急車で搬送されたという情報が流されている。

他にも嘗て海外から移住してきた異邦人達が使用したとされる外人墓地では、ガス爆発で吹き飛んだという情報も流されている。どちらも聖杯戦争によって生み出された爪痕だ。

ジャンヌは魔術師、或いはサーヴァントによる人避けの結界が施されている可能性もあるから、気付けないのは仕方ないと言っていたが、修司にとってそれは唯の言い訳に過ぎない。あれだけ息巻いておきながら結局何も変えていない自身に修司は己の滑稽さに怒りを覚えた。

そしてそのルーラーが聖杯戦争の審判役である以上、それがルールに則った物であるならば文句を挟む道理はない。昨夜の教会付近で行われたと思われる戦いに当然彼女は知ってはいたが、それを修司に伝える事はしなかった。

彼女は聖杯戦争によって他人が巻き込まれる事を由としない。故に修司を監視する事はあっても協力する事はあまりない。勿論、それは修司も彼女の立場を理解しているし、弁えているからその事でどうこう言うつもりはない。

その代わりルーラーであるジャンヌからはある程度の情報を齎されている。彼女が言うには昏睡事件の方は陣地作成のスキルを持つキャスターの仕業ではないかと睨んでいるらしい。修司は聖杯戦争に付いて最低限の知識しか知らないので何とも言えないが、今は彼女の情報を基に今後の方針を固めていくのが妥当な所だろう。

そしてサーヴァントを従えるマスターの見破り方だが、此方は比較的簡単だった。両手のどちらかの甲辺りに浮かぶ紅い刺青みたいな模様、それがサーヴァントに対する絶対命令権である令呪であり、マ

スターの証なのだとか。
聖杯戦争の審判役であるジャンヌは一つの陣営に付いたりはしない。それは乱入者である修司にも同じこと、それでも聖杯戦争に於ける不正だと判断された情報は教えてくれるし、聖杯戦争のシステムについても話してくれるから、充分助かっていると修司は思う。
(成る程、道理で俺の手を見た遠坂が引き下がった訳だ)
昨夜、自分の弁明ではまるっきり信じなかった癖にジャンヌの言葉と両手の甲を見せた途端アッサリと信じた訳を知った修司は成る程な〜と一人納得する。
そう思っていると、時刻はそろそろ差し迫ってきた。余裕をもって登校するには今くらいが調度良い、横においた鞄を手に取ってソファーから立ち上がり、修司は玄関へと向かう。
その見送りをしようとシドゥリとジャンヌも修司の後へ続く、家ではシドゥリに違和感を悟られぬ様に相変わらずジャンヌをレティシアと呼ぶことにしている。
「それでは修司様、お気を付けて」
「うん、シドゥリさんもね。レティシアさんもあまり夜遅くまで出歩かない様に」
「ええ、そちらも」
互いに目で合図をし、放課後の事を了承し合う。彼女は修司が学校にいる間は深山町で探索をする事になっている。いざとなれば合流するように示し合わせていた二人、その事を確認すると修司は今度こそ玄関の扉を開けて外に出る。
少し歩いて下を見下ろせば、其処には人気の無い駐車場がある。通常ならその高さに慣れない人ならば高所による恐怖で足が竦むのに、今の修司にはその恐怖は全く無かった。
辺りを見渡して、下に人がいないことを確認した修司は———ふと、飛び降りてみた。何て事無いように、まるで自宅の階段を下りる様に、気安く、気軽に、地上２０階の高さから飛び降りてみせた。
端から見たらどう考えても自殺者の行動のソレ、重力に従い落下する修司だが、地面に近付いた瞬間、猫の様にクルリと体勢を変えて、何

事も無かった様に着地する。
　着地による衝撃は思った程ではなかった。アスファルトの地面がひび割れているのに、修司の脚には何一つ影響は無く、ポンポンと叩いてみても痛みや痺れと言った症状はない、普通に動かしても何の問題は無かった。
「――――事が全部終わったら、一度医者に診て貰お」
　取り敢えず今はこのままで、変わった自身の身体能力に戸惑いながらも学校へ向かう修司だった。

◇

「士郎、無事だったか」
「し、修司？　あぁ、お陰様でな」
　そして登校し、朝練を終えた修司が気になっていた生徒を探していると、件の人物を目撃して声色が晴れやかになる。対する赤毛の少年も変わった様子の無い友人との再会に安堵する。
「テレビでやってた外人墓地の爆発、あれお前等が原因だろ？」
「えっと……これ、言っちゃって良いのかな？」
　大胆に聖杯戦争に乱入すると布告した修司だが、その在り方は依然として一般人と代わり無い。事情を知っているとは言え、無関係である筈の修司に話すのは未熟とは言え魔術師の一端である士郎は事情を口にするのを躊躇う。
「まぁ、話せないならいいや。此方は此方で勝手にするからよ、でも危なくなったら俺に一言連絡入れろよ？　携帯、持ってるんだろ？」
「何でお前が俺の心配するんだよ？　魔術師じゃないのに……」

「阿呆、だからだろうが。そもそも友達を助けるのにイチイチ理由が必要なのかよ」
「いや、そう言う訳じゃ……」
　同じ学園の級友で友人であり、本来無関係な修司を巻き込むわけにはいかない。だから士郎は修司の聖杯戦争への参戦を反対したい所だが、如何せんこの男異様に頭が回り行動力が凄まじい。勝手にすると口にする以上、本当に独自で聖杯戦争の諸事情を看破しそうで怖い。
「……なぁ、修司。お前何でそこまで関わろうとするんだよ。魔術師でもマスターでもないお前が、其処までして関わろうとする理由はなんだ？」
　何気ない質問、そして当然の疑問であった。昨夜教会付近にいたと言うことは、遠坂の言う通りあの神父から色々聞かされたのだろう。聖杯戦争の事、万能の願望器、もし目の前の修司も聖杯に何か託す望みがあるのなら、それを可能な限り諭してやりたい。
　――だって、聖杯戦争を勝ち抜くという事は１０年前のあの惨劇が再び繰り返される可能性があるという事だから。
「――１０年前の惨劇、その繰り返しを何としても阻止する為、そして……聖杯をぶっ潰す為だ」
「――え？」
　憤怒に満ちた修司の横顔、それを目にした士郎は驚いた。普段は温厚で蒔寺相手以外温厚な修司が、明らかに怒りを露にしている。
　そして彼の口にした願い、それはまさに士郎にとって予想だにしなかったモノだった。
　聖杯を破壊する。聖杯戦争という魔術師同士による殺し合いの儀式、その根底にある聖杯を完膚無き迄に破壊すると、隣にいる少年に士郎は目が放せなかった。
「じゃ、またな。無事を確認できて良かったよ。もし気が変わったら俺の教室に来てくれ、俺も色々話せる情報があるからさ」
「あっ……」
　先行く修司に声を掛けようと手を伸ばす士郎だが、その手は届くこ

とは無かった。いや、掛ける言葉が見つからなかった。
自身の先を歩く修司、目的があり、果たすべき願いがあり、それが１０年前の惨劇を繰り返させてはならないと、その原因たる聖杯を絶対に許さないと、確固たる意思を持って行動する修司に士郎は何て呼び止めたら良いか分からなかった。
誰かの為に怒り、無関係なのに手を伸ばす。その怒りの在り方がどうしようもなく自身の憧れるモノに近い気がして……。
故に衛宮士郎には、白河修司を止める事は出来なかった。
「ふぅん、聖杯をぶっ潰す。ねぇ」
「なら、残念だけど白河君。貴方はどうしようもなく――私の敵よ。喩え弟弟子であっても、容赦はしないわ」

その22

――――修司が学校で士郎と再会してから少しばかりの時間が経過し、現在は昼休み。廊下へ出て食堂へ向かう生徒達に習い、自身も飯を食べようと席を立つ。

シドゥリから渡された弁当を何処で食べようかと廊下へ出ようとした時、先に待ち構えていたらしい士郎が修司の姿を見付けるとヨッと片手を上げて歩み寄ってきた。

「修司、お前も弁当か？」

「あぁ、シドゥリさんが作ってくれてな。そう言う士郎も？」

「あぁ、色々話がしたいし、久し振りに二人でどっか食べにいかないか？」

タイミング的に聖杯戦争云々に関する話だろう。自分も士郎には色々聞きたい事があるし、丁度良いと思い彼の誘いを受ける事にした。

「それは別に構わないが……遠坂は良いのか？　アイツも交えた方が良いんじゃないのかって、いないな」

どうせなら遠坂も巻き込もうと目論むが、教室へ視線を向ければ其処に遠坂の姿は無かった。どうやら先に廊下へ出て人知れず何処かへ姿を消したのだろう。

教室で顔を合わせても彼女の態度は普段と変わらぬお嬢様然としたもの、聖杯戦争に乱入すると言い張る自分に何も言うことは無いのか、静かな遠坂の反応に修司は嵐の前の静けさの様な不気味さを感じた。

「いないならいないで仕方ないさ、俺も後で遠坂に会ったらそれとなく伝えるからさ」

「そう、なのか？」

聖杯戦争とは魔術師同士の殺し合いではなかったのか、自分から言っておきながら相変わらずな友人の態度に何処か安心すら覚える

修司だった。

◇

「慎二がマスター!?」
「ばっ、声がデカイ!」
「あっ、わ、悪い」
　昼下がり、誰もいない学校の屋上で昼食を食べ終えた二人は、昨夜に起きた出来事をそれぞれ交互に話し始めていた。最初は士郎次に修司となるべく時系列に沿って話し合う二人、互いに起きた出来事に呆れたり驚いたりしていたが、修司が慎二とそのサーヴァントらしきモノと戦ったと言う辺りから、士郎の驚愕の度合いは大きなモノとなっていた。
「そうか、だから慎二の奴学校をサボってたのか」
「美綴の方は安心しろ。ジャンヌさん……いや、この場合はルーラーか。彼女と言峰神父に診て貰ったし、今は病院で安静にしている。専門家によれば二、三日で快復するらしいから、心配はいらないだろ」
「あぁ、俺も安心したよ。ありがとな修司、美綴を助けてくれて」
「気にすんな、偶々出会しただけだ。それに俺がしたことと言えばサーヴァントらしい女を蹴り飛ばした程度、大した事じゃない。……それに、重要な事はそこじゃないだろ」
「あぁ……桜も、そうだったりするのかな」
　先日の遭遇から流れで慎二とそのサーヴァントと戦い、撃退した修司。専門的な知識は皆無だからハッキリと言えた事ではないが、あの両面眼帯のボディコン女は果たしてあれで消滅したのだろうか？
　サーヴァントにはどうやら一般人から姿を隠す為の霊体化なる術があるらしく、魔術など専門外な修司にはその区別の付け方すら分か

らない。
間桐臓硯は敗退したと言うが……今一つ信用出来ないのは先の夜で紅い外套の男が口にした騙し合いは魔術師の常套手段、と言うのを気にしている所為か。
現在修司がルーラーや言峰の説明によって分かっているのは現在冬木には七騎のサーヴァントがいて、各々が剣士（セイバー）、弓兵（アーチャー）、槍兵（ランサー）、騎乗兵（ライダー）、暗殺者（アサシン）、魔術師（キャスター）、狂戦士（バーサーカー）とクラスを冠しているという事。そしてサーヴァントを従えている魔術師、マスターには令呪なるものが宿っている事等と精々この程度だ。
魔術に関する知識が無い以上、どんな奴がサーヴァントでマスターなのか皆目検討も付かない。現在分かっているマスターは遠坂凛、衛宮士郎、間桐慎二、そしてあの白い少女くらいだ。
そして慎二には……間桐の家にはもう一人魔術師かもしれない人物がいる。彼の妹である間桐桜、彼女もまた魔術師である可能性がある。もし彼女が聖杯戦争に参加したら……果たして修司（自分）はこの拳を彼女に向けられるだろうか。
「――なぁ、士郎は何で聖杯戦争に参加するんだ？」
「え？　俺？」
修司は一端最悪の可能性から目を逸らす様に別の疑問を投げ掛ける。衛宮士郎という男は端から見ても正義感の強い男で、厄介事や困っている人がいたら率先して関わろうとする悪癖がある。
そんな彼が聖杯戦争なんて血腥い戦いに身を投ずるのは少し意外だった。人間味の薄い彼にも聖杯に賭ける願いがあるのか、それを込みで訊ねてみると……。
「――お前と、似たようなもんかな」
「なに？」
淡々と語る士郎に今度は修司が目を丸くさせる。
「聖杯戦争が１０年前、冬木で起きた大災害の原因だと知って、いてもたってもいられなかった。またあの惨劇が起きる可能性がある。また、あの日の様な地獄が顕れる。それだけは絶対に阻止しなくちゃいけない」

「……」
この時、修司は僅かだが確信した。隣に座る少年が自分と同じ境遇だという事を、当時の出来事を知り、体験し、そして刻まれた悍しい経験をしたと言う事を。
「――なぁ士郎、お前も……その、１０年前の？」
「あぁ、生き残りだ」
ストンと、何かが填まるように納得した。ああそうか、この赤毛の少年は自分とは違う助けられ方をしたんだな、と。
衛宮士郎は自分と同じだった。あの地獄のただ中で自分の無力に打ちのめされていた惨めな思いをした自分と、自分は其処で黄金の王に救われ、育てられ、導かれた。
白河修司と衛宮士郎、二人の原点は共にあの地獄から始まった。異なっているのは、分岐点となったのは助けた者が違っていたと言う事。
修司を救った黄金の王はあの地獄の中で死に損ない、身の程知らずでありながら声高に理不尽に怒る修司に可能性を見た。正義の味方を目指していた者は生き残っていた衛宮士郎に感謝して助け出した。
きっと、二人が違っているのは其処からだ。理不尽を許さない修司と、正義の味方に憧れる士郎。二人の在り方は何処か近く、しかしそれでいてどうしようもなく遠かった。
「……あっ、チャイムだ」
気付けば昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴っていた。本当はもっと語る事が、話したい事があった筈なのに二人の会話はこれ以上交わる事はなく、空になった弁当箱を片してそれぞれの教室へと戻るのだった。

◇

――そしてそれからも無事に授業は進み、ＨＲも終わらせて放課後となった現在、先の事件もあり放課後の部活動は未だに活動停止状態にあり、殆どの生徒達は学校から出て家に帰っていた。
修司は残った生徒がいないか自主的に見回りをしていた。本来なら自分も早く帰るべきなのだが、慎二に続き士郎、遠坂と学友の三人が魔術師だった事もあり、もしかしたら他にもいるのでは？　という直感から修司は学校の内部を詳しく調べ回る事にしたのだ。
結果は見事なまでの空回り。そもそも魔術師でもない修司が他の魔術師を見付ける術など持ち合わせてはいない。
「やっぱ、先にキャスターの所から調べるべきかなぁ」
外ではキャスターによる昏睡事件も未だに相次いでいるし、このままでは後手に回る一方だ。やはり今は可能性の段階でしかない間桐の方は後回しにして先にキャスター討伐の方向に向かう方が良いか。
それとも、もう一度士郎と話をして協力を仰ぐべきか、彼も聖杯戦争に対して否定的な所がある。自分と同じ気持ちでいるならば、自分達はもしかしたら手を取り合えるかもしれない。
（いや、それは多分難しいだろうな。士郎にもサーヴァントがいる。サーヴァントが聖杯に願いを叶えて貰おうとしている以上、聖杯を壊すつもりでいる俺とは致命的に合わない）
もし自分と士郎が手を組んだりしたら、最悪の場合あの少女騎士が士郎を斬り殺すだろう。彼女がそう言う事をするのは初対面の時の印象からあまり無さそうだが……自分とは合わないのは間違いないだろう。
下手に此方から接触するのも不味い気がする。と、携帯の時計を見て現在の時刻を確認した修司はそろそろジャンヌと合流すべきだなと、学校から出て行こうとする。
その時、向こうの曲がり角から件の少年が姿を表した。向こうも自分に気付くともどかしそうに頭を掻き、照れ臭そうにヨッと気軽に声を掛けてきた。
「修司、お前まだ帰ってなかったのかよ」

「まぁ、な。もしかしたらお前等以外にもマスターがいるんじゃないかって思ってブラついたら、自然とこんな時間になった」
「それで、成果はあったのか？」
「……まぁ、校内で被害にあった生徒がいないようで何より、かな」
何の成果も得られなかった、なんて口にするのが悔しくてつい濁す言い方をしてしまったが、士郎には簡単に気付かれていた様だ。苦笑いを浮かべながらもそうかと頷く彼に修司は虚勢の強がりを張ることしか出来なかった。
「で、そっちこそこんな時間まで何してんだよ。まさか校内に変な罠でも張ろうってんじゃないだろうな？」
「そんな大それた事なんて出来るわけないだろ。俺に出来るのは精々強化の魔術だけだ」
「強化？　何それ凄そう。どうやるの？」
「いや、魔術師じゃないお前に言っても多分分からないぞ」
「――前々から思ってたけど、魔術師とそうじゃない人の区別って何なんだ？　ていうか、魔術師は何を以て魔術師って呼ばれるんだ？」
「……すまん、実は俺もあまりよく分からないんだ」
修司の問いに士郎は分からないとぼやく。と、そんな時だ。
「根源へ至らんとしている者達の事よ」
困り果てていた士郎の代弁をするように第三者の声が二人の間に割って入ってくる。声の方へ振り向けば、階段の踊り場で仁王立ちをしている遠坂凛が夕日の光を背に二人を見下ろしていた。
「衛宮君、私言ったわよね？　サーヴァントを連れずにノコノコやってくるおバカを晒す様なら、私が真っ先に狩りに来るって」
やはり、昨日のあの態度は見間違いではなかった。普段の温厚なお嬢様な雰囲気は何処へやら、ツインテールの髪が揺らめくほどに怒気を顕にしている彼女に修司と士郎は困惑の表情を晒す。
「な、何言ってんだよ遠坂、マスターが行動するのは原則として人気の無い場所か夜にするものだろ。何もこんな校内で――」
「そうね、その認識は間違ってないわ。でもね衛宮君。その人気って

言うのはここにあるかしら？」
　言われて辺りを見渡せば確かに周囲に人の気配はなく、教師が見回りに来る気配もない。今此処にいるのは修司と士郎そして遠坂の三人のみ、何だか嫌な予感がする。
「サーヴァントも連れずにノコノコ学校に来る衛宮君もそうだけど、それ以上に許せないのはアンタよ、白河修司！」
「あ、俺？」
　人知れず身構えているといきなり矛先が自分に向いてきた事に修司が戸惑うと、捲し立てながら遠坂は言葉のマシンガンをぶつけてくる。
「マスターでなければ魔術師ですらない。三流以前に一般人でしかないアンタが聖杯戦争に乱入？　冗談じゃないわよ！　この戦争は１０年も前から私が待ち望んでいたモノなの！　それをただ巻き込まれただけのアンタがぶっ潰す？　あのエセ神父の下で何年鍛えられたか知らないけど、魔術の魔の字も知らない奴がシャシャリ出てくるんじゃないわよ！」
　長い台詞を一息で言い切った遠坂に奇妙な感心を抱くが、要するに遠坂は魔術師でない自分が首を突っ込んでくることを宜しく思っていないんだろう。それが一般人を巻き込みたくない遠坂なりの優しさなのかも知れないが、それでも修司には譲れないモノがある。
「悪いが、手を引くことはないぞ遠坂。今回の聖杯戦争が１０年前の惨劇を引き起こす可能性があるなら、俺はその大元を叩く。その意思は変わらない」
　――故に、その拒絶は当然のモノだった。
　すると、遠坂の怒気が急に鳴りを潜めていく。止めるのを諦めた？
　否、この時遠坂凛は白河修司という男を排除すべき敵であると認識し、その事に全力を注ぐことにしたのだ。
「――そう、アンタの気持ちは分かったわ。なら、私は遠坂家の当主としてアンタの馬鹿げた行動を止めるだけよ」
「昨日の赤い奴を呼ぶつもりか！」
「まさか、一般人の記憶を奪うのにサーヴァントの力は必要ないわ。

アンタを打ちのめすのは正真正銘、魔道の力よ」
　左手の袖を捲り其処から見えるのは光輝く紋様、何処と無く機械の回路にも思えるそれはまるでエネルギーを循環させるポンプにも見えた。
「遠坂、お前本気かよ！」
「当然よ、丸腰同然でやってくるおバカを見過ごしてやるほど私の神経は太くないわ」
「……良いぜ、掛かってこいよ。俺が聖杯戦争に乱入するのが許せないって言うなら――――相手になってやる」
「お、おい修司！」
　売り言葉に買い言葉、聖杯戦争に乱入する修司とそれを許さない遠坂、互いに敵意を募らせる二人をどうにか宥めようとする士郎だが、悲しいかな彼に二人を止める言葉は持ち合わせていなかった。
「そう？　なら、遠慮はなしにっ……！」
　瞬間、向けられた遠坂の指先から赤黒い弾丸の様なモノが射出される。修司は咄嗟に横へ飛び回避するが、まさかの見慣れたモノに修司の目は大きく見開かれた。
「今のは【ガンド】、こんな風に魔術刻印がある程度あれば詠唱無しに撃てたりするのよ」
「ガンドって、北欧のちょっとした呪いの魔術何じゃなかったのかよ。俺の知ってるのと違う」
　廊下の床を抉った遠坂の魔術に驚きながらも士郎は戦慄した。まるで銃弾の様な威力、これではまるで常に丸腰でありながら銃器を手にしている様なモノじゃないか。
　修司が幾ら鍛えていようとも銃器に勝てる未来はない、最悪の結末が訪れるよりも先になんとかして止めに入ろうとする士郎だが、対する修司の感想は全く違うモノだった。
（え？　今のが魔術？　え？　アレが？　あんな出来損ないの霊〇みたいなのが、魔術の一つなの？）
　思い浮かぶのは数年前、とあるヒョロヒョロの貧弱男と厳つい用心棒、そしておっかないツインドリルと一緒におかしな連中

から襲われた時の事だ。
思い返せば彼等も指先から今の遠坂の様に赤黒いモノを飛ばしてきた。当時は手品の一種と思い一蹴にしてきたが、もしかしてアレは魔術師による魔術的攻撃だったのだろうか。
あの骸骨の兵隊も、ハロウィンに備えての出し物何かではなく、魔術を使った遠隔攻撃みたいなモノで、獅子劫が使っていた動物の指を使っての攻撃も魔術的な意味合いがあった……。
――つまり。
(俺が今まで手品クラブだと思っていた人達、魔術師だったー!?)
衝撃の真実。今日の今まで手品師による奇妙な勧誘だと思われていた行動は、実は全て魔術師による敵対的攻撃だった。しつこい勧誘と思いながらも今にして思えば可愛らしい人達だよなーなんて考えていた修司は、その衝撃的な真実に少なからずショックを覚えた。
そして、そんな隙だらけの修司を見て、何を思ったか観念したと勘違いした遠坂はこれで終わりだとその手を修司へ向ける。
「漸く現実を理解したかしら？　なら、これで終わりにしてあげる。安心なさい、目が覚める頃にはアンタはいつも通りの日常を送れるわよ」
「や、止めろ遠坂ー！」
士郎の制止の叫びも届かず、放たれる魔術の弾丸。真っ直ぐ修司向かって伸びていくそれは次の瞬間間違いなく標的に向かって突き進む筈だった。
魔術の弾丸、【ガンド】は消えた。横薙ぎに振り抜かれた修司の拳に、パンッと割れた風船の様な音を立てて消えていた。一瞬何が起きたか理解できず目をパチクリさせる遠坂と士郎、そして次の瞬間――。
遠坂の隣には左手を振り上げる修司がいて――――。
「少し、頭冷やそうか」
振り抜かれた左手は遠坂の臀部を捉え、甲高い音と共に遠坂は回転しながら廊下の奥へと吹き飛び、壁に激突して気絶した。
「……と、遠坂ーー!?」

友人を心配する叫びは何時しか学園のマドンナの安否を気遣うモノにチェンジした。

その23

――――静まり返る校舎、呆然とする士郎の視界に映るのは気炎を上げ、仁王立ちする友人と、その先にある廊下の奥で目を回して気絶している穂群原学園のマドンナ。

自身がよく知る者達同士による争いは想像していたモノより呆気なく終わり、結果として二人の間で血が流れるような事は一切無かった。

フンッと鼻息荒く倒れるマドンナを一瞥した修司は後で未だ呆けている士郎に言葉を掛ける。

「なぁ士郎、聖杯戦争って魔術師が令呪を持っていて初めてマスター足り得るんだよな？　なら、逆を言えばその令呪って奴が失くなればそいつは聖杯戦争の脱落者って事になるのか？」

「あ、あぁ、確かそうだった気がする」

「マジかー、令呪ってどうやったら消せるんだ？　流石に手を切り落とす訳にもいかないし……消ゴムとかで消えたりしないかな？」

「いや、流石にそれは……」

魔術に関する知識が皆無な修司と魔術に対して毛の生えた程度の知識しか知らない士郎、あーだこーだと悩んでいると……。

「茶番は済んだか？」

「お前、アーチャー！」

赤い外套を纏い白髪頭の弓兵が気絶する凛を庇うように現れた。あの赤いアーチャーとは何か因縁があるのか、珍しく苛立ちを顕にする士郎に修司は少し驚いた。

「マスターが其処の小僧を黙らせると息巻いていたから静観していたのだが……やれやれ、まさか返り討ちに逢うとはな。相手の実力を図れなかったとは言え、もう少し考えて行動すれば良かったものを……いや、推し量れなかったのは私も同じか」

肩を竦ませ呆れる仕草を見せるアーチャーだが、その言葉には思っていたより棘は少なかった。その口振りから先程の様子は何処かで

見ていたらしく、修司は「成る程、アーチャーという位だから目は良いのか」等と一人納得していた。
「おい、ちょっと待てよ」
　気絶する凛を抱え、離脱しようとするアーチャーだが、それをさせまいと修司が呼び止める。
「――何かね」
「そこに延びている学園のマドンナ様もそうだがお前には幾つか聞きたい事がある。俺は聖杯戦争に付いてまだ何も知らない事が多い、その情報を得る為にもソイツをまだ連れていかせる訳にはいかない」
　修司からすれば遠坂は魔術の、ひいては聖杯戦争に関する知識を持つ貴重な情報源だ。何も知らないままでは今後行き詰まる場面もあるかもしれない、知っていると知らないとではいざという時の対応がまるで違うのは海外への出張で思い知っている。
　だから、少なくとも一つは何かしらの情報を欲しい。そう暗に語る修司の眼にアーチャーはやれやれと溜め息を吐いて……。
「……私に、それに応える義理は無いと思うが？」
「アンタが来るまでの間、遠坂には手を出さなかっただろ」
　と、それらしい事を口にして交渉しようと目論む修司だが……勿論口から出任せである。アーチャーが遠くで見ているとは欠片も知らなかったし、出てくる迄の合間令呪をどうするか無い知識を振り絞って頭を悩ませていただけだし、そもそも修司には遠坂をどうこうする意思は無かった。
　そしてその事は当然アーチャーに見破られている。呆れ果てたアーチャーは首を横に振り、キザったらしい仕草を振り撒きながら口を開く。
「仕方ない。そうまで必死に詰め寄られては応える他あるまい。但し、あまり多くは語れんぞ。何せ其方には出来損ないとは言え魔術師見習いがいる。下手な知識を得られて得意気に恥を晒されては敵わん」
「んだと!?」
　何故かその皮肉の矛先は修司にではなく、その後ろにいる士郎へ向

けられる。何故こうもアーチャーは士郎に対して攻撃的で、士郎も敵意を剥き出しにしているのだろうか？　やっぱり何処かで似ているからか？

とは言え今はその事に追及する場合ではない。数少ない情報を得られるチャンス、時間は無駄にできないと修司は思考を巡らせて――一つ、新たに気になる疑問が浮かんできた。

「……なぁアーチャー、この聖杯戦争は七騎のサーヴァントが聖杯を巡って各々七組の陣営が争っているんだよな？」

「そうだ。七人のマスターが七騎の英霊を使って覇を競い合う殺し合い。それが聖杯戦争の基本原型だ」

「その聖杯に願いを叶えるって、具体的にはどんな感じなんだ？　聖杯って言うとあの杯として知られる聖杯らしいけど、器がどうやって勝ち抜いた奴の願いを叶えるんだ？　それがサーヴァントの殺し合いとどうやって結び付くのか、今一つ理解できないんだけど？」

「修司？」

「――ほう？」

修司の質問に士郎は良く分からないと首を傾け、アーチャーは感心するように目を丸くさせる。

（この短期間で其処へ視点を向けられるとはな。いや、何も知らない一般人だからこそ至れる着眼点、という訳か。……さて、どう応えたら良いのやら）

それはアーチャーからすれば非常に答え辛い質問だった。何せ修司の問いは聖杯戦争の基本骨格、核心部分を突いた質問だからだ。それを此処で口にするのは容易いが、そうすれば何故自分がその事を知っているのか問い詰められる事になる。

何せ修司が訊ねてくる質問はサーヴァントは勿論、現在聖杯戦争に参加している殆どの陣営が知らない事実だ。今ここで知られてはアーチャー（自分）の正体と目的が最悪暴かれてしまう可能性がある。

「――済まないが、質問の意図が良く理解できなかった。結局お前は何が言いたいんだ？」

故にアーチャーは修司の質問に応えず、敢えて誤魔化す事にした。

「いやさ、聖杯という器を用意するのは分かるよ？　でも、その聖杯にいれる中身って結局何なんだって事」
「中身……だって？」
　中身。その単語を聞いた士郎は総毛立った。修司の質問の意味は未だに分からない。けれど、過去に体験したあの地獄の記憶が突然想起するように脳裏に浮かんでくる。
　燃え上がる命、建物は崩れ、沢山の命が死に絶え、空に浮かぶのは黒い孔の様なソレ。聖杯は勝ち抜いたモノの願いを叶える願望器、善き者悪しき者、その人間の性質問わず願いを叶える天の杯。
　なら、１０年前のあの地獄は悪しき者が手にした事によって引き起こされたモノなのだろうと、そう勝手に解釈していたが修司の質問にその考えは大きく揺さぶられる事になる。
　聖杯に注がれる中身、善悪問わずにあの様な惨劇が生み出されたと言うのなら、それはもう聖杯戦争のシステム自体が狂っている事に他ならない。
　そしてその見解は間違いではない。修司の無自覚な核心への追及にアーチャーは舌を巻くが、先に述べた通り彼には彼で果たすべき望みがある。故に修司への評価を改める事はあってもその問に愚直に応える事はしなかった。
「――――済まないな。その質問には応えられない。いや、どう応えたら良いのか分からないと言った方が正しい。我々英霊は聖杯の力によって喚ばれてはいるが、与えられるのは喚ばれる時代の情報程度、聖杯そのものの知識は与えられていないのだ」
「……そうか、そう言う事なら仕方ないな。やっぱ自分で直接見聞きする他ないか」
「期待に応えられず申し訳ない。ならば今回の件は一つ貸しにしておいてくれ、マスターには私から伝えておこう」
「え？　いや、それは有難いけど……良いのか？」
「今回に限ってだが、致仕方ないだろう。最初に仕掛けたのは此方だ。それを手加減され、その上気絶程度で許して貰えたのだ。これくらいの譲歩は必要だ」

「それにこの遠坂凛という魔術師は借りを受け取ったままにするのを嫌う人間だ。きっと近い内に借りを返しに行くだろう」
「……またいきなり仕掛けて来たりしそうで怖いんだが？」
　何だか普通にありそうで怖い。先程のやり取りを見るにこの遠坂凛はかなりの負けず嫌いらしいし、言いようにあしらった自分を目の敵にしそうだ。そんな未来に不安を覚える修司に対し、アーチャーはニヒルに笑みを浮かべ……。
「なに、そうなった時はそうなったでその時は君がもう一度彼女をあしらえばいい。しつこいだろうが、折れてくれたら案外従順に応えてくれるやもしれんぞ」
「いや、普通に嫌だからな。そんな未来」
　目を細め、げんなりと拒絶してくる修司を一瞥し、アーチャーは凛を担いで廊下の窓から跳躍していく。そんな派手な退場に下校途中の生徒に見付かったら事だろうに、お構いなしにアーチャーは町並みへと消えていく。
「……結局、得られた情報は無かったか。こりゃ、アーチャーの言う借りとやらに期待するしかないか」
「……なぁ、アイツお前に対して途中から態度変わって無かったか？」
「え？　……あー、言われてみればそうかもな」
　アーチャーとの交渉、またはいつ戦闘になっても応えられる様に気を張っていたから其処まで気を付けていなかったが、言われてみれば確かにそんな気がする。小僧とか呼ばれてたのに最後は君なんて呼ばれ方してたし、高圧的な態度も幾らか柔らかくなっていた気がする。
「まぁ、今回は遠坂の独断専行らしいし、その事で色々思う所があったんじゃないか？　ほら、アイツも一応英霊らしいし？」
「そんなもんか？」
「なんでお前が不服そうにしてんだよ」
　襲われたのは此方なのに何故か不機嫌の様子の士郎に困惑する。それでも二人はこれ以上学校に留まる事はなく、二人は肩を並べて下校することになった。

◇

その後、二人で色々話し合いながら商店街を回ると、公園の方に人集りが出来ている。何かと思い顔を覗かせてみると……。
「だからー、私はただシロウに会いに来ただけだっているじゃない。セイバーったら頭固すぎー」
「敵である貴方にそんな事を言われる筋合いはありませんよ、イリヤスフィール」
「や、止めなさいセイバー。この往来のど真ん中で、子供相手にムキになるなんてそれが騎士のやることですか！」
「止めないで下さいルーラー、確かに貴方はこの聖杯戦争の審判者、しかしこの娘はよりにもよって私のたい焼きを盗み食いしたんです。許せません、食べ物の恨みは恐ろしいとその骨身に刻まなければ私の気が済みません！」
「そもそもそのたい焼きだって私が買ってあげたものでしょーが！あぁもう！　シドゥリさんから折角お小遣いを戴いたのにこんなに使ってしまって……後で何て言えばいいのか」
何故か見知った人達がちょっとしたキャットファイトをしていた。周囲の人々は美人さんが言い合っている物珍しさで来ているが、あの白い少女が何かしているのか、あまり大きな騒ぎには至れていない。
「……何やってんだアイツら」
「セイバー、家で大人しくしてろって言ったのに……」
呆れる修司と頭を抱える士郎、しかしいつまでも彼女達を放っておくわけにもいかず、仕方ないと溜め息を吐いて三人の所へ向かう。
本当は抵抗があった。特に修司は白の少女が従えている黒い巨人に殺されかけたのだ。まだ日は沈んでおらず、未だ人が多く出歩いて

いるとは言え、一人で彼女と相対するのは少しだが怖かった。
「あっ、シロウ！　それにお兄ちゃん。こんにちはー」
「あれま、これはご丁寧に――じゃねぇよ、何で白昼堂々出没してるんだこのロリッ子は」
「えー？　別にいいじゃない。聖杯戦争は夜に行うモノだって貴方も知ったんでしょ？　なら、そんなに怯える必要ないと思うけど？」
「お、おおお怯えてなんかいないもんね。ちょっと驚いただけだし、別にビビってなんかいないんだからね！」
「アハハ、面白ーい！　やっぱりお兄ちゃんは面白いわ」
「シロウ、無事のご帰宅、誠に喜ばしい限りです。しかし、何故彼と一緒に行動してるのです？」
「し、修司君、その、これはですね……」
微笑むイリヤと士郎に問い詰める騎士の少女、更にジャンヌに至っては懺悔をするように涙目で縋ってくる。混沌としてきた場の空気、外人と言う物珍しさからドンドン人の目が集まってくる。
流石にこれ以上此処にいるのは不味い。そう判断した士郎は修司に一つの提案を出してみた。
「修司、取り敢えず俺の家に避難しないか？」
「合点」
士郎の住まいである武家屋敷は此処から然程遠くはない、故に緊急の避難所として提案してきた士郎に修司もまた乗っかる事にしたのだった。

――その夜。
「そろそろ決めておけよ娘」
「……」
「お前は我が臣下のお気に入りらしいからな。我自ら手を下すことは

無いが……それも時間の問題だぞ？　このまま人として死ぬか、それとも死ぬことも許されぬ化生に成り果てるか、選択までの猶予はもうあまり残されてはいないぞ？」

それは少女の胸を抉り、貫く真実の言葉。無情とも呼べる宣告に少女は一人取り残される。

「……どうして、私の回りは」

グジュリ。自身の中で何かが爛れて落ちる音が聞こえた気がした。

その２４

「――うん、うん。そうなんだ。今士郎の家にいて……うん、夕飯戴く事になって、うん。ごめんねシドゥリさん。また留守番させて……そう、レティシアさんも一緒なんだ。うん、気を付けて帰るよ」
「――修司くん、シドゥリさんはなんて？」
「ご迷惑を掛けないようにってのとお小言を幾つか、それと気を付けて帰って来るようにだってさ」
「連日遅く出掛けているのに敢えて詰問せず、ですか。彼女にはほとほと頭が上がりませんね」
「因みに、お小遣いの事も言ってたよ。アレは来客である貴女に不自由させない為に渡したもの、貴女が納得して使うのなら私が特に思うことはありません――だって」
「うぐぅ。本当に彼女には頭が上がりません」
　日が落ち、辺りは夜の暗闇に包まれる時間帯。人目を避ける為に急遽衛宮邸に訪れた修司とジャンヌ、自宅で留守を任せてしまっているシドゥリに詫びの電話を入れ終えると、居間の方へ戻り彼女の隣に並ぶようにテーブル前に腰を下ろす。
　今この場にいるのは修司とジャンヌ、士郎とセイバーの四人だけ、白の少女――イリヤは士郎と修司の元気な顔を見れた事に一先ず満足し、そそくさと自陣の拠点へと引き返していった。
「士郎も、電話サンキューな。携帯の充電が無くなりかけてたから助かった」
「別にそれくらい良いさ」
「それで士郎、何故彼等をワザワザこの家に上げるのですか。確かに彼等はこの聖杯戦争の枠外、絶対の敵対者という訳ではありませんが、それでも気を許して良い相手では無い筈です」
「その前に質問があるんだがセイバーさん。貴方には留守番を任せていた筈ですよね？　何故に彼処でイリヤと口論してたんでせうか？」

「うぐ、そ、それは……」
「それは私にも責任があるのです。セイバーのマスター、彼女があの場にいたのは偏に私の話を聞いて貰うため。無理を言って行動を共にして貰っていたのです」
「ルーラーが？　そりゃ何でまた？」
「円満な話し合いの為にせめてもの誠意と思って幾つかご馳走する事にしたのですが……まさか彼女が彼処までの健啖家だったとは思いもせず、つい手痛い出費となりました。うぅ、本当なら私も鯛焼き食べる筈だったのに……」
「ジャンヌさん。本音、本音はみ出ちゃってるから」
「セイバー？」
「ち、違うのですシロウ！　サーヴァントには魔力の供給が不可欠で、それを補う為にある程度の食事が必要で、決して彼処の露店の品々に惑わされたとかそう言うものでは決して！」
「うーん、強情なのか素直なのか」
「まさかの腹ペコ枠が二人とか、何だか嵐の予感」
　話し合いの場なのに早速ぐだぐだしてきた。必死に取り繕うセイバーを無視して、士郎は咳払いを一つ溢し無理矢理話の流れを戻す。
「オッホン。……で、その話ってのは何なんだ？　ルーラーがワザワザセイバーに直接言いに来たって事は用件は結構切迫していたりするのか？」
　本来ならサーヴァントではなく、マスターに話を通すべきなのにジャンヌはそれをせず、逆にサーヴァントであるセイバーから先に事情を話そうとした。それはルーラーである彼女が優先順位を変えたのは偏に士郎の人物像を彼女なりに把握したからである。
　彼女から見て衛宮士郎という人間は正義感の強い男子だ。強きを挫き弱きを助ける、その在り方は聖女と呼ばれたジャンヌから見ても最初は多少なりとも共感できた。
　だが、彼はそれが些か強過ぎる傾向にある。正義感が強いという言葉だけでは片付けられず、その他者への行き過ぎた奉仕精神はジャンヌには少し歪に見えた。

彼に頼めば二つ返事で了承してくれるだろう。しかし、それは少々狡いのではと思い止まり、士郎本人ではなく彼よりも警戒心が強く、聖杯戦争を知るセイバーから先に話を通すことを選んだのだ。

尤も、その甲斐なくジャンヌの目論見は砕かれる事となったのだが……。

目を一時伏せ、軽く深呼吸をするジャンヌ。よほど重大な事を口にするのか、つられて三人も真剣な表情となり。

「――聖杯戦争の審判者（ルーラー）、ジャンヌ＝ダルクがセイバーのサーヴァントとそのマスターに要請します。私と共にキャスター討伐に協力してください」

――そしてその口から出される言葉にセイバーと士郎は揃って目を見開く。

「キャスター討伐って、どういう事なんだ？」

「掻い摘んで説明します」

それからジャンヌはキャスターが行った内容を簡潔ながら説明した。今、キャスターは冬木の街のあちこちから無差別に魔力を供給していること、その影響で巷ではそれがガス漏れ事故による昏睡事件の原因であること、聖杯戦争の審判者である彼女から見ればキャスターのしている事はルール違反に当たっていると。

「しかし、それだけ派手に動いていれば他の陣営だって気付くだろ？マスターも令呪を持ってるし、そう簡単に好き勝手させるもんなのか？」

「キャスターはその名の通り魔術に秀でている者です。そして実力も恐らく一流、適正もあり、知略策略にも長けた者がキャスターとして召喚されたのなら、恐らく聖杯戦争の抜け道など幾らでも模索出来るのでしょう」

「そして、可能性の一つとしてキャスターのマスターは既にキャスターの傀儡となっている可能性が高い。と、貴方はそう言いたいのですねルーラー」

セイバーの付け足す説明にジャンヌは肯定するように頷いて見せる。キャスターが持つ危険性、その可能性を考慮したが故にセイバー

は彼女の要請に異議は唱えなかった。
「そうか、キャスターが昏睡事件の犯人……なら、断る訳にはいかないな」
　そして、それは士郎も同様で彼がジャンヌの誘いを断るのは有り得なかった。キャスターを倒し街の人々を助ける。それは衛宮士郎が望む正義の味方の正しい在り方だと思えたから。
「そして、修司君は……」
「今の話を聞いて俺が大人しくしていると思う？」
　本当なら一般人である修司には関わって欲しくはなかった。しかし、キャスターの話を耳にした以上、彼も当然の如く関わって来るだろう。口で言った所で聞く耳持たないのは彼と同じ屋根の下で過ごしていやというほど理解した。
「――――はぁ、仕方ないですね。その代わり約束して下さい。無理はしないと」
「……まぁ、善処はするよ」
　そこで素直に分かったと言わない辺り、修司も相当な意地っ張りだと理解したジャンヌは本日幾度目かの溜め息を吐き出す。
　これで話し合いは終わりか？　士郎も修司も互いに異議は唱える様子はない。ならばそろそろこの話を終わりにしようとジャンヌが締めに入った所で……セイバーが待ったを掛ける。
「シュウジ、一つ気になった所があるのですが……宜しいですか？」
「ん、なんだ？」
「貴方は何故、そうまでして聖杯戦争に関わろうとしているのです？
　貴方は魔術師でもなければマスターでもない、只の人間だ。何故自ら死地に赴く様な事をする。幾ら腕に覚えがあっても人間が英霊――――サーヴァントに勝てる道理はない。正直言って、貴方のやろうとしていることは唯の蛮勇だ」
　セイバーにとっては当然の疑問、そして修司にとってその問は既に答のある聞きなれたモノだった。セイバーの隣にいる士郎は表情暗く俯き、ジャンヌは目を閉じて瞑目している。
　真っ直ぐに見詰めてくるセイバー、対する修司もまた彼女の視線か

ら逃げず、彼女の瞳を正面に捉えながら応えた。
「それは、俺が聖杯戦争に全てを奪われた人間だからだ」
「――――え？」
「１０年前、冬木の新都の方で起きた大火災、あれは当時の魔術師達が起こした聖杯戦争によるものらしくてな、それの所為で俺も其処にいる士郎も家族を失った」
「……そう、なのですか、シロウ？」
　目を見開き、微かに震える声でセイバーは隣に座る士郎へ訊ねる。返ってきたのは無言の肯定、静かに頷く己のマスターにセイバーは今度こそ言葉を失う。
「１０年前に起きた惨劇が今再び起きようとしている。俺はそれをなんとしても阻止する。いや、しなければいけない。聖杯戦争に乱入し、元凶たる聖杯を破壊する」
「聖杯を……破壊？」
「あぁ、万能の願望器だが知らないが、そんなものがあるから俺達の街は壊された。多くの犠牲者を生み出し、深い傷痕を刻まれた。故に、俺は聖杯を破壊すると決めた」
　修司の戦う理由である聖杯の破壊、それはセイバーにとって寛容し難い話で、当然認められるモノではない。だが、彼女にはそれが出来なかった。
「戦争なんて血腥い戦いに進んで参加したんだ。セイバーさん、アンタにも譲れない願いってのがあるんだろ。それ自体は否定しない、けどな」
「聖杯戦争の果てにあの地獄が待っているなら、俺は全力を以てそれを阻止するぞ」
　目の前の少年は嘗ての聖杯戦争の被害者だ。当時の理不尽に抗い、払拭する為に体を鍛え、今日まで力を付けてきた。そして今、嘗ての災厄が１０年の時を経て再び訪れようとしている。
　セイバーに、彼の言葉を否定するだけの材料など持ち合わせてはいなかった。だって、彼の言っている事は何処までも正しいからだ。彼の怒りはこの街に住まう人間にとって当然抱くモノだからだ。

それを否定する事など、自分には出来ない。その資格すらない。10年前の聖杯戦争に参加していたセイバーに修司の言葉は何処までも深く、重かった。
「じ、じゃあそろそろ飯にしようか。そろそろ藤ねえも来るし、人数分用意しないと……」
重苦しくなった今の空気を可能な限り払拭しようと、努めて士郎はそう言って立ち上がり、台所へと足を進める。
「んじゃ、俺も手伝うよ。流石に此処から一人で作るには時間が掛かる。士郎、冷蔵庫借りるぞ」
「わ、分かった。んじゃ修司は前菜を頼む」
台所に並ぶ修司と士郎、互いにそつなくこなし邪魔になるような事はならず、男二人による調理は恙無く進んだ。
「……あの、最後に一つ質問して良いですか？　ルーラー」
「は、はい。何でしょうか？」
「何故、共闘を我々に提案したのです？　私達以外にもアーチャー達の様な適任は他にもいるかと思われますが？」
顔色悪く、力弱く手を上げて質問してくる剣士の少女。昨夜の力強さは何処へいったのか、力なく項垂れ、特徴的なアホ毛も何となく萎びてるようだった。
「ええ、最初は私もそのつもりでした。ですが先程見掛けたときは気絶していた様で、アーチャーに抱えられていた状態でしたから、呼び止めるのに少し躊躇してしまったんです」
そして、不思議そうに応えるジャンヌの言葉に調理していた男二人の肩はビクリと震えるのだった。
「修司……」
「お、俺は悪くないもん……」
その後、やって来た藤村大河教諭と一緒に食卓を囲み、多少の騒動に見舞われながらも、本日の夕食は無事に終了するのだった。
「桜ちゃん、来なかったな。安心した様な、少し残念な様な……」

◇

――その後、衛宮邸での夕飯を済ませ、自宅へと戻った修司達。少しの休息を挟ませ弛んだ気持ちを引き締めながら、修司はお手製である山吹色の胴着を身に纏う。

時刻は深夜、魑魅魍魎達が動き出すには最適な時間帯。シドゥリはとっくに眠りに付いているし、圏境を用いれば気付かれること無く外へ出ることが出来る。

防寒用の上着を羽織り外に出ると、既に鎧を身に纏うジャンヌが待機していた。

「修司君、準備は良いですね？」

その口ぶりから彼女にはもう修司を止めようと言う意思はない。あるのは修司だけはなんとしても五体満足で生還させるという覚悟と決意、それを汲み取ってか修司も力強く頷いた。

「あぁ、キャスターをぶちのめして街の人達を解放させる。ジャンヌさん、頑張ろう」

修司とジャンヌの気持ちは同じ、唯一違うのは修司だけでも生き延びさせようとするジャンヌと共に生き延びようとする修司の決意だけ。しかし、そのズレさえも認め合い二人は夜の冬木へ跳躍する。

向かった先は柳洞寺、聳え立つ階段を前に修司はもう一方の陣営の到着を準備運動をしながら待った。

「さて、約束の時間にはまだ時間があるな。ジャンヌさん、今の内に作戦の確認をしておこうか？」

「……いえ、どうやらそんな暇は無いようです」

「それは、どういう？」

「この魔力の流れは――やられた！　キャスターはセイバーのマス

ターに術を仕掛けています！　今、柳洞寺にはキャスターの他に士郎君がいます！」
「っ!!」
　叫ぶようなジャンヌの言葉に反応し、修司は柳洞寺へ続く階段をかけ上がる。呼び止めようとするジャンヌだが、既に修司は山門の前にまで足を進めている。
　何と言う脚力か、修司の身体能力の高さに改めて驚愕するが、呆けてばかりもいられない。追い縋ろうと彼の後を追うジャンヌだが……意外にも彼は山門の所で足を止めていた。
　彼の気質なら囚われの士郎の所まで一直線に駆け付けるだろうと思っていただけに不思議に思いながら彼の隣に立つと……その理由に納得する。
　修司の行く手を遮るように悠然と佇む一人の青年、その背に身の丈にも迫る長刀を背負い、その長い髪を夜風で靡かせるその姿、異国の出自であるジャンヌは理解する。自分の前にいるのは嘗ての日本という国の象徴、即ち――侍だと。
「先ずは名乗っておこう。我が名は佐々木小次郎、此度はアサシンのサーヴァントとして現界した」
「……自ら真名を名乗るのですか？」
「元より隠すほどの名ではないのでな、それに其方は裁定者（ルーラー）だ。真名が既に暴かれている以上、隠す意味は然程あるまい？」
　その姿勢は何処までも自然体だった。まるで風に揺れる柳の如く……その佇まい、その心構え、武術を嗜む修司には一目で理解した。
　目の前に佇む男は紛れもない強者だと。
「……ジャンヌさん、先に行ってくれ。コイツの相手は俺がする」
「修司君!?」
「今、士郎はキャスターの手の内なんだろ？　多分、俺が行った所で大した助けにはなれない。魔術に長けたサーヴァントにはそれに対抗出来る力を持ったサーヴァントを当てるのが得策だ」
「で、ですが！」
「頼む、行ってくれ。アイツは俺の友達なんだ。友達が死にかけてい

るのにそれを見過ごす真似だけはしたくない！」
　戸惑うジャンヌだが、修司の差し迫った言葉に圧され有無を言えなくなる。全ては修司の見解が正しい、しかしそれを行うには目の前のサーヴァントを修司一人で相手をするという事を意味している。
　士郎を助けるか、修司を守るか、迫る選択肢を前にジャンヌが迷っていると……。
「来ないなら――――此方から往くぞ」
　一息に長刀を抜き放ったアサシンが、修司に向けて肉薄する。振り下ろされる刀、物干し竿と呼ぶに相応しい得物を前に修司は人生初の真剣白羽取りを実行する。
　そして、それは成された。振り下ろされた刃を両手の掌で受け止めて見せ、それを目の当たりにしたアサシンは感心の声を漏らす。
「今だ！　行ってくれジャンヌさん！」
「っ！」
　そのダメ押しの一言にジャンヌは今度こそ覚悟を決め、山門の向こうへと走り出す。その後ろ姿を見送って、修司は薄く微笑むアサシンを見てその疑惑を確信させる。
「お前、やっぱワザとか！」
「フッ、いやなに折角一人の男が覚悟を見せたのだ。ならばその後押しをしてやるのが人情と言うものだろう？」
「はっ、随分と気遣いの上手い侍がいたもん……だ！」
　肉薄するアサシンの刃を蹴りで弾き飛ばし、石段の踊り場へと着地する。見上げれば未だ佇み、追撃する素振りを見せないアサシンが静かに修司を見下ろしている。
（コイツ、俺を待っている。俺がその気になるのを待ち望んでいやがる！）
　それは侍の矜持――――否、佐々木小次郎という一人の男の誇りだった。彼が望むのは全霊に全霊を重ねた至極の一時、聖杯戦争という戦いに戦いその物に願いを抱いた武士（モノノフ）の在り方だった。
「さぁ、来るがいい。未だ未熟な拳士よ、貴様が挑むのは剣の極致。ここより先は紛れもない死地と知れ」

あからさまな挑発を前に修司の闘志はメラメラと沸き立つ。明らかに乗せられたのに、目の前の男を前にするとそれすらも心地よくなってくる。
「――――上等。ならばその極致、俺の拳で抉じ開ける」
上着を脱ぎ捨て、拳を構える。夜の風が凪ぎ、月の光が二人を照らす。包まれる沈黙、空気も、時間さえも止まるような錯覚を前に――――動き出したのは。
「フッ！」
「ダラァッ！」
両者。石畳の階段を踏み抜き、駆け出した二人が剣と拳のそれぞれを振り抜く。ぶつかり合った衝撃が山の木々を揺らしていく。

その25

靄の掛かった脳裏に浮かぶのは幾つもの光景、古の空と海、人と城、そして――――裏切り。
血に沈む男と燃える城、幾つもの歴史がチャンネルを変える如く切り替わる。それが自分以外の誰かの記憶で、生み出された幻影だとしてもそれを衛宮士郎に阻める力はない。
「――おはよう坊や、良く眠れたかしら」
気付けば、目の前にはフードを被る女性がその口に笑みを携えて佇んでいた。
「こ、ここは……俺は、一体」
「本当ならもう少し間を置くつもりだったのよ？　セイバーだけでなくルーラーと一緒にいるものだから最初は私も躊躇したの……でも、貴方が剩りにも隙だらけだったから、つい魔が差しちゃったわ」
ご免なさいね。等と思ってもいない言葉を口にするキャスターに士郎は自身の迂闊さに歯を食い縛る。修司達と合流する前に少しでも身体を休めようと仮眠を取ったのが裏目に出てしまった。
体は――――動かない。魔力の込められた糸が士郎の全身を這うように縛り付けている。指処か言葉を口にする事も困難、助けを求めるのは絶望的。しかしそれでも衛宮士郎には諦めという選択肢は無かった。
「あぁ、助けを期待している所申し訳ないけど、それは無理よ。山門には私が召喚したアサシンが門番しているから、喩えセイバーが合流してきても山門を突破するには時間が掛かるわよ？」
「――――っ！」
足下から崩れ落ちる感覚、サーヴァントがサーヴァントを召喚すると言う埒外の反則。魔術に於いて素人な士郎でも理解した。自分には助かる可能性は欠片も残されていないのだと。
「どうやら、自分の置かれている状況を理解できたようね」

「……俺を、殺すのか？」
「フフフ、別にそれでも良いのだけどそれじゃあ少し可哀想だから、恩情として貴方の令呪を戴くだけにしておくわ」
「令呪を……だと？」
「ええ、それともこう言った方が分かりやすいかしら？　貴方の相方である最優のサーヴァント、セイバーを私に頂戴な」
「っ！」
その笑みをより深めてそう口にするキャスターに士郎はそうはさせるかと令呪の刻まれた右手に力を込めるが、悲しいかな魔術の力によって封じられた士郎の体ではその程度の抵抗も許さなかった。
キャスターが指を動かす。それだけで士郎の身体は為す術なく支配される。魔術の糸により勝手に差し出される右手、キャスターはそれを優しく指を這わせるが――――次の瞬間襲ってくる痛みはそんな生易しいものではなかった。
「が、ぐ、あぁぁぁぁぁっ!!」
右手の神経が丸ごと抜き取られる様な感覚、自身の手から何か大事なモノが抜き取られようとしている。
「ダメだ。令呪を、キャスターに奪われるのは、それだけは……ダメだ!!」
それはセイバーへの裏切りを意味している。共に戦うと約束したのに、それを一方的に切るのはそれはセイバーに対する裏切りと同然、故に士郎は抵抗する。体が動かなくとも相手が魔術を使って令呪を奪おうとするのなら、此方も魔力を以て対抗するしかない。
「へぇ？　頑張るのね。セイバーに対する義理立てかしら？　でもね坊や、私はそう言うの――――反吐が出る程嫌いなのよ」
「がぁぁぁぁぁっ!!」
「いいわ、そんなに抵抗するのなら令呪を奪った後に殺してあげる。可能な限りゆっくりと……ね？」
キャスターの口許に今までとは違う嗜虐的な笑みが刻まれる。このままでは殺される。痛みによって薄くなる意識を必死に繋ぎ止め――――。

「其処までです！」
「っ!?」
　しかし、救いの手は現れた。振り抜かれたソレはキャスターを退かせ、その余波により士郎に纏わり付く魔力の編まれた糸を吹き飛ばしていく。
　キャスターの縛りから解放され、息も絶え絶えになりながらも意識を飛ばさずに済み、大量の汗を流しながらも息を整えようとする。
　ふと、視線を上げれば其処には金髪の女性サーヴァント、セイバーと顔の似た聖女がその旗を槍の様にキャスターへ突き立てていた。
「キャスター……いえ、コルキスの王女メディアよ。貴方の行っている魔力供給は無関係な人々を巻き込む非道なモノ、裁定者（ルーラー）である私、ジャンヌ＝ダルクが命じます。今すぐ冬木の人々を解放しなさい！」
　瞬間、聖女の背中から赤い光が浮かび上がる。羽根のようなソレが一際輝きを見せ、士郎はそれがサーヴァントに対する絶対命令権である令呪なのだと理解する。
　そして放たれた令呪の力は間違いなくキャスターに作用される。
【神明裁決】各サーヴァントに対し二画の令呪を持つ裁定者（ルーラー）であるジャンヌにのみ許されたクラス特権。
「ぐっ、ルーラーですって！　アサシンは何をしていたの!?」
　ルーラーからの令呪に耐えきれなくなったキャスターはその縛りを強制的に受け入れ、次の瞬間忌々しそうに門番であるアサシンに悪態を吐き捨てる。
　しかし、キャスターの疑問は当然の事だった。この柳洞寺には特製の結界を山全体に覆っている。サーヴァントは山の側面から侵入を許さず、この寺に侵入できるのはアサシンのいる山門のみ。
　だが、このルーラーはそのアサシンと戦った様子はない。セイバーも柳洞寺に訪れるにはまだ時間が掛かるだろうし――――であれば可能性は一つしかないと、キャスターはその事に気付く。
「ルーラー、貴女まさかあの坊やにアサシンをぶつけたの？　あの白河とかいう小坊主を」
「っ!?」

キャスターの言葉に強く反応したのは士郎だった。自分の友人がサーヴァントを相手にしている。無茶だ。最初に相対したあの青いランサーだってとんでもない実力者だった。アサシンがあのランサーと同格の英霊だと言うのなら、修司の命は間違いなく潰える事になる。

「ルーラー、本当なのか!?」

「……」

士郎の責めるような問い掛けに返ってきたのは沈黙、しかしその沈黙はこれ以上ないほどに肯定であることを示していた。

「くっ、フフフ、アハハハハ！　これは傑作だわ！　嘗ては自国の為に立ち上がった貴女が今度は無関係な民を犠牲にする！　貴女のやっていることは私のしていたことと何一つ変わらないわよ！」

キャスターの嘲りは正しく正論だった。キャスターという巨悪を討つ為に修司という一人の人間を犠牲にする。小を殺して大を救う、しかし本来無関係である人間を捨て駒にするのはある意味キャスターより悪逆だと言えるだろう。

キャスターは白河修司という人間を少なからず知っている。ルーラーと行動を共にして聖杯戦争に偶然巻き込まれた一般人、その評価は普通の人間にしてはそこそこ力がある程度、魔術に特化した自分では何の障害にもならない……と、そのくらいの認識でしかなかった。

コンテナ街でのバーサーカーとの遭遇戦は、バーサーカーのマスターが生意気にも結界を張っていた所為か遠目の魔術では何も確認できなかったが、正直そんな事は些細な事だ。

何か幸運が働いたのか、彼が生きていたのは意外だったけど、その幸運が修司を生かしたのだと考えれば然程疑問には思わなかった。

修司という人間が特別な幸運に恵まれているのかは定かではないが、何れにしろ自分の敵ではない。そんな彼をあろうことかサーヴァントの足止めに使うなど馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「――それは違いますよ。キャスター」

「……なんですって？」

しかし、ルーラーはそんなキャスターの嘲りを一蹴する。
「彼は、自ら私を送り出してくれました。そこに他者の介在は一切ありません。彼は、自分の意思で私の背中を押してくれたのです」
そして、と区切りジャンヌはその旗をもう一度キャスターへ突き付け――。
「彼は、白河修司という男の子は貴女が思うほど弱くはありません。剰り、彼を侮らない方が良いですよ?」
その不敵な笑みは修司という少年に対する信頼をこれでもかと現していた。

◇

「ハァッ!」
「フッ」
「セラァッ!」
「セッ、ハッ」
柳洞寺山門前にて突風が吹き抜ける。物干し竿と呼ばれる長刀の刃を前に距離を開けるのは愚策だと判断した修司は降り掛かる刃に対する恐怖を呑み込み、接近戦を選択する。
一歩でも退けばその瞬間自分は無惨に斬殺される。故に少しでも流れを掴もうと修司はその拳を奮うが、一向に当たる処か掠らせる気配がない。ノラリクラリと修司の拳は避けられ、その余波が突風となって吹き荒れるだけに終わる。
「いやはや、現代の人間というのも捨てたモノではないな。これ程までの武術の腕を持った者は私のいた時代にはいなかったぞ」
「はぁ、はぁ、クソ! 涼しい顔をしやがって」

「ハハハ、気に障ったのなら謝ろう。しかし其方にも原因はあるのだぞ？　何せ此方が幾ら冷や汗を流そうともお前の剛腕によって吹き飛ばされてしまう。いやはや、今の時期が夏で無いのが残念だ。夏期になればその剛腕も存分に活躍出来たモノを」

「扇風機扱いか……よっ！」

苦し紛れの回し蹴りも空しく空を切るだけだった。頭上には飛び上がるアサシン、両手には長刀である物干し竿が握られており、その剣先は修司に狙いを定めていた。

このままでは一刀両断される。コンマ数秒後の自身に寒気を覚えた修司は、本能に命じられるがままに後ろへ飛ぶ。

しかし、段差となっているその足場ではそれ以上の逃げ道は無かった。着地をして次の動きに転じようとしても、下の足場に辿り着く迄に後数瞬の間が必要になる。

対して先に着地したアサシンは既に次の行動へ動きをシフトしていた。

「隙だらけだぞ、小僧！」

振り抜かれる刃、回避は不可能だと察した修司は両腕を交差させて防御の姿勢に入り――――次の瞬間、その鋭い痛みに悲鳴を上げそうになった。

肉が斬り落とされていく。筋肉を斬り、骨を断ち、命を両断させる必死の刃。だがこの時アサシンは自身の手応えに違和感を覚えた。まるで頑強な巨大金属に触れた様な感覚、その手応えから斬れたのは表面上の肉だけだと察したアサシンは不思議そうな顔立ちで階段の足場へと着地する。

対して修司は満足に受け身も取れないまま地上へ落下、痛みと衝撃に声すら上げられないが追撃を逃れる為に己の体に鞭を打ち、身体中から血を流しながらも立ち上がる。

出血の量に反して傷口は然程深くはない。まだ自分は戦えると再確認した修司は拳を構えてアサシンを睨む。

――――対照的にアサシンは呆れ顔だった。

「全く、お主の身体は一体何で出来ているのだ？　サーヴァントでも

なく魔術師でもないお主が我が剣を肉体のみで阻むとは……些か頑丈に過ぎやしないか？」
（あ、危なかった。あの一瞬の間で師父から教わった呼吸法を実行していなかったら、あの瞬間に俺の身体はバラバラにされていた！）
修司が行ったのは身体の強度を一時的に増加させる言峰師父から教わった呼吸法、あの一瞬の合間で死を前にして咄嗟に出来た事に修司は日頃鍛練を欠かさなかった自分と教えてくれた師父に内心で深く感謝した。
しかし、これで戦況は振り出しに戻った。依然としてアサシンには傷一つ付いてはおらず、致命傷に至っていないとは言え此方は傷だらけだ。ダメージの差は一目瞭然、同時に二人の間にある実力差はそれ以上にハッキリとしていた。
アサシン――――佐々木小次郎は純粋な腕力で言えば修司よりも劣っている。その膂力も、脚力も、力と速さも、その全てが上回っている。
が、それを凌駕して制するだけの〝巧さ〟がアサシンにはあった。幾ら此方が力を繰り出しても相手の技が全て無力化させる……それは正しく柔よく剛を制すという格言の体現。地の利を活かし、己の術理を活かし、達観された眼で以て剛を制する。
この短い応酬で理解した。今の修司ではあの佐々木小次郎に勝てはしないという事を。
「ふむ、あちらも中々忙しそうだ。キャスターめ、流石のルーラー相手では少々分が悪いと見える。そう言う意味ではお主の見立ては正しかったと言うわけだな」
「……」
「だが、それでは此方がやられたまま終わる。それは面白くない。――――故に」
「っ！」
「此方も一つ、勝負と行こうか」
アサシンが構えた。一見背中を無防備に晒しているように見えるその構えはまるで引き絞られた弓矢の如く修司に狙いが定められて

いる。アサシンの得物でも距離があるというのに、修司は喉元に矢じりを突き付けられているような錯覚を覚えた。
「其処から一歩でも前に進み、拙者の間合いに踏み込めばお主は我が秘剣を目にするだろう。だが、退くと言うのなら止めはしない。逃げるのならば引き返し、二度とこの地に足を踏み入れるな」
それはこれ迄の煽るような挑発とは違う事実上の宣告だった。逃げるなら追わない、しかし踏み込めば避けられない死が修司を襲うだろう。
構えからして繰り出される斬撃はアサシンにとって必殺、そして佐々木小次郎が持つ必殺と言えば一つしか考えられない。
秘剣・燕返し。それが一体どんな斬撃なのかは修司には分からない。飛燕の如き俊敏性を以て切り刻まれるのか、渾身の力を込めた一刀で両断してくるのか、修司には判断がつかない。
確かなのはこのまま無策で突っ込めば修司に待っているのは死だけだと言うこと、踏み込めば死は免れない。かといってこのまま下がってしまえば修司は二度と立ち上がれない挫折を味わう気がした。
長い思考の中で選んだ選択、それは命を惜しむ者ならば当然の選択だった。
(退く……か、まぁそれも仕方ない。この血腥い戦いで彼処まで立っていられただけでも大したモノだ)
背中を見せ、階段を下りていく修司を見てアサシンはその構えを解く。そこに些かの落胆や失望の感情はない、ただ彼が抱くのはもう少し成長し、完成された修司と相対出来なかった己の不運に対する嘆きだけだった。
アレが成人を迎える頃にはきっと想像も及ばない拳士に育っていた事だろう。魔術師でもない人間では此処までが限界だ。
「さて、後はこれから来るセイバーを迎え撃つだけか、せめてこの嘆きを払拭してくれるだけの相手であれば良いの――――」
〝おい〟
その言葉は、何処までも透き通っていた。目の前に声の主はいない。まさかと思い下へ視線を向ければ――――。

「何勝手に構えを解いてんだよ……アサシン！」
其処には、獣の如く身を深くした修司がアサシンを睨み付けていた。
修司が選んだのは逃亡ではなく、かといって無闇に突っ込むことを選んだ訳でもない。全てはアサシン――佐々木小次郎に勝つために自身の最善を選んだだけなのだ。
クラウチングスタート。陸上競技において最もスタンダードな構えの一つ、両手を地に付けて片足を延ばし、力を溜める様はまるで発射体勢のロケット。
自分に勝つ為に最善を尽くそうとする修司を見て、佐々木小次郎は声を上げて笑い出す。
「フフ、フフハハハ、フハハハハハッ!!　そうかそうか、そう来たか！　勝てぬと分かって逃げるのではなく、勝てぬと分かって突き進むのではなく、勝つ為に勝利を選んだ訳か！　いやいや、何処までも楽しませてくれるなぁ――修司!!」
初めて小次郎は修司の名前を口にする。それは紛れもなく敵対者として認めた証、自分に勝つ為に死を選ぶのではなく、未熟の身でありながら尚前に進むという気概を見せた少年にアサシンはここが自分の死力を尽くす場なのだと確信した。
「来るがいい白河修司、貴様に我が秘剣を存分にお見せしよう!!」
再び刀を構えるアサシン、その眼は修司から一瞬たりと逸らさず、その口元は歓喜に歪んでいた。よもやこの戦で早々に宿敵に出会える喜びに剣豪佐々木小次郎は驚喜に打ち震えていた。
――静寂が再び周囲を包む。溜めるに溜め、それでも尚力を集束した力を一点に向けて爆発させる修司が脳裏に浮かぶのは今の自分の限界に付いて。
（足りない。今の俺では奴に、佐々木小次郎に勝つことは出来ない。それはどうしようもない事実、だから――）
〝越えよう。まだ至らない自分とこれ迄の自分に打ち克ち、もっと先へ往こう〟
（限界の限界を超えて――――更に向こうへ！）

瞬間、階段を蹴り抜いた修司はこの時音を超越した。
（まだ、だ！　まだまだぁっ!!）
足りない。これではまだアサシンには……あの剣士には届かない。
忘れるな、今己が挑もうとしているのは古くから伝わる伝説の剣豪の片割れ。驕るな、侮るな、この瞬間、この刹那に己の全てを懸けろ。
二歩、踏み出し修司の世界から色が消えていく。更に加速したその速さ、しかし目の前の剣豪だけは確かに捉えていて……。
「秘剣――燕返し」
瞬間、修司が目にしたのは三方向からの同時斬撃。一息に三つ繰り出される刃はこの瞬間確実に修司を捉えた。
驚く暇なんてない、最早この身が止まることはない。振り抜かれたアサシンの斬撃は確かに修司の肉体に届きつつあった。
避けられない、どんなに速さを重ねても既に修司の未来は決まっている。瞬きにも勝る刹那の後に訪れる結末、それが修司に課せられた運命。
（足りないなら、振り絞れ！　未来が俺を殺しに来るのなら――）
（未来すら置き去りにしろ!!）
アサシンの必殺、燕返しの刃が修司の首、胴、腰にそれぞれめり込み――。
「届けぇぇぇぇっ!!!!」
三歩目の踏み込み、振り抜かれた拳は音を越えて――この刹那、光へと至った。
振り抜かれた拳はアサシンの鳩尾に深々と突き刺さり、貫かれた衝撃はアサシンの背中の衣服を突き破り、背後の山門すら吹き飛ばし、更にその先にある柳洞寺の本堂すら粉砕する。
「な、なに!?　きゃぁぁっ!?!!」
「い、今のは!?」
「まさか、修司君!?」
その時、遠くから女性の悲鳴が聞こえた気がしたが……それに意識を向けるほどの余力など修司には残されていなかった。

身に纏っていた山吹色の胴着はその上半身部分が吹き飛び、鍛え抜かれた肉体が露になる……が、先にも述べた様にそれを気にする余裕など修司には無かった。
「はぁっ、はぁっ、はぁ――――」
「く、フフ……見事だ」
血を口から垂れ流し、それでも雅さを失わない流麗の剣豪。その言葉を耳にして漸く修司は己の勝利を実感した。
「――――本当は、こんな勝ち方なんてしたくはなかった」
本来の立ち合いの勝負でなら終始アサシンが圧倒していた。修司はその技の差を埋めようとアサシンを自らの土俵に引き込んだに過ぎない。
しかし、それすらも目の前の侍は笑って受け入れて……。
「フッ、何を言うかと思えば……過ぎた謙遜は嫌みになるぞ？　我等がしているのは所詮血腥い殺し合い、其処に作法を求める方がどうかしている。お主は全力で自身の出来ることを成し遂げた。であるならば……胸を張れ」
そう言って、剣豪佐々木小次郎は己の敗北を認め修司に道を譲るように脇に逸れて――――。
「さぁ、往くがいい。お主にはその資格がある」
英霊佐々木小次郎に認められ、先を進むことを許される。殺し合いをした筈なのに修司には蟠りは無く、剣豪である彼に僅かな尊敬の感情すら芽生え始めていた。
――――恐らく、彼はこの後脱落するのだろう。それだけの手応えはあった。喩え相手が既に死した英霊であっても自分と死力を尽くした相手である事に変わりはない。
故に最期の礼儀として、修司はアサシンに頭を下げて先へ往く。その後ろ姿を佐々木小次郎は満足そうに見送り――――。
「フフ、よもや早々に胸踊る戦いが出来ようとは、キャスターの女狐には感謝しなければな」
満足そうに目を瞑り――――。

『満足した様で何より、ならば其処から先の命はワシが有効活用するとしよう……』

ギチギチと悪意の鰓が鳴った気がした。

その26

「やぁぁぁっ!!」
　振り抜かれた旗、その圧倒的な膂力で奮われる棒術は押し寄せる骸骨たちを一瞬にして粉砕していく。ルーラーとして顕現されたジャンヌ＝ダルク、裁定者として他サーヴァントよりも上を行く彼女のステータスはキャスターが繰り出す骸骨の軍団を全くモノともしなかった。
　鎧袖一触、数の暴力を以て足止めしている内に次の策を画策していたキャスターだが、これではそれもままならない。衛宮士郎というお荷物に襲わせて多少なりとも行動を遅らせてはいるが……彼女を完全に止める事は出来ない。
「無駄ですキャスター、冬木市に張り巡された人々の魔力供給が断たれた今、貴方の力で私を仕留めることは敵いません」
　挑発紛いの言葉、しかしそれはどうしようもなく事実だった。神明裁決による令呪発動、これによりこれ迄魔力の源にしていたキャスターは供給源である冬木の人々との繋がりを完全に断たれ、彼女の魔力の源は自前の物のみとなってしまっている。
　魔術を大々的に行える供給源も失くなり、白兵戦に乏しいキャスターではルーラーであるジャンヌに勝てる道理はない。故にキャスターに残されている策は魔術による逃走位しか残されてはいない。
　――しかし。
「剰り、人を侮るものでは無いわよ？　ルーラー！」
　キャスターにはそれでもまだ戦えるだけの余力は残されていた。確かに供給源は断たれ、令呪の力も加味されて今後街の人々から魔力を奪う事は出来ないだろう。
　しかし、それ以上にキャスターには人々から魂という魔力を来れでもかと溜め込んでいた。死なせない程度にまでギリギリに溜め込んだ魔力量、その総量は並みのサーヴァントならば四、五体を使役でき

る程。
　それだけの魔力量を誇り、且つその魔力を使いこなせるだけの腕を持つキャスターならば、魔法の真似事にまで至るのに然程苦労はない。
「……流石は神代の魔術師、空中浮遊程度何て事ありませんか」
「さて、大きな口を叩いたのだから……まさか逃げる何て事はしないでしょうねぇ？　尤も――――」
　空高く舞い上がり、広げられたキャスターのマントに浮かぶのは解読難解な幾何学模様、それは全て魔術を詠唱無しで行う特殊術式。
　その模様が虹色に輝いた時、キャスターの周囲には幾つもの魔法陣が浮かび上がって……。
「逃がすつもりは此方に毛頭ないのよ！」
「くっ！」
　魔法陣から放たれた閃光は二人に向けて降り注がれていく。放たれた破壊の光、魔力の奔流を前にジャンヌは士郎の前に立ち、旗を盾代わりに押し寄せる魔力の波を防ぐ。
　柳洞寺の地を抉り、蹂躙していく。それでも魔術に対する対魔力を規格外（EX）という絶対的な耐久力を誇るジャンヌには、キャスターの魔術は僅かな損傷も与えられなかった。
　背後にいる士郎も同様に無傷、それが面白くないのかフードの下に隠れて表情自体はハッキリと認識出来ていないが、その口元からは悔しそうに歯を食い縛る様子が見てとれた。
　大元の魔力の供給源は断たれ、自慢の魔術も通じない。しかしキャスターはそれでも逃亡を図ろうとせず、未だジャンヌを睨み付けている。
「――――業腹ですが認めましょう。ルーラー、私では貴女には敵わない。どうかしら？　街の人間は解放されたことだし、今回は見逃してもらえないかしら」
「な、何を言って……!?」
「裁定者である彼女の役割はあくまで聖杯戦争が正しく行われる為の審判役に過ぎない。問題が解消された以上、私に拘る道理はない筈だ

と思うのだけど？」
「っ!?」
キャスターの言葉に士郎は言葉を失くしてジャンヌを見やるが、彼女の口から否定の言葉は出てこない。その沈黙はキャスターの言っていることを肯定している様で、士郎は自身の奥にある何かがギシリと悲鳴をあげた音を聞いた気がした。
……いや、本来ならもっと早く気付くべきだった。ルーラー、裁定者、聖杯戦争における審判役、聖杯側が用意した緊急装置でその役割は混迷していく聖杯戦争を正しく運営していく者。
そう、結局の所彼女もまた聖杯戦争の――ひいては魔術側の人間だ。聖杯戦争に於ける無関係な一般人を巻き込まないと言うスタンスも神秘を秘匿する為のモノであり、それは決して無関係な人間を守る為ではない。
無関係な人間を守る為ではなく、魔術を秘匿する為の安全装置。それがルーラーとして召喚されたサーヴァントの本質なのだとキャスターは言う。
そして、ジャンヌもまたその事を自覚していた、自分は無関係な無辜な人間を巻き込まない為と口にしても所詮は聖杯戦争が用意した駒の一つに過ぎないという事を、どんなに綺麗事を並べた所でキャスターの言う通り、聖杯戦争を続けさせる為の舞台装置でしか無いことはジャンヌも重々承知している。
――けれど。
「……確かに、貴女の言う通りです。キャスター、私は裁定者の立場ではありますが所詮は聖杯の導きによって召喚されたサーヴァントの一騎、審判役と銘打ってもあくまでそれは聖杯戦争の運営に携わる者というだけ、私と言う存在は聖杯戦争を正しく行うための安全装置、聖杯戦争を止める為の存在ではありません」
彼女の瞼に焼き付いているのは理不尽と不条理を前に傷だらけになりながらも吼える一人の青年がいて、その姿は嘗てフランスの為に立ち上がった自分と何処と無く似ていて……。
「――ですが、それでも私は貴女を見逃すつもりはありません。

キャスター、貴女は此処で倒れなさい！」
　そんな彼と肩を並ぶに恥ずかしくない自分で在る為に、ジャンヌは裁定者（ルーラー）としてではなく、人を守る英霊としてこの戦争に参加することを決意した。
「ルーラー！」
「……正気？　貴女はあくまで聖杯が喚んだ安全装置、ただの装置でしかない貴女が聖杯戦争に介入すると言うの？」
「確かに私はその為に喚ばれたサーヴァントです。ですがその範疇は全て私自身に委ねられています。仮に此処で私が聖杯戦争に参加する事を宣誓しても誰も気には止めないでしょう」
「呆れた。嘗ては聖女と呼ばれた女がここまで強情だったとは……流石に予想外だわ」
　聖杯戦争の安全装置、しかしその解釈はジャンヌ自身に委ねられている。聖杯に懸ける望みがない故に召喚された聖女、しかしその強引な解釈にはキャスターも予想できなかったのか、フードの奥で呆れに満ちた溜め息を溢す。
　しかし、その口元はすぐに喜悦に歪むのを士郎は見逃さなかった。ジャンヌはキャスターを逃がすつもりはない、なのに何故嗤っていられるのか、何か奥の手を隠しているのではと、それとなくジャンヌに伝えようとするが……。
「なら、其処にいる小僧共々消えなさい！」
　視界一杯に広がる光に士郎の言葉は阻まれる。押し寄せる熱気と衝撃、その熱量から人一人など簡単に消し炭にできる偉力を秘めていることは素人魔術師の士郎にも容易く理解できた。
　しかし、その魔力を受けてもジャンヌの鉄壁とも言える守りを抜くことは出来ない。このままキャスターの魔力が切れるまで耐えきるか、それとも何か手立てを考えるべきか、魔力の閃光を受けながらも思案するジャンヌが次に目にしたのは――――。
「これで、終わりよ！」
　短剣を片手にジャンヌの間合へ踏み込むキャスターの姿だった。
（キャスターが白兵戦を!?）

逆る魔力の光線を盾に突っ込んで来るキャスターに最初こそは驚いたが、先にも述べた通り大半のキャスターは接近戦を得意とはしていない。旗を独特の棒術で振り回し、骸骨兵士を軒並み吹き飛ばすジャンヌに対してキャスターの特攻紛いの攻撃は一見悪手にしか見えなかった。

しかし、士郎の見解は異なっていた。キャスターの手にしている短剣、それの真価を見た士郎は二人の戦いに巻き込まれるのを覚悟の上で叫ぶ。

「ダメだルーラー！　その剣に触れちゃ――――」

だがもう遅い。士郎の叫びよりも早くキャスターの短剣はルーラーの胸元に突き立てられ――――。

「な、なに!?　きゃぁぁぁぁっ!?」

突如、山門を吹き飛ばして襲ってくる凄まじい突風に煽られ、キャスターの身体は錐揉み回転をしながら空高く強制的に舞い上がる。

突き抜けた突風はキャスターを吹き飛ばしただけには留まらず、その先にある柳洞寺の本堂の半分を粉砕し、辺りを蹂躙していく。

「い、今のは!?」

「まさか、修司君!?」

まるで巨大トラックに轢かれた様に空高く舞うキャスター、ギュルギュルと畝りを上げて回転しながら舞い上がる彼女に唖然としながらも二人は突風のあった方へ視線を向けると……。

「ジャンヌさん、士郎、無事か!?」

上半身を露にした血塗れ姿の修司が山門の方から二人の所へ走りよってきた。

「修司く――――」

「修司お前、ボロボロじゃないか！」

友人の痛ましい姿に士郎は無意識にジャンヌの言葉を遮って心配の声を上げる。

「ハハハ、まぁな。流石に簡単な相手じゃなかったけど……何とかなったよ。傷の方も大した事じゃない。派手に見えるけどどれも浅いし、血も止まってるからさ」

「そういう問題じゃないだろう！　早く手当てをしないと……！」
「あぁ、それはあとで頼む。でも今は……」
士郎から一旦視線を外し、柳洞寺の方へ視線を向ける。其処には物理的に平衡感覚を狂わせられたキャスターがプルプルと身体を奮わせながら立ち上がろうとしていた。先程の突風が余程堪えたのか、体勢を整えながらも彼女の身体はフラフラと揺らめいている。
「ば、バカな。お前はアサシンが相手にしていた筈、なのに何故生きている!?」
「何故も何も、俺はこうして生きて此処に立っている。お前も歴戦の英霊だったのなら、それだけで色々察せるんじゃないのか？」
キャスターの怒声の問い掛けを修司は至って平静に応えるがそれの意味を理解した途端、士郎、ジャンヌ、キャスターの三人は目を見開いて言葉を失っていた。
現代の魔術師　では、サーヴァントには敵わない。令呪という縛りとマスターと使い魔という主従関係であっても、戦いに於いて現代の魔術師ではサーヴァントに勝てないというのは常識であり、不可能とされてきた。
しかし、その常識を目の前の少年は覆した。傷だらけになりながらも五体満足で、マスターでもなければ魔術師ですらない唯の人間がその運命（常識）を覆したのだ。
「バカな、唯の人間がサーヴァントに勝てるわけ――」
信じられない。神代の英霊であるキャスターにとって神秘の力は絶対、魔術の力が如何に強力か熟知しているが故に、修司の成し遂げた偉業が信じられずにいた。
しかし、どんなに疑っても目の前の男が消える訳ではない。全身が傷だらけになってもそれでもまだ戦える余力がありそうだし、何よりそろそろセイバーが合流してきても可笑しくない時間帯だ。
冬木市の人々からの魔力供給も途絶え、相手が更に増えてしまえば今まで魔力を溜め込んでいたキャスターでも手に終えなくなる。故に彼女は即座に自身の逃亡を画策しようと――。

「気を付けてください修司君、彼女はコルキスの王女メディア。魔術師としての実力は神代クラスの実力者、迂闊に近付くのは危険です」
「こ、コルキスの王女？　それってまさか――――魔女っ子メディアちゃん!?」
盛大にスッ転んだ。
「ブフッ！」
友人からのまさかの一言に吹き出す士郎、ジャンヌも思いもしない修司の台詞に意を突かれ吹き出しそうになるが、聖女としての鋼メンタルでどうにか堪える。
当の本人たるキャスターは先程とは違う意味でプルプルしていた。
「し、修司君？　魔女っ子メディアちゃんとは一体？」
「一昔に流行ったテレビアニメだよ、王様……俺の保護者が戯れといって作ったアニメ制作会社による作品何だけど、見た目と内容のエグさによるギャップとの面白さに当時は深夜枠な番組だったのにも関わらず結構な人気作だったんだ」
「……あ、あー、なんかそんなアニメが昔あったなぁ、藤ねえが嵌まってた気がする」
当時の事を思い出しながらそんな事を話し出す二人、まさかアニメにも出てきた有名な英霊が冬木に顕れた事に死闘の後なのに少なからずテンションが上がる修司だが、目の前のフードを被った女性を見て不思議そうに首を傾げている。
「……でも、やっぱ創作モノなんだよなぁ。魔女っ子メディアちゃんの方は年若い女の子だけど、あのキャスターはなんと言うか――――うん、違うな」
特に見た目の若さとか。とは決して口にはしない。喩え女性に対する機微の疎い修司でもそれを口にしたらどうなるか位は理解している。ただ、幾ら誤魔化しても既に手遅れなのは間違いなくて。
「ぶっ殺す」
自分の最も触れたくなかった部分を盛大に踏み抜いた修司に対して燃え上がるほどの殺意を抱くのは当然の帰結であった。
「あ、あれ？　もしかして俺、やっちゃった？」

「修司君、私ちょっとガッカリしてます」
ジト目で睨んでくるジャンヌに修司は見ないように流しつつ、殺意と共に魔力を漲らせるキャスターに拳を構える。
このまま第二ラウンド突入か？　ジャンヌも旗を握り締め、士郎もいつでも動けるように身構えていると。
「士郎、無事ですか!?」
漸く到着した騎士の少女が崩壊した山門を通って現れた。
「……チッ、セイバーが到着した以上、ここに留まるのは危険ね。ここは撤退させて貰うわ」
「逃げるのですかキャスター！」
「当然、戦力的撤退は兵法の基本。バーサーカーの様な脳筋とは違うのよ！」
「負けると分かれば即座に撤退、この潔さ……やっぱり魔女っ子メディアちゃんなのか？」
「修司君、ちょっと黙って」
セイバー、ルーラー、そしてサーヴァントを退ける規格外の一般人こと白河修司。この三人を前に正面から戦うほどキャスターは愚かではない。形勢が覆られぬなら、即座に撤退を選ぶキャスターだが。
「――そこの小坊主、白河修司と言ったわね？」
「え？　あ、はい」
「アンタだけは絶対に許さない！　私を辱しめた屈辱、いつか絶対に倍にして返してやるんだから！」
目尻に涙を浮かばせながらそう吐き捨て、空を舞い上がって夜空に溶ける様に姿を消すキャスター、その必死な剣幕から追撃すら躊躇したセイバーは修司達に向かって訊ねる。
「い、一体、何があったのです？」
「い、いやーハハハ」
「嘗てのミーハー精神が疼いたと言いますか」
まさかキャスターが涙を浮かべる程の屈辱を受けるとは思いもしなかった修司と士郎はセイバーの問いに苦笑いで答えるしかなかった。

魔女っメディアちゃん、嘗ての自身の伝説がテレビアニメとして新たに作られていると知ったときのキャスターの心労は計り知れない。敵同士であるにも関わらず、ジャンヌは少し彼女に同情した。
「う、ぐ、あたたた。急に身体に痛みが」
「緊張が解けた影響でしょう。今日は此処までにして一度引きましょう」
「そうだな。修司、俺の家に寄ってけ。先ずは傷の手当てをしないと」
「あぁ、悪い。迷惑を懸けるな」
「バカ、其処はお互い様だろう。……俺も、助かったよ、ありがとな」
「そ、それなら私が彼を担ぎましょう。正直状況はあまり理解出来ていませんが、シュウジが一番危険を犯した事は何となく理解出来ます。と言うかさせて下さい、このまま傍観を続けたら私は役立たずのレッテルが張られてしまう」
アサシンは退け、キャスターは逃げた。士郎も助けたし、冬木に住まう人々もキャスターによる呪縛から解放された。端目から見ても充分すぎる戦果だ。修司の怪我を治すため柳洞寺を後にしようとする修司達だが……。
「っ！」
ふと、背中に悪寒を感じた。振り返っても其処に何か在るわけでもないのだが、何故か修司はそれが嫌な予感に思えた。
「修司、どうした？」
「い、いや何でもない。急に寒気がしたもんだから……」
「そりゃその格好なら寒気もするだろうさ！　セイバー、ルーラー、早く行こう。俺の家で修司の手当てしないと」
「了解です。さ、シュウジ、私の背中に乗って下さい。大丈夫、貴方の安全は私が保証します」
「自分より背の低い女子におんぶしてもらうとか、背徳感と罪悪感がヤバイのですが？」
「なら私にします？」
「……し、士郎」
「諦めてくれ」

上半身裸である今の自分では寒気を感じるのも当然かと納得し、気の所為だと自分の中で流すことにした。
「あっ、士郎。そこの階段に俺の上着が落ちてるから悪いけど取ってくれ」
「分かった」
「それとセイバーさん、 大丈夫？ 俺重くない？」
「平気です。寧ろ此れくらいしかする事のないのが情けなく思うくらいです。まさかアサシンを倒すとは、私は貴方を見くびっていた様です」
そんなやり取りをしながら柳洞寺を後にする四人、夜の冬木を走っていく。

「修司め、よもやキャスターを逃がすとはな。詰めが甘い奴よ。……まぁ良い。アサシンは倒した様だし〝歪み〟方も確認できた。今はそれで良しとしておこう」
その遥か上空、黄金の船に乗った英雄王はその口振りとは裏腹にその表情は上機嫌なモノだった。
「我が后の背中に跨がる無礼も……まぁ許そう。かの騎士王の背に乗ったとあれば、奴にとっても自慢の一つになるだろうよ」
「――王よ、戯れも程々に」
その後ろで彼が信を置く側近が戒めの言葉を送る。かの英雄王に小言を口にするのは死に値する無礼、しかし当の英雄王はその臣下の言葉すら笑って受け入れて……。
「フハハハ、確かに少し口が回ったわ。しかしこれも王による余興よ、笑って流せよシドゥリ」
「――しかし驚きです。まさか本当に修司様がかの英霊を相手に勝利を納めるとは……王の慧眼を疑うわけではありませんが、それにしても剰りにも」
「度が過ぎていると？ 違うなシドゥリ、奴の飛躍は此処で終わるのではない。寧ろ逆よ、奴の成長――否、【シンカ】は此処より始まる

のだ」
「シンカ……ですか？」
シンカ。進化ではなく、全く別の意味合いとして聞こえてくるその言葉にシドゥリは不思議そうに首を傾げる。
「然り、奴のシンカ…それが一体世界に何を齎すのか、今から楽しみで仕方がないわ。フハハハ、フハハハハ!!」
冬木の遥か高い夜の空にて黄金の王の笑い声が響いていく。

その27

――世界は朱く包まれていた。砕かれた空、裂かれた大地、まるでこの世の終わりの様なその世界で輝く二つの命を目の当たりにした時、今見ているのは夢なのだと自覚した。

その様子を一言で語るなら終末戦争（ハルマゲドン）。世界を終わらす闘争、新たな世界を拓く為に旧き世界を滅ぼす神話の終わり。

しかし、その戦いは二つの命によって齎されたモノだと一体誰が信じられる。映画を見ている様な気分になる自分の眼前に映るのは相対する二人の男。

一人は銀色の魔人だった。盟友の為に永い時の中を戦い続け、喩え全てを失おうと魂に刻まれた誓いの為に闘争を繰り返してきた次元の将。

対するもう一人の男は――ただ、本能のままに戦っていた。大切なモノがあるから、失いたくないものがあるから、そうしたいとただ自身が願ったから、故にその男は戦っていた。

その身に眩しい位の命の輝きを纏わせて、互いに拳を奮い、蹴りを放つ。その挙動の一つ一つが大地を穿ち、星を揺さぶり、軈て宇宙すら震わせていく。

――場面が切り替わる。

そこは現代の街並み、人の営みに溢れ、人の優しさに満ちた人の世界。他人を労り、慈しみ、子供達の笑い声と何気無い会話が織り混ざる日常。

しかし、その当たり前の日常の世界は前触れもなく崩壊した。笑い声は悲鳴に変わり、日常は地獄へと変わった。

子供の泣き声が聞こえる。母の叫びが聞こえる。父の断末魔が聞こえ、誰かの嘆きが聞こえてくる。その中心にいるのは満身創痍の男とそれを見下ろす狂った慈愛の化身。

その怪物は口にする。私の愛を受け入れろと、嘲り、嗤い、全てを蟲以下と断じておきながら全てを受け入れようとする狂った怪物。

男は心が折れそうだった。屈した膝は崩れ落ちそうで、握り締めた拳は今にも解けそうな程に……先の光景ではまるで別人なその男に俺もまたここで終わるものだと思った。
けど、そうはならなかった。男の心が屈しても、男を信じる少女が男を守ると怪物に吼えたのだ。
男は立ち上がる。何とも単純で、淡白で、ありふれた物語。――――けれど、その光景は何処までも眩しく見えて。
『――君を、守る』
その横顔はどうしようもなく――――白河修司そのものだった。

――欠けた夢を見た気がした。

◇

「――夢、か」
目を開ければ見慣れた天井、窓から差し込んでくる朝日の光に朧気な意識が徐々に覚醒していく。何とも不思議な夢だった。自分の夢の筈なのに自分のモノじゃないと断言できる感覚、まるで別の自分の記憶を覗き見た様な感覚、全く心当たりが無いのに何故か修司は不快感と罪悪感を覚えた。
身体へ視線を落とすと幾つもの包帯が巻かれており、それのお陰で修司は昨夜起きた出来事を全て思い出す事が出来た。
柳洞寺で起きた死闘、佐々木小次郎という伝説の剣豪と果たし合い、そして打ち勝った事実。強敵を打ち倒した達成感よりも自身が生き残った事に修司は安堵した。
「――俺、アイツを殺したんだよな」
サーヴァントは英霊、過去の影法師を現代に呼び寄せた者達。柳洞

寺から去る時に山門を通り抜けたのだが、そこにアサシンの姿は無かった。霊基の核たる部分が破壊されればサーヴァントは程なくして消滅する。ジャンヌやセイバーは仕方がないことだと諭してくれたが、それでも修司は仕方がないと割り切る事は出来なかった。

自分はアサシン――――佐々木小次郎を殺した。その事実だけは決して覆してはならない事実で、絶対に忘れてはならない現実なのだと受け入れた。

思えば、自分は昔から人を殺めていたネルロ某と殺し合いをした時も、状況的に仕方がないとは言え、一つの命を奪った事に変わりはない。その事実は白河修司が覚えておくべき事なのだ。

けれど、事実は事実なだけだ。その際に起きた過程に間違いはないし、これ迄自分が行ってきた事に対して何ら落ち度があるとは思えない。開き直るようで申し訳ないが、その事実を修司は自身の罪とは思わなかった。

それに、今はまだ感傷に浸っていられる状況じゃない。アサシンは倒して残るサーヴァントは六騎、キャスターは逃がしたし楽観視をするにはまだまだ不安材料が残っている、

「……兎に角、身体を洗おう」

先ずはシャワーでも浴びてスッキリしよう。変な夢を見た所為か寝汗が酷い、今日は朝練も無かったし、久し振りにゆっくりしよう。そう思って脱衣所に向かうと……。

「――――どう、なってんだ？」

身体は完全に回復していた。アサシンに付けられた傷は完全に無くなり、痕もなく綺麗になっている。昔から新陳代謝が良いのか人よりも回復力が優れているが、今回はそんなレベルの話じゃないし、何より問題はそんな所じゃない。

〝痕〟が増えている。前まで刀傷しかなかったのに今度は腹部に銃創らしき痕が出来ている。

そして頭髪も前よりも濃くなっている。黒だった色はより紫色に染まり、誰から見ても違うと分かる程に……まるで、何かに侵略されているかのように。

一体、自分はどうなってしまうのか。そんな恐怖を払拭するように修司はシャワーを浴び、努めていつも通りに振る舞う事にした。
その後、シドウリには「イメチェンですか？」程度の認識で済み、却ってジャンヌの方から心配されてしまうのだった。

◇

――その後、修司の身体の変化を心配していたジャンヌへの説得をどうにか完了し、修司は無事に学校へ向かう事が出来た。
学校では教師に、クラスでは生徒達にと髪を染めた修司に各々反応を示していたが、普段の素行の良さと学業に於ける成績と部活動の活躍により然程強く言いに来る者はおらず、蒔寺達に誂われる事はあってもそれ以上の追求はなく、昼休みの頃には修司の髪についてとやかく聞いてくるものはいなかった。
尤も、それ以上に大きな話題があったのも理由の一つかもしれない。柳洞寺の半壊、世間の間ではガス爆発によるモノだと認識されており、聖杯戦争による爪痕だと知るものはいない。柳洞寺の人達に怪我人が出たという話もないし、寺の人間である柳洞一成が学校に来ている事から、本当に人的被害は無いのだろう。
とは言え、やらかしたのは紛れもない修司自身である。昨夜は必死であったから然程気にはならなかったが、翌朝のテレビで報道されているのを見て、事の重大さを漸く理解した修司は聖杯戦争の全てを終わらせた後、何らかの形で補填することをこの時誓った。
そんな日常と非日常の差に若干の気苦労を覚えながらも、修司は屋上の扉を開ける。いつもは弁当を食べるときにしか訪れない場所、人

気が無く静かに過ごしたい人にとって割りと好かれているその場所に……魔術師が一人待っていた。
「それで？　何の用だよ遠坂、ワザワザ机の中に手紙を寄越して来るなんて……」
「――――」
　屋上のフェンスを握り、外へ視線を向けているのは先日軽くやりあった学友、そして同じ師を持つ八極拳の姉弟子である遠坂凛。振り返って見せる彼女の表情はクラスにいたときとは異なり真剣その物となっている。
　本当なら接触は最低限のモノにして極力関わろうとはしないつもりでいた、向こうも何かしら仕掛けてくる様子はなかったから静観していたのだが……まさか机の中に手紙を忍ばせるなんてベタな方法で近付いてくるとは思わなかった。
「……本当に一人で来たのね」
　手紙に書かれていた内容は〝昼休み一人で屋上に来て〟というシンプルなモノ、明らかに罠の気配がするが無視をするとなると後々厄介な事になりそうだ。一応自分の姉弟子なのだから最低限の礼儀として修司はこの呼び掛けに応える事にした。
「まぁな。本当なら士郎にも一言声を掛けようと思ったけど、アイツには昨日世話になったしそうそう迷惑を掛ける訳にもいかないからな。それに――――」
「相手が私一人ならどうとでもなるって？　随分舐めてくれるじゃない」
　僅かな怒気が凛から滲み出る。ぶつけられる遠坂凛という魔術師からの怒りを受け、気の弱い人間なら腰を抜かすだろう。
　しかし、そんな彼女の怒りを一身に受けても修司は構えも取らずに平然としている。この数日受けた英霊という埒外の存在達の殺気を受けた事もあり、大抵の気当たりには動じなくなったと言うのもあるが、何より彼女の怒りが本気ではないという事が分かっていた。
　そんな平然としている修司に毒気を抜かれた様に遠坂は怒気を消す。

「……まぁ、実際その通りなんだし、そう思われても仕方ないか」
「何だよ、随分しおらしいな」
「うっさい。あぁもアッサリと沈められちゃ認めるしかないでしょ……」
　思っていたよりも遠坂凛という少女は話の分かる人間だった。事実を事実として受け止め、それでも尚気高くいられる性格。魔術師としての評価は兎も角、一人の人間としてなら修司から見ても遠坂凛は尊敬できる人間だった。
「で？　俺を呼び出した用件は何だ？　時間は限られてるんだ。早い所済まそうぜ」
　とは言え、聖杯戦争に於ける修司と遠坂は所謂敵対関係にある。向こうがそのつもりでいるのなら此方も警戒を怠る訳にはいかない。あの赤い外套の男は見当たらないが、霊体化させて姿を消しているかもしれない。
　いつ何処から狙われても対応出来るように気を張り続ける。すると、先程までの遠坂の様子が一変し、バツが悪そうに表情を歪ませて……。
「そ、その……この間はご免なさい」
　不意に謝罪の言葉を口にした。
「……は？」
　これには修司も面食らってしまう。何故ここで彼女が謝るのか、理解できない謝罪に修司の頭は軽い混乱常態に陥る。
「な、何よ。そんなに意外？」
「いや、だって……」
「わ、私だって必要なら素直に謝ったりするわよ。意気揚々と制裁するつもりだったのに軽く返り討ちに逢うわ、更に見逃されるわ、魔術師としての私の威厳はボロボロ、こんなのもう笑うしかないじゃない」
　でも、どんなに現実逃避しても事実が変わることはない。あの後、簡単にのされた凛はアーチャーから事の顛末を聞き、自身の羞恥っぷりに数時間悶えた。

このまま修司に対して何もしないのは遠坂家の名折れ、かといって弟弟子でもある修司に頭を下げるのは色々抵抗がある。故に昨日は丸一日を掛けて考える事にしたのだが、それ以上に驚くべき光景を見て、遠坂の考えは改める事となった。

「――――使い魔を通して、柳洞寺で戦う貴方の姿を見たわ。今も信じられないけど、白河君はアサシンを……サーヴァントを倒す実力がある。今の貴方は他の陣営にとってもダークホースな存在の筈よ。そんな相手に敵視されたままじゃ聖杯戦争に集中する事も出来ない」

思っていたより打算的だった謝罪の経緯に修司は唖然となるが、ジャンヌが言うには魔術師は元来効率的で打算的なもの、寧ろその打算的な部分も晒している訳だから、これもある意味遠坂なりの誠意の示し方なのかもしれない。

「だから、俺に謝罪してせめて後ろから狙われないようにするって事か……まぁ、別にいいよ。遠坂にも聖杯に懸ける望みもあるだろうし、俺から特に言うつもりもない。けどな」

「分かってる。聖杯戦争を続ける以上、何れはアンタとぶつかる事になるって……力を示した以上私ももうアンタを無理に止めようとはしないわ」

「そうか」

「でも、それはそれとして借りの方はキッチリ返すから、困った事があったら相談して、私で良ければ力になるから」

「お、おう」

魔術師と言うのはもっと冷酷で残忍な性格をしていると思っていたのに目の前の遠坂からはまるでそんな気がしない、確かに魔術師としての心構えがあるのだろう。聖杯戦争なんて殺し合いに参加する位だから、そう言うのにも耐性はあるのだろう。

でも、目の前で笑う遠坂は普通に年相応の女の子だ。借りを返すと言っておきながらその事をまるで不快に受け取っていない。何でこんな少女が魔術師なんかやっているのだと不思議に思える程に遠坂凛の笑みは魅力的だった。

「で、話は変わるんだけど修司もあのエセ神父の弟子だったのよね？

どんな風に虐められたか教えてくれない？」
「……なんか、急にフレンドリーだな。一応俺とお前は敵同士の筈だろ？　って言うかエセ神父って、もしかしなくても言峰師父の事を言ってんのか？」
「そーよ。アンタは知らないだろうけどあの神父は中々に狸よ。そんな奴の下で自ら鍛えたいなんて物好き、気にならないと言ったら嘘になるわ」
「それに、聖杯戦争が行われるのは基本的に夜よ。人目のある場所でいきなりおっ始めるバカはいないわよ」
「……なんか、お前に対するイメージ変わったわ」
「幻滅した？　理想の女の子じゃなくて」
「いや、寧ろ好印象だよ。魔術師としてどうかは知らないけど、筋を通そうとするお前の人間性は個人的に好ましい」
結局の所、遠坂凛が聖杯戦争の参加者である以上修司と彼女が何れ闘い合う間柄である事に変わりはない。けれど、少なくとも今はその時ではない。今自分の顔を下から見上げてくるのは何処にでもいる普通の女の子、姉弟子として、一人の女の子として対話を望んでいる。
それを拒むほど修司は器量の狭い男ではないし、何より修司自身も興味があった。姉弟子である遠坂が何を以て師父である言峰をエセ神父と呼ぶのか。
今日の昼休みは楽しく過ごせそうだ。と、そう思った時――。
――地震が起きた。足場がぐらつき、学校全体が震えるような衝撃に修司と遠坂の二人は表情を強張らせる。
「な、なんだ？　何が起きた？」
「これって……結界!?　嘘でしょ、学校には人が大勢いるのよ!?」
戸惑う修司だが、それ以上に遠坂は激昂していた。平日の昼間から行われた学校全体を包み込むほどの巨大な結界。空には結界内部の人間を監視するような目玉が顕れ、周囲の世界が血のように朱色に浸透していく。
尋常ならない事態に修司と遠坂は同時に校舎内部へ戻る。其処に意思の疎通は存在しない、二人の姉弟弟子はこの時言葉を交わすこと

無く事態の収拾の為の同盟を組むこととなった。
「うっ、く……」
「士郎！」
「衛宮君、無事!?」
「修司、遠坂、これは……一体？」
　屋上から引き返して階段を下りると、足下が覚束ない様子の士郎が廊下の角から姿を表した。どうやら過度な立ち眩みをしているようだ。そんな彼を少しでも休ませようと近付き座らせようとするが、それよりも早く遠坂の口からアドバイスの言葉が紡がれる。
「衛宮君、魔力を内から出すように意識を向けなさい。この結界は魂喰いのモノ、野放しにしていると取り返しの付かない事になるわよ！」
　〝魂喰い〟その言葉を聞いて思い出すのはライダーに襲われる美綴の姿、あれが魂喰いと言うのなら今回の規模はアレとは比較にならない事を意味している。
　学校の教師、生徒問わずに全ての魂を喰らおうとするその悪逆さ、当然見過ごす訳には行かない。
「遠坂、アーチャーは？」
「ダメ、繋がらない。くそ、魂喰いだけじゃなく連絡手段も断ってくるなんて！」
「俺の方は大丈夫だ。今ルーラーがこっちに向かってくるってさ」
　念話で通じなければ携帯で連絡すればいいじゃない。そう言わんばかりに科学の力を用いて外にいるルーラーと連絡を取った修司に遠坂は何とも言えない表情を浮かべている。
「士郎、セイバーさんは今お前の家にいるのか？」
「た、多分……」
「なら一応連絡いれとけ、十回鳴らしても出なかったらルーラーさんと合流したと判断しよう。あの二人の事だから、きっと数分後には駆け付けてくれるさ」
　些か楽観的な気もするが、状況や情報が定かでない以上慌てても仕方がない。何年にも渡って海外を旅してきた修司にとって想定外の

事態と言うのは慣れきっている。尤も、命懸けの状況に出会す事自体稀なのだが……。
「あぁ、ありがとう修司。でも、それは大丈夫だ。俺にはまだ令呪が残されているからな」
令呪。それは魔術師であるマスターがサーヴァントに使用できる絶対命令権、その手に刻まれた三画の刻印はその一つ一つが膨大な魔力を秘めた魔術の結晶。その力を以てすれば魔法の真似事すら可能とされており、その力は聖杯戦争に於いて切り札とも言える。
「令呪を以て命じる。――来てくれ、セイバー！」
士郎が叫ぶと同時に彼の手の甲にある令呪が輝き、次の瞬間光と風が吹き荒れ、鎧を身に纏うセイバーが顕れる。瞬間移動、マスターとサーヴァントとの物理的距離を一瞬にして零にしてしまう。初めて目にした魔術らしい魔術に修司は不謹慎だと思いながらも内心ドキドキしていた。
「シロウ、状況は？」
「見ての通りだ。サーヴァントの結界に閉じ込められた。状況の打開に力を貸してくれ」
士郎の要請にセイバーは二の句も言わずに頷いた。聖杯戦争という闘いに加担している彼女だが、無関係な人間を巻き込むのは彼女も是としてはいない。
士郎と遠坂、修司という三人が揃っているのも事態を収めようとするが故の事なのだろうと判断したセイバーは二人にも視線を向けて共闘の意を示す。
「本来なら私もアーチャーを呼び出した方がいいのだろうけど……」
「いや、アーチャーは外で待機させた方がいい。この騒ぎの下手人が校内にいるとは限らない。弓兵というからにはアイツは目がいいんだろ？　下手に合流させずに外で怪しい動きをする奴がいないか見張らせた方がいい」
「その間にルーラーも合流して、セイバー、ルーラー、アーチャーの包囲網を形成させるって訳か……成る程、合理的だわ」
「じゃあ、急いで行動しよう。こうしている間にも皆が危ない！」

即興の同盟、即興の作戦。何れも稚拙で穴の多い作戦だが、それでも今は行動するしかない。各クラスの容態を診て、まだ息のあることに安堵した修司達は下手人を探しだそうと挟み撃ちの形で学校を探索し始めた。
「くそ、何処にいるんだよ。学校に結界を仕掛けた下手人は！」
姿を現さない魔術師に修司は早くも焦り始めていた。まだ事が起きて数分も経ってはいないのに、自分以外の人間の命が掛かっているという異常事態に修司の思考はいつしか混乱していた。
こうなったら外に救援を求めるか。神秘の秘匿とか魔術師のルールとか後で騒がれるかもしれないが知った事じゃない。人命第一だと、修司は携帯を開いて１１９番を押そうとするが……。
「圏外……だと？　さっきまで普通に連絡出来たのに!?」
携帯に記されているのは通信不能を示した圏外の二文字が表示されている。先程まで普通に使えたのに使えなくなった文明の利器、一体何故だと混乱する修司の耳朶に届いて来たのは……。
「それはライダーの結界を少しばかり強めたからさぁ。久し振りだねぇ修司」
「慎二……」
士郎と並ぶもう一人の友人、間桐慎二が修司の前に姿を晒した。
「桜……ちゃん」
その腕に身動きを封じられた間桐桜を抱えて……。

その２８

――――間桐慎二にとっての魔術は羨望し、渇望し、他の何よりも欲する絶対的な象徴だった。

嘗て魔術師の家系であった間桐、その歴史は長く元は遠い異国の地から移住してきた血族だと知った時、当時まだ小学生である慎二にとって正に夢心地の心境だった。

自分は魔術師の血を引いている。他とは違う特別なのだと慎二は幼い頃から増長傾向にあった。

尤も、その鼻っ柱も白河修司と出会う事で粉微塵に粉砕されたのだが――――閑話休題。

魔術師という他とは違う家系、何れは自分もその家系を受け継ぐのだと思い……そして、慎二の魔術師としての矜持は始まる前に終わっていた。

自分は要らない子だった。産まれた瞬間から間桐の家から不要と断じられた人間だった。魔術師に必要な器官である魔術回路は無く、間桐慎二はこの世に生を受けた時点で魔術師の素養は皆無だったのだ。

そして代わりに間桐の魔術を受け継いだのが養子だった間桐桜、養子で拾われた子供だと哀れみの対照で、魔術師である自分の妹だと慎二なりに可愛がっていた桜こそが魔術師でない自分を哀れんでいた。

それ以降、慎二は鬱屈された家庭環境の中でジワジワと歪んでいった。慎二を要らんと断じ、苦しむ孫の姿を愉しむ臓硯とごめんなさい位しかマトモに話さない桜、慎二の自尊心を歪ませるのには充分すぎる環境だった。

それでも、学校にいる間だけは不思議と心が安らいだ。魔術というモノを知らないバカな一般人、自分よりも下の人間を内心下に見ることで慎二の心はどうにか平穏を保てていた。

でも、それ以上に心が安らげたのは慎二が自ら格上と断じる修司

が、正しく慎二を評価していた時だ。
間桐慎二は性格がお世辞にも良いとは言えない、それこそ女子には手を上げるし、見えない所では義妹の桜にさえ不当な暴力を奮う時がある。
――――でも、それだけだ。暴力を奮う時点で最低な義兄なのは変わりない。しかし、最後の一線を越えることはしなかった。臓硯に命じられた時も精一杯の勇気を振り絞り、義妹と交わるなんて気持ち悪いと震えた声で断ってやった。
間桐慎二は魔術師に憧れる。どんなに焦がれても魔術師になれる事はない、それは覆す事のない事実。
でも、もし聖杯戦争に義妹の代わりに参加できるのなら。もし、聖杯戦争を勝ち抜き万能の願望器である聖杯を手にすることが出来たなら。
その時、慎二が願うのは――――。

◇

「よぉ修司ぃ。相変わらず無駄に元気だねぇ、流石は陸上のエースだけあるね」
「慎二……」
赤い結界の光が差し込んでくる二階の突き当たりの廊下で修司と慎二は向かい合っていた。
慎二の腕の中には結界の影響か身動きの出来ない桜が苦しそうに顔を歪めている。それだけでも修司にとって許されない光景なのに彼女の頬には鋭いナイフの刃が突き立てられている。
「おっと、動かないでくれよ？　流石に僕も妹の顔に傷を付けるような真似はしたくない。事が済むまでお前には大人しくして貰おうか」

「……このふざけた騒動はお前の仕業か」
「まぁね。サーヴァントってのは燃費が悪くてさ、こうして定期的に魔力を補充しないと戦うのも儘ならなくてさ、ホント困っちゃうよ」
修司の怒りの滲んだ問い掛けにも一切悪びれる様子はなく、慎二は淡々と応えた。自分の友人が学校の人間達を窮地に追いやっている。その事実に修司は拳を強く握り締めるが、桜が慎二の腕の中にいる以上、迂闊に近付く事は出来ない。
「――今、この校舎には三人のサーヴァントが集まっている。セイバー、ルーラー、アーチャー、事態の収集に集まろうとしている彼等を相手にお前だけでどうにか切り抜けられるのかよ」
現在、修司はジャンヌと合流するために単独で動いていたが、そのジャンヌも間もなく到着する。彼女のルーラーとしての能力ならば慎二とそのサーヴァントの位置くらいすぐに把握出来るだろう。
そうなれば彼女の令呪の力でキャスターの時と同様に状況は逆転する。故に修司は遠回しに投降を呼び掛けるが、慎二にはその事が分からないのか、その笑みは依然として狂気の色を滲み出していた。
「へぇ？　サーヴァントが三騎も、それは壮観だ。流石の僕も対処仕切れないだろうね。……でも、本当に良いのかよ？　この狭い校舎の中で四人もサーヴァントを闘わせる気かよ、まだ大勢の人間がいる学校でさ！」
「……」
思っていた以上に慎二の思考は冷静だった。サーヴァントという超人達の戦いを前に意識のない人間が耐えられる訳がない、最悪そのサーヴァント達の戦いの余波で何十人という死傷者が出てくるだろう。
「更に言えば、僕のライダーの宝具は移動に特化した代物でね。もしここで使ったら被害は更に跳ね上がるだろうなぁ！」
慎二のサーヴァント――ライダーはその名の通り騎乗する事を得意とするサーヴァント、修司は宝具と言うものが何なのか理解できないが、恐らくはアサシンの様な必殺技……切り札の類いなのだろうと推察する。

そのライダーの持つ切り札は乗り物、慎二の言うことが本当なら今ここでそれを使われる訳にはいかない。しかし、今の修司には何も出来ないのもまた事実で、出来ることと言えばルーラーが駆け付けてくれるまで時間を引き伸ばすだけだ。
「……一体、俺に何をさせたいんだ？　何の為に俺の前に現れた」
「なぁに？　漸く観念した訳？　察しが良いのは助かるけどさぁ、もう少し頑張って欲しかったよ」
「……」
「おっと、とは言え時間がないのもまた事実だ。遠坂や衛宮に気付かれる前に用件は手早く済ませよう……出てこい、ライダー」
瞬間、慎二の横で長身のボディコン姿をした女が現れる。どうやら本当に生きていたらしい。この分だと敗退と宣言した間桐臓硯の方にも注意をするべきかと考える修司に対し、慎二は昂った感情のままにライダーへ命令を下した。
「やれライダー。この間の仕返し、倍にして返してやれ」
慎二は無抵抗で動けない修司に仕返しという自尊心を満たすためにライダーへ命令をする。
「や、止めて兄さん……」
「うるさい！　戦いもしないグズは黙ってろ！　どうしたライダー、さっさとやれよ！　お前がアイツに無様に負けるから、こんな面倒な事になったんだろ！」
桜の制止の声を振り払い、慎二はライダーへ激を飛ばす。この状況に陥った原因は自分にもある、そう自ら言い聞かせ、ライダーはその長身の体を低くし……。
「――――怨んで下さって結構ですよ」
獣の如く跳躍し、その体躯を活かした回し蹴りを修司の身体へ叩き込んだ。
「っ！」
桜が息を呑む声が聞こえる。ライダーの、サーヴァントの蹴りをマトモに受けて無事に済む訳がない。次に悶え苦しむ修司の様子を想像し、喜悦に歪む慎二だが……。

「っ!?」
「……」
ライダーの蹴りを受けたまま、微動だにしない修司を見て慎二の表情は凍り付く。
ライダーの蹴りは間違いなく入った。その証拠に今も彼女の蹴りは修司に突き立てている。が、それだけだ。サーヴァントの蹴りを受けて平然としている修司は一切の痛みも衝撃も感じること無くその場で佇んでいる。
衝撃を感じない訳ではない、痛みを感じない訳ではない。だがライダーというサーヴァントの膂力が其処に至るまでのダメージを負わせられなかっただけの事、幾ら今のライダーが多大な制限の状態だとしても、目の前の光景は信じられないモノだった。
「な、何だよ。何平然としてるんだよ？　ら、ライダー！　相手が無防備だからって手を抜いてるんじゃないぞ！」
「い、いいえ慎二、私は本気です。今の私は本気で彼を倒そうと……」
「〜〜〜〜っ!!　なら、何でソイツは倒れないんだよ！　やれ！　やるんだよ！　徹底的に！」
遂にはその光景に理解が追い付かず癇癪を起こして慎二はライダーへ更なる命令を加える。桜の制止の声など最早聞こえない、慎二はサーヴァントの弱さは自分には関係ないと自分を誤魔化し、修司への追撃を命じる。
ライダーには断る事は出来なかった。そして、ライダーは修司を打ち倒そうと何度も打撃を放った。拳を振り抜き、蹴りを振り抜き、身動きできない修司へ何度も攻撃を繰り返し行い――――。
――――結果、それでも修司が倒れる事はなかった。痣は出来ている。打たれた箇所も熱を帯びて僅かに膨れ、鼻や口元には微かだが血も流れている。だがそれだけだ。その瞳は依然としてライダーを……否、慎二を捉えて放さない。
「何だよ、何だよ何だよ何なんだよ、お前ーーっ!?」
なぜ倒れない。何故退かない。サーヴァントの攻撃を受けて何故

平然としていられる。サーヴァントは人類を超越した使い魔ではないのか、息切れを起こして肩で呼吸をし始めるライダーと修司を見て慎二は発狂の叫びを上げる。

もう、時間はない。もうじき士郎達が今の叫びを聞き付けて集まってくる。残り少ない時間の中で慎二は撤退を余儀なくされたのだが……。

「僕は、僕は魔術師なんだぞ！　マスターなんだぞ！　なのに何で、何で!!」

目の前の唯の人間すら倒せない。その事実に慎二が悲鳴にも似た叫びを上げる中、修司は歩み出す。

一歩、また一歩と、疲弊したライダーを尻目に修司は慎二へ歩み寄る。

当然、慎二に対して許せないという感情はある。桜や学校の皆を巻き添えにして、今も苦しませてその張本人は自分の欲求を満たす為だけに行動している。

修司にとって、今の慎二は理不尽そのものだった。許せない、許せるものではない。理不尽や不条理に抗う為に修司は力を得ようとし、今もその気持ちは変わらない。

……でも、それと同じくらい友達を放っておけないのも、また事実で――――。

「慎二、そんなもの（魔術）とは手を切れ」

故に、彼が友人に手を伸ばすのはごくごく当たり前の事だった。

「……っ！」

差し出された手、それはどう見ても間桐慎二を哀れんでの事だった。しかし、慎二に哀れんでいるのは彼が魔術師だからではない。そもそも、修司には魔術師がどういうモノか、毛ほども理解していないのだ。

「お前が何で其処までして魔術に拘っているのか何て分からない。きっと、俺なんかじゃ計り知れない事情があるんだろ」

「……」

「でも、その上で言わせてもらう。慎二、魔術なんてものとは手を切

れ、そんなモノ無くてもお前は充分凄い奴だよ」
修司から見て、間桐慎二は優秀な人間だった。何事も卒なく熟すし、口は悪いがその実結構な面倒見の良さがある。
中学の頃、お人好しな士郎を利用しようと画策していた連中を人知れず制裁を下していたのも修司は知っている。そんな間桐慎二だから、修司はこれまで友達でいられたのだ。
魔術師の家系に産まれたのに魔術を使えないことに哀れんだのではない。修司は魔術師なんてモノに拘る慎二に憐れんでいるのだ。
慎二は魔術が無くても余りある才能がある、それを活かす頭脳がある。その力がきっと誰かを助ける為の一助になるし、或いは社会を支える一つの柱にだってなれる。
――――そして、何より。
「これから先、お前はもっともっと凄くなる。俺が保証する。だから慎二……」
〝戻ってこい〟
慎二という友人を魔術側に行かせたくなかった。
自分よりも遥かに優れた修司から、正当に認められている。それが喩え魔術に拘っていたこれ迄の自分への全否定だとしても……〟嬉しい〟と、間桐慎二は思ってしまった。
「僕は……僕は！」
慎二の決意が揺れ動く。そんな時、最悪のタイミングでそれは起きた。
「慎二！　アンタ、なにやってんのよ！」
「修司、無事か?!」
慎二の後ろから遠坂が、修司の後ろから士郎とセイバーがそれぞれ挟み込むように現れる。そして、腕の中に囚われの桜を見て、遠坂の表情は怒りの一色に染め上げる。
「慎二、こんなことをして、唯で済むと思わないでよ!!」
「ヒィッ!?　と、遠坂！」
「士郎下がって、この距離ならライダーを仕留められます」
魔力回路から魔力を流す遠坂と、見えない剣を手にするセイバー。

臨戦態勢の状況、唐突に追い詰められた状況に慎二は叫ぶようにライダーへ指示を飛ばす。
「ら、ライダー！　宝具だ。宝具を使えええっ!!」
「っ!?　だめええっ!!」
　宝具の使用を求めた慎二を遮る様に桜が悲鳴をあげる。瞬間、慎二が手にした本は火花をあげて次の瞬間火が灯り、本は瞬く間に燃え尽きていく。
　慎二が信じられないものを見るように目を見開いている瞬間、修司にライダーの蹴りが再び襲った。突然の反応に咄嗟に両腕を交差させて防ぐが、伝わってくる衝撃はこれ迄の比ではなかった。
（なん、だ。この重い蹴りは!?　さっきとは別人じゃねぇか！）
　ライダーの蹴りに圧され、一歩後退る。これ迄のライダーとはまるで別人の様な怪力に修司は目を大きく見開き……そして言葉を失う。
　桜の側に寄り添う様に立つライダー、彼女の手の甲には令呪らしき紋様が浮かんでおり、その状況から彼等が辿り着く答えは一つしか有り得なかった。
「そう、そう言う事、まんまと騙されたわ。ライダーのマスターは慎二じゃなくて、桜。貴女だったのね」
　信じられないと士郎と修司が打ち震える中、止めを刺すように遠坂が真実を口にする。間桐桜がライダーのマスター、衝撃の真実に修司の思考は停止する。
「逃げますよ桜、捕まってください」
「逃がすと思うか、ライダー」
「そうですね。ですから、私も手段を選ぶのを止めましょう」
　逃げようとするライダーを阻止せんとするセイバー、校門からはルーラーの気配も近付いてくる。手段を選んでいる場合でないと悟ったライダーは、これまで付けていた目隠しを取り外す。
　瞬間、士郎達の身体は突然石のように……否、修司と士郎の身体は石になっていく。セイバーも重圧に掛かった様に動きが鈍り、残された遠坂はその様子に言葉を失う。

「魔眼ですって!?」
「しかも、これは恐らく宝石級の石化の魔眼。これ程の魔眼を有する英霊……いや、反英霊は恐らく」
「その通り、私はゴルゴーン姉妹の末妹。メドゥーサ、体制を整える為、ここは退かせて貰います」
「させるかっての!」
「あぁ、それは止めておいた方がいいですよ。私の魔眼はセイバーには通じませんがそのマスターは定かではない。この学校の生徒達と同様、早急に対処せねば手遅れになりますよ」
「くっ!」
ライダーの言う通り、士郎の身体は刻一刻とその肉体が石化に侵食しつつある。修司の方は何故か足下だけに留まっているが、桜がライダーのマスターである事実に放心状態のまま、セイバーも今のライダー相手に一撃で仕留められない以上、残された選択肢は数少ない。
ルーラーが駆け付けるまで後数秒、階段を駆け上がってくる足音を耳にしたライダーは、桜を抱えて窓を突き破り外へ飛ぶ。
「アーチャー! くそ、連絡遮断の結界はそのままか!」
遠坂の悔しさに満ちた台詞とは対照的に、ライダーの姿は瞬く間に遠くなっていく。ルーラーが修司達の下へ駆け付ける頃には既に全てが終わった後だった。
結界は解除され、学校の人々は意識を失いながらも助かった。間もなく救急車が駆け付け、事態は収集するだろう。
残されたのはライダーのマスターが桜だったという真実と……。
「慎二……」
全てを失い、力無く項垂れる間桐慎二だけだった。

その29

「――――そうですか。はい、はい。分かりました」
「士郎、学校からは何て？」
「あぁ、取り敢えず学校の皆は全員無事みたいだ。ただ症状の重い生徒も何人かいるみたいだから、明日と明後日の二日間学校は休校するってさ」
学校での騒ぎの後、ライダーの張っていた結界は消え、魂喰いから解放された教師や生徒達は教会側が派遣した救急車によって新都の総合病院へ搬送された。幸い死亡者はおらず、症状の重い生徒達も時間経過と共に快復するだろうと言う事から、学校は数日の休校という扱いとなった。
一人も死亡者を出さずに乗り切った事に安堵する修司達は、現在学校と同じ地区にある深山町の衛宮邸に来ていた。
「……さて、学校の方は一応何とかなったけど、問題は此処からよ。其処にいる慎二といい、ライダー陣営に対する今後の対応はどうするの？」
そう言って遠坂は居間の隅で膝を抱えて沈黙を続けている慎二へ視線を投げ掛ける。その目には未だ敵対心の色が濃い、神秘の秘匿という魔術師にとっての暗黙のルールを破り、無関係の人間を大勢巻き込んだ事に対する怒りの感情が渦巻いている。
敵愾心たっぷりの遠坂に慎二の肩は恐怖で跳ね上がり、怯えた表情で遠坂を見る。その心境は裁決を言い渡される罪人のそれ……いや、絞首台に立たされる死刑囚である。
サーヴァントを失い、魔術師としての才の無い慎二に今更間桐家に帰れる筈がない。帰ったとして待っているのはあの蟲に支配された妖怪屋敷とその主だ。あの妖怪がオメオメと自分を家の敷居を跨がせるとは思えない。
マスターとしての権利も失くし、今の慎二は魔術師の魔の字もないただの小市民の一人、残ったのは自分が行った罪過だけ、何も出来な

い慎二は遠坂の視線に震えていると……。
「その事なんだけどな遠坂、慎二の事は俺に任せては貰えないか？」
「し、修司？」
「……本気なの白河君、コイツ、未遂だったとはいえ学校の皆をサーヴァントの餌にするつもりだったのよ？　理不尽を許せないアナタとしては、その案は無いと思ってたけど……」
「勿論、今でも慎二のした事は許せないさ。学校には蒔寺や氷室、三枝や陸上部の後輩達もいる。大会に向けて頑張っていた皆の努力が水泡に消えようとしている。そう言う意味でも慎二の仕出かした事は許せるものじゃない」
　巻き込まれた生徒達の中には当然蒔寺達や陸上部の先輩後輩の姿もあった。見知った彼等が下手をすれば死んでいたかもしれない、その事実に修司はどうしようもなく怒りを覚えるが、それと同じくらい自分にも非がある事を修司は理解していた。
「でも、そこまで慎二が追い詰められたのは多分俺達にも非があったと思う。コイツ、高校に入ってからちょっと変わったし、時々スゲエ追い詰めた顔をしてたからさ。きっと、その頃から家で色々あったんだと思う」
　今にして思えば、慎二の変わり様は異常だった。元から選民思想は強く、他者を見下しているような部分がある男だがそれでも面倒見は良く、中学の頃は良く後輩達に相談を受けてたりした。
　また、士郎が悪い奴等に利用されようとした時だって陰で制裁してたりするのを知ってたし、口や態度は悪いけど間桐慎二という男は総じて良い奴と思える人間だった。
「コイツをあんなになるまで放っておいた俺にもある意味で今回の件には非がある。学校も暫く休みだし、聖杯戦争が終わるまで、コイツの事は俺の所で預かりたい」
「遠坂、俺からも頼む。慎二はもうマスターじゃないんだ。修司なら信頼できるし……」
　冬木の管理者である遠坂にとって慎二のやらかした事はとてもじゃないが許される事ではない。神秘の漏洩を促し、更には多くの無

関係な人間を巻き込んだ。魔術師的にも倫理的にも慎二の行った事は許せない。
「衛宮君まで……はぁ、いいわ。それなら慎二の事は白河君に任せる事にする。でも、次にまた変な事をしようものなら、分かってるわね？」
しかし、遠坂は慎二にペナルティを与える事はなく、殺気の混じった怒気をぶつける事で大人しく引き下がる事にした。修司という男の強さとそれに対する信頼故の引際である。
「さて、慎二の方はそれで良いとして、問題は……」
「桜、だな」
「……」
話は次に……そして、修司が最も触れたくなった話題へシフトする。間桐桜、彼女もまた聖杯戦争の参加者だった。
ライダーの正式なマスター、それを知ってしまった修司は最初は何かの間違いだと思った。彼女は優しい人で、人を傷付ける様な人間ではなく、魔術師という冷酷な輩には最も遠い存在だと思っていた。
……いや、そう思いたかった。しかし、ライダーの最後に放った蹴りの重さがそれは違うと否定してくる。正規である桜にマスターとしての権限が戻った事でライダーの強さは本来のモノへ変わったのだ。慎二がマスターの時に彼処まで弱体化していたのは偏に慎二が正規のマスターではない事が原因だったのだろう。
慎二の話だと桜は元々聖杯戦争に参加する気は無いと頑なに拒否していたと言う。だから間桐の当主である臓硯は桜の持つ令呪を拝借して偽臣の書という代物でライダーを操り、慎二に代理として聖杯戦争に参加させたのだという。
当初は魔術師として活躍できるという聖杯戦争に参加できると知って、慎二のテンションは爆上がりだった。それからは選民思想に拍車が掛かり、性格まで増長し、終いには嗜めてくる美綴綾子を昏睡状態に陥るまで魂喰いをさせ、そこで修司と遭遇する。
其処でライダーは修司にアッサリと返り討ちに逢い、納得できなかった慎二は再び桜にマスターの権限の譲渡を強請る。渡したくな

い桜は最初は断るも、士郎に全てを話すと言われて渋々これを承諾。
これで漸く修司にリベンジ出来ると思ったのも束の間、結界を張り学校中の生徒や教師から魔力を得ようとしても、修司には届かず、それどころかライダーの攻撃をモノともしていなかった。
そして、遂に追い詰められた慎二はライダーに宝具の発動を命じようとしたが、桜がこれを拒否。慎二の持っていた最後の偽臣の書が燃え尽き、慎二の聖杯戦争はこれで終了となった。
「凛、戻ったぞ」
「お疲れアーチャー、それでどうだった？」
「君の予想通りだよ。ライダーとそのマスターは間桐邸へ逃げ延び、籠城を決め込んだ様だ。あの様子からして出てくるのは当分無いだろうな」
偵察に繰り出していたアーチャーから告げられるのはあれからのライダー達の様子だった。やれやれと肩を竦めている辺り、どうやら相当厳重に守りを固めているのだろう。
「あぁなると迂闊に攻め込むのは危険だな」
「……一応、此処には貴方を含めて三騎の英霊がいるのだけれど、それでも難しいと思うかしら？」
今、衛宮邸にはアーチャーを含めてセイバー、ルーラーの三騎が集まっている。一騎当千のサーヴァントが三体もいるとなれば如何に守りを固めた魔術師の家だとしてもゴリ押しで崩せるのではないか、と敢えて遠坂は楽観的に訊ねるが……。
「周囲への被害を考えなければゴリ押しでもいけるだろう。だが、相手は機動に優れたライダーだ。状況次第では我々でも手を焼くかもしれん」
相手の陣地に攻め込み、罠があるなかで機動力のあるライダーと正面切って戦う。その時の戦いはきっと自分達が想像しているより遥かに苦戦を強いられる事だろう。
「それと、私に戦いの参加を期待している様で申し訳無いのですが……恐らく、私はその時の戦いに参加する事は出来そうにありません」

「やっぱそうなるかぁ」
　ジャンヌの申し訳なさそうに語る姿に遠坂はどうしたものかと頭を抱える。ジャンヌは聖杯により遣わされた聖杯戦争の審判役だ。無関係な人間を巻き込むような事態には厳しく対処するが、そうでないのなら極力手を出さないのがルールとされている。
「……或いは、今回の無関係な人々を巻き込んだペナルティとして――という名目ならもしかしたら有りかもしれませんが」
「下手人の慎二が此方にいる以上、理由としては弱いか」
　ルールを、秩序を重んじる聖女としてジャンヌは今回のルール違反に対して何処まで手を出せば良いのか、彼女自身が迷っていた。無関係な人間を巻き込ませたくない気持ちは今も変わらない、しかしルーラーというクラスの制約がジャンヌの迷いをより際立たせていたのだ。
「……仕方ない。一先ずライダーの方は放っておきましょ」
「ほ、放っておくって、そんなので良いのかよ遠坂！」
「勿論良くは無いわよ。でも、相手は間桐の家、其処に施された罠がどんな代物があるのか分かったモノじゃないわ。ライダーの正体が本当にあのメドゥーサなら、事は慎重に運ぶべきよ」
　メドゥーサ。ギリシャ神話に於ける有名なゴルゴーン三姉妹の一人、反英雄と目される彼女が相手となればあの間桐の家はより危険な場所へ変質している可能性もある。
　サーヴァント1体で戦うには心許ない。対魔力の強いセイバーと一緒ならばある程度安心できるが、その為には魔術師として未だ未熟な士郎も連れていく事となる。熟練な魔術師の家に攻め込むことを考えると、それは剰りにも博打が過ぎる。
「何より、桜……あの子と相対する覚悟が出来てるの？　衛宮君、白河君」
「「……」」
　遠坂の指摘に二人は即座に言い返すことが出来なかった。間桐桜、士郎にとっては家族同然の存在で修司にとっては言わずもがな、保護や救出対象であっても敵対する事は絶対に有り得ない両者にとって

〝日常〟の象徴だ。
そんな彼女が魔術師として、マスターとして聖杯戦争に参加していた。その事実が二人の肩に重くのし掛かる。
「……でも、いつまでも放っておくわけにもいかないだろう」
「士郎？」
「それは、マスターとして桜を倒すって事かしら？」
「違う。確かに桜は魔術師でマスターだったけど、だからと言って誰かを傷付ける様な人間でないことは俺にだって分かる。慎二を代理人として参加させていたのなら、少なくとも最初の頃の桜は聖杯戦争に乗り気でない筈だ」
「なら、どうするの？」
「先ずは会って話をする。そして桜の真意を聞き出す。聖杯戦争に参加するのか、その是非を問う」
「参加するって言ったら？」
「止める。喩え恨まれようと俺は桜を止める。アイツにこんな血腥い戦いをいつまでもさせておくわけにはいかない」
ハッキリと自分の思いを口にする士郎に修司は納得した。間桐桜に必要なのは自分ではなく、この衛宮士郎なのだと、自分では間桐桜を助けることは出来ても救うことは出来ない。それを改めて実感できた修司はその口元を僅かに吊り上げる。
「何を言うかと思えば……下らん。敵を倒すのではなく救うだと？　相手がそれを許すと思うのか、たかが貴様一人の力でどうにか出来るほど、魔術の家は甘くはないぞ」
「そんなの、やってみなくちゃ――――」
「一人でないなら、問題ないんだろ？　なら生憎だったな、桜ちゃ……間桐さんを何とかしてやりたいって宣う馬鹿はここにもいるぜ」
「し、修司？」
実力の無い士郎の言葉を戯れ事だと断じるアーチャー、その言葉に苛ついた士郎が言い返そうとするよりも早く、修司がその口論に割り込んでくる。

「……やれやれ、どうやら君も魔道の家のなんたるかを理解できていないようだな。魔術師の家とはそれ自体が一種の要塞だ。侵入者を殺すだけではなく、嬲り、犯し、時には魔術の実験材料とする魑魅魍魎の巣窟だ。サーヴァントを一騎斃した程度で思い上がっているのなら、今すぐその考えは改めた方がいい」
「かもな。だけど俺は諦めたくない。間桐さんが聖杯戦争に参加するのを拒み、あの爺がそれを強制させようとするなら、俺はそれを見過ごしたくない」
　アーチャーの言葉を親身に受け止め、それでも諦めたくないと口にする修司。そんな彼をアーチャーは呆れの混じった視線で睨み付けるが、修司はそれを撤回する事なく、不敵な笑みを浮かべている。
　先に視線を外したのはアーチャーの方だった。付き合いきれんと吐き捨てて霊体化するアーチャー、その所為か場の空気は途端に重くなりその原因となった修司はアハハと苦笑いを浮かべて頭を掻く。
「な、何か悪いな。空気悪くさせちゃって」
「……ま、あんた達にそれなりの覚悟って奴があったのは分かったわ。私も間桐家には留意するし、手伝うことがあったら手を貸すわ。でも、忘れないで、あんた達がこれからも聖杯戦争に関わるのなら、相手はライダーだけじゃないってことをね」
「あぁ、遠坂もありがとな」
　そう言って遠坂は立ち上がって衛宮邸を後にする。それを見送った士郎はセイバーを無視して話を勝手に纏めてしまった事に漸く気付く。
「わ、悪いなセイバー。勝手に話を進めちゃって」
「いいえ、私は今回の件に関して口を挟む事はありません。間桐桜とは言葉を交わす事は数える程しかありませんが、彼女が優しい人間だというのは私なりに分かっているつもりです。戦うつもりのない人間を無理矢理戦場に立たせるのは私としても容認し難い。シロウが彼女を助けたいと言うのなら、私も存分にその為の力を奮いましょう」
「そう、か。ありがとなセイバー、それに修司も」

「気にすんなよ。可愛い後輩を助けるのも先輩の役目だ。それにお前がそうしなくても俺はこの件に首を突っ込むつもりだからな」
申し訳なさそうに礼を口にする士郎に修司は努めて強がり、気にするなと口にする。するとセイバーとジャンヌのそれぞれから空腹を報せる音が鳴り響く。その大きさに慎二は何事かと驚くが、当の二人は顔を赤くさせて俯いている。
二人の腹の音で場の空気は払拭され、衛宮邸は笑い声に包まれる。
「よし、なら飯を作るか。士郎、台所借りるぞ」
「あぁ、シドウリさんには連絡入れたのか？」
「とっくに済ませてるさ。おい慎二、お前も食え、腹が減ってたら元気は出ないぞ。難しいことは後回しにして、先ずは腹を膨らませる事から始めようぜ」
それから料理人二人により今宵の衛宮邸の夕食は豪勢なモノとなった。食欲を刺激され、瞬く間に消費していく二体のサーヴァント。その喰いっぷりに慎二はドン引きするが、衛宮邸の夕食は終始明るい雰囲気に包まれていた。

◇

そして、それから夕食を終えて片付けも済ませた修司達は慎二を連れて帰路に着く。眼前に聳え立つマンション、それを前にして修司は腕を組んで頭を捻る。
「さて、ここまで来たのは良いけど――シドウリさんに何て言おうか？」
「ぼ、僕に聞くなよ」
ジャンヌに引き続き、今度は同じ学友である慎二を泊めることになった。その事自体に後悔する事はないが、その理由まで考えてはいなかった。

急いで話の流れを考え、脳をフル回転させる修司は一つの話を思いつく。幸い学校が休校になったことは街全体が知ってるし、ニュースでも取り立てられている。
ガス漏れ事故の影響で学校は休みになり、その間部活も休み、病院にいる妹の見舞いに行くのに深山町にいるのは不便なので、暫くの間新都に居を構える修司のマンションへ泊めて欲しい。――と言う如何にもな話を思い付いた修司は慎二にその旨を伝えた。
「……まぁ、いいんじゃないか。学校が休みなのは疑い様の無い事実だし」
了承した慎二に満足し、修司は自室へ向かう。この時修司はジャンヌと慎二の二人を先に向かわせ、本人は地上にある駐車場からジャンプし、一息で自宅のある階まで跳躍する。
やはり昨日よりも力が強くなっている。その事に戸惑いながらも平静を装い、エレベーターでやって来た二人と合流し、修司は自宅の扉を開く。
「ただいまー、シドウリさん。話したいことがあるんだけど――」
「ほう？　少し見ない間に随分変わったなぁ修司、それになんだその見窄らしい田舎娘と愉快な道化は？　一体何時からここは物見小屋となったのだ？」
あっ、やっべ。リビングにふんぞり返る黄金の王に修司は最大のピンチを予感した。

「クカカ、慎二はあの男の下へと降ったか。これは好都合」
「……」
「桜よ、機を見て隙があればあの男――白河修司を誘い、堕とせ。お前ならば容易く出来よう」
「……」
「あの男のあの力を上手く扱えば、この聖杯戦争など勝ったも同然。

桜よ、ワシの可愛い孫よ。期待しておるぞ」
「――――はい、お爺様」
暗い暗い闇の底で少女はクルクル嗤い出す。誰も私を助けてはくれない。誰も私を救うことは出来ない。
故に、だから……。

くぅくぅおなかがなりました。

少女の中で黒い何かが溢れ出す。

その３０

「あ、あっれー？　王様、仕事が忙しくて暫く帰って来れないんじゃなかったっけ？」
「そのような雑事、当の昔に終わらせていたわ。ただ少々鈴鹿に用があった為、我がギルギルマシーンの調整を兼ねて暫く戯れていただけよ」
「あ、あー……そう言えば地下駐車場に王様のバイク無かったからてっきりそっちで通勤したのかと思ってたけど、そっかー、鈴鹿に行ってたのか」
　ソファーに座る黄金の王、その趣味は幅広く自身が興味を示したモノならば容赦なく金を落としていく。地上の駐車場はマンションの住人達の共通のモノだが、その地下にある駐車場は黄金の王の持ち物、其処に足を踏み入れるのを許されるのはシドゥリと修司だけという完全なるプライベート空間なのだ！
　目の前の王が手こずると言うから一体どんな企画プロジェクトなのか、そしてどれだけ規模の大きいイベントなのか、気になる所は多々あれど兎に角王が留守だと言うのなら好都合、不在の間に聖杯戦争を片付けようとしていたが、修司の思惑は根底から覆ってしまった。
　王の後ろ隣で控えているシドゥリの表情も心なしか申し訳なさそうに見える、
「で、でも王様。シドゥリさんが言うには今回の仕事はかなり大変そうみたいじゃん、大丈夫なのか、そんなにのんびりして」
「なに、問題あるまい。仮にも我が集め我が命じた者達だ。雑種とは言えそのくらいの能力は弁えているだろうよ、それとも修司、貴様は我の采配を疑っておるのか？」
　ギロリと紅い双眸で睨んでくるギルガメッシュに修司はこれ以上の詮索は無理だと諦める。何かの間違いで会社から呼び出され、現場

へ引き返す展開を期待したいが、この王がそんなヘマをするとは思えないし、何より会社からの呼び出しを平然と断るのが目に見える。
　と言うかする、断言出来る。目の前の王は例え側近から助けを求められても即答で断ってしまう非情さも兼ねているのだ。
『我の手を貸して欲しい？　たわけ、我の力なしで維持できぬ会社など無用、路頭に迷いたくなければ死に物狂いで足掻けよ』
　昔、部下からのＳＯＳを電話越しで嗤いながら断る王を修司は見た。会社を、企業を支えるのは人の輪としての力だけでなく、時として突出した個の力も必要だと王様は口にしている。
　そんな他者に対して容赦も情けもない王だが、不思議と会社を辞めると言う者はいなかったという。シドゥリは王のカリスマ性の賜物だと言うが、果たしてそれで納得していいものか、
　ともあれ、王が帰ってきたのなら出迎えるのが臣下の努め、修司は直ぐ様夕飯の準備に取り掛かりたいが……それよりも彼にはやるべき事があった。
「さて修司、何やら話を逸らしたい様だが生憎そうはさせぬぞ？　貴様が後ろにいる田舎娘と道化の男、ソイツ等はなんだ？　よもや、王の城にその様な雑種を飼う。等と宣う訳ではあるまいな？」
「っ、で、でも王様、ジャ――――レティシアさんの事はシドゥリさんから聞いているだろ？　彼女の事は俺が面倒を見るって！　慎二だって友達だし、泊めるのだってほんの数日の合間だけさ！　王様に迷惑を掛ける様な事はしないって！」
「それは我が帰ってくる迄の話よ。その我が来たならば、そのような話は当然消えてなくなるわ」
　何と言う傲慢不遜、しかしマンションを建てたのも土地を買ったのも全ては目の前の王の財力によって齎されたモノ、彼の持ちうるカリスマ性も合わさってその言葉による強制力は絶大。並みの人間ならば黄金の王に意見を口にすることすら難しいだろう。
　尤も、修司にはそんな英雄王のカリスマなどものともしておらず、彼が意見する事自体は簡単だ。修司がギルガメッシュに口答え出来ないでいるのは恩人に対して不義理をするような真似はしたくはな

いという善良性が故の弊害だった。
一体なんと言えばこの王様に納得して貰えるのか、それとも二人をマンションではなく別のホテルへ匿った方が良いのか。幸い金銭的問題はない、もし何を言っても、何を条件にしても聞き入れて貰えない時は最悪その方法で行くしかないのかと、修司が覚悟した時――。
「何故、何故貴方がここにいるのですか」
「ジャ――レティシアさん？」
背後にいるジャンヌが信じられないものを見るような眼差しで黄金の王を見つめていた。
「ほう？　王に対してその様な目を向けてくるとはな。その命、よほど要らぬと見える」
「ちょ!?　ちょっと待って王様！　レティシアさんは俺の恩人！　確かに王様に対して失礼な態度だったかもしれないけど、ここはどうか寛大に！　ね！　お願い！」
黄金の王から放たれる明確な殺意。その覇気を前に並みの人間が立っていられる筈がない。空間が軋み、頑丈な筈の窓ガラスが揺れている。修司の背後にいる慎二はその覇気に耐えられず泡を噴いて気絶している。
ジャンヌは額から大粒の汗を流して戦慄し、修司もこれはヤバイと彼女を庇うように前に出る。唯一シドゥリだけは何事もないように振る舞っているのが印象的だった。
「――ふん、ならば我が臣下の嘆願により今の不敬は水に流してやろう。感謝しろよ、女」
「……」
唐突に迎えた緊迫の状況は修司の必死の嘆願により何とか収まった。しかしジャンヌの眼差しは未だ王を捉えて離さない。彼女の不遜な態度に王が再び機嫌が損なうとも限らない、どうにかして修司は場を取り保とうとするが……。
「どうやらそこの田舎娘は我に何か言いたいことがある様だ。いいだろう、無知なそこの娘の為に我に問うことを許可してやる。修司、今宵の馳走を用意せよ。シドゥリ、貴様もだ。修司のサポートをしてや

るがいい」
「御意に」
「へ？　へ？」
　先程の怒気をぶちまけていた本人とは思えない程の穏やかで不敵な笑み、ジャンヌがまた何かやらかす前に何とかしようとした修司は王の穏やかな態度に困惑する。
　そんな穏やかな修司を他所にシドゥリは彼を引っ張って厨房の奥へと引っ込んでいく。残された王と聖処女、二人の姿を完全に見えなくなるのを見計らって王は懐から小さな小瓶を取り出す。
　コポッと音を立てて小瓶の中の液体が落ちていく。そのままフローリングの床へ落ちていくかと思われたその青い液体は直前気体となってリビング一帯を満たしていき、瞬間外との空間を切り離したかのように部屋の様相が一変する。
「これは……結界、ですか」
　何て事ないリビングが霧の掛かった空間へと変貌する。外の情報がまるで入ってこない隔絶された空間、これが自分と目の前の王と問答する為に用意された空間なのだと察したジャンヌはいつの間にか用意された綺羅びやかな椅子に腰掛け、優雅に茶を飲んでいる黄金の王に問い詰める。
「――――まずは確認を、貴方は古代ウルクの王……英雄王ギルガメッシュその人と見て相違ないですか？」
「如何にも」
「何故、前回の聖杯戦争の参加者が未だこの世に留まっているのです」
「知れたことよ。聖杯の泥を浴びて受肉した。ただそれだけの事よ」
　ジャンヌの問いをサラリと何でもないよう答える王、その堂々たる振る舞いは正に古の英雄王で、ジャンヌもギルガメッシュが一切嘘を口にしていないことは理解できた。
　故に聖杯の泥を浴びたという爆弾発言にジャンヌは頭を痛める事になる。聖杯の泥とは何なのか、前回の聖杯戦争で一体何が起きたのか、聞きたいことは多々あるが、それ以上に聞くべき事がジャンヌにはあった。

「……何故、そのウルクの王が修司君に固執しているのですか」
「あ奴は我の臣下よ。王が有能な臣下を気に掛けるのは当然の摂理、ワザワザ我に問い掛けたい事がソレか？」
「……嘘ですね。いえ、厳密に言えば本当の事を貴方は話していない」
「――ほう？　たかが田舎娘風情が我の心を暴くか」
ジャンヌの恐れ知らずの言葉に王の眼光が鋭くなる。全身に突き刺さる殺意、ジャンヌの周囲を囲むように広がる黄金の波紋からは千差万別、様々な刀剣が顔を覗かせている。
僅かでも口を滑らせればその瞬間ジャンヌの命は無い、しかしそれでもジャンヌの眼差しは黄金の王から逸れる事は無かった。相手が最古の時代の英雄王であったとしても一歩も引くつもりもない、そんな気概がジャンヌから滲み出していた。
強い瞳だ。その眼差しに何処かかの騎士王を連想させられる。生意気だと思いながら、英雄王の機嫌は再び良くなっていく。
「――良いだろう。話してやる、だがその前に一つ問おう。オルレアンの聖処女ジャンヌ＝ダルクよ、貴様にはルーラーとして様々なスキルが備えられているが、それら全ては正しく機能されているか？」
「……え？」
王からの問いにジャンヌは一瞬呆けた顔を晒す。何を言っているのか分からない、ギルガメッシュの問いに不審に思ったジャンヌは自分のこれ迄の経緯を思い返し――。
「っ!?」
そして絶句する。
ルーラーには【神明裁決】と【真名看破】という破格のスキルとは別に聖人と呼ばれるモノに未来予知に似た情報、【啓示】を時折受け取る事がある。
その情報は断片的で酷く曖昧な代物、受け取ったルーラーの解釈次第で様々な意味合いに変化する未来予知。
しかし、ジャンヌが召喚されて以降その様な啓示を受け取った事は一度足りとも無かった。ルーラーとしての機能不全かとジャンヌは

焦ったが、相対する黄金の王は依然としてニヤケた顔で今度はワインを傾けている。
「どうやら、啓示とやらは受け取っておらぬようだな。成る程、これで一つの疑問は解消された」
「英雄王、一体それはどういう意味です。私が啓示を受け取れなかった事と修司君に一体なんの因果関係があるというのです？」
「我がアイツを拾ったのは１０年前、冬木の大災害という災禍の真っ只中の時だった。最初は死に損ないの小童が生意気にも天に向かって吼えているから気に止めただけだったのだがな」
ジャンヌの質問に答える為、英雄王は少しばかり昔の事を語り始めた。死と炎に塗れた冬木の地、地獄の中でも尚魂を輝かせる修司に古代ウルクの英雄王はそこに彼の可能性を見た。
体は屈し、心は折れ、それでも負けるものかと吼える小さき命。当時はそれだけで満足した英雄王だが、後日改めて修司を臣下として手元へ置いた時、彼は信じられない事象を体験した。
「――――視えなかったのだ。奴の未来が、白河修司という男の行き先が、我の千里眼を以てしても、欠片足りとも目する事が叶わなかったのだ」
「なん……ですって？」
【千里眼】それは過去、未来、現在を見通すとされる神秘の結晶。それを所持する者は並行する様々な事象を見通し、更にランクの高いモノだと冠位の資格を得るとされる魔術の世界に於いて最高峰の神秘の一つと謳われている。
その千里眼を持つ英雄王ですら白河修司という一人の男の行く末を見通す事が出来なかった。それは弓兵として召喚された弊害か、それとも１０年前に《泥》を浴びた所為なのかは定かではない。
だが、それはジャンヌにとって他人事とは思えない話だった。降りてこない啓示、見通せない千里眼、この二つの不具合の共通点は共に彼と……白河修司と出会ってからだ。
「まぁ、それは良い。何故我の千里眼が機能しなくなったのか、その原因は大体理解している」

「なっ、貴方はその原因に心当たりがあるというのですか!?」
「何を驚く。貴様も見た筈だ。数日前にかの場所で顕現した蒼き魔神の姿を」
「っ!!??」
不敵に笑う英雄王、その口元から紡がれる蒼き魔神という言葉、その台詞からジャンヌが思い返すのは海岸沿いにあるコンテナ街で顕れた巨大な蒼い巨神の姿。
「……まさか、あの魔神は修司が呼んだと、彼が呼び寄せたと言うのですか!?」
「本人はまるで自覚していないようだがな。それに、あれは今のところ完全に目覚めている訳ではない様だ。主を守るため、あらゆる干渉をはね除ける防御システム。恐らく我の千里眼とお前の啓示が機能していないのもあの魔神の仕業と見て間違いないだろう」
あの巨神が修司という一人の人間によって呼び出されていたという事実にジャンヌは言葉を失う。が、同時に修司が異常なまでの身体能力を有している事を何となく理解した。
恐らく、彼がサーヴァントを屠るまで強くなったのは、其処まで成長したのは他ならぬあの巨神の仕業なのだろう。主を守護する為、その力を行使する。英雄王の千里眼やルーラーの啓示が機能しないのも修司という男を隠蔽する為のモノだと思えば不思議と違和感はなかった。
「だがな聖処女よ。あの魔神が何なのかは今はどうでもいい。奴が修司を守ると言うのなら、我は別に文句はない」
「っ！」
「我はな、知りたいのだ。あの男がこれからどのような道を辿るのか、その果てに何を掴み何を成し遂げるのか――――我は気になって仕方がない」
「英雄王……貴方は」
「故に、聖杯戦争などというつまらぬ諍いなど早々にケリを付けて欲しいのだ。全く、慢心を許されるのは我だけとはいえ、我が臣下は些か慎重に過ぎる。あれでは征服王めに嫌味の一つでも言われるとい

うモノだ」
　やれやれと肩を竦め、呆れた様に溜め息を吐き出す英雄王にジャンヌは少し安心した。目の前にいる黄金の王は紛れもない暴君だが、人の成長を見守る器の広さは持ち合わせている。
「英雄王ギルガメッシュ、その言葉に一切の偽りはありませんね？」
「あ？　何を当たり前の事を、我は何時だって真実しか口にしない。つまらぬ探り合いなんぞそこらの犬にでも喰わせておけ」
「……そうですね。失礼しました」
　最後にジャンヌが頭を下げることによって王と聖女による問答は終了する。相変わらず分からない事は多々あるが、それでも目の前の王が世に悪をばら蒔く存在では無いことは確認できた。
　修司がいる限り、黄金の王が暴挙に出ることはない。そう信じたジャンヌはギルガメッシュにこれ以上追及する事無く、引き下がる事を選ぶ。
　瞬間、部屋の景色は元に戻り、リビングには空腹を誘う香ばしい香りが充満していた。
「王様、出来たよー……って、どしたの？」
「いや、何でもない。それよりも修司、今夜の夕餉の品は何だ？」
「今日は王様の久し振りの凱旋だから、何時もより豪華にしてみたんだ。ベトナム風生春巻にシーフードパエリアと他色々、デザートにはホットブラウニーアイスを用意したから、ジャンヌさんも是非食べてくれ」
　リビングのテーブルに並べられる豪勢な料理の数々、宝石の如く輝く品々にジャンヌの口元から思わず涎が溢れそうになる。
「それで、その……王様、慎二達の事なんだけど――」
「……フンッ、良かろう。この料理の品々に免じて特に許そう。但し、面倒はキチンとお前が見ろよ。何か粗々しようものなら即刻叩き出すと知れ」
「分かった。ありがとう王様！」
　王からの特別な許しに安堵し胸を撫で下ろした修司は、後ろで控えていたシドゥリにサムズアップする。にこやかに微笑むシドゥリ

もまた親指を立てて返事を返す。
その光景を見てジャンヌもまた笑みを浮かべる。１０年も前から生きてきた古代の英雄王、最初は酷く警戒していたが、目の前で広がるその光景にそれは杞憂だったのだとジャンヌは思い知る。
もしかしたら、彼が此処まで穏やかな性格でいられたのも偏に修司のお陰かも知れない。彼の秘めた可能性が王に泥による侵食を防ぎ、今も尚偉大な王として君臨させている。
未だ謎の多い少年、白河修司。彼のこれからの未来に僅かな不安を抱きながら、ジャンヌもまたその行く末に興味を抱くようになっていくのだった。
「じゃ、皆は先に食べててくれ。慎二を取り敢えず俺の寝室へ運んでおくから」
「あぁ、その前に修司。お前に一ついい忘れていた事がある」
「んー？　なに？」
勿体ぶった口振り、こう言うときの王様はほぼ間違いなく無茶振りを要求してくる。しかし今の修司にはその程度で驚くほど肝は小さくない。
これまで王の無茶振りによって培ってきた耐性、故に修司には王が何を言っても動じない自身があった。気絶し、眠りに入ってしまった慎二を担ぎ、王が何を言うのか待っていると。
「我、近い内に結婚するから、披露宴の準備を宜しく」
「……はぁぁぁぁぁっ!!??」
訂正、この王様、とんでもないことを口にしやがった。

◇

冬木の夜。冷たい夜風に噴かれて眼下に広がる街並を見下ろす一つの影。
髑髏の仮面を付けたソレの視線の先にあるのは病院、現在多くの入院患者がいる新都の総合病院が写し出されていた。
「タマシイ、イッパイ、タマシイ、ホシイ」
「止めておけよ。彼処に手を出せばテメェはもう英霊ですらねぇぞ」
「っ!?」
髑髏の背後に現れるのは蒼い槍兵、その手に朱色の槍を携えてその眼光は鋭く黒き髑髏を射抜く。
「ラン、サー!」
「応よ。そう言うテメェはアサシンだな。どんな外道なマスターに引き当てられたか知らねぇが、病院に手を出すなんてふざけた目論みは今この瞬間潰えたと思え」
ランサーの全身から闘志が漲る。迸る魔力は気炎となって立ち上ぼり、手にした槍を以て身構える。
静まり返った冬木の夜空で二つの命が奪い合う。

その31

――――夜の冬木の街を二つの影が疾走する。片や黒の外套を身に纏う髑髏の暗殺者、片や蒼の装束と紅い槍を携えた槍兵。その関係性は追われる者と追う者、獲物とそれを刈り取るハンター、必死に逃げ惑う黒の暗殺者を蒼の槍兵が追随する。

「シャアッ！」

暗闇に紛れ込ませ様に放たれるのは三つの短剣、投擲に適した鋭い刃には相手を死に至らしめる猛毒が塗り込まれている。掠ればそれだけで死は免れない、しかし槍兵はそんな凶悪な凶器を前に臆する事無く突き進む。

瞬間、短剣は弾かれる。都合良く弾かれ、地に落ちる己の刃に暗殺者は仮面の奥で動揺する。

「無駄だ。俺に飛び道具は効かねぇよ」

「矢避ケノ加護カ！」

つまらなく吐き捨てる槍兵、自身の技と道具が加護というスキルに防がれた事を暗殺者は忌々しく思いながらも、今の彼には槍兵を正面から打ち破る術はない。

故に今は逃げの一手しかないと、入り組んだ新都の街路樹を縫うように奔る。しかし相手は俊敏さと速さに特化したサーヴァント、幾ら暗闇に紛れようとも優れた猟犬の如く、槍兵の追跡を振り切る事は叶わなかった。

それから数度の刃をランサーと交え、傷を負い、逃げ足も覚束無くなって来たアサシンが訪れたのは柳洞寺――――の、中腹に当たる巨大池枯木が沈み、外来種の魚等が数多く生息するその場所で、両者は相対峙する。

「連れてきたかった場所は此処か？　何を企んでるのか知らねぇが、決着（ケリ）を付ける場所としてはチョイとセンスがねぇな」

「――――」

身を低くさせ、いつでも動けるアサシンに対し、ランサーは見下す

ように見つめる。しかしそこに一切の慢心油断の気は存在しない。幾ら相手が砂虫と言えど歴とした英霊、どんな隠し球があるか分からない以上、そこに油断等という雑念を持ち込む訳がない。

朱色の槍を肩に担ぎ、相手の出方を伺う。と、その時だ。水面の底から這うようにそれらはランサーに向けて押し寄せてくる。

「っ！」

ランサーを囲むように現れたソレ、場の空気が一気に悍しいモノへと変化した事に気付いたランサーは、己の直感に従いその場から跳躍。

空高く舞い上がると同時に水面から現れるソレを目の当たりにしたランサーの顔は凍り付き、直後に悟る。

これは、在ってはならないモノ。自分達サーヴァントにとって天敵にも等しい化生の存在なのだとランサーは理解した。

これを放置してはならない。だが、今のランサーでこれを打ち破るのは不可能、迫り来る黒い帯の群れを的確に捌く事しか出来ない。

このままでは何れ追い付かれる。致し方ないとランサーは三つのルーン文字が刻まれた石を複数個投擲し、池へと着水する。

押し寄せる黒い帯、ランサーに向けて四方から群がるそれを防いだのはルーンの力による結界だった。強度で言うならば並みの宝具位弾き飛ばす性能を持っている。が、黒いソレは構う事無くルーンの結界を侵食していく。

「マジかよ、取って置きだったんだがなぁ！」

自身の切り札とも言えるルーンの力がアッサリと破られた事に嘆くが、事態はそれを許してはくれない。迫り来る黒いそれを凌ぐだけで手一杯なのに、更なる脅威がランサーを襲う。

「ドウシタ、ランサー。足ガ、止マッテ、イルゾ？」

「テメェ、コイツが何なのか分かってんのか!?」

グッグッグッとくぐもった声で嗤うアサシンに神経を逆撫でられるが、そこに余計な気を回す余力はランサーには無かった。気付けば攻守は逆転され、アサシンを打ち取るまであと一歩だったランサーは、とうとう逃げ場が無いところまで追い詰められてしまっていた。

「魂ナゾ、飴細工ヨ、苦悶ヲ、零セ……！」
「っ!?　宝具か！」
瞬間、アサシンから魔力が吹き荒れる。紡がれる言霊から宝具の発動を察したランサーは一か八かの勝負に出る。
「ちっと遠いが……やるしかねぇか！」
迫り来る黒い帯の群れを振りほどき、一時的に自由の身となったランサーはアサシン同様に宝具を開帳させる。
打てば必中、穿つは心臓。其は文字通り必殺の一刺。
「刺し穿つ（ゲイ）――――」
「妄想心音（ザバーニーヤ）!!」
その時、ランサーがその時目にしたのはアサシンの歪な迄の巨大な腕だった。
それは、呪いだった。擬似的な心臓を生み出し、相手と同調させて握り潰して殺す呪いの腕。
ランサーの必殺の槍が届くよりも、アサシンの呪殺の一撃が速かった。握り潰された心臓は確かにランサーの心臓にも届き、一手遅かったランサーはこの時を以て死亡。高められた魔力は行き場を失くして辺りを蹂躙していき、この時アサシンの髑髏の仮面を一部削っていく。
ランサーとアサシンの宝具の打ち合いはアサシンに軍配が上がった。心臓を破壊されたランサーは絶命し、僅かな意識はあっても身動きなど出来る筈も無かった。
そのランサーに止めとばかりにアサシンの手が延びる。迫るアサシンの手はランサーを貫き、その手には微かに動く心臓が乗せられていた。
ランサーの心臓を抉り出したアサシンはそのまま後ろに飛ぶ。すると、ランサーに迫っていた黒い帯が凄まじい数となって彼へと巻き付き、池の底へと引き摺り混んでいく。
その様子を見送りながら、アサシンはランサーの心臓を補食する。滴る血液を舌で舐めとり、果実を頬張るように心臓を口にすると、一息に心臓をを呑み込み、ランサーの心臓を取り込んでいく。

「ランサー、貴様の心臓……馳走になった」
それだけを言い残し、アサシンは再び暗闇の中へと姿を消した。
「――成る程、あれが冬木に蠢くモノの正体ね。全く、何て茶番。このままじゃあの蟲どもの独壇場じゃない」
その光景を一人の魔女に監視されていた事に気付かれないままで……。
「――一応、礼を言っておくわランサー。結果的にとは言え、貴方が宗一郎様を守ってくれたことを……ね」
新都の総合病院には未だ多くの教師、生徒達が入院している。其処には守りの護符を渡せなかった葛木宗一郎の姿もあり、彼の隣には彼を慕い敬う柳洞一成の姿もあった。
「――あの人を狙っておいて、ただで済むと思わない事ね」
踵を返して彼女もまた暗闇へ溶けていく。その瞳に激しい怒りの炎を宿して……。

《あーあ、色々と勿体ねぇ終わり方だなぁこれは》
沈み行く意識の中、ランサーは自身の末路の際で幾つかの嘆きを溢していた。思い返すのは今回の聖杯戦争、一人の戦士として戦い抜く事を楽しみにしていたランサーは今回の自分の結末に一抹な不満を抱いていた。
思えば、あのいけすかない神父のいる教会に足を踏み入れたのが運の尽きだった。相方は捕らわれ、令呪は奪われ、気付いたらあの外道神父の駒使い。セイバーや他のサーヴァント達と一通りやり合えたのは良かったが、それでも全開には程遠い戦いにランサーは未練たらたらだった。
何より、あの時の坊主と死合え無かったのが本当に心残りだった。あの坊主とならきっと心行くまで戦いを楽しめただろうに……。
嗚呼、でも何よりも残念なのが……。

《悪いなバゼット。先に逝ってるわ》
相方である女の為に一度も槍を奮ってやれなかった事が、ランサーの心に痼となり。
その残滓の念も、黒い帯に喰われて消滅した。

◇

「ったく、王様ってばいつでも無茶ぶりするんだからなぁ～、いきなり披露宴の準備とか、高校生に任せる難易度じゃねぇだろ」
翌朝。朝食を終え、学校も現在休校である事も重なって現在修司は新都の街にて比較的穏やかな時間を過ごしていた。シドゥリと慎二に留守の番を頼み、ジャンヌと共に街へ散策に出た修司は今単独で行動している。
携帯で呼べば直ぐに駆け付けてくるだろうジャンヌに心強く思いながらも、修司の心境は憂鬱だった。原因は勿論、昨夜保護者兼上司である彼の黄金の王の突然のカミングアウトである。
「まぁ確かに王様って見た目の割りに良い年みたいだし、そういうのがいてもおかしくはないと思うけどさ、何も今言う事じゃないよな」
唯でさえ今の冬木は色々と危険な状態だ。魔術師という不確かな連中が跋扈し、サーヴァントと言う危険な存在を暗躍させている。そんな危険地帯な冬木でワザワザ婚儀を挙げようとする王に流石の修司もどうかと思った。
その当の本人は朝起きれば姿を消してるし、これではどう準備すれば良いのか検討も出来やしない。シドゥリもこの事には寝耳に水の様で、終始王を問い詰めていたが、彼の王は高笑いするだけでマトモに答えてはくれなかった。
ああいう時の王の無茶ぶりはヤバイ。本人は臣下を喜ばすサプラ

イズのつもりだろうが、臣下達からすれば彼の月のかぐや姫の無茶ぶりにも匹敵すると謂われている。
頭を抱えて悩むシドゥリは兎に角何時でも動けるよう準備はしておくと言って、自宅マンションで電話越しにて各部署の部下達に命令を下している。
因みに慎二はそのお手伝いである。元々多方面に優れた才能を持つ慎二はそう言った面でも能力を発揮できるらしい。手際よく手伝ってくれる慎二にシドゥリさんが感謝していると、照れ臭そうに憎まれ口を叩く慎二が印象的だった。
「――まぁ、王様の相手がどんな人なのかは今は置いておこう。先ずは情報収集だな」
頭を振って意識を切り替える。王の婚儀を成功させる為にもこの聖杯戦争はさっさと終わらせる。残ったサーヴァントはアサシンを除いた六騎、セイバー、ライダー、アーチャー、バーサーカーのマスターの情報は出揃っている。
残るマスターが不明なのはキャスターだ。彼女を逃がした事は大きいが、魔力供給源を断たれて令呪による縛りを受けた今の彼女ではマスター以外に得られる魔力は殆ど無いだろう。とは言え、油断出来る相手では無いことは確かだが。
「後は……ランサーか。士郎が言うにはランサーは全身蒼で紅い槍を持っているって言ってたけど……」
思い返すのはコンテナ街でバーサーカーと戦う蒼い槍兵、その速さから移動する軌跡しか目で追えなかったが、今にして思えばあれがランサーだったのだろう。
果たして今の自分で勝てるのだろうか。今の自分なら或いは……なんて思い上がるには不確かな要素が多すぎる。
それとも、やはりライダーのいる間桐邸へ突撃するか？　膠着した状況を打破するには行動あるのみが基本だが、迂闊な事は出来ないのがこの聖杯戦争の恐ろしい所だ。
「――取り敢えず、士郎の所へ行ってみるか。アイツも色々動いているみたいだし」

そうと決まれば深山町へ向かおう。メールでジャンヌ宛に上記の旨を伝え、いざ衛宮邸へ向かおうとした時。

修司の目は見開かれる。眼前に佇む白を強調とした衣服に身を包んだ紫色の少女、修司が無意識に敵と認識しなかった聖杯戦争のマスターの一人。

ライダーのマスター……。

「桜……ちゃん？」

「白河先輩、少しお時間戴いても宜しいですか」

無機質で感情の籠らない瞳、その眼は修司を見ているようでまるで眼中になく、その伽藍堂な瞳は何処までも空虚で濁っていた。

その32

カツン、地下へと続く階段を一人の男が降りていく。カソックを身に纏い、首から掛けられ、胸元では十字架が揺れる。歪んだ微笑みを携えた男が向かった先に待っていたのは、台座の上に寝かされた女性――魔術協会からの参戦者、バゼット＝フラガ＝マクレミッツだった。

「――起きろ執行者、事態に動きがあった」

「言峰綺礼、今更私に何用ですか」

台座の上で寝かされているバゼットは魔術的処置を施されているのか、今の彼女は瞼と口しか動かすことを許されてはいない。冷ややかな視線を向けてくる彼女に言峰はやれやれと肩を竦め――。

「ランサーが敗れた」

その一言にバゼットの眼は大きく見開かれる事になる。

「……相手は？」

「不明だ。状況も、どの陣営にどのように斃されたのか、その一切が不明のままだ」

「――どうやら、事態は私が思っている以上に混迷としている様ですね」

言峰の言葉を咀嚼し、その上で彼の言うことを真実だと知ったバゼットは同時に現在の聖杯戦争の状況がかなり混沌としている事を察した。

魔術協会が派遣した封印指定の執行者、その肩書きに偽りなしな洞察眼に言峰も流石だと納得するが、話はこれで終わりな訳ではない。現在バゼットは言峰の罠によって身動き一つ出来ない状態だ。話の流れからこのあとどのような展開なのかは大凡（おおよそ）察してはいるが、それでもバゼットは目の前の神父に文句を言わなければ気が済まなかった。

「それで？　私に一体どうしろと言うのです。相方のサーヴァントは

消え、令呪も貴方に奪われた。マスターとしての権限は全て失われ、聖杯戦争に参加する資格も失った。そんな私に一体何をさせたいと言うのです」
「不意討ち気味に罠を仕掛けたのは謝罪しよう。しかし、意味深に私が用意した茶を何の疑問もなく飲み干す其方も少々不用意なのではないかな？」
「……むっ」
「それに、此処へ来る前に一般人とトラブルを起こしたとも聞いている。身柄の自由を奪い聖杯戦争への参加を遅らせた事がそのペナルティだとすれば、納得は出来なくとも理解は出来るのではないかな？」
「むむむっ」
言峰の正論（？）の様でこじつけの様な理屈にバゼットは唸ることしか出来ない。確かに無関係な一般人を一方的に襲ったのは自分であり、非があるのもまたバゼットだ。
ここ数日の身柄の拘束がそれに対するペナルティだと言うのなら、仕方ないのかもしれない。とは言え、令呪の没収は流石にやりすぎる。それに先程もバゼットが言ったように、今の彼女には相棒であるサーヴァントが存在しない。
サーヴァントなしで勝ち残れる程、この聖杯戦争は甘くはない。切り札は一応残されているが、それだけで挑むのには少々心もとない。負ける気はないが、戦いの過酷さもまた身に染みている。
「今回の聖杯戦争は例年よりも輪を掛けて厄介ごとがありそうだ。故に魔術協会の執行者である君に依頼する。此度の聖杯戦争の異常を検知し、事態の収拾に勤めて欲しい」
「――――了解した」
しかし、自分は魔術協会から派遣された執行者。依頼があるのなら断るわけにもいかない。術を解除し、身動き出来るようになったバゼットは身体の調子を整え、固まった関節をボキボキと鳴らしながら体を解していく。
「さて、このまま君を死地に送り出すのも気が引ける。故に教会から

出る前に一つアドバイスを送ろう」
「――なんです？」
「白河修司、困ったことがあれば彼を頼ると良い、アレは中々機転が利く男だ。私の紹介だと言えば無下にはすまいよ」
「……彼、ですか」
何故言峰が彼を知っているのか、気になりはするが……きっと、この男は正直に答えはしないのだろう。言峰綺礼という人間がどれだけ性根が歪んでいるか、ここ数日の監禁生活でバゼットはイヤというほど熟知してしまっている。
正直、あんなことがあったあとで彼に顔を合わせるのは気が引けるが、現状ではそれ以外に選択肢はない。それに何より疑問を解消するには今は行動するしかない。
現在の聖杯戦争の進み具合を調べる意味合いも兼ねて、バゼットは冬木の街へ再び足を進める。
その背中を喜悦に笑みを浮かべた神父が見つめていることを知らずに……。

◇

――突然だが、俺は女性経験が無い。性的体験は当然、キスは愚か異性とは手を繋いだ事すらなく、会話も特定の女子生徒や教師としかしたことが無く、今日まで童貞の中の童貞――伝説のスーパー童貞を自負してきた。
心は童貞で出来ている。血潮は（無駄に）気高く心は（硝子よりも）脆い。
ただ一度の女性経験もなく、童貞の丘でリア充を妬む。そんなキン

グオブ童貞の俺は現在。
「――――意外です。先輩ってこんなお洒落なお店も知っていたんですね」
俺の初恋の人、間桐桜ちゃんがとある喫茶店にて俺の前で優雅にカフェオレを呑んでいます。あっ、頬に掛かった髪をたくし上げる仕草、可愛い。
（いや違う。そうじゃないだろ俺ェッ！）
何故、桜ちゃんが俺に構うのか。何故、俺に接触してきたのか、そして何より何故彼女が聖杯戦争なんて血腥い争いに参加してしまったのか。聞きたい事は山ほどある。
この出会いをその疑問を解消させる数少ない機会であると捉えよう。もし彼女が聖杯戦争に乗り気で無いのなら、説得してこの戦いから降りて貰うことも出来るかもしれない。
慎ましやかにカフェオレを呑む桜ちゃん、その口元へつい視線が動いてしまうが、首を振って煩悩を退散させる。
「と、所で間桐さんはどうして俺の所に？　こう言っては何だけどてっきり君はもうあの家から出てこないとばかり思ってたから……」
「――――そう、ですね。確かにその方が良かったんだと思います。兄さんからライダーを取り戻したと言っても、今の私には遠坂先輩や衛宮先輩にも敵対されていて、その上白河先輩にまで敵視されちゃってます。状況的に言えば私は間桐の家に引きこもるべきでしたね」
遠坂は兎も角、士郎や俺が桜ちゃんを敵視する事は有り得ない。聖杯戦争というふざけたモノの所為で色々おかしくなっているが、本来であれば士郎も桜ちゃんもこんな血腥い戦いに身を投じる必要なんかないんだ。
だから、俺は口にした。そんな事はないと、士郎が桜ちゃんを敵として認識するなんて有り得ないと。
だって、衛宮士郎は正義の味方を目指す男だ。今は色々実力不足感が否めないけど、いずれは多くの人々を助けるイケメンヒーローになってる筈だ。そんなアイツが、年単位で付き合いのある桜ちゃんを敵視するなんて有り得ない。

無論俺も。と、割りと熱弁してしまいその様子に桜ちゃんは少しだけ目を見開いて驚いていた。店内に人がいないことが幸いだった。もし此処にあの猫なのかマスコットなのか良く分からない知的生命体達がいたら、きっと揶揄されたに違いないから。

「――白河先輩は、優しいんですね」

「や、優しいかなぁ？　俺、単に士郎の事を語っているだけだぞ？」

「友達を正当に評価できる人って、意外と少ないんですよ」

「へ、へぇ……そうなんだ」

い、イカン。なんか話がドンドン脱線していきそうな気がする。話を戻そうにも目の前の後輩はイチイチ人を誘惑するような素振りを見せてくるし。て言うか、何で制服の胸元若干開けてるんだよ!?　ここそう言う場所じゃないから！ここは、公共の、一般的な、憩いの場所だから！　そう言う如何わしい事をするような所じゃないから！

いないよな！　あの珍妙な猫擬きの知的生命体、ホントにいないよな!?　あ、バイトの子と目が合った。や、止めて、そんな汚物を見るような目で見ないで！　違うから、そう言うんじゃないから！

「――ふふ、先輩ってば照れ屋なんですね。可愛いです。何だったら、場所を変えて改めて話をしますか？」

「へ？　で、でも今の時間、そんな空いてる店は無いと思うけど……」

「やだなぁ、惚けちゃって。それとも本気で言っているのかな？　まぁ、どっちでも良いですけど」

そう言って、桜ちゃんは俺の耳元で一言囁く。対面する形で座っている為、身を乗り出してくる彼女の胸元はより近くに迫り、彼女から発せられる香りは思考を麻痺させるほど誘惑的だった。

今の彼女には並々ならぬ色気を感じる。並の男なら当然の如く付いていくだろう。その上更に誘ってくる言葉を耳元で囁かれれば、彼女の言葉に抗える術はない。

――なのに、俺の心は嘘みたいに冷えきり、静かになっていた。相手は初恋の相手、そんな彼女が蠱惑的に誘ってくるのに、先程までとは打って変わって俺の乱れていた心音は静かな水面の如く平静を

保っていた。
　彼女のこれ見よがしな誘惑に頭が冷えた？　そんな卑猥な彼女に呆れ果ててしまった？　童貞故に、経験豊富そうな彼女に失望した？
　どれも違う。耳元で囁く際に見せた彼女の目がどうしようもなく悲しそうに見えたからだ。笑っているのに、彼女の目は今にも泣き出しそうに歪んでいる。……見ていられなかった。
「――なぁ、桜ちゃん」
「え？　な、何です？」
「どうして、君は聖杯戦争に参加したんだい？」
「っ！」
「俺、魔術師の理屈なんて分からないし、桜ちゃんにどういう事情があったかなんて、想像も出来ない。でもさ、自分の心と正反対な事をし続けると、いつか本当に刷りきれちゃうぞ」
「……まるで、私の事を知っている様な口振りですね」
　彼女の本心が聞きたいが為に、敢えて抉る様な言い方をしてしまったが、どうやらビンゴだったらしい。先程の男に媚を売るような態度から一転、まるで無機質な伽藍堂な眼差しで此方を見てくる彼女に、俺は少なからず怖気を感じた。
　そして、その感覚は何処かで覚えがあった筈なのだが……思い出せない。ただ確かなのはやはり桜ちゃんを放っておく事は出来ないという事だ。
「俺さ、昔君に助けてもらった事があるんだけど……覚えてる？」
「――何の話です？」
「……覚えてないならいいや。実際大した話じゃないからね。でも、覚えてて欲しいのは一個だけ。今後、どんな事があっても俺は君を見捨てたりしない。それは絶対に絶対だ」
「――」
　下を向き、黙りしてしまった桜ちゃん。色々言い過ぎたかな。自分なりの言葉を伝えたつもりだけど、桜ちゃんは手元にあるカフェオレの残りを見つめるだけで何も口にしない。
　ただ、その瞳には僅かばかり感情の光が灯っている気がした。自分

の言葉に何かを思い出したのか、ブツブツと何かを呟いている。一瞬雁夜おじさんなんて人物名らしき単語が聞こえてきたが、果たして彼女の脳内にはどんなやり取りが行われているのだろう。

……そろそろ、店を出るべきか。外は段々暗くなっていくし、このまま彼女と一緒にいれば遠坂が要らぬ誤解を考えるかもしれない。テーブルにおかれた伝票をもって立ち上がろうとすると……。

「――――ねぇ、先輩。もし私がこの先、沢山の人達を不幸にさせる悪い人になったら、どうします？」

「ん？　普通に止めて叱るけど？」

彼女の口から溢れた台詞、それに条件反射で答えると、それ以上彼女の口から何か紡がれる事はなかった。

悪い事をしたのなら、回りが止めてキチンとごめんなさいをさせる。それは人としてごくごく当たり前な常識だ。そんな事は死んだ両親やシドゥリさんが口酸っぱく教えてくれた良識人としての当然の在り方だ。

その後、俺はレジで桜ちゃんの分の支払いも済ませて、喫茶店を後にする。その際、彼女が俺を見ていた気がするけど、気にせずそのまま冬木の街へ戻った。

――――相変わらず、それらしい情報は殆ど得られなかったが、自分がするべき事は再確認できたから、それだけでも良かっただろう。

聖杯戦争をぶち壊す。早い所、この戦いに決着を着けたい所だ。

「――――本当、つくづく癪に障る人です」

修司がいなくなった店内で桜は苛立ちしながら呟く。敵対しない？　見捨てない？　白々しい、嘘臭い。魔術師という家系に生まれ、今日まで身体中弄くられてきた桜にとって修司の台詞、その全てが偽善に聞こえていた。

そんな事、出来ないくせに。少し強いくらいで、何を調子に乗って

いるのか。
幸せに暮らしていた癖に、自分が地獄を味わっていた間、自分は何不自由なく暮らしていた癖に。何故そうも私に固執する。何故私に其処まで拘る。
間桐桜にとって白河修司は天敵だ。何も知らない癖にノコノコと踏み込んでくる。許せない、煩わしい。許せるなら、徹底的に虐め抜いてやりたい。一般人に毛が生えた程度の力で、自惚れるなと踏みにじってやりたい。
でも、そう不愉快に感じる一方で……。
「なんで、私ってば嬉しいなんて感じてるの」
修司の言葉、その全てに嘘が無いのもまた事実で。何故かそれが無性に心の隅で残っていた。

――そして夜。静まり返る冬木の郊外にてそれは顕れる。

その３３

――――桜と別れ暗くなり始める空の下、幾つもの車が行き交う冬木の大橋で海を眺めていた。海と山に囲まれ自然豊かな街、こうして眺めれば聖杯戦争なんて抗争が起きているなんて嘘のように思えてしまう。

「……結局、桜ちゃんは何が言いたかったんだろうな」

店へ一人置いてきてしまった後輩に考えを巡らせるが、魔術師ではない修司が答えに辿り着ける事はなかった。分かるのはあの時の桜の様子が何処かおかしかったこと、魔術に関わる彼女がこれ迄どういう心境で生きてきたか、修司には想像すら出来なかった。

しかし、どれだけ彼女が聖杯に掛ける望みが大きくてもそれを叶えさせる訳にはいかない。１０年前の災厄が再び引き起こされる可能性が僅かでもあるのなら、それを阻止する義務と権利が自分にはある。

結局の所、修司もまた戦うしかない。聖杯戦争を止めるために全てのサーヴァントを倒していくしかない。仮に桜が自分の前に立ちはだかるのなら、修司もまた退く訳にはいかないのだ。

「――――まぁ、結局出たとこ勝負なんだよな。分の悪い賭け事は性に合わないんだけどなぁ」

その時が来ることを憂鬱に思いながら立ち尽くしていると、向こうからやってくるのはここ数日で見慣れた金髪碧眼の少女、ジャンヌ＝ダルク。

「修司君、お待たせしました」

「いや、大して待ってはいないよ。それで、そっちの話し合いはもう済んだのか？」

修司が街に出ている間、ジャンヌは士郎とセイバーに今後自分達とどうするつもりか是非を問う為に衛宮邸へ向かい話し合いを行っていた。

セイバー陣営である彼等に協力を頼んだのは冬木の人々を魔力源

にしているキャスターを叩く迄の間、キャスター自体討伐は叶わなかったが、それでも彼女の戦力の大部分を削ぎ落とす事は出来た。
聖杯戦争の審判役であるジャンヌは公平に戦いを見守る義務がある。故に彼女は協力関係の解消をしようとしたのだが……。
「どうやら、セイバーのマスターは私達に協力をしてくれる様です。聖杯戦争から無関係な人々を守るために協力していきたいと仰ってました」
「何て言うか、アイツらしいな」
困ったように笑うジャンヌに連れて修司も苦笑う。脳内で完璧に再現できてしまう友人のその時の状況に微笑ましく思うが、ジャンヌの言葉に違和感を覚えた修司は今一度彼女に問う。
「セイバーのマスター〝は〟って事は、セイバーさんは違うのか？」
「それは……」
修司の問いに何と返していいのか分からず、ジャンヌは頭を悩ませる。彼女が言うには話し合いの最中終始心此処に在らずといった様子で、マスターである士郎の言葉にもあまり反応を示してはいなかった。
だが、それも無理もない事なのかも知れない。聖杯に願いを聞き入れて貰う為に聖杯に喚ばれたと言うのに、それを阻止すると豪語する者と出会ってしまった。
それが敵対する魔術師であるならば斬り伏せるのみだが、相手は魔術師から縁遠い人間でしかも嘗ての聖杯戦争による被害者である。１０年前の聖杯戦争に参加していたセイバーにとって白河修司の存在はある意味鬼門とも言えた。
そんな彼から１０年前の大火災を防ぐ為に聖杯戦争に乱入すると言われてしまえば当時の当事者であるセイバーにそれを言い返せるだけの言葉など持ち合わせていなかった。
気高き騎士であるが故に開き直る事など出来はしないセイバーは、現在針の筵の状態だろう。そんな彼女の心境など露知らず、ジャンヌは曖昧な言葉で濁す事しか出来なかった。
「確かにハッキリと言葉として聞けなかったのは残念でしたが、彼女

も騎士。きっとマスターの言葉には従ってくれるでしょう」
「……まぁ、如何にも生真面目そうな人だもんな。余程の事じゃない限り士郎に騙し討ちなんてするわけないか」
修司は万が一の事を考えるが、あの女騎士が意味もなく主に背中から斬りつける様な事をやらかすとは思えない。ジャンヌの言葉を信じる事にする修司だが、まだ一つ疑問は残されていた。
「て言うか、なら何で士郎達は此処に来ないんだ？　アイツの事だからついてくるもんだとばかり思っていたんだけど」
衛宮士郎は良くも悪くもお人好しが過ぎる人間だ。義理堅いし、人の頼みは基本断らず、時々見ている此方が心配になるほどの善人。そんな彼がこれから聖杯戦争に乱入するという自分達をそのまま放っておく事なんて出来ないと思っていた。
するとジャンヌは再び困ったように苦笑いを浮かべて――。
「実は、その……セイバーのマスターは今風邪を引いているらしくって――」
「風邪だぁ？」
彼女の口から告げられる意外すぎる事実に思わず素っ頓狂な声を出してしまった。
「風邪？　嘘だろ？　アイツは私生活もバカみたいに真面目な男だぞ？　体調管理も普段から徹底しているみたいだし」
「私もそう思うのですが……現に彼は今少しばかり衰弱しています。これから戦地に赴くにはあの状態では些か以上に危険と判断したので……」
「士郎達は今回置いていく事になったと、まぁそれが正しいか。病人を連れていく訳にも行かないし」
「彼の事はセイバーに任せましょう。私達は私達で、出来ることをやりましょう」
「そうだな。……士郎にはあとで栄養ドリンクでも買ってってやるか」
風邪で衰弱し、動けなくなった士郎を連れていくわけにも行かない。彼の事は彼のサーヴァントであるセイバーに任せ、二人は行動を

開始した。

◇

「――マジか。本当にあったよ」

冬木の郊外にある森の中、時折電気ショックの様な地雷に微かな痺れを覚えながら暗い夜の森を進んでいくと、其処には中世の時代を想起させる立派な堅城が聳え立っていた。

普段から森には近付かない様に過ごしていたが、まさか城があるとは思わず、修司の瞳は驚愕に開かれている。しかもその造りは何処と無くドイツで見た物と似ている気がするから二重の意味で驚きである。

アインツベルンの城。聖杯戦争を確立させた御三家の一つとされている魔術の家、これから相対するであろう者達を想像し、修司は無意識に緊張で体を固くさせていた。

「修司君、先程も言いましたが今回の目的は戦闘ではありません。バーサーカーの陣営と話し合いをしに行くだけです。今回起きている聖杯戦争の異常に付いて、彼女達から知っている情報を伺いにいくだけですから、そう固くならなくても大丈夫ですよ」

「そ、それは分かってるんだけどね。こう、トラウマが、ね？」

安心してくださいと諭すジャンヌ、修司もその事は重々承知しているが、何せ相手は自分を殺そうとしてきた幼女だ。恐怖感は大分薄れてはいるが、それでも身体があの時の戦いを思い出してつい臨戦態勢に入ってしまう。

既に聖杯戦争が始まって幾度となく戦いに首を突っ込んでいるの

に、未だに修司の心は幼女とあの筋肉大男に過剰に反応してしまう。
「はぁ、では最後に深呼吸をしておきましょう。既に私達が侵入してきているのは気付かれています。対話を行うには先ずは此方に敵意が無いことを示す事が重要です」
「あ、あぁ……分かった」
　言われて深く呼吸を繰り返す。全身の力を抜き、自然体で入られるように勤め、修司は何度も深呼吸を繰り返す。軈て全身の硬直感は解れ、リラックスな状態に差し掛かり。
「もう、いつまで待たせるの？　女の子を待たせるなんてお兄ちゃんてばマナー知らずなんだから」
　突然聞こえてきた声に修司の身体はビクンと震えて息を呑む、完全脱力からの不意討ちに息を詰まらせた修司は窒息によって顔を青白くさせていく。
　まるで狙っていたかの様なタイミング、呆れの溜め息を溢しながらジャンヌは城の玄関先で佇む白く幼い魔術師へ視線を向け。
「悪戯とは感心しませんよ。バーサーカーのマスター」
「フフフ、驚かしてしまってごめんなさい。でもそこのお兄ちゃんもいけないのよ？　あまりにも面白い反応するものだから、つい遊び心が疼いてしまったわ」
　年相応に笑う少女に毒気を抜かれたジャンヌは、話を変えようと態度を改め――。
「……この度は突然の来訪の無礼、お許しを。私はルーラージャンヌ＝ダルク、バーサーカーのマスターである貴女にお尋ねしたいことがあって参上しました」
「ええ、その話受け入れるわ。イリヤスフィール＝フォン＝アインツベルンは貴女達を歓迎します」
　聖女の立ち振舞いに敬意を評してイリヤスフィールと名乗る少女も優雅な立ち振舞いで答える。尤も――。
「あの、挨拶が終わったなら、助けて、くれませんかね？」
「あぁ！　修司君ごめんなさい！」
　青ざめて呼吸困難に陥ってる修司を見て、少女の口許は依然として

笑みを浮かべたままだった。

◇

「どうぞ、ハーブティーでございます」
「あ、どうも」
　家主であるイリヤに連れられて二人が案内されたのは客間と思われる場所だった。促されて席に座り、イリヤの側で控えていたメイドが綺麗な所作で用意されたカップに紅茶が注がれていき、香り立つ紅茶を目の前に置かれた修司は先ずメイドに凝視し、次に部屋全体を見渡した。
　そこは客間というには余りにも豪勢な造りだった。綺羅びやかなシャンデリア、大きな窓には綺麗なカーテンが掛けられ、そのどれもが素人から見ても一級品である事は分かるほどにその部屋は豪華に彩られていた。
　ましてや蒔寺との付き合いや英雄王にそう言ったモノを見せ付けられて修司の眼はある程度物の知る事に肥えている。そんな彼からすればこの部屋はまるで財宝の宝庫だ。壁に掛けられた絵画、飾られた刀剣、傍らに置かれた騎士甲冑、そのどれもが偽りの無い本物である事は嫌と言うほど理解してしまう。
　目の前に置かれているティーカップだって相当な年代物だ。果たしてこれに口を付けていいのだろうか？　隣にいるジャンヌへ視線を向ければ構うことなくティーカップに口を付けている。
　流石英雄ともなれば胆力も違うなぁ。なんて思いながら修司もまた紅茶を口にする。うん、やはりこの紅茶も高級品だ。味が其処らの品とは訳が違う。魔術師と言う奴は皆こんな金持ちなのだろうか？
「――フゥ、美味しいお茶ですね」
「フフ、気に入ってくれた様で嬉しいわ。お兄ちゃんもお口に合ったかしら？」

「あ、ウン。オイシカッタデス」
　出された紅茶を飲み干したコトだし、話の場は整った。いよいよ話を進めようとジャンヌが口を開こうとした時。
「あぁそうそう。話の前にお兄ちゃんに言いたい事があったんだ」
「え、俺？」
「うん。以前この街で騒ぎを起こした人間……深山町だったかしら？　そこで起きた殺人事件、お兄ちゃんは知ってるよね」
「あ、あぁ……」
「あの犯人、私が殺しておいたからお兄ちゃんはもう気にしなくていいよ」
「……え？」
　あっけらかんと、何事も無かったように微笑みすら浮かべて口にするイリヤに修司の思考は固まった。
　殺した。見た目はまだ幼い少女が一人の人間をあっさりとそう口にすることに修司は魔術師の悍しさを初めて眼にした様な気がした。
「こ、殺した？　君が？　何故？」
「何故って、お兄ちゃん困ってたんでしょ？　あの殺人事件の犯人、偶々見掛けたからバーサーカーに頼んで連れてきて、事情聴取？　というモノをしてみたのよ。　そしたらその犯人何て言ったと思う？」
「〝誰でも良かった〟だそうよ？　お金に困っていたから強盗序でにその一家を殺し、残った子供は気紛れに見逃しただけ、私達魔術師もそうだけど今の人間って中々凄いわね。意味もなく人を殺しちゃうなんて」
　呆れた様に語るイリヤにジャンヌは痛ましく目を瞑り、修司は愕然とした思いで聞き入っていた。殺人を犯した犯人もそうだが、目の前の女の子もまた異常だ。人の生き死に全く頓着していないその在り方はあの日パリの地下で邂逅したネルロ某と全く同じ性質に思えた。
「その癖いざ自分の番となると泣き喚くんだもの、話聞くのも詰まんなかったし、適当に殺して燃やしたの。ほら、この国って火葬が主流でしょ？」
「――――なぁ、イリヤスフィールちゃん」

「長いからイリヤでいいよ。なに、お兄ちゃん」
「君は、その殺人事件の犯人を殺した事になんの忌避感も感じていないのかい？」
「？　――なんで？」
「確かに、犯人のした事は許せるものじゃない。人を殺しておいて誰でも良かったなんて宣う輩は端から見れば死んで当然だと思う。でもね、だからと言って本当に殺してしまってはあまり意味がないんだ」
「え？　どうして？　だって皆困ってたんでしょ？　街で色んな人に聞いてたけど、皆同じことを言ってたよ？　そんな犯人は許せないって」
「そう、許せないんだ。残された子供の事を考えれば誰だってそう感じる。そう思う。でもね、その犯人は一切その事を知らないんだ。自分のした事を何一つ理解していないんだ」
「――――」
　責める訳ではなく、何も知らない子供を諭す様に修司はイリヤへ語り掛ける。何故悪い奴を殺してはいけないのか、純粋に疑問に思うイリヤに修司は可能な限り分かりやすく言葉で伝える。
「罪を犯した奴には罰を与える。でも、その前に先ず自分が何をしたのか思い知らさなければならないんだ。殺された人達の無念を、人々の怒りを、残された子供の憎しみを、その全てを犯人は背負わなければならない。それを自覚して初めて罰は罰足り得るんだ」
「でも、それだと時間が掛かるんじゃないの？　自覚させるって言うけれど、そんなの結局は犯人次第じゃない」
「そう、だから時間が必要なんだ。犯人が自分のした事を自覚させる為に、被害者の心が癒えて犯人と決着をつける為に、時に人は時間を必要とするモノなんだ」
　人は時間によって忘却し、時に癒され、時に立ち上がる事が出来る。犯人が捕まり、生き残った子供がそれを乗り越えられるまで成長し、犯人と法的決着を着けることで初めて今回の事件は解決となる。喩え犯人が反省しなくても怒りと憎しみをぶつける事は出来る。

けれど、犯人が死んでしまえばその感情も宙ぶらりんのまま、怒りや憎しみをぶつける相手がいないとなると、あの生き残った少年の感情は何処へ向かえば良いのだろうか。
「――――」
「君が良かれと思って犯人を始末したのは分かった。結果的に言えば君の行いは街の人達の為にもなった。その事は本当に有り難いと思うし、申し訳ないとも思う」
「だから、今度また同じことをしようとした時、少し待って欲しい。君が手を汚す事が無いように俺も頑張ってみるからさ」
そう語り掛ける修司に対して、イリヤは下へと俯いてしまう。何か言い方を間違えてしまったか、隣のジャンヌへ助けを求めるように視線を向ければ、頼みの聖女は困ったように顔を顰めて首を横に振るだけ。
心なしか彼女の両脇で控えるメイド達から怒りの感情が沸き立っているように見える。話をしに来ただけなのに結局は戦いになるのか、緊張感が高まりつつある客間で修司が身構えようとした時。
「でも、キリツグは来てくれなかった」
「……え？」
イリヤのその声は何処までも小さく掠れていた。
「私はずっと待っていたのに、キリツグは迎えに来てくれなかった。悪いことをしたのはキリツグなのに、キリツグは私にごめんなさいの言葉もなかった」
（キリツグって、もしかして切嗣さんの事か？　確か切嗣さんって士郎の親父さんだった筈……）
イリヤの口から紡がれる人物、それは士郎が小学校の頃に亡くなったとされる父親の名前の筈、何故此処で彼女の口からその名前が出てくるのか、困惑する修司がイリヤに何て声をかけようかと迷っていた時。
「「っ!!??」」
それは突然起きた。冷たく、重たく、粘りつくような濃厚な殺意。客間にいる全員に叩き付けられる殺意の暴威に冷や汗を流しながら、

修司とジャンヌは殺意の元となる場所へ目を向ける。
イリヤの背後にある窓、その奥にあるテラスへ抜けると――それはいた。
森の奥から溢れるように涌き出る黒い泥、その中から現れるのは赤黒く刺々しい槍を持つ尾の生えた槍兵。
「なんだ――アレ？」
「あれは、まさかランサー!? でも、あれではまるで……」
別人。そんな言葉を呑み込んで這い出る殺意の槍兵を凝視するジャンヌはあれが如何に危険な存在か、そして自分が何故召喚されたのか理解する。
「――修司君、そしてバーサーカー陣営の皆さん。今すぐ此処から逃げて下さい」
「ジャンヌさん？」
「アレは――危険です。今すぐ逃げて体制を整えなければ！」
「悪いけど、それは出来ないわ」
一歩ずつ近付いてくる歪な槍兵を前に直ぐに逃げるよう告げるジャンヌだが、白く小さい魔術師は拒絶する。
「アレの相手は私とバーサーカーがする。その間に貴女達は逃げなさい」
「なっ、待ちなさい！」
イリヤはジャンヌの制止を振り切り、テラスから飛び降りる。アインツベルンとしての意地か、それとも先の修司の言葉で嫌な事を思い出したのか、今のイリヤはこの時少しばかり視野狭窄となっていた。
「バーサーカー!!」
「■■■■■■■■■ッ!!」
主の叫びに呼応して、偉大なる大英雄が姿を顕す。その肩に小さな主を乗せ、着地と同時に彼女を地面に置き、敵である槍兵を睨み付ける。
「殺して、バーサーカー。アイツを今すぐに！」
「■■■■ッ!!」
主の命令に従い、狂戦士は飛び出していく。その手を強く握りしめ

て佇む相手へと拳を振り下ろす。
その刹那。
「嗚呼、分かっている。精々そちらも上手くやれよ」
屈強な狂戦士の胸元に禍々しい槍が突き刺さる。貫かれた槍は内側から華が咲くように広がり、狂戦士の命を刈り取っていく。
「怖じ惑え、皆殺しだ」
殺意の牙が突き立てる。

その34

それは獣性に満ちた一刺しだった。猛る狂戦士の振り抜かれた拳をいなし、胸元から突き刺し貫くその様は正に獣の如し一撃。貫かれた槍から滴り落ちる血は地面へ落ち、貫かれた狂戦士は痛みに悶える事なく冷静にその獣を観察する。

「フンッ流石にこの程度で死にはしないか。いや、死んだところで意味は無いのか。――――鬱陶しい」

槍を手にしたその男はつまらなそうに吐き捨て、バーサーカーの顔目掛けて蹴りを放つ。当然防ぐバーサーカー、防御として差し出した腕を踏み台に獣は宙を舞う。尾を翻し、槍を片手に身を低くさせる槍の獣、対して狂戦士と呼ばれた巨漢は唸って敵獣を睨み付ける。

「どうした狂戦士。お互い死には慣れ親しんだモノだろう？　嗚呼それとも、コイツを気にしているのか？」

口許を歪ませる獣の隣に在るソレに、バーサーカーの目は見開かれる。黒く蠢くモノ、何の前触れも無しに現れたその存在にバーサーカーだけでなく、城で様子を見ていた修司達も驚愕に目を見開いていた。

「な、なんだよアレ。アレも魔術なのか!?」

「……まさか。いや、でもそうだとしたら」

「ジャンヌさん？」

驚いている修司達の中でも別の意味で驚愕しているジャンヌ、何かを知っている……いや、たった今知り得たかのような口振りの彼女に、修司は何かを知ってるのかと問い掛けようとするが。

「バーサーカー！　それに捕まってはダメ！　戻ってこれなくなる！」

悲鳴の様な叫びが問い掛けようとする修司を押し止める。下を見れば悲痛な面持ちでバーサーカーを見つめる幼いイリヤがいて、その両手はギュッと握り締めて胸元を抑えている。

イリヤはバーサーカーを信じている。自分のサーヴァントこそが世界最強なのだと、誰にも負けない強い人なのだと、あの寒い雪の中で自分を守ってくれたように、何度も自分を守ってくれる父の様な存在であるバーサーカーをイリヤは信じている。

だが、魔術師としての直感がそれを否定する。バーサーカーがどれだけ強くとも、あのランサーは兎も角、新たに現れた黒いアレには敵わない。強い弱いの話ではない、サーヴァントではアレには勝てないという確信がイリヤにはあった。

「■■■■■■ッ!!」

「どうした狂戦士、動きが鈍いぞ」

迫り来る黒い帯を避けながら、バーサーカーはランサーの相手をしなければならない。触手の様に蠢くソレを交わしながら絶死の槍が狂戦士を貫く。防戦一方のバーサーカー、一度でも足を止めればその瞬間自分は終わる。狂戦士は本能でそれを理解し、それでも勝ち筋を見出だそうとするが。

「そら、二つ目だ」

投げ放たれた槍がバーサーカーの心臓を抉り貫く。このままでは不味い、狂戦士は未だ修司と戦った傷が癒えていないのだ。

狂戦士の宝具である十二の試練（ゴッド・ハンド）、その特性は命のストック。加えてマスターであるイリヤの魔力を以て失った命の分も補えるその宝具は、聖杯戦争に於いて破格の力を有している。

しかし、三日近く経過した今でもバーサーカーの命は回復しきれていない。原因は不明、押し込まれつつあるバーサーカーにイリヤは撤退の選択を迫られるが……。

「っ、バーサーカー！」

その選択を選ぶよりも早く、黒い触手はバーサーカーの右腕へ巻き付いていく。

「■■■■■ッ!!」

巻き付かれた触手、そこから侵食する様に広がる黒の汚染にバーサーカーは苦悶の雄叫びを上げる。

「――――つまらん幕切れだ。だが、流石は大英雄、泥に呑まれようとも

尚足掻くか」
　腕に巻き付かれ、黒く悍しいソレを流されても、それでも足掻く大英雄にランサーは感心する。　しかしそれを嘲笑うかのように黒いそれは更に触手を増やし、バーサーカーへ迫っていく。
「嫌だ。嫌だよ、バーサーカー、お願い。負けないで！」
　その両目から流れる涙、それを目の当たりにした修司は――――。
「ごめんジャンヌさん」
「え？」
　ジャンヌが制止するよりも早くテラスから跳躍、弾丸の如く飛び出した修司は瞬く間にランサーとバーサーカーの間に割って入り……。
「先に謝っておくぞ！」
　侵食されたバーサーカーの右腕を手刀で斬り飛ばし。
「そぉらっ！」
　体を捻って溜めた力をそのままに、バーサーカーをイリヤの所まで蹴り飛ばす。弧を描き、イリヤの前で地面に激突する狂戦士、右腕から血煙を上げ、それでも生きている己のサーヴァントに、イリヤは無意識に安堵した。
「なっ、修司君、貴方何を!?」
「ジャンヌさん、皆を連れて街へ逃げてくれ！」
　「はぁっ!?」
「今のやり取りを見て分かった。コイツ等普通じゃない！　特に其処の黒いタコさんウィンナーみたいなのはサーヴァントにとって天敵！　そうだろ！」
「で、ですが！」
「だったら、今この場で有効に立ち回れるのは俺しかいない！　頼むジャンヌさん！　俺も時間稼いだら直ぐ逃げるから、皆を逃がしてやってくれ！」
「～～～～っ!!」
　何と言う暴論だろう。確かに修司の言う通りあの黒いのは真っ当なサーヴァントであればあるほど猛毒であり、餌でしかない。加えてあの変異したランサーも合わせて危険度は超一級、あの場で修司でな

くジャンヌが出ていった処で、結果は然程変わらないだろう。
いや、寧ろあの黒の特性を考えれば、ジャンヌだけでなく依り代であるレティシアですら危険に晒される可能性がある。自分の身体だけでない事を鑑みなければならないジャンヌにとって、修司の提案は最も有効で合理的だった。
だが、これで彼を囮にするのはこれで二度目、自ら聖杯戦争に首を突っ込むと口にした以上、修司には自己責任が常に付きまとうが……善性の塊であるジャンヌにとってそれは凄まじく苦い決断だった。
「もう！　貴方はいつだって勝手な事ばかり！　絶対に生き延びて下さいね！　でないと承知しませんから！」
そう叫ぶジャンヌはメイドの一人を抱えてテラスから降りる。その最中メイドは何かを叫んでいたが、事態がそれを許す事はない。もう片方のメイドは何か心得があるのか、特に問題なくジャンヌに追随し、同じようにテラスから降りていく。
「イリヤスフィール、バーサーカーは!?」
「……うん、平気。ちょっと淀んでいるけどこの分なら少ししたら元に戻ると思う」
「■■■■■……」
「ごめんねバーサーカー、ゆっくり休んで」
余程あの黒いのに侵食されたのが堪えたのか、バーサーカーは疲弊していた。それを労う様にイリヤはバーサーカーを霊体化させると、涙を拭って立ち上がり……。
「先ずはここから離れ、街へ向かいます。付いてきてください」
「……仕方ありませんね。従いましょう、リーゼリット」
「ん、分かった。イリヤ」
「うん、ありがとうリズ」
リズと呼ぶメイドにイリヤが背負われた事を確認したジャンヌは彼女達を連れて城を後にする。その時、イリヤの目はずっと修司の背中を見つめていたが、修司がそれに応えることはない。森の中へ消えていくジャンヌ達、それを見送った修司は取り敢えず安堵した。

「――意外だな。律儀に待っていてくれるなんて」
「……確かにな。だが問題はない、貴様を殺し奴等を追えば済むことだ。多少面倒ではあるがな」
「はっ、そうかよ。あの愉快なアロハな兄ちゃんがここまで人が変わっちまうなんてな。聖杯戦争ってのはやっぱ陰険極まりない儀式だな」
「――俺は、〝残滓〟だ」
「あぁ？」
「遠い何処かのバカが自分の欲望と願望で作り上げた贋作、その搾り滓。それが今の俺だ」
「アンタ、一体何を言って……」
「話は終いだ。ここから先、貴様を待っているのは正真正銘の死地と知れ」
それを皮切りに殺戮の牙と黒死の触手が修司へ襲う。迫り来る二つの脅威を前に、修司は全力で挑むのだった。

◇

「――シロウ」
衛宮邸。風邪によって衰弱し、寝込んでいる己のマスターをセイバーは気落ちした様子で見守っていた。
思い返すのは此処へ召喚されてからの自身への問い掛け、聖杯へ望みを掛ける自分と聖杯戦争を許さないと断じる修司への葛藤。
果たして自分はこのまま聖杯戦争に参加するべきなのか、自身の聖杯へ託す望みは消えていない。なのに怒りに満ちた修司の顔を見て、セイバーの強気は瞬く間に萎縮してしまっていた。

自分達の起こした戦いの所為で犠牲になった人々がいる。それまで当たり前の様に過ごしていたのに、自分達の所為で多くの人々が死に絶え、疵を生み出してしまった。
白河修司、彼はそんな自分を責め立てる資格がある。両親を死なせ、多くの人々を巻き込んだ事への罰を課す義務と権利が彼にはある。敵討ちと称して、自分を討ち取る資格が彼にはある。
でも、言えなかった。聖杯戦争へ正当に異議を口にする人間など前の戦いでは有り得なかった。
「――いや違う。本当はいた筈なんだ。聖杯戦争を憎む者はこれまで多く存在していたんだ」
思い出すのは〝前〟の時、アインツベルンの森で見た忌々しい過去の惨劇。暇潰しと称して当時のキャスターが行った悪逆非道の数々、彼等は全て聖杯戦争の犠牲者だ。
彼等からすればあのキャスターも自分も大差ない。聖杯を掛けての殺し合いで巻き込まれて死んで逝くのはいつだって無関係な弱い人間だ。
それを自分は見ないようにした。聞こえないようにした。全てはキャスターが行ったモノだと断じ、自分は無関係だと気取っていた。
――そんな道理など、彼等からすれば押し通る筈もないのに、どうしてあの時の自分はそんな風に考えてしまったのか。
「――でも、それでも私は聖杯を諦めることは出来ない」
申し訳ないと思う。済まないとも思う。嘲りも罵りも全て受け入れよう。しかし、それでも尚セイバーは聖杯を諦める事は出来なかった。
全てはブリテンの、彼の国の末路を変えるため、破滅の未来を回避するためにセイバーは聖杯へと望みを託したのだ。こんな間違いだらけの王ではなく、もっと相応しい者へ託すために、セイバーは聖杯戦争に参加したのだ。
「でも、このままでは……それも叶わなくなる」
マスターである士郎に不満があるわけではない。人間として好ましく思えるし、共に戦えるとも思えた。

でも、彼と逢ってから全てが空回りな気がする。このままいけば自分と彼が戦うのは避けられない。思い詰めた堂々巡りの思考にセイバーが嫌気を覚えた時。
「っ！　サーヴァントの気配！」
堂々と、玄関の辺りからサーヴァント特有の気配を感じ取ったセイバーは即座に立ち上がり、一度だけ士郎へ視線を向けると、彼女は直ぐ様渡り廊下から飛び出し、戦装束の鎧を身に纏う。
相手は誰だ？　ランサーかアーチャー、それともバーサーカーか。どちらせよ向かってくるのなら切り払うしかない。手にした不可視の剣に力を入れ……。
「――バカな」
絶句した。
「遅かったではないかセイバー、夫を待たせるなどいつから貴様はそんな焦らし上手となった」
「バカな、何故貴方が此処にいる……」
それはセイバーにとって最も有り得ない存在。彼は１０年前のあの戦いで、自身の聖剣に聖杯諸とも呑まれた筈だ。
「だが、そのいじらしさに免じて特に許そう、だが次はないぞ。次回からは我が来る五分前には待ち合わせに来るように」
だが、眼前に佇む男はあの日と変わらず存在していて、その王気も見間違えるはずもなく。
「何故、貴様がここにいる！　答えろ、アーチャー!!」
その黄金の王は不敵に、愉快に笑みを深めるのだった。

その３５

――――僕はね、正義の味方になりたかったんだ。

そう言って死んで逝った爺さん。炎の中で死にかけた俺を助けて、その時見たあの人の姿に憧れて、そんな風に自分もなりたいと思って……。

だから、俺も正義の味方になりたいと思った。悲しむ人を見たくない、困っている人を、泣いている人を助けてやりたいと、誰も彼も救える。そんな人間になりたいと思った。

――――いいかい士郎、誰かを助けるという事は、誰かを助けないという事なんだ。

悲しそうにそう語る切嗣にそんな事はないと叫びたかった。切嗣は自分を助けてくれた。そんな切嗣が正義の味方ではないなんて、それこそ自分には信じられなかった。

誰かの助けになりたくて、正義の味方になりたくて、でも、どうやったら正義の味方になれるのか、それすらもわからなくて……。

そんな時、アイツが颯爽と現れた。まだ俺が中学生の頃の話だ。学校の先輩に頼まれ、校門の飾り付けに手間取っていた時だ。

白河修司。当時から何かと話題になっていた有名人、そんなアイツが暇だからと言って飾り付けの手伝いをする事になったのが、俺と修司の始まりで、巻き込まれた慎二との出会いでもあった。

修司は、色々と器用な奴だった。人並み以上に物事をこなし、海外に頻繁に出掛けているから知らなかったが、相当鍛えている様で街のチンピラ程度なら軽くあしらえる程度には強く、逞しかった。

……いや、違う。強かったんじゃない、強くなったんだ。１０年前に起きた冬木の災厄の様な悲劇を二度と繰り返さない為に、あの神父の下で必死に自分を鍛えたんだ。

その結果、アイツは魔術師である遠坂をもあしらい、更にはサーヴァントであるアサシンすら倒して見せた。理不尽や不条理を許さないと豪語する俺の友人はそれすら凌駕してみせた。

アイツは、今も頑張っている。冬木の人々が聖杯戦争に巻き込まれないように、聖杯戦争を早く終わらせる為に、今も行動している。
なら、俺は何だ。正義の味方になる為に努力を重ねたつもりでいても、結局は何も出来ていない。誰かを助ける処か、自分ばかり助けられてしまっている。
サーヴァントを喚んだのも、聖杯戦争に巻き込まれたのも、全ては偶然の産物。切嗣に教わった魔術も何一つ活かせず、戦いにすら参加出来なかった。
理不尽を許さないと語るアイツは、修司は正義の味方を目指す俺にとってどうしようもなく眩しくて――。
それでいて、自分の心のままに行動出来るアイツを少し羨ましく思えてしまう。
（分からないよ、切嗣。一体、どうしたら正義の味方になれるんだ）
――なぁ、士郎。知ってるか？　ヒーローってのは一人じゃ成り立たないんだぜ？
懐かしい夢を見た気がした。

◇

「ん、んう？」
ふと目を開ければ、そこには見慣れた天井。外は暗く、既に時刻は深夜を指そうとしていた。何故自分は此処にいるのか、思考を巡らせて考えを纏めようとした士郎は以前垣間見た卑猥な夢を思い出す。
何故あんな夢を見てしまったのか、よりにもよって学校のマドンナと交わる夢だなんて、幾らなんでも失礼すぎる。その上その夢を見た所為で風邪を引くとか、無様を通り過ぎて滑稽ですらある。墓に持っ

ていく秘密が出来てしまった事に悶えようとする士郎だが、それよりも気にする事がある。
「そうだ！　修司は、アイツ等はどうしたんだ!?」
　思い出すのは自分達と同盟を組む事になった聖杯戦争にとってイレギュラーな存在達。友人とその協力者達が聖杯戦争の異変に対処するために動いている。もし彼等が今も行動しているのなら、今頃何処かで戦っているのかも知れない。
　友人が戦っている。いてもたっても居られなくなった士郎は即座に着替えを済ませ、自身のサーヴァントであるセイバーに同行してもらおうと居間へ向かった時……セイバー、それにアイツは一体。
　衛宮邸に続く門の前で対峙するセイバーを縁側で見付けた士郎だが、彼女の鎧姿と険しい表情を見て対峙する金髪の男が普通でない事を悟ると、縁側の戸を開き、裸足のままセイバーの下へ駆け寄る。
「セイバー、無事か！」
「っ！　シロウ、ダメです！　来ては行けない！」
　此方に来るなと叫ぶセイバーの声を振り切って、士郎は二人の間を割って入る。両手を広げて庇うように前に立つ士郎にセイバーは目を見開いて驚愕し、金髪の男――ギルガメッシュはその深紅の双眸を値踏みするように目を細める。
「ほう？　我が后との逢瀬に水を差すか。セイバーへの忠義故の行動とは言えその不敬、刎頸程度では済まされぬぞ」
「いきなり出てきて、何言ってるんだ！　誰だお前は！」
「ダメですシロウ、下がって！」
　不敵に笑う英雄王に士郎はより敵意を滲ませて吼える。セイバーはそんな士郎を落ち着かせようとするが、その言葉は士郎には届かない。
　士郎も分かっていた。目の前に立つこの男は普通ではないと、他のサーヴァントと同等、或いはそれ以上の存在感。マトモに戦えば此方に勝機はない。しかし正義の味方を目指す士郎にとってここで身を引くこと、それこそが有り得ない選択だった。
「――ふっ、衛宮士郎。成る程、聞きしに勝る偽善ぶりよな」

「……何だと？」
　偽善。そう呼ばれて頭に来たのではなく、まるで自分の事を知っている様な英雄王の口振りに士郎は動揺する。目の前の男とは確かに初対面の筈、なのにどうして自分の事を知っているのか、戸惑う士郎にギルガメッシュは喜悦の笑みを浮かばせ――――。
「何、そう驚く事ではない。貴様という人間の成り立ちは大凡（おおよそ）だが我が臣下から聞いているだけだ。最初はそんな偽善者などいるものかと軽く一蹴していたが……フハハハ、まさか実在していたとはな。今度からあやつの相談事には多少耳に入れてやるとするか」
「お前、一体何者なんだ」
「気を付けてくださいシロウ、その男は嘗て私と同じく聖杯を巡って争った相手です」
「なっ……!?」
　何故、ただ士郎の脳裏には疑問しか浮かばなかった。セイバーの言葉の意味をそのまま捉えるならば、目の前の男は前の聖杯戦争で召喚されたサーヴァントの一騎と言う事になる。何故その前のサーヴァントが目の前にいるのか、何故セイバーはそれを知っているのか。疑問と動揺、そして風邪による眩暈から足下が覚束無い士郎は膝を屈するが、セイバーはそれを気遣うよりも士郎の前に立つことを選んだ。
「事情は全て後でお話します。ですからどうかシロウは中へ戻ってください！　この男と戦うには今の貴方では無謀過ぎる！」
「……！」
　無謀。そう、今の衛宮士郎では目の前の男に勝つ事など出来はしない。友人である彼とは違って今の士郎では正しく無謀だ。
　でも、それでも立ち向かう事をやめる訳には行かない。喩え無惨に殺されようと諦めるわけには行かない。そう思い立ち上がろうとする士郎だが……。
「フム、ではセイバーよ。ここで我と勝敗を決したいと言うのか？　我は一向に構わんがそれではこの辺り一帯が焦土と化すわけだが？」
「っ！」
　呆れた様に肩を竦める英雄王にセイバーは冷水を掛けられた様に

思考の熱が急激に冷めていく。衛宮邸の近くにはマスターである士郎が気にかける藤村大河とその家族である藤村組があり、さらに言えばここ深山町には多くの住宅が存在している。
超常の英霊であるサーヴァント、セイバーと目の前の男が戦えば巻き込まれるのは無辜の民、何も知らない一般人だ。
それだけではない、どういう訳か目の前の男からは敵意や悪意と言った此方を害する意思が全く見受けられない。出会い頭にセイバーを后と口にしていたが、まさか本当にそんな事を言うために此処へ来たと言うのか。
「――仕方あるまい。此度は出直すとしようか。騎士王を娶るには相応の準備が必要というもの、そこの偽善の雑種に免じて今日の所は引き下がるとしよう」
「ま、待てアーチャー！　貴様、一体何の為に……」
「此度はお前の顔を見に来ただけだ。１０年前と同じ清廉な顔付きで安心したぞ、それでこそ我色に染め上げ甲斐があるというものだ」
そう言って踵を返し、英雄王は衛宮邸から去ろうとする。用件が済んだから帰る。そう言いたげな彼の背中を士郎は呼び止める。
「ま、待て！　お前にはまだ聞きたい事がある！」
「――先に続いて我を呼び止める愚行を侵すか。何用だ雑種、我の歩みを止めたのだ。相応の理由でなければ次の瞬間貴様の頚は失くなると知れ」
目線だけ此方に向けてくる英雄王の殺気に士郎は身を竦ませた。この男は本気だ。本気で自分を殺そうとしている。ただ呼び止めただけで不敬と断じ、更には殺意を向けてくる英雄王に士郎は身震いせずにはいられなかった。
それでも、彼は問わねばならない。何故ならそれは士郎にとってどうしても拭えない違和感を払拭するのに必要な疑問だからだ。
「お前の言う臣下って、一体誰なんだ!?　俺の、俺達の知っている奴なのか！」
「し、シロウ？」
嫌な予感がする。そんな事はないと必死に否定しながら心の何処

かでそうではないかと疑問視する自分がいる。そんな衛宮士郎の質問はまるですがり付く迷い人にも聞こえてしまい。
故に、英雄王の口許が愉悦に歪むのは必然だった。
「――白河修司」
「っ!!??」
「我が拾い、我が鍛え、我が育てた現代の英雄。喜べ雑種、貴様は今真なる英雄の誕生に立ち合っているのだぞ」
驚愕し、両膝を地に突いて愕然とする士郎。隣で佇むセイバーも信じられないと言った様子で目を見開いている。
あの男が、白河修司が英雄王の臣下。疑問と驚愕に打ちのめされている二人を見て英雄王は満足そうに笑みを浮かべ。
「さて、これであの雑種は修司を敵と見るか、それとも友と見るか、見物だな」
嘗て起こった冬木での聖杯戦争、１０年前から続くセイバーとの因縁。英雄王という存在を多少なりとも知るセイバーは果たしてこの事実をどう受け止めるのか。そしてセイバーから告げられる英雄王との因縁を耳にして衛宮士郎は何を思うだろうか。
少なくとも、疑心は残るだろう。心に残った痼は何れは大きくなり、疑心は疑惑となって肥大化していく。
もし、士郎が修司を敵として認識したら、果たしてどうなるのか。不確定な未来を予想して英雄王は満足そうに夜の冬木へ姿を消すのだった。

◇

「シャアッ！」
「オラァッ！」
　迫り来る朱色の死槍を振り抜かれた拳で受け止める。ぶつかり合う力と力は拮抗し、暴風となって周囲の空気を蹂躙していく。
　アインツベルンの城、その周辺にて激闘を繰り広げるのは朱色の槍を携えた槍兵、ランサー。対するのは山吹色の胴着を身に纏う自称ごく普通の人間、冬木の一般人代表白河修司。
　ぶつかり合う槍と拳、既に幾合か戦端を交えた両者はそれぞれ致命傷を受けぬまま、戦いを続けていた。
　地を掛け、宙を舞い、一度の交差で武を交える。勝つ事を目的としたランサーと生き残ることを目的とした修司、この戦いに於いて戦いの状況は生き延びる事を優先とした自分にあると修司は思い込んでいた。
　今の修司は目の前のランサーを倒す事を目的としていない。あくまでも自分は殿、ジャンヌ達が逃げ延びるまでの時間稼ぎに過ぎない。ランサーだけが相手ならこの役割は然程難しくはなかった。
　そう、ランサーだけなら。
「クソ、何なんだよさっきから！　あの黒いタコさんウインナーは！」
　修司がタコさんウインナーと呼ぶモノ、影は何かを語るのではなく、何かを察する事はなく、ただ修司を狙ってその触手を伸ばしてくる。不規則に、無制限に迫る無数の触手はランサーの攻撃と相まって修司をより窮地へと追い詰めていく。
「狡いぞお前ら！　一般人相手に二対一とか！」
「殺し合いに作法があると思ったか、戯けが」
「グゥの音も出ない正論、どうも！」
　触手に行き場を阻まれ、足の止まった修司へランサーの槍が迫る。眼前まで迫る槍を、精一杯上半身を反らした事で紙一重に避け、お返しの蹴りをランサーへ放つ。
　死角を狙った一撃、しかし相手は歴戦の英霊。修司の蹴りは当然の

如く防がれ逆に足場として利用され、ランサーとの距離は開けてしまう。
追撃を繰り出そうとするが、影はそれを許さない。足下へ迫る触手を跳躍して回避する修司だが……。
「バカが、隙を晒したな」
「っ！」
ランサーの手にする槍がより紅く輝いている。嫌な予感がすると、修司の直感が囁いた時。
「抉り穿つ鏖殺の槍（ゲイ・ボルク）」
渾身を込めたと思われるランサーの投擲――瞬間、槍は無数の投擲槍となって修司へ向かって放たれる。頭上を覆う凄まじい数の槍、その数に圧倒されながらも修司は当たるまいと範囲から逃げ延びようとする。
しかし、逃げる修司を追うように全ての槍はその軌道を変えて追随する。「ハァッ!?」凄まじい理不尽を目にした修司はふざけるなと声を大にして叫びたいが、生憎今はそんな暇は無い。
迫る槍は全て修司に向けて追随してくる。何処まで逃げても無駄だと、そう言ってくるかのようなしつこさ。修司は仕方ないと割り切りイリヤが所有する城へと逃げ込むが、そんな事はお構いなしに槍は群れを成して修司へと迫っていく。
「クソがっ！　インチキも大概にしろー！」
壁を突き破り、天井を抉り、廊下の足下からも襲ってくる槍の軍勢、遂にこの逃走劇に嫌気が差した修司は迫り来る槍の波を前に振り返り。
「――スー……ハー……」
その拳に力を込める。
（イメージしろ。俺が殴るのは槍じゃない）
イメージするのは槍という個体ではなく、己の内にある気の巡りを拳に乗せて放つ事。
槍の群れが修司へ押し寄せる。その尖端が前髪へ触れた時。
「ハッ！」

力を籠めた震脚がアインツベルンの城を粉砕していく。廊下は捲り、柱は砕かれ、落ちていく足場が崩れるその刹那――――。

「セイ、ハァッ!!」

放たれた拳圧、全身のバネをフルに活用とした修司のたった今生み出された必殺。无二打(二のうち要らず)が至近距離の奥義だとするならば、今の遠当ては遠距離による必殺技である。

その一撃は群れを成して迫る槍の全てを撃ち抜き、見事全て粉砕する。しかしどうやらその槍は当たれば爆発する性質でもあったのか、その悉くが爆散していく。幾つもの槍が誘爆した為、その規模は凄まじい。無数の槍の爆発によってアインツベルンの城は吹き飛び、巻き込まれた修司もまた吹き飛んでいく。

爆風によりアインツベルンの城から吹き飛んだ修司、しかし窮地はまだ抜け出していなかった。遠くから見える朱色の光、それが何なのか理解した瞬間。

「誰が一度だけと言った。間抜け」

「……嘘、だろ?」

再び迫る無数の槍、逃げ場を完全に失った修司に出来るのは亀の様に身を固めるのみ。

視界を埋め尽くす朱色の光、それらを全て受け止めてしまった修司は次の瞬間――――目映い閃光に包まれた。

その36

――――闇に包まれた冬木の空を赤い光が照らしていく。押し寄せる爆風と轟音にアインツベルン城周辺の大地は深々と抉れ、クレーターが出来上がっている。

郊外という離れた場所からでも冬木の人々が異常を感知するほどの大規模爆発、大気が震える程の爆発は容易に命を消し飛ばす威力を秘めているのは誰の目にも明らかだった。肉片一つすら残らないであろう宝具による一撃。

「奴め、どんな手品を使った！」

しかし、その現実を他ならぬランサー自身が否定する。手応えはあった、避けられた様子もなくランサーの放った槍はその全てが修司に向かって突き立てられた筈。絶命は免れない、どう足掻いても死という結末は変わらない。

なのに、その件の男――――白河修司は何故五体満足で存命しているのか。爆炎から落ちていく修司、身に纏っていた胴着の衣服は上半身より上から消し飛び、その身体から夥しい量の血を流している。

紛れもない致命傷……だが、その程度だ。直撃を受ければサーヴァントですら絶死は逃れられないランサーの宝具はしかして修司を追い詰めはしても命を奪う迄には至らなかった。

なにが起きている。地へ落ち行く修司を驚愕して見開かれた双眸で眺めていたランサーはふと、ある異変に気付く。

「何だあれは……膜、だと？」

光の屈折現象で目の当たりにする修司を覆う薄い膜、それが己の宝具を全て受けて尚存命しているカラクリの正体だと直感で理解したランサーは、次を放つ為の準備をする。

放てば必中、穿つは心臓、その一振りに必殺の呪いを込めて今一度ランサーは宝具を放つ。

「抉り穿つ鏖殺の槍（ゲイ・ボルク）」

振り抜かれた一刺、分かたれ、増え、追尾してくる死の弾頭。三度迫る槍の軍勢を前に修司は混濁する意識の中でその光景を見る。
（あぁ、これは死ぬなぁ）
何故自分が生きているのか分からない。悪運が強いのか、それとも何か別の要素のお陰かは定かではない。
だが、それももう無理だ。先の攻撃を受けた所為で体はもうボロボロ、どういう原理か知らないが、あの槍を受けた瞬間外側よりも内側の方に痛みを覚えた。
きっと、あの攻撃は先のアサシンこと佐々木小次郎と同じサーヴァントにとって切り札のような取って置きの一つなのだろう。それがあの全自動追尾機能搭載の多数ミサイルだとすれば、今の自分では剰りに分が悪い。今の自分にその様な兵器を捌く技術などないのだ。
――――では、諦めるか？　全てを諦めて、速やかに死を受け入れるか？
（――――誰、だ？）
――――確かに、それは心揺さぶられる提案だ。諦めて全てを投げ捨てれば、少なくともこれ以上苦しまずに済む。
――――楽になれる。
それは黒いナニかからの悪意に塗れた囁き、死に溢れ、絶望と嘆きに満ちた悍しく悲しい囁き。
何だと思い己の腕を見れば、いつの間にかあの影の触手が修司の左腕に巻き付いていた。
嗚呼、これでいよいよ後が無くなった。迫り来る死を前に修司が静かに瞼を閉じようとして――――。
「……けるな」
黒が蠢く。
「――――ふざけるな」
影がざわめく。
「ふざけるな」
悪意が、震える。
「ふざけるなぁ!!」

怒りが、悪意を消し飛ばす。
「楽になれる？　全てを投げ捨てる？　テメェ、よりにもよって俺に諦めろと抜かしたか!?」
左腕に巻き付いた影の触手、そこに伝って真下にいる影に向かって修司は吼える。影に意思があるのかは定かではない、ただ、押し寄せてくる悪意のビジョンを流し込んでくる影の性質はどうしようもなく修司の神経を逆撫でた。
嘗て修司は黄金の王に救われた。救い、施され、導かれ、修司は今日まで己を鍛え続けてきた。邁進し、驕ること無く己を高めること。それは修司にとって王へ返せる数少ない恩返しだ。
諦めるという事、それ即ち王への裏切りと同義。よりにもよって影は修司にとっての矜持を踏み抜いたのだ。
全身に力を込める。それに比例して触手に巻き付かれた左腕からブチブチと皮膚の剥がれる音が耳朶に響くが――――関係ない。怒りという感情に染め上げられた修司がその程度で止められる筈がなかった。
迫る朱色の槍の群れ、血が滴る左腕を掲げて前方に佇むランサーを見やる。修司には最早周囲の状況を見極める冷静な思考はない、あるのは目の前に押し寄せる理不尽の波を打ち潰すという意思のみ。
故に気付かない。力を溜め、全力の一撃を放とうとする己が今、空中を足場にしている事に。
「ダラァァァァッ!!」
放たれた拳圧、アインツベルン城で放ったときよりも遥かに重く鋭い一撃。振り抜かれた衝撃で触手を振りほどき、朱色の壁に風穴を開けていく。
その孔を抜けるように修司は空を駆け、飛翔する。物理法則を完全に越えた挙動、この刹那の合間に見せ付けられた事象を前にランサーは一瞬だけ呆けた表情を晒す。
「――ハッ、良いぜ。そう来なくちゃ面白くねぇ。テメエを殺すのに、最早僅かな加減も要らねぇな！」
迫る修司にランサーも吼える。全身に力を込めてもう一つの切り

札を切ろうとした瞬間。
それよりも速く、修司はランサーへ肉薄する。
「オラァッ！」
振り抜かれた右腕、放たれた右の拳は咄嗟に防御として差し出したランサーの左腕ごと腹部にめり込ませる。
その力にランサーは今度こそ目を剥いた。ふざけた膂力、防いだ左腕からはバキバキと骨が砕ける音が響き、腹部にめり込まんと更に奥へ迫ってくる。目の前にいるのは唯の身の程知らずの小僧ではない、殺らなきゃ殺られる正真正銘の敵であるとランサーは認識した。
「バカが。自慢の拳、戴くぞ！」
勝利する事に特化され、その全身を呪われたランサーは謂わば全身その物が命を奪う殺戮兵器。殺すことに特化した彼の能力は一つ呪いを念じるだけでその身を対象を殺す呪いへと変貌させる事が出来る。
ランサーの腹部から黒い槍が生える。己の腕ごと修司の拳を貫いた槍は更に無数の棘へと変じ、修司の右腕を内側から噛み砕いていく。
だが、それでも修司が止まることはない。貫かれた右腕はそれ以上動くことはないが、それは同時にランサーの動きも封じた事を意味している。嫌な予感がする、次の瞬間ランサーが目にしたのは――。
「たわけが、こんなもんで俺の気が済むわけ――ねぇだろうが!!」
振り抜かれた左腕、修司の左の拳がランサーの胴体に深々と突き刺さり衝撃がランサーの内臓を蹂躙していく、貫かれた衝撃はランサーだけに留まらず、その後ろにある木々を吹き飛ばしていく。
勢いに負けたランサーは口許から血を垂れ流しながら後退る。それが二人の勝敗を分ける決定的瞬間となった。
未だランサーの手には朱色の槍が握られている。この距離でなら当てるのは容易い、だが、その自由を許すほど修司は甘くはなかった。砕けた拳を握り締め、震脚を以て力を瞬時に溜める。振り抜いた脚は地面を砕き、僅かに生まれたランサーとの距離を零にする。
「七孔噴血――兎に角死ねぇ!!」

振り抜かれた拳は確かにランサーを捉え、その瞬間――――ランサーは遥か空の彼方へと吹き飛んでいった。

◇

「ぶはー、ぶはー、ぶはー、……はぁっ、くっ」

吹き飛び、彼方へと消えていくランサーを確認して、一つの脅威が過ぎ去った事を安堵した修司だが、途端に押し寄せてくる痛みに眉を寄せて苦悶の表情を晒す。

血は止まらず、ボタボタと地面に血溜まりを形成していく。もう右手は指一本も動けない、満身創痍になりながらもそれでも修司は自身の不甲斐なさに歯を食い縛る。

「クソッ、仕留め損ねた」

修司の拳は確かにランサーを捉えた。必殺の一撃を叩き込み、拳から伝わってくる感触は確かな手応えを感じた。

しかし、相手は歴戦の戦士であり過去の逸話に名を残した英霊。修司の必殺が叩き込まれた瞬間、後ろに飛んで威力を殺したのだ。派手に吹き飛んではいるが、実際のダメージは余り期待出来ないだろう。

己の未熟さに辟易とするが、今の修司にはランサーに追撃する体力はない。気力も底を尽き、連戦に挑むには怪我を負いすぎた。

右手はもう言うことが効かない。骨が砕けた所為で指一本動かせないし、仮に動かそうとすれば即座に激痛が襲ってくる。そう言う意味では左腕の方がまだ軽傷だが、何れにせよ重症で有ることには変わらない。

本当は今にも泣き出してしまいそうだが、ジャンヌ達と合流する為にも此処で足を止める訳には行かない。幸いにも脚に怪我らしい怪我はなく、出血も少し収まってきた。相変わらず痛みは残ったままだ

が、その辺りはジャンヌ達に追い付いてから考えよう。
其処まで思考を巡らせて――ふと、違和感を感じた。
「……そう言えば、あの影は何処に？」
あの胸くそ悪くなるビジョンを一方的に送り込んできた影、凝縮された悪意の塊の様なモノを受けた修司は本能的にあの影の危険性を察知した。あれはこの世に生み出してはならない類いのモノ、あの影が今も自分の事を狙っているとするなら、今一度身構えなければならないが……意外にも、その様子はなかった。
（あの影はさっきの奴と行動を共にしている様にも見えた。アイツが吹っ飛んだから撤退した？　でも、あれの異常性はアイツよりも常軌を逸している様にも感じるし……）
あの影があのまま引き下がるとは考えられない。だとしたら何処に……？
「――まさか、ジャンヌさん達の所に!?」
最悪の状況を想定したが故に辿り着いた答え、そんな事はないと否定したくても嫌な予感は拭えない。その予感を払拭するべく、修司は彼女達に追い付くべく森の中へと引き返していく。

◇

「――修司君」
同時刻。アインツベルンから離れたジャンヌ達は突然聞こえてくる大爆発に足を止める。方角とタイミングからしてあの爆風がランサーと修司の戦いによるモノだとは間違いない、果たして修司は無事なのか。不安に思うジャンヌだが今は立ち止まってもいられない、首を横に降って不安を払拭したジャンヌはイリヤにバーサーカーの状

態を訊ねる。
「イリヤスフィール、バーサーカーは今どうなっていますか？」
「――――受けたダメージは魔力で回復させたから平気、戦いにも出られるけど……正直、今の状況では余り出したくは無いわね」
「それは……あの影の所為ですか？」
　恐る恐る訊ねるジャンヌにイリヤは悔しそうに頷く。あの影はサーヴァントにとって凶悪な代物だ。霊体で在るが故に影にはその攻撃の全てが通らず、また防ぐことも叶わない。その特殊な生まれからあの影が何なのか理解したイリヤは今の状況が如何に危険かポツリポツリと語り出す。
「あの影にとってサーヴァントは餌でしかないわ。人も英霊もあの影の前では意味を成さない、今現在の聖杯戦争はあの影によって狂いつつあるわ」
　聖杯戦争の御三家とも言われるアインツベルンから告げられる脅威、イレギュラーでもあるあの影の存在はこれ迄の聖杯戦争の中で一度足りとも現れた事がない。淡々と語りながらもその額から大粒の汗を流すイリヤの表情が事態をより重くジャンヌ達に浸透させていく。
「――それにしても、あの男は大丈夫なのでしょうか？　かなり腕の立つ御仁ではあるようですが相手はあの英霊、高々魔術師一人で時間稼ぎなど期待出来るのでしょうか？」
　辛辣な言葉で疑問を口にするのはイリヤのメイドの片割れの女性だった。自分達を逃がすためにあの場に残った修司に対しての物言いにジャンヌも少しばかり思うところはあるが、今それを追及しても状況は変わらない。
　と言うか、魔術師ですら無いんだけどね。そう思っても今口にするのはタイミング的にどうかとジャンヌが迷った時、離れた茂みから物音が聞こえてくる。
　即座に臨戦態勢となるジャンヌ達、ジャンヌは旗を構え、メイドの一人はハルバートを握り締め、もう一人のメイドも魔術発動の準備に取り掛かり、イリヤはバーサーカーを呼び出す。緊張が高まる中、茂

みの向こうから現れたのは――。
「じ、ジャンヌさん。俺だ、修司だ」
「修司君!?」
血だらけとなり、満身創痍になりながら現れる修司にジャンヌは安心ながらも、痛ましい姿となった彼に言葉を失う。胴着の上半身は吹き飛び、露になった肉体には幾つもの傷が刻まれていて両腕も負傷、特に右腕が酷い状態であると察したジャンヌはフラフラと歩み寄る修司へ駆け寄っていく。
「あの影はまだ来ていなかったんだな。……間に合って、良かった」
「何が良かったですか！　こんな、傷だらけになって！　腕もこんな滅茶苦茶にして！　これじゃあ、元に戻るかなんて分からないじゃないですか！」
「へ、へへ。やっぱそうか。不味いなぁ、このままじゃ王様のご飯も作れなくなっちまう。王様に……叱られるなぁ」
「～～～ッ！　貴方って人は!!」
外見から見れば修司の出血は止まっている。だが、流した血が多すぎた。出血の多さに意識は混濁し、無理に身体を動かしてきた為に肉体が悲鳴を上げている。こんな状態になる事を見越していなかった自分に腹を立てながら、ジャンヌは修司を抱き止める。
「セラ、お兄ちゃんを出来る限り治療してあげて」
「お嬢様？　しかし、宜しいのですか？」
「この人は私達を助けてくれたわ。借りのある人間に見す見す死なれてはアインツベルンの名折れよ」
「セラ、私からもお願い。この人はイリヤ達を助けた。乱暴だったけどバーサーカーも助けた」
「リーゼリットまで……はぁ、分かりました。可能な限り手を尽くします。でも期待しないで下さいね。見ればこの男は相当なダメージと呪いを受けています。私に出来るのはそれを少し緩和させる程度に過ぎませんから」
「セラさん、ありがとうございま――っ!?」
瞬間、その影は現れた。何の脈絡も無く、サーヴァントの感知能力

を通り抜け、何の知覚も出来ないままその影はセラとジャンヌの前に現れた。
「っ！　ジャンヌさん！」
「くっ、皆走って！」
　必死の叫びをあげるジャンヌだが、それよりも速く影は動き出す。周囲の魔力を吸って膨張する影、その様相は正に爆弾、それも洒落にならない規模と威力を秘めたレベル。このままでは全員死ぬ、意を決したジャンヌは修司をリーゼリットへ放り投げる。
「じ、ジャンヌさん、何を!?」
「リーゼリットさん、彼をお願いします！　バーサーカー！　皆を守って！」
　修司の言葉を遮ってジャンヌはバーサーカーに指示を飛ばす。するとバーサーカーも逃げ切れないと悟ったのか、イリヤを始めとした四人を守ろうとその巨体を使って盾になろうとする。
　バーサーカーの強固な肉体なら可能性はある。更に生存の可能性を引き上げる為にジャンヌは己の切り札を使う事にした。
「我が旗よ、我が同胞を守りたまえ！」
「我が神はここにありて（リュミノ・ジテ・エテルネッル）！」
　ジャンヌの旗が輝きを放つと、周囲に光が満ち溢れる。それはフランスを救わんと立ち上がったジャンヌ＝ダルクの在り方を宝具としたモノ、守護に特化したそれは膨張し弾ける影の爆発を完全に防いで余りある鉄壁の防御壁になる……筈だった。
「そ、そんな!?」
　しかし、その思惑は呆気なく崩れ去る。爆発を防ごうと鑪を踏んで踏ん張るジャンヌだが、彼女の目の前に広がるのは更に上回る絶望の具現だった。
　光が黒に塗りつぶされていく。何人足りとも崩せない守護の光は影の触手が触れた所から侵食し、崩していく。宝具すら喰らい尽くそうとするその光景に絶句するジャンヌだが、それでもこの守りは崩してならないと力を込める。
　だが、その頑張りすらも嘲笑うかの様に侵食の領域は増していく。

まだ爆発の波は終わっていない、このままでは皆を巻き込んでしまい確実に修司達は死ぬ。その未来だけは何としても避けねばならない――。

「く、あ、あぁぁぁぁぁっ！」

しかし、そんなジャンヌの気持ちとは裏腹に守護の防御壁は呆気なく崩れ去る。瞬間、爆発の炎は辺りを瞬く間に浸透し、ジャンヌ達を呑み込んでいった。

（――ふざ、けるな）

白に染め上げられる視界の中で、修司は思う。こんな終わりは認められない。こんな結末は納得行かない。

脳裏に浮かぶのは１０年前の光景、全てを焼き、全てを壊した憎っくき大火災の日。あの日、自分は決めた筈だ。もう二度と理不尽や不条理に屈してはならないと、二度とあの様な悲劇は起こさせないと。

それがこの様か。どれだけ身体を鍛えても、どんなに自分を強くしようとも、結局理不尽には勝てないのか。

（違う。それは違う！　俺は、俺はまだ諦めちゃいねぇ！　まだ何も終わってねぇ！）

手を伸ばす。迫る光の奔流に抗うべく、押し寄せる理不尽に打ち克つために、修司はその先にある未来を手にしたいが為に――。

熱が、濁流となって押し寄せる。コンマ数秒後に訪れる死を前にそれでも修司は負けないと吼えて……。

『ならば、その力をお前に預けよう』

――遠くで、誰かの声が聞こえた気がした。

◇

「――うっ、く、一体何が……」

混濁する意識、頭が揺れる不快感を感じながらもジャンヌは自身が生きていた事に驚愕する。あの爆発の規模からして周囲は壊滅した筈、どう足掻いても死は免れないと言うのに、驚くほど何ともなかった。

精々宝具使用による魔力消費がある程度、辺りを見ればセラもリーゼリットの無事な姿もあり、イリヤとバーサーカーも無傷で立っている。

良かった。と安堵するが修司がいない事に気付く、まさか彼だけ爆発に巻き込まれたのか、一気に不安が募るなかふとジャンヌは違和感を覚える。

（地面が……堅い？）

手足に伝わってくる感触は凡そ自然のモノではない。どちらかと言えば金属の上にいるような感覚、更に言えば……妙に風通しが良いように感じさえする。

それに、バーサーカーもイリヤも、セラもリーゼリットも何故か皆同じ方向を向いて……否、見上げている。

そこに一体何があるというのか、振り返るジャンヌが目にしたもの、それは……。

「そう、やっぱり貴方はお兄ちゃんの守り神だったのね。今度は私達も序でに助けられたって訳か」

「お、おおおお嬢様？　こ、これは一体!?」

「おー、でっかいゴーレム」

嘗て、冬木の地にて現れた巨神が目の前にいて。

更に言えば、ジャンヌ達は今その巨神の掌の上にいた。

その37

――其所は、何処までも広かった。前後左右もなく、足場もなく、ただ浮かんでいるだけの不可思議な空間。

距離感などとうに狂い果て、遠くで瞬く星々がまるで砂粒のように小さいのに其処に確かに在るものだと光輝いている。

宇宙の果て、そう呼んでも差し支えのない幻想的な風景。身体に重みは無く、フワフワと海の中を漂っているような感覚。一体自分は何をしているのか、何故こんな所で彷徨っているのか、そもそも……自分は一体何者なのか。

『――――どうやら傷の深さもあってか記憶の方が少し混濁しているようだな。このまま放置しても構わないが、それだと些か時間が掛かるか』

声がする。この広大な宇宙の中で自分以外の存在がいた事に驚くが……残念な事に言葉が出ない。一体何処の誰だろうと声のした方へ視線を向けると――――。

【魔神】がいた。無知な己ではその全貌が明らかにならない程に巨大で強大な魔神が目の前にいた。

その魔神がそこに在るだけで全てが軋む。星も、星雲も、遠巻きに見える銀河も、そして……自分がいるこの宇宙そのものが助けてくれと悲鳴を上げている。目の前の魔神は敵意すら見せていないのに、相対しただけで魂が砕け散りそうになる。

『ふむ、この程度ならば耐えられる、か。我ながらタフな事だ。この分だとアレを使いこなすのに然程時間は掛からないか』

声は魔神から聞こえてきた。聞き慣れた様で記憶にない、まるで他人とは思えない声の主。何者なんだと訊ねたくても言葉が出ない今の自分では問答一つすら儘ならなかった。尤も、それを赦せる程目の前の魔神が寛容であるかは定かではないが……。

『さて、突然の事で混乱しているようだが時間がない。悪いが手短に

済ませるぞ』
　自分が何者かを明かさぬまま、魔神は言葉を続けた。
『お前には選択が用意されている。このまま何もせず自身の力のみで立ち向かい、多くを失うか』
『それとも、■■■■■と共に全てを勝ち得るか。敗者か、勝者か、好きに選べ』
　それは選択の様で選択ではなかった。誰にだって失いたくないものは一つや二つ位持っている。目の前の魔神の問答はそもそも問答として成り立っていなかった。
　――しかし。
『だが忘れるな。お前が■■■■■と共に力を得ると言うのなら、それは即ち』
　〝お前は俺に近くなると言うことだ〟
　その光景を見て、何となくだが理解する。目の前にいるのは嘗てそうしてきた白河修司の成れの果てなのだと。
　星を砕き、星雲を裂き、銀河すら消滅させる化生。それが■■■■■と共に自己を高め続けてきた己の末路なのだと、修司は理解する。
　自分には大切なモノが、人達が数多くいる。その人達の為ならば幾らでもこの身を砕こう、誰かの為ではなく、自分の願う行いの為に白河修司は如何なる手段を用いるだろう。そこに後悔はない、あったとしてもそれを他人の所為には絶対にしないと誓える。
　でも、その果てに待っているのが〝アレ〟だと思うと……心が裂けそうになる。
『■■■■■、次にお前がこの名を口にした時、お前の未来は大きく揺らぐことになる。それを忘れるな』
　世界が割れて宇宙が消える。眼前に在るのは日輪の背負いし蒼い魔神、その背後に見えるのは禍々しき原初の魔神と進化の皇帝。
『忘れるな。■■■■■はお前と共にある事を』
　それはとても悲しく、残酷な――未来からの贈り物だった。

◇

「――君、シュ――――君！」
「う、……あ？」
「修司君！」
聞き慣れた声が自分の名前を何度も呼んでいる。閉ざされた意識が浮上し、次に修司が目にしたのは心配そうに自分を見下ろしているジャンヌの顔だった。
「あ……れ？　ジャンヌさん、どうしたんです？」
何故彼女はこんな必死に自分を呼んでいるのだろうか、見ればその目尻には涙が浮かんでいる。気丈な彼女がここまで取り乱すのも珍しい、余程の事が合ったのかと混濁する意識を徐々に覚醒させながら修司は今までに起きた出来事を思い出す。
（確か、バーサーカーのマスターって奴に会いに行って、そこで黒い奴と戦って、ジャンヌさんと合流して――）
脳裏に浮かぶのはあの黒い影、影なのだから黒くて当然だと思われるが、あの影には色としての意味合い以上にどす黒く、胸糞が悪かった。
あの影を一言で言い表すのなら――――悪意。人が生み出す悪意の塊、影の触手が腕に巻き付かれた時に流れてきたモノ、あれは凝り固まった悪意の断片だ。魔術に毛程の知識のない修司でもアレは危険だと断言できる程、あの影は危険な代物だった。
「ジャンヌさん、あの影は、あの黒い塊はどうなったんですか!?」
「お、落ち着いて下さい修司君。幾ら傷が塞がっていても失った体力までは戻ってない筈なんですよ！」
「いや、でも！　……え？」
何故か、サラリと凄いことを言われた気がする。そう言えば先程から体が重い代わりに痛みが無くなった気がする。黒い奴との戦いを思い出した修司は自身がどれだけ重症なのか理解できていた。左腕

の皮膚はズタズタになり、右腕の方は元に戻るのかさえ分からない程だった。
なのに、その痛みは目を覚まして以降僅か足りとも感じない。とうとう傷が深すぎて痛覚すら麻痺したか、そう思い己の手元へ視線を向ければジャンヌが言うように傷は塞がり、痕すら残らない完治した自身の両腕があった。
「――マジ、か」
昔から自分の回復能力には定評があった。王様への無茶振りのために世界各国を巡り、その道中何度も危険な目に逢ってきた。手足の骨が折れたことは一度や二度で済まないし、酷いときは崖から落ちて暫く身動きが出来なくなるほど激痛に苛まされた事もあった。
でも、その度にこの身体は驚異的な速度で回復した。常人ならば3ヶ月は掛かるだろう大怪我も一月も経たずに完治させた。この回復力は修司にとって数少ない特技なのだと、今までは思っていた。
たが、自身の両手を見てそれは間違いだと思い知る。右手を腕ごと穿たれ、内側から破壊し尽くされたのにその日の内に完治するのは流石におかしい。
これも魔術によるモノなのか、綺麗さっぱり治った自身の腕を見て修司はジャンヌへと視線を向ける。修司の視線の意図に気付いたジャンヌは首をブンブンと横に振って否定する素振りを見せる。
自分の腕を治したのは彼女ではなかった。では隣で此方の様子を見ていた二人なのかと視線を向ければやはり首を横に振られてしまう。ならば一体誰の仕業なのか――。
「お兄ちゃん、本当に覚えていないの？」
「――え？」
やんわりと訊ねてくるイリヤの問いに、修司の鼓動は瞬く間に跳ね上がる。何か、忘れている気がする。何かに、守られた気がする。自分の背後から感じる存在感、これまで感じたことの無い威圧感。
そこに不快さや圧迫感はない、伝わってくるのはこれ迄何も無いと思われたモノが確実に在るという存在感だけ。
逸る心音、まさかと思い後ろに振り向けば――其処には何もな

く、暗闇の森林が生い茂っていた。
「お兄ちゃんはね、護られてたんだよ。大きくて強ーい魔神さんに」
「――魔神」
大きく、強い鋼の巨神。思い出すのは夢の中で相対した蒼色の魔神。
その名を修司は知っている。夢の中で魔神の中に座する何者かが自分にその事を教えてくれた。その言葉は今も己の胸の中に刻まれている。
今、その名を口にすれば再びその魔神は顕れるだろう。これ迄の様な魔神からの出現ではなく、修司からの呼び出しに応じるという形に――。
その魔神の力を使えばこのふざけた戦いに終止符が打たれるのだろうか、これ以上犠牲者を出さずに、聖杯戦争を終わらせる事が出来るのだろうか？
でも、もしこれから一度でもその名前を口に出してしまえば……。
『お前は俺に近くなる』
あの忠告の言葉がどうしても耳に残って離れない、■■■■■を呼べば全てが解決するかも知れないのに、修司はその一歩を踏み出せずにいる。そう、修司は恐怖していたのだ。
あの夢に相対した声だけの存在、ただそこに在るだけで星よりも大きな宇宙（ソラ）すら破壊してしまう埒外の怪物。修司と声の主の間に力の強弱はない、在るのはただ《違い》だけ。
その《違い》と《同じ》になることを修司は本能的に恐れた。■■■■■を呼べば自分はあの存在と同質、或いはそれに限りなく近くなるナニかへと変わってしまう。果たしてそれは自分だと、あの黄金の王の臣下である白河修司と言えるのだろうか。
「……兎も角、一度街へ戻りましょう。此処に留まっては危険ですし、何より修司君を休ませてあげないと」
「――ま、今はそれでいっか。セラもリズも今はそう言う事にしておこう？」

「……お嬢様が、そう仰るなら」
「でも、私達お家に戻らないよ？　どーする、イリヤ？」
リズの言う通り、アインツベルンの城は修司と黒いランサーの戦いによって崩壊した。派手に爆発した事もあってイリヤ達の拠点であり住まいは完全に崩落してしまっている。拠点を失った以上、イリヤ達は新しい拠点を探す必要があるのだが……。
「じゃあ、バーサーカーが回復するまで宜しくね。お兄ちゃん♪」
「――――は？」
残念ながら修司に選択の余地は無かった。

◇

そして翌朝。朝食の支度を終え、制服の袖に腕を通した修司は二日ぶりの学校へ向かおうと玄関の扉を開ける。
「今日は午前中授業みたいだから、なるべく早く帰るよ」
「分かりました。では私もお昼までには買い物を済ませておきますね。足りなくなった調味料も確保しておきます」
「ありがとう、助かるよ。それと慎二の事なんだけど……出来るだけ気にかけてやってくれ」
「はい、其方もお任せを。それでは修司様、レティシア様、お気をつけて」
「行ってきます」
「行ってきます」
シドウリに見送られ、玄関を後にする二人。階段を降り、一階下へ足を進めると、現在入居者のいない筈の部屋から扉が開かれ、中から見慣れた白髪の少女とその従者が現れる。

「あっ、ルーラー、お兄ちゃん、おはよー、いい天気ね」
「おはようございます。イリヤスフィール、貴女もお出掛けですか？」
「うん、バーサーカーが回復するまでまだ時間が掛かるし、この街をもっと色々見ておきたいからね」
「相変わらずフリーダムな娘だなぁ、そんなんじゃお供のメイドさん達も大変だろうに……」
「別に貴方に言われる筋合いはありませんが……その心遣いは素直に受け取りましょう」
　イリヤと共に現れるセラ、主一人を出歩かせてはなるまいと彼女もイリヤの散策に付き合う事となったが、昨晩の事もあり少し疲れているようにも見える。
　それも重なってか人間嫌いなセラの棘のある言葉も今は鳴りを潜めている。
「しっかし、本来なら敵対する間柄だってのにどうして俺は匿っているんだか」
「えー？　まだそんな事言うの？　私達の城を盛大に壊したのはお兄ちゃんなのにー？」
　口元に指を当ててわざとらしく振る舞うイリヤに修司はグヌヌと口を噤む。
　あの夜、拠点を失い行き場を失くしたイリヤ達は次の拠点を確保するために修司の住むマンションに転がり込むことを選んだ。当然修司は一度断ろうとしたが、イリヤ達の住む城を戦闘の余波で破壊し、住めなくしてしまったのは間違いなく修司自身に責があるし、この冬空の下で少女達を野晒しにしておくにも抵抗がある。
　故に仕方なく修司は彼女達を迎え入れることにした。幸いこの日の王は留守だった為にイリヤ達はすんなりマンションに入れたし、シドウリへの説得も一回の土下座で済んだ。
「……あぁ、もしこの事が王様に知られたら俺、こっぴどく怒られるんだろうなぁ。拳骨程度で済んだらいいんだけどなぁ」
　顔を青ざめてその時の事を考える修司、彼の王とは１０年以来の付き合いだが、叱られる事はあっても怒られる事は無く、見たことの無

い保護者の怒りの形相に修司は今から不安になってきた。
唯でさえ慎二とジャンヌを匿う時に彼の怒りに触れたのだ。それが今度はいきなり三人も増え、本来なら彼の許しを得なければ住ませるわけには行かないマンションに修司の独断で招いている。
万が一これを知られたら拳骨の一発で済まないだろう。果たしてその時に自分は無事でいられるのか、不安と恐怖で胃が痛みだした修司にイリヤはやれやれと溜め息を溢す。
「そんなに心配しなくても、お金の方はちゃんと払うわよ。幸いセラがうちの通帳は確保していてくれたし、世話になっている間の料金は惜しまないつもりよ」
「いや、そう言う問題じゃないんだが……はぁ、まぁいいや。その時が来れば必殺のローリング焼き土下座で王様に嘆願すればいいか」
「待ってください修司君、何ですかその愉快痛快な面白拷問は？　新手の宗教弾圧ですか？」
王への謝罪＆誤魔化しの為に即興で編み出した嘆願方法、これを行うには巨大な鉄板焼が必要不可欠だが、果たしてその技が繰り出される日は来るのか。
「それより、そろそろ学校に行った方がいいんじゃない？　お兄ちゃんって皆勤賞狙ってるんでしょ？」
「っと、いけないいけないそうだった。じゃ、俺はもう行くわ。アインツベルンの嬢ちゃんもメイドさんも気を付けてな」
そう言って修司はそのまま跳躍し、地面へと着地する。なんの疑問も抱かずに地上２０階建てのマンションから飛び降りる修司にイリヤは呆れながらその背中を視線で追う。
「――修司ってば、気付いているのかしら。今の自分がどれだけ異常なのか」
魔力もなく、魔術的付与も無く、純粋な己の身体能力のみで見せる脅威的な力、その膂力は常人を超え、単純な力なら並のサーヴァントすら凌駕している。
しかもその成長は留まるところを知らない。その成長性は異常の一言につきた。魔術師ならば是非とも肉体の構造を知ろうとするだ

ろう、魔術の世界に生まれていれば間違いなく封印指定の烙印を押される程に白河修司という男は特異に過ぎた。
そして止めに昨晩再び見えたあの魔神、影が発した魔力による大爆発を防ぎきり、更には触手による干渉も完璧に防いで見せた。
もし、修司があの魔神の力を完全に掌握してしまえば聖杯戦争はその日の内に終了するだろう。あの日、初めて魔神と対峙したイリヤにだけ理解できた。
あの魔神に打ち勝てるモノは恐らく現在の地球上に存在しない。裏、表問わず数多の強者達もあの魔神には敵わない。
聖杯戦争は今後も様々な展開を見せるだろう。しかも彼とその魔神を中心に、もはや彼等を止める者は誰もいない。仮にいたとしてもそれはきっとこの星の安全装置である抑止力の仕事だろう。
「じゃ、私も出掛けよーっと、それじゃあルーラー、またね」
「あぁ、お待ちをお嬢様！」
だけど、もう自分には関係ない。バーサーカーが回復次第戦いには赴くが、イリヤにはもう以前ほどの戦う意思は見受けられない。
「さぁて、シロウはちゃんと生きているかなー♪」
雪のような白さと儚さを併せ持つ少女は己の待つ結末に未練を残さぬよう、勤めて笑いながら愛しの弟を探すのだった。

その３８

新都と深山町、二つの街を繋ぐ冬木の大橋を一つの影が通り過ぎる。人が出入りする歩道――――ではなく、多くの車が行き来する車道、行き交う車を追い抜き一息の内に渡りきった影の正体は絶賛聖杯戦争の乱入者、白河修司である。

「――――マジか、軽く走っただけなのに自己記録５秒以上更新したぞ」

体感で分かるだけでも大幅な自己記録の更新に修司は我が事ながら驚いた。確かにここ最近のとんでもバトルを行ってきたから自分の身体能力が向上していたのは分かっていたつもりだが、まさかここまでとは……。

「これ、そのうち速度違反で捕まったり……しないよな？」

道路交通法で捕まり聖杯戦争脱落……なんて未来だけは勘弁してほしい。幾ら特異な身体能力を有しているとは言え、根はごく普通の一般人である修司に警察という法の番人には敵わない。

というか、仮に捕まっても困るのは警察も同じだ。何で生身の人間が規定速度越えてるんだよ、どんな罰則すればいいんだよ。困惑する警察官の顔が想像できてしまった修司は今後、体に重しでも付けようかと真面目に考えて見ることにした。

これからの日常生活が大変だなぁと呑気に考えながら学校に向かうと、途中見慣れた赤み色の髪の少年を発見した。どうやら体の方はもう大丈夫らしい。

「おーい、士郎。お前、風邪はもういいのか？」

「……修司」

修司に呼び止められた事により、士郎は足を止めて振り返る。その表情は何処か困惑し、張り詰めた顔付きだった。

「――――どしたんだお前？　そんな難しそうな顔して……何かあったのか？」

「あぁいや、その……修司の方は昨日大丈夫だったのか？　バー

サーカーの所へ行くって聞いたからさ」
「あぁ、その事に付いても色々話があるんだが、先ずは昼休みだな。話をするにしても俺も色々整理しておきたい事があるし」
夢で見た光景、自身に起きている事を誤魔化しつつどうやってあの影の事を話したらいいか、今一度考える必要がある。衛宮士郎は面倒見の良すぎる奴だ、変に勘繰らせて負担にさせるようなことは極力避けたい。
「そう……か……」
「？」
そう思って敢えて今は言葉を濁したが……士郎の反応は今一つだった。もっと色々訊いてくるかと思っていたのに淡白な反応の士郎、何処か上の空な彼に今度は修司が心配になった。
「おい、どうしたんだよ士郎。もしかしてまだ風邪の影響が残ってんのか？」
「え？　あぁいや、そうじゃない。身体の方は本当に大丈夫なんだ。朝飯も食ってきたし、体力も問題ない」
「そうか？　ならいいが……」
士郎にしては歯切れが悪い。何か気になる事でもあるのだろうか？　例えば……士郎のサーヴァントであるセイバーの所為で食費がヤバイとか？
（――やべぇ、なんか普通にありそうだ）
他のサーヴァントと違って、食事をする事で魔力を補充する　セイバーは非常に健啖家だ。その食欲っぷりはルーラーであるジャンヌに匹敵するほどで、修司もここ数日の食費の出費にちょっと驚いていたりする。
保護者からの報酬で貯金はまだまだ余裕があるが、一般家庭の人間である士郎には些か以上に大変かもしれない。このままでは衛宮陣営が食費関係で脱落するかもしれない、何度か衛宮家で夕飯を共にしたことのある修司は心に生まれた罪悪感を払拭するために士郎の肩に手を置いた。
「士郎、食費に困ったら言えよ。なるべく融通してやるから」

「――いきなりなんの話？」
「おーいお二人さーん」
肩において同情的な視線を向けてくる友人に訝しむ士郎、何だかセイバーに対して割りと酷い事を考えていそうな修司に士郎が軽く突っ込もうとすると、後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。
「美綴、お前も今日から復帰か？」
「まぁな、ここ最近ゆっくり寝てたお陰かすっかり良くなってさ、身体の調子も良いんだ」
言峰師父の言う通り、何事もなく無事に快復した学友の美綴の姿に修司と士郎の二人は安堵する。この分なら学校の皆も大丈夫そうだ。今日は生徒達の様子を見ると言う事で授業は午前中だけ、明日からはいつも通りの日常が戻ってくる事に安心すると同時に……修司は少し嫌な予感がした。
昨夜目にした影、あれがもし街中へと姿を現したとき、果たして皆は無事に済むのだろうか。
早く、あの影をどうにかしなければ。心の中に生まれた焦り、それを二人に悟られないように振る舞いながら、修司は二人と共に学校へ向かうのだった。

◇

「そうか、そんな事があったのか」
「あぁ、バーサーカーのマスターであるロリっ子も一時だけど休戦と影を何とかするまで協力してくれる事を約束してくれた。ジャンヌさんも今は郊外の森へ行って調査してるみたいだし、戻ってきたらまた色々と話は聞けると思う」

午前中だけの授業も終わり、学校の生徒達がそれぞれの自宅へ帰宅する頃、修司は士郎と共に人気の無い屋上で広い青空を仰ぎ見ながら昨日の出来事を語っていた。
「……ごめんな修司、大変な時に何も手伝ってやれなくて」
「気にすんなよ、俺のは自業自得だ」
自分が寝込んでいる間に大変な目に遭っていた修司に士郎は心底申し訳ないと頭を下げるが、修司はそれを笑って受け流す。巻き込まれただけならいざ知らず、今は自分から首を突っ込んでいる当事者だ。
士郎はそんな修司にそれでもと食い下がる。相変わらず生真面目な奴だと、修司は心配してくれる士郎を有り難く思う反面少し気になる事があった。
「――なぁ、そっちも何かあったのか？」
「え？」
「いやだって、今朝から何かおかしいぞお前、ずっと上の空と言うか……何か気掛かりな事でもあるのか？」
今朝顔を合わせた時から感じられる違和感、戸惑い、萎縮し、何かを躊躇っている様な雰囲気の士郎に修司もまた気になっていた。昨夜に何かあったのだろうか、様子のおかしい士郎に試しに訊ねると本人はどうしたものかと顔を俯かせて黙り込んでしまう。
その様子に訝しむ。ここまで悩ませている友人も珍しく思いながらも修司は士郎自ら話してくれるのを待とうとする。一分か十分か、はたまた一時間か。空の雲を眺めながら士郎が口を開くのを待っていると……。
「白河、衛宮、二人ともまだ帰って無かったのか」
「あ、葛木先生」
出入り口の扉が開かれ、無愛想な顔付きの教師が屋上に現れる。恐らくは残った生徒がいないか見回っていたのだろう、真面目な教師の登場に話はここまでかと思い、修司と士郎は立ち上がる。
「学校が始まったとは言え、今はまだ様子見の段階だ。先に起きた殺人事件の話もある。お前達も早く帰るといい」

「うす、すみませんでした」
そう言って頭を下げる修司を見て満足したのか、葛木と呼ばれた教師は瞬きもせずに仏頂面のまま屋上を後にする。今残っている全ての生徒に同じことを言いに行くつもりなのだろうか、融通の利かない……もとい、凄まじく真面目な教師に困惑し、取り敢えずここで話すことは無いと士郎と共に屋上を後にした。
その後、帰宅途中何度も士郎に訊ねようとするも、襲撃してきたロリっ子（イリヤ）に邪魔されたり、遠坂に横槍されたりした為に話す機会を失ってしまい、衛宮のいる自宅まで何一つ聞き出す事は出来なかった。
「んじゃ、取り敢えず一旦家に帰るよ。ジャンヌさんとも合流しないと行けないし、詳しい話はまた後でな」
「じゃあねお兄ちゃん、また後でね」
「って、何でしれっと見送ろうとしてるのよ。アンタも帰りなさいよ」
「えー？　だってお兄ちゃん夜になったらまた来るんでしょう？　だったらシロウの家で待っていても別に良いじゃない。セラもリズのお世話があるから戻ってるし、こんな女の子一人街を歩かせちゃ危ないじゃない」
「こ、このガキんちょ。よくもぬけぬけと……」
帰り道、イリヤと遠坂と遭遇しその道中で昨夜起きた出来事を話し、今の状況が聖杯戦争処の騒ぎでないことを理解した遠坂は一時的に修司達に協力する事にした。聖杯戦争に於ける半数近くの陣営が手を組んでいる。
極めて稀な事態だが、あの影はそうせざるを得ないほどに危険だと判断したのだろう。イリヤと遠坂、揃って衛宮邸で待つことにするという状況に修司は誂う意味を込めて……。
「良かったな士郎、モテモテだぞ」
「うるせぇ、さっさと戻って来てください」
家に入ればセイバーも待っている。唐突に男女の比率バランスが大きく崩れた事に辟易とする士郎は早めに修司と合流する事を切に願う。

「んじゃ士郎、また夜にな。その時になったら話を聞かせてくれ」
「あ、あぁ……」
簡単な別れを済ませて修司は衛宮邸を後にする。その背中を見送る士郎の目は後悔に塗れ、問い詰められなかった自分を憂いた。
昨夜、あの金髪の男と出会ってから士郎は戸惑ってばかりだった。友人と信じ、信頼を寄せている修司が、まさか１０年前に現れたサーヴァントの一人と繋がっていたなんて……。
信じたくは無かった。だけど、セイバーの話を聞いたらそれを強く否定する事も出来なくて、何て聞いていいか分からなかった。
『シロウ、情けない話だが私には分からなくなった。もし彼に真偽を訊ねるのであれば、あの男……アーチャーに関する話もする必要がある。そうなった時、もしかしたら貴方とシュウジは……』
〝敵対するかもしれない〟
昨夜、申し訳なく口にするセイバーの言葉に士郎は耳を疑った。
修司と敵対する。もし修司があの金髪の男との仲間で、ずっと自分達を騙していたとしたら、自分とアイツとは戦う事になるかもしれない。友人と戦う事になる――そんな可能性のある現実を前に衛宮士郎は果たしてどのような選択をするのか。
その時、士郎はその正義の刃を友人に向けることが出来るのか、小さくなっていく彼の背中を士郎は見えなくなるまで見送っていた。

◇

「結局、士郎から話を聞けなかったなー。まぁ、後でまた話は聞けるし、その時からでも遅くは無いよね」
士郎と別れて少しして、新都にある自分の住まいへと戻ってきた修

司は士郎とのやり取りを思い出しながら一人愚痴る。色々とタイミングの難しい遣り取りだった。何度士郎から話を聞き出そうとしてもロリっ子はやって来るし、猫かぶりのあかい(遠坂)あく(凛)まも来るし、結局修司は士郎から話を聞くことが出来なかった。

あの様子からして、余程言いにくい話なのだろう。無理に聞き出すのではなく士郎から口にするのを待っていたが、どうやらそれが裏目に出てしまったらしい。

修司はタイミングの悪さに嘆息したくなるが、道中話した影の件で遠坂陣営とも手を組めるようになったし、結果的に由とする事にした。

後はシドゥリへの説得と万が一王がいた場合に備えての言い訳を考えるだけ、前者は兎も角後者の難易度は凄まじく高い。少しでも言葉を違えればお仕置きを受けるのは明白、最悪の場合そのまま海外へ出張！　なんて場合すらある。

そうなれば聖杯戦争の強制脱落、それだけは避けなければと思考をフル回転させながらドアノブに手を掛け――――違和感に気付く。

何かが、いる。自分が知るものとは異なる何かが自分達の住む部屋の内部にいた痕跡がある。心臓の音が跳ね上がると同時に部屋に飛び込んだ修司は――――。

「シドゥリさん、慎二、大丈――――っ!?」

目にした光景に言葉を失った。

敷き詰める赤、朱、赤、リビング一杯に広がった朱色は嘗て修司が体験した１０年前の地獄の光景を想起させる。

テレビに、テーブルに、キッチンに、窓に、部屋を構成するありとあらゆる箇所に夥しい量の血の跡があった。その光景に修司の思考は一気に氷点下へと下回る。

覚束無い足取りで入ると、べちゃりと粘り付く感触が伝わってくる。何故、どうして、自分の住んでいる場所がこんな事になっているのか、思考が混乱で埋め尽くされた修司、その時ふとあることに気付く。

――――手紙だ。血に塗れたテーブルに不釣り合いなほど鮮明な白

い手紙が乗せられていた。不思議に思った修司は徐にそれを手にして、開く。

瞬間、修司は己の内から熱い何かが込み上げてくるのを感じた。熱く、激しく、荒れ狂う感情の渦、この感覚には覚えがある。それは10年前にあの黒い月と相対した時だった。

【殺意】怒りの感情を振り切り、修司はこの時人生二度目の殺意を覚える事になる。

《――――我が孫は返して貰った。序でに貴様の従者も戴く事にした。返して欲しくば、今宵一人で我が屋敷に来るがよい》

――――臓硯。

手紙を握り締めた修司の瞳には嘗て無い感情を滲ませていた。

その39

「――――さて、それじゃあ私達も話し合いを始めましょうか。白河君が話していた聖杯戦争の異常、サーヴァントを取り込む影の事、聖杯戦争の参加者として冬木の管理者として無視は出来ないわ」
「それは良いけど、なんでワザワザ俺の家でするんだよ。一応敵同士の筈だろ俺達」
　修司の姿が見えなくなり、彼が戻ってくるまでの間衛宮邸で待つ事にした士郎、手を繋いでくるイリヤには既に諦めたが、何故これ迄敵対していた遠坂凛も招かなければならないのか、疑問に思う士郎は素直に言葉として訊ねてみると。
「あら衛宮君、私が手伝うのは不満？　魔術的知識の乏しい貴方にとって私の情報はそれなりに役に立つと思うのだけれど？」
「お生憎様、シロウには私が付いているからリンの手は必要ないわ。サーヴァントだって私のバーサーカーがいるし、正直今のリンに利用価値は無いわ」
　あっけらかんと答える遠坂にイリヤが鋭いツッコミを返す。ビキリ、三人の間に亀裂が生じた気がした。
「ふん、なぁに強がってんのよ。アンタのバーサーカーだって相当弱っているって聞いたわよ。影に危うく取り込まれ掛けたと聞くし、変異したランサーに何度か殺られた事も聞いたわ。アンタの自慢のバーサーカーは後何回持つのかしらね」
「それこそ余計なお世話よ。リン程度のサーヴァントなんてたかが知れてるし、実際今回の聖杯戦争で貴方達マトモに戦っていないじゃない」
　ビキビキ。亀裂は更に増え二人の空気は益々険悪なモノに変わっていく。言葉の殴り合いをしている二人の間に立っている士郎は心の内で修司の到着を待つ。
「お、落ち着けよ二人とも。今はそんな事言い合っている場合じゃな

いだろ。修司が来る間俺も色々と準備しておきたいんだ。イリヤにはその手伝いをして欲しいし、遠坂にだって聞きたい事はあるんだ。今は例の影を何とかするために一度手を組むのもアリなんじゃないのか？」

思考を必死に回転させ、士郎は双方どちらにも角が立たない言い回しで場を収めるのを試みる。僅かばかりの静寂、数秒にも満たない静けさの中で返ってきたのは渋々ながらの凛の返答だった。

「――まぁ、確かにそんな場合じゃないわね。いいわ、取り敢えず一時的に共闘する事を良しとするわ。具体的に言えば影の問題が片付くまで」

「……私としてはどっちでも良いけど、シロウが其処まで言うなら聞いてあげる。それにあのお兄ちゃんの件もあるしね、ここで私だけ参加しないというのも面白くないし」

それぞれ了承の返答を得られてほっと胸を撫で下ろす士郎、なんで自分がこんな修羅場の仲介役を任されなければならないのか、ここにはいない修司に理不尽な文句を呟きながら玄関の戸を開くと……ふと、違和感に気付いた。

人のいる気配がない。何時もならセイバー辺りが迎えに来てくれる筈なのに今日は何故かその様子はない。出掛けているのか？　不思議に思った士郎は靴を脱いで玄関から居間へ向かい、居間にあるテーブルの上に置かれた手紙を見て――速攻家を出た。

「ちょ、衛宮君!?」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

突然様子が変わった士郎を二人は呼び止めるが、その必死の形相から彼女達の声は届いている様子はなく、士郎は宛もなく冬木の街へ向けて走り出す。

遠坂は溜め息を吐いて士郎の後を追う。残されたイリヤは敢えて二人の後を追う事はせず、家へと入り居間へと足を進め、乱雑に投げ捨てられた手紙を手に取る。

「――そう言う事ね」

手紙に書かれた内容は唯一つ、セイバーによるルーラーへの詰問す

る事、修司というイレギュラーと行動を共にしているルーラーに対する事への尋問だった。
恐らく、セイバーはルーラーに不信感を抱いているのだろう。少なくともセイバーにはルーラーに一つ訊ねなくてはいけない事があった。
確かにイリヤもそれは思った。あの巨大なゴーレムを保有する修司とどうしてルーラーが手を組んでいるのか、しかしその事についてはイリヤは既に聞いているし、今更深く問い詰めようとは思わない。
だが、あの夜に自分達はセイバーと顔を合わせてはいないし、セイバーもあの魔神の事は目撃していない、厳格なルールの下で聖杯戦争に介在するルーラーをどうしてセイバーが疑心に思うのか。
「もしかしてセイバー、何か気付いてる？」
自分が知る情報とは別の何かをセイバーは知っていて、彼女はそれをルーラーに訊ねる事で解消しようとしている。
一体何のために？　疑問に思うも答えが出ないと知ったイリヤは取り敢えず二人が戻ってくるまでの鍵の開いた衛宮邸の留守を守ることにした。

◇

――暗い暗い闇の底、大小様々な蟲が蠢く蟲蔵にて悪意に満ちた翁は嗤う。
「いやはや愉快愉快、まさかあの臆病な孫がああもワシに反発するとはな。女の前とはいえ其処まで虚勢を張るとはお前も一端の男と言うわけか」
「ヒッ……ヒッ」
首に、脚に、手に、股ぐらに、巨大な百足が慎二に巻き付いている。

人肉を骨ごと両断せしめてしまう顎をギチギチと鳴らしその口内を晒している。
涎らしき液体から匂わせる異臭、眼前に迫る悍ましい死の具現の前に慎二の股間は既に濡れきっていた。怖い、どうしようもない恐怖感に苛まされ今すぐにでも逃げ出したい慎二だが、状況がそれを許さない。
今、自分達がいるのは間桐の最も闇の深い部分だ。助けなど誰も来ない、来るわけがない。仮に来たとしても目の前の怪物がそれを許す筈がない。
５００年もの間、間桐を恐怖に縛り付けている妖怪とそれに付き従う暗殺者のサーヴァント。コイツらに対抗するには同じくサーヴァントを引き連れて来るしかない。尤も、一対一を基本とする聖杯戦争に於いて今は間桐の陣営にマトモに対抗出来るのはバーサーカーのマスターであるアインツベルンの陣営位しかいない。
間桐臓硯の隣に黙した人形と化している間桐桜、彼女の隣にはやはりサーヴァントであるライダーが従っている。超常の存在足るサーヴァントが二体、これ等を前に慎二が立ち向かえる道理などなかった。
更に慎二の見えない位置には異色のサーヴァントと成り果てたランサーも控えている。どう足掻いた所で慎二がどうにか出来る状況ではない。
既に、自分の命は目の前の蟲爺の手の中にある。それが分からない程慎二は間抜けではない、涙を流し、小便を漏らし、最早されるがままの彼だが……不思議と命乞いだけはしなかった。
「……何で」
「む？」
「何で、今更僕に何の用があるんだよ。僕は聖杯戦争に負けた。なのに僕だけじゃなく、彼女まで巻き込むなんて、しかも……あんな街中で」
正気の沙汰じゃない。そう遠回しに非難する慎二だが臓硯はそんな孫の必死の抵抗にその口許を大きく愉悦に歪ませる。

確かに早計だったかもしれない。人気のない路地裏へ引き込んだとは言え日の登っている時間帯に二人の人間を拉致するには確かに目立ちすぎる行動かもしれない。当然人の目はあるだろうし、何よりこの事が教会に知られれば間桐にペナルティを課せられるのは想像に難しくない。

だが……。

「確かに、お前の言う通り今回のワシは些か以上に迂闊だったようだ。目撃者もいるかもしれん。だがな慎二、それはあくまで目撃者がいればの話じゃ」

「っ！　ま、まさか……」

「何をそんなに驚く必要がある。神秘の秘匿は魔術師の義務、神秘が人目に触れてしまうのであればその目を潰すのが我々魔術師の責務であろう。慎二、お前もそう言って同じ学友の娘を襲ったではないか」

嗤いながら口にする臓硯の言葉の意味を理解した慎二は顔を青褪めて震え上がる。

「まぁ尤も、傀儡にしたあのチンピラどもの味は少々悪かったがな。全く、若い内に酒やタバコに溺れるなど、餌にもならんとは嘆かわしい」

吐き捨てる臓硯に慎二は漸く理解した。自分達を路地裏に引摺り込んだチンピラ達も、全て目の前の妖怪が引き起こした茶番で、用済みとなった彼等はその悉くが蟲達の餌となった。目撃者も、それに関わる人達も分け隔てなく全て文字通り喰い尽くされた。

こんな事なら、外に出るんじゃなかった。あの黄金の王が怖くて、シドウリに優しく誘われたから、柄にもなく慰められて、こんな自分にも何か出来るんじゃないかって思い始めて……。

その矢先にこれだ。結局、自分は死ぬまでこの妖怪の玩具でしかないんだ。恐怖よりも悲しさに涙を流す慎二、それを見て尚笑みを深める臓硯。

恐怖と悲しみに満ちた蟲蔵に凛とした声が響き渡る。

「成る程、それが貴方の遣り方ですか。間桐臓硯」

「っ！」
「ふむ？」
　今まで沈黙していたシドゥリが、その双眸を以て臓硯を睨み付ける。そこに一切の恐怖はない、夥しい蟲に囲まれても彼女の強気な姿勢は崩れる事はなかった。
「ほう、今まで気を失っていたのに随分と気丈な娘だ。魔力回路があれば立派な苗床になれたモノを、全く世の中と言うのはつくづくままならんな」
「そんな事はどうでもいい。彼を、間桐慎二を解放しなさい」
「何故かね？　こやつは君の所の小僧と敵対していた相手だぞ？　目的の為に手段は選ばず、妹すら利用する有り様、そのような男を庇う必要など其方にはあるまい」
「愚問ですね。例え相手が憎い仇だとしてもそれが糧になるのなら受け入れるのが我が社の社訓、更に言えば彼はあの方が認め、許した者。貴方程度の者が口を挟むべきではありません」
　理路整然としたシドゥリとしてはその理屈は暴論にも聞こえた。全てを頂点とした黄金の王を筆頭にその最大の臣下を絶対とする在り方、彼女はその出身からある一柱の女神を崇める神官の末裔でありながら、同時に偉大なる王に使える臣下の一人でもある彼女。
　そんな彼女にとって現在進行形のこの状況こそが何よりも許せない事だった。故に彼女は吼えるのだ。彼と、そして自分を解放しろと、己の今の立場を理解した上で強気に物を言う彼女に臓硯はこの手の女には拷問の類いは効かないと瞬時に理解する。
「アサシン、少し黙らせろ」
「御意」
　主の名に従い、その左手でシドゥリの首を締め上げる髑髏の暗殺者。サーヴァント相手に力で勝てるわけもなく、シドゥリは成す術なくされるがままとなる。
「お、おい爺さん！　止めろよ、その人は関係ないだろ！」
「ならば慎二、お前が代わりに罰を受けるか？　お前は間桐の名に泥を塗った愚か者よ。罰を与える際には其処の女より更に厳しいモノ

が待っているぞ？　魔術師でもないお前に果たして耐えられるかな？」
　笑みを浮かべる臓硯に慎二は今更ながら底冷えした。目の前の妖怪は血を分けた肉親すらも己の悦の玩具としか見ていない。もうどれだけ泣いて喚こうがこの妖怪に自分の言葉が届くのは有り得ないのだと、慎二は漸く思い知った。
（いや違う。目を背けていただけなんだ。いらない子供だと言われても、何処かでまだこの家には愛情があるのだと、心の何処かで思い込んでいたんだ）
　そんなもの、この家はずっと昔から失っていたと言うのに。愛情の一欠片があれば桜はあんなことにはならなかったと言うのに。
　感情が見えず、虚ろな瞳で佇む義理の妹。ここ最近は人並みの感情があったのに今はもうその様子すら見えない。
　これが、こんなものが自分が欲した魔術なのか、人を堕として辱しめる。こんなものを自分は今まで望んでいたのか。
（なら、もう僕は魔術なんてモノを望みはしない。奪うことしか出来ない魔術なんて、消えてなくなっちまえ！）
　慎二は魔術を呪った。嘗て憧れ、欲し、聖杯に願いを託そうとした魔術師への回帰。しかし、それはこの瞬間を以て泡となって消え果てた。もう自分は魔術師なんて望まない、糞の役にも立たない魔術に望みを断ち切った慎二は……。
「いい加減にしろよ、クソ爺」
「……むぅ？」
「やること成すこと奪う事しか出来ないのかよこのクソ蟲が！　何が永遠の命だ。人の命をゴミみてぇに扱いやがって！　そんなお前の願いが叶う瞬間なんて未来永劫あり得ねぇんだよ！　分かったらとっととくたばれこの蛆虫野郎がぁっ！」
　それは慎二に出来る唯一の強がりだった。吼えて、吠えて、蟲蔵にビリビリと響き渡る罵倒の叫びは臓硯だけではなくそれぞれのサーヴァントと、これまで呆然とした桜すらその視線を彼に向けていた。
「――――そうか、良く吼えた」

だが、そんな慎二の強がりも目の前の怪物の殺意に瞬く間に呑まれてしまう。嗚呼、結局自分はこのままゴミのように殺されるのだと、慎二は自身の結末を受け入れた。
巻き付いた百足の口が開かれる。これに食われたら痛いでは済まないだろうなぁ、と呑気にそんな事を考えながらひきつった笑みを浮かべ――――。
瞬間、凄まじい轟音と衝撃が蟲蔵を襲った。
「な、何事!?」
アサシンが驚き、臓硯が尻を付く。倒れそうな桜をライダーが支え、それぞれの表情には驚愕の色が張り付いていた。
何が起きた。外の様子を使い魔との視覚情報を繋げて臓硯が確認すると、その光景に唖然とした。
間桐の門が破壊されている。魔術によって施された門が完膚なきまでに叩き壊されている。下手人は拳を握り締めて日を背に佇む男、この聖杯戦争に於いて尤もイレギュラーな存在。
「……貴方達は間違えた」
驚愕に震える臓硯を見て首を締め上げられながらも不敵に笑うシドゥリはポツリと口にする。
「私の忠告を無視したから、貴方達は間違えた」
「貴様、何を言っている！」
「もう、貴方達に逃げ場はない。よりにもよって彼に知られてしまった」
持ち上げられ、首が絞まっているのにそれでもシドゥリは止まらない。
「貴方達は彼を、白河修司を――――」
怒らせた。
その言葉が紡がれると同時に蟲蔵の壁は砕かれた。

「――――さて、そろそろ間桐の家に着く頃合いか」
冬木の教会、そこで神父は一人嗤う。
「折角派手に演出したのだ。これで奴も盛大に怒り狂うと言うもの」
「白河修司、我が弟子よ。さぁ、お前の怒りを見せてくれ」
空を仰ぎ見る神父の笑みは何処までも邪悪で清々しかった。

「言っておくが言峰、この先修司がやらかす不始末に我は一切手を貸さぬからな？　お前一人で片付けるのだぞ？」
「え？」
当たり前なんだよなぁ。

その４０

「――この異常な程の魔力反応、やはりあの影は聖杯から生まれたモノと見て間違いない様ですね」

冬木の街から少し離れ、郊外にある森の奥深くにある嘗てアインツベルン城……その跡地にてジャンヌは先に遭遇した影の正体を見極める為にこの地へ赴いていた。

先日起こったランサーと修司の戦いによる痕跡は今も根付いたままだが、あの影の残した跡は跡形もなく消えていた。

同様にあの泥も消えている。しかし、代わりにその地には魔力による痕跡がこれでもかと残されていた。隠す気など更々無いような残り香に到着時のジャンヌは眉を寄せて顔を顰めていたが、その強烈な残滓のお陰であの影の正体が何であるか大体の検討は着くことが出来た。

あれは、聖杯から溢れ出たモノ。人に仇成す為に生まれ、命を喰らう為だけに顕現する悪意の結晶。人類にとって天敵とも呼べる悪意があの影の正体である。

だが、何故それが聖杯から生まれてしまったのか。何故よりにもよってあんなものが出てきてしまったのか、影の正体は分かってもその原因と理由については未だ不明のまま依然として分かっていない。

ただ確かな事はこの事態を望んで引き起こしたモノがいる。その輩はこの影が引き起こす惨劇を承知した上でこれを解き放とうとしている。それはこの聖杯戦争に於ける明確なルール違犯……いや、ルールそのものを破壊する所業である。

これを成そうとするモノは間違いなく自分の敵だ。その事が分かっただけでも収穫はあった。後は件の下手人をどう暴いて阻止するか、事態は刻一刻と過ぎようとしている。自身が召喚された意味を知り、早く街へ戻り修司と合流しようとジャンヌが踵を返した時。

「――ここにいましたかルーラー」

「セイバー？」
森の中から騎士甲冑を身に纏うセイバーが現れる。その様子から並々ならぬ感情を秘めていると察したジャンヌは戸惑いながら彼女へ向き直る。
「ど、どうしたのですセイバー？　何故貴方がここに？　貴方は普段自身のマスターと共に行動していると思っていましたが……」
「故あって、問い詰めたい事柄が出来た為、単独で貴方を探してました」
「――分かりました。ですがその前に一度場所を変えましょう、ここは危険です。ここを離れ、落ち着いた場所で話をしま――」
ここに留まればいつまたあの影に襲われるか分からない。あの影の相手はサーヴァントでは不可能に近い、故に場所を変えて改めて話をすることをジャンヌは提案するが……それは出来なかった。
突き立てられた刃、風によって遮られ、不可視となった刀剣を突き付けられたジャンヌは突然の事に内心狼狽する。
「……セイバー、何のつもりですか？」
「何のつもり？　それは此方の台詞だルーラー、同盟者である我々に隠し事をするなど、どういう了見だ」
「隠し事？　一体なんの話を……」
「まだ惚ける気か。いいだろう、ならばハッキリ言ってやろう」
「嘗ての聖杯戦争の参加者、前回のサーヴァントであるアーチャーと彼、白河修司と繋がっていた事を何故黙っていた。答えろ！ルーラー！」
――隠しているつもりはなかった。ルーラーにとって前回のアーチャーが生存し、現代に未だ現界している事は今回の件について関係ないと思っていたからだ。
彼は一つの命としてこの世界に根差している。嘗ての戦いで全てを失った少年を家臣として迎え入れて、育て、見守っている。そんな彼が悪徳を成さないと判断した上で……結果として、放置する事となった。
勿論、彼女はセイバー達にこの事を話すつもりではいた。前回の

サーヴァントが現界しているが、これといって此方に干渉してくる様子はないと、だがこれまで続く異常事態がその事を告げる機会を奪っていった。
ルーラー、ジャンヌ＝ダルクはミスを犯した。それは事前に士郎とセイバーにアーチャーことギルガメッシュの存在を伝えなかった事、そして……。
「事と次第によっては私は貴方を斬らなければならなくなる」
セイバーがギルガメッシュと同じ前回からの参加者であること、そして何より二人の関係について把握出来ていなかった事。
己のミスに表情を曇らせるジャンヌ、戸惑う彼女の眼前には怒りを滾らせる騎士の王が佇み、そんな彼女達を喰らう為にあの影が再び姿を表すのだった。

◇

「――――よぉ、間桐臓硯。招待状の通り一人で来てやったぞ。シドゥリさんと慎二は無事なんだろうなぁ？」
間桐邸の魔術工房に繋がる扉が壁ごと破壊され、崩れる瓦礫の中から現れるのは頭髪を怒りでざわつかせた修司が、不敵な笑みと共に間桐の蟲蔵へと足を踏み入れた。
「――――招待状、だと？　お主、何を言っている」
「おいおい、ボケる場面じゃないんだぜ？　折角人を彼処まで挑発したんだ。もう少し、大胆不敵に構えていろよ」
階段を降りず、修司はそのまま臓硯の前まで飛び降りる。蟲蔵に充満する嫌な臭い、醜悪なその臭いだけで怒りが爆発しそうになるが、まだその時ではないと、平静を装いながら修司は辺りを見渡す。

百足に絡め取られた慎二、眼前の臓硯の隣には髑髏の面を付けた暗殺者がいてその手にはシドゥリの首が握られていて、更にその奥では虚ろな顔とした桜がライダーに抱えられている。
おまけに何処からかあの黒いランサーの気配も感じ取られる。考えられる限り最悪な状況、端から見ても絶体絶命な危機、なのにも関わらず修司は臓硯を睨み付け……。
「言いたい事は腐るほどあるが、その前にシドゥリさんを離して貰おうか。その人はテメェ等みてぇな薄汚い連中に触れられて良い人じゃあねぇんだよ」
強気に、一切の妥協なく吐き捨てるようにそう口にしている。相手が５００年も生きている妖怪だろうとそんな事など知った事ではない、修司にとっての大事な人達が下衆の手によっていいようにされている。それ事態が何よりも許せないのだ。
「――付け上がるのも其処までだ小僧、どれだけ意気がろうと、この者の命は私の手の内にある。それ以上そこから動けばこの女の首は引き千切られると思え」
「修……司……様、私の事は、お気になさらず、どうか成すべき事を……なさいませ」
ギリギリと首を締め上げられても、それでも尚臣下として修司を導くシドゥリ、サーヴァントという超人に命を握られても尚、足掻くその精神にアサシンは内心で評価した。
だが、それを言われて頷けるほど修司は冷酷になれなかった。当然だ。彼女はあの黄金の王に認められた数少ない側近の臣下であり、ある意味では修司以上に王の興味の対象でもある。
修司にとっても彼女は姉のようなモノ、一人っ子である修司が王と師父以外に気心の知れた相手で、これまで身内同然に接してきた女性、見捨てることなんて有り得ない。しかしそれ故に修司はアサシンの言う通りその場から動けないことを余儀なくされた。
「――クカカ、無様じゃのう。威勢良く乗り込んできたのは良いが、考えが足らんかった様じゃな。だが、その蛮勇さは嫌いではないぞ。見ていて滑稽じゃからな」

アサシンに言われるがまま、身動きの取れなくなった修司に臓硯は嗤う。嘲り、罵る蟲の翁だが、修司は表情を変える事なく臓硯を睨み付けている。
「――もう一度言うぞ。シドゥリさんと慎二を離せ。慎二は兎も角シドゥリさんは聖杯戦争になんの関係もない人間だ」
「関係ない事はないじゃろう。この女はお前の関係者、聖杯戦争に乱入すると豪語するお主の身内、ならばそれを利用しない手はないじゃろ。魔術師がそんな非道な手は使わぬと思ったか？　浅い、浅いのう。だからお前達一般市民はワシ等の餌以外の選択肢がないのじゃよ」
「……おい、俺の聞き間違いか？　その言い方だとまるでこれ迄何人も喰ってきた様な言い方だが？」
「聞き間違いなものか、文字通りの意味よ。我が魔術の真髄は〝奪う〟事、他人から命を奪う事でワシは生き長らえてきた。全ては聖杯をこの手に掴むためよ」
「――そんな事のために、無関係な人を殺してきたのか」
「然り」
何て事無いように、無関係な人間をこれ迄何人も殺したと宣う臓硯に修司は自身の頭が怒りで沸騰しそうになる錯覚を覚えた。吐き気を覚える邪悪、修司は目の前にいる妖怪こそがその体現者なのだと今更ながらに痛感した。
これ迄、テレビや新聞で時たま見かけた失踪者、聖杯戦争の前から起きる行方不明者達、その中には年端もいかない少年少女の名前もあった。
その元凶が目の前にいる。今すぐこの妖怪を殴り飛ばしたいが、アサシンがこれ見よがしに捕まったシドゥリを見せ付けてくる。
「何故お主が我が屋敷に訪れたのか、その是非は最早どうでもよい。ワシとしてもお前には用があったからの。手間が省けたわ」
「俺に用だと？」
「然り。お主が持つあの魔神、それをこの間桐臓硯に譲って欲しいのだ。アレは良い、アレさえあれば聖杯戦争など勝ったも……いや、

世界すらも手に入れる事が出来よう」
「魔神だと？　一体なんの事を――――」
意味が分からない。臓硯の語る魔神の有無、その言い方からしてまるで自分がその魔神とやらを所有しているみたいだが、修司にとって全く心当たりが――――あった。
魔神。その言葉を耳にしたと同時に思い浮かぶ一つの名称、それは恐らく例の魔神とやらの名前なのだろう。なんの確証はないくせに胸の内に浮かび上がったこの名が魔神を呼び出す鍵なのだと修司は今を以て理解した。
今、その名を口にすれば魔神は間違いなく呼び出せるだろう。必要だと、この状況を打開するのにその力が必要なのだと、手を伸ばすようにその名を叫べばきっとその魔神は顕れるだろう。
あの時見た夢の様に……。
だが、それをするつもりは修司になかった。あの夢で見た人物から言われた運命の岐路に立たされるのが怖いから？　否、魔神を呼んでどんな被害になるか検討も付かないから？　否。
目の前にいる腐れ外道の言う通りになるのが我慢出来ないから、シドウリを傷付け、慎二を脅し、桜に何かしたであろう目の前の蟲野郎の言いなりになるのがどうしても我慢出来ないからだ。
「――――ふむ、どうやらお主にそのつもりは無いようだ。それとも未だに扱い方が分かっておらぬのか、……まぁ、その辺はどうでもよい。呼べないのなら呼べるようにしてやればいいだけよ」
「――――シドウリさんに何かをするつもりか？」
もしそうなら形振り構わずあのアサシンをぶち殺してシドウリを助ける。ここから奴との距離は離れているから間に合うかどうか分からない危険な賭けになるが、それでも彼女を助けるにはこれしか方法はない。
しかし、臓硯の嘲笑がそれを否定する。
「カカカカ、その必要はない。言ったであろう。我が魔術の真髄は奪う事にある。と、――――お主の身体、このワシが有効に使ってやろう」
瞬間、臓硯の身体が霧散した。否、分離した。己の身体を無数の蟲

へ変化させ、群体となった自身を修司の身体へ纏わりつかせる。
「この爺、マジで人間として終わってんだな」
『然り。我が悲願不老不死には人間の命では届かぬでな、命を喰らい続けることで繋げてきたのよ。だが、お主を我がモノとすればその時間は大いに短縮される。喜べ、お主の肉体はこのワシが最大限に活用してやろう』
『そう、この蟲蔵へと入った時点でお前は既にワシの腹の中よ』
『――――愚かな。命は限りがあり、有限であるからこそ尊く、美しいというのに』
その口調は恐ろしく低く、それでいて透き通っていた。まるで修司ではあって修司では無いような口振り。その違いに自身すら気付かず、気付いたのはこの場で慎二ただ一人だけだった。
『――――命の輝きこそが永久不変。だがお前はその輝きすら失くしてしまったようだ』
蟲が這いずり回る。皮膚を食い破ろうと、至る所で蟲の顎が修司の肉体に牙を立て、或いは内側へと侵入しようと、蟲達は侵入を試みようとする。
しかし――――。
『だったら、俺が証明しよう。聖杯なんぞに頼らなくても、人は、命は、永遠すら打ち勝てるのだと』
その瞬間、修司の内から光が溢れる。光は炎となって荒れ狂い、纏わりつく蟲となった臓硯を悉く焼き付くしていく。
『ヌグァァァァッ!? な、なんじゃ、この熱は、この、熱さはぁっ!?』
「ま、魔術師殿?!」
その光景に誰もが言葉を失った。修司の纏う白い炎は臓硯だけでなく使役する他の蟲達にも燃え移っていく。壁や天井に張り付く巨大蟲も、慎二を縛っていた百足も、その悉くを燃やし尽くしていく。
『臓硯、ここはお前の腹の中と云ったな。ならば都合がいい』
握って作った拳に力を込める。すると修司の炎はその拳一点に収束され、それに比例する様に輝きを増していく。
『腸をぶち撒けろ』

拳を天井に向けて突き出すのと、極光が放たれるのは同時だった。ありったけの怒りを拳にのせて放たれた一撃は蟲蔵の天井を突き破る。

光は止まらなかった。蟲蔵を突き抜け、天蓋を抜け、冬木の空を覆う雲を蹴散らしていく。

突き抜けた天井から見える空、その光景は確かに間桐桜の視界に映されていた。

その41

――――間桐桜にとって蟲蔵は地獄そのものだった。幼い頃から己を間桐の魔術師に改造する為に幾度となくその肉体を蹂躙され、嬲られ、貶められ、踏みにじられ、犯され尽くしてきた。

間桐桜の魔術師としての全てはここから始まった。身体中の全てを蟲に食い潰され、辱しめられてきた彼女にとって魔術師である事は苦痛でしかなかった。

何故、自分がこんな目に合わなければならないのだろう。蟲蔵へ放り込まれる度に繰り返される自問、答えは出ずただ桜は己の境遇といつしか自分以外の幸せそうな周囲を無意識の内に妬み、恨むようになっていった。

魔術師としての桜が誕生した蟲蔵は、正しく蠱毒の壺そのものだった。数多の命を喰らい、犯してなお貪ってきた呪いの空間。嘗ては叔父さんと呼ばれた人物もその蠱毒に呑まれて消えた。

――――いつしか、桜は何も感じなくなっていた。反応する心は廃れ、ただ義務として蟲達に嬲られる日々。そんな時、間桐桜はふと遥か昔の記憶を思い出す。

それはまだ桜が遠坂の性を名乗っていた頃、母と姉から逸れて、一人とある公園にやって来たときの事。そこにあった遊具のブランコに一人の男の子が項垂れながら座り込んでいたのを目にした時だった。

その男の子は今にも泣きそうな顔だったから、何が悲しくて、どうしてそんな顔をしているのか、心配と好奇心の半々の心境で声を掛けて見ると――――返ってきたのは凄まじいまでの怒気の嵐だった。

『何だよお前』

自分よりも一つ位年上の少年、その怒りに満ちた声に桜は恐怖で腰が抜けそうになった。でも、それでも何故か放って置けなかった。オズオズと、我ながら挙動不審になりながらも、半分涙目になりながらも桜は男の子に声を掛け続けた。

軈て根負けした少年は桜に謝罪し、どうして自分がここにいるのか、泣きそうになりながらブランコに座っていたのかをポツリポツリと話し始めた。
大好きだった祖母が死んだ。仕事で忙しい両親の代わりに育ててくれた祖母を失い、悲しくて苦しくて仕方がなかったと、祖母と良くこの公園で遊んでいたから、もしかしたらまた会えるのではないかと、少年は涙ながらに語った。
自分の好きな人がいなくなる。それは年端もいかない子供にはとても重く、苦しいもの、それを自分に話すまで決して涙を見せず耐えながら待ち続けた彼を桜は純粋に凄い人だと思った。
だから、という訳ではないが。桜は彼に手を差し伸べた。一緒に遊ぼうと、少年の怒気に触れ、震えながらも手を差し伸べる少女の手、少年は少しばかり躊躇し――――その手を取った。
ほんの僅かな時間、桜の母と姉が迎えに来る十数分しかない短い時間、桜と少年は一緒になって遊び、そしてその僅かな時間の中で少年の心の疵は少女に対する初恋という恋心を抱く事で癒えた。
以降、その日から少年――――白河修司にとってその公園での時間は何よりも勝る宝物となっていた。それが例え十数分の短い時間であろうとも。
あの公園は今はもうあの日の大災害の日によって消えてしまっているが、それでも思い出に残るあの時間は今も修司の脳に色鮮やかに刻まれている。
故に修司は決めた。いつか彼女の、桜の助けになれる時が来たら、迷いなく彼女に手を伸ばすと。手を伸ばし、掴み、絶対に助けて見せるとこの時誓った。
『おれ、頑張るから！　今はまだ小さくて弱いけど、大きくなったら絶対に強くなるから！　強くなって、いつかお前が困っていた時に助けられるように頑張るから！』
何故、今になってそんな事を思い出すのか。風穴を穿たれた蟲蔵の天井、そこから見える空を見て間桐桜はそんな事を考えていた。

◇

――この世界に於いて、魔力とは魂を変換させたモノ。魔術師が魔術を行使する際に魔力回路なる器官を通して自身の魂のエネルギーを物質世界に干渉させる行いである。

つまり、魔術とは魔力回路が前提として置かれている条件であり、魔術師であることの最低限の条件でもある。魔力回路の有無で人は魔術師――――即ち通常とは異なる事象を児戯の如く操る事が出来る。

炎を操る者、水銀を操る者、蟲を操る者、魔力回路に食い込み、相手の魔力回路を破壊する者、宝石等といった媒体を駆使して魔術を操る者。その様相は千差万別、魔術師の数だけ魔術は存在していて、その要となっているのが魂のエネルギーを抽出し、変換する魔力回路。

魔力回路が在る者だけが魔術師に成れる。それがこの世界における基本骨子であり、絶対とも呼べる理である。

――――ならば、であるならば。

今、この場で、この瞬間彼等が目にしているのは一体なんなのか。

白河修司という少年は正しく唯の人間で、その身体に魔力回路は無く、魔術の知識なんて毛程すらない。聖杯戦争という非日常が行われるまで身体能力がずば抜けているだけのチンケな小僧に過ぎない筈だ。

なのに、彼の纏う炎は何だ？　間桐の保有する蟲を悉く焼き尽くしておきながら近くにいた慎二に火傷一つ負わせていないあの炎は何だ？

誰もが困惑した。ライダーもアサシンも異形と化したランサーも慎二も、その光景に唖然としていた。唯一シドゥリだけは力を引き出した修司に満足そうに笑みを浮かべていた。

白河修司は魔術師だった？　否、それは違う。確かに修司は魔力回

路など持ち合わせてはいないし、現在彼が内から溢れ出させている力も魔力ではない。魔力に似て異なる力、言い換えるなら魔力よりもより純度の高いエネルギー。
日本や中国に於ける体内エネルギー【気】。或いは魂のエネルギーそのもの。
魔力回路で抽出し変換させるそのエネルギーを修司という男は直に内から溢れ出させたのだ。
「まさか……自ら解き放ったと言うのか。魔力の源泉を、魂のエネルギーを、肉体を保有したまま、肉体を介して発現させたとでも言うのか!?」
羽虫となって炎から生き延びた臓硯は顎をキチキチと鳴らして驚嘆の声を挙げる。何せ目の前の修司という男は擬似的に、厳密には異なるとはいえ魂の物質化をやってのけているのである。
魂から内出るエネルギーを、自らの肉体に纏わせる。それがどれだけ埒外の理なのか、永い時の中で生きてきた臓硯だからこそ理解できた。目の前にいる小僧は感情だけで第三魔法に手を掛けた。
通常の魔術師ならば耳にしただけで発狂しそうになる事案、されど当の本人足る修司はそんな事など歯牙にも掛けず、シドウリを縛るアサシンへ目を向ける。
「おい、そこの薄汚ぇ髑髏野郎、最後の警告だ。今すぐシドウリさんを放せ、これを聞き入れなければその髑髏の面、顔ごと消し飛ぶと知れ」
それは何て事ない宣告、淡々と口を開く修司にアサシンは一瞬呆ける。目の前の少年は今、主人(マスター)でもないのに命じたのだ。今自分の手にある女性を放せ、さもなければ殺すと。
滑稽過ぎて笑いも出ない。だが、一蹴する事も出来ない。それだけの力が目の前の少年にあるのだと、英霊としての本能……いや、矜持がアサシンにそれが事実だと理解させられた。
故に、アサシンは行動に移る。暗殺者としてするべき事に殉じる為に、次に繋げる為に。
「妄想(ザバー)――――」
宝具の発動を使用、対象は眼前の女。修司の勢いを僅かでも削ぐ為

に行われた死の一撃は、されど発動させる事なく、アサシンは修司の飛び回し蹴りによって頭部を破壊される。
余りにも呆気ない最期、断末魔も呪詛の言葉を吐く事も許されず、臓硯の裏技を用いて召喚された暗殺者は灰となって消滅した。
アサシンが消滅した事で拘束から解放されたシドゥリを、彼女が地に倒れるまでに修司が抱き抱える。パッと見て外傷はなく、頸に残った手の跡以外目立った所はない。暗殺者というから毒の類いも警戒していたが、その様子もない。
「シドゥリさんゴメン、遅くなった」
「いいえ、それよりも……良く其処まで己を鍛え上げました。同じ臣下として嬉しく思います」
口振りでは平静を装っているが、額に浮かぶ大粒の汗がシドゥリの憔悴さを物語っている。早い所安全な所へ預けた方がいい、そう判断しても状況がそれを許さなかった。
「女を抱えて逃げるか？　構わないが、果たしてそれが許されるかねぇ？」
背後から感じ取れる濃密な殺気、振り返るまでもない。今、修司の背後には朱色の槍を携えた異形のランサーが此方に狙いを定めている。
このまま逃げ出せば背後からあの槍が襲ってくる。対処を間違えば、それこそシドゥリ諸とも串刺しにされるだろう。
しかし、修司はシドゥリを抱えたまま立ち上がり――。
「――やってみろよ」
ただ一言、その言葉から滲み出てくる殺気でランサーの動きを封じ込めた。修司の殺気に充てられた訳ではない、これまで甘ちゃんと思っていた少年が、殺意を以て相対すると決めたのだ。
アインツベルンの城で戦った時から、ランサーはこの男を殺すのは自分なのだと決めていた。殺戮の機械と化し、矜持も誇りも無くなったランサーが懐いた僅かな感情。奇しくも、それはランサーが一番不要と断じていた拘りとして現れていた。
仕掛けてくる様子のないランサーに不思議に思いながらも、修司は

シドゥリを抱えたまま慎二の下へ歩み寄る。アサシンを瞬殺したとはいえ、未だに二体のサーヴァントが此方を睨んでいる。
　ライダーの方は桜を守るために様子見を決め込んでいる様だが、ランサーが相手だとシドゥリを抱えたまま戦う訳には分が悪い。
「慎二、少しの間だけでいい。シドゥリさんを守ってやってくれ」
「し、正気かよ。僕にそんな力なんてあるわけないだろ？　遠坂や衛宮みたいな魔術師でもないのに……」
「――――頼む」
　慎二の眼を見て真摯に頼んでくる修司に、慎二は何も言えなくなった。これ迄幾度と無く修司の前に敵として現れたのに、この男は結局慎二を敵として見ることはなかった。
　修司にとって間桐慎二という男は昔から付き合いのある頼もしい友人、ただそれだけだった。それだけで充分だった。聖杯戦争の最中でもそれは変わらず、シドゥリを任せられるのは彼しかいないという確信を以ての判断。
　自分よりも遥か上にいる強者が自分に心の底から頼み込んでいる。それがどこか可笑しくて、それ以上に……こんな自分を頼ってくれる事実が嬉しかった。
「分かったよ。でも期待するなよ、僕はお前らと違って普通の人間なんだ。出来ることなんてそれこそ逃げる事くらいだぞ」
「それでいい、俺が時間を稼ぐ。慎二はシドゥリさんと一緒に衛宮の家に向かってくれ、彼処には遠坂達もいる筈だから」
　逃げるまでの時間稼ぎ、そう口にしながら修司の眼は勝つ気満々でいた。炎を纏い、腹の底から溢れる力と嘗て無い高揚感、そして全能感に修司は少しばかり酔いしれていた。
　そんな修司を背に慎二はシドゥリを背負って蟲蔵からの脱出を図る。天井は穿たれ、今にも崩落しそうな頭上に注意しながら、慎二は出入り口の扉へと急ぐ。
『慎二、間桐を裏切るのか』
「裏切る？　今まで必要としなかった癖に、調子の良いこと言ってんじゃないよ」

何処からともなく聞こえてくる臓硯の言葉を慎二が切り捨てる。自分が何よりも恐れていた間桐の怪物、それに一矢報いる事が出来た慎二は恐怖と達成感に膝を震わせながら蟲蔵の扉へと手を掛ける。
「修司！　お前の頼みは僕が責任を以て果たしてやる！　その代わり僕の頼みも聞いて貰うぞ！」
「っ？」
「こんな家、跡形もなく消してしまってくれ！」
「――――オーケー、承った」
最後に己の未練を完全に断って貰うために慎二は間桐家の完全なる破滅を頼み込む。もう間桐は自分で終わりなのだと、そう口にしながら今度こそ蟲蔵を後にする。
蟲蔵に残されたのは修司、ランサー、ライダー、桜、そして姿の見えない臓硯のみ。
『――――恨めしい。よもや慎二にあれほど反旗を許してしまうとは、ワシも老いたか。それとも、間桐の恐怖に抗うほどお主という光は強いという訳か』
何処からともなく聞こえてくる蟲の声、耳を傾けず、何処に潜んでいるのか神経を集中させる。
『白河修司。お主が其処まで力を高めたことには素直に称賛しよう。超常の存在であるサーヴァントを瞬く間に屠っただけに留まらず。限定的にとはいえ、お主は第三魔法の領域に手を掛けた。魔術師でもない人間がその域まで踏み込んだのだ。他の魔術師が耳にすれば発狂程度では済まされぬだろう』
「――――」
『だが、それでもお前は桜には勝てんよ。その気性の激しさの裏にある甘さもそうだが、何より桜は聖杯の【門】に至ろうとしている。魔法の領域ではなく、魔法――――即ち天の杯に至らんとする桜には届かない』
「――――テメェ、桜ちゃんに何をした」
修司には臓硯の言わんとしていることが何一つ理解できなかった。天の杯とは聖杯の事か？　何故桜ちゃんがそれになるという流れに

なる？　虚ろな様子の彼女と何か関係しているのか？
断片的な情報に内心戸惑う。が、それ以上に嫌な予感がした。１０年前に引き起こされた聖杯による災害、あれがモノではなく、人として現れるのだとしたら、それが……自分が好意を寄せている人の成れの果てだとするならば。
「……まさか、桜ちゃんを」
『く、クカカカカ！　やはりお主は聡いのう。只人の身でありながらモノの本質を見抜きおる。そうよ、お主の考え通り、間桐桜は間桐の聖杯として成り変わらせるのだ』
「っ！」
愉快そうに嗤う臓硯に修司の心中は驚愕で埋め尽くされる。
桜が聖杯になる。彼女が、初恋のあの子が１０年前に引き起こされた災害その物に成ろうとしている。人として扱う処か、物として扱う人としてあるまじき所業に修司は魔術師の人で無しさを痛感した。
『聖杯の欠片を桜に埋め込んで１０年、漸く此処まで漕ぎ着けた。蟲に犯させて間桐の魔術を刷り込み、他者と交わる事で魔力の受け皿となる』
これが、魔術師。これが本物の外道。人の倫理観なんて欠片も持ち合わせていない正真正銘の怪物。
『慎二にも桜と交じ合わせようとしたがな、あ奴は最後まで手を出そうとはしなかった。義理とはいえ妹に手を出すのは気が引けたのか、それとも単に度胸が無かったのか、いずれにせよ意気地の無いやつよ』
感情が沈んでいく。臓硯の言葉を耳にする度に修司の思考は凍てつき、固まっていく。
黙り、消沈した修司を見て臓硯は嗤う。どれだけ肉体を強くさせても所詮は成人に満たない子供、桜が抱えてきた衝撃的な事実に肉体ではなく精神が耐えられなかったか。
魔術という世界に踏み込んで初めて味わう悍しさに修司の精神は沈んでしまった。そう確信した臓硯が地を這い、修司の体を這って耳から侵入し、その肉体を得ようとして――――。

「もう、いい」
瞬間、閉ざされた肉体の内から再び炎が吹き荒れる。
『っ!?』
蠢き、這いずり回っていた臓硯は今度こそその肉体を焼却させる。意識を他の蟲に移そうとも、その瞬間臓硯の肉体は修司の放つ白い炎によって灰すら残さず消えていく。
「お前はもう――――喋るな」
臓硯は一つ、見誤った事がある。確かに修司は肉体は兎も角その精神は未だに一般人の領域に留まっている。だが、それは同時に当たり前の事で直ぐに激化する事も意味している。
大切な人。初めて恋して、守りたいと強く思った想い人、そんな彼女が陵辱の限りを尽くされたと聞いて修司は何を思ったか。
絶望、恐慌、自身の未熟さと察しの悪さ、その他諸々に罪悪感で押し潰されそうになり――――そして、激怒した。
惚れた女を、好きな女性を、自身の目的の為だけに利用し、辱しめる。それを聞かされて、黙っていると思ったのか？
間桐臓硯は事ここに至って、未だ理解できていなかった。目の前の人間が何者なのか、その全貌を見極められていなかった。
今の修司を支配する感情は唯一つ――――怒り
ただ、それだけである。
瞬間、ランサーの槍が迫る。修司の涌き出る炎と怒りの感情に刺激され、これは爆発させてはならないものだと察して、槍を修司へ突き立てる。
だが、その槍は届かなかった。朱色に鈍く煌めく槍の先端を手掴みで握り潰し、その力で作った拳をランサー目掛けて振り抜く。
胸元を叩かれ、抉られ、穿たれたランサーは勢いのまま蟲蔵の壁へと叩き付けられめり込んでいく。
その様子を目撃したライダーは桜を連れて即座にその場から離脱。外は薄暗く闇に乗じて消えていく様を修司は敢えて見送り、身に纏う炎を更に高める。
『ま、待て！　お主、一体何をする気か!?』

「――――こんなものがあるから、こんな所があるから、桜ちゃんは、あの子は、辛い目にあってきたのか」
間桐桜は、笑っていた。衛宮士郎と出会った事で人並みに笑い、楽しそうに生きていた。きっと、これからもそうなのだろうと、修司は少し寂しく思いながらもそれを嬉しく思っていた。
好きな人には幸せになって欲しい。当たり前で、ありふれた願いを、桜自身も願っていた細やかな幸福を、この悍しい蟲の巣が悉く踏みにじり、奪っていった。
――――許せない。許せる訳がない。間桐臓硯、お前だけは、お前だけは……。
「もう、謝ったって許さねぇぞ。この、クソ野郎ォォォォッ!!」
修司が叫ぶ、凝縮された怒りの感情は魂のエネルギーとなって、体の内から炎が閃光となって溢れ、そして――――。
間桐の家は冬木の地図から完全に消滅した。

その42

――――修司が怒りの感情を爆発させ、間桐の家を冬木の地図から消した同時刻。セイバーとジャンヌはアインツベルンの跡地にて向き合っていた。

二人の間に流れる雰囲気の空気は最悪、ジャンヌが一言でも言葉を間違えれば即座にセイバーの剣が奮われる程の険悪な空気、一体どうすれば誤解を解けるのかジャンヌは思考を必死に巡らせていると。

「なっ！　今の光は⁉」

冬木から離れた郊外の森、其所からでも視認できる程の光の柱が天を貫き、二人の視界に刻み込まれる。

「今のは、まさか彼が⁉」

ジャンヌが協力者として選んだ白河修司、彼と組んで暫く時間が流れ、いい加減彼の起こす出来事に馴れてきたと思っていたが、どうやらまだ認識が甘かったようだ。

あれが別のサーヴァントの仕業という可能性もあるが、現在の時刻はまだ太陽が昇っている時間帯、人目も多く晒されているこの時間帯にてあんな派手に光の柱をブッパする魔術師はいない。となれば必然的に可能とする人間は限られており、ジャンヌの頭の中ではほぼ確定的に修司の仕業で間違いないとされていた。

修司の放つ力に驚愕するジャンヌとセイバー、首を横に振り、我に返ったセイバーは再び見えない剣を取ってジャンヌに突きつける。

「答えて貰おう。ルーラー、貴方はあの黄金のアーチャーと組んで一体何を企んでいるのです。彼を、シュウジを彼処まで鍛えたのは聖杯戦争に備え彼と共に私達を後から討つつもりだと？」

「それは違います！　彼は本当に聖杯戦争、ましてや魔術の事などまるっきり理解していなかった！　彼は正真正銘唯の一般人、魔術や神秘には最も遠い人間です！」

「では、あの力は何です。天を衝き穿つ程の力を発しておきながら唯

の人間？　裁定者ともあろう者が語るに落ちましたね」
　修司は正しく一般人である。桁違いの力を有し、並外れた精神力を兼ね備え、遂にこの瞬間に世界の理すら超え始め――故に、タイミングが悪すぎた。並外れた修司の力がセイバーの抱く疑惑により拍車が掛かってしまった。
　常識はずれた力、執行者すら一蹴する脅威的な身体能力、彼と手を取って聖杯戦争に挑むのが予想以上に頼もしく思えた。だが、今回の彼の力の発露はジャンヌから見ても度が過ぎている。これではセイバーが怪しく思うのも無理はない。
　英雄王というサーヴァントの中でも頂点に位置する者が１０年前から修司を拾い育てている。それが全て聖杯戦争に勝つための布石だとするならば――確かに、辻褄は合う。
　そこでジャンヌは気付く。何故セイバーがその事を知っている？　彼女とギルガメッシュは顔馴染みだった？　何故？　そこまで思考を巡らせたジャンヌは一つの可能性をこの時見いだした。
「――まさか、セイバー。貴女もなのですか？　前回に引き続き、今回も聖杯戦争に召喚を？」
「……」
　ルーラーからの問い掛けは沈黙によって返されたが、その沈黙が何よりも肯定している答えでもあった。
　セイバーが前回に続いて今回の聖杯戦争にも召喚されている。それも記憶まで引き継ぐというおまけ付きで。
　英雄王と修司の関係を知って此処まで憤っているのは彼女があの黄金の王を知っていたから、過去の因縁が今現在の状況を生み出しているのだと。
「――セイバー、貴方が何故前回に続いて今回まで召喚されたのかは問いません。ですがこれだけは言っておきます。彼の英雄王は聖杯に興味などありません。今の彼は一つの命としてこの世界に根付いています。修司君が彼といるのはその可能性を彼の王に見出だされたから、貴方が危惧する事は何もないのです」
「だが、その事を彼は知っているのか。あのアーチャーが前回の聖杯

戦争に生き残ったサーヴァントなのだと、シュウジからすればそれは許されない裏切り行為なのではないのですか」
「残念ながら、その事を追求する資格は貴女にはありません」
「っ！」
冷静に、しかしピシャリと断じるジャンヌにセイバーは目を見開いて黙り込む。確かにセイバーの言う通り修司にとって前回の――――あの大災害を生み出した前回の聖杯戦争に於ける参加者はその全てが敵と呼べる者達だろう。
彼等の戦いに巻き込まれ、多くの命が失われた。その原因とも言えるサーヴァントが自身を拾ってくれた英雄王なのだと、その事実を修司は未だ知る由がない。
だが、それは彼等の問題であって第三者が口を挟む事ではない。修司にとって彼の王は大事な恩人であり、仕えるべき偉大なる王だ。その関係性が変わるのだとしてもそれはジャンヌや他の外野が口を挟むべきではない。
特に、同じく前回の聖杯戦争の参加者であるセイバーがそれを口にするのは絶対に間違っている。確かに前回の戦いで敵対していた存在が存命していて修司という切り札を育ててたのなら警戒の一つも言えるだろう。
しかし忘れてはならない。修司が自身を拾ってくれた男がサーヴァントで、その事を話さなかった事が咎だと言うのなら、前回の聖杯戦争に引き続き召喚されたセイバーもまた同様の咎を背負っているのだと。
サーヴァントと言えど元は人間、英霊である以前に感情のある人なのだ。憤りもするだろうし、苛立ちや不安に思うこともあるだろう。
でも、だからこそジャンヌはセイバーの言葉に強く反論するのだ。セイバーが疑いを持つのも分かる。だが、だからと言って悪戯に二人の仲を裂くような真似は許されない。
いずれ、修司は真実に辿り着くだろう。１０年前に何が起きて、自分を拾い育んでくれた者が何者であるかを彼自身向き合う事になるだろう。

「私にも不十分だった所が合ったのは認めましょう。ごめんなさい。でもどうか修司君を、彼を信じてあげて欲しい。彼が聖杯戦争に挑んでいるのは彼の王の傀儡だからではない。彼が戦うのは彼自身が選んだ事なのです」

「――――」

自身の責を認め、その上で謝罪し、頭を下げるジャンヌにセイバーは何も言えなくなる。

修司はセイバーからみても誠実で、人の良い好感の持てる人間であることは理解できる。あの黄金のアーチャーと接触してどうやら疑心暗鬼に陥っていた様だ。

ジャンヌに理路整然にハッキリと返された事でセイバーは頭に昇った憤りを鎮め、冷静さを取り戻す。

「――――いえ、此方こそ平静さを失っていたようです。申し訳ない、確かに彼等二人の事は私から糾弾するべき事ではなかった。貴女の言うことが正しいのなら、あのアーチャーは今回の聖杯戦争には関わらないのでしょう」

「セイバー」

「ですが、あの黄金のアーチャーには気を付けてください。あの類いの男は親しい相手にも平然と絶望を与える。もし奴が何かしらの心変わりがあるものなら」

「その時は私が全力を以て彼を……修司君を守ります」

手にした旗を強く握り締め、誓うように口にするジャンヌにセイバーも満足したように頷いた。これでセイバーも自身の気持ちの蟠りに決着が着き、今頃心配しているだろうマスターたる士郎にどう謝ろうか頭を悩ませた時――――。

それは、前振りもなく現れた。

「っ！」

突如、セイバーの形相が凄まじい剣幕になったと同時、ジャンヌは彼女の風の力によって吹き飛ばされた。

「セイバー、いきなり何を……っ!?」

和解も成り、再び同盟相手として組んでいけるのだと安堵した矢先に襲われる衝撃。戸惑うも何とか体勢を整えたジャンヌがセイバーに抗議しようとするが……その言葉は喉から先へ出てくる事はなかった。

黒い泥、形状し難いナニか、形を持った影、昨夜アインツベルンの城にて異形のランサーと共に現れた影がセイバーに覆い被さっていた。

「あ、が、あぁぁぁっ！」

「セイバー！　くっ、令呪を以て命じます。影の縛りを解き放ち今すぐ主の下へ戻りなさい！」

影の侵食に苦悶を晒すセイバー、ジャンヌはセイバーを助けようと令呪を用いて脱出を試みるが、セイバーが影の触手から逃げられる素振りはない。魔力の結晶体とも言える令呪の力すら抗えない影の力、それは奇しくもジャンヌに影の正体を確信させる事になった。

「セイバー、脱出を！　貴女の魔力放出ならば！」

「それは……難しいですね。既に我が身は、この影に半分以上……汚染されている。悔しいですが、私は、ここまでの様です」

影の力はサーヴァントに対して絶大、セイバーは自身の魔力でできた肉体を汚染される激痛に苛まされながらも、それでも強がって笑みを浮かべる。自分本意な考えに先走り、最悪の展開を招いた自身への浅はかな行動を嘲笑するように。

「ルーラー、この影が完全に私を取り込むまでの合間、早く戻り、急いでこの事を伝えてください。今、聖杯戦争の状況は混迷を極めつつある。影の正体に検討が付いている貴女ならば……きっと、この状況を打破出来る筈です」

「セイバー！」

「最後に……伝言を。シュウジと、我がマスターに謝罪を、私は、貴方達と共にいるべき者では……なかった。私は、卑怯な臆病者、だったと」

その言葉はセイバーの自身の悔恨の台詞だった。修司と士郎に、真実を話すのが怖かった自分への浅ましき捨て台詞を口にして、最優の

サーヴァントは影に呑み込まれていった。
抵抗するセイバーを完全に呑み込もうと、肥大化しながら蠢く影、その様を見せ付けられながらも、ジャンヌはこの事を伝えるべく、沸き上がる感情を圧し殺しながらアインツベルンの城の跡地を後にした。

◇

「――――さ、流石に少し……疲れたな」
沸き上がる感情を爆発させ、命を玩具の如く消費していた魔術師の魔窟を跡形もなく消失させた修司は額に小さくない玉粒の汗を流し、肩で息をしながら辺りを見渡した。
薄暗く、死の臭いで満たされていた蟲蔵は跡形もなく消し飛び、お化け屋敷と揶揄されてきた間桐の館も同様に消し飛んだ。後に残されたのは間桐の土地を丸々覆う程の巨大なクレーター、地下深く抉られた地表は否応なしに明日の朝刊の一面を飾ることになるだろう。
「やり過ぎた……とは思わないな。これで慎二や桜ちゃんの気持ちが少しでも晴れればいいんだけど」
間桐桜が１０年受けてきた虐待、その表現すらも生温い過酷な体験を鑑みれば、間桐のこの結末は当然とも言えた。己の欲望に他者を巻き込み、数多の悲劇を生み出してきた怪物の家、それを跡形もなく消滅できたのは良いが、これで全てが終わった訳ではない。
まだ、修司には倒すべき相手、戦うべき相手がいる。あの異形のランサーの姿も見えない。修司の一撃で消滅したのか、確認できる術は今はない。
「兎も角、一度ここから離れよう。流石に騒ぎになるだろうし、早いと

ころ慎二に合流しないと」
そう言って修司は先に行っているだろう慎二の後を追おうとするが……足元がふらつき膝を着いてしまう。度重なる激闘と死闘、人間としての限界を超えた力の発現。本来なら何年も積み重ねて発現される力を僅か数日の内に到達した事により修司の肉体は疲労困憊の状態に陥っていた。
「くそ、今更体が限界に気付きやがった。もうちっと待ってくれよ」
限界を迎えた肉体に鞭を打ち、それでも立ち上がろうとする修司。そんなときふと頭上から聞き慣れた女の声が聞こえてきた。
「――本当に、ただの人間なのですか？　貴方は」
見上げると、其処には驚愕と呆れ、他にも様々な感情を秘めたバゼットがいた。

◇

「ふはははっ！　修司め、日はまだ沈んでないと言うのにあんなド派手な花火をあげおって！　全く、我が臣下ながらせっかちな奴よ！」
冬木の街を一望出来る教会、深山町から離れた位置からでも確認できた光は英雄王の笑いのツボをこれでもかと刺激した。天を穿つ光、次いでドーム状に広がる光、何れも修司が命の輝きを爆発させた事による現象なのだと、黄金の王は一目で見抜いた。
「確かに我はお前を鍛えた。理不尽を許さぬと断じる貴様を、抗う為に可能な限り鍛え上げた。だが、よもや此処までとはな。未来を見通せなくなったとは言え、俺の見識の眼も衰えたものよ」

その表情には呆れと驚愕、そして感嘆と喜びの色が混じり合っている。理不尽を許さないと語る少年を理不尽に抗う為に鍛え上げたのはいいが、この成長具合はちょっと予想出来なかった。
「――認めよう。貴様の成長速度は我の予想を上回った。誇るが良い、お前はこの英雄王の上をいったのだ。……いや、〝大元の貴様〟を考えれば、あの程度の進化は当然と言えるか」
その口元を歪ませ、グラスに注がれていた朱色のワインを一気に飲み干す。英雄王からすれば雑多な味だが、あの光を前にしてはどんな安酒も至高の品の様に感じる。
あの光は命の――可能性の光そのものだ。魔術師でもないただの人間が根源に最も近い領域に足を踏入れたのだ。
「――いや、違うな。アレは根源とは異なる似て非なるモノ、現存する理を己の理を以て凌駕する。根源が原初への回帰ならばアレは頂天への突破という事か」
修司が行った現象を英雄王がその眼で分析し、独自の回答を得ると、その笑みはより深くなっていく。そう、あれこそが人間の本懐、どこまでも貪欲で先へとその歩みを進める者。
前進する愚者。それは人類の裁定者である英雄王が最も注目し、そして讃えるモノである。
「見ているか神々よ。アレが、あの男が何れ貴様等をも超える人間よ。今の内に目に焼き付けておくといい」
愉悦。何処までも成長し、足掻き、何処までも進化を続ける己の臣下に黄金の王は満足そうに眺めていた。
――そして。
「フハハ、フハハハ、何だアレは。あんなものどうやって誤魔化せと言うのだ。ガス漏れ？　ガス爆発？　いや無理だ。最早ガス会社程度の理由で収まる案件ではない。どうしよう。いやホントどうしよう。いっその事隕石が降ってきたとかそう言う言い訳の方がまだ通るんじゃないだろうか」
隣でアタフタと事後処理について頭を悩ませている言峰、その様子もまた愉悦の一環となるのだった。

「そうだ。ガスの対消滅という事で押し進めてみてはどうか？」
「意味が分からぬわたわけ」

その43

「な、何なのよあの光は!?」
家から飛び出す士郎とそれを追い掛ける遠坂、二人が衛宮邸を後にするのと、光が空を突き上げるのはほぼ同時だった。
それも桜がサーヴァントと共に籠っていると思われた間桐邸から、大規模な魔術行使による光なのではないかと分析するも、次いでそれ以上の光が轟音と共に冬木の街に轟いていく。
魔術師にある暗黙のルール、神秘の秘匿。それを真っ向から全力でぶち破っていく誰かが間桐の家にいる。桜か、臓硯か、或いはライダーの宝具か、何れにせよ碌な事が起きていない事は確かだ。
急いで確認すべきだろう。士郎も立ち止まり間桐邸へ振り向いている事から、彼にも迷いがある筈だ。間桐邸かセイバーの後を追うか、二手に別れるかどちらか一方に決めるか、この選択が後の戦いに響く分水嶺に遠坂は思えた。
「あ、ぐぁっ!」
するとその時、士郎の方から苦悶の声が聞こえてきた。何かと思い駆け寄ってみると、彼の手の甲に刻まれた令呪が消え去っていた。
士郎の令呪にはまだ一画残されていた筈、なのに使用もされずに消失された事に遠坂は言葉にできない嫌な予感を覚えた。
セイバーに何かあった？　聖杯戦争の中でも飛びきり優秀な部類に入る最優の英霊に何かしら不具合が発生した。それも士郎の令呪が消されるほどの何かが……。
「衛宮君、一旦家に戻りましょう」
「でも、でもセイバーが!」
「セイバーの事に関しては恐らくルーラーが何か知ってる筈よ。こう言ってはなんだけど、今の冬木は前代未聞の事態に直面しようとしている。先の光の事もそう、今ここで焦って動けばきっと取り返しの付かない事になるわ」
遠坂は士郎を説得し、衛宮邸へ戻ることを促す。今、聖杯戦争の状

況は過去に類を見ないほど混迷な事態に差し迫っている気がする。此処で焦って行動すればきっとより取り返しの付かない事態に陥る。遠坂の魔術師としての本能が彼女にそう警告してやまない。

士郎は士郎で一緒に戦うと約束した相手を見捨てるような真似はしたくないと、遠坂の提案に素直に頷く事が出来なかった。自分とセイバーの繋がりが途絶えた今、セイバーが現在どうなっているか早いところ確認するべきだと気持ちが逸ってしまう。

こうしている最中も事態は良くも悪くも加速して動いているかもしれない。速いところ方針を決めなくてはならない……そんな時だ。

「お、お前ら、こんな所に、いたのかよ」

「あ、あんた……」

「慎二!?」

背後から聞き慣れた声に振り向けばシドゥリを背負った慎二が息も絶え絶えに士郎達に歩み寄っていた。その様子からどうやら彼は間桐邸の方角からやって来たらしい。修司の所で保護されている筈の彼がどうして此処にいるのか、戸惑う二人が訊ねようとする前に慎二は片手を挙げて二人を制する。

「聞きたいことも言いたいことも取り敢えず後回しにしてくれ、今の僕にはそれすら堪えるんだ。今は兎に角衛宮の家に向かうぞ。修司の奴も直に来る」

「な、なによそれ、どういう……」

「説明は後だって言ったろ。頼むからこれ以上僕を酷使しないでくれ！　唯でさえ色々限界なんだ！　魔術師ならそれくらい察しろよ！」

当て付けとも呼べる慎二の言い方に苛立ちを覚えなくも無いが、確かに現在の状況ではそれが正しい選択だろう。

「――衛宮君」

「――分かった」

士郎の肩に手を置いて諭す遠坂、数秒の間の後に返された返事は何処までも苦しく、重たそうだった。

そこから先は迅速だった。慎二から渡されたシドゥリを士郎が担

ぎ、遠坂を先頭に来た道を戻っていく。道中、間桐邸で起きた騒ぎを聞きつけ多くの住民が外へ出て、何が起きたのか口コミで士郎たちの所へ届いてきた。
何でも間桐の家は完全に消失し、その家主である臓硯も孫娘の桜も行方が分からなくなっているだとか、情報が錯綜としている為に真偽は定かではないが、あの規模からしてその情報は恐らく真実なのだろう。
間桐が何をやらかしたのかは分からないが、それを詳しく知るには慎二を無事に衛宮邸へ送り届ける必要がある。この男は全てを知っていると確信した遠坂が一番乗りで衛宮邸の門を潜ると。
「おや、貴方は遠坂凛。何故冬木の管理者が此処に？」
修司を肩に担いだ見知らぬスーツ姿の女と。
「良かった。皆さん無事でしたか」
私服姿のジャンヌ＝ダルクが待っていて。
「やっと戻ってきたー」
呑気に玄関先で座り込む雪のような少女が其処にいた。

◇

「――――んぅ？」
目を覚ませば、其処は見慣れぬ天井。ボーッと其処を見つめること数秒、修司は寝惚けた意識を覚醒させながら起き上がり、此処が何処なのか辺りを見渡す。
渡り廊下の向こうに見える倉と道場、それを目の当たりにした事で修司が自分が今どうして此処にいるのか思い出す。
「そうか……あのあとバゼットさんに会って確か眠っちまったんだ」
既に陽は傾き、外は暗くなり始めている。あれから時間はどのくら

い経過したのか、未だ覚めきれない頭を軽く揺らし体の調子を整えながら立ち上がると、隣の襖から人の気配がした。
誰かと思い襖を開けて見ると、其処には横になっているシドゥリの姿があった。布団越しに胸元が上下に揺れている事からどうやら無事のようだ。何事もない彼女の状態に安堵しながら修司は再び襖を閉めて寝室を後にする。
そして、修司はそのまま居間へと向かう。自分が此処にいて、シドゥリもまた此処にいるという事は恐らく自分は無事に士郎達と合流したのだろう。
「――来たわね」
「修司、大丈夫か？」
そして居間へ辿り着くと予想通り遠坂と士郎たちが机を囲んで待ち構えていた。慎二とバゼットも同席している事から大方の話の流れは聞いたのだろう。
「じゃあ、改めて説明して頂戴白河君。一体彼処で何が起きたのかを」
一同を代表して訊ねてくる遠坂に修司もまた同意するように頷いた。此処から先は魔術師の知識も必要となってくる。間桐邸で起きた一連の出来事、臓硯が口にした言葉の数々、頭の方も完全に覚醒し、事細かに思い出した修司は事の経緯の全てを皆に説明した。
――それから少し、時間にして３０分に及ぶ説明をした後、返ってきたのは重苦しい空気だった。
特に遠坂、士郎の二人は桜が１０年前から臓硯に酷い目に合わされていた事と聖杯の門に成るかもしれないと聞いてから一言も口も開かず俯いてしまっている。
彼女が蟲に犯されていた事は流石に直接口にはしなかったが……それでも、魔道に詳しい遠坂には勘づかれてしまった様で察した瞬間の彼女の表情は怒っているような、泣いているような顔をしていた。
「――どうやら、事態は思っていたよりも深刻の様だが、幸いな事に手段はまだ残されている様ですね」
重い沈黙を破り、ハッキリとした口調で切り出したのはスーツ姿の

バゼットだった。
「バゼットさん、手段って？」
　バゼットもまた遠坂と同じ魔術師、魔術に秀でた知識を持つ彼女ならば何か良い案が有るのではないか、士郎は期待混じりの眼差しで彼女を見ると。
「簡単です。間桐桜を殺せばいい」
「なっ!?」
　その目を驚愕と絶望に大きく見開かせる。
「な、なんで桜を殺さなきゃならないんだよ！」
「彼女は聖杯と繋がり門と成ろうとしている。その門から溢れ出る厄災は軈て人界に害を及ぼす。神秘の秘匿を義務付けられる魔術師から見ても、一般市民から見てもこの選択が最善かと思われますが？」
　桜が聖杯の門と完全に成ってしまえば其処から溢れる災いが無関係の人間を巻き込んでしまう。そして、桜がそうなるのを許せば恐らくそれは１０年前の大災害の再来を意味している。
　それを防ぐには桜を殺すしか方法はない。遠坂を見ても彼女の目には反対の意思はない、イリヤを見れば彼女もまたどうしようもないという風に首を横に振るだけだ。
　桜を殺す。サーヴァントのマスターだからではなく、必要だから、それが冬木の人々を救う唯一の手段だからと士郎の内で反芻していく。
　いつか、切嗣が言っていた事を思い出す。誰かを助けるという事は、誰かを助けないという事なのだと。
（そうなのか、切嗣。これがアンタが諦めた正義の味方の道なのか）
　でも、それでも士郎には正義の味方になるしかない。それが衛宮士郎に残された最後の願望なのだから。より多くの人々を救う為、より多くの人の幸福の為に衛宮士郎はそうなるべきと定めてきた。
　故に、彼もそれに従うしかない。そう思っていたのに――――。
「いや、その理屈はおかしいだろ」
　向かい側に腕を組んで座る男は何処までも自分に正直だった。
「桜ちゃんを殺す？　バカ言ってんじゃないよ。何で事態を収集させ

る為にあの子を殺す必要がある」
「ですが修司、これ以外手立てはもう……」
「いや、普通にあるだろ。桜ちゃんに繋がろうとしているのが聖杯なら、その大元を叩けば済む話だろ？　何を悩む必要がある」
　寧ろ、何故その可能性を考慮しないのか、心底呆れている修司に一同が唖然となる。
「そっか、まぁそりゃそうだよね。冬木の地に眠る大聖杯、それを完全に破壊しちゃえば聖杯戦争は強制的に終幕しちゃうものね」
　アッサリと、桜の問題解決を示唆して見せた修司に士郎は安堵してその場に座り込む。心なしか遠坂の方も表情が少し明るくなっている様に見える。
「ですが、状況が差し迫っているのも確かです。桜さんが完全に聖杯と一体化する前に阻止しないと、事態はそれこそ最悪の展開となるでしょう。アサシン、セイバーの二騎……いえ、前のアサシンを含めれば三体のサーヴァントが還っている今、大聖杯には結構な魔力が注がれている筈です」
「倒されたサーヴァントが魔力として聖杯に注がれる、か……　１０年前の大災害もそれが原因なのかね」
「因みに白河君、例のランサーは？　貴方から見て倒せたと思う？」
「いや、多分倒せてはいないな。手応えはあったけど……あの様子だと多分まだ生きていると思う」
「なら、今後私達の行動をソイツが邪魔しに来る可能性があるわね。なら、下手に分散せず一ヶ所ずつ回るしかないか」
「遠坂、何か考えがあるのか？」
　それから遠坂は簡潔にだが大聖杯の隠された場所の心当たりを話し始めた。冬木は霊脈にも優れ、大規模な魔術の術式を行えるだけの潤沢な資源があると、そしてその霊脈には大きな要点が三つあり、その内二つのどちらかが大聖杯の仕込まれた土地なのだと遠坂は推測する。
「もう一度纏めると、桜は大聖杯の器――所謂、門というものにしようと臓硯は画策したわけね。でも其処にいる白河君によってその計画

を途中で頓挫されそうになる。でも桜が生きている以上、桜に施された間桐の術式がドンドン桜を侵食していく。それを防ぐには桜を殺すか、桜に繋がろうとする大聖杯を破壊するしかない。ここまではいいわね？」
「何か急に仕切りだしたぞコイツ」
「シッ、慎二は取り敢えず黙っとけ」
桜を殺さずに済む。その可能性を見出だした事で遠坂の頭脳がフル回転していく、どうすれば桜を救えるのか、それだけに集中して思考する彼女を頼もしく思いながら士郎は胸を撫で下ろす。
「よかったな、士郎」
「修司……あぁ、本当にそう思うよ」
桜を殺すと聞いて一時はその心を鉄のように固くした士郎、だが桜を助ける手立てがあると聞いて今は酷く安堵している自分がいることにも気付いた。
衛宮士郎は正義の味方になる。その結末は変わらないかもしれない、しかしこの時士郎は不特定多数の誰かを救う正義の味方ではなく、誰か一人を死ぬ気で守る。そんな正義の味方の在り方も在るんじゃないかと、人知れず考えていた。
士郎にとっても間桐桜は特別な人間、だからこそ修司はこの男になら桜を幸せに出来ると思えたのだ。
「あーあ、その気になったら幾らでもいい女捕まえそうなのに何でよりにもよってウチの愚妹を選ぶかなぁ、コイツらは」
「本当よねぇ。シロウももっといい女探せば良いのに……」
幼女とワカメが呆れた様に見守るなか、話し合いは続く。

◇

（――――私は、終わったのか）

何もかもが溶けていく中、剣の英霊は想う。自分は結局、何の為に聖杯を求めたのかを。

滅び行くブリテンの未来を変える為、自分ではなくもっと相応しい人間を王位に就かせる為、セイバー――――アルトリア＝ペンドラゴンは戦い続けた。

しかし、その果てに待っているのはどのみち滅びしか待っていなかった。自身の願いを叶えようとして戦った戦争は全てを台無しにする最悪の結末しか待っていなかったのだ。

自分の戦いの所為で多くの人間を傷付け、殺め、その人生を狂わせた。自分の願いは果たしてそんな罪深い行いの果てに叶える程、高尚なものなのか。

今でも、彼の怒りに満ちた顔が脳裏に浮かぶ。聖杯戦争を許さないと、自分から全てを奪った聖杯を許さないと、それを狙い争っている奴等も同類だと、糾弾してくる彼の姿を幻視する。

ならば、やはりこの結末は妥当なのだろう。そう思いこのまま沈んで消えようとするセイバーに……。

『なんだ。意外と潔いのだな』

ふと、声が聞こえた。聞き慣れた様で初めて耳にするような……そう、まるで自分自身の声を聞いているかのような感覚。

まさかと思い振り返った先に待つのは……。

『ならば、此処から先は私が出るとしよう、聖杯も、貴様が怯える小僧も、私が纏めて消してやろう』

冷たく微笑む、黒く冷たい自分自身だった。

その４４

「――――私達の方針は冬木の聖杯、即ち大聖杯の破壊という事で話を進めるけど、ぶっちゃけその辺りはどうなの？」
桜を殺すのではなく、聖杯を破壊するという方向で話を進め始めた衛宮邸での円卓会議（居間のテーブルは四角）その際に行き着いた最初の難関はその聖杯が本当に破壊できるかについてだった。
聖杯という存在は前回からの戦争によって確認されている。だが、それはあくまでアインツベルンが用意した別枠の聖杯、聖杯戦争の根幹を為している大聖杯はその規模も大きさも依然として不明なままだ。
ただ、大聖杯は冬木の霊脈に密接に繋がっていると思われる事から、間違っても片手に収まる程度の規模でないことは確実の筈。過分な魔力を吸い上げて顕れる大聖杯はまさに一つの極大な魔力炉心、生半可な魔術攻撃ではびくともしないだろうというのは、予想出来た。
「因みに、私のアーチャーでも難しいみたいよ。実物を見ない限り何とも言えないけど、私の方は宛に出来ないと思って頂戴」
「私のバーサーカーも……かなぁ。バーサーカーは力こそ他のサーヴァントより遥かに強いけど、大聖杯を破壊するだけの一撃ってなると、ちょっと難しいかも」
どちらかと言えばバーサーカーはその力こそが宝具みたいなもの、狂戦士としてではなく、弓兵として召喚されたなら或いは可能性があっただろうが。
「こうなってくると、セイバーが落ちたのが悔やまれるわね。彼女がいれば大聖杯だろうと一撃で粉砕出来ただろうに」
「セイバーって確か士郎のサーヴァントだったよな？　彼女って其処までの力があったのか？」
士郎とセイバーとは同盟関係ではあったが、実際に戦っている所は見たことがない。セイバーというから剣士であることは解るが、果た

してあの細身の女性に其処までの力があるのだろうか。
疑問に首を傾げる修司にジャンヌが遠坂に代わり説明する。
「セイバー……彼女の真名はアルトリア＝ペンドラゴン。嘗てブリテンの王、アーサー王その人です」
「――――マジで？」
明かされるビッグネームに修司は目を丸くして再度訊ねる。サーヴァントとは過去に英霊として名を世界に刻まれた英傑達、確かに彼の騎士王が召喚される可能性も零では無いだろうが、まさか此処でその名前を耳にするとは思わなかった。
「いや、アーサー王って確か男だった筈じゃ……」
「当時のブリテンには超一流の魔術師がいるとされています。夢魔と人の混血児マーリン、彼の大魔術師の力ならば性別を偽る位造作もないかと」
ジャンヌの説明を補足するようにバゼットも口を挟む。まさかあの騎士王が、ゲームやアニメ等で知られるイギリス最大の偉人がまさかの女性だった事実、世の歴史学者が知れば卒倒するであろう真実に修司は困惑しながらも納得した。
アーサー王伝説に於ける最大の宝具、聖剣エクスカリバー。成る程、確かにあの聖剣ならば大聖杯を破壊するに足る力を有していると言われても納得してしまう。
だが、そんな最大火力の戦力はもういない。神代の魔術師であるキャスターなら次点で候補に上がるのだが……。
「私の令呪は既に一度彼女に使用しています。加えて彼女は稀代の魔術師、迂闊に此方の手札を切るのは悪手かと思いますが……いよいよとなったら」
「令呪で何とかする……か、具体性が欠けてるけど確かにあの魔術師にはそれくらいしかできないわね」
神代の魔術師、キャスター。その真名はコルキスの王女メディア。柳堂寺に居城を構え冬木の人々から魔力を吸い上げてきた慎重さと実力を兼ね備えた一流の魔術師。
彼女の有する火力は実際に目にしたジャンヌをして舌を巻くほど、

あれだけの力なら大聖杯を破壊するに足る火力を生み出せるのではないかと思えるが……同時に、不安要素でもあった。
キャスターは未だに姿を眩ましている。様子見を決め込んでいるのか、それとも何か企んでいるのか、嵐の前の静けさのような沈黙を保っている事に不気味さを感じる。
あれだけ慎重な彼女だ。此方が隙を見せた所で一気に逆転の不意打ちを狙ってきそうな気さえする。
「まぁ、キャスター相手ならバーサーカーで充分だけどね」
「ん？　どういう事だ？」
「バーサーカーの真名はヘラクレス。メディアとは面識があるのよ」
サラリとバーサーカーの真名を明かす遠坂に修司の目は再び丸くなる。
「アーサー王に魔女っ娘メディア、佐々木小次郎に更にはヘラクレスとか……マジか」
「その内の一人を貴方は倒したけどね」
聖杯戦争という戦いの凄まじさを改めて実感した修司は頭を抑えて机に伏せる。過去の偉人達、その中でも有名処が惜し気もなく登場していた事実に、修司は自分が如何にヤバイ相手と戦ってきたのかを改めて思い知る。
尤も、そんな過去の英霊……即ちサーヴァントを現代の人間が打ち倒している事は遠坂達魔術師にとって充分信じられない話ではあるが。
「てか、ギリシャの大英雄を一人の小僧殺すために使うかね。ええ？　そこのロリッ子」
「テヘペロ」
ジト目で恨めしそうに睨むも当の本人であるイリヤは全く堪えた様子なくしている。これが魔術師かとゲンナリした所で修司はふと思った事をジャンヌに訊ねる。
「因みに、桜のライダーの真名は分かるのか？」
「彼女はメドゥーサ。かの有名なギリシャの怪物、ゴルゴーン姉妹の一人です」

ギリシャに於けるヘラクレスやコルキスの王女メディア、それに加えてメドゥーサまでもが聖杯戦争に参加していた事実。
ギリシャ勢が多くね？　そう疑問に思うよりも前に修司は再び頭を抱え……。
「嘘だろ。よりにもよって薄幸少女メドゥーサちゃんかよ……」
「は、薄幸少女メドゥーサちゃん？」
「し、修司君？　薄幸少女メドゥーサちゃんとは？」
「ん？　魔女っ娘メディアちゃんの次に放送された深夜枠のアニメだよ。あのアニメも王様……俺の保護者が関わっていたアニメでさ、姉達にイジられたり女神アテナに苛められたりしながらも健気に頑張る日常系アニメの主人公なんだよ」
「懐かしいなぁ。僕も昔桜と見てたっけ」
「俺も、藤ねえに巻き込まれた形で見てたけど深夜枠なのになんか惹き付けられるんだよなぁ」
「でも、あのアニメでは小さな女の子だったじゃん。何であんな大人な女性になってるんだ？」
「そりゃ、史実とでは実際には異なる部分もあるんだろうよ。俺もアーサー王が女の子とは思わなかったし」
「そう言う意味では期待外れだったね。せめてあのアニメ位可愛気があれば、僕としても気分よかったのにさ」
修司の呟きから始まった当時のアニメの話題、よもやメディアに続きメドゥーサまでもがあの英雄王の毒牙に掛かっていたとは、色んな意味で酷い黄金の王の所業にジャンヌは目眩を覚えた。
「はいはい男共のバカ話は置いといて話を進めるわよ。現状私達は戦力こそ揃ってはいるけど何れも決定打に欠けている状態よ。大聖杯の破壊に足る手段、他に案のある者はいないかしら」
遠坂はそう言って辺りを見渡すが、やはり誰も声を上げるものはいなかった。当然だ。長い間冬木の霊脈に巣食い、魔力を貯めてきた大聖杯は謂わば大規模な魔力炉心、それを完全に破壊するとなると生半可な火力では心許ない。
誰もが口を閉ざす中、修司だけは心当たりがあった。大聖杯を破壊

して余りある力――――即ち、あの魔神の存在を。
（でも、使って良いのか。あの魔神を喚んで果たして俺は無事でいられるのか？）
思い出すのは夢で見たあの光景、星よりも強大で星雲すら呑み込み、永遠に闘争と破壊を繰り返す埒外の化生。あの時夢で見た光景が自分の待つ末路だと思うと、握り締めた手が震えてしまう。
しかし……。
（違うよな。今考えるべき事はそこじゃないよな）
今、この瞬間に誰よりも怖い思いをしているのは間桐桜に他ならない。彼女を助ける為なら今は自分に対するリスクは度外視するべきだ。
彼女を助ける。それが今の自分の望みなら、それだけに気持ちを割くべきだ。
気持ちは固まった。沈黙するこの場の空気を払拭しようと修司が手を上げようとした時――――。
「あの、大聖杯の破壊は私に任せていただけませんか？」
修司の言葉を遮るように先にジャンヌの声が沈黙を破る。挙手をして言い切る彼女にその場の全員の視線が集まる。
「え？　ジャンヌ＝ダルクって対軍宝具レベルの宝具って……そんな由来貴女にあったかしら？」
「ていうか、貴女の宝具って護り特化じゃなかった？」
英霊――――サーヴァントには基本的に一体に付き宝具は一つとされる。生前に於ける偉業や伝承を宝具として昇華させる事によって有することを許される。
だが、当然ながら由来とされるモノが一つでない場合その場かぎりではない。偉業とされるモノが複数あるのならば、有する宝具が複数であることも有り得る。
だが、果たしてジャンヌ＝ダルクにそれだけの宝具が、他にもあっただろうか？　本人を前にして失礼ながらも思い付かない事に遠坂とイリヤはウンウンと頭を唸らせていると……。
「詳しいことは話せませんが、大聖杯は私が責任を以て破壊します。

どうか、今は私を信じてください」
「……ルーラーの貴女が其処まで言うなんてね。分かったわ。取り敢えず大聖杯の破壊は貴女に任せる事にするわ。イリヤもそれで良いわね？」
「私はそれで良いけど……お兄ちゃんはそれでいいの？」
「――え？　あ、俺？」
　まるで自分の代わりの様に切り出したジャンヌに、修司は先程の決意が霧散していくのを感じた。何故此処で彼女が出るのか、疑問に思う修司だが此方に顔を向けて微笑む彼女に修司はまさかと思った。

　もしかして、彼女は自分に……あの魔神について何か知っているのではないだろうか。自分とあの蒼い魔神との関係に何かしら心当たりがあるから、だから自分の代わりに大聖杯を破壊すると言い出したのではないか？
　だとするならば彼女を止めるべきだ。彼女が有する二つ目の宝具が何なのかは定かではないが、大聖杯を破壊するにはそれだけの魔力の確保が必要になる筈だ。
　これ迄の短い付き合いではあるが、修司は目の前の女の子がどれだけ意志が強く、優しいのかを理解している。もしその宝具が何かしら自分を犠牲にするモノだとしても、構わず使いきる覚悟が彼女にはあることも修司は知っている。
「私なら大丈夫ですよ。修司君、貴方は貴方にしか出来ないことを成し遂げて下さい」
　けれど、慈愛の笑みを浮かべる彼女に修司は何も言えなくなった。間桐桜を助けたいのなら、それだけに集中し、やり遂げて見せろ。微笑みの裏でそう強く言ってくるジャンヌに修司は彼女を引き留める言葉を完全に失ってしまった。
　そうして話し合いは続き、作戦の内容が固まり始めた頃、遠坂の背後に紅い弓兵がその姿を現した。
「作戦立案の進捗はどうかな？」
「アーチャー、ごめんなさい。もう少し煮詰めておきたいの。もう少

し待ってくれるかしら？」
「いや、此方も急かすつもりはない。万全を期すのは戦場に携わるものなら当然の事だからな。しかし、一つ解せない事がある。その作戦を立てるのに何故この家で行う必要があるのかな？」
　何気なく言い放つアーチャーの一言に場の空気は一気に凍り付く、何故今になってそんな事を言うのか、まるで士郎を敵視したアーチャーの物言いに修司はふと違和感を覚えた。
「――――どういう意味だ？　言いたい事があるならハッキリと言ったらどうだ」
「なに、私からの細やかな気遣いのつもりだったが、どうやらお気に召さなかった様だ。ならば言わせて貰おう。聖杯戦争から降りろ衛宮士郎、ここから先の戦いで貴様が役に立つ事は何一つありはしない」
「んだとっ!?」
「事実だ。現に貴様はこの場にいる誰よりも脆弱で、誰よりも何も出来ていない。吼えることしか出来ない貴様は足手まといになる前に降りろと、そう言っているのだ」
　ハッキリとお前は邪魔だと言い放つアーチャーに士郎は何も言えなくなった。目を逸らしていた現実を前に士郎の敵愾心はドンドン萎んでいく。
「ちょ、ちょっとアーチャー。いきなり何を言ってんのよ！」
「これでも、其処の小僧や皆を考えての事なんだがね。これから我々が行うのは失敗の許されない戦い、即ち決戦が待っている。戦う術もなければ自衛の手段もない、相手からすれば的でしかない者を連れていってもデメリットしかないだろう」
「そんな事、あるもんか！　俺にだって何か一つ位出来る事が……」
「では聞こう。貴様に遠坂凛やイリヤスフィール並の魔術の知識はあるか？　其処にいる執行者や白河修司の様な実力がお前にはあるか」
「っ！」
「無いだろう？　聖杯戦争が始まるまで貴様がしていた事は魔術の基礎にすら満たない戯れでしかない。執行者の彼女から聞いただろう。貴様が呑気にしている間、白河修司は世界中を巡り死徒を斃して回っ

ていたと」
（え、使徒？　俺、いつの間に人類補完計画に参加してたの？）
（多分、違うと思うぞ）
　後ろでこそこそ言っている二人を無視して弓兵は続ける。
「今の貴様に出来る事はなんだ？　むざむざ人質になる事か？　戦場でも救助の場でも一番被害を増やすのは何も出来ないのに出来る気になっている輩だ。そんなものは正義の味方ですらない」
「っ!?」
　それは士郎が切嗣と約束し、唯一己に残された願望、正義の味方。そう在りたいと願う士郎にとってアーチャーの言葉は死刑宣告にも聞こえた。
　そんな筈はない。と、口にしたかった。こんな自分でも、魔術師としても半人前以前の自分だけど、それでも出来る事はある筈だと吼えたかった。
　だけど、アーチャーの言う通りこれ迄の自分は何も出来なかった。ランサーに抵抗虚しく殺され、バーサーカーには為す術なく胴体を切り裂かれ、キャスターには抵抗すら出来ず人質に成りかけた。
　同盟相手である修司とジャンヌに多大な迷惑を掛けてばかりだ。自衛の為にセイバーに剣の稽古を付けて貰ったりしたが、それを見せる場面も結局今まで無かった。
　もう、自分には出来る事は無いのか。自分では正義の味方に成り得ない、唯一自分に残った願望も否定され、力なく項垂れる士郎に誰も声を掛けることは出来ず……。
「いや、普通にあるだろ」
　それでも、白河修司は見捨てない。魔術も碌に扱えず力もなく、無力と断じられた士郎を修司は違うと否定する。その一言にアーチャーの視線が修司へと向けられ、その目には呆れと苛立ちの色が濃く滲み出ていた。
「――――正気か？　この期に及んで、この小僧に出来る事があると？
　無力な輩がいた所で足手まといにしかならないと何故分からない」
「確かに人を助けるにはそれなりの知識と力は必要だ。でもな、人を

救う事に関して言えば力の有無は関係ないんだぜ」
「――なに？」
人を救うのに力はいらない。そう語る修司にアーチャーは目を見開き、対して修司は確信を得た様子で不敵に笑っていた。
そう、人を救うのに力の有無は関係ない。何故なら白河修司自身がその事を強く実感しているからだ。祖母を亡くした時、喪った悲しみに沈んでいた嘗ての自分を救い出してくれたのは他ならぬ当時の桜だったのだから……。
桜自身、そこまで考えてはいなかったのだろう。当然だ。まだ五才にも満たない幼子の子供にそこまで考えが回る訳がない。当時の彼女が修司に近付いたのは何処までも純粋な好奇心とお節介、ただそれだけなのだから。
けれど、悲しみと苛立ちで失意のドン底にいた修司を救ったのはそんな桜の心の優しさに触れたから、修司は悲しみから立ち上がる事が出来た。
１０年前の大災害で両親を喪った時もそうだ。両親を亡くした絶望にあの黄金の王は半ば無理矢理に修司を立ち直らせる事が出来た。
『泣いてもいい、喚いてもいい、ただ立ち止まることだけはするな。それは貴様だけでなく貴様を生かした父と母の生き様を汚す所業と知れ』
当時、両親を喪ったばかりの子供に黄金の王はそう言い放った。とても厳しく、それでいて熱い叱咤激励の言葉、修司という人間を想っての言葉に子供ながら理解し、そして再び立ち上がった。
救うと言うのは心の受け取り方、その人の心にどれだけ向き合えるかが鍵となる。そういう意味では間桐桜を救うのに衛宮士郎という存在は必要不可欠と言えるだろう。
けれど、それは暗に自分では桜を救えない事の裏返し。どれだけ力を付けても自分では桜を助ける事が出来ても救う事は出来ないという修司の確信でもあった。
「まぁ尤も、桜ちゃんを救うのに命懸けな事は変わらないがな。でも、やり遂げてみせるんだろ？」

そして修司は士郎の後ろへと回りその背中を叩く。強く、重たい衝撃。噎せたくなる衝撃に必死に耐えながら自信に満ちた笑みを浮かべる修司に笑い返すのだった。
「あ、あぁ！　勿論だ。俺にとって桜は家族も同然なんだ。必ず救い出してやるさ！」
「おう、頑張れよ」
修司の問いに士郎は力強く答える。そんな二人を慎二と遠坂は呆れた様に肩を竦め、イリヤは僅かに不満そうに頬を膨らませていた。
「――付き合いきれんな」
「アーチャー！」
「作戦には異論はない。出番があれば喚べ」
修司の持論に呆れ果てた様子のアーチャーは吐き捨てるように言い残し、霊体化して姿を消す。
「んじゃ、俺も一度家に戻るかな」
「え？　ここでかよ。何しに戻るんだ？」
「なに、そろそろ決戦が始まると思ってさ。一張羅を取りに……あぁ、あと遠坂、お前に一つ聞いておきたい事があるんだけどさ」
「え、私？　な、なによ？」
「ガンドって魔術、あれどうやるの？」
立ち上がりながら聞いてくる修司に遠坂は目を丸くした。

◇

「――――お、此処にいたのか。周囲への見回りご苦労様」
「……」
衛宮邸の屋根上、そこで周囲への哨戒をしているであろうアーチャーの前に修司が現れる。依然として視線を合わせようとしない

弓兵に修司は頭を掻いて苦笑う。
「……やっぱ、納得してないか？」
「人の心を救う……その言い分は理解出来るとも。助けると救うの意味合いは似ているようで異なる。そういう意味ではお前の考えは理想的なのだろうな」
「理想は嫌いか？」
「理想はどこまで行っても理想だ。そも理想は現実に足り得ないからこそ理想という。理想に燃えるのは結構だ。だが、それに巻き込まれる人間が、どれだけ苦しい思いをするのか、お前は考えた事があるか。理想に殉じた愚か者が行き着く果てが、何なのか……見たことはあるか」
振り返るアーチャーの瞳には強い敵意の様なものが滲んでいた。修司の言葉に癇に触れる部分があったのか、その眼光は鷹の様に鋭い。
その様子に確信を得たのか、修司はあー、と言葉を漏らし……。
「あー、やっぱそうか。今ので確信したわ」
「なに？」
「お前、衛宮士郎だろ？」
何気なく言い放つ修司にアーチャーの眼は大きく見開いた。

その45

「――私が、あの小僧だと？」
「正確に言えば未来の衛宮士郎かな？　いやー、まさか過去だけでなく未来の英霊まで呼び寄せるなんて、聖杯って奴は本当にヤバイ代物なんだな」
　目を見開かせて、明らかに動揺を見せる目の前のアーチャーに修司はより確信を得た風に頷く。
「バカな、何故私があんな小僧と似ていると言われる。これは酷い侮辱だぞ少年、何を根拠にそんな世迷い言を口にする」
「いやだって、お前ら普通に似てるんだもん。確かに骨格や肌、頭髪等は成長と共に変化するもんだけどさ、此処まで似ているとなると同一人物と考えるのが妥当だろ」
　自分は衛宮士郎などではない。そう強く否定するアーチャーだが、修司はそれはないと断言する。修司の眼は度重なる修羅場を経験した事で相対する者の骨格や筋肉、動きの動作を見抜く眼を手にしている。
　例えば蒔寺楓の増えた体重を指摘したり、酷い筋肉痛を痩せ我慢する氷室を助けたり、三枝の肉離れしかけた脚の筋肉を的確に解してやったりしている。
　修司にとって人体とは見馴れ、熟知しているモノ、そんな彼にとって目の前のアーチャーの変化は多少の領域から抜け出しはしない。尤も、その事に気付くのに数日を要したのだから、その眼力もまだまだ未熟ではある訳なのだが……。
「まぁ、それでも否定するってなら別に構わねぇよ。お前が衛宮士郎だっていうのも言いふらしたりはしないから安心しろ」
「……ならば、何のために私の前に来た。よもやそんな戯言を言いに俺の前に現れたのか？」
「俺、ね。段々らしくなってきたじゃねぇか。変に斜に構えているよりずっといいぜ」

「――――」
修司としては本心で言ったことなのにどうやらアーチャーには挑発に聞こえたらしい。眉を寄せて敵意すら滲ませて睨んでくる弓兵に修司は溜め息を溢す。
「……正直、驚いてるんだ。あんな正義の味方になるって言い張った奴がこんな皮肉屋になるなんてさ。そんなに、未来のお前はシンドイ事があったのか？」
「……」
「なぁ衛宮、どうしてお前そんな風になっちまった？　何がお前をそんな風に変えたんだ？　今更聞いても遅いというのは何となく分かる。でも、聞きたいんだ。お前は未来で満足の出来る死に方が出来たのか？」
それはサーヴァントに対して最も意味の無い問い掛け、サーヴァントとは英霊で即ち死者。歴史の中に刻まれた影法師に過ぎない。未来から喚ばれた英霊もその例外ではなく、目の前のアーチャーがサーヴァントとして此処にいるという事は……つまりは、そう言う事なのだ。
我ながら酷い事を聞くモノだと、修司は顔には出さず内心で自戒する。しかし、どうしても聞きたかったのだ。嘗て正義の味方になると豪語した男が今もその理想を捨てずにいられているのか、その是非を。
「正義の味方……か、確かに、人生の最期まで嘗ての私はそう在ろうとしたのだろう。一人でも多くを救えるように、一人でも多く悲しみから助けられるように」
「……」
「死後も私はそう在ろうとした。英霊として昇華され、人外の力を手にした私はこれでより多くの人間を救えるのだと、世界と契約し、それを為そうとした」
「世界と……契約？」
世界と契約という聞き慣れない言葉に首を傾げるが、その事をアーチャーが説明する様子はない。だが、何だか良いように聞こえない。

そう思うのは目の前の弓兵こそがその選択に後悔している風に見えたからだ。
「だが、結果はご覧の有り様。英霊と持て囃されていてもやっていることは単なる掃除屋だ。私に求められているのは世界の守護、その為だけに使い潰される体の良い殺し屋。それがこの私英霊エミヤの正体だ」
　世界と契約し、死後の安寧まで明け渡して得られたのは世界を存続させるための道具。これ迄世界を護るために数多くの人間を殺し、それよりも遥かに多くの人間を救ってきた男は自嘲の笑みを浮かべて吐き捨てる。
「結局、誰かの為に戦う正義の味方など仮初の御伽噺でしかなかった。誰かを助ける為には誰かを助けない事になる。それは何処までも無慈悲な事実だった」
「――そうかよ。んで？　そんな世界と契約したお前は聖杯戦争に何のために参加したんだ？　」
「言った筈だ。この身は既に世界の装置として成り立っていると、世界を守護する為にこの身は常に最低限の結果を求められている」
　世界を維持する為に英霊エミヤは多くの命を殺し尽くしてきた。男も女も、老いも若いも、一切合切問わずに切り捨ててきた。切り捨ててきた者達、そんな彼等こそ彼が助けたいと願った命だというのに。
　そんな彼は今後も世界の為に闘うのだろう。多くの屍の上に立ち、それでもそれ以上の命を救うために、英霊エミヤは世界の為に戦う事を余儀なくされている。
　きっと、彼が今回の聖杯戦争に参加したのも世界の為に、という題目のおかげなのだろう。それはつまりこの冬木の地で世界の均衡を崩すだけの事件が待っていることを意味している。
　そして、その原因は今まさに冬木の何処かで今も静かに息を潜めている。
「お前……まさか桜ちゃんを殺すために召喚されたって言うのか？」

「――――」
その質問にアーチャーが答えることは無かった。世界を救うために契約した英霊は命を助けるよりも世界の維持を優先する。大を救うために小を捨てる。当たり前すぎて頭が痛くなる最悪の取捨選択、目の前の男はそれを腐るほどしてきたのだ。
そして、修司の質問は沈黙で返される。それが何よりの答えである事は誰の目にも明白だった。
「白河修司、お前が語るのは理想の極み。妄言の極致と知れ。失敗すれば貴様だけでなく大勢の人間の命を危険に晒すのだ」
この世に都合の良い出来事は起こらない。あるのは何処までも理不尽で不条理な現実だけ、一を助けるのに大を殺すのは愚の極み。故にアーチャーは言葉ではなく眼で語る、甘い幻想は捨てろと。
「まぁ、確かにお前の言うことは正しいよ。人生ってのは常に選択の連続だ。その答えに後悔しないなんて人間はこの世の何処にも居はしないだろうよ」
「でも、だからこそ人は最善の未来を選ぼうとするんだろ？　一を殺して大を救う？　成る程それも選択の一つだ。そうせざるを得ない状況だろうし、個人の人間では限りがあるだろうよ」
どれだけ力があろうと、所詮個人の力では出来ることが限られている。人を救おうとするなら尚更、だから衛宮士郎は世界と契約し、世界を護る殺し屋と成り果てた。
「なぁ士郎、お前覚えているか？　昔、俺がお前に言った言葉」
「なに？」
「戦隊モノもライダーモノも、どちらの特撮ヒーローも根っ子にしてる部分は変わらないって話、まぁ、その様子だと覚えていないみたいだけどさ」
「――――」
「英雄、ヒーローってのはさ、一人だけでは成り立たないんだよ。ヒーローを取り巻く環境、人の繋がりがヒーローをヒーロー足らしめているんだ」
「何を、言っている」

心の奥で何かが軋んだ気がする。目の前の少年の言葉が硝子となった自分の心に激しく打ち立てている。自分がこれ迄問題にしてこなかった事をこの少年は知っている。
自身の理想が間違っていたと糾弾するのではない。白河修司の指摘はそんな生温いモノではない。
「士郎、お前はさ。人との繋がりを大事にしてこなかったんだろ？誰かの呼び止める声を、お前を引き留めようとする人達の言葉を無視してきたんだろ？」
「――――」
そんなことはないと、否定できなかった。嘗ての衛宮士郎は正義の味方であろうと我武者羅に進んできた。誰かを助けるのが綺麗だから、そんな綺麗なモノに憧れたから、衛宮士郎は正義の味方であり続けた。
傷付く自分を蔑ろにして、もう止めろと泣きじゃくる友人達の言葉を振り切り、ひたすらこの道を突き進んだ。
仲間もいた。友人もいた。誰かを蔑ろにしたつもりもないし、喧嘩をしたこともまた無く……同時にその人達の制止の言葉に耳を貸した記憶もまた無かった。

「ヒーローってのはさ、一人じゃないんだよ。支えてくれる人、間違いを正してくれる人、話を聞いてくれる人、そういう人の輪の中でヒーローはヒーローであり続けられるんだ」
「士郎、最期まで正義の味方で在ろうとしたお前の想いはきっと間違いでは無いんだろうよ。もし、そんなお前に間違いがあるとすれば、きっと、そういう所なんだと思う」
「私は……俺は」
自分では決して気付けなかった間違いの答え。世界の守護者として在り続けた男に残された間違いと指摘された答え。否定したくても出来ない訳だ。何せ目の前の少年から指摘された通り、嘗ての衛宮士郎だった男には親しかったとされる友人達の顔の殆どが思い出せない。

「そうか、間違っていたとかそうでないとか、それ以前の話だった訳だ。……滑稽だな、私は」
　正義の味方と在り続けた男はその実、誰よりも周りを見ようとしなかった。誰かに、頼ろうとしなかった。
「お前はさ、自分を突き詰めすぎたんだよ。正義の味方の在り方だって一つじゃない、誰かと手を取って一緒に困難を乗り越えても良かったんだ」
　独りぼっちのヒーローなんて存在しないのだから、そう言葉を口にした修司はアーチャーに手を差し出す。
「だから、手を貸せ。衛宮士郎（正義の味方）、冬木の人達を守るために、下らない魔術師の陰謀から桜ちゃんを救う為に、一を捨てて九を拾うのでも、九を捨てて一を拾うのでもなく、皆の力で十を掬い上げる。その為にお前の力が必要だ」
「……無茶苦茶だな。話の流れが全く異なっている。一体お前は何が言いたい、此処まで私の矜持を砕いておきながら、今更何故私の力を欲しがる」
「なに、ブラック企業に務めている奴に心なしのご褒美って奴よ。誰になんて言われようが知ったことじゃない、問答無用のハッピーエンド。そのエンドロールにお前の名前も刻ませてやるって言ってんだ」
　余りにも傲慢、そして不遜。人をあれだけ扱き下ろしておいて今度は力を貸せと来た。人をバカにするのも程がある。
　だが、その言葉を拒絶する気も起きなかった。するだけの気力が無いわけではない、下らないと一方的に否定する気もない。見てみたい、と思ったのだ。誰も傷付かず、誰も失わない、そんな御伽噺の様な結末を今になってアーチャーは信じてみたくなった。
「――言っておくが、私は安くはないぞ」
「安心しろ、蓄えならある。何ならお前のご主人様ごと雇っても良いんだぜ？」
「それは、何とも豪気な事だ」
　差し出された手を紅い弓兵は皮肉の混じった笑みを浮かべて掴む。硬く、熱く、優しい手だ。もし、この手の持ち主にもっと早く出会え

ていれば自分の最期も変わったモノになれたかもしれない。
だけど、少しだけ安心した。この男がいるならば恐らくこの世界の衛宮士郎は自分のような末路は辿らないだろう。仮にそうなろうとしても、きっと目の前の少年が止めに入る。
何故、嘗ての自分はこの男と巡り会えなかったのか、その事に僅かな嫉妬を覚えながら、握り締めた握手の手をやんわりと手離した。
「マスターにも言ったが、出番の時は私を呼べ。可能な限りお前の信頼に応えよう」
「あぁ、ありがとなアーチャー。お前の事も皆には黙って置くことにするよ」
それは有り難いと言い残し、アーチャーは霊体化をして姿を消す。これ以上ここへ留まる意味は無い、アーチャーとの遣り取りに確かな手応えを覚えた修司は屋根から飛び降り、玄関先で待つジャンヌと共に新都の方へ足早に向かうのだった。

◇

「――――成る程、事態はそこまで進んでいるのですか。ならば確かに私達が大人しく待つ道理はありません。白河修司、貴方の此度の働きには感謝します」
「イリヤを守ってくれてありがとね～」
「いや、別に守ってはいないんだけどね」
修司が忘れ物を取りに行く序でにイリヤの従者である二人のメイドを回収に訪れた二人は、マンションの玄関口でそんな軽口を叩き合う。主であるイリヤが衛宮の家で暫く厄介になるかも知れない以上、

従者である彼女達に話を通さない訳にはいかない。それ故に一張羅の胴着を取りにいく序でに立ち寄ったのだが、当初はいい感じに寛いでいる彼女達に声を掛けるのを躊躇ったものである。
「しかし、よりにもよって衛宮ですか。お嬢様には戯れは程々にするようあれほどご忠告したというのに……全く、困ったモノです」
「セラ、しつこい。今はきんきゅーじたいなんだから、あまりそういう事は言わない方がいいと思う」
「分かっています。事態が混沌としている以上、迂闊に別行動をするのは危険、事態が事態な為に敵対者と一時的に協力関係になるのも理解できます。しかし……」
　どうやらこのセラというメイドは結構な神経質な女性らしい。事態を予め説明したというのに何時までも納得しようとしない彼女に流石の修司も対応に困った。
「私知ってる。セラの今やっているのって、クレーマーって言うんでしょ？」
「なっ!?」
「それよりもシュージの着てるソレ、何処かで見たこと有るんだけど、一体なに？」
「お、嬉しいねー。漸くこの服に触れてくれたかー、最近この胴着を着ても誰も突っ込んでくれなくてさ、少し寂しかったんだよ。実はこれね、あるキャラクターの着ているモノを真似したモノなんだ」
「あ、もしかしてアレ、ドラゴンでボールな摩訶不思議な冒険の？　それならセラも知ってるー、お城で全巻読んだから」
「そうそう！　あの漫画に俺も嵌まってさー、昔はあの必殺技を出したくて、まずは形からと胴着を作ったんだけど、これがまた凝っちゃって、最初はコスプレ気分のつもりだったけどクオリティがドンドン上達してさー、今ではお気に入りの一張羅なんだよ」
「おー、凄いなシュージ、もしかして職人さんかー？」
　天然気質なリーゼリットに感謝しながら、彼女との談話を続ける修司、ジャンヌを護衛に衛宮邸へ戻ろうとする道のりは冬木の大橋へと差し掛かっていた。

「さて、そろそろ談笑は終わりにしよう。ジャンヌさん、セラさんを任せても良いかな？　リーゼリットさんは俺が運ぶから」
「承りました」
「シュージ、私を運ぶの？　大丈夫？　私、結構重いよ？」
「大丈夫、俺鍛えているから」
　先のアインツベルン城での戦いで修司の力とその強さを知るリーゼリットは、それ以上言葉を挟む事無く修司の背中へ身体を預ける。その時、背中へと伝わってくる女性特有の豊満な感触に童貞である修司は顔を赤くさせるが、直ぐ様邪念を振り払うように首を横に振る。
「……言っておきますが、リーゼリットに如何わしい事をしようものなら、お嬢様へ報告しますので覚悟してくださいね」
「ふぁ!?　ち、違！　別に俺は――――」
「修司君、サイテーです」
「ジャンヌさんまで!?」
　必死になって誤解を解こうとするが、相手は冷めきった眼をした女性二人、男が自分しかいない以上どうあっても勝つことは不可能。そう判断した修司はもういいやと諦めの溜め息を溢しながら自身を先頭に人気のない大橋を一気に走り抜こうとする。
「おー、シュージはやーい。バーサーカーみたーい」
「ハッハッハ、俺はそこまで筋肉ダルマじゃないぞー？　――――っ!!」
　軽口を交わしながら橋を渡るその刹那、修司は尋常ならざる殺気を感じ取った。
　瞬間、黒い閃光が上から修司のいる大橋を目掛けて降り注がれる。直撃した閃光は橋に直撃し、巨大な爆発と共に周囲へ弾け飛ぶ。
　爆発する煙の中から抜け出した二つの人影、修司とジャンヌは未遠川沿いにある土手に着地する。
「ジャンヌさんそっちは無事か!?」
「此方は大丈夫！　セラさんにも傷はありません！」
「私も大丈夫、シュージ、ありがとね」
　背後からのリーゼリットの無事な声に修司は一瞬安堵するが、その

視線は依然として橋の方へ向けられている。今のは危なかった、全身に伝わってくる悪寒と直感に従っていなければ、今頃自分達はあの冬木の大橋で丸焼きにされていた。
一体どこの陣営の仕業だ。時刻は既に遅く、人気は少なくなってきたと言っても人の目はゼロではない。このまま戦えば野次馬が集まってくるのも時間の問題だ。
一言相手側に文句を言わなければ気がすまない。舞い上がる粉塵の中を睨み付ける修司だが、その中から現れる人物を前にその目は驚愕に眼を見開かせる。
「――ウソ、だろ」
煙の奥から現れたその人物は目元をバイザーで覆い、素性を隠しているつもりでいる。だが、修司は知っている。あの背丈、格好、何れもあの清廉な青い騎士王と何処までも似ていたから――。
「修司。先ずは、貴様の頚を頂くとしよう」
向けられた剣の切っ先が向けられる。待ってくれと制止の声を叫ぶよりも早く、極光の黒き奔流は放たれた。

その46

「――――修司の奴、大丈夫かな」
「んー？　大丈夫なんじゃない？　ルーラーも一緒みたいだし」
イリヤの従者二人と自慢の一張羅を取りに修司とジャンヌが一度新都の方へ引き返して五分、静かになった居間の空間で時計の針の音が響く中、士郎は心配の声を漏らす。
だが、その心配の声も遠坂の否定の言葉が即座にソレを掻き消していく。遠坂にしては冷たい態度に士郎は眉を寄せて問い詰める。
「何だよ遠坂、修司の奴が心配じゃないのかよ。一応、アイツはお前の弟弟子なんだろ？」
「現時点でバーサーカーに匹敵する戦闘能力保有者なんて心配するだけ時間の無駄よ。衛宮君も今はこの聖杯戦争を乗り越える事だけに集中して」
「バーサーカーに匹敵って、修司の奴そんなに強いのか？」
「認めたくないけどね。けど、そこの執行者から話を聞く限り、有り得ない話ではないわよ。何せ、何年も前から既に単独で死徒を滅殺できる程の実力者なんだもの」
普段の修司を知る衛宮にとって魔術師である凛やイリヤの評価は聖杯戦争開始の当初は到底信じられるモノではなかった。確かに普段から勉強は出来るし、身体能力も陸上のエースを張っているからそれなりに高いことは知っている。
だが、それがまさか魔術側に深く認知され裏社会にその名を轟かせている人物だとは欠片も知らなかった。中学の頃から保護者の教育方針で海外に出張っている事は知っていたが、それがまさか死徒という人外を斃して回っていたのだというから更に驚きだ。
更に話を深掘りすれば、その強さは魔術協会や聖堂教会も一目置く程で、同じ居間に居る執行者を凌駕するほど。また、彼のお陰で死徒による被害者は格段に減ったと聞く。聖杯戦争に参加するまで録に

魔術の鍛練を行えなかった士郎にとって修司の今日までの物語は御伽噺の英雄譚にも聞こえた。
「……修司の奴、今までそんな事全然言わなかったのにな」
天井を仰ぎ見て呟くのは修司に対するある感情の発露。自分一人で戦い、誰かを助け、人知れず救い続けてきた親友の本当の姿に士郎は心の底から羨ましく思えた。
『聖杯戦争から降りろ衛宮士郎、無力なお前では何も成し得る事は出来ん』
アーチャーの冷めきった眼差しから告げられる言葉、悔しいが衛宮士郎にそれを否定するだけの材料は無かった。彼が言う様に士郎が魔術の基礎すら四苦八苦していた頃、彼は一人で死徒なる人外を相手に戦い、生き残り、旅を続けてきた。
その旅の道中で一体どれだけの人々が救われたのだろう。彼が戦い続けてきた事でどれだけの多くの人間が犠牲にならずに済んだのか。正義の味方を目指す衛宮士郎にとって修司こそが正に正義の味方の様に思えた。
無関係な人間を巻き込む聖杯戦争を許さないと断じ、ルーラーの助力を得ながらも度重なるサーヴァントとの激戦を制してきた。
運もある。実力もある。そして何より強い意志がある。理不尽を許さないと語る修司の瞳は怒りの色に満ちていたが、その義憤が誰よりも正義の味方の在り方に相応しいと士郎は思った。
当たり前の事を当たり前の様に大事にする。超常に浸りながらも日常を愛し、日常を謳歌する彼こそ、きっと誰よりも……少なくとも自分よりも遥かに正義の味方足り得るのだと。
衛宮士郎が白河修司に抱くのは無自覚な憧憬と嫉妬。誰よりもそう在りたいと願ったのに、隣にいた筈の修司こそが正義の味方に相応しいと思い知った。
「……切嗣」
嘗て、自分を救ってくれた魔法使いは言った。正義の味方は期間限定だと、自分では成りきれなかったと。正義の味方を目指し、足掻いても現実の不条理がそれを阻む。

現実はいつだって不条理で理不尽だ。残酷な選択続きの果てに後悔は募り、たった一人護りたかった人までこの手から溢れ落としてしまった。正義の味方を目指すには衛宮切嗣は諸々が足りなかった。

そんな義父の想いを継いで衛宮士郎は正義の味方を目指すと誓った。……でも、何故だろう。誓ったのに、あの日の憧れは今もこの胸に焼き付いているのに、何故かそれを強く口に出すことが出来ない。言葉として吐こうとすれば、修司の背中が脳裏に過って離れない。

（もしかして俺、諦めようとしている？　正義の味方を、切嗣から受け取った願いを、放棄しようとしているのか？）

それは違う。断じて違う。衛宮士郎は正義の味方に成る。成りたいのではなく、絶対に成るのだ。

でも、聖杯戦争で何の役にも立てていない自分に、果たして誰かを助ける事なんて……救うことなんて出来るのだろうか。

「――ねぇ、シロウはどうして切嗣に憧れたの？」

「……え？」

ふと、声が掛けられる。顔を前に戻せば長い銀色の髪が特徴的な少女が衛宮の眼を覗き込むように見詰めていた。

「少し貴方を観察していたけど、何となく分かったわ。貴方は切嗣に憧れている。彼の生き方に、彼の在り方に。ねぇ、どうしてシロウはあの男に其処まで拘るの？　正義の味方って、そんなに大事なの？」

「イリヤ、お前何言って……」

「答えて」

ジッと、瞬きすらしないで問い掛けてくる少女に士郎は呑まれた。誤魔化す事は許さない、そう暗に伝えてくる彼女に戸惑いながら、士郎はポツリポツリと少しずつ自分の境遇を語り始めた。

１０年前の聖杯戦争で家族全てを失ったこと。その時に切嗣と出会い、拾われ、家族として接してきたこと。何度も何度も外国に出掛けてナニかを探していたこと。そして……。

『あぁ……安心した』

最期に、自分の理想（夢）を託せたことに安堵して眠るように逝ったこ

と。自分に許される全ての事を話し終えると今度はイリヤが口を開いた。
「そっか。切嗣は私の事、迎えに来ようとしてたんだ」
「イリヤ？」
「ねぇシロウ、シロウは一体どんな正義の味方になりたいの？」
「え？」
　イリヤのその言葉は先のモノよりもずっと優しく、そして刺のない口調だった。何も知らない子供を諭すように優しく語りかけてくる少女、そんな彼女の言葉に衛宮士郎は不意を突かれ唖然とした。
「正義の味方って一つしかないの？　シロウが目指す場所はそんな寂しい所なの？」
「俺は……」
　正義の味方、ただそれだけを目指して生きてきた。それだけを考えて生きてきた。自分の行いが、細やかでも誰かの幸福であると信じて、苦痛を苦痛と感じないまま、今日まで生きてきた。
　正義の味方を目指しておきながら、その実、正義の味方の在り方に悩むだけ悩んで、答えは見付からなかった。あの日、衛宮切嗣に救われて、その時の彼の表情が忘れられず、それが綺麗だったから憧れた。
　借り物の理想。それだけならまだしも、衛宮士郎の理想は形だけを模した空っぽの器のままだった。正義の味方を目指しておきながら正義の味方の在り方を、形を、何一つ見いだしてこなかった。
「正義の味方って、一人じゃなきゃ駄目なの？　シロウの言う正義って、そんな回りの人間を悲しませてまで叶えるモノなの？」
「俺は……俺は」
『誰かの為に頑張れるのは偉いことだと思うよ？　でも士郎はいつも怪我して、お姉ちゃん心配だよ』
　脳裏に甦るのは不安そうに眉を寄せる姉貴分、何故今彼女の顔が横切るのか。
『なぁ士郎、戦隊モノもライダーモノも、根っこの部分は同じなんだぜ』
　何故、彼の言葉が頭に浮かぶのか。

（……もしかして、正義の味方って一人じゃ成り立たないのか？）
答えは未だ見付からない。けれどこの時衛宮士郎は正義の味方の問い掛けに一つの答えを得た。
そして――――。
「何よ今の音は!?」
遠くから聞こえてくる音に衛宮邸にいた全員が外に出る。何事かと凛がアーチャーに問い詰めれば……。
「まさか、こんなに堂々と襲ってくるなんて！」
ここからでも見える赤い炎、場所は冬木大橋。深山町と新都を分ける未遠川にて一つの激戦が幕を上げようとしていた。

◇

「……なぁジャンヌさん、セイバーさんは例の影に呑まれて消滅、聖杯戦争から脱落したって聞いたけど？」
「その筈です。彼女は、騎士王アルトリア＝ペンドラゴンは、私を庇って消失しました。その最期を私自身がこの眼で見ています」
ジャンヌ＝ダルクの震えた声で告げる言葉を修司は否定しなかった。勿論、修司も彼女がそんな嘘を吐く人間だとは思っていない、清廉にして潔白、その在り方は共に聖杯戦争を戦ってきた修司だからこそ理解できる。
だが、それでも問わずには入られなかった。例えジャンヌの言うことが全て正しくても目の前の光景が彼女の言葉を全力で否定しているのだから……。
燃え盛る橋の上から覗き込むように現れる黒の騎士、その鎧の細部は黒く変容して目元には顔隠しのバイザーが填めらて様相を明らか

にしていないが、それでも修司には彼の人物に思い当たる人物が一人しかいなかった。
「なら、何でその騎士王が俺達の敵として出てくるんだ？」
「――――っ」
理解しても納得できなかった状況を前に、修司は敢えて口にする。そうすることで認めたくない現実を直視するようになった二人は歯を食い縛り、それぞれ構えを取る。
背にした従者二人を下ろし、自分達の背後に誘導する。リーゼリットもセラもその事に異論を挟む事なく従っていく。四人とも気付いていた。今の自分達ではどうあってもあの黒い騎士王から逃げ延びる事は出来ないと。
きっと、あの黒い騎士王は再び此方に切り込んでくる。ジャンヌと修司の構えが自然と同調していった――――その刹那。
黒い光が、再び四人を襲った。
「修司君！」
「おおっ！」
降り注がれる黒の光をジャンヌが旗を掲げて直撃を塞ぎ、修司が両腕を交差させて余波を防いでいく。防御に特化したジャンヌを前にしても全身を焼き付く程の熱気が修司を襲う。
やがて光は弾着地点であるジャンヌを中心に爆発し、修司を吹き飛ばす。
「あっ、ぐ、ジャンヌさん!?」
爆風によって空中へと打ち上げられ、無防備となった姿を晒しながらもジャンヌの安否を確認しようと修司は地上へ視線を向ける。見れば、所々焦げ目は有り、地に片膝を突いているようだが、どうやら無事らしい。魔術に特化したセラが回復の術式を施しているから、恐らくは大丈夫だろう。
そこでふと修司は違和感に気付く、あれほどの爆発を受けてほぼ無傷なジャンヌにではなく、彼女を狙ったであろう黒い光を発したセイバーが、ジャンヌに追撃を仕掛けて来ない事に。
一目見ただけで感じた寒気がするほどの殺気、あれほどの殺意を見

せておきながら追撃を仕掛けないなんて……。
（まさか、奴の狙いはジャンヌさんではなく――）
黒いセイバーの思惑に気付いた瞬間、上空から黒の聖剣に禍々しい光を纏わせて斬りかかってくるセイバーと視線が重なるのはほぼ同時だった。
反応できたのは、殆ど運によるもの。培われてきた戦闘経験による咄嗟の行動――両腕を交差し、衝撃に備えた修司が次に感じたのは……想像を絶する痛みと熱と衝撃。
黒の光をマトモに受けた修司は未遠川へと叩き付けられ、底へと沈んでいく。これまで経験したことのない衝撃に一瞬意識が飛びかけたが、持ち前のタフさで何とか耐えきってみせる。両腕も黒く煤けてはいるが、軽い火傷程度で済んでいる。
どうやら、防御の方は上手くいったらしい。殆ど博打だったが、全身に漲る力と迸る白い炎を纏っている事で事なきを得たことに修司は僅かながら安堵した。
だが、呆けている場合ではない。既に相手は自分に更なる攻撃を仕掛けてくるに違いない。五感を研ぎ澄ませ、闇夜に染まる水の底で周囲を見渡し――。
「っ!!」
右方向から、先の黒い光が迫る。両手を突きだして防御の姿勢に入った修司は放たれる黒の光を正面から受け止めた。
勢いは殺せず、そのまま水底を進む修司はその足で未遠川の底に二本の線を刻んでいく。このままでは太平洋まで押し出されかねない、そんな死に様はごめんだと、修司は突きだした両手に力を込める。
黒光の勢いが削がれた。その瞬間を狙っていた修司は体を回転させて蹴りを放つ、放たれた蹴りは黒光の軌道をずらし、海面へと吹き飛ばしていく。
この時点で既に四発、まるで大砲の様な閃光をバカスカ撃ち込んでくる事から、これで終わりだとは思わない。
そして、遂に修司はその姿を捉える。
（そこかぁっ！）

お返しとばかりに拳を振り抜く。水中では意味のない行動、だが、白い光を纏い人としての可能性の扉を開けた今の修司が行えばそれは水の大砲へと昇華される。

振り抜かれた拳に押し出され、渦を描きながら押し進む水の濁流は見事なまでにその先にいる人物へと直撃する。

しかし、相手はそれに怯むことはなかった。直撃した事に何の反応も示さず、水底に佇む黒き騎士王はお構いなしに手にした剣を振るう。

剣を振るう。その度に黒の光は迸り、冬木の水中を抉っていく。大分目が馴れてきた為に何とか回避は出来ているが、このままでは何れ圧しきられる、遠くない自分の最期に抗い勝つ為に修司は再び賭けに出た。

（この、好き勝手にバカスカ撃ちやがって！）

沸いて出てくる苛立ちの感情すら力に変えて、修司は拳を頭上へ向けて振り抜き。

その瞬間、修司を中心に周囲の海水は吹き飛んだ。露になる地表、この現象を前にこれまで無感情だったセイバーの動きに揺らぎが見える。

そしてその千載一遇の好機を修司は見逃さなかった。脚に力を込めて一気に蹴り抜く、その勢いは水底だった大地を抉り、セイバーとの距離を一瞬の内に零へ変えてしまう。

ただの接近戦ではない、超至近距離での殴り合い。一撃二撃と、打ち出される拳を黒の剣士は持ち前の直感で捌くが……如何せん、速すぎる。

その技の速さ、それは嘗て柳堂寺の門にて戦った侍の技を修司なりにアレンジしたもの、一度に三つの斬撃を繰り出せるほど今の修司は器用ではないが、あの侍の繰り出した体捌き、或いは剣捌きを修司は己の内で吸収し、確立させた。

その技の冴えを以てセイバーの動きは封殺される。繰り出される筈の黒剣を振り抜かれるよりも早く弾き、セイバーの動きを牽制していく。

打ち出そうとすればするほど、セイバーが晒す隙は大きくなり、その隙が大きくなるに連れて修司の反撃の糸口もまた開けていく。
そして、その時は来た。ままならぬ状況に苛立ちを隠せなくなったセイバーが、遂に大振りの姿を晒した。それを回し蹴りで弾いて、反し刀の要領で修司は彼女の腹部へと拳をめり込ませた。
「さっきの……お返しだ!!」
振り抜いた拳は確かにセイバーを捉え、吹き飛んでいく。その様子を見ながら修司は土手へと跳躍し、未だ打ち上げられているセイバーを見やる。
放物線を描きながら海面へと落ちていくセイバー、それに伴って打ち上げられた水も元に戻り、海水を抉られた大地は再び元の形へと還っていく。
正直、手を抜ける相手ではなかった。この身に纏う力がなければきっとマトモに戦う事は不可能な程にあのセイバーの力は強大だった。
これで終りにして欲しい。別人の様に変わってしまったとは言え、相手は嘗て同盟を結んだことさえあったセイバーだ。心痛いし、何より友人である士郎の相棒をこれ以上殴り付ける様な事はしたくない。
しかし、そんな修司の心情を嘲笑うかのように黒き騎士王は水面へと着地する。先の一撃を受けてまだ戦えるのか、並の相手なら勿論、サーヴァント相手にすら暫くは身動きできないほどの一撃を放ったつもりだ。
「まさか、あの妙な感触、アレに防がれたのか!?」
心当たりがあるとすれば、修司の拳が当たる直前、まるで巨大な衝撃緩和材に触れる感触。アレが己の繰り出した一撃の威力を削いでしまったのか。
自身の内から生じた迷いと甘さ、それだけではない。かの騎士には如何なる物理、霊的力を阻害する魔力放出が鎧の様に身に纏っているからだ。
ドラゴンの因子を持つとされるアルトリア＝ペンドラゴン、その最

大の特徴はそこから生まれる膨大な魔力。そこから繰り出される斬撃は正しく伝説に刻まれる勝利の剣。
故に、修司は思い知る。今、自分の目の前にいるのは正真正銘の伝説なのだと。
「――――――」
水面に立つ黒き騎士王、彼女が剣を両手で以て頭上に掲げた瞬間――大気が震えた。黒く、赤く、おぞましい程禍々しい光が黒に染まった聖剣を中心に凝縮し、圧縮されていく。
水面はざわめき、空が狂い出す。天地すら裂いてしまうような力の顕現に修司は全身から血の気が引いていくのを感じた。
解る。アレは、撃たせてはならない光だ。撃たせてしまってはその瞬間、自分なんて瞬く間に消し飛んでしまう。今すぐ逃げなくては、逃げて、次に繋げなくては……。
だが、それは叶わない。何故なら今の自分の背後には何も知らない冬木の人々の住宅地が並んでいるから、避けてしまえば無関係な人々が大勢死に絶えてしまう。
向こうでジャンヌが何かを叫びながら此方へ走ってくるが……間に合わない。彼女が割って入ってくるよりも早く、あの極光は放たれるだろう。
避けるのは無理、受けるのも不可能、ならばあとは――――迎え撃つしかない。
（でも、出来るのか？　今の俺に、そんな事、本当に？）

『ガンドの撃ち方？　そんな事訊いてどうするのよ？』
『もしかしたら長らく追い掛けてきた男のロマンが完成するかも知れない？　はぁ、神秘の力を男のロマンにすげ替えるとか、本当あんたって私達魔術師に喧嘩売るのが好きね』
『あぁ、いいわよ。教えてやるわよ。その代わり感覚的によ。あんたの使っているのは私達魔術師の魔力とは色んな意味で違うみたいだ

から、知識的に教えるのは無理そうだもの』
『それでもいい、ね。ま、その勤勉さは嫌いじゃないわ。一応、私はあんたの姉弟子だからね。最低限の応援はしてあげる』
『いい？　ガンド、もしくはそれに通じる魔力の放出の仕組みは往々にして似ているものなの、その真髄は即ち――』
『出力の操作、並びに圧縮と放出よ』
『自身の内に流れる力を自在に扱えるようになって初めて扱えるような技法、例えるなら自身の内に通っているパイプと其処に流れる力と言う名の水を操る様なもの』
『それが出来れば、アンタにもガンドみたいなモノが撃てるんじゃない？　知らないけど』
『良いわね、教えたんだから最低限の結果は出して見せなさいよ。でないと承知しないんだからね』

（――あぁ、そうだな。何もしないまま終わるのは一番ダメな事だよな）
ここに来る前、手短でも親身になってアドバイスしてくれた姉弟子に内心で感謝しながら修司は眼前の騎士王を見る。
臨界に達しつつある黒き光、これを抑えるには同規模の出力が必要、果たして今の自分にそれが出来るのか。
否、出来る出来ないのではない、やるしかないのだ。迷っている時間はない、修司は全身に力を込め、身に纏う白き光を迸らせ――。
両の手の付け根をくっ付け、そのまま腰回りへと待っていく。
「かぁ……」
それは、現代のこの国に於ける男子全員が一度は通った登竜門、その技に人種を越えた万人が真似をした。
「めぇ……」
それは、現代に於ける摩訶不思議なアドベンチャーの代名詞。多くの若者が夢見、夢想し、そして破れて潰えた幻想の奥義。
「はぁ……」

しかしてこの時この瞬間、夢想は現実に甦る。多くの夢を乗せて、数多の理想と共に……。

「めぇ……」

――光が、集った。その両の手の間に確かな熱と質を伴って。

「約束された（エクス）――」

対するは極限に高めた黒き極光、高められた殺意の光を前にしかし修司の顔は何処までも穏やかだった。

高まりあう力、一瞬の静寂に世界が停止し――。

「波アアアアッ!!」

「勝利の剣（カリバー）!!」

瞬間、黒の極光と蒼白の光芒が未遠川にて激突した。

その47

――――黒と蒼白の光芒が、未遠川にて激突する。
衝撃が波を弾き、底の大地を穿ち、ビリビリと震える振動が大気を震撼させていく。
黒き極光を放つセイバーは自身の放つ聖剣の一撃に拮抗する蒼白の光芒に、バイザー越しにて驚愕する。
バカな、有り得ない。ついこの間までただの人間に過ぎなかった男が、何故魔力放出というスキルまで会得しているのか。
（いや違う。これは魔力とは似て非なる何かだ）
互いに撃ち合い、ぶつかり合っている今でこそ理解できる。このエネルギーの奔流は魔力ではない、もっと純粋で強力な魂のエネルギーそのものに等しい。
そんなエネルギーを普通の人間が放てば、忽ち魂は枯渇し、死に至るだろう。だが、現にその本人は今も平然と打ち返している。
（――――成る程、やはり貴様は危険だ）
独自の方法で独自に魔力放出の真似事を習得し、土壇場でやり遂げる努力と胆力。認めるしかない、目の前にいる白河修司なる存在は全てのサーヴァントを差し置いて現在の聖杯戦争に於ける最強の戦士だと。
（だが、故にこそ貴様の敗北は決定する。力に目覚めたからこそ、その力に翻弄されて自滅する）
力の放出とは、自身の内からソレを湯水の様に溢れさせて相手にぶつけること、それはつまり自身の残りの力を全て出し切る事を意味している。
白河修司は確かに凄まじい拳士である。技の冴えも、膂力も、その力を奮う度にその強さはサーヴァントである己すら凌駕し、圧倒し始めた。
だが、そんな彼が最後の最後で選択を誤った。打ち合わず、避けて、次に繋げてしまえば勝機はまだ幾らか残っていただろうに。

（嘗ての切嗣の様な冷酷さ、非情に徹し切れなかった事が――――貴様の敗因と知れ）

人は、個人では、どうしても限界が存在する。故に悲劇は回避できず、悪戯に被害ばかりが増えていくのだ。如何に桁違いの力を以てしても、所詮は個人。彼女を通して大聖杯に繋がっているセイバーとは持ち得るエネルギーの総量が根本的に異なっている。

「……さらばだ。我が怨敵よ、我が極光に呑まれ塵へ還るがいい」

力が迸る。手にした黒い聖剣に更なる力を解放したセイバーは増した勢いを加速させ、修司の放つ閃光を呑み込まんとした。

――――そして、対するその本人はと言うと。

（う、うぉぉぉっ!?　出た！　出来た！　本当に出た！　ウッソだろお前、俺遂にやり遂げたぞ!?）

自身の放つ閃光を前に嘗て無いほどにテンションを振り切らせていた。

顔には出さず（そんな余裕もないとも言う）内心での歓びっぷりで、その有り様は年相応の反応でとても殺し合いの最中に抱いていい感想ではないが、それもある意味仕方がない事であった。

何せ、この技は初めて目にした時からずっと修司が――――いや、全国の少年たちが追い求めて止まない伝説の必殺技だからだ。私生活から学校生活に至るまで、一時期あらゆる場所で模倣し、繰り返されてきた思春期の少年達の希望の必殺技なのだ。

繰り返される度に虚しさで胸が張り裂けそうだった。他者に見つかる度に顔が焼けつくほど羞恥で赤くなった。

黄金の王に目撃されれば何時までも弄られ、師匠に見られたら呆れられ、姉同然の人に見られれば、地母神の如く穏やかな笑みを向けられた。

そうして、いつしかその技の模倣はやらなくなっていた。笑われるのが嫌だから？　呆れられるのが辛いから？　優しい目を向けられるのが堪えたから？　――――違う。

諦めてしまったから。所詮は漫画の中の話だと、非現実の産物だと、自分には出来ないと、そう認めてしまったから。

けれど、聖杯戦争に介入したことでその認識は覆る。理想の力を、技を、現実に落とし込めるなら、嘗て抱いた情景も再び甦るのでは無いのかと。
斯くして、それは成った。自身の全力を出し切るつもりで裂帛の気合いと共に放ったソレは、嘗ての幻想通りに両の手から飛び出してきた。
嬉しくない訳がない。感動しない訳がない。テンションなんて……振り切れるに決まっている。
今この瞬間、修司のテンションはＭＡＸ値すらも振り切り有頂天処の騒ぎでは無かった。が、そのテンションが次第に萎えていくのもまた避けられなかった。
押し返されている。自分の放った技が、閃光が、黒き極光に呑まれようと押し返されている。このままでは光ごと自分は呑まれ、背後にある住宅街――そこに住まう人々をも巻き込んでしまう。
負けてしまう。眼前に迫る敗北と死、それを前に修司は――。
（負ける？　俺が？　かめはめ波が？　俺達のロマンが？　……そんなの、そんなもの！）
認められる訳がない。許容出来る筈がない。
（伝説の聖剣？　最強の騎士王？　ザケンナ！　舐めんな！　ふざけんな!!　そんな、それが、なんだって言うんだ！）
相手が強いなら、更にその上を超えていく。その心の強さを、修司はあの物語を通じて思い知っている。
大事なのは負けない、勝つという意志。
（出し切れ俺！　もっと、もっとだ）
後の事は……今は考えない。今の修司の頭にあるのは今押し寄せてくる脅威に全力で挑むこと、ただそれだけ。
（思い出せ、姉弟子の言葉を！　全身に流れる力の流れを、パイプを、更に強固に加速させろ！）
内に流れる力の奔流、その全てに伝達させる。もっと熱く、もっと速く、もっと力強く放出させろ。頭の天辺から爪先まで、全細胞を通じて活性化させていく。

まだ自分の力はこんなものではないと、他でもない自分自身が信じている。
そして、その思いは形として如実に顕れ始めた。
（――何だ？）
手応えに違和感を覚える。今まで押していたモノがまるで巨大な何かに塞き止められた様にセイバーの極光は勢いを止めてしまっている。一体何が、そう彼女が疑問に思うのも束の間、今まで圧されていた蒼白の光芒が急に息を吹き返し始めてきたのだ。
「――無駄な事を、今楽にしてやる」
小癪なと悪態をつきながら、セイバーは更に力を高めていく。今自分に繋がっている魔力炉心は現代に於いて超級規模の容量を誇っている。この程度、押し潰して見せる。セイバーが今度こそ息の根を止めようとしたとき――。
横から、ハルバードが飛んできた。
「っ!?」
ガインと、音を立ててセイバーの頭に激突した槍斧はその勢いのまま水面へ落ちていく。突然の衝撃に直感が働く余地もなく受けてしまったセイバーはハルバードが飛んできた方向へ目線を向ける。
そこにいたのはアインツベルンのホムンクルス、リーゼリットだった。野球選手が如く流麗なフォームで固まっている彼女を相方のセラが担いで逃げていくのが見えた。
「き、貴様ぁっ！」
激昂に任せて叫ぶセイバー、しかし彼女が意識を逸らしたその一瞬の隙が彼女の運命を決定付けた。意識が僅かにズレた事で力に弛みが生じてしまい、それは同じ光を放つ修司にも伝わり――。
（今だっ!!）
「ダァァァァァッ!!!」
その隙を見逃さず、自身に出せる更なる放出を行った。全細胞を一片残さず出し切る勢いで放ったそれは、修司の放つ白い闘気にさえ及ぼしていく。
（なんだ……アレは？）

押し寄せる光の奔流の中でセイバーが目にしたのは蒼白の中に漂う朱色の炎だった。蒼白の光の中で燦々と紅蓮の如く燃え滾る炎、その不可思議な光景を目にしながらセイバーは修司の放つ光の中へ呑まれていった。

◇

「……が、ぐ……ば、バカな。何故私は……生きている」

光に呑まれ、己の死を覚悟したセイバーだったが、意外なことに自分は未だ現界したままだった。バイザーは砕かれ、鎧も半壊し、全身も指先一つ動けないままに疲弊してはいるが、それでも己の命が存在している事にセイバーは驚きと戸惑いを隠せずにいた。

自分の一撃があの光と相殺した？　否、それは違う。あの拮抗した状況の中で、最初こそは押し込められていたが、徐々にその差は無くなっていき、あのホムンクルスの横槍が入った事で自分とあの男の実力差は完全に入れ替わった。

あの時、白河修司はこの騎士王を上回った。それは間違いなくて、同時に己の放つ約束された勝利の剣（エクスカリバー）にも打ち勝って見せた以上、どう考えても自分が消滅するのは間違いないはずだ。

だが、現に自分は生きている。あの光の奔流に呑まれておきながら、何故自分が生き残れたのか、偶然でないのなら考えられる事は一つ。

「……手心を加えたな」

「……」

忌々しく吐き捨てるセイバーの頭上には悲痛な面持ちの修司が

立っていた。
「やっぱ、セイバーさんだったのか」
「ふん。相変わらず甘い男だな。この私に止めを刺さないとは、嘗てのマスターと同じく、トンだ甘ちゃんだな。貴様は」
「……セイバーさん。アンタも、あの黒いのに呑み込まれたから、だからそんな風に変わっちまったのか？　もう、元には戻れないのか？」
「――――どうやらまだ理解出来ていない様だな。私は嘗て有り得た王の別側面、あったかもしれない騎士王のもう一つの顔だ。あのランサーとはその根本から異なっている」
黒化、或いは反転。後にそう称される現象によって現在のセイバーは全く異なった性質を持つサーヴァントとなっている。
修司に魔術の知識はないから殆ど理解出来ないが、彼女の言葉によって理解してしまう。もう、この先彼女が元に戻る事は絶対に無いのだと。
しかし、それでも彼女とは一度共に戦う事を約束した仲だ。諦めたくはないし、何より士郎に申し訳が立たない。何とか説得して対立することを止めて貰おうと説得を講じてみるが……。
「なぁ、セイバーさん。記憶、残ってるんだろ？　ならさ、戻ってきなよ。あんたがいなくなってから士郎の奴が寂しそうにしてるんだぜ」
「知るものか、私はもう貴様達の知る騎士王ではない。……さぁ、止めを刺せ。貴様にはその資格がある」
「セイバーさん」
「くどいぞ。それともなにか、このまま私の回復を待って今一度私と戦うか？　そうなれば今度こそ大勢の街の人間が死に絶えるぞ」
不敵に笑い、なんてこと無いように語るセイバーに修司はこの少女がもう自分と知る人物ではないと悟る。きっと、彼女は自分の言葉を曲げないのだろう。負けず嫌いな事だ。そういうところは……きっと、反転する前から持ち合わせた彼女の気質なのだろう。
もう、言葉はいらない。修司は近くに落ちていた彼女の聖剣を手にし……。

「悪趣味な事だな。だが正解だ。私の頸を落としたければ私の聖剣を以てする他ない。どうやら貴様も限界らしいようだ……精々、外すなよ」
黒いセイバーに言われるがまま、修司は地に落ちた持ち主同様黒に染まる聖剣を頭上高く掲げ――る、事はなく。
片手を柄へ、もう片方の手で刃の部分を握り。聖剣を水平へと持ち替え
「はぁぁぁぁ……」
全身に白い闘気の炎を迸らせる。
「え？　ち、ちょ、貴様、一体何をするつも――」
嫌な予感がする。セイバーが持つ直感が盛大に警鐘を鳴らすよりも早く……。
「オラァッ!!」
見事な膝打ちを剣の腹に叩き込み、彼女の聖剣をへし折った。
言葉にならない叫びが未遠川に響き渡る。そこには折れ逝く愛剣の姿に童女の様にギャン泣きする少女がいたとかいなかったとか。
後に、士郎が何故そんな事をしたのか問い詰めると。
『戦う意志が消えないなら、殺すより戦う得物を目の前で壊した方が人道的じゃね？』
サーヴァント、英霊の象徴とも言える宝具をそんな理由でへし折る友人に士郎はちょっぴり引いたのだった。

その４８

黒と蒼白、二つの極光がぶつかり合って既に１０分近くの時が過ぎようとしていた。中心地点である未遠川は隕石でも落ちたかのようなクレーター、更に海へと続く水平線の彼方には蒼白の光が黒の閃光に打ち勝った際に出来た一筋の溝が出来上がっている。

既に多くの住民が現地へ野次馬根性で殺到しているだろう、神秘の秘匿の秘の字もない所業に魔術師の一員である遠坂は内心酷く憤慨した。一体何処の大馬鹿がこんな大規模な魔力行使を行ったのか、この分では事後処理の件も此方に回ってきそうな騒動に遠坂が怒りと焦りと不安で百面相をしていると……。

「遠坂、修司達が帰ってきたぞ！」

タイミング良く様子見から戻ってきた士郎のその一言に遠坂の目が光る。状況と先に見えた間桐邸からの光の柱の件と重なって今回の件も原因はあの男に違いないと察した遠坂はノコノコとやってくる元凶に向かって一直線に駆け出していく。

それをアーチャーは止めようとはしなかった。止めた所でどうにもならないし、何より分かりきっている結末に手を出すのも気が引けたからだ。遠坂凛の読みは間違いではない、神秘の秘匿に関しても彼女の魔術師としての気持ちを考えれば間違ってはいないからだ。

しかし、それをぶつけるのに遠坂が向かっていた相手は……剩りにも分が悪すぎた。

「あっぶねぇなぁ、ヘトヘトになって帰ってきた弟弟子に蹴りを放ってくるとか、ウチの姉弟子はやることがえげつないなぁ」

「～～～～っ!!」

学校一の美少女の顔を片手で鷲掴みをする修司が坂の向こう側から姿を表す。山吹色の胴着を身に纏い、所々煤けた修司がホムンクルスの女性を背に担いで呆れ顔を晒しながら遠坂と共に現れる。その後ろには聖女が苦笑いを浮かべながら追随し、彼女の背にもやはりホ

ムンクルスの女性が抱えられていた。
　どうやら、目的は達成できた様だ。道中トラブルに見舞われた様だが、全員無事で戻ってきた事に安堵するアーチャーだが……最後に現れた人影を見て絶句する。
「ほらセイバー、いい加減機嫌直せって。修司も悪気はないし、寧ろお前を止めるために頑張ったんだ。もう愚図るのは止めろって」
「だって、だってぇぇ～～」
　士郎に手を引かれ、涙を流す黒い騎士の少女。唯でさえ意味の分からない状況に困惑するアーチャーだが、彼女の片方の手に握られた折れた剣の柄を見て、彼の思考は完全に停止した。

◇

「セイバーの聖剣をへし折ったぁぁぁっ!?」
　状況整理の為に今一度衛宮邸の居間へと再度集まった修司達、ジャンヌから簡単な手当てを受けながら修司は夜中にも関わらず大声を出す遠坂に半目で睨む。
「声がデケーよ遠坂、近所迷惑だろ。隣にはセラさん達も寝てるんだから」
「いや何シレッと言ってんのよアンタ、自分のしたことが分かってんの？　聖剣よ聖剣、レジェンドソード、伝説の中の伝説の聖剣を折った？　アンタが？　なんで、どうやって!?」
「どうって……普通に膝でだけど？　こう、テイヤって」
「テイヤって……嘘でしょう」

「残念ながら事実です。私も、この目で見ましたから……」
修司が事の顛末を詳細に話すと、返ってきたのは絶叫の嵐だった。伝説に謡われた聖剣、一度奮えば勝利は確約される栄光のある剣を目の前の男は平然と、一切悪びれる事なく折ったと断言した。
「仕方ないだろ。セイバーさんってば剣を振る度にバカスカとビームを撃ってくるし、勝ったと思えば止めを刺せ刺せ煩いし、黙らせ……もとい、納得させるにはこれが最善だと思ったんだよ」
「いや確かにそうかも知れないけど……」
隣を見れば泣きながら士郎の作ったハンバーガーを頬張るセイバー、泣くのか食べるのかどっちかにしろと言いたいところだが、修司の話を聞く限りそれを言うのは酷に思えた。
「言っておくけど、俺に神秘の秘匿云々の話は止めてくれよ。俺魔術師じゃないし、魔術師の常識を説かれても困る」
「じゃあ、何で私が教えた魔力のコントロールが出来てるのよ」
「さぁ？　出来たから出来た。としか言えねぇよ」
これである。聞けばこの男は魔力回路なんて欠片も持ち合わせてはいない癖に特大の魔力放出をぶっ放したと言う。残念なことにそれを否定出来るものはおらず、眠る前のセラも同意し、リーゼリットに至っては興奮しながらその時の修司のポージングをしながら解説していた。
「そっかー、かめはめ波かー、僕も間近で見てみたかったなー」
なんて、酷く羨ましがった様子の慎二がそんな事を口にしていた。この男、聖杯戦争から脱落してからか憑き物が取れたようにさっぱりとし、今では他人事のように話を聞くだけである。
「慎二もやってみるか？　相当修練が必要だけどやってみると楽しいぞ。テンションで頭が可笑しくなりそうだったし」
「いやぁ、僕は良いよ。やるよりも見る専門だから」
やんわりと笑顔で断る辺り、相当強かさを身に付けている様である。その笑顔の裏では二度と修司とは対立しない事への絶対的な誓いを立てていた。
「て言うか、俺がかめはめ波を撃てたのは姉弟子のお陰なんだぜ。あ

の時遠坂のアドバイスがなければ、多分被害はもっと大きくなってた」
「え？　そうなの？」
「あぁ、だから、姉弟子には感謝してるんだぜ？」
　そう言って笑みを浮かべて礼を口にする修司に遠坂はなにも言えなくなった。そのつもりは欠片も無かったのに、結果として自分のアドバイスが冬木の街を、更に言えば弟弟子の命を守ることに繋がった。自分の教えが実を結んだ事に内心嬉しく思う遠坂だが、同時に自分のした事への大きさを自覚する事になる。
（え？　じゃあなに？　コイツがそのナンとか波を撃てたのは私の所為で、あれだけの騒ぎを起こしたのも私の所為ってこと？）
　サーッと遠坂の顔から血の気が引いていく。神秘の秘匿を守る処か進んで破っていく怪物を己のアドバイス一つで生み出した事実に漸く彼女は気が付いた。
　いや、魔力回路は持ってないので厳密には神秘とは異なる力かも知れないが……今この場においてはそれすらもどうでも良かった（良くない）。
　表情を青褪めながら冷や汗をダラダラと垂れ流す遠坂を訝しむが、それに誰も突っ込もうとはしなかった。口を出すのも憚れたとも言う。
「まぁ、そんな訳でセイバーは何とか無力化し、迎えに来てくれた士郎が人目に付かないルートで此処まで案内してくれたって訳だ」
「へー、結構大変だったんだ。あーあ、私もその場で見てみたかったなぁ。かめはめ波ってアレでしょ？　お兄ちゃんの所のマンションで仮住まいしていた時、暇なら読んで良いって渡してくれた漫画の主人公の必殺技」
「おっ、読んでくれたんだ。お嬢様にはちょっと合わないかと思ってたけど、その分だと楽しんで貰えたみたいだな」
「楽しんだ。と言うより、色々と思う所が出来たお話ね。七つのボールを集めて呪文を唱えれば願いが叶うとか、聖杯戦争顔負けじゃない」

「やっぱ、殺し合いを前提としている時点で色々ダメだからじゃね？」
「……どうしよう。何だか私もそんな気がしてきた」
修司との何気無い会話でイリヤの中にある魔術的な常識が徐々に崩れていく気がした。何故この男は目の前に立ち塞がる不条理の壁を更なる理不尽で捩じ伏せていくのか、しかもその言動と理念が一般常識からのごく自然なモノであるから、世界の裏の面である魔術とは致命的な迄に剃り合わない。
仮に今此処で魔術協会の強硬派が修司の行いを弾劾しようと襲ってきても、本人は正当防衛を主張して返り討ちにしてしまうだろう。自分達のプライドに傷を付けた修司を魔術側は許さないだろうし、修司もまた一方的な言い分で襲ってくる魔術師達を悉く打ち倒していくのは想像に容易い。
その先に起こりうるのは魔術と一人の男の戦争。しかもそうなったとき不利なのは常日頃から魔術を秘匿する事を是とする魔術側に他ならない。対して修司は昼間だろうと深夜だろうと襲ってくるならば容赦なく例の集束砲をぶっ放してくるだろう。
空へ、海へ、陸へ、最強の聖剣の宝具を打ち破った理不尽の塊の様な一撃が際限なく撃ち込まれていく。……うん、悪夢だ。
「と、色々と言いたい所はあるだろうけど、今は取り敢えず横に置いておこう。セイバーさんの様子からして恐らくは間桐の……ライダー陣営からの刺客なのではないかと俺は考えている」
「……だろうね。キャスターの仕業って可能性も有りそうだけど、あのランサーとの類似性から見て、このセイバーが桜の送ってきた奴だと見て間違いないだろうね」
「なっ、ま、待ってくれよ二人とも！　どうして桜の仕業なんだ！　ライダーの陣営は裏で操っていた臓硯が元凶だったんだろう？　その元凶も修司が倒した。なら、自由になった桜がそんな事をする筈がないだろ」
「気持ちは分かるけどね衛宮、なら何でその桜は今此処にいない？　桜にとってお前のいるこの家は何にも勝る大事な居場所だった筈だ。ライダーに拘束されている？　有り得ないね。残念ながらあの大女

が桜に其処までする事は絶対に無い」
「っ！」
桜が修司達に刺客を差し向けた。それも、セイバーという死線を潜り抜けてきた者を。
臓硯の縛りから解放され、自由を得た桜がそんな事をする筈がない。だから士郎はそれを強く否定しようとするが、反ってきた慎二の問いにその口許は強く結ばれてしまう。
「――なぁ、イリヤちゃん。臓硯は桜ちゃんを聖杯の門にするとか宣ってたけど、魔術的にそんな事は可能なのかい？」
「……普通なら無理よ。如何に魔術が神秘を伴う秘術だとしても、大聖杯規模の魔力炉心を受け止めるなんて意思を持つ人間には不可能に近いわ」
だが、間桐臓硯は１０年前の聖杯戦争の折りに聖杯の欠片なるモノを入手し、それを桜に植え付けた。虚数属性という魔術的にも稀有な才能を持った彼女と聖杯の欠片が長い時間の中でゆっくりと溶け合う事で不可能とされる壁を排除したと言うのなら。
「確率で言えば、結構高いかも。でも、だとしてもそうなった時の桜は……もう桜じゃない。桜という器を持った別のナニかよ」
「そんなっ!?」
臓硯を倒した所で根本的解決には至らない。やはり聖杯そのものを破壊しなければ桜もこの街も危ない。セイバーを取り戻してきて得た平穏への道筋が一気に遠退いていく感覚に士郎は足元が崩れる錯覚を起こした。
「……」
「修司君、どうしました？」
重苦しい沈黙のなか、手当ての終えた修司は徐に立ち上がり居間を後にしようとする。ジャンヌは何か意を決した様子の彼に声を掛けるが……。
「ちょっと連絡することがあって……士郎、電話借りるぞ」
「あ、あぁ……」
後を追いたいが、今はこの場をどう取り持つかが重要だ。桜を取り

戻すに残された時間はもうあまり無い。ジャンヌも必死に無い知恵を絞り出そうとする一方で。
「シロウ、シロウ、ハンバーガーまだー？」
「小僧は少し取り乱している様だ。ここから先は私が作ろう」
「アーチャー？　うむ、よかろう」
　聖剣がへし折れ、戦意も誇りも砕かれた騎士王を赤の弓兵が涙を流しながら給仕に徹していた。
「ちょっとアーチャー!?　アンタ何か透けてない!?　ちょ、もしかして座に還ろうとしていない!?」
「ふふふ、心は硝子だぞ」

◇

――――――光が、来る。
　大きくて、あつくて、眩しくて……まるで、燦々と輝く太陽の様な光がもうすぐ私の所へ迫ってくる。
　鬱陶しい、煩わしい。どうして私に迫るのだ。私が一体何をしたと言うのだ。私は何もしていないのに、悪いことなど……何一つしていないのに。
　いつも、いつも私の周りだけが幸福に包まれている。私だけを仲間外れにして、皆が皆、幸せそうに嗤っている。
　許さない。許さない許さない許さない許さない許さない。何故私だけが苦しまなければならない、どうして私がこんな辛い目に

合わなければならない。
嫌いだ。皆嫌いだ。私を殺す世界が嫌いだ。私を犯す世界が嫌いだ。私を照らす……光が嫌いだ。
――――殺してやる。
殺して犯して嬲って殺して撃って焼いて引き裂いて殺して炙って殺して殴って殺して消して殺して殺して殺して殺して殺して殺して……。
《――そうじゃ桜、憎め、恨め。お主のその憎しみは正しい。お主の絶望は正しい。故に吐き出せ、全てを犯せ。お主にはそれだけの許しがある》
「――――はい、お爺様」
奈落の底、淡く蠢く地獄の釜の淵にて少女は黒いドレスを纏う。全ては――――。
「光に照らされて、皆ペラペラの影法師みたい。そんなに薄くて小さなモノなら……無くなっても、誰も困らないでしょ？」
「……ねぇ、貴方もそう思うでしょ？」
〝修司センパイ〟
目障りな全てを消したい、ただそれだけの為に。
奈落の底で黒の少女は嗤う。

その49

「さて、此度の聖杯戦争もそろそろ佳境か。うむ、こうして振り返ってみれば中々どうして面白い余興ではあったな」
　冬木の街並みを一望出来る冬木の教会にて英雄王はワインを片手に先の未遠川で起きた戦いを反芻し、その笑みを愉悦に歪める。
「理想を……いや、夢想を現実へ落とし込んだか。は、流石は我が臣下。やる事が派手だな、もし魔術師どもが先の光景を目にすれば発狂して死に絶えるであろうな」
　その光景が目に出来ないのが残念だ。そう溢しながらワインを傾けて己の臣下の仕出かした偉業にご満悦に浸っていると、ふと横にいる神父に目を向ける。
「……聖杯戦争という舞台も間もなく終幕、だというのに聖杯に召し上がれたサーヴァントは反転した者達を除いて未だアサシンのみ、前のと合わせても二体だけという。しかもその相手が聖杯戦争に無関係な一般人だというのだから魔術師達からすれば前代未聞の光景だな」
「ではどうする？　予定調和の為に貴様も動くか？」
「まさか、今更手を加えよう等と思わんさ。正確に言えば手の施しようが無い。の方が正しいが」
　肩を竦め、暗躍することを諦めると明言する言峰。その表情には達観の色が濃く現れ、心なしか頬も少し痩けているようにも見える。
「その様子だと、どうやら後始末の方は片が付いた様だな」
「――――ふふ」
　遠い目で疲れた笑みを浮かべる言峰の表情が全てを物語っていた。度重なる聖杯戦争による冬木の被害、それが魔術師同士による殺し合いというのを気付かれずに秘密裏に処理する。それが今回の聖杯戦争に於ける言峰綺礼の役割。
　だが、予想以上に被害の規模が大きすぎた。先の間桐邸の爆発から未遠川での光、どれも通常の自然現象では片付けられない案件に流石

の言峰も手を焼いた。
　聖杯戦争に於けるガス爆発事故として処理しようにも、あんな派手な光の柱をどうやってガス爆発の所為に出来るというのか、未遠川で起きた光のぶつかり合いもそう、目撃者にどんな暗示を掛けて無かったことにするべきなのか、魔術協会や聖堂教会への根回しも含め、やることの多い言峰は寝る間も惜しんで隠蔽工作に勤めた。
　暗躍？　そんな暇なんて有りませんでしたが？　ちょっかい出したくても出せない状況、この時の言峰綺礼の心境は夏休みの宿題を終わらすまで遊べない事を強要された小学生の気持ちと似ていた。
「いやな。本当に我が弟子ながら成長しすぎじゃね？　なんなんあれ？　どうして魔術の魔の字も知らない小僧が魔法の真似事が出来るの？　そんなんどうやったって誤魔化し様がないじゃない。こんなん魔術協会に知られたら一発で介入案件じゃない。もう疲れた。本当に疲れた。これ以上やらかしてみろ、私は寝るからな。全てを放り投げて不貞寝するからな」
「落ち着かぬか戯け、色々ブレブレだぞ貴様」
　膝から崩れ落ちて泣き言を呪詛のように呟く言峰に英雄王は呆れながら叱咤する。
「あぁ済まない。取り乱した。さて、諸々異常事態が続く此度の聖杯戦争、終幕の時は間もなく訪れる　その時、我が弟子は聖杯戦争の真実に気付けるのか、そして気付いた時、果たして立ち向かえるのか、見物だな」
「我の見解としては、割りとあっさりと越えられてしまいそうだがな」
「おい止せやめろ。考えないようにしてるんだから」
　話が逸れた。数回咳払い、場を取り直す言峰。その表情には先とは違う笑みが張り付く。
「ともあれ、その時が来るのなら私も否応なく表舞台に出るしかないな。今回の聖杯戦争で全てに決着がつけられるにしろ、私は聖杯戦争の勝利者に問わなくてはならない」
　先の聖杯戦争にて言峰綺礼という男は死を迎えた。今、こうして此処に生きていられるのは偏に聖杯の力によるものに他ならない。

聖杯が破壊されれば聖杯と繋がっている自身もまた死に果てる。この結末はどう足掻いても変わらない、ならば最期にその瞬間を聖杯戦争の勝利者との問答にて消費する事を決めた言峰は今回の事後処理が終えた後、自身の目的の為に動く事を決めていた。

そう、１０年も前の時から。

「往くか、言峰」

「往くとも、英雄王。既に賽は投げられた。ならば後は出た目に従うのみ。……この１０年、中々楽しめたぞ」

「そうか……」

別れ行く言峰の背を一度だけ見送り、王は外へ視線を向ける。時刻は既に深夜を周り、未遠川付近に数十台のパトカーが集まっているのが見える。

もうじき聖杯戦争も終わりを迎える。それが一体どのような形となるのかは千里眼を封じられた英雄王でも計り知れない。

「一つだけ言えるのは、奴が、白河修司が確実に大きな事をしでかすという事だけ、だな」

その時、ふと懐にしまった携帯電話が鳴り響く。画面には見慣れない電話番号、何かと思い出てみれば、通話口の向こうからは今話題にした臣下の声が聞こえてきた。

「どうした修司こんな夜更けに、貴様にしては珍しいではないか。なに？　我に頼み？　……ほう、厄介事に巻き込まれているのか。相変わらず忙しないな貴様は」

「で、その頼みとは？　――――ふはは、成る程。確かに危険性を考えればそうするのが当然だろうよ。確かに我は冬木の市長とも面識がある。我が声を掛ければ瞬く間に事態は進むだろう」

「だが、その案は今一つ現実味が足りないな。幾ら極東の島国とは言え冬木にも数千の人間が住んでいる。そやつらを一晩とはいえ全員避難させるには些か時間が足りん」

「故に、深山町の人間だけ新都へ避難させよ。場所は新公民館、彼処なら一時の避難所として申し分あるまい。……不安だと言うのなら、この一晩で全てを終わらせよ」

「――その気概があれば充分であろうよ。深くは訊かん。だが必ずやり遂げよ、我の臣下を名乗るのならば最後まで、徹底的にな」
　その一言を最後に王は通信を切る。相変わらず世話の焼ける奴だと溢しながらもこれから何をしでかすのか分からない臣下の行動にその内心ではワクワクとドキドキで胸を高鳴らせていた。
「しかし修司め、よもやアレを会得するとはな。以前から行っていた修練は無駄では無かったか」
　未遠川で見せた己の臣下の放つ光、その光景を目にした時は柄にもなく興奮した事を思い出す。
「確か……こうだったか、かーめーはーめー……」
「いつまで遊んでいるのかしら」
　臣下にも出来るなら我にもワンチャンあるのでは？　なんの根拠もなしにかめはめ波の練習を始めた英雄王、そんな彼の後ろから呆れた表情の女性が現れる。
「むっ、男の秘め事を覗き見るなど無礼千万。我が上機嫌でなければその首吹き飛んでいたぞキャスター」
「事態が動くのでしょう？　ならば、早いところ指示を寄越しなさい。宗一郎様との逢瀬を中断までしてきたのだから」
「ふん、受肉を果たした途端これか。全く、世のメディアちゃんファンが見たら泣き崩れる事必至である。もう少し愛想というのを振り撒いたらどうだ」
「黙りなさい諸悪の根源、いい？　私が貴方に協力しているのはあくまでも受肉の為に寄越した宝具の返礼よ。私がするのはこれから起きる出来事の後処理、それが済めば私達は無関係の間柄よ。それを間違えないで頂戴」
「無論、心得ているとも。貴様の魔術の腕は業腹だが認めてやる。その力で以て我が臣下の後始末をする。その代わり貴様は定命の生を以て想い人と添い遂げる。うむ、これぞＷｉｎ―Ｗｉｎな関係という奴よ」
　それはキャスターが修司とジャンヌに敗れ、身を隠していた頃。魔力供給の源を失い、時間が過ぎる毎に現界に必要な魔力を失い、想い

人の事を考えながらこれからの事をどうするか考えていた時だった。
黄金の王が目の前に現れ、ただ一言『命が惜しくば我に協力しろ』とだけ告げられた。
キャスターに断る選択肢は無かった。一目見ただけで分かってしまったのだ。今自分の目の前にいる黄金の王は自分など一捻りに殺せるのだと。そうしないのはこの男にとってまだ自分には利用価値があるという事。断れば即座に殺されるが、殺されなくても自分にはもう策を弄するだけの時間はない。
一か八かの賭けで結んだ契約だが、結果的に言えば最良の結果だった。与えられた宝具の力により肉体は得られ、魔力に関しても生前とほぼ変わることなく使用が可能、この時点でキャスターにとって最早聖杯戦争は意味の無いモノとなっていた。
流石は人類最古の英雄王、サーヴァント一騎程度なら現世に命として留めさせる事くらい訳はないと言うことか、その代償にこれから起きる出来事の後始末をさせられる事を考えると少なからず憂鬱な気分になるが。
というか、《魔女っ子メディアちゃん》等というふざけた黒歴史を産み出してくれた事を考えると、軽く腸煮え繰り返る思いだが……今は呑み込んでおこう。
「で？　私の出番はいつ頃かしら？　私としてもいつまでもあんな下らない争いを放置しておきたく無いのだけれど？」
「ふっ、まぁ暫し待て。貴様をここへ呼び立てたのだ。然程間を置かずに事態は動くであろうよ」
そう言いながらギルガメッシュは携帯電話を操作し、連絡先の一つとして登録してある市長に繋がる番号を押す。
市長と話をする英雄王の背中を眺めてキャスターは思う。あれ程の力を持つ英雄王が、何故あの小僧に其処まで拘っているのか。
力は強いと思う。勇気もあるし、恐怖に駆られても退かない度胸もある。自分が生きた時代でなら勇者と呼ばれてもおかしく無い程にあの少年は強く、そして強くなった。
確かに王という生き物は英雄や勇者といった生き物を好む傾向が

ある。それが自分の臣下であれば拘る気持ちも分からなくもない。
でも、それだけではない気がする。あの暴君と恐れられる英雄王がそれだけで彼の言葉に耳を傾けるとは到底思えない。彼には、修司という男には他にも隠された何かがあるのではないか。
（……まぁ、例えそうでも私には何の関係も無いんだけどね）
そう、今となってはキャスターにとってそんな事はどうでもよかった。ただ彼女が願う事があるのだとすれば、今後この地で生活するに当たり、なるべく被害は少なく、穏やかに聖杯戦争を終わらせて欲しいという事だけ。
好きな人が出来た。この人と一緒に人生をやり直したいと、そんな細やかな願いがもうじき叶う。これ以上下手な暗躍はせず、大人しく慎ましく生きていこうとキャスターことメディアは心に誓った。
しかし、そんな彼女の願望は色んな意味で裏切られる事になろうとは、この時の彼女は想像すら出来ていなかった。後に彼女は語る。
『あんなの、どうやって予想しろっていうのよ！』

◇

「――今晩中に何とかしろ。かぁ、王様も中々無茶言うなぁ。今に始まった事じゃないけど」
衛宮家での通話を終えた修司は受話器を静かに下ろす。自身の保護者であり、また直属の上司から齎された久々の無茶振りに頭を悩ませるが、修司としてもこのふざけた戦争を終わらせたい気持ちはあったので、決心が付いたから良いかと一人納得する。

問題は聖杯戦争の元凶である聖杯、それも大規模な魔力炉心であると予想される大聖杯の居所だ。現在遠坂とイリヤが冬木の地図を見ながらあれこれ考えているから、そう然程時間が掛かる事は無いだろうが……。
「修司、誰と話してたんだ？　もしかして、例のお前の保護者の？」
「あぁ、今その人と話してきた。あの人は冬木の市長さんとも面識があって、結構話す間柄らしくてさ、その人にお願いして深山町の人達を新都の方へ避難させて貰えるよう手配して貰ったんだ」
サラリと何てこと無いように語る修司、一つの町に住む人々を隣の新都へ避難させるなんて大規模なことをすると誰もが思ったが、これから起きる戦いの事を考えれば、彼の行動は余り間違いとも思えなくなった。
「――――まぁ、ここしばらくガス洩れ事件とか相次いでいたし、間桐邸の家の消滅はガス爆発の所為とされてきたから、流れとしては悪くはないんじゃないかしら」
「問題は、今回の聖杯戦争に於ける出来事を全てガス爆発の所為に出来るかってこと……て言うか前々から思ってたけど、冬木のガス会社風評被害凄くない？　よく潰れないわね」
「まぁ、そこは綺礼辺りが上手くやっているんでしょ。伊達に監督役やってないだろうし、前回の事も踏まえて色々対策はしてるだろうしね」
「前回って、やっぱかなり激しかったのか？」
「聞いた限りだと相当派手にやらかしているみたいよ。聖杯戦争の参加者一人を潰すために一つのホテルを爆破したって記録があるくらいだから」
「ホテルの爆破って、下手しなくてもテロ案件じゃないか。普通警察とか……いや、自衛隊が動くんじゃないのか」
「それだけ魔術の力ってのはデカイんだろ。……正直、聞いててむかっ腹が立つぜ。大勢の人間を巻き込んでいて自分達は知らぬ顔とか。神秘ってのがどんなに大事か知らないが、魔術師のやり口ってのには反吐が出る」

「――――」
「っと、悪い。今言うことじゃないな。兎に角、パトカーの音が聞こえてきたら警察の人の誘導に従うように言われると思うから、今の内に役割を決めておこう」
　前回の……いや、全ての聖杯戦争にて引き起こされた人災、魔術師によって一方的に決めた儀式にはいつだって多くの無関係な市民が巻き込まれている。それなのに魔術師側はいつも神秘の秘匿だけを優先して行い、後は知らぬ顔を決め込んでいる。
　自分の仕出かした事に責任を取ろうともしない魔術師のやり方に心の底から怒りを覚える修司だが、それを今ここで吐き出すのには憚れた。遠坂もイリヤもある意味では聖杯戦争の被害者、当事者の家系ではあるが魔術師たれと教え込まれて育ってきた彼女達を一方的に責めることも、少し違うのではないかと思ったからだ。
　ともあれ、これで一時的ではあるが時間は稼げるはずだ。後は大聖杯の在処が深山町付近にあることを願うだけだが……その前に、役割分担は決めておくべきだろう。
「……そうね。大聖杯の在処は一応絞れたから今の内に役割を決めておこうかしら。取り敢えず白河君と私とアーチャー、そしてルーラーが突入、衛宮君は私達の後ろで自身の身の安全を確保、イリヤスフィールとバゼットには後方を支援って事でいいかしら」
「あら？　私とバーサーカーが前でなくて良いの？　貴女のサーヴァントを疑うつもりは無いけれど、今後待ち構えている敵サーヴァントを考えると、私達の方が適任だと思うけど？」
「敵は何もサーヴァントだけじゃないわ。例の影、あれこそが向こうの主力と考えるべきよ。私のアーチャー曰く、自分ならある程度なら耐えられるけど、純粋な英霊であるバーサーカーとでは相性が悪い。だからいざとなったら瞬時に退路を確保できるバーサーカーを温存しておきたいの」
「ならば、私こそが前に出るべきでは？」
「そうね。正直私もそこは迷ったわ。アーチャーもどちらかと言えば後ろに控えた方が安全だし、何よりバランスが良いと思う。でも

……」
「なぁバゼットさん。アンタ、ランサーのマスターだったんだろ？　倒せるのか？　嘗ての相棒相手に、アンタが」
　向こう……即ち、桜とライダーの陣営にはライダーだけでなくランサーも顕在している。短い間とはいえ、共に寝食を共にしてきた相手をバゼットは打ち倒せるのか、疑問に思った修司が素直にそう口に出すと……。
「構いません。私は、魔術師であると同時に戦士でもあります。例え敵が見知った相手でも容赦なく拳は奮えます」
「――――即答かよ。こっちは気を遣ったつもりなのに」
「その様な気遣いは、私には無用です」
　ランサーだろうと自分は戦える。そう主張するバゼットに諦めた修司達は仕方ないと次に移る。
「で、最後は避難組……もとい藤村先生や知り合いの人達に遭遇した場合の言い訳を担当してもらう人なんだけど」
「うん、もしかしなくても僕しかいないよね？　僕戦えないしね。分かるよ。うん、スッゴい解る。適材適所っていうからね。そうなるのは分かってたさ」
「でもね。ちょっと待とうか、シドウリさんだっけ？　彼女は良いよ。普通の一般人だし、修司の知り合いだって言えば通じそうだし、でもあのメイドはどうするの？　てかあの二人今も寝ているまんまだよね？　何て言えばいいの？　いや、それもよしんば何とかしたとしよう。でも、アレだけはどうやっても無理だから！」
　そう言って慎二が指差す方向には未だハンバーガーを頬張る騎士王が頬をリスのように膨らませながらバクついている。自棄食いなんてレベルじゃない、衛宮邸の食材を食いきる勢いで頬張っている。
「どうやってアレを説明すんの？　て言うかアレも僕の預りなの？　無理だから、絶対に無理だから、あの人の目、見た？　人をゴミみたいに見るんだよ？　目を合わせただけで死ぬかと思ったからね？」
　顔をリスのように膨らませている時点で威厳もクソも無さそうだが、どうやら慎二には少々刺激が強かったらしい。ため息を溢しなが

らセイバーオルタへと近付き……。
「いつまで食ってんだよ、いい加減此方の話も聞け」
パシンと、容赦なく彼女の頭を叩いた。
「ちょ、修司君いきなりなにを!?」
「なに騎士王相手にツッコミ入れてんのよ！　衛宮君の家を吹き飛ばす気!?」
「いや、だってコイツも当事者の一人じゃん。話混ぜてやらないとあとで混乱するじゃん」
「いや、ですが……」
今のセイバーはあの黒い影に呑まれ通常とは異なる性質へ変異してしまっている。反転、そう呼ばれている事から今の彼女は根っこの部分こそは変わらないが、その在り方は冷酷にして残虐、一歩扱いを間違えれば冬木の街は焦土と化す。
「おら、そんだけ喰えばもう充分だろ。そろそろマジで話に混ざってくれなきゃ困るんだって」
しかし、それでも構うことなく修司はセイバーへの態度を改めない。この男、命を懸けた戦いをセイバーと繰り広げた所為か彼女に対する遠慮というものを無くしていた。
「――ヤダ」
「あ?」
「エクスカリバーが無ければヤダ」
ズズと鼻を啜り不貞腐れながらそう話す黒セイバーに修司の額からビキリと青筋が浮かびあがる。未遠川での激闘再びか？　そう危惧する遠坂達を置いて修司は部屋の隅へと移り、其処にあった新聞紙へ手を伸ばす。
テキパキと何かを作り出す修司、近くにあったガムテープに手を伸ばし、最後に黄色のマジックペンを使う。時間にして二分も掛からない早業、再び黒セイバーの所へ戻ると。
「ほら、これでいいだろ」
ポイッと、一本のハリセンを彼女の前に置いた。其処には黄色くデカデカとエクスカリバーの文字が書き込まれている。

ウッソだろお前。修司の所業にイリヤすらも言葉を失い……。
「……ふぇ」
セイバーが再びその目に大粒の涙を浮かべ……。
「この人でなしがぁぁっ！　アンタの血の色は何色だぁぁっ!?」
「うお、何だよいきなり」
「いきなりじゃないわよ！　アンタ、幾ら何でもそれはあんまりでしょうが!?　彼女騎士王、誇り高き騎士王だから！　その人に対してアンタ、よりにもよって新聞紙はないでしょう!?」
「いや、騎士王だからこそだろう？　下手に刃物なんか持たせたら危ないし、何よりこの人、関係ない人間を巻き込もうとしたんだぞ？　これくらいの扱いが妥当だろうが」
「それでも！　もう少し扱い方ってのがあるでしょうが！」
「セイバー、大丈夫だから、俺がいつかキチンとした剣を用意してやるから！　今はまだ未熟だから何もしてやれないけど、少なくともハリセンよりは良いものを用意してやるから！」
「引っ込んでろ小僧！　セイバー、何もこんな未熟者に頼る必要はない。聖剣が欲しいというのなら私が用意しよう。なに、確かに聖剣そのものは用意出来ないが、幸いにも君の剣の在り方は熟知している。そのものを生み出す事は叶わないが、真に迫ることは出来るとも。Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ（体）ｏｆ（は）ｍｙ（剣）ｓｗｏｒｄ（で）．（出）（来）（て）（い）（る）」
「ってこらー、そっちもそっちでなに宝具を使おうとしてんのー!?」
錯乱したアーチャーに遠坂が止めに入る。もう話し合い処ではなくなった衛宮邸に修司はやれやれと肩を竦める。
「ったく、コイツら彼女に対して甘すぎだろ」
「というより、修司君が容赦無さすぎなのでは？」
「アハハ、やっぱりお兄ちゃんてば面白ーい」
深夜にも関わらず賑やかな衛宮邸、光が溢れる武家屋敷に暗く黒い闇が迫る。
「……随分、余裕なんですね。そうですか、そんなに私がいない方が楽しいんですか」
暗闇の中から黒い悪意が顔を覗かせる。

その50

――それに気付いたのはアーチャーとバーサーカー、そして修司の三人だった。先程までバカ騒ぎしていた居間の空気が一転し、重苦しいものへと変化する。途方もない殺気、この世の全てに深い憎しみを抱き、それでもなお飽きたらない憎悪の遺志が衛宮邸に集まる面々に突き刺さる。

いち早く行動したのはアーチャーと修司、縁側と玄関口のそれぞれから飛び出すように外に出て、次いでイリヤを抱えたバーサーカーが庭先へ飛び出していく。

「ば、バーサーカー、どうしたの？　ダメじゃないいきなり出てきちゃ、士郎の家がメチャクチャになっちゃうでしょ」

叱るように己の僕（しもべ）たるバーサーカーへ視線と言葉を向けるイリヤだが、歯を剥き出しにして威嚇する狂戦士に不可解に思い言葉を詰まらせる。

バーサーカーが無理矢理出てきた事で縁側の一部が崩壊した衛宮邸、突然の事に驚愕する士郎と遠坂だが、バゼットは外から感じ取れる殺気に納得した様に頷いた。

「――どうやら、向こうに一手先んじられた様です」

「そ、それってどういう？」

「っ、まさか!?」

修司達に続いてバゼットも外に向かい、何かを察した遠坂と戸惑いながらも付いていく士郎、一気に騒ぎ立てる事態の変化、残された慎二は向かい側に座る黒セイバーへ顔を向け。

「――あの、アンタは行かなくていいのか？」

「私が行って何になる。それとも、行って欲しいのか？」

「――」

言い返されて口を閉ざしてしまう慎二、目の前の黒いセイバーは確かに修司の手によって聖剣は砕かれ、その影響もあって戦意を挫き無

力化された。
だが、それでも彼女自身の英霊としての戦闘能力が消失した訳ではない。黒い影に呑まれ、性質も在り方も変容された彼女は謂わば効率の塊。修司を真っ先に狙ったのも彼が一番の脅威だと察知したからである。
そんな彼女が偏に大人しくしているのは修司という強大な楔があるからこそ、あと士郎のご飯が食べられるから、ただそれだけの事である。
彼等がいない今、セイバーが大人しくしているのは単なる気紛れでしかない以上、いつまた暴れだすのか分かったものではない。向こうに行けば恐らくセイバーは再び自分達の敵になる、そうすれば深山町の人々は巻き込まれるの確実で何より己自身が危ない。
もう、間桐慎二に出来ることはない。あるのはただ腹を括って事の顛末を見守るだけである。――故に。
「そ、それじゃあ僕もここで大人しくしておこうかなぁ、あんたの監視もあるし、寝ている連中を放って置くわけにもいかないしね」
アハハと精一杯の強がりを口にしながら座布団に座る。実際慎二が行ったところで手助けなんて出来る訳がないし、セラ達やシドゥリ達の面倒を見るものも必要だ。
何より、避難するにあたって士郎の姉貴分である藤村先生に納得させる言い訳を講じる内容も考えなければいけない……あれ？　これもしかしなくても一番の貧乏クジは自分が引いたんじゃね？　引き攣った笑みを浮かべながら慎二はそんな事を考えていた。
「――ま、それでもいいだろ。どちらにせよ今の私は敗残兵だ。業腹だが、今は事の流れに従うとしよう」
そう言ってセイバーはアーチャーが作り置きしていたハンバーガーを再び頬張り始める。
「――ホント、さっきまでベソ掻いてた奴とは思えないな」
「何か言ったか？」
「いえ、何も」
取り敢えず余計な事は口にしない様に勤め、速いところ修司達が

戻ってくる事を切に願いながら、慎二は夜が明けるのを待ち続けた。

◇

「――――桜、なのか」

目の前の夜の闇から這い出るように現れた黒いそれに衛宮士郎は目を見開いて問い掛けた。帰ってきたのは嘲笑、嘲笑い、見下し、凡そ彼女のモノとは思えない……悪意に満ちた声音だった。

「――――はい。先輩、私は正真正銘の間桐桜。聖杯戦争を終わらせるためと先輩を戴くために此処に帰ってきました。ただいま、先輩」

目の前の変容した間桐桜、今の彼女を見て衛宮士郎は理解する。目の前の彼女はこの街に……いや、この世界にとって災いをもたらす者なのだと。斃さなければならない世界の悪意なのだと。

「――――そう、間桐臓硯の目論見はまんまと達成された訳ね。聖杯の欠片を用いての聖杯との融合、間桐の魔術である〝吸収〟と桜の〝虚数〟、これ等を利用して動く聖杯を組み上げる。成る程、胸糞悪くなる程に合理的な方法ね」

変質した己の妹を努めて冷静に分析する遠坂だが、その表情には強い怒りの色が滲み出ていた。

「ですが妙な話です。間桐臓硯はシュウジが斃した筈です。間桐の当主が倒れた今、間桐桜にそのような施術を施せる者はいない筈、ならば何故――――」

バゼットが口にする当然の疑問、臓硯は確かに斃された。無関係な人間を巻き込み、更には人質に取ろうとした事で彼の逆鱗に触れ、間桐臓硯は自身の屋敷――――工房と共に消滅した。それは間違いない。

そう、臓臓硯の肉体を形成する多くの蟲達は既にあの時葬られた筈

なのだ。
『ワシが斃された？　これは異なことを、魔術協会の執行者も其処までの考えには至らんかったか』
　しかし、その事実を否定する者がいる。それもよりにもよって……間桐桜の内側から。
「そう、そう言う事ね。呆れ果てたわマキリ＝ゾォルケン、己の存命の為に寄生虫にまで成り果てるなんて、どうやら嘗ての誓いはとうの昔に消えた様ね」
『言うではないか、アインツベルンのホムンクルス。命が惜しいのは命あるものとして当たり前の本能よ、貴様には分かるか？　時間と共に崩れ行く肉体の痛みを、腐臭と共に朽ちていく様を、惨めじゃあ、憐れじゃあ、それを嘆いて何が悪い。人を殺すことで生を得られるのなら、世界中の人間を殺して回っておるわ』
　イリヤスフィールのアインツベルンとしての言葉も臓硯だった怪物には最早届かない。孫娘である桜に寄生することで生を長引かせる。全ては膨大な魔力を有する聖杯を手にする為、この怪物には既に人としての矜持は微塵も残されていない。
　あるのは永い時間の中で腐れて爛れた魂のみ、残されたのは聖杯と不老不死という願いだけ。言葉など、どれだけ重ねても意味がない。
　アーチャーもまた手遅れだと断じた。ああなった間桐桜に人としての感情や感傷は残されていないだろう。仮にあったとしてもそれも最早微々たるもの、彼女の事を考えれば彼女の命を絶つ事こそが、この街にとっても間桐桜にとっても救いの筈。それはこの場にいる誰もが考えている事だろう。
（だが、それでもお前は彼女を助けるというのか。白河修司）
　横目で見るアーチャーの視線の先には口を結んだ修司が静かに桜を見据えている。聞こえていない訳がない、変貌した間桐桜の有り様を見えていない訳がない。
　現実逃避をしているのか？　無理もない、臓硯を斃し、桜を聖杯との繋がりを絶つだけだと思っていただけにこの展開は修司にとってキツすぎるモノがある。必ず助け出すと口にしておいて、いざとなっ

たら動けない。けれどアーチャーはそれを恥だとは思わなかった。
だって仕方ないから、誰もが理不尽や不条理、立ちはだかる運命には決して抗えないのだから。それは古くから続く神話から現している。人は、運命には逆らえない。出来るのは精々がその結末の方向を僅かばかり変えることだけ。
「お爺様、駄目じゃないですか。勝手に出てきては。今は私が先輩とお話をしてるんですから」
『おぉ、そうか。済まないな桜、じゃが時間は限られておる。なるべく早く済ませておくれ』
「分かっています。……ねぇ、先輩。私、考えたんです。どうして私の回りばかり幸せなんだろうかって、私だけ、どうして酷い目にあってるんだろうって」
「だってそうじゃないですか。私、これまで生きてきて悪いことなんて一つもしてこなかった。なのに10年間、私はあの蟲倉の中で貪られ続けました」
「時には魔力を得るためだって何の面識の無い男性と一日中交わりました。汚ならしく、獣みたいに、それでも我慢しました。その方がこれ以上酷くならないと思って、先輩と長く一緒にいられると思ったから」
桜自身の口から語られる間桐という闇が行ってきた悪行の数々、孫娘を聖杯へと変貌させるために行った非道、そこに一切の愛情はなく、あるのは己の剥き出しの欲望のみ。
数々の欲望の受け皿となった桜は正しく願望の器なのだろう。歪んだ欲望は桜の魂すら汚し、犯し、踏みにじってきた。
遠坂も士郎も顔を青ざめていた。自分達が知らない間に凌辱の限りを尽くされてきた桜の実態を聞いて、二人の戦意は既にギリギリの所まで追い詰められていた。
今、サーヴァントによる奇襲を受ければ被害は凄まじいことになる。ジャンヌを始めとした比較的冷静な面々が未だに存在し続けるサーヴァントに警戒を強めるが。
「あぁ、動かないで下さいねジャンヌさん。幾らルーラーの貴方でも

私の影には敵いません。無駄に犠牲を出したくなければ大人しく見ていることが正解ですよ♪」
無邪気に微笑みながら恐ろしく殺気を振り撒く桜にジャンヌの頬から一筋の汗が滴り落ちる。彼女が言うように彼女の纏う影にはサーヴァントでは決して抗えない力を秘めている。
それはセイバーを取り込んだ泥と同様、或いはそれ以上の汚染作用が働く。今の間桐桜はこの聖杯戦争に於てサーヴァントに対し絶対的な力を持っている。触れるのは勿論、近付くだけですらサーヴァントを変質させかねない危険な力。恐らくはバーサーカーの暴威ですら、彼女には通じないだろう。
正純な英霊であればあるほど、あの影には弱い。実質的にサーヴァントの封殺をそこにいるだけで目の前の少女はやってのけてしまった。
このままでは町にいる人々の避難が間に合わない。数も質も此方が圧倒的に有利だったのに状況と相手の質の悪さに戦況は覆されてしまった。
「先輩。私、頑張りました。頑張って頑張って、我慢しました。だから……ねぇ、先輩」
そう言いながら桜は士郎へ手を伸ばす。それは救済を求めての縋りなのか、それとも破滅への誘いか、正義の味方としての在り方が問われる選択に士郎が瞳を揺らして動揺していると。
それを割って入ってくるものがいた。
「――なぁ、桜ちゃん。もう止めようぜ。そう言う物言いは君には似合わない」
「……」
山吹色の背中が士郎の瞳に映る。友人の庇う様な背中に士郎の目は大きく見開き、士郎とは対象的に桜の目は薄く細くなっていく。
「俺さ、魔術の事はテンで素人だから知らないからさ、今君がどういう状況なのかなんてまるで見当が付かないさ。精々大変な事が君の身に起きているという事、それだけさ」
「そうですか、それで？　私の前に立ってどうするんです？　私を殴

るんですか？　セイバーさんやランサーさんみたいに、私を敵として相手をするんですか？」
「……そう、だね。確かにそうなるのは避けられないかもしれない。俺だってそこまで子供じゃない。善悪の区別や大事にするべき優先順位って言うのは弁えているつもりだ。でも」
〝それでも、君を助けたいという気持ちは変わらない〟
そう言いきる修司の言葉、それは誓いでもあり、決意でもあり――――覚悟の一言だった。どんな代償を支払ってでも、どんな災いが自身に降り掛かっても初恋の少女を助けるのに微塵の迷いがなかった。
その姿に、士郎も腹が決まった。誰かを助けるのに誰かを犠牲にするのではなく、誰かの力で皆を助ける。そんな浅ましくも勝手で、我が儘な正義の味方の在り方を、衛宮士郎は見出だせた気がした。
そんな士郎の目を見て桜は顔を俯かせる。
「――――ホント、いつも貴方はそうですよね。勝手に出てきて場を乱して、全てをグチャグチャに掻き乱していく。なんなんですか？　そんなに自分が特別だと、そう言いたいんですか？」
「私にいつも話し掛けて、気に掛けるフリをして、私という弱虫な人間を守った気になって、悦に浸ろうって言うんですか？」
「気持ち悪い、気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いから……修司先輩」
〝死んでください〟
感情の無い声と表情（かお）で死を懇願する桜、同時に彼女の足元から黒い泥が溢れ、衛宮邸の庭を埋め尽くしていく。
其処から延びる無数の影、触手を槍のように鋭利にし、殺意を以て修司へ襲い掛かる。
煩わしい。鬱陶しくて、其処らの有象無象より目障りな存在、誰よりもそう感じているのにどうしてだろう。間桐桜にはその理由に心当たりがなかった。
「修司君！」

影の触手が修司へと伸びる。ジャンヌが回避の呼び掛けをするが、それよりも早く触手は伸びていき……。
虚しくも、空を切るだけに終わった。
「っ！　一体何処へ……」
まるで見えなかった。如何に力を得ようと動体視力が常人である桜に修司の動きを捉える事は出来やしない。これ迄の戦いを経てサーヴァントの領域すら超えつつある修司は聖杯による感知能力すら振り解き……。
気付けば、彼は桜の右側面へと立っていた。
（あっ、なんかスッゴい既視感）
緊迫した状況、なのに何故か士郎は呑気にデジャブを感じた……瞬間。
「少し、頭冷やそうか」
修司の振り抜かれた左手が、桜の臀部を捉えた。
瞬間、吹き飛んだ桜はそのまま回転しながら衛宮邸の道場の壁へと突き刺さり、目を回して倒れ込む。
静まり返る空気、誰もが絶句するなかで今まで霊体化していたサーヴァントが現界し。
「さ、桜ァァァッ!?」
悲痛な叫びが衛宮邸に響いた。

その51

――私はきっと、もうずっと前から諦めていたのだろう。自分に置かれた境遇を、決して逃げることは叶わないこの地獄の中で、貪られ、犯され、朽ちていくのだろう。そう言う運命の中で生きて、死んでいくのだろうと、そう思っていた。

待っていたのはそんな地獄すら生温い末路、天の杯。マキリの聖杯として意思なき人形に成り果てること、それが彼女……間桐桜の行き着く果てなのだと改めて思い知った。

もう、彼女に自我を保てる時間は余り残されていない。マキリの聖杯として完全に機能すれば私という人格は聖杯に溜まっている魔力という名の泥に呑まれて消えていくのだろう。

ならば、せめてその前に恋い焦がれていた先輩に会っておきたい。桜の最期の細やかな願いに私の内に巣くう間桐の当主は嘲笑いながらこれを了承する。もう、彼女の想いは叶うことはないと分かりきっているから。

でも、そんな彼女の前にあの人は立ちはだかった。必ず助けると宣い、現実を見ないで妄言ばかり垂れ流すあの人――白河修司。

どうして、目の前の男は此処まで自分に構うのだろう？　煩わしい、放っておいて欲しい、そう思いながらも心の何処かでそれを嬉しく思ってしまう自分の浅ましさが……何よりも許せなかった。桜が好きなのはあの人、衛宮士郎だけ。だから邪魔をするな、あっちへ行け。それが出来ないのなら……死んでしまえ。

溢れ出てくるのは凝り固まった殺意。目の前の敵をただ死んで欲しいという桜の願いを悪意の願望器が反応する。

桜の影から悪意が伸びる。ただ目の前の人間を殺す為にサーヴァントですら太刀打ち出来ない彼女の攻撃を……彼は何て事もなく避けてしまった。

１０年、あの蟲倉の中で嬲られて犯され続けてきた彼女の時間。マ

キリの聖杯に至るまでの魔術の鍛練(拷問)を受けて尚、それでも目の前の男一人殺せない。
何て理不尽なのだろう。こんな不条理が有っていいのか、こんな事が……あっていいのだろうか？
良い訳ない。そんな事があって良い訳がない。
殺す。白河修司の平手を受けて薄れ行く意識の中で桜は誓う。この人の形をした理不尽を必ず己の手で殺してみせる。
喩えその果てにこの世全ての悪に呑まれようと、必ず……。

◇

「桜、しっかりして下さい。桜！」
目を回して地面に倒れる間桐桜に今まで霊体化していたライダーが、酷く慌てた様子で駆け寄り彼女を助け起こす。軽く揺さぶっても目を冷ます様子の無い彼女にライダーはバイザーで隠された目をこれでもかと鋭くして修司を睨む。
しかしそんな殺気混じりのライダーの視線を修司は正面から受け止める所か「あ？」などと低い声を漏らしながら睨み返す。端から見れば暴行を受けた加害者と被害者のソレ、しかしその実際は襲われたのは修司の方であり、加害者は桜となっている。法律上、修司の行いは正当防衛の範疇に収まっているのだ。
「加減はした。打ち所が悪くても今日の夜明けには目を覚ますだろうさ」
「いや、加減ってアンタ、人体から出してはいけない音が出てたわよ？」
桜の臀部を叩いた際に聞こえてきた音はバシンとかピシンとか軽いものではなかった。〝ズドゴン〟という決して人の体から出して

いい音ではない、あの平手には明らかに逸脱した威力が秘められていた筈だ。
　それでも手加減したと宣う修司に遠坂は反論したい気持ちで一杯だった。そしてその気持ちはどうやら遠坂だけでなく、向こうにもあったようで。
「あ、貴方には慈悲という言葉が無いのですか⁉　」
「慈悲？　あるに決まってるだろう。桜ちゃんは大事な後輩だ。彼女には彼女の人生がある。それを魔術とか言う訳の分からない力で捻じ曲げやがって、彼女を歪めたお前らが今更道徳論を持ち出すんじゃねぇよ」
　ライダーの精一杯の反論も修司の正論が蹂躙する。彼の持ち出すのはごくごく普通の人間が持つ倫理からくる真っ当な価値観によるモノ、故に彼の言葉は魔術という外法に属する彼女達に敵味方関係なく容赦なく突き刺さるのだ。
「さて、これで桜ちゃんは無力化した。後は中にいるクソ蟲をどうやって取り出すか……この場合、やっぱ外科手術か？　それとも……」
　倒れる桜とそれを抱えるライダーへ近付き、修司はこのあとの彼女達の処遇をどうするか熟考する。今の桜がおかしくなっているのは間違いなく桜に取り付いている蟲（臓硯）によるもの、寄生虫の如く生者に縋り付く生き汚さに吐き気すら覚えるが、奴を取り除く方法を修司は知らない。
　こう言う時、専門家による外科手術が相場と決まっている。修司ならば彼の王に嘆願して腕の良い医者に見て貰う事も可能だが、相手は蟲に意識を移せる下法を用いている怪物だ。真っ当な医者では対処すら難しいだろう。
　となると、やはり魔術の専門家に頼る他ないか。
（見た感じ遠坂やイリヤの嬢ちゃんにはそう言った知識は無さそうだ。なら……やっぱり師父辺りに頼むしか無いのか）
　今の桜を何とか出来そうなのは魔術の世界にも精通しているであろう自身の師、言峰綺礼しか心当たりがなかった。彼は前にも魔術の

被害者だった美綴綾子を助けてくれた前例もある。色々と癖のある人物だが、助けを求める者を無下に扱ったりはしない。
ならば今はその一縷の望みに賭け、行動を移すのみ。限られた時間の中で迅速に動こうと修司が前に出るが……それを阻むようにライダーが立ち塞がる。
「……退けよ」
「出来ません。今ここで桜を渡したら彼女は間違いなく死にます」
「なら、このまま放っておけば何とかなるのかよ？　魔術なんてものは毛程も理解できないが、それでも今の彼女がヤバイ状態であるというのは俺でも分かる。お前、桜ちゃんのサーヴァントなんだろ？　主人がこんなんなってるのに何とも思わねぇのか？」
立ち塞がり戦闘態勢へと構えるライダーを修司は臆することなく睨み付ける。対するライダーも分かっていた。自分程度のサーヴァントでは最早目の前の男を斃す手段はないと。
何せ、自分の魔眼にすら平然と耐えている男だ。生きたものを石へと変える呪いの魔眼、あの校舎で彼女の魔眼を受けたモノは須く石に変えられようとしていた。
だが、この男は何食わぬ顔で平然としていた。サーヴァントすら石化させる自身の魔眼を直視していたにも関わらず。
セイバーの様な高い対魔力で防いだ訳でもない、ごく自然体のままこの男はライダーの魔眼を防いでみせた。それも、本人が魔眼を受けたことすら自覚しないまま。
身体能力に関してもライダーが勝てる見込みは殆どない。サーヴァント相手でも真っ向から挑み、打ち勝つ実力は今も留まる所を知らずに成長している。魔眼同様、それは先の校舎でのやり取りで既に証明されている。本来の力を取り戻した自分の自慢の蹴りを受けて大したダメージにならない時点で既に勝敗は付いている。
唯一何とかなりそうな宝具もこの状況では不可能、そもそも宝具を出すまでの猶予をこの面々が許す筈がない。未だ呆けているマスター達は兎も角、サーヴァント達は既に行動を終了させている。
ルーラーは士郎達の前に立って旗を構えてその後ろにはバーサー

カーが、アーチャーに至っては既に屋根に跳び移り矢を番えて此方の眉間を狙っている。
サーヴァントに対して絶対的な力を持つ桜が倒れた事でこの戦況は当然の帰結だった。最早自分に勝ち目は無い、袋小路の状況にライダーが歯を食い縛った時。
『時間稼ぎ、ご苦労じゃったな。ライダー』
桜の足下の影が広がり、修司に向かって刃となって突き立ててくる。死角からの強襲、持ち前の反射神経と反応速度によって間一髪避けた修司は頬に僅かな傷痕を残しながらジャンヌの下まで後退する。
見れば、気を失った筈の間桐桜が覚束ない足取りで立ち上がっていた。意識を取り戻した？　いや、違う。先程耳にした忌々しいあの声からして、今彼女を支配しているのは……。
「おいクソ蟲、その娘はテメェ如きが好き勝手して良い人間じゃねぇんだよ。楽に殺してやるからとっとと彼女から出てこい」
『クカカカカ、我が愛しの孫娘に容赦なく手を掛けて於いて良くも言えたモノよ。ここまで不遜だといっそ笑えてくるな』
『だが、戯れも此処までよ。桜の意識を断ってくれたお陰でこやつの肉体の所有権はワシに譲渡された。一時的にではあるが、それでも本懐を遂げるまでの時間稼ぎなら充分に出来よう』
「テメェ、ふざけんな！　桜を返せ！」
修司にとって初恋の人を、士郎にとっては家族同然の後輩が醜悪な寄生虫に良いように操られている。その事実に後者は怒りを、前者は殺意を露にする。
が、そんな二人の感情の発露も目の前の寄生虫には愉悦の餌でしかない。
『愉快。ただ愉快。お主らの慟哭は気持ちが良いわ。胸が弾む、心が洗われるようだ……。だが、足りん。我が願望を、悲願を叶えるには今のままでは些か足りん』
「この腐れジジイ、一体何処まで強欲なのよ」
『魔力が足りん。命が足りん。魂が、根源に至るまでのエネルギーがまるで足りん。サーヴァントの魂を喰らうことで補充すべき聖杯へ

の貢ぎ物、その補填はこの冬木に住まう全ての命で贖うとしよう』
瞬間、桜の足下に広がる影が彼女の体を引きずり込んでいく。影を利用しての転移魔術、それをさせまいとアーチャーは桜に向けて僅かの躊躇いを見せた後、番えた矢を放とうとして……。
「させんぞ、弓兵」
「っ！　ランサー！」
頭上から降ってきた黒いランサーが強襲する。爆発衛宮家の屋根、このままランサーとアーチャーによる戦いが幕を上げるのかと思われた時、二人の間に割って入る女傑がランサーの槍を拳ではね除けた。
「そこまでです。ランサー、これ以上の暴挙は元マスターである私が許しません」
「バゼットか」
ランサーが現れた事で戦況は混沌としていく桜を支配した臓硯、それにあ然となりながらも状況に流されるまま彼女を守護するライダー、そして常に此方の死角を突いてくるランサー。
戦況は正直に言って未だ修司達に分がある。バーサーカーやアーチャー、更には全てのサーヴァントに対して優位に立ち向かえるルーラー、この三騎が協力しあえばこの状況も打破する事が出来るだろう。
その代わり、深山町に住まう人々もまた全滅するだろう。尋常ならざるサーヴァント、戦意を失ったとはいえセイバーを合わせればキャスターとアサシンを除いた全てのサーヴァントが集結した事になる。その彼等が本気になって争えば冬木の街の大半が死滅する。多くの犠牲者を出してしまうのだ。
圧倒的有利な状況から対等な状況へ押し戻された。桜の意識を刈り取る迄は良かった。だが修司は寄生虫になってまで願いを叶えんとする臓硯の執念――――否、怨念の深さを読み違えていた。
『さて、どうするかね？　我が怨敵よ。このまま我等と戦って冬木を焦土に変えるか？　それとも我等を見逃すか？　ワシは別にどちらでも構わんぞ？』

「――――」
答えは分かりきっている。自分達が戦えばそれだけで被害は相乗的に広がってしまう。ここで最適解なのは彼等を見逃す事、さらに言えば今ここで間桐桜を殺すしかない。
そして、それを叶えるのは……間桐桜を殺すに足る力を持っているのはこの場に於いて修司しかいない。
視線が修司に向けられる。彼の選択を見守る者、彼の選択に縋る者、彼の選択を尊重するもの。彼を、嘲る者は此処にはいない。ただあるのは彼に全てを背負わせる申し訳なさと無力な自分への憤りだけ。
遠坂凛もまた、覚悟を決めて此処にいる。聖杯戦争へ参加した魔術師として、冬木の管理者としてこの結末もまた受け入れるべき顛末。あるのは選択の余地がない自分に対する怒りだけ。
「し、修司……」
衛宮士郎は何て声を掛ければ良いのか分からなかった。生殺与奪の権利を自分じゃない誰かに握らせる。その苦悩は想像を絶し、その葛藤の苦しみは今の衛宮には予想も出来ない。
……何となく、分かっていた。目の前の友人白河修司は間桐桜に対して並々ならぬ想いを抱いていることを。
だから、代わってやりたかった。彼が受ける痛みと苦しみを自分が代替わりするべきなのだと、衛宮士郎は思う。やめて欲しいという願いと、それしかないという諦めが自身の胸中でせめぎ合う。
故に――――。
「――――仕方ない。少し難易度は高いが……まぁ、王様の無茶振りよりかましか」
何てこと無いように、この程度の窮地など問題にならない。そう暗に語って首を鳴らす修司に士郎達は言葉を失った。
「し、白河君？」
「お前、一体何を……」
「別に、ただ其処の糞虫の思い通りにならないってだけの話だ。桜ちゃんを殺す？　臓硯から彼女を救うにはそれしかない？　ハッ、馬

鹿じゃねぇの？　何でワザワザ相手の思う通りに動かなきゃならないんだよ」
『貴様、何を言うておる』
　不敵に笑みを浮かべる修司に臓硯は苛立ちの声を漏らした。何故、諦めない。何故、屈しない。不条理な状況に身を任せず、ひたすら抗い続けるのか。
「悪いが、テメェと問答はするつもりはない。当にその段階は過ぎている。精々しがみついていろよ、今からテメェが受けるのは我が師父から授かった人の奥義だ」
　修司が白い炎を纏う。それだけで周囲の大気は震え、彼を中心に力の渦が形成されていく。渦の流れの先にあるのは……修司の右拳、神秘の力とは異なる事象の具現に桜の内に潜む臓硯はたじろぐ。
『や、止めろ！　来るでない！　それ以上来たら、この娘の命は……』
　堪らず臓硯は自身の手の内にある桜の心臓にその牙を突き立てる。それ以上近付けば彼女を殺すと、だがその言葉は最後まで紡がれる事はなく――。
「悪いが、お前の言葉はこれ以上聞くつもりはない」
　ライダーの守りを突破し、瞬きの合間に桜の間合いへと入った修司がその拳に力を込め。
「七孔噴血――ただ、死ね」
　そのエネルギーを桜の心臓目掛けて打ち込んだ。

――それは、ある日の修行風景。

『修司、お前に一つ課題を出しておこう』
『ん？　今度は何？　まさか、また滝を逆流させて来いなんて言い出

さないだろうね？　アレ冬場だとキツいんだよ？　単純に寒いし冷たいし、この間なんて風邪引きそうになったし、何より地域の人達に怒られたんだからね？』

『まさか、私が二度同じ課題を出すつもりは無いことはお前が良く分かっている筈だ。今回私がお前に課すお題は一つ、風船を割らずに風船の中にある蟲を滅してみろ』

目の前に置かれた風船、中には小さな蠅の様な虫が一匹、中で暴れまわっている。風船を割らずに中の蟲を斃す、矛盾だらけにして土台無理な内容に珍しくも当時の修司はその課題を挑む前に諦めていた。

今の修司の拳は軽く振っただけでモノを破壊する凶器、風船ごと蟲を殺すのなら兎も角、風船を破壊せずに蟲を殺すのは修司にとって成功の兆しすら見えない未知の領域だった。

『む、無理だよ師父。幾らなんでも難しすぎるよ！』

『ほぉ？　お前にしては珍しい。挑む前に音を上げるなど、随分とらしくないのではないか？』

『だって、師父の言っている事が出来るようになったら、それはつまり何でも殴れるって事でしょ？　そんなの神様でもなければ無理だよ！』

この課題の裏に隠された意図、それを理解しながら無理だと断言する修司に言峰綺礼はフッと微笑む。

『残念ながら、神でなくともそれを可能とした者は存在している。宮本武蔵、彼の大剣豪もその長きに渡る生の果てにその境地に至ったとされる逸話が残されている』

曰く。刀が無くとも、無刀であっても人は斬れるのだと。

曰く。極めれば、人は、己が望むモノを断ち切る事が出来るのだと。

その話を聞いた修司は年相応に目を輝かせる。だって、師父が課した課題を乗り越えれば、それは即ちあの大剣豪にグッと近付いた事を意味している。

その後、修司は拳を奮った。何百何千何万、日が落ちて昇り、また落ちて昇る。それを数回繰り返した辺りで……。

遂に、彼は成し遂げた。成功確率は二割にも届かないが、それでも

修司は技を完成させた。武術とは、人体を如何に効率良く破壊するかに重きを置いている。しかし、この技は同じ武術の技であってもその性質は全く異なっていた。
人の生み出す力、技、それらは決して壊す事だけじゃない。何かを見出だし、誰かを助ける一助にもなるのだと、修司は師父である言峰綺礼の真意を知った。
『ありがとう師父！　俺、何だかわかった気がするよ！』
『――――え？　あぁうん、そう』
人の可能性は無限、人は、人間は、どんなことだって出来るのだと。

故に。

「間桐臓硯、お前の敗因は至って簡単だ」
『ば、バカな……』
「人間の可能性、それを軽視した時点でこの結末は必然だった」
穿つは必中、当たれば絶死。衝撃波だけを飛ばして任意に対象を選んで破壊する武の秘奥。
偉大なる大剣豪を目標に鍛えた拳は遂にその背中へ手を掛けた。
――――尚、彼の師父である言峰綺礼は弟子を焚き付ける為＆四苦八苦する修司に愉悦するために適当を口にしていた模様。

その52

何をした？　棒立ちしている桜目掛けて、寸での所で突き出した拳を止める修司を見て、士郎達はその行動に何一つ理解出来ないまま、困惑した表情で二人を見ていた。

桜の体内に寄生していた臓硯――気を失った桜を意のままに操ろうとした魔術師も、修司が拳を突きだしてからピクリとも動こうとしない。

恐らく、臓硯は本気で桜を道連れにするつもりだった。あの時断末魔にも似た脅しも演技の類いには聞こえなかったし、何より寄生虫になってまで死から逃れようとした奴が、生粋の魔術師が、外道に落ちた生き物がそういう意地汚い真似をしない訳がない。

だが、修司が拳を突きだしてから臓硯に怪しい動きは見られない。断末魔の如き悲鳴も聞こえず、完全に動きを停止した意識の無い棒立ちの桜だけ。

すると、今まで棒立ちの状態だった桜だったが、次の瞬間彼女の足下に影が泥の様に波紋を立たせながら広がっていく。

まさか、まだ臓硯は生きていて桜を動かしているのか、それとも桜が目を醒ましたのか、何れにせよ修司の決断は無駄に終わったのかと思われた。

広がる影の泥に飛び退く修司、その表情には困惑の色が濃く滲み出ていた。

「白河君、もしかして失敗？」

「……違う。俺の一撃は確かに臓硯を捉えた。衝撃を奴にだけ届くように調節し、桜ちゃんの肉体には外も内も傷一つ付いていない筈だ」

焦りと困惑を見せる修司に遠坂は彼の試みは失敗したと思っていた。が、返ってきたのは否定の言葉、桜の肉体に一切の傷跡を付けず、臓硯だけを狙った武の秘奥の一撃は確かに奴の息の根を止めた筈だと、修司は語る。

彼がこのタイミングで嘘や冗談を口にするタイプでは無いことは分かっている。サラリと信じられないことをやり遂げた修司に戸惑いつつも、言葉通りに彼の言葉を受け入れた遠坂は未だ意識が戻っている様子のない実の妹――桜に視線を向けた。
「アンタ、一体誰？　臓硯？　それとも桜？　それとも――」
「――――」
警戒しながら問い詰める遠坂に桜は応える事はなかった。返ってくるのは沈黙、やはり意識が戻っていないのか、しかしそれに反して影は未だに緩やかではあるが広がりつつある。このままでは軈て衛宮の家が影の泥に呑まれてしまう。そうなる前になんとしてもこの状況を何とかしないといけない。
修司が今一度桜を行動不能にしようとした時――彼女の口から言葉が紡がれる。
「――ユスティーツァ」
「っ!?」
人名、らしき言葉に修司達が戸惑う一方、反応したのはイリヤだけだった。ユスティーツァ、そう口にした桜は此処へ訪れた時のような表情ではなく、感情の無い能面の様な表情で影に呑み込まれて消えていく。
「っ、させるかよ!」
当然ながら、修司は彼女を逃がさんとした。影の中へ沈み行く桜へ手を伸ばそうとして――。
その行く手を赤い槍と銀の鎖が防いでいく。右から飛んできた赤槍は屋根にアーチャーとバゼットを相手にしているランサーが、鎖は今まで呆然としていたライダーが。
ランサーの槍に阻まれた所でライダーの鎖に巻き取られていく。腹ただしい程に見事な連携、苛立ちに思考を鈍らせている内に桜の体は影の中へと消えていく。
届かなかった。目の前にいた筈の、助けられた筈の女の子が、助けると決めた女の子が再び遠くへ行ってしまった。その事実に苛立ちを覚えた修司は自身の腕を掴む鎖の持ち主へ睨み付け。

「――――そんなに」
「え？」
「そこまでして聖杯が欲しいのか。彼女を、桜ちゃんをあんなにしてまで、そこまでして聖杯が欲しいのか？　万能の願望器？　何でも願いが叶う？　そんな胡散臭い売り文句に良くもまぁそこまで必死になれるもんだ」
「ち、ちが、私はただ――――」
それ以上、ライダーが言葉を口にすることは無かった。目の前の修司が見せる苛立ちと侮蔑の篭った眼、桜を助け出せる千載一遇の好機を不意にされた怒りによる睨み付けが彼女をこれ以上言葉を紡がせる事をさせなかった。
「――――失せろ。そして待っていろ。俺達が桜ちゃんを助け出すのを首を洗ってな」
その言葉を最後に修司がライダーに視線を向ける事はなかった。敵対者に情けを掛けたのではない、単に時間の無駄だから気に留めるのを止めただけ。最早ライダーに割く時間はない、最後の難関に立ちはだかるであろう障害は黒く歪んだランサーだけ。
アーチャーとバゼットの二人を相手に難なく対応しているランサーに目を向け、修司は再び白い炎を纏う。すると戦況が変わったのを認識したのか、ランサーは二人と距離を開けるように後ろに飛び退き、衛宮邸から離れた位置にある電柱に立ち、感情の薄い眼で一行を見下ろす。
「マスターは引いたか、これ以上ここで闘うのは無意味だな」
「逃げるか、ランサー」
「場所を変えると言っているのだ間抜け、どうせすぐに殺し合うんだ。せめて舞台位は相応な所を用意させて欲しいものだろう」
「ならば、その決闘の場所へ案内しなさい。貴方のその顔に私の拳をねじ込ませて差し上げます」
「吼えるな執行者、直に舞台は整う。後は役者だけ待てば良い。……頗る面倒だが、貴様らは俺が殺し尽くす。セイバーが使い物にならなくなったのは誤算だったが、なに、最期を飾るのにこれ程面白

い舞台はそうそうない」
　そう言って修司を見るランサーの眼には僅かだが喜色の色が少しばかり強く滲み出ていた。泥に呑まれた事で本来あり得ない別の存在へと変質されたランサーであったが、どうやら多少ではあるが以前の様な気質も持ち合わせているようだ。
　その事実に嬉しくもあり、悲しくもあり、寂しくもあったバゼットは気持ちを固める様に拳を握り締める。もう、彼を止める事は出来ないのだと。セイバーの様に戦意を砕くことで無力化出来ない以上、バゼットとクーフーリンは最後まで殺し合う間柄になるだろう。
　それ以上、何かを語る事なくランサーもまた闇夜の中へと消えていった。後に残されたのは少しばかり抉れた衛宮邸の庭と屋根、補修される事は間違いないし、今後藤村に事の説明を考えなければならないと思うと頭が痛くなるが、それでも今は動くことが先決だ。
「修司」
「あぁ、分かってる。遠坂、イリヤのお嬢ちゃん、場所は特定出来たか？」
　既にパトカーのサイレンが深山町に近付いてくる。行動を起こすなら今しかない、士郎に促されながら修司は遠坂へと向き直り、遠坂もまた追跡が終えたのか、その表情を覚悟と決意で染め上げている。
「今、私の使い魔が場所を特定したわ。場所は円蔵山、恐らくはその内部にある大空洞に桜達はいるわ」
　遂に、桜達がいるとされる居場所が判明した。向こうが体勢を建て直す前に一気に攻め立てる。チャンスは一度きり、今度こそ失敗は許されないと修司達は円蔵山へ向かおうとするが。
「ごめん、その前に私の話、聞いて貰えるかな？」
「イリヤ？」
「それって、もしかしてさっき桜が口にしたユスティーツァって名前みたいな奴の事か？」
　どうやら、あの時彼女が溢した台詞は修司だけでなく全員が耳にしていたらしい。士郎が首を傾げながら訊ねる横でイリヤは小さく頷き。

「もしかしたら次に私達が相手にするのは、相当厄介な相手かもしれない」
そう口にするイリヤはユスティーツァなる神域の天才について語り始めた。

◇

『――――おぉのれぇ、おぉのれぇぇ』
何故だ。何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ何故だ。
何故、悉く邪魔をされる。何故、我が望みは成就されない。何故、我が野望は果たされない。
全て、全ては、そう、奴の所為だ。白河修司、奴をただの人間と侮ったのが我が過ちの全てだった。何故、あの様な男が存在しているのか、どうして、あんな人間が存在しているのか。
サーヴァントを斃し、アヴェンジャーと化した桜を退け、それでも尚底知れぬ強さを持つあの男は本当にただの人間だというのか。
認めぬ。認めてはならぬ。あの様な小僧が聖杯戦争の勝者だという事を、マスターどころか魔術師ですらない男が、聖杯戦争の勝利者である事など断じて許しはしない。
全ては我が願いの成就、その為にここまで来た。その為にここまで生き長らえてきた。
全ては……全ては、この身が決して朽ち得ぬ存在、不老不死へと至らんが為に――――！

――不老、不死？　そう、だったのか？
何故、不老不死を願った？　何故己は決して朽ち得ぬ存在を願った？
何の為に？　何を為し得る為に？　何を、目的としていたのか？
分からない。分からない、分からない――。
一体、私は――何の、為に？　多くの、命を、喰らって――――。
『さようなら、ゾォルケン』
嗚呼、それはきっと――。
『ユスティー――――』
ブチュリと、地を這いずる蟲の潰れる音が聞こえた気がした。

闇の中、地獄の釜の中でそれは生まれる。間桐桜という器を媒体にして、それは変容し、変質し、体現し、誕生する。
それは、嘗て魔法使いの弟子だったもの。それは、嘗て神域の天才だったもの。第三の魔法を会得した魔法使い。
嘗て、大聖杯の炉心となったもの。万能の願望器の礎となったソレは間桐桜を母体に再誕する。
『――――さぁ、願いを叶えましょう』
その身にこの世全ての悪意を携えて。

その53

――――ユスティーツァ＝リズライヒ＝フォン＝アインツベルン。それは嘗てアインツベルンの中から偶発的に産まれた個体であり、唯一第三の魔法へと至った神域の天才。

彼女と彼女に協力した者達、後に御三家と称される者達によって大聖杯は生まれ、霊脈が豊富とされる冬木に大聖杯を埋め込み、奇跡へと至る儀式の為の舞台を作り出した。それこそが多くの悲劇と惨劇を生み出した元凶、聖杯戦争の全容である。

全ては一人の天才が齎した災厄なのだと、道中イリヤから聞いた修司は内心で沸々と怒りを滾らせていた。ユスティーツァの意図したものが何なのかは分からないが、随分余計な事をしてくれたものだと、そう思わずにはいられない程にその人物に対して嫌悪感を持った。

「それで、そのユスティーツァって奴は大聖杯の炉心とやらになって既に数百年が経っているんだろ？　ソイツ、まだ自我とか残ってるのかよ？」

「ユーブスタクハイト……アハト翁は、自我は既に残っていない筈だと言ってたわ。大聖杯の礎になる時点で自我はとっくに喪失しているだろうって」

他人の命処か自身の自我の有無まで度外視するその所業、何処までも一般的倫理を持つ修司としてはユスティーツァなる人物の考えが到底理解出来なかった。

魔術師にとって魔法というのはそこまでして手に入れておきたい代物なのだろうか。そこまでしがみついて後世に残しておきたいモノなのか、分からない。

分からないから、ユスティーツァなる人物に付いて考えるのは止めた。どうであれ、間桐桜を助け、大聖杯を破壊するまで修司の聖杯戦争は終わらない。そのユスティーツァなるものがどれだけ凄かろうと、立ち塞がるなら蹴散らすまで。

そもそも、これ迄の惨劇を生み出してきた元凶、その一人が待ち構えているというなら、俄然としてヤル気が沸いてくるというもの。どのみち戦うのなら必ずぶち倒して冬木に住まう人々に土下座して詫びさせる勢いで望んだ方がいい。
「あーあ、１０年掛けて準備した私の聖杯戦争が、まさかこんな事になろうなんてね。ホント、人生ってば不測の事態の連発よね」
「なら、これを機に魔術師であることを見直したらどうなんだ？　１０年掛けて準備した戦いが不意になったんだ。ここらで身を引いてもバチはあたらないんじゃないか？」
「冗談、この程度で音を上げるなら最初から魔術師なんてやってないわよ。元々聖杯が無くても根源を目指すつもりだったし、これまで培ってきた遠坂の魔術を捨てるつもりもないわ。白河君こそ、あまり首を突っ込まない方がいいんじゃない？」
「勿論関わるつもりはねぇよ。人に迷惑ばかり掛ける魔術なんてこっちから願い下げだ。だが、そっちから向かってくる以上、俺も全霊を以て抵抗するからな」
魔術師という生き物が碌でもないというのは今回の件で嫌と言うほど理解した。そしてそんな連中を相手に容赦をする必要もないことも、今回の事件で痛感した。
魔術師には魔術師の事情がある。だから修司は彼等のやり方に口を挟むつもりはないし、関与するつもりもない。ただ、連中が敵意を以て接してくるならば容赦なく対応するまで、……なんだ、結局はいつも通りかと、そこまで考えて修司から笑みが溢れた。
「さて、改めて流れを確認するわよ。円蔵山の大空洞に侵入したら、そこからはノンストップで駆け抜けるわよ。イリヤスフィールはこの時点でバーサーカーを実体化、バーサーカーを先頭に最深部まで突っ切って大聖杯と対面、ルーラーが大聖杯を壊すまでの合間、私達で時間を稼ぐのよ」
「そして大聖杯を壊したら桜ちゃんと一緒に脱出と、なんか超特急の流れだなぁ。本当に上手くいくのか？」
「上手くいかせるのよ。いい？　ここから先の戦いは全てアンタに掛

かっていると思いなさい。サーヴァントでも魔術師でもない、自称一般人であるアンタこそがこの聖杯戦争を終わらせる鍵なんだから」
「――あぁ、分かってる」
ここから先、大空洞へ入った時状況は二転三転と変わるだろう。だが、足を止めてはならない。桜を救い出して大聖杯の破壊という目的を達成させるにはノンストップの行動を余儀なくされる。
僅かな迷いも油断も許されない、そんな緊迫した状況が続くであろう――その前に、今まで黙っている士郎に一同の視線が向けられる。
「その、大丈夫か士郎？　ここから本番な訳なのだけど……その、行けそうか？」
「はぁ、はぁ、はぁ……んっ、ぐ、はぁ、だ、大丈夫だ。問題ない」
「問題ありまくりに聞こえるんだけど」
衛宮邸からここまで一度の休憩も挟まずに円蔵山までやって来た修司達、遠坂やイリヤはそれぞれサーヴァントに抱えられているから体力的消耗はないし、バゼットも執行者として鍛えられているから何の問題はない。修司も言わずもがな、士郎を除く誰もが汗一つ流さず平然としている。
これより向かうは死地、なのに既に死にかけている士郎をどうすれば良いのかと悩んでいると、これ迄敢えて沈黙を保っていたアーチャーが口を開く。
「なんだったら、ここで置いていくのもありなんじゃないのかね？この程度で疲れ果てた未熟者を連れていく必要などあるまい」
「ンだと、テメェ……！」
「事実だ。そして今立ち上がらなければ、貴様は最早正義の味方処か一人の後輩すら助けられん愚図に成り下がる。それが嫌ならば顔を上げろ、肺がつぶれても尚動け、どのみち、貴様に出来るのはそれくらいしかないだろうが」
「そんな事、お前に言われる……までもない！」
「――ホント、不器用な奴ね」
「いや、此処まで来ると最早器用な部類に入るのでは？」

悪態を吐きたいのか激励したいのか、そのどちらとも言えるアーチャーの対応に修司と遠坂は苦笑う。どうやら遠坂もアーチャーの正体に心当たりがあるらしく、その笑みは何処か慈愛に見えた。
「歓談出来る程度の余力があるようで何よりです。では向かいましょう、もとより我々に残された時間はありません。急ぎましょう」
「余裕を持つのも良いけど、そろそろ気を引き締めないとねー」
バゼットに急かされ、イリヤに気持ちを切り換えられ、一同の表情が再び引き締まる。目の前に広がる大空洞への入り口が口開く物の怪の顎にも見える。もう後戻りは出来ない、最後までやり遂げる決意を固め、修司達は大空洞への一歩を踏み出した。
そして、同時に思い知る。自分達は確かに慢心も油断もしていなかった。戦力も充分、最悪の事態が起きても最低限の勝利は約束されていると、確信しながらもそれに甘えるような思考は唾棄していた。
修司達が見落としていたのは相手の戦力ではなく心境。追い詰められ、手段を選ばなくなった者が行う悪魔的発想による凶行を全く予想出来なかった。
詰まる所、一行を襲ったのは足場の崩壊。大空洞の崩落も辞さない初見殺しの罠だった。
その崩壊にいち早く気付いたのはバーサーカーとアーチャー、そして修司のみ。アーチャーと修司は崩落していく足場を頼りに罠を避けようとするが、それを銀の鎖が行く手を阻む。
そして、物陰から現れたのは桜が使役する最初のサーヴァント、ライダー。眼を隠すバイザー越しの視線が修司と交差し。
「――――恨んでくれて結構ですよ」
どこか諦めた様な、達観された言葉と共に繰り出される蹴りにより、修司達は今度こそ闇の谷底へと落ちていった。

◇

「――あいててて、皆無事!?」
突然の足場の崩落に巻き込まれ、ライダーに気圧された一行。サーヴァントの助けがあったとは言え、結構な高さから落ちた衝撃は魔術師である遠坂達には少しばかり堪えたらしい。時間にして一分足らず、その間に意識を失っていた事を自覚した遠坂は急いで他の面々の安否を問うた。
「もう、遅いわよ凛。もう少し遅かったら置いていく所だったわ」
「イリヤスフィール、そう。一応アンタは無事だった訳ね」
聞こえてくるのは生意気な少女の悪態、暗闇で良く見えていないが、この分だと然程遠くない位置に要るようだ。魔力的繋がりでアーチャーも側にいるのが分かる。取り敢えず現在の状況を確認しようと、遠坂は予め用意していた宝石を取り出し、灯りの為の魔術を行使する。
「――これは、不味いわね」
そして、目の前に現れた現実に打ちのめされかけた。遠坂の目の前にあるのは瓦礫の山、どこにも行き場のない空洞だけが広がる場所にポツンと自分達だけ落ちて来たことに気付き、少しばかり嫌気が指す。
「――これ、無理に突き進んだらどうなるかしらね？」
「生き埋めになりたいなら他所でやって」
分かりきった答えを前に項垂れる凛、折角此処まで来たのにここへ来てまさかの足止め。時間が残り少ないのに余計な手間を掛けさせられる事態に遠坂は地団駄を踏みたくなったが、遠坂の家訓を思い出しこれを懸命に押さえる。
と、向こうから足音が近付いてくる。ガンドの構えのまま足音の主を待つと、影の中から現れるルーラーとバゼットの姿に安堵し、遠坂はその腕を下ろした。
「皆さん、ご無事でしたか」

「ルーラーに、それとバゼット。これであの二人を除く全員が此処に落とされたって訳ね」
「っ、では、やはり修司君達は……」
「ええ、恐らくは意図的に通されたのでしょうね。今頃は桜とご対面、もしくはもう戦っているか、全てが終るまで私達は此処で足止めされるって訳」
　無論、遠坂が相手の思惑に乗るつもりはない。守りに特化したルーラーが此方にいる以上、ここで足止めを受ける必要性は無くなった。
　アーチャーとバーサーカーの力を以て此処から脱出する。恐らく瓦礫を吹き飛ばした際に更なる崩落が待っているが、そこら辺はジャンヌに任せる他ない。負担の割合が増えるが、もう躊躇している場合ではない。
　そんな時、足音が聞こえた。自分達以外いないであろう人物が存在していた事に驚くが、もしかしたら修司か士郎の何れかがまだ此処に残っているかもしれない。
　だが、そんな甘い考えは直ぐに吹き飛ぶ事になる。闇の中から這い出るように現れた黒いランサー、尾を生やし、更なる人外と成り果てた反転したケルトの大英雄が遠坂達の前に立ちはだかった。
「ちっ、やはり修司はいないか。あの女、最初からこうする腹積もりだったか」
「貴様が此処にいると言うことは、やはり二人は向こうにいるのか。ランサー、君も随分と酷い貧乏クジを引かされたモノだな」
「業腹だがその通りだ。事此処に至って、よりにもよって貴様らなんぞを相手にしないといけないとはな」
　現界しながらも溢すアーチャーの皮肉をランサーは眉一つ動かすことなく応える。何せランサーにとってこれが修司と戦える最後のチャンスと思っていたからだ。その望みが断たれた今、彼の胸中にあるのは惰性による殺戮しか残されていない。
「――――」
　バゼットは変わり果てたランサーを見て静かに瞑目する。全ては自分が至らなかった事が原因、ならばせめて全力で相対する事で払拭

しようと、彼女の拳に自然と力が込められる。
「……さて、事此処に至って互いに出し惜しむ事はあるまい。死にたくなければ、精々全力で足掻くが良い」
「来るわよ、アーチャー！」
「了解した！」
「バーサーカー！　お願い！」
「■■■■■■ッ!!」
ランサー一騎を相手にアーチャーが矢を放ちバーサーカーが疾走する。有無を言わさぬ速攻、この攻撃を前に並みのサーヴァントならば圧殺される事は避けられない。
だが……反転したランサーは怯まない。
「――全呪解放、加減は無しだ」
その瞬間、バーサーカーの左胴体が巨大な顎に喰われた様に抉られて……。
「っ、アーチャーッ!!」
矢を放った筈のアーチャーの片腕が宙を舞った。

その５４

「■■■■■ッ!!」
「バーサーカーッ!?」
　アーチャーの片腕が飛んだのと、バーサーカーが瞬時に身を翻すのはほぼ同時だった。全ての呪いを解放した事で異形の姿へと変貌したランサーへ脇目も振らず、主の呼び声にも応えずに吶喊するのは偏に目の前の脅威を排除するためのモノ。
　このランサーは普通ではない。泥に呑まれ変容した事でそれ自体は察するに余りあったが、この様な宝具を隠していた事には完全なる盲点だった。〝抉り穿つ鏖殺の槍〟とは異る第二の宝具、自らを異形と化して純粋なる戦闘特化へと至った反転したランサーの奥の手。
　この男は危険だ。本能に従い、無謀と知りながらも素手で挑む大英雄。そんな彼をランサーは嘲笑もせず、淡々とその剛腕を奮う。
　ぶつかり合う力と力、されど拮抗したのは一瞬。飛び掛かる形で襲い来るバーサーカーをランサーは抵抗を感じないまま防いだ片腕だけで吹き飛ばす。腕力でならば今回の聖杯戦争の中でも最強の狂戦士が鎧袖一触される光景にその場にいる全員が驚愕に眼を剥く。
「っ、このぉっ！」
　それでも、此処で引いてはならぬとジャンヌが握り締めた旗を振り抜く。オルレアンの乙女、ジャンヌ＝ダルクはその逸話もあってか純粋な腕力で言うなら以前のランサーにも引けを取らない。
　そんな彼女の一撃をランサーは腕力ではなく、技で以て打ち返す。延びた尾を利用し、旗を叩き落としてからの回し蹴り、腹部に突き刺さったジャンヌはもん絶の言葉すら吐けずに息を吐き出され、岩壁へと打ち込まれていく。
「嘘でしょ、あの二人を子供扱いなんて、パワーアップしてるとは言えふざけすぎよ！」
「いいえ、遠坂凛。あの異常な迄の膂力は恐らくあの宝具だけが原因

では無いでしょう」
バーサーカーとジャンヌをまるで子供扱い。素手とは言えバーサーカーとて大英雄として世界に名を刻んだ英霊、幾らサーヴァントという縛りがあるとは言え彼処まで彼を子供扱いするのは可笑しすぎる。
努めて冷静に戦況を分析するバゼットに習いアーチャーの止血と回復に意識を割きながら遠坂も思考を巡らせ……そして、その答えに辿り着く。
「まさか……聖杯？　アイツ、大聖杯から魔力を受け取ってる!?」
聖杯は膨大な魔力を注がれる受け皿、魔力に満ち、この物理世界に風穴を穿つ〝外側〟へと至る為の鍵、そんな膨大な魔力量を誇る聖杯からバックアップを受けているのであれば、ランサーのあの異常な膂力にも説明が付く。
だが、それだけの魔力は一体何処から来ていると言うのか、脱落したサーヴァントは修司の話から聞いたアサシン二体程度、幾らサーヴァントが魔力の塊の存在だとは言え、それだけで聖杯の魔力が満ちるとは思えない。
その疑問は脳裏に浮かんだ瞬間解消された。内にエネルギーが無いのなら、外から持ってくれば良いという、ごくごく当たり前の帰結に行き着いてしまった。
冬木は優れた霊脈を持ち、同様に豊富な魔力的資源に富んでいる。そして大聖杯はその霊脈と深く繋がっている。自然も資源も、そして命すらも魔力というエネルギーに変えてしまえば、それは即ち聖杯の完成を意味している。
恐らく、外は今頃魔力的干渉を受けて被害が出始めている頃だろう。冬木の人々が異常現象にパニックに陥るのも時間の問題、事態は既に取り返しの利かない段階へ進もうとしている。
なら、迷いはもう許されない。バーサーカーに並んでバゼットもランサーへ挑んでいるが、戦況は芳しくない。大聖杯というバックアップを受けたランサーを斃すにはこれに掛けるしかない。
〝令呪〟　サーヴァントのマスターに許された神秘の結晶、この力

を使ってアーチャーを完全復活させる。それで戦況を長引かせてその間に修司達が決着を着ける事に賭けるしかない。

しかし、そんな彼女の決断は彼女のサーヴァントによって止められる。

「まだだ、凛。令呪を切るには今はまだ時ではない」

「でも、このままじゃ全員やられちゃうわよ！」

「あぁ、それは分かってる。今のランサーは恐ろしく強い。バーサーカーと執行者を合わせても、尚足止めする事くらいしか叶わない。戦況は極めて最悪だ」

「だったら！」

「だからこそ、堪える必要がある。……安心しろ凛、この戦いは何がなんでも勝ってみせるさ」

「アーチャー……？」

片腕を失い、痛みで脂汗を滝のように流して尚、その男は勝つと言った。この状況で、どうしてそんな事が言えるのか……決まっている。彼は、英霊エミヤは、正義の味方なのだから。

〝――――体は剣で出来ている〟

「ッ！」

一節、詠唱を唱えた。瞬間、バーサーカーとバゼットを圧倒していたランサーは急遽狙いの矛先をアーチャーへ向ける。反転した事で野生の感覚が増した彼の直感が、この場で一番危険なのが誰なのか嗅ぎ分けたのだ。

翔ぶ。地を蹴り、弾丸の如くアーチャーへと迫るランサー、しかしその行く手は何重にも重ねて咲く花弁によって遮られる。

〝血潮は鉄で、心は硝子〟（Steel is my body, and fire is my blood.）

〝幾度の戦場を越えて不敗〟（I have created over a thousand blades.）

〝ただの一度も敗走はなく〟（Unknown to Death.）

〝ただの一度も理解されない〟（Nor known to Life.）

紡がれるのは嘗ての己の生き様、正義の味方に憧れ続け、只ひたすら走り続けた愚かで間抜けな自身が辿った道のり。

そこに意味は無く、価値もない。黄金の英雄王が見れば唯の贋作と

掃き捨てられるだけの……ただ偽物だった者の過程。
理解などされる訳がない。当然だ。他ならぬ自分自身が他者の理解など求めはしなかったのだから。
――――――でも。そんな自分をちゃんと見てくれる人がいた。泣きながら止めてくれと、声を掛けてくれる人がいた。
こんな自分に、ちゃんと呼び止めようとしてくれた人がいた。正義の味方を目指した自分に真摯に向き合ってくれた友人がいた。
後悔はある。無念もある。憤りも、嘆きも、苦しみもある。けれど――。
『知ってるか士郎、正義の味方って一人じゃないんだぜ』
（――そうだな。ああいう友達（とも）も、俺にはいたんだな）
捨てはしない。後悔ばかりの、借り物で偽物の理想でも、それでもその道を進んだのは他ならぬ自分自身だ。故に、喩え死んでもこの在り方だけは捨てることはしない。
価値もなく、意味もない生涯。しかし、それでも。
この体は――無限の剣で出来ていた（UNLIMITED BLADE WORKS.）

◇

「なんだ……これは」
そこは何処までも広がる荒野。空は曇り、錆び付いた歯車と、墓標の様に鎮座する無数の剣の世界。
固有結界。魔術に於いても深奥の一つとされる奥義、現実を己の心

象風景で以て侵食する幻想の具現。
「成る程、これが貴様の宝具か。剣士の真似事をしているから変わったアーチャーかと思っていたが……何てことはない、魔術師こそが貴様の本職だったか」
「その通りだクー・フーリン。何てことはない、無限に剣を内包し投影する。これだけが俺に許された魔術だからな」
「ふん、つまらん仕掛けだ。タネが分かってしまった魔術程退屈なモノはない。――もういい、貴様は此処で死ね。残ったバーサーカーも魔術師達も皆殺し、俺は奴の所へいく」
「ハッ、止めておけ。今の彼に止められるものなどないさ。これ以上無様を晒す前に貴様こそ此処で果てろ」
「よく吼えた。ならば微塵になれ。アーチャー!」
瞬間、異形の走狗が掛ける。これ以上の挑発も、足止めも受ける謂れはないと。
最初からランサーの標的は修司にあった。恐らくは初めて目にした時から確信があった。この男とは心から楽しめる戦いが出来ると。今すぐで無くとも近い将来に必ず自分達サーヴァントと同じ領域に立てるのだと。
それが今ではどうだ。聖杯戦争に巻き込まれたばかりか、バーサーカーとの戦いから生き延び、厄介だった門番のアサシンを正面から打ち破り、間桐の地下では自分を簡単にあしらい、今では最優のセイバーですら奴を倒すことは出来なかった。
今回の聖杯戦争、最強と謳われるのはセイバー(アーサー王)でもアーチャー(エミヤ)でもバーサーカー(ラクレス)でも、そしてランサー(自分)でもない。神秘の薄くなったこの世界で今を生きる奴こそが聖杯戦争の最強の存在へとなった。
その最強に挑むのは自分だ。自分こそが奴の相手に相応しい、聖杯戦争の最後の戦いを飾るのはあんな悍ましい怨霊等ではないのだと、ランサーはアーチャーに向けて殺意を込めた一撃を見舞おうとして……。
「■■■■■ッ!!」
その先を黒の巨人によって阻まれた。完全に意識外からの強襲、防

御するよりも速く振り抜かれた蹴りはランサーの腹部へと直撃する。
「バーサーカーだと、何処に隠れてた」
「私達もいますよ」
「っ！」
吹き飛ぶランサーを血に染まるバゼットとジャンヌが追撃する。これ迄の戦闘で既に彼女達は満身創痍、身体中の至る所から血を長し、自前のスーツやその甲冑を鮮血で染めるのは見た目以上に痛々しかった。
が、それでも彼女の奮う拳には、旗の勢いには些かの衰えも無かった。繰り出される連打、凪ぎ払われる棒術、それを煩わしく思いながらも避けきったランサーはバゼットを蹴りで吹き飛ばし、ジャンヌを殴り飛ばし、アーチャー達と距離を開ける。
見れば、アーチャーの後ろには奴のマスターとバーサーカーのマスターが一緒にいる。どうやら此処が自分達の決戦の場なのだと腹を括った様だ。
どちらにせよ、ランサーがやることは変わりない。今すぐに此処にいる全員を鏖殺し、己の宿敵に向けて走るだけ。異形の走狗は止まらない、既にその段階はとうに過ぎている。敵を殺し尽くすまで決して止まらない、それが自身に掛けられた呪いなのだから。
「申し訳ないが此方も既に余力はない。持てる全てを以て貴様を狩らせて貰う」
言って、アーチャーは一本の剣を造り出す。それは以前までバーサーカーが愛用していた巨岩で生み出された斧剣。複製、贋作、しかしそれは前以上にバーサーカーの手に馴染んでいく。
「往くぞランサー、槍の貯蔵は充分か？」
その言葉を皮切りに聖杯戦争、サーヴァント同士による最後の戦いが開始された。

◇

「――――いっ痛ぅ、クソ。なんだったんだ一体」

浮上する意識、それに伴って全身に襲い来る痛み。全身の状態を確認し、落下による打撲を除いて五体満足だった己の幸運さに驚きながら、士郎は辺りを見渡して現状に於ける自分の立場を知る。

周囲には誰もいなかった。遠坂凛もバゼットも、イリヤも……そして修司の姿が何処にも無かった。もしかしたらあの崩落の時、誰かが巻き込まれて瓦礫の下敷きになっているかもしれない。体の骨が折れて助けを呼ぶための叫び声も出せないでいるのかもしれない。

修司や遠坂達がそんな危機に陥っている可能性は殆ど無いだろう。だがもしかして、万が一の可能性があるかもしれない。そう考えた士郎は薄暗い空間に眼を凝らし、落石に注意しながら辺りを回ろうとすると……。

気配を感じた。圧力、或いはプレッシャーとも呼べる圧が士郎を襲った。反射的に其方へ振り向けば、其処には両目隠しのバイザーを着けたサーヴァント。間桐桜が従えていたライダーが立っていた。

瞬間、彼女から放たれる蹴りと護身用に士郎が持ってきた木刀がぶつかり合う。ライダーの蹴りは的確に士郎の顔面を狙い、士郎は反射的に木刀で防御する。

「ガッ、グフ」

魔術によって強化された木刀はライダーの蹴りによって呆気なく砕け散った。それだけの威力、それだけの膂力、木刀で防御した士郎はその衝撃に耐えきれず吹き飛び、背中を地面に叩き付けられてしまう。

肺の空気が強制的に吐き出される。背中の痛みで眼から火花の様なモノが弾いた気がした。凄まじい威力だ。こんなもの一撃でも直撃してしまえば、その瞬間消し飛ぶ。そう思える程にライダーの蹴りは強烈だった。

呼吸が苦しい、意識が途切れそう。しかしそれでも倒れたままではいられないとふらつきながらも立ち上がる。
「やはり、貴方は勇敢ですね」
「ライ、ダー……お前、何だってこんなことを」
「私はサーヴァントです。主であるマスターに従い、主であるマスターの望みを叶えてやろうと戦うのは然程不思議な事では無いでしょう？」
まるで予め用意されていた台詞を口にしているようでライダーの口調は機械的だった。彼女が桜を大事にしているのは間違いない、学校で相対した時も、修司から聞いた間桐での立ち振舞いも、全ては桜を守ろうとしての行動だった。
そんな彼女の言葉からは何処か諦めの感情が滲み出ている気がした。こうする事でしか桜を守れないと、まるでそう言い訳している様にも見えた。
「桜に、何かあったのか？」
「それを知った所で、貴方には意味がありません。余り掛けられる時間はありませんので雑に殺しますが……精々、恨んで下さい」
瞬間、ライダーが迫る。両手に鎖の付いた短剣を握り締め、自分という獲物を喰らうためにその力を奮う。武器が砕かれ、丸腰となった士郎に為す術はない。しかしだからといって士郎に諦める理由は無かった。
桜を助ける。喩え何があっても、絶対に。それを為すために今、衛宮士郎が最も必要としているのは――武器だ。
そう、武器がいる。簡単には砕けず、折れず、それでいて目の前の障害を切り伏せるだけの力を持った強い一振りが、今この瞬間に必要となっている。
思考するのは一瞬、思い浮かぶのはあの日学校の校庭でランサーと打ち合っていたアーチャーの夫婦揃いの短刀。
綺麗だと思った。あの剣が、夜と星の光に彩られ、剣戟に火花を散らすあの刃が士郎の目に焼き付いて離れない。
――故に。

「投影（トレース・オン）、開始」
その台詞を口にするのは必然だった。
瞬間、火花が散る。振るわれたライダーの一撃を、士郎は手にした夫婦の刀剣で以て数回腕を奮う事で勢いを殺し、封殺し、圧倒していく。
打ち勝てた瞬間、返し刀の一閃がライダーを襲う。油断した。こんな事は有り得ないと、魔術を少し齧っただけの素人に遅れを取る道理はないと、この期に及んで未だ内心考えていたライダーはその一撃を頬に受ける。
しかし、所詮は成り立ての魔術師の苦し紛れ、直撃を受ける前に飛び退いて士郎が奮った一閃は直撃を避け、ライダーの頬に薄い一本の線を描くだけに終わった。
頬から流れる僅かな赤い血、それを黙したまま親指で拭ったライダーはその血を舐めとり――。
「……貴方を侮っていました。貴方を彼の、白河修司の付属品だと思っていました」
「はぁ、はぁ、はぁ……」
「ですが、ここまでです。もう貴方には力は残されていない。窮鼠猫を噛むと言う諺はこの国由来のモノですが、それでも、貴方の状況が覆ることはない」
「くっ」
「受け入れなさい。貴方の出番は此処で幕を下ろすのだと」
瞬間、ライダーは短剣を振りかざし宙を舞う。瓦礫の天蓋へと着地したライダーはその脚に最大限の力を込めて……。
「せめて、この一撃で死んでください」
音すら越えて、士郎へと強襲する。
回避？　無理。防御？　不可能。
ほぼ全ての力が反撃の時に出し尽くしてしまった。今の士郎に抗う事は出来ない、運命に立ち向かうだけの余裕はない。
ないのだから――。
「いい加減にしろ」

「グボハァッ!?」
横から掻っ攫う他ないじゃない。
落ち行くライダーの横っ面を見事なまでの飛び蹴りが撃ち抜いていく。回転し、勢いを乗せたままライダーは岩壁へと吹き飛び、地面に突き立てた刀剣の如く、深々とめり込むのだった。

その55

冬木市新都にある冬木中央公園。嘗ての大災害で多くの人命を失い、慰霊碑が置かれ、曰く付きの場所として知られるこの場所に深山町方面に住む人々が警察の指示に従い此処へ避難していた。

冬木に起きるガス漏れ、或いはガス爆発による事故、それは大戦中に冬木に落とされた爆弾が原因であるとされ、その不発弾が深山町にあると断定された。ガス爆発による誘爆で更なる被害が出るかもしれないととある情報から入手した話を元に、冬木市市長は即座に警察と連携、深山町方面に住まう人々に避難勧告を促した。

突然の出来事に戸惑いながらも、警察の指示に従い速やかに新都へ避難した深山町の人々、その中には士郎の姉貴分にして保護者である藤村大河の姿もあった。

「よし、これで冬木方面の生徒達の安否はほぼ完了っと、葛木先生、協力ありがとうございます」

「気にする必要はありません。生徒達の身の安全を考慮するのも教師である私達の責務です」

「でも、葛木先生には婚約者の方がいらっしゃるのでしょう？　此方にはうちの組の子達もいるし、安心させる為にも側に付いていてあげた方が……」

藤村大河は藤村組の頭目の孫娘である。それ故に教師という役職に就いても子分の者達に最低限の命令を下す事は可能であり、現在も彼女の指示の下、避難してきた住人に寒さで凍えないよう毛布等を配っている。

人手は足りてるから未来の奥さんの側にいてやれと、大河は促すがその必要はないと葛木は首を横に振る。

「ご心配には及びません。アレは聡い女ですから……先程連絡があり既に冬木から発っているとの事、それと私の事よりも自分の出来る事をしろとも言われました」

「それは……色々、凄い人なんですね」

「ええ、自慢の伴侶です」
相変わらず無愛想で無表情の男だが、それ故にその口から紡がれる言葉にはいつも真実味が込められていた。未来の夫の負担にならない様に即座に行動する奥方もそうだが、それを前向きに受け止めているこの男も色々と凄い。結婚する前から深く繋がっているであろう二人に羨ましく思いながら大河はそうですかと納得する。
「分かりました。では私は一先ずこれで、後は衛宮君達の安否を確認するだけですので」
「分かりました。何かあれば声を掛けてください」
それではと、互いに会釈した後二人は其々の持ち場へと戻る。葛木は自治体と一緒になって行動している一成達の下へ、大河は色々と話を誤魔化して煙に巻こうとした慎二に事の追及をする為にその足を進めていく。
だが、その歩みはそれに気が付いた者の言葉によって止められる。
「な、なぁ、あれなんだ？」
「何アレ……煙？」
「煙……なのか？　煙にしてはなんか様子が変だぞ？」
一般の男性が指差す方へ視線を向けると、其所にはうっすらとだが煙の様なモノが浮かび上がっているのが見える。方向からして円蔵山の方角、つまりは一成達が住まう寺……柳堂寺の方だ。
まさかあれはガス漏れによって引き起こされたモノなのか、それとも不発弾による何らかの事象が引き起こされているのか、困惑する人々を余所に事態は更に深刻化していく。
「お、おい。どうしたんだよお前、いきなりふらついて……」
「わ、分かんね。なんか、急に眩暈が……」
「なんか、私も……意識が……」
「ちょっと、大丈夫？」
突然、周囲の人間が体調の不良を訴え始めた。眩暈を覚える者、意識が朦朧として昏倒しそうになる者、症状は其々で今の所重い症状を訴える者はいない。
だが、明らかに不自然な症状だった。先程まで健康そのものだった

者がどうしてこうも唐突に不調を訴え始めたのか。年齢も性別も問わずに襲い来る症状、その中には頑丈な藤村組の人間もいた。
そして、藤村にはこの感覚に覚えがあった。先の所属する学校が休校となった原因であるガス漏れ事故、あの時陥った自分達の症状と彼等が訴える症状はどれも似通っている。
今、この冬木で何かが起きている。そしてその原因は恐らくあの煙の立ち上る円蔵山に起因している。周囲の人々が不安にうち震える中、藤村大河は静かに円蔵山の方へ睨み付けていた。

◇

舞い上がる砂塵、ガラガラと音を立てて転がり落ちる岩の瓦礫、岩壁に突き立てられた刀剣の如く突き刺さるライダーを尻目に修司は士郎へと向き直る。
「悪い士郎、無事か？」
「あ、あぁ、どうにか……つぅ」
サーヴァントに襲われ、あわや命の危機に瀕していた士郎だったが、唐突に現れた友人によりどうにか窮地を脱する事が出来た。自身の命よりも友人が無事だった事に安堵する士郎だが、次に肉体に襲い来る痛みにその表情を歪ませ、膝を地に付ける。
同時に手にした干将莫耶が魔力の残滓となって霧散する。士郎が行ったと思われる魔術行使に一瞬見とれる修司だが、士郎の尋常でない疲弊具合にも気付き急いで彼の下へ走り寄る。

「おい、本当に大丈夫かよ。酷く辛そうだぞ」
「へ、平気だ。これくらい何て事……ない」
　明らかに強がりだが、今はそれで問答する暇はない。皆と一丸となって決戦に望んだのはいいが、向こうの策略によって分断、現在修司達は孤立した状態にある。早く他の面々と合流し大聖杯の所へ向かわなければならない。故に士郎の事は取り合えず先送りにするしか無いだろう。
「分かった。お前がそう言うなら俺は何も言わない。でも状況が状況だ。悪いが、此くらいの手は出させてもらうぞ」
「ちょ、お、おい！」
　物言う士郎を無視し、修司は彼の体を背負う。士郎を動けるようになるまでどうにかこれで遣り過ごすしかない。
「おい暴れるな。そんな事で体力を消耗させる位なら少しでも早く回復するよう努めろよ」
「だ、だからっておんぶってお前……！」
「気にするな、旅先でお年寄りに良くしていたからな。誰かを背負うのは慣れている」
「いや、でも……」
　良い歳して男に――――しかも同学年の友人に背負われる事実に士郎は色々と恥ずかしくなった。だが、修司の言うことも正論でここであれこれ文句を言っている場合ではない。大人しく体力の回復に努める事にした士郎に安心しながらこの場から立ち去ろうとする修司だが……。
「いか……せま、せん。桜は……私が守らなければ！」
「っ、ライダー！」
　二人の前にライダーが立ち塞がる。しかし修司の奇襲の一撃が予想以上に効いたのか、彼女の佇まいには以前の様な洗練さはない。ふらつきながらも主の為に戦うその姿は正しいサーヴァントの在り方なのだろう。
　しかし。
「――なぁ、ライダーさん。アンタ……一体何がしたいんだ？」

「なに？」
　そんな彼女を修司は何処までも冷めきった眼で見つめ返す。
「桜ちゃんを守りたいというアンタの想い、それに嘘はないんだろ。あぁ、それは分かる。察しの悪い俺でもアンタの桜ちゃんに対する想いは本物であることくらい……伝わってるよ」
「でもさ、これ迄の聖杯戦争でアンタ一体何をしてきた？　桜ちゃんを守ると言って、具体的に何をしてきた？」
　静かに、淡々と、事情聴取の様に問い掛ける。一つ一つ丁寧に訊ねてくる修司にライダーの心は真綿でジックリと締め付けられる感覚を覚えた。
「何も、だよな？　アンタは桜ちゃんを守ると言ったが、助けるとは一言も言っていない。現状維持、アンタがしてきたのはただそれだけだ」
「っ！」
「あの間桐臓硯がどんなに恐ろしいかは知らないし、アンタの事情も知らない。アンタからすれば俺の言葉なんて癪に障るだろうが……それでも言わせてもらう」
「アンタさ、空回ってんだよ。本当に思っている事とやりたい事が致命的な迄に噛み合ってないんだよ。アンタ、昔どん臭いとか言われた事ないか？」
「わ、私は――ちが、そんな事は……」
「アンタがやるべき事は桜ちゃんを守る事だけじゃない。桜ちゃんを助けるべく……誰かに、助けを求めるべきだったんだ」
　ライダーは終始、桜を守ろうとしていた。慎二にマスター権限を譲渡され、それに従おうとしたのも全てはマスターである桜を守る為。その為には他の多くを犠牲にしても構わないと、そう思ったからあの学校に張った結界もそのままにした。
　だが、その時点で彼女は間違っていた。桜を守るのも良い、だが、それ以上の結末を望まなかった。彼女をより日の当たる場所に連れていこうと、何の行動もしなかった。所詮この身はサーヴァントなのだからと、無意識に諦めた。

ライダーが、メドゥーサの彼女に間違いがあるというのなら、それは他者に頼るという事をしなかった事にある。
しかし聖杯戦争は全てのマスターが敵、協力関係になることは有り得ない。
下手に情報を与えてしまえばそこから全てが崩れ去ってしまう。守りたいと思った桜にまで危害が及んでしまう。と、尤もらしい理屈を考えて。
修司自身、無茶な事を言っていると理解している。だがそれでも考えずにはいられない、もしライダーが早い段階で自分やジャンヌに助けを求めれば、もっと違う未来があったのではないかと。
「わた……しは、私はただ、あの娘の幸せを」
「幸せってのは未来にあるものだろうが、今にしか目を向けていない奴が手に入られるものかよ」
崩れ落ちるライダー、敵対する意思も戦意すら叩き折られた彼女を修司は一切触れる事なく彼女の横を通りすぎその場から立ち去った。遠くなっていくライダーの背中、そんな彼女を士郎だけが憐れみの籠った瞳で見つめていた。

◇

「さて、そろそろ最深部か」
士郎を背負い、洞窟内を進むこと数分。道中瓦礫で塞がれていた道もあった為、結局ジャンヌ達と合流出来ぬまま最深部と思われる場所へ到達した二人。
ここまでの道中、まるで導かれる様に何事もなく進めたのは僥倖だ

が、今の二人はそれを素直に受け止める事はできない。本来ならば此処にジャンヌやアーチャー、バーサーカーやバゼットなど万全の陣営で挑むはずだった作戦も今ではもう成り立たない。
完全な作戦失敗――――とまではいかないでも、状況は最悪の一歩手前まで追い詰められている。奥の方……恐らくは最深部から感じ取れるのはこれ迄にない〝濃い〟モノ。
死と呪いが詰め込まれたモノがこの先で待っている。逃げられる状況ではない、此処で僅かな望みに懸けてジャンヌ達が来てくれるのを信じたい所だが……それが許されるだけの時間は残されていなかった。
「……士郎、立てるか？」
「あぁ、お陰で楽になった。ありがとな修司」
溢れ出る死の気配が時間が経つに連れてより膨大に膨れ上がっている。このままではジャンヌ達が来る前に暴発しかねない、知識も何もない自分達だが、それでもやるしかないと覚悟を決め、修司は士郎に声を掛けて背中から降りてもらう。
士郎の表情は先程よりもマシになっていた。どうやら魔術行使による疲労は幾分か回復したらしい。自力で歩けるようになった士郎に安堵し、修司は改めて奥の方へ視線を向ける。
「悪い、色々と不都合が重なって結局は俺達だけで対処しなくちゃならなくなった。本音を言うならここでジャンヌさん達を待ちたい所だけど……正直、期待は出来ない」
恐らくだが、ジャンヌ達は今別のサーヴァントと戦っている可能性が高い。士郎の所へライダーが待ち受けていた様に、ジャンヌ達の所へは恐らくあの異形のランサーが待ち伏せていたに違いない。奴を相手にしていると考えれば、ジャンヌ達が苦戦しているのも頷ける。
故に、援軍は期待出来ないと修司は正直に口にした。それはつまり自分達の身の危険性がぐんと高くなることを意味しているからだ。
「お前が気にする必要は無いだろ。寧ろ、魔術師の癖に何の役に立てていない俺こそが謝るべきだろ」
暗に、ここから先は士郎を守れる保証がない。そう語る修司に士郎

は笑みを浮かべて気にするなと語る。
「それに、ここから先はお前が如何に本気で戦えるかによって結果が変わる。だから修司、俺の事は気にせず、思いっきり暴れてくれ。その方がきっと早く片付けるし、桜を助け出せる可能性が高くなる」
「……あぁ、そうだな」
士郎には自衛に専念してもらい、戦いは修司が全面的に受け持つ。悔しいが、今はこれがベストだと士郎は悟る。無力な自分、友人に頼ることしか出来ない自分に内心で憤慨しながらも、それでも修司に頼るしかない今に縋るしかない。
滲み出る衝動を飲み干しながらそう言う士郎に修司もまた頷き、決意を固める。必ず、全員で生きて帰ると。
そして、二人は遂に到達する。円蔵山の内部、その奥底に在る最深部。地下大空洞へと辿り着く。
そこで目にしたのは……黒い月。忘れもしない、１０年前の冬木の空で見た暗闇の孔が穿たれていた。
全身が強ばる。当時の光景と全く同じソレに修司の内から凄まじい迄の感情のエネルギーが溢れ出そうになる。
全身から迸るエネルギー。だが、それは寸での所で鎮火する。何故なら、自分達の向かい側に一人の女性らしき人影が佇んでいるから。
桜ちゃん？　訝しむ修司だが次の瞬間、目の前の人物が桜でないことを確信する。目の前の黒いドレスを着た者は桜じゃない。桜という依り代を得て現世に顕れたナニかであると、本能的に理解した。
「……お前、誰だ。桜ちゃんじゃないな」
「――ククク、漸く来てくれたか。待ちわびたぞ」
艶やかな声音だった。優しく、丁寧で、それでいて……自分達を羽虫程度にしか思っていない眼差し。黒いドレスと王冠を纏い、死者の様な白い素肌と髪を覗かせるその女は――――何処と無くイリヤと似ていた。
「さて、先ずは名乗ろうか。我が名はユスティーツア＝リズライヒ＝フォン＝アインツベルン。ホムンクルスであり第三の魔法へと至った魔法使いなり」

そう言って嗤う彼女の顔には何処までも底無しな悪意が滲み出ていた。

その56

「ユスティーツァ……だと？　それは確かイリヤの嬢ちゃんが言ってた奴か」
「然り。我はアインツベルンが生み出した最高傑作、人の手によって生み出されておきながら人を凌駕せし存在（モノ）、そしてこの大聖杯の中枢を担うものなり」
　広々とした空間、その広さ直径にして一キロに及ぶ大空洞にて修司と士郎はその者と相対する。黒いドレスに煌めく黄金の王冠を戴き、イリヤと同じ銀髪にして紅い双眸を向けてくるその女は自らをユスティーツァと名乗った。
　それはアインツベルンが生み出したホムンクルス。その神域の才能を以て聖杯戦争の基盤である大聖杯を遠坂家、マキリ家と共に構築した始まりの御三家の一柱。
　その外観は美しく、見る者を虜にしてしまいそうな外見とは裏腹に彼女の浮かべる笑みは何処までも歪んでいるように見えた。世の全てを嘲笑するかの様な張り付いた笑顔、その様子からどう見ても普通ではないと察した修司は警戒心を最大限に高めながらユスティーツァへ問いを投げ掛ける。
「悪いが此方はアンタに興味はない。ここに桜ちゃんがいる筈だ。どこにいる？　答えろ」
「クハハハ、そう急くな。せっかちな男は嫌われるぞ？」
「生憎、此方はお前と仲良く歓談しに来たんじゃねぇんだよ。お前が大聖杯の中枢担っているなら、繋がっている彼女の事も知っている筈だ」
「フッ、面白味の無い男よ。その癖勘が鋭い、聖杯越しに見ていたが……成る程、面倒な男よ」
　尊大、しかして傲慢。その口ぶりと身振りから此方を羽虫程度にしか思っていないユスティーツァに修司は苛立ちや嫌悪感よりも焦りを募らせる。

嫌な予感がしたからだ。ここにユスティーツァが居て、その代わりに桜の姿がない。桜が大聖杯の門となって、その中枢を担うと豪語する奴がいるという事に修司は言葉に出来ない悪寒を感じた。
「ならば、もう察しは着いているのだろ？　大聖杯の受け皿となったあの娘は私の依り代となるためにその全てを我に明け渡した」
全てを明け渡す。それは文字通りの言葉、血も髪も、肉も骨も、細胞の一つ一つその全てを間桐桜はユスティーツァに明け渡したのだ。そんなバカなと士郎は叫ぶ。
「嘘だ！　桜が、アイツがそんな事を望むものか！」
「無論、そうであったとも。あの娘は気弱ではあったが、耐え忍ぶ強さはあった。この器を手にする前に記憶を閲覧したが、それはもう根気の強い娘、そんな彼女の気概に亀裂を入れたのは……他でもない、貴様だ」
そう言ってユスティーツァの指先は修司へと向けられる。桜を追い詰めたのはお前だと、ハッキリと告げてくる彼女に対し、心当たりの無い修司は面喰らうばかりだ。
「白河修司、聖杯の中から見ていた時もそうだが、お前は凄まじいな。魔術師でなければマスターでもない。出自も経歴も平凡な貴様がああの英雄王に拾われただけで此処まで成長するとはな。……いや、成長という言葉では最早収まらぬ。聖杯戦争という戦いを経て、お前は進化した」
「……何が言いたい」
「そんなお前をあの娘は妬んだ。太陽の様に眩しいお前を間桐桜は疎んだ。憎んでいたと言っても良い、環境に恵まれ、人に愛され、人生を謳歌しながらも、不条理を己が理不尽を以て捩じ伏せる力を持っている。幼き頃から地獄を見続けてきたあの娘にとってお前という存在は余りにも度し難いのだろう」
「故に、間桐桜は我に明け渡した。お前を殺すという願いの下に、な」
「そんな……」
「さて、そう言う訳だからお前には早々に命を散らして貰わなければならない。契約上、それを為さなければこの器を完全に掌握出来ぬか

らな。あぁ、自決すると言うのなら手を貸すぞ？」
淡々と語るユスティーツァに士郎は言葉を失っていた。有り得ないからだ。彼女、間桐桜は優しい人間だ。一度言い出せば中々聞かない強情さもあったが、同じ時間を過ごす中で衛宮士郎は彼女に安らぎを覚える事もあった。
そんな彼女がよりにもよって修司に憎しみを抱くなんて……10年という長い歳月で臓硯によって刻まれた疵はそこまで彼女の性根を歪ませてしまったのか。
友人である修司を殺す為だけに全てを明け渡す桜、そこまで彼女を追い詰めていた臓硯に怒り、そんな風になってしまった彼女に気付いてやれなかった自分に、士郎は憤りと同時に絶望を知った。
もう、自分達ではどうする事も出来ないのか。地に膝を突ける士郎を横に修司は一歩前に出る。
「くっだらねぇ。なんだそりゃ？」
「なに？」
「し、修司？」
そして、口にした最初の言葉に士郎は再び絶句する。何を言っているのだと、そう問い掛ける士郎の眼差しを無視して修司は言葉を続ける。
「桜ちゃんが俺を嫌ってる？　ンな事、とっくの昔に気付いてんだよ。けどな、それがどうした。桜ちゃんが俺を殺そうってんなら真っ向から相手して諦めさせる。生憎俺は王様の臣下でな、そう勝手に命を散らす事なんて出来ねぇんだよ」
「それが、あの娘の願いに反する事でもか？」
「当たり前だろうが。何で俺が桜ちゃんの願いに応えて死ななきゃならない。それに好き勝手に言ってくれたが……別に俺は順風満帆な人生を送って来た訳じゃないんだぜ？」
確かに、これ迄の人生の中で自分は恵まれた方だなと修司は自覚している。黄金の王を筆頭に、シドゥリや言峰神父、ジャンヌやレティシア、他にも旅先で出会った人達に世話になったりと多くの人達と巡り会う事が出来た。

だが、それと同じくらい困難と窮地の連続もあった。王に言われて外国を飛び回り、旅先で様々なトラブルに見舞われ、時には腕の骨を折るなどの命懸けの場面に遭遇したりもした。
師父との鍛練だって時々王の無茶振りと同等の難題を課せられたり、それによって何度も手足を滅茶苦茶にしてきた。
これ迄の人生の中で楽しい思い出は多く記憶しているが、それと同じ……或いはそれを越えるくらいの苦難と苦痛が修司の脳裏に刻まれている。それら全てを引っ括めれば充実した人生だと思えるのは、偏にそんな自分を応援し、見てくれる人達がいたお陰だからだ。
――修司は、同情していた。間桐桜のこれ迄の不幸な道程に、過程に、そして現在に。同情出来るし、可哀想だなと憐れむ気持ちもある。
だが、それ以上の怒りがあった。確かに自分は間桐桜の事を何も知らなかった。だが、それと同じように間桐桜も白河修司の苦労と苦難を知らない。
「俺がする事は変わらない。お前をぶちのめして桜ちゃんを助ける、だが、その前に一つ文句を言わなきゃいけないな」
まるで、世界の中で自分だけが不幸だと宣う桜に修司は初めて憤りを覚えた。
「そう言う訳だから天才の魔法使い様。お前を倒し、桜ちゃんを助け出す。喩えこの手を振り解かれても、首根っこ掴まえて日の当たる場所に連れてってやる」
故に、修司は気持ちを固めた。どんな事があっても桜を大聖杯(そこ)から引っ張り出すと、彼女が望む望まないに関係なく、強制的に掬い上げると決めた。
「――吼えたな、人間」
対して、ユスティーツァの表情から感情の色が消えた。悪意に満ちた笑みは消え、残されたのは機械的で無感情な貌(カオ)。ただ役目だけを行うだけのシステムがその姿を顕した。
同時に、ユスティーツァの背後の大聖杯から唸り声の様な駆動音が聞こえてくる。それは、間違いなく大聖杯起動の証し、宙に浮かぶ穿

たれた黒い孔から注がれる泥に呼応する様に大聖杯のあるとされる窪みから肉の柱が顕現する。
「おい、何をしやがった！」
「知れたこと、大聖杯を起動させただけよ。確かに此度の聖杯戦争に於いて斃れたサーヴァントが少ないため、大聖杯に注がれる魔力は願いを叶えるだけのリソースはないが……なに、足りないならかき集めればいい。幸いな事にこの冬木の霊脈は街中に張り巡らせているからなぁ」
「――――まさかっ!?」
ユスティーツァの物言いに魔術に然程詳しくない士郎も気付いた。冬木は優れた霊脈を保有し、それ故に聖杯戦争の舞台として選ばれた土地。その豊潤な霊脈は冬木全体に張り巡らせ、そこに住まう人々も必然的にその霊脈の――――ひいては、大聖杯の影響を受けてしまう。
ユスティーツァは足りない魔力を冬木に住まう人々、その全員から搾り取ろうとしている。キャスターの様な人の生死を見極めての搾取ではない。正真正銘、一人残らず、搾りカスすらも残さない勢いで飲み干そうとしている。
「修司！」
「あぁ、分かってる！」
これ以上、あの聖杯を放っておく事は出来ない。ユスティーツァを撃破し、大聖杯を破壊する為に修司は全身から力を漲らせて吶喊する。
白い炎を纏っての全速力。地を駆け、ユスティーツァとの距離を瞬く間にゼロにした修司は引き絞った握り拳を放とうとするが。
「――――無駄だ」
その一撃は、横に割って入ってきた影によって阻まれてしまう。構うものか、今更この程度の影に阻まれるのは読めている。更に力を込め、修司は影諸ともユスティーツァを殴り飛ばそうとして――――。
「――――私を殺すの？　白河先輩」
「っ!?」
愚かにも、その動きを止めてしまった。自分と言うガワを破り、其

処から見せた後輩の表情はユスティーツァが作り出した幻影に過ぎないと言うのに。
分かっていたつもりだ。この手の手合いがマトモに相手をする訳がないと、少し話を交えて分かっていたつもりだった。このユスティーツァなる物の怪はあらゆる悪辣な手段を用いてくる事くらい。
考えていた。気持ちを固めていた。奴を殴ることが即ち、間桐桜を殴り飛ばす事になるのだと。分かっていながら――――出来なかった。

情が邪魔をした？　彼女の境遇を知り、彼女が経験した地獄を知ってしまったから、情けを掛けてしまった？
それもある。だがそれ以上に白河修司はこの瞬間、あろう事か見惚れてしまったのだ。これ迄の人生の中で初恋の相手と此処まで顔を近付ける事は無かったから。可愛いと、場を弁えずにそう考えてしまったのだ。
そんな彼女の顔にこの拳を叩き込むのか？　刹那の合間に流れる逡巡、しかし相手はそんな猶予を待つ事はなく。
――――容赦なく、修司の腹部を影によって貫かせた。
「修司っ!?」
「愚かな。こんな古典的な策とも呼べぬ罠に引っ掛かるとは。惚れた弱みとは存外厄介なものなのだなぁ」
ニヤリと、ユスティーツァを名乗るそれは厭らしい笑みを浮かべて修司を見下ろしている。
そしてその言動により理解する。この女、修司と言う人間の弱みを突くために間桐桜の記憶を全て覗いているのだと。思い出したくないこと、知りたくないこと、沢山ある筈だった彼女の記憶をこの女は容赦なく暴き晒したのだ。
許せない。だが、それ以上に自分が情けない。腹部を貫かれ、逆流した血液が口から溢れ落ちる。それでも修司は負けてなるものかと拳を奮うが。
「最早お前の相手をする意味がない。精々大聖杯の養分になれ、お前

ほどの人間なら良き燃料になるだろうよ」
「が、あぁぁぁぁっ!?」
ブンッと、影はその触手を奮い修司を宙に投げ飛ばす。投げ飛ばされた先に待つのは――――開かれた地獄の釜、混沌とする大聖杯の中身そのものだった。
身を捩り、逃げ惑う修司だが、今の彼に空中から逃げ出す術はなく、物理法則に従い下へと落ちていく。ボチャンと泥水に石を投げ込むような鈍い音を最後に修司の気配は消えた。
「修司？　……おい、嘘だろ？」
その光景に衛宮士郎は何も出来なかった。白河修司は強い、これ迄幾度となく危機を乗り越え、その度に力を増していくその姿はまるで物語に登場するヒーローのようだった。
そんなアイツがこんな所で終わる訳がない。そう思い大聖杯のあるクレーターに目を向けても一向に彼が戻ってくる気配はない。
最悪の結末が脳裏を過る。違う、そんな筈はないと否定しても確定した事実が覆る事はなかった。
「なんとまぁ、呆気ないものよ。聖杯戦争の最も強き者がよもやこんな呆気ない最期を辿るとはな。いやはや、男女の問題と言うのはバカに出来ぬものよ」
「お前っ！」
その口振りから、ユスティーツァは全てを知っていた。修司が桜に対してどんな気持ちを抱いていたのか、桜の記憶を暴いて晒し、桜自身も気付けなかった修司の想い。目の前の人の形をとった異形者はそれを分かった上で踏み躙った。
許せない。許せる訳がない。ユスティーツァを自身の敵と認識した士郎は自身への負荷を顧みずに再び魔術を行使する。激痛が走る。魔術回路が悲鳴を上げる。全身に掛かる負荷が鼻血という形となって溢れ出るが、構うものかと士郎は身構える。
それを、ユスティーツァは嘲笑の笑みを浮かべる。
「ほう？　歯向かうか。未熟者な魔術師が、その程度の力量でこのユスティーツァに仇なすと？」

「うるせぇ！」
吼える士郎をユスティーツァは更に笑みを深めた。愚かだと、醜悪だと、立ち向かう士郎を嘲笑いながら、ユスティーツァは片手を上げる。
瞬間、幾つもの影が人の形を模して顕れる。人と言うには何処か歪で、複眼の様なモノが怪しく光る。どう足掻いても自分では叶わない。遠坂達は未だに此処へ来る様子はない、しかしそれでも衛宮士郎には逃げるという選択肢は無かった。
――――地獄の蓋は開かれた。最早一刻の猶予もなく、人類は人知れず存亡の危機へと落ちようとしている。
そんな中、黄金の王は嗤う。大空洞で起きている現状を、今其所で何が起きているのかを、それを全て把握して尚、英雄王は不敵に、それでいてどこか諦めた様に嗤う。
「あーあ、我知ーらね」
それは何に対しての言葉なのか、何に対しての諦めなのか。
それは、彼以外知る由もない。

その57　前編

――――何処までも続く地平線、その大地を刀剣の類いで埋め尽くしているのはアーチャーが具現化させた心象風景。無限の剣製、一人の魔術師だった男が唯一行使されることを許された魔術で生み出された世界で、狂化された狂戦士が吼える。

手にした斧剣を奮い、大地を抉りながら吶喊するその突進を異形と化したランサーが正面から受けて立つ。拮抗は一瞬、振り抜かれる斧剣を以て押し込もうとするバーサーカーだが、異形と成り果て、大聖杯のバックアップを受けたランサーの前では大した時間稼ぎになる訳がなく、バーサーカーの力押しは瞬く間に凌駕されてしまう。

押し退け、弾かれた斧剣。同様に両腕が弾かれた事により晒された胴をランサーの槍と化した豪腕が貫く。

更に、槍から槍へと派生し、バーサーカーの体内を無数のゲイボルクがその肉体を蹂躙していく。内蔵を破壊され、骨を引き裂かれ、内側から破壊される苦しみを受けながらも、それでも己の得物を奮う姿は正に狂戦士。

そんな苦し紛れのバーサーカーの足掻きを、ランサーは嘲笑も浮かべずに後退する。バーサーカーの苦し紛れの攻撃に恐れたのではない、その直後に襲い来る追撃を野性動物の様な勘の鋭さで察知したからだ。

瞬間、ランサーのいた場所に無数の刀剣が降り注がれる。大小、形も問わずあらゆる刀剣が降り注がれながらも、難なくそれを回避するランサーに投擲した本人……アーチャーはその勘の鋭さと俊敏さに舌を打つ。

次いで、左右からバゼットとジャンヌが矢継ぎ早に斬り込んでいく。体術と棒術、異なる術理の技を互いの動きを阻害せずに繰り出していく。現代に於ける高等技術のオンパレード、しかしそんな彼女達の攻防をランサーは即座に見切り、対処してくる。

「それはもう見た」

アーチャーが固有結界に自分達ごとランサーを封じ込めて数分、その間に何度も目にして来た攻防にいい加減飽々したとランサーは内心で愚痴る。故にこれ以上の戯れは要らないと、ランサーはその膂力でもってジャンヌ達を蹂躙していく。

降り掛かる旗と振り抜かれる拳、それらを自身の体を回転させる事で防ぎきり、その勢いを以て二人を吹き飛ばしていく。

「――さて、そろそろ其方も限界だろう。今の打ち合いで元マスターは死に体、バーサーカーも残りの命は後僅かとなった今。あとどれくらい持ちこたえるかな？」

淡々と、無表情のまま事実を突き付けてくるランサーにジャンヌは選択を迫られていた。今、あのランサーを完全に仕留め切れる方法は一つしかないが、それを行った時その際に起きる負債は全て修司に負わせる事になる。

それはダメだ。故にこれ迄その禁じ手とも呼べる手段を封じてきた。……だが、もうそれを由とする状況ではなくなった。此方が追い込まれている以上、切れる手札は使うべきだ。

（――しかし、それでもあのランサーに届くかどうか）

驚くべきは黒化したランサーの異常な迄の戦闘継続能力。大聖杯のバックアップを受け、従来の能力を軒並み大幅に向上したとはいえ、彼の戦う能力は桁外れである。もし、万が一この賭けに負ければ待っているのは１０年前の災厄の再来――――否、それを上回る大災害が待っている。

賭けに出るか否か。追い詰められる状況、そしてそれすらも出来なくなる切迫した戦況、イリヤも遠坂も、誰もがじり貧な状況に歯噛みする中で――――。

ジャンヌに天啓が舞い降りた。〝天啓〟、それはエクストラクラスでありルーラーという特殊なクラスに設けられた第三のスキル。

送られてきたのは断片的な情報、彼女の脳裏に映るのは赤い炎と眩い閃光――――そして、日輪を背負う巨大な魔神。

何故今になって天啓が届くのか。なんて疑問よりも――――嗚呼、と。気付けば自分でも驚くほどの気の抜けた声が溢れていた。何せ、その

声には全てが詰まっていたからだ。
諦めであり、安堵であり、絶望であり、希望でもあった。そう、ジャンヌ＝ダルクは断片的な情報であってもこの戦いの結末を何となく察してしまったのだ。
まだその結末が確定した訳ではない。けれど、心のどこかで納得してしまった。彼なら、白河修司ならば、きっと何とかしてみせると。
本来なら聖杯戦争とは無縁である彼に全てを託すのは些か以上に心が痛む。けれど、ここで躊躇って彼にランサーという余計な敵を残すのも憚れる。
――――故に、ジャンヌは覚悟を決めた。修司に全てを託すのではなく、彼の負担を少しでも軽くさせる為に。己に出来ることを成す為に。
「アーチャー！」
「っ！」
「暫し、時間を稼いで貰えますか？」
突然呼ばれた事に戸惑うアーチャーが、ジャンヌの表情を見て即座に理解する。大聖杯に使うべき切り札を今此処で切るという事を。
何をバカな。と、口にはしない。彼女が覚悟を決めた以上、自分達がとやかく口にする道理はない。それに、今此処であのランサーを斃さなければどのみち自分達は終る。マスターを死なせず、守り、最善の結果を生み出すにはこれしかない。
残る全ての問題は向こうにいるであろう修司と士郎に託される訳だが……構うものか。嘗ての自分ならいざ知らず、白河修司ならきっと何とかしてくれるだろう。
我ながら、楽観的な考えだと呆れ返る。けれど、そう思わずにはいられない。あの男なら、修司ならば、自分では成し遂げられない何かを成し遂げてくれるのではないかと。
だから、アーチャーも賭けることにした。
「無論、時間稼ぎなら任せたまえ。そういうのは馴れている。――――しかし」
「？」

「別に、あれを倒してしまっても構わんのだろう？」
不敵に、笑みを浮かべる。その言葉の意味を理解してジャンヌもまた笑みを浮かべた。
遠坂とイリヤにも伝わった。ここから先は自分達も賭けるべきなのだと、魔術師としてではなく、人としての本能が彼女達を突き動かした。
「いいわ。ぶちかましなさいアーチャー！　あなたの後押しは私に任せて！」
「私達も負けられないよバーサーカー、私も貴方に託すから、貴方の全てをここで出し切って！」
遠坂とイリヤ、それぞれから令呪が切られる。聖杯戦争に於けるマスターの奥の手、神秘の塊とされる令呪が輝きを放つ。瞬間、アーチャーとバーサーカーにマスターからの最大限の後押しが施される。
砲弾と化してランサーへ肉薄するバーサーカー、斧剣を両手で握り締め、勢いと共にランサーへ目掛けて振り下ろす。
瞬間、大地は爆発して辺りに衝撃が広がっていく。余波ですら致命傷に成りかねないソレをランサーは忌々しく吐き捨てる。
「令呪を切ったか、この状況なら当然か。だが……がら空きだぞ、ヘラクレスッ！」
令呪のブーストによる一撃は確かに凄まじい。だが、当たらなければ意味がない。当然これを避けたランサーはその隙だらけな脳天を穿とうと豪腕を奮い――。
「その瞬間を待ってました」
砂塵の中から現れるバゼットに一瞬、対応するのが遅れた。
（コイツ、まさか最初から狙って!?）
思えば、これ迄のバーサーカーの動きは単調にすぎた。如何に狂化をされたバーサーカーとは言え、相手はあの大英雄ヘラクレス。仮にもギリシャ最大の英雄が、ただ単調な動きしかしない愚図に成り下がるだろうか。
全ては、この瞬間の為の布石。狂戦士であるバーサーカーはその耐

久力を活かし、自らの命を費やしながらこの状況を作り上げていたのだ。小癪な真似を、苛立ちながらも槍を奮おうとするランサーだが。
「〝抉り斬る戦神の剣（フラガ・ラック）〟!!」
バゼットの放つ宝具が、ランサーの肩を鎧ごと貫いた。
それはケルト神話に於ける海神リールの息子であるマナナン＝マクリルより太陽神ルーに与えられし報復者の意味を持つフラガ＝マクレミッツに伝わる迎撃礼装の宝具。
本来なら相手の宝具に合わせてカウンターの意味合いを込めて放たれる宝具だが、現在ランサーは強化外骨格なる宝具による強化状態になっている。つまり、今のは現状一発だけならランサーよりも先んじて一撃を加える事が可能という裏技を用いての一撃だった。
小癪に次ぐ小癪、だがそれだけで吐き捨てる事はランサーには出来なかった。最初は派手な目眩まし、次は小手先な足止め。ならば次に待っているのは本命――もしくは、本命に繋げる一撃がくる。
そして、そのランサーの読みは見事に的中した。空を見れば片手に眩い光を放つ剣を持ったアーチャーが。当然、これに当たる訳にはいかないとランサーは避けに徹しようとする。
しかし、それは砂塵の向こうから現れる赤黒い光弾によって阻まれる。それは北欧に於ける簡素な呪い、ガントと呼ばれる魔術の一種。
何故？　と、疑問符が浮かぶよりその答えがランサーの目に飛び込んできた。距離からして百メートル以上、なのに其処にはしてやったりと生意気な笑みを浮かべる遠坂がそこにいた。
「見たか！　伊達にアーチャーのマスターはやっていないっての！」
確信めいた言い方だが、実際はまぐれも良いところである。ただ、バゼットの放つ宝具の光が見えたからそこに目掛けて撃ち込んだだけ、内心ではガクブルな遠坂だが、ここは敢えて強がって見せることにした。
ランサーにダメージはない。当然だ、サーヴァントであるランサーに一介の魔術師の魔術が通用する筈がない。何よりも遠坂の狙いはランサーの意識をアーチャーから一瞬でも反らす事にあったのだから。

「しまっ!?」
「〝永久に遥か(エクスカリバー)――〟」
「〝黄金の剣(イマージュ)〟!!」
それは、嘗て在りし日の少年がその光景に憧れて生み出したかの騎士王が所持していた聖剣。人と星の願いの元で生み出された最後にして最強の幻想、黄金に輝く一振りは確かにランサーの胴を切り裂いた。
手応えはあった。剣の複製も渾身の出来栄えでマスターの令呪のお陰で何とか完成できた。令呪によるリソースを殆ど聖剣の複製の完成に費やした為、霊基の崩壊は免れないがそれでも自分の成すべき事は成し遂げたと、アーチャーは安堵する。
だが――――。
「――――見事だ。貴様らの奮戦、奮闘。確かに受け取った。認め、前言を撤回してやる。お前達が最後の相手であった事を、俺は誇りに思う」
「しかし、それでも勝つのは……俺だ」
鎧を裂かれ、致命傷を受けても、ランサーは尚も健在だった。アーチャーの投影が不完全だったのではない、彼に繋げるまでの連携にミスがあったのではない。全てはアーチャーが片腕だったのと、ランサーの規格外な戦闘継続能力故の出来事だった。
ランサーの纏う鎧は使用者の耐久力と筋力を大幅に強化させる。これにより耐久面でも強靭となったランサーはアーチャーの片腕故の筋力不足という偶然のお陰で生き残る事が出来た。
とは言え、致命傷を受けたのは事実。これ以上の戦闘は無理だし、何より核となる霊基に亀裂が入った。長くは持たない、しかしこの場にいる全員を殺すだけの余力はまだ残されている。
最初は修司と戦えなかった事に憤るランサーだったが、結果を見れば存外満足出来る内容だった。ギリシャの大英雄に子孫の切り札、魔術師達の悪足掻きに偽物ではあるが騎士王の聖剣も目にすることが出来た。
充分だ。残された力を振り絞り、ランサーが最後の攻撃に転じよう

とした所で――――それは顕れた。
「――――〝主よ、この身を委ねます〟」
それは、祈りの光。聖女が手にしているのは生前一度も奮う事の無かった炎の聖剣。由来は嘗ての己の命を燃やした火炙りの炎を攻撃的に解釈した概念結晶武装。
身に纏う鎧も変わり、剣そのものと化したジャンヌは剣の刃を握り締め、柄に備わった蕾を開花させる。
「〝――――紅蓮の聖女（ラ・ピュセル）〟」
瞬間、全てを呑み込む炎が具現化される。まさか味方ごと焼き尽くすつもりか？　迫り来る炎という名の死を前に呑気にそんな事を考えていると――――ふと、己の周囲に誰もいないことに気付く。
見れば、イリヤの方にバゼットを抱えたバーサーカーがいるし、アーチャーもいつの間にか遠坂の隣に立っている。恐らくはバーサーカーの方はイリヤが何とか令呪で呼び戻したのだろう。あのホムンクルスは少々他とは異なる的なことをあの女から聞いた気がする。
アーチャーの方は――――何だ。ただ意地を張ってるだけか。変にカッコつける弓兵を見て何と無く呆れるランサーは……。
「ハッ、スッキリした顔しやがって。全く、面倒くせぇ野郎だぜ」
戦えるだけ戦った。過程を見れば色々歪んでいた聖杯戦争だが、ランサーは満足しながら炎の中へと消えていった。

――――あぁ、消えていく。私の全てが燃え尽きていく。
当然だ。あの宝具は自身を糧にする自爆同然の禁じ手、本来ならば大聖杯の破壊に使うべき代物をまさかこんな所で使うなんて……

思いもしなかった。
　でも、結果を見ればこれで良かったのだと思う。あのランサーは普通ではなかったし、仮にアーチャーが止めを刺したとしても聖杯がランサーの敗北を察し、より禍々しいモノを彼を媒体にして呼び寄せたかも知れない。
　それを防ぐにはランサーというサーヴァントを消滅させる他ない。そして、それを可能とするのは私の第二宝具以外に無かった。
　……彼には、白河修司には申し訳ない事をした。彼の手助けの為に取っておく切り札が、よもやこんな所で使うなんて、思いもしなかった。
　けれど、不安はない。きっと、あの穢れた大聖杯は彼が何とかしてくれる。無責任だし他人事だが、彼にはあの魔神がいるから、きっと何とかしてくれるだろうと――――そう、思えるから。
　だから、この結末を受け入れよう。悔やまれるのは全てを彼に押し付けてしまった事、それを謝ることも出来なかった事、それだけが悔やまれてしまう。
　その時、ふと視線を感じた。何かと思い視線の感じる方へ目を向ければ其処には彼の守護神である例の魔神が其処にいた。
　そして気付く、これまで何度も頭に浮かんだ疑問がこの瞬間一気に氷解していった。
（そうですか、私を喚んだのは聖杯ではなく――――貴方だったのですね）
　何故、ルーラーである自分が聖杯によって呼び出されたのか、自身の消滅を前にして初めて理解する。あの汚染された大聖杯では自分というルーラーを呼び出すのはほぼ不可能だと。実際、今大聖杯の前にはルーラーとは対を成す本来ならば有り得ざるクラス〝アヴェンジャー〟が顕現している。
　ならば何故、自分は召喚されているのか。答えは明白、自分は聖杯ではなく目の前の魔神によって召喚された存在なのだと。
（そうか。なら、本来ならば彼こそが私のマスターとなっていたのですね）

あの日、公園で出会えたのは運命だった。彼に刻まれる筈だった令呪は目の前の魔神によって弾かれ、その余分の魔力リソースが自分という存在をレティシアを通して現界させたのだ。

道理で、彼と行動を共にして心地よかった筈だった。彼が、彼こそが私のマスターだった。嬉しい、素直にそう思える程に私は彼に心を開いていた。

（ならばこそ、この終わりに後悔はありません。ありがとう修司君、貴方と共に戦えた事を――私は、決して忘れません）

座に還れば私はきっとこの記憶がなくなることでしょう。でも、きっと忘れません。例え仮初の命であったとしても、私はこの想いを忘れません。

だから、ありがとう。私のマスター。さようなら、私の――マスター。

胸中から溢れる感謝の気持ちを抱きながら、消滅する私に――。

『戯け。ノコノコ貴様だけを楽させるものかよ』

あの傲慢な英雄王の声が――聞こえた気がした。

その57　後編

――燃える。何もかもが燃えている。
人も建物も等しく燃え尽き、残されているのは怨嗟の声だけ。其処に慈悲は無く、救いもない。
――助けを求める声が聞こえた。
死にたくないと、助けてくれと、この子だけでも、誰でもいいから、救いを求める声を呪いの泥と炎が掻き消していく。
その中で、一人の少年が彷徨歩く。その顔を涙と鼻水でグシャグシャにして助けを求める声を手で耳を塞ぎ、聞こえないように歩いていた。
『ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……』
助ける声を耳にして、最初は助けようと藻掻いた。燃える電柱の下敷きになっている人を、瓦礫に、家屋に、押し潰されて動けない人達を少年は必死に助けようとした。
助けようと手を伸ばし……その悉くが零れ落ちていく。当然だ。当時はまだ幼い子供が人を助けるにはそうするだけの力が致命的に欠けている。誰かを助けるのに当時の少年では何もかもが足りていなかった。
他の誰かに助けを求めて動こうとしても炎と泥は容赦なく命を呑み込んだ。人も動物も、分け隔てなく蹂躙していく。
助けてと、誰かが呟いた。
助けてくれと、誰かが懇願した。
死にたくないと、誰かが命乞いをした。
その全てを炎が呑み込んでいく。
それは、隣に住む同い年の子だった。
それは、向かい側に住む気さくな親父さんだった。
それは――自分の両親だった。

『ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい――――』

悔恨は尽きず、呪いは疵となって刻まれる。あの時自分が生き残れたのは何故なのか、何が、この身を生かしたのか。

分からない。分からないことだらけで吐き気がする。ただ一つ、確かなのは――――。

〝どうして、お前は生きているの？〟

この身は、何処までも望まれていなかった。自分には出来ないと、無理だと諦め、助けを求める声を振り切り、ひたすら自分だけを守った。死にたくないから、まだ生きていたいから、だからごめんなさいと口にして必死に許されようとしていた。

あの黄金の王に見初められ、生きる許しを得られ、努力を重ねてきたのは……偏に、そうする事で生きても良いのだと無意識に許しを乞うていたのだ。

死んだ皆の分まで頑張れば、自分は許されるのだと。だから我武者羅に鍛えた。武術も料理も勉強も、全ては生きても良いと言う許しを得たいが為に――――。

だけど。

〝許さない。お前が生きている事が〟

〝許せない。お前が存在している事が〟

〝何故、お前は生きている。私達の犠牲の上で成り立っている貴様が、何故のうのうと生きている〟

〝お前の生存は許されない。お前の存在は許されない〟

――結局、白河修司の生存は誰も認めはしなかった。

――――本当に？

〝お前は生きてはいけない〟
――違う。
〝自分だけ助かるなんて、なんて非道だ〟
――違う。
〝お前は生きてはいけない。お前の生存は許されてはならない〟
――違う！
〝お前が――死ねば良かったんだ!!〟
断じて、違う!!
生存を、存在を、誰かの許しを必要とする。それ自体が間違いだ。第一、許しが必要だと宣うのなら、とうの昔に俺は得られている。
当時、家の中で火の手に囲まれていた自分を助けてくれたのは両親だ。炎に焼かれ、煤で汚れても、俺という人間を救ってくれたのは父と母だ。
酷い火傷を負い、煙も吸って倒壊した家屋に巻き込まれながらも、それでも二人は俺を助けてくれた。自分を見捨てても良かった筈だった。二人だけ逃げ出しても良かった筈だ。それでも父と母は、俺を救うために全てを差し出してくれた。
『生きてくれ。お前だけでも』
『生きて、貴方だけでも』
炎に包まれて、熱くて痛くて苦しいのに、二人は俺を生き延びさせようとして……笑って見送ってくれた。
生きてと、生き延びろと、父と母に命を託され、偉大な王に認められた。
両親の深い愛情が、王様と引き合わせてくれた。
――故に、この身には悔恨はない。あるのはただ命を救ってくれた人達への……感謝だけ。

――故に、俺のこの歩みに後悔はない。例え誰かに呪われていたとしても、俺のこの人生は、この歩みは……。
決して、間違いなんかでは無いのだから。

地獄に、光が溢れる。幼い子供は青年となり、地獄の亡者を睨み付ける。
『さっきから黙って聞いてりゃベラベラと。恨み節を聴かせたくなるのも分かるが、生きている人間を引きずり込もうとするのは感心しねぇな』
〝あぁ、生きている。まだ生きている〟
〝何でお前だけ生きている。俺だってまだ生きていたかったのに……〟
〝許せない許さない許し許し許し許し許しシシシシシイイイイッ!!!〟
『会話が成り立たねぇ。まぁ、ここがあの大聖杯の中なら、それも仕方のない話しか』
あのユスティーツアの操る影に貫かれて、この大聖杯の中に放り込まれて解った。この大聖杯には悪意しか入っていない。元は別の形……魔術師にとってはだろうが、この願望器はマトモな形をしていた。
間桐桜がおかしくなるわけだ。唯でさえ間桐臓硯の悪意に晒され、今度はこの大聖杯の悪意に呑まれてしまった。
絶対に助ける。そうする為にはここから脱出する必要がある。
『悪いな。魔術師さん、アンタらの夢は……俺が壊すよ。そもそも、その為に今日まで自分を鍛えて来たんだからな』
全身に力を込める。抱いたのは代わりのない決意と意志、思い出したのは嘗て描いた歪な願い。
〝お前だけは、絶対に許さねぇ！〟

それは、あの日地獄で王の前で誓ったモノ。自分の大事な物、その全てを奪ったモノへの復讐の誓い。それが原動力だった。

生への許し？　確かに一時期はそんな風に自分を追い詰めた事がある。自分だけが生き延びてしまった事に強迫観念の様な感情を抱いた事もある。

けれど、王は言ったのだ。それは違うと、それは命を賭して救ってくれた両親に対する最大の侮辱だと。黄金の王はそう言って本気で自分を叱り付けてくれた。

そう、父と母はそんな生き方をさせる為に俺を生かしたんじゃない。生きて生を謳歌して、自分らしく生きて欲しいが為に生かしたのだ。

――だから、決めた。自分の可能性を、生きていく意志と力を、死んだ両親に届くまであの黄金の王の下で示し続けるのだと。

それこそが、白河修司が選んだ生きる道――――即ち、王道なのだと。

その為には、この世界からの脱出を。全身に力を逆らせ、白い炎で周囲の火炎を瓦礫ごと吹き飛ばしていく。

だが、悪意の影が修司の行く手を阻んでいく。命を奪う為に、殺す為に、呪う為だけに力を奮う悪意達に修司は言い表せない苛立ちを感じた。目の前にいる影達からは悪意しか感じられない。まるで人間には悪意しかないと断言するような影達の物言いに修司はいい加減文句を言いたくなった。

人の根底にあるのは悪意しかないと、それしか無いと。

……ふざけるな。

人には悪意しかない？　人の根底にあるのは悪性だけ？　違う。人の中には悪意には決して負けない善性も存在するのだと、修司は断言する。

だって、この身は他ならぬ人の善性によって守られてきた。他ならぬ両親と王によって。

……悪意を抱えるのは人の性（サガ）、確かにそれは認めよう。人を愛すれば憎悪も増していき、人の成功に喜びもすれば妬む者もまた存在

する。
けれど、それだけじゃないのが人間だ。憎み、蔑み、嫌悪するのも人ならば、慈しみ、想い、愛するのもまた人間だ。どれか片方だけが人間と呼ぶのではない、清濁合わせて初めて人はヒトと呼べる知的生命体へと昇華されるのだ。
混沌こそが人の本性、推し量れず、未知数だから其処に人は可能性を見いだしていく。可能性こそが人の、命が抱く無限の力なのだ。
故に、目の前の悪意に修司が負ける道理はない。だからこそ、修司は可能性を示す必要があった。人は、命は、悪意だけに縛られる存在ではないのだと。
『お前達が人には悪性しか残されていないと宣うなら、俺が見せてやる。人は、命は、もっと凄くて大きいモノだと――』
嘗て、自分は何も出来ない無力な子供だった。泣いて喚いて苦しんで、空虚になるまで自身を憎むまで追い詰める時があった。――■黙の巨■、■し■の■■、■■の■蠍。
そんな自分に生きる道を示してくれた王がいた。嘆くのはいい、喚くのはいい。だが自身を偽り、地に沈むのは命を賭して助けてくれた両親の深い愛を裏切る行為だと。――■■の黒■、■■■■瓶。
王は言った。立ち上がれと、その足で前へと進み、己の可能性を示し続けろと。それこそが死んだ両親への最大の恩返しだと信じて。――■ち■がる射■、。
だから、修司は走り続けた。自分の可能性を示す為に、何よりも自分の為に、傷付きながらも貪欲に自身を鍛え、世界をこの目で見て回ってきた。――傷■■■の■■、■深■金■、■■■■■山羊。
故に、この戦いで修司は決めた。喩え好きな人に恨まれ、憎まれようと、彼女を助けると。――■れる■秤。
全ては、彼女の笑顔をもう一度みたいというエゴの為に。その笑顔が決して自分に向けられないと分かっていても。――■見る■魚。
矛盾とエゴの塊。それを自覚しながらも尚進む。それこそが、人が

人足り得る所以なのだから。――いがみ■■■■。
エゴと矛盾、それこそが人の本性。けれど、それでもいいのだ。可能性は混沌の中から生まれる。善も悪も、聖も邪も、根底として生まれるのは同じなのだから。
魔術なんて……神秘なんてものに縋らなくても、人は、命は、何処までも羽ばたいて往ける。
さぁ往こう。全ては可能性の先に待つ未来を掴み取る為に。
悪意も善意も越えて今、白河修司は限定的ではあるものの、命の可能性の極致――極みへと至る。

◇

「ふむ。余興ではあったが……些か以上に愉しめたぞ。お前の足掻く様は四肢を切り落とされた虫の様で、実に滑稽であった」
「――――」
円蔵山の内部、大空洞。未だ膨らみ続ける大聖杯を前に一人ユスティーツアを相手にしていた士郎は、無理矢理行使していた投影魔術に限界が訪れ、息も絶え絶えに地に膝を着いていた。
今、士郎が殺されていないのは偏にユスティーツアの戯れによるも

の。既に悪性に汚染された彼女に嘗ての内面的面影は微塵もなく、その力はただ悪戯に士郎を嬲る事だけに費やされていた。
士郎は戦った。修司が大聖杯の中へ落とされてもきっとまだ生きている事を信じて、自分に出来る最善を繰り返し行ってきた。繰り返される投影魔術、その都度襲われる激痛。
魔力回路は焼き切れる寸前で、度重なる魔力消費も重なり、握られた干将莫耶もその刀身部分は砕かれてしまっている。
限界だ。これ以上魔力を消費すれば、魔力が尽きるよりも早く回路が焼き切れる。元より、既に衛宮士郎には満足に動ける体力も残されていない。
「これ以上の余興は無用よ。先の男共々――――死に果てろ」
「ふざ……けるな」
「うん？」
「アイツが、修司が、死ぬものか。アイツは、凄い奴なんだ。誰よりも努力して、誰よりも戦って、誰よりも立ち上がって、誰よりも……桜の幸せを願っていた！」
「……」
「そんなアイツが、何一つ約束を守らないままで、終わるわけ、ないだろ！　舐めすぎなんだよお前らは、アイツを、白河修司って人間を!!」
全身を血で染め上げながらも尚、士郎は吠え続けた。自分の友達は死んでなんかいない、絶対に立ち上がり、再びお前の前に現れるのだと。
酷い妄言だ。根拠も何もないただの空想、魔術師でありながら現実を直視出来ていない士郎を最早価値の無いモノと断定し、彼に向けて無数の影の槍を飛ばす。
既に、衛宮士郎に頭上を覆う影の雨を防ぐ手立てはない。しかし、その目には依然として輝きを纏っていた。絶望の淵に立たされても決して諦めてなんかいない、人間染みた悪足掻きの光を。
瞬間、ユスティーツアの背後から光が溢れた。其所は自分の力の原動力である要、大聖杯が埋め込まれた場所。まさか、有り得ないと否定しながらも振り返る彼女が目には――――。

奴が立っていた。その身に先程の炎とは違う淡く輝く光を纏いながら、白河修司が立っていた。
「バカな……何故、生きている。たかが人間が、何故あの中で生きていられる？」
今の大聖杯の中身は〝この世、全ての悪〟によってその全てが汚染されている。魔術的防御手段もない只の人間が其処に落ちれば、発狂して死に果てるのが当然。
しかし、目の前の男は生きている。死に果てる処かユスティーツアですら理解し得ない光を纏って佇んでいる。一体奴は何をしたのか、それを問い詰めるよりも速く――――。
「っ!?」
「え？　あ、あれ？」
修司は士郎の側へ移動していた。その動きに反応出来ず、知覚する事すら出来なかった。攻撃手段である無数の影の槍はいつの間にか消え失せ、其処にはただ静寂だけが広がっていた。
「修司、お前、やっぱ生きてたのか。良かった。本当に……」
「遅くなって悪かった。お前にも大分迷惑を掛けた」
「迷惑な訳ないだろ。それに……はは、何か今のお前すげぇや。こんな近くにいるのに滅茶苦茶遠くに思える。この土壇場で覚醒とか、本当にヒーローみたいだな」
「――――少し休んでろ。後は、俺が何とかする」
そう言って修司は士郎の胸元に手を当てる。士郎の体の中で張り巡らせる器官、それが魔術回路だと認識した修司は其所へ向けて意識を集中させる。
瞬間、士郎は自身の体に変化を起きているのを感じた。酷使し、焼ききれる寸前だった魔力回路が生き返っていくのが分かる。体力そのものは回復していないが、それでも全身を蝕む痛みが全くと言って良いほどに快復した事に士郎は目を丸くさせる。
「これで、少し休めば体力の方も回復する筈だ。頼むぜ正義の味方、お前の出番はもう少し先だからよ」
「修司……」

大聖杯の中で何が起こったのか、明らかに以前とは異なる様子の修司。だが、士郎以上に戸惑い困惑しているのは他ならぬユスティーツアの方だった。
「……嘘だ。有り得ない。こんな事、有り得る訳がない。何故魔術回路を持たぬお前が〝ソコ〟へ往ける？　魔術も神秘も解さない一介の人間風情が、何故その領域に踏み入れられる？」
その声は何処までも震えていた。まるで今の修司が有り得ない存在だと言うように、ユスティーツアの声は何処までも驚愕と怯えで染まりきっていた。
「その境地は、一介の人間が辿り着けるモノではない。何だ、何なのだ貴様は!?」
「さてな。今の俺が何なのかは俺自身が知りたい所だが……今は、そんな事はどうでもいい。俺がやるべき事は何一つ変わらない。いい加減、桜ちゃんを返して貰うぞ」
それは、全ての魔術師が追い求めて焦がれるモノ。
〝根源〟
似て非なる力を発現させた修司にユスティーツアは発狂の雄叫びを上げる。
「それは、貴様ごときが触れていい力ではない！　返せ、その力、返せぇぇぇぇっ!!」
「別に、お前のモノじゃないだろ」
ユスティーツアの叫びに呼応して、影が無数に現れる。天井から、壁から、地面から、人の形をした無貌の影が獲物を補食しようと大空洞の全てから溢れ出る。
既に悪意の泥が円蔵山に浸透しつつある状況、僅かでも触れれば魂ごと汚染される強烈な悪性の塊達を前に――。
「フンッ」
修司はその腕を横に凪ぐ。それだけで影は形もなく霧散していき、その光景にユスティーツアは言葉を失う。
士郎もまた同様に目を大きく見開かせていた。今の修司は明らかに今までと異なっている。けれど、それは決して悪いことではなく、

士郎には友人のその姿が何故か凄くしっくり感じた。
「嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ――嘘だぁアアアッ!!」
認められない現実を押し潰そうと、ユスティーツアは叫び、再び影が形作る。それは、一つの波だった。大空洞の全てを覆い、埋め尽くすだけの影の波が修司達の頭上に生み出される。
今、修司達がいるのは出入り口を塞がれた閉鎖空間にいる。外界から隔離され、外との繋がりを立たれた現在の大空洞は言わば一つの固有結界。
「私の前から……消えろォォォッ!!」
降り注がれる泥、津波の如く降り注がれるソレを修司は避けもせず佇み――片手を翳した瞬間。
押し寄せる影の泥を一切の抵抗なく掻き消していく。その光景にユスティーツアの思考が停止する。有り得ない光景に遂に彼女の思考回路が停止したのだ。
そして、その瞬間を修司は見逃さない。思考を停止させて動かなくなったユスティーツアに修司はすかさず眼前まで移動する。その際の挙動や初動の気配を一切の感じ取れないまま、ユスティーツアは懐へ潜り込まれ……。
「桜ちゃんから――出ていけ」
眼前に翳した掌から、力を放つ。其処に物理的干渉はなかった。霊的力も、魔力の欠片も感じ取れなかった。――なのに。
(そんな、引き剥がされていく!? 魔術による契約を、魂レベルの融合を、何の抵抗もなく!?)
間桐桜の器から汚染されたユスティーツアが引き剥がされていく。そこに一切の制約はなく、ただ一方的に、無慈悲に、抵抗すら許さないまま。
それはユスティーツア、多くの魔術師によって定められた不条理が更なる理不尽によって覆される瞬間だった。ユスティーツアが桜から引き剥がされるのと同時に彼女との繋がりも断たれていく。
断末魔も上げられぬまま、ユスティーツアはその魂ごと大聖杯へと返される。一分にも満たない攻防、しかしその間に全ての決着は付い

た。
　大聖杯の呪いから解放され、臓硯によって施された蟲達もその全てが除去された。付けられた傷や失ったモノは帰ってこない、しかし修司の腕の中には確かに息づく桜の姿があった。
「修司！」
　修司の側へ士郎が駆け寄って来る。どうやら走り回れるだけの体力は回復したようだ。全快までとはいかなくともそれなりに元気になった友人に修司は安堵しながら振り返る。
「……やったんだな？」
「あぁ、この通り、桜ちゃんは無事だ」
　修司の腕の中で意識を失いながらも静かに息をする桜に士郎は安堵する。これで本来の最終目的も完遂された。ならば後は帰るだけなのだが。
『許さない。逃がさない。お前だけはここで死ぬべきだ。お前だけは私に殺されるべきなんだ』
　瞬間、地響きと共に大聖杯が肉の触腕を生やしてクレーターから浮上する。大聖杯の中身と思われる剥き出しの女神像、歪み吠えるその姿は先程まで桜に憑依していたユスティーツアの成れの果てに酷似していた。
「嘘だろ!?　あれだけの質量が浮かぶか普通!?」
　直径一キロにも及ぶ大空洞を埋め尽くす程に巨大な大聖杯、至る所から腐蝕し、汚染された液体を振り撒き此方に狙いを定めるそれに修司は一つの決断を下す。
「士郎、桜ちゃんを頼む。そして出来るだけ離れて屈んでくれ。運が良ければこれで全部が終わる」
「終わるって、何をするつもりなんだよ!?」
「説明は後、桜ちゃんを守ってくれよ。正義の味方」
「――――分かった」
　修司の抱く策にどれだけ自分が協力できるか分からない。渋々ながら了承した士郎は桜を抱え壁際まで退避していく。
　その間に大聖杯は更にその姿を膨らませ続けていた。そこに嘗て

の願望器の姿はない、それは何処までも凝縮した人の悪性。人に、命に対して何処までも負の面しか映さない呪いの虚像。
らしくもなく、憐れだと思ってしまった。本来ならばこの大聖杯もこの様な終わり方だって望んではいないだろうに。魔術師の手で生み出され、汚染され、そして望まれる事なく終わっていく。
その最期に同情もするが、此方も生きるために必死に戦っているのだ。人の歴史を終わらせない為にも、修司は全ての力を解放させる。
「――――漸く、俺の願いが果たせそうだ」
頭上に浮かぶ黒い孔がドンドン肥大化していく。それは、あの日の冬木の空に何処と無く似ていて、その光景を目の当たりにした修司は内心で感謝した。
ここまで自分を繋いでくれた全ての因果に。
白河修司が抱く願いは１０年前からずっと変わらない。嘗て自分の全てを奪ったモノを思い切りブッ飛ばすという願いを。
『シュウジィィィッ!!!!』
怨霊が、怨嗟の叫びと共に全てを吐き出してくる。それは、嘗て冬木を襲った呪いの泥、押し寄せてくる大海の如き呪いを修司は静かに見据え――――構えを取った。
「か……め……は……め――――」
嘗て、この冬木には多くの苦しみがあった。多くの嘆きが起きた。たった一つの願いを巡り、その所為で多くの命が散っていった。
悔しさがあり、憎しみもあった。けれど、それも今日で終わり。
悲しみも憎しみも、後悔も憎悪も、全て余さず消し飛ばす。万感の思いを込めて――――。
「波ァァァッ!!」
全てを振り絞る勢いで放たれた閃光は押し寄せる泥の波を吹き飛ばし、大聖杯へ雪崩れ込んでいく。
溢れ出る閃光は円蔵山を内側から蹂躙していく。崩れる瓦礫も、岩盤も、何もかも吹き飛ばし。
軈て円蔵山に建てられた柳洞寺はその山ごと吹き飛んでいき、嘗て五百年前に埋められた大聖杯は空の彼方へと消えていった。

その５８

薄暗かった大空洞に風が吹き抜け、頭上には満天の星空が瞬いている。その光景に目を奪われた士郎はこの光景を生み出した男に呆れの混じった笑みを浮かべる。

「は、はは……マジかよ」

先程まで自分達の前には絶望が広がっていた。膨張し、肥大化された悪意の結晶。それが溢れ出た時にこの冬木は……いや、世界中が１０年前の大災害を体験していた事だろう。

この地球という星に住まう生きとし生ける全ての命を殺し尽くすまで、あの泥は止まらない。実際士郎は死を覚悟したし、頭の中には桜だけでも守らなければという思考だけで埋め尽くされていた。

が、そんな思案も次の瞬間には消し飛んでいた。中学からの縁で友人関係を築いている陸上部のエース、白河修司。彼が放つ蒼白い閃光はあの穢れた大聖杯をその泥ごと吹き飛ばし、成層圏の彼方へと吹っ飛ばしてしまった。

最早、笑うことしか出来なかった。迫り来る不条理な絶望を希望という理不尽を以て凌駕する。悲劇しか無かった未来を一瞬にして喜劇へと変えてしまった友人に士郎は桜を抱え、笑顔を振り撒きながら歩み寄っていく。

――彼の側まで歩み寄る頃にはもう彼を包むあの輝きは消え失せていた。

「……やったな。修司」

「……へへ」

士郎の呼び掛けに振り向き、肩で息をしながらサムズアップをしてくる修司に士郎は肩を竦めた。

「はーっ、つっっっかれたぁぁ」

「はは、お疲れ様」

明らかに普通じゃない力を発現させたあげく、大聖杯を地球外へ吹

き飛ばしておきながら〝疲れた〟程度で済ませる修司に、士郎は呆れながらも労った。
身体中傷を付けながらも、五体満足で大聖杯の中から帰還し、元凶諸とも凶悪を屠ってみせた。桜を見殺しにする事なく、殺すこともなく、人質も無事に救出してみせた。この結果は士郎が予見してきた中でも最上位の結末。
それをもたらしたのは他でもない修司だ。きっと、自分ではどうにも出来ない場面はあった。諦めたり、仕方ないと言い訳して最上ではなく最善の結末を選んだ筈だ。
対して修司は決して妥協せず、どんな苦境や逆境を前にしても、折れずに最後まで足掻き、その果てに自らの意思と力でこの結果を勝ち取って見せた。そんな友人の無茶苦茶ながらも必死に、我武者羅に、自分の我を通すその在り方に士郎の内心は悔しさや羨望以上に嬉しさがあった。
「本当、大した奴だよ。お前は」
「あぁ？　何か言ったか？」
どうやら余程疲れているのか、両手を両膝に付けて肩で息をして聞こえていない様子の修司に士郎は何でもないと返す。
「さて、これで元は断たれた筈だ。あとは……」
「遠坂達の方だな」
元凶である大聖杯はもう此処にはない。そろそろその影響が出始める頃合いだろう。あの面々ならランサーも倒せた筈だろう、そう思いながら二人はこの場から立ち去ろうとするが……。
「……なんだ？」
ふと、遥か彼方から気配が膨れ上がるのを感じた。
「修司？　どうした？」
立ち止まり、振り返れば空を見上げている修司を訝しむ。何だと思い同じように空を見上げれば――――うっすらと空が黒く滲み出しているのが見えた。
嘘だ。頭に真っ先に浮かぶのは否定の言葉、だって大聖杯は確かに修司の手によって破壊された筈。桜を守るのに必死で直接目にした

訳ではないが、大聖杯が破壊されるだけのエネルギーが放たれた筈だ。
「まさかユスティーツアの奴、大聖杯の自爆をしようとしているのか？」
「なっ!?」
そんなバカな。あれだけの膨大なエネルギーの奔流を受けて、まだその機能を停止……いや、破壊されていないのか。予想以上の頑強さに修司も士郎も言葉を失っていた。
否、大聖杯は既に大部分が破壊されている。その機能は本来の三割にも稼働されてはいない、出来ても精々これ迄溜め込んでいたモノをぶち撒ける程度。
しかし、それで充分だった。大聖杯が悪意に染まったその日から貯めに溜めた悪意の炎。長い年月を掛けて霊脈から吸い上げた魔力は世界中を覆う迄に達している。
其処に最早意志はなく、あるのはただ悪意という名の怨念のみ。生者を憎み、命を妬む、人類を含めた総ての生命体に対する悪意。それが大聖杯に残されたモノだった。
止められる術はない。既に大聖杯は大気圏外を越え人の届かぬ場所へと上げられた。他ならぬ人の手によって……。
この状況を覆す事は不可能、最早地球の命はただその時を待つだけだ。この不条理を超えるのは不可能、この理不尽を凌駕する事は――――不可能なのだ。
地上からでも認識できる悪意の膨張、黒の夜空がよりどす黒く滲んでいく光景に士郎が地に膝を着けようとして――――。
「そっか、なら――――仕方ないか」
「修司？」
何処か、悟った様子の修司に士郎は隣の彼を見る。その顔に諦めは無かった。絶望も無く、ただ何処までも自然体な笑顔を浮かべて……何かを決めた顔をしていた。
「士郎、桜ちゃんを頼む」
「頼むって、お前はどうするんだよ？」

「決まってる。大聖杯を破壊する。ここまで来てあんなどんでん返しなんて……俺は、認めるつもりはねぇからよ」
そう言って修司は山吹色の胴着、その上着を脱いで裸の桜へと覆い被せる。男性ながらの大きさで士郎に抱き抱えられた桜を覆うには充分な大きさだった。
「悪いな桜ちゃん、こんな汚いヤツで」
「修司、お前……一体何をするつもりなんだ？」
大聖杯は空の彼方へと飛ばされ、そこは人の手には届かない場所でどんなに手を尽くしてもどうにもならない状況となっている。なのに修司のこの自信はなんだ？　どうしてこの状況でそこまで笑っていられる？
諦めたわけでも悟った訳でもない。ただ覚悟を決めた修司に士郎は何をするつもりかと問い詰めるが……その問いに答える事は無かった。
「士郎、何度も言うようだが桜ちゃんを頼む。彼女には……お前が必要だ」
「修司？」
「万人の為の正義の味方、か。それも格好いいけど、大切な一人の為に正義の味方を張るのも悪くは無いと思うぜ」
「……」
笑みを浮かべながらそう言う修司に士郎は何も言い返せなくなった。あぁそうか、目の前の男は今、この状況を覆す為に覚悟を決めたのだ。
自分達の頭上で膨れ上がる理不尽を、地球を死の星に変えてしまう不条理を、悪性の塊を消す為に修司は自ら更なる理不尽になることを決めたのだ。
衛宮士郎はそれ以上、何かを口にすること無く修司から離れていった。離れていく士郎を一瞥し、修司は再び空を見上げる。
「さて、そろそろ夜も明ける。最速で最短で、一直線に――――決めてやる」
ソレを喚べば、きっと自分はあの者に近い存在となるのだろう。夢で

見たあの怪物の様に……でも、不思議とそこに恐怖は無かった。
だって、自分はあの男とは違うから。どれだけ自分が奴に近付いても、根底にある想いは変えられないと確信しているから。
王様がいる。シドウリさんも、師父も、士郎も、慎二も、学校の皆も……だから、自分は大丈夫だ。
自分はアイツのようにはならない。それは強がりではない確かなもの、だからコレを喚ぶのに迷いは無い。全ては自分が失いたく無いものを護る為、それに仇なす輩を滅する為……。
「目覚めの時だ。来い――――ネオ・グランゾン!!」
白河修司はその名を叫ぶ。
瞬間、地の底が割れるように空間が裂けていく。修司の喚び掛けに応え、顕れるのは蒼き魔神。日輪を背負い、禍々しくも何処か神々しいソレは自分を見下ろしてくる。
その魔神を見て修司は正しく認識する。この魔神の乗り手は自分なのだと。
後ろを見れば言葉を失い口を大きく開かせた士郎が、離れた所で魔神を見上げていた。それを見て思わず吹き出してしまった修司はそれでも彼に聞こえる様に声を張る。
「んじゃ、行ってくる」
修司の言葉に我に返った士郎は何も言わずサムズアップで返してくる。それを見て修司もまた親指を立てると、魔神へと乗り込んだ。
自分を迎え入れる様に魔神の胸部の一部が開かれる。其処が自分の入る所なのだと察した修司は導かれるままに其処へと入る。
そこは、何処か見覚えのある光景だった。未来的で、革新的なコックピット。世界中何処を探してもこれ以上の代物はお目に掛かれないだろう。
戸惑いながらも修司は操縦桿らしきモノを握り締める。すると、頭に魔神を動かす術と技術が流れ込んでくるのを感じた。
圧倒的情報量、しかし不思議と嫌悪感や忌避感はなかった。あるのは既視感のみ、ここへ意識を持って来るのは初めての筈なのに、何処か修司には懐かしさを感じた。

同時に今まで何の反応もなかったコックピットに光が灯る。薄暗い空間に瞬く間に光が広がり、外の景色が全面に渡って映し出されている。
目の前で浮かび上がるコンソール、其処には幾つものシステムらしき文字の羅列が展開され、機械的に処理されていく。けれど何故だろう、今日が初対面の筈なのに修司にはこの文字の羅列が魔神からのメッセージの様に思えた。
〝お帰り〟そう言われた気がする修司はふっと笑みを溢し、操縦桿を握る手に力を込める。
さぁ往こう。降り注がれる理不尽を覆す為に、絶望を凌駕する為に。
「往くぞ、ネオ・グランゾン!!」
主の声に応えるように魔神の双眸は輝きを放つ。垂直に浮遊し、飛び立つ魔神を見て……。
「スゲー。スーパーロボットだ」
衛宮士郎はその光景を見て不謹慎ながらワクワクしていた。

◇

ソコは、誰も届かない場所。人類が地球に誕生して数千年、未だこの領域に辿り着いた者は数える程にしか存在しない。
星という最大級の生命体の外側の領域、宇宙。無限に広がる空間で最大限に膨れた悪意はその標的足る地球に向けて今その泥を溢れさせようとしていた。
大聖杯に意志は無く、あるのは何処までも深い悪意のみ。全ての命

は許さないと、染め上げられた悪性は叫ぶ。
滅ぼせ、殺せ、全ての命は死に絶えろ。慟哭の様に叫びながら広がる泥、最早止められる者はいない。
人類の歴史は今日終わる。そう確信していたのに――。
『悪いが、此処までだ』
割れた空間から顕れる日輪を背負う魔神に遮られる。蒼く巨大な機械の魔神、一切の予兆も前兆も無しに顕れた魔神。大聖杯に意思や自我と呼ばれるものは存在しないが、この魔神を前にしたとき何故か震えた気がした。
怨念達が騒ぎだす。止めろ、邪魔をするなと。地獄の蓋は開けられた。もう誰にも止められはしない。
足掻くのを止めろ。運命を受け入れろ。不条理に抗うな、理不尽に呑まれろ。そんな悪意に満ちた怨嗟の声を……。
『ふざけんなバカ野郎。誰がそんなものに従うかよ』
誰よりも理不尽、不条理を許さない男が両断する。その言葉に一切の慈悲はなく、そこにはただ怒りが満ちていた。
『さぁ、仕上げだネオ・グランゾン。出てきたばかりで悪いが……本気でやろう』
『相転移出力――最大限』
瞬間、魔神の全体にエネルギーが満ち溢れる。迸るエネルギーは日輪を更に輝かせ、甲高い金属音が宇宙空間であるにも関わらず響き渡る。
『縮退圧――増大』
無尽蔵に膨れ上がる力、それは既に大聖杯すらも凌駕し、空間を裂く程に増大していく。そこに抑止や星の意思が介在する余地はなく、それは遍く全ての事象が一体の魔神と一人の魔人に捩じ伏せられた瞬間でもあった。
割れる空間、広がる異空間。それに呑まれた大聖杯が次に座していたのは……地球ではない何処か。世界の外側の更に外、理の埒外の世界。
もう、怨嗟の声は聞こえない。悪意の言葉は囁かれない、どんなに

恨み節を語ろうともその結末は変わらないのだから。
『重力崩壊臨界点……突破』
体の内側から何かが崩れかける。溶けて、消えてしまいそうなソレを修司は精一杯繋ぎ止める。自分は消えない、自分は壊れない。この程度の負荷で白河修司は……偉大なる王の臣下は挫けない。
『お前の存在を、この宇宙から抹消してやろう』
そして、因子の侵食すらも耐えきった先にそれは顕現する。それは何処までも純粋な破壊の結晶。
『縮退砲――――発射ッ！』
落とされるのは破壊の落涙、溢れるのは創世の光。呑まれ、消え逝く果てに大聖杯が最後に聞いたのは……。
『いや、あんなの無理っしょ』
何処までも黒に染まる少年の白旗を挙げる声だった。

◇

――――水平線の向こうから太陽が覗いてくる。朝だ。魑魅魍魎の時間は終わり、人の世界、日常が戻ってくる。
けれど、人の世界が魔の侵食に怯える夜は……もう来ない。魔神――――グランゾンのコックピットで朝日に照らされる冬木の街を見下ろして修司は思う。
「父さん、母さん、フィーネ婆ちゃん……終わったよ」
嘗て、この地に災いが起きた。それは大勢の人の命を奪い、今日まで人の心を蝕み続けていた。
でも、それももう終わり。悔恨に満ちた日は終わり、これよりこの街は本当の意味で前に進める事ができる。父と母の無念を晴らし、祖

母との思い出を汚した元凶を破壊する事が出来た。
久し振りに晴れ晴れとした気分だ。そう思うのも束の間、修司の表情は引き攣るモノになる。
「さて、この騒ぎ……どうすっかなぁ～」
夜中に起きた円蔵山の消滅、そしてそこから出現する巨大ロボット。当然、コレを隠蔽する術など今の修司にある訳がなく。
有り体に言えば……冬木は大混乱に陥っていたのである。騒ぎ立てる街の住民、その多くが目を輝かせる若者ばかりで、お年寄りに至っては冬木の守り神が降臨されたと拝む始末。
警察もどんどん来てるし、何なら県外からも来てる。赤いサイレンに囲まれつつある状況に考えが纏まらなくなった修司は……。
「よし、逃げよう」
冷静に的確に、逃走の一手を選んだ。
後に、この騒動はとある魔女と黄金の王が総力を挙げて沈静化させるのだが、途中何度もその二人が喧嘩したというのは別のお話。
「あんなの、どう誤魔化せって言うのよ!?」
ちゃんちゃん。

その59

『――後悔はないか？』
無間の世界にてソレは問い掛ける。これから先、待ち受けるだろう未来の試練に挑む覚悟の是非を。
『無いさ。この選択に俺は絶対に後悔なんてしない』
そんな大いなる存在を前に、矮小なる人間は応える。無論と、即答で、躊躇いもなく。其処に一切の後悔はなく、その目は何処までも未来を移していた。
『お前はグランゾンを使うことを選んだ。遠い未来、お前は私と同様にこの果ての無い戦いに身を置く事になるのかもしれないんだぞ？』
『それでも、俺はこの選択に後悔はしない。だって、それはこれ迄俺を生かしてくれた全ての人達に対する冒涜だから』
大いなる存在の片割れ、それを使うということはいつか遠い未来に彼もまた選択の時が来るかもしれないという事。果てしなく続く戦いの輪廻の渦へ……。
しかし、それでも人間は笑って答える。その顔に一切の強がりはない。
『――そうか』
『それに、今はそうかもしれないけどこれからは違うかもしれないだろ。俺は最期まで足掻き続けるよ、アンタと同じく――さ』
『……ククク、成る程な』
『もう二度と逢うことはないだろうけど、別れの挨拶は言っておくよ。じゃあな、遥か未来の俺。お前の旅路を……祈ってるよ』
『あぁ、さようならだ。いつかあり得た嘗ての俺よ。お前の旅路に……幸があらんことを』
それが、二人の間に交わされた最後の言葉だった。無間の世界が晴れていく中で人間――修司が見たのは進化の皇帝と原初の魔神と共に消え行く……もう一人の自分の姿だった。

◇

大聖杯が破壊されて、早くも1ヶ月近い月日が流れた。人々の間に変わった様子もなく、冬木の街は現在変わらぬ日常を謳歌している。

人的被害も殆ど無く、過去の聖杯戦争の歴史から見ても最も被害の少なかった戦い。しかし、全くの影響がなかったという訳ではなく、一部の地域では今も復興作業が続いている。

その代表例が円蔵山に建てられた寺、柳洞寺もその一つで、聖杯戦争の余波で吹き飛んだ山と消し飛んだ寺院を建て直すために現在地元の住人たちと総出で復興作業に勤しんでいる。

表向きは円蔵山に溜まったガスが一気に爆発した事で寺院諸とも吹き飛んだとされている円蔵山、最初は復興作業による費用に寺院の僧侶達は辟易としていたが、とある大財閥からの莫大な援助によって賄われた事で資金面に何の苦もなく復興は進んでいる。

尤も、山が吹き飛んだ事で円蔵山は円蔵丘に改名、市役所での面倒な手続きが必要となったが、それは仕方ないと割りきるべきだろう。尚、柳洞寺の復興の際に穂群原高校の生徒（陸上部のエース）が柳洞寺の人間である生徒会長に意味もなく土下座をするという珍事件が発生したとか。

しかし、最大の要因はそこではない。今回の聖杯戦争で最も隠蔽工作に苦労したのは……とある魔神の出現だった。

魔神――――グランゾン。その威光と威容を惜し気もなく晒した事により冬木は……否、世界中で騒ぎになった。単身で成層圏で到

達した事で各国の人工衛星にバッチリ写り込んでしまっているし、その是非を問い質すため現在日本政府はあわや各国政府機関から調査と言う名の介入を許すことになった。
しかし、そうならなかったのは偏にある大財閥の企業と一人の大魔女の懸命なる隠蔽工作によって防がれた。その大財閥の名は通称U（ウ）・L（ル）・K（ク）、あらゆる分野において世界シェアの１０％近くを独占する世界的規模の大財閥である。
かの大財閥が有するサイバーチームによってグランゾンの証拠となるモノは全て削除され、魔神の姿は公に公表されてはいない。また、魔術方面からの介入はかの大魔女であり、元サーヴァントである彼女が必死に隠蔽工作に力を入れた為、魔術協会に今も介入を許さない状況を崩さないでいる。
そんな大財閥と一人の魔女の奮闘によって今日も平穏を守られた冬木市、その中で件の重要人物達は今日も今日とて学校の屋上で弁当にパクついていた。
「そっか、じゃあイリヤ達はお前の所で預かる事になったのか」
「まぁな」
誰もいない昼頃の屋上に胡坐を掻いて弁当を頬張る二人、彼等の視界には同じく何処までも続く青空が写し出されていた。
冬木で起きた聖杯戦争から1ヶ月、なぁなぁの流れでこれ迄修司が住まうマンションで生活していたイリヤとその従者達は、正式に大財閥U・L・K・の従業員の一人として雇われる形で保護される事になった。
ホムンクルス。人造の生命体として生まれ、聖杯戦争の為に調節されたイリヤ達。勝とうと負けようとその結末は変わらない彼女達の行く末を修司が反発し、王を説得する事で彼女達の存命を果たす事が出来た。
「確か……ドイツのアインツベルンだっけ？　今度の春休みに其処に行って色々やることがあるんだって、王様に言われてさ、視察という名目で俺も行くことになったんだ」
「しかし、よくあの王様が許す気になったな。やっぱ、お前って相当気

に入られてるんだな」
「どうかな。王様、最近忙しそうにしてたし『雑種ごときに何故我が心労を負わねばならん！』って言ってたから、暇潰し感覚なんじゃねぇの？」
　イリヤ達を引き取る際、どうせならアインツベルンの技術も吸収してやると自棄になった王がアインツベルンの本拠地を買収。当然それに抵抗する勢力もあったが、金の暴力で無理矢理に解決させてしまったらしい。本当、お金ってば色んな意味で偉大である。
　ホムンクルス達の延命処置、その為の技術を知るために駆り出される修司。後にこの出会いがイノベイドなる人類の支援者を生み出す事に繋がるとは――――この時、誰も知る由もなかった。
　――因みに、バゼット＝フラガ＝マクレミッツは柳洞寺の復興の為の一員として働いており、現在は藤村組にて厄介になっている模様。
「それに……さ、大丈夫なのか？」
「あ？　なにが？」
「ほら、お前の王様の事。知ったんだろ？　アイツが本物の英雄王、ギルガメッシュだって事に」
「あぁそれ、うん。知ったけど？」
　聖杯戦争から生還し、全てが終わった事を確認して家路に着いた修司は其処で待っていた英雄王に自身の正体を告げられた。自分は古代ウルクの王で、前回の聖杯戦争に参加していたサーヴァントだと。
　勿論これには当初、流石の修司も言葉を失った。自分を助け、生かしてくれた恩人がまさかのサーヴァントの一体であった事に。当然最初は驚いた修司だが、同時に何となく納得し、難なく受け入れる事が出来た。
「まぁ、聞けば１０年前の大災害に王様は何の関与も無かったみたいだしさ。俺を助けてくれたのも事実だし、別にいっかなって」
「それで、お前は納得してるのか？」
「納得も何も、実際救われているし、あの人が無茶振りをしてきたお陰で今日まで俺は生き抜いてこれた。闘うための手段を教えてくれた

のもあの人だし、恩を感じることはあっても恨むような事はないさ」
　実際、英雄王から自身の話を聞いても修司は特に思うことはなかった。ふーん、どうりで。と、修司が抱く感想はそれだけ、黄金の王と修司の関係に特に変化が起こることは無かった。
「寧ろ凄いことじゃね？　ゲームや漫画で知られる歴史的有名人の臣下とか、軽くお伽噺じゃん」
「ゲームや漫画って、お前なぁ……」
「それに、それはお前の方にも言えるんじゃねぇの？　セイバーさんの事、お前の中で区切りは付いたのか？」
「……」
　聖杯戦争の後、残った者もいれば消えていく者もいる。大聖杯という寄る辺を失い、現界する事の叶わなかった英霊達はほぼ例外無く現世から去った。
　ランサーやライダーは言わずもがな、セイバー、アーチャー、バーサーカーの三騎もまた英霊の座と呼ばれる所へと還っていった。救いがあったのは誰も悲しみの中で別れる事はなかったと言う所。
　アーチャーはこれからも頑張ると遠坂に告げて笑顔で消滅、バーサーカーも最期までイリヤを守れた事を何処か満足そうに、うっすらと笑みすら浮かべて消えていった。其処に何の禍根も無く、共に戦った戦友達への感謝の気持ちだけが残った。
　そんな中で唯一士郎だけはセイバーと満足に顔を合わせる事はなかった。慎二が言うにはセイバーは結局一緒に避難所へ向かう事無く、一人何処かへ消えてしまったと言う。別れの言葉すら話せずに決別してしまった事へ後悔は無いのかと問う修司に、士郎もまた笑みを浮かべて答えた。
「あぁ、アイツとは多分また逢えると思う。それまでに俺ももっともっと腕を上げなきゃいけないからな」
「投影魔術だっけ？　お前が扱う魔術って」
「あぁ、遠坂が言うには俺の魔術は刀剣の投影に特化したモノらしい」
　胸元に手を当ててそう答える士郎にこれ以上セイバーとの別れについて聞くことはなかった。士郎の気持ちに整理が付いているのな

らそれでいい、ただ今はそれ以上に気になるのは高校卒業後の進路についてだ。
「お前、高校を卒業したらどうするんだ？　もしかして例の魔術師達の総本山に行くつもりなのか？」
「遠坂はそうするみたいだけどな。ま、今は冬木の管理者（セカンドオーナー）として色々やることあるみたいだからそれ処じゃないみたいだけど」
　遠坂凛は現在、冬木の管理者として元円蔵山にある大空洞跡地にて霊脈の調査をしている。あれだけ派手に暴れているのだから、何か異常を起きているのかも知れないという老婆心から、中々冬木から離れる決心が出来ないでいるという。
「まぁ、まだ三年生になってないんだ。魔術を鍛えながら進路の事も少しずつ考えていくさ」
「……なんか、変わったな。お前」
「そうか？」
　普段の衛宮士郎なら正義の味方になる為に日々を誰かの為に生きようとしている。自分の事を棚に上げて、他人に手を差し伸べ続けるその在り方に以前なら危険に思えていたが、今の士郎にはそんな危険な感じはしなかった。
「なら、それは多分お前の影響だな」
「あ？」
「正義の味方は、一人じゃ成り立たないんだろ？」
　笑みを浮かべる士郎に修司もまた笑顔で応える。
「何かあったら頼らせてもらうぞ。修司」
「おお、最短で駆け付けてやるよ」
　空を仰ぎ見る二人の眼には何処までも蒼い空が浮かんでいた。

◇

――――その日の授業も終わり、部活も終えたし大人しく帰路につく。何時ものように走りはせず、たまには冬木の街を見てみたくなり、その足取りは緩やかだった。
商店街に活気づく人の営み、それが聖杯戦争によって壊されず、魔術師によって踏み躙られる事無く存続されられた事実に修司は内心で安堵する。この光景が失われなくて良かったと、変わらずに日常を謳歌する人々を見て何となく嬉しく思い、そして誇らしかった。
数少ない自慢が一つ増えた気がする。そんな風に思いながら商店街を抜け、深山町と新都を繋ぐ大橋に差し掛かると、歩道用の通路の所で一つの人影が修司を待ち構えていた。
人影の主は間桐桜、今回の聖杯戦争の最大の被害者で最大の加害者になりかけた少女が其処にいた。
「……今日は、いつもより少し遅かったんですね。白河先輩」
「ま、間桐さん？　ど、どうしてここに？　士郎の家はとっくに過ぎてる筈だけど？」
「今日は……その、兄さんの様子を見るために新都へ向かうつもりだったんです。ついでに白河先輩に聞きたい事がありましたから」
聖杯戦争の折り、修司の所為で家を失った間桐の兄妹はそれぞれ修司の所のマンションと衛宮邸にて保護されている。表向きはガス爆発で吹き飛んだとされる間桐邸、家主の間桐臓硯はその際に亡くなり、次の住み処の目処が立つまで仮住まいという事になっている。
間桐桜は衛宮邸の近くに藤村組がいるという安全面を考慮してそこに住まわせて貰っており、慎二は将来英雄王が経営する会社に就職するという事で現在はシドウリの下で部活後は色々扱かれている。
そんな普段は絶対にいない筈の彼女に慌てふためく修司を他所に桜はお構いなしに彼の隣まで歩み寄る。
「それで、いつまで此処にいるつもりですか？　早くしないと夜になっちゃいますよ」

「あ、うん。ごめん」
え？　一緒に帰るの？　桜に促されるまま再び歩き始める修司だが、其処からの会話は一切無かった。
気まずい。一言も喋らない桜は海の方ばかり見て此方を見ようとしない。車の行き交う音だけが耳に響く中、二人の歩みだけが進んでいく。
そろそろ橋の中心に差し掛かろうとしている。そろそろ此方から何か話すべきではないか、修司の思考が巡るのを他所に漸く桜が口を開いた。
「――どうして？」
「へ？」
「どうして、私を助けたんです？　死ぬ思いをしてまで、どうして私を……」
現在、間桐桜の体は恐ろしい速度で回復し、日常生活はおろか、大聖杯から完全に繋がりを断たれた上に、更に魔術行使に何の影響もない程に人としても魔術師としても完治している。魔術的にも医学的にも奇跡としか言い様のない事象に当然士郎達は大いに喜んだ。
桜もそれ自体は嬉しく思っている。間桐臓硯によって弄ばれたという事実は消えないが、それでも刻印蟲によって蝕まれた肉体を傷一つ無く癒してくれた件については桜も修司には感謝している。
しかし、だからこそ分からない。それだけの力を持ちながら何故自分を殺すという最善を選ばなかったのか。あのまま放置されていたらきっと自分は多くの犠牲者を出していた。きっと、そんな自分を許せずに悔恨に苛まされる日々を送っていた筈だ。
殺した方がより確実に聖杯戦争は終わらせられた筈、けれど目の前の男はそうはしなかった。桜を助けて大聖杯を破壊するという最善を越えた最上の結末を無理矢理に手に入れた。何故、彼を其処まで必死にさせたのか。今日までずっと考えていたが……結局桜はその答えに辿り着く事は出来なかった。
士郎や遠坂にも何度も訊ねた。どうして彼はそうまでして私を助けてくれたのか、そう聞くと決まって答えは一緒だった。

『それは、桜が直接聞けば分かる』と、それだけを口にして後はニヤニヤと笑うだけの二人に桜は諦め、遂に修司に直接聞く覚悟を決めた。
正直に言えば今も修司の事が苦手だ。嫌いという訳ではない、それは寧ろ修司の生い立ちを士郎から聞いたからその気持ちは限りなく薄くなっている。
白河修司は自分が思うような幸福な人間ではなかった。１０年前に冬木の大災害によって家族を失い、世の中のあらゆる理不尽に抗う為に必死に努力を重ねてきた事、その際に何度も死にそうな目に合ってきたことも……。
それを聞いてしまったら、もう間桐桜に修司を逆恨みすることなんて出来やしなかった。
桜が修司を苦手にしているのは偏に一方的な悪意をぶつけてしまった事への罪悪感によるもの、修司はそれを大聖杯と繋がってしまった事への弊害だと認識し、気にしていないと言うが、その優しい気持ちがより桜の良心を責め立てていた。
今日、修司の帰りを待つのに相当勇気を振り絞ってきた。だから何故修司があそこまでして自分を助けてくれたのか聞きたかったのだが、当の本人はどうしたものかと頭を掻いて悩んでいる様子だった。
「えっと、なんて言ったら良いのかな？　俺がそうしたかったから。というのじゃ……納得しないよね」
「当たり前です」
命の恩人に対する態度ではない。しかし、どういう訳かこの男は自分に対して低姿勢な節がある。どうして其処まで自分に気遣うのか、よく分からない桜に修司はポツリと語り始める。
「昔さ、俺、間桐さんに助けてもらったんだよね」
「……え？」
「１０年とちょっと前にお婆ちゃんが死んでさ、当時凄く慕っていた人が死んだことに気持ちが受け入れられなかった俺は少しヤサグレてて、ずっと公園で一人でいたんだ」
言われて、ふと桜の脳裏に遠い昔の記憶が甦る。その頃はまだ遠坂の姓を名乗ることを許され、姉と仲睦まじく過ごせていた桜にとって

最も古く優しい記憶。
その記憶の中で一人の少年がいた。今にも泣きそうな顔で公園の隅でブランコを漕いでいるその少年に、桜はどうしたのかと問うた。
返ってきたのは幼児が放つものとは思えない迫力と乱暴な言葉、怒鳴り散らされた訳でもないのにその迫力に負けた桜は最初は逃げるように彼の下から去っていった。
しかし、家に帰って桜が抱いたのはどうしてあの少年が彼処まで怖くなってしまったのかという疑問だった。何故あんなに怒っているのか、どうしてそんなに悲しいのか、泣きたいのを必死に堪えているのか。
気が付けば、桜は再び彼の前に立っていた。それから何度も話をする内に少しだけ彼の心を開かせた桜はその日、1日だけ彼と遊ぶことにした。名前も聞かず、ただ〝また明日〟と約束だけを交わして。
そして、その次の日に遠坂桜は間桐の家に養子に出される事になった。
「――――まさか、あの日の男の子って」
「あぁ、やっぱ忘れてた？　まぁ、随分昔の話だし、お互い小さかったから覚えていないのは無理もないよな。……でも、あの出会いのお陰で俺は立ち直れた。君が俺に手を差し伸べてくれたから、俺は救われたんだ」
「そんな、それだけの理由で？」
「はは、我ながら気持ち悪いよな。小さい頃の思い出をいつまでも引き摺ってさ。でも、それでも君が魔術師なんぞに囚われているのが……どうしても我慢できなかった」
そう自嘲の笑みを浮かべる修司だが、対する桜はそうはいかなかった。自分なんて当の昔に忘れてたのに、目の前の男はずっと覚えていた。大災害の後も、理不尽に屈しないために、運命に抗う為に、間桐桜を助ける為に、ずっと頑張ってきた。
この人に、自分は何を出来るのだろう。どんなに罵倒罵声を浴びせても気持ちを変えず、文字通り命を掛けてまで自分を助けてくれたこの人に、間桐桜は一体どうやって応えればいいのだろう。

いや、答なんてとっくに出ている。
「――――あの、白河先輩」
「ん？」
「本当に……ありがとうございます」
自分をあの家から解放してくれた事、魔術師の縛りから解き放ってくれた事、取り返しが付かない罪を犯す前に、自分を取り戻してくれた事。
それら全ての思いを込めて口にした感謝の言葉、涙を流し、それでも満面の笑みを浮かべる桜に修司も一瞬言葉を失うが。
「あぁ、どういたしまして」
その笑顔にこれ迄の全てが報われた気がした。これで、彼女も本当の意味で前を向いて歩いていける。そう確信できる程の美しい笑顔だった。
「そ、それで……なんですけど？」
「ん？」
「どうして先輩は……その、私との思い出をずっと、覚えてくれていたんですか？」
（んん？）
ふと、口元に手を当ててモジモジと此方を見上げてくる桜に修司は訝しんだ。日が沈む光の所為かその頬はうっすらと紅くなっているように見える。
その時、白河修司に電流が走る。
（ま、まままましゃか、これはもしかしての超ビッグチャンスなのではないのでは!?!?）
夕焼けの時間、辺りに人はおらず車の音も奇跡的に聞こえない。今この場にいるのは自分と桜のみ、もしかしなくても絶好の告白チャンスである。
（いや待て、それはダメだろう白河修司！　彼女は衛宮士郎にゾッコンの筈だ。そもそも彼女と士郎をくっ付ける為に彼女を士郎の家に住まわせる様にしたんだろうがぁぁぁっ!!）

衛宮士郎と間桐桜をくっ付けさせ、自分は渋くクールに去る。そんないぶし銀なキューピッドになるために修司は桜を衛宮邸に住むことに賛成したのだ。

ただ、最近の士郎は遠坂と一緒にいることが多い。本人は魔術の師匠だから仕方ないと言っていたが、果たして本当にそうだろうか？ 最近では桜だけでなく、妹が心配だからという理由で遠坂も入り浸っているようだし。

まさか、あのブラウニー野郎、桜ちゃんだけでなく遠坂まで手を出すつもりか!? そんな風に考えているとふと修司の脳裏にある選択肢が思い浮かぶ。ズバリ、告白するか否かを。

（い、いやダメだろ！ 俺はあくまで恋のキューピッド！ それをまるで横恋慕するような真似なんて、出来る訳が――）

《何を惑う必要があるぅ？ 貴様はこれ迄何度も生き死にを体験した？ 想い人の為に命を張ったのだぁ、なぁらぁば、多少良い思いをしてもいいだろぉぅぅ？》（ＣＶ若??風）

脳裏に浮かぶ悪い藤村（ジャガー）が悪魔のような提案を囁いてくる。何て蠱惑的で魅力的な話に修司の善良な心がへし折れそうになる。

《ダメよ、そんなその場の勢いで告白したら！ 長続きしないに決まってるわ！ 此処は手を繋ぐところから初めて、家に連れ込んでからニャンニャンすればいいじゃない！大丈夫、きっとイケるわ！》

（いやどこが大丈夫やねん！）

何と言う事だろう。善の藤村（ジャガー）だと思われたソイツは悪の藤村（ジャガー）よりも悍ましい何かだった。あ、今ルチャの達人っぽい女性に蹴り飛ばされた。

善も悪も碌な考えが浮かばない。どうしたものかと悩む修司だが、その一方で桜はずっと此方を見上げている。答を欲している彼女に修司もまた覚悟を決めた。

「――間桐桜さん」

「は、はい！」

そうだ。自分は常に自分のしたいことを貫いてここまで来た。苦しいこともあった、辛いことも、悲しいことも、その全てが自分の中

に経験として、糧として生きている。
ならば、この選択もきっとその後の自分の人生の一つの糧になる筈だ。例えその事に後悔があったとしても、自分はこの生き方を曲げはしない。
意を決して告白しよう。そう、言葉を紡ごうとして……。
「俺は、あの日からずっと、君の事が――――す「修司く～～ん!!」」
しかし、その声は別の第三者によって掻き消されてしまった。
何かと思い振り返ると、其処には現代の服に身を包んだジャンヌ＝ダルクが、実に良い笑顔でこちらに向かって走り寄ってくる。
あの日、聖杯戦争に決着が付いた時、全ての力を出し尽くしたジャンヌはそのまま英霊の座へ還ろうとしたのだが、その寸前で黄金の英雄王の手によってその霊基は回収され、王が持つ財宝の力によってメディア同様受肉を果たし、現世に留まる事になった。
レティシアから離れ、一つの生命体として生きることになったジャンヌ、現在彼女は修司の従者、或いは秘書としてイリヤ達と同様にマンションに住んでいる。
レティシアを依り代とせず、自力で顕現した彼女はルーラーとしての役割からも解放され、結構いい感じにはっちゃけている。より具体的に言えば、世俗（主に料理）に触れた事により感情の表現が豊かになっている。
折角の告白チャンスが潰された事に思うところがある修司だが、相手は聖杯戦争で組んだ頼れるパートナー、しかも王様が言うには本来ならば彼女は自分のサーヴァントだった可能性が高いという。共に死地を潜り抜けた相手である以上無碍には出来ないと諦めて彼女に向き直る。
「あぁ、そう言えば今日はジャンヌさんと買い物に行く約束をしてたっけ。て言うか、そんなに走ると転びますよー。まだ現代の履き物（ハイヒール）に慣れてないんだからー」
「もう、大丈夫ですよ。私、そんなにポンコツじゃ――――キャッ！」
言わんこっちゃない。躓き、転びそうになるジャンヌを修司は自身の体で彼女を抱き止める。その拍子に自身の胸板に伝わってくる柔

らかい感触に修司は一瞬目を見開いた。
（な、何という戦闘力――――ハッ！）
ふと、横からの冷たい眼差しに振り向くと其処には氷の微笑を浮かべた桜が。
「どうやらお邪魔してしまったようですね。それでは、白河先輩。また明日」
「え？　ちょ、間桐さん？　間桐さーん!?」
呼び止める修司を背に歩き始める桜、その顔に影は無く、年相応とした女の子の顔をしていた。
「また明日……か、未来が楽しみに思えるなんていつぶりだろう」
こんな日が訪れるとは思ってもいなかった。真っ暗闇な闇しかなかった自分の道が、今は目映く光って見える。今は、その光る未来に目が眩んで何も見えない。けれど、何時かその道を真っ直ぐ見つめられる事が出来たら、きっと自分の人生はもっと彩りを持つのだろう。
（ありがとう、修司先輩。いつか、あなたの隣に立てるよう頑張りますから）
一度だけ、間桐桜は振り返り。
「それまで、待ってて下さいね！」
その笑顔は、何処までも眩しかった。

◇

「全く、あやつ等はいつまで青春を謳歌しているのやら」
「良いではありませんか。今あの風景が見られるのは偏に修司様達の

奮闘の賜物、多少羽を伸ばすくらい大目に見るべきかと」
　冬木を一望できる標高、黄金の舟に座する王は呆れながらもその光景を見下ろしていた。隣に控える臣下の言葉に仕方ないと溢しながら、王は一冊の手帳を手に取る。
「そうさな。これより全人類に待ち受けるのは変革の脈動、奴等の準備が整い次第事は遂に動き出すからな」
「では王よ。遂にあの計画を？」
「うむ。修司がもたらした設計図のお陰で目処は立った。後はその準備と根回しだけだったが、此度の一件でそれも可能となった」
　修司が王に言われて夢の内容を綴った日記、それを実行するための資金と準備は得られ、遂に王はその計画の着手を宣言する。
「まずは軌道エレベーターの完成と外宇宙航行艦の製造、さぁ忙しくなるぞシドゥリ。人類の飛躍は此処から始まるのだ！」
「御意に。どこまでもお供致します」
　――後に、世界最大規模の大財閥U．L．K．はその凄まじい科学技術により人類の文明は数百年単位で縮まることになる。その裏には一冊の手帳が関係しているとか。
「ククク、多すぎると思っていた人類がよもや〝足りない〟とはな、つくづく我の予想を上回る小癪な奴よ」
　眼下では未だあわてふためく臣下の姿があった。そんな可能性に満ちた臣下を見て黄金の王はどこまでも愉快そうに笑い続けるのだった。

　王の手に握られた幾つもの書類、その中に一つだけ魔術に関係するものがあった。

〝白河修司へ人理継続保障機関フィニス・カルデアへの参加を要請する。〟

↑To Be Continued?

鬼滅の刃編
その1

――――その日は雪が降る寒い夜だった。心も体も凍ってしまいそうな冷たい夜、この日私は……怪物を見た。

鬼。それは私達鬼殺隊が命を賭して倒さねばならない化生達の名称で、私達姉妹から父と母を奪った化物達。

けれど、そんな鬼と姉である胡蝶カナエは分かり合えるのだと言った。鬼も元は人間、憐れな存在であれど此方が心を開けばきっと分かり合えると、私にだけそんな理想論を語った。

姉は、優しい人だ。両親を殺した鬼を許そうとしている。鬼を許すことで未来を生きようとしている……私には　、理解は出来ても到底納得出来ない生き方だった。

そんなある日、姉は鬼に襲われた。鬼殺隊の中でも最強とされる柱である姉、そんな姉が雪の中倒れていた。

まだ夜明け前の時間、暗闇の中で走る私が次に目にしたのは――――強大な力を持っていると思われる鬼が何者かの手によって頚を撥ね飛ばされる瞬間だった。

鬼の目には上弦弐と刻まれていた。

鼓動が速くなる。上弦の鬼が容易く屠られる場面もそうだが、格好からして目の前の人間――――人間？　はどう見ても鬼殺隊の人間ではない。白衣の様な外套を身に纏い、背丈は煉獄さんと同じか少し大きい程度だが、その体格は大きく男性のそれだ。一体どんな輩なのか気になる一方で私は倒れている姉に駆け寄った。

幸いな事に姉は気絶をしているだけだった。外傷こそ目立つが、呼吸も確りとしている。無事な姉と灰となって消えていく鬼に安堵するが白衣の輩の顔を見て私は再び凍り付いた。

その人物は仮面で素顔を隠していた。富岡さんが昔付けていたという厄除けの狐の仮面とは違う異質で何処かカラクリ染みた面、その

隙間から見える氷よりも冷たい眼に私が全身が硬直した。圧倒的威圧感、鬼とはまるで別次元の怪物に私は一瞬呼吸すら忘れてしまっていた。

が、それも束の間。私を見ると仮面の男は一瞬だけ目を点にして次の瞬間にはその冷たい雰囲気を一瞬にして暖かいものに変えていた。

「えっと……もしかして、そこの女性と関係のある方？　なら安心してくれ、彼女は無事だ。一時はさっきの奴に肺を凍らされてしまったが、それは此方の方で処置しといた。直に目も覚ます」

「え、あ……その……」

「あぁ、けれどこの寒空だ。雪も降っているし、このままでは君も彼女も風邪を引いてしまう。これを使うといい。擦れば次第に暖かくなる」

そう言いながら男から手渡された白い手のひらに収まるほどの小さな袋を幾つも渡されてきた。半分呆然としていた私は言われた通りに袋を擦ると、次第に熱を帯び始めた袋に目を丸くした。

「――あれ？　もしかして今ってカイロってまだない時代？　やっべ、やっちまったかな」

ボソボソと仮面の男は何かを呟いているが、今はそれよりも姉の方に集中したい。だが、今の私には懐疑の言葉よりも口にするべき台詞がある。状況的に見て姉は目の前の仮面の男に命を救われた。それも、上弦の鬼という強大な化物を相手に、戦いに守り、討ち果たしてくれた。

「あ、あの、姉を助けて――「貴様、そこで何をしている！」」

せめてお礼の一言でも口にしないとバチが当たる。そう思うも、横からやって来たこの町の警羅隊の人達によって阻まれてしまう。

「き、貴様、何故刀を持っている!?　廃刀令が敷かれて久しいこのご時世に！　しかもそこの女性、服が乱れているではないか!?　お、おのれぇぇ不埒な悪漢め！　許さんぞ！」

「え」

警羅隊の人に言われて良く見れば、仮面の男は見るからに怪しく、その手には姉が使用している日輪刀が握られている。夜明け前とは

いえ暗闇の時間帯、そんな中女性二人前に抜き身の刀を手にしている仮面の男は……悲しいほどに不審者そのものだった。
仮面の男の方も今の自分を客観的に理解出来たのか、自分の手元を見て固まってしまっている。
「ち、ちが……違うんですぅぅぅ！」
カシャンと日輪刀を落とした仮面の男は誤解だと叫びながら立ち去ってしまった。警羅隊の人達が次々と応援を呼んで後を追ったが、男は鬼殺隊の私から見ても異常な程に健脚で瞬く間に私達の視界から消えていった。
その後、保護された私達は無事に鬼殺隊の本拠地に戻る事になるのだが、その途中町の至る所に仮面の男の手配書が貼られているのを見て、私は少しばかりの後悔と複雑な気持ちを抱くことになった。
「ん？　どうしたのしのぶ？　私の顔に何か付いてる？」
「んーん、何でも。それよりも速くお館様にご報告しなくちゃね。上弦の鬼が倒された時の事、詳しくご説明しないと」
「そうね。仮面の人にも今度お礼言わなくちゃいけないし」
――姉は、昨日の事を覚えてはいなかった。上弦の鬼にやられて倒れた所までは辛うじて覚えているが、それ以降はあまりハッキリと覚えてはいないらしい。
微かに覚えているのは自分があの仮面の男に日輪刀を託した事、鬼を倒して欲しいと叫んだらしい事、それ以外は……本当に覚えていないらしい。
まぁ無理もない。上弦の鬼、それも弐という化物とやりあったのだ。幾ら柱の姉でも深傷を負っては意識を保っていられる余裕もなかったのだろう。
この後、私達はきっと柱合会議に召集されることになる。上弦の鬼の討伐、それが鬼殺隊とは関わりのない外部の人間によるものだと知られれば、きっと柱の皆も驚く事だろう。
一体、あの仮面の男は何者だったのか。分からないことは多々あるが。
「あ、ねぇねぇしのぶ。あの簪、私がしてるのと似てる！　カナヲへの

お土産に買っていきましょ！」
「もう、姉さんてば」
今は、変わることのない姉の笑顔を失わずに済んだことに安堵しておこう。

◇

×月○日
自分がこの世界に訪れて早数日。この頃の時代の生活にも慣れ、衣服も新調した自分は旅商人を自称し、各地を転々とする生活を続けている。
この世界に初めて訪れた時は真っ暗な夜で、しかも目の前に派手目な男が倒れている若い女性に襲っているからすわ性犯罪かと思わい、つい反射的に男を蹴飛ばしてしまった事が始まりだった。
男は当時蒼のカリスマスタイルだった自分の事を頭のおかしいキチ○イ呼びをしてきたり、変な扇を使って此方に攻撃を仕掛けてくる。明確な殺意を感じ取った自分はやむを得ず応戦するのだが、この男やたらと此方を煽ってくるのだ。
やれ人間の癖に馬鹿力だの、肺を凍らせるほどの冷気に晒されて何で生きているだの、挙句の果てには化物呼ばわり、これらをひきつった笑みで言うものだからまぁ本当に腹立つこと。
倒れている女の子に次元力を用いた治癒を施していたから大丈夫だけど、この時は雪が降っていたし、女の子は暫く動けそうにないから早いところこの男をどうにかしたかった。

でも幾ら退けと言っても男は聞かなかった。名前は……どう、どう、どうまんだっけ？　は、女の子を食べるまでは帰れないと抜かしやがる。

しかもこの男、どうやらこう言う事をするのは今回が初めてではないらしい。攻防の最中何人もの女子供を殺しては食ったと自慢気に語るどうまん（暫定）に俺もまたじわじわと殺意を抱き始めていた。

手っ取り早く消してもいいが、町中では流石に相棒を呼んだり出来ないし、かといって本気で技を繰り出す訳には行かない。いっそのことワームホールで遠い海にでも飛ばしてやろうかと思案したとき、後ろから意識を取り戻した女性から声と一本の刀を投げ掛けられた。

曰く、目の前の男は鬼でこれまで多くの人の命を奪ってきた悪鬼だと、その刀を使って頚を撥ねれば倒せるのだと、涙を流し、血反吐を吐きそうな勢いで自分に訴えてきた。

その後、力を使い果たし再び意識を失った女の子にどうまんは宣った。「待っててね、すぐに君を食べてあげるから」と、それを聞いて俺は確信した。あの女の子の叫びは全てが真実でこの男は彼女を殺そうとしている。

正直、俺は迷った。幾ら相手が異常性犯罪者とはいえ初対面の相手を殺しに掛かっていいものかと。自分は文字通りこの世界に来たばかりの新参者、無闇に力を振りかざす、無遠慮な真似は憚るべきなのだとも思った。

でも、あの可憐な女の子がこんな刀を握って戦っている。必死な様子で自分に訴えてきた。なら、自分がこの戦いに介入する理由は充分にある。

幸い刀剣の類いの扱いは慣れてはいなくとも心得てはいる。刀を両手に握って構える自分にどうまんは口許を歪めて挑発した。

確かに俺は防戦一方だった。どうまんが扱う氷の術を捌いてばかりで攻撃をしようとしなかった。それなのにいきなり刀を手にして構える自分が、奴には余程愉快に見えたのだろう。

故に、奴の頚を撥ねるのは簡単だった。奴が瞬きをした瞬間、自分は奴の懐に潜り込み刀を横に一閃に振るっただけ。それだけで全て

が終わった。
男は自分が斬られたことに気付いてもいなかったらしい。目を丸くし、言葉を失っている奴が徐々に灰になって消えていく様子を見ていると、ふと背後に気配を感じた。
振り返ると、そこにもう一人の女の子が先の女の子を抱えて呆然としていた。顔付きから倒れている方の子の肉親の様だ。多分……妹さんかな？　彼女にお姉さんの無事を伝えて偶然持っていたホッカイロを渡すとタイミング悪く（良く？）警察の人――――いや、警羅隊だっけ？――――の人達がやってきた。
彼等は自分を見るや否や犯罪者と断定、情け容赦なく追っかけてきた。いや、分かるよ？　夜更けに女の子二人を前に刀を手にした仮面の男とか、普通に考えれば一発で通報確実な案件である。誰がどう見てもギルティ、誰でもそうするし俺でもそうする。
故に自分は逃げた。それはもう形振り構わず。アレかな、どうまんという性犯罪者を倒した事で自分はそうなりたくないという強迫観念みたいなのに突き動かされたのかね？　正直言えば、逃げたのは不味かったかも知れない。素直に白状すれば、白い目で見られても罪には課せられないかも知れないし。
でも、今になってはそれも無理だろうなぁ。なんか蒼のカリスマの俺、結構世間では有名人らしいし。〝刀を振り回す仮面の変態〟それがこの世界での蒼のカリスマの認識である。
何故だろう。冬の青空が目に染みるや。

α月δ日
今日は、人の暖かさに触れました。
この世界の生活にも大分慣れてきた今日この頃、自分はこの日とある家族の方々に助けてもらいました。その人たちは炭を売って生計を成り立たせている人達で子供が多くいる大家族、中でも長男の竈門炭治郎君は凄い確りもので、父を早くに亡くしているのにも関わらず、健気に家族を守る優しい子供だ。
奥さんの竈門葵枝さんも、炭治郎君含めた六人の子供達を支えなが

ら懸命に子育てに励んでいる。そんな大家族と知り合えたのは自分が雪山で迷子になっていた所から始まる。
最近では変態仮面騒動も沈静化してきたものの、地方では未だ話題になることが多くあり、居心地の悪さからついつい人里から離れるようになってしまったのだ。
そんな自分が何処かの洞窟で大人しく過ごそうかと立ち寄った山に入ると、一人の少年と出会った。それが竈門炭治郎君だったのだ。
山道をさ迷う俺を何かと勘違いしたのか、必死に家に来てくださいと迫る炭治郎君、俺も最初は遠慮しようとしたのだけど、意外にもこの炭治郎君は頑固かつ強情な子で放っておけませんと半ば強引に彼の家へと招かれてしまった。
ご家族の皆さんにも最初は驚かれたが、炭治郎君が奥さんに何か耳打ちをすると、葵枝さんはハッと表情を強張らせ、次の瞬間には滅茶苦茶優しい笑顔を向けられた。
……なんだろう。凄い勘違いをされている気がする。
その後、葵枝さんの家事の手伝いや子供たちの相手をしている内に竈門家に受け入れられた自分は今日、この家の厄介になる事になった。流石に亡くなった旦那さんの部屋で眠るのは憚れたが……かといって子供たちと同じところで眠っては却って子供たちの迷惑になるし、何より禰豆子ちゃんという年頃の女の子もいる。
旦那さんのお布団に入る際は土下座をした自分です。いや、竈門家の人達、優し過ぎィッ!!

α月Ω日
今日はお世話になった竈門の人達に恩を返す為に炭治郎君の仕事を手伝うことになった。
炭治郎君のお仕事は炭売り。その始まりは木を切るところから始まる。最初は遠慮していた炭治郎君を大人の理屈で説き伏せ、山へと登った自分達は幾つかの木を切りそれらを炭に変えた。
その途中、木を手刀で切り倒していると炭治郎君から凄い顔で見られていた。まぁ、一般の人と比べて鍛えている自分としては出来て当

たり前だが、炭治郎君からすれば見慣れないモノの様だ。君も鍛えれば出来るようになるよと言うと、再び炭治郎君は驚きの顔をしてそれが少し面白かったのは内緒。

その後、炭治郎君は炭を売りに下の人里へと向かい自分は此方の方で待機、本当は自分も付いていきたかったけど、余所者の自分がいては却って仕事の邪魔をすると思い、遊んでと迫ってくる子供達の相手をしながら葵枝さんの手伝いをさせてもらっている。

そして現在、子供達を寝かし付けて炭治郎君の帰りを待っているのだけど……遅い。辺りはもう真っ暗だし、雪も降っている。葵枝さんは遅くなるときは近所の人に泊めてもらう様に言ってあるから大丈夫だと言っているが――心配だ。

葵枝さんの言葉を疑うつもりはないが、もう少し待ってみて来なかったら探しに行ってみようと思う。子供達もそろそろ寝付く頃合いだ。それを見計らって――。

◇

「おっ、帰ってきたかな?」

遠くから聞こえてきた雪を踏み締める足音に竈門家の長男が帰ってきたんだと思い込んだシュウジは徐に立ち上がる。

「あ、修司さん。私が出ますよ」

「いえいえ、ここは俺に任せて下さい。葵枝さんは明日も早いのですから、どうか休んでて下さい」

日々の家事、子供たちの面倒を見ている葵枝を労ろうとやんわりと断るシュウジはドンドン近くなる気配に合わせて玄関の扉を静かに開ける。

扉の先にいたのは炭治郎……ではなく、この時代では都心位にしか未だ馴染んでいない西洋の服を着た男性が立っていた。
帽子で顔は良く見えないが、端正な顔立ちの男。この季節にしてはやたらと薄着だなとシュウジが怪しんだ――――瞬間。
「邪魔だ」
振り抜いた男の裏拳がシュウジの顔面を捉えた。響き渡る轟音、爆発にも似た衝撃が竈門家の玄関を吹き飛ばす。
人一人を殺すには充分過ぎる一撃、余計な手間をと男が顔をしかめて。
「なんだお前、強盗か？」
「!?!?」
その表情を驚愕に染め上げる。
「こんな夜更けに騒ぎを起こすんじゃねぇよ」
「き、きさ――――」
「あっちいってろ」
何かを言い掛ける男を無視して、シュウジは蹴りで男を吹き飛ばした。

その2

「三郎爺さん、ありがとう。夕食(ゆうげ)と布団、いただいちゃって」
「気にするな。お前さんの事は葵枝からも宜しく言われておる。夜の山道を灯りもなく歩かせる訳にはいかんからな。それに……」
「夜は鬼が出る。だっけ？　なぁ爺さん、それは本当なのか？　本当に夜になると鬼は出てくるのか？」
　鬼。それは大正の時代において既にお伽噺とされる異形の存在、竈門家の長男である炭治郎もそういった化物がいると聞かされて育ってきた人間の一人だ。
　しかしそれはあくまでお伽噺の話。角の生えた鬼なんて存在は今日まで出会ったこともない、恐らくは幼子に危険を教える為の方便、夜は危険だとか、なにも知らない子供から危険を遠ざけるために大人達が考えた教育の一つなのだと、炭治郎は何となくだが理解していた。
　だが、目の前の老人が呼び止める時の迫力は鬼気迫るモノがあった。まるで本物の鬼を目にしたことがあるような説得力、多くは語らない老人だが、夜の山を登らせようとしない彼の言葉にはそれだけの気迫が込められていた。
　炭治郎は訊ねる。鬼は本当にいるのかと、しかし老人は語らずただ寝ろと就寝を促してくるだけ、辺りは既に暗闇に耽っている。家族の皆ももう床に就いている頃合いだ。
「家族が心配なのは分かるがな。炭治郎、ここを出るのは日が昇ってからにしろ。それにアレだ、家には最近入り浸っている若いのがいるんだろ？」
「修司さんのこと？」
「あぁソイツだ。その男はお前から見ても信頼出来る奴なんだろ？」
「うん」
「なら、安心して寝ろ。お前が信頼出来るというのなら、ソイツが家族

を守ってくれるだろうよ」
それだけ口にして老人は敷いた布団に入り眠りについた。隣で寝息をたて始める老人を尻目に炭治郎は家族の事、そして修司の事を思う。
炭治郎からみて白河修司という男は色んな意味で不思議な人物だった。最初はどんよりとした表情で辛そうな臭いをしていたから、てっきり山へ自殺をしに来た人かと思い呼び止めたのが出会いの瞬間だった。
素朴で謙虚で、義に厚い人。泊めてくれた恩だと手慣れた手付きで母の家事の手伝いや子供たちの面倒を見ている時は本当に頼もしく思った程だ。
炭焼きの仕事を手伝ってくれた時も普通なら斧で伐らなければならない木々を素手で切り倒した時は驚いた。固い木をまるで豆腐のように切り倒す修司に当初の炭治郎は目をこれでもかと丸くさせていた。
素朴で、謙虚で、優しい。白河修司から感じられる臭いに炭治郎はすっかり心を開いていた。それこそ、自分に兄がいたらこんな気持ちなのかと思ってしまう程に。
(でも……)
そんな炭治郎が修司を不思議に思うのは驚異的な身体能力ではなく、自分達家族を見ている時だった。炭治郎が弟妹達の面倒を見ながら母の手伝いをするとき、所謂家族の団欒の時だ。
あの時の修司からは普段は感じる事のない感情の臭いが感じ取れた。少しばかりの哀しみと大きな慈しみ、そこに混ざった小さな嫉妬、そして……憧憬。悪感情ではなく、寧ろ尊んですらいる修司の複雑に混じった感情に炭治郎は戸惑っていた。
だから仕事を手伝うと言ってくれた時、二人だけになった炭治郎はそれとなく訊ねた。修司の家族を、ここに来るまでに何があったのかを、それとなく訊ねてみた。
『――炭治郎君、君は家族は好きかい？』
『え？　あ、はい。それはもう』

炭治郎にとって家族は宝だ。手間の掛かる妹、言うことを聞かなくなってきた末っ子、生意気になってきた次男、母の手伝いや家の事など長男である炭治郎には何れも大変な仕事ではあったが、そんなモノなど一切苦にはならなかった。炭治郎にとって家族と共に生きられる事、それ自体が幸福であったからだ。

大好きな家族。いつか大人になってそれぞれの生きる道を見つけるまで、一緒に生きていたいと言うのが炭治郎の抱く幸福である。

『なら、その幸せを決して手放さないようにな。俺のように』

その一言にある程度察しの付いた炭治郎はすみませんと謝罪した。修司は気にするなと笑って流していたが、失礼なことを聞いてしまったとこの時の炭治郎は自分の浅慮さを呪った。

そして炭治郎は確信した。きっと、修司は辛い人生を送ってきたのだろう。家族を失うような出来事、だからあの時彼は山へと身を投げに来たのだ、と――

(明日、朝早く家に帰って改めて修司さんに謝ろう。そして彼の心の傷が癒えるまで家にいて貰おう。幸い、弟達は修司さんに懐いてる。母ちゃんもきっと反対はしない筈だ)

きっと、そうなったらいいな。そんな事を考えながら炭治郎もまた眠りにつくのだった。

◇

「し、修司さん！　今のは一体!?」

聞こえてきた轟音と同時に玄関が吹き飛んだ。有り得ざる光景に我が目を疑う葵枝は怯える子供達を落ち着かせながら玄関口に立つ

修司に今起きた出来事について訊ねた。
「どうやら強盗の類いの様です。追い払いはしましたが、多分まだ諦めてはいないでしょう」
「ご、強盗って、そんな、うちに取れるモノなんて何もないのに！」
愕然とする葵枝を尻目に修司は思案する。強盗という輩は何も金品を強奪する事に重きを置いている訳ではない。質の悪い者ならば文字通り命を盗る事だって厭わないだろう。今回の場合は恐らく後者、帽子の男の繰り出す拳には殺意があったし、何より自分の事を邪魔だと言った。
それはつまり、男の狙いは竈門家の皆の命という事。放っておくにはあまりにも危険な案件だ。蹴りで一度吹き飛ばしてはいるが、あくまでそれは相手に合わせて加減した蹴りだ。帽子の男は直に動ける程に回復するだろう。ならば動けるようになる前に捕らえ、警察に引き渡すのが今の自分がするべき事。
炭治郎がいない今、竈門家の皆を守るのは自分だと修司は気合いを入れて一歩足を進める――――が、それよりも先にやるべき事がある。
「葵枝さん、お子さん達を連れて家の奥へ避難してください。俺は外へいって様子を見てきますので」
「そ、そんな危険ですよ！　ここは一度皆と一緒に山を降りるべきでは!?」
勿論、それも考えた。子供達の事を考えたら山を降りて人里へ降りるのも選択の一つだし、自分達でなら一瞬でそこまで転移できる。
だけど、家に誰もいない事に逆上した強盗がこの家に火を付けるかもしれない。人里に向かった自分達を追って山を降り、道中出会った炭治郎へ八つ当たりに危害を加えるかもしれない。ともすると人里へ逃げたことで強盗が腹いせに町の人達を害するかもしれない。
顔を見たのは一瞬だが、あの男はそう言った形振り構わない危険さを持っている気がする。流石に偏見かもしれないが、それでも危険さを考慮すれば今から山を降りるには少しばかり抵抗がある。
それに何より、ここでなら――――周囲に人の目のない山中でなら相棒の力も存分に奮えるし、その力を竈門家の皆の為に使える。

山を降りる事へのデメリットを伝えると、葵枝は愕然としながら座り込む。そんな彼女に修司は笑みを浮かべて――――。
「大丈夫です。この家には……子供達と葵枝さんには絶対に近付けさせません。亡くなった旦那さんに誓って」
「し、修司さん……」
「禰豆子ちゃん、竹雄君、聞いてた通りだ。俺は少し外に出てくる。お母さんと一緒に家の奥で待っててくれ」
言われて葵枝が振り向くと物陰から様子を見に来たであろう子供達がいた。皆、何れも不安と恐怖に怯えた顔をしている。禰豆子は長女だけあって気丈に振る舞っているが、それでもその顔からは不安の色が滲み出てしまっている。
そんな子供達の下へ葵枝は駆け寄り抱き締める。震える子供達を抱き留めて、大丈夫だよと子供達と自分に向けた言葉を吐いて言い聞かせ、折れた心に喝を入れる。
「……修司さん」
「はい」
「厚かましいようですが、お願いします。そしてどうか……お気をつけて」
その間、子供達はなんとしても守って見せる。そんな強い決意の眼差しを受け止めた修司はニッコリと笑みを浮かべる。
「任せて下さい。日が昇る頃には終わらせますよ、皆も風邪を引かないように暖かい布団でくるまっててね。帰ったら家の修繕だ」
にこやかに、なんて事ないように口にする修司に子供たちの顔から少しばかり不安の色が薄くなる。それを確認すると、修司は改めて家の外へ踏み出し……。
「――――此処は任せたぞ」
誰にも聞こえない呟きを残して、雪山の中を翔んでいき、その背中を末っ子の六太は見えなくなるまで見つめていた。

◇

帽子の男を見付けたのは竈門家を後にして割りとすぐだった。竈門家から男との距離は数キロ単位で離れている。ここでなら多少暴れても大丈夫だと思った修司は未だ踞っている男の前へと降り立った。

「よぉ、意外と元気そうだな」

「っ！」

修司の声に反応して顔を上げる男、その表情はハッキリいって……なんか、色々と凄かった。涎はダラダラと垂らしているし、目はこれでもかと見開いて血走っていて、顔中に筋を浮かべ、ギリギリと軋りを上げて剥き出しにする歯は獣の様な鋭さを見せている。

端正な顔を怒りによってこれでもかと歪ませている。予想以上の激情を見せる男に修司は軽く引いた。

「よくも、よくも……」

「あ？」

「この私を、足蹴にしたなァッ!!」

激昂する男の腕が伸びたと思われた瞬間、周囲の木々は一瞬にして斬り倒された。広範囲に至る所の木々が倒され、雪山の大地に沈んでいく。

常人であれば横一閃に断たれる絶死の一撃、周囲の木々が男の癇癪によって全て斬り倒された事実、それでも男の怒りが収まることはない。男にとって修司という男は先の蹴られた瞬間に何にも勝る抹殺対象へ昇華されたからだ。

両断しただけでは許さない。四肢を切り、臓物を撒き散らし、首を地に叩き付けるまで男の怒りは収まる事はない。

しかし、不思議にも白に染められた雪の大地の何処にも赤い染みが出来ている様子はなかった。不思議に思った男が修司を探そうと一

瞬上を向いた瞬間。
「あらよっと」
その端正な顔に蹴りが打ち込まれた。吹き飛び、何度も地を跳ね、うつ伏せに倒れ込む。男の体はワナワナと震えていた。
「がぁっ!?　き、きさ、きさまぁ!!　この私に腹だけでなくか、顔にまで！」
「なんだ。蹴られるのは気に入らなかったか？」
貫かれた顔への衝撃に男の鼻から血が噴き出す。己の痴体とそれをしたシュウジに余程煮え繰り返ったのか、男の表情は更に怒りに歪められる。
「っ、鳴女ェッ!!　ありったけの鬼をここと先の家の所へ呼べ！　上弦、下弦の鬼含めてだ！」
瞬間、辺りに琵琶の音がなったかと思えば周囲には夥しい異形の怪物達が姿を表した。図体の大きいモノ、小柄なもの、目に下弦やら上弦といった文字が刻まれたもの、多種多様の様々な化け物が其所にいた。
「ほう？　転移が使える奴がいるのか。琵琶による……いや、一瞬襖の音も聞こえてきたな。成る程、そういう原理か」
自身の周囲を化物に囲われていながらシュウジは平静を崩さない。それどころか冷静に転移を起こした鳴女なる者の能力の分析をしている始末。
周囲には嘲笑の笑みが聞こえてくる。人間だ。男だ。餌だと、悪性の笑みが辺りに満ち渡る。
「この男を殺せ、家にいる人間を殺せ、さすれば私の血をくれてやる！」
「「オオオオォッ!!」」
雄叫びが雪の山へと木霊する。この声を聞いて今頃寝ているであろう炭治郎が起きないか心配だと、シュウジは検討違いな心配をする一方で。
「なんか視線を感じるな……カラス？」
ふと遠くから感じ取った動物の視線に気付いていた。

◇

「カァーッ！　カァーッ！　伝令！　伝令！　〇〇山ニ多数ノの鬼ヲ発見！　鬼殺隊ハ至急向カウベシ！　急ゲ！　急ゲ!!」

鎹烏の伝令の指示に従い、月明かりに照らされた道をひたすら走る青年。その腰には悪鬼滅殺の文字が彫られた一本の刀が添えられている。

青年――――冨岡義勇もまた鬼を倒すため鬼殺隊の一員である鬼狩りの一人だ。鎹烏の伝令を受けていの一番に駆け出した剣士の一人、指示された場所に最も近い位置にいるが、それでもここから現地に辿り着くには一定以上の時間を必要としてしまう。

（走れ、走れ！　冨岡義勇！　お前が遅れればそれだけ無関係の人間が死ぬんだぞ!!）

自分が遅く到着すればそれだけ被害は甚大なモノになる。どうして多くの鬼が一ヶ所で同時に現れるのか不安や疑問は尽きないが、今はそんな事は関係ない。

今は一刻も速く現地に辿り着かなければ。これ以上自分のような人間を、悲惨な末路を辿る人間を増やしたくはない。

（頼む。死なないでくれ！　誰も、死なないでくれ！）

悲痛な思いで道を行く冨岡義勇、しかし目的地は未だ遠い。

その3

――――この世には、鬼がいる。

闇夜に紛れ、人に仇なし、人を襲い人を食らう。古き時代から続く災いで、人を恐怖と悲しみの底、絶望の谷底へと突き落としていた。

そんな鬼達がある山に群れを成して現れる。普段は単独行動を常にしている鬼達が、たった一人の人間を喰い殺す為に首魁の男の一声によって召喚される。

鬼達は嗤う。餌だと、喰い応えのある人間だと、口を開き涎を垂れ流しながら、目の前の食事に品性の欠片も見せず嗤い出す。この男を喰い殺せば自分達の頭目であるあのお方の血を分けてもらえる。そうすれば自分は更に力を得られるようになり、鬼のトップである十二鬼月の座にも手が届くかもしれない。唯一懸念しなければならないのは、自分達が動く前に下弦、上弦の鬼が男を喰い殺さないかという点のみ。

食欲と野心に満ちた幾つもの相貌が男を捉えて離さない。既に男の末路は決まっている。鬼達の頭にあるのはいかにして他の鬼を出し抜いて男を喰い殺す事だけ、化け物達にとって既にそれが前提となっていた。

「ひゃぁ！　もう我慢出来ねぇ！」

と、そんなときだ。一匹の鬼が男の首筋めがけて飛び付いていった。しまったと周囲の鬼がざわつく。他の鬼が周囲の鬼に牽制の殺気を飛ばしている合間に、爬虫類の様な舌を伸ばした鬼が本能を抑えきれずに飛び出した。

鋭い鬼の牙が男の首筋に突き立てる。微動だにしない男に恐怖で動けないのだと確信した鬼はその顔を愉悦に染め上げて無遠慮にかぶり付く。

最初の一口が奪われた。これ以上先を越されてなるものかと、他の鬼達も一斉に駆け出していく。たった一人の人間に蟻のように群がる鬼達、これでは自分達の取り分は無いなと下弦の参と目に刻まれた

鬼が呆れのため息を吐いた――――瞬間。
「息がくさい」
鬼の顔面が弾け飛んだ。
「――――え？」
裏拳で、なんて事なしに、虫を振り払う勢いで奮われた拳は鬼の首から上を文字通り消し飛ばした。倒れ、雪の大地に血の池を作る鬼だったモノに周囲の鬼は停止する。
しかし、暫くすると鬼の首から肉が盛り上がり、何事もなかったかのように元に戻っていく。だが、鬼の方は何が起きたのかまるで理解出来ていない様で、ポカンとした表情で男を見上げている。
「ふむ。頭部を破壊しても再生するのか。人間ではないと思っていたが……まぁ、それならそれでやりようは幾らでもある」
男――――シュウジの首には鬼からの噛み付かれた箇所は依然として無傷のまま、喰い殺す処か薄皮一枚にも届いていない事実に鬼達の認識に衝撃が走る。初めて目の当たりにする現象に戸惑う鬼を構うことなくにシュウジは一つある提案をする。
「さて、お前らに一つ提案をしてやろう。二度と人を襲わないと誓うのならこの山から無事に逃がしてやる。それが出来ないのなら――――今日ここで塵にしてやる」
その目には一切の感情が消え失せていた。目の前の男の言葉には虚勢はなく、やると言えばやると言う凄みのような迫力に鬼達の表情が凍り付く。この人間はなんだ？　鬼殺隊の柱なのか？　これだけの鬼を前に怯える処か怯みもしない男に鬼達に動揺が広がっていく。
「何をしている」
だが、その鬼達の動揺を踏み砕くような冷たい声音が辺りに響いた。声のする方へ視線を向ければ、自分達を鬼にした御方が来れでもかと顔に筋を浮かべて怒りを顕にしていた。
「お前達は私に二度も同じことを言わせる程に愚鈍なのか？」
血のような赤い瞳を見開いて表情とは裏腹に静かにそう口にする御方に鬼達の表情は一気に青ざめる。もう自分達に選択権はない、この男を殺さなければ自分達が殺される。生殺与奪の権は自分の手元

にはない、その事を今更ながら思い知った鬼達は一心不乱に男に襲い掛かる。
　ある者は鼓を打ち、ある者は鞠を蹴り飛ばす。
　ある者は赤い血のような蜘蛛糸を飛ばし、ある者は爪を伸ばし切りかかる。
　全ての鬼が男を殺す為に雪崩れ込む。それらを静かに見据えた男はその目に呆れと憐れみの感情を浮かべ……。
「成る程、お前らの関係性は何となく理解した。例えるならブラック企業に勤める企業戦士、うん。なんか普通に悲しくなってきたな。――だが」
「俺に、何より竈門家の人達に危害を加えると言うのなら。このシュウジ＝シラカワ、容赦せん」
　僅かな悲しみと同情の念を抱くがそれはそれ、殺意を以て来るのなら容赦はしない。向かってくる鬼の群れを前にシュウジは静かに拳を握り締めた。

◇

　襲ってきた無数の攻撃、数多の殺意にまみれた鬼の攻撃をシュウジは表情一つ変えることなく回避する。時折妙な軌道をみせるが、基本的に一直線で単調な鞠を適当に蹴り返し、押し寄せる空気の刃を蝶の様に避け、手足に絡み付いた赤い蜘蛛糸を乱雑に振り払い両手の爪を伸ばして襲い来る鬼の凶手をその爪ごと拳で粉砕していく。
　前後左右と頭上を含めたありとあらゆる方向から絶え間なく押し寄せてくる殺意の波をシュウジは呼吸すら乱さずに対処する。時には蹴り飛ばし、時には殴り飛ばす。この度に鬼達は体の何れかを破壊されていくが、鬼の最大の特徴である再生の力は健在。徐々に元の体

へと戻っていく鬼達にそれでもシュウジは顔色一つ変えずに口を開く。
「やはり、この程度では死なんか。成る程、確かにこれは少々厄介だ」
「今更怖じ気付いた？　でももう遅いよ。お前はあの御方を怒らせた。楽に死ぬと思わない事だね」
「なに、別にそんなつもりはないさ。確かに再生能力自体は厄介だが、別に対処法が無いわけではない。ただ殴っても無理なら、此方も相応のやり方で相手をするだけさ」
　言外に、この程度は問題にならないと語るシュウジに下弦の伍と刻まれた少年ほどの十二鬼月は苛立ちを募らせる。自身の血鬼術を簡単に破って見せただけでなく、脅威とすらみられていない。下弦の鬼が、十二鬼月が、そのような無様を晒してはならない。
「血鬼術、刻糸輪転!!」
　憤りを隠せない少年の鬼が、両手を伸ばし必殺の技を繰り出す。地面から生える無数の赤い糸、それらがあや取りの様に絡み合い、シュウジを糸の篭へと封じ込める。
　糸の篭は回転し、勢いを殺さずにシュウジの体へ迫る。少年の鬼が繰り出す糸は鋼にも勝り、その糸でこれまで多くの鬼狩りの刀を折ってきた。刀すら断ち切る糸によってこれまで多くの人間を細切れにしてきた。これでこの男も終わる。あの御方から血を分けられるのは自分だと確信した瞬間。
「あやとりしたいなら余所でやれ」
　少年鬼の血鬼術は、何気ない腕の一振りで容易く破られてしまった。自身の最大の奥義が、自慢の糸が破られたことに驚愕した少年の鬼は動揺と焦りに呑まれ、一歩後退る。
（しっかし、コイツらまるで連携がなってないな。さっきの鼓打ちの奴なんて他の奴等を巻き込んでいたぞ）
　帽子の男に群れで呼び出されたというのに肝心の連携が何一つ取れていない。連中の誰もが我先に自分を殺そうと襲い掛かるだけで、それらを繋げて活かそうという考えがまるでない。
（あの帽子の男、まさか数さえ揃えばいいなんて安直な考えだったり

する？　……いや、まさかな）
シュウジが一人考えに浸っている中、鬼達は今起きた光景に言葉を失い、立ち尽くしていた。
下弦の鬼の血鬼術が破られた。その事実が鬼達の間に波紋が広がっていく、ただの人間が刀も持たずに身体能力だけで自分達を凌駕している。認めるには余りにも重い事実、周囲の鬼が動揺しざわめき始めたその時、群れの中から一体の赤毛の鬼が現れた。
前に出てきたその赤毛の鬼に周囲の鬼達は更にざわつく。幾本もの線が幾何学模様に刻まれたその男、鍛え抜かれた肉体、その目には上弦の弍と刻まれていて全身に満ちる闘気とは裏腹にその顔は満面の笑みを浮かべていた。
「俺の名前は猗窩座という。人間よ、お前の名前を聞かせてくれ」
「――――シュウジ」
「シュウジか、良い名だ。戦う前にお前に素晴らしい提案をしよう。鬼になれ、シュウジ！　お前ならきっと強い鬼になれる。鬼になって俺と共に武の頂を目指そう！」
「……はぁ？」
人懐っこい笑みを浮かべて、鬼になれと勧誘する猗窩座と名乗る鬼にシュウジは呆気に取られた。
（は？　鬼？　コイツら何かの突然変異で生まれた化け物じゃなかったの？　俺、てっきりインベーダーの親戚か何かかと思ってた）
思い返してみれば先の女の子を助けた時も鬼がどうたらって言っていた気がする。あの時は警羅隊の人に追い掛けられてそれどころじゃなかったから、その時の事をすっかりと忘れてしまっていた。
「見れば分かる。お前は強い、それこそ下弦の鬼などでは比べ物にならないほどに！　あの御方への非礼を詫び、態度を改めるなら俺も嘆願してやる。だからシュウジ、お前は鬼になれ！」
鬼という存在を今の今まで忘れていたシュウジは自分の失態が恥ずかしくて、猗窩座の話を殆ど聞いていなかった。何か必死に話しかけてくる赤毛の鬼、そう言えばコイツも鬼になれとか言ってきたなとシュウジは向き直る。

「鬼になれ……ねぇ。お前さ、なんで俺を鬼にしたいんだ？」
「聞いてなかったのか？　俺は至高の領域、武の頂きに挑みたいんだ。その為にはシュウジ、お前のちからも必要だ。お前と俺とならきっと其処へ辿り着ける！」
「ふーん、で？」
「あ？」
「至高の領域、武の頂き。そういう強さを得て、お前は一体何がしたいんだ？」
「――――」
鬼になれと勧誘してくる猗窩座にごく自然な疑問をぶつけてくるシュウジに猗窩座はなにも応える事が出来なかった。
何故、自分は強さを得ようとしている？　何のために強くなろうとしている？　武の頂き、そこへ行って自分は何になろうとして――――。
〝――――狛治さん〟
ふと、何処かで聞いた懐かしい声が聞こえた気がした。
「何をしている猗窩座、上弦の鬼がノコノコ前に出て一体何をしている？」
ふと、背後から帽子の男が酷く苛立った様子で猗窩座の名を呼ぶ。
「私はその男を殺せと言った。それが出来ないならお前が死ね。コイツを鬼にする？　ふざけるな。貴様を上弦の弍へ格上げさせたのはそんな戯れ言を吐かせる為ではないのだぞ？」
「……申し訳ありません」
「言い訳はいい。貴様等はこの鬼舞辻無惨の駒だ。駒にもなれぬ塵は死ね。私の言葉一つ守れぬ役立たずは必要ない」
横柄、傲慢、そんな言葉では収まらない理不尽の塊。この男は、鬼は、自分以外の鬼を……いや、全ての命を同じ生き物として見ていない。
「なぁ、そこのワカメ頭さんよ。部下に任せっきりでなにもしていない癖に、随分と上から目線なんだな？」
「……なに？」

「今俺はそこの猗窩座だっけ？　ソイツと話をしてるんだ。邪魔しないでくれる？」
「貴様、どこまで私を愚弄すれば――――」
「黙れと言ってるんだよ鬼舞辻無惨。お前の相手は後でしてやるから、大人しく其処で待ってろ」
どうやら、ワカメ頭の言動に自分も少し頭にキていたらしい。自分の為に懸命に戦っている部下を代えのきく消耗品としか考えていない奴に少々怒りを覚えた様だ。
自身の未熟さに内心恥じていると、鬼舞辻無惨と名乗る男はわなわなと震え……そして。
周囲にいた上弦と目に刻んだ鬼を除いた全ての鬼達の体から、突然巨大な手が生えてきた。口と腹のそれぞれから手が生え、鬼達の頭や体を潰していく。その凄惨な光景に流石のシュウジも息を呑んだ。
何をした？　驚き以上に疑問がシュウジの脳内を埋め尽くしていく。奴等は自分を殺す為に無惨が呼んだ兵隊だった筈、子供の鬼がいた。女性の鬼がいた。異形となった鬼もいた。それでも彼等は皆、男のために命懸けで戦った。
なのにどうしていきなりこんなことをするのか。頭部を潰され、再生する様子のない鬼達にシュウジは戸惑っていると。
「黒死牟、半天狗、玉壺、堕姫、猗窩座、二度は言わん。その男を殺せ、そしてその先にいる一家も殺せ。周辺に住む人間達を全て殺せ」
先程までの苛立った様子とはまるで違う落ち着いた様子の無惨にシュウジはまさかと目を見開いた。
（コイツ、まさか自分の苛立ちを解消したいから？　俺からの挑発を抑えるために、ただそれだけの為に部下を殺したのか!?）
これまで、シュウジは多くの相手と敵対し、その度に様々な悪意と対峙してきた。自分以外を信じていないもの、自分を除いた全ての存在は駒でしかないと言い張るもの、何れも吐き気を催す邪悪さであり、その邪悪さに見合ったおぞましさも目の当たりにしてきた。
だが、この鬼舞辻無惨という男はそんな邪悪な者達とは色んな意味で一線を画している。自分を殺す為に用意した兵隊達を自分の感情

を平静に保つ為だけに殺してしまっている。使い捨てるのではなく、ただの八つ当たりとして処理している。
命を道具以下としてしか見ていない。人々はコイツを鬼と呼ぶが、シュウジは最早鬼舞辻無惨を鬼とすら見ない。
琵琶の音が聞こえてくる。それと同時に現れる襖の扉、その奥へと消える鬼舞辻無惨。
もう、男が口を開くことはない。上弦の鬼とは勿論シュウジとも口を開くことはない。開かれた襖の先へと足を踏み入れる。これでもう奴も自分も追ってはこれない。後は奴が死ぬまでに逃げ続けるだけ。
「おい」
なのに、何故この男は私の目の前にいるのか。上弦の鬼達の前から消え失せ、いつの間にか自分の前へと現れたシュウジに無惨は一瞬目を疑い。
気付いた時には無惨の顔にはシュウジの拳が捩じ込まれていた。
再び鼻血を吹き出し倒れ付す無惨、主の酷い姿に全ての上弦が目を見開いているなか、シュウジは静かに口にする。
「おいクソ餓鬼、お遊戯は楽しいか？」
「あ、が、あぁ……」
「なぁ、教えてくれよ。一体何が面白いんだ？　命を弄んで、玩具にして、それで何が満たされる。自尊心か？　嗜虐心か？　なんの意味もなく命を奪って、一体お前は何がしたいんだ？　なぁ、答えろよ」
その口調は何処までも冷たかった。淡々と訪ねてくるその口振りに鬼舞辻無惨は必然にある剣士を思い出す。
『何故奪う？　何故命を踏みつけにする？』
『何が楽しい？　何が面白い？　命を、なんだと思っているんだ』
鬼舞辻無惨はこの日、最大の絶望を体験する。

その４　前編

――――某所。都心の喧騒から離れ、人気も少ない大きな武家屋敷。冬特有の夜の寒空の下で一人の男が月を見上げている。
「――――お館様、体が冷えてしまいます。どうか屋敷にお戻りを」
「子供達は今も外で戦っているのに、私だけ寝ているわけにはいかないよ」
　女性の屋敷に戻るように促される言葉に男はやんわりと断った。穏やかな口調だが、それ以上に男の口にする言葉の節々に強い意思が滲み出ている。女性はそんな彼に一度だけ目を伏せると、男へと近づき一枚の羽織を男に被せた。
「なら、せめてこれだけでも。子供達が帰って来たときに元気な姿で迎え入れて上げるのも、お館様のお仕事でございますので」
「あぁ、ありがとうあまね。いつもすまないね。私の我が儘に付き合わせて……」
「その我が儘を支えるのが、私の役目ですから」
　柔らかい笑顔でそう告げる妻の言葉に男もまたにっこりと笑みを浮かべる。……既に男には妻の顔を見るだけの視力はない、男の一族はある理由から病による短命を背負わされてきた呪われし者達の末裔。成人を越え、今年で２３歳を迎える男の未来は既に前を見据えるほどの時間は残されていなかった。
「義勇は、既に目的地へと向かったか」
「他の柱の皆様や鬼殺隊の子供達も現地へ向かっています。きっと、鬼達を討伐してくれます」
「――――あぁ、そうだね」
　今、とある街にはかなりの数の鬼達が姿を現しているという。中には下弦の鬼だけでなく奴の最大の戦力である上弦の鬼達の姿も確認されている。
　何故これ程の鬼が一つの場所に姿を見せるのか、長きに渡り鬼と

戦ってきた歴史ある一族、その長である自分ですら今回の事例は初めて体感する。報告にあった山で一体何が起きているのか、未知の出来事ばかりで予測は出来ないが、それでも男は一つの可能性を導きだしていた。
鬼舞辻無惨。一族の宿敵にしてこの国の鬼による被害の全ての元凶。鬼殺隊結成から永きに渡って探し求めていた仇があの山にいるかもしれない。
奴を討つのは自分を含めた鬼殺隊の隊員全ての願いである。だが、今奴を討つのは果たして得策なのか、山へ向かっている全ての隊士には鬼舞辻無惨もいる可能性を示唆しているが、それが事実である確信は未だない。
根拠はない。だが、妙な確信的心境が男にはあった。
「実はね。少し前に夢を見たんだ。この先の鬼殺隊の行く末を案じる様な夢を」
「夢……ですか？」
「うん。何処までも青空と地平線が続く世界、晴れ晴れとした世界でその中心で僕は一人佇んでいた。風が心地よく、たったままでも眠ってしまいそうな。そんな世界で、一つだけ不思議なモノが有ったんだ」
「不思議なモノ……ですか？」
「大きな、とても大きな黒い星。一瞬太陽かと思ったそれは、何処までも真っ黒な天体。そこで気付いたんだけど、その空に太陽が無くてさ、変わりにその黒い天体だけが青空に浮いていたんだ」
青空と聞いて最初は吉兆かと思ったが、黒い星と聞いてあまねと呼ばれる女性は途端にとんでもない凶兆なのではないかと息を呑む。何処までも続く青空が吉兆と言うのなら、黒い星というのは凶兆なのではないか。男の語る夢の内容にどう解釈したらいいか分からないでいるあまねだが、対する男はどこまでも穏やかだった。
「でもね。そんな大きな黒い星を前に不思議と不安はなかったんだ。寧ろ、逆に夢の中の僕はその黒い星に奇妙な安堵を抱いていた」
「そ、そうなのですか？」

「あぁ、それで今ふと思い出したのだけど、確か七福神に黒い星に似た大黒天様という神様がいたよね？　もしかしたら、今回見た夢は神仏からのお告げだったりして……」
「そうですね。そうだと、いいですね」
　どこか茶目っ気に語る男にあまねはフフフと笑みを溢す。そんな時、ブルリと体に悪寒が走る。どうやら、外でこうしていられるのも限界の様だ。
「お館様、そろそろ……」
「……あぁ、ありがとう。世話になるね」
　悔しい。どんなに決意や覚悟を固めても体は言うことを聞いてくれない。以前よりも弱くなった自分の体に男は己の脆弱さに内心で涙を流す。
　今、遠い山の地で凄惨な出来事が起きようとしている。それを止めようとする子供達に自分は何もしてやれない。後悔と無念に苛む男は、ふと先に見た夢の事を思い出す。
（大黒天。七福神の一柱に数えられ、仏教では財や戦の神として奉られている神）
　男は病弱な己の肉体に少しでも蓄えを入れようと過去に書物を読み耽っていた事がある。膨大な知識の海、底から掬い上げられるのは神話に出てくる一つの神の存在。
（確か、大黒天の由来となったモノはマハーカーラ。そして、その名の意味するところは――――）
　大いなる暗黒。
　何故だろう。所詮は夢の中の話だろうに、何故か男――――産屋敷輝哉は夢と切り捨てる事ができなかった。

◇

「どうした。答えられないのか？　自分（テメエ）の部下には好き放題命令できるのに、たかが人間には返事を返すことも出来ないのか？」
　しんしんと降り積もる雪の中で、シュウジの低い声だけが辺りに響いていく。鼻元を押さえて座りこんだまま、何も言い返すことが出来ていない鬼舞辻無惨は過去の出来事の記憶を想起させていた。
　それは、文字通り刻み込まれた記憶。あれから既に数百年の時が過ぎたと言うのに、無惨の頭からは全く色褪せる事のないトラウマ。目の前の男と記憶の男とは姿形が全く異なっているのに、どうして今になって再び思い出すのか。
（怯えているだと!?　この私が、鬼舞辻無惨が、こんな奴に!?）
　それは無惨にとって決して認めるわけにはいかない負の記憶。一方的に切り刻まれ、この体になってから初めて抱く死の恐怖。花札のような耳飾りを着けた剣士、後にも先にも無惨をして〝化け物〟と評する者。今目の前で自身を見下ろすコイツから、あの剣士と似た何かがあるというのか。
　あの日以来味わうことのなかった屈辱に満ちた感情。しかし、そんな激情とは裏腹に無惨の頭の中では如何にして目の前の男から逃げ出す算段が練られていた。
　このままでは再び自分は追い詰められる。ならばもう一度あの時の様に１０００を超える肉塊に変異して逃げ延びるまで、タイミングはどうする？　果たして自分は逃げられるのか、不安と恐怖で体が言うことを聞かなくなり始めた時。
「無惨様から、離れろォッ！」
　男の――――シュウジの死角から帯の様なモノが襲い掛かってきた。適当に手で振り払おうとするシュウジだが、帯から感じられる異様な力に瞬時に回避を選択し、胴体を反らしてこれを避ける。
「お兄ちゃん！」

だが、続けざまに別方向から放たれる血のような赤い斬撃にシュウジは今度こそ後ろへ飛んで無惨と距離を開けてしまう。
「無惨様、今です！」
「っ！」
己の配下である女の鬼――――堕姫に礼の一つも言わず、無惨は足元に出現させた襖へ落ちるように姿を消す。その様子にシュウジは小さく舌を打った。
（逃がしたか、まぁいい。奴の転移した座標（場所）は既に捉えている。転移した先の空間がこの時代にしては大きいのに少し驚いたが……それだけだ）
無惨の追跡を既に済ませているシュウジは辺りに此方を見据えている鬼達を一瞥する。全員、目には上弦やら陸、参など数字の文字が刻まれているから、恐らくは無惨が保有する精鋭部隊の様なものだろう。部下を、配下を、手下である他の鬼を己の癇癪で握り潰す。あんな餓鬼の様な奴にまだこれだけの鬼が指示に従おうとしている。その事実にシュウジは内心で憐れんだ。
「お前ら、本当に俺とやるつもりか？」
それはシュウジに出せる最大限の譲歩のつもりだった。あんな癇癪持ちの男の下で働き、生きるのは自分が思っている以上にシンドイ筈、目の前の鬼達も少なからず人を殺して来たのだろう。けれど、今のシュウジがそれを知ることはない。先の条件と同じ、二度と人に危害を加えずひっそりと生きていく事を選ぶのであれば、無闇に命を奪おうとは思わない。
鬼舞辻無惨を除いて。
だが、そんなシュウジの言葉に誰も靡こうとしない。鬼という人間の敵対者は最大の敵意と殺意を以てシュウジという人間と相対する。
「図に乗るなよ人間。たかが他の鬼と下弦の鬼を相手取った程度で付け上がるなよ」
「お前には、俺たちを舐めた付けを支払わせなきゃなぁ～！」
仕掛けたのは目に伍と陸の数字を刻んだ壺と男女の鬼、シュウジは何故男女二人の鬼が揃って目に同じ数字が刻まれているのかと不思

議に思い首を傾げた。
（もしかしてこっちの男女の方はそれぞれ同時に倒さないと倒せないとか、そう言う仕組み？）
「血鬼術・千本針　魚殺!!」
「血鬼術・飛び血鎌！」
「血鬼術・八重帯斬り!!」
　何処から取り出したか不明な壺から出てきた魚が吐き出す無数の針と、飛んでくる血の鎌、そして女から繰り出される無数の帯の刃がシュウジに向けて雪崩れ込む。いずれも殺意に満ちた凶撃、常人であれば死は免れないその攻撃にシュウジはまず迫る帯の刃を受け流した。
　周囲の木々を切り倒す鋭利な帯、その腹の部分を拳圧で反らし、帯の軌道を他の血鬼術で相殺される。女の鬼が扱う血鬼術は良くも悪くも幅が広い。その部分だけを上手く利用された事に気付けなかった堕姫と呼ばれる鬼は、何が起きたのか理解できずに混乱する。
「な、なんで!?　どうして私の血鬼術があんな風に……」
「堕姫殿！　何をされておりますか！　遊んでいる場合ではありませんぞ!?」
「ち、ちが、私は遊んでなんか……お兄ちゃん、違うからね！　私は遊んでなんか――――」
（嘘だろ。あの人間、小さく手を振るっただけで妹の技をねじ曲げやがった。しかもそれだけじゃねぇ、妹の帯の特徴を初見で見抜き、直接触れないように拳圧だけで！　さっきの無惨様を殴り付けた時も奴の動きが見えなかった。今俺の前にいるのは本当にただの人間かぁ!?）
　自分の技が邪魔されたと思う壺の鬼が堕姫に憤りを露にしているが、当然堕姫はそんな事はする筈がないと反論する。唯一堕姫から兄と呼ばれる片割れの上弦は今の流れの一部始終を理解できていたが、到底人間業とは思えない事をしれっとやり遂げるシュウジに人知れず戦慄していた。
　今、自分達が相手にしているのは並の人間ではない。少なくとも鬼

殺隊よりも余程不気味な輩だとシュウジの脅威を再認識した鬼、妓夫太郎は残り全ての上弦にも手を貸すよう指示を出す。
「玉壺、本気になれ。半天狗、テメェもだ！　今の動きで分かった。コイツは舐めて相手していい奴じゃねぇ！　無惨様のご命令通り、コイツはここで確実に殺さなきゃならねぇ！」
「なっ!?」
「ヒィィィィ!!」
「黒死牟！　猗窩座！　テメェ等もだ！　もう上弦の鬼の面子とか言ってる場合じゃねぇ！　全員で――――」
「悪いが、ワザワザ待ってやるつもりはない」
「「「!?!?」」」
妓夫太郎に一切の驕りはなかった。先に見たシュウジの身体能力、妹の血鬼術を反らした技、人間の枠組みから外れたその力に妓夫太郎はシュウジをただの餌とは見ていない。だからこそ滅多に顔を合わせない上弦にも協力することを要請した。いがみ合い、気に入らない相手だろうと今は手を組んで奴を殺すしかない。
妓夫太郎の判断は間違ってなかった。玉壺も半天狗もそれに従おうとしたし、上弦の壱と弍も応えようとした。
――――ただ、シュウジという人間の方が遥かに動きが速かった。
目を離してはいなかった。瞬きも、奴の動きの全てを見逃さないと終始睨んでいた。
それなのに、見えなかった。
気が付いたら、奴が自身の懐に潜り込まれていた。振り払わなければ、瞬時に判断した妓夫太郎が手にした血鎌で振り払おうとして――――。
無防備となった脇腹をシュウジの回し蹴りによって蹴り抜かれた。重い一撃、人間の膂力では到底出せない威力。妓夫太郎は口から赤黒い吐瀉物を吐きながら吹き飛び、背後にいた妹を巻き込んでその先にある岩壁に叩き付けられる。
意識が断絶し、視界が混濁する。鬼狩りの日輪刀によるモノではなく純粋な物理攻撃による一撃が上弦の鬼を動けなくする程のダメー

ジを負わせた。
（嘘、ダロォッ!?　今の一撃で、一撃だけで全身が内側から砕かれたァァッ!?）
　鬼特有の治癒力を以てしても瞬時に完治できないダメージ。されど自身は上弦の鬼、これまで屠ってきた人間の血が、柱を殺してきた実績が妓夫太郎の闘志を奮い立たせる。
（いや、まだだ。まだ戦える！　俺は上弦の鬼！　無惨様に認められた十二鬼月の一人！　ビビってんじゃねぇ。幾ら奴が強くても所詮は人間！　日輪刀も持っていない奴が俺達を殺せることなんて、できや――――）
　――――しかし、妓夫太郎の奮起はそれ以降続かなかった。体を回復させていた途中に降ってきた木の槍、後ろにいた妹ごと貫かれ、岩壁に貼り付けられた妓夫太郎は自身の動きが封じられた事に気づく。
「そこで少し大人しくしていろ」
　それは、無惨が最初に振るった腕の一振りで薙ぎ倒した木々の内の一本。何故たかが木が自分を妹ごと貫いているのか、岩を貫いているのか、鬼である自分の動きを封じているのか。
　分からない事だらけ、目の前にいる人間の能力なのか、それとも別の何かによる作用なのか、どれだけ思考を巡らせても妓夫太郎には理解することは出来なかった。
「さて、それじゃあ次は――――」
「隙だらけだわこの間抜けがぁぁぁっ!!」
　頭上から異形の怪物が押し寄せる。半魚人と蛇の怪物であるラミアが融合したかのような姿、上弦の伍とされる玉壺が己の血鬼術である壺を介しての転移能力を駆使して、両手を広げてシュウジに抱き付こうと迫ってくる。
　当然ながら、シュウジは気付いていた。流石に姿形が変わっていた事に驚きはしたが、この手の不意打ちを受けるのは一度や二度ではない。今更ながらの奇襲に機械的に対処しようとするが、それよりも前に黒い孔が両者の間に広がっていく。
「え」

「あ」
お互い間抜けの顔を晒すも、既に事は終わった後だった。玉壺は黒い孔に吸い込まれ、姿を消してしまった。
恐らく、今のは竈門家を守っている相棒の介入なのだろう。生身同士の戦いには滅多に横槍を入れてこなかった相棒、それは今の鬼の力が余程危険なのか、それとも時間を掛けすぎだと急かしてきたのか。恐らくは後者である。
「さて、いい加減夜明けも近い。ここから先は一気に終わらせて貰うぞ」
これ以上時間を掛ければ夜明けが来て人の活動する時間帯となってしまう。そうなってしまえば家に帰ってくる炭治郎と鉢合わせてしまい最悪巻き込んでしまう可能性があるし、何よりここにいる連中が無差別に人を襲いに行くかもしれない。
そうなる前に片付けなければ、速攻で動き出したシュウジが次に狙ったのは、やたらとビクビクしている老人の鬼。
「ヒィィィィッ!!」
矢鱈と怯えていて調子が狂いかけたが、それでもこの鬼からの血の臭いは凄まじい。炭治郎程ではないが、シュウジもまた五感の鋭い男、この鬼が殺してきた人間が一人や二人では済まない事など、既に見破っている。
「このォッ、極悪人がァァッ！　弱いものをいたぶるのがそんなに楽し――――ガァッ!?」
老人の体から生えるように現れた鬼を最後まで言わせることなく拳を捩じ込む。逃げようとする老人の鬼、上弦の肆の首根っこを捕まえ……。
「そんなに逃げたいのならつれていってやるよ。今の時代では誰も到達出来ていない場所へな」
シュウジはそのまま上弦の肆を遥か彼方へ遠投。地球の重力圏を超え、宇宙へ進出した半天狗はワームホールで先に来ていた玉壺と共に太陽に焼かれて二人仲良く消滅した。
だが、鬼が太陽に弱いことなど知らないシュウジは今ので鬼二人を

倒したなど露知らず、後で対処するように念頭に置いて上弦の弍である猗窩座へと向き直る。
「さて、宇宙(ソラ)へ飛ばした二人は後で何とかするとして――――猗窩座、だったか？　お前、本当にそれでいいのか」
「……どういう意味だ？」
「お前さ、他の鬼と比べて圧倒的に血の臭いが薄いんだよ。代わりに伝わってくるのは何処までも強くなろうと言う意志だけ、体を見りゃわかる。お前、凄く鍛えてるだろ」
「……」
「俺もさ、体を鍛えて拳で戦っているから何となく分かるんだ。猗窩座、お前にはもしかして守りたいものがあったんじゃないのか？」
「っ!?」
　シュウジから見て猗窩座という鬼は　実直な奴だった。言葉を交わした訳ではない、拳を交えた訳ではない。先に強くなる理由を訊ねた際に見せた表情、この時の猗窩座の顔は他の鬼よりも遥かに人間らしく見えた。
「別にさ、説得しようだなんて思っちゃいないさ。お前も、少ないとはいえ人を殺してきた鬼。人の事は言えないが、お互い引き返せる場所はもうない身だ」
「おれ……は……」
「でもさ、立ち止まるなら、終われるなら、自分で選べるうちにそうした方がいいんじゃないか？」
　シュウジは、何となく猗窩座を放っておけなかった。倒すにしても見逃すにしても、一つ言葉を交わしておかないといけない気がした。
　鍛え上げられた肉体。鬼であることに驕らず、ひたすら自己を鍛え続けてきた猗窩座、ひたむきさと実直さを併せ持つこの男がどうして人を脅かす鬼になってしまったのか。
『狛治さん！』
　ふと、猗窩座の耳に懐かしい声が聞こえた。泣き叫ぶ声、今まで何度も振り払い無視してきた声が……何故だろう。猗窩座には泣きたくなるほど尊いモノに聞こえてきた。

「……全く、イチイチ癪に障る事ばかり言いやがって、初対面だろ。お前は人で、俺は鬼だ。何故そこまで俺を気にかける」
「別に、ただ何となくだ」
適当な奴だ。目の前の人間を忌々しく思いながら、どこか感謝の気持ちを抱き始めた猗窩座は、笑みを浮かべて構えを取る。その笑顔は何処までも人らしかった。
「往くぞ。シュウジ、俺の奥義を以てお前を殺す。血鬼術、術式展開!!」
猗窩座の足元に陣が広がる。その形は雪の結晶の様に鮮やかで、目の当たりにしたシュウジは綺麗だと目を開いた。
猗窩座から強い意志と決意を感じる。初手から奥義を繰り出すつもりだ。鬼になり、永い時の中で積み上げてきたモノ、その全てを自分にぶつけようとしている。
「そうか。それがお前の選んだ道だというのなら、――――此方も見せねば、無作法というものだな」
瞬間、シュウジの内側から光が溢れる。それはシュウジが示す人の可能性、その極致。猗窩座が追い求める至高の領域と似て非なる極みの世界。
(嗚呼、凄いな。人は、命とは、此処まで練り上げられるものなのか。そんなところにまで至れるものなのか)
感嘆を抱く。しかし、それでも猗窩座は止まらない。鬼になろうとも自分は男、ましてや今までずっと見ていてくれた女に格好付けたいのは必然の事だから。
「破壊殺終式――――青銀乱残光」
「人越拳――――千手観音貫手」
光が、猗窩座を包み込む。眩しくて暖かい光。
(恋雪さん、待たせて……ごめんね)
『お帰りなさい。狛治さん』
最後の最後に、その男は自分が望むべきものを……思い出した。

その4　後編

――――上弦の弍、猗窩座との戦いは一瞬で幕を降ろした。刹那の交差、瞬きする間もなく繰り広げられた攻防は十二鬼月の中でも最強の部類に入る猗窩座の敗北という形で決着となった。

首を特殊な素材で加工された刀か太陽の光でしか倒せないとされる鬼、十二鬼月の上弦である猗窩座は他の鬼と比べて純粋な強さだけでなく、再生能力も桁違いに優れている。腕を失おうと、足を切り落とされようともそれこそ瞬きの間に再生される桁違いの再生力。

如何に男の技が凄まじくとも、蜂の巣にされたとしても、それで終わる猗窩座ではない。

……では、どうして猗窩座の肉体は崩壊していくのか？

日輪刀で首を斬られた訳でもない。太陽の光に晒された訳ではない。考えられるなら、先程まで男が纏っていた光が原因か。

光を纏う男はこれ迄の鬼狩りとは違っていた。存在感が希薄になり、動きも前よりも比較にならないほどに読めず、上弦の壱――――黒死牟が認識する頃には既に猗窩座の肉体は既に上半身が崩壊しきっていた。

男――――シュウジの体から光が消えていく。猗窩座の体が完全に消滅するまでその様子を見守っていたシュウジは消失した猗窩座を悼む様に目を瞑り、意識を切り替えて最後の上弦、黒死牟へ向き直る。

「さて、最後はアンタになった訳だが……どうする？　まだやるか？　俺はどちらでも構わないが」

無惨が襖の奥へ消えて既に数分。流石に此方の索敵範囲から逃れてはいないが、未だに逃走を続けている。血鬼術というシュウジにとって未知の術を使っている以上、いつまでも放置している訳にはいかない。

早いところ決着を着けなければ夜が開けてしまう。故に残りの鬼

との戦いも終わらせたいとシュウジは六つ目の鬼へ再三の逃亡の打診を促すが、鬼――――黒死牟はビキビキと青筋を立てて怒りを露にしている。
「……何故だ」
「あ？」
「……何故、お前のような男が生まれてくる。……何故、お前のような化け物が生まれてくる」
「……」
「……どうして、そこまでして……俺に見せ付ける。お前も、縁壱も、何故生まれてきた！　俺を……どうして、嘲笑ってそんなに楽しいか⁉　……俺を蔑んで、そんなに面白いか⁉」
どうやら、これ迄の自分の行いが黒死牟のトラウマになるような何かを踏み抜いたらしい。先に見た怒り心頭な無惨の形相とどっこいな黒死牟の顔にシュウジは内心で後退る。
上弦の鬼、それも猗窩座を退けて最強の鬼とさえ呼ばれている黒死牟の様相にシュウジは勿論、未だ磔にされたままの妓夫太郎と堕姫も驚きを隠せずにいる。
頭を押さえ、掻き毟る黒死牟。血を流しながらも驚異的な回復力で再生し、また血が出るまで掻き毟る。暫く続いたループ、その様は軽くホラー的だった。
すると、一頻りに発狂して落ち着いたのか、先程よりも理性のある口調で語りだした。
「……答えろ。男、どうしてお前はそこまでの力を手に入れた。どうしてそこまでの強さを得た。俺は……どうしたら其処までの領域に至れる？　答えろ」
それは縋るような必死さに満ちた言葉だった。
黒死牟は辿り着きたい場所がある。どれだけ鍛えても、どれだけ屍を重ねても、それでも尚届かない領域。神々に寵愛されたとしか思えない才を持つ弟を超えるため、時間すら忘れて剣に生きてきた。
その果てに今こうして弟とは異なっていながら凄まじい才と強さを兼ね備えた怪物が現れた。腸が煮えくり返る。恥と惨めさで死に

そうになる。それでも千載一遇の好機だと自分に言い聞かせ、最期であると自覚しながらも黒死牟はシュウジへと訊ねた。

どうしたら其所へ往ける。どうやったらそこへ辿り着ける。鬼になるのとは別の手段があるのか、例え今ここで殺されても来世では必ず活かして見せると誓いを立てた上で黒死牟はシュウジの答えを待つ。

シュウジの答えは一つしかなかった。これまで振り返ってきて得てきたもの、数え切れないほどの危機と強敵、そして今も心の底で支えとなっている嘗ての思い出。どうして自分がここまで来れたのか、どうやって此処までやってこれたのか、記憶の引き出しをほんの少しだけ開けて思い出に耽ってきたシュウジは口を開く。

「――努力、だな」

結局の所。シュウジが出せる答えはそれしかなかった。死ぬ思いをして、死にかけ、実際に死んだりして、それでも守りたいモノがあって、それが自身のエゴだと理解しつつそれでも進んできた自分の道。目的があり、使命があり、その為に必要な力を得る為に鍛練を重ねてきた。

今までも、これからも絶やさずに続ける鍛練。それを努力というのならシュウジに出せる答えはそれしかなかった。

果たして上弦の鬼はこの回答に納得してくれたか。妙にハラハラとした気持ちで黒死牟へ視線を向けると、黒死牟は顔を俯かせていて表情が見えない。

心なしかプルプルしている。もしかして自分の言葉に何かしら思うところがあったのか？　侍みたいな格好しているし、武士道な感慨に思いを馳せているのだろうか。

もしかしたら、本当に戦いを避けられる？　まさかの反応にシュウジが僅かに期待に胸を膨らませ――。

「……ふは、フハハハ、フハーッハッハッハッハ!!　――殺す」

「ヒェ」

六つの目から血の涙を流して斬りかかってくる黒死牟にシュウジは本日二度目の全力態勢（ボッチの極意）で迎え撃った。

戦いは猗窩座の時と同じ一瞬に終わったが、猗窩座の時とは違う意味で記憶に刻まれる一戦だった。

◇

「はぁ、はぁ、はぁ、くそ、クソクソクソクソォッ！　何なんだあの化け物は!?　何故あんな化け物が生まれてくる!?　あんなのと何故二度も相対せねばならない!?」

襖へ足を踏み入れた先、幾つもの回廊を越えた無限とも呼べる異空間。とある鬼の血鬼術によってここまで逃げ延びた無惨は額に滲み出る汗を拭いもせず、己に降り掛かった理不尽に憤る。

その後ろにはこの結界とも呼べる無限城を生み出した血鬼術の使い手、琵琶を手にした女の鬼が取り乱す主に何も言わず、静観のまま座している。

「――――上弦の鬼が消えた。玉壺も半天狗も猗窩座も……黒死牟も。生きているのは堕姫と妓夫太郎の二匹だけ。何故何の役にも立たずに死ぬのだ屑どもめ！　何の為に私の血を分けてやったと思っている!?」

怒りの矛先は理不尽（シュウジ）から上弦の鬼達に向けられる。何れも自分の手足となるために生み出してきた精鋭、下弦の鬼や他の鬼とは違い無惨が使えると判断してこれ迄重宝してきた下僕達。

そんな彼等の生命反応が軒並消えている。今は生きている妓夫太郎達も死ぬのはもう時間の問題だろう。これ迄何かと役に立ってきた鬼達が死んでいく。その事実に憤りを隠せない無惨が八つ当たりに周囲の襖や回廊を破壊して回ったとき。

「っ!?」

「はぁ、はぁ、――――鳴女？」

背後に控えていた鳴女という鬼の様子がおかしくなった事に気付

いた無惨、この女は余計な口数もなく、便利な血鬼術を持っているから側に置いていた無惨の数少ないお気に入りの鬼。
琵琶を持つ手を震わせる鳴女が何かに怯えた様子で震えている。どうしたと訊ねる無惨、主の言葉にすら応えず。
「バカ……な」
心底信じられないものを見た。そんな風に呟く鳴女に嫌な予感を覚えた無惨はふと感じた気配に振り返る。
「ほう？　ここが襖の先にあった空間か。中々洒落ているじゃないか」
其処にいたのは撒いた筈の怪物、紫色の髪をした男、シュウジが其処にいた。何故此処にいるのか、どうやって此処にいるのか、ここは鳴女という鬼の血鬼術でないとこれない異空間。人間である目の前の男が来れる道理はない筈。混乱する無惨、そんな彼を余所にシュウジはゆっくりと無惨へ向き直る。
「さて、ここなら誰も来ないだろうし、お互い逃げられなくなった訳だが。時間の余裕も出てきたし、ここらで一つ話を聞いておこうか」
「はなし、話だと!?　貴様の様な異常者にどうして言葉を交わす必要がある」
「いちいち鼻の付く言い方するなお前、まぁいいや。話というのは他でもない。どうしてお前、竈門家の人達を狙った？　彼処の人達に恨みでもあるのか、それとも……無差別に襲ったのか」
シュウジにとって竈門家の人達は一宿一飯以上の恩義があり、この世界にとって何よりも護りたいと思う人達だ。優しく、困っている人がいたら深く聞き入らずに必要なものを施してくれる。自分達だって裕福であるわけでもないのに、それでも誰かに優しく出来る竈門家の家族。
そんな彼等の暖かく泣きたくなる程に優しい人間性にシュウジは嘗ての家族を見た。自分を育てるために朝早くから夜遅くまでに懸命に働き続けた父と母、家で留守番していた自分を寂しくさせないように側にいてくれた祖母。
戦いが続いてきたシュウジの心の奥底にしまっていた大切な思い

出、それを久し振りに思い出させてくれた竈門家の人達にシュウジは深く感謝していた。
そんな竈門家の人々を目の前の男は狙った。悪意にまみれ、殺意に溢れた凶刃であの人達の命を奪おうとしていた。許せるモノではない、なんだったら今ここで相棒と共に肉片一つ残さずに消したっていい。
自身がそうしないのは竈門家の皆から優しさの本質を思い出させてもらったから。
優しさとは許す事、人を憎むだけじゃなく、許して慈しむ事。久しく忘れていた人間らしい感情、優しい竈門家の人達に自分も見習おうというシュウジなりの敬意だった。
話していて分かったことは目の前の無惨という男は、驕りと自尊心の塊でその上自分を絶対の存在として確立させる典型的な支配者気取りの小悪党だ。
改心させる事は難しい。しかし、それでも竈門家の人達のような慈愛の心で接すれば、奴の性根も変わるかもしれない。そうすれば、見逃すという選択も自分という監視つきではあるものの、ありなのかもしれない。
改心し、人に仇なすのを止めてひっそりと静かに生きていく。それならばこの戦いももう終わってもいいのかもしれない。
我ながら傲慢だ。今自分のしていることが優しさではなく、妥協や譲渡の類いの打算的な提案なのは否定できないし、反論することもできない。
でも、可能性を見たのだ。目の前の存在が性根から腐っているものではなく、鬼となり永く生きた弊害なのだとすれば、多少なり更正できる余地がある。
これ以上の戦いをしないで済む。そんな、シュウジなりの気持ちを――。
「そんなもの、決まっている。〝生きる〟為だ！　人間が食物を食べて生き長らえる様に、私もまた人間を補食するだけ、そこに何故善悪の是非を問う!?」

「――――」
「その為に増やしたくもない同胞を増やし、私の目的の為に働かせた！　それの何が悪い!?　何の責がある!?」
「それは、あの家にいる子供達の前でも言えるのか？」
「当たり前だ！　私は千年の時を生きる限り無く完璧に近い存在！　その私の役に立てるのだ。感涙に咽び泣くのが当然だろう!!」
鬼舞辻無惨はその真意を計ることなく吐き捨てる。予想していた中でも最悪の形で、無惨は差し出された手を振り払い、踏みにじった。
シュウジは理解した。目の前の男はどんなに言葉を尽くしても理解できない存在だと言うことを。
コイツは人を理解しない。人の気持ちを、人の想いを、この男は全て自分の都合のいいように曲解して破壊する。邪悪を超えて醜悪、シュウジはもうコイツに情けを掛けようとは思わない。
「そうか。それがお前の本音か鬼舞辻無惨。あぁ、なら安心した」
「なに？」
「やはりブチのめすのなら、お前のような奴がいい。俺もゴチャゴチャ言い訳を考えるのは止めた。お前は今日、ここで死ね」
シュウジがそう言いきるのと、回廊の一部が押し潰して来たのはほぼ一緒だった。無限城という異空間を操る鳴女、彼女の血鬼術を駆使してシュウジを殺そうと琵琶を鳴らす。
倒壊する建物、そこから湧き出る鬼達。彼等は無惨の血によって生み出された知性無き怪異達、鬼にもなれず、ただ餌に食らい付くだけの無限城に配置された防衛機構。
それらがシュウジに向かって一直線に群がっていく。それは鳴女の援護、主と仰ぐ無惨の行動を援護する彼女なりの支え、鳴女自身この程度でシュウジの足止めを出来るとは思っていない。そして、彼女の予想は的中した。
群がる怪異達が爆ぜる。その中心に立つ男は未だ怪我一つ付いてはいない。化け物め、内心で吐き捨てる鳴女と無惨が次に目にしたのは……。
「猛羅――――総拳突き」

無限城を埋め尽くすかと思われる拳の流星群だった。
無限と称される空間が破壊されていく。自我のない鬼のなり損ないはミンチよりも細かく細切れにされ、命だったモノ達が駆逐されていく。
そしてその拳の流星群は鳴女をも粉砕していく。避ける余裕なんてなかった。血鬼術も使う間もなく砕かれた鳴女は他の怪異達と同様に細かい肉片となり、何もない無限城の下へと墜ちていく。
残されたのは己のみ、逃げる為の最有力である鳴女が再起不能にされた事にいよいよ逃げ場を失った無惨、そんな彼の前にシュウジが静かに降り立ってくる。
「これで当分あの女が術を使うことはないだろう。これで漸くサシで戦れるな」
無惨に向けるシュウジの視線は何処までも冷ややかで、自身を完璧な存在と豪語する無惨にとって、その視線はなによりも侮辱的に見えた。
鳴女の再生が終わるまで無惨に逃げ場はない。無限城という避難場所が一気に逃げ場のない鳥籠へと変貌した。
どうしてこうなった。私が一体何をしたと言うのだ。自身のこれ迄の行いを全く悪びれない無惨は自身に振り掛ける理不尽にただ憤りを募らせていただけ。
「どうした？　ここまでお膳立てしたのに、まだ戦う気がないか？　ええ？　自称完璧な存在さんよ。たかだか千年ポッチで支配者を気取るには、色々足りてないよな。本当」
「き、貴様!!」
シュウジの分かりやすい挑発に乗り、無惨の姿が変異する。伸ばした両腕から幾つもの刃を、胴体から数本の鞭を生やし、四肢には鋭い牙と口を構成させていく。無惨にとって最大の戦闘形態、おぞましくも恐ろしい姿となる無惨にシュウジはそれでも態度を崩さない。
「貴様は殺す！　私が殺す！　命乞いをしたところで、楽に死ねると思うなァァッ!!」
「上等」

倒壊する無限城、この中で無数の斬撃がシュウジを襲った。

◇

もうじき、夜が明ける。長い道のりを走り続けて漸く目的地に近付いた男、冨岡義勇は独自の呼吸法で体力を回復させ、人気のない町中を一人駆けて行く。

町の中は何の異変も無かった。近くの山には無数の鬼が犇めき合っている筈なのに、近隣の人里には嘘みたいに穏やかな時間が流れている。

鬼は己の食欲と本能のままに動くもの、目に写る人間を餌としか見ず、襲い喰らう化け物達。そんな奴等がすぐそこに群を成して山にいるというのに訪れた町並みは全く変わった様子がなかった。争った後は勿論血の痕すらない。それが余計に不安を煽られた義勇は鎹烏の導きに従い山道を掛けていく。

もうすぐ目的地に着く。そこで待つ嘗てない戦いを前に覚悟を決めた義勇は刀を抜いてその地へ降り立つ。

さぁ、鬼はどこだ。一匹残らず切り捨てるつもりで前を見据える彼が見たのは……。

「さぁ、鬼舞辻某。大人しく自分の運命を受け入れるがいい」

「クソォ、クソクソクソクソクソクソォォォォォッ!!」

見えないなにかに押し潰されている異形の怪物と、近くにある切り株の上で悪い笑みを浮かべて見下ろす男がいた。

もうじき夜が明ける。鬼の活動時間が迫る中で冨岡義勇の思考は停止した。

その5

冨岡義勇が目的地の山へ訪れる数分前、無限城の奥深く。崩れる回廊が瓦礫となって降り注ぐ中、凶器となった無惨の腕がシュウジに向けて奮われる。

降り注ぐ瓦礫が横に両断される。壁となった視界の先が斜めに開かれるが、其所にシュウジの姿はない。

（まただ！　奴め、どんな術で姿を消した!?）

姿の見えないシュウジを探すが、何処にも彼の姿はない。まさかまた上かと見上げるも、やはりシュウジの姿はなかった。

何処かへ逃げたのか？　そんな思考が浮かんだ瞬間、無惨の足元は爆発し、其処から現れるシュウジの蹴りによって無惨の顎はカチ上げられる。仰け反り、体が宙に浮く。初めて体験する痛みと衝撃、一度ならず二度までも自身の顔を足蹴にしたことに憤る無惨だが、既にシュウジは無惨の懐へと潜り込んでいた。

「さっきから思ってたがお前、随分と隙だらけだな」

「っ!?」

呆れの混じった一言に無惨の怒りは振り切れる。ブチリと額から音を立て、凄まじい形相で身体中から生やした鞭でシュウジを切り刻もうとするが……遅い。先に述べた様に既にシュウジは無惨の懐にいる。彼が鞭を振るうよりも速くシュウジは行動に移る。

「渦廻斬輪蹴（うずまわしざんりんげり）」

両足を渦のように回転させて抜き放つ蹴りの応酬、無数の蹴りによって鞭ごと四肢を切り刻まれた無惨は再びあの日の出来事を思い出す。

無惨の脳裏の奥の奥に刻まれた忌まわしき記憶、自身を一方的に切り刻み死の淵へと追いやった忌々しい鬼狩りの剣士、やはりこの男は奴と同質。何としても逃げなければ今度こそ終わる。

（ふざけるな！　私は鬼舞辻無惨だぞ！　永遠の命を持つ人を超えた

完璧なる存在！　それをこんな、こんな奴ごときに終わらせられて――なるものかぁ!!）

切り捨てられた四肢を繋ぎ止めず、新たな鞭を形成する。切られた手足を動かし、無惨は未だに宙に浮いているシュウジへ全方向からの攻撃を行った。技を放った直後、加えて宙に浮いている今なら此方の攻撃を避けられる術はない。

己の勝利を確信した無惨は笑みを浮かべる。全方向からの一斉放射、しかし無惨の攻撃はどれ一つも直撃することはなく、放たれた得物はそれぞれ宙でぶつかるだけに終わった。

その時、無惨は信じられないものを見た。目の前の男は宙に浮かんでいた筈、なのにあろうことかこの男は宙を蹴り、三次元の動きで無惨の放つ攻撃を回避して見せたのだ。

空中を足場にする人間など聞いたことがない。鬼にだって血鬼術でも使わなければ空を飛ぶことは有り得ない。やはり目の前の男は化け物だ。そんな無惨が無意識に畏怖を抱き始めている事など関係なしに――。

「人越拳――霞獄」

無惨の視界に映るのは無数の貫手、次いで爆撃の如く衝撃を受け、四肢をこれでもかと破壊されるが、鬼舞辻無惨は腐っても鬼の首魁とされる男。その再生力は桁並み外れており、上弦の規格外な回復力をも上回る。

更には心臓が七つ、脳が五つ、既に生物としての枠すらも超越しつつある。それが鬼の頂点こと鬼舞辻無惨なのだが。

「胴回十字蹴り」

――関係ない。いかに無惨が並外れた再生能力を持とうと、心臓や脳を複数持っていようと、一切合切無視した斬撃染みた打撃の連打乱打が無惨の体を悉く粉砕していく。

十字に切り裂かれた肉体、それでも再生する肉体。どんなに砕かれても無惨の肉体が朽ちることはないが、対称的に無惨の精神はゴリゴリと削られていった。

一方的、あまりにも一方的な戦い。此方の攻撃はその全てが見切られ、不意打ちをしても予め読んでいたように避けられ、四肢から生み出した口を使って奴の動きを阻害しようと空気を吸っても、何てことないように対処される。

避けられ、捌かれ、受け流され、繰り出した倍以上の攻撃を無惨は受けている。怒りは募り、爆発させてもまるでシュウジは風に揺れる柳の如く流すだけ。罵倒し、挑発した所でなに食わぬ顔で鼻で笑われた時は怒りで頭がどうにかなりそうだった。

「クソォ！　当たりさえ、当たりさえすれば!!」

無惨の攻撃、その全てには自身の体に流れる血を仕込んでいる。鬼にとって絶大な力となる劇薬だが、鬼になる余地のない人間にとっては最悪の猛毒。これを一度でも奴に当たれば、それだけで自分は勝利する。

すると、突然シュウジの動きが止まった。何故？　奴は未だに呼吸を乱している様子はない。戦いに疲弊した様子はないし、忌々しいことに奴にはまだ余裕があるように見えた。

「――――当ててみろよ」

笑った。攻撃が当たらない自分の攻撃に苛立つ無惨にシュウジは当ててみろと笑って見せた。明確過ぎる挑発、故に無惨を怒り狂わせるには充分な威力を秘めていた。

「～～～～ッ!!　後悔するがいい!!」

幾つもの触手を束ね、一本と槍と化したそれをシュウジに向けて放つ。触れた無限城の回廊を塵にするほどの大威力、触れるのは勿論かすっただけでも致命傷は免れないその一撃を。

シュウジは、真っ正面から受け止めた。同時に起きる爆風、無限城全体を揺るがすような衝撃に周囲の襖や回廊は吹き飛んでいく。

確かな手応えがあった。奴と戦って初めて味わう感触に無惨の口元が笑みで歪む。

「は、はは、ハハハハハ！　やった、殺ったぞ！　あの化け物め、調子に乗って自ら勝機を手放したぞ！　無様、余りにも無様！　所詮人間ごときがこの鬼舞辻無惨に挑もうと言うのが間違っているのだ！」

自分の一撃を受けたことで決着がついたと高笑いを上げる無惨、自身の内側から溢れる得難い狂喜に震え、その笑い声は無限城全体にまで及んだ。
「フハハハハハ、ハハハ……ハ？」
しかしその高笑いは数秒たたずに終わりを迎える。崩れ落ちる瓦礫、立ち上る煙の中から現れる男に無惨の笑みは凍り付く。
男、シュウジには傷らしい傷はなかった。ただ上半身の着物が弾け飛び、直撃した胸元に僅かな赤みを帯びた痣があるだけ。体に降り注ぐ瓦礫の欠片を手で払いながらシュウジは言う。
「鬼の首魁になって、完璧な存在になっても――――たった一人の人間は殺せないみたいだな」
今のは紛れもなく、無惨が繰り出せる最大の一撃。人間が受けきれる威力ではない。なのに、目の前の男は何てことないように佇んでいる。
化け物。再三自身の口から出てきた罵倒の言葉、それが本当の意味で事実だった事に気付いた無惨は二の句も上げず逃げ出した。脇目も降らず、一心不乱に、全速力で無限城の中を駆け回っていく。
「何処へ行く気だ？　ここはお前が逃げ込んだ場所だろ？」
当然のごとく、シュウジは無惨の背後に追い付いていた。この時既に無惨はシュウジを人間としてみなしていない。純粋なる化け物、自分達鬼やあの日の呼吸の剣士とも違う。根っこの部分が異なる怪物。
無造作に振るった腕の刃がシュウジに向けて振り放つ、しかし既にそこにシュウジの姿はなく、無惨のなけなしの勇気を振り絞って放たれた一撃は空しく空を切るだけだった。
「さて、そろそろあの女琵琶士も完治する頃合いだ。面倒になる前に……そろそろ終わらせるぞ」
前方から聞こえてきた声、反応する前に跳ね上げられる顎、視界がぶれて体が宙に浮く。その体感はまるで上に向かって落下している様だった。
目の前には黒い穴が広がっている。鳴女ではない、何なのだ、今、自分が目にしているモノは、事象は、一体何なのだ!?

困惑し、纏まらない思考、混乱する無惨は為す術なく黒い孔に呑み込まれ、次に視界に映るのは辺り一面雪に覆われた場所だった。
「ここは……さっきの」
周囲を見渡すと無数に切り倒された木々、頭部と体を潰された鬼達の死体が横たわっており、向こうの岩壁には唯一残った上弦の兄妹が串刺しにされていたままの様子がそのまま残されている。同じ所に戻ってきた。混乱する思考の中で無惨が理解できたモノ、逃げられたのか？　そう安易に考えたのも束の間、突然無惨の体にこれ迄感じた事のない圧が自身の体へ覆い被さってきた。
僅かな抵抗も許さない圧倒的な圧力、有無を言わさず地面に叩き付けられた無惨は苦悶の呻き声を上げる。
「ぬ、ぐ、あああああッ!!」
どれだけ力を加えても体にのし掛かる圧は消えない。何故自分がこんな目に合わなければならない、自身の振り掛かる出来事に無惨はなんて理不尽なと憤りを露にする。
そんな彼の頭上からこの数時間で忌々しく思えるほどに聞き慣れた男の声が聞こえてきた。
「さて、これで少しは静かになったな」
視線だけ声の方へ向けると、先程まで自分が通ってきた黒い孔から完治した鳴女の首根っこを掴み、破けた筈の着物を身に纏うシュウジが現れる。ブンッと腕を振り、鳴女を岩壁へと投げ付けると、隣の堕姫達と同じく無惨が切り倒した木を利用して鳴女を磔にし、身動きを完全に封じてしまう。
彼女の手には琵琶はなく、そして疲弊しているのか血鬼術を使う様子はなく、項垂れたまま動かない。暗に自身の逃げ場は何処にもないことを示している事に気付いた無惨は自身の完全なる敗北という事実に悔しさと怒り、そして憎悪に満ちた怨嗟の声を上げる。
対するシュウジは何処までも冷ややかだった。どんなに泣いて喚こうと此処から逃がすつもりはない、倒れ伏す無惨を見下ろしながら近くの切り株へ座り、己の運命を受け入れろと口にする。
（とは言え、コイツらどうするかなぁ、動けなくなった所で死ぬことは

ないみたいだし、夜ももうすぐ明ける。それまでに竈門家の人達の所へ戻りたいが……さて、どうしよう）

残った鬼と無惨の処遇について考えていると、ふと背後から人の気配を感じた。

そう言えば誰かが近付いてきていたな。なんて思いながら視線を向けると、そこにいたのはこのご時世に帯刀をしている青年で、呆然とした様子で立ち尽くしていた。

刀を装備し、奇抜な羽織を纏う青年。その格好はどこか先日助けた女剣士と似ている。

「もし、そこの青年。ここは今、少々危険だ。悪いことは言わないから今の内にお山を降りなさい」

「――――アンタは？」

呆然としている青年に声を掛けると、青年はビクリと肩を震わせてシュウジに視線と体を向ける。心なしか警戒している様子。

まぁ、それも仕方がないかもしれない。辺りは鬼の血で赤く染まっているし、端からみれば普通に大量殺戮現場だし、向こうの岩壁にはパッと見て人間の男女が串刺しにされている。その中で倒れ付している異形の化け物とそれを見下ろす自分を見れば誰だって警戒はするだろう。いや、凄惨な現場を前に失神しないだけこの青年は相当胆が座っているのかもしれない。

「自分はこの山にある炭造りを生業にしている一家のお世話になっている者さ、そこに転がっている男はそんな一家に押し掛け強盗を仕掛けてきた奴で、俺はそれを対処したってだけ。周りの死体は……まぁ、そこの男がやったと言ったら信用してくれるかな？」

「――――」

事の顛末を簡潔に話すと、青年は目を閉じて静かに深呼吸を繰り返す。独特な呼吸法だ。体もかなり鍛え上げているみたいだし、もしかしたらこの青年は先の女性剣士と何らかの組織に属している人間なのだろうか。

「――――俺の名は冨岡義勇。鬼殺隊の者だ」

「鬼殺隊、聞かない名だ。それが君の所属している組織？」

深呼吸を繰り返した事で落ち着きを取り戻したのだろう。最初に見た戸惑いの表情は鳴りを潜め、無表情になった義勇と名乗る青年。その見事な感情のコントロールにシュウジは彼をこの時代の工作員なのかと勘違いをする。

鬼殺隊。その名前からして鬼を倒す組織なのだろう。これまで無惨とその手下達と戦っていたからコイツらが普通の存在ではない事はシュウジもまた察していた。

ていうか手下の鬼の何人……人？　かは、血鬼術て言ってたし、多分鬼なんだなぁ位の認識で戦っていた。でも、幾ら鬼でも頭砕かれたら普通死ぬでしょ？　コイツ等、普通に再生したんだけど？　的な事をふんわりとした説明口調で義勇青年に訊ねる。

義勇青年は一瞬目を丸くさせていたが、それでも平静を装って話を続ける。鬼は鬼殺隊がもつ日輪刀で頚を切るか、太陽の光を浴びない限り死にはしないと。

（なにそれ、鬼ってか吸血鬼じゃん）

脳裏に浮かんだ疑問をシュウジは口にすることなく呑み込んだ。この世界の鬼はそう言う性質なのかと一人納得したシュウジが腕を組んで義勇の話に聞き入っていると、今まで黙っていた無惨が口を開いた。

「鬼狩りめ、忌々しい異常者どもめ！　今更ノコノコなにしに来た！」

「！」

「貴様等はいつもそうだ！　やれ親が殺された！　やれ妹が、弟が、兄が、姉が、家族が、大切な人が殺されたと同じことをベラベラと！何故同じことを繰り返す！　日銭を稼ぎ、静かに生きていけばいいだろう！　私と出会った不幸に嘆くのではなく、鬼舞辻無惨という大災に見舞われたと諦めればまだマシな生き方があると何故理解しない!?」

「!!???」

無惨が己の名前を口にした瞬間、冨岡義勇の目は大きく開き、その顔を一気に憤怒の色に染め上げる。腰に差した日輪刀を抜き放ち、無惨に突き付けて義勇が口にするのは彼がこれ迄抱いてきた怒りの雄

叫びだった。
「ふざけるな！　お前の所為でどれだけの人間が死んだと思っている!?　どれだけの悲劇が、嘆きが、引き起こされたと思っている!?　お前の所為で姉は死んだ！　祝言を上げて、幸せになる筈だった！　錆兎も、皆も、幸せに生きる筈だった!!」
　それは冨岡義勇が抱いてきた感情の発露だった。怒りの雄叫びを上げて、これ迄自分を生かしてくれた人達を思い出し、涙を流す彼の姿にシュウジは何も言えなかった。
「お前が壊した！　お前が殺したんだ!!　お前が奪いさえしなければ、俺達は、俺達は……」
　それ以上、義勇は言葉を続けられなかった。感情のままに言葉を吐けば、きっと取り返しの付かない事まで口にしてしまいそうで、これ迄の皆を貶してしまいそうで、義勇は溢れ出す感情を拳を握り締めることで耐え抜いた。
　そんな痛々しい彼を宥めようと、シュウジは彼の肩に手を置こうとする。もう見ていられない、敵討ちをして彼の気が少しでも済むのなら、そうしてやろう。
　――しかし。
「知ったことかァ！　何故たかだか百年も生きられない貴様等人間の事など考えなければならんのだ!?　貴様は道を歩くとき地に這う蟻に気を遣うのか!?　病に冒されたら死ぬ、転び、打ち所が悪ければ死ぬ。そんな脆弱で愚かな人間など、気に病む価値などあるわけなかろう!!」
「!!」
　冨岡義勇の心の叫びを無惨は下らない戯れ言だと両断する。その心のない罵詈雑言に義勇は息を呑み、シュウジの手が止まった。
「何度も言わせるなよ異常者め！　お前達の感情は取るに足らない戯れ言だと知れ！　何が殺し殺されただ！　そんなに死にたくないのなら平伏し、地に這って命乞いをしろ！　そうすれば助かった命もあっただろうに無駄なことをしおって！　そもそも、貴様の姉を殺したのは別の鬼であって私ではないのだろう!?　私に擦り付けるのは

筋違いだ馬鹿が!!」

人は、怒りの感情を振り切れると何も考えられなくなるのだと、この時義勇は知った。鬼を生み出したのは自分なのに、その生み出された鬼で姉は殺され、多くの人々が悲劇に見舞われたのに、この怪物はそれを頑なに認めようと……否、自覚しようとしない。

呆然自失となる義勇、立ち眩み、一歩後ろに下がりかけた所に……ふと、背中に暖かいものに支えられた。

振り返ると、いつの間にか背後に立っていたシュウジが義勇の背中に手を置いていた。暖かい、人の温もりに触れ、シュウジの笑みを見た義勇は徐々に落ち着きを取り戻していく。

そんな彼に満足したように頷いたシュウジは義勇に代わって前に出る。その際に見えたシュウジの表情は底冷えするほどに無感情だった。

「それがお前の理屈か鬼舞辻無惨。己を頂点に座していると豪語し、自らを完璧なる存在と語る。成る程、永い時間の中を生き続けてきた者としては当然の帰結だな」

淡々と、語りながら無惨へと近付いたシュウジは無惨の顔側へ腰を下ろす。先程よりも近い距離感、手を出せば直ぐにでも届く距離だ。

しかし、その距離がとてつもなく遠い。歯をギリギリと軋ませ、屈辱で怒りを露にしている無惨に対して、シュウジは冷淡に話を続ける。

「では、そんな君に質問だ。人を人と思わず、文字通り有象無象と断じているお前は、どうして生きている？　何を目的に生きている？　死にたくないから？　死ぬのが怖いから？　成る程それは当然だ。死に対する拒絶反応は命を持つ者ならば誰しもが抱く当たり前の感情だ」

これ迄の短い間で無惨が異常な程の生に対する執着を抱いていた事をシュウジは見抜いていた。部下の鬼達をけしかけ、逃げに徹する事で自分という脅威から逃げ延び、無限城という異空間へと逃げ延びた。

いざ自分と戦い勝てないと分かれば直ぐに逃げる。生き汚いとさえ思える無惨、この男は自らを千年生きる完璧なる存在と言っている。その位永く生きれば大抵は自身の生き方に自分なりの誇りを持つというのに、この男にはそう言った〝矜持〟がない。
自尊心の塊。傲慢で不遜な人間のエゴの塊。なのに超然とした生き方ではなく、何処までも生き汚いその在り方。この鬼舞辻無惨という鬼はある意味最も人間らしい生き物なのかもしれない。
故にシュウジは追い詰めることにした。精神的に、徹底的に、一切の情け容赦なく。
「だが、それは生きる者にとって前提条件であり理由ではない。今一度聞こう鬼舞辻無惨、お前は一体何の為に生きている？」
「な、何故そんな事を貴様に……」
「言わなくてはならない……か？　構わないさ。こっちは大体察しが付いているからな。――――そうだな、例えばより完璧な生命体になる為に日輪刀や日光の克服の為」
「っ!?」
「そんな驚くような事じゃないだろ？　そこの冨岡青年の言う通りならば、簡単に分かる話だ。お前達鬼は日輪刀と日光を弱点としている。その弱点を補い、日の下で自由に生きたい。それがお前の本当の願望だろう？」
自分の永く追い求めていた野望、それが白日の下に晒されて無惨の表情が大きく歪み出す。怒りや羞恥心に染まる無惨を無視し、シュウジは話を続ける。
「では、そんなお前が何故日光を克服し、日の下で生きたいと願うのか。これも簡単、人を見下してきたお前がその実、誰よりも人間の暮らしに憧れていたからだ」
「?!?!?」
「無惨が、人間に……憧れている？」
無惨は人間に憧れている。その事を告げられた無惨は目を大きく見開かせ、義勇は対照的に困惑した様に反芻している。
「本当に人間を見下しているなら、別に人間と同じ格好をする事もな

いだろ？　だけど、竈門家に来たときのお前はこの時代にありふれた衣服を着てやって来た。それはつまり、人間社会に溶け込んでいたという事に他ならない」
「人間を見下している癖に人間社会の中で生きる。酷い矛盾、天の邪鬼も良いところだ」
人間を見下し、人間を嘲笑うのなら、人間と一緒に生きる必要もない。先の鳴女の血鬼術によって造られた無限城という異空間も有しているのだ。無惨が人間と一緒に暮らしていく理由なんて何処にもない。
日光のような弱点を持つ為に普段は無限城に引きこもればいいだけだし、無惨が自身を人間と偽って生きる意味は然程ない。であるならば、答えは自ずと限られている。
鬼舞辻無惨は人として太陽の下で生きていく事を望んでいる可能性がある。無惨に関する情報が少なく確実とは言えないが、それでも決して眉唾とは思えない帰結に義勇は息を呑む。
対して無惨は震えていた。てんで的外れな持論を突き付けられたから？　否、シュウジの出した結論に正しく己の核心を打ち穿たれたからである。
鬼舞辻無惨は嘗ては人だった。生まれた頃から体が弱く、この世に生まれ落ちた時などは心臓が止まり、危うく死にかけた事があった。
それからも病弱と死は無惨にとって身近な存在となっていた。どんなに生きようとしても死が確実に付いて回っている。死にたくないと願ってもそんな心とは裏腹に自身の体はドンドン弱くなっていく。
そんな時、一人の医者が無惨の前に現れた。青い彼岸花という花を使った薬、それを以て漸く元気な体になれるのだと思っていた無惨は、この日怪物となった。
人から外れた力、それと引き換えに手放した日の下での生活。嘗て憧れた世界から完全に切り離されたという事実に打ち拉がれた無惨は衝動のままに暴れまわり、癇癪の末にその時の医者を殺した。
それからは自身が今度こそ日の下で生きられる為に無惨は永い時

を生きてきた。使える奴は側におき、そうでないものは捨て駒に。青い彼岸花の情報と、日の光を克服する方法を模索し、後に組織された鬼殺隊から逃げ延び、生き汚いと罵られようと今日まで生きてきた。

――――全ては、あの日屋敷の中から見えた元気に遊ぶ子供達の様に生きたいと願ったが故に。

「……黙れ」

「あ？」

「黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れエェェ!!」

「！」

「貴様ごときが私の心を暴くな！　私の心を覗くな！　私の心を踏みにじって、そんなに楽しいか!?　嬉しいのか!?　この、この、人でなしがぁぁぁっ!!」

初めて耳にする無惨の泣き叫ぶ声に義勇は動揺が隠せなかった。鬼舞辻無惨は自分達鬼殺隊の全員にとって倒すべき仇敵、それが目の前では子供のように喚き散らしている。これが、自分達が倒すべき相手だったのかと衝撃を受ける義勇を他所に。

「お前にだけは言われたくねぇよ」

低く、冷たいドスのきいた声が無惨のわめき声を掻き消した。

「お前はこれ迄、どれだけ多くの命を蔑ろにしてきた？　自分の命惜しさにどれけの命を弄んできた？　気に入らないというだけで殺し、踏みにじってきた？」

「お前は言ったな？　知ったことじゃないと。その台詞、そっくりそのまま返してやるよ」

「ぐ、ぐぅぅぅ!!」

「人を殺し、命を弄んできたお前にくれてやる慈悲はない。それに――もう、終わりだ」

ふと、東側から明かりが見えてきた。光だ。夜と言う帳が消えていき、空には太陽の光が伝わってくる。夜明けだ。暗い夜の終わりに義勇は心なしか安堵する。

辺りの木々は無惨の一撃で切り倒され、遮蔽物が殆んどない状態となっている。あと数刻も経たない頃に辺り一面は気持ちのよい朝日

が浴びれる事だろう。
「い、嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だァァッ!!　私はまだ、死にたくない！　死ぬわけにはいかない!!」
　太陽の光が徐々に顔を覗かせるなか、鬼舞辻無惨は死にたくないと泣きわめいて訴える。自分はまだ何も為してはいない、何も始めていないし、何一つ始まっていない。
　なにもしていない死んでたまるか。そう足掻き、のたうち回ろうとする無惨だが……悲しい事に触手一つ動かす事は出来なかった。全身から掛かる圧力、見えない何かで押し潰される感覚に無惨の表情はより歪んでいく。
　これでは体を爆発させて細胞分裂しながら逃げることも、体積を増やしてやり過ごすことも出来ない。迫り来る死、これまで遠ざけてきた死がすぐそこにまで迫っている。
「人を殺し、命を蔑み、見下してきた鬼よ。お前の末路はそんなものだ。何も残さず、何も果たせず、とっとと塵に還るがいい」
「!?」
　それは、事実上の死刑宣告だった。何も残せず、何も成せず、何かをする事なく消えていく。言外に無駄な人生……いや、鬼生だと断じられた無惨は死より恐ろしいものを理解した。
　このままでは自分は消える。跡形もなく、千年も生きたと言う事実も、その全てが消えてなくなる。そんなのは嫌だ。せめて何か、死は避けられなくとも形ある最期にしたい。誰かの記憶に残る終わりを迎えたい。
　そう思い無惨が最期にすがり付いたのは、皮肉にも鬼殺隊の冨岡義勇だった。
「鬼狩り！　私を、私の頚を切れ！　その刀で私の命を刈り取れぇ！」
「!?」
「そしてその手柄でお前の名を歴史に刻め！　それが私の生きた証となる！　それだけが私が残せる唯一の証明なのだ！　頼む！　こんな訳のわからない死に方をさせないでくれぇ!!」
　義勇は困惑した。自分達が倒すと決めた鬼の首魁が自分の足下で

切ってくれと懇願している。避けられない死を前にせめて生きた証を残したいとせがむ無惨に義勇はどうすればいいか迷っていた。
倒すべき仇がいる。これで奴の頚を刎ねればそれだけで全てに決着が着く。――――皆の無念を張らすことが出来る。
気が付けば、義勇は日輪刀を振りかぶっていた。皆の仇、涙を流し、血走った目で見下ろす義勇に無惨は救われたように笑みを浮かべる。
シュウジは……何も言わない。此方に背を向けている様子から完全に後の判断は義勇に任せるつもりなのだろう。シュウジも義勇の敵討ちに口出すつもりはない。
これで、全てが終わる。そう思い手にした日輪刀を振り下ろす義勇の目に太陽の光が差し込んできた。
目が眩み、手が止まる。眩しいと目を細める義勇が次に目にしたのは……死んだ筈の戦友達だった。
皆、慈しみの笑みを浮かべている。この中には親友の錆兎や真菰の姿もあった。
〝ありがとう〟
〝お疲れ、義勇〟
それは太陽の光が見せた幻覚、しかしそれでも自分を労ってくれる戦友達と親友の言葉の意味を理解した義勇は無惨の頚を刎ねようとした手を止める。
そうだ。自分は敵討ちや鬼を殺す為だけに刀を手にしたんじゃない。悲しみを止めたいから、悲劇を食い止めたいから鬼殺隊に入ったのだ。あとに続く誰かに繋げるために、分不相応ながら柱へと至ったのだ。
その事を思い出し、同時に自分の役目が終わったことを悟った義勇は日輪刀を鞘に仕舞う。
「おい、何をしている鬼狩り、どうして手を止める？　何故私を殺さない!?」
「――――いいのかい？」
自分の思い通りに動かない義勇に激昂する無惨、喚く鬼の首魁を無視してシュウジが問い掛けると、義勇は涙を拭って……。

「あぁ、――――もう、意味はないから」
意味はない。そう言い切る義勇に無惨は言葉を失った。
そうしている内に朝日は昇り、シュウジ達のいる場所も照らし出す。照らされた日光、それは瞬く間に無惨と他の鬼達を焼いていく。
鬼の死体は血の痕すら残さず焼失し、岩壁に刺さった男女の鬼達も消えていく。彼らもまた観念したのか、比較的大人しく消滅していった。
「あぁぁぁ、あぁぁぁぁ、あぁあああああああああっ!!」
その断末魔は鬼舞辻無惨の最期の足掻きだった。何も果たせず、何も残せず、ただ人に悲しみを植え付けるだけの害悪、本当にやりたかった事も成し遂げられず、ただ悪意しか振り撒いてこなかった男はこの日、塵一つ残さず消滅していった。
太陽が顔を覗かせる。日が照らし、青空が広がるなか。
「錆兎、真菰、皆……終わったよ」
冨岡義勇は晴れやかな笑顔を浮かべていた。

その6

「さて、鬼の首魁を討ち取った所で……君はこれからどうする？」
鬼舞辻無惨という鬼を倒し、一応の決着を着けたシュウジは朝日が昇る空を見上げる義勇に語りかける。先程まで涙を流して感極まっていた様子だったが、今はもう落ち着きを取り戻し、元の無表情な顔をしている。その事に安堵しつつ、シュウジは訊ねた。果たして彼はこれからどう生きるのだろう、会話の流れから先の無惨は目の前の義勇が属している鬼殺隊が長い間追い求めていた仇みたいだったし、もしかしたらその組織に報告するために戻るかもしれない。
そうなったら、自分も同伴しなくてはならないのだろうか？　実際に無惨を倒したのは自分だし、謂わば鬼殺隊が求めて止まない敵の総大将を勝手に横から討ち取っているのだ。
（きっと追求は免れないだろうなぁ。やだなぁ、怖い人とかいたらどうしよう）
人の手柄を横取りされて良い気持ちでいられる人間なんてそうはいない。シュウジも嘗て憎き仇はいたし、それを必ずと言って良いほどに報復してきた。復讐は人間だけが行える行為、今の時代がどうかは定かではないが、シュウジは復讐という報復行為自体を悪だとは思わない。
鬼舞辻無惨が義勇の属する組織鬼殺隊、そこの隊員達全員の仇だとするならば、それを横取りした形で屠った自分はもしかしたら彼等の怒りを買う事になるのかもしれない。
というかそうなるのは目に見える。自分だってそうなるもの、必ず報復すると誓った相手がどこ奴も知れない奴に始末されたと知れば、誰だって少なからず不満に思うだろう。
もし自分もその鬼殺隊の本拠地に赴くのならば、目の前の義勇君に助け船を出して貰おう。そう思い青年の言葉を待っていると……突如、辺りに暴風が吹き荒れた。

「冨岡ァァッ!!　テメェ、此処で何していやがるッ!!」
「――――」
「何故鬼を斬っていねぇ！　いや、そもそも鬼どもは何処にいる!?
テメェが先行していたんだろ!?　質問に答えろや冨岡ァァッ!!」
（なんか無茶苦茶怖い人が来たぁァァッ!!）
　風の中から現れたのは顔や体の至る所に傷を着けた銀髪の青年だった。この寒い冬空の下で胸元をはだけさせている事に色んな意味で驚くシュウジだが、目の前の青年の血走った目にそれ以上にビビっていた。
「テメェまさか、逃がした訳じゃねぇよなァ？　鬼の数にビビって、テメェ一人日が昇るまで隠れてたんじゃねぇだろうなぁ？　仮にもテメェも柱だ。そんな無様な姿、晒す訳ねェよなァ？」
（すみません。鬼より貴方の方が遥かに怖いです）
　控えめに言っても堅気の人間には見えない銀髪の青年、血走った目で義勇に詰め寄り睨み付けるその様子はどう見ても借金を取り立てる裏組織のソレである。この人も鬼殺隊？　嘘でしょ、鬼より恐ろしい風貌してるんだけど。
　心の内で誰よりもビビるシュウジ、どうか自分に話を振らないで欲しい。そしてどうか義勇青年、上手く事情説明をしてくれ。これ迄少ししか言葉を交わしていないが、義勇青年は人情味溢れる好青年だ。きっと、この場を上手く纏めてくれるだろう。シュウジは猛る銀髪青年の鎮静化を義勇に委ねて内心で祈る。
「……俺から言えることは何もない」
（ファっ!?）
　しかし、その祈りは最悪な形で裏切られる事になる。どうしてこの場面でそんな台詞が言えるのか、さっきの無惨相手にはあんなに口早く喋っていたのにどうしてここへ来てそんな口数が少なくなってしまうのか。
　もしかしてこの義勇青年、コミュ障だったりするのだろうか？
だったらごめんね気付いてやれなくて、フォローすべきは自分の方だった。そんな風にシュウジが後悔するも時すでに遅し、義勇青年の

一言にプルプル震えていた銀髪の青年は遂に此方へ狙いを定めるのだった。
「……おいそこの紫頭、テメェ、いつから此処にいた？　何か知っているなら教えろ」
冷静さを装っているのだろう。銀髪青年の声は低く大人しいモノになっている。しかし悲しいかな、先のやり取りを見ていたシュウジとしては銀髪青年の声が凄まじく恐ろしいモノに聞こえてしまって仕方がない。
「言っておくが、妙な嘘を吐くんじゃねェぞ？　今の俺は少々気が立っているからなァ、出来れば手荒なことはしたくねェ」
（いやもう怖すぎィィッ！　今すぐ竈門家の皆に会いたいよぉぉぉっ!!）
思い浮かぶのは数時間前まで一緒にご飯を食べていた竈門家の人達、屈託のない笑みを浮かべる子供達、それを見て困りながらも幸せそうに微笑む母、そんな家族と共に囲う食卓は言葉にできない癒しの空間が出来上がっていた。
あの空間に帰りたい。最近は禰豆子ちゃんともけっこう話すようになったし、花子ちゃんとも炭治郎程でないにしろ自分に懐いてくれるようになった。
竹雄君には空手を教える約束をしていたし、茂君と六太君には凧上げのコツを教えて上げる約束をしている。そうだ。自分にはまだ、やるべき事がある。ここで恐怖に屈する訳にはいかない。
自分は一人っ子だ。妹や弟はいないが、それでも一人っ子なりに頑張ってきた。
（頑張れシュウジ頑張れ!!　俺は今までよくやってきた！　俺はやれば出来る奴だ！）
（そして今日も、これからも！　俺が挫ける事は――――絶対にない！）
シュウジは内心で己を勇気づける。そして毅然とした態度でこの顛末を話そう。未だ睨んでくる銀髪青年に向き直り、佇まいを正したシュウジは一言。
「スミマセン。鬼舞辻無惨は、俺が倒しました」

それは簡潔で齟齬のない完璧なモノだった。変に言い訳染みた事は言わず、相手に伝わりやすいシンプルな説明。確かに自分は鬼殺隊の仇敵である無惨を横取りするような形で倒した。そこに罪悪感がないと言えば嘘になる。だが、それを嘘や誤魔化しで話さないのは彼等に対する不義理になる。

彼等からすれば自分は横からでしゃばった無関係の人間、ならばせめて真実を包み隠さず話すことがこの場における最良の選択の筈だ。自信に満ちた表情で語るシュウジ、義勇からは何のツッコミも無かったし、きっとこれが正解なのだろうと……。

「おいテメェ、なに笑えない嘘吐いてんだコラ？」

顔中に筋を浮かべて爆発秒読み開始となった銀髪青年に、シュウジは己の自信が砕け散った音を聞いた気がした。

（あ、こりゃダメだわ。地雷踏んだわ）

義勇青年に対する物言いよりも声音が低くなった分恐ろしい形相となった銀髪青年にシュウジは先程以上の恐怖を覚えた。

おかしい、今は朝日が出て始めて体は暖かくなってきている筈なのに背筋が氷を突っ込まれた様に冷たい。助けを求めて義勇青年に視線を送るが、義勇青年はのほほんと無表情のままで何かを言うつもりはないらしい。

（嘘でしょ!?　君鬼殺隊の人間なんでしょ!?　仲間なんでしょ!?　何で情報共有しないの!?　何で詳しく説明しようとしないの!?　口下手なの!?　人見知りなの!?）

心の中で可能な限りつっこむシュウジだが、現実逃避ももうじき限界がくる。銀髪青年は此方にメンチ切ったまま動かないし、義勇青年に再度訊ねたりしない。折角奮い立たせた心が再び挫けそうになった時、救いの手は舞い降りた。

「不死川！　冨岡！　生きてるか！」

「加勢に来ました！　鬼は……あれ？」

向こうから現れたのは溌剌とした青年と優美な女性がやって来た。女性の方には覚えがある。先の雪の日に助けた女性の妹さん、あの頃より少し髪が伸びたのだろうか。顔付きも大人びており、あのお姉さ

んと似た雰囲気になっている。
　そんな新たにやって来た二人にシュウジは助かったと安堵する。片方の男性は終始笑顔の耐えない好青年の様だし、片方の女性に至っては一方的だが面識がある。最悪自分が巷を騒がせた仮面の男だと口にすれば少なくとも話は聞いてくれる筈。
　なにより、この銀髪青年よりは話が通じそう。なんて割りと失礼なことを考えながら、このチャンスを逃す手はないとシュウジは二人の前に出る。
「お二方も、鬼殺隊の隊員と見て宜しいですか？」
「え？　ええ、まぁ、はい。そうですが」
「うむ！　見たところ貴方がこの状況について一番詳しい様だ！　説明をお願いしても宜しいか！」
「それでは先ずは自己紹介から、私は白河修司。旅の行商人をしていて今は彼方にある竈門家の人達の所にお世話になっている者です」
「商人？　そんな方が何故ここに？」
　首をコテンと傾げる女性にシュウジは此処だと説明を続ける。先の説明は省略し過ぎた。ならば今度はこれ迄の経緯をなるべく短くまとめて話していこう。何故商人の自分がこの山に来ているのか、そこら辺を上手く誤魔化しながら話を繋げ、自分が鬼と呼ばれる怪物達を倒したことも簡潔に説明していく。
「――――と、まぁ要するに竈門家の人達を守る為に鬼舞辻無惨を撃滅した訳です。理解して頂けましたか？」
　因みにこの事は義勇君も知ってますよ。と、付け加えて説明を終えたシュウジは今度こそ手応えありと満足げに頷いた。途中上弦の名前とか出す度に皆ビクッと反応していたけど、まぁ死者を貶める様な事を言うつもりはないし、そこら辺はささっと流させて貰ったが、重要な無惨を倒した所は話したからこれで納得してもらっただろう。
　最後まで話終えたことで満足するシュウジ、しかし鬼殺隊の人達は納得仕切れなかった様で……。
「うむ！　修司さんと言ったな！　残念だがにわかには信じがたい！　けれど嘘を言っている様子もない！　申し訳ないが、お館様の前で

今一度詳しい話を聞かせてくれないだろうか！」
「て言うか冨岡さん。貴方も現場にいたのですから何故その事を話さないのですか！　貴方が証言すれば、それだけで済むと言うのに！」
「――――俺から話せることは何もない」
「……そんなんだから皆から嫌われてるって、どうして分からないんでしょうかねぇ？」
「俺は嫌われてない」
「そうかァ、クソ鬼ども……いねぇのかァ」
　爽やか青年は爽やかなままシュウジを連行しようとし、女性は冨岡に詰め寄っている。銀髪青年はなにやら意気消沈の様子で踞っているし、後から駆け付けた他の隊士や隠の人達は混沌としたその場に唖然としていた。
　その後、半ば連れ去られそうになっていたシュウジを救ったのは人の言葉を話す烏だったという。

その7

翌日。三郎の家を出て我が家へと帰ってきた炭治郎が目にしたのは、異様な光景だった。血の臭いはしない、血塗れになって息絶える家族がいたなどという悪夢はなく、彼の瞳に映るのは刀を携えた人達と修司が一緒に家を改築してるという何処までも混沌とした空間が広がっていた。

しかも自分が着く頃には既に完成に近い状態で、幾ら懐の深い炭治郎も困惑しながらもシュウジに問い質した。

何でも、昨晩強盗の類いの輩がやって来て襲われた所を修司が撃退。捕縛し、山を降りて強盗の身柄を町にある警羅隊に引き渡し、現場を改めようとやって来たのが今現在自分の前にいる人達なのだという。

改築しているのは強盗が襲ってきた際に玄関の一部が崩壊し、このままでは冬の冷たい雪風が入ってきてしまう事を危惧しての事なのだとか、改築といっても家の外観を極力変えている様子はなく、ただ所々新たに人の手が加わった箇所が増えたという事だけ。

ただ、そーらーえねるぎいとか、自動供給型電力発電とか、色々と難しい事を言われたが、住み心地は前と殆んど変わっていないので炭治郎は家の事は一先ず横に置いておくことにし、次に警羅隊の人達の自己紹介を受けることにした。

胡蝶しのぶ、煉獄杏寿郎、不死川実弥、そして冨岡義勇。いずれも警羅隊と呼ぶには色んな意味で荒々しい人達に当初炭治郎は困惑した。特に不死川という男はその傷だらけな風貌から子供達も怯えるかと思いきや、この不死川実弥という男は年下の子供を相手にするのが得意なのか、その見た目からは予想外に優しい声音で弟達の相手をしてくれており、炭治郎がシュウジ達から事情を聞いている間は子供達の面倒を見ていてくれていた。

胡蝶しのぶという女性も母の家事の手伝いをし、竈門家の優しい空気に触れ、時折笑顔を浮かべており自分にも姉妹がいると語り、仕事

が一段落したら家族と一緒に此方に引っ越そうかと話している。
　煉獄杏寿郎、この男性は一言で言うなら極めて溌剌とした男性で兎に角物事をハッキリと喋る。ただ、自分にも弟がいて炭治郎や他の兄弟達を見て良い家族だと太鼓判を押している。
　最後の冨岡義勇は先の煉獄杏寿郎とは正反対の寡黙な人で、基本的に多くを語ろうとはしない。ただ、この人も他の人達と同様に決して悪人の類いではなく、少しばかり口下手な人間なのだと炭治郎は認識した。
　皆、いい人ばかりだ。出会って数刻も経っていないのに、炭治郎はシュウジが連れてきた人達を決して悪い人達ではない事を断定した。例え自分達に嘘を吐いているのだとしても。
　冨岡達が町の警羅隊ではないことは炭治郎は持ち前の嗅覚で既に気付いていた。けれど、悪意が無いのも本当で、家族と接している彼等がとても穏やかな臭いをしていることから、炭治郎は深く追求することはしなかった。
　それに、強盗が来たというのは嘘ではない。家族の誰もがそう言ってるし、母もまた気丈に振る舞ってはいるが、その話をする度に内心怯えてしまっている。
　そして、そんな強盗から家族を守ってくれたシュウジに炭治郎は改めて感謝した。家族を守ってくれてありがとうと、この恩は決して忘れないと、そう口にする炭治郎に。
「なに、気にする必要はない。君達子供達を守るのも大人の役目だからな」
　そう笑い、シュウジは炭治郎の頭を撫でる。大きな手だ。岩のように硬く、ゴツゴツしている武骨な手、死別した父とはまた別の大人の男の手だった。
　昨夜、自分には説明できない何かが起きた。それが何なのかは炭治郎が知ることはきっと訪れない。何が訪れ、シュウジが何と戦ったのか、きっと炭治郎には分からない。
　分からない事だらけではあるが、一つだけ確かなのは自分達の細やかな日常は壊されることなく、これからもきっと在り続けるという事

だけ。
炭治郎はその事実だけで充分だった。

◇

「本当に、行ってしまうんですか？」
それから少しして、シュウジは冨岡達と共に竈門家を後にする事にした。数日という短い間ではあったものの彼との生活は悪くなく、いきなりそう申し出たシュウジに当然炭治郎達は驚いた。
もっと家にいても良い、家族を守ってくれたお礼がしたい、もっとシュウジと遊びたい。そんな暖かな言葉を掛けてくれる竈門家の人達に心まで暖かくなる想いだが、それでもシュウジは慎んで辞退した。
今の自分にはやるべき事がある。鬼の首魁である鬼舞辻無惨の最期と山で繰り広げた鬼達との戦い、上弦やら下弦やらの幹部達を倒したことを鬼殺隊の頭目に伝える義務がある。
勿論、また会いに来るつもりだ。自分の行ったこと、その責務と責任を果たしたらまた会いに来るし、なんなら月一で遊びにも来る。世界各地の名産品をお土産に色んな話を聞かせたりもしてやろう。
その時を楽しみにしていて欲しい。そう言ってどうにか竈門家の人達を納得させる事ができた。
「……分かりました。そこまで言うのでしたら、私たちから言えることは何もありません」
「修司さん、またいつでも来てください。俺達はいつまでもこの家で待っていますので」

「あぁ、ありがとう。炭治郎君、葵枝さん。皆も体には気を付けてな」
それだけいってシュウジは竈門家を後にする。優しい人達、あの人達を守れて本当によかった。今後世界がどうなるのかは分からないが、どうあってもあの家族だけはこれからも守っていこう。そう思えるほどにあの家の人達は優しかった。
前を見据えれば、先で待つ四人の剣士達。自分達の戦いがいつの間にか終え、その胸中はさぞや穏やかではないだろう。しかし、彼等の表情にはもう既に迷いは無かった。
「では、行きましょうか修司さん。山を降りたら直ぐにお館様のもとへ向かいます。少々走りますが……大丈夫ですか？」
「構わないよ胡蝶さん、こう見えて体力には自信があるからね。7日7晩位なら走り通してみせるさ」
「なんと！　それは凄まじい！　俺も任務のために夜通し走り続けた事は多々あるが、其処まで走り続けた事は無かったな！」
「それがホラじゃねェ事、精々楽しみにさせて貰うぜ」
「行くぞ、無駄話は終わりだ」
竈門家の皆が見えなくなる所まで歩き、四人と一人は駆け出していく。山を降り、人里を駆け抜け、目的地を目指す彼等の先には何処までも澄み渡る青空が広がっていた。

◇

以下、それぞれのその後。

竈門家。

無惨の襲来が無かった為、家族も殺されることなく、妹も鬼になることなく、日々を健やかに過ごしている。
最近、とある美人姉妹が山の麓にある町に引っ越してきて医院を開業し、そこに住む心を閉ざした少女と炭治郎が出会い、最近は良い雰囲気になりつつある二人に周囲の人達はニマニマしている。
尚、数日前には妹の禰豆子に言い寄るタンポポ頭の男が頻繁に竈門家に来ては弟達にしばかれている模様。

炎柱。
古くから鬼を滅する為に活躍してきた家柄だったが、無惨を倒した事でお役御免となる。鬼殺隊の頭目であるお館様なるお方のお陰で、仕事を斡旋させてもらい現在は弟と共に歌舞伎役者として働き、現在は人気役者となっている。
尚、先代炎柱である父は鬼殺隊解散の報告を受けて唯でさえ酷かった酒癖が更に悪化したが、ある男の説得(物理)により現在は改心。息子ばかり迷惑掛けてはならぬと親子共々働きに出ている。
「いやはや！　この様な顛末になるとは、よもやよもやだ！」

風柱。
鬼を狩るために人生の全てを捧げていたが、無惨の消滅と共に鬼殺隊も解散。当初は自身の生きる目的であった鬼がもういないことに愕然としていたが、竈門家の人達に触れたことで自分にも最後に残された家族の事を思い出す。
鬼殺隊解散後はとある町の警羅隊となり、その町に住む弟を遠くから見守っている。尚、弟は兄の事をある男から話を聞いている為、現在は知らないふりをしているが、遠くない未来二人の兄弟が再び家族となるのは間違いないだろう。
因みに、その町の犯罪発生率は頗る低く全国区で一、二を争うほどの治安の良い町となっている。
曰く、その町には鬼より恐ろしい奴がいる。と。
「鬼殺隊の柱ではなくなったがな、俺ァ今でも、アイツの柱だ」

「に、兄ちゃん……！」

蟲柱。

鬼に両親を殺され、その復讐心から鬼殺隊へ入隊し、柱となった女性。彼女もまた首魁である無惨が消滅した事で一時は消沈こそしたが、自分のような不幸な人間が生まれなくなった事を善しとし、鬼殺隊解散後は姉妹達と共にある町への引っ越しを決意し、その後はお館様の伝とその卓越した医療の知識を以て医院を開設。町で評判な美人姉妹の医院として話題になる。

尚、引っ越しの理由は心を閉ざした妹の為、心暖かな竈門家の人達と触れ合えばもしかしたら感情を取り戻すのではないか、という考えから。

その狙いは見事的中。直向きな優しさを持つ炭治郎の心に触れたことで心を取り戻し、一人の少女となった妹に勉強を教えるのが最近の楽しみだったりする。

「さて、今日も頑張るわよ。鬼はいなくなっても、怪我をする人はいるんだから」

花柱。

本来であれば死する運命だった人物だったが、仮面の男の手によって息長らえた者。最初は分かり合える事なく鬼達が消滅したことに少しばかり落ち込むが、これ以上鬼による悲劇が起きないことを善しとし、これからは妹達と一緒に生きていく事を決意する。

蟲柱の妹の提案によりとある町へと引っ越し、竈門家の人達と知り合い、炭治郎と触れ合って心を取り戻した妹に最近では恋の後押しをするようになっている。

医療の知識が豊富な妹が医者となり、自分はその助手となっているが、最近は以前自分を助けてくれた仮面の男の情報を集めている模様。

「いつか、お話できると良いなぁ」

音柱。
元忍にして柱の一人。鬼殺隊解散後、嫁達と一緒に各地を転々とし、困っている人を助けながら気儘な暮らしをしているのだとか。
噂では、ある仮面の男の下で新たな任務に付いているとかいないとか。
「なんか、俺だけ雑じゃね？」
「嫁が三人もいるあんたなんかこれで充分じゃあ!!」

蛇柱。
その出生と生い立ちから自身を呪われていると卑下する男、恋い焦がれ、好きと言える異性がいるが己の生い立ちからそれは叶えてはならないと自らを戒めてきた。
それは、無惨が死に鬼達が消えたことで変わることはなく、鬼殺隊解散後は人知れず行方をくらませようとしていたが、ある男の必死な説得により思い止まり、自身の口の傷を完全に治すことを条件に女性に告白することを約束した。
……その後、とある町では美しい桜色の髪をした女性と幸せそうに過ごしている男の姿が目撃され、二人の傍らには何時も白い蛇が側にいたとか。
「俺、君と一緒で幸せだ」
「ちくしょおおおっ！　爆発しろおおおっ!!」

恋柱。
自分の事を好きだと正面から言ってくれた蛇柱に撃沈。好きな人と好きなものを一緒に食べられる事ができて本人曰く幸せの絶頂との事。
ただ、最近は妙にお腹が出てきた事を気にしているようで、一度元同僚が営んでいる医院に看て貰うと……更なる幸せが押し寄せてきて未来に希望を見出だしまくっている。
「私、貴方と結ばれて……幸せです」
「おじあわぜにぃぃぃぃっ!!」

水柱。
鬼殺隊解散後、恩師である元水柱の下へ戻り現在は恩師と共に過ごしている。家の近くには戦友の墓が建てられており、更には恩師に習って厄除けの仮面を作ったり、時折将棋を指したりしている。
最近は山を何故か訪れる蟲柱と話をしているが、相変わらずの口下手で何時も怒らせてばかりいる。そんな自分を変えようと、近い内に上手く出来た仮面と共に今までの詫びとお礼を伝えようとしている。
尚、近い内に本格的な棋士として活動する模様。
「胡蝶、今まで迷惑を掛けて済まない。そして、こんな俺を気にかけてくれてありがとう。つまらないものかもしれんが、これを受け取って欲しい。厄除けの仮面だ。……お前には何時までも元気でいて欲しいからな」
「きゅ、急に饒舌になってどうしたんですか冨岡さん!? 頭どうかしたんですか!?」
「やれやれ、判断が遅い。……いや、鈍いやつめ」

霞柱。
ある事件を切っ掛けに一部の記憶を失った少年剣士。人に仇なす鬼を斬ることを目的に生きてきたが、無惨と鬼の消滅という報告を機に自分のこれからに疑問を抱くようになる。
お館様からも生活の支援は惜しみ無いと言われているが、果たしてこのままで良いのかと思い、ある時を境に姿を消す。残された屋敷、彼の部屋には一通の手紙が残されていた。
『ちょっと世界を見てきます』
霞のような天才剣士はやはり霞のように消えていった。しかし、お館様は危惧していない。彼の側には誰よりも恐ろしい大黒天が付いているのだから。
「アンタと行けば、俺の記憶も戻るのかな」
「さぁ、それは分からないな。けれど、君は少し世界というものを見た方が良いのかもしれない。何せ君の名前には無限の無が刻まれてい

るのだから」
「……うん。分かった」

岩柱。
鬼殺隊最強の柱で盲目の戦士。鬼の首魁である無惨が討ち取られたという報告に虚しさよりもこれ以上鬼の犠牲者が出ないことに安堵し、涙を流した男。
無惨を倒したという男と何回か話し合う内に自分のしたいことを今一度見つめ直し、お館様へ頼み込みある町で寺子屋を開くようになる。
家も新しく建てられ、近所の三郎翁とは時折雑談する間柄となっている。鬼殺隊員として役目を終えた岩柱は得物を置き、今日も子供達の元気な声を聞いてその姿を想像して涙を流す。
「南無阿弥陀仏。嗚呼、今日も平和なり、まこと善きかな」

鬼殺隊。
鬼を狩り、無惨を討つために組織された集団。国に認められていない非公式な組織だったが、この度悲願だった鬼舞辻無惨の討伐の報告を受けて解散する事になった。
多くの隊員が鬼による被害者だった為、その者達の多くはお館様の計らいで日頃から興味を抱いていた職に就くようになる。
中には過剰な野心を持っていたり、性格人格に難のある者達がいるが、そんな者達はある男が進んで引き取っている。男の下へ集まった隊員達は鬼を狩っていた頃より色んな意味で過酷な鍛練の日々に連日悲鳴を挙げている。
「ヒィィィッ！　なんで俺がこんな目にぃ！　俺はただ、手頃な鬼を斬って楽に出世したかっただけなのにぃ！　おい獪岳！　お前ちゃんと評価されたいんだろぉぉぉっ!?　なら絶好のチャンスだろぉがぁ!?」
「うるっせぇ！　俺だってこんな事になるなんて思いもしなかったよ

！お前が何とかしろよサイコロ野郎！」
「だぁれがサイコロだ何処から出てきたサイコロ要素！　ブッ飛ばすぞ!?」
「大丈夫！　君達なら出来るさ！　人間はやれば出来る！　限界を超えてその先へ！」
「「ぎゃぁぁぁぁぁぁっ!!」」
「……うわぁ」

お館様。
鬼殺隊を束ねていた組織の長。無惨討伐の為に己の全てを捧げてきた男だが、この度その役目も無事に終える事になる。最初は他の隊員と同様に幾らか気落ちしていたが、無惨を倒したという男と話をした事でなんとか元気を取り戻した。
その後はこれまで戦ってくれた隊員達に最大限の礼と報酬を送り、彼等のその後の人生の為に仕事の斡旋に奔走する。
その後、無惨を倒した影響か体の調子も良くなってきており。病も回復。奇跡的なその快復に元蟲柱も不思議に思ったが特に悪い予兆はなく、特に気にしている様子はない。
最近では一度も抱いてやれないでいた子供達を抱き上げるため、筋トレに励んでいる。
「はぁ、はぁ、いいぞ。僕の上腕二頭筋が喜んでいる！　もう二百回いってみようか！」
「頑張れ父上――！」

ある二人の鬼。
鬼舞辻無惨が倒されたと知るのは鬼殺隊解散から数年後、筋トレに励み健康的な肉体を取り戻したお館様が鋏烏を以て伝えられ、当時一人の鬼女は愕然とした。
自分が知らない間に無惨が倒されたことに複雑な心境を抱くが、自分のような悲劇がこれ以上生まれないことに安堵する。その後、無惨を倒した者と名乗る男に人間に戻れる方法があると聞かされるが、鬼

女は自分の犯した罪を償うためにこれを辞退。
せめてその手助けになるように男は青い彼岸花を手渡し、鬼女とその片割れの少年は人間に戻れる様研究を続けた。
それから、百年ほど経過した現代の街並みで二人の仲睦まじい老夫婦が穏やかな日々を過ごしているとか。

◇

「猪突猛進！　猪突猛進!!　猪突猛進ー!!」
深い深い山の奥、がむしゃらに突き進む獣が一匹。
獣にとって全てが戦う相手であり、超えるべき敵でもあった。木を見ては木を倒そうと頭突きをし、岩を見つけては岩を砕こうと蹴りや拳を奮う。骨が折れ、肉が痛み、全身が悲鳴を上げようとも、獣は決して止まろうとはしなかった。
猪突猛進。獣は正しくその言葉を具現化したものだった。
しかし、そんな獣が一人の人間を前に立ち尽くしている。
「ほう。素晴らしい身体能力だ。その若さにしてその俊敏さ、柔軟さ、そして打たれ強さ、素直に感服したよ。猪の少年、君の名前を教えてはくれないか？」
獣の少年は震えが止まらなかった。幼き頃から山で育ち、自然と共に生きてきた少年にとって己の本能は絶対としてきた。
その本能が告げている。目の前の存在に抗うなと、敵対してはならないと、全速力で逃げ出せと。
しかし、少年は動けなかった。目の前の奇妙な存在感を放つ男に目が離せないでいた。
「俺は……俺は嘴平伊之助様だ！　テメェ、一体何者だ!!」

震えながら身構える少年に男はこれは失敬と頭を下げる。不思議な男だ。目の前でこうもデカイ隙を晒しているのに、まるで勝てる気がしない。
「これは失礼した。人に名を尋ねる時は先ずは此方から名乗るべきでしたね。――――私の名前はシュウジ、シラカワ＝シュウジと言います。単刀直入に聞こうか、嘴平伊之助君」
〝――――私と、友達にならないか？〟
この日、世界に暗躍するある秘密結社が誕生した。

その後、世界は幾度となく揺れ動く激動の時代を迎える事になる。世界恐慌、世界大戦、大災害。そんな人の歴史が動くその背後では……。
ある一人の仮面の男が介入していたという。

Ｆａｔｅ／Ｇｒａｎｄ　Ｏｒｄｅｒ＋１
その１

聖杯。それは、万能の願望器。あらゆる願望、願いを受け入れる杯。その実態は魔術師達が根源へ至るために生み出したた七人のマスターと七騎の英霊――サーヴァントが織り成す大魔術。

嘗て、その奇跡を巡って幾つもの悲劇が起きた。ある時は男女のいざこざによって、あるいは姉妹のいざこざによって、または想像すら出来なかった予期せぬ事態によって、これまで聖杯を巡っての大規模魔術儀式……通称、聖杯戦争は勝者が決まることなく終わり、勝者が誕生する事なく幕を閉じてきた。

数えて五つ。勝者も大規模魔術儀式も完了する事なく迎えた五度目の聖杯戦争、魔術師達がサーヴァントを用いて行われる殺し合いの儀式は、そんな、誰もが想像も予測も予想も出来なかった異常事態（イレギュラー）によって終息した。

たった一人の人間、魔術師でもなく、サーヴァントでもない唯の人間が正しき怒りを以て終わらせた聖杯戦争。理不尽を許さず、不条理を由としないその人間の名は――――。

◇

――――西暦２００Ｘ年。

「カルデア？」
とある高層ビルの一室、厳かな雰囲気のある部屋に呼び出された紫髪の男はその聞き慣れない単語を反芻する。
「然り。子細の程はそこの資料に纏めてある。今の内に把握しておけ」
困惑する男が言われるがままに資料に目を通してみると、その文面には細かい内容がびっしりと書き殴られている。速読は男の数少ない特技、時間を掛けずに読み終えた男はその内容に何やら少なからず違和感と僅かな嫌悪感を抱いた。
資料の内容を大雑把に纏めれば、魔術師達が建築した人理継続保障機関なる施設に自分が呼ばれているという事らしい。何故そんな胡散臭い組織に自分が呼ばれているのか、これが自分の上司である目の前の王の命令なら理解できる。
しかし、この組織の連中の元締めはアニムスフィア家なる魔術師が統括しているとのこと。何故よりにもよって魔術師に自分が呼ばれているのか、理解しがたい内容に男――――白河修司は納得出来ずに首を捻っていた。
「理解しがたい、と言った様子だな。修司」
「……正直、混乱してるよ。何で魔術師が今更俺なんかに声を掛けるんだよ？　いや、王様の命令で、それが仕事って言うのなら大人しく従うけど、ハッキリ言って嫌な予感しかしないんだよな」
修司にとって魔術師とは色んな意味で厄介な連中で、それは力の有無に限っての話ではない。連中は兎に角上からものを言うキライがあり、表舞台に出ようとしない癖に支配者を気取っているのだとか。
修司の身近にも魔術を扱う者はそれなりにいるが、何れも意味もなく他人に理不尽を押し付けようとしたり、変に上から目線でなにかを指図したりせず、対等な人間として見てくれている。
他にもエーデルフェルト家の当主なんかも割りと良い付き合い方が出来てたりする。仕事の関係上、たまに対立する事はあるが、それはあくまで仕事上での話。してやったりしてやられたり、出し抜いたり出し抜かれたりとしているが、互いに利益がある時は滞りなく手を

結ぶ事もあり、エーデルフェルト家の当主は仕事における良いライバル関係が築けていると言えるだろう。
魔術師だって人間、善い人間がいれば悪い人間がいるように魔術師の中にも真っ当な奴がいることは修司にだって分かっている。分かっているが、それでも嫌悪感が拭えることはなかった。
結局、修司が魔術師を苦手としているのは偏に聖杯を生み出した連中と総じて似たような事を考えているからだ。
《根源》詳しくは知らないが、魔術師達が魔術を探求する最大の理由であり、最終目標到達地点。そこに辿り着いた魔術師は魔法使いとなり、世界に名を刻める程の存在になれるのだとか。
根源なるモノがどれだけ凄いのかは魔術師ではない修司には分からない事だし、興味もない。ただ、その根源を目指すが故にあの血腥い聖杯戦争なる戦いが五回に渡って開催されたのもまた事実。
魔術師は己の目的を達成させるあまり周囲に気遣う事を蔑ろにする傾向が強い所がある。それが修司が魔術師を苦手としている最大の原因でもあった。
努力するのはいい、研鑽は自己を高め出来ない事を可能にし、自身の価値観を変える事にも繋がる。しかし、それを他人に干渉したり強要したりするのではまるで意味が違ってくる。
昔、王様からの命令で世界各国を放浪していた頃にそんな魔術師と戦った事がある。当時は黒魔術に傾倒したオカルト野郎による薬品テロかと思い込んでいたが、その実態は魔術の研鑽。即ち根源への挑戦であった。
そんな奴と同じ魔術師が一つの組織を率いて自分に詳しい理由の説明もなく来いと言ってくる。普通の価値観を持つ者ならば先ずは何かしらの罠があるのではないかと勘繰る事だろう。
「……因みに聞きたいんだけど、俺の《相棒》は連中には知られていないんだよね？」
「正確に言えば大多数の魔術師には、だがな。あの女も魔術による隠蔽工作は一流だが、それでも単独では限界がある。一部の雑種共に知られるのは……まぁ、避けられぬだろうよ」

第五次聖杯戦争。そこで起きた出来事は人類の歴史始まって以来の異常事態。聖杯戦争の核を担う大聖杯が謎の巨大物体によって塵一つ残さず消滅されたという大事件。

当時、聖杯戦争の開催地であった冬木市は一時騒然となり、隣町からも警察がやって来たりと色んな意味で大盛りあがりとなった。そんな大混乱となった冬木市の人達を鎮めてくれたのが、聖杯戦争の当事者の一人であり数少ない受肉したサーヴァントの一人、キャスターのクラスで現界したメディアである。

サーヴァントとは過去の英霊を聖杯によって喚び出された者達の総称。彼女もまた第五次聖杯戦争によって喚び出された一騎であり、己の叶えたい願いの為に戦った一人である。

そんな神代の魔術師である彼女の尽力により、どうにか事態を沈静化させることには成功した。王の力により願いを叶えられた彼女は現在愛する夫と共に冬木の地で第二の人生を謳歌している。

しかし、そんなメディアの安息の時間は長くは続かなかった。修司が己の相棒――《グランゾン》を使用する度に修司が属する会社と共に方々へ隠蔽工作の奔走に忙しい日々を送るはめになっている。

更に言えばここ数年、太陽系に属する各々の惑星から巨大なエネルギーを感知し、その対処に向かう度に彼女にも同様に根回しに協力して貰っている事から、修司の彼女に対する罪悪感は年々増えていく始末ですらある。

特に、最初の頃グランゾンがどう言ったモノなのか調べる為に動かした時は、色々とやらかしてしまいその度に彼女に助けを求めていた。後に知った世界の裏側とやらに行ったときは影みたいな城やデッカイ卵を抱えたデッカイ龍を見かけ、その時は驚きのあまり思わず携帯で写メを撮った程だ。

けれど、近年グランゾンの扱いにも慣れ、その上の段階であるネオへ自在になれるようになった頃にはそんな彼女の手も煩わせる事は少なくなってきた。

因みに、その頃から宇宙から変なモノがやってくるようになってきた。

木星付近からやって来た数十ｋｍの黒い巨人とか、土星辺りから侵攻してきた十字架とか、他にも海王星、天王星、冥王星といった天体から強いエネルギーが感知されると同時にグランゾンと共に対処する為に宇宙へ飛び立ち、敵対行動される度に縮退砲をブッパし、それらの出来事は地球に住まう人々に知られる事なく、色んな事が出来るようになった時は久し振りに自分の成長を実感できた。

――――閑話休題。

詰まる所、修司にはグランゾンという魔術師に知られたら色々と面倒な案件を抱えているという事。この事を何処からか入手し、それを出汁に魔術師達が無理難題を吹っ掛けてきたのではないかと、その代案に自分がそのカルデアなる私設に向かうことになったのではないのかという修司の心配に黄金の王は鼻で笑う。

「ハッ、たかが魔術師程度に弱味を握られるものかよ。仮に知られたとしても、堂々と公表するだけの事よ。この件はあくまで奴等に対する一つの貸しだ」

「貸し？」

「然り。アニムスフィアなる雑種は魔術師達の中でも存外に影響力がある輩らしくてな、この条件を呑めば今後の仕事に於いて時計塔の連中からの横槍はさせないようにすると、生意気にも言ってきたのだ」

「――――冗談だろ？　条件になってないぜ王様」

笑いながらそう口にする王に修司は眉を寄せて目に見えて不機嫌になる。何故わざわざ連中の条件を呑まなくては、これ迄だって連中が横槍を入れてきた事は多々あったし、その度に修司はそんな奴等を真っ正面から蹴散らしていった。

その嫌がらせにも似た横槍に何度時計塔なる奴等の本拠地を叩き潰したいと思った事か、以前一度だけ相棒と共に本気で実行しようとした時は姉弟子である遠坂凛と友人である衛宮士郎の嘆願により思い留まったが、それでも未だに修司は魔術師達を許した事はない。

アニムスフィアはそんな連中の一派とは無関係だとは思うが、それでもそれを条件に出されるなんて修司としては甚だ遺憾な話である。

何なら、今から時計塔を消してやろうか。今日こそ魔術界隈最後の日だと内心息巻く修司に黄金の王の冷ややかな視線が突き刺さる。
「修司、弁えろよ？」
「……ごめん。王様、ちょっと苛立ってた」
聖杯戦争から幾年か経過した今、修司もまた一人の社会人として生きている。会社という組織に属している以上、一時の感情で愚行を晒すわけにはいかない。
王からの戒めの言葉に頭を下げると黄金の王はウムと頷く。
「とは言え、お前の心中も分からなくもない。故に此方も条件を出した」
「条件？」
「ウム。聞けばこのカルデアなる施設は面白い所だと聞く。場合によっては戦闘もありえるだろうとな。もし、そんな状況に至った場合……お前は、一切の加減をしないということを条件にした」
王からの条件に修司はイマイチ理解できずにいた。何故カルデアなる施設に戦闘の必要性が出てくるのか、何事も真剣に取り組むことは昔からの王からの教育により骨身に染み付いているし、今更手を抜くなんて事はしない。
曰く、慢心は王のみに許された特権である。
王の意図を読み取れない修司が首を傾げる一方、黄金の王――英雄王ギルガメッシュはそんな臣下に笑みを浮かべる。
「ともあれ、此度の一件はお前に一任することにした。拒否権はない、精々励むのだな」
結局の所、今回の話はこれ迄の王からの無茶ぶりと大して変わりないという事に、修司は苦笑いながら受け入れた。
「まぁ、仕事だし、何より王様からの命令だ。受けるのは当然として、俺の元々の仕事の方はどうする？　一応、ある程度の引き継ぎは済ませてきたけど……」
先の聖杯戦争から月日が経ち、修司もまた立場のある人間へと成長した。現在はもう一人の友人である間桐慎二に仕事のことを任せて

いるが、彼も色々と忙しい身の上、出来る限りの負担を減らしてやりたいと具申する臣下に王はやはり不敵に笑うのだった。
「既に人員は手配してある。慎二も人を扱うのが上手い奴だからな、手広く且つ効率的に事を運ぶだろうよ」
「そっか、なら安心だ。じゃあ、これから向かえば良いのかな？　そのカルデアって所に？」
「まぁ待て、その前にお前に渡したいモノがある。……シドゥリ」
　ソファーから立ち上がり、現地へ向かおうとする修司にギルガメッシュは一度だけ待ったを掛ける。すると、向こうの別室で待機していたのであろう、王の秘書であるシドゥリがアタッシュケースを手に扉を開いて入ってきた。
　あれから数年の年月が経過したのに変わらぬ容姿で王に仕えるシドゥリ、今でも彼女は修司にとって良い姉貴分のままだった。
「修司様、どうぞ此方をお持ちください」
「これは？」
「我からの餞別よ。お前が必要となった時に開ける事を赦す」
　言外に必要ないときは決して開けるなと釘を刺してくる王に修司は再び首を傾げる。が、彼がこう言う時は必然的にそういう時が来る事を知っていた修司は、アタッシュケースを受け取りニヤリと笑う。
「成る程、厄介ごとか。それも結構面倒な……なんか久し振りだな。王様からこう言う無茶ぶりを振られるのも、この頃そういうのなかったからすっかり油断してたぜ」
「ぬかせ、言動と顔がまるで一致しておらんぞ。それと……ほれ、これも持っていけ」
　先の戦闘云々の話といい、これから向かうカルデアとは色んな意味で厄介な所のようだ。気を引き締めて行こう、そう思い改めて部屋を後にしようとする修司に王からの一つのアイテムを投げ渡される。
「何だこれ？　万華鏡？　随分古びたモノみたいたけど……」
「なに、向こうに渡る際に必要なものだからな。失くすなよ？」
　渡されたのは一本の筒、そこから覗き見えるのは宝石の様にきらびやかな万華鏡だった。何故これを渡されるのか不思議だが、どうやら

これはカルデアに向かう際に必要なアイテムらしい。これから向かう施設には魔術師が大々的に関わっているし、恐らくは御守りみたいな役目を果たしてくれるのだろう。
「さて、これで準備は整った。往くがいい白河修司、我が臣下よ。カルデアなる地にてお前の力と威光を我の名の下に存分に奮う事を赦そう」
「威光は兎も角、全力で事に当たることを約束する。王様の名前に傷を付けないよう、王様の臣下として思い切り頑張ることを誓うよ」
カルデアなる場所に何が待っているのかはまだ何も分からない。けれど、修司が出来ることは何時だって一つだ。自分に出来ることを全力でやり遂げる。聖杯戦争から幾年の月日が流れても鍛練を怠った事は一度だってない。王の会社に就職し、自分の時間を削られても、それでも今日まで修司は自己を高め続けてきた。
変わらない。そう、これからも自分がすることは何も変わらない。どんな理不尽が不条理が立ちはだかろうと、それらを打ち破る決意が修司の眼に秘められていた。
「それじゃあ王様、シドゥリさん。行ってきます」
「ウム」
「修司様のご活躍、楽しみにしてますね」
王と姉貴分に見送られ、修司は社長室を後にする。臣下の旅立ちを見送ると、シドゥリもまた秘書室へ戻っていく。ギルガメッシュのいる社長室が静謐な空間に包まれた時……。
「さて、これで貴様の目論見通りになった訳だな」
「――ウム、一先ずは礼を言っておこうか。英雄王」
そこに一人の老人がいた。なんの気配も前兆もなく、王の前に老人が現れた瞬間、世界は停止する。
「しかし、本当に良いのか？　貴様にとって奴は臣下の中でも一番のお気に入りなのだろう？　再三言ったが向こうに渡ればいつ此方に戻ってこれるか分からんのだぞ？　例え、ワシ手製の魔道具を使ったとしても、世界の壁を超えるのは容易くはないぞ」
老人は言う。世界を渡るという事はそれ即ち魔法の領域だと、世界

を渡るという事は時に世界を変えるよりも難しく、また取り返しのつかない偉業なのだと。
故に、今回で英雄王最大の臣下とはこれで別れる事になる。そう暗に語る老魔術師にやはり黄金の英雄王は鼻で笑い飛ばす。
「ハッ、随分と下に見てくれるな宝石翁。此方も言ったはずだぞ？奴にマトモな常識を当て嵌めること、それ自体が愚考であると」

今生の別れと語る翁にギルガメッシュは否定する。何故なら、送り出した臣下は己の意志と力で幾つもの不可能を踏破してきた。理不尽という壁を破壊し、不条理という名の荒波を打ち砕いていくその様は英雄王にとっての宝なのだ。
「さて、これで契約は果たされた。次は貴様の番だぞシュバインオーグ」
「……あぁ、分かっているとも。全てが終わった時、我等魔術師は正式にお主の軍門に下るとしよう。他ならぬ白河修司の為ならば、喜んでこの身を捧げよう」
「いらぬわたわけ、貴様等の忠誠などいるものか。貴様等がするべき事は我等の行く末を指をくわえて見ることだけよ」
それだけ言うと老魔術師は姿を消し、世界は色を取り戻していく。後に残された英雄王は徐に立ち上がり外界に広がる世界を見下ろしている。
すると、修司の奴が会社から出ていく姿が見えた。用意された車に乗るよう促されるも、走った方が速いと軽く断り、瞬く間にその場から立ち去っていく。
相変わらず落ち着きのない奴、呆れると同時に何処までも己を高め続ける臣下に王は満足そうに笑みを浮かべる。
「しかし、人理焼却とはな。何とも酔狂な雑種もいたものだ」
王の口から紡がれるのは限り無く近く遠い場所、本来ならば互いに干渉することはない世界の壁が、この後最悪の形で押し寄せてくる。
しかし、王には一切の悲観はなかった。例え人理焼却が為され全てが消滅しても、たった今その全てを覆す男を解放させた。既に決まり

きった結末なんぞ、見通す意味はないし、元より彼を送り出したことでその世界の行く末は見えなくなっている。
「ククク、数多の英霊達の驚く様が眼に浮かぶ。さぁ、修司よ。我が臣下よ。思うように暴れ、昂り、己の意志を示してこい」
思えば、随分と楽しく慌ただしい時間を体験した気がする。この怠惰にまみれた人の世界の中で修司という男の物語はそこいらの娯楽よりも余程楽しめたものだ。
あれから、世界は変わった。この数年で奴は軌道エレベーターや半永久機関を開発し、人員確保の為に多くの国と交渉し、貧困や紛争で困窮する人々を救ってきた。
これらは全て奴だけにできた事ではない。修司がしたことは精々人々の視線の先を、意識の矛先をほんの少しだけ変えたに過ぎない。
腹を空かせている子供には食料を与え、その見返りに勉学を習わせて自身の可能性を広げさせる。紛争に喘ぐ人がいれば喧嘩両成敗の精神で介入し、一緒に解決策を考えて実行してきた。
自分の力だけで解決するのではなく、誰かと共に立ち向かっていく事を修司は知っている。そんな彼の姿に多くの人々が感化され、立ち上がってきた。
……まぁ、その割には依然として友と呼べる者が少ないのは考えものだが。
ともあれ、偽善を偽善のままに終わらせる事はせず、偽善でもいいから進むことの意義を修司は見出だしてきた。時には誰かを助け、時には誰かに助けを求める。そんな人として当たり前の姿を修司はこれからも貫いていくだろう。
――――世界は変わったしこれからも変わっていく。つまらないと思っていた自身が今では明日の出来事に内心でワクワクしている。
「しかし、それも些か疲れた。走り回った後は適度に休むのも大事。こんなことを思わせるとはつくづく生意気な奴よ」
そう言うギルガメッシュの表情は何処までも晴れやかなモノだった。
「さて、次に会うときはどんな冒険譚が聞かされるのか、その時を楽し

みにしておくとしよう」
見えなくなった臣下の姿をいつまでも眺めつつ、黄金の王は空を見上げた。
そして。
――――――それから暫くして、世界は焼却された。

その2

α月※日

王様の命令に従い、カルデアなる施設に向かおうとすぐに行動に移した自分は、先ずは自宅で簡単な荷物を纏めることから始めた。

カルデアという施設がどういう所かは分からないが、王様から渡された資料によるとどうやら一度イギリスに向かって飛行機を乗り継ぐ必要があるみたいなので、取り敢えず必要最低限のモノだけを用意する事にした。主に下着関係で。連絡用の携帯も持ち込み、メモ帳と筆記用具、あと簡易トイレと非常食を幾つか……まぁ、大体こんなモノだろう。

昔だったらもっと少ないのだが、これから向かうのは魔術師が運営する施設だ。向こうも自分の事は知ってそうだし、嫌がらせをされた時の対処法も今の内に考えた方がいいだろう。まぁ、自分は殴る事しか出来ないんだけどね！

しかし、魔術師かぁ。こんなにも魔術というモノに触れるのは聖杯戦争以来か。あれから数年、まだまだ未熟な自分だけれど、それでもあの頃よりは遥かに強くなったと思う。〝気〟の扱いも上達したお陰で〝あの技〟に対する耐久力もだいぶ底上げされた。今の自分なら大抵の異常事態（イレギュラー）に対応出来る……筈、だといいなぁ。尤も、聖杯戦争の終盤の大空洞で見せたあの状態には未だなれないのが残念ではあるけれど。

兎に角、非常に不本意な話だが、あの聖杯戦争を経て自分は結構強くなれた。けれど、それは別に自分に限った話ではない。士郎や遠坂、慎二だってあの経験を経てそれぞれ自分なりの成長を遂げている。

士郎はなんか固有結界？ていう凄い便利な魔術を扱えるようになった。あの結界内ではどれだけ暴れても外に被害を出さずに済むらしいし、お陰で士郎と手合わせするときはいつもあの便利空間のお世話になっている。投影魔術とやらの腕前もだいぶ上がって来たみ

たいだし、この間も自分の攻撃を花弁の盾みたいなものを出して防いだり受け流したりしていた。
ただ、一度だけの攻撃で砕かれる盾っていうのは正直どうかと思ったが、まぁ士郎の魔術は剣を作ることに特化しているみたいだし、盾を出すのは相性とかで苦手なのだと思う。得意分野だけでなく、苦手なものまで克服しようとするその姿勢は素直に好感が持てる。
なんて言うと士郎に絶妙に微妙な顔をされた。何故？
そんな士郎も今は世界を渡り歩くボランティア団体の一員として働いている。確かに世界は未だ争いの絶えない所があるし、その戦争を拡大させようとする奴等も少なからずいる。しかし、そんな奴等は近い内にあらゆる手段で黙らせる予定だし、その子供達の保護支援も直に完遂される。
士郎は士郎で皆と一緒に困難を乗り越える事を覚えたみたいだし、後見人の藤村先生も海外で頑張ってる士郎に満足そうにしていた。ただ一つアイツに不満があるとするならば、未だに桜ちゃんとくっついていないことだ。それどころか最近では遠坂とばかり一緒にいることが多い気がする。
正直、色々追求したいことはあるが、今は控えておこう。帰ったら思う存分追求して桜ちゃんとくっつけさせてやる。あの子を幸せに出来るのはアイツくらいしかいないんだから。
――――――閑話休題。
ともあれ、ここ数年で自分達は自分達なりの成長を果たすことができた。士郎も遠坂も、自分も慎二も、これからも成長するし努力を重ね続けていくことだろう。いつかまた皆が揃った時、その時は同窓会を開いてもいいかもしれない。
そんな訳で、そろそろ飛行機の時間だ。走っていけば余裕な時間だが、社会人である自分は十分前行動を心構えている。ジャンヌさんやあのロリっ子に関してはまた後日書き連ねる事にしよう。
α月β日
……船酔い。もとい、飛行機酔いをした。おかしいなぁ、これま

で自分はこう言う乗り物に酔った事はないんだけど？

やっぱあれかな？　イギリスに来たときに少し摘まんだフィッシュ＆チップスが不味かったのかな。味は其処まで悪くなかったけど、安易に安いものを選んだのが駄目だったのかなぁ？　自分、食べ物には結構耐性ある方だと思ってたんだけど。

今は大分落ち着いたから日記を書けているけど……なんか、空港の様子が違う気がする。さっきカレンダーを見たら２０１５年って表示されてたし、なんか前来たときよりも内装が違っているし、俺、疲れてんのかな？

いかんいかん。しっかりしなくては、こんな様では王様の命令も果たせるどころの話ではない。深呼吸をして繰り返して落ち着きを取り戻した自分は、資料にある案内人の人を探す事にした。

――――探し人は直ぐに見付かった。老人で明らかに魔術師って感じの人だったけれど、普通に話をしてて面白い感じのお爺さんだった。

なんでもこのゼルレッチお爺さんはアルさんの後見人の人で、アルさんから色々と自分の事について話を聞いていたらしい。アルさんかぁ、あの人も中々忙しそうであまり顔を合わせていないんだよなぁ。今度会ったら自分の相棒の手に乗せて上げたいし、王様にも紹介しておきたかった。

今頃、何処にいるんだろうなぁ。なんて溢していると、今度会ったら伝えておくとゼルレッチお爺さんが賑やかに言ってくれた。いい人だ。やっぱ魔術師にもマトモな人っているんだなぁ。時計塔の魔術師って、なんか選民思想の強い奴が多いし、酷い時はＤＱＮみたいな奴もいるみたいだし。

皆、ゼルレッチお爺さんみたいな気さくな人だったらいいのにと愚痴ったら、盛大に笑われてしまった。反省。

そんなこんなで乗り継ぎの所に来た自分は現在目隠しを手渡されている。なんでもカルデアのある場所は極秘の場所に設立されてい

るらしく、目隠しは情報漏洩対策の一環だそうだ。
自分も会社に属しているから、情報の大事さは理解しているつもりだ。魔術師から手渡される代物に若干の抵抗はあるが、まぁゼルレッチさんも悪いことはしないと約束してくれたし、心持ちだけはしっかりするようにして、取り敢えず従うことにした。
……でも、ごめんな。自分、目隠しされてても自分が何処にいるのか、何処に向かっているのか、大抵解っちゃうんだ。

α月Ω日
はい。そう言う訳でカルデアにやった来ました。来た最初の感想は……なんというか、清潔？
施設に入るまで目隠しされていたから外観は確認できていないからモニター越しでしか見ていないんだけど、なんか結構近未来的。うちの会社で作った最新鋭の設備並みに整った環境になっていました。
魔術師が取り仕切る施設だって言うからもっとこう、ジメジメとしたイヤな空気が渦巻く所を想像してた。なんかごめんなさい。
最初、カルデアに入った自分が耳にしたのは機械的な声だった。恐らくは自分が何者か、確認していたのだろう。しかし驚いた。塩基配列とか生体認識とか一瞬で解析するなんて魔術というのは結構便利なものなのかもしれない。
まぁ、まだまだ甘い所はあるみたいだけどな。自分を人だとちゃんと認識出来ていないのはちょっぴり減点だ。いや、別に負け惜しみじゃないからね？
なにが『ヒトゲノム……ヒト？　ヒトとは一体……うごご』だ。ちゃんと人だわ！　それ以外のなんだというのだ！　お陰で後から来たスタッフから色々言われたり、此処まで送り届けてくれたゼルレッチさんに笑われたりしてホントに散々だった。
ともあれ、無事にカルデアまで辿り着いた自分はゼルレッチさんに別れを済ませて本当の意味でこの施設に入居する事となった。お爺さんと別れる際に誰と喋ってたの？　とスタッフの人から聞かれたけど、まぁあのゼルレッチさんは王様が認めるだけあって凄腕の魔術

師っぽいし、他の人に見つかる前に姿を消すくらい造作も無いんだろう。
そこから施設の案内人の人に付いていって数分、カルデアと言うのは随分と大規模な施設なんだなと呑気に感心していると、所長室なる部屋へと通された。
そこに待っていたのは銀髪の女の子、オルガマリー＝アニムスフィアだった。当初、カルデアの統率者はマリスビリーという男性だったのではないのかと疑問視したが、なんか深い事情がありそうだったので口にするのは止めておいた。
向こうも自分に何か違和感を感じていたみたいだけど……頭を振って姿勢を正した。
そして、そこでオルガマリーちゃんから一通り話を聞いたのだが、二年後の２０１７年に人類が滅びるからその時に備えて力を貸せ、というものだった。
……いやね。もうね、この時点で思考が停止したわ。二年後？　２０１７年？　今って２００Ｘ年じゃなかったの？　人類が滅びる？　頭に浮かぶのは疑問ばかり、呆然とする俺をオルガマリーちゃんは怪しんでいたが、取り敢えずここはグッと堪えて話を聞くことに集中した。
端的に言えば、近い内に人類が滅びるからこのカルデアでのレイシフトなるタイムマシンで時間を逆行し、原因となる特異点を修復をするとか、そんな話だった。取り敢えず体面だけは何とか平静を保てた俺は了解したと頷いておいた。
そんな自分の態度に何か気に障ったのか、オルガマリーちゃんは終始自分を睨み付け、その後、聞き捨てならない事を口にした。
『余裕そうね？　流石は英雄王の臣下ね。この程度の試練はなんて事ないわけか』
『でも、幾らあなたが凄くてもここはカルデア、魔術師である私達には逆立ちしたって敵わないんだから！』
『ちょっと、聞いてるの!?　宇宙開発技術部門統括様!?』
その役職名はまだ自分のモノではない。今の自分は会社での生活

に馴れる為、下請けや現場で働く人達の気持ちを理解できるよう謂わば社会の修行時代の真っ只中にいる。
　その役割は今から数年後、俺が真に王様から認めてもらった暁に用意されている重要な責任のある役者だ。今はまだ自分には荷が重いと敬遠もしていた役職名、シドウリさんも知らないそれを何故彼女が知っているのか、愕然としながらも問い詰める自分にオルガマリーちゃんはしどろもどろになりながら続けた。
『な、何よ。貴方の事なんてそこら辺の子供だって知っているわよ！
　魔術も知らない素人が聖杯戦争じゃないにも関わらず独学でサーヴァントを召喚し、英雄王を呼び出した稀代の怪物！　魔術世界に於いて貴方を知らない奴はいないわよ！』
『何よこれ！　自慢のつもり!?』　そう吐き捨てる彼女に俺は何も言えなくなった。その後は用意された部屋で待機する事になり、今はある程度落ち着きを取り戻したので取り敢えずこれ迄得た情報を纏めることにした。
　１．ここは２０１５年。自分がいた時代とはＸ年も後の世界。イギリスの空港で見たカレンダーは間違いじゃなかった。
　２．ここでは自分は宇宙開発技術部門統括となっている自分のいた頃はそんな役職をまだ拝命していない。今の自分はまだ、ただの平社員の筈だ。
　３．自分が聖杯戦争関係無しに王様を召喚している。聖杯の有無など関係無しにサーヴァントを召喚出来るのかは不明だが、ここでは自分が王様を召喚したとされている。
　以上の事から推測すると、非常に信じられないことだが……自分は恐らく、並行世界に渡ってしまったようだ。
　しかもただの並行世界じゃない。未来の並行世界だ。最初こそは何かのドッキリか魔術師達の質の悪い精神攻撃の類いかと考えたが、何度考えてもこの結論が一番しっくりとしてしまうのだ。
　確かに自分は魔術師とは折り合いが悪い。いっそ敬遠してるし、なんなら嫌悪すらしている。だからこれは魔術師の仕業だと断じたい所だが、生憎とそうはならなかった。

この施設にはネットワークも完備しているので少し調べたのだが、どうもオルガマリーちゃんが言っている事に嘘はなく、検索して映し出された画像には今よりも少しばかり成長した自分自身がいたからだ。その傍らには見慣れた黄金の王の姿も確認されている。

世間では自分の後見人という情報しか載せられていないから、恐らく一般の人には王様が本物のウルクの英雄王だとは知られていないのだろ。その点は元いた世界と同じだ。

それから暫くして調べていたが、やはりオルガマリーちゃんのいう通りだった。何もかもが彼女の言った通りで、何一つ間違ってはいなかった。ここの施設には自分のような魔術師でない人間も多少なりともいるらしい、後日改めて話を聞いてハッキリした時はこの疑問が決定的なモノに変わる事だろう。

……いや、もうなっている。これだけ完備された施設なのだから、その技術力の高さからこれが未来による科学技術も導入されていると思えば納得がいく。

問題は、どうして自分は未来の並行世界に跳ばされる事になったのだろう。いや、恐らく王様はこうなる事も予見した上で自分をこのカルデアに送り出したのかも知れない。そうなると、あのゼルレッチさんも王様とグルだったのかと思うと、何だか色々と辻褄が合う気がする。

そう言えば、乗り物酔いになった時も懐にお守り代わりにと閉まっておいた万華鏡が一瞬光った気がするし、万華鏡を手渡してきた時も王様はそれっぽいこと言ってた気がする。……うわ、こうして改めて思い返すと色々と伏線があったんじゃん！

……こうして文字として感情を書き殴れるのは色々と助かるな。お陰で考えも纏まったし、気持ちも前向きになった。それに、俺は王様から言われた筈だ。如何なる時も自分のするべき事を見失わず、己に出来ることを全力で尽くせと。

未来の並行世界に跳ばされるという嘗てない状況に少しナーバスになったが、こうなったら逆に気持ちも固まったというもの、取り敢えず今後の自分の方針は決まった。未来に待つ脅威とやらを打ち克

つ為に頑張るぞー！

α月Γ日

今日は色々あった。朝起きて備え付けのシャワーを浴びて、持ってきておいた服に袖を通すと、オルガマリーちゃんから呼び出しを受けた。丁度良いから昨日について謝っておこうと思い急ぎ足で所長室に向かうと、其処には数人の男女が待っていた。

何でも彼等はAチームと呼ばれるここカルデアの精鋭で、今日は彼等との顔合わせらしい。何でワザワザ自分なのだろうと疑問に思っていると、オルガマリーちゃんから説明がされた。

なんと、自分もこのAチームとやらに配属される事になったらしいのだ。理由は不明だが、オルガマリーちゃんが言うには自分ならAチームでも上手くやっていけるから、だとか。そういう割には不服そうな顔していたけど……まぁ、今はいいか。

取り敢えず自己紹介を受けると、カドック君はやや暗そうな印象な男子でオフェリアちゃんは眼帯を付けている所以外見た目は普通な女の子、ぺぺさんは……うん、いい人っぽい。

そして芥ヒナコさん。嘗ての知り合いがカルデアにいたことに驚いたが、この世界では初対面の筈なのでその平静を装いつつ彼女の自己紹介の時は黙っていた。ただ、向こうは何やら落ち着かない様子だったので、もしかしたらこの世界でも自分の事は知っているかもしれない。

そして次のデイビット君とベリル君なのだが……この二人は良く分からなかったデイビット君は純粋に寡黙な人っぽいけど、ベリル君は……うん。表面上は軟派な人かなと思うけど所々皮肉屋みたいな所があるし、時折殺気の様なモノを見せる時がある。

彼を見て此処にいるのが全員凄腕の魔術なのだと思い知る。今は共に戦う仲間だから気にしないけど、もしかしたら彼にだけは簡単に背中を見せてはいけないのかも知れない。

そして最後にキリシュタリア君だが、彼の第一印象はザ・魔術師でザ・貴族みたいな印象だった。凄い派手な衣装だし、金髪で髪長い。

生まれる時代を間違えたんじゃないかっていう位気品ある人物だった。
名乗られたから名乗り返し、その後は親睦を深めようと自分達はラウンジへ向かった。本当はオルガマリーちゃんに謝りたかったが、今日も機嫌が悪そうだったので後日に改めることにした。
その後、ラウンジにて改めて自己紹介をした後、ぺぺさんから色々と質問攻めにあった。一体どんな仕事をしているのか、何を趣味にしているのか、今後宇宙開発はどうなるのか、それっぽいことを矢継ぎ早に捲し立てられた。
何て言うか、気を遣ってくれているなぁと思った。最初はなんだこのカマ野郎と思ったけど、今は素直に土下座出来そうな位にいい人なぺぺさん。取り敢えず仕事関係は秘匿義務があるとやんわりと断り、趣味やこれからの活動については自分の願望もあった為、結構話した。
ただ、途中でカドック君から振られた『アンタは一体何が出来る』という質問に答えてからは、場が一転して白けてしまった。カドック君からは溜め息吐かれて呆れられたし、ベリル君は皮肉気味に笑われた。デイビット君とオフェリアちゃんは興味ないのか退席し、フォローしてくれたぺぺさんも若干引いていた。ヒナコさん？　自己紹介した後そそくさと自室に戻っていきましたが？　唯一最後まで話しを聞いてくれたのはキリシュタリア君だけだよ畜生。
最初の自己紹介に大コケしてしまった自分もまた大人しく自室に帰る事にした。今日は顔合わせという事でさほど予定はなく、暇だからカルデア内を彷徨いていると、一匹の珍しい小動物を見かけた。
フォウと可愛らしい鳴き声を発するその小動物は此方を見るとチベットスナギツネみたいな顔をし、自分も一瞬驚いた。しかしすぐに元の可愛らしい顔付きになると、その場にジッと見つめてくる。もしかして触ってもいいのかもと思い近付けば、コロンと寝っ転がりお腹を見せてくる。
触ってみればフカフカで暖かい感触、ここへ来て初めて体験する小動物の感触を一通り堪能し、その後はそのまま部屋へと戻ったのだっ

た。

◇

「あーあ、しくったなぁ」

自室に戻り一人ごちる修司は備え付けのベッドに横たわり、天井を見ながら先程の自分とAチームのやり取りを思い返す。

別に自分が嘘を吐いた訳ではないが、彼等にはそうは思われなかったらしい。カドックからは『ふざけてるならとっととこの件から降りろ』と怒られ、ベリルからは『流石は、有名人はユーモアも違う』と皮肉を込められて一蹴された。デイビットは特に何も言わず、オフェリアも何か語ることは無かったが、最後に見せた彼女の目は失意と呆れに満ちていた。

芥ヒナコについては結局一言も言葉を交わさないまま終わってしまった。唯一の癒しだったペペロンチーノは気にしないでとフォローしたくれたが、修司の心はいたく凹んでしまった。

部屋に戻る際に出会った小動物に幾分か癒してもらったが、それでも心の凹みはそう簡単に治りはしない。

（どうしよう王様、俺、早速凹みそうだよぉ）

知らぬわたわけ！　何て王の罵倒が聞こえた気がして仕方なくやる気を取り戻そうとベッドから起き上がり……ふと、部屋の外から人の気配が感じた。

誰だろう？　不思議に思う修司が立ち上がると同時に呼び出しの時とは違う音が鳴る。どうやらこれがインターホンの音のようだ。

不思議に思いながらも扉を開けると、そこには……。

「ごきげんよう。白河修司、さっきぶりだが君に聞きたいことがある」
「えっと……キリシュタリア……君？」
「先程聞いた君の話。実に興味深い、是非続きを聞かせてはくれないか？」
その口振り、その口調、その振る舞い。その全てが凛としており、その風格はまさに勝利者のソレ。

――しかし。

《掴もうぜ！　ドラゴン？ール！》というロゴの入ったTシャツを着て目をこれでもかと輝かせているその姿はどうしようもなく彼のキャラを崩壊させていて。
その手にはガンプラの箱が幾つか抱えられていた。
……いや、なにしてんねんお前。

その3

α月Δ日

キリシュタリアの突然の訪問から一夜明け、本日の予定を聞かされるまでもう少し時間があるらしいとの事で取り敢えず昨日の就寝する所までに起きた出来事を書いておこうと思う。

先に述べた通り、キリシュタリア＝ヴォーダイム君が自分の部屋の所にやってきた。それもなんというか……凄まじく面白い格好でやけに目をキラキラさせて手にはガンプラを持ってやって来たのだ。

もうね、カルデアに来て一番衝撃的だったよ。確か彼って時計塔の中でも群を抜いて才能ある有望ある魔術師なんだよね？　しかも彼の家って由緒正しき血統のある所の人なんでしょ？

そんなやんごとなき人間が話を聞かせて欲しいと目ェキラッキラさせてやがんの。いやね、その時程隙を晒した瞬間はなかったよ。

兎に角通路に立たせたままではアレなので取り敢えず彼を中へ通して余っている椅子に座らせて紅茶を淹れる。ここって魔術師達が集まっている施設だけあって日用品や雑貨類は勿論来客用の紅茶といった嗜好品も結構豊富に揃っているみたいなんだよね。

紅茶の淹れ方も一応シドゥリさんから一通り習っているから心得ているけど、本物の貴族様には合うのかなぁ。なんて不安に思っていたけど、割りとこのキリシュタリア君はそう言ったモノに拘りはしないらしい。紅茶を一通り飲み終えて社交辞令の礼を口にすると、待ちわびたと言わんばかりに話を始めた。

なんというか……まぁ、彼が自分の思う魔術師という類いから凄まじく外れた人種というのは理解できた。て言うかスゲェ親しみのある人間だった。俺の好きなマンガ、アニメも彼は読破したって言ってるし、特にラウンジでの話を聞いてから是非実物を見せて欲しいと言って聞かないし、キリシュタリア君が少年の心を持った青年だというのがこの時嫌と言うほど理解できた。

剰りにも見たい見たいと騒ぐ彼に仕方ないと折れた自分は少しだ

け気を解放し、その姿を見せる事にした。そしたらキリシュタリア君は余程興奮したのか、ひっきりなしに例の技の真似をするようになり、今度はあの技もやって欲しいとせがむようになってきた。
いや押しが強い。滅茶苦茶嬉しいのは分かったから、取り敢えず落ち着く様に促して紅茶を飲ませると、済まないと侘びの言葉を口にして頭を下げてきた。
まぁ、初めてあの技を出したときの自分だって危機的状況なのにも関わらずテンション爆上げしたし、彼が興奮するのも分かる。本当なら見せても良いのだが、生憎とここは屋内だし、外に出るのだってイチイチ許可をとらなければならないと聞く。此処であの技を出せばカルデアが崩壊するのは目に見えているのでその時が来るまで待っていて欲しいと言って一先ずその場はそれで終わることになった。
その後は彼が持ってきてくれたガンプラを組み立てたりするのだが、キリちゃん（本人には許可を取った）ってば随分とこう言うのには拘りを持っているらしく、専用のニッパーとか持ってたのだ。やべぇ、想像以上に面白いぞこの男。なんて思いながら談笑を続けながらガンプラを組み立て終えると、今回のガンプラはお近づきの印だと彼からプレゼントされ、その日はそれで解散となった。
明日も来ると言っていたので、自分も何か趣向品を用意してもいいのかもしれない。
因みに、彼の好きなガン？ムシリーズはＧのマスターガン？ムとドラゴンガン？ムだとか。

――――さて、あの後時間が来たので本日の予定をこなしたのだが、今日はマスター適性とレイシフト適性なる二つの素質を測るらしく、医療設備の整った医務室に通される事になった。
其処で待っていたのは医療担当のトップのＤｒ．ロマンなる人物で、何とも魔術師らしからぬ気弱だけど温厚そうな人だった。思えばカルデアに来てからそう言う如何にもな魔術師と出会ったことはないな、なんて思いながら訊ねてみると、Ｄｒ．ロマンはそれはそうだ

と笑われた。
何でもこのカルデアは前所長であるマリスビリーが世界各国を渡り歩いて現地でスカウトした人材ばかりらしく、中には技術能力が高いというだけで魔術師ではない自分と同じ一般枠の人間も参加しているとのこと。尤も、その裏では他の魔術派閥の連中に要らぬ介入をされるのを警戒していた為というらしい理由もあったりするみたいだが、それでも人を現地で採用する豪胆さに自分は思わず感心してしまった。
そんな雑談交えているといつの間にか検査は終えていて、結果の方もすぐに解析出来たようなのだが、何やらＤｒ．ロマンは難しい顔をしている。どうしたのかと訊ねると、自分にはマスター適性値とやらが恐ろしく低いらしく、これではマトモなサーヴァントと契約できるか分からないとの事、その代わりレイシフトの適性値はＡチームの中でも群を抜いて高いみたいだが、これでは令呪が刻印できないとの事らしい。
まぁ、自分には魔術回路ないみたいだしそこは別にいいんだけどね。必要になったら別の人からサーヴァント借りればいいし、別にレイシフト先には一人で行く訳じゃないんだし、そこまで悲観はしていない。少し残念な気持ちではあるけれど。
それに一番重要そうなレイシフト適性が高いのは幸いした。Ｄｒ．ロマン曰く、仮にレイシフト先で皆と別れ、何らかの理由で此方から観測出来なくなっても、意味消滅する事なく自己を保ち、尚且つ任務を続行出来るという破格の適性値らしい。
ならいいやとあっさりと受け入れる自分にＤｒ．は引いていたけど、最終的には彼も納得してくれた。その後も色々と世間話をしながら自室へ戻る準備をしていると、ふと一人の少女を見かけた。
マシュ＝キリエライト。彼女もどうやらＡチームに配属される予定の様で先の顔合わせの場では見掛けなかったから、改めて彼女に自己紹介をする事にしたのだが、何て言うか……人間味の薄い娘だった。
礼儀が無いわけではない。寧ろその逆、彼女の挨拶は終始徹頭徹尾

丁寧なモノで丁寧過ぎていっそ機械的ですらあった。戸惑う自分にそれではこれでと挨拶もそこそこに部屋の奥へ消えていく彼女に自分は自然と目線でＤｒ．に問うた。
『あの子はちょっと特殊だから……』そう言葉を濁すＤｒ．になにやら引っ掛かりを覚える。姿の見えない前所長もそうだが、このカルデアには何かキナ臭いモノが渦巻いているように感じる時がある。まぁ、魔術師が創設した施設なのだからキナ臭いのは当たり前なのかもしれないが。
ただ、部屋に戻る途中奇妙な視線を感じた。突き刺すような、ネットリと舐め回す様な嫌な視線。そこに混じった確かな悪意を感じ取った俺はすぐに振り返るけど……そこには誰もいなかった。
その後、遊びにやって来たキリちゃんと今日はぺぺさんを連れて有名アニメの劇場版を何本か観る事になった。
因みにぺぺさんって、ピッコ？さんと天？飯、あとバー？ックが好きらしい。何だろう、あまり違和感がない。

α月√日
そう言えば、ここって魔術師が深く関わる施設だったな。と、改めて実感する出来事が起きた。このカルデアなる施設には多くの人間が在住し、来る日に備えてそれぞれ準備を進めているあの国連もが認める一大組織。
人が多ければソレだけで不安要素が大きくなり、考える事がそれぞれ存在する。特にこの施設には魔術師という人の枠から外れた輩が数多く配属している。キリシュタリア君達だけじゃない、多くの魔術師が様々な思惑を抱いて此処にいる。
まぁつまり、今日はそんな魔術師の皆から自分は必要ないのでは？という魔女裁判みたいな事が起きたんだよね。ハッハッハ。いや、笑えないけどね。
どうやら昨日の適性検査の情報が何処からか漏れてしかも自分がマスター適性が絶望的に低いという部分だけがカルデア中に広まっているらしく、一部の魔術師がＡチームから外すべきだとオルガマ

リーちゃんに訴えたらしいのだ。
オルガマリーちゃんは前所長の後を継いで今は施設運営の為に頑張っているというのに、面倒な事をしてくれる奴もいたものだ。まぁ、そうなる原因となった自分が言うべき事ではないが。
その後、オルガマリーちゃんの采配で自分の実力を見聞する事になり、自分は戦闘専用のシミュレーター室へと向かった。この時用意された戦闘用の礼装なる装備を着たのだけど……何かピチピチで落ち着かないんだよね。
そんなわけでやって来たシミュレーター室。サーヴァントが使っても問題ないような頑丈で広々とした空間で戦う事になるのだが、周囲から聞こえてくる騒音が煩いこと。
やれ実力のない一般人がでしゃばるなと、やれ英雄王を呼び出したのは何かの間違いだったんだと、言いたい放題でこれでもかと投げ飛ばされる罵詈雑言の嵐に自分は怒りや呆れよりも、あぁやっぱりコイツ等は魔術師なんだなと変に安心すらしていた。
観戦室……というか、向こうのモニタールームではキリシュタリアが承諾するように頷き、隣のぺぺさんもサムズアップをしてＧｏサインを出してきた。どうやらあとの事は彼等が上手くやってくれるらしい。有難いチームメイトに内心で感謝しつつ、現れる敵性体に向き直る。
出てきたのは十数体の人形、腕を鋭利な刃にした機械人形が無機質な目で此方を睨んでいる。モニター室から聞こえてくる開始の合図、迫ってくる機械人形達を前に自分は気を解放させた。
キリちゃんに見せた時よりも少しだけ大きい闘気を纏い、機械人形達を三秒掛からず粉砕した。瞬間場の空気は静まり返り、キリちゃんとぺぺさんだけが此方を労う拍手の音が聞こえてくる。自分が見せた力はまだほんの一部でしかないが、今回の件に何か作為的なモノを感じ取った自分は取り敢えずこの程度にとどめておくことにした。
その後、無事に自分の力を示せた事で黙り込んだ魔術師達はそれ以降自分に何かを言ったりはしなかったし、時間を掛けなかったことでオルガマリーちゃんの負担も少しは減らせた事だと思う。

その後、簡単な検査を行った自分はキリちゃんと共に昼食を摂り、その後自室待機となった。

――――結局、今日はあの嫌な視線を感じる事はなかった。

◇

「イヤーンもう！　修司ってば格好いいんだから！　何なのあの速さ！　あの強さ！　もうサーヴァント顔負けじゃない！」

「もう、分かったわよぺぺ、彼の強さは充分分かったから」

「一体何回目だよこの話をするのは」

通路を歩く三人、何れも選りすぐりのＡチームである彼等彼女等は先に起きた模擬戦という名の魔女裁判を見事乗り越えて見せた修司に未だ冷めやらぬ様子で語らっていた。

と言うよりも、ぺぺロンチーノという偽名感丸出しの彼女（此処では敢えて彼女と呼ぶ）が一方的に話しているだけなのだが。

「だって凄かったじゃない。あのシュインシュインっての、昔私が見たのとまんま同じだったのよ！　テンション上がってリピートするのは当たり前じゃない！　二人だってそうでしょ？」

「いや、僕は別に……」

「わ、私は……テレビとか見たことないし……」

そう言って興味なさげに言う二人にぺぺロンチーノはお構いなしに続ける。

「なら今度一緒に観ましょ！　私も久し振りに観て嵌まっちゃったわ～！　今度工房借りて白マントとか作っちゃおうかしら！　きっと

デイビットに似合うと思うのよ～！」
「遠慮する」
「わ、私も……」
「因みに、拒否権は無いわ～！」
先を歩くペペロンチーノの言葉を戯れ言だと切り捨てながらもカドックは思い出す。先に見せた白河修司が見せた実力の一端を。
見えなかった。動きも挙動も何もかもが、まるで一瞬の出来事で、カドックが状況を認識する頃には全てが終わっていた。
修司が秒殺で破壊した機械人形は何れも魔術の力で強化された自律型の殺戮兵器だ。サーヴァントが霊基を調整する為の人形といっても普通の人間は勿論魔術師でも無策では決して相対してはならない相手だ。
なのにあの男は事も無げに、障害とすら認識せずにただの数秒で片付けてしまった。マスター適性値が低いと見下した連中も、そしてカドック自身も、恐らくは隣のオフェリアも等しく思い知った筈だ。
白河修司は強い。それも無茶苦茶とか、出鱈目といった言葉が付くほどの規格外の怪物だと。彼もまたAチームに相応しい人材なのだと。
誰もが認めざるを得なかった。他の魔術師も、映像越しで見ていたDr.ロマンも、現所長のオルガマリーも、ある工房にて待機している万能者（キャスター）も……そして、他ならぬAチームの面々も。
何せ、ベリルも頬を引き吊らせ、あの鉄仮面のデイビットですら目を開けて驚きを露にしていた。彼の反応から察するに恐らく奴は実力を隠しているのだろう、力を隠してその上で示したのだ。グゥの音も出ない程に勝利した修司、あの結果を当然のものと受け取り、何て事ないように退出するその背中にカドックは自然と手を握り締めていた。
散々心の中で罵倒していた相手が見上げるほどの強者だった事実にカドックは自分が情けないと思いながらも憤慨せずにはいられなかった。
（結局、アイツもそう言う奴って事かよ！　凡人じゃ、どうやったって

天才には敵わない。そんな事、分かっていた筈だろ！）
魔術社会は完全なる実力世界。弱いものは淘汰され、強い者だけが勝利を得る。そんな理不尽な世界の中でカドックは自身をなんの長所もない凡人と位置付けていた。
（でも、それでも俺はやると決めたんだ！　このＡチームで結果を出し、そして証明するんだ！　こんな僕でも――――）
〝――――世界は、救えるのだと〟

「……カドック？」
「っ、済まない。何でもないんだ」
思わず心がざわついてしまった事に後悔しながらカドックはオフェリアに謝罪する。暗に勘繰るなと拒絶する彼に彼女もまた追求せずに沈黙で返す。
……というか、自分達は一体何処へ向かっているのだろうか？
ペペロンチーノに半ば無理矢理連れてこられ、やって来たのはこのカルデアの施設では見慣れたマイルームが目の前にある。
まて、確かここは……扉に手を伸ばすペペロンチーノに待ったを掛けようとするが時既に遅く、プシュンと音を立てて扉は開かれる。
（確か、此処は奴の、白河修司の部屋だった筈！　クソ、こうなったらその強さの秘密を少しでも多く暴いてやる！）
此処まできたらもう自棄だと、カドックは開き直って部屋へと入る。あれだけの強さを持つ奴の事だ。きっとなにか特別な術式を施しているに違いない。それがどんなに困難で難解な術式だとしても、絶対に解明してみせると息巻いたカドック次に目にしたのは……。
「だーかーらー！　ペガサス流？拳はこうだって！」
「ちげーって！　それは天馬座を描いているんだって！」
明らかに魔術とは関係の無さそうな奇妙な動きをしている。しかも良く見ると二人ともそれぞれ天舞？輪と鳳翼？翔というロゴの入ったＴシャツを着ていたりと、明らかに想像とは異なる姿、特にキリシュタリアの格好に絶句したカドックとオフェリアはそのまま思考停止に至る。

「あ、良いところに来てくれたぺぺ！　この分からず屋に言ってくれ！　ペガサスの動きはこうだって！」
「ぺぺさん！　コイツにガツンと言ってくれ！　コイツ分かってねぇよ！」
「全く、二人とも子供なんだから。折角人が勝利の宴に参加しようってのに――――ペガサスの動きはこう！　私この間全部観たんだから！　間違いないんだから！」
「なにおう!?　ならば上映会じゃあ！」
「いい度胸じゃない！　今夜は寝かせないわよ！」
「今夜も徹夜だね！　分かるとも！」
「な、な、な、……」
「何を聖闘？星矢談義してるんだお前等アァァァッ!!??」
この日、Ａチームに於けるカドック＝ゼムルプスの役割が決定した。

その4

α月√日（さっきの続き）

いやー、今日は久し振りにはっちゃけたわ。まさか聖闘？星矢の話で彼処まで盛り上がるとは思っても見なかったわ。士郎も慎二もアニメはあまり見ないみたいだし、こう言う話題で話す時はあんまり無かったから、ついつい夜遅くまで騒いでしまった。幸いなことにこってプライベートを尊重する作りになっているのか結構な防音措置もされているらしく、あんなに騒いでも誰も文句を言いに来る人はいなかった。

しかも途中ぺぺさんがカドック君とオフェリアちゃんを連れて遊びに来たから話はドンドン弾んでいく。っーかぺぺさんや、いきなり女の子をこんな男ばかりの部屋に呼んじゃ駄目でしょうよ。ご禁制ですよご禁制、まぁぺぺさんが終始ガードしていたから別に良いけどさ、今度女子を呼びに来る時は予め話しておいて欲しいよね。サプライズ？　やかましいわ。

しかし、まさかカドック君にあんなに見事なツッコミが出来るなんて思わなかった。自分もツッコミの腕はそこそこあると自負しているが、彼のソレには到底及ばない。キリシュタリアの適度に交えてくるボケに対して悉く鋭く返すものだからその才能は最早疑いようがない。

というか、その能力の高さにキリちゃん悔しそうにしてたっけ。終いには『カドックばかりズルい』なんて拗ねる位だ。結局その日は上映会は途中で終了、オフェリアちゃんという女子がいる以上あまり無茶は出来ないという事でお開きになった。

皆がそれぞれの自室に戻ろうとする最中、ぺぺさんにある質問をされたのだが……これが良く分からなかった。

『どうして貴方はそこまで強くなれたの？』

普段のぺぺさんとは違い真剣な様子だったこの人に自分は戸惑いながらも返した。

『強くなろうとして強くなったんじゃない。ただ強くなりたいと願っただけだ』

あの日、燃え盛る炎の中で王様と出会えたから今の自分がいる。父と母に生かされ、その果てに今がある。自分から大事なものを奪う理不尽が許せない、自分から大切な人を奪う不条理が許せない。降り掛かる絶望をはね除ける為、多くの人の手を借りて、その上で自分は今ここにいる。

王や皆からの期待、そう言ったものに応えたいというのも勿論あるが、やはり一番の理由は自分がそうありたいと心から願っているから、だからこそ自分はここまでこれたのだと思う。

そんな自分の言葉にぺぺさんは納得してくれたのか、先程までの神妙な雰囲気は何処へやら、次の瞬間にはいつものぺぺさんへと戻り、賑かな笑みを浮かべて自室へ戻っていった。

……やっぱ、ぺぺさんも魔術師なんだなぁ。表情こそは穏やかで笑顔のままだったけど、まるで考えが読めなかったんだもの。社会に出て自分なりに人の機敏ってのには読めると思ったんだけど、ああいうのを目の当たりにすると自信なくすわぁ。まぁ、ああいう事ができるのはぺぺさんの人生経験故なのだろうけど。

キリシュタリアも帰ったし、明日も何かしら検証やらなにやらをやるみたいだし、自分ももう寝るとしよう。

α月＊日

魔術師って、ある意味で分かりやすい人種なんだなぁと、朝に身支度をして通路を歩く際に最初にそんな事を思った。

昨日、自分の実力を知る為に半ば魔女裁判気味に行われた模擬戦はどうやら思っていた以上に効果があったらしく、あれほど自分に罵詈雑言の嵐を向けてきた他のチームの魔術師達は揃いも揃って何も言わなくなっていた。別に力をひけらかすつもりはなかったし、同じ危機に立ち向かう仲間なのだから、そんなに怯えた目で見なくてもいいだろうに。

そんな呆れにも似た感情を抱きながらカルデアの憩いの場の一つ、

大食堂へ訪れるとここ数日で聞き慣れた声が投げ掛けられてきた。ぺぺさんだった。
どうやら自分が来るのを待っていてくれたらしい。手を上げてこっちよー！と呼び掛けてくれるぺぺさんを有り難く思いながら朝食を乗せたトレイを持って近付くと、意外な人物も同席していた。
デイビット君だ。いつも無表情でぺぺさん以上に考えの読めない彼が、どういう訳か自分と同席する事になった。てっきり、最初の自己紹介でカドック君やオフェリアちゃんと同様に呆れられているのかと思ったけど、なんか自分に聞きたいことがあるらしい。
その聞きたい事と言うのが、自分が本当に此処へは一人で来たのか。というのだが……正直、自分には彼の質問の意図するモノが今一つ理解できなかった。
もしかしたらアレかな？　カルデアのスタッフを始めとした人材の多くが前所長のマリスビリーがスカウトした人達らしいから、そう言う意味で聞いているのかな？
だとしたら答えは多分ＮＯだ。自分は確かにカルデアからの要請でこの施設へやって来たが、別にマリスビリーと直接面識がある訳ではない。ただそういう話があるから出頭しろという王様の命令だから此処へ来たのだし……そもそも、この世界のマリスビリーがこの世界の自分とどういう接点があるのかすら分からないのだ。
それを言えばじゃあ何で出頭の命令が来てるんだよと言うそもそもの話になるのだが、それこそ自分には分からないことだ。王様が何らかの手段で並行世界と繋がりを持ったのかもしれないし、ゼルレッチのお爺さんなら何か知っているかもしれないけど、今ではもう分からない事だ。
だからデイビット君にはカルデアからの出頭命令で来たと、あるがままに答えることで納得してもらう事にした。デイビット君もそれで納得したのか、分かったと一言だけ呟いて朝食を食べ終えるとさっさと自室へ戻っていってしまった。
しかし、何だって彼はそんな事を聞くのだろう？　一瞬不思議に思ったが……デイビット君って、もしかして普段は重力の渦の中に

隠している相棒の事に気付いてる？　……ま、まさかねぇ？
そんでもってその後はＡチームの皆からそれぞれ魔術に関する大まかな勉強をする事になったのだが……いやぁもう訳わかんないね。ルーン文字とか陰陽道の事なら何となく理解できるけど、キリシュタリアの扱う占星術が全く意味分からなかった。
こんな複雑で訳の分からないモノ、良く扱えるなぁと感心すると、君だけには言われたくないと笑顔で返された。なんでさ。
その後、取り敢えず自分には魔術の才能が殆んどない事が明かされただけに終わり、この日は解散となった。
俺、此処へ来て碌に活躍してないんだけど、このままでいいんかねぇ？　いや、意外と居心地が良いからそんな気にしてないんだけどね。

δ月∂日
今日、凄い人に出会った。取り敢えず今日も今日とで検査やらなにやらと色々とこなして、一通りやり終えた自分が施設内部の把握をする為に散策していたんだけど、何となく気になった部屋へ入ってみると、其処には絶世の美女がいたのだ。
て言うかモナ・リザがいた。あの世界的にも有名な絵と瓜二つな女性にその時の自分は酷く驚いた。するとその女性は自分の反応に大層満足したのか、ケラケラと笑いながら自己紹介をした。
レオナルド・ダ・ヴィンチ　かの有名な万能の才人として知られる人物が、まさかのモナ・リザの姿でこの部屋――――工房に居を構えていたのである。
何でもこの人はカルデアでのサーヴァントとして召喚されたらしく、（システム・フェイトだっけ？）諸々の事情で在籍し、カルデアの為に一肌脱ぐことにしたらしい。
そんな彼女に自分も自己紹介をと思ったが、どうやら一昨日の一件で自分の事は知っていたらしく、その必要はないとやんわり断られた。
そして一番気になっていた姿について聞いてみると『人は誰だって

より美しいモノに惹かれるモノだろ？』なんて分かるような分からないような曖昧な答えを返される。つまりなんだ。このダ・ヴィンチちゃんはモナ・リザの姿に心酔するあまり、あの姿で召喚されたらしいのだが……うん。まぁ、人の趣味趣向は人それぞれだからね、他人が口出すのは止めておこう。

そうしてダ・ヴィンチちゃんと色々と話す内に言われたのだが、もし何か造って欲しいモノがあれば遠慮なく言って欲しいと言われたのだが、正直自分にはあまり必要とするものはない。精々が鍛練や戦闘の時に着るいつもの胴着を忘れていたのが悔しかった位で……もしかして、このダ・ヴィンチちゃんならそう言う服も作れたりするのだろうか？

なら一つ仕立てて欲しいモノがあると頼もうとした所、キリシュタリアがカドックと一緒にやって来た。というか、何やら凄い剣幕でキリシュタリアを引き留めようとしていた。

何でもこのキリちゃん、自分が手に持つ杖を某リリカルでマジカルな変形機能搭載型の魔導ステッキに改造して欲しいと依頼しに来たらしい。いやなにしてんねんお前。

お前のその杖って大事なモノじゃないんかい。先祖代々から伝わる一子相伝の杖とかじゃないんかい？　と、自分なりに至極当然の質問をすると、だからこそ次代の後継者の為に新しい仕様にしてやるのさと正論（？）をぶつけてきた。

カドック君はしきりに止めろと叫んでいるが、キリシュタリアはそのつもりはないらしい。しかもダ・ヴィンチちゃんも面白そうだと悪ノリするものだからもう手が付けられない。

取り敢えず自分はこの場をカドック君に任せて食堂で麻婆豆腐を食べることにした。今日の麻婆はいつもよりちょっと美味しかったです。

その後、工房の前を通り掛かるとオルガマリーちゃんとＤｒ．ロマンの二人に正座させられて説教食らってるダ・ヴィンチちゃんとキリちゃんを見た気がしたけど……うん、気の所為だな。

稀代の万能者と魔術師がたん瘤作ってる姿なんてなかったんや。

因みにその後、カドック君の密告により自分も同罪であると見なされてオルガマリーちゃんから説教食らいました。おのれカドックゥ！

δ月α日

今日は久し振りに遭遇したフォウ君を愛でる一日でした。このフォウ君、フォウと鳴くから勝手に自分がそう呼んでいるけど、この小動物って本当に不思議な生き物でこれ迄自分が目撃してきたどの生命体とも全く異なった生き物なのだ。

犬や猫にしては小柄だし、リスにしては色々と違いすぎている。そう言えば魔術世界には幻想種なる生物もいるみたいだし、この小動物もその類いの生き物なのかな？　なんて思いながらもお腹をコチョコチョと擽っていると、マシュちゃんがやって来て驚いた表情をしていた。

何でもこのフォウ君、人に対して結構な警戒心の強い生き物らしく、自分以外にこうして無防備な姿を晒すことは殆んどないと言う。

それはそれとしてどうしてマシュちゃんは此処にいるのだろう？

確か彼女ってＤｒ．ロマンが担当している娘なんだよね？　最初にあったときも医務室だったし、何か病気を抱えたりしているのだろうか？

とはいえ、年下の女の子にそんなズケズケとモノを言うのはアレなので、適当に話を合わせることにした。何処かへ行くのかと訊ねると、どうやらマシュちゃんは図書室に用事があるらしいので、自分も何処にあるのか把握したかったし、折角だからと自分も其所へご同行願うことにした。

最初は拒絶されるかと思ったけど、意外とマシュちゃんは受け入れてくれた。というより、その方が効率的ですねと同意する感じだった。……なんと言うか、色々と心配になる娘である。

と言うか、図書室なんてものがあったのねここ。この施設ってデカイ割りに案内板が少ないから未だに何処に何があるか把握仕切れていないスタッフがいるくらいだし、何なら自分も一度だけ迷った程

だ。
フォウ君を頭に乗せて図書室へ向かうと、そこはビッシリと本に囲まれた所に出た。いや、図書室というより図書館じゃねここ？
そして取り敢えず目的の場所に送り届けると、フォウ君を彼女に預けて自分はその場を後にしようとした時、ふと気配を感じた。
振り返ると、先程自分達が通ってきた所に物腰柔らかそうな男が立っていた。モスグリーンのタキシードとシルクハットを着用した如何にも紳士然とした男は自らをレフ＝ライノールと名乗った。
どうやらこの男はこのカルデアに於ける重要なシステムを造り上げた人物でＤｒ．ロマンとは学友の間柄だったらしい。
口調や態度こそは魔術師とは思えない物腰の柔らかい人だったが……何故だろう。俺には彼の笑顔が別の何かを隠す為の作為的なモノに見えて仕方がなかった。
ぺぺさんやキリシュタリアの様な心から楽しむ笑顔とも、ベリル君やカドック君の様な皮肉の混じった嘲笑とも違う。まるで此方を見ているようで見ていないその笑顔にどうしても俺は違和感を拭えなかった。
故に、失礼なことだと自覚しながら訊ねた。一体何に苛ついているんだと。
すると、奴の顔から一瞬だけ表情が消えた。まるで激情を吹き起こす前触れの様な貌、この時俺は理解した。先に俺に向けていた嫌な視線の主はこいつなのだと。
何故そんな奴が此処にいるのか。自分に？　それとも図書館にいるマシュちゃんに？　魔術師が何を考えているのかは知らないが、敵対するのなら容赦はしないと、自然と俺の体も戦闘体勢に移しつつあった。
そんな時だ。偶々図書館に来ていたらしい芥ヒナコさんが『なにしてんの？』と声を掛けてくれたお陰で場の空気は一気に弛緩されていき、緊張も適度に解れていった。
その後はお互い何も言うことなく、軽く挨拶だけを済ませてレフ＝ライノールと別れた後、俺はヒナコさんに奴について訊ねた。

けれど、彼女も奴についてはそんなに詳しくはなく、自分と同じＤｒ．の学友という事以外知らないらしい。この分だとキリシュタリア達も同様かなと一先ず奴に対する深追いは止めておくことにした。

そして、一応助け船を出してくれたヒナコさんに何かお礼をしてやりたかったのだが、そんなものはいらないと一蹴されてしまった。ならせめてと今人気のあるあのアニメの公式続編の映画をオススメしておくことにした。新たに出てきた破壊神という新キャラ、キリシュタリアやぺぺさん、カドック君にはイマイチ受けが悪かったけど、ヒナコさん独身ＯＬみたいな所あるし（普通に失礼）きっと猫とか好きそうだよな。なんて理由で趣味を押しつけておいた。

まぁ暇潰し程度に軽く観てくれればいいし、興味が無ければそれでいい。これで話のネタの一つにでもなればいいやと思いつつ今日はこれで終わろうと思う。

ＰＳ．

俺の部屋、最近密度高くね？　最初はキリシュタリアだけだったのにぺぺさんも来るし、最近はＤｒ．も来るようになった。どうやら彼、プリ？ユアが好きらしい。特に初代。

何でもマギマリとやらがプリキュアを推してて、それに興味を持って覗いてみたら見事に嵌まったらしい。ここの人、日本のサブカルチャーに嵌まりすぎじゃない？

◇

――――翌日。

「なっ！　正気か芥ヒナコ！　どうして君ほどの聡明な者があんなポッとでの新キャラに心酔するんだ!?」

「ハッ、負け犬風情が吼えるんじゃないわよ。所詮あの主人公は三下。

イケボでナイスガイな破壊神様に勝てる道理はないのよ！　身の程を知りなさい」
「くっ、それでも、それでも私は信じてる！　きっと彼は、私達の偉大な主人公は、きっといつか破壊神だって超えてみせる筈だ！」
「不様ねぇキリシュタリア、自分が信じてたモノに裏切られて……ねぇどんな気持ち？　ねぇねぇどんな気持ち？」
「く、くぅぅぅ!!」
　僕達Ａチームのクール眼鏡女子は一晩の内に自身のキャラをかなぐり捨てて、ビ？ス様の大ファンになってました。
「キリシュタリアといい芥ヒナコといい、この映像媒体にはそこまでの強制力があるのか？　いや、白河修司という前例がある以上、俺も一度目を通すべきか？」
「止めてくれデイビット。お前までそっちに行かれたらいよいよ僕は挫けそうだ。そしてペペとベリルゥ！　アンタ達も何時までも笑ってないで止めるの手伝え！　オフェリアも何時までも現実から目を背けてるな！」
「〜〜〜〜〜〜〜っ!!!!」バンバンッ（笑いすぎて声が出ない）
「私は、私は輝きを見ない……見たくなかった」
　現在自分達はラウンジにいるのだけど……まぁカオス。普段なら絶対に有り得なかったＡチームの光景に他の魔術師達も呆然。これが人理を守護するトップチームなのだからまぁそうなるのも分からなくもない。
　けれど、今日の自分達は昨日の自分達よりも少しだけ距離が縮められた気がする。バラバラだった思惑が表面上だけでも固まるのなら、こう言う日常も悪くはない筈だ。
　そう思うだろ？　アンタも（唐突のスクラ？ド）
　ピンポンパンポーン。
『白河修司、大事な話があるから今すぐ所長室に来なさい！　５秒以内に来なかったら八つ裂きにしてやるんだから！』
「なんで!?」

その5

δ月γ日

オルガマリーちゃんの実に理不尽な説教から一夜明け、今日の自分はAチームの一人と組んでシミュレーターにてサバイバル実習訓練が行われた。

レイシフト先で待っているのは何も文明栄えた人の都市だけじゃない。寧ろ当時の年代を考えれば何もない荒野や猛獣が多く生息する密林の中に放り込まれる可能性だってある。人理を守る前に現地トラブルで命を落とすのは控えめに言って最悪なので、現地での適応性と順応性を磨く為のサバイバル訓練なのだとか。因みに、監修はオルガマリーちゃんとぺぺさんが担当したらしい。

自分が組んだのはオフェリアちゃん。Aチームの中でも儚げで可憐な少女風な彼女を最初こそは守ってやらないと思ってたのだが、どうやら彼女にはその様な気遣いは不要だったのだと思い知る。

自分達がやって来たのは密林で、拠点や食料の調達をどうするかと相談しようとした所、トントン拍子に彼女はそそくさと目的事項を片付けてしまう。自分も食料を調達しようと近くの虎擬きとか、ニワトリみたいな生物を狩ったりしたが、オフェリアちゃんは少食なのか、あまり食べようとしない。というかシミュレーターなので、実際は食べることは出来ない。物凄い質感と現実味のあるのに、これが実はデータの塊だと言うのだから凄いよなぁ。

魔術と科学の融合具合に感心しながら状況を進めていくと、とある敵性個体が自分達の前に現れた。

デッカイ蛇。人一人位余裕で呑み込めそうな巨大な蛇にオフェリアちゃんは驚いた様子だった。後から聞いた話だけど、どうやらこの時のシミュレーターに何らかの不具合があったらしく、オフェリアちゃんも外部との通信が切れていたと言っていたから、割りとこの時の状況は危なかったらしいのだ。

相手はシミュレーター、データの塊とはいえ魔術と科学の力で再現

された怪物。個体名は……ヒュドラだっけ？　ゲームや漫画で良く見かけるモンスター、コイツの毒はシミュレーターと言えど危険なモノで本来ならばサーヴァントが召喚されてから初めて試される難易度のモノなのだとか。

仕方ないので自分はオフェリアちゃんを抱えながら逃走。お姫様抱っこじゃないよ？　そんな暇ないし、何より両手が空いてないんじゃいざという時の対処ができない。所謂お米様抱っ子のスタイルで森林を蹴散らしながら追ってくるヒュドラ、跳躍し、此方を追うことで全容が明らかになった大蛇に向けて気で作った円盤を投擲する。そう、気円斬である。

スパンと綺麗に切り裂かれたヒュドラはそのまま崩れ落ちる様に霧散していった。アレだけの大きな蛇なのだから栄養価の高そうな食材になりそうなのに勿体ない。なんて愚痴ると、流石に悪食過ぎない？　と呆れられた。

その後は特に問題なく訓練は進み、本日の成果は満点の評価だったようだ。特にぺぺさん辺りは気円斬に興奮したのか、キリシュタリアに自慢してやろうと声高に叫んでいる。

その後の事後処理はぺぺさんやスタッフの皆さんに任せる事になり、自分は着替えてラウンジに向かった。すると、其処には奇遇にオフェリアちゃんもいたので反省会も兼ねて話をする事にしたのだが、何故かオフェリアちゃんからは別の話ばかり振られてしまった。

どうして自分がキリシュタリアと意気投合出来ているのか、魔術師でもないのに魔術師と共にいられるのか、どうして其処まで強くいられるのか等々、いつぞやのぺぺさんに似た質問を投げ掛けられた。

前にぺぺさんにも言ったかもしれないが、別に自分は強く在ろうとしている訳ではない。ただ、負けたくないから結果的にそう見えているだけ、理不尽や不条理に屈したり、負かされたままでいるのが嫌だから鍛えただけ。

自分が魔術師と一緒にいても平気なのは……まぁ、簡単に言えば慣れである。実際自分には何人か知り合いに魔術師いるし、中には神代の魔術師という現在は奥様は魔女を地でやってる人もいる。今更魔

術師にビビるのも……ねぇ？

キリシュタリアは……うん、あんなに親しみのある魔術師だったとは自分も予想だに出来なかった。やたら日本のサブカルチャーに明るいし、ガンプラ作る際はマイニッパーを持ってくる位だ。それでいて公の時はビシッとしているのだから、色んな意味で凄いやつである。

と、一応一通り質問に応えるとオフェリアちゃんは一言『羨ましい』と返され、次いで『私は日曜日が嫌いなの』と意味深な言葉を聞かされた。はて？　日曜日が嫌いとは一体どういう事なのか？

アレかな？　日曜日の次はまた月曜日が始まって繰り返される学校の登校や会社への出勤に嫌になっている学生や社会人……的な意味合いの事なのかな？　だとすればオフェリアちゃんってサ？エさんとか苦手なタイプ？　個人的には彼女にはワン？ースを押したかったんだけど、日曜日が嫌いなオフェリアちゃんにアラバスタ編は酷かもしれない。

返答に困っている自分にオフェリアちゃんはごめんなさいと微笑みながら言ってきた。多分、今言った日曜日が嫌い云々な話は忘れて欲しいという事なのだろう。席から立ち上がり自室に戻る彼女に困ったことがあるなら何でも言えと口にすると、やはり彼女は困ったような笑みを浮かべて『その時はお願いね』と達観した様で言うのだった。

日曜日が嫌いか……いつか、オフェリアちゃんの悩みが解消出来ればいいな。

ＰＳ．

そう言えば、今日の訓練で起きたトラブル。結局原因は何だったのか、未だに原因は分かっていないらしい。高難易度のクエストは特殊な暗号鍵で施錠（ロック）されているらしいし、外部の人間が何かをしたという形跡もない。

オルガマリーちゃんはその事に酷く憤慨していたみたいだけど、取り敢えず今は様子を見るしかないとのこと。一先ず自分達が無事だった事を良しとし、原因究明はまた後日という事でその場はそれで

終わったらしい。
　因みに、憤るオルガマリーちゃんを説得したのが……レフ＝ライノールだったらしい。オルガマリーちゃんは彼に心を許しているのか、いつもそのレフ某がくると、ベッタリと隣にいるのだとか。
　レフ＝ライノール……かぁ。

「おのれ、まだ生き残ったのか。忌々しい奴め、まるでゴキブリの様な人間だ。吐き気がする。大人しくここで死んでおけばまだ絶望せずに済むというのに、つくづく人間というのは度し難いな」
「……どうやら、予定を少しばかり繰り上げる必要がありそうだ」

δ月※日
　今日は、何だか皆がピリピリしていた。他の魔術師達は勿論、カルデアのスタッフ、カドック君やオフェリアちゃんも何処か緊張している様子でオルガマリーちゃんは普段の三割増しにピリピリしていた。
　食堂に休憩がてらの食事を摂りに来たＤｒ．ロマンに聞くと。曰く、どうやら明日いよいよ人理修復の為のレイシフトが開始されるので、それが原因で皆ピリピリしているのだとか。
　ぺぺさんやデイビット君はいつも通りにしていたから自分も気にしていなかったが、どうやら人理修復に挑むと言うのは歴史そのものへの挑戦という意味もあるしく、場合によっては歴史そのものと敵対する可能性もある危険なモノであって、その辺りのリスクを加味して皆少々ナーバスになっている。
　同席していた技術師の人も顔色悪くしていた為、これ以上の緊迫し

た状況は却って士気に影響が出かねない。そう思い自分は王様から教わったある屁理屈を語ることにした。
曰く、世界を掛けた戦いに要らぬ緊張こそ無意味。　何故なら負ければ世界は滅ぶのだから、必然的に責める者もまたいない。故に世界の危機を存分に楽しむ事こそが人が最大の力を奮えるに足る。という。
Ｄｒ．ロマンは酷い屁理屈だと苦笑うが、技術師の人は多少気が楽になったのか、先程よりも少し顔色が良くなっていた。我ながら酷い理屈だと思うが、実際その通りなのだからバカに出来ない。王様なりの応援の仕方に当時の自分も何とも言えなくなっていたっけ。
その後、食事も終えて本日の業務と報告書の提出も終わり、後は部屋でその時が来るまで待機しておこうと通路を歩いていた時、背後からオルガマリーちゃんに呼び止められた。
食堂での台詞はどういう意味だと凄まじい怒気を醸し出しながら訊ねてくる彼女に、素直にそのままの意味だと伝えると、彼女はこれ迄見たことのないヒステリックさを見せてきた。
貴方は強いからそんな呑気に言えるのよ。とか、勝手なことばかり言わないでとか、自分が来てから頼みのＡチームは可笑しくなったとか、そんな超然とした自分が大嫌いとか、その後も色々と彼女から罵詈雑言の嵐を感情のまま投げ付けられた。
何というか、この時の彼女はまるで年相応の女の子で、今まで塞き止められていた感情があるがままに溢れ出している彼女に何故か俺は放っておく事が出来なかった。
だからだろうか、どんなに口汚く罵られても彼女から離れようとは思わなかった。
思えば、一つの組織を一人の少女が抱え込む事、それ事態が普通じゃないのだ。アニムスフィア家がどれだけ優れた魔術師を輩出してきたのかは知らないが、オルガマリーちゃんも魔術師である前に一人の女の子、そんな彼女に全ての責任を押し付けていたのは……他ならぬ自分達だ。
気付いたら、彼女の頭に手を乗せていた。涙を流しながら憤慨する

彼女に、哀れみではなく感謝の気持ちを込めて自分なりの言葉で激励した。
まぁその結果、脇腹を殴られて終わったんだけどね！　いやぁ、やはり年頃の娘の頭をいきなり撫でるのは良くなかったよね！　自分なりにエールを送ったけど全くの逆効果だよ畜生！
何処でスタンバっていたのか途中からやってきたぺぺさんにもないわーって笑いながらダメ出しされたし、本当今日は災難だったわへへーん！
……あぁ、明日が憂鬱だぁ。

――私にとって白河修司は、魔術の理解もないただの素人としか見ていなかった。国連からの直々の命令状、これに従わないのならばカルデアは没収するという分かりやすい脅しを添えての指示に私は従う他無かった。
自分の無力さを呪いながら彼を受け入れ、僅かでも無能さを晒せばすぐにでもカルデアから叩き出すつもりだったのに、規格外に過ぎる奴の強さに私も他の魔術師達も全員揃いも揃って黙り込んでいた。
奴は、サーヴァントを使役できない代わりにサーヴァントと同等の力を有している。その事実が奴をAチームに在籍させる証明になってしまった。
それからも奴の影響でAチームはおかしくなっていくし、私が唯一心の拠り所にしていたレフも、最近あまり姿を見せなくなっていた。
不安ばかりが募っていていよいよ初の実戦を明日に控えた今日、心を落ち着かせようと施設を散策していた私に最悪の言葉が耳に入ってきた。
『そんなに気を張る必要はないさ。これは俺の王さ――保護者の言葉なんだけど、世界を掛けた戦いに必要以上に緊張する必要は無いん

だってさ。必要なのはやってやるって開き直りにも似た気持ち、どうせ人理とやらが滅んだら人類も終わるんでしょ？　と言うことは失敗したことを責める人間もいないんだから、気に病む必要は無いって話』

その言葉は私にとって何よりも許されざるモノだった。責める人間がいない？　だったら気にする必要もない？　ふざけるな、なら失敗を誰よりも恐れている私は、誰よりも滑稽な存在という事になる。

これ迄の自分の努力を土足で踏みにじられた。怒りでこれ迄塞き止めていた感情が一気に噴き出してきた私は、奴に全てを叩き付けた。

『ふざけないでよ！　何であんたなんかにあんなことを言われなきゃいけないの!?　私がいつも、どれだけ必死になってると思ってるの！　誰も責める者がいない？　私が許せないわよ！　私は、お父様に託されたの！　そう受け取ったの！　なのに、なのに！　何であんたみたいなのに軽く扱われなきゃならないのよ！』

魔術師ならばあってはならない無様な姿だった。誰かに認めて欲しくて、父に認めて欲しくて、がむしゃらに頑張って……なのに、それでも誰も私を認めてくれなくて。

〝これくらい出来て当たり前〟

〝そんなことでいちいち呼び立てるな〟

〝お前のその成果とやらを聞くに足るメリットがあるのか？〟

だから、私は――――。

「そうか、凄い奴なんだな。君は」

「――――へ？」

気付けば、私の頭には暖かい温もりある感触があった。

「そうだよな。一人でこの施設を支えて、頑張ってない訳が無かったんだよな。ごめんな、気付いてやれなくて。ありがとうな。今まで頑

張ってくれて」
それは、憐れみの言葉じゃなかった。それは、これまで努力を重ねてきたオルガマリーに対しての心からの謝罪と感謝の言葉だった。
頭には嘗て一度たりとも感じたことのない感触。人の温もりの感触にオルガマリーは一瞬、自分が何をされているのか理解できなかった。
「だからさ、これからは俺も頑張るからさ。何でも言ってくれよ、そりゃあ、魔術師じゃない俺に出来ることなんてたかが知れてるけどさ、こう見えて腕っぷしにはそこそこ自信があるんだ。だからさ――」
『もう、自分を追い詰めるのは止めておこう』
気付けば、私は奴の手を振りほどき、力一杯込めた拳を脇腹に叩き付けていた。嘘でしょ、身体強化で固めたのに殴った拳の方が痛いとか、あの男の体は鋼か何かで出来ているのか。
――本当に、ふざけた男だった。こっちの気持ちも考えないで土足に踏み込んで勝手なことを言うだけ言って、あまつさえこの私の、私の頭を撫でてきた！
悔しい。悔しい。悔しい。悔しい！　あれだけ好き勝手言われたのに何も言い返さなかった自分が、誰にもされなかった事をされた自分が。
何より、彼の言葉に〝嬉しい〟と感じてしまった自分が、何よりも悔しくて仕方がなかった。

◇

――――翌日。
「あー、もうすぐミーティングかぁ。オルガマリーちゃん、昨日の事忘れてないかなぁ。無理っぽいよなぁ」
すっかり昨日の出来事で落ち込んでいた修司はミーティングが行われる時間のギリギリまで施設内をウロウロしていた。
あの後、反省会と称してペペロンチーノにラウンジへ連行され、そこで偶々居合わせていたＡチームの面々に事の顛末を暴露され、それぞれボロカスにダメ出しされたのだ。
オフェリアからは「シンプルに気持ち悪い」。
芥ヒナコからは「上から目線とか何様？　ビ？ス様と項羽様の爪でも煎じて飲めば？　あぁ、貴方には項羽様の爪は勿体ないわね。寧ろ私が欲しい」。
カドックからは「それは駄目だろ」。
ベリルからは「プギャー」ｍ９（^ Д^）。
デイビットからは「それは今必要な話か？」
等々、散々な言われようだった。唯一キリシュタリアからは「そうか……済まないな。本来その役割は私の筈だったのに」と、普段とは違う真面目な顔付きで言われたのが心の救いだった。
あとベリルはいつかシバく。
そんな事があって現在顔を合わせるのに抵抗があってカルデア内をウロウロとしていると、いつの間にか施設の出入口付近にまで戻っていた。
そろそろミーティングに向かうか。ここまで来て漸く気持ちを固めた修司が踵を返した時、ふと小動物の声が聞こえてきた。
フォウ君だ。こんな所に来ているなんて珍しいと、興味本意で鳴き声の方へ向かっていくと――――少女が倒れていた。
「うぅ～、頭がクラクラする～。えーっと、ここは……何処だっけ？」
「……君は？」
「ん？　あ、はい！　私、藤丸立香と言います！　それで、その、いきなりなんですけど……ここ、何処ですか？」
それは修司よりも一般人な文字通り唯の人間である少女との邂逅。

この日より、運命は回り始める。

その6　特異点F

その少女は、服装こそカルデアのモノだが、どこからどう見ても常識的でその有り様はいっそ稀少動物の様に平凡で、多くの魔術師や専門技術者が在籍するこのカルデアに於いての凡庸は異端ですらあった。

修司は訝しむ。何故、この様な少女がこの施設にいるのだろう。もうじきレイシフト前のミーティングが始まるであろうこのタイミングで、何故今ここにいるのか。

「え、えっと……あのー？」

困惑した様子の少女――藤丸立香に促され、我に返った修司は考察を中断して自己紹介を返す。

「えっと、取り敢えず初めまして。俺は白河修司、君と同じ日本人だと思うけど……合ってるよね？」

「あ、はい！　良かったー！　最初に会えたのが日本人で！　なんか駅前の献血車で血を採ってたら突然此処へ連れてこられちゃって、……あの、ここって一体何処なんです？　何かあそこの玄関通る際に色々と調べられて、気付いたら此処で寝ちゃってたんですけど、私、家に帰れるんですかね？」

自分に起きた出来事を淡々と語る立香に修司は顔に手を当てて天井を仰ぎ見る。目の前の少女の証言によれば、彼女は恐らくその献血車両で何らかの適正が認められ、殆んど拉致の形で連れて来られたのだろう。流石魔術師、手段に人情の欠片もない。

効率を求めすぎて逆に面倒くさい事をしでかす魔術師に今更ながらの苛立ちを募らせるが、ここで今それを吐き出しても意味はない。取り敢えず彼女の処遇をどうするかをオルガマリー所長に相談しようと彼女の手を引いて立たせた時、背後から聞こえてきた足音に振り返る。

「フォウさん、此処にいましたか。ダメですよ、あまりうろうろしては。……あ、修司さん、おはようございます。此方にいらしたんです

ね。それで……そちらの方は？」
　やって来たのは眼鏡の似合う純粋系女子、マシュ＝キリエライトだった。彼女がやって来たのと同時に小動物は彼女の肩にまで昇り、まるで自分の定位置だと言うように居座る。
「あ、初めまして！　私は藤丸立香っていいます！　貴女はもしかしてここの子？」
「ここの子、という意味は計りかねませんが、そうですね。カルデアに所属しているという意味でならそうかと思います。……あ、もしかしたら先輩は一般枠の方ですか？　成る程、本日が到着だったんですね」
「あれ？　マスターの一般枠って俺だけじゃなかったの？」
「はい。どちらかと言えば修司さんは企業枠として此方に派遣されたという形になってますから、そちらの先輩が最後のマスターとなる予定です」
　一般枠だと思っていた自分がまさかの企業枠だったという事実に修司は僅かばかりショックを受けた。話を聞く限り、拉致に近い形でカルデアへやって来た立香が最後のマスターである事は間違いない。そろそろミーティングの時間である事もあり、彼女と一緒に目的地へ向かい所長に彼女の処遇について話を聞くことにした。
「まぁここで話し込むのも何だし、取り敢えず施設を案内するよ。一応聞くけど、立香ちゃんはカルデアについてどの程度理解してるんだい？」
「え？　まぁ、そこそこ？　何か世界のピンチだから適性の高い私に色々と手伝って欲しい……的な？」
「おっふ。なんてフワッフワな解釈、出来立ての卵焼きかな？」
　イマイチ理解しきれていない彼女に色々と説明しながら、修司はふと気付く。あれ？　そう言えば魔術って神秘が薄れるとかの理由で基本的には秘匿されるモノじゃなかったっけ？　疑問に思うが、そもそもこのカルデアには魔術師だけじゃなく、一般家庭出身の技術者も在籍している。前任のマリスビリーが進んでスカウトしてきたと聞いてるし、案外この世界は魔術の漏洩に関して寛容だったりするのか

もしれない。
　そしていい加減時間にも考慮しなくてはならなくなってきた。所長の説明会まで残り１０分もない、そろそろ向かわなくてはならないのだが……如何せん、立香の様子が少しばかりおかしい。先程までは普通に話していたのに今は少し眠たそうに見える。
　マシュが言うには一種の夢遊病状態にあるらしい。病といっても一時的なモノで、時間が経過すれば症状も収まる軽度なモノ。とは言え、そんな彼女をこのまま連れていくのは些か気が引ける。オルガマリー所長には自分から言っておいて、Ｄｒ．ロマンに預けた方が良いのではないか。
　そんな事を考えている内にフォウは何処かへと走り去り、擦れ違うように現れたソイツに修司の思考は切り替わる。
「おや、マシュ、それにミスター白河。こんな所にいたのか？　そろそろオルガマリー所長の説明時間の筈だと思ったが……此処で寄り道をしているのは、流石に不味くはないかね？」
「レフ＝ライノール技師。すみません、ですが先輩をここに置いておくのは些か問題があるかと……」
「彼女は……あぁ、確か数合わせに一般募集していた補欠要員のマスター候補だったかな？　成る程、今日が到着予定だったか」
　拉致同然に連れてきた癖に、まさかの数合わせだという事実に修司の表情が僅かに強ばる。
「成る程……どうやら入館時のシミュレートを受けたみたいだね。霊子ダイブは慣れていないと脳に来る。覚醒はしているみたいだから大丈夫だろうが、万が一もある。本当なら医務室に運んだほうがいいのだけど……」
　レフ＝ライノールの物言いは所々気になる点が見受けられるが、それは魔術師としての性質なのだろう。それでもその言動は紳士的なモノで表面上は藤丸立香を気にかけたりするなど、良心的な部分が垣間見える。
　マシュも藤丸に対して苦手意識は持っていないのか、緊張しておらず、寧ろ少しばかり心を開いてすらいる彼女に修司は何処か寂しく思

いながらも嬉しくなった。
　その後も彼等のやり取りを見守っていると、ふとライノールの視線が此方に向けられる。
「ともあれ、時間は有限だ。説明会までもうそこまで間がない。今後の彼女の職場での安寧を確かなモノにしたければ……急いだ方がいいね。特にミスター白河、君は精鋭の中でも選りすぐりのＡチームの一員だ。そんな君が説明会に遅れるとなると、大目玉では済まないのではないかね？」
「ぬぐっ」
　挑発的な言い方だが、正論だった為に言い返すことも出来ない。オルガマリー所長は相変わらず気難しい所のある人だが、最近になってその性質も若干変わりつつあったみたいだが、今回の件でそれがぶり返すのも嫌だと思い、修司はそれもそうだなと説明会に向かうことにした。
「あの、私もご一緒しても宜しいでしょうか？　どうやら先輩の体調はまだ悪そうですので、中央管制室に辿り着く前に熟睡される可能性も考慮すると……」
「君を一人にすると所長に怒られるからなぁ。となると必然的に私も一緒と言うわけか。まぁ、それも良いだろう。それなら私もご同行しようか」
　それだけ言って修司達は説明会の会場となる中央管制室へと足を進める。途中何度も倒れそうになる藤丸を支えながら甲斐甲斐しく世話を焼くマシュを微笑ましく思いながら会場へ向かうと、中央には既に所長であるオルガマリーの姿があった。
　どうやら、既に説明会は始まっている様子だった。このまま見付かっては再び大目玉は免れないと悟った修司は、レフ達と別れたあと普段あまり使う事のない圏境を用いて何食わぬ顔で中央管制室へと入り、既に着席して待っていたぺぺの隣にシレッと座り込む。
「あら？　修司、遅かったわね？　普段時間を守る貴方にしては珍しいじゃない」
「ちょっとゴタゴタに巻き込まれてな。ほら、最前列のあの娘、どうや

ら一般枠の最後のマスターらしくてな」
「あぁ、そう言えばそんな話があったわね」
「しかも、ありゃ霊子酔いしてるな。あのままだと所長の前で居眠りかますんじゃねぇか？」
「随分と、胆の太い一般人が来たものね」
「一般人だからこそ……じゃないか？」
　ヒソヒソと話をしながら修司の遅れた理由を追求するＡチーム。
「ていうかアンタ、サラッと気配を消してたけど何してたの？　魔術使えないんでしょ？」
「ん？　あぁ、ちょっと圏境使ってな。ほら、オルガマリーちゃん怒ると怖いから」
「中国武術の秘術を叱られるのが嫌だから使うとか……アンタ、中国に向かって土下座しなさいよ」

「本当、出鱈目だよなコイツ。カドックもそう思うだろ？」
「え？　何か言った？」
（コイツ、聞いてないフリして乗り切ろうとしてやがる!?）
　それから程なくして、藤丸立香は霊子ダイブの影響でカルデアに関する説明をしている所長の目の前で爆睡。余程眠たかったのか、鼻提灯すら浮かべている彼女に怒りによって怒髪天を衝く勢いの所長によって叩き出されてしまう。
　誰もがオルガマリー所長の剣幕に愕然とする中。
「今のオルガマリー所長なら、超サ？ヤ人になれるのでは？」
「お前本当ブレねぇな」
　普通にそんな事を口にするキリシュタリアに流石の修司も少し引いた。

◇

「さて、いよいよ人理を守護する為の旅が始まる訳だが、その前に何かやり残した事は無いだろうか」
　それはもうじき人類初のレイシフトを前にした時だった。もうすぐ最初の作戦が始まり、皆がそれぞれ戦闘用の礼装に着替えた時、唐突にキリシュタリアが切り出してきた。
「何だよキリシュタリア、いきなりだな」
「なに、これから人類初の試みに挑もうというのだ。その前に私達の偉業を残しておくのも悪くないと思ってね」
「おいおい、まだ人理の修復はなっちゃいないんだぜ？　流石に気が早くないか？」
「そうね。ちょっと楽観が過ぎると思う」
「あらいいじゃない思い出作り！　私は賛成よ！　こういう青春ぽいの、ちょっと憧れてたのよね！　デイビットはどう思う？」
「何でも構わないが、あまり悠長にはできんぞ？」
　いきなりもいきなり、キリシュタリアの突然の提案に流石のＡチームの面々も戸惑っている。時間も押しているし、あまり時間をかける訳にもいかない。すると、今度はペペロンチーノが切り出してきた。
「なら、この場はこれで決まりね！　てれれてってれ～普通のカメラ～」
　何処に隠し持ってたのか、ペペロンチーノの手には一台のカメラが乗せられている。しかも意外な事に最新型のモデルだ。
　適当な場所にカメラを置いて、皆が映れるように位置を調整する。
「さぁ皆真ん中に寄って寄って～！　ほぉらカドックも！　照れてないで此方来なさいって！」
「ちょ、僕はまだ納得してない――――」
「ホラホラいいからいいから！　それじゃあ撮るわよー！」
　抵抗しようとするカドックをペペロンチーノは強引に押し込んでいく。女性陣も抵抗する事なくそれぞれがカメラの枠に収まるようにそれぞれ身を寄せ合い……パシャリと、カメラの音が鳴った。

◇

「――――修司。ありがとうね」
「ん？　どうしたぺぺさん、改まって」
　キリシュタリアの我が儘である思い出も残し、今度こそＡチームは作戦が開始される中央管制室へと赴く。既に他の魔術師達がレイシフト用のコフィンへと入り、出撃準備を整えている。遠くで未だ怒りの冷めやらない様子のオルガマリーが此方を睨んでいた。
「本当はね、Ａチームが此処まで纏まるとは思わなかったの。皆が皆、それぞれ色んな想いを抱えて此処にいる。それぞれの目的、それぞれの野心を抱えてね」
「え？　そうなの？」
「そりゃそうよ。魔術師って生き物は何処までも自分勝手な生き物なんだから、自分に得がないモノにワザワザ命を掛けたりしないわよ」
　それは、魔術師だけでなく人間全般に言えることではないのだろうか。修司は率直にそう思ったが、ぺぺの言う限りでは少しニュアンスが異なるようだ。
　魔術師だって生き物、良識ある人間と異なりその思考は何処までも効率的な手段や価値観で埋め尽くされている。必要であれば己の子供も魔術の道具として利用するし、不要であれば実の親だって簡単に見切りを付ける。
　カルデアの魔術師達だってそうだ。人類の救済という結果欲しさに前所長の誘いを興味本意で乗っただけであり、別に心の底から人類を救うという目的を掲げている訳ではない。全てはカルデアという

地で普通の魔術師では得られない功績を自分のモノにする為に利用する為の口上だった。
　そして、その理屈はＡチームにも当て嵌まる。彼等彼女等がどんな目的でカルデアに集まったのかは定かではない。ただ、皆が本当の意味で一つの目的にひた走る訳ではなかったのだ。
　それは、魔術師という生き物を多少なりとも心得ている修司にも分かっていたことだ。どれだけお題目を並べた所で彼等の根底にあるモノが変えられることはない。寧ろこのカルデアという施設を使って何らかの悪巧みを企てる奴だっているかもしれない。
　しかし、それでも……。
「でもね、貴方が来てから少し空気が変わったわ。ヒナコちゃんがあんなにも項羽推しだったなんて知らなかったし、ベリルが皮肉以外で笑う所なんて初めて見たし、オフェリアが時々乙女みたいな顔でキリシュタリアを見ている時なんか此方が恥ずかしくなるくらいときめいたし、デイビットなんてあれから随分と口数も増えてきたのよ？」
　修司が来てから、それは少し変わった。基本的に互いに不干渉だったＡチームが時折世間話をしたり、ペペのお節介やベリルの皮肉の混じったヤジを抜きに話合うのが増えたりとこれ迄にはなかった変化が訪れていた。
「カドックは最近開き直ったのか、キリシュタリア相手にも遠慮なくツッコミ入れたり、そのキリシュタリアだってカドック以上に開き直っちゃってね。この間なんて会議の時に例の変Ｔ着てオルガマリーに怒られてたんだから」
　ペペ達魔術師にとってその変わり方は許容し難い変化なのかもしれない。人間性を捨て去って魔導を追求するモノにとって、それは余分なモノと言えるだろう。
　ペペ自身も自分達がこれでいいのかどうかなんて分からない。先日みたいな笑いあった時間でさえ、皆にとっては何の価値もない無駄な時間なのかもしれない。けれど、それでもペペは思った。こんな時間も悪くはない、何もかもを諦めてしまった自分でもあの一時に甘えても良いのではないかと、そう思える程に心地よかった。

彼が来て何が変わったのかは分からない。ただ一つ言えるのはあの一時はきっとぺぺの人生にとって忘れ難い出来事であったと言うこと。
「もしかしたら、私達に足りなかったのは案外貴方みたいな人間だったのかもしれないわね」
「ぺぺさん……」
「さてと、そろそろ私達も向かわなくちゃね。ご免なさい、付き合わせちゃって……」
「ぺぺさん」
「ん？」
「戻ったら、紅茶を淹れますよ。キリシュタリアも、皆も誘って、またバカ話をしましょう」
そう言って笑う修司にぺぺも吊られて笑い出す。
（本当、眩しい人）
「そこの二人！　いい加減準備しなさい！」
遂にオルガマリーの我慢も限界なのか、声を荒げて叫んでいる。これ以上待たせては先の藤丸立香の様に外へ叩き出されてしまう。
急いで用意されたコフィンへと向かい中へと入る。以外と中の心地は悪くない、これからこれで現地へと向かい、人理を守るための冒険が始まる。そこでは一体何が待ち受けているのか、心の内に広がる不安と興奮に委ねて修司が瞼を閉じた時。

◇

衝撃と爆発が中央管制室を呑み込んだ。

――――落ちていく。まるで底のない落とし穴へ真っ逆さまに落ちていく感覚。
これが、オルガマリーが言っていたレイシフトをする際の感覚という奴なのだろうか。成る程、確かにこの感覚は落ち着かない。まるで紐なしバンジーで飛び降りた様な感覚は、普通の人間ならあまり歓迎できない体感だ。
（……いや待て、これ実際に落ちてね？　て言うか風切り音が聞こえてね？）
何やら嫌な予感がする。恐る恐る目を開けた修司が目にしたのは……予想通りの空の上、さらに言えば現在進行形で落ちていた。
レイシフト初日からまさかの転移失敗。落下の速度と未だに地面に落ちていないことから相当高い位置で転移させられたのだろう。並の人間なら此処で自身の生存を諦めるところだが、生憎とこの程度の修羅場には慣れっこな修司が慌てふためく事はない。
体勢を整えて体を下へ向ければ、そこには炎に呑まれた街が見えた。酷い有り様だ。まるで隕石か何かが降ってきた様な惨状……いや待て、この街には見覚えがある。
「おい嘘だろう……ここ、冬木市じゃねぇか!?」
眼下に広がるのは修司の生まれ育った街、冬木の街だった。何故冬木市が人理修復の舞台になっているのか。
未だ理解が追い付いていない修司、そんな彼が次に目にしたのは、長い鎌を持った長身の女がオルガマリーを追い回している場面だった。
何故彼女が此処にいるのか、Ａチームの皆は何処にいるのか。今、この地で何が起きているのか、その全てを明らかにする為に……。
「オラァ！」
「ぶぷっ!?」
取り敢えず修司は鎌を振り回す女の顔へ落下速度を利用した蹴り

を叩き込むのだった。

その7　特異点F

――――気が付けば、オルガマリーは炎の街中に一人取り残されていた。彼女の頭にあるのは突然すぎる事態にただただ疑問符を浮かべるのみ、何が起きたのか、何があったのか、混乱する思考の中で何が原因でこのような事態に陥っているのか理解できないでいると、ガラッと近くで瓦礫の崩れる音がした。

物陰から現れたのは一体の骸骨。亡霊の類いであるそれは明確な憎悪となってオルガマリーに襲い掛かった。

いきなりの強襲に戸惑いながらもオルガマリーはこれを応戦する。憤り、突然の理不尽に呪いながら自身の体に肉体強化の魔術を施して、迎撃用の魔術を使いながら炎に包まれる街中をひた走る。

その途中、川沿いのある場所へ出た。開けた所だ。亡霊共は撒けた様で姿を見せないし、これで漸く一段落出来る。これ迄の経緯をまとめようと近くのベンチに腰かけようとした時、それは現れた。

「――――おや？　まだ生きている人間がいたのですか」

「さ、サーヴァント!?」

頭上から聞こえてきた声に視線を向ければ、其処には手に鎌を持った長髪の女が、舌舐めずりをしながら街灯から此方を見下ろしている。最悪なことに、オルガマリーが訪れたのは開けた安全な場所ではなく、猛獣が支配する狩場だった。

自分から最悪な展開へと足を踏み入れたことに激しく後悔しながらも、今は逃げることだけに専念しようとオルガマリーは再び走る。

だが、相手は現代に於いて人外の力を持つサーヴァント、一介の魔術師でしかない自分が満足な準備なく撃退することは不可能に近い。同様に逃げることも儘ならない以上、オルガマリーがサーヴァントの鎌に狩られるのは時間の問題だった。

「誰か、誰かいないの!?　レフ、レフ！　助けてよぉ！」

すぐ後ろにまで迫る死にオルガマリーは叫び声を上げる。その叫

びにサーヴァントは喜悦に顔を歪め――――。
「オラァ！」
「ぶぷ!?」
突然の死角からの攻撃にサーヴァントの意識は暗転した。

◇

「し、修司……どうして、貴方がここに？」
「さてな、それは俺が知りたい所だが……どうやらまだ安心していい状況ではないようだ」
蹴り飛ばされ、瓦礫の中へと沈んでいくのと同時に一人の男がオルガマリーの眼前に降り立った。
白河修司。Ａチームの一人でその並外れた膂力と不思議な力で自身を含めた魔術師達に認めさせた問題児。そんな彼が何故か上半身が裸のままで自分の前に立ってサーヴァントが吹き飛んだ瓦礫の中を油断なく睨み付けている。
肌を露にしている所為か、普段よりも大きく見えるその背中も相まって頼もしさを感じたオルガマリーは安堵するが、すぐに首を横に振って修司に問い詰める。
「あ、貴方！　今まで一体何処にいたの!?　此方がどれだけ心配したと思ってるの!?　ていうか、どうして上半身が裸なのよ!?」
「そうは言ってもなぁ、俺も今一つ頭が付いてきてないんだよ。気付いたら空の上にいたし、下を見れば所長が追われてたからさ急いで駆け抜けたわけ、裸なのは……知らん。此処に来たらこうなってた」
「そんな、レイシフトの定着予定地点までズレてるの？　シミュレー

ションでは完璧だったのに！」
「ま、訓練と実戦じゃ勝手が違うんだろ。今回を糧に次回からは改善していこうぜ。……それよりもアイツ、まだやるみたいだぜ？」
謂われて向き直れば、瓦礫の中からサーヴァントの女が鎌を杖がわりにして立ち上がる。再び前に出てくる恐怖にオルガマリーは身をすくませるが、修司が前に出る事によってオルガマリーの恐怖は自然と薄れていく。
「他の皆が何処にいるのかも分からない状態だ。時間を掛ける訳にもいかねぇ、所長。良いよな？」
「――――ええ、頼んだわよ」
それはオルガマリーからの直々の命令だった。サーヴァントという超常的な存在を時間を掛けずに瞬殺せよ、そんな通常の魔術師ならば即座に逃げ出す条件を前に。
「了解した」
修司は二の句も告げずに了承した。
「私を瞬殺？　面白い事を言いますね。なら先ずは……その思い上がりから砕いてあげま――――」
それ以上、サーヴァントが語ることはなかった。体勢を整え、構えて、修司へと肉薄しようとする――――よりも遥かに速く、サーヴァントの懐には既に修司が潜り込んでいたからだ。
「言った筈だぞ。時間は掛けられないと」
知覚すら出来なかった。サーヴァントの視線は修司の動きを終始見逃さなかったし、全ての挙動に対して過敏なほどに反応しかけていた。僅かでも動きを見せればすぐにその首を刈り取る為に、牙を磨いて研ぎ澄ましていたのに……。
「七孔噴血――――悪いが、死ね」
衝撃がサーヴァントの体を貫いた。霊核を砕き、背後にあるタワーマンションが衝撃で拳の形に凹む。問答無用で放った絶死の一撃にサーヴァントは最期の言葉すら残さずに消滅していく……。
「取り敢えずこんな所か」
「取り敢えずって……貴方、一体今何をしたの？」

「ん？　ああ、唯の震脚を応用した歩法だよ。ほら、今の奴って長物を獲物にしていただろう？　リーチのある相手には接近戦こそが有効だろ？　だから実際にそれをやったまでさ」

サラリとなんて事ないように語る修司だが、それは違うとオルガマリーは内心で断じる。人は魔術無しで転移染みた動きなんて出来ないし、第一サーヴァントに対して唯の人間が接近戦を挑むこと自体が有り得ない事なのだ。

「兎に角今はここから離れて他に誰かいないか探そう。通信機は……俺の方は壊れてるな。て言うか消し飛んでやがる。礼装の事といい、どうなっているんだ？」

「て言うか、何で上半身だけなのよ」

何処までもツッコミ要素満載の修司に正直オルガマリーは小一時間程問い詰めたくなったが、今はそんな事をしている場合ではない。兎に角ここから離れ、他に誰かカルデアの人間がいないか探索しようとした時、その雄叫びは聞こえてきた。

「ッ!!!」

「ヒッ、な、何よ今のは!?」

「今の声、まさか……」

声のした方へ向き直れば、砂塵を巻き上げ、骸骨達を蹴散らしながら一体の黒い巨人が此方に向かって迫ってきている。

その圧倒的な迄の威圧感にオルガマリーは萎縮する。このまま此処で迎え撃てば彼女にまで被害が及ぶ可能性がある。周囲に他の敵対者がいないことを確認した修司はオルガマリーに許可を取り、一瞬だけその場から離れる事にした。

そう、一瞬だ。オルガマリーからすれば瞬きの合間に起きた不可視の行動。ピシュンッと独特な音と共にかき消えた修司、その場には陥没した地面だけを残して疾走し、修司は黒い巨人との距離を瞬く間に縮めていく。

「やっぱり、あの時のアイツだったか。しかし、何て様だよ。あのギリシャの大英雄がどうしたらこんな不様を晒すことになるんだ？」

接敵し、最初に口にしたのは失望の声だった。此方が近付いてきた

のに向こうはまるで気付いた様子はない。修司の知り得る彼ならば此方が近づく前にそこいらの標識や車を的確に投げ付けて此方の動きを妨害してくるのに、今の彼にはその様な暴虐性がまるで感じられない。

動きも単調、漸く此方に気付いた時は既に修司は巨人の懐の中にいた。巨人は手に持った得物で斬りかかるが……遅すぎる。

「俺に出来るのは、今のアンタを終わらせてやる事だけだ。……次に逢うことが会ったら、その時は勝負しようぜ」

あの日、聖杯戦争の存在を知る切欠となった相手、嘗ての大英雄を悼みながら修司は拳を奮い。先の鎌の女と同様に黒い巨人を一撃の下に消滅させるのだった。

そして、最早追求する気力も失くなったオルガマリーに改めて合流し、辺りを調査しようと探索を始めた時、意外な人物達と合流する事になった。

「藤丸立香にマシュ!? どうしてアナタ達がかここに!? それに、マシュのその姿は一体……」

時折現れる骸骨達を適当に蹴散らしながら進むこと数分、市街地だった所に差し掛かった二人が待ったいたのは、大きな盾を携えて鎧を身に纏ったマシュ＝キリエライトと、オルガマリーが追い出した筈の藤丸立香、そして小動物のフォウがいて……。

「……アンタは」

「ん? なんだ兄ちゃん、俺の事を知ってんのかい?」

杖を手にし、魔術師と何処か似ている格好をした嘗ての槍兵が其処にいた。

修司が目の前のサーヴァントらしき男を知っている。オルガマリーがその事に追求しようとした時、藤丸の手首に巻き付けられた通信機から音が鳴ると、其処からホログラム（立体映像）が表示され、その向こうには涙目のＤｒ．ロマンが映し出されていた。

『しょ、所長! ご無事だったんですね! それにそっちは修司君もいる! よ、良かったぁ～! 二人とも無事だったんですねー!』

「ロマン? どうして貴方が所長の椅子に? レフは? レフはどう

したの!?」
Ｄｒ．ロマンがオルガマリーと修司の生存に喜んでいたのも束の間、自分の次に権限のある筈のレフ＝ライノールが出てこない事に疑問に思ったオルガマリーが追求する。
何故今彼が座っているのかは定かではない。重要なのはこの場面で何故レフが出てこないのか、未だにレフへの依存から抜け出せないでいるオルガマリーに修司が複雑そうに見詰めていると……。
『マシュ、藤丸君、修司君、そして所長、どうか心して聞いて欲しい。僕達のカルデアは現在……崩壊の危機に瀕している』
Ｄｒ．ロマンから絶望的な報せが届いた。

◇

――――それから暫く歩いて、今はとある高校の教室で藤丸達を休ませ、現在修司は一人見張りを兼ねての巡回をしていた。
頭に浮かぶのは先のＤｒ．ロマンから告げられた報告、それはその場にいる誰もが絶望の底に突き落とすには充分な威力を秘めていた。
カルデアの魔術師４７名、並びにスタッフの大多数が謎の爆発事故により重症、危篤状態となっていると言う事、特に魔術師側の被害は甚大でどれだけ治療に専念しても僅か数名しか助からないという事実。
カルデアは機能の八割を失っている。残されたスタッフでは出来る事に限りがあると、Ｄｒ．ロマンは平静を保ちながら報告する。
そこから現在のカルデアは非常に危うい状態であると理解したオルガマリーは勢いのまま魔術師達の凍結保存の命令を下した。コフィンには有事の際人命を可能な限り延命させる為にその様な機能が搭載されていることは分かっていたが、まさかここで使うとは思っていなかった為に修司もマシュも彼女の英断に感心していた。本人

はそんな大勢の命なんか背負えないと否定していた。
現在カルデアは残された人員でレイシフトの修理、カルデアス、シバの現状維持に勤めている。其処までの指示を妥当のものと判断し、レイシフト修理を最優先と改めて命令を下すオルガマリーはその間この街、命名特異点Ｆの調査を行う事になった。
それ以降の通信はリソースの無駄という事で、一時通信を中断、Ｄｒ．ロマンからの気を付けてという言葉を最後に通信を閉じ、今度は藤丸立香とマシュの事について説明される事になった。
どうやらＤｒ．ロマンの言う爆発とやらで中央管制室はメチャクチャになり、藤丸とＤｒ．ロマンが駆け付けた頃には炎に包まれていたのだとか。その惨状に怯えながらマシュを探していると、瓦礫に挟まれ、血を流す彼女を発見。
手を繋いで欲しいという彼女の想いに応え、既に手遅れな状態にあったマシュの傍にいようと思った時、レイシフトが行われ、気付けばこの特異点Ｆに辿り着き、マシュ＝キリエライトはデミ・サーヴァントとして覚醒していた。
そして髑髏のエネミーを掃討している内にキャスターと名乗る男に出会い、取り敢えず行動を共にしようという所で修司とオルガマリーが合流してきたという。
その後も何故藤丸立香とマシュが契約しているのかとか、その事に憤るオルガマリーを宥めたり、この特異点の異常性やキャスターからの事情を聞いたりするのだが、其処までクールなキャラでいたキャスターが途中で出てきた修司の話題になると目を点にしたのが印象的だった。
その後、藤丸立香の戦いに対する心持ちや、マシュにはキャスターによる宝具のレクチャーなどのイベントが合ったりするが、修司は基本的に見守るだけだった。
そして現在、穂群原という学校で漸く落ち着いて休める場所に辿り着いた一行は、空いている部屋に適当に陣取り、暫しの休息をとっていた。
虫の声すら聞こえない夜、学校の屋上から炎に呑まれる街をただ静

かに修司は見つめていた。
「――――これが、聖杯戦争のなれの果てかよ」
そう吐き捨て、拳を強く握る修司の目には怒りの色が濃く滲み出ていた。嘗ての地獄を想起させる光景に加え、通信で聞かされたＤｒ．ロマンの報告。再起不能となった魔術師達の名簿の中にはＡチーム全員の名前もあり、最後にぺぺとの会話を思い出した修司は悔しさと悲しさ、何より怒りでどうにかなりそうだった。
――だけど、何時までも後悔ばかりしてはいられない。マシュも藤丸も戦いには未だに不馴れな状態だ。オルガマリーも表向きは気丈に振る舞っているが、それもいつまで続くか分からない以上、年齢的に一番踏ん張らなければならないのは自分だ。
（気持ちを切り替えろ、白河修司。ここで彼女達に怪我なんて負わせたら、それこそＡチーム皆に笑われるだろうが）
気持ちを変えて己を鼓舞する。そうする事で自身の落ち着きを取り戻した修司は握りしめていた拳を緩めて深く息を吐く。
「よう、その様子だと頭は冷えたみたいだな」
すると其所へキャスターが音もなく現れる。その口振りから自分の心境に察していたらしい彼に気恥ずかしく思いながらも修司は彼に礼を口にする。
「その、ありがとう。正直言ってアンタが一緒にいてくれて助かったよ。きっと俺だけじゃあ、あの娘達をあんな風に助ける事は出来なかった」
「いいって事よ。話に聞くと、お前さん魔術師じゃないみたいだし？　宝具の使い方なんて当人の心の問題だ。あの嬢ちゃんはまだちゃんと使いこなせてはいないが、当面はアレで充分だろ」
「あぁ、マスター……藤丸ちゃんを守るには盾となるサーヴァントが必要だ。そう言う意味では彼女達の相性は良い、と思う。問題は藤丸ちゃんだが……」
「マスターの方の嬢ちゃんはついこの前までただの一般人だったんだろ？　なら、その辺りはおいおい自覚させていくしかねぇさね。下手に強要するとあっという間に潰れちまうぞ？」

「だな、その事を肝に銘じながら、俺は俺のやるべき事を全うするよ」
「分かってんじゃねぇか。こりゃ、本当にお節介だったみたいだな」
「そうでもないさ、こういう状況でアンタみたいな剽軽な奴は結構需要があるんだぜ？」
「悪かったな軽そうで」
　ケッと鼻息飛ばすキャスターに自然と笑みを溢れ、それで自分が如何に今まで張り詰めていたのかを思い知る。彼女達だけじゃなく、然り気無く自分にまで気に掛けてくれるキャスターの兄貴分振りに修司は内心感謝し、それから暫く男二人の談笑は続く。
「っと、そうだ。ほれ、取り敢えずおまえさんはそれを着とけ。フェルグスの叔父貴じゃあるまいし、年頃の娘を前に何時までも裸でいるわけにもいくまいよ」
　投げ渡されたのは一着のローブ、ボロボロでふとした拍子に破れそうだが、確かに裸でいるよりはマシだと思いキャスターの気配りに素直に甘えることにした。
「一応、俺のルーンを施してある。多少頑丈になる程度だが、お前さんにはそれでも充分だろ」
「あぁ、助かるよ。サンキューな」
「野郎の礼なんざいらねぇよ。んじゃ、そろそろお前さんも休みな。後の見張りは俺が引き受けるからよ」
「……待ってくれキャスター、何度もアンタに頼むのは図々しいとは思うが、どうか聞いて欲しい」
　踵を返すキャスターに修司が頼みがあると呼び止める。修司が人の厚意に甘えて無遠慮に頼み事をしてくる人間には思えなかっただけに不思議に思ったキャスターは振り返る。
「頼みねぇ？　そりゃあ内容次第によるが？」
「これから向かう場所、そこに待っている二体のサーヴァントの相手は……俺に譲って欲しい」
「……マジで言ってんのかお前さん」
　修司の口から聞かされる頼みの内容にキャスターは目を見開いて驚きを露にしている。確かに修司がライダーとバーサーカーを倒し

たことには素直に驚いた。しかし、ライダーは影に落ちかけていたし、狂戦士に至ってはただの獣に成り果てていた。どちらも今のキャスターでも充分に相手取れるし、キャスターの認識ではあくまで修司は人間の範疇として強い部類程度にしか見ていない。

そんな彼が残ったサーヴァントの二体を相手取ると豪語しているのだ。即ちセイバーとアーチャー、召喚されたサーヴァントの中でも選りすぐりの厄介者達をこの男は倒すと宣っている。

一瞬、キャスターは修司が自分の実力を過信した愚者かと思ったが……違う。彼の表情を見る限り、とても相手を侮っている風には見えなかった。寧ろ、最大限に警戒している様にも見える。

そう言えば、この男は最初に自分を見たときにおかしな反応を見せた。まるで自分の事を予め知っていたかのような反応、ただの知り合いにあったとかそういう話ではない。今の自分とは異なる自分の事を知っている。あの時の修司の反応はそういう類いのものだ。

「――その前に一つ聞かせてくれや。兄ちゃん、テメェは一体、何処の誰なんだ？」

まさか、と思いながらもキャスターは修司に訊ねる。この質問に答えれば残る二人のサーヴァントの相手も譲ってやるし、これ迄の借りも返してやる。そう付け加えるキャスターに修司はまぁいいかと一人納得する。

「そうだな。別に隠す事でもないし……あ、でも所長達には黙っていてくれよ。下手に言って混乱させるのもイヤだからさ」

「あぁ、その点については心配するな。約束しよう」

深く頷いて了承するキャスターに修司もまた頷く。

「……俺は、聖杯戦争を知っている。尤も、この世界とは色々と違っていたから、ハッキリと確信したわけではないけどな」

「成る程、今の台詞で理解したぜ兄ちゃん。お前さん、越えてきたんだな？　世界の境界を！」

「あぁ、俺はこの世界とは別の世界、だけどこの時と時代を同じくする聖杯戦争に乱入した事がある」

真っ直ぐに見据えてそう口にする修司にキャスターは諸々を察して……爆笑した。

その8　特異点F

それから暫くして、学校の教室で少しの休息を取った修司達は改めて今回の特異点の調査を行う為、異常の基点と思われる場所に向かうことになった。

道中、相変わらず湧き出てくる髑髏の兵隊が襲ってくるが、サーヴァントのキャスターとデミサーヴァントであるマシュ、そして修司という戦闘担当が次々に駆逐し、瞬く間に敵性エネミーは消滅していく。

その圧巻とも言える光景に藤丸はただ呆然と眺めていた。

「うわー、キャスターさんやマシュも凄いけど、修司さんもあんなに強かったんだー」

「いえ先輩、キャスターさんはサーヴァントだから当然として、私もデミサーヴァントとして機能している以上この結果は当然と言えます。異常なのはサーヴァントでもデミサーヴァントでもない修司さんです」

そうマシュは口にしているが、藤丸は修司の異常性というモノが今一つ理解できなかった。キャスターやマシュも同じく凄い、自分には逃げることしか出来ない相手に堂々と立ち向かって倒している。

そんな二人と同じく化け物達を倒せる修司も藤丸には同じくらい凄い人、という事しか理解できていない。そんな彼女の能天気とも言える価値観にオルガマリーは呆れの溜め息を吐き出した。

「はぁ、良いわね一般人は能天気でいられて。普通、サーヴァントと同等に戦える人間なんてそれだけでも有り得ないのに、どうしてあの男は平然としていられるの？　魔術も無しにどういう理屈であんな風に動けるのよ。本当、意味わかんない」

「ん？　どうしたの所長、お腹空いたの？」

「空いてないわよ！　全く、しかも最後に残ったマスターがこんな奴だなんて……もう、戻ってからの事を考えると今から頭が痛くなってくるわね」

白河修司という男が如何に非常識な存在であるか、魔術という神秘に関わるオルガマリーでも理解できていない。分かっているのは彼の時折扱う力というのは自分達魔術師とは色んな意味で異なっているという事。理解できていない、というよりしたくない。しかし所長という立場にいる以上、力ある者の能力を把握しなくてはならないオルガマリーとしては、白河修司という人間は藤丸よりも輪を掛けて厄介な存在になりつつあった。

「嬢ちゃん達、そろそろお喋りは終いだ。奴さん出てきたみたいだぜ」

やって来たのはとある山の洞窟前、ポッかりと広がるその大穴はまるで地獄が開けられた怪物の口にも見える。そんな出入り口の大穴に一人の男が立ち塞がっていた。

「先輩！」

「え？」

突然、男から一筋の光が放たれたかと思うと自分を先輩と呼ぶ少女が前に出てきた。どうして彼女が自分の前を遮るように現れたのか、疑問に思う藤丸だが、瞬間彼女は理解した。

今、自分は命を狙われた。何の予兆もなく、突然降って沸いた様に無防備な所へ狙われた。それを今度は自分の代わりにマシュが庇おうとしてくれている。

「マ――――」

何とかしなくては、何も出来なくても、自分も何かしなくては。頭を混乱と焦りで藤丸は我を忘れそうになる。マシュを何とか助けてやりたい、そう叫ぼうとする彼女よりも早く。

「無防備な女の子から狙って矢を射る……か。随分と下衆な手を使って来るな」

白河修司が、飛来するその矢をマシュに当たる前に握り掴んでいた。

「……未だ自分の立ち位置を認識できていない者など、残しておいても無駄なだけだろう。此方としてはその重荷を減らしてやろうという親切心を見せただけなのだがね」

「へっ、相変わらず嫌な野郎だ。兄ちゃんとの誓約（ゲッシュ）がなけりゃ俺が相

手をしてやる所だったぜ」
　ベキリと矢をへし折り、乱雑に投げ捨てると魔力で編み出された矢はその効力を失い消失する。突然向けられる濃厚な殺意に藤丸は顔を青ざめ、オルガマリーとマシュは額から大粒の汗を吹き出している。
　キャスターが気に入らないと男――――アーチャーを睨み付けるが、弓兵は氷の様な冷たい目で藤丸達を見下ろしている。
「キャスターさん、手筈の通りに……」
「あぁ、分かってるよ。お前さんには面白い話を聞かせて貰ったからな。その対価だ。嬢ちゃん達は俺に任せておけ」
「え？　ちょ、なんの話？　貴方達、何を勝手に話を進めてるのよ!?」
「はいはーい。そんじゃ三名様ごあんなーい！　ほらほら急げ嬢ちゃん達、早くいかねぇと怖ーい兄ちゃんの八つ当たりに巻き込まれるぞー」
「え？　え？」
「きゃ、キャスターさん？」
　混乱する藤丸達の背中を押し、強引に洞窟の中へ押し入ろうとするキャスター、勝手に話を進めていた修司とキャスターにどういう事かと憤るオルガマリーを強引に連れていこうとする所へ……。
「行かせると思うか？」
　矢を番えたアーチャーがキャスター達に向けて放たれる。放たれた矢は一寸の狂いのない軌道を描き、キャスターの眉間に向けて突き進む。サーヴァントの力によって射られた矢の力は絶大、魔術を行使する素振りも見せないキャスターには避けることも困難なその矢を。
「よっと」
　修司は苦もなく再び素手で掴みとる。
「んじゃ、兄ちゃん。任せたぜ、精々手酷くあしらってやんな」
「あぁ、彼女達を頼んだ。俺も、コイツを片付けたらすぐにいく」
「ちょ、ちょっとキャスター!?」
「しゅ、修司さん!?」
　困惑するオルガマリー達を押し込み、洞窟の中へと消えていく。彼

女達を見送った修司は再びアーチャーへと向き直り、彼の顔を静かに見据える。
「すぐにいくか。随分と舐められたモノだ。たかが矢を2本掴んだだけで、すっかりその気か」
　アーチャーの矜持とも呼べる矢がサーヴァントですらない男に見切られ、掴み取られる。その事実をアーチャーなりに受け取ったのか彼の手には弓はなく、白と黒の夫婦剣が握られている。その目には侮蔑の色が濃く滲み出ていた。
「しかも先を見る目も無いと来ている。定石を打つならキャスターと盾の小娘と一緒に私を一息に潰すべきだった。そうすれば先に待つ彼女にも対策出来ただろうに、貴様が私にどんな感情を抱いているが知らないが、一時の感情で最善を逃すなど愚の骨頂」
「いいだろう。相手をしてやる。精々時間を掛けるがいい、その間に貴様の仲間は全滅だ。絶望の中で溺死――――「なぁ」？」
「お前がしたかった事って、こんな事だったのか？」
　侮蔑に彩られ、嫌悪すらあったアーチャーの顔が凍り付く。険しい表情だった彼に対し、修司の表情は何処までも穏やかで、いっそ慈しみですらあった。
「こんな焼け野原になっちまった街で、後生大事に彼女を護り、その果てになんの気持ちも固めていない女の子に矢を射る。これが、お前のしたかった事か？　こんなものが、お前が目指した”正義の味方”って奴なのか？」
「……何を、言っている？」
　すでに、先程までの威勢はアーチャーにはなかった。修司が言葉を一つ紡ぐ度に剣を握る手は震え、脳裏には燃え尽きた筈の記憶の残り滓がざわつき始める。
「もしこれがお前の言う正義の味方の在り方だというのなら……今すぐ藤村先生に報告してこい。これが自分の理想なのだと、胸を張って言ってこいよ」
「!?」
　アーチャーの脳裏に一人の女性が浮かんできた。横柄で、横暴で、

優しくて、終始ふざけていても決して自分を見捨てず、常に気に掛けてくれていた女性。
「藤……姉ぇ……」
気付けば、アーチャーの目から一滴の涙が溢れ落ちていた。自分ですら気付けていない感情の吐露、しかし、それだけで修司は終わらせない。
「とっとと構えろ。アーチャー（衛宮士郎）、今のお前に出来るのはそれだけだと言うのなら、俺が正面からその腐った性根を体ごと打ち砕いてやる」
「あ、あぁ……」
修司に出来るのは間違えた友達を自分なりのやり方で止めてやるだけ。戦意は折れ、戦う意思を失い決壊したダムのように涙を流すアーチャーに……。
「フンッ!!」
「ブッ!?」
修司は容赦なく握り締めたその拳を彼の顔面に叩き込んだ。

◇

藤丸立香にとって今までが現実味のないモノで、カルデアに連れてこられてからはまるで物語の中にいるような、半ば夢見心地の様なフワッとしたものだった。
献血と称して何らかの適性検査を受け、それが彼等の目に止まった。ただそれだけの理由でカルデアという未知の施設に拉致同然の形で連れてこられ、流れるままに此処まで来た。
理不尽を理不尽と認識する間もなく、ただ目の前の光景を見送るだ

け、その認識に変化が起きたのはあの赤い弓兵に本物の殺意を向けられた時だった。何気無しに向けられた殺気、それを前にして漸く藤丸立香は自分の立ち位置を認識した。

あぁ、今私は生きるか死ぬかの瀬戸際にいるのだ。誰もが当然の様に握り締められていた生存の権利を、自分以外の誰かに握られている。それを漠然と理解していながらも、それでも彼女は自分の意思で前に進む事が出来なかった。

当たり前だ。ほんの少し前まで、彼女はただの一般人……否、今も彼女はただの普通の一般人でしかない。決意なんてものが抱ける訳がなく、覚悟と呼べる信念も無い。今彼女の胸中に抱くのは何故自分がこんな目に遇わなければならないのかと、至極当然な疑問のみだった。

「良く防ぐ。伊達にその盾の力を受け継いでいない、という事か。だが、それももう限界か」

「はぁ、はぁ、はぁ、……う、ぐ……」

眼前には黒い剣を持った黒い剣士が盾を持つ少女を打ちのめしている。自らを騎士王と名乗り、またオルガマリーやＤｒ．ロマンも認める人類の歴史の中でも最上級の英霊、その騎士王が言葉を一つ紡ぐ度に心が張り裂けそうになる。恐怖でどうにかなりそうになる。

顔を青ざめ、呆然とただ見つめている事しか出来ない自分を客観的に見ている自分が何か言っている。

逃げろ。己の生存本能が形振り構わず逃げろと叫んでいる。全てを見なかったことにして、何もかもを夢だったと結論付け、逃げて自分だけでも逃げ延びろ。

事実、それを許されるだけの権利が彼女にはあった。拉致同然に連れてこられ、本人の許諾なく訳の分からないプロジェクトに巻き込み、挙げ句にはこんな命を掛けた場所に無理矢理連れてこられるハメになる。魔術がなんだ。人理がなんだ。どうしてそんな事の為に命を張らなければならない。

しかし、どんなに理不尽に憤り、怯えていても既に足は恐怖で動けなくなっている。黒い騎士王が放つ殺気に既に藤丸立香の心は折れ

そうになっていた。
　このまま、自分は死ぬのか。嫌だ。怖い。死にたくない。彼女の頭にあるのは恐怖を誤魔化すための逃避しかないと――――。
（――――あ）
　そう、思われていた。彼女の、自分を先輩と呼ぶ少女が苦しい顔を目にした時、思い出すのはあの炎の中で繋いだ手の感触だった。
　あの時、彼女は助けてとも、死にたくないとも言わなかった。ただ淡々と自身の現状を述べる彼女、そんな彼女が口にした願望は願望とも呼べない無垢なるものだった。
　自分は、何故あの時彼女の手を握り締めた？　ただ言われただけ？
　それとももうじき死ぬという彼女の運命を憐れんだから？
　分からない。分からないけど……。
　気付けば、少女は走っていた。覚束ない足取りで、恐怖で泣きそうになりながら、躓きそうになりながら、それでも藤丸立香はマシュの元へ急いだ。キャスターの応援の声が聞こえ、フォウの鳴き声が聞こえてくる。
　後ろから自分を呼び止める所長の声が聞こえる。耳元ではＤｒ．ロマンが戻れと必死な様子で叫び立てるが、藤丸は止まらなかった。走り、走り、走り続けて漸くマシュの背中にまで辿り着いた時。
「ならば、この一撃を防いでみせろ。お前達にそれだけの意思と力があるのなら！」
　黒い極光が降り注いだ。
　衝撃、熱量、その全てが自分達を呑み込もうと濁流の如く押し寄せてくる。今自分が生きていられるのは、マシュがいるから、彼女の持つ盾がなければ今頃自分は灰も残さず消し飛んでいた。
　もう、自分が今いるのは悪夢でもなければ幻でもない、純然たる現実なのだと藤丸は理解した。
「せ、先輩！　どうして来たんですか!?　近くに来れば危険度は跳ね上がる！　それはアナタにも充分分かっていた筈です！　なのに――――」
「分からない。そんなの私にも分からないよ！　怖くて怖くて仕方な

くて、本当はこんなの私だって嫌なのに、でも……マシュの顔を見てたら、勝手に体が動いてたんだもん」
「先輩……」
「お願い。私は何も出来ないけど、ただマシュの頑張りに乗っかるだけの私だけど、無責任な事を言うけど！　それでもお願い。頑張って！」
マシュは素直に驚いた。彼女の言う自分勝手なお願いにではない、恐怖と後悔に苛まされながらも、がむしゃらでも、それでも一歩を踏み出した藤丸立香にマシュは驚嘆した。
人は、恐怖の前には何も出来なくなるものだと聞いていた。大抵の人間がその前に為す統べなく立ち尽くすのだという。これに抗うのは英雄の所業、決意に満ち、覚悟に溢れた者だけが恐怖に打ち克つのだと、マシュは知識のみだが知っている。
しかし、藤丸立香は英雄ではない。英雄から遠く離れた一般人、カルデアに於いては有用性が低く、また脅威性も薄い故にマシュは彼女を警戒せず、先輩と呼んだ。
そんな彼女が死に逝く筈だった自分の手を優しく握ってくれた。自分も次の瞬間には炎に呑まれて死ぬかもしれないのに、自身よりも他人であるマシュの願いを聞き入れた。
そして今、彼女は再び恐怖に抗った。恐怖に震えながら、眼前に迫る死に怯えながら、それでも彼女は叫んだ。頑張ってと。
凄い人だとマシュは思った。皮肉でも何でもない心の底からの称賛。マシュ＝キリエライトは藤丸立香をこの瞬間、ただの先輩から凄い先輩へと無意識の内に昇華させた。
瞬間、藤丸の手の甲に刻まれた紋様、即ち令呪が光りだす。それはカルデアからマスターである藤丸に与えた数少ない切り札、その膨大なる魔力リソースを受け取り、彼女の宝具を顕現させる。
「ありがとうございます。先輩、マシュ＝キリエライト……頑張ります!!」
〝擬似展開（ロード・カルデアス）／人理の礎〟!!
マシュの張った宝具の結界が黒い濁流を受け止める。軈て騎士王

の放つ極光は止まり、辺りには先程までの戦闘とは打って変わった静寂に支配された。
「……成る程、どうやらそれだけの意思はあるようだな。依然として未熟なのは変わりないが、それでも全くの無力という訳ではないか」
『藤丸君！　マシュ！　二人とも無事!?』
息も絶え絶えなマシュと藤丸にＤｒ．ロマンの安否を気遣う声が届く。何とかと気の抜けた返事を返す二人にロマンは座っていた椅子からズリズリと落ちていく。
そんな所長代理（仮）を他所に騎士王が再び動き出す。警戒するマシュ達を無視して彼女が剣を突き出す先には……キャスターがいた。
「それで、どういう了見だキャスター？　先程から貴様は何の手出しをしていないが……よもや、漁夫の利を狙ったつもりか？　この私を相手にまさかその様な稚拙な策が罷り通るとは思うまい？」
そう、マシュが騎士王と戦ってからキャスターは戦闘という戦闘を行ってはいない。精々がマシュに対する援護程度で、後はオルガマリーや藤丸が余波に巻き込まれないように結界を施していた程度、度重なるオルガマリーからの追求をなぁなぁで避けていたキャスターだが、流石に嘗ての敵対者である騎士王からの詰問を無視するわけにはいかないと思ったのか、キャスターは若干気まずそうに口を開く。
「いやな、本音を言うなら俺も参加したかったよ。キャスターとは言え俺もケルトの端くれ、英霊と称され喚び出された以上、少しは戦うべきだとは思ったさ」
「けどな、約束しちまったんだよ。残念な事にな。お前さんと戦うのは俺に譲れと、面白い話を聞かされた以上、ついな」
「なに？」
キャスターの言っている言葉の意味が騎士王には理解できなかった。約束とは何なのか、一体誰に譲ったと言うのか。その口振りからしてマシュと藤丸でないというのは何となく解る。
では一体誰なのか、オルガマリーと藤丸、マシュの三人は何となく

察しが付いた様ではあるが、何れも皆、信じられないような顔をしている。
今一つ理解出来ない騎士王がうすら笑みを浮かべるキャスターに苛立ち、今再び剣を奮おうかとした所で……ピクリと聖剣を握る彼女の手が一瞬震えた。
見間違いか？　僅かな反応を見せた騎士王に藤丸が目を瞬いていると、彼女の震えは徐々に大きくなっていく様に見えた。
震える彼女の視線の先には……自分達が今いる大空洞、その出入り口。影のような帳の中から現れるのは一人の男だった。
「どうやら、間に合った様だな」
「おうよ兄ちゃん、少し危なかった場面はあったがこの通り、全員ピンピンしてるよ……ていうか、どうしたんだよソイツ」
満を持して現れたのは白河修司。自分達を先に行かせ、アーチャーとの戦いを一手に引き受けたＡチーム最後の生き残り、その彼の手にはアーチャーの首根っこが掴まれていた。
ブンッとソレを放り投げると、変わり果てたアーチャーの姿に周囲の人間は驚愕に目を見開く。彼の顔には最初に見たあの恐ろしい表情は完全に消え去り、顔は拳の形に陥没し、頭には幾つものたん瘤をつくり、白目を向いて涙を流し、気絶していた。
「一応、戦意はへし折っておいたつもりだが、もしその大バカがまた戦う気になったら、その時はキャスターさんが煮るなり焼くなり好きにしてくれ」
「いや好きにしろって……これ戦意処か生きる気力すらへし折れてねぇか？　何をしたら腐っても英霊がここまで落ちぶれるんだよ」
「なに、大した事はしてないさ。言葉を尽くし、拳骨で制裁しただけ。コイツとは色んな意味で長い付き合いだからさ、手の内は知り尽くしているからな」
「いや、でもよ……ええ」
あのいけすかないアーチャーが、まるで叱られた子供のように泣いている。変わり果てた好敵手に流石のキャスターも同情し、オルガマリーもサーヴァントをここまで追い詰める修司に内心ドン引いてい

た。
「さて、遅くなって済まなかったな。藤丸ちゃん、マシュちゃん。その様子からしてスゲェ頑張ってくれてたんだろ？　見なくても分かるさ。……本当、ごめんな。そして、ありがとう」
膝を地に突いて、未だに体力の戻っていない二人に修司は心からの感謝と謝罪の言葉を送る。彼女達を追い詰めたのは自分にも非がある。責はカルデアに戻ってから盛大に受ける事にして修司は改めて騎士王……セイバーへと向き直る。
「さて、俺を覚えているか騎士王？　いや、セイバーさん。こうしてアンタと再び相対するなんてな、人生というのは分からないものだ」
――――知らない。セイバーは目の前の男なんて知らない。知らない筈だ。初対面だし、面識もない、今の自分はとある理由からこの地に残された特異点を繋ぎ止めるだけの楔でしかない。

なのに、何故自分はあの男に臆している。霊基が、或いは魂が、あの男から逃げろと叫んでいるのだ。
「それじゃあ、ラウンド2を始めようか。まさか、事ここに至って逃げるとは……言わねぇよな？」
両手をパキパキと鳴らす修司、そんな彼を前に目隠しのバイザー越しでも分かるほどに動揺しているセイバーは形振り構わず聖剣を振りかざした。
そんな彼女を前に修司は気を纏って静かに構えて迎え撃つのだった。

◇

――――それは、明らかに人の越えた領域だった。降り頻る黒い閃光、雨霰の如く降り注がれる破壊の一条、キャスターのルーン魔術によって被害はないが、それでも近くに黒い光が落ちる度にオルガマリーは失神しそうになった。
『な、なんて事だ。あのセイバー、よりにもよってあの大炉心と直接パスを繋げている！　あの魔力炉は冬木の大聖杯、万能の願望器を形とったモノ、あんな馬鹿げた魔力炉と繋がった彼女は実質無尽蔵の魔力を得ているのに等しい！』
「おう軟弱野郎、流石に詳しいな。いやはやあの女、よもやそこまで手を伸ばしていたとはなぁ。道理で俺達普通のサーヴァントとは違った訳だ」
セイバーが放つ一つ一つの魔力の塊が有無を言わさぬ破壊の濁流となって大空洞を蹂躙していく。その有り様は先程のマシュとの戦いとはまるで違う、暴力の嵐そのものだった。
マシュとの戦いは謂わば彼女の残した一握りの僅かな良心の様なもの、これからの試練を前に立ち向かって欲しいという彼女なりの一種の激励でもあった。
そんな彼女がああも形振り構わず剣を奮い、その度に黒い閃光を放っていく。その姿は荒れ狂うドラゴンそのもの、最強の幻想種である竜種を想起させる程に彼女の戦い方は苛烈だった。
『でも、何が一番恐ろしいってそんな彼女とまともに戦えている修司君だよ!?　何なの彼!?　どうして騎士王の聖剣とマトモに打ち合えてるの!?　なにあのシュインシュインっての!?　僕あんなの知らないよ!?』
『え？　ドクター知らないの？　嘘～、遅れてるぅ～』
『うるっさいよムニエル！　ていうかなんで君は落ち着いているのさ!?』
最早パニック状態のロマンだが、そんな彼を責められるものは誰もいない。何せこの場にいる誰もが彼と同じ心境だったからだ。

白目剥いて愕然としているオルガマリー、マシュは純粋に凄いと驚き、藤丸立香は「あれ？　何かどっかで見たことあるなぁ」なんて冷や汗駄々漏れで戦いの様子を見物している。
しかし実際の所、誰よりもふざけるなと言いたいのはセイバーの方だった。剣を奮う度に特大の魔力をビームという形で放っているのに、目の前の男はなんて事ないように片手で弾いている。
落ち行く瓦礫を足場にランサー以上の俊敏さで縦横無尽に駆け回り、振り下ろされる拳はバーサーカー以上に重く、芯に来る。剣で何度も振り払っても、その都度修司は加速し、セイバーを追い詰めていく。Ｄｒ．ロマンは二人の戦いを互角であると評した。しかし、キャスターの見解は違う。
圧倒している。セイバーを、あの伝説の騎士王を、現代に生きる修司がその力と技により着実に追い詰めている。道理で自分に譲れと強気なことを言ったわけだ。最初から修司はあの二人を相手にするつもりでここに来ていたのだ。
「ったく、つくづく悔しいねぇ。俺が槍持ってたら真っ先に挑んでいたってのに……」
悔しそうに煙草をふかしながら呟くキャスターだが、降り注ぐ瓦礫と黒い閃光の所為で泣き喚くオルガマリーの叫びに消されていく。
そんな時、戦いは遂に佳境を迎えた。修司が地面に着地した瞬間騎士王の持つ剣がこれ迄とは桁違いの光を纏い始めたのだ。
それは、騎士王の宝具。マシュの擬似的な宝具と藤丸の令呪によって漸く防がれたセイバーの最大にして最強の宝具。
『ま、不味い！　今あれ使われたら此方には打つ手が無くなる！　皆、急いでそこから離れるんだ！』
「は、離れるって言っても何処へ行ったら……」
戸惑う藤丸達が立ち往生する一方、セイバーには膨大な魔力が収束される。放たれれば死は免れない、しかし修司は静かにそれを見つめるだけだ。
「卑王鉄槌。極光は反転する。――――光を呑め！」
『約束された勝利の剣（エクスカリバー・モルガーン）』！！

撃ち下ろされる極大の閃光。周囲の瓦礫を破壊し、粉砕する破滅の一撃。逃れる術はなく、受け止める術もない。そんな極大な死を前にして……修司は一歩前に出る。

「……本当なら、この技はアイツ等（チーム）に見せてやりたかった。キリシュタリアなら喜ぶし、ぺぺさんなら興奮してくれそうだし、カドック君は……きっと、率先してツッコんでくれたんだろうな」

思い返すのは本当なら此処にいる筈のチームの面々、ベリルなら、デイビットなら、オフェリアなら、ヒナコなら、一体何て言うだろうか。

呆れるのだろうか、怒るのだろうか、笑うだろうか、戸惑うだろうか、どれだけ想像を膨らませても彼等の声はもう、聞こえてこない。

ならば、せめて自分が前に出よう。意識を失っても、何も見えなく、聞こえなくても、自分達は負けていないのだと届けるために……。

修司の手に光が集う。それは修司の纏う気という名の命の輝き、握り締めた拳を手刀に変え――。

「見せてやるよ騎士王！　これが俺の――――」

『エクスカリバーだ!!』

振り上げた手刀は黒い極光を切り裂き。

大空洞ごと切り捨てた。

◇

「……何故、私は……生きている」
意識を取り戻した彼女が最初に思い浮かんだのは自身の存命だった。
修司の放つ光は本質こそ異なっていたものの、その輝きは殆んど聖剣と並び称される程のモノだった。それを受けて何故生きていられるのか、不思議に思うセイバーだが、その答えはすぐそこにあった。
「そうか、貴様……手を抜いたな」
倒れている自分の隣に腰掛けて座っている修司にセイバーは自分が生きている事の理由を理解した。
詰まる所、この男は想像以上にお人好しで且つ甘ちゃんだったのだ。宝具を正面から切り裂く程の力を持っていても相手に止めを刺そうとしない、魔術師としては勿論、戦士としても落第クラスの善人。
「別に、手を抜いた訳ではないさ。アンタとシロ……アーチャーには聞きたい事がある。折角の情報源なんだ。アンタには知っていることを話してもらう」
口ではらしいことを言っているが、それが口実なのはアリアリと見てとれる。きっと、嘘を吐くのが苦手な人間なのだろう。それがただの人間なら好感を持てるのだろうが、力を持っている以上それはただの足枷にしかならない。
「敗北した将に語るべきモノなどありはしない。止めを刺すがいい。貴様にはその責務と権利がある」
「……どうしても、か？」
「くどいぞ。それとも何か？　回復した私ともう一度戦うか？　今度は私も手段を選ばん。次はあの少女達を狙うとしよう。彼女達を庇いながら果たして貴様は何処まで戦える――――ん？」
何故だろう。ここまで話している内に黒いセイバーはふと既視感を覚えた。記憶はない、知識も、このようなやり取りは初めての体験である筈なのに、何故か今猛烈に後悔している自分がいる気がする。
そんなセイバーを余所に修司は徐々に立ち上がる。立ち上がり、踵

を返して立ち去ろうとする彼の先にあるのは……自分が使っていた相棒とも言える聖剣が落ちていた。
修司は落ちていたその聖剣を手に取る。何故だろう、凄く嫌な予感がする。
「いや待て。少し待て、ちょっと待て、待ってくださいお願いします。あ、あー、何かちょっと私喉の調子が良いなー、もしかしたら色々喋っちゃうかもー、グランドオーダーの事とか、色々口走っちゃうかもー！」
「はぁーー……」
「ねぇ待って、頼むから待って、何だその力の昂りは！　や、止めろ！　そのシュインシュインを今すぐ止めるんだ!!　私喋るから！　有ること無いこと教えるから！　これから始まる重要な事、色々全部話すから！　だから待っ――――」

「オラァッ!!」

手にした聖剣の腹を修司の膝打ちが炸裂する。バギィンと音を立てて折れ、砕け散る己の聖剣を前に……騎士王だった少女のギャン泣きが大空洞に木霊する。
オルガマリーもマシュも藤丸も絶句する中、キャスターだけは諦めた様に煙草の煙を吐き出し。
「あの兄ちゃん、もしかしたらうちの師匠よりも色んな意味で容赦ねぇかもな」
『おっふ』
Ｄｒ．ロマンから変な声が漏れた。

その9　特異点F

『い、いやー、何はともあれ、皆無事で良かったよ！　藤丸君もマシュもお疲れ様！　大きな怪我がなくて何よりだよ！』

静まり返った大空洞にＤｒ．ロマンの声が響き渡る。その声は何処か空回り気味で無理矢理感が半端ないが、それでもこの異様な空間の前には有難く、まるで清らかな清涼剤の様に感じられた。

「は、はい！　マシュ＝キリエライト及び先輩……もとい、藤丸立香。共に怪我なく、オルガマリー＝アニムスフィア所長も無事です」

そんなロマンの思惑に全力で乗っかることにしたマシュは取り敢えず状況終了の報告を行う。彼女の言う通り藤丸もオルガマリーも、そしてマシュ自身も特に大きな怪我を負うことなく、今回の最大の修羅場を乗り越えることが出来た。

最初こそはどうなることかと思われた特異点の調査、危険な場面は幾つもあったし、冷や汗が溢れ出す場面も一度や二度ではなかった。つくづく悪運と幸運にまみれた今回の特異点調査、後はセイバーに異常を来したと思われる水晶体を回収するだけなのだが……念のため、大聖杯にも何らかの処置を施した方がいいのかもしれない。

「しかし、修司さんって黄金聖闘士だったんだ。へー、黄金聖闘士って実在してたんだー」

そんな彼等を余所に感心するように呟く藤丸立香の一言にＤｒ．ロマン並びにマシュ＝キリエライトは否応なく現実と向き合うことになる。

ポッカリと縦状に開かれた天蓋、そこから覗ける小さな星々。その景観がほんの数分前に起きた出来事を何よりも現れており、考えたくなかったロマンは頭を掻いて項垂れる。

一方、この惨状を生み出した張本人は降したサーヴァント達を前に仁王立ちして正座している二人を見下ろしている。そのすぐ近くではキャスターが咥え煙草をしながらゲラゲラと笑い転げている。

「んで？　お前等はここで何をしてたんだ？　士郎がセイバーさんを守っていたというのは分かるとして、問題はセイバーさんだ」

「――あの、ここでその名前を言うのはちょっと、止めて欲しいのだが……」
「却下だ。で？　セイバーさん、アンタ此処で何をしていた？　俺達に何を伝える為にここで待ち構えていたんだ？」
「――――ぐす。ふ、ふん。誰が白状するものか！　貴様のような悪辣外道に応えるものは何もない！　……あ、嘘だ嘘です止めろ止めてください！　お願いだから無言で拳をパキパキさせないで！　わ、私に近づくなぁぁぁっ！」
『おっとぉ！　それ以上の英霊の尊厳破壊はそこまでにしてくれ修司君！　君のその行いは君が思っている以上に大変なことだという事をいい加減理解してくれぇ！』
「て言うか、どうしてさっきから所長は大人しいの？　やっぱりお腹空いてるのかなぁ」
「先輩、今はそっとしておくのが最良かと思います」
「聖剣が、伝説がへし折れた。人類の夢と希望の象徴が……呆気なくへし折れた。は、ハハハ」
　報告をマシュ達に任せてその間に情報を得ようとする修司に残された英霊としての矜持で反抗するセイバーに更なる暴力が押し寄せるのを必死に止めるＤｒ．ロマン、その一方でエクスカリバーという宝具の中でも象徴的なモノが折られ、粉砕させたという事実に茫然自失になるオルガマリー、小動物のフォウから見ても中々に混沌とした光景だった。
　このままでは埒が明かないし、本当に修司が傷心な英霊二人を更なる追い討ちをしかねない。唯でさえマシュと藤丸がギャン泣きする騎士王に哀れみの感情を抱き始めているのだ。どうにかして話の流れを取り戻そうとして、Ｄｒ．ロマンは咳払いをし、改めて状況の確認を行った。
『コホンッ！　えっと、それじゃあ先ずは状況を再確認をするとしよう。マシュ、藤丸君、何度も言うが君達二人も、所長も、そして修司君達が無事でいてくれたこと、素直に嬉しいと思うよ。でだ、君達の前にある超抜級の魔術炉心。あれが、冬木の大聖杯で間違いないね』

「はい。ドクター、確か此処に来たときも仰ってましたよね？　冬木の大聖杯はアインツベルン、魔術協会に属さない錬金術の大家が造り上げたと、そう聞いてます」
『うん、その通りだ。それでこの特異点の異常はあの大聖杯と呼ばれるモノであると見て間違いない。いや、本当ならそこの彼女を倒せば事は既に終わっていた筈なんだけど……』
　チラリと其所へ視線を向ければ、未だに正座姿のセイバーが涙目でそっぽ向いている。あんな彼女に止めを刺せというのは論理的に、何よりロマンの人格的に無理があった。
『それが出来ない以上、あの大聖杯を破壊するしかない。あの魔術炉心とセイバーが持っていた水晶体、この特異点の基盤を担っているなら、あれを壊せばこの特異点はその形を保てず自壊する筈だ！』
「なんだ。そんな事で良いなら、俺が適任だ」
　大聖杯を破壊。水晶体という小さな物体なら兎も角、直系１kmに迫る巨大魔術炉心を完全に消滅させろというＤｒ．ロマンの無理難題に難なく応えるのは……やはり、この男だった。
　白河修司。ほんの少し前までセイバーと大規模な戦闘を行っていたというにも関わらず、息を切らさずに平然としている。正直、色々と彼には聞きたいことが目白押しなのだが、それを今この場で追求するわけにはいかない。ツッコんでやりたい衝動を必死に抑え、Ｄｒ．ロマンは彼に問う。
『ほ、本当かい？　別に嘘を言わなくていいんだよ？　正直僕も無茶苦茶な事を言ってる自覚はある。黒い騎士王と戦って君も少なからず疲弊している筈だ。疲れているなら大人しく休んでいた方が……』
「ん？　いや、大丈夫さ。この程度の運動なら慣れてるし、切り札を出していない分、体力にはまだまだ余裕がある。それに、コレの壊し方は俺なりに心得がある。あの時は吹き飛ばすだけで精一杯だったけど、今なら俺だけの力でも充分対処出来る筈さ」
　なんだかサラッととんでもないことを口にしている気がするが、努めてＤｒ．ロマンは聞かなかった事にする。目の前の大聖杯を破壊するには少なく見積もっても対城宝具級の威力が必要に思えるが、果

たして修司にそれが可能なのか。
先程からの会話で麻痺しつつあるが、そもそも普通の人間にそんな芸当が出来るのか？　先の騎士王の宝具を切り裂いた瞬間といい、Ｄｒ．ロマンは自身の常識が崩れていくような気がした。
誰もが戦いの終わりを確信し、安堵の溜め息を溢した時――――それは起こった。
「――――あ」
どこからともなく放たれた一条の光、その光は修司や藤丸にではなく、戦意を失い項垂れていたセイバーの胸元を貫いた。
「！　セイバー!!」
「い、今のは一体何処から!?」
「兄ちゃん！　彼処だ！　下手人はあの高い所にいるぞ！」
胸元を貫かれ、霊核を砕かれたセイバーは力なく横へ倒れそうになる。そこへ自身の不手際に呪いたくなるほど憤るアーチャーが彼女を抱き留める。
「アーチャー、貴方の所為ではない。既に我等は敗北している。私の末路は遅かれ早かれこうなっていたさ」
「……戯けが、そんな言葉が聞きたくてお前の側にいたのではないぞ」
「あぁ、そうだったな。我が騎士。……白河修司、時間がない。こうなった以上、伝えられるのは限られてしまう」
「……気にするな、元よりこっちは端から手掛かり無しに挑むつもりだったんだ。でも、ありがとうよ」
修司に殺意がないのはセイバーは最初から分かっていた。彼が胸中に抱くのは怒りの炎、故に修司は相手を殺すことに拘りはしないし、敵対しない事を条件に頷けば、見逃す事も考えていた。
それが、こんな事なるなんて思いもしなかった。しかし、それでも修司は謝罪したりはしない。謝ればそらは即ちこれ迄の彼女の頑張りに対する侮辱になる気がして……故に、彼が口にするのは消滅を前に僅かでも情報を伝えようとしてくれる騎士王に対する感謝の言葉だった。

それを理解した上で騎士王は微笑む。その顔には最初に見た苛烈さは何処にもなかった。
「……グランドオーダー。これより始まるのは聖杯を巡る旅路となる。汝らの行く末に……どうか未来があらんことを」
それだけを言い残してセイバーは消滅した。グランドオーダー、その言葉を意味する事を知る術を今の修司は持たない。気にはなるが、正直今はそれ処ではない。

セイバーという特異点を繋ぎ止めていた楔が消えた事で他のサーヴァント達にも影響が出始める。アーチャーは何処か寂しそうな笑みを浮かべながら消滅し、これまで共に戦ってくれたキャスターもまた英霊の座への退去が始まる。
「って、俺もかよ!?　いやそりゃそうか！　セイバーが消滅した事で連鎖的に俺達もこの特異点とやらから退去するって事かよ。アイツが言ってた楔ってのはこう言うことか！」
「キャ、キャスターさん！」
「えぇい！　こうなった以上仕方がねぇ。嬢ちゃん達、気を付けろよ！　お前さん達の本当の相手はこの後に――――」
最後まで口にすることなく、キャスターも消滅する。これで残るはオルガマリー、マシュ、藤丸、そして修司の四人だけとなった。嫌な静寂が辺りを包む、一秒か一分か、それともそれ以上か、マシュが盾を構えて藤丸とオルガマリーを守るように周囲を警戒し、Ｄｒ．ロマンも固唾を呑んで見守る中……そいつは現れた。
「やれやれ、まさか君達がここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ。４８人目のマスター適性者、全く見込みのない子供だからと善意で見逃してあげた私の失態だよ」
「レフ教授!?」
『レフ――――!?　レフ教授だって!?　彼がそこにいるのか!?』
それは、あの爆発で亡くなったと思われていたレフ＝ライノール。いつもと変わらぬ微笑みを浮かべ、修司達を見おろす彼の目は、これまでと何処か違う異質なモノへと変わっていた。

自分が最も信頼し、慕っていた人が生きていた。その事実に感極まったオルガマリーは、彼に向かって一直線に駆け出していく。
「うん？　その声はロマニ君かな？　君も生き残ってしまったのか。すぐに管制室に来てほしいと言ったのに、私の指示を聞かなかったんだね。全く――――」
「どいつもこいつも統率のとれていないクズばかりで吐き気がブゲラッ!?」
レフが自身に向かって駆けてくるオルガマリーと呆然としている藤丸達に向け、最大限の軽蔑と侮蔑を込めた悪意に満ちた台詞を口にする――それよりも早く、彼の顔には修司の拳が捩じ込まれる。
バキメキパキと骨が砕ける音を鳴らし、地に倒れ込むレフ、血を噴き出してピクピクと痙攣する彼を前にオルガマリーの叫びが大空洞に響き渡る。
「れ、レフゥゥゥッ!?　ちょっと貴方！　いきなり何してくれてんのよぉぉぉっ!?」
悲鳴に似た彼女の訴えを耳にしながら、修司は倒れるレフを睨み付ける。
「ドクター！　今すぐコイツを縛れるモノを送ってくれ！　コイツを拘束する！」
『えぇ!?　ちょ、ちょっと待ってくれよ！　僕には何がなんだか……』
「状況から見て既に答えは出ているだろうが！　爆発の後に行方を眩まし、今になって無傷でご登場！　意味深な口振りというおまけ付き！　以上、コイツが管制室を爆破させた張本人だ！」
「「っ!?!?!?」」
混乱するＤｒ．ロマンに修司が一括して事実を突き付ける。その事実に驚きを隠せない面々だが、その推理を認めるかのような笑い声がレフから聞こえてくる。
「ふ、フフフ、流石はＡチームの一人。その判断の速さと決断力は見事なものだ」
「……それ以上動くな。動けば次はお前の四肢を砕くぞ。芋虫みた

いになりたくなければ、大人しく情報を吐け」
「止めて！　レフに酷いことをしないで！」
「いけませんオルガマリー所長！」
　既に修司の中ではレフ＝ライノールは今回の件の首謀者として見ている。なぜ彼がこんなことをしているのか、その目的を聞き出すため、修司は暴力という原始的な方法を選ぶが、オルガマリーがそれを許さなかった。
　マシュの制止の声も聞かずに修司を押し退け、レフの前で庇うように立つ彼女に修司は眉を寄せる。
「オルガマリーちゃん、そいつから離れるんだ。ソイツが何をしたのか、本当は分かっているんだろ？」
　オルガマリーも魔術師の一人、普段こそヒステリックさが目立って忘れがちだが、本来の彼女は聡明で物事に対して俯瞰的な視点で見ることの出来る女性だ。故に、彼女本人も分かっていた筈、これ迄の状況とこれ迄の一連の流れ、その全ての原因は自身が慕うレフであるということを。
　しかし、彼女は首を横に振って否定する。
「貴方こそ、自分が何をしているのか分かっているの!?　彼は今まで私を助けてくれた！　これからもそうよ！　貴方の様な粗忽者とは違うのよ！」
　それは、オルガマリーが人として吐き出す感情の吐露だった。これ迄余程自分を圧し殺してきたのだろう。父の代わりにカルデアという施設とそこに属する技術スタッフや魔術師達を束ねる為に、直向きに頑張ってきた彼女にとってレフという男は心の支えにも似た存在になっている。
　修司が気に掛けていたモノが最悪の形として表れてしまった。これでは彼女はレフ＝ライノールの傀儡に等しい、オルガマリーを押し退いて今すぐ奴を拘束しようと一歩前に出た時。
「!?」
　ふと、違和感を感じた。今まで繋がっていた大事な何かが、ブツンと千切れてしまった様な感覚。これまでずっとあって当たり前だと

思っていたものが、突然焼き切れた様な感覚。次いで、凄まじい迄の衝撃と痛みが修司を襲った。
　修司は知らない。それこそが隣接していた自分の世界が焼却された証だという事を、そこにいた人、モノ、育んできた大事なモノ、その全てが焼き滅ぼされたという事を。
　今、修司の内に襲っているのは偉大な英雄王との繋がりを人理焼却によって断たれ伝わってきたバックファイアによるもの、その激痛と衝撃は修司を一時的に行動不能にするには充分な威力を秘めていた。

「し、修司さん!?」
『修司君!?　どうしたんだい!?　……そんな、バイタルが急速に低下している!?　何で!?』
　膝を地につけ、苦しみ出す修司に藤丸達が動揺する。そんな彼等を嘲笑うかのようにレフ＝ライノールは立ち上がり、今度は彼が修司を見下ろしていた。
「フン、あれほど息巻いておきながら所詮はこの様か。不様なものだ。……まぁ、それはそれとしてオルガ、君もよく生きていたな」
「レフ！　えぇ、えぇ、そうなの！　管制室は爆発したと言うし、魔術師達は再起不能になるし、助けは来ないしで大変だったの！　でも、あなたがいれば――――」
「いや、本当によく生きていたものだ。爆弾は君の足下に設置していたのにね」
「――――え？」
「いや、少し違うか。君はもう死んでいるのだよ。肉体はとっくにね。トリスメギストスはご丁寧に残留思念になった君をこの土地に転移させてしまったんだな」
　鼻血を拭き取り、笑みを浮かべるレフが口にするのはオルガマリーにとって到底信じがたい真実だった。
「ほら、君は生前レイシフトの適性がなかっただろう？　肉体があったままでは転移できない。分かるかな？　君は死んだ事ではじめて、あれほど切望した適性を手に入れたんだ」

「故に、カルデアにも戻れない。なにせカルデアに戻ったその時点で、君のその意識は消滅するのだから」
　より笑みを深め、悪意を露にするレフにオルガマリーは言葉を失う。消滅？　自分が？　カルデアに……戻れない？
　茫然自失になりかけ、立ち尽くす彼女にレフは慈悲という名の更なる真実を口にする。
「とはいえ、それではあまりにも哀れだ。カルデアに生涯を捧げた君のために、せめて今のカルデアがどうなっているのか見せてあげよう」
　そういって、レフが掲げた左手の先に空間が歪みだし、ある場所を写し出す。〝カルデアス〟人類の繁栄と生存を観測した蒼い星がみる影もなく真っ赤に燃えている。
「なに……あれ？　カルデアスが、真っ赤に……。嘘、よね？　あれ、ただの虚像でしょう、レフ？」
「本物だよ、君のために時空を繋げてあげたんだ。聖杯があればこんな事も出来るからね。さぁ、よく見たまえアニムスフィアの末裔。あれがお前達の愚行の末路だ。人類の生存を示す青色は人欠片もない。あるのは燃え盛る赤色だけ、あれが今回のミッションで引き起こされた結果さ」
「よかったねぇマリー、今回もまた、君のいたらなさが悲劇を呼び起こしたワケだ！」
　レフ（悪魔）はせせら笑う。こうなったのはお前の所為だと、お前の考えなさと無能さが、この様な結果を招いたのだと笑う。
「違う！　違う違う違う！　私は間違ってなんかいない！　失敗なんかしていない！　死んでなんかいない！　アンタ、どこの誰なのよ!?　私のカルデアスに何をしたっていうのよぉ……！」
　オルガマリーはただ違うと否定することしか出来なかった。子供の様に泣きじゃくり、しゃくりあげる上げるその顔には、既に所長としての威厳はなく、ただのオルガマリーがそこにいた。
　それをレフ＝ライノールは呆れた顔をして一蹴する。
「アレは君の、ではない。まったく――――――最期まで耳障りな小娘

だったなぁ、君は」
「え？　体が……宙に――――何かに引っ張られて――――」
「言っただろう、そこは今カルデアに繋がっていると。このまま殺すのは簡単だが、それでは芸がない。最後に君の望みを叶えてあげよう。君の宝物とやらに触れるといい。なに、私からの慈悲だと思ってくれたまえ」
「何を言ってるの、レフ？　私の宝物って……カルデアスの、こと？　や、止めて。お願い。だってカルデアスよ？　高密度の情報体よ？　次元が異なる領域、なのよ？」
「あぁ、ブラックホールと何も変わらない。それとも太陽かな？　まぁ、どちらにせよ人間が触れれば分子レベルで分解される地獄の具現だ。遠慮なく、生きたまま無限の死を味わいたまえ」
　体を持ち上げられ、赤色のカルデアスに引き込まれるようになるオルガマリー。彼女の顔は青ざめる。このまま行けば自分は死ぬ。それもこれ以上ない苦痛に苛まれながら無限に等しい死を味わい続ける事になる。それが正しく現実なのだと、強く認識したオルガマリーは悲鳴を上げる。
「いや――――いや、いや、助けて、誰か助けて！　わた、私、こんなところで死にたくない！」
「だって、まだ褒められていない！　誰も、私を認めてくれていないじゃない……！」
「どうして!?　どうしてこんな事ばっかりなの!?　誰も私を評価してくれなかった！　皆私を嫌ってた！」
「やだ、止めて、いやいやいやいやいや……！　だってまだ何もしていない！　生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めて貰えなかったのに――――」
　それは、彼女の後悔の叫びだった。誰にも認められず、褒められず、何もしていないと叫ぶ彼女の悲鳴は虚しく消えいくだけ、彼女自身も燃え盛るカルデアスに呑み込まれて消えていく。
　誰もが止めることが出来なかった。レフ＝ライノールの蛮行を、死に逝く一人の少女を、大きすぎる理不尽を前に……。

「――――え？」
しかし、一人の男だけは抗った。宙に浮かぶ彼女の胴体に腕を回し、抱き寄せる形で引き留めたのは……動けなくなっていた筈の修司だった。
「させるかよ。これ以上そんな理不尽を、罷り通らせてなるものかよ！」
額に大粒の汗を流し、痛みと熱さに耐えながら、修司は理不尽に抗う。地面へ着地し、オルガマリーを助け出そうとするが、Ｄｒ．ロマンは待ったを掛ける。
『だ、ダメだ修司君！　このままでは君までカルデアスに呑み込まれてしまうぞ！』
「だから、彼女の事を手放せって？　諦めろって？　ふざけんなよ、オルガマリーちゃんは、まだ生きているだろうが！」
『っ!?』
「こっからだろ！　オルガマリーちゃんは頑張っていた。努力し、お父さんの後を継いで、泣きそうになって、それでも頑張ってきた！」
「報われるべきなんだよ彼女は！　頑張った奴にはそれに見合った報酬があって良いだろうが！」
ジリジリと引き摺られ、このままではオルガマリーと共に自分もカルデアスに呑み込まれる。避けられない死を前にそれでも修司は叫ぶ。オルガマリー＝アニムスフィアは報われるべきだと。
彼女の頑張りは付き合いの短い修司にも分かっていた。夜遅くまで資料を漁り、スタッフや魔術師達が全力で事に挑める様に環境を整え、父の後を立派に継げる様に彼女はひたすら頑張ってきた。
だったら、そんな彼女も報われるべきだ。頑張ったと、良くやったと、褒められて認められてもいい筈だ。そんな、ささやかな願いくらい認めてもいい筈だ。
そんな彼女の願いを理不尽が、不条理が蹂躙すると言うのなら、その悉くを砕き、捩じ伏せてやろう。
「修司！　あなた、血が!?」
カルデアスという人造の太陽に近付いた弊害か、修司の体が沸騰

し、皮膚を焼き血が蒸発していく。オルガマリーにそう言った様子が見えないのは、レフ＝ライノールの言う通り肉体を持っていないからなのか。

「やれやれ、これだから頭の足りない猿は困る。いいかね？　Ｍｒ．修司、これが私から君に贈る最初で最後のレクチャーだ。君が後生大事に抱えているオルガマリーはね。残留思念なのだよ、分かるかね？

つまりは残りカスなのだよ。トリスメギストスが偶々見つけた魂の欠片を偶然この特異点に送っただけ、君が人のように相手しているその娘はオルガマリーだったものの……文字通り燃えカスなのさ」

レフは呆れと失望の混じった表情で淡々と事実だけを告げている。オルガマリーは既に死に、修司のしている事は無駄以外の何者でもないのだと。

しかしそれでも修司はオルガマリーを抱えた手を放そうとはしない。

「大丈夫だ。オルガマリーちゃん、君は絶対に俺が、俺達が助けるから、だから、もう暫く辛抱してくれ」

――――既に、修司は自分の意識を保つのに限界が近かった。体の内側から超高熱の炎に焼かれているような間隔、痛みも熱さも以前として残ったままで、意識も断絶した回線のように着いたり消えたりを繰り返している。

賭けに出るしかない。既に修司の肉体は内からの焼却により限界近いが、彼には自身の切り札とは別の一手が残されている。

特異点が崩れ始め、自分達の今いる場所もいつ崩壊するか分からない。そんな状況で相棒を出せばどうなるかなんて分かったものではない。

それでも、今の修司にはそれしかなかった。オルガマリーを助け、無事にカルデアまで連れていくには彼の力を借りるしか方法がない。

故に、修司は喚ぶことに決めた。この後がどうなるか、特異点がどうなるか何て二の次にして、今この状況を打開する為に修司は〝魔神〟を召喚することを決意する。

「こい、グラ――――」

しかし、その名を口にするよりも前に修司の腕の中からオルガマリーが飛び出していった。両手を突き出して修司の腕から弾かれるように飛び出していたのだ。
呆然と宙に浮かぶ彼女を見つめると、オルガマリーはフッと笑みを浮かべる。
「……私は、オルガマリー＝アニムスフィア、魔術の事なんてまったく知らない、下世話な庶民の情けなんていらないわ」
その言葉は震えていて、誰が聞いても強がりだと言うのは分かる。怖い筈だ。死にたくない筈だ。それでも未だに手を伸ばし続ける修司にオルガマリーは手を取ろうとしない。
「本当に、本当に納得のいかない話だけど、後の事は貴方達に任せるわ。ロマニ＝アーキマン、藤丸立香、マシュ＝キリエライト、そして……白河修司。人類の未来を貴方達に託すわ」
〃――――――〃
最期にオルガマリーがなんと言ったのか、修司には分からなかった。カルデアスに呑み込まれる直前に何かを口にしたであろう彼女の言葉は、限界を超え、意識を失った修司に……届くことはなかった。

◇

??月?日
――――――結論から言えば、人類は滅びた。人類を支えていた人理がレフ＝ライノールと彼が王と仰ぐ何者かによって、地球に住まう全ての人類は焼却という終焉を迎えた。
そんな中で唯一生き残ったカルデアもあと数年経てば宇宙の塵へ

と還る。それが、俺が目を覚ました際にダ・ヴィンチちゃんから聞かされたあの後の内容の全てだった。
レフは既に何処かへ逃亡し、行方を追うのはほぼ不可能。悔しいが、奴を改めてぶちのめすのはもう暫く先になりそうだ。
Ａ．チームの皆を初めとした多くの魔術師達は……まだ治療の目処は立っていない。今は仮死状態を保つ為に然るべき場所で厳重に冷凍保存されている。コフィンに包まれている形で保存しているとはいえ、雑菌の類いを持ち込ませない為に彼等の面会は基本的に禁止になっている。
……自分のいた世界は、果たして無事なのだろうか。あの時感じた喪失感、その直後に体の内側から焼かれるような痛みと熱さはレフの野郎が言う人理焼却と何かの関係があったりするのだろうか。
一応ダ・ヴィンチちゃんとＤｒ．ロマンに話を通し、一通りの検査を受けさせて貰ったが、異常は特になしと出ている。やはり悪い報せばかりで気持ちが参っているのかもしれない。
……結局、今回も自分は奪われてしまった。仲間を、オルガマリーちゃんを失い、無力な自分がどうしようもなく情けなく思えるけど、いつまでも凹んではいられない。
藤丸ちゃん……いや、立香ちゃんは立ち上がった。人の死を目の当たりにし、その恐怖に苛まれながら、それでも取り戻したいモノ（未来）があると口にして、Ｄｒ．ロマンに立ち向かう意思を伝えた。
年下の彼女が気持ちを固めた以上、自分が何時までも下を向くわけにはいかない。それに、オルガマリーちゃんから託されたのだ。未来を取り戻せと、上司からの無茶ぶりに応えているのは慣れている。あとはやるかやらないかだ。
あれから、体は充分に休めた。痛みも熱さも今は感じないし、何なら以前よりも好調な位だ。これならばきっと、あの技のもっと高い倍率にだって耐えられる筈だ。
――――それに、自分には王様からの餞別がある。アレを渡された以上、今度こそ自分達に敗北は許されない。
待っていろよレフ＝ライノールとその黒幕、お前達の顔にこの拳を

必ず叩き込んでやる。

『修司君、そろそろ最初の特異点へのレイシフトだ。準備が出来次第管制室に来てくれ』

「了解した。すぐに向かう」

日記を書き留める手を止め、ドクターからの要請に従い、修司は衣服を着替える事にする。備え付けのクローゼットの中には、黄金の王がいざという時に開けろと言って渡してきたアタッシュケースが鎮座している。

それを手に取って机の上に置いて開けると、そこに鎮座するモノに修司は嬉しそうに微笑む。

すぐに着替えを終え、部屋から出ようとした際に一枚の写真立てを目にする。それはあの爆発の時に運良く残ったあるデータのモノだった。

「――――行ってくるよ」

そこに写るのはAチームの面々との集合写真。キリシュタリアを中心に並ぶ面々に修司は懐かしむように出発を告げる。

足取りは……軽くはなかった。未だに施設のあちこちは破損しており、カルデア全体がその機能を全て取り戻すまで、時間は暫く掛かるだろう。

それでも、戦うと決めた。失ったモノを取り戻すため、失った人の想いを遂げる為、何より、理不尽に屈したままではいられないから、修司はその歩みを決して止めはしない。

管制室の扉が開かれる。あの爆発から特に徹底的に修復に取りかかっていた為にその様相は以前とほぼ変わりなく戻っている。

Ｄｒ．ロマンとダ・ヴィンチが此方に気付くと、二人ともそれぞれ異なった表情を見せてくる。ドクターは唖然とした様子で、ダ・ヴィンチは興味深そうに修司の着るソレを見つめている。

中でも藤丸立香は関心が深いのか、その目をキラキラさせて修司を見ている。その様子を何処と無くキリシュタリアと似ていると思った修司は優しく笑みを浮かべる。

山吹色の胴着。持ってくるのを忘れたと思っていた修司の一張羅が王の手によって礼装と言う形で生まれ変わった一品。その背中には新たに界の一文字が刻まれている。

何かに言いたそうにしているロマニ＝アーキマンだが……諦めた。何せ今の修司の礼装は爆発で破損している為、替えがない以上修司の采配に任せるしかない。

まさか心当たりと言っていたモノがコスプレ紛いの衣装だったのには驚くが、それでも修司に任せる以上、横から口出すのは少し抵抗があった。

しかし、それでもＤｒ．ロマンには希望があった。Ａチームの中でも特に異彩を放ち、常識外れの力を持つ修司なら、きっとこの絶望的な状況にも何とかしてくれるのではないかと。藤丸やマシュをいい方向へ導いてくれるのではないかと、一方的な期待を抱いている。

――――これから挑むのは７つの特異点。何れも一筋縄では行かず、数多くの困難が自分達を待っている。でも、それでも進むと決めた。取り戻したい未来があるから、失った世界を取り戻したいから。

救い(奇跡)はなく、未来(希望)もなく、星(友)は闇に溶けていった。

しかしそれでも、そうだとしても。

「――――それじゃあ、行こうか」

ここにはまだ――――俺(彼)がいる。

その１０

――――その日、人類は歴史ごとその存在を焼却された。レフ＝ライノールと彼に王と仰がれる何者か分からない黒幕によって、２０１７年に人類は終焉を迎える事になった。

その証拠に未来を観測する筈だったカルデアスは炎の様に紅く染め上げられている。人類に希望はなく、同じ様に未来もまた存在しない。唯一残された生存区域であるカルデアもその時が来れば人理焼却の波に呑まれて消滅するだろう。

例えるなら、宇宙空間に漂流するコロニー。レフ＝ライノールの残した言葉通り、人類に２０１７年以降の未来は訪れない。

しかし、自分達は違った。カルデアは未だ未来に到達してはおらず、確定された未来を覆せる機会（チャンス）がまだ残されている。

崩れている特異点を修復出来る手段であるレイシフト。これを用いればレフ＝ライノールと黒幕がもたらした人理焼却を覆す事に繋がるのは間違いない。

観測された七つの特異点にレイシフトし、崩された歴史を正しいカタチへと戻す。それだけが人類を救うただ一つの手段。

〝この戦争がおわらなかったら〟

〝この航海が成功しなかったら〟

〝この発明が間違っていたら〟

〝この国が独立できなかったら〟

そんな、現在の人類を決定づけた究極の選択点。これから自分達が挑むのはそんな人類史の分岐点なのだ。

故に、立ち向かう意思を示した時点で自分達の運命はここに決まった。

目的は人類史の保護、及び奪還。探索対象は各年代と、原因と思われる聖遺物・聖杯。

我々が戦うべき相手は歴史そのもの。立ちはだかるのは多くの英

霊、伝説。
それは挑戦であると同時に過去へ弓を引く冒涜。我々は人類を守るために人類史に立ち向かう事になる。けれどそれしかない、自分達が生き残るには、これしか方法がない。未来を取り戻すためにはこれしかない。そこに例え、どのような結末が待っていたとしてもだ。
――――――以上の決意を以て、作戦名はファーストオーダーから改め、カルデア最後にして原初の使命。
人理守護指定・G（グランドオーダー）・O。
魔術世界における最高位の使命を以て、我々は未来を取り戻す！
「――――――て、お互いの士気向上の為にあんな事言ってから三日程経った訳だが、その様子だとどうやら見付かったみたいだな。最初の特異点って奴が」
Ｄｒ．ロマンからの呼び出しに応えて修司は管制室へやって来た。そこでは先に来ていたであろう藤丸達が修司の到着を見ると手を振って此方だと呼んでいる。
彼等の下へ歩みより、先の導入部分について語ると、ロマニは照れ臭そうに笑って頭をかく。
「いや、別に声真似までして言わなくても言いからね？　……コホン。と、まぁその通りだ。修司君の言う通り、僕達はあれから引き続き観測を継続していた結果、七つの特異点の一つを発見した。現在はレイシフトの最終調整中、突貫作業になったけどレイシフト関連は今回の作戦の要だ。集中的に修復したから精度の方は心配要らないよ」
「それはいいが、大丈夫か？　アンタ達スタッフはカルデアの修復だけじゃなく、レイシフト中の俺達のバックアップも兼任している。あまり自分に負荷を掛けすぎていると、いつか取り返しのつかない事になるぞ」
レフ＝ライノールによる中央管制室の爆発によりカルデアは決して小さくないダメージを受けている。来れによりＡチームを始めとした多くの魔術師達が再起不能になり、技術スタッフにも多くの被害が出た。
数少ない彼等を酷使させるのは忍びない。だから修司もせめて体

が回復する迄の間と無理を言って技術的方面に手を貸すことにしたのだ。
「その点については心配いらないよ。何せ此処には世界屈指の天才、万能者たるこのダ・ヴィンチがいるのだからね！」
　そこに絶世の美女として召喚されたダ・ヴィンチが応える。心配はいらないと語る彼女にそれが強がりではない事実であると分かった修司も一先ず胸を撫で下ろす。
「というか、あれから三日で特異点を見付けたことに危惧しているみたいだけど、それは君が手を貸してくれたからって分かってる？」
「え？　俺？」
「そう、折角技術者でもある君にマウントしてやろうと色々教えてやったら、あっという間に覚えちゃうんだもの。お陰で私から教えられる事は殆んど失くなったし、君も技術面でもカルデアに貢献できるスタッフの一員になったわけさ。しかも並外れた体力付き、君が手を貸してくれた事で観測側に人員を割くことが出来て他のスタッフ達の負荷も軽減されたってわけ。流石、英雄王の臣下なだけあるね」
　修司は過去の並行世界から何らかの理由でこの世界に訪れた渡航者、故に本当は未だ宇宙開発技術部門統括などと大層な肩書きを持ってはいないが、それでも彼自身が類い稀な技術者という事実はこの世界でも変わらない。
　最初こそはカルデアの特殊な機材に戸惑いこそしたが、ダ・ヴィンチの的確な指導により施された論理（ロジック）を理解し、修繕修復の加担に成功した。
　その上体力も並外れている為、普通の人より長く活動出来る修司は、リハビリと称して寝る間も惜しんで作業に没頭した。その集中ぶりにＤｒ．ロマンも流石に不味いと思い一度半ば強制的に医務室に連行したが、そこで彼の口から出てきた台詞にＤｒ．ロマンは呆れを通り越して関心すらしてしまった。
「まさか、作業が楽しくて寝るのを忘れてた。なんて言うんだからね。夢中になるのもいいけど、君こそ程々にしなよ」
「は、はは……その節は世話になりました。ごめんなさい」

カルデアという科学と魔術の合わさった施設に合法的に触れられたのは修司にとって大変実りのある経験だった。それ故に没頭し、熱中し過ぎた末に医療担当のトップに怒られる事態になってしまった。尤も、彼の頑張りのお陰で短時間の内にカルデアの大部分が修復された為、ロマニもあまり強く言うことはしなかったが……。

その後は半日近く爆睡した為に気力体力共に全快した修司が今度こそリハビリに専念した為に体の方も完全に元に戻り、今は前以上に力が満ちている気さえする。

「ん、んん！　それじゃあブリーフィングを始めるとしよう。その後、僕達は第一の特異点の修復に取り掛かる。皆、準備はいいね？」

「はい！　取り敢えず、私は出来ることをやってみます！　部活には帰宅部に所属していたので逃げ足には多少自信があります！」

「先輩、自慢気に言うことではないかと」

「うんうん、二人とも元気そうでなによりだ」

それから紆余曲折あってロマニから特異点の調査による大原則である行動の指針を説明された。

主に自分達が行うべき事は特異点の調査及び修正。その時代における人類の決定的なターニングポイント。

具体的に言えば、それがなければ人類はここまで至れなかった、所謂人類史における決定的な〝事変〟。それを調査ないし解明してこれの修正をしなくてはならない。

次に作戦第二の目的。それは《聖杯》の調査である。Ｄｒ．ロマンの推測によると特異点の発生には聖杯が関わっているとされ、レフも何らかな形で聖杯を入手し、悪用したと思われる。膨大な魔力の塊である聖杯を使わなければ時間旅行や歴史改変は不可能とＤｒ．ロマンが断言している事から、この推測は間違いではないのだろう。

故に調査の際は聖杯を探索し、発見次第回収、もしくは破壊をするようにと厳命される。他にもレイシフト後の霊脈を発見からの補給物資を送るための召喚サークルの設置など細かい点を説明され、その全てを記憶するように藤丸は聞き入っている。そんな彼女の姿勢に有り難いと思いながらもロマニの説明は続いた。

その後、ダ・ヴィンチと藤丸の紹介も終わり、いよいよレイシフトが開始される……と、その前にＤｒ．ロマンから修司に待ったが掛けられた。
「えっと……修司君？　君、本当にその格好で行く気かい？」
「ん？　なんかおかしいか？」
「いや、寧ろおかしいところしかないんだけど……」
今の修司の格好は紺色のインナーとリストバンドにブーツ、そして山吹色の胴着を身に纏っている。知る人ぞ知る、あの格好である。
やっぱりアレなんだ！　藤丸は目を再びキラキラさせて修司を見てくる。やっぱりこの娘、キリシュタリアと何処か似ている。アイツがいればきっとこの困難も楽しく乗り越えられたのだろうな、そう思いながら修司はロマニへ説明しようとするが……。
「あぁ、それなら心配要らないよ。パッと見た限りだと彼のその礼装はレイシフトに何ら支障もない。寧ろ、カルデアが支給する礼装よりも性能は上だ。それはこのダ・ヴィンチちゃんが保証しよう」
「えぇ？　本当かい？　このコスプレ紛いが？」
……このＤｒ．ロマンとはこのカルデアへ来て１ヶ月程の付き合いしかないが、この男時折余計な一言を口にする悪癖がある。それと変にネガティブな所さえなければ良い指揮官になれるだろうに。
いや、ネガティブなのは現状を正しく認識しているが故に、という奴なのだろう。若干苛つく修司を余所にダ・ヴィンチが彼の礼装について熱弁している。
軈て修司の着る礼装が有用性のあるものだと無理矢理に自身を納得させ、Ｄｒ．ロマンはレイシフトへのＧｏサインを出す。藤丸とマシュ、そして修司の専用にと用意されたコフィンが現れる。
其所へ乗り込もうとした時、藤丸からある質問が投げ掛けられた。
「あの、修司さん」
「ん？」
「キリシュタリアって人、修司さんと同じＡチームの人だったんですよね？　どんな人なんです？」
これ迄何度も出てきたキリシュタリアという名前、本来ならば彼が

率いるＡチームこそが人理修復に乗り出していた筈。だから、という訳ではないがそれでも彼女は知りたかった。キリシュタリアという人間がどういう人物だったのかを。
「そうだな。色々と面白おかしな奴だったけど、アイツを一言で表すなら……」
「表すなら？」
「君と、何処か似ている男だよ。ここにアイツがいたら、きっと君とは良いコンビになれる。そう断言できる奴だよ」
　それだけ言って修司はコフィンへと向かう。扉が開かれ、いざ乗り込もうとした時、ふと何かを思い出したのか、修司はクルリと踵を返してロマニへ向き直る。
「ドクター、俺の格好をコスプレ紛いと言ったな。なら、一つ賭けをしようじゃないか」
「へ？　な、何だいいきなり？」
「この胴着は伊達や酔狂で着ている訳じゃないって言ってるのさ。それを証明できた暁には……そうだな、アンタが隠している菓子を一つ貰うとしようか」
「ええ!?」
　その後、なにやら喚いているＤｒ．ロマンを無視して修司はコフィンへと乗り込む。藤丸もマシュもコフィンに入り、それを確認したロマニは戸惑いながらレイシフトの開始を宣言する。
　レイシフト開始のプロセスが起動する。それに伴い意識は徐々に薄れていき、体には妙な浮遊感が纏わり付く。
　消えいく意識の中で修司はある台詞を思い出す。それは彼の偉大な黄金の英雄王から賜った修司の枷を外す一言だった。
『お前の力と威光、我の名の下に存分に奮う事を赦そう』
（あぁ、分かっているよ王様。こっから先、遠慮も容赦も一切なしだ。正真正銘全力全開で暴れてくるよ）
　今、自分の世界がどうなっているのか、今の修司には知る術はない。しかし、それでも自分にはまだやるべき事がある。
　王の名の下に力を奮う。自己満足な誓いを立てて、修司は光の中へ

と溶けていった。

◇

「――――ふん、塵も残さず燃え尽きましたか。つまらない時間を取りました。ごめんなさい、ジル」
「何を仰る。これも全て意義のある鉄槌ゆえ。他に生き残った聖職者たちはどうします？」
「そうですね。いちいち審問をするのも面倒です。彼等に喰わせてあげましょう。喜びなさい。私の卑しい猟犬（サーヴァント）達。生き残った聖職者どもは貴方達のものです。マスターであるこの私、ジャンヌダルクが全てを許しましょう」
　フランスの某所。灰となり、塵も残さず燃え尽きた人だったモノを踏みにじり、その者は嗤う。
「魂を喰らいなさい。肉を咬み千切りなさい。湯水の様に血を啜りなさい。だって我々はまさに、〝悪魔〟として顕現したのですから！」
「私の命令はただ一つ。この国を、フランスという過ちを一掃する。刈り取る様に蹂躙なさい、まずはいと懐かしきオルレアンを」
「そして地に蔓延した春の沃地を荒野に帰す。老若男女の区別なく。異教信徒の区別なく。あらゆる者を平等に殺しなさい」
　自分を辱しめた国を許さない。自分を犯した全てが許さない。自分を笑い、踏みにじったあらゆるものが許さない。
　それは、正しく黒い魔女。復讐に駆られ、あらゆるモノを殺すと誓う殺戮の破壊魔。

その名は――――ジャンヌダルク。嘗て聖女と謡われた嘗ての彼女は黒い竜の魔女へと成り果てていた。

その11　第一特異点

――――レイシフトが完了した直後、修司が最初に感じたのは心地よい風の音と草葉の匂いだった。

目を開ければ、そこに広がるのは草原と澄み渡った青空。人理が焼却されたとは思えない程に平穏な場所だった。

辺りを見渡せば無事にレイシフト完了していた立香とマシュの姿も確認できる。前回とは違い安全に転移出来たことに修司は一先ず安堵する。

「フォウ！」

「ふ、フォウさん!?　また付いてきてしまったんですか!?」

何故か前回に続いてレイシフトに付いてきた小動物、恐らくマシュか立香のコフィンに忍び込んだであろうフォウはマシュの頭に登ってご満悦そうにしている。レイシフトの影響による異常もないとの事だし、仕方ないと割り切ってフォウも連れていく事にした一行、直後に立香は何かを目にしたのか、驚いた表情である方角の空を見て固まっている。

一体何を見たというのか、不思議に思った修司は彼女が視線を向けている方角へ目を向けて――――絶句した。

其処にあるのは巨大な光の帯が円形状となって自分達を見下ろしていた。明らかに自然現象には見えないソレ、後から通信を開いてきたロマニもその様な現象はその時代に記録されていないと断言している事から、人理焼却に関わりのある事象と見て間違いないだろう。

一先ずあの巨大な光の帯については後回しにするしかないと判断したロマニは、修司達に送り出した時代の背景について詳しい説明を始めた。

レイシフトに訪れた年代は１４３１年。イギリスとフランスとの間で起きている争い、所謂百年戦争の真っ只中であり、マシュが付け足して説明するとどうやら現在は戦争の休止期間に当たる時期らし

い。
　戦争に休止期間があるという話に立香は首を傾げ、マシュが事細かく補足説明をしている。ちょっとした歴史の勉強をしている二人に和んでいると、修司はふと周囲から視線を向けられている事に気づいた。感じた視線の先に向き直ると、其処には槍や剣を手にしたフランス兵らしき人々が自分達を取り囲もうとしている。
　その目には敵意の類いではなく、どちらかと言えば怯えや戸惑いといった様子のモノに近い。確かに自分達はこの時代から見て風変わりな格好をしていると自覚しているが、それでもあの怯えようは異常だ。
　マシュと立香は未だ気付いている様子もないし、ロマニも警戒している様子はない。恐らくは自分に任せるつもりでいるのだろう、歴史の勉強を行っている彼女達に修司は気付かれないようにソッとその場から離れていき、にじり寄ってくるフランス兵に声を掛ける。
「失礼。貴方達はフランス側の兵士と見て間違いないだろうか？」
「な、何だお前達は!?　おかしな格好をして、何処からやって来た！」
「カルデアという此処より少々遠い地からやった来た旅の者です。見た限り皆さんは何かに怯えていたご様子でしたが、この国で一体何が起きているのですか？」
　現地人になら特異点であるフランス、つまりは自分達の住んでいる故郷に付いて何か知っている事があるかもしれない。情報収集を兼ねて努めて穏やかな口調で訊ねる修司だが、どうやら今のフランスは余程の異常事態に陥っているらしい。
「た、旅の者だと!?　嘘を吐くな！　このフランスに今はもう見るべきモノはないぞ！　さては、貴様等も魔女の手先だな!?　仲間の仇だ。覚悟しろ!!」
　そう言って襲ってくるフランス兵に修司は仕方なく応戦した。とは言え、相手はこの時代に生きる生身の人間。サーヴァントが相手でもないのに本気で相手をするわけにも行かず、峰打ち感覚で彼等に応戦した。
『と、まぁ百年戦争に関する話は大体こんな所――――て、どうしたの修

司君!?　何を勝手に死体の山を築き上げてるのさ!?』
　話を一通り終え、今まで大人しくしていた修司に話し掛けようとしたら、いつの間にか出来上がっていた人の山にＤｒ．ロマンを始めとした全員が目を大きく見開かせて驚きを露にしていた。
「いや、殺してねぇから。適当に小突いて大人しくさせただけだからね？」
　端から見れば大量殺戮の現場責任者にしか見えない光景、ドン引いているロマニへ違うと否定しながら、修司は倒れている彼等を近くの木に寄り掛からせる。
「本当なら情報収集も兼ねて色々と聞き出したかったんだけど、どうにも彼等は余程何かに怯えているっぽくてさ、碌に情報が聞けなかった。折角そっちが御膳立てしてくれたのに申し訳ない」
『へ？　あ、うん。そうだね。それなら仕方ないよね』
「ドクター？」
　明らかに索敵を怠っていたであろうロマニは、この場を自分に任せていたであろうと勘違いしてくれた修司に全力で乗っかる事にした。当然マシュには気付かれており、その目を一瞬う？美ちゃんの如く鋭くさせるが、気付けなかったのは自分も同じなので修司に軽く謝る事で流すことにした。
「でも、気になる事も言ってたな。〝魔女〟、確か彼等はそんな事を口にしていた」
『魔女か。確かに気になるワードだね』
「取り敢えず進もうか。何人か逃がしておいたし、後を付ければ人のいるところに出る筈。本格的な調査はそこから始めるとしよう。マシュちゃん、立香ちゃんの護衛、宜しく頼むよ」
「了解です。先輩の安全は私が護りましゅ……」
「マシュ、もしかして今噛んだ？」
「か、噛みました……すみません」
「フォウフォーウ！」（噛み噛み戯きましたー）
　気絶させた兵達も直に目を覚ますその前に移動して新たな情報を探す為に一向は足早くその場を後にした。

◇

辿り着いた所はとある砦。砦と呼ぶにはその内側はあまりにも酷い有り様となっているその建物に修司達三人は目を丸くさせる。戦争中ではない筈なのにこの有り様では負傷兵の治療もままならないだろう。

１４３１年、フランス側は当時の国王シャルル七世がイギリス側についたフィリップ三世と休戦条約を結んでいる筈。小さな小競り合い程度の争いはあってもここまで大規模な戦闘は無かった筈だとマシュは語る。

ともあれ先ずは情報を集めることから始めよう。修司は一時二人から離れ、骨折等の負傷をした兵達の現地でも出来る簡単な処置を施しながら話を聞き出すことにした。

「あ、アンタ。随分手馴れているんだな。もしかして何処かの偉い名医だったりするのか？」

「んなわけないさ。俺が処置しているのは折れた骨が綺麗にくっ付くように整えているだけだ。骨折程度なら何とかしてやれるが、それ以上の処置となると専門的な知識と技術、なにより施設が必要になる」

「良く分からんが、アンタのお陰で少し楽になったよ。ありがとう」

「礼ついでに一つ教えてくれないか？　この国で一体何が起きている？　今は休戦状態じゃなかったのか？」

「あぁ、そういやアンタ達は旅人なんだってな。全く、大変な時に来たものだぜ。運がねぇな」

そう言って負傷兵の話を聞いていくと、驚くべき事実が明るみに出た。フランスの国王だったシャルル七世はすでに殺されており、イングランドは当の昔に撤退し現在フランスは戦時以上の国家存亡の危

機に立たされていた。
ジャンヌ＝ダルク。嘗て火刑に処された筈のフランスの英雄が〝竜の魔女〟として蘇り、フランスの大地を血で染め上げているという。
それを聞かされた修司は絶句した。ジャンヌ＝ダルクは救国の英雄として世界的に知られた女性だ。若干１７という歳でフランスの為に立ち上がり、僅か一年でオルレアン奪回を果たした者。
イングランドに捕らえられ、火刑に処されるまでの間、あまりにも惨い拷問と屈辱を受けて、それでも尚祈りを止めなかった女性。そんな彼女がフランスを滅ぼそうとしている。
到底信じられない話だ。しかしそれはジャンヌ＝ダルクが救国の英雄だからではない。
知っているからだ。彼女がどれだけ優しく、強く、気高い女性であることを修司は誰よりも近くで眼にしてきたからだ。
自分の知るジャンヌ＝ダルクは無闇に人を傷付けたり、辱しめたりはしない。人に慈しみを持ち、尊重し、時には叱ってくれる……修司にとってシドゥリに続くもう一人の姉貴分として慕ってきた人だ。
そんな彼女が竜の魔女と呼ばれ、フランスを蹂躙している。目の前の負傷兵は実際にその様子を見たと言っているが、それでも修司には信じがたい話だ。
しかし、現実逃避をしている場合ではない。一通り彼等の処置を終えた修司は立香達との情報のすり合わせの為に合流しようとすると……。
「来たぞ！　ドラゴンだ！」
「動けるものは立って戦え！　そうでないものは何とか自力で逃げてくれ！」
空から飛来してくるのは――――ドラゴン。竜の亜種体とされる幻想種、ワイバーンの襲来である。間違っても１５世紀のフランスにいていい生物ではない。
それが数頭、大口を開けて空から飛来してくる。ここには多くの負傷者達がいる。やらせるわけにはいかないと修司は跳躍し、一匹のワ

イバーンの前に出る。
「ヌンッ！」
全身の筋肉をしならせ、回し蹴りを放つ。空気が爆ぜる音と共に吹き飛んだワイバーンは他のを巻き込んで地に落下する。
「悪いが、これ以上好きにはさせねぇ。一瞬で終わらせてやる」
そう言って掲げた左手に気を集中させて一つのエネルギーの塊を生成する。光輝くそれをワイバーン達に向けて放つと、光は爆発しワイバーン達は粉微塵に消し飛んでいく。
亜種とはいえワイバーンも竜、即ちドラゴンと呼ばれる存在だ。そんな幻想種が苦戦どころか秒で始末される光景にマシュ達は勿論フランス兵達もアングリと口を開いて固まっている。
「ドクター、索敵を頼む。マシュちゃん立香ちゃん、お疲れ様」
『りょ、了解！』
「いや、お疲れって言うほど何もしてないんだけど……」
「そんなことないさ。俺が情報収集している間、骸骨と戦ってくれてたんだろ？」
「え？　修司さん、気付いてたの？」
「そりゃあんだけ外で騒がれてたらね」
ワイバーンが襲来する少し前、マシュと立香が戦っているのを修司は知っていた。本当なら修司も手伝うつもりだったが、彼女達がいい感じに戦えていた事に安心し、その場での戦闘を任せることにしたのだ。お陰で負傷者達の簡単な治療処置を終えることができ、彼等をここから逃がす算段も整えることができた。
「カルデアでの三日、君達も頑張ってくれてたんだな。君達と一緒に戦える事、頼もしく思うよ」
「そ、そうですか？　えへへ」
修司がこのカルデアでの三日間を濃厚に過ごしていた様に立香とマシュもまたそれぞれ思い思いに過ごしてきた。忙しいダ・ヴィンチとロマニに頭を下げてシミュレーターを起動させ、其処で可能な限り二人はサーヴァントとマスターとしての戦闘訓練に勤しんでいた。
取り戻したい未来がある。その為に頑張ると口にした彼女の言葉

は嘘じゃなかった。本当は怖い筈なのに、それでも前を向いて進み続ける彼女達に修司はＡチームの皆とは何処か違う可能性を感じ始めていた。
「さて、それはそれとして……そこにいる奴、いい加減出てこいよ」
「え!?」
「ドクター!?」
『ご、ゴメンよぉ！　今こっちでも確認した！　向こうの木の影に魔力反応！　……これは、サーヴァントだ！』
　修司君の探知、速すぎるよぉ！　そんなロマニの嘆きの叫びを無視して盾を構えるマシュとその後ろで身構える立香、サーヴァントと聞いて前回の特異点でのアーチャーと騎士王を思い出しているのだろう。
　そんな二人にいい反応だと感心しながら二人を庇うように修司は前に出る。木の影に隠れた何者かは依然として出てくる気配はない、此方の様子を伺っているのかと勘繰っていると……。
「あの……その……すみません。戦いの助力になろうかと駆け付けたのですが……アハハ、出遅れてしまって……」
　両手に旗を巻いた棒を持ち、気まずそうに出てくるその女性に修司は目を見開いた。
「そのポンコツ具合、間違いない！　ジャンヌさんだ！」
「だ、誰がポンコツですかぁ！」
　まさかの聖女（？）の登場に立香達は驚きを隠せなかった。

その１２　第一特異点

――――それは、過去の記憶と呼ぶには些か彩りに満ちた日々だった。あの血腥い聖杯戦争を終局させ、英雄王の気紛れによって生き長らえた一人の女性。

肉体を得て、普通の人間の様に暮らし始めた彼女との日々はとても充実し、楽しく、そして……波瀾万丈に満ちたモノだった。

彼女とは自分の付き人として共に過ごす時間の多い間柄だった。面倒見が良く、お人好しで、真面目で、何処か抜けた所のある……修司にとってシドゥリに続くもう一人の姉貴分。

実際にそう呼んだことは無かったが、そう思える位の濃い時間が自分達にはあった。外国へ行けば現地でのイザコザに巻き込まれ、その度に共に戦い窮地を抜け出してきた。

修司にとっては姉貴分の一人であり、共に戦う頼もしい仲間。

しかし、そんな彼女も今はどうしているか分からない。元の世界に戻るまでは安否を確認する事は出来ないと、半ば諦めかけていたのだが……ここへ来て転機が訪れた。

今、自分の目の前には嘗てと何ら変わりのないあの時のままの彼女がいる。相変わらず頼れそうに見えて何処か抜けていて、英雄王曰くポンコツ属性持ちの聖女、寸分違わず記憶の中の彼女と同じだった為に思わず感情のままに口走ってしまったが……この時の彼女の反応もまた、予想通りのモノだった。

「ジャンヌ＝ダルク、この方が救国の英雄と言われる！」

「あれ？　でもジャンヌ＝ダルクって今は皆から竜の魔女って呼ばれていたんじゃ……」

『確かにそれも気になる所だ。でも、今はそれ以上に気掛かりがある』

音声からしてＤｒ．ロマンの懐疑的視線を向けられている気がした修司は、此処で自分の犯したやらかしに気付く。元の世界の自分と、今いるこの世界の自分とは色々と異なっている点がある。英雄王の臣下であるという点は共通だが、ここでは自分が彼の王を喚びだし

た事になっている。
　加えて、此処ではジャンヌ＝ダルクと自分が元の世界と同じ主人とその従者である可能性は低い。世界が焼却される前に一度軽くだがカルデアからネットを通じて調べてみたが、まるで手懸かりが得られなかったのだ。
　まぁ、仮にもこの世界の自分は宇宙開発技術部門統括なんて大層な肩書きを持っているのだ。そんな人間の情報を少し調べただけで全容が明らかに出来るとは思わない。だからこそ何故そんな自分が英雄王を自ら召喚したと魔術側からは認知されているのだろう。
　それとも、それすらも偽りの情報なのだろうか。そこまで考えた所で修司の思考は現実へと引き戻される。
「詳しい話は後程に致しましょう。先ずはここから離れるべきです。……その、あまり騒ぎにはしたくないので」
　言われて辺りを見渡せば、砦から顔を覗かせる複数人のフランス兵が此方の様子を伺っている。その困惑と怯えた表情からどうやらジャンヌがいることにも気付いているのだろう。
　現在のフランスの人々にとってジャンヌ＝ダルクは恐怖の象徴、あれでは話をしようにもパニックに陥れて却って危険な事になるかもしれない。諸々の可能性を考慮してこの場から離れる事にした一同は、近くの森で巣食っていた敵性エネミーを駆逐しながら進んでいった。
　――――そして夜。火を焚き、野宿の準備を終えた修司達は改めて自己紹介をしながらジャンヌからの話を聞くこととなった。と言っても、現在の彼女は聖杯からの基礎知識等のバックアップが施されていない為、自身がサーヴァントである自覚は薄いらしい。
　ルーラーというクラス自体は修司の知るものと全く一致しているが、その概要を完全に把握している訳ではない。
「成る程、つまり今のジャンヌさんはサーヴァントとしてはピカピカの一年生なんですね！」
「せ、先輩。その認識はどうかと……」
「あ、あはは……」

時折そんな笑いを交えたりしながら話は淡々と進んでいった。オルレアン崩壊とシャルル七世の死去、フランスという国家の崩壊とそれによる世界への影響。

ワイバーンという竜種の召喚とそれに関わっていると思われる聖杯の有無、これまでに得た情報を掛け合わせ、今後の指針を改めて定めた所で、Ｄｒ．ロマンからその話は切り出される。

『さて、それじゃあさっきの続きだ。修司君、どうして君は彼女がジャンヌ＝ダルクであると分かったんだ？　確かに君は公……と言っても魔術側だけにだが、英雄王を召喚したという事はあってもジャンヌ＝ダルクまでもが召喚したという話はなかった筈だ。差し支えなければ、詳しく説明しては貰えないだろうか』

「え、えーーっと……」

音声だけとはいえ少しばかり圧のあるロマニの言葉に修司はなんて答えるべきか悩んでいた。こうなったら正直に話そうか？　別に疚しい事などないし、黙っていた所で不信感を持たれる位なら全部話した方が皆との信頼関係を崩さずに済む。

問題はどう話したらいいのか、魔術というモノがどれ程のモノかは修司には分からないが、世界の壁を越える魔術というのは聞いたことがない。いや、実際に越えているのだからそう言う術があるのは判明しているが、それをどんな手段でどの様な目的で行われたのか、修司自身全く分かっていない。

知っていそうなのは送り出した英雄王位だが、その彼もここにはいない。カドックじゃなくてもツッコミ所満載な話をどう上手く話したらいいか分からない修司が悩んでいると、意外な所から助け船が出されてきた。

『まぁまぁロマニ、そう怖い顔するもんじゃあないぜ？　彼の何を疑っているのかは……まぁ大体予想は出来るが、それは今考える事じゃないだろ？』

『ダ・ヴィンチ……いや、でもさ』

『それとも君は、修司君がレフの奴等と同じ人類に仇なす存在だとでも言うつもりかい？　それは幾らなんでも失礼ってモノじゃないか

？』
「そ、そうですよ！　修司さんが敵だなんて、そんなこと有り得ませんよ！」
「先輩に同意します。修司さんはあの時、レフ教授とは明確に敵対していました。あれを演技と呼ぶには……少し無理があるかと」
「フォウフォーウ！」
『う、うぅ……これじゃあ僕の方が悪者みたいじゃないか！　分かった、分かったよ！　この話はおしまい！　僕だって彼の事は信用してるんだ！　こんなことを聞くつもりは無かったよ』
「ドクター、悪い。何て言ったら良いのか、俺も分からなくてさ……」
『はいはい。ロマニも修司君もそこまでにしようか、明日も早い。君達は早く休みたまえ、体調管理も君達の仕事だよ』
そう言って一時カルデアとの通信は終了し、その後少し話をした後でダ・ヴィンチの言う通り、明日も早いと早急に休むことになった。
目下の目的はジャンヌ＝ダルクと行動を共にし、魔女と呼ばれるもう一人のジャンヌの真相を暴くこと。その裏にはきっと特異点の元凶に繋がっていると信じて、修司とジャンヌも交代に見張りをしながら休むことにした。

◇

「ダ・ヴィンチ、どういうつもりだい？」
「どういうつもりって？」
「修司君の事だよ。彼の言動には時折引っ掛かる所があったけど、今

回のは流石に無視できない。彼が何故初対面であるはずのジャンヌ＝ダルクを知っていたのか、そこから彼の素性を少しでも明るみに出せたかもしれないのに……」
「別に知った所で意味はないんじゃないかな？　通信を切る間際に彼も言ってただろ？　自分でも何て言ったらいいか分からないって、それはつまり少なくとも彼自身には疚しい事なんてないって意味なんじゃないかな？」
「それは……そう、だけど……」
「それに、素性が怪しいのは彼に限った話ではないだろう？　嘗てのAチームにだって素性を明らかにしていない魔術師はいたさ、彼等に比べたら修司君は比較的分かりやすい」
「……」
「それに、あの様子だとそう遠くないうちに彼自身から聞かされるんじゃないかな？　アレは知られたら困るってモノじゃなく、教えて混乱させたらどうしようというこちらに配慮したものさ。まぁ、この万能たる私迄もが気を遣われていると思うと釈然としないがね」
「……はぁ、分かったよ。この件に関しては此方から追求はしない。それでいいだろ？」
「宜しい。なら、此方も少し休むとしよう。珈琲飲むだろ？　淹れてくるよ」
「ありがとう」
　未だに渋るロマニを説得し、何とか荒波たてずに終えた事に満足したダ・ヴィンチは一人食堂へと向かう。その途中、ダ・ヴィンチはふと思う。今の白河修司は写真や映像で見るより少しばかり若い姿であると。
（最初はただの若作りか魔術の類い、或いは英雄王の力によるものかと思っていたけど、事はもっと単純かもしれないな）
　英雄王とはその伝承からありとあらゆる財宝を有している英雄達の中でも最上の力を持つとされる英雄だ。その彼の力を用いれば、他の英雄を呼び出す事や修司にある程度若返りをさせるなんて造作もないだろう。

当初、誰もがその仮説に行き渡り、誰もその事について指摘をしようとは思わなかった。けれど、あの時見た彼の態度から予想してダ・ヴィンチはもっと簡単な話ではないかと予想し始める。
（そう、例えば彼は此処とは別の次元、別の時空、別の世界からやって来た渡航者とか）
「なんて、流石にそれは飛躍しすぎか」
自分で言っておいてないわーと溢しながら珈琲を淹れたダ・ヴィンチは珈琲の入ったコップ二つを手に持ちロマニの待つ管制室へと向かっていった。

◇

翌朝、森を抜けて近くの街や砦で情報収集をする事になった修司達は現在位置から最も近い街、ラ・シャリテへと向かう事になった。
「もうすぐラ・シャリテです。ここでオルレアンの情報が得られない場合、更にオルレアンへ近付かなければいけませんが――なるべく、そうならないように済ませたいですね」
現状、敵の本拠地であろうオルレアンに直接向かうには情報が不足すぎる。その為に少しでも手掛かりを得るために一行はオルレアンから近い位置にある街へ向かうようにしたのだが……Ｄｒ．ロマンからのサーヴァントの探知をしたと言う報告を受けてから事態は一変する事になる。
街から煙が上がっている。煙の出所を見ると街からは大きな火の手が上がっているのを認識した瞬間、ジャンヌは走り出した。
修司達も慌てながら彼女を追う。街へ辿り着いた彼等が目にした

のは……破壊の限りを尽くされたと思われる惨劇の光景だった。
「まさか――」
「ドクター、生体反応は!?」
『――――ダメだ。その街に命と呼べるものは残っていない』
「そんな――――」
　辺りにばら蒔かれる血の跡。燃え盛る街と瓦礫、その惨劇から凄まじい程の憎悪を感じ取ったジャンヌはその顔を悲痛なモノに歪める。
　街には大人だけでなく子供もいた筈だ。それなのに意にも介さず蹂躙するのは正に魔女の所業と言えるだろう。
　ふと、藤丸が道に落ちてた汚れた人形を手に取り、手ではたいて汚れを落としていく。恐らくはこの街に住む子供、それも女の子が持っていたものなのだろう。近くの壁に座らせ、悼むように手を合わせる彼女を偽善と口にするものはいない。
　生存者かと思われたモノは全てが生ける屍（リビングデッド）に変貌し、仕方なく蹴散らし、死体を食い漁るワイバーンには容赦なく拳を叩き込んだ。
「最後のワイバーンを仕留めました。周囲に敵影なし、戦闘終了です」
「……」
「ジャンヌさん、大丈夫か？」
「これを行ったのは、恐らく〝私〟なのでしょうね」
　立ち尽くすジャンヌに修司は違うと言えなかった。
　何せ、この破壊には深い憎しみが感じられた。フランスが憎い、自分にすがりつき、殺したこの国が憎い。憎くて憎くて堪らないと、だから悉くを殺したのだと、そう言われている気がしてならないからだ。
「一体、どれ程人を憎めばこのような所業を行えるのでしょう。私には、それが分からない」
「……」
　正直、修司にはジャンヌのこう言う所だけが少しだけ疑問だった。ジャンヌはこれ迄フランスの人々を救うために救国の旗を掲げて戦い、敵を討ち、血を浴びてきた。誰よりも自国の救済を望んでいたのに最後はその国に全てを奪われた。

誇りも、矜持も、純潔も、尊厳すらも踏みにじられ、それでも祈ることを止めなかった彼女に修司は一度だけ聞いたことがある。
フランスを、自分を死に追いやった全てを恨んだことはないのか、と。
彼女は即答で答えた『ありません』と。
何故なら、彼女は全てを受け入れていたからだ。凌辱を受けても、尊厳を踏みにじられても、死に追いやられ、火刑に処されても、彼女はフランスの事を想っていたからだ。
それが彼女の凄い所であり、同時に寂しく思える所でもあった。もっと彼女は報われてもいい筈だ。人並みの幸福があってもいい筈だ。あんな最期になって……怒っても、憎んでもいい筈だ。
けど、他ならぬジャンヌがそれを望まない。望まないからこそ、そう思わずにはいられない。
（……ん？　待てよ？　そう思わずにはいられない？）
ふと脳裏に浮かんだ違和感。件の魔女と二人のジャンヌの差異について修司が決定的な何かに気付きかけた時、ロマニから緊急の連絡が入った。
『待った！　先程立ち去ったサーヴァントが反転した！　不味いな、君達の存在を察知したらしい！』
「数は!?」
『おい、冗談だろ……!?　数は五騎！　し、しかも……ワイバーンが次々に召喚されている!?』
「!?」
『数は……既に２０を越えた！　総員退避！　今すぐ逃げるんだ！
数で勝てない以上逃げるしかない！』
「ですが、せめて真意を問い質さなければ！」
『数が同等だったらそれも選択肢に入ってたさ！　でも圧倒的戦力差を前に無謀な戦いをさせる訳にはいかないだろ！』
「……！」
Ｄｒ．ロマンの言う通り、ジャンヌも撤退するべきだと分かってはいた。空を見れば既にワイバーンの群れが此方に迫っており、その背

にはそれぞれ恐るべき力を持ったサーヴァントが五騎も乗っている。
圧倒的力と数の前に自分達が戦える訳がない。真意を確かめたいが、自分の我が儘でマシュや藤丸達を危険な目に合わせる訳にはいかない。
決断の時が迫り遂にジャンヌが撤退を選択した時、修司が一歩前に出る。
「要は、数を減らせばいいんだろ？」
『し、修司君!? 何をするつも――――まさか、冬木で見せたあのエクスカリバーを!?』
「エクスカリバー!? 聖剣の!? あの伝説の剣を彼が持っているのですか!?」
「あ、いやー……何て言いましょうか」
「エクスカリバーだけどエクスカリバーじゃないと言いますか」
「???」
エクスカリバーと聞いて驚愕するジャンヌだが、マシュと藤丸の反応を見たジャンヌは混乱し首を傾げる。
「マシュちゃん、立香ちゃんを守ってくれ。ジャンヌさんは吹き飛ばされないように気を付けてくれ……久々だからな。上手く加減できるといいんだが」
そう言って、修司は己の内にある気を解放させる。爆発の様な解放の余波にマシュは盾を構えて踏みとどまり、藤丸は吹き飛ばされないようにマシュの腰にしがみつく。
山吹色の胴着を着ている修司はその体に白い炎を纏わせている。その異様な光景にジャンヌは目を大きく見開かせて驚きを露にしていた。
「ジャンヌさん。国のために命を捧げ、そして国に見捨てられたアンタに聞きたい。アンタはフランスを、人類を……今でも好きでいてくれるか？」
迫り来るワイバーンの群れを前に修司はジャンヌに問い掛ける。昨夜の自己紹介の時、彼女は聞いた。人理を焼却され、失った世界と未来を取り戻すために戦っていると。

人類はその歴史によって否定され、焼却された。歴史とは即ちその時代を生きてきた人々の繋いできた証そのもの。
だから修司は聞きたかった。ジャンヌに、フランスを想い、誰かを想い、誰かの為に戦ってきた彼女に……人類を、信じてくれるかを。
「そんなの、当たり前じゃないですか」
そしてやはり、彼女は即答で応えてくれた。世界が違っても変わらない彼女の想いが嬉しくて、修司は更に力を高めていく。
「なら、その想いに応えなきゃいけないよな！　ドクター！　皆も！
しっかり見ていろよ！」
『な、何を見せるって言うんだよ!?』
「可能性だ！　人を、命を、人類を信じてくれたジャンヌさんに俺が示せる可能性を見せてやるのさ！」
昂った気を更に燃え上がらせて、修司はワイバーンの群れに向けて両手を前に突きだす。
「かぁ……」
そして両手を腰に持っていき、力を溜めるその姿に藤丸はまさかと両目を見開く。
「めぇ……」
光が灯り、収束されていく。世界中の誰もが知るその構えにモニター越しで見ていたロマニは立ち上がる。
「はぁ……」
最初は、ふざけている奴だと思っていたスタッフの多くがこの時〝マジだ〟と思い知る。
「めぇ……」
光が集い、溢れていく。誰もがその光景に目を奪われている中でムニエルだけは涙を流していた。
期待と可能性に胸を膨らませて――――今。
「波ァァァァァァッ!!」
光は放たれる。空を覆うワイバーンを呑み込み、その巨大な蒼き閃光は空の彼方まで伸びていく。
その様子はフランスの各地で目撃されていた。天に昇る光の柱、天

変地異の光景だ。しかし、その反面に人々の顔には恐怖の色はない。
「わー、きれー」
何も知らない子供はその光に満面の笑みを浮かべていた。

モニター越しでその様子を見ていたロマニは腰が抜けた様に椅子に座り込む。
「まさか、これ程とは……」
「いやはや、ちょっと流石に予想外だねこれは。彼、本当に人間かい？」
モニターに映るのは空に風穴が穿たれた光景、空を覆っていた黒い影は吹き飛び、今は疎らに残っているものしかいない。
その様子に誰もが言葉を失っている中……。
「あぁ、ちくしょう。キリシュタリアにも見せてやりたかったなぁ」
眼鏡を外し、笑いながら涙を拭うムニエルの呟きだけが管制室に溶けていった。

その13　第一特異点

彼女にとって絶望とは歓喜だ。彼女にとって悲劇とは喜劇だ。
涙を流して命を乞う者を見れば喉が潤い、神に無意味な祈りを捧げる者を見れば心が満たされた。
そんな人々を彼女は等しく……そう、平等に蹂躙した。老いも若いも、男も女も、その全てが彼女にとって焼き払うべき憎悪の対象だ。
彼女は裁定者（ルーラー）。その名の通り裁く者、嘗ては傲慢な人間の手によって裁かれた自分が、今度は自分が裁いていく。
汝、罪ありき。口にするまでもなく命を蹂躙していくその様子は生前ですら得られなかった甘美に彩られていた。
そして今日も彼女は蹂躙を終えた。気分が良かった。心地が良かった。泣いて喚いて逃げ惑う人間が、面白くて愉しくて仕方がなかった。次は何処へ向かおうか、彼女の脳裏に埋め尽くされるのは次への楽しみだけ、鼻歌混じりにワイバーンに乗って一時オルレアンへ戻ろうとした時、ふと彼女は違和感を感じた。
誰かがラ・シャリテ（街）にいる。そう確信させる程の濃い気配、意識を集中させれば今さっき壊滅させた街に四人ほどの気配があるのが分かった。
生き残りか、それとも運悪く訪れた何者か、どちらでもいいしどうでもいい。彼女にとってこの国に生きる全てが抹殺対象なのだから。
ワイバーンを操り、街へと引き返す。その傍らに自分の下僕であるサーヴァントを従えて黒い竜の魔女（ジャンヌ＝ダルク）は口を愉悦に歪ませる。
さぁ、蹂躙してやろう。命ある全てを貪り、この国の全てを犯して踏みにじろう。大地と空を血で染め上げ、あらゆるモノを破壊しつくそう。
何故なら、自分はジャンヌ＝ダルクなのだから。
「……ん？　何かしら、あの光――――」
街の方になんか光っているのが見える。目を細めて光の正体を見うよとしたジャンヌは……次の瞬間、突如軌道を変えたワイバーンによって顔を竜の背中に叩き付けられてしまう。

突然の顔の強打により目から涙が溢れてくる。痛みと驚きに憤慨する魔女だが、彼女が何かを口にする前に――――。
光が雪崩れ込んできた。蒼白く、眩しく、地上から放たれた巨大な閃光は数秒前まで自分がいた位置を呑み込み、従えていた多くのワイバーンと二騎のサーヴァントを消滅させ……空の彼方へと消えていった。
「な、ななな……」
そして、魔女を含めた残る数少ないワイバーンも閃光の余波によって翼を焼かれ、その推力を失っていく。
「何なのよ、今のはァァァァッ!?」
地上に落ちていく魔女が目にしたのは、忌々しいほどに逞しい、山吹色の胴着を着た男の姿だった。

◇

「いっけね、何体か逃しちまった。参ったな、久し振りにやったから、少し抑えすぎたか」
空に放たれた蒼白い巨大な閃光、空を穿ち雲を消し飛ばし、世界に一時の空白のような静寂をもたらした男は自分の手応えに不満を溢していた。
誰も彼もが絶句し、言葉が見付からない状態。だが、それは当然とも言えた。
男――――修司の放った閃光はあの物語を知る者ならば誰もが一度は真似した事のあるモノだったからだ。少年なら当然の如く、そしてそう言った物語に疎い少女すらも知っている現代に於いて最大にし

て最強、そして最高の必殺技の一つ。
〝かめはめ波〟　世界中の人々が認知している理想が現実のものとして実現したその光景に誰もが言葉を失っている。
「……さて、最上の結果を得られる事は出来なかったけど、まぁボチボチの成果という事にしておこう。ドクター」
『え、え？　あ、うん。なんだい？』
　声を掛けたのにも関わらず、未だに放心状態のロマニ、そんな彼に修司はフッと笑みを溢し……。
「これで俺がこの胴着を着ていることが伊達や酔狂の類いでないことは……理解してもらえたかな？」
　そんな修司の不敵とも言える一言にロマニもまた小さく笑った。
『あぁ、参ったよ。完全に僕の敗けだ。認めるよ、君は本当に――――ハチャメチャな奴だよ』
「それは、最高の誉め言葉だな」
　ハハハと笑う二人、そんな彼等に漸く反応した藤丸達が修司の下へ歩み寄ってくる。
「修司さーん！　凄いよ凄いよ！　私、生まれて初めて生で見た！」
「お、驚きです！　修司さんはあの手刀だけでなく、対城宝具以上の宝具を有していたのですね⁉　いや、修司さんはサーヴァントではないから……まさか、魔法使い⁉」
「あー、違うよマシュ。あれはどちらかと言えば仙人が使う必殺技みたいなもので……」
「仙人⁉　貴方はその若さで仙人の領域まで足を踏み入れたというのですか⁉　いえ、仙人に外見の是非を問うのは違う気もしますが……」
「いやジャンヌさん、そういう事でも……ん？　いや、そういう事なのかな？　そこら辺どうなんですか修司さん？」
　皆、それぞれが興味津々といった様子で修司へ詰め寄ってくる。特に立香からの追求が凄まじい、この食いつき具合からやはりこの娘はキリシュタリアと何処か似ている。そんな風に思っていると、近くの瓦礫となった街に一体のワイバーンが落ちてくるのが見えた。

「あれって……」
「どうやら、俺が射ち漏らした奴が落ちてきたらしい。チラッと見た限りだと誰か乗っていたみたいだが……」
「行ってみましょう。場合によっては戦闘になる可能性もあります。皆さん、充分に警戒を」
「了解です」
修司に問い詰めるのを一旦止めて、ワイバーンが落ちたとされる場所へ向かうことになった一行。翼竜が落ちた場所へ辿り着くと、これ迄戦っていたワイバーンとは一回り以上に巨大な体躯をしていて、それはまるでより純正の高い竜種であることを示唆している様だった。
しかし、その翼竜も既に事切れている。余波を受けただけでもかなりのダメージを受けたのだろう。鋼の如く硬いとされている竜の鱗がまるで飴細工の様に焼け爛れている。これでは辺りを調べるのに手間取りそうか？　いっそのこと竜を何処かへ運ぼうかと修司が悩んでいた所に、近くで瓦礫が崩れる音を耳にする。
マシュとジャンヌが立香の前に立ち、修司もまた一歩前に出る。崩れた瓦礫から何かが這い出て来ると確信した修司達はいつでも迎え撃てるように身構える。
ガタリッ、音を立てて瓦礫の中から這い出るように現れたのは……黒いジャンヌ＝ダルクだった。
その顔、その出で立ち、その風貌。憎悪に満ちた鋭い目と黒い格好、そして死人の様に白い素肌の所を除けば自分の知る、引いては隣にいる彼女、ジャンヌ＝ダルクと同じである女性に修司は一瞬言葉を失った。
「い、一体何が起きたというのです。よもや今更になって神から裁きがあったとでも言うのですか」
「生憎、神なんて大層なものじゃねーよ。正真正銘、人の手によって放たれた力だ」
「!?」
声を掛けて反応を伺った修司だが、返ってきたのは殺意の籠った一撃だった。黒いジャンヌは手にした黒い旗を振り抜き、修司の喉笛に

突き立てようとする。
旗の尖端が喉に突き刺さる――――直前、彼女の奮う旗は修司の手によって防がれていた。
「なっ!?」
動かない。どれだけ力を込めて動かそうともビクともしないその膂力に竜の魔女は目を剥き、そして理解した。コイツだと、あの巨大な閃光を放ったのは間違いなくコイツだと、竜の魔女は直感で理解する。
見た限り、コイツはサーヴァントではない。ふざけた話だ。神代のサーヴァントでもないパッと見てただの人間にしか見えない男が、自分が有するワイバーンとサーヴァントを二騎も消滅させた。
なんという理不尽、なんという不条理、嘗てのイングランドとの戦いでも此処まで憤る事はなかった。自分を見下ろすのが許せない、自分を下に見ているのが気にくわない。
なにより……。
「本当に、ジャンヌさん、なんだな……」
「……このっ!!」
その憐れみに満ちた眼で見られるのが、心底腹が立った。
憤り、憤慨し、猛る竜の魔女。気炎の如く息を吐き、彼女は旗を握る手により力を加える。その甲斐あって修司の手から僅かだけ旗を動かすが……それでも、彼の喉を尖端で穿つには至らない。
「竜の魔女を、舐めるんじゃ……ないわよ!」
「!」
相変わらずふざけた力だ。これだけ力を加えても尚、均衡を崩すには至らない。しかし、膂力の扱い方は何も抑えるだけに限った事ではない。黒いジャンヌは修司を旗ごと持ち上げ、遠心力をこれでもかと利用し、目一杯振り抜いて、修司を吹き飛ばした。
「修司さん!」
「余所見をしている暇はないよ」
「っ!?」
「先輩!」

影から立香に向けて放たれる一刺しをマシュが盾をもって防ぐ、マシュと盾の陰から見えたのは……流麗の騎士。細剣（レイピア）を片手に此方を静かに見据えるのは美しいとも呼べる綺麗な美剣士だった。
「マスター、撤退を。アサシンとランサーがやられた以上、数による此方の優位性は期待できない」
淡々と機械的の様に事実を口にする剣士（セイバー）に、黒いジャンヌの表情は苦いものになる。敵サーヴァントは既に二騎も倒している、その事実はカルデアにいるロマニ達も確認しているが、それでも楽観できる状況ではない。
吹き飛ばされた修司は未だに戻ってくる気配はない。何かしらのトラブルが起きているのだろうか、現在はスタッフが修司の周辺を探索しているが、原因究明まであと十数秒の時間が必要になる。
その間に時間を稼いで貰いたい。そんなロマニの意思を汲み取った様に白いジャンヌ＝ダルクが口を開いた。

「応えなさい黒いジャンヌ＝ダルク。何故貴女はこのような蛮行を行っているのです」
「何故？　何故と言ったの？　驚いたわ。ジャンヌ（私）の癖にそんな事も分からないの？　呆れたわ、こんな小娘（私）にすがるしかなかった国とか、ネズミの国にも劣っていたのね！」
真摯に問い質すジャンヌの問いに竜の魔女は悪意を以て返す。その問いには意味がないと、嘲り、罵る彼女に白いジャンヌは務めて平静を装い魔女を見据える。
「ならば質問を変えましょう。貴女は……誰ですか？」
「さて、それは此方の質問でもありますが……そうですね。上に立つものとして教えて上げましょう。私はジャンヌ＝ダルク。蘇った救国の聖女ですよ、もう一人の私」
バカげている。ジャンヌは黒い方のジャンヌを見てそう断じる。彼女は決して聖女等ではない、そもそもジャンヌ（私）自身がそう認めてはいない。
「いえ、それはもう過ぎたこと、今語ることではない。それよりも、今

一度問います。何故この街を襲ったのですか？」
「フランスを滅ぼすため」
事もなげに黒いジャンヌは言い放つ。それがごく自然の事だと、彼女にとって国を滅ぼすのは生きることに必要な呼吸であるのも同じなのだと、その凶悪な笑みを浮かべて言い放つ。
国際的にではなく、経済的にでもない。物理的に、力ずくで全てを潰す。その方が確実で簡潔、何よりも分かりやすいシンプルなものだと、彼女は嗤う。
彼女は、どうしようもなく狂っている。対峙して改めて確信したジャンヌは魔女とは対照的な白い旗を握り締め、その切っ先を彼女に向けた。

◇

「チッ、不味いな。思ったよりも離されちまったか」
一方、黒いジャンヌの膂力によって吹き飛ばされた修司は、すぐに体勢を整えて地面へと着地する。
前を見据えれば、既に結構な距離を離されていた事に焦りを感じた修司は急いで立香達の所へ戻ろうとする。流石はジャンヌ＝ダルク、黒くなってもその力は健在だと妙な感心を抱きながら駆けようとして……修司は降ってくるそれに気付いた。
両腕を交差させて防御の構え、次いで訪れる衝撃と重さに目を見開いた修司は、襲ってきた衝撃の勢いを殺そうと後ろに飛ぶ。

着地した修司は前を睨むように見据える。立ち上る砂塵からは一つの人影が立ち上がるのが見えた。恐らくはサーヴァント、この特異点に来て初めてのサーヴァント戦に意識を集中させ、砂塵の中の人影を見据える。
「……へぇ、今のを避けるのね。成る程、ただの人間でないことは確かなようですね。しかし」
「……」
「ここから先、通りたくば先ずはわたしを殺しなさい。でなければ――このヤコブ様の拳があなたの命を砕くでしょう」
現れたのは一人の女性、長い髪を靡かせ、砂塵の中から現れる彼女は……何故か水着の格好をしていた。
「我が名はマルタ。不本意ですが我がマスターの命により、貴方を屠ります」
拳を握り締め、突貫してくる女に……。
「いやどういう事よ!?」
修司は至極全うな疑問を口に出した。

その14　第一特異点

黒いジャンヌと白いジャンヌ、魔女と聖女、善と悪。外見は何処まで同じなのにその在り方は哀しいほどに対極に位置する両者の戦いは、端から見て拮抗に映っていた。

白のジャンヌが旗を独自で培った棒術で奮えば、黒のジャンヌも同じ手段で対抗する。まるで鏡写しの二人、しかし止めるものはおらず、止められる者もまたいなかった。

「シッ！」

「うっ、やぁ！」

放たれる白条の一閃、盾越しからでも伝わってくるその鋭さと重みにデミ・サーヴァントのマシュは歯を喰い縛りながら耐え抜き、反撃の蹴りを放つ。

しかし流麗の騎士はマシュの蹴りを闘牛士の如くヒラリと回避する。避けると同時に攻めてくる騎士の攻撃に藤丸立香はマシュに対する指示を決めかねていた。

戦えてはいる。先の特異点であの騎士王とマトモに戦えている事から、マシュが目の前の剣士のサーヴァントに負けている所はない。そう、負けてはいないのだ。

問題なのは……藤丸立香自身にあった。

覚悟は決めていた。人類最後のマスター、その片割れとしてマシュと共に戦い、いつか自分の戻る日常を取り戻すために戦うと、そう心に決めた。その気持ちに嘘はないし、撤回するつもりはない。

だが、どれだけ覚悟や決意を固めた所で経験という現実はそう簡単には覆らない。相手は歴戦のサーヴァント、命を懸けた修羅場を潜り抜けたのは一つや二つでは済まない。シミュレーターとは違う、サーヴァントという一時の具現化だとしても、目の前にいるのはその時の歴史を生き抜いた戦士で、それが自分達の戦う相手なのだ。

後手に回るのは当たり前、苦戦を強いられるのは当たり前、何せ藤

丸立香は唯の一般人。何処までも平凡で凡人な――――ただのマスター擬きだ。
　しかし、それでも……。
「先輩！」
「任せてマシュ！」
　抗うと決めた。怖くても、痛くても、何も見ないで、知らないフリなんて出来やしない。奪われた世界に価値はないと一方的に告げられ、消された未来に無意味と一方的に押し付けられ、それを素直に受け入れられる程……藤丸立香は大人ではなかった。
　何より――――。
「先輩、次が来ます。備えを！」
「守りを固めて、隙あれば応戦！」
「了解！」
　自分を信じて背中を任せてくれる後輩がいる。自分よりも可愛くて、可憐な少女が自分の為に命を張って戦ってくれている。
　そんな彼女を置いて……逃げる事なんて出来はしない！
（まぁ逃げる時はマシュを引きずってでも逃げるけどね！）
　そんな後ろ向きで前向きな誓いを立てながらマシュとジャンヌの戦いを眺めていると、戦況に動きが生じた。弾かれるように後ろへ飛ばされたのは……白いジャンヌの方だった。旗を地面に差して膝を着く彼女に立香はそんなと息を呑む。
「どうやら、彼方の決着もそろそろ付きそうだな。あの男がいる限り此方の勝ちは望み薄いかと思ったが……どうやら彼女、相当頑張ってくれているようだ」
『ま、ままま不味いぞ！　どういう理屈かはまだ解析出来ていないけど、地力は黒いジャンヌの方が上だ！　修司君はまだ戻ってくる様子はないし……助けてマギ☆マリー！』
『おぉ！　返信来たぞ！　えーっとなになに……〝あのボッチがなんとかするんじゃね？〟　マギ☆マリー!?』
「先輩！　絶対にこの局面を切り抜けましょう！　私、カルデアへ戻ったら殺ることが増えました！」

「落ち着いてマシュ！　気持ちは分かるけど！」
「フォーウ！」
本来ならば冷静でいるべき筈のロマニが慌てふためいている。そのお陰か先程よりも緊張感が抜け、程よく落ち着く事ができた。
「マシュ！　盾を前にして突っ込んで！　礼装発動、〝肉体強化〟!!」
「はぁぁぁぁっ!!」
「チッ」
細剣を突き出して突貫してくる剣士にマシュもまた盾を前にして突撃をブチかます。瓦礫を凪ぎ払いながら突き進むその姿は正に戦車、更にマスターである藤丸の援護も合わさり、彼女の動きは攻防一体の重戦車と化していた。
突き刺した細剣が歪み出す。このままでは剣が折れると察した剣士は、その俊敏さをもって上へ回避する。これで無防備な死角はがら空き、これで終わりだと確信した剣士が次に見たのは……マシュの靴底だった。
そう、マシュ……否、立香は読んでいた。マシュの攻撃は避けられる。これ迄の相手の動きを見て、そのくらい出来ると信じていた立香はマシュに援護の魔術を施す合間、一つの指示を出した。
此方の攻撃は基本的に当たらない。だったら、避ける所へ次の一撃を置いておく。それがこれ迄の戦闘で得られた情報の答え。
そして、その読みは中った。頭上へ跳んだ剣士に向けてマシュが予め放っておいた蹴りを見舞う。結果は効果抜群（クリティカル）、顔にめり込み、吹き飛んで宙を舞う剣士に藤丸立香は人知れずガッツポーズをした。
「マシュ、そのまま転進！　ジャンヌさんの援護をして！」
「了解です！」
地に落ちる剣士を横にマシュはそのままジャンヌの下へと急ぐ。見れば黒い方のジャンヌが腰から剣を抜いて止めを刺そうとしている。
振り抜かれた黒の刃が聖女へと襲い来る。しかし、それを防いだのはマシュではなく、別の方向から飛来する一本のガラスの薔薇だった。

「そこまでよ！」
「チッ、誰ですか！」
黒と白の二人のジャンヌとマシュと藤丸立香の視線が一斉に其所へ向けられる。こんな大それた登場をするのはどこの誰なのだと、敵意と好奇が混じり合う視線に晒されながらも、その少女は謳い上げる。
「これ以上フランスへの狼藉はこの私、マリー・アイランド仮面が許しません！　月に代わって……お仕置きよ！」
某月の戦士のポージングをした謎（？）の仮面少女がそこにいた。
「マリー、今月は出てないから！　色々混ざってるから！　あとそれ僕の仮面だから！　いい加減返して！」
あと後ろで変なのがワチャワチャしてる。
『うーん、グダグダしてきたぞぉ？』
そのイベントはまだ先の筈だ。（メメタァ）

◇

――――砂塵が舞う。瓦礫が吹き飛ぶ。打撃の音が轟く度に大気が震え、空気が弾け飛ぶ。
暴風の如く荒れ狂い、周囲を蹂躙するのは……一人の女の応酬が巻き起こすモノだった。
「打打打打打打打打打打打打ッ!!」
「お、と、と、とぉ！」
繰り出される拳、その一つ一つが人体の急所を狙い、命を奪おうと襲ってくる。殺意と敵意の嵐、そんな女性の乱打を修司は的確に捌い

ていく。受けて、流し、いなし、己の術理を以て吹き荒れる嵐を無効化させていく。
　しかし、それだけで済むほど彼女の打撃は浅くはない。時に避けられも流すことも出来ない拳を、修司は同じく拳で以て相殺させる。ダメージはない、だが、受けきれなかった大地が陥没となって周囲の瓦礫ごと吹き飛んでいくのだ。
　しかも奮われるのは拳だけではない。時には脚を鞭の様に凪ぎ、時にはその体躯の全てを駆使して突撃を仕掛けてくる。キックボクシングというよりは喧嘩殺法の様な無茶苦茶な動き、それなのに一応の型があるのが何とも言えず、見切るのも得意とする修司には少しばかりやりにくかった。
「いつまで避けているつもりかしら、それでは貴方が戻る前にはあの子達は全て死に絶えるわよ」
「……チッ」
「それとも何？　水着の女は手出し出来ない？　だったらその的外れな常識に囚われたまま死になさい！」
「っ！」
「そもそも、此処へきて私に一度も手を出さないのが何よりも腹が立つ。――――何時までも舐めてんじゃないわよ。このシャバ僧がぁッ!!」
「っ!?」
　振り抜かれた右のストレートが修司に向けて放たれる。避ける様子はない、直撃は免れないと確信した女性だが、その確信は一瞬で覆る事になる。
　受け止めた。素手で、それも片手で防がれている事に水着凄女（凄まじき女戦士の略、誤字じゃないよ！）は目を剥いた。
「悪いな。舐めてた訳じゃないんだ。ただアンタの格好が中々奇抜だったから少し気が抜けただけだ。……いや、それでも充分失礼だったな。謝るよ」
　修司の体に気力が迸る。燃え滾り、次の瞬間……爆風が周囲を瓦礫を吹き飛ばし、その足下を陥没させていく。出鱈目な力の発現を前

に凄女は目を大きく見開き、しかし尚口許には笑みが浮かんでいた。
「アンタも、本来ならもっと強い奴だったんだろうけど……悪いな、俺達はこんな所で足踏みしてはいられない。だから――――一瞬で終わらせてやる」
「ハッ、上等!!」
先に動いたのは凄女の方だった。震脚で力を溜め、修司の上を取ろうと跳躍する。そうはさせないと修司もまた跳ぶが、それが凄女の誘いだと気付いたのは彼女が獰猛の笑みを浮かべていた時だった。
「〝愛を知らない哀しい竜……ここに。星のように！　タラスク！〟」
宝具、それはサーヴァントの象徴。伝承、伝説、神話にて語り継がれる英霊達が残す最大にして最強の切り札。
そんな彼女が繰り出す宝具は――――ドラゴン。嘗て悪竜として彼女に祈りによって鎮められたリヴァイアサンの子、亀のような巨大な体躯を以て修司の体を圧殺せんと上空から回転しながら迫る。
だが、彼女の猛攻はここからだ。修司へと叩き付け、地へと迫るタラスクの背に向けて凄女は拳を振り上げ……。
「オラ――――!!!!」
全力全開、己の全てを掛けた乱打乱撃（ラッシュ）を叩き込む。タラスクから抗議の断末魔が聞こえてくるが知った事ではない。全ては目の前の男に勝つという一心のみ、放たれる拳の一つ一つの衝撃が修司の体を貫いていく。
「逃げ場は無いわ！　鉄拳聖裁!!」
『あ、姐さ――――!!!!??』
振り抜かれた最後の一撃、それはタラスクごと修司を砕く破壊の一撃。
これで、全て出し切った。文句無しの一撃だった。
故に……。
「驚いたよ。まさか、ドラゴンごと叩き潰しに来るなんてな。本当、凄い人だよ、アンタは……でも」

〝これで、終わりだ〟
砕けたタラスク、その光の中から現れる胴着が少し破けただけの修司を前に凄女は満足そうに目を瞑る。
「七孔噴血――安らかに逝け」
そんな彼女に修司は最大限の敬意を以て、この戦いを終わらせるのだった。

◇

「――――なぁ、アンタの名前、聞かせてくれないか？」
「なぁに？　ここまで人を叩きのめしておいて、新手のナンパ？」
仰向けに倒れ、既に消え掛かっている凄女を抱き起こし、修司は女性に問い掛ける。凄女は問いを投げ掛ける修司の真意に気付き、律儀な奴だと呆れながらも笑みを浮かべた。
修司達が挑むのは嘗ての歴史、人類の礎となった英霊達だ。戦うにしても、仲間になるにしても、せめてその人がどんな人で、どういった人物だったのか、可能な限り覚えていたかった。
それが、今を生きる自分達に出来るせめてもの礼儀として……。
ただ静かに見つめてくる修司に女性はフッと微笑んで――――。
「マルタよ。今の私は唯のマルタ。それじゃあ、頑張んなさい今を生きる人間さん。いつか縁があったら、その時は……」
「あぁ、その時は、また勝負しようぜ」
本音を言えば、またあのデカイ亀みたいな竜に押し潰されそうになるのはゴメンだが、いつかまた本来の彼女と手合わせしてみたいと思

うのもまた事実。
存分に暴れてスッキリしたのだろう。マルタと名乗る女性は最期まで満足そうな笑みを浮かべて……消えていった。

その15　第一特異点

「へぇ、そちらのお二人が彼の有名なヴォルフガング＝アマデウス＝モーツァルトさんとマリー＝アントワネット王妃か」
「フフ、堅苦しいことは良いのよ逞しい戦士の方。マシュと同じく気軽にマリーと呼んでちょうだい」
「僕はどっちでもいいけどね。敬われるのは慣れてるから」
　修司がマルタと名乗るサーヴァントを打破し、立香達に合流しようと元の場所へ戻ると、其処には黒いジャンヌと剣士の姿はなく。此方に敵意の無い二騎のサーヴァントが立香達と和気藹々と言った様子で自己紹介混じりの談笑をしていた。
　話を聞いた限りだとどうやら黒いジャンヌと剣士は立香達に二騎が加勢する事になり、その事もあって戦力的に自分達が不利であると判断すると即座に撤退。こちらもジャンヌが傷を負った事もあり、立香は追撃はしないことを選択したようだ。
　相手側の戦力を結構削いだとはいえ、敵拠点の近いこの場所で限られた戦力で追撃するのは些か以上に不安要素は大きい。向こうも何かしらの対策は練っているだろうし、勢いに任せて無茶な強行突破をしなかった立香を修司は素直に誉めた。
　そして、加勢に来てくれたという二人のサーヴァントと話をしている内に修司が駆け付けたという所で話は冒頭に戻る。
「それじゃあマリーさんとアマさん二人はこれから俺達と行動を共にしてくれる。という事で宜しいか？」
「宜しくてよ。フフ、最初見たときは荒ぶるお方と思っていたのに、とても紳士的で驚いちゃった！　マシュや立香もそうだけど、貴方もとても不思議な人なのですね。Ｍｒ．修司」
「ねぇ、それよりもアマさんって僕の事？　確かに必要以上に敬われるのは鬱陶しいけどさ、それにしたってアマさんって……」
「え、そう？　私は良いと思うけどなアマさん。日本の海女さんに似た感じで親しみ持てるよ？」

「ええ……」
「可愛いじゃない。私は好きよアマさん」
「マリーまで……」
修司なりのジョークのつもりだったのだが、思った以上に女性陣に受けたようですっかりアマさん呼びが定着してしまったフランスの偉大な音楽家は、ガックリと肩を落として項垂れる。
そんな彼等のやり取りを少し離れた瓦礫の上で腰掛けて微笑んでいるジャンヌに気付いた修司が歩み寄っていく。
「ジャンヌさん。体の方は大丈夫か？　ダメージを負ったと聞いたけど……」
「修司さん。ええ、此方の方はなんとか……傷の方も少し休めば大丈夫です。ご心配おかけして、すみません」
「謝る必要なんかねぇさ、お互い無事だったんだ。今はそれを喜んでおこう」
そうは言うが、修司から見て今のジャンヌは色々と辛そうに見えた。自分に瓜二つの女がフランスを滅ぼすと言って竜種を操って暴れている。今自分が座っている所だって嘗ては思い出のある場所だった。
彼女にとって今のフランスは過去のものではない。続いているのだ。彼女にとってこの特異点はあの日、火刑に処された時から未だ区切りはついていない。
それでも止まるわけにはいかない。迷いながらも進む決意を固めている彼女に修司は呆れながらも笑みを浮かべる。仕方のない人だ。そう言って彼女に手を向けると、修司の手から光の塊が放出される。
光の珠がジャンヌに触れると彼女の体は忽ち回復し、怪我をした場所も瞬く間に綺麗に塞がっている。突然の事に目を丸くさせるジャンヌ、まるでダメージを受ける前までの状態に戻った自身の体にジャンヌはワナワナと身震いをさせていた。
「し、修司さん！　貴方、これ、私に何をしたのです!?」
「何って、俺の気を少し分けただけなんだけど？　何処か気分でも悪かったりする？」

「いえ、体調は頗る良好です。いえ、そうではなくて！」
　驚き震え、狼狽えるジャンヌに周囲の視線が修司に向けられる。その視線に修司もまた訳がわからないと言った様子で肩を竦めた。
「なに？　修司さんまた何かやらかしたの？」
「いや立香ちゃんよ、そんな俺が問題児みたいな言い方止めてくれない？　まぁ、確かに此処までの効果があるとは思わなかったけどさ、やっぱサーヴァント相手だと効果も違ったりするのかね？」
『いやいやいや、攻撃だけじゃなく回復にも使えるとか、ちょっと万能過ぎやしない君の力。一体どういう原理？』
「そんな大層なモノでもないだろ？　魔術師（お前達）だって攻撃とか防御とか、回復とか使えたりするみたいだし、なぁ立香ちゃん」
　回復や援護の類いは立香だって礼装を使って行っている。そもそも、摩訶不思議な力を使うのは魔術師の専売特許の筈だ。疑問に首を傾げるロマニにおいおいしっかりしろよと笑いながら隣の立香へ同意を求めるも……。
「うん。私はこの件に関してはノータッチにするね。絶対ややこしい事になるから」
「ですね先輩、これが俗に言う触らぬ神に祟り無し、なのですね」
「うん、ちょっと違うかな」
「成る程、君はそう言う類いの天才なのか。これは周囲の人間は大変だなぁ」
「ヴィヴ・ラ・フラーンス」
「フォーウ！」
　立香は苦笑いで誤魔化し、偉大なる音楽家は他人事のように笑い、王妃は小動物と戯れている。誰も味方になってくれる人がいない、そんな理不尽に挫けそうになりながらも、修司は話を続けるのだった。
「兎も角、今は此処から離れよう。またさっきの連中が大群押し寄せて来るかもしれない」
「そ、そうですね。そうなったら私たちだけでなく周囲の人達も危ない。一旦ここから離れて話は其所で続けましょう」
「ドクター、近くで身を隠すのに最適な場所はありますか？」

『其処からだと近くの森が比較的安全そうかな。ただ、森の中には凶暴化した魔獣や亡者の類いもいるかもしれない。気を付けてね！』
「猪だったら、美味い鍋が作れるんだけどな」
「え？　修司さん料理も出来るの!?」
「おう、こう見えて料理は数少ない特技だからな。期待してくれていいぞ」
「一家に一人は欲しいね君」
　そんなこんなで修司達は近くの森へ一時身を潜める事にするのだった。

◇

「そんな、あの聖女マルタまでが……」
　森へと入り、安全確保の為に周囲の敵性エネミーを一通り排除し終え、カルデアから送られた夜営設備と食糧を使って修司の料理を舌鼓を打つ中、修司の話す情報により場の空気は少しばかり重くなってしまっていた。
　聖女マルタ。悪竜として知られるリヴァイアサンの子、タラスクをその祈りで以て鎮め、あのイエス＝キリストとも親交があった女性。その信仰深さと逸話から聖女として知られていた彼女が、黒いジャンヌの手先になっていたという事実に白のジャンヌは悔しそうに歯を食い締めた。
『で、でもその聖女マルタも修司君が倒したんだろ！　なら、そんなに心配する必要はないんじゃないか？』
「いえドクター、恐らくこの場合は聖女として知られるマルタさんま

でもがあの黒いジャンヌさんに支配されてしまう事実に驚いているかと思います」
（マジか、あの人聖女だったの？　聖女というより凄女って感じだけど……）
　皆が驚きを隠せないでいる中、唯一修司だけは手に持った器の中のスープを飲みながら検討違いの感想を抱いていた。いやだって聖女には見えないんだもの、聖人って皆あんななの？　ジャンヌさんもいつかはあんな感じになっちゃうの？　それは……ちょっと嫌だなぁ。なんて事を考えていると、話はドンドン進み、軈て一つの結論に至った。
　あの黒いジャンヌは聖人すらも従わせ狂化させる力を持っている。今この特異点にはマリーやアマデウス以外にもサーヴァントがいるかもしれない、彼等を敵陣営に取り込まれると此方に不利になるのは明白、故に先回りをして他のサーヴァントを仲間にしてしまおう。
　そんな訳で、明日からは他にいるサーヴァントを見付ける所から始めよう。という事になった。
「……どうでもいいけどさ、いい加減二人のジャンヌの呼び方何とかしない？」
「例えば？」
「黒い方はジャンヌ・ブラック、白い方はジャンヌ・ホワイトとか」
「な、何ですかそれ！　そんなの私イヤですよ!?」
「そう？　シンプルだし、プリキ？ア見たいで格好いいじゃん。ドクターもそう思うだろ？」
『ちょ、そこで僕に振るの止めて!?』
「プリ？ュアって何かしら？」
「それはですね……」
「そこー、その人一応フランスの王妃だった人だからねー？」
　重苦しい空気も何処へやら、そこからは比較的楽しい談笑になり、第一特異点の初日は幕を下ろすのだった。

◇

「どういう事よジル！　何でワイバーンを、腐っても飛竜を！　サーヴァントを！　生身の人間が倒しているのよ!?」
「落ち着いてくださいジャンヌ、我が聖処女よ。貴女の怒り、憤り、全て解りますとも。ええ、ええ、怒りの原因はあの忌まわしい山吹色の男なのでしょう？」
「……知ってたの？　ジル」
「あの光、ここオルレアンからでも見えましたからなぁ、全く不愉快極まりない光景でした」
「――苛立っても仕方ないわ。ジル、向こうに無視できない強敵がいる以上、もう此方も遠慮する必要はないわ」
「おぉ、では？」
「全てのワイバーンを出します。無論サーヴァントも。そして……邪竜の方もね」
「……全てとなると、準備に些か手間が取ってしまいますな。勿論、急いで用意はしますが」
「どれくらい掛かりそう？」
「明日の正午、でなら如何でしょう？」
「了解よ。聞いてたわね？　バーサーカー、アサシン……いえ。湖の騎士ランスロット。処刑人シャルル＝アンリ・サンソン」
「――――ｕｒｒｒｒ」
「……了解しました。マスター、王妃の首の話なら僕以外に適任はおりません」
　血にまみれた城の中でも狂った怪物の目に映るのは……やはり、何処までも血にまみれた光景だった。

その16　第一特異点

翌日、聖女と王妃の女子会トークやら偉大なる音楽家の変態性等が垣間見られ、レイシフト初日の夜を満喫した修司達は、現在は近くの街にてサーヴァントに関する目撃情報を集めていた。

修司と立香とマシュ、そしてマリー＝アントワネットの三人による情報収集、そのお陰でこの街では有益な情報を得ることが出来た。

「リヨンの守り神、ですか」

「ええ、既にそのリヨンという街は焼き払われているみたいだけど、その地に大きな剣を持った騎士様が骸骨兵やワイバーンを蹴散らしていたみたいなの」

この街にいる人々、その多くが焼き払われたリヨンの街に住んでいた者だ。現在は避難民としてこの街に移住しているが、それ以前ではそんな守り神と呼ばれる騎士に助けられていたという。

ワイバーンや骸骨兵を一人で駆逐出来る人間なんてそうはいない、十中八九サーヴァントであることは間違いないだろうと全員が納得する。

「でも、そんな騎士様も複数の恐ろしい人達によって追い詰められ、今では行方不明だそうよ」

「恐らくは、ジャンヌ・ブラック達の仕業だな」

「え？　その呼び方で固定なのです？」

「他にも、シャルル七世が討たれたのを切っ掛けに混乱していた兵を纏め上げたのがジル・ド・レェ元帥なのだそうよ」

「ジルが!?」

ジル・ド・レェ。百年戦争期のフランス軍の元帥にして貴族の一人でもあった男性。ジャンヌに取っては共に戦場を駆け抜けた戦友、そんな彼がリヨンを取り戻すために攻め入るという情報に一時は彼等に加勢する話も出てきたが、それを拒否したのは他ならぬジャンヌだった。

向こうに竜の魔女としてのジャンヌが入る以上、この時代のジルが

知らない筈がない。ここで合流しては却って混乱に繋がってしまうと思ったジャンヌは、彼等と共に戦う道を拒んだ。彼女の心境、そして事情も理解したマシュと立香もその事に同意し、マリーもまたこれに納得した。

そんな中、唯一渋い顔をしていたのは意外な事に修司だった。難しい表情で何かを考えている様子の修司にマシュは恐る恐る訊ねた。

「あの、もしかして修司さんはこの話しに何か不審な点があるのでしょうか？　確かに現役フランス軍の人達の力を借りるのは一つの手段でしょうが……その、ワイバーンやエネミーを相手に戦うのは、些か無理があるかと」

「……ん？　あぁ、違う違う。そういう事じゃないんだ。俺もジャンヌさんがフランス軍と合流するのは反対だ。実はちょっと考えていてね」

「考え？　今の話しで他に分かった事が？」

ジャンヌを始めとした好奇の視線が一斉に修司へ向けられる。混迷するフランスを一刻も早く何とかしたいと願うジャンヌは勿論、フランス王妃も興味津々の様子だ。

「いや、でも……あくまで俺の推測だし、本当にそうであるかは定かではないし」

しかし、そんな彼女たちとは余所に修司の様子は何処かたどたどしい。知ってはならない真実に気付いた様な、これをジャンヌの前で口にするのは憚れる様な、その様子は何処までも他者に対する気遣いのソレであった。

「だとしても、あのジャンヌの謎を明らかにするのであれば、私はそれに賭けたい。お願いします修司さん、迷える私達にどうか救いの手を」

そんな修司の優しさに触れながら、それでも今は確かな情報が欲しいとジャンヌは一歩前に出る。

「わ、分かったよ！　分かったから跪くのは止めてくれ！　アンタにそんな事されたら多方面から怒られそうだ！」

膝を折り、祈りを捧げようとしてくる彼女に修司は慌てて呼び止め

る。こういう頑固な所は以前と変わらない、厄介且つ何処までも正直な彼女に呆れと僅かな嬉しさを抱いた修司は、ポツリポツリと自身の考えから来る推測を口にしだした。
　話を進むに連れて先の修司同様に難しい顔をする立香達、話を全て聞き終える頃には誰もが修司の抱いていた気持ちに納得がいっていた。
「あの、ドクター。そういう事って起こり得るのでしょうか？」
『……可能性はゼロじゃない。聖杯によるサーヴァントの召喚は時間軸に縛られたりはしないからね。現にこの時代からは遥か未来の人物である王妃と天才音楽家がいるんだ。修司君の推測は強ち間違いではないと思うよ』
「まぁ、道理と言えば道理か。向こうにはジャンヌ＝ダルクがいる。だとするなら、彼女の右腕である彼がいても……いや、今回の黒幕として居座っていても不思議じゃない」
「アマデウス、それは……」
「事実だよマリー。でも、早めに分かって良かった。これで気持ちの整理にも多少時間がとれる。そこのデタラメ君には感謝した方がいいかもね」
　憎まれ口を叩き、進んで嫌われ役に徹しようとする友人をマリーは軽く小突いて嗜める。そう言うのは貴方のやることじゃないでしょう？　頬を膨らませて叱る王妃に天才音楽家は勝てないなと素直に頭を下げた。
「……ジャンヌさん。今のはあくまで俺の推測だ。状況と言葉を合わせただけのまやかし、だから」
「ええ、ですがその可能性もあるという心構えが出来ました。ありがとう修司さん」
「……そっか」
　明らかに無理をしている笑顔だが、それを修司は指摘しない。何故なら、修司は知っているからだ。彼女も理不尽に抗い立ち上がった一人の人間、苦境や逆境に苛まされても必ずやり遂げるという確固たる決意を持った強く格好いい女性である事を。

故にこれ以上修司が語る事は無かった。いや、語れなかった。語る言葉がないからではない、それを必要としないほどに彼女はその事実を呑み込んだのだから。
「さぁ、それではリヨンに向かいましょう。そこでサーヴァントがいるなら、せめて話だけでもしておかないと」
そう言ってジャンヌはリヨンへ足を進め、マリーや藤丸達も後に続く。修司も自分の言葉に僅かな後悔を抱きながら、彼等の後に続いた。
黒いジャンヌ＝ダルク、その背後にいるのは恐らく嘗ての元帥ジル・ド・レェ、彼が何らかの方法であの黒いジャンヌを召喚し、竜を操る力を与えた。
確証はない、証拠もない、ただそうあったら色々辻褄が合うなと言う願望に近い推測。本当ならもう少し情報を集め、吟味してから結論付けたかったがこうなってしまっては仕方ない。
（いや、違うな。誰よりもそうあって欲しいと願っているのは……俺自身だ）
嘗て、修司の住んでいた故郷で想像を絶する惨劇が起きた。幼い子供達を対象に連続して起きた殺人事件、被害者となった人数は数知れず少年少女達の両親は絶望の涙を流した。その犯人は既に何者かの手によって討たれ絶命し、人の裁きを受けずにこの世を去った。
そんな子供達の命を弄び、殺してきた者の名前を知ったのは全てが終わった後だった。
『ジル・ド・レェだって？』
『然り。その者が１０年前に起きた童達を狙った連続殺人事件の首謀者の片割れの名だ』
ジル・ド・レェ、史実からして英雄とは程遠い悪行を繰り返してきた狂人。しかしそんな怪物を相手に当時の修司が相手に出来る筈はなく、精々が死体の数が一つ増える程度に変わるだけだろう。
だがもし、もしもそんな奴と面と向かって出会（でくわ）す時があるのなら、その時はきっと……。
（酷い八つ当たりだ。この世界の奴が俺の世界にいた奴と同じである

かは分からないのに……）
　しかし、心の内でその時が来るのを待ち望んでいる自分がいるのもまた事実。ならば今は待とう。いつの間にか握りしめていた手を解き、今度こそジャンヌ達の後を追うのだった。
（うわぁ、彼って怒らせたら不味い人だったのね。気を付けておこ）
　そんな修司の様子を持ち前の耳の良さで聞き取っていたアマデウスは修司の逆鱗に触れたと思われる人物に内心で哀悼するのだった。

◇

　リヨン。辿り着いたその街はやはり崩れ落ちており、微かに残った人の営みの痕がより一層当時の悲惨さを物語っていた。
「では、一度二手に別れましょう。私とマリー、そして修司さんが西側を、マシュと立香、アマデウスさんが東側をお願いします！」
「了解。あ、そうだ修司。マリーは気分が昂れば好き勝手にベーゼをしてくるから一応気を付けてね」
「あぁ、それはもうさっき知ったから」
　ここへ来る前に見たフランス王妃と聖女のベーゼ（口付け）の一幕は色んな意味で破格な光景だった。後から何事かと駆け付けた藤丸にも熱いベーゼをしたことでマシュが慌てた様子の姿は今も目に焼き付いて放さない。
　そんなアマデウスからの緊張を解す為の揶揄を受けながら、修司達は情報にあった騎士を探そうとする。ロマニは立香のフォローに回っている為、探索の手伝いは望めない。
　それから暫く探し続けたのだが、例の騎士を一向に見付けられず、藤丸達に合流しようか悩んでいた時にソイツは現れた。
『全員、直ちにそこから離れるんだ！　サーヴァントを越えた霊基反応、超極大の生命反応がそっちに接近している!!』

「あれは!?」
「まぁ！」
　遥か空の彼方から飛来してくるのは空を覆い尽くそうと迫る飛竜の群れが此方に向かって接近している。中でも中央に停滞しているそれは周囲の飛竜と比べモノにならない程に巨大且つ強大。
　多くの伝説神話に登場するドラゴン、正に真竜とも呼べる最強の幻想種が此方に狙いを定めて一直線に飛んできている。
　一刻も早く藤丸達と合流し、この街から離れろと叫んでくるロマニだが、修司はこの時デカイ飛竜が力を溜めているのを感じた。
「ジャンヌさん、マリーさん、伏せろ！」
「え!?」
「こ、こうかしら？」
「波ァァァァァッ!!」
　修司の突然の言葉に驚きながらも従った二人を見ると、即座に修司はワイバーンの群れに向かってかめはめ波を放った。再びお目にかかる最強の必殺技にモニターしていたカルデアは再び沸いたが、その興奮は長くは続かなかった。
　飛竜の群れ、その中心に位置するドラゴンから赤い熱線が放たれる。それは世界中の誰もが知る竜の息吹き。全てを薙ぎ倒し、全てを焼き払う正にドラゴンの代名詞とも呼べる一撃が修司のかめはめ波と激突する。
　ぶつかり合った場所を中心に爆風が辺りを蹂躙する。雲は消し飛び、瓦礫は消し飛び、周辺の地域一帯にさえ及んでしまう破壊の衝撃はそれだけでフランスの大地を蹂躙してしまう。
「な、ろぅぅ!!」
　このままでは結果的に此方の方がダメージを負ってしまう。修司は全身に力を込め、更に出力を上げて赤い熱線を押し上げる。
　拮抗は呆気なく崩れた。まるで最初から勝負するつもりなど無かったと、ドラゴンの放つブレスは掻き消えた。
　不思議に思うのも束の間、ドラゴンの群れはまるで最初からこうする為だと言わんばかりに飛散し、かめはめ波を避けていく。

巨大なドラゴンも騎乗しているだろう黒いジャンヌの影響もあってか素早い軌道でかめはめ波を避けていく。それでも余波は受けたのかドラゴンの体のあちこちが焼け爛れているのは確認できた。
ダメージこそ多少は与えられたが、今のは明らかにこちらの動きを読んでの行動だった。嫌な予感がした修司は次の攻撃に備えるが、飛竜の群れは予想外の行動に出た。
「なっ!?」
「ワイバーン達がバラバラの方角へ!?」
此処まで纏まっていた飛竜が突然バラけるようにそれぞれ別行動を始めたのだ。西へ東へ、北へ南へとそれぞれ向かう飛竜に修司達は面食らい戸惑ってしまう。
だが、同時に気付いた。この飛竜達が向かっているのはそれぞれ生存者達が避難している街があるという事を、その事にいち早く気付いたジャンヌは飛竜達を倒そうと移動を試みるが、そんな彼女の前に巨大な竜が降り立った。
見上げるほどに巨大な竜、体の節々から火傷の痕が見られるが、それも竜の桁違いな回復力によって瞬く間に消えていく。全快したドラゴンはその鋭い目で修司達を見下ろし、炎の吐息を口端から洩らす。
「アハハハ！　無様ねぇジャンヌ＝ダルク、フランスを救おうと立ち上がり、フランスによって捨てられた哀れな女。さぁどうします？　此処で貴女がもたつけばそれだけ多くの民が死にますよ？　急ぎなさい、慌てなさいな。どのみちもう手遅れですけどね！」
「Ａｒｒｒｒｒｒ!!」
「っ！」
「ジャンヌさん！」
黒い竜と魔女、唯でさえ厄介な状況に加えてそこへ黒い鎧に身を包んだサーヴァントがジャンヌへと襲い掛かる。遠くから別の戦闘音が聞こえることから、恐らくは向こうでも同様の戦いが行われているのだろう。
「さて、後は生意気な箱入り王妃とふざけた力を持つあんただけね。

感謝するといいわ、貴方達の様な無価値な存在が邪竜ファヴニールの餌になるのだから！」
「???ッ!!」
???魔女が嗤い邪竜が吼える。分断され、孤立され、そしてフランス全土へ飛竜が解き放たれた。目の前には彼の伝説上の存在とされていた邪竜、これだけの窮地を前に覆す術は有り得ない。そう、奇跡でも起こらない限り絶対にこの理不尽は覆る事はない。
しかし、そんな理不尽が罷り通る事を彼は許さない。向こうが理不尽を押し通すなら、此方も理不尽を持って捩じ伏せるのみ。
「――――させるかよ」
「……あ？」
本来なら、この技を出すのはもう少し後にする筈だった。力や技の威力が増す分、自身への負担が大きく土壇場以外で多用することを控えていた技。
しかし、それが原因で理不尽を受け入れるのは修司にとって最も避けるべきモノ、自分の保身の為に使うのを控えるより、誰かに降りかかる理不尽を払い除ける為に修司はこの技を使う事に一切の迷いはない。
「ここで遊んでいる訳にはいかない。一瞬で終わらせてやるぞ！」
「無駄なことを、今楽にしてあげるわ！」
黒いジャンヌが邪竜と共に押し寄せ、修司が体に赤い闘気を纏わせる。マリーも修司に加勢しようと身構えた時――――。
「私の歌を、聞けぇぇぇっ!!」
リヨンの地に特大の音波兵器が轟いた。

その17　第一特異点

その超音波攻撃（ハウリングボイス）はリヨン全域だけに留まらず、その周囲にまで鳴り響いた。大気を震わせる程の音の暴力、規格外も良いとこなそのボイスに周辺のむらや街へ飛び立とうとした飛竜達は、揃って目を回し地へと落ちていった。

唯でさえ通常の生物よりも五感の鋭い竜種がその超音波により飛行能力を狂わされて悉く落ちていくその様子は言葉にできないほどの凄惨さが物語っていた。

「な、何今の!?　新手の兵器!?」

「み、耳がキーンとします。ハッ、アマデウスさん大丈夫ですか!?」

並の聴力の立香でさえ立つことが儘ならない謎の超音波、マシュはデミサーヴァントの力のお陰か比較的軽傷だが、それでも地に膝を着いている事から三半規管が狂わされているのは明らかだ。

メンバーの中でも随一の耳の良さを誇るアマデウスなら、どれ程のダメージなのかは計り知れない。心配になったマシュが近くにいる筈の彼に安否を確認すると……。

「――――」（ピクピク

「あ、アマデウスさーん!?」

白目剥いて吐血しているアマデウスにマシュは嘆きに満ちた叫び声を上げた。どうみても手遅れである。ガッカリしろ。

しかし、ダメージを受けているのは飛竜達やアマデウスだけではない。女性の声と思われる超音波攻撃は目の前の敵サーヴァントにまで影響が及んでいた。

「な、何なんだ今の不快な音は!?　処刑された人達の断末魔だって此処まで酷くはなかったぞ!?」

「あぁ、クリスティーヌ、クリス……ゴッフ」

踞る二人の敵対サーヴァント。オペラ座の怪人ことファントムとフランスの処刑人シャルル＝アンリ・サンソン、この二人もまたアマ

デウス同様に音波攻撃によってダメージを受けていた。
「ま、マシュ、兎に角今は！」
「りょ、了解です！」
　マスターである立香の指示を受け、いち早く立ち直ったマシュは盾を支えにして立ち上がる。未だ向こうのサーヴァントは立ち直れていない様子、本調子に戻る前に決着を付けようと立香もまた礼装の力を発動させる。
　マスターからの最大限の支援を受け取ったマシュは、盾を前へと構え勢いを乗せたまま突貫。満足に動けない二騎のサーヴァントに向かって突き進み、ファントムとサンソンは大型車に吹っ飛ばされた様に宙を舞った。確かな手応えを感じたマシュは立香の前へと戻り油断なく盾を構えて倒れる二騎を見据える。
「おぉ、よもやこの様な結末になろうとは……クリスティーヌ……」
「何でだ。僕は、サーヴァントになって強くなった筈なのに、彼女の首を切り落とせるのは……僕だけの筈なのにイィィ……！」
　光の粒子となって消滅していくファントムとサンソン、彼等の最期を見届けるのとアマデウスが再起動するのは殆んど同じタイミングだった。
「――――ハッ!?　なんだ!?　僕の身に一体何が起きていた!?」
「アマデウスさん！　良かった。正気に戻られたのですね」
「正気？　……そう言えば意識を失う直前、とてもおぞましいモノを聞いた気がする。音と呼ぶには剩りにも冒涜的で、音楽と呼ぶには原始的過ぎるモノを……う、頭が」
「おぉう、天才音楽家のＳＡＮ値がゴリゴリ減ってる」
「と、ともあれ、どうやらマシュ嬢がバカサンソン達を倒してくれたんだね。ありがとう、そして申し訳ない。せめてサンソンの野郎の最期は指差して笑ってやりたかったけど、こうなっては仕方ない。急いでマリー達のところへ戻ろう、向こうもきっと厄介な事になっているだろうからね」
　正気を取り戻し、戦線に復帰可能となったアマデウスは自身の不甲

斐なさを謝罪しつつマリー達がいる西側へ向かおうと提示する。周辺の飛竜が再起不能となっている今、向こうと合流するタイミングは今しかない。
　立香もアマデウスと同意見だと頷き、急いでジャンヌ達がいる場所へ向かおうと走り出すが、そんな彼女達の所へ一人のサーヴァントが立ち塞がる。
「悪いけど行かせないよ。君達は此処で釘付けにされてもらう」
「チッ、コイツも此方に来てたのか。これは少々面倒だぞ」
「でも、今は進まなきゃ！　マシュ、行ける？」
「はい先輩！　マシュ＝キリエライト、応戦します！」
　盾を突きだし、掛けるマシュ。そんな彼女を静かに見据えながら流麗の剣士は告げる。
「勢いに任せるのもいいが、それは少々無謀と言うもの、さぁ見せてやる。最優と称されるサーヴァントの力を！」
「っ、不味い！　戻れマシュ！」
　細剣を構えて魔力を高めるセイバー、その様子にただならぬ気配を感じたアマデウスはマシュに静止を呼び掛け、それを耳にしたマシュは咄嗟に盾を前にして防御の姿勢を取った。
「百合の花散る剣の舞踏（フルール・ド・リス）」
　瞬間、マシュ達の前に美しい花が咲くと無数の斬撃がマシュを襲った。

◇

「――――か、あ、な、何だったんだ今の凄い音は？　人の声？　みた

いな感じだったけど……」
一方その頃、立香達と同じ超音波攻撃を受けた修司は両耳を手で抑え、何とかといった様子で耐えていた。
凄まじい音だった。マトモに耳にしていたら意識が根刮ぎ刈り取られてしまいかねないほどの恐ろしい音だった。爆発音の類いではない、鼓膜は疎か体の奥底に刻み込まれるかの様な恐ろしい音の暴力。咄嗟に防げたのは偶然に等しい、実際最初に音の出だしを耳にした瞬間、修司は嘗て味わった事のない恐怖を体感した。

両手で強く耳を抑えたのにまだ頭がクラクラする。三半規管が未だに正常に働いていない事に修司が危惧していると、隣であの大きなドラゴンが地に降りて踞っている。この様子から見て恐らく今の爆音は黒いジャンヌ側の攻撃ではなかったようだ。
巨大なドラゴンすら昏倒させる音に修司が戸惑っていると、横から声が掛けられる。
「ちょっとそこの豚、私の質問に答えなさい」
(誰だ？　こんな所に生存者？　いや、この強い気配……まさか、サーヴァント？)
敵側の新手か、それとも味方か、修司は戸惑いながら声のする方へ視線を向けると……そっと視線を外した。
「ちょっと！　今目線此方に向けたでしょ！　絶対今こっち見たでしょ！　何を見なかった事にしようとしてんのよ！　私の話を聞きなさいよそこの山吹色の豚ァッ！」
角と尻尾を生やし、槍を持った少女がズカズカと此方に歩み寄ってくる。明らかに普通の風貌ではない、サーヴァントなのは確実でしかも恐らく黒いジャンヌの方に付いていない野良のサーヴァントだ。
味方に引き込めば戦況は傾く。今頃あの黒い鎧の奴と戦っているジャンヌへ加勢しに行って貰うのも手だ。
だがこのサーヴァント、非常に面倒臭そう。人を豚呼ばわりするのもそうだが、何より言動がアレだ。しかし選り好みもしていられないのも事実、意を決した修司は近付いてくるＵＭＡとの接触を試みる。

「あー、えっと……俺に何か用？」
「単刀直入に聞くわ。貴方、今此処でデカイ光を出した奴を知らない？　昨日からずっとこの辺りを探してるんだけど、全然見当たらないの」
　角少女の言う光とは多分かめはめ波の事だろう。昨日から探していたと言うし、恐らく間違いない。何故そいつを探しているのかと訊ねると返ってきたのは思ってた以上にブッ飛んだモノだった。
「そんなの、私のライブの演出にする為に決まってるじゃない！　あの空の彼方まで一直線に伸びる輝き、あれを私のライブに取り入れればオリコン総なめも夢じゃないわ！」
「……」
　どうしよう。言ってることの八割以上がワケわかんない。演出？　オリコン？　なにこの娘、歌手か何かなの？　頭に浮かぶのは疑問符の羅列、目の前の蜥蜴っぽい少女の言語が殆んど理解できていない修司は、隣にいる未だ悶えている邪竜の存在すら忘れかけていた。
「それで、貴方は知ってるのかしら？　知っているなら教えなさい。知らなくても教えなさい。言っとくけど嘘なんて吐こうモノなら私の連れが容赦しないわ……て、きよひー？　どこ行ったのよー？」
　話の半分は理解できないが、要するにこの蜥蜴娘は自分を探して此処まで来たのだと言う。なら、今はその状況を利用しよう、もうじき邪竜の方も正気を取り戻す。そうなったら本格的に戦いは激化するだろう、そうなる前に何としても戦局を此方の有利に進めなければならない。
「君、名前は？」
「え？　あぁ、そう言えば名乗らなかったわね。私はエリザベート＝バートリー、クラスはアイドルよ」
「ならエリちゃん、君に頼みがある。此処からあっちの方へ少し離れた所で白い女の人が黒い鎧の奴と戦っている。君には白い女の人の助けになって欲しい。その見返りに君の望みを叶えよう」
「え!?　そ、それってまさか……!?」
「さぁ、早くいってくれ。もうじきこの邪竜も目を覚ます。そこの人

を連れて早く行ってくれ」
「え？　――――ま、マジ？」
　言われて漸く気付いたのか、空で蠢く邪竜の存在を前にエリザベートはわわと慌てながら未だ目を回しているマリーの手を引いてその場を後にする。向かった先にはジャンヌと黒い鎧の奴が戦っているだろうから、これで少しは彼女の負担も軽くなるだろう。
　今この場に残っているのは修司と黒い邪竜、そしてそれに跨がる黒いジャンヌのみ。
　邪竜の瞼が開かれる。鋭く、おぞましく、視界に入るもの全てを震え上がらせるサーヴァントを超えた超極大の生命体。ドラゴン。その中でも最上位に位置する真の竜種がたった一人の人間に向けて殺意を放つ。
「……全く、人を苛つかせるのが上手い連中ですね。まさか音波兵器を隠し持っていたとは、お陰で折角用意した戦力がガタガタですよ」
「……」
「しかし、貴方もつくづく愚かですね。たかだか人間一人がこの場に残って、一体何が出来ると言うのです」
　起き上がり、見下ろしながら吐き捨てる黒いジャンヌ。彼女の言う通り、この邪竜からすれば修司はちっぽけな存在に見えるだろう。どれだけ実力があろうと所詮は人、たかがサーヴァントと互角程度の生命体が最強の幻想種に敵うわけがない。
　嗤う。黒いジャンヌは目の前の修司をただ嗤う。運がなかったと嘲笑する彼女に修司は不敵に笑みを浮かべる。
「何が出来る……か、そうだな。先ずはアンタには俺の実力を知ってもらうとしよう」
「はっ、そんなもの知る必要はないわ。ここで貴方は終わり、他の奴もあの白いジャンヌも、生き残っている人間も、フランスの全てを焼き尽くしましょう。何故なら私はジャンヌ＝ダルクなのだから！」
「??????ッ!!」
??????ジャンヌが謳い邪竜が吼える。天と地を震え上がらせる咆哮を前

にそれでも修司は逃げる素振りを見せない。
「それじゃあ、一丁やってみるか」
全身に気を纏わせ、構えを見せる修司の顔には伝説のドラゴンに挑めるこの状況にワクワクした笑みが浮かんでいた。

◇

「やりなさいファヴニール！　最上位のドラゴンの力、見せ付けてやりなさい！」
竜の一撃とは時折自然現象と同一視される事がある。雪崩、火山、嵐、雷、地震、その事象に嘗ての人類は神や超常の存在の仕業であると認識し、その影響を受けて神格が誕生した。
今、修司が目にしているのは……津波だ。崩れた瓦礫が津波のごとく押し寄せてくる。黒い巨大な邪竜がしたのは唯の尻尾を振り回しただけのモノ、しかしそれだけでも脅威的な威力を秘めていた。
押し寄せる瓦礫の波と巨大な尾、触れただけでもミンチになるのは確実なその凪ぎ払いを修司は正面から止めて見せた。黒いジャンヌと邪竜の目が大きく見開く一方、修司は笑みを崩さないまま邪竜の尾を掴む。
「今度は此方の番だな」
全身に纏う気を大きくさせ、修司はその場から回転を始める。最初はゆっくりだったのが徐々に勢いを増していき、軈ては修司を中心に大きな竜巻が生まれる。
周囲の瓦礫を巻き込みながらの大回転、邪竜はモチロン背中に乗っていた黒いジャンヌが悲鳴を上げる間もなく必死にファヴニールにしがみつく。

「オラァァッ!!」
遠心力を武器に修司は邪竜を自身の真上へと投げ飛ばす。その様子に進軍していたフランス軍が目を丸くさせて呆然と見ていた。
そんな吹き飛んだ邪竜に追い付こうと修司もまた跳躍する。明らかに人並み外れた脚力、瞬く間に邪竜の懐に潜り込み修司は邪竜のその大きな腹に握り締めた拳を叩き込んだ。
「ダララララララッ!!」
一発、二発処ではない、両手の拳が分裂したと錯覚するほどの激しい連打（ラッシュ）。心なしか邪竜の顔が苦しく悶絶の表情が浮かんでいる気がする。
しかし、ただやられるだけの邪竜ではない。大きいというのはただそれだけで脅威、故に振り払うドラゴンの手もまた巨大で、ファヴニールと比べて羽虫も同然な修司は避けることは出来なかった。
バシンッ、音と共に地表へ落下する修司だが、体勢を整えてあるモノに着地する。それは邪竜を投げ飛ばす際に一緒に巻き上げた瓦礫だった。
良く見れば邪竜の周囲には幾つもの瓦礫が浮かんでいる。ただ闇雲に投げ飛ばしたのではない、飛行も可能なドラゴンに対抗するべく修司が編み出した即興の作戦に黒いジャンヌは瞠目した。
瓦礫から瓦礫へと飛び移り、ファヴニールへと接近していく。小癪なと邪竜もブレスを吐いて吹き飛ばそうとするが、高速で移動している修司には当たらない。
そして、遂に邪竜の背中へと到達した。飛行能力の要である翼へと向かおうとする修司だが、当然それを黒いジャンヌは許さない。
「いい加減にしなさいよ、このデタラメ男！」
「悪いがジャンヌさん、今はアンタの相手をしている暇はない！」
振り抜かれる旗を修司は難なく掴み取る。既に彼女の動きは見切っている。強力で豪胆だがそれ故に大雑把な一振り、そういう所も変わらないんだなと内心で笑うが、先もいった通り今は彼女に構っている暇はない。
彼女ごと旗を持ち上げ遠くへ投げ飛ばす。いつぞやとは逆となっ

たが、回復したであろう一匹のワイバーンが邪竜から落ちていく黒ジャンヌを拾い上げる。そんな彼女を一瞥すると、修司はドラゴンの翼へ手を伸ばす。

強い力だ。それでも修司の手から逃れることはない、はためく翼を強引に掴み取った修司は、そのまま邪竜の背中を掛けて地表に向けて投げ飛ばす。

所謂一本背負いである。ブチブチと音を立てながら翼は千切れ、巨大な体躯がリヨンの大地へ激突する。地を揺るがすほどの振動、遠くでマシュ達の悲鳴が聞こえたが、戦闘に集中している修司の耳には届かない。

地表に着地し、修司は舞い上がる砂塵を油断なく構えて見据える。伝説のドラゴンがこの程度で参る訳がない、そんな確証めいた心境で砂塵の中へ睨み付けると、予想通り邪竜はゆっくりと起き上がった。

「アハハハ！　バカね！　そのドラゴンは邪竜ファヴニール、伝説に名を遺した稀代の竜種よ！　そいつを殺したくば〝竜殺し（ドラゴンスレイヤー）〟でも連れてくることね！」

邪竜ファヴニール。伝説によれば大英雄であるジークフリートによって討たれたとされる正真正銘の伝説的な竜種。伝説上このドラゴンは竜殺しであるジークフリートには決して勝てないとされる運命にある。しかし逆を言えばジークフリートや竜殺しを除いてファヴニールを倒す事は不可能であると言うこと。

ファヴニールの伝説、それは既に一種の概念として世界に根付いている。引きちぎった筈の翼が瞬く間に再生されていくのがその証拠、ファヴニールを倒したことのない修司では今のファヴニールを倒す事は不可能なのだ。

しかし、その程度で修司が諦める訳がない。殴ったり千切ったりする程度で倒せないなら、粉微塵になるまで消し飛ばす迄だ。全身に力を滾らせ、再び修司はあの構えを取る。

「フンッ、またその技か。いい加減芸がないのよ、ファヴニール！　本当の閃光というのを見せてあげなさい！」

瞬間、邪竜の周囲に力が溢れ出す。それは大気に満ちるマナの集

約、星の力すら手にしたファヴニールの最大出力だ。
周囲の瓦礫が溶解していく。空が朱く染まり、大地が血の色に染められていく。練り上げられた力の奔流は既にリヨンとその一帯ごと世界地図から消し飛ばすほどに高まっていく。
誰もが抱く終焉の二文字。しかし、修司は止まらない。
「かぁ……めぇ……」
確かに目の前のドラゴンが見せる力は凄い。その出力は１０年前に見た騎士王の聖剣よりも単純な出力では上回っているだろう。正に伝説の再現……いや、復活だ。直撃を受ければ、修司でも無事では済まないだろう。
しかし。
「はぁ……めぇ……」
それがどうした。伝説のドラゴン？　避けきれない終焉？　そんな理不尽、これ迄だって乗り越えてきた。今更その程度の壁に自分が怖じ気付くと思っているのか。
白河修司は偉大なる黄金の王、英雄王ギルガメッシュの臣下である。あらゆる理不尽と不条理に打ち克つため、彼の下で力を得た臣下の一人。そんな自分が目の前のトカゲ風情に負けるなど……あり得ない。
何より、昨日とさっきので自分の力を計ったつもりでいるのが我慢ならない。既に王から許可は戴いている。あとは思う存分、その力を放つだけである。
瞬間、眼前に紅い光が修司を覆っていく。圧倒的な破壊の力、命は勿論魂すら砕け散るその光を前に……。
「波ァァァァァッ!!」
修司もまた光を放った。紅と蒼、ぶつかり合った二つの光の拮抗は驚くほど呆気なく崩れ……。
邪竜の放った灼熱の閃光は修司の放った蒼い閃光に巨大なファヴニールごと呑み込みまれ、遥か空の彼方へと消えていった。
――あっ、今空にある光帯にかすった。

軈て、辺りは静まり返る。修司の体には特に怪我を負っている様子はなく、精々上の山吹色の胴着部分が衝撃の余波で吹き飛び紺色のインナーが露になっている程度。
対する邪竜の方はその殆どが消滅しかけていた。
「ふぅ、流石にちょっと疲れたかな」
口では体力の消耗を訴えているが、未だに修司の体力は底をついてはいない。肩を回し、体を解し、自分の体調を確認するその姿はまだまだ限界の様子ではなかった。
「な、なによ、何なのよアンタ、それだけの力、どうやって手に入れたって言うのよ!?」
先程までの威勢は修司の放ったかめはめ波によってファヴニールのブレス諸とも消し飛んだらしい。飛竜の上で明らかに狼狽している彼女に修司は何事もないように応える。
「どうって……普通に修行でだけど？　あと実戦」
「ふざけないでよ、ただの人間がどう修行したら手からビームなんて出るのよ。おかしいでしょ、不条理だわ」
何やら酷い罵倒を受けた気がするが、戦意を削がれたのならそれでいい。捕まえて彼女から洗いざらい聞き出そうと修司が歩き出した時、半分となった邪竜が蠢きだした。
「??――マジか、本当に粉微塵にしないと倒せないのかよ」
「??????……」
??再生し、立ち上がる邪竜に修司は呆れ、魔女は笑みを浮かべる。形勢逆転、そう思わせる展開に黒ジャンヌは先程までの調子を取り戻す。
「あ、アハハハ！　そうよ！　邪竜ファヴニールにはこれがあったのよ！　例え全身が砕かれても尚復活するその巨体！　竜殺し無くば崩れ得ぬ絶対的な不死性！　喩えお前がどれだけ強かろうと、それだけでは邪竜に勝てる道理はないと知るがいい！」
「……」
「さぁファヴニール！　今一度さっきの力で今度こそ目の前の男を殺

しなさい！」
勝利を確信したかのような黒ジャンヌの叫び、しかしそれに反して邪竜の方は先程までの荒ぶりが嘘のように大人しくなっていた。
何せ、先程放った邪竜のブレスは間違いなく最大限の威力を秘めていた。リヨンは勿論、オルレアンや下手すればフランス全体が焦土となるほどの本気の一撃だった。
それを、目の前の男はあっさりと凌駕した。つまり、自分ではこの人間にはどうやっても勝てないと言う事、疲れたと男は言うが、精神的苦痛は寧ろ此方の方が大きいし、何よりあれだけのエネルギーを放出したのに未だ白河修司という人間は息一つ乱してはいない。
初めて理不尽というのを目の当たりにした。邪竜ファヴニールは初めて体験する理不尽に怯え、無意識に修司から後退る。
「??、??????????ッ!!」
しかし、それでも竜種としての矜持がファヴニールに逃避の選択を許さなかった。苦し紛れの雄叫びを上げ、その巨大な前足で踏み潰さんと迫るが。
「いいぜ、此処からは持久戦だ。けど覚悟しろよ邪竜さん、……こう見えて俺は、少しばかりしつこいぞ」
やはり、片腕で難なく防いでしまう。空いた片腕に力を込め、握り拳を突き出してくる修司に邪竜ファヴニールの目から大粒の涙が溢れ落ちた。

◇

――――男にとってドラゴンは避けては通れぬ存在だった。ドラゴンの伝説はそのまま己の伝説であり、己の逸話もまたドラゴンと共にあった。

嘗て竜殺しを成し遂げたもの、ジークフリート。リヨンの人達の為に戦っていた男は現在瀕死の状態で街をさ迷っていた。

ジークフリート、嘗て邪竜を屠ったとされ人々に平和をもたらした英雄。人に利用され、王に利用され、その果てに裏切られた悲しき英雄。

そんな彼は現界した時点で邪竜の存在には気付いていた。竜殺しとしての因縁、ならば今回も断ち切る迄だと、瀕死の体を引き摺りながら邪竜の下へ向かおうとしていた。

その途中、顔を合わせた清姫なるサーヴァントの肩を借り、どうにか一太刀浴びせる程度にまで回復したジークフリート。

これで邪竜を屠る事ができる。刺し違える覚悟でその場所に辿り着いた彼が目にしたものは……。

「行くぞ！　これが俺の、ペガサス流星拳だ！」

「ッ!!」

「やめて、もう止めてよぉ……ファヴちゃん、この間誕生日を迎えたばかりなのよ。また一緒に誕生日を開くって約束したの、ねぇ、もういいでしょう？　もう、止めて上げてよぉ!!」

「まだまだァッ！　今度は彗星拳だッ！　次はエクスカリバー、その次は気円斬で輪切りにしてやるぜ！」

「ッ!?」

「どうしてそんな酷いことをするのぉっ!?　これが、こんな事が……人間のやることですかぁ!?」

「お前が、泣くまで、戦うのを、止めない!!」

「ッ!!!!」

「もう泣いてんのよぉぉぉ!!」

「――――おっふ」

その混沌とした光景にジークフリートから変な声が出た。

その18　第一特異点

聖女ジャンヌ＝ダルク。彼女が黒い鎧の男に勝利できたのは殆どが偶然の産物であった。突然聞こえてきた超音波、多くの翼竜が墜落し自身や鎧の男にも多大な影響を与えてきた音の暴力。裁定者として顕現した事で得られた耐久力により狂戦士よりも早く回復した彼女は、手にした旗を振り回し黒い鎧に直撃を当てる事に成功した。

当然、その程度で倒れる狂戦士ではなく、叩き込まれた旗を掴み、彼女の宝具でもあるソレを自らの武器にしようと蝕み始めた。しかし、そんな彼の抵抗むなしく更なる追い討ちが狂戦士に降り注ぐ。

フランス王妃の宝具、ガラスの馬が黒い鎧の男を轢き倒し、角と尻尾を生やした少女の槍が男を貫いたのである。超音波攻撃による前後不覚への一撃と意識外からの強襲、清々しい程の不意打ちに流石のジャンヌも瞠目した。

それから、消滅する狂戦士を見届けると王妃とエリザベートと名乗るサーヴァントから簡単な事情説明を受けたジャンヌは修司の下へ駆け付けるために急いだ。

彼は、たった一人で邪竜と戦っている。神話に知られ、伝説として語り継がれる幻想種最強の生命体とその身一つで戦っている。彼の実力の知っている彼女としてもそれは剰りにも無謀と言えた。

邪竜ファヴニール。財宝に固執し、凶悪な力と知性で以て仇なす幻想種の中でも最上位に位置する魔竜。その最大の特徴は伝承にある竜殺しでしか倒し得ないという絶対的とも言える不死性にあった。

如何に力で捩じ伏せ、切り刻み、打ち砕こうとも邪竜は何度でも蘇る。竜殺しの手で屠られない限り、必ず邪竜は蘇り、再びこの世界に災いをもたらしていく。

つまり、修司では邪竜ファヴニールには勝てないと言う事。彼が強いのは理解している、腕力も胆力もその全てが現代の人間の枠組みから大きく逸脱しているし、何なら自分達サーヴァントすらも上回っているかもしれない。

でも、そんな彼でも邪竜は倒せない。純粋な力としてではなく、世界に定められた概念が不可能としているのだ。
一刻も早く彼の下へ駆け付けねば。彼はこの先の戦いにも必ず必要とされる者。ここで死なせるわけにはいかないと、駆け付けたジャンヌが目にしたのは……。
「波動拳！　波動拳！　からの昇竜拳！　竜巻旋風脚！」
「あ〝ーーー！　あ〝ーーー！」
「――――……」
ひたすら邪竜を滅多打ちにしている修司、その上空ではワイバーンに跨がった竜の魔女である黒いジャンヌが童女の如く滝のような涙を流して止めろと訴えている。殴られている邪竜は最早泣きわめく元気すらないのか、死んだ目で修司の暴力を受け入れていた。
その近くでは大きな剣を持ったサーヴァントがいる。彼が件の騎士様なのだろうが……その目は邪竜と同じように死んでおり、うっすらと涙が流れていた。そんな彼の隣にいる和服姿のサーヴァントは青白い顔をしてガタガタと震えていた。
「あ、ジャンヌさん。そっちも無事だったんだ！」
「立香、良かった。そちらも無事だったんですね」
呆然としていたジャンヌに立香から声を掛けられる。それにより我に返ったジャンヌは振り返った先で此方に駆け寄ってくる彼女に無事である事を認識すると、擦り傷こそあるものの五体満足でいてくれたマスターに深く安堵した。
「うん、ゲオルギウスさんとマシュのお陰で何とかね」
「いえ、私は最後の詰めに少々手を貸しただけ、あの窮地を乗り越えたのは他ならぬマシュ嬢の鉄壁の賜物です」
「そ、そんな。私なんかが……」
ゲオルギウス。聖ジョージとして世界中から認知され、イギリスの守護聖人としても知られる竜殺し（ドラゴンスレイヤー）。彼もまたエリザベートやマリーの様に立香達の窮地に駆け付けてくれたサーヴァントなのだろう。
彼女達の後ろには耳を抑えているアマデウスもいる。恐らくは彼

も先の超音波で影響を受けた一人なのだろう。天才的な音楽家、聴覚が人並み外れており、それ故に未だ回復仕切れていない。そんな彼がエリザベートを見ると酷く怯えた表情でゲオルギウスの背後へと逃げる。

「実は先日空に向けて放たれた蒼白い光を目撃しまして、一瞬竜の吐息（ブレス）かと思ったのですが、それにしては邪気はなく、寧ろ一種の清廉さを感じたので気になって周辺を歩いて回っていた次第です。……まぁ、この様な場面に出会すとは流石に思っても見ませんでしたが」

言われてゲオルギウスの視線の先を追って再びそこへ向けば、無数の拳による連打で地中にめり込んでいく邪竜がいた。

「震えるぞハート！　燃え尽きるほどヒート！　刻むぞ、血液のビート!!」

「山吹色の波紋疾走（サンライトイエローオーバードライブ）!!」

「止めてぇエェッ！　もう燃え尽きちゃってるからァ！　さっきからファヴちゃんはもう灰になっちゃってるからぁ!!」

「最高に「ハイ！」ってやつだァッ!!」

修司による波紋連打（波紋なし）は邪竜を地中へ深々とめり込ませていく。泣くことも喚くことも出来なくなった邪竜は枯れた筈の涙腺からただ涙を流してされるがままになっていた。そんなファヴニールに何を勘違いしているのか、修司は打撃の勢いを緩めることはしない。

何せ、相手は最強の邪竜だ。竜殺し以外倒せないと知り、この竜を抑えられるのは今は自分しかいない。そんな責任感からファヴニールとの一対一（タイマン）を受けることにした修司は兎に角自分に釘付けになってもらおうとあらゆる方法で攻撃を行った。

ある時は気力で、ある時は小宇宙（コスモ）的な気力で、またある時は波紋的な気力で。結局全部気力による模倣した技だが、それでも修司にとっては血の滲む修行の果てに習得した必殺技、これにより邪竜の足止めを行う事にした。

決して熟練度の低い技の習得に最適だとか思っていない。そう、決

してそんな風に思っていない。
　そんな彼の技を受け、もう幾度めか分からない死を体験した邪竜は、刻まれていたその概念によって復活する。遠くで黒いジャンヌがファヴニールに逃げてと叫んでいるが、逃げた所でどうしようもない。何せ目の前の理不尽の塊みたいな男は力だけでなく速さも逸脱している。邪竜ファヴニールの巨大な体では逃げることさえ出来ないのだ。
「おっ、まだまだやる気だな！　此方も漸く温まって来たところだ！
　此処からまた一段階ギアを上げていくぞ！」
　倒しても倒しても復活してくる邪竜に修司は軽いランナーズハイ状態となっていた。邪竜が抵抗らしい抵抗をしなくなって不思議にも思ったが、恐らくは此方の体力が尽きるのを待っているのだろう。邪竜の癖にズル賢い奴だ。そんな勘違いをしながら修司は更に力を高めようとするが、そんな彼の肩にポンッと誰かの手が置かれる。
　なんだと思い振り向けば、修司の背後には体に奇妙な光る紋様を浮かべた大剣を手にした男が立っている。そんな彼が修司へ目線を向けると後は任せろと言わんばかりに前に出て邪竜へと近付いていく。
　今の邪竜は復活ホヤホヤの状態だ。ダメージもなく、体力も体調も万全な邪竜に無策で近付くのは危ないぞと修司は男を呼び止めようとする。
　そんな修司を止めたのは立香だった。彼の肩に手を置き、「その辺にしてあげて」と口にする彼女を不思議に思いながら周囲を見渡すと、なんとも言えない表情で此方を見るジャンヌ達がいる。
　なぜそんな目で見られているのか、本気で解っていない修司がポカンとしていると、ザシュッと何かを斬り捨てる音が聞こえてきた。振り向くと其処には邪竜の首が転がっており、男は全身を邪竜の血で染めていた。
　――――邪竜は、もう復活することはなかった。男が振り下ろしたその一撃は確かな手応えが感じられ、邪竜ファヴニールは光の粒となって消えていった。
「――――眠れ、邪竜よ。お前が何度蘇ろうとその度に俺はこの剣を奮

おう」
　それは騎士の誓いで、邪竜に対する約束だった。喩え此処とは違う何処かで見えようと、ふたたび自分の剣は邪竜討伐の為に奮われる。お前が蔓延る余地はないのだと、そう吐き捨てる宿敵（ジークフリート）に……。
『……あ、り……が……と、う……』
　漸く逝ける事に安堵した邪竜ファヴニール。消えていく宿敵にジークフリートは空へと消えていくその欠片たちを完全に見えなくなるまで見守り続けた。
　……最後に振るわれたその一撃は、何処までも慈悲深く、切なかった。

◇

「いやー、助かったよ清姫ちゃん。君がジークフリートさんを連れてきてくれなかったら、俺ずっとアイツと戦っていた所だったよ」
「戦いとは程遠い惨劇に見えましたけど……嘘ではない？　つまり、この人はアレを対等の戦いだと認識している？　ええ……」
　それから少しして、修司達は互いに生きていたことを喜び、自己紹介をしながら情報を交換していた。
　既に黒ジャンヌの姿は此処にはない。恐らくはオルレアンへ戻っているのだろう。追撃を提示する者はいない、というか出来なかった。涙処か鼻水も垂れ流して体裁や面子など放り捨ててギャン泣きしている黒ジャンヌに誰も追撃の提案を出来なかったというのが本音である。
「ジャンヌさんも無事で良かったよ。あの黒い鎧のヤツはなんかヤバ

そうな雰囲気だったし、ある意味邪竜より厄介だと思ったからさ、エリちゃん達を向かわせたのは正解だったみたいだな」
「え、ええ。そうですね。お陰で助かりました」
「ではジャンヌ。これよりジークフリートの解呪を行います。手を貸して戴きたい」
「あ、解りました。では、皆さん。私は一旦これで……」
「あぁ、また後でな」
　そう言ってジークフリートに掛けられている呪いとやらを解くためにジャンヌはゲオルギウスの下へ歩いていく。そんな彼女を見届けた後、修司は立香達の所へ向かった。どうやらこれからの方針についてロマニと話し合っている様だ。
「立香ちゃん、マシュちゃん、ドクターとの話は進んだかい？」
「あ、修司さん。もう平気なんですか？」
「あぁ、元々そんなに疲れてないしな。少し休憩したお陰で、この通りさ」
『あれだけ暴れまわってケロッとしてるなんて、君の体はどうなってるんだい？　普通に謎過ぎて怖いんだけど』
「はっはっは、鍛えているからな。これくらいじゃ音をあげねぇよ」
　肩を回し、全快したことを告げる修司にロマニは軽く引いていた。全世界の男子が憧れる技を難なく放てるのもそうだが、この男は色々とおかしい点が多い。
　ツッコミ処満載だが、今はそれを追求している場合ではない。此れからの方針について修司の意見も聞いておきたいと意識を切り替えたロマニは、目の前にいる今は唯一となったＡチームの修司に訊ねた。
『……正直、僕はこのタイミングがチャンスだと思っている。向こうの戦力であるアサシン達やセイバーも倒れ、バーサーカーも打ち倒し、切り札である邪竜も滅んだ。向こうが建て直しを図るには相当な時間が必要になる筈、僕はこのまま追撃するべきだと提案するよ』
「だな、俺も同意見だ。向こうの戦力は著しく低下した筈、畳み掛けるのは今しかないだろう」

「ですが、相手の本拠地に正面から攻めいるのは少々危険が伴うかと思われます。いえ、ジークフリートさんや他のサーヴァントの皆さんが手を貸してくださるなら、その選択も充分ありだとは思いますけど……」
「でも、マシュも言うように敵の本拠地なんだよね？　普通に考えたら罠の類が張り巡されてると思うけど……」
『そこなんだよねぇ。罠と分かって向かわせるのは指示を出す者としては憚れるのが……ねぇ？』
　方針は定まっているが、今一つ決定力が掛けている。藤丸立香は修司とは違いマスター適性を持つ者、そんな彼女を罠が待ち構えていると分かった上で投入するのは些か以上に気が引けた。
　かといって修司ばかりに頼るのも気が引ける。というか、やり過ぎてややこしい事態になりそうだから修司に一任するのは出来る限り控えたいのが本音だ。
　あーだこーだと悩んでいる内に時間だけが過ぎていき、どうしたものかと頭を悩ませていると……。
「ちょっとそこの山吹色の豚、まだ話終わらないの？　いい加減此方は待ち疲れたのだけれど？　全く、アイドルを待たせるなんてマネージャーとして三流よ？」
「エリちゃん？　あぁ、悪い。今少し煮詰まっててさ、もう少し掛かりそうなんだけど……」
「だめ、待てないわ。貴方には私の望みを叶える義務があると言う事を忘れているのではなくて？」
「え？　あ、あぁ……あれか、素で忘れてたわ」
「ちょっと!?　ほんの十数分前の話じゃない！　何で忘れるのよ!?」
「防衛本能？」
「はぁっ!?」
「わ、悪かったって！　忘れてたけど約束は守るからさ！」
　エリザベートの追求にたじたじになる修司だが、実際彼女の望みをどう叶えるかまでは考えていなかった。自称アイドルのライブに一体どう考えたらかめはめ波を取り入れようというのか、そんな戸惑う

修司に助け船を出してくれたのは立香だった。
「ねぇエリちゃん、エリちゃんの望みって何？」
「良く聞いてくれたわねそこの子ジカ、この男ってあのデカイ光を出せるでしょ？　私の宝具と合わせればそれはもう綺麗なイルミネーションになる筈なのよ！」
「エリちゃんの宝具ってどんな感じなの？」
「な～に？　そんなに私の事を知りたいの～？　流石は私、こんな田舎娘をも魅了しちゃうなんて、私ってば罪なお・ん・な♪」
『ここ、笑うところ？』
「お二人とも、シッですよ」
　イヤンイヤンと体と尻尾をくねらせるエリザベートに軽くイラッとする修司とロマニ、そんな二人をマシュが黙らせ、立香はエリザベートを煽てて彼女の宝具について聞き出していた。
　あくまで立香だけに聞かせようとエリザベートは耳元で囁き、立香はうんうんと頷く。それから少しして彼女の宝具の概要を把握した立香は少しの間考え込んでいると……。
「ティンときた。これなら行けるかも！」
「ほ、本当ですか先輩!?」
「うん！　本当なら修司さんだけで何とかなりそうだけど、もしかしたら外しちゃうかもしれないし……でも、これなら多分籠城されようと何とか出来るかも！」
『そ、それが本当なら確かに凄いぞ！　それで藤丸君、その内容は一体なんだというんだい？』
　あのねー、と言葉を紡ぎ立香が思い付いた作戦を伝えると……徐々に二人の顔は曇り始め、心なしかフォウもドン引いている様子だった。
「な、なんと言うか、その……」
『君も、修司君と同様に中々容赦ないんだね』
「え？　そうかな？　いい作戦だと思ったんだけど……」
　引いている二人に立香はキョトンと目をパチパチさせている。ともあれ、確かに彼女以上の代案がない以上作戦はエリザベートと修司

に任せることにし、ジークフリートの解呪も終わり、一行はそろそろやってくるであろうフランス軍に鉢合わせる前にリヨンから立ち去り、オルレアンへ向かう事にした。
その道中、夜になりこれ以上の行動は危険と判断した一行は森の近くでキャンプをすることになった。レイシフトして二度目の野宿、初日と違い大所帯になった事で必要な食材が多くなった事に不安を覚えるロマニだったが、今回は現地で取れた肉（ワイバーンｏｒファヴニール）を用いての焼き肉パーティーとなった。
竜種独特の臭みや固さはあるものの、血抜きや毒抜きは一通り終えている為、食材としてはそんなに悪くはなかった。　強いて不満があるとするなら野菜が少ないこと、今後は食事面も気を付けようと修司と立香、マシュの三人は頷きながらそう決意するのだった。
その後、見張りの順番を決めたりマシュがアマデウスから自身の在り方についてアドバイスを受けたり、ジャンヌとマリーが友好を深めたり、エリザベートと修司が翌日の打ち合わせをしたりしながら時間は過ぎ去り、決戦を前にした夜は穏やかな内に過ぎていった。

◇

「ジル、ジル～～!!」
早朝。オルレアンにいち早く辿り着いた黒ジャンヌは砦内部の玉座と思われる場所にて自身の帰りを待っていた彼女が最も信頼して

いる者に泣き付いていた。
「おお、我が麗しの魔女よ。よくぞご無事で戻られました。水晶越しでしたが、貴方の活躍は拝見させて頂きましたよ」
「それなら分かってるでしょ！　ファヴニールが、私のファヴニールが……う、うわぁ～～ん！」
「ええ、ええ、存じていますとも！　全てはあの忌々しい山吹色の男が元凶。ファヴニールを失ったのは痛手ですが、彼の竜も聖杯の導きによって召喚されしモノ、事が終われば再び私達の呼び掛けに応えてくれますでしょう」
「ほ、本当？」
「勿論です。ですがジャンヌ、今はどうか我慢を。此処にはあの者達が近付いているのです。戦いはまだ終わってはおらぬのです」
「っ!?」
　ジル・ド・レェの一言にジャンヌの死人のような白い顔が青くなる。あの山吹色の悪魔が来る、理不尽で不条理で、生前でも存在しなかった怪物が今度はこのオルレアンへやって来る。
　恐怖が彼女の内から沸き上がる。言葉にできない震えが襲い、悪寒がジャンヌの思考を混乱で埋め尽くしていく。抗えない、抗えるわけがない。何故ならジャンヌ＝ダルクは良くも悪くも運命というモノを受け入れてきた。抗うという事を知らず、与えられているのは自分を殺したフランスに復讐する感情のみ。彼女はそう望まれて生み出されたのだから……。
「しかし、ご安心召されよジャンヌ。奴等の快進撃も此処まで、私が施した陣形により既にオルレアンは要塞となっております」
「そ、そうなの？」
「ええ、入り口には手始めに翼竜の群を配置しており、奴等を視認すればその牙と爪で食らい尽くすでしょう。仮にその場を潜り抜けてオルレアンに侵入しようとも既にオルレアンは異界と化し、これまで殺してきた人間達の怨念が怨霊となって奴等を呪い殺すでしょう。我が海魔も無数に配置しており、奴等に休むまもなく呑み込むでしょう。それらを潜り抜け、此処まで辿り着いたとしても、その頃には奴

等も満身創痍。貴女が出るまでもなく事は終わることでしょう」
「で、でもジル！　あの悪魔は手からビームを出すのよ！　遠くから狙い撃ちにされたら……」
「勿論、それも対策済みです」
　ジルが窓へ指を指しジャンヌそこへ視線を向けると、砦の前にある広場から巨大な海魔が現れた。その数凡そ八体、邪竜ファヴニール以上の巨体を誇る海魔がオルレアンの街に顕現した。海魔を喚び出すにあたって必要となるのは生死を問わない人の体、このオルレアンには人の死で溢れていて材料となる死体は事欠かない。
　とある理由から無尽蔵に等しい魔力を持つジル・ド・レェだからこそ出来る力業、確かにこれだけの規模の戦力がまだ残されているなら、此方にもまだ勝機は残されているかもしれない。
　イケる。これならまだ自分達は戦える。あの馬鹿げた力を持った山吹色の悪魔にも一欠片の勝機があるかもしれない。
　竜の魔女は立ち上がる。旗を手に取り、天高く掲げる黒いジャンヌは先程までのギャン泣き状態から立ち直り、凛々しい顔付きで宣戦布告する。
「アハハ！　来るなら来なさい愚かな反逆者たちよ、所詮お前達の力では覆ることはない現実があるのだと知りなさい！　我が名はジャンヌ＝ダルク、フランスを駆逐し、人理を破壊する魔女――――」
「波ァァァァァァッ!!」
　そんな彼女の宣戦布告を遮る形で蒼白い巨大な閃光（かめはめ波）が巨大海魔総勢六体と、ジャンヌとジルのいる砦の天蓋部分を吹き飛ばし。
「Ｌ　ａａａａａａ――――!!」
　次いで前代未聞の音の暴風がオルレアンに仕掛けられたあれやこれやを吹き飛ばし、二人ごと蹂躙していった。

◇

「……どうやら、上手くいったみたいだな」
瓦礫の山となったオルレアンの砦に降り立った修司はその様子から立香の立てた作戦が上手く行ったことを確信する。
彼女が立てた作戦は罠を張り巡らせ、待ち構えているだろう黒ジャンヌ達の思惑に乗らない為の遠距離からの攻撃という簡単なもの。
問題はその火力、修司のかめはめ波で一網打尽にするのはいいが、それではフランスに大打撃を与え結局は人理崩壊に繋がってしまうかもしれない。オルレアンに極力ダメージを与えず、ジャンヌ達にだけダメージを通すのは流石の修司にも難しかった。
そこで白羽の矢が立ったのがエリザベートだった。街に物理的ダメージを比較的抑え、黒ジャンヌ達に最大限のダメージを与える切り札、それが彼女の宝具〝鮮血魔嬢〟である。
え？　彼女の宝具も充分に物理兵器？　知らんな。
「しかし、まさか彼女の宝具がアンプに改造した城とはね。サーヴァントってのは何でもありなんだな」
エリザベート＝バートリーの宝具は生涯に渡り君臨した居城を召喚するというもの、それがどういう訳か巨大な音の増幅機として成り立っており、彼女の破壊的美声を最大限に引き出すというモノだった。
その宝具にアマデウスは失神するという被害を被ったが、それ以外の者達はあらかじめ用意していた耳栓と白ジャンヌの宝具によって護られている為、アマデウス以外目立った被害を受けたものはいない。
今頃は他の面々も仕留め損ねた残りのワイバーンや、巨大海魔を倒すのに戦ってくれている頃合いだろう。あの黒いジャンヌの所へも

立香達が駆け付ける頃だろうし、此方もそろそろ決着をつけるべきだ。
「……さて、そろそろ立ったらどうだ？　ええ？　ジル・ド・レェさんよ。いや、青髭と呼んだ方が通りがいいか？」
　地に膝を付き、頭を抑えるジル・ド・レェ。その表情には憤怒が浮かんでいて、その目はマグマの如く血走っている。
「おおぉぉのれぇぇぇ！　この野蛮な匹夫めがぁっ！　何処まで我々を愚弄すれば気が済むのかぁ！　許さん、許さんぞォォッ！」
「別に、アンタの許しを欲しいとは思わねぇよ。て言うかいらねぇし、俺がアンタにくれてやるのはこの拳だけだ」
　立ち上がり、罵倒してくるジルに修司は淡々とした様子で言い返す。そもそも好き勝手にしていたのは連中も同じ、言われる筋合いなんて在るわけがなく、目の前の男の言葉に修司が動じる事はない……筈だった。
「山吹色の悪魔め！　お前がいるから私のジャンヌが怯えてしまっている。死ね！　死んでしまえ！　お前のような輩は存在自体が忌々しい」
「私のねぇ、やっぱりそう言うことだったか」
「あぁ、可哀想なジャンヌ。フランスに裏切られるだけに飽きたらず、この様な蛮族に乱暴されるとは、
　なんて嘆かわしい！　貴様には人の心が無いのか!?　これが、この悲劇が、貴様ら人間のすることかぁ!?」
　その何気なく吐き捨てたジル・ド・レェの一言が、白河修司の触れてはならない部分に触れた。
　第四次聖杯戦争、そこで行われた凄惨な戦い、その裏で被害にあった無関係の子供たち。
　王に我が儘を言って教えてもらった当時の凄惨な現場、なんの抵抗も出来ない子供達を一方的になぶり殺した外道。
　一説では青髭のモデルとも謂われたジル・ド・レェ、彼のその一言により修司の怒りはこの時――――頂点を越えた。
「お前が言うな」

「ぶへぇ!?」
瞬間、修司はジルを殴り飛ばしていた。血を吐き、鼻血を垂れ流し、衝撃と痛みで涙を流すフランスの元元帥に……。
「とっとと立てよ三下、テメェには此から自分がしたことへの付けを、たっぷりと返させてやるからよぉ」
修司は一切の容赦、情けを掛けないことを……今この瞬間に決めた。

その19　第一特異点

ジル・ド・レェ。フランスの貴族にして軍の元帥に成り上がり、嘗てはジャンヌ＝ダルクと共にオルレアンを解放したフランスの英雄。しかし、輝かしい経歴とは裏腹にジャンヌが火刑に処された後、フランソワ＝プレラーティを始めとした詐欺師紛いの自称錬金術師達により黒魔術に没頭するよう唆され、ある悲惨で凄惨な虐殺に手を染める事になる。

今、修司の前で鼻を抑えて踞る男はそんな男の成れの果て。狂気に堕ち、殺戮に溺れ、命を弄ぶ怪物。人としての倫理観から外れてしまったジル・ド・レェに修司は何処までも冷たい視線を浴びせた。

「……三下、だと？　我が信念を、我が悲願を、取るに足らないと嘲笑ったか！　小僧!!」

「笑う価値すらねぇよ。人を、命を簡単に踏みつけにするお前ごときが信念なんて御大層な言葉を口にしてんじゃねぇよ」

「ゆ、許さん……許さない許さない許さない許さない許さない許さない断じて、許さなーーい!!」

瞬間、ジル・ド・レェの手にした本が開き怪しげに光る。人の皮で作られた表紙、バラバラと捲られていく頁が進むにつれてドス黒い光は強くなっていく。

修司は目を細めて静かに力を漲らせる。すると、立ち上がるジルの足下から幾つもの魔方陣が浮かび上がり、そこから無数の海魔が召喚されてくる。鋭い牙を持ち、その様相はイカやタコに似た海生軟体の造りをしていた。

全身をウネウネと蠢かせながら襲ってくる。人によっては生理的恐怖すら覚えるおぞましい化け物、それが二十以上の数の暴力として修司一人に押し寄せる。

その海魔一匹で人間一人を喰い殺すには充分な力があったが、ジルの狙いはそうではなかった。修司の一撃で崩れた天蓋、その瓦礫の影

で死角となった場所からもジルは海魔を召喚していたのだ。
　瓦礫を吹き飛ばして背後から修司へ抱き付いた海魔は捕食しようとその牙を頭部に突き立てる。残った海魔達も一斉に飛び掛かり、修司の体を瞬く間に覆い尽くしていく。
「ふは、フハハハ！　バカめが！　所詮は単身で殴り込む事しか出来ぬ猪よ！　我が親友からの贈り物に不可能はなく、また我が願いに障害はないのだ！――――おっと、こうしてはいられない。早くジャンヌの元へ馳せ参じねば、待っていてくださいジャンヌ！」
　修司を喰い殺そうと蠢く海魔を前に高らかに笑うジル、後は魔女である黒いジャンヌに駆け付け、共に邪魔者達を打ち倒すだけ。
「ハァァァァッ!!」
　その時、突然海魔が弾け飛んだ。爆発に巻き込まれたかの様に、粉々に吹き飛び辺りに散っていく己の使い魔の無惨な姿にジルは固まった。何が起きて何をしたのか、疑問に思うジルに修司の代わりとして応えるならば――――気合い、ただそれだけである。
　自身から発する気の昂り、それを爆発的に高めて物理的に爆発させた文字通り気合いの爆発。そして当然の如く修司には傷一つ付いておらず、精々が海魔の体液があちこちに付着している程度。海魔の体液には毒性のある成分が含まれている様だが、その程度で修司が堪える筈もなかった。
「どうした？　こんなものなのかよ、お前の信念って奴は」
「ぬ、ぬぅぅぅ！」
「お前は仮にも元帥だったんだろ？　フランス軍の一部を率いて、この百年戦争の世界で生き抜いた兵（つわもの）だったんだろ？」
　分かりやすい挑発、普通なら絶対に乗らないし、寧ろ鼻で笑って返されるだろうその挑発を、ジルは受け流す術を知らない。何故なら今の彼は生前の時とは違い精神が汚染されている。自ら行ったおぞましい儀式と惨劇により、既に彼の精神状態は破綻している。
　しかし、そんな事など修司にはどうでも良かった。狂気？　精神が汚染されている？　だからどうした。そんなスキル（モノ）で自分がしてきた事を無かった事に出来たつもりでいるのか？　否、断じて否であ

る。
「この、この……図に乗るなよ匹夫めがぁぁっ!!」
駆け出し、振り上げた拳が修司に向けて振り下ろされる。現在この特異点の首謀者と思われるジル・ド・レェのクラスは魔術師（キャスター）だ。陣地作成に長けて直接戦闘することは苦手とされるクラスだが、それでも彼はサーヴァント。振り上げた拳は人間一人殺すなんて訳はないし、その握力は子供の頭蓋程度易々に握り潰せる。
そんなジルの拳が修司の顔面に突き刺さる。鈍い音が辺りに響き、匹夫と蔑んでいたジルの顔に狂喜の笑みが溢れだす。手応えはあった、これで少しは気分も晴れたと笑みを浮かべるジルが次に感じたのは……自身の拳への痛みだった。
「あ、がぁ!?　な、なんだこの固さは!?　まるで……鋼の類いのような……」
「当たり前だ。昔からずっと師父に言われて続けてきた俺の功夫、そう簡単に破れると思うなよ」
自身の拳に伝わってくる鈍い痛み、サーヴァントの力で殴られても平然としている肉体。神性？　否、この男は自ら鍛え上げた自身の肉体のみでサーヴァントの攻撃を受け止めたのだ。
拳が砕かれて呻くジル・ド・レェ、これで一先ず大人しくなったと思った修司が、一旦気を納めて戦闘体勢を解く。
「……なぁアンタ、どうしてこんな事をしたんだ？　人を殺して街を焼いて、どうしてここまで非道な行いができる？　どうして其処までしてジャンヌさんを貶める？」
「――――あぁ？」
その言葉はジル・ド・レェにとって無視できないモノだった。瞬間、彼の内側から激情が溢れだす。なんという暴言、なんという侮辱、生前ですら経験のない嘲りにジル・ド・レェの怒りは限界を越えた。
「貴様は今、私がジャンヌを貶めていると、そう言ったのか？」
「そうだ」
「ふ、ふふふ……ふざけるなぁ!!　私が、このジル・ド・レェがジャンヌ＝ダルクを貶めているだとぉ!?　それは貴様達の方だろう

がぁぁ!?」
　ジャンヌは祖国の為に立ち上がった。神の啓示を受け、フランスを救う為に戦い、そして救って見せた。オルレアンを解放し、フランスに生きる人々を救い、自分達と共に戦ってくれた。
　それを祖国（フランス）は裏切った。利権の為に彼女を裏切り、保身の為に彼女を凌辱した。貶め、辱しめ、死に追いやったのは紛れもなくこの腐った国だ。
　恩人に牙を向ける唾棄すべき腐敗した国、それがこのフランスという国の正体だ。踏みにじって何が悪い、破壊し尽くして何が悪い。ジャンヌ（聖女）を殺した歴史など、焼却された方が良いに決まっている。
「ジャンヌ＝ダルクを殺した国、そんなものなど存在する価値すらない！　何故それが分からぬ！」
「……なら質問だ、何でアンタはそうしなかったんだよ」
「……は？」
「ジャンヌさんを殺されたのが許せないって言うなら、何で生前のアンタはそうしなかったんだ？　フランスに反逆するって手段をよぉ」
「……!?」
「許せなかったのなら、悔しかったのなら、どうしてアンタは当時フランスに復讐しなかったんだ？　すれば良かっただろうが、許さないと息巻いて、フランスという国に、シャルル七世という王様によぉ」
「そ、それ……は……」
　否定の言葉は出なかった。一度はジャンヌを救出しようと彼女が囚われていたルーアンに攻撃を試みたが、彼女が処刑されてからは心と生活は荒み、ただ堕落的に生きてきた。
　そう、ジル・ド・レェはジャンヌを殺された事を激怒し、フランスとその国王に報復する道を選ばずにショックで引きこもる方を選んだのだ。その後はプレラーティに唆され、黒魔術の材料にと非道という言葉ですら収まらない惨劇を行ってきた。
「許せない。憎い。自分もそうなのだからきっとジャンヌもそう思っている筈、だから彼女をそう造り出した。違うか？」

「う、うぅ……」
「今の自分じゃあフランスには歯が立たないから、だからサーヴァントになった後で黒幕の誘いに乗り事を起こした。全てはフランスという国を歴史から焼却する為に……と、大体こんな所か？　全く、随分と卑怯な手を使ってくるもんだよ」
修司の中で今回の特異点の経緯は大体察しが付いていた。全ては人理焼却を行った黒幕の掌の上、遠回しでありながら効果的な立ち振舞いをする黒幕の狡猾さに舌を巻きながら修司は卑怯と吐き捨てる。
ジル・ド・レェの気持ちも分からなくもない。修司もまた過去に理不尽に家族を奪われた事がある。それ故に大事な人を殺されて憤ったり、気落ちして塞ぎ込んだりするのもある程度理解できる。
だが、それを差し引いても彼の行いを肯定できやしない。何故なら彼は――――。
「貴様に、貴様何ぞに、何がわかる！　我が敬愛するジャンヌを縛り、凌辱し、死に追いやったフランスへの怒りが！　悲しみが！　嘆きが！　苦しみがぁぁっ!!」
涙を流し、怒りのまま殴りかかってくるジル。その憤りは確かに人の性善に則ったモノで、その涙は正しくジャンヌへの哀悼を意味していた。
そんな彼の拳を修司は片手で受け止め――――。
「だから、無関係な子供達を殺してきたと？　……ふざけるのも大概にしろよテメェ!!」
低い声だった。心の底から、腹の底から怒りを顕にした修司の顔を目の当たりにしたジルから短い悲鳴の様な声が漏れる。
ジル・ド・レェは嘗てプレラーティという友に黒魔術という怪しげな術を聞き入れた。ジャンヌ＝ダルクが死に、自身の光を見失ったジルは、その友人の囁きに抗うことなく悉くその非道を行ってきた。
即ち、子供達の虐殺。年端もいかない少年達を拉致し、凌辱し、殺してきた。その数は千に迫ると言われており、フランスに於ける最もおぞましい猟奇的殺人鬼として語られていてあの青髭のモデルとなったとされている。

「ジャンヌさんを殺したフランスが許せないから？　なら、何で無関係な子供達を殺した！　お前がフランスに復讐するのと、子供達を殺すのとではまったく関係ないだろうが！」
「ヒッ、アガァッ!?」
「結局テメェは、怖かっただけだろうが！　フランスに反逆するのが怖くて、無力な子供達を拉致して殺してきた！　自分が無力な癖にそれを隠して狂ったふりして、自分よりも弱い子供に手を掛けて快楽に逃げたんだろう！」
「ぶ。が　ち、違う！　私は神へ冒涜したかっただけ、決しておのれの欲求の為では……がぁっ!?」
　殴る。ジル・ド・レェに気を用いての技ではなく、純粋な己の腕力のみでサーヴァントであるジルを圧倒していく。ただ無造作に、乱雑に、容赦なく拳を叩き込んでいく。
「神への冒涜だぁ？　違うな、テメェはただ憂さを晴らしたかっただけだ。何も出来ない自分を誤魔化すために、自分よりも弱い子供を殺してきた根性なしの変態クソ野郎。それがジル・ド・レェ、お前という人間の正体……だ!!」
　最後に血と涙でグシャグシャになった顔面に拳を叩き込む。宙を舞い、瓦礫の中へ落ちていくジルを見下ろしながら最後に修司は止めを刺していく。
「そして、アンタは侮り過ぎたんだよ。ジャンヌ＝ダルクって人をさ」
　修司にとってジャンヌは聖女ではない。優しくて気高く、時折ポンコツな彼女だがそれでも修司は知っている。ジャンヌ＝ダルクという人間の強さを、そしてそれ故の寂しさを。
「アンタはさ、ジャンヌ＝ダルクという光に憧れただけだ。本当に彼女を知りたかったら、彼女にもっと寄り添うべきだった。救国の英雄としてではなく、一人の人間としてな」
　結局の所、ジル・ド・レェはジャンヌという少女を神聖視し過ぎたのだ。あの時代において正しい想いと信念を抱いて立ち上がったが故に、その眩しさに囚われて彼女を人間として見れていなかった。
　もし、彼がジャンヌを一人の人間として接していたならば、悲劇に

終わった歴史も少しは変わったかもしれない。
　瓦礫の中に埋もれて動かなくなったジルを見つめ続けて数分、背後から聞こえてくる複数の足音に振り返ると、其処には件のジャンヌ達がいて、その後ろには魔女のジャンヌも一緒だった。
　他にも辺りを見渡せば、他の翼竜や巨大海魔の姿も消えている。外から時折大きな音や振動もしていたから、恐らくはサーヴァントの皆が宝具等で蹴散らしてくれたのだろう。
「立香ちゃん、マシュちゃんにジャンヌさんも、その様子だと決着は付いたみたいだな」
「うん！　凄かったですよー二人の宝具！　ジャンヌ・ブラックの炎を全く通さないんだもん！」
「待ちなさい、何ですかその固有名は!?　幾ら私が作り物だとしてもその様な呼び方は断固拒否しますわ！」
「えぇー？　格好いいのに……」
「何処が!?」
　どうやら、こっちは此方でカタが付いたのだろう。黒ジャンヌからは既に戦意と敵意は消え失せ、あるのはただの虚無感だけ、しかも作り物と認識していることは恐らくは自身の出生も既に耳にしているのだろう。
　視線をジャンヌに向ければ、悲しげに笑みを浮かべている。真実を突き付けられ、それでも正気を保っていられる黒ジャンヌに修司はある種の敬意を抱いていた。
「で、そっちのジャンヌさんは敗けを認めてくれるのか？」
「……認めるしか無いでしょう。ファヴニールは倒され、ワイバーンや海魔達も貴方達に付いたサーヴァントによって死に絶えた。既に此方に勝機はありません。ふふ、結局はこういう結末、偽者である私にはお似合いの末路ですね」
「ジャンヌさん……」
「さて、なら再び私を火刑に処しますか？　別に私は構いませんよ、記憶はあっても所詮は作り物、ここで本物の火刑に処されるのもまた一興でしょう」

力なく笑う黒ジャンヌの顔には以前のような苛烈さは無かった。弱く、自棄になった彼女に言葉を詰まらせていると、これ迄事態を静観していたロマニから通信が入る。
『ジル・ド・レェのいる瓦礫から急速に魔力反応が増大している！　修司君、止めを刺していなかったの!?　いや、殆んど刺しているようなモノだったけど！』
「チッ、ジャンヌさんと最期に会わせてやるって仏心が裏目に出たか。悪い皆、これは俺の失態だ」
「うぅん、ならもう一度頑張るだけだよ！　マシュ、いける？」
「勿論です！」
黒ジャンヌとの戦いで疲弊しているだろうに、それでも立ち向かう意思を見せる二人に修司は頼もしく思った。そして、蠢く瓦礫へ目をやると、そこから現れるのは幾つもの海魔を纏わせたジル・ド・レェが現れた。
「まだ、だ。まだ我が願いは成就されていない。我が悲願ははたされていないいいいぃ……！」
「ジル……」
「さぁジャンヌよ！　我が元に来たれ！　我が怒りは未だ此処にあり！　どうか、どうか！　今一度貴方の憤怒の炎を!!」
血涙を流し、手を差し伸べる先にいるのは黒ジャンヌ。まだ自分達は終わってはいないと、まだ戦えると宣う男の叫びに……黒ジャンヌは応えるように前に出た。
「良いでしょう。それが、貴方の望みであるのなら、それを叶えるのが私ですから」
立ち上がり、光となって消えていく彼女の内から黄金の杯が現れる。聖杯。願いを叶える曰く付きの万能器がジルの体へと吸い込まれていく。
やはり、と修司とジャンヌは確信した。黒いジャンヌ＝ダルクは聖杯を手にしたもう一人のジャンヌではない。彼女の正体はジル・ド・レェが願い叶えたジル・ド・レェの望んだジャンヌ＝ダルクだった。
ジャンヌ＝ダルクはフランスを怨まない。仮にジルが彼女を召喚

したとしてもジャンヌはフランスへの復讐を望まないだろう。故に彼は願った。フランスに復讐を抱くジャンヌを、憎しみと恨みを抱く魔女を、自身が望む形として聖杯に願った。

そんな彼の願いを叶えていた聖杯が本来の形となってジル・ド・レェに呑み込まれていく。聖杯は純粋な魔力リソースとして彼に呑み込まれ、ジルを覆っていた海魔達が一斉に活性化していく。

「も、目標巨大化していきます！」

「こ、これは流石にヤバイかも!?」

「一度、外へ退避します！　マシュは立香を、修司君は……」

瞬く間に海魔は肥大化し、砦を呑み込んでいく。外へ逃げようとする立香達とは対称的に修司は膨れ上がる海魔へ足を進める。両手を突き出し、腰だめに構える彼の姿を見て、全員の足が一瞬止まった。

「悪いが、容赦はしないと事前に決めている。……ここで終わりだ」

相手が切り札を出そうと言うのなら、出す前に決着を付ける。本当の意味で圧倒するのなら自身の相棒を呼んで決戦に持ち込むべきだろうが、そんな事になればフランスに多大な被害が出てしまう。

故に、修司は此処で勝負に出た。両手にこれ迄で一番の光を集め、その体に白ではなく真紅に燃える炎を滾らせて……。

「行くぞ。これが最後の……かめはめ波だぁっ!!」

蒼白い閃光が膨れ上がる海魔を呑み込んでいく。聖杯を呑み込み、膨大な力の塊となったジル・ド・レェすらも呑み込んで……。

（あぁ、私ではやはり……成し得なかったか……）

口惜しい。だが、その感情すらも光へ呑み込まれていく。自身が完全に消滅していく中、ジルはふと彼女と目があった。

ジャンヌ＝ダルク。祖国の為に立ち上がり、祖国に裏切られた哀れな聖女。そんな彼女の瞳は消え逝く自分を捉えて外さない。

（ふふ、こんな私にまで慈悲を向けるとは……やはり、貴方は優しい御方だ）

でも、そんな彼女にもっと自分を大事にして欲しかった。誰かの為に戦い、自分の正しさを通してきた彼女に目が眩んできた自分だが……それでも、普通の女性として生きて欲しい気持ちも無いわけで

はなかった。
フランスを滅ぼすと決めた男、ジル・ド・レェ。光へ消えていく彼の行動の原理は何時だって一人の女の為だった。

その２０　第一特異点

戦いは終わりを告げた。膨れ上がり、天にも届く海魔の集合体を修司の放つかめはめ波によって消滅。今回の特異点の首謀者であるジル・ド・レエも蒼白い光の中へと溶けて消えていった。

オルレアンを覆っていた暗雲は吹き飛び、澄み渡る青空が広がっていく。自分の放つ一撃に納得のある手応えを感じた修司は、手に残るエネルギーの残滓を振り払い後ろにいる立香達へと向き直る。

「よし、取り敢えずこんな所だな」

仕事をやり遂げた男の顔で満足気な修司に対し、立香は若干引き気味だった。

「えぇ、修司さん。そこまでやる？　今絶対相手巨大化する所だったじゃん、絶対皆で力を合わせて戦う流れだったじゃん」

「いやぁ、剰りにも隙だらけだったから……つい」

膨れ上がり、天にも届く勢いで膨れ上がっていたあの海魔は、間違いなくオルレアン処かフランス全体を呑み込む勢いだった。もしあのまま放置していたらきっと本格的にこの時代は窮地に立たされる所だっただろう。そうなれば修司も相棒を出す他なくなり、人理に凄まじい負荷を掛ける事態は避けられなくなっただろう。

それを防げたのは偏に修司の直感に似た感覚の賜物。直感といっても未来を予知する類いのモノではなく、ただ何となくというあやふやなもの。もっと雑に言えば膨れ上がる際に晒していた大きな隙が武術を嗜む修司をソワソワさせたからである。

そんな事実など露知らず消滅する嘗ての戦友にジャンヌは複雑な思いで見送った。

「悪いなジャンヌさん、勝手に終わらせちまって」

「いいえ、彼とは何れ何処かで会えると思いますから。それこそ、貴方達がいるというカルデアとやらに……そうでしょ？」

「は、はい。確かにカルデアにはサーヴァント召喚の為の専用スペー

スが確保されていますから、可能性はあるかと」
「え？　そうなんだ」
「あー、そう言えばそんな話も聞いたな」
　ジャンヌの問い掛けにマシュが応える。未だカルデアを把握していない立香は不思議に思い、修司は思い出しながら頷いた。
「じゃあ、運が良ければジャンヌさんとまた会えるって訳だ」
「そうですね。私では些か頼りないかも知れませんが」
「そんな事はないさ。確かに頑固で強引でポンコツな所があるけど、アンタのその護りに……俺は何度も助けられたからさ」
「……え？」
「だからさ、自信持てよ。王妃様にも言われたんだろ？　アンタは、アンタの思いのまま進めばいいさ。俺も、そうするつもりだからよ」
　そう言って笑う修司にジャンヌは何処か既視感を覚えた。今までもそうだが彼は自分の事を知っている素振りを時折見せている。もしかしたら、この人は――自分と何処かで出会っているのかもしれない。
　訊ねた方が良いのだろうか？　好奇心と僅かな恐れがジャンヌの中で入り雑じる。そんな時彼等の前にＤｒ．ロマンことロマニ＝アーキマンがホログラフで割り込んできた。
『皆！　異変となっていた元凶が倒された事でその特異点はもうすぐ崩壊して正しい形に再構築される！』
　ロマニからの通信は一つの特異点を修復したという一足早い報告だった。異変によって失ったモノは全てが元に戻り、焼かれた街や人、奪われた命も元の形へと戻る。そう聞かされた修司達の表情には安堵が浮かび、特にジャンヌは今回の異変が全て無かった事になると知って胸を撫で下ろしていた。
　そしてロマニの言葉が証明されるように修司や立香、マシュの三人は光に包まれ始める。それが特異点からの退去なのだと察した修司はジル・ド・レェのいた場所にある黄金色の杯を手に取った。
「ドクター、この聖杯はどうする？　一応回収しておくか？」
『え？　あ、うん。そうだね。お願いしようかな。人理焼却や黒幕に

繋がる手掛かりになるかもしれない。解析に回したいから是非頼むよ』
「了解」
本音を言うなら聖杯何てものは叩き壊したい所だが、人理焼却や黒幕への手掛かりとなるのならロマニの言う通り回収するべきなのだろう。そう言って聖杯を回収した修司は改めてジャンヌへと向き直る。
「それじゃあジャンヌ！　また会おうね！」
「これまで旅をご一緒出来たこと、本当に嬉しかったです！　ありがとうございました！」
これが永遠の別れではない。そう信じて疑わない立香とマシュはジャンヌにまた会う約束をして消えていく。一足早く特異点から帰っていく二人を尻目に、ジャンヌの視線もまた修司へ向けられる。
「……はは、なんだか悪いな。最後までドタバタしてて」
「ふふ、本当ですね。まるで嵐です。こんな旅をするなんて現界した時は思いもしませんでした」
突然この特異点へとやって来たと思ったら嵐のごとく掻き回され、気が付いたら全てが終わっていた。目が回る時間だった、落ち着きがなく慌ただしく、それでいて濃く……楽しい時間だった。
全ては泡沫の夢、全ては無かった事になり誰の記憶にも残らない端から見れば無意味な闘い。サーヴァントである自分もこの時の戦いはきっと座の記録に残るだけで実体験としては残らないのだろう。
それでも、価値はあった。喩え全てが残らなくても何もかもが消えてなくなったとしても、この世界で彼等と共に戦ったと言う事実は変わらない。
……だから、今は詳しくは聞かない。彼が自分の何を知っていようと、自分にどんな想いを抱いていようとも、聞くことはしない。
それに――――。
「それでは、修司さん。またいつか」
「あぁ、またな」
彼等とはきっとまた会える。そんな根拠のない確信を抱きながら

消えていく修司を見送った……。

◇

「お帰り、マシュ、藤丸君、そして修司君！　お疲れ様！」
　意識が戻り最初に目にしたのはＤｒ．ロマンの満面の笑みだった。どうやら無事に戻れたらしい、コフィンから這い出て辺りを見渡せば管制室の光景が広がっていて、近くにはマシュと立香の二人の姿があった。
「うーん！　帰ってきたぁ！　マシュ、お疲れ様」
「先輩もお疲れ様です。フォウさんも無事に戻って来れた様で何よりです」
「フォフォーウ！」
　二人と一匹も戦いによる後遺症はない様子でひとまず安心した。そう胸を撫で下ろしていると立香に怪訝な視線を向けられている事に気づいた修司は自分に何か変わった所があるのか訊ねた。
「立香ちゃん、どうかした？　俺の体……どこかおかしいのか？」
「いや、おかしいと言うか元に戻っていると言うべきか」
「あ、本当です。修司さんの礼装元に戻っています！　不思議です。さっきまでは結構ボロボロでしたのに」
　言われて自分の体に手を当てれば、破れていた箇所が元に戻っていた事に気付く。修司の着ている山吹色の胴着は黄金の英雄王から賜った礼装、闘いの余波で破れた為それだけが気になっていた修司と

してはこの修復力は思いもしない発見だった。
「うーん、これはまたダ・ヴィンチが騒ぎそうな代物だなぁ。修司君、もしアイツがその礼装を解析したいとねだってきたら容赦なく追い払っていいからね」
「いや、流石にそこまで邪険にはできねぇよ。と、それよりもこれ、解析に回すんだろ？」
「ちょ、貴重な聖杯を投げ渡さないで!?」
　特異点で破損した礼装が帰ってくれば元通りになる。そんな色々とありがたい機能を付けてくれた王に内心で感謝した。
「うぉっほん！　……改めて、本当によくやってくれたね。この限られた補給物資と人員の中で初のグランドオーダーは無事に遂行された。まだ特異点の一つしか修復出来ていないが、それでもこの一歩は大きい。カルデアの代表として君達に感謝をさせてくれ」
　そう言って頭を下げてくるロマニに立香もマシュも困惑した。修司へ助けて欲しいと視線を向けるもいいから受け取っておけと頷くだけ、どう返事したらいいか困惑していると管制室に空腹を伝える腹の音が響き渡っていた。
　見れば、立香の顔が真っ赤になっている。無理もない、これまでずっと動いていたから体が栄養を求めているのだろう。しんみりとした空気が一気に朗らかになり、吊られて修司の腹からも空腹を告げる音が鳴り響いた。
「あ、はは。そう言えば俺も戦ってばかりいたから腹減ったな。ドクター、悪いけど食堂を貸して貰えるか」
「ふふふ、あぁ、勿論いいとも！　今はしっかり食べてしっかり休もう！　面倒な話はその後でも充分さ！」
「よし、ならこのまま向かうとするか。立香ちゃん、マシュちゃん、何でも好きなもの言ってくれよ。俺が腕によりを掛けて作ってやるからな」
「わぁい！　ありがとう修司さん！」
「修司さんの作る料理は先の特異点で美味であると証明されましたからね。先輩と私、そしてフォウさんの胃袋はがっちりとホールドされ

ています」
「フォーウ！　マーボーカンベンフォーウ！」
「……前々から思ってたけどこの小動物、実はめっちゃ賢いんじゃね？　絶対に俺達の言葉理解してるだろ」
　そんなやり取りをしながら管制室を後にする三人を見送り、Ｄｒ．ロマンは安堵する。彼等なら、きっとこの先の苦難も乗り越えてくれる。藤丸立香の元にサーヴァント達が集い、そんな彼女をマシュが護り、修司が彼女達を導いてくれる。
　願わくば、どうか彼女達の旅路に幸があることを……願うばかりである。
「さて、まずは……」
『うぉ!?　どうしたんだよスタッフの皆』
『うわー、皆あの胴着きちゃってるー！　いいなー、私も欲しいな～！』
『え？　これ全部ダ・ヴィンチちゃんが作ったんですか!?　は、はわー……』
『ハチャメチャフォーウ！』
　通路の先で囲まれているだろう修司達を助ける事から始めるとしよう。そして……。
「ダ・ヴィンチ、アイツは後でシメよう。うん」
　オチャメにやらかしてくれた万能の天才に折檻の内容を考えることにしよう。

◇

「ジル・ド・レェ元帥！　オルレアンに蔓延るワイバーンの姿が見当たりません！」
「此方も、各方面の出入り口から探っていますが戦闘の形跡はあってもワイバーンや化け物達の死骸は未だに確認できていません！」
「まさか、一体何が起きていたと言うのだ」
　当初はリヨン解放の為に募った軍は現在オルレアンの中心にまで差し掛かっている。二つの街で目撃された巨大な光、一部のフランス国民の間では神の奇跡だと噂されていたその光を辿ってオルレアンにまで進軍したのはいいが、其処に残されていたのは闘いの形跡だけだった。
　一体この地で何が起きていたのか、不思議に思うジルが辺りを見渡すと、ふと人影が見えた気がした。フランス国旗の旗を手に瓦礫の上に立つ一人の女性、その姿はほんの少し前まで彼が共に戦っていた聖女……。
「ジャンヌ!?　……いや、違う。彼女は既に処刑された身、生きている筈がない」
　一瞬だけ見えた嘗ての戦友は既にそこにはいなかった。幻覚を見てしまった自分を女々しく思いながら、それでも彼は思っていた。この闘いの裏ではもしかしたら彼女も関わっていたのかもしれない。
　全ては自分の願望にすぎない。しかし、それでもジル・ド・レェは願わずにはいられない。敬虔なる彼女の魂が死んだあとも滅びずにフランスを、自分達を想ってくれている事を。
　自分達のしたことは許されないモノ。彼女を裏切ったフランスをきっと自分は許せなくなるだろう。しかしそれでも、この先の未来が確定していても、彼はフランスの……オルレアンの乙女に乞い願う。
　どうか、この先の人類に……祝福あれと。

◇

オルレアンから離れた地、丘の上の草原を複数のサーヴァントが歩いていく。目的なんてない、特異点が修復され彼等もまた直にこの歴史から消えていくだろう。

彼等が集って歩いているのはそんな最後の時間を噛み締めるためのただの座談会。しかし、彼等の表情はどこか晴れやかだった。

「あー、もう！　今回全然良いところなかった！」

「もう、またその話ですか？　いい加減しつこいですよ？」

「だって！　折角のライブがたった一瞬で終わっちゃったのよ!?　もっと歌っていたかったー！」

「充分活躍したではありませんか。私なんてデカイイカを焼いてただけですよ？　それに、その我が儘彼の前でも言えますの？」

「ヴ……」

「ふ、ふふふ……済まない、何の役にも立てなくて本当に済まない」

「あーもう！　そう落ち込むなよジークフリート！　僕だってあの出鱈目君のお陰であんまり目立たなかったんだ！　次の機会に賭けて気持ちを切り替えよーぜ！」

「アマデウス殿ではないですが、その通りですよ。それに、貴方はあの巨大海洋生物を一撃で叩き切り伏せたではありませんか。貴方の剣は邪竜のみに通じるモノではない、そう悲観することはないですよ」

「そ、そうか？」

「まぁ、修司君は一発で六体もあのデカブツをぶっ潰したみたいだけど」

「グハァッ!?」

「ジークフリート殿!?」

てんやわんや、煽ったり煽られたりと騒ぎ出す彼等を後ろで微笑みながら見守るマリー＝アントワネットとその隣ではジャンヌ＝ダル

クが肩を並べて歩いている。
「ねぇジャンヌ、どうだった？　今回の旅は」
「そうですね。とても慌ただしく目が回りそうで、実際私は終始振り回されてばかりでした。何もかもが新鮮で、サーヴァントなのに……まるで、あの時の続きを夢見ているようでした」
「フフ、でも、とっても楽しかったんでしょ？」
はにかんだ様に笑う王妃に聖女もまた笑う。
「ええ、生前の私の旅路はいつも戦場が目的地でしたから、こんな風に周りを良く見る事が逆に新鮮で……」
戸惑い、どう説明したらいいか四苦八苦しながらも自分の旅路がどれだけ色鮮やかだったかを伝えるジャンヌ、その顔は年相応で聖女と呼ぶには剰りにも眩しかった。
「……ねぇジャンヌ、貴方はこの国が好き？」
「ええ、勿論です。だって、私が生まれ、そしてこの先で貴女が生まれる国ですもの。愛しているに決まっています」
サーヴァントである彼女達は歴史という本に刻まれた影法師。消えればその記憶は全てはリセットされ、全ては泡沫の夢へと消えていく。
でも、それでもよかった。この出会いに意味はなくても、この邂逅に価値はあった。時を越えて集う英霊達、憧れる聖女の口から直接伝わってくる告白に……。
「フランス万歳（ヴィヴ・ラ・フランス）！」
キス魔な彼女が感極まってジャンヌに抱きつくのは当然の帰結だった。

第一特異点・邪竜百年戦争オルレアン
――定礎復元――

その21

δ月Δ日

七つのある特異点、その一つを修復して翌日。今日俺と立香ちゃんは先ずは自身の体について知ることになった。

朝に目を覚ますと何時もの日課をこなして食堂へ向かい、立香ちゃんとマシュちゃんの二人と朝食を共にするとＤｒ．ロマンから体の異常を調べる為の検査を受けることにした。

レイシフト先での感染症やら風土病、その他諸々を持ち込んでいないかを調べる為の必要な処置なのだそう。特に反対はなく、カルデアのスタッフや立香ちゃん達の安全に配慮している事から素直に検査を受けることになった自分達はドクターの主導の下で検査をする事になった。

しかし、彼も大変だよな。医療担当としての役割だけでなくカルデアの所長代理も兼任しているのだから、彼に掛かっている負担は相当なものだろう。そっちの方はダ・ヴィンチちゃんが手伝っていると言うから言うほどキツくはないのだろうけど、二足のわらじはそれだけで大変だ。自分も仕事をしていた時に二つ以上を同時進行で行っていた際はあちこちで小さなミスをしていたものだ。

一人で出来ることには限りがある。手が必要なら遠慮なく言ってくれと告げるとドクターは「ありがとう」とだけ返してきた。コイツ、気持ちだけ受け取って人には頼らないタイプだな。

検査の後、特に異物もウイルスの類いも検出されなかった事からドクターから問題なしの健康体と太鼓判を押された自分達はその後簡単なトレーニングをする事になった。

自分は兎も角、立香ちゃんはただの一般人。魔術による支援も援護も出来ない彼女では今後の特異点先で万が一の事態に陥った時、生き残れる可能性は一気に低くなる。

だから皆もレイシフト先では彼女を重点的にサポートするようにしているし、マシュちゃんも立香ちゃんのサーヴァントとして常に傍

にいるようにして貰っている。
しかし、それでも不測の事態にというものは起こるもので何かしらの不都合が原因でレイシフト先で立香ちゃんが自分達と離れる事があるかもしれない。そうなったら自分かマシュちゃんが駆け付けるまで彼女には自分の力で生き残って貰うしかない。
そう言う訳で彼女にはトレーニング室にあるマシンで走り込みをしてもらうことになった。人間、何はともあれ先ずは足腰が大事だからね。先ずは危険が迫ったときに逃げ切れるだけの体力作りをする事になった。
逃げ足は時に何者にも勝る手段になるからね。あとはサバイバル下での知識や火起こしの手段とか色々あるけれど、先ずは何より体力だ。それなりの走り込みとそれなりの筋トレ、何だかんだ人間最後にモノを言うのは日々の鍛練だからね。ソースは俺と俺の知り合いであるルヴィアさん、あの人も日課の鍛練を欠かしていない人だし、何なら魔術よりも優先している節があるからね。
そんな訳で始まった立香ちゃんの身体能力向上教室。今回は初日と言う事で軽く流す事にして明日から合間を見て始めていこうと思う。
あ、因みにスタッフ全員の制服はカルデアの奴に戻りました。一時期皆あの胴着に拘っていたけど、半分はダ・ヴィンチちゃんの悪ふざけだった為、あの人を叱り付けた後ドクターが元の制服に戻すように言い含めたらしい。
いや、なにしてんのよ万能の天才。

δ月√日
今日、色んな事が起きた。いや、実際に起きたのは英霊召喚と言う儀式だけだったんだけどね？　もうね、俺疲れちまったよ。
先の特異点Fと第一特異点の修復した際に得られた魔力リソース、これ等を使ってサーヴァントを召喚しようって今日の朝食を食べてた時にダ・ヴィンチちゃんから話を持ち掛けられたんだけどね。もうね、これが酷いんだわ。

何せ自分には変な礼装しか来ないんだもの、黒鍵？　ていう剣みたいなの？　ダ・ヴィンチちゃんとドクターは教会の人がよく使う投擲武器って言ってたけど……いや知らんわ。
何で礼装しか出てこないの？　サーヴァントの召喚でしょ？　俺、詠唱したんだよ？　前にキリシュタリアから聞いて一生懸命に覚えたんだよ？
何で礼装しか出ない？　なによ黒鍵って、使ったことないんだけど？　なに？　ぶん投げればいいの？　いいよ、なら次のレイシフト先でメタくそにぶん投げまくってやるからよぉ。
……いや、まぁ良いけどね。そんなに期待して無かったし、サーヴァントと一緒に友情深めあったり、時には喧嘩して絆を育んで行こうとか考えてないし、寂しくなんかないし。
その後、立香ちゃんがサラッとエミヤとか召喚してたけど気にしないし、ジークフリートとかケイローンとか何か凄そうなサーヴァントが続々と来て挙げ句の果てにはあのアーサー王も来てたけど別にいいし。
立香ちゃんから気まずそうに謝られたけど別に気にしてないし、俺にはグランゾンって相棒がいるから別にいいし……。
まぁ、冗談はさておきドクターからサーヴァント召喚に辺り重要な話をされた。サーヴァント、即ち英霊は〝座〟という所に記録されており、あくまで彼らは記憶保存された状態であり召喚される度に嘗ての記憶は消去されるらしいとのこと。
つまり、今後の知り合いらしき人が召喚されても自分の事を覚えている事はないという。どうりでエミヤやあのアーサー王が自分とは初対面な挨拶をするわけだよ。
まぁ、王様も自分の事は覚えていないと思うと少し、いや大分堪えるけど……仕方ないよな。

δ月√α日

何やら日本に新たな特異点が発生したらしい。特異点というのは増えるのかと一瞬身構えた自分だが、ドクターとダ・ヴィンチが言う

には人理焼却に直接関わりのある特異点では無いらしいのだが、この特異点が今後どのような悪影響に繋がるか予測出来ないため、出来るだけ早く修復して欲しいとの事。

当然自分達は了承した。今後の憂いになるのなら断ち切るには早い方がいいし、何より自分達の故郷である日本が舞台だ。黒幕への手懸かりに繋がるかもしれないし、それだけでもレイシフトする理由はある。

立香ちゃんも乗り気だし、マシュちゃんとフォウ君も連れて日本の特異点にレイシフトする事になった。因みに、エミヤ達サーヴァントの皆には必要になった時随所で召喚するという手筈になっている。一緒にレイシフトするには多大な負荷が掛かるから人数はある程度絞られるが、戦闘の間だけの召喚は然程ではないらしい。

それでその特異点にレイシフトするとなんか金髪グラサンの体格の良いお兄さんがいた。坂田金時、あの日本で最も知られている童話の一つである金太郎その人である。

熊と相撲とっていただけあって凄まじい筋肉質な彼の肉体、ドクターもモニター越しで暑苦しいと騒いでいるが、個人的には自分もこれくらいの筋肉は欲しい所である。

その後、金時さんと色々と話をしていると物凄い酒の臭いが辺りに充満した。酒とは心と体を解すモノであって何もかも蕩けさせるモノではないと金時さんは言うが、自分も全く同意である。

酒は飲んでも飲まれるな。自分は深呼吸をすることで体の調子を整える事ができるが、立香ちゃんはそうではない。どうにかして避難させるかと考えていると、意外なことに立香ちゃんは平気そうだった。ドクター曰く防御に特化したマシュとパスで繋がっているから毒類に対してかなり強い耐性を獲得しているらしい。サーヴァントと繋がっているだけで毒類に強くなるとか、普通に凄くね？

そんな訳でこの異様な酒の臭いのする場所が特異点の元凶であると睨んだ自分達は金時さんと共にそこへ向かった。

辿り着いた先に待っていたのは大きな門。現代の日本でもそうお目にかかることのない立派な門が聳え立っており、屋根の上には一体

のサーヴァント……否、鬼が立っていた。
その名は茨木童子。日本に住む人間なら一度は耳にする大妖怪、まさか英霊だけでなく妖怪まで顕現しているとは、サーヴァントとは凄いものである。尚、その大江山の首魁の鬼は外見は見事なチビッ子だったけど。
で、なにやらこの茨木童子さんは捕らえた酒呑童子を喰らうつもりだとか、金時さんが言うには彼女は彼処までメチャクチャでは無かったらしい。食物連鎖のルールは守るし、鬼としての範疇なら寧ろ真面目な方なのだとか。
気になる事は色々とある今回の異変、取り敢えずそれは後回しにして今は暴れる茨木童子の相手をする事となった。
マシュちゃんが防いで俺と金時さんが攻撃する。時々立香ちゃんが俺を除いた二人に魔術で援護するという単純だけど割りと堂に入った連携で茨木童子を追い詰めていった。
端から見れば幼女を集団でボコボコにする集団だけど、彼女もデカイ手とか使ってるし……別にいいだろ。そもそも彼女は鬼であって人間じゃないから苛めにはならないしね。
……まぁ、そんなのは嫌だから途中から自分と彼女の一対一（タイマン）に持ち込んだんだよね。通信越しにドクターから止めてくれと呼び止められたが、ここで仮に集団でフルボッコにしても彼女が敗北を認めるとは思えない。
絶対に負けないから安心してくれと熱弁すると、ドクターは渋々ながら承諾してくれた。いい人だ。彼には今度お詫びに何かご馳走してやらないとなと思いながら立香ちゃん達にも手を出さないようお願いすると、彼女達も苦笑いを浮かべながら了承してくれた。
金時さんは意外とすんなりと受け入れてくれた。まぁ、彼も元々は一人で妖怪退治とか出来る人だし、自分の事を見極めるつもりでいるのだろう、やばくなったら手を出すという条件の下で俺は単身で茨木童子の前に出た。
そして、やはりというか自分の事を舐めていると思い込んだ茨木童子が怒り狂う。気炎を立ち昇らせて怒りを露にする彼女に自分もま

た力を解放させた。邪竜と戦った時、或いはそれ以上の力を解放させて舐めてはいない事を示す。
すると、自分の訴えに茨木童子は納得してくれたのか、怒りの炎は瞬く間に鎮静していく。良かった。これでお互い存分に戦えるなと安堵した自分は彼女に勝負を挑んだ。
相手は日本の妖怪の中でも最強に位置する大妖怪、一瞬で間合いを詰めた後茨木童子の顎に拳を捩じ込んで彼女を中に浮かばせると、そのままかめはめ波を叩き込む。
しかし、彼女もまた特異点の元凶らしく凄まじき回復力を誇っており、自分の与えたダメージは瞬く間に回復させていく。邪竜の時と同じように不死性を持つ彼女と耐久戦へと突入した。
かめはめ波、ギャリック砲、気円斬に操気弾。自分の得意とする奥の手を除いたありとあらゆる技を叩き込んでいると、意外と早くに決着は付いた。
泣きじゃくりながら山に帰ると逃げていく茨木童子、イマイチ勝ったと喜べない展開に首を傾げていると、ケラケラと笑う声が聞こえてきた。
酒呑童子。茨木童子と並ぶ大江山の大妖怪がいつの間にか目を覚まし、のらりくらりと歩きながら此方に近付いてきた。「あんさん、なんやおもろいなぁ」と口にしながら近付いてくる彼女に自分は戸惑いながらも身構えた。
この酒呑童子という鬼は金時さんが言うように掴み所がなく、何とも不思議な印象を持ってしまう。友人のように親しみがあり、かといって人間とは相容れない残虐性を併せ持つという何とも言えない矛盾。
しかし、当の彼女には敵意がないらしく今回の異変の原因となった〝願いを叶える酒〟とやらの場所へ案内してくれるのだとか。
酒呑童子には興味もない杯らしいのだが、特異点の元凶となるそれを破壊できるのなら是非もない。皆と一緒に彼女の後を付いていくと、そこにはやはり聖杯があった。
その後、聖杯を破壊してカルデアへと自分達は戻るのだが、何だか

色々と腑に落ちない点が多くある異変だった。
この聖杯は一体だれが持ち込み、誰が特異点として生み出したのか、金時さんはまだ終わっていないと言っているが、先と同様自分もこれで全てが終わったとは思えない。
取り敢えず、今は一つの特異点を終わらせたとして由としておこう。
……因みに、その後立香ちゃんが何となくサーヴァントを召喚すると金時さんと茨木童子ちゃん、酒呑童子ちゃんが来てくれました。自分？　依然として変な礼装しか来ませんが？
もうね、戦力増強の為の召喚は彼女に一任しようと思うの。
追記。
最初、色々と問題のあった茨木童子ちゃんだったけど、この間来てくれたロビンさんがうまい具合に彼女を手懐けてくれました。
茨木ちゃん、どうやら洋菓子が好みのよう。しかもエミヤが作った奴。今度自分も作って上げようかな。
なんて厨房で言ったら、ご飯前には上げるなよと釘刺された。いやお母さんかよ。

「ほ～ら、茨木童子。お菓子だぞー、奪ってみろ～」
「フシャー！」
「なぁ大将、修司の旦那は何してんだ？」
「なんか、自分のお菓子を食べさせようとしてるんだって、エミヤさんのばかり食べてるのが面白くないみたい」
「それにしては、矢鱈と怯えられているみたいだが……」
「あぁ、まぁ、そりゃあ……ねぇ？」
「？」

とある羅生門前。
「かめはめ波ー！　からのギャリック砲！　気円斬に操気弾！　まだまだいくぞぉぉっ！」
「も、もうやだー！　吾、お山に帰るうううっ!!」
「こ、コイツぁ……ヘビーだぜぇ……」
「おっふ」
二人から変な声が出た。

その22

――――澄み渡る青空の下、何処までも広がる荒野で二つの影が激突する。片や青と銀の鎧を身に纏い不可視の剣を奮う剣士、名をアルトリア＝ペンドラゴン。

清廉にして苛烈、荒れ狂う暴風の中に佇むその姿は正しく騎士の王であり、数多く存在するサーヴァントの中でもトップクラスを誇る英霊。それに互するのは山吹色の胴着を身に付けた現代の人間、奮われる剣檄の嵐を掻い潜り振り抜かれる拳は歴戦の騎士王の頬から一粒の冷や汗を流させる。

迫り来る鉄拳を持ち前の直感で避け、奮われた僅かな隙を狙って返し刀で刃を奮う。回避は不可能、防ぐことも叶わないその一撃を男は手の甲で反らして受け流す。土壇場で脱力し、流水の如き体捌きで危機を脱するその技に騎士王は瞠目した。

驚いて僅かな隙を見せてしまった彼女の腹に蹴りが叩き込まれる。衝撃に口から空気が吐き出され、吹き飛びながらも立て直す彼女が目にするのは、此方の動きに警戒している様子の男が自身の力を練り上げて佇んでいる。

強い。彼と手合わせをして既に幾分かの時間は流れてはいるが、それでも未だに彼の実力の底は見えずにいる。動き自体は中国武術である八極拳を主流としているのは理解しているが、そこに独自のアレンジを加えている所為か動きが読めない時がある。

しかしとて、彼女もまた歴史に名を刻んだ英雄の一人。相手の技に感心するばかりではいられない、向こうが魅せるなら此方も技を見せるまでと彼女は自身の技の一つを解き放った。

風王鉄槌（ストライク・エア）。剣士（セイバー）であるアルトリアが有する風王結界（インジブル・エア）とは正反対の性質を持つ文字通り風の鉄槌。

風王結界が剣を覆う風の鞘だとするなら風王鉄槌は攻撃に転換した魔術。彼女の魔力放出によって放たれる圧縮された風の暴風、地を抉りながら突き進むそれは最早鉄槌というよりビームに近かった。

迫る風の暴力を前に男は己の左手を無造作に突き出した。瞬間、並の魔物程度なら粉微塵に切り刻まれる風の鉄槌の衝撃が左手に集中して襲ってくる。荒れ狂う暴風、風なのに甲高い金属音も聞こえてくる気がする。初めて体感するその鉄槌を男は――――握り潰した。

自ら放つ技の一つを何の細工もなく純粋な握力で握り潰された事にアルトリアの目は大きく剥かれる。デタラメ、というより理不尽ですらある男の胆力に度肝を抜かれるも彼女がそれで臆する訳がない。

そして向こうも同じ気持ちらしい、不敵に笑みを浮かべる山吹色の男にアルトリアもまた笑みを浮かべる。純粋に戦いに集中できるこの境遇に感謝しながら次の一手を繰り出そうとした所で――――。

『申し訳ないが、立ち合いはそこまでだ。双方速やかに手を洗い食堂に来るといい』

唐突に告げられる終了の声、次いで辺りの景色は無機質な空間へと変わり残された二人は苦笑いを浮かべて戦闘態勢を解除した。

「いやー、流石は騎士王だな。まさか風を武器にするとは……いてて、格好つけて素手で防ぐんじゃなかったぜ。まだ手が痺れてるよ」

「私の一撃を受けて痺れだけですか。全く、呆れるほどに頑丈ですね」

「まぁでも、お陰でいい経験になったよ。ありがとうな、わざわざ時間を取らせちゃって」

「それは此方の台詞です。現代にまさかこれ程の実力者がいるとは、人間は鍛えればここまで強くなれるのですね」

「まだまだこれからさ、アルトリアさんも暇があるときはまた手合わせ頼むよ」

「望むところです。私も貴方の全力を引き出せるよう、腕を磨いておきますね」

「そ、それはまた……お手柔らかに」

「無理ですね。貴方を相手に手を抜くのは寧ろ失礼というものだ。まぁ、貴殿がその気になるのなら話は別だが……」

「あ、あはは」

そんな軽口を言い合いながら食堂へ向かう二人、これはカルデアでの日常の一コマである。

◇

δ月√β日

今日は体を鈍らせない為に何人かのサーヴァントの皆さんに声を掛けて軽い組手をする事になった。

相手をしてくれたのはアーサー王ことアルトリアさんとエミヤ、そして先日立香ちゃんが追加で召喚したクー・フーリンと佐々木小次郎の四人、奇しくも俺が聖杯戦争で戦ったことのある人達だ。

当然、彼等も自分の事は覚えてはいない。そもそも別の世界の人間だから当然だが、自分だけが知っている状態というのは何とも言えないむず痒さがあった。まぁ、そんな気持ちも彼等と話をしているうちに失くなっていたけどね。

彼等との組手は宝具抜きとは言えそれ以外は本気だった為、結構緊張感のある戦いとなっていた。エミヤの狙撃は狙いが嫌になるほど正確で、接近できたとしても彼独自の二刀流が此方を翻弄してくる。先の特異点Ｆではその剣筋も鈍く、殆んど一方的な展開だったが本来のアイツの実力はあんなものではない。遠近両方の戦い方は今後の戦いでも重要視されるだろうし、それらへの対策も課題となってくるだろう。次も是非手合わせしたい所だが、生憎アイツはカルデアの料理長としての立場もある。俺自身も厨房に立つことがあるから、今後は予め時間を決めなければならないのが唯一のネックだな。

また戦いの内容で言うのならクー・フーリンとアルトリアさんとの一戦は殆んど似たようなモノだった。お互いに真っ向からのぶつかり合い、二人とも小細工を弄するタイプの英霊でないから此方としても非常にやりやすかった。

クーフーリンはスピード、アルトリアさんはパワーといった感じで区別しやすいし、俺も自分の戦いを思い切り出来たから悪くない気分だった。

アルトリアさんも最初こそは自分に苦手意識を持っていたみたいだけど、話している内にそんな気持ちはなくなり、気兼ねなく接するようになれたらしい。

そして佐々木小次郎との手合わせなのだが、やはりと言うか彼の技量は前の印象と全く変わらず、寧ろ自分が成長したことで彼の技の巧さがより一層理解出来た。我流と言うには鮮やかなその太刀筋に斬られることはないと分かってもうすら寒い時がある。

技で迫る彼に自分も技だけで対抗しようとしたが、やはり彼の剣技には一歩及ばず時間切れで逃げ切られてしまった。幾ら此方が気を使わなかった（ギャグじゃないよ）からといっても、まさか此処まで差があるとは思わず、柄にもなく落ち込んでしまった。この悔しさをバネにしてこれからも精進していこうと思う。

そして、今回の組手の発端はある人からの助言から来るものだったという事を今の内に書いておこうと思う。今回の組手の人選を選んでくれたのは賢者として知られるギリシャ神話の英霊にして教師、ケイローン先生のアドバイスによるもの。

ケイローン先生はあの大英雄ヘラクレスやアキレウスの師匠であった事のある人だ。その慧眼から俺の癖や弱点となる所を正確に見抜き、今回の手合わせの人選やアドバイスをしてくれたのだ。

ケイローン先生が俺に課した問題となる点は……即ち経験だという。これから俺や立香ちゃん達が戦うのは様々な伝承逸話を持つ百戦錬磨の英雄達、その中には常識外れな能力を持つ者と相対する可能性は高い。

今後、そういった異常事態を前に慌てることなく対処する為に経験を今の内にしておくことだと言っていた。勿論、その経験に慢心することなく常に心構えをしておくことも重要だとも。

流石は大英雄の師匠、自分も師父には教えてもらった事は色々あるけどここまで親切ではなかったなぁ。寧ろ意図的に言葉を足りなく

した感じが多かったし、時には王様以上の無茶ぶりもしてきたことがあったっけ。
明確な教えを受けたことで修行や組手にもより効率且つ効果的に出来るようになったし、時には自分に縛りを付けて組手をするようにもした。まぁ、一部のサーヴァントの人は縛りを付けるとか舐めてんのか!?　みたいな反応をされたけど、て言うかアルトリアさんがそうだったけど。
そこでケイローンさんから教わった挑発を口にしたらあら不思議、皆さん分かりやすい位にムキになるではありませんか（特にアルトリアさん）。
自分から本気を出させようと積極的に挑んでくるのは嬉しいけど、此方も技術屋や食事担当もしているから少し頻度を下げて欲しいのが最近の悩みである。
お陰で本当に手合わせしたい人とはあまり出来ないし。ロビンさんの様な搦め手のスペシャリストみたいな人との立ち回りも今の内に体験しておきたいし。
まぁ、そこら辺はおいおい、かな。

γ月※日
ヤバイ人に目を付けられた。クーフーリンやディルムッドと同じケルト出身の人で影の女王とも呼ばれる女傑、スカサハさんに何故か矢鱈と誘いを受けるようになった。
大人でアダルティな誘いかと思った？　残念、組手だよ！　あの人外見は出来るＯＬみたいな雰囲気な癖に中身はゴリゴリの殺戮マシーンだよ！　そりゃあケルトの中でも屈指の実力者である彼女と手合わせ出来るのならいい経験になるなと思ったよ？　でも、何も彼処まで本気になることないじゃないか!?
バカスカと槍の雨は降らしてくるし、ルーンとかバンバン使ってくるし、しかも此方が気という見慣れない技を使うとすぐさま俺が奥の手を使っていないことを見抜いてその気にさせようとより苛烈さが増していくのだ。もうね、技の凄さもそうだが何よりも食い付きの勢

いが怖い。軽くホラーだよアレ。
特に話をする中で自分が一度影の城の事について話したことが彼女の何かに触れたのか、「お前こそが私を殺す勇士なのかもしれない！」と物騒な言葉を吐いて襲ってくるようになった。
あまりにもしつこいから一度本気で相手をして、どうにか勝てたことで大人しくしてもらう事になった。それ以降は彼女も無闇矢鱈に襲うことはなくどうにか平穏のカルデアに戻すことが出来た。
ただ、どういう訳かここ最近彼女から俺に自分の弟子にならないかと誘われる事がある。いや、俺は師父の弟子だからとやんわりと断っているけれど、中々諦めてくれない。
お陰で一部のケルトからスカサハ担当と呼ばれる事が多くなった。クーフーリン、アンタの師匠だろ何とかしろ。
て言うかスカサハさんはケイローン先生を見習うべきだと本気で思う。いや本当にマジで。
後、あのピッチリした格好もどうにかして欲しい。金時さんも言ってたが、あの手の格好の女性は目のやり場に困る。
今度ダ・ヴィンチにそう言ったものを見えなくする眼鏡とか作って貰おうかな。

◇

カルデアの談話室。その中で立香へのトレーニングの内容を考えていた彼の所へ一人の女性が歩み寄る。最近立香の新たなサーヴァントとして召喚された彼女に彼――――ケイローンは少し驚きながらも歓迎する。

「ほう、汝が賢者ケイローンか」
「おや？　影の女王が私に何かご用で？」
「イヤなに、あの男がお主を見習えと豪語するものでな、誰かに何か教わるのも久しく無かった故な、単なる好奇心だ」
「あぁ、彼ですか。その様子だと貴方も体験した様ですね。どうでしたか、彼との戦いは」
「〝気〟だったか？　確か中国にある仙術の一種だと聞いていたが……あれはそういう類いの技ではないな」
「ええ、信じられないことに彼は自らの魂をエネルギーに直接置き換えて放出しています。あんな戦い方をしてよく今まで生きてこられたモノです」
「恐らく総量が他とは桁違いに多いのだろうよ。本人は何てことないように使っているから誰も追及しないが、本来ならあの技は一種の魔法の領域なのだろうよ」
「現代の魔術師が聞いたら卒倒しそうですね」
「若しくは標本にしようと躍起になるだろうよ。尤も、アレをどうにか出来る者など限られるだろうがな」
「……やはり、貴女から見ても彼は」
「異常だよ。あの様な技を使えるのもそうだが、何より成長速度が速すぎる。その上まだ奥の手を隠しているのだから腹立たしいやら楽しみやらで……退屈せんよ」
「ふっ、そうですか。ですが、私としては少々もの足りませんね」
「ほう？」
「仮にも賢者と呼ばれている身です。ですが、彼に対して私が出来る事と言えば簡単なアドバイスだけ、何とも教え甲斐のない生徒を持ったものです」
「お主にはもう一人教え子がいるだろ。我等のマスターである藤丸立香を」
「勿論、彼女は充分教え甲斐のある生徒ですよ。素直でまっすぐで、そこが少し心配な私の新しい教え子。教育にも熱が入るというものです」

「なら、別にいいのではないか？」
「それはそれ、これはこれです」
　したり顔でそう語るケイローンにスカサハは呆れたように頬をヒクつかせる。それから暫く育成について軽く談義した後、特にやることもなくなったスカサハは自室へと戻る。
　辺りから他のサーヴァントやスタッフ達の声が聞こえてくる中、ふと彼女は彼との会話を思い出す。
『影の国の城？』
『そうじゃ、今は人理が焼却された事で召喚されているが、本来ならばワシはあの城のなかで今もいた筈なのだ。まぁ、カルデアに召喚されてからは特に退屈しとらんし、別に気にしていないがな』
『……それってもしかしてあの大きな城の事か？　確か相棒と一緒に見掛けた事があった様な』
　あの時、影の国へ来たことがあるという事で我を忘れていたが、確かに奴は言っていた。〝相棒〟と。
　つまり、奴には……白河修司にはまだまだ隠されている事があるという事。己の魂を力とし、これまで見たことのない技を編み出した規格外の生命体。
　彼が今後何処まで強くなるのか、楽しみで仕方のないスカサハは口を凶悪な笑みを浮かべたままカルデアの通路を歩んでいくのだった。

その２３　第二特異点

γ月√Ω日

今日は念願……という訳でもないが、例のロビン＝フッドさんに手合わせする事が出来た。シミュレーションの舞台としたのは木々が生い茂る山林地帯、相手の能力が最大限発揮される場所にて行われたのだが、初めて狩られる立場というのを体感した気がする。

張り巡される罠という罠、自分も旅をしてきた事で野生の動物を狩猟した事があるが（勿論免許書や許可証は取ってるよ）、自分と彼の狩猟の腕前はまるで大人と子供以上の明確な差があった。

そもそも、ロビンさんは罠を隠すのが上手すぎる。いや、あれは隠すというより罠と思わせないのが上手いと言うべきか、罠の配置が絶妙に厭らしいのだ。自然の背景に馴染ませるように仕掛けるのは勿論のこと、意識の薄くなったタイミングで発動するタイプや、常に警戒心を煽ろうとするタイプ、様々な多種多様の罠が全方位に配置されているのだ。

これがシミュレーションによる模擬戦であるから平気でいられるが、逆に実戦だと思うと心底ゾッとする。気力も体力を底を着いた状態でこの様な状況に陥ってしまえば肉体よりも先に精神が参ってしまうだろう。彼の仕掛けた罠はそう言う類いのモノだ。

ここに立香ちゃんもいると更に状況は悪くなる。彼女はマスターと言っても極度な状況に対する訓練も経験もしたことのない学生だった少女だ。追い詰められた状況で体よりも心の方が先に参ってしまい、下手をすれば病んでしまう可能性すらある。

実際にこの様な状況に陥れば気円斬で周囲の木々を罠ごと斬り倒すだけだが、場合によってはそれも封じられてしまうかもしれない。極力気を使わず純粋な身体能力のみで見付けようと試み、相手も宝具を使わない条件だったからどうにか接近戦に持ち込んで勝つことが出来た。

今回は、色々と為になる手合わせだった。アルトリアさんやクー

フーリン、佐々木小次郎の様なゴリゴリの肉弾戦とは違う搦め手を相手にしたときの怖さというものを身に染みて実感したと言える一戦だった。

今回は立香ちゃん、マシュちゃんも見ていたから勉強になっただろうし、今後レイシフト先で森で野宿する時は今まで以上に気を付けようと思う。やはり、ケイローン先生の見立ては間違いなかった。

ただ、次も頼もうとしたらロビンさんからは二度とゴメンだと断られてしまった。何でも自分の攻撃が怖すぎるとのこと。

そんな、自分はただ石や小枝を気配を感じる方へ投げ飛ばしただけなのに、そんなに嫌う事はないじゃないか。

なんて愚痴ってるとスカサハさんから「ならば次はワシが相手をしてやろう」何て言うから即座に断った。

て言うかクー・フーリン、あの人はアンタの師匠だろ。何とかしろよ。

γ月√Δ日

ドクターから次の特異点先の説明がされた。レイシフト先は一世紀のヨーロッパ、具体的に言えば古代ローマ帝国。イタリア半島から始まり地中海を制した大帝国である。

転移先の予定地点は帝国首都であるローマ、地理的に言えば前回のフランスと似たり寄ったりな地形だと認識しても構わないらしい。因みに存在している筈の聖杯の正確な場所は不明、歴史に対してどういった変化が起こっているのかも同じく不明。

実際に行ってみなければ分からないという安定しきれていない観測精度にドクターは済まないと頭を下げていたが、それは別に構わないしなんなら石の中とか壁の中とかそう言った場所でないなら構わない感じですらある。

マシュちゃんもどちらも自分達で突き止めますと気合いは充分だし、立香ちゃんもこれまでの間ケイローン先生を始めとした多くの先人達の助言やシミュレーターの模擬戦で得難い経験を得ている。不足の事態を前にしてもきっとやり遂げてくれるだろうし、必要な戦力

はカルデアからも送られる手筈となっている。
それに自分もいる。充分な戦力と慢心は出来ないが、それでも切れる手札が以前より多い事自体は悪いことではない。
作戦の要旨は前回と同じ、油断せずに頑張ろうという事でその日は一旦解散となった。明日はいよいよ第二特異点へのアタックだ。万全を期すために今日は夕飯も早めに済ませて、何時もより早く休んで明日に備えることにしよう。
と思って食堂に向かうと、既にエミヤの奴が調理を終えていた。聞けば既にロマニから予定を聞いていて事前に仕込みを終えていたらしい。
……いや、本当にこいつイキイキしてんな。前も言ったけど既に厨房はコイツの支配下にあるんじゃなかろうか？　アーチャーというより料理人（コック）なんじゃなかろうか。
実際カルデアスタッフの多くはアイツに胃袋握られているし、なんならサーヴァントも握られている。特にアルトリアさん、清姫さんも彼に対抗できるのは閻魔様しかいないと言っていたし……ん？　改めてこう書くと……閻魔って料理できるの？
くっ、いずれアイツとは決着を付けなければならない時が来るかもしれない。そうなった時は自分の史上最高の逸品である麻婆豆腐が白日のもとに晒される事だろう。
その日が来るのを楽しみにしつつ、今日はこれで終わろうと思う。おやすみなさい。

◇

「それじゃあ、三人とも準備はいいね？　作戦の要旨は昨日も伝えた通り、特異点の調査及び修正。そして聖杯の調査、並びにその入手、または破壊だ」
「了解です」
「り、了解です！」
「フォウ！」
「おう、万事承った」
　そして当日、管制室に集った三人と一匹。シャワーも浴びて朝食も食べて万全の状態となった三人はＤｒ．ロマンと万能の天才ことダ・ヴィンチに見送られ、次のレイシフト先である特異点へと向かうことになった。
「人類史の存続は君達の双肩に掛かっている。どうか、今回も成功させてほしい。……そして、無事に帰ってくるようにね」
　そうプレッシャーを与えてくるロマニも彼等なら成し遂げてくれるという確信を抱き、所長代理として敢えて回りくどい言い方をする。そう言いながらも彼等の無事を祈っている辺りやはりロマニはロマニだった。
「きっと、レイシフト先のローマにも召喚されたサーヴァント達がいるだろう。可能であれば彼等の力も借りるように。無論、敵対する者に対しては叶わない願いだけど」
　それからは敵対サーヴァントや中立サーヴァントに対する感知反応は出来ないかというやり取りがあった後、修司達はコフィンの中へと入っていく。
　ふと、出入り口に佇むサーヴァント達の姿が見える。恐らくは見送りに来てくれたのだろう、坂田金時を始めとした交友関係のある彼等が応援しながら見送ってくれるその姿を嬉しく思いながら……。
　――アンサモンプログラム　スタート。
　霊子変換を開始　します。
　レイシフト開始まで　あと3、2、1……。

全工程　完了(クリア)。
グランドオーダー　実証を　開始　します。
修司達は古代ローマの地へと向かうのだった。

◇

「――――で、気付いたらまたもや空の上か。冬木の時といい、何か最近の俺運が悪すぎないか？」
レイシフトが完了し、最初に感じたのは風を切る音と何処までも落ちていきそうな落下感。まさかと思い目を開ければそこは冬木と同じ空の上だった。
違う所があるとするなら、空が冬木と違って青空が広がっている事。そう思えば少しは気が楽になるだろうけど……いや、やっぱそんな事はなかったわ。
冷静に辺りを見渡せば辺りの彼方此方から争いの跡と思わしき箇所があり、何なら火の手が上がっている所も見えるし、上を見れば第一特異点と同じ巨大な光帯が此方を見下ろしている。
そういえば、あの光帯は結局なんなのか。ロマニも不明だと言っているし、第一特異点と合わせて空に在ることから人理焼却に関係してそうなのは間違いないだろう。
（どうする？　いっその事あの光帯を破壊してみるか？）
まずはかめはめ波を撃って様子でもみようか、なんて考えている内に地面が近付いてくる。ふと下を見れば……何か、叫んでいる男が

赤い剣を持った少女に襲っている。その傍らには立香とマシュの姿もあった。
どう見ても事案な光景に修司は男を敵と認識し、拳に力を込めて……。
「ペガサス……流星拳!!」
拳の弾幕を叩き込んだ。

◇

――――現在のローマ皇帝であるネロ＝クラウディウスにとって眼前で吼える男カリギュラは母の兄であり、生前は自分に妹であるアグリッピナ同様惜しみ無い愛を注いでくれていた彼女にとっても無下に出来ない人物の一人。
本来なら刃を向けることなんて叶わず、しかし相手は紛れもない殺意を以て迫ってくる。自分はこの国の皇帝、母であるアグリッピナを暗殺した罪深い人間ではあるが、それでも今はこんな所で倒れるわけにはいかない。剣を握る手に力を込めて伯父であるカリギュラに切っ先を向けようとして――――。
「ペガサス……流星拳!!」
「ネロぶるぁぁぁぁっ!!??」
「お、伯父上ぇぇぇっ!?!」
拳の弾幕がカリギュラの頭上から降り注いだ。突然の光景に目を丸くさせる皇帝ネロ、その傍に控えていた立香とマシュは納得した様子で遠い目をしていた。
軈て光の粒子となって消えていく伯父にネロはガタガタと震えていると……空から遅れて一人の男が着地した。独特の着地、所謂ヒーロー着地である。

砂塵を巻き上げながら下り立つのは山吹色の胴着の男、見覚えがありすぎるその背中に二人がやっぱりなと納得している最中。
「どうやら、良いタイミングだったようだな」
ニヤリ、と不敵に笑う修司に立香とマシュは戸惑った様子で苦笑う。様子のおかしい二人を怪訝に思った瞬間……。

「こ、この不埒者めがぁ！　余より目立つとは何事かぁ!!」
混乱する皇帝が口にするのは取り敢えず自分よりも遥かに目立っている修司に対しての涙ながらの訴えから始まった。

その２４　第二特異点

全体的に赤い少女を助けた後、立香とマシュの二人と無事に合流を果たした修司は二人と共にやたらと上から目線な赤い少女、ローマ帝国の第五代皇帝ネロ＝クラウディウスの食客として彼女の軍勢に加わることになった。

そして相手となるのは自らを皇帝と名乗る複数の手合い、何れも手強い相手になるのは間違いない。そう言う意味では最初に敵の将の一人と思われるカリギュラを仕留められたのは大きな戦果と言えるだろう。

「しっかし、まさかあんなちっこいのがローマ皇帝とはな。て言うか、なんか顔付きがアルトリアさんと似てなかった？」

『ちょ、あまりそう言うことを言うもんじゃないよ修司君！　折角友好的になったんだから、あまり荒波立てるような事は言わないでくれよ！』

「え？　俺一応褒めたつもりなんだけど？　ほら、誰だって可愛いマスコットには親しみを持つだろ？　ネロ皇帝が国民から支持を得ていることに個人的に納得しているだけ何だけど……」

「いや、仮にも皇帝をマスコット扱いするの流石にどうかと」

現在、日は沈み夜の帳が降りる時間帯。修司達がいるのは永遠の都と呼ばれるローマの街、ネロ皇帝の直々の食客という事で宛がわれた部屋に集まった修司達は今も観測してくれているロマニと共に今日の起きた出来事について簡単に話し合っていた。

「でも、皇帝様も聖杯を探す事を協力してくれるみたいだし、最初の滑り出しとしては悪くないんじゃない？」

『そうだね。立香ちゃんのいう通り出だしとしては悪くない、けれどそれと同時に懸念すべき事もある』

「修司さんの転移先……ですね」

この時代におけるネロ皇帝と早速協力関係になれたのは大きい。

此方の事情を知った上で向こうから協力してくれと言ってきた時は彼女の決断力と器の大きさを知った気がした。伊達に皇帝をしていないなと素直に感心する反面、それとは別口に懸念となる材料もまた存在している。

当初、修司は立香達と共に同じ座標位置に転移させる手筈だった。ズレたとしても数十～百m程度の小さな範囲、それが全く別の位置に転移させられたと知ったロマニは予想以上に焦ったものだ。

『恐らく、修司君が転移した際に何らかの干渉が働いたんだと思う。それも結構強めなモノだ』

「そして、それが可能と思われるのは今の所一人しかいません」

「レフ＝ライノールか」

レフ＝ライノール。カルデアの裏切り者……否、カルデアを利用し、人理焼却へ追い詰めた人類の仇敵。修司のレイシフトに干渉できる魔術師は現状彼しか思い付かない、あまり思い込むのは良くない傾向だがここまで材料が揃ってしまっている以上修司も否定することは出来なかった。

「今後、彼がどういった行動を取ってくるのかわからない以上、行動は慎重になるな……」

あの燃える冬木の街で出会って以来顔を会わせることのなかったレフがこの特異点にいるかもしれない。そんな彼が今後どのようなちょっかいを仕掛けてくるのか分からない以上、慎重になるのは仕方のない配慮なのかもしれない。

だが、それを修司は鼻で笑って一蹴する。

「なに、立香ちゃん達が気を張る必要はないさ、レフの狙いは恐らく俺。立香ちゃんとマシュちゃんには直接的な攻撃は仕掛けてこないと俺は思うよ」

「え？」

「ほら、冬木での俺と奴とのやり取りがあっただろ？　アイツ、あんな見た目でプライドとか無駄に高いみたいだし、何より人間を下に見ている。自らが虫けらと断じておきながら俺にぶん殴られたんだ。相当根に持っていると思うぜ」

「で、ではそれだと修司さんに危険が及ぶのでは!?」
「寧ろそれでいい。奴の目が俺に向いているというのならもう一人が奴、或いは黒幕に迫れば良い。これはある意味好機だ」
『チャンスだって？』
「俺に害しようとレフの奴が来るのなら、俺が捕まえて諸々を吐かせてやる。その間に立香ちゃん達は特異点を調査して原因を解明させて聖杯を回収或いは破壊。ほら、どちらかがミスっても必ず一つは達成されるだろ？」
『えぇ……』
『あっははは！　良いじゃないかその楽観さ、私は嫌いじゃないぜ？』
　方針というには些か楽観的に過ぎるが、向こうの出方が分からない以上その位の気持ちが大事なのかもしれない。
　レフの動向は気になるが、流石に今は別行動を取るつもりはない。結局は平常運転（いつも通り）、気負らずに行こうという事で話は纏まる事になった。
「んじゃ、俺は適当な場所を見つけて寝るとするよ」
「え？　修司さんもこの部屋で寝ないの？」
「年頃の娘二人と川の字なれってか？　流石に色々と不味いだろ。俺の事は気にしなくていいから、二人はゆっくり休みな」
「あ、ありがとうございます修司さん」
「また明日、宜しくね！」
「フォウフォーウ！」
　手を振って来る二人に軽く挨拶して修司は部屋を後にする。このローマの街は皇帝ネロのお膝元、昼間のようにチンピラが暴れることはあっても今は警備の人が見回る夜の時間、ロマニも周囲をモニタリングしているから立香達の安全は確保されている。
　暫く歩いてローマの外壁部へと出る。警備の人も巡回に来るだろうが、今はこの場に誰もいない。ここなら大丈夫だろうと辺りを見渡すと、背後にいるであろう少女に声を掛ける。
「ほら、ここなら良いだろ？　いい加減出てきなよ皇帝様」
　暗がりから現れるのは薔薇の皇帝　ネロ＝クラウディウス。咲き

誇る華の如く笑みを浮かべる少女は後の歴史に名を刻む暴君と同一人物とは思えなかった。
「ふふーん、余をチビッ子扱いした不埒者をどう裁こうか考えていたが……お主も存外過保護なのだな」
「皇帝様が盗み聞きかよ。趣味悪いぜ？」
「抜かせ、そもそも最初から気付いていただろうに。お主が気付いていながら余を無視した。であるならば、これは盗み聞きではない！ただ単純にお前達の話を耳にしただけの話なのだ！」
「ええ、なにその暴論」
と、口では呆れの言葉が出てしまうがそれでも彼女の言い分に間違いはなかった。自分は勿論あの場ではドクターも気付いていた筈、それを気付かないフリをするということは彼女に悪意あるモノは一切ないという事。
事実、微笑む彼女からは悪意というモノがまるで感じられなかった。多分未来から来たという自分達に興味を抱いているのだろう、此方も協力を得ている以上対等な立場だ。なら、相手の質問や話には出来るだけ応えるのも必要な事なのだろう。
尤も、どうして立香達ではなく修司なのか、という疑問は残るが。
「て言うか、アンタこんな所にいていいのかよ？　仮にも皇帝だろ？国の代表がホイホイと市井に出てきて大丈夫か？」
「ふふん、その様な政務は既に終わらせた。余は宿題なるモノは嫌いでな、セネカからの課題も即刻終らせたモノよ」
誇らしげに胸を張るネロに修司は苦笑う。その際に彼女の一部が盛大に揺れた気がしたが、修司は全力で目を逸らした。
（うん。アルトリアさんと似ていると思ったがこれは違うわ。何処とは言わないが何処とは！）
心なしか騎士王の視線を感じた気がする。え？　ジャンヌとも似てただろって？　ハハ、何の事やら。
「て、今はその話はよい。余が気になるのはお主の態度だ」
「ん？　俺？」
「お主が余より目立つのは……まぁ、釈然としないが良い、許す。だ

が、あの者達に対する態度が少し気になるのだ。先も言ったが些か過保護と思ってな」
「過保護……そんな風に見えたか？」
「少しな。まぁ余の気の所為かもしれんし、一応念のためにな」
「……」
　正直な話、彼女の言葉に心当りが無いわけではない。マシュも立香もケイローンを始めとした多くのサーヴァント指導を受けて頑張っているし、日々努力をしているのも知っている。
　特に立香は巻き込まれただけなのに鬱憤を溜めず、サーヴァントという超常の存在にも既に慣れ、最近では他のスタッフの手伝いもしていたりする。
　それでも彼女を気に掛けるのは……まぁ、他のサーヴァント達と似たようなモノなのだろう。彼女は努力家だし、胆力もあるし度胸もある。けれどどこか天然でそれが何処か危なっかしく思えてしまう。悪い男に引っ掛かったらそのまま連れ去られそうな……見ていて怖いところがある。
　て言うか、そもそも彼女はカルデアに拉致同然に連れてこられているしね。そんな彼女はエミヤでなくても気に掛けてしまうというもの。小動物がノコノコと戦場のど真ん中を闊歩しているようなものだ。過保護になるのも仕方がないだろう。
「あー……そうか、そう言われるとなんとも」
「いや納得するんかい」
「し、仕方なかろう。余を見て目をキラキラさせているのだぞ？　確かに余は華も恥じらう美の化身だが人並みに照れる事もあるのだ」
「本当、色んな意味でスゲェなアンタも」
　尤も、それが全ての理由という訳ではない。先にも述べたように彼女も努力している。一人でも何とか生き延びれる様に逃げ足を鍛えたり、状況を上手く判断するための訓練も行っていたりする。
　そんな彼女を庇うように自ら前に出るのは……偏に自分のためである。レフ＝ライノール、奴はあのカルデアで多くの命を踏みにじり、嘲笑った。

無駄で無意味で無価値だと、そう断じる奴の顔にもう一度拳を叩き込まなければ気が済まない。Ａチームを死に追いやり、オルガマリーを殺したことに対するケジメを付けさせなくてはならない。
そして、それを誰かに譲るつもりは毛頭なかった。マシュにも、立香にも、カルデアにいる多くのサーヴァントにも、誰にも委ねるつもりはない。
そう、これは我が儘だ。子供の駄々にも似たみっともない我が儘、けれどやはり譲るつもりはない。奴を倒すのは自分なのだと修司は自然と獰猛な笑みを浮かべた。
やられたらやり返す。受けた借りをウン十倍にして返す。そんな意気込みで握り拳を作る修司に皇帝ネロは溜め息を吐いた。
「呆れた。お主、理知的に見えてかなりの激情家ではないか。成る程、そのレフ某には余程大きな貸しがあると見える」
「まぁな、奴をブチのめすのは俺だ。こればかりは誰かに譲るつもりはねぇよ」
立香を気に掛けるのは嘘ではないし、彼女を心配に思うのもそうだ。けれど、それと同じくらいに修司は受けた仕打ちを倍にして返すのも決して忘れない。その為ならば幾らでも前に出るし、奴等の目に留まるなら派手に動いて注意を自分に引き付けてやる。
獰猛な笑みをより深めている修司に呆れながらもネロは彼の怒りの対象となっているレフ某を内心で追悼するのだった。

◇

翌日、カルデア側の応援を万全なモノにするために一時エトナ火山

へ向かうことになった一行は、ネロ皇帝に許可を得てターミナルポイントを設置することにした。
火山というだけあって気温は少し高い。茹だるような暑さではないが、少し汗が滴り落ちてくる。時折出てくるスケルトンやゴーストと言ったエネミーを蹴散らしながら進むと、目的地に無事辿り着いた。
ネロも宮廷魔術師が頻繁に訪れるとされる場所、ここならカルデアとの連絡もより強固になり、サーヴァントの援軍も送れるだろう。そんな訳でターミナルポイントを設立させた立香達は急ぎ足でローマ、ないし皇帝陛下の所まで戻っていた。
無事に皇帝ネロの下まで戻ってきた三人と一匹だが、出会い頭に皇帝からガリアへの遠征を共にする事となる。苦戦を強いられている兵隊の鼓舞と現地で何が起きているのか見極める為、自ら戦場に向かう彼女には驚き戸惑いながらも立香達は付いていく事となった。
道中、跨がっていた馬から落馬しかけて以降徒歩で歩くことになった立香、そんな彼女を見かねて修司が背負ったり途中途中で襲ってくる連合兵士を片手間に蹴散らしていると、現地の味方の兵士達が設営した野営地と合流した。
「へぇ、一世紀の野営と言ってたから期待してなかったけど、案外しっかりしてるなぁ」
『そりゃあ、仮にも大帝国のローマだからね。軍の設備にも気を遣っているだろうし、流石に野晒しって事はないだろうさ』
苦戦していると聞いていたからてっきりもっと追い詰められているものと想像していたが、元気そうな兵士達の様子に立香達は安堵する。兵士達に士気を向上させようと鼓舞させるネロ皇帝を尻目に案内していると、一際強い気配を修司は感じ取った。
「なぁ、ドクターあの人達って……」
『う、うん。物凄い筋肉(マッスル)だ』
赤い髪の女性と見るからに拳闘士と思われる筋骨隆々の大男、二人とも恐らくはサーヴァントなのだろう、特に大男の方はニコニコと笑顔を浮かべている。迫力満点なその圧力にフォウもタジタジだった。

「もしかして、君達が噂の客将の子達かな？　男性の君もそうだけど、女の子の方も見かけによらず強いんだってね。遠路はるばるこんにちは、あたしはブーディカ。ガリア遠征軍の将軍を努めてる」
「――――え？　ブーディカ？」
「そう、ブーディカ。ブリタニアの元女王さ」
　ブーディカ、その名前を耳にした瞬間、マシュと修司は揃って怪訝……というより、困惑した表情を浮かべていた。彼女がブリタニアの元女王というのは嘘ではない、気掛かりなのはどうしてブーディカである彼女がローマの味方に付いているのか、史実通りなら彼女は……。
「で、其所にいるデカイのが……て、スパルタクス？」
「……」
「え、な、何？　俺？」
　不思議に思うマシュを余所にスパルタクスと呼ばれた大男が修司に歩み寄る。大きい、鍛え抜かれた肉体もそうだが全体的に目の前の大男はデカかった。１８０を越える背丈の修司ですら見上げるほどの巨漢、そんか彼が修司の顔をマジマジと見つめていると……。
「うむ、圧政者に与する者かと思っていたが……その実、大いなる反逆の意思を持つ者よ、汝の名を聞かせて欲しい」
　へぇ、とブーディカは珍しいモノを見たような声を溢す。自分と戦うスパルタクスという男は反逆という言葉を体現したかのような存在。彼が圧政者と認定した者には須くあの笑顔と豪腕で叩き潰そうとする。
　そんな彼は修司を圧政者に与する者と定めたのに襲い掛からない、寧ろ慎重に彼の在り方を見極めようとしている。
　ブーディカから見て、修司は変わった胴着を着ているだけの人間にしか見えない。勿論腕は立つだろうが、それでも彼が自分達と肩を並べて戦えるとは正直思えない。精々連合の兵士を数人相手取る程度のモノだろう。
　そんな彼がスパルタクスを相手にどう応えるのか、半分野次馬、半分心配で様子を伺っていると……。

「お、オッス！　オラ修司！　ワクワクすっぞ！」
瞬間、空気が凍り付いた。この男、張り詰めた空気を少しでも和ませようとしたつもりだろうが……ダダ滑りである。しかも恥ずかしさの所為か若干吃っているし良く見れば頬も紅潮している。後ろではマシュがあわあわしていて立香にいたっては「ダメだよ修司さん、そこは恥ずかしがってちゃダメな場面だよ！」等と良くわからないフォローをしている。
モニターしているロマニはやりやがったと喚き、ダ・ヴィンチに至っては腹を抱えて笑い転げている。最早バッドコミュニケーションでは済まない失態、ここにAチームの面々がいたら総スカンを受けていた所だろう。
これは圧政者認定も加速してしまうかもしれない。しかし、そんな危惧とは余所にスパルタクスの反応は意外なモノだった。
「偉大なる反逆者シュウジよ、汝の気持ちは理解した。その情熱（ワクワク）に敬意を評し、共に戦い、圧政者たちに熱い抱擁を送ろう」
「え？　あ、うん。宜しくお願いします」
それだけを言い残して去っていくスパルタクスに修司は毒気を抜かれた気持ちだった。そしてそれはブーディカも同じでその目を丸くさせている。
「修司さん、次やる時はちゃんと照れも消さないと！　折角の挨拶なんだから！」
「さ、流石です先輩」
『いや、突っ込む所そこじゃなくない!?』
微妙な空気の中で唯一平常運転な立香に改めて尊敬の念を抱くマシュであった。

「っ!?」
「ん？　どうしたんだい先生、急に飛び上がって、変な夢でも見た？」
「……いや、サーヴァントは夢を見ない。今のはそう、ちょっとした悪寒だ」
「サーヴァントが悪寒を感じるのも変な話だけど……まぁ、虫の報せというのはそう言うものかもしれないね。それで、どうする？」
「一応、彼に話を通しておこう。場合によってはそのまま彼と合流することになるかもしれん」
「先生がそこまで判断するほどのモノなの？」
「杞憂であればいいがな。今私が思い浮かんだのは嘗てのトラウマだ。無視したいが、したら大変な事になる気がしてならない！」
「あは！　先生がそこまで思い詰めるなんて、その悪寒の相手は相当だね！」
「喜ぶんじゃない！　……全く、小さくてもお前は何も変わらんな」
「はは、そりゃそうさ。これが僕なのだから！　さぁ行こうエルメロイ先生！　先生の力でローマの皇帝に目にものを見せてやろう！」
「……あぁ、そうだな」
ガリアの地で二つの英霊が参戦する。激突は必至、揺るぎない激闘を前にそのローマの皇帝はただ静かにその時が来るのを待っていた。
「敵が来る。ならば私は勝つだけだ」

そして、その様子を遠くから見守る偉大なる皇帝は――。

「白河修司、汝もまた……ローマである」
その赤い瞳には燃え滾る情熱の炎が渦巻いていた。

その２５　第二特異点

――――翌日、合流した遠征組と共にガリアへやって来た皇帝ネロとその客将達、前日にブーディカからのブリタニア料理を振るわれた事で英気も養われ、気力体力共に充実した修司達はガリアで展開される連合軍の軍勢に正面から切り込んだ。

数では不利な現皇帝軍。しかし彼等にはサーヴァントという規格外の存在が味方に付いており、並の兵士では足止めすら敵わなかった。

そしてその中でも山吹色の嵐が兵士達を蹂躙する。押し寄せる人の波を拳や蹴りで打ち砕き、気を使わない純粋な身体能力を以て圧倒する様はサーヴァントと似て非なる超常を見せ付けていた。

「ふぅ、まさか自分が無双シリーズを体現するとは、人生とはわからないものだ、なっと」

背後から不意打ちを狙っていた兵士にも裏拳を放って昏倒させる。修司の周囲には死屍累々の兵士達が倒れ伏しているが、幸か不幸か何れも気を失っているだけでに終わっている。

魔術師から見たら甘いと言わざるを得ない所業だが、生憎と修司の目的は兵士達の虐殺ではない。あくまでも修司の――――カルデアの目的は特異点の調査と元凶の特定と解決にあるのだ。

「やぁ、随分と暴れているみたいだけど、大丈夫？　疲れてない？　君が凄いのは充分理解したけど、今から飛ばしすぎると後からしんどくなるよ？」

そんな彼の所にブーディカが走り寄る。嘗ての戦場の女王と謳われていただけあって彼女の戦いぶりも凄まじい、盾と剣というシンプルな装備で敵兵を悉く殴り倒す様は色んな意味で刺激的だった。

「なに、此方が頑張ればその分本陣に向かった立香ちゃん達の負担は減るからな。まだまだ体力には余裕があるし、このままいけるよ」

「ふーん、流石は男の子って感じ。もしかして二人のどっちかは君のお気に入りだったりするの？」

修司達がガリアに滞在している連合兵士を相手取って幾分かの時

が過ぎている。今頃立香達は本陣にいる皇帝の一人とやらと敵対しているだろうし、彼女達の下へ雑兵を行かせるわけにはいかない。
「そんなんじゃないッスよ。俺は彼女達よりも年上だからさ、彼女達の負担は出来るだけ軽くしてやりたいだけッス」
「成る程、保護者としては年頃の娘の頑張りを応援したい感じ？」
「まぁ、そんな所です」
　互いに軽口を言い合いしながら、敵を順当に倒していく。修司は拳で、ブーディカは剣の腹で叩き潰しながら敵兵力を凪ぎ払っていく。
　既に彼女は修司に侮りの視線を向けてはいない。寧ろ戦場で共に戦い彼の戦闘能力の高さを目の当たりにしてその評価は先日の正反対となっている。
　彼は強い、それもトンデモない程に。幾万の軍勢を前に一切怯むことなく正面から圧倒するのはサーヴァントである自分に匹敵、或いは凌駕しそうな勢いがあった。そんな彼がその気になっていないのは偏にネロ皇帝の客将であるからなのか。
　それとも、今はただの時間稼ぎに徹しているからだろうか。何れにしても此だけの兵力を前に未だに息を切らしていない修司にブーディカは言葉にできない末恐ろしさを実感していた。
「て言うか、こっちの方に来て大丈夫なんスか？　スパさん、何か凄いことになってますけど……」
　言われて振り向けば、槍を構えて突撃（チャージ）する敵部隊に正面から体当たりをして吹き飛ばす剣闘士（スパルタクス）がいた。その体の至る所には剣や槍、矢といった刃が突き刺さっており、どう見ても尋常の様子ではない。幾らサーヴァントでも不味いのでは？　と一瞬焦るが等の本人は満面の笑みを浮かべながら敵兵士達を吹き飛ばしていく。
　そんなホラーチックな光景に修司が引いていると、ブーディカは戸惑った様子で頭を掻いた。
「あちゃー、スパルタクスの奴張り切っちゃってるよ。昨日君と会ってから妙にテンション高いし、もしかしたら爆発するまで止まらないかも……」
「は？　ば、爆発？」

何かの比喩なのだろうか？　爆発という不穏な言葉を口にするブーディカに修司は困惑すると、彼女はゴメンといって此方に手を合わせる。
「あたし、スパルタクスのフォローに回るね。申し訳ないけど君には此処を任せちゃうけど……」
「大丈夫、任せてください」
再び修司を一人にしてしまう事に申し訳なく思うとブーディカだが、修司気にするなと彼女を送り出す。強い子だ。現代に彼処まで強い人間がいたことに何だか嬉しさを感じながらブーディカはスパルタクスの下へ急ぐ。
スパルタクスの耐久力は凄まじく彼の精神性と合わさって凄まじいモノとなっている。喩え肉体が滅んでも戦う、そんな彼のフォローに回ろうとブーディカが近付いた時。
〝悪いが、其処までだ〟
「!?　スパさん、ブーディカさん！　そこから離れ――――」
何かの違和感に気付いた修司が叫ぶが、それよりも速く空から幾本の巨大な円柱がブーディカとスパルタクスをその周辺ごと取り囲んだ。何が起きた？　突然の事態に混乱するのも束の間、二人を囲んだ円柱の更に上から陰陽の太極図が閉じ込めるように蓋をされる。
「一手遅かったな。――――これぞ大軍師の究極陣地、石兵八陣（かえらずのじん）。破ってみせるがいい。尤も、簡単にはさせんがな」
「な、なに……これ？　体が……動か……ない」
「ぬうぅ、この程度の圧政、我が愛に叶う道理……なし」
「ブーディカさん！　スパさん！　待ってろ、今行く！」
円柱に囲まれた事で身動きが取れない二人、原理がどうなっているのかは知らないが、あれが二人を苦しめているのなら破壊するまでだと駆ける修司だが……。
「やらせないよ、ブケファラス！」
一頭の馬と一人の少年が修司の前に降り立った。その蹄で押し潰さんと迫る黒き牡馬、それを腕で防ぎ弾き飛ばした修司は目の前の少年がサーヴァントであることを瞬時に見抜く。

こんな少年がサーヴァント……とは思わない。そもそもサーヴァントとは歴史にその名を刻んだ英雄だ。偉業を成し遂げ世界に名を馳せた偉大なる先人、油断はしない。だが、それ以上の焦燥が修司の中で燻ってしまっている。

スパルタクスとブーディカを縛る円柱、あれはサーヴァントすらも縛り殺す類いの厄介な代物だ。早く彼処から解放しなければいずれ二人は死に、消滅してしまう。

二人とも今後の戦いに必要な人達だ。死なせるわけにはいかない、しかしそんな修司の気持ちとは裏腹に二騎のサーヴァントはそれをさせまいと立ち塞がる。

「いやいや、驚いたよ。僕ごとブケファラスを吹き飛ばすなんて、しかも片腕で！　ははは、大した馬鹿力だ！　世界は本当に広いや！」

「だから、敵に感心するなと……まぁいい、取り敢えずこれで下地は済んだ。後は我等次第、準備はいいな？」

「勿論さ先生！」

片や馬に跨がる赤髪の美少年。成長すればさぞかし女泣かせなイケメンになるであろう少年が戦意を滾らせて腰に差した剣を抜く。恐らくクラスはライダー、そして跨がる馬はきっと彼の宝具なのだろう。ライダーはその機動力が最大の武器とされているらしいから、恐らくはそれで自分の行く手を遮るつもりなのだろう。

だが、それよりも修司は少年の隣にいる彼こそが何よりも驚きを隠せない人物だった。

修司は彼を知っている。その昔、ロンドンに訪れた際に宿に困っていた所を助けてくれた時計塔の魔術師で、修司が魔術師の中でもまともな人だと認識する数少ない知人。

魔術師のある友人が尊敬してやまないとされる魔術師の中でも君主とされる人物。

その名は――――。

「まさか、アンタは……グレートビッグベン？ロンドンスター!?」

「断じて違う!!」

ロード・エルメロイⅡ世、嘗て共に魔術師と戦った事のある彼が、奇

しくも敵として目の前に立っていた。

◇

眼前に佇む二騎のサーヴァント、ライダーとキャスター。赤毛の少年と黒いスーツを着用する現代的な青年、端からみればバラバラな関係なのに妙にしっくりとくるのは何故なのだろう。

なんて考えるのも束の間、見知った顔が相手であることに戸惑いつつも自分のやるべき事は変わらない。彼等を相手にするよりも、先ずはブーディカとスパルタクスを救出するのが先立と、修司は地面を蹴り、猛烈な勢いで彼等との距離を瞬く間に零にする。

「悪いが、あんた達の相手をしている暇はない！　通してもらうぞ！」

「わわ！　すごい迫力だ！　はは、凄いや！」

振るわれる蹴りを自身の剣で間一髪防いで見せる赤毛の少年、触れたのは足のほんの指先程度なのに愛馬であるブケファラスから吹き飛ばされてしまった。機動力では並のサーヴァントよりある筈の自分が速さで全く敵わなかった事実に少年は悔しさや嘆きよりもただ単純に尊敬し、喜んだ。

そんな少年の反応に若干困惑しつつも、修司は構わずブーディカ達の所へ向かおうと足を進める。この踏み締めた一歩で彼らの所まで一直線に突き進もうと修司が脚に力を入れた瞬間、修司の足元は爆発した。

まるで地雷を踏み抜いたかのような衝撃、この時代に地雷なんて兵器は存在しない筈だと驚きながら後退り、バランスを崩して膝と手が地に着いた修司に、今度は横から突然突発的な暴風が襲う。かと思え

ば落石が降り注ぎ、更には足元から炎が噴き出してくる。
「な、なんだなんだ!?」
そんな小規模な天変地異に見舞われた修司は慌てふためくが、それでも体勢を立て直そうとする。しかし二騎のサーヴァントはそんな事させないと追撃してくる。
修司が次に目にしたのは幾つもの太極図が刻まれた炉心の様な小さな箱が黒いスーツの男の周囲を漂っていると、そこから幾つもの光が修司に向かって降り注いできた。
ビームである。幾つものビームが箱から放たれ、その中から掻い潜るように黒い馬と共に赤毛の少年が修司に向かって駆けてくる。
「そら、今度は此方の番だよ!」
瞬間、修司は幾つものビームに焼かれて馬の体当たりで撥ね飛ばされる。山吹色の胴着が破れ、紺色のインナーが顕になる。
(さて、これで多少のダメージが通ればいいのだが……)
派手に吹き飛ばされる修司を注意深く観察する男、ロード・エルメロイⅡ世はこれで終わりでないことを理解しながら次の手を頭の中で構築させていた。
確かに此方の策はまんまと嵌める事ができた。魔力による地雷から怒涛の攻め、そこからの支援魔術による相方の強化。此方の出来る手札は可能な限り出し切ったつもりだが……。
(たかがあの程度の攻撃で奴が参るとは思えん! 速やかに次の手に移らなければ……)
あの程度では決して修司という男は倒せない。そんな一種の確信をしながらⅡ世は相方に戻れと指示を出す。
……が、ふと違和感を感じた。ここまで攻撃されて何故彼は反撃しようとしないのか、確かに此方はそうはさせないと攻め続けた。だが、相手はあの白河修司だ。
彼のデタラメさは自分もよく知っている。その強さもその行動力も、自分達の攻撃の合間に反撃するなんてわけはない筈なのに、まるで案山子のごとくされるがままになっている修司にエルメロイⅡ世は違和感を拭えずにいた。

そして……。
「!?」
「え？　え？　なに、どういうこと!?」
突然、背後にあるブーディカとスパルタクスを封じていた石兵八陣が破壊された。下から突き上げるように現れた一個の光の玉が、閉ざしていた石兵八陣の太極図を貫いて爆発させていたのだ。
何が起きたのか一瞬焦るが理解できなかったエルメロイⅡ世だが、不自然に地面に空いている穴を見付けて瞬時に理解する。自分の宝具を破ったのは修司の気のエネルギーを使った仕業だという事を。
あの時、奴が地雷で膝と手を地面に付けていた時、自身の気のエネルギーを使って地中から石兵八陣の真下まで動かしていたのだ。奴の動きが鈍かったのは操気弾でエネルギーを操作する為に精神力を使っていたからか、それとも意図を諭されないようにする為の演技か、恐らくは後者だ。
今に思えばあの時の奴の動きは些か作為的だった、罠に嵌めていたつもりが逆に嵌められていた。策士策に溺れる処ではない失態にエルメロイⅡ世は自身の不甲斐なさを悔やんだ。だが、悔やんでばかりはいられない、直ぐに体勢を建て直さなければ詰むのは此方の方だ。
「ごめーん修司君！　足引っ張っちゃって！」
「おお反逆者よ！　汝の愛、必ず報いて見せよう！」
そうしている内に既に背後にはスパルタクスとブーディカが佇んでいる。形勢は逆転された。砂塵の中から立ち上がる修司を前にしていよいよ逃げ場は無くなった事に焦りを感じ始めたエルメロイⅡ世はこの状況からの脱出を模索する。
相方も強気に笑みを浮かべているが、その額には幾つもの汗が浮かんでいる。このままでは自分達は負ける。良くてもどちらかは必ず此処でリタイアする事になるだろう。
（どうする？　前門の理不尽に後門の狼二頭！　どちらも離脱を許すことはないようだし、何より奴が逃がすとは思えない！　一か八か、もう一度宝具を使うか!?）
追い詰められる思考の中、相方の少年――――アレキサンダーは修司

に戦意が無いことに気付いた。
　というか此方を見ていない、彼の視線はずっと別の所に向けられている。なんだと思い彼の視線の先を目で追うと……その訳に納得した。
「スパさん、ブーディカさん、悪い。この二人にはあんた等で当たってくれ……どうやら、大物が来たみたいだ」
「え？　何を言って――――!?」

――――其処には男（ローマ）がいた。
国を、人を、命を愛し、育み、死して英霊として召された後も子供達を見守り続けてきた偉大なる皇帝（ローマ）。
男に共はいなかった。護衛の兵士を連れず、ただ一振りの巨大な槍だけを手に、しかしその歩みを誰も止めることは叶わない。
何故なら、男は皇帝（ローマ）にして神祖（ローマ）。彼の歩みをこの時代の人間が止められる筈がない、阻める訳がない。
男は漲る闘志を更に昂らせる。されどその昂りに一切の荒ぶりはなく、まるで大樹の様に聳えている。デカイ。見た目だけでなく、その器がまるで底知れない。
間違いない。この男こそが連合の総大将なのだと修司は理解する。
「修司よ。遥か遠い世界から訪れし可能性の体現者よ。どうか、この私と一戦交えてはくれないか？」
まさかの敵の総大将からの誘いに流石の修司も面喰らう。剰りにも大胆不敵、されど何処までも本気な男に修司は拳を握り締め……。
「いいぜ、掛かってこいよ！」
駆け出し、跳躍し、槍を鉄槌の如く振り下ろす大いなるローマの皇帝に、修司はやはり正面から迎え撃つのだった。

その26　第二特異点

――――――帝国連合軍、ガリア本陣。修司とスパルタクス、そしてブーディカの尽力によりほぼ無傷の状態で本陣へと駆け込んだ立香とマシュ、皇帝ネロの三名は其処で待つ皇帝の一人と相対し、そして戦った。

皇帝と僭称するその男の名はガイウス＝ユリウス＝カエサル。その恰幅のある体型とは裏腹に俊敏且つ猛烈な剣捌きに一時はマシュもネロも追い詰められていた。

セイバーである自身を嘆き、本来なら将である筈の自分が一兵卒の真似をするのは些かおかしい。等と自虐を口にしながらも、彼の奮う剣閃は凄まじかった。

彼の攻撃を捌く事が出来たのは偏に盾のデミサーヴァントであるマシュの防御力のお陰だった。堅牢を象った彼女の防御を以てガイウスの剣戟を防ぎきり、振り切った一瞬の隙を突いてのネロの剣が僭称皇帝カエサルを討ち取った一撃となった。

「ふむ、やはりこうなるのは目に見えていたか。あぁヤダヤダ、何故私がセイバーとして前線に出ねばならぬのだ。どちらかと言えばキャスターの方が良かったなぁ、……まぁ、美しき女達に敗れるのもそれはそれで良いものだが」

「待ってくれ僭称……いや、ガイウス＝ユリウス＝カエサル殿、貴方の言葉が誠に真実であるというなら、私は……」

「真実だ。だが悔やむことはない、確かに私はカエサルだが既に死した者。今のローマの皇帝はネロ＝クラウディウス、貴様だろう？」

「……」

斬り付けられ、致命傷を受けたというのにカエサルの顔は何処まで も慈愛に満ちていた。敵として戦った相手を美しいと評し、ネロに対しては幼い孫を思いやる様な慈悲深い態度。

ネロは理解した。今目の前にいるのは初代以前に存在した偉大な

る先人、ローマの礎の一人となった……カエサル本人なのだと。そんな先人を切り捨てたことの後悔に顔を俯かせる薔薇の皇帝をカエサルは気にするなと声を掛ける。
「ネロよ。美しき皇帝よ、どんな表情(顔)をしようとお前は等しく美しいが……笑え。薔薇は、華は、咲き誇るからこそ何よりも美しいのだから」
「カエサル殿……」
「しかし心せよ。あの御方の前には全ての皇帝は逆らうことは出来ん。その名と姿を見たとき貴様は果たしてどんな顔をするのだろうな」
「――あの御方？　それは、一体」
「逸るな当代の正しき皇帝よ。あの御方は連合首都にてお前の訪れを待って――――」
カエサルが其処まで口にした瞬間的、離れた所から爆音と轟音が轟いた。次いで襲い掛かる衝撃、爆風と砂塵が入り交じる暴風にマシュは構えてネロと立香を庇うように前に立つ。
爆風から伝わってくる衝撃、立香は吹き飛ばされないようにマシュの腰にしがみつき、ネロは剣を地面に突き刺して耐え忍ぶ。
唯一その場で爆風と衝撃を受けたカエサルはコロコロと地面を転がっている。その表情は何となく青ざめているように見えた。
「ぐふぅ、ま、まさか既に斯様な場所にまで来ていたとは、あの御方の酔狂は……本当に……困ったものだ……ガク」
折角格好良く消えるつもりだったのに最後の最後で台無しにされたカエサルはあの御方に対してちょっぴり憤り、そしてその敵対者を盛大に恨みながら光の粒子となって消えていった。
「な、何なのだ今の爆発は!?　……ぬ？　あのカエサル殿は何処へ？」
「ば、爆発の理由は兎も角、カエサルさんは恐らく消滅したかと」
「し、消滅？　死んだのか？」
『あぁ、彼は、ガイウス＝ユリウス＝カエサルは魔術的な死を迎えた。彼はサーヴァントだからね。普通とは違って遺体を残すことはない

んだ』
「そうか。うむ！　ならば今はそれで佳しとしよう！　ともあれ皇帝の一人を撃破した訳だな」
　カエサルの残した言葉を今は胸の奥にしまっておく事にしたネロは一先ずこれでガリアを取り戻した事に……とはならなかった。
「て言うかドクター、今の爆発はもしかしなくても修司さんが原因なんじゃ？」
『あ、そうだった！　二人とも急いで修司君の所に戻ってくれるかい!?　此方はさっきから大きな魔力反応を検知している！　十中八九サーヴァントだけど……この反応はちょっとヤバイかも！』
「や、ヤバイかもって!?」
『具体的に言うとトップクラスの力を持った敵のサーヴァントが来てるってこと！　純粋な戦闘能力だけならあのジャンヌ・ブラック以上かもしれない！』
「っ!?」
　慌てながら修司と戦っているサーヴァントの能力を口にするロマニに二人は戦慄する。黒いジャンヌ、それは前の特異点でフランスをこれでもかと蹂躙した竜の魔女、最後のオルレアンにある砦で戦った際はマシュとジャンヌの二人で掛かって漸く倒せた相手だ。
　そんなのが爆発のした方向で修司が相手をしている。彼が負けるところは想像も出来ないが、それでも相手が敵の中枢を担う戦力を出してきたなら此方も腹を括る必要がある。
　そんな二人に感化されたのか、自然とネロ皇帝の視線も厳しくなる。恐らく彼女も気付いたのだろう、あの先には今回の件の重要人物がいるという事を。ならば皇帝として出向かない訳にはいかない、余も連れていけと目で語る彼女を立香が止められる訳がなかった。
「行こうマシュ、ネロ皇帝！」
「うむ！」
「了解。マシュ＝キリエライト、先導します！」
　盾を構えて前進するマシュを先頭に立香とネロは駆け出す。この先で待つ修司の助けに僅かでもなれるように……。

◇

「ローマ！」
「ヌンッ！」
「ローマ!!」
「セイッ!!」
「ローマ!!!」
「オラァッ!!!」

振り抜かれること三度、男の奮うその槍を悉く回避する修司、されど男の猛攻は止まらない。男の奮う槍は槍と呼ぶには太く大きく、どちらかと言えば棍棒の類いの様に見えた。蹴りや拳で打ち払って捌いてはいるものの、兎に角攻撃の手を緩める様子がない。

仕方ないから捌くだけでなく打ち返す勢いで拳を奮っているが、それでも構わず打ち込んでくる。お陰で辺りには衝撃波が相次ぎ、時には爆発みたいに轟音と爆風が辺りを吹き飛ばしてしまう。ブーディカとスパルタクスもエルメロイⅡ世とアレキサンダーを相手にしている為中々修司に援護する事が出来ずにいる。

膠着しつつある状況、このままでは少し不味いかという所に頭上から男の槍が振り抜かれてくる。腕を交差して防御に徹するが、受けた際に感じた衝撃は思っていたよりも重かった。足元が地面にめり込み、体ごと地中に埋まりそうな勢い。受けるのは悪手だったか、このままでは地面から首の生えた愉快な生物が誕生してしまう。

そんな時、鍔迫り合いに似た状況の中で男の方から声が掛かってき

た。
「どうした。可能性の子よ、お前の力はそんなモノではない筈だ」
「ン、だと？」
「私（ローマ）は全て受け止めよう。お前の進（ロー）んできた道（マ）を、その道程（ローマ）を、我（ロー）が全（マ）てを以て応えよう。――それとも、お前の全てを出し切るのに私（ローマ）では不足か？」
その言葉を聞いたとき、修司は理解した。この男は自分に奥の手を引き出させようとしているのだと。相棒ではなく、自身の手で掴んだあの奥義を自分に見せろと言ってきているのだ。
大胆不敵、しかしただ数回打ち合っただけで其処まで看破して見せた男の慧眼に素直に見事と感心した。今のままでも押し返すのは充分、しかし相手はそうは望まない。目の前のいちいちローマと誇張する男は文字通り自分の全力を所望している。
瞬間、修司の体から赤い闘気が溢れ出す。これ迄の白い闘気とは違い、荒々しい血のようなオーラに男は抗う間もなく吹き飛ばされる。
宙に吹き飛ばされ、それでも体勢を変えて着地する男はその気になった修司を見やる。しかしその時には既に赤い闘気は消えていた。
何故？　疑問に思う男が問うよりも早く修司が口を開いた。
「アンタ、名前は？」
「うん？」
「名前だよ名前、さっきから気になったけどアンタは俺の事を知っていたつもりでも俺はアンタの名前は知らないんだ。本気を出して欲しいって言うけれど、その前にせめて最低限の名乗りは聞かせてくれないとな」
そう言って不敵に笑う修司に男は納得したようにポンッと手を叩いた。そう言えば自分は名乗っていなかった。今更な自分の迂闊さに済まないと軽く頭を下げてくる男に修司は調子が狂うと言いながら男の名乗りを促した。
「うむ、失礼した。我が名はロムルス、帝国連合に名を連ねる者にしてローマを束ねる皇帝（ローマ）である」
（うん、何となく分かってたけどやっぱり皇帝さんだったー！　あれ

？　しかもロムルスって……確かローマ帝国を建国した人じゃなかったっけ？）

曰く、生きながらにして神へと至った者。自分が相手をしていた奴が皇帝の一人だとは思っていたが、まさかの建国者……というかローマの始祖だった。予想を上回る大物だった事に流石に修司の頬はひきつってしまう。

「……て言うか、何でローマの始祖さんが俺に興味を持つんだよ。アンタ程の人に認められるほど大層な人間じゃねぇぞ、俺は」

「否、それは違うぞ修司よ、私（ローマ）は言った筈だぞ。可能性の体現者と、お前の事は彼の者から聞いた。愚直なまでに己を磨き、新たな人の領域へ踏み出した者だと」

ロムルスが語る彼の者とは恐らくレフ＝ライノールの事なのだろう。しかし解せない、第一印象から人間をこれでもかと下に見ている奴が果たして自分の事をそんな風に口にするだろうか？　どちらかと言えばこれ以上ないほど扱き下ろし、親の仇の如く罵倒しそうなものだが……。

事実。修司の懸念通りレフはロムルスに修司についてこれでもかと扱き下ろし、罵倒し、嘲笑った。しかしそんなレフの言葉を１８０。変えて受け止めたロムルスは修司を新たな可能性を持つ人間であると認識したのは……恐らく知られることはない。

――――――閑話休題。

「……修司よ。可能性の体現者よ、どうかお前の全力を見せて欲しい。何故ならお前のその可能性こそが私（ローマ）にとっての浪漫（ローマ）であるが故に」

浪漫。本来なら語源となっているのはフランスからでありローマとはあまり関係ないとされる言葉。しかし、ロムルスは言った。その可能性は自分にとっての浪漫だと、ローマの皇帝……否、始祖に其処まで言われたら断るのは難しいだろう。

「……本当はさ、まだコイツを出すつもりは無かったさ、一度出せば疲れるし、加減を間違えれば丸一日動けなくなるし、場合によっては死にかける事もあるし」

「……」

「しかもさ、アンタ、本気じゃないだろ？　いや、どちらかと言えば本気を出せる形じゃないんだろ？　今のアンタはさ」
「……それは」
　ロムルスが修司の隠し札を見抜いた様に修司もまたロムルスの正体とも言える部分をある程度看破していた。何度か拳と槍を重ねる毎に感じる違和感、確かに目の前にいるのはローマ帝国の始祖であることには間違いではない。
　だが、何かが足りていない。或いは封じているような感覚。全力なのは間違いない、手を抜いていないのも分かる。だがそれ以上に何かを置いてきたロムルスに修司は言葉にできない妙な苛立ちを覚えた。
「でも、アンタはそれでも俺の力を浪漫と言ってくれた。それが嬉しくてさ……だから、見せてやるよ」
「！」
「今、俺が出せる正真正銘の全力を――――ハァァァァァッ！」
「おぉ！」
　瞬間、大地が揺れた。木々が揺れ、大気が震え、風が荒ぶり、空がざわついていく。その天変地異のように騒ぎ出すガリアに誰もが唖然としていた。
　アレキサンダーも、エルメロイⅡ世も、スパルタクスも、ブーディカも、そして現在戦争している筈の両軍の兵士達も一斉に動きを止めて修司に視線を向ける。
　誰もが理解した。今、この様な天変地異を引き起こしているのは奴なのだと、何が起きる？　何が始まる？　誰もが期待と恐れを抱きながらその時が来るのを待ち……。
　一瞬、静寂が訪れた。不発？　否、これは始まりの前触れ、嵐の前の静けさに過ぎない。来る。ローマの始祖が誰よりも期待に胸を膨らませて身構えた時。
「行くぞ始祖さん。かい――――」
『いつまで遊んでいるロムルス！』
　修司とロムルスの間に大きなレフの映像が映し出される。恐らくは魔術的な仕組みなのだろう、ロマニが映像を飛ばしてくるのと似た

ようなホログラムが映し出され、酷く憤っている様子のレフが腕を組んで怒りを露にしている。
　あまりの出来事に修司の体からエンストした様にプスンと力が抜けていく、まさかの乱入者に修司とロムルスは目を点にさせ、アレキサンダーは見るからに落胆し、スパルタクスに至っては笑みが消えていた。
　ブーディカは攻撃するべきか悩んでいてエルメロイⅡ世は複雑な表情で頭を抑えていて、両軍のローマ兵士に至っては白けた様子で途方に暮れている。
　そんな彼等の反応など露知らず、レフ＝ライノールは捲し立てた。
『貴様の出番はまだの筈だ！　貴様の役目は皇帝ネロの心を折るためのモノ！　カエサルが死んだ以上最早ガリアなど守る意味はない、戻ってこいロムルス！』
「……了解した」
　レフからの一方的な通信はやはり一方的に切られてしまった。ロムルスの返答を待たずにして姿を消すレフになんとも言えない様子で了承したロムルスは槍を片手に修司に背を向ける。
「……戻るのか？」
「然り。彼の魔術師の言葉通り本来ならば私の出る幕は此処ではない、お前と言う光りに目が眩みつい逸ってしまった。それに……今は我が子に答えを聞く時ではないからな」
「何て言うか……父親って言うのは大変だな」
　ロムルスはローマを興した偉大なる先人、故に全てのローマの民は彼の子供の様なもの、そんな彼もこの時代に敵側に立つのは偏に彼なりの愛故に……という奴なのだろう。
　そんなロムルス（ローマ）に修司は素直に尊敬した。今の自分がどの様な立場にあっても常に子供達（ローマ）を思いやるその深い愛情に。
　立ち去る際のロムルスの横顔には笑みが浮かんでいた。マントを翻し、立ち去っていくローマの始祖。一陣の風が吹いて砂塵が修司の視界を僅かに塞ぎ、次に目を開く頃には彼の姿は既に何処にもなかった。

他にもアレキサンダーとエルメロイⅡ世の姿も消えている。恐らくはレフの登場によりどちらかが手引きして脱出したのだろう。
　些か消化不良な結果となってしまったが……なに、次は次で戦う機会がある。その時は自分ではなくあのチビッ子皇帝がロムルスの前に立つからあの技を使う事はなくなるだろうが……まぁ、今はいいだろう。
　遠くからマシュ達の声が聞こえてくる。それがガリアが解放の合図となりあちこちから勝鬨の声が上がっている。そんな彼等の声を聞きながら修司は広がる青空を見上げるのだった。

その27　第二特異点

連合軍との戦いに勝利し、ガリアを取り戻すことに成功した皇帝ネロとその一向。度重なる戦いと過去のローマの礎となった皇帝、カエサルとの戦いに決着を付け、疲れを癒すために首都ローマに一時帰還することになった。

しかし道中、古き神が現れたという情報により急遽行き先は噂にある島を目指すことになった。場所は地中海、ノリノリな皇帝ネロが操作する船に乗り込み向かうことになったのだが……。

「俺、昔から王様に言われて色んな所に旅してきたけど……此処まで酷い船旅は生まれて始めてだぞ」

「オロロロロロ……」

「せ、先輩！　しっかりしてください！」

「フォーウ！」

青い空、白い砂浜、絶景とも言える自然の姿に一人嘔吐するゲロインが誕生していた。その少女の名は藤丸立香、修司と同じ人類最後のマスターである。

白い砂浜に盛大に吐き出す立香の背中をマシュが優しく撫で、片手には水の入ったコップが握られている。彼女の甲斐甲斐しい世話により少しずつ回復してきた立香、その傍らでは修司が襲ってくる死霊系エネミーを悉く駆逐していた。

「うー、修司さんすみません。一緒に戦えなくて……」

「気にする事はないさ、立香ちゃんは船旅は初めてだったんだろ？　船ってのは酔いやすいし、何よりあの運転だ。馴れてない奴に酔うなって言う方が無理な話だ」

船旅に馴れている修司やデミサーヴァントであるマシュならまだしも馴れていない立香にあの船旅は些か以上に堪える筈、酔うのは仕方ないしその事で彼女を責める人間はこの場にもカルデアにもいないだろう。

「むう、言外に余が責められている気がするのだが……」
「責めるというより呆れてんだよ。一体何処であんな操舵を学んできたんだこの皇帝様は、何処の世界に海上を帆船でドリフトする奴がいるんだよ。モーターボートじゃねぇんだぞ」
「それは偏に余！　であるが故にというやつよ。因みに操舵は我流である！」
　そう言って鼻息荒く胸を張るチビッ子皇帝に修司は頭を抑える事しか出来なかった。ロマニはロマニで妙な感心をしているし、修司は呆れながら立香の回復を待っていると、向こうから一際強い気配を感じ取った。
「あら？　折角久し振りの勇者に出会えるかと思って期待していたのだけれど、まさかサーヴァントが混じっていたなんてね。少し残念だわ」
「ど、ドクター、向こうからサーヴァントらしき女性の方が近付いてきます」
『あぁ、今此方でも確認した。でも……なんてこった。こんな事があるのか⁉　反応は確かにサーヴァント。しかし、違う！』
「そ、それって……彼女がその古き神ってこと？」
　酷く動揺するロマニに修司も怪訝に首を傾げた。神霊とはその名の通り神に類する格を持つ者達の総称、既に世界から失われた存在として扱われた者達でロマニも召喚される事は有り得ないと断じてきた。
　その有り得ない存在が他ならぬロマニ自身の口から紡がれる。目の前にいるあどけない少女、彼女から発せられる数値で計測出来るほどの神性は間違いなく神に連なるモノなのだと。
『あぁ、間違いない。彼女は間違いなく神なんだ。いいや、女神！』
「えぇ、そう。私は女神――名は、ステンノ。ゴルゴンの三姉妹が一柱。古き神、と呼ばれるのは好きではないのだけれど。まぁ、それでも構わなくてよ。確かに、貴方達からすれば過去の神なのでしょうし」
「どうか好きにお呼びになってくださいな、みなさま。私の美しさは

時間に依るものではありませんもの」
　ステンノ、ゴルゴン三姉妹。その二つを聞いて修司が思い出すのはある一人の女性サーヴァント、メドゥーサだった。
　嘗ての聖杯戦争で幾度も敵として自分の前に立ち塞がり戦った事もある彼女、彼女もまたゴルゴン三姉妹の一人……否、一柱だった筈。三姉妹というから残りの二柱もメドゥーサと良く似た長身の女性かと思っていたが、今目の前にいるのは幼い子供の様な外見をした少女だ。
　姉妹と言うには色々違う気もするが、相手は仮にも神。姿形なんて幾らでも変えられるのだろうと、修司は深く追求するのはしない事にした。
　美しく可憐な女神。その愛らしさでロマニや立香やマシュ、皇帝ネロですら身震いをする中で修司だけは一歩離れた所から神霊ステンノと彼女達のやり取りを眺めていた。
　そんな中、ふと女神ステンノと目が合った。美しく可憐で、それでいて何処か蠱惑的で小悪魔的な少女。仕草一つで男女問わず魅了してしまいそうなそんな彼女を……修司は何処か鋭い視線を向けていた。
「ねぇ立香、彼方の殿方は？」
「え？　あぁ、あの人は修司さん。私達と同じカルデアから来たマスターで、とっても頼りになる先輩だよ」
「へぇ、そうなの？　ねぇ、修司。貴方の話、聞かせてくれないかしら？」
「……悪いが、そのつもりはない。此方も悠長にしている訳にはいかないからな、用が済み次第立ち去らせてもらう」
「え？　し、修司さん？」
　明らかに普段と様子が違う修司に立香達は困惑している。いつもは穏やかで優しい紳士的な青年が神とはいえ一人の少女に敵意に近いモノを向けている。彼女と修司は初対面の筈、どうして其処まで毛嫌いしているのか不思議に思っていると……。
「……いや、何でもない。悪いな神さん、どうやら俺は神と言う存在（モノ）

が嫌いみたいだ」
「あら、そうなの？　残念、貴方とのお喋りは色々楽しめそうだと思ったのに」
「……」
　ステンノが怪訝に思うのもそうだが、修司自身もどうして神と聞いて此処まで毛嫌いをしてしまうのか理解できなかった。初対面の相手には印象を損なわない様に振る舞うようシドゥリから教わったというのに、目の前の少女が神と言うだけで嫌悪感を抱いてしまった。
（確か、王様も神と言うモノを毛嫌いをしてたっけ……もしかして其処から来ているのか？）
　自分を育ててくれた英雄王ことギルガメッシュも神と言うのには酷く難色を示していた。その昔、テレビでメソポタミア文明とその神話に焦点を当てたテレビ番組が放送された時の事。
　途中まで採点付きで放送を視ていた王様が女神イシュタルの話に切り替わった瞬間チャンネルを変えた。その時の王の顔は不機嫌なモノになり、一緒に番組を視ていた修司が戸惑う程だった。
　聞けば、女神イシュタルという神はメソポタミア神話に於いて随一のＤＱＮ女神らしく、神話で語られる以上に傍若無人な振る舞いをしていたらしい。当時の修司も聖杯戦争を乗り越え自身の保護者が本物のギルガメッシュ王である事を知っていた為、その事もあってより一層英雄王の話に説得力が込められていて、お陰で神がどれだけ厄介且つ面倒な生き物かという事を教えて貰った。
　けれど、だからといって此処まで神に対して嫌悪するのは修司自身も意外な事だった。精々出会ったら気を付けよう位の認識だったのに、今では少しでも妙な事をすれば叩き潰してやるという危険な思考に陥りかけた自分がいる。
　特にギリシャと聞いた辺りから修司の中の嫌悪感は爆発的に膨れ上がった。様々な神話体系の中でもアレでアレなギリシャ神話、アレな話の多い神話の神がいる事に修司の中の何かが過剰に反応してしまったのだ。
　未だに原因は分かっていない。何故自分が其処まで神を嫌ってい

るのか理由は定かではないが……とは言え、相手は神とはいえ初対面。無礼な態度を取った事に素直に謝罪した修司は気を取り直して話を進めることにした。
　その後、勇者への褒美としてとある洞窟に向かった修司達はそこで多くのエネミーを倒したあとに宝箱に入っていた二騎のサーヴァントを仲間にした。
　エリザベート＝バートリーとタマモキャット、第一特異点に続くまさかのエリザベート再びである。そしてタマモキャットと名乗る犬だか猫だか良く分からない知的生命体は取り敢えずニンジンがご所望との事だったので後でカレーライスを振る舞うことにした。
　そして、女神ステンノから連合軍の首都の位置を教えてもらい、今度こそローマへ凱旋するのだった。

◇

『それで、修司君。君が出会ったとされるローマ始祖、ロムルスの事だけど……』
「あぁ、あのチビッ子皇帝、相当ショックを受けていたけど、今はどうにか持ち直してるよ」
　形ある島を後にし、改めてローマへ凱旋することになった修司達はその途中、ガリアで遭遇した出来事についてその全てを皆に話した。黒い牡馬に騎乗する赤髪の少年と現代でも知られるロード・エルメロイⅡ世、そしてローマの始祖ロムルスと連合軍を従わせる宮廷魔術師であるレフ＝ライノール。
　当初、多い情報に誰しもが驚愕していたが、一番動揺していたのは

他ならぬネロだった。自分達が神祖と崇め、尊敬して止まないローマの父とも呼べるロムルスが敵側の、それも総大将として待ち構えているという事実に彼女は一時塞ぎ込んでしまっていた。

マシュと立香の方は事前にそう言う可能性があると分かっていたから事から然程驚いていないから良かったとして、今後様々なサーヴァントがレフの手によって召喚されるのではないかと危惧している。

当然ロマニもその事を警戒しているので、ローマに戻り次第カルデアのサーヴァントを何人か召喚しようかという流れになっている。

「でも、エリちゃんが話してからは幾分か気持ちは軽くなっているみたいだな。俺も、ロムルスに悪意の類いはないとそれとなく伝えておいたから、多分彼女の中で奴との対面した時の答えを探そうとしているんだろうな」

ロムルスが連合軍の総大将というのはネロにとって衝撃的な事実だろうが、別にロムルス自身はネロに対して悪意を抱いている様子はない。

彼が待っているのは偏に当代のローマ皇帝であるネロへの問い、彼は言っていた。我が子の答えが聞きたいと、そこには彼なりの愛があり、また厳しさがあった。

偉大なる神祖が自分を待っている。その事実がプレッシャーとして彼女にのし掛かっていた様だが、乗馬している彼女の様子は前より少し明るく、その側にはエリザベートが楽しげにネロに話しかけていた。

『あのローマの始祖ロムルスが敵側に付いているのは驚きだけど……そうか、ネロ皇帝はどうにか自分の答えを見付けたのか』

「まぁ、なるようにならないから諦めたのかも知れないけど……向こうは彼女の本心が聞きたい素振りだったからな。仮に上手く言葉にできなくても、気持ちが籠っていればある程度通じるだろうよ」

『……もし、ネロ皇帝の答えがロムルスに通じなかったら？』

「その時は正面から戦うことになるだろうな」

不安に思うロマニが口にする疑問を即答で答える修司にロマニは

苦笑いを浮かべるしかなかった。というか、十中八九そうなるだろうと修司は読んでいる。ロムルスという男は器が広く懐も深い人間だが、同じくらい厳しい一面もある。ネロの答えを聞いて満足しても今度はその答えに見合う力を示せとか何とか言って戦いになるのは目に見えている。

その辺りの事はロマニも気付いているだろうから修司も敢えて口にしない事にした。

そんな時、前方から押し寄せる集団の姿があった。首都ローマからの増援か？　いや違う。あれは敵の……連合軍の敵サーヴァントだ。気配の感じからやって来るのが敵勢力だといち早く認識した修司は、馬から降りて近付いてくる一団に先手を仕掛けようと即座に動いたとき。

「ねぇネロ、貴女って歌にも自信があるのでしょう？　ちょうどオーディエンスも来てくれてるみたいだし、一つ私とデュエットしてみない？」

「む？　しかしあれは見る限り連合軍の兵士だ。違うのも混ざってる様だし……歌うにしても些か舞台に華が無いのではないか？」

「フフフ、皇帝ともあろう者が弱気じゃない。舞台に華がないなら、自分自身が華になればいいだけの話でしょう？　それに貴方の歌で連合軍とかいう連中が大人しくなれば、それこそ貴方に新たな伝説が刻まれるというのに……全く、残念だわ」

「むむむ、其処まで挑発されるとはな……だが、うむ！　佳いぞ！貴様の挑戦受けてたとう！」

聞こえてきたその不穏の会話にピタリと修司の動きが止まった。

え？　歌？　敵が近付きつつあるこの状況で？

周囲の兵士達が呑気な皇帝に動揺しているが、それ以上に彼等は嫌な予感がした。後ろを振り向けば息を吸い込んでいる皇帝とドラ娘、その瞬間これまでサーヴァント相手にも臆す事なく戦ったローマ軍の中でも選りすぐりの精鋭の兵士達は形振り構わず二人から離れていく。

そしてそれは修司達も同じだった。マシュと立香を抱えて全速力

で離脱していく修司の顔にはこれ迄見せたことのない必死な形相が浮かんでいた。
そう、彼も気付いたのである。エリザベートとネロ、この二人の相性は最高に……否、致命的に噛み合いすぎているという事を。
第一特異点でのエリザベートの超音波兵器、一人でも凄まじい音の暴力が二人に増えた時、その破壊力は計り知れない。
ならば、エリザベートの歌にネロ皇帝も巻き込まれるのでは？　何てマシュは思ったが、精鋭である筈のローマ兵士達が半泣きしながら逃げ惑っている時点でお察しである。寧ろ、二人が話を合わせた瞬間逃げ出しているのだから、危機回避能力は自分達より上かもしれない。
「二人とも、耳を塞いで口を開いて！」
『目も閉じるのを忘れるな！』
ロマニも修司達に対爆発への備えを大声で促した。完全に危険物への扱いである。
そして……。
「ホゲェェェェェェッ!!」
瞬間、音の暴力が大地や空を揺さぶった。
そして……。
「むむ？　ローマ軍が退いていく？　いや、二人程残ってる？　一体何の目的で……いや、そんな事はせんなき事、さぁ来るがいいローマ皇帝ネロ＝クラウディウス！　貴殿の情熱が本物であるというのなら！」
「このスパルタ王レオニダス、逃げも隠れもおぉぉぉぉぉぉっ!!?」
その音の暴力は接近しつつあるレオニダス率いる連合軍に直撃した。
スパルタ国王レオニダス、二人の歌姫による超音波兵器により――
――再起不能（リタイア）!!
そして、軈て音は収まり、三半規管を狂わされながらも立ち上がる修司はこの二人は二度と一緒に歌わせないことを心に決めた。

その２８　第二特異点

ガリアを取り戻し、連合軍の本拠地でもある首都の位置も女神であるステンノからの情報提供により反撃の糸口を見付けた一行は、道中待ち構えていた連合軍の伏兵を撃退し無事に首都ローマへと凱旋することとなった。

そこからの展開は早く、連合軍の首都への位置を特定したネロとカルデアの一行は速やかに部隊を編成、後にアサシンである荊軻と飛将軍として名を知られるバーサーカーの呂布、そしてブーディカ達とも合流を果たし、ローマ軍は連合首都へと侵攻を開始した。

攻めるのは軍、対抗するのも軍、故に激突は避けられない。押し寄せる槍と矢の雨を掻い潜り、突き立てられる刃を粉砕しながら修司は周囲の連合の兵士達を薙ぎ倒す。

「いやぁ、本当に強いね君！　お姉さんやる事なくて暇だわ！　最初はちょっと雑兵より強いかなって程度に思ってたけど、うん。普通にヤバイわ！　自分の目利きの無さに自信無くしそう！」

「はは、ブーディカさんみたいな人に誉められるのは悪い気はしないな。日頃から鍛練を欠かさずにしてきた甲斐があったってもんさ」

「でも、本当に私達のところに来て良かったの？　向こうにはマシュちゃんと立香ちゃんがいるし……正直、此方は損な役割かと思うんだけど……」

連合首都に攻め入る際に、ローマ軍は大きく二つの役割を担う事になった。即ち、首都内部に乗り込む部隊と陽動部隊の二つである。分けられた二つの部隊の内の陽動部隊に修司は自ら進んで志願した。

陽動という事はそれだけ多くの敵の注目を集める必要があり、同時に危険度は跳ね上がる。いつ死んでもおかしくない危機的状況、それを自ら進んで挑む修司にブーディカは少しばかり心配になった。

白河修司は強い、ガリアでの一件でそれは誰が見ても明らかで、ブーディカから見ても頼もしく思える程に彼は強い。

しかし、人間である以上必ず何処かでボロが出る。無理が祟り肝心

な所で戦えなくなったとなれば、それは修司にとって拭えない悔いとなってしまう。だから陽動には自分達を任せて少しは自分を顧みて欲しいというのがブーディカの本心だった。

特にこの陽動部隊には負担となる部分が幾つもある。絶え間なく襲い来る連合軍の兵士達を相手取るのも最たるモノだが、それ以上に厄介なのが味方の事だ。

「??????ッ!!!」

「おぉ！　圧政者の輩達よ！　汝らを抱擁せん!!」

??????雄叫びが聞こえ、連合兵士がダース単位で吹っ飛んでいく。狂戦士である彼等に理性というブレーキ等存在しない、罠があろうが無かろうが、等しく吹き飛ばして蹂躙する。敵としても味方としても厄介極まるモノ、それが狂戦士（バーサーカー）だ。

そんな彼等と組むのは貧乏クジである事以外何者でもない、危険でもあり面倒でもある陽動部隊に自ら志願する修司にブーディカ　は心配だった。

「心配は無用ッスよ、こう見えてペース配分は確りしてるつもりだし、何かあったら直ぐに退きますよ。それに、大変なのはブーディカさんも一緒でしょう？」

そう言ってニカッと笑う修司にブーディカは呆れながらも文句を言うことはしなかった。サーヴァントだろうが使い魔だろうが、仲間である以上修司は対等に接する姿勢を決して崩したりはしない。

危険なのは自分もブーディカも同じ、ならば遠慮し合うより互いに頼り合った方がよっぽど危険は少なくなるというもの、そんな持論を語る修司に遂に折れる事になったブーディカは「これだから男の子は」と呆れ半分に戦場を駆け抜ける修司の後を追うのだった。

確かにブーディカの言う通り、陽動というのは危険を伴う役割を担っている。絶え間なく襲い来る敵兵士の刃にいつ襲われるか分からない緊張感に長時間晒されるのは誰だってキツいし大変なことだ。

だが、修司は知っている。陽動部隊よりも実は実働部隊である立香達の方が危険が一杯な事を。ローマの始祖？　宮廷魔術師であるレフ＝ライノール？　違う。それらは脅威であっても恐れではない。

エリザベートとネロ、この二人の組み合わせは修司であっても恐怖で震えた。彼女達の声帯には悪魔が宿っている。比喩や誇張ではない、正真正銘彼女達の歌声は壊滅的で破滅的であった。

声量も発声も人外のそれであり、おまけに声質も凄まじい。音痴という言葉すら当てはまらない冒涜的な何か、あれをもう一度耳にする位なら修司は単身で全ての特異点に挑む道を選ぶ。そんな修司でも恐れる二人は現在首都内部に向かって乗り込んでいて其処には当然立香とマシュも同伴している。

前日、自ら陽動部隊に志願する修司を最も強い声で反対していた立香とマシュ、自分一人だけ逃げようとする修司を彼女達は必死で猛反対をし、その結果じゃんけんで決める事になった。そう、彼女達も知っているのだ。彼女達の歌声を側で耳にする位なら陽動部隊で敵兵士と戦った方がよっぽど安全なのだと。

激しい攻防の末、陽動部隊という枠を無事に勝ち取った修司に立香とマシュは最後まで恨み節を語っていたことは……ブーディカ達は知らなかった。

(いっそのこと、敵陣のど真ん中で歌った方が早く決着付きそうだよなぁ。まぁ、その時はこっちの被害もヤバそうだけど)

自分だけ陽動部隊(安全地帯)にいる所為かついついそんなゲスい事を考えてしまう。そもそも、あのおぞましい歌でもあの始祖なら受け入れてしまいそうな気がする。

そんな時、ふと違和感を感じた。陽動部隊の狂戦士達の部隊が突然別方向に進軍し始めたのだ。見れば彼等の先に魔獣らしき軍勢が見える。恐らくはアレの対処に向かったのだろう。

だがタイミングがおかしい、そう不思議に思った時修司の体は必然的に回避の動きを取った。その腕にブーディカを抱え、後ろに跳躍した瞬間いつぞや目にした巨大な土塊が土砂の様に降り注いできた。

「今のは……エルメロイの先生か!」

「Ⅱ世だ。あまり人の名前を間違えるのは感心しないぞ」

着地し、他より強く感じる気配に目線を向けると、煙草を加えた黒髪ロングのロード・エルメロイⅡ世が修司を見据えていた。

「あの魔物、アンタがけしかけたのか。ワザワザ俺達を分断する為に」
「然り。と言ってもただの時間稼ぎだがな、サーヴァント相手にあの程度の魔物など取るに足らん。が、アイツの時間稼ぎくらいにはなるだろう」
　アイツ、そう言われて見るとエルメロイⅡ世の隣には先日一緒にいた赤毛の少年の姿は無かった。恐らく彼は立香の……いや、ネロ皇帝の所へと向かっているのだろう。だがおかしい、それなら何故此処に彼がいるのだろう。ただ時間を稼ぐなら自分達に魔物やら連合兵士を差し向ければそれで済む筈なのに。
　現に、たった一つの魔物の群れで自分達は分断されてしまっている。それはもう鮮やかな程に、翻弄するだけならエルメロイⅡ世が自ら出てくる必要はない。なのに何故ワザワザ自分の前に出てくるのか、目の前のロードの思惑が今一つ理解できないでいると、エルメロイⅡ世は眼鏡を上げて　煙を吐いた。
「なに、アイツが皇帝ネロに話があるように私にもお前に話がしたかっただけだ」
「アンタが……俺に？」
「あぁ、どういう訳か私にはこうなる前の記憶が保持してある。それも明確にハッキリとな」
「……？　アンタの記憶」
　それは、つまり彼の生前という事に他ならないが……益々分からない。何故彼の生前の記憶が出てくるのか、彼の読めない思惑に修司は眉を寄せると。
「いいか、よく聞け白河修司。お前の……いや、私達の世界は焼却された。この世界の人理焼却に巻き込まれたのだ」
「！」
「お前の事だ。何となくだがその事に気付いているのだろう？　だが認めたくなかった。自分は唯の巻き込まれただけの余所者で、この世界を何とかすれば元の居場所に戻れると、そう安易に目を背けていた。違うか？」
　その事実は修司も薄々気付いてはいた。この世界が焼却されたと

同時に感じた体の奥底からの痛みと衝撃、それは自分がいた世界との繋がりが切れた事の証明だったのではないかと。
　気付いてはいた。だが、自覚はしていなかった。自分の世界が、これまで積み上げ、成し遂げてきたモノが、ついでとばかりに消されたなんて……そんな事を考えると怒りで頭がどうにかなりそうだった。
　だからこれ迄自分の世界について深く考えようとはしなかった。向こうには王様がいるから大丈夫、きっとなんとかなっていると。
　だが、そんな修司の浅はかな考えをエルメロイⅡ世は否定の言葉で両断する。お前の世界は焼却されたと、この世界の人理焼却に巻き込まれ消滅したのだと、一切の遠慮なく言い切った。
「自覚しろ。そして受け入れろ。今のままではどうあってもお前は元の場所には戻れない、戻った所で……何もかもが手遅れなのだと。そして！」
「――――!?」
「自らの不手際に嘆いて、此処で果て死ぬがいい!!」
　瞬間、修司の頭上から幾本もの巨大な柱が降り注いできた。これも見覚えがある、このままではいけないと修司は腕に抱えたブーディカに短く謝罪をすると、彼女を乱雑に投げ飛ばした。
　彼女が地面に着地するのとエルメロイⅡ世の宝具が発動するのはほぼ同時だった。全身に襲い来る虚脱感と蝕まれる感覚、気付きながらも目を背けていた修司にエルメロイⅡ世の宝具は些か以上に堪えた。
　……だが。
「どうした！　こんなものか貴様の怒りは!?　時計塔に横槍を入れられた時の貴様はこの程度でどうにかなるタマだったか!?」
「それとも何か、貴様の信じる王の臣下はこの程度の障害に打ちのめされる程に軟弱か！」
「――――！」
「貴様の王は、嘗ての私の信じる王を殺した。貴様が真に英雄王の臣下であるというのなら、その在り方を今此処で示して見せろ!!」

こうして、誰よりも自分を信じている人からそんな風に言われたら……地に膝を着ける訳にもいかない。
修司の内にある怒りが消えていく。代わりに沸き起こるのは紅く、血の様に赤い深紅の炎。
瞬間、宝具である柱と天蓋が吹き飛んだ。その衝撃は辺りを蹂躙し、周囲の兵士達を敵味方関係なく吹き飛ばしていく。
砂塵の中から現れる修司にエルメロイⅡ世は息を呑み、そして笑った。そうだ。これが奴だと、自分の知る何処までも理不尽な白河修司なのだと、冷や汗を流しながら笑みを浮かべた。
「……ありがとな。エルメロイさん、アンタのお陰で漸く自覚できたよ。俺は巻き込まれただけの人間じゃない、正真正銘の当事者だって……だから」
〝そこをどけ〟
一言、それどその言葉には強い意志の籠った一言だった。これで修司は本当の意味で人類最後のマスターとなった。これで少しはあの胸くそ悪い宮廷魔術師に報いる事が出来たと、エルメロイ……否、ウェイバー＝ベルベットはほくそ笑む。
だが、それはそれとして……。
「退いて欲しいなら――退かしてみせろ!!」
エルメロイⅡ世が扇を奮う。吹き荒れる暴風を、襲い来る土塊の波を――その全てを修司は瞬きの内に粉砕して見せた。
「!?」
見えなかった。気付けば元の状態となっていた修司が既に自身の懐に潜り込んでいて、既にその右拳には圧縮された気のエネルギーが集約されている。あぁ、痛そうだなぁ。なんて呑気に考える彼が次に耳にしたのは。
「――ありがとうな、エルメロイさん。アンタは確かに大した先生だよ」
小さく、それでいて確かに聞こえてきた礼の言葉にエルメロイⅡ世は呆れながらも笑って見せた。
「ふん、敵に礼を言うバカがどこにいる」

「ギャラクティカ――マグナム!!」
振り上げられた右のストレートは確かに彼を捉え、ロード・エルメロイⅡ世は空高く舞い上がり、光となって消えていった。
サーヴァントを一撃で倒して見せた修司に唖然となるのも束の間、続々と押し寄せてくる魔物の群れ、気付けば連合軍の兵士達は戦意を失くして敗走し、残されているのは自分達だけとなっていた。
「ブーディカさん」
「ん、どうしたの？」
「ここ、任せても良いですか？」
振り向き、此処を任せたいと口にする修司の目は何処か吹っ切れたモノとなっていた。恐らくは次の自分の目的を決めたのだろう、此処へ来て初めて我が儘を口にする彼にブーディカは呆れながらも笑顔を浮かべて……。
「いいよ、行ってきな。でも、負けるんじゃないよ」
そう言って送り出すブーディカに修司もまたサムズアップで応え、砦を守る壁を難なく飛び越え、砦内部へと侵入する。
そんな修司の背中をブーディカは慈愛に満ちた目で見送り続けていた。

そして、砦の中を進むこと数分、途中で待ち受けていた魔物を瞬で片付けた修司が辿り着いた先には……。
「なっ、貴様、一体何処からゴンバッ!?」
偶々目の前にいたレフ＝ライノールの顔面に今度は蹴りを叩き込んだ。

その29　第二特異点

修司が一足速く元凶の一人と相対している一方、立香達首都攻略組も状況はいよいよ佳境のモノとなっていた。立ち塞がる赤毛の少年ことアレキサンダーを退け、遂に今回の特異点の最大の障害であるローマの始祖ロムルスとの対面を果たした。

始祖は言った。我が子よ、我が腕に抱かれよと。ネロの抱える全てを赦し、愛して見せようと豪語する。その言葉に一切の偽りはなく、ネロも事前に修司から聞いていたとはいえ、始祖の大きすぎる器と愛の深さに一時は迷った。

だが、それでもネロは譲らなかった。この時代の皇帝は自分である、ならば退くわけには行かないと返した。

ネロは言った。確かに始祖の言葉に偽りはないのだろう。連合首都に住まう人々になんの不満もありはせず、ただ盲目にロムルスに従うその姿は確かに不幸ではないのだろう。

だが、人々に笑顔は無かった。如何にも優れた統治があり、どれ程幸福に満たされようと笑顔という華なき都に人の生きる術はないとネロは断言する。

ロムルスは剣先を向けて敵対を顕にする皇帝ネロと敵対した。しかし、それは偏に彼の愛深き故の選択だったからだ。目の前の美しき薔薇の皇帝は一人立ちする事を決めた。ならば始祖として、ローマの父として立ち塞がり子の成長を見届けるのが責務であろう。

斯くして、連合軍との最後の戦いは切って落とされた。紅き燃え滾る剣を奮うネロの剣戟をロムルスは国産みの槍を以て答える。力量差は歴然、何度も吹き飛ばされ、怪我にまみれようとも食い下がるネロに当然立香とマシュも参戦し、エリザベートと……色々正体不明なキャットも加勢する。

戦いは熾烈を極めた。ローマの始祖とも呼べる神祖ロムルスの剛撃は凄まじく、複数のサーヴァントが相手でも全く怯みもせずに正面から打ち克っていく。

此がロムルス、これこそが始祖、連合の皇帝達を束ねる偉大なるローマ。器も、愛の深さも、その全てがネロを上回っている。
しかし、ネロは退かない。退くわけにはいかない。自分はローマ第五代皇帝であるネロ＝クラウディウス、過去も現在も未来も今輝ける皇帝は自分なのだと、紅い紅蓮の少女は吼える。
そして、振り抜かれた刃の一閃は確かにロムルスを切り裂いた。手応えはあった。ローマの始祖であるロムルスを切り裂いたことに些か以上の後悔を抱くネロだが……。
「……眩い、愛だ。ネロ。永遠なりし真紅と黄金の帝国。その全て、お前と後に続く者達へと託す。忘れるな。ローマは永遠だ。故に、世界は永遠でなくてはならない。心せよ」
そんな彼女の後悔すらもロムルスは愛した。
「あぁ、しかし残念だ。あの者の輝きを目に出来ないのは……」
そんな僅かばかりの後悔を残して消えていくロムルスを見送り、立香達は連合軍との戦いを制したことを自覚する。
だが、特異点は依然として存在している。まだ核となっている聖杯を回収していない事を思い出した立香達は恐らくこの後に控えているであろうレフの所へ急ぐ。ネロもこんな事を仕出かしてくれた宮廷魔術師とやらにお礼参りする為、再び剣を握り締めて立香達の後を追う。
立香達が向かうのは玉座の部屋の更に奥、ロマニからの通信で大きな魔力反応を検知したとある事からそこにレフがいるのは間違いない。気を引き締めて挑もう、この後にどんな展開が待っていたとしても冷静に対処できるよう気持ちを整えた立香達が奥の部屋へ踏み入れようとした時。
部屋へと続く扉が爆発し、中から一人の魔術師が吹き飛んできた。レフである。その顔に靴底の痕を刻まれたレフ＝ライノールが地面と垂直に吹き飛んできて立香達の横を通りすぎ、そのまま壁に激突した。
咄嗟に肉体強化でも掛けていたのか、そのまま壁に突き刺さるレフに立香もマシュも何とも言えない表情を浮かべている。対してネロ

やエリザベートは初めて目の当たりにする人体による愉快なオブジェと化したレフを物凄い引き気味で見つめていた。
「お、立香ちゃん達も来ていたか。その様子だと無事に始祖ロムルスは倒せたみたいだな」
「あ～、うん。お陰さまで」
そして案の定、扉だった所から現れる修司に立香達はやっぱりと苦笑う。そして修司はネロの方に視線を向けるとやはり彼女は胸を張って偉そうにしていた。
そんな変わらずにふてぶてしい態度を崩さないチビッ皇帝に修司は笑みを浮かべていると、恐る恐るマシュは疑問の声を上げた。
「え、えっと修司さん？　貴方は確か外で陽動に徹していた筈では？
それが何故此処に？」
「あぁ、丁度陽動（こっち）の方でも一通り片が着いたからね。サーヴァントも倒したし、残るは大したことのない連合の兵士達だけだからブーディカさん達に任せる事にして俺も此方に来ることにしたんだ」
「ち、因みに今飛んできたレフっぽい人は？」
「ん？　そいつはレフ＝ライノールで間違いないぞ？　此処に侵入する際に偶々見かけたからさ、ついでに蹴り飛ばしておいた」
何て事ないように応える修司にマシュ達は少し引いた。幾ら敵対している相手とは言え言葉一つ交わさずに蹴り飛ばすのは人として如何なモノだろうか。尤も、魔術師は通常の人種とは異なるみたいなのである意味真っ当な対応とも呼べなくもないが……。
「ね、ねぇ子ジカ、コイツ絶対ヤバイわよ。出会い頭に人の顔を蹴り飛ばすとか普通の人間のやることじゃないわよ！」
「そうか？　私は思い切りがあって良いと思うが？」
「取り敢えずキャットはニンジンを所望したい」
立香達に歩み寄る修司を好き勝手言うエリザベート、荊軻は豪気な奴だと感心しているが正直立香本人としてはエリちゃんに同意したかった。なんか、キャットも修司を見てからは怯えた様子で彼女の後ろに隠れているし。
そして、修司は立香達の横を通りすぎて壁に突き刺さっているレフ

の足を掴むと、畑に根付いた雑草よりも簡単に引き抜き、無造作に投げ捨てた。
　床にベチャリと倒れるレフから短い悲鳴のような声が聞こえてくる。見るからに痛そうな彼の姿とは裏腹に修司は冷たい声でレフに声を掛ける。
「おら、テメェが今回の特異点の元凶なのは分かってんだ。情報も吐くつもりがないのなら大人しく聖杯を此方に渡せ、でないと……次折れるのは鼻っ柱じゃ済まねぇぞ」
『こわっ!?　修司君、やっている事がまんまチンピラだよ!?』
　後ろでロマニが揶揄してくるが、やり方としては悪くない。少々強引だがレフ＝ライノールは人類の裏切り者、人理焼却を行った黒幕と直接繋がりのある危険人物だが、彼もまた一級の魔術師だ。そんな彼に先手を譲るのは愚の骨頂、反撃を許さない徹底した修司のやり方はある意味で魔術師に対する天敵とも言えた。
「この、この、カス共がっ！　たかだかサーヴァントを倒した程度でいきがるな！　既に終わっている貴様等が悪足掻きしたところで無駄だと言うことを何故理解できん!?」
「そう言うテメェは何様だ。サーヴァントを使い魔としか認識出来ていないテメェは、この特異点で何が出来た？　上からモノを見るだけのお前が一体何が出来た？　足下が疎かだから掬われる。現に、お前が送り込んできた刺客とやらは俺達の誰一人崩せてはいないぞ？」
　ボタボタと鼻血を垂れ流し、尚も憎まれ口を叩くレフを修司は冷たく両断する。レフは確かに歴代のローマ皇帝というサーヴァント達を召喚した。だが、果たして彼等はレフ＝ライノールに従っていたのだろうか。
　答えは否。確かに聖杯を所持しているレフの強制力は絶大だろう、多くの皇帝達はそんなレフに表面上は従い、そんな彼等をレフは操り人形にしていたつもりだったのかもしれない。
　だが、彼等の心にはいつもローマという愛があった。権謀渦巻き、身内にすら毒牙に掛けてきた多くのローマの権力者達。そんな彼等が最期まで捨てなかった一つの矜持、即ち――――愛（ローマ）である。

ローマの始祖であるロムルス、大いなる愛（ローマ）の具現である彼がいたからこそ、歴代の皇帝達はレフに従いながらもその心は自由であり続けられた。多くの敵対者に屠られても、暗殺し、惨殺されても、二度目の死を迎えても尚、彼等の愛（ローマ）が失われる事はなかった。
結局、レフが縛り上げたのは表面上のモノだけ。滑稽な事に使い魔風情と見下していたレフこそが真の意味で一人舞台を演じていただけだった。

「ハッ！　たかが二つの特異点を制しただけでスッカリその気か！　だから貴様等人間は愚かだと言うのだバカめ！」
「……なんだ、もう自分の敗けを認めるのか。意外と素直なんだなお前」
何処までも上から目線なレフを修司は揚げ足を取る形で揶揄する。まだこの特異点を完全に修復したとは言えない、聖杯を回収するまで終われないというのに、レフの口からは既に自分達がこの特異点を制覇したモノだと認識している。
それはつまり今回においてレフは自分の敗北を認めた事に他ならない。修司の指摘に気付いたレフは見る見る内にその顔を赤くさせていく。
「うわぁ、修司さんって結構意地悪な事も出来るんだ」
『マシュ、立香ちゃん、ああ言う人間は色んな意味で孤立しちゃうから君達は決して真似しないようにね』
「は、はい。気を付けます！」
後ろでロマニがいらん事を吹き込んでいるが、今は無視しよう。
「兎も角だ。テメェは既に詰んでいる。大人しく聖杯を渡して王とやらの所に行って泣き付いてこい。私では彼等の相手になり得ませんでしたーって、惨めったらしくな」
鼻で笑い、そう吐き捨てる修司にレフからブチブチと太い何かが切れているのが聞こえてくる。余程腹に据えかねているのだろう、その目は血走っており、その顔は鬼気迫るモノだった。
「……良いだろう、ならば見せてやる。少しは腕が立つ程度でその

気になっている貴様も、凡百のサーヴァントを従えているだけでマスター気取りのそこの小娘にも、我が王の寵愛がなん足るかをみせてやる！」
「ちょ、私なにもしてないのに敵視されてる!?　修司さーん！　人を巻き込むのはやーめーてーよー！」
「いや、悪いのはコイツの懐の狭さであって俺達ではないだろ。適当に聞き流せばいいんだよ」
そんなやり取りをしている内にレフの懐からあるものが取り出される。聖杯だ。光輝く黄金色の聖杯がレフの胸元に吸い寄せられるように消えていく。同時に膨らみ始めるレフの気配、ただ事でないと瞬時に悟った修司はレフを砦の外まで蹴り飛ばした。
骨は砕かれ、黒い血をブチ撒けるレフ。それでも彼の口許には笑みが浮かんでいた。
瞬間、レフは光に包まれた。爆発？　いや違う。自爆による衝撃や爆風は来ていない。ならば奴は何をしたと目を開けた修司達が次に目にしたのは……。
巨大な柱。先の特異点で見た邪竜や海魔よりも巨大な肉の柱が無数の目で修司達を見下ろしていた。その大きさはまるで山、圧倒的気配を見せつけるソレはこの世の何よりも醜悪だった。
「なんだあの怪物は！　醜い、この世のどんな怪物よりも醜いぞ、貴様！」
『はは！　ははは！　ソレハその通り！　その醜さこそが貴様等を滅ぼすのだ！』
『この反応、この魔力！　サーヴァントでもない、幻想種でもない！　これは――伝説上の、本当の〝悪魔〟の反応か!?』
『改めて、自己紹介をしよう。私は、レフ＝ライノール＝フラウロス！　七十二柱の魔神が一柱！　魔神フラウロス――これが、王の寵愛そのもの！』
フラウロス。それは、ある一人の魔術師が契約し従えていたとされる地獄の大公爵。２０の軍団を率いて強大な力を持つとされる悪魔がレフの真の姿だった。

その異様、そのおぞましさ、その邪悪さ、目にしたことのない立香達も分かる。目の前にいるのはその真偽は兎も角として伝説に残る悪魔に比類する存在なのだと。
「あぁ？　魔神？　こんなのが？」
立香達が驚愕している中で修司だけは怪訝な顔付きでフラウロスと名乗る肉の柱を見上げている。確かにこの魔神柱とやらは強大かも知れない。強いし、場合によっては手こずるかもしれない。
だが、本当にこれが魔神と呼べるのか？　魔神とはその名の通り魔なる神の総称、断じてこの程度の相手につけるべき名前ではない筈だ。
それこそ、自身が嘗て夢見た三体の内の一機の”ＺＥＲＯを背負った鉄の巨神”の方が魔神と呼ぶに相応しいと思える。
ともあれ、目の前の肉の柱も脅威なのは違いない。大きいのはそれだけで武器になる。幾ら遠くに蹴り飛ばしてもコレでは周囲に展開する味方部隊にだって影響が及ぶだろう。
ここで此方の相棒を呼ぶか？　一瞬だけそんな事を考える修司だが、先にも述べた様に外ではまだローマ軍兵士が戦っている。ブーディカ辺りが撤退指揮を取ってくれているかもしれないが、それでも間に合うかなんて分からない。
周囲の状況が不確かな以上、相棒を呼ぶのは得策じゃない。ならばやはり先手必勝の一撃かと修司が両手を腰だめに構えた瞬間、立香は叫んだ。
「ドクター！　此方に呼び出せるサーヴァントはいる!?　可能なら彼を呼びたいんだけど！」
「せ、先輩!?」
『か、彼？　……あ！　そ、そうか！　彼の宝具なら確かに此方が有利に立ち回れるかも！』
『そう思って、既に彼を呼んでいるよ！　出来る万能者ダ・ヴィンチちゃんを宜しく！』
「お、おい立香、お主何を？」
立香が叫び、ロマニが察し、既にダ・ヴィンチがその準備を完了し

ている。しかし、それはさせぬと肉の柱――魔神柱が動き出す。
『無駄だ！　何をしようと貴様等下等生物に逃れる術はない！　消えろ！』
「お願い――――来て！」
魔神柱の瞳が瞬いた。瞬間、光が弾け周囲が爆発した。砦を一撃で瓦解するほどの爆風、その中で佇むのは盾を持つマシュと――――。
「やれやれ、まさかこんなギリギリのタイミングで喚ばれるとはな。次からはもう少し落ち着いた場所で喚んでくれるのを期待するよ」
熾天覆う七つの円環。七つの花弁を携えてマシュと共に立香達を守護する紅い外套の男が悠然と立っていた。
「全く、色々言いたいことはあるが……先ずは、目の前の汚物を掃除する事から始めよう。魔力を回せ、決めにいくぞマスター！」
「うん！　令呪を以て貴方に託す！　皆を守って、アーチャー!!」
立香がなけなしの魔力を絞り、令呪を起動させる。託すのは目の前の敵を屠る為の力ではない、此処にいない誰かの為に、自分達の戦いに巻き込まない為の傲慢で暖かく、優しい願い。
そんな彼女の浅はかな願いを……正義の味方が拒絶するわけなかった。

I am the bone of my sword.
Steel is my body, and fire is my blood.
I have created over a thousand blades.
Unknown to Death.
Nor known to Life.
Have withstood pain to create many weapons.
Yet, those hands will never hold anything.
So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS.

◇

――――気付けば、ネロ達は荒野に立っていた。辺りにあるのは何処までも続く荒野と、突き立てられた数多の刀剣。上を見上げれば雲の掛かった空と調律を司る歯車。

固有結界。術者の心象風景を具現化し、現実を侵食する魔術の最奥。この世界は彼の生涯を象形となったモノ。

《無限の剣製》。これが英霊エミヤに許された最初にして奥義の魔術である。

「やれやれ、よもや私の宝具が都合のいい決闘場となるとはね。一応、これでも魔術の奥義なのだが……」

「うん、ありがとうエミヤ！　今度肩叩きしてあげるね！」

「それ、絶対他の連中の前で言わないでくれよ？　唯でさえ私は食堂のオカンなどと不名誉な渾名で呼ばれているのだぞ」

「いや、実は満更でもないだろお前」

「たわけ、そもそもお前が不甲斐ないからこんな事になっているのだろ！　全く、カルデアでもそうだがお前は……」

「やべ、薮蛇だった」

固有結界という外界から隔絶された世界にいる所為か、今一つ緊張感に掛けるやり取りにマシュは戸惑い立香は苦笑う。

『いい加減にしろカス共！　貴様等の脳には蛆でも湧いているのか!?』

そして当然目の前の悪魔がそれを許容する事はない。眼光を光らせ、修司達のいる場を爆発させるが、エミヤが立香を、修司がネロを抱き抱えて回避する。

荊軻もキャットも事前に読んでいたのか、難なく回避して着地す

る。やはり凄まじい威力だ。一つでも当たればサーヴァントでも無事では済まない火力を前にエミヤは笑みを浮かべている。
「さて、意気込みは充分な所で諸君にお知らせだ。急な召喚の弊害かマスターの令呪を以てしても私の固有結界は持ってあと１０分、万全な援護射撃に至っては数分弱が限界だが……やれるかね？」
「充分、何だったら紅茶を淹れる時間も作ってやるよ」
「ほう？　大きく出たな。ならば決め手はお前に譲るとしよう。精々外すなよ」
「はっ、当たり前だ」
「では……行くぞ！」
　瞬間、山吹色と紅い風が無限の荒野に吹き荒れる。まるで友人同士の様な気安さで戦場を掛ける二人にネロは目を丸くしながら二人の苛烈さを目の当たりにする。
「やれやれ、あの二人完全に私達の事を忘れてたぞ？」
「もう！　アイドルの私を差し置いて目立つなんて許さないわよ！」
「それは不味い。キャットは寂しいと死んでしまうのだ。これは最早ニンジンだけでは収まらぬ。マスターには後で猫じゃらしも所望するワン」
「よし、此処にいるマトモなサーヴァントはどうやら私だけのようだな！」
　そう言って荊軻とキャットの二人も修司達に続いて魔神柱に肉薄する。強大な敵を相手に一切怯むことなく戦う彼等にネロは悔しさと歓喜に震えながら見つめる。
「全く、狡い奴等よ。コレでは余の見せ場がないではないか。だが……うむ！　良いぞ！　ソナタ達の舞踊、まさに薔薇の如くだな！」
　そんなローマ皇帝の応援を背にしながら修司達は魔神柱フラウロスに肉薄し、それぞれ攻撃を仕掛けた。荊軻はその短刀で、キャットは自身の爪で、エリザベートは自慢の槍で、それぞれ切り裂き貫いていく。
　しかし、それでも魔神柱に対して決定打にはなり得ない。

『バカが！　その程度の針に我が肉体に傷など付けられるモノか！　無意味！　無駄！　無価値！　所詮人間の力などこんなものだ！』
「バカ笑いも結構だが……そら、追加だぞ！」
頭上から降り注ぐ無数の刀剣、立香の令呪によりブーストされたエミヤの宝具は、固有結界の性能も底上げされている。肉の柱に突き刺さる一本一本の刀剣が爆発し、フラウロスの目を焼き潰していく。
『ヌガァッ!?　おのれ、おのれおのれおのれおのれぇぇっ！　たかが猿が、たかが猿人類がぁ！　図に乗るなぁッ！』
再び、魔神柱の眼が瞬き辺りが爆炎に包まれる。その巨体に見合った火力、しかしフラウロスは気付かない。自身が最も憎み、踏みにじりたいと願う奴の行方を。
サーヴァント達の目論みに気付いた時は……既に、勝負は決していた。眼前の下に潜り込んでいた山吹色の男、その両手には膨大なエネルギーの塊が集約されている。
「そら、決め時だぞ！　白河修司！」
「かぁ……めぇ……はぁ……めぇ……」
『な、何だその光りは？　く、来るな、近寄るな！　その光を……私に向けるなぁ！』
それは、魔神柱にとって未知の光だった。そう、フラウロスは、レフ＝ライノールは知らない。人間を取るに足らないと豪語していた彼は白河修司の力を知らない。
「波ァァァァァッ!!」
放たれる蒼く白い極光が魔神柱を呑み込んでいく。フラウロスは必死の抵抗をするが、彼の瞳が瞬く事は最早ない。レフ＝ライノール＝フラウロスは、自身が見下して蔑んだ人類にものの数分で完敗するのだった。

◇

気付けば、立香達は砦の中にいた。天蓋は破壊され、砦の大部分が吹き飛んでいるが、それでもローマ軍の兵士達が無事な事からどうやら決着は付いたらしい。

前を見れば修司達がいる。恐らくはエミヤが宝具を解除したのだろう、彼等の少し離れた所には倒れているレフがいる。油断なく見据える彼等の邪魔にならないように近付く立香だが……ユラリと立ち上がるレフに凍り付く。

「おい、まだやる気かよ。いい加減ちょっとしつこいぞ」

「この男ではないが……確かにそちらの勝機は既にない。諦めて、大人しく敗北を認めた方が潔いと思うがね」

「ふ、はは、阿呆が。どうやら未だに理解が及んでいないらしいな。特異点を何とかした所で貴様等にはどうしようもないというのに……つくづく人間は愚かだな」

「何言ってんだ？　テメェもその愚かな人間の一人だろうが。他所から貰った力でいい気になって、気が大きくなって他者を見下す。テメェが嫌う人間とビックリするほど一緒だろうが」

「黙れェッ！　あぁ、もういい。もう言葉を交わすのも疲れた。貴様がどれ程強かろうが、何処でそれ程の力を手に入れたのかなんて……最早どうでもいい。白河修司、貴様はここで死ね」

そして、再びレフは聖杯を手に空へ掲げる。やらせはしないとエミヤが聖杯を握るレフの手を切り落とし、修司がだめ押しに拳を顔面に叩き込もうと振り抜く。

だが、それでも一手遅かった。命を断つ気で放った拳は突如召喚されたサーヴァントによって防がれる。

そして、防がれた何かによって修司は吹き飛ばされた。ダメージはない、だがそれ以上に召喚されたサーヴァントに修司は驚いていた。

「……古代ローマそのものを生け贄として、私は、既に大英雄の召喚に成功している。喜ぶがいい、皇帝ネロ＝クラウディウス。これこそ、真にローマの終焉に相応しい存在だ。さぁ人類（せかい）の底を抜いてやろう！　七つの定礎、その一つを完全に破壊してやろう！」
「――我らが王の、尊き御言葉のままに！　来たれ！　破壊の大英雄アルテラよ!!!」
――現れたのは、褐色の少女だった。華奢な腕に細身な体、触れれば吹き飛びそうな体躯の少女。だが、修司は何故か知らないがこの少女に言葉にできない違和感を感じていた。
強そうとか、弱そうとか、そう言ったモノではない。何かが違う。根拠はないが、目の前の少女は本来の姿ではない気がした。
そんな修司の反応に気分を良くしたレフが早口に捲し立てる。
「さぁ、殺せ。破壊せよ。焼却せよ。その力で以て。特異点もろともローマを焼き尽くせ！　ははは！　終わったぞロマニ＝アーキマン！　人理継続など夢のまた夢！　このサーヴァントこそ究極の蹂躙者！　アルテラは英雄ではあるがその力は――」
「――黙れ」
「――へ？」
自慢気に語るレフの台詞はそれ以上続く事はなかった。他ならぬ自ら召喚されたアルテラによって、その体を真っ二つに両断されたのだ。
その光景に立香達は総毛立つ。なんの脈絡もなく、唐突にレフという自分達の敵を切り捨てたアルテラという英雄に、立香とマシュは目を見開いて硬直する。
「大王アルテラ、まさかここで出してくるとはな」
「なぁエミヤ、確かそれってフンヌの……」
「あぁ、どうやら戦いはここからが本番らしいな」
エミヤは干将・莫耶の夫婦剣を、修司は気を高めてそれぞれ構えをとる。明らかに普通ではない様子の敵サーヴァント、その圧は先の魔神柱すらも凌駕している。
荊軻もキャットもエリザベートも、誰もがアルテラを注視する中、

アルテラと呼ばれる少女は聖杯を吸収し、謳い上げる。
「私は――――フンヌの戦士である。そして、大王である。この西方世界を滅ぼす、破壊の大王」
次いで、彼女を中心に光が集まる。それは彼女の先制攻撃なのだと、修司は叫びマシュは宝具を展開させる。
「お前達は言う。私は、神の懲罰なのだと。――――神の鞭、なのだと」
瞬間、虹色の極光が放たれ、ローマの空は貫かれた。

その３０　第二特異点

連合軍首都、その拠点から虹色の光が目撃されたのはブーディカがローマ軍兵士達を連れて一時撤退をしたのとほぼ同時だった。荒々しくも神々しいその光りは半壊していた砦を蹂躙し、地球の重力を越えて空の彼方へと消えていく。

今のは紛れもなく対城宝具の威力を秘めていた。あれだけの魔力を放出出来るサーヴァントは味方にはいない筈、当然ネロも。

唯一可能性があるとするならば修司位だが、果たして彼に彼処までの芸当が出来るだろうか。本音を言えば今すぐにでも応援に駆け付けてやりたい所だが、生憎と状況がそれを許してはくれない。

あの気持ち悪い肉の柱が出てきてから、妙に死霊系やら魔物の出現率が高い。今は自分達でも対処できるがいずれ総量は軍隊規模で膨れ上がってくるだろう。そうなれば間違いなく、この特異点はより破滅を加速させる。

全てはあの砦の内部での出来事がこの事態を引き起こしているに違いない。いっそのことローマ軍の連中なんてほっとけばいいなんて思ったりもするが……。

「でも、任されちゃったからね。やるしかないかぁ！」

修司にこの場を、何よりローマ軍の皆を任せたと頼まれた以上、その選択肢は彼女の中から消えている。年下の男から頼られた以上、お姉さんとしては頑張らない訳にはいかないのだ。

（ここは任されたからさ、そっちも頑張りなよ）

恐らく、砦の内部での戦いは佳境を迎えているのだろう。正念場を前にしている筈の修司にブーディカは健闘を祈りつつ、沸いて出てくるスケルトンの群れを蹴散らすのだった。

◇

「開幕からブッ放してくるとはな。やってくれるじゃないか。おいエミヤ、生きてるか？」
「どうにか、と言った所だが。修司、お前の方こそ無事か？　今の光、逸らしたのはお前の仕業だろう」
崩れた瓦礫の中から修司とエミヤが現れる。あの光の中で共に五体満足でいられたのは修司が咄嗟に片腕で弾いたからだ。そのお陰でマシュ達はマスターである立香とネロを守る事に集中でき、エリザベート達も自身の身を守る事が出来たのだ。
その甲斐あって放たれた虹色の光はローマの大地に直撃する事なく、空の彼方へと消えていったのである。
だが、代償はゼロではない。対城宝具という巨大なエネルギーの奔流を片手で弾いた事で修司の腕からは血が噴き出していて、自慢の胴着が綺麗に上半身の右半分が吹き飛んでしまっている。致し方ないと修司は残りの上半身部分を破り、慣れた手付きで傷口に宛がい止血を行う。
そして弾いた右腕を適当に動かすと骨に異常がないことも確認できた。大丈夫みたいだ。そう口にする修司にエミヤは少しばかり引いた面持ちで溜め息を吐く。
「やれやれ、あれだけの魔力の奔流を受けて皮一枚抉れただけとは筋金入りだな。なんだ、お前の主食はボンドだったりするのかね？」
「いやそれどこの異星人の話？　ていうか、何故に素直に人の心配出来ないかねこの皮肉屋は」
「だったら心配される位の可愛気を見せたらどうかな？　尤も、その

様子だとそれもいらない世話のようだがね――――来るぞ」
瞬間、修司とエミヤの間を褐色の少女が斬り込んで来た。その踏み込みの速さから繰り出される剣閃は凄まじい。ただ一振りを見ただけだがそれでも目の前の少女が並のサーヴァントでないことは容易に理解できた。
ならば、この瞬間に片を付けるまで。集中力と気力を高めた修司がエミヤと共に連携で仕掛けようとするが……。
「――――」
「なっ!?」
「チィッ!」
あろうことか、少女の剣筋が突然伸びた。無軌道に描き、そして奮われる剣戟はまさに鞭。初めて目にする剣の軌道に思わず修司は驚きの声を上げた。
「マジか、伸縮自在な剣って初めて見たぞ。エミヤ、一応聞いておくがあれは蛇腹剣の類いでは――――」
「ないな。あの剣にその様な機構はない。文字通り鞭、彼女自身も言っていただろう。自分は神の鞭であると」
破壊の大王、レフ=ライノールは彼女をそう呼ぶが、少女の目は此方を映していながら自分達を見てはいない。そんな彼女は自身を神の鞭と呼んだ。より正確には自分達がそう呼んでいるらしいが……いずれにせよ、厄介な相手であることは間違いない。
「話し合いは出来そうにない、か。なぁエミヤ、一応聞くがお前の宝具は今すぐ使えたりは――――」
「無理だな。マスターの令呪をもう一度使って畳み掛けるのも手だが……む?」
「なんだ?　気配が……増えてる?」
エミヤと修司が目の前の少女をどう制するか簡潔に話し合う中、ふと違和感を覚えた。辺りの空気が急激に濃くなるような、もしくは重くなるような雰囲気。すると次の瞬間、大地を震わせるような地響きが起こる。何事かと思い立香が外を見ると無数のエネミーが一つの馬車に向かって雪崩れ込む様に向かっている。

その異様な光景に誰もが戸惑っていると、ロマニから通信が入ってきた。
『た、大変だ！　連合首都を中心に膨大な数のエネミー反応があった！　その全てが首都ローマに向かって進軍中！　まさか、これもそこのサーヴァントが引き起こしているのか!?』
「なんと、それはまことか!?」
「どうやら間違いないようだ。どのエネミーも皆一つの場所に向かって進軍している。奴等の向かう方角は……皇帝である君が一番よく分かっているのではないかね？」
「っ！」
エミヤの問いにネロは愕然となった。魑魅魍魎が向かっているのは紛れもなく首都ローマ、彼処には多くのローマの民が住んでいる。
既にエネミーの群れの総量は連合軍を大きく上回り、ローマ軍を呑み込む勢いだ。このままでは兵士達は勿論ローマの民達も蹂躙されかねない。
「――――」
そんな全員が外の光景に唖然としていた時、アルテラは跳躍し、エネミーの群れの中へと消えていく。咄嗟にエミヤが弓矢で狙い打つも伸縮自在な剣によって防がれてしまう。
瞬間的、エネミー達から力が溢れ出した。アルテラには聖杯を吸収した恩恵がある為、その影響か死霊も魔物も分け隔てなく活性化し、その勢いは一気に加速する。その様相はまるで死の軍隊である。
『今、解析及び計算結果が出た！　あのエネミー群が首都ローマに辿り着くまで約１０分！　先導しているのはフンヌの戦士アルテラ！　彼女を倒さない限りあの群れが止まることはない！　もし失敗すれば……ローマは、人理復元は成されないぞ！』
焦りながらも的確な情報を提供するロマニと、解析してくれたカルデアスタッフは流石の仕事ぶりと言えた。状況は最悪、しかしそれを防ぐ手立てはある。そして何より……。
「させるものか。余のローマを、余の民達を、余の愛を、あの様な者共に消されてなるものか！」

ローマの薔薇は、未だ華やかに咲き誇っている。その瞳には鮮やかな炎が燃え滾っている。
始祖ロムルスは言った。人は永遠であると、故に世界は永遠でなければならない。人間という種を信じ、そしてそのバトンは皇帝ネロに託されている。ならば、自分こそは諦めてはいけないと、薔薇の皇帝は立香達に向き直る。
「藤丸立香、マシュ、そして白河修司と英霊達よ！　余のロー[世界]マを救うためにどうか今一度その力を貸して欲しい！」
「勿論だよ！」
「で、ですが既に対象サーヴァントのアルテラは見失っています。探すにもこのエネミーの群れの中では……」
「あ、それなら多分大丈夫だよ。大体の位置は気配で分かるから。ていうかあの褐色少女、普通に先頭を走ってるな」
「ドクター!?」
『此方でも観測したよぉ！　修司君の言う通りアルテラは現在群れの先頭を爆走中！　前の特異点もそうだけど修司君の策敵能力高過ぎない!?』
「いや、あれだけデカイ気配をしてりゃ何処にいても分かるだろ。そっちは諸々観測してるんだから遅れるのは仕方ないと思うし」
「――お前はいい加減、自分に関する諸々に気付いた方がいいな」
「？」
修司の妙に高い策敵能力にロマニは涙目になるが、そもそもカルデア側の主な役割はサポート全般であって策敵だけが仕事ではない。立香達の周囲の魔力係数やら情報伝達もこなさなくてはならないのだから、そう落ち込む必要はないと修司は語るが、それが余計にロマニの心を抉る事になるとは気付かない。
そんな修司をエミヤは呆れながら指摘するが、本人は理解している様子はない。追及してもいいが、今はそんな事をしている場合ではない。目的が定まったのなら次は役割と行動を決める時だ。
「と、そんなことは今はどうでもいい。修司、これからどうする？」
「勿論、追撃だ。そしてその手段は既に確立させている。マシュちゃ

ん、ちょっと俺の拳に乗ってくれる？」
「え？　こ、拳にですか？」
反芻しながらマシュは修司の握り拳を注視する。サーヴァントのバランス能力なら問題ないだろと頷く修司にエミヤと荊軻はこれから起きることに予想出来たのか、それぞれ対称的な笑みと苦笑いを浮かべており、フォウは悲しげな鳴き声と共に顔を手で覆っている。器用な獣だ。
そして、言われるがまま修司の拳にマシュが乗る。人一人乗せているのに全くぶれる事のない腕力、改めて修司の身体能力に驚嘆しているのも束の間。
「よし、それじゃあマシュちゃん。これからアルテラに向けて振り抜くから、タイミングを狙って宝具を展開してみて、多分それだけで奴の足を止められる筈だから！」
「は、はい！　――え？」
勢いよく返事をしたものの、何だかとんでもないことを言われた気がする。聞き間違いかと思いマシュは聞き返そうとするが……既に遅かった。
「それじゃあ――いっけぇぇぇッ!!」
「ひゃぁぁぁぁぁっ!?」
「ま、マシュゥゥゥッ!?」
振り抜かれた拳はマシュを空の彼方まで瞬く間に吹き飛ばしていく。その光景に立香は目が飛び出すほどの驚きを顕にするが、既に事態は次の段階に移行している。
いきなり過ぎる展開に立香が文句の一つでも修司に言おうとした時、既に本人の姿はそこにはなかった。マシュを吹き飛ばした位置よりも更に後ろ、見慣れた前傾姿勢――クラウチングスタートの格好で其処にいた。
瞬間、いやな予感を感じた立香は腹筋に力を込めた。カルデアにて賢者ケイローンの指示を受け、ひたすら行ってきた筋肉トレーニング。最近妙に筋肉が付き始めた事に乙女心は複雑な反応をするようになった――その筋肉に藤丸立香は力を込め、同時に魔力による強

化を施した。
「んじゃ、こっちもいくぞ。エミヤ、後は宜しく！」
「あぁ、露払いは任された。精々暴れてこい。マスター」
「な、なに？」
「なに、奴もバカではない。加減は勿論するだろうが、まぁ……頑張ってくれ」
普段、カルデアでは厳しい表情の多いエミヤがここでまさかの慈愛に満ちた目線を投げてくる。そんな彼の表情を目の当たりにした立香は、やはり自分の予感は間違いでないことを思い知る。
そして次の瞬間、藤丸立香は風になった。恐らくはスタートダッシュを切った修司が立香と皇帝ネロをその両腕に抱え、勢い乗せて跳躍したのだろう。
瞬く間に砦は小さくなっていく。とんでもない速度で背景が進んでいくが、礼装のお陰かそこまで衝撃はキツくない。だが、腹部に走った衝撃が立香とネロの胃袋を強制的に押し上げてしまい……。
「「オロロロロ……！」」
悲しきかな、ローマの大地に二人の吐瀉物が飛来し、進軍するエネミーに直撃するのだった。

◇

――――それは破壊の具現。破壊の体現、この世の全てを破壊す

ると言う一種の概念的機構であった。破壊の大王アルテラ、またはアッティラ。フン族の戦士として知られ、大帝国を築き上げた西方世界の支配者であり、ローマを滅ぼした遠因となった人物。レフが最期に召喚した彼女は確かにローマを滅ぼすに足る力を秘めていた。

そして、その時は遂に来た。進軍を開始して彼女の視界は遂に栄光のローマを捉えた。自分は破壊の化身、故に壊す。壊し、壊して、粉砕する。それが自分の存在の証明なのだと、疑いすらしない彼女はその剣先を街に向ける。

するとその時、違和感を感じた。空の彼方から何かが飛来してくる音、不思議に思い振り向けば、其処には大きな盾が既にアルテラの眼前にまで迫ってきていた。

「疑似展開（ロード・カルデアス）／人理の礎!!」

――曰く、硬さとは強さである。マシュ・キリエライトの体に眠るサーヴァントの正体は未だ修司には分かっていないが、その性質が守護に特化しているモノであることは何となく理解している。

それによりその防御力は生半可なサーヴァントの攻撃では通る事はなく、また貫かれる事はない。そんな防御力を一転させて即興で思い付いたのが投擲である。マシュの防御力は鉄壁、ならばその鉄壁を利用しての投擲。なんという逆転の発想、そんなんだからボッチなのである。

当然、アルテラは剣で以てこれを防ぐ。彼女の手にしているのは軍神の剣、彼女の逸話を下に手にすることになった神マルスの剣。防ぐのは容易い、容易いが――予想よりも遥かに重かった。

遥か連合首都から投擲されたマシュは、現代における弾道ミサイルと化していた。道中はその勢いの凄まじさに何度も泣きそうになり、実際泣いた。カルデアに戻ったら皆に言い付けてやると子供っぽい仕返しを考えつつ、半ばやけくそに解放した彼女の宝具は無表情だったアルテラの顔を焦りに歪めるほどの凶悪な威力になっていた。

「私……は、破壊の大王！　敗北は……ありえ、ない！」

一瞬の攻防、制したのは――アルテラだった。圧し負ける自分の体に聖杯からの力を借りて補助した彼女は強引にマシュと盾を弾き

飛ばした。
　自分の勝ちだ。そう確信したアルテラが次に目にしたのは――――マシュを追って飛来する修司だった。
「なっ!?　ふ、フォトン――――」
「遅い!!」
　よもやマシュだけでなく、人間である筈の修司までが飛来してきた事にアルテラは驚きを隠せなかった。否、気付くべきだった。目の前の人間はただの人間でないことに……仮にもこの男は自分の初撃を避けた男なのだから。
　咄嗟に剣を構え、宝具を展開しようとするも――――遅い。飛来するマシュだけが自分に対する最後の対抗策だと思い込んでいたアルテラは……。
「エクス――――カリバー!!」
　自身の……文字通り宝である剣ごとその霊核を光輝く手刀にて両断されるのだった。

◇

「――――ふぅ、終わったぁ。どうにか間に合ったみたいだな」
　咄嗟に思い付いた電撃作戦、通用するかは五分五分だったが、結果的に見れば最上のモノとなっている。もし自分の一撃が浅かったら止めにネロが追撃をしてもらおうと思っていたが、まさかの結果に修司は満足そうに頷いた。エネミー達も進軍を止めているし、この選択は間違いでなかったと安堵するが……。
「あぁ、剣が。私の……マルスの剣が。ごめんなさい。不甲斐ない

私で……ごめんなさい」
しくしくと涙を流して泣きじゃくるアルテラに修司は物凄い罪悪感を感じていた。いや、だって仕方ないやん。あの時はこうする事が最善だと思ったし、て言うかそもそもこの少女はレフに召喚された切り札、即ち敵だったのだ。
仕方ないこと、そう思っても心に突き刺さる痛みは中々抜けきらない。マシュも立香もネロも涙目で睨んでくるし、心なしか消え行く死霊系のエネミーからも責めるような視線を向けられている気がする。
――――やがて、エネミーの群れは消えていく。崩れるように、最初からいなかったように消える魔物の群れ、そして同時にアルテラもまた光となって消えていく。残されるのは今回の特異点の元凶、その発端となった聖杯だけとなった。
これにて一件落着。と、言いたい所だが。
「おのれ、修司、おのれ白河修司！　余の活躍を根刮ぎ奪うだけでなく、余をまさかの吐瀉物皇帝にしおってからにぃ！　そこいらの暗殺者より質が悪いぞ!!」
「前々から思ってたんだけどさぁ、修司さんって道徳的にオッケーだったら何してもいいって考えている時ない？　例えば今、とか」
「ドクター、私理解しました。これが、理不尽に対する怒り！　という奴なんですね！」
特異点が修復されようとしているのに、尚も立ち上る怒りの炎。ワナワナと震える乙女達に修司はやっべと息を呑む。
どうすれば許される。どうすれば機嫌を直して貰える？　僅かな時間、考えに考え抜いた修復が最後に編み出したのは――――。
「ご、ごめーんにゃ♪」
テヘペロである。素直に土下座でもすればいいものを、この男よりにもよって怒れる乙女にビビって最悪の選択を選びやがったのである。
故に――――。
「「くたばれ、この理不尽バカ!!」」
「ギャーッ!?」

『うーん、これは擁護出来ないなぁ』
「フオウフオウ（やれやれだぜ）」
ネロと立香の二人から今日一番のドロップキックを食らうことになり、マシュからはポカポカと叩かれるハメになった。
そんな訳で、今回の特異点もハチャメチャに終わった立香達はネロに別れを告げ、万雷の喝采を受けながらカルデアへと帰還するのだった。

――定礎復元――

その31

※月○日

第二特異点の修復、定礎復元も無事に終わり次の特異点へ備えるために今日も自分は自分に出来ることをこなしてきた。

といっても、自分のやることは体を鍛えるためのトレーニングや適度な休息を取ったりする程度、ケイローン先生曰く、まだ特異点を修復して二日と経っていないのだから今日まではゆっくり休むようにとの事だ。今日のトレーニングは明日からの本格的な鍛練の為の慣らしみたいなもの、事務作業や書類仕事も休むようにと割りと強めに言われてしまった。

自分としてはまだまだやれるのだが、人理焼却は未だに払拭できず不測の事態に備えてマスターが万全な状態で保っているのも充分な仕事だという。賢者ケイローン先生にそこまで言われては自分もとやかく言える訳がなく、取り敢えず今日までは大人しく生活しておこうと思う。

立香ちゃんとマシュちゃんには第二特異点での出来事について改めて謝罪し、どうにか許してもらえた。向こうもあの時はあれが最善であった事に理解してくれたらしく、苦笑いを浮かべながらもどうにか受け入れて貰えた。

そんな彼女達の優しさに報いる為、自分が最も得意とする料理を振る舞おうとしたのだが……何故かエミヤとクー・フーリンの二人に阻まれてしまった。それも物凄い形相で止めろと怒鳴ってくるのだから自分も困惑してしまった　。

せめて普通の料理にしろと言われたので、立香ちゃんの口にも馴染みのあるオムライスを作ることにした。幸いカルデアの材料にはまだまだ余裕がある、卵、玉ねぎ、ソーセージといった各種素材を用いての料理は思った以上の出来映えとなった。

卵のフワフワ具合も文句なし、いざ実食といった所でマシュちゃんがドクターを連れて食堂にやって来た。折角なので二人の分も作っ

てやると、三人とも何とも美味しそうに食べてくれるのだから作った甲斐があるというもの。
この分ならエミヤを料理長の座から引きずり落とすのも時間の問題か？　なんて冗談を口にすると、いつでも相手になってやると真剣な眼差しで返された。コエーよ、何処まで本気なんだよコイツ。
ブーディカさんも特異点を修復したお陰か召喚に応じてくれ、今ではエミヤに続く厨房の支配者になりつつある。この分だと自分が厨房で料理を振る舞う機会も何れは減っていくかもしれない。
それに少しずつ寂しく思いながらも自分用の麻婆豆腐を作り、皆と一緒に食べるのだった。その際に麻婆豆腐を頬張る自分にエミヤとクーは信じられないモノを目の当たりにした様子で自分を見てくるが……いちいち言動が失礼過ぎんかねあの二人。

※月α日
本日の召喚、相変わらずサーヴァント召喚に勤しむ立香ちゃんだったが、今日はある三人のサーヴァントを喚び出してくれた。
一人はジャンヌ＝ダルク。第一特異点でも、そして自分のいた世界でもその守護の力で活躍してくれたフランスの聖女がカルデアに参戦してくれた。
最初は自分達の事や第一特異点での記憶はない全く別のジャンヌさんかと思ったら、なんと彼女は俺の世界から来たジャンヌさんらしいのだ。憶えている内容も記録としてではなく、実体験によるものだと語っているし、何より俺しか知らない筈の向こうの世界の出来事をスラスラと語ってくれた事で彼女の言っていることが事実だと確信した。
原理は分からないがどうやら自分とジャンヌさんの間にある縁が強く反応した結果らしい。と、エルメロイⅡ世さんはそう解釈している様だ。
そう、先の特異点で戦った彼もジャンヌさんと同様に俺との記憶を保持した状態で召喚されたのだ。根拠は召喚された際の表情、最初こそは冷静沈着な先生みたいな顔をしていたのに自分の顔を見るなり

ゲェッ!?　と表情を変えたのを見て確信した。
神霊やら英霊として格のあるサーヴァントなら覚えているかもしれないが、此処までハッキリと記憶された状態で召喚されるのは事例がないという。まぁ自分は魔術師でないから英霊召喚に関する知識もない為、取り敢えずエルメロイⅡ世さんの話で納得することにした。
因みに、二人には自分が世界移動をした異邦人である事は自分が話すまでカルデアの皆に黙ってくれる事になった。召喚された最初の反応は特異点での記憶が僅かながら残っているという理由でごり押す事になり、意外なことにそれがすんなり受け入れられた。
そして三人目、セイバーオルタことアルトリアさん（黒）が来てくれたのだが、自分の姿を視認した瞬間ネコみたいに翻り、立香ちゃんの後ろに隠れて威嚇してきた。
どうやら、彼女も自分との戦いを覚えていたらしく物凄く怯えた様子で終始自分を威嚇していた。ドクター曰く特異点での記憶が僅かながら座に残っていたらしい。そんな彼女の様子もあって先に述べたエルメロイさんの話にも説得力が増したらしい。
……まぁ、皆が納得してくれたなら別に良いんだけどさ、オルタさん少しビビり過ぎじゃない？　何で俺と話をするだけでエミヤやアルトリアさんの後ろに隠れるのさ、仕方ないだろ！　そもそもの原因は彼女にあるんだから！
と言っても関係が改善される事はないので、取り敢えずこの後ご飯を作って気分転換でもするとしよう。

「――――む？　こんな所にバーガーが？　エミヤが作ってくれたのか。ふむ、匂いも悪くない。誰もいないのだから摘まみ食いしてもいいだろう」
「む？　セイバーオルタ、そのハンバーガーは一体何処から……ブーディカ氏が作ったものか？」
「え？　私知らないけど……」
「キャットも知る由がないワン」

「ならば、一体だれが……」
「おーいエミヤ、ここに置いてた俺の特製麻婆バーガー知らね？」
「「!?」」
↑Ｔｏ　Ｂｅ　Ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．
その日、一人の英霊が座に還り掛け、白河修司は当分の間麻婆関連の料理を作ることを禁止にされた。

※月β日
昨日、何だか不思議な夢を見た。ジャンヌさんが火刑に処される場面に遭遇する所、当然自分は周囲の人垣を押し退けて彼女を救出し、その場から彼女を連れて行こうとした所で……ジャンヌ・ブラックがファンキーな自称悪魔と一緒に現れた。
何故第一特異点で戦った彼女が今更出てくるのか不思議に思ったが、まぁ夢だし、過去の敵が現れるのも何か分かるし、まぁいっかと納得するのだが、そう言えば自分はジャンヌ・ブラックとはマトモに戦ってないんだよな。
なんか矢鱈とジャンヌさんを煽ってくるし、昔は潔く死んだくせに今回は醜く生き残ろうとするか、なんて宣うものだからついカッとなってブラックの旗をへし折ってやった。あと剣も。
人を煽るくせに武器をへし折られた程度で泣き出すとか、少しメンタル弱すぎね？　いや、夢の話なんだけどさ。
そもそも、ジャンヌさんが死を望もうと望むまいとそんな事は過去の話と何ら関係ないだろう。それはそれこれはこれ。死にたくなったら勝手に死ねば良いし、死にたくないなら助ければ良いだけの話。何をそんなに複雑そうに話を歪めるのか、これが分からない。
尤も、仮に死にたいと本人が願っても俺は勝手に助けるけどね。どんなに罵倒されたり罵られようが結局俺は自分のしたいことをするだけである。
勝手に死にたいのなら、勝手に助けるまで、そう泣きわめくジャンヌ・ブラックに言い放った所で夢は終わった。
……なんか、夢の話なのについ熱くなってしまった。ジャンヌさ

んが関わっているから？　まぁ否定はしない。俺にとってジャンヌさんは既に身内みたいなもの、彼女が理不尽に苛まされるのなら、それを駆逐するのが弟分の役目だろう。
　そんな訳で気持ちを改めて一日を過ごしていたのだが、何故か唐突にメフィストに呆れの溜め息を吐かれた。一見感情的に見えて正論を暴力に変える自分こそが悪魔だとか。
　え？　なに？　最近のサーヴァントは人にいきなり喧嘩を売るのが主流なの？

『な、何よ、どうしてアンタはジャンヌ＝ダルクを助けるのよ!?　そいつは英雄かもしれないけど、同時に多くの人間を死に追いやった魔女なのよ！』
『関係ねぇよ。ジャンヌさんが過去に何をしようが、そんなもの俺が助けに入らない理由になりはしない。俺が彼女を助けるのは偏に俺自身がそうしたいと思ったからだ』
『い、いいの!?　そんなことをしたら、フランス全てが敵になるのよ!?　イングランドも、下手をすればイギリスの全てがアンタの敵に――』
『関係ない。そう言った筈だぞ。国が、世界が、この世の全てが敵に回ろうと俺は俺の大事なものを取り零しはしない。数多の理不尽が彼女を殺すのなら、無限の不条理を以てその運命を捩じ伏せよう』
『そんな、そんなふざけた生き方――一体、いつまで続けるつもりよ!?』
『無論、死ぬまで』

※月√日
　今日も結構な数の英霊達が召喚に応えてくれた。スパルタクスさんや荊軻さん、レオニダスさんと言った数多くのサーヴァントが来てくれたお陰でカルデアもすっかり大所帯となった。
　特にローマ勢。あの薔薇のチビッ子皇帝ことネロやカエサル氏、カ

リギュラ、そしてロムルスさん等ローマの名だたる皇帝達。当初は時々ローマ組を感情のない目で見つめるブーディカさんにドキマギしたが、どうにか今は何とか抑えられているとの事。

何とかそのまま抑えていて欲しいものだが……難しいだろうなぁ。サーヴァントと言えど皆、嘗ては生きていた人間、その間に生まれた感情の痼はどうやったって消えない時がある。もし万が一ブーディカさんが自分を押さえられなくなった時、その時は俺と立香ちゃんで何とかしよう。というのが俺と彼女の見解である。

カルデアの多くのサーヴァントは立香ちゃんをマスターとしているが、一応俺もマスターなのだ。サーヴァントの問題はなるべく俺と立香ちゃんとで対応していこうと思う。

それはそれとして……ネロの奴、早速エリちゃんとユニット組みやがった。彼女達の歌声のヤバさはカルデア一同全員が理解している。今はカエサルさんがその優れた弁舌で彼女達のコンサートを阻止してくれているが、彼も何だかんだでネロには甘い。今の彼のネロに抱いている気持ちは可愛い娘、もしくは孫娘に強く出れない父のソレだ。

ロムルスもカリギュラもそう、というかローマ組のほぼ全員がネロに甘い！　いつか来るその時が来るまでに何とか対策を講じなければ！

なんて悩んでいるとクーの野郎から「テメェの麻婆食わせれば一発で黙るだろうよ」なんて言ってきやがった。

俺の麻婆にそんな便利な機能がついてるわけないだろ！　いい加減にしろ!!

◇

「はぁ、ネロとエリザベート。この二人のデュエットを何とか阻止できる良い考えはないモノか」
「そうだね、もし万が一施設内で歌われたらその瞬間。カルデアは甚大な被害を受けるだろうね。そうならない為に現在ダ・ヴィンチが全力で専用の防音設備を造っているよ」
「流石、万能の天才。そのうち重力制御室とか作っちゃいそう！」
「うん、気持ちは分かるけど何故そこで俺を見るのかな？　立香ちゃん？」
「え？　やらないんですか？　例の修行」
「いやまぁ、いずれはカルデアでもやりたいと思ってるよ？　実際地元にいたときは特殊な設備（グランゾンによる重力制御）でやってたし」
「いや実践済みかよ!?」
　ロマニからのツッコミも聞き流し、修司と立香はサーヴァント召喚の為の準備に入る。カルデアの戦力は大分潤沢してきたが、それでも人理焼却を覆すための戦力は未だに足りていないと言える。
　不測な事態、突発的な異常事態、人理を焼かれ世界的に何が起きるか分からない現在のカルデアにて対処できるサーヴァントは多い方がいい。そう自分達なりに考えて召喚のサークルが回り始めた時、それは起きた。
「お、おぉ！　凄いよ立香ちゃん！　またもや虹回転が来た！」
「凄いですよ先輩！　今月で既に三回目です!!」
「え、えへへ？　そう？」
「ウワースゴイナー、アコガレチャウナー」
　ジャンヌとエルメロイ(諸葛亮)Ⅱ世に続く大物サーヴァントの登場の予兆に誰もが期待に胸を膨らませる中（その内一人は死んだ目をしている模様）、その英霊は高らかに謳い上げた。
「フハハハ！　この我を呼び出すとは、運を使い果たしたな雑――――――あ」

それは、偉大なる黄金の王。全ての英霊達の元祖であり頂点である英雄王が遂にカルデアに召喚された。

その３２

※月γ日

王様がカルデアに来てくれた。俺が尽くし、自分の力を示し続けると誓ったあの人が遂に俺達のカルデアに来てくれた。

と、最初こそは有頂天になってしまったものだが、どうやらこの王様は自分の知る王様では無かったようだ。開口一番に発せられた一言は警戒心丸出しの「誰だ貴様は？」である。その時点で俺の知る王様でない事は容易に想像できたし、彼もまた俺の事を知らないのも……また道理だ。

サーヴァントは出会った人の記憶を記憶として保持している可能性は極めて低い、前に神霊や格の高いサーヴァントなら可能性はあるとされていたが、今回はジャンヌさんやエルメロイさんの様にそうならなかっただけ、寧ろこうなるのが普通だとロマニは言っていた。

少し……いや、大分堪えたなぁ。そりゃあここの王様からしたら名も知れない有象無象の一人に過ぎないだろうけど、まさか俺まで雑種呼ばわりされるとは思わなかった。まぁ、名前自体は早くに覚えてもらったから今はそこまで凹んでないけど……。

そうだ。凹んでばかりはいられない。確かにあの王様は自分の知っている王様じゃないし、自分もまたあの王様の臣下ではない。でも、だからと言ってこれで自分達の関係が終わる訳ではないのだ。

また始めればいい。一から……いいや、ゼロからか。立場も立ち位置も前の時とは違うが、これからもあの人に認められるよう精進し続けようと思う。

ただ、気になるのはジャンヌさんが王様と時々絡んでいる事、何でも元の世界での自分と王様の関係を教えようとしてくれていたらしい、別に気をツカワナクテモいいのに。

ともあれ、これでまたカルデアの戦力が濃くなった。王様一人で文字通り百人分の……いや、それ以上の戦力になるだろうが、あくまで王様は立香ちゃんのサーヴァントだ。あの人の対応は彼女に任せ

ることにしよう。
て言うか、自分は王様がどれくらい強いのか知らないし。戦いは専ら自分が担当していたし……まぁ、英雄王って言うくらいだからヘラクレスよりは強いのだろう。多分。
……ヘラクレスかぁ、昔コテンパンにやられたからいつかリベンジ出来たらいいな。出来たら出来たでイリヤに知られたら怒られそうだけど。

「英雄王、どういうつもりですか」
「いきなりだな芋娘、王たるこの我に気安く問を投げるなど、聖女とは言え少々度がすぎるのではないか？」
「惚けないで下さい。貴方、本当は憶えているのでしょう？」
「……いや、知らんが??」
「本当ですか？」
「本当本当、英雄王嘘吐かない」（憶えていないとは言っていない）
「……まぁ、今はそれでいいでしょう。私も貴方も今はカルデアのいちサーヴァント、憶えていないのなら私から特に言うべき事はありません。ですが」
「？」
「彼に関する厄介ごとに巻き込まれたくない。それ故の虚偽だった場合……分かってますね？」
「……」
「その時は、清姫さんを用いて洗いざらい調べあげるつもりですのでお覚悟を。では、私はこれで……」
「……」
「あれ？　どうしたのギルガメッシュ王……うわ！　凄い汗だよ!?
どうしたの!?」
「……何も、なかった」

※月Ω日

今日も今日とて鍛練鍛練……の、筈だったのだが、緊急事態が起きた。

立香ちゃん。自分と同じ人類最後のマスターである藤丸立香ちゃんがここ数日全く目が覚める様子がないのだ。バイタル（生命兆候）は正常、普段なら起きて活動する筈が今は全くその様子がない。唯ならない様子の立香ちゃんにマシュちゃんは軽く混乱しているが、今は眠り続けている立香ちゃんを見守るしかない。

……余計な混乱を避けたいからあの場では言わなかったが、メディアさんが言うにはどうやら今の立香ちゃんは何者かの干渉によって夢に囚われている状態だという。

これがレフが王と呼ぶ人理焼却の黒幕の仕業かは分からないが、その事が分かるメディアさんなら何とか出来るのではないかとロマニは訊ねるが、彼女曰く魔術に囚われた人間を強引に夢から醒まさせようとすると、後で体にどんな悪影響が残るか分からないらしい。

これが魔術師なら多少強引にしても大丈夫だろうけど、立香ちゃんは正真正銘の一般人だ。それ故に対処する際は慎重に扱わなければならないという。

今はケイローン先生を初めとした医療に心得のあるサーヴァントがマシュちゃんとドクターと交代制で立香ちゃんを看病している。サーヴァントといつの間にか交流を深めていた立香ちゃんに感心していると……再び異常事態が起きた。

何でもダ・ヴィンチちゃんの特製礼装とやらが無遠慮にカルデア内で出回っているらしいのだ。正直異常事態と騒ぎ立つには微妙だし、何より今は立香ちゃんの事もある。優先順位を間違える訳にはいかないし、危険度が低いなら放っておいても別に良いのではないか？と、最初はダ・ヴィンチちゃんを除いた誰もがそう思ったいたのだが、一人、これに反対してきた人がいた。

王様である。モノの真贋に対して絶対的とも言える拘りを持つ王様が贋作殺すべしみたいなノリと勢いでダ・ヴィンチちゃんの工房に押し掛けてきたのである。

人類最古の英雄王が味方に着いた事で申し訳なく思いつつもこの

異常事態を解決するための依頼を出すことにしたダ・ヴィンチちゃん。まぁ、自分の作品であるモナリザが偽物として出回っている現状を何とかしたいと思う気持ちは分からなくもない。

しかし、今はマスターである立香ちゃんは未だに眠ったまま、だから今回は自分がメインのマスターとしてサーヴァントを連れて異常を観測した座標にレイシフトする必要があった。

事態が事態な故に速攻で解決することにした自分は単独でレイシフトするつもりだったが、流石に自分一人で行かせるのは忍びないという事で何人かサーヴァントを連れていくことになった。

自分が連れて行くことにしたサーヴァントはエミヤ、クー・フーリン、アルトリアさん、そして王様の四人だ。エミヤは言わずもがな、アルトリアさんとクーは戦闘スタイルを熟知しているから連携がしやすい。

王様は……なんか物凄い数の刀剣をブッパしていた。アルトリアさんやエミヤが言うには王様は無数の宝具を惜しみ無く降り注ぐ戦闘スタイルらしい。本人も戦えなくもないが、基本的にはああいう戦い方なのだとか。

初めて目の当たりにする王様の戦い。その圧倒的物量に一瞬呆けてしまったが、自分も戦いに参戦。立ち塞がる敵サーヴァント（贋作）を駆逐しながら漸く元凶のいる場所に辿り着いたのだけど……。

ジャンヌ・ブラックだった。うん、第一特異点と今ではもうあまり憶えていないけど夢の中でも戦ったジャンヌ・オルタがなんか息の荒いランサークラスの女性に纏わり付かれていた。

……おっかしいなぁ、ジャンヌ・ブラックもといオルタって第一特異点では結構な悪党じゃなかったっけ？　何かワイバーンとか邪竜とか従えていて、人類を根絶やしにしてやるー的なことを息巻いてた文字通り人類の敵だった彼女が一体どうしてあんな面白い人間になったのか。

兎も角、彼女が今回の異常事態の元凶なら倒すだけだと速攻で倒し、序でに旗と剣と槍をそれぞれへし折り無力化させた。エミヤやアルトリアさんはやりすぎだと言っていたが、戦意のある相手をへし折

り負けを認めさせるにはこの手が一番だし、戦う前に一応投降を促したんだけど……聞かなかったのは向こうだし仕方ないよね。
ともあれ、剣を折られて旗も折られ、涙と鼻水にまみれたジャンヌ・ブラックだけれども、遂に最期まで彼女は自分が消え行く運命を由としなかった。自分は偽物、だけれど関係ない。私は私としてジャンヌ＝ダルクを超えると豪語する彼女に自分は一言口にした。
だったらカルデアに来ればいいと、今カルデアにはジャンヌ(白)もいるし、喧嘩はご法度だが多少のじゃれ合いくらいは見逃そう。ホンモノを越えるというジャンヌ・ブラックの気持ち、その気持ちは紛れもなく本物なのだから。
そう言うと彼女は自らの敗北を認めてランサーの女性共々消滅した。少し寂しいが……これも一つの別れだとエミヤは言った。
王様は……特に何も言わなかった。王様は贋作に対して潔癖とも言えるほどに拒絶する人だから、ぶっちゃけ受け入れた自分を粛清するのかと思ったけれど、特にそれらしい反応は無かった。
ただカルデアに戻る際、「あれはあれで一つの真作だ」と呆れた様に呟く王様はやはり懐の深い人なんだと改めて思った。そう、贋作として生み出された英霊達は皆総じて楽しそうだった。英霊としての在り方に拘るのではなく、一つの人生として楽しんでいた彼等は英雄王である王様にとって贋作には見えなかったのかも知れない。
そう言う意味ではダ・ヴィンチちゃんの言う通り、ジャンヌ・ブラックは真作を越えたのかもしれない。
追記。
カルデアに戻ると、立香ちゃんは目を覚ましていた。七日間も眠っていたから心配していたけど、体に異常はないみたいだし、ケイローン先生やメディアさんも健康体であると太鼓判を押していた。
無事に目を覚ました立香ちゃんに安堵する俺達。だから、という訳ではないが目を覚ました記念に立香ちゃんは召喚ルームに向かいサークルを回すと、なんと二人ものサーヴァントが召喚に応えてくれた。
一人はジャンヌ・オルタ、今回の異常事態の片割れの元凶であった

彼女が早速カルデアに来てくれた。何故か履歴書を片手に。

何でも、オリジナルより自分の方が字が綺麗だろうとマウント取る為に練習してきたのだとか。いや真面目か。しかも本当にジャンヌさんより字が綺麗だし。

そんな訳で無事にジャンヌ・オルタ……長いから邪ンヌでいいか。彼女も新たにカルデアの一員に加わる事になるのだけど、もう一人が少し変わっていた。

巌窟王エドモン＝ダンテス。何でも立香ちゃんによれば夢の中で助けてくれたサーヴァントらしいのだ。夢の中で一体どんな事があったのか知りたいが……まぁ、それはまた今度にするとしよう。

ともあれ、協力的なサーヴァントが来てくれた事を今は喜ぶとしよう。

◇

時刻は深夜を周り、スタッフ達も交代しながら睡眠を取り、サーヴァント達も燃費を抑えるために睡眠することにした時間帯。英雄王は一人カルデアの中を散策する。

中々に混沌としてきたカルデア、贋作の少女（ジャンヌ・オルタ）に巌窟王。この二人は何れもアヴェンジャーとして顕現している。これは偶然か？　否、これは起こるべくして起こった必然であると黄金の王は一人笑う。

「やれやれ、相変わらず過保護なのか判断に困る奴よ。奴が心配なくせに相方は自分だけで事足りると断じるその性根、めんどくさいを通り越して一種の可愛げにさえ見えてしまう」

王が目するのはここではない何処か、呆れと苦笑いに彩られたその笑みはある種の愉悦を噛み締めていた。
そんな英雄王が休憩室に立ち寄った時、ふと視線を感じる。先程よりも強くなった気配に姿を現す気になったその者を黄金の王は愉快そうに呼び掛ける。
「――それで？　この我になに用だアヴェンジャー。今宵の我は少しばかり機嫌が良い、姿を見せるのであれば断罪するのは止めておくが？」
言外に今すぐ出てこなければぶち殺すと脅す英雄王、白河修司という臣下を得ても他者に対して苛烈なのは変わらない。
すると、暗闇から一人の男が現れる。憤怒を纏い、世界を憎み、また愛する者。アヴェンジャー……巌窟王、黒いシルクハットを深く被る男の眼差しは何処までも鋭く、しかし何処か焦りの色が滲み出していた。
「――先ずは、不躾な真似をした事に対する謝罪と謁見に応じてくれた寛容さに感謝したい」
「良い、赦す。して、なにが知りたい？　まぁ、見当は付いてるがな」
備え付けの椅子に座り、王の蔵から一本のグラスと酒の入った小振りの樽を取り出す。流石に巌窟王に勧めるつもりはないのだろう、一人グラスに注ぎ飲み干す英雄王は喉を潤しながら巌窟王からの問を待った。
「お前の臣下――白河修司に取り付いているモノ、あれは、一体なんだ？」
巌窟王は極めて平静さを取り繕っていたが、その声は何処か震えている。そんな彼の様子に気分を良くした英雄王はクハッと笑みを溢した。
「貴様も半分気付いていよう岩窟王。アレは紛れもなく人の手で生み出された人造兵器、地球人がその技術力を他の惑星間の知的生命体に自分達の力を示す為の機体だ」
「地球人、そして他の惑星間……だと？」
「然り。覚えておけ、そして歓喜するがいい巌窟王。貴様が危惧する

アレは正真正銘……人類の叡智の結晶よ」
そう言って笑う英雄王の瞳にはこれから待つ愉悦の瞬間を待ちわびる子供の様に輝いていた。
――――尚、そのハチャメチャに自分が巻き込まれることを予想していなかった模様。
そして、それから数日後。カルデアは次なる特異点の座標を特定。
未知の大海原を前に立ちはだかるのはギリシャの大英雄。
白河修司にとってリベンジの時が――――迫る。

その３３　第三特異点

――――カルデア・中央管制室。
第一、第二と続き新たに特定した第三の特異点の座標が遂に特定された。詳しい説明を聞くために万全の状態で管制室に向かった修司は、そこで既に先に来ていたダ・ヴィンチと立香達に合流する。
「あ、修司さん来たー！」
「おはようございます修司さん、その様子だと気持ちよく眠れた見たいですね」
「あぁ、お陰さまでな。そう言う二人はキチンと眠れていたか？まぁ、その様子だと快調みたいだな」
「はい！　朝ごはんもしっかり食べてきました！」
「先輩、朝からモリモリ食べてましたもんね。ご飯二杯も、エミヤさんも呆れてましたよ」
「うぐ、だ、だって隣でアルトリアさんが美味しそうに食べてるからつい……」
「……アルトリアさんにはいつか食事制限掛けた方がいいんじゃないのか？」
前々から思っていたがアルトリアさんは健啖家という枠から少し外れている気がする。自分が彼女と顔を会わせる時は大抵鍛練のためのシミュレーションや食堂だ。
特に食堂にいる時はいつも何か食べている気がする。サーヴァントは太らないみたいだが、それでも少し過食すぎないかと心配になる時がある。エミヤは許容範囲というが幾ら腹ペコ王でも限度はあるだろう、特異点修復後にカルデアに戻ったら一言物申してもいいかもしれない。
――――閑話休題――――
「まぁ、そこら辺はおいおい話し合うとして、特定された場所はこれまた厄介な所だ。１５７３年。見渡す限りの大海原だ」

「海……ですか？」
「うん。しかも特異点を中心に地形が変化しているらしい。具体的に〝ここ〟という地域が決まっている訳ではなさそうだ」
「それはつまり……太平洋でも大西洋でもなく、インド洋でもない定まっていない海って事か？」
「ニュアンス的には間違っていない。あぁでも安心してくれ、君達のレイシフト先は何としても安全な場所にしてみせるから、レイシフトした先で壁に埋まって詰み。何て事には絶対にしないから安心してくれ」
「まぁ、そこの修司君なら壁の中だろうと深海だろうと平然としていそうだけどね」
「コラ！　駄目じゃないかダ・ヴィンチ！　本当の事でも言って良いことと悪いことがあるぞ！」
「お前ら仲良いな」
　特定された座標地点は１５世紀の大海原、特異点の影響で地球上のどの海なのかは定かではないが、それでも無事にレイシフトさせるロマニの言葉に嘘はなかった。
　勿論、修司達もそこに疑っているつもりはない。修司も冗談混じりに弄ってくるダ・ヴィンチに苦笑いを浮かべているが、仮に壁の中や深海、宇宙空間であろうともどうにか出来る用意が修司にはあった。気を纏えば宇宙空間でも多少は活動出来るし、深海にだって要は浮上すればいいだけだから何とかなる。
　修司達が危惧しているのは先の特異点でレフが見せた魔神柱なる悪魔の姿。今回も元凶となる輩の事もそうだが今修司達が気になっているのは七十二柱の魔神の有無とその背後にいる黒幕のことだ。
「で、ロマニ実際にどう思う？　前回の魔神柱フラウロスを見て、黒幕は例の王様を召喚していると思う？」
「うん。その可能性も否定出来ないけど、それでも七十二柱の魔神なんて信じられないかな？」
「それは何故？　実際に立香ちゃん達は戦ったのに？」
「だからだよ。送られてきたデータは確かに〝悪魔〟と言われるに相

応しい数値だった。でも、何て言うか……あまりにも伝説通り過ぎる。悪魔の概念は彼の王よりももっと後に誕生したものだ」
「仮に、本当に彼の王が英霊化したとしても、その宝具はもっとシンプルでスマートな筈だ。あんな現代人が知っているような禍々しい魔神を使役できるとは思えない」
「うーん。その辺りは確かになぁ。名前を騙っているだけ、という可能性も高いか」
「つまり、黒幕は純粋に魔神柱を召喚しているのではなく、伝説に記述された通りの悪魔を召喚している模倣犯でもあると？」
「或いは、それら全部ブラフか。ったく、分かっちゃいたけど魔術師ってのはどうしてこうも面倒な手段をしてくるかなぁ」
「あはは、まぁそこら辺はこれからも解析を続けていくからさ、今は横においておこう」
　魔神柱なる存在が出てきて黒幕の正体が少し明るみに出るかと思ったが、どうやらそう簡単にはいかないらしい。多すぎる可能性と憶測は却って此方の判断を鈍らしかねない。魔神柱とその黒幕の考察を程ほどに切り上げ、修司達は改めてロマニに向き直る。
「では、三度目の聖杯探索を開始しよう！　皆、用意はいいね！」
「「はい！」」
「フォーウ！」
「おう」
　これから向かうのは未開の大海、そこで待つ脅威と冒険に不安とワクワクを抱きながらコフィンへと入っていく。
　その途中、ふと視線を感じた。見上げるとスタッフ達のいる管制室に此方を見送るジャンヌとエルメロイⅡ世の姿があった。
　どうやら見送りに来てくれたらしい。手を振ってくるジャンヌに修司も拳を突き出して挨拶を済ませると、立香達に続き修司もコフィンへと乗り込んでいく。
　先のレイシフトでも聞いたアナウンスが流れてくる。いよいよ始まる三度目の聖杯探索、いざレイシフトが始まると言う所でまたもや視線を感じた。

見ればロマニ達の遥か後ろ、中央管制室の出入り口に黄金の王がいた。扉に寄りかかり、不敵な笑みと共に見送ってくれる英雄王は、やはり自分の知る人と何処までも同じだった。
帰ってきたらまた話をしよう。今度の冒険もきっと凄いものだと半ば確信しながら……落ち行く意識に身を委ねた。

アンサモンプログラム　スタート。
霊子変換を開始　します。
レイシフト開始まで　あと3、2、1……
全工程　完了(クリア)。
グランドオーダー　実証を　開始　します。

◇

――――結果的に言えば、カルデアによるレイシフトは成功した。以前のように空からのダイブではないし、深海からのスタートでもましてや宇宙空間からの始まりでもなかった。
修司達が降り立ったのは海上を往くとある船の上だった。見渡す限りの大海原の中でこの地点でのスタートは過去のレイシフトの中でも最上の成果とも言えるのではないだろうか。
尤も、そこが見知らぬ海賊船でなければの話だが。
「お、島が見えてきたぞ。あそこが例の海賊島か」
レイシフト直後に始まる戦闘、ノリと勢いで襲ってきた海賊達を修司とマシュの二人で一瞬の内に無力化し、同時に海賊船を制圧。マ

シュはいい加減なことを宣うロマニにお冠、一方で修司は海賊達の語るアテにしていたという島が見えてきた事を皆に伝える。
　修司とマシュの武力によって沈められた海賊達は揃って二人に従順となっていた。船の上で無用な争いはご法度、それが格上相手ならば尚更だと海の怖さを知る海賊は二人の指示に文句ひとつ言わず、テキパキと作業をこなしていく。その一方、立香は立香で船酔いをしなくなった自分に安堵していた。
　そうしてやって来た海賊島。船を座礁しない程度まで島に近付けると修司達は船へと降り立った。一旦この島へ立ち寄り、情報収集でも行おうかとした所で……。
「ヒャッハー女だ！　獲物だ！　狩りだ！　楽しそう！」
　やはりと言うべきか、予想通りと言うべきか、カトラスと単発銃を手にノリと勢いで襲ってくる海賊に再び修司とマシュは迎撃、当然のごとく瞬殺である。
　その後、三下口調でキャラ立てを意識する1人の海賊に事情を知っているであろう〝姉御〟なる人物――否、大海賊フランシス＝ドレイクの元に案内されることになった。
「先輩、修司さん。気を付けてください。相手は世界最大の大海賊。大食漢で大巨人、酒樽を片手で掴んで一気呑みするような豪傑と想像されます」
「ま、マシュ？」
「そして、腕の一振りで大気は震え、地震が起きて津波を引き起こす。そう、大海賊フランシス＝ドレイク、彼女こそが世界を滅ぼす力を持った大海賊です」
「誰!?　うちの可愛い後輩にワン○ース読ませたの!?　まんまイメージが白○げに固定されちゃってるんだけど!?」
「いや、その……別にそこまで人間離れしてないというか、強運はすげぇよ？　でも大巨人と言われるとその……」
「ほらもー！　海賊の人恐縮しちゃってんじゃん！　気まずそうにさせちゃってるじゃん！」
『いやー、しかしこの作者すごいね。色んな伏線が張り巡されていて

考察が尽きないよ。因みに皆は主人公の夢はなんだと思う？　因みに私は海賊王はあくまで通過点であって本命は別にあると睨んでいるけど……』
「お前の仕業かダ・ヴィンチちゃんンンン!!」
「……なんか、楽しそうッスね」
「うちの子達が騒がしくてすみません」
　何故だろう、本来なら危険極まりない海賊の人から生暖かい目で見られると自分達が酷く場違いな気がする。いや、実際に異邦人であり場違い感がありまくるのは当然かもしれないが……。
　騒ぎたつ立香達にそれとなく注意しつつ、案内されること数分。辿り着いた野営地にいたのは一目で分かるほどに快活で、それでいて美しい女性だった。
　ただ、思っていた様な大巨人ではなく、寧ろ武装したマシュよりも若干小柄な人。その手にはラム酒の入った杯を片手に他の海賊達とドンチャン騒ぎをしていた。
「姉御ー！　客人を案内してきましたー！」
「あぁ？　役人か？　なんだい折角の酒宴に……」
　振り返る先に見えた顔には大きな傷跡、女性の顔に傷というデメリットを抱えて尚、その女性は美しかった。
　そして、そこから話が始まること数分。酒盛りをしていただけあって些か以上に酔っていたドレイクは何を思ってか修司に一対一による決闘を仕掛けてきた。理由は単純、自分達に話を聞かせたければ力を示せというケルト勢もニッコリな暴力的理論によるものだった。
　しかし、大海賊として知られるドレイクは酔っていながらも修司の強さを的確に見抜いていた。目の前の山吹色の男は強い、カルデアの一味と名乗る連中の中で最も手強い奴であると判断した彼女は二挺拳銃をフルに活用し、その軽快な体術も合わさってマシュから見ても動きの読めない挙動となっている。
　これが大海賊の実力。そう立香達が戦慄するのも束の間、早々にドレイクの動きを看破した修司がその掌底打を以て昏倒させる。
　大振りとなった蹴りを避けて腹に一撃、加減こそしているが相手は

生身の人間。そして受けた掌打の衝撃は当然のごとく彼女の胃袋をこれでもかと刺激し……。
「うっぷ、オロロロロ……」
フランシス＝ドレイクはこれまで飲み食いしていたこれ迄のモノを、修司の足下に盛大にぶちまけ。
「て、テメェ！　良くも姉御をゲロインにオロロロロ……」
「ば、バカ野郎！　こんなところで吐くバカがオロロロロ……」
ドレイクを初めとした海賊達は全員が酒盛りに騒いでいた者達ばかり。故に、負の連鎖（貰いゲロ）は留まる事を知らず……辺り一面悲劇に見舞われる事になり。
『立香ちゃん！　マシュ！　今すぐその場から逃げるんだ！　このままでは二人ともゲロの海に呑まれてしまうぞ！』
嘗てない剣幕で退避を促すロマニに反論する者などなく、マシュは口を抑えて青くなる立香を抱え、フォウと共にその場から一時離脱。
唯一、残された修司は……。
「俺、悪くないよね？ねぇ、ねえってば!!」
一人その場に残る彼の目には大粒の涙が浮かんでいた。――尚、その後修司は一人で海賊達の介抱をした模様。
第三特異点初日。その日は兎に角酸っぱい一日であったと後に修司は語った。

その３４　第三特異点

　世界の海を制覇し、地球という星の開拓を行ったとされる世紀の大海賊フランシス＝ドレイク。その色んな意味で衝撃的な出会いから一夜明け、現在修司達は彼女が所有する船、黄金の鹿号（ゴールデンハインド）に乗船し、海賊達の一員として大海原に乗り出していた。
「いやぁ、昨日のアンタの一撃、痺れた痺れた！　彼処まで綺麗にノサれるとは、拳法家ってのは大したもんだねぇ！」
「精神的ダメージは此方の方がでかかった気がするけどね。その後も普通に呑んでたし、加減していたとはいえアンタも大概タフだな」
　昨日の悪夢を思い出したのか、若干顔色が悪くなる修司だが、対照的にドレイクの顔は何処までも爽やかだった。
「でも、本当に今でも信じられません。まさかドレイク船長が聖杯を所有していたのもそうでしたが、まさか海神ポセイドンを倒してしまうなんて……」
「ねぇ～、私もビックリしちゃった」
　ドレイクが一方的に修司に絡んでいる一方、立香とマシュは昨夜に彼女から聞いた冒険譚を思い返していた。海神ポセイドンなる海の覇者を打ち倒し、聖杯を手にいれたと。聖杯を酒飲みのグラス代わりに使用し、食料の類いを湯水のように使いながら宴会するドレイク達に話を聞いた立香達はそれはもう大層驚いた。
　特異点の原因と思われていた聖杯の回収が予想を遥かに越える形で成し遂げられた事、そうそうに特異点が修復される事に一時は拍子抜けたりしたが、事は上手くいかないようでドレイクから譲渡された聖杯を手にしても修復されない様子にやはり黒幕によって仕掛けられた聖杯を回収しなければならないというロマニの推測により状況は振り出しへと戻った。
　とは言え、今は海賊であるドレイク達の手を借りられる事から、そこまで悪い事態ではない。寧ろ頼れる海の猛者を味方に引き入れた事で状況はマイナスというよりプラス寄りだ。

時々襲い掛かる他の海賊達を適当に瞬殺しつつ航海を楽しむ一行、特にマシュは見渡す限りの海を前に興奮を抑えきれていない様子だ。
（……そう言えば、マシュちゃんっていつ頃からカルデアにいたんだ？　デミサーヴァントだからってこれ迄なし崩し的に受け入れてきたけど、良く考えればおかしなことだらけだよな）
空を飛ぶカモメ、何処までも続く水平線、それらを前にしてはしゃぐ姿に年相応の少女だと認識していたが、もしかしたら自分は何か勘違いをしていたのではないかと考えてしまう。
これ迄多くの出来事が起きていたことで忘れかけていたが、そもそもカルデアはある魔術師の手によって興された施設だ。魔術師とは人の倫理やら価値観を捨て去り、魔導にのみ力を入れる人種。だからだろうか、目の前のマシュ＝キリエライトという少女が、実は全うな生を受けた人間ではないのだろうか。
そんな考えが頭に浮かんだ瞬間、修司は自分の顔を殴り付けた。結構な威力と音がした為、隣にいたドレイクは勿論、立香とマシュの二人にも何事かと心配されてしまった。
（そうだよな。今はそんな事を考えている場合じゃない。糾弾や矯正は全てが終わった後に幾らでも出来る。それに、マシュちゃんはマシュちゃんだ。俺達と同じちゃんと前を向いている生きた人間だ）
彼女の出自がどうあれ、今は自分達の頼れる仲間。懸命に戦い立香を守る頼もしい盾の守護者だ。下手な疑心を抱く自分に戒めと謝罪を込めての殴打だったのだが……予想より力を込めていた所為か、うっすらと鼻血が出てしまった。
そんなアホみたいな事をしている内に、船員の一人から島があると告げられる。見れば、確かに東北東の位置に島が見えた。宝とこの海域に潜む謎を解き明かす為に修司達はドレイクと共に島へ上陸した。
「あの、修司さん、一つ聞いても良いですか？」
「ん？　さっきの事は唯の自戒だって言ったと思うけど？」
「た、確かにそれも気になりますけど。そうではなく、その……脇に抱えている丸い物体は？」
「あぁ、この砲弾？　いやー、皆がそれぞれ得物を持ってるのに俺だけ

何も持たないって言うのもね。ドレイク船長に一言言って一個だけ拝借したんだ」
「何に使うつも……あぁいや、私何となく分かっちゃったからいいや。マシュもワン○ース読んだなら何となく気付いたでしょ？」
「で、ではやはり……」
　海上の戦闘においてメイン武装とも言える大砲の弾をまるでサッカーボールの様に扱う修司に何となくこの後の展開を察した立香とマシュはジリジリと修司から離れていく。
「ん」
「お？」
　何かを察したのか、突然ドレイクは密林の方に向けて銃を向けて一発の銃弾を放つ。続いて修司が特有の察知能力で気を纏わせた砲弾をドレイクの放った銃弾とややずれた箇所に向けて投擲する。ゴウッと音を超えて放たれた砲弾は地面に衝突すると派手に爆発し、其処にいた筈のサーヴァント諸とも辺りを吹き飛ばした。
　まるで小さな隕石が落ちたような衝撃、伏せるドレイクと盾で衝撃を防ぐマシュ、そのマシュの腰回りに引っ付いて離さない立香、唯一吹き飛びそうになったフォウを修司が抱き上げた。
　通信から乾いた声でサーヴァント消滅の報告をしてくるロマニ、通信の向こうからダ・ヴィンチの笑い声が聞こえてくる。恐らく管制室では天才の万能者が腹を抱えて床に転がっている事だろう。
　予想以上の威力に誰よりも驚いていたのは修司だった。初めて使う砲弾、気持ち的には某海賊漫画に出てくる老兵（中将）を真似たつもりだったのだが、思った以上の威力が出てしまった。どうやら偉大なる海兵はあぁ見えてキチンと力加減が出来た人だったらしい。
　どうやら大海原に出てはしゃいでいたのは自分だけでは無かったようだ。恐る恐る後ろを振り返ると、砂にまみれながらジト目で睨んでくる二人の少女がいた。
「ねぇマシュ、ここ最近の私、敵よりも味方に殺されそうになってない？」
「ですね。一発くらいひっぱたいても問題はないと思いますよ先輩」

「いや、本当はもう少し抑えるつもりだったんですよ。あんなに爆発するなんて自分も予想していなかったというか……すみませんでした！」
「アッハハハ！　何とも豪快な人じゃないか！　そこいらの海軍なんて目じゃないね！」
「ブォフォーウ！」
その後、立香とマシュに折檻と説教をされながらも島を探索した修司達はバイキングの船を発見、内部に隠された一冊の本とそこに記された情報を頼りに一行は島を後にするのだった。
……尚、修司のなんちゃって拳骨隕石（ゲンコツメテオ）はこの日を以て封印される事になった。

血斧王エイリーク、ドレイクと修司の同時攻撃により特に出番もなく――再起不能（リタイア）!!

◇

バイキングの残した暗号を頼りに船を進めること数刻、途中で遭遇した海賊を倒し、手にした海賊旗をロマニに解析させ、その間情報通りの所に新たな陸地を発見したドレイクは船を島へ接岸させ、先程とは規模の違う島に胸を踊らせながら探索した。
その後、霊脈ポイントへ到達した修司達はそこで召喚サークルを無事に立ち上げ、カルデアとの通信を開始した。その途中ダ・ヴィンチ

による当時の物価の値段と価値の高さを利用してドレイクを失神に追い込むなどの茶目っ気を見せながら話を進めていき、Ｄｒ．ロマンから一つの情報がもたらされようとした時だ。
「あ、そうそう。先程海賊旗の結果が出たんだけど――あの旗は伝説の大？賊《??》の??。つまり、あの海賊達は????という???……」
「ドクター？　ドクター、通信の様子が――ドクター!?」
　これまで繋がっていた筈のカルデアとの通信が一方的に遮断された。これ迄の経緯から原因はカルデア側にあるとは考えづらい、不思議に思った修司達がドレイクの船である黄金の鹿号へ戻ると……不可解な出来事は再び起きた。
　船が動かなくなった。船員の一人が真面目な顔でふざけたことを口にする事にドレイクは怪訝な顔付きになるが、船員はそんな場違いな嘘を吐く部下でないことはドレイク自身が良く理解している。
　ドレイク本人も船を調べるが……結果は同じ、船に不備があるわけではない。まるで何かに固定されているようだと口にする彼女に立香とマシュは漸く異変の原因が魔術的結界によるものだと気付く。
　一方修司は最初結界と聞いて嘗て地元の学校で遭遇したとあるメドゥーサによる鮮血神殿を思い出すが、取り敢えずあの時程危険性のある結界でない事に安堵し、一人胸元を撫で下ろしていた。
　とは言え、このままこの島で足止めを食らう訳にはいかない。結界を張った術者をどうにかしない事には次の島へ向かう算段も立てられない。仕方なしに再び島への探索に向かう一行、その途中人気のない砦という人工的な建築物の存在に首を傾げたりするが、その様式は何処と無く見覚えがあった。
　何故あの時代のモノが此処にあるのか、不思議に思う修司だが、その一方でマシュはとある岩山に穴が開いてあるのが見えた。
　人一人容易く通れそうな空洞、中は広範囲に広がっていそうであり、魔術に秀でたサーヴァントなら軽く工房にしてそうな異空間。罠である可能性も考慮して修司が先頭に立って中へ進むと……明らかに人工的な地下迷宮が広がっていた。
　初めて目の当たりにする迷宮、マシュと立香が唖然としている中、

唯一ドレイクだけは楽しそうに目を輝かせていた。地下迷宮は冒険譚に於いてメジャーなモノ、故に修司もドレイク同様ワクワクさせていたが……二人の前であるという事もあり、表情に現れないように務めて平静を装っていた。

そして、迷宮の奥で何かがいるという事も修司は察知していた。その事もあり結界を張った術師がこの地下迷宮にいる可能性が格段に高くなった事を悟り、修司達は急遽ダンジョンの攻略に乗り出した。

途中、何度か遭遇するスケルトンの兵士やら、毛色の違う竜牙兵なる雑兵を蹴散らしながら一行は奥へと進む。修司の気配察知能力とドレイクの勘を照らし合わせること数分、未だにダンジョンの終着地点は見えてこない。

「ず、随分と奥へ進んでしまいましたけど、帰りは大丈夫なのでしょうか？」

「そうだな。予想に反してだだっ広い場所だし、出入り口はとっくに見失っているけど……まぁ、安心してくれよ。幸い横に広がっていても深さ自体は大した事はないから、いざとなったら俺がかめはめ波で地上までの道を作るからさ」

「うーん、何故だろう。地上に戻れるって言われているのに全く安心できないこの気持ち」

「私もです先輩。何なんでしょう、このなんとも言えない奇妙な気持ちは。取り敢えず修司さんは絶対にかめはめ波を射たないで下さいね。生き埋めになるのは目に見えてますから」

「え？　いや、そんなヘマは流石にしないよ。崖崩れが起きないほどに地表を吹き飛ばせば……あ、いや、やっぱ何でもありませんすみません」

どうやら先程の砲弾の一件が未だ彼女達の中で許されていないらしい。世知辛い二人からの風当たりに修司が涙を流すと、不意に開けた場所に出た。

ここが終点か？　そう思ったのも束の間、頭上から感じた殺気に修司は後ろに下がると、巨漢の男が二振りの巨大な斧を手に落下してきた。３ｍはあるであろう仮面を付けた大男に一同は一瞬怯むが、向こ

うには敵意がありありと滲み出ている。
　戦闘は避けられない。誰もがそう判断し身構えた時、修司が待ったを掛けた。
「皆、ちょっとだけ時間をくれ。もしかしたら戦いは避けられるかもしれない」
「え!?　で、ですが向こうはとても殺気立っていますよ!?」
「そうだぜ旦那、言っちゃ悪いが向こうは普通の人間じゃねぇ、ありゃ獣だ。しかも手負いと来た。追い詰められた獣がどれだけ恐ろしいか、あんただって知ってるだろう」
　巨大な斧を手にグルルと唸る大男、その目は血走っており今にも此方に襲ってきそうである。そうしないのは大男が目の前の白河修司という男の強さを本能で察知した故の自制。
　見れば男の体からはあちこちから血が滴り落ちている。ドレイクの言う通り手負いなのだろう、目の前のサーヴァントがどうして此処まで追い詰められているのかは分からないが、少なくともそう言うことをする輩がこの海にいる事は確かだ。
　と言うことは、目の前のサーヴァントは情報を持っている。この特異点に関するなんらかの情報を。ならば交渉の余地はある筈、緊迫する空気、戦闘開始の秒読みが始まる中、修司が選んだ選択は――――。
「ちょ、ちょちょちょ!?」
「修司さん!?　な、何をして!?」
「向こうは手負いの獣、そう言ったなドレイクさん。相手が獣なら、此方も獣になるまで！　服を脱いで敵意が無いことを示せば、きっとコイツも分かってくれる筈だ！」
　脱衣である。もう一度言おう、脱衣である。この張り詰めた空気の中で考えに考えを重ねた結界、上半身の胴着を脱いで裸になり、武器の類いを持っておらず、且つ敵意の無いことを示す為に修司は脱衣という手段を取ることにしたのだ。
　上着を脱ぎ、肌を露にして両腕を広げ、無防備を晒す。すると、目の前の大男からの敵意が若干薄まった気がする。まさか通じた？

たじろいで後退る大男に立香達も驚きを顕にするが……実際は、突然服を脱ぎだす修司の奇行に戸惑っているだけである。
対する白河修司は至って真面目である。本気で考え、本気でそう思った故の行動。実に傍迷惑である。
「くっ、警戒心が解かれるまであと一歩という所か。やはり、下も脱ぐべきか！　流石に少女達の前で全裸になるのは流石に憚れるが……くっ、やむを得ないか！」
自分のプライドや矜持よりも最善を尽くすことを優先とした修司は意を決して腰の帯に手を伸ばす。まさかの全裸公開、マシュは盾の影に顔を隠し、立香は両手で顔を覆いながら指の隙間でチラ見している。ドレイク？　勿論ガン見である。偉大なる海の戦士がたかが男の裸に狼狽えることはない。
いざ！　時間を掛ければそれだけ相手に不信感を与える事になる。羞恥心は投げ捨てるもの、自分が恥をかくだけでいらぬ戦いが避けられるなら本望だと、修司が己の全てをさらけ出そうとした時。
「うちのアステリオスに、何てものを見せるつもりよ！　このド変態!!」
「ぶへ!?」
突如、大男の背後から現れた可憐で小柄な美少女が、物凄い勢いのある飛び蹴りが修司の顔面に直撃するのだった。

その３５　第三特異点

「――――いつも思うんだけどさ。生きてて恥ずかしくないのかな」
「もう、メアリー。ダメですよ、そういうことを言っては。ミミズだって、ゴキブリだって、ペスト菌を保有したドブネズミだって生きているのよ？　このサーヴァントだって生きていていいのです。私は許します」
　修司達の滞在している島から少しばかり離れた海域、海上に陣取る一隻の船。その船員である二人の美女はその外見からは予想できない罵詈雑言の嵐が吐き出されるが如く紡がれる。
　揶揄も冗談でもない本気の罵倒、殺意すら滲んでいるその言葉を受けて。
「うふぉぉうｗ　コレはコレはキツキツのポイズントークでおじゃりますなｗｗｗ　ひっふひっふｗ　アン氏はいつもソフトに締めてくるでござるｗｗｗ」
　鉤爪の男は笑う。生理的嫌悪感をこれでもかと刺激し、それを自覚しても尚辞める気のない言動。美女二人の罵倒をご褒美と断言して受け入れる処かもっともっととねだるその姿は、ある意味で魔神柱すら凌駕している。
「……やっぱり殺そうよ、アン。アイツ、この世にいちゃいけない奴だよ」
「だ・め・よ。遠くから見ている分には有害で不快で臭いだけで済むでしょう？　さ、船長。そろそろ指示を出さないと、風船よりも軽い頭を抉り潰し吹き飛ばしますわよ？」
　口調こそは上品だが、言っていることは海賊らしく物騒この上ない。しかも仮にも船長に対してこの態度である。しかし鉤爪の男は笑みを崩さない。
「おっとこいつはしたりｗ　失敬失敬。それでは真面目にやらせて頂きますですわｗｗｗ」

「……」
「アン、コメカミの血管が切れ掛けてるよ」
　男の無意識な煽りにアンと呼ばれる女性の笑みが歪み、凍り付く。今にでも爆発しそうな怒気、そんな彼女を相方のメアリーが話しかけて宥めようとするが……正直、あまり効果は期待できない。
　そんな彼女達の怒りを察した男は笑いながらもスイッチを切り替えた。人を無自覚に煽るバカから、歴史に名を刻んだ海賊へと。
「それでは、真面目モード……インッ、でござる！　ふひょおおおお！　きたきたきた――！　……という訳で我が同胞よ。ペロマニア至宝の女神エウリュアレ氏をいただきに参りましょう！　あ、あとついでにＢＢＡのアレもね！」
　男も言動こそは相変わらずふざけているが、その目は獰猛な獣の如く鋭くなっていた。どれだけふざけ、醜態を晒そうがやはり海賊。そんな彼の前に一振りの槍を担いだ男が現れる。
「先生！　いざという時は頼みましたぞ！」
「頼ってくれるのは嬉しいけど、あんまり期待しないでくれよ？　おじさん知っての通り負け犬だからさ」
「はっはっはご冗談を！　トロイア戦争の大英雄である貴方様がいらっしゃれば百人力つまり百馬力！　朝の栄養バランスもバッチリ！　グレイト！　アーンドネグレイト！」
「……ねぇ、君たち。こんな船長で本当に大丈夫なの？　ねぇ？」
「「……」」
「あふん、凍るような視線が快感。そろそろ出てくるかな……フヒッヒィ！」
　何処までもふざけた海賊――――黒髭。愉快痛快と船を出す彼の背中を槍の男は静かに見定めていた。

◇

「海賊のサーヴァント？」
その後、興奮する大男を小柄な美少女が鎮める事でどうにか戦いを回避する事が出来た一行は事情を説明し、説得する事で地下迷宮に潜んでいた二騎のサーヴァントを仲間として引き入れる事に成功し、再び大海原へと出航する。
大男の方はアステリオス、迷宮の主として知られるミノタウロスであり多くの子供達を殺して喰らってきたとされる恐るべき怪物……なのだが、体格こそ大きいものの、中身はまるで幼い子供のようだった。
拙い言葉で懸命に自分の意志を伝えようとするアステリオスに癒された立香、よく見ればモフモフしてそうでフォウとは違った意味で癒し枠だと認識した彼女はアステリオスとコミュニケーションを取っていた。
アステリオスも最初はグイグイくる立香に戸惑うが、自分を見ても全く動じない彼女に少なからず心を開いていた。ワイワイと戯れる二人、そんな彼等から目を離さない様にしながら、マシュと修司はもう一人のサーヴァントと話をしていた。
「えぇ、それも唯の海賊じゃないわ。最強の気持ち悪さと変態さを併せ持った最悪のサーヴァントよ。変態さと気持ち悪さの度合いで言えばさっきのこの男よりも上よ」
「き、気持ち悪い……ですか？　強いでも、怖いでもなく？」
「待ってマシュちゃん、俺が変態という所は否定してくれないの？」
最近になって自分に対して色々冷たくなってきたマシュに修司は言葉に出来ない寂しさを感じていたが、最初の頃に比べてだいぶ人間味が出てきた気がする。以前ベリルが無感情なマシュが人間的に好みと言っていたが、修司としては今の感情豊かな彼女の方が人として

魅力的に思えた。
　そんな修司の心情を余所に仲間に引き入れたもう一人のサーヴァント、女神エウリュアレがアステリオスを呼び寄せ、その大きな肩に乗る。
「へぇ、本当に回復してるのね。そこの……修司、だったかしら？　貴方の使う技、結構便利ね」
「普通は此処まで劇的な効果じゃないんだけどな。多分、アステリオスがサーヴァントだから出来た芸当なんだと思う。普通の人間なら、此処までの効果は無かったと思うからな」
　地下迷宮で遭遇した際にアステリオスが負っていた怪我も、修司が気力を分け与えた事で全快している。その事を確かめたエウリュアレは全快したアステリオスを見て何処か慈しみの籠った瞳で彼の頭を撫でた。
「そう、まぁどちらでもいいわ。取り敢えずここから離れましょう。アステリオスの結界も解かれたし、あんまり1ヶ所に長居していると奴に見付かっちゃうもの……アステリオス、どうしたの？」
「……うぅ」
「む、この気配は……」
　アステリオスが唸り始めるのと同時に修司もまた接近する敵の気配を感知した。水平線から見える海賊旗、それは奇しくも修司達がアステリオス達のいる島に遭遇した旗と同じもの。
「あぁ！　あの船さね！　アタシを散々追い回してくれた船は！　此処であったが１００年目、水平線の彼方まで吹き飛ばしてやるよ！」
「あ、そ、そうです！　海賊旗ですよ先輩！　確かドクターに解析を回していた筈です！」
「そうだった！　へいドクター！　詳しい情報を教えてプリーズ！」
『急に繋がったと思ったら今度は無茶ぶり!?　えぇいならば答えて見せよう！　君達が見せたあの旗は伝説の海賊旗、しかも恐らくは――史上最高の知名度を誇る海賊のモノだ！』
「史上最高!?　ま、まさか!?」
「そうよ、そのまさかよ！」

「「!!??」」
ロマニから告げられる史上最高の知名度を誇る海賊、それを聞いて思い当たる英雄は一人しかマシュは知らない。誰もが戦闘体勢に移るなか、その声は周囲の海域にまで響き渡る。
「拙者こそ黒髭として知られたエドワード＝ティーチ！　あ、一応言っておくけど、拙者Ｄの名前とか無いから、其処んところ気を付けてね♪」
ドデカイ自己紹介の声に立香もマシュも凍り付く。黒髭と言う海賊は知る人ぞ知る大海賊。確かに某おデブな海賊を想像しなかった訳ではないが、それでもアレな言動をする黒髭にマシュとドレイクは凍り付き、他の船員達も固まってしまっている。唯一なんとか反応して見せたのは修司と立香だけである。
「ず、随分と毛色の違う海賊だな」
「私、前に秋葉原で似たような人見掛けたことあるー。どうしよ修司さん、私今のアレを見てホームシックになりそ」
「それはなんというか……御愁傷様」
修司はこれ迄見てきたどの海賊よりも奇怪な言動に困惑し、立香は初めてのホームシックの原因が海賊であることに酷くショックを受けていた。なんという精神攻撃、女神であるエウリュアレをして最強の気持ち悪さと言わしめるだけの事はある。
魔術もなしに精神攻撃を仕掛けてくる黒髭に一同は並々ならぬ警戒心を抱いているが、黒髭ことエドワードはそんな彼等を構うことなく捲し立てる。
「て言うか、拙者が欲しいのはお主らではござらーん！　エウリュアレ氏を出せエウリュアレ氏を！」
「……おい、一応アンタを呼んでいるみたいだけど？」
「知らないわ。エウリュアレなんて美しくも可愛らしい超絶美少女はここにはいないわ。私は超絶驚愕美少女のステンノ、そう、私はステンノなのよ！」
「コイツ、自己暗示で自我を保とうとしてやがる!?」
エドワードの狙いは明らかにエウリュアレにあるが、当のエウリュ

アレはそれを頑なに認めようとしない。恐らくは先の島にて隠れていた原因の八割以上があの男にあるのだろう。姉妹であるステンノの名前を出してまで無関係を貫こうとする彼女の必死さは修司から見ても哀れみを誘うほどだった。
「んっほおおおおお！　やっぱりいたじゃないですか、エウリュアレちゃん！　あぁ、やっぱり可愛い！　かわいい！　ｋａｗａｉｉ！　ペロペロしたい！　されたい！　主に腋と鼠蹊部を！　あ、踏まれるのもいいよ！　素足で！　素足で踏んで、ゴキブリを見るように蔑んでいただきたい！　そう思いませんか皆さん！　同意のある方はご唱和ください！」
　それは、願望と呼ぶにはあまりにも汚れていた。一切の妥協なく、一切の迷いなく、人目を憚る事なく己の欲望を口にするエドワード。それは確かに欲望で、英雄と呼ぶには何処までも俗世にまみれていた。
　しかし、だからこそ彼の願望は人間味で溢れていた。上品下品を抜きにして、彼の欲望は何処までも真っ直ぐだった。尤も、素直だからといってそれを良しとするのは全く別の話なのだが……。
「うぅ……やだこれ」
　そんなティーチのアプローチをエウリュアレはガチで恐れ、拒絶する。蔑みや侮蔑侮辱の類いではない、心の底からの嫌悪。神霊とはいえ仮にも神の一柱に数えられる彼女を心底恐怖させるティーチは確かに伝説の海賊であった。
「……」
　怯えて後退るエウリュアレをアステリオスが庇うように前に出る。その表情は幼いながらも戦う決意をした男の目をしていた。
「ああん？　そこの！　デカイの！　邪魔でおじゃるよ!?　出せー、出せよー、エウリュアレ氏を出せよー！」
「チッ、そう言いながら此方に近付いて来るか。船長！　いい加減呆けている場合じゃないぞ！　指示を出せ！」
「……はっ！　アタシとした事が呆然としちまった！　野郎共、大砲に弾を詰めな！　戦闘開始だぁ！」

「修司さん！　私は先輩を守らなくちゃいけませんので……どうか、気を付けて！」
「わたしも一応アーチャーだからね。援護くらいしてあげるわ」
「あぁ、ありがとうな。そっちも気を付けて！」
　言葉を使いながらジリジリと近付いてくる黒髭の船、既に向こうから牽制の砲弾が何発か放たれている。これ以上何かをされるより前に先手を取った方がこの戦いの優劣を決める。
　マシュに立香の護衛を任せ、修司は迫る船に向けて跳躍する。相変わらず凄まじい脚力、それでも船に傷付ける事なく飛び出した修司の背中を立香は見守る。
　そんな戦友の思いを背に、修司は黒髭ティーチの船へと接近する。この大きさなら外す事はない、両手を腰に持ってきて力を溜め、いざ放とうとした時。眼前の船から一人の男が飛び出してきた。

　男の手にしていた得物は――――槍。細くも鋭い殺意に満ちたその一振りは迷いなく修司の首もとに突き立てようとしている。かめはめ波の構えを解かざるを得なかった修司は男へと応戦する。
　振り抜かれた槍を紙一重で避け、お返しとばかりに男へ蹴りを放つが……当たらない。身を翻し、その動きを利用して近付く男の体捌きは、歴戦の強者の経験を匂わせていた。
「おっと、今のを避けるか。流石に、若い奴は動きがいいね～」
「チッ、やっぱりサーヴァントか！」
　物腰の柔らかそうな笑みを浮かべているが、男の目は鋭かった。分かっていたがやはりこの男もサーヴァント、体を捻って蹴りを繰り出してくる男の一撃を修司は片腕で防ぐ。
　そしてその勢いを利用して、修司は黒髭ティーチの船へと降り立った。しかし、修司への追撃は終わらない。彼が船の甲板へ立つ瞬間、カトラスの刃と狙撃の弾丸が修司を襲う。
「うわっ」
「ちょ、マジですか」
　振るわれる刃を片手でいなし、小柄な少女の首根っこを掴んで避け

た弾丸の先にいる狙撃手に向けて投げ渡す。初見必殺とも言える自分達の連携を破られたことに目を丸くさせる二人の女海賊、しかしそんな彼女達よりもドレイク以外の女海賊がいることに修司もまた驚いていた。

そして……。

「テメェ、誰の許可を得て俺の船に乗ってるんだ？　ああ？」

その男は先程のふざけた態度をしていた人物とはまるで別人だった。怒りと苛立ちに満ち溢れ、敵意と殺意に満ちたその手には一挺の銃が握られている。

エドワード＝ティーチ。修司をも見下ろす体躯の男は何の躊躇もなくその引き金を引き絞った。修司の後頭部目掛けて放たれる弾丸はしかし当たることはなかった。予測と反応、予めこうなることを読んだ上での反応速度で死角からの見えない銃弾を避けた修司は返し刀で蹴りを放ち、ティーチの手にした銃を蹴りあげる。

これで奴もまた無防備、そう思った次の瞬間。修司の顔に衝撃が走った。拳である。銃を弾き飛ばされた事になんの動揺もなく黒髭ティーチはその巨漢から繰り出される拳で、修司を殴り飛ばしたのだ。

片足で、それでいて不安定な船の上。踏ん張りの利かない足場であることも合わさって吹き飛んだ修司は、それでも体を捻って体勢を整える。

前を見据えれば四人のサーヴァント、周囲を見渡せば大多数の海賊達が自分を囲んでいる。おまけにドレイクの黄金の鹿号は未だに離れた所だ。

「へぇ、一人で私達に斬り込んで来るなんて度胸あるね」

「大した身体能力ね。でも、これは少々驕りが過ぎるんじゃない？」

「一騎掛けとは豪勢な兄ちゃんだが、それは流石に俺達を舐めすぎだろ」

端的に言えば絶対的不利な状況、それでも白河修司の顔には微塵も追い詰められた様子はなく、寧ろ不敵に笑みさえ浮かべている。

修司の見据える先にいるのは……黒髭、静かに殺意を研ぎ澄ませ

る伝説の海賊。その佇まいは荒くれ者の猛者というより一振りの刀剣の類いに見せた。
「伝説の海賊の拳、受けたのはいいが……ダメだね、全然軽い」
「そうかい、だったら次は鉛弾を腹一杯喰わせてやる。魚の餌にはならないが……まぁ、笑いの種にはなるだろうよ」
生半可な挑発では欠片ほどの動揺すら見せないその風貌は、正しく伝説の大海賊。高まる殺意、それでも直ぐに手を出さないのは、修司という人間の強さを警戒するが故の判断だった。
白河修司は強い。それは彼の頬を殴り飛ばしたティーチが一番理解している。生身の人間を殴ったというのにまるで鋼に触れたような感触だった。未だにしびれが残る手を隠し、代わりに鉛弾を詰めた拳銃を手に取る。
今度はその眉間に撃ち込んでやる。冷えきった思考で修司に拳銃を向けたとき。
「お前の鉛弾なんざ効くかよ。お前の拳や銃弾よりもエウリュアレの飛び蹴りの方がまだ効いたっつうの」
「野郎ぶっ殺してヤルァァ！」
ティーチに殴られた所とは逆の位置を擦りながら、何気なく呟いた一言に黒髭ティーチの沸点は一瞬で飛び越えるのだった。

その３６　第三特異点

――――黒髭、エドワード＝ティーチは激怒した。必ず、かの傍若無人の青年をぶち殺すと決意した。
「今死ね！　すぐ死ね！　骨まで砕けろぉぉっ!!」
「な、なんだぁ？」
「アン殿、メアリー殿、ぶち殺して上げなさい！」
振り上げた拳を避けた所へ直ぐ様鉛弾が放たれる。いずれも急所を狙ったモノ、殺意に満ち溢れた弾丸を修司は素手でその全てを払い落としていく。
先程の冷静さとは打って変わった激情ぶり、そのテンションの激しい落差に戸惑っていると、左右から濃厚な殺意を感じた。片方はカトラスを握り、もう片方は狙撃用の銃を手にしている。
どちらも女性、しかも世にも珍しい女海賊であり、同時に有名な海賊。アン＝ボニーとメアリー＝リード、女だてらに荒波を制覇する歴史に名を刻んだ猛者である。
修司も負けじと二人の連携を捌き、対抗するが、ここは船上で更に言えば敵船。地の利は圧倒的に向こうが有利、船の甲板という特殊な地形で縦横無尽に駆け巡るカトラスの女、メアリー＝リード。小柄な体格を活かして修司の返しの攻撃を掻い潜り、翻弄していく。
そんな中でアン＝ボニーの銃弾が修司の死角から頭部に向かって放たれる。跳弾すら利用した絶技、銃を持った時の彼女の戦闘力はドレイクすら上回っているかもしれない。
見事な連携、しかし解せない。これだけ見事な連携が出来るのはこれ迄戦ってきたサーヴァントの中でも存在しなかった。唯一呼吸があった戦い方をしていたのは先のローマ特異点でのエルメロイⅡ世と、彼の偉大な大王の幼体であるアレキサンダーの二人。
あの二人だって連携といっても所々穴があった。英雄と言っても元は人間、自分の戦い方に余計な異物が混じってきたら当然ぎこちな

くなる。アマデウス風に言えば不協和音だ。
だが、目の前の女海賊達にそんな不備はない。綺麗すぎるのだ。まるで二人で一人と言わんばかりの戦い方に修司は半ば感心していると……。
（待てよ？　二人で一人……まさか!?）
「どうやら、その様子だと気付いたみたいだね」
「あら、もう見破られてしまったの？　意外と見る目がありますのね」
「アン＝ボニーとメアリー＝リード、二人で一つのサーヴァントとか、マジで何でもありかよ。どこぞの仮面ライダーもビックリだわ」
アン＝ボニーとメアリー＝リード、二人で一つのサーヴァント。嘗ての逸話故のその在り方、サーヴァントは一騎という前提条件を破壊してしまいそうな規格外の者、修司は魔術に精通している訳ではないが、目の前のサーヴァントが異常であることは何となく理解した。
しかし、分かった所でさほど意味はない。相手が厄介なのは依然と変わりはないし、数の利が覆った訳ではない。
「ほら、お姉さんばかりじゃなく、おじさんの相手も頼むよ」
唯でさえ色んな意味でやり辛かったのに、そこへ槍兵の男が参戦することで修司は更なる苦境へ追い詰められる事になる。しかもこの槍兵の男、表情こそは人のいい優男な顔をしている癖にやり方がえげつない。
アンとメアリーという二人の女海賊の連携を邪魔をしない程度に横槍を入れてくるのだ。それも此方が反撃しようとする絶妙なタイミングで、お陰で反撃の機会すら与えられる事なく、修司はより苦しい状況へと追い詰められていく。
振り抜かれる刃を避け、放たれる銃弾を防ぎ、その先に待つ槍の穂先を掻い潜る。一方的な攻防、しかしそれでもサーヴァント達の攻撃も修司に届くことはなかった。
「オラァッ！　エウリュアレ氏の御足を受けた横っ面はどっちだぁ!?」
そこへ更に黒髭の猛攻が加わり、遂に修司の防御が破られる。跳ね上げられる両腕、がら空きとなった体にメアリーのカトラスの刃と槍

兵の穂先が捩じ込まれる。
　船上という不安定な足場という事もあり、踏ん張りが利かなくなった修司は、勢いのまま帆柱に激突する。まるで岩のような固さの船、この特異点に来て初めて受けた衝撃に修司の肺から空気が吐き出される。
「いやいや、今の攻めを受けて漸く一撃かよ。しかも手応えも相当硬いし、お前さん主食にボンドとか混ぜてたりしてない？」
「うわ、しかもよく見るとコイツ私の銃弾を肌で弾いてるよ。穴が開いているのは胴着だけ、コイツの体、何でできてるの？」
「サーヴァントである私達が言うのもなんですが……気持ち悪いですわね」
「かは、こほ、……す、好き勝手言ってくれるなぁ」
　容赦なく攻められ、斬られたり殴られたり撃たれたりしているのに、悪態すら吐いてくる海賊達に流石の修司もゲンナリした。
「さぁて山吹色な兄ちゃんよぉ、エウリュアレ氏からご褒美を受けた頬はどっちか教えな。テメェの首を落とした後にその頬肉を削ぎ落としてやるからよぉ、間接キスならぬ間接キック、ドゥフフｗｗｗ。これで女神への攻略もまた一歩近付いたでござるｗｗｗ」
「かぁ、気持ち悪い。ヤダお前……」
　カトラスを手に舌舐めずりをしている黒ひげに修司は筆舌に尽くし難い嫌悪感を覚えた。言ってることは野蛮な海賊のソレなのに言葉の端から感じられるのはソレ以上のおぞましさがあった。
　良く見ればアンとメアリーはドン引いており、ランサーの男も頬を引き吊らせて苦笑っている。成る程、女神エウリュアレが彼処まで怯えるのも無理はない。何せ無意識に神を嫌っている自分が気の毒と思えたのだから。
「さて、兄ちゃんの実力が本物なのは分かった。俺達が相手にしても仕留めきれない位に頑丈なのも……まぁ、悔しいが理解できた。だが、それはそれで殺りようはある」
「二人で来たことは潔かったですが、やはり無謀でしたわね。せめて一人位共に戦える方を連れて来たら結果はまた違ったでしょうに

……」

見れば、ドレイクの船が一向に近付いてこない。恐らくは黒髭が部下の船員に指示を出し、黄金の鹿号を近付けさずに立ち回っているのだろう。向こうから大砲の弾が撃たれているが、何れも此方に当たる様子はない。

救援もなく、地の利も取られ、一人単騎で挑んだ修司の敗北。彼等の言い分に何も間違いはなかった。海の常識を軽んじた男の情けない敗北だと、誰もが疑わなかった。

「……あぁ、そうだな。確かにアンタ等の言う通り、そこいらの海賊をあしらって戦える気になっていた俺に原因はあるんだろう。認めるよ、船の上の戦いならアンタ達の勝ちだったってな」

「……なに？」

「だから、奪わせてもらうぜ。アンタ達の有利を……根刮ぎな!!」

瞬間、修司の脚に力が練り上げられる。確かにこの船は黒髭の船であり、単独で挑んだ修司が相手の土俵で戦うには何もかもが足りなかっただろう。

だが、そんな事はどうでもいい。白河修司が目的としていたのは黒髭の船の上で戦うのではなく、黒髭の船を破壊する事にあるのだから。

その目論見がバレないように必死に戦ったのも当然だし、彼等の連携に対応できなかったのも全て本当だった。尤も、向こうが宝具を使わない限り傷を付けられる事は無い自信はあったのだが……。

だが、意気揚々と挑んでおいてここまで追い詰められるのは想定外であり、そういう意味では黒髭達は強者であり、勝者とも言えた。不甲斐ない自分を情けなく思いながら修司は脚に力を入れた。

震脚。己の師からの命令で毎日欠かさず行われてきたモノ、これまで生きてきて殆ど忘れる事のなかった鍛練。数千数万と繰り返してきたそれは一種の兵器と化していた。

瞬間、船が沈んだ。黒髭の宝具であるアン女王の復讐（クイーンアンズ・リベンジ）が悲鳴を上げて海中へ強制的に沈み、船はその浮力によって無理矢理に跳ね上がる。まるで狂暴な荒馬が乗せた人間を振り払うかの様に、船の上にい

た全ての人間が吹っ飛ばされた。
　海上に投げ出される黒髭、空中で無防備を晒す彼に待っていたのは……二振りの巨大な戦斧を持った大男。
「て、テメェは!?」
　ドレイクの船にいる筈のアステリオスが、何故自分の真上にいるのか、ふと気になって下を見れば、黒髭は自分の船とドレイクの船の間にいる事が分かり、同時に理解した。船の速さはドレイクの方が上、白河修司の目的は最初から自分の船に追い付くまでの時間稼ぎだった。
　いや、気付いてはいた。黒髭も伝説の海賊として恐れられてきた猛者だ。修司の目的が自身を囮にすることで時間稼ぎをする事だとは彼が単騎で乗り込んできた時点で分かっていた筈だ。
　誤算だったのは修司という人間の強さを読み間違えたこと、そして何より自分の船に潜む寝首を掻こうとする者に対する注意をし過ぎていた為。
　海賊が海の上で読み負ける。これ程滑稽で笑えない話もないが……まぁ、生前の死に方よりはだいぶマシか。
（あーあ、せめてもう少し……憧れの海賊と海で競いたかったなぁ）
「エウリュアレを……虐めるなぁ!!」
　胸中に抱くのは僅かな後悔、海賊エドワード＝ティーチはアステリオスの一撃を受け、海の中へ溶けるように消えていった。
　そして、アステリオスが黒髭との決着を付けていた一方で、修司の方も一つの戦いが終わろうとしていた。
「あーあ、黒髭の奴負けちゃったね」
「全く、一人だけ勝手に満足して逝くなんて、これだから男は……」
「まぁ、僕達も人の事は言えないんだけどね」
　手にしていた銃は砕かれ、カトラスも真っ二つにへし折れた。自分の内にある霊核が確かに砕かれた事を認識したアンとメアリーは消え往く自分の体を互いに達観した様子で見つめていた。
「それにしても、律儀な人ですわね。私達を倒すのなら片方だけ潰せばいいのに、ご丁寧に二人とも倒すなんて……」

アンとメアリーはその逸話から二人は一つのサーヴァントとして召喚されていた。片方が倒されれば残ったもう片方も消える、これ迄の中で異例なサーヴァントだが、それ故に対処も確立されていたサーヴァント。

一人を押し切れば結果的に二人とも倒れる定め、しかし修司は敢えて二人とも同時に倒すことを選んだ。

「だって、そうしないと負けを認めないだろ？　アンタ達は」

その言葉に二人の女海賊は愉快そうに笑った。白河修司は自らの勝利を誇示するタイプではない、彼がそう口にしたのは敵対したサーヴァントの全力を乗り越えたという証が欲しかっただけ。

無欲に見えて何とも強欲な奴だとメアリーは笑い、海賊でないことが惜しいとアンは嘆き、二人の女サーヴァント達はやはり笑いながら消えていった。

「さて、これで残すはアンタだけだな」

「いやぁ、まさか今の一瞬で彼女達を倒すなんてね～。ペガサスなんちゃら拳だっけ？　おじさんそう言うの疎いから良くわかんないけど……今時の人間ってああいうの出来ちゃうのねぇ」

目の前にいるのは槍を肩に担いで感心したように呟く男はヘクトールと呼ばれていた。トロイア戦争で活躍したという守りが得意な英霊、自分の味方であったはずの海賊達が倒されたにも関わらず、その余裕そうな風体は依然として崩された様子はない。

「その様子だと、此方に情報を渡すつもりは無いようだな」

「まぁね。それで、どうする？」

「無論、ここで倒れてもらう。アンタはある意味で黒髭以上に厄介な相手だ。自らの手の内を晒すつもりがない以上、そうする前に仕留めさせてもらう」

修司が警戒しているのはヘクトールという英雄の手練手管だ。トロイア戦争にてその武勇を知らしめた彼だが、彼はその武勇もさることながら為政者としての手腕もまた凄まじかったと聞く。言葉巧みに人を操るのはカエサルなどを相手として慣れているつもりだが、ヘクトールという男にはカエサルとはまた違った。

成る程、アキレウスが一騎討ちを申し込む訳だ。目の前のサーヴァントは武力以上に何かをしでかす怖さがある。
「そうかい。まぁ、確かにお前さんの目論見は正しい。相手が得体の知れない切り札を持っているなら、使われる前に潰しちまえばいい。誰だってそうするし俺だってそうするね……けどな」
「っ！」
「悪いな兄ちゃん。時間切れだ」
ヘクトールが笑みを浮かべた瞬間、修司の足元が唐突に消え去った。突然の事態に驚く修司だが、二人が足場にしていたのは黒髭の宝具である船、その持ち主である黒髭が敗れ去ったと言うのなら、彼の宝具も消えるのもまた道理。
海中に身を投げ出す修司だが、同時にヘクトールが何処かへと消えていくのも見えた。自身の得物である槍をしまい、その手には光輝く盃――即ち聖杯が握られていた。
何故奴が聖杯を持っている？　戸惑う修司を余所に海中を泳いでいくヘクトール。逃がすものかと今一度かめはめ波を放とうと両手を前に突きだした時……。
「っ!?」
ふと、凄まじい殺気を感じた。背筋が凍り付き、一瞬身動きが強ばってしまうほどの殺意と圧倒的気配から来る圧力。それは修司が嘗て体感し、そしてトラウマとして刻まれていたモノだった。
そう、白河修司はこの殺気を知っている。圧倒的なまでの死の気配、それは昔修司が命を掛けて立ち向かい、そして敗れた相手。
「……まさか、アンタも来ているのか？」
修司の言葉に応えるモノはいなかった。ただ一つ分かっていることは、この海に嘗て自分を殺しかけたあの男がいるという事。
――――いつの間にか、修司の手は強く握った拳が出来上がっていた。

◇

「ったく、黒髭め。女神も奪えずに終わるとか。とんだ役立たずだ。同じ海を往くものとして使ってやったのに、とんだ粗悪品を掴まされたモノだよ」

事の一部始終をある魔女の力によって見つめていた男は、アステリオスによって散った黒髭をこれでもかと扱き下ろし、悪態を吐いていた。

本来の目的であるエウリュアレも手に入らず、帰ってきたのは此方が用意した聖杯だけ。しかしそれでも良い。男にとって全ては余興に過ぎないのだから。

「さて、それじゃあ私達も頃合いを見計らって奴等の前に出てやるとしますか。此処まで頑張ったバカな連中を絶望の底に叩き落としてやる為に」

男の目には敗北の二文字はない。男が見据えるのはいつだって勝利の二文字しかない。男は自分の勝利を信じて全く疑わない。

何故なら――――。

「では、船を動かそう。ヘラクレス。お前の出番も近い。期待しているぞ」

男の操る船の名はアルゴー。そしてその船長の名はイアソン。そして、彼が全幅の信頼を寄せる男の名は――――ヘラクレス。

ギリシャ最大最強の英雄が水平線の彼方を静かに見据えていた。

――――嘗て、ヘラクレスには倒せない男がいた。自身の宝具である命のストックを一撃で二つも奪われておきながら、ついぞ倒しきれなかった宿敵。

この記憶をもって召喚された時、ヘラクレスは確信した。この何処までも続く大海に自分と戦ったあの少年がいるのだと。

それを知った瞬間、ヘラクレスは内心で歓喜した。あの時の続きが出来る。あの時の好敵手と再び合い見えるのだと、気分が高揚し、叫びたくなった。

あれから、どれだけの月日が流れたのだろう。一年か、二年か、それともももっとか。分かっているのは嘗ての好敵手が更に力を付けているという事。楽しみだ。楽しみで楽しみで、仕方ないと思えるほどにあの時の戦いは刺激的だった。

此度の召喚で大英雄ヘラクレスが望むのはただ一つ。嘗ての戦いの続き、そして――――決着である。

その３７　第三特異点

成り行きで、その場の勢いで遭遇した大海賊黒髭とその配下達との戦いは、やはり勢いのまま修司達の勝利で幕を下ろした。人理修復の旅の中で初めて体験した苦戦、歴戦の海賊を相手に向こうの土俵で強引に勝利をもぎ取って見せた修司を労う……という建前の下、とある理由で一行は新たに見付けた島に立ち寄ることになった。

「いやぁ、強い強いとは思ってたけど、一人で海賊達を皆殺しにしちまうとは、修司の旦那は本当に豪気だねぇ。アンタが海賊じゃなくて心底安心したよ」

「いや言い方。俺が倒したのはアンとメアリーという女海賊だけだから、肝心な黒髭を倒したのはアステリオスだから、そこら辺マジで気を付けて」

「アステリオスもありがとね！　お陰で助かったよ！」

「う、アイツ……エウリュアレ、を……虐めるから」

黒髭を倒したのはアステリオスで、彼が黒髭を倒した事で奴の宝具である船も消えた。それをどう曲解したのやら、海賊黒髭をその船員ごと皆殺しにしたと吹聴するドレイクに修司は必死な形相で訂正を促していた。

その一方で立香とマシュは黒髭戦に於ける功労者であるアステリオスを良く頑張ったと褒めちぎっている。初めて人に褒められたアステリオスはどう反応すればいいか分からずにタジタジとしており、そんな彼の肩に乗るエウリュアレは笑みを浮かべたままアステリオスの頭を撫でた。

「本当、良くやってくれたわ。これで私も安心して夜眠れるってものよ。私からも改めてお礼を言っておくわね。ありがとう、アステリオス」

「……へ、へへ」

慈愛に満ちた笑みで頭を撫でられ、戸惑いながらも受け入れるアステリオス。あ、なんかこの二人良い。体格的に美女と野獣な二人、な

のに精神的面で見れば幼い子供と大人のお姉さんの様なアステリオスとエウリュアレ。二人のやり取りを目の当たりにした立香はこの時、自分の中の新しい扉が開いた気がした。
『うん。先ずは黒髭とその配下の海賊達の撃破、素直におめでとうと言わせてもらうよ。これはつい先程分かった解析結果だが、黒髭の宝具は強い乗組員がいればいるほどその強さを高めていくタイプだったみたいだ。つまり、あの時の修司君が行った行動は一見無茶苦茶に見えて実はかなり有効な手段だったみたいだ』
黒髭ことエドワード＝ティーチの宝具、その特徴は自身の船と嘗ての船員達を呼び出す一種の召喚系の宝具で、その真骨頂は強い乗組員……つまり、サーヴァントを乗せればその数だけ船の性能を底上げさせるという今回の特異点に於いて破格な性能を誇る宝具だった。
だからドレイクの船の砲弾も全く利いていなかったし、船の速さも凄まじかった訳だ。向こうがサーヴァントであることに対して此方はデミ・サーヴァントであるマシュやアステリオス、エウリュアレの三人。
もし更なる戦力を整えて襲撃したら、恐らく此方の受けた被害は甚大なモノになっていただろう。そうなる前に決着を付けられた事はロマニから見ても最上の結果とも言えた。
だが、喜んでばかりもいられない。黒髭という大きな障害を片付けられたのはいいが、問題はまだ残されている。修司が珍しく取り逃してしまったというギリシャの英雄ヘクトール、トロイア戦争にて活躍した政略武力に富んだ彼を逃がしてしまったのは大きいし、何より逃げる際の彼の手には聖杯が握られていた。
『ギリシャの英雄ヘクトール。彼も彼で海賊黒髭並みに厄介な相手だ。それに……』
「修司さんが感じた殺気、一体相手は何者なのでしょう？」
『うーん、此方としては何も探知してないからなぁ。そもそも殺気というのは向けるものであっても飛ばすモノじゃないし、仮にそうだとしても修司君に殺気を飛ばしてきた相手は此方の感知範囲を余裕で抜けてきたって事になるからなぁ……』

医療担当であり、カルデアの技術とスタッフを統括している立場であるドクターとしては修司が感じた殺気とやらは気の所為、もしくは冷たい海に入った事で背筋がブルッたものだと勘違いしたものだと思いたい。

けれど、修司は間違いないと確信する。ヘクトールを倒そうとした際に感じた殺気は明確で、感じた殺意はいっそ物理的ですらあった。

有り得ない。考えたくない。しかし、曲がりなりにもカルデアの代理統括者であるロマニは、限られた情報の中である一つの仮説に辿り着く事になる。

遥か水平線の向こうからでも届かせる殺気、見渡す限りの大海原と海賊、エウリュアレとアステリオスというギリシャ出身地のサーヴァント。

仮に、仮にこれ等全ての条件に当てはまるサーヴァントの集団がいるとするならば……恐らくは一つ。海賊とは即ち海を往くものの総称であり、嘗てのギリシャにも海賊の原形とされる最古にして最強の海の戦闘集団が存在していた。

名をアルゴノート。アルゴー号という一隻の船、船長イアソンを筆頭に形成される英雄達を乗せた船。そこには知る人ぞ知る彼の大英雄の姿もあった。

もし、ロマニの憶測が正しければ今後の戦いはこれ迄とは比較にならない程に状況的に追い詰められるかもしれない。

明らかに飛躍した発想。しかし、気の所為と吐き捨てる事も出来ない。沸き上がる不安の中でロマニが提案したのは、可及的速やかなドレイクの船である黄金の鹿号の改修である。

ワイバーンは本来の竜種よりも位の低い亜竜種と呼ばれる生命体だが、それでもドラゴンの枠組みの中に入る種族だ。鱗で作られた鎧は頑強となる事から防具や武器の素材に使われる、ただ今回宛がうのはドレイクの船である為に求められる数は多くなる。

レッツ周回。一先ず立ち寄った島にワイバーンをひたすら狩ることにしたのだが……これが意外と集まらない。３０という数のワイバーンを仕留めたのはいいが、それでも黄金の鹿号全体を覆うには

まだまだ素材が足りていない。
皆で話し合った結果、ワイバーンの巣穴を探すことになった。最初にワイバーンを狩り続けた事でこの島の何処かに巣穴が在ることは分かっている、後はその場所を探す事になるのだが……これが意外と見付からない。
どうでも良い時は頻繁に襲ってきた癖に此方が必要になったと思えば姿を眩ませる。これが物欲センサーかと嘆く一行が当てもなく森をさ迷っていると……ワイバーンの群れを見付けた。
数は五匹、修司達に気付かず何かを貪っている様に見えるワイバーンを修司が死角から手刀を一閃。頸を跳ねられ、盛大に血を噴き出しながら倒れるワイバーンを余所に修司は連中が貪っていたとモノと思われる物体を手に取った。
「なんだこりゃ？　ぬいぐるみ？」
「ぺ、ぺ、ったく。ワイバーンに集られたかと思ったら今度は血の雨かよ。おい兄ちゃんよ、勢いがあるのは結構だが、ハンティングをするならもう少し丁寧にやりな。そんなんじゃ、女の子一人口説けやしないぞ？」
「……あ？」
手にしたそれはクマのぬいぐるみだった。なんとも場違いなソレ、しかも喋った。喋るぬいぐるみなんてそれこそフィクションな存在で小さな女の子ならば誰しもが一度は夢見たシチュエーションだ。
なのに口を開けば上から目線の良くわからないマウントを取ってきた。声もなんだかクー・フーリンと似ているし、何となく苛ついた修司は目の前の喋るぬいぐるみを触れる手に力が籠った。
「ちょ、痛い痛い!?　こら！　図星だからって暴力に訴えるのは良くないと思います！」
「……へいドクター、この珍妙で摩訶不思議な生き物はなんじゃらほい」
『人を便利なアプリみたいに呼ばないでくれる？　……えっと、修司君が持っているそのぬいぐるみ、微弱ながら魔力反応が此方で検出されているよ。多分誰かの使い魔だと思う』

「成る程、つまりお前、どっかの誰かと一緒にいたみたいだな。そしてソイツは十中八九サーヴァントと見た」
「違うよ。ボク森のクマさんだよ？　悪いクマじゃないよ？」
　自身が誰かの使い魔だと知られ、露骨に命乞いを始めたぬいぐるみ。目をウルウルさせて端から見れば可愛らしいぬいぐるみに見えなくもないが、悲しいかな最初に口を開いた時の第一声の所為で彼の印象は確定しまっている。
　さて、この珍妙な生き物をどうするべきか。ワイバーンの巣穴も探さなきゃいけないし、あまり悠長もしていられないと修司が頭を悩ませていると……。
「修司さーん、何か見付けたの？」
「ダーリン、もう！　何処に行っちゃったのぉ!?」
　両側から現れた二人、片方は自分と同じ最後のマスターとして人理修復に勤しむ戦友藤丸立香。そしてもう片方は……所謂絶世の美女と呼ばれる銀髪の女性。
　明らかに気配が並みのサーヴァントを凌駕している。恐らくは何処ぞの女神、言動が明らかにスイーツ系の女だが、彼女が修司の手にしたぬいぐるみを見て目を輝かせていた。
「いたー！　もう、ダメじゃないダーリン！　こんな所で寄り道しちゃ」
「いや、寄り道というかお前が俺をぶん投げた所為でしょうが！　お陰でワイバーンに弄ばれるわ怖い兄ちゃんに握り潰されそうになるわで偉い目にあったんだぞ！」
「……本当に握り潰してやろうか？」
「それよりもそこの貴方、ダーリンを見付けてくれてありがとー！　お礼に私の加護でもあげましょうか？」
「いえ、結構です。……ていうかアンタ、その様子だと名のある女神と見たが、名前を聞いても？」
「名前を聞きたいなら先ずは自分から……と、言いたいところだけど、ダーリンを見付けてくれたお返しに教えてあげる。私こそが月の女神、アルテミスでぇす！」

「どうも、俺オリオン。コンゴトモヨロシク」
突然現れたギリシャ神話の神の一柱と伝説の狩人、嘗ての神話で知られたカップルは美女と野獣というよりアーパー女とナンパ野郎だった。
その後、女神アルテミスと狩人オリオン。ギリシャ神話でも知られる伝説の二人が仲間に加わってくれる事になった。人理焼却とそれによる特異点修復、カルデア側の事情を汲み取る形で合流する事になった二人は一行が探していたワイバーンの巣穴に案内される事になったのだが……。
「……いやぁ、俺も長い間狩りをしてきたけどさ、狩られる側を同情するのって初めての経験だわ」
オリオンが今目の前にしている光景はお世辞にも狩りとは呼べなかった。狩りとは狩人がその技術と知識を駆使して獲物を効率良く射止めることにある。自分も大概脳筋だが、それでも目の前で繰り広げられるモノよりかは幾分かマシだと自負している。
「よし、そんじゃあマシュちゃん次いくよー」
「はい！　バッチこいです！」
逃げるワイバーンの尻尾を修司が掴み、マシュへ向けて放り投げて彼女が持ち前の硬い盾を以てワイバーンの頭蓋を打ち砕いていく。掴み、投げ、粉砕の繰りす修司とマシュの組。
「立香、そっちに一匹行ったよ」
「はーい！　ガンド！　よし、アステリオス、お願いね」
「う、ん……！」
一方でドレイクがワイバーン達を逃げないよう銃で牽制し、マスターである立香がガンドで身動きを完全に封じ、その間にアステリオスが頸を刎ねるという此方も中々エグいことになっている。
狩りも命のやり取り、互いに命を掛けた戦いだがこの光景はあまりにも酷かった。何処までも機械的に処理をする彼等にオリオンは勿論アルテミスも心なしか表情がひきつっている様にも見えた。
「ん？　なんかデカイ奴がきたな」
「恐らくはこのワイバーン達を従えていた親玉でしょう」

「成る程、ならあれを狩ったら目的の数の確保は達成出来そうだな。気円斬！」
　そして、巣の異常に気付いた主のドラゴンが怒り心頭といった様子で空から飛来してくるが、修司が気円斬を投擲。巣穴の主のドラゴンは一矢報いる事も許さないまま両断されるのだった。
「いやー、これが狩りか。皆でこうして狩りをするのって結構楽しいもんだな」
「……違う」
「ん？　どうしたオリオン？」
「これ、俺の知ってる狩りじゃない……」
　嘗て伝説の狩人として知られるオリオン、今はアルテミスが現界した影響でぬいぐるみになってしまっているが……その声は何故か涙声だった。

◇

「よし、取り敢えずこんなものかな」
「アルテミスさんもありがとうございます。お陰さまでワイバーン狩りが上手くいきました」
「う、うーん。あれを狩りと呼ぶにはちょっと抵抗あるけど……まぁ、役に立てたのなら良かったわ。うん」
　倒したワイバーンとドラゴンは既にドレイクの部下達が運んでいる。砂浜で解体し、鱗を剥ぎ取る為だ。マシュから巣穴の場所を教えてくれたアルテミスとオリオンに改めて礼を口にするのだが、対する

アルテミスの表情は未だにひきつっている。
「しっかし、これだけのワイバーンの鱗、船を強くする為に必要なのは分かるが、一体何を相手に想定してるんだ？　まぁ、サーヴァントが相手っていうんだから用心するのに越したことはねぇが……」
『そうだね。僕としてはこの保険が無駄になることを願うばかりだけど……そこの修司君が言うには相当ヤバい奴がいるみたいだからね。失敗が許されない此方としては保険は幾つあっても足りないのさ』
「あぁ、あの兄ちゃんか。いやぁ、まさか現代に彼処まで腕の立つ人間がいるとはなぁ。ギリシャにいても普通に違和感ないぞ」
　ワイバーンとの戦いもそうだが、オリオンから見ても白河修司という男の強さは異常だった。唯の人間が何の加護も無しに竜種を圧倒するなんて普通なら有り得ない。胆力、腕力、脚力、その全てが嘗て自身が呼ばれた超人の域に達している。
　そもそも、何で人間が手からビームが出せるのだろうか。本人曰く魔術ではないらしく、特に術式とかそう言うのは使っていないらしい。若く、強く、そしてそこそこ顔立ちも整っている。もし彼がギリシャにいたら当時の人間や神々は放っておかなかった事だろう。
　それこそ、修司がトロイア戦争に参加していたらもしかしたら全く別の歴史が始まっていたのではないかと思える程に……白河修司という男の強さは逸脱していた。
「止めてくれよオリオンさん、ギリシャってアレだろ？　ゼウスとか言う超絶ＤＱＮ下半神を筆頭にアレな神々が跋扈するヒャッハーな世紀末も真っ青な所なんだろ？　そんな所に生まれたら俺上手く生きていける自信はないわ」
「せ、先輩、ＤＱＮとは一体なんの事でしょう？」
「マシュが一生知る必要のない単語だよ」
「しかもギリシャってアレだろ？　基本的にマッチポンプと告げ口を得意としてるんだろ？　アポロンとかあんた等にとって最たる例じゃん」
「あぁうん。その辺りは否定できないわ。て言うか大体その通りだか

ら何も言えねぇわ」
『……前々から思ってたけど、修司君ってかなりの神嫌いだよね？
なに、昔神様から呪いを受けたりしたの？』
白河修司にとって神は未だに無意識レベルで嫌悪してしまう対象だ。人の人生を無遠慮に踏みにじっては素知らぬ顔で責任転嫁するその所業は現代日本人の倫理を持つ修司としてはとても許容出来ないモノだ。
そんなギリシャの神々を人間臭くて親しみが持てると言う者もいるが、道理を通さずに力を奮うギリシャの神々は修司にとって質の悪いチンピラに等しい。そういう意味では海の理を重んじるドレイク達海賊の方がまだ理性ある人間といえるだろう。
「えー？　でも修司って普通に私ともお話出来るじゃない。エウリュアレにだって普通に接しているし……」
「そりゃ、アンタがオリオンの代理として現界しているだからだろうよ。エウリュアレは……うん、嫌悪する前に同情しちゃってるから」
「あぁうん、アレに付け狙われてたらって思うと……そりゃ気の毒に思っちゃうよね」
「え？　なに？　黒ひげってそんなヤバい奴だったの？」
現在アルテミスはオリオンの代理として現界しており、その所為か修司が抱く嫌悪感は然程ではない。エウリュアレに至っては黒ひげとの件もあり、嫌悪感以上に同情を抱いてしまっている。
しかし、ローマでの時もそうだが本当にどうして神というものを此処まで嫌悪してしまうのだろう。神……正確には神霊と呼ぶ彼女達に対してこれなのだ。いつか本物の神と相対したとき、問答無用で手を出してしまうのではないか。カルデアへ帰還したら本格的に精神修行も考慮すべきだろうか。
そんな事を考えながら浜辺へ戻ってきた一行。しかしその直後、予想だに出来なかった事態が待っていた。
「あれ、なんだろう？　ドレイクの船の隣にもう一隻船がある」
「っ、全員戦闘準備……！」

林を抜けた立香が黄金の鹿号の隣に座している大きな船を見て一言呟いた瞬間、ドレイクの怒号が周囲に響き渡る。此処は特異点として歪められた不安定な世界、相対してきた海賊は問答無用に襲い掛かってきて、倒せば霧のように消えていった。

何れも遭遇すれば襲い掛かる獣達。故に待ち伏せをされていた事、それ事態に違和感を覚えた彼女が全員に戦う準備を指示するが……。

「悪いね。一手こちらの方が早かったな」

「ヘクトール！」

カルデア側の索敵、そして修司の感知能力すらも掻い潜って接近してきたのはトロイア戦争の英雄、槍を片手にエウリュアレの背後から現れたヘクトールが彼女を脇にかかえて奪取した。

「っ！　エウリュアレ!!」

当然、アステリオスがエウリュアレを取り戻そうとヘクトールを追う。最初に修司が気付いたお陰でアステリオスも反応することが出来た。まだ彼の届く範囲にエウリュアレがいる。手放してはならないとアステリオスが手を伸ばそうとして――。

瞬間、アステリオスの巨体が吹っ飛んだ。３ｍはあった彼の体がまるで木の葉のように吹き飛んだ様に誰もが息を呑む。

アステリオスを吹き飛ばした者、それもまた巨体だった。色黒の肌、巌の如き肉体。身震いするほどの殺意と息が止まるほどの圧力、誰もが思った。コイツには正面から挑んでは勝てないと。そう、ただ一人を除いて……。

「やっぱり、アンタだったか」

誰もが唖然としているなか、修司だけは目の前の巨人を静かに見据えている。

そして、対する巨人も白河修司という一人の人間だけをジッと見下ろしていた。

一触即発。誰もが次に起こる戦いを予見していた時。

「やれやれ、相変わらず俺の友はやることが派手だな。ただ軽く小突いただけなのにもう向こうは戦意を失っている。では、そろそろ私も自己紹介をしておくとしよう。ごきげんよう海賊の諸君、私はイアソ

ン。このアルゴー号の船長でアルゴノーツを率いるモノ」
「さて、此処までお膳立てすれば知能の低い君達でも解るだろう。諸君の生殺与奪の権利は私が握っている。そこにいる我が友、ヘラクレスにけしかけられたくなければ、大人しく聖杯を渡して降伏するといい」
ドレイクの船に隣接していた船から一人の男が優雅に振る舞いながら姿を表した。自らをイアソンとなのり、金色の髪を掻き上げながらドレイク達に降伏を命令する。
決まった。内心で自分の振る舞いに満点を付けるイアソン、これで誰もが自分に平伏するだろう。
しかし、幾ら待ってもその時は来なかった。あれ？　もしかして自分無視されてる？
「船長、連中全然聞いている様子ないですぜ？」
女神エウリュアレを抱えながら乗船口してくるヘクトールが無慈悲な事実を突き付けてきた。まさにランサー、その鋭さは敵だけではなく味方にまで向けられるというのか！
「……ふ、ふふ。まぁヘラクレスが出てきたんだ。怯えて声がでないのも仕方ない。私は寛容な男だ。怯えている者に鞭打つつもりはないさ」
だからもう一度降伏勧告をしてあげよう。なんて優しい人間だろうか。そんな呆れるほどの自尊心を抱きながらイアソンが再び声を上げてドレイク達に呼び掛けようとしたとき。
「――よぉ、久し振りだな」
ふと、通りのよい声が耳に入ってきた。一瞬自分に言われたのかと思い戸惑うイアソンだが、どうやら声の主はイアソンに言ったわけではないらしい。
声の主、即ち白河修司は自身の前に立つ大英雄に呼び掛ける。相手は理性なき狂戦士。自分の事なんて覚えている訳がないし、言葉なんて通じる筈がない。
しかし、それでも修司は言わなければならなかった。何せ今目の前にいるのは修司がいつかリベンジをしたいと望んでいた相手だから。

「俺のこと、覚えているか？　――――ヘラクレス！」
瞬間、修司が気の炎を纏い噴出される。ドンッと空気が爆ぜる音ともに暴風が吹き荒れ、その唐突な力の昂りにイアソン達を含めた全員が目を剥いた。
自分はあれから強くなったぞ。そう言わんばかりの挑発行動、あの時とは明らかに違う。そんな修司を前にして……ヘラクレスは一瞬だけ獰猛な笑みを浮かべ。
「??????????ッ!!」
「オラァッ!!」
??????互いに同時に振り抜かれた拳は激突した瞬間的――――浜辺に轟音と爆発が覆い尽くした。

その３８　第三特異点

その戦いは白河修司の人生において一つの契機をもたらした。人気の無くなった倉庫街、逃げ場のないその場所での出会いは修司にある種の始まりを与えた。

圧倒的理不尽、圧倒的不条理、そして……圧倒的暴力。この世の不条理や理不尽を許さないと断じる修司が再び地に屈した相手。

その男の名は――――ヘラクレス。ギリシャ最大にして最強、その者の名を知らないものなど地球上に存在しないとさえ言わしめる伝説の中の伝説。幾多の偉業を成し遂げ、後に神へと至った人類最強。敵わないのは当たり前、かの伝説を前に戦い、生き延びただけでもそれこそが偉業であると普通なら慰めるだろう。

だが、それを修司は良しとしなかった。負けた自分が情けなくて、勝てなかった自分が許せなくて、理不尽に抗えなかった自分が、あの時から成長していないようで……恐ろしかった。

ヘラクレスは今も修司にとって始まりの象徴で、絶望の具現で、理不尽の体現者だ。二度と逢うことはないと思っていた強敵、あの聖杯戦争で唯一勝ち逃げされた相手。故に――――白河修司は感謝した。

自分を目の前の巨人と再び巡り会わせてくれた神を除いた全てに、最大の感謝と敬意をその胸の中で抱く。

今、目の前にはあの頃と寸分違わない巌の巨人が立ち塞がっている。嘗て敵わなかった相手が再び自分の前に現れている。

自分の事を覚えているのかはどうでもいい、今修司が抱く思いは唯一つ。――――あの時の、リベンジを。

◇

「どひゃぁぁぁッ!!?」
「先輩!?」
突如巻き起こった爆発に堪えきれなかった立香が吹っ飛んでいく。女の子が出してはいけない叫び声を上げながら、宙を飛ぶ人類最後のマスターを後輩でありデミ・サーヴァントであるマシュが抱き止める。
黒い巨人と修司の拳の激突による衝撃は周囲を吹き飛ばしながら蹂躙した。足元にあった浜辺は二人を中心に抉れて陥没し、そこへ海水が流れ込んでしまっている。
幸い船やドレイク達に被害が出ている様子はなく、島に接岸する為に下ろしていた錨ごと沖へ吹っ飛んだだけで済んでいる。尤も、現状その事に気付けているものは誰もいない。
ドレイクも立香も、そして敵対しているイアソンすらも突然の出来事に呆然としてしまっていた。ギリシャ最強の大英雄がたった一人の人間を殺すために全力を奮っていて、対するその人間も振り抜かれたヘラクレスの拳に向けて自身の拳を放った。
結果、白河修司はヘラクレスの拳に潰される処か拮抗し、対抗してしまっている。有り得ならざる光景、あってはならないその光景にイアソンの思考は現実を受け入れられず停止する。
対して女神エウリュアレを抱えていたヘクトールは他の者達と同様に驚きこそはしても、その思考だけは止めていなかった。務めて冷静さを装いながらヘラクレスと力で拮抗する修司を観察していると、彼の体から白い炎の様なモノが吹き出ているのが見てとれた。
恐らく、アレが奴の力を底上げしているのだろう。だがあの炎の正体が全く分からない、魔術の類いか、或いは何かの術式か。何にせよ大英雄に対抗出来るだけの膂力に底上げしているのならば、どちらにしても厄介なことに代わりはない。
一度戦いの場に出せば勝利を約束されたヘラクレスが対抗されて

いる、その時点でヘクトールはイアソンに撤退を進言するべきだった。多少できる程度と思っていた人間が、まさかのヘラクレスと互する実力を有しているなんてヘクトール自身、予想していなかった。

そして、そんな驚いている全員を他所に状況は動き出す。完全に膠着状態となった二人、拳を突き出した状態から最初に動いたのは――――修司の方だった。

脚に力を入れ、腰、両肩、そして拳へ筋力を連動させた修司が見せたのは寸勁を応用した人の技。未だ力で押し潰そうとするヘラクレスを修司は己の技を以て受け捌く。

全身から流れる力、それは付き合わせていたヘラクレスにも伝搬し……その瞬間、ヘラクレスは回転した。緩い足場である砂浜を利用し、自分よりも大きな相手であるヘラクレスを修司は純粋な体術で体勢を崩させた。

「????ッ!?」

突然自身の視界が反転した事にヘラクレスは驚愕の雄叫びを上げる。逆さになる地面、体感する浮遊感に彼の大英雄が戸惑うのも束の間、修司は無防備となった胴体に自身の背中を叩き込む。

「憤ッ！」

鉄山靠。八極拳を修めた修司が独自に自身の武術を拓き始めても尚、捨てることのなかった基本技。体当たりというよりは投げ技に近いその一撃に３ｍ近くあった巌の巨人はまるでゴム毬の様に吹き飛んでいった。

地面を跳ね、その先の森林を薙ぎ倒し、幾つもの岩山を砕きながら飛び続けた大英雄は奇しくも修司達が狩り尽くしたワイバーンの巣穴辺りにまで吹き飛んでいく。

其処まで跳び跳ねた事で此処まで戻るのに幾ばくかの猶予が生まれ、その間にやるべき事を済ませようと修司は黄金の鹿号に隣接するアルゴー号へ乗り込んでいく。

その最中、今の内に船へ乗り込んでいくドレイク達を見送る。途中、気を失っているアステリオスを忘れずに回収していくドレイクの部下達、彼等の優しさを嬉しく思いながらアルゴー号の甲板へ降り立

つ修司を待っていたのは、一条の光だった。
鋭く、人を穿つには充分な威力を持った光。しかし炎を纏い力を纏う修司に着地間際を狙った一撃が届くことはなく、その光は修司の手によって鷲掴みにされた。
「……チッ、流石に分かりやすかったか」
「アンタなら、着地間際の隙を狙ってくると思ったよ」
放たれたのはヘクトールによる隙を突いたつもりの一撃だったのだが……流石に迂闊にすぎた。修司という男の力を目の当たりにし、焦ってしまった彼の一振りは速く鋭くあっても読みやすかった。彼ならば此くらいの事は仕掛けてくる、なんて一種の信頼から繰り出された一撃は修司にとってやはり分かりやすく、それでいて防ぎやすいモノだった。
英雄ヘクトールが手にする槍、不毀の極剣（ドゥリンダナ）即ちデュランダル。その名の通り決して毀れず、折れず、朽ちないとされる伝説の剣。握り締めた感触から確かにその名に相応しい硬さが伝わってくる。
しかし。
「アンタの槍、確かに凄い硬さだ。以前折ったエクスカリバーよりも幾分頑丈に造られているのは握っただけで伝わってくるよ」
ミシミシとドゥリンダナが悲鳴を上げている。不朽とされる己の得物が刃を通す処か押し負けそうになっている。どんな得物も十全に扱えてこその一流と豪語するヘクトールだが、流石に今自身の得物を破壊されるわけにはいかない。
「ったく、本当におっかない兄ちゃんだな！」
咄嗟に跳躍し、修司の顔に向けて蹴りを放つが、やはりその動きも修司に読まれていた。振り抜いた蹴りを捕まれ、とうとう無防備を晒してしまったヘクトールへ一度だけ蹴りを放つ事で彼の腕に抱えられていたエウリュアレを解放させる。
そして、そのまま修司の手によってドレイク達とは反対方向へ投げ飛ばされたヘクトールはそのまま海面に激突し、沈んでいく。落ちるエウリュアレを抱き抱え、そのまま自身の後ろへ隠すように立たせると改めて停船の船長であるイアソンへ向き直る。

「さて、イアソンって言ったか？　アンタが船長って言うなら、ここに聖杯がある筈だよな。大人しく渡してくれるなら、命までは取るつもりはないが……どうする？」
「ヒッ！」
　言外に戦うつもりなら容赦はしないと脅してくる修司にイアソンは腰を抜かせて尻餅を付く。その表情は何処までも怯えていて、とても歴戦の英雄とは思えない。ブラフ？　何かの陽動か？　怪しむ修司に奥から数体の竜牙兵が襲ってきた。

　軽くあしらおうとした時、背後から魔力で編まれた矢が竜牙兵達を撃ち抜いていく。振り返ればエウリュアレが弓を構えており、どうやら戦うだけの気概はあるようだ。
　本当なら今すぐにでもドレイクの船へと放り投げてやりたいところだが、生憎と修司にはまだ言及しなければならないことがある。視線をイアソンから外し、修司が睨み付けるのはその奥、竜牙兵達が現れたとされる暗闇へと目を向ける。
「あらあら、防がれちゃいましたか。残念です、イアソン様の敵を排除できるかと思ったらまさか女神様に阻まれてしまうだなんて……」
「別に助けたつもりはないわ。私はあくまで奥に潜んでいる貴女を狙ったの。そこの脳筋バカは私が助けなくても勝手に何とかしてたわよ」
「……脳筋バカって俺の事？」
　アンタ以外に誰がいるのよ。辛辣な女神からの言葉を無視して改めて声の方へ振り向くと……そこには可憐な少女が杖を片手にイアソンの側で佇んでいた。
　彼女を見て修司は確信する。あの時、エウリュアレを狙ったヘクトールの存在に気付けなかったのは目の前の少女の魔術によるものだと、あの佇まいから恐らくは彼女もこの船の一員なのだろう。
　油断はできない、しかしそれ以上に気になる。目の前の少女に修司は何処か見覚えた感じがした。
「大丈夫ですかイアソン様。さぁ、私の手を取って下さい」

「め、メディア……くっ、こののろまがぁっ!!」
メディアと呼ばれる少女がイアソンに手を差しのべ、イアソンもまたその手を取ろうとした時、イアソンはその手を払いのけ、握り締めた拳を彼女の顔へ叩き付けた。
仲間である少女に対しての仕打ちに修司とメディアは驚きに目を見開いた。イアソンと呼ばれる男は仮にも英霊に数えられる男、故に悪逆暴虐の類いの人間ではない筈。しかし今目の前に広がる彼の行いは到底英雄とは程遠いモノだった。
「このグズが！　どうしてさっさと魔術でヘラクレスを援護しない！　魔術だけがお前の取り柄だろうが！　この俺に恥をかかせやがって！」
「申し訳ありませんイアソン様」
「この、この、このっ！」
「いい加減にしろ」
「あぐぁっ!?」
殴られ、倒れ伏すメディアと呼ばれる少女をイアソンは罵詈雑言を浴びせながら蹴りを入れる。そんな状況を見かねた修司が横から蹴りを入れてイアソンを吹き飛ばす。潰れた蛙のような悲鳴を上げながら倒れるイアソンを、修司は静かに見下ろした。
「そんなに部下の不手際に腹を立てるのなら、いっそテメェが戦えばいいだろう。腐ってもテメェも英霊だ。多少の心得はあるんだろ？」
自分よりも弱い立場の人間を一方的に責め立てる事を修司は由としない、それが例え敵が相手でもそれは変わらず、ましてや被害に遭っているのがあの魔女っ子メディアちゃんだとすればなおのこと。
そう、修司は思い出した。視界の端で倒れる彼女は昔保護者であった英雄王が監督した偉人アニメ魔女っ子メディアちゃんの主人公であるメディアちゃんに瓜二つなのだ。というか、元ネタ的に此方が本命なのだろう。
薄幸で健気で、その上頑張り屋なメディアちゃん。英雄王曰く大分脚色が入っていると言っていたが、それでも当時はそんな可愛らしいメディアちゃんに多くの子供達が注目しており、白河修司もまた彼女

に少なからず関心を抱いていた。
　そんな子供たちの人気者であった彼女が悪い男に虐げられているなら、修司が止めるのも当然と言えた。
　しかし、そんな修司の胸中を逆撫でするように倒れたイアソンから笑い声が滲み出る。
「く、くくく、バカが。お前みたいな凡人が本当にヘラクレスを倒せると思っているのか！　調子に乗るなよバカが！」
「……」
「ヘラクレスは無敵だ！　生前奴が乗り越えた試練はそのまま奴の命となる！　分かるか？　仮に、仮に奇跡的にお前がヘラクレスを倒したとしても、ヘラクレスはあと十一回も復活するんだよ！」
「そして、お前ごときにヘラクレスを倒せるのは絶対に有り得ない！　奇跡なんてものは十一回も起きたりはしないんだよ!!」
　サーヴァントであるヘラクレスは生前の偉業を宝具として昇華させ、自らの命のストックとさせている。類いまれなる強靭な肉体と最高の膂力を併せ持ったヘラクレスは１２という数を殺さなければ倒せない。まさに不滅、まさに不撓不屈、ギリシャ最強に相応しい力を持っていると高らかに謳うイアソンに……。
「知ってるよ」
　白河修司の声色は何処までも平静だった。
「……なに？」
「あの男が強いのは昔からよく知っている。何せ実体験したからな。強さ、タフさ、そして不死身具合、どれもふざけたモノだったさ。当時の俺では精々二つ倒すので精一杯だった」
　思い出すように、懐かしむ様に語る修司にイアソンは再び放心してしまった。修司の言葉、その内容を理解するに連れて彼が抱くのはヘラクレスと戦い、生き残ったと口にする修司への嫉妬だった。
「な、なんだそれは？　なんだその口振りは？　まさかお前、以前にもヘラクレスと戦ったことがあると、そんな事を宣うつもりか!?」
「つもりもなにも、事実だよ。俺は一度奴と戦い、敗北している。まぁ負けたけど、お陰で今日はリベンジが叶いそうだ。この巡り合わせに

運命を感じずにはいられないよ」
「ふざ、ふざけるなぁ！　お前ごときがヘラクレスにリベンジするだと!?　お前なんかが、お前なんかがヘラクレスと戦って、生きていられる訳がないだろうが！」
「別にお前に信じてもらう必要はねぇよ、俺は奴を倒す。……それとも？」
「???????ッ!!」
「何こうもどうやら、そのつもりのようだ」
何かを喚いているイアソンを他所に修司が上を見上げると、そこへ黒い巨漢の大男――――ヘラクレスが甲板へと落ちてくる。恐らくはあの距離から跳躍してきたのだろう。
ヘラクレスが着地した衝撃で船体が大きく揺れる。バランスを崩したエウリュアレを修司が抱き抱えると、その瞬間を狙ったヘルクレスの豪腕が二人めがけて打ち下ろされる。
しかし、心なしかヘラクレスの拳に勢いが無かった。自分の乗る船を壊すわけにはいかないと加減をしたのか、それともイアソンの指示なのかは不明だが、速く重いヘラクレスの拳を難なくいなした修司が懐へと潜り込み。
「先ずは、証明の一撃だ。挨拶代わりに受け取っとけ！　七孔噴血……撒き死ねぃ!!」
瞬間、拳から放たれる一撃がヘラクレスを貫き、その胴体に風穴を開けた。自分の仲間が、嘗ての大英雄が名も知らない人間にその肉体を物理的に破られた。
体に孔を開け、膝を折る大英雄。その光景はイアソンにとって何物にも勝る衝撃的なモノだった。
「修司！　そろそろヘクトールも戻ってくるわ！　一旦ここは下がるべきだと思うのだけれど!?」
ヘラクレスが再生しきる前に決着を付けようかと思ったが、どうやらそう簡単にはいかないらしい。気が付けば大量の竜牙兵に囲まれているし、このままではヘクトールも合流されてしまう。大英雄ヘラクレスを筆頭にギリシャの強者達が勢揃い、対して此方には連中の

狙っているらしいエウリュアレを抱えてしまっている。
流石に彼女を抱えて守りながら戦うのは流石にキツイ、仲間達を無事に逃がせたから勝敗的には痛み分けで済んでいる。
既にドレイクの船は遠く離れている。気配を探して脱出しようと、修司は竜牙兵の群れを薙ぎ倒し脱出口を作り出す。
「じゃあな。次会ったときは今度こそリベンジ、させてもらうぜ」
一度だけ振り返り、再生の途中であるヘラクレスに一言投げ掛けて修司はドレイク達が逃げた方角へ跳躍。そのまま海面を滑るように掛けていく、ヘラクレスが完全に再生する頃には修司の姿は彼方へと消えていた。
残されたのは目の前でヘラクレスの命を削られた事実にうちひしがれるイアソンと彼の側に付き従うメディアのみ。
「……嘘だ。ヘラクレスが、俺達の最強が――――あんな奴に」
認めたくない現実、しかし事実は変わらない。ヘラクレスという大英雄をたった一撃で倒す白河修司という男にイアソンは今更ながら恐怖を覚え、そして……それ以上の怒りを覚えた。
ヘラクレスは最強でなくてはならない。ヘラクレスこそが世界最強の英雄で、何者にも負けない男でなければならない。イアソンの自信と誇りは全てヘラクレスの強さに直結している。
故に彼が負けるのだけは何よりも有り得ないと断じ、否定してきた。しかし、その自信も誇りも白河修司という一人の男に脅かされている。
奴は殺す。必ず、ヘラクレスによって殺されなければならない。この海に召喚され、世界の支配者に……王になるべく動いてきた男はこの時初めて追い詰められた表情で思案していた。
そして……。
「イアソン様、私の……いえ、私達の王よ。あの不届き者を倒したいと本気でお思いですか？」
「……どういう意味だ？」
「もし、あなた様が全てをかなぐり捨ててヘラクレスへの勝利を願うのでしたら――――このメディア、一つだけ策がございます」

試行錯誤するイアソンに声を掛けるのは彼が酷くあしらった少女、メディア。コルキスの王女として見目麗しい見た目の少女は、その笑みもやはり美しく可憐だった。

その３９　第三特異点

「矢文？」
　船を改修しようと立ち寄ったとある島で、イアソン達アルゴノーツから逃げ延びた立香達は現在別の島へと辿り着いき、そこで採集したワイバーンの鱗を使ってドレイクの黄金の鹿号へ取り付けながらこれ迄の経緯を整理している最中、島の奥から一本の矢文が放たれた。
　オリオンの眉間を撃ち抜いた矢文、それをアルテミスが引き抜いて文の内容を読むと嬉しそうに笑みを浮かべる。船を改修後、矢文が放たれた所を探索すると、そこに男女一組のサーヴァントが待ち構えていた。
　アタランテとダビデ、ギリシャ神話に於ける美しき狩人とイスラエルの王。共に弓兵（アーチャー）として現界した二人が立香達の前に現れる。
「汝らがアルゴノーツに敵対する者か？」
「は、はい。いきなりの事でしたので未だ状況は把握しきれていませんが、恐らくはそうなるかと思われます」
「まぁ、私達が混乱しているのって大体修司さんの所為でもあるけどね」
「むむ？　そう言えばその修司とやらは一体何処へ？　姿が見えないとなると……まさかやられちゃったとか？」
「そ、それは……」
　この場にいない修司の安否にマシュの顔に陰が落ちる。彼が黒い巨人――――ヘラクレスを吹き飛ばした所までは憶えていたが、それ以降は必死にその場から逃げることだけを集中していた為、修司とエウリュアレがどうなったのかは定かではない。
　アステリオスも打ち所が悪かったのか未だに船の上で伸びたままだ。もし彼が目を覚ましたら、エウリュアレがいない事に驚いて彼女を取り戻そうと暴れまわるだろう。
　そうなる前に何とか修司と連絡を取って安否を確認したい、そうマ

シュが悩んでいると……。
「おっ、やっぱり皆ここにいたのか。全員無事みたいで安心したよ」
「し、修司さん!? ご無事だったんですか!?」
「ん? あぁ、ヘラクレスを一度倒して再生しているその間にね。あとアステリオスが未だノビているみたいだし、介抱と周辺への警戒を兼ねてエウリュアレを置いてきたよ」
「まてまてまてまて、情報量が多すぎる! え? ヘラクレスを倒してきたの? 兄ちゃん一人で? そしてエウリュアレは普通に取り戻してきたの? あのヘクトールから?」
「あぁ、あの槍のおっさんやっぱ相当な手練れだわ。得物を壊そうとしても避けられちまうし、エウリュアレも抱えていたから逃げの一手だったわ」
さらりと宣う修司にマシュとオリオンは頭を抱えた。ヘクトールは守りに秀でた英雄、トロイア戦争で活躍した彼から特定のモノを奪い返すなんて事は誰にでも出来る事じゃない。
何より、白河修司は口にした。ヘラクレスを一回倒したと、不撓不屈で知られるギリシャ代表格の大英雄が目の前の人間に一度倒されたという事実にオリオンを初めとしたギリシャ勢に少なくない衝撃を与えた。
「嘘を……言っている様子ではないな」
「はぁー、最近の人間って凄いんだねぇ」
「いえ、この人を基準にされたら困るので止めてくださいね。普通の人間にそんな真似出来ませんから」
「なんか、立香ちゃんも段々俺に対して容赦が失くなったね」
その後、一行は出てきた情報の数を整理すべく、ドレイクの船へと戻る。そこでは目を覚ましたアステリオスが目の前の介抱してくれたエウリュアレに感謝しつつ彼女を肩車していた場面に遭遇し、その後は穏やかな空気に包まれながらアタランテとダビデからの自身のこれ迄の経緯と彼等の知る限りの情報を交えながら話は進んでいった。
「契約の箱(アーク)ねぇ、つまりあのイアソン一行はそのアークを使う為にエ

ウリュアレを拐おうとしたと。しかし分からんね、何故世界を滅ぼすって箱をあの男は開けようとするのかな」
「それほどまでに世界を滅ぼしたいのでしょうか」
「さてな。……案外、知らされていないだけやもしれんぞ。誰かに唆されて言われるがまま行動しているだけ、とかな」
　そんな話の中、契約の箱と呼ばれる聖遺物という単語が出てきた辺りでイアソンの目論見の矛盾点が露になる。契約の箱（アーク）とはダビデがこの特異点で最初に召喚された時に付属として現界した聖遺物。神が人類に与えた契約書でもあり、比喩抜きで死をもたらす災いの箱。
　そこにエウリュアレという神性が生け贄として捧げられれば、その瞬間不安定な特異点であるこの世界は死に絶え、世界は終焉を迎える事になるだろう。
　しかし、話を聞く限りイアソンは王になる野望はあっても世界を終わらせる程の破滅願望の持ち主でないと嘗てのアルゴノーツの船員であったアタランテは言う。王になることを望みながら世界を滅ぼすという矛盾、そこに一行はイアソンではない誰かの思惑が絡んでいるのではないかと推測している。
「成る程、つまりエウリュアレをイアソンに渡しちゃダメだって事だね！　理解したよ！　アステリオス、絶対にエウリュアレを守ろうね！」
「う、うん。オレ、エウリュアレ、守る」
「兎も角、やらなきゃいけない事がハッキリしたのはいいが、問題はヘラクレスだ。奴さんが向こうにいる以上事は簡単には行かないぞ」
　幸いな事にアークもエウリュアレも今は此方の手の内にある。が、それ以上に厄介なのはヘラクレスの存在だ。ギリシャ最強の大英雄に相応しい力を持つ彼に正面から戦えるサーヴァントはこの場にはおらず、どちらかと言えば後方支援に特化したアーチャークラスのサーヴァントが多い。
　アステリオスもパワーだけなら負けていないかもしれないが、ヘラクレスは力だけでなく技のキレも凄まじい。正面からで戦うにはアステリオスでは些か以上に不安と言えた。

今回の特異点は間違いなくイアソンだ。なのに彼を倒すまでの道のりは遠い、……と思われていたが。
「なら、ヘラクレスは君に任せようじゃないか。聞く限りだと既にヘラクレスは一度君に倒されている。聞けば君はヘラクレスと何かしらの因縁があるみたいじゃないか、リベンジを果たすのに今回のシチュエーションはピッタリだと思うんだけど？」
誰もが考え、敢えて口にしなかった事をイスラエルの王ダビデは修司に向けて提案する。彼とヘラクレスの間にある因縁、古代ギリシャの大英雄と現代に生きる修司にどんな接点があるのかは定かではないが、確かにダビデが言うように実力的に白河修司こそが対ヘラクレスの切り札といえた。
「あぁ、任せてくれ」
そして、そんなダビデの提案を修司は二つ返事で了承する。元よりそのつもりだと、そう言わんばかりに頷く修司に一人のドクターが異論を挟む。
『僕は反対だ。あの大英雄と正面から戦う？　冗談じゃない、数少ない人材をそんな捨て駒の様に扱ってたまるか』
「ど、ドクター？」
普段とは違い、些か怒気の孕んだ口調で反対するドクターにマシュと立香は戸惑った。
『修司君、君がどうしてあのヘラクレスと面識があるのかはこの際聞かないさ。でもね、幾ら因縁があるからってハイそうですかと送り出せるほど僕は薄情じゃない。相手はギリシャ最強と謂われる大英雄だ。幾ら君でも必ず勝てるなんて保証はないだろう』
「いや、割かしイケると思うぞ。前は二回倒すだけで精一杯なのに今回は結構簡単に一回倒せているからな。多分、然程苦戦はしないと思うぞ」
大英雄を相手に苦戦はしない。大言壮語も甚だしい台詞だが、修司がホラ吹きでないことはこの場の誰もが理解している。恐らく、修司はヘラクレスと戦い勝てるのだろう。
そう、相手がサーヴァントである限り。

『そう言うことを言ってるんじゃない。どうして君はそう一人で解決しようとするんだ。僕達はチームだろう。困難に立ち向かうのは君だけじゃない、立香ちゃんもマシュも、僕達カルデアスタッフだっているんだ。君だけが命を掛ける必要なんかないんだぞ』
　それはＤｒ．ロマンの本音だった。当然のように矢面に立ち、立香やマシュの代わりに危険地帯に飛び込もうとする修司は端から見れば自殺志願者にしか見えないだろう。
　もう少し、足並みを揃えて考えて欲しい。自分だけが戦えばいいだなんて……そんなものは傲慢でしかない。考え直せと言外に伝えてくるロマニに修司は笑って応えた。
「別に、そんなつもりはないさ。立香ちゃんもマシュちゃんも、他の皆も戦うだろうし、そこに掛かるリスクは同じ、そうだろ？」
『で、でもさ！』
「それに、ダビデのおっちゃんが提案したけど、本当は俺自身が奴との一騎討ちを望んでいるんだ。アイツとはいつかリベンジを果たしたい、そして今その機会が目の前に転がってきた。俺は、可能な限りこのチャンスを不意にしたくない」
「え？　待って、僕のおっちゃん呼びについて一言物申したいんだけど？」
「後にしろおっちゃん」
「頼む、ロマニ＝アーキマン司令代理。俺の我が儘をどうか聞き入れてくれ」
　そう言って修司は声だけのドクターに頭を下げた。自分の我が儘の為に前線に立つこと、それは人材に限りあるカルデアという組織としては到底受け入れがたい話だ。
　特に、白河修司は藤丸立香と並ぶ人類最後のマスター。彼の代わりなど存在しない、本来なら彼の頼みなど聞き入れる筈もなく即座に否定するべきなのだろう。
　だが、ロマニは出来なかった。白河修司は基本的に他人に優しく自分に厳しい人間だ。カルデアにいる時は常にスタッフ達の健康状態を気に掛けたり、相手がサーヴァントだろうと対等の存在として、或

いは敬うべき相手として接したり、またその技術力の高さでカルデアの機器を修復したりと、カルデアの機能改善に大いに貢献した。
　そんな彼が口にする初めての我が儘。無視するにはロマニ＝アーキマンは実直過ぎた。
『～～～～っ、あぁもう！　分かったよ！　でも、必ず生き残ること、無茶をしないこと、ヤバくなったらすぐに逃げること、これ等を条件を頭に入れておいてよね！』
「あぁ、善処する。ありがとう、ドクター」
　とうとう折れたロマニを修司は笑いながら礼を口にする。ヘラクレスは白河修司が担当する。最大の問題であるヘラクレスの対応はそれでいいとして、残る問題は他にもあった。
「でも、あのイアソンが果たして自身の切り札であるヘラクレスをそう簡単に手放す様な真似をするでしょうか？」
「いや、奴ならば間違いなくヘラクレスを修司へけしかける事だろう。奴はプライドの高さ以上にヘラクレスを絶対視している。仮にも対等に戦って見せた彼をムザムザ野放しにする真似はしないだろうよ」
「流石元船員、船長の事は良く知ってるのな」
「ただ、あの男は基本的にクズだが、追い詰められると恐ろしい迄の底力を見せてくる時がある。侮るなとは言わないが、詰めを誤るのはオススメしないぞ」
「へぇ、やっぱりあんなんでも一端の猛者なんだね」
　アタランテの助言もあって作戦内容は相変わらず大雑把だが纏まりつつあった。ヘラクレスを修司が相手をしている間にイアソンを討つ、その間の障害であるヘクトールとメディアに警戒しながらどう戦うか話し合う最中、ロマニから再び通信が入ってきた。
『皆、たった今対岸から特大の魔力反応を感知した！　この反応は――――ヘラクレス！　真っ直ぐに此方を目指しているぞ！』
「俺の気配察知には反応がなかった。となるとやはりあの魔女っ子の仕業か」
「いきなりの決戦、土壇場もいいところだけど……まぁ、何とかなるさ。死んだら死んだでそれはそれだ」

「なんつー破滅願望、いや、この場合は無責任か」
「契約の箱（アーク）とエウリュアレさんを奪われたら、世界が滅んでしまう。それを防ぐためにも……皆さん、宜しくお願いします！」
「やれやれ、とんだ大冒険になったもんだよ。でもこれはこれで良い土産話になるってもんさね。さぁ、張り切っていこうか！」
ドレイクの号令を皮切りに修司達もまた動き出す。修司はヘラクレスの下へ、立香達はイアソンがいるだろうアルゴー号へ突き進む。
第三特異点における決戦、その時はもうすぐそこまで来ていた。

◇

――――カルデア、人類最後の魔術拠点。数少ないスタッフが立香達をサポートに徹しているなか、多くのサーヴァント達は食堂にある大型モニターを前に映し出される光景を注目していた。
この大型モニターはカルデア内にいるサーヴァントが常にマスターの状態と特異点での状況を共有出来るように修司の手によって備えられた特殊機構。管制室から送られる映像を目の当たりにした各サーヴァントはその多くが興味津々といった様子で眺めていた。
そんな中、一人離れた位置に座る英雄王は目を閉じて他の面々とは異なる映像を直視する。
千里眼。常人とは異なる視点で異なる世界を見渡すとされる眼、英雄王が見渡すのは今より少しだけの未来、彼が目にしたのは――――考えられる限りの中でも最悪の未来だった。
大地は砕かれ、空は切り裂かれ、海が荒れ狂う。そんな地獄のよう

な世界で赤く染まる修司と、そんな彼を静かに見下ろすのは知性と理性を宿した巌の如き黒い巨人。断片的に見えた未来の映像はしかして突然に途切れる事になる。
「チッあの過保護者め、この程度の覗き見すらゆるさんとは、つくづく面倒な奴よ。……だが、成る程。よりにもよってそうなるか」
取り出せた情報は僅かなモノ、されど英雄王にはそれだけで充分だった。
王は笑う。それは念願が叶う臣下を思ってか、それとも……。
「さぁ修司よ、お前の真価を問われる時だぞ。かの伝説を前に蹂躙されるか乗り越えるか……それとも、新たに伝説を塗り替えるのか、見せてもらおう」
その笑みは何処までもワクワクに満ちていた。

その４０　第三特異点

「そんな、竜牙兵の軍勢がもうここまで!?」
「メディアの仕業だな。あの女、聖杯の力で手当たり次第に呼び出したらしいな」
　修司と別れ、自分達の役割を果たすべくイアソン達のいるアルゴー号へ向かう立香達の前に立ち塞がるのは平原から浜辺までの一帯を埋め尽くす竜牙兵の軍勢だった。
　聖杯という膨大な魔力リソースを用いての大規模召喚。中には黒ひげやアン＆メアリーの形取ったシャドウサーヴァントまで陳列し、その全てが立香達に向かって真っ直ぐに行進してくる。
　数えるのも億劫に成る程の戦力、しかし幾ら数は多くても複数のサーヴァントがいる立香の陣営の方が圧倒的有利、時間こそ掛かるが向こうに逃げる意思がない以上戦況はこちらに好都合だ。
「行くよマシュ！　皆もお願いね！」
「了解！　マシュ＝キリエライト、突貫します！」
「オォォォォオッ!!」
　マシュが盾を構えて突進し、アステリオスが両手の斧を振り回して竜牙兵の群を凪ぎ払っていく。序盤にしては上々の出だし、アーチャー組も援護に回り矢の雨を降らして敵の数を減らしていくと、カルデアからの通信が入ってきた。
『……おかしい』
「ドクター、どうしたの？」
『今こちらからアルゴー号への魔力反応を確認したんだけど……イアソンとメディアの反応が無いんだ！　大量の竜牙兵の所為でハッキリしないんだけど、そこに彼等の姿はない！　そこには一騎分のサーヴァントの反応しかないんだ！』
「！」
　通信を繋げてきたロマニの声は思ってた以上に焦りを含んでいた。

イアソンという男は基本的に後方で控えてふんぞり返りながら指示を出す指揮官だ。本陣を、それも自身の分身とも呼べるアルゴー号から逃げ出すなんてそれは彼にとって自ら敗北を宣言しているに等しい。

誰もがそんなバカなと狂ってしまった作戦に動揺するなか、アタランテはまさかと一つの思い当たりを口にする。

「まさか、白河修司の予想以上の活躍がイアソンのプライドに触れてしまったのか」

「それってもしかしなくても、あの二人が修司さんの所に向かっているって事になるんじゃ……」

「ご名答」

「!?」

「先輩!」

アタランテの言葉に二人の行方を察した立香、そんな彼女の喉元に一本の槍が突き立てられようとするが、間一髪マシュの盾が迫る凶刃を防ぐ。

「チッ、やっぱそう簡単にはいかせてくれねぇか。やれやれ、盾を持つ英霊ってのは本当に面倒だこと」

「ヘクトール!」

弾かれた槍を構え直して今一度奮おうとした時、ヘクトールに矢の雨が降り注がれ、女神アルテミスの矢が迫るが、守りに特化しているヘクトールに牽制として放たれた矢など当たるわけもなく、頭上からの矢の雨を避け、着地間際に狙われた一矢を竜牙兵を盾にして防いでしまう。

「チッ、そう言うことかよ」

「何がそう言うことなのダーリン?」

「いやお前は気付けよ!　……どうやら向こうも此処でケリを付けるらしい。誘い込むつもりが、まんまと此方が誘われたって事なんだよ!」

「加えてこの竜牙兵の数、どうやら向こうも狙いは同じだったらしい」

「察しの通り、ここはアンタ達の檻って訳。そっちはヘラクレスを足

止めしている間に此方の大将を仕留めたい、こっちはあの怖い兄ちゃんを倒す間の足止めをしたい。皮肉にも互いの目的は噛み合った訳だ」
「してやられたね。あのボンクラ船長、こういう事まで頭を巡らせるとは……参ったね。完全に読み間違えた」
「此処へ来てうちの大将も腹を括った訳だ。なら、部下としてそれなりにやってやらんとなぁ」
ヘクトールの口元が獰猛な獣の様に歪む。
「生憎と、雇い主からの最後の命令でね。事が終わるまでお前達をここに釘付けにするのが俺の役目って訳――――悪いが、付き合ってもらうぞ」
無数の竜牙兵を味方に付けているとはいえ、立香にはドレイクを除いて総勢六騎のサーヴァントが付いている。戦力では依然としてこちらに有利の筈。
なのに目の前のたった一人のサーヴァント、ヘクトールの目には微塵も諦めの様子はなかった。一人で殿を任された男の意地、こうなった英雄はヘラクレス並に厄介だ。
逸る気持ちを抑えながら立香はヘクトールを見据える。目の前のサーヴァントは無視をして良い相手ではない、此処で倒すつもりで戦うべきだと意識を切り替え、立香はマシュに指示を出す。
「マシュ！　ヘクトールを速やかに撃破後、私達も修司さんの所へ向かうよ！　だから……絶対に勝って！」
「了解です！　必ず勝って、修司さんの所へ向かいましょう！」
「ハッ、そう簡単に行くと思うなよ、小娘共！」
浜辺付近の平原にて盾と槍が激突する。

◇

「――――意外だな。お前はもっと臆病な人間だと聞いていたんだがな」

立香達がイアソンの張っていた罠にまんまと嵌まってしまっていた同時刻、森を抜けた先にある草原に修司を待ち構えていたのは巌の黒き巨人ヘラクレス――――だけではなかった。

イアソンとメディア。アルゴー号でも中枢を担う役割だった筈の二人が、ヘラクレスに付き従うように側で控えていた。アタランテから聞いていた限り、イアソンは安全な後方で指示を出す指揮官の様な人間であり、好んで前線に立つような男では無かったという。

人には適材適所がある。前に出て戦う人間がいれば後ろで的確に指示を出し、皆に勝利をもたらす人間もいる。それを分からぬ修司ではないが、それでも相手の粗を炙り出す為に敢えて修司は挑発の言葉を口にする。

「フンッ、生意気な人間がヘラクレスに叩き潰されるのをこの目で見る為だ。たかが一度倒した所で良い気になるなよ？　ヘラクレスにはまだ11もの命がストックされているんだからなぁ！」

返ってきたのは意外にも冷静な声音だった。以前として此方を格下扱いにしてくるが、その辺りは別にどうだって良い。相手が侮るだけ此方に優勢が傾くし、此処で勝てばそれだけ人理修復に近付く。

だが、心なしかイアソンにはそう言った傲慢さが見えない気がする。まるで何かを待っているかの様な……時間稼ぎ？　視線をメディアの方に向けると目を瞑っているだけで何かをしようとしている様子はない。

どちらにせよ、勝負は早い内に決めた方が良いのかもしれない。立香達の安否を気に掛けた修司が気を解放した瞬間。

「この世に、お前より強い人間なんかいやしないんだ！　やっちまえヘラクレス!!」

「??????????!!」

イアソンがヘラクレスに命令を下す。四肢に力を入れ、狂化のス

イッチが入る。こうなったヘラクレスは相手を塵殺するまで誰にも止められない。
ヘラクレスの足場が弾け、瞬く間に修司との距離を零にする。振り上げた腕、その手にはあの日自分の体を切り裂いた岩の斧剣が握り締められている。
振り下ろされる凶器、受ければ死、触れただけでも嘗ては死にかけた一撃必殺の一振り。それを正面から見据えた修司は――一歩、踏み込んだ。
「おおおっ、らぁぁぁっ!!」
踏み込み、ヘラクレスの間合いの更に内側へ潜り込み、握り締めた拳をヘラクレスの脇腹へとめり込ませた。深々と突き刺さる一撃、初めて受ける衝撃にヘラクレスが戸惑いの声を上げるよりも早く……。
「エクス……カリバー!!」
気を込めた手刀の一撃がヘラクレスの胴体を切り裂いた。高い神性を持つヘラクレスの体を容易く切り捨てた光景にイアソンは目を大きく見開かせ、後退る。
メディアも人間である筈の修司の所業に驚きの表情を浮かべているが、イアソンほど動揺してはいない。
「これで二つ。さぁ、ドンドンいくぞ！」
「～～～ッ！　な、何をしているんだヘラクレス！　手加減なんてしている場合ではないぞ！　さっさとそこの身の程知らずを叩き潰せ！」
「???????????ッ!!」
先のと合わせてすでに二つ、残り１０の命となったヘラクレス。しかしイアソンは認めない、認めるわけにはいかなかった。
ヘラクレスはギリシャで……否、世界で知られる大英雄だ。サーヴァントの身で、クラスという縛りに落ちてもその力は未だに健在の筈。自身の憧れで、誰よりもヘラクレスを信じているイアソンが友の勝利を信じるのは当然とも言えた。
「そうだ。俺の……俺達のヘラクレスは最強なんだ！　誰にも負けはしない。どんな奴にだって、負けることは有り得ないんだ!!」

神々の戦いに参加するほどの豪傑。ネメアの獅子を、ヒュドラを、あまねく強敵達を打ち倒し、数多くの伝説と偉業を打ち立てた戦士。そんな彼が負けるわけがない、そう信じて揺るがないイアソンだが。

「??ガサス、彗星拳!!」

「????ッ!!」

??そんな彼の思いを打ち砕くが如く、無数の拳がヘラクレスを貫いた。何故、とイアソンは思う。何故あの修司という人間はヘラクレスを圧倒しているのか、通じていない訳ではない。だがヘラクレスが暴力を奮うよりも速く修司の武力がヘラクレスの暴力を打ち消してしまっている。

知性や理性を無くしても、己の技まで失ってはいない。ヘラクレスには生前に培った技の数々が今も確かに残っている。

なのに……。

「??だらぁぁぁっ!!」

「????ッ!?」

??届かない。奮えば必殺の剛腕が、大地を砕き海を別つ一撃が、修司に届かない。間一髪避けた瞬間、代わりに返される蹴りでヘラクレスの首が在らぬ方向へねじ曲がる。

イアソンが現実を直視出来ない事を咎めるように、一つ二つとヘラクレスはその命を散らしていく。イアソンが信じたヘラクレスが名も知らない小僧に殆んど一方的に蹂躙されていく。

こんな事があって良いのか、こんな悪夢が許されるのか、嘆き、喚きたいイアソンが、絶望に膝を落として地に座り込んだその時、彼は見た。

悔しそうに表情を歪ませるヘラクレスの顔。今の彼に悔しさを感じる知性がなければ顔を歪ませる理性もない。それも一瞬、現実を受け入れられないイアソンが見た見間違い、幻想とも言えるその光景。

しかし、イアソンはそうは思わなかった。知性もなく、理性もないヘラクレスが見せた表情。それはもしかしたら自分だけに見せた信号なのかもしれない。

我ながらふざけた話だ。助けなんて求められる訳がない狂戦士がまさか泣き言を表に出すなんて……それこそヘラクレスを信じるイアソンには有り得ないと吐き捨てるモノだ。

だけど……。

「これで、七つ目ぇッ!!」

「ッ!!」

ヘラクレスが、助けを求めている。その可能性があるだけでイアソンが立ち上がるには充分な理由となった。自分が見た妄想による空想でも良い、それでも自分が今するべき事を理解したイアソンは隣に佇む嘗ての伴侶に声を掛ける。

「――メディア、本当にお前の案でヘラクレスは強くなるんだな？」

「はい。イアソン様の頑張り次第でヘラクレスは嘗てのような無敵無双の力を取り戻す事ができますでしょう。……しかし、その代償にイアソン様はご自身のゆめを諦めなければなりません」

「……」

「イアソン様が願う王になる夢。差別なく、争いがなく皆が平和に暮らせる理想の国、貴方が手にしたくて止まないその全てを……手放さなければなりません」

「――今一度問いましょう。イアソン様、貴方に全てを捨ててまでヘラクレスの力になりたいと願いますか？」

――手が震えた。握り締めた拳に汗が浮かび、喉が乾いて動悸が速くなる。心臓の音が煩いほどに高鳴り、イアソンは最悪の選択を前に思考が停止していた。

自分の夢か、友の助けになるか。二つに一つ、眼前に迫る選択肢。どちらも嫌だ。何故俺がこんな辛い目に合わなければならない、どうして……どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして!?

答えなんて分かりきっている。全てはあの化け物染みた強さを持つ白河修司なる男が全ての原因だ。生身の人間の癖にサーヴァントを凌駕し、現代に生きる人間の癖に古代のヘラクレスを圧している。

「う、うぅ、うぅぅぅぅ……!!」

悔しい。心底悔しい。認めたくない。絶対に認めたくない。認めてしまったら……自分があの男に嫉妬している事まで認めてしまうようで――――もう、イアソンは唸る事しか出来なかった。

このまま何も決断せず、選択肢すら擲って自棄になるか。無様に、みっともなく負けてやろうかと考えることすら放棄し始めたイアソンが目にしたのは……。

「??????ッ!?!?」

??これで、九ォつ!!」

手にしていた斧剣ごと全身を拳で撃ち抜かれ、過半数以上の命のストックを削られたヘラクレスが……地に膝を着けた光景だった。

瞬間、イアソンは走り出した。相手はヘラクレスすら圧倒する怪物、人の皮を被った化け物だ。

認めよう。イアソンは修司に嫉妬している。ヘラクレスと対等以上に戦い、そして圧倒するほどの強さを持つ戦士であると。

矜持も誇りもかなぐり捨てて、序でに帯刀していた剣も投げ捨てる。そのがむしゃらな投擲は両手を腰だめに構えて力を溜めていた修司に唯一の隙を晒す一手となった。

突然の意識外からの攻撃、溜めていたかめはめ波のエネルギーが四散し、この一撃で終わらせようとした修司の目論見が一瞬の内にご破算となった。

一体どこから？　投げ付けられた方向へ目線を向けると、恥も外聞も捨てた様子で走るイアソンがヘラクレスの下へ駆け寄る所だった。

今さら何を？　疑問に訝しむ修司が戸惑った瞬間。

「メディア！　やれぇっ！」

イアソンが叫び、メディアが聖杯を掲げて魔術を行使する。ヘラクレスを中心に広がる魔方陣、輝き出す魔術サークルに不味いと思った修司が魔術を阻止しようと動き出すが……。

修司が魔方陣に触れるよりも速く、イアソンと聖杯は光となり、ヘラクレスの内へと消えていった。

◇

――――膨大な情報の海。過去も、今も、未来も、その全てが那由多の彼方へと吹き飛び、上と下もない何処かへと続く「　」へイアソンの意識は落ちていく。

進む度に自身の核が削れ、落ちる度に加速度的に自身の消失が進んでいく。一端の英霊では自我も保てなくなる情報の海。

（あぁ、何で俺はこんな事をしてるんだろうなぁ、夢も理想も、矜持も誇りもかなぐり捨てて……俺は、なにがしたかったんだろうなぁ）

胸中で溢すのは後悔と愚痴。抱いていた夢と理想は全て潰えて消えて、何もかもを失ったイアソンは結局自棄になる事しか出来なかった。

我ながら、何てバカな事をしたのだろう。生前でも、そして今回も、イアソンという男は何も得られず、救われることなくこの世を去ることになった。

――――もう、五感の全てが消えている。音もなく、光もなく、ただ落ちていくだけの残り滓。何て無様だろう。何て滑稽だろう。結局自分は何も果たせず残せない……道化以下の間抜けだった。

どうしようもない馬鹿野郎。イアソンという英雄は所詮はその程度の人間でしかなかった。

――――でも。

（でも、それでも……）
全てが徒労に終わり、何もかもが無駄になるのだとしても。
（俺は、お前が負けるのなんか……見たくないんだ!!）
イアソンの胸に抱く――《憧れ》だけは消えず、朽ちず、捨てる事はなかった。
理解なんて求めていない。求めるのはいつだって自分の方だった。
（だから、お願いだ！　お前の強さを、お前の伝説を、お前の――格好いい所を！　もう一度、見せてくれ！）
（ヘラクレス!!）
消えいく自我と意識、何もかもを捨て去り、たった一つの憧れだけを胸に手を伸ばし続けた男が最期に届いたのは……。

〝――全く、仕方のない奴だよ。お前は〟

何処か呆れを含んだ……親友の暖かい声だった。

◇

「――何だ。このバカでかい気配は」
暴風が吹き荒れる。大海が唸り、空が軋み、大気が震え出す。天を

衝く光を前に修司は目の前の光景に愕然としていた。
イアソンが聖杯と共にヘラクレスの内に溶けるように消えたのかと思えば、ヘラクレスを中心に光が溢れ、まるで柱のように空へ衝き立てている。
一体何をしたのか、困惑する修司だが消えていく光の柱から顕れるソレに咄嗟に構えた。
――瞬間、ソレを目の当たりにした修司は息を呑んだ。気配、圧力、存在感の全てが先程とはまるで別次元に膨れ上がっている。
まるで嵐、台風のごとく荒々しい気を放っているのにその目は何処までも静かで理性的だった。
そう、目の前の巨人には理性が宿っているのだ。先程までの狂戦士の目とはまるで違う。知性と理性に溢れた人の眼差し、まさかと思う修司にロマニから通信が入る。
『嘘……だろ。何だよ、これ。こんなの……あって良い筈がないだろ』
「ドクター？」
その声はこれ迄に聞いたことがない程に震え、動揺していた。有り得ないと口にするロマニ、落ち着けと修司が諭す前に彼の口から悲鳴に似た叫びが紡がれる。
『――逃げろ！　修司君！　あれはもう、君が知るヘラクレスじゃない！　あれは、もうサーヴァントじゃない。正真正銘本物の……いや』
『生前の――ヘラクレスだ!!』
「――思えば」
「っ!?」
「こうして、自らの口から名乗るのは……初めてだったな」
更に力が膨れ上がった。溢れ出す暴威、相対しただけで分かる圧倒的力。
「嘗てはアルケイデスと名乗り、女神ヘラの栄光となり、英霊の一つに数えられし者」
「――我が名はヘラクレス。白河修司、お前を倒す男の名だ」

原典回帰。ギリシャ最大にして最強の大英雄が四海（オケアノス）にて復活する。

その41　第三特異点

――――それは、まだ聖杯戦争の名残が冬木の街に色濃く残っていた頃。日課の鍛練をしていた修司に黄金の王はある疑問を投げ掛けた。

『修司よ。お前は何故強さを求める？』

『え？　どうしたんだよ王様急に』

『なに、ふと気になってな。此度の聖杯戦争を終わらせ、お前は名実ともに世界でも有数の強者となった。裏表問わず、お前の実力は周知の事実となった。なのに何故、お前は今も強さを求めている？』

『そりゃあ、王様の臣下である以上向上心は常に持っておくべきだろ？　聖杯戦争が終わったからって俺の人生は終わらないんだ。鍛えられるなら何処までも鍛えるべきだろ？』

英雄王という王の中の王に仕えるには生半可な実力ではいられない。文武共に常に上を目指し、努力を怠るべきではない。そもそも、修司は鍛練することそれ自体が嫌いではないし、寧ろ好きな部類だ。出来なかった事が出来るようになり、自分の限界を知ってその上で限界を越えた時に体感する達成感は言葉にできないほどに健やかな気持ちになれる。

だからこれからも鍛練は続けるし、強くなる事に貪欲であり続ける。と修司は応えるが、英雄王には不服なのか、難しい顔をして頭を掻いている。

『まぁ、お前ならそう答えるだろうが……今一つ面白味に欠ける解答だなぁ』

『いや、面白さを求められても困るんだけど』

相変わらず愉しさを追求する人だなと、半分呆れながらも修司は鍛練を続けた。すると今度は何を思い付いたのか、英雄王は先とは少し違った質問を投げ掛けてきた。

『ならば、問いを変えよう。修司よ、お前が此度の聖杯戦争で戦ったサーヴァント達を相手に何を思った？』

『え？　……まぁ、強かったよ』
『それだけか？』
『……』
　内容を変えて質問してくる王に修司は僅かに言い淀む。そこに本当の気持ちを隠している事に気付いた英雄王はニヤリと笑みを浮かべて追求する。
『王に対して隠し事など、臣下のすることではないぞ修司よ。大人しくその胸中を我の前に晒すがよい』
『わ、分かったよ。……でも、笑ったりしないでくれよ？』
『分かっている。この英雄王、臣下の想いを踏みにじるほど下衆ではない』
　そうは言うが、王の顔は既に弛みきっている。しかし言わなければいつまでも同じことを言われるだろうし、逃げ場もない以上観念するしかないだろう。
　一度だけの溜め息、やれやれと肩を竦めて空を見上げた修司はポツリポツリと胸の中に閉まっていた感情を溢し始めた。
『王様、聖杯戦争に参加していたサーヴァント達って、謂わば本人達の分身みたいな奴なんだろ？　遠坂から聞いた。定められたクラスに合わせ、それぞれ特徴的な能力を持った奴等、その多くが一定の強さにまで平均化されているって』
『ふむ、それで？』
『……悔しかったよ。あんなに必死に戦って、漸く勝ちを拾ったってのに、実は本当の実力ではありませんでした。って後に言われた気がしてさ、久し振りに腹が立ったよ』
　悔しい。そう語る修司の手は強く握りしめられていた。繰り広げた激闘、死闘の数々。心が折れ掛け、死にかけながらも戦い抜いた果てに待っていたのは修司にとって偽りの勝利だった。
　サーヴァントは過去の伝承逸話を元に能力を決定付けられ、そのクラスに合った力とその基盤に見合った能力を付与される。ヘラクレスから命からがら生き残り、佐々木小次郎という剣豪を倒し、クー＝フーリンやアーサー王という怪物達と戦って来たのに修司はまるで

その全てが否定された気持ちになった。
　別にサーヴァントを下に見たり侮辱している訳ではない。ただ、あの戦いに〝お前は本気でない自分達に勝利しただけだ〟と、ケチを付けられた気がしたのだ。
『だからさ、今度はそんなケチが付けられない様に強くなりたいんだ。そりゃ、次なんてものがあるかは分からないよ？　でも、いつかまたそういう連中と出会っても今度こそ自分の勝ちだと言えるように今の内に鍛えておきたいんだ』
『成る程、つまりお前は……単に意固地になっているだけなのだな？』
『み、身も蓋もない事を言わないでくれよ。自覚してるんだから』
　結局の所、英雄王の言葉通り修司は意固地になっていただけだった。次は負けないと、ありもしない未来に備え、今度こそ勝って見せると一人で空回りしているだけ。
　それがとても滑稽で、それでいてとても眩しくて……。
『ククク、よもや、ここまで強欲とはな。我が臣下ながら欲深い奴よ！　フハハハハ！』
『ちょっとぉ!?　そこまで笑う事ないんじゃあないですか!?　そんな面白い事を言ったつもりはないんですけどぉ!?』
『これが笑わずにいられるか！　フハハハハ!!』
　何処までも前を見据える修司に黄金の王は愉快に、痛快に、そしてなにより――――嬉しそうに笑っていた。

◇

「生前のヘラクレス……だと？」
『あぁそうさ！　あ、いや。厳密に言えば違うかもしれないけど、今！　君の前にいるヘラクレスはサーヴァントの枠から剰りにも逸脱している！　人理焼却の影響？　抑止力が働いていないから？　あぁもう兎に角！　イアソンが此方にとって最悪の奇跡を起こした！　だから修司君、急いでそこから逃げ……』
「落ち着けよドクター」
　嘗てないほどにロマニは慌てふためき、修司もまた理屈ではなく心で理解した。今、目の前にいるのは嘗ての伝説、ギリシャ神話の大英雄ヘラクレスその人であると。
　先程ぶりの荒る狂戦士と同一人物とは思えないほどの落ち着いた佇まい。なのに微塵も隙はなく、無意識に放たれている威圧感は男の周囲の空間を歪めていく。
　これ迄に戦ってきた相手とは明らかに違う。ロマニは逃げろと進言してくれるが、生憎と修司にそのつもりはない。
　逃げた所で逃げ切れる相手ではないし、仮に逃げられたとしても奴の矛先が立香達に向けられるだけ、向こうも今は戦いの最中の筈、そんな時に目の前の男を向かわせたら忽ち凄惨な光景の出来上がりになるだろう。
　逃げられない、逃げるわけにはいかない。これは自分の我が儘から始まった戦い、その責任は最後まで背負わなければならないし、何よりこの状況はある意味修司の望み通りとも言えた。
　油断なく構え、男を見据える。頬から流れ落ちる汗すら拭う事もせず、じっと観察を続けていると……。
「ここでは、些か狭いな。……場所を移すか」
　辺りを見渡した男――――ヘラクレスの口から紡がれたその言葉に修司は一瞬面喰らう。場所を移す？　この島ではこの平原より広い場所はない。どういう意味かと修司が困惑した時。
「っ!?」
　腹部に衝撃が走った。
　全身が雷に撃たれた様な衝撃、咄嗟に両腕を交差させて防げたのは

殆んど偶然だった。
気付けば、修司は空を飛んでいた。……否、飛ばされていた。大地から、島から瞬く間に遠退き、海面を何度かバウンドしながら吹き飛ぶこと数秒、先程までいた島と全く違う遠く離れた未開の島の荒野の大地に叩き付けられた。
「がっ、くそ、いきなりかよ！」
覆い被さってくる岩を退かしながら立ち上がる。いきなりの攻撃に悪態を吐く修司だが、既に戦う前の口上は終わっている。間抜けなのは自分の方だったか、警戒して辺りを見渡す修司だが……。
「こい、マルミアドワーズ」
頭上から感じる殺気、先よりも膨れ上がった膨大な力の奔流に修司は見上げて確認するよりも回避を優先させ……。
「射殺す百頭（ナインライブス）」
――――瞬間、九つの斬撃が大地を抉り引き裂いた。衝撃で幾つもの岩山が吹き飛び、回避した筈なのに刃を持った衝撃は修司の肉体をも切り裂いていく。
痛みよりも驚きで修司の表情が歪む。自分が吹き飛ばされた距離は体感で数キロはあった筈、なのに一分も掛からず追い付いてくるヘラクレスの膂力に改めて修司は戦慄した。
体勢を整え、近くの岩山に立つとほんの数瞬前にいた大地が谷と化している。たった一振りで地形を変えてしまう力、これが大英雄の力の一端か。
「……随分、見栄えの良い剣が出てきたな。て言うか、どっから出したんだ？　ソレ」
「これは、大いなる火の神により賜った宝剣マルミアドワーズ。お前を切り裂くのに相応しい武具と判断し、座より持ち寄った次第だ」
自分の体のダメージを確認する意味合いでの問いを投げるが、意外な事にヘラクレスはこれを受けた。マルミアドワーズ。一説では火の神ヴァルカン、或いは鍛冶の神ヘファイストスよって造り出されたとされる剣。古の神々によって作られたソレはまさしく神剣と呼ぶに相応しい、聖剣エクスカリバーの様な輝きこそないが、ヘラクレス

の手にしている宝剣は神造兵器に足る重みが備えられていた。
だが、この島の地形を変えたのは宝剣の力ではない。荒野の大地に谷を作ったのは他でもないヘラクレス自身の力であると他ならぬ修司が理解している。今の問答で体の確認は済んだ。状態は万全、戦意も折れていない修司は再び気の炎を纏って構えを取る。
「神様の剣、か。光栄と思った方がいいのかな？　この場合」
「さてな。どちらにせよ、私の……いや、俺のやるべきことは変わらない。我が望みと友の想いに応える為、白河修司――――お前を、倒す」
「……行くぞっ!!」
地を蹴り、全身全霊を掛けて白河修司は最強へ挑む。

◇

「修司君との通信はまだ回復しないのか!?」
「ダメです！　何らかの妨害があるのか、一向に回復する見込みがありません！」
修司がヘラクレスへ挑む最中、カルデアの代理責任者であるロマニは一向に繋がらない修司との通信に動揺していた。今、彼が戦っているのは伝説に語り継がれる大英雄そのもの、サーヴァントの枠組みすら逸脱した真なる伝説の具現である。
修司のこれ迄の戦いで彼が並々ならぬ実力者であることはロマニも充分理解している。しかし、そんな修司を以てしても果たしてあの大英雄に勝てるだろうか。
山を砕き、海を割り、多くの逸話を残して偉業を成し遂げた最強の

伝説。現代の人間が単身で挑むには剰りにも大きく、高い壁だ。
「Ｄｒ．ロマン！」
「君は……ジャンヌ＝ダルク、どうして君がここに？」
「どうか、今すぐ私を彼の下へ遣わせて下さい！　私の宝具ならきっと大英雄の一撃にだって耐えられる筈です！」
　管制室へ入ってきたのは聖女ジャンヌ、恐らくは食堂に備え付けられたモニターから向こうの様子を見たのだろう。酷く慌てた様子の彼女の顔には焦りの色が色濃く滲み出ている。
　だが、確かに彼女の宝具なら一縷の望みはあるだろう。彼女の扱う宝具は鉄壁の守り、その守護の前には何人だろうと侵せる事は出来ない。如何に相手が大英雄だろうと、その場しのぎの防御壁だとしても有益に活躍出来るだろう。
　当然、ロマニもその作戦は考えた。彼女と修司のタッグならの大英雄が相手でも通用するのではないか、そう思わせるだけの可能性がこの組み合わせにはあった。
　しかし。
「――――残念だがジャンヌ、それは出来ないんだ」
「な、何故です!?」
「落ち着けたまえよＭｓ．ジャンヌ。今ロマニが言っただろ？　君達サーヴァントを彼の所に送りたいのは山々なんだけど、今言ったように出来ないんだ」
「……」
「今、此方から送られる戦力は全て修司君の所ではなく立香ちゃんの所に召喚されるようになっている。恐らくは、現地の魔術師が関与しているのだろう」
「――――ハッ！　メディア！」
　カルデアから修司への干渉は一人の魔術師によって防がれている。コルキスの王女メディア、まだ魔女になる前の彼女が修司に余計な戦力を送られまいとその魔術を以て妨害している。
　通信妨害も恐らくは彼女によるものなのだろう。加勢にも加わる事もできず、助けることも出来ない歯痒さと不甲斐なさに憤っている

と、それを嘲笑うかのような声が管制室に響いてきた。
「やれやれ、男の勝負に水を差すとは、聖女とは言え少々余計な世話が過ぎるのではないか？」
「英雄王……っ！」
　ジャンヌの後に管制室に入ってきたのは黄金に輝く英雄王、その顔に嘲笑とも取れる笑みを浮かべてジャンヌの加勢を余計な世話と両断する。
「男が戦うと決めているのだ。ならば勝敗が決するまで手出し無用が常識であろう？」
「そんな悠長な事を言ってる場合ですか!?」
「僕としても反対だ。彼は立香ちゃんと同じ人類最後のマスターだ。彼の代わりになる人材はいない、個人の感情で決めて良い話じゃあない」
「我が臣下がこの程度の逆境も乗り越えられぬと？　あまり侮ってくれるなよ、雑種？」
「うぐっ」
　ジャンヌに便乗した形とは言え、折角英雄王に一言言ってやったのに彼からの殺気の籠った一言で押し黙ってしまう。けれど口にした言葉まで曲げるつもりはない、精一杯の抵抗にジャンヌの影から睨み付けるロマニ。そんな彼に一瞥しながらモニターへ視線を向けると、黄金の王は静かに口を開く。
「いいから、黙って見ておけ。貴様たちの希望がどんなものか、今一度その目で確かめるといい」
　窘めるように言って、それ英雄王が口を開くことはなかった。そんな彼にこれ以上の問答は無駄だと、ロマニはダ・ヴィンチと共に作業に戻る。映し出されるモニターにはヘラクレスと修司の神話の再現とも呼べる激闘が繰り広げられていた。
（……あれ？　我が臣下？）
　しかし、英雄王は気付かない。自らの失言を、柄にもなく内心興奮するあまり溢してしまった失敗を、ジャンヌの目がう〇美ちゃんの如く鋭くなって自身が見られていることに。

英雄王はモニターに映る修司の活躍に夢中で気付かなかった。

◇

「だらぁっ！」
「ヌンッ！」
「ダダダダダダダ、ダァッ！」
「フンッ、ハァッ！」
繰り出す拳と拳、打ち出す蹴りと蹴り、衝撃と轟音が鳴る度に島の大地は抉れ、木々は薙ぎ倒され、湖が弾け飛ぶ。
修司がヘラクレスを相手に選んだのは接近戦、彼が奮うマルミアドワーズなる宝剣は神々によって造られた神造兵器だけあってその切れ味は凄まじく、一振りで島を両断する鋭さがあった。
それを防ぐ為に修司はヘラクレスに接近戦での肉弾戦を選択した。暴風という表現すら生温い拳の渦、しかもそこに人としての技の冴えも加わった事でより脅威と危険度は跳ね上がり、修司の命を容赦なく削り取ろうとしてくる。
しかし、それでも修司にはその選択を選ぶ他なかった。距離を開けられればあのふざけた威力の斬撃がまた飛んでくるし、それを防ぐ唯一の方法だからだ。
事実、ヘラクレスの背には最初の一振り以降振るわれることのなかった宝剣が背負われている。肉弾戦なら修司も得意とするモノ、師父から学んだ八極拳を駆使して戦いを挑む修司だが……それでも、今の修司とヘラクレスの間には大きな力の差があった。

奮われる度に吹き荒ぶ暴風は真空の刃となり修司の体を切り刻んでいく。避けた所で負傷は免れず、既に辺りは修司の舞う鮮血で染まっていた。
「噴ッ！」
そんな時、相手の勢いを利用しての攪打頂肘がヘラクレスの胴体にめり込んだ。手応えはある。いや、ありすぎた。喰らわせたのは此方なのに直撃させた肘が僅かに痛む。
気で強化しているのにまるでダメージが通っている気がしない。先程よりも分厚い筋肉の鎧、やはり必殺の无二打（にのうちいらず）しかないかと思われたその時。修司の腕にヘラクレスの大きな手が迫る。
瞬間、修司は悪寒を感じた。この手に捕まってはいけないとこれ迄に培ってきた経験と直感が警戒を最大限に鳴らす。気を全開にして振り払い、ヘラクレスの顎を蹴りあげた。
「ほう、どうやらそちらにもパンクラチオンに精通した英雄がいるようだな」
「あぁ、お陰でアンタの手に壊される前に察知できたよ。……て言うか、顎を蹴りあげられた事はノータッチかよ」
パンクラチオン。その起源は古代ギリシャにまで遡る。相手を破壊する事に特化した人類史に於ける最古の格闘技の一つ、投げ、打ち、掴み、砕く。それは人体を砕く事に重きを置いた体術であり、ヘラクレスが最強たる所以となった奥義。
背負った宝剣にばかり目が行ってしまったが、ケイローンの教えによりどうにか反応することが出来た。ありがとうケイローン先生！
「だが、これで距離は開いたな」
「っ！」
ヘラクレス手から逃れる事に必死で、詰めていた間合いが開いてしまっていた。背負った宝剣に手を伸ばし、膨大な力が解放される。
逃げられない。振りかぶる大英雄を前に修司が選んだのは真っ向からの打ち合いだった。
両手の付け根を合わせ、腰だめに持っていく。それは修司が放てる最大出力の一撃。

「かぁ……めぇ……はぁ……めぇ……」
「射殺す百頭(ナインライブス)」
「波アアアアアッ!!」
　振り下ろされる斬撃と放たれる閃光、ぶつかり合ったエネルギーは周囲の地形を凪ぎ払い、二人のいる島を破壊していく。
　そして次の瞬間、大きな爆発が起きた。衝撃は大海を大きく揺さぶり、キノコ雲が天に昇る。遠く離れた場所の立香達にまで届く衝撃、それは人の領域を越えた力と力のせめぎ合い。
　互いの攻撃は相殺に終わった。しかし、戦いはまだ終わらない。全身に力を込めてヘラクレスがいるであろう場所に向けて駆け出す修司だが……。
「そう言えば、一つ言ってなかった事があった」
「っ!?」
「俺の放つモノ、射殺す百頭などと言ってはいるが、アレは別に剣を用いての必殺技ではないぞ」
　気付けば、既に修司の間合いにはヘラクレスが踏み込んでいた。いつの間に此処まで近付けたのか、気配も何も察知できなかった。驚きに目を剥く修司を前にヘラクレスは拳を握り締める。
「これは我が生涯、我が闘争の果てに生まれし奥義。数多の不死性を持つ怪物達を屠ってきた我流の闘法である」
　それは、幾度倒しても、殺しても、尚も立ち塞がる怪物達を殺し尽くす為にヘラクレスが編み出した最強にして単一の奥義。何度も生き返るのなら、死ぬまで殺すを物理的にごり押し、極限にまで磨きあげたヘラクレス最大の暴力。
　故に射殺す百頭(ナインライブス)。爆発的に気配が強まるヘラクレスに修司は腕を交差させて防御の姿勢を取るが。
「受けよ、我が剛拳を!!」
　両の手から繰り出される無数の拳、一振りで山をも砕くその剛拳全てをマトモに受けた修司は血反吐を吐きながら吹き飛んだ。

◇

「――――こんなものか」

空を穿ち、海を割り、大地を砕いた島の跡。砦だった建造物は微塵に消え、更地となったその場所で大英雄が口にするのは落胆の声だった。

「お前が鍛え、磨きあげた力はこんなものか!? 己の無力に嘆き、ひたすら強さを求めた貴様の底力は、この程度か!?」

既に辺りに修司の姿もなく、また気配も消えていた。ヘラクレスが最後に放った一撃はその悉くが修司を捕らえ、打ち込んでいる。生身の人間なら塵すら残らず、サーヴァントであろうとも死は免れない。

なのに、ヘラクレスは信じていた。自分と戦ってきた相手、白河修司はこんなものではない。この程度で終わる筈がないと、奇妙な信頼関係。ヘラクレスはある種の期待を修司に抱いていた。

そして……。

「……ったくよぉ、そこまで期待されちゃあ、断る事なんて出来ないだろう。大英雄ってのは口も上手いのかよ」

吹き飛んだ瓦礫の中から、ボロボロの修司が現れる。王より賜った胴着は上半身から吹き飛び、全身から痛々しいほどに血が流れている。

しかし、修司の目には微塵も絶望に染まってはいなかった。目の当たりにした力の差、覆し難い実力の壁、勝てるかわからない困難を前にそれでも修司は力を込める。

闘気が、満ち溢れる。先の戦いで見せた時よりも強く、激しい白い炎。まだ戦うつもりでいる修司にヘラクレスは不敵に口端を吊り上

げた。
「けれど、お陰で此方も腹が決まった。もう、俺も後の事は考えない。文字通り、死力を尽くしてアンタに勝つよ」
圧し負け、ボロボロにされ、それでも尚勝つと修司は豪語する。そんな彼にヘラクレスは笑った。呆れの嘲笑ではない、窮地に追い込まれながら、それでも勝利を諦めない修司にヘラクレスは嬉しさとワクワクで胸が一杯だった。
「そうだ。そんなお前と戦りたかった！　さぁ見せろ！　お前の研鑽を！　お前の全てを！」
その時、修司から溢れる気の力が爆発的に増大した。空が荒れる、大地が、海が、大気すらもが揺れ、特異点そのものが震えている。天変地異。その中心となっているのはやはり白河修司だった。
自然とヘラクレスは息を呑む。これから起こる出来事に、これから始まる闘争を前に、本能と理性が疼いて止まらない。
――そして。
「――界!!」
「――王!!」
「――拳(けえん)!!」
紅い炎が天を衝いた。
力が形となって吹き荒れ、ヘラクレスの前に現れる。
ヘラクレスは笑みを浮かべた。これが奴の全てだと、自分に敗れたあの少年が、たった数年で此処まで這い上がってきた。その事実にヘラクレスは嘗て味わったことのない喜びを噛み締める。
「――界王拳。これが、俺の奥の手だ」
「あぁ、分かる、分かるぞ。此処まで練り上げ、高め、爆発させた力。あぁ、待った。長らく待ったぞ、この時を!!」
吹き荒れる闘気は凄まじいのに身に纏う修司の目は落ち着きを取り戻している。彼自身が理解していた。この技に耐えきれなくなった時、それは自分の敗北を意味していると。
故に、最初から全力で挑み掛かる。今度こそ、目の前の伝説に勝つ為に。今度こそ、嘗ての自分を越える為に。

「行くぞ、大英雄」
「行くぞ、未来の英雄」
ここから先こそが本当の戦い。相対するのは互いに過去最高最強の戦士、激闘は必至で死闘は免れない。
けれど、それでも。
「「勝つのは、俺だ!!」」

踏み出すのは同時、繰り出す拳は互いにぶつかり――。
瞬間、四海(オケアノス)が砕けた。

その４２　第三特異点

――――オケアノス。七つの特異点の中の一つであり、何処までも青い海で満たされた大海の特異点。世界を股に掛けた大航海時代に風穴を開ける為に生み出されたその特異点は今、決戦の舞台となっていた。

何処までも続く大海原、時に凪ぎのように静かで海の冒険者達を見守り、時に嵐となって凄まじく荒れ狂って訪れる人間を海底へと引きずり込んでいく。

そんな極端な二面性を持つ大海オケアノス、特異点を覆い満たす大海原……その一部が

砕けた。

比喩でもなく、誇張でもなく、大海で埋め尽くされていた四海（オケアノス）の一部が二つの膨大なエネルギーの激突により、オケアノスの大海が足場にあった島ごと砕け散ったのだ。

圧倒的熱量と覇気を携え、激突する二人。その片割れであるギリシャの大英雄ヘラクレスは目の前の好敵手に目を剥いた。

（驚いた。確かに何か隠しているとは思っていたが、よもやこのような力を隠し持っていたとは）

ヘラクレスの眼前の男、白河修司は実力こそは凄まじく、ギリシャにいても何ら違和感がない程に強い男だった。もし、彼が古代にギリシャにて生を受けていれば、きっと多くの伝説と逸話を遺せる程の英雄となっていただろう。

けれど、それでもこのヘラクレスには及ばなかった。積み上げてきた研鑽、磨きあげてきた技の数々と冴えは目を見張るモノがあった。だが、それではこの身は砕けない。数多の試練と困難を乗り越えてきた自分を、たかが人間が越えられる筈がなかった。

隔絶された力の差、しかしそんな格差を目の前の男はアッサリと乗り越えてきた。拳を付き合わせただけ、けれどヘラクレスには理解で

きた。目の前の紅い炎を纏う男は先程までとはあらゆる意味で別物であるという事に。
「だが、その程度で俺の首はやれんぞぉっ！」
ヘラクレスは更なる力を解放し、修司の拳を振り払い直突きの拳を放つ。何の細工もない唯のパンチ、しかしその拳には今までとは桁違いの威力を秘めていた。
迫り来る剛拳、受ければ即死は免れない巨大な死を修司は受け流して見せた。体が流れ無防備を晒すヘラクレス、そんな彼の鳩尾に修司が肘鉄をめり込ませて息を詰まらせ、更にその顔へ回し蹴りを叩き込む。
瞬間、ヘラクレスは吹き飛んだ。衝撃で唯一残った島の断片を砕きながら吹き飛び、幾度も海面をバウンドし、木々を薙ぎ倒しながら壁に激突して瓦礫に埋もれる。漸く勢いが止まり、ヘラクレスが吹き飛んだのはオケアノスの何処かにある要塞付きの島だった。
一体何処まで吹き飛んだのか、現状を確認するよりもヘラクレスは次の攻撃を先読みした。右からの一撃、全身の感覚を研ぎ澄ませて察知した攻撃は見事ヘラクレスの読み通りに的中した。
右から繰り出される鋭い拳、体を回転しながら飛んでその勢いのまま振り抜いた蹴りは今度こそ修司を捕らえた。大英雄の一撃、防いだ所でダメージは免れない。
要塞の壁を突き破り吹き飛ぶ修司だが、次の瞬間には目の前に戻ってきた。その事実に面食らうヘラクレスの顔面に今度は修司の拳が捩じ込まれる。猛烈な痛みと衝撃、それはヘラクレスに嘗ての巨神達との闘いを思い出させた。
修司の攻撃はそんな古き神々にも匹敵するというのか、困惑するヘラクレスだが、次第に彼の内には驚愕よりも喜びの感情が勝りつつあった。嘗て、自分と正面から戦えるのはそれこそネメアの獅子やヒュドラといった怪物達や、巨神達しかいなかったのだから。
今、ここに自分と互する者が現れた。目の前の男がどんな手品を使って此処まで強くなったのか、奴の身に纏う紅い炎にどれだけの意味があるのかはこの際どうでもいい、ヘラクレスが望むのは自分をこ

の場へ喚んでくれた親友の願いに応える為、目の前の脅威を捩じ伏せて勝利する。
「ペガサス――――流星拳!!」
「おぉぉぉぉぉっ!!」
眼前に広がる拳の弾幕、明らかに先程よりも範囲が広がり、威力を乗せたソレをヘラクレスは正面から迎え撃ち。
嘗てあった要塞の跡地は最初から無かった様に消し飛んだ。

◇

「――――へっ、どうやら此方の大将は当初の目論見通りに上手くいったようだな」
遠くから聞こえてくる爆裂音を耳にしながら立香達は血塗れになりながら座り込むヘクトールを見下ろしている。多数のサーヴァントを相手に単騎で立ち回り時間稼ぎに徹していたヘクトールは自身の仕事をやり遂げた事に満足していた。
既にメディアによって召喚された竜牙兵はその全てが塵となって消え、ヘクトール自身も霊核を破壊されている。もうじき消えるであろうトロイアの英雄に立香達は言葉に出来ない敗北感を味わっていた。
「喚ばれた当初は酷い貧乏クジを引かされたもんだと諦めていたが、最後の最期にあのボンクラ船長は一皮剥きやがった。自身の夢よりも友の勝利を優先する。大馬鹿野郎には違いねぇが、仕えるならああいう馬鹿の方が良い。そういう意味ではあの兄ちゃんには感謝しねぇとな」
「ったく、まんまとしてやられたよ。まさかあのイアソンが其処まで

ヘラクレスに傾倒していたとはな」
「あぁ、其処ばかりは俺も同意見だ。……じゃあなカルデアの魔術師さんよ。もし万が一この局面を乗り越えたら、その時は俺を喚んでくれ。迷惑掛けた詫びとしてそれなりに働かせて貰うからよ」
そう言って英雄ヘクトールは光となって消えていった。口では悪かったと言っていたが、最期に見せた表情は清々しい程に晴れやかだった。
対して闘いを制した筈の立香達の表情は暗い。ヘクトールという守りに特化したサーヴァントも倒し、特異点の原因たるイアソンも消滅した。残るのは聖杯を持っているであろうメディアのみ、キャスター一人相手ならこのメンバーでも充分対応出来るだろう。
それなのに、全く勝ったとは思えない。その原因は遥か遠くから聞こえてくる炸裂音が原因だろう。イアソンが自身が消滅してまで望んだヘラクレスの勝利、欲望と野望に満ちたイアソンの望みの中でも最も純粋で鮮明な願いが起こした有り得ざる奇跡、誰もが侮り下に見ていた男が成し得た奇跡に立香達は過去一番に追い詰められていた。
「……あー、一応聞くけど。あのヘラクレスに戦えそうな奴ってこの場にいたりする？」
ぬいぐるみのオリオンの質問に応えられるものは誰一人いなかった。相手は英霊の座より召喚されたヘラクレスの本体に限りなく近い存在だ。既にその戦闘能力はサーヴァントの枠組みから大きく逸脱し、生前と変わりない力を有している。
身に纏う神秘の濃さも、神性も何もかもが桁違いに高過ぎる。ただのサーヴァント数体では覆らない力の差が出来上がってしまっていて、その上此方はヘクトールの巧みな立ち回りの所為で無駄な労力を強いられてしまっている。
勝てる見込みはゼロ、更に言えば此方とカルデアとの通信も途絶えてしまっている。向こうからの増援も望めず、頼みの綱は現代に生きる生身の人間――白河修司ただ一人に委ねられていた。
「……マシュ、宝具の展開はいけそう？」
「す、すみません先輩。ヘクトールさんの宝具を防ぐ為に……その、

思った以上に魔力を消費してしまって……」
「そう、だよね……」
ヘクトールの宝具である〝不毀の極槍（ドウリンダナ）〟はランクA相当の対軍宝具、その威力もさることながら最も警戒すべきはあらゆるものを貫くとされてきた貫通力にあった。彼の宝具を防ぐ為にマシュもまた宝具を使い、一点のみを貫こうとするドゥリンダナを前に立香は令呪を二画消費する事を迫られた。
結果として、マシュは味方全員を守る事に成功したが、その代償に此方側の余力の大多数を削られる事になってしまった。アルテミスやアタランテ、ダビデやエウリュアレ、そしてアステリオスもヘクトールの策略によって力の大部分を失ってしまっている。
これでは、修司の助けにも行けない。仮に向かったとしてもこれでは彼の足手まといになりかねない。マスターとして闘い始めて日の浅い立香だが、未熟なりにあのヘラクレスの強さの異常さには何となく察しは付いていた。
――このまま、決着が付くまで待つしかないのか。悔やむことしか出来ない自分、無力でしかない自分に立香が下に俯こうとして。
「よし、じゃあ行くとしようかね」
「……え？」
一人の女海賊が何気なく口にした。
「なにを呆けているんだい立香。マシュも、あの兄ちゃんはお前達のお仲間じゃあないのかい？」
「で、ですがドレイクさん、もう既に此方の戦力は戦えるだけの余力がありません。仮に向かったとしても……あの戦いに付いていける余裕は、もう」
遥か水平線の彼方で繰り広げられている戦い。神話の具現、伝説の再現とも呼べる戦いに付いていけるほどの余裕は今の立香達にはなかった。いや、仮に万全だとしても真なるヘラクレスと修司の戦いに割って入れる者は限られているし、マトモに戦えるとも限らない。
もう、自分達に出来ることはない。悔しさに手を握り締めながら俯くマシュにドレイクは言い放つ。

「んな事を聞いてるんじゃないのさ。立香、マシュ、アンタ達二人が今どうしたいのかって話をしているんだよ」
真っ直ぐ、立香とマシュを見つめてくるドレイク。そんな力強い瞳で問い掛けてくる彼女に二人は息を呑んだ。
「圧倒的力の差？　上等じゃないか。此方はいつもバカデカイ力の差を持った相手に喧嘩を挑んでるんだ。今更それが二つ増えたくらい、何て事はないさね」
あっけらかんと、大したことはないと言い放つドレイクにマシュは目の前の女性が世界最大の大海賊である所以を理解した気がした。フランシス＝ドレイク、大海原を制覇し太陽を沈めた女とされる大海賊。
彼女が偉大なる海の覇者となったのは、そんな泥臭い程の諦めの悪さにあった。力の差なんて関係ないと、日頃から大海という桁違いの怪物相手に闘いを挑んできた故の信念。
挑むか、挑まないか。やるか、やらないか。結局の所、ドレイクの言いたいことはそれだけだった。それだけで充分だった。
気付けば、立香の体に力が戻ってきた。単なる空元気かもしれない。けれどその顔には先程より幾分か顔色が良くなってきた。
周囲を見れば、皆立香の指示を待っているかのように佇んでいる。アルテミスも、アタランテも、ダビデも、エウリュアレも、アステリオスも、そして……マシュも。皆が立香の言葉を待っている。
「皆、疲れているかもしれないけど……どうかお願い。力を貸して!!」
「はい。こうなったら、やれるだけやりましょう。先輩！」
「やれやれ、サーヴァント使いの荒いマスターだ。その代わり、その未成熟なパイオツを一揉み所望――」
「ダーリン？」
「なんでもないですハイ」
「私としても望む所だ。あの筋肉達磨に我が一矢を浴びせてやろうではないか」
「うーん、どう考えても勝機はなさそうなんだけどなぁ。いや、やるよ？　うん。正直逃げ出したいけどね。あのヘラクレスに今更

契約の箱(アーク)が通用するとは思えないしね。……やっぱり逃げて良い？　ダメ？　あ、そう」
「まぁ、ここまで来たらやるっきゃないわよね。どうせあの男が負けたら此方は皆殺しにされるだろうし、せめて一矢報いてやろうかしら」
「だい、じょう、ぶ。オレが、エウリュアレを、守る、から」
　それぞれが決意を固めて立香に賛同する。無駄骨だろうと返り討ちにされようとも、ただ死を座して待つのはいやだ。ここにロマニがいたら間違いなく止めに入るだろう。事実、これはあまりにも無謀な賭けだ。
　相手は甦った大英雄。生前に打ち立てた武勲と伝説を携えて復活したヘラクレスに敵うとは思えない。
　だけど、この海の向こうでそんな大英雄を相手に一人で挑んでいる人がいる。その人を死なせたくない、そんな浅はかな想いで藤丸立香は闘いへ自ら挑む。
　この時、初めて藤丸立香は覚悟というモノを決めたのかもしれない。戦い抜くこと、最後まで諦めないこと、それら全てを抱えて彼女は一歩歩みでる。
　そんな立香にドレイクは笑みを浮かべて応えた。この無力で無謀な少女を何がなんでも守り抜くと、全てを賭けて戦いに挑む事を誓った。
「そんじゃ、行くぞ野郎どもぉ！　黄金の鹿号(ゴールデンハインド)、出航だぁ!!」
　怒号が響く。ノリと勢いに任せて帆を張り、大海原へと漕ぎ出す。これが最後の戦いだと、信じて疑わない彼等の行く手の前に……不気味な程に晴れ渡った青空が広がっていた。

◇

衝撃が迸る。轟音が轟き、力が暴風となって荒れ狂う。修司とヘラクレス、互いに加速しながら力を高める両者は、付かず離れずの超高速戦を繰り広げていた。

現れては消え、また現れては消える。一瞬の内に見せる両者の間には、しかして千を越える応酬が繰り広げられている。

激突する拳と拳、蹴りと蹴り、腕と腕がぶつかる度に衝撃が広がり、オケアノスを蹂躙していく。辺りには海面を蹴る小さな波紋が広がるが、次の瞬間には衝撃による爆風がオケアノスの海を荒波へと変えていく。

伝説の大英雄ヘラクレス。その実力は正に天井知らずであり、それに拮抗している修司もまた規格外の戦士であった。

しかし。

（くそ、痛ぇ。痛ぇ！　界王拳の反動がもう抑えきれない所まで来ている！　早く決着を着けないと、あっという間に押し潰されちまう！）

ヘラクレスと互角にまで高めた修司の奥義である界王拳は使用者に絶大な力を与えるが、それ故に反動も強く、倍率を高める度に比例して肉体に掛かる負荷もまた増していき、使用時間が長くなる程にその負荷は重くなる。

――筋肉が、骨格が、神経が、血液が、細胞が、もうやめろと悲鳴を上げている。これ以上は耐えられないと、修司に激痛となって界王拳の使用停止を促していく。

でも。

（ここまで来て、負けて、たまるかよぉ！）

それでも、修司は界王拳を止めない。目の前の伝説を越える為に、ギリシャ最強に勝つ為に、修司は自分の限界に挑み続ける。

惜しみ無く繰り出す技の数々、振るう度に大気が弾け、振り抜く度に空に浮かぶ雲を吹き飛ばす。全開を越えた全開、そんな修司の必殺の数々を――――。

「射殺す百頭(ナインライブス)!!」

「っ!?」

大英雄は、一凪ぎで容易く凌駕する。振り下ろされるマルミアドワーズの斬撃が修司の放つ技の数々を切り刻んでいく。界王拳を使っているのに、未だに破れないヘラクレスの奥義。修司も鍛えた技の応酬で相殺を狙う。

結果、威力だけは殺すことに成功した。大英雄ヘラクレスの破壊に特化した奥義、それを相殺するには修司もまた全霊で挑まなければならない。本来なら技の相殺にではなくヘラクレスそのものにぶつけなければならなかった攻撃、それを防御に回してしまった事でいやいよ修司には後がなくなってしまった。

そして……。

「〜〜〜〜〜〜〜っ!?!?」

ここに来て界王拳を使っていた反動が来てしまった。全身を蝕む痛みは濁流となって押し寄せ、修司の意識すらも断絶させていく。視界が白い火花で埋め尽くされ、思考が激痛で鈍くなる。

当然、その隙を見逃すヘラクレスではなかった。時間にして一秒にも満たない攻防だが、それ故に修司が見せた隙は大きい。構えもせず、身悶えする今の修司はヘラクレスから見てただの的に過ぎなかった。

――――駆ける。大地を抉る脚力を以て修司との距離を瞬く間に零にしたヘラクレスはその剛腕を鎌のように広げ、修司の首を刈り取る様に振り抜いていく。

大英雄ヘラクレスによるラリアット。この一撃を受ければ死ぬ、痛みを必死に堪えながら両腕を前に翳して防ぐ修司が味わったのは想像を絶する衝撃だった。

岩が砕ける。森を、山を粉砕しながら押し進んだヘラクレスは気炎を吐きながら修司を吹き飛ばす。

瓦礫が吹き飛び、人気のない要塞をぶち抜き、二人の闘いの余波で変形した地形の岩盤に叩き付けられた事で漸く勢いは止まった。
地に倒れ、動けなくなる修司、何とか意識は繋いでいるが、それももう時間の問題となっていた。
「――――貴様の使う界王拳とやら、その効果は確かに絶大で凄まじい。もしこの技を極限まで極めていたら、俺でも対抗するのは難しかっただろう」
「……」
「だが、絶大な効果故にその反動は凄まじい。使用者に莫大な力を与える代わりにそれ以上の代償を支払わせる。まさに奥の手だ」
倒れ伏す修司にヘラクレスは淡々と語りかけた。生前から無敵の怪力と桁違いの剛力として知られるヘラクレス。しかしその実、彼の真価は相手の弱点を見極める眼の良さにあった。
「つくづくお前の強さには驚かされる。人間の身でありながら、神の血を引く俺に匹敵する強さ。……認めよう、お前こそが俺の宿敵であると」
自分と戦う為だけに自身の身を顧みずに負荷の大きい技を使い続けた修司、そんな彼にヘラクレスは最大の賛辞を贈る。既に戦いは決した。そう暗に語るヘラクレスは手にしていた宝剣を握り締める。
これでこの戦いは終わる。振り上げたヘラクレスが自身の奥義で宿敵を屠ろうとした時。
――――再び、紅い炎が天を衝いた。
「な……に……!?」
その光景にヘラクレスは驚愕した。有り得ない、白河修司の体力は底を尽き、精神力も尽きた。界王拳の反動で既に指一本すら動かせない筈だ。
しかし、そのヘラクレスの予想に反して修司は立ち上がる。全身から流れる血、腕は折れ、全身の筋肉はあちこちが断裂し、そのダメージ量はヘラクレスが付けたモノよりも深刻だ。
なのに、それなのに……修司の目は依然として輝きを失ってはいなかった。

「あぁ、そうだよな。たかが限界に挑んだ程度で、アンタに勝てる道理はなかった。伝説に挑むには、アンタという伝説を塗り替えるには、限界を攻めるだけじゃダメだったんだ」
「……」
修司は嗤う。自分の弱さを、自分の浅はかさを。限界に挑む？　笑わせる。向こうが一つの神話の最強を担っているのに、どうしてたかが人間が勝てるというのか。
目の前の大英雄を凌駕するには、今の自分では何もかもが足りない。足りないのなら……引き出す他ない。
「なら、その限界を越えてやるまでだ。アンタに、大英雄に勝つまで――何度でも」
その決意は何処までも泥臭く、見苦しく、それでいて……熱い。
限界を越える。その言葉に偽りなく、修司の力は更に爆発的に膨れ上がっていく。再び空が震え、大地が震え、特異点そのものが震撼していく。
（なんだ。このバカげた力の高まりは!?　この男、一体何処まで引き上げるつもりだ!?　五倍……六倍……いや、これは!?）
「１０倍だァァァァァッ!!!!」
瞬間、ヘラクレスは吹き飛んだ。顔面を殴られ、大海を跳ねながら、自分が如何にして殴られたのか分からなかったヘラクレスは次に襲ってくる背中からの痛みに顔を歪めた。
見えなかった。修司の動きが、その挙動が、手足の指先から初動まで、その全てが全く読めず、見えなかった。
背中を蹴りあげられ、ヘラクレスは宙へカチ上げられる。次は何処からだと体勢を整えるが、修司の速度は既にヘラクレスでは捉えられない領域にまで足を踏み入れていた。
攻撃が止まらない。左から、右から、上から、下から、縦横無尽に容赦なく打撃が叩き込まれる。速く、重く、鋭い。神性を持ち、何者にも砕けなかったヘラクレスの肉体がこの時初めて悲鳴を上げた。
「ぬ、あ、ぐがぁっ!?」
痛みに悶え、叫びながらも、それでもヘラクレスは修司を捉えよう

と腕を振り回す。師から学びしパンクラチオン、触れれば破壊は確実な人類最古の格闘術を……。
「だらぁッ！」
修司は、それを真っ向から叩き潰す。奮われるヘラクレスの直突きを修司も同じ一撃を以て応える。拮抗は一瞬、打ち負けたのは――――ヘラクレスの方だった。
「!?」
自分の剛撃が打ち負けた。その事実にヘラクレスは嘗てない衝撃を受けた。数多の怪物達を打ち倒し、遂には巨神をも殴り殺した必殺の拳。
自慢の拳が打ち負けた事実にヘラクレスは目を剥いた。自分よりも体格の劣る人間が、神でもなく神秘の恩恵を受けていない人間が、己の力と技のみで自分を越えようとしている。
その時、紅い炎を纏う修司と目があった。強い目だ。自分も既に限界を越えているのに、それでも目の前の男は挑み続けている。
いつからだろう、自分が挑むのを止めたのは。いつからだろう、自分が最強と呼ばれるのに違和感を失くしたのは。
生まれに恵まれ、才能に恵まれ、師に恵まれ、そして戦い続けた我が人生。勝つのは必定で、何時だって自分には勝利が確約されていた。
そんな自分が今、嘗てないほどに追い詰められている。ヒュドラの毒や神々の試練でもなく、何処までも真っ直ぐな一人の人間に。
その事実がとても不思議であり、恐ろしくもあり……そして何より、嬉しかった。
「お、オオォォォォォッ!!」
「っ！」
故に、ヘラクレスも挑むことにした。嘗てない好敵手に報いるために、この宿敵に勝つために。
ヘラクレスから覇気が迸る。吼えた事で生ずる衝撃は修司を一時的に距離を開けさせた。
「行くぞ、マルミアドワーズ。この一撃が俺の奮う最後の一撃だ」

剣を両手に構えて、頭上に掲げる。ヘラクレスから伝わる力に神によって鍛え上げられた宝剣は変色する。
膨れ上がる気配。これが最後の攻防だと察した修司もまた、その両手を腰へ持っていく。
それは、先程と同じ構図。違うのは双方この一撃で全てを終わらせるつもりであること。逃げることはしない、最早その選択肢は二人の頭の中にはなかった。
人理の焼却も、修復も、今この瞬間に限り二の次だ。この場にあるのは二人の男の意地の張り合い、それ故にその思いは何処までも純粋だった。
「かぁ……めぇ……はぁ……めぇ……」
「オオオオオオッ！」
収束されていくエネルギー。溢れる光を一点に集中し、圧縮させ凝縮させていく。
そして――。
「波アアアアッ!!」
「射殺(ナイン)す……百頭(ライブス)!!!」
互いの全力を乗せて放つ一撃がオケアノスにて激突する。天と地を切り裂くヘラクレスの両断する力、何処までも届かせて見せると放つ修司の光の奔流。
周辺の島々を巻き込み、砕き、呑み込んでいく力の濁流。その拮抗を崩したのは――修司のかめはめ波だった。
「う、ぐぉぉぉっ!!」
「だぁぁぁぁっ!!」
呑み込まれまいと抗うヘラクレス。自身の渾身の一撃で対抗する大英雄に修司もまた限界を超える。
軈て光はヘラクレスを斬撃ごと呑み込んでいく。痛みはない、苦痛も、かめはめ波に呑まれたヘラクレスは、既に痛みを感じる機能すら失われつつあった。
（まだだ！　まだ俺には十二の試練(ゴッドハンド)がある！）
十二の試練(ゴッドハンド)。それはヘラクレスが生前に果たした偉業を元に付与

された反則染みた宝具、十二の命を持つヘラクレスにとってこの力はマルミアドワーズ以上の切り札とも言えた。
既にかめはめ波によって十二の内の六つが消し飛んでいる。だが此処までだ。もうじき光の奔流が収まり、自分は解放される。その時こそ自分の勝利だと、ヘラクレスは迂闊にも慢心してしまった。
互いに全てを出し切ったと思い込んだが故の慢心、それ故にヘラクレスは気付かなかった。蒼白い光の中から現れる紅い炎の存在に。
「な、なんだと!?」
まさか、自分の放つ技の中を放っていた張本人が現れるとは思わなかった。咄嗟に宝剣を奮うヘラクレスだが、既にその一振りに力はなく。
「七孔噴血――ぶち抜けェェッ!!」
緩やかに流れる時間の世界、音も、光も置き去りにした世界の中で、ヘラクレスが最期に目にしたのは――振り抜かれた拳によって砕かれる宝剣と、その拳を自分の体に捩じ込む修司の姿であり。
次の瞬間、ヘラクレスの霊核は世界ごと貫かれた。

◇

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁ……」
もう、何も出来なかった。手足を動かすのも、呼吸を整えることも、今の修司には何もかもが億劫だった。
全てを出し切った。精も根も尽き果て、目を開けているのも辛い。このまま倒れてしまったらどれだけ楽になれるだろうか。

けれど、それはできない。まだ自分は倒れるわけにはいかないのだ。
何故なら――――未だに目の前の砂塵の中には、巌の巨人が佇んでいるからだ。
倒せなかった。今の攻撃は自分にできる最大の一撃だった。それは限界を超え、超克した果てに放った最高の一撃だった。
あれを受けて、それでも立ち続けるのは……流石に修司の予想外だった。もう、自分には鼻をほじる余力もない。既に肉体は限界を越えた反動で痛みに震えているし、今でも意識を保つのでやっとだった。
敗けだ。どうしようもなく、言い訳もできないほどに修司は自らの敗北を認める他なかった。また勝てなかった。未だ動こうとしないヘラクレスに最後のチャンスとばかりに拳を叩き込もうとするが……既にそんな力は修司には残されていなかった。
ありったけの力を振り絞っての一撃は、虫も殺せない程に弱々しかった。もう、これで終わりだ。大人しく敗けを認め、ヘラクレスからの反撃を受けようと身を委ね……修司は目を閉ざす。
しかし、ヘラクレスからの反撃はついぞなかった。
「――――あぁ、本当に、凄い奴だよ。お前は」
「ヘラ……クレス？」
「限界を超え、更にその向こうへ目指すその姿。あぁ、どうして俺はそんな姿を忘れてしまったのだろうな」
何処までも健やかで、穏やかな顔で語るヘラクレス。その胴体には大きな空洞が出来上がっていた。
「白河修司」
「！」
「胸を張れ、この戦い……お前の勝利だ」
ヘラクレスの体が消えていく。光の砂となり、空へと消えつつあるギリシャの大英雄。敗北したのにその表情は青空の様に晴れ晴れとしていた。
「済まんなイアソン。負けてしまったよ」

遠くで親友の駄々を捏ねる声が聞こえた気がする。けれど、この勝負を訂正するつもりはない。十二の試練という次に期待した自分の負け、その十二の試練も一つ残さず潰された以上、ヘラクレスは大人しく敗けを認めるしかなかった。

今一度、目の前の男を見る。ボロボロで、負けた自分よりも傷だらけな男。これが自分よりも強い男なのだと、ヘラクレスは自身の記憶に刻み付けた。

「――修司」

「……？」

「次は、俺が勝つ」

「っ!!」

「だから、それまで……負けるなよ」

それだけを言い残してヘラクレスは消えていった。多くの偉業を成し遂げ、多くの伝説を打ち立てた男は新たに伝説を塗り替えた男に次の挑戦を叩き付けながら消えていった。

ヘラクレスが消えた場所、そこから後ろにはオケアノスを両断する巨大な谷が出来上がっていた。

天と地を穿ち、水平線まで続く谷を前に修司は呟く。

「……勝った、のか？」

あのヘラクレスに、あの大英雄に、正面から挑み、打ち勝てた。達成感に体が震える修司だが……もう、立つ事も限界だった。

力なく、地面へと仰向けに倒れ込む。相変わらず体は動かないが、不思議と心は満たされていた。嘗てない強敵、血と汗にまみれながら、修司は広がる青空に向けて手を伸ばし。

「――勝ったよ。王様」

満足そうに呟くとパタリと意識を手放すのだった。

その４３　第三特異点

その光景にカルデア全体が歓喜と驚愕で震えていた。神話に語られる伝説、具現化した最強の大英雄に一度は消沈したカルデアのスタッフ達。

ロマニは勝てるわけないと項垂れ、ダ・ヴィンチすら此処までかと半ば諦め掛けていた。隔絶された力の差、圧倒されて地に倒れ伏した修司に多くの者が自分達の敗北を予見した。

大英雄ヘラクレス。サーヴァントの枠組みを越え、生前に限りなく近い状態で召喚された正真正銘の半神半人。勝てるわけがなかった。道理も、根拠も何もかもがなかった筈だった。

そんな隔絶された力の差を、白河修司は飛び越えて見せた。限界を越えた限界を更に越え、何処までも貪欲に勝利を求めて……遂には勝ち取って見せた。

ヘラクレスが敗北し、修司が勝利した。その事実にカルデア中が驚愕に震えた。新たな伝説が打ち立てられ、新たな神話が幕を上げた。この神秘の薄い現代において神代真っ只中の英雄――――神の血を引いた大英雄を下したという歴史的瞬間に立ち会えたカルデアスタッフ達はその多くが愕然とし、また歓喜に狂乱していた。

恐らく、各エリアで事の顛末を見ていたサーヴァント達も似たような反応をしている事だろう。新たな伝説の始まりに血が騒いだり、目の前で目撃した神話を再現した戦いに、多くのサーヴァント達の士気が天井知らずに高まっているだろう。

実際、雄叫びにも似た声が遠くから聞こえてくる。恐らくは狂戦士の誰かが修司の戦い振りに触発され、シミュレーター室にでも向かったのだろう。騒がしい奴等だ。耳を塞ぎたくなるほどの大歓声に黄金の王は眉を寄せるが、その内心はそんな彼等とそう変わりはなかった。

「全く、童の様な寝顔を晒しおってからに、図体はデカくなった癖に中

身はホントに変わらん奴よな」
　モニターに映し出されているのは大の字になって倒れ、満足そうに眠る修司。そんな彼を見て、英雄王は誰にも気付かれる事なく笑みを浮かべる。それは慈愛に満ち、幼子の成長を垣間見た父性に満ちた笑みだった。いつか見た誓いを果たした臣下に英雄王はたった一言だけの称賛を送った。
「――――見事」
　たったそれだけの言葉。しかし、それだけで充分だった。それ以外の言葉も、それ以上の表現もいらない。自分が予見した未来を、相棒の力を借りずに成し遂げた男への最大の賛辞と称賛がそこに込められているのだから。
　故に、後の後詰めは王に委ねられる。踵を返し、レイシフト用のコフィンへと向かう。
　英雄王は視た。修司がヘラクレスを打ち破った瞬間、降って沸いた様にある映像（ビジョン）が送られてきたのだ。
　それは、英雄王にとって色んな意味で無粋で看過し難いもの。その映像を目にした瞬間黄金の王は上質な料理に泰山産の激辛麻婆をぶちまけられた様な嫌悪感を抱いた。
「万能者、直ぐにレイシフトの支度をせよ」
「なんだい藪から棒に？　折角人類初の快挙を目の当たりにしたんだ。もう少し余韻に浸っていてもバチは当たらないんじゃないかな？」
「戯け、何を終わった気でいる。まだ本来の目的を成し遂げていないのに呆けている場合ではない筈だぞ」
「――――あ」
　英雄王に指摘され、見落としていたモノに気付いたダ・ヴィンチはヤバイと口から溢して直ぐ様ロマニへ事の説明を話し、レイシフトの準備に取り掛かった。未だに復旧していない立香達との通信、それはまだ特異点の修復を完全に成し遂げていない証明でもあった。
　一転して慌ただしくなる管制室、ロマニの指示が飛び、サーヴァントのレイシフトが開始される。やれやれと呆れながら歩み進める英

雄王、そんな彼の隣をオルレアンの乙女が通りすぎる。
「私も行きます。彼等を此処で死なせる訳には行きませんから！」
「好きにせよ」
素っ気ない態度の英雄王だが、対してジャンヌの顔には笑みが浮かんでいる。まるで此方の意図を読んでいるかの様な含み笑いに軽く苛ついたギルガメッシュだが、今はそんな事に気を取られている場合じゃない。
彼にあの映像が送られたという事は、彼の魔神が必要だと判断したからだろう。相変わらず厳しいのか甘いのか分からない態度、これもこれで英雄王の神経を逆撫でしてくるが……出てこない相手に論を語っても無意味だろう。
いずれにせよ、臣下の偉業を汚そうとするのは英雄王としても見過ごせない。久し振りに王の威光を示してやろうと、何だかんだ先の戦いの熱に宛てられてノリノリなギルガメッシュはレイシフトの光に身を任せるのだった。

◇

「あぁ、負けてしまいましたか」
遥か遠い孤島にて年若い魔術師の少女は口を開いた。達観に満ちて、何処か他人事で、それでいて誰よりも悔しそうに呟く少女の名は――――メディア。
彼女が魔女と呼ばれるよりも前の時代から召喚され、イアソンの野望を叶える為にこれ迄彼に仕えてきた少女は、その胸中を複雑な感情で満たしていた。

本当なら、自分と彼は共に倒れる運命にあった筈だった。自分の言葉に惑わされ、言われるがままに行動し、人理焼却の後押しになる筈だった。全てを無かったことにして、彼と共に滅ぶことを選んだ少女。しかしその目論見は一人の男が切っ掛けに瓦解する事になった。

白河修司。藤丸立香と同じ名目上最後のマスターの一人に数えられていた青年、彼がサーヴァントのヘラクレスを圧倒してしまった為にイアソンに要らない熱を引き出す事になってしまった。

イアソンはギリシャ神話の中でもヘラクレスこそが最強の英雄と信じて疑わない。彼こそが最強で、彼に及ぶものは存在しないと豪語していた。

そんな彼の自信で矜持でもあったヘラクレスが知らない男に膝を付かされた事でその矜持が砕かれ、イアソンを嘗ての英雄へと覚醒させてしまった。自身の願いも野望も夢も、全てを擲ち、ヘラクレスの勝利を願ったイアソンはそれまで狂戦士（バーサーカー）でしかなかったサーヴァントを、真なるヘラクレスと呼べる存在にまで昇華させた。

自分の言葉による誘惑を振り切り、自分の信じるヘラクレスの為に己の命を使い果たした。それを目の当たりにしたメディアは否応なしに認めるしかなかった。結局の所、自分はカルデアのマスターでも彼等に従うサーヴァントにでもなく、自分が愛（殺したい）したいと願ったただ一人の男に敗北したと言う事を。

悔しい。けれど同時に嬉しくもあった。アルゴノーツの船長が自分よりも船員を優先した事、自分の理想よりも友の勝利を願った事、自身の境遇を憎むよりも友の敗北を否定した事。

あの時、厚顔で慢心に満ちていたイアソンは本当の英雄へと返り咲いていた。その事実がメディアにとって悔しくもあり、嬉しくもあった出来事だった。

そんな彼等の輝きも既に消え失せた。下手な小細工を弄したりせず、真っ向からの戦いに挑み……敗北した。

完敗だ。これ以上の敗北はないとメディアは自分達の負けを受け入れていた。既にイアソンの船であるアルゴー号も消えている。出航した彼等に追い付こうにもメディアにはその手立ても気概もない。

ヘラクレスが敗北したことで術者であるメディアに聖杯が戻ってきているが、今更聖杯を使った所で彼等に勝てる要素はない。
「はぁ、どうしましょう。大人しく自害でもすればこの特異点は修復されるのでしょうか？　でも、痛いのは嫌だなぁ」
既に自分達は敗北している。ならば大人しくこの特異点も終わらせようとメディアはあれこれ考えを巡らせるが――。
『――それは困るな』
ふと、自分の口から知らない言葉が溢れ落ちてきた。
「え？」
『お前は既に私に負けている。なのに最低限の働きもしないまま終わろうとするのは……些か怠惰に過ぎるのではないかな？　既に目障りなハエ（修司）も死にかけている。君も魔術師の端くれなら、効率のよい選択をするべきだろう？』
〝嘗て、君がそうしてきたように（裏切ってきたように）〟
自分の口なのにまるで別の何かに動かされている感覚、自分の奥底に蠢くなにか、悪意に満ちたソレに抵抗すら出来なくなったメディアは手にした聖杯を胸に抱き――そして。
コルキスの王女だった少女の体は泥のように崩れていった。

◇

（――なんか、揺れてる？）
真っ暗な無意識の底に感触という一条の光が差し込んできた。まるで水面に漂っているような感覚、程よい振動で疲れている人間には

揺りかごに感じられるその感触に修司の意識は徐々に覚醒していく。
（――――いや、なんか、胸元が重いような気も……）
次に感じた違和感は胸元に僅かな重みとそれによる息苦しさ、一体自分の体に何が起きているのか、気になった修司が重い瞼を開くと……。
「あ、起きた」
なんか、クマのヌイグルミが喋っていた。
「……なに、してんの？」
「なにって、お前さんの様子見だよ。今嬢ちゃん達は外でカルデアって所と話をしようとしていたらしくてな、他の奴等も見張りだ何だので忙しいから、暇な俺様が兄ちゃんの様子を見に来たって訳」
「……ここは、船、か？」
「おう、ドレイクの黄金の鹿号、その船室さ。大変だったんだぜ？　兄ちゃん達次々と戦う場所変えちまうし、ドッカンドッカンとうるせぇし、なんか衝撃波が来て船が転覆しかけるし、正直戦闘よりもしんどかったわ。俺なにもしてねぇけど」
「それは……迷惑を掛けたな」
「謝るのなら、マスターの嬢ちゃんに言ってやんな。あの娘、血塗れで倒れていたアンタを見てわんわん泣きながら治癒魔術を掛けてたんだぜ？　男の勝負に拘るのも良いが、巻き込まれる側の気持ちも少しは汲んでやれよ」
ヌイグルミのクマがなんかそれっぽい事を言って船室を後にする。多分、外にいる立香達に修司が目覚めた事を話にいくのだろう。眼前に広がる知らない天井、心配を掛けた立香とマシュに申し訳なく思いながら修司は自身の体の具合について確認を始めた。
「～～っ、……やっぱ、動けないか」
首から下、指先一つ動かそうとすると全身に鈍い痛みが襲ってくる。やはりヘラクレスとの戦いによるダメージ……というより、限界を越えて使用した界王拳の反動は予想以上に大きかったようだ。
本来なら6倍、ギリギリで7倍までが限界ラインだったのにそれが今回大きく越えて１０倍まで引き上げてしまった。ほんの僅かな時

間とは言え、体に大きなダメージとなるのはやはり避けられなかったようだ。
だが、修司は後悔はしていない。オリオンの言う通りヘラクレスとの戦いは自分の自己責任だったし、あの時の彼を凌駕するには１０倍界王拳の力が必要だった。
それ故に現在満身創痍の状態となっている訳なのだが、全身の筋肉が断裂しかけているというのに修司の表情は其処まで暗くはなかった。
何せ、あのヘラクレスに勝ったのだ。ギリシャ最強と名高い大英雄、その本人同然な相手に一歩も引かずに打ち勝つ事が出来たのだ。嬉しくない訳がない、もし体が万全なら小躍りしたくなるほどに修司の胸中には歓喜で満たされていた。
それに体の調子も悪くはない。痛みがあることは痛覚があるという事でその意味は神経が無事であることを指している。指一本動かすのも億劫だが、我慢できない程ではないし、闘うことは出来ないが壁を伝えば一人で歩くことも出来るだろう。
骨も折れたりしているだろうが、処置が適切なだけあって然程苦にはならない。痛いのは痛いが、耐えられない程ではない。
そんな自分の体の調子を確認した修司はふと近付いてくる足音を耳にした。気配からして立香なのだろう、そろそろ起きるかと修司が体を起こすのと立香が部屋へとやって来たのは殆んど同時だった。
「修司さん！　目を覚ましたって本当!?」
「おう、この通りピンピンしてるよ」
部屋にやって来た立香に修司は片手を上げて無事だと応える。正直まだ寝ていたい気持ちがあるが、それではまた余計な心配を掛けてしまう。白河修司は男の子、時には意地を張るものだ。
そんな修司に立香はヘナヘナと腰を落とす。余程気に掛けてくれたのだろう、良かったと安堵の息を口から溢す立香の目には大粒の涙を滲ませていた。
「ごめん、心配……掛けたな」
「本当だよ！　修司さんてば一人でヘラクレスと戦っちゃうし、ドラ

ゴン○ールみたいになっちゃうし！　私は終始ヤムチャ目線だし、本当に心配したんだからね！」
「いや、本当に悪かったよ。そして、ありがとう。立香ちゃん達のお陰で、どうにか生き延びる事が出来たよ」
　ウガーツと憤慨を顕にする立香に修司は真摯に対応する。理由や、結末はどうあれ、戦友とも言える相手に心配を掛けたのだ。年上であるならば尚更誠意を見せるべきだと判断した修司は未だに怒る立香に頭を下げた。
　立香も立香で、命懸けで戦った修司にこれ以上追及する事は出来なかった。過程はどうあれ、結果的には全員無事で生き残ることが出来た。その最大の結果をもたらしたのは間違いなく目の前の彼のお陰だ。
　だから……。
「うん。どういたしまして……それと、ありがとう。私達の為に戦ってくれて……」
「気にするな。俺の場合、殆んど自業自得だ」
「それでも、だよ」
「――そっか」
　ありがとう。そう言葉にする立香に修司もまた受け入れた。気持ちも晴れ渡り憂いもなくなった事で今度こそ戦いは終わりを迎える事になるだろう。
　そう、後は聖杯を回収するだけで――。
「ん？」
「あ？」
　この時、二人は気付いてしまった。
「……なぁ、立香ちゃんや」
「……なんでしょう、修司さんや」
「俺達、聖杯って回収したっけ？」
「……して……ませんね」
「……もう一人、敵側にサーヴァント……いなかったっけ？」
「……いましたなぁ」

修司も、立香も、そして船にいる全員が忘れていた。ヘラクレスのインパクトが強すぎて他の敵の存在を完全に頭からスッポ抜けていた。

まずい。二人の思考が一致したとき、突如として船に衝撃が走った。大きな揺れだ。立香は船室の中で転がり、修司はベッドの縁に捕まり踏ん張っていると、今度は酷く慌てた様子のマシュがやって来た。

「せ、先輩方大変です！　船の前方に巨大な魔力反応が現れ、不気味な柱が現れました！　お、恐らくは先の特異点で現れた魔神柱と呼ばれる存在だと思われます！」

（（やっべぇ、メディアの存在忘れてたぁぁッ！））

恐らく、魔神柱の依り代となったのは若いメディアなのだろう。既に連戦と激闘により満身創痍となっている修司達一行、割りと窮地に立たされているというのに、意外とその心境には余裕が生まれていた。

その４４　第三特異点

「いやー、忘れてたなぁ」
「忘れてたねー」
「忘れちゃってたなー」
「汝らなぁ……いや、すまん。私も忘れてた」
　オケアノスの中心に聳え立つ黒い海魔の魔神。その名をフォルネウス。ソロモンが使役していたとされる魔神の一柱の顕現を前にオリオンを始めとした数名のサーヴァントは、やっべぇ忘れてたと口にしながら頭を悩ませていた。
「皆さん！　状況はどうなっていますか!?」
「おうマシュちゃん、今のところ奴（やつこ）さんはこっちに気付いてはいない……て、何やってんだよ修司」
「いやね。この際恥も外聞も気にしてられないと思ってね」
　船室に続く扉が開き、マシュと立香が甲板に上がってくる。声につられてオリオンがアルテミスの頭上から振り返ると、マシュの背中に背負われている修司を見て何とも言えない気分になった。
　デミサーヴァントであるマシュの膂力は人間の範囲を超えている。立香も筋力を魔力によって強化する事ができるが、それでもマシュには敵わない。よってマシュに身動きの出来ない修司の移動の際の手助けをしてもらう事になったのだが、その姿がまぁ情けない。しかし、そんな彼がギリシャ最強を倒したというのだから驚きだ。
「全く、これが私達の伝説（ギリシャ神話）を塗り替えたっていうのだから笑えないわ。大英雄を降した新たな英雄、白河修司。確か、立香と同じ出身国なのよね？」
「え？　うん。そうだと思うけど？」
「本当かい？　うへぇ、ニッポンて国には黄金の国って聞いたことがあるけど、とんだ魔境じゃないか。スペイン艦隊なんか目じゃないね」
「だから違うって、日本人の皆がＤＢ染みた戦闘能力なんか持ち合わ

せていないから！　とんでもない風評被害だから！」
「……あれ？　なんだろう？　俺一生懸命戦ったのに、何でこんな散々な言われれようなの？」
「それは……その、やはり日頃の行いかと。前の特異点でもそうでしたし」
「ぐふぅ」
　エウリュアレが修司の叩き出した偉業に呆れ、ドレイクが戦慄し、立香が激しく否定する。今回の戦いでかなりの貢献をした筈、それなのに散々な言われれように修司はマシュの背中で泣きそうになるが、悲しいことに彼を慰めるものはこの場にはいない。
「……諸君、賑やかな歓談も其処までだ。気付かれたぞ」
　これまで魔神柱の様子を観察していたダビデからの一言にその場にいる全員に緊張が走る。海面に佇む不気味な柱、蠢く目玉には全て自分達の方に向けられている。集合体恐怖症（トライポフォビア）の人間には些かキッツイ光景だ。
　そんな魔神柱に向けて黄金の鹿号から砲弾が放たれる。放たれた砲弾はその全てが直撃するが、魔神柱に堪えた様子はない。
「よし、当たったね！　当たるなら後はどうとでもなるさね。立香、マシュ！　アレを倒すのがあんた達の目的なんだろ？　なら、あともう一踏ん張りじゃないか！　そうだろ？」
「ドレイクさん……うん！　やろう、皆！」
「やっぱこうなるか。そんじゃあ一先ず点呼！　この中に宝具撃てる人何人いますかー？」
　唐突に始まった第三特異点での最後の戦い、ドレイクの発破を切っ掛けに戦う決意を固めた立香は今一度サーヴァントの皆に呼び掛ける。これが最後の戦いだと、改めて気を引き締める彼女に対してオリオンは有効な残弾の確認を急ぐ。
「私は……残り一度くらいか。メディアの竜牙兵を蹴散らすのに少々魔力を使い過ぎたようだ」
「僕はちょっと無理かな、ヘクトールの動きを阻害するのに無駄撃ちをし過ぎたみたいだ。精々援護射撃が限界だ」

「ごめーんダーリン、私もちょっと厳しいかもぉ～」
「私も似たようなモノね。因みにアステリオスは論外よ。そもそも宝具が攻撃的じゃないし」
「う、でも、オノ、投げられる、よ？」
「投げた所であの化け物には大したダメージにならないわよ」
　オリオンの質問に他のサーヴァント達からの返事は思ってた以上に芳しくはなかった。皆それぞれ此処までの戦いで魔力を消費しており、切り札となる宝具の回数も限られてきている。しかも相手は並のサーヴァントを圧倒するほどの魔力量を有している、アレを倒すには最低でも対軍宝具クラスの火力が必要だ。
「くそ、せめてもう少し回復してれば、俺も戦えるのに！」
　正直に言えば、今すぐ倒れて横になりたい。意識は覚醒しても失った体力は未だ戻らず、全身に掛かる痛みは今も修司を苛ましている。
「来るよ！　面舵逃げろォッ！」
　ドレイクの指示に合わせて船が動き出す。瞬間、魔神柱の無数の目が一斉に輝きだし、先程まで船がいた場所に閃光が走り、海面が爆発する。
　魔神柱からの攻撃。威嚇ではなく、射撃から撃沈狙いの一撃。アレを受けたらひとたまりもないのは明白、それでも船は恐れずに魔神柱へ舵を切る。乗船している彼等の目には不倶戴天の決意が宿っていた。
「まずは私がやるとしよう。我が弓と矢を以て太陽神（アポロン）と月女神（アルテミス）の加護を願い奉る。この災厄を捧がん――訴状（ポイボス・カタストロフェ）の矢文!!」
「あらやだ奉られちゃった♪　それじゃあ私も放つわよ――――愛の矢を！　月女神（トライスター・アモーレ・ミオ）の愛矢恋矢!!」
「この際宝具の名称に突っ込まねぇ！　やったれぇ！」
　唯一宝具を撃てるだけの魔力を持った二人による一斉掃射が放たれる。空を覆うほどの矢の雨、その悉くが魔神柱に直撃し、爆発する。魔神柱を海面ごと揺らす大爆発を引き起こし確かな手応えを感じる二人（一人と一柱？）、しかし砂塵の向こうには依然として巨大な肉の柱の影があった。

「くそっ！　火力が足りないか！」
「ダメージは与えられています！　このまま叩き続ければきっと……っ!?」
　瞬間、再び魔神柱の目が輝き出す。煙の中から分かる怪しい光、それが魔神柱からの攻撃的完了の合図だと知った修司は同じく察したマシュに指示を飛ばす。
「マシュちゃん！　俺に構わず皆を！」
「――――っ、了解！」
　背中には重傷の修司を背負っている為に僅かに迷うマシュだが、修司本人からのＧｏサインに彼女は意を決して前に出る。
「疑似展開（ロード・カルデアス）／人理の礎!!」
　守りの宝具が魔神柱の放つ光から船を守護する。しかし、既に魔神柱には二撃目が用意されていたのか、先程以上の光が無数の目に集約されている。
　不味い、再び防御に入ろうとするマシュだが――――その時、彼女の後ろから右手が伸びてきた。
　修司だ。ボロボロで身動きもマトモに出来ない癖にそれでも彼の目には戦う意思が今も燃え盛っていた。
　修司が伸ばす腕、そしてその先にある手の指先はまるで拳銃の様に形とられている。伸ばされた人指し指、曲げられた親指はさながら引き起こされた撃鉄。
「これが、正真正銘最後の一撃だ。――――霊……丸!!」
　指先から放たれるのは一条の矢、威力も速さもない脆弱な一撃はそれでも魔神柱に届いて見せた。対してダメージにもならないその一撃はしかして魔神柱には不快だったのか、今まで黄金の鹿号に向けられていた目は全て修司に向けられる。
「……マシュちゃん、下ろしてくれ。こうなったら俺も戦うよ」
「なっ!?　だ、ダメです修司さん！　その提案は受け入れられません!!」
　魔神柱の敵意が一斉に修司へと向けられる。今の一撃で脅威と見なされた？　否、今の修司はこの場にいる誰よりも弱っている。なら

ばそこから崩すまでと言う魔神柱の合理的な判断によるものだ。そしてその判断は正しく、本当に修司の体には戦えるだけの力は残されていない。風でも吹けばそれだけで倒れてしまいそうな程に……修司は弱りきっていた。

マシュから離れ、甲板に降り立つ。足を甲板に着けた、それだけで身体中に激痛が走るが、それでも修司は笑って耐えて見せた。

「今、皆が頑張って戦ってくれている。そんな中で俺だけがお荷物なのは……俺自身が耐えきれないんだ」

「ですが修司さん、それ以上戦えば本当に貴方の命が！」

修司の状態はマシュにも分かるほどに酷い状態だった。立ち上がるのも不可能な状態で、ましてや戦うなんて……。

「なぁに、満身創痍になるのは慣れている。限界を迎えるのもね。それに……俺はこんな所で終わるつもりはない。今の自分が限界だって言うのなら、さらにその先へ挑むだけさ」

嘘だ。既に修司には戦えるだけの力なんて残されていない、闇雲に魔神柱に挑んでも無駄死にするのは目に見えているし、本来ならマシュは修司を止めるべきなのだろう。

だが、マシュ＝キリエライトには修司を止めるだけの言葉が見つからない、修司の目には既に強い意志が宿っている。彼を止めるのに今のマシュでは白河修司という人間を知らなすぎた。

正直に言えば、強がりも良いところだ。しかし立香も、他の皆も戦っている中で自分だけ寝ているわけにはいかない。

「それに何より、俺は……あんなモノ（理不尽）に負けるわけにはいかないんだよ！」

体が動かないからなんだ。力がないからどうした。死力を尽くして戦っても未だに修司の意思は折れていない。

ここが自分の限界なら、その限界を越えるまでだ。目の前の魔神柱（理不尽）に抗う為に修司が激痛に包まれながら一歩踏み出した――その時。

『ハッ、意地を張るのは貴様の勝手よ。だがその前に――右に避

けぬか！』
「……え？」
聞きなれた声に振り返るのと同時に巨大な刀剣が修司の横を通過した。魔神柱に突き刺さる。
「？？？

「さて、雑種どもの珍道中も飽きた。見るべきものも無くなり、残ったのはみっともない魔神柱。大人しく身を引けばまだ潔くあったものを」
「故に、我が裁定を下す。疾く死ぬが良い。ゲテモノにはゲテモノらしい末路があろう」
黄金の王が片手を上げると、無数の波紋が広がっていく。空を、海を、周囲の空間ごと魔神柱を覆い尽くす波紋。その中からは無数の刀剣が射出されていく。
圧巻だった。たった一柱の魔神柱を相手に一切の容赦なく無数の刀剣が突き立てられていく。その光景にオリオンとアルテミス、アタランテは唖然となり、ダビデとエウリュアレは戦いの終わりを感じ取っていた。
唯一アステリオスは黄金色に輝く波紋を見てキレーと呑気に呟いている。ドレイクに至っては次々と放たれる宝の山に勿体ねーと愚痴っている始末だ。
戦いに次ぐ戦い、激闘に次ぐ激闘。波乱と驚嘆に満ちた第三の特異点は黄金の王が最後に全てを持っていく形で終わりを告げた。
――その後、聖杯を回収してカルデアへ帰還した一行は問答無用に休息を言い渡され、中でも修司は気絶していることを良いことに本人の了承なく緊急治療室にぶち込まれるのだった。

◇

――――それから、暫くして。
「姉御、楽しい連中でしたね」
「あぁ、此処までワクワクしたのは初めてさね。最初は珍妙な海に巻き込まれたと思ったが、まさかあんな大冒険を味わえるとは」
穏やかになったオケアノス。特異点となっていた原因も取り除き、聖杯を回収した事で第三の特異点は間もなく修復される事になる。
これ迄の冒険の記憶は全て消え、自分達は元の航海に戻る事になる。そう告げられたマシュにドレイクは最初こそ寂しく思ったが……それも一瞬。自分達は覚えていないかもしれないが、彼女達が自分達の事を覚えてくれる。その事実だけで充分だった。
彼女達、カルデアの一行は自分達のいる時代から遥か未来から来たという。なら、恐らくは知っているのだろう。これからの時代の流れを、これから待つ自分達の行く末を。
それを考えて内心不安になることもあった。恐怖を抱く事もあった。けれど、自分達は海賊。海を往く者、ならばそんな不安や恐怖も笑って吹っ飛ばしてやろう。
自分達は海賊、海の開拓者。いつか終わりが来るときまで楽しく笑って生きていこう。
偉大なる大海賊、フランシス＝ドレイク。彼女の冒険は……まだ終わらない。

「良かったの？　アステリオス。皆と一緒に行かなくて」
遠ざかる黄金の鹿号を見送りながら、とある島へ下ろして貰ったエウリュアレは自分を肩に乗せているアステリオスに声を掛ける。
彼等は海賊だ。野蛮であり、下品で、不躾な所も多々あり女神である自分から見ても海賊は海の無法者と呼べる人種だった。
けれど、彼等は同時に勇気ある者達でもあった。アステリオスという生前に怪物と恐れられていた彼を、共に戦う仲間として、共に海を

往く友人として、対等に接し、アステリオスと名前で呼んでくれていた。
　きっと、この思い出は彼が座に還っても刻まれる事になるだろう。こう言う人達もいるのだと、単なる記録だとしても決してアステリオスはこの思い出を忘れることはしないだろう。
　だから、もう少し一緒にいても良かったのではないか。誰からも恐れたり、怪物として見ることのない彼等と共に特異点が修復されるその瞬間まで、一緒にいても許されるのではないか。
　しかし。
「う、ん。でも、オレ……怪物、だから。沢山の子供を、殺して、きたから」
　アステリオスは頑なに首を横に降る。生前、自分は多くの罪を犯してきた。多くの子供達の命を奪い、殺し、喰らってきた。
　自分は怪物だ。そんな自分が今更人並みの幸せを望むなんて合ってはならない。仮に許されたとしても、それは自分の行いのケジメを付けてからだ。
「……」
「みんな、名前、で、呼んで、くれ、た。オレ、凄く、嬉しい。でも、だからこそ、自分の、やった、事に、責任、を、取らなくちゃ、いけなか、った」
　本当は、アステリオスは死ぬつもりだった。自分より弱い子供達の命を奪い喰らってきた自分が、盾になることで罪を少しでも償おうとしていた。
　そんな彼の悲痛な願いは、ついに叶えられることはなかった。死に場所を探していたのに、その機会を奪われ、死にきれなかった男は誰も知らない島で一人消滅する道を選んだ。
「……もう、見た目によらず真面目なんだから。でもねアステリオス、貴方が自分をそう思うように貴方に生きていて欲しいと願う物好きな女神がいることも、忘れないでね」
「う、ん。だから、オレ、今、凄く、嬉しい。エウリュアレと一緒、で、オレ、凄く、嬉しいんだ」

自分は一人ではなかった。生前では得られなかったモノ。殺し、殺される道しかなかったアステリオスが初めて手にする事が出来たモノ。

人はそれを――――宝物と呼んだ。

「――――オレ、エウリュアレが、大好きだ」

二人が見上げる空には何処までも続く蒼穹が広がっていて、二人の足下には名前の知らない花達が咲き誇っていた。

――――定礎復元――――

「いやー、あのパイオツで聖女は無理でしょ」

「台無しよ、ダーリン♪」

「ぶぎゅる!?」

終われ

その４５

※月※日

――――気付いたら、自分はベッドの上で寝ていて医務室の天井を眺めていた。どうやらあの後、特異点から帰還した自分は気を失ったまま医務室に担ぎ込まれ、治療を受けた後丸二日も眠っていたらしいのだ。

最後に覚えているのは現れた魔神柱を前に、満身創痍の自分達の所にジャンヌさんと王様が駆け付けてくれた所だけだから、あの後どうなったのかはドクターから教えて貰った。

結果的に言えば聖杯は無事に回収され、特異点も修復されたという事。報告書に記載された文字ではいつもと変わらない最上の結果だが、今回は相手が相手だった為に自分としても胸を撫で下ろす思いだ。

で、今回の特異点での戦闘は今までの比較にならない程の激しいモノであった為、自分を含めた立香ちゃんやマシュちゃんも当面の間は安静に過ごすようにドクターから〝命令〟された。

命令なんて強い言葉を使うものだから一瞬唖然としたけど、そう言えばロマニってオルガマリーちゃんの代理なんだよな。謂わばカルデアのトップ、カルデアという限られた施設での立場としては立香ちゃんや俺よりも断然上な役職の人間だった。普段から気弱な優男って印象が強かったから忘れてたけど、彼は一応ここの責任者なんだよな。

そんな彼から目の覚めた俺を見て安堵するのも束の間、眉間に皺を寄せて小言を言ってきた。その小言の内容も専ら自分の身を案じるモノばかりで、彼の言うことはほぼ間違いないので取り敢えずは大人しく聞き入れる事にした。

その後、自分の容態について改めてロマニに訊ねると、自分が寝ている間に受けた諸々の治療の成果もあって診断書は全て正常となっ

ていた。折れていた骨や断裂していた筋肉も元通りになっており、寧ろ以前より柔軟且つ頑強になっているらしい。
驚きと呆れの言葉がドクターから告げられたが、昔から回復力には定評があった為、自分はそんなに驚いてはいない。
折角目を覚ましたし、ご飯を食べた後にシミュレーターで適当に体を解そうかと思ったが、ドクターからストップを掛けられた。幾ら目を覚まして体調も回復したからといって、いきなり体を激しく動かすのは許可できないとの事。
心配性……いや、一組織を率いる人間として当然の判断か。今回の特異点でのヘラクレスとの戦いは殆んど自分の我が儘を押し通した形となった訳だし、今日くらいは大人しくしておこう。
その後、飯時になるとエミヤが食事をトレーに乗せて持ってきてくれた。病み上がりの人間に適切な食材で作られた胃に優しい品々、自分も食堂のコックとして役割があるのに律儀な奴だ。
と、最初はそう思ってたのにこの男、ここぞとばかりに小言を連発してきやがったのである。やれこれに懲りたら少しは自重しろとか、やれ人を猪扱いしたり、挙げ句の果てには人を宇宙最強の戦闘民族扱いしてきたりと、反応に困るからかいをしてきたのである。
その後も見舞いに来てくれたジャンヌさんにも小言を言われるハメになったのだが……まぁ、今日くらいは甘んじて受け入れるとしよう。実際心配を掛けたのは事実だし、何よりまだ体には疲れが残っている。
エミヤの料理を食べて、今日の所は大人しく寝ておこう。……そう言えば、こうして何もせずに寝て終わるのって、久し振りだな。

「おやロマニ、彼のカルテを凝視してどうしたんだい？」
「……ねぇダ・ヴィンチ、本当に彼は唯の人間なのかな？」
「――まぁ、君が懸念に思うのは分かるよ？　白河修司、魔術回路を持たず魔術師には絶対になり得ない凡庸の人種。人並みの外れた知

識と科学技術を持っていたりするが……残念な事に、正真正銘の人間さ」
「そうなんだ。彼は人間、神の血を引いている訳でも神代の神秘を帯びた生命体でもない。分類的に彼が人類なのは間違いない、けれど、だからこそ解せないんだ。そんな唯の人間がどうしたら彼処まで強くなれるんだ」
「追及、してみるかい？」
「……いや、止めておこう。彼が僕達に隠し事をしているのは分かっているし、彼自身もそれを申し訳なく思っているのは何となく伝わってきている。誠実で真面目な人格も演技ではないだろう、彼が真実を口にしてくれる事をもう少し待つことにするよ」
「因にだけど、一部のサーヴァント達は彼の事を知っているっぽい事については？」
「え？　なに？　何か言った？」
「……面倒ごとに巻き込まれたくないって、素直に言えたらいいのに、立場ある人間は大変だねぇ」

@月δ日
ドクターストップから翌日、本日から完全復活を遂げる事となった自分は、朝食を摂り栄養を補給した後、早速鍛練を始める事にした。
鍛練といってもあくまで体の調整を促す程度、先の特異点では自分でも相当無茶をした自覚はあるし、今日までは基本的なトレーニング辺りで済ませておこうと思う。安心と実績のあるケイローン先生の監修の下、自分は体の調子を整える事にした。
結論から言えば、無茶をする前の状態と全くと言って良いほどに体は調子がよく、そして軽くなっていた。これならまた以前のように、或いはそれ以上に戦えるだろう。
体の調子も万全、これなら明日からでも本格的に鍛練を始められる事だろう。ただ問題なのは鍛練をする際に使う場所だ。
シミュレーター室でもいいが、基本的にここは立香ちゃんが他の

サーヴァント達と一緒に戦闘訓練を行う場所、連携や戦いに対する免疫を付ける場所でもあるシミュレーターはジックリと追い込みを掛ける修行場には向いていないと自分は考えている。
いや、別にシミュレーター室が鍛練の場に向いていないという訳ではない。サーヴァントの皆との模擬戦は為になるし、実戦形式での鍛練は一人でするよりも余程実になる。
ただ、あの戦いを振り返って思ったのだ。今の自分はまだまだ弱い、今後またあのヘラクレスと同等か、それ以上の敵がいつ出てくるか分からないし、そうなった時に自分がまた勝てるとは限らない。
立香ちゃんもマシュちゃんも特異点を乗り越えることで逞しくなっているし、そんな彼女達を足手まといに思うことはないし、寧ろ頼りにしている。けれど、そんな二人を全ての特異点を修復させるまで辿り着かせるには自分自身の強化も必要と感じたのだ。
自分を強くする。具体的に言えば自分を自分で追い込める環境が欲しい。とするなら、やはり今後必要となるのはやはり〝アレ〟だろうか。
アレは作るのに自分の元いた世界でも結構な時間を要したし、何より〝相棒〟の力が必要になる。未だ相棒の事を皆に話せていないから一体どうやって説明するかが今の自分の宿題である。

「……そう言えばケイローン先生さ、俺の事恨んでねぇの？」
「え？　君に何か恨みを持つ様な事されましたっけ？」
「いや、ヘラクレスって一応先生の弟子だったわけでしょ？　幾らそうするしかなかったとは言え、教え子を殺されたのならば、師匠として思う所があったりするんじゃないかと……」
「いやいや、流石にこの状況でそんな勝手な事を宣う程、私は耄碌してませんよ？　互いに譲れないモノがあり、貴方はそれに勝った。正面から正々堂々と、ならば私から言う事はありませんよ」
「そ、そういうモノなのか？」
「そういうモノですよ。ただ、一つだけ言うことがあるとすれば……」

「？」
「ありがとう。ギリシャ最強と謳われる彼をその重圧から解放してくれた事に、彼と正面から戦ってくれた事に……彼の、新たな目標となってくれた事に」
「え？　そ、そう？」
「そして、そんな君は今後、多くの英雄達から追われる立場となった。頑張ってください。英雄とは往々にしてしつこいですからね」
「……え〝？」

@月√日
昨日、鍛練を終える際にケイローン先生から英雄達に狙われるみたいな事を言われたのだが、今日になってその理由が嫌と言うほど理解した。
現在カルデアに召喚に応じてくれたサーヴァント達、その多くが自分に勝負を挑んでくるようになったのだ！
特にケルト勢！　更に言えばその女王!!　なんなのあれ、どうして自分が行く先々で絡んでくるのかなぁ!?　前からその様子はあったけど、自分が回復して鍛練に励むようになってからよりその傾向は強くなってきやがった！
幾ら止めろと言っても聞きはしない。それどころか「儂の様な美女に此処まで言わせても応えんとは……よもや貴様、不能か？」なんてセクハラ交えて挑発してきやがった！
あぁ分かったよ、相手すりゃいいんだろ!?　半ばヤケクソ気味に彼女との戦闘訓練をするのだがこの女、よりにもよって自分に界王拳を使わせようとしてくるのだ。後でクー・フーリンに聞いた所、どうもあの戦いの様子を録画していたらしく、繰り返して見る度にヘラクレスを羨ましく思っていたとか。いや知るかよ、何で女性からバトルの話で嫉妬されなきゃならないんだよ。悲しいわ。
そして、仕方なく始まったスカサハとの対戦。降り注がれる槍の雨、間断なく攻められる応酬。流石はケルトの中でもトップクラスのサーヴァント、前もそうだが技の引き出しが半端じゃない。しかも

ルーン魔術とやらが思っていた以上に厄介で、彼女の指先が動く度に変に警戒してしまい、意識を剃らされてしまう。
純粋な戦闘能力も高いが、技の駆け引きも相当に上手い。巧みな技の応酬に俺もまた技を繰り出した。
その名も太陽拳。文字通り太陽の如く輝きを発して相手の目を眩ませる技、ぶっちゃけて言えば初見殺しである。突然人が物理的に光るのだから彼女も最初こそは動揺したのだが、次の瞬間には見えないことを関係なしに対応してきやがった。
最終的には前のように気絶させて結果的には自分の勝ちとなった訳だが、やはりケルトは化け物だ。持ち前の戦闘能力もそうだが、対応力も化物染みてやがる。アレで強さに打ち止めされたサーヴァントとか、本当魔境だな過去の英霊というのは。
次に彼女と戦う際は本当に界王拳を使わざるを得なくなるかもしれない。
それからというものの、頻繁に他のサーヴァントとも模擬戦を行うようになった。ランサーだったりセイバーだったり、主に三騎士と呼ばれるサーヴァント達が自分との模擬戦を所望してきた。なんだかんだ彼等との戦いは得難いモノがあるし、例のアレも作る目立てが立ててない今、今の環境は最適かもしれない。
因みにバーサーカーの皆は一対一の決闘染みた勝負より、一緒に筋トレする事が多かったりしている。金時とかスパさんとか、あとはランサーだけどレオニダスさんとも割かし一緒にトレーニングしている。
……理性のない筈の狂戦士の方が紳士的且つ自重してるってどういう事？
あ、でもアルトリアさんは青も黒も模擬戦の誘いもなかったな。なんかここ最近ずっと塞ぎ込んでたみたいだけど……どうしたんだろ？

「皆さん、修司さんとの勝負に夢中ですね」

「当たり前だ。今や奴は新しく誕生した現代の英雄、しかも勝利した相手は半神半人の大英雄。血気盛んな雑種どもには奴への興味は尽きぬだろうよ」
「……ドヤ顔している所申し訳ありませんが、彼の担当は貴方ですから、有事の際はお願いしますね」
「……」
「……マルミアドワーズが……私の、憧れの剣が」
「こ、粉々に……」
「こっちは此方でダメージが酷いな」
「相変わらず、多方面に傷跡を残す奴だな」

@月α日
ここ最近サーヴァントとの模擬戦の毎日な自分だが、今日新たに別のサーヴァントが参戦してきた。
英雄の名はアキレウス。ヘラクレスと並ぶ有名な大英雄であり、ギリシャ〝最速〟の豪傑でケイローン先生のお弟子さん。相変わらずな立香ちゃんの引き寄せっプリに最早笑いしか出てこなくなったよ。ハハ…。
そんでこの韋駄天君、自分がヘラクレスを倒した男だと聞くと速攻勝負を仕掛けてきやがった。流石ギリシャ最速、行動が速い。アタランテの姐さんもそうだが、スピード特化のサーヴァントって結構血気盛んな奴が多い気がする。
まぁ、別にいいんだけどね。何だかんだサーヴァントとの戦いは自分にとって経験になるし、別に命の取り合いとかはしないし。
そんな訳でアキレウスとの勝負なんだけど……いやー、速かった。流石はギリシャ最速、自分も速さには自信があったけど、彼の場合はまさに韋駄天。純粋なスピードならサーヴァントの中でもトップクラスなんじゃないか？
殆んど瞬間移動染みた移動能力。自分が彼の強さに対応できたのは偏にあのヘラクレスとの戦いのお陰だろう。奴と戦う前の俺だっ

たらきっと、もっと苦戦を強いられていたと思う。
ケルトの影の女王もバケモンなら、アキレウスも化物だった。
……やっぱ、今後は自分自身の強化も必要か。

「いやー、負けた負けた。流石はヘラクレスを倒しただけはある。この現代の中でよく彼処までの強さを手に入れたもんだよ」
「おや？　アキレウス、負けた割にはスッキリした顔ですね。何か、得られるモノはありましたか？」
「あぁ、……最初、あの男を見たときはヘラクレスを倒した奴には到底見えなかった。最初の印象は凡庸、何処にでもいる普通の人間に見えた。正直ガッカリしたよ、あのヘラクレスがこんな奴に負けるまで弱かったのかって」
「……それで？」
「――震えたよ。相対した瞬間、奴は化けやがった。唯の人間と思っていた奴が次の瞬間、化物になりやがった。最初は戸惑っていた俺のスピードにも瞬く間に適応し、対処しやがった」
「――――」
「しかもアイツ、あれでまだ全力じゃねぇんだろ？」
「手加減されたと思いますか？」
「あぁ思うね。更に言えば遠慮もされた。けれど、それはそう引き出せなかった俺自身の未熟さにある。……たまんねぇな、仮にもギリシャに名を馳せた俺が、自分の未熟さを痛感するなんてよぉ」
「ふふ、楽しそうですね」
「あぁ、久し振りにできた目標だ。精々、励ませて貰うぜ」
（――ヘラクレスに続き、アキレウスまでも降しますか。白河修司、貴方は一体……何処まで強さを求め続けるのですか）
シミュレーターを後にするアキレウス、敗北を知りながらも尚熱くなるその姿に頼もしく思いながらケイローンは思う。
白河修司。人間でありながら人を超えつつある人類の頂点、彼は一体何処まで強くなり続けるのか。ケイローンには少し……ほんの

少しだが、修司の行く末に一抹の不安を覚えた。

@月※日
李書文先生キターーー!!

その46

※月β日

李書文。１８６４年に中国の河北省滄州市塩山県生まれの武術家であり、八極拳の門派・李氏八極拳の創始者。

立香ちゃんに呼ばれた彼は〝肉体の全盛期〟の頃、即ち年若い姿として召喚され、該当するクラスはランサーとなっていた。

師父に影響され彼の事を少なからず知る自分としては李先生がカルデアに来てくれた事を喜ばずにはいられなかった。何せ彼は中国拳法において知らない者はいない程の達人、しかも生まれた年代から神話や伝説上の英雄達とは異なり比較的近代的な人物。

本来ならより技の洗練された老齢の頃の自分の方が強い。というのは李先生本人の言だが、個人的にはそうは思わない。

何故ならランサーとして召喚された李先生には槍という武具を使ったアドバンテージがある。確かに肩を叩いただけで人を殺したという逸話のある晩年の李先生もバケモンだが、槍一本で神話の英霊達と渡り合えている李先生も充分バケモンだ。

そんな李先生に同じ八極拳を使う一人の武術家として教えを乞うことにした自分だが……実はちょっぴり緊張していた。李先生てば北京から武術を指南してもらおうとやって来た同じ武術家の人を殺害した逸話を持つ人だし、自分もそうなるのではないかと内心ビビっていたが、意外にも李先生はフランクな人で八極拳を師父から教わったと告げると、結構親しげに話をしてくれたのだ。

若いくせに大した功夫の練り上げだ。なんて誉められた時はいつになくテンションが上がったし、型の指導を受けた時はマジで感激した。

そして、ある程度指南を受けて改めて組手を申し出ようとしたのだが……やはり、拳よりも槍を得意とする若い頃の李先生では色々と勝手が違うようで、今の自分の技を見てもあまり役には立てないだろ

うと言ってきた。
同じように李先生でもその時代によって武に対する見解は色々と違うようで、肉体的には全盛期であっても技に対する指導は難しいとの事。
残念……なんて思わない、何せ相手はあの李書文先生だ。例え技に対する指導ができなくとも、実際に相対して真摯に挑めば見えてくるものは必ずある筈。李先生の都合が許す限りでいいから自分と組手をしてくれとダメ元で言ってみると、李先生は笑って了承してくれた。
師父以来初となる八極拳同士の組手、初回という事もあって自分も李先生と同じ槍を使って一度勝負する事になったのだが。
結果は惨敗。いやー、やっぱ強いわ李先生。同じ槍なのに使い手が違うだけでこうも差があるとは……やっぱり、自分も無手だけでなく武器を使った動きも覚えた方がいいんだろうか。
昔から苦手なんだよなぁ武器使うの。師父にも言われたけど、自分には武器を扱う才能はあまりないみたいな事を言われたし……自分自身、槍や剣を扱うよりも直接殴った方が速いと思っていた時期もあったし。
でも、李先生も仰るように武器を扱えれば体の動きにも影響が出てきて、結果的に洗練される事に繋がると言ってたし、何より苦手な事をそのままにしておくわけにはいかない。
これからは槍の指南を李先生から受ける事になり、自分の強化の第一歩を踏み出せた気がする。ケイローン先生も立香ちゃんの指導の合間に様子を見てくれるって言うし、これからが楽しみになってきた。
え？　ケルトの影の女王も指導指南に長けているだろって？　ハハ、冗談はよし子さん。
教え子を平然と死地に追いやるのはね、指導とは言わないの。単なる拷問なのよ？　拷問と指導は全く違うってハッキリわかんだね。

「お、今日もやっていますか李書文先生。どうですか、新しい門下生は」
「ギリシャの賢者に言われるのは流石にむず痒いから止めて欲しいが……そうさな、多少の粗さは目立つが、年齢の割に大したモノだ。功夫の具合もそうだが、何より向上心が普通ではない。槍の扱い自体は未だ拙いが、それはあくまで奴自身の苦手意識がそうさせるだけであって、切欠一つですぐに克服できよう」
「やはり、そうですか」
「恐ろしい奴よ。ギリシャの大英雄を下したというのに、まるで驕った様子は見受けられない。何処までも強くなることを望み、また底知れない才が奴を新たな次元へ押し上げる。全く、末恐ろしい奴だ」
「……でも、そんな彼の果てを見てみたいと思う自分がいる、と」
「可可可。いやいや、若さとは良いものよ。……所で賢者ケイローン、彼処にいる者についてだが……」
「あぁ、彼女の事は気にしないでください。貴方に槍の師としての立場を取られて嫉妬しているだけですから」
「……やれやれ、武で女に嫉妬される日が来ようとは、サーヴァントというのは面白いモノだな」
「うぅ、何故だ。何故だ修司ぃぃ！　何故槍の指導をワシに受けに来ないのだ！　ワシの方がカルデアでは先輩なのにイィィ！」
「いやぁ、普通に賢明な判断だろ。誰だってそうするし俺だってそう――――（ブスリ）ンアッーーーー!?」
「昔（プロト）の俺エェェェッ!?」

※月Ω日
李先生に槍の指導を受け、武器を扱った体術を一通りこなし終えて午前の鍛練は終了、午後に備えて身支度と昼食を戴こうと食堂に向かおうとしていたら、突然カルデア中に警報が鳴り響いた。
何事かと思いロマニ達のいる管制室に向かおうとしたのだが、途中で珍妙な生物と遭遇。ノブノブと鳴くゆるキャラみたいな生命体が

そこら中に蔓延っていた。
一見すれば可愛らしく見えなくもないゆるキャラだが、その性質は獰猛な獣。自分と目が合うとノブノブなゆるキャラは一体何処から出したのか、刀や鉄砲を持ち出して襲ってきたのだ。
突然の強襲に驚いたが、相手はサーヴァントですらない何処かの使い魔。外見に騙され先手を取られたとしても、たかが刃物や鉄砲にやられるほど自分は落ちぶれてはいない。
可愛らしい外見と言えど、敵意を持って襲ってくるなら容赦はしない。襲ってくるノブノブなゆるキャラ達に拳を叩き込むと、ゆるキャラ達は霧散して消えていく。一体カルデアに何が起きているのか、原因を究明する為に改めて管制室へ急いだ。
管制室に辿り着くと既にレイシフトの準備がされていた。というより、既にレイシフトはされた後だった。何でも人理焼却の影響か、妙な別の異空間とも呼べる特異点に繋がってしまい、そこからあのノブノブと鳴く生き物がやって来たらしいのだ。
このままではカルデアはあの珍妙な生物に埋め尽くされてしまうという、フワフワしながら割りと深刻な事態に自分も現地へ向かう事になった。
立香ちゃんとマシュちゃんの二人に合流して原因の究明を急ぐべく、自分もレイシフトをした。
で、そのレイシフト先に辿り着いたのはいいんだけど……なんか、目の前で寺が燃え盛っていた。しかも向こうではやたら高笑いをしている長い黒髪の少女がバカスカと鉄砲を撃ちまくっていた。
デザイン的にあのノブノブなゆるキャラの元締めだろう、そう判断した自分は即座にかめはめ波をブッパした。勿論、立香ちゃんとマシュちゃんには当たらないように気を付けての一撃である。
その後、もう一体同じ個体のサーヴァントがいたので次いでに岩斬両斬波（チョップ）（弱）で無力化しておいた。すると、やはりあの黒髪ロングが元凶だったらしく、特異点の修復はすぐさま始まった。まさかの秒での解決、これなら午後の鍛練にも間に合うだろうと安心した自分を何故かドン引いた様子の立香ちゃん達の視線が突き刺さって痛

かった。
　そしてこれは後から聞いた話だが、あの黒髪ロングの女の子、実は織田信長で、二人の傍らにいた女剣士は新撰組の沖田総司なのだという。
　――――日本でも有数の戦国大名が女の子とか……マジか、この様子だと上杉景虎とかも実は女の子だった。みたいな事にならないよな？

「しかし、羨ましいのう。よもや摩訶不思議アドベンチャーの代名詞を放てる者がいるとは、流石のワシも驚きを隠せんわ」
「まぁ、それなりに鍛えたからな。切欠は姉弟子の助言のおかげだけど、ここまで自在に撃てるのに結構苦労したんだぜ？」
「うぅむ、ワシもいつか手から波を出してみたいモノじゃのう。名付けて〝ノブノブ波〟！　どうじゃ、良くね？　これ良くね？」
「いや知らねぇよ、て言うかそう簡単に出せて堪るか」
「ぬわっはっはっは！　今に見ているがいい白河修司、両手からビームを出せるのがお主だけの専売特許になると思うなよ！」
「いや、別に専売特許にしているつもりは……え？　もしかしてマジでめざすつもりなの？」
「うむ、いつかお主との親子かめはめ波が出来る日を楽しみにしておるぞ！」
「誰が親だ誰が」

　――――後に、とある夏のハワイにて二人のかめはめ波（必殺技）が一柱の邪神を退ける事になろうとは、この時誰も予想だに出来ていなかった。
　出来てたまるか。

その４７

Δ月δ日

前回の特異点の修復から早くも１ヶ月、次の特異点へのレイシフトには未だ少しばかりの時間を必要としている今日この頃、相も変わらず自分は李先生やケイローン先生の監修の下、鍛練の毎日を続けていた。

流石に一月も時間を掛ければ槍の扱いも多少なりともマシになり、それにともない自身の動きもより洗練され、気の扱いも前より数段上手く扱えるようになれた……気がする。

断言できないのは……ここ最近、誰とも組手をしていないから仕方ないが、自分が今どれ程強くなれたのか、未だに計ることが出来ていないからだ。

というのも、自分は基本的に界王拳を使うことを禁止にされているのだ。界王拳は使用者に絶大な力を引き出す代わりに、それに見合った反動を肉体を通して返してくる諸刃の剣。カルデアの代表代理兼医療スタッフの統括を担っているロマニはその負担を考え、その結果緊急時以外での界王拳の使用を全面的に禁止にする事となった。

……まぁ、形だけの禁止扱いなんだけどね。界王拳を使いこなすには界王拳を使い続ける他ない、熟練度の度合いを高めれば高めるほど使用効率が伸び、倍率もまた高くなっていく。

実際、最初こそは三倍界王拳も満足に扱えなかったのに諦めず使い続けた結果、今では一瞬だけとは言え１０倍まで使えるようになった。もしこれであの修行場の製作が叶えられれば夢の２０倍界王拳も一気に近づけるかもしれない。

自分が強くなれば、それだけ立香ちゃんやマシュちゃんの負担も軽くなり、人理修復への道のりもグッと近くなる筈だ。

と言っても、所詮は自分の我が儘だ。実際に２０倍界王拳を使えるまでに至れるか分からないし、何よりあの修行場を作る際に皆にどう

説明したらいいのか未だに考えられていない、下手に相棒を皆の前に公開するとパニックになりそうだし。

――――それに、自分が界王拳を使おうとすると必ずといって良いほどサーヴァント達が絡んでくるんだよなぁ。

特にケルト、アイツ等俺が一人で没頭して鍛練したいから邪魔するなといっても、なぁなぁの態度で勝負を挑んでくるのだ。しかも割りとガチめな勝負を。そんなケルトに触発されて他のサーヴァント達も勝負を挑んでくるから、ホントに鍛練に集中出来ない。

そんな自分の最近の楽しみはエミヤの作るご飯を食べながら立香ちゃんや黒ひげ達とアニメの話について盛り上がったりする事である。

黒ひげの奴、カルデアに召喚された影響か現代のサブカルチャーにドップリと嵌まり込んでやがる。フィギュアからプラモ、ポスター、更には同人誌に至るまでありとあらゆる日本のアニメ文化に精通しているようになっていた。

特にお気に入りなのはＴｏ　Ｌ○ＶＥるのヤ○ちゃんなんだとか、そんな彼にワン○ースを読んどけよとツッコミしたいのは自分だけではない筈。

と、そんなこんなで今日も無事に一日を終えることが出来た。今日は特にこれといった話はなかったが……まぁ、たまにはこんな日もありだろう。

Δ月※日

……今日、奇妙な特異点が発見されたとロマニとダ・ヴィンチちゃんからそれぞれ連絡が届いた。

その特異点はこれ迄の特異点とは異なり、放っておいても消えるだろうとされる所謂特異点のなりそこない、だそうだ。

規模で言えばジャンヌ＝オルタがもたらした贋作騒騒ぎのアレ、危険性も低く無視しても別に問題ないとされていた特異点だが、個人的には特異点の場所に懸念があった。

冬木。よりにもよって自分の地元である冬木市が特異点として発

見されてしまったのだ。しかも観測を続けた所特異点の年代は十数年程度の前の時代、その話を聞いてどうしても自分にはあの儀式の名前が頭に過ってくる。

――――聖杯戦争。それも、俺が戦った時よりも一つ前の聖杯戦争だ。俺の家族を、故郷を、大事なもの全てを焼き払った最悪の厄災。その舞台が、特異点として再び俺の前に現れたのだ。

話を聞いた時、俺は沸き上がる激情を堪えるので必死だった。両親を、親しかった知人友人達を、惨たらしく殺したあの災害を特異点だからと言って見過ごしたくはなかった。

個人的にその聖杯戦争を無視する事はできない、どうすると訊ねてくるロマニへ俺はレイシフトする事を伝えたのだが、それに待ったを掛ける人物がいた。

エルメロイ先生だ。魔術師の中でも人柄に秀でて、教え子達に慕われている時計塔の魔術講師が行くなら自分も同席すると行ってきた。

前に一度だけ聞いたが、エルメロイ先生もこの儀式……第四次聖杯戦争に参加していたらしく、今回のレイシフトへの同行もその辺りに起因しているのだろう。

立香ちゃんも念の為という事で一緒に行くこととなった。当然、彼女のサーヴァントであるマシュちゃんも。これなら守りも大丈夫と言うことで俺達は改めて特異点となった冬木の地でレイシフトする事になった。

――――そろそろ時間だ。続きは特異点から帰還してから書くとしよう。

「くっ、まさかレイシフトして早々に奴とはぐれるとは！」

「で、ですがこの冬木という街は修司さんにとっての故郷だと聞いています。土地勘のある彼ならばはぐれた所ですぐに合流できるのでは？」

「甘いよマシュ、エルメロイ先生ははぐれた事に危惧しているんじゃない。自分達と離れた事により生まれる修司さんのやらかしを恐れ

ているんだよ」
「その通り、流石はマスターだ。奴の事をこの短期間で既に熟知している」
「へへへ」
「えっと……喜ぶべき事、なんでしょうか？」
「キャー！」
「今の声は!?」
「甲高い男性の声、あっちだ！」
「いだだだだ！　痛い痛い痛い！　な、何故僕の気配を察知できた!?　僕の気配遮断のスキルは完璧だった筈！」
「そんな殺気丸出しで遮断もクソもあるかよ」
「くそ、まさか僕がこんなふざけたコスプレ野郎に遅れを取るなんて！」
「フード被ってマスクしたアサ○ンクリード擬きに言われたくねぇな」
「ウギィィィ!?　や、止めろ！　アームロックは止めロォ!!　折れる、折れるゥゥゥ！」
「あぁ、遅かったか……」
「第一の被害者……発見です」
「修司さん、止めてあげてよぉ！」

Δ月βΔ日
いやービックリした。まさかレイシフトして早々に皆とはぐれたと思ったら、突然見知らぬ暗殺者に命を狙われてしまった。
一応アームロックで動きを封じ、無力化した所で立香ちゃん達と合流できたから良かったモノの、この暗殺者、以前中学の頃に戦った魔術師と似たような技を使うものだからついムキになって対応してしまった。
しかもこの暗殺者、衛宮の義父である衛宮切嗣さんだというから更に驚きだ。彼自身にはそんな記憶はないと言っているが、仮にも友人

の父親をアームロックでギリギリまで攻めたのは不味かったと思い、自分は取り敢えず謝罪しておいた。
でも、いきなり問答無用で襲ってくる切嗣さんにも悪いと思うよ？
そりゃ、クラスがアサシンだから闇討ちしてくるのは当然かも知れないけど、幾ら相手が見知らぬ怪しい人間だからって殺意全開で不意討ちかますのはどうかと思う。そんなんだから変な誤解が生まれるし、返り討ちに遭うんだよ。
と、まぁそんな感じで切嗣さんを半ば無理矢理に引き連れ、特異点の調査を立香ちゃん達に任せることにして、先ず自分は冬木に潜む殺人鬼の排除から向かうことにした。
最初は自分が単独で動く事を納得しなかったエルメロイ先生だが、彼は彼でこの特異点でやるべき事がある。自分のは殆んど八つ当たりみたいな事だから今だけは単独で動くことを許して欲しいと懇願すると、先生は何かを察してくれたのか、無理をしないことを条件に単独行動を許してくれた。
立香ちゃんにはエルメロイ先生とマシュちゃんがいる。共に守りに秀でた人達、二人がいるなら立香ちゃんも大丈夫だと思い自分は切嗣さんを引き連れてある場所に向かった。
自分が向かったのはとある地下水路。海と山に囲まれた冬木特有の地下施設、その奥にある広々とした空間に……奴等はいた。
キャスター、ジル＝ド＝レェとそのマスター。共に第四次聖杯戦争で無惨な殺戮を繰り返していた最悪の殺人鬼、奴等を見掛けた瞬間に俺は自身の力を解放し、奴の魚みたいな顔に思い切り拳を捩じ込ませ首から上を吹き飛ばしてやった。
キャスターを一撃で仕留め、戸惑っているマスターらしき男も股間を蹴りあげて再起不能にしてやると、捕まっていた子供達を解放して警察へと直行した。幸いなことに子供達は眠らされた状態で特に何か細工をされていた様子はない。地下水路にも目だった血痕が無かった事からどうやら惨劇が起こる前に助け出せた様だ。
警察へ無事に送り届け、泡を吹いて気絶している殺人鬼を簀巻きにして別の交番へ送り届けると、自分は今度は間桐邸へ向かった。

途中、なんか死にそうになっている男性を見つけ、彼がバーサーカーのマスターだと知った自分は彼に簡単な事情を説明し、彼に協力する事となった。

間桐の家に向かった自分はこの家の長男だという男性に簡単な訳を説明し、生活に必要なモノだけを持って家から出てもらう事になった。その後、家の奥にいた少女を救出すると間桐の家をクンッして破壊。家に住まう蟲諸とも叩き潰してやった。

その後、少女をバーサーカーのマスターに引き渡すと、彼に俺の気を分けてある程度にまで回復させ、長男の人の手も借りて彼女と共に街から離れた病院へ入院させる事になった。既に彼のサーヴァントは自分と戦い、消滅している。

残る聖杯戦争の参加者は五人。……いや、ランサーのマスターもエルメロイ先生の説得により自国へ帰ったと言っていたから、あと四人にまで減っている。

残るはランサーとアサシン、そしてライダーとセイバーだ。エルメロイ先生は切嗣さんを見た瞬間どういう事かと狼狽えていたのが気になったけど、その辺りは実際に聖杯戦争に参加した人にしか分からない事があるのだろう。取り敢えず細かいイレギュラーな事には彼に任せる事にしよう。

で、その切嗣さんだが……まぁ拗らせていますこと。自分のやる事なす事全てにケチを付けてダメ出ししてくるわ、無駄な事だと煽ってくるわ、正直何度その減らず口を物理的に黙らせてやろうかと思った事か。

そりゃあ、今自分達のいる特異点は修復したら全て無かった事にされる胡蝶の夢みたいな世界だよ？　元凶となるモノを解決し、原因となっている聖杯を回収したら全てが終わり消えていく。

この特異点で本来起こるべきだった過去を変えた所で、それが世界に対して影響が出ることは殆んどない。自分のやっている事は見るに耐えない自己満足に過ぎないと切嗣さんは吐き捨てた。

だから自分も吐き捨てた。それがどうしたと、ここで過去を変えたつもりでも未来を変える事には繋がらないし、過去に起きた出来事は

覆らない。そんなのは分かっているし、そもそもその為に自分達は人理修復を行っているのだ。
自分がやっているのはあくまで自分の気持ちに決着を付ける為、自己満足の為だ。あの時今の自分がいたらという、取るに足らない幻想を証明する為だ。
それを切嗣さんは馬鹿馬鹿しいと一蹴する。そう、馬鹿馬鹿しい話だ。彼の言っていることは間違ってないし、きっと正しいのだろう。
けれど、正しいだけの理屈なんて自分は求めていないし、何より未来に関係ない話だとしてもそれを今起きている惨劇を放置していい理由にはならない。そう自分が口にすると、切嗣さんは分かりやすい程に苛立ちを露にしていた。
そんな彼に今度は俺が訊ねた。どうして切嗣さんはサーヴァントになったのかと、何を求めて死んだ後も戦う道を選んだのかと。返ってきたのはやっぱり〝正義の味方〟だった。
なんというか、切嗣さんといい以前の士郎といい、どうして正義の味方を目指す奴って変な所で頑固なんだろう？　頑なになる所、絶対間違ってるだろ。
切嗣さんの言う正義の味方は間違っている。そもそも正義の味方は一人で活動するモノではないし、したとしても録な結果に繋がらない。切嗣さんは誰かを助けるというのは誰かを助けない事なんだと言うけれど、それはアンタ一人で活動しているからだと返しておいた。
なんで人を助けるのに個人でやる必要があるのかなぁ、救助隊の人達だって一人の人間を助けるのに複数人でやっているのに、どうして人命救助のプロでもない切嗣さんが一人で出来ると思ったのか、これが分からない。
誰かを助けたいのなら、先ずは自分が助けを求めるべきだ。この人を助けたいから手を貸してくれと、声を大にして叫ぶべきだった。
そりゃあ、切嗣さんが過去に何があったのかなんて自分には分からないよ？　どれだけ辛く、しんどい時があったのかなんて分からないけど、だからといって人を信じるのを止めたら本末転倒ではないかと

自分は思う。
人助けというのは、人を信じる所から始まる。誰かを助けたい癖に誰にも心を開いていない切嗣さんが正義の味方を目指しても、そりゃ無理があるというモノだ。
そこまで言うと、切嗣さんは酷く落ち込んでしまっていた。具体的に言えば体育座りをしていじけてしまっていた。いじける位なら最初から認めれば良かったのに、なんて言うとロマニから止めてやれと通信越しから止められてしまった。
なんか通信越しでエミヤの啜り泣く声と王様の笑い声が聞こえてきた気がしたけど……気の所為だろう。
そんなこんなで自分が立香ちゃん達と合流する為に大聖杯の所へ向かうと、なんかデカイ図体のライダーとエルメロイ先生、マシュちゃんが戦ってた。
何でも自分達というイレギュラーな存在が出てきた事で聖杯戦争の戦力バランスが崩壊し、それが面白くないので立香ちゃん達と敵対する道を選んだのだとか。
流石というかなんというか、これがあの美少年であるアレキサンダー君の成長した姿と言うから驚きだ。というか、骨格からして違くない？　なんであの少年が彼処までの巨漢になるんだよ。彼を見ていると人体の神秘を目の当たりにした気になる。
ともあれ、そんな二人の戦いに手を出すのもアレなので、協力関係となっているセイバー陣営の二人と主が戦線離脱する中一緒に戦う事を約束してくれたランサーと一緒に観戦する事にした。
そして結果は辛くもエルメロイ先生達の勝利となった。如何に征服王イスカンダルと言えど、サーヴァント二騎と立香ちゃん相手に単機では勝つことは難し勝ったようだ。
宝具も魔力が足りなかった様で使えなかったみたいだし、端からみれば勝敗を決めたのはライダーのマスター、即ち昔のエルメロイ先生にあると見えただろうし、実際にその通りなのかもしれない。
悔しそうに自分の力の無さを痛感する昔の先生、きっとこの挫折をバネに奮起し、時計塔でロード呼ばれる様になり多くの生徒達に慕わ

れるようになるのだろう。そう思えば自分は人の歴史の瞬間に立ち会えたという希少な体験をする事になったと言える。
その後は現れた蟲臓野郎硯と大聖杯から現れたユスティーツアを自分が速攻でぶちのめし聖杯を回収し、この特異点は修復される事になった。
……本当は大聖杯の中の奴も自分が相手してやりたかったのだが、それは切嗣さんに譲る事にした。本来彼は奴を相手にする為に喚ばれたサーヴァントみたいだし、流石に人の仕事まで奪うのは気が引ける。
必ず勝つ事を条件に特異点から帰還する事になった自分達は皆に別れを告げてこうして冬木市を後にすることとなった。
……現地の協力者、アイリスフィールさんを連れて。
え、こう言うのありなの？
あ、それと特異点での王様は自分が立香ちゃんと合流したのを見て早々に聖杯戦争から手を引いてくれたらしいのだ。その証拠にワザワザマスターとの契約を切り、魔力不足で消滅するまで現世を楽しむと言っていたから、きっと今頃何処かの高い展望台の上で高笑いをしているのだろう。
結果的に言えば今回の特異点は割りと満足な顛末と言えるだろう、個人的にもスッキリしたし。
大聖杯を破壊できなかったのは少し物足りなかったけど……まぁ、それは未来の自分に任せる事にしよう。

「ほう、お前があの英雄王の臣下か！　うむ、良い面構えをしておる！
しかもあのヘラクレスを倒したと言うではないか！　日本にはマスラオなる戦士がいると聞いたことがあるが、成る程、これなら納得というものだ！」
「お褒めの言葉どうも」
「しかし悔しいのぅ、我が臣下達も傑物足り得た豪の者達ばかりだが、ヘラクレスを倒したという伝説を築き上げた奴はいなかった。本当

に生まれた時代を間違えた男よのぉ」
「そんな褒めても、起き攻めの手は緩めねぇよ、ほれ」
「ぬぉ!?　余のスネークがピンクの悪魔にぃ!?」
「いい加減キャラ変えたら？　パターンが分かりやすくて動きが読めちゃってるんだけど」
「ぬぅ、ならぬ！　余のスネークが１０の勝利を飾るまで絶対に退かぬ！　媚びぬ！　顧みぬ！」
「おーい誰だぁ、征服王に北斗〇拳見せた奴」

その48

△月＊日

……なんか、不思議な夢を見た。夢を夢と自覚するのは明晰夢と言うが、夢と分かっていながら現実味のある夢をこの場合、果たして何と言うのだろうか。

――――目を覚ますと、自分はどことも知れない陥没した大地のど真ん中にいた。クレーターというにはまるで隕石でも落ちてきた様な広範囲のモノ、其処では見知った顔が何人かいて見知らぬ誰かが数人いた。

姉弟子である遠坂と仕事の好敵手であるルヴィアさん、頭髪の一部が白くなっている士郎とバゼットさん、そしてロリッ子イリヤ嬢と此処までは自分もよく知る人達だ。

問題はイリヤ嬢に良く似た黒ギャルと空に浮かぶデカくて黒い四角の立方体、そしてその下で何か儀式をしている怪しい男女数人、良くみれば遠坂は今みたいに髪を下ろしてないし、皆学生の頃のように若い。

故に自分は鍛えられた脳をフル回転させて答えを得た。ははーん、さては自分、夢をみているな、と。

自分の格好も寝間着から山吹色の胴着へ変わっているし、夢である事には変わりない。夢とはいえ折角の再会だから挨拶でもしておこうとしたら――――。

なんか、無数の刀剣が飛んできた。それらを叩き落とすと、なんか矢鱈と露出の高いパツキンのチャンネーが凄い殺気を込めて此方を睨んでいた。

「何者か」とか、「疾く失せよ」とか、その言動が英雄王こと王様の真似をしている処か、あまつさえその女は自ら英雄王の力を手にしている、みたいな事まで口に出していた、

いやーもうね、夢の中とは言えイラッとしたよ。王様に似た雰囲気

を醸し出しているからってあたかも自身を王様の成り代わりみたいな言い方をするその女性に久し振りにムカついた。
ならその力を見せてみろと自分も挑発を返して気を解放し接近、少し速く動いただけなのに自分が後ろに回っている事に反応するどころか気付きもしない女に加減の岩山両斬波（チョップ）を脳天に叩き込んで黙らせた。
全く、英雄王の力を持っていると言うからどれ程のモノかと警戒していたのに、とんだ肩透かしである。ホンの少しギアを上げただけで反応すら出来ないなんて……これがあのヘラクレス（大英雄）が相手だったらぬるい攻撃をしてきた自分に容赦なく手痛いカウンターを仕掛けてくるぞ。
ましてや、女が騙るのは英雄の中の英雄王。数多く存在する英雄達の頂点とも言えるあの人の真似事をするのだから、此方の初手の一撃くらい対処して見せろ！　という話である。
そして、気を失った女が早着替えでもしたのか、服を着ていた状態で倒れ付し、その傍らには一枚のカードが落ちていた。拾ってみるとなんか弓兵の絵柄が書かれている。
何ぞこれ？　首を傾げていると敵意と殺意ダダモレの気配が近付いてきて、なんだと思い見上げれば、なんかでっかいハンマーを持った女の子が叫びながら降ってきた。
士郎やイリヤ嬢の反応を見る限りなんか敵っぽいし、夢だし、何より女の子が凄い良い位置にいるもんだから自分はついあの技をやってしまった。
その名も廬山昇龍覇。個人的にはペガサス流星拳に並ぶ必殺技、今までかめはめ波や流星拳ばかり使ってたし、夢の中くらい気分を変えていこうと思いこの技を繰り出した所、まぁ良い感じに当たってくれた。
しかも女の子がハンマーを振り下ろした所にカウンターに当てたモノだから、女の子は一撃で気絶してしまった。うーん、寸止めしたとは言えやはり少々やり過ぎた感が否めない。
とは言え、相手が殺意を抱きながら挑んでくるなら、此方も相応の

対応をさせてもらっただけの事、文句は受け付けてないのでそのつもりで。
そして、その後は浮浪者みたいな外見の男がなんか喚いていたから殴って黙らせ、囚われのお姫様みたいな女の子を解放させた。その際にも金髪の幼女やなんか水着みたいな鎧を着た桜ちゃんが出てきたので、それぞれ紳士的に対応させて戴いた。主に臀部への掌打である。
桜ちゃんは以前みたいに正気を失っていた感じだったから少々強めに、幼女の方は軽く説教するだけに留めておいて後は男への折檻のみである。
というかこの男、幼女の保護者っぽい癖にまるでその責任能力を果たしてないのだ。聞けばこの幼女、ランドセルこそは背負っているのに学校とかには殆んど通っていないみたいなのだ。
魔術云々の前にまず人としてダメダメじゃないか、一人の幼女の将来も守れてない癖に、何が世界の平和だ。へそで茶が沸くわ戯けめ。
何て言ってると男の中から少年が出てきた。一瞬ファッ!? となる自分だが、既に此方は多くの修羅場を潜り抜けてきた猛者(自称)である。落ち着きを装いながら対応していると、少年は感情剥き出しにして捲し立ててくるので、取り敢えず一言だけ言っておいた。
〝いや、お前の不幸話なんて知らんから〟 的な。
そもそもこの世の中で自分だけが不幸な人生を歩んでると思い込んで悦に浸っているのが気に入らない。誰にだって多少の悲劇的な出来事はあるだろうし、いつ理不尽が降ってるかなんて分からないよ?
でもさ、だからと言って一人の女の子を犠牲にして世界を守るとか、正直良く分からんわー。なに? 小を切り捨てて大を救う的な?
アサシンな切嗣さんもそうだけど好きよねーそういうひねくれた解釈。
て言うか、その選択をした時点で自分でもう諦めたって認めているようなものじゃん。そんな諦めた人間に世界を救うとか言われても、説得力が欠如しまくってるわー。

まぁ？　なんか地球の地軸が傾いてるっぽいし、卑屈になるのも分かるし、此処まで好き放題した以上ある程度の事はやりますよ？　そもそも自分夢を見ているだけだし、その位やりますよ？

そんな訳で、項垂れるじゅ、じゅ……ジュリガン？君を余所に黒い立方体をかめはめ波で消去。美遊ちゃんと呼ばれる少女を士郎の所まで送り、ついでにカードも渡してその場から離脱、人気のない所まで行くとグランゾンを呼び出して大気圏の外へと向かう。

グランゾンの力で地軸を緩やかに戻し、取り敢えず地球が息を吹き返すのを確認すると、自分の夢は其処で終わった。

……冷静に考えると、普通に痛いよな。夢の中とは言え年下の少年に偉そうに説教とか。うん、本当に夢でよかったよ。

夢の中というには凄い臨場感と現実味があったけど……そういうこともあるよね！

こんな夢を見たのも切嗣さんみたいな正義バカと関わった影響かな？

「……英雄王。夜分遅く申し訳ないが、少しいいか？」

「なんだ。巌窟王、我は今先の特異点の映像をＢＤに移している最中なんだが？」

「お前の臣下、白河修司が奴に取り憑いている魔神によって普通に世界の壁を越えていったのだが……どういう事だ？」

「そのうち帰ってくるから心配するな。我の時もそうだったからな」

「えぇ……」

Δ月γ日

ここカルデアも大分賑わいを取り戻してきた。最初こそはレフの野郎の所為で施設の至る所が破壊され、多くの人材を失いかけたが、後になって立香ちゃんが召喚してくれたお陰で、今では結構な所帯となっている。

英雄王こと王様を筆頭に騎士王ことアーサー王、征服王ことイスカンダル大王、ローマの各皇帝など様々な国のトップがこのカルデアという一つの組織施設に集合していると考えると、色々凄いことに思える。

そんな彼等と対等に接している立香ちゃんは本当に胆の据わった女の子だと思う。時代が時代なら軽く話し掛けただけで不敬罪として打ち首だって有り得そうなのに、ごくごく普通の女子高生のノリで話し掛けてたっけ。

今日もシミュレーターで始祖ロムルスとハイタッチをしてカエサルさんの顔を青くさせてたし、マジで肝っ玉な娘だよホント。

最初はこのカルデアに殆んど拉致に近い形で呼ばれておいて、一方的に巻き込まれただけなのによくこれだけ真摯に受け止めてくれたモノだと感心してしまう。普通なら重い現実に塞ぎ込んで現実から逃げてしまってもおかしくないのに、事実を事実として受け止め、それでも前に進もうとする気概がある。

そんな彼女には魔術師としての才能は殆んどないとメディアさんは言っていた。魔術の才能もなく、人として直向きに努力を続けている彼女に自分もまた勇気付けられる。

多分、そんな彼女がいるから自分達も腐らずに頑張っていられるんだと思う。生き残ったスタッフ達も立香ちゃんに負けじと頑張ろう、みたいなことを聞いた事があるし、人理焼却という前代未聞の困難を前に絶望したりしていない。

三度の特異点を修復した事で、自分を含めたカルデアの全員が自信を抱いているのだと思う。そんな特異点修復も次で四つ目、遂に折り返しまで辿り着くことが出来た。

次の特異点の場所は――――ロンドン。イギリスの首都ロンドンだ。

個人的に色んな意味で因縁のある土地、きっと其処でも困難の連続が待ち構えているのだろう。

上等だ。此方も既に士気も意気込みも充分に高まっている。何が待ってようと此方には迎撃の用意がある。

待ってろよ黒幕、お前の顔を拝めるのもそう遠い話じゃない。今の内に首を洗って待っておけ。

◇

「――――フン。カルデアめ、漸く第四の特異点まで来たか」
「此処までは順調、奴等にとって快進撃の様だが……無様なモノだ」
「お前達に未来はない。お前達に希望はない。人類に、迎えるべき明日は存在しない」
「その事を、改めて証明してやるとしよう」
「――――この、魔術王自らな」
遥かなる時間神殿にて魔術の王は嘲笑する。

その４９　第四特異点

――――人理継続保障機関カルデア。人の世界を継続させる為に作り上げられた国連所属の魔術組織、その広大な敷地内の通路を山吹色の胴着を着た男がゆったりとした挙動で歩いていく。
先の第三特異点での激闘を経て、益々その実力に磨きが掛かった男――――修司はいつもと変わらぬ素振りで通路を歩んでいく。
途中ですれ違ったサーヴァント達と適当に挨拶を返し、激励を受けながら辿り着いた場所に待っていたのは白衣の男、このカルデアの代理所長と医療関係を統括する人物だ。
Ｄｒ．ロマニ＝アーキマン。通称ロマンと呼ばれスタッフ達から信頼されている気弱ながら指揮官を勤めている彼と、万能の天才であるダ・ヴィンチ……そして、立香とマシュが待っていた。
「おはよう修司君、予定時間のピッタリ五分前だ。朝御飯はしっかり食べてきたかい？」
「あぁ、朝飯旨かったからついついお代わりしちまった。エミヤの奴、ここ最近また料理の腕を上げてるっぽいんだよなぁ。下手したら俺より上手いかも」
「分かります。エミヤの料理って滅茶苦茶上手いんですよね。だから最近お腹回りの脂肪が気になって……」
「立香ちゃん位の歳の子は、少し位ぽっちゃりしてた方が健康的で良いらしいよ？　少なくとも病的に痩せ細っている人よりは魅力的だと思うけどな」
「ドクター、その発言は一種のセクハラだと思います」
「ちょ、違うよマシュ！　僕はあくまで医療従事者としての視点から言ってるだけであって……立香ちゃんもそんな目で僕を見ないで！」
お腹を擦る立香に自分なりのフォローするロマニをマシュが痛烈に両断していく、特異点修復という偉業を前にもう彼等の中に緊迫し

た緊張感はない。
程よく脱力し、程よく気を引き締めている。緊張感とリラックスした――所謂ベストとも言える空気がそこにはあった。
「はいはい、愉快な歓談も一先ず其処までにしておこう、今日は新たに観測された第四の特異点だ。全ての特異点の修復も今回で折り返し、油断なく行こうじゃないか」
「だな。でもその前にロマニ、前の特異点でも現れた魔神柱の件について何か進展があったりしたか？」
ダ・ヴィンチによって話が進められ、修司から振られた話にロマニは咳払いをして場の空気を変える。
「ンン、そうだね。先ずは前回に得られた情報の解析結果からいこうか」
「七十二柱の魔神……そう呼ばれる召喚術を使ったという、ソロモン王の時代の観測、ですね？」
「そうだ。結論から言うと、ソロモン王の時代に異変はなかった。紀元前１０世紀頃に特異点は発生していない。これがどういう事かというと……」
「まことに遺憾だけど、ロマニの言う通り、七十二柱の魔神を名乗るモノ達とソロモン王は無関係という事さ」
修司達がそれぞれ体力の回復や日々の修練や勉学に励んでいる一方、カルデアのスタッフ達は魔神柱なる存在について可能な限り調べあげてくれていた。
そんな彼等の調べによる結果はソロモン王は〝シロ〟だという事、つまり調査は振り出しに戻ったという事になる。漸く掴めたとされてきた黒幕の正体、それが不発に終わったという事実に修司達は肩を落とす――
「なんだぁ、振り出しに戻っちゃったのかぁ」
「そうですね。確かに残念に思いますが、ソロモン王は無関係という情報が得られただけでも良しとするべきではないでしょうか？」
「マシュちゃんの言う通りだな。些か肩透かしをした気分だが、前進出来た事に変わりはない。そう気に病む必要はないさ」

「ですね。そもそも私魔神柱がどうとか言われてもピンと来ないし」
――なんて事はなく、多少の気落ちはしてもソロモン王は無関係という情報を三人はそれぞれ前向きに受け取った。
そんな彼等をロマニとダ・ヴィンチは頼もしく思えた。三度の特異点の修復、場数も踏んでいよいよマスターらしくなってきた藤丸立香とそのパートナーであるマシュ、最初はどうなることかと心配していた二人が何だか少し大きくなったように見える。
「ともあれ、ソロモン王には魔神柱を未来に向けて召喚したという痕跡が無いことから、彼が今回の事件の黒幕である可能性は限りなくゼロに等しいだろう」
「だから、レフ＝ライノールや魔神を名乗る連中は全く違う〝何処かの時代〟から現れている。なのでソロモン王と彼等は無関係だ。まぁ、もっとも――――」
「ソロモン王がサーヴァントとして誰かに使役されていた場合は別、ですね？」
「うーん、それはそれでどうなんだろ。サーヴァントの召喚は基本的に双方の合意で行われるモノだ。ソロモン王が人理焼却なんて悪事を働く輩に手を貸すとは思えないんだけど……」
「あぁ、それはそうか。私も同意したからカルデアに来たのだし」
「あぁ、なんか前にも似たような話を聞いたな」
「当時の所長が優秀な魔術師だからね。彼なら信用できると契約したんだ。前にも言っただろ？　私はカルデアにおける、記念すべき召喚成功例第三号だって」
七十二の魔神とソロモン王の関係性から話は意外な方向へシフトする。ダ・ヴィンチが口にする前任のカルデア所長、オルガマリー所長ではない。万能の天才が口にしているのは彼女の更に前任者、修司が訪れる頃よりも前に亡くなったとされるマリスビリー＝アニムスフィアの事だ。
「ダ・ヴィンチちゃんが三人目なんだ。後の二人は？」
「二号は君の目の前にいるマシュちゃんで、第一号は……現段階では不明だね。第一号と第二号は機密事項として扱われている。詳細

は先代所長しか知らなかった筈だよ」
「先輩。私を助けてくれた英霊が第二号さんです。その真名も能力も、私には分かりませんが」
「盾を使う英霊なんだから結構絞られてくると思うんだけどな」
「フォウ……」
「第一号に関してはマリー所長も知らなかったな。先代所長は第一号のデータをひた隠しにしていた。……今にして思うと、先代所長の死は事故ではなく殺人だったんだろう。第一号という成功例――いや、英霊召喚システムを良く思わなかったレフが、殺めた可能性が高い」
　確かに、ロマニの言う通り人理焼却を狙うレフが人理継続を願う先代所長と衝突するのは考えられる中で自然な流れになるだろう。だが、それとは関係なしに第一号の秘匿を徹底する理由が今一つ理解できない。
　ダ・ヴィンチが言うにはカルデアの英霊召喚システムが完成したのはダ・ヴィンチちゃんが喚ばれた頃だという。マシュのデミ・サーヴァント化も不安定なモノだと言っていたし、そもそも第一号の存在自体が怪しいのではないかとダ・ヴィンチは言う。
　――何故だろう。万能の天才の語る言葉に修司は何となく違和感を覚えた。ダ・ヴィンチは何かを隠している？

（いや、隠しているというより……庇っている？）
　言葉の節々から感じ取れる違和感、その正体と理由について考えようとした時、ロマニは手を叩き場の空気を正していく。
「さて、そろそろミーティングは其処までにしてレイシフトの準備を始めよう」
「っと、そうだな。色んな可能性が出てきて視野と選択肢を広げるのはいいが、無用な憶測は却って此方の動きを鈍くさせる。どのみち残りの四つの特異点に黒幕は潜んでいるんだ。警戒を緩めず、目の前の出来ることを一つずつこなしていこう」
「うん、そうだね。今アレコレ悩んでも仕方ないもんね！　よーし、今

回も元気に頑張るゾイ！」
「が、頑張りマシュ！」
「では、今回のオーダーの詳細を改めて説明しよう。第四の特異点は十九世紀――――即ち文明と発展の隆盛。この時代に人類史は大きな飛躍を遂げることになる。つまり、産業革命だ！　まさしく決定的な人類史のターニングポイントだ。消費文明の観点から鑑みても、人類史はまさしくこの時期に現代への足掛かりを得た」
　逆に言えば、この時代を失くせば現代への多大な影響は防ぎようがない事を意味している。そんなこれ迄の特異点の中でも尤も近い時代での転移先は――――。
「絢爛にして華やかなる大英帝国。しかも珍しい事に今回は首都ロンドンに特定されている。広範に渡っていたこれ迄とは、些か異なるね」
　イギリスの首都ロンドン。これまで国単位の移動距離を必要としていたのにここへ来ての狭い範囲での探索。楽な仕事……とは思わない、特定された地点が一つの首都を指しているという事は、そこには多くの危険がひしめき合っている事を意味している。
　油断はしない。これ迄の特異点での旅路で規格外な相手と戦ってきた彼等がそんな事で慢心することは有り得ない。
　それに、一つの都市で戦闘をするという事は選べる戦闘手段が狭められるという事。
「ロンドンかぁ、俺あまりいい思い出が無いんだよなぁ。……なぁロマニ、初っぱなからかめはめ波をブッ放すのは――――」
「ダメに決まってるでしょ!?」
　霧の都ロンドン。ブリテンにもローマにも深く関わりのあるとされる神秘の都市にして時計塔と多くの魔術師が滞在する魔の都、それを良い思い出がないという理由で速攻で更地にしようとする修司にロマニは声を上げてダメだと告げた。
　無論、修司本人も本気でやるつもりは微塵もない。ただ、ロンドンに訪れる度に関わりたくない魔術師が近付いてきて、何かあればすぐに嫌みや妬み、僻み、挙げ句の果てには謂れのない嫌がらせを受けて

きた修司としては、時計塔は正直言って存在する意味すらないのでは？　なんて感じている。
キリシュタリアや時計塔に属しているＡチームの皆を悪く言うつもりはないが、某二世のロード曰く、時計塔では現在魔術の探求より日々利権やら権力争いに忙しいらしく、他所の派閥の粗捜しばかりで魔術の探求は其処までではないらしい。
そんな腐ったミカンのバーゲンセールみたいな魔窟、この現代社会に存在している意味って……果たしてあるのだろうか。
個人的にはそんな使い道のない肥溜めみたいな所と関わりたくないが、自分の何が気に入らないのか、謂れのない嫌がらせに前の世界では結構苛立つ事が多かった。
だからつい時計塔の上にいる連中を全員ブチのめしてしまおうか、なんて物騒な事を考えるのも……一度や二度では済まなかった。
今回は、そんなロンドンへレイシフトをする。前の特異点とは違う意味で疲弊しそうな展開になるのではないかと、修司は密かに肩を落とした。
「と、兎に角いきなり大規模攻撃をするのはホントに止めてね！　振りじゃないからね！」
「分かってるって、流石に俺も他所の国の土地を理由もなく問答無用で更地にする様な真似はしないさ、実行に移すときは後の事も考えるようにしろって言われてるし」
逆を言えば、更地にする理由とアフターケアが万全であれば容赦なく行動を実行に移す事を意味しているのだとダ・ヴィンチは何となく察した。
更に言えば修司はロンドンの街を消す際に敵対している魔術師を除く全ての人々を外に逃がす手段とその後の復興に関する手筈も既に整え終えているのだが、異なる世界線の住人である立香達がそれを知る事はない。
「さて、それじゃあ始めるとしよう。ダ・ヴィンチ、レイシフトの準備を」
「はいはーい。それじゃあ三人とも、今回も頑張ってね」

「よーし、今回も頑張りますか！」
「フォウさんは……あ、今回も一緒に来るんですね」
「フォウ！」
　情報の整理も終え、次はいよいよ特異点の修復作業に取り掛かる。足元から現れるレイシフト用のコフィンへそれぞれ乗り込んでいく立香とマシュ、そして小動物フォウを見送り、修司もまたコフィンに乗り込もうと足を進める。
「――――修司君」
「うん？」
「……気を付けてね」
　ふと、背後からロマニの彼なりの激励が飛んでくる。カルデアに着任して早数ヶ月、漸く自分達もチームとして成り立った来たと実感できた事を内心で喜んだ。
「あぁ、任せとけ」
　不安な気持ちで見送るロマニを勇気づける様に修司は笑いながらコフィンへ乗り込んでいく。
　やがて、レイシフトのカウントダウンが始まり三人と一匹はカルデアから十九世紀頃のロンドンへ跳ばされる。それを見送るロマニは〝無理をするな〟なんて言える訳がなく、彼に出来るのは修司達の無事の帰還を祈るだけだった。
「よし、今回の特異点でのお助けアイテムは貴様に決まった訳だな。精々励めよ征服王の従者」
「いや待たれよ英雄王、レイシフト先がイギリスの首都ロンドンという理由で私を選出するのは些か短絡的ではないかな？　ここはやはり守りの担い手であり姉貴分でもある聖女殿に任せるべきでは？」
「お二人とも、人理を守る大事な作戦を前に戯れるとは何事ですか。罰として有事の際はお二人が向かいなさい。私？　勿論マスターの危機とあれば即参上する所存ですよ？　嘘ではありませんよ。ええ、決して……」
「……なぁ、あの三人は一体何を言ってるんだ？」
「気にするな、ただの面倒事の擦り付け合いだ」

色々台無しである。

その５０　第四特異点

――――十九世紀ロンドン。当時、産業革命の只中にあった都市は排煙と霧に覆われ、昼間も視界が塞がれた煙たい街となっていた。
霧の都ロンドン。人理修復の為に訪れた修司達、彼等の前にもやはり霧に覆われた世界が立ち塞がっていた。
「ロンドンに到着しました。ですが、これは……」
「うっわー、すごい霧。向こうが見えないや、皆から離れると迷っちゃいそう」
「先輩、どうか私から離れないで下さいね。この霧……いえ、煙でしょうか？　兎も角凄い濃度です　空に浮かぶ光の輪は確認できていますが、それさえこの霧もしくは排煙のせいではっきりとは――――」
『空を埋め尽くす程の霧、煙。それ自体は産業革命の頃には珍しくないけど……いや待ってくれ、どうやらただの霧や煙じゃないようだ。こちらでは異常な魔力反応として検出されている。凄い濃度だ！　いや、ちょ、これ！　濃すぎない!?』
レイシフト開始から早々にロマニから酷く慌てた通信が入ってくる。どうやらこの霧やら煙にはかなりの濃度の高い魔力が込められている様だ。
『まるで大気に魔力が充満しているようだ。大気の組成そのものに魔力が結び付いたクラスだよ！　生体に対して有害な程の密度だよこれ……三人とも、体の調子は大丈夫かい？』
密度の濃い魔力は時に人体に悪影響を与える。現地に赴き、モロに影響を受けるだろう三人の安否を気遣うロマニは焦りの感情を圧し殺して冷静さを保ったまま三人に体の様子について訊ねた。
「私は問題ありません。デミ・サーヴァントであるからでしょうか」
「私もー、特に息ができないとか、お腹が痛くなったりしてないよー？」

「俺も、鼻がムズムズする事以外にこれといった自覚症状は出てないな。イッキシ！」
「フォーウ」
　心配するロマニを他所にマシュ、立香、修司は特にこれといった悪影響は受けていない様だった。修司のくしゃみも魔力云々に影響されている訳ではなく、単に煙が鼻についてつい出しただけ、そんな平然としている彼等にロマニは安堵し、また疑問に思った。
『おかしい。マシュが平気なのはデミ・サーヴァントのだからという事で納得できるけど、どうして立香ちゃんまで平気なんだ？　この霧は有害、通常の人間が吸い込めば命に関わる猛毒だぞ』
「え？　でも私、本当に何ともないよ？　修司さん見たいにくしゃみも出たりしないし……」
「マジかよ立香ちゃん、花粉対策万全じゃないか」
『いやそういう次元の話じゃないからね？　普通におかしい事例だからね？　でも、うーん……もしかしたら、マシュと融合した英霊の恩恵なのかもしれないな。彼女と融合したサーヴァントには強い毒耐性とか強い祝福のスキルがあって、その加護がマスターにも与えられているのかもだ』
　マシュとサーヴァントの契約をした事で得られたと思われる恩恵、どうして藤丸立香は有毒な霧の中にいても平気でいられるのか、不思議でならないロマニだが一先ずそれは後回し、立香に備わっている新たなスキルを毒耐性スキル（仮）と呼称し、いよいよ聖杯探索の第一歩を踏み出す。
『兎も角、だ。霧の都ロンドンは魔力の霧に包まれた危険な死の都市と化している。周囲の様子はどうだい。犠牲者は、見掛けられるかい？』
「いいえ、ドクター。往来はまったくの無人です。現在時刻は午後二時。ですが、馬車はおろか歩行者さえありません」
　ロマニの言葉に従い見える範囲で辺りを見渡すが、マシュの言う通り周囲には人一人も見当たらず、ロンドンの街は静寂を保っていた。
　やはりこの霧が影響しているのか、お昼を過ぎたばかりだと言うの

に人気のない街並みに立香達は言葉にできない不気味さを感じた。
「んじゃ、この霧消しちまうか」
「あ、やっぱりできちゃうんですね」
そんな彼女達の不安を払拭する様に修司が前に立つ。腰を落とし、右手を開いて力を貯めた修司は次の瞬間。
「ハッ！」
眼前に広がる霧と煙を掌打の一撃を以て吹き飛ばしていく。一度のアクションで暴風を引き起こし、蔓延する魔力の霧を吹き飛ばす様は色んな意味で爽快だった。
ロンドンの街が揺れる。風に建物の窓が揺れ、通りに吹き抜ける風の音が奏でていく。すると、今まで霧に覆われていた往来は途端に開かれ、空の雲の切れ端から暖かい日の光が差し込んでくる。
「ふわー、なんか素敵な光景！」
「凄いです。霧の晴れたロンドンの街がこんなにも美しかったとは……」
「フォーウ！」（なんと言う脳筋）
霧で覆われた街並みが明るみになり、露になった事に立香達は感慨深い気持ちを抱いた。
「喜んでくれている所悪いけど、多分これは一時的なものだ。時間を掛ければすぐにまた元の霧に覆われるし、根本的な解決にはならないと思うぞ」
『……いや、それでも充分だ。お陰で此方の周囲の感知が格段に楽になった。て言うか修司君、サラリと都市の環境を変えたね』
「え？　なんか不味かった？　視界が防がれてると奇襲とか遭った時面倒だし、街に影響でないように加減したりして俺なりに気を遣ったつもりなんだけど……？」
『だからこそ、なんだよなぁ……どうしよ、最近こういうのに慣れてきている自分が時折酷く怖くなるんだけど……』
通信の向こうでロマニが頭を抱えている。確かに修司の言う通り視界の阻まれたこの霧の街では奇襲に遭遇した時対処するのが遅れるかもしれない、その原因となるのがこの霧と煙であるのなら、吹き

飛ばすのが一番手っ取り早いだろう。
　修司の目論みは間違っていない、間違っていないのだが……出来るかどうかはまた別の問題だ。都市の一部を覆っていた霧を吹き飛ばし、街の環境を一変させてしまった。唯の、なんの魔術も施されていない腕の一振りで。
　明らかに修司の膂力が前より数段上がっている。前回の特異点での死闘を経て、強くなった修司にロマニは色んな意味で頭を抱えたくなった。
「ロマニ、こういうのは多分気にしたら負けだと思うよー？」
「そうですよドクター、私はもう諦めました」
『あ、うん。なんかごめん』
「？」
　修司のやる事為す事に対して既に達観の域にまでいる二人、そんな彼女達を申し訳なく思いつつ、ロマニはスタッフ達と共に周辺への索敵をするのだった。

◇

「……霧、濃くなってきましたね」
　修司の掌打によってロンドンを覆っていた霧と排煙を吹き飛ばし、視界が開けたのも束の間、三人は再び霧の中へと包まれていた。
　その間の道中はお陰で予期せぬ奇襲に遇うことはなく、襲ってくる敵を順調に対処できており、その甲斐あって現段階において三人全員が無傷でいられている。
「どうする？　今度はもう少し強めにやっておくか？」
『いや、それは今は止めておこう。建物に立て籠っている人達がいる

以上、無闇に力を奮うのは危険だ』
鬱陶しく思いながら視界を覆ってくる霧をもう一度吹き飛ばそうか提案する修司だが、ロマニはそれをストップさせる。確かに修司の極めて脳筋なやり方のお陰で最初の探索にしては上手くいったが、それはロンドンの街に人がいないことを前提としてのモノだった。
今、ロマニを初めとしたカルデアスタッフ達の解析により厄介な状況であることが判明している。霧と煙に覆われたロンドン、人気もなく無人化された街かと思われたソレは実は多くの人々が街に避難してるという事実。
何故人々がロンドンから逃げられずに街にいるのか、殺人的に濃い魔力の霧や排煙だけではない、明確な殺意を持った殺戮の敵が街の至る所に跋扈しているからだ。
自動人形（オートマタ）、ホムンクルス、そして詳細不明な謎のロボット。これまでのキメラや竜種とは違う人工的に生み出された敵、その力はサーヴァント程でないにしろ一般市民に脅威的である事には変わりなく、奴等の所為で人々は建物の中へ引きこもっている事は容易に想像できた。
魔力の濃い霧と煙、そして自動人形を初めとした敵性エネミーの所為で街の人々は外に出てこられないでいるのだ。
そんな彼等がいる街で好き勝手に暴れる訳にはいかない、少なくともかめはめ波等の放出系統の技の使用は控えるべきだろう。
「でも、本当に凄いねこのロボット。どうやったらこんな大きいのが動かせられるんだろ」
「――――俺の所の会社も一応似たようなロボットは作られているが、ここまで重厚さはなかったな」
「それは、修司さんが勤めている宇宙開発部門の話……ですか？」
襲ってきたエネミーを見下ろしながら呟いた一言がマシュの耳に届いたらしい、見れば立香の方も興味津々と言った様子だ。
「まぁね。宇宙の環境は人間にとって未知の世界であると同時に危険な所でもあるからね。一応俺達人間でも真空空間で活動できる宇宙服を作ったりしているけど、それでも出来ることに限りがあるから

ね。そんな人間達を支援するためのロボット、そんなコンセプトで作ったりしているよ」
　尤も、作っているのはロボットでも巨大ロボットなんだけどね。しかもMでSな人型ロボット、勿論タチ○コマ的な支援ロボットも手掛けているし、何なら宇宙を往く為の艦船も絶賛造船中である。
（本当なら今頃、外宇宙航行艦が完成している頃なんだよなぁ）
　本来なら今頃、完成した船を稼働させて火星辺りに飛んでいた筈なのにその予定が大きく狂ってしまった。修司の脳裏に浮かぶ元の世界でのやり残し、そんな自分のやるべき事を根っこから燃やしてくれた黒幕はやはり許せないと、修司は一層怒りを募らせる。
　と、そんな時だ。倒れて動けなくなったロボットを眺めている立香の後ろに何者かの影が迫っていて、その両手には鋭い刃の短剣が握られている。
　自分やマシュにではなく、真っ直ぐに立香を狙って直進する影に……マシュが立ち塞がった。
　盾と剣が衝突し、辺りに甲高い音が響き渡る。衝撃は周囲の空気を震わせ、近くにあった建物の窓を揺らしていく。
「ご無事ですかマスター！」
「大丈夫！　ありがとうマシュ！」
　自分の命に刃が向けられた。その事にゾッと恐怖を覚える立香だが、今はソレ以上の衝撃に襲われている。
　――子供だ。自分の命を狙ったものの正体、その姿に藤丸立香は目を大きく見開いた。自分よりもずっと小さく、ずっと華奢な女の子。そんな幼い少女が妖しく煌めく刃を手にして楽しそうに笑っている。
「あはは、防がれちゃった。防がれちゃったね。凄いねお姉さん。この霧の中で、わたしたちの霧の中で平気でいられるなんて……もしかしてサーヴァント？」
「――あなたはサーヴァントなのですね。この時代の人間、であるのが本来は正しいはずですが。――ジャックザ・リッパー。十九世紀末のロンドン市街で数多くの女性を殺害した事のみならず、全ての

被害者を解体しロンドン警視庁に挑戦を叩き付けた伝説の殺人鬼。当時の英国、いいえ、欧州全土を席巻した恐怖の象徴」
（……もしかしてマシュちゃん、ミステリー小説とか好きだったりするのかな？）
　目の前の幼い少女があの伝説の殺人鬼であるジャック・ザリッパーなのも驚きだが、いつもより饒舌且つテンション高めに語るマシュに修司は驚いた。
　そんなマシュに今度某探偵漫画を二つ程紹介してみよう。そう思いながら二人の前に立つ修司は殺意を漲らせる幼きジャック（殺人鬼）の前に立ち塞がった。
「？　なぁに？　お兄さん。私たちに何か用？」
「あぁ、ちょっと君に幾つか聞きたい事があってね。さっき君はわたしたちの霧って言っていたけど、それがどういう意味なのか聞きたくてね。もしかしてこの霧は君の宝具によるものなのかな？」
「うーん。教えてもいいのかなぁ？　いいよね。うん、そうだよ。この霧は私たちが作り出した霧なの、でも少し前に剥がされちゃって、ついさっき張り直したの。……ねぇ、もしかしてさっき吹いたすごい風、あれってお兄さんがやったの？」
「そうだと言ったら？」
「アハハ！　そんなの勿論――――殺すね」
　瞬間、殺人鬼は修司の背後に回っていた。霧の中に紛れての強襲、ほんの僅かな瞬きの間に見せる俊敏性にマシュと立香は目を見開いた。
　ダメだ。逃げろ。そう叫ぶ立香達が行動するよりも速く、殺人鬼の凶刃は修司の首筋へと放たれ――――る事はなかった。
「え？」
　まるでない手応え。振り抜いた刃は空を切り、ジャックの視界に映るのは何処までも続く霧の中。修司は何処へ消えたのか、困惑する少女が辺りを見渡した時。
「人に刃を向ける悪い子には――――お仕置きが必要だな」
「っ!?」

「これで、頭を冷やすといい」
瞬間、振り抜いた修司の掌がジャックの臀部に直撃、弾けるような音と共に上げる悲鳴がロンドンの街に響き渡った。

「え？　なに今の音と悲鳴、こわ」
突然聞こえた悲鳴と音に赤雷の騎士はビクリと肩を震わせた。

その51　第四特異点

「――――逃げたか」
視界を覆う霧の中、確かな手応えを感じた修司は霧の向こうへ吹っ飛んだ襲撃者を睨む。
有無を言わさず襲ってきた襲撃者、ロンドンの殺人鬼ことジャックザ・リッパーは修司の一撃を受けてどうやら撤退を選んだようだ。消えてなくなった気配、恐らくは霊体化とやらで離脱したらしい事に修司は周囲への感知を張り巡らせながら残心を解く。
振り抜いた手の感触から多少のダメージは与えた筈、当分の間は襲ってこない事を確信した修司は改めて立香達へ向き直る。
「よし、どうやら追い払えた様だ。二人とも怪我は……て、どうしたのそんな苦虫を噛み潰した顔をして」
「いやぁ、その……何て言いましょうか。助けて貰ってばかりいる私が言うのもなんですが」
「ちょっと……事案かなぁ、って思っちゃって」
『うん、本当に僕達が言える事じゃないんだけど、端から見た今の修司君、結構ヤバかったよ?』
「いや、だって仕方ないじゃん。咄嗟の事だし、相手一応女の子だし、なんかちっこいし、いきなり顔にグーパンするのもアレだし」
ロンドンの殺人鬼、ジャックザ・リッパーはその見た目こそ幼い少女だが、その本質は紛れもなく殺人鬼のソレである。立香とマシュ、並びにロマニの言動こそがこの場に限って言えば異端である。
ただ、そんな見た目な幼女であるジャックに尻叩きを叩き込むのもまた異端である事に変わりはないのだが。
『と、兎も角今はその話は止めよう。それよりも八時の方向から魔力反応がある。サーヴァントだよ』
言われて振り向けば、其処には重厚な鎧を身に纏う一人の騎士がいた。荒々しくも何処か洗練さのある騎士、そんな彼女はその外見から

は凡そ似合わない言葉を口にする。
「あ、あー。ごほん、今先ほど此処から少女の悲鳴……というより、断末魔みたいな叫び声が聞こえてきたのだが、君達、何か心当たりあるかね？」
　本来なら男勝りな口調の筈なのにどうしてか丁寧な言葉遣いの女騎士。恐らくは慣れていないのだろう、それでも相手を刺激しないように言葉を選ぶその様子は何処か職務質問をしてくる警官の様であった。
　立香とマシュ、ついでにロマニの視線が修司に向けられる。そんな彼女達の視線に習って女騎士も目を向けると……。
「またテメェかぁ!!　いい加減にしやがれこのクソボッチ!!」
「いきなりなんだこの野郎!!」
　いきなり鬼気迫る勢いで罵詈雑言浴びせてくる女騎士に修司もまた狼狽えながら言い返した。

◇

「成る程、カルデア。君達はそこからこの怪奇現象を何とかするためにやって来たと、そういう事でいいのかな？」
「はい。概ねその認識で合っているかと。そして……拠点の提供有り難うございます。ジキルさん」
「モーさんもありがとう、助かったよ！」
「礼はいい――――て、ちょっとまて、モーさんて俺の事？　何で出会って一時間足らずに愉快な渾名付けられてんの俺？」
「えー、ダメ？　可愛いし呼びやすいんだけど……」

「ダメっていうか……はぁ、もう何でも好きに呼べや」
女騎士といきなりな応酬を繰り広げたあと、ややあって彼女の協力者とされる人物の自室まで案内された一向は、そこにカルデアとの繋がり――――即ちターミナルポイントを確立し、部屋の主であるヘンリー＝ジキルと情報の擦り合わせを行っていた。
「それで、さっきの物凄い突風を起こしたのが其処のシュウジ氏という訳か」
「修司でいいよ。それに、悪かったな変に希望を持たせてしまったみたいで」
「なに、そこまで気にする必要はないさ。久し振りの空が見えただけでも満足しているし、何よりあの霧が晴れるという事実を知っただけでも儲けものさ。このロンドンが霧に包まれて三日経つ、君の行いはぬか喜び以上の意味合いを持っている」
「本当なら根刮ぎから霧を吹っ飛ばしてもいいが、それだとこの街も唯じゃ済まないからな。次はもっと長期間晴れるように工夫してみるよ」
「う、うん。そうか」

この特異点に来て、そうそうに修司が行った振る舞いは既に多方面に影響を与えていたようだ。三日前に突然発生した謎の霧、魔力を含んだその霧は多くの人々の命を脅かし、今も辛い外界との接触を断たれた隔離生活を強いられている。
ロンドンの街を覆う魔力の霧、その濃い魔力濃度により人体に悪影響をもたらし、その濃度がより濃い所では一時間も掛からずに人を死に至らしめるという。
その霧が一時的に晴れた。それが自然的に起こったモノではなく、人為的のモノであると知った時は驚いたが、それでもヘンリーは多少気が晴れたと喜んだ。
しかし、そんな晴れ渡ったロンドンの空を見ても人々は建物から出てこないし、その理由も修司達は知っている。人を見るなり襲ってくる自動人形やホムンクルス、そして不明の怪機械（ヘルタースケルター）。

奴等の存在を知るロンドン市民達は一度は街からの脱出を試みたが、結局は踏みとどまってしまい、結果的にはそれで生存に繋がっている。
やはり霧を吹き飛ばすだけで問題を解決するには至らない。早急な原因の究明と解決を求められる事になった一行は休憩もそこそこに探索を続けようとした。
「さて、これからどうする？　街に出て探索を続けるのは構わないがこの霧だ。要所要所で吹き飛ばしはするけど、それでも何の宛もなく出歩くのは得策ではないと思うけど？」
「あぁ、それなら一つ君達に頼みたいことがあるんだ――――――」

◇

「で、ヘンリーさんの友達のヴィクターさんって所に向かうことになった訳なんだけど……もーエルメロイさん、そんな嫌そうな顔をしないで下さいよ」
特異点の元凶となる聖杯を見つけ出すため、一先ずヘンリー＝ジキルのお使いを頼まれる事になった一行、道中襲いかかる敵を駆逐しながら突き進む彼等の傍らで立香は肩を落とすロード・エルメロイⅡ世に声を掛ける。
「くそ、英雄王め、たかだかじゃんけんに千里眼を使うなんて汚いぞ。彼女も彼女だ！　手を出す瞬間に手の形を変えるなんて器用な真似をしおってからに、お前達の問題児だろうが！　あぁ、何故私がこんな目に……」
ヘンリーの所でカルデアとの繋がりを強固にした一行はその繋がりの力を以てカルデアにいるサーヴァント達に呼び掛けを行った。土地勘に明るく、支援に秀でたサポート重視のサーヴァントを。

結果、選ばれたのは現代のロンドンの時計塔に在籍するロードの称号を持つエルメロイⅡ世、そんな彼が召喚される迄の間、とある英雄王と聖女による熾烈な戦いがあった事を彼等は知らない。
『Ｍｒ．エルメロイはロンドンに住んでいるからね。土地勘はあるだろうし、何より彼に力を貸している英霊の力は凄まじい。この見通しの悪い霧の中で彼の宝具は立香ちゃん達を守ってくれるよ』
「はい。かの諸葛亮孔明の宝具は持ち歩きの出来る工房だと、既にエルメロイ先生から聞き及んでおります。私も盾を持つ身としてとても頼りにしています」
「Ｍｓ．マシュ、何度も言うがⅡ世を付けるのを忘れないでくれ、それにあくまで私の宝具は借り物だ。故に絶対では無いことを肝に命じておいてくれ」
眼鏡をかけ直し、致し方ないと割り切る事にしたロード・エルメロイⅡ世は溜め息を吐きながら意識を切り替える。
そんな彼を尻目に立香は先導する女騎士――モードレッドに質問する。
「あ、そうだ。モーさんに聞きたいことがあったんだ」
「あ？　俺？」
「うん、モーさんってさ、修司さんと知り合いなの？　ほら、初対面の時さ」
「……あー、俺ってばそんな事言ったっけ？」
「あ、はい。一応私も記憶しています」
マシュと立香が思い返すのは最初にモードレッドと遭遇した時の事、あの時確かにモードレッドは修司を指差して言った。またか、と。
モードレッドと修司は以前にも顔を合わせている？　立香は単純に好奇心で、静かに見守るロマニは敢えて口を挟まずにモードレッドの反応を待っている。
そんな彼等に返ってきた言葉は……。
「――さぁな。もしかしたら、円卓の誰かと勘違いしたのかもしれないな」
「え、円卓の中に修司さんの様な方が？」

「マジで？　大丈夫なのブリテンの円卓は」
「立香ちゃん、それどういう意味かな？　いい加減にしないと俺、そろそろ泣くよ？」
『因みに、修司君の方は何か覚えてたりしないのかい？』
「いや全く、これっぽっちも心当たりがない」
　モードレッドの応えに何だかはぐらかされた気持ちになる立香達、対して修司に何か覚えてないかと訊ねるも、此方も全く知らないと返してくる。しかもモードレッドと違い此方は本当に覚えがないようだ。
　腕を組んで思い出そうとする修司にモードレッドは目を細くさせる。

『――テメェ、いきなり現れるなりぶん殴ってくるとは、いい度胸だな！　このモードレッドに歯向かって、唯で済むと思うなよ！』
『ごたくはいい、掛かってこいよ三下。自分よりも弱い相手にしか吠えられねぇ犬に格の違いって奴を教えてやる』
『待て、待ってくれシュウジ！　貴方はこの戦いに無関係な人間の筈だ！　俺なんかの為に命を掛けようとしないでくれ！』
『――それは違うぞジーク君。夢の中とはいえ、君と俺は友達だ。そんな友達を助けたい、そう思うのは人間として当たり前の事なんだよ』
『なんで、どうしてそこまで……』
『――誰かを助けたいと思うのに、理由は必要か？』

「――ったく、つくづくムカつく野郎だよテメェは」
「え、いきなりなに？」
　突然悪態を吐き出すモードレッドに修司は訝しむ。

「二人とも、口論はあとにしたまえ――――来るぞ」
「オラ、キャスターのご命令だ。精々遅れんなよ、修司！」
「あいよ」
脳裏に浮かぶのは嘗て自身が体験したと思われる記憶。記録としてではなく、実体験として刻まれているモードレッドが覚えている光景。
赤い雷を纏う自分と、赤い炎を纏う修司。嘗て対面として目にした光景が今は自身の横にいることに何だか面白いと思ったモードレッドはその顔に笑みを浮かべながら襲い来る敵勢力を薙ぎ倒していった。

その52　第四特異点

「あの、モードレッド卿。少しお話いいでしょうか」
「あん？」
　霧の中で待ち構える敵勢力を薙ぎ倒していく一行、襲ってくる敵の数が揺るやかになり歩みを進めると、ふとマシュがモードレッドに問いを投げ掛けた。
「あの……えっと」
「あぁ？　聞きたいことがあるならハッキリ言えよ。お前に遠慮されるのはなんというか……イラッとするからよ」
「そりゃお前がそんなチンピラ口調が原因だろうが。騎士ならもちっと礼儀を慮れよ」
「うっせぇ、俺は元々こうなんだよ。ガレスみてぇな事言ってんじゃねぇよ」
「え？　つまり俺って円卓にいてもなんら不思議な人間じゃないってこと？」
「ハッ」
「鼻で嗤いやがった!?」
　言い出し辛そうな面持ちのマシュに少しでも渡し船を出そうとする修司だが、モードレッドの痛烈な返しに敢えなく撃沈。地面に項垂れる修司を立香だけが肩ポンして慰めた。
「怒らないで聞いて欲しいのですが。どうしてモードレッドさんはこの街を、ロンドンを守ろうとしているのですか？　私には……その、何故か違っているように思えてしまって」
　何故マシュが疑問に思ってしまうのか、それはマシュ自身が良く分かっていない。だが、彼女の言わんとしている事は何となく理解している。
　モードレッド。円卓の座に騎士として名を連ね、そして反逆の騎士として称される事となったブリテンを終わりへと追いやった原因の

一人。
そんな騎士がロンドンを守っている。滅ぼした騎士が今度は守護する為に戦っている事にマシュ――――或いは彼女の内にいるサーヴァントがその矛盾が気になった故の質問。
そんな彼女の問いに反逆の騎士は快活に即答する。
「ンだよ、そんな事か。決まってるだろ、ムカつくからだ」
「え？」
「父上（アーサー王）が守った地を、俺以外の奴が好き勝手するのは許さねぇ。王の守ったモノを台無しにするのはこの俺、モードレッドだけだ」
嘗て自分を拒絶し、息子と認めなかったアーサー王。そんな王に反旗を翻し、国を滅ぼした反逆の騎士モードレッド。
王に反逆するのは自分だけだと、そう声高に告げる彼女にマシュはただ圧倒されていた。
「ねぇ、修司さん。モーさんの言ってる事って……」
「あぁ、間違いない。奴はべ○ータ系だ。驚いたな、まさか円卓の中に此処までベジ○タ要素を詰め込んだ奴がいたとはな」
「ソコォッ！　グダグダうるっせぇぞ！」
「元気だなコイツら」
そんなモードレッドの矜持とも呼べる拘りをツンデレ扱いする修司と立香は、やはり現代っ子なのである。
そして、そんなグダグダなやり取りをしながら進むこと数分。漸く目的地へ到達した修司達はそこで待ち受けていたサーヴァント、メフィストを撃破した。
ヴィクター＝フランケンシュタインは自分が殺した。そう語りながら、面白可笑しく、登場から退場まで終始此方を嘲笑い続けた悪魔の名を持つ殺人鬼。奴の最期は修司に胴体を蹴破られ、モードレッドに頚を刎ねられる事で絶命し、消滅していった。
その後、ヴィクターの屋敷へ足を踏み入れるが、やはり屋敷内に人の気配は無く、手分けして探索していたその際に修司が目にしたのは殺害現場らしい暴散した部屋だった。
やはり、あのメフィストはヴィクター博士を殺害していた。カルデ

アにいるメフィストも狂言回しの所があるから今回もそう言ったモノだと内心で期待していたが……眼前に広がる光景を前にそれはないと思い知らされた。
ヘンリーからへの報せに心苦しくなるが、今は少しでも有益な情報を少しでも多く見付けようと現場を後にする。
立香達の気配を追って書斎……もしくは研究所らしき部屋の奥へ進むと、其処には立香達の他にも一人の女の子が其処にいた。
名をフランケンシュタイン。かの小説で怪物として語られている麗しき少女がそこにいた。
「悪い皆、少し遅れた」
「あぁ、ご苦労だったな。その様子だと……やはり」
「うん。やっぱりダメだった。あのメフィストの言う通りヴィクター氏は殺害されていた」
「そっか……」
ヴィクター氏が殺された事は事実、その現実に酷く落ち込む立香だったが、彼女が落ち込む理由は他にあった。メフィストフェレス、そのサーヴァントはカルデアにも在籍し、色々と言動に悩ませる事もあったが、それ以上に共に戦う仲間として頼りにしてきた英霊の一人である。
そんな彼が敵として人を殺し、敵として自分達に襲い掛かり消滅した。サーヴァントというのは召喚された時代によって立場や在り方が僅かに変わってくる、カルデアに在籍しているサーヴァントがレイシフト先でも味方である可能性は高くはない。
更に言えばメフィストはサーヴァントの中でも〝悪〟として分類される英霊だ。カルデアのサーヴァントでなければ自分に召喚された訳でもない奴が此方に協力せずに敵対するのは……ある種、火を見るより明らかだ。
分かっていたが、だからと言って呑み込めるほど立香は戦いに身を置いている訳ではない、そんな彼女に何て言っていいのか分からずに修司達が頭を悩ませていると、意外な人物から激を飛ばされる。
「なに落ち込んでンだよお前、あんなピエロにそんな心を割く余裕が

お前にあるのかよ」
「モーさん……」
「それになんだ、お前んとこのカルデア？　にも似たような奴がいるんだろ？　だったらソイツに言ってやればいいだろ、お前に似た奴をブッ倒したけどお前より全然弱かったってな」
「そ、それでいいのかな？」
「いいんだよ。サーヴァントってのはドイツもコイツも自分こそが最強！　なんて思い込んでる奴が不特定多数いるもんだ。そんな奴が現地にいる自分がカルデアにいる自分よりも強かったなんて思われてみろ。割りとソイツに対する侮辱になるからな？」
「そ、そうなの？」
「あぁ、だからあのピエロを倒した事にテメェが負い目を感じる必要はねぇ、寧ろ率先して教えてやれよ。お前の方がより悪辣だったってな」
「……うん。ありがとうモーさん、なんか元気でた」
「そうかよ」
　自分の知るサーヴァントを倒した事に対する気落ち、様々なサーヴァントと出会い、現在藤丸立香は史上希に見る数多の英霊と縁を結んでいる。それでも彼女は人並みの感性を持っている為、知り合いを倒した事に罪悪感を覚えていた。
　そんな彼女に自分なりの励みを口にするモードレッドに立香は幾らか元気を取り戻した。カルデアにいる仲間の為にも目の前の障害を乗り越える。そう気持ちを切り替えて再び立香は立ち上がった。
　元気になった立香を見て修司もまた安堵する。と、それはそれとして先ずは目の前の彼女をどうにかするのが先決だ。
「んじゃ、その子をヘンリー氏の所に連れていくか。エルメロイ先生、帰りの護衛もお任せしますね」
「おい、担いで行く気か？」
「そのつもりだけど……あ、なんだったら立香ちゃん達も乗ってく？　こっから一回ジャンプすれば速くヘンリー氏の拠点に戻れるけど？」

「いや、それは止めておこうよ修司さん。もしかしたら空にも敵がいるかもしれないし！」
「そ、そうですよ！　千里の道も一歩からと言いますし、急がば回れという格言もあります。慎重に徒歩で行くのがベストかと！」
『そうだね！　僕も同じ意見だよ！　何事も石橋を叩いて渡るつもりでいかないとね！』
「えぇ……」
活力の乏しいフランケンシュタイン――改めフランを背負って一緒に行くかと提案する修司だが、第二特異点での出来事を思い出した二人は止めた方がいいと必死の様子で丁寧に却下する。
そんな二人に折れた修司はフランを背負ったまま跳躍する事なく、ションボリとしながら大人しく二人にペースを合わせるのだった。
「――コイツ、ここでもこんな調子なのかよ」
「あぁ、胃が痛い」
「フォフォーウ！」
一度ヘンリーのアパルメントへ戻る事にした一行はヴィクター氏を助けられなかった事を悔やみながら屋敷を後にする。
その時、ふと何か気になる事を思い出した修司は後ろ髪を引かれる思いで一度だけ屋敷へと向き直る。
「――魔霧計画、か」
それはメフィストが溢した計画であり、ヴィクター氏が書き遺してくれた計画とやらの名称。
魔霧計画。計画の内容は未だに明らかにされず、また推察も出来ようがないほどに情報はないが、それでも修司にはこの計画の名称に引っ掛かりを覚えていた。
「偶然にしては、些か出来すぎているよな」
魔霧――或いはマキリ。今回の黒幕はもしかしたら自分の知る奴なのかもしれない、そう思うには充分な計画の名称に修司は拳を握りしめるのだった。

その53　第四特異点

「人を襲う本？」
　ヴィクター博士の忘れ形見、フランケンシュタイン改めて通称フランを無事にジキルのアパルトメントまで送り届けた修司達一行は其処で彼が新たに入手したとされる情報に目を丸くさせていた。
「あぁ、何でもソーホーエリアで人間サイズの本が建物に押し入ってまで襲っているという情報が出回っていね、事の詳細を確かめるべく君達にもう一度調査を依頼したいんだ」
「それは別に構わないんだけど……人を襲う本、かぁ。ねぇエルメロイ先生、そういうのって本当にあるの？」
「確かに魔術書の中にはそう言ったトラップ式の本もあるとされているが……人を積極的に襲う魔術書なんてものは聞いたことがないな」
　魔術とは神秘より生まれ、また神秘は秘匿するもの。基本的に魔術を人の目に晒すことはご法度とされる魔術の界隈にて進んで晒そうとする魔術師は存在しない。
　故に魔術の秘められた魔術書も他者に読み解かれない為の細工を施してあるモノが幾つか存在している。読んだ者の記憶を消すモノから、本に取り込まれる凶悪な代物まで神秘を秘匿する役割として多種多様に存在している。
　そんな中で率先して人を襲う本というのは魔術師のルールに明確に反していると言えるだろう。故に今回の事件はサーヴァントに類するものだとロード・エルメロイⅡ世は結論付ける。
「とは言え、これはあくまで仮説に過ぎん。何はともあれ、直接確かめるしか有益な情報を得られはしないだろう」
「しゃーねぇか。んじゃ、もう一度外へ行くとしますか。フラン、大人しくしてるんだぞ」
「またねフラン」

「……ゥ……」
ジキルの語る情報に何処まで信憑性があるか分からないし、これが魔霧計画に繋がる事になるかなんて定かではない。どちらにせよ、屋内で避難している市民達を襲っている以上、本と言えど放っては置けない。アパルメントに到着して休憩もそこそこにして、修司達はソーホーエリアに出没されると言われる……通称魔本の調査に乗り出すのだった。

◇

「人を襲うデカイ本、魔本ねぇ。俺の頃のブリテンにはいなかった類いの怪物だな」
「あなたの生前のブリテンというと……円卓の騎士の時代に怪物が存在していたんですか？」
霧に包まれたロンドンの街を一塊になって進む一団、道中出くわす自動人形を蹴散らしながらソーホーエリアを目指していると、モードレッドはふとそんな事を口にした。
「そりゃあいたさ。円卓の騎士ってのはドラゴンや巨人とも戦ってんだぜ。深い森や険しい山、突風の絶えない断崖。人の立ち入らない領域ってのは格好の幻想種の巣だ。たまに人里に降りたりもするけどな。で、まぁ、ただの人間じゃ大抵の場合は餌になる」
「え、餌……ですか」
「魔獣、幻獣、竜種が相手じゃ並の兵は戦うだけ無駄だ。お前らの時代の兵器でも大概は通用しない。ただし、例外はある。ブリテンの場合は――円卓（俺）の騎士（たち）だ」
「つまり、円卓の騎士はハンターだった？」
『成る程』

「おいやめろ。誉れある騎士達をモンハンに例えるな」
「いやなんでエルメロイ先生が知ってるんです？」
「……」
「す、スミマセンモードレッドさん。続きを」
　折角人が嘗てのブリテンに関して話をしているのにゲームで例えてくる男共にモードレッドの額に青筋が浮かぶ。
　そんなモードレッドに平謝るマシュ、彼女に免じて怒りを納めたロンディニウムの騎士は深いため息を吐き出すと共に続きを口にした。
「で、俺達はそんな怪物達を相手にそれなりに戦って、それなりの数を殺したぜ？　幻想種との戦闘ってのはなかなかこれで――――あぁ、あとアレだ。アレ。ピクト人」
「私達の時代では謎に包まれた人々ですね。嘗て、スコットランドを中心に繁栄した部族だとか」
「いや、人々って言うかあれは……うーん……アレは、もう、部族とか蛮族とか、そういう次元のものじゃなかったような……」
　反逆の騎士と呼ばれるには些か歯切れの悪い物言いをするモードレッド、言い方に悩んでいるというより表現する言葉そのものを悩んでいるように頭を捻っている。
「そうだなぁ、お前らの時代に合わせるとなんて言うんだろう？　ＳＦ映画、とかに出て来そうな感じだったぞ？　エイリアン？　とか、そういう感じ。あぁ、そういう感じだ」
　そして漸く思い付いた言葉を捻り出せてご満悦となるモードレッド、嘗て戦ったとされるピクト人がＳＦ映画に出てくるエイリアンに似ていると言い放つ反逆の騎士。それが彼女なりの冗談だと察した一行は二人を除いて朗らかに対応した。
　言い出した本人は至って真面目なのに冗談扱いにされてやや不満気味なご様子、対して修司とエルメロイⅡ世は神妙な面持ちで考え込んでいた。
「なぁ、エルメロイ先生。モードレッドが言ってたピクト人って……」
「……今は考えても仕方のない事だ。修司、お前もこの件に関して

は今は考えるな。私も忘れる。ただ一つ言えることはお前が嘗て倒したとされる他の星からの侵略者とは恐らく無関係だ」
ピクト人がエイリアン（宇宙人）と聞いて修司が最初に思い出したのは以前相棒と共に戦った他惑星からの侵略者だった。
水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星、そして冥王星。数えること8つの星々から現れる巨大敵性物体はいずれにせよ地球に住まう人類に対して敵対行動を示してきた。
当時は相棒の縮退砲をブッパして即座に撃滅して見せたが、今になって思うとアレは外宇宙からの侵略兵器だったのかもしれないし、ピクト人はその尖兵だったのかもしれない。
となると、当時の円卓の騎士はもしかしたらそんな侵略者から人々を守る当時の人類最後の守護者だったのかもしれない。最終的には内輪揉めで終焉を迎えた罰ゲーム染みたしょうもない連中だと思っていたが……もしかしたら、考えを改めるべきなのかもしれない。
まぁ、そんな事はないわけなのだが。
「モードレッド」
「あ？　なんだよ」
「戻ったら、美味い飯でも食わせてやるよ」
「は？」
事実はどうあれ、嘗て誰かの為に戦った事に変わりはない。反逆の騎士だろうとそれは同じ、故に修司は一時の合間だけ、モードレッドを優しくしてやろうと決めるのだった。
「フオフオ（物凄いすれ違いを見た気がする）、フオウフオフオーウ!!」

◇

――――そして、その後再び自動人形と遭遇して蹴散らしたり、

ちょっとしたすれ違いからマシュとモードレッドが戦ったりするなどちょっとしたハプニングはあったモノの、ジキルからの無線通信による情報追加もあり、魔本の新たな危険性を認識した一行はその情報提供者の下へ訪れた。
　そこはとある古書店の一角、本に囲まれた空間の部屋で彼はいた。
「……ふむ、漸くというには些か早いな。暇潰しに読んでいた小説を十三冊程度、時間潰しには丁度良い時間か」
「え？　……子供？」
「いや、ただの子供じゃないな。この気配から恐らくはサーヴァント、アンタが情報の提供者で間違いないか？」
「話の流れで理解しろ。此処までの展開の流れで俺がその人物だと理解するには充分な要素だと思うが？」
「さてな。生憎今のこの街は良からぬ輩が良からぬ事を企んでいる権謀術数の只中にあるようなのでな。そちらが此方を騙している可能性も否めん、何事も確認という行為は大事だぞ？　急を要する場面でなら特にな」
「ほう？　中々に弁の立つ者がいるらしい。安心したぞ、そこの猪騎士のようにいきなり喧嘩腰でこられたら困る所だった」
「あぁ？　テメェ、なにいきなり俺に喧嘩売ってんだ？　良いぜ、言い値で買い取ってやるよ」
「モーさん、抑えて抑えて」
　本の山の中で修司達を待っていたのは眼鏡を掛けた年端もいかない少年だった。少年と呼ぶには剰りにも大胆不敵で、幼いというには何処までも舌が回るその口調はモードレッドを苛つかせるのに充分な威力を秘めている。
「そこの性根の拗れた魔術師に免じて名乗ってやろう。俺の名はハンス＝クリスチャン＝アンデルセン、ただのしがない作家でお前達に救援をだしたものだ」
「え、えええええっ!?」
「お嬢さん。いきなりの大声は勘弁してくれ、奴が来るぞ」
　世界三大作家の一人、アンデルセン。マッチ売りの少女や人魚姫の

作品で知られる世界的に名前の知られた作家だ。しかもどうやらマシュはそんなアンデルセンの大ファンらしくその目をキラキラと輝かせながら青毛の少年を見つめている。
　そんなマシュの純粋な眼差しにアンデルセンは慣れてないのか、そっぽを向きながら奴が来ると応える。マシュが自分の迂闊さに我に返るのと同じタイミングで、それは突然彼等の頭上から現れた。
　人一人を呑み込んであまりある大きな本、魔本の登場に反応したのは紫雷を纏う反逆の騎士と白い炎を纏う山吹色の男だった。
「合わせろや修司！」
「応！」
　振り抜かれる銀線と拳、直撃は当たらなくても風圧により魔本は屋根を突き破って屋外へ弾き飛ばされていく。見失ってはならないと修司とモードレッドは魔本の後を追って穴となった天井を通り共に屋外へ出る。
　その後も攻撃を加えようと二人で協力して果敢に攻めるが――おかしな手応えだった。まるで分厚い何かに阻まれたかのような感触、一度止まって隣を見ればモードレッドも似たようなモノだったのか、その表情を苦々しく歪めている。
　魔本は未だに自分達の頭上でフワフワと浮かんでいる。このままでは埒が明かないと修司はここで勝負に出る。
「どうやら向こうは普通の相手じゃないようだ。仕方ない、ここは俺がやるしかないか。ドクター！」
『今此方で計算が終わったよ！　そこからの角度なら街や建物に被害は出ない。やっちゃえ修司君！』
「よっし！」
　ロマニからの許可を得て、街に被害が出ないことを確認した修司は両手を腰に持って来て力を溜める。
「ちょ、お前マジか!?」
　両手の間に現れる光、それは周囲の霧を吹き飛ばし、余波を察したモードレッドが兜を被った。
　そして――。

「かめはめ――――波ァッ!!」
溜めに溜めた一撃は魔本の無意識に展開している固有結界ごと呑み込み、霧に覆われたロンドンの空に風穴を空けた。
そして、名前も知らない本は幸か不幸か自我を持つことも、誰かを死なせたり、苦しませたりせずに光の中へと消えていった。
「固有結界ごと消滅させたか。全く、強引な奴もいたものだ」
その様子を見て偉大な作家は呟く。
「さようならだ。誰かの為の物語（ナーサリーライム）、もし次があるのなら……誰かに愛される物語でありますように」
静かに呟く作家の目には円形に広がる青空を映していた。
そして、ソーホーエリアで魔本によって眠らされていた事件もこれで一先ず終幕となり、古書店の所有者が目を醒ます前に天井を直し後片付けを済ませた一行は再びジキルのアパルトメントを目指す。
誰も欠けることなく目的を果たし、魔本も無事に討伐し、アンデルセンという貴重なサーヴァントも確保できた。後は無事に帰るだけだと修司達は古書店を後にしようとするが。
「……おい、なんのつもりだこれは？」
「ん？　どうかしたか？」
意外にもその歩みはアンデルセン本人から止められる。
「どうかしたか、ではない！　何故俺がお前に背負われなければならないのだ!?」
酷く憤慨した様子で抗議してくるアンデルセン、そんな彼は現在修司の背中に赤子のように背負われている。しかもご丁寧に布を使った背負い袋を作っての運搬である。
確かにアンデルセンは外見こそ少年だが、中身は歴とした成人した男性。イスカンダル（アレキサンダー）大王の幼体とは異なり大人の紳士然とした人間である。
それがまるで赤子のように背負われている。しかも男に。はっきり言って地獄である。
「え？　けどアンデルセン先生は肉体労働が不向きだって言ってたじゃん？　マトモに戦闘できないって自負している先生が一人でこ

の街を歩くのは危険だと思うけど？」
「だから、だからと言ってこれはないだろ!?　確かに俺は基本的に幼い外見だが、中身までそうではないのだ！　いい歳した男が野郎に背負われるとかどんな拷問だ!?」
「大丈夫、介護みたいなモンだし、俺気にしてないよ？」
「俺が気にしてると言ってるんだヴァカが！」
「ぷっ、ククク……良いじゃねぇか作家の先生よォ、俺は賛成だぜ？　ククク……アーハッハッハ!!　ダメだ、俺、もう我慢出来ねぇ!!」
　ここまでアンデルセンに弄られ、揶揄されてきたモードレッドはアンデルセンの格好に遂に笑いのダムが決壊してしまった。
　見れば立香やエルメロイⅡ世も目線を逸らして笑っている。マシュだけは吹き出してはならないよう耐えてはいるが、笑いを堪えるために変顔を晒してしまっている。
「おいお前ら、嗤うなんて失礼だぞ。アンデルセン先生は戦闘には向かないんだ。だったら、俺達がフォローしてやるのが筋ってモンだろ」
　皆が笑っている中、修司だけは唯一真顔を崩さないでいる。戦闘には役に立たないと豪語するアンデルセン、そんな彼を守るためにジキルのアパルトメントまで連れていくと言ったのは修司だ。
　彼には一切ふざけた様子はなく、アンデルセンの為に努力は惜しまないと口にする修司にアンデルセン本人も了承した。
　その結果がこれである。……いや予想できるかこんなの。
「分かった。分かったから此方を向くな。その格好で真顔を向けられたら――プスーッ!!」
『き、君達、いい加減にしないか！　修司君は至って真面目に……ブフゥッ！』
　遂に通信の向こうでカルデアの面々から笑い声が漏れてくる。全ては自身の怠惰がもたらした自業自得、しかしそれでもどうか言わせてくれ。
「殺せぇ、いっそ殺せよぉ」
　初めて体験する羞恥にアンデルセンの顔は耳まで真っ赤になって

いたという。

その５４　第四特異点

「ただいま戻りました」
「あぁお帰り、随分早かった――――て、どうしたのそれ？」
　ソーホーエリアでの魔本騒動も収束させ、無事にジキルのアパルメントまで戻ってきたカルデアの一行。そんな彼等を出迎えたジキルは修司の背負う青い髪の少年を見て目を丸くさせ、事情を知っているモードレッドに説明を促した。
「要介護者だってよ。ククク、あー腹いてぇ。まさか笑いで死にかけるなんて流石の俺様も予想外だったわ」
「モーさん笑いすぎだって」
「申し訳ありませんジキルさん、実は……」
「マシュ、ジキル氏への説明は私に任せて貰おう。アレのした事をそのまま伝えるのは……その、Ｍｒ．アンデルセンの名誉的に、な」
　ジキルにどういった説明をしようか悩んでいるマシュ、そんな彼女にすっかり引率者が板についたエルメロイⅡ世が自分が話すと勧めてくる。
　修司に良い様にされ、両手に抱えられながら下に下ろされる彼を見て既に名誉なんてものは欠片も無いように見えるが、それでも死体蹴りをされるような真似は控えたい。サーヴァントといえど嘗て存在した人間、人権なんてものはないかもしれないが、それでも微かに残った僅かな誇りを守ってやりたいと思うのが嘗て聖杯戦争に参加した者の気遣いだった。
　そして、そんな健気なエルメロイⅡ世にジキルも何となく察した。山吹色の胴着を着ているから魔術師ではなく武道家の類いかと思っていたが、どうやら自身が思っていたよりも余程ぶっ飛んだ人間だった様だ。
「えっと、そう言えばさっき光の柱が出てきたと思ったらロンドンの空が晴れた気がしたけど……もしかして」

「あ、此処からでも見えたんだ。どうだ？　青空を二度も見れたから気分的に大分楽になっただろ？」
「あ、うん。やっぱり君なんだ」
　ソーホーエリアから空に向かって放たれた蒼白い光の柱、突然外が光ったと思ったから何事かと思い窓から空を見上げれば、巨大な光の柱が薄暗いロンドンの空を穿ち、先刻以上の青空が広がっていた。というか、今も若干割れている。
　それを成し遂げたのがこの修司であるという。どうやら口振りからアレをやったのが修司である事は間違いないらしく、立香達はそれを否定してこない。というか、関わろうとしていない。
　ヘンリー＝ジキルは碩学であり、魔術に関してはそこまで明るくないが、それでも修司がした事は魔術的に、物理的にも有り得ない相当出鱈目な事であると何となく理解した。
　しかもこの男、それを自慢する処か全く意に介していない。謙遜とかそういうレベルではなく〝敵を倒すついでに空を明るくした〟程度にしか考えていない。
　ヘンリー＝ジキルは理解した。目の前の山吹色の男はその気になればロンドンを1日足らずに更地に出来るやべー奴であると。
「――――俺は隣の書斎にいる。何かあれば呼べ、入る時はノックを忘れるな」
「飯が出来たら呼ぶから、ちゃんと来てくれよアン君」
「～～～～っ!!　ア・ン・デ・ル・セ・ン　だ！」
　傲岸不遜な態度の少年は耳まで真っ赤にしながらジキルの書斎へと逃げていった。ジキルは自身の書斎に許可無く入っていったアンデルセンに文句の一つも言うべきなのだろうが……何故だろう、気の毒に思えてしまった為に呼び止めることは憚れてしまった。
「あ、アン呼びだと女海賊と被っちまうな。やっぱりアンデル君の方が良かったか」
「いえ修司さん、そういう問題ではないかと」
「え？　ていうか、修司……君は料理出来るのかい？」
「あぁ、これでも人並み以上出来ると自負しているよ。ジキルさん、そ

う言うわけで台所と材料を拝借したいのだが……」
「あぁうん。それは構わないけど……」
　自信満々にそう語る修司にジキルは突っ込むのを止めた。
「お、結構材料が揃ってるな。これなら大抵のものは作れそうだ。皆は何かリクエストあるか？」
「ふむ、なら私はトースターとサラダを戴こう。コーヒーが着いてれば尚よし」
「あ、じゃあ私もそれでお願いするね」
「わ、私も先輩と同じく……」
「材料を擂り潰しただけのマッシュ料理じゃなけりゃなんでもいいや」
「アンデル君は……疲れてるみたいだし甘めのフレンチトーストにしてやるか」
「でもフレンチトーストって、パンを卵に浸すから手間が掛かるんじゃ……」
「フッフッフッ、そこは生活の知恵を搾るんじゃよ」
『うーん、なんだか僕もお腹が空いてきたな。エミヤ君に差し入れを頼んでみるかな』
「フォーウ！」
　その後、霧で塞がれていくロンドンの空を背景にカルデアの一行は一時の小休止を満喫するのだった。

◇

「お前ってさ、知り合いに魔術師が結構いたりするのか？」
　食事を終え、食器を片付けていた修司の所へモードレッドから唐突の質問を投げ掛けられる。昼下がりの時間帯、満腹感に満たされた立

香がウトウトと睡魔に負けそうになっているのを尻目に修司はモードレッドの質問を率直に返した。
「まぁ、一応何人か心当たりはいるな。なんだよ急に、そんな事を聞いてくるなんて」
「いやなに、俺も一応魔術師という奴がどんなんかは知っているつもりだけどよ。現代の魔術師ってのがどういう奴なのか知りたくてな」
何やら視線を泳がせ動揺しているモードレッド、どうしてそんな事を訊ねるのか不可解に思うが……まぁ、今このアパルメントにいる一行は現在次の探索に向けて少しばかりの休息を満喫している頃だ。誰もがゆっくりと体を休んでいる中、血気盛んなモードレッドとしては少々不満が蓄積されてしまうのだろう。
要するに、暇潰しの話相手を所望しているのだろう。反逆の騎士の心中を見通せない修司は、無理やりだがそう納得する事にした。
「あー、まぁ大抵はクソだな。昔の魔術師がどういう奴なのかは見た事ないから知らないが、大体の連中は謎の上から目線の尊大な奴が多いな」
「ふーん。やっぱそんなもんなのか」
「最初に出会った奴なんか出会い頭に俺の体を要求してきやがったんだぞ。しかも男。普通に気持ち悪くて引いたわ」
言いながら当時を思い出した修司はゲンナリと気落ちする。魔術師側からしたら言葉通りの意味なのだろうが、それを知らない修司から見れば単なるそう言う趣味の特殊性癖持ちである。
しかもその後は危ない薬を使っての化け物に変異したり、相対した当時の修司の心境はラスボスと出会ったバイオの主人公である。
あの時は無我夢中で対応してどうにか勝利する事が出来たが、もし負けてしまったらどうなっていた事か……考えただけでもゾッとする。
「まぁ、そんな魔術師の中でもマシな連中がいるのも知ってるけどな」
「……例えば？」
「俺の姉弟子……つっても八極拳の方なんだけどな。ソイツは普段はツンケンしてるけど、何だかんだ面倒見が良いし、俺が気を解放す

る事が出来たのもアイツの助言のお陰だったりするし……ま、悪い奴では無かったよ」
確かに魔術師の多くは道徳観や人道から外れた価値観の多い輩が多いが、中にはマトモな感性を持った奴もいるという事を修司は知っている。
遠坂凛やルヴィアは血気盛んで衝突する事は多いが、少なくとも一般人に危害を加えたりはしない。メディアも修司が知る限りは魔導の探求より夫との順風満帆な夫婦生活を楽しんでたりしている。
エルメロイⅡ世は魔術師というより教師の面が強い人だし、そんな彼に教えを受けている生徒達も基本的には無害な人達ばかりだ。中でもフラットという魔術師は魔術師でありながら科学にも深く関心を抱いていて、彼の一見突拍子もない話には深く考えさせられたりして、とても有意義な時間を得られたりした。
他にも義手義足造りの達人な魔術師や修司と同じビームを打つのが得意な魔術師など、幅広い魔術師の知り合いがいたりする。
「まぁ、要するに魔術師も人間と同じ、悪い奴もいれば良い奴もいる。特にカルデアに来てからはそう言うもんだと思う事が多いな」
「ふーん」
「後は……そうだな。獅子劫さんとか強面の割に面白い人だったな」
「っ！」
獅子劫界離、嘗て修司が中学の頃に世界中を飛び回った旅先で出会った魔術師の傭兵。強面の割には慎重派で、されど戦闘になれば苛烈なまでの攻撃特化となる戦闘のプロ。
そんな彼を当時の修司は動物の指を弾丸にするやべー奴だと認識していた事を思い出し、ふと笑ってしまう。
「獅子劫って人は子供が出来ない体質みたいでさ、養子の子を後継ぎに出来ないか悩んでたみたいだけど、本人は魔術なんて血腥い世界に引き込むのを躊躇ってさ、俺に色々愚痴ってきたんだよ」
「……それで？」
「そんなに悩むなら止めちまえば？　の一言で納得したみたい。それ

からは純粋に子供を愛するようになって、そっからはデレデレよ」
　本当はその途中で獅子劫界離の決断に納得しなかった彼の父親が息子の魔術回路を回収しようと刺客を放ったのだが、修司と偶々巻き込まれた士郎が介入し、刺客を返り討ち。そのまま獅子劫家を物理的に解体したりしているのだが……長くなるので割愛である。
　そんな紆余曲折を経て子供大好きなパパさんとなった獅子劫界離はフリーの魔術師から修司が勤める会社へ入社し、安定した地位と収入を得ている。
「と、まぁ大体こんな感じだ。終始クソみたいな輩もいれば獅子劫さんみたいな強面パパさんみたいなギャップの強くて面白い人もいる。それが俺の中の魔術師って奴だな」
「……そっか」
　自分の知る限りの魔術師を話終えると、モードレッドは何処か嬉しそうな、寂しそうな表情を浮かべていた。特に獅子劫界離の話をした辺りからそんな顔をしていた気がする。
　この反逆の騎士と獅子劫界離にどんな接点が？　不思議に思う修司だが、それに触れるのはなんだか野暮な気がして、追及するのを止めた。
　さて、団欒も此処までにして再び探索に移ろう。昼食の片付けも終わり、そろそろ次の行動指針を定めるべきだ。立香もマシュに起こされ、エルメロイⅡ世も首をならしながら席から立ち上がると――――。
「皆、大変なことが起きた。いきなりで申し訳ないけど聞いてくれ」
　酷く慌てた様子のジキルが飛び込んできた。
「切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）が再び現れた。しかも今度は霧に紛れて女性を襲う殺人じゃない。籠城状態にあったスコットランドヤード（ロンドン市警）を襲撃中だ」
「「っ!?」」
「ロンドン全域の警察署への救援の電信を受信してね。現在進行形で今も助けを呼び掛けている」
「アイツか、やっと出てきやがったなあの野郎！」

「あの際どい格好をした女の子か。やっぱ、尻叩き一回程度じゃ堪えないか」
「頼む。今の彼等を助けられるのは君達しかいない、どうか助けてやってくれないか」
「分かりました。今から出ます！　マシュ、エルメロイ先生、お願い！」
「了解です！」
「肉体労働は得意ではないが……まぁ、やるしかないか」
「先行する。遅れんじゃねぇぞ！」
　あの殺人鬼がロンドン市警を襲撃している。その事を知った立香達はいち早く現場へ向かおうとアパルメントから飛び出していく。
　修司も当然それに続こうとしたが、その時部屋の隅であるものを目にした。
「……ジキルさん、これは？」
「え？　あぁ、それは知人から押し付けられた東洋の島国の仮面のお土産だけど……そう言えば君と立香はその島国の出身だったね」
「この仮面、使わせて貰ってもいいか？」
「構わないけど、その仮面は別に特別な力を持ってないよ？　魔除けの仮面って聞くけど、実際はそんな力もないただのガラクタなんだけど……」
「あぁ、これで良い。いや、これが良いんだ」
「そこまで言うなら構わないけど……」
「ありがとう！」
　埃被っていたとある仮面、それの有効活用を思い付いた修司はその仮面を取って今度こそ立香達の後を追う。
　白い炎を纏って跳躍する修司、そんな彼の背中をジキルは何となく不安に思いながら見送るのだった。

◇

スコットランドヤード。ロンドンとそこに住まう市民達を守る為に設立された警察組織、魔霧によってその機能を失ったロンドン市警は現在――地獄と化していた。

――人が死ぬ。人が死ぬ。己が、自己が、私達が刃を、凶器を、奮う度に人は呆気なく死んでいき、奮う度に大地が赤く彩られていく。

人を殺すのは気持ちが良い。人を殺すのは気分が良い。腹から飛び出る臓物と血が、自分をより狂気へと落としてくれる。

血で血を彩るのは私達の性だ。役目だ。本能だ。人を気楽に殺し、人を気儘に殺す。そう定められたのが殺人鬼である私達だ。

だから、だから――。

「もう、邪魔をしないで欲しいなぁ」

「へっ、お楽しみの所悪いな。年貢の納め時だ。殺人鬼！」

奮われた刃がより大きな刃に弾かれる。あと少しで狩れた命を、無骨な騎士崩れに阻まれる。

「死傷者……多数確認。先輩、これでは中にいる人達の生存は……」

「まだ決まった訳じゃない。諦めないでマシュ！」

狩り損ねた人を庇うように盾の少女が現れる。その背後から丸腰の少女と男性、男性の方はサーヴァントで丸腰の少女はマスターなのだろう。

なら、あのマスターを殺せば邪魔者はいなくなる。そう思い切り裂きジャックは構えるが……赤い雷がその行く手を阻む。

「言った筈だぞ。テメェは此処で終わりだってな」

「うふふ、じゃあ鬼ごっこだ」

「なに、テメェ!?」

「お遊びしましょ。貴方は鬼で私も鬼、私達が殺しきる前に止められ

たら貴方達の勝ち」
自分達がいるロンドン市警。そこには未だ手を付けていない人間達がいる。通路の一つ一つを進んでいき、隠れている人間達を殺しきれば自分達の勝ち。
――既に、切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）は狂っていた。魔霧に当てられた影響か、それとも元々の本質か。彼女は人を、命を奪うことになんの躊躇も迷いもない。
自分が悪いことをしているのは自覚している。分かっていながら止められない。何故なら、自分達は切り裂きジャックだから。
殺人衝動は止められない。人を殺すことが止められない。こんな自分達を止めるには自分が奪ってきた命と同様にその手でこの命を奪う他にない。
或いは、殺意以上の恐怖がなければ自分達は止まることはない。故に、方法は自ずと一つだけしか有り得ない。
少女は踊る血の中で。少女は巡る血の中で。
どうせ自分は此処で終わる。騎士に斬られて死に絶える。ならばせめて一人でも多く殺してやろう。
そう、達観とも呼べる心境で突き当たりの所を右に曲がった瞬間――。
「――ねぇが」
暗闇の中に、それはいた。ジャリジャリと床を踏み歩き、キリキリと音を立てて近付いてくる。
「――子は、いねぇが」
あれ？　おかしいな。さっきまでポエム感マシマシだったのに今は冷や汗が止まらないや。
闇の中から浮かび上がる眼光らしき二つの光、その光はジャックを捉えて離さない。
膝が震える。肩が震える。体が、全身のあらゆる細胞が少女に逃げろと告げている。
軈て、街灯の光が通路を照らす。霧で覆われた闇を取り払うように晴れていく。

そして、その中から現れたのは――――。
「悪い子は、いねぇがぁぁぁぁっ!!」
鬼の仮面を被った山吹色の男、シュインシュインと白い炎を纏いながら走ってくる　〝なまはげ〟　に……。
「びぇぇぇぇっ！　お、お母さぁぁぁんっ!!」
切り裂きジャックは形振り構わず逃げ出した。

その５５　第四特異点

「痛え、痛え、ちくしょう、怖ええよぉ……」

斬り付けられた腕を抑え、青年は自身の置かれている状況に恐怖し、絶望していた。

彼がロンドン市警に配属され今年で一年。父と母に背中を押され、必死に勉強をして漸く叶えられた夢。警察になり市民や両親を守りたいと願った青年の夢は今、崩壊の時を迎えようとしていた。

三日前、突如として現れた霧は瞬く間にロンドンを覆った。唯の霧にしては濃いと思っていたソレは人の命を容易く奪い取ってしまう猛毒で、更にはロンドンの街が理解しがたい化け物の群で埋め尽くされてしまっていた。

多くの人が恐怖に震えた。市民達を逃がそうと果敢に戦った同僚や先輩達は全員化け物達に殺された。自分が今こうして生きていられるのは偶々、運が良かっただけだ。

必死に戦い、必死に抗い、両親がどうなったのかも定かではないこの状況で魔術師でもない青年の心が限界を迎えるのは必然だった。戦い、敗走し、どうにか立て籠りに成功したこの警察署も現在は幼い一人の少女に蹂躙されている。

その少女は悪魔だった。嗤いながら人の首を刎ね、嗤いながら人のからだを引き裂いた。少女の前に銃弾は意味を為さず、襲われた同僚は断末魔すら口に出来ず物言わぬ案山子と化した。

もうじき、自分は死ぬ。あの嗤いながら人を殺す殺人鬼に殺される。嫌だ。逃げ出したい、逃げて両親の所へ帰りたい。

心は折れ、夢も崩れた。祈る気力はとっくに使い果たし、希望を持つのも疲れた。

もう、このまま消えてしまいたい。終わってしまいたい。何もかもを諦めて楽になりたい。青年が、そう願うのは仕方のない、どうしようもない事だった。

――――本当に？
夢も希望も失い、あるのは死と絶望だけ。諦めてしまうのは仕方ない、楽になりたいと願うのは仕方のない事だ。
だけど……。
（俺が此処で死んだら、同じ恐怖を父さんと母さんに与える事になる。それだけは、それだけはダメだ！）
弱い体を必死に酷使して、自分を学校に行かせてくれた父。警察学校に通う自分を夜寝るのも遅いくせに毎朝弁当を作ってくれた母。
そんな二人を守りたいから、そんな二人に恩返しをしたいから、だから自分は警察という道を選んだのだ。自分を産み、育んでくれた両親を少しでも良い人生を送って欲しい為に。
心は折れ、夢も崩れた。しかし、それでもまだここには――――自分自身という体がある。
（立てよ！　立って戦え！　此処で無様に死を待つだけなら、少しでも戦って二人が生きられる時間を作れよ！）
恐怖で震える足を叩き、青年は立ち上がる。涙と鼻水を垂れ流し、生きる盾となる為の覚悟を決めようとしていた。
分かっていた。そんな事をしても時間稼ぎにならない事を、命を懸けてあの殺人鬼に挑んだとしても瞬きの内に自分は挽き肉にされる。そうなるのは青年自身も分かりきっていた。
けれど、それでも、守りたいモノがある。失いたくないモノがある。ほんの僅かな勇気を振り絞り――――青年は立ち上がった。
同時に、暗闇の通路の向こうから足音が聞こえてくる。軽く、子供の様な足音に青年の心臓の音は跳ね上がる。
奴だ。間違いない。状況的に今自分の前にあの幼くも恐ろしい殺人鬼が近付いてくる。震える手足を必死に動かし、ホルスターに差した銃を構える。
「来いよ、来た瞬間その可愛い顔に風穴開けてやる」
声が震え、死が近付くに連れて青年の動悸は早くなる。恐怖に抗っても逃れた訳ではない、どんなに決意や覚悟を固めても人の心には限界がある。

それでも、青年は動かない。決めたから、あの両親に二度と会えないと分かっていても、それでも青年は逃げることだけはしなかった。
もうすぐあの憎くも恐ろしい殺人鬼の少女と接敵する。その瞬間自分は殺されるだろう、それでも出来るだけの悪足掻きをしてやると開き直り……カチカチと震える口許を無理矢理に笑みに変える。
そして――――。
「こいよ化け物――――「お母さぁぁぁんっ!!」」
「――――え？」
気の所為、だろうか？　今、自分の横をあの銀髪の殺人鬼が横切った様な……恥も外聞も捨てて、まるで年相応の子供のように泣き喚いていたような。
だが、自分は生きている。気付かれなかったのか、それでも敵とすら認識されなかったのか分からないが、それでも自分は生き延びる事が出来た。
フッと青年の体から力が抜ける。覚悟していた死が急激に遠ざかり、極度の緊張から解放された事からどっと汗が噴き出してくる。
良かった。生き残れた。そう青年が安堵した瞬間――――。
「悪い子はいねぇがぁぁぁっ!!」
突然現れた山吹色の鬼（オーガ）の発する嵐のような威圧に青年の意識は根刮ぎ刈り取られた。
後に、目を覚ました青年は決意する。
「――――田舎に帰ろう」
両親が待つ田舎に帰り、其所で幼馴染みと結婚し、畑を耕しながら幸せに暮らしましたとさ。

◇

「いっけね、現地の人を脅かしちまった」
ジキルのアパルメントにあったナマハゲの仮面を拝借した修司は、切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）の戦意を挫く為、自らナマハゲに為りきっていた。
ナマハゲは怠惰や不和などの悪事を諌め、災いを祓いにやってくる来訪神とされており、現代では教育的機能の一つとして日本の東北地方の一部地域に浸透されてきた。
子供に恐怖心を植え付ける事でモノの善悪を学ばせ、子供達を善に導く役目とされてきたナマハゲ。その風習に肖る事で修司も外見は子供である切り裂きジャックを納める事を目論んだのだ。
序でに気をある程度解放して威圧も増し増し、これなら切り裂きジャックも多少は怯むだろうと思っていたが、効果はそれ以上だった。
ただ、現地の人にまで有効とは思わなかった。この時代のロンドンにナマハゲの文化は知られていなかった筈、気絶した青年を抱き抱えて壁にそっと寄り掛からせると、青年の腕に結構深い傷があるのを見付けた。
そんな青年に自身の気を分け与えて傷を回復させると、再び修司は切り裂きジャックを追い掛ける。彼女の気配は既に覚えているからどこまで逃げようと必ず追い付ける。
その証拠に、トイレに隠れていた切り裂きジャックを発見。幾つもあるトイレの扉の一つから鍵を掛ける音を聞いたから間違いない。
このまま正面から扉を蹴破るのは器物損壊に当たる。唯でさえここはロンドン市警の建物なのだから、後で捕まるような事態は極力避けたい。
そして都合良くこのトイレは天井が開いているタイプの奴だ。日本で導入されて長い間保たれてきた上から覗いてしまえるタイプの奴。
少々行儀が悪いが仕方ない。今の自分はナマハゲなのだ。子供を怯えさせ、モノの善悪を叩き込むシステム的必要悪なのだ。
圏境を用いて気配を断ち、開いているトイレの閉じられた蓋の上へ

と登り隣へ覗き込む。見ると其処には予想通り震えた切り裂きジャックがいた。
「みぃつけた」
「ビャアァァァァァァァッ!!」
そしてこれまた予想通り、切り裂きジャックは修司の顔（ナマハゲのお面）を見ると絶叫し、扉を蹴破ってトイレから出ていった。
もう大分戦意は挫けた筈、後はどうにかして拘束するだけだが……。
（イヤ違う。切り裂きジャックが向かっているのは……外だ！）
切り裂きジャックが向かっているのは外に繋がる窓、今この建物の外には迎撃に向かい返り討ちにされた警官達がいる。多くの死体となったその中には気紛れで見逃された生き残った人もいる。
切り裂きジャックはここにきて彼等を人質にとる選択を選んだ。やはり、どれだけ見た目は幼くても殺人鬼。その思考は何処までも悪に染まっていた。
――尤も、ジャック・ザ・リッパーは建物からの脱出を試みているだけなのだが、それを修司が知る由もない。
まだ出入り口には怪我人の対応に追われている立香達がいる。彼女達を巻き込むわけにはいかないと判断した修司は一気に速度を上げた。
俊敏Ａもあるサーヴァントとの距離を瞬く間に詰めていく。背後から近付く気配に既に戦意のせの字も砕かれたジャックは半狂乱となりながらも窓の外へ飛び出した。
これで自分は逃げ切れる。そう思ったのも束の間、既に切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）はナマハゲ（白河修司）の間合いにまで詰められていた。
「此処までだ」
そう言い、修司は切り裂きジャックの両足を掴み、少女の頭を肩に担ぐ。視界が逆転し、身動きが出来なくなったジャックが最後に体験したのは――。
「これが俺の――筋肉バスターだ！」
全身を貫く凄まじい衝撃だった。

（あぁ、私、ここで終わっちゃうんだ）
自身の受けたダメージが現界を保てる許容を超えた。自分は消滅し、あとはこの特異点から退去するのを待つのみ。
思えば、自分は多くの人間を殺してきた。殺してきた数だけ魂という魔力を喰らい、自分勝手に生きてきた。無惨に殺してきた人々を考えれば今回の自分の死に様は寧ろマシな方と言えるだろう。
（そっか、私達……いけないことをしたんだ）
消滅する際に幼い殺人鬼は理解した。何故自分があんな恐ろしい目に遭わなくてはいけないのか、その道理と意味を。
ともあれ、切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）は消滅した。
光となって消えていく切り裂きジャック。断末魔の叫びも、怨めしい呪いの言葉を吐かずに、ロンドンを震撼させた伝説の殺人鬼は自ら犯した罪悪を受け入れて特異点から消滅した。
霧の中へ消え行く幼き殺人鬼を見送り、修司は一言口にする。
「次に生まれてきた時は――――幸せになってくれよな」
あの切り裂きジャックがあの様になったのは偏に自分達人間社会に原因がある。修司があの殺人鬼から何を感じたのかは定かではない。ただ、そんな気がしてならない。
祈りとは心の所作。いつかそう教わった修司は消えた光に向かって両手を合わせて頭を垂れた――――ナマハゲの仮面をつけたままで。
「……なぁ立香、切り裂きジャックもそうだけどあのピクト擬きもとっ捕まえた方がいいんじゃね？」
「言わないであげてモーさん。気持ちは分かるけど」
「というか、ブリタニアを襲ったピクト人って、あんななのか」
「いや、あれよりもうちっと理性的だった」
「「おっふ」」
エルメロイ先生と立香から変な声が溢れた。

◇

――――それから暫くして、怪我した警官の治療と建物の修繕を行っていた修司達。そうしている間に日は落ち、霧の濃さも重なってすっかり暗闇に覆われたロンドンの街。
不気味な空気が辺りを満たす。今にも妖怪の類いが出てきそうな空気に一行もヒリついた空気を纏いだす。
「さて、ロンドン市警も守りきり、人的被害もどうにか抑えられた」
「ついでに言えばサーヴァントも倒した。今回の騒動の裏に黒幕がいるなら、出てくるのはそろそろの筈だな」
切り裂きジャックは恐らく今回の黒幕の尖兵、メフィストフェレスと同じく従わない者達を粛正する為の暴力装置だ。その装置が破壊された以上、向こうも出方を変えてくるだろう、というのがカルデア側が出した推察である。
そして、その時は来た。
『六時の方向から動体反応あり！』
ロマニの言葉にその場にいる全員が振り返る。暗闇の中から現れた覇気のない優男、どうみても戦いを主体としている輩ではなかった。
「……成る程、切り裂きジャックは倒されましたか。流石は音に聞く円卓の騎士」
「違えよバァカ。殺人鬼を倒したのは俺じゃない、そこにいるピクト擬きが一蹴にノシたんだよ。……て言うか、いつまでそれ付けてんだテメェ、敵幹部のお出ましだ。ちゃんと面拝んどけよ」
「おっと、これは失敬。なんか仮面を付けるのが抵抗感がなくてつい……」
『君が仮面をつけたままでいたから警官の人達も終始怯えていたけどね』

とうとう現れた今回の特異点における黒幕の関係者、間違いなく目の前の優男は魔霧計画の核となる部分を知っている。ここへ来て漸く手に掛けた手掛かりにモードレッドも剣を握る手に力が込められる。

「――やめとけモードレッド、そいつは姿を転写した謂わばホログラムだ。斬りかかった所で意味はねぇよ」

そんな反逆の騎士の憤りを察した修司が落ち着くように促す。相手のクラスは恐らくキャスター、手練手管に優れて搦め手に特化した魔術師のサーヴァント。

そんなキャスターが正面から堂々と現れる時は逃げる算段を確立させた時か自分達を相手に勝利を確信した時だけ、何より目の前の優男からはサーヴァント特有の濃い気配がない。

「……其処まで見抜かれているとは。成る程、貴方が切り裂きジャックを倒したというのも頷ける。ありがとう、彼女を助けてくれて。愛を知らないあの子を倒すにはさぞかし心を痛めた事でしょう」

「敵から慰めを受ける謂れはねぇよ。……俺がテメェに聞きたいことはただ一つだ」

「――なんでしょう？」

「お前達首謀者の中に……マキリって奴いるだろ」

疑問というより確認に近い口調、マキリという言葉にエルメロイⅡ世を除いた全員が首を傾げるなか。

「――怖いお人だ」

白衣の優男は薄く微笑んだ。

その56　第四特異点

『マキリ、マキリだって!?　確かそれは――』
「聖杯戦争を形作った御三家の一つだな。アインツベルンや遠坂と同じ、私達の時代から五百年程前から存在していると言われている」
「ご、五百年前!?　一世紀が百年だからえーっと……江戸時代辺り!?」
「江戸時代は十七世紀です先輩！　恐らくは十五世紀、戦国時代の始まりの頃かと思われます！」
『立香ちゃんェ……』
『これは、帰ってきたら補習かな？』
「うひぃ!?　やぶ蛇だった!?」
　マキリと聞いてロマニは驚愕し、エルメロイⅡ世は驚きながらも納得した。魔霧計画。その名の通りこの計画にマキリの魔術師が関与しているなら、聖杯戦争を熟知しているだろうし、それを利用しての災厄を生み出すのも訳はない。
　そして、マキリが主導として計画を動かしているなら……恐らくはこのロンドンにもあるのだろう、冬木と同じ聖杯戦争の土台とも言えるアレの存在が。
　白河修司の口振りからして、恐らくは彼自身も気付いているのだろう。今回の特異点の中心にいる者の正体が。だからこそ、自分達の前に立っているこの男は滲み出てくる怒りを必死に抑えているのだ。
　そう、白河修司は怒っている。嘗て自身の両親の命を奪い、故郷を焼いた聖杯戦争。それを生み出した元凶たる御三家の所業を修司は未だに許してはいない。
　万能の願望器等と銘打って、イタズラに血を流して聖杯戦争を歪め、その果てに多くの悲劇を生み出してきた聖杯戦争。御三家の願いがどういったモノだったのかは定かではないが、魔術師でない修司にとって彼等の行いは余計なお世話以外の何者でもない。
　だから、その果てに白河修司は御三家最後の生き残りである間桐臓硯を討ち、聖杯戦争を終わらせた。しかし、その御三家の一つが関

わっていると知り、修司の怒りのボルテージは一段飛びで跳ね上がっていく。
　修司の周囲にある礫が浮かび上がっては弾けていく、その光景にいち早く気付いたエルメロイⅡ世は修司の肩に手を置いて、変わるように前に出る。
「落ち着け白河修司、貴様の言う通りソイツは遠くから転写されたホログラムの様なものだ。ここで殴った所で霧ごと霧散されて終わるだけだぞ」
「エルメロイ先生……ごめん、あとは頼みます」
　エルメロイⅡ世に諭され、一先ず怒りを抑えた修司は頭を冷やして反省しようと後ろに下がる。向き直るエルメロイⅡ世の視線の先には先と変わらず佇む優男の魔術師がいた。
「逃げる素振りを見せない所を見るに、此方の質問に応える意志があると見ていいのだな？」
「貴方達は彼女達に勝利し、私達は彼女達を従えていたのに敗北した。なら、ある程度質問に応えるべきだと判断したまでです」
「ならば聞こうか。魔霧計画はお前達のマスターが主導で行っているモノで、マスターの名は間桐……いやマキリ＝ゾォルケンで間違いないな？」
「其処まで見抜かれている以上、誤魔化しは出来ませんね。然り、私は私の主。マスターであるマキリ＝ゾォルケンに従い行動しています」
　エルメロイⅡ世の問いに白衣の優男は淡々と応えた。切り裂きジャックに勝利した事への報酬、恐らくはこの程度の情報開示になんの危機感を感じてはいないのだろう。少なくとも目の前の優男からは情報開示をマスターに対する裏切り行為だとは微塵も感じていないようである。
　そんな男にロード・エルメロイⅡ世は再度訊ねる。
「なら、そのマキリ＝ゾォルケンの居場所については？」
「残念ながら、其処まではお答え出来ません。サーヴァントと言えども所詮は使い魔、マスターの許可なしでは口を割ることは出来ません」

逆を言えば首謀者であるマスターの名前の開示、そこまでは裏切り行為ではないという事になるのだが、其処まで思考を割く余裕はないし、なにより心当たりは幾らでもある。
「ならば質問を変えよう。ロンドンの街を霧で覆って、お前達は何を企んでいる」
「全ては主の悲願の為」
やはり、白衣の優男は口を割ろうとしない。マキリという首謀者の名前（Who done it）は明かせてもその先にある動機（Why done it）と理由は明らかにしてこない。
だが、そこはエルメロイでも予想通りの答えだった。そして、その理由も朧気ながら見えてきた。
「なら、お前の……いや、お前達のマスターは人理焼却の黒幕と手を組んだ。そう判断して良いわけだな？」
「ご想像にお任せします」
魔霧計画の主導者。それが五百年続く魔術師であるマキリ＝ゾォルケンに間違いなく、そのマキリも人理焼却の黒幕と手を組んだという事実。エルメロイは厄介だなと頭を抱えたくなったが、それを知れただけでも充分だった。
だが、それだけでは些か足りない。ここまでの経緯を経て向こうは未だ隠しているモノが多い、マキリの名はその数ある秘密の一つでしかない。
「ではもう一つ質問だ。切り裂きジャックやメフィストというサーヴァントを……一体何処から拾ってきた」
「……」
「サーヴァントと言うのは自然に生えてくるモノではない、必要な魔力と儀式を経て魔術師と契約する最上級の使い魔だ。そして、そのサーヴァントを召喚するのは――――聖杯だ」
「っ！　まさか……」
エルメロイⅡ世の言わんとしている事を理解したであろうマシュ、そしてそんな彼女の浮かび上がった疑念は確信へと変わる。
「そう、このロンドンを覆っている霧は全て聖杯から起因しているモ

ノだ。故にロンドンにてサーヴァントが召喚される。順序を辿っていけば割りと簡単に辿り着ける答えだな」
そう語るエルメロイにモードレッドはそう言えばと思い出す、確かに自分も気が付いたら霧の中にいた。召喚された事は確かなのに自分を喚びだしたマスターの存在は今の今まで確認されていない。
自分も、あの偏屈な作家も、霧の中から召喚された。自分達を喚んだマスターが消えたのではない、最初からマスター何てものは存在していなかったのだ。
だから、それがどうしたという話ではないが、エルメロイⅡ世が優男に聞きたいのは其処ではない。聖杯の力を使い、改造し、霧という形でロンドンを覆い、その果てに一体何を喚び出そうとしているのか、それが一番聞きたい事でもあった。
尤も、その喚び出そうとしている何かについても幾つか既に心当たりがあるのだけれど、場の空気が変わってしまいそうなので自重する事にした。
「それで、マキリ＝ゾォルケンは聖杯を使って何を喚び出そうとしている？　応えては――貰えないようだな」
「ええ、そちらの山吹色の方といい、貴方達は本当に聡い方だ。この特異点に来て然程時間は経っていないのに既に此方の核心近くまで迫っている。恐ろしい限りです」
「では、お引き取り願おうか名も知らぬ魔術師。今の我々に戦う意思はないが……それはそちらの態度次第だぞ」
「ええ、そうさせてもらいましょう。次に会う時は……互いに殺し合わなくてはならないみたいですので」
準備を万全に挑む。そう言外に語りながら白衣の優男――キャスターは姿を消した。
「さて、一先ず情報は得られた。次の行動指針を決める為にも一度ジキル氏の所へ戻るとしよう。というか、珈琲が飲みたい」
「なら、俺が淹れさせて貰うよ。先生には世話になってばかりだからな」
「何て言うか、最初は眼鏡のモヤシだったから宛にしてなかったけど

よ、エルメロイて言ったか？　お前、アグラヴェインとちょっと似てるな」
「円卓の騎士の一人に例えられるとは光栄だがなモードレッド卿、そこはⅡ世を付けるのを忘れないでくれ」
「おっと、これは失礼した」
　首謀者の一人と自称する白衣の男から情報を得られ、モードレッドもエルメロイⅡ世の口の巧さに納得し、認める事ができた。切り裂きジャックも倒し、ロンドンの警官達を守る事ができた。
　ロンドン市警も守った事だし、此処で自分達に出来ることはもうない。惜しむこともなくその場から立ち去ろうとするした時に、ロマニから通信が入ってきた。
『立香ちゃん達の近くから大きな魔力反応を感知！　場所は――――修司君のすぐ後ろだ！』
「マジか、本当に召喚されるのかよ」
「これでエルメロイ先生の言ってる事が正しいって証明されたね！」
「そうだな。だが、これで連中が良からぬモノを喚び出そうとしているのも確立された訳なのだが……はぁ、憂鬱だ」
　振り返り、身構える一行を前に光が集約されていき、形が形成されていく。人型、それも髭のある赤毛の男、本を片手に顕現するその男は唐突に謳い上げた。
「召喚に応じ参上致しましたぞ！　我こそは稀代の劇作家！　キャスター、シェイクスピア！　――――今こそ問いましょう。あなたが私のマスターか？　くー！　一度言ってみたかったんだなーこの台詞！
……あれ？」
「あぁ？」
　召喚されるや否や、高らかに喋り始めるだけでなくなんか成りきってマスターの有無を問うてくるサーヴァントに一同呆気に取られていた。
　何とも勢いのあるサーヴァントだ。しかも自らをキャスターで劇作家と名乗っているのだから、恐らくはアンデルセンと同類なのだろう。しかし、当のキャスターは修司を見るとその表情を固くさせてい

る。
「……あっ、失礼。人違いでした。いやはや、申し訳ない。我輩とした事がついおかしな事を口走ってしまって――――日課の人間観察がありますので、我輩はこの辺で……」
「サーヴァント、ＧＥＴだぜ」
　踵を返してその場から立ち去ろうとするシェイクスピアを修司が抱えあげる。サーヴァントと言えど相手はヘラクレスとも渡り合える剛力の持ち主、こと腕力でキャスターが敵う道理はなかった。
「や、止めてぇ！　我輩は確かに劇場と演出を愛する芸術の徒！　けれど今は、今だけはどうか見逃して頂きたい！　私はあなたの冒険活劇（やらかし）を見たいのであって、巻き込まれたい訳ではないのです！」
「ちょっとなに言ってるか分かんないな」
「ノォォォォッ!!」
　騒ぎ立てるシェイクスピアを無視し、彼を肩に担いだ修司は今度こそ立香達と共にロンドン市警を後にするのだった。

◇

「そうか。切り裂きジャックは死んだか」
　深い深い地下、光も届かない闇の底で男は一人口を開く。
「白河修司。よもや、その名を再び聞くことになるとはな」
　深い青の色を帯びた頭髪、修司の名を呼ぶ男性は自嘲気味に口許を歪める。
「来るがいい。理不尽の反逆者、今一度私を殺し、未来を切り開いて見せろ」

天を見上げる男の目には不気味に蠢く巨大な機械仕掛けが映し出されていた。

その57　第四特異点

「聖杯戦争の元ネタ？」
「というより、英霊召喚の本来の目的に就いてだな」
　切り裂きジャックという殺人鬼を打ち倒し、今回の特異点の黒幕の一人と遭遇し、シェイクスピアというはぐれサーヴァントを保護（拉致）して無事にジキル達の待つ拠点に戻ってこれた修司達はアンデルセンが以前から気に掛けていた英霊召喚の起源について考察していた。
「其処のエルメロイⅡ世、確か時計塔の人間だったな。しかもロードとくれば英霊召喚に関する何らかの知識を持っていても不思議じゃない。本来なら時計塔の地下深くまで出向かなければ行けなかったが、コイツのお陰で手間が省けた」
「エルメロイ先生って、そんな凄い人だったの？」
「期待させて悪いが、私はあくまで代理だ。今でこそかの諸葛亮孔明の依代となって疑似サーヴァントとして顕れているが、本来の私は名前だけのロードに過ぎん。英霊召喚の事にしたって降霊科の専門家と比べれば知識も技量も圧倒的に劣っている」
「だが、全く知らないという訳ではないのだろう？　ならば充分価値はある」
「……はぁ、あまり期待するなよ」
　それからエルメロイⅡ世は英霊召喚に関する知識を独自の考察と混ぜ合わせながら説明した。英霊召喚のシステム、その意味と理由をアンデルセンの意見と擦り合わせながら推察と考察を深めていく。
　結果、一つの可能性が生まれた。英霊召喚は元々はサーヴァント同士の殺し合いに使用する使い魔の召喚……などではなく、ある一つの脅威に対する人類の守護者を喚び出す降霊儀式なのだと。
　英霊とは人類史に刻まれた記録であり、歴史の成果。サーヴァントとはそんな記録である英霊を現実に〝在る〟ものとしてクラスという器に落とし込んだ存在。人類が続く限り英霊は存在し、サーヴァン

トもまた儀式召喚に応えてくれる。それが本来の英霊召喚の意味なのだとアンデルセンは結論付けた。
「そんな英霊召喚を聖杯という後押しで叶えたのが、お前達の言う聖杯戦争なのだろう。元々ある英霊召喚の儀式を、儀式を生み出した魔術師側が己の欲望で歪めてしまうとはな、とんだ皮肉だ」
「やっぱ魔術師って禄でもねぇのな」
『や、やめてー！　正論の暴力で殴って来ないでー！』
英霊召喚の本当の目的を知った一行、だが当然疑問に残る事もある。アンデルセンの言う事が本当なら本来の英霊召喚はある脅威に対抗する為の抑止力的な装置だという。
『儀式・英霊召喚』と『儀式・聖杯戦争』は同じシステムではあるが、そのジャンルは違うものだとアンデルセンはエルメロイとの意見交換で確信した。
ならば、その脅威とは何なのか。不思議に思う立香達だが、ふと何かを思い付いたのか今まで考え込んでいたマシュが口を開く。
「で、ではＭｒ・アンデルセンの言葉を倣うなら、人理焼却を行った黒幕が……その脅威だと？」
何となく口にした言葉だが、ジキルは何処か理解できた。時計塔の地下へつづく大英博物館、ロンドンが霧に覆われた直後に其所は何者かの手引きによって爆破され、現在は見るも無惨な瓦礫の山と化している。
英霊召喚の本来の目的と時計塔の地下へ続く大英博物館の崩壊、この二つが全くの無関係とは思えなかったジキルもまたマシュと同じ結論へ至った。
そして、それとは別件に始まる立香はある一つの仮定を思い付く。アンデルセンが提唱する儀式・英霊召喚の本当の役割、ある脅威に対抗するのが英霊召喚の本当の役目だとするならば喚び出される英霊はこれ迄出会ってきた中でも最強のサーヴァントでなければならない。
そんな凄まじい力を持った存在を立香は知っている。先の特異点、後のオケアノスと称される特異点で顕現した真なるヘラクレスの事

だ。
彼の力は正しく伝承通りであり、その強さは神話に出てくる史実そのものだった。剣を奮う度に地形は代わり、力を放つ度に天地が揺れた。遠くから見ても触れ得てしまう暴力の化身、サーヴァントの枠組みから逸脱した超人。
あれが本来の英霊召喚に喚び出される者の一角、成る程確かに人類が希望を託すのにあのヘラクレスはこれ以上のない適任者と言えるだろう。
しかし、そんなヘラクレスを打ち倒してしまった男がいる。伝説の英雄と正面から打ち合い、勝ってしまった男がいる。
もし、今後あのヘラクレスを喚び出す事ができなければ、それは必然的に倒してしまった男の責任と言う事になる。
立香の目が修司へ向けられる。すると、カルデア組の誰もが立香と同じ考えに至ったのか、その視線を修司の所へ刺すように向けられている。
当の本人である修司もその事に気付いたのか、ダラダラと冷や汗を流して顔を横へ逸らしている。敵対し、倒すしか無かった状況だから誰もあの時の事で蒸し返したり責めるつもりはない。が、日頃の行いの所為か修司に対する一定の感情を抱くのもまた事実。
部屋に充満し始めるやっちまった感。アンデルセンやジキルが首を傾げ、モードレッドとシェイクスピアは何処か悟った表情を浮かべながら苦笑いを浮かべていた。そんな空気に関係なく言葉を紡ぐアンデルセンの図々しさは修司にとって一種の清涼剤となった。
「マシュ嬢の言う通り、その可能性も考えた。だが所詮は物書きの取るに足らない考察、思い込みの要素となる余計な情報はあまり許容しない方がいいぞ」
『……そうだね。英霊召喚に関する情報、それが分かっただけでも儲けものだ。そこからの考察と調査は僕達の仕事、現地の皆は目の前の事に集中して欲しいかな』
「でも、その考察に裏付け出来る証拠は無いんだよな？　なら、やっぱり時計塔の地下とやらへ向かった方がいいんじゃないか？　ここに

はアンデル君やシェイクスピアもいる。この二人なら資料の速読も訳ないと思うし」
　何処まで精度の高い考察を並べた所で、所詮は裏付けのない空虚な妄想に過ぎない。説得力や拡散がどれだけ持てても個人の域をでないのであればそれは単なる感想にまで落ち込んでしまう。
　エルメロイⅡ世やアンデルセンの考察を疑うつもりはない。全てはそんな彼等が頭を捻り出してくれた推論をより確立したものにしたいが為の提案だった。
「地下でどんな罠があっても二人を守れる自信があるし、なんなら場所さえハッキリしていれば俺一人で向かってもいいぞ。……いや、良く良く考えたらその方がいいな。うん、ちょっくら行ってくるよ」
『待て待て待て待って！　そんなコンビニに行くみたいなノリで外に出ようとしないでくれないかい!?　外は依然として怪物達で溢れてるんだぞ！　そんな中で単独行動なんて……いや出来るんだろうけど！』
「肯定しちゃうのかよ」
　白河修司は生身でありながらサーヴァントを凌駕する膂力の持ち主、大英雄との戦いを経てより強くなった彼に自動人形やヘルタースケルター程度の敵に敗北することは万に一つも有り得ない。
　そんな特記戦力を一人で向かわせるのは戦術としてはアリなのかもしれないが、道徳的に果たして許可して良いものか、ロマニが悩んでいるとシェイクスピアが大きな溜め息を吐きながら観念した様に席から立ち上がった。
「仕方ありませんな。ではここは我輩がご同行するとしましょう」
『シェイクスピア、いいのかい？』
「放っておいてはこの御仁は勝手に行動しますよ。そして勝手に盛大にやらかす、エンターテイナーにして傍迷惑！　しかも基本は善意で行動し、繰り出す理屈は大抵正論だからより質が悪い！　なのが、この御仁の性質だと私は睨んでおりますが？」
「ふぇー、流石劇場作家。人間観察が趣味なのは伊達じゃないんだね」
「……まぁ、私の場合経験則でもあるのですが」

「？」

『さぁさぁ遂に来る最終決戦！　我がマスターは人類の救済の為、対する敵対者はその夢を砕かんが為にこの空中都市に攻め入ってきた。果たして勝つのは野望か願いか、面白くなってきましたぞ！　この衝動を如何にして後世に残すか、我輩の腕の見せ所ですぞー！』

『って、書斎が燃えとるぅぅぅぅっ!?!?』

『ふー、暖まった。流石に夜空を生身で行くのは冷えるな。次からはもう一着着るようにしとこ』

『い、いいのだろうか？　ここ、明らかに普通の書斎の様なのだが……』

『大丈夫でしょ。敵のアジトだし、僕のマスターは真面目だなぁ』

『けど、燃やすものが沢山あったのは幸いしたな。ホレ、焼き芋焼けたぞ。ジーク君も食っとけ、腹が減っては戦は出来ないってな』

『うわーい。僕この大きいの貰うねー！』

『どれも同じだっての。全く、しょうがねぇなぁ』

『こ、ここここ……』

『『ん？』』

『この、ド外道共がぁぁぁぁっ!!』

「そう、あの様な辛い思いをするのは、我輩だけで充分なのです」

「「？」」

そう語るシェイクスピアの表情は達観とも後悔とも呼べない複雑な表情を浮かべていたが、修司を含めてそれを知るものはいない。

唯一モードレッドだけは何かを察したのか、何とも言えない顔をし

ていたが、やはりそれを理解できるものはいなかった。
その後、修司はシェイクスピアと何故か付いてきてくれたモードレッド、並びにジキルと共に大英博物館からロンドンの地下へと侵入。無事に目的の資料を探し当てることに成功した。
そしてその途中、ジキルがあるクスリを服用して第二の人格を目覚めさせたり、その制御が上手くいかず暴れまわったりするが、修司のアームロックによって無力化。以後、ハイドと名乗るジキルの第二の人格は修司に怯えるようになってしまい、その特異点では二度と表に出てくることはなかった。
因みに資料の内容はアンデルセンの読み通りのモノで、彼等の考察は事実として確立される事となった。
――――――そして。
「なんか、ヘルタースケルターと良く似たデカイ奴を仕留めて来たんだけど……操られていたみたいだったし連れてきたわ」
「そこにいるのは……ヴィクターの娘、か？　そうか、我が友は汝を完成させていたのか」
「ウー！　ウー！」
戻ってきた修司達が霧の中から担いできたのはヘルタースケルターの大将とも見える巨大な蒸気機関のロボットだった。
名をチャールズ＝バベッジ、イギリスの数学者にして哲学者。世界で初めてプログラム可能な計算機を考案し、コンピューターの父と呼ばれた人物。どういう訳か蒸気機関の鎧の体を依代として現界した彼は、四肢をモゲられ身動き一つ出来ない状態となっている。
そんなバベッジ氏の変わり果てた姿を見て憤慨したフランが殴り掛かるも、哀しいかな。実力差の有りすぎる相手に彼女のぐるぐるパンチは全くダメージにならなかった。
「ど、どうしたんだよフラン、急に暴れだして」
「あの、修司さん。恐らくフランさんとバベッジ氏は多分面識のある知人なのではないでしょうか」
「え？　そうなん？　ありゃー、それは悪いことをしたな。後で適当なヘルタースケルターの残骸を見付けて付け足して置くから、勘弁し

てくれ」
「ウ？　……ウー！」
「大丈夫だって、俺こう見えて造るの得意だから。ババッジロボをスーパーロボットに改造してやるから、楽しみにしてくれよ」
「ウゥ？　ウー♪」
「あの、我が自由意思は？」
「諦めろ。操られたとはいえ敵対した時点でテメェはこうなる運命だったんだよ」
「……おいシェイクスピア」
「これでも我輩頑張ったのですよ。ええ、本当に頑張ったのです」
　その後、ついで感覚で破られたバベッジはジキルのアパルメントでは据え置きする事が出来ないと判断され、修司に新たな四肢を付けられるまで玄関前に放置されたという。

その58　第四特異点

霧に包まれ、魔の都と化したロンドン。人に仇なす殺戮の魑魅魍魎が蠢き、ロンドンの人々を恐怖に沈めた怪物の都。

そんな霧の中で一人の少女が走り出す。病に喘ぐ妹を助けたいが為、両親の反対を押し切って薬を求めて少女は霧に包まれたロンドンの街を走る。

幸いな事に、薬局の店主は心優しい人間だった。戸を叩いて音を鳴らす自分に咎める事なく、快く薬を提供してくれた店主に少女は首がもげそうな程に何度も頭を下げ、来たとき同様急ぎ足で掛けていった。

最近、ロンドンでは奇妙な出来事が起きている。一度は霧に覆われたロンドンが突然晴れたり、空に向かって大きな光の柱が出現したりと、奇っ怪な現象が立て続けに起きている。

父と母は更なる異常の前触れかと案じていたが、少女は不思議と安心感を覚えた。まるで誰かがこの霧を何とかする為に起きた出来事であると、そう思えてならなかった。

そんな光景に恐怖ですくんでいた自分の足が前に動いた。病弱で、病に苦しんでいる妹を何とかしたいと思い、立ち上がる程度には力が宿った。

けれど、そんな少女が霧に覆われた今のロンドンの街を出歩くには……想像以上に過酷だった。高密度の魔力を帯びた霧は人体に対して有毒でしかなく、比較的薄い所を通るにしてもそこは人を殺す事に特化した自動人形やホムンクルスが跋扈していて、少女一人が切り抜けるにはあまりにも無謀だった。

背後から此方に向かって近付いてくる足音が聞こえてくる。人の足音ではない、機械的で無機質な音、自動人形の足音に少女は自分の命の危機の到来を明確に感じ取った。

心臓の鼓動の音が跳ね上げ、これ迄霧を吸い込まないように気をつけていた口を咄嗟に開いてしまう。吸い込んでしまった魔力の霧は

一瞬とはいえ、少女の肺を蝕むのに充分なモノだった。
咳き込み、走る体力を根刮ぎ奪われた少女は遂に地面へ倒れ込む。硬い石の地面が少女の体を強く打った。
片手で薬を抱き、残された手で口許を塞ぐも肺を蝕む痛みは消えない。咳き込む痛みと苦しみで意識が朦朧とする少女に機械仕掛けの殺戮者が囲いだす。
あぁ、自分はここで死ぬのか。幼いながらも自分の最期を悟った少女が家で待つ両親と病で苦しむ妹に心でごめんなさいと呟いた瞬間。
ふと、何か音が聞こえてきた。自動人形達ではない、何か回転する音、空気を裂く様な音が少女の耳に届き。
「受けるがいい、我が新生した剛腕を。ターボスマッシャーパンチ!」
閉じ行く視界の中で少女が最後に目にしたのは……大きい鉄の巨人だった。

◇

「お待たせ、あの女の子は無事に送り届けたよ」
ロンドンの住宅街、そこで倒れていた少女を自宅まで送り届けた修司はロンドン橋周辺で待機していた立香達と合流し、少女の無事を報告した。
「貴様にしては少し遅かったな。なんだ、また余計なお節介でもしていたか?」
「余計なお節介って程でもないさ、あの子の家にもう一人病気で苦しんでいた子がいてさ、咳で大分体力が落ちていたから俺の気を分けて

来たんだ」
『修司君の力って、病気にも効くの!?』
「いえ、この場合は修司殿の言う通り、単に体力を回復しただけなのでしょう。彼の力が病まで治してしまえたら、それこそ医療技術が崩壊してしまいますからな」
　自動人形達を退け、少女を抱えて彼女の家へと運んだ修司は霧と病によってそれぞれ弱っていた姉妹へ自身の気を分け与え、回復させてきた。
　と言っても、あくまで修司が施したのは体力の回復と治癒促進だけ、修司の気は他者に与えると傷口を癒したり体力を回復させたり、魔力に汚染された体を浄化させる程度だが、サーヴァントに与える時程強い効力があるわけではない。精々が止血したり失った体力を少しばかり回復させる程度、大きな怪我や病気を治せる力はなく、どれだけ分け与えた所で欠損した手足を元通りにする事は出来ない。
　仙人が使うとされる仙術に似ているとアンデルセンは推測するが、修司の使っているのはそれの下位互換なのかもしれない。
「シェイクスピアの言う通り、俺が出来るのは些細な事だけだ。情けない話だが、後はあの姉妹次第だ」
「それだけ出来りゃ上々だろ。姉の方だって本来なら彼処で死んでたんだ。それをねじ曲げてやっただけでも儲けモンだろうよ」
「そこの猪騎士に賛同する訳ではないが、俺も概ね賛成だ。そもそもあの子供を放っておいた親にも責任がある。子が彼処まで根性を見せたなら今度は親が踏ん張る番だろうよ」
　モードレッドとアンデルセンから彼等なりの激励を受け、修司はこれ以上彼女達を気にかけるのを止めた。これ以上修司があの姉妹に出来るとこはない、あったとしてもそれはこの特異点を早々に終わらせる事こそが修司達に求められる解決策だ。
「はい。じゃあこの話はおしまい！　後はあの子達自身に任せるとして、私達は私達に出来ることをしよう！」
「ですね。それとＭｒ．バベッジ、新しいお体の調子は如何ですか？」
「ウム、多少違和感は覚えるが概ね問題はない。起動するに問題はな

く、駆動の為の妨げにもならない」
　マシュが見上げた先にいるのは五メートルは優に超える巨人、武骨且つ重厚なその姿はまさにスーパーロボットのそれだ。所々バリッた要素に加え、膝に当たる部分にはドリルが備えられている。どこぞの魔神皇帝と勇者王を足したそのフォルムにカルデアスタッフの男性一同（特にムニエル）はスタンディングオベーションをする程に喝采を上げている。
「このロンドンでは停止したヘルタースケルターが腐るほど手に入るからな。素材には困らなかったよ、動力も魔力だからこの霧を吸い込む形で回収すれば実質エネルギー問題は無いも同然だし、そこだけ気を付ければ後は大した問題じゃなかったよ」
「口で言うほど簡単な問題じゃないのだがなぁ、何故私の近くにいる奴はどいつもこいつも……」
「だ、大丈夫ですかエルメロイ先生」
「因みにコンセプトは《僕らの蒸気王！》だ。割りと自信作なんだぜ？」
　さらりと科学と魔術の融合をやってのけた修司にエルメロイを含めた常識あるカルデアの面々は頭を抱えた。
「貴殿には感謝しなければならんな。私をアングルボダから解放してくれただけでなく、この様な新たな手足まで授けてくれた」
「礼ならダ・ヴィンチちゃんに言ってくれ、あの人の助言もあって此処まで上手くできたんだ。そうでなきゃ、もっと時間が掛かったと思うからさ」
　修司の手によって文字通り改造されたチャールズ＝バベッジ、新たな機能が搭載された手足に加え、自分をこれ迄縛ってきたアングルボダから解放された事で彼の意識は完全に自分のものへ取り戻している。確かにアングルボダなる蒸気機関の介入部分を指摘したのはダ・ヴィンチという万能の天才だが、それを見つけて即座に対応してやり遂げる修司もまた天才的だった。
　本人に自覚が無いようだが、この白河修司という男は機械に対して恐ろしい程の知識を持っている。自分の腕に取り付けた技術の数々

等を本人は大したものではないと語っているが、幾らヘルタースケルターが自分の宝具から生み出されたモノとはいえ、ここまで応用的に利用されるのはバベッジ本人も考えてなかった。
しかも工具もなしにである。多少エルメロイ達キャスター組から魔術の手を借りたとは言え、基本的に修司は素手だけで自身の改修を行っている。拾ってきたヘルタースケルターを紙屑のように素手で引き裂く様は蒸気機械である自分が寒気を覚えるほどに凄まじかった。
本人はこれを手先が器用だからと特に誇っている様子はないが、明らかに器用という範疇を超えている。黙々と作業を行っている修司にバベッジは説明を求めたが、返ってくるのは楽しみにしていろという言葉のみ。されるがままだったバベッジとしては完成までの合間気が気でなかった。
結果として、自我は取り戻したし、ヴィクターの娘とも話が出来た。バベッジにとって最上の結果ではあるが、心なしか素直に認めるのはやや抵抗があった。
「――白河修司、改めて貴殿に礼を言おう。貴殿の助力のお陰で私は私を取り戻す事が出来た」
「……コンピューターの父に言われると、流石に照れるな」
「それはそれとして、今後貴殿は色々と学んだ方がいいな。特に倫理観辺りを」
「え？」
しかし、それはそれとしてバベッジは修司に苦言を呈した。もっと周りを見てくれと、もっと周囲の事を察しろと。自分の起こした行動とその結果による影響をもっと鑑みた方がいい。と、示唆したつもりなのだが。
「あー、やっぱりヘルタースケルターを目の前で解体するのはちょっと不味かったかな？　悪かったよ、でも状況も状況だ。そこら辺は目を瞑ってくれると助かる」
「う、うむ……」
（分かってねぇな）

（絶対分かってないだろコイツ）
（そう言うことじゃないんですがなぁ）
（反省はするんだよなぁ）
　本当は理解して欲しいところは別にあるが、それでも素直に謝罪してくる修司にバベッジは何も言えなくなった。そもそも自分はサーヴァントで本来であれば倒される運命にあった存在、それをこうして生き延び、修司という現代人のお陰で新たな体と力を得る事が出来た。
　幾ら人理に刻まれたサーヴァントと言えど、良心もあれば罪悪感もある。修司に対して大きな恩のあるバベッジがそれ以上彼に強く物言いする事は出来なかった。
「さて、そろそろ目的の場所だ。バベッジさん、合ってますよね？」
「あ、あぁ。間違いない。そこの地下鉄への入り口を降りてその先にアングルボダのある更なる地下へ続く空洞がある」
　バベッジが指差す地下鉄へ続く階段、その先に今回の特異点の元凶があると知ったカルデア一行はジキルとフランをアパルメントに置いて第四特異点最後の戦いに向かおうとしていたのである。
　これで今回の特異点を終わらせる。体に力を入れていざ決戦の地へ向かおうとしていたその時、白衣の錬金術師が一行の前に立ち塞がった。
「やはり来たか。マキリ計画の首謀者の一人、〝P〟とやら」
「はい。改めて名乗りましょう。我が名はヴァン＝ホーエンハイム＝パラケルスス。人理に仇なし、人類に敵対した錬金術師。貴方達を屠る者です」
「ほう？　口上が上手いじゃねぇか優男。だったら、望み通りにその首をはねてやるよ」
　これ迄姿を消していた〝P〟の登場にバベッジの言う敵の本拠地が間違いないことであると一行は確信する。出てきたなら好都合だと剣を握る手に力を強めてモードレッドが前に出ようとした時。
「待たれよ反逆の騎士、ここは私に任せて欲しい。貴公はこの先に待つ今回の首謀者の討伐を頼みたい」

「んじゃ、俺も残るよ。バベッジさんの体を改造した手前、俺にはそれを間近で見届ける義務がある。マキリの野郎をブチのめせないのは残念だが、それはモードレッドに譲るよ」
「あぁ？　ったく、しょうがねぇな。なら、ここは任せたぞ」
　バベッジと修司が残ると言い出し、立香達に元凶への対処を頼み込む。マシュも立香もこれ迄の戦いで成長しているし、ロマニ達カルデアのスタッフもサポートしてくれる。
　先の特異点を経て自分達は確実に強くなっている。力も、繋がりも、心の持ちようも。だから修司も託せる。元凶であるマキリを倒しこの特異点を収束してくれる事を。
「分かった。行こう皆！」
「了解です！　修司さんもどうかお気をつけて」
「我輩も当然お供しますぞ。因みにアンデルセン殿は如何いたします？」
「分かりきった事を聞くな。誰がわざわざ暴走機構（やらかし）の側にいたいものかよ。俺は喩えどんなことがあろうとも、猪騎士に寄生してやるさ！」
「本当に質が悪いなお前ら!?」
「失敬な！　一番質が悪いのは修司殿でありましょう!?」
「そうだそうだ！　俺達はまだマシな部類だぞ」
「あれ？　なんで俺がディスられてるの？」
　決戦の前だというのに和気藹々とした雰囲気のまま的本拠地へ乗り込む立香達を見送り、改めて修司とバベッジは〝P〟改めパラケルススへ向き直る。
「良いですね。仲良き事はそれだけで美しいものです。あぁ、願わくば私もその輝きに肖りたかった」
「……分からねぇな。どうして其処まで人類に共感できているお前がワザワザ俺達と敵対する道を選ぶ。お前の言っている言葉に嘘はない、だからこそ気になる。お前はどうして其処までして人理焼却の黒幕に加担する」
「……」

騒ぎながら地下へと攻めいる立香達を微笑ましいと語るパラケルスス、そんな彼に修司は微かな違和感を感じた。確かにこの男はこの特異点に於いて人類と敵対する道を選んだ。切り裂きジャックやメフィストの様な危険なサーヴァント、他にもホムンクルスや自動人形、そしてヘルタースケルターといった人を殺すシステムを霧と同じくロンドンの街を覆い尽くした。

彼の行いは悪逆そのもの、そこにどんな背景や事情があろうとも修司は許すつもりはない。ただ、何となく気になったのだ。パラケルススという錬金術師は悪逆を成しながらも人の営みを肯定する器の広さがある。そんな彼が　人理焼却に加担するほど人類に恨みを持っているとは到底思えなかったからだ。

「答えられないか？」

「……そうですね。こればかりは相対した者でなければ分かりません。理由はどうあれ、私達は頷いた。頷いてしまったのです。彼の王に」

「王だと？」

パラケルススの口から溢れた『王』という単語に修司は眉を寄せて心当たりのある人物を探し当てようとする。騎士王や征服王は論外として英雄王ことギルガメッシュ王も今は心強いカルデアの味方であることから除外、どれだけ悩んでも出てこない黒幕にヤキモキしていると、周囲に相当な数のホムンクルスが囲んでいた事に気付く。

「修司、考えるのは其処までにしよう。既に戦いは奴のペースとなっている」

「どうやら、その様だな」

周囲を埋め尽くすほどの数だというのに二人に焦りの様子はない。何故なら二人は既に物量の差を覆すほどの戦闘能力を有しているからだ。

「俺が本丸を狙う。ババッジさんは他の奴等を頼んだ」

「承知した！」

瞬間、ババッジの体から蒸気が噴出し、ギュボォンと赤いモノアイが光り出す。

「穿て必中――ドリルニー！」
蒸気の力で膝に着いたドリルを回転させ、ホムンクルスの群れを粉砕していく。その圧巻的な光景に修司は満足そうに親指を立てた。
「さて、それじゃあこっちも始めるか。立香ちゃん達に負けないよう、俺も頑張らないとなぁ！」
修司も負けじと白い炎を纏う。自分の相手は稀代の錬金術師パラケルスス、油断はしないと気持ちを固め、修司は彼を守るホムンクルスの群れに突貫していく。

◇

「――まぁ、こんなものだよな」
そして、戦いは呆気ないほどに直ぐに終わった。ホムンクルスも自動人形も、修司にとって敵になり得る事はなく、並のサーヴァントが正面から彼に打ち克てる事など有り得なかった。
既にパラケルススは胸元を拳の形で大きく抉られている。霊核が砕かれた彼にこれ以上の現界に耐えられる道理はなく、マキリ計画の首謀者の一人は自身の持つ魔術の全てが修司の拳の前に破れ去っていった。
「流石にあのヘラクレス程ではなかったか。まぁ、出てきたら出てきたで困るけどな。流石にあんなのが出てきたら街が更地になっちまう」
周囲のホムンクルスも片付け、静けさを取り戻したロンドンの街。バベッジの方も無事であることを確認し、あとは地下にいる立香達だ

け。
先程から起きている地下からの振動の事もある、急いで自分も追い掛けよう。地下への出入り口の守りをバベッジに任せ、修司も急いで立香達に合流しようとした時。
地下から凄まじい程の雷が顕れる。出入り口を吹き飛ばし、周囲に撒き散らす雷の奔流に修司は驚き腕を交差させる。
何が起きた。吹き飛んだ地下鉄への入り口が吹き飛ばされ、空洞と化した地下への出入り口。警戒しながら見据える修司の前に現れたのは電雷を纏う一人の偉丈夫だった。
「おっと、済まないな。少しばかり加減が出来ないようだ」
「……誰だ。アンタは」
「人に名を訊ねる時は先ず自分から、等と言うが。私はそうは思わない。何故ならわたしは――――ニコラ＝テスラなのだから！」
「っ!?」
ニコラ＝テスラ。そう名乗る偉丈夫のサーヴァントに修司は衝撃を受けた。彼の名前が事実だとするならば、彼は修司にとってあの発明王と並んで尊敬して止まない人物なのだから。
電磁の碩学者が目の前にいる。本当なら此処で頭を垂れてでも教えを乞いたい所だが、今の自分にはやるべき事がある。心の底から沸き上がる欲求に堪えながら、修司は手を握り締めて拳に変える。
「俺の名は白河修司。ニコラさん、アンタは此処へ来る途中マスターの女の子を見掛けなかったか？」
「ふむ。赤みの帯びた髪の少女の事かね？　彼女なら見たともさ。あぁしかし勘違いはしないでくれ。確かに私は連中の手によって召喚され、〝そうあるべき〟に生み出された存在だが、最低限の人道は弁えている。意味もなく乙女を傷付ける事はしないさ」
恐らく、マキリが狙っていたサーヴァントはこの電磁の碩学者だったのだろう。彼の体から迸る電流は凄まじく、今も地面を焼いている。
しかし、迸る電流と異なりその人格は何処までも尊大で、それでいて紳士的だった。自分が人類の敵対者に召喚されたというのに、ニコ

ラ＝テスラはそれを受け入れ、倒されるべき悪だという事も認識している。
　言葉を交わしたのは僅か、それでも分かってしまう器の大きさ。修司はそんな彼の尊大さに敬意を抱き、最大の礼儀として全力で戦うことを決めた。
「……行くぞ、電磁の碩学者。アンタを止めてこの特異点を終わらせてやる！」
「ほう！　さっきの騎士は赤雷を操るが、君は赤い炎を纏うのか！　素晴らしい！　やはり人類とは可能性に満ちているのだな！」
　まるで子供のようにはしゃぐ偉大な碩学者に修司は笑みを溢し、電雷迸る人類の先達者に拳を見舞うのだった。
　ぶつかる電雷と赤い炎、その背後には――――。
「えっと、私、出番あるんですかね？　これ」
　とある狐の良妻賢母（自称）が、物陰に隠れて様子を見ていた。

その59　第四特異点

――――雷が迸る。霧に覆われていたロンドンの街に蒼き蒼雷が凪ぎ払い、周囲の建物を砕きながら一人の男に向かって波打ちながら迫ってくる。

その男――――白河修司は自身に深紅の炎を纏わせ、頭上へ向けて拳を振り抜いた。瞬間、巻き上がる暴風が荒れ狂う蒼雷を巻き込み、ロンドンの上空へ吹き飛ばす。

そして、霧で覆われたロンドンに三度の晴天が姿を見せた。時間帯は既に夜の時刻であり、霧を含めたロンドンの空を覆っていた不純物の全てを吹き飛ばした事で目映い星々の夜空が修司達を照らし出す。

「ふはははは！　我が雷電を拳の一振りで凪ぎ払うか！　なんという凄まじい膂力、本当に人間かね？　実は何れかの神話に属する半神だったり？」

「生憎、純度１００％の只人だよ俺は。……それはそれとしてニコラさん、どうやってもロンドンを滅ぼさないとダメなのか？」

ニコラ＝テスラ。それは神々の神業とされてきた雷を解明し、神から人の手へと繋ぎ渡した星の開拓者の一人。人類の科学技術に大いなる貢献をもたらしたエジソンやライト兄弟に並ぶ偉大なる先人であり、修司が尊敬して止まない人物である。

そんな彼と人類の存亡を賭けて戦う事になるなんて思いもしなかった。

「うむ。先にも言ったが、今の私はそうあれと望まれて生み出された存在だ。喩え泣いて懇願されようとも、今の私は聞き入れず人理焼却に加担するだろう。誠に遺憾だがね」

「――――そうか、なら。仕方ないか」

「名も知らない青年よ。その反応からして私に何か言いたいことがあるのではないかね？　戦いの手を止める事は出来ないが、話を聞くだけの器量はあるつもりだ」

言いながら、ニコラは更なる雷を修司に向けて撃ち放つ。迸る雷、地を抉り建物を破砕しながら押し寄せる蒼雷の波を修司は両手を交差して受け止める。
「修司！」
尋常ならざる電流と熱、石造りの道路を溶解させるほどの熱量にバベッジは盾になろうと駆け出すが、拡散する電熱に阻まれ押し戻されてしまう。
ならばとバベッジは自らの胸部装甲に熱を入れ始める。白河修司の手によって新たに加えられた武装、これならば電熱も吹き飛ばしてニコラに一撃が叩き込める。
だが、そんな彼を止めたのは他ならぬ修司だった。
「バベッジさん。コイツの相手は俺がする。アンタは街に被害が出ないようにしてくれ」
「しかし！」
「頼む、この人は……俺が絶対に倒すから」
「〜〜っ！　ええい！　仕方のない奴め！」
修司に言われ、戦闘の介入よりも戦闘の余波による被害を食い止める事を選んだバベッジは蒸気を噴出し熱を放出し、宙を舞う。修司が施した機構の一つ、蒸気による加速である。電熱に引火し、燃え始めている家屋の鎮火に向かったとされるバベッジを確認して、修司は改めて力を解放する。
赤い炎をより滾らせ、受け止めていた蒼雷をはね除ける。戦う者の目となった修司にニコラ＝テスラは息を呑んだ。
「……ニコラさん」
「……何かな？」
「俺、貴方の事を尊敬しています。アンタがいたから人類は電気の力を獲得した。貴方が頑張って、踏ん張ってきたから、人類は飛躍的な成長を遂げられた」
「……」
「だから、倒すよ。アンタという偉大な男に人類の未来を潰させはしない」

英雄王を除いて、修司が真に尊敬する人物。ニコラ＝テスラ、そんな彼を人理焼却の加担者にさせはしない、黒幕達の思い通りにはさせない。何故なら彼は人類の可能性を何処までも信じて疑いはしないのだから。

そんな修司の眼差しに天才は笑う。大きく、高らかに。

「ハハハハハ！　成る程、では見せてくれ！　君の可能性を、君の輝きを！」

瞬間、ニコラ＝テスラは空を飛んだ。電磁の応用、空中に電磁波による力場を造り、あたかも空中に佇んでいる雷電博士に修司も跳躍して追い縋る。

しかし、それはニコラ＝テスラの罠だった。空へ逃げる自分に街の被害を気にしていた修司なら必ず追ってくるだろうという彼の確信した策略、空中に出れば修司に逃げ場はない。故にニコラ＝テスラも自身の宝具を最大出力で放つことが出来た。

「神の雷霆は此処にある。さぁ、ご覧にいれよう！　人類神話・雷電降臨!!」

ロンドン全土を覆う雷鳴。彼を中心に雷が円環を描き、その直後に空を裂き、霧を蹴散らして轟いて空間そのものを蹂躙していく。迫り来る轟雷に修司は右手を強く握り締めて真っ正面から受けて立つ。

握り締めた拳に更に力を込めて、可動域限界まで腕を伸ばす。空いた左手は照準を合わせように掌の形でニコラ＝テスラに向けていた。

雷が修司の体を呑み込んでいく。全身に伝わる痺れと痛み、そして熱さ。これが人類を一つの段階へ踏み込ませた男の一撃だと、身を以て知りながら。

「火拳銃（レッドホーク）!!」

修司は拳を振り抜いた。赤く燃える炎を拳に宿し、自身を呑み込んでいた轟雷ごとニコラ＝テスラを撃ち抜いた。炎と衝撃に霊核を貫かれ、一撃で戦闘不能となったニコラ＝テスラはそれでも尚笑みを絶やさない。

何せ、彼は目撃したのだから。彼自身の語る人類神話、絵空事だと

一笑されるその物語を体現したかのような存在と巡り会うことが出来たのだから。
「……ありがとう」
魔術師に言い様に操られた自分を倒してくれた事、人理焼却を阻んでくれた事、自分に――――未来を示してくれた事。本来であればもっと別の形で自分を倒せた筈なのに、敢えて此方の土俵に立ってたたかってくれた修司に万感の思いを込めて、ニコラ＝テスラはそう言い残して消えていった。
「ありがとう、か。それは、此方の台詞だよ。雷電博士」
いつかカルデアに来てくれたら話をしよう。そんな想いを抱きながら白河修司は消え行く偉大な雷電博士を見送った。
「修司さん、無事!?」
「あの雷親父、何処へ行きやがった！」
そしてニコラ＝テスラの消滅を確認し、修司がロンドンの地へ着地するのと立香達が地上に戻ってくるのは同時だった。
周囲を見渡し、地下へ突入する時とは違う霧の晴れたロンドンの街並みにここで戦いがあったと察した立香は近くに佇む修司を見ると、所々焼け焦げてはいるものの、彼の五体満足で元気でいるのを確認すると急ぎ足で駆け寄ってくる。
「良かった修司さん、無事だったんだね！」
「あぁ、どうにかな。ちょっと痺れるけど……まぁ、見ての通りさ」
「おいおい立香、そいつがそこらのサーヴァントに負けるわけが無いってのはお前が一番分かっている事だろう？　心配なんて無用の長物だろうが」
「いや、そうかもしれないけどさ、やっぱり心配しちゃうよ」
「ですね。其所が先輩の良い所だと、私は思います」
修司がいてニコラ＝テスラがいない。戦闘のあった形跡といい、ここで二人が戦い、そして修司が勝利した。モードレッドがその事を察するには状況証拠が揃いすぎていて、自分の獲物が横取りされた気がして反逆の騎士は不服そうに口を尖らせる。
「その様子だとお前が勝ったんだろトンチキ野郎。ったく、人の獲物

を横取りしやがって」
「悪かったな。もう少し早く来てくれたら譲ってやることも出来たんだがな」
　ぐぬぬと悔しさを露にするモードレッドに修司は肩を竦めて返答する。実際、ニコラ＝テスラが地上に出るまでの間、立香達の前には大量のホムンクルスや自動人形が立ち塞がってきて結構な時間を取られたのも事実、地下という限りのある空間で存分に力を奮えなかったモードレッドとしては些か納得のできない決着と言えただろう。
「でも、その様子だとそっちも無事に親玉を仕留められたみたいだな」
「うん」
　修司の言葉に立香は素直に頷いた。地下鉄の更に地下深くに根付いていたマキリ計画の首謀者、マキリ＝ゾォルケン。立香達を地下で待ち伏せていた彼は予定調和の如く聖杯の力によって魔神柱となり、彼女達の敵として立ち塞がった。
　反逆の騎士のモードレッドを筆頭にマシュ、アンデルセンにシェイクスピア、そしてエルメロイⅡ世の五騎のサーヴァントを総動員させて立香達は何とか勝利を得ることが出来た。
　その後にマキリが最後の足掻きとしてニコラ＝テスラを召喚し、ロンドンを破壊させようとしたのがこれ迄の大まかな流れだ。
「良くやったなマシュちゃん、そして立香ちゃん。俺抜きでも充分に君達は生き残り、勝利した。胸を張るといい」
　修司からの心からの称賛に立香は照れ臭そうに頬を掻いた。
「えへへ。あ、そうだ。修司さん、ゾォルケンさんから伝言を預かってるんだけど……」
「伝言？」
「うん。済まなかったって、どういう意味なんだろう？」
　それは立香達に破れたゾォルケンが消滅する前に言い遺した最期の言葉、一体何に対しての謝罪なのだろうか。伝言である事から修司に対しての言葉なのは理解できるが、それ以上の深い意味は立香には理解できない。
　そして、修司の方も特に変わった様子を見せる事なく、「そうか」と

だけ言ってそれ以上この伝言に触れる事はなかった。
『ともあれ、元凶も倒した事だし残るは聖杯を回収するだけだ。皆、手間かかるけどあと少し頑張ろう！』
「あー？　また地下に潜るのかよ。俺嫌なんだけどォ？」
「良いからキリキリ働け猪騎士、お前は突き進むことだけに特化した騎士なんだろう？　怠けた猪なんぞ、唯の的になるだけだぞ？」
「おっとアンデルセン殿、それは言い過ぎですぞ。反逆の騎士モードレッド卿は仮にも円卓に連なる騎士の一人ですからな。猪では些か雅に欠けると言うもの、ここは一つ〝鉄砲玉〟で手を打たれては如何かな？」
「よーし、テメェら其所に直れ。二人仲良く頚を刎ねてカラスの餌にしてやるからよぉ」
「わー！　モーさん、ストップ、ストーップ！」
　ギャーギャーと騒ぐモードレッド達に仕方ないなと修司は苦笑う。ともあれ、これで今回の特異点も終わり、後は聖杯を回収するだけ、という事で。
「そこの人、アンタもサンキューな」
「え？」
「っ!?」
　修司は唐突に背後へ振り返り、路地裏に続く建物の影へと声を掛ける。誰かいるのかと戸惑う立香達、すると観念したのか狐の耳と尻尾を生やしたサーヴァントと思われる女性が現れた。
「あ、アハハハ。バレちゃいましたか」
『サーヴァントの反応が突然現れた!?　ど、どういう事だい!?　此方の策敵を潜り抜けるなんて！』
『恐らくは魔術とは別系統の術による気配遮断の類いのスキルなのだろうね。しかもかなりの使い手と見た』
「修司さん、あの人知り合い？」
「俺がニコラ＝テスラと戦っている間、街に被害が出ないようにフォローしてくれた人だよ。彼の電撃の範囲は結構あったからバベッジさんだけじゃあ負担を掛けすぎたからな。彼女の手助けは正直助

かった、尤も女性とは思わなかったけど」
「それにしたって感知能力高過ぎませんかアナタ。しかし、近年稀に見ぬイケ魂なのに全く惹かれないのはどういう事なのでしょうか？
いえ、私はご主人様一筋なので惹かれる事はありえませんが」
なにやらぶつぶつと呟いている狐耳の女性、その風体からクラスはキャスターである事は何となく理解できて、恐らくは霧によって喚ばれたはぐれサーヴァントなのだろう。
召喚されて間もないのに自己の判断で街を守ることを選択した彼女に立香はこれ迄と同様に対等の相手として接近した。
「街の人達を守ってくれて、ありがとうございます。私は藤丸立香、アナタは……キャスターの人、でいいんですよね？」
「おやおや、これはご丁寧に。はい、私キャスターの玉藻と申す者でしがない呪術師でございます。むむ、この御方もご立派なイケ魂の持ち主。女性であるのが惜しまれますねぇ」
「？」
立香の偽りのない態度に心を赦したのか、差し出された手を玉藻は迷いなく掴み、柔らかく握った。それを切っ掛けに和気藹々と語り出す彼女達を尻目に修司はふと空を見上げると、渦巻き始めた空模様に眉を寄せる。
そしてそれに気付いたのは修司だけでなく、アンデルセンもまた不可解な現象を前に表情を強張らせている。
「おい、何か来るぞ」
「アンデルセン殿？」
アンデルセンが察知したのは何か、それを追求する間もなく……それは現れた。吹き荒ぶ暴風、空を暗雲で覆い尽くし、雷が巻き起こる中で荒馬の嘶きが響き渡った。
嵐の中に佇む一騎、それは大きな黒い槍を携え、修司達を見下ろしている。
黒い荒馬、黒い槍、そして身に纏う黒い鎧。何もかもを黒に染め上げたその騎士、兜が開き相貌が明らかになると、その顔付きに立香達は戦慄した。

「ウソ、あれって……」
「信じられません。ですが、確かに面影があります！」
「あぁ、間違いない。アレはアーサー王の成体、聖剣の呪縛から解放された騎士王の姿だ！」
「父上！」
吹き荒れる魔力の嵐、その中心に佇む嵐の王に立香達は驚く一方で。
「よし、取り敢えず槍（アレ）、折ろうか」
凄まじい敵意と殺意が騎士王の成体から向けられる中、修司だけはポキポキを拳を鳴らし、エルメロイⅡ世は全力で聞かなかったフリをした。

その６０　第四特異点

ドス黒い魔力と鎧、そして槍を携えて漆黒の荒馬に跨がるサーヴァント。迸る魔力は嵐となってロンドンの街に吹き荒れる。

その姿は騎士王というより嵐の王（ワイルドハント）、嵐を従えて此方を見下ろす騎士の王は身に纏う魔力に見合った殺意と敵意に満ちていた。

『修司君、立香ちゃん、マシュ。向こうはやる気だ。どうか凌いでくれ！』

通信を通してロマニの口から出てくるのは具体性も何もないモノ、しかし彼がそう言うのも仕方がなかった。相手は冬木の特異点でも戦ったアーサー王、その成体だ。観測している魔力量からみても魔神柱以上の強さなのは明白、既に一度地下で大立回りをしたきた立香達にとってこの連戦はかなりの負荷になっている筈だ。

疲弊も疲労も承知の上、それでも戦う事を選ぶしかない立香達にロマニが言えることはそれしかなかった。自身の無力さを痛感しながら、それでもどうにか手助けできないかとカルデアのスタッフ一同が総力を挙げて解析に勤しむ。

そんな中、騎士王は動いた。槍に魔力を集め、馬の手綱を引いて突進してくる。騎士王と同様に黒い馬を操り、その馬力を以て突撃（チャージ）を仕掛けてくる。

立香達が身構え、キャスター達が魔術を施し、修司が跳躍して迎え撃とうと――――するよりも速く、赤雷が黒き騎士王に肉薄する。

「父上、覚悟ォーッ!!」

「モーさん!?」

反逆の騎士モードレッド。アーサー王に反旗を翻し、最期は騎士王に討たれたアーサー王伝説に終幕を飾った者、そんな騎士が単身で騎士王に挑んだ。

振り下ろされる大剣クラレント。王の宝物庫から強奪し、アーサー王に致命傷を負わせた剣、モードレッドとクラレントの二つは騎士王に対して特効とも言える力を秘めていた。

しかし、そんな反逆の騎士の猛威も長くは続かなかった。槍に阻まれ、嵐のごとく吹き荒れる魔力に防がれてしまう。モードレッド自身も魔力を込めるが、騎士王の保有する魔力量が桁違いなのか、モードレッドの纏う赤雷はアーサー王の暴風によってモードレッドごと吹き飛ばしてしまう。

吹き飛ばされるモードレッドが地面に激突する寸前、白い炎を纏った修司が間一髪抱き止めるが、魔力の暴風によって切り刻まれたモードレッドの鎧はあちこちに亀裂が入っており、自身も相当なダメージを負っていた。

「かは、クソ。父上め、姿は変わっても容赦ねぇ」

「モーさん、大丈夫!?」

修司に抱えられたモードレッドに立香が駆け寄り、礼装による回復の魔術を施す。しかし、壊れた鎧までは修復出来なかったのか、モードレッドの鎧はパラパラと音を立てて崩れていく。

騎士王は……未だに空の上に佇んでいる。交戦したのにも関わらず、沈黙を保ったままのアーサー王。モードレッドを警戒して近付いてこないのか、それとも敵とすら認識していないのか。

「モードレッド、やれるな」

「ハッ、当たり前だ」

どちらにせよ、モードレッドはまだ折れてはいない。騎士王がどういう理屈で空を飛んでいるのかは分からないが、それならそれで戦い方はある。重苦しい鎧から解放されたモードレッドを横に置いて修司は気を解放する。

「修司さん、私は屋根に上りバベッジさん達と共に建物への被害を食い止めます!」

「だから、頑張って!」

「あぁ、行ってくる」

マシュと立香からの激励を受け取り、修司とモードレッドは走り出す。

決め手になるのは、モードレッドだ。その逸話から、その伝承からモードレッド自身がアーサー王に対する特効兵器と言えた。あの暴

走する嵐の王を征するには反逆の騎士が必要だと修司は直感で理解した。
　黒い槍の騎士王から嵐が吹き荒れる。雷鳴が轟き、街に降り注ぐが、予め待機していたマシュがその盾を以て防いでいく。更に離れた所では、バベッジが左手のバリアフィールドで落雷を霧散させていく。
「みこーん!?　なんなんですかこの雷の雨はァ!?　借りにも太陽に属する私への嫌がらせ!?」
「騒ぐ暇があったら貴様も手伝え真っ黒女狐！　俺はもう先の戦いでボドボドだ。あぁイヤだイヤだ！　風呂に入って寝たい！」
「我輩も、体育会系はほとほと合わない質でして……エルメロイ氏、おんぶしては戴けませんか？」
「よしわかった。なら今すぐ修司を呼んで抱えてもらおう。喜ぶといい劇場大作家、お前の望む景色が特等席で観られるぞ」
「よーし！　我輩頑張るぞー！」
　遠くからギャイギャイ騒ぐキャスター組もまだまだ元気そうだ。とは言え、これ以上手間を掛けるつもりはない。屋根を伝って駆け、モードレッドと修司はそれぞれ赤い雷と炎を纏う。
　そして騎士王の足下まで迫った直後、同時に脚に力を入れて跳躍。速度はやや修司が上、彼の背中に重ねるように空へ上がったモードレッドはクラレントに魔力を送る。
「聖槍、抜錨」
　瞬間、騎士王の魔力が爆発的に膨れ上がった。
「突き立て、喰らえ！　十三の牙！」
　その時、槍に刺さっていた棘が消えていく。……否、あの棘は文字通り拘束だったのだ。これから放たれる膨大な魔力の渦を解き放つための――――。
「最果てにて輝ける槍（ロンゴミニアド）!!」
　嵐――――というより、濁流に近い魔力の放出。このタイミングで避けるのは不可能だと後ろにいるモードレッドを察して判断した修司は急遽、左手を手刀に変えて力を込める。

「エクス……カリバー！」
瞬間、修司は騎士王の闇色の嵐を光輝く一刀で切り裂いた。エクスカリバー。そう言い放つ修司にモードレッドは一瞬だけ戸惑うも、やはりデタラメな奴だと笑って受け入れた。
そして、騎士王との間合いが詰められる。今度は此方の番だと、修司が右の拳に力を入れて振り抜くが……それを読んでいた黒い騎士王が修司の拳に目掛けて槍を振り放つ。
ぶつかり合う拳と槍、常識で考えれば修司の拳は腕ごと貫かれ、彼の四肢の一つが吹き飛ぶと言う凄惨な末路が待っている。
だが、生憎と白河修司という男は並の人間の常識の範疇に収まらない。偉大なる黄金の王に認められ、多くの縁と出会ってきた事で理不尽に抗う術を得た。
修司は迷わない。そもそもな話、先の特異点でヘラクレスの持っていた神剣の方が手応えは遥かに堅かった。
故に――――。
「二重の極み!!」
白河修司が、人理焼却の担い手として召喚されたアルトリア（理不尽）に負ける道理はなかった。
槍が砕かれる。ガラス細工の様に、尖端から塵となる自身の槍に騎士王が大きく目を見開いた瞬間。
「受けろ騎士王！　我が麗しき父（クラレント・ブラッド・アーサー）への反逆!!」
修司と入れ違いに現れるモードレッドの一撃によって、黒い騎士王は霊核ごと両断されるのだった。

◇

「悪かったなモードレッド、また父親殺しをさせちまって」
ロンドンで引き起こされてきた異変。その悉くを解決し、最後の敵であった騎士王を倒したカルデア一行はアングルボダに接続していたとされる聖杯の回収の為に、大きさ故に置いていくしかなかったバベッジに別れを告げ、修司達を連れて再び地下洞窟へと向かっていた。
その道中、再び父親を殺す事になってしまったモードレッドに修司は謝罪する。生前、モードレッドとアーサー王の間にどの様なやり取りがあったのかは定かではないが、仮にも父と呼んでいる人に手を掛けさせてしまった事に修司は少なからず罪悪感を抱いていた。
そんな修司にモードレッドは鼻で笑って突き返す。
「ハッ、ンな事気にする必要ないだろうが。俺はモードレッドだ。アーサー王に反逆し、その全てを台無しにした愚か者だ。そう人類史に刻んだのが俺だ。同情なんて、するんじゃねぇよ」
「そっか。なら、ここはありがとうが正解だったかな」
モードレッドはアーサー王に反逆し、一つの物語を終わらせた一種の舞台装置。アーサー王という超級のサーヴァントの対抗馬でありカウンター、自らの役割をそう結論付けるモードレッドは修司の同情を無用なものだと一蹴する。
そんなモードレッドに修司は今度は礼を言い始めた。相変わらずムカつく野郎だと、内心で罵倒しながらも。
「へっ」
それでも、悪い気分ではなかった。誰かに感謝されるなんていつ以来だろう。そんな事を考えながらモードレッドは歩き続けた。
そして、大分地下深くへと進んだ先でそれはあった。大きな空間だ。嘗て冬木の大聖杯のあった場所と同じか、或いはそれ以上の巨大空間。その空間の中央部にはアングルボダと思われる蒸気機関が一定のリズムを刻みながら稼働している。
「あれが、アングルボダか」
「みてぇだな。さて、そんじゃあ後はあの中にある聖杯を回収したら

終わりだ。お疲れさん、お前達のお陰であれこれ助かったぜ。ロンディニウムは救われた。俺以外の誰かに蹂躙される事はなかった。めでたし、めでたしだ」
「ふぅ、やれやれ。どうにかこうにかやりきったか。キャスターのお歴々には迷惑をかけてしまったな」
「全くだ。だが、まぁ言うほど酷いモノではなかったな。ハチャメチャな展開ではあったが、それならそれで読み手に飽きさせない内容になるからな」

「くっ、なんという事か。言いたいことや文句は腐るほどあるというのに、それを言わせない圧倒的な展開に我輩の創作意欲がドッパドッパに溢れて止まらないとは、これが巷に有名な〝くっ殺〟の境地ですかな?!」
「そこの変態紳士は兎も角として、私はあのビリビリ博士の抑止枠で召喚されただけみたいですし、皆様ほど苦労はしていないんですがねぇ。まぁ、貰えるモノは何でも戴くのは節約上手な賢母の必須スキルですので、有り難く戴くとしましょう」
『ははは。何だか騒がしくなってきたね。事件も解決したし、大団円には相応しいかな』
「だね。今回の修司さんは大きな怪我もしてないし、服も破れてない。ある意味今回の特異点は完全勝利とも言えちゃうかも」
「立香さんや、人を露出魔みたいに言うの止めてくれない? 違うから、服が破けたのは戦いの余波によるもので、自ら進んで脱いだ訳じゃないから!」
「だ、大丈夫ですよ修司さん。先輩も私も、そこら辺はちゃんと分かっていますので!」
「慰めが辛ァい!」
　元凶であるマキリを倒し、暴走状態の騎士王という厄災を退け、遂に第四特異点の修復も完了目前となった。あとは聖杯を回収すれば今回のレイシフトも無事に完了する。その前に僅かな歓談を楽しんでいる立香達を微笑ましく見守っていると、ふとロマンはある異変に

気付く。
『待って、なんだこの反応は……!?』
「ドクター?」
『みんな気を付けて！　地下空間の一部が歪んでいる！　何かがそこへ出現するぞ！　サーヴァントの現界とも異なる不明の現象だ！』
「「「っ!?」」」
『不明？　いや、これは寧ろレイシフトに似てる……のか？　けど、そんな筈はないぞ、カルデア以外にこの技術は……！』
　瞬間、ロマニの映像化通信が切られてしまう。突然の異常事態にざわつく一行、警戒を最大にしながら周囲を見渡すと、マシュが口を開いた。
「……先輩、ヘンです。何も異常はないのに、寒気が――――凄くて――――」
「ど、どうしたのマシュ!?　もしかして風邪!?」
「いや、違うぜ立香ちゃん。このプレッシャーは多分……大物だ」
　自分を抱き締めながら真っ青な表情で震えるマシュに立香が駆け寄っていく。他のサーヴァント達も似たような反応で、気配を察知した修司もまた一粒の冷や汗を流していた。
『空間が開く！　来るぞ！』
　そして、音声のみとなったロマニからそう告げるのと同時に――――それは現れた。
　それは、濃厚な敵意。
　それは、濃密な殺意。
　この世のありとあらゆるものに軽蔑と侮蔑を抱き、嘲笑う悪意の化身。
　それは、開かれた空間から現れる。
「魔元帥ジル＝ド＝レェ。帝国神祖ロムルス。英雄間者イアソン。そして神域碩学ニコラ＝テスラ。多少は使えるかと思ったが――――小間使いすらできぬとは興醒めだ。下らない、実に下らない、やはり人間は、時代を重ねるごとに劣化する」
『クソ、シバが安定しない、音声しか拾えない！　どうした、何が起き

たんだマシュ!?』
「わ、分かりません。何か、人のような影がいて……」
「マシュ殿、どうかお下がりを。あれは厄に厄を重ねたモノ、ぶっちゃけ悪魔みたいなものです。あなた様のような純粋な方には、些か刺激が強すぎるかと」
　現れる人影、それを直視してはならないと玉藻がマシュの前に立つ。
「――――オイ、なんだこのふざけた魔力は。竜種どころじゃねぇぞ。これは、まるで――――」
「玉藻殿は悪魔と仰ったが、それですら足りますまい。圧倒的な魔力、いるだけで場を制圧する支配力。まさに神！　或いは、それに比肩する存在なのだと、我輩理解しましたぞ！」
「どうしてお前はいちいち大袈裟なんだ。だが、たしかにそうだ。まさかここへ来て本命が出てくるとはな」
　本命。アンデルセンの溢した一言に修司は全てを理解した。彼の言う本命とは言葉の意味、それは人理焼却という舞台の奥底にいる黒幕という意味。
　理解した。あぁ、理解したとも。今、自分達を高みの見物気分で現れた者、ソイツこそが人理首謀者の黒幕にして実行犯なのだと。
「声だけの者、成る程。カルデアは時間軸から外れたが故、誰も見付ける事の出来ない拠点となった。あらゆる未来――――全てを見通す我が眼ですら、カルデアを観る事は難しい。だからこそ生き延びている。無様にも。無惨にも。無益にも。決定した滅びの歴史を受け入れず、いまだ無の大海に漂う哀れな船。それがお前達カルデアであり、藤丸立香という個体。燃え尽きた人類史に残った染み。私の事業に残った、私に逆らう愚者の名か」
「……随分と好き勝手宣ってくれたな。ご託を並べるのがお前の得意技か？　成る程、それならばあのレフが無駄に饒舌なのも納得できるな」
「吼えるな。白河修司、たかがサーヴァントを倒せる程度で、私と比肩できると思ったか？」

影が形を成していく。人の形からより鮮明なモノへと変化する度に場の空気は重くなる。
「貴方が、レフの言っていた王なの!?」
そんな空気を振り切って立香は声を張り上げる。そして、そんな彼女の勇気を嘲笑うかのように、その男は語り出す。
「なんだ。既に理解していると思っていたが、よもや其処まで蒙昧な猿だったとはな。いいぞ、その無様は気に入った。故に教えてやるとしよう」
「我は貴様らが目指す到達点。七十二柱の魔神を従え、玉座より人類を滅ぼすもの。名をソロモン。数多無像の英霊ども、その頂点に立つ七つの冠位の一角と知れ」
ソロモン。遂に明るみに出た黒幕の正体、それは紀元前１０世紀に存在したとされる古代イスラエルの王。約三千年も昔の王が立香達の前に現れた。
「ハッ、そいつはまたビッグネームじゃねぇか。するってーとなんだ？　テメェもサーヴァントな訳か？　英霊として召喚され、二度目の生とやらで人類滅亡を始めたオチか？」
「それは違うなロンディニウムの騎士よ。確かに私は英霊だが、人間に召喚される事はない」
「――なんだと？」
「貴様ら無能と同じ尺度で考えるな。私は死後、自らの力で蘇り、英霊に昇華した。英霊でありながら生者である。故に、私の上に立つマスターなど存在しない」
「私は私のまま、私の意思でこの事業を開始した。愚かな歴史を続ける塵芥――この宇宙で唯一にして最大の無駄である、お前たち人類を一掃する為に――」
「うるせぇ」
「む？」
「し、修司さん？」
「お前がどんなに大層な大義があって、どんな手段を用いたのか興味がねぇ。俺が聞きたいのは唯一つ、――何で、こんなことをした

？」
人理焼却が行われて、全てが焼き尽くされて、帰る家も、人も、世界ごと奪われた立香達。そんな中で修司が気になっていたのは黒幕の手段ではなく、理由だった。
何故、人類は滅ばなければならないのか。何故、焼却されなくてはならないのか。どれだけ思考を重ねても答えは出ず、どれだけ推測しても結論は出なかった。
故に修司は訊ねた。手段や目的ではなく、どうして人理焼却をしなければならなかった、その理由を。
「くは、クハハハハハ！　理由？　理由だと!?　愚か、あまりにも愚か！　やはりどれだけ力は強くても所詮は猿！　バカに付ける薬はないとはこの事か！」
「……」
「何故人類を焼却したかだと？　そんなもの、お前達（人類）が下らないからだろうが！　存在自体が無意味で、生きていることこそが無駄！　だから掃除をしてやったんだろうが!!」
修司の問いにソロモンは喜悦に顔を歪めて嗤った。ゲラゲラと、下品に、何処までも此方を侮蔑しきっていた。
「あぁ、そう言えばお前の世界も燃えたのだったなぁ。いやはや、まさか近しい世界だったというだけで焼却されるとは、お前も存外運がない。ギャハハハハハ」
「――――」
嗤う。その男は修司の世界も焼却された事に気付き、その上で嗤った。無様だと、蔑みながら。
『修司』
そこには、衛宮士郎がいた。頑固で、お人好しで、偽善と罵られようと、誰かの為に頑張る奴がいた。
『修司』
そこには、間桐慎二がいた。魔術なんてものが使えなくても、新しい夢に向かって直向きに頑張る奴がいた。
『白河君』

そこには、遠坂凛がいた。同じ師父を持ち、冷たくても面倒見のある魔術師らしくない魔術師がいた。
『修司様』
そこには、シドウリがいた。自分の姉貴分であり、いつも自分の事を思ってくれて、優しくて強い人がいた。
『修司』
そこには、王がいた。優しくて、厳しくて、時々怖い人……自分を見つけ、導き、鍛えてくれた偉大な王がいた。
全てが修司にとって宝物だった。街の人達も、学校の同級生も、先輩も後輩も、そして知り合った全ての人達が今日までの自分を形作ってくれた。
そして――――。
『――――修司先輩』
好きな人がいた。自分を絶望から最初に救い上げてくれた人、何に変えても守りたかった人。誰よりも……幸せにしたかった人。
自分達が何をした？　ただ生きてきただけで、どうして消されなければならない。焼却されなければならない。
夢に生きるのが悪なのか？　誰かの為に戦うのが悪なのか？　誰かを好きになるのが悪なのか？　どうして、どうしてどうしてドウシテドウシテドウシテ――――。
「何度も言わせるな猿が、お前達は存在自体が悪だった。ただ、それだけの話だ」

「――――ほう？」
「「っ!?」」
瞬間、エルメロイを始めとしたモードレッド、シェイクスピアは目を見開き、その顔からドッと大量の冷や汗が噴出した。
目の前のソロモンに釘付けだった視線が、今度は隣にいる修司に向けられる。顔は見えない。見たくない。ただ一つ分かっていることは……白河修司という一人の人間が、どうしようもなくブチ切れているという事。
「修司さん？」
ふと、立香は違和感に気付いた。普段なら此処で手を出す筈の修司が沈黙を保っている事に、恐る恐る彼の顔を覗き込もうとする彼女を……モードレッドが抱え込む。
「せ、先輩!?」
「マシュ、そして立香。今からずらかるぞ。ここで俺達に出来ることはもうない。地上に戻り、カルデアへ帰るんだ」
「え、で、でも……」
「いいんだ。……だよな」
「あぁ、頼む」
訊ねてくるモードレッドに修司もまた了承する。それを聞くや否や、モードレッドは二人を連れて地下空間から脱出し、地上へ向かって駆けていく。
他のサーヴァント達も立ち去って、今この場にはソロモンと修司の二人しかいない。しかしソロモンは逃げ行く立香達を追うつもりはなかった。
「フンッ、所詮は知能のない猿の集まりか。たかが人間一人で足止めなど、嗤いすぎて腹が捩れる。本来なら此処は見逃してやるところだが……気が変わった。お前達は此処で死ね」
ソロモンが片手を上げる。すると、二人を中心に空間が歪み、気付

けば何処とも言えない未知の場所へ飛んでいた。
恐らくは固有結界の一種。詠唱もなしに展開する魔術の最奥の現出、しかし修司にはそんな事などどうでもよかった。
「白河修司。お前の強さはある程度認めよう。故に、お前はここで念入りに殺す。捩じ伏せ、磨り潰し、細胞まで一切残さず消滅してやろう」
瞬間、ソロモンの背後から無数の魔神柱が顕れる。数々の特異点で立香達の前に立ち塞がった悪魔達、嗤いながら見下してくる悪魔の群れ。
そして、悪魔達の眼が瞬いて世界を揺るがすほどの大爆発が起きる。呆気ないものだ。サーヴァントを凌駕する力の持ち主でも、所詮はこの程度。
「フン、大人しく焼却に巻き込まれておけば良いものを。やはり、人間とは何処までも愚かだな」
踵を返し、立香達の後を追う。奴等を殺せば全てが終わる。余興も此処までだと踵を返すソロモンに……。
「何処へ行く気だ？」
「――――なんだと？」
声が届く。振り返り、見据えると、そこには傷一つ付いていない修司がいた。
「ソロモン、だったか？　お前の主義主張は理解した。人類を侮辱し、侮蔑し、蔑み、否定し、拒絶し、そして破壊した。あぁ、理解したとも」
「なんだ。何を……言っている？」
「ならば、俺も否定しよう。お前がそうした様に、お前の全てを侮蔑し、蔑み、否定し、拒絶し――――破壊し尽くしてやろう…当然、”自分もそうなる目”に遇う覚悟が出来るだろう？」
修司は決めた。目の前のソロモンと名乗る男がそうしたように、修司もまたこの男の全てを破壊してやろうと。
故に、白河修司はソレを呼んだ。静かに、淡々と、染み渡らせる様に……。

「――起きろ、グランゾン」
斯くして、それは顕れた。重力の底の底から、他ならぬ主の呼び声によって。

「あーあ、我知ーらね」
遥か遠いカルデアで黄金の王は嗤いながら呟いた。

その61　第四特異点

カルデア。星見の……天文台の名を冠した人類最後の砦。焼却された人理を修復するべく、数少ない人類が運営する組織、そんな人理最後の希望とも呼べる組織、或いは施設は――――。

現在、危機的状況に陥っていた。鳴り止まない警報音、危機的報せを告げる赤い光がカルデアの全ての施設に広がっていて、カルデアのスタッフ達は状況の対応に追われていた。

「藤丸立香、マシュ＝キリエライト、白河修司の反応依然と途絶！　通信回復しません！」

「もう一度位置特定を急ぐんだ！」

レイシフト先で起きた突然の異常事態。半分泣き喚く状態で報告してくるスタッフにロマニは怒号の如く声色で作業の継続を促した。

何故、どうしてこんな事になったのか。混乱と焦りで混濁する思考を回転させ、彼が導きだしたのは……やはり、先に通信で聞こえてきたある王の名前にあった。

《ソロモン》　魔術世界においてその王は多くの魔術師達から畏敬とし、畏怖として恐れられてきた。七十二の魔神を従え、未来を見通してきたとされる魔術の王。

魔術師達の始祖とも言えるその王の登場を切っ掛けにカルデアとレイシフトをしていた立香達との繋がりに異常が生じてしまった。彼女達に装備させていた通信装置から映像が途切れ、モードレッド達が立香達を連れてソロモンから逃げるという所で最後の繋がりだった音声も切れてしまった。

観測している此方も立香達の反応を追いきれなくなっている。このままでは彼女達が意味消滅しかねない、少しずつ迫ってくる最悪の事態を前にロマニが思考をフル稼働していた所で。

『おいカルデア！　聞こえるか!?』

「そ、その声はモードレッドか!?　立香ちゃんは!?　マシュは無事なのかい!?」

突然、ノイズ混じりの音声が管制室に投げ込まれ来た。突然の情報に戸惑いながらもスタッフ達は回線を繋ぎ、観測反応も徐々に大きくなってきた。
『ごめんドクター、返事が遅れて！　私もマシュも無事だよ！』
そして、立香からの無事という報告にロマニは自身の体からドッと力が抜け落ち、落ちるように椅子に座り込んだ。
「よ、良かった～。本当に良かった。一時はどうなることかと……」
「呆けている場合じゃないよロマニ、まだ確認するべき事があるだろう」
脱力し、背凭れに寄り掛かるのも束の間、ダ・ヴィンチの指摘に我に返ったロマニは改めて二人に訊ねた。
「そうだ二人とも、一体あれから何が起きたんだい？　幾ら観測しても地下空間の情報が遮断されてしまうんだ。……ていうか、修司君はどうしたんだい？」
ソロモンという恐らくは冠位クラスの英霊と遭遇してから、カルデア側の計器は不具合を起こしてきた。今でこそ立香達のいる地上は普段と変わりない程に安定に観測できているが、地下空間へ座標を調べようとすると機器が警報を発するようになってしまった。
更に言えば、彼女達の中に修司の姿がない。カルデアの中で一番の功労者であり、同時に問題児でもある彼の不在にロマニは半ば確信しながら訊ねた。
『修司さんは……その』
『私達を逃がすために』
振り絞るように答える二人に今度こそ、ロマニは愕然とした。修司は二人を逃がす為に一人であのソロモンと名乗る者と対峙したのだ。嘗て、完全復活を果たしたヘラクレスを倒した時と同様に、一番の戦力だと自負している彼こそが殿を務めるのに相応しいのだと。
きっと、修司は自覚しているのだろう。Ａチームの唯一の生き残りとして、巻き込まれた立香を後の希望とする為に、前線に立って自分のやるべき事を示してきた。
きっと、彼は此処で一つの区切りを付けるつもりだ。ソロモンとい

う古代の王に、一人の人間として戦うつもりだ。なら、此方のやるべき事は決まっている。
「立香ちゃん、マシュ。これからそっちに可能な限り増援を送る。其所で暫く待機していてくれ！」
『ドクター、うん。分かった！』
　ロマニの言葉の意味を察した立香は了承の言葉を残し、一時通信を切った。暗転するモニターに目もくれず、ロマニはダ・ヴィンチに指示を出す。
「ダ・ヴィンチ。今からカルデア中にいる英霊達を集めてくれ、適正のあるサーヴァントを見繕って立香ちゃん達に送るよ」
「ここを決戦の場にするつもりかい？」
「それは向こうの出方次第さ。けど、一人で戦おうとする彼を放っておく訳にもいかないだろ？」
　必死に、けれど不敵に笑みを浮かべるロマニにダ・ヴィンチも笑った。管制室を後にする天才を見送り、ロマニは再び前を見据える。
「早まらないでくれよ。修司」
　今頃、一人でソロモンと戦っている修司にロマニは彼の無事を祈り続けた。
（なんというすれ違い。愉悦！）
　その隣でハデスの兜を被り、愉悦に浸りながら酒を煽る英雄王に気付く事はなく、ロマニはコンソールを叩いた。
　既に、警報の音は止んでいた。

◇　　◇

「なんだ……それは？」
第四特異点、ロンドン。霧に覆われ死の都と化した街の地下深く。アングルボダに繋がれた聖杯を前にソロモンと名乗る男は眼前に顕れたソレに言葉を失い、目を剥く。
空間を裂いて顕れた鋼の巨人。深い蒼色に彩られ、黄金色の機械的眼孔がソロモンを見下ろしている。正体不明の巨人を前に魔術の王は不快さを顕にする。
「成る程、それが貴様の切り札か。現代に生きる貴様らしい幼稚なモノだな、ただ巨大なだけで強さと直結させるその浅はかさ。正に猿」
ソロモンは眼前の巨人を下らぬ機械人形だと吐き捨てる。何せ、目の前の巨人からは神秘の気配がまるでないからだ。ギリシャ神話におけるトロイの木馬や青銅の巨人タロスとも異なっている。恐らくは純正の、人類が生み出した科学技術の結晶の成果とやらなのだろう。
下らない。実に下らない。こんな見かけ倒しの木偶の坊で、一体何が出来るというのか。大層な外見でこのソロモンが怯むと思っているのか、やはり人類は愚か。死なねば分からない馬鹿ばかりだと辟易しながら蒼き巨人を仰ぎ見る。
『その理屈だと、魔神柱なんてデカイものを侍らせて意気がっているお前も、猿の一人になるわけだが？』
「――死ね」
巨人の中から聞こえてきた白河修司の声、姿が見えないことからアレは搭乗するタイプのモノだと察するも、ソロモンは気にかける素振りも見せず、淡々と魔神柱達に指示を下す。
無数の眼光が光り、爆発と衝撃が空間に轟き響き渡っていく。魔術王ソロモンが張った固有結界が揺れるほどの大爆発、先程よりも威力は上げている。今度こそ終わりだと踵を返すソロモンだが――。
『あのさぁ、この流れ、さっきもやったよな？　いい加減学習しろよ』
「……なんだと？」

その巨人に欠片ほどの傷も付いてはいなかった。
「バカな、直撃の筈だ」
『どうしたよ魔術の王様、ご自慢の魔術は品切か？』
「っ、調子に乗るなよ。塵芥が」
巨人の中から聴こえてくる挑発とも言える修司の言葉に不愉快さと憤りを露にしたソロモンは、更に追加で魔神柱を召喚する。
無尽蔵とも呼べる魔術王の固有結界。そんな無限に近い空間を埋め尽くすほどの肉の柱、そのある意味で壮観な光景に修司は巨人――――グランゾンのコックピットで吐き気を抑える。
「消えろ。砕けて、爆ぜて、塵となれ。その玩具と共に、鉄屑になるがいい！」
ソロモンが吼え、魔神柱が呼応する。その数既に五百を超え、その悉くが破滅の光を放っていく。眩い光が世界を覆い、衝撃と熱で満たされていく。燃え盛る世界、手こずらせたと忌々しく思いながらソロモンが吐き捨てようとしたとき。
――――やはり、そこには無傷の巨人が佇んでいた。
「――――バカな」
ソロモンは今度こそ言葉を失う。まだ数は控えているとは言え、五百の魔神柱の光線を直撃した以上無傷はあり得ない。その火力を前にしては如何に神秘神代の英雄と言えど無傷でいられないし、神ですら直撃は避ける威力だった。
なら、一体何故目の前の巨人は無傷なのか。そんなソロモンの思考を読み取ったかのように、巨人の中にいる修司が嘲笑と共に簡潔に答えた。
『そんな難しい話じゃあない。単純に、お前の魔神柱（オモチャ）が力不足なだけだ』
そもそもな話、魔神柱の攻撃はその全てがグランゾンに届いてはいないのだ。〝歪曲フィールド〟　空間を歪ませる程の重力のバリア、嘗てこれを突破してきたのは太陽系の各々の惑星に潜んでいる後のタイプシリーズと呼ばれる超級の質量兵器のみ。
たかが光学兵器に類する攻撃が重力そのものを歪曲させるバリア

を貫通出来る筈もなかった。
魔神柱の攻撃では、グランゾンには届かない。それこそ、戦略兵器級の――――国ごと破壊するような兵器でもない限り、グランゾンに一撃を与えるのは不可能と言えるだろう。
『さて、二度も先手を譲ったんだ。今度は――――此方の番だな』
巨人の眼光が妖しく光る。二度も先手を譲り、魔神柱の力も大体だが計れた。ならば、最早容赦はいらない。人類の全てを唾棄すべきモノだと吐き捨てる傲慢な王に蒼き巨人――――否、蒼き魔神が動き出す。
『魔神柱。七つ柱の悪魔の名を冠する有象無象、お前らに教えてやる。攻撃とは……こうするものだ！』
〝ワームスマッシャー〟
瞬間。無数の光の槍が魔神柱達を貫いた。外から、或いは内側から隙間なく、間断なく穿いていく。五百を超える魔神柱の軍勢が瞬きする間もなく全滅。その光景にソロモンは初めて驚愕の表情を浮かべた。
「なん……だと？　貴様、一体、何をした!?」
『さぁな。その御大層な頭で考えて見ろよ。ええ？　ソロモン王様よ？』
人間という種族を見下し、見限り、焼却した男に修司は何処までも軽蔑していた。口を開けば罵詈雑言の嵐を叩き付け、下らないと一蹴するソロモンを修司はどうしても許せなかった。
この男は、過去にしか目を向けていない。悲惨な過去を、凄惨な人類の歴史を、無念と後悔しかないと断じてそれしかないと、未来がないと勝手に結論付けた。
悲惨な過去、凄惨な歴史、その中にも必ずあった人の足掻く様を、この男は見向きもしていない。誰かに何かを託してきた人類の歩みを、知りもしないで。
『どうしたソロモン、もう終わりか？』
故に、白河修司は許さない。大事な人達の繋がりを一方的に切り捨てた目の前のソロモンを、仮に命乞いをしても赦しはしない。奴が人

類史の全てを侮蔑した様に、修司もまたソロモンの全てを踏みにじる事を決めた。
「図に乗るなよ、猿人類がぁぁっ!!」
ソロモンが吼える。猿と見下して侮ってきた人類に、こんなものかと侮蔑な目で見られた事に、我慢できなかった魔術の王は玉座より自身の軍勢を喚ぶ。
その数、総勢５０万。桁違いの軍勢を前に――――。
『足りねぇよ。俺達をどうにかしたいのなら、これの三倍は持ってこい!!』
白河修司は不敵に笑う。そんな主に呼応するかの様に蒼き魔神――――グランゾンに力が宿る。
『収束されたマイクロブラックホールには、特殊な解が存在する。剥き出しの特異点は時空そのものを蝕むのだ』
「っ!?」
それは、詠唱にも似たモノだった。グランゾンの胸部装甲が開き、顕になる膨大なエネルギー。漆黒の球体が重なりあい、無数の力の奔流が固有結界を蝕んでいく。
ソロモンは理解が出来なかった。目の前の巨人はたかだか人類史が生み出しただけの鉄屑の人形では無かったのかと、自身の価値観が崩れていく音にソロモンは怯えながら後退りをした。
そう、ソロモンは恐怖を知った。侮蔑してきた人類の中で最も愚かと断じてきた感情を、よりにもよって恐怖という体験を経て理解してしまった。
足が震える。膝が笑う。なんだこれはと初めて経験する感情の発露に戸惑う、そんな彼を嘲笑うかの様に……。
『何人も、重力崩壊からは逃れられん!』
グランゾンの力は爆発的に膨れ上がった。
瞬間、ソロモンは姿を消した。湧き出て溢れた感情に制止が利かず、脇目も振らずに時空の裂け目へ避難する魔術の王に修司が気付くことはなく……。
『さぁ、事象の彼方へ消え去るがいい。〝ブラックホールクラスター

〝……発射!!』
放たれた極大のエネルギーは残された魔神柱の軍勢を呑み込み、塵ひとつ残さず消滅させた。
世界が白に染まる。醜く、おぞましい肉の柱が消えていくのを見て……。
『少し、大人げなかったかな？　く、ククク……』
汚物を消毒するヒャッハーの気持ちを何となく理解したのだった。

――定礎復元――

その62

δ月＊日
第四の特異点。人理修復の為の旅も折り返しとなり、其所で立香ちゃんが築いてきた縁を以て新たなサーヴァント達を召喚し、カルデアはより賑かな場所となっていた。
ニコラ＝テスラ氏やバベッジ氏など現代に近しい英霊やアンデルセン君やシェイクスピア氏の様なサポートに特化した彼等を喚べたのは喜ばしい限りだが、モードレッドだけが来なかったのは残念だった。
立香ちゃんもその事を気にしていたが……まぁ、アイツを喚ぶのは次の機会に期待しよう。そもそも依然としてサーヴァント一騎も呼び出せていない自分がいるのだ。気にしたところでしょうがない、という奴である。
そんな立香ちゃんは今日もサーヴァント達から相談されたり、無茶ぶりをされたりとしているが……相変わらず元気そうで何よりだ。特異点から戻ってきたばかりの頃はあのソロモンとかいう輩の迫力に当てられ、気落ちしてしまうのかと思っていたけれど、全くそんな様子は無かったから安心した。
魔術王ソロモン。古代イスラエルの王であり未来を見通すとされたきた魔術の祖、冠位という従来のサーヴァントとは逸脱した力を持つとされる七つの内の一つ。英霊召喚の元ネタに記された脅威に対抗する一角。どうしてそんな大層な奴が人理焼却なんて目論んだのか分からないが、奴が黒幕なら叩き潰すまでだ。
と、息巻いておきながら逃がしてしまったという失態。グランゾンを出しておきながらまさかの逃走を許してしまったとは、我ながら恥ずべき失態だ。
次に見える時は今度こそ倒す。向こうにどんな事情を抱えているかなんて知ったことじゃない、奴が人類の抹殺を企てるなら、その悉

くを捩じ伏せてやるまでだ。
その為にはグランゾンの力だけじゃなく、自分自身の強さを磨かねばならない。そういう訳でロマニとダ・ヴィンチちゃんに諸々の事情を話すべく、一部のサーヴァントの皆さんと一緒にカルデアの格納庫へと連れてきた。
先ずは自分が何者なのか、何処からやって来たのかを伝え、これからの自分の方針と相談をする為に彼らの前でグランゾンを顕にした。
最初は皆、グランゾンを前に驚いたりしていたけど自分の話を聞くにつれて落ち着くようになっていき、自分の修行場の作成の協力にも皆乗り気になってくれた。
特にテスラさんはグランゾンを前に物凄く喜んでくれたのが良かった。「人類は此処まで至れるのか！」なんて言いながら両手を上げて万歳三唱したりして、途中から歯止めが利かなくなってきた。
そんな彼を比較的冷静さを保っていたバベッジさんが宥めてくれたりして話しは進み、結果として自分の要望は全面的に通る事になった。
所長代理とは言え、格納庫の半分近くを占拠してしまう自分の話に乗ってくれたロマニには感謝してもしきれない。バベッジさんやテスラさん、ダ・ヴィンチちゃんも自分の修行場の製作に非常に協力的だし、自分が嘘を吐いていないかの判断と信用を得るために利用してしまった清姫さんには、ロマニ同様感謝しきれない。
今回の件で、自分は本当の意味でカルデアの一員になれたと思う。そんな気がする。
勿論、今回の件は立香ちゃんとマシュちゃんにも伝えたとも。丁度お昼だったから一緒に食べながら談笑混じりに話しておいた。
流石に立香ちゃんは場数を踏んでいるだけあって然程動揺してはいなかった。まぁ、平行世界から来たといっても学生には良く分からないだろうし、「へぇー、そうなんだ」位の認識でいいかもしれない。
因みに、カルデアスタッフへの説明はロマニ達がしてくれる事になった。本来なら自分が果たすべき事なのに、何もかもを任せてしまって悪い気がするが……バベッジさんからも言われた通り、今は

自分に出来ることを成し遂げる事から始めよう。

「……ダ・ヴィンチ」
「なんだいロマニ」
「僕は今、いろんな意味で混乱している」
「まぁ、うん。そうだね、気持ちは分かるよ」
「彼が何かを隠しているのは薄々感じてたさ。彼の事を知っている素振りを見せるサーヴァント達がいる時点で、何となく察したよ？　でもさ、話の内容が大きすぎるんだよ！」
「なに平行世界からきたっぽいって!?　ぽいってなにさぽいって!?　なんでそんなふわっふわなの!?　ゼルレッチの名前が出てる時点でほぼ確定だよ！　何で宝石翁を変な爺さん呼びしてんの!?」
「……いやさ、平行世界から来たと言うのはまぁいいよ？　良くないけど。人理焼却に巻き込まれる程に近しい世界だから来れるのも何となく分かるよ？　いや分からないけど」
「でもさ、なにあのグランゾンって巨大ロボ。なんであんなのが出てくるの？　え？　しかもなに？　あれでソロモンを撃退した？……僕はもうワケガワカラナイヨ」
「落ち着きたまえよロマニ、色々ブレブレだよ君」
「逆に聞くけど、どうしてダ・ヴィンチはそこまで落ち着いていられるんだい？　君もあのグランゾンを前にした時はエネル顔を晒していたじゃないか」
「だからこそだよロマニ、彼に対して驚くのは仕方のない事、けれど逆を言えばそれだけだ。彼は悪意ある人間ではなく、善意ある若者だ。それが分かっただけでも儲けものじゃないか」
「それは……まぁ、うん。自分の身の潔白を証明する為に清姫を用いたんだから、信頼しているし信用しているよ」
「そう。そしてこう考えればいいのさ。彼が行うやらかしには受け入れた方が順応しやすいのだと」

「それ諦めただけだよね!?」

δ月δ日

テスラさんやバベッジさん達の助力を借りながら製作作業を行うこと数日、余っていた資材をかき集めてどうにか自分の修行場である重力室を組み上げることに成功した。

重力室の設計図は覚えているし、なんならグランゾンのデータベースにも保存してあるから作業効率は落ちなかったし、予め用意してあった資材があった事もあって、嘗て自分の家にしかなかった重力室はほぼ相違なく完成する事ができた。

自分一人の製作だったら、もう少し時間が掛かっていただろうから、協力してくれたテスラさん達には改めて感謝を伝えるべきだろう。

そんな世紀の学者達の助力を得て作り上げた自分の重力室は大きく二部屋に分類されている。一つは鍛練用の重力部屋、もう片方は日常生活する為の空間。鍛練後の汗を流す為のシャワー室や寝室も完備しており、ロマニ達と連絡できる通信も備えている。

そういう造りもあって格納庫には一つの家が出来たも同然なのだが……実際に自分の使ったスペースは格納庫全体の四割にも満たしていない。格納庫だけでも東京ドームの倍近い規模を誇るカルデアには改めて感心する思いだ。

そんな格納庫の中心に鎮座する巨大な黒い装甲車がある訳なのだが……なんでもダ・ヴィンチちゃんが言うには、このシャドウボーダーというこの装甲車はレイシフトが失敗した際のセカンドプランなのだとか。

現在はレイシフトが正常に稼働している為にほぼお蔵入りの状態で埃を被っているが……なんか、見ていて勿体ないなと思う。折角のメカなのだから何とか使えるようにしたいというのは技術屋の性だろうか。

テスラさんやバベッジさんも似たような事を言っていたから、折りを見てダ・ヴィンチちゃんに相談しても良いのかもしれない。
それはそれとして、今は自分の事を専念しよう。今回はあのヘラクレスの様なヤバい相手がいなかったから良かったものの、いつまたああいう手合いと殺り合うか分からないのだから、やるべき事はしっかりとやっておこうと思う。
先ずは１０倍界王拳を完全に自分のモノにする事、その為には１００倍の重力を克服しなければならない。前は半分の５０倍がやっとだったが、体が回復し、以前よりも動けるようになった今、自分を追い込むには今しかない。
さぁ、始めよう。白河修司の肉体改造を。

「いやはや、白河修司。彼は凄まじく向上心のある男なのだな。彼の物事に対する真剣さは共にする私にも身を引き締まる思いをさせてくれる」
「当初はその真剣さに危惧したものだが、力を抜く所も弁えている。善き若者と巡りあえてサーヴァント冥利に尽きると言うものだな」
「加えて、彼考案の重力室に携われたのも良い経験となった。これで私とあの凡骨との差は更に明確に開いたというわけだ！」
「あまり、彼の前では控えた方がいいぞ。彼は君だけでなくかの発明王にも敬意を抱いている。彼の気持ちを汲んで少しは自重するがいい」
「むっ、確かにいない輩を影で罵るのは私のポリシーにも反する。以後、気を付けるとしよう」
「気を付けると言えば、グランゾンだったか？　アレの有無も出来るだけ吹聴するのは控えた方がいいのやもしれん」
「それは些か心配すぎる気もするがな。いちサーヴァントがアレをどうにか出来るとは到底思えん」
「念には念を、と言うやつだ。彼の真摯さに私達も真摯に向き合うべきだと判断したまでだ」

「それもそうであるな。……しかし、ふふ」
「どうした？」
「いやなに。つい嬉しくなってな。彼の世界は、既にそういう所まで来ていると思うと、ワクワクして仕方がないのだ」
「流石の雷電博士、好奇心の強さはサーヴァントになっても変わらんか」
「あぁ、願わくば彼が元いた世界にも喚ばれてみたいものだ。君も、そうではないかね？」
「……まぁ、肯定はしておこう」

δ月※日
ヤバい。久し振りに死ぬかと思った。以前ヘラクレスとの戦いで一度１０倍界王拳を使ったから平気かなと思って試しにグランゾンを通して部屋の重力を１００倍にしたら、危うく圧死しかけた。
しかも抜け出すのに１０倍界王拳を使ったから体はボロボロ、現在自分は医務室にてロマニやジャンヌさん達から強めのお叱りを受けている。
幸い骨に異常はなく、重度の筋肉痛程度に済んでいるが、一歩間違えれば第三特異点での二の舞になる所だった。前回は５０倍が限界だったのに、今回では楽にこなせたからつい調子に乗ってしまった。
まさか１００倍の重力の世界が彼処までヤバかったとは知らなかった。次からはもっと慎重に、段階を飛ばさずに確りと基礎から始めていこう。
でないと、今度は本気で怒られそうだからな。主にジャンヌさんから。あの人、俺との平行世界を通しての関係性だと明るみに出てから、開き直った様に関わってくるんだよなぁ。嬉しいからいいけど。
エミヤは時々飯の差し入れをしてくれるようになった。口では小言を言ってくるけど、やっぱり未来の衛宮士郎だけあって色々と手助けをしてくれる。尤も、面と向かって士郎の事をいうと分かりやすいくらいに臍曲げるから言わないけどな。

エルメロイ先生やこの間召喚されたメディアさん、他にも何人か自分の事を覚えているけど、やっぱり英雄王……王様だけは俺の事を覚えてはいなかった。

でも、俺の事を全く覚えていないけど優しいところは変わっていなかった。今日だってバカやって医務室行きの俺の見舞いに来てくれたし、軽口で罵ったりとしたけど回復の秘薬みたいなのを掛けてくれた。

王様は厳しいけど、頑張っている奴を貶したりはしない。そういう自分の知っている王様の部分が変わらずにいた事に自分は嬉しくなった。

さて、体も回復したし、午後からは改めて鍛練に戻るとしよう。今度こそ、自分の実力を見誤らないように気を付けながら……。

「それで、いつまで本当の事を黙っているつまりですか英雄王」

「無論最後までだとも、此度の我は半分バカンスよ。戯れで来たと言うのに何故平行世界に来てまで過労の種を抱えねばならんのだ」

「……その割には、彼の事を気にかけている様ですけど？」

「当然だ。我の宝を我が気にかけて何が悪い。さて、日課のセイバーウォッチングの時間だ。小言はその辺にしておけ田舎娘、皺が増えるぞ？」

「だっ、誰の皺が増えますか！」

「フハハハハ！　貴様の家、おっ化けやーしき！」

「私の家なんて見たことないでしょうが!?　ちょ、待ちなさい英雄王！」

「小学生か貴様ら」

??月√日

重力室での鍛練も慣れ始め、そろそろ修行を次の段階に移そうとしていた今日、なんか変な奴に絡まれた。

天草四郎時貞。日本生まれの人間なら割りと知られているその人物は自分に声を掛けるなり妙な問答をしてきた。
それも〝人類を救うにはどうしたらいいのか〟という割りとトンチキな話。いや、知らんがな。そう即答する自分に天草四郎は尚も食い下がってきた。笑顔で。
コイツの笑顔、妙に圧があるんだよなぁ。しかもなんか俺の事を知ってるみたいな事いってるし、初対面の筈なんだけどなぁ。誰かと勘違いしてるんだろうか？
まぁ、立香ちゃんもサーヴァントの相談みたいな事をしているし、それと似たようなもんだろ。そう納得しながら俺も天草四郎の質問に真剣に考える事にした。
つっても答えなんて在るわけないんだけどね。救済なんて個人の尺度で幾らでも変えられるし、どんなに手を尽くした所でそれで得られるのは自己満足の様なもの、それで救われたと感じる人もいれば、偽善だと罵る奴もいる。
それが人類全体の規模で言うなら尚更だ。故に俺の答えは〝考えた所で意味はない〟である。
結局、人間に出来るのは目の前にある事を全力で挑む事だけ、個人も団体も規模や手段が違うだけで本質は変わらない。ソイツに出来ることを出来る範囲だけ頑張るしかないのだ。
自分一人の力ではどうしようもないから他人の力を借りる。そんな当たり前の事をちゃんと理解出来ている奴は……意外と少ない。
特に魔術師、アイツら他人を容赦なく巻き込む癖にまるで全て自分の実力だと勘違いする奴が……まぁ多いこと多いこと。
その癖ちょっと正論いうとすぐ逆上するんだもんなぁ。マジで害悪。いつか時計塔は滅ぶべきだと思うのは自分だけかね？
閑話休題。
そんな訳で天草四郎の質問には考えた所で意味はない的な事を一応の答えとして示したのだが……なんか、貴方らしいですね。と一言言われてどっかにいった。
納得……してくれたんだろうか？　まぁ、人の考えなんて俺には

分からないし、それがサーヴァント相手なら尚更だ。天草は悪い奴じゃないみたいだし、立香ちゃんが心強い仲間だと頼りにしている以上、自分から言うことはない。
　ただ、シェイクスピアといい天草四郎といい、初対面の割に自分の事を知っているサーヴァントが増えてきている気がするんだけど……気のせいかね？

「〝人類救済に意味はない〟か。やはり、貴方はその答えに行き着くのですね」

『何故だ、どうしてお前は私の邪魔をする!?　それだけの力を持っていながら、どうして誰かの為に使おうとしない！　ほんの少しの慈悲を分け与えようとしないんだ！』
『お前、何か勘違いをしていないか？　誰かの為に力を奮って、それがソイツの為になると、本気で思ってるのか？　人類を救う？　大義名分も結構だが、俺から言わせればアンタのやっている事は余計なお世話でしかないんだぜ？』
『っ、それは……』
『人類の救済。大いに結構、だがな、それを一個人が勝手に決めていいもんじゃあねぇんだよ。ましてや、アンタはその手段として聖杯という手を使おうとした』
『それの何が悪い。これしかないから仕方がないじゃないか！　どれだけ考えても人は変わらない。なら、聖杯という手段を使っても……』
『仕方がないってか？　笑わせんなよ、魔術師なんて人の枠組みから外れた奴等が作ったモンを利用して、それで人類が救われる道理なんてあるわけがないだろ。それも、人類を見限った奴が使うとすれば尚更な』
『そんな、私は……人類を見限ったなんて』

『人類(俺達)は、人類(俺達)自身の手で進まなきゃ行けない。アンタ達英霊が人類を繋いで来たようにな』
『それでも、それでも……俺は!!』
『そうだ。それでもだ。例え人類の未来が閉ざされていようと、託された思いが扉を開く。無様でも、みっともなくてもなぁ!』
『白河……修司イィッ!』
『来いよ天草四郎、お前が自分の幻想(エゴ)で人類を縛るというのなら、先ずは――そのふざけた幻想をぶち壊す!!』

「本当に、つくづく腹立たしい人ですよ。何処までも正論を吐く癖に、誰よりも無茶を通すその在り方は――」
「私には、些か眩し過ぎる」

その６３

??月α日

重力室で修行を続けて早くも一月が過ぎた。目標の１００倍の重力に耐え続け、１０倍の界王拳にもある程度耐えられるようになったこの頃、今日も今日とて鍛練に励んでいた自分の所にダ・ヴィンチちゃんから通信が入った。

何でもこれ迄の例の如く、とある小さな特異点が出現した為にこれの対処に当たって欲しいのだとか。観測した限りでは、立香ちゃんやマシュちゃんだけでも対処できそうな規模だが、金時が嫌な予感がするといって同行を願い出たのだとか。

他にも、先日召喚された風魔小太郎も金時同様に嫌な予感をひしひしと感じているらしく、念の為に自分も参加して欲しいと頼まれた。

坂田金時や風魔小太郎という伝説の忍までが予感を察しているのだから、それはもう確実と言っていいだろう。ダ・ヴィンチちゃんからの頼みを引き受けた自分は鍛練を一時切り上げ、身嗜みを整えてから管制室に向かうと、既に立香ちゃん達が待っていた。いつも待たせてしまってすみません。

金時や小太郎君もいるし、改めて話を聞こうとしたのだけど、ダ・ヴィンチちゃんから待ったが掛かった。なんか自分の新しい礼装が完成したから着てくれとの事。

何だと思いながら一旦着替える為にロッカールームに戻ると、その衣装に驚いた。

ゴジ○タ。よりにもよってこの天才、ゴ○ータが着ている（正確に言えばメタモル星人の服）を造りやがった。何でも昨今カルデア内で流行っているＤＢブームに肖り、劇場版を観ていた際に思い付きで造ったらしいのだ。色合いといい、素材といい、完成度高過ぎる出来映えに自分も驚いた。いや、しっかり着替えておいてなんだけどね。

で、今回はこの礼装を着用して欲しいとの事。立香ちゃんばかりバ

リエーション豊富で自分だけが代わり映えのない山吹色の胴着で味気ないという。頑丈に出来ているし、気分的にどうかと訊ねてくるダ・ヴィンチちゃんに自分は快く受け取った。

理由はどうあれ、折角万能の天才が自分の為に造ってくれたのだ。下手に断って突っ返すより、有り難く受け取った方がダ・ヴィンチちゃんも嬉しく思うだろう。

ただ、皆の前で渡すのは少々勘弁して欲しい。金時もそうだけど小太郎君まで羨ましそうに此方見てくるのは微妙に堪えるからね。嬉しいけども。

そんな訳で新たに礼装を手に入れた自分達はロマニから事の経緯の説明を受け、特異点修復の為にレイシフトをするのだった。

転移先は日本の昔話で有名な鬼ヶ島。そう、あの有名な鬼ヶ島である。

……そう言えば茨木童子と酒呑童子の二人、見掛けなかったけどどうしたんだろう？　普段は酒を呑んでたりエミヤとロビンさんからお菓子を貰ったりしている二人が大人しいのは……なんというか、違和感があるな。

??月β日

疲れた。肉体的には然程疲弊してはいないけど、今回の特異点は精神的に疲れた。最初は例の如く皆とはぐれた所に転移したけれど、何時ものごとくスルー出来た。道中鬼と化物達が襲ってきたけれど、大した強さじゃないから適当にあしらう事が出来た。

問題はその後、適当に小鬼達を蹴散らしていると、唐突に女剣士が勝負を仕掛けてきたのだ。名前は新免武蔵藤原玄信、あの日本最大の大剣豪こと宮本武蔵が腹ごなしに勝負を仕掛けてきたのだ。

カルデアのボイラー室の隣で、信長と一緒にいる新撰組の沖田総司に続く女剣士。師父から修行を付けて貰う際に度々出てきた偉大なる剣の達人である。

そんな大剣豪がまさかの女性である。アーサー王といい、大王アルテラといい、そして沖田総司といい、最近実は女でしたー、みたいな

事例多すぎない？　いや、第六天魔王の織田信長が女性だった時点で今更感半端ないけど。

で、そんな大剣豪から挑まれて仕方なく応戦し、アームロックで身動きを封じた時、自分はある事に気付いた。

この宮本武蔵、弱い。失礼なのは重々承知しているけど、アルトリアさんやアルテラさんと手合わせした事のある自分は彼女達と比べて目の前の剣豪が弱く見えた。特に剣の技に限って言えば佐々木小次郎の足下にも及ばないだろう。

まるで完成前の城を見ているような感覚。自分も修行中の身だから偉そうな事は言えないが、この時勝負した彼女は何となく未完成な状態に思えた。て言うか若い、て言うかそもそもサーヴァントですらなかった。年齢に言えば中学生位だろうか？

そんな彼女は自分の事を師匠と仰ぎ、矢鱈と付いて回るようになっていた。師匠なんて呼ばれるのは抵抗があるから名前で呼んでと言っても、頑なに師匠呼びを止めてくれない。

その後、彼女の事情を訪ねると、クソ親父から逃げ出して家出の真っ只中だという。宮本武蔵の父親というと新免無二だったか？　彼と喧嘩をして家を出てムシャクシャしながら走っていると、気付けば此処にいたという。

で、お腹が減っていたから近くの飯処でうどんをいただき、親父にギャフンと言わせたいが為に帰るまでに強くなろうと手っ取り早く強い奴と戦おうとした所で、自分に出会ったという。

――なんというか、破天荒な奴だ。宮本武蔵という人物は結構ハチャメチャな逸話が遺されているが、それが無ければ到底信じられないハチャメチャっぷりだ。よく言えば効率的、悪く言えば短絡的。勢いに任せたくなる年ごろとは言え、もう少し理性的に行動しても良いのでは？　と、自分は思いました。

で、話を聞いて彼女が嘘を吐いていない事を確信した自分は一つの仮説を思い浮かべた。現在この世界はソロモンってクソ野郎がやらかした人理焼却によって燃やされてしまっている。

その影響は過去にも繋がり、宮本武蔵が生きていた頃の時代にも及

び、彼女が今回の特異点に巻き込まれたのもそう言う経緯だとするなら、割りと辻褄は合うかもしれない。
どちらにせよ、未成年である彼女を放ってはおけない。自分の事を師匠と呼んで慕ってくる以上、無視するわけにもいかないし、一先ず彼女を保護しながら立香ちゃん達との合流を目指すことにした。
未来の大剣豪であって子供ながら動ける武蔵ちゃん。脇差し位の刀を両手に持って暴れるだけあって、その腕力は並の子供を遥かに凌駕している。小鬼程度なら簡単に倒せる程度には強いが、流石に見上げるほどの大鬼の相手をさせる訳にはいかなかった。
しかもこの大鬼は門番らしく、その側には玉藻さんが控えていた。明らかにカルデアにいる玉藻さんとは別人らしく、自分の事を知らないみたいだったから、手加減なしで相手をする事にした。
というかかめはめ波で諸とも消し飛ばした。二対一だし、玉藻さんてば後衛特化のサーヴァントだし、下手に引き伸ばせば此方が不利になるかもだし、先手必勝の気持ちで会敵した瞬間に門ごと吹き飛ばしておいた。
武蔵ちゃんからはあんなのアリなの？　て聞いてきたから、相手の有利になる状況をワザワザ見逃す理由はないとだけ言っておいた。いやだって此方は武蔵ちゃんも抱えているし、万が一の敗北も許されないんだから別に良くね？　一応切嗣さんから太鼓判押された戦法だよ？　いや言い訳じゃなくて戦術的に。
その後、門を破壊して島の奥へと向かっていた自分達に立香ちゃん達が合流してきた。予想通り二人の所には金時と小太郎君がいたからこれで全員が集合した事になる。何か金時が格好を変えてクラスもライダーになっていたんだけど……クラスってそんなお手軽に変えられるもんなの？
とはいえ、お互い無事だったのだから細かい事は気にせず、その後は武蔵ちゃんとの自己紹介が行われた。この時、やはりというか予想通りというか、あの宮本武蔵が女性だった事にロマニ達は酷く驚いていたし、自分を師匠と呼ぶ事にも動揺していた。
その後、互いに経緯を説明しながら奥へ進み、道中襲ってきた鬼達

を蹴散らし、途中で何故か此方に来ていた茨木童子と酒呑童子と合流し、更に島の奥へと進んだ。

そして最後の門番らしき大鬼を倒して島の最奥へ辿り着くと、そこでは一人の女性が待ち構えていた。源頼光、源氏の棟梁にして数多くの妖怪達を討ち滅ぼしてきたとされる侍大将。

嘗ての天皇を守護してきたとされる侍集団の長が女性である事にも驚いたが……宮本武蔵とか酒呑童子が女性という事もあり、然程動揺はしなかった。

そんな頼光公は現在もう一つの側面である牛頭天王こと丑御前の影響もあって、酷く不安定な状態らしいのだ。酒呑童子と茨木童子が鬼ヶ島に来ていたのもその影響らしく、先の羅生門での異変も彼女が大元だったらしい。

丑御前の狙いはまつろわぬ者共の復権。つまりは妖怪達の復活、らしい。如何にも後付けな理由の裏にはやはり彼女が不安定が故の言動なのだろう。

その後、結局は丑御前と敵対し戦う事になるのだが……正直、金時を戦わせるのには抵抗があった。頼光公は金時にとって親代わりみたいなもの、慕ってこそいても憎いとは思えない相手に戦いを強制するのには流石に忍びない。

だから自分が代わりに矢面に立とうとしたのに、このゴールデン野郎、笑って拒否しやがった。「親の不義理は子が背負うもの」なんて格好いい事言っちゃって。

小太郎君もやる気だし、仕方ないから俺と金時と小太郎君の即興のチームで対応する事になった。茨木と酒呑の二人は武蔵ちゃんと立香ちゃん達の護衛に務めて貰うことにした。二人を丑御前の標的にならないように立ち回ったのだから、それくらいしてもらってもバチは当たらないだろう。

そして始まった鬼ヶ島での決戦。着ている礼装の事もあって気分は劇場版のＤＢ、金時はバイクを取り出し、小太郎君は分身し、俺は界王拳を使って丑御前と戦った。

結果を言えば戦いは俺達の圧勝だった。如何に丑御前と言えど元

はサーヴァント、ロマニは魔神柱クラスの天災と言っていたが、途中段階とはいえ１００倍の重力を克服しつつある自分と手の内を知り尽くしている金時相手に勝てる道理はない。最後は金時の手を汚さないように俺が見よう見まねのソウルパニッシャーで止めを差す事になった。

丑御前を退き、正気を取り戻した頼光公は自分達に謝罪しながら消滅。顕れた聖杯を回収し、鬼ヶ島という特異点は修復された。

その際に武蔵ちゃんがいつか自分もそう言ったものを断ち切れる剣士になると息巻いて消えていったから、恐らくは元の時代に戻ったのだろう。

恐らくは彼女のここでの記憶も元の時代に戻った事で失われるだろうが……まぁ、その方が彼女の為だろう。下手な先入観は彼女の今後の人生にどんな影響が出るか分からないしね。少し寂しい気もするけど、これでいいのだ。

……しかし母親か。全てに決着が付いて自分も元の世界に戻ったら、墓参りに行こうかな。

その後、この特異点の縁でカルデアに頼光公も召喚される事になるのだが、なんか自分を見掛ける度にあれこれ世話を焼こうとしてくる。

酒呑童子や茨木童子には生前の因縁もあって殺伐とした雰囲気なのは相変わらずなのに、何故か自分には母として――と言って世話を焼いてくる。立香ちゃんにも同様の反応しているみたいだが、自分に対してはなんというか、それだけじゃない気がする。

どちらかと言えば、金時に対する対応に近い感じがする。何かと世話を焼いてくれる頼光公は優しくてイイ人なんだろうけど……その、距離感が近いッス。

流石に重力室には来ないけど、最近では避難させて欲しいと金時が良く遊びに来るようになった。

いや、お前が何とかしろよ。お前の上司兼親代わりでしょうが。

「……何だろう。すごい夢を見ていた気がする」
「どうしたクソ餓鬼、まだ寝惚けてやがるのか？」
「……なぁ、クソ親父殿。人って悪いモノを祓ったりする力を持ってたりするのか？」
「あぁ？　なんだ急に」
「例えば虹色の光が人の手から出てきて、悪いモノに取り憑かれた人にぶつけると、パァッと祓ったりするのかって話」
「――――何を言うかと思えば、人間にそんな真似出来るわけねぇだろ。それが出来るのは「　　」を切れる正真正銘の剣人か……或いは」
「或いは？」
「……神仏の類いだろうよ」
「……そっか、えへへ」
「今度はニヤニヤしやがって気持ち悪ぃ、一体なにが言いてぇんだ」
「いや？　私のお師匠は凄い人だったんだなぁって……」
「あぁ師匠？　テメェ如きに？　ハッ、物好きな奴もいるもんだな」
（「　　」を切る。私にはそれがどういう事なのかてんで分からないけど、師匠には出来たんだ。何だか、少し嬉しいや）
　見上げる先にあるのは遥かに遠い空、今はまだ小さい天元の蕾が、近い将来大輪の華を咲かせる事になるのは――――まだ少し、遠い未来の話。

その64

――とある鬼との逢瀬――

とある山の奥、夜も帳を下ろし魑魅魍魎が跋扈する山中の森にて地面を抉り、木々を吹き飛ばす爆発が巻き起こる。

煙の中から聞こえてくるのは、かんらかんらと、鈴を鳴らした様な嗤い声。盃片手に酒を呑みながら鬼が嗤う。

童女のような笑みを浮かべ、鬼が腕を奮う。細くひ弱な子供の腕、しかし内に秘められたその腕力は人一人を粉砕するのに過剰なまでの威力を秘めていた。一度腕を横に凪ぐ、それだけで木々を大地ごと吹き飛ばす鬼の一振り。

それを相対している山吹色の胴着を着た男は正面から打ち返した。奮われる鬼の一撃を、同じ腕力で以て凌駕する。一瞬だけ眼を剥いて驚きを露にしながら鬼は吹き飛ぶが、それでもやはり……その顔には恐ろしい程に美しい笑顔が張り付いていた。

「ふふふ、あの牛女が気にかけるだけあるわぁ。旦那はんってば、随分と強ぉなっとるさかい。これは敵わんなぁ」

吹き飛んで地に倒れ付し、勝てないと思い知り、おどける様に両手を広げ、鬼――酒呑童子は参ったと降参を顕にする。何処までも気紛れで快楽主義的な思想の持ち主、その価値観から人とは決して相容れぬ三大妖怪の一角。当時の彼女を知る者ならば人間妖怪問わずに震え上がらせた鬼の頂点。

そんな彼女に参ったと言わせる者、白河修司は怪訝な面持ちで眉を寄せ、不可解そうに首を傾げている。

「ったく、シミュレーターに来るなりいきなり襲ってきやがって、一体何のつもりだよ」

「小僧や牛女が旦那はんをエライ気にかけていたからなぁ、摘まみ食い程度にするつもりだったんやけど、旦那はんてばえぇ眼をしとるさかい、ついつい興に乗ってしもうたんよ。堪忍な」

「お前、絶対悪く思ってないだろ」

偶々シミュレーター室にちょっとした用事があってそこへ入ると、既にシミュレーター内は機能しており、そこはとある山奥を再現した地形となっていた。
そこへ酒呑童子が襲ってきてなし崩し的に闘う事になったのだが、幸いな事に酒呑童子に宝具を使う素振りはなく、終始手足や時折剣を使った攻撃しか使ってこなかったから、対処法は比較的軽めに済んだ。
しかし、幾ら生半可な奇襲では後れを取るつもりはない修司といえど、今回の不意討ちは肝が冷えた。アサシンクラスで召喚された酒呑童子は殺気をうまい具合に隠している。それ故気付くのが遅くなり、ギリギリで最初の一撃は何とか頬を掠める程度に留まった。
もしあの時が修行後の疲労困憊状態だったら、恐らくは頬を掠める程度で済まなかっただろう。それ程までにあの時の酒呑童子の一撃には真剣さと殺意があった。それ以降の立ち合いは殆んど殺気が込められていなかったから、よりそう思えてしまう。
「でも、旦那はんもイケずやわぁ。あの牛女に使ったかいなんちゃら、やったっけ？　なんでそれを使おてくれへんの？」
「界王拳だよ。……これから修行する時に温存しておきたかったんだ。幾ら慣れてきたと言っても、あれは短期決戦用の――所謂奥義なんだ。そう簡単に晒す訳にはいかねぇよ」
界王拳を使わずに戦った事を不服そうに頬を膨らませる酒呑童子に修司は肩を落として説明する。元々界王拳は長期戦向きの技ではなく、その消耗の激しさから短期決戦用の奥義として運用している。確かに度重なる激闘や、過酷な環境での修行によってある程度使いこなせるようになっているが、それでも完全にモノにしたとは言い難い。
サーヴァントを相手にしながら技の熟練をこなす。確かにそう言うやり方もあるにはあるが、少なくとも目の前の大妖怪相手に使うつもりはない。あとケルトの女王にも。どう考えても鍛練以上の死合いに付き合わされる事になるのは目に見えている。
使うのは１０倍界王拳を完全に使いこなせるようになってから、そ

う断言する修司に酒呑童子は興味を失った様に背を向ける。
「そ、ならもう此処には用ないなぁ。その気にならない旦那はんを相手にしてもつまらへんし、今日はお暇させてもらうわ」
「そ、そっちから襲ってきておいて……」
一方的に襲ってきたと思ったら、一方的に用無しと断じられた。気紛れと言うには些か理不尽な態度の酒呑童子に修司は頬を引くつらせる。同郷であり敵対者でもあった金時から、酒呑童子という鬼は基本的に気紛れで破滅的思考をしていると事前に警告されているが、その意味を漸く理解した気がする。
その後、その場を後にする酒呑童子とは時間をおいて修司もシミュレーター室から出ていくが、後で聞いた話だとここ最近の酒呑童子はシミュレーターを操作しているロマニの背中をジッと見つめていたという。恐らくは彼の動作を真似て装置を弄ったのだろう。
今回のシミュレーター室の一件はロマニには寝耳に水な事だった様で、酒呑童子は暫くシミュレーターへの出禁が言い渡される事になった。
因みに、修司のシミュレーターへの用事は広大な空間に様々な外の景色を投射する機能に興味があった為、もう一度肌で体験したかったという。
そして、今回の出来事を偶然耳にした頼光公が激怒し、茨木童子と一緒になって酒呑童子をカルデア中追いかけ回す事態になるのは……また別のお話。
「……なぁ酒呑、どうしてあの人間をそこまで気にかける？　坂田金時だけではなかったのか？」
「なんや茨木、妬いとるのん？」
「だって酒呑、ここ最近あの白河の話ばかりするではないか。流石の吾も辟易するぞ」
「あはぁ、そやったっけ？　堪忍な。けど、旦那はんも悪いんやよ？なにせ、あのかいなんちゃらを使おてる時の旦那はん、血のように紅くて、瑞々しくて……」
「とても、美味しそうなんやもん」

からからと鈴の様に嗤う幼き姿の大妖怪、酒呑童子はいつか目の当たりにする赤い炎を纏う修司を思い描き、うっとりと眼を細めて妖艶に舌舐めずりをする。
「其処にいたか蟲ぃ!!」
「げぇ!? 頼光ぅ!?」
白河修司と坂田金時が出撃するまであと――――数秒。

――――王達との歓談――――

日課の鍛練も終わり、食堂へとやって来た修司。晩御飯の時間をやや過ぎた時間帯、人気もサーヴァントの気配も少なくなった食堂へ訪れるとそこで屯っている三人の王と出会した。
「おお、シュージではないか。その様子だと今日の鍛練は終わった所か」
「征服王、それに王さ……英雄王に始祖さんもか。結構意外な組み合わせだけど、なにしてんの?」
「フンッ、ただの談笑よ。最初はそこの始祖との対談だったのにそこの雑種が強引に話に入ってきおったのだ」
「まぁそう言うな。異なる時代に我等はそれぞれ一つの時代を築いた王、見識を広める為意見を交わすのも一興だろう?」
カルデアという一つの施設に稀代の王が三人も顔を合わせるのは確かに貴重な体験だろう。征服王イスカンダル、オケアノスを目指して大地を駆けた大王は死後サーヴァントになった後でもその探求心は微塵も翳っている様子はなかった。
「まぁ、確かにビッグネームの王が三人も顔を合わせる現場はそうそうないよな。うん、俺が歴史学者だったら卒倒してるかも」
「そう言う貴様も、若い頃は世界中を旅していたとマスターから聞いたぞ。どうだ? 晩飯食いながらで構わんから我等と一つ話をしていかぬか?」
「え? そりゃあ、征服王から直々のお誘いなら是非もないけど

……いいのか？」
「余は構わぬとも。余も征服王も一つの時代（ローマ）を築いてこそあっても、世界を見てきた訳ではない。これも一つの巡り合わせ（ローマ）、現代で世界を見てきたそなたの話、興味はある」
「勝手にしろ。我は興味がない」
　征服王からの誘いを受けて一瞬迷っていた修司だが、ローマの始祖からも誘われた以上無下には出来ない。英雄王からは素っ気ない態度を取られたが、拒絶されていないのなら是非もないと、厨房で佇む料理長（エミヤ）に夕飯を頼み、出来上がりを待つまで王達と談笑に交わる事になった。
　ただ、話の内容は古代よりも修司の旅をしていた頃にシフトする。いずれも神秘満ち溢れる古代の王達であるが、それ故に好奇心や探求心は人一倍強く、中でも征服王は修司の当時の話に夢中になって聞いていた。
「……で、その頃の俺はそれが魔術だと知らずに当時の魔術師達を殴り倒した訳」
「ははぁ、前々から聞いた限りもしかしたらと思っていたがこりゃ予想外だったわ。お主、結構ハチャメチャな旅をしておるのだな」
「まぁ、当時から俺の保護者には度々無茶ぶりをされてきたからな。今でこそ笑い話で済んでいるけど、当時は本当に洒落にならなかったんだよなぁ」
　エミヤの料理も綺麗に平らげ、片付けを終えた修司は食堂の天井を見上げながら沁々（しみじみ）と当時の事を思い返す。我ながら破天荒な毎日だった。見識を広め、経験を与える為、全ては黄金の王からの試練だったとはいえ、中学に上がったばかりのガキに一人で外国を旅させるとか、今でもよくやったものだと思う。
　お陰で文化も言葉も字も読めなかった修司は、滞在先の二週間でほぼマスターするようになった。そうせざるを得なかった。お陰でトラブルには頻繁に巻き込まれるし、事件事故にも何度も直面した。その度に自棄になって暴走し、地元マフィアを壊滅し、その際の町の損壊の酷さにマフィア共々警察の厄介になった事もあった。

「ブハハハハ！　悪の組織を壊滅させたのに警察の厄介になるとは、お前の旅路は話題が尽きぬな！」
「いや笑いすぎだから、確かに端から見れば面白いかもしれないけど、当事者からすれば笑い事じゃないから。もうちっと遠慮して」
「ハハハハ、それは悪い悪い。しかし聞けば聞くほど面白い。お主、もしかしたらそう言う星の下に生まれたのやもしれんな」
「笑えないからなそれ。……そう言えば、魔術師の話で思ったんだけど、どうして現代の魔術師って高慢ちきな連中が多いんだ？」
「と、言うと？」
「いやほら、メディアさんって魔術師の中でも最高峰に位置する人でしょ？　でもあの人ってその事を鼻に掛けたりしないし、見下したりしないでしょ？　なのに現代の魔術師はメディアさんの足下にも達しない連中が多いのに、そういう奴等に限って横柄な態度を取ってくるんだよ。この違いってなんなのかなーって」
　旅の話をしていくにつれて必然的に修司の話の内容は魔術師達との繋がりが多くなっていき、軈てそれは魔術師に対するある疑問の話に辿り着く。現代と神代の魔術師を知る修司が思う魔術師に対する疑問、それは現代に生きる魔術師に対する修司の問い掛けだった。
「別に現代魔術師の全てがそうだとは思ってねぇよ？　俺の知り合いにだって魔術師はいるけど、大体皆良い奴だし、話が分からない奴はいない。ただ、俺が外国で出会う殆んどの魔術師は皆決まって同じ様な事を言ってくるんだよ」
　やれ自分の研究の礎になれとか、やれその体を解剖させろとか、唯でさえ人の命を当たり前のように狙ってきて、あまつさえそれを当然の権利だと断じてくるのだ。

　その癖此方が少しでも抵抗すると何故だバカなを繰り返すオブジェと化し、終いには無様に命乞いをしてくる始末。殺す気で来る癖にやり返されると酷く動揺する現代の魔術師達には修司も色んな意味で辟易としていた。
「征服王や英雄王の時代にいる魔術師……この場合は神官様か？

当時の人達にそんな奴っていたりした？　もしいたりしたら対処法とか教えてもらえたりすると嬉しいんだけど」
「う、うーむ。どうだったかなぁ？　余はそう言うのには余り詳しくはないからな。英雄王、貴様はどうだ？」
「いるわけなかろうそんな戯け者、神官とはその名のとおり神に繋がる者の総称よ。神へと繋ぎ、仰ぎ見る者が神より傲慢でどうする。そうなったら最期、神々に呪われて終いよ」
　魔術師の異常なまでの傲慢さ、それを不思議に思っての問い掛けは古の王達の首を傾げさせた。
「別にさ、自信を持つのはいいと思うんだよ。武術にせよ魔術にせよ、それはソイツが伸ばしてきた技だからさ、それを誇りに思うこと自体は悪いことではないと思うよ？」
　武術も魔術も極めるモノだというのは修司も理解できる。出来なかった事が出来るようになる喜びは何物にも勝る劇薬の様なもの、その喜びを糧にして更なる成長へ挑む、それが魔術師と人間にある数少ない共通事項だと修司は思っていた。
　けれど、それにしたって魔術師の傲慢さは理解できないモノだった。その最たる例となったのが聖杯戦争に参加しようとしていたとされる元メディアのとあるマスターだった。
　その男は如何にも成金な魔術師だったとメディアは語る。自分を優秀な存在と自負し、莫大な金と労力を使って無駄な手段と無意味な犠牲を払って小さな魔力の塊を自慢気に話す小物。
　そんな彼の前で術を見せればプライドが傷付いたと激昂し、メディアに手を挙げて令呪で縛ってきたという。
　突っ込み所が多すぎてワザとやっているのかと言いたくなるくらいにアレな魔術師、普通自分より格上の術者が出来たら低姿勢でないにしろ、それなりに良好な関係を築こうとするモノ。技術も知識も格上な相手に何故そうも上から目線でモノを言えるのか、これが分からない。
　魔術師なんて生き物に同調するつもりはないが、もし仮に自分がメディアという格上の魔術師を召喚したなら、聖杯戦争中は絶対に敵対

しないし、なんなら弟子入りだってするだろう。傲慢なのもそうだが、魔術師という輩は格上の相手をも虚仮にする傾向……というか、知らない相手には基本的に高圧的な気がする。
「……これは、余の主観であるが、現代の魔術師は神々との繋がりが薄いのではないだろうか」
「ロムルスさん？」
「ほう？　ローマの始祖よ、その根拠はなんだ？」
　魔術師という存在に王達と一緒になって首を傾げていると、唐突にローマの始祖ロムルスが語り出す。魔術師の傲慢な理由、それは即ち古に存在していたとされる神々にあるのではないのかと。
「魔術とは古き神秘に依存するものが多い、神々も然り。神という導き手があったからこそ、魔術師達はその指針に揺るがぬ自信があった」
「ふむ、つまり神々が消えた時代から魔術師達は独学で魔術を学び、研究する必要があった。指針がないから手探りで挑む必要があり、だからこそ自力で達成した己を誇りとしたが、時代が流れるに連れて増長したと？」
「えぇ？　そんな大層な話かぁ？　以前メディアさんから聞いたアトラムって魔術師は大した魔術師じゃないと断言してたぞ？」
　始祖ロムルスの言葉を自分なりに解釈するイスカンダル大王に対し、修司はそんな馬鹿なと一蹴する。仮にもローマの始祖相手に友人感覚で接する修司にエミヤは厨房の奥で吹き出した。もしここに他のローマ勢がいたら確実に面倒な事になっていただろう。それでも全く意に介しない辺り、ロムルス王の器は大きいと言えた。
「それに、魔術師って奴は家の歴史が浅い奴ほど上から目線な奴が多い気がする。前にエルメロイⅡ世の先生が言ってたけど、前のエルメロイの人は魔術師らしい人であっても無闇に人を見下したり、一般人を巻き込んだりしないと断言していたぞ」
「む？　そうであったのか。であるならばこれは余の落ち度（ローマ）であるな。済まない（ローマ）」
「そう気にするほどではないだろうローマの、今のは言葉足らずだっ

たこやつが悪い。ほれ、お前も謝っとけ」
「うっ、確かに今のは俺の説明不足だったな。悪いロムルス王、魔術師に対する偏見で言葉を濁らせた」
「ウム。しかし……フフ、余は少し安心したぞ。人の善性を体現するソナタにもその様な感情があるのだな」
「ど、どういう事？」
「人として上を向き、人として高みを目指すそなたを余は眩しく思えた。しかし、強すぎる善性は時に人を人の枠組みから外してしまう。正しくあろうとするのは良い、だが正しさだけでは人は生きられぬ。強さだけではない、弱さもまた人の在り方なのだ」
　優しい眼差しを向け、諭すように言葉を紡ぐロムルスに修司は彼の言わんとしている事を言葉ではなく、心で理解した気がした。
　魔術師も人間も同じ、強弱であることが悪ではなく、悪性も含めて人なのだと、改めて諭された気がした。魔術師の事を口汚く罵るつもりはなかったが、過去の経験からつい偏見混じりにモノを言ったのも事実、ロムルス王の言葉を胸に刻み、修司は改めて彼の王に頭を下げた。
「ごめん。いや、この場合はありがとうか。そうだよな、魔術師だって人なんだ。悪い奴もいれば良い奴もいる。清濁合わせてこそ人は人でいられるんだな」
「ほほう、まるで悟りを得たような物言いだな。なんだ、これを機に覚者でも目指すか？」
「まさか、俺のやることは今もこれからも代わりないよ。自分の出来ることを全力でやり通すだけさ。ただ、魔術師も人間も大して違いはないって事を改めて理解しただけ」
　黄金の王からの揶揄も修司は笑って受け流す。
「んじゃ、俺はそろそろ行くよ。王様達もあんまり遅くまで呑んでるなよ」
「おう、お前の旅の話は中々面白かったぞ。また何かあったら聞かせてくれ」
「お休み、良き夢を」

「フンッ」
偉大なる王達から話をし、有意義な時間を過ごせたと満足そうに修司は自室へと戻っていく。そんな彼を見えなくなるまで見送った王達は一斉に英雄王へと振り返った。
「おい英雄王、お前さんいつまで本当の事を黙っておくつもりだ。あんな良い臣下を弄ぶのは流石にどうかと思うぞ」
「それも汝の愛（ローマ）である事は理解できるが、些か愛（ローマ）が過ぎるのではないか？」
「戯け、アレが弄ばれるタマか。いいか、散々言っているが、我は今回の召喚に応じたのはあくまでバカンス、つまりは遊びに来ただけなのだ。人理修復？　そんなもの、アイツ一人その気になれば一息に片付けられよう。それをしないのは、偏にアイツが人の感性を捨てずにいるからだ」
「……それは、例の魔神とやらか」
「詳しくは語らん。意味がないし語る理由もない、どちらにせよ奴がここにいる以上結末は決まっている。我はただその過程を遠くから面白おかしく愉悦（見守る）するだけよ」
「……あ、聖女だ」
「とう！」
ドヤ顔で語る英雄王に若干の苛立ちを覚えた征服王はいもしない聖女を口にする。その瞬間黄金の王は懐にしまってあったハデスの兜を取り出し、気配と一緒に姿を消した。恐らくは彼も自室へと逃げ込んだのだろう。
「最近、あやつの努力の方向性が頗る間違っている様な気もするが……余の気のせいかなぁ」
「……それも、またローマである」
偉大なる人類最古の王、ギルガメッシュ。今宵も極上の愉悦を得るために意味のない努力を続けるのだった。
「よし、ならば呑み直すか。おーいエミヤの、此方に酒の追加を頼む」
「帰りたまえ」
カルデアの食堂、そこは料理長が守護する絶対領域。そこに反する

⊠達は喩え王であっても許しはしない。

その65

――筋肉の共演――

朝食。それは日々人間が摂る最初の糧であり、その日一日の調子を得るための大切な行事。それは極寒の地に位置するカルデアでも変わらず、職員達は勿論、本来食事を必要としないサーヴァントもこの時ばかりは生前のいざこざを持ち込まず、特殊な環境下での団欒を楽しみながら朝の栄養を補給していた。

カルデアの料理長（オカン）であるエミヤと、ブーディカやキャットを始めとした料理組が用意してくれた朝食に舌鼓をしながら、人類最後のマスターである藤丸立香は少し離れたテーブルへと視線を向ける。

筋肉。荒々しくも何処か神秘の輝きを思わせる光沢を放つ勇ましい肉の結晶、その肉の主であるヘラクレスとスパルタクス、バーサーカーである彼等もこの時ばかりは大人しかった。狂戦士と呼ばれる彼等でも最低限の規則を守ってくれている道徳心は残っていた様だ。

他にレオニダス王と坂田金時、金時に至ってはヘラクレス達と同じバーサーカーなのに理知的な彼は納豆を混ぜながら鼻唄を鳴らしている。

そして、その中心にいる白河修司。カルデアの中でもかなりの筋肉密度を誇るサーヴァント達、その中に平然と混じっている修司、その光景も立香は最近慣れ始めてきた。

対する修司も、最初は朝食時に於ける暑苦しさに辟易としていたが、次第に慣れてきた為に今ではもう特に何も言うことはなかった。

「うむ、相変わらずエミヤ殿の作る料理は栄養バランスが均整で素晴らしい。これを毎日食べれば自然と活力は沸き立つもの、マスターの修練もより励みになりましょうな」

「毎朝ゴキゲンな飯をいただけるたぁ、これだけでもカルデアへ召喚された甲斐はあったぜ。俺様の筋肉も躍動するってもんよ」

「朝の糧、それ即ち圧政者への反逆。その第一歩である」

そして朝食も滞りなく食べ終わり、各々が思い思いに行動し始めると、修司達はトレーニング室へと向かった。世界最高の質と規模を誇る器具と設備に囲われながら、今日も彼等は己の筋肉を磨きあげる。
「しかし珍しいな。修司の旦那が此方に来るとは、いつもの所での修行はもういいのか？」
「いや、もうすぐ次の特異点へのレイシフト準備が始まるってロマニから聞いてな。準備期間はいつも大体二～三週間あるから、その間にみっちり追い込むつもりだ。今日はその前の慣らしみたいなものさ」
「過度な追い込みは肉体を痛め付ける結果になりますからな。適度の休憩は必須、修司殿の判断は間違いないかと」
「反逆は一日にして成らず。圧政の前の休息も時には必要である」
巨大なダンベルを片手にスクワットを続ける修司達、常人ならまず持ち上げられないそれを談笑しながら続ける様は端から見たら圧巻の光景だった。
他にも、アタランテとアキレウスが二人仲良くランニングマシーンで走ったり、マルタ（水着）が設備をフル活用してトレーニングしていたり、中には休憩中の職員達が運動不足を解消する為に利用しにきていたり、ここトレーニング室はマスター専用の施設ではなく、サーヴァントやスタッフ達の交流の場となっていた。
「しっかし、スパルタクスやヘラクレスって本当に良い体格してるよなぁ。金時も、どうやったらそんな筋肉が付けられるのか教えて欲しいもんだよ」
「筋肉って、修司の旦那も相当鍛えているじゃねぇか。筋肉の量も質も、オイラ達とそんなに変わらねぇと思うけど？」
「いやさ、単純に見てくれの話。俺って昔さ、筋肉って硬くてバキバキしててこそ格好いいみたいな考えを持っててよ。良くテレビの前でボディビルダーの真似していたりしてたんだよ」
「なんとも微笑ましい限りですな」
「まぁな。で、筋肉付けている奴は必然的に強くて格好いいイメージを抱いてさ、あんな風になりたくて鍛練の合間に筋トレしていたんだけど、上手くいかなかったんだよなぁ」

昔、筋肉というモノに偏った情景を抱いていた修司は、テレビに出てくるようなマッスルな肉体を目指して一時期筋トレに励んでいた時期があった。筋肉＝パワー、単純で明確な図式。パワーがあるから強い、そして格好いいとポージングを取るマッスル達に影響されていた。

しかし、どれだけ筋トレをしても一向にバキバキに成らず、食生活を変えても体格が変わらない自分に一時は絶望したりしていた。

今でこそ自身に見合った体格となり、山吹色の胴着を着るのに相応しい肉体となっているが、嘗て夢見た理想の筋肉を持つ英霊達を前にその気持ちが甦ってしまったが故の愚痴、こんな自分になりたかったと語る修司に金時は肩を竦めた。

「そりゃあ、流石に欲張りってもんだぜ旦那。確かに俺やヘラクレスの旦那は恵まれた肉体を持っているかもしれねぇが、俺達から見たらアンタだって大概なんだぜ」

自分達の体を羨ましいと語る修司だが、彼等から見れば修司こそが羨望の塊だった。鍛えに鍛え、サーヴァントを凌駕するほどの頑強さを身に付けておきながら、それでもまだ完成されていない未完の大器。

これからもまだまだ強くなる修司の愚痴は歴戦の英傑であるサーヴァント達にとっては、欲張りとも言える言葉に聞こえた。

「へへ、そうかな」

そんな金時の大概だという言葉に修司は嬉しそうに笑っていた。これ迄自分が歩んできた道のり、それが偉大な英霊達から太鼓判を押された事実に嬉しく思わない筈もなかった。

「レオニダス王、ちょっといいですかー？」

「トレーニングメニューで相談したいんですけど……」

「了解しました。すぐ向かいます！　それでは皆さん、私は一度これで……」

遠くからトレーナー室を利用しに来たスタッフ達に呼ばれたレオニダスは談笑もそこそこにその場から離れていく。

「そう言えば、レオニダス王ってここのトレーナーでもあったんだっ

け」
「あぁ、レオニダスの旦那って面倒見もいいからな。体を動かしたいって奴の相談に付き合ったり、トレーニングを付きっきりでサポートしてくれるから、ここじゃあ大人気なんだぜ」
藤丸立香の筋力トレーニングのコーチの一人である事に加え、その面倒見のよさから職員達からも人望の厚い人物となっているスパルタ国王レオニダス。その人気はトレーニングのコーチランキングにおいてぶっちぎりの一位を誇っており、受講者の多くは彼をリピートしている。
因みに他にも数名のサーヴァントがトレーニングコーチに名を連ねており、専門的要素が多く、内容もやや上級者向けという事でケイローンが二位となっており、三位は笑顔が素敵なスパルタクスだったりする。
因みに某ケルトの影の女王もコーチをしているらしいが、人気は最下位だったりしている。そんな彼女の八つ当たりに巻き込まれた青タイツとその派生が尻から赤い槍を生やしたりしているが……知らぬが仏である。
「さて、そんじゃあ俺達もやるか。ボチボチ体も温まってきたし、まずは腕立て千回やってみようか」
「おし、付き合うぜ旦那」
「フハハハ！　反逆は一日一歩、共に苦難を乗り越えようではないか！」
理想の筋肉を目指し、修司は今日も頑張るのだった。

――第一次・被害者の会――
「本日は忙しい所来てくれて、感謝してやろう」
「いや感謝する立場の態度じゃないでしょ、それ」
ある日、秘密裏に集められたサーヴァント達は用意されたテーブルの席に座り、自分達を集めた人物へ視線を向ける。黒いドレスを身に纏い、雪のような白い髪と素肌を晒して不敵に嗤うのは、アルトリア

＝ペンドラゴンのもう一つの側面(顔)、セイバーオルタだった。
「話を遮らないでくれないか戦車女。今日は待ちに待った我々の語らいの時、無闇なチャチャは品位を落とすぞ」
「人を電車男みたいに呼ばないでくれる？　て言うか、何でアンタが代表なのよ。あの男に酷い目に合わされたのは、アンタだけじゃないんでしょ？」
「いいや、ここの代表は私以外に有り得ない。何故なら、過去二度に渡って私はあの男に剣を折られているのだからな」
「……ごめん」
　セイバーオルタが被害者の代表という事に納得のいかなかったジャンヌオルタが異義を立てるが、達観した笑みと共に呟かれる彼女のカミングアウトによってジャンヌオルタは潔く退くことを選んだ。
　そして、彼女のカミングアウトによってセイバーオルタこそが自分達の代表だと認めた一同は、今後は彼女の主導で会は進む事になる。
「では、早速今回の議題を掲げるとしよう。内容は、〝白河修司の暴挙を如何にして止めるか〟である。今後、特異点で行われるであろう奴のやらかしを今後どの様にして防ぐかが議題の要とする」
「やはり……ここは共にレイシフトをする事で、事前に対応するのが最善ではないか？　彼が事を起こすのは決まって危機的状況に陥った時だけ、その様な機会がなければ彼も無用な行動を起こしたりはしないと思うのだが？」
「甘いな。竜殺し君(すまない)、奴は根っからの優等生、出来きることは自分から進んで行う人間だ。特異点という問題しかない地に於て、奴より戦果を挙げるのはほぼ不可能と言っていい」
「では、特異点に行かせない。というのは？　そもそも事の経緯は全て彼が特異点に赴く事に起因しています。言葉巧みにカルデアに縛り付ければ、管制室で待機させられるかもしれませんよ？」
「人類☆救済君、それは現実的ではないな。そもそも、言葉一つで奴が止められるとは思えない。あの男は意外にも弁が立つ、とあるローマ皇帝と談話を繰り返し、正論という名の暴力により磨きを掛けてしまった」

「て言うかアイツ、ここの最高戦力の一人なんでしょ？　人類最後のマスターでもあるわけだし、遊ばせとく理由なくない？」
　被害者の会。その名称通り過去に特異点にて白河修司から酷い扱いを受けたとされるサーヴァント達が集まる秘密の集い。剣を折られたもの、旗を折られたもの、宿敵をサンドバッグにされたもの、実際にサンドバッグにされたもの、計画を根底から捩じ伏せられた者など、多種多様の被害者が集まっていた。
　そんな彼女彼等が目的としているのは、白河修司への糾弾。彼の蛮行を如何にして防ぎ、被害を抑えるかという事だった。
　その後も会議は続くが、有効となる案は何一つ出てこない。時間ばかりが過ぎていく中、遂に音を上げる物が出てきた。
「……やっぱり、無理なのかな」
「おい、どうした解体ちゃん」
「だって、まるで勝てる気がしないんだもん！　どんなに言葉を伝えたって、どんなに想いを伝えようとしても、あの人には全く届く気がしないんだもん！」
「解体ちゃん……」
「当たり前だよね。だって私たちは〝悪〟なんだもん。人類から悪いものだと決め付けられて、切り捨てられた側、何処までも正しいあの人に間違っている私たちが……勝てるわけないんだもん」
　幼い一人の英霊の叫びに一同は揃って俯く、分かっていた事だ。間違っているのは自分達で、あの男は常に正しい事を言っている。
　淘汰されるのは当たり前、否定され、拒絶されるのは当たり前、だから、諦めて受け入れるのも……また当たり前。
「……本当にそうか？」
「……え？」
「確かに、我々は間違っているのだろう。こうして皆を集めているのはただの愚痴の言い合い、傷の舐め合いでしかないのかもしれない。だが、それでも私は……叫ばずにはいられないのだ!!」
「冷血女……」
「貴様達は許せるのか!?　あのピクト人すら躊躇いそうな蛮行を！

解体ちゃん、お前は許せるのか？　カルデアに召喚されて尚、恐怖を刷り込んできたあの男の行いを」
「っ!?」
「マカ☆ロンの鬼よ！　貴様はどうだ!?　圧倒的な暴力に一方的に攻撃され、なぶられ続けたお前は、悔しくもなんとも思わないのか!?」
「……悔しい。嗚呼悔しいともさ！　あれは吾であって吾でないのに、思い返すだけでも悔しさと怖さで涙する！　最近では酒呑に本気で心配されたのだぞ！　あ、でも酒呑に膝枕されたからそれはそれで……」
「そうだ。此処にいる多くの者は敗北者だ。かくいう私も二度も聖剣を折られ、今ではギャン泣き王などと呼ばれる始末。情けないと何度思ったか、消えてしまいたいと何度思った事か」
「しかし！　そんな我々でも意地がある！　奴の蛮行を止め、後の被害者を無くす義務がある！　これは人理修復の戦いではない。けれど、我々英霊に許された数少ない正当性を勝ち取る聖戦である！　悪も善も関係ない、これは、未来を取り戻す戦いである！」
『オオオオオオッ!!』
歓声が沸き立つ。何度膝を付き、挫けても、それでも立ち上がる気概が彼女にはあった。剣を二度も目の前でへし折られ、座に刻まれていたその記録が記憶へ昇華され、彼女の脳裏にはいつもその光景が刷り込まれていた。
恐怖と絶望に苛まされ、それでも此処まで立ち上がってきた。全てはたった一人の男の行いを正すため。彼女の言葉は彼等の心に火を灯したのである。
「……いや、食堂でやることかね」
その後、一通りの意見を纏めた被害者の会の面々は修司に討論を挑むが……結果は惨敗、彼の吐く正論に何一つ反論出来ず終了した。
「いや、そもそも仕掛けてきたのは大体そっちなんだから、正当防衛主張されたら勝てるわけなくね？　手加減しろ？　いや、ある程度はしてるよ？　ジャックちゃんとか粉微塵になってないじゃん」
「君、本当にそういう所だからね」

??月√β日

遂に、第五の特異点の特定が判明した。場所は北米、つまりは北アメリカ大陸。地球上における最大規模の陸地が今回のレイシフト先らしい。らしいというのは、未だ特異点の原因である聖杯の位置が絞り込めていない様で、今も観測を続けてはいるが、どうも上手く絞り込める事が出来ないでいるらしいのだ。

過去の特異点とは一線を画す規模の広さ、場合によってはアメリカ大陸を横断する必要も出てきた以上、今後自分達には戦略や戦術よりも体力を必要とするかもしれない。

レイシフトまで二週間と少し、この間に少しでも体力をつけるべく、立香ちゃんも自分もかなりの肉体改造を求められるだろう。

故に、自分はロマニに二週間程の暇を戴く事にした。レイシフト先でちょくちょく回収していた食料をつぎ込み、自分はこれから外との接触も断ち切り、自身の修行に集中する事になった。目指すは１０倍界王拳を完全に使いこなし、更なる上へ行くための土台作り。折角なので、ここで宣言しておこう。

この二週間で俺は２００倍の重力を克服し、２０倍界王拳を習得する――――為の土台を必ず完成させる。してみせる。

そうしなければ、次にまたあのヘラクレスの様な奴が出てきた時、勝てるとは限らないから。

さぁ、始めよう。ここから先は時間との勝負だ。気を引き締めて掛かっていこう。

その６６　第五特異点

――――人理焼却という未曾有の危機、人類はその歴史ごと淘汰され、遂には終焉を待つばかりとなった。哀しむ者も、嘆く者もいなくなったこの世界でしかしちっぽけな希望は残されていた。

人類保障機関カルデア。人類の歴史を守り、未来を取り戻す最後の砦。現在人類最後の火を守るカルデアは遂に第五の特異点へのレイシフトの準備を終えることが出来た。

七つある特異点。その折り返しを越え、黒幕の存在が明らかになり、彼等は今、何時ものように管制室に佇んでは……いなかった。

カルデアの中枢部分である管制室から離れに離れた隅の方、現在使い道が無く利用する者もいない事から長い間放置されていた区画――――格納庫。広大な敷地内を誇りながら、シャドウボーダーなる巨大な装甲車以外目立った所がない空間に複数人が揃って集まっていた。

「これが、修司さんの修行場かぁ。凄いなぁ、こんな建物が出来てたなんて、私全然知らなかったよ」

「私もです。修司さんはいつも突飛な事をする人なんですね。分かっていたつもりでしたけど、どうやら過小評価していた様です」

そんな装甲車とは別の意味で巨大な建物に集まる立香とマシュ＝キリエライトは眼前に聳え立つ丸みを帯びた建築物に呆れ果てていた。どうみてもあの主人公が使用していたとされる宇宙船型のトレーニング室、外観といい質感といいまるで原作から抜き出してきたかのような出来映えに立香は呆れ以上に感心を抱いていた。

それは修司がニコラ＝テスラを筆頭に碩学者達から叡智と技術を借りて造られた特別製の重力操作室。重力による負荷を任意で操作し、最大で３００倍にまで引き上げられるモノ、端からみれば拷問器具でしかないデカブツだが、そこに修司が籠って既に二週間の時が過ぎていた。

何の音沙汰もなく、連絡一つも出してこない修司。最初は彼の事だ

から心配は入らないと放置されてきたが、此処まで何の反応もないと流石に不安になってくる。今日は大事なレイシフトの日、今まで時間通り姿を見せてきた修司が全くその素振りを見せなくなった事にまさかと思った立香達が格納庫へとやってきた。というのが、彼等が格納庫へと押し寄せてきた経緯である。

「……ねぇニコラ＝テスラ、君はこの建造物の作成物に携わった人物だと聞いたんだけど、中では具体的にどんな風になっているんだい？」

「ハハハ、組織の長として心配するのは分かるが、それは杞憂だぞロマニ＝アーキマン。ともあれ責任者の一人である以上説明責任は果たさねばな。中は外観通りの空洞、中枢に重力操作の装置がこの建物の柱を同時に役割を担っており、その下には必要最低限の居住スペースが確保されている。正に鍛える者の為の鳥籠という訳だな」

「……じゃあ、どうして彼と連絡が取れなくなったのかは説明できるかい？」

「無論だとも。内部には外……この場合はカルデアの各施設との通信という意味なのだが、それらと繋がるように設定されてある。カルデア側も彼が拒まない限りいつも通りに連絡事態は繋がる筈だ」

「でも、現にこの中にいる修司君と連絡が取れていない。それはつまり……」

「恐らくは、彼自身が通信手段を絶っているのだろう、乗り込む間際に鍛練に集中したいと耳にした。中は特殊な素材で造られた防音仕様となっているから、此方の呼び掛けにも応えられない筈だ」

修司との連絡が付かない点についてロマニが追求すると、今度はニコラの代わりにバベッジが返答した。彼も修司の誘いを受けた者の一人、淡々と答える蒸気機関の戦士に所長代理は溜め息を吐きながら頭を抑えた。

「やれやれ、どうして彼という人間は一人で何でもかんでも決めちゃうのかなぁ。少しは僕達にも本心を開かして欲しい所だよ」

「いや、それは違うよＤｒ．ロマン。恐らく彼は我々を信用していないのではなく、単に遠慮しているだけじゃないのかな？　ホラ、君っ

てば立場的に色々と忙しい人間な訳じゃん？　そんな君に気を使ったんじゃないかなぁ」
「だとしても、一言相談くらいして欲しいと思ってしまうのさ。幾度の特異点を乗り越え、僕達は仲間になれたと思っている。それが、並行世界からやって来た異邦人だとしてもね」
　修司の相談もなしに行う独断的行動。彼らしからぬ行いだとは思うが、そこにはいつもの彼らしい気遣いがあった。それをロマニは嬉しく思う半面、申し訳なく思った。
　そして、更に言えば……。
「あぁ、あぁ！　どうしてあの子（修司）は私に相談もなく一人で勝手に決めてしまうのでしょう。それが子の決断であるならば……ええ、ええ。母は認めましょう。ですが、それも限度があります。一日二日の家出なら笑って許しましょう、ですが、二週間とは何事ですか!?　その様な暴挙、天が許してもこの頼光が許しませんよ！」
「落ち着いてくれ頼光の大将！　旦那は別に家出とかそういうんじゃねぇから！　ほらあれだよ、男子三日会わざればって奴だよ！」
「既に三日過ぎてます！　つまり男子の家出が許されるのは三日までという事！」
「いや意味違くね!?」
　後ろで騒いでいるバーサーカーを何とかして欲しいなぁ……なんて思ったり。
「しかし、坂田金時と源頼光でここまで理性の差があるとはね。同じバーサーカーでもこうも違いがあるとは面白い」
「ダ・ヴィンチ、そんな事を言ってる暇があるなら止めてきてくれ」
「あっはは、ちょっと今は遠慮しておこうかな」
　笑うダ・ヴィンチにロマニは呆れるが、彼女（彼）の気持ちは分からなくもない。この分厚い扉の先には二週間もの合間一人で修行を続けてきた彼がいる。第三特異点での死闘を経て、より強さを求めた彼が誰の目にも留まる事なく一人でずっと鍛練を続けてきた。
　彼と親しい人も、サーヴァントも、修司があれからどうなったのか分かっていない。つまり、誰も見たことのない未知がこの扉の先にい

る。あれから彼がどうなったのか、ダ・ヴィンチ程の才覚を持ち合わせていないロマニでも、興味を抱かずにはいられなかった。
……自然と格納庫に張り詰めた緊張のある空気が広がっていく。一体いつ開かれるのか、緊迫した面持ちで扉を見つめていると。
カシュッと空気の抜ける音が聞こえ、扉が動き始めた。幾重にも連なった扉が機械的な音と共に開かれていく。明らかになっていく扉の向こうで果たして修司は無事なのか、立香達が固唾を呑んで見守っていると……。
「あれ？　立香ちゃんにマシュちゃん、ロマニに……皆まで、なに？　なにかあったのか？」
平然とした様子の修司がそこにいた。二週間前と殆ど変わらない容姿で、待ち構えていた立香達に逆に驚きを顕にしていた。
「全く、なにかあったのか？　じゃないよ。二週間も音沙汰もないから心配したんだよ？　しかも此方からの通信も一切応えないし、少々自分勝手が過ぎるんじゃないかな」
「え？　あぁ、悪い悪い。久し振りに本気で修行がしたかったから、勢いで通信を切ってたんだ」
珍しく責める口調で話すロマニ、流石に二週間もの間連絡一つ入れなかったのは不味かったと修司は申し訳なく頭を下げる。
そんな修司に呆れるも、それ以上に気になることがあったロマニはその場にいる全員を代表して問い掛ける。
「今度から、一言連絡入れてくれよ？　……それで？　成果はあったのかい？」
この二週間で一体どんな鍛練を行ってきたのか、想像出来ないロマニに修司はニカッと笑みを浮かべ……。
「へへ、まぁその時が来たらのお楽しみだな」
悪戯を思い付いた子供の様に笑みを浮かべるのだった。
そしてその後、簡単なブリーフィングを終えた修司達は次の特異点、第五特異点の北米へと向かうのだった。

◇

――――血が飛ぶ、肉が爆ぜる。骨が砕かれ、神経が抉られる。横たわる骸を踏み潰し、猛り狂った王が吼える。

足りない。何もかもが足りない。闘争が、争いが、戦争が、敵が、強者が、弱者が、王にとって全てが取るに足りないモノだった。

己に説法を説いていた餓鬼のサーヴァントも、既に死に体で撤退した。追撃なんてしない、する意味がない。既に王の興味は別の獲物へ矛先が向けられているからだ。

「あぁまだか、まだ来ねぇのか。早くテメェを殺してやりてぇってのに、まだテメェは此処へ来てねぇのか」

目を瞑る度に甦る。眠る度に、息をする度に王は有り得ざる記憶を想起させていく。

己の前に立つ山吹色の男。森の中で、或いは薄暗い地下で、白き炎を身に纏って立ち塞がるどんなに傷だらけでも此方を睨み付けてくる男の姿が、瞼の裏に焼き付いて消えない。

鬱陶しく、煩わしい。なのに、待ち焦がれている自分がいる。感情の全てが削ぎ落とされた筈の、王の根底に残った僅かな染み。

苛ついて仕方がないのに待ち遠しくて仕方がない。矛盾した感情（モノ）、敵意と殺意と憎悪に満ちた凶王は槍を振って空を睨む。

早く来い、憎たらしくも愛しい仇敵よ。お前の敵は此処にいるぞ。

「……なによ、なによなによなによ!! クーちゃんは私のモノなのに、私以外靡いちゃいけないのに！ どうして、どうして!?」

そんな王の傍らに戦士達の女王が憤怒に燃える。彼の全ては私のモノ、そう断じているのに……当の本人は此処にはいない誰かに想いを寄せている。

許せない、許せるわけがない。自分の全てを掛けて手に入れたいと願った男が、聖杯にて在り方を歪められても尚、自分以外の誰かに何かを抱いている。嘗て自身が欲して止まなかった敵意を、殺意を、憎悪を、全てを独占しているその輩に、女王は――――嫉妬していた。
「誰だか知らないけど覚悟しなさいよ。私のクーちゃんに手を出して、只では済まさないんだから!!」
手にした鞭を鳴らし、女王は王と同じ空を睨み付ける。
――――遠くの空で流れ星が落ちた気がした。

「……来たか」
「む？　どうしたのかねカルナ君？」
「あぁ、どうやら俺の待ち人が漸く来てくれた様だ」
「おぉ！　それならば歓迎せねばいけないな！　君の友は私にとっての友であるも同義！　是非とも私の計画に賛同して欲しいモノだ！」
「あぁ、歓迎せねばならない。他ならぬ俺の手で、盛大にな」
（どうしよう。私のマハトマが、盛大にすれ違ってると囁いてるわ）
そのマハトマは、きっと間違ってはいない。

その６７　第五特異点

「さて、早速やって来た北米大陸なんだけど……正確にはまだアメリカ合衆国は出来てないんだよね？」
「そうですね。私達が今いる時代は１７８３年、この年に終結するイギリスとの独立戦争を経て、アメリカは国家として成立します」
「その後は歴史の教科書にも載っている通り、世界の覇権を握るべくひたすら合理的に突き進む怪物国家になった訳だ。立香ちゃん、勉強の成果は出来てるみたいだね」
「あはは、ケイローン先生や他の学者気質の皆さんから手解きを受けてきましたから」
『人理に刻まれたサーヴァントから学問を学ぶとか、端から聞けば凄い贅沢な話だよね』
　ロマニとのブリーフィングも終え、早速レイシフトで第五の特異点へとやって来たカルデア一行。レイシフト先に待っていたのはアメリカ――もとい、北米大陸の何処かの森。周囲に人影も敵の影も見当たらず、取り敢えず森を出ようと修司達は森の中を歩いていく。
「じゃあ、今回の特異点の敵はイギリス……て事になるのかな？ほら、アメリカって何だかんだ人類の歴史の中で欠かすことの出来ない大国な訳だし」
『順当に行けばそうかもしれないけど……あの魔術王の事だ。何かしらの罠を張ってある可能性は充分考えられる』
　先の特異点で遂に明らかになった黒幕の存在、魔術王ソロモン。冠位（グランド）という他のサーヴァントとは一線を画す力を持つとされる英霊、魔術師達にとって魔術の始祖とも言える存在。
　自ら使役する七十二の魔神柱を用いて人理に錨を突き立てて特異点とし、人類の歴史を焼却したまごうことなき人類の敵。そんな奴が今後どういった方法で修司や立香に牙を向けてくるか分からない以上、警戒心は絶やさずにいるべきだとロマニ＝アーキマンは言外に忠

告する。
「だな、魔術師ってのは総じて搦め手を使ってくる奴が多い。そんな奴等の王みたいな奴が相手だと尚更だ。立香ちゃん、マシュちゃん、気を引き締めような」
「「はい！」」
そして、そんなロマニの意見に修司も概ね賛同していた。先の特異点を経て、本格的に体を鍛え直し、以前よりも遥かに強くなったと断言できるが、依然として修司は魔術というものをあまり理解できていない。
ソロモンがどの様な手段で此方に妨害してくるのか、どの様なタイミングで仕掛けてくるのか定かではない。気にするなと言うには敵対している相手の情報が未だに不明な点が多すぎる。こうなってくると、先の特異点で仕止めきれなかった事が悔やまれる。
（今更だが、あの時さっさとネオになって縮退砲をぶちこめば良かったか）
立香とマシュが握り拳を作りながら気合いの掛け声をしている横で、修司はそんな事を考えてしまうが……今更な話だ。次に奴が自分達の前に顕れた時、それがこの壮大な歴史の旅が終わる時だ。
（その為に鍛えてきたんだ。相棒を使うにせよそうでないにせよ、俺はもっと強くならなきゃいけない）
もしソロモンが相棒の対策に何かしらの手段を用いた時、
頼りになるのは自分自身だ。己の体一つで危機的状況を打破出来るようにならなければと、修司は立香達と同様に己に気合いを入れる。
そうこうしている内に森が抜け、一面の荒野へと出てこれた。見渡す限りの大地、これ迄の特異点とはまた違う広大な特異点（世界）に立香が感嘆の声を溢していると……。
『皆、気を付けてくれ！　着いた早々で緊急事態だ！　その先で大規模な戦闘が発生しているぞ！』
「……どうやらそのようだ。向こうで沢山の気配がひしめき合っている」

ロマニの言葉に修司もまた気配を探る。すると、かなりの数の気配が戦っている様子を感知した。
「行ってみよう。もしかしたら其処に今回の特異点の元凶がいるかもしれない！」
「了解です。マシュ＝キリエライト、前進します！」
『二人とも気を付けて、修司君も二人のフォローをお願いね！』
「任せとけ」
盾を構えて突き進むマシュを筆頭に立香達は戦闘が行われている場所へ向かう。そこで彼等が目にしたのは、異様な光景だった。
機械の鎧、先の特異点で遭遇した機械人形（ヘルタースケルター）と似た兵士の群れがレトロチックな戦士達に向けて銃撃している。銃に射たれ、それでも向かってくる戦士、手にしたやりを突き立てて機械の鎧を貫いていくその様子は立香達の目に異様に映った。
その構図はさながら原始的な蛮族と近代的な兵団による応酬、機械兵士の中には生身の人間もいることから、完全な機械の集団ではないようだ。
この場合、どちらに付けばいいのか、それとも静観に徹するべきなのか、目の当たりにする混沌な戦場に立香達が戸惑っていると、両方の陣営から殺意と敵意が向けられる。
『ちょ!?　事情も聞かずにいきなり!?』
「戦争状態だから頭に血が昇っているのか。何れにせよ、これじゃあ話も出来やしないか。と、来たぞ。二人とも、ちょっと下がってろ」
押し寄せてくる集団。片方は槍を、もう片方は銃口をそれぞれ修司達に向かって放たれる。上空からの槍の雨、前方からは鉛玉の嵐が彼等を覆っていく。受ければ無事では済まない凶器の弾幕を。
「シッ」
しかし、修司は拳の一振りで吹き飛ばして見せた。気を纏っての一撃ではなく右腕の一突きの動作、ただそれだけで暴風が戦場を縦断し、両陣営の敵を根刮ぎ吹き飛ばしてしまった。
「こ、これは……」
「うっわぁ～～～、修司さんってば、遂にそう言う所まで来ちゃったか

〜〜」
腕の一振りで戦場を変えてしまった事にマシュはただ驚き、立香は引いていた。当の本人も思っていた以上に威力が出ていた事に驚いているが、修行の成果があったことを静かに喜び、己の手を握り締めた。
「な、なんなんだ今のは!? あ、アイツがやったのか!?」
「機械化兵士達を一撃で……あ、あれが例のサーヴァントタイプって奴なのかよ!?」
機械兵士達の一緒に戦っていた地元の住民らしき人々が戸惑いの声が出てくる。どうやら今ので戦場の酔いが醒め、正気に戻った様だ。修司を化け物を見るような目で見つめてくる彼等に立香が事情を訊ねよとした時。
「立香ちゃん! 上だ!」
「え?」
彼女の頭上から一個の爆弾が降ってきた。何処からの流れ弾か、何れにせよこのままでは彼女の身が危ない。一瞬の迷いも許されない状況で修司が躊躇いなく界王拳を使おうとするが。
「っ!」
修司が加速するよりも一瞬早く、マシュが立香の前にたった。瞬間、爆発が起こる。サイズ的に火薬の量は大したモノではなく、規模も予想より小さなモノだったが、人一人を屠るのに充分な威力が秘められていた。
だが、その爆発もマシュによって防がれ、人類最後のマスターの命は守られた。
「はー、ビックリした。ありがとうマシュ、助かったよ!」
「修司さんが最初に反応してくれましたから、どうにか間に合いました。ありがとうございます、修司さん」
「いや、俺の方も油断していた。大した相手じゃないから大丈夫だと、タカを括っていた」
修司の反応とマシュの気転のお陰でどうにか五体満足でいられた藤丸立香、彼女が危険に晒された事を反省しつつ、次の戦闘に備えよ

うと身構えるが……既にその場には他の勢力の姿は消えていた。
恐らくはそれぞれの陣営に引き返したのだろう。
「やれやれ、到着早々エライ歓迎を受けたなぁ」
「そうですね。ですが、これで一つ分かった事があります。恐らくは、あの陣営のどちらかが今回の特異点の元凶に繋がっていて、どちらかがそれに抗う集団だと」
「あぁ、俺もそう思う。なら、今度はどっちの陣営に接触するかだが……」
「一先ず、あの機械兵士の人達に接触してみようか。あの槍の戦士達はなんというか、話が通じない感じがしたし」
槍の戦士達か、機械の兵隊か。どちらに接触を試みるか悩む修司達に立香がそれならばと提案する。確かに見た限りでは機械兵士達の方が槍の連中よりも幾分か対話の余地がありそうだ。対する槍の戦士達は見るからに野蛮な連中で、修司も初見から、コイツらとはマトモな対話は敵わないと半ば諦めかけていた。
「なら、機械兵士達の拠点へ向かうか。ここから然程遠くない場所に彼等の野営地があるみたいだし、なによりサーヴァントの気配も感じる。ここにいるよりもかなりの情報が得られる筈だ」
「ドクター？」
『い、今此方でも確認した！　確かに近く野営地と思われる所からサーヴァントの反応があった！　……ていうか修司君の感知能力、前よりかなり精度が上がってない!?』
「あぁ、お陰でアサシンの気配遮断にも対応出来そうだ」
そう言ってニカッと笑う修司にロマニは頭を抱えた。

◇

――――それから少しして、修司が感知した人の気配を辿っていくと、森の中に機械兵士達の拠点と思われる野営地に辿り着いた。最初の印象から敵対される事を危惧していたが、どうやらその心配は杞憂だった様だ。忙しく動き回る彼等を横目に、サーヴァントの気配がするテントへ向かう。

その途中、怪我をした兵士達がテントへ駆け込んでいく姿を目撃した修司はそう言えばと何かを思い出し、マシュに声を掛ける。

「そう言えばさ、マシュちゃんは大丈夫なのか？」

「え？　と、突然どうしたんです？」

「いやさ、なんかマシュちゃん疲れているみたいだし、少し休んだ方がいいかと思ってさ」

「え!?　マシュって疲れてたの!?　ゴメン、私全然気付けてなかった！」

「い、いえ先輩。私は頗る元気ですよ。定期検診でも異常は見られませんでしたし、バイタルも正常値を保っていますよ」

ですよね、ドクター。そうロマニに訊ねるマシュに医療担当トップの男は通信の向こうで頷いた。

『あぁ、マシュの体調は至って正常だ。異常を示している所は確認されていないよ。そもそも、彼女に何かあったらレイシフトの予定もっと早くに先伸ばしにしていたよ』

「あ、そっか。それじゃあそうなると……修司さんの勘違い、なのかな？」

マシュの不調さを気の感知から読み取った修司だが、ロマニとマシュ本人からそれはないと返されてしまう。此処へ来て修司の勘違いかと疑う立香だが、これ迄の彼の感知能力の実績からそれは考えにくいと思われた。

と、その時だ。マシュの背後から人影が現れる。見れば包帯だらけの兵士がヨロヨロと歩いていくのが見えた。道を塞いでいたことを謝りながら脇道に逸れる三人、兵士がテントへ入っていくのを見計らって二人は修司の方へ視線を向ける。
「もしかして修司さん……」
「……あー、悪い。今の人と間違えたみたいだ」
頭を掻いて間違いだったと認める修司に立香は溜め息を吐きながら安堵する。
「もー、ビックリさせないでよ修司さぁん！」
「いやー、本当にゴメン。どうやら修行していた時の感覚がまだ抜けきっていないみたいでさ、どうやら感覚が鋭くなりすぎているみたいだ」
「成る程、感覚が鋭敏になって違うものまで感知したと、そう言う事なのですね」
「マシュちゃんもゴメンな、不安にさせるような事を言って」
「いえ、修司さんの言葉に悪意が無いことは分かってましたし、私も気にしてませんから。ただ、修司さんも疲れているようなら少し休まれては？」
「なに、筋肉痛と一緒で動いていれば感覚も元に戻るから大丈夫さ。それより、これからの事だ。彼処のテントには間違いなくサーヴァントはいるけど、どうやって話を聞こうか」
マシュの不調、それは結局修司の勘違いだった。申し訳なく頭を下げる彼に立香もマシュも気にしないと謝罪を受け入れ、ロマニの方もそれ以上何かを言うことはなかった。
そして、話題は変わってテントの中にいるサーヴァントに移る、兵士達が中へ入っていく所から恐らくは医療系の英霊がいるのだろう。戦時における医療従事者は兵士よりも多忙である事例が多い、多くの兵士の命を救う事は国の戦力を保つ為の貢献に繋がる。
そんなサーヴァントを引き抜く事は現地の人々を見捨てる事にも等しい、故に修司達はサーヴァントを引き抜く前提で話すのではなく、情報を得ることを優先にした。

「でもさ、さっきの戦闘もそうだけど、ああいう戦場って他の所でもあったりしているのかな？」
「恐らくはそうかと、まだ全容が明らかになっていないので何とも言えませんが、恐らくは北米大陸全体に戦禍は広がっていると思われます。あまり、当たって欲しくない予想ですが」
「まるで身体中に転移した癌細胞だな。今回は腫瘍部分を摘出すれば全部解決するだろうけど、生憎今はその情報はない」
『成る程、つまり修司君達は特異点という人体を治すナノマシンみたいなものか、言い当て妙だね』
　テントの往来から少し離れ、あーだこーだと話し合いを模索する一行。軈てこれでは埒が明かないという結論に至り、正面から話を聞いてもらう事となった。
　そんな時、テントから一人の女性が現れる。赤い軍服を身に纏い鉄仮面の様な表情の女性、彼女は修司達を見付けると、ズカズカと小走り気味に歩み寄って来て……。
「今の話は本当ですか？」
「え、え？」
「えっと……貴女は？」
「私の事などどうでもよろしい。それよりも、今の話は本当なのかと聞いているのです」
　突然話し掛けてきたと思ったら、彼女の態度はあまりにも一方的だった。先の話からすると癌細胞云々に付いての事だろうが、それにしたって一方通行過ぎる。
「私は、全ての命を助ける義務があります。喩え、全ての命を奪うことになっても。ですから、話してください。あなた達の目的と、この惨劇を沈める治療法を」
　一見すれば矛盾に満ちた言動。しかし、目の前の女性はそれになんの疑いも在りはしない。全ては目の前の命を救う為、クリミアの天使が修司達に接触する。

その６８　第五特異点

人理修復の旅、今回で五度目の特異点へ赴いたカルデア一行、北米大陸という嘗てない規模を誇る探索範囲に戸惑いながらも、どうにか人のいる場所へ辿り着く事が出来た。戦場で負傷した兵士達が最低限の治療を受ける野営地、そこでは赤い軍服を身に纏う女性と山吹色の胴着の男が駐在している医師と共に手当てを行っていた。
「ふぅ、一先ず山場は乗り越えたか。君達も良くやってくれた。後は我々がやっておくから、君達は休んでいてくれ」
「――了解です。ではドクター、後の事はお願いします。くれぐれも、誤った処置をしないようお願いします」
「予備の包帯と水は此方にありますから、使ってあげて下さい」
女性看護師と修司の手伝いもあって、どうにか山場を乗り越えた事で気持ちに幾分か余裕の出来た医師は二人に感謝を述べ、やんわりと退出を促す。軍服の女性もここで自分にやるべき事はないと悟ったのか、二つ返事で了承しテントを後にする。
そんな彼女を追う形で修司もテントから出ていくと、ズカズカと外で待機していた立香達に歩み寄る。
「あ、ナイチンゲールさん！　そっちの方はもう大丈夫なんですか？」
「問題はありません。彼の手伝いもあって患者の処置は全て滞りなく完了しました。……ありがとうＭｒ．修司、貴方の適切な処置と協力に感謝を」
「礼は必要ありませんよＭｓ．フローレンス、俺は選択（トリアージ）の幅を少しだけ広げただけ。彼等を救い上げたのは間違いなく、貴方の功績だ」
「私は事実しか口にしませんし、無駄な賛美は言いません。更にいえば功績云々に興味はありません。貴方の手際と処置の早さは彼等に一時の救済をもたらした。謙遜も結構ですが、今は素直に受け取っておきなさい」
「そっか。なら、ありがたく受け取っておくよ」

「お、おぉう。何か修司さんが理知的だ」
『彼女もバーサーカーなのに、不思議と修司君と話している時は理性的だ。どういう原理？』
　フローレンス＝ナイチンゲール。裕福な紳士階級の出身でありながら、当時は卑賤な職業と言われてきた看護婦となることを強く希望した戦場医療従事者。彼女の行いは治療という概念に革命を起こし、衛生管理と患者への看護を徹底させ、更には私財を擲って物資を投入させる事で戦時医院での死亡率を５％にまで抑え込んだ、通称〝クリミアの天使〟。
　バーサーカーのクラスで召喚された彼女は生前の逸話からか人の話を聞きはせず、自らの判断で行動する女傑となっていたが、どういう訳か修司の話には耳を貸し、更には近代的な治療法と応急処置の技術を持つ彼から教えを乞おうとした程だ。
　特異点の修復を人体の治療に置き換えて説明した事が功を奏したのか、彼女の聞く耳はマスターである立香にもある程度向けられる様になっている。
「で、ではナイチンゲールさん。改めて説明させて下さい。私達はカルデアという組織から現在はここ、北米大陸で起きている特異点を修復する為に派遣された者です」
「……ミスター？」
「あー、そうだな。フローレンスさんに伝わるように言うと、俺達は特異点修復という治療の為にやって来た医療チームだ。で、現在この大陸は戦争という病に侵されている状態で、病巣である原因の特定、治療の為に来たってことだ」
「成る程、概ね理解しました。では、急ぎ向かうとしましょう」
「まぁ待ってくれ。医療チームと言ったが、今の俺達はまだ原因となっている病巣を探索（診断）している最中だ。闇雲に探し回っても確かな情報を得られるとは限らない、先ずは立香ちゃん達の話も聞こう」
　修司はナイチンゲールに特異点云々を医療関係に置き換えて説明する事で、どうにか彼女との対話を成立させている。立香も彼女とのコミュニケーションを取るべく、拙い医療知識で対話に挑む。

「あの、此処から少し離れた所に小規模だけど戦闘が……じゃなくて、病気が発症して、其処には少なからず負傷者がいるみたいなんです。そこで新しい情報を得る為に、私達は貴女に協力を要請したいんですけど……」
「貴女、名前は？」
「あ、はい。立香、藤丸立香です」
「では司令官（コマンダー）立香、これより私は一時的に貴女の指揮下に入ります。誤った判断をしないよう、気に留めておきなさい」
「は、はい！　ありがとうございます！」
　その甲斐あってか、ナイチンゲールというサーヴァントを味方に率いる事に成功した。半分以上は修司のお陰、けれど、懸命に責務を果たそうとする立香に彼女が感化されたのもまた事実。
「それじゃあ、次の戦場へ急ごう。治療はどれだけ迅速に手を付けるかで結果に大きく関わってくる」
「同感です。それでは行きましょう」
　この場でのやるべき事は終え、立香達が得た情報を元に一行は次の戦場へ向かおうとする。
　そんな時だ。彼らの前に一つの集団が立ち塞がる。
「何処へ行く気かしら。フローレンス、持ち場に戻りなさい」
「うん？」
　複数のバベッジ氏と何処と無く似ている機械化歩兵を連れた一人の少女、その風貌は先の特異点で出会ったアンデルセンと似たような雰囲気を醸し出していた。
「軍隊において勝手な行動はそれだけで銃殺ものだと知っていて？　今すぐ治療に戻りなさい。さもないと――――手荒い懲罰がまっているかも、よ？」
「既に此処での治療は終えました。貴女こそ自分の職場に戻りなさい。私の仕事は何一つ変わりません、この兵士達の根幹治療の手段が見つかりそうなので、それを探りに行くだけです」
「そうなの。尤もな理由、ありがとう。でも――――バーサーカーの貴女に行かせる訳にはいかないでしょ。戦線が混乱したらどうするの

よ。王様は認めないわよ、絶対に」
（王？）
（アメリカに王様って、いたっけ？）
「……王様？　そんな人物に私を止める権利などありません。より効果的な根幹治療の提示があるなら別ですが」
「うわお、やっぱりバーサーカーは話が通じないわねぇ。どうしたものかしら。これまで何度も思想的に衝突してきたし、いい機会だから片付けてしまおうかしら？」
「エレガントな発想ではありませんが同感です。この先の無駄話が省けます」
　ナイチンゲールを見上げるほどの背丈でしかない女性がバーサーカーである彼女に戻れと命じている。いつ殴ってくるか分からない狂戦士を相手に胆力のある女子だなと感心するのも束の間、険悪を通り越して一触即発な空気になりつつある両者の間に立香が仲介に入る。
「あ、あの！　ごめんなさい。少し良いですか？」
「あら、こんにちは可愛らしいお嬢さん。そちらの盾の子は……まぁ！　サーヴァント！　よくってよ！　先の戦場でケルトの連中を撃退したと聞いて、まーたフローレンスが一人で暴れたのかと思ったけど……どうやらそうでもなかったようね。これは王様にとってグッドニュースかしら」
　思想的に相容れないナイチンゲールと険悪な様子な女子だったが、立香とマシュを見るとその様子は喜色のモノへと一変させる。
　単純に戦力を欲しての反応か、彼女の語る王様の事もあり、その節は濃厚かと緩和した空気に立香もマシュも安堵した瞬間。
「って、言いたい所だったけど、そうでもないかも。そこの山吹色の貴方、私の名前はエレナ、エレナ＝ブラヴァツキーよ。お名前を伺っても宜しいかしら」
「あっ、これはご丁寧にどうも。俺は修司、白河修司っていいます」
　修司の姿を見るなり、エレナと名乗るサーヴァントは目を細める。そして、本人からの自己紹介を得ると、確信した様に深い溜め息と共

に頭を抱えた。
「そう、貴方がシュウジなのね。何て事、よりにもよって此処で彼の目的が達成されるなんて……」
「えっと、Ｍｓ．エレナ？」
　何か一人でブツブツと語りだすエレナに流石の修司も困惑する。一方でナイチンゲールが構うことなく野営地から離れようとすると、修司の感知能力に二つの大きな気配が近付いてくるのを察知した。
「っ、向こうから此方に近づいてくる気配がある。ドクター！」
『はいはーい！　会話に割り込めない分此方で頑張ってたよぉ！　サーヴァントの反応が二つ、配下らしい兵隊を複数連れて近付いてくる！　恐らくはさっきの連中の仲間だと思う！』
「了解した。此方で対応する。立香ちゃん、マシュちゃん、行けるか？」
「こっちは大丈夫、いつでもいけるよ！」
「私も問題ありません。フローレンス女史は……やはり、既に出撃していますね」
　ロマニの言葉を聞くや否や、飛び出していくナイチンゲール。そんな彼女を一人にはさせまいと、修司は彼女の後を追い、マシュは立香を抱えて先行する二人に食い付いていく。
　そんな彼等をエレナ＝ブラヴァツキーは神妙な顔付きで見送った。
「本当、儘ならないモノね」
　その言葉の意味は何処にあるのか、それは彼女以外分からない。

「あぁ、来たか。漸く、この時が」
「待ちわびた。嗚呼、待ちわびたとも」
　それは、二つの異なる場所、出身も経歴も、何もかもが異なる英雄達。
　思想も思考も異なり、戦いに対する姿勢も違う相容れない存在達。

しかし、この時は違った。何もかもが違う癖に――――この瞬間、この刹那は何処までも一緒で、何処までも同じだった。
「「さぁ、今度こそ決着を付けよう」」
あるものは嘗ての因縁を、あるものはいつかの約束を。今回の特異点における最大の壁である二人、程度の違いはあれど、その顔には同様の笑みが浮かんでいた。
〝シンクロニシティ〟　同時期に有り得ざる偶然は、しかしてこの時に限り……必然となった。
「いっきし！　なんだ？　急に悪寒が……」
白河修司、最大の受難が始まる。

その６９　第五特異点

――――今でも、瞼を閉じれば想起する。静かな夜に染まる大地、黒のランサーを倒す為に派遣された筈の自分が、全く別の相手と戦う事になった時の事。

『お前が、黒のランサーを倒したのか？』

『その口振りだと、アンタが赤のランサーって奴か？　本当に何人もいるもんなんだな』

サーヴァントという存在を当時から打ち倒す程の実力を持った人間、自らの強さを驕りもせず、ただ真摯に受け止め、常に上を目指す求道者。そんな人間が何故、魔術師でもない人間がこの大戦に介入するのか、己の内に抱く疑問を目の前の――――まだ、少年の枠から出て切れていない男に――――隠すことなく問い詰めると。

『別に、そんな大層な話じゃねぇよ。一緒に来ていたツレとはぐれてな、ソイツと合流する為にここら辺を探し回っていたら、絡まれたんで相手しただけだ』

消え行くサーヴァントを一瞥し、そう口にする山吹色の男。そんな奴に気付けば俺は戦いを挑んでいた。

我ながら、一方的な話である。同じ武を嗜む者として目の前の男がどれ程の実力者か、知りたくて堪らなかった。内に秘めた力、それを解放した時どうなるのか、知りたくて仕方がなかった。

そして、奴の強さはそんな自分の予想を容易く上回った。己が槍を奮っても貫けぬ肉体、炎を放っても焼き尽くす事の出来ない闘志。

神秘もなく、神性もなく、魔術の恩恵もなく。泥臭く、しかして修練の果てに得られたであろう強さが、その男から感じ取れた。

感服した。その強さに感嘆し、その力に感動した。個人の強さが平均化され、人の限界値が低くなったこの現代に於いて男の――――白河修司の突き抜けた強さは生前の猛者達を思い起こさせる。

嗚呼、叶うことならもう一度戦いたかった。何処までも、望む限り

戦っていたかった。けれど、今生の己の宿敵、決着を付けるべき相手は既に存在している。彼を、黒のセイバーと完全な決着を付けるまで目の前の、もう一人の好敵手と決着は叶わない。
強欲であるべきではないことは解っている。この様な気持ちで戦っては、目の前の男とも、黒のセイバーに対しても不義理になる。堪えよう、全ては未熟な己の責任だと、甘んじてその謗りを受けよう。
そう、自分の気持ちを嘘偽りなく語った所――。
『えぇ、一方的に襲ってきておいてなにその理屈？　……まぁいいけど。アンタと戦っていると俺も強くなっている気がするし、また会うことが出来たら……また戦ろうぜ』
呆れながらも笑い、また勝負をしてくれることを許してくれた修司に施しの英雄は頭を垂れた。
『感謝する。白河修司、お前との戦いはいつか必ず決着を付けると約束しよう。喩えこの大戦で俺が消え、座に還ろうとも、この約束だけは決して違えたりはしない』
『ま、真面目な奴だなぁ。けど、分かったよ。その時が来たら決着を付けよう。それまでに俺ももっと腕を上げておくよ』
『楽しみにしている』
嗚呼、楽しみだ。本当に楽しみだ。現時点でサーヴァントに匹敵、或いは凌駕するお前が、次に会う時はどれ程の高みに到達しているのか。考えただけでもワクワクする。
この日、施しの英雄――カルナは、一つの約束を交わした。その約束は座に還った後でも決して磨耗する事なく抱えていて、それは新たに召喚された後でも変わらない。
次に彼と出会う時、それこそが自身にとって至福の時間の始まりなのだと、施しの英雄は信じて疑わなかった。

◇

荒野の砂塵を巻き上げながら、敵勢力がいる拠点へと近付く無数の影。手には槍を握り締め、敵意と殺意に満ちた獣の如き戦士達は遠吠えを吐きながら荒野の大地を駆けていく。

言葉も交わせぬ野生の獣同然の戦士達を率いるのは、長い金髪が特徴的な優男と、目元に黒子を携えた男性。彼等のその手にも槍が握り締められていて、これから始まる戦いに微塵も臆している様子はなかった。

「はてさて、我等が王の話では近い内に山吹色の男が現れると聞いたが、どんな男だと思う？　ディルムッド」

「はっ、子細の程は我々にも伝え聞いていない故に不鮮明ですが、恐らくは彼の王が固執する程度には強者なのではないかと」

「固執ねぇ。あの王に誰かを固執する感情があるとは思えんが……まぁ、固執するものがそれしかないのなら仕方がないか。とは言え、女王を前に惚気るのは流石に勘弁して貰いたいものだなぁ」

「……物凄い剣幕でしたからね」

此処に来るまでに起きた出来事を思い返し、二人は深々と溜め息を溢す。いつの時代も男女関係の問題は厄介なものだ、今回の召喚でせめて自分達は巻き込まれないように気を付けようと気持ちを新たにした時、彼等の前に赤い軍服の女性が現れた。

「止まりなさい。そこの貴方達、この先にいるのは戦えない患者達のいる野営地です。引き返しなさい」

「おっと、これは麗しいお嬢さんだ。しかし、その言葉には従えない。我々は王の命を受けて此処にいる。退かせたくば、力で押し通るがいい」

「分かりました。ならばこれより、貴方達を殺菌消毒した後、治療を施

します」
「治療？　いや、我々は特に怪我とかしていないが？」
「問答無用。大人しくベッドに沈みなさい」
「くっ！　話を聞かないタイプの女性であったか！　苦手だ。本当にこう言うタイプは苦手だ！」
「ハハハ、実感が籠っているぞディルムッド！」
　会話もそこそこに、名乗りもあげず進軍してくる槍の兵隊達をクリミナの天使は己のみで挑もうとする。幾らサーヴァントでも多勢に無勢、縦横無尽に襲ってくる槍の筵にそれでも構わず暴れようとする彼女に――――。
「先行しすぎだナイチンゲール氏！」
　山吹色の胴着を身に纏った白河修司が駆け付け、開口一番に右手から気功波を放ち、槍の戦士――――ケルトの群を一掃する。
「っ!?」
　たった一撃で連れてきたケルトの半数以上が消滅した事実に二人の槍兵は目を見開くが、彼等が驚愕したのはそこだけではない。
　山吹色の男、もっと詳しく言うならその胴着を着た男こそが二人がこれまで探し続けてきた者だった。これまで北米大陸の侵攻ついでに探し続けてきたのだが、今まで見付からなかった事に王以上に女王が苛つき始めてきた今日、漸く目的の人物が現れたことに二人のランサーは歓喜と安堵の混じった表情を浮かべた。
「気持ちが逸るのは分かるけど落ち着いてくれ。ナイチンゲール、俺達はチームで動いている。アンタの判断や考えを否定するつもりはないが、せめて行動する時は一声掛けてくれ」
「善処します」
　独断専行するナイチンゲールに対する苦言は程々にして、追い付いてきたマシュと立香達と共にケルトの軍勢に向き直る。初撃で半数以上を削ったとは言え、依然として戦力差は大きい。修司が一歩前に進んだとき、金髪の優男が待ったを掛けてきた。
「其処の御仁、戦う前に一つ聞いても良いだろうか」
「あ？　なんだよ」

「貴殿の名前は――――白河修司であるとお見受けするが、間違いないか？」
薄ら笑みを浮かべて訊ねてくる金髪に、立香とマシュは驚くが、対する修司は然程驚いてはいなかった。
何せ、既に修司は魔術王から目を付けられている。これからの旅先でどの様な罠が張り巡らされているか分からない以上、如何なる事態に陥っても　〝これも魔術王の仕業か〟　で納得できるし混乱もせずに済む。
恐らく連中の親玉に魔術王が何らかの仕込みをしたのだろう。人類を見下しながら人類を利用する。魔術師らしい狡い手を使うモノだ。
「だったらなんだよ」
「いやなに、我等の王が貴殿の来訪を待ち望んでいたのでな。故に貴殿には我々と共に来て欲しいのだが……」
「舐めるなよ。そんな風に言われて誰がホイホイ着いていくかよ、用があるなら自分から来いと伝えておけ」
「それを言うと本当にやりそうだから困るんだよなぁ」
「フィン＝マックール。どうしますか？」
「うーん。そうだなぁ、王からは報告しろと言われていたが、戦うなとは言われてないし、なにより――――ケルトの戦士が、ヤられっぱなしのままというのは戴けないな」
瞬間、二人のケルトの戦士から放たれる気迫に立香達は身構える。ついさっきまで彼処まで砕けていたのに、まるで別人のような切り替えの早さ。これがケルトの戦士の戦い、この特異点初となるサーヴァント戦に一行が戦闘体勢に入った時。
「悪いが、そうはさせんよ」
頭上から無数の炎の槍が、立香達とケルト勢の間を分かつように降り注がれる。次いで起きる爆風、マシュは立香を、修司はナイチンゲールを守るように前に立ち、迫る爆風を防いでいく。
草木のない荒野の大地が、それでも尚燃える地面。その圧倒的熱量に立香が驚いていると、一人のサーヴァントが降り立った。

「なんという火力。これが、あちら側の最高戦力か」
「施しの英雄、カルナ。その武勇に偽りなしか」
　透き通るような白い肌と髪、まるで何もかもを見通してしまいそうな眼光と出で立ち。その堂々たる佇まいはケルトの戦士達を一時的に萎えさせてしまうほどに強大だった。
「さて、これで数の差は開いたみたいだけど、どうする？　これでもまだ貴方達は戦うつもりかしら？」
「え、エレナさん？」
　どうやら、目の前のカルナと呼ばれるサーヴァントは彼女が連れてきたらしい。腕を組んでドヤ顔している彼女は年相応の少女にしか見えなかった。
「――――仕方ない。此処は引くとしよう」
「フィン＝マックール、宜しいので？」
「この状況では仕方ないだろう、我等は彼の発見の命令を第一に与えられていた。それが果たされた以上戦う意味はないよ」
「おいコラ、お前ほんの十数秒前まで戦う気満々だったじゃねぇか」
「フフフ、臨機応変という奴さ。それでは諸君、また会おう」
　それだけを言ってその場から翻すケルトの戦士二人は瞬く間に荒野の彼方へと姿を消していく、追い掛けてやりたい所だが、残ったケルトの雑兵が修司達の前に立ち塞がる。その顔には生気がなく、まるで死兵の様だった。
「な、なにコイツら！」
「これは……気を付けろ二人とも、コイツ等は普通じゃない！　死ぬことを恐れない死兵だ！　道連れにされないように気を付けろ！」
　目の前の修司やカルナに臆した様子も見せず、機械的に襲ってくるケルト兵。恐怖の感情を抱かせず、本能のままに襲ってくるその姿は並の獣よりも野性的であった。
　しかし、いくらケルトと言えど所詮は量産型の雑兵。修司を筆頭に施しの英雄のカルナも来てくれた以上此方に敗北はなく、襲ってきたケルトの集団を危なげなく殲滅する事ができた。
　取り敢えず、第五特異点に来て二度目の戦闘はどちらも傷を負う事

なく終了した。これも偏にカルナと呼ばれる英雄のお陰、敵か味方かはまだ分からないが、手を貸して貰った以上は礼を言うべきだろう。
そう思い修司が近付くと、カルナから錫杖の様な槍を向けられる。彼から発せられる敵意と漲る戦意、ただ事ではないと警戒を顕にすると。
「さぁ、今こそ約束の時だ。決着を付けよう、白河修司！」
不敵に笑い、口角を吊り上げる大英雄を前に――――。
「えっと、すみません。……どちら様でしょうか？」
「!?!?!?」
頭を掻き、本当に覚えている様子のない修司に施しの英雄は愕然となり、その後ろではエレナ＝ブラヴァツキーがコケていた。
『前から思ってたけど、修司君っていろんなものを台無しにしていくの得意だよね』
「フォウ！」

その７０　第五特異点

第五の特異点、北米大陸。広大な探索範囲に戸惑いながらも、どうにか現地での協力者を得ようとしていたカルデアの一行は、ナイチンゲールというサーヴァントを味方に引き入れる事に成功した。
その後、負傷した兵隊のいる野営地を襲おうとした敵勢力、ケルト達と戦うことになったのだが、紆余曲折を経て、どうにか無傷で撃退する事に成功した。
そんなカルデアの一行は特異点の原因である聖杯を見付け、回収する為に次の旅へ向かおうとしていたのだが。
「「……」」
現在、カルデアの一行は馬車の荷に揺られ、重苦しい空気の中とある拠点に向けてナイチンゲール共々搬送されていた。
『お、重い。空気が重いぞぅ!?　ねぇ修司君、この空気なんとかしてよ！　もとはと言えば君が原因みたいなもんなんだから！』
「いや、そう言われてもなぁ」
通信越しでロマニから重苦しい空気を何とかしろと言われ、恐る恐る荷馬車の隅へ視線を向けると、膝を抱えたまま、ブツブツ何かを言っているサーヴァントがいた。
カルナ。インドの叙事詩に於いて大陽神の子として伝えられる通称施しの英雄、数多く存在しているサーヴァントの中でもトップクラスの力を持っている英霊。そんな彼が、現在は膝を抱えて何かを呟いている愉快なオブジェクトと化している。
「ねぇ修司さん、本当に心当たりはないの？」
「その筈なんだけどなぁ、俺もあんな強そうな奴を見かけたら忘れるとは思えないし、でも実際なにも思い出せないし……うーん。もしかしてマジで前世からの因縁だったりとか？」
「いえ、それは流石にないかと思います。カルナさんは今の――今世での修司さんと約束していたみたいですから」

どれだけ記憶をサルベージしても、カルナという大英雄と約束を交わした事が思い出せない。修司としても思い出してやりたいのは山々だが、如何せん心当たりも記憶もない。落ち込んでいるカルナを前に流石に罪悪感が拭えないでいる修司、一方でナイチンゲールは自分達を何処へ連れていくつもりなのか、同じ荷馬車に同乗しているエレナへと問い詰めた。

「それで、私達を何処へ連れていくのですか。私達には病の根本的治療をしなければならない任務があるのですが……」

「そんなに慌てなくてもうじき着くわ。それに、私達に付いてくるのは貴女も同意していた筈よ」

本当の事を言えば、修司のどちら様？に戦意が折られたカルナを必死にフォローし、修司達に来て欲しいと懇願したのが事実だが、彼女は見た目こそ幼い子供ではあるが中身は歴とした成人した女性、落ち着き計らった態度で修司達に自分達に付いてくるメリットを語って納得させた手腕は敏腕な秘書官を思わせた。

「貴方の同志、修司も言っていた筈よ。病を治すにしても先ずは必要な情報を集めるのが先決、貴女にとっては辛い選択かもしれないけどね」

現在、ここ北米大陸は大きく二つの勢力に別れている。東と西、ケルトとアメリカ、巨大な二つの勢力が日夜大陸の覇権を懸けて争っている。こうしている間にも怪我人が出て、死人を出してしまっている。全ての命を殺してでも救いたい、大きすぎる覚悟を背負うナイチンゲールにとってその選択は他人が思っている以上に重たいもの。

しかし、それでも反発しない辺り彼女も理解しているのだろう。一つ一つの野営地で人を救っても根本的治療には至らない、修司は現在の北米大陸を病に侵された人体のようだと比喩したが、その表現は強ち間違いではなかった。

大陸中に転移する戦場という病、その病を治すには戦いを引き起こしている元凶を殺菌、消毒する他ない。それを理性ではなく、本能(心)で理解しているからこそ、ナイチンゲールは現在まで大人しく修司達に付き従っているのだろう。

「……分かりました。今はその言葉に従いましょう、ですが今の内に言っておきます。私は、治療を終えるまで決して立ち止まるつもりはありませんので」
そう言って、ナイチンゲールはそれ以上口を開く事はなかった。そんな彼女を前にしてエレナ＝ブラヴァツキーは深い溜め息を溢す。
そして、それから暫く荷馬車での移動は続き、カルデア一行はとある巨大な拠点へ到着した。砦の至る所に掲げられた星条旗、外と中には機械化された歩兵達がアチコチに配置され、警備の厳重さを物語っている。
エレナを筆頭に砦の中へと通されると、一際大きな場所へ案内された。広い空間だ。その奥には玉座らしい椅子が鎮座しており、本当に民主主義の大国であるアメリカに王が誕生しているようだ。
「ふわぁ、本当に王様がいるんだ。どんなひとなんだろ？」
「民主主義の大国に王とは、個人的に酷く矛盾している様に思えるのですが」
「そうね。だからこそ面白いのよ、私達の王様は」
「……なんだ、これ？」
「あれ？　修司さん、どうしたの？」
「……いや、ちょっと妙な気配を感じてさ。ロマニ、そっちはどうなってる？」
『うん。多分、修司君が感じた通りの反応だと思う。けど、憶測で余計な先入観を与えたくないし、一先ず黙っておいて』
「了解、そう言うわけだから気にしなくてもいいよ」
「ええ、余計に気になるんだけど？」
何やら秘密裏に話している二人に仲間外れにされたと思った立香は頬を膨らませて抗議する。そんな彼女を宥めていると、遠くから大きな声が聞こえてきた。
「お待たせしました。大統王、ご到着です！」
『おおおおお！　遂にあの天使と対面する時が来たのだな！　この瞬間をどれ程待ち焦がれた事か！　ケルトどもを駆逐した後に招く予定だったが、早まったのならそれはそれで良し！　うむ、予定が早ま

るのはいい事だ！　納期の延期に比べれば大変良い！』
「デカ、声デッカ！」
「す、凄い声量です。純粋な声の大きさならネロ皇帝やエリザベートさんに匹敵するかも？」
「「いや、それはない」」
　扉越しからでも響いてくる大きな声、大統王なる王の声量に驚くマシュだが、皇帝ネロとエリザベートという二大巨頭を知る者としては珍しくはあれど驚くほどではなかった。
「はぁ、独り言ならもう少し声量落としてって前から言っていたのに……」
　……因みに、二人の声は扉越しに響かせるのではなく、扉ごと吹き飛ばしたりしている。閑話休題。
「――――素直に言って大義である！　みんな、はじめまして、おめでとう！」
　そして、大きい扉が開かれ、奥から人影が現れる。左右の肩に乗せられている電球、青と赤という二大色をメインにした視線が引かれる色合い。その見上げる程の長身は王と名乗るに相応しい威圧感をもたらしていた。
　ただし――――。
「「「……ら」」」
「む？」
「「「ライオンだァーーッ!!」」」
　その頭部はどうしようもなく、肉食動物だった。

◇

「――――と、言うわけで諸君達には是非我が軍に将として参戦して欲しいのだ」
「は、はぁ、成る程」
ケルトとアメリカ、東と西、東西に別れて行われている戦争、エレナ＝ブラヴァツキーから聞かされていた話を、改めて知ることとなった一行。
目の前のライオン男――――改め、トーマス＝エジソンからの誘いをどうにか冷静を取り戻したマシュが吟味する。ケルト人の駆逐、この時代に有り得ざる侵略者達から北米大陸を守るという点に於いては目の前の発明王との衝突には至らない。寧ろ、大きな後ろ楯を得られる事で立香達の出来ることは増えてくるだろう。
エジソンの話を静かに聞いていた修司は、エジソンの目論見を見定めている。果たして彼の本心は北米大陸の防衛にあるのだろうか。
確かに召喚された以降のエジソンの活躍は目覚ましいモノがある。彼の発案した新国家体制、新軍事体制によって、ケルトに圧倒されていた戦線を建て直し、今では戦況は互角にまで持ち直した。
ニコラ＝テスラに続く白河修司の尊敬する人物の一人、トーマス＝エジソン。彼の行いは正に大量生産の覇者である。そんな彼と協力して戦う事は修司にとってある意味、最高の名誉でもあった。
しかし、そんな彼を大陸各地に召喚された英霊達は参戦を拒んでいるという。その辺りの事も含め、修司には引っ掛かるモノが多く感じ取られた。
そんな時、藤丸立香は恐る恐る挙手をしてエジソンに質問を投げ掛ける。
「あの、エジソンさん。一つ質問いいですか？」
「うむ。人類唯一のマスターの一人である君の言葉だ。聞かせていただこう」
「ケルトを倒して世界を救う。と、貴方は言いましたけど、具体的にどうやって世界を救うんです？　私達はこれまで聖杯を回収するという形で特異点を修復させて来たんですけど……」

これ迄の特異点の旅と照らし合わせるなら、ケルト軍を打ち倒して聖杯を回収する事で時代を修正させる。それが今回のミッションの内容であり、大まかな流れでもあった。
だが、目の前のエジソンはケルトを倒した先の事を話してはいない。意図して話していないのか、それとも単に伝え忘れているだけか。恐らくは後者だ。現に、発明王は立香の質問にそうだったと手を叩いて思い出した素振りを見せている。
「いいや、時代を修正する必要はないぞ」
「……え？」
「必要はない。聖杯があれば、私が改良する事で時代の焼却を防ぐこともできよう。そうすれば、他の時代とは全く異なる時間軸にこのアメリカという世界が誕生する事になる」
「なっ、そんな事が可能なのですか!?」
「聖杯の力は、召喚された我々にも良く分かっている。故に、充分に可能だという結論が出た」
「……他の時代は、どうなるんですか」
「――――滅びるだろうな」
「そ、それでは意味がありません！」
「何を言う。これ程素晴らしい意味があるだろうか。このアメリカを永遠に残すのだ。私の発明が、アメリカを作り直すのだ。ただ増え続け、戦い続けるケルト人どもに示してくれる。私の発明こそが人類の光、文明の力なのだとな！」
――――火の文明。
ふと、修司の脳裏にそんな言葉が浮かんだ。文明の力、確かにそれは人類が築き上げてきた力の総称だ。喩え如何なる災害や人災に見舞われても、立ち上がり乗り越えてきた人類の文明の力。その一助となっているエジソンを尊敬しているし、今でもその気持ちは変わらない。
だが、目の前のライオン頭はそれを自分だけで成し遂げてやると豪語している。人類の舵取りは自分こそが相応しいと、他は不要だと暗に断じている大統王に……修司は、失望感を抱いていた。

そして、トーマス＝エジソンとの交渉は決裂となってしまう。ナイチンゲールが糾弾し、マシュや立香もそれではダメだと諭そうとしている。しかし、エジソンは止まらない。これこそが人類の光だと自らの計画に絶対視してしまっている。

軈て、無数の機械化歩兵達が雪崩れ込んでくる。戦いは避けられず、エジソンの側に控えていたエレナやカルナ迄もが戦闘体勢に入ろうとしている。衝突は避けられない、戦うしかないのかと立香達が身構えた時。

今まで黙していた修司が、大統王に向かって歩きだす。

「トーマス＝エジソン。いや、大統王。貴方は俺にとって目標であり、憧れでもありました」

「む？　君は……」

「貴方の発明は、多くの人の生活に影響を与え、貴方の発明に俺もとても感化されました。貴方達の存在は、俺達人類に大きな標となっていました」

「し、修司さん？」

何だろう、いつもの彼とは少々様子が違う気がする。間違っている事に対して何処までも苛烈になれるこれ迄の修司とは異なり、今の彼は何処までも静かだった。

「でも、貴方はそれを否定した。過去の人達の努力を無視して、未来に現れる可能性に蓋をして、己だけしか見ていない」

「それが、それがなんだというのだ！　私という発明王がいれば、それだけで人類の発展は事足りる！　私の頭脳をもってすれば、人理焼却など大した問題では――――」

「ニコラ＝テスラ」

「っ!?」

「先の特異点で、俺は彼と戦った。敵として立ち塞がったあの人を、俺は正面から戦い、打ち破りました」

修司が思い返すのは、霧に包まれたロンドン。雷を纏い、人類に仇なす事を決め付けられた彼は、それでも自分に出来ることを模索し、その上で修司に討たれる道を選んだ。

手加減なしで撃ち込み、痛みや熱で苦しい筈なのに、それでも雷電博士は笑ったまま修司達に託した。
「あの人は最後の最期まで、俺達人類を信じてくれた。あとは頼んだぞと、笑いながら俺達の可能性に懸けてくれた。嬉しかった。あの雷電博士に認められた気がして、凄く……嬉しかった」
「一体、君は、何が言いたいんだね?!」
「大統王」
仄めかし、何かを言いたげな言葉を敢えて焦らすような口振り、ハッキリとしない物言いに苛立ち始めたエジソンだが、次に向けられる修司の眼に彼の巨大はビクリと跳ねる。
「アンタがどうしてそうなったのか、今いる立場が、或いはアンタの中にいる人達がそうさせているのか、俺には分からない。けれど、それらを踏まえた上で言わせてもらうよ」
「今のアンタ――――超絶ダセェよ」
その言葉は、立香やマシュの説得よりも、ナイチンゲールの糾弾よりも、友人のカルナとエレナの慰めよりも、深く深くエジソンの心に突き刺さり――――。
「ＧＡＯＯＯＯＯＯＯＯ!!!」
その悲鳴は拠点となる砦中に轟いた。
「全く、痛いところを突いてくれるわね。カルナ！」
「承知した」
泣き喚き、地に崩れ落ちる大統王に駆け寄るエレナがカルナに立香達の捕縛を命じる。ここまで来ると己の欲を優先する場合ではないと、施しの英雄が錫杖を片手に肉薄する。
そんな彼を遮ったのも、また修司だった。振るわれる錫杖と剛腕、衝突の余波で周囲の機械化歩兵達が吹き飛ぶなか、修司は立香達の処まで跳び下がる。
「三人とも、フォウ君も、目を閉じろ！」
「「っ!!」」
修司の咄嗟の叫びに立香達は溜まらず言うことに従う。彼等との交渉が決裂した今、ここに長居をするのは得策ではない。一気に離脱

しようと修司は自身の顔に広げた両手を掲げ。
「しまっ――――」
「太陽拳！」
カルナの静止も届かず、目映い閃光が巨大空間を満たしていく。光が収まる頃には修司達の姿はなく、天蓋に大きな穴が開いていた。
当然カルナも跡を追うが、外にも既に修司達の姿はなく、完全に見失った。やられた。今回の一連の流れは全て己の不手際だと自戒しながらカルナは戻る。
「――――この借りも、いずれ纏めて返させて貰うぞ。喩え、お前が約束を忘れていようとも」
自分の望む形とはならなかったが、次に会う時は遠慮はなくなった。いずれ訪れるその時を前に施しの英雄も、今は大人しく身を引く事にした。

その71　第五特異点

大統王トーマス＝エジソンが支配する合衆国軍の拠点から少しばかり離れた森、鬱蒼と生い茂る木々の上空から白い炎を纏った山吹色の男、白河修司が降り立つ。その両腕にはマシュと立香を抱え、背中にはナイチンゲールを背負っておきながら、遥か上空からの着地に関わらず、その肉体には僅かな傷も無かった。

『……周囲に敵反応はナシ。追っ手が迫ってくる様子もないから、どうやら完全に撒けたみたいだね』

「悪い皆、完全に私情に走った。折角の交渉の場を台無しにしてしまって済まない」

立香達を下ろし、周囲に人の気配が無いことを確認し終えると、修司は立香達に向かって頭を下げる。先のエジソンを前にしての態度、人理を救う為に召喚された筈の彼があの様な結論に至ってしまった事に失望感を抱いてしまった修司は、立香達からの同意を求めることなく勝手に話を進めてしまった。

恐らく、もう彼等との協力は結べないだろう。仮に戻ったとしても、敵対者の烙印を押されるだけ。自分の独断で勝手な行動をしてしまった事に、修司は全面的に己の非を認めた。

「気にしないでよ修司さん、修司さんがあそこで動かなくても、多分私も似たような事をしていたと思うよ」

「そうですね。確かにエジソンさん達の協力を得られなかったのは残念ですが、仮に彼等に取り入った所で上手くいく保証はありませんし、下手をしたら身動きが封じられていたかもしれませんから」

「……私の経験上、ああいう手合いは最終的に破滅する場合が殆んどで、そういう輩に限り〝こんな筈ではなかった〟と宣うのです。修司、貴方の決断は間違っていません。なにより、悔やむ暇など私達には無い筈です」

『僕としてはもう少しやりようがあるんじゃないかと思うけど、明らかにあのエジソンは様子がおかしかったし……まぁ、仕方ないっ

ちゃあ仕方ないかな』
「あぁ、そうだな。次からはもう少し行動を鑑みる事にするよ。さすがに今回は、少しばかり独断に過ぎた」
　あの流れから、向こうは言うことの利かない自分達を拘束するつもりだったのだろう。無数に現れた機械化歩兵達が、自分達を囲んだのも何よりの証拠。修司の行いは決定打にこそなったものの、直接の原因では無いことは皆も分かっていた。
　なら、この話はこれでおしまい。両手を叩いて場の空気を変えた立香はこれからどうするか方針決めを行う。
「ねぇ、これからの話なんだけど、私に一つ提案があるの。エジソンが言っていた自分達に協力しないサーヴァント達の事なんだけど……彼等と話が出来ないかなって」
『成る程、第三の勢力か。確かにあのエジソンの話だと、大統王とは別の思惑で動いている様に思える。ケルトと手を組んだ。なんて話も聞かないし、一考の余地はあるんじゃないかな？』
「問題はそのサーヴァントが何処にいるか、なのですが……あ！」
「そう！　そこで修司さんの探知能力の出番って訳さ！」
　大統王との協力関係が断たれた今、次に向かうべきは彼ともケルトにも与していないという第三の勢力。その彼等を探し当てるのも修司の更に磨きかかった気の探知能力を使えば難しい話ではない。ここへ来て次の行動の具体的な打開策を提示してきた立香に修司達は彼女の成長を目の当たりにした気がした。
「じゃあ、先ずはここから動く事から始めるとしようか。途中で戦闘している戦場があったら武力介入を行って戦闘を鎮圧、近くにある合衆国側の野営地で情報を収集と、大体こんな感じか」
「うん。そうなるね。ナイチンゲールさんごめんなさい。ここまで振り回しちゃって……」
「謝罪は無用ですよ司令官立香。貴方の判断は綿密ではありませんが、間違ってはいません。次の目的指針を即座に出せる貴方は、今後良き指揮官になるでしょう」
「え、えへへ。そうかな？」

自分なりに頭を回して出した案が満場一致で賛成を受けたことに、立香は照れ隠しに頭を掻く。これまで培ってきた旅の成果が出てきたことに立香だけでなく、ロマニ達も嬉しく思った。
「じゃあ、そろそろ行くとしよう。日はまだ落ちる様子はないが、時間は限られている。俺とナイチンゲールが前に出るから、マシュちゃんは立香ちゃんの防衛に当たってくれ」
「了解です。ですが、一つ打診があります。この北米大陸は広大で、加えて私達はケルトと合衆国。二つの勢力を相手にする可能性がある以上、カルデアから増援をお願いするべきかと思います」
話も纏まり、さっそく行動に移そうする一行だが、マシュは敢えてそこに待ったを掛ける。相手はこの大陸を二分する勢力だ。正面から戦うにも、この広大な大地を駆け巡るにも、今の自分達では些か戦力が心許ない。
修司一人でもカバー出来るだろうが、彼一人に負担を掛けるのもどうかと思う。自分達はチームだ。ここならカルデアとの繋がりも強くできるし、ここで戦力を増強するのも一つの手だと、マシュは強く提案する。
『そうだね。マシュの言うことも尤もだ。じゃあ先ずは召喚から始めるとしようか。立香ちゃん、なにか希望するサーヴァントはいるかい？』
「うーん。ここはなるべく土地勘のあるサーヴァントが来てくれると心強いかなぁ。出来ればケルト、もしくはエジソン達と面識のあるサーヴァント」
『となると、生前エジソンやエレナと面識のあるニコラ＝テスラ位かなぁ？　うーん。個人的には修司君のアレがある以上、拗れるのはほぼ間違いないから出来れば避けたい』
「因みに、テスラさんはなんと？」
『……物凄い良い笑顔でサムズアップしてる。バッチコイだってさ。修司君、どうするの？』
「いや本当済みません」
『はぁ、しょうがない。ならここはやっぱり彼に……って、ちょっ

!?』
突然、通話の向こうにいるロマニから驚いた様子の声が聞こえてくる。何かあったのか困惑する修司達を他所に、マシュが設置した召喚サークルが回りだす。
一体誰が来るのか、戸惑う一行が召喚された光の向こうにいる人物を凝視していると。
「ケルトと言えばワシしかおるまい！　そんな訳でワシ、参上！」
全身紫タイツに身を包んだケルトの影の女王（番長）が、清々しい程のドヤ顔で其処にいた。何処かの仮面ライダーがやりそうなキメポーズに……。
「帰れ」
修司は食い気味に罵倒した。

◇

「ふぅーん、見付かったんだ。山吹色の男」
「ハッ、事前に聞かされていた特徴通りのモノでしたので、恐らく間違いはないかと」
北米大陸、ホワイトハウス。かつて合衆国の心臓部とされたきた白亜の建物、嘗ての面影とはかけ離れた内装の奥、玉座に腰掛ける王に靡くようにすり寄る…一見では清楚で無垢に見える女は報告をしてきた二人の戦士を氷より冷たい眼で見下ろしていた。
「で、その男を前に貴方達はなにもしないで帰ってきたの？　ケルトの戦士が、敵将の頚一つ持たずに？」
「ハッハッハ、これは手厳しい。流石はケルトの女王、苛烈さはどの時代の王にもひけを取りませぬな」

「ちょ、フィン＝マックール!?」
　金髪で長髪の男、栄光のフィオナ騎士団の長であるフィン＝マックールは明らかに不機嫌な女王メイヴに部下らしからぬ馴れ馴れしい口調でおどけだす。
　氷点下を超えた絶対零度となった視線で射抜いてくるコノートの女王、流石に不敬だと部下であるディルムッドはフィンを窘めようとしたが。
「なに、流石に彼を戴くのは不味いと思いましてな。我等が王は彼の者に対して大層なご執心のご様子、であるならば摘まみ食いは避けるべきかと……」
　そう微笑み、女王に跪くフィンの横でディルムッド＝オディナはダラダラと滝のような冷や汗を流していた。
　聖杯を所有している女王メイヴ。彼女の手によって彼等もこの北米大陸に召喚された身なのだが、喚ばれた当初からこの女王は不機嫌だった。唯でさえ気分屋と知られている彼女が、この特異点で魔術王の駒として召喚された彼女はより苛烈に、より嫉妬深くなってしまっていた。
　己の不機嫌を少しでも解消させる為に、ケルトの戦士を呼び出しては犯し、殺し、その命を弄んでは踏みにじっている。ここ最近は落ち着いてきたのに、フィンの余計な物言いで火に油もとい、火薬庫に火の粉である。
　アワアワと一人震えるフィオナ騎士団の輝く貌、女性に対してある種のトラウマを抱えている彼は此処が自分の死に場所かと戦々恐々としていると。
「フハハハ、そう怒るなメイヴよ。可愛らしい顔が台無しだぞ」
　快活な男の声が玉座の間に響き渡った。その声にディルムッドは希望を見出だした表情で振り向くと、掘削機の様な刃の剣を肩に担いだ筋骨隆々なケルトの戦士がそこにいた。
「ふぇ、フェルグス殿ォッ！」
「おぉ、おぉ、相変わらず女は苦手かディルムッド。可哀想に、男の嫉妬は怖いが、女の嫉妬は輪を掛けて怖いからなぁ。まぁ、そこが可愛

いのだがな！」
　ガハハと快活に笑い飛ばすフェルグスと呼ばれる男、嘗てはクー＝フーリンの養父であり、メイヴに仕えていた経歴もあるこの男は、今この場の空気を納める唯一の存在でもあった。
「なによフェルグス、アンタを呼んだ覚えはないんだけど？」
「安心しろメイヴ、俺も呼ばれた理由はない。ただなにやら面白い話が聞こえてきたのでな、少し混ぜてもらおうと思った次第だ」
　細められた目を僅かに開き、玉座で沈黙している王に視線を送る。自身の叔父を前にしても最低限の反応しか見せない王にそれでも構わないと話を続ける。
「確か、シュウジだったか？　聞けば聞くほど興味深いヤツよ。神秘神性の薄い現代において、神の血を引かぬ人間がそこまで強くなるとはにわかに信じがたい。此処にいても暇を弄ぶだけだし、俺はここで一つ行動を起こすことにした」
「あっそ、で？　具体的に何をするつもり？」
「シュウジを殺す。死合をし、可能であるならばこの剣で奴の心臓を穿つ事にしよう」
「なっ!?　フェルグス殿、本気ですか!?」
「そう驚く事はないだろう。我等ケルトの戦士、好敵手を前にしたら嬉々として殺し合うのが我等だろう？　何もおかしな事はあるまい」
「いや、そうではなく！」
　サラッと爆弾発言をぶちかますケルトの伊達男、フェルグス。山吹色の男こと白河修司は王が殺すと定めていた獲物だ。それを堂々と横からかっさらうと発言するフェルグスに、ディルムッドは彼の死を予見した。
　しかし、王からの反応は思っていたよりも淡白なものだった。目を開き、ジッとフェルグスを見下ろしてはいるものの、そこに殺意の感情はない。あるのは何処までも空虚な無感動な視線だけ、不敵に笑みを浮かべるフェルグスに王が口にするのは一言だけ。
「……好きにしろ」
　ただそれだけ、あれだけ自分達に見付けてこいと命じていた王が、

打って変わって無関心となっている。一体どういう事なのか、ディルムッドは理解が及ばなかった。
軈て、ディルムッド達は玉座の間を後にする。報告するべきことを終えた今、今度こそ戦線に復帰する番だと、息苦しい空間から脱出できた二人はそれぞれ槍を手にして次なる戦場を目指して闊歩する。
誰も彼もがいなくなり、残っているのはコノートの女王と彼女が愛する王だけ。己が拘ってきた男を手中に納めたというのに、女王メイヴの気持ちは晴れないでいる。
何故なら、彼女こそは理解していたからだ。沈黙したままの王の胸中を、獲物を横取りすると豪語するフェルグスの行いを許したのも、偏に王自身が信じているからだ。
白河修司は必ず自分の前に来る。近い内に、自分と決着を付けるために此処に来る。そう確信しているからこそ、王は揺るぐことがないのだ。
女王メイヴは嫉妬した。自分を見ているようで見ていない王に、自分よりも心を独占している白河修司に。
許さない。絶対に、許さない。
「覚えてなさいよ白河修司。アンタなんかに、クーちゃんは渡さないんだから！」
王に聞こえない小声で、しかしその言葉には何よりも熱い激情が滲み出ていた。
……一方、張本人である修司はというと。
「よし、これで一先ず片付いたな！　では修司、戦いを終えた後のストレッチをしよう！　その後はワシと共に見回りに向かおう！　な！　そうしよう！」
「あっ、結構です」
ケルトの影の女王を素っ気なくあしらっていた。

その72　第五特異点

大統王エジソンとの交渉が決裂し、次なる目的を各地に散らばるサーヴァント達との合流に定めたカルデア一行は、現在北米大陸の西部に位置する小さな町に滞在していた。

その間、襲ってくるケルトに遭遇しては蹴散らし、争っている東西の戦線に武力介入しては蹴散らし、暴走特急と化したナイチンゲールが負傷した兵達を治療したりと、中々な濃い珍道中を繰り広げていた。

そんな中、彼等の前に一人のサーヴァントが現れる。自らをジェロニモと名乗り、修司達に自分達と一緒に戦って欲しいと共闘を持ち掛ける。勿論、暴走するエジソンとは違って真っ当な理由で戦う彼を拒絶する理由もなく、一先ず修司達は彼と行動を共にする事を決めた。

「しかし、最初にエジソンの拠点から飛んでいったのは驚いた。まさかあんな方法で脱出するとは、此方も余計な手間が省けて非常に助かったよ」

「いや、此方こそワザワザそちらから出向いてくれて助かったよ。幾ら俺が気でサーヴァントを探してもここは広大な北米大陸、俺やナイチンゲールさんが大丈夫でも立香ちゃん達の体力が保たないからな」

「気、全ての生命体には必ず存在するとされているエネルギーの概念か。私も似たような術を知っているが、ここまで実用的なのは見たことがないな」

「まぁ、それなりに修行したからな。それでも、本家本元に比べればまだまださ」

修司の戦闘力を評して称賛するジェロニモだが、本人はまだまだだと謙遜する。他のサーヴァントと比較しても修司の強さは凄まじく、それが未だに成長途中の段階というのだから、今後、更に強くなる彼の事を思うとジェロニモは乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

「……所で、あの女性の方は放置してていいのか？」

話題を変え、アレを指差すジェロニモに修司は「あぁ」とだけ応えた。村から少し離れた荒野、そこには村を襲撃しようとして来たケル

トの軍勢が須く朱い槍に貫かれていた。恐怖という感情が欠落しているケルトが逃げ惑い、その後ろから朱槍の雨が降り注ぐ。軽く地獄絵図な光景の中心にはカルデア自慢の槍の女王が君臨していた。
「アレは妖怪の類いだ。アンタも気を付けろ、目を合わせたら仕切りに殺し合いを強請ってくる変態、気軽に声を掛けてくるけど無視してくれ」
「物凄い良い笑顔で此方に手を振ってくるが？」
「無視しろ」
　ここ北米大陸に来て、一番修司が辟易としたのがケルトの影の女王ことスカサハの扱いだった。今でこそ特異点修復の旅をしている為にいつもより少しだけ大人しいが、ことある度に死合を申し込んでくるのは変わらず、そんな戦闘民族な彼女に修司は心底疲れていた。
　ロマニにカルデアへのクーリングオフを要請したが、当然カルデアにそんな機能がある筈もなく、特異点修復まで仕方なく行動を共にすることになった。最近では、カルデアに戻ってから勝負をしてやる事を条件に彼女を露払いの周回マシーンみたいに扱っているが、本人も殺る気に満ち溢れている為に気にしてはいない。
　寧ろ、カルデアへ戻った後の事を考えると背筋が寒くなるが……この際、修司は考えない事にした。
「それより、彼の具合はどうだ？　一応俺の気を分けていたが、あの怪我だ。そう簡単に治るとは思えないが……」
　そう言いながら、修司はジェロニモの案内によって家屋の奥へと案内される。そこは彼が組んでいるとされる三騎のサーヴァントの一人、カルナと同じインド神話に出てくる英雄の一人、インド叙事詩〝ラーマーヤナ〟に出てくる戦士ラーマであった。
　この村に訪れて、ジェロニモに案内された修司達が最初に顔を合わせることになった英霊。最初に顔を合わせた時は心臓が半分ほど抉られた致命傷で、今にも死にそうな状態だったが、修司が自身の気を分け与えた事でどうにか持ち直す事に成功した。
　その後はナイチンゲールが付きっきりで看病する事になり、これ迄の疲れを癒す為に一日だけ此処で休むことになった。

アレから数時間、一眠りをした事で体力気力共に回復した修司はジェロニモと共に再びラーマの元へ訪れる事となった。
「ラーマ、体の調子はどう――――」
「なぁ、本当にこれしかないのか？　一応、余もある程度回復してきたぞ？　いや、全快には程遠いが、シュウジの治療のお陰で歩く程度には回復した。故に貴女に負担を掛ける必要はないと思うのだが……」
「負担ではありませんよ。貴方が生きたいと願うように私も貴方を助けたい。それに昨夜の彼も言っていたではではありませんか、自分の行いは所詮応急処置、本格的な治療には至らないと。であるならば、やはりここは私の出番かと」
「くっ、バーサーカーなのに正論が痛い！」
「ほら見なさい。やはり痛むのではないですか」
「しかも話しを聞かないと来た！　だ、誰か！　助けてくれ！」
扉を開き、中で待っているラーマの様子を見に来ると、ナイチンゲールに背負わされている場面に出会した。
「お、ナイチンゲールさん。看病お疲れ様です」
「来ましたか修司、お疲れ様です。早速ですが彼に治療をお願いします」
女性に背負われ、恥ずかしいと暴れるラーマを無視し、修司は彼に手を翳してそこから己の気を分け与える。淡く優しい光がラーマを包むと彼の胸元を覆った包帯に滲む血の流れが止まっていく。
「ふむ、やはり何度見ても神秘的な光景だな。修司は気を分け与えたと言うが、私には命そのものを分け与えているようにしか見えん」
「それなら俺の寿命が減ってるって事じゃないか。俺は別に疲れたりしてないし、単にエネルギーを分け与えているだけなんじゃないか？」
『まぁ、修司君のそれはサーヴァントに対してだけじゃなくて人間にも有効ってのが恐ろしいんだけどね。それはそれとしておはよう、立香ちゃんやマシュもそろそろ来ると思うよ？』
「ごめんなさい、遅れました！」

「藤丸立香、並びにマシュ＝キリエライト。到着しました」
「よし、全員揃ったな。では、改めて話を進めよう。目的は先ず、ラーマの回復とケルトの総大将の暗殺だ」
　それからは立香とマシュを交えた話し合いは、ラーマの容態の事もあり、三十分足らずに結論に至った。まず、インドの英雄ラーマはケルトのとある大英雄の一撃によって決して治る事のない呪いをその身に受けてしまっている。
　その呪いを与えたのはクー＝フーリン。アイルランドの光の御子にしてケルト神話最強の英雄、カルデアにも同じクー＝フーリンがいて、冬木の特異点では一時的とはいえ行動を共にし、心強い仲間であった為、最初に彼の名前を聞いたときは立香もマシュもかなりの衝撃を受けていた。
　だが、サーヴァントとは基本的に召喚した相手に従う傭兵みたいなもの。その時心強い仲間であったとしても、召喚したものが自分達でない以上、敵対する可能性は充分にあったし、後でロマニからそう言い聞かされてきたから立香もマシュも今は然程気にしてはいないみたいだ。
　ただ、気になるのはラーマの語るクー＝フーリンが闇に堕ちたという言い回しが修司には少し引っ掛かっていた。闇に堕ちたクー＝フーリン、その人物について修司は少しばかり心当たりがあった。故に修司は昨夜にロマニへこの事で相談を持ち掛けていたが、余計な先入観で立香達の視野を狭めたくはないと言うことで、この件の話は一先ず保留することとなった。
　そして、話は戻りラーマの件だ。彼は今クー＝フーリンのゲイボルグを受けて瀕死の状態、修司が自身の気を分け与えてどうにか歩ける程度には回復させたが、今のラーマは底抜けたバケツの様なもの。幾らエネルギーの塊である気を分け与えた所で応急処置程度にしかならないし、傷が塞がったり開いたりするラーマに対して現状負担にしかなっていないし、ナイチンゲールの処置も症状を僅かに抑える程度にしかなっていない。
　そんなラーマを助けるには彼の存在の力をより強固なモノにする

他ない。具体的に言えば彼と近しいサーヴァントの力を借りて、呪いとなっている傷口を回復して貰う手段しか残されていない。
故に。
「先ずは修司。君達はこれからナイチンゲールとラーマと一緒に、西にあるアルカトラズに向かってそこに囚われているシータを救って欲しい。確認するが、彼女は間違いなく其処にいるのだな？」
「あぁ、ラーマ君と良く似た気配が西側から感じられる。そして西側にはアルカトラズって監獄島があるというなら、十中八九そこで間違いないだろう」
修司はナイチンゲールとラーマと共に、ラーマの妻がいると予想されるアルカトラズへの侵入を試みる事となった。修司の気の感知能力は既に大陸全土を覆っている為、ラーマの妻であるシータの居場所を特定するのに然程時間は掛からなかった。
「あぁ、流石はシヴァ神の生まれ代わりだ。その様な芸当まで可能とは、貴殿が味方でいることを、余は志より嬉しく思うぞ」
「いや、昨日も言ったけど俺は別に破壊神の生まれ変わりとかじゃないからな？　正真正銘、企業勤めのリーマンだからな？」
『うーん。そもそもなんで修司君が破壊神なんだい？　いや、確かに修司君は色々と台無しにする天才だけどさ』
「何を言う。余はヴィシュヌ神の生まれ変わり。故に分かるのだ。彼から感じられる神気は至極薄いモノであるが、その気質はかの破壊神に良く似ている。ここにパールヴァティ様がいらっしゃれば、きっとより詳しく分かるだろうな」
「えぇ……」
「恐らく、カルナが貴殿に拘る理由も其処にあるのだろう。加えてケルトの影の女王迄も従えているのだ。それほどの実力者となると、余は破壊神シヴァを於いて他に知らんぞ」
「従えているというか、付きまとわれてるんですが？」
「アハハ……」
昨夜から修司を出会った当初からシヴァの生まれ変わりだと呼び、自身もヴィシュヌの生まれ変わりであるから、ラーマは修司を兄弟の

様に親しく接してきた。当然修司はその事に対してまったくと言って良いほどに心当たりがなく、一方的に親しくするラーマの対応に困っていた。
「まぁ、彼が破壊神の生まれ変わりの是非は一先ず横に置くとして、彼等がアルカトラズに潜入している合間に我等は各地に散らばったサーヴァントを集める。ケルトの総大将の暗殺の為に戦力は多いに越したことはないからな」
ラーマの呪いを解くには、彼の妻であるシータの力を借りるか、そもそもの原因であるクー＝フーリンを倒す他ない。そして、相手が無限に湧き出る戦力を確保している以上、ゲリラ戦には限界がある。
そこで、ロマニの助言の元に選ばれたのが……暗殺。正攻法での攻略ではなく、搦め手を使った確殺をジェロニモは選択した。
「修司達と同様に長い距離を移動することになる。道中の戦闘を考慮すると、戦力はなるべく多い方が助かるが……修司、本当にいいのか？　かの女王の力を借りてしまって……」
ジェロニモは今後の暗殺の為に戦力は多めに確保したいと狙っている。それ故に長距離の移動をする必要があるし、距離が長くなるにつれてケルトとの戦闘は考慮しなければならない。
負傷したラーマや、暴走するナイチンゲールを任せるだけじゃなく、カルデアからの最高戦力であるスカサハを借りてしまう己の図々しさに自己嫌悪しながらジェロニモが訊ねると……。
「あぁ、全然良いよ。潜入には少人数で挑むのが定石だし、ケルトを相手するにはアイツ程の適任者はいないだろ」
などと、アハハと光のない眼で笑いながら修司は快く承諾する。誰が見ても喜んでいる彼の反応に敢えて突っ込む者はいなかった。
そうして、二手に別れての行動指針は定まり、カルデア一行は一時、それぞれ別の道を歩き出す。東と西、それぞれの目的を果たす為に……。
因みに。
（計画通り！　悪いな、二人とも）
先にも述べた通り、修司の気の感知能力は北米大陸を覆う程に広く

なっている。故に、既に彼は気付いていた。この地に召喚された二人のアイドル（）が降臨している事に。
後に、その事に気付いた立香からぐるぐるパンチを受ける事になるのだが……それはまた別のお話。

◇

「ここがアルカトラズか。思っていたよりデカイな」
立香達と別れて数時間、日が落ち始め、夕焼けの光に空が赤く変わり始めた頃。修司達は監獄島アルカトラズ……の、対岸へとやって来た。
「ほ、本当に数刻で辿り着いてしまった。我等二人を担いで、よくもあんなに速く走れたモノだ」
「本当ならもう少し速く走りたかったけど、西部の連中とかに見付かるの避けたかったし、ラーマ君の怪我を考慮する必要があったから、これが限界だった」
途中途中で点在しているアメリカ西部軍の拠点を回避し、時折ラーマへの治療をしている内に日が暮れてしまった事に対して悔やむ修司だが、ラーマからみて修司の速さは常軌を逸していた。
北米大陸の面積は凡そ２４，万　ｋｍ▪。日本の約２０倍程の広さを誇り、地球上の中で三番目に位置する国土面積を有している。そんな巨大大陸をサーヴァント二体も担いで息一つ乱さない修司にラーマはただ驚き、ナイチンゲールも表情にこそ出していないが、異常な健脚を誇る修司にラーマ同様に驚愕していた。

そんな二人に対して、修司はさも当然の様に体を解し、目の前の監獄へ如何にして侵入するか思考を巡らせている。修司にとって大陸間の移動は長年の旅を経験して慣れたもの、人理焼却前の日常で修司が車や新幹線といった乗り物を使っていたのは、偏に経済を回す為に他ならない。

更に言えば、修司は２０倍の重力をも克服し、以前よりも身体能力は向上している為、前よりも足の速さは上がっている。恐らくその気になれば数日足らずに大陸を横断するのは訳ないだろう。――閑話休題。

「ダメだな。アチコチにワイバーンが配置される。島に上陸されたらすぐにバレるな。オマケにケルトの兵士達もわんさかいやがる、ナイチンゲール、ラーマ君の容態は？」

「……これ迄の時短的行動により、安定こそしていますが、いつ容態が急変するか分かりません」

「よし、なら今すぐアルカトラズを攻略しよう。ただし、戦闘は俺に任せること。ナイチンゲールはラーマ君を護ることだけに集中してくれ」

「了解しました」

「ま、前々から思っていたが、二人ともやけにウマが合うのだな」

そして、ラーマの容態を考慮してのアルカトラズ攻略は開始された。近くにあった小舟を拝借し、監獄島へと上陸した修司達。待ち構えていた雑兵を蹴散らし、一行はシータの待つ監獄へ向かう。

「ダメだ！　数が多すぎる！」

「砦の方も門が閉まっているな。ならば……」

どれだけ殴り、蹴飛ばしても、次々と沸いて出てくるケルトとワイバーンの群れ。このままでは埒が明かないと修司は白い炎を纏い気を解放する。

「道を作る。二人は俺の後ろに！」

「了解」

「な、なにを……」

「魔閃光!!」

両手を額に重ね、エネルギーを溜めた瞬間に放たれる魔閃光。修司の両手から放たれた眩い光は射線上にいるケルト、ワイバーンを消滅し、砦を塞いでいた扉を城門ごと吹き飛ばした。

明らかに対城宝具以上の火力をポンポン放つ修司に、常識あるラーマは唖然とするが、いつまでも呆けて入られない。ナイチンゲールに背負わされ、何も出来ないラーマではあるが、復活した際は改めて自分も活躍しようと心に誓った。

そして、修司がナイチンゲールとラーマの二人を護りながらケルト達を蹴散らし、アルカトラズ内部へ突入すると、不思議なことに中には誰もいなかった。明らかに罠の気配がするが、今はそれよりもラーマの治療を優先したい。

急いでシータの気配を探ると、ラーマに似た気の持ち主が地下から感じられた。急いで気配を感じた方角へ向かうと、其処には地下に続く階段があり、三人は迷わず下へ降りると幾つもの牢が設置されており、その中にラーマに良く似た女の子が地べたに横になっていた。

「よし、いたな。ラーマ君、彼女がシータちゃんで間違いないか？」

「あぁ、あぁ、シータだ。余の愛する……大好きな、シータだ」

「そのお声は……ラーマ様？　嘘、本当に？」

呆然となっているシータを他所に、修司は己の腕力にモノを言わせて牢を抉じ開ける。対サーヴァント用に作られ、触れたら即死級の電流が流れるが……気を纏っている修司には通用しなかった。精々、強めの電流程度にしか感じない。

「シータちゃん、俺達は君に助けて欲しくて此処に来た。君の力でラーマ君を治すことは出来るかい？」

「え？　そ、その気配は……シヴァ神様？　な、何故破壊神がここに……」

「君もか。いや、今はそんな事はどうでもいい。彼を治し、救ってあげくれ。俺や彼女も出来る限りの事はしてきたが、現状焼け石に水の状態なんだ」

混乱するシータに修司は簡潔に状況を説明し、シータもナイチンゲールに手厚く横にされるラーマを見て事の深刻さを理解する。愛

する夫の現状を見て、心優しい少女は目尻に涙を溜めながら強く頷いた。
「ええ、ええ、解りました。彼の事はどうか私に任せて下さい。必ずや、彼を万全な状態に戻して見せます」
「頼む。ナイチンゲールは……」
「私はここに残ります。喩えオカルトチックな治療法でも、私に出来ることはあるはずだから」
「助かりますナイチンゲールさん。では初めに清潔な水を、彼の傷口を洗ってください」
「了解です」
テキパキとラーマの治療を始める二人に安心した修二は地上で待っている気配に意識を向ける。気配の強さから言ってサーヴァント、それも二体がアルカトラズの中央広場に陣取っている。
ラーマの治療はまだ始まったばかり、向こうは此方の出方を待っているつもりのようだが、いつ気が変わって襲ってくるかも分からない。ならば、ここは自分が出ていく所だろうと、修司はナイチンゲールに外の空気を吸ってくると言い残し、一人広場へとやって来る。
……案の定、其処には二人のサーヴァントが笑みを浮かべて待ち構えていた。一人は褐色肌と至る所に付けられた傷跡が逞しい厳の様な男と、快活な笑みを浮かべている割には尋常じゃない殺意を抱いている――掘削機の様な剣を担いだ細目の男がいた。
「おお、来た来た。話に聞いた通りスゲェのが来たな。こりゃあ、退屈な看守の真似事も捨てたもんじゃねぇな」
「うむ。俺もこの眼で見るまで信じられなかったが、大した奴よ。クーが一目置くのも頷ける」
「……」
二人とも、笑ってこそいるが隙がない。口振りから察するにケルト側のサーヴァントで間違いないであろう二人に、修司は声を掛けた。
「一応聞くが……あんた達、どうしてさっきは仕掛けてこなかった。あの時の俺は二人を守りながらだったから、幾らでも隙を突けた筈だ」

「あん？　何を言うかと思えば……」
「確かに、我等はお前達から見れば野蛮な侵略者だろうよ。だが、あくまで我等はサーヴァント。主に戦いを命じられてはいるが、やり方までは口出しされていないからな」
「だから、ラーマが万全になるまで手を出さないと？」
「まぁ、その方が楽しそうだからな。折角第二の人生として喚ばれたんだ。楽しまなくちゃ損だろ？」
　何処までも戦闘狂な思考回路の二人に辟易とするが、今の状況に限り、修司には嬉しい誤算だった。
　此処は広く、敵しか存在しない監獄島。要のラーマ達は地下にいて、未だに出てくる様子はない。つまり、この特異点にやって来て漸く本来の力で戦える場が出来たのだ。
「良いぜ、今回ばかりはあんた達の流儀に乗ってやる」
「おっ、遂にやる気になってくれたか！　待ちわびたぜ！」
「おっと、横取りは見過ごせんなベオウルフ。ここは先のジャンケン通り、俺に譲るべきだ」
「そうは言うがフェルグスの旦那、アレを前に我慢しろって言うのは野暮だぜ。ここは一つ、若輩の俺にだなぁ」
「……二人だ」
「「あ？」」
「ごちゃごちゃ語るのも面倒だ。二人まとめて……掛かってこい」
　ケルトと北欧の英雄を相手に修司は不敵に笑みを浮かべる。初めて口にした強気な言葉、過酷な修行を経て、若干いつもよりテンションが高めになっている修司は、歴然の英雄を相手に手でチョイチョイと挑発する。
　そんな修司を前にフェルグス＝マック＝ロイとベオウルフは、先程よりも深い笑みを浮かべ、雄叫びと共に修司へ襲い掛かった。
　それから少しして、監獄島アルカトラズから青白く輝くゴン太ビームが成層圏に向かって放たれ、北米大陸を照らすのだった。

その７３　第五特異点

――――それは、北米大陸に蒼白い閃光が覆う少し前の事。人類最悪の監獄として知られる監獄島、アルカトラズ。

サンフランシスコから３ｋｍ程離れ、孤島となっている場所。ケルト勢力によって制圧され、要塞と化した大監獄は……現在、激闘が繰り広げられていた。

振りかぶる二振りの剣。理もなく、ただ己の腕力で奮われる暴力は、しかして命を砕く威力が秘められている。ひとつひとつが死を免れない剛撃、それが束となり濁流となって押し寄せてくるその全てを、山吹色の胴着を身に纏う男は正面からおのれの拳だけで打ち抜いていく。

刃ある剣に対し、自身の拳で迎え撃つ。常識で語るなら、山吹色の男の拳は奮われる剣の一撃によって両断される筈、しかしそんな常識を嘲笑う様に、山吹色の男が放つ拳は、神話に語られる英雄の一撃を弾き飛ばしてしまった。

鋼同士がぶつかり合う音。火花を散らしながら重ね合う剛撃の数々を、山吹色の男――――白河修司は全て自身の拳だけで打ち合って見せている。

それを、北欧の英雄――――ベオウルフは、驚愕以上に歓喜に震えた。

「は、ハハハ！　マジかよお前！　剣を前に拳で返すとか、どんな命知らずだよ。バカだろお前！」

「生憎と、そんな柔な鍛え方はしてねぇからな。師父から肉体を鋼に変える呼吸法は既に体得している。後は気を全身に纏わせて、肉体をより強硬に固めるだけだ」

「ハッ、成程な。その白い炎がそうか。派手な上に強ぇとか、羨ましい限りじゃねぇか！　だがな……」

「俺を忘れてもらっては困るな」

「っ！」

腕と剣でつばぜり合いとなったベオウルフと修司、そんな二人の間

を文字通り割り込む形で、円錐の剣が頭上から地面に降り注いできた。
　ベオウルフを弾き飛ばし、自身も後ろに飛んでその一撃を避ける。すると、修司がいた場所が爆発し、エネルギーの奔流がアルカトラズの中央広場を蹂躙していく。
「フハハハ！　強いだけじゃなく、勘まで鋭いと来たか！　全く、その若さでそれだけの強さを得ているとは、生まれてきた時代を間違えたとしか思えんな！　そうだ。なぁ修司よ、今からでも我等の所にこないか？　お前ならきっと我等ケルトもお前を受け入れるだろうよ」
「冗談じゃねぇ。誰が好き好んで殺し合いが大好きな部族に入るかよ、こちとら礼儀正しく他人への思い遣りに長けた現代人だ。ワザワザ野蛮人になるつもりはねぇよ」
「おいおい、それは偏見が過ぎるぞ。確かに我等は戦いを誉れにしている節があるが……別に殺し合いそのものを愉しんでいる訳ではないぞ？」
「ケルトの影の女王も？」
「……あー、それは……うん。俺からはノーコメントだ」
「それ認めてると同じだからな？」
　冗談半分で洒落にならない事を口にする細目の男、フェルグス。殺し合いの最中でもガハハと快活に笑う男、そんな彼でもケルトの影の女王は怖いらしい。
「しかし、我等二人を相手にしても未だに底を見せぬとは、少々妬けてしまうな」
「あぁ、だが……分かっているんだろ？　今のままじゃあ俺達を倒すことは出来ねぇってな」
「……」
　不敵に笑い、修司の強さを認めながら、それでも自分達を倒すことは出来ないと語る二人。確かに白河修司という男は強い、強さだけなら其処らのサーヴァントなんてかるく捻り倒せるだろう。事実、フェルグスとベオウルフがそれぞれ各個撃破を狙われていたら、それこそ瞬きもする間もなく勝敗は決まっていた。

それが出来ていない理由は、修司が無意識的に手を抜いているのと、フェルグス達二人の巧さにあった。修司は他の囚人達やラーマの治療が終わるまでにアルカトラズを壊さないように気を遣いながら戦い、フェルグスとベオウルフはそんな修司の心の隙を狙って攻撃してくる。必然的に迎撃を優先する形で行われる戦闘は、二人のサーヴァントに大きなアドバンテージを与えていた。

しかし……。

「分かっている筈だろ？　此処、アルカトラズを完全に解放するには我々を倒すしかない。ならば、やることは一つだろう？」

「そら、生意気に俺達二人を相手取るって宣ったんだ。様子見も結構だが……そろそろ、その気になってもいいんじゃねぇか？」

有利な状況（そんなモノは）はいらないと、二人の英雄は吐き捨てた。元より自分達は既に死んでいるモノ、サーヴァントとして再び生き返ろうが、第二の人生なんてモノは彼等は望まない。

二人の英霊が望むのは、尋常なる勝負。ただ自分の全てを懸けて、目の前の強敵を打ち破るのみ。そして、そんな二人の思いを汲み取ったのか否か、修司の纏う炎が勢いを増した。

「……後悔するなよ？」

その一言を皮切りに、二騎のサーヴァントは修羅と化した。笑いながら地を駆け、手にした剣に力を込める。

先手は、ベオウルフだった。狂戦士らしい勢いを乗せた一振りは間違いなく修司の脳天を捉えた。直撃すれば頭の天辺から両断されるのは間違いない、手にした二つの魔剣に渾身の力を込めて振り抜いた一撃は――修司の振り抜いた拳に打ち砕かれた。

剣が拳に負けた。その事実はベオウルフに多少ながら衝撃を与えたが……そんな事はどうでもいい、これで漸く枷が外れたと、狂暴なる戦士は嗤う。砕けた剣に別れを惜しむのも一瞬、空いた掌に力を込めて、力の限りのこぶしを奮う。

「受けろやぁッ！　源流闘争（グレンデル・バスター）ァァァッ!!!」

殴り蹴り、殴る。それは人類に刻まれた闘争の形。獣の様な爪も牙もない人間が編み出した最初の攻撃方法。単純にして明確、故に強靭

なその応酬は悉く修司に叩き込まれた。
手応えあり、そう感じながら嗤うベオウルフが次に目にしたのは……。
「返すぞ」
僅かに痕の残った顔、その奥から竜すら震え上がる眼光がベオウルフを覗いていた。
「マジかよ……」
自身の渾身の宝具（必殺）を受けて尚、平然としている修司にベオウルフは乾いた笑みを浮かべ……。
「ギャラクティカ――マグナム!!」
返しの一撃が北欧の英雄の顔に深々と突き刺さった。顔を潰され、アルカトラズの外壁を突き破り、大陸と隔てていた海をも超え、青天井になりながらもベオウルフは満足そうに消えていった。
残されたのはフェルグス＝マック＝ロイ唯一人、倒したベオウルフを気に掛けたのも一瞬で、修司は頭上から感じた力の膨れ上がりに注視する。見上げると其処には、輝かしい虹の螺旋が広がっていた。
「真の虹霓、お見せしよう！　極・虹霓剣（カレドヴールフ・カラドボルグ）!!」
それは、本来の虹霓剣を上回る一撃。怒りに任せての一撃ではなく、偉大なる英雄が目の前の強敵を打ち破らんとする為に引き出した……文字通りの極めた一撃。
その一撃に監獄島アルカトラズが耐えられる訳がない。一瞬でもあの剣が地上に刺さったら最後、監獄島は跡形も消し飛び、地下で治療を続けているラーマ達諸とも死に絶えるだろう。
やらせはしない。数秒後の地獄の未来を変える為に、修司は身に纏う白い炎を血のように赤い緋色に変える、両手を腰に持っていく。
「これが、界王拳の――かめはめ波だ!!」
瞬間、赤い炎の中から巨大な蒼き閃光が放たれる。頭上から迫る虹色の光を呑み込み、北米大陸の夜空を照らしていく。
その光景に全ての戦士達が、戦う手を一時止めてしまっていた。ケルトも、アメリカも、サーヴァントも、皆が等しく地上から空へ伸びていく巨大な流れ星に見惚れていた。

「……あぁ、眩しいな。これなら、きっとアイツも……」
光に呑まれ、フェルグスもベオウルフと同様に笑いながら自身の消滅を受け入れていた。これならきっと彼も満足するだろう、そんな他人任せの希望を抱きながら、ケルトの英雄フェルグスは自身の虹色と共に夜の空へ溶けていった。

――空が明ける。特異点に来て迎える朝日、修司はそんな朝焼けの空を見上げていると、地下から複数の気配が近付いてくるのを感じた。
振り向けば其処にいるのはラーマとナイチンゲールの二人だけ、ラーマの妻であるシータの姿は……何処にもなかった。
「二人とも、無事だったか。……シータさんは？」
「Ｍｒｓ．シータは夫であるラーマさんの病巣を受け継ぎ……消滅しました」
「そう、か……」
修司が二人の英雄を相手に戦っていた合間、修司は地下で起きていた異様な気の動きを感じ取り、まさかと思った。だが、ナイチンゲールのハッキリと告げる言葉に修司は受け入れながら空を仰ぎ見た。
ラーマとシータ、二人の間にある離別の呪いはサーヴァントとなった今でも続いているらしく、ラーマが全快する頃には彼女は既にこの特異点から消滅していたという。
「悪いラーマ君、俺、何て言ったらいいか……」
「何を言う。貴殿のお陰で余は再びシータと出逢えた。言葉を交わし、あの時の謝罪を、愛を、言葉の限り伝えることができた。そして何より、我等の間にあった離別の呪いに綻びが出来た。だから修司よ、我が恩人よ、どうか謝らないでくれ。貴方のお陰で、私は救われたのだから」
「……分かった。なら、俺もこれ以上ウダウダ言うのは止めるよ」
清々しく、晴れやかな笑顔でそう言うラーマに修司もまた笑顔で応えた。これで、損なわれていた戦力が補填された。後は東部で仲間を集めている立香達と合流するのみ。

そんな時だ。
『た、大変だ修司君！』
「どうしたロマニ、アンタは立香ちゃん達のサポートじゃ……」
『そ、それが大変なんだ！　立香ちゃんが、立香ちゃん達が!!』
「なに!?」

◇

――――――北米東部。ケルトの本拠地、ワシントンから遠く離れた地にて、それは起きた。
「なんという事だ。あのクー＝フーリンが自ら軍勢を率いて此方に攻め立てて来るとは、完全に予想外だ！」
「別に、王が率先して暴れるなってルールなんて無いだろうが。戦場に常道も邪道もあるかよマヌケ」
仲間を集め北米大陸を横断していた立香達、ジェロニモの仲間だったロビンの案内のもとでセイバーであるネロ・ブライドを仲間に引き入れ、後は修司との合流を待つばかりという所で、奴等は現れた。
ケルト勢力。大陸を二つに分けていた勢力、そのほぼ全ての戦力が立香達の周囲を取り囲んでいた。圧倒的戦力の差、唯でさえ勝率は愚か生存率も低い状況なのに……。
「その上、アルジュナか！」
「……」
よりにもよって、インドの大英雄であるカルナが生涯の宿敵と定め

たアルジュナまでもが、どういう訳かケルトに付いている。ジェロニモが予想していた中でも最悪の状況、覆らない戦力の差に立香達がどうするか悩んでいた時。
「安心しろ。お前達はまだ殺さん、お前達は奴を誘き出す撒き餌だ。餌である以上、殺すのは好ましくないからな」
「撒き餌……だと？」
「ぐぬぬ、バカにしおって～～！　余というアイドルを捕まえておいて餌呼ばわりは何事かぁ！」
　意外なことに、クー＝フーリンには立香達に対する殺意がなかった。餌と表現する事から彼の狙いは別にあるだろうが、それにしたって意外に過ぎる。現に、彼の主と思われるピンクの髪の女性は不服そうに頬を膨らませている。
「……ねぇクーちゃーん。本当にコイツら生かしておくの？　生かしておくと見せ掛けて、裏で殺しちゃってもよくなーい？」
「……最初に言った筈だよなメイヴ。俺はテメェが望む様に王となる事を約束した。その条件に奴との決着を着けるのが先だともな」
「うー、分かってるけどぉ、もう、他の願望とか欲望とか無い癖に、それだけは頑なんだから」
「――奴を、白河修司だけはこの俺の手で殺す。それを破るのなら……分かっているな？」
「いーっ、分かってますよーだ！」
　血に狂い、暴力に狂い、殺戮に狂った凶（マガツ）の王。手にした槍で殺気を込めながら並んでくるケルトの王に、伴侶たるケルトの女王は不貞腐れる。
　彼もまた、修司との浅くない因縁を持っているようだ。一体あの男は元の世界で何を仕出かしたのか、ともあれ今すぐ命は奪われる事はないだろうとモニターの向こうでロマニが息を溢した時、それは起きた。
「は、ハハハ。私の聞き間違いかな？　なぁそこのバカ弟子。貴様今……誰を殺すと言った？」
　ケルトである。中でも最強の女王として知られ、数多の英霊英傑が

集うカルデア内でも、上位に位置付けられた強さを持つ戦士。
　スカサハ。クー＝フーリンの師でもある彼女は、聞き捨てなら無い彼の言葉に心底ご立腹の様子だった。
「修司の奴は俺が殺すと言った。誰にも譲るつもりはない。それが喩えアンタでもな」
「は、ハハハハハ！　おいおいバカ弟子よ。冗談は格好だけにしろ。人の獲物を横取りするような真似はするなと、修行時代散々教えただろう？　……アレは私の獲物だ。小僧ごときが、邪魔立てするでないわ」
「抜かせ、アレとの因縁はアンタの比じゃねぇんだよ。引っ込んでろババア、いい歳して若い奴に色目使ってるんじゃねぇよ」
「は、はは、ハハハハハハ……」
「く、くく、クハハハハハ……」
「「殺す」」
　瞬間、ケルトの凶王とケルトの影の女王が激突。周囲を巻き込みながら唐突に始まる戦いは敵味方問わず（主な被害はケルトの模様（笑））蹂躙していった。
「せ、先輩ー！　は、早く私の後ろにー！」
「あーもう！　修司さーん！　早く来てェェェッ!!」
　今この場を抑えられるのは修司（原因）しかいない。切実な立香の叫びは北米の空へ溶けていった。

その７４　第五特異点

――――そこは、戦場と言うには剰りに苛烈で、地獄というには剰りにも鮮烈な光景だった。朱色の雨が降り注ぎ、大地を穿ち家屋を粉砕し、建物のあった土地は今は更地と化している。

槍が降る。無数の流星となって、前後左右上下を問わず、無秩序に、無遠慮に奮われ、すべての障害物を塵芥に変えていく。其処に敵味方の区別なく差別すらもなく、全てを等しく刺し穿っていく。

正に槍の嵐。一つ一つが命を呪い殺す鏖殺の一刺で、一つ一つが相対する師を、或いは弟子を、この世から退場させるつもりで奮われていく。

そんな嵐の中を、必死に走りながら逃げ惑う一つの小隊が存在していた。人類最後のマスターの一人である藤丸立香を守る為に、懸命に彼女を守護するサーヴァント達、嵐のごとき死の暴風の中で寄り添う彼らは荒れ狂う大海に佇む一隻の小舟の様だった。

「ちょっとー!?　何なんですかあの槍の人はァァッ!?　マスター、あの人お宅のサーヴァントじゃありませんでしたっけ!?」

「うぅ、そうなんだけど、そうなんだけどさぁ！」

迫り来る死の暴風を前に決死の勢いで逃げ惑う面々の一人、緑の弓兵ロビン＝フッドは突然殺し合いを始めたスカサハについて追及していた。

「も、申し訳ありませんロビン＝フッドさん！　スカサハさんはなんというか、戦いに喜びを見出だす人らしく、強い人を見るとその……ちょっかいを掛けずには要られないみたいで」

「なにその傍迷惑な性癖!?　ケルトってのはあんなんばかりなの!?」

「ていうか、話の流れ的にそれだけじゃないよね？　絶対他にも理由があるよね？」

「そう言えば、何か人を取り合っていなかった？　やれアレは私のモノだとか……ハッ!?　まさか恋の三角関係!?　蛮族同然なケルトの中にも恋は芽生えるのね!?」

「それはそれで凄く修羅場に……いや、だからこその惨状という訳か」
突然始まったケルトによる大戦争、完全に巻き込まれた側であるロビンはマスターである立香に問い詰めるが、立香も立香で訳が分からない状態である。半泣きになりながら、それでもマスターとして頑張る彼女にロビンは文句を言いながらも手を貸している。優しい。
降りかかる槍を払い、或いは防ぎながら爆心地から遠ざかろうとする一行、確かにロビンの言う通り傍迷惑な理由から始まった戦いだが、お陰でこの場から逃げる算段が出来た。包囲していたケルトの軍勢が巻き込まれていることで戦局は瓦解し、立香達が逃げる活路が開けた。
結果的に、状況はスカサハによって切り開かれた。そんな彼女に一人で負担を強いるのは酷な選択だが、今の自分達に奴等を相手取る余裕はない。向こうの体勢がメイヴによって建て直される迄にどうにか包囲網を突破しなくては……。
そんな時、立香の後頭部に向けて光の矢が迫る。咄嗟に気付いたマシュが防ごうと盾を前にして防御の姿勢に入るが、信じられないことに……唯の矢の一射でマシュは盾諸とも吹き飛ばされてしまった。
「っ、マシュ！」
後輩でありパートナーであるマシュが吹き飛んだことに立香は目を見開いた。振り返ると、槍の暴風の只中にて自然体を崩さずに佇む男が弓を片手に立香達を見下ろしていた。
「……無駄なことです。我が目からは何人たりとも逃れはしない。我がアルジュナの名に懸けて、貴方達の命運は此処で断とう」
「まさか、アルジュナだと!?」
「アルジュナ!?　そいつは確か、あのカルナが宿敵と定めたインド神話の大英雄じゃねぇか!?　なんでそんなビッグネームがケルト側に付いてるんだよ!?」
「ええい緑の狩人、お主もアーチャーであるなら臆すでないわ！　弓の腕なら貴様にも覚えがある筈だ！」
「そりゃ純粋な弓の腕ならワンチャンあるかもだが、相手が悪すぎる

！　此方が普通基準の弓矢ならあっちは大砲だ！　的を射抜くのと的ごと吹き飛ばすのでは本質が異なってるんだよ！」
「更に言えば、放たれる弾は変幻自在の光線（ビーム）ときた。僕も銃での曲芸は慣れたもんだけど、流石に弾そのものを変形させたりは出来ないなぁ」
　インド神話の大英雄、アルジュナ。授かりの英雄として知られ、叙事詩〝マハーバーラタ〟にも綴られている最強格のサーヴァント。表情こそは落ち着きのある清廉としたモノだが、その瞳の奥にある激情はロビンと銃使いであるビリー＝ザ＝キッドを震え上がらせる程に燃え盛っていた。
「いかん、此処で足を止めるわけには……」
「おっと、そうはさせないよ」
「此処を抜けたくば、我等を倒してからにしてもらおう」
　アルジュナに標的にされ、焦り始めるジェロニモに追撃とばかりに更なるサーヴァントが立ち塞がる。ケルトの栄光なるフィオナ騎士団の団長であるフィン＝マックールと彼が信頼する部下、輝く貌のディルムッド＝オディナである。
　ケルト勢力の中でも指折りの戦士、それが二人で連携を取りながら仕掛けてくるから、余計にその強さに拍車を掛けてくる。純粋なサーヴァントの数ならば立香達も負けていない。が、如何せんケルト側の戦力が多すぎた。
　一人一人サーヴァントには及ばなくても、過去にそれなりの強者として数えられてきたケルトの尖兵。女王メイヴの力により無限に増えることが可能となった彼等は、謂わば尽きぬ兵隊。どれだけ倒し屍を晒した所で彼等の進軍は止まることはない。
　気付けば、立香達は分断されていた。津波のように押し寄せる軍勢に、気付けば立香とマシュは孤立無援の状態。そんな二人の前にはケルトの女王が君臨していた。
「はぁい。先程振りね仔猫ちゃん達。短い大冒険は堪能出来たかしら」
　勝利を確信した笑みを浮かべるメイヴ、その傍らにはインドの大英

雄アルジュナが控えている。マシュ一人では到底太刀打ちできない相手、ジェロニモ達が駆け付けようとそれぞれ奮闘しているが……間に合いそうにない。

そしてスカサハもまた、地に膝を着けて息を切らしていた。影の女王と凶王、互いに無傷でこそないが、それでもクー＝フーリンにはまだ余裕で、対するスカサハは悔しそうに肩で息を吐いていた。

詰み。将棋やチェスの王手（チェックメイト）な状況だが、それでも立香の目には諦めの色が微塵も出てはいなかった。楽観的、或いは泥臭い諦めの悪さ、何れにしてもその負けん気はメイヴにとって極上の餌でしかなかった。

「あぁ、いいわぁ。ゾクゾクする。まるで自分達の負けを分かっていないその目、その目がこれから泣いて赦しを乞うのかと思うと、楽しみでしかたないわぁ」

「させません！　先輩は、私が護ります」

「勿論、貴女も一人にはさせないわ。二人とも私の閨でヒィヒィ哭かせてあげる！」

無垢に見せた悪食なる魔性の女が、涎を垂らして舌舐めずりをする。その性根にアルジュナは目を伏せ、それでも己の願いを叶えるために弓を引き。

――――遥か空の彼方から何かがやって来る。アルジュナが目の前のマシュから空の彼方にいる何かに向けて矢を放った時、それは起きた。

空に向けて放たれた矢が、何者かによって弾かれる。アルジュナが更に追撃を仕掛けようとした時――――それは地に落ちた。

爆発と爆風、同時に起きた災害は周囲のケルト兵を女王であるメイヴごと吹き飛ばしていく。

その光景に全員の視線が向けられる。空から突然飛来してきたモノ、それを確かめるべく注視するジェロニモ達。

そして、砂塵が収まり視界が明らかになる中、スカサハに槍を突き付けていたクー＝フーリンは目を見開く。これ迄何者にも興味を抱かなかった彼が、驚愕と歓喜に目を見開いたのだ。

砂塵の奥にて佇む山吹色。背中に大きく書かれた界の一文字、それは嘗て自分が戦った忌々しくも懐かしい怨敵の姿。
「来たか！」
駆ける。メイヴにも、己の師にも目もくれず、獣と化した狂った王は狂喜に顔を歪ませながら、一心不乱に肉薄する。
そして、奴との距離が三メートルを切った所で……目があった。日本人特有の黒い瞳は、あの時自分が見たモノと、全く同じモノだった。
『――やってみろよ』
思い出す。あの薄暗い闇の底で、吐き気の催す邪悪を前にそれでも決して揺るがない男の眼を。嗚呼、思い出す。思い出したとも、今この時この瞬間、クー＝フーリンの感心は全て目の前の男に向けられた。
振り抜かれる鏖殺の槍、対するは白き炎を纏わせる剛腕。競り合う力は再び激しい乱気流を生み出し、周囲の全てを凪ぎ払っていく。
「よぉ、久し振りだなぁ。修司ィッ！」
「やっぱりアンタか、クー＝フーリンッ！」
激突する二つの闘気。世界と時間を越えて、二人は遂に再会を果たした。

◇

「あれが、噂に聞く白河修司ですか」
女王の願いによって在り方が歪み、凶悪と残忍さに振り切った凶王

を生身の人間が押し留めている。噂に勝る膂力、過去の自分達と比べても遜色のない戦士の登場に授かりの英雄は素直に驚いていた。
彼の男が現れた時、凶王の目的は彼の打倒への専念に切り替わると、前もって知らされていたから驚きは然程ではない。何れにせよ、自分のやるべき事は変わらない。逃げる人類最後のマスターの足を射ぬこうとアルジュナが矢をつがえた時。
「させん！」
「っ！」
紅蓮のごとく燃える髪を揺らし、小さな王の剣がアルジュナの視界に割り込んできた。全く予想していなかった横やり、自分と同じ出身でありながら凶王に呪いを受け付けられて再起不能の状態だった筈のサーヴァント、コサラの王ラーマがアルジュナの前に立ち塞がった。
「……貴方は、戦える状態ではないと聞いていましたが？」
「良縁に巡り合えてな、お陰でこの通り全快よ。さて、授かりの英雄よ、戦況は既にこちら側に傾いた。お主の事情は分からない……事もないが、ここは一度引いた方がいいのではないか？」
剣を向け、やや同情の混じった視線で撤退を促してくるラーマにアルジュナもほぼ同意見だった。確定していた筈の戦局は白河修司というたった一人の人間の登場によって覆り、有利だった筈の戦況は瞬く間に劣勢に追い込まれつつある。
更には、ラーマと共に此方に辿り着いたもう一人のサーヴァント、ナイチンゲールがケルトの戦士達を蹴散らしていくのが見えた。徒手空拳から始まり、拳銃、何処から出したのかベットまで投げ付けて戦場を蹂躙する様はハッキリ言って悪夢である。ディルムッドが彼女を止めるが、花嫁衣装（ブライダル）に身を包んだ皇帝ネロが阻んでいる為、動けずにいる。
フィンもジェロニモやキッドの猛攻に防ぐ事しか出来ないでいる。現状、打開策はない。追い詰めていた筈の自分達が逆に追い詰められ始めている事実、しかし……。
「残念ながら、私には其処までの決定権がありません。我等の王の命

令が下されない以上、私のやることは一つだけです」
「やれやれ、汝も大変だな」
「遠慮は無用です。さぁ、来るがいい、コサラの王よ！」
「ならばいかせてもらおう。後悔するなよ授かりの英雄！」
放たれる弓矢、光の奔流となって放たれる死の雨、当たれば致命傷は避けられない攻撃を、幼き王は正面から切り伏せていく。負けられない。愛する妻の接吻を受けて、今日のラーマ君の強さは通常の五割増しになっていた。爆ぜろ。

◇

一、十、百、千。降り注がれる朱色の槍はその悉くが相手を呪い殺す絶死の魔槍、防がれる術などなく、避ける事も不可能な死の一刺。
大地を朱色に染める槍、その全てを素手で払い落としながら、白い炎を纏う修司は黒に染まるクー＝フーリン（凶王）へ肉薄する。
速い。単純な速さで先手を取られたクー＝フーリンはそれでも構わないと槍を奮う。修司諸とも周囲の地形を凪ぎ払う一撃、サーヴァントは勿論、生身の人間であれば地形ごと両断される一振り。
それを、修司は己の片腕のみで対処する。この程度なんの障害でもないと、涼しげな顔で対応する修司に凶王は表情を強張らせる。
強い。あの頃よりも遥かに力を増している修司に凶王の胸中は歓喜以上に悔しさで満たされていた。修司の速さに追い付けない、強さ

も、タフさも、何もかも、今の自分よりも遥かに凌駕している。
スカサハにある程度削られているから、だから今は負けているのだと、戦いを俯瞰している者はそう言うだろう。だが、当の本人はそうは思わない。仮に今の凶王が万全な状態だとしても、この状況は変わらないだろう。そう思わせるほどに白河修司という人間の強さは凄まじい。
当然だ。此方は既に成長の余地のない打ち止めのサーヴァントで、彼方は今も生きる人間だ。生きた人間であるならば成長し、出会った当初より強くなっているのは当然のこと、悔やまれるのはそんな修司の強さに着いていけていない自分の不甲斐なさだ。
「ぬ、ぐぅぅ……」
「どうする、もう止めとくか？　一応此方も疲弊している身だ。体勢を建て直す意味も含めて、今はお互い退き時じゃねぇか？」
挙句の果てに、相手から見逃される始末。修司本人はそのつもりはないとはいえ、これでは見逃されたと変わらない。誇りも矜持も踏みにじられた王はただ闇雲に槍を奮う事しかできなかった。
「……随分と、余裕のある顔だなぁ。なんだ？　今はもう自分の方が上だと言いてぇのか？」
「あぁ、もう随分と上だと思う」
「っ!?」
槍を手にした手に力が入る。気に入らない、あの時よりも余裕ぶった表情が、超然とした振る舞いが、安い挑発だと分かっていても、今の凶王には修司の態度の全てが癪に障っていた。
だが、事実として修司は強い。あの頃よりも力を磨き、直向きに強くなっていた。対する自分はあの時と対して変わらず、聖杯の願いでそう歪められているに過ぎない。
悔しい。王として、何より戦士として、対等に戦えていない自身が何より許せない。消された筈の怒り、失くした感情が底から溢れてくる感覚。
そんな、愛しのクー＝フーリンを前に……。
「クーちゃん」

気付けば、ケルトの女王は駆けていた。

その７５　第五特異点

――――女王メイヴにとって、男とは自身に跪くモノであり、足の代わりであり、椅子の代わりでしかなかった。

己の挙動一つで男は靡き、自身の操り人形となる。古の時代、男が統治し支配する世界観に於いて己の美貌は剣や槍にも勝る武器だった。

唯一人、アルスターの戦士クー・フーリンを除いて。戦場で初めて対峙する自身に靡かなかった男、此方の手練手管を鼻で笑い、最期まで自分の下につく事に頷かなかった男。

故に、その男の死は免れなかった。一度でも頷けば変えられたかもしれない己の運命を、やはり笑って受け入れた男、バカで頑固な愚か者――――そんな男だからこそ、女王メイヴは焦がれたのだ。

女王のメイヴにとって、最強の英雄とは誰か。ギリシャ最強ヘラクレス？　トンチキ集団のトップを走るカルナ？　それとも……影の国の女王？

否、そんな有象無象など知った事ではない。最強なのはあの日、初めて出会った時から変わらない。コノートの女王メイヴの最強で最高な英雄は何時だって……唯一人に与えられる称号（モノ）なのだから。

喩え、彼の瞳に自分が写らなくても、恋する乙女は決して止まったりしないのだ。

◇

「……詰みだ。クー・フーリン、幾らアンタが聖杯で在り方をねじ曲げられようが、俺には勝てんぜ」
「ぐ、がぁぁ……」
修司とクー・フーリン（凶王）が戦って数分。周囲の地形はあちこちが陥没し、隆起している。肉体の至る所から血を流し、地に膝を着けて肩で息をする凶王に対し、修司は何処までも平静だった。腕や頬からかるく血を流しているがその程度、凶王の奮う呪いの死槍の効果は修司の意に介さずに弾かれてしまっている。
端から見ても凶王に勝ち目などなかった。　その事実にケルトの尖兵達は動揺し、戦意も折れ始めている。既に包囲網も崩壊し、立香達の逃げ道は確立されている。
だが、誰もその場から逃げようとしなかった。圧倒的な力の差、サーヴァントでも埋めようがないその格差に敵側は勿論、味方すらも戦闘の意志が抜け落ちてしまっていた。
「話には聞いていたが……これ程とは」
「これ、俺達の出番ないんじゃねぇか？」
「ぐぬぬぅ～、余の出番をこれでもかと奪いおって！　あやつ嫌い！」
ジェロニモもロビンもネロも、口でこそ三者三様に呆れてはいるが、彼らから見ても修司の強さは本物であると認めていた。認めるしかなかった。
折れては自身の内側から生えるを繰り返し、身を削って生成する槍を以て奮われる鏖殺の槍を、正面から砕き、凶王を殴り、蹴り飛ばす。影の女王（スカサハ）すらも梃摺る呪いの死槍を己の手足で粉砕する修司を見て、誰もが彼の勝利を確信していた。味方だけでなく、敵すらも。凶王の幕下にあるサーヴァント達も、そう認めざるを得なかった。
「……あぁ、くそ。強いなテメェ、当然か。テメェはあの日からずっと強くなる為に鍛え続け、俺はあの日から何一つ変わっちゃいねぇ。差を付けられるのは当たり前か」
「……クー・フーリン」
「だがな。まだ俺は折れてねぇぞ。テメェがあの日から折れてないよ

うに、なぁ！」
　しかし、それでも凶王は立ち上がる。全身から血を吹き出し、足下に赤い血の池を作っても、それでも尚、狂った王は獰猛に笑う。それを目にした修司は全身を覆う白い炎を滾らせ、炎の色を白から紅蓮の如き紅へと変えていく。
「……行くぜ、クー・フーリン。この一撃であの日のやり残しを終らせるぞ」
「やってみろよクソガキ、生意気な小僧があれからどれだけ成長したか、見せてみろォッ！」
　駆け出す両者、既に勝ち目のない凶王にとってそれは特攻同然であった。しかし悔いはない、あの日果たせなかった戦いの続きを自身の手で終らせる事が出来た。
　これで、全てが終わる。振り抜かれる槍と拳、凶王クー・フーリンの目には自身を終らせる者しか映しておらず……故に。
「な……に……？」
　横から現れる美しき女王の姿に反応する事ができなかった。
　瞬間、鮮血が舞った。砕かれた大地に赤く滑った液体が振り撒かれ、その場にいる者の全てが停止する。ケルトの兵隊も、フィンやディルムッド、スカサハを含めた立香達も、そして修司も。いや、それ以上に……。
　クー・フーリンが驚愕した顔で、己の槍で貫かれているメイヴを抱き抱えていた。
「テメェ、メイヴ……何のつもりだ？」
「あ、はは、やっと、クーちゃんに……貫かれたぁ。本当は、もっと別のモノで貫いて欲しかったけど、これはこれで……悪く、ないかなぁ」
　クー・フーリンの槍に胸元から貫かれ、口元から血を吐き出すメイヴ。霊基の核を貫かれ、最早助かる見込みのない女王に狂った筈の王は何故と問い詰める事しかできなかった。
「なにを勝手な事をしやがる。俺は、俺の勝手に戦っていただけだろうが。テメェはそれでいいと、それでこの国を取っちまえと、そう

言っただろうが」
「うん、言った。言ったよクーちゃん。でもね、嫌だったんだ。私を見てくれないクーちゃんが、私以外に夢中になっちゃうクーちゃんが、一番近くにいるのに、誰よりも遠くにいる気がして……」
「なら……」
「でもね。負けを受け入れているクーちゃんが、一番嫌い。負けてもいいなんて考えているクーちゃんが、一番……嫌だなぁ」
「っ!?」
　その言葉は子供の駄々、或いはそれ以上にどうしようもない身勝手なモノだった。歪めたのはコイツなのに、そうあれと望み、歪曲したのは他でもないメイヴ本人だ。邪悪に邪悪を重ね、自分と同じ魔性に至れと呪いを植え付けてきたコノートの女王。
　だから、それがどうしたと言えた筈だった。勝手な女だと唾棄し、唾を吐き捨てる事だって出来たはず。しかしどうしてだろう。凶王となり、誰よりも邪悪に新生したというのに、狂った筈のク・ーフーリンはその女を手放せずにいる。
　そんな彼の頬を愛しそうに撫でる。それは、悪名高いコノート女王にはこれ以上なく似合わず、それでいて……美しい顔だった。
「だからね。そんなクーちゃんに更なる呪いをプレゼントしてあげる。――――――勝ちなさいクー・フーリン。私の総てをあげるから、あの白河修司（クソ野郎）に勝ちなさい」
　その言葉を最期に、女王メイヴは消滅する。光の粒子となったソレはクー・フーリンに刻まれるように、彼の中へと吸い込まれていく。その光景は先の特異点でイアソンが見せた現象と酷似していた。
　瞬間、クー・フーリンから光が溢れ出す。濁流となった光は北米大陸の天を貫き、覆っていく。
『こ、この反応は……不味い！　これはオケアノスの時と同じモノだ！　修司君、今ならまだ間に合う！　あの現象が収まる前に、この戦いに決着を付けるんだ!!』
「っ！」
　通信から聞こえてくるロマニからの必死な声に修司の表情が強

張った。彼の言う通り、このまま放置すればクー・フーリンはあの時のヘラクレスの様に凄まじい力を以て顕現する事だろう。それを防ぐには今の内に倒すしかない、クー・フーリンが生前の力を取り戻す前に！

そう、ロマニの言うことは正しい。戦略的にも戦術的にも、相手が強くなる前に決着を付けるのが正しい選択だ。誰だって文句は言えないし、言わせない。人理焼却を覆す為に余計な障害は取り除くべきなのだ。

だが、その考えに至るのに、非情になりきるのに、修司は僅かな迷いがあった。

何故なら、美しいと感じてしまった。一人の男の為に文字通り総てを擲った彼女が、修司は凄いと感じてしまっていた。誰かの為に自身の命も厭わない、その行為に修司は嘗ての両親を思い返してしまう。自分の為に自身の命を投げ捨てた両親と目の前の女王が重なって見えてしまったのだ。

そんな彼女の想いを踏みにじる真似は……出来ない。修司の中にある良心が、迷いを生んだ瞬間だった。

時間にして一秒も満たない刹那、修司は遂に駆け出した。胸に残る葛藤と痛みに耐えながら、目の前の大英雄の復活を阻もうと、掲げた手刀に力を入れる。

「エクス……カリバー!!」

これで全てを終らせる。僅かな後悔を抱きながら刃となった己の手刀を振り下ろし――――。

「っ!?」

しかし、その一撃は二人のサーヴァントの……身を呈しての防御に阻まれてしまった。

「ゴフッ、そ、そうはさせぬさ。我等が王の新生……いや、再誕の邪魔はさせんよ」

「っ、フィン・マックール！」

「ぐぶっ、は、済まないなディルムッド。私の我が儘に付き合わせてしまった」

「いいえ、この戦いの一助になるのなら、盾になることくらい、何の気兼ねもありません！」
フィン・マックールとディルムッド・オディナ。二騎ともジェロニモ達の猛攻を必死になって捌いていたのに、追撃を掛けられるのも構わずに無防備の背中を晒しながら、王の盾になる道を選んだ。

背中に幾つもの傷を受け、血を流し、修司の一撃で胴体を両断された二人。既にサーヴァントとしての耐久値は超え、消えるのみとなったのに……その表情は受けた傷とは裏腹に、何処までも晴れやかだった。
戦いの中に意味を見出だし、意義のある最期を見出だした二人。護るべきモノを守れた満足感と達成感を抱きながら、フィオナ騎士団の二人は消滅した。
そして、それは新たな戦士が誕生した瞬間でもあった。天を貫いていた光の柱は消え、残されたのはたった一騎の英霊……。
否、修司達の目の前にいるモノは、既に英霊の枠組みから逸脱していた。被っていたフードは焼け落ち、獣のごとき尾は崩れ、そこには立香もよく知るクー＝フーリンと良く似た男の姿があった。
露になったケルト最後の戦士、この男を倒せば全てが終わる。……なのに、誰も動けない。静かに見据える修司とスカサハを除いて誰一人、指一本、動かす事が出来ないでいた。
「つたく、ドイツもコイツも勝手な事をほざきやがる。だが、それも良いだろう。気に食わねぇが、今回ばかりはテメェの言うことに乗ってやる」
「その前に……まずは、二人。その心臓を貰い受ける」
「っ！　しまっ――――」
瞬間、ケルトの大英雄が起動する。爆発的に膨れ上がる闘気に修司がいち早く反応するも……既に、光の御子は一人のサーヴァントの胸に朱色の槍を突き立てていた。
「ジェロニモォッ!!」
「ば、バカな。速……過ぎる」

胸元を貫かれ、心臓を砕かれたジェロニモ。抵抗すら許さない速さに驚嘆する彼の目には……既に、クー・フーリンの姿は映ってはいない。
駆ける大英雄、その速度は既に光の領域へと差し掛かり、彼の瞳に映る全てが鈍重に見えていた。遅く、鈍い世界。そんな世界で無情に駆け抜ける彼が次に穿つのは、アウトローの少年悪漢王。
得意の早撃ちで牽制するも、クー・フーリンには当たらない。否、当たった所で通らない弾丸にビリー・ザ・キッドは引き吊った笑みを浮かべることしか出来なかった。
「がっ、ん……だよ、これ。反……則……すぎ……」
貫かれた心臓、溢れ落ちる命の音を聞きながら二騎のサーヴァントは消滅する。圧倒的、なんてものじゃない。本当の意味で〝全盛期に限りなく近い状態〟となったクー・フーリンに、誰もが追い付ける事が出来なかった。
このままでは此方が全滅する。ならば自分が殿を務めようと、半ば自棄になったネロが前に出ようとした時、一人のサーヴァントが走り出す。手にした拳銃を使い、警告なく発砲。一瞥すらせず、片手間で弾く大英雄にナイチンゲールは拳で殴り掛かる。
狂戦士として召喚されたナイチンゲール。その膂力は並の戦士を遥かに超えているが、彼女の拳を頬に直撃しても尚、クー・フーリンは揺らぐことはなかった。
「重症患者を確認。これより治療行為を開始します」
「患者か。確かに、今の俺は重症と呼べるかもな」
「自覚症状があるようで何よ――――っ!?」
「だが、俺を相手にするにはお前では足りん」
冷淡な目でナイチンゲールを見据え、可能な限り加減した蹴りで吹き飛ばす。血を吐き出しながら吹き飛ぶナイチンゲールを抱き止めたのは修司だった。
これ迄の一連の流れを、立香は全く以て反応できなかった。しかし、そんな立ち尽くしている彼女を誰も責めることは出来やしない。
先程までとは異なる次元へ昇華したケルトの大英雄。戸惑ってい

るのは立香達だけじゃない、周囲のケルトの兵も、アルジュナすらも突然の出来事に理解が及んでいないのだ。
「……白河修司。改めてお前に決闘を挑む、場所は白い家。日取りはそちらで勝手に決めろ。次にお前が俺の前に現れた時、それが決戦の合図だ」
「っ、まて！　逃げる気か！」
「追って来るなら構わん。好きにしろ。但しその時は……決死の覚悟で挑んで来い」
修司と睨み合うのも僅か、槍を収め、クー・フーリンは自分達に背を向けて去っていく。ラーマが呼び止めようとするも、返ってきたのは体が重く感じるほどの濃厚な殺意のみ。その殺意に黙らされたラーマを尻目にクー・フーリンはその場から立ち去っていく。
自分達の王が去っていくのに自分達がここにいるわけにはいかない。去り行く王を追ってケルトの兵隊も付いていき、アルジュナも霊体化となって彼の後を追った。
残された修司達。生き残り、サーヴァントの数は未だに此方が上。なのに全く勝った気がせず、寧ろ見逃された気がする。そんな立香達の心境を知らずに、ナイチンゲールを抱えた修司は口を開く。
「……責任、取らなくちゃな」
「…修司さん？」
それは、本来なら止められた筈の事象への悔恨。自分が迷い、躊躇ったゆえに起きた出来事。恨み節も断末魔も上げることなく消えていった二人の英霊へのせめてもの弔い。
「ごめん立香ちゃん。何度も何度も迷惑を掛けて……あのクー・フーリンは、俺が倒すよ」
その為には先ず、戦力を整える必要がある。ケルトの軍勢を相手にしても決して負けることのない勢力を、此方に付ける必要がある。
一行は次なる目的、大統王の下へと向かう。そこで待ち受ける戦い、それはきっとこれ迄よりも激しいものであると、何処かで確信しながら……。
遠く離れた地で、施しの英雄が笑った気がした。

その76　第五特異点

　果てしない荒野の道を一台の馬車が進んでいく。荷馬車に揺られて眠る立香と、そんな彼女を自身の膝を枕にしするマシュ、他にもネロとエリザベートが寄り添う様に仮眠を取り、ナイチンゲールとラーマが何やら話をしている。
　黒ひげ辺りが見たら歓喜しそうな光景を尻目に手綱を引いて馬車を操るロビンに修司が声を駆ける。
「悪いなロビンさん、アンタにばかり先導を任せて」
「なぁに、お気にしなさんな。馬車の扱いは人並みに自信があるんでね。そう言うアンタも少しは休んだ方がいいんじゃないか？」
　修司の言葉に返すようにロビンもまた修司に休むように促してくる。どれ程常人離れな体力をしていても、修司も立香と同様に今を生きる人間であることには変わりない。休める時には休んでおいた方が良いとロビンは言う。
「勿論、俺もそろそろ寝るつもりだ。ただその前に向こうに着いてからの段取りを今の内に確認しておこうって思ってな」
「東西に別れたアメリカとケルト、その片割れであるアメリカを戦力として引き入れる。だったか？　こう言っちゃアレだが、今更連中の戦力とか必要か？　ケルトの戦力はスカサハの姐さんが半分近く間引いちまったし、それを産み出す母体も……」
「……」
　そこから先をロビンは口にする事はなかった。分かっているからだ。これ以上戦いに先が続く事は無い事を、それはつい数刻前に敵の総大将本人が口にしていた。次で最後だと、決着を付ける場所だけを告げて、一方的にあの場での戦闘を終わりにした。
　そして、それがこの特異点に於ける最後の戦いなのだと、修司自身が予期……否、確信を抱いている。
　しかし、何事にも予期せぬ出来事は起こるモノ、今回アメリカ軍の本拠地に向かうのはその予期せぬ出来事に対する処置、それを進言し

たのは彼等の頭脳であり指揮官でもあるロマニ＝アーキマンだった。
『修司君、これから君に待っているのはオケアノスで体験したヘラクレスと同格とされる英雄だ。死闘は免れず、また君の負担も計り知れない。サーヴァントの枠組みから逸脱した彼を倒すには並々ならぬ苦難となるだろう』
「――――あぁ」
『僕がアメリカ軍を必要としたのは、軍の主導者であるエジソンを抑える為と、何より……魔術王ソロモンの介入に対抗する為でもあるんだ』
魔術王ソロモン。人理焼却を企て、実行し、立香と修司の世界を燃やし尽くした元凶。先の特異点にて黒幕の正体が明るみとなった事でカルデアではソロモンの人理修復の旅に於ける介入を懸念していた。恐らくは魔術王もこの状況を見ている筈、負けるわけにはいかない戦いの最中に何らかの魔術的介入が無いとは言い切れない以上、奴に対する対抗策は考えておくべきだろう。
『向こうにはカルナに匹敵するアルジュナがいる。ラーマを魔術王に対する切り札にするなら、出来ればカルナを此方に引き入れたい。ただ、その為には修司君に頼るしかないんだけど……』
「まぁ、何とかするさ」
他にも、ロマニが懸念する事項は存在する。授かりの英雄と称され、実力ではカルナに匹敵するとされるインドの大英雄アルジュナ。彼を抑える為、魔術王に備える為、カルナの力はカルデア一行に対して必要な存在だ。
尤も、彼の大英雄との決戦でアルジュナが横槍を入れてくるとは思えないが……ともあれ、戦力は多いに越したことはない。向こうに着けば、修司との戦いに異様に固執しているカルナとの戦いが待っている。度重なる激戦を強いる事になる修司にロマニは申し訳なく思っているが、対する修司は然程気にせず振る舞っている。
そんな時、スカサハが修司の隣にまで近付き腰を下ろしてくる。一瞬試合を申し込まれるのか危惧する修司だが、流石に其処までの図々しさはなく、これまで戦闘狂だった影の女王はいつもよりややしおら

しかった。
「……済まんな、修司。お主に余計な手間を掛けることになった」
「……急にどしたの？」
「ふっ、そう警戒するな。流石にこの状況でお主に勝負を挑むことはせんよ。尤も、カルデアに戻ればその限りではないがな」
「平常運転でなによりですわ」
「茶化すな。話を戻すぞ？　本来、あの馬鹿弟子は私が殺すべきだった。メイヴ何ぞに絆され、その在り方を歪められたのを哀れに思い、殺すべきだった」
「……」
「だが、出来なかった。弟子であるアイツに絆された訳ではない。如何に特殊な方法でカルデアに召喚されても所詮私も一介のサーヴァント、平均化された強さでは聖杯で強化された奴には届かなかった。お陰で私は要らぬ傷を負い、こうしてナイチンゲールの世話になることになった」
「そうか」
「その上で言わせてもらう。修司、今の馬鹿弟子は強いぞ？　恐らく奴は奴の人生の中で最も脂の乗った時期、嘗て私を殺せるやもと思わせた全盛期。それに……限りなく近い状態になっている」
「……確か、クー・フーリンって、けっこう滅茶苦茶な逸話が残ってたよな。剣の一振りで9人切り殺したとか」
『他にも寝起きの際は起こしに来た人の頭蓋骨を陥没させたって話もあったね。うん』
「白河修司、現代の英雄よ。お前に待つのは嘗ての伝説、その体現者じゃ。甦った伝説を相手に本気で勝てるつもりか？」
「勝つさ」
　鋭い目で問い詰めてくるスカサハに修司は真っ直ぐに返した。勝つと即答する修司の瞳には並々ならぬ決意が色濃く出ていて、それは来るべき決戦への意気込みが滲み出ている。
　その言葉と目に安心したスカサハはふっと笑みを溢した。やはり自分の見込みに間違いはなかった。そう頷けるだけの確信を得たス

カサハはナイチンゲールに声を掛け、彼女から水の入ったコップを貰い、修司に手渡してくる。
「これは？」
「ただの水だ。但し、私のルーンが刻まれている。効果は疲労回復、眠くなるが向こうに着く頃には全快しているだろう」
「もしかして……立香ちゃんにも？」
「いや、アレは素だ」
スカサハに僅かばかりの気遣いを受け取った修司は、立香にも同じことをしたのかと訊ねるが、帰ってきたのは否定の言葉、呆れ混じりに寝ている彼女に視線を向けると、マシュに膝枕をされながら呑気に寝言を口にしている。
こんな事態に関わらず呑気に寝ていられる立香にスカサハは呆れながらも微笑んでいる。凡人でありながら精神面では中々に強かな彼女に勇気付けられた修司はスカサハのルーンが刻まれた飲み水を口にすると、落ちるように微睡みの中へと溶けていった。
「修司、貴方の行動に間違いはあっても咎はありません。どうか、あまり自分を責めないで」
修司が完全に眠りに落ちる瞬間、柔らかい看護師の笑みを見た気がして……その日、修司は夢を見た。
此処ではない遠い何処か、炎の大地に囲まれながら、また出会い、戦おうと約束をした――――嘗ての誓いを夢見た気がした。

◇

「ほう、あの時私に啖呵を切った若造が戻ってくるとは、今更ながらに

私の偉大さを理解したという事かね？」
　エジソン率いるアメリカ軍の本拠地、乗り込んでそうそう待っていたのは清々しい程のドヤ顔を晒すライオン頭の大統王だった。どうやら修司達が逃げ出してからメンタルの方はエレナの助力もあって無事持ち直し、現在は戦線もアメリカ軍が押し上げ始めているのも合わさってその態度はより増長していた。
「あの、やっぱり私達に協力するのは出来ないかな！　向こうは大分戦力は削れているけど、魔術王からの横槍に備えて出来る限りの事はしたいんだけど……」
「それは、そっちの都合じゃなくて？　確かに貴方達はアルカトラズに囚われていた同胞達を解放したり、ケルトの戦力を削ったりと大活躍してくれていたみたいだけど、此方からの誘いを断ったのはそっちではなくて？」
「それでも此方の頑張りのお陰でそちらは楽できているんだから、少し位聞く耳あってもいいんじゃないかと思うがね」
「うむ、そこの緑のアーチャーではないが、此方の奮闘でそちらが楽を出来ているのなら、その者に多少の褒美を取らせるのが良き王の器と言うものだぞ？　余ならそうする」
「ていうか、アンタ達言うほど活躍して無いじゃない。戦線を押し上げる切っ掛けを作ったのは此方の訳だし」
「そもそもな話、無尽蔵の兵力を持つケルトを相手に有限の資源で挑もうとしている時点で貴方の敗北は確定していたのでは？」
「ＧＡＦＵッ!?」
　各サーヴァント達からの正論の応酬にライオン頭の大統王は膝から崩れ落ちる。特にナイチンゲールの突っ込みはエジソン自身も薄々自覚していただけにダメージは大きい。そんな大統王に駆け寄り、大丈夫だと精神の安定をもたらそうとしているエレナの行いは、献身と言うより処方に近かった。
「ちょっと、私の友達を精神面で滅多打ちにするのは止めてくれる!?
　唯でさえそっちの彼から受けた傷が治っていないんだから！」
「あ？　俺？」

「自覚なしかい」
ウガーッと吼えながら修司を糾弾するエレナだが、そもそも修司の目にはエジソンを映してはいなかった。大統王の相手をするのは立香達だと事前に打ち合わせをしていた為、彼の関心はエジソンの隣で静かに佇んでいる一人の英雄に向けられていた。
手痛い現実に打ちのめされているエジソンを横を通り、修司は白髪の青年の前へと歩みを進める。
「……なぁ、一つ聞いてもいいか？」
「――なんだ？」
「俺は、本当にアンタと戦う約束をしていたのか？」
最初にこの特異点で出会った時、この英雄は修司との再会を喜んでいた。約束の時だと、あの時果たせなかった約束を今こそ果たす時だと、目の前の大英雄は嬉々としてそう口にしていた。
正直、今でも修司は目の前の男とその様な約束を交わした記憶はない。だが、その約束を違えてはいけない気がした。自分は、この大英雄と決着を付けるべきだ。ケルトの大英雄であるクー・フーリンの前に、インドの大英雄……カルナとの尋常なる決着を。
「あぁ、何度でも言おう。白河修司、俺はお前と戦う約束を交わした。お前は覚えていないかも知れないが、俺は覚えている。一方的に聞こえるかもしれないが、俺はお前と――心行くまで戦いたい」
シャランと鈴のような音を鳴らし、カルナは手にした錫杖を修司へと突き付ける。鋭い目だ。何もかもを見透しそうな眼をしておきながら、その奥には太陽のごとき炎が渦巻いている。厄介な奴に目を付けられたものだと、それでも自分で蒔いた事だと受け入れながら、修司は分かったと頷いた。
「あぁ、分かったよ。アンタとの約束、果たさせてもらうよ。約束……だもんな」
「感謝する」
こうして、クー・フーリンとの決戦の前の前哨戦が幕を開ける。北米神話大戦。後に第五の特異点での呼び名、そうなる前の――前日譚である。

その77　第五特異点

「――――正直言って、俺はアンタと戦った約束を交わした覚えはない。いや、思い出せていない」

遥か続く荒野、エジソンが率いるアメリカ軍の本拠地とは少し離れた無人の大地。見渡す限りが岩石と大地に覆われた赤茶けた世界、その一色に包まれた世界で二人の男は肩を並べて歩いていく。

白河修司と施しの英雄カルナ、エジソンとのやり取りを立香達に任せ、修司はこの特異点で矢鱈と自分に拘るもう一人の大英雄との決着に挑もうとしていた。これは、戦いの前の最後の会話。約束と言っておきながら、スッポリと忘れてしまっている修司のカルナに対する懺悔の言葉だった。

「俺がアンタに挑むのは……義務だ。クー・フーリンに挑む前に後顧の憂いを断とうという、打算に満ちた義務感だ」

ケルトの大英雄であるクー・フーリンとの決戦に備える為、ケルトに与するアルジュナに対抗する為、今も何処かで横槍を画策している魔術王に警戒する為、二転三転とまるで言い訳のように増えていく理由に修司の胸中は申し訳なさで一杯だった。

目の前の大英雄であるカルナは高潔な戦士だ。その逸話、伝承、伝説から不遇な戦士だと言われ続けてきたが、そんな彼の在り方は何処までも高潔だった。

如何なる相手でも決して逃げず、自身の不利になる条件でも己を曲げず、受け入れて来た戦士。修司は自身を高尚な戦士だと思ってはいないが、それでもそんな真摯に約束を守ってきた戦士に対して罪悪感を抱かないほど人でなしではない。

済まない、と。約束を交わしたにも関わらず忘れてしまった自分に対しての不義理、その上でついでのように戦うことになってしまった状況に、修司はせめてもの誠意として頭を下げようとして……。

「くだらんな」

「――――え？」

目の前の大英雄は、そんな修司の誠意を一刀両断に切り捨てた。
「下らんと、そう言った。白河修司、お前のその呵責、葛藤はお前の人格を正しく表し、また己の義心によるものなのだろう。だが、今この場に限り、それは全くの不要だ」
ギロリと、鋭い眼光で見詰めてくる施しの英雄。一見にすれば薄情とも取れるカルナの言葉だが、その裏に隠された熱意は太陽よりも熱かった。
約束を覚えていない。確かにその事実はカルナに少なからずショックを与えた。幾星霜の可能性の果てに再び出会えた宿敵、そんな相手が本気で覚えていない事実に施しの英雄は生前も体験しなかった絶望を経験した。
だが、そんなカルナの絶望も修司の肉体を目の当たりにして覆った。鍛え抜かれた肉体、気力は共に以前の彼を遥かに凌駕し、今も尚成長――否、進化を続けている。自分と戦う為ではない、全ては己の身に降り掛かる理不尽や不条理を跳ね退ける為。間違っても自分との決着に備えたモノではないと、カルナは思い上がる事はない。
それで充分だった。自分との約束を忘れても、自己を高め続けた修司。そんな彼が今こうして自分との決着を付けるべく相対している。カルナにとって、その事実だけで充分だった。
理由がある？　それの何がいけない。人は戦いに意味と意義を見出だすモノ、理由を持たずに命を奪い合う行為は獣の共食いと何ら変わりない。故に、カルナは修司が謝る意味が分からなかった。
ただ、修司がそれを申し訳なく思うのなら、それを軽くしよう。約束を忘れ、それでも尚果たそうとする宿敵に対して、カルナもまた誠意で応えた。
そして、そんなカルナの気持ちは届いたのか、修司は一瞬だけ眼を丸くさせ、プッと吹き出したように笑みを溢した。
「く、ククッ……なぁ、アンタさ、意外と優しいとか言われた事ないか？」
「？　いや、記憶にないが……」
「じゃあ、一言余計だとか、逆に一言足りないとか、言われたりは？」

「それは……ある、かもしれないな」
一瞬、ぽっちゃり体系の女性が何か言っている光景を幻視した。姉の様な、要介護者を前にした様な、放っておけない何かが脳裏を横切ったが……不思議と、それは不快なものではないと思った。
気が付けば、カルナもまた笑っていた。大英雄の顔とはまた別の……年相応の青年らしい笑み、そんな顔も出来るのかと、修司もまた笑みを溢した。
そして……。
「さて、雑談も此れぐらいにして……始めるか」
「あぁ、彼方も、そろそろ始める頃合いだろう」
耳を澄ませば、遠くで戦いの音が聞こえてくる。恐らくはエジソンとエレナ、立香達が戦っているのだろう。これに勝利すれば、ケルトとの決戦が待っている。だが、敗北すれば自分達はアメリカ軍に組み込まれ、更なる混沌の呼び水になってしまうだろう。
しかし、不思議とそうなるとは思わない。何より、今のこの場においてそんな考えは無駄でしかないからだ。
「では――――」
「尋常に――――」
「「勝負!」」
駆るは同時、インドの大英雄カルナとの戦いは熱と炎に満たされた激突から始まった。

◇

――――それは、正しく神話の再現。地獄の具現だった。槍の一振

りで大地が砕かれ、その腕の一振りで大気が抉られる。拳と槍、炎と蹴り、繰り出される攻防は神話に語られる聖戦そのものだった。
カルナは静かに嗤う。大英雄と呼ばれる自身をして、常識外れな膂力の修司に、嬉しくて楽しくて仕方がなかった。全てを焼き尽くすアグニの炎を拳一つで吹き飛ばし、力で勝ってくる修司になんの冗談だと、カルナは笑わずにはいられなかった。
対して修司も嗤う。戦いは手段であって目的ではないのに、まるで昔ながらの旧友と遊んでいるかの様な感覚。カルナの槍の一振りは寒気がするほど鋭く、洗練されていて自分の皮膚を容赦なく切り裂いていく。けれど、痛み以上の高揚が二人の間に確かに存在していた。
「はぁっ！」
瞬間、修司の頭上から無数の炎の槍が降り注いでくる。それはフィンとディルムッドに会敵した時に見たモノ、当たれば火傷では済まない灼熱の槍を、修司は白い炎を強く滾らせ、拳一つで捌いていく。
瞬間、大規模な爆発が修司を呑み込んだ。大陸に生えるキノコ雲、モニターの向こうでロマニとダ・ヴィンチが噴き出す一方で、修司はカルナを探す。
カルナは何処だ。気による感知を周囲に巡らせ、視覚と一緒になって奴の姿を追い……背後ッ！
「武具など無粋。真の英雄は――――眼で殺す……！」
「うぉぉぉっ!?」
眼からビーム。比喩ではなく、ガチで眼光から熱線を飛ばしてくる大英雄に修司は戸惑いながら横へ回避した。瞬間、カルナの放つ熱線の射線上にあったものは大地ごと熔解していく。修司の胴着の上着、その右半分が延焼し、アチチと悶えながら修司は己の一張羅を鎮火させる。
なんと言う火力。腕力や膂力なら言うに及ばずだが、火力という一点でなら、あの時のヘラクレスに比肩するかもしれない。後ろに広がる災害を目の当たりにして修司は漸く自覚する。目の前にいる男は紛れもなく神話の戦士なのだと。
しかし、修司も負けてはいられない。追撃を仕掛けてくるカルナに

修司は防御を捨てて前に出る。圧倒的火力を持つカルナに無謀とも言える特攻、放たれる第二のビームを撫でるように回避し、飛翔する様に跳躍すると、その拳を大英雄目掛けて叩き込んでいく。

ブッ、とカルナの鼻から血が吹き出した。顔面に伝わる衝撃、堪らずカルナは瞬きをしてしまう。生物であるなら誰もが行う反射的防衛本能、それを極限に削いだカルナの僅かな隙、しかし修司にはその僅かな一瞬で充分だった。

蹴りがカルナの腹部に直撃する。神々の王を以て砕けないとされてきたカルナの鎧、加えて自身には神性の中でも最高峰のAクラスの加護がスキルとして備わっている。

通常であればダメージなど皆無。なのに、そんな事はお構いなしに衝撃と痛みがカルナを襲う。吹き飛び、幾つもの岩壁を貫かれ、瓦礫の下敷きになったカルナは、務めて平静を装いながら自身の受けた痛みの理由を分析する。

いや、理由なら分かっていた。恐らくは修司の纏うあの炎。己の魂を鎧、或いは武具として昇華させ、神性をも貫く武器にしているのだろう。

なんという出鱈目だ。己の魂を武器として扱う胆力、そしてそれを為している総量。とても人間業とは思えない。それとも、彼の内の奥底に眠る破壊神に類似する何かが、理すらねじ曲げているのか。

気になる所は多々あるが……そんなモノは関係ない。仮に何らかの加護が修司にもたらしているのだとしても、彼自身の力であることには変わりない。

（そうだ。それでこそだ！）

白い炎を纏って突っ込んでくる修司にカルナは不敵に笑みを浮かべて跳躍する。手にした槍を掲げ、魔力を込めると、錫杖だった槍の形態が変化する。

顕れる黒い刃。あれが錫杖の本当の姿だと修司が警戒し、立ち止まる。すると周囲の大気が熱を帯び始め、辺りが灼熱と化した。

「梵天（ブラフマーストラ・クンダーラ）よ、我を呪えッ!!」

膨大な熱量が、修司を覆う。伝承では核に匹敵すると謂わしめる投

擲兵器。一介のサーヴァントでは防ぐことも敵わない圧倒的熱量を前に……。
「エクス――カリバーッ!!」
修司は自身の右手に力と光を集め、迫る炎の塊に向けて振り放つ。激突する光の刃と炎の槍、混じり合い溶け合った力の奔流は爆発となって大地を砕いていく。
炎に包まれた大規模なクレーター、深く陥没した大地の中で未だに致命傷を受けていない二人。
未だに決着に至らない戦い。これより更に激しさを増していく激闘を前に……。
「ふ、ふふ……」
「へへ……」
二人の男は楽しそうに笑っていた。
「……カルナっ」
そんな二人を遠巻きで見詰める男が一人、悔しそうに歯を食い縛っていた。

その７８　第五特異点

「私の……敗北か」
「戦闘終了を確認。私達の勝利です、マスター」
　地に膝を着けて自身の敗北を認めるエジソンの言葉で戦いの終わりを確認したマシュは、自身の武装でもある盾を消し、マスターである立香に向き直る。度重なる特異点の旅を経て、サーヴァントとの戦いにも慣れてきた彼女は一端のマスターと皆から認められるようになっていた。
　今回の戦いもエレナとエジソンというサーヴァントを相手に危なげ無く勝利する事ができた。これも偏にマシュと、協力してくれたサーヴァント達のお陰だと、決して自惚れる事なく、その事実を受け止める。
『トーマス＝エジソン。人類史に於いて発明王と称された生産・量産のスペシャリスト、それがまさか歴代の大統領の魂が宿っていたとは、確かに大統王の名に相応しい英霊なのかもしれない』
　エジソンは抑止……ひいてはアメリカの歴史に刻まれた歴代の大統領の呼び掛けによって召喚されたサーヴァントだ。過去、現在、未来に於ける歴代の大統領達、彼等は自分達がサーヴァントとして召喚されてもケルトには敗北するという結論に至り、一人の英雄に集積することを決めた。
　それがトーマス＝アルバ＝エジソン。アメリカだけでなく、世界的に知名度を誇る彼に歴代の大統領達は託した。人理が焼却され、未来を失くした世界の中でせめてアメリカだけでもと、一方的にエジソンに希望を託してしまった。
　初代から最後の代……大統領の座についた者達の思念、或いは怨念染みたモノがエジソンに憑依し、その重圧が彼に暴走の道を選ばせてしまっていた。
　エジソンもまた世界を救うべく立ち上がった英霊、アメリカだけで

なく世界を救いたいと願っていた彼を、アメリカだけでもと願う歴代の大統領の思念が、歪ませてしまっていた。それが分かっていたからこそ、ナイチンゲールはエジソンを病に侵されている病人だと認識し、治療する事となったのだ。

尤も、生産性に拘っていたエジソン自身にも暴走してしまった原因であるのは確かなのだが。

そんな彼を戒めるように、ナイチンゲールから痛烈な一言が投げ掛けられる。それはエジソンにとっては何よりも辛い一言、具体的に言えばエジソンの宿敵でもあるニコラ＝テスラと比較しての言葉は彼の心に、ショック療法という名のメスが突き刺さった瞬間でもあった。今頃、カルデアにいる雷電博士はこの上なくニッコニコに微笑んでいる事だろう。

「さて、後はあの山吹色の彼の方だけど……大丈夫かしら？　彼が相手をしているカルナって一応インド神話の大英雄なんだけど……」

「なに、あやつの事なら心配はあるまい。何せ余をゲロインにした大罪人であるからな。余が断罪するまで勝手に死なれては困る……む？　ゲロイン？　余は何を言って……う、頭が」

「げ、ゲロイン？　ネロ、貴女なにを言ってるの？」

何故か得意気になったり頭を抑えて踞るネロを余所に、立香達の懸念は此処にはいない修司へと向けられる。修司の強さは特異点の旅の中でも嫌と言うほど理解しているが、それでも全くの無傷でカルデアに戻ってきた事は一度もない。中でもオケアノスでの戦いは修司が死にかけるほどの激闘となった。

これから先、あの様な激闘が待っている。来るべき決戦を前にしてインドの大英雄と戦う事になった修司に、立香は心配に思うのは無理なかった。

しかし……。

「どぅわぁぁぁぁっ!?　な、何事かねこの衝撃はぁぁぁっ!?」

「た、大変です先輩！　修司さんとカルナさんが向かった方角から大規模の熱量と熱波が押し寄せてきます!!」

先ずは、自分達の身を守れる様になってからにしよう。遠くから押

し寄せてくる熱の津波を前に藤丸立香は白目を剥きながらマシュに宝具の展開を命じるのだった。令呪込みで。
その後、カルナと修司の戦いを目の当たりにしたエジソンが頗る面白い顔を晒しながら絶句する事になるのだが、それは物語には関係のない話。

◇

熱が大地を焼き、炎が天を焦がしていく。一つ一つが命を奪う炎神（アグニ）の如き火の礫を生身の拳が打ち砕いていく。遥か広がる北米大陸を駆け足　、大英雄が槍を振り抜く度に、大地が悲鳴を上げながら砕かれていく。
熱と炎にまみれた大地、カルナの奮った一撃で砕けた大地を、白き炎に身を包んだ修司が走る。陥没し、隆起した大地を足場に跳躍し、修司の蹴りがカルナの顔目掛けて放たれる。
それを、カルナは己の槍を使って当然のように受け流す。重なりあう視線、互いに相手の事しか見ていない両者の顔には、子供のような笑みが張り付いていた。
次に起こる拳と槍の応酬。こんなものか？　いいやまだまだ。そんな会話さえ聞こえてきそうなやり取り、事実、二人の胸中はそんな子供染みた思いで埋め尽くされていた。
特にカルナはその胸中を言葉に出来ない程の歓喜に震えている。那由多の果てにも等しい可能性の果て掴めた再会、嘗て再戦を誓った相手がより強大に成長してくれた事実、自分が全力を出しても尚届かない桁外れの強者。嬉しくない筈などなく、不満など……ある筈もな

かった。
ただ、惜しむらくは目の前の男の本当の全力を引き出せていない事だろう。いや、本気なのは間違いない。目の前の男が尋常な戦いで手を抜く輩でないことはカルナ自身がよく理解している。
目の前の敵――――修司がそうしないのは偏に反動を恐れているから、勝負を決めるにはまだこの瞬間ではないから。それは修司にとってサーヴァントでいう宝具並みに戦いの明暗を決める奥義だからだ。
(ならば、その奥義……引きずり出してやろう!)
「考え事をしている場合かよ!」
瞬間、カルナの手にしていた錫杖が蹴り上げられる。戦いに於いて思考を巡らせての隙、ここで晒すのは愚の骨頂と修司がカルナの胴に拳を叩き込もうとして……瞬間、視界がブレた。頭部を始めとした肩、腕、胸元、胴、太股へこれ迄受けたことのない衝撃と痛みが修司を襲う。
「確かに俺はランサーのクラスで召喚されたサーヴァントだ。槍術こそが今の俺の本懐……しかし」
「徒手空拳が苦手だと、言った覚えはないぞ」
見れば、悪戯の成功した悪ガキの様な笑みを浮かべたカルナが、拳を突き出していた。彼はインド神話に於いても最上級の武芸を誇る戦士、剣や槍だけでなく、無手の戦いすらも達人級なのは当然の話だ。
カルナの手に槍が戻る。殴り飛ばされ、体勢を崩した所への一刺し、防ぐのは困難と判断した修司は体を捻って直撃を避ける。抉られる脇腹、痛みに眉を寄せながらも、瞬時に戦闘に影響はないと判断し修司は避けた勢いを脚に乗せ、カウンター気味にカルナの腹部に叩き込む。
血を吐き出し、吹き飛んでいくカルナ。痛みと衝撃に意識が所々で途切れるが、それでも彼の高揚感が消えることはなかった。
「あぁ、素晴らしい、素晴らしいぞ。修司、我が敵よ、お前の研鑽は瞠目に値し、お前の強さには敬意を評したい」
鍛え抜かれた肉体、虐め抜かれた四肢。安泰と安寧がもたらされている現代に於いて、修司の行いは当時のカルナには無駄に思えた。

何故そこまで己を鍛える。どうしてそこまで強さを求める。嘗ての大戦を経て、比較的平和な国で生きられた筈なのに、どうして其処までして自己を高められるのか。

降りかかる理不尽、不条理が許せないからと、修司は言った。まるで子供の様な願いだ。世界には不条理で溢れ、それ以上に理不尽にまみれている。それは古の時代から存在して、理不尽や不条理に振り回された人間は現代、神代問わず存在している。

何より、不条理や理不尽を覆すというのなら、それは己自身が誰かの理不尽、或いは不条理になるという事。矛盾している、嘗てカルナは修司の想いをそう断定した。

しかし。

『それでもだ。それでも俺は振り掛かる一方的な理不尽を許しはしない』

『自身の願いが矛盾しているモノだと、それでも尚、お前はその道を進むというのか？』

『あぁ。それに……嫌だろ？　自分の大切な人やモノが、良く分からない奴に一方的に壊されるなんてさ』

『だが、それはお前自身が他者に対する理不尽になるという事、お前が理不尽を許さないと力を奮うことで、お前という理不尽に涙を流す者も現れるだろう』

『そん時は、皆で考えればいいさ。ぶつかり合う前に言葉を交わせば、それだけで見えてくるものだってきっとある』

『……その皆で解決出来なかったら？』

『解決するさ。だって俺達は人間だ。考え続ける限り、諦めない限り道は続く。ありきたりだけど、俺達人間はそういうモンだと、俺は思っているよ』

笑いながら、彼はそう口にした。身勝手で、浅慮で、ありきたりな言葉を口にし、それを信じると豪語するありきたりな人間。真っ直ぐで、逞しく、今を生きる人間。

強いわけだ。眩しいわけだ。そんな人間に自分が出来るのは、何処

までも正直に、愚直なまでにぶつかり合う事だけ。
故に、カルナは決めた。
「っ！」
気配が強くなった。膨れ上がるカルナの闘気に気付いた修司は、立ち上がるカルナを前に身構える。
「素晴らしき我が敵よ。お前の力、お前の業、お前の強さ、感嘆する。これら全てにはお前自身の信念がこれでもかと伝わってきた。そんなお前に対し、今のままでは不足だと俺は認識している」
「……」
「――故に、お前を討ち倒す為、お前に勝つため、俺には絶対破壊の一撃が必要だ」
カルナが手を天に掲げた時、彼の身に纏う鎧が消えた。否、融合されていく。他でもないカルナが奮う槍そのものに……。
瞬間、カルナの内から炎が溢れ出す。それはありとあらゆるモノを溶かし、溶解させ、蒸発させていく。
宝具の顕現。ただその余波だけで北米の大地が溶解し、波打つマグマとなっていく。その圧倒的な熱量に修司は眼を見開いた。
更に熱量は跳ね上がり、周囲の地形を変えていく。天も地も弾け飛び、残っているのは修司とカルナの二人のみ。
気付けば、カルナの背には日輪が輝き、目映い太陽が修司を見下ろしていた。
「我が素晴らしき敵よ、どうか今一度お前の名前を聞かせて欲しい」
「……修司、白河修司だ！」
「修司よ、再び出会えた我が仇敵よ。最大にして最強の好敵手よ。お前という男に対し、最上の敬意を以てこの一撃を捧げよう！」
これが、カルナの最後の一撃。逃げる訳にはいかない。避けるわけにはいかない！　負けたくない。自分との約束を信じて疑わなかった男の一撃を前に、修司もまた全力で迎え撃つ事を決めた。
「――界王拳」
静かに告げる言の葉。修司が身に纏う白い炎から、朱色の炎へと変わるのを見て、カルナは何度目か分からない笑みを浮かべる。

そして――。
「――神々の王の慈悲を知れッ」
「――かぁ」
カルナの背に片翼の翼が広がっていく。言葉を紡ぐ度に力は溢れ、修司もまた両手を腰へ持っていく。
「インドラよ、刮目しろ」
「――めぇ」
それは、カルナの持つ鎧を代償にインドラより授けられた必滅の一撃。それはあまねく事象を滅ぼし、神すらも殺す必殺の一刺。
対するは、物語の主人公が放つ誰もが一度は真似をした幻想の一撃。それは多くの巨悪を打ち倒し、多くの少年達が夢見た夢想の必殺。
「絶滅とは是、この一刺」
「――はぁ……めぇ……」
最早、言葉は不要。極限に高め合った力と力、臨界を超え、光と光が北米大陸を覆い……。
「灼き尽くせ、日輪(ヴァサヴィ・シャクティ)よ、死に随え!!」
「波ァァァァァァッ!!」
必滅の神槍と、夢想の必殺が激突する。
天地が砕かれ、大陸が悲鳴を上げる。ぶつかり合う力と力、均衡する両者の力は周囲の世界を破壊しながら、尚続く。
神々の王の一撃を以てしても、それでも尚、修司は倒れない。覆い、潰しに掛かる熱量を前に、身に纏う炎は全く萎える事はなく、彼の目には光の中で此方を睨むカルナだけを映していた。
カルナもまた、修司を見やる。これが現代に於いて最強の人間なのだと、自身が消滅して座に還っても、記録としてではなく記憶として憶えていられるように、その姿を魂に刻んでいく。
「これで……最後だッ!!」
瞬間、カルナは吼える。ケルト(後)との決戦(の事)も、人理焼却(先の事)も、何もかもを忘却の彼方へと追いやり、施しの英雄カルナはこの刹那に自身の全てを捧げた。

負けたくない。負けはしない。何処までも続く意地の張り合い。しかし、全力を出し合う中、修司の心境はカルナとは少々異なっていた。

必ず勝つ。ケルトの決戦と、そこで待つクー・フーリンに勝ち、人理焼却も覆す。後も先もかなぐり捨てたカルナに対し、修司は後も先も拾い集めるつもりでいた。

きっと、二人にあった違いはそこだけ。後も先も考えずに振り絞ったカルナ、後も先も打ち勝つ事を決めていた修司、意地の張り合いはいつでも欲張りの者が勝つのが必定で。

「１０倍だァァァァッ！」

「っ!?」

欲望が薄く、聖人の様な武人のカルナが打ち負けるのは……きっと、避けようのない事だったのだ。

（あぁ、そうか。俺は……もっと欲張りになれば良かったのか）

太陽の光が、幻想の光に打ち負ける。掻き消され、霧散していく自身の宝具。迫り来る蒼き閃光を前に、施しの英雄カルナは……やっぱり、笑いながら受け入れるのだった。

◇

（――――俺は、負けたのか）

自覚し、思い返すのは全力を出し切って戦った男との一戦。全てを出し切り、死力を尽くしたカルナは、その充足感に満たされていた。

いや、本音を言えばまだ戦いたい気持ちはあった。もっと強者と戦

いたい、あの時の様な高揚感をもう一度体験したい。まるで未熟な修行時代の自分を思い出したような心地、こんな気持ちで退場するとは……夢にも思わなかった。

もし、再び修司と出会う事があれば、今度は礼を言うのを忘れずにしよう。何もかもが満たされ、心地よく〝次〟を願うカルナ。

しかし、そんな彼の思惑とは裏腹に自身の意識はドンドンと浮上し……。

「ヨッ」

目を覚ませば、岩に腰掛けて片手を上げ、カルナを見下ろす修司がいた。

その79　第五特異点

「俺は……生きているのか」
　天変地異の様な激闘も終わり、焼け焦げた大地に仰向けになって倒れ伏しているカルナは、染み渡る青空を見上げながら呟いた。
　尋常な勝負。記憶の片隅に残った約束を果たすべく修司と戦ったカルナは、今の自分に出来る最大限の全力を以て彼と戦った。心地よい高揚感に包まれ、最後は互いの必殺を繰り出しての決着。力のぶつけ合いに敗北したカルナは、そのまま特異点から消滅する筈だった。
　眼前に迫る蒼白い極光。カルナが覚えているのは自身の放つ宝具が破られ、修司の放つ光に呑まれる所までだ。あの光に呑まれて生きていられる筈がない、けれど現に……自分はこうして生きている。
　修司が手を抜いた？　否、彼がそんな事をする様な男でない事は分かっている。ぶつかり合う時も、最後の決着を付ける時も彼は本気であり、真摯に自分と向き合っていた。
　ならば何故自分は生きているのか。空に流れる雲を見つめながら答の出ない問いにカルナが堂々巡りをしていると。
「運が良かったな」
「運……だと？」
「いや、それしか考えられないだろ。俺もアンタをブチのめすつもりで戦ったし、最後の競り合いだって奥の手（界王拳）を使うことになった。アレを受けて生きていられるって事は、それはもうアンタの運が良かったって事だろ？」
　其処らにある岩に腰掛け、カルナと同じ様に空を見上げるのは、己を降した男、白河修司だった。山吹色が特徴的だった胴着は上半身の部分が消し飛び、その全身の至る所には火傷の痕が残っていた。
「俺も、アンタも、本気で戦って全力でぶつかった。なら、それでいいんじゃねぇか？　別に俺達は互いを憎いと思った訳じゃないからな」
　正直、その話を鵜呑みにするには先の戦いは苛烈に過ぎた。少なく

ともカルナは死力を尽くして戦い、修司に挑んだ。そこに運などという不確定要素が割って入る余地などなく、最後に修司の放った閃光はそれこそ運そのものを破壊する勢いがあった。
事実、修司はカルナにかめはめ波が当たる直前に気の出力を抑え、彼に与えるダメージを最小限に抑えた。その受けたダメージもカルナが気を失っている間に修司が気を分け与える事で回復し、カルナはダメージによる消滅を免れる事ができた。
見るものが見れば、修司の行いは尋常なる戦いを汚したと糾弾するだろう。負けた相手に情けを懸けるのは武人のする事ではないと、潔くトドメを差せと宣うだろう。
尤も、修司は自身を武人等と自覚した事はないし、その気はない。あくまで修司が戦ったのはカルナの語る約束に応えるためと、エジソンが率いるアメリカ軍を仲間に引き入れる為と、向こうにいるインドの大英雄であるアルジュナに対抗する為である。
そんな打算があるが故に修司はカルナを殺す事はせず、彼に対する致命傷を避ける為に考慮しながら戦い続けた。
そして、カルナの持つ貧者の見識もまた修司の意図を看破していた。自分に情けを掛けた事、自身の体力を削りながらも己を癒し、生き長らえさせた事への打算。それらを隠し、カルナの名誉の為に運が良かったで片付ける修司の気遣い。
それら全てを看破した上でカルナは……フッと笑みを溢した。
「あぁ、そうだな。俺は運が良かった。そう言うことにしておこう」
そんな修司の言い分を笑って受け入れる事にした。今の戦いで、自分は最大限の全力を出し切った。そこに嘘偽りはなく、修司もまた真剣になってカルナと戦った。その事実だけで充分だった。脳裏に刻まれた戦いの記憶、生前叶えられなかった己の全てを出し切っての戦闘、カルナに微塵の悔いはなく、彼の胸中にあるのは修司と同様に妙に晴れ晴れとした気持ちだけだった。
「んじゃ、今回はおれの勝ちって事で。アンタがカルデアに召喚され、また俺と勝負したいっていうなら、そん時はまた……相手してやるよ」

「そうか。ならば、その時を楽しみにさせてもらうとしよう」
　差し出された手を掴み、カルナは立ち上がる。互いに酷い格好だと、笑いながらエジソンや立香達にどういった言い訳をしようかと考えていた時――――ソイツは現れた。
「……どういうつもりだ。カルナァッ！」
「っ!?」
「ん？」
　横から突然怒号が聞こえ、明らかに怒気の色が濃く出ている声の方へ二人が振り向くと、白い服が特徴的なアジア系の男性が、物凄い剣幕でにじりよってきた。
「なんだアイツ、松○し○るの親戚か？」
「アルジュナ……」
　アルジュナ。カルナからそう呼ばれた男はその端整な顔立ちを憤怒を以て歪ませている。美人が激怒すれば震え上がる程に怖いと聞くが、それは性別問わないらしい。
「貴様、何故宝具を使った!!　それはインドラより賜りし決戦兵器！　生涯に一度しか使えぬその一振りを、よりにもよって……その様な男に!!」
　ワナワナと震える指を突き付け、どうしてと喚くアルジュナ。生涯で一度しか使えない宝具を使用したカルナからは、既に身に纏っていた黄金の鎧は消失しているし、あの錫杖の槍も影も形もなく消滅してしまっている。
「それは違うぞアルジュナよ。俺はこの様な男にではなく、相対した相手が白河修司だからこそ宝具を使用した。そこに一切の呵責はなく、またお前が口を挟む余地はない」
「〜〜〜っ!?!?」
　互いに合意の上で全力を出したのだから、余計な口出しはするな。そう宣うカルナにアルジュナは先程以上に激昂を露にしている。
　……直接戦った事で何となく解った事だが、このカルナと呼ばれるインド神話の英雄は他人とコミュニケーションを築く際に、言葉が一つ以上足りない節がある気がする。今だって本来ならもっとオブ

ラートに言い回せる筈なのに、ワザワザ相手を怒らせる様な直接的な物言いとなってしまっている。
　それが、アルジュナの視線が修司にではなくカルナ自身に向ける為のモノだとしても、次の瞬間に己の眉間がアルジュナに射られたとしても、全てを承知した上でそんな風に語るカルナが修司には一周回って器用に見えた。
「あー、アルジュナさんだったか？　俺、インド神話とか叙事詩とかそんな知らないから何とも言えないけど、その様子だとカルナとは因縁浅からぬ仲みたいだな」
「……」
　相手を刺激させないように丁寧に言葉を選んだつもりなのに、返ってきたのは凄まじい憤怒の眼光。その目から滲み出る嫉妬の激情を叩き付けられながらも、修司は内心ビビり散らかし、必死に表情に出さないようにしていた。
「アンタとカルナがどういう間柄なのかは知らないが、現に俺はコイツと本気で戦い、コイツに勝った。それは覆らない現実であり、事実だ」
「っ!!」
「アンタからすれば、俺こそがカルナとの勝負に余計な手出しをした憎い相手、腹が立つのは無理もないかもしれない。だから――――」
「カルナへの文句は、俺に言え」
「修司……」
「……貴様、自分が何を言っているのか分かっているのか？」
　カルナと戦ったのは自分で、カルナに宝具を使わせたのも自分だ。万全なるカルナとの決着を望めなくなり、苛立つアルジュナの怒りを鎮めるには方法は一つしかない。
　今ここでアルジュナと戦い、勝つ。そう豪語する修司にアルジュナは息を呑み、カルナは目を見開いていた。そこにカルナを降した事への驕りや慢心はなく、ただ一つの事実として修司はアルジュナとの戦う道を選んだ。
「……正気か。貴様はこの後、あの凶王と戦うのだろう。カルナと

戦い、その上で私と戦い、更にはあのクー・フーリンとも」
「あぁ、そのつもりだ」
　カルナと戦い、少なくない疲弊を被ったのにそれでもアルジュナとも戦うつもりでいる修司に授かりの英雄の怒りは……遂に、頂点を越えた。
「私(俺)をコケにするのもいい加減にしろォッ!!」
　カルナと双璧を為す授かりの英雄、神々の手によって祝福され、神々の手によってその生涯を振り回されてきた男。そんな男の沸点がたった一人の人間の物言いによって限界を迎え、怒号となって炸裂する。
「私を……俺を、ついでに倒すと宣ったか!?　それは最早、傲慢という言葉ですら収まらない侮蔑と知れ!」
　己を倒し、先にいるクー・フーリンをも倒すと豪語する修司に遂にアルジュナの怒りの限界値が振りきれる。弓矢を構えて狙いを定める大英雄を前に白河修司は笑みを浮かべた。
「傲慢?　バカ言え、こんなもの傲慢の内に入るかよ。戦う相手が決まっている以上何処までも真剣になるのがウチの家訓だ。傲慢不遜は我が王だけのモノ、たかが一臣下が図に乗るには百年早い」
　アルジュナは修司を傲慢と言うが、修司自身はそうは思わない。自身が口にしているのは何処までいっても己の我が儘、本物の傲慢というモノは修司という男を軽く凌駕している。
　英雄王ギルガメッシュ。この世全てを背負うと語る彼こそが、傲慢と呼ばれるに相応しい傑物であると、修司は確信している。
「何を、訳の分からない事を……!」
「そこまでにしてもらおうアルジュナ。この場は引け、修司も、無駄に相手を煽る口振りは控えた方がいい」
　今にも矢を放とうとしていたアルジュナに、カルナが待てと呼び掛ける。
「アルジュナ、お前の怒りも尤もだ。俺がこの地に喚ばれて応えた様に、お前もこの大地に召喚された。お互い相容れぬ間柄であるが故に、お前はケルトへ着き、俺はエジソンの所へ加わった」

「あぁ、あぁそうだ！　私は、お前と戦えると、生前果たせなかった決着が付けられるからと、そう思い人理と敵対する道を選んだ。そうする事で漸く、あの時の……なのに……っ！」
カルナの言葉にアルジュナは嘗ての光景を思い出す。神々の寵愛を受け、授かりの英雄と称されるほどとなった大英雄。そんな彼の心に最も黒い影を落とすことになったのは……ある大戦。インド神話を巻き込んだ大きな戦い、そこで仕留めた父親違いの兄だった男の亡骸。
万全な状態なら、自分すらも凌駕していた男の、呆気ない終わり。全ての苦難を受け入れて戦った男と、全てに祝福された男。後悔と苦悩に苛まされるのは……後者だった。
それは瞼を閉じても消えず、座に還っても決して覆ることのない疵。消しても消えない過去が、アルジュナを縛って離さない。故に、カルナもまた腹を括った。
「ならば、戦うとしよう。アルジュナ、生前から続くお前との因縁。この大地で決着を付けるとしよう」
「っ!?」
その言葉にアルジュナは言葉を失った。カルナは修司との戦いで持ちうる全ての力を殆んど使い果たしている。あの目映い鎧も、槍も、何もかもが失っていて、その姿は随分とみすぼらしく、まるであの日の焼き増しを見せ付けられている様だった。
そんな満足に戦えもしない体で、どうして自分と戦う気でいるのか。そこまでして自分を侮辱したいのか、アルジュナが怒りで感情を振り切ろうとした時……カルナと目が合った。
強い眼だ。英雄としての矜持と強さを兼ね備え、ボロボロになりながらも戦う意思を抱き続ける男。まるで、自身の心の内を暴こうとするその眼こそが、アルジュナがカルナと敵対する最大の理由であった。
瞬間、アルジュナの内から何かが溢れ掛ける。黒く、大きいナニカ、それが何なのか修司が見極める前に、黒いナニカは霧となって消えていく。

気付けば、アルジュナから敵意は消えていた。手にしていた弓は消え、踵を返して背中を晒す。その横顔から、彼の表情はもう伺い知れる事はない。
「……いいだろう。その死に体で何ができるのか、見せてみろ」
それだけを言い残し、アルジュナは姿を消した。訪れる静寂、戦いとは別の意味で疲れた事に修司は溜め息を吐きながら空を見上げた。
「ぷはー。いやー、おっかねぇなインドの英雄は」
「済まんな、俺の弟が迷惑を掛けた」
「あぁ、いや、別にアンタが気にする事じゃ……待って、今何て言ったの？」
「？　済まない、と」
「その後おっ！　え？　あのアルジュナって奴とお前って……兄弟だったの？」
「あ、あぁ。そうだが？」
「に、似てねぇ～～……」
アルジュナとカルナ、異父兄弟であり宿敵である両者。兄弟同士で相争う二人を哀れに思う事はなく、ただ似てないと唖然とする修司。
それがなんだか可笑しくて、気付けばカルナは笑っていた。戦いに敗北し、生き長らえてしまった自身を一時は生き恥を晒してしまったと考えたりもしたが、〝次〟があるという感覚に喜んでしまっている自分がいる。
多くの英雄にとって敗北とは死を意味しており、死とは終わりを意味している。なのに、今はこうして笑ってしまえる自分がいることに堪らなく不思議で、楽しかった。
「あぁ、本当に。人間というのは……」
縁、出会い。時代を越えて出会う人々はいつだって自分に思いがけないモノを授けてくれる。人は自身を施しの英雄と呼ぶが、自身こそが施しを受けていたのだと、カルナは改めてそう思えた。
「おっ、あっちも終わったか。あの様子だと無事に終ったみたいだな」
遠くから聞こえてくる立香達の声に振り返り、修司は手を振って自身の無事を伝える。すると気の所為か、彼女の走る勢いは加速してい

く。フォームも洗練され、その姿は何処と無く陸上の某黒人選手を彷彿とさせた。
そんなに急いだら転ぶぞ、と、微笑ましく修司が笑みを浮かべると……。
「こんの、ハチャメチャ大量生産機がぁぁっ!!」
「ぶへらぁっ??!!」
乙女の矜持をかなぐり捨てた藤丸立香の渾身のドロップキックが炸裂した。
こうして、エジソン率いるアメリカ軍との戦いは修司と立香達の勝利として幕を下ろし……。
そして……。
「……あぁ、楽しみだ」
ケルトの大英雄との決戦の……始まりである。

その８０　第五特異点

――カルナと修司、二人の傍迷惑な大激闘から一夜明け、立香達カルデアの一行は遂に第五の特異点に於ける最後の戦いの準備が完了した。エジソン、エレナ、カルナが属するアメリカ軍を仲間に加え、ネロとエリザベート、ラーマにロビン、そしてスカサハとナイチンゲールというサーヴァント達を引き連れ、立香とマシュ、修司はケルトの軍勢に最後の決戦に挑む為、奴等の拠点であるワシントンへ向かう事となった。

　現在、立香達は行軍の最中エジソンが用意した巨大馬車に乗車し、最後のブリーフィングを行っている。用意された馬車にはエジソン特性のスプリングが使用されており、馬車の内部は予想より遥かに快適だった。

『皆、恐らくこれがこの特異点での最後の戦いになる。決戦に挑む前に気になる事があるなら挙手して欲しい』

「えっと、私達はケルトの軍勢を相手にするんだよね？」

「厳密に言えば、魔術王ソロモンの横やりを含めた軍勢、ですが」

「ねぇ、昨日からその魔術王ってのが横やりを入れてくるのを前提に話を進めてくるけど、本当にそんな事が起きるの？」

「何事も最悪を想定し、慎重になるのは悪いことじゃないわよ？まぁ、あんまり考えすぎるのもアレだけど、予めそのつもりで動くのとそうでないとでは、対応の差が大きくなるのは良くあることよ」

『本当なら杞憂であって欲しいし、何事もなければそれでいい。此方は唯でさえ完全復活した大英雄を相手にしなくちゃいけないんだ。最悪の想定なんて、幾らしても足りないくらいだよ』

「まぁ、奴さんの相手は俺達の大将達に任せましょうや。それで、どうなんだい？　お二方の調子は」

「あぁ、あの後飯も随分と食べたし、ナイチンゲールさんからの治療も受けた。エジソンさんから服も貰えたし、体調は万全。いつでも行け

るぜ」
「此方も支障なし。そこの影の女王のお陰で既に万全以上の力を得た。まさか英霊の霊基（クラス）にすら手が届くとは、ルーンの真髄は凄まじいな」
「ハッハ、そうであろうな。我が操るルーンは原始のソレ、加えて当時のお主は宝具を使い果たしていたからな。霊基を書き換えるのにそこまで難しくは無かったよ」
「よもや修行時代の俺に戻してくれるとはな。感謝する影の女王、これでアルジュナと戦える」
　深く被った黒いフードの奥で、不敵に笑みを浮かべるカルナ。アルジュナという宿敵との決戦に武者震いをしている彼に、誰もが最初は戸惑った。こんな奴だっけ？　拳を握り締めてフフフと笑うカルナを一時放置し、改めてロマニは皆に確認する。
　修司との激闘のお陰で疲弊し、却ってやり易かったと語るスカサハ。サーヴァントのクラスを書き換えるキャスター顔負けの手腕に、昨晩のロマニ達が頭を抱えて悶えたのは記憶に新しい。
　スカサハによるルーンの力で新たにクラスを変えたカルナ。そんな彼に対し、充分な食料を食べ、適切な治療を受け、満足のいく睡眠時間を確保したことで、修司の消費していた気力と体力も完全に回復していた。
　そんな満足のいく対応を受けた修司が、唯一不満に思う所があるとするならば……。
「なぁ、本当にこの格好でいかなくちゃダメか？」
　現在の修司の格好は山吹色の胴着ではなく、アメコミのヒーローに変わっていた事。全体的に青のカラーリングで、所々に黄色や赤のラインが刻まれている事や背中に広がる深紅のマントが実にソレっぽく写し出している。
「君の礼装は大分破損していたからね。彼方の方は既にマシュ嬢の盾を経由してカルデアに送っておいた。それに君は我等アメリカの希望、つまりは代表だ。代表にはそれに相応しい衣装というものがあるのだよ」

「このライオン、本当に懲りてんのかよ。なんかピチピチで落ち着かないし……このマントとか、絶対にいらないだろ」
「なに、性能は保証しよう。何よりアメコミヒーローならマントは必須条件！　これで君も立派なマー○ルヒーローだ!!」
「色んな所から怒られそうな発言は控えような」
「本来なら私が手を加えてやりたかったのだがな。生憎とカルナへの対処で忙しかった。カルデアに戻ったら、改めて私からも一つ礼装を送るとしよう。無論、ケルト式のな」
「あっ、結構です」
　これ以上のピチピチはいらないと、スカサハからのプレゼントをやんわりと断る。そんな修司達のやり取りを頼もしく思いながら、ロマニは改めて声をかける。
『それでは、現時刻を以てワシントン攻略作戦を開始する。これがこの特異点の最後の戦いだ。皆、宜しく頼むよ！』
「「「応ッ！」」」
　ロマニからの激励を最後に、カルデアとの通信は一時途切れる。作戦の開始が伝えられると同時に遠くから聞こえてくる地響きの音、ケルトの軍勢だ。津波の様に押し寄せてくる軍勢を前に修司達も一斉に馬車から降りようとする。
　と、そんな時だ。馬車から降りようとする修司にナイチンゲールが肩を掴んで呼び止める。
「ん？　ナイチンゲールさん、どうしたんだ？」
「白河修司。これ迄の旅を経て確信しました。貴方は病人です。それもかなり重症の」
「え？」
「ですが、その病は貴方自身でしか癒せません。悔しいですが、看護師でしかない私には……明確な治療法が提示できない」
　呼び止めておきながらいきなりの病人呼ばわり。生まれて以来怪我はしたことはあっても、病気にだけは気を付けてきた修司にとってナイチンゲールの言葉は衝撃だった。
　一体自分の何処にそんな病が入り込む余地があったのか。カルデ

アでの医療検査では特に問題はなかった筈なのに、ナイチンゲールにしか分からない症状があったりするのだろうか。
「いいえ、貴方の症状は肉体に作用するものではない。貴方の場合は精神、或いは在り方に起因するモノです」
「え、えっと……？」
どうしよう。目の前のバーサーカーの言っている事が流石に分からない自分がいる。これ迄は彼女の医療知識に則って話を合わせてきたが、流石に此処まで抽象的な事はなかった。彼女の言いたいことが分からず、またなんて返したらいいか分からない修司にナイチンゲールはソッと彼の頬を手で触れた。
「全ての理不尽を赦さず、不条理を由としないその在り方は、いつかきっと貴方自身を追い詰める。どうか、その瀬戸際を見誤らないで」
「ナイチンゲールさん……」
ナイチンゲールは気付いていた。理不尽を赦さないと語り、不条理を由としない事を絶対としている修司の在り方は純粋に見えてその実……歪んでいる。
命を救うことに妥協を赦さない自分と、目の前の生きる修司。自分達は良く似ている、その在り方は鋼のように硬く重い。
だからナイチンゲールはせめてもの忠告を残すことにした。目の前の彼がいつか妥協点という救いを見付けられる事を信じて……。
「……大丈夫だよ。俺は、そんなに柔じゃないからさ」
「修司……」
「ありがとうナイチンゲールさん。貴女も、どうかご無事で」
そう言って、修司は跳んで最後の対戦相手が待つ場所へと向かう。ナイチンゲールの言葉、その意味を理解しながら、白河修司は決戦の地へ向かう。
瞬く間に消えていく修司を見送りながら、もう自分に出来ることはないと、ナイチンゲールも戦場に向かう。
「……それではこれより、最後の治療を開始します」
全ての命を殺してでも救う為、押し寄せるケルトの兵隊達を前に、クリミアの天使は修羅と化す。

◇

――――――ワシントンD・C・。暗雲渦巻く空の向こうから、闘争の音が聞こえる。肉が弾けて骨が砕き、生と死が戦場を蹂躙していく音。男……クー・フーリンにとってその音は子守唄にも等しいモノだった。

悲鳴と断末魔に彩られた唄、そんな狂った唄の中に一つ、雑音が入り雑じる。耳障りな音、鬱陶しいとも感じられる雑音は、徐々に大きくなっていく。

「――――失せろ魔術王。貴様の手など必要ない、余計な手出しをすれば、奴の前に貴様を殺すぞ」

一閃。風と音を置き去りにした一振りが耳障りな音を消していく。その一振りで根城にしていたホワイトハウスは砕け散り、次の瞬間には辺りに鋭い音が響いていく。何者かの干渉だったソレは術者の機嫌の様に甲高く鳴り響き、周囲に轟きながら消えていく。

「ハッ、まるで餓鬼だな。こんなのが魔術の王というのは笑わせる。先の特異点で余程奴に痛い目に遭わされたと見える」

下らないと、干渉してきた魔術王に悪態を吐くクー・フーリンだが、すぐにその意識は切り替わる。奴が来た。背後から近付く強い気配に漸くその時が来たと、猛り狂った凶王が嗤う。

「なんだ、取り込み中だったか？」

「いや、たった今口煩いクレーマーを黙らせた所だ。お前が気にする必要はない。そういうテメェこそ、随分と毛色の変わった格好をして

るじゃねぇか」
　振り返り、目を開くと其処には自身が殺したいと求め続けていた仇敵が立っていた。格好こそはいつもの山吹色の胴着でない事に少々驚いたが……どうでもいい、目の前の男が万全の状態でいる事にクー・フーリンは嘗てない昂りを感じていた。
「どうやら、施しの英雄との戦いは調度良いウォーミングアップになったようだな。感じるぜ、今のテメェは以前のテメェとはまるで違う。正真正銘、本気って訳か」
「俺は何時だって本気だ。カルナと戦った時だって全力を出したし、舐めて掛かった覚えはない。……ただ」
「あぁ？」
「今回は……最初からフルパワーでいく。出し惜しみはしねぇ」
　瞬間、修司の内から膨大な気が放出される。大地と大気を震わせ、天変地異を思わせる脈動を前にクー・フーリンは極上の餌を前にした獣の如く、鋭い犬歯を剥き出しにして嗤う。
「行くぞ、１０倍界王拳だッ！」
　そして、修司の気力が最大に高まった反動で大地が陥没し、クー・フーリンの背後にあるホワイトハウスの残骸が周囲の瓦礫ごと吹き飛んでいく。デタラメな闘気、最早気を解放しただけで物理的災害になりつつある修司を前にクー・フーリンは微塵も臆した素振りを見せずに槍を構える。
「あぁ、そうだ。コレと戦りたかった！　待った、この時を待っていたぞ！　修司ィッ！」
「行くぞクー・フーリン。アンタを倒し、この戦争を終わらせる！」
「やって見せろ。その前に――貴様の心臓、貫い受ける!!」
　槍が迫る。赤く、血の様に朱い死槍を前に……。
「デトロイト――ＳＭＡＳＨッ!!」
　修司もまた、拳で応える。槍と拳、ぶつかり合う力と力はワシントン中にある建物の残骸を吹き飛ばし、その衝撃は北米大陸全土を震撼させた。
　第五特異点最後の戦い、北米神話最後の闘争が……始まる。

その８１　第五特異点

「えぇい。次から次へとキリがないな！」
「ぼやいても仕方ないわエジソン。今は目の前の相手を倒すことに集中しましょう」
　溢れるように押し寄せてくるケルトの群れをエジソン達サーヴァントを筆頭に戦線を維持する。押し寄せてくる暴力の波、第三の特異点以来の対総力戦に立香は広い視野を持つことを心掛けながら、マシュに逐一指示を出す。
　とはいえ、相手の戦力は第三特異点（オケアノス）で経験した以上に多く、雪崩れ込んでくる危機はあの時の比ではない。命令通りにしか動けない竜牙兵とは異なり、此方は歴戦の猛者であるケルトの戦士達だ。一人一人が油断ならない意思を持つ戦士、死ぬ気で此方の命を取りに来るケルトの戦士達に徐々に立香の精神は磨り減っていく。
　そんなマスターを守る為にマシュは盾を奮って立香を守護する。そんな後輩の背中に安堵した立香は、気持ちを立て直して眼前の敵を静かに見据える。
「ロビンさん、ネロ陛下とエリちゃんのフォローお願い！　スカサハ師匠はエジソンさん達の援護を！」
「あいよ！　ったく、こう言う正面切っての戦いは苦手なんですがねぇ！」
「若者が、そう易々と泣き言を口にするモノではないぞ？　ほら、良く言うではないか、何事も当たって砕けろと。チャレンジ精神は幾つになっても持つべきではないかな？」
「説得力のあるご助言、どうも！」
　辟易としながらも突出する二人のフォローに回ってくれるロビンの人のよさに感謝しながら、立香は次の脅威に視線を向ける。ナイチンゲールも狂戦士（バーサーカー）でありながら周囲の皆と上手く連携してくれているし、アメリカ軍の兵士達も援護射撃に徹してくれるから戦況は現

在、こちら側に有利に傾いている。
今の内にワシントンで戦っている修司が勝利してくれる事を願いながら、立香がマシュと共に前進しようとした時、遥か空から無数の光の矢が立香に降り注いできた。
「先輩ッ!!」
「っ!?」
突然のマシュの叫びに戸惑いながらも、頭上から降り注いでくる光の矢の雨に気付き、返事を返す余裕もなく、立香はマシュが掲げる盾の下へと避難する。その体勢からマシュの両足の間に挟まる形になるが、それを気にする余裕すら今の二人にはありはしない。
途切れる事なく降り注がれる光の雨、その一つ一つが自分を殺す為に放たれた物だと理解した立香は、何度目か分からない死への恐怖を体感した。
怖い。でも、ソレ以上に負けたくない自分がいる。恐怖を和らげる為にマシュの脚にしがみつくが、それを臆病者と罵る者はいない。ここは戦場、サーヴァント同士がぶつかり合う常道から駆け離れた特異なる戦場。魔術師としての日は浅く、マスターとしても未熟な立香が、無防備のままで生き残れる程甘い世界ではない。
ふと、光の雨の向こうから、一人の男が此方を見据えていた。その男には見覚えがあった。アルジュナ、マハーバーラタの叙事詩にてカルナと同格の英雄とされる人物。そんな男が弓矢を構えて此方に狙いを定めている。マシュは頭上からの光の矢の対処でソレ処ではない、このままでは狙い撃ちにされると、通信越しでロマニから悲鳴にも似た叫びに漸くマシュが気付いた所で……光は放たれる。
あ、これ死んだ。どこか他人事に思いながら目の前に迫る光の矢を見つめていると、突然、人影が立香の前に立ち塞がった。
そして……。
「ふっ!」
その人物は、迫る光の矢を全て素手で叩き落としてみせた。黒いフードを深く被り、表情を隠しているその人物は……しかして、不敵に頬を歪ませていた。

「済まない。向こうのケルトを片付けている内に少々遅れた。大事ないか、カルデアのマスターよ」
「か、カルナさぁん!!」
　視線だけ此方に向けてきて安否を気遣ってくれる施しの英雄の登場に、生きた心地がしなかった立香は半泣きしながら彼の到着を喜んでいた。既に彼が担当していた方は全て片が着き、今はラーマが後詰めを行っている。
　自身を助けてくれたカルナの登場に安堵の涙を浮かべながら、立香はカルナの名を叫ぶ。対するカルナは立香の声援を受けながらも、目の前の宿敵に一切視線を逸らさずにいる。
「らしくないなアルジュナ、授かりの英雄と呼ばれた男が不意打ちとはな」
「……この戦争の早期終結を行うには、敵大将の首を狙うのは常、この場合に於ける敵大将とは誰か？　エジソン？　いいや違う。この場合私達の敵の大将とは、カルデアのマスターを置いて他にない。私を愚かと罵るのは筋違いだ。愚かなのは自身の価値を分かっていない彼女自身だ」
「賢明で道理だな。だが浅慮でもある。確かに彼女は愚かかもしれんが、それでも一人の人間として戦う決意と、生き残る覚悟がある。その彼女を侮辱する事はこの俺が許さない」
「ならば、どうする？」
「決まっている。敵として相対した我が宿敵に一足早いプレゼント（敗北）を贈るのみ。行くぞアルジュナ」
「来い、カルナァッ！」
　アメリカとケルト、二つの勢力がぶつかり合う戦乱の中でインドの両雄が激突する。当然、その余波は凄まじく……。
「ふぎゃぁぁぁぁぁっ!?」
「せ、先輩イイイッ!!?」
「ブフォーウッ!!」
　大地が抉られる衝撃に巻き込まれた二人と一匹は、戦場の何処かへと吹き飛んでいった。

これだからインドは！

◇

――――荒野の大地に砂塵が舞う。ワシントン州のホワイトハウス跡地から南へ、まるで大陸を縦断する様に広がる砂塵。それを生み出しているのは、たった二人の戦士による闘争から発生しているもの、彼等の戦いは先のカルナと同等以上の規模で拡大していき、その有り様は神話の戦いそのものだった。

拳が奮われる。一呼吸の内に目の前の男の両手から繰り出される千を超える打撃の応酬、触れればサーヴァントですら粉砕するであろう暴力の嵐、それを掻い潜り、返しに槍を振り抜くクー・フーリンも、また大英雄として相応しい武を有していた。

振り抜かれる死槍、僅かでも触れれば死の呪いによって瞬く間に命を喰らい尽くす魔槍。鋭くも恐ろしい朱色の槍は必死に逃げる男の努力空しく、その胸元を刺貫かれる。

しかし、男――――修司を貫いたかに見えたソレは陽炎となって消えていく。古典的な手だ。しかし、だからこそ使う場面によって効果覿面な避けの一手となる。

「――――残像か」

「〝残像拳〟。些か使い古し感のある技だが、乱戦の時には意外と通用する。特に、アンタみたいな手数の多い奴にはな」

気付けば、既に自身が追っていた男は己の少し離れた背後へと回っていた。此処まで互いに容赦なく仕掛けていたと言うのに、互いにほ

ぼ無傷。クー・フーリンは脇腹や頬に僅かな擦り傷が出来ている程度で、修司の方は精々マントに数ヵ所の穴が空いている程度。
依然として互いに有効打が打てない状況、しかし見てくれの状況とは異なり、心境的に追い詰められていたのは修司の方だった。修司の奮う拳は確かに強力、打てば大抵のモノは粉砕し、掠っただけでも並のサーヴァントなら致命傷になり得る威力を秘めている。修司の生きてきた人生の中で鍛えられ、培われてきた剛拳。
対してクー・フーリンの奮う魔槍は触れた相手に死を送るモノ、相手の強弱に関係なく、触れれば殺す事を決定付けた死の具現。これ迄手合わせをしてきて理解した。目の前の男が突き付けてくる死槍は、直撃すれば自分の気の防御を突破してくると。
だから幾百幾千もの魔槍が奮われる度に、修司の精神がゴリゴリと削れたのは言うまでもない。受けても耐えられる拳と、受ければ死は免れない魔槍、どちらが精神に堪えるかは明白だった。
そして……。
「手数は多いか。いつから俺がテメェに手札を晒したよ」
アイルランドの光の御子の力は、魔槍だけに留まらない。
「！」
「あまり、英雄を舐めるなよ？」
クー・フーリンのその一言により修司の足下から赤いルーン文字が輝き、瞬間に巨大な火柱が修司を呑み込んだ。痛みや熱さよりも純粋に驚いた修司だが、ダメージはない。今更この程度の炎で臆する事はない修司が、構うことなく前進しようとするも。
頭上から瓦礫、足下は大地が隆起して修司を呑み込もうと迫ってくる。どちらも此方の足止めを目的としたモノ、そうはさせないと修司が頭上の瓦礫に向けて気弾を放って吹き飛ばし、上空へ向けて跳躍する。
そして、それこそがクー・フーリンの狙いだった。
「そら、逃げ場はもうないぞ。――――くたばれ」
槍を握る手に力が満ちる。己の獲物に最大限の魔力を注ぎ込み、その余波でクー・フーリン周辺の大地は陥没し、空間すらも歪ませる力

を一点に集中させる。
「突き穿つ――――死翔の槍ッ!!」
そして、文字通りの必殺の一撃は放たれた。サーヴァントであった頃から避ける度に相手に襲い掛かり、如何なる防御防壁も貫いてきたクー・フーリンの一刺。それはサーヴァントの枠組みを越え、伝承そのものの威力となり、修司を殺そうと食らいつく。
避けるのも防ぐのも不可能。であるならば、迎え撃つしかない。面に強い手刀では点のゲイボルクが相手では力不足、ならば渾身を込めての拳骨しかないと、迫る朱色の死に拳を振り上げる。
力を溜め、気を込め、そして――――。
「TEXAS――SMASHッ!!」
放たれた拳は朱色の魔槍と激突し、衝撃で天と地が砕け散る。大陸を覆っていた雲を吹き飛ばし、北米大陸上空に穴が開く。拮抗する力、己の皮膚を突き破って侵入しようとする呪いの槍に――――修司は更なる力を解放し。
瞬間、光が周囲を呑み込み、北米大陸の一部が吹き飛んだ。

◇

「……仕留め損ねたか」
巨大隕石が落下した。そう思わせる程の衝撃。しかし大地は大して砕けてはおらず、陥没してなければ、融解もしてはいない。全てはあの白河修司という男の仕業だろうと確信しながら、それでも仕留められなかった事実にクー・フーリンは舌を打つ。
そして、クー・フーリンの疑念は確信へと変わる。ボロボロとなっ

た礼装、体の至る所から酷い火傷を負っている修司にクー・フーリンは彼の人の良さに呆れ果てていた。本来であれば圧し勝てていたであろう力のぶつけ合い、それをわざと相殺へと持ち込んだのは他ならぬ修司の選択だった。

あのままでは地上が無事ではすまない。力の衝突の弊害で地上へのダメージを懸念した修司は、打ち勝つことを放棄し、自身にもダメージの通る相殺を選んでおり、それは彼の拳から流れる痛々しい傷跡がその証となっている。

修司は、自ら呪いの槍を受けることを選択した。それが自身の命を脅かす事を意味していても、それでも修司はこの時代の人々が生きていける配慮を選んでいた。

それを、クー・フーリンは無駄な事だと嘆息する。下らない戦いの幕引き、もうじき終わる戦いに光の御子が失意の溜め息を吐いた時、それは起こる。

力が衰えていない。全身を呪いの槍によって蝕まれ、常時耐え難い苦痛に苛んでいる筈の修司が、依然と紅い炎を纏って空で此方を睨んでいる。

「おい、なに終わった気でいるんだよ。ケルトの戦士ってのは、終わってもいない戦いに背を向けるのかよ」

戦いは終わらない。終わらせない。そう強く瞳に顕れている修司にクー・フーリンは歓喜に口元を歪める。

「あぁ、最高だよ。テメェは！」

砕けた槍を手元に復元し、再び構えを取る。激闘は――更なる段階へ進みつつあった。

そして――。

『……いや、あの……修司君？　君、空……飛んでない？』

２００倍の重力の修行を経て、白河修司は遂に飛行能力を獲得する。

その８２　第五特異点

飛行能力。それは、有史以来の全ての人類が夢見る偉業。蝶の様な翅を持たず、鳥の様な翼を持たない人類が叶わないと知りながらも手を伸ばし、足掻いてきた一つの到達点。

時は１９世紀末。アメリカのとある兄弟が翼を持たない人類に空を飛ぶ術をもたらした。数多の苦難と悲劇を経て、それでも空への飛翔を夢見た彼等が遂に成し遂げた空への切符。

それは時を経て人類に貢献し、今では多くの人々が利用する移動手段となった。国を越え、聳え立つ山脈や外界を隔てる大海原を越え、遂に人は空という領域を介して世界中の人々と繋がる事が可能となった。

ライト兄弟。当時はまだ誰も知らない二人の兄弟の諦めなかった想いは、現代となった今でも薄れる事なく語り継がれている。

――ここで問題。もしもライト兄弟が上空に佇む白河修司（トンでも人間）を見たら、どの様な反応をするだろうか。

A．ふざけんなとぶちギレる。

B．翼が無くても人は飛べるんだと白目を剥きながら発狂する。

C．目の前の光景を極力直視しないように気を付けながら、自分達の目的を遂行する。

さぁ、どれでしょう？

「私は……全部かなぁ」

「ダ・ヴィンチ、何を言ってるの？」

天文台の名を冠する人理保障機関、カルデア。人類最後のマスターである藤丸立香、並びに白河修司への可能な限りの支援をする為に、スタッフが一丸となってサポートに徹しようとしている中、立香達を観測している管制室は異様な程に鎮まり返っていた。

立香とマシュとは別に修司を観測している巨大モニター、そこに映し出されている光景を前にあるものは言葉を失い、あるものは達観の

笑みを浮かべ、あるものは記録に残そうと必死に録画(REC)している。
そして、それはサーヴァント達も同様で、多くの英霊がその光景に言葉を失っていた。空への憧れは誰もが一度は抱き、夢想する。中には実際に空を飛べるものもいるだろうが、それはほんの一握りの英霊しか認められていない特権。
翼を持たず、神秘の魔術や特殊な能力でもなく、神々による権能でもない。純然たる人の技として、空を飛ぶ白河修司は神話の中の英霊達にとっても伝説に見えた。
その中で唯一、コルキスの王女は食堂にてモニターに移る修司を見て、ある種の予感を感じ取っていた。
「あの坊や、今度は私に転移の術を教えて欲しいとか言ってきそうね」
唖然とする騎士王の隣で辟易とした様子で呟くメディア、因みにその予感は見事的中し、後にメディアに転移(瞬間移動)の術を学ぼうとする修司が一時期彼女に付き纏う事になるのだが、それはまた別のお話。
空を行く修司と彼を追うケルトの猛犬。彼等の激闘は科学と魔術の粋を集めたカルデアの観測すらも振り切り、その様相はスタッフ達に第三特異点(オケアノス)以来の死闘を想起させていく。
果たして彼は勝てるのか、勝って欲しい、勝つに決まっている。そんなすがる思いで修司の戦いを見守る中、管制室に緊急事態の報せ(アラーム)が鳴り響く。
「北米大陸に大規模な魔力反応を検知！　これは……魔神柱です！」
「来たか！　数は!?」
「一……十……そ、そんな、まだ増えていく!?」
オペレーターの動揺する声が管制室に響き、彼女の不安が室内に伝播していく。魔神柱という天災クラスの兵器が十の数を越えていき、それがスタッフ達をより深刻な恐怖の沼へと引きずり込んでいく。
魔術王ソロモンの介入、直接的で確実な方法で立香達を潰しに掛かってきた事実に、ロマニが立香達の特異点からの強制退去も視野に入れた時、怒号が響き渡った。
「臆している場合か！　シャンとせんか貴様等ァッ！」

鼓膜が激しく揺さぶられ、脳髄にまで浸透しそうな溌剌し過ぎた一声、怒号というより号砲に似た叫びが管制室に溜まっていた不安の空気を諸とも吹き飛ばした。いきなり誰だと、両耳を押さえてロマニが振り返ると、両腕組んで不敵に笑うマケドニアの大王がエルメロイⅡ世を従えて、管制室の出入り口に佇んでいた。
「い、イスカンダル大王？　どうして貴方が此処に？」
「なぁに、坊主から聞いてここのが一番現地の様子を見れるというからな。折角だし見てみようかと思って来たのだが……全く、何をそんなに凹んでいるのか知らんが、今は気落ちしている場合ではないだろう？　我等がマスターが戦っているのに、お前達が先に戦意を喪失させてどうする」
戸惑いながら訊ねるロマニの言葉に、征服王は呆れを混じらせながら答えた。彼の言うことは正しい、最早観測出来ないほどに激闘を繰り広げている修司に対し、藤丸立香は凡庸な少女だ。サーヴァントの庇護の下でいるといっても、彼女が立っているのは紛れもなく最前線。爆風や戦闘の余波で大地を転げ回り、傷だらけになっても、無数の魔神柱を前にしても諦めずに今も必死になって前を向いている。
彼女が諦めない以上、送り出している自分達が先に折れるのはあってはならない。征服王イスカンダルが言うのも理解できる、だが目の前の現実がそれは簡単では無いことを如実に現しているのも……また事実。
戦力が足りない。エジソンが守り、培ってきた兵力を合わせ、漸くケルトと同等の戦いを繰り広げても、これでは元の木阿弥。魔神柱の放つ光線で戦場ごと蹂躙される光景を前に征服王の叱咤激励は以下ほどの励みになるだろうか。
故に。
「よし、ならば余が往くとしよう。坊主、共に来るか？」
「この流れで拒んだら、それこそ不粋極まりないだろう？　はぁ、前回に引き続き今回もか」
征服王は自ら出陣を宣言する。それに付き従うようにエルメロイⅡ世が後に続く。

「私もご同行しましょう。私の守りならば、魔神柱の攻撃も防げます」
　そこへ更に聖女ジャンヌまでもが戦列に加わった。征服王イスカンダルとジャンヌ＝ダルク、共に前線に立ち、軍勢を率いた経験のある強者達。特異点の修復旅の中で初めてのカルデア側からの戦力の大量投入、本来ならば特異点への影響を考慮して控えていた数多のサーヴァントの同時投入だが、ソロモンが魔神柱という横槍を入れたことで、その影響もかなり軽減されるだろう。
　一気に希望が見えてきた。十を越える魔神柱相手に一時はどうなる事かと思ったが、これならば行けるかもしれない。
「了解した。なら君達を立香ちゃん達の所に送ろう。……どうか、彼女達を守ってやってくれ」
　すがる思いで立香とマシュを頼むと口にするロマニに、征服王は任せろと快活な笑みを浮かべて進軍する。そんな彼を筆頭にエルメロイとジャンヌが後を追っていく、勇猛な英霊達が足踏み揃えて戦場に向かうその姿にカルデアのスタッフ一同は古い伝説を見ている様な気分だった。
　ただ……。
「えぇい！　放さぬか田舎娘！　最古の英雄王たる我に流石に無礼が過ぎるだろうが！　我はこれからマギ・マリとやらに煽り文を送って炎上させねばならんというのに！」
「貴方がいつまでも逃げ回っているからでしょうが。全く、貴方も英霊豪傑の一人ならば臣下の為に一度くらい体を張ってもいいでしょうに、ハデスの帽子も被らず、変顔晒して笑いを堪えていたあなたの迂闊ですよ」
「イヤだって、あやつとうとう星の重力からも逸脱したのだぞ？　我としては奴の戦いを遠巻きに眺めるだけで充分愉しめるのだが？」
「ならば、遠慮せずに特等席でご覧ください」
「ヌォォォッ!?　はな、離せ、離さぬかァッ！　我は、我は……面白おかしく愉悦に浸りたいだけなのにぃぃぃっ!!」
　聖女に首根っこを掴まれて、ドナドナされていく英雄王が、何とも気の毒に見えた。

兎も角、これで戦況は再びこちら側に傾く事だろう。後は大陸の遥か彼方で戦っている修司の勝利を願うだけである。
「立香ちゃん達の事はなんとかする。だから……頼んだよ、修司君っ！」
自分の無力さを棚上げするのを自覚しながら、ロマニは戦いの行く末を修司へ委ねるのだった。

◇

――鮮血が舞う。巻き上げる砂塵に混じり赤い水滴が大地を濡らす。
「――どういう事だ？」
そんな中、ケルトの大英雄は困惑の声を溢す。戦いの中で無駄口を叩くのは歪められた彼らしからぬ行い、しかしそんな彼が唖然とするのは無理もない。
目の前の男――白河修司は呪いの死槍を受けて暫くの時間が流れていた。既に呪いを受けた拳は瞬く間に浸透し、今では腕半分が赤黒く変色してしまっている。
だが、それだけだ。あれから相当数の槍の攻撃を受けているのに、修司という男は怯む処かより勢いを増していく。迫り来る死を前に怯えるのは戦士以前に生命体としての本能だ。どんなに鍛え抜かれた戦士だろうと、目の前にまで迫る死を意識しないでいるのは不可能に近い。
そう、己の一撃を受けて白河修司という男の死は決まっている。な

のに、どうしてそんな風に動ける。死の恐怖を前に戦える？
「俺の槍は死という概念そのものだ。触れ、貫かれたモノは例外なく死に絶え、神すら屠る呪いの死槍。それをまともに受けて……何故お前はまだ動ける」
一刺必殺。生前の力を取り戻し、伝承の力をより引き出せる事が可能となったクー・フーリン。そんな彼の一撃は嘗ての師と同様に数多の命を殺し、神すらも喰らう必殺となっている。確定された死、覆らない現実的な死、謂わば概念的死を受けているのに……生き続けるという矛盾を行う修司が、クー・フーリンには酷く不気味に見えた。
しかし。
「概念？　なんだそりゃ、そんなもので人を殺せると……本気で思っているのか？」
「なんだと？」
「確定された死？　覆らない現実？　そんな言葉を並べて何になる？
そんな小難しい単語を並べて……卵でも立てた気になったか？」
「……」
「お前の槍で俺が死なねぇのは、お前の槍より俺の方が強いって事だろうが。概念なんて言葉を吐いて知識人ぶって、それで俺を倒せると思ったか？　舐めるなよ、英雄。俺を殺したいのなら、心臓を穿つなり頚を切り飛ばすなりするんだな」
命を喰らう呪いを一身に受けて、それでも平然としていられる修司は、正しく化け物だ。魂すら喰らい尽くす呪いの槍、それを受けて平然としていられるのは、あのスカサハであっても不可能だろう。
「……とは言え、少々時間を取らせた。向こうも何だか不穏な気が集まっているし、あまり悠長にしていられない。だから……」
故に……。
「次の一撃で、お前との戦いも終わらせてやる」
「……嗚呼、そうだな。テメェはそういう奴だよな」
クランの猛犬が滾るのも、無理もない話だった。
「良いぜ、ならばこれで最後にしてやる。テメェを殺し、改めて俺はこの国の王になろう」

互いに荒ぶる闘争心を高め、ぶつかり合う。大陸を震撼させる神話の戦いは、もうすぐ終わりを迎えようとしていた。

その８３　第五特異点

魔神柱。それは、人理焼却の原因の一つとされている魔術王ソロモンが送り出す尖兵、醜悪な外見でありながら、保有する魔力量は膨大で、一柱あればそれだけで国家レベルの大災害をもたらす天災の徒。

その魔神柱が総勢十を越え、敵対している立香達を見下ろしている。禍々しく恐ろしい巨大な無数の眼、それら全てが立香とマシュに敵意と殺意を込めて睨み付けてくる。空を穿つとばかりに巨大な魔神柱達の顕現に驚愕する立夏だが、立ち止まる暇はない。

眼が瞬き、光と熱が彼女達を襲おうとした時――光の輪が、魔神柱の一柱を真横に両断する。

「――羅刹（ブラフマーストラ）を穿つ不滅。やれやれ、顕れるやいきなり攻撃とは、魔神と呼ばれるには余裕のないやり口だな」

「うむ、あれだけの巨大さなら口上もさぞ派手になるだろうに……いや、ダメか。派手ではあるが、あの肉塊はあまりにも美意識が足りないな」

「そうね。やっぱり謳い上げるなら、それ相応の美意識が必要よね」

「ネロ陛下！」

「エリちゃん！　ラーマ君も！」

危うく集中砲火の所をラーマに救われ、隣にいたもう片方の魔神柱もネロとエリザベートの両雄によって破壊される。ケルトの兵隊達を相手に戦い、自分達だってそんなに余裕は無い筈なのに、それでも駆け付けてくれたネロ達に立香達は心から喜び、抱き付いた。

「うぇぇーん！　助かったよぉー！　有り難う二人ともぉー！」

「よしよし、余達がくるまでよくぞ耐えたよ立香よ」

「ていうか、何であんた達がここにいるのよ？　アンタ達の担当は此処から少し離れた所じゃなかったかしら？」

「そ、そうなんだけど……」

言い淀む立香にネロ達が首を傾げると、遠く離れた所から轟音が鳴り響き、地震を思わせる衝撃が立香達の足場を揺らした。何事かと思

い衝撃のあった方角へ目線を向けると、雄叫びを上げながら戦い続けるカルナとアルジュナが見えた。
身体中の至る所に土埃が付いている立香を見て、全てを察したネロが立香とマシュの頭を撫でる。
「……ねぇ、アンタの所の英雄ってみんなあんななの？」
「いや、元は冷静沈着で寡黙な者達なのだが……その……スマン」
ジト目でどういう事かと訊ねてくるエリザベートにラーマは何となく居心地が悪くなり、思わず謝罪してしまう。
さて、そんな和気藹々とした空気も束の間。ラーマによって両断された魔神柱は自己を保てず消滅するが、もう片方は未だに健在。再起動したように眼光を瞬かせ、再び立香達に狙いを定め始めた時、今度は無数の朱色の槍が魔神柱を滅多刺しにしていく。間断なく、隙間なく埋め尽くされ、最終的に穿たれ果てる魔神柱。
そんな魔神柱が黒い灰となって消えるのと、影の女王が立香達の所に着地するのはほぼ同時だった。
「全く、戦場のど真ん中で談笑する奴がおるか。ほら、急いで向こうに戻るぞ、彼方には発明王一派がいたはずだろう？」
スカサハに言われ、ハッと思い出した立香達はエジソン達のいる方角へ視線を向けると、其処にはエジソン達が複数の魔神柱に囲まれていた後だった。
その一柱をエジソンが宝具を放つことで消し飛ばし、包囲網の一角に風穴を開けるが、直ぐにまた別の魔神柱が逃げ道を塞ぐように顕れる。
「そんな、魔神柱が復活した!?」
「ふむ、どうやら連中は互いの命を繋げることで同一の個体へと昇華させたらしい。アレを滅するには繋がっている全ての魔神柱を同時に消す必要があるな」
「そんな、そんな大火力を持つ宝具を持ったサーヴァントは、この場には……」
互いに活動機能の補完を担い、命という炉心を同一にする事で一つの生命体へと変化した魔神柱。特異的な性質を有する様になり、あの

肉塊の群れを駆逐するには同時に消滅するしかないとスカサハは冷静に分析する。
　そんな火力をもった英霊はこの場にはいない。ネロは固有結界に似た宝具であるから仕方ないとして、スカサハとラーマは威力こそはあっても、広範囲に及ぶ宝具ではなく、唯一可能性のあるエリザベートも全ての魔神柱を屠るには火力が些か以上に足りない。
　このままではエジソン達がやられる。一度は敵対し、実際に戦った事のある相手だけど、今では大切な仲間達だ。彼等を失う訳にはいかないと、立香が駆け出そうとして……それは起きた。
　稲妻が迸る。天空に暗雲が広がり、魔神柱達を覆い尽くす。
　そして、雷鳴は轟音と共に降り注がれる。その雷鳴に立香は覚えがあった。その蒼く眩い雷は嘗て人類史に電気をもたらした男の宝具。
　つまりは――――。
「フハーッハッハッハッハ!!　随分と無様ではないか凡骨ゥッ!!　貴様の無様さを嗤う為、カルデアからワザワザ来てやったぞ！　喜べ凡骨ゥッ!!」
「す、すっとんきょうだとぉぉぉっ!!??」
　戦場に響き渡るほどの高笑い。空からゆっくりと降りてくるのは雷電博士ことニコラ＝テスラその人である。絶え間無く降り注がれる放電は魔神柱の表面を焼いていくが、活動限界にはまだ至らず、魔神柱の瞳はテスラ一人へ向けられる。
　急いでテスラに支援しようと立香が魔術礼装を起動させ、テスラに回避の魔術を施そうとするが、それは彼女の肩に置かれる大きくも暖かい手によってやんわりと阻まれる。
「よぉマスター、今回も随分と気張ったな。お主の奮闘、勇気、楽しませて貰ったぞ」
「い、イスカンダル大王!?　え？　ど、どうして？」
「どうしても何も決まっているだろう。マスターの危機に我等が駆け付けたのではないか、ほら、ボサッとしてないで指示を出さぬか。戦いはまだ終わってはおらぬぞ」
　瞬間、エジソン達の方角から光と爆発が起きる。しまったと目を剥

く立香であったが、次の瞬間彼女の危惧は杞憂へと変わった。砂塵の中から溢れる光、それが聖女ジャンヌの守護の光だと安堵すると、次に隣の征服王から魔力が迸る。

征服王イスカンダルのやる気に立香も前を向く、今こうしている間にも彼は激闘を続けている。そんな彼のお荷物になるのだけは嫌だと、藤丸立香は令呪を以て征服王に後を託す。

「お願い征服王、皆を守り、目の前のアイツ等を――――ぶっ飛ばして！」

「ワッハハハハハ！　ビックリするほど他力本願だな此度のマスターはっ！　だが良いぞ、その開き直りは心地よい。お主の覚悟と決意、しかと余の胸に刻んだぞ！」

「ならば仰ぎ見るがよい！　遥か万里の彼方まで往く、我等が行軍――――即ちッ！」

「王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）であるッ!!」

瞬間、世界は変わる。何処までも続く荒野だった世界は見渡す限りの砂漠となり、頭上には吹き抜ける蒼い空が何処までも無限に広がっていた。

足音が聞こえる。背後から耳にする砂を踏み締める無数の足音が立香達の鼓膜を震わせていく、何事かと振り返れば、砂漠の大地を埋め尽くすほどの英霊達が群となって現れる。

「ふわぁー」

「す、凄いです。これが、征服王の宝具……」

「そうとも、これが我が同胞と共に駆けてきた余の宝具。英霊という座に招かれて尚、力を貸してくれる余と同胞達の絆の証よ。さて、話は此処までだ。残る魔神柱共を片付けるとしよう。――――さて、では抜かりはないな英雄王！」

「え？」

「ぎ、ギルガメッシュ王も来ているのですか!?」

なんとも大盤振る舞いな援軍である。聖女ジャンヌや征服王イスカンダルだけではなく、オケアノス以来の英雄王の加勢に不利だった戦況は一気に立香達の方へ戦局は傾いた。

ただ、一つだけ問題があるとするならば……。
「あー、それじゃあ精々気張れよ雑種どもー。貸した武具はちゃんと後で返す様にー」
肝心な英雄王が、これ以上ない程にヤル気を失っているという事である。空を浮遊する黄金の船に乗り、気だるそうにしている彼の姿は、お世辞にも偉大なる王とは到底思えない。その様子は宿題を強制的にやらされている小学生のそれ、普段ガシャガシャ五月蝿い鎧は着ておらず、私服姿で玉座に凭れる姿は控えめに言って腹立つ。
これには流石の征服王も物申したかったが、生憎と宝具の展開時間に限りがあるため、聖女にチクるのは後にするとしよう。魔神柱もそろそろ此方に狙いを付け始めるだろうし、決戦の時にあれこれ言うのも無粋だろう。
それに……。
「全軍への魔術強化、完了した。後はお前次第だぞ、征服王」
嘗ての己のマスターが、全力を以て支援をしてくれている以上、カッコ悪い真似は出来ない。大人へと成長し、多くを見て成長したであろう臣下に征服王は乱雑に頭を撫で回し……。
「蹂躙せよォォォッ!!」
遂に、進撃の合図は下される。雄叫びと共に砂漠の大地を駆け、手にした刃を魔神柱達に突き立てる。彼等の持つ武具の全てが英雄王が保有する財宝のモノ、その悉くが一級品の武具であり、中にはAランク相当の宝具も含まれている。
当然、そんな武具を手にした王の軍勢を止められる筈もなく、立香達を殺す筈だった魔神柱はその悉くが狩り尽くされていく。
その後、エジソン達も持ち直し、テスラと口汚く罵り合いながらも魔神柱を殲滅。特異点修復初となる修司を先んじての勝利である。
後は修司の勝利を待つだけ、征服王の固有結界が解除される迄の合間、藤丸立香はその時を待ち続けた。

◇

――――足りない。どれだけ大地を駆けても、どれだけ槍を奮っても、目の前の敵を倒すのに何もかもが足りていない。

持ちうる限りのルーンを使い、技を使い、力を行使した。目の前の敵を殺す為、クー・フーリンはこれ迄の人生から培ってきた全てを総動員させ、一切の油断なく攻め立てた。

なのに倒れない。目の前の男は燃え盛る炎に炙られようが、吹き荒れる風に切り刻まれようが、降り頻る雨に穿たれようが、お構いなしに佇んでいる。一撃で終わらせると豪語した男は、あれから一切自ら動こうとせず、拳を握り締めたまま静かにクー・フーリンを見据えている。

どれだけ傷を受けても不動のまま、その様子はまるで居合いを構えた侍。既にマントは引き裂かれ、礼装もボロボロとなっている。どれだけいたぶられ、なぶられても、全く動じない修司にクー・フーリンは言葉に出来ない不気味さを感じた。

〝この一撃で終わらせる〟　恐らくはその宣言通り、修司は次に奮う拳の一撃で終わらせようとしているのだろう。そんな宣言に付き合う道理はクー・フーリンには存在しない。呪いを受けなくとも、傷を受け、血を流し続けていれば、いつか修司にも限界は訪れるだろう。

『クーちゃん、勝ってね』

尤も、その様な選択肢はクー・フーリンには存在しない。呪いで倒れないなら、己の槍で殺せないなら、更なる呪いと殺意を以て鏖殺するまで。

嗚呼そうだ。闘争とはそういうもの、殺し合いとはそういうもの。そこに小難しい理屈は不要で、ただどちらかが強いかという事実だけが残るだけ。

ならば、自分もまた挑むとしよう。目の前の嘗て無い強敵に、己も限界に挑むとしよう。

距離を開け、クー・フーリンが停止する。嵐の様な猛攻から一変した静寂の間、何をする気だ？　これ迄クー・フーリンの動きを観察していた修司だったが、初めて目にする姿勢に戸惑った時、膨れ上がる気に目を剥いた。

獣の如く姿勢を低くさせ、此方に狙いを定めてくる。間違いない、向こうも自分と同様にこの一撃でケリを付けるつもりだ。互いに最後の一撃に賭けた構図、シンプルで分かりやすい展開に修司は自然と口端を吊り上げる。

僅かな静寂、破ったのは……クー・フーリンだ。低い姿勢から放たれる様は弾丸の如く鋭く、その速度は既に音を置き去りにし、光の領域へ差し掛かっている。

これまで戦ってきてハッキリした。目の前の男は速さだけならあのヘラクレスすら凌駕していると、女王メイヴによって反転し、歪められた存在になろうとも、彼の速さだけは微塵も揺らぎはなかった。

しかし、それでも修司は目を逸らさず、真っ直ぐにクー・フーリンを見据えている。迫るのはこれ迄のような概念頼りの一撃ではない、文字通りの一刺一殺の奥義。狙うは心臓、既にその間合いはクー・フーリンの領域だ。

その刹那、修司が一歩踏み込んだ。瞬間足場にしていた大地は砕かれ、これ迄溜めていた力の全てが解放される。眩しい光だ。血の様に赤い光が修司の拳に集約されていく。

しかし、一歩遅かった。修司の間合いはクー・フーリンよりも狭く、クー・フーリンの間合いは手に槍を持っている分、修司よりも広い。

故に……。

「刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）!!」

修司の拳よりも速く、クー・フーリンの槍が届くのは必定だった。

槍の穂先が修司の心臓目掛けて放たれる。彼の放つ一撃は因果逆転の一撃に非ず、正真正銘、自身の全てを擲っての……最後の一刺だ。

朱色の槍が皮膚を抉る。嘗てない程に頑強な肉の感触に光の御子が叫んだとき、信じられない事が起きた。
修司が一歩、足を踏み出している。自らの心臓に槍が放たれているというのに、構うことなく踏み出している。自ら命を差し出すような愚考、当然の事ながら槍は修司の胸に突き刺さり、朱色の槍は修司の心臓のすぐ其処まで迫っていた。
しかし……。
「ワザワザ近付いてくれて……感謝するぜ」
そこは、既に修司の間合い（エリア）だった。滾り迸る力の奔流を身に纏い、その拳に全てを乗せていく。逃さないつもりで放った一撃が、逆に誘い込まれていた。
気付けば、クー・フーリンは退いていた。修司の迫力に負け、獣としての本能が勝ってしまった。女王メイヴが自分の様に邪悪にして欲しいと願ってしまった故の弊害、しまったと目を見開いた時は……既に、修司の拳は目の前まで迫っていた。
「ＵＮＩＴＥＤ――」
拳が、クー・フーリンの顔面に叩き込まれる。
「ＳＴＡＴＥＳ　ＯＦ　――」
その一撃の余波は、北米大陸全土を覆い。
「――ＳＭＡＳＨッ!!」
振り抜かれ、クー・フーリンを叩き付けた振動は大地に津波の様な地震を引き起こし、跳ね返った衝撃は空へ巨大な竜巻となって広がっていく。
天変地異。文字通り、天も地も変えてしまう一撃が北米大陸に震撼させていくのだった。

◇

「あぁ、クソ。俺は……負けたのか」
修司の一撃によって致命傷となり、存在する力すら保てなくなったクー・フーリンは、生前に味わう事の無かった敗北の味に顔を歪めていた。
「あぁ、そして――俺の勝ちだ」
そして、必然的に勝利となった修司は、胸に突き刺さった槍を引き抜き、地に突き立てる。最後の一刺で全ての力を失った朱色の槍、主よりも早く力尽きたソレは黄金色の光となって空へ消えていく。
槍を引き抜いた事で、出血の量は増していくが、それでも構わず見下ろしてくる修司にクー・フーリンは忌々しそうに掃き捨てる。
「へっ、何処までも生意気な小僧だ。だが……悪くない、この俺に勝ったんだ。堂々としてなきゃ困る」
「――なぁ、クー・フーリン」
「あぁ？」
「少しは……満足できたかよ？」
言われて気付いた。これ迄あんなに飢えていた衝動が嘘のように消えている。初めて自覚した満ち足りた感覚にクー・フーリンは声を出して笑った。
「――く、クハハハッ！　なんだ、俺も案外単純だったんだな。いや、それも当然か、聖杯に歪められ、女に叱咤され、全てを出しきった上で負けたんだ。認めるしか……ねぇよな」
そして、クーフーリンの消滅の勢いは加速的に増していく。自分の敗北を認め、受け入れた彼に最早この世界に留まる理由はない。
だが、その前に……。
「次だ」
「あ？」
「次にまた、俺はテメェに挑むぞ。俺が勝つまで何度も何度も挑んでやる。だから、俺に負けるまで――」

〝誰にも負けるんじゃねぇぞ〟

その呟きは光となったクー・フーリンが風と共に消える事で消滅するが、残念な事に修司の耳には確り届いてしまっていた。

「ったく、これだから英雄ってやつは……」

奇しくも、ギリシャの大英雄と同じ捨て台詞を吐きながら消滅したクー・フーリン、そんな彼に呆れながらも、何処か修司の顔は晴れ晴れとしていた。

遠くから立香達の声が聞こえてくる。どうやら向こうも乗り切った様だ。手を振りながら走り寄ってくる立香達にサムズアップで応えながら、修司もまた青空の下を歩き始めるのだった。

――――定礎復元――――

その８４

△月※日
ケルトの軍勢を退け、序でに魔術王の横槍もはね除け、無事に聖杯を回収し、第五の特異点も修復に成功した自分達は無事にカルデアに帰還する事ができた。
カルナとアルジュナも、決着こそは着けられなかったが、互いに全力の戦いが出来た事で多少ではあるが、二人の間にあった蟠りは解消された様だ。後に二人ともあれから立香ちゃんによってカルデアに喚ばれているが、今の所は特に目立った衝突はない。
そして立香ちゃん達も、王様やジャンヌさん、征服王やエルメロイ先生の助力もあって魔神柱を撃退出来た様だし、危ない場面こそあったものの、無事に帰ってこれたから本当に良かった。
で、立香ちゃん達と一緒にカルデアへ戻ってきた自分は、いつぞやの時のようにソッコーで医務室に直行、この時にジャンヌさんもが有無を言わさない勢いで腕を引っ張っていくのだから、それは怖――――もとい、大変だった。
征服王は笑ってばかりで助けようとしないし、エルメロイ先生は苦笑いを浮かべるだけ、王様に至っては……何時ものように高笑いしながらそそくさと自室へ帰っていった。相変わらずの自由人で安心したよチクショーめ！
その後、言われるがままに医務室に直行した自分は為されるがままに治療を受け、最終的にはほぼミイラ状態となり、ロマニやダ・ヴィンチちゃんから有難い小言を聞くようになって……それは起きた。
マシュちゃんが倒れた。バタバタと騒がしい足音を立てながら医務室にやって来た立香ちゃんが、不安に満ちた顔でぐったりしたマシュちゃんを抱き抱えているのだから、医務室は騒然となった。
ロマニも俺への小言は一時中断し、急いでマシュちゃんの容態を診る為に医務室の奥にある集中治療室へ、マシュちゃんと共に入って

いった。突然の事態に呆然となる俺達、そこで漸く俺はマシュちゃんの気が著しく小さくなっている事に気付いた。
ダ・ヴィンチちゃんは、これ迄の特異点修復の旅と度重なる戦闘で疲弊したのだろうと、立香ちゃんを安心させようとしていたが……俺はそうは思えなかった。
マシュちゃんの気が急激に小さくなったのは、これ迄の旅や戦闘だけではない。もっと別の理由があるのではないかと、俺は疑問に思った。気とは草木や動植物、人間を含めた全ての生命体に宿る力の総称だ。それは生まれた時から誰もが持ち合わせており、熟知し、使いこなせるようにならないと気が突然と小さくなったりはしない筈。
未だ修行中の身であり、完全にマスターしたとは言い難い自分だが、それでも今のマシュちゃんが並々ならぬ状態である事は分かる。結局はその後、ロマニとマシュちゃんが一晩集中治療室から出てくることはなく、立香ちゃんはダ・ヴィンチちゃんに連れられ自室へ戻り、俺もまたジャンヌさんの監視の下で医務室で一晩過ごす事になった。
因みに、日記はジャンヌさんから持ってきて貰いました。
……どうでもいいな。

Δ月＊日
あれから数日、既にクー・フーリンから受けた傷は完治し、立香ちゃんも表面上は普段と変わらぬ調子に戻っていた。
今回ロマニから所長室に呼び出されていた理由は他でもない、マシュちゃんの件だ。あれから一日経ってマシュちゃんは何事もない様子で戻ってきたから安心したが、依然として彼女の気は不安定なままだ。スタッフの皆や立香ちゃんの様に一定とした気ではなく、なんというか……例えるなら、忙しなく小波が立っている状態だ。
高くなったかと思えば低くなる。今でこそその振り幅は小さいもので、現在は然程大した問題にはなっていないが、その状態がいつまで続くかなんて分からない。
彼女がああなった理由。自分は最初、彼女の内に宿る英霊によるものだと思っていた。デミ・サーヴァントとして覚醒した彼女は、身体

能力こそサーヴァント並となっているが、英霊の証である宝具までは使いこなす事が出来ていない。完全に英霊の力を引き出していない事から、今回もそれに関する話だと予想していたのに、事実はそれよりも遥かに深刻だった。

マシュちゃん――――マシュ＝キリエライトは純粋な人間ではなかった。人間と英霊を融合させる事で英霊を人間にするための遺伝子操作によって造り出された……デザインベイビーだった。

英霊を喚ぶのに相応しい質の良い魔術回路と無垢な魂を持った人間。本来なら３０歳程で活動停止する彼女は……現在、サーヴァントとの融合で更に寿命を縮め、長く見積もっても１８年生きられるかどうかという。

この話を聞いた瞬間、俺はロマニの胸ぐらを掴んで彼を本棚へと叩き付けていた。彼が悪いわけでなく、感情的になった俺こそが悪いのだが……あまりにも淡々と彼女の容態をさも他人事のように語る彼に――――八つ当たり染みた怒りを抱いてしまっていた。

マリスビリー＝アニムスフィア、カルデアの前所長であり、オルガマリーちゃんの父親だというからもしかしたらと思ったが……コイツも他の魔術師達と同様に命を軽視する典型的な魔術師だったようだ。

どうして、魔術師という奴は命を軽く扱うかなぁ。魔術を極めるのに、どうして命を弄ぶ真似が出来るのか。もし奴が存命していて俺の前に立っていたら、オルガマリーちゃんになんて言われようがぶちのめしていたと思う。

そんな事を考えても無駄だと察した自分は、自分を宥めてくるダ・ヴィンチちゃんと立香ちゃんに諭され、ロマニに謝りながら手を離した。マシュちゃんの事を黙っていたのは癪だが、それを理由にカルデアを見限る程俺達は浅い関係ではない。

ただ、マシュちゃんが英霊と融合し、寿命のリミットがある以上、彼女をもう戦場に立たせる訳にはいかない。ロマニはマシュちゃんの寿命を１８年あるかないかと言っていたが、それはあくまで安静にしていたらの話だ。

これからもマシュちゃんが俺達と一緒にレイシフトして戦い続けたら、間違いなく彼女の寿命は尽きる。そうなっては折角自分が思い付いた打開策までもが無駄になってしまう。

彼女の肉体は元々がデザインベイビーであることとサーヴァントとの融合によって、肉体は限界に差し掛かっている。ボロボロでどうしようもない状態だと言うのなら、違う細胞に変革させればいい。そう口にした俺にダ・ヴィンチちゃんを含めたロマニも物凄く驚いた顔をしたのは今でも笑えてくる程に傑作だった。

しかし、可能性は低い。焼却されたこの世界にも俺がいるのなら、ほぼ間違いなくあの炉心は……少なくとも、一つは完成している筈だ。元の世界では既に実用化され、一部の医療にも使われている次世代のエネルギー炉心。

〝ＧＮドライヴ〟。特殊な環境下によって精製され、半永久的に稼働するその動力システムはとある条件下によって人体にある影響を与える事は既に元いた世界で立証されている。

条件を満たし、限界稼働値を叩き出したＧＮドライヴは翡翠色の粒子を放出し、それに触れた人間に一定の効能を与える。ある症例では肺の病に侵されていた病人が回復し、紫外線の病によって壊死した皮膚の細胞を完全に修復する事に成功させており、他にも理論的にはステージ５を迎えたガン細胞にも有効だという事が明らかになっている。

遺伝子レベルで変革を促す特殊粒子。それが、王様の助力を借りて俺達が生み出した新たなエネルギー炉心、それがＧＮドライヴである。

ただ、これには一つ副作用が懸念されていて、ＧＮ粒子を浴びたモノは夜間でも分かるほどに目が光る様になり、空間把握の認識能力や身体能力が飛躍的に向上したりと、肉体に関して変化が認められている。

見た目に関しては瞳が光ること以外特に変化はない。眼に関してだって特訓すれば元の状態に戻るから、マシュちゃんへ施すには充分な効果が期待されると言ってもいい。

とはいっても、肉体に関してそれだけの効果をもたらすのだから、他の人から見れば非人道的な所業に思われるかもしれないし、そう言う意味では現代の魔術師と同じ外道な類いの方法なのかもしれない。

どちらにせよ、マシュちゃんには選択権を与える必要がある。このまま死を覚悟して戦い続けるか、それとも僅かな可能性に賭けて、自室で立香ちゃんと一緒に待機しておくか。個人的には圧倒的に後者をお勧めしたい。

立香ちゃんもマシュちゃん、彼女達二人は充分に頑張った。自分に出来ることを懸命にやりとげ、慣れない戦闘の毎日を続けて、心と体に負荷を掛け続けてきた。そんな二人の旅を此処で終わらせても誰も文句を言う奴はいないだろうし、何より俺が言わせない。

人理焼却を修復し、ソロモンも必ず俺がぶちのめすから、どうか安心して欲しいと俺が言うと、ロマニやダ・ヴィンチちゃんは結論を急ぐなと言ってきた。

確かに俺も一度は二人を認めた。一緒に戦う仲間として、戦友として、Ａチームの皆を除いて、背中に預けるに足る人だと信じてきた。

けれど、その為にマシュちゃんが犠牲になると言うのなら話は別だ。俺はマシュちゃんを死なせたくないし、カルデアの皆だって死んで欲しくない。そこには当然、サーヴァントの皆だって含まれている。

そんな俺を偽善だと罵る奴がいるかもしれないが……知ったことか。こちとら体を張って、命を賭けて人類の未来を取り戻そうとしているんだ。多少の我が儘を押し通して何が悪い。

もし、今後もマシュちゃんを戦場に立たせると言うのなら、彼女に自身の容態を余すことなく伝えろとだけ言って、俺は所長室を後にした。我ながら酷い事を言っているかもしれないが、これは大人として必要な事だと思う。

生き残れる可能性と、死しかない未来。その二つを突き付けてマシュちゃんに選ばせる必要がある、誤魔化しは利かないし、させない。ロマニはこの話は聞かなかった事にして、これからも変わりなくマシュと接して欲しいと言ってきたが……〝無理に決まっているだろ

うがたわけ〟と返しておいた。
　人が死ぬと言う瀬戸際に立たせておいて、それを笑って誤魔化すことなど俺には出来ないし、立香ちゃんにもさせたくない。もし仮に誰もマシュちゃんに自身の容態を伝えないのなら、俺が全てをぶちまけてしまう事だろう。
　だって、ありのままに受け取って、ありのままの答えを出させないと、きっと……後悔させてしまうと思うから。
　あーあ、上から物言って何様のつもりなんだか、嫌な大人になった自分に辟易しながら、今日はこれで終わりにしておく。
　……後で、久し振りにやけ酒しよ。

◇

「で、自分の意地の悪さに自己嫌悪して、酒に溺れに来たわけか。お前にしてはらしくないな」
「うるせー、ンなこと俺が一番分かってんだよ」
　夜も更け、人気の少なくなった食堂で珍しく晩酌をする事にした修司は、明らかに悪い酒の飲み方をしていた。それを赤い弓兵であるエミヤが嗜めるが、修司は構うなと突っぱねてしまう。
　しかし悲しいかな、絶え間なく鍛え続けて人体の外も内も人の限界を越えている修司が、今更酒程度で酔える筈もなく、彼の回りには空となった酒瓶だけが散乱するようになってしまっていた。
「おいおい、どうしちゃったんだウチの主戦力様は？　修験者染みた生き方をしていたお前さんが、まさか酒に溺れるなんて、こりゃ明日はいよいよ人類滅亡かぁ？」

そんな修司をからかうように現れたのは、槍を持ったケルトの大英雄クー・フーリンだった。そんな彼に修司とエミヤは一度だけ一瞥し……。
「……おいエミヤ、全身青タイツの変人が来たぞ。出禁にして追い出せ」
「そうしたいのは山々だが、生憎俺には其処までの権限はない。明日、所長代理に掛け合っておくとしよう」
「テメェ等揃って酷すぎだろッ！　喧嘩売ってンのか!?　ったく……で？　そこの新たな大英雄様は一体何に打ちのめされてんだ？」
「嫌な大人になった自分への戒め、なんだとさ」
「あぁ？」
「おいエミヤ」
　言われたくない内情を言われ、修司はエミヤを止めるが、生憎相手は腐っても英雄、咎められるよりも速く厨房の奥へと避難するエミヤに修司は舌打ちを打った。
「なんだぁ？　そんな事でイチイチ悩んでンのかテメェは？　普段はドン引きするほど威勢が良いくせに、こう言う時に限ってチキンなんだなぁ。お前さんが気にしても仕方ないだろうに」
「うるせぇよ。て言うか、何処まで広がってるんだその話、一応カルデアの機密情報だぞ？」
「あぁ、まぁ……気付く奴は気付いているだろうな。盾の嬢ちゃんの状態は、俺を含めて何人かは既に察しているぞ。賢者の先生も大分前に察していたみたいだしな」
「マジか、流石はケイローン先生。俺が気付いたのは第五特異点の攻略前辺りだったのに、既にそこまで見抜いていたのか」
「まぁ、彼は多くの大英雄を世に送り出してきた人物だ。他人に対する観察力は我々の中でも群を抜いているのだろうよ。それこそ、気で相手を見抜くお前以上にな」
　そう言って修司の前に一杯の水を差し出してくるエミヤ、ここら辺で止めておけと言う彼の気遣いを有り難く思いながら、差し出された

コップに入っていた水を一息に飲み干した。
冷ややかな喉越しが心地よく、火照った体に冷たく浸透していき、思考も必然的にクリアになっていく。そうする事でより自身のした事に対する意地の悪さに改めて自己嫌悪したくなった修司は、テーブルに項垂れながら二人に質問した。
「……なぁ、お前らならどうする？　これ迄一緒に戦ってきた戦友に対して、戦えば死ぬと分かっていて、それでも一緒に戦わせたいと思うか？」
「俺は当然だと思うね。戦場で散るのは戦士の誉れだ。死に損なえば戦士は死に場所を求める亡者となる。死ねる時に死ねるのはある種の救いだと思うがね」
「ケルトらしい野蛮な思想だが、確かに死は一種の救いであるのは事実かもな。だがこの場合、彼女には生き残れる選択肢もあるのだろ？
ならばそれに懸けるのも悪いことではないと思うがね」
「そうかぁ？　聞いた限りだとそれ、かなり可能性が低いんだろ？生半可に希望を与えるより、スパッと諦めた方が気も楽だろ」
「誰もが君みたいな自殺志願者だと思ってくれるな。可能性が低いと言っても、それは常識の範疇で語ればの話だ。常識なんぞ宇宙の彼方へ吹っ飛ばしているこの男に当てはまると思うなよ」
「まぁ、それもそうかもな」
「おいコラ、サラリと人をディスり始めるんじゃねぇよ」
普段こそは一歩間違えれば殺し合いにまで発展しそうな二人の癖に、こう言うときだけは恐ろしい程息が合う。誉めているのか貶しているのか分からない台詞に辟易としていると、食堂に二人の人影が入ってきた。気を探らなくても分かる聞きなれた足音、近付いてくる彼女達にクー・フーリンから肘で小突かれ、向き合うように促してくる。
エミヤもいつの間にか厨房の奥へと引っ込んでいるから、恐らくは自分に委ねるつもりなのだろう。薄情な奴め、そう恨めしく思いながらも今更逃げられないと観念した修司は、背後にまで近付いてきた二人へ向き直る。

足音の主は、やはり立香とマシュだった。
「……どうした二人とも、こんな時間までに夜更かしなのは感心しないぞ？」
「うん、そう、なんだけど……」
「実は、修司さんにお話があったのですが、お部屋にはいらっしゃらなかったので、クー・フーリンさんに教えて貰いここへ……」
意外にも、話の切り出しはマシュから始まった。最初に会った時とは別人にすら思えてしまう溌剌とした彼女に修司は無垢な子供が成長した場面を目の当たりにした気がした。
同時に此処へ二人を連れてきたクー・フーリンを睨み付ける。この男、最初からこのつもりで二人を呼んだらしい。そんな余計なお節介が好きなケルトの大英雄は、今は酒を呑んで知らんぷりを決め込んでいる。
ともあれ、マシュ自ら話があると言っている以上無視はできない。此方の対応を待っている二人に修司は今度こそ話に付き合おうと、改めて向き直る。
「それで、俺に話とは？」
「その、皆さんからから色々と聞きました。私の残りの寿命の事、これからの事、そして僅かな可能性があること。その全てをドクターやダ・ヴィンチちゃん、先輩から全て聞きました」
「そうか。で？　君はどうする？　このまま戦って寿命を削り、避けられない死を受け入れるか？　それとも、戦いを止めて僅かな生の可能性にしがみつくか？」
我ながら、嫌な言い方だと思う。けれど此処で一度現実を直視する必要が彼女にはあった。如何に手前勝手な理由で造られたとしても、彼女も今を生きる命である事には変わりない。生殺与奪の権利は他の誰にもない、故にこの決断は彼女自身に委ねるべきものだ。
「……結論を話す前に、一つだけ言わせてください」
「なんだい？」
「ありがとうございます修司さん、私の為に色々と考えてくれて、そこまで気に病んでくれるとは……正直、思ってもみませんでした」

腰を曲げ、深々と頭を下げてくるマシュに修司は目を丸くした。
「……それは、当然のことだ。俺は君達を足手まといのお荷物だと思った事はないし、俺が庇護する対象でもない。そんな対等な戦友に多少なりとも気に掛けるのは当然の事だろう」
「多少ねぇ……」
隣の席で酒を煽りながら揶揄してくるクー・フーリンを視線で黙らせて、修司は未だに頭を下げているマシュに顔を上げてくれと言い含める。

「私の寿命が短かいのは、何となく分かっていました。レイシフトに挑み、特異点を修復させる度にこの体は悲鳴を上げている。恐らく私の命はそう長くは持たない、ドクターが言うように私の命は近い将来燃え尽きるのでしょう」
自分が死ぬと言うのに、まるで恐怖を抱く事なく口にするマシュに修司は彼女の内にある純粋さに気付いた。彼女は自身の命に対してさほど執着心を抱いていない、ただ目の前の事実を受け入れ、達観しているだけだ。死という終わりを額縁の向こうにある終着地点程度にしか見えていない。
ならば、そんな彼女が抱く結論を誰もが予想できるのは、当然の事だった。少なくとも、この時点では。
「……これ迄の旅を続けてきて、私は沢山の人と出会ってきました。多くの別れを経験してきました」
燃え盛る冬木から旅が始まり、フランス、ローマ、オケアノス、ロンドン、そして北米大陸と、自分達は多くの世界を旅してきた。その全てがマシュと立香にとって困難の連続であり、修司から見ても大変な道程だったと断言できた。
「これからも、きっとそう言う旅が続くのだと、私は思うのです。楽しい事ばかりではいられない、苦しく困難な道程。でも、それだけではないと私は思うのです」
「どうだろうな。人理修復の旅は人類史との戦いだ。人類の歴史とは

戦いの記録、神話以前から続く血腥い歴史の繰り返しだぞ。君の語る理想は恐らく見付かりはしないと思うが？」
「それでもです。だって私は……先輩のサーヴァントですから」
　世界はマシュの様に純粋ではない。血にまみれ、争いに満ち、醜悪さとエゴの塊で出来たモノ、それが人類史の正体だ。それを分かった上で旅を続けたいと語るマシュ、決意と覚悟に満ちた彼女の瞳を見て、言葉では止められないと修司は悟った。
　詰まる所、マシュ＝キリエライトは死に怯えて生きる道を選ぶのではなく、人類史の旅を巡って終わる事を選んだ。失意はない、落胆も、失望もしない。全てを知り、それでも尚考え抜いて選んだ彼女の答えだ。
　ならば、自分もそれに応えよう。他ならぬ彼女の意思に報いるために……と、話は此処で終わると思っていた。
「それで、そのー……そこでお願いがあるんですけど」
「うん？」
「マシュが生き残れる為に、修司さんや周りの皆には色々とその……助けて貰えたらなぁと思いまして、はい」
　オズオズと手を上げ、申し訳なくそう口にする立香に修司は再び目を丸くさせ、彼女の言葉を理解するのに数秒の時間を有する事となった。
　え？　つまり……なに？　マシュはこのまま旅を続けたいけど、立香はマシュを死なせたくないから、自分達に全面的に協力して欲しいと？　そういうこと？
「い、いやだって、マシュも旅を続けたいと言ってるし、マシュは私のサーヴァントだし、でも私はマシュの先輩だからマシュを死なせたくないし……その、我が儘を言っているのは分かっているんです！でも、なんというか、諦めたくないっていうか、折角此処まで来ているのに諦めるのは……勿体ないといいますか」
　勿体ない。マシュの未来とか、人類史の記録とか、人理修復の旅とか、そう言うのを全て引っ括めて、勿体ないと言い切る藤丸立香に、遂に修司の我慢は限界を越えた。

「く、ククク……こ、これ迄色々とあったのに、勿体ないだけで済ますとか、本当に、本当に……ククク」
「む、無茶苦茶な事を言っているのは自覚ありますよ!?　でも、だって、嫌じゃないですか！　此処まで一緒に旅をしてきたのに、マシュだけを仲間はずれにするなんて！　いや、その時は私も諦めますよ？　マシュは私の後輩だから、最後まできっちり面倒を見ますよ！　でも――――」
「両方手に入れられる可能性があるのなら、私は、どちらも諦めたくないんです！」
　それは、数あるスペシャリストの中で何処までも凡人な藤丸立香だからこそ選べた第三の選択肢。マシュとの旅を諦めるのも嫌だし、自分を先輩と慕ってくる彼女を死なせるのも嫌。どちらか片方だけを選ぶのが嫌なら、その両方を掴み取ればいい。
　子供染みた発想。しかし、だからこそ彼女の一言は修司の目を覚ませるのに充分な威力を秘めていた。
「だから、お願いします！　私達の為にこれからも一肌脱いでください！」
「潔さが凄まじいです先輩！　ですが、私からもお願いします！」
　そう言って再び頭を下げようとする二人に……。
「あぁ、勿論、此方こそお願いするよ」
　修司は満面の笑みで承諾する事となった。
　その後は二、三回だけ言葉を交わし、夜も遅いからと眠るように促した修司は、二人を食堂から出ていく所まで見送ると、目元を手で覆った。
「――――なぁ、聞いたかよ。あのマシュちゃんが自分から我が儘を言って来たぞ」
「おぉ、聞いた聞いた。いやぁ、子供の成長ってのは早いもんだなぁ。ありゃあ将来とんだじゃじゃ馬になるぞ？」
「いいじゃないか、女性は元気である方が健康的で魅力的だ。尤も、節度も弁えるべきだと思うがね」
　初めて目にしたマシュの成長に、赤い弓兵と青い槍兵が色々と邪推

しているが、そんな雑音は既に修司の耳には入ってはいない。
　初めて耳にしたマシュの我が儘、残された可能性をどちらとも捨てたくはないと駄々を捏ねる人間性、そう、初めて耳にした彼女の心からの訴えに修司もまた心から震えたのだ。
「あぁ、良かったぁ……」
　若干涙声の混じった言葉、それを敢えて訊かなかった事にした二人、やはり慣れない酒は飲むものではないなと、自身の涙腺の弛さを情けなく思いながら、修司の夜は更けていった。

「ふん、全く修司め、つまらんことで悩みおって。相変わらず変な所で押しの甘い奴よ」
「良いじゃないですか。彼も人の子、思い詰め、悩むのまた、人にだけ許された特権ですよ」
「……我としては、もう暫く思い詰めても良かったのだがな。数少ない奴の愉悦ポイント、存分に味わってやりたかったものを」
「もう、またそんな事言って。……それで？　どうするつもりです？」
「なにがだ？」
「マシュさんの事ですよ。彼女の事、結構気に入ってたんでしょう？」
「ふん、貴様も貴様で目敏い奴よ。なんだ？　暇なのか貴様は？」
「まさか、こう見えて私はカルデア風紀委員の一人なんですよ？　貴方と違い、人の苦しみを肴に酒を呷る性悪ではありませんので」
「言うではないか田舎娘。だが……そうさな、この時代に彼処まで純粋な娘を捨て置くのも気が引ける。とは言え、臣下でもないモノに我の宝をくれてやるつもりもない」
「……では？」
「なぁに、誰にでもうっかりはつきものよ。あの娘の飲む薬に偶々癒しの秘薬が混ざり込んでしまうかもしれんが、うっかりであるならば

仕方ない事よ」
「ふふ、そうですか。うっかりならば仕方ありませんね」
「では、見るべきものは見たし、我もそろそろ戻るとしよう。そこの田舎娘も戯れも程ほどにしておけよ」
「ええ、ですが……その前に」
「ぬ？」
「征服王から、貴方が戦闘の時に手を抜いていたと聞いていたのですが、そこら辺の話――詳しく聞かせてもらえませんかね？」
「……」（ダッ!!
「あ、こら！　待ちなさーい！　逃げるのは王としてどうなんですかー！　て言うか足早ッ!?」
「フハハハハハ！　王の前進、付いてこれるなら付いてきてみよ！　ギルダーッシュッ!!」
「何やってんだアイツら？」
「放っておけ、走者（ランナー）の妖怪だ」
　その後、カルデアの注意換気事項に《緊急時以外の走り込みを禁ずる》という一項が追加される事になるのだが……割りとどうでもいい話。

その８５

Δ月Ω日

立香ちゃんとマシュちゃん、二人の気持ちを聞いて翌朝、この日自分は初めてマシュちゃんと模擬戦をする事となった。模擬戦といっても、軽く汗を流す程度。自分も完治したとはいえ、未だに看護師（ナイチンゲール）さんからＯＫサインを貰っていない身、気を解放せず、あくまで体の調子を整える程度の範囲でマシュちゃんとの組手に付き合う事になった。

これ迄多くの戦いを経て、戦闘経験も豊富になったマシュちゃんの強さは既にサーヴァント相手でも遜色なく、相手次第では有利に立ち回れると思える程に彼女の強さは地に足を着けたモノとなっていた。

そして、模擬戦を終えて疲弊しているマシュちゃんに気を分けて回復させると、今日の誘いに付いて理由を訊ねた。どうして昨日の今日で自分と組み手をしたいと思ったのか、叱るつもりではなく、純粋な疑問として訊ねると、マシュちゃんは最初こそは口ごもるが、少しずつ話してくれた。

なんでも、今の自分はまだ自身の体に宿る英霊の力を完全には扱いきれてないらしく、本来の宝具を扱えていない事に負い目を感じているらしい。そんな中、これ迄ギリシャとケルトの大英雄の二人も撃破した自分と組み手をすれば、何らかのヒントが掴めるのではないか、というのがマシュちゃんの狙いだったらしい。

騙してしまい申し訳ないと、マシュちゃんは謝っていたが、自分は別にそれくらい構わないと返した。だが、同時に彼女の抱える問題はある意味難しいものだった。

なにせ、自分はサーヴァントではなく今を生きる人間な訳で、当然宝具なんてモノは持ち合わせていない。宝具というのはそのサーヴァントを知らしめる切り札であり、そのサーヴァントの象徴だと言われている。

アーサー王のエクスカリバー、と言った風にサーヴァントにはその伝承に纏わる必殺技が一つ二つ持ち合わせているらしく、マシュちゃんを助けた英霊も例にもれず宝具を待ち合わせている様で、それが使えずにいる自分が情けないと、マシュちゃんは落ち込みながら教えてくれた。

教えてくれたのはいいが……正直、自分にはどうしようもない話である。いやだって、本当にどうすればいいのか分からないんだモノ、宝具って聞いた話だとサーヴァントの必殺技というのは分かるけど、俺が扱っているようなモノとは根本的に違っているみたいだし、宝具の中には心象――――つまりは心の在り方に深く作用するモノまであるという。

だから、宝具を完全に扱えていないのはマシュちゃんの気の持ちようなのではないかと、それとなく言ってみた。マシュちゃんの扱う武器は盾だ。盾というからにはその本質は攻撃や破壊ではなく、守護する事に重きを置いているのかもしれない。例えるならレオニダス王、例えるならジャンヌさん、と言った具合に守りたいものを強く願った時に真価を発揮するタイプの宝具。と、自分は睨んでいる。

そこまで言うと、マシュちゃんは笑いながら先輩も同じことを言ってましたと返した。まぁ、自分も立香ちゃんも魔術に関しては素人に毛が生えた程度の知識しかないんだけどね。ともあれ、マシュちゃんも気持ちを吐き出したことで落ち着いたのか、シミュレーター室から出てくる迄にはすっかり元気になっていた。

今回の模擬戦で疲弊した分の体力は、自分の気を分け与える事でカバーしておいた。彼女の容態はロマニやスタッフの皆がそれとなく気を使ってくれているから、安心……とまではいかなくとも、落ち着いて見ることが出来ている。

ただ、マシュちゃんや。幾ら俺が気を分ける際に頭に触れているとは言え、人をお父さん呼びはどうかと思うぞ。確かに前々から色々と気に掛けてはいるけれど、そこは普通お兄さんとかだろう。何故よりによってお父さんなんだか。

どちらかと言えば、ロマニこそがマシュちゃんの父親みたいなもの

だろ？　昔から、それこそ俺以上にマシュちゃんを気にかけていたみたいだし……。
なんて言い返すと、マシュからみてロマニはお父さんというより親戚のお兄さん、もしくは叔父さんポジションなんだとか。ロマニェ……。

＊月δ日
マシュちゃんの限られた寿命を克服すべく、秘密裏に俺が各著名人達に相談を持ち掛けた所、ほぼ満場一致で俺と王さまの会社が手掛けたＧＮドライヴが一番可能性のある手段という結論に至った。
最初こそは人の細胞を遺伝子レベルで変革させるＧＮ粒子に僅かばかり難色示す人も出ていたが、テスラさんやエジソンさんの熱意ある説得の下で納得したりと、今日はホンの少し知恵を借りるだけのつもりだったのにいつの間にか大規模な定例会議みたいになってしまった。
しかも場所が自分の修行場なのだからいろんな意味で申し訳ない。最初はエジソンとテスラさん、バベッジさんだけだったのに、いつの間にかマシュと交流のあるサーヴァントの皆さんが数多く集まってくるのだから、本当に色々と申し訳なかったです。
そして、マシュちゃんの容態の回復の為にＧＮドライヴ製造の是非を問う話し合いが行われたが、やはり少なからず反対意見の持つサーヴァントは存在していた。
いや、この場合は反対というより懸念、あるいは心配ごと、といった方が正しい。ＧＮ粒子による人体の影響は凄まじく、その効果もまた絶大。身体能力が劇的に向上したり、目が光るようになったりする身体的変化は人間社会に於いて多大なる波紋を呼び起こす事になり、差別による虐め問題が横行する可能性が大きい。
そうならない為に目の光を抑える訓練や、精神面での援助のカウンセリングを徹底させたりしているが、それはあくまで俺がいた世界での話だ。エジソンさんやテスラさんはこの場合はマシュちゃんだけに対する処置だからそこまで気にするほどではないと言うが、アタラ

ンテさんの様に万が一に対する危惧を示唆したりと、話し合いは一時間近く続いた。
エジソンさん達の肯定派の意見も、アタランテさんやブーディカさん、頼光さん達のような人達の否定的な意見も、自分にとっては無視できない話だ。
そんな悩んでいる自分達にエジソンさん達と一緒になって否定派の人達を説得したのが看護婦長であるナイチンゲールさんだった。救われる命があるのならそうするべきだと、勢いのある彼女の一喝に押され、ＧＮドライヴを製造する際はカルデアのスタッフとサーヴァントを数名立ち合わせる事を条件に会議は可決された。
で、可決された事で自分にＧＮドライヴの製作を許されたのはいいんだけど……問題は、誰に立ち合って貰うべきか、である。
サーヴァント側は出来れば反対派の人に立ち合って貰いたい。エジソンさんやテスラさんと言った発明者は何だかんだ造る事に夢中になる人が多いし、公正な目線を保つのは難しいと思われる。けれど、反対派の人も自分の扱うものに対する知識は乏しい為、あまり意見を言う事は出来ないらしい。
博識且つ公正で、厳格的な視野を持つ人物……やっぱり、今回もケイローン先生に頼むしかないかなぁ。あの人も最近カルデアで色んな人から相談を受けていて忙しいみたいだし、あんまり負担を掛けたく無いんだよなぁ。
他にも何故か話し合いに参加していた天草四郎が目をキラキラさせて立候補してきたが……なんか嫌な予感がするので却下した。アイツ、ＧＮ粒子が人体にもたらす影響の話をしたら、矢鱈と食い気味で質問してきたんだよなぁ。特に、思考領域の拡張と人体寿命の延長辺りで、アイツ、まだ人類救済とかに拘ってるのかよ、自重しろよいい加減に。
まぁ、ＧＮドライヴの製作の件については一先ずこれで由としておこう。幸いにも物資は重力室を造ったもので賄えるし、設計図も俺の頭に保存されているし、何だったらグランゾンのデータベースにアクセスすれば元の世界での稼働実験のデータも残されている。

作る際は此方から連絡するし、その時は反対派の人達が厳正な判断で立会人を決めることを約束し、話し合いは終了した。
ただ、その際に発明者数人から助手は必要ないかと猛アプローチしてきたのが何気に凄かった。特にエジソンさんとテスラさん、二人ともＧＮドライヴという次世代の動力炉心に興味津々なのだろう。確かに二人の力を借りれば完成まで大きな時短に繋がる。
しかし、そこで第三者が待ったを掛けてきた。ダ・ヴィンチちゃんである。この人、普段は自分の工房に引きこもっている癖に、こういう話になると露骨に関わってくるんだよなぁ。しかも、駄々っ子気味に。
床に寝そべりながらヤダヤダ言ってくる万能の天才とか、これ、歴史学者に聞かせたら悶絶死しそうな光景じゃね？
兎も角、これでＧＮドライヴ製作の目処は立った。後は造るタイミングと、設備の設営、そしてロマニのＧｏサインだけである。さぁ、これから忙しくなってくるぞぉ！

＊月√日
マシュちゃんの救済処置の一つとして提案されたＧＮドライヴの作成、その為の設備の設営が今日で完了した。特殊な炉心を造るのだから場所は思いの外取ってしまい、場所作りの為に格納庫にあるシャドウボーダーを隅に追いやってしまったのが心苦しかったが、取り敢えず設備の方は完了したと言って良いだろう。
既に前回の日記から数日が経過しているが、サーヴァントの皆のお陰で一週間も掛からずに設営が完了したのだから、時短的にかなり縮められた事だろう。
ＧＮ粒子は地球上の重力下では製造が困難な代物だ。故に製造環境は重力の変動できる機器が必要な訳で、重力室の修行場から取り出すのに若干手間取った。という程度だ。協力してくれたバベッジさん達には今度、何かしらの礼をしておくべきだろう。
そして、問題の立会人なのだけど、意外な事に騎士王ことアルトリアさんが俺の監視役に付くことになった。意外と言えば意外な人物

だが、確かに彼女なら厳正な判断で人を見るだろうし、止めるときは容赦なく止めてくるだろう。
ただ、今回の選出はアルトリアさん本人の立候補も理由の一つだそうだ。そう言えばアルトリアさんも時たまマシュちゃんと何かしらの話をしていたのを見た記憶があるから、多分その辺りが立候補の理由かな？
興味本意で訊ねると、なんかアルトリアさんの表情はやや暗くなった。彼女が言うにはあの盾を持つマシュちゃんを死なせたくないというのが本音らしい。
……もしかしたら、アルトリアさんはマシュちゃんの内にいる英霊の事を知っている？　彼女の言い方に何となくそう思ったが、なんか訳ありっぽいのであまり言及はしないことにした。
さて、これで準備は整った。後はロマニからのＧｏサインを待つばかりである。
――――いや、助手にする人の選別があったか。個人的には誰でも良いんだよねぇ、皆時代を築いた立役者だし、邪魔になることは有り得ないんだから。
ただ、このまま放置しておくと二人の殴り合いが始まりそうなので早急に決める必要があるだろう。あー、頭いたい。
なんて愚痴を溢すと、アルトリアさんから「貴方も大変ですね」と肩を叩かれた。その慰めの一言には矢鱈と実感が籠っていた気もするけど……気のせいだよね。

＊月＊日
――なんか、無人島でバカンスする事になった。
……いやなんで？

その８６

＊月α日

新たに発生したという微小特異点を観測し、ロマニとダ・ヴィンチちゃんの勧めで、とある無人島にバカンスする事になった自分達は、取り敢えずこれ迄の疲れを癒す為に、慰安旅行という名目上で遊びにやって来た。

此処の所、自分はＧＮドライヴの製作にカルデアの格納庫に籠りっきりだったから、今回の旅行はそんな自分に対するロマニ達の気配りの部分も合ったのだろう。マシュちゃんの一件以来、あまり話すことがなく、互いに何処か避けていた時もあったから、今回の話は関係改善の為にも必要な事だったのだと思う。

ただ、事前に話があった事もあり、今回レイシフトした所はマジもんの無人島だった為、最初は衣食住の確保の為に色々と忙しかった。水着で。

そう、今回のレイシフトはまさかまさかの水着の格好での出発だった。マシュちゃんも普段の鎧姿とは全く別の水着仕様となっており、立香ちゃんも水着の礼装で特異点の調査に乗り出した。

最初は露出の多い水着なんかで大丈夫なのかと危惧していたが、そこは万能の天才ダ・ヴィンチちゃんが手掛けた一級品。見栄えと性能の両方を重視したスペシャル礼装なんだとか。まぁ、立香ちゃんが喜んで受け入れているのなら別に良いんだけどね。

一応俺の水着も用意してくれたみたいなんだけど、立香ちゃんのとは違って単に破けないだけの礼装らしく、リソースを立香ちゃんに注いでいた為に其処まで拘れなかったとか。

いや、全然いいよ？　自分としては頑丈な礼装ってだけで有り難いし、汚れる事以外気にする必要がないから、着心地も含めて個人的には大満足な仕上がりだ。

ただ、俺が特異点の調査に乗り出している合間、製作途中のＧＮド

ライヴに手を出すなと言ったのに、終始ニマニマ顔をしていたダ・ヴィンチちゃんの顔が今でも気になって仕方がない。本当はこの日記を書いたら寝るつもりだったけど、念の為に見に行った方が良いのかもしれない。

まぁ、そんな風に色々と不安要素はあるものの、取り敢えず調査に協力してくれる他のサーヴァント達と一緒にこの無人島で開拓する事になったのだが……調査をする面子が問題だった。

玉藻さん、マリーさん、アルトリアさん、女海賊の二人（アン&メアリー）、スカサハ、マルタさん、清姫ちゃんと、まぁ女子の割合が多いこと。しかも全員がスカサハの手引きで水着仕様となるのだから、皆普段よりはっちゃけてしまっている。いや、水着姿になったのはもう少し後なんだけどね。

他にも黒ひげやケルトの三槍、小次郎さんとカルナとかがいたんだけど……黒ひげが、早い段階で再起不能（リタイア）となり、カルデアへ強制送還された。

いや、本当なら自分が調べようとしたんだよ？　前の修行で空を自由に飛べるようになったし、丸一日程度なら遠泳しても問題ないから、自分が調べようかと立候補しようとしたんだけど。

黒ひげの野郎、まんまと女海賊の口車に乗せられて呆気なく単身で大海原へ出ていきやがった。やめておけと言ったにも関わらず、ご褒美が待っていると丸太に跨がって板一つで大海に出る黒ひげの背中は、何処と無く哀愁が漂っていた気がした。

で、その間自分が今度こそ空飛んで島を調べてやろうと思ったのだが、この島、どうやら普通の無人島ではないらしい。カルデアとの通信は途絶えてしまったし、妙にデカイヤドカリとかがウヨウヨいるのだ。しかも凶暴で、カニらしからぬ俊敏さを持っているなど、どう考えても普通の生態系ではない。

だからこそ自分が空を飛んで安全な場所を見付けようとしたのだが、この島、想像以上になにもない。火山らしきものがあったりするのが見えたりしたが、思っていた以上に森林で鬱蒼としていた為に、あまりハッキリとしたことは分からなかった。

仕方がないので一先ず黒ひげが戻ってくるまで待とう、という結論になり、その日一日は浜辺で見張りを交代しながら黒ひげが来るのを待った。この日の夜、いつもと違う夜空に見惚れていたマシュちゃんと一緒に談笑している立香ちゃんを見てホッコリとしたのは内緒だ。

そして次の日。瀕死の状態で浜辺に打ち上げられていた黒ひげから告げられたのは、割りと切羽詰まった情報だった。海から見える星の位置はメチャクチャで、潮の流れも相当きつく、並の船では島から脱出するのは難しいと、嘘偽りなく言われた。

ただ、黒ひげはその報告だけで終わることはせず、最期に呪いを吐きながら消えていった。無人島という閉鎖された空間で自分だけが美女美少女とキャッキャウフフ出来ないと、血涙を流しながら悔しがっていた。

聖パイに呪いあれー！ってさ、あの時の黒ひげの断末魔は自分もちょっぴり気圧されてしまった。いや、本当は助けるつもりだったんだよ？　自分の気を分け与えれば、少なくとも黒ひげは此処で脱落する事はなかった。

ただ、彼を助けようとした際、メアリーが銃口を押し付けながら笑顔で言ってくるんだもの、「余計な事をしたら……分かってますね？」って！

こえーよ。お前らそんなに黒ひげが嫌いかよ、アイツ海賊としてならやべー奴だけど、普段は割りと話の通じる面白い奴なんだぞ？　趣味も合うし、俺は割りと話のしやすい奴なんだけどなぁ。

そんな自分の気持ちなど露知らず、黒ひげはリタイア。絶海の孤島で漂流する事となった自分達はこうして無人島でのサバイバルが始まったのだ。

まぁ、取り敢えず自分が適当に木々をへし折ってログハウスを四軒程立てたから、少なくとも寝床には困らないけどね。

＊月√※日

前回の続きだが、無人島に漂流する事になった自分達はスカサハがルーンで脱出の為の船、その資材を集めたりしながら、無人島でのバ

カンスをなんだかんだ楽しんでいた。
環境を破壊しない程度に島を開拓し、たまたま生息していた家畜になる動物達を自然の法則に反しない程度に繁殖させ、船が完成する頃には島は人間でも住みやすい環境となっていた。
しかし、その間にも何かと問題が起きたりした。巨大な猪にディルムッドが死にかけたり、マリーさんが可愛いうり坊達と親しくなったり、そのうり坊達が巨大猪――――魔猪に迫害されていたりと、割りと波瀾万丈な日常となっていた。
魔猪は自分を含めた最前線で活躍するサーヴァント達が揃っていた事もあって、特に苦戦することなく地に沈める事ができた。ただ、この魔猪はやたらとタフでその癖逃げ足が速い。その癖何度も出てくるのだから、いい加減猪鍋にでもして喰ってやろうかと思った。玉藻さんからは悪食ですわよと窘められたから止めておくが、せめて毛皮位剥いでやろうと思った。
それ以外は小次郎がマルタさんに戦いを挑んだり、スカサハが俺に死合いを申し込んでくる事以外、特になにもなく、平和に俺達の夏は過ぎていった。いや本当、ケルトもそうだが小次郎もしつこくない？
なんでそんなに斬りたがるのかなぁ、そんなに斬りたいならヤシの実でも斬ってりゃいいのに。
お陰でこの無人島生活でマルタさんと割りと親しくなれた気がした。主に厄介な奴に付きまとわれる苦労人的な意味で。
そして、そんなマルタさんにサバイバルの手解きを一通り教えると、お陰でマスターの役に立てたと喜んでくれた。マルタさんも妹弟がいたみたいだから、年下の子の面倒を見るのは得意らしく、立香ちゃんの事も何かと気にかけてくれていたらしい。
玉藻さんや清姫ちゃんも限られた食材で連日ご飯を提供してくれたから、此方も頗る助かっていた。日頃から良妻賢母と自負しているだけあって玉藻さんも手際がいいし、清姫ちゃんも火の扱いはカルナ並みに上手い。その慣れた手付きは生前からくるものなのだろうか？
気になったのでそれとなく訊ねてみると、なんだか二人は苦笑いを

浮かべる始末。聞かれたくない事だったのかな？　なんて考えていると、清姫ちゃんがそれとなく教えてくれた。曰く、地獄の紅閻魔様に鍛えられたの事。

何故に閻魔？　いや、そもそも地獄で料理とか学べるの？　色々と突っ込みたくなる話だが、二人ともそれ以上は話したくないのか、苦笑いを浮かべるだけでクチを硬く閉ざしてしまっていた。なんだか申し訳ないことを聞いてしまったなと、若干後悔した自分は、それとなく謝り、この話は一先ずこれで終わることにした。

そして、マリーさんとアルトリアさんなのだが……マリーさんは兎も角、アルトリアさんが酷かった。何が酷いって、獣一匹狩るのに宝具をブッパしやがったのだ。しかも森のど真ん中で、どや顔しながら！

だから、思わず咄嗟に彼女の頭を引っ張叩いてしまった。いやだって、他の動植物が共生している森を獣一匹狩るために宝具ブッパするとか、猪だって壁を前にすると止まったりするのに、思い切りが良すぎるだろう。

カルナだって自身が炎を扱うものだから、力を奮う際にメチャクチャ周囲に気を遣ってるんだぞ？　自分もそう、この島に来てからかめはめ波なんて撃ってないし、使う技だって気を纏う時以外殆んど使っていない。

だから、もう少し威力を抑えて慎重に行動しろと遠回しに言っても、なんか自慢気に話をするだけであんまり懲りてはいなかった。

あまりにも自然を蔑ろにする言い草につい頭に来たものだから……その、柄にもなく、つい説教を垂れ流してしまった。生態系や食物連鎖について、自分なりに分かりやすく説明するが、アルトリアは「で、でもアグラヴェイン卿は誉めて……」なんて言うものだから。

「それ、誉めてるんじゃなくて呆れてるだけだからね」と、懇切丁寧に説明しておいた。するとアルトリアは顔面蒼白になって項垂れ、以降は大人しくなった。

流石に言い過ぎたかなぁ？　でも、アルトリアだって外見は兎も角

中身は歴とした成人した女性だし、なんなら自分よりも年上だ。今回のやらかしは霊基を変えた事への弊害という事で、次からは気を付けようという形で説教は終えた。
マリーさんは……うん、普通に見てて癒しになったわ。うり坊達と戯れながら、それでも自分に出来ることを懸命に頑張っている姿は元王妃であることを差し引いても美しく見えた。
まぁ、アルトリアさんも立香ちゃんとマシュちゃんの護衛に一役買ってくれてたし、他の皆と同じ様に頑張っていたしね。この日のカレーは彼女にだけ何時もより具を多くよそっておいた。
その後、船が完成して皆で島を脱出し、けれど辿り着いた場所は千年以上経過した元の島だったり、うり坊が喋ったり、元凶である魔猪をぶちのめしたり聖杯を回収して特異点を修復したりと、ワレながらハチャメチャな日々だったけど。
この無人島での生活は、総じて悪いものではなかったと思う。うん、きっと……良い思い出になると、俺は思う。
――因みに、小次郎&スカサハへの対応は自分とマルタさんが手を組んで対処する事になりました。控え目にいって、メチャクチャしんどかったです。
その後、カルデアに戻った後も自分とマルタさんの交流は続いたりしている。

「あら修司、アナタも休憩？」
「そんな所ッスね。マルタさんもトレーニングの帰りですか？」
「まぁね。レオニダス王や賢者ケイローン程ではないけど、私の所にも生徒が来たりするもんだから、その対応で必死で……こちとら、そんな柄じゃないってのに」
「はは、マルタさんも面倒見がいいッスからね。つい頼りたくなるんじゃないッスか？」

「まぁ、頼られる分には構わないけど……て言うか、なんでアンタも体育会系なノリなのよ？」
「あぁ、多分これ学生の頃の癖ッスね。俺、高校は陸上やってたから、その名残ッス。マルタさんに似た先輩（OB）もいたし」
「ふぅん。ま、良いわ。今日は気分がいいから、奢ってあげる。付き合いなさい」
「シャーッス！　マルタ先輩、アザーッス!!」
「そのノリ止めなさい。ぶちのめすわよ？」
「ふぐぐぐ、私も水着の霊基になれたら……！」
「何を言ってるのよこの聖女は」

＊月√δ日
マシュちゃんの容態の回復という名目で始まったＧＮドライヴの製作、途中で無人島にレイシフトしたりハプニングがあったが、今回の工程でどうにか形になる所までに至った。
エジソンさんやテスラさん、バベッジさん等、多くの先達者の皆の協力のお陰で、ＧＮドライヴの一つが完成した。これで半分、一個が完成出来た以上もう一つが完成するのはそう遠い話じゃない。後は二つのＧＮドライヴが同率の稼働領域を同調、両立の調整をしながら補助機である《オーライザー》を完成させるだけである。
しかし、果たして資材は足りるのか。いや、ＧＮドライヴをもう一つ作る分にはギリ足りる。問題は、二つのＧＮドライヴを臨界値まで高めてくれるオーライザーの分の資材だ。
不味い、計算が狂ったか？　此処まで来ておいて計画が頓挫するのはどうしても避けたい。設計も完璧だし、製作過程も何も問題はない。多くの英霊やスタッフの皆の力を借りて完成しようというのに、こんなつまらない結果で終わるのは自分としては何としても避けたい事だ。
何か、何かないか……別に一から作らなくてもいい、せめてＧＮド

ライヴを二つ載せて、それでも余裕がありそうな乗せるものとか無いものか……。

いや、あった。そう言えばＧＮドライヴを造っている最中、ずっと格納庫で埃被っていた黒いボディーがナイスな車体が、眠っていた!!

こ、これしかない。二つのＧＮドライヴを搭載させても尚、耐えられそうな装甲車！　シャドウボーダー、君に決めた!!

善は急げ、しかし急がば回れともいう。カルデア所長代理であるロマニ＝アーキマン、彼への交渉を考えながら、一先ず今日は休むとしよう。

ここへ来てまさかのシャドウボーダーへの改造計画。あのゴツい装甲車をどういじってＧＮドライヴ二つを搭載するのか、考えただけでもワクワクするっ！

おっと、いけないいけない。ＧＮドライヴの製造はあくまでマシュちゃんを助ける為のモノ、遊び半分ではなく、キッチリとした大人として、確りとした態度で挑まなくでは。

……シャドウボーダーって、幾らで買い取れるかなぁ。

その８７

＊月√※日

シャドウボーダーへのＧＮドライヴの搭載を計画する為に、思い切ってロマニに直訴する事となった今日。二つのＧＮドライヴを連結、同調させて初めて可能となる〝ツインドライヴシステム〟。その効果と副作用をロマニやダ・ヴィンチちゃん、他の有識者達の前で自前のＰＲ方式で発表する事にしたのだが……結果的に言えば、万々歳な成果を得た。

いや手応え自体はあった。前々からツインドライヴシステムについて知っていたエジソンさん達は勿論、反対派の人達だって幾つかの質問に答えている内にある程度理解を示してくれたし、ダ・ヴィンチちゃんに至っては私にも一枚噛ませろと駄々を捏ねてくる始末だ。

カルデアスタッフの人達だって最初こそ信じられないといった様子で驚いていたが、説明を進めていくに連れて納得し、自分の計画を支持してくれるようになった。

そんな中、唯一ロマニだけはこれを由としなかった。しかしその理由は不満や反対といった否定的なモノではなく、寧ろロマニも出来るならいいよという比較的緩いスタンスだったのだ。

そんな彼が首を縦に振らなかった理由、それがシャドウボーダーはあくまでカルデアが保有するモノであり、それは詰まる所オルガマリーちゃんの実家であるアニムスフィア家のモノであるから、という、至極真っ当な理由だった。

正論である。幾ら前所長やオルガマリーちゃんが倒れたと言っても、シャドウボーダーは元々マリスビリーがレイシフトの失敗に備えてのセカンドプランとして用意したモノ、故人の所有物を勝手に扱うのは流石の自分も気が引けた。

折角此処まで来たというのに、ここで手詰まりか。なんて項垂れていると、結論を出すにはまだ早いとダ・ヴィンチちゃんが言ってきた。

曰く、カルデアは確かに元々はアニムスフィアが関わっていたが、その背景には国連の思惑も絡んでおり、更に言えばこの世界にいた自分も国連には大分大きな貸しがあるという。
更に言えばカルデアの運営には国連も出資をしているのだから、謂わばカルデアは世界の皆のモノ、人類最後の砦であると同時に、人類の所有物でもある。
だから、自分が一部好きに扱っても、それが人類の為になるのなら大丈夫！　なんて暴論を叩き付けて来やがったのだ。
いやどういう理屈？　そんな暴論を越えた超暴論が罷り通っていいのか？　ジャイアンでも其処までのメチャクチャな事は言わないぞ？　ウインクしながらドヤ顔しているダ・ヴィンチちゃんが、この時ばかりはアホの子に見えた。
ロマニは何かを言おうとしていたけど、ダ・ヴィンチちゃんに言い負かされて押し黙ってしまった。おい、もう少し頑張れよ所長代理。自分が言うのもなんだけど。
ともあれ、こうしてシャドウボーダーの改造計画の許可は降りた。もう一基のＧＮドライヴ製作の為に、協力してくれるサーヴァントの皆には続けて辛い目に合わせてしまうが、それはどうか了承して欲しいと、自分が頭を下げることで会議は修了する事となった。
さぁ、明日からまた忙しくなるぞ。明日はシャドウボーダーの本格的な性能調査もするし、英気を養う為に今日は一先ずこれで終わることにする。

「いやぁ、修司君の考えていることは本当に面白い！　ツインドライヴシステム！　名称もそうだが、ＧＮドライヴという我々にとって未知の炉心を二つも使ってのシステムとは、我ながら贅沢な代物だよ」
「全く、他人事だからって好き勝手言っちゃって、どうしてくれるのさ！　もしこの事が国連、ひいては魔術界隈に聞かれたら、大事処じゃ済まなくなるんだぞ!?」
「そうかい？　私は考えすぎだと思うがね。修司君のやろうとしているのは人類の躍進そのものさ、魔術師が拘る神秘には一切触れていな

いし、人類の未来を考えれば、修司君のやることは寧ろメリットしかないよ？」
「……その対応に、僕の胃が悲鳴を上げそうなんだけど？」
「君は所長代理だろう？　それくらい頑張りたまえよ。彼等が日頃から挑んでいるモノに比べたら、なんて事はないだろう？」
「……そうだね、確かに君のいう通りさ。なら、言い出したのは君なんだから、修司君の作業に手を貸したりせず、僕の手伝いだけに集中してよね！」
「んなぁっ!?　それは、幾らなんでも酷すぎるだろぉっ!?　ロマニ＝アーキマン！」
「うるさいうるさーい！　人にばっかり負担を押し付けて、自分だけ楽しい思いをしようだなんてそうはさせないからな！　エジソンとテスラの自慢話に、精々悔しがるがいいさ！」
「ふぐぐぅっ!!」
グヌヌっているダ・ヴィンチとやーいやーいと煽るロマニ、二人の言い争いは夜が更けても続き、後に両者とも、見回りに来た看護師（ナイチンゲール）にしばかれた模様。

＊月√Ω日
もう一つのＧＮドライヴの完成まで後僅か、今日もエジソンさんとテスラさん、バベッジさんという有識者の皆と作成段階を進めていると、とある一人の女性サーヴァントが格納庫へと押し入ってきた。
そのサーヴァントの名はメイヴ。先の特異点の元凶で、あのクー・フーリンの為に文字通り全てを捧げた女傑が、不機嫌さ全開で自分の所へやって来たのだ。
蹴破る勢いで格納庫へと押し入ってきて、ズカズカと自分の所へやって来たこの女王は、開口一番に決闘を申し込んで来やがった。いやー、慣れって怖いね。殺気をこれでもかと滲ませて凄んでくるメイヴに、自分はただ「あぁ、またか」みたいに順応しているんだもん。因みに、押し入ってきた時点で何となく彼女の言いたい事は察していました。

それで、この女王メイヴはやはり先の特異点の出来事の記録を見ていた様で、自分の全てを捧げたクー・フーリンが負けるとはあり得ないと地団駄踏みながら抗議してきたのだ。「私の全てを捧げたクーちゃんが、お前なんかに負けるわけがない！」てさ、なんかこんな長いタイトルのライトノベルありそうじゃね？

いや、実際に戦って勝っているから自分はこうして生きている訳じゃん。どんなにお前が否定しても、勝負の結果は変わらんよ？と、ＧＮドライヴの製作の邪魔をされ、若干苛立った自分は、我ながらド直球でそう言い返した。

そしたらこの女王様、「だから仇討ちの為にわたしと勝負しなさいよ！」なんて宣って来やがったのだ。当然、そんな彼女の我が儘に付き合うつもりはないし、今は別件で忙しいから無理だと断ろうとしたのだが、この女、従わないならＧＮドライヴを破壊すると脅して来やがったのだ。

本当、我ながらプチんと来たよ。そりゃあ素っ気なく断った俺にも言い方が悪かったかも知れないけどさ、なんでモノに当たろうとするのかなぁ？　仮にも英雄としてそれはどうなんかね？

しかもこの女、頭にキている俺に何を思ったのか、ニヤニヤとほくそ笑みながら煽ってくるんだよ。うん、見た目は可愛らしい少女だし、下手に相手にすると後でケルトの人達に変に絡まれるのがイヤだから、これまではあまり関わろうとしてこなかったけど……。

もうね、ボコボコにしちゃいましたよ。シミュレーター室に入り、模擬戦が始まった途端に自分は界王拳を発動させ、有無を言わさずに奴の鼻に指を突っ込んでぶん投げてやった。

これで戦意が折れるかと思っていたが、そこはケルトの女王。その後も鞭を振るってきたり、肉弾戦を仕掛けてきたが、日頃から某影の女王からちょっかいを受けていた自分からすれば、奴の動きはお粗末に過ぎた。奴の動作一つ一つにカウンターで張り手を見舞い、その都度吹き飛ぶのだが、この女王もは思った以上にタフだった。最終的には宝具まで出してきたので此方も軽めのかめはめ波で迎え撃ち、メイヴを黒焦げにすることで、模擬戦は自分の勝利で幕を下ろした。

シミュレーター室の被害も力を抑えて戦っていた為に然程被害は出ず、見学に来ていた複数のサーヴァント達によって結界が張られていた為に修復も滞りなく進みそうだった。
今回の件でＧＮドライヴ完成に一日程遅れてしまったが、完成の予定日迄には余裕で間に合いそうなので、エジソンさん達からは気にするなと励まされる事となった。
今回の件で女王メイヴも納得し、大人しくなるだろうと、クー・フーリンから聞いたので自分はそれに期待する事になった。
……大丈夫だよな？

「ねぇ、ねぇーってば！　聞いてるの!?」
「うるっせぇな。耳元で騒ぐんじゃねぇよ」
「だって、シーちゃんてばずっと私のこと無視するんだもの」
「朝は静かに過ごしたいんだよ俺は。ていうか引っ付いてくんな。そもそも誰だよシーちゃんって」
「えー？　だってシュージでシューズと似てて紛らわしくない？　シーちゃんならクーちゃんと名前の響きが似てて可愛いし、何より私の好みだもの！」
「そんな訳でシーちゃん、私のモノになりなさい」
「いやどういう理屈？　そもそもお前、クー・フーリン一筋だったんじゃねぇのかよ？」
「勿論、クーちゃんは大好きよ？　でも、それと同じくらいつよい勇士は大好きなの！　ほら、私ってば可愛くて美しいじゃない？　私の側には常に強者がいるべきだと思うのよ！」
「知らねぇよ。アンタの道楽に付き合うつもりはねぇし、相手にしていられる程、俺は暇じゃない。悪いが、アンタの相手はこれっきりにさせてもらうよ」
「アン、つれない奴。……ふふ、本当に面白いやつ。最初はムカつく奴かと思ったけど、結構可愛いところあるんじゃない」……カリカリ

「いいわ、アンタがそういう態度を取るのなら、私にだって考えがあるわ。コノートの女王の恐ろしさ、たっぷり味わわせて上げる！」……カリカリカリカリ
「って、さっきからカリカリうるっさいわね！　何よさっきか――ヒッ!?」
「メイヴ、貴様、何を、している？」
「す、スカサハ!?　な、なんで壁をカリカリ引っ掻いてんの!?　普通に怖いわよ!?」
「修司、私の、獲物（モノ）、横取り、ダメ、絶対」
「わ、分かったから！　そんな顔で近付かないで！　怖いから、笑えない位に怖いからー！」
　その後、カルデアのとある通路で一人の女王の悲鳴が木霊したとか。
「これだからケルトは！」

√α月α日
　遂に、GNドライヴがもう一基完成した。最初に造ったモノと寸分違わない規模と質量、これならツインドライヴシステムへ移行した際も、理論通りの出力が期待される事だろう。
　後はこれをシャドウボーダーに搭載させて、ツインドライヴシステムに対応出来るように改修し、調節させるだけである。幸いな事にシャドウボーダー自体が完成されていない未完の状態だ。エジソンさん達やダ・ヴィンチちゃんの力を借りれば一年も待たずに完成に至らせる事が出来るだろう。
　これならば、マシュちゃんの治療も上手くいく筈。そうなれば、Aチームの皆もあのコフィンから解放させる事だって夢物語ではなくなる。
　……いや、焦るな。完成まであと少し、確実な完成へ近づく為に、一度全体への見直しをする意味を含めて格納庫から一時離れた方がいいだろう。
　それに、製作ばかりに気を取られて自分の腕を磨き上げるのを忘れ

ていた。ロマニから次の特異点について説明もされたし、これから向こう二週間はふたたび重力室で修行を開始しようと思う。
あ、今度はちゃんと外と連絡取れるようにしますよ？
また前みたいに心配させたくないし、社会人足るもの、報連相はしっかりしないとね。
しかし、次の特異点で六つ目か。これまではフランス、ローマ、オケアノス、ロンドン、北米大陸ときて規模もバラバラになっている。
今回は一体どんな所で、どんな手強い奴が待っているのだろうか。
そう考えると……どこかワクワクしている自分がいる。

◇

――その道のりは果てしなく、此処までの旅路はとても遠いモノだった。
嘗て、己がもたらした過ち。その誤りを糺すためにその騎士は今日まで歩き続けて来た。
腕は朽ち、脚は鈍り、心が錆び付き、魂は……まるで石のように硬く成り果て。
それでも――騎士は歩き続けて来た。己の贖罪の為に、犯した罪と向き合う為に……。
「ここが、私の旅の果てか」
無限に広がる砂漠の大地、騎士の視線の遥か先には――白亜の

城が聳え立っていた。

その８８　第六特異点

「本当、君には驚かされてばかりだよ」
　特異点修復の旅も、今回で六度目。既に慣れた手付きで仕度を整え、今ではすっかり見慣れた山吹色の胴着を身に纏い、管制室に訪れた修司が最初に掛けられたのは……呆れと驚愕、そして感謝の混じった複雑な感情の発露だった。
　ロマニ＝アーキマン。これ迄の旅で誰よりも近い場所で藤丸立香と白河修司を見てきたカルデアの代理所長、眉を下げ、微笑みを浮かべながら声を掛けてくるロマニに修司はキョトンとした表情を晒していた。
「え？　どうしたん急に？　なんか悪いものでも食べた？」
「いや食べてないから。全く、どうして君はいつもこう、変な所で察しが悪いんだろう。普段は直感スキルもかくやというレベルで鋭い癖に……」
「いや、流石にそれは無茶ぶり過ぎじゃない？　幾ら俺でも、脈絡がなければ推理推察なんて出来ないぞ？」
「――マシュの事さ。彼女は本来、デミ・サーヴァントの検体としてその短い生涯を終える筈だった。一生外の世界を見ることなく、永遠に無垢のまま、電池の切れた人形の様に、忽然とその命に幕を下ろす筈だった」
　ロマニの口から淡々と語られるのは、嘗てのマシュ＝キリエライトの本質。人工的に作られた生命体であるが故に自意識が薄く、赤子の時から育てられた記憶がない故に喜怒哀楽の感情もまた、希薄。
　ただ、彼女はあるがままを全てを、目に映る全ての光景を受け入れていた。自身の寿命を稼働限界と捉え、命の生死を何処までも客観的に見つめてきた幼き少女。過酷で辛い実験も、そういうものだと受け入れていた。目に映る全ての光景をマシュ＝キリエライトはただ純粋に受け止めていた。
　そんな彼女の口から聞かされる微かな感情。それは、ロマニ＝アー

キマンが前所長への直談判でマシュの担当医となって幾分の月日が経過した頃。
『私……空を、見てみたいです』
それは、マシュが溢した初めての感情だった。欲しいものはないかと訊ねた際に、返ってきた彼女の初めての願望であり、願いでもあった。
マシュ＝キリエライトの体は、外の環境に対応する事はできない。生まれた時から無菌室の部屋で育てられ、外の環境に彼女が耐えられるだけの免疫力は存在しない。マシュにとって、このカルデアこそが生きる事を許された活動領域なのだ。
外の世界を見ることなく、成人し、大人になる事もなく、静かに……それこそ、最初からいなかった様に扱われる人間を模したホムンクルスとは違う人工生命体。それがマシュ＝キリエライトの正体だった。
けれど、だからこそ、今の彼女には驚かされていた。
「でも、君や立香ちゃんと出会ってから、マシュは変わったよ。レイシフトを通じて世界を知り、多くの人と出会って、マシュ＝キリエライトは我が儘を言える人になった」
自分の命に終わりが来る。けれど、それでも外の景色を見たいという願いを捨てる事は出来ない。つい先日、マシュ本人からそう言われたとき、ロマニは人知れず泣きそうになっていた。
「そして、君が死を待つしかないマシュに新しい選択肢を与えた。喩え君の造るモノが意味を成さなかったとしても、僕はこれまで君のしてくれたモノを決して否定したりしない。……ありがとう、修司君。君と立香ちゃんのお陰でマシュは女の子らしい一面を持てるようになったよ」
感慨深くそう口にしたロマニは、修司に向かって頭を下げようとして――。
「いや、何言ってんの？　お前」
「……え？」
呆気に取られていた修司の口から溢れたのは、心の底から〝呆れ〟

の声だった。
「なぁに自分は無関係な顔してんだよ。マシュちゃんがああいう風に育ったのは、アンタにだって原因はあるんだぜ？」
「ぼ、僕に？」
「いいか、子供ってのは周囲の環境に影響されて育つもんだ。確かに本人の元々の素養も重要なのは理解できる。けどな、それを含めて子供は成長していくんだ。俺と立香ちゃんだけじゃない、ロマニやダ・ヴィンチちゃん、今のカルデアにいる全てが、マシュちゃんの成長の糧になってんだよ」
　マシュが彼処までハッキリと自分の意思を言えるようになったのは、立香の様な一般人と先輩後輩の間柄になって、修司という頼れる大人と一緒に旅をしてきたからだと、ロマニは思っていた。
　けれど、違った。これ迄に関わってきた全てがマシュ＝キリエライトの糧になっていたのだ。旅の中での出会いと別れ、恐ろしい敵、頼もしい味方、そしてカルデアでの日常。その全てがマシュの一部であり、彼女の人生に色彩を与えたモノの正体だった。
　嘗て、偉大なる音楽家は言った。君が世界を作るのではない。世界が、君を造るのだと。
「俺達全員が今のマシュちゃんを生み出す切欠になった。なら、彼女が本当の意味で自分の脚で立って歩けるようになるまで、見守ってやるのが親代わりの務めだろう？　弱気になるなよロマニ＝アーキマン」
「――あぁ、そうだね。その通りだとも」
　そう言って、肩を叩いてくる修司の手が、これ迄の自分を労っている様に感じ――――ロマニ＝アーキマンの目元は、少しだけ赤くなっていた。
　それは、立香達が管制室に訪れる３０分前の出来事だった。

◇

「――――と、言うわけで、今回のレイシフトにはこの万能の天才、ダ・ヴィンチちゃんが同行する事となりましたー！」
「おー！」
「いやいや待て待て待ちなさい。え？　どういう事？」
　その後、仕度を終えた立香がマシュとダ・ヴィンチと共に管制室に訪れ、今回のレイシフト先の説明を受けていた最中、万能の天才の口から聞かされる台詞に一同は目を見開いていた。
　唯一立香だけは嬉しそうに手をパチパチと叩いているが、修司とマシュは戸惑うばかりで、ロマニに至っては彼らしからぬ程に動揺していた。
「何を言っているんだダ・ヴィンチ！　そんな事は許可できないぞ！」
「えー？　どうして？　英雄王やジャンヌ、他にも結構なサーヴァントがレイシフト先に送られているじゃんか。どうして私はダメなんだい？」
「一度特異点にレイシフトしたら、人理定礎を修復するまでカルデアには帰還できない！　君に万が一があったらカルデアはどうなる!?」
「ハッハッハ、それこそ無用な心配という奴だよ。いや、本音を言えばエルサレムの造形に興味があるというのが正直な所だが、なに、心配はいらないよ」
「そんな能天気な!?　どうしてそんな根拠のない自信が――――」
「根拠のない自信は、天才の最低条件さ。それに、カルデアには人間（君達）がいるだろう？　なら、大丈夫さ」
　ダ・ヴィンチのロマニを見る目は何処までも強く、自信に満ち溢れていた。彼はカルデアに召喚されたサーヴァントの中でも最も長い間カルデアで働いてきた者、ロマニやカルデアのスタッフ達を誰よりも長い間見続けてきた故の確信。君達なら大丈夫だと、万能の天才

が、そう太鼓判を押してくる以上ロマニからこれ以上強く言える事はなかった。
「……分かった。君がそこまで言うのなら、僕からはもう何も言わないよ。けれど約束してくれ、立香ちゃん達のサポートに徹し、必ず戻ってくると」
「あぁ、分かっているとも。なぁに、此方には無敵の戦闘民族がいるんだ。そうそう簡単に後れは取らないよ」
「あ、すみません。俺一応地球人です」
「修司さん、そう言うことじゃないと思うよ」
修司のツッコミもスルーし、ダ・ヴィンチを含めた一行はコフィンへと向かっていく。そんな彼等を見送りながら、ロマニは改めて今回のレイシフト先の特異点に関する説明を行う。
「改めて説明させてもらうけど、今回判明した第六の特異点――時代は十三世紀。場所は《聖地》として知られるエルサレムだ。正確には１２７３年。第九回十字軍が終了し、エルサレム王国が地上から姿を消した直後の時期になる」
「十字軍の終了――西洋諸国がエルサレムから撤退したことは、現代に続く人類史へと多大な影響を与えている。特異点として選ばれるのに充分相応しい時代と言えるだろう。……ついこの間までならね」
実のところ、第六特異点の予測はアメリカより早くに出来ていた。けれどシバ――カルデア有数の特異点を調査する際に使われる観測結果が、あまりにも安定しなかった。時代証明が一致しない、時には観測そのものが困難な時もあった。
それは燃え尽きた赤い大地の赤色だけが返ってくる事ではなく、観測の光そのものが消えてしまうということ。つまり――第六の特異点はカルデアスの表面に存在せず、その部分だけすっぽりと空洞になりつつあるということ。
嘗てない状況、ロマニ曰く第六特異点は人理の流れから外れようとしているとの事。これ迄のレイシフト先は『その時代』を乱そうとするソロモンの聖杯との戦いだった。

今回は第六の特異点そのものが、『あってはならない』歴史になりつつある。これを放置すれば、仮にソロモンの人理焼却を解決できても、人類史は多大な被害を被る事になる。故にその特殊な事例から第六特異点の人理定礎評価はＥＸ（規格外）と認定、これ迄の旅とは何もかもが異なるモノだと、ロマニは語る。

今回もカルデアからの支援は少なく、また危険度は極めて高い。ダ・ヴィンチや修司という仲間がいても、それでも楽観視出来ない。それが、ＥＸと評価された特異点である。

「ＥＸか、やっぱりメチャクチャ強い奴がわんさかいたりするのかな？」

「修司さん、もしかしてワクワクしてる？」

「……実は、少しだけ」

「うわぁ、やっぱり戦闘民族じゃないですかヤダー！」

「どんな郷土料理があるのでしょう？　楽しみですね！」

「フォウフォーウ！」

「君達ねぇ……」

そんな話を聞いても普段と変わらない修司達に、ロマニはすっかり毒気を抜かれた様子で苦笑いを浮かべる。

「アッハハ！　頼もしい限りじゃないか！　さて、お喋りは此処までにして、そろそろ現地へ向かうとしよう。六度目の聖杯探索（グランドオーダー）、張り切って行こうじゃないか！」

「今回もソロモンからの横槍もあるかもしれない。皆、油断せずに落ち着いていこう。」

「「はいっ！」」

ロマニとダ・ヴィンチの言葉に元気に返す二人を見て、修司はもう、自分から言えることはないなと確信する。これ迄の旅を経て成長した二人、きっとこれからも彼女達の旅路は続いていくのだろう。

ならば、自分はその道を切り開こう。その為には先ず、この特異点を早急に攻略し、カルデアへ戻った後、ＧＮドライヴを搭載したシャドウボーダーの最後の調整に移行するだけだ。

二つのＧＮドライヴと、それを両立、同調させるシャドウボーダー。

そして……ＧＮドライヴを完全に解放させる〝あのシステム〟の構築。
マシュ＝キリエライトを助ける。その道程まで後わずか、エジソン達に自分がいない合間の調整を任せ、修司は立香達と共にエルサレムへと向かう。
しかし、立香達は知らなかった。レイシフト先で待つ嘗てない惨劇に。
そして、立香達は知らなかった。本気で激昂した頼もしき隣人（修司）の恐ろしさを。

その８９　第六特異点

特異点修復の旅もこれで六度目、レイシフト特有の感覚にも既に慣れ、カルデアの一行は特異点の地であるエルサレムへと転移した。
エルサレムといえばユダヤ教、キリスト教、イスラム教と三つの宗教の聖市として知られる都市である。嘆きの壁や、様々な歴史的建築物が多数存在しているその地は正しく聖地と呼ぶに相応しき場所でもあった。
――――時は十三世紀。十字軍の遠征が終了されたと言う時代の節目、そこにレイシフトしたカルデア一行を待ち構えていたのは……何処までも広がる砂漠の世界だった。
「いやー、まさか初っ端から想定外の事態に遭遇するとは、これも魔術王の横槍なのかね？」
レイシフト先で修司を待っていたのは、上を見れば何処までも広がる青空と、下を見れば何処まで広がる砂漠の大地があって、具体的に言えば自由落下の只中だった。
今更空に放り出された程度で、どうにかなるわけがない修司は、そのまま砂漠の大地へ着地。砂塵を巻き上げながら周囲を気で察知すれば、そこは見たこともない生き物達が蠢く弱肉強食の世界だった。
奇妙な蜥蜴、羽虫、中には炎を人型に形作られたナニカや、巨大なスフィンクスを模した魔物等、多種多様な生命体が存在しており、その全てが人間にとって脅威的な力を有している。
ただ、相手が悪かった。幾ら世界に危険視されている魔獣魔物が群れようとも、これ迄の旅を経て、数多の困難を乗り越えて格段に強くなった修司に敵う筈もなく、本能のままに襲い掛かってきた魔獣達は修司の奮う拳の前に瞬く間に沈んでいった。
そうして、立香達の気を辿って空を飛ぶこと数分。修司の眼下には本来なら有り得ない建物がデカデカと聳え立っていた。
「え？　うそ、何でこんな所にピラミッドが？」
目の前に聳え立つ黄金の神殿。エジプト文明に於いて無くてはな

らない王達の神殿、巨石建造物として知られ、その形から金字塔とも言われているピラミッド、砂漠の世界であるから余計に違和感なく見えるが、逆に今いる此処が本当に中東方面なのかと疑ってしまう程だ。

そして、目の前の神殿の奥から立香達の気が感じられるから、彼女達が此処に入るのは明白だ。しかしその近くには二つの大きな気配があるし、片方に至っては、修司の上司兼保護者である英雄王に比肩する程の威圧感が感じられる。

恐らくはこの神殿の王がサーヴァントとして召喚されたのだろう。ならこのピラミッドや周囲の豊かな風景もこの王による力なのか、それとも別の力が作用しているのか、何れにしても凄い力だ。サーヴァントというのは一つの都市すらも喚び出してしまうものなのか、此処に来る前に見掛けた白亜の城といい、サーヴァントというのはまだまだ推し量れない力を持っているのだなと、修司は一人で戦慄し、感心した。

しかし、いつまでもここで棒立ちしてもいられない。未だ誰が敵で誰が味方になるのか定まっていない状況だが、悩んでいられる時間はあまりない。

無礼を承知で乗り込むか、それとも立香達が出てくるまで待つか。仮にもここは神殿、であるならば神官だっているだろうし、此処に自分がいるのがバレたらそれこそ要らぬ誤解を招いてしまうかもしれない。

ここは一旦外に出て、遠くから様子を伺おうか？　と

修司が其処まで思考を巡らせていると、神殿から三人の女性達が姿を表した。藤丸立香、マシュ＝キリエライト、ダ・ヴィンチ。五体満足で現れた彼女達に安堵しながら、修司は彼女達と合流を果たすのだった。

◇

「オジマンディアス王か、まさか太陽王が召喚されているとは、今回の特異点も一筋縄ではいかなそうだな」
　広大な砂漠地帯をダ・ヴィンチがオジマンディアス王から譲り受けた資材で開発した万能車両、オーニソプター・スピンクス号が一行を乗せて砂漠の海をひた走る。オジマンディアス王に言われ、取り敢えずの目的としてこの特異点を見て回る事になった修司達、そんな彼等は目的地である聖都に向かいながら、合流する迄に起きた出来事を車の上で話し合っていた。
「この短時間で其処までの情報を集めてくるとは、流石だな。情けないけど、情報収集では立香ちゃん達に敵いそうにないや」
「そんな、修司さんだって私達の代わりに戦ってくれたじゃないですか。今だって……その、魔物とかを追い払ってくれていますし」
「え、そう？」
　この砂漠地帯は太陽王オジマンディアスが召喚された影響か、一帯が砂漠の大地で覆われている。其処には大小様々な魔物が生息しており、中には魔獣といったドラゴンより危険な幻想種まで闊歩している。
　マシュもダ・ヴィンチも巨大なスフィンクスと戦ったのだが、それでも撃退するのだけで精一杯で、話の中で出てきた〝ルキウス〟なるサーヴァントの手助けが無ければ、今頃まだ砂漠のど真ん中で立ち往生していたと、マシュは語る。
　そして、そんなスフィンクスや魔物の群を、片手間で生成した気円斬で両断していく。この砂漠地帯の中で一級の危険さと力を持つスフィンクス、それが周囲の魔物ごと真っ二つに両断された為、その光景に他の魔物達はすっかり怖じ気づき、スピンクス号を取り囲んでい

た魔物達はあっという間に砂漠の中へ消えていった。
　そんな、何でもないように危険生物を片付けるのだから、マシュと立香は次第に目が泳ぐようになっていた。彼女達の視線の先にいるのは万能の天才、如何なる状況にも対応し、打開して見せる風な事を豪語していた彼女にとって、今の状況は色んな意味で面白くないモノだった。
「さて、そろそろ砂漠も抜けるか。なぁダ・ヴィンチちゃん、砂漠を抜けたら今度は俺が飛んで運ぼうか？」
「い、いいやぁ？　別に大丈夫だけどぉ～？　私、全然余裕綽々なんですけどぉ？　なんなら砂漠を抜けた後も私に任せて欲しいんですけどぉ～？」
「た、大変です先輩！　ダ・ヴィンチちゃんの声が裏返っちゃっています！」
「あぁもう、だから修司さんと張り合うなって言ったのに！」
　この資源の乏しい砂漠の大地で、快適な乗り物を開発したダ・ヴィンチは確かに万能の天才であった。彼が類い稀なる才人であることは周知の事実、そこに誰も疑いは抱かないし、なんなら称賛だってするだろう。
　ただ、相手が悪かった。数多の艱難辛苦を乗り越え、遂に飛行能力まで手に入れた修司、そんな彼に利便性で挑んだダ・ヴィンチ、彼の無謀ながら勇気ある行動は、立香とマシュの心に深く刻まれる事となった。
「なぁ、ダ・ヴィンチちゃん。やっぱ今からでも俺がこの車ごと運ぼうか？　どう考えてもそっちの方が速いって」
「ムキィーーッ！」
「善かれと思って言っているのが、なんかなぁ……」
　そうして、ダ・ヴィンチが修司の理不尽（ハチャメチャ）さに悔しさを顕にしたりする中、砂漠地帯を抜けた修司達は改めてその世界に言葉を失った。
　その大地は燃え尽き、残り火を残すだけの滅びの大地となっていた。魔術王ソロモンが行った人理焼却、その影響が色濃く滲み出た大地。魔術知識の乏しい立香と修司も、その光景の意味を理解した。

この世界は、もう長くは持たない。滅びの道以外の標は――――限りなく小さいのだと。

◇

「で、今日はこの辺りで夜営するのはいいとして、これからどうする？　立香ちゃん達は太陽王からこの世界を見てくる様に言われたんだよな？」
「うん。取り敢えずはこの特異点を見て回って、それから自分なりにどうするべきか決めるつもり。オジマンディアス王は次に会ったら敵対は避けられないみたいな事を言ってたけど、私的にはまだそんな急には決められないかなぁ」
その後、焼却された大地から離れ、夜営の準備をする事となった一行は、改めて今後の自分達の行動について話し合っていた。ダ・ヴィンチの開発したスピンクス号、その内部にはご丁寧に数人分のベッドも収納されており、雑魚寝をする分には充分な広さが確保されていた。
そんなスピンクス号の甲板にて、修司達は話し合う。かの太陽王は次に会う時は客人として迎える事はせず、敵対者として蹂躙してやると。聖杯を所持している彼がそう口にしている以上、激突は避けられない。しかし、彼がこの特異点の元凶だと確定するには今の自分達は知らないことが多すぎる。
故に太陽王は来るのが遅すぎたと、そう突き付けた自分達に見聞を広める為の猶予を与えた。敵対する王としては寛大過ぎる配慮だ。その器の大きさも太陽王としての矜持がそうさせているのなら、オジマンディアス王はやはり色々と規格外な王様なのだと、修司達は思い知る。

「ま、戦うにせよ、話し合うにせよ、今の俺達はこの特異点について何も分かっていないからな。太陽王の言う通り、ここは見聞を広めて改めて自分達のすべき事を見直した方がいいかもしれないな」
「となると、やはり次に向かうべきは聖都でしょうか？　ですが、聖都には既に十字軍は消滅したとオジマンディアス王から聞かされました」
「その辺りの事も含めて、見聞を広めろというのが、太陽王の言葉なんだろうね。所で修司君、聖都の方から何か感じたりしていないかい？　ほら、ご自慢の気の探知でとっくに気配の情報収集は済ませているんだろ？」
「……なんか、ダ・ヴィンチちゃん拗ねてない？」
「すーねーてまーせーん！　ほら、いいからチャチャッと分かっている事を洗いざらい吐け吐け」
「お、おう」
　何処か凄味のある笑みを向けられ、いつもと少しだけ茶目っ気の強い万能の天才に圧されながら、修司は此処に来て最初に感じた気配について語り始めた。

「まず最初に、この特異点には大きい気配が二つある。一つは太陽王オジマンディアス、流石太陽王と呼ばれるだけはあるよ。強さの有無は兎も角、王としての格ならばこれ迄出会ってきた王達の中でも頭一つ抜きん出ていると思う。彼と対等に相手が出来るのは、それこそ英雄王やロムルス王位しかいないな」
　カルデアに滞在する多くの王のサーヴァント達に対する冒涜とも言える修司の言い草、しかし修司は騎士王や征服王達を貶める為に口にした訳ではない。気という気配察知は相手の強さの有無を見抜くだけでなく、ある意味人の〝格〟を図る一種の測定器の様な役割を担っている。
　この場合、太陽王の格を語る修司の基準となっているのは、王としての責務とオジマンディアスという一人の英霊が成し遂げた偉業の大きさを気というエネルギーを通して修司が偏見も織り混ぜて見解

を述べたに過ぎない。それでも、英雄王と同格と言える程の力があるのは事実、鵜呑みにせず、かといって無下にするには具体的に話す修司にダ・ヴィンチ達は素直に聞き入れる事となった。
「成る程、オジマンディアス王に対する君の見解は分かった。なら、聖都の方はどうだい？　向こうにも太陽王クラスの厄介な王様がいたりするのかな？」
「それなんだけどな。正直分からないんだ」
「分からない？　修司さんが？」
「いや、感じ取れない訳じゃないんだ。空を飛んで立香ちゃん達を探した時、聖都の方向には真っ白いお城が見えたりしたし、なによりそこから大きな強い気配を感じたりもした。ただ……」
「ただ？」
「なんというか、デカイんだよ。大きさだけなら太陽王を軽く凌駕している。空から見えた白い城が丸々覆い隠せるほどのデカイ気配が、聖都から感じられたんだ。まるで聖都そのものが一つの力、見たいな感じでさ」
「そ、そうなんですか……」
「うーん、やっぱり修司君の言う気の探知能力は確かに凄いけど、具体的なニュアンスが今一つ伝わって来ないのが難点だなぁ。ま、先入観に囚われずに一つの目安として考えれば、分からなくもないけどね」
「第三特異点でのヘラクレスや、第五特異点のクー・フーリンはどうだったの？」
「あの二人はなんと言うか……こう、大きさもそうだけど伝わってくる力の感じが違うんだよ。ヘラクレスは空に届きそうな大きな岩で、クー・フーリンは深くて鋭い槍って感じ、二人とも強いってのは間違いないんだけど、感じ方は相手によって違うなぁ」
　修司の気の探知能力の講座は今一つ立香達に共感を得られる事はなかった。人やサーヴァントだけでなく、魔獣や魔物の存在と位置まで割り出せる彼の探知能力は、ダ・ヴィンチから見ても一級品の技術だ。しかも本人が強くなる毎に精密さがアップグレードされて増していくのだから、ロマニが嘆くのも無理はないと言えるだろう。

尤も、それだけに今の所、他者に伝授出来ないのが残念である。もしこれがカルデアの技術に組み込まれれば、それだけでカルデアの防衛能力は格段に向上するのだから。最近のカルデアはサーヴァントの人数も合わさってきて結構な大所帯になっている。中には癖のあるサーヴァントだっているだろうし、悪巧みを目論む輩だって出てくるだろう。

そういった連中に対して修司の能力は、ある種の抑止力に成りうるだろう。まぁ、流石にそんな都合の良い話は無いだろうから、ダ・ヴィンチはそれ以上修司に追及する事はなかった。

「あー、でも、この特異点に来て初めて不思議な感じがアッチの方からしたな」

「アッチ？」

「彼処は確か、山脈地帯があったように見えましたが……そこに何かあるのですか？」

修司がそう言えばと指差す方角は、スピンクス号で移動していた合間にマシュ達が見かけた小さな山々があった所だ。修司が言うには其処にも集落らしい気配が幾つもあることから、恐らくは何らかの集団が生活しているのだと思われる。

それだけなら、聖都やオジマンディアス王のエジプト領と然程変わらない。しかし、修司が気にするのはそこではなかった。

「違う、逆なんだ。あそこの山の所、集落らしい人の集まっている所から少し離れた場所なんだけど、不自然な程になにもないんだ。あれじゃあ、まるで空洞だ」

「く、空洞？　どういう事？」

「……正直言って、俺にも良く分からない。こんなの初めてだ。気配が感じられないとか、誤魔化しているとかじゃなく、底無しの空洞みたいに感じるんだ。その癖、そこに意識を向ければ背中に悪寒が走ってくる。彼処、ヤバい奴がいるぞ」

それは、〝気〟という力を習得した修司が初めて味わう感覚だった。太陽王のエジプト領や聖都の大きな力とは全く異なる異質な気配、まるで、其処だけが何者かに抉り、斬り落とされたかの様な……

ポッカリとした空洞を覗き込んでいるような感覚。
　そこへ意識を集中させようとすると、凄まじい悪寒が修司の背中を駆け巡った。敵意や殺意の類いではなく、これまで感じたことのない〝死〟の気配。正直な所、彼処は興味本意で近付いて良い場所ではない気がする。
「ふむ。相変わらず抽象的ではあるが、それでも幾つか分かった事があるのは確かだ。修司君、取り敢えず一番危険な所は彼処の山々にあるという事でいいんだね？」
「そうだな。他にも強い気配は幾つもあるけれど、彼処の山程のヤバそうな所は今の所ないな」
「なら、今はそれが分かっただけで良しとしよう。さぁ、明日も早いんだ。皆も今日の所はゆっくり休みなさい。見張りの方は私と修司君で済ませておくから――――って、修司君？　どうしたんだい？」
「……誰か近付いてくる。最初は小型の魔物かと思ったけど、これ人だ。それも複数人、しかも……誰かに追われているっぽい、かなり強い気配が一緒に来ている！」
「「っ!?」」
　修司に言われ、すぐさま隠れるように身を翻す立香達は、身を低くさせて隠れると、少し離れた所から複数の人間達が走っていくのを視認した。
　黒い髑髏の面を被った者と、この世界の住人達らしき集団。髑髏の奴が一番の後方にいることから、恐らくは殿を努めているのだろう。そして、そんな彼等を追っている者が現れる。
　それは、赤く、長い髪が特徴的な騎士だった。絢爛な外套に身を包み、一切の乱れなく大地を踏みしめる様は、物語に出てくる騎士のソレ。騎士とは弱きを助け強きを挫く正義の体現者、あの赤い長髪の騎士がそうなのだとしたら、逃げ惑う彼等は騎士の敵であり悪なのだろうか。
　しかし、見ている修司からしたらその光景は何処と無く違和感を感じた。隣を見れば何処か落ち着かない様子でマシュが震えているし、ダ・ヴィンチは目を見開かせて驚きを顕にしている。

一体、彼等はどういった関係なのだろうか。もう少し様子を見ようと修司も立香達に倣って身を低くさせた時……。
「きゃっ！」
「おいおい正気かい!?」
「あの髑髏、自分の首を切りやがった!?」
髑髏の面をした者が騎士の男に幾つかの言葉を吐くと、自ら喉笛を自身の得物でかき切り、自害した。いきなりの壮絶な場面を直視した立香は一瞬目を瞑るが、それを責めるものはこの場にはいない。修司が立香を大丈夫かと声を掛けようとするが、事態は更なる凄惨な光景を生み出していた。
恐らくは、髑髏の奴が騎士の男に何らかの条件を出したのだろう。自分の命を差し出す代わりに他の者達を見逃す様にとか、恐らくはそう言った類いの願いだ。
しかし……。
「ぎゃあっ!?」
「「っ!?」」
騎士の男が弓と思われる弦を指で弾いた瞬間、無防備に背中を晒して逃げていた女性の頚が刎ね飛ばされた。その光景に言葉を失う立香達、そしてそんな彼女達が衝撃的な光景に言葉を失う中、惨劇は次々と引き起こされる。
戦う意思のない人々が、次々に殺されていく。無防備で、逃げることしか出来ない彼等が無慈悲とも呼べる力で一方的に蹂躙されていく。
止めて、助けてくれと、命乞いをするこの地の民を殺していく、その光景を前に彼が耐えられるのは有り得ない訳で……。
「ま、待ちたまえ修司君！」
彼が、ダ・ヴィンチが止めるよりも速く、行動に出るのは当たり前な訳で……。
彼の蹴りが、騎士の頭に直撃するのは……ごく当たり前の話であった。

◇

「……私は悲しい、たかが身動きを縛った程度で我が妖弦から逃げられると思っていた事に……」
男は呆れていた。無意味に命を差し出してきた翁の一人と、無駄に生き恥を晒しているこの地の民に。
既にこの者達の裁決は下された。彼等の命運は既に終わっており、抵抗は無意味な事だというのに、どうして彼等は此処まで生き汚く抗うのか。
故に、男の嘆きは綴られる。弦を一本弾く度に命が弾け、その指一つを引く度に命が無意味に散っていく。嗚呼、なんて、なんて救いのない作業なのか。
故に、男の嘆きは止まらない。悲しいと嘯きながら、それでも惨劇を生み出す弦を奏で続ける男の指は止まらない。
さぁ、これで幕引きとしよう。残った者達を一息に終わらせようと、男が弦に指を伸ばした――その時だ。
「オラァッ!!」
「っ!?」
男の頭部に衝撃が走った。事前に耳にした風切り音、それを認識しておきながら尚対応出来なかった一撃。振り抜かれた蹴りの一撃は男の頭に直撃し、赤髪の男は燃える大地を転げた。
「……何者です」
「貴様に名乗る名はない」
男は素直に感心した。理由や経緯はどうあれ、まだこの世界に、自分達と正面から戦えると思い上がっている輩がいた事実に。一体ど

んな顔をしているのか、見える事のない身としては、些か残念な気がしなくもない。
けれど……それだけだ。
「……私は悲しい。この地に未だ我々に楯突く愚か者が、度しがたく息をしている事実が」
「そうかい。なら、そのまま嘆きの海で溺死しろ」
男は弦を弾き、鋭き音の刃は寸分違わず敵対者の頚へと放たれる。不可視の刃、当たれば死は免れない風の刃。
「フンッ！」
それを、敵対者の男はなんて事ないように片手で払い除ける。信じ難い光景（音色）に騎士の男が驚愕を顕にした瞬間、敵対者の拳が男の顔面へと突き刺さる。
吹き飛び、倒れ付し、鼻血を噴き出す男、明らかにこれ迄の相手とは異なる強さに驚嘆していると。
「どうした三下。お前に出来るのは無抵抗な人間の頚を刈り取るだけか？」
敵対者の声が聞こえてくる。耳障りで、神経を逆撫でする男の声が。
故に、騎士の男は苛立ちを顕にする。静かで荒々しい、嘆きの怒りを。
「あぁ、私は悲しい……」
騎士の男が指を弾いた瞬間、音の刃が敵対者（修司）を包み込み、燃え尽きた大地に衝撃が走った。

その９０　第六特異点

「くっ、やっぱり始めてしまったか！」
眼前で巻き起こる戦いにダ・ヴィンチは歯噛みをして、見守る事しか出来ない自分を呪った。今自分達の前にいる赤い長髪の騎士はある後天的な強化を経て異常な強さを有している。それは自分を含めてマシュや立香が束になって掛かっても皆殺しにされるほど凶悪で、一度でも相対したら逃げ切れない程の残忍さがあの騎士から滲み出ている。
今の自分達ではあの騎士を倒すことは不可能に近い。故にダ・ヴィンチは、無抵抗な人々を見殺しにする事になっても、自分達の身の安全を優先させる事にした。それが、立香達と旅を共にすると決めた自分の役割だと信じて。
しかし、そんなダ・ヴィンチの気持ちも虚しく空回り、虐殺を行おうとする騎士を止めに入る者がいた。それがカルデアきっての主戦力の一人であり、立香と同じく人類史唯一のマスターである白河修司である。
背中から頸を刎ねられ、無抵抗な人々が惨たらしく殺されていく光景に修司は我慢出来る筈もなかった。ダ・ヴィンチの制止の声も聞かずに駆け出し、騎士の男と戦闘を繰り広げて十数秒。既に周囲には誤魔化しきれない程の戦いの傷痕が刻まれてしまっている。
だが、あの騎士が修司にだけ注意が向いているならば、此方も少しは動きやすくなるだろう。幸いに騎士と修司の戦いは、修司によって圧されつつある。流石二人の大英雄を相手に正面から打ち勝った男、安心して見れる戦いにダ・ヴィンチは一先ず落ち着きを取り戻した。
「……どうやら、あの騎士は修司君に任せても良さそうだ。二人とも、今の内にここから――――」
「先輩？」
そこまで言い掛けて、ダ・ヴィンチとマシュはやっと立香の顔が青

ざめている事に気付いた。怯えた表情で震えている藤丸立香、そんな彼女を見てダ・ヴィンチは自身の迂闊さを歯噛みした。人類最後のマスターなんて言われているが、ほんの少し前まで彼女はただの女の子でしかなかった。

友人達と共に学校に通い、家族のいる家に帰り、なんて事ない毎日を過ごしていく筈だった一人の少女。幾らサーヴァントの戦いを間近で見てきたと言っても、人の生き死を慣れた訳ではない。

死を恐れるのは生命としての本能。それが戦いから遠い所にいた唯人であるなら尚更、前の特異点で戦場というモノを経験しても、目の前で人が殺される様を見て動じない程、立香は達観していない。

だからこそ、修司が前に出てあの騎士の蛮行を止めたのだと今更ながら理解する。彼は単に己の感情に従って飛び出したのではない、隣で怯える立香をこれ以上凄惨な光景を目の当たりにさせない為に、自ら前に出たのだと。

「先輩、大丈夫ですか？」

そんな藤丸立香の震える手を、マシュ＝キリエライトが静かに包み込む。あの騎士を見てから震えが止まらないと言っていたのに、それでも誰かの為に気遣えるその優しさに触れた事で、立香の震える手も自然と収まった。

「ごめんマシュ、ありがとう。私はもう、大丈夫！」

額に大粒の汗を浮かばせて、それでも強がって見せる立香にダ・ヴィンチは目を見開いた。ちっぽけながらも一生懸命に立ち上がろうとする。それこそが人間の強さなのだと、改めて思い知った。

（全く、結局は何も出来ていないのは私だけかい、これが万能の天才だなんて笑わせる。本当、はやく今回の失態を挽回出来るチャンスが来ればいいんだけどね）

やれやれと肩を竦めて色々と諦め始めたダ・ヴィンチ。そんな彼が立香とマシュにこの場を離れることを促すのと、騎士と修司の戦いが終わりを迎えるのはほぼ同時だった。

◇

騎士の男が弦を奏でる度に修司に不可視の斬撃が襲う。それは人間の肉体程度なら容易く断ち、瞬く間に肉塊へと変えるおぞましき刃。

しかし、そんな不可視で回避不可能とされている風の刃を修司は紙一重で避けていく。自身の技が避けられた事に僅ながら動揺する騎士の男は、それでも構うことなく妖弦の弓を奏でていく。男が指を一つ弾く度に風の刃は生み出され、その初速は人間の反応速度を超えている。

それを、瞬く間に百に迫る数で修司の行き場を埋め尽くしていく。先の全方位とは密度も威力も異なる死の網、触れれば細切れは避けられない。故に、この瞬間修司も本腰を入れる。

全身に白い炎を纏い、脚を止めて身構える。何をする気だと騎士の男も手を止めた瞬間……。

「ペガサス――流星拳！」

振り抜かれた拳の弾幕が、迫り来る風の刃を悉く打ち砕いていく。自身の技をサーヴァントでもない人間が正面から打ち破った事に、騎士の男は細い目が見開かせるほどに驚きを顕にした。

光はなく、既に何物も映せていない瞳。それ故に迫る修司の拳を防げる事はなく、自身の間合いをすり抜けてきた拳を男は顔面で受ける事になる。

再び、大地を転げ回る。幾ら衝撃の瞬間に後ろに飛んでも、全てのダメージを流した事にはならない。口を切り、ボタボタと血を流す男に修司は静かに歩み寄っていく。

「何故、私の弓が、あなた如きに……」

「確かにお前の弓は厄介だった。目にも映らない空気撃ち、始めは対処するのに手一杯だったが、慣れてしまえば大した事じゃない。空気

の僅かな乱れ、空を切る風の音、そういった微かな情報が俺に攻略法を教えてくれたんだよ。なにより……殺気がダダ漏れなんだよ、お陰でお前が次に何処に狙ってくるのか、次第に手に取るように分かってきたぜ」

「……」

目の前で踞る騎士の男の殺意は並々ならぬ程に濃く、それでいて粘着質だった。それこそ放った風の刃に乗るほどに濃密で、それ故に対処するのに然程時間は掛からなかった。

これ迄ヘラクレスとクー・フーリンという大英雄と戦った事で、修司の強さは最初にカルデアに来た頃より桁違いに変わっている。もし当初の頃の修司だったなら、目の前の騎士の男にもっと手こずっていた事だろう。

「さて、これからどうする？　大人しく降伏するか？　それともまだやるか？　俺はどちらでも構わんぜ」

拳を鳴らし、男の返答を待っていると、俯いていた男の口から不気味な笑い声が溢れ始めた。

「く、くくく。成る程、それだけの強さと自信を持っているのなら、その傲慢さも理解できる。ああ、私は悲しい。自分より強いと驕っている男が、実は誰よりも愚かだという事実に……」

「あぁ？」

この期に及んで、未だそんな事が言える男に、流石の修司も首を傾げた。そして男が弓を弾くのと、それに気付いた修司が男の手を砕く勢いで蹴りあげるのは、殆んど同時だった。

遅かった。男の弦が修司の蹴りより僅かに速く引き絞ると、男の周辺の地面が砕かれ、砂塵が二人を包み込んだ。単なる目眩ましかと思われたが、男が弾いた弦は一本だけではない。嫌な予感に修司が後ろに控えるマシュ達に、バレる事を承知の上で声を張り上げる。

「マシュちゃん！　二人を守れェッ！」

すると、修司の声が届いたのか、立香達のいる方角からマシュの宝具の光が見えた。次いで聞こえてくる鋼のぶつかる音、急いで駆け付けた修司が見たのは何とか無事な立香達の姿だった。

突然の事で驚き、肩で息をしているマシュだが、どうにか五体満足でいてくれたことに安堵するが……。
『成る程、あなた方がカルデアの者達ですか』
「っ！」
『あなた方の報告と引き換えに、この場は去るとします。次に会う時はその首、切り落として差し上げましょう』
風に乗せられて告げてきたのは、何処までも上から目線の物言い、苛立つことこの上ないが、既に周囲にはあの騎士の姿はなかった。気で探っても捉えられず、感じられるのは聖都方面から感じられる強大な気配のみ。
唯一救いなのは、騎士の男に襲われていた人達が逃げ延びているという事、彼等が騎士の射程範囲から逃げ延びるまで時間稼ぎをしたかった事もあって、それだけが修司達の心の救いとなっていた。
「あの野郎、あんな芸当も出来たのか。……悪い皆、俺の独断の所為で面倒な事になった」
「それについては……まぁ、気にしても仕方ないさ。私も結局何も出来なかったし、次の機会で挽回しようぜ」
「マシュちゃんも済まなかったな。体、大丈夫か？」
「は、はい。今はどうにか。体の震えも今は治まっていますし、問題はないかと」
「そっか、ならよかった。いや、良くはないな。向こうに俺達の存在がバレたし、これだと聖都に潜入するのが難しくなるか？」
「うーん、いっその事変装でもしてみる？　私、一応そういうのも出来るけど？」
「お、流石は天才。頼りになるな」
「ふっふーん。もっと誉めてもいいんだよ？」
長髪の騎士に此方の存在がバレてしまったが、ここで考えても仕方がない。取りあえずダ・ヴィンチの変装という形で聖都に近付く事を画策する修司達だが、そんな中で立香がオズオズと手を伸ばして意見を述べてくる。

「あ、あのー……その前にいいかな？」
「うん？　どうしたんだい立香ちゃん？　何か、気になる事でも？」
「いや、その……今後の事を話し合うのもいいけど、取り敢えず彼処の人達、弔ってあげません？　ほら、あのままだと魔物とかに食べられちゃうかもだし……」
　気弱に、それでも起きてしまった事から目を逸らさないように振る舞う立香に、敢えてその話題に触れなかったダ・ヴィンチと修司は頭を掻く。どうやらまだ自分達は目の前の少女の事を見くびっていた様だ。
　その後、騎士の男に殺された人を自分達なりに手厚く弔った後、手を合わせて黙祷を捧げた一行は、今度こそ聖都に向かって進み出す。
『――――ありがとう』
　その時、風にのってそんな声が聞こえた気がした。

◇

　それから少しして。此処まで特にトラブルもなく、無事に夜の内に聖都に一行は辿り着く事ができた。眼前に聳え立つ白亜の城、夜の闇の中でも分かる程に白く、巨大な城の様相にダ・ヴィンチを含めて皆が息を呑んだ。
「ふぁー、凄いお城ー」
「これが、オジマンディアス王が言っていた獅子王の城、ですか」
「こりゃあ凄いね、芸術点も高い建築物だ。惜しいなぁ、カメラが手元にあったら一枚くらい撮ったのに」
　誰もが目の前の城に感心を抱く中、一人だけ不満を顕にしている者がいた。その者は独特な足音を鳴らしながら、酷く憤慨した様子で

ダ・ヴィンチに抗議する。
「あの、ちょっと待って貰っていいですかね？　なんで俺だけこんな格好をしているのか、是非とも説明をして貰いたいんですけど？」
「うん？　どうしたんだいエリザベス？　ちゃんとプラカードを持っていないとダメじゃないか、それは君の存在価値（アイデンティティ）なんだろ？」
「そうだよエリザベス！　ちゃんと自分の個性は大事にしないと！」
「大丈夫です！　慣れないプラカードのコミュニケーションでも、私達がきっとフォローして見せます！　安心してエリザベスさんになりきって下さい！」
「わぁい。マシュちゃんの優しさが身に染みるなぁ――――じゃねぇよ!?　なんで俺だけエリザベスなんだよ!?　エリザベス要素どこにあったよ!?　つーか誰だよ万能の天才に銀魂教えた奴!?」
　城の周辺に点在している難民キャンプ、余った衣服を買い取ってダ・ヴィンチが仕上げた潜入用の衣装に立香達が身を包んでいる中、唯一白いアヒルとペンギンが悪魔合体したような風貌をしたＵＭＡがいた。言わずもがな、白河修司である。
「えー？　だって残っていた資材で作れるのはそれしかなかったんだもん。でも、割かし君のも再現度高いと思うよ？　彼も『再現度たけーでござるな』って絶賛してくれる筈さ！」
「よーし、カルデアに帰ったら絶対黒ひげぶっ飛ばす」
　知らない内にカルデア内でおかしな精神汚染が進んでいるようだ。元凶は黒ひげ、カルデアに戻ったら全力で断罪する事を心に決めながら、修司達はこれからどうやって城に潜入するかを話し合う。
　と言うか、この場合修司が囮になるしかなかった。目の前の白亜の城と同じくらいに白いエリザベスの着ぐるみを着た修司では、喩え闇の帳に紛れても騎士達に気付かれてしまうだろう。そんな彼が今でも騒ぎになっていないのは、圏境を使って立香達以外に姿を見せないようにしているからである。
「しかし、何で皆此処に集まっているんだ？　そりゃあ、あんな城があったら誰だってその威容に肖りたいと思うだろうけどさ」
「うん、さっきの商人を名乗っていた人は、聖都に近付かない方がい

いって忠告したもんね」
　時おり見回りに来る騎士をやり過ごしながら、修司達はそんな事を口にしている。先に出会った商人の男が言うには、あの城に入ったら人間を止める事になり、そうでないものには凄惨な結末が待っていると。
『でも、今の僕達には虎穴に入ってでも情報を集める必要がある。危険な事だけど、此方も精一杯バックアップはするからね』
　どちらにしても物騒な話だが、生憎自分達には情報が少ない。ロマニの言う通り、ここはリスクを無視してでも踏み込んでいくしかない。タイミングはあの大きな門が開いた時、その時に合わせて行動を開始しようと皆が息を合わせようとした時。
　いきなり、空が明るくなった。
「え？　え!?　なに、私もしかして寝てた!?」
「い、いいえ違います先輩！　ほんの今まで、私たちは夜の暗闇の中にいました！」
　突然、空が明るくなった事に立香もマシュも慌てるが、それは何も二人だけに限った話ではなかった。周囲の難民達も動揺している中で、正門から顕れる騎士がいた。
「――落ち着きなさい。これは、獅子王がもたらす奇蹟。〝常に太陽の祝福あれ〟と、我が王が私に与えたもうた祝福（ギフト）なのです」
　それは、何処までも誠実で、高潔な精神を携えているとされる騎士の理想像。その口振りと佇まいは確かに人が安寧を抱く程の振る舞いだった。
　それを証拠に難民達の表情には皆、安堵の色が濃く滲み出ている。これで自分達は助かると、聖都の中へ入れると。
　その騎士の名はガウェイン。太陽の騎士と呼ばれた男の頭上には燦々と輝く日輪が輝いていて、白亜の城の城壁から獅子を模した――王が現れた。
「――これより、聖抜の儀を執り行う」
　静かに、荘厳に告げられる一言。そこに一切の迷いは無いというのに……何故だろう。嫌な予感がしてならない。

ダ・ヴィンチがここから逃げようと立香達に提案するよりも速く、儀式は始まった。

もう戻れない。凄惨の幕開けは――――もう、すぐそこまで来ていた。

その91　第六特異点

白亜の城壁より獅子を模した鎧の騎士が姿を現した。荘厳にして偉大、相対しただけでも身がすくむ程の威圧を前に、立香とマシュは立っているだけで精一杯だった。

「……エリザベ――――いや、修司君。もしかしてアレが」

「あぁ、アイツが俺の感じた強くて大きな気配を発していた奴だ。こうして奴を前にしているから分かる。あの騎士、まだ底を見せていないぞ」

正門の城壁から姿を見せた獅子の騎士、あれが太陽王の言っていた獅子王であることは間違いないと、修司の話を聞いてダ・ヴィンチは確信する。しかも彼の言うことが本当なら、あの騎士の強さは底知れないという。

流石に前の特異点でのヘラクレスやクー・フーリン程ではないと信じたい所だが、彼の声音からしてその可能性は低いようだ。出来れば直接的な戦闘は避けたい所だと、ダ・ヴィンチは声に出さずに肩を落とすが、それに気にかける者はいない。

そうして、太陽の騎士――ガウェインと呼ばれる男が何かを言っていると、獅子の騎士は徐に手を掲げ、何かを始めようとしていた。恐らくは、先に聞こえてきた聖抜の儀とやらに関する事なのだろう。立香達は緊張な面持ちのまま、静かに辺りを警戒する。

聖抜の儀。何かの儀式の名称しか分からないそれが、一体何の意味を示しているのだろう。立香も達や難民の人々が戸惑い、疑問に思う中、それは粛々と執り行われた。

「――――最果てに選ばれるものは限られている。人の根は腐り落ちるもの。故に、私は選び取る。決して穢れない魂。あらゆる悪にも乱れない魂。生まれながらにして不変の、永劫無垢なる人間を」

獅子の騎士が言葉を紡いだ瞬間、光が溢れる。難民達の中から数人規模での割合で光が漏れ出していく。夜が昼に代わったり、人の体から光が溢れるなど、摩訶不思議な出来事が連続して起こるものだか

ら、難民達の間でパニックが起こるのは必然の事だった。
　そんな人々の反応を他所に、聖抜の儀は続いた。それは気の知れた友人であり、愛を近いあった夫婦の片方であり、それは――この過酷な環境で、せめて我が子だけでも救って欲しいと願う、美しき心を持った母親だった。
　大多数の難民の中から選出される様に光りだす一部の人々、これが聖抜の儀なのかと立香達が疑問に思う中、ダ・ヴィンチの頬には冷たい汗が流れた。
「聖抜はなされた。その三名のみを招き入れる。回収するがいい、ガウェイン卿」
　そんな、無慈悲な言葉だけを言い残して獅子の騎士は城壁から消えていく。これだけの難民を集めておきながらたったの三人、聖都の規模からしてまだ入れそうな余地はある筈なのに、狭量とも思われる騎士の采配に修司は腕を組んで疑問を静かに口にする。
「これだけの人を集めておいて、たったの三人？　少し、狭量が過ぎるんじゃないか？　それとも、既に都の中は人で一杯だったりしているのか？」
　幾ら気で探っても、聖都から感じられる気配は先の獅子の騎士のモノしか感じられない。故に修司には中の様子を感じ取る事は出来ず、内部で何が起きているのかは見当もつかない。やはり、聖都も余裕がないのだろうか。
　そんな風に考えていた。聖都の連中も必死なのだと、全ては不毛の大地となったこの世界に原因があり、聖都の獅子王も万能ではないのだと、これは彼等にとっても不服な事で、決して本意ではないのだと。そんな風に、修司は自分なりの解釈で騎士達の都合を受け止めようとしていた。
　故に――。
「……皆さん。まことに残念です。ですが、これも人の世を後に繋げるため。王は貴方がたの粛正を望まれました。では――これより、聖罰を始めます」
「――え？」

修司がその光景を理解するのに――――ほんの僅かだけ、遅れた。
瞬間、修司の視界の端で鮮血が舞った。倒れ伏しているのはこの過酷な世界でも頑張って生き残ろうと誓った、夫が愛する妻だった。どれだけ自分がへこたれようと、気丈に振る舞い、自分を立ち上がらせてくれた気高い女性。
その彼女が、全身を甲冑で包んだ騎士の一人、無情に放たれた剣閃が、彼女の体を斬り裂いた。信じられない、そんな顔をして倒れる妻に夫は発狂の叫びを上げる。彼女の内から溢れる臓物を必死にかき集めながら、起きてくれと叫ぶ夫の叫び声により、人々は否応なしに突き付けられた現実を前に目を覚ます。
悲鳴が、白亜の城の前に木霊する。城壁から現れる無数の騎士達、彼等の手には弓矢が握られていて、地に降り立っている騎士達は、全員が剣を抜き放っていて、彼等の狙いは聖都から逃げようとしている――――無抵抗の難民達だ。
虐殺。その言葉が脳裏を過った時、修司は有無を言わさずに駆けた。後ろでダ・ヴィンチが何かを叫んでいるが、そんな事など知ったことではない。引き絞った腕と、握り締めた拳に力を込めて、修司は逃げ遅れた人に剣を振り下ろそうとしている騎士の横っ面へ、全力の一撃を叩き込んだ。
突然の不意打ち、更に言えば修司という規格外の人間からの一撃により、騎士は宙に浮かんで白亜の城壁に叩き付けられる。突然の騎士の吹き飛びとそれを行った奇っ怪なアヒルの怪物、明らかに着ぐるみな化物を前に今度は騎士達の動きが停止した。
そんな彼等をエリザベス（白河修司）は見逃さなかった。両手に気のエネルギーを溜め、光弾を放つ。既に放たれていた矢を叩き落とし、その勢いのまま城壁の上に立つ騎士達に叩き込む。
その光景に難民の人々は足を止めた。自分達を殺そうとしている騎士を倒し、自分達を逃がそうとしている白いアヒルの怪物。奇っ怪な姿の癖に騎士達を紙屑のように吹き飛ばすその光景に、人々は奇妙な希望を見出だしていた。
「なにをボーッとしている！　さっさと逃げ……っ!?」

しかし、そんなアヒルの猛攻もその騎士には通らなかった。振り抜かれる刃、空気を裂く轟音、余所見をしていたら掠り傷では済まない一撃を前に、修司は気力を全身に張り巡らせ、両腕を交差させて受け止めた。

「――何者です。その面妖な格好で、一体どうやって我々の目から逃れていた」

（こいつっ！）

それは、場に現れただけで夜を昼に変えた太陽の騎士、凄惨な殺戮の場を築き上げた張本人の一人であるその男は――ガウェイン。円卓の騎士の一人と呼ばれ、アーサー王からの信頼も厚いとされてきた太陽の騎士。

「答えられませんか。ならば、強引にでも引き剥がすまで！　ヌゥンッ！」

「っ！」

その強大な膂力にモノを言わせて、ガウェインは修司を吹き飛ばす。無表情なアヒルの顔で分からないが、修司の表情は驚きに満ちていた。今の自分の力は界王拳こそは使っていないが、それでも全身を気の力で覆い、通常時よりも強めの膂力となっている。この力でこれ迄修司は多くのサーヴァントや魔物達を退けてきた。

そんな自分が、力で押し負けた。これ迄敵対してきたサーヴァントとは一線を画すガウェインの強さ、しかし修司もまた揺るがない。吹き飛んだ体勢を瞬時に立て直し、白亜の壁を足場に着けて、跳躍。弾丸の如く飛び出し、勢いを乗せた蹴りは、剣を盾にして防ごうとするガウェインを、お返しとばかりに防御ごと吹き飛ばす。

「くっ、成る程。単身で我々に挑む事はある。しかし、どのような目的かは不明だが、我等の儀を邪魔した以上、無視はできない。名も知らぬ怪物よ、覚悟するがいい」

剣を地に刺して、勢いを押し止めたガウェインは、再び剣を構えて修司へ肉薄する。抜き身の刃で斬りかかっているのに、まるで薄皮一枚も斬れる気がしない。予想以上の怪物を前にガウェインは自らを鼓舞するように吼える。

そんな彼に対して、修司の声は何処までも冷たかった。
「覚悟、覚悟だと？　自分達は碌に戦う術を持っていない難民達を殺しておきながら、覚悟の是非を問うのかよ？　どんだけ面の皮が厚いんだ？」
「……！」
「お前達にどんな大層な道理があるのかなんて知らないし、今更興味もない。俺が今することは此処にいる難民達を一人でも多く逃がして――テメェ等をぶちのめすだけだ！」
「勢いは認めましょう！　だが、それだけでは！」
力が増した。目の前の怪物を覆う白い炎が勢いを増し、祝福（ギフト）を授かった自分を凌駕しようとしている。驚きと畏怖を抱くガウェインだが、それでも自分の為すべき事を為す為に、太陽の騎士は更なる力を込めた。
その時、修司の目にあるものが入り込んできた。それは、絶対にあってはならないモノであり、絶対に防ぐべき事象だった。離れた所で同じ様に気付いたマシュがロマニとダ・ヴィンチの制止の声を振り切って掛けていくが……残った騎士がそれを許さない。

行く手を阻まれ、止めてと叫ぶマシュを他所に、その騎士の刃は振り下ろされる。凶刃の先にあるのは――幼き子供、輝く甲冑を身に纏う騎士を格好いいと憧れの眼差しで見つめていた無垢の少年。
そんな子供を、母が身を挺して庇った。振り抜かれる刃、無抵抗のまま切り裂かれた母親は我が子を守ろうと自身を盾にして、我が子を抱いて地に倒れる。
その光景を目にした瞬間、修司は目の前のガウェインに目もくれず駆け出した。脇目もふらず、親子を助けようと駆け出す修司の背中は……悲しいほどに無防備だった。
剣閃が迸る。戦場の中で敵対者に背を向けるなど愚の骨頂、目の前の敵を倒さずして余分の事に気を逸らす目の前の怪物は、ガウェインにとって格好の的でしかなかった。
戦いにおいて、非情に徹する事が常道であり、目の前の敵から目を

逸らす事こそが邪道である。そんな、自分に言い訳をして放たれたガウェインの剣筋は、恐ろしいほど正確に、修司の背中を斬り裂いた。
痛みが走る。礼装は破かれ、肉も裂かれ、血が流れる感触を感じながら、それでも修司は駆け出していく。両脚に力を込めて、瞬く間に騎士との距離をゼロにした修司は、母親諸とも斬ろうとする騎士に向けて、その鉄拳を振り抜き、騎士の頭部を消し飛ばした。
倒れ、消滅する騎士に一瞥すらせずに、修司は着ぐるみの残骸を脱ぎ捨てながら母親の下へ駆け寄り、即座に自身の気を分け与えていく。
「修司さん！　お願いです！　どうか、どうか助けてください！　この方達はただ助けて欲しかっただけなんです！　自分じゃなく、自分の子供の為に、救いを求めてきた……ただ、それだけなのに!!」
騎士達を蹴散らしたマシュが立香と共に駆け寄り、涙を流しながら訴えてきている。助けて欲しい、そう叫ぶマシュに修司は応える余裕すらなく、目の前の母親を助ける事に意識を向けていた。
「……お母さん？」
そんな、混沌とした戦場の中で母親の子供が声を絞り出す。その声は平時となんら変わらず、まるで夢でも見ているかの様な反応。少年は、まだ理解できていないのだ。自分の母親が自身の憧れる騎士によって倒れたという事実に。
「――――大丈夫だ。お母さんはきっと元気になる。君、将来の夢はなんだい？　今の内に考えておくといい、親にとって子供の夢は親の夢と同然なんだからさ」
その声は、震えていた。自身も背中を裂かれていると言うのに、痛みと感情を圧し殺して修司は少年を安心させるように語りかけるが、立香にはその修司の声は震えているように聞こえ、同時に理解してしまった。
白河修司の力は強力だ。内に秘めた気という力は多くのサーヴァントを打ち破り、魔物を、ドラゴンさえも倒して見せただけでなく、人に対して治癒の様な役割を担っていた。
強力にして万能。しかし――――全能ではない。傷口は既にふさが

り、出血も止まっている筈なのに、女性の顔色は……一向に良くならなかった。
たとえ傷を癒し、血を止めても、死という事実は覆らない。そんな、当たり前の事実に気付くには、修司という男は強すぎた。
「あぁ……ルシュド……よかった。わたしの希望……わたしの……人生……」
「どうか……健康に……善き毎日が、送れますよう……」
「お母さん？　泣いてるの？　もう、泣き虫なんだから、そんなぎゅうってされると……苦しいよう？」
「あぁ、あぁぁぁぁぁっ!!」
最期に我が子への未来を祈って、母親は事切れた。その事実にマシュは泣き崩れ、立香もまた泣きそうになる。しかし、それでも自分達にはやるべき事があると歯を食い縛り、母親が――――文字通り死んでも守って見せた少年を大事に抱き抱える。
少年は、既に意識を失っていた。騎士に切られる前に殴られていた少年は、既に意識を繋ぎ止めるだけで精一杯だった。母の死を理解できずに意識を失った少年は、立香に抱き抱えられる。
「マシュ、立って。私達にはまだ、やらなきゃいけない事があるでしょ？」
「先輩……はい。マシュ＝キリエライト、戦闘を続行します」
既に戦線は包囲されつつある。倒された粛正騎士達は白亜の城より続々と投入され、数の暴力となって立香達を押し潰そうとする。そうなる前に自分達もここから離れるべきだと、マスターである立香は決断する。
立香は立ち上がり、マシュも立ち上がった。だが、修司だけは、亡くなった母親の亡骸を静かに見下ろしていた。
「修司さん？」
揺さぶられるのは、嘗ての記憶。炎と血の海で目にした幼き頃の自身の記憶。
『生きて、あなただけでも！』
『生きるんだ。お前だけでも！』

嘗て、自分の為に全てを投げ出した両親。あの二人もきっと、この母親と同じ気持ちだったのだろう。たとえ、時代が変わっても、国とそこに住まう人々の価値観が違っても、根底にある人の善性は変わらないのだと、不謹慎ながらそう思っていた。

故に、だからこそ……。

「立香ちゃん、マシュちゃん、難民の人達の事、任せてもいいかな？殿は……俺が務めるからさ」

「修司くん、君は……」

「ダ・ヴィンチちゃんも、二人のフォローを頼む。万能の天才なんだ。これくらい、やってみせるだろ？」

もう、この男は止められない。憎悪ではなく、正しき怒りによって戦う修司を前に如何に万能の天才だろうと、止める言葉は見付からなかった。

「修司君、あの円卓の騎士ガウェインは、恐らく何らかの祝福を受けている。恐らくそれは彼の特性、〝聖者の数字〟に関係がある――」

「ダ・ヴィンチちゃん」

「っ！」

「俺は、大丈夫だから」

そういって、笑顔を向けてくる修司に、ダ・ヴィンチは今度こそ言葉を失った。今の修司はどうしようもなくキレている、それを心配させないように振る舞っているからこそ、ダ・ヴィンチには彼の怒りの程が理解できてしまっていた。

「分かった。なら、出来るだけ早く合流してくれたまえよ？　君達のサポートをするための私だ。あまり、ヤキモキさせないでくれよ？」

それだけを言い残し、先に逃げ延びた立香達を追い、ダ・ヴィンチもその場を後にする。残されたのは手負いとなった修司と、無尽蔵の粛正騎士達だけ、既に連中の狙いは修司に定まっている。圧倒的物量の前に、修司はただ平静を保ったまま、それらを睨み付けていた。

「自らを囮にして、仲間を逃がす。その心意気は認めましょう。しかし、貴方の選択は愚かだ。逃げるというのなら貴方ではなく、彼女達こそ囮にするべきだった」

「……」
「ここであなたが死に絶えれば、それは彼女達の死も同義。我々は、王の決定から逃げ延びる者達を、決して許しはしないのだから」
前に立つのは、太陽の騎士。聖罰という役割を任され、役割を与えられた円卓の騎士。堂々たる物言いのガウェインに対し、修司はただ静かに見詰めていた。
「残念です。山吹色の戦士よ、トリスタン卿の報告がなければ、その強さは我々、ひいては王にとって、決して無視は出来なかったでしょうから」
「……なぁ？」
「？」
「お前、なにやってんの？」
「なに？」
「無抵抗の人間を殺して、子供を殴って、母親を殺して、覚悟？　え？　お前達にとっての覚悟って、大量虐殺の免罪符かなにかなの？」
「……」
「それが覚悟っていうのなら、俺はそんなものいらねぇ。俺が今この場で抱くのは、テメェ等をここでブチのめすという――気持ちだけだ!!」
「ならば、その決意ごと塵となるがいい!!」
魔力が膨れ上がる。獅子王の祝福によって〝不夜〟の加護を受けている。これにより生来のモノである〝聖者の数字〟も常時発動状態となり、並外れた耐久能力を有するようになっている。
生半可な攻撃では掠り傷にもならない。跳ね上がる力の波動に修司は真っ向から受けて立つ事を決めた。
そして、彼が振るうのはもう一振りの星の聖剣。嘗ての騎士王が持つ約束された勝利の剣の姉妹剣。
「この剣は太陽の映し身。もう一振りの星の聖剣！　あらゆる不浄を清める焔の陽炎！」
「転輪する（エクスカリバー）――――勝利の剣（ガラティーン）!!」
「どっちが不浄なんだか……」

迫り来る炎の津波。大地を灼き、大気すら炎上させる炎の大海を前に、修司は静かに吐き捨てる。
もう、修司は聖都の連中のことは考えない。どれだけ思考を割いても無駄でしかないと、彼らを見て思ってしまったから。
如何なる理由があっても、修司は円卓を許しはしない。やめて欲しいと、許して欲しいと言うのなら、それは連中が殺してきた人々に対して言うべきだ。
――力を解放する。白から赤へ、修司の気力の炎が天を貫いていく。血のごとく赤い炎、その奥から淡く輝く光にガウェインと、その光景を隠れて見ている騎士は、まさかと絶句した。
嘘だ。あり得ない。だってそれは、自分達が希望を見出だしてきた……星の輝き。
「エクス――カリバー!!」

聖者の数字。それは言うなれば太陽の騎士ガウェインの全能力値を三倍にするという代物、全ての力が三倍となったガウェインは、確かに脅威と言えるだろう。
それに対して、四倍の界王拳で迎え撃つことにした修司は、四倍のエクスカリバーの力で迫り来る炎の津波を両断した。霧散していく炎の陽炎、自身の宝具を打ち破ったモノが、よりにもよって聖剣を模した技。ガウェインの心の衝撃は想像以上に強烈なモノだった。
「なぜ、何故貴様に、星の聖剣の真似事が!?」
「それを、お前にいう必要はあるか?」
「っ!?」
既に、修司はガウェインの間合いへと踏み込んでいた。なんという速さ、円卓の騎士でも捉えきれない速さに戸惑いながらもガウェインが選択したのは、自身の剣を盾にしての防御の体勢だった。
既に一度は己の聖剣が、修司の一撃を防いでいることはガウェインも熟知している。兎に角今は体勢を整えねば、混乱する思考の中であっても冷静に対処するガウェインに対し……。
「いいぜ、俺もテメェの命なんて興味はねぇ。俺がぶち壊したいのは、

最初からソレだ」
拳を握る。力を込め、気を込める。白河修司が奪うのは、敵対者の命ではない。彼等が支えとし、王に捧げると誓ったある意味に於いてもう一つの自分の映し身。騎士にとって命と同義にあたるもの。
聖剣。防御に構えたガラティーンは振り抜かれた修司の拳によって粉砕され、顔面へと直撃。ガウェインは遥か彼方、聖都の中央に聳え立つ塔の頂上部分へ激突する。
「受け取れよ獅子王、これが俺からの――――宣戦布告だ」
パンパンと手を叩き、埃を振り払いながら、修司は塔の頂上を睨み付ける。
そんな修司に呼応するかのように、玉座に座る獅子王も静かに修司を見下ろしていた。

その９２　第六特異点

「おーおー。連中、大将がやられた事で躍起になりやがったな」
遥か聖都の上空、大地を見下ろすほどに高い中央の塔の天辺から、黙視できるほどの砂塵が浮かび上がっている。
太陽の騎士ガウェインの撃破。その事実は昼だった世界が夜に戻った事で証明され、周囲に展開している粛正騎士達の間で瞬く間に広がり、小さくない衝撃となって動揺の波紋が伝播されていく。
円卓の騎士の中でも最高峰の実力者であるガウェイン、そんな自分達の直属の上官とも言える太陽の騎士が吹き飛んだ事で、最初こそは騎士達の足並みは及び腰となっていた。
しかし、それもほんの僅かの合間。開かれた正門の奥から続々と現れる粛正騎士達の援軍により、連中の気炎は息を吹き返した様に燃え上がっていく。どうやら、この戦場を俯瞰的な視界で眺めている指揮官がいるらしい。嫌なタイミングで押し掛けてくる騎士の群れに、修司はその額に脂汗を滲ませながら身構えた。
「やれやれ、数だけは大したもんだな。だが、その程度で俺の首を取られると思ったなら――見込み違いも良いところだぜ？」
正直に言えば、背中の傷を早く何とかしたいというのが本音である。幾らガウェインの持つ聖剣がサーヴァントの一部で、魔力の結晶であろうとも、その力の性質は嘗てのモノと変わらない。太陽の映し身というガウェインの謳い文句は誇張ではなかった。
切り裂かれた背中からジリジリと灼けるような熱の痛みが、修司の体力を徐々に奪っていく。幸いなのは背中の傷が灼かれている事で、出血が収まっているという事だ。
体力も奪われつつあるが、それでもまだまだ体は動く。立香達が完全に逃げ切るまで、殿を勤めようと修司が身構える。
城壁から、矢の雨が降ってくる。頭上を覆い尽くす程の凶器の雨に修司は気を解放させる。この程度なら拳圧だけで吹き飛ばせる。拳

に力を乗せ、今放とうとした時。
「はぁっ!!」
「っ!?」
突然、外套を翻しながら銀腕の騎士が腰に差した剣を手に、降り注ぐ矢の雨を弾き飛ばす。その気配は聖罰が始まる前から身を隠していた奴と同質のモノだった。
今まで隠れ潜んでいた騎士、そんな奴が今更なにしに来た。軽蔑よりも戸惑いの方が大きい修司は構えを解かずに目の前の騎士を見る。すると、その視線に気付いた騎士の男は振り返ると即座に頭を垂れて、謝罪をしてきた。
「突然の無礼、お許し下さい。私の名はベディヴィエール。円卓の末席に加えられている者です」
「……で？　その円卓の騎士が、今更何のようだ？」
「っ、気付いて……いたのですか？」
頭を下げての謝罪を口にしているベディヴィエールに対し、修司の声音は何処までも冷たかった。それは、戦いに乱入に対するものや、円卓の騎士を名乗る者に対する警戒ではない。これ迄難民達が襲われていながらも、何もしようとしなかった癖に今になって現れる事に対しての疑問と怒りだった。
「そりゃあな、お前の気配はさっきの奴と何処と無く似ている。難民の人達とは桁違いに強いお前の気配は、岩場の影で様子見していた位には丸わかりだったよ」
「……」
「それで？　無抵抗の難民達が襲われている中で、傍観を決め込んでいたお前が、今更俺に何の用だ？」
「それは……」
突然現れた円卓の騎士、ベディヴィエールと白河修司の邂逅は過去の特異点の旅の中でも、最悪の形となっていた。言葉を詰まらせて俯くベディヴィエールに対し、修司は若干苛つき始める。自分より背が高い癖に女の様にナヨナヨしたその態度に、ガウェインをブッ飛ばした事で、多少は沈静化した修司のボルテージは徐々に膨らみ始めてい

た。
　そんな時、正門の方から強い気配が現れるのを感じた。その大きさからしてガウェインと同格の騎士、背中を駆け巡る痛みを、脳内分泌(アドレナリン)で誤魔化しながら正門を見据えると、其処には大勢の粛正騎士達を引き連れた紫の騎士が、鞍の付いた馬に跨がりながら現れた。
「ランスロット卿！　やはり、貴方までもが……！」
「ベディヴィエール卿……だと？　バカな、何故卿が此処にいる!?」
「あ？　お前ら仲間じゃねぇの？」
　ベディヴィエールとランスロット。共に円卓の騎士に数えられる人物であり、嘗ては同じ王を仰いだ同士。てっきり、ベディヴィエールが円卓の騎士と合流する為にここへ来たのだと、そう思い込んでいた修司はまるで予想と反していた二人の反応に僅かながら戸惑った。
「何故我等が王に喚ばれなかった貴殿が、今更此処にいるのか。……いや、今更その是非は問うまい。今私の課せられた任務は、そこの山吹色の男を捕らえる事！」
　ランスロットが修司に剣を突き付け、周囲の粛正騎士達も呼応して身構える。ガウェインという大将格を倒れされたのにも関わらず、即座に体勢を整えさせるカリスマ性。その風貌は確かに最高の騎士と謳われるだけのモノがあった。
「へぇ？　殺すんじゃなくて捕獲か。そちらの王様は随分とお優しいんだな。難民達には容赦なく切り捨てる割にはよぉ」
「……全ては、我が王の聖断故に。責めるべきは実行したガウェインと、それを是とした我々にある。何も知らない若造が、知ったことを言わないで貰おうか！」
「だったら教えて欲しいもんだな、アンタ等の言う王がどれ程上等なモノなのか。我が子だけでも、そう願う母親を容赦なく斬り殺したお前らに、どれ程の立派な言い訳(理由)があるのかをよぉ」
「……！　全ては、我が王の為に！」
「思考停止かよ。騎士ってのは、皆こんなのばかりなのか？」
　自らを王の為と、まるで自分自身に言い聞かせるように口にするランスロットに、修司はゲンナリしながら呆れ果てていた。軽く挑発す

るつもりが、効果は抜群だ。感情を圧し殺しながら駆けてくるランスロットに、修司もまた身構える。
　その際に一瞬だけ隣にいるベディヴィエールを一瞥するが、どうやら彼は強いショックを受けている様で、とても戦える状態ではない。別に頼りにしている訳ではないが、目の前で殺されるのは……流石に目覚めが悪い。
　仕方ないから、何とか庇いながら戦うしかない。ランスロットは円卓の騎士の中でも最強の騎士として有名だが、そんな豪傑を相手にそう上手くいくのか。
「難しいけど……やるしかないか」
　迫りくる最強の騎士。マントを靡かせながら愛馬と共に駆けてくるランスロットを迎撃しようと、構えた体を更に低くしようとした瞬間。
『修司くん！　立香ちゃん達は安全圏まで退避した！　君もすぐにそこから離脱するんだ！』
「良かった。それはいいニュースだぜロマニ！　出来ればもうちょっと前に聞きたかった！」
『も、もしかして戦闘中だった!?　ゴメン！　怪我とかしてない!?』
　突然、割って入ってきたロマニの通信に目を丸くさせた修司は、振り抜かれる騎士の刃を直前で回避、傷は、なんとか頬を掠めるだけで済んだ。
　ロマニはゴメンと謝ってくるが、それは彼がこれまで必死に立香達をナビゲートしたからに他ならない訳で、今このタイミングで修司に撤退を指示したのは、立香達の安全圏が確保されたという事。
　そんな、懸命に自らの仕事を成し遂げた人間に罵声を浴びせるほど、修司は狭量ではない。
「ちょっと円卓最強とやりあっている所！　何とか隙を見つけ次第逃げるから、引き続き立香ちゃん達の事を宜しく頼むよ！」
『円卓最強って……まさか、ランスロット!?　ほ、本当に大丈夫なのかい!?』
「大丈夫にする為に、なんとか……する所、だ！」

馬上の上から奮われる剣閃。その悉くが凄烈を極めており、剣筋の鋭さもガウェインを凌駕している。太陽の聖剣を使い、面制圧を得意とするガウェインの剣に対し、ランスロットの奮う剣は相手の一点を崩すモノだった。

気の力で防いでいるが、そう長くは続かない。距離をとって反撃を試みても、ランスロットは間合いの詰め方も上手く、その戦い方は修司の戦闘スタイルと悪い意味で噛み合っていた。

このままでは不味いと、修司は全身から気力を放出して砂塵を巻き上げる。突然の目眩ましに動揺する事なく剣で振り払うランスロットだが、死角から現れる蹴りに僅かに反応が遅れてしまった。

「っ！」

咄嗟に剣で防ぐランスロットだが、彼の据わる場所は踏ん張りの利かない馬上。幾ら膂力のある身だとしても、修司の蹴りを防ぐには些か以上に力が足りなかった。

当然、馬から吹っ飛ぶ事になるランスロットだが、そこは円卓最強。宙に舞っても体勢を建て直し、追撃してくる修司に落ち着きを払いながら迎え撃つ。

奮われる剣戟、放たれる剛戟。剣に対して拳で戦う修司に戸惑うが、ランスロットは構わず剣を奮う。

「驚いた。よもや生身の人間が、これ程の実力を持ち合わせていたとは。人間の可能性には心底驚かされる！」

「最近、似たようなことを言われるけど、別に大した事じゃないだろ。過去を遡れば、強い奴ってのは幾らでもいるんだ。だったら今を生きる俺が強くなっても、然程驚く要素はないだ、ろ！」

振り抜かれる剣筋に合わせて、修司もまた拳を奮う。鍔迫り合いになって一瞬だけ睨み合う両者、互いに力を込めての一撃は、修司の勝利となった。単純な膂力にモノを言わせての押し出し、それは遠回しに修司自身が技ではランスロットには敵わないという告白にも見えた。

しかし、これでランスロットとは距離が空いた。奴が自分との間合いを詰めてくるまで僅かばかりの猶予が生まれたのだ。その間にで

きる限りをしようと、修司は偶々隣で立ち尽くしていたベディヴィエールに声を掛ける。
「俺はこれからここから離れるが……アンタはどうする？」
「わ、私は……」
「お前が何を思って此処に来たのかは知らないし、興味もない。だが、此処に残れば確実に捕まるぞ。俺も、本当なら此処にいる連中を全員ブチのめしてやりたいが……その前に、やらなきゃいけないことがある」
そう言って、修司はルシュドの母親へ視線を向ける。穏やかな死に顔、きっと息子の生存を信じて疑っていないのだろう。自身の生を擲ってまで繋げた息子の命、そんな彼女の想いを無下にする訳にはいかない。
故に修司は、未だに気持ちの固まっていないベディヴィエールに、決断を迫らせた。
「三秒やる。その間に決めろ」
「……お願いします。私も、貴方方の旅路に加えさせて欲しい！」
一瞬の間があったが、即決したベディヴィエールに修司はこの男も円卓の騎士なのだと、僅かだが見直した。とは言え、周囲には粛正騎士達が迫ってきており、更に正面には円卓最強の騎士が迫ってきている。
常識で考えれば離脱は不可能。しかし、白河修司という男ほど常識という言葉が似合わない者はいない。
「逃がしはせん！　嘗ての同士共々、大人しく縛に繋がるがいい！
――最果てに至れ。限界を越えよ。彼方の王よ、この光をご覧あれ！」
正面から真名解放の光が溢れてくる。ランスロットの放つ宝具、迫り来る極光を振りかざす円卓最強を前に、修司は不敵に笑みを浮かべる。
「悪いな、アンタとの決着はまた今度――太陽拳!!」
「た、太陽の光だと!?」
突然現れる太陽の光、周囲が夜に包まれているから余計強烈に輝く

光を前に、ランスロットの目は完全に潰される。眼光を焼く光、失明にこそ至っておらず、じきに収まるモノであっても、その痛みはランスロットや周囲の粛正騎士達を一時的に行動不能にするには充分すぎるモノだった。
だが、たかが視覚が奪われた程度で円卓最強は崩れやしない。不意打ちに備えて身構え、修司が近付くのに合わせて切り捨てる。そうランスロットが意識を集中させているが……修司が近づいてくる様子は微塵も感じられなかった。
一体何処へ？　やがて取り戻した視力で辺りを見渡せば、其処には修司とベディヴィエールの姿はなく、あるのは自分の部下達だけである。
自分は、夢でも見ているのか？　そう呆然としているランスロットの遥か後方には、ベディヴィエールを抱えながら飛翔する修司の後ろ姿が僅かに残されていた。

「……それで修司君、其所の騎士は一体？」
「拾った」
「目が、目がぁぁっ!!」
「ルキウスさん、しっかりしてください！」
「くっ、一体誰がこんな酷いことを！」
「……」
「修司君、取り敢えず手当てをするから、そのあとは……少し、お話しようか？」
「あ、はい」

その９３　第六特異点

『そうか。花の魔術師マーリンは君を遣わしてきたのか』
「はい。魔術師殿から話は聞きました。人理焼却、その恐ろしい謀を成し遂げた魔術王の思惑を打ち破ろうと、特異点を修復している者達がいる。と」
「あの、ベディヴィエールさん。目の方は大丈夫ですか？　先程まではその、物凄く悶えていたようでしたから」
「え、ええ、大丈夫です。心配してくれて、ありがとうございます。正直言えば、まだ少しだけ目がチカチカしますが、じきに元の視力を取り戻す事でしょう」
「はぁー、良かった。それなら安心したよ。修司さんてば、いつでも前振り無しで突拍子の無いことをするんだもん」
「わ、悪かったよ。反省してるって」
　あの後、聖都から無事に脱出し、殿を務めていた修司とも合流した立香達は、彼の手に抱えられていた騎士の男、ベディヴィエールから色々な情報等を聞き出し、修司には予想以上に少なくなっていた難民達の事を伝える事になった。
　ベディヴィエールは、気が付けば砂漠の大地に佇んでいて、人づてを頼りながらこの特異点をさ迷い歩いていたという。その道中で聖都に関わる情報を聞き出し、嘗ての円卓の騎士の非情な噂を耳にし、真偽を確かめる為に、それまではルキウスなる皇帝の名を偽名に使い、人知れず活動していたという。
　その途中で、たまたま魔獣に襲われている立香達と遭遇し、親切心で手助けをしてくれたのだと、他ならぬ立香が代弁する。
　そして、半数以上の難民達が聖罰からギリギリ逃げ延びたとある商人が引き取り、保護した事でこの人数になったのだと説明する。
　難民の話……特に、商人が保護した辺りを聞いてから、修司の表情は途端に柔らかくなった。余程彼等について気に病んでいてのだろう。生き延びた難民達の事を想いながら、改めて修司はルキウス―

――改め、ベディヴィエールに向き直る。
「と、そんな感じで私達はルキウス――――ベディヴィエールさんと出会ったわけなんだ」
「そうか。なら、アンタは一応俺達カルデアの恩人と言えるわけだな。礼を言わせてもらうよ、本来ならその役割は俺が請け負うべきモノだったのに……」
「い、いいえ！　そんな、私のしたことなど大した事はありません。それに……私は、あの聖抜の場にいたのに、マトモに動けませんでした。目の前で行われている凄惨な光景を前に、唖然とするばかりで何も出来ませんでした」
　立香達の話を聞いて、ベディヴィエールこそが彼女達の窮地を助けてくれたルキウスなる騎士だった事を知った修司は、聖都で起きた気持ちを押し殺して呑み込み、ベディヴィエールに頭を下げる。
　そんな修司に、ベディヴィエールは両手を振って否定した。円卓の騎士でありながら、嘗ての同志達の蛮行を糾弾せず、ただその凄惨な殺戮に唖然としているだけだと自身を嗤い、侮蔑する。
「修司殿。貴方が思っている通り、私は情けなく、卑怯な人間です。あの場で、誰よりも円卓の蛮行を糾弾しなければいけなかったのに、私は目の前の光景を否定するだけで精一杯でした。言い訳はしません、私こそがあの場で、誰よりも卑怯者だった」
　所詮は風の噂だと、どうせ円卓の騎士の誰かがやらかして広まり、誇張された噂なのだと、ベディヴィエールは内心で一蹴していた。あの誉れある円卓の騎士達がそんな事をするはずないと、彼の騎士は信じて疑わず、それ故に目の前に広がる惨劇を前に思考が追い付かず、立ち尽くしていた。
　彼が我に返ったのは、修司がガウェインを殴り飛ばす直前。嘗ての王が放つ聖剣の如き輝きを前にした時の事だ。あの光で自分は正気に戻れた。そう言って頭を下げるベディヴィエールに、修司はこれ以上強く言うことはなかった。
「……別に、俺に謝ったって仕方ないだろう。難民達を虐殺していたのは円卓の連中だ。そして、あの子の母親を助けられなかったの

も、俺達の責任であり、奴等の所為だ」
「……」
「今、母親を失って誰よりも辛いのは俺達じゃない。ルシュド君だ。全ては、あの子の気持ち次第という事を、忘れない方がいい。お互いにな」
「それは……そう、ですね」
「立香ちゃん、ルシュド君は？」
「今はスピンクス号で眠ってる。よっぽど疲れていたんだろうね」
「そうか。……ダ・ヴィンチちゃん、ここは任せるよ。俺は周辺の見回りをしてくる。一応、俺達追われている身だし、頭も冷やしておきたいしね」
「あまり、遠くにはいかないでくれよ？　手当てはしたとは言え、君は怪我人だ。砂漠の夜風は傷に染みるからね」
　それだけを言い残し、修司は一度立香達から離れていった。ベディヴィエールに対して修司のらしくない対応に立香とマシュは揃って首を傾げた。
「あの、修司さんはどうしたのでしょうか？　なんというか……その、彼にしては色々とおかしな言動が多々ある様な気がするのですが」
「うん、なんかおかしかったよね。修司さん……どうしたんだろう？」
『……』
　今は一時の休憩。聖都からの追手の可能性を考えれば、あまり一つの場所に長居は出来ない。難民達の事を考えれば、自分達の行動範囲は限られてくる。それまでには修司も戻ってくるのは皆が分かっているだろうし、修司もまた理解している。
　だからこそ、ロマニ＝アーキマンは何も言えなかった。白河修司、彼の生い立ちを知るが故にＤｒ．ロマニはそこまで足を踏み入れることは出来なかった。
　それから暫くして、ベディヴィエールは難民の一人と交渉し、一行は山岳地帯に陣取っている山の翁達の所へ向かう事になる。行動を開始する頃には戻ってきた修司と共に、行動を再開させるのだった。

◇

「――――失態、という言葉では最早足りんな。一体何故、これ程の損失を出してしまったのか。ガウェイン卿、あの聖抜で一体何が起きたというのだ」

白亜の城の頂上。外を見下ろし、地平線の彼方まで見据える程に高く聳え立つ玉座の間。そこに集うのは嘗て円卓の騎士と謳われてきた者達が王のいない玉座の前で立ち尽くしていた。

重苦しい空気の中、最初に口を開いたのは黒い鎧を身に纏う男性、その氷にも鋼にも見える冷たい目線は息の荒い嘗ての同僚に対し、何処までも容赦なく浴びせている。

そんな男の視線を直視するガウェインは、外見こそは平静を装っているが、呼吸している息は僅かに荒くその目は何処までも暗い。原因となっているのは先の戦いで受けた傷と、己の分身として扱っていた聖剣が砕かれたという事実、ガウェインの精神的ダメージは予想以上に深刻で、こうして玉座の前で立っているだけでも限界に差し掛かっていた。

「――――随分と辛そうで申し訳ないが、生憎休んでいる暇はないぞ。我が王は完璧だ。故に僅かばかりの〝汚れ〟も容認できない。太陽王との決戦を前に、些末なトラブルは抹消しなければならない。そうであろう？」

「……ええ、無論です。アグラヴェイン卿、我等が王に間違いはな

く、あるのは何処までも公平な決断だけ、であるならば、私がその足を引っ張るわけにはいかない。全て、お話ししましょう」
アグラヴェインという騎士の言葉に気を取り直したガウェインは、聖抜の儀で起きた出来事を余すことなく口にした。当初こそは落ち着いてガウェインの報告を耳にしていたが、太陽の騎士の敗北と聖剣の粉砕、加えてみすみす生き恥を晒してしまっている事を余すことなく伝えると、玉座の間は前以上に重苦しい空気に包まれる。
そんな重苦しい空気を破ったのは、やはりアグラヴェインだった。
「――成る程、そんな事が」
「信じられないないのも無理はない。聖剣を折られ、生き恥を晒している私こそが、そんな気持ちで一杯です」
「……あぁ、分かっている。卿が偽りを口にしていない事など、損壊した塔の一部を見ただけで理解している。だが、その山吹色の男とは一体――」
「恐らくは、私と相対した者と同じ輩なのでしょう」
「失礼、ガウェイン卿、アグラヴェイン卿。二人の話に割って入るつもりはありませんでしたが、何せ内容が内容です。心当たりのある身としては、放っておくわけにはいかないと思い、口を出させていただきました」
嘆きの騎士トリスタン。その閉じられた瞳の奥から感じられる狂気は、既に人の道を外れ、その手には多くの難民達を手に掛けた血で染まっている。私は悲しいと嘯きながら、その実誰よりも嗤っていた。
そんな彼の口出しに目を細めたアグラヴェインは、両腕を組んで思考を巡らせる。トリスタンを迎撃し、ガウェインを聖剣ごと撃破した怪物。そんな輩が何故、今になって出てきたのか、考え付く情報の限りをその頭脳で纏め上げたアグラヴェインは、一つの答えに行き着いた。
「――カルデアか」
しかし、そんな彼の言葉は新たに現れた神々しい王の登場により掻き消されていく。こんな夜更けに登場していただけるとは、アグラ

ヴェインはそんな感極まった感情を押し殺し、他の騎士達に倣って王の前に跪く。
「王よ。この夜更けにご尊顔を拝謁出来るとは、感謝の極み。しかし、カルデアというのは？」
「急ぎの事案なのだろう？　答え合わせの必要はないぞアグラヴェイン卿。そしてトリスタン卿を退け、ガウェイン卿を打ち破った山吹色の男、その者はほぼ間違いなくカルデアの者と見て間違いはない。事実、その男は先程まであの聖抜の場でこの私を睨み付けていたのだからな」
「あぁ、私は悲しい。天に唾を吐くに等しい蛮行を許してしまうとは。やはり、彼の者を今からでも追いかけ、始末を付けるべきなのでは？」
「確かに、トリスタン卿の言うことにも一理ある。その者が間違って太陽王と手を組み、此方に仇なすとあれば、それは無視できない脅威となる。もはや一介の魔術組織程度だと、侮る事は出来ますまい」
　これ迄は、カルデアなる組織を下に見ていた円卓の騎士達。不吉なる予言によって示唆された終末の一節はカルデアなる星見の魔術師達の到来が予見されていた。
　そんな予言を円卓の騎士達は誰一人鵜呑みにはせず、来るなら来てみろ！な精神で迎え撃つつもりでいた。しかし、蓋を開ければその脅威は凄まじく、カルデアの人間の一人らしい山吹色の男によって粛正騎士達は５０人程消滅し、ガウェインは聖剣諸とも顎を打ち砕かれてしまっている。
　更に言えば、ランスロットからの猛攻すらも捌き、不可思議な術で姿を眩ませたのだとか。何度報告を読み返しても信じ難い内容だ。そんな奴が太陽王と手を組み、此方に攻めいってくるとなると、此方の被害規模は予想を遥かに上回る事になるかもしれない。
　なら、そうなる前に手を打つべきだ。そう考え、不敬であることを承知の上で、アグラヴェインは目の前の獅子王に具申を告げる。
「我等が王よ。不敬を承知で具申をさせて頂きます。今すぐに兵を挙げ、追撃を仕掛けるべきかと思います。どうか、ご一考の程を……」
「私に意見するかアグラヴェイン。如何に補佐の任を与えたと言って

も、其処までの越権行為は許した覚えはないが？」
淡々と口にしているだけなのに、のし掛かってくる圧力（プレッシャー）はサーヴァントの枠を越えている。麗しい相貌とは裏腹に何処までも冷酷にして無慈悲な王。
だからこそ、アグラヴェインは今度こそ王に仕える事を誓ったのだ。文字通り、己の全てを捧げて。
故に、この一件で王に断罪されようとも構わない。全ては我等が王の為、そう自分に言い聞かせて王の判断を仰ぐアグラヴェインは、ただその時が来るのを待った。
「――――だが、貴公の言うことも理解できる。あの男は少々厄介だ。潰すにせよ、利用するにせよ、先ずは手足をへし折る事が先だろう」
「ハッ、では……」
「既に追撃はモードレッドに命じてある。あの者ならば、討ち取る事はできなくても、傷の一つくらい遺せるだろう」
「では、ランスロット卿にも追撃の参加を……」
「いや、既に彼にはキャメロット周辺の守りに入ってもらっている。モードレッドの抜けた穴を埋めてもらう必要があるからな。必要であるなら、貴公が後付けして構わない。貴公ならば、後詰めの采配も出来ることだろう」
「……ハッ、その役目、謹んでお受けいたします」
「ガウェイン卿も、今は休むといい。聖剣の代わりは後で私から見繕っておこう。尤も、ガラティーン程の聖剣は早々に見付かりそうにないがな」
「ハッ、有り難き幸せ」
そうして、獅子王は玉座を後にした。静寂に包まれる空間、誰一人言葉を口に出来ないまま、時間だけは過ぎていき……。
「未だに王は、あの男を信用するのか」
鉄のアグラヴェインのその言葉は、誰の耳にも入りはせず、無音なる玉座の間に溶けていった。

「――――所でロマニ、そっちからアルトリアさん喚べたり出来ない？　円卓の連中も、嘗ての上司を見れば、流石に此方に聞く耳も立てるんじゃないか？」
『あー、その事なんだけど……ゴメン、ちょっと無理そう』
「もしかして、この特異点となんか関係があるのか？」
『いや……その、そっちの映像は断片的にしか映ってないんだけど、聖抜の時だけ映像が鮮明に映し出されちゃって……』
「……見ちゃった感じ？」
『うん、しかも此方はちょうどお昼時で、彼女ちょうどご飯を食べてた最中だから、アレを直視しちゃったみたいで……ナイチンゲールが心肺蘇生をした後、医療室で療養中』
「……因みに、黒い方は？」
『君がいるから行きたくないってさ』
「あの野郎、帰ったらマジでへし折ってやろうか」
そんなやり取りがあったとかなかったとか。

その９４　第六特異点

「もうすぐ、山岳地帯の集落です」
『いやー、ここまで来るのに時間掛けちゃったけど、どうにか誰一人欠けることなく此処までこれた。それだけで嬉しい限りだよ』
「ダ・ヴィンチちゃんのお陰だよ。水とか錬成してくれるし、狩った魔物の毒とか無害化してくれるし、お陰で難民の人達も飢えることなく此処までこれた」
「ふっふーん！　もっと誉めてくれてもいいんだよ？　まぁ流石にスピングス号は持ってこれないから麓に隠しておいたけど……」
　難民達を引き連れての行軍も滞りなく進み、途中で遭遇した魔物や魔獣を狩り、それらを上手く調理し、難民達にも振る舞う事で、どうにか此処まで脱落者を出さずに此処までこれた一行は、先頭に立って案内を続ける難民の言葉に勇気付けられながら、目的地に向けて歩みを進めた。
「所で修司君、此処まで近付いたのだから、君の探知能力でそろそろどの辺りに集落があるのか見当が付いてそうなんだけど……どう？」
「期待されるのは俺としても嬉しい限りだけど……正直に言おう、全然だ。此処まで近付ければ、大抵何処に誰がいるのかなんて分かるのに、何も感じない。こんなの、今まで一度だって無かったのに……」
　そう言ってダ・ヴィンチの言葉に答える修司の頬には大粒の汗が一つ、流れ落ちていく。集落に近付けば近付く程に感じる違和感。殺気も殺意もないのに、修司は何故か、自身の首に死神の刃が添えられている気分になった。
「気を付けろダ・ヴィンチちゃん。太陽王や獅子王も手強い相手だが、それ以上にヤバい奴がいる。此処まで近付いて分かった。多分俺は、コイツにはまだ勝てない」
「え、えぇ～」
「これ迄ハチャメチャだった君が、そこまで言う？」

ギリシャのヘラクレス。ケルトのクー・フーリン。いずれも歴史に名を刻み、時には神々すら凌駕する強さを奮ってきた選りすぐりの大英雄。そんな彼等を正面から挑み、打ち破ってきた修司が初めて口にする〝勝てない〟の一言は、ダ・ヴィンチや立香やマシュ、ロマニとカルデアの面々に少なくない衝撃を与えていた。

『そ、そんなヤバい奴がこの山岳地帯に!? だ、大丈夫なのかい!?』

「分からない。けど、殺気や殺意がないから、此方に対する敵意や害意もない。と、そう思って信じるしかないとしか、言えないな」

ハハハと苦笑いを浮かべる修司に、ロマニはマジかと天を仰いだ。山岳地帯を覆いながら、一切の気配を感知させない何か。腕を磨き上げ、死線を潜り抜けてきた修司だからこそ感じ取れた違和感。不安になる立香達だが、取り敢えず太陽王に謁見した時と同様に失礼のないように振る舞うしかないと、修司は気休め程度のアドバイスを送った。

もうすぐ集落に着くと言うのに、意気消沈となる立香達。まぁ何とかなるさと不安な気持ちが一周回って開き直りの領域まで至った修司は、半ばヤケクソ気味で先頭に躍り出た。勿論、難民達の様子も欠かさず見守るようにして。

そんな時、ふとベディヴィエールが近付いてきた。その表情は何処か暗く、何やら思い詰められている様な感じ。今更修司が彼に何かを思うことはなく、今は共に旅をする仲間として認めている。そんな彼が、改まって自分に何の用なのか、近付いて来るのを敢えて気付かないフリをしながら待っていると……。

「あ、あの……修司さんは相手の気配や強さを知る術を持っていたりするのでしょうか？」

「え？ まぁ、うん。そうだな。そこまで詳しくは感じ取れないが、ソイツが何処にいて、どのくらい強いって言うのは、感覚的ではあるけど分かるぞ」

「で、では……もしかして、私の事も？」

「うん？ まぁ、多少はな。あ、もしかして一人で円卓の連中と戦おうとしているのか？ だったら止めた方がいい。先の正門でランス

ロットと戦った時にそれとなく探ったけど、アンタの強さはどう見繕ってもランスロットより下だ。なんならマシュちゃんにすら劣る。その義手の腕がどんなに凄い宝具かなんて知らないけど、あまり背負い込まない方がいいぞ」
「い、いえ。そんな思い上がっているわけでは……」
「なんか嫌な言い方をしちまったけど、力の強弱が戦いの情勢を決める絶対条件ではないからな。工夫を凝らして頑張ろうぜ」
「あ、はい。……ありがとうございます」
「？」
なんだろう。てっきり自分の強さがどれだけあるのか知りたいから訊ねて来たのかと思ったのに、正直に感じた事を言えば、何やら凹んでしまったベディヴィエールに修司は首を傾げ、頭に疑問符を浮かべた。
サーヴァントであるベディヴィエールは、その強さこそ円卓の中では大したことは無いかもしれないけど、別に戦闘能力だけがサーヴァントの強さではない事くらい、修司にだって理解できている。力が無くとも一級のサーヴァントと渡り合える英霊だっているのだ。
その最たる例がロビン＝フッド。搦め手や罠、更には直接姿を消す宝具の持ち主で、彼の扱う毒の弓矢は撃った相手に確実な死を与えるほどに強力で、強烈な武器だ。
切嗣ことアサシンエミヤもそう言った技が上手いし、アーチャーのエミヤだって、創意工夫でアルトリアとの模擬戦に食らい付いている。修司としてはヘラクレスやアキレウスといった大英雄より、ヘクトールの様なあらゆる手段を使ってくる相手の方が厄介だと認識している。
だから、ベディヴィエールもランスロットに挑む際は工夫を凝らして頑張って欲しいと本気で思っている。尤も、湖の騎士の相手に相応しいのは別にいるのだが。
ともあれ、集落まで後一息だ。幸い、あの恐ろしい感覚は今の所感じない。悪戯に探らない限り、此方には無害である事を何となく察した修司は、それから気の探知をすることなく皆と山道を歩いていく。

そして……。
「そこの一行、止まれ」
「「っ!?」」
「円卓の騎士を連れて、何をしに来た？　僅かな希望さえも摘みにきたというのか？」
怒りに震えた声が、周囲に木霊する。ダ・ヴィンチは辺りを見渡して周囲に人影が無いことを確認し、マシュは盾を構えて立香や難民達を庇うように前に出る。ベディヴィエールも銀腕を前に構えるなど、それぞれが対応している最中、修司だけは目を鋭くさせている。
この声に聞き覚えがあった。それはまだ自分が高校生だった頃、地元で起きたある戦いの儀式に乱入していた頃、ソイツは友人と姉代わりの人を拉致し、脅しの道具にした奴と、全く同じだった。
ざわつき始める感情、静かに声に耳を傾けながら気を高め始め、いつでも不意討ちに対処できるよう身構えていると……。
「いやいや呪腕の旦那、昨日あんなにはしゃいでいたんだから、今更凄むなって。〝我が同胞達を救ってくれただけじゃなく、円卓の騎士に一矢報いるとは見事！　是非ともお会いしたい！〟　なんて言ってたんだからさ」
「ちょ、アーラシュ殿!?　色々と省き過ぎでは!?」
「……」
突然現れたアーチャーのサーヴァントらしき男と、髑髏の仮面を被った黒い男。その髑髏の男は、間違いなく嘗て敵対した奴と同じなのに、彼の人間らしい一面を目の当たりにした修司は、戸惑いながらも身に纏っていた気を霧散させるのだった。

◇

「――そう、ですか。サリアが……」
「謝って済むことではないのは、重々承知している。情けない話だが、俺達は彼女を……ルシュド君の母親を死なせてしまった。言い訳はしない。好きに罵倒してくれていい」
その後、これ迄の道中の経緯と此方の事情を説明し、アーラシュと名乗る弓兵のサーヴァントの仲介もあって、集落に入ることを許された一行は、其所で改めて自分達の事情を話すことで自分達と協力関係を結べないかを模索した。
集落の守護者、山の翁として知られる呪腕のハサン。彼と交渉する事になったのはカルデア側の最高戦力の一人、白河修司である。
修司は、最初こそはその事に若干渋っていたが、ダ・ヴィンチが集落の人々に錬成した水を配っていたり、ベディヴィエールがアーラシュと共に食料確保の為の狩りに出掛けたり、立香とマシュは二人の手伝いに向かったりと、それぞれがやるべきことしている中、たまたま手の空いているのが修司となった。
正直に言えば、修司も集落の手伝いやらに出向きたかったが、生憎此処には万能の天才がいる。カルデアに召喚され、人を扱うと言う事を知った彼がいる以上、自分の出る幕は殆んどない。故に修司も観念して呪腕のハサンに獅子王と戦う際の協力者になって貰おうと、話し合いの場に出ることとなった。
その筈だったのだが……。
「何を言いますか。貴方方は此処に来るまで、既に我々にとって返しきれない恩がある。聞けば、煙酔のハサンが死んだ際、奴に変わって円卓の騎士を足止めしてくれたのは、此処に訪れた者達から聞き及んでいます。サリアの事は確かに残念であり、無念ではありますが、貴殿が気に病む必要はありませぬ」
「あ、あぁ……そう言ってくれると助かる」
どうしよう。このハサン、メチャクチャ話しやすい。気さくという

かなんというか、親しみやすい雰囲気を纏っている。最初に出会ったときは殺気と殺意全開で人質を取ったりしていたから、てっきりもっと陰湿な奴かと思っていたのに……。
しかも口調も丁寧で好感が持てる。あの間桐臓硯のサーヴァントでなければ、ここまで印象が変わると言うのか。
そんな風に戸惑いながらも、着々と話を進める二人。これ迄の経緯から、これから具体的にどうしていくかの話にシフトしようとしていた時、突然建物の中へアーラシュが入室してきた。
「話し合いの最中済まない。緊急事態だぜ呪腕さん！　西の村に円卓の騎士が近付いてきているぞ！」
「な、なんですと!?」
「旗の色も確かめてきた。赤色の、竜の首を断つ稲妻の模様。間違いない、西の村に近付こうとしているのは円卓の遊撃騎士、反逆のモードレッドだ！」
「おぉ、おおぉぉぉお。なんと言うことだ。皆殺しにされるぞ！」
モードレッド。その名前を耳にした瞬間、修司の脳裏にロンドンでの彼の騎士の姿が浮かんだ。荒々しくて勇ましく、身に纏う赤き赤雷の騎士。歪んでいても、騎士王に対する想いだけは本物だったあの騎士が、女子供もいる村を蹂躙しようとしている。
気付けば、修司はアーラシュに詰め寄っていた。
「アーラシュさん。西の村ってのはここからどの辺にある？」
「……それを聞いて、アンタはどうするつもりだ？」
「決まっている。止めるんだよ、モードレッドは付き合いは短いが面識がある。アイツを、これ以上人殺しの道具にさせて堪るかよ」
ジッと見詰めてくるアーラシュに、修司もまた見返した。睨み合う事数秒、先に折れたのはアーラシュの方だった。
「やれやれ、俺の千里眼が通用しないからどんなヤバい奴かと最初は思ったが、何て事ない気の良い兄ちゃんじゃないか。――俺達もすぐ駆け付ける。アンタの背中の傷は、まだ癒えきってないんだ。無茶はするなよ？」
そう言って笑い、送り出してくれるアーラシュに修司もまた笑顔で

頷いて見せた。建物の暖簾を潜り、外へ出る。この時、自分の名前を呼ぶ声に視線を向けると、元気な姿のルシュドが此方に向かって手を振っている。

これから先、彼にはきっと辛い道が待っている。母を失った事実は、きっとこれからの彼の心に浅くない傷を残すだろう。これ以上、彼の様な境遇の子供を生み出しはしない。白い気の炎を身に纏った修司は、西の村の方角から感じる強い気配を頼りに跳躍、飛翔していった。

初めて目の当たりにする人間の飛行、それを集落の人々は唖然としながら見送り……。

「はは、何だよあの兄ちゃん。とんだハチャメチャ野郎じゃないか」

アーラシュ＝カマンガーは笑いながら立香達の所に向かうのだった。

その９５　第六特異点

――広大に広がる蒼空に、赤い雷が迸る。放出し、荒れ狂う嵐のごとく渦巻くそれは、まるで意思を持つ生命体の様で、吹き荒れる赤き雷鳴は周囲の地形すらも呑み込んで、その形を変えていく。

そんな、一種の災害染みた赤雷に地形諸とも呑み込まれる影があった。〝百貌のハサン〟　生前の多重人格症を宝具として昇華させ、その特異性ゆえに斥候や諜報、工作活動に秀でた能力を持つアサシンのサーヴァント。闇に紛れ、闇の中からの搦め手はこれ迄の戦いの中でも円卓の騎士達を相手に生き残れるほどの優位性を保ってきた。

しかし、そんな彼女も太陽が空に浮かぶ晴天の下では、その能力も半減以下にまで下がり、しかも相手が円卓の騎士の中でも暴威として知られるモードレッドの前では、時間稼ぎが関の山となっていた。

「あぁ、うざってぇ！　とっととくたばれボウフラ共が！　虫みてぇに沸いて出てきやがって！」

「ぐっ、おのれ――どうやって、この村の位置を……！　我らの隠蔽に落ち度は無かった筈！」

「あぁ？　知るかよそんなの、こんなの勘だよ、勘。陰気でせせこましい負け犬どもがいそうな場所に、聖剣をブチ込んだらビンゴ！　ってだけだ」

身を挺して、村を守るハサン。そんな彼女を嘲笑いながら村発見の経緯を吐き捨てるモードレッドに、百貌のハサンは歯を喰い縛って、仮面越しでありながら、目の前の騎士を睨み付けた。

勘。そんなふざけた理由で村が露見した。その事実だけでも腹立たしいのに、目の前の騎士を凌げる自身の未来が予想できない事に、百貌は怒り以上に焦りを感じていた。

今、ここでモードレッド達を抑え込める者は自分しかいない。村人達の避難が完了できていない今、自分が殺られてしまえば、後に待つのは惨い虐殺だけだ。それだけは何としても阻止せねばならない。

「まぁ、当たりはしたが本命じゃないのが残念だけどな。ガウェイン

をぶっ飛ばし、ランスロット相手に互角に打ち合った生意気な山吹色の野郎、ソイツを殺せば流石に父上に報告できると張り切ったが……こりゃあ、見込みは薄いかね」
「こんなシケた村を皆殺しにした程度じゃ、褒められる所か叱られる事すらねぇ！　どうしてくれる!?　オレが処刑されるまで、あと数日もねぇってのに！」
　激昂して言い放つモードレッドに、百貌は違和感を覚えた。目の前の騎士は何を言っている？　処刑？　何故獅子王の騎士の一人である奴が処刑されるのか、理解しがたい言葉を吐くモードレッドに、百貌は今が戦いの時であることを一瞬忘れてしまう程に呆けてしまう。
「……処刑？　お前は処刑されるというのか？　円卓の騎士であるお前が？」
「おう、そうだぜ！　父上の聖抜が終われば、聖都以外はみんなあの世行きだ！　聖都に城を貰えなかったオレも、めでたく燃え尽きるって話さ！　だからよ、なぁ？　最後は犬死にするよしみでさ、反逆者ども、ひいては山吹色の野郎がいる村ってのを教えてくれよ。そうすれば楽に殺してやる。村の奴等もいたぶらず、首を刎ねるだけで済ませてやるぜ？」
　笑いながら、何て事ないように話すモードレッドに、百貌は寒気を感じた。目の前の騎士は狂っている。盲目的に王に付き従い、ただ殺戮を行い、果てには自分も死ぬことを受け入れている。
　そうであることが正しいと、そう信じて疑わない反逆の騎士の狂気に似た感情。自分達の信じる信仰とは違う、狂おしい程の信仰が目の前の騎士の中に根付いてしまっている。
　やはり、ここでこの騎士を捨て置くわけにはいかない。相討ち、それが敵わなくとも暫くの間動けなくする術を模索しなければならない。何れにしても、火力のない自分には難しい話だ。
　それでもやるしかない。そう身構えた百貌は毒の塗られた短刀を構えた時……。
「――――話すつもりはねぇか。なら死ね。虫けらみてぇに潰してやる。テメェも、その後ろにいるカス共含めてなぁ！」

反逆の騎士は猛り吼え、赤雷を纏って突き進んでくる。逃げ場はなく、正面から挑むしか失くなった百貌のハサンは、次の瞬間に挽き肉となって砕け散る自身の最期を幻視した。
しかし、それでも自分は退くわけにはいかない。残る全ての分身達の力を費やし、何としてでも食い止めてみせる。そんな彼女の心情とは裏腹に、百貌の分身達はモードレッドの振るう剣の一振りにより、成す術なく砕けていく。
「とっととくたばれ暗殺者！　父上に逆らう愚かさを、あの世で嘆いてろ！」
遂に間合いを詰められ、剣が振り下ろされる。逃げ場も避ける隙もない一撃。不可避の死を前に百貌がせめてもの抵抗として防御の姿勢を取ったとき――――。
「っ!?」
山吹色の衝撃が、振り下ろす剣ごとモードレッドを吹き飛ばした。驚嘆に目を見開かせる両者、特にモードレッドは、視界にすら映らなかった突然の衝撃に驚きを隠せずにいる。
何が起きた？　吹き飛びながら体勢を整え、地に剣を刺して立ち上がるモードレッドが目にしたのは、山吹色の胴着を着た男、白河修司が静かに反逆の騎士を見下ろしていた。
「き、貴殿は……」
「百貌のハサンだな？　話は呪腕さんから聞いている。コイツ等は俺に任せて、アンタは村の人たちを避難させてやってくれ」
「あ、あぁ！　済まない！　ここは任せた！」
突然空から現れ、モードレッドを蹴飛ばした光景を目の当たりにした百貌は、その現実味のない光景に一瞬呆けてしまっていたが、修司の言葉によって我に返り、自分のするべき事を思い出し、村へと駆けていく。
「っ、逃がすな！　追って全員始末しろ！」
「行かせるわけねぇだろ」
そんな百貌のハサンを追う粛正騎士を、修司は指先から気のエネルギー弾を放つことで行く手を阻む。更に弓矢で村人達を狙う騎士達

には、より威力を込めた光を放ち、粛正騎士達を断末魔すら上げる間もなく消滅させていく。
獅子王から譲り受けた騎士達の消滅、しかしモードレッドには既にその過失に対する負い目はない。彼の騎士の目に映るのは、山吹色の男――白河修司だけだ。
「そうか、テメェがそうか！　ハハハ！　コイツは良いや。父上から貰った騎士どもを瞬殺かよ！　良いぜ、テメェはオレが殺す。ガウェインにもランスロットにも譲らねぇ。テメェを殺し、父上に報告する口実になってもらう！」
「――――」
猛りながら力を振るうモードレッドに、修司は静観を保ちながら迎え撃つ。荒波のように迫るモードレッドの剣戟を、素手で迎え撃つ修司。振るわれる度に反逆の騎士の膂力は増していき、魔力の勢いも増していく。それらを冷静に見極めながら修司は淡々と己の拳で打ち返していく。
モードレッドもガウェインやランスロットと同様に何らかの祝福（ギフト）を受けている様で、その強さは時間が経つに連れて増大し、膨れ上がっていく。まるで爆発する風船みたいだなと、一人思った修司は自身の気力を上げ、全身に白い炎を纏って、モードレッドを殴り飛ばす。
咄嗟に剣の腹で受けて防いで見せたのは並外れた直感と反射神経、そして戦いのセンスで成り立つモードレッドの戦闘スタイルによるもの。確かにその強さは円卓の騎士の中でも指折りの実力者と言えるだろう。
「はっ、流石にやるじゃねぇか。これまで逃げる事しか能のねぇ腰抜けどもよりは、よっぽど歯応えがあるぜ」
「……なぁ、モードレッド」
「あ？」
「お前、本当に獅子王に対して思う所はねぇのか？」
「――――はぁ？」
神妙な顔付きで、そんな事を宣う目の前の男に、モードレッドは自分でも驚く程に間抜けな声が出てしまった。

「恋人を殺し、親を殺し、子供を殺す。そういうやり方でしか人類を救えないと口にする獅子王のやり方を、アンタは否定しないのか？　だって、アンタはモードレッドだろう？　反逆の騎士なんだろ？　それがなんで今更になって――――騎士王じゃない奴にいいように使われてるんだよ」

目の前の男など、自分は知らない。興味もなかった。腕が立つのは理解できる。強さも技も、嘗ての円卓の中にいても、それが許されるほどに凄まじいのは、今の打ち合いだけでモードレッドは充分理解できた。

しかし――。

「――なんだテメェ、嘗めてんのか？　こちとらこんな山にまで来てるってのに、何を上から目線でモノ言ってんだ？　あ？」

「……」

「オレが獅子王に従うのは、オレがそう在りたいと願ったからだ！　今度こそ、オレは間違えねぇ。たとえ認められず、使い捨てされようとも、今度こそオレは、父上の騎士で在り続けると――決めてんだよ！」

「――――そうかよ」

「満足したか！　オレは、テメェの知ってるオレじゃねぇ！　テメェと出会ったオレが何て言ってたのかなんて知らねぇが、そんなもんとオレと一緒にするんじゃねぇ！　オレはモードレッド。獅子王に仕える……円卓の騎士だ!!」

瞬間、モードレッドから赤雷が迸る。これ迄とは比較にならない熱量を帯びたその光は、修司という一人の人間を捉えて離さない。溢れ出す赤き閃光、流出する雷が迸る周囲を焼いて砕いていく。

「テメェの面はもう見たくねぇ。この一撃で――消し飛びやがれ!!」

「我が麗しき父への叛逆（クラレント・ブラッド・アーサー）アァァァッ!!」

束ねられた赤雷の閃光。燃え滾る赤き極光は真っ直ぐに修司へ向けて向けて放たれる。彼の後ろには村があり、逃げるのも避けるのも不可能となったこの状況の中で、モードレッドは己の勝利を確信した。

獅子王から授かりし《暴走》のギフト。それは文字通りモードレッド自身を爆弾として扱い、決して生き延びることを許さないと定めた祝福(呪い)。そんな定められた自分の末路を、モードレッドは恨みはしない。生前の自分はそれだけのことをしたわけだし、寧ろあの場で殺されても文句は言えなかった。

それなのに……父上は、獅子王は、自分に役割を与えてくれた。偽の十字軍を滅ぼすだけで終わらず、新たに役目を与えてくれた。王の騎士として、息子として、こんなに嬉しい事はない。

故に、モードレッドは自分の扱いを悉く受け入れた。全ては王に殉じる為、嘗て裏切った自分を塗り潰す様に……。

「かめはめ――波ァァァァァッ!!」

そんなモードレッドの誓いと決意を打ち砕くように、修司から蒼白い光が放たれる。拮抗は一瞬、村ごと消し飛ばすつもりで放たれたモードレッドの赤き光は、修司の放つ蒼い光によって呑み込まれるのだった。

◇

「――クソがッ、何処までも舐め腐りやがって」

焼け焦げた山の斜面。器用に山岳地帯の隙間を縫うように放たれた蒼き閃光は、山の景観を損なうことなく、はるか空の彼方へと消えていく。恐ろしく精度の高い一撃は、モードレッドの宝具の一撃を呑み込んで見せた。

ただ、元々モードレッド自身を狙っていたつもりは無かったのか、迫る蒼い閃光を前に横に逃げるのは、意外と容易かった。持ち前の直

感頼りの破れかぶれで死にかけはしたものの、五体満足でいられた事にモードレッドは自身の運の良さを喜び――激怒した。
五体満足でいられた？　違う。自分が今こうして生きていられるのは、偏に修司が手を抜いたからだ。今こうして自分が生きているのに、何も仕掛けて来ないのが何よりの証拠だ。
白河修司なる男は、自分のことを知っている口ぶりだったが、そんな事、モードレッドには何の関係も無い話、今の自分は獅子王の騎士だ。たとえ息子としてではなく、単なる使い捨ての道具でしかないのだとしても、自らそう望み、受け入れたのだ。
なんで自分の知らない自分のことで、情けを掛けられないといけないのか。自分をただの敵として対処しない修司の甘さに、モードレッドは吐き気を覚えるほどの怒りを覚えた。
「――いいぜ、テメェがそのつもりなら勝手にしやがれ。けどな、その代わりにオレはその甘さに付け入るぞ。精々油断していやがれ、次に甘さを見せたとき、その喉笛を噛み千切ってやる！」
獰猛な笑みを浮かべ、剣に赤雷を纏わせる。さぁ出てこい、今度こそ村ごと消してやると意気込むモードレッドは……。
「哀れだな。反逆の騎士モードレッド、騎士王に忠義を立て、反逆の狼煙を上げたお前が、今度は獅子王に尻尾を振るとはな。――残念だよ」
「っ、そこかぁ！」
声の聞こえた方へ、全力の一撃を放った。赤雷を乗せ、周囲の空気を焼き切りながら振り抜かれた反逆の騎士の一撃は――。
拳で迎え撃つ訳でも、蹴りではね除ける訳でもなく、素手で鷲掴みに受け止められてしまう。
「っ!?」
「前々から思ってたんだけどよ。雑なんだよ、お前の攻撃。喧嘩殺法なのも結構だが、勢い任せの攻撃は、見切るのも容易いもんだぜ」
片手なのにガッシリと掴まれ、力を込めているのにビクともしない。魔力を乗せて赤雷を放とうとも、修司の纏う白い炎がモードレッドの赤雷を弾いてしまっている。

「この、放しやがれ！」
引き抜き、刺し貫こうとしても、まったく微動だにしない己の聖剣。どうにかして目の前の怪物から取り返そうとするが……。
「……本当に、残念だよ。モードレッド」
「あぁ!?」
「ロンドンにいたお前は、今よりもずっと格好良かったよ」
「――っ!?」
腹部に走る衝撃。胴体から背中へ突き抜けるような衝撃、視界がブレて急速に落下するような体感。そして、次の瞬間にはモードレッドは岩壁に叩き付けられ、地面へと倒れ付した。
ただの蹴りの一撃、しかも受けた感触から手を抜かれた。それでも、体が万全になるまで時間が掛かる程のダメージを受けたモードレッドは、嗚咽を漏らしながら立ち上がろうとして――――気付く。
剣が……ない。自身にとって反逆の象徴であり、反逆の騎士モードレッドの証明であるクラレントが、手元には無かった。どこへやったのかと辺りを見渡すが、剣が周囲に落ちてはおらず、同時に聖剣の在処に気付いた。
クラレントは、修司の手に握られていた。空に浮かぶ光帯に翳すようにクラレントを掲げる修司の横顔、彼が今どんな顔をしているのかはモードレッドには与り知らぬ事だ。
「ハッ、自分（テメエ）の手が汚れるのが嫌だから、オレの剣で止めを刺すってか？　いい趣味してんじゃねぇか。けど……まぁ、それでもいいか。良いぜ、殺れよ」
剣を突き付けてくる修司に、モードレッドは自身の敗北を認めた。ならばせめて悪態を吐きながら死を受け入れてやろうと、笑みを浮かべるモードレッドだが、彼の予想に反して剣が振り下ろされる事はなかった。
代わりに、突き付けていた剣を横にして両端を掴む修司に、モードレッドは理解できず怪訝な表情を浮かべる。
「……モードレッド、確かに俺はアンタを知っているが、それはロンドンで一緒に戦った反逆の騎士であって、獅子王に尻尾を振るアンタ

じゃない。断言するよ、もしロンドンのアンタがこの地に召喚されていたら、どんな理由があっても獅子王に与したりはしないってな」
「だから、だから――それがなんだってんだ！」
「アンタは俺の知ってるモードレッドじゃない。だから……配慮も、遠慮も、必要はないよな？」
　瞬間、修司から爆発的に気の炎が噴き出していく。自分と戦った時よりも、遥かにずっと強く、密度の濃いモノ。なのに……殺気がない。山岳地帯の山々が闘気の炎に呼応して震える中、モードレッドは自身に僅かたりとも殺意が向けられていない事を不思議に思った。
　そして……やはり、直感の鋭いモードレッドは気付く。最初からこの男は、自分を殺そうとしていたのではなく。
「ハァァァァ……」
「ちょ、待て、待て待て待て!?　それは、幾らなんでもそれは無いだろ！　それは、オレが！　父上から奪った唯一の――」
「オラァッ!!」
　最初から、自分に残された唯一の証とも言える――クラレントの破壊だった。
　砕かれる嘗ての聖剣。アーサー王の倉から奪い、反逆を起こし、アーサー王の伝説を終わらせたモードレッドの邪剣。剣の中央から真っ二つに砕かれた己の愛剣を間近で直視したモードレッドは……。
　それはそれは、盛大なギャン泣きを披露したという。

「な、なんだ!?　なんだこの泣き声は!?　まるで赤子のような声ではないか!?」
「いやこれ、赤子の出せる声量じゃないだろ。西の村で、一体何が起きてるんだ？」
「まさか、モードレッド卿が何かを……急がなくては！」
「せ、先輩。これはまさか……」

「うん。修司さん……やっちゃったね」
やっちゃったＺＥ★

その９６　第六特異点

「百貌の、生きているか！　村人達は無事か!?」
「そう叫ぶな呪腕、聞こえている。仮にも暗殺者が呼ばれて姿を晒すのも、おかしな話だがな」
　アーチャーのサーヴァント、アーラシュの機転によって西の村までやって来れた立香達。円卓の騎士達に襲われたとされる西の村まで駆け付けた彼女達は、無事に生き延びていたハサンの一人と村人達の姿に安堵し、ホッと胸を撫で下ろしていた。
　辺りを見渡せば村のあちこちに戦いの爪痕らしき痕が刻まれていて、どれ程の戦いがあったのか容易に想像できる。でも、申し訳ないが村の修復は後回し。立香はマシュと共にそこに向かって駆け出し、修司のいる場所まで走っていく。
「修司さん！」
「おー、二人とも此方に来れたのか。結構距離があったと思ったんだが……一体どんな魔術を使ったんだ？　もしかして、転移の魔術だったりする？」
「いえ、流石の先輩も其処までの高度な魔術は扱えません。アーラシュさんのお陰で、物理的に飛び越えてきました」
「正直言って、二度とごめんだけどね。……それよりも修司さん、その人って……」
「あぁ、元反逆の騎士にして現円卓の騎士、モードレッドだ。気を付けろ、コイツは俺達の知ってるモードレッドじゃない。戦意はへし折ったが、いつまた暴れるか分からないからな。二人とも、俺の前に出るなよ」
　修司の元へ駆け寄った二人が見たのは、涙にまみれながら嗚咽を漏らしているモードレッド。言葉も出せず、力なく地面に座り込んでいる姿に、嘗ての反逆の騎士の姿はなく、その痛々しい姿に二人とも言葉が出てこなかった。

同情している訳ではない。獅子王の騎士として喚ばれ、獅子王の下で戦ってきた彼女は他の騎士達と同様に、その手で幾人もの無辜の民を斬り捨て、血と屍の山を築き上げてきた。だからこそ聖剣をへし折って無力化した修司に対して思う所はないし、これ迄の彼等の所業を思えば、これ位は当然の報いとも言えた。

そして、目の前のモードレッドはロンドンで出会った反逆の騎士ではない。ならば比較するのも筋違いだろうと気持ちを切り替えた二人は、改めて修司へと向き直る。

「――修司さん、私達は村の方を見てきてもいいかな？　集落の方にはダ・ヴィンチちゃんを置いてきちゃったし、今の内にハサンの人達と話をしておいた方がいいと思うんだけど……」

「あぁ、その方がいい。コイツの事は此方で何とかするから、山の翁達を手助けしてやってくれ」

そう言って二人は踵を返して村の方へ引き返していく。その最中、マシュだけは一度立ち止まってモードレッドを一瞥するが、力なく崩れ落ちて項垂れる彼女に掛けられる言葉はなく、胸に引っ掛かる想いを抱きながらも、立香の後を追った。

そして、改めて残される事になった修司とモードレッドの二人。未だに俯いて崩れ落ちているモードレッドだが、どんなことが切っ掛けで再び暴れるか何て分からない。背後ではアーラシュが念の為に矢を構え、いざと言う時の為に、修司の援護を務めてくれている。そんな弓の大英雄の気遣いに感謝しながら、修司は改めて問い詰めた。

「――で？　お前はいつまでそうしているつもりだ？　まだ戦うつもりなら相手になるが？」

「……」

「それとも、大人しく捕虜として捕まるか？　こっちはお前らと違って無抵抗の人間を殺したりはしない。山の翁達にも話は通してやる。好きな方を撰べ」

見逃してやると言われ、モードレッドは一瞬ピクリと体を震わせるが、自身の愛剣を砕かれた以上出来ることは他になく、仮に素手で挑んだとしても素手での戦いを得意とする修司が相手では、技量の差も

あってマトモに戦うことすら不可能だろう。
ならば、自分に出来ることは一つしかない。獅子王から施されたギフト、その能力を臨界にまで引き上げようと、モードレッドは全身から赤雷を迸らせるが……。
「――――ガッ」
周囲を赤い雷が呑み込もうとした瞬間、アーラシュから放たれた矢が、モードレッドの肩を射抜いた。外部からの攻撃、しかも力の流れが霧散するように射抜かれた為、モードレッドは今度こそ為す術がなくなった。再び膝から崩れ落ちるモードレッドに、修司は呆れながら嘆息を溢し、手助けしてくれたアーラシュに向き直る。
「悪いね、アーラシュの兄さん。助かったよ」
「なぁに、アンタなら俺がいなくてもどうとでもなったろうよ。今のは千里眼が使える俺からのせめてものお節介さ」
「なら、そのお節介に肖る序でにネタばらしといこうか。モードレッド、アンタが獅子王から付与されたっていうギフト、その効果は……自身の魔力の前借り、或いは霊基の耐久力ギリギリまで跳ね上げる《暴走》みたいな何かだったりするんじゃねぇのか？」
「……」
沈黙で返すモードレッドに、修司は確信した。ロンドンで出会ったモードレッドも確かに強くて頼もしいサーヴァントだったが、ここまで滅茶苦茶な力を振り回す奴ではなかった。一時とはいえ、史実では円卓の騎士の一人として数えられてきた反逆の騎士。そんな騎士が手を焼くほどの魔力の昂り、拳で打ち合っていた合間に、それとなく分析していた修司の回答は、ぐうの音が出ないほどに的を射ていた。
そして、それは修司にとって当たって欲しくなかった答えでもあった。モードレッドに付与された《暴走》のギフトは、目の前の騎士の限界以上の力を強制的に引き上げるモノ、詰まる所モードレッドは獅子王の手によって爆弾へと変えられたのだ。
確かにモードレッドは反逆の騎士であり、アーサー王に反旗を翻し、伝説を終わらせた一因となった騎士だ。獅子王がカルデアの予想通りにアーサー王の変異体で言うのならその扱いにもある程度の理

解は示せるが、修司から見てその事実は悪辣に過ぎた。そして、それを黙って受け入れているモードレッドを見て、つくづく目の前の騎士は自分達の知る人とは違うのだと思い知る。
　さて、これからこの騎士をどうしよう。このまま放置していく訳にも行かないし、仮に捕虜にしたとしても、いつまた暴走するか分からない爆弾を隠れ里に住む人々の近くに置い置くわけにはいかない。
　とはいえ、このまま此処に置いておけば異変を感じた円卓軍が軍を興して攻めてくるかもしれない。そうなれば全面戦争は避けられず、此方にも無用な血が流れるように思うのは、当然の帰結といえるだろう。地味に困るモードレッドの扱いに修司達が悩んでいると、背後からベディヴィエールが現れた。
「モードレッド卿……」
「あぁ？　誰かと思えば、父上に喚ばれてもいなかったチキン野郎かよ。今更テメェが出てきてどうする？　余った円卓の席に座っていただけのテメェが！」
　そんなベディヴィエールの姿を見て、モードレッドの覇気が僅かに戻る。どうやら、この騎士から見てベディヴィエールは相当特殊な事情の持ち主らしい。一応噛み付かない様に見張りながら、修司はベディヴィエールに道を譲り、事の顛末を見届けようとする。
「モードレッド卿、何故、王はあの様な蛮行をするようになったのです。あの様な虐殺、以前の王であれば、決して許しはしなかった筈」
「ハッ！　テメェ如きが父上に意見する気かよ！　――思い上がるなよ三下。ただ父上に覚えが良いだけのテメェが、一体何ができる!?」
「父上は絶対だ！　あの人が何を考え、何を成そうとしてるかなんて知った事じゃねぇ！　オレは今度こそ――父上の為だけに生きると決めただけだ」
「モードレッド卿……」
「大層な義手を付けてイキがるのも結構だがな。もう俺達の円卓にテメェが割って入れる余地はねぇんだ。テメェは、何処とも知れぬ場所で、勝手に野垂れ死ぬのがお似合いだぜ！」

そう笑い、何処までもベディヴィエールを貶すモードレッドに、修司は仕置きが足りなかったかなと拳を鳴らす。ポキポキと小気味の良い音にモードレッドは肩を震わせるが、そこは大人なアーラシュが修司を宥める事で事なきを得た。

そして、これ以上この騎士から情報を得られる事はないと思い、修司の決定の下。王や他の円卓の騎士達に村の場所を知らせない事を条件に、モードレッドを解放する事にした。

その際

「次、俺の前に姿見せたら、その立派な鎧剥ぎ取って農具にしてやるからな？」

と、脅しを付けながら、去り行く反逆の騎士の背中を見送った。その背中は少し震えているようにも見えた。

◇

――その夜。村の人達の無事も確認し、戦いによる損壊もある程度の修復を終えると、呪腕のハサンからある提案を出された。

それは、円卓の騎士に捕らえられたとある山の翁の救出。数ある特出した能力を持つ山の翁の中でも、特殊な力を持つそのハサンは、ある事情から自刃の選択もできず、日々円卓の騎士による拷問を受けているとの事。

このままではいずれ精神力に限界を迎えたその山の翁が、うっかり口を割るかもしれないと危惧した呪腕が、捕らえられた山の翁を救出

する為に、立香達に協力を要請した。当然、立香達はこれに賛成し、サポーターのロマニもいずれ円卓の騎士達と戦う為に戦力は必要だという事で、立香達の山の翁救出作戦を承諾した。
当然、修司もその作戦に参加しようとしたのだが……。
「なぁんで、俺だけが留守番なのかねぇ」
宛がわれた村の空き家にて、横になって天井を見上げる修司は、一人で愚痴を溢した。
『仕方ないだろう？　ガウェインに付けられた傷、まだ完治していないんだから』
「だーかーらー、この程度何て事ないって。相変わらず心配性だなぁ、ロマニは」
『なに言ってるんだい。モードレッドと戦った時、傷が開いたんだろう？　こっちの方で君達のバイタルは常にチェックしてるんだ。あまり、痩せ我慢はするもんじゃないよ』
自分はまだまだ戦えるというのに、ここでまさかのドクターストップ。ガウェインから受けた傷を未だに回復しきれていない修司を、見かねたロマニがストップを掛けたのである。当然修司はこれに反発したが、これからの戦いに備えて万全な状態でいて欲しいという立香達の懇願によって、村での一時休養を余儀なくされたのだ。
そんな修司の代わりとしてベディヴィエールが救出作戦に同行する事となったが、正直言って修司は不安だった。ベディヴィエールは他の円卓の騎士と比べ、目立った逸話や伝承など持ち合わせてはいないが、その代わりに、アーサー王の最期を看取るという役割が与えられている。
ベディヴィエールも円卓の騎士の一人、そんな彼がアーサー王と敵対する道を選んで、果たして平然としていられるのだろうか。モードレッドと対峙した時もなんだか迷っている様子だったし、山の翁が捕らえられている砦にだって円卓の騎士がいるかもしれない。
その為に立香には呪腕や百貌も付いていく事になったが……不安は拭えない。せめて道中で仲間になったという三蔵法師に期待したい所だが……。

「……まぁ、立香ちゃん達の事は気で何となく分かるからいいとして、今は俺も体を休めることに集中するか。いい加減、安静にしてないとナイチンゲールさんが押し掛けてきそうだし」
『アハハ、そうしてくれると僕も安心だ。立香ちゃん達の事は任せて、直接な支援が出来ない分、きっちりとサポートしてみせるから』
「あぁ、頼んだ」
不安を重ねた所で、現状が良くなるわけでもない。立香達の状況はロマニに任せる事にした修司は、大人しく自身の回復に専念することにした。
外ではアーラシュが村を守ってくれている。夜でも目が効く彼ならば、村の見回りを任せても安心だろう。ひんやりと冷たい地べたに身を任せながら、修司は僅かばかりの休眠を受け入れるのだった。

「――――？」
ふと、違和感を感じた。夜も更け、虫や動植物達の息遣いも聞こえなくなった時間。あまりにも静かな状況に落ち着かなくなった修司は起き上がり、外に出て辺りを見渡した。
そこは特に変わった所はなく、村も別段なにかが変わっている様子もない。けれど、修司中に眠る第六感とも呼べるナニカが、違うと警羅を鳴らしている。円卓の騎士の気配はないし、殺気や殺意も感じない。
「……ドクター？」
何気なしにロマニを呼んでみたが、返答はなかった。今頃、立香達のサポートに必死なんだろうなと察した所で……その違和感に気付く。
立香の気が感じられない。マシュも、ベディヴィエールも、ハサン達やダ・ヴィンチ、アーラシュ。みんなの気が感じられなくなっている。いきなり感じられなくなった立香達の気に焦る修司だが、周囲に

は粛正騎士達や円卓の騎士、太陽王や獅子王の強い気配も感じられなくなっている事に気づき、焦りは困惑へと変化していく。
一体、自分は何処にいるのか。こんなときでも綺麗に輝く月を見上げながら周囲を探索しようと一本前を踏み出したとき――。
『――――』
「……え？」
声が聞こえた。幻聴？　いや、今のは確かに声だった。タイミング的に修司の現在進行形で体験しているこの事象に、間違いなく関与しているモノだろう。罠の可能性も充分に考えられるが、魔術に関して毛ほどの知識しか持ち合わせていない修司に取れる選択肢は一つしかない。
戦いになることを考慮しながら、声のした方へ進み続けていると、修司は不可思議な洞窟へと辿り着いた。いや、洞窟というには何処か神秘的で、人工的にたて付けられた扉は何処か重々しく、それでいて荘厳的に見えた。
「洞窟？　……いや、霊廟か？」
神秘や魔術等には皆目価値の分からない修司だが、この扉がどれ程重いものなのか、何となくだが……理解できた。この霊廟にあるのは――――信仰だ。
今、修司は理解した。目の前に聳え立つ扉の向こうにあるモノ、それこそが修司が勝てないと思わせた者であると。
正直に言えば、今すぐ引き返したい気分だ。此処に来て、この扉の前に来た辺りで呼吸は荒くなっているし、手足は震えてしまっている。
声は――――聞こえなくなった。恐らくは、最後の最後は自分の意思に委ねようとする扉の向こうにいる〝ナニカ〟の気遣いなのだろう。或いは試しているのか、何れにしても質が悪い。
『汝の扉、未だ開かれる事叶わず』なんて、意味深な事を言われた以上、黙っている訳にはいかない。きっと、この霊廟の主は知っているのだ。自分がまだ、本当の意味で限界を超えていない事に。
ならば、挑むしかない。この霊廟の奥にいる何かが自分に試練を課

そうと言うのなら、乗り越えるまで。それに……。
不思議と、声の主の感じが何処と無く嘗ての師父に似ている気がする。そんな事を考えながら、閉ざされた霊廟の扉に手を触れた瞬間――。
修司は、暗闇の中にいた。
「っ?!」
構え、周囲に気を配る。相変わらず何も感じないが、それでも今自分が何処にいるのかは分かった。
此処は、霊廟だ。いつの間にか、自分は霊廟の奥へと移動していたのだ。
汗が、全身から噴き出してくる。本能が今すぐ逃げろと最大音量で警告してくるが――遅い。既に自分は死神の掌の上なのだから。
『――来たか。シンカの戦士よ』
炎が灯る。ゆらゆらと揺れる蒼い炎が、何の前触れなく灯り、修司の前に人の形をしたナニカが浮かび上がっていく。
『いつか来る戦いの刻、我等に出来ることはあまりにも小さく、また少ない。白河修司よ、大いなる戦いを余儀なくされた哀れで気高い戦士の末子よ。汝の扉は未だ閉ざされたまま――故に』
『その固く閉ざされた扉の施錠の開封、このハサン・サッバーハが承った』
現れたのは――死。修司が危惧し、勝てないとされていた偉大なるハサンの祖。
『尚、本来の役割とは大きく異なる為に加減は出来ぬ。――構えるがよい。でなければ死、である』
唐突に始まった第六特異点の事実上の決戦。振り上げられる大剣を前に、修司は迷いなく……１０倍界王拳を引き出した。

その97　第六特異点

――――山岳部地帯を抜け、道中、魔物に絡まれていた三蔵法師を助け、その場の勢いで仲間にした立香達は、土地勘のある呪腕と百貌のハサン達の案内のもと、仲間が囚われているとされる砦へと辿り着いた。

急ぎ囚われたハサンの一人を救出するべく、百貌のハサンが陽動の為に単独行動をする事にして、その間に砦の地下牢へ向けて迅速に行動し、その途中牢屋で囚われていた俵藤太と合流。彼を弟子弟子と呼んで騒ぐ三蔵法師をスルーしながら、遂に囚われていたもう一人のハサン。静謐のハサンと呼ばれる少女の下へ辿り着くことが出来た。

この時、とあるハプニングが起きて一同は一時騒然となるが、マシュとパスで繋がっているお陰か大事には至らず、この場に長く留まるのは危険だと呪腕のハサンに促され、一行は砦からの脱出を試みた。

「こんにちは諸君、そしてようこそ。私の尋問室へ。盗人であろうと遠方の客人であることには変わりはない。歓迎するよ、遥か天文台（カルデア）からのマスター殿」

しかし、その脱出は遂に砦へと辿り着いた円卓の騎士の一人、アグラヴェインと彼が引き連れる粛正騎士たちによって阻まれる。

「円卓の騎士、アグラヴェイン……！」

「そうか、名を告げる必要はないか。ああ、君達の名乗りも結構、不要だ。マスター一人、その専属のサーヴァントが一騎。山の翁が二人、そして――――傲慢にも我等が城を後にした三蔵法師とその護衛サーヴァントが一騎。例のもう一人のマスターがいないのが気にかかるが、恐らくは山の翁の何れかが守護する隠れ里の何処かにいるのだろう。里の護衛か、それとも未だにガウェインが付けた傷が原因か、何れにしても好都合だ。――――しかし」

「っ！」

「何故、貴様が此処にいるベディヴィエール。本気で我等が王に反旗を翻す気か？」
「――――アグラヴェイン卿」
鋼鉄のアグラヴェイン。感情のない冷たく、重い視線が立香達の隣で佇むベディヴィエールを射抜く。口にこそ出ていないものの、その瞳はベディヴィエールを裏切り者と呼んでいるようにも見えた。
そんな彼の訴えに対し、ベディヴィエールは僅かに気圧されながら、立香達より一歩前に出る。
「私は、あの方に――――獅子王と話がしたい。問わなければならない事があるのです」
「それは、聖抜に関する事か？」
「それは――――それも、あります」
「……成る程、であるならば。我等と貴様は最早相容れまい。他の粛正対象共々、此処で死ね」
それだけを告げると、アグラヴェインは引き連れてきた粛正騎士達を前に出す。そして、戦いは始まった。数で押してくる粛正騎士達に対し、個々で凌駕するサーヴァント達。戦況こそは立香達にこそ有利となっていたが、アグラヴェインが立香を重点的に狙い初めてから、戦況は徐々に傾き始めてきた。
「くっ、こやつ等、執拗に立香殿を狙って来る！」
「マスターとはサーヴァントを支援し、強化するものだと聞いている。そして、貴様達の中心であるマスターは支援能力こそはあっても、戦闘能力は皆無に等しい。剥き出しの弱点を見過ごすほど、私はお人好しではないぞ？」
忌々しく語る呪腕のハサンだが、アグラヴェインの指揮能力は確かなモノ、聖剣や特殊な武器武装を持たず、目立った加護も持たないアグラヴェインが持つ他の円卓の騎士にはないモノ、それは徹底した効率主義だった。個人同士による戦いを視るのではなく、戦いとなっている戦場全体を観る事。人を嫌い、人を遠ざける鉄のアグラヴェインだからこそ、初見で藤丸立香をカルデアの弱点であることに気が付いた。

「させません！」
　立香に迫る粛正の刃を、マシュが受け止める。彼女が手にしている盾に、アグラヴェインは一瞬目を見開かせるが、既にその表情を元の鉄仮面へと引き戻す。
「アグラヴェイン卿、貴方も獅子王の考えに賛同しているというのですか！」
「相容れない。そう言った筈だぞベディヴィエール。貴様は既に我が王を裏切った。王の召喚に応じず、今の今まで姿を見せなかったのがその証拠だ」
　ベディヴィエールからの訴えをアグラヴェインは何処までも冷徹に返す。彼の中では、既に嘗ての同胞は完全に敵対したと完結している。言葉での対話は不可能、やはり力で押し通るしかないのかと、ベディヴィエールは義手である銀腕に力を込める。
　そんな時だ。辛そうに、苦しそうに顔を歪めるベディヴィエールに見かねた立香が声を張り上げた。
「ねぇ、どうして貴方は無抵抗の難民達を殺すの？　それが獅子王の思惑なのだとしても、もっと他のやり方があったんじゃないの？」
「――――天文台（カルデア）のマスター、君の事はそれとなく把握している。凡人でありながら人理修復という重荷を背負わせれ、戦う宿命を押し付けられた哀れな子供。流石の私も同情し、故に答えよう。全ては聖都を理想郷として成立させるためだ」
「理想郷？」
「そうだ。聖都には真に正しき命だけを選別して、聖都にて保護し、最後の人類として管理していく。それが、我等の王が下した結論だ」
「管理？　なにそれ、獅子王は人間を家畜にでもしようっていうの？
　だから、無抵抗の人達を一方的に殺して回るっていうの!?」
「言葉を謹みたまえ。これは、必要な犠牲だ。仮に難民達を聖都から逃がしたとしても、彼等は荒野にて野垂れ死ぬ。盗賊に殺され、獣や魔獣に食い殺される末路に比べれば、まだ人間らしい死に方といえるだろう。それに、万が一生き残ったとしても、難民達は限りある人間だけを回収する我々に、恨みや妬みを抱き、何れは他の陣営に助けを

求め、何れは戦争という形でより多くの人命が失われる事だろう」
「理解できたかね？　カルデアのマスターよ。これが大局を見据える獅子王の決断だ。故に私は彼の王の支えになるべく、最も効率のよい戦略戦術を選ぶまで。――――さぁ、粛正の再開だ」
――――確かに、アグラヴェインの言うことは正しい。自国の領土と民という財産を守り、それを脅かす不穏分子を排除する。例え冷徹で冷酷な王と謗りを受けようとも、為すべき事を為そうとする獅子王は確かに王としての正道を歩んでいるのかもしれない。
何処までも効率よく、徹底して語り掛けてくるアグラヴェインに、マシュや他の皆が口を出せる事はなかった。彼等も困窮する民草を抱えるもの、その大変さと気苦労が理解できてしまうが故に、アグラヴェインの言葉に何処か納得してしまう自分がいるからだ。
しかし――――。
「……うぅん、やっぱりおかしい。獅子王は間違ってるよ」
「――――なに？」
「だって、そこまで大変さが理解できるのなら、助けられる人命に限界があるって言うのなら、どうして他の人達に手を貸して貰おうとしないの？　どうして、太陽王や山の翁達と、協力し合おうとしなかったの？」
「――――」
藤丸立香は、それでも獅子王は間違っていると語る。何故なら、特異点修復という旅路において、自分こそが役立たずで、お荷物だと理解しているからだ。支援といっても、それはカルデアの技術によって造られた魔術礼装によるモノであって、マシュやサーヴァント達をホンの僅かに手助けしているだけにすぎない。
白河修司の様にトンでもない力を持っている訳でも、マシュの様に自分の寿命を削ってまで戦う度胸や覚悟はない。情けなく、誰かの手助けがなければ、明日の朝日すら拝めないと立香は己を断じるだろう。だから藤丸立香は、誰かに助けを求めることを躊躇したりはしない。
そんな彼女だからこそ、獅子王の歪さに気付けた。

「……そうか、出来ないんじゃなく、しないんだ。自分以外は出来ないと、決め付けて、押し付けて、……もしかして、獅子王って本当の意味で人の心が残っていないんじゃ――――」
「そこまでにしてもらおうか、小娘。それ以上の王への邪推は許さない。貴様は此処で死ね。最早、一片の慈悲も与えられぬと知れ」
　眉を寄せ、嫌悪感を露にするアグラヴェインは、部下達に立香を殺せと命じてくる。押し寄せる白刃、身構える立香だが、彼女には刃を届かせないと、雪花の盾と黒き刃が弾き飛ばす！
「先輩は、やらせません！」
「大人気ないなアグラヴェイン。娘一人の言葉に激情を晒すとはな。だが、その顔を見れただけでもこの砦に来た意味と意義はあった」
「チッ、暗殺者風情が！」
「然り。我等は闇に潜み闇に蠢く暗殺者よ、しかし貴殿は闘いを得意とせぬモノ。であるならば、貴殿の首が取られる事も考慮しての事なのだろうよ」
「なに？　……っ!?」
　呪腕のハサンからの要領の得ない言葉によって、より眉間に寄る皺が深くなるアグラヴェインだが、次の瞬間、彼の言葉の意味を理解できた。
　瞬時に自分のするべき事を選択し、部下を置いてその場を後にするアグラヴェイン。突然の自分達の上官の遁走に首を傾げる騎士達だが、次の瞬間異変は起きた。
「がっ、なんだ……これは？」
「体が……痺……れ!?」
　次々と体調に変化が起きて、地面へと倒れ伏す粛正騎士達。何事かと思い身構えれば、今まで自分達の背後に控えていた筈の静謐のハサンが、華麗な舞を踊っていた。
　彼女の扱う力の正体は――――毒。彼女の特異な体質から、人体に及ぼすありとあらゆる毒を纏い、生身のまま扱えるようになった彼女の舞いは、風に乗って流れる僅かな毒の匂いですら、粛正騎士達を昏倒させて絶命させるだけの致死量となっている。

軈て、全ての粛正騎士が倒れるのを確認すると、静謐のハサンの舞いは止まる。それが合図となり、これ迄黙り混んでいた俵藤太は、深々と息を吐きながら汗を拭った。
「いやー、焦ったぞ。よもや舞で毒を撒く技があるとは。山の翁というのは、本当に底知れぬ者達なのだな」
「ハッハッハ、そう言ってくれると、我々としても鼻が高い。さて、静謐と藤太殿を奪還し、アグラヴェインを撃退した今、この場に留まる意味はない。皆様方、急ぎ脱出と参りましょう」
「うむ、宜しく頼む。……む？　どうした三蔵？」
「か、体が……痺れへ……とうふぁ、らすけへぇ……」
「……何とも、締まらんなぁ」
　その後、全員無事に砦から脱出を果たし、百貌のハサンとも合流した一行は、用意された馬車に乗り込んで山岳地帯へと引き返し、里へと目指す。これで再び戦況はこちら側に引き戻された。後は各村への食料事情を何とかするだけであり、それを打開する宝具を俵藤太は有している。
　一先ず、これで安心だとハサン達が安堵した時、カルデアから緊急の通信が入ってきた。
『た、大変だ皆！』
「あ、ドクターだ」
「ど、どうかしましたか？　ドクター、隠密作戦の為に、作戦中は通信できない変わりに私達の観測と解析を徹底すると聞きましたが……」
『それなんだけど、大変なんだ。修司君の反応が消えたんだ！　まるで何かに消されたみたいに！』
「落ち着かれよ、カルデアの魔術師殿。立香殿が混乱されている。簡潔に、順を追って説明してくれ」
『ご、ごめん。……君達がハサンの仲間を救出している間、僕達は立香ちゃんと修司君の存在証明の為の観測、解析を徹底してたんだ。それはついさっきまで正常に出来ていて、立香ちゃんも修司君も無事に観測出来ていたんだ』
「ふむ、それで？」

『それが、途中修司君が村の建物から外に出た所までは観測できたんだ。最初はトイレかなと思ったんだけど、ある地点に着いてから一切の観測が出来なくなったんだ！』
「ある地点……だと？」
『そうなんだ。今から座標を送るから、余裕があったら確認して欲しい！　ダ・ヴィンチにも話を通して向かわせた。彼の事だから万が一もないかもしれないけど、念には念を入れておきたいんだ！』
　酷く慌てた様子のロマニから、修司が消えたとされる地点の座標が送られる。その場所は今通っている道から少しそれた場所、それは普段から人気のない所であり、特異点となった今でも魔獣怨霊の類いすらも現れないという地。
　送られてきた地図の座標を見て、ハサン達は仮面越しからでも分かるほどに表情を青ざめる。ただならない雰囲気になる馬車の中、呪腕のハサンの口は開かれる。
「――立香殿、急ぎその場所まで向かいましょう。もしかしたら、既に手遅れやもしれませんが」
「て、手遅れって？」
「……もしかしたら修司殿は、死んでおるやもしれませぬ」

　蒼く、淡い炎が揺れ動く。暗く冷たい闇の底、大剣を地面へと突き立てる髑髏の翁は、落胆の色を滲ませながら溜め息を溢す。
　その眼前の下には……。
「――立つがよい。未熟者よ、晩鐘の音は、未だ汝の名を指し示してはおらぬ」

「あ、が……あ……」
全身を切り刻まれ、血の池に沈む修司の姿が映し出されていた。

その９８　第六特異点

――最初に振り下ろされる一撃、その刃を回避出来たのは、殆んど偶然だった。上から下へ、ただそれだけの動作。何て事のない、素人から見ても分かる上段からの振り下ろされる一太刀。

それが、恐ろしく研ぎ澄まされたモノであり、気付けばその一太刀は修司の頭皮に触れていた。

瞬間、加速。事前に１０倍の界王拳を引き出していた瞬間だからこそ、間一髪避ける事ができた。後ろにではなく横へ、呼吸すらも忘れ、全細胞を全力で回避に回すことで、薄皮一枚切られる程度で収まった。

皮膚が裂け、血が額から顔へと流れ落ちるが、それを拭う余裕など修司にはない。油断もなく、慢心もなく、ただ静かに目の前の相手を見据えていた。

それなのに……全く、視えなかった。剣を振り上げる挙動も、振り下ろす動作も全く知覚できず、そもそも、離れていた間合いをどうやって詰められていたのかすら……分からなかった。

目の前の死神が何かをしているのか？　それとも、この薄暗い空間がそう見せているのか。困惑、混乱の只中におかれても、活路を見出だそうと必死に思考を巡らせる修司に――容赦なく、二振り目の刃が迫る。

背後から伝わるひんやりとした冷たいモノ、それが首筋にめり込んだ瞬間、再び修司は加速した。音を置き去りにして移動し、受け身も取れずに地面へと転がりながら、それでも死神を見据える修司は、先ほどと同じ姿勢で佇む山の翁を睨み付け……そして、理解する。

目の前に佇む山の翁、その正体こそは見破れないモノの、彼が奮う刃には純正な人の技が詰め込まれていた。首筋から流れる血が、それが事実であると物語っている。

そう、信じ難い事に目の前の山の翁は、唯の人の技として修司に二

度も切りつけて見せたのだ。一切の気配を悟らせず、一切の挙動を読ませないまま、唯の鉄の塊同然の大剣で、気によって底上げされた外皮をすり抜けて、二度も白河修司を死に追い込んだのだ。
反応できたのは殆んど偶然。薄暗い空間の影響で他の五感が鋭くなったお陰で出来た……殆んど奇跡に近い芸当だった。皮肉なことに、この限られた空間こそが修司を生かした抜け穴になってくれたのだ。
「――二度も我が刃から抜け出せたのは見事。本来であれば、その時点で汝は天命から抜け出せたと言えよう」
ならば、ここいらで見逃して欲しいものだ。そう皮肉を口に出してやりたい所だが、そんな暇すら修司には存在しなかった。呼吸を整えて次に備える。荒くなる心音を必死に宥め、全神経を次の死を逃れる事しか、修司の頭にはなかった。
その圧力はあのヘラクレスやクー・フーリンとも異なる異質なもの、死の概念ではなく死そのものを前に、只人が出来ることは余りに少ない。
けれど、未だ自分にはやらなきゃいけない事がある。立香やマシュ、カルデアの皆を放って自分だけがリタイアする訳にはいかないし。なにより……死にたくない。そう、死を前にして一つの生命体に出来ることは生にしがみついて抵抗する事。まだ自分の手足は動けるし、戦いはまだ始まったばかりだ。
故に、修司は今度は自分の番だと自身の気を高め始めた。山岳地帯の山々を震わせるほどの力の波動、太陽王や獅子王に気取られてしまう事も考慮せず、がむしゃらに修司は自身の生存を掴むともに抵抗を試みる。
「波ァァァァッ!!」
両手を腰に回し、全霊のかめはめ波を放つ。それは先のモードレッドの宝具を呑み込んだモノより、遥かに威力に富んだ破壊の光。本来であれば獅子王の居城に向けて放たれる筈だった蒼白い極光、目の前のたった一人を倒すために放たれた閃光は――。
「――ふっ!」

目の前の黒き死神の、一呼吸から繰り出される斬撃によって、文字通り八つ裂きに切り裂かれてしまった。これ迄防がれたり、相殺されたりしたことはあっても、正面から切り裂かれた事に驚きを隠せない。が、そんなことは始めから想定していた。目の前にいるのは正真正銘本物の死神、或いはそれすらも凌駕する者だ。今更その程度で怖じ気てはいられない。

攻めろ。相手に一切の反撃の余地を与えず、此方の場に引きずり込め。かめはめ波を放った直後、修司は山の翁に接近戦を挑んだ。向こうの得物は大剣、如何に山の翁が殺すことに長けた技術の持ち主だろうと、振るわせなければただの鉄の棒の筈。気後れする気概を無理矢理奮い立たせ、修司は自ら死神の懐に入る。

「――――シッ！」

銃弾の如く放つのは、肘を突き出す？打頂肘。暗闇の世界で修司が頼るのは、無意識レベルにまで刷り込ませた嘗ての師父から習った中華拳法、八極拳である。一連の動作に震脚を混ぜた瞬歩と似た間合いを詰める歩法、それを気によって強化され、勢いを増したその一撃は瞬間移動にも匹敵する速度まで至る。

力と速さ、その両方を兼ね備えた一撃を山の翁は当然のように避けて見せる。体を横に反らしただけの、あらゆる無駄を排斥した回避。しかしそれでも、修司は動きを止めはしなかった。

？打頂肘はあくまで間合いを潰す為のモノ、避けられるのは想定の範囲内。山の翁が避けた事を確認するよりも速く、修司は次の行動に移行する。技を放った反動を利用しての跳躍、山の翁の真上まで飛ぶと、修司はギュルンと音を立てて回転し――――。

「シャッ――――！」

遠心力という勢いを乗せた踵落としを見舞うが、それすらも山の翁は柳の如く避けてしまう。しかも修司の狙いが読まれたのか、避ける際に後ろに跳び、再び二人の間合いは開いてしまう。

させない。修司は地面へ着地と同時に界王拳で距離を詰めようとするが、既にその頃には山の翁の手には剣が握られていた。

「ヌンッ！」

横一閃。放たれた剣閃は確実に修司を捕らえ、このままでは避けられないと察した修司は、自身の負荷になることを考慮せずに、１０倍界王拳の勢いを片足だけ地面にめり込ませて押し殺し、真横へ飛ぶように避けて見せた。
その際に回避に使った左足から嫌な音が耳を叩き、避けた筈の剣閃が修司の胸元を切り裂いた。胸元を横一閃に切り裂かれ、倒れた拍子に傷が開き、夥しい量の鮮血が霊廟の地面を埋めていく。
「――――立つがよい。未熟者よ、晩鐘の音は、未だ汝の名を指し示してはおらぬ」
「あ、が……あ……」
そんな修司を山の翁は静かな空気を保ったまま見下ろしている。その淡く光る蒼き眼光には嘲りや侮るといった悪感情はなく、何処までも修司を見定める役目に徹している。果たして修司は此処までなのか、あの者達が期待する程のナニかがあるのか。
疑問と期待で倒れる修司を見つめていると――――動いた。血溜まりの中から、必死に力をかき集め、震える手足で立ち上がって見せた。
「――――は、はは……すげぇな、アンタ。俺も昔と比べると結構強くなったつもりでいたけど、上には……上がいるもんだなぁ」
「――――」
「けど、俺だって死にたくないし、そう思える理由はある。何より……アンタという理不尽に、越えるべき壁を、越えるために、俺はまだ……諦めたくは、ない！」
既に、修司は嫌というほど理解できた。目の前の死神に、自分は勝てないと。力や速さで上回っても、有りすぎる技の差が全てを帳消しにしてしまっている。
目の前の山の翁、ハサン＝サッバーハが何者なのかは、修司にはわからない。只一つ分かっているのは、此処で目の前の死神という試練を越えなければ、自分はここで死ぬという事。
既に血は大量に流れ、目も霞んできている。最後に残された力を出し切る為に、修司は破れかけの上着の胴着を破り捨て、全身に力を巡らせる。

「ハァァァァッ!!」
赤い炎が霊廟全体に満ちていく。ビリビリと空間全体が震え、霊廟のアチコチに亀裂を刻んでいく中、山の翁は静かに修司を見据えている。
既に、修司は限界を迎えている。戦える力だって僅かしか残されておらず、マトモに動けるのはこれで最後だろう。太陽王や獅子王の事など頭にはなく、今の修司の頭には目の前の死を越える事しかなかった。
やがて、力は爆発的に膨れ上がっていく。それは既に１０倍の域を越え、更に跳ね上がっていく。
限界を越えた限界を越え――――更に向こうへ。
故に、修司が選ぶ最後の技は――――２０倍界王拳である。
「ダッ!!」
駆ける。跳躍という飛翔、２０倍という限界の許容範囲を遥かに越えた決死の突撃。ありったけの力を乗せた……今の修司の最後にして究極の一撃は――――
「――――愚かなり」
――――しかして、山の翁には届かなかった。
威力はあった。速度も、膂力も、何もかも、山の翁を遥かに超えていた。
ただ、それだけだった。ただ向かって来るだけの突撃など、猪の突進と同じ。如何に速さが光に迫ろうと、魂そのものを見定める山の翁の目から逃れる事は敵わない。
鮮血が、舞い散る。全身を切り刻まれ、明らかに致死量の血を流す修司には、既に意識など残されていなかった。
白目を剥き、立ち尽くす。鍛え上げられた体幹が修司に倒れる事を許さない。しかし、たったそれだけでは山の翁の刃から逃れる筈もなく。
「――――未熟、あまりに未熟。理不尽を由とせず、不条理に抗う戦士よ。何故汝は、理不尽を許さぬと誓ったのだ。それと向き合わない限り、〝極意〟には至れぬと知れ」

無機質な刃が、修司に向けて振るわれた。

◇

――何故、お前は戦う？

燃え上がる炎の中、瓦礫に埋もれる誰かが言った。

今更の問い、そんなもの、とっくに出ているというのに。

――理不尽が許せないから？　なら、君にとって理不尽ってなに？

燃え盛る炎の中、炎に焼かれる誰かが言った。

決まっている。理不尽とは人に仇なすもの、不条理とは人を押し潰すもの。そんな理不尽や不条理に負けたままの自分が嫌だから、自分は今日まで戦い続けてきた。

――違うな。それは理由であって本質ではない。お前はもう、分かっている筈だ。自身の戦う本当の理由を、お前が嫌う理不尽の、本当の意味を。

炎や瓦礫が黒い泥に呑まれる中、意地の悪い神父が言った。

そうだ。理不尽に命が潰されるのが嫌だから、不条理に命が消されるのが嫌だから、自分は強くなろうとしたのだ。

――では、お前の言う命とはなんだ？　ただ守るだけの宝か？　愛でるだけの財宝か？

軈て泥は消え、目の前にいるのは黄金の王。王は言った。お前にとって命とはなんだ？　と。

〝――――あぁ、そうか。今まで理不尽が、とか。不条理が、とか、色々言ってきたけど、結局はそんな事だったんだ〟

命とは、可能性だ。そして可能性とは――――自由だ。

漸く、分かった気がする。何故自分ががむしゃらに戦ってきたのか。どうして自分は命というモノに価値を見出だしているのか。

命とは、可能性。そして可能性とは自由の中から生まれる。自分はきっと、そういうモノが……愛おしく感じるのだ。

気付けば、空は晴れ渡っていた。炎も瓦礫も泥もなくなり、あるのはただ己だけ。

――――いや、少し違ったな。

振り返れば、懐かしい人がいた。忙しい両親に代わり、自分を育ててくれた……優しくて厳しい祖母の姿。

泣いているような、怒っているような、呆れているような、そんな笑みを浮かべて手渡されるのは――――一つの鍵。

ありがとう。お婆ちゃん。

『――――』

光満ちる世界の中、祖母の声が聞こえた気がした。

獣の血
水の交わり
風の行き先
火の文明
その先にある遥か未来を見据えて――――今、〝兆し〟へ至る。

◇

「――――なに？」
　静寂に包まれる霊廟に、山の翁の声が響く。確かに今、自身の奮った刃は目の前の修司を捕らえた筈。彼には既に避ける程の体力もなければ技術も無かった。
　しかし、現に己の刃は空を切るだけに終わっている。嘗て体験したことのない現象、けれどこれで山の翁は確信した。確信した上で、その男に向き直った。
「漸く、至ったか。成る程、奴の言う通り。追い詰めなければ発揮しない男よ」
　呆れと期待の混じった視線が、男を射抜く。その視線の先には淡く輝く修司が背を向けて佇んでいた。その無防備な背中に、今更斬り込みはしない。そんな事をしても意味がない位、山の翁は一目見ただけで理解している。
「――――ありがとう。山のじっちゃん、アンタのお陰で……少し、分かった気がするよ」
「礼など不要。汝はただ、その証を示すだけでよい」
　フッと、笑みが溢れる。修司は意外と面倒見のいい山の翁に、山の翁は手間のかかる修司に。
　そして――――ハサン＝サッバーハは剣を取る。ごく自然体のまま、流れるように死を運ぶ。ふと、修司の耳に鐘の音が聞こえた。
「聞こえるか？　あの鐘の音が」
「聞こえるよ。コイツが、俺を死に導くお告げって奴なんだろ？」
「然り。であれば……分かっていような？」
「あぁ、この死を越えて、俺はもっと先へいく」
「では――――首を出せい。死告天使（アズライール）」
　振り抜かれる剣閃。迫る死を前に、修司はただ静かにソレを見据え――――そして。

交差は、一瞬だった。振り抜かれたまま制止する翁、その背後には身を屈め、両手を伸ばす修司がいた。互いに動かぬまま時間だけが過ぎ去り、数秒の間の後、山の翁からカランと、何かが落ちたような音が響いた。

「――見事」

落ちたのは、翁の面。自身の刃をすり抜け、更には翁の証である髑髏の面を叩き落とした事で、修司は自らの証を立てた。

「未だ扉は閉ざされたまま、しかし鍵は解かれた。扉を開き、先へ進むか否か、全ては汝次第。心するがいい」

「あぁ、ありがとうな。山のじっちゃん。アンタの教え、絶対に……忘れ……」

体力は使い果たし、気力も死力も尽くした修司は最後まで言葉にする事なく、地面へと倒れ伏す。その刹那、修司が倒れ込む場所に黒い孔が開かれ、修司は黒い孔へと呑み込まれていくが……恐らくは、彼の相棒の仕業なのだろう。山の翁は面を被り直し、過保護な相方に嘆息を溢しながら、霊廟の奥へと姿を消す。

――その最中。

「ご協力、ありがとうございます。山の翁」

「――これも、汝の狙い通りか？」

いつの間にか、ソイツはいた。山の翁とは異なる蒼い仮面を被り、白い外套に身を包んだソレは、まるで初めから其処にいたように佇んでいた。

そんな蒼い仮面の男に山の翁は僅かに怒気を放つ。そんな偉大なるハサンの祖に、仮面の男はその外見には似合わないほどの誠意ある謝罪を見せた。

「試すような真似をしてしまい、誠に申し訳ありません。本来であれば、我々の内の何れかが担当するべきだったのですが……如何せん、この世界。いや、この時空は些か繊細過ぎる、故にこの様な手段を取ってしまいました。重ねて、申し訳ありません」

深々と頭を下げてくる仮面の男、その気持ちが本物である以上、山の翁からこれ以上言うことはない。あるとするならば、精々これ以上の介入をしないよう、細やかな口出しをする程度だ。
「――――立ち去るがいい、超越者よ。汝が在るには、ここは狭すぎる。進化の皇帝にも、原初の魔神にも伝えよ。汝らの居場所は、ここにはないと」
「はい。勿論、私もそう在りたいと願っています」
ソレだけを最後に、仮面の男は姿を消す。最初からそこにいなかったように、ただ静寂だけが霊廟を支配していた。
「――――心せよ、シンカの戦士よ。汝の旅路は、未だ果てはない」

その９９　第六特異点

「あ、……う……」
「あ、起きた。おーい皆ー！　修司君が目を覚ましたぞー！」
　気だるい微睡みの中から、意識が浮上する。重たい瞼を開けて、最初に修司が目にしたのは、自分の顔を覗き込んでいるダ・ヴィンチの顔だった。どうやら、自分は何とか生きているらしい。ぼんやりな意識を少しずつ覚醒させながら、修司は外から聞こえてくる足音に耳を傾けた。
「修司さん、起きたって!?」
「フォウフォーウ！」
　雪崩れ込むようにやって来る立香とマシュを見て、漸く修司は自身が生きている事を実感する。心底心配していた様子の二人に修司は上半身を起こして二人を見やる。因みに、彼女達の後ろには見知らぬサーヴァント達が何人かいた。
「おお、立香ちゃん、マシュちゃん、二人とも無事か。山の翁の皆も……知らない顔も増えてるし、どうやらそっちは上手くいったようだな」
「あぁ、お陰さまでね。そう言う君は一体どうしたって言うんだい？　ロマニに言われて慌てて現地へ向かえば、妙な扉の前で気持ち良さそうに寝息を立てている君がいるんだもの！　山の翁――彼等も、怒っていたり青ざめていたりと混乱していたんだ。説明、させて貰えるんだよね」
　如何にも〝私、怒ってます！〟と、腕を組んで珍しく怒気を孕んだ眼で睨んでくるダ・ヴィンチ、立香もマシュも同様の様子なのか、何時もより表情が険しい。山の翁達に至っては無言で圧力を掛けてくる程だ。
　ただ、彼等の場合は怒っているというより、修司が何かをしでかしたと言う事に対する戸惑いと焦りの方が大きい様だ。何れにしても

沈黙は許されない様子、修司としても話しておきたいのは山々だが……如何せん、修司自身が言葉でどう説明したらいいか分からない状態だった。
　というか、思考が定まらない。自分が無事でいられた事もそうだが、何より体に刻まれていた傷跡がない事が修司自身すらも混乱へ落とし込んでいる。混乱と困惑で思考が纏まらない中……。
「……と、取り敢えず何か食わせてくれない？　もう俺、腹が減って……」
　ぐぅう、空腹を知らせる人間らしい音に一瞬その場は静まり返り。
「ハハハハハ！　いやはや、結構な事ではないか！
　腹が鳴くのは生きてる証拠！　宜しい。この場は一つ、俺が取り持とうではないか！」
　米俵を肩に担いだ日本由来と思えるサーヴァントが、笑いながら修司の前に立ってきた。男は自らを俵藤太と名乗り、米俵をまるで太鼓の様に叩く。するとどうだろう、修司と立香、そしてマシュの前には白く瑞々しい炊きたての白米と焼き魚、味噌汁にお新香とシンプルながら上機嫌な朝食が、三人の前に現れた。
「本来でなら食料しか出せない我が宝具だが、何とか三人分なら用意出来た。さぁ、立香もマシュも召し上がられよ。二人は勿論、どうやら貴殿も死線を潜り抜けてきたばかりの様子、今はたらふく飯を食い、英気を養うといい」
　突然目の前に現れた食事に、疲弊した修司は目を見開いた。周囲を見渡せば他の面々もこの宝具の事は知らなかった様で、目を丸くさせて驚いている。唯一露出度が凄い女性だけは、我が事のようにうんうん頷いていた。
　修司も立香も、互いに言いたいことは沢山ある。でも、今だけはそれは横に置くとしよう。白米の入った丼を手に一口頬張ると。
「うん……めぇ～～っ!!」
　カルデアでの食堂以来、味わう事のなかった懐かしき日本の味が、口一杯に広がっていった。

◇

「「初代様と戦ったぁっ!?」」

それから少しして、藤太が出してくれた食事に舌鼓を打ちながら綺麗に平らげた修司は、空腹も満たされた事で体は万全となり、以前以上に力が満ち足りた感覚を味わいながら、自身に起きた顛末を皆に話した。

カルデア側はそんな様子は微塵も観測できなかったと嘆き、今後は修司も迂闊な行動を控えるようにと釘を刺す事で無理矢理納得させるが、山の翁達はそうはいかなかった。

何せ、初代山の翁は歴代の山の翁にとって禁忌とも呼べる掟の超秘密事項である為、意味合いも、その名の重さも、自分達とは比較することすら憚れる畏れ多い人物だった。

特に、呪腕のハサンはこの時代の山の翁であり、初代とは一番近い繋がりのある人物。故に静謐や百貌以上に衝撃は大きかった。

「ど、どどどどどどうするのだ呪腕!? その話が本当なら、初代様に一度お目通しをした方が良いのではないか!?」

「で、ですがそれでは呪腕さんが……いや、でも、それで万が一初代様の怒りに触れてしまったとしたら――――」

「お、落ち着け百貌、静謐。聞けば修司殿は初代様が自ら呼び出し、試練をお与えになった様子。ならばこの件に関して我等が何らかの罰則が与えられることはない筈……多分、きっと、メイビー」

端から見ても異常な程に恐れているハサン達、余程怖い人物なのだ

ろうかと、立香は修司に訊ねた。
「ねぇ修司さん、その初代山の翁ってそんなに怖い人なの？」
「うん？　確かに見てくれは迫力あったし、怖いと言えば怖いかもだけど……別に其処までではないと思うぞ？　山のじっちゃん、結構面倒見良さそうだったし、仮面を叩き落としても怒らなかったし。アレだ、近所では怖くて頑固で有名な人だけど、孫の前ではデレデレなお爺ちゃんって感じだな」
「じっちゃん!?」
「仮面を叩き落とした!?」
「あ、ダメだこれ、私死んだわ」
　自分の感じたことをそのまま伝えただけなのに、何故か阿鼻叫喚となっているハサン達。呪腕に至っては茫然自失となって虚空を眺めてしまっている。
「なんというか、敵味方問わず全方向に被害を出す兄ちゃんだな」
「でも、本人は至って真面目なつもりなのよね？　うーん、これは説法案件？」
「て言うか、そこのポンコツ臭のするお姉さんは何者？」
「ぽ、ポンコツ!?」
「あ、此方の方は玄奘三蔵さんで魔物達に囲まれ、泣きべそかいていた所を保護しました」
「マシュ!?」
『うーん、マシュも大分逞しくなって僕としては嬉しいけど、なんか複雑だなぁ』
「あっはっは、相変わらず賑やかで楽しいじゃないか！」
「フォウ……」
　そんなこんなで、修司は藤太と三蔵と面識を交わし、賑やかな朝の食卓を終えるのだった。

◇

それから少しして、円卓軍に対抗するべく立香達は、初代山の翁の助力を獲るために（というか、修司が何かやらかしていないか知る為に。）アズライールの霊廟に向かう事になった。

修司としては今更円卓の騎士相手にこれ以上の戦力は必要ないと思ったが、聖都には凡そ一万に迫る騎士達が配置されており、対する此方は七千に到達するかどうかの戦力差なのだと言う。

しかも、騎士一人に対して此方は三人の人員を割かなければならず、それも必ずしも勝てるとは限らない。それはサーヴァントであるアーラシュ達に対しても同じことが言える事だ。

獅子王の祝福（ギフト）によって増幅された円卓の騎士達の実力は、アーラシュや藤太達が複数人で相手にしなければならない程に強力で、且つ強大。修司を獅子王にぶつける事を考えれば、初代山の翁の力を借りたいと望む呪腕達の目論みは、割りと的を得ていた話だった。

修司も、自分の力が獅子王に通じるかなんて分からない。〝今〟自分の身に宿っているこの力がいつ消失するか分からない現状、呪腕達の言っていることは間違っていないと思う。尤も、力を貸して欲しいと言って、素直に了承してくれる相手とは思えないのも、また事実である。

本当なら自分も初代様の所に向かいたかったが、ロマニから絶対安静と言われた以上、大人しく集落で待っている他ない。霊廟に向かう立香達を見送ると、修司は適当な岩山に腰を下ろし、一人静かに瞑想する事にした。

アズライールの霊廟にはハサン達の他に三蔵、藤太が付いているし、マーリンから話を聞いたとされるベディヴィエールも同行してい

る。戦力としてなら充分だろうし、集落にだって人員は割くべきだろう。
　そんな訳で、現在集落にはアーラシュと修司、そしてダ・ヴィンチの三人が守衛に付いていた。
「よぉ修司、体の具合はどうだい？」
「藤太さんの用意してくれた朝飯のお陰で、すっかり絶好調さ。体のどこも悪いところはないし、なんなら今から聖都攻略に向かえって言われても良いくらいさ」
「ハッハッハ！　ソイツはいい。頼もしい事この上なしだ。けど、ロマニ＝アーキマンだっけ？　アイツの言うこともちゃんと聞いておけよ。ダ・ヴィンチが見付けた時のお前さん、五体満足ではあったものの相当疲弊していたんだからな」
「分かってるって。かなり心配を掛けてたみたいだし、今は大人しくしているよ」
　アーラシュ＝カマンガー。古代ペルシャの時代の出身であり、とある長年続く戦争を終わらせた西アジアの大英雄として知られる人物。その気安い性格と兄貴分な気質で、集落の人々から慕われている人格者でもある。
　加えて、やたらと眼が良いらしく、持ち前の気質と合間って独り問題を抱えている人を見掛けては、何かと世話を焼いているらしい。
「ルシュド君は、どうしてる？」
「あぁ、今は狩りの為の弓矢を教えている所だ。幸か不幸か、この状況があの子を動かす原動力になっている。母親を殺された恨みではなく、集落の皆の為に弓を取り、明日の生きる糧を獲ようとしている。強い子だよ」
「そっか。凄いなルシュド君は、俺だったら多分そんな風に割りきれないぞ」
　母親を失い、悲しみに暮れているかと思いきや、意外と逞しくなっているルシュドに、修司は一先ず安心した。憎しみに囚われたり、独り善がりにならず、あくまでも皆と一緒に生き延びようとする彼の在り方は、きっと母親の教育の賜物なのだろう。

それだけに、円卓の連中のしてきた事を考えると、腸が煮えくり返す思いだが。
「ルシュドもそうだが、問題はベディヴィエールだ。お前さんも気付いているんだろ？　あの騎士の兄ちゃん、トンでもない重荷を背負わされているぞ」
「……」
アーラシュから紡がれる話の話題は、ベディヴィエールの事だった。彼が何かしらの使命を背負っている事は、これ迄の彼の態度を見て何となく気付いてはいた。獅子王が召喚されたという円卓の騎士、嘗ての王の喚び掛けに応えず、単騎で獅子王に反旗を翻し、裏切りの汚名を被る事になった騎士。
何故、彼は獅子王の喚び掛けに応えなかったのだろう？　他にも円卓の中には獅子王の召喚に応えなかった騎士がいるみたいだけれど、それとは別の理由がベディヴィエールにある気がした。
尤も、それを無理矢理暴く気はないし、元より差ほど興味もない。修司がこの特異点に来て決めたことは、円卓を可能な限りブチのめす事、それの邪魔をしない限りは修司もベディヴィエールの邪魔はしないつもりでいる。
「――さてな。アイツが何を抱えているかなんて、俺には預かり知らない話さ。仮に問題があったとして、それはベディヴィエール自身の気持ちの問題だろ？　部外者がとやかく言う筋合いはないさ」
「それはそうなんだがなぁ。あの手の奴を見ると、どうしてもムズムズしてな、口出しをせずにはいられんのだよ」
「全く、アンタも大概お人好しだなぁ」
腕を組んで身震いさせるアーラシュに、修司は苦笑いを浮かべる。しかし、そんな穏やかな空気は突如として終わりを迎える。
「――修司」
「あぁ、感じた。そっちも視えたようだな」
「結構な数だ。そして円卓の騎士が二人、此方に来ている。見回りに来て良かった。此処からなら地の利を活かせる」
「なら、俺が行くとしよう。アーラシュさんはダ・ヴィンチちゃんにこ

の事を伝えて、集落の皆の避難をさせてくれ」
「良いのか？　さっきはあぁ言ったが、お前さんの強さには俺としても肖りたい所だ。無理はするな、なんて言えないが……死に急ぐ真似はするなよ」
「勿論そのつもりだよ。ただちょっと、山のじっちゃんに鍛えられた成果を、試して見たかった所さ」
　それだけを告げると、修司は岩山から立ち上がり、山の崖を滑るように降りていく。その身軽さから、どうやら本当に体の方は何ともないらしい。
　紺色の背中を見送るアーラシュ、彼の瞳は既に円卓軍の粛正騎士達に向けられていた。

◇

　広い場所。山岳地帯の何処かにある一つの部隊が丸々収まりそうな開けた空間、そこに馬に跨がる二人の騎士がいた。
　湖の騎士ランスロット、嘆きの騎士トリスタン。とやかく嘗て共に円卓の下で同じ王に仕えていた二人は、ある目的の為に山岳地帯にある集落へ向けて、無数の粛正騎士達と共に進軍していた。
「――――トリスタン卿、卿は本当にこの作戦に付いて何も思う所はないのか？」
「今更どうしたのです？　ランスロット卿、王に最も敬愛された貴方らしくない気弱さですね。既に獅子王が、聖断は成された。であるならば、我々に口を挟む余地は最早無い筈では？」

「しかし、彼処には……難民達が大勢住んでいる。我々に牙を向ける訳でもなく、ただ平穏に暮らしているだけなのではないか？」
「それは、今だけの話でしょう？　喩え今は穏やかに過ごしていたとしても、いつ牙を向けてくるか分からない。であれば、その様な不穏分子は早い内に摘んでしまうのが正解の筈です」
「だが……！」
「あぁ、しかし――私は悲しい。たかが一山の民ごときの為に、何故我が弦を弾かなければならないのか。彼等にそれほどの価値があるとは到底思えませんが……」
「トリスタン卿――！」
　既に、ランスロットの隣に並ぶ騎士は彼の知る嘗ての同志ではなくなっていた。分かっていた事だ。獅子王のギフトを受け入れて、彼の在り方は歪に変えられてしまった。〝反転〟という祝福（呪い）を受け入れた彼は、その時点で自分達の知るトリスタンではなくなっている。
　嘗てのトリスタンであれば、決して許容しなかった筈の蛮行。そして、そんなトリスタンを見ていることしか出来ない自分も、また同類なのだろう。
　あぁ、誰か。誰でもいい、愚かな我々を裁いてくれ。そんな自身の嘆きをも、今更なものだと切り捨てて、ランスロットは自身の心を鉄に変える。
　と、そんな時だ。彼等の前に一人の男が、自分達の前に立ちはだかるように其処にいた。
　何者？　いや、知っている。自分は、自分達はその男の事を知っている。トリスタンを撃退し、ガウェインを一蹴し、そして――自分の剣閃すら捌いて見せた規格外の戦士。
　自分達を裁ける唯一の存在が、自分達の前で呑気に屈伸していた。
「――貴様、ここで何をしている」
「うん？　見てわかんね？　準備運動だよ。さっきまで寝て飯食って瞑想していただけだし、体動かすの忘れてたからさ――大事だろ？　食後の運動って」
　トリスタンの怒りと殺気もなんのその、手足を伸ばして体を解して

いく目の前の男は、これだけの軍勢を前に何処までも自然体だった。
瞬間、トリスタンはそれ以上語る事なく弦を弾く。ランスロットの制止する声が届かない程の速打ち、目には見えない不可視の弾丸は、しかし目の前の男に当たる事はなかった。
逆立ちをしたまま、ヨッとという軽い掛け声を溢すだけで、其処から軽く飛び退いただけ。男に――――修司に当たる筈だった空気の弾丸は、偶然にも地面に当たるだけだった。
(バカな、奴は終始ずっと此方を見ていなかった。まさか、空気の僅かな振動だけで見切ったというのか!?)
周囲の粛正騎士達がマグレだなんだと騒ぐなか、ランスロットだけはその光景に息を呑んでいた。トリスタンの弓は単なる偶然で避けられるモノではない。自分は勿論、円卓の誰しもが彼の妖弦の前には翻弄されてしまうだろう。喩え在り方が歪められたとしても、彼の弓の冴えが失われた訳ではないのだから。
「おし、大分解れてきたな。そんじゃ――――いっちょ、やってみるか」
準備完了。そう言って振り返る修司の顔は、何処までも自信に満ち溢れていて、その瞳は自分達を見ているようで見ていない。
既に、修司の目標は彼等(円卓)ではなく、遥か先に待つ自分の可能性しか、見据えていなかった。

その１００　第六特異点

修司と別れ、目的地へ向かうことになった立香達、途中荒野にあるとされる他の集落から、何としても戦力をかき集めると息巻く百貌のハサンが一時離脱し、険しい山の道を進むこと数時間。立香達はそこへ辿り着いた。

――――アズライールの廟。歴代のハサン達が禁忌として畏れ、敬い、そして奉っている霊廟。決して楽ではない道程を経て、其所へ辿り着いた一行を待ち構えていたのは、自分達の予想を遥かに上回る何かがいた。

髑髏の翁。全てのハサン達を処し、その役目を終わらせる為の――――ハサンにとってのハサン。その超越とした技巧は、同行した藤太を十年単位の修練の果てに一射届かせるかどうかと言わせる程に規格外だった。

成る程、修司が勝てないと言わしめたのも頷ける。そんな翁からの試練を乗り越え、遂に話し合いの場に立てるようになった一行は、初代山の翁に対獅子王に備えての戦力に加わって欲しいと願い出た。

「……初代様、恥を承知でこの廟を訪れた事、お許しいただきたい。この者達は獅子王と戦う者。されど王に届く牙があと一つ、足りませぬ」

「どうか――――どうかお力をお貸しいただきたい。全ては、我等が山の民の未来のために」

両手を地に着けて懇願するハサン、静謐も同じ思いなのなだろう、立香達の試練として肉体を操られ、疲弊しているにも関わらず、彼女もまた平伏して懇願の意を示していた。

「――――幾つか、間違いがあるな。以前と変わらぬ浅慮さだ、呪腕」

「――――と、申しますと？」

「魔術の徒に問う。獅子王と戦う者――――これは真か？　汝らは神に堕ちた獅子王の首を求めている。その言に間違いはないか？」

向けられる視線。体も、魂すらも凍り付いてしまいそうな初代山の翁の視線。一切の嘘も偽りも許さないと醸し出してくるハサンの祖を前に、立香は慎重に答えを出そうと少し悩んで――。
「う～～ん、正直分からないかも」
「ちょっ、藤丸殿ォッ!?」
答えは分からない。これ迄獅子王の――その手下である円卓の騎士達の蛮行を目の当たりにして、それでも分からないと答える立香に、呪腕と静謐のハサン二人は信じられない様子で動揺していた。
別に嘘を言っているつもりはない。確かに円卓の騎士達が何の罪もない人達を手にかけ、数多くの悲劇を生み出してきた彼等を赦せるとは思えないし、仮に赦したとしても、それは自分ではなく山の民の人々が決めることだ。
更に言えば、立香は獅子王本人に怒りを感じている訳ではない。そもそも太陽王とは違い、獅子王とは顔も合わせてないし、言葉も交じ合わせていないのだ。首が欲しいのかと言われて、混乱するのが正直な所である。
「うんうん。嘘言っても仕方ないものね。だって顔も知らない相手は殺せないわ。せいぜい文句を言うくらいでしょ」
「――まぁ、修司さん辺りは部下のやらかしは上司の責任とか言って、殴り掛かりそうだけど」
「せ、先輩！　此処で本当の事を言うのはどうかと！」
「マシュ殿!?」
「次に、牙が一つ足りぬ、とも申したな。果たして、本当にそうか？」
「――え？」
「汝らの徒、もう一人の戦士である白河修司、奴だけでは獅子王に届かぬと、そう思うか？」
「「「っ!?」」」
これ迄、敢えて触れてこなかった話題に進んで踏み込んでくる初代山の翁に、今度こそ立香達は凍り付く。というか、そっちから話してくるんだ。此処までの道中で悩みに悩み、結局スルーに徹する事を決めたハサン達が、折角話題に触れないように気を付けていたのに、

色々とあんまりである。
しかし、向こうから触れてきた以上、もう無視は出来ない。ならば聞いてやろうと立香は腹を括った。
「えっと、修司さんから少し聞きました。山のじっちゃんの世話になったって、貴方のお陰だと、妙に晴れやかな顔をしていました」
「――そうか」
「あの、修司さんがその……何か粗相をしたりしませんでしたか？あまり話を聞く間がそんなになかったから、詳しくは知らないんですけど、なんか――手解きを受けたみたいな事を聞いたんですが……」
出来るだけ丁寧に、相手を不快にさせないよう礼儀を重んじながら、立香は慎重に言葉を重ねていった。言葉を紡ぐごとに空気が重くなっていく気がする。息苦しさが増していき、二人のハサンに至ってはガタガタと震えている。果たして修司はこの初代山の翁に何をしたというのか、緊張しながら目の前の死神の返答を待っていると……。
「我が下したのは、一つの選定。未熟な戦士の……可能性という名の扉の鍵、その枷を外す為の――ほんの僅かな後押しをしたに過ぎない」
「故に、刮目せよ。魔術の徒よ、汝の手には獅子王に挑む剣が――既に、握られている」
そう語る山の翁の蒼き眼光の奥には、微かな期待が滲み出ている様な気がした。

◇

――――知っている。この感覚に、覚えがある。視界が広がり、色んなものが見えるような錯覚。全てを見通すのではなく、この刹那に流れるあらゆる事象が自身の体を通して流れていく感覚。全能感とも、万能感とも違う、何処か心の内で高揚し、何処までも力が高まっていく感覚。

コレに、この感覚に白河修司は既視感を抱いている。そう、以前に修司はこの領域に足を踏み入れた事があった。

それはあの時、自分がまだ学生だった頃。聖杯戦争という魔術の戦いに自ら首を突っ込んだ頃の話、呪いの泥に汚染された聖杯の中で、修司は確かにそこへ至った。

あの日以来、あの領域にもう一度踏み込む事はなく、挑もうにもどうすればいいのか全く分からず、どれだけ鍛練修練を重ねても、そこへ踏み入れる事はできなかった。やがて時間が過ぎる度にあの感覚は修司の体から薄れ、多忙なる毎日が修司をあの領域から遠ざけてしまっていた。

けれど、今回の山の翁との一戦を経て、それは再び相成った。体から滲み出る光、視界が広がり、大気やあらゆる事象にすら干渉出来るであろう高揚感。白河修司は今、あの時と同じ境地に踏み込めたのだと理解する。

しかし、山の翁が言うように、今の自分はまだ鍵を解いただけに過ぎず、扉を開いてすらいない。此処からが正真正銘、自分次第なのだと。

「本当に、山のじっちゃんには感謝しなくちゃな」

此処まで自分の力を開花させてくれた山の翁に、心からの感謝の言葉を口にしながら、背後から忍び寄る剣閃を体を僅かに逸らせるだけで避け、返し刀の裏拳で、兜ごと粛正騎士の顔を砕いていく。

その一撃は、修司からすれば何気無い腕の一振りに過ぎなかったが、粛正騎士にとっては致死を通りすぎた即死の一撃だった。砕かれた頭部は粛正騎士を存命させる力を根刮ぎ打ち砕き、騎士だったもの

は断末魔の声を上げる事なく消滅した。
「さて、これで全部片付いたか。後はお前ら二人だけだが――――まだ、やるか？」
腰に両手を置き、辺りに伏兵がいない事を確認すると、地面に膝を付ける二人の騎士を見る。
ランスロットとトリスタン。共に円卓の騎士として名を馳せ、今は獅子王の騎士として在る英雄。そんな両者が地に膝を付けて肩で息をしていた。
「――――バカ、な。我等が、円卓の騎士が二人も揃っておいて、唯の傷一つ付けられない……だと!?」
忌々しく呟き、閉じられた眼で睨み付けてくるトリスタン。目の前の男と相対した時、粛正騎士達の突撃に合わせて迷いなく自慢の弓を放った彼が次に感じたのは、自身の放つ空気の矢が悉く外れる音だった。

肉を裂き、骨を断ち切る風の刃。不可視の斬撃を避け、いなし、複数体の粛正騎士達をあいてにしながら、片手間で弾かれる様はトリスタンに最上級の屈辱を与えた。いや、或いはそれだけならまだ良かった。
この男は、自分達を敵として見ていない。自分の力を何処まで高められるか試すだけの……練習台程度にしか見ていない。誰もが殺気を漲らせている中で、白河修司だけが平常心で佇んでいた。
隣でトリスタンが苛立ちと怒りを募らせる中、比較的落ち着いていたランスロットは、目の前の淡くうっすらと輝いている修司を前に、ある種の感嘆の想いを抱いていた。
今、自分は一つの武の極致と相対している。永く続く人類のあらゆる歴史の中で、此処までの領域に足を踏み入れたモノは数少ない。ランスロット自身もスキルとして似たようなモノを所持しているが、アレは根底から異なるモノだ。
（たった数日の間に……此処まで化けるのか。凄まじいな、現代の人間というモノは）

自身の剣撃も、まるで通じていなかった。ガウェインを下し、モードレッドを撃退し、更には自分達すらも軽くあしらってしまっている。断言しよう、目の前の男の拳は、獅子王にも届く。あの恐ろしい嵐の王となった嘗ての王を、弾劾出来る者が遂に現れた。

（――――いや、止めておこう。今の私は獅子王の騎士。今更の感傷、今更の後悔だ）

胸に灯る希望の光を無視して、ランスロットは立ち上がる。その両手に握られたアロンダイトの剣から、目映い光が溢れ出す。

宝具の光。ランスロットからの真名解放に初めて修司は表情を引き締める。宝具の開帳は、文字通り自身の全てを賭けた決死の一撃。侮る事はしない、元より修司が狙っていたのは円卓最強の騎士の一振りにあった。

最早、トリスタンの事は視界にすら入っていない。嘆きの騎士をいつでもどうとでも出来るモノとしか認識していない修司に、トリスタンは嘆き（怒り）に震えた。

故に――――。

「何処までも、何処までも私を愚弄するか！　あぁ、私は悲しい。何処までも傲慢な男、しかしその男を正面から射つことが出来ない事に」

トリスタンは弓を引く。圧縮し、高める魔力の奔流。開かれた眼の奥には――――既に、光は届いていなかった。

「輝きは水面の如く。爛々と燃え盛れ！　受けよ、我が聖剣！　――――縛鎖全断・過重湖光（アロンダイト・オーバーロード）!!」

「死を以て贖いを。殺戮を以て収束を。傲慢の罪、ここで支払って貰いましょう！　――――痛哭の幻奏（フェイルノート）!!」

正面と背後、両方向からの同時攻撃。未だ構えを見せず、無防備の姿を晒す修司に、トリスタンは直撃を確信した。

対して、ランスロットだけは世界が静止したような錯覚を覚える。極限の集中力が見せる世界の中で――――。

白河修司は加速する。

「見様見真似――――鶴翼三連」

――――見えなかった。初動の動きも、あらゆる動作も、何もかも

がランスロットの五感から逸脱していた。剣士としての直感も反応する余地なく繰り出された三十の連撃は、余すことなくランスロットの全身に叩き込まれ、砕かれる宝剣と鎧と共に湖の騎士は地に倒れた。

その光景に、トリスタンの動きは止まる。自分達の知る円卓の騎士が、ガウェインと対を成す獅子王の騎士が、無造作に倒れる姿にトリスタンは言葉が出なかった。

「バカな、誉れある円卓の騎士が、獅子王の刃が、倒れたというのですか？　あぁ、あぁぁぁ……なんという事でしょう。私は悲しい、あのランスロット卿が、この様な匹夫に倒されるとは、一体誰が予想デキタト言うのです。あぁ私は悲しい――――」

「おい」

「……？」

「お前さ、用が無いならとっとと帰ってくれる？　獅子王に報告するのもなんでもいいけどさ、集落の皆の所に話をしなきゃいけないし、お前の相手をしている暇ないの」

「……何を、言っているのです？」

「とっとと帰れって言ってるの。どうせお前に出来るのは、無抵抗の難民への攻撃と不意打ち位だろ？　お前の攻撃はもう見切った。戦う意味もねぇし、相手をする価値もない」

価値がない。自分の戦いを、弓を、技を、全てを吟味した上で価値がないと断言する修司に、トリスタンは自身の内で何かが崩れた様な気がした。

事実、修司は今のトリスタンに価値はないと確信している。獅子王のギフトを授かる前ではどうなのかは知らないが、今のトリスタンは雑過ぎる。もし彼に反転のギフトが授からず、真っ当な騎士として相対したら、結果は少し変わっていたのかもしれない。

しかし、決着は付けられた。トリスタンの事はこの地で尤も因縁の深いハサン達に任せる事にして、自分はとっとと集落に戻ろうと背中を向けた時。

微かに、空気の弾かれる音が聞こえた。

「本当に、不意打ちが大好きだよなぁ、お前」
「あ、あぁ……」
自身の弓は外れ、いつの間にか自身の隣に立っている山吹色の男。その顔には何処までも呆れと侮蔑の色に染まっており、それはまるで汚物を見ているように冷たかった。
それは、眼の見えないトリスタンにとって唯一の救いだったのかもしれない。反転し、何処までも悪辣となった自分に、この結末はお似合いだと、自嘲の笑みを浮かべて……。
「わ、私は――――」
「あぁ、もう喋らなくていいぞ。興味もないし、聞きたくもない。潔く――汚い花火になれ」
瞬間、修司はトリスタンの股間を蹴りあげた。ブチュブチュとナニかが潰れる音が聞こえ、骨盤が砕かれ、内臓まで達した蹴りは、トリスタンを空高く舞い上がらせる。
本当なら、ハサン達に決着を委ねるべきなのだろう。これ迄の彼等の話を聞いて、円卓の騎士トリスタンこそが最も山の民達を殺していることは知っている。今回も、立香達の留守を狙って押し寄せてきた。もしも自分やアーラシュがいなかったら、きっと集落は地獄と化していただろう。
そんな悲劇は起こさない。故に修司は空を舞うトリスタンに向けて、エネルギーを収束させ――――放った。天を貫く極光、片手だけで従来のかめはめ波を大きく凌駕するエネルギーの奔流は、トリスタンを呑み込み、遥か空の彼方へと消えていった。
軈て静寂が戻り、辺りは静まり返る。これから急いで集落に戻ろうとした時――――それを感じた。
「なんだ、このデカイ気は？　東の村からだ」
天から覗かせる黄金の光。それが獅子王の裁きだと直感で察した修司は、急いで集落に向かおうとして――――。
「――――あぁくそ！　得物をへし折るだけにすれば良かった」
倒れ伏すランスロットを抱え、村へと急ぐのだった。

その１０１　第六特異点

――――自分は、何をしているのだろう。嘗ての円卓の所業に憤り、獅子王の行いを糾弾し、自身の罪と向き合わなければいけないのに……気付けば、状況は自分を置いて、ドンドン先へと進んでしまっている。

円卓の非道な所業、獅子王の非常な決断。それに誰よりも怒り、行動に移すべきだったのに、気付けば自分は傍観者になりつつあった。

藤丸立香やマシュ＝キリエライト、白河修司達と共に戦うと決めた筈なのに、自分はいつも出遅れてしまい、円卓との戦いに殆んど介入出来なくなってしまっている。

未だ、私は迷いの中なのだろう。自分の犯した罪の重さと、その代償に。情けなく、浅ましく、決意と覚悟を胸に抱いておきながら、今も自分の胸中には葛藤と後悔と自己嫌悪に満たされている。

――――怖い。自分の罪と向き合う事が、罪と向き合い、その果てに支払われる自身への代償とその末路に。

そして……獅子王となった嘗ての王と再会するのがとても、とても怖かった。獅子王の前へと辿り着き、そこで顕になる己の罪が明らかとなることが、どれだけ気持ちを固めようとしても、それを考える度に足元から固めた筈の決意が崩れ落ちていく。

結局、自分は己の事しか考えられない矮小な者で、そんな自分だから皆に置いていかれるのだろう。

ガウェイン卿は、どうあれ王に尽くすと言った。

ランスロット卿も、迷いながら王の聖断に従うと言った。

モードレッド卿は、獅子王に逆らうこと事態が間違いだと言った。

アグラヴェイン卿は、完璧な王に問いは無用と断言した。

トリスタン卿も……きっと、彼等と同じ意見なのだろう。彼の行いを聞いて、彼の所業を余すことなく耳にして、自分は漸く嘗ての円卓は消えたのだと痛感した。

そして、そんな彼等を間違っていると糾弾し続ける者達。立香達の叫ぶような言葉に、自分はいつも呆然と立ち尽くすだけだった。
こんな自分が、本当に己の責務を真っ当する事ができるのだろうか。何処までも優柔不断で、何処までも自分本意な己が、王を在るべきモノへ還せるのだろうか。
「王よ……」
集落へ引き返す立香達の背中を見ながら、ベディヴィエールは己の旅の答えを……未だ見出だせずにいた。

◇

――――陽が落ち始め、夜の帳が降りる頃。それは唐突に、突発的に現れた。それは奇跡というには眩しく、罰というには剰りにも美しい光。
突然自分達の頭上に照らすように現れた光、膨大な熱量と質量を併せ持つその光は、この特異点に幾度となく降りそそげられ、その度に大地に決して消えない傷跡を刻み込んだ。
其は――――獅子王の裁き。円卓の、ひいては獅子王に仇なし、弓を引く者として定められた者達に対して、獅子王自らが下す裁定の光。
雲の割れ目から這うように現れる光、それはまるで槍の様な形となって、反逆者達に降り注げられる。此度の裁きの標的となっているのは、山の民達が生活する東の村。そこに円卓の騎士達に仇なす者は愚か、戦える者すらいない弱者の村。
これまで慎ましく、穏やかに生活を営んできた彼等に対し、下される苛烈な裁きを前に、村人たちはただひたすらに祈ることしか出来なかった。
「お母さん、綺麗だねー」

「ええ、そうね。本当に……」
突然空から現れる光になにも知らない少年は目を輝かせ、そんな息子をせめて痛みのないように祈りながら、母親が抱き止めた。
間近に迫る絶対的な死を前に、少年が次に目にしたのは――――大きな男の背中だった。
「波ァァァァッ!!」
空を飛び、微かな光を纏う男が放つ蒼白い閃光は、押し寄せる獅子王の裁きの光を呑み込み、成層圏を超えて大気圏外へと押し上げる。空が、世界が白い光に包まれ、少年はその眩しさに目を閉じる。
軈て光は収まり、少年の瞼が開かれると、其処にはいつも通りの世界が広がっていた。まるで夢を見ていた様な、そんな錯覚さえ覚えてしまう程に、先の光景は衝撃的だった。
けれど、夢でない事は少年にも分かっていた。何故なら――。
「何とか、ギリギリ間に合ったか」
空を覆う光を、更なる極光で消滅させたトンチキ戦士が、目の前にいたのだから。

◇

「どうにか間に合ったか、良かった」
円卓の騎士達を退け、山の民達を護れたと安堵したのも束の間、突然東の村方面から感じ取れる巨大な力を感じて急行すると、戦略兵器のエネルギーが落とされる場面に遭遇。
当然、この様な度が過ぎる蛮行を修司が許す筈もなく、それまで満身創痍の円卓の騎士を抱えていた修司だが、村の適当な場所に捨て置

き、全力のかめはめ波を放った。
結果、獅子王の裁きと呼ばれる戦略兵器を退けた上で滅させ、東の村の人々の人命を守る事ができた。しかし、あまり悠長に構えてはいられない。以前逃がしたモードレッド辺りが密告したのかは知らないが、獅子王にこの村の居場所を知られた以上、村人達はもう此処にはいられないだろう。少なくとも、獅子王を何とかしない限りは。
「あ、あの……貴方は先日の、円卓の騎士を撃退してくれた方……ですよね？　その、助けて下さって、ありがとうございます」
「どういたしまして。と、言いたい所だけど、ちょっと不味いことになった」
「それは、獅子王にこの村の場所を知られた事ですね。確かにそれは由々しき事態ではありますが……なに、心配召されるな。我々は山の民、山に居場所を置き、山と共に生きていく者。であるならば、逃げる場所の一つや二つ用意していますとも。あなた様はどうか、獅子王との戦いに集中して下さいませ」
修司に歩み寄る初老の男性、その口振りはついさっきまで死地にいたとは思えない程に穏やかで、落ち着いていた。そしてどうやら現在の特異点の情勢にも詳しいらしく、修司が獅子王と戦うつもりでいることを見抜いていたようだ。
自分達の事は自分達でどうにかする。そう目で語る男性に、修司は申し訳なく思うと同時に、頼もしく思えた。ならば自分はこのまま立香達に合流しようかと、彼女達の気を探り始めると……。
「バカな。獅子王が、我等の王が、この村に裁きを落とそうとしたのか。戦えるものなど殆んどいないこの村に……」
地面に項垂れ、伏している円卓の騎士――――湖の騎士と呼ばれるランスロットが、信じられないといった様子で呟いていた。
「……なんで、お前が意外そうにしてんだよ。お前達の上司の仕業だろ？　アレ」
「――――知らなかった。私が命じられたのは、山の民を守護する戦力を削ること。貴殿やアーラシュ＝カマンガーを切り捨てる事、ただそれしか命じておらず、それが完了次第即座に離脱しろ。と」

どうやら、嘘は吐いていないらしい。全身の骨を砕かれ、自慢の宝剣を砕かれたランスロットからは、最早戦意らしい戦意は感じられず、修司の問いにも条件反射の様に答えるだけだった。

そして、騎士王が最も敬愛していたとされる湖の騎士ですらも、獅子王の思惑を理解できなかったのだと、修司は今のランスロットの状態を見て確信し、その確信は別の疑惑へと繋がっていく。

これ迄、獅子王は騎士王の変異したモノだと話の流れで認識していた。カルデアにいる騎士王は食事する時はアレだが、それ以外の平時では常に騎士達の模倣になるべきだと振る舞っている。

そんな彼女から聞いたことがある。円卓の騎士の一人、ランスロット。彼の事は今でも信頼している騎士の一人だと、そして同時に円卓を囲んでいた頃の自分達は確かに互いを信頼していたと。

そんな騎士王の成れの果てが獅子王だと言うのなら、獅子王は剰りにも騎士王とかけ離れているのでは無いだろうか？　それこそ、別人と呼ばれる程に。

（もしかして……獅子王は騎士王の別の要因で形成された別人格？）

古来より、聖剣魔剣の類いは所有者に少なからず人格に影響を及ぼしていると聞く。アーサー王のエクスカリバー然り、バルムンクやグラム然り。特に顕著に挙げられるのは、村正が造りし妖刀村正なんて最たる例だと思われる。

妖刀に魅入られ、辻斬り人切りに落ちぶれる物語は修司も一度くらい聞いたことがある。もし仮に獅子王がそれに似た状態というのなら、それはもしかして――。

「……もしかしてアルトリアは、もうアルトリアじゃなくなっていたりする、のか？」

「……なん……だと……？」

獅子王への仮説を自分なりに推測して見立てた呟きは、ランスロットの耳にも届いてしまったらしい。信じられないと、けれど心当たりが幾つもあるらしいランスロットは、項垂れたままそれ以上語る事はなかった。

さて、このままコイツをこのまま放置する訳にもいかないし、そろそろ皆に合流しようかと言う時、修司は再び巨大な力の奔流を感じ取った。
「おいおいマジか、連射できるのかよアレ!?」
暗雲広がる向こうの空から、巨大な光の槍が落ちてくる。方角と距離から落下地点を予測した修司は、其所が山の民の集落であると知り、急いで現場へ向かおうとする。
しかし、粛清騎士達と円卓の騎士二人を相手に立ち回り、且つ先の獅子王の裁きへ放ったかめはめ波で、修司の気力は底を着いていた。修司の纏っていた光は突如として霧散し、襲い来る凄まじい虚脱感に修司は膝を折って地に倒れ伏す。
「だ、大丈夫ですか!?」
近くにいた村人が近寄り、肩を貸す。界王拳の時のような激痛はないが、空腹感とも違う虚脱感により、修司はもう指一本動かす事が出来なかった。
(マジかよ!? 此処にきて、電池切れか!?)
プルプルと震える両足、動けと修司は手で叩くが、振り下ろす腕にすら力が宿っていなかった。このままでは集落にあの光の槍が落ちてしまう、そうなる前に何とかしなくては……!
最後の手段として修司は相棒(グランゾン)を喚ぼうとした時、それは現れた。地上から立ち上る光、修司の放つかめはめ波とは違う、淡く、儚い小さな光。
しかし、その蒼い一筋の光が獅子王の裁きに触れた瞬間――奇跡がおきた。解き、霧散していく光の槍。幻想的で、神秘的な光景を前にふと、修司は感じ取った。気の消失、向こうの集落で誰かの命が尽きたのだと。
そして――――。
『あとは、任せたぜ』
陽気で兄貴分な彼の声が聞こえた気がした。
「アーラシュ……さん」
軈て光の矢は、獅子王の裁きを貫いて空の彼方へ消えていく。遥か

空へ描く軌跡は――――まるで。
立ち上る流星の様だった。

その１０２　第六特異点

「――そっか、やっぱりさっきの光はアーラシュさんだったか」
「……うん」
体力も回復し、虚脱感から抜け出した修司が急いで集落に辿り着いた時は、既に全てが終わった後だった。
円卓の騎士と彼等の率いる軍勢を前に、山の民からは唯の一人も犠牲者を出さず、殆んど無傷で退ける事に成功した。そう、一騎のサーヴァントを除いて。
アーラシュ＝カマンガーは、空から降りてくる獅子王の裁きを前に己の命を対価で支払う宝具を以て、降ってくる巨大な光を霧散させた。
彼以外にあの窮地を退ける者はいなかった。彼以外の何者も、あの場で抗える選択肢など持ち合わせてはいなかった。だから、アーラシュ＝カマンガーの選択肢は間違っておらず、それに異議を唱えられる者など居はしない。
けれど、それでも……。
「もう少し……色々と話しておきたかったなぁ」
彼との突然の別れを、簡単に受け入れて、割り切れる事は出来なかった。
「立香ちゃん、大丈夫か？」
思えば、明確な死に別れを体験するのは、今回が初めてだった。これ迄の特異点は多くのサーヴァントと共に行動し、白河修司という規格外の猛者がいる事でどうにか脱落者を出さずに、ここまでこれた。
藤丸立香はごく普通の人間だ。魔術師としての教養など微塵もなく、巻き込まれただけの素人。人の死の間際に立ち会う経験などある筈がなく、それが自ら命を差し出す行為のならば尚更だ。
「うん、私なら大丈夫。ただ、少し……寂しいだけ」
そんな強がりを言う立香に、修司からはこれ以上語る言葉を掛ける事はなかった。特異点の旅を続けると決めたのは彼女の意思、ならば

その意思を尊重するべきなのだろう。
「そっか、頑張ったな」
「ちょっ、もー修司さん！　いきなり女の子の頭を撫でるなんてマナーがなってないよ！　……でも、ありがと」
　それでも、歯を食い縛って立っている立香を気に掛けない訳がなく、修司は寂しそうに目を細める立香を、自分なりのやり方で励ます事にした。
「おお、修司殿、戻られましたか」
「呪腕さん、東の村の方は何とか無事です。そしてスミマセン、俺にもっと余裕があれば……」
「其処までにしておきましょう。お互い、己の無力さに嘆く暇はありますまい。静謐にも言いましたが、今回は我々の見通しが甘く、円卓を招き入れる隙となってしまった。誰もが悪く、また責を咎める者もいない。ならば、次こそはと意気込むことこそ、アーラシュ殿に対する礼儀と言うものでしょう」
　人々の垣根から現れる呪腕、今回の件は円卓に居場所を悟らせた自分達こそが悪いのであって、修司達に非はないと、遠回しにそう告げる呪腕に修司は情けなくも受け入れた。
　あの時、自分がもっと自身の事をちゃんと把握していれば、或いは相棒を早めに出しておけば、アーラシュを犠牲に強いらせる事もなかったかもしれない。自身に顕れた力に浮かれ、自力でどうにかしようとして、この様な結果に終わらせてしまった。
　これでは初代山の翁にも申し訳が立たないと、立香達に合流するまで自責し続けていた修司だったが、呪腕の言葉に幾分か救われた気がした。
　ならば、悔恨の念を抱くのは此処までにしよう。そう気持ちを切り替える酔うに頬を叩くと、向こうから三蔵と藤太の二人がやって来た。
「あ、帰ってきた！」
「よう修司、お主の活躍は集落の皆から聞いたぞ？　大層な活躍だったそうじゃないか」

「あぁ、山のじっちゃんのお陰でなんとか乗り越えたよ。それよりも、そろそろ向こうでの出来事を教えてくれたりしないか？　俺も、色々と話したい事があったし」
「うむ、そうしてくれると助かる。――実は先程からずうっと気になっていたのだが……お主の横で正座しているソレ、もしかして円卓の騎士ではないか？」
　そろそろ情報の共有の為に話し合いをしようという所で、俵藤太が口にした一つの疑問。それは、これ迄誰一人敢えて口に出さなかったモノで、自ら進んで指摘してくれた藤太に一同は内心で拍手を贈った。
「ん？　あぁ、コイツか。コイツは円卓の騎士の一人ランスロット。流れで捕虜にしたんだけど……なんか、不味かったりする？」
『いや、不味くはないんだけどさぁ……本当にさぁ、修司君はさぁ』
「あっはっは！　本当に君は私達の予想の上を行くねぇ！」
　縄でがんじ絡めにされている円卓最強の騎士に、ロマニ＝アーキマンはガックリし、ダ・ヴィンチは声をあげて笑った。

◇

「成る程、アトラス院か。まさか此処でメガテンの制作会社に行き着くとは。流石はアトラス」
「修司さん、それアトラス院じゃない。ＡＴＬＵＳや」
「ど、どうしましょうドクター、先輩と修司さんだけ違うことを言っている気がします！」

『うん、取り敢えずゲームの話は横に置いて……ハサンの廟で知り得た情報はこんな所かな』
「獅子王とこの世界の真実、ねぇ。今更そんな事を知って何になるんだ？　いや、ＡＴＬＵＳ院って所に行くのは賛成なんだけどね」
「アトラス院ね」
　修司と立香達が合流して一時間と少し、近くの空き家にて互いに別れて行動していた間に起きた出来事を、可能な限り細かく話し終えると、初代山の翁から教えて貰ったアトラス院なる場所へ行く事を一先ずの目的地として決める事にした。
「あ、あと修司さんの言う通り、山の翁さん。キングハサンさんは、厳しい雰囲気のある人だったけど、修司さんのアドバイス通りに接したら、結構話の分かる人だって分かったよ」
「だろ？　山のじっちゃん、髑髏の仮面こそ被ってておっかない印象が先行しがちだけど、キチンとした態度で望めば、結構話が通じるんだよ。ていうか、キングハサン呼びなのね」
　サラリと初代山の翁をキングハサンという渾名で呼ぶ立香に、修司は少し不安に思ったが、自分もじっちゃん呼びとかしているのでどっこいどっこいと思い、追及はしなかった。
「我等としては、修司殿の話の方が喜ばしい。粛正騎士達を倒しただけでなく、円卓の騎士すらも対処してしまった手腕、見事と言う他ありませぬ」
「本当は、トリスタンの奴だけは呪腕さん達に任せたかったんだけど……アイツ、放っておくと更に何かをやらかしそうな雰囲気があったからな。あそこでトドメを刺すしかなかった」
「いえ、そのお気持ちだけ受け取って起きましょう。確かにトリスタンは我々にとって不倶戴天の仇敵ではありましたが、同時に恐ろしい天敵でもありました。対策はあるにはありましたが、何れも確実とは言えぬモノ、キャメロット攻略の前に厄介な騎士が一人消えた事、その事実だけで充分です」
　本来ならば、多くの山の民を殺され、同胞も殺されたハサン達こそが、一番トリスタンに対して思う所はあっただろうに、私情よりも集

落が無事であった事、そしてトリスタンという脅威が消えたことを喜ぶ呪腕に、修司は目の前の暗殺者の懐の深さを知った気がした。
「とはいえ、既にこの地は獅子王に知られ、いつ追撃の軍や先の光が差し向けられるか分からない今、この集落は一時捨て去るを得ませんな」
「やはり、そうなるか。なら、その間は拙者が護衛を受け持とう。三蔵、異論はないな？」
「勿論よ。寧ろ此処で山の民を放って私達に着いてくる何て言ったら説法してたわよ。藤太は此処で皆を守って上げて」
「承知した。そういう訳だ呪腕殿、荷物が一つ増えるが、宜しく頼む」
「此方こそ。……では、今の話を百貌と静謐にも伝えねばならないので、私はこれで。皆様、見送りは出来ませんがどうかご無事で……」
「うん。呪腕さん達も、気を付けて」
　ソレだけを言って、呪腕のハサンと藤太は空き家を出て、既に移動の準備を終えた山の民達と共に集落を後にする。立ち去る際、ルシュドから笑顔で手を振られ、それに応えながら見送り、さて、と息を吐いて此処まで沈黙を保っていた騎士達に向き直る。
「問題は、このランスロットだな。どうする？　連れていくのは仕方ないとはいえ、やっぱり錠の一つくらい着けた方がいいんじゃないの？」
「う～ん。私も修司君の言うことに賛成ではあるんだけど、相手は円卓最強の騎士の一角だよ？　多分私が特性の手錠を着けても、そんなに長く抑える事は出来ないかも」
　自分達の背後に座り込み、一言たりとも言葉にせずにジッとしているのは、湖の騎士ランスロット。修司に敗れ、宝剣であるアロンダイトも砕かれた彼は、捕虜として修司の側で沈黙を保ったままである。
　一応捕虜の扱いは国際法に則り、最低限の治療は施し、行動も監視付きではあるが許している。が、山の民達やハサン達がいる前ではあまり公にはしなかった。
　傷もある程度は癒え、話せる様になったが、未だにランスロットは

キャメロットの内情について話すことはなく、無言を貫いたままである。
「ランスロット卿、やはり我々と手を取り合える事は出来ませんか？」
「――――くどいベディヴィエール卿、卿とは既に袂を別ち、敵対者として相対した。我が忠誠は騎士王に捧げたのであって獅子王に誓った訳ではないが……それでも私は剣を預けると誓ったのだ。今更、翻す事は出来ない」
「剣は既に俺が砕いたけどな」
「修司さん、シッ。今大事な話をしてるから」
「そんな、貴方は王が過ちを犯していると気付いているのに、それを由とするのですか⁉」
「王は聖断されたのだ。喩え非道な行いだろうと、彼の王がそう決めたのであれば、我らはそれに従うのみ！」
「巻き込まれる人々にとってはたまったものじゃないけどな」
「修司君、抑えて抑えて」
あくまで全ては王の為と、頑なになっているランスロットに修司達はどうしたものかと頭を悩ませていると。
「いえ、修司さんの言う通りです」
聞き慣れた声の筈なのに、何故か酷く苛立ちと怒りを募らせているマシュが、ランスロットの前に立っていた。
「湖の騎士ランスロット。貴方にはつくづく失望しました。自分の行いを棚に上げて言い訳ばかり、それでも貴方は、騎士王が最も敬愛された騎士なのですか？」
「き、君は⁉」
これ迄、淑女として見ていた筈の少女から言われる突然の罵倒。ランスロットは当然の事ながら、ダ・ヴィンチや修司、立香も普段とは違う強気のマシュ＝キリエライトに目を丸くさせていた。
「其処まで貴方が強情だと言うのなら、宜しい。ならば戦争です。私も、今はこの盾を横に置きましょう。あ、修司さん、これお願いします」
「あ、はい」

「さぁ、構えなさいランスロット。貴方のそのネジ曲がった性根、今こそ修正してあげます」
「待て、待て待て待って待ちなさい！　まさか……君は!?」
振り抜かれたマシュの拳、修司を真似た正拳の一撃はランスロットの顔面を捉え、湖の騎士はぶっ飛んだ。

その１０３　第六特異点

「――――そうか。ランスロット卿もトリスタン卿も、戻ってはいないか」
「ハッ、お恥ずかしい限りではありますが。戻ってこれない事を推察するに辺り、恐らくは山の翁の何れかに敗北したかと思われます」
「卿は、円卓の騎士である彼等が、たかが暗殺者風情に遅れを取ると、そう言うのか？」
「……いえ、決してそのようなことは」
　山の翁と、彼等を支持する民草の集まる集落を発見したという報せから一夜明け、ランスロットとトリスタンという獅子王の戦力が未だ戻ってきていない報告を受けたアグラヴェインは、己の王である獅子王に進言した。
　如何に暗殺に長けている山の翁であっても、一騎当千の戦力に当たる円卓の騎士が敗北するとは考え難い。太陽王と結託したという情報も届いていない今、考えられる理由はそう多くはない。
「――――山吹色の男、恐らくは星見（カルデア）の天文台より遣わされた彼の戦士の仕業だろう。私がトリスタン卿に与えた〝反転〟のギフトが消失した事が、何よりの証明だろう」
「っ、やはり……では、ランスロット卿も？」
　トリスタンが葬られた。その事実に僅かな動揺を垣間見せたアグラヴェインは、ランスロットも消滅したのかと微かに焦りを見せる。湖の騎士はアグラヴェインにとって天敵とも言える相性の悪さがあり、生前の因縁も含めて厄介な間柄ではあるが、それを差し引いても湖の騎士の戦力を無下に出来るほど、鉄の騎士は愚かではない。
　せめて、獅子王が事を成す時まで存命していて欲しいが、死んでいるのなら仕方がない。そう自分に言い聞かせてアグラヴェインは獅子王に訊ねるが、当の獅子王は違うと首を横に振った。
「いや、我が騎士であるランスロットに与えたギフト、〝凄烈〟は消え

てはいない。恐らくは聖都に向かっている最中なのだろう」
「――――」
湖の騎士に対し、あの頃から何も変わらない態度の獅子王に、アグラヴェインは自身でも自覚がないほどに拳を握り締めていた。湖の騎士は騎士王であるアーサー王、その伝説に終わりをもたらした一因となった者、彼の裏切りに多くの同胞が倒れ、自身もまたその凶刃に命を絶たれた。
そんな彼に未だ全幅の信頼を寄せる獅子王に、思う所があったとしても、所詮は個人の感情に過ぎない。沸き上がる感情を必死に噛み殺しながら、アグラヴェインは獅子王の言葉を待った。
「とはいえ、聖槍も既に最終段階へと至った。最果ての塔は、ついに我らを迎え入れる。我等にとっての最大の障害となるのは時間、人理焼却を終えた彼の王が次の段階に入る前までに、最果ての塔を開かねばならなかった」
「そして、それはじきに成ろうとしている。もはや山の民たちの反抗など些事に過ぎない」
そう、既に獅子王の目的は間もなく達成されつつあった。人類という種を保護すべく行ってきた聖抜、それが間もなく完遂されるという理由から、獅子王は聖槍を山の民への村へと解き放った。
既に山の民達は、彼等を守護する翁達と共に滅んでいる。そう信じて疑わない獅子王は、残された僅かな問題に向けて注視するように目を細める。
「だが、全ての問題が片付いた訳ではない。恐らく生き延びているであろうカルデアの者共と、奴等の最大戦力である山吹色の男。太陽王と同じく、此方もまた警戒すべき相手だろう」
「既に、追撃の部隊は再編成を完了しております」
「よい。言った筈だぞアグラヴェイン卿、我等の最大の障害は時間であると。最果ての塔が開かれるまで、ただ時間を稼ぐだけでよい」
「ガウェイン卿も、もう間もなく復帰する頃合いだろう。彼に守護を任せれば、問題はないだろう」
「御意に。では、モードレッドと合わせて防衛の陣を築きます故」

「あぁ、任せる」
そう、全ては獅子王の目論見通り。彼女の言うことは全て正しく、神の視点へ至った彼女は常人とはかけ離れた世界をその目に写しているのだろう。
全ては人類存続の為、その為ならばどんな悪辣に成り下がろうと彼女が進む道行きは変わらない。そんな彼女が、唯一誤算があるとするならば……。
山吹色の男――――白河修司の、理不尽に対する怒りを侮った事である。

◇

――――アトラス院。魔術協会総本山である時計塔と並ぶ、三大魔術機関の一つ。その歴史は時計塔よりも深く、時計塔よりも神秘の秘匿に尽力してきたとされる魔術の徒。人理焼却に伴い焼失されたと思われるその研究機関が残されているという初代山の翁（キングハサン）のからの助言もあり、獅子王の奮う聖槍と第六特異点の真実を暴くために、一行は錬金術師達の総本山であるアトラス院へと進んだ。
吹き荒れる砂漠の嵐を抜け、砂の大地に駆動音を鳴らすスピンクス号が轍を残して目的地へ向けて駆けていく。
「「「……」」」
心地よい風が立香達の頬を撫でる一方、彼女達の心境は正反対に気まずかった。顔中を腫らせ、正座して項垂れているのは湖の騎士ランスロット。そんな彼を絶対零度の眼差しで見下ろすのは、我等が後輩マシュ＝キリエライトである。

スピンクス号を走らせて早半刻、その間誰一人言葉を発する事なく、口元をHの形にキュッと結んでしまい、沈黙を生み出してしまっている。
いや、だって……気まずいやん。先の集落で一方的にランスロットを殴り続けたマシュを見て、何て言葉を掛けたらいいのか分からず、ベディヴィエールすらこの件に触れるのを躊躇しているように見えた。
先の喧嘩で見たマシュに宿っている英霊の真名も何となく察してしまった為、余計に触れるのが難しくなってしまっている。
(て言うか、誰だよマシュちゃんにデンプシーロールを教えた奴、リバーブローからの完全再現だったんですけど、キレイなガゼルパンチとか出てきちゃったんですけど)
脳裏に浮かぶのは、戸惑うランスロットに見舞ったマシュの渾身の拳の応酬。人体の急所を的確に打ち抜き、綺麗に描く無限の軌道は某ボクシング選手の必殺技を想起させた。
マシュ之内の拳の連打によって見事打ち倒されたランスロットは、改めて修司達の捕虜となり、現在はマシュの監視の下となっている。
「所でマシュ。どうしてデンプシーロールなんてボクシングの技を知ってるの？　もしかして……マンガで読んだりした？」
「え？　いえ、先程の動きは全て聖女マルタ（水着）から教わった肉弾戦でして、別にマンガから得た知識ではないですよ？」
「へー、そうなんだ」
「あっ、でもマルタさんから強く勧められたので、今回の特異点修復後には嗜むつもりです。何でも虐められっ子の少年が、ボクシングの日本チャンピオンになるのだとか、その道程が少々気になったので」
「ふーん、いいじゃん。私も今度久し振りに読んでみようかな」
(いや何やってんのあの聖女ォォォッ!?)
まさかの凄女からの横やりである。純真無垢なマシュになんという恐ろしい技を授けているのだろうか、というか、実際にやり遂げるマシュもマシュである。
マシュに対する今後の教育姿勢をロマニと話し合っていく事を決

めた。そして、空気が未だに冷たい中砂漠を走り抜ける事数分。
「そろそろ目的の場所に着く筈なんだけど……」
目的の場所まで後僅か、だというのに一向にそれらしき建造物は見当たらない。座標地点は間違いなくあってる筈だと唸るダ・ヴィンチだが、ここで首を傾げても仕方ないと思い、皆に告げる。
「もしかしたら、近付かなければ分からない特殊な結界の類いなのかもしれないね。皆、申し訳ないけど此処からは徒歩だ」
「了解です。さて、それでは参りましょうかランスロット卿。貴方を一人此処で置いていたら何をされるか分かったものではないので、引き続き私が監視をさせていただきます」
「――既に、私は敗北した身。今更抵抗して恥の上乗りをしようとは思わん」
「はい？」
「――トゥワ」
氷点下越えの眼差しに萎縮し、縮こまる湖の騎士に修司達はこの時だけランスロットに同情した。
「さて、どうだい修司君。君の気の探知は何か情報を掴んではいないかい？」
「そんな期待されても困るんだけどな。俺の気による探知はあくまで人や生命に対して向けられるモノであって、場所や空間を指すものじゃないんだ。ただ……」
「ただ、なんだい？」
「気のせいかな、俺達の足下から誰かの気を感じる」
瞬間修司達の足下は崩れ、一行は暗い闇の底へと落ちていく。誰もが突然自分の足元が崩れた事に驚くが、その中で唯一次の行動を移せる者がいた。
「修司君！　皆を抱えあげて！」
「！」
ダ・ヴィンチの言葉に我に返った修司が、白い炎を纏って宙を舞う。立香とマシュ、フォウを最優先に掴み取り、次点でダ・ヴィンチや三蔵、ベディヴィエールを抱え、最後にはランスロットを両足で挟むよ

うに掴む。
　そして僅かにフラつきながら、修司達は穴の底へと辿り着く。何とも手の込んだ罠だ。見上げれば空の光も届かない程深く落とされた事に辟易しながら、修司は左手に気の明かりを灯し点呼する。
「さて、唐突の罠に皆驚いたと思うけど、その前に点呼を取らせてもらうよ。立香ちゃんマシュちゃん、怪我はないかい？」
「はー、ビックリした。うん。私は平気だよ」
「わ、私も大丈夫です。スミマセン修司さん、お手数お掛けしまして」
「気にすんなって、適材適所だ。続いてダ・ヴィンチ、ベディヴィエール、三蔵、無事か？」
「ぎゃてぇ。まさかこんな大仕掛けがあるとはねぇ。設計者には説法しなきゃ！　それはそれとして修司、私の弟子にならない？」
「結構です」
「私達も無事だよー。いやー、本当に修司君は便利だねぇ。一家に一人は欲しいよ」
「わ、私も問題ありません。……人間って、空を飛べたり出来るのですね」
「ランスロットは……まぁ、大丈夫だろ。一応円卓の騎士だし」
「トゥワ」
　全員の無事を確認し、一先ず安心する修司だが、如何せん自分達のいる場所は穴の底。出る分には問題はないが、意味もなくこんな場所に巨大な落とし穴があるとは不自然だ。状況と山の翁の証言を合わせ、修司が思考を回転させ始めた時――。
「そう、君の考えの通りさ。Ｍｒ．白河、この場所こそが君達の探し求めていた場所に他ならない」
　修司の思考を遮る形で、その男は現れた。端正の顔立ち、知性と理性に道溢れさせて喫煙パイプを片手にたたずむ男性。
「ようこそ、カルデアの諸君。神秘遥かなりしアトラス院へ！　私はシャーロック＝ホームズ。世界最高の探偵にして唯一の顧問探偵。探偵という概念の結晶、〝明かす者〟の代表――君達を真実に導く、まさに最後の鍵という訳だ！」

その１０４　第六特異点

「ほ、ホームズさん!?　本当に貴方が彼の名探偵のシャーロック＝ホームズさん!?」
「すご、嘗てない位にマシュが興奮している」
「名探偵かぁ。立香ちゃんは名探偵と聞いて最初に誰を思い浮かぶ？　俺コナン」
「私もそうですよ。て言うか、本物？」
「どうやら本物のようだよ、現に彼は修司君の事を言い当てている。名前だけでなく、その思考まで」
　深い穴の底へと落とされた一行の前に現れたのは、自らをホームズと名乗る青年だった。佇まいと振る舞いから英国紳士らしいのは確かで、序でにサーヴァントであるという事も間違いない。
　そんな名探偵がどうして自分達の前に現れるのか、一行が困惑と疑問に戸惑うなか、ホームズを名乗る自称探偵は続ける。
「初歩的な事だよ、Ｍｒ．――――いや、今はＭｓ．と読んだ方が宜しいかな？　万能の天才レオナルド＝ダ・ヴィンチ氏」
「どちらでも好きに呼びたまえよ。どちらも私である事には変わりないんだ。それに、その分だと私達の事もある程度把握しているんだろ？」
「勿論だとも。Ｍｒ．修司をはじめ、藤丸立香、マシュ＝キリエライト、レオナルド＝ダ・ヴィンチ。そしてそちらはＭｓ．三蔵とＭｒ．ベディヴィエール、そして私が唯一驚いたのが、円卓の騎士であるランスロット卿が此処にいること。恐らくはＭｒ．修司辺りが無力化したのではないかね？」
「す、凄いです！　本当に全部当てちゃってます！　やっぱり本物ですよ先輩！」
「へー、本当にホームズなんだ」
「て言うか、止めを刺したのはマシュちゃんだった気がするんだけど

ね」
「修司さん、今その話は無しで」
　本物のホームズと出会ったという事で、これ迄見たことのないテンションではしゃぐマシュに自称ホームズは気分を良くしたのか、ニコニコと微笑みを浮かべている。
　だが、何時までもここで立ち話をしている場合ではない。先のホームズが語ったアトラス院の是非について問わなければならないのだから。修司は興奮するマシュの頭を撫で、一行を庇うように前に出る。
「そんじゃ、自己紹介はいらないな。ホームズさん、アンタがさっき言った事が本当なら、ここは既にアトラス院の内部と判断していいんだな？　だったら時間が惜しい、とっとと本題に移ろうじゃないか」
「ふむ、ファンとの交流を楽しみたい所ではあるが、君の言うことも尤もだ。此処でただ雑談をして時間を潰すのは私としても不本意、宜しい。歩きながらではあるが、情報を共有しようじゃないか」
　そう言って踵を返して奥へと進むホームズを追って、修司達も先へ進む。道中、ロンドンで既に遠回しに接触していた事を明かしたり、アトラス院の成り立ちを軽く説明したり、今は立香やカルデアに協力出来ない事などを雑談を混じりながら歩みを進める。
　そんなアトラス院の歴史を説明される中で、修司が興味を引いたのはとある兵器の話だった。曰く、世界を滅ぼす兵器。〝自らを最強とするのではなく、最強であるものを創造する〟そんな格言を持つアトラス院が有する兵器というのに同じ技術者である修司が興味を抱かない筈がなかった。
「世界を滅ぼす兵器ねぇ。どんなモノかは気にはなるが、歴代の院長様ってのはどうしてそんな物騒なモノを造りたがるんだか」
「さてね、その辺りは諸説あるが何れにしても確かなモノではないな。ただ、歴代のアトラス院の院長はほぼ間違いなく発狂し、おぞましい兵器を造り上げるとされているらしい」
「へー、おっかねぇ組織もあったもんだなぁ」
「……こと兵器関連に関して、君だけは言っちゃいけないと思うの

は、私だけだろうか？」
「ん？　どしたんダ・ヴィンチちゃん？」
　その後も雑談は続き、半ば暴走状態となっているアトラス院の防衛システムを退けたりと、そこそこ暴れながら歩き進めること数分。修司達は遂にそこへたどり着いた。
「え？　ここって……」
「なんか、カルデアの管制室に似ている？」
　一行が出てきたのは開けた空間、そこに既視感を覚えた立香とマシュは其処にあった違和感に気付く。そこはカルデアの管制室と意匠が似ていて、カルデアの設立の経緯を知るダ・ヴィンチは成る程なと理解を示していた。
「成る程、あの三つの柱――――いや、オベリスクか。あれがアトラス院最大の記録媒体、疑似霊子演算器トライヘルメスか」
「ご名答、流石は万能の天才レオナルド＝ダ・ヴィンチ。いや、この場合は当然と言うべきかな？」
「カルデアに送られた霊子演算器トリメギストスのオリジナル。こんな時じゃなかったら余すことなく調べ上げたい所だけど、ここは大人としてグッと堪える私なのでした」
「あれがカルデアの……そっか、だからここの空間は雰囲気が似てるんだ」
「アレは賢者の石とも呼ばれるフォトニック結晶。今の地球上の科学では生成出来ないオーパーツだ」
「フォトニック結晶？　……そう言えば、ウチの会社がそんな名前に似た鉱石を衛星基地で精製したって話を聞いたな」
「既にアクセス権は回収して――――ちょっと待って、今なんて？」
「え？　あ、いや。此方の話だよ。単にそう言う風の結晶が精製したっていう報告書があったのを思い出しただけ、別にそんな食い付く話題じゃないさ」
「いやいやいや、君は今人類の歴史にとって無視できない発言をしたいるからね？　え？　造れたの？　フォトニック結晶を？　永遠に失なわれた過去の遺物を？」

「だーかーら、似た名前だって言ってんじゃん。ホームズさんが想像している代物とは全く違うモノだと思うし、そもそもソレはある物質を造り上げるために出来た副産物みたいなモノだ。大した価値は多分ねぇよ」
「えぇ……」
「因みに修司さん、本当は何を造ろうとしていたの？」
「ん？　サイコフレームって言ってね。結構汎用性の高い物質なんだけど、狙って造るのが難しい代物なんだよ。アレを応用したＭＳを製造して宇宙事業を拡大させるのが今の俺の仕事なんだけど、これが中々上手くいかなくてさ。今の所全身サイコフレームに固めたＭＳは５機だけなんだぁ」
「……どうしよう、なんかトンでもない話を聞かされた気がする」
　サラリと口にする修司の爆弾台詞に早くも辟易となるホームズ達だが、今はその話に夢中になっている場合ではない。自分の役目を全うしようと、ホームズが渋々装置に触れると、トライヘルメスを起動させた。
「んで、その記録媒体でホームズは何を調べる気だ？」
「それは勿論、２００４年の聖杯戦争についてだよＭｒ．修司。私はそこである疑問に立ち合わなければならない」
「っ！」
　聖杯戦争。その単語を聞いた瞬間、修司の表情は一変する。２００４年の聖杯戦争、その舞台となっているのは日本のとある地方都市。今では特異点Ｘなんて呼ばれている今尚燃え続けている地獄の世界。
　眉間に皺を寄せて不機嫌さを顕にする一方で、トライヘルメスから一通の回答が送られる。起動音もない効率に満ちた仕様だが、映し出されたその事実に修司は更に目を鋭くさせた。
「ふむ、やはり私の予想通りだった。２００４年、日本で起きた聖杯戦争。勝者の名はマリスビリー＝アニムスフィア。彼は六人の魔術師を殺し、万能の願望機である聖杯を手に入れた。と、ヘルメスは記録している」
「マリスビリーって、確かそれは所長の……」

「そう、マリスビリーは聖杯戦争の勝利者でオルガマリー＝アニムスフィアの前任者、つまりは彼女の父親って訳さ」
　立香達が驚く一方で、ダ・ヴィンチは不服そうにそっぽを向いている。予め知っていた彼女の態度に立香は一瞬問い詰めたくなったが、そもそもこのカルデアに長く滞在しているのは彼女の方だ。自分なんかより余程カルデアに精通していると察し、出掛かった言葉を寸でで飲み干した。
「聖杯を……手に入れていた？　人理焼却が起こる前……レイシフトを行う前の状況で、ですか？」
「イエス。そしてこの記録には続きがある。聖杯戦争の当時、マリスビリーはとある助手を連れていた。その人物は聖杯戦争の翌年、特例としてカルデアのスタッフとして招かれている。２２歳で医療機関のトップとは、まさに異例の抜擢だ。正常な人事である、と公言するのが憚れる位には」
「おい、まさかそれって……」
　カルデアの医療機関のトップ。その役職に現在進行形で就いているのはマシュも立香も、そして修司も一人しか心当たりがない。そんな三人の反応を見て、肯定するように深く頷いたホームズは、改めてその名を口にしようとして。
「ロマニ＝アーキマン、ですね？　ドクターは……カルデアに来る前から、前所長と知り合いだったと？」
　マシュが、呑み込むようにその名前を口にした。
「イエス。そして、更におかしな事に。このロマニ＝アーキマンという人物の経歴は一切不明だ。どう調べても聖杯戦争以前の記録を見つけ出せない。ヘルメスを更に使えば判明するだろうが……年ごとに更新される何十億という個人データからたった一人の人生をサルベージするには時間がない」
「え？　検索機能とか付いてないの？　こんな大層な演算器なのに？」
「それでも尚、なのだよ。如何にトライヘルメスであっても膨大な情報の海からたった一粒の砂金を探し当てるのは骨が折れるというこ

とさ。そして――――これが私がＤｒ．ロマニを信用していない理由であり根拠だ。彼は間違いなく人間であり、魔術師ではないが……何かを隠している。それもとびきり、真相に近い何かをね」

「――――」

あのＤｒ．ロマニが、前所長と繋がっていた。これ迄共に人類を救う為の戦いをしてきた戦友とも呼べた人物が、である。当然、立香とマシュは小さくない衝撃を受けたし、修司は修司で何処か納得した様子で頷いていた。道理であの若さでカルデアという組織の医療機関のトップという役職に就けたのだと。

しかし分からない。確かに前所長と繋がっていた事に驚きはするが、それが信用できない理由になるだろうか。怪しいというのなら、修司から見てロマニよりもレフ＝ライノールの方が余程怪しく感じられる。

「……なぁ、ホムホムさんよ。アンタがロマニを信用していないのは、ひょっとして」

「修司さん？」

何故ホームズが其処までロマニを毛嫌い……いや、苦手としているのか、その事を何となく察した修司は苦笑う。そんな修司に対して立香達が戸惑っていると。

「その呼び名は後で抗議させて頂くとして……まぁ、その、概ねそんな所だ。彼は〝どうしているのか分からないが、事件とは無関係の、別にいてもいなくてもいい傍迷惑な謎の人物〟……という可能性が大きくてね、頭を悩ませてくるばかりなのだよ」

「なにそれ、おっかしー！」

「はは、でもドクターらしいや」

「はい。私も同じ感想です」

修司の疑問に肩を竦めながら肯定してくるホームズに、立香とマシュの空気は途端に明るくなった。ロマニは自分達を裏切っている訳ではなかったと、そう判断できる材料を手に入れた二人は安堵しながら胸を撫で下ろした。

ただ……。
「――――」
ダ・ヴィンチ。万能の天才である彼女だけは憂鬱な面持ちで俯き、その感情を読み取れる者はこの場にはいなかった。
「とは言え、ロマニ＝アーキマンは聖杯戦争の結末を知った上で君達に対して黙秘しているのは事実。彼の正体とその秘密が明らかにされるまで、どうか此処での出来事は彼等には口外しないで欲しい。幸いにも、ここは外界にも隔絶された場所だからね」
「あ、だからさっきからドクターとの連絡が出来ないんだ」
アトラス院の穴に落ちてから、一向にロマニはからの通信が無かった事を不思議に思っていたが、どうやらここは魔術的、科学的に問わず外界からの干渉を防ぐ結界が備わっているらしい。外からの来訪者を逃さないという迷宮染みた造りといい、アトラス院という場所はかなり特殊な場所の様だ。
「まぁ、ドクターの事はこの際どうだっていいさ。前所長とどんな繋がりがあって、どう言った関係だったのかは知らないが、少なくとも俺は彼を信用しているし、信頼している」
「万が一、その信頼が裏切られたら？」
「そん時は殴り倒すだけさ。そう、これはソレだけの話なんだよホームズ」
「そうか。君がそう言うのなら、私から云えることは何もないな」
ふと、ダ・ヴィンチの表情がホンの少しだけ和らいだ気がする。修司の言葉を聞いて何を思ったのか、溜め息を吐きながら肩を竦める天才に、敢えて触れずにいると、ホームズは改めてと咳払いをし、次の話題に意識を向けた。
「では、いよいよ彼女。マシュ＝キリエライト嬢に宿る英霊の真名について話しておこう。これ迄謎に包まれたキリエライト嬢を守ってきたサーヴァント、かの英雄の真名は――――」
「ギャラハッドでしょ？」
「――――え？」
「いや、ぶっちゃけ皆何となく察しているし。ついさっきまで親子喧

嘩見ちゃってたし、あの時のマシュちゃん中の英霊の影響かランスロットをお父さん呼びしてたし、つーかそもそも、ランスロットがマシュちゃんの横で大人しくしている時点で、大体察せるでしょ？」
「……」
　これ迄種明かしについてワクワクしていたホームズの表情が、石膏の様に固まってしまう。白眼を剥いて愕然としているホームズの横で、申し訳なく思いながら、マシュは自らの変化を認識した。
「あっ、マシュなんか変わったね？」
「はい。どうやら修司さんの一言が決め手になってくれた見たいです。力も底上げされた感触がありますし、この分だとギャラハッドさんの宝具が、私でも扱えるようになりそうです」
　これまたアッサリと霊基の再臨を果たしたマシュが、淡々とギャラハッドの宝具が扱えるようになったと口にする。これ迄の旅の中で結構な衝撃的な事実の筈なのに、先のランスロットと戦闘（喧嘩）で見せたマシュの反応を見て、何となく察していた一行は特に驚いた反応を見せることはなく、反対にホームズは無表情でありながら明らかに不機嫌になっていた。
　そうして、マシュの新たな力に目覚めた事を喜びながら、一行はいよいよ地上に戻ろうとホームズの案内の下、アトラス院を後にする。
　その道中、修司と肩を並べて横に立つホームズは皆に聞こえない声量であることを訊ねてきた。
「さて、キリエライト嬢やＤｒ．ロマニへの疑問も明らかにした所で残るは魔術王に関する事だが、Ｍｒ．修司、君は魔術王に対してどれだけの関心があるかね？」
「出会い頭に顔面に拳を捩じ込む程度」
「うん、怖いね。ではなく、不思議に思った事は無かったかね？　何故魔術王は２０１７年に人類が滅びる様に人理焼却を行ったのか、疑問に思わないかね？」
　そう言えば、と修司は思った。確かに何故魔術王は２０１７年という中途半端な年代に人理焼却を行ったのだろうか？　これ迄魔術王とは出会い頭に速攻でブン殴る事以外考えたことのない修司は、ホー

ムズの指摘によって初めて思考し、同時に答えを得た。
何故魔術王が２０１７年を選んだのか。魔術師は理屈のない行動を起こさない生き物だと聞く、魔術師達の祖である魔術王もその例に漏れないのだとしたら、その行動には何かしらの理由がある筈だ。人類に対する憎悪等の悪感情ではなく、そうせざるを得ない何かが……。
「まさか、魔術王は２０１７年以降に何かが起きると読んでいる？」
「そう、私もその答えに行き着き、アトラス院で調べものをしていのだが、やはりそう簡単にはいかなくてね。こうも情報がないと推理も儘ならないのだよ」
「成る程。つまりアンタは俺に魔術王に対して……だけでなく、その後に起きるであろう事態に備えろって言いたいんだな？」
「その通り。いやはや、話の分かる人間は推理が進むから助かる。生憎まだ私はＭｓ．立香とは契約を結べない身なのでね、君の様な人材は非常に稀有なのだよ」
人理焼却の犯人である魔術王。彼を打倒し、取り戻した未来の先で待つナニカ。それに対しても対策を頼んでくるホームズに、修司は難しい顔をしながらも了承した。
一体未来の自分達にどんな厄災が待ち受けているのか、疑問に思っても仕方ないと割り切った修司は、それとは別にホームズへ一つの疑問を抱く。
「……此方から、一つだけ質問いいか？」
「？　何かね？」
「アンタ、今は別の依頼があって立香ちゃんとの契約には応じれないと言ったな。なら、今アンタが抱えている案件は、誰の事を差しているんだ？」
「……」
「言い辛いなら、俺から当ててやろうか？　アンタが今追っているのはジェ――――」
「Ｍｒ．修司」
答えを言いきる前に、ホームズからストップを掛けられた。その様

子から正解だと確信した修司は、首を横に振るホームズへ向き直る。
「ホームズさん。約束してくれ、アンタが今追っている案件を片付けたら、その時は立香ちゃんに……カルデアの皆に協力してやってくれ。勿論、俺にもな」
「あぁ、憶えておこう」
　そうして、修司達は地上へと帰還する。眩しい太陽の下へ戻る立香達を見送りながら、再び地下深くへと姿を消すホームズは、とある事柄について思考を巡らせる。
「白河修司。やはり、興味深いな」
　２００４年の聖杯戦争とその勝者、これまでホームズは様々な情報をトライヘルメスを通して抜き出していたのだが、一つだけ、魔術王の真意とは別のあることがどうしても分からずじまいだった。
「まさか、トライヘルメスの記録媒体から〝正体不明（unknown）〟の烙印を押されるとはね」
　ホームズの手に握られる一枚の紙切れ、其所に刻まれている大量のエラーの文字。それは、この世界に存在している筈の人間を示したもの。
　白河修司。本来なら人理焼却と共に消失している筈の人間だが、今回の件でホームズは一つの仮説に至った。
「間違いない。今この世界に、白河修司という男は――――二人、存在している」
　有り得ざる事象。しかし、それでもホームズは微笑みを絶やさない。謎に立ち向かうその瞬間こそが、彼が生きている証明になっているのだから。

その１０５　第六特異点

アトラス院を後にし、ホームズの案内の下、薄暗い洞窟の中を進み陽の光が照らされる大地に戻ってこれた一行。今はまだ直接協力は出来ないと語るホームズとの別れを惜しみながらスピンクス号の所まで戻ると、修司はこれからの事について皆に訊ねた。
「さて、一応アトラス院からそこそこの実りある情報は得られたとして、これからどうする？　やっぱり太陽王の所にいって話を付けに行くのか？」
「うーん、そうだね。後はこの特異点に関する情報位なんだけど……修司君、ぶっちゃけ君はこの特異点についてどれだけ理解しているかな？」
「あ、あー、なんか、壁みたいな光が見えた気がしたな。ンで、その向こうには何にも無かった。もしかしたら、それがこの特異点の異常性？」
ダ・ヴィンチに言われ、初日にこの特異点にレイシフトを果たした時の事を思い出す。遥か上空の空に投げ出された時の事、覚えているのはこれ迄の特異点同様に空に浮かぶ光帯が目に付いたが、今回はそれ以上に印象になる異様な光景が広がっていた。
見渡す限りの砂漠と荒野の大地を囲む光の壁、幻想的で何処か破滅的にも見える光の先には……何もなかった。あの時は皆とはぐれた事や特異点に蔓延る強敵達の実力を計るために気を探っていた時だったから其処まで記憶していなかったが、今にして思えば、あれはこれ迄の特異点の中でも異常性が際立っていた気がする。
もし、もしも仮にアレを〝世界の果て〟と呼称するなら、獅子王がやろうとしているのは虐殺以上の蛮行なのかもしれない。
「いや、でもアレが獅子王の仕業である確証はないんだし、あんまり決め付けるのも良くないか」
「……いや、もしかしたらその通りなのかもしれないよ」

「……マジ？」
　初見で見た感想を、自分なりに考え、推理した末に出した答え。我ながら突拍子のない拙い話だが、ダ・ヴィンチからすればそうでもないらしく、確信を以て肯定してくる万能の天才に修司は驚き以上に呆れの感情で聞き返していた。
「では、今回はその事について答え合わせをしていこうじゃないか。ランスロット君、そろそろ話して貰ってもいいんじゃないかな？」
　自分以上に懐疑的で、修司よりも呆れた表情でランスロットに訊ねると、周囲の面々も揃って視線を湖の騎士に向けると。
「――最早、隠しだては無意味か。既に敗残の将である以上、私に選択肢はない、か」
「ランスロット卿……」
「いいでしょう。私も腹を括りました。Ｍｓ．レオナルド、この座標に向かってください」
　腹を括った。長い沈黙の果てに自分のするべき行いを見出だしたであろうランスロットは、円卓にも、獅子王にも隠していたある場所に関する情報を告げた。一瞬だけ罠かと怪訝に思うダ・ヴィンチだが、彼女に向けられる目は真剣で、其処に偽りがないことを察したダ・ヴィンチは、スピンクス号の舵を切って目的地へと向かった。
　その途中。
「――修司君、君は私に何かを聞いたりしないのかい？」
「は？　何が？」
「惚けなくてもいいさ。ホームズからも聞いただろう？　ロマニ＝アーキマンは２００４年の聖杯戦争で、当時の勝利者である前所長マリスビリー＝アニムスフィアと協力関係にあった。その彼が医療機関のトップで、今はカルデアの代理所長ときている。怪しい事この上ないだろ？」
　目的地に向かう途中、運転中のダ・ヴィンチに運転を代わろうかと提案しにいった時、ふと彼女からそんな事を言われた。
　確かにホームズの言うように、ロマニ＝アーキマンという男には怪しさしか感じられない。別にホームズの言葉を鵜呑みにしている訳

ではないが、トライヘルメスという大掛かりな装置を用意している以上、彼の言うことに嘘や偽りはないのだろう。
Ｄｒ．ロマニは前所長と繋がっている。更にいえばそれ以前の経歴はトライヘルメスですら詳しくは知らないとされている。怪しくないと言えば嘘になるが、かといってその事について修司は特に気にしている訳でもなかった。
何故なら――――。
「あぁ、その事？　悪い、俺全然別の事を考えていたわ」
「ええ？」
白河修司が気にしていたのは、それとは全く別の事。マリスビリーやロマニの事は気にはなるが、それ以上に別の事に思考が向けられていたのだ。
「まぁ、今は別にその事はいいんじゃない？　ロマニは俺から見ても頑張っているし、何なら気負い過ぎな所がある。アイツ、また睡眠時間を削って作業してるんだろ？　そんな奴を、頭ごなしに否定するほど俺は落ちぶれていねーよ」
「……修司君」
「それに、仮に俺達に隠し事をして、それが俺達に対する裏切りで、立香ちゃんやマシュちゃんを傷付けるなら、それこそ俺の拳が唸るだけさ。勿論ダ・ヴィンチちゃんにもな」
「わ、私もかい!?」
「当たり前だろ？　その様子だとダ・ヴィンチちゃんもなんか知って隠している部分があるんだろ？　だったら同罪だ。気を付けろよー、俺は基本的に男女問わずやらかすみたいだからさ」
そう言ってニカッと笑う修司にダ・ヴィンチも呆れながら笑みを浮かべた。単純な思考回路、こんな奴が人類史の中でも指折りの技術者というのだから質が悪い。
けれど――――。
「全く、君は物事を単純に考えすぎだ。でも……ありがとう」
「アンタたちは物事を複雑に考えすぎなんだよ。どういたしまして」
事実、修司にとってマリスビリーもロマニもそれほど重要な話では

ない。前所長は既に亡くなっていると聞くし、仮にロマニが自分達を土壇場で裏切ったとしても、それを説得（物理）できる用意は自分にはあった。
　ただ、それ以上に修司が気になっているのは、２００４年の聖杯戦争の時、そこでこの世界の自分は何をしていたのか。
　白河修司にとって、理不尽や不条理というのは到底許容出来ず、それが自分や友人達に対して害を成すというのなら、相手が誰だろうと決してその所業を許したりはしない。
　この世界の自分もそうなら、きっと魔術師達に好き勝手させたりはしない。少なくとも、あの様な地元の街を火の海にはしない筈だ。
（一体、この世界の俺は何をしていたんだ？）
　脳裏に浮かぶのは、特異点Ｘで見た変わり果てた冬木の街。炎に呑まれ、何もかもが消え去った最悪の光景に……酷く苛つく自分がいて、その苛つきはカルデアからの通信が届くまで続いた。

◇

「こ、ここって――！」
「円卓軍の、野営地!?　で、ですがどうしてここに!?」
「待って、円卓軍の騎士達だけじゃないわ。山の民、砂漠の民、聖地の人達まで一緒にいるわ」
「これだけの規模の拠点、昨日今日で出来たモノじゃないね。最早ここは難民達の村と言えるだろう」

ランスロットの案内の下に訪れた場所、そこでは山の民や砂漠の民問わず、人種や立場という垣根を越えた一つの共同生活集団を築き上げていた。
「ランスロット卿、貴方は――――難民達をここに避難させて、匿っていたのですか!?」
「……聖抜に選ばれてしまった者は聖都に輸送する他なかったがな。選ばれなかった人々をどうするかは私の自由だ。王は処罰しろ、とは命じなかったのでね。それに、王命に背いて放浪する騎士達も少なくはなかった。彼等にも居場所は必要だ」
「なので、騎士達には難民達の警備をしてもらっていた。ようは私の私設軍隊だ」
「もう、スッゴい詭弁ね！　これ、立派な反逆罪よランスロット！」
これ迄、獅子王の聖抜に選ばれなかった人々は、全て皆殺しにされていたと思っていた。立香もマシュも、助けられたのは自分達がたまたま聖抜の儀にいたあの時だけで、それまでは皆円卓の騎士達に殺されたとばかりに思い込んでいた。
しかし、そうじゃなかった。ランスロットという湖の騎士は、自ら詭弁を口にしている事を自覚しながらも、どうにか一人でも多くの人間を救おうと彼なりに足掻いてきたのだ。獅子王からの王命に従えず放浪し、聖抜の義に選ばれず、死ぬ事しか道のなかった難民達を秘密裏に匿い、獅子王の王命に背き、放浪して野垂れ死ぬしかなかった騎士達を難民達の警備という名目で居場所を与え、生き長らえさせていた。
その事を指摘しながらも笑みを浮かべる三蔵に対し、修司もまた納得したように手を叩いた。
「そっか、聖都から離れた場所に幾つかの気が感じられたから、てっきり円卓軍の拠点の一つかと思っていたから不思議に思っていたけど、そういう事だったのか」
「やっぱり気付いてたんだね君は、もう少し早く教えて欲しかったよ」
「悪い悪い。この特異点に来てから色々あったから、すっかり忘れてたよ。でも、これで分かった。ランスロット、アンタは最初から俺達

を此処へ運ぶつもりだったんだろ？」
「え？」
「それは……どういう？」
「まぁ、保険のつもりだったんだろうよ。他の円卓の騎士達と比べ、ランスロットはあまりにもマトモだ。獅子王に対する疑念を抱き、それが悪である事を確信したアンタは、王命の隙間を狙ってこの野営地を築いた。全ては、いつか獅子王に問い質す為に……」
「……買い被りだし、深読みが過ぎる。私は単に無意味に人を死なせる事を由としなかっただけの男に過ぎない。それに、仮に諸君らを捉えた所で、此処へ通すとは限らない。特に君は、我等にとって余りにも凶悪過ぎる」
「ハハ、誉め言葉として受け取っておくよ」
「誉めてはいないのだがね」
「むむー」
「わ、どうしたのマシュ、頬っぺたをそんなに膨らませて？」
「い、いえその……修司さんとランスロット卿が仲良さげにしているのがなんというか……少し、モヤモヤしマシュ」
　それは尊敬する修司（父）が、碌でもないランスロット（潰し）に取られて不貞腐れる子供のような心境みたいなものだと、三蔵やダ・ヴィンチ達は察したが、口にするのは流石に止めておいた。
『ともあれ、ランスロット卿。ここに連れてきてくれたという事は、そう言うつもりだという事で認識しても構わないかな？』
「それは、これからの話し合いで決めるとしましょう。既に天幕は用意させているので、話はそこで……」
　そう言ってランスロットの後に続き、やって来たのは一行が入っても余裕のある大きな天幕だった。周囲に人気はなく、話し合いをするには最適で、適当に寛いでくれと促された一行は、それぞれ楽な姿勢となる中、ベディヴィエールだけは直立のままだった。
　そんな真面目なベディヴィエールに誰もが苦笑いを浮かべる中、最初に口を開いたのはダ・ヴィンチだった。
「さて、早速聖槍と獅子王の事だけど、いきなりで申し訳ないが断言し

よう。この世界の特異点の終焉は獅子王の持つ聖槍と連動している」
「初っぱなから重い話が出てきたな。ンじゃなにか？　獅子王の聖槍が砕かれたら、この特異点は消滅するって事か？　そんな大層な代物なのかよ、聖槍って」
　ダ・ヴィンチから告げられる衝撃的な言葉に、上手く実感の湧かない修司は信じられない様子で聞き返した。
『正確には、獅子王の聖槍は槍であり、〝塔〟でもあるんだ。今君達が立っている世界、その表面（テクスチャ）を縫い付ける為の、留め針みたいなモノなんだ』
「せ、世界の表面？」
「または〝世界の果て〟とも呼べる。修司君、君はこの特異点に光の壁を見たと言ったね？　つまりは、獅子王のいる聖都が世界の果てであり、聖槍が最終段階に入れば、聖都を中心に世界は消えてなくなるという訳さ」
　アトラス院で得られた情報を、簡潔に分かりやすく教えてくれたダ・ヴィンチに礼を言いつつ、修司は獅子王が碌でもない奴だという事を再認識した。世界の果てとか、表面とか、魔術的用語はイマイチ理解出来ないが、獅子王が余計な事をしているというのは充分理解できた。
　要するに、獅子王の計画は世界を終わらせると同義で、自分達はそれを防ぐ必要がある。だったら話は簡単だと、自己完結を果たした修司は立香にも同様に説明するのだった。
「成る程、つまりは獅子王を止めた方が良いって事なんですね！」
『う、うーん。間違っていないのは確かなんだけど……なんか複雑な気分』
「話を戻すよ。つまり、聖槍は人類を確保する為の鳥籠であり、管理する塔でもあるという事。ならば、聖抜とは結局なんなのかという話になるわけだけど……」
『恐らく、人の善性。属性で言うところの秩序・善の人間を聖都キャメロットに集めて、キャメロットごとロンゴミニアドに吸収、どのような隔絶空間にあっても存在し続ける宇宙コロニーの様なものにする。

それなら魔術王による人理焼却にも耐えられる。それが獅子王の目的だったんだ』
「要するに、自分達に都合のいい人間だけを選別するだけという話か。この分だと、聖都に入った人達が人間らしい生活をしているのかも怪しいな。そこん所、どうなっているんだ？」
「それは……済まない。我等に与えられている任務は聖抜に選ばれた人々を確保する事、それ以上の情報は与えられていないのだ」
　極論で言えば、自分の指定した人間だけを選んで救うという獅子王の人理焼却に対する備えは、一見すれば合理的ではあった。如何に聖都や獅子王であっても万人を救うことは不可能であり、それを早期に理解したからこそ聖抜という措置を行ったのだろう。
　限られた人間だけでも救おうとする。それだけならば修司もそこまで否定はしない、それが本当の意味で人類の為にあるのならば。
　だが、彼処まで苛烈な対応をしてくる獅子王が、選ばれた人間に人間らしい生活を与えたりするなど、本当に有り得るのだろうか？　満足に抵抗したり、戦える者のいない村や集落に裁きという名の戦略兵器を叩き込んでくる輩が、人類の未来を本気で考えているとは……到底思えない。
　何か、ズレているのではないか？　ダ・ヴィンチとロマニの話を聞いて、考え込んでいた修司はふとあることを思い出す。
「……なぁロマニ、魔剣や妖刀の類いが持ち主の人格を奪うって話、聞いたことないか？」
『え？　あ、うん。まぁ確かにそんな話はあるかもしれないね』
「ならさ、獅子王の持つ聖槍も、似たような力があると、そんな風に考えられたりしないか？」
『あ、あー。聖槍が人類を守る為と暴走し、騎士王の人格を乗っ取った結果、獅子王が生まれたと、君はそう考える訳かい？』
「あぁ、ベディヴィエールやランスロットも言ってたけど、俺も騎士王――アルトリア＝ペンドラゴンが虐殺を好むとは思えない。カルデアにいる彼女を見ていたら尚更そうだと思うよ。……俺には、どうしても彼女が其処までの蛮行に及ぶとは思えない」

『修司君』
「いや、単なる俺の願望だというのは重々承知しているよ。でも、それでもやっぱり可能性は捨てたくないんだ。あの聖槍が嘗ての騎士王を縛っているのだとしたら……」
『いや、そうじゃなくて……後ろ後ろ』
「うん？」
全ての元凶は、獅子王の持つ聖槍ロンゴミニアド。それが嘗ての騎士王の人格を奪っているのなら、これから彼の王に対して対応は変わってくる。自分の甘さを認識した上で、それでもその可能性に賭けてみたいと語る修司に対し、ロマニの反応は淡白だった。
周囲を見渡せば、マシュも立香も顔を青ざめていてダ・ヴィンチに至っては呆れながら顔を手で覆っている。何で皆そんな〝やっちまった〟みたいな空気になっているのだろう？　不思議に思いながら後ろに振り返ると……。
「――――――」
真っ青になりながら震える騎士達がいた。
「お、おおおおおお王が、きききき騎士王が、そちらにいらっしゃるのですかかかかか？」
「え？　うん。なんならこれ迄の事、現在進行形で見てる筈だぞ？」
「ゲボハァッ!?」
「ピャーッ!?」
カルデアには、現地でのやり取りをリアルタイムで確認し、サーヴァント達が自己の判断で救援に向かう特別な処置が設けられている。何気なしに修司がそう口にした瞬間、ランスロットは血反吐を吐き、ベディヴィエールは奇声を発しながら倒れ付した。
阿鼻叫喚の地獄絵図、それを生み出した当の本人は、自分のやらかした光景に頬を掻いて……。
「あー、その。ごめんなさいね？」
「修司、後で説法ね」
三蔵の杖にポカンと叩かれるのだった。

その１０６　第六特異点

その後、気絶から回復し、気力もどうにか立て直したベディヴィエールとランスロットの二人は、再び立香達と共に行動を共にする事を決めた。特にランスロットはマシュ――――――厳密に言えば彼女に宿っているギャラハッド――――との親子喧嘩を経て、自分のやるべき事を見出だし、正式にカルデア側に付くことを決意された。

円卓の騎士の中でも卓越した剣技を持つランスロット、彼が新たに旅路に加わり、一行は最後の要である太陽王オジマンディアスの下へ大神殿へ向かうこととなった。

その道中はランスロットの拠点でダ・ヴィンチと修司が余った資材を掛け合わせて造られた移動装置、スピンクス号を新たに改修させたバステニャンで以て、砂漠の大地を駆けていく事となった。

途中、獣や珍妙な怪物達が一向に襲い掛かってきたが、周囲の生体反応を気で感知する修司が絶えずに気の弾丸を放つことで迎撃し、その都度追い払った。

そして、立香ちゃんがバステニャンを操縦する事一時間弱、そろそろ日も落ちて来たので完全に暗くなる前に休むことを提案したダ・ヴィンチは、いい感じにスピードに魅了されかけた立香に呼び掛け、バステニャンを停止させた。

周囲に魔獣魔物の気配はなく、安全地帯であることを確認した一行は、速やかに荷を解し、慣れた手付きで夜営の準備を始めた。

そして日は完全に落ち、辺りが暗闇の空間に包まれる中、空に浮かび上がる満天の星空を見上げながら夕食を食べ終えると、修司はふとダ・ヴィンチと立香が離れていくのを見掛けた。

「ん？　あの二人、何処かに行くつもりか？」

「あ、はい。何でもダ・ヴィンチちゃんが先輩に話があるそうですよ」

「え？　マシュちゃんにも内緒で？」

「私は、ここの後片付けがありますから。あ、修司さんも気にしないで好きに自由時間を過ごして下さって構いませんよ？　ベディヴィ

エールさんも手伝ってくれますし、私なら大丈夫ですから」
少し皆から離れていく二人、恐らくはアトラス院でホームズから説明されたロマニ＝アーキマンに関する事なのだろう。ダ・ヴィンチはカルデアに於いてマシュの次に付き合いの長い人物だ。きっと、ダ・ヴィンチなりのロマニへのフォローをしていくつもりなのだろう。
別に、自分も立香ちゃんも気にしていないのになぁ。と修司は手にしたコップに注がれたコーヒーを飲み干しながら思う。修司は仮にロマニが裏切り者で、自分達に害を為そうとするのなら、その時はその時で対応するつもりだし、立香に至ってはロマニが自分達を裏切っているとは全くと言って良いほど信じていない様子だった。恐らくは彼女も修司と似た結論に至っているのだろう。
多少楽観的な思考だとは思うが、一緒に戦ってきた戦友を疑うのは心が疲れるし、表情に出さないとなると尚更大変だ。だったら自分の都合よく信じた方が気が楽だし、その方が仮に裏切られたとしても信じた自分が間抜けだっただけなのだと開き直る事ができる。
尤も、あのロマニが自分達を裏切って魔術王側に着くとも考え辛い、彼は修司から見ても無理している人間だ。人理焼却に対して何とかしようと足掻いている人間に自分達を貶める余裕など、果たしてあるのだろうか？
何れにしても、ダ・ヴィンチの気遣いは杞憂に終わるだろうが……まぁ、無駄にはならないだろう。万能の天才から見たロマニ＝アーキマンという人間を知るのもいい機会だし、二人の間に割って入る真似は控えることにしよう。
そして、それはそれとして。
「なぁロマニ、そっちから騎士王を此処に送ったり出来ない？　何かランスロットもベディヴィエールも悩んでいるみたいだし、話し相手くらいさせてやった方がいいんじゃないかな？」
「っ!?!?!」
『修司君、君って、時々ワザとなんじゃないかってくらいエゲツない事を思い付くよね？』
「え、そう？」

『それに、残念だけど君の要望は叶いそうにないんだ。実は少し前から聖都方面から奇妙な反応を感知してね、それに比例してその特異点が縮小し始めたんだ。今はまだ緩やかで君達の存在証明に影響はないけれど、此方から戦力を送ることは難しい。心底申し訳ないと思うけど、現状は君達に任せる事になる』

「そっか、それなら仕方ないか。あ、でもこうして通信は出来るんだから、話をする程度なら大丈夫なんじゃない？」

『そ、それはそうだけど……』

気落ちするランスロットとベディヴィエール、二人の騎士の気力を持ち直させる為に、修司は自分なりの気遣いを見せ、カルデアにいるであろうアルトリア（青）を呼び掛けようとする。

「おーい、そっちで此方の様子を見ている皆～、誰でもいいからアルトリアさんを呼んでくれる～？　折角円卓の騎士が二人もいるんだ。いい加減、言いたいことや問い詰めたいことがあるんじゃないのー？」

修司の呼び掛けにどよめくサーヴァント達。確かにランスロットは最低限の犠牲で済ませようと、獅子王や他の円卓の騎士の目を盗んで生存者たちを匿ったりしているが、それでも獅子王の手先となって難民たちを手にかけた事はあるし、ベディヴィエールに至っては重大な秘密を誰にも知られないように抱え込んでいる。

そんな二人の所にアーサー王ことアルトリアを、軽い声で呼び掛ける修司だが、彼とて別に二人を苛めるために騎士王を呼んでいる訳ではない。ランスロットもベディヴィエールも程度はあれど何かを抱えているし、ベディヴィエールに至ってはこの特異点に最も重要な何かを隠しているというのは、修司もなんとなく気付いてはいた。

そんな彼等の心を解きほぐすのは修司ではない。彼等の心の拠り所であり、終生の忠誠を誓った騎士王だけが、それを可能としているのだ。悪意や悪戯心ではなく、純度１００％の善意。騎士王が相手ならこの二人の騎士も幾分か素直になるだろうという、修司のよかれと思っての行為に――――他のサーヴァントは控えめにいってドン引きした。普段はアレなダビデすらも「アレはない」と後に英雄王に苦言

を呈する程である。
　対する英雄王は素知らぬ顔で自室に籠り、一人ワインを啜って愉悦に浸っており、後に聖女によって折檻される事になるのは……また、別のお話。
「い、いえ。その必要はありませんよ修司。私のような未熟な者に王の貴重な時間を奪うのは忍びませんから」
「え？　でも、いいのか？　お前随分憔悴しきっているみたいだし、それがメンタルから来ているモノなら、今の内に抱えているものを吐き出した方がいいんじゃない？」
「それには及びません。私の内にある責は私だけのもの、王に向けられる必要はありません」
　そう思っているなら、表情に出すなと言いたくなったが、ベディヴィエールの抱えているものが分からない以上、あまり深く追及する訳にはいかないし、詮索もしない方がいいだろう。本人が最後までそうすると決めた以上、本人の意思を尊重するまでだと、修司もまた納得する事にした。
「そっか、なら俺から言うことは何もないな。悪かったよ、余計なことをして」
「いえ、ただ勘違いしないで欲しいのですが、私は貴方のその気遣いはとても好ましく思っています。円卓には、貴方のようなハッキリと指摘する人間は然程いませんでしたから」
「難儀な集まりだな円卓ってのは。んじゃ、俺もそろそろ寝るよ。見張りの当番は出番が来たら起こしてくれ」
　そう言って修司はバステニャン号の甲板へ向かうと、見張りと明日に備えて早めに就寝に入る。これ迄の旅の中ですっかり夜営にも慣れた立香とマシュ、そんな二人に加えて今はダ・ヴィンチや三蔵法師、更には円卓の騎士が二人もいることもあり、そこら辺の心配はあまりしていなかった。
　そんな修司の背中を見送ると、ランスロットは改めてベディヴィエールに訊ねた。
「ベディヴィエール卿、卿は何故、今になって我らの前に現れた」

「全ては、己の罪と向き合う為に」
「それは、卿のその義手と関係あることか？」
「……」
　ベディヴィエールの右腕の義手、それは円卓の時代に於いて同僚であるランスロットも知らないベディヴィエールの宝具。しかし、ベディヴィエールにその様な逸話はなく、またケルト神話の戦神と関わった記録もない。
　明らかな外付けの宝具、一体何処でその様な力を得たのかは定かではないが、誰がやったかについては、ランスロットにも少しばかり心当たりがあった。
「……花の魔術師。彼の大魔術師も、此度の王には思うところがあったか」
「――ランスロット卿」
「失礼、流石に踏み込みすぎたな。卿ももう休むといい、後の見張りは私が引き受けよう」
「ありがとう、ございます」
　踏み込まず、察した様子で休むよう促してくるランスロットに、ベディヴィエールはただ礼を口にする事しか出来なかった。全ては、自分の迷いの果てに生まれた罪、それに向き合うことが自分への罰であり、贖罪なのだ。
「あぁ、今度こそ。今度こそ私は……この手で」
〝王を、殺すのだ〟

◇

「さて、そういう訳でやって来ました大神殿！」
「いやー、やっぱ改めて見るとデカイなぁ。昔の人はどうやってこんなデカイ建築物を建てたんだろうな」
翌朝、日の出と共に行動を再開した一行は、朝日が昇りきる前に目的地へと辿り着く。朝日に照らし出された大神殿は黄金に輝き、神秘的な光景を造り出していた。
太陽王への謁見はこれで二度目だが、直接面識があるのは立香とマシュ、そしてダ・ヴィンチの三人のみ。修司はあくまで外で待機していただけであり、実質王への謁見は三人が頼りとなっていた。
太陽王が座する大神殿にまで続く巨像、獅子王の座するキャメロットとはまた異なる威容のある景観に修司が唸っていると、奥から神官と思われる褐色の女性が姿を現した。
「来ましたか、カルデアの者達よ。ファラオがお待ちです。謁見を行うのであれば、速やかに行いなさい。……おや？　そちらの方は初めてですね。貴方もカルデアの人間なのですか？」
「如何にも。名は太陽王の御前にて晒すつもりですので、どうか今はご容赦くださるよう、お願い申し上げます」
「ほう、中々礼節を弁えた者の様ですね。余程良い王に仕えているのでしょう」
「はい。今は少々事情があって暇を出された身ではありますが、この身は未だ未熟ではありますが、英雄王の臣下、その末席に加えられている身でございます。後ろに控えている騎士はランスロットとベディヴィエール、共に円卓の騎士ではありますが、彼等は既に我等の配下の身の上、そこに至るまでの経緯を含めて話しておきたいので、どうかお目通りの方をお願いしたく存じます」
「え、英雄王の!?　な、成る程、どうりで……彼の英雄王の臣下であるのなら、太陽王も無下にはしません。良いでしょう、貴方を含めそこの円卓の騎士達の謁見も許しましょう」
「ありがとうございます」

これ迄尊大な態度だった女性の態度は、英雄王の名前を出した途端に一転する。一瞬修司の虚言かと怪訝に思う女性だが、修司の言葉に嘘偽りはない。ならば太陽王に通しても問題ないと判断した女性は、改めて大神殿の奥へと案内した。
「ふぇー、あの頑固なニトクリスさんがあぁもアッサリと」
「い、意外です。てっきりスフィンクス辺りをけしかけてくるかと思っていただけに、この展開は予想外です」
「恐らく、修司君の英雄王に仕えていた経験が活かされたんだろうね。ニトクリスも嘗てはファラオの一人だったが、今は太陽王の臣下として振る舞っている。共に王に仕える者として、無下には扱えないと察してくれたんだろうね」
「て言うか、修司さんってメッチャ畏まるんだね」
「ん？　そりゃそうだろう。太陽王は王様も認めるファラオ、そこに顔を出しに行くんだから、最大限の敬意は必要さ」
相手が王であり、その臣下であるならば失礼のないように振る舞うことは修司にとって大事な事である。今でこそ英雄王の臣下から離れた立場ではあるが、それを理由に礼節の欠いた態度をするわけにはいかない。
自身の失態はそのまま英雄王の汚点になる。そうならない為にも、ニトクリスなる神官や太陽王の前では失礼のないように振る舞う事を徹底しているのだ。
「し、修司、貴方もその……王に仕える身なのですね」
「あぁ、まぁ悪かったよ黙ってて。騙すつもりはなかったんだけどな」
「い、いえ。それは良いのです。ただ、貴方には一つ訊ねておきたくて……」
「なんだよ？　そろそろ太陽王の御前だ。手短に頼むよ」
「もしも、もしも貴方の王が間違いを犯した時、貴方はそれを糺す事が出来ますか？」
「程度によるが……まぁ、多分そうするんじゃね？」
修司が英雄王の臣下であるという事に驚くベディヴィエールだが、同時に聞きたい事が出来た。もしも自分の王が間違った道へ踏み出

した時、自分はそれを糺す事が出来るか否かを。
すがるようなベディヴィエールの質問に、修司は簡潔に応るが、正直それは彼の答えに成り得ることはないだろう。英雄王と騎士王もとい獅子王とでは、比較する事は出来やしないのだ。
それに、修司は確信している。仮に英雄王が間違った道を進んだとしても、それは自分達から見た尺度であって、王から見たモノとでは善悪の基準があまりにもかけ離れている。仮に人類の敵側に立つことになっても、それは王が遥か未来を見据えての行動だと自信を持って言えるし、王が自分にもそれに手を貸せと言えば喜んで手を貸すつもりだ。
ただ、仮に王が間違っている事をした時は……その時はきっと、この拳は英雄王にも向けられる。万が一その時が来たら……まぁ、やっぱり自分はそうするのだろう。

その１０７　第六特異点

「ほう、貴様が噂に聞く山吹色の男か」
　荘厳壮大な大神殿。広大な砂漠の大地に自らの権威と威光を示すように建てられた光り輝く黄金のピラミッド。その深奥にある聳え立つ玉座にて、その王はいた。
「お初にお目にかかります。太陽王、此度はお目通しの赦し、誠に有り難うございます。我が名は白河修司、英雄王の臣下の末席に数えられ、今はカルデアに属する者です」
　己の民草は照らし、敵には容赦ない灼熱を見舞う太陽王オジマンディアス。居城としている大神殿同様に尊大且つ偉大な王の前に、修司は片膝を付いて跪く。そんな修司に立香達は驚いたが、太陽王は然程関心がないように口を開く。
「ふむ、最低限の教養はあったか。弁えている様で安心したぞ、して？　此度はどの様な件で参った？　確かに余はお前達にこの特異点（世界）を見て回れと命じ、貴様達はそれに応えて見せた。それ自体は余も認めよう、だが……それ以上を望むのであれば、分かっていような？」
　跪く修司を一瞥し、その視線は立香達へと向けられる。鋭い目だ。ここでふざけた事を口にし、一言でも言葉を間違えれば、きっと自分は殺される。立香はそう確信に思いながらも……。
「お願いします太陽王、貴方の力を、どうか私達に貸してください！」
　藤丸立香は何時だって、そのちっぽけな命を張ることしか出来ない。自分なりの覚悟と決意をもって口に出した言葉は、思っていた以上に大神殿に響き渡り。
「ふむ、まぁ……いいだろう。山の民達との共闘、応えてやらんこともない」
「――――ふぇ？」
　そんな決意の籠っていた言葉は、嘘のように受け入れられていた。
「ブフォウッ!?」
「なんだ、余の力とその軍勢を望んでいたのではないのか？」

「い、いえ！　そうではありません！　そうでは、ないのですが……」
「太陽王、確かに我々は君の力を得たいと画策していたし、一度や二度の懇願では聞いては貰えないとも思っていた。それなのに此処へ来てあっさりと承諾されてしまったら、立香ちゃん達が呆然になるのは仕方がないよ。ていうか君、たった今までそんな素振りは見せなかったじゃないか」
　自分達の要望が、あまりにもアッサリと受け入れられた事に、立香達は困惑する。確かに自分達は太陽王の言う通りにこの特異点を巡った。聖都にて円卓の騎士達と獅子王の蛮行を目にし、山の民の営みと、世界に迫る〝果て〟を知った。だが、それだけで目の前の太陽王が素直にハイそうですかと首を縦に振るのも、立香達にとって違和感が過ぎた。
　そして、そんな立香達に対して、太陽王オジマンディアスはやれやれと肩を竦め……。
「全く面倒くさい連中よ、余が力を貸すと言うのが其処まで怪訝に思うとはな。とは言え、確かに貴様達の言う通り、唯で貸すわけではない。余の力と軍勢、そして守護獣を貸し与える代わりに、余は聞きたい事がある」
「聞きたい事？」
「そうだ。そこのいつまでも頭を垂れ下がっている貴様だ！　いい加減面を上げ、立ち上がらんか」
「え、俺？」
　聞きたい事がある。そう言って太陽王が突き付ける指の先には、未だに頭を下げたままの修司がいた。突然の指名に驚く修司だが、太陽王に聞きたいことがあると言うのなら断る訳にもいかない。オジマンディアス王の言葉に従い立ち上がると、次に太陽王は驚いた様に目を見開いた。
「ほう、やはり貴様も山の翁の頭目と相対した者か。貴様、あの死神を相手にどうやって生き延びた？　アレは命乞い等で見逃す輩ではない筈だぞ？」

太陽王が目を剥いた理由は、修司の体に刻まれた無数の切り傷の痕。完治し、完全に塞がった後からでも分かる鋭すぎる剣筋に身に覚えのある太陽王は、それがあの山の翁によるものだと瞬時に理解した。

大神殿内にいた自分の首を、容赦なく撥ね飛ばした者の斬撃。斬る事ではなく、殺すことに特化した死神を相手に生きている事、それ自体が太陽王にとって称賛に値する出来事だった。

「えっとその……色々と経緯は語るのに難しいのですが、主観で宜しければ」

「構わん。申せ」

何故か喰い気味の太陽王に、修司は戸惑うが、変に断って空気を悪くするのも違うと思い、素直に話すことにした。初代山の翁に誘われて霊廟に入ったこと、戦った事、一度そこで死にかけ、どうにか翁の仮面を叩き落として認めて貰った事。

その全てを話終える頃には、太陽王は笑いを堪えるように片手で顔を覆っていた。

「く、クハハハ！　叩き落としたと!?　あの死神の面を!?　正面から!?　これ迄数多くの命知らずを目にしてきたが、貴様ほどの者は余も見たことがないな！」

「我ながら、信じがたき事かと思いますが、全て真実でございます」

「分かっている。貴様の言葉には一切の偽りがない事くらいはな、だからこそ面白いと言ったのだ。あの死神を相手に生き残り、未だ成長し続けるその底無し具合……成る程、英雄王めが臣下と認める訳だ」

「では……」

修司の語る初代山の翁との戦い、それを耳にした太陽王は面白おかしく笑い飛ばした。このような人間がいるのかと、尋常ならざる成長性と何処までも高みへ挑まんとする向上心。その圧倒的可能性は成長というより進化に近い、一体何処からこの様な人間が生まれたのか、太陽王オジマンディアスはその可能性に賭けてみたくなった。

「とは言え、唯で守護聖獣を貸し与えるのもつまらんな。よし、ならば

一つ余興としよう。ニトクリス、供をせよ！」
「ハッ！　ファラオ・オジマンディアス！」
「ちょ、太陽王!?」
「なんで戦闘態勢に入るんだい!?」
　突然杖を構える太陽王とニトクリスに、三蔵やダ・ヴィンチは戸惑うが、対するマシュと立香は身構えている。
「ダ・ヴィンチちゃん、やるよ。太陽王は私達を直に見定めようとしている」
「ええ？　だってさっきは……」
「それは修司さんに対してのモノだよ。私達はまだ、目の前の王様に何一つ示していない。それに、ワザワザ向こうから見定めてやるってその気になってくれたんだ。此処でそれを逃してしまったら、きっと私はあの人に認めては貰えない」
「ハッ！　分かっているではないか小娘よ、その若さで大した度胸だ。女にしておくのが勿体ないな！」
「マシュ！」
「了解！　マシュ＝キリエライト、太陽王の無茶ぶりに全力で応えます！」
「あぁもう！　二人ともすっかり逞しくなっちゃって！　寂しいったらないね！」
　膨れ上がる太陽王の王気（オーラ）とそれに呑み込まれないように踏ん張る立香達、太陽王に認めても貰うための戦いは、修司抜きで行われた。
「ええっと……もしかして我々は」
「蚊帳の外、だな」
「ぎやてぇ……」
　目の前で繰り広げられる戦い、それを目の当たりにして完全に置いていかれた二人の騎士と一人の法師は、大人しく隅っこで見学に徹するのだった。

◇

――――――それから暫くして、太陽王から無事に認められた立香達は、今度こそ同盟を結び、山の民たちへ報告する事が出来た。
そして現在。山の翁達に連れられ、移動した新たな集落に辿り着いた一行は、その光景に唖然としていた。
「な、なんて数の人達……これ、完全に百や二百じゃきかないよね!?」
「明らかに千人単位、いえ、下手したらそれ以上の……!」
一つの集落に集まるには、過剰に過ぎる集団。一体何処からこれ程の人員が集まるのか、未だに呆けている立香達の疑問に応えたのは、山の翁の一人である百貌のハサンだった。
「お前たちがいるなら、協力するんだとさ」
「百貌さん?」
「わ、私達って?」
「自分達とは人種も、信じる神も、何もかもが違うのに自分達を助けてくれた。そんな連中がいるなら一緒に戦ってもいいと、一から十、十から二十、二十から四十と増えていってな。今ではこの通りよ」
「他の各村からそれぞれ戦力が集まっておりますゆえ、そこに太陽王とそこの湖の騎士の戦力と合わせれば、数で言えば円卓の軍勢と渡り合えるかと」
「全く、我々が説得した時は歯牙にもかけなかった癖に、調子のいい連中だ」
百貌の説明を補足するように現れた呪腕は、此処まで山の民達が集まってくれたのは、偏に立香達のお陰だと語る。異国の人間で、自分達とは価値観も何もかもが違うのに、それでも必死に助けてくれた人達がいる。そんな人達と一緒に戦えるのなら、自分達も戦うと、一人

一人がそんな小さな希望を頼りに集まったくれた人達だと知り、立香は自分達の行いは無駄ではなかったと、目頭が熱くなった気がした。
「ともあれ、これで全ては整った。初代様のお力を借りられるか定かでないのが不安だが、代わりに此処には初代様から認められた修司殿がおられる。太陽王との協力が得られた今、この機を逃す事はありますまい」
「では、いよいよかい？」
「ええ、今宵我等は里を発ち、夜の内に聖都へ出立する所存。皆様はその間、どうかゆっくりと休んで下され」
呪腕から最終決戦へ挑む事を告げられた一行は、自然と引き締めた表情をする。その後、ランスロットは山の翁達と進軍の際の具体的な連携を、三蔵やダ・ヴィンチ、ベディヴィエールは集落の人々に食料を提供する藤太の手伝いをしたり、立香はマスターという立場から早々に就寝するように勧められ、有り難くそれに甘えたりと、それぞれ最後の休みを満喫していた。
そんな中、修司だけは立香同様に休むように勧められていたが、妙に目が覚めてしまい集落を彷徨いていた。時間帯はまだ夜更けに入る前、武装した山の民達が出立の準備を進める中、修司は一人佇む呪腕のハサンを見付けた。
「呪腕先生、幾らサーヴァントと言えど休みは必要だ。いい加減、仮眠の一つくらい取ったらどうだ？」
「ハハハ、嬉しい気遣いではありますが、今だけはそれを受け取る訳には参りませんな。何せ、嘗てない程に気持ちが高揚しております故」
「それは……ルシュド君の事か？」
「……ええ」
静かに山岳地帯の向こうにある聖都を見据えながら、ルシュドなる少年の事を思い返す。十字軍の驚異から逃げ延び、ただ救いを求めて聖都に訪れた哀れな子供。
最初は、ただの私情からだった。嘗ての想い人が残した忘れ形見、彼女が最期に残した彼女自身の最期の希望。あの子を死なせてはならないと、無意識の内に優先順位を跳ね上げた呪腕のハサンは、自分

のソレはとんだ見当違いであったと、思い知らされた。
「マシュ殿から聞きました。あの子は自分こそが母の命であると、自分が生きている限り母の人生もまた続くのだと、だから死ぬ訳にはいかない。例え辛くて苦しくとも生きるのだと……そう、言ったそうです」
「そっか……格好いいなルシュド君は、これもアーラシュさんの薫陶の賜物かね」
「恐らくはマシュ殿や立香殿、修司殿達を含めた全ての人から影響を受けた結果でしょう。いやはや、この歳になっても、教えられた気分です」
「……本当、そうだよな。獅子王はルシュド君の爪の垢を飲んだ方がいいんじゃないか？」
「ハハハ、修司殿も言いますな」
「決戦の前なんだ。口くらい軽くなる」
ルシュドという幼くも確かな希望に、呪腕は確かな救いを見出だしていた。そこに嘗て修司が目にした悪辣さはなく、やはり人は環境次第で変われるのだと、改めて理解した。
――それはそれとして。
「……所でさ、俺から一つ提案があるんだけど」
「むむ？　改まって如何した？」
「聖都にある正門、アレを崩す秘策があるんだけど……聞いてみない？」
第六特異点の最後の戦いまで後僅か、ここまで来たら後は進むだけだと、誰もが決意や覚悟を固める中で、修司が告げてきた提案に――。
「正気ですかな？」
呪腕のハサンは至極全うな言葉を口にするのだった。

◇

――朝。晴天が広がり、終末の世界とは到底思えない晴れやかな青空の下で、太陽の騎士は静かに目の前の軍勢を見据えていた。

「――来ましたか」

聖都の円卓軍と対と成るように展開された軍隊。その多くが山の民達であり、中には粛清騎士達と似た装いの甲冑兵も多数確認している。恐らくは、獅子王の決定に背いた騎士達の成れの果てなのだろう。そして、そんな彼等を率いて王に糾弾しようとする者も、恐らくは彼の騎士で間違いないのだろう。

そして、それらを懐柔し、かき集めてきたのは紛れもなくカルデアの者達である事は間違いない。いつぞやの予言が現実味を帯びてきたな、と誰かが邪推するが、太陽の騎士は一蹴する。

我等の王は完璧である。既に聖槍は完成され、後は選ばれた人間達を人理焼却から守るだけ。自分はただ、その時まで時間を稼げばいい。

(相手が誰であろうと切り捨てる。それが喩え、共に円卓を囲んだ同胞であろうと!)

あの日、実の妹を手に掛けた瞬間から、太陽の騎士ガウェインは自分の在り方を定めた。必ずや王を守り、今度こそ己の忠誠を貫くのだと。盲信であろうと構わない、それが自分に出来る忠節なのだと、ガウェインは決して揺るがない。

此方には壁上から狙える弓矢が無数に配置されている。加えて、聖都の正門も万全となっており、喩え宝具であっても耐えきれる強度を誇っている。

そして、それを守護するのは太陽の騎士である己自身。ならば勝利は約束されたと、ガウェインが確信を抱いた――その時だ。

「なんだ……アレは？」
空に――――孔が空いている。より正確に言えば、山の民達の頭上に、孔のような黒い空間が出来上がっている。大規模な魔術によるモノ？　生前にも見たことがない現象を目の当たりにするガウェインは、孔から顕れるソレに目を剥いた。
剣である。巨大で、無骨で、凡そ人には扱えない巨大な剣が、黒い孔から顕になっている。その光景にガウェインを含めた騎士達も驚愕し、何故か味方の筈である立香達も驚いている。
そんな、誰もが目を見開く程に驚愕している中。
「ワームホール展開、距離、空間補填、その他諸々誤差修正――――グランワームソード、発射ァッ!!」
グランワームソード。自身の相棒が扱う大剣を重力加速によって射出し、聖都の正門に直撃。爆撃の様な音ともに瓦解した正門を前に、白河修司は指を突きだし――――。
「どうだ見たかぁ！　円卓のナルシスト共がァッ！　これからテメェ等が壊してきたモノ、そのまま熨斗付けてお返ししてやるよぉっ!!」
静寂に満ちた戦場で、修司の罵倒の混じった叫び声を発端に、戦線は開かれるのだった。

その１０８　第六特異点

――――染み渡る青空。雲一つなく、自分達を見下ろす光帯を除けば、満天の青空が広がっていて、世界の行方を決める決戦としてならある意味、これ以上ないシチュエーションである。

そんな青空の下、決戦の舞台に立つ当事者達はこれから戦うとは思えない程に静まり返っていて、たった今起きた出来事に唖然として見つめていた。

聖都キャメロットを守る正門。白く気高い騎士を顕した白亜の城門は、その面影が一切残らない程に崩れ落ちていた。

白亜の門の中央に突き刺さる巨大な剣、人が奮うには規格（サイズ）的に有り得ない大剣、それを飛ばした張本人である白河修司は、腰に手を当てて満足そうに頷いた。

「ヨシ、取り敢えず正門の問題は片付いたな。後は――――」

正面の最も厄介な正門が崩れたのは大きい。巨大な正門はそれだけ頑強で、攻城戦に於いては厄介な関門の一つとされているが、それはあくまで正攻法で挑んだ時の話である。本来なら正門の攻略に割く筈だった戦力も、他の所に回せる事が出来る。後は自分達が突入して獅子王を倒すまでの間、いのちをだいじに戦法で撹乱して貰えれば良いだけである。

これならば、戦いで犠牲になる人の数も比較的減少する事だろう、そう頷きながら次の行動に移ろうとした修司に……。

『待ってぇ!?　お願いだからちょっと待ってぇぇぇぇッ!?!?!?』

「うお、ビックリした。いきなりどうしたんだよロマニ、もう戦いは始まってるんだぞ？」

『ビックリしたのはこっちだからね!?　あと動いてないから！　君の所為で誰一人動けないでいるから！　ねぇ、何で君はいつもいつも突拍子の無いことをするの!?　君、魔術師じゃないんだよね!?　魔術回路ないんだよね!?　なんであんな事が出来るの!?　止めてよ、これ以上僕の脳細胞と胃を虐めないでよ!!』

唐突に開かれるカルデアからの通信、開かれた映像通信の向こうには、半ば発狂しながら問い詰めてくるロマニがいた。酷い顔だ。きっとマギマリがサービス終了を告知された時も似たような反応になるんだなと、半泣きで訴えてくるロマニに対し、修司は――――。
「いや、普通に科学技術の力だけど？」
シレーッとそう宣う修司に、ロマニは自身の頭から血管が二、三本程千切れる音を聞いた気がした。
『普・通・は!!　あんな風にデッカイ剣が亜音速で飛んでったりしないから!!　て言うかどっから出てきたのあのデカイ剣は!?　ハッ、まさか……アレも君の相棒のなのかい!?』
「そうだけど？」
『なら、どうしてあの時ちゃんと教えてくれなかったんだい!?』
グランワームソードなる大剣、恐らくアレは修司が相棒としている代物なのだろう。だが、一体どうやったらあんなモノが音速を超えて飛来するのだと考えられる？　相変わらずメチャクチャな事をしでかす修司に、今回ロマニは初めて八つ当たり気味の糾弾を口にした。許容オーバーによる暴走とも言える。
「どうしてって……巨大ロボに大剣がデフォルトで備わっているのは当然だろう？」
そんなロマニの心情を全く察した様子もなく、修司は平然と答えた。ロボにパンチ、ドリル、ソードは必須という三大原則を網羅している修司にとって、今更論ずるに能わない話である。
尚、この話を聞いたとある二人の発明家は同調するように深く頷き、マハトマの幼き母にしばかれている。
閑話休題。
『あぁぁぁもうやだぁぁぁぁっ!!』
『落ち着いてください所長代理、気を強くもって！』
通信の向こうで頭を抱えながら発狂するロマニ、近くにいたオペレーターの女性が宥めながら消えていく光景を尻目に、改めて修司は聖都へ向き直ると、今度は呪腕のハサンが近付いてきた。
「は、話には聞き及んでいましたが、まさかこれ程とは。修司殿、開戦

の狼煙としてはこれ以上ない一撃でしたな」
正門は崩され、正門付近にいた騎士達も衝撃に巻き込まれ吹き飛んでいる。ガウェインの姿も見えない以上、後は獅子王の下へ修司達を送り届け、その間の戦線を維持するだけである。
しかし、そんな呪腕の思考とは裏腹に……。
「何を言ってるんだ呪腕先生、俺のターンは……まだ終わっちゃいねぇぜ？」
「――――ひょ？」
白河修司は、再び空間に孔を開ける。黒く、奈落を思わせる暗黒の底、そこから顕れるのは……先程修司が投擲した巨大な大剣。
バカな、アレは既に正門に向けて放たれた筈。もしや、この大剣をあと何本も隠し持っているのか、戦々恐々たる思いで正門に視線を向ける呪腕だが、そこにあった筈の剣は姿を消している。
ワームホールとは、重力操作によって開かれる重力の門。そこに空間による差異など意味はなく、そしてそれは空間に対して強い感能力を持ち、グランゾンという規格外の存在を脳波である程度遠隔操作が可能となっている修司にとって、相棒の一部である剣を回収、投擲を繰り返すのは然程難しい事ではない。
「……呪腕先生、何回だ？」
「え？」
「獅子王の裁きってのは、これ迄何回地上に叩き落とされた？」
これ迄、修司は地表に出来た巨大なクレーターを何度も目撃してきた。その数は一つや二つじゃきかず、その全てに嘗て人々の生きた場所があったと聞かされてきた。
目には目を、歯には歯を。別に修司は自らを山の民や原住民の人々の代弁者を気取っているつもりはないが、それでもやり返さなければ気が済まない気持ちはあった。無抵抗のまま蹂躙された者、子供の未来を憂いながら、親の事を想いながら死んで逝った者、ルシュドと同じ被害者を何人も出しておきながら、素知らぬ顔で開き直る騎士を騙る者共。
「ほーれ、ドンドンいくぞォッ！」

全てが気に食わない。そして、それらを生み出している獅子王が、修司が今最も殴り倒したい者の筆頭である。とは言え、聖都には未だ取り込まれた原住民達もいる。彼等の安否を気遣う為、相棒の力を十全に発揮しない所だけは、修司なりの慈悲は確かにあった。

故に十発。３０ｍを超える質量の塊を重力加速によって十回程だけを打ち出し、聖都キャメロットの外壁を打ち崩すだけに留めておいた。

崩れ落ちるキャメロットの外壁、そこには嘗て人々にとって畏怖の象徴として描かれた白亜の城門は無く、無惨な瓦礫の山が築かれていた。

「フーッ、こんなものか。本当なら整地してやりたい所だけど、生憎其処まで時間はない。ここから先は呪腕先生達に任せたい所だけど……頼めるか？」

「いや……うん、そうですな。此処までお膳立てをされてしまった以上、退くわけには行きますまい」

「太陽王も、構わないか？」

『えっとその……ファラオ・オジマンディアスは現在腹痛の為に席を外されておりますので、私が代弁させて頂きます。〝構わん、好きに暴れろ〟との事です。ファラオの同盟者に相応しい振る舞いを、どうか忘れないよう』

空に浮かぶニトクリスが、オジマンディアスの代弁者として映し出され、戦線に異論はないと告げてくる。何故オジマンディアスが離れているのかは知らないが、背後に彼等がいるのなら、安心して前を見ていられる。

「さて、舞台は整った。後は獅子王をぶちのめすだけだ」

「整ったというより、蹴散らしたの方が正しくない？」

「ですね。こればかりは先輩に同意します」

「フォフォーウ！」

これ迄愕然とした様子で佇んでいた立香とマシュの二人は、初めてみたグランゾンの一端を目撃したのにも関わらず、割りと平然としていた。

二人とも、順調に白河修司の起こすハチャメチャに染まってきている様である。
そして、一行は歩き出す。外壁は崩れても未だ衰えぬ白亜の塔、その頂上で佇む獅子王に挑む為に……。
「それじゃあ、行きますか」
戦いの火蓋は、今度こそ切って落とされた。

◇

「う、ぐ……なんと、出鱈目な」
崩れ落ちた白亜の城門。嘗て尊大だったキャメロットの外壁は今では見る影もなく崩れ去り、今では土埃にまみれた瓦礫の山と化している。
そんな瓦礫に巻き込まれ、壁上で待機させていた弓矢部隊は壊滅し、地上の部隊もその多くが瓦解している。自身にのし掛かる瓦礫をはね除けながら、太陽の騎士ガウェインは辟易としながらも立ち上がり、迫り来る敵軍に目を向ける。
確かに、白亜の城の外壁は崩された。しかしそれだけ、依然として獅子王の聖槍ロンゴミニアドは輝きを失ってはおらず、寧ろその輝きは前より強くなっている。城門を砕かれるという前代未聞の展開に流石の獅子王も危機感を抱いたか。否、それは有り得ない。
(そうだ。我等が王は完璧であらせられる。如何なる侵略者が相手であろうと、その輝きが損なわれる事は、決して――ない！)
手に握られている太陽の騎士の新たな剣。それは以前まで使って

いたガラティーンの様な太陽の炎を司る力こそ持ち合わせてはいないものの、その性能は決して劣りはしない。
それは、ある焔の巨人が奮うとされる終末の剣――――を、模倣した遥かに型落ちした劣化コピー。世界に刻まれた伝承通りの出力こそないが、それでもギフトを授かった自身が奮えば無二の焔が濁流となって戦場を蹂躙し、敵味方関係なく殲滅出来る諸刃の剣。
獅子王から使い処を見誤るなと云われ、これ迄固く封じてきた浄化の焔。遂に、これを奮う時が来たのだと、ガウェインは握り締めた剣の柄に己の魔力を通していく。
溢れ出る熱量は天地を喰らいながら荒れ狂い、周囲を融解させながら呑み込んでいく。燃え盛る業火の中、ガウェインは静かに迫る迫り来る敵対勢力を見据える。
ガウェインが魔剣を解放したと同時に、撤退を始めているが……もう遅い。相対し、キャメロットに侵攻を始めた時点で、既に此方の射程範囲に入っている。
奮えば自軍含めて全滅必死な破滅の一撃、されどこの身には既に一切の躊躇はなく。
「呑み込め、燃え尽き、灰塵に帰せ――――終局の一振り(レーヴァテイン・イマージュ)!!」
遂に、魔剣は奮われた。津波となって戦場を蹂躙し、敵味方問わずに終らせる焔の一振り。これで我が王の望みは護られた。そうガウェインが確信した次の瞬間。
炎は消えた。パンッと軽い音と共に、余りに呆気なく、消失した。
「――――な、に?」
まるで最初から何もなかったかの様な光景、目の前の現象に理解の追い付かないガウェインの口からは間の抜けた声しか出せていない。一体何が起きたというのか、混乱する思考で呆然となるガウェインの前に……ソイツは現れた。
それは、まるで夜空に浮かぶ星の様な輝きだった。淡く輝く小さな光、そんな光を纏いながら此方に歩いてくるのは、これまで幾度と無く辛酸を味合わされた相手、忌々しい我等が天敵、白河修司だった。
何故、あの様な輝きを纏っているのか、どうやって今の己の一撃を

掻き消したのか。否、どうでもいい。分かっている事はただ一つ、目の前に悠長に歩いてくる男を決して獅子王には会わせてはならないという事。

瞬間、ガウェインは駆けた。瓦礫の足場を踏み抜き、炭化しかけた自身の腕を省みず、ガウェインは修司に肉薄し、その脳天に向けて剣を振り下ろした。一片の無駄無く、ギフトの影響で常時三倍の力を持つ自身の全てを乗せた渾身の一撃、避ける暇も与えなかったこの特異点に於けるガウェイン最高の一撃は……。

虚しく、空を切るだけに終わった。目の前にいた筈の修司の姿は其処に無く、先程までと変わらない様子でガウェインの後ろを歩いていく。変わり果てていたのはガウェインの握る魔剣だけだった。

砕かれている。握り締めていた魔剣は柄から粉々となり、ガウェインの手から溢れ落ちていく。二度目の理解の及ばない光景に、今度こそガウェインの思考は停止する。

そんな時、彼の耳にカルデアのマスターと思われる少女の声が聞こえてきた。

「し、修司さん、いいの？」

「ん？　何がだい？」

「ガウェインだよ。なんか剣を砕かれた事以外変わった様子はないんだけど……その、これまで修司さんってば敵対した相手には誰であろうと容赦しなかったからさ」

そう、立香の言う通り、確かにガウェインには魔剣の反動以外傷らしい傷はなく、実際に修司はガウェイン本人には一切の攻撃を仕掛けてはいない。これ迄の修司ならば、ガウェインも殴り飛ばしている筈だと確信していただけに、立香は少しばかり疑問を抱いていた。

そして、そんな立香に――――。

「いいんだよ。もう、意味ないし」

修司はたった一言、そう口にした。

意味はない。そこに込められた言葉には文字通りのモノでしかないが、それを耳にしたガウェインは膝から崩れ落ち、特異点が消滅するその時まで愕然と項垂れるオブジェとなるのだった。

最初の関門である正門を抜け、修司達は獅子王のいる中央の塔へ向かうのだった。

その１０９　第六特異点

白亜の城キャメロット。何人にも侵されず、嘗てはブリテンの人々の希望であり、模範と在ろうとした騎士王が座した居城。その中を走るのは修司達カルデアと現地のサーヴァント達、押し寄せてくる粛正騎士達を蹴散らしながら、一行は獅子王のいる塔の頂上へとひた走る。

「……なんだろう？　聖都ってこんなに人気がない所だったの？」

聖都の居住区エリア。そう思われる箇所を走り抜く最中、立香はふとそんな違和感に気付く。人気がない。これ迄、聖都には聖抜によって選ばれた人々が穏やかに過ごしていると思われてきたが、実際に建物には人のいる様子はなく、立香達のいる大通りや路地裏に至るまで全く人気がないのは……流石に違和感は拭えなかった。

「戦いが始まるからと、事前に避難させていたか、それとも既に聖槍に取り込まれたか。どちらにせよ、無為に扱われている事はない筈だよ、獅子王にとって彼等は掛け替えのない……いや、換えの効かない貴重品なのだからね」

貴重品。聖抜に選ばれた人達を、獅子王はモノとして認識していると暗喩するダ・ヴィンチの表現にベディヴィエールの表情が険しくなる。彼の騎士の様子を察したダ・ヴィンチはすぐに意地悪な言い方をしたと謝罪する。

だが、彼も分かっていた。今の獅子王は最早自分達の知る騎士王とは何処までも解離していて、今となってはその面影は微塵も残ってはいないという事に。人としてではなく、神としての在り方に寄ってしまった獅子王に、人間の価値観とは相容れないと、これ迄の獅子王のやり方でベディヴェールは何となく察してしまっていた。

けど、それでも自分は成すべき事を果たさないといけない。喩え、獅子王が自分の事を忘れているのだとしても。そんな、ベディヴェールがいよいよ覚悟を決め始めると、前方から騎士の群れが殺到してくる。

それは、獅子王の直属の粛正騎士。獅子王自らが造り、近衛とした謂わば分身とも呼べる集団。そんな彼等を相手に時間を掛けるわけにはいかない。
「久し振りに行くぜ、ペガサス――――流星拳!!」
そんな獅子王の直属部隊を、鎧袖一触に薙ぎ倒す。拳から放たれる弾幕により、悉く撃ち抜かれた粛正騎士達は魔力の霧となって霧散する。ガウェインを降した時のような輝きは纏っていないが、それでも白河修司の強さは以前よりも跳ね上がっていた。
「……さっきから気になってたけど、どうして修司さんは私達と一緒にいるの？」
「え？」
「いやだって……修司さんって空飛べるじゃん」
「た、確かにそうですよね。修司さんならかめはめ波を塔の頂上に向けて放っていると思ってました」
「君達俺を何だと思っての？」
「「ハチャメチャ量産機」」
「凄い、二人とも息がピッタリね！」
「ハハハ！　伊達に幾度と無く修羅場を潜り抜けてはおらぬな！」
「フォフォーウ！」
唐突に思い浮かんだ立香の素朴な疑問だが、確かにこれ迄の修司なら、戦いを引き延ばそうとせず、早期決戦に持ち込もうとするだろう。かめはめ波をブッパしたり、武空術で塔の頂上へ一人特効しかけたり、なんなら先の城門を破壊したように、あの巨大な剣を王城へ向けて叩き込んだりしていた筈。
なのに、今はそんな事をする気配が全くない。決戦の時だというのに、驚くほど大人しい修司にマシュも立香も違和感を拭えなかった。
「まぁ、確かにそういう手もアリっちゃアリなんだけどな……」
そう言って修司はベディヴェールの方へ視線を向ける。これ迄彼は獅子王に対して並みならぬ執念の様なモノを向けていることは、修司も何となく察してはいた。仮に獅子王と戦えば、ほぼ間違いなく修司は獅子王を倒すだろう。そうしないのは、ベディヴェールの事情を

考えているが故の事だった。
　ベディヴェールが獅子王もとい、この特異点のアルトリア＝ペンドラゴンに用があるのは以前から分かっていた。ここ最近では何かしらの気持ちを固めたのか、表情も幾分マシなモノになっている。そんな彼の覚悟に水を差すのに気が引けたからである。
　まぁ尤も、別に全員抱えても問題なく飛べるんだけどね。
「けど、此処まで来た以上、あんまり悠長な事を言ってもいられないか。ヨシ、ならお望み通りの展開にしてやろうじゃないか。二人は両腕に抱えるから良いとして、問題はダ・ヴィンチちゃんとベディヴェールだな」
「え？　嘘、本当にやるつもり⁉」
「ど、どうしましょう先輩！　完全に藪蛇でした！」
「え、これ私も巻き込まれる流れですか⁉」
「あちゃー、これはもう覚悟を決めるしかないかな」
　何やら四人供非常に嫌がっている様子だが、今は時間が僅かでも惜しい状況だ。いつ獅子王の聖槍とやらが本格的に動き出すのか分からない以上、手をこまねいている場合ではない。後でセクハラで訴えられることを覚悟しつつ、立香とマシュの二人を両腕にそれぞれ抱えようとした時――それは起きた。
「「っ⁉」」
　塔の王城を中心に光が溢れ出す。金色に輝く光、天を衝かんとばかりに増していく輝きに修司達の足が止まる。
「な、なにこれ……」
『まさか、ロンゴミニアドの輝きか⁉』
「知っているのかエルメロイ先生⁉」
　戸惑う修司達を正気に戻したのは、ロード・エルメロイ二世。ロマニの通信に割って入ってきた時計塔のロードは、酷く表情を強張らせながら解説を始めた。
『あぁ、恐らく獅子王の仕業だろう。聖槍を起動させ、遂に世界を閉じようとしている！』
「ど、ドクター！　ロード・エルメロイの解説は――⁉」

『あぁ、残念ながらその様だ。三蔵法師が見たという世界の果て、何もない無の空間が聖都に向かって押し寄せて来ている！』
　世界の果て、そこから先の世界は存在しないという文字通りの無の世界。獅子王が人理焼却に抗う為に実行するたった一つの救済処置。
「ていっ！」
　王城を包み込む黄金の光に向けて、修司はそこら辺に転がっている瓦礫の破片を掴んで投げ捨てる。常人離れした修司の投擲、それは間違いなく王城の玉座に向けて放たれたのだが……虚しくも、光の中に吸い込まれるだけに終わった。
「吸い込まれた？　いや、掻き消されたのか」
『あの光の壁は凄まじい魔力によって時空断層の様に隔たれてしまっている！　何処かに発生源となっている場所はないかな!?　いきなり現れたんだ。急な仕掛けには僅かながら穴がある筈だよ！』
　ロマニから告げられる王城を守る光の壁の性質を耳にした修司は、いよいよ相棒の出番かと思考するが……ダメだ。それは出来ない、確かにグランゾンの力をもってすれば、聖槍の力や世界の果てに対抗する位訳はないだろう。
　しかし、そうなってしまったら聖都――――いや、聖槍に取り込まれた人々は解放されないし、下手をしたら大規模な死傷者を出してしまう。そうなったら特異点修復処ではなく、人理焼却を待たずに人類の歴史は終わってしまう。
　やはり、自分達だけで何とかするしかない。そう修司が改めて王城に向けて駆け出そうとして――――。
「行かせるかよぉ！」
　赤い稲妻が修司達の前に落雷のごとく落ちてくる。
「くっ、来てしまいましたか、モードレッド卿！」
「おう！　来てやったぜチキン野郎！　今度こそその素っ首叩き斬ってやる為に、このモードレッド様が正々堂々、正面から奇襲しにきてやったぜ！」
　舞い上がる砂塵。煙の向こうから意気揚々と名乗りを挙げるのは反逆の騎士とされるモードレッド。暴走のギフトを持つ彼女の周囲

には赤雷の光が迸っている。
　そんなモードレッドを見て、修司は静かに拳を鳴らし始める。パキパキと聞こえる骨の音にモードレッドは一瞬ビクリと体を震わせるが、首を横に振って気持ちを建て直す。
「そして山吹色のテメェ！　俺の事を次に会ったら鎧を剥ぎ取るなんて嘗めたこと言ってくれたが――――残念だったなぁ！　鎧はとっくに俺の手から離れてんだよぉ！」
　砂塵の向こうから現れるのは、鎧を脱ぎ捨てて肌を露出させたモードレッドだった。次に修司の前に現れたら鎧を剥いて農具にしてやると脅されてから、モードレッドはアグラヴェインに頼み込んだ。お前から獅子王に取り成してくれと、剣を失った自分では殴ることしか出来なくなる。それでは流石に円卓の騎士とは言えないと、らしくない懇願の果てにモードレッドは再び剣を手に入れた。
　その代償に、モードレッドは自身の鎧を捨て去る事となった。元より次に会ったら鎧は剥かれる運命、だったらその前に自ら脱いでやるつもりでいたモードレッドは、獅子王から提示された代償の要求に嬉々として受け入れた。
　この手に握るのは嘗て自身を守っていた鎧。それが今とは自らの新たな刃となって新生を果たして見せた。これなら父上の役に立てると、満足そうに鼻息を鳴らすモードレッドに対し……。
「ね、ねぇ修司さん。モーさんって……あんなアレな感じだったっけ？」
「もしかしたら、これも暴走のギフトの所為なんかな？　魔術回路だけじゃなく、思考回路まで暴走しているから、あんなアホな感じになっているとか」
「ふ、二人とも、流石に言い過ぎなのでは!?」
　修司と立香は、可哀想なモノを見るような眼差しをモードレッドに向けていた。修司という怪物から鎧を護るために鎧を脱ぎ捨てる道を選んだモードレッド、本人はしてやったりな顔をしてドヤ顔を晒しているが、端から見ると痛々しいことこの上ない。
　殆ど上半身が裸に近い少女が剣を片手に不敵に笑っている。その

何とも言えないシュールな光景に誰もが言葉を失うが……。
「さて、そんじゃあいっちょ殺し合うか。覚悟しろよテメェ等、こうなった俺は少しばかりしつけぇぞ」
　それでも、モードレッドの強さは変わらない。鎧を脱ぎ捨てた事で身軽さを会得した彼の騎士には魔力放出による推進力を得ている為、その厄介さは折り紙つきだ。ならばそれに翻弄される前に仕留めるだけだと、修司が前に進もうとして……。
「じゃあ、ここは私と藤太で引き受けるから、皆は先に行っててくれる？」
　しかし、その歩みは三蔵法師と俵藤太によって阻まれる。
「修司、お主はこれから獅子王との戦いに備えて体力を温存しておけ、これだけの仕掛けを仕出かすのだ。恐らく彼の王は既に人の枠組みから外れているのだろう」
「……」
「ならば、ここはお主の力を奮う場ではない。往け、若き武人よ。高き天にてお主の輝きを目にするのを、楽しみにしているぞ」
　獅子王との決戦に備え、修司には極力体力を使わせない方がいい。そう判断した藤太もまた、三蔵と供に足止めをする事を由とする。そんな二人を尻目に、一行は王城へ向けて走った。
「……ざけんなよ。テメェ等ごとき三下英霊が、俺の足止めを出来ると、本気で思ってんのかよ!?　いいぜ、テメェ等を殺したあと、もう一度連中の頚を切り落としてやる！」
「ハッハッハッ、先程まで震えていた小娘が、調子の良いことを言う！」
「あぁ!?」
「もう、ダメじゃない藤太、彼女も一端の騎士。余計な無礼は説法モノよ？　……でも」
　シャラン。心地のよい錫杖の音を鳴らし、三蔵法師は身構える。
「素直になれない貴方にも、説法をプレゼントしちゃうんだから！」
「――――殺す」
　ぶつかり合う三騎の英霊。白亜の城のキャメロットの城下町にて、

赤き雷が荒れ狂った。
激闘を繰り広げる三蔵達、そんな彼等を背にしながらひた走る修司達は、黄金の光に包まれる王城を見上げながら、王城へ続く道を探していた。
「モードレッドを二人に任すのはいいとして、ここから実際どうする？　俺がかめはめ波でぶち壊してみるか!?」
「そ、それだと取り込まれている人々まで被害が及ぶのでは!?」
「だが、このままでは世界の果てが完成し、特異点は完全に崩壊してしまう！　やれる事が限られている今、迷っていられる時間はないぞ！」
どんどん光の強さが増していく。このままでは世界の果ては完全に自分達を呑み込み、世界は消滅してしまう。ならば、取り込まれた人々の安否を度外視するしかない。
それでも可能な限り巻き込まないよう気を付けながら、修司は両手にエネルギーを収束させていく。極力被害を出さないように、獅子王だけを狙えるように神経を磨り減らしながら力を溜めていると。
『フハハハハ！　余、復活である!!』

遥か砂漠の向こう、エジプト領から目映い光が、王城に向けて放たれていく。恐らくは太陽王オジマンディアスの宝具、これまで腹痛で離れていたファラオの登場に、一同は息を呑んだ。
『獅子王め、このタイミングで最果ての塔を出すとは、存外追い詰められているようではないか！』
「た、太陽王!?」
『とはいえ、流石にこれだけでは足りんか。ならば、世界を果てとするその不敬に、最早大神罰では生温い！』
光だけでは足りないと、全域に響く声を轟かせながら、太陽王は宝具を解放させる。それは、嘗て自身が巨大神殿であるピラミッドを移動させたという逸話から生まれた……最大級の質量兵器！
『喜ぶがいい獅子王！　貴様には、余の墓をくれてやる！　太陽の碑石、巨いなる巨石、宇宙を司るピラミッドよ！　我が無限の光輝、太

陽は此処に降臨せり！　落ちよ――――光輝の大複合神殿（ラムセウム・テンテイリス）!!』
空から、ピラミッドが落ちてくる。キャメロットを覆うほどの巨大神殿。純粋な超級の質量兵器と最果ての塔となった王城は激突し……ピラミッドは砕け散った。その衝撃は特異点全体を揺るがし、戦っている全ての者の動きを、一時的に封じ込めた。凄まじい衝撃だ。消失していく黄金の光に修司もやったと喜ぼうとした瞬間。
エジプト領から、二つの気が消えた。それを感じ取った修司は、太陽王と彼女に敬意を示す様に敬礼し、改めて先へ進むのだった。
〝さぁ、見せてもらうぞ。貴様の輝きを〟
遥か空の彼方から、太陽王の捨て台詞を聞いた気がした。

◇

「ぐっ、よもや貴卿にこれ程の力があったとはな。侮りがあったのは私の方だったか」
「御託はいい。聞きたくもない、貴様は此処で王に顔を見せる事なく――此処で死ね」
獅子王の座す玉座より、少し離れた王城の何処か。カルデアの一行とは別口から聖都へ侵入を果たしていたランスロットは、自身の遊撃部隊を引き連れ、獅子王の間違いを糺すべく、奔走していた。
モードレッドの遊撃隊を蹴散らし、他の騎士達を倒しながら歩みを進めるていると、ランスロットの前に一人の騎士が現れた。

アグラヴェイン。鉄の騎士として知られ、生前から人嫌いとして知られる王の補佐官。彼が目の前に現れた時、ランスロットは嘗ての自分の犯した罪と直面した気がした。
全ては王の過ちを糺すため、そう吼えるランスロットに対し、アグラヴェインは何処までも平坦に、冷静に返した。〝またか〟と。
「貴様は、一度ならず二度も王を裏切った。最早言葉は要らん。ただ死ね。意味もなく、王の記憶から一片も残さず消滅しろ！」
凄烈のギフトを有するランスロットに対して、アグラヴェインにギフトはない。ただ王の為に全てを捧げる鉄の男は、自分には何も要らないと〝不要〟を貫いた。
実力では到底及ばない筈、それでも湖の騎士に食らい付いているのは、偏に両者がサーヴァントであり、アグラヴェインの執念が凄まじい事にあった。
アグラヴェインは人を嫌い、ランスロットを憎み、蔑んだ。しかし、それ以上に王に忠義を誓っている。例え獅子王と呼ばれ、嘗ての在り方とは異なっていようと、今度こそ最期まで遣えて見せると、誰よりも強く誓っていた。
故に――――。
「世界を、人類を救えるのは、我が王に於いて他になし。消えろ、ランスロット！」
「――――いやぁ、それは無理なんじゃねぇかなぁ？」
地に膝を着けるランスロットに向けて奮われた剣は、その一声によって止められる。
「――――貴様、今何と言った？」
向ける視線。そこに滲み出るのは濃い嫌悪の色、鉄のアグラヴェインの一身に受け止め、それでもその男は平然と歩み寄り……。
「ん？　聞こえなかったか？　ならもっとハッキリ言ってやるよ」
白河修司は、アグラヴェインの前に現れる。
「人類救済なんて大業、獅子王には土台無理な話なんだよ」
鉄の心を砕くのは、騎士の一撃に非ず。
山吹色の男の一言は、鉄の心に確かな一筋の罅を刻み込んだ。

その１１０　第六特異点

――――数分前、聖都キャメロット内部。

山の翁達や山の民、多くの協力者達が尽力してくれた事で開かれた道筋。一度は発動された聖槍の〝果て〟も、太陽王がカルデア一行に後を託してくれた事で、一度は阻止できた。

時空断層にも匹敵する魔力の壁も消失し、再び開かれた道を立香達はひた走る。これ迄の旅路を経て、体力と逃げ足だけなら自信のある立香は、遥か頂上まで延びる階段を、速度を落とさないまま走り続けていた。

獅子王の座す玉座まであと僅か、一行がラストスパートを駆けて脚を動かそうとした時、それは起きてしまった。

突然足場を揺らす振動、すわ地震かと錯覚する一行が一瞬だけ鑪を踏むと、頭上から巨大な瓦礫が降り掛かってきた。このまでは立香に直撃する、そうはさせないと一番乗り近くにいた修司が立香の背中を押し出し、代わりに修司が瓦礫の下敷きになる。

「修司さん!?」

突然の事に立香は息を呑んだ。自分の代わりに瓦礫の下敷きになった修司、マシュもベディヴィエールも目を見開いて瓦礫を退かそうとするが……。

「ったく、ビックリしたなーもう。……って、瓦礫の所為で外に押し出されちまってるし。立香ちゃんは無事？　怪我とかしてないかい？」

「あ、うん。ヘイキデス」

瓦礫の向こうから平然とした様子の修司が聞こえてきて、立香達はズルッとコケそうになる。そうだ、この男は数あるサーヴァント達の攻撃を正面から受けてきた怪物だ。あの大英雄達の一撃を受けて生きている彼が、今更瓦礫程度に押し潰される筈もなかった。

「良かった。なら……ロマニ、今何が起きたか説明頼めるか？」

『あぁ、たった今解析が終わった所だ。どうやら獅子王はもう一度聖

槍を発動させ、再び世界を閉じようとしている。太陽王という障害が消えた今、自分の目的を達成させる為にね』
　口調こそ落ち着いているが、ロマニの心境は嘗て無いほどに荒ぶっていた。獅子王の持つ聖槍、それが再び真価を発揮すれば今度こそ世界は崩壊し、特異点の修復は不可能となってしまう。もう慌てるリアクションをしている暇もない、そんな淡々と解説するロマニに危機感を覚えた立香とマシュは事の重大さを理解し、頬から汗を流す。
　もう、獅子王を止められるのは自分達しかいない。改めて覚悟を決めた立香は改めて玉座へ向かおうとした時。
「これは……なんだ？」
『修司君？　どうかしたのかい？』
「向こうから大きめの気を感じる。圧されているのは――――ランスロットか？」
　ふと、修司の気の感知に奇妙なモノが引っ掛かる。力の質や大きさは然程じゃないのに、それでもランスロットを着実に追い込んでいる。円卓の騎士の中で最強と謳われる湖の騎士が追い詰められるなど、ただ事じゃない。
「……悪い皆、先に行っててくれ。ちょっと気になることが出来た」
『え、ええ!?』
「ロマニ、ちょーっと煩いよ？　修司君、野暮用って？　君がこの土壇場で自分勝手な言動で皆を戸惑わせる男ではないことは、私も皆も充分理解している」
　この土壇場に於いて、一人別行動を取ろうとする修司にロマニもダ・ヴィンチも呼び止める。獅子王と正面切ってマトモに戦える数少ない、そんな修司を自分勝手な男でない事を理解した上で、ダ・ヴィンチは簡潔に事情を訪ねる。
「実は今、妙な気配を感じてな。ランスロットが追い詰められているっぽいんだ。アイツが護るのは俺達の後ろ、万が一破られたら、俺たちは獅子王とランスロットを負かせた奴とで挟み撃ちにされちまう」
　時間がないことから簡単に説明したが、それだけで何か察したらし

い。瓦礫越しからでも分かる向こう側から伝わってくる張り詰めた空気、沈黙の時間は十秒か一分か、それでも幸いな事に掛けられた時間は然程長くは掛からなかった。
「――――分かった。なら、修司さんは向こうをお願い。そっちが片付く間、私達でなんとか獅子王を抑えてみるよ」
声色こそ震えているものの、立香の言葉に迷いはなかった。土壇場で戦力の要の不在という不安を抱えながら、それでも何とかして見せると口にする立香に、修司達は彼女の確かな成長を感じ取っていた。
「で、でもなるべく早く合流してくれると嬉しいかなー」
「あぁ、片が付いたら超特急で駆け付けるよ。ロマニは立香ちゃんを全面的に支援してやってくれ、俺の方は大丈夫だから」
『あーもう、分かったよ。彼女達の事は僕が責任を以て何とかするよ』
「ありがとうロマニ！　じゃあ……先に行くね！」
「修司さん、ランスロット卿の事……その、宜しくお願いします！」
遠ざかっていく立香達の気配。逞しく成長してくれた彼女達を嬉しく思いながら、修司は感じた気配の下へ向かって飛翔する。
これが、修司がアグラヴェインと対面する数秒前の出来事である。

◇

「……山吹色の胴着。そうか、貴様が噂に聞く山吹の男か」
「そういうお前は偉い仏頂面だな。纏う覇気も武人というより文官

……成る程、アンタが鉄のアグラヴェインって奴か。まぁ消去法的に、それしかないんだろうけどな」
動き始める王城、聖槍が本来の姿を見せ始めている中相対する二人。ランスロットを追い詰め、今まさに止めの一振りを振り下ろそうとしているのは、鉄のアグラヴェイン。ベディヴィエールから聞き及んでいた彼の人物像は、戦場で戦うより人を使い、情報という武器を使って騎士王の勝利を影から支える文官気質の男で、人と関わりを持たない人間嫌いだと耳にしている。
そんな直接的な戦闘力を持ち合わせていないアグラヴェインが、気迫だけでランスロットを圧している。此処に来るまでに、アグラヴェインにも何らかのギフトが獅子王から施されていると予想していたが、修司の予想は見事に外れた。これ迄の獅子王の騎士達とは違い、素であのランスロットと斬り合えている。
生前からの因縁か、はたまた別の要因か。いずれにせよ、自分の意思だけで円卓最強を下しつつあるアグラヴェインに修司は最初で最後の尊敬の念を抱いた。
「し、シュージ殿、何故、貴殿がここに？」
「なに、此処から少し奇妙な気配を感じてな。アンタが負けそうになっているのが気になって、ちょっと顔を出しに来ただけだ」
「そ、そうでしたか」
「ランスロットさん、アンタはもう下がれ。アンタはもう充分戦ってくれた。地上に戻って皆と一緒に、今度は生き延びるように頑張ってくれ。これは、アンタの子供の願いでもある」
傷だらけのランスロットを見て、修司は下がるように言い含める。彼はもう充分に戦い、傷付いた。忠義と己の正義の間で、葛藤しながらも自らの進むべき道を選び取ったランスロットに、修司は最大限の敬意を送った。
対するランスロットは、最後まで戦おうとした。しかし、一度ならず二度も王を裏切り、同胞に刃を向けた時点で、自身に何かを語る資格はない。自分の責任に最期まで向き合えないのは無念だが、子供に心配を掛けるなと言われた以上、引き下がる事しか出来なかった。

剣を支えに、ランスロットはその場から去っていく。アグラヴェインはトドメを刺せなかった事を悔しく思うだろうが……それも一瞬。乱れた髪を直しながらいつもの鉄仮面に戻ったアグラヴェインは、ランスロットにではなく修司に注意を向ける。その目にはもう、ランスロットに対する関心は失せていた。
「ふん、下らんな。そんな男の何処に気遣う価値がある。そんな程度の低い理由で、お前は勝機を逃したというのか？」
「へぇ、分かるのか？」
「貴様の事は報告だけだが、うんざりするほど耳にしている。ガウェインを降し、そこの俗物を懐柔し、モードレッドを降し、そして恐らく……トリスタンを消したのも貴様だ。我等円卓を悉く打ち破ったもの、であるならば獅子王と互する力を持つ者である可能性は当然出てくる――――業腹だがな」
唯でさえ深い眉間に、より一層深くして睨んでくるアグラヴェインに、修司は肩を竦めた。
「白河修司、貴様は言ったな。我等が王では人類は救えないと、それだけ断言した以上、根拠は当然あるのだろうな？」
「正確に言えば、人類は救済を求めてはいない。なんだが……まぁ、根拠も何も、獅子王のやり方自体が根拠、とだけ言っておくかな」
「聖抜の儀式の事を言ってるなら、アレは必要なモノだった。聖都キャメロットにも限界はあり、際限なく難民を救うのは不可能だ。如何に獅子王が完璧であろうと、限界は存在する。そも、ただ死を待つだけの人間を僅かでも救ってやれる。それだけでも充分なのではないかね？」
聖抜に選ばれなかった人々を殺していくのも、必要な犠牲だと、息を荒くしながら口にするアグラヴェインに、修司は何処までも冷ややかだった。彼の口から出てくるのは獅子王を擁護するものばかりで、それを進言しているのは自分なのだと、アグラヴェインは語り続ける。
それはまるで、悪い事をした子供を庇う親の様だと修司は思った。全ての悪行を成したのは自分の独断で、獅子王には何一つ非はないの

だと。しかし、アグラヴェイン一人だけに押し付けるには、あまりにも無理があった。
「――――なぁ」
「なにかね、この期に及んで何か言いたい事でも……」
「お前さ、本当はとっくに気付いているんじゃねぇの？　獅子王だけじゃあ理想郷は作れないって。獅子王では人類を救えないって、誰よりもお前が一番良く分かっているんじゃないのか？」
「――――っ」
崩れた。あの仏頂面のアグラヴェインが、無骨で人間嫌いのアグラヴェインが、他でもない人間の言葉によって、心の内に秘めた感情を顕にされている。
獅子王は完璧だ。そう信じ、そう在り続けてきたアグラヴェインが、目を大きく見開いている。
「……獅子王がやっているのは唯の標本だ。自分に都合の良い人間だけを選び、聖槍に取り込み、管理する。そこに自由というモノはなく、意思という自我はない」
「――――無用なモノだ。そんなもの、獅子王の掲げる理想郷には、全く不要なモノ、人理焼却から免れるのだ。その程度の代償、望んで受け入れるべきだろう」
「人理焼却から免れる。ねぇ……」
「そうだ。魔術王の人理焼却から逃れる為に、獅子王は聖断なされた。何も知らない者が、知った様な口は控えて貰おうか」
「――――ハ、ハハハ、クハハハハハハ!!」
嗤う。顔を手で抑え、抱腹絶倒とばかりに修司は嗤った。突然嗤う修司にアグラヴェインは一瞬面喰らうが、次に彼は憤怒の激情に駆られ、怒鳴り付ける。
「何が、何が可笑しい!?」
「これが嗤わずにいられるか。免れる？　おいおいアグラヴェインさんよ、言葉はもっと正確に選べよ。魔術王の人理焼却から免れる？　違うだろ？」
「〝逃げ〟たんだろ？　お前の所の王様はさぁ」

「っ!?」
「なーんか言葉を選んで仰々しく語っているけどさぁ、要するにお前ン所の王様は魔術王の人理焼却を前に戦う前から諦めたんだろ？　私じゃあ魔術王に敵いません。だからその分の負債を他の人に押し付けましょう。今回の話はそれだけで片が付く話だろ？」
「――――黙れ」
「獅子王……いや、今は女神ロンゴミニアドか？　いやぁ、どっちにしろ見物だったろうなぁ。良い歳した女が、野郎に尻振って逃げ惑う姿ってのは」
「貴様ァッ!!」
激昂したアグラヴェインが、手元にあった槍を投げ付けるも、避けられる。分かっていた事だと冷静に分析するも、アグラヴェインの思考は煮えたぎった怒りで、冷静に回る筈の思考回路は機能不全に陥っていた。
腕を掲げる。すると、アグラヴェインの周囲には無数の粛正騎士が現れ、アグラヴェインの放つ鎖に巻き付いて黒化していく。恐らくはアレがアグラヴェインの宝具、他者に何らかのブーストを掛ける補助的な役割を担うモノなのだろう。
獅子王の直属の騎士に、アグラヴェインの宝具。二つの要素を兼ね備えた粛正騎士は、単純な膂力だけなら円卓の騎士にも匹敵していた。
「北斗――――剛掌波!!」
が、その悉くが修司の手によって粉砕されていく。どれだけ力を増し、速さを担おうとも、実力が伴わなければ意味がない。嘗て自分が味わった体験が活かされた事に、修司は皮肉に思いながらも微かに嬉しく思った。
「貴様に何が分かる！　この滅び行く世界で、滅ぶ事が確定した世界で、それでも人を救わんと立ち上がった獅子王の決断を！　最低限の人命しか救えないと分かって、他の命を切り捨てるしかないと聖断された王の気持ちが、貴様に分かるか！」
「知るかよ、興味もねぇわ」

霧散していく獅子王の粛正騎士達、自身の宝具で強化しながらも、それでも鎧袖一触にされる現実にアグラヴェインは歯を食い縛りながら吼え立てる。獅子王の聖断を侮辱するな、そう吼えるアグラヴェインに対し、修司の眼は何処までも冷たかった。
「ならお前は、抵抗すら許さずに殺された人達の気持ちを少しでも察してやった事はあったのかよ？　父を殺し、母を殺し、子供を殺し、その人にとって大切な人達を、一方的に殺して奪ってきたお前らが、人間の心を語るな」
「っ、それは――」
「全て自分が負うべき咎、なんてなまっちょろい台詞を吐くなよ？　お前のやった事は、全て獅子王の理想を叶うべきモノ、ならその責任も全て獅子王のモノだろうが」
「ち、違っ、違う！　それは違う！」
「何も違わないだろうが。お前のやった事は、獅子王の為という免罪符を使った――唯の大量殺戮だ。同罪なんだよ、お前も獅子王も」
踵を返す。ランスロットを地上に逃がし、脅威と思われていたアグラヴェインも、既に満身創痍。修司が自ら手を下さなくとも、その内朽ちていくだろう。
無駄な時間を使った。これ以上この男に関わる意味はないと、立香達の所へ向かおうとした時、修司は遥か頭上から力の奔流が広がっていくのを感じた。
――世界が捲れていく。他でもない、塔の天辺から。恐らくは獅子王が何かしたのだろう。固有結界とも違う世界の変質に、修司は舌打ちを打ちながら地上を見る。
どうやら、まだ地上には影響が出ていないのだろう。未だ戦い続けている山の民達に、不謹慎ながら安堵していると、修司は改めてアグラヴェインへ向き直る。
「続きがしたいなら追ってこい。その時は――獅子王諸とも、その湯だった脳天カチ割ってやるよ」
それだけを言い残し、修司は飛翔する。瞬間、裁きの光と白亜の防壁がぶつかり合うという光景が生まれるが、それを認識する余裕はア

グラヴェインには無かった。

その111　第六特異点

「――――答えよ」
修司と分かれてから少し、五分も満たない時間の中で走り続けてきた藤丸立香と、彼女に付き従ってきたサーヴァント達は、遂に獅子王の前へと辿り着いた。
玉座へ続く長い廊下をひた走り、大きな扉の先に広がる部屋。その中心にその王はいた。
尊大にして荘厳。太陽王とは別の意味で畏怖を憶える佇まい、黄金に靡く髪と、白銀の鎧に身を包んでいるその姿は、自分達の知る騎士王と良く似ていた。
「――――答えよ。お前達は何者か。何を以て我が城に。何を以て我が前にその身を晒す者か」
「我は獅子王。嵐の王にして最果ての主。聖槍ロンゴミニアドを司る、英霊の残滓である」
獅子王の声、それを耳にしただけで体が竦む。獅子王の言葉には人間としての暖かさはまるでなく、まるで機械を相手にしているかの様な印象だ。だというのに、マシュはギ呪アスを受けた様に全身が縮み上がる錯覚を覚えた。
（アレが獅子王――――聖槍を持ち続けたアーサー王……覚悟していたというのに、これほど恐ろしいとは……ですが、それでも――――私は、あの方を正視しないと！）
恐ろしい。自分の罪を、嘗て己が犯した過ちを前に、挫けそうになりながらも、ベディヴィエールは自身を鼓舞した。
「――――答えよ。お前達は私を呼ぶ者か。お前達は私を拒む者か。藤丸立香、遥かなカルデアより訪れた最後のマスター、その片割れよ。お前は、何の為にこの果てに訪れた？」
「……人理を、貴方を止める為に来た！」
凍てつくような視線を前に、立香は正面から答えた。全ては人理を

修復し、その先で待つ魔術王に挑むためだと、彼女はハッキリと口にした。それが、目の前の獅子王を殺すという意味だと、理解した上で。
「――――成る程。強い眼だ。余程例の山吹色の男を信用しているのだな。だが残念だ。お前は、聖槍には選ばれない」
「その魂は善を知りながら悪を成す。善にありながら悪を許す。それは悪と同義だ。我が足下まで辿り着いた、最新の人間に期待したが――――死ぬがよい。私の作る理想都市に、お前の魂は不要である」
「――――では、円卓を解放する。見るがいい。これが最果ての波。世界の表面を剥いだ、この惑星の真の姿だ」
瞬間、魔力の嵐が吹き荒れ、その場にいる全員の視界が塞がれる。やがて荒れ狂う魔力の暴風は収まり、次に立香達が目にしたのは……荒波、〝世界の果て〟と呼ばれる断絶された場所だった。
その光景にダ・ヴィンチは目を見張る。彼女は、始めから世界の果てで待っていた。つまり、それは最初から、何時でも世界を閉じる事が出来たという意味。これ迄の戦いは、獅子王の慈悲の上で成り立っていたのだと、ダ・ヴィンチはその事実を前に悔しさを覚えた。
しかし、そんな事は関係ない。玉座から立ち上がり、槍を手にする獅子王を前に戸惑うマシュを振り切りながら、藤丸立香は再び叫ぶ。
「うるさい！　私の価値を、お前が勝手に決めるな！」
「せ、先輩!?」
「何が理想都市よ、大勢の人間を殺して、沢山の人達を悲しませて、自分の都合の良い人間だけを選抜して……貴方のやっている事は人類の救済でも何でもない！」
獅子王と円卓軍。この特異点で彼等の行ってきた蛮行を前に、憤りを感じていたのは修司だけではない。彼と同じ、人並みの感性を持つ立香もまた、獅子王に対して鬱憤を募らせていたのだ。
相手が獅子王だろうが、騎士王の成れの果てだろうと関係ない。超常の存在たる獅子王に対して、真っ向から言い放つ立香に、ダ・ヴィンチは良いものを見たと拍手喝采とばかりに捲し立てた。
「ひゅう、なんてクソ度胸だ！　サーヴァントではあの神格には萎縮するというのに！　でも、言ってやれ言ってやれ！　それは人間であ

る君にしかできない事だ！」
「どうして世界を閉ざそうとするの!?　なんで、そうまでして貴方は世界を終わらせようとするの!?」
ダ・ヴィンチの後押しを受けて、立香は言葉を続ける。何故、どうしてと、獅子王が山の民や太陽王を敵に回してでも成し遂げようとしている――――自称、人類の救済。その理由を訊ねる立香に獅子王は目を閉じ、失望したと言わんばかりに溜め息を吐き出した。
「……理由か。どんな時代であれ、人間（お前達）はそれを聞きたがる。私が世界を閉じるのは、人間（お前達）を残す為だ。ある者の大偉業によって、この惑星の歴史は終了する。人理は焼却され、人類史は無に帰される。だが、それは私の存在意義に反する」
「我らは人間達によって生み出されたもの。神は、人間なくして存在できない。故にお前達を残す。何を犠牲にしても護る。――――これは私の意思だ。魔術王が自由（すき）にするのなら、私も自由（すき）にすると決めた」
「あぁ、告白しよう。ずっと、私はそうしたかった。お前達を愛している。お前達が大切だ。だから、お前達（人類）を失うことに耐えられない」
それは、獅子王の告白。心からの本音だった。人間を愛し、真に大切だと想っている。例えあらゆる犠牲を払おうとも、人間に永遠を与えるのだと。後世に残し、いつか訪れる誰かにこの様な種族がいたのだと。
故に、獅子王は選び取った。悪を成さず、悪に触れても悪を知らず、善に飽きる事なく、また善の自覚なきもの達。この清き魂を集め、固定し、資料とする事で永遠に価値の変わらぬモノとして、己の槍に納めるのだと、獅子王は臆面もなく言った。
それを聞いたとき、ダ・ヴィンチも、マシュも、ベディヴィエールも、立香も、果てはカルデアにいる全ての者達が驚きを顕にするが、一部の……特に、英雄王は酷く落胆した様子で嘆息を溢していた。
「これの――――何が間違っている？　私の偉業は、全て人間（お前達）の為なのに」
「……ふざけないでよ。そんなの、ただの標本じゃない！」

「そう思うか？　盾の英霊よ。定められた命の中でも、更に限りある命とされた者よ。お前ならば、私の言うことにも理解できるのではないか？」
獅子王の行いは、単なる標本。そう言いきる立香に早々に見切りを付けた獅子王は、話の矛先をマシュへと向けた。獅子王はマシュの寿命を、造られた命であるが故に短命であることを既に見抜いていた。残りの時間が短い彼女ならば、自分の言いたいことも理解できるだろうと、僅かな期待を乗せて問い掛けると……。
「……そう、ですね。確かに、貴方の選択も一つの最善なのでしょう。滅び逝く世界を前に、出来る事は少ない。それなら、残った命を必死に守り通す。それもまた、王に求められる素質なのでしょう」
「……そうか、ならば――――」
「だけど、私は思うんです。いつか尽きる命だというのなら、だからこそその刹那の時間を、精一杯生きようと。無駄かもしれません。徒労に終わり、意味もなく死を迎えるのだとしても……私は、最後まで生きてみたいと、そう、思うんです」
「……それが、価値のないモノだとしても？」
「だとしても……です。私は、最期まで、私の思うがままに、生きようと思います。それが例え――――貴方と相対する事に、なるのだとしても」
強く、澄んだ瞳だった。自分の終りが近い事を理解しても、それでも尚、自分の思うがままに生きたいと口にするマシュに、ダ・ヴィンチは今回の旅で一番の驚きを露にしていた。
そして、うっすらと笑う。あの無垢な少女が、ここまで自分の我を押し通せる様になったのだと、万能の天才ダ・ヴィンチは嬉しく思えた。
対する獅子王は、無言になる。自身の救いを振り払い、要らないと断じられた事実に、彼女の腹は決まる。もう、自分に理解者はいない。ならば後は最後の仕上げを行うだけだと、聖槍の化身である獅子王――――否、女神ロンゴミニアドは自身の力を解放していく。
奔流する魔力。それは遥か遠くのカルデアにまで届き、立香達を観

測しているシバが数枚吹き飛んでいく程。映像も乱れ、不明瞭となったモニターにロマニは慌てふためく。
『うわぁ!? し、シバが数枚吹き飛んだ!? 獅子王の魔力は、カルデアにまで届くというのか!?』
「いいだろう。ならば、この一撃を以てお前達を葬ろう。お前達の消滅を以て、最果てを解き放つ。私は嵐の王。常世から大地を飲む荒波。世界の果て、そのものである」
「……だが嘆くな。それが、人間(お前達)の幸福である」
嵐が、世界の果てにて吹き荒れる。世界を揺るがし、世界に終わりをもたらす終焉の一撃。それを前に……。
「それは、違う!」
「私は、私達は、貴方の幸福を認めません!」
二人は吼える。まだ幼くて、未熟で、不格好でありながらも、二つの命は女神に向けて吼え立てる。
「何故なら、私達は! この時代で、多くの命を見てきたから!」
「子供を助ける為に命を落とした人がいた! その事を嘆く人がいた!」
「そして――――それでも、生き続けると。自分が生きている限り、お母さんの人生は続くと顔をあげた人がいました!」
「終わりは無意味なものじゃない! 命は先に続くんだ。その場の限りのものじゃなく!」
二人は見た。凄惨な現実を、残酷な運命を、どうしようもない……絶望を。
そして、同じくらい眩しいものを見た。大切な人を奪われ、嘆きの底に落ちても、それでも立ち上がる命の輝きを。
「いつまでもいつまでも、多くのモノが失われても、広く広く繋がっていくものなのです!」
「ロンゴミニアド! 貴方が荒波で、世界の果てだと言うのなら!」
「私達は、全力でこれと戦います!」
故に、二人は立ち上がる。世界の果て、その一撃を真っ正面から受けて立つと!

「いいだろう。では見せてやろう。我が聖槍の呼ぶ嵐。世界の皮を剥がした下にある真実を！」
――そして、槍は輝きを放つ。
「聖槍、抜錨。其は空を裂き地を繋ぐ嵐の錨――」
空が渦を巻く。逆巻き、荒れ狂い、その全てが槍の中へ収束されていく。
「最果てより光を放て……！　ロンゴ、ミニアド――！」
空が堕ちてくる。天に光が覆われ、全てを無に帰す滅びの光。避けるのは不可能――否、元より二人は逃げるつもりなどなかった。
脳裏に浮かぶのは、一人の英霊。自分達の為にその身を捧げた偉大なる弓の英雄、自分達は彼の様にはなれない。でも、きっとこの光に立ち向かった時、彼もこの様な気分だったのだろうと、マシュと立香は不敵に笑う。
「やるよ、マシュ！」
「了解です。マスター・藤丸立香、私に力を……！　見ていて下さい所長――今こそ、人理の礎を証明します!!!」
藤丸立香の令呪が光り、放たれる魔力の全てをマシュへと注ぎ込んでいく。迫り来る終幕の光、あの時と同じ、決して避けられない死の運命。
頼みの綱の彼はいない、この場には自分達しかいないのにそれでも何故か……負ける気はしなかった。
「其は全ての疵、全ての怨恨を癒す我等の故郷――顕現せよ、〝いまは遥か理想の城（ロード・キャメロット）〟!!」
――落ち行く聖槍の光の前に、白亜の城が顕現した。

◇

――――出し切った。マシュに秘められた英霊の力、盾の英雄であるギャラハッドの力を、マシュ＝キリエライトは今度こそ十全に引き出して見せた。

〝いまは遥か理想の城（ロード・キャメロット）〟　その性質は守護。その持ち主の精神が、心が強く在る限り、決して壊れない白亜の城。そんな嘗て円卓の騎士達が夢見、騎士達の王もそうあって欲しいと願って築き上げた……遥か遠き城。

その光景を、カルデアの医務室で待機していた騎士王の目にも届き、静かに涙を流していた。嗚呼、あれこそが嘗て我等が抱いた情景、失われた筈の騎士達の集う円卓の城。

そして、そんな白亜の城は獅子王の裁きの一撃すらも耐えて見せた。魔力の残滓となって霧散していくマシュの宝具、されど彼女が顕現させた白亜の城には……一切の綻びが見受けられなかった。

マシュの持てる全ての魔力と、立香の令呪によるブースト。これら全てを出し切った二人は、互いに肩を貸し合いながら地に膝を着ける。

そう、自分達は全てを出し切った。意識を保っているのが難しい程に、持てる限りの全てを使い切ったのだ。

だから――――。

「あとの事は……お願いしますね」

「おう、任せておけ」

いつの間にか隣に立つ山吹色の男――――白河修司に、立香は手を伸ばす。手を貸して欲しいのかと、修司も手を伸ばすと。

パンッと、小気味の良い音と共に手を叩かれる。一瞬だけ目をキョトンとさせる修司、そんな珍しい反応を見せる彼が面白くて、立香は笑うと……今度こそ意識を手放した。

「ダ・ヴィンチちゃん、二人の事、頼む」

「あぁ、任せたまえよ。二人の事は私が全霊を以て護るとも」

バトンタッチ。後の事の全てを修司に託したと、一時の間だけ眠りに付いた二人。そんなマシュと立香をダ・ヴィンチに預けると、修司は獅子王へ向き直った。

「貴様が、山吹色の男か。人の身でありながら、我が円卓を退ける膂力。認めるしかないだろうな、貴様の力はもはや英霊の枠組すら当てはまらない」

「……別に、どうだっていいんだよ。そんな事は」

「――なに？」

言いたい事は沢山あった。人類の救済というお題目で、大量虐殺を果たした事、太陽王や山の民、多くの協力者を得られる道もあった筈なのに、数多ある道を模索しなかった事、ガウェインやランスロット達以外の円卓の騎士達の事、訊ねたい事や糾弾するべき事は幾らでもある筈なのに……今は、全てがどうでもいい。

滅びの光を前に、一歩も退かずに立ち向かった二人を見てしまえば、自分の罵詈雑言の言葉など流されてしまうのは当然と言えるだろう。

「獅子王――いや、女神ロンゴミニアドか？　取り敢えず今は一つだけ聞いておこうか。……アンタは、人の可能性を、命の輝きを、どうして其処まで蔑ろに出来る？　どうして、誰かを信じようとしなかった？」

「可能性？　なんだ――それは？　そんなものになんの意味がある。そんなモノに、どのような価値があるというのだ」

故に、その言葉を聞いて修司は改めて安堵した。

――嗚呼、思った通りで良かったと。

「そうか。それがお前の答えか」

「ならば、どうだというのだ。人の可能性？　そんな不確かなモノに賭けて、一体それがなんだというのだ！」

獅子王が苛つき始める。神の如き視点を得ても、白河修司という男の言葉が理解できないらしい。神霊という位階に魂の格が繰り上がった事で失った弊害、感情を露にする獅子王に、遥か彼方に座す英

雄王は不敵に鼻で笑い薄ら笑う。
そして、そんな神霊を前に……。
「獅子王、或いは女神ロンゴミニアド。お前が人の、命の可能性を切り捨て、自分のエゴを押し付けるというのなら――」
先ずは――
「そのふざけた幻想を、テメェの得物諸とも――ぶち壊す」
宣戦布告を口にするのだった。

その112　第六特異点

「――――吼えたな、人間」

魔力が迸る。修司の宣戦布告を受けた獅子王は、自身に秘めた力を解放し、嵐となって玉座を蹂躙していく。表情こそは無感情のままではあるが、口端から溢れ落ちる感情の吐露は隠しきれていない。

初めて明確に露になる獅子王の感情、そんな彼女とは対称的に、修司の口元は不敵に歪む。

「早々に魔術王に勝てないと知って尻尾を巻いて逃げた王なんだ。そりゃ吼えるだろ」

嘲りの混じった皮肉、やれやれと肩を竦めて事実を事実のまま口にする修司に、獅子王は初めて憤りを自覚し――――気付けば、彼女の手にした聖槍は修司の心臓目掛けて振り放たれていた。

獅子王から初めて見せた攻撃の挙動だが、如何せん速すぎる。音を超え、己の膂力と魔力によるブーストを掛けて行う獅子王の突撃（チャージ）。

しかし、そんな女神の一撃は防がれる。他ならぬ、彼女にとって保護対象でしかなかった人間の手によって、聖槍の尖端が握られている。

「なんだよ今の動きは？　もしかして、不意討ちのつもりだったのか？」

「――――っ！」

素手、それも片手で簡単に受け止められた事実に獅子王は驚きを露にするが……すぐに目の前の人間の評価を改める事で平静を保ち始める。相手はこれ迄、幾度となく自分達に立ち塞がってきた強者だ。自分が側に置いていた騎士達の全てを悉く蹂躙してきた猛者だ。そんな奴にとって、この程度の芸当は造作もないのだろう。

握り締めた修司の手を振り払い、距離を取る。身を屈めて戦闘態勢となる獅子王に対し、修司は何処までも自然体だった。

「人間、お前は言ったな。私に逃げていると、何故そう思う。滅びる事が確定したこの世界で、何を以て望みがあると言い切れる？　幻想の

ような希望にすがり付いて、他者を巻き込んで自滅するのが、お前の言う可能性なのか？」
聖槍ロンゴミニアドを手にし、神の視点へ辿り着いた獅子王は世界の終りを目撃し、その光景を受け入れた。受け入れるしかなかった。
この世界に可能性もなければ希望もない。ただ定められた必然しかないのだと、魔術王による人理焼却は完成されている。今更足掻いた所で意味はなく、どれだけ泣き叫び、喚こうとも覆ることは有り得ない。終わるのではなく、終わった事を覆すのはどんな奇跡を用いても不可能に近い。
そんな芥子粒にも満たない可能性の為に、残された人類の全てを掛けて抗うなど……無駄でしかない。覆らない事実に抗い、救える命を見捨てては本末転倒も良いところだ。だったら、限りある命を確実に救済し、永久的に保存して管理する方が余程現実的と言えるだろう。
なのに、目の前の男はそれを全く考えようとしない。可能性という未知数で不確かなモノにすがり、依存していては諸とも破滅を迎えるのが関の山だ。そんなモノは希望とは呼ばない、そんなモノに縋って破滅をもたらす愚か者に、逃げたなどと侮辱される謂れはない。
しかし、そんな内心で憤る獅子王とは余所に、修司はただ呆れ、首を横に向ける。
「だったら、お前一人で勝手に消えれば良かっただろうが。私は魔術王には勝てないと思うので、一足先に消滅しておきますってよ」
自分が諦めるのはいい。誰も共感を得ないだろうし、諦めた本人も其処まで気持ちを固めた以上、闇雲に理解されたくはないだろう。無駄の抵抗を止めて大人しく死を待てば良いし、都合良く救われるのも待てば良い。
だが、獅子王はそうじゃない。魔術王には勝てないと分かると、その達観のツケを他者に押し付けた。聖抜という儀式で自分の都合の良い人間だけを選び、他は残さず虐殺するという悪辣さ、それはこれ迄の特異点の中でも群を抜いて唾棄するモノだった。
「もしくは、誰かに全てを丸投げするのも良かったかもな。自分では

どうしようもないから、他に頼れる人に全て託してよ。それこそ、太陽王に円卓を託したりしてな」
「太陽王……だと？」
「おお、もしお前が円卓の騎士達と一緒に太陽王の手下にでもなっちまえば、この特異点の難易度はもっと跳ね上がっていただろうよ。例の十字軍ももっと楽に倒せたと思うし」
修司達カルデアの一行がこの特異点に辿り着く以前に円卓の騎士は十字軍と戦い、獅子王との戦いも勝利した。が、その代償は決して小さくなく、その戦いで円卓は予想外の犠牲を払うことになった。
その真相は修司にも分からない。だから、他に姿の見えない円卓の騎士達が十字軍の戦いで消滅したのではないかという結論に至るのも、仕方のない事。
というか、状況的にそれしかない。十字軍の軍勢がどれ程強大で手強いモノだったのかは、直接相対した訳ではない修司には推し量れる事ではない。だが、もし其処で太陽王と同盟でもしていれば、円卓や太陽王はもっと万全な態勢で自分達を迎え撃つ事もできたのだ。
次の第七特異点と、その先に待つ魔術王。勝てるとは限らなくても、挑む前準備程度は出来た筈だし、或いは……もっと別の道の可能性だって開けた事だろう。それだけの可能性があの王にはあった。
「私が、太陽王に劣る？　酷い侮辱だ。一体何を以て、貴様はそう言い切れる？」
「実績」
即答。怒りに声を震わせる獅子王に修司は即答で応え、これに獅子王は面喰らう。カルデア越しに見ていたロマニは勿論の事、多くのサーヴァント達がアチャーと顔を覆っているが、英雄王だけはカラカラと笑い声を張り上げ、聖女にシバかれていた。
「実績……だと？」
「いや、なに意外そうな顔をしてるんだよ、当たり前だろうが。片や国を次代へ繋ぎ、数多くの栄光と繁栄を築いた王。片や最初から最後まで外にも内にも敵を作って、最終的に身内のいざこざで滅んだ国の王。ほら、語るまでもないだろ？」

本気で分かっていない様子の獅子王に修司は可能な限り丁寧に説明を口にした。確かにブリテンのアーサー王には多種多様の伝説が存在し、一見すれば誰もが羨む時代なのだろう。

だが、当時のブリテンは度重なる戦いに大地は困窮し、それでもブリテン各国の王達は戦いを止める事は出来なかった。それを諌め、真なる王として立ち上がった騎士王には頭が下がる思いだが、端から見ればそれは不幸の始まりにも見えた。

騎士王は確かに頑張ったのだろう。ブリテンの各地に起きる戦いを平定し、ヴォーティガーンなる邪竜を討伐したのも見事と言えよう。だが、それらの功績を覆して余りある負債がブリテンには存在していた。

ブリテンという土地の疲弊、加えてローマやサクソン、ピクト人等の侵略者の対応、他にもアーサー王に与しない王達の暗躍など、問題は腐るほどあった。

極め付きは、妖妃モルガン。アーサー王伝説において避けては通れない彼女に至っては、先代ウーサー王や魔術師マーリンの所為で魔女と呼ばれる存在になったと言っても過言ではない。

他にも数々の負債と地雷が敷き詰められた大地、それが当時のブリテンだ。無論、その全てがアーサー王の所為だと言わないし、言うつもりもない。だが、アーサー王が繁栄を齎した経験のない王だというのも、紛れもない事実なのだ。

今一度言おう。繁栄を齎し、次代へ繋げた王と滅びた国の王。環境や時代の影響があったとしても、二人の王の間には隔絶とした差が存在しているのだ。

「理解したか？　お前と太陽王とは、比べる事すら憚れる決定的な差があったんだよ。それもまぁ知りもしないで……よくも太陽王（あの御方）を下に見れたモンだよなぁ!?」

獅子王の言う酷い侮辱。それを太陽王と獅子王を比較して言っている事なら、それこそ太陽王に対する酷い侮辱だ。彼の王は、苦悩していた。滅びが確定したこの世界で、それでもなんとか民草と共に生き延びさせようと思案を巡らし、砂漠の民達を可能な限り保護し、害

意となる騎士達には貴重なスフィンクスの聖獣達を惜し気もなく解き放った。
全ては自国を護る為、神の教えに倣ったやり方ではあったけれども、彼の王が下した決断には確かな人間の情が秘められていた。
そして、太陽王は修司が仰ぎ見る英雄王が同格と認めるファラオだ。そんな彼が貶められる事は即ち、英雄王が侮辱されたのも同じ、そういった意味でも獅子王の言動は修司にとって許容出来ないモノだった。
「――もう、いい。貴様はもう黙れ、お前の言いたい事は分かった。もう、充分だ」
「ハッ、なんだ意外とメンタル脆いな獅子王さんよ？　散々人を見下しておいて、いざ図星を突かれるとそれか。ああ失敬、今は女神だったか？　なら人間の言葉に耳を貸さないのも当然かぁ!?」
「おぉう、修司君が嘗てない程に荒ぶっている」
『……アレはああ見えて、人の事は其処まで悪く言わない質なのだがな。今回ばかりは腹に据えかねているらしい。気をつけたまえよ、ああなった奴は普段以上に容赦がない』
「アレ？　エミヤ君？　ロマニは？」
『今しがた医務室に向かった。二人の騎士王がショック症状を引き起こしてな。ナイチンゲール女史と一緒に手当てをしてる最中だ』
「ｏｈ」
相変わらず全方位に向けて被害を出す修司だが、今はその事を追求するのは止めておこう。
「ドゥン・スタリオン!!」
ダ・ヴィンチが修司の口撃に絶句するなか、獅子王は叫ぶ。すると、嵐の向こうから蹄の鳴る音が響き渡り、獅子王の下へ一頭の白馬が顕れる。
ドゥン・スタリオン。ラムレイと対を為すアーサー王の愛馬が、獅子王の呼び掛けに応えた。在り方が歪み、嘗ての主とはかけ離れていようと、獅子王に頭を垂れて騎乗を促すその馬は……紛れもなく、アーサー王の忠臣であった。

獅子王がドゥン・スタリオンの背に跨がる事で、威圧感はより増していく。見下ろし、無表情でありながら怒りを顕にしてくる獅子王に対し、修司は不敵な笑みを浮かべた。
「――――山吹色の男、我が怨敵よ。最早貴様に事の善悪の問答はすまい、貴様が私の道を阻むと言うのなら、その肉片一つ残さず消し飛ばしてやろう」
「やれるもんならやってみろ」
不遜。獅子王に対する修司の態度は何処までいっても変わることは無かった。
そして――――。
「いいだろう。ならば、お前の全てを否定してやる。お前という悪を滅ぼす為に、私は全霊を以て挑むとしよう」
駆ける。ドゥン・スタリオンの手綱を引いて、獅子王は空高く舞い上がる。――――結局、修司の言葉には何一つ満足に返すことが出来ないまま。
軈て、聖都全体を見下ろすまで飛んだ獅子王は、聖槍の力を解放する。膨大な魔力の奔流、マシュと立香が死に物狂いで防いだ裁きの光が、再び地上に向けて力を収束し――――。
「私の世界に、貴様という人間は必要ない。消えろ!!」
「ロンゴ――――ミニアド!!」
獅子王の怒りに満ちた光の鉄槌が下された。

◇

――――迫る。大きく、巨大な光の奔流が、修司という一人の人間

を消す為にその力を惜し気もなく押し寄せてくる。圧倒的質量と魔力量、その規模はあのカルナの宝具すらも凌駕する勢いだ。
これが神霊。人間では決して敵わない神秘の領域――――しかし、その男は何処までも不敵に笑っていた。
獅子王は、人間の可能性を否定する。可能性という不確かで、曖昧なモノには頼らず不要と断じるその姿勢、ならば自分こそが獅子王の芯を折るのに相応しい。
「ベディヴィエール」
「っ！」
「聖槍は、俺が砕く。その後の事は……お前次第だぞ」
落ちてくる裁きの光を見上げながら、これ迄沈黙を保っていたベディヴィエールに声を掛ける。その意味深な言葉が何を意味しているのか、ダ・ヴィンチには分からない。ただ……。
「はい。ありがとう修司、あなたという人間と出会えて、私は幸福でした」
何か、気持ちを固めたらしい。そんなベディヴィエールを一瞥しながら、修司は空を飛ぶ。迫り来る破壊の光に向かって、一直線に。
もう衝突まで時間がない。空を覆う巨大なエネルギーを前に、修司の動きは停止する。目を瞑り、意識を深く研ぎ澄ませる彼の前には……一つの扉が聳え立っていた。
鍵はない。掛けられていた錠は既に消え、あるのは古びた取っ手のみ。これが自分の可能性だと言うのなら、この扉の先にこそソレはある。
触れる。扉の取っ手に触れた瞬間、修司に流れ込むのは一つの光景、数多の敵と戦う鋼の勇者達の情景。現代の技術力では、到底敵わない未来の映像。
否、それは遠い未来の話ではない。極めて近く、限りなく遠い光景の一つなのだと、修司は心で理解した。
彼等も、可能性を信じて戦う者達だというのなら、自分も負ける訳にはいかない。
――――力が宿る。淡く輝く光を纏い、修司は迫る光の尖端に向けて

拳を突き付ける。
「行くぜ獅子王、これが――人間の力、お前が不要と断じる可能性の力だ！」
選択するのは、一つの力。無茶を通して道理を突き破り、天も次元も突破する無限の体現。
渦を描く。修司の突き出した拳を軸に、光が集約し――軈て、一つの形を生み出していく。奇しくも、獅子王の奮う槍と似た形状のソレは。
「ギガァ――」
「ドリルッ！」
「ブレイクゥゥゥッ!!」
ドリル。螺旋を描き、無限に続く力の奔流は、獅子王の裁きの光を巻き上げ――獅子王の持つ聖槍ごと、打ち砕いた。
「バカな」
獅子王の呟き、呆然となった彼女が次に味わうのは……。
「お前の世界なんて……此方から願い下げだッ!!」
振り抜かれる修司の、拳の痛みだった。

その113　第六特異点

〝……という訳さ。あの特異点に現れたアルトリアは、それはもう大変な事になっている〟

〝伝承にあるワイルドハント。嵐の王。死者達を率いて顕れる、亡霊の王だね。無論、それは後から彼女に付けられた逸話の一つだ。ワイルドハントの該当者は他にもいる〟

〝でも、あのアルトリアは別物だ。本当のワイルドハントになってしまった。正確に言うと本物のアーサー王じゃない、けどね。或いは、ある食い違いが元で変質してしまったアーサー王だ〟

〝本来なら顕れる筈のない偽物、それが特異点の影響で現れてしまった。……それとも、あのアーサー王の方が本物で、ボクたちの知っているアーサー王が偽物なのかな？〟

〝亡霊の王として地上に残ったアーサー王。未来の王としてアヴァロンに運ばれたアーサー王。私が知っているのは無論、アヴァロンのアーサー王だ。でも君が知っているのは――〟

何処までも広がる草原。穏やかで、現世とは隔絶された約束の大地。そこで声を掛けてくるのは永遠に塔に幽閉された魔術師。彼が問い掛けてるのは、嘗てルキウスと名乗る誰かの騎士。

「……地上に残ったアーサー王です。ですが、私には見付けられなかった。ずっと探し続けたものの、出逢う事はなく私はここに流れ着き、生きた屍になっていた」

それは、懺悔の言葉だった。彼の慕う王の最期の願いを聞き入れず、子供の様な我が儘で拒絶した――愚かな騎士の悔恨の言葉。

〝ああ、その通りだ。君は運がいい。いや、悪いのかな？　妖精達はずっと噂していた。アヴァロンの端に人型の岩があるってね。いつの間にかあったもので、誰もこれの由来を知らない。どうやら人間らしいんだけど、怖ろしい事に生きている〟

〝生きているけど動けない。肉体はボロボロ、魂は燃え滓。まさに

生きる屍だ〃
人は、生まれながらにして魂の限界値が存在している。喩え魔術の力で老化を防ぎ、寿命を延ばしたとしても、核となる魂は生きている限り消耗し続ける。稼働し続ける魂は軈て腐り、その人の人格を汚染し、遂には肉体その物を腐蝕させていく。
目の前の人の型をした岩だった⊠も、その慣れの果て。気の遠くなる様な年月を生き続け、その果てにアヴァロンに辿り着いてしまった迷い人。しかし、その魔術師は心底驚いた。
〃でも、驚くべき事に精神は尽きてはいなかった。その岩は物凄い執念で、まだ自分が死ぬ事を許さなかった。……分かるねルキウス？　それが君だ。特異点によってアヴァロンに現れた、どこか別の末端世界の、有り得たかもしれない可能性〃
呆れた様な、嬉しい様な、悲しい様な、……或いは、寂しい様な眼差しで花の魔術師は告げる。
〃ルキウス――――いや、懐かしのベディヴィエール卿。おはよう。そしてこんにちは。起き抜けで悪いんだけど、こっちも時間が無くてね。私はいつも通り、とても残酷な事を君に言うよ〃
〃君は、まだ戦えるか？　自分の使命を、まだ実行できるかい？〃
肉体はとうの昔に尽き果て、魂も燃え滓寸前。遥か昔から続く肉体という器を、ただの精神力だけで支え続けた騎士に、花の魔術師は問い掛ける。戦える気力の有無を、その果てに待つ騎士の終わりを。
「――――無論です。そのために、私はここまでやってきたのですから」
決意に満ちた顔なのか、悲哀に沈んだ顔なのか、それとも安堵に浮かぶ笑顔なのか、それは目の当たりにした魔術師にしか分からない。
けれど、彼の抱く覚悟だけは、あの頃から何一つ変わっていなくて……。
〃そうか。……そうか。それじゃあ私から餞別だ〃
花の魔術師――――マーリンはやはり、花のような微笑みを浮かべるのだった。
〃まず、君には誤魔化しの魔術をかけよう。誰が見ても君の正体に

気付かない様に。どんな英霊であっても、君の真実に気が付かないように〃

マーリンがベディヴィエールに施すのは、人の目を欺くモノ。余程の理不尽が相手でない限り、喩えモルガンであっても初見では見破れない誤魔化しの魔術。

〃何故そんな魔術をって顔だね。簡単な事さ、君の正体が分かったら、彼等は全力で君を阻むからさ。彼等だってバカじゃない。モードレッドは馬鹿だけど。君の真実を知れば、獅子王の真実にも気付く〃

〃彼等は絶対に君を獅子王には近付けないだろう。そして獅子王は、君をもう覚えてはいないだろう。君は一人きりで獅子王に謁見し、否定される前に事を成さなければならない〃

〃とても、とても孤独な旅だ。でも、そういうのには慣れているんだろう？　だって君は既に――――気の遠くなる様な年月、旅を続けてきたんだから〃

それは、マーリンなりの激励のつもりだったのかもしれない。既にこれ迄の旅路の中で肉体と魂の両方が尽きようとしている嘗ての円卓の同胞、そんな彼が成し遂げようとしている贖罪の旅。

その終わりに向けての出来る限りの応援。らしくないのは知っている、けれど、流石のマーリンでも目の前の騎士を雑に扱う事は出来なかった。

〃――――最後の確認だ。この旅の結果、どうあろうと君の死は免れない。魂を使い果たし、輪廻の枠から外れ、君という存在は虚無に落ちるだろう〃

だからこそ、今一度魔術師は問う。

〃それでも――――まだ、君は旅の終わりを目指すのかい？〃

「――――はい。私の精神（こころ）は、今も彼の王の光の為に」

この旅の果てに、ベディヴィエールという存在は消滅する。一切報われる事なく、いっそ無価値だと断じられる程に――――。

しかし、それでも彼の騎士はハッキリと口にした。喩え自分の最期が報われる事のないモノだとしても、きっと……そこには、確かな意味があるのだと。

その曇り無き決意の顔に、マーリンも笑みを溢した。
円卓最後の騎士、ベディヴィエール。決して報われる事なく、消滅を確約された彼の騎士の右腕には……彼の罪を現す、白銀のアガートラムが輝いていた。

◇

「――あ、う……」
一体、自分は何をしているのだろう。どうして、空を見上げているのだろう。この特異点で目覚めてから初めて目にする青空に、獅子王の思考は徐々に覚醒していき……思い出す。
そうだ、自分はあの男……山吹色の男と戦っていた筈。忌々しく度しがたいあの男を消す為に自分は愛馬であるドゥン・スタリオンと共に空を駆け、自身の出せる力の全てを解き放った。
……最後に憶えているのは、無機質な掘削機。通称ドリルと呼ばれる工具が、自分の放つ魔力の塊を突き破ってくる光景だ。
（まさか……負けたというのか？　私が、獅子王である私が――）
到底受け入れ難い現実、星が造り上げた神造兵器が、あの様な掘削機に負ける筈がない。しかし、既に光の粒子となって消えていく聖槍と、獅子王の右の頬に刻まれる鈍い痛みが、それらが事実であることを告げている。
「よぉ、目ぇ覚めたかよ獅子王さんよ」
「っ!?」

「ざっと、２０秒って所か？　随分と呑気に寝ていたみたいだけど……どうだ、少しは現実を思い出したか？」
獅子王が目を覚ましたことを察し、覗き込んできた山吹色の男――――白河修司が、獅子王に現実を突き付ける。２０秒という時間の合間、一切手を出すことはせず、修司は目が覚めるのを待ち続けた。
全ては、獅子王に決定的な事実を突き付ける為に。
「一応説明してやるよ。俺に顔を殴られ、地に落ちたアンタは、俺に一切攻撃されずに２０秒もの間、呑気に居眠りしていた。さて、ここまで言えば流石のアンタも理解できるだろ？」
「わ、私は……」
「お前の敗けだよ獅子王。誰よりも真実に近く、神のごとき視点を得たらしいアンタは、自分の庇護の対象である人間に負けたんだよ」
敗北。その言葉の意味は獅子王にこれ以上ない程に衝撃を与えた。生殺与奪を握られておきながら、指一つ触れてはいないという事実。目を剥いて唖然としているが、頬に残る痛みが紛れもない現実であると証明している。
そんな獅子王に一瞥すると、修司は後ろで最後の謁見に挑もうとしているベディヴィエールを見た。
「――――さて、取りあえず今はこの辺にしておこうか。後は、アンタの好きにしな」
「ありがとう。白河修司、此処までの旅路を一緒にできて……本当に良かった。藤丸立香とマシュ＝キリエライトにもお伝えください、皆との旅はとても……とても有意義なものであったと」
未だに立てる様子のない獅子王を尻目に、修司とベディヴィエールが交代する様にすれ違う。これ迄の旅の中で迷い、葛藤し、悩み続けていた一人の騎士の集大成。罪を犯した騎士の、最期の奉公。
その忠義がどれ程重く、ベディヴィエールの肩にのし掛かっていたのかなんて、修司には分からない。だから……。
「……実を言えば、俺はアンタが嫌いだったよ。多くの犠牲を目の当たりにしながら、それでも気持ちを固めないアンタに、ヤキモキしたのは一度や二度じゃない。煮え切らないアンタの態度に、俺はアン

タに何度も苛ついたモノさ」
「――――」
「でも、アンタは選んだ。その道の果てに自分がどうなるのか、知った上でアンタは選びとった。だから、アンタのその選択はきっと……間違いじゃない」
ただ一つ、修司はベディヴィエールに言葉を送った。彼の騎士の犯した過ちを、その苦悩と苦痛に満ちた長き旅路を、その果てに待っている終わりを、小さな勇気で踏み出したベディヴィエールに、精一杯の言葉を贈った。
間違いじゃない。その言葉を背に受けたベディヴィエールは、薄く微笑んだ。
ベディヴィエールと修司、共に仰ぎ見る王は異なっていながら、それでも臣下とあろうとした⊠同士。交わした言葉こそ少なかったが、それでも互いに意識をしていたのは当然の事で……。
「じゃあな、ベディヴィエール。アンタこそ、忠義ある人間だよ」
修司が人間であるベディヴィエールに対し、尊敬の念を抱くのも――また、必然であった。
こうして、全てのお膳立ては整った。全てはただ、この時の為。自身の犯した罪と今度こそ向き合う為に――――。
「剣を摂れ、銀色の腕（スイッチオン・アガートラム）」
ベディヴィエールは、残る魂の残滓を燃やしながら、その輝きを解き放つのだった。

◇

「――――修司君。君は、知っていたのかい？」

ベディヴィエールの腕が光り、一つの形に戻っていく。幻想的で神秘的な光景、しかし同時に花の魔術師によって掛けられたまじないも解けていき、これまで隠してきた彼の真実が明らかになった。
彼は――――人間だった。ある聖剣の力で肉体の老化を防いできたベディヴィエールは、その聖剣を返す為に今日まで生き続けてきた。１５００年という途方もない時間、ただ一人の王に今一度出逢う為に、円卓最後の騎士は生き続ける道を選んだ。
ただの人間が其処まで長い時間を生きて、無事でいられる訳がない。魂は既に擦りきれ、聖剣の力で無理矢理生きているだけのただの肉塊。それが、ベディヴィエールという騎士の正体だった。
更には信じられない事に、ベディヴィエールはその状態を精神力だけで支えている。そんなベディヴィエールという騎士の惨状を目の当たりにしたダ・ヴィンチは、唖然とした様子で隣に立つ修司に訊ねた。
「――――最初は、ただの気の所為かと思った」
それは、修司がベディヴィエールと行動を共にしてから少しの間、山の民達が住まうとされる山岳地帯に赴く時の事。初代山の翁の力によって一部の地帯が全く感知できなかった時、修司はふと奇妙な気配を感じた。
それはまるで老衰間際の様で、いつ永眠しても可笑しくないような、そんな寿命を迎える人間の様な気配で、或いは死臭と呼べるような……そんな、不気味な気配。そんな気配がベディヴィエールから感じるのだから、当初は何かの間違いかと思っていた。
けれど、初代山の翁の試練を超えてから、修司の疑念はより強くなっていき、決戦前夜の時には自分の感じたものが正解だったと確信した。
……止めるべきだったのかもしれない。ベディヴィエールの義手である銀の腕、それが解放されれば彼の騎士は間違いなく死に果てる。マシュも立香もベディヴィエールに信頼を置いている以上、事情は話すべきだったのかもしれない。
けれど、彼が騎士王の事をどれだけ深く信じ、敬愛していたのかを

思うと、説得の言葉は修司の喉を通りすぎてしまっていた。
　これは、ベディヴィエールの贖罪の旅。ならば自分は最後まで見守ってやろうと思い、その時が来るまで自分が前に出て戦おうと決めたのだ。
「ダ・ヴィンチちゃん、アイツを責めないでやってくれ。アイツはただ、探していただけなんだよ」
　自分の犯した罪と向き合い、苦悩と葛藤に満ちた１５００年。贖罪の旅というには……余りにも重すぎた。
「全ては、たった一人の騎士が王の願いを拒絶した故に起きたモノ、獅子王の誕生の裏にはベディヴィエールという騎士の存在が関わっていた」
　アーサー王伝説に於ける最期。カムランの丘で瀕死の傷を負ったアーサー王は、最後に残った円卓の騎士に向けて聖剣の返還を頼んだ。
　そんな王の願いを二度に渡って躊躇い、そして――――本来ならば湖に返還される三度目もまた、ベディヴィエールは躊躇ってしまった。騎士王を死なせたくないという一人の騎士の我が儘によって、アーサー王は聖槍ロンゴミニアドによって神霊へと至ってしまう。
　全てはベディヴィエールという一人の騎士の迷いによって生まれた事。しかし、そんなベディヴィエールに対して、修司は其処まで悪感情を抱くことはなかった。
　それは同情か、憐れみか。ただ、修司から見てベディヴィエールは良く頑張ったと思う。自分の犯した罪と向き合い、吐きそうになりながらも歩みを止めなかったベディヴィエールに、修司は嫌悪感以上に尊敬の想いが強かった。
「自分の罪と向き合って、どれだけしんどくても歩き続けたその人生（忠義）、素直に尊敬するよ」
　脚は崩れてバランスを崩し、それでも跪きながら預かっていた聖剣を獅子王に還す。それが自身の最期であり、獅子王の終わりを意味しているのだとしても、彼の騎士は己に課された宿命を最期までやり通して見せた。

呆然としながらも、獅子王は渡された剣を手にする。瞬間、ベディヴィエールの肉体は今度こそ土塊となり、崩れ落ちて消えていく。その様子は砂上の城、或いはそれよりもっと脆く、ベディヴィエールだったモノは、風に乗って空へ消えていった。
「……ベディヴィエール卿の、完全消滅を確認しました」
「マシュ、それに立香ちゃんも、起きていたのかい？」
ベディヴィエールが消えるのと同時に、ダ・ヴィンチに抱えられていた二人から目覚めの声が上がる。その様子から、どうやらベディヴィエールが消える間際の事は見ていた様で、二人の表情には寂しさや悲しさという悲哀の色で満ちていた。
「……悪いな立香ちゃん。隠すつもりは無かったんだ」
「うぅん。仕方ないよ、ベディヴィエールさんは最期まで私達に隠し通すつもりだったみたいだし、私達も変に気を遣わせたくなかったしね。悲しいし寂しいけど……うん、これで良かったんだよ。きっと」
「――ありがとうございます。ベディヴィエール卿、貴方の事は絶対に……絶対に、忘れません」
達観ではなく。受け入れ、その上で良かったと安堵する立香と、これまで一緒に旅をしたベディヴィエールに祈りを捧げるマシュ。二人もこの旅で大分強くなったと納得して……改めて、獅子王へ向き直る。
「で？　どうする獅子王、その手に聖剣が戻ってきた今、もう一度俺と戦うか？　その様子だと自分が負けた事にまだ納得出来ていないみたいだし、俺は一向に構わんぞ？」
割れた円卓の席に最期までしがみつき、長い年月の果てに漸く使命を果たしたベディヴィエール。獅子王の手にはそんな彼から返還された聖剣が握られていて、嘗ての頃の様に光り輝いている。
その剣を使えば、もう一度獅子王は戦えるだろう。修司としては別にもう一度戦ってもいいし、なんなら聖剣ごとへし折ってもいいだろう。そんないつでも戦える様に身構える修司に対し、獅子王は刀身を見詰めるばかりでその様子はない。

何より、もう既に獅子王に戦意は無かった。その表情に冷酷な神霊の面影はなく、今日まで忠義を貫いていた騎士に対する慈しみで満ちている。
「――私の、負けだ」
そんな彼女の口から、アッサリと敗北を認めた一言が出てくるのも、意外と受け入れられた。負けず嫌いとして有名なアーサー王、獅子王へと変質した事でその辺りの気質が変異したのかは定かではないが、大人しく敗北を宣言した以上、修司からこれ以上手出しをする事はない。
敗北を認めた獅子王、そんな彼女の一言を皮切りに特異点の修正の波は瞬く間に迫ってくる。聖槍という特異点を歪めていた楔を破壊した事で始まる特異点の修正、同時にカルデアに帰還する予兆が始まる光が修司達を包み込んでいく。
「おっ、今回はいつもより早いんだな」
「多分、特異点の楔となっていた聖槍が破壊されたからだと思います」
「そうか、ならば私から一つだけ忠告をしておくとしよう」
「獅子王？」
既に体の半分は透明となり、意識も徐々に遠くなっていく。そんな中聞こえてくる獅子王からの忠告に、修司達は静かに耳を傾けた。
「人理焼却という大偉業を為し遂げた魔術王、彼の王の下へ辿り着くにはある聖杯に刻まれた座標が必要とされるだろう。その聖杯が在るとされるのはお前達が次に挑む特異点、そこに魔術王の玉座へ続く聖杯が存在する」
「魔術王が人理焼却の礎として人理に打ち込んだ最初の楔、それこそが魔術王の下へ続く標となるだろう」
「……そうかい。貴重な情報、ありがとよ」
「なに、私に勝った⊠に対するせめてもの報酬だ。……カルデアの戦士よ」
「修司だ。白河修司」
「――そうか。ならば修司よ、星見の戦士よ。次の特異点を攻略すれば、その先に待っているのはあの魔術王だ。私に侮辱の限りを尽く

した以上、負けるのは許さんぞ」
「別に、アンタの許しはいらないが……ま、最初から負ける気持ちで挑むバカは、此処にはいねぇよ」
立香もマシュも、共に敗北から此処まで登り詰めた戦友。次の特異点でもどんな相手が立ち塞がろうとも、決して諦めたりはしない。
「じゃあな獅子王。色々間違いだらけのアンタだけど、最後に一つだけ良いこと教えてやるよ」
「？」
「結果や過程はどうあれ。人の為に、人類の為に立ち上がったアンタの気持ち、それだけは――間違っちゃいねぇよ」
それだけを口にすると、修司達は修正の波に呑まれ、カルデアへと帰還していった。残されたのはただ一人、獅子王だけである。
聖槍が砕かれた以上、彼女の道程は此処で終わり。誰よりも人類の存続を願った歪な女神の願いは最後まで果たされぬまま、終わりを迎える。
けれど――。
「ベディヴィエール卿、我が最高の忠節の騎士よ。ありがとう、貴卿のお陰で……大事な事を思い出したよ」
遥か昔、選定の剣を台座から引き抜いたあの日に抱いた情景。それを思い出せた獅子王はどこか満足した様子で……崩壊していく城と共に消えていくのだった。

――定礎復元――

その114

√γ月δ日

第六の特異点の修復も完了し、レイシフトから帰還した翌日。自分達は例に習って医務室で簡単な検査を済ませると、ロマニから暫くは安静する様にと強く言い渡された為、今日は大人しく過ごしておくことにした。自分は別に通常業務に戻っても構わないのだが、そうすると立香ちゃんも素直に休めなくなる為、絶対に安静にしていろとロマニから強く言われてしまった。

本当ならカルデアに残っていたＧＮドライヴの作業を片付けたかったのだが、所長代理に言われてしまっては仕方がない。ので、今日はダラダラ過ごす事にした。具体的には、カルデアに在籍するサーヴァントやスタッフの皆と色々話をしたり、食堂や娯楽区画でまったりするなど、所謂暇潰しだ。

そして、ロマニの指示によって適当に休日を満喫していたのだが、今更ながらある事実に気が付いた事がある。

このカルデア、サーヴァント同士によるコミュニティが形成されているのだ。あらゆる神話体系問わず、あらゆる時代の伝説的英霊英傑が集うカルデアだが、如何にサーヴァントと言えど元は人間。こう言った事になるのは前から分かっていたとはいえ、改めて見るとこれが中々に面白い。

ギリシャ勢は主にケイローン先生を中心にヘラクレス、アキレウスなど大英雄が集結して結構和気藹々としている。

インドは専らラーマ君が主要人物扱い。本人は其処まで乗り気じゃないのだが……まぁ、仕方ないよね。カルナやアルジュナと言ったトンチキ組を御せるのは彼位しかいないし、元々一国の王だった事からまとめ役がうまかったりするのだから、こう言う立ち位置になるのはある意味必然と言えるだろう。

……ただ、何故かインド勢には時折絡まれたりするんだよなぁ。

自分を矢鱈と破壊神シヴァと関連付けようとしてくるし、そんなに似てますかね？　いや、神と思われても困るんだけどね。

そんで、エミヤやブーディカさん、頼光さんや清姫ちゃん、他にも玉藻さんなど料理組は日々その腕前をスタッフの人達に披露させている。皆普通に料理が出来るし、エミヤに至っては既にカルデア料理長の座に君臨してしまっている。いつの間にか、コック帽も被るようになってきたし、実はアイツこういうの好きだったりするのではなかろうか？

そうそう、料理と言えば意外にも黒髭も料理出来たりするんだよな。しかも海賊組の中では最上位級、しかもエミヤ曰く、その腕前は厨房の臨時コックを任せられる程なんだとか。

更に詳しく聞くとあれがカルデアに召喚されてから身に付けた技術らしい。黒髭の大雑把ながら味のある味付けは子供組に結構人気らしく、アステリオスやジャックちゃん達が美味しそうに炒飯を頬張っているのを見たことがある。

其処へ更に裁縫とかの器用さもあるものだから、大したものだと素直に思う。しかもヴラド公に伝授されたというから、色んな意味で凄まじい。……実はこのカルデアに召喚されてから一番楽しんでいるの、アイツじゃね？

と、まぁそんな感じで現在のカルデア事情を書き込んで見たのだが、他にもまだまだ書きたい事はあるし、今後更にそう言う話は増えていくだろう。

サーヴァント。時代の立役者である英霊達の残滓、人は彼等を幽霊やら人類の歴史に刻まれた染み、なんて言うけれど、自分はそうは思わない。彼等に刻まれた知識や知恵、力と技は間違いなく本物で、彼等には心がある。

だから、自分は彼等と対等に接しよう。彼等が自分達に力を貸し、人類を手助けしてくれる限り、自分も真摯に向き合おうとしよう。

√γ月√※日

ロマニから安静の任が解かれ、いよいよシャドウボーダーにＧＮドライヴを取り付けようとした今日、作業自体はカルデアの技術職員と一部のサーヴァント達の協力のお陰で滞りなく進み、後は稼働実験を幾つかこなしていく段階という所まで進む事ができた。

協力してくれた技術職員の皆には勿論、ニコラさんやエジソンさん、バベッジさん達には感謝しても仕切れない。彼等が一人でも欠けてしまったら、作業効率は著しく低下していた事だろう。

まぁ、途中何度か直流交流論争と話が脱線し、その都度エレナさんに仲裁して貰ったのも――――いい思い出だと思うことにしよう。

シャドウボーダーとＧＮドライヴの連結の方も、自分がレイシフトしている間にバベッジさんが予め用意しておいたプログラムを入力してもらったお陰で不具合なく進むことが出来た。

これで、例のシステムの発動とシャドウボーダーとの同調、運用を試していくだけになった。とはいえ、此処からが正念場だ。マシュちゃんの体を完全に治すまで最後まで油断せずに行こう。と、締めくくり今日の作業は終了。それで今回の活動は終わりにしようという所に……アイツ等が来た。

円卓の騎士である。先の第六特異点にて、自分は当然ながら立香ちゃんにも出来てしまった因縁という名の縁に招かれ、彼の円卓の騎士達が召喚に応じてくれたのである。

特異点で出会った彼等と、カルデアに召喚された彼等は基本的には別人。だから自分達も因縁に囚われず、他のサーヴァント達に対しても同様に、暫くは大人しく静観しておこうという感じに立香ちゃん達と話し合って決めたのだが。

どういう訳か、彼等はカルデアの記録保管所（アーカイブ）にアクセスし、その結果第六特異点での自分達の所業を目撃しすると、自分や立香ちゃん、マシュちゃんを見掛けるたびに謝罪をする事になった。

音に聞く円卓の騎士が、自分達を見掛けるたびにジャンピング土下座をしてくる始末。太陽の騎士であるガウェインに至っては、自ら聖剣で鉄板を焼いてセルフ焼き土下座をしてくる始末。しかも厨房にある鉄板を拝借しての暴挙だから、これには料理組も大激怒。

因みに、鉄板を貸したのはブーディカさんだった。何でも深刻な表情で貸してと言うものだから、つい貸してしまったんだと。こんな事に使われるなら事前に止めていたと嘆く彼女に、責めるのは流石に憚れた。

そんな、色んな意味で空振る円卓の騎士達。自分は既に踏ん切り着いているし、立香ちゃんマシュちゃんも気にしていないという。それでもだけどしかしと喚く円卓の騎士達を纏めあげたのは……他ならぬ騎士王である。

騎士王であるアルトリアさん。彼女の「己の失態を嘆くのではなく、次で挽回するように最善を尽くせ」という一言に円卓の騎士達は沈黙した。いやー、流石は騎士王。言うべき所はしっかり分かっている。

折角円卓の騎士という強力なサーヴァントの戦力を得たのだ。今にも自害しそうな彼等を現世に留めるように説得してくれたアルトリアさんには、感謝しかない。

で、その後は円卓勢も他のサーヴァントとは仲良くなり、今ではすっかりカルデアに染まっている。

因みに、モードレッドは第四特異点のロンドンで出会ったモードレッドだった。珍しい記憶持ちのサーヴァントであるモードレッドは、第六特異点での自分の行いを見たあと――。

「俺なら殺されてでも反逆してるね。三蔵って奴と俵とか言う弓兵には悪いことをさせた」

と、第六特異点の自分の姿を見て落ち込み、後に召喚される二人に頭を下げていた。いや、良い子かよ。

因みに、そんな良い子な反逆の騎士は、たまにエミヤや黒髭から料理を学んでいるらしい。何でも、いつか父上に自分の手料理を食べて欲しいのだとか。いや、良い子かよ。

そんな、騒がしくも楽しい我等がカルデアに、遂に獅子王が召喚されました。あの特異点の事を覚えている訳じゃないから、いつも通り別人として接する事にしたのだけれど……。

はてさて、これからどうなる事やら。

√γ月√Δ日

どうも、先日獅子王に絡まれ、ふとした論争からギャン泣きさせてしまった男、修司です。

いや、違うんや。別に泣かせるつもりはなかったんや。ただ、なんかやたらと王の在り方とか統治について自分と論じたいと言うものだから、仕方なく付き合う事にしたのだ。

そしたらまぁ止まらない止まらない。言葉を選んだ上での指摘のオンパレード、太陽王を筆頭に数多くの為政者サーヴァント達を例題に上げ、当時の彼女の統治の拙さを問い詰めると、獅子王の表情は次第に軟化。

更に表情筋は歪み、最終的にギャン泣きさせてしまうと言う結果に終わってしまった。いや、泣かせるつもりはなかったんよ？　俺は別に獅子王を憎んでいた訳じゃないし、どちらかと言えば義憤。神霊となった獅子王の振る舞いが許せず、感情のままにぶちのめしただけ。

だから、カルデアに召喚された獅子王を同一視するつもりはない。その後は何だかんだ獅子王とも和解し、立香ちゃんに力を惜しみ無く貸すと言う事で、今回の話は終了――――の、筈だった。

なんか、ヒロインX？　を自称するアルトリアがやって来た。なんか、立香ちゃんが微少特異点でアルトリア・リリィと出会い、彼女をスカウトするとついでに付いてきたらしい。

で、何故かこの暗殺者、セイバークラスのサーヴァントを見付けては闇討ち紛いの事をするらしく、しかも一切の反省もしないという徹底ぶり。そんでこのヒロインXはクラスはアサシンの癖にセイバーを名乗る頭のおかしい奴だったりする。

そんなヒロインXにセイバークラスのサーヴァント達はタジタジ、仕方がないので自分が対応する事にした。

とはいえ、彼女も立香ちゃんの呼び掛けに応えてくれたサーヴァント、人理焼却を阻止する為に駆け付けてくれた彼女を、頭ごなしに否定する訳にはいかない。
自分は白河修司、あの英雄王の臣下の一人として暴力に訴えるのは良くない。向こうは自分達の召喚に応じてくれた大切な英霊、扱いを軽んじる訳にはいかない。
そんな訳で彼女のいるシミュレーターへ到着、怯えるネロやカエサル、ジークフリートを逃がし、自分は彼女との対話を試みた。
最初は、やっぱり挨拶。挨拶は大事だ。自分は開発職の人間だったが、他社との連携を図る際は第一印象を武器にして交渉に挑んだもの、おかげで営業スマイルもそこそこな自分ならば、きっとシドゥリさんの様に事を上手く運べると……心のどこかで自惚れていたのだろう。
「失礼します。ヒロインX様、この度は我等の呼び掛けに応じて下さり、誠にありがとうございます。僭越ながら、お部屋をご用意しておりますので、どうかそちらでゆっくりとお寛ぎ下さい」
我ながら、完璧な対応だと思う。格好こそは胴着のままだけど、英霊というある種の国の代表を相手にするのに一切の不快感を与えない低姿勢な振る舞いだと思う。
初対面の相手ならば、大抵は聞いてくれる振る舞い。あの礼儀作法に厳しいニトクリスさんも合格をくれた自分の低姿勢に対し……。
「私以外のセイバーぶっ殺す！」
と、半ば錯乱状態殴り掛かり、あまつさえ手にした聖剣みたいな獲物で斬りかかってきたのだ。
……まぁ、ね。俺もこれ迄色んな聖剣魔剣をへし折った来たよ？
相手の得物を、結構な頻度でぶち壊してきたっけ。
特異点とは違い此処はカルデア。味方となるサーヴァントの武器を破壊する訳にはいかない。しかも向こうはアルトリアさんと同じ顔をした英霊だ。以前獅子王というアルトリアさんの成体の顔を殴り飛ばしたばかり、同じ顔をしたヒロインXさんの顔を殴るのには少しばかり抵抗があったりする。

だから――――首をへし折る事にしました♪　ラリアットでシミュレーターにあった適当な岩盤に、ヒロインXを叩き付けた。
その後はナイチンゲールさんのいる医務室へポイ。サーヴァントなんだ。加減はしたし、この程度の負傷くらい直ぐに治る事だろう。
以降、ヒロインXさんは無闇にセイバークラスのサーヴァントに噛み付かなくなり、今ではすっかり大人しくしています。
やっぱ、対話って大事だね！

――――追記。
アルトリア・リリィさんからメチャクチャ恐がられるようになりました。うん、彼女の目の前でやっちゃったからね。仕方ないね。

その115

√γ月√＊日

先日の謎のヒロインXなるサーヴァントの暴走から一夜明け、一先ず落ち着きを取り戻した彼女は表面上こそ反省している様なので、取り敢えず今後はああいった事はしない様にロマニから厳重注意をしてもらう事でカルデアに迎え入れる事になった。

何故セイバークラスのサーヴァントを目の敵にするのか、自分はアサシンなのにセイバーを名乗るのか、そもそも何故ヒロインXなんてふざけた名称を名乗っているのか、ツッコミところは多々あるが……まぁ、暴れなければ自分としては問題ないし、それは別にいいだろう。

リリィちゃんもカルデアに馴染んできた様だし、その純粋無垢な性格はカルデア内にて早くも結構な人気ぶりとなっている。特に王様――英雄王や一部の王や皇帝からは結構な人気を誇っている。まぁ、彼女は騎士王以前の少女時代の娘みたいだし、まだ当時の荒波に揉まれる前だから、あんなにもキラキラしているのだろう。

お陰で円卓の連中は彼女に癒されたり、胃にダメージを負ったりしているが……そこら辺は自分には関係ないのでノータッチにしておく。

――どうでもいい話だけどさ、アルトリアさんってバリエーション豊富じゃね？　反転（オルタ）やら成体やらその反転した奴やら、やたらと種類が豊富な気がする。

今回もヒロインXやら果てはリリィなんてのも出てきたし……て言うか今気付いたんだけど、彼女に似た顔の人って結構多くない？　ジャンヌさんは髪型や身長は異なるけど顔の造形は似ているし、沖田さんもそうだ。ネロ皇帝に至っては一部分を除けば殆どアルトリアさんに瓜二つだぞ？　なんか、作為的なモノを感じるのは自分だけだろうか？

増えないよね？　これ以上アルトリアさん顔の人達、増えないよね？　そう願いつつ嫌な予感が収まらないおれなのでした。
それはそれとして、シャドウボーダーに搭載したＧＮドライヴの同調と調節は滞りなく進んでいる。これならば次の段階である例のシステムを稼働させられるのも、そう遠くないだろう。
次の特異点を修復させるまで、何としてもマシュちゃんの体を何とかして見せる。限りある時間を有効に活用し、自分は改めて気持ちを固めるのだった。

√γ月√α日
２基のＧＮドライヴの同調も順調に進み、いよいよ例のシステムの稼働実験も近いと言う今日。まるで水を差される様なタイミングで微小特異点が発生した。
別にこれはいい。まだ段階的には其処までではないし、実際今回も通常の稼働実験と整備点検を行う程度のモノだ。作業行程も滞った訳ではないから、そんな気に病む程ではない。
ただ、微小特異点となった所、それが問題だった。その特異点の発生を感知した時、立香ちゃんの姿も消えていて、彼女がお昼休み中に特異点に吸い込まれる様に姿が消えたと言う。
コフィンを介さない単独レイシフト。そんな事があり得るのかと驚いたが、今回はどうやら事情が違うようで、人理焼却による影響で引き起こされてしまったイレギュラーな事態らしい。
幸いにカルデアから立香ちゃんの存在証明と観測は出来ている為、それを辿る形で自分も急ぎレイシフトを行った。その際にダ・ヴィンチちゃんから休んでも構わないと勧められたが、流石に二回も彼女に任せるのは気が引けると、やんわり断った。
そう、実は立香ちゃんは以前に微小特異点をマシュちゃんと二人で修復し、無事に解決へ導いた事があるのだ。それが、以前カルデアに召喚された謎のヒロインＸとリリィちゃんである。なんでもアルトリウムと言うヘンテコエネルギーとか、リリィちゃんの修行とか、諸々重ね合わせたヘンテコ特異点で、普段忙しい自分に気を遣って二

人で解決したのだという。
うん。普通に有り難いと思ったわ。なんだよアルトリウムって、完全にアルトリアさん関連のモノじゃん。伝え聞いただけでも戸惑うのに、実際の記録映像を見た時唖然としたからね？　何でホムンクルスにアホ毛が生えてんだよ。
そんな訳で、一度完全に特異点修復をやり遂げた二人。これ迄の旅を経て心身共に逞しくなった二人を嬉しく思うけど、流石に二度も彼女達に任せるわけにさいかず、自分もその特異点に赴く事にした。
で、其処で出会った協力者なのだが……なんと、あのイリヤの嬢ちゃんが協力者だったのである。しかも魔法少女の格好をして！　喋る魔法のステッキを片手に！　である。
イヤもうね、何て言ったらいいか分からなかったよ。イリヤ嬢、今でこそ年相応の背丈になっているけど、初めて会った時は歳上なんて思わなかったし、そんな彼女が魔法少女の格好で暴れていたら、何て声を掛けたら良いのか分からなくなっても仕方がないと思う。
しかもこのイリヤ嬢、なんかスッゴク大人しいのだ。具体的に言えば見た目相応の――――常識ある普通の女の子なのだ。ただ、何か自分との距離感が可笑しく、此方をチラチラ見る割には話し掛けてこない。というか、思い切り避けられている。アレ？　俺何かしたっけ？
そして、その後も色々とあって自称魔法少女と名乗るこの特異点でのエレナさんやメディア・リリィ、ナーサリーやメイヴと敵対したり協力しあったりして、無事に特異点は修復された。途中、メディア・リリィの使い魔になった小さいイアソンからメッチャ罵詈雑言を吐かれたが……拳をチラつかせたらおとなしくなった。
そんなこんなで特異点を修復させた訳だが、カルデアには新たに三人のサーヴァントが召喚される事になった。一人目は先にも述べた魔法少女となったイリヤ嬢、彼女の召喚には一部のサーヴァント達が反応していたが……取り敢えず、黒ひげには近付かない様に言い含めておこう。
そんで、残る二人なのだが……片方はイリヤ嬢を黒ギャルにした様な感じの女の子のクロエちゃんで、もう一人はエーデルフェルトを

名乗る美遊ちゃんだ。二人とは特異点で出会ったのが初対面の筈なのに、何故か以前から自分の事を知っている風な感じ。
その事を指摘すると、何か言いかけたイリヤ嬢の口を塞ぐクロエちゃんが知り合いに似ているから驚いただけだと濁すばかり。美遊ちゃんに至っては俺を見るなりイリヤ嬢の後ろに隠れてしまう為、完全に警戒されてしまっている。うーん、俺、何かしたかなぁ？
ともあれ、外見こそは小柄な少女の三人だが、その内に秘められた力は本物だ。三人とも立香ちゃんに協力的だし、今後は新たな戦力として頼りになるとしよう。
――――ただ一つ困った点があるとすれば、イリヤ嬢の扱うステッキ。コイツが少々厄介で、事ある度にトラブルを発生させている。ジャンヌさんやブーディカさんを魔法少女に変身させたり、それを写真にとって脅迫紛いな事をしようとするのだから質が悪い。コイツ、本当に魔法少女の相方か？
どれだけ叱っても全く反省しないので、次やったらヘラクレスの腰巻きの中へぶちこむぞと脅しをすることで、漸く大人しくなった。因みに、ヘラクレスには後で謝った。
どうやら、彼女達も彼女達で何やら事情があるらしいので、余り根掘り葉掘り聞き出す事はせず、他のサーヴァント達と同様に接していく事にした。
ただ、彼女達が来て以降アサシンのエミヤの様子が可笑しい。イリヤ嬢を見掛ける度に気配遮断のスキルを全開で尾行するのだから、普通にやっている事がストーカーである。
全く、普通に接すれば良いのに変に頑固な所があるよな。
そしてクロエちゃんの方だけど……うん。彼女の事は立香ちゃんに任せよう。もしくはエミヤ。
絶対にアイツと関係のある娘でしょ、目に見える地雷位簡単に避ける自分なのでした。

√γ月√Ω日
遂にこの日が来た。度重なる実験と検証、多くの協力者の尽力のお

陰で、シャドウボーダーは今日新たに生まれ変わる事になった。
とはいっても、完成したのは内面だけで外の装甲についてはまだまだ手付かずなので、現時点ではこれで一先ずの到達点と納得する事にした。
二つのＧＮドライヴの稼働実験、同調と調整を繰り返し、シャドウボーダーと見事に融合を果たした奇跡の代物。安直な名称だが、カルデア内ではこの生まれ変わったシャドウボーダーをＧＮボーダーと名付ける事にした。呼んでるの、俺だけだけどね。
そんな訳で二基のＧＮドライヴを起動させ、最後に例のシステム――ＴＲＡＮＳ―ＡＭシステムの稼働実験を行った。
二基のＧＮドライヴ――――通称ツインドライヴによるＴＲＡＮＳ―ＡＭの稼働実験は、この世界初となる内容だ。ダ・ヴィンチちゃんを筆頭に各碩学者達、中には征服王や太陽王、更にはローマの神祖と歴代のローマ皇帝達がこぞって格納庫に集結してくる様子は、圧巻の一言に尽きた。
そして、稼働実験は無事に終了。ＧＮドライヴの負荷も許容範囲であることから、ＧＮボーダーの改造第一段階は全工程無事に完了したと言っても良いだろう。
後は、ボーダーにマシュちゃんを乗せ、その時が来るのを待つばかり――――と、なる筈だったのだが、例により微小特異点の発生。またしても良いタイミングで水を差してきた特異点に遂に苛ついた自分は即座にレイシフトを行い現場へ急行。
舞台は日本。原因は目の前の寂れたホテルだと察した自分はそのままホテル地下へ急行、途中にホテルに留まるサーヴァント達に最低限の警告をした後、俺はかめはめ波でホテルを地下からまるごと消滅させて、特異点をゴリ押しで修復させ、今回の件は終了させた。
ロマニからハチャメチャもいい加減にしろと言われたが、そんなん知らないね。一応反省はするけれど、後悔は一切していない。
その後、立香ちゃんが召喚で式さんという綺麗な女性を喚び出したのだけど、身に纏う雰囲気が柔らかく、料理の腕も相当なので、カルデアの新たな料理担当として腕を奮って貰っている。

それと、何だか彼女はあのヒロインＸに対してマウント取れるみたいで、今はそういう意味合いを含めてヒロインＸと同室となっている。

……どうでもいいけど、最近なんか突発的に微小特異点発生してね？　自分の気の所為なのかな。

その116

人理保障機関カルデア――格納庫内部。魔術王ソロモンとその配下であるレフ＝ライノールの画策により、人理焼却が果たされた世界。ごく少数の人類を残して燃え尽きるのを待つその世界で、ある試みを試されようとしていた。

マシュ＝キリエライト。英霊との融合を目的として魔術師の手によって鋳造されたデザインベイビー、生まれたその瞬間から寿命（テロメア）を設定された彼女の余命は、第六特異点修復時点で限界を迎えつつあった。

カルデアの所長代理であるロマニ＝アーキマンを筆頭に、多くのサーヴァント――英霊達が彼女の治療を試みたが、何れも延命処置程度で精一杯。自分は大丈夫だと強がるマシュに、表情にこそ出さないものの、皆、俯く事しか出来なかった。

そして第六特異点の修復も無事に完了し、いよいよ最後の特異点に向けてカルデアが再始動という所で――それは完成した。

〝シャドウボーダー〟兼ねてから白河修司の手によって改造を施されてきたカルデアの第2プランである装甲車は、多くの技術者系統のサーヴァント達の協力の下、遂に完成の段階へ踏み切った。

ＧＮドライヴという未知の動力を搭載し、改装され、改造されたシャドウボーダー改め――ＧＮボーダーはこの日、早速その真価を発揮する時が来た。

『あの……修司さん？　本当に私、横になっているだけで良いのでしょうか？』

「うん、問題ないよ。マシュちゃんは事が終わるまでそのままでいいし、手持無沙汰が気になるのなら手元にある端末で遊んでても良いよ。ただ、くれぐれも其処の医務室から出ないようにしてね」

カルデアのレイシフトが正しく機能しなかった時に備え、職員全員を乗せてまるごと特異点に挑むことを想定されたボーダーは、最初に

発見された時点でかなりの巨大さを誇っており、内部には簡素な食堂だけでなく、医務室まで備わった最新鋭の機体となっている。
　そんな医務室のベッドに横になっているマシュは、普段と変わらない格好で戸惑う表情を晒していた。以前から修司が格納庫で自分の身体を何とかする為の作業を行っている事は察していて、先日全ての作業工程が終了したのも耳にした。
　自分の身体を治療するというのだから、きっと大規模な施術が待っているのだと身構えていたマシュだが、普段着のままで構わないと言われ、戸惑うがままやってきたボーダー内の医務室に来てみれば、大人しく寝ているだけで良いと言われた為、マシュの困惑は大きなモノだった。
「さて、今回でマシュちゃんの身体を何とかする訳だけど……メディアさん、頼んでいた術の件は――」
　そんな僅かな不安を抱くマシュを余所に、ＧＮボーダーから離れた位置で最終工程を行っていた修司は、同伴を頼んだキャスターの一人――メディアに声を掛ける。
「貴方に頼まれていた内漏れ防止の結界はこの格納庫全体に施しておいたわ。序でに、此処にいる全員に遮断のまじないのオマケもね」
「流石ギリシャきっての魔術師、仕事が早い」
「誰かさんのお陰でね。でも、あまり期待しないでちょうだい。確かに魔術に関しては一端のモノだと自負しているけれど、坊やの造ったソレは神代から見ても未知数なモノ。ＧＮ粒子と言ったかしら？それを完全に防ぐのは保証しかねると、予め言っておくわよ」
「その点については既に対策済みさ、既に格納庫に続く隔壁は封鎖されていて、スタッフ達も今は別区画へ避難させて貰っている。他にも色々と細工はさせて貰っているから、多分大丈夫だろ」
「それでも私達に対策を依頼する辺り、徹底しているねぇ」
　メディアからの指摘に応えていると、格納庫へやって来たダ・ヴィンチが、呆れた様子で修司の隣へとやって来た。
「何事にも不測な事態と言うのは付き物だからな。これから行う事を思えば、当然の対応だろう」

「そこの凡骨に倣うつもりではないが、これから始まる前人未踏の所業を思えば、彼が慎重になるのも仕方がないだろうな」
「お二人も、これ迄手を貸してくれて……本当にありがとう」
　次にやって来た発明王と雷電博士。人類の進歩に大いなる一歩をもたらした二人が、修司の肩に手を置き、それぞれ用意されたコンソールの前に座る。
「では、人類初めての試みを始めるとしよう。Ｍｒ．修司、指揮を頼む」
　先の二人と同様、コンピューターの父と呼ばれるバベッジが修司にボーダー起動の先導を促す。これ迄長く続いた作業と実験の繰り返し、それが今日で実を結ぶのだと、今更ながら緊張してきた修司は、改めてＧＮボーダーを見据える。
「それでは、ＧＮボーダー起動！　並びにＧＮドライヴを安定領域まで固定！」
「了解。ＧＮボーダー起動、並びにＧＮドライヴの起動を確認」
「二基とも、安定領域を維持……行けるぞ、修司君！」
　エジソンが吼える。それに合わせてボーダーから駆動音が鳴り響き、更には翡翠の粒子が噴出してくる。これがＧＮ粒子、人類を変革へ導いて新たなステージへ進ませる進化の光。
　本来なら数多の使用方法がある可能性の光、今回はそれら全てを一人の少女の為に使用する。
「ＴＲＡＮＳ―ＡＭ、始動！」
「了解、ＴＲＡＮＳ―ＡＭ!!」
　遠隔操作により、発動されるＧＮドライヴの力。黒いボーダーはその全身を緋色に染め上げ、それに伴うように粒子量は爆発的に増加し、格納庫一帯を埋め尽くしていく。
　メディアの結界は正しく作用しているようだ。極少の粒子が弾かれるのを感じながら、修司はその時が来るのを待つ。緋色の輝きを放ちながら、それでも更に加速していくＧＮドライヴ。このままでは暴発も有り得るのでは？　モニター越しで格納庫の様子を眺めていたロマニが見守るなか――その時は来た。

「ＧＮドライヴ、臨界点に到達！」
「今だ！」
二人の先達者に促され、修司は手元に有ったスイッチに指を置く。それはＧＮドライヴに施された最後の枷を解放する為の鍵、マシュ＝キリエライトの肉体を遺伝子レベルで変革させる為の最後の安全装置。
それを今、解放させた。
「ＴＲＡＮＳ―ＡＭ・ＢＵＲＳＴ!!」
瞬間、これ迄暴風となっていた粒子は更に勢いを増し、カルデアの全体を包み込んでいく。それはまるで意思を持つように暖かで、その光にカルデアの人々はマシュ＝キリエライトという一人の少女の心に触れた気がした。

◇

√※月√Ω日
これ迄、幾度となく試行錯誤を繰り返し、失敗と成功の果てに今日、その日を迎えた。自分が元いた世界でも開発し、製造を行っていたＧＮドライヴ。それを搭載してカスタマイズしたシャドウボーダー改めＧＮボーダーが遂に今日、完成の時を迎えた。
内装とか外側（ガワ）の装甲部分はまだ手付かずだから、厳密には完成とは呼べないかもしれないが、目的であるマシュちゃんの身体の治療を行う為の水準には届いているし、動力としては正しく稼働しているから、一応完成と呼ぶことにした。
そして、同時に今日はそんなマシュちゃんの治療日でもある。完成初日から最大稼働を強いらせるのはどうかとエルメロイ先生から指

摘されたが、勿論既にその事は踏まえている。
何せ細かい設定や調節の合間に既に何度かＧＮドライヴは起動させてあるし、ＴＲＡＮＳ―ＡＭシステムだって秘密裏に行ってきている。このシステムの事を知っているのは自分を除けばごく一部のキャスターのサーヴァント達だけ、事前に慣らされたＧＮドライヴは、いつでも最大のパフォーマンスが出来る様にしておいたのである。
ＧＮドライヴの本領発揮とも言えるＴＲＡＮＳ―ＡＭシステム。そして、そこから更にＧＮ粒子を大量に生成するＴＲＡＮＳ―ＡＭ・ＢＵＲＳＴ、本来なら意識領域を拡張させ、人類の相互理解を促すＧＮ粒子を今回はマシュちゃんの人体修復に全てを注ぎ込む事にした。
結果としてＧＮボーダーの全ての稼働、それ自体は問題なく完了した。大量に生成されたＧＮ粒子はカルデア全体を包み込んではいたが、マシュちゃん以外の人に影響を与える訳にもいかない為、先にも述べた通り、キャスター組の人達に頼み込み、カルデアの職員一人一人に魔術による特殊な防御膜を施して貰った。
色々と無理を聞いて貰ったキャスターの皆さんには、本当に感謝しても仕切れない。特にメディアさん、彼女には元の世界でも色々と面倒見て貰ったから、本当に申し訳ない気持ちで一杯である。
今度、何かしらの形で恩返しを出来たらなと、強く思うのだった。
それで、今回の当事者であるマシュちゃんだが、身体が少し軽くなった気がするだけで、特にこれといった変化は感じないと言っていた。
別に、目に見えて人体に影響が出る訳じゃないし、変化が表面化するのはこれからだ。後日ロマニにはマシュちゃんのカルテを見せて貰う許可を貰い、彼女の変化について事細かに説明をさせて貰うつもりだ。
この世界に来て初めて行ったＧＮドライヴによる治療実験、是非とも上手く行っていて欲しいものである。
……因みに、今回の稼働試験に於いて、自分には防御魔術を一切施されてないんだけど、アレどういう意味なんだろ？　メディアさん

とか「坊やには必要ないでしょ？」てやんわり拒否られたし。
そんで、皆がＧＮ粒子を魔術の力で弾いてる中、俺だけモロに受けたんだけど、元の世界で記録された現象が全く起きなかったの。他者との意識が繋がる不思議な感覚とか、個人的に凄く気になっていたんだけど……ソレっぽい事一切起きなかったんですけど。
いや、きっとあれだ。皆が防御魔術でＧＮ粒子を弾いているから、意識を繋げる先が無いから無反応で終わったんだ。
そうだ。きっとそうに違いない。

√Ｘ月Ω日
ＧＮ粒子をマシュちゃんが大量に浴びてから数日、定期検診を受けたマシュちゃんは結構興奮気味で立香ちゃんの所へ走っていった。あの様子だと、あの実験の効果が上手く働いてくれたのだろう。
定められていた寿命からの脱出。ロマニから提出されたマシュちゃんの遺伝子カルテを読ませて貰い、改めて成功したのだと実感した。本音を言えば小躍りでもしたい所だが、大人としてグッと堪え、今は静かに彼女の再誕を喜ぶことにしよう。
短命を宿命付けられ、ボロボロだったマシュちゃんが元気を取り戻した事に、ロマニは静かに涙を流しながら礼を口にし、更には頭を下げてきた。感謝を言われるのは嬉しいが、問題はまだ多く残されている。
一時は死を確約されたマシュちゃんだが、近い内に細胞が劣化し、死の縁を彷徨うことになるのか分からない。今後も定期的に検診は受けさせるべきだし、仮に自分の予想どおりの実験になったとしても、憂慮すべき事は多々ある。
ＧＮ粒子は人に変革をもたらすもの、自分のいた世界と違い、そこら辺の法的配慮が施されていない。技術革新こそその兆しはカルデアの資料室で確認できたが、具体的なモノはまだ発表されていない。
ともあれ、今後マシュちゃんの身体に異変があったら、その都度皆を集めて話し合いの場をすぐに設ける用意は常に意識しておいた方がいいだろう。いつになく真剣にそう口にする自分に、ロマニは目を

パチクリしていた。
「普段からそのくらい慎重ならいいのに」とか、割かし失礼な事を言っていたが、まぁ別にいいだろう。今後、マシュちゃんの身体がどうなるのか未知数だが、経過は慎重に看ていくつもりだとロマニも言っていたし、取り敢えず今はそれで良いだろう。
そんなこんなで今後のマシュちゃんに対する対応を明確にさせ、今日は解散という所に……立香ちゃんが慌ただしい様子で医務室に駆け込んできた。
曰く「マシュの目が光ったぁっ!!」とか。
え？　症状でるの、早くない？

その117

√X月√∂日

立香ちゃんからの報告を受け、速攻で話し合いの場を設けて皆であれやこれやと意見交換をしてから翌日。取り敢えずマシュちゃんの身体に悪い部分が見付からなかったということで、一先ずは保留という結論に至った。

膨大なGN粒子を浴びたマシュちゃん、確かに彼女の身体を何とかする為にGNドライヴ搭載型マシンを造ったのは間違いないが、それにしたって症状が出るのが早すぎる気がする。

GN粒子は確かに人体に変革と呼べる程の影響を与えるが、それでも表面化するのは早くて数ヶ月は掛かるし、人によっては一年以上の時間を有するモノだってある。

だが、マシュちゃんはそんな自分が記憶するどの実例よりも早く覚醒し、革新者（イノベイター）の特徴を顕にしている。革新者というのは、人よりもチョビッと優れた……まぁ、空間把握能力やら身体能力やらが向上した自分が何となく……もしくは格好良さとか、思い付きで付けた人類の呼称である。別に大した意味はない。

そんな革新者の最大の特徴は眼、暗闇の中でも分かる光を発光させることである。これは革新者となった過去の例と同様に、マシュちゃんの脳量子波が情報処理を行っている際に顕れる症状だが、特に危険視されるような症状ではない。

現にマシュちゃん本人も特に痛覚等の自覚症状が無いと言っているし、その報告に強がっている節も見当たらない。キョトンとしているマシュちゃんにロマニが深い溜め息が出てきたのが印象的ではあったが……。

だが、一体どうしてマシュちゃんが此処まで早く革新者として変革したのか、自分を含めたエジソンさん達とあれこれ意見を交わした結果、自分達はある仮説に行き着いた。

そもそも、マシュちゃんは英霊との融合症例として製造された人造人間（ホムンクルス）。言い方は悪いが、魔術師にとって彼女は使い捨てられる生命体だった。

しかし、逆を言えば人間としてまっさらな状態。絵画で言えば真っ白なキャンバス、人として純粋な彼女だからこそ、ＧＮ粒子もこれ迄の実例よりも濃く影響され、マシュちゃんの肉体に作用したのではないか？　というのが、自分達の推測である。

ともあれ、彼女の身体自体に悪影響は確認されず、寧ろロマニが見せてくれた診断結果には立香ちゃんと同様に極めて良好の文字が刻まれている。検査自体はこれからも続くだろうが、自分の知る過去の症例を鑑みれば、それもあと数年の辛抱だろう。これ迄の彼女を蝕んでいた造られた生命体由来の楔はなくなり、これからは人並みの幸せだって望めることだろう。

問題は、人理焼却を含めた諸々が解決した後、国連や魔術界隈からの余計な介入と、人間社会への影響だ。自分の元いた世界では王様に頼んでそこら辺の問題は既に解決してもらっているが、この世界ではそうはいかない。

人間というのは、自分と違う存在に対して必要以上に反応し、敵意やら害意を向けてくる。そして、そんな悪意に見舞われた人は自己を守る為に自分は特別な存在であると、選民思想に囚われがちになる。革新者となった人達も一時はその可能性に不安を抱いたりしていた。

そうなる前に王様は国連を始めとした各国機関にＧＮドライヴの設計の公開とその他諸々を条件に、革新者の人達が日常生活を送れるように全面的支援をするよう契約を取り付け、社会への影響を緩やかなモノとさせた。

あ、因みにそこら辺を無視して襲撃してきた魔術師達は強制的に太平洋の海へダイブしてもらってます。勿論物理的に。

そして、一方で他とは異なった革新者達が増長したり、横柄な性格にならないか危惧していたのだけれど、どういうことか皆そんな様子はなく、日々健全に研鑽を重ねてくれている。特に一時は危なかったとある子は自分と魔術師の攻防を目撃してしまって以降、めっきり素

直になってしまっていた。
閑話休題。
と、そんな訳でこの世界にはそういった問題が多々あるが、そこら辺はロマニ達に上手く何とかしてもらう他ないだろう。幸い革新者となったのはカルデア内にてマシュちゃんのみ、ＧＮボーダーだって事が済み次第国連にくれてやれば良いし、それを条件にマシュちゃんの身柄の安全を約束させれば良い。
何なら、そのまま自分の属する会社に逃げ込むという手段だってある。この世界にも王様の会社があるのは既に分かっているし、俺の名前を出せば会社だって無下にはしない。会社への貢献を条件に厚待遇な生活も約束されるだろう。
問題は……魔術師関係なんだよなぁ。アイツ等、人間社会に溶け込む癖に社会のルールを守らないから質が悪く、時計塔の上層部に至っては神秘が秘匿されれば後はどうでも良さそうな感じで、平気で事を闇に葬ろうとしてくるんだよなぁ。
しかもこの場合、危険性はマシュちゃんだけでなく立香ちゃんにだって及んでくる話だ。立香ちゃんはこれ迄数多くの英霊と縁を結び、絆を育んできた女傑だ。謂わば、彼女の存在そのものが魔術師達にはサーヴァントを喚び出す聖遺物に見えるのだろう。
そうさせないためにも立香ちゃんとマシュちゃんの人理修復後の対応は、自分達にとって急務と言えるだろう。尤も、向こうが権力で有無を言わさないのなら、此方だってそうさせてもらうけどね。
知ってるんだぜ？　この世界の俺、国連に相当な技術提供を与えているってことはな。元いた世界では既に浸透した何てことない技術だが、この世界では未だ破格の価値を持っている。
その技術を一度にではなく、段階的に渡している以上、国連は白河修司という人間を無視できない筈。向こうが俺という存在を認識している以上、下手な強行手段は控えるだろう。
しかし、我ながら悪どいやり方だ。本来の俺ならば世界に技術を浸透させる為に国連や各国にはホイホイと技術を軽めに渡して技術革新を促しているが、この世界では小出し程度に抑えている。恐らく

は、この世界で俺に召喚されたという王様の助言なのだろう。
もしかしたらこの世界の王様は其処まで読んでいるのかもしれない。何せあの人は、この世全てを背負う英雄王だ。この程度の読み合い位何てことないのだろう。
さて、長々と続いたが振り返ってみればいつもと変わらない一日だったと評しておこう。マシュちゃんは革新者になった所で性格変わるような娘じゃないし、立香ちゃんの今後の処遇についてだって、それは自分達大人の役割であって、彼女達が気に病むことではない。
今後の対策を考慮しつつ、今回はこれで終わることにしよう。

√X月√g日
さて、マシュちゃんの肉体改造という大きな目的を果たし、一先ず肩の荷を下ろした自分は、今一度自分を鍛え直す為、丁度暇なサーヴァントを誘いシミュレーターを使って軽く身体を動かすことにした。
相手は円卓最強というだけあって振るわれる剣筋は鋭く、研究やら開発で鈍った自分の身体を否応なしに鍛え上げてくれた。流石の腕前だと忖度無しに付き合ってくれたサーヴァントにお礼を言うと、マシュちゃんがやって来て自分に組手の誘いをしてきたのだ。
ここ数日身体の調子も良好で、次に最後の特異点が控えていることから、予想される激戦に備え、今の内に可能な限り自分に指導を受けたいのだと、マシュちゃんは極力自分の隣に立つサーヴァントを見ないように誘ってきてくれたのだ。
そんな勤勉なマシュちゃんの要望に応えてやりたい所だったが、生憎此方にも都合がある。具体的にはシミュレーター内で誰よりも先に殺意高めで待ち構えていた……ケルトの影の女王の相手をするためである。
この女、自分が第六特異点で力を付けてきたことを誰よりも鋭く嗅ぎ分け、今日という日を待ち構えていやがったのだ。マシュちゃんの身体を良くする迄はと我慢していた様だけど、彼女が元気になったという報せを受けた瞬間、我先にと勝負の申し込みをするようになった

のだ。
今までは予定があるから～とか、先約があるから～と躱してきたが、それも最近になって言い訳も限界になり、ここ数日この女からの誘いはより過激なモノになっていた。
具体的に言えば……夜這いである。この女、よりにもよって人の部屋に土足で侵入し、夜這いを仕掛けてきたのである。仮にもスカサハという女傑は美人で、端から聞けば羨ましいと怨嗟の声が向けられることだろう。
だが、相手はケルト。挨拶代わりに殺意と得物を放ってくる頭のおかしい連中で、彼女はその筆頭株でもある。曰く、〝影の女王からの夜這いは俺も勘弁したい所である。〟そう語るのはケルトの叔父貴的存在、フェルグス＝マック＝ロイである。
そんな彼女に夜這い（強襲）までされては、最早無視は出来ない。ぶっちゃけ今でも嫌だとは思うが、それでも逃がしてくれないのがケルトの嫌な所である。
一応直前まで何とかしようとしたよ？　夜這いを掛けられた日にはケイローン先生にガチで相談したし、エルえもんやエミえもんにも半泣き混じりで助けを求めたりした。
そんな俺に……アイツ等酷いんだ。いや、ケイローン先生はまだいいよ？　親身に相談に乗ってくれたし、最後は滅茶苦茶申し訳無さそうに謝ってくれたし、お陰で心は少し軽くなったさ。
でもあの二人は絶許。特に便乗してきたクー・フーリン、アイツだけはいつか死なす。人が真剣な悩んでるのにいい加減腹を括れだの、骨を拾ってやるだの、呆れ半分でまるでマトモに取りあってくれない。クー・フーリンに至っては笑いながら俺に指差して来やがった。
後で覚えてろ。そんな誓いを立てながら食堂から立ち去ろうとする俺を唯一慰めたくれたのが……熊のぬいぐるみだった。
何でも、今の俺達は似た境遇なのかもしれないのだとか。去り際に月の女神に物理的に搾られる彼の姿は、いつも以上に哀愁が漂っていた。そうか、アレと同類なのか、俺って……。
そんな訳でしつこいスカサハを相手する為、マシュちゃんの組手に

は前哨戦として相手してもらっていた円卓最強ことランスロットさんにお願いすることにしました。
て言うか、泣き付かれたんだよね。ここ最近、他のサーヴァントやカルデアのスタッフとは馴染むようになり、騎士王ともそれとなく話せるようになったけれども、未だにマシュとはマトモに会話をしたことがなく、仮にあったとしても事務的会話しか記憶にないのだと。
息子だったのが娘に変わり、距離感とか分からなくなってはいたが、此処は人理救済の為に数多の英霊が集うカルデア。過去の遺恨を乗り越え、今こそ親子の関係を深める時だと、一大決心をしたのだとか。
其処で自分に頼る辺り……何とも残念な気もするが、親として立ち上がるのなら、協力は惜しみはしないということで、細やかではあるが手を貸すことにした。
で、早速その時が来たから自分が仲を取り持つことにしたのだけれど……まぁマシュちゃんの拒否反応が凄いこと。
う○美ちゃんの如く鋭い眼、しかもその眼が革新者張りに光り輝くもんだから、それはもう迫力がエライことになっていた。女の子がして良い顔じゃない表情にランスロットはタジタジだったが……自分が出来るのは此処まで。
何せ此方は此方で、飢えた獣を相手にしなくてはならないのだ。申し訳ないが、後はランスロット本人の力で何とかして欲しい。
そんな訳で始まった俺とスカサハの組手という名の死合い（誤字に非ず）が始まり、決着が付くまでの数十分の間、俺は槍の雨という地獄を見る羽目になった。
分かる？　縦横無尽に襲い掛かる槍の応酬とか、普通に泣けてくるからね？　後にシミュレーターの映像を見たヴラドさんも「これは酷い」と呆れながらスカサハさんに説教してくれたからね？
バーサーカーが呆れ、説教を噛ます程。それがあの戦いの悲惨さを物語っている。まぁ勝ったけどね。山のじっちゃんのお陰で会得したモノで、何とか双方無事に終わることが出来ました。山のじっちゃん、マジありがと。このご恩はきっと返します。

で、久しぶりに疲弊した自分の所に、今度はマシュちゃんからお誘いがありました。あれ？　ランスロットは？
疑問に首を傾げた自分に、「ランスロット卿は急用があるとのことです」と可愛らしく言ってきた。ランスロットェ。
バーサーカーの彼とは比較的マトモに対応しているのに、どうしてこうなってしまうのか。その後、可愛い娘のような彼女の頼みを無下には出来ず、結局は相手をする俺なのでした。
いやー、久し振りに疲れた。精神的に。

◇

「は、はは……」
――いつぶりだろう、此処まで心が踊るのは。いつぶりだろう、こんなにも気持ちが昂るのは。我が振るうは絶死の槍、振れば死は免れない破滅の一振。縦横無尽、一切の隙間なく放たれるスカサハの絶技の応酬は、しかし目の前の淡く光る理不尽によって覆される。
迫り来る避けられない死の空間を避けるという矛盾、絶技を越えた理不尽の現象を前に、スカサハは自身の心臓の鼓動を確かに感じた。
誰にも殺されず、強さだけを望んで至った人外の極致。それを今、たかが二十代の青年が越えようとしている。
嬉しく思わない訳がない。楽しみ、期待しないわけがない。あれだけの才能を、あれだけの可能性を、自分の手で育てられないのが悔しいが、今はただ彼の更なる成長を期待している自分がいる。
嗚呼、間違いない。彼が、彼こそが……私を、スカサハという存在を――――。

「ハハハ、ハハハハハハ！」
仮想の大地の下で、大の字になりながら敗北を噛み締める影の女王、その笑みは何処までも純粋で……狂喜に歪んでいた。

その118

√X月√X日

ケルト（スカ）のやべー（サハ）奴からの試合という名の死闘を乗り切り、GNボーダーの整備とか、相棒の整備とかしているだけでここ最近平穏な時間を過ごせている今日、未だに最後の特異点の座標は特定出来ていない。

ロマニやダ・ヴィンチちゃんが言うには、最後の特異点の座標は神代。人類史の中でも最も古い場所に位置する為、今までの様に簡単には進まないらしい。根気のいる作業だから、皆がそれぞれ合間を縫って休みを入れたりして作業効率を底上げしているが、それでもやはり難しい様だ。

特異点が見付かるまでの合間、ロマニやスタッフの皆ばかりを働かせては不味いと思い、自分も立香ちゃんマシュちゃんの三人でお菓子を作り、それぞれ皆に振る舞う等の差し入れをする事で、細やかながら支援をしていた。

そんな、それぞれが出来る限りの事をしている中、ローマ皇帝の一人であるネロ陛下が、オリンピアなる運動の祭典を開こうと提案してきたのだ。なんでもここ最近皆がピリピリしている為、息抜きを兼ねて英霊によるオリンピアを見せることで、スタッフ達の英気を養おうという話である。

人理修復の旅を初めて数ヶ月、カルデアには既に数多くの英霊達が在籍している。力自慢や速さ自慢、一人一人が一騎当千の兵の英雄達という事で、嘗てオリンピックの語源となったオリンピア開催者として、何とか盛り上げてやろうというネロ陛下。まぁ、勿論これは建前だが。

詰まる所、数多く在籍している英霊達の中で自分を目立たせたいという野望（？）全開マシマシでアピールしたいというのだ。

因みに、この話を持ってくる時には既に大会は開催準備万端だった

という。協力者は……これまたローマ皇帝の方々。神祖であるロムルスさんやカエサルさんを筆頭に全面的に協力したらしい。なんでも、彼女にねだられては断り辛かったのだとか。

孫に甘いお祖父ちゃんかな？

ともあれ、たまには息抜きも必要だという事で開催されたネロ陛下主催のオリンピア、後にネロ祭りと呼ばれる催しは開催された。内容はオリンピックというより運動会――――前半は陸上をメインにした催しだった。

折角の機会、戦い以外に於ける力を出せる場とあって結構なサーヴァント達が参加を表明している。陸上は走るだけじゃなく、槍投げや砲丸投げという種目があるから、色んな英霊達が楽しめる様に工夫も凝らしてあった。

そして、各種目別にメダルもキチンと用意されている。参加賞や入賞の賞品も細やかながら用意されているから、サーヴァント達の意気込みも意外と高め。色々と安全面を考慮し、偶然拾った聖杯を使って制限期間を設けて簡易な極少特異点を形成させ、開催の場を造り上げていた。

そんな色々とツッコミ所満載なオリンピア。珍しく浮かれる英霊達に混ざって、自分も数種目だけ参加する事となった。これでも自分は陸上の選手だった身、元いた世界では未だ記録を破られていない記録保持者なのである。

今回は名だたる英雄達が参加する運動会、部活の時のような加減はせず、一選手として本気で挑むことにした。

で、早速始まった１００ｍ走なんだけど……決勝で惜しくも敗退しました。入賞こそ出来たものの、メダルを手に入れる事は出来ませんでした。

いや速ぇーよギリシャの韋駄天二人、アタランテの姐さんもそうだけど、アキレウスの奴も尋常じゃなく速かった。特に初速、自分が界王拳を使おうとする頃には、既に彼等がゴールテープを切っていた。食い付いて行けたのは、自分を含めてクー・フーリン位だったな。今後、新たにスピード自慢のサーヴァントが来てくれたら、もう一度挑

んでみたいモノである。
　そして次に自分は１５００ｍ走に出場したのだが、此方はアッサリな程に早く片が着いた。先のギリシャ産韋駄天の二人が出ていない事もあってか、長距離走では界王拳も使う必要がない程に快勝する事が出来た。
　その後、出場種目を終わらせた自分は会場のあちこちを見て回り、アーチャークラスのサーヴァントはアーチェリーで競ったり、ランサークラスは槍投げ、バーサーカーはハンマー投げなど、皆それぞれ楽しんでいる様子を見ることが出来た。
　因みにフェンシングではデオンが無双をしていた。元々細剣が得意だった為なのは分かるが、並み居るセイバー達を相手に完勝していく様は流石に驚きが隠せなかった。特に円卓の騎士の一人であるガウェイン相手にストレート勝ちを奪う瞬間は、今でも鮮明に覚えている。
　て言うか、ガウェインの聖者の数字って屋内では使えないのな。てっきり時間に依存するスキルだと思っていただけに意外だった。……いや、アルトリアさんの反応を見る限り、多分素で忘れてたな。
　しかし、そんなフェンシングで無双していたデオンも円卓最強の前に破れる事となり、優勝はランスロットのモノとなった。何でも彼はマシュ（正確にはマシュの中にいる息子）に格好いい所を見せようとしていたらしいが……うん、取り敢えず応援はしていたよとだけ伝えておいた。
　いや、応援をしていたのは本当だよ？　メッチャ冷めた視線で見下ろしていたけど、応援の方もメッチャ棒読みだったけど、何なら自分がせめて形だけでも応援してやれと言わなければ、一切声を掛ける様子はなかったけど、それでもちゃんと応援はしていたから。
　……その後は、立香ちゃんと合流するまで自分にベッタリしてたけどね。最近のマシュちゃん、なんか矢鱈と俺に懐いてない？　大丈夫？　俺ランスロットに斬られたりしない？
　と、まぁ色々あったけどそんな訳でオリンピアの前半部分の日程は滞りなく進み、余計なトラブルは特になく、参加していた英霊やモニ

タリングしていたスタッフ達を含め、皆それなりに楽しんでくれた様で何よりだった。
明日から後半の部が始まるみたいだし、何が始まるのか楽しみにしておくとしよう。

√X月√ω日
――なんて、そんな風に考えていた時期が、俺にもありました。
いや、内容的には大した事はないんだけどね。別に普段からサーヴァント同士の模擬戦とか日常茶飯事だし、それが彼等の糧になるのなら特に此方から言うことはなにもない。
でもさ、幾らオリンピアの会場が闘技場（コロッセオ）に似てるからって、本当にバトル形式にしなくても良くない？　しかもチーム戦とか。
まぁ、安全面に考慮したシステムを施しているみたいだったから別に良いけどさ……本当にその辺りの根回しとか上手いよな、カエサルさん。ダビデと対を為す口先の魔術師と言われるだけあるよ、本当に。
で、参加者は前半に参加していたサーヴァントがほぼ全員で、中にはこれ迄大人しく観戦に専念していた王様系のサーヴァント達も何名か参戦し、自分も他の英霊達のやる気が上がるからという理由で参加する事になった。
殺る気ですね分かります。
そして肝心なチーム分けなのだが、くじ引きにより自分が組んだ相手は王様――英雄王その人だった。
確かに自分の知る王様も祭りや何かしらのイベントには積極的に参加してたし、冷やかし気分で楽しんだりしていた時もあったが、まさかこんな無茶振り感の強い催しにも参加するとは思わなかった。
とは言え、別世界の王様といえど、人類最古の英雄王の前で無様な姿は晒せない。初戦から征服王＆エルメロイ先生という強力タッグを相手にする事となったが、それでも王様は序盤手を出すことはなかった。

征服王の宝具は〝王の軍勢〟、固有結界からの地平線まで続く彼の臣下という名の盟友達。加えてそれらをほぼ強化していくエルメロイ先生の補助能力、さらに此方の動きを阻害しようと的確に邪魔をしてくるのだから、全く本当に厄介な相手だった。

最初こそは出会い頭にかめはめ波で数を減らしたけど、それ以降は一人一人を相手に肉弾戦で相手していった。雑兵と思われていた兵士の一人一人が手強いから時間は掛かるし、エルメロイ先生の妨害工作が要所要所で炸裂するから、まぁイチイチ手間取って仕方がないこと。

征服王が自分に負けたら我が軍門に降れ、何て笑顔で言って来るから、此方も笑顔で断ってやった。そんな自分に益々その気になった征服王が更に臣下達を喚び出そうとした時――――彼の王が動いた。何処までも広がる砂漠地帯に、あらゆる刀剣が降り注ぐ地獄絵図。これ迄退屈そうにしていた王様が、器用に自分だけを外して大群を消し飛ばしていた。

王様はただ一言「疾く片付けるぞ」とだけ言い、自分との共同戦線を張ることとなった。以前にも似たような状況はあったが、今回はあの時よりも王様と近い位置にいる気がして、現金な自分は勢い任せて界王拳を使い、一気に征服王とエルメロイ先生のコンビを降した。

その後も太陽王&ニトクリスさんや、騎士王&獅子王という名だたる強敵達を降し、最後に待ち構えていた自称カルデア(ネロ&エリザベート)の歌姫を退け、第一回オリンピア改めネロ祭りは……無事に自分達の勝利となった。

優勝賞品は、今回の主催者であるネロ陛下から自画像が刻まれたのメダル、純金製である。無駄に凝ってある品ではあるが正直いらないのだが……まぁ、これも記念という事で貰っておく事にした。

次も必ず開催するぞというネロ陛下の言葉を最後に、今回の大会は幕を下ろすのだった。

……どうでも良いけれど、今回の催しで妙にスカサハが大人しかったのが個人的に気になった。出場していたのも槍投げだけだし、後半の部に至っては影も形も見当たらなかった。

大人しくしている分にはいいのだけれど……なんだろう、嵐の前の嫌な静けさに似ている気がして、少し落ち着かない。反応したらそれはそれで面倒な絡みがありそうなので、取り敢えず今はスルーしておく。

◇

「どうだ白河修司、此度の演目にて貴様が負けたら改めて余の軍門に降らぬか!?」

「ハッ、寝言は寝て言えよ征服王。幾らアンタの誘いでもそればっかりは受けられねぇよ!」

迫り来る軍勢、征服王イスカンダルが注ぎ込むのは己が生涯を掛けて拾い集めた何よりも尊ぶ同胞達。苦しむ時も、悲しい時も、如何なる艱難辛苦も笑って乗り越えてきた偉大なる盟友達。そんな、質も量も兼ね備えた軍勢相手に、白河修司はたった一人でその軍勢と渡り合っていた。

征服王の臣下は、何れも一騎当千を誇る兵達。そんな物量を圧倒してくる修司の背中を、一人眺める黄金の王。彼の脳裏に浮かぶのは、初めて彼と出会った時の事。

滅んだ街の中で、恐怖と絶望に沈むのではなく、正しき怒りで立ち上がり小さくも吼えた少年の姿。あれから幾何の時が流れ、少年だった男の背中は……いつの間にか、大きく成長していた。

理不尽、不条理を赦さず、己の可能性という武器で戦い続ける男。

今はまだ、見守る事にしよう。いつか自身の臣下が果てなき旅路に出る――その日まで。

英雄王は、その時が来るのを確信しながら……一歩足を踏み締め

るのだった。

その119

√Z月δ日

ネロ祭りも終わり、GNボーダーの整備点検やサーヴァント達との修行、あとは日頃の報告書をまとめること以外差程やることのない今日、最後の特異点のレイシフトに向けて諸々の調節を行っていると、あるサーヴァントがボーダーの整備中に押し掛けてきたのだ。

その英霊の名は沖田総司。新撰組きっての剣の達人であり、同時に病弱で実は少女だった彼女が、自分に病の治療を頼みに来たのだ。何でも常日頃からコフる自分が嫌で、サーヴァントの身になってまで病に侵されたままでは、いざという時にマスターである立香ちゃんを護れない。

そう涙目で訴えてくる沖田さんに、正直自分はどうすれば良いか分からなかった。マシュちゃんが短期間の内にイノベイターとして革新した理由も、その生まれから来るもので、普通ならGN粒子が生身の肉体に作用するのに数ヶ月から約一年の時間が必要になってくる。

更に言えば、それまでに自分はGNボーダーに付きっきりで面倒を見ていなくてはならないし、その間にいつ最後の特異点の捕捉、解明がされるか分からない。エジソンさんやニコラさん達に任せるのも一つの手ではあるが、GNボーダーを遠隔で操作するには最低でも四、五人のサポーターが必要になってくる。

それに、沖田さんは生身の人間ではなく霊体のサーヴァント。どんな影響があるか未知数だし、何より影響されるかどうかすら分からない。個人的に自分としては事ある事に血反吐を吐く沖田さんの体質をなんとかしてやりたいが、先に述べた通り時間的にもリスク的にも簡単に頷く事は出来なかった。

上記の説明をすると、沖田総司さんは酷く落ち込み、肩を落としてトボトボと格納庫を後にした。その途中何度か足を止めて自分をチラ見していたが、最終的にはノッブこと織田信長にドロップキックさ

れ、引き連られる様に去っていった。
……前々から思っていたけど、仲良いよね。彼女達。
そんなこんなで格納庫でボーダーの整備をしながら過ごしていたら、何やら何処かで見た事のあるような生物が現れ、銃を乱射してきた。
反射的にノブノブ喚く未確認生物をぶちのめし、一通り整備を終えると立香ちゃん達の所へ向かった。其処には茶々と名乗るお面を被った少女がいたので、大阪のおばちゃん張りに用意していた飴玉を渡すと、口に頬張りコロコロさせながら自分達に危機が迫っていると告げてきた。
て言うか、茶々ってアレじゃん。一度は戦国統一を果たした豊臣秀吉の側室、ノッブの妹であるお市の方の娘さんで、浅井三姉妹の長女として数奇な運命を辿る女性。なんでそんな女傑が小さな女の子として現界しているのか。
その後、事情説明を受けた自分は取り敢えずぐだぐだ粒子が検知して世界がヤバいという、何ともフワッとした認識で微小特異点へレイシフトを果たすのだった。
……我ながら、見直すと酷い内容だな。こんなんで良いのかぐだぐだ組。
あ、因みにロマニはノブノブな生物に気絶させられ、今回はダ・ヴィンチちゃんがモニタリングしてくれる流れになりました。
此処んところロマニもマトモに寝てなかったからね。仕方ないね。

√Z月α日
そんなこんなで、茶々さんの要請により微少特異点へレイシフトを行った自分達の探索は、ペリィーチなるサーヴァントをぶっ飛ばす所から始まった。この時点でノッブはやる気を失くして帰る気満々だったが、以降の出番もなくなるぞと言う立香ちゃんの良く分からない脅しによって踏み留まった。
自分達がレイシフトした先の時代は19世紀中頃の日本、所謂幕末の時代だった。徳川幕府が衰退し、外国の船が訪れた事によって始ま

る新たな時代の幕開け。
坂本龍馬や桂小五郎、日本史の教科書にも載った名だたる有志達が活躍した時代。当然其処には沖田ちゃんが在籍した新撰組の事も忘れちゃいけない。明治維新、文明開化の始まる時代だ。
そんな時代へレイシフトを果たした自分達を待ち受けていたのは……戦車体ノッブ、どう見てもガン○ンクの格好をしたチビノブ（勝手に命名しました）が突然強襲し、無惨に塵芥となった。
いや、仕方ないやん。いきなり爆撃やら腕のマシンガンとか炸裂してきたら、取り敢えず迎撃しなくちゃいけないじゃん。マシュちゃんは立香ちゃんを護らなきゃいけないし、ノッブと沖田ちゃんは動揺して初動が遅れてたし、戦車体チビノブの狙いはサーヴァントと言えど見た目は子供な茶々さんだったし、人数的に自分が前に出るしかなかったんや。
まぁ、流石にいきなり気功波を放つのは悪いと思ったよ？　海割っちゃったし、デカイ水飛沫を上げたのも、やり過ぎた感があって申し訳なかったよ？　でもあくまでも護る為であって、それ以外の意図は無かったんだよ！
そんな自分の言い訳も空しく、茶々さんから怯えた目で見られる様になってしまった。べ、別に傷付いてなんかいないんだからね！
しかし、自分がチビノブ達を相手にしている一方で立香ちゃんが上手く情報を集めてくれたお陰で、面白い話が聞けた。何でもこの時代ではまだ存続していた筈の徳川幕府が倒れ、新たに織田幕府なる政府が新たに立ち上がったのだとか。
……うん、訳分かんないね。この突拍子のない情報には自分だけでなく沖田ちゃんやノッブ本人も驚いていたっけ。一時は混乱するも、取り敢えず更なる情報集めの為に京都へやって来た俺達、其処で細かな話を纏めていくと、徳川幕府は維新を待たずにスナック感覚で滅亡。代わりに織田幕府がインスタント感覚で出来たという。うん、やっぱり訳分かんないね。
他にもどっかで見た事のある長い紫髪の茶屋娘を見た気がするが……自分を見るや否や速攻で姿を眩ませました。解せぬ。

そんなこんなでお汁粉とお団子を味わいながらこれからどうするか思案していると……なんか往来のど真ん中で戦闘が発生。織田幕府と新撰組が争っているという事で乱入すると、其処にはノッブに良く似た別人さんがちびノブやらでかノブやらを率いて、如何にも狂戦士な男性とやりあっていた。

一先ずは沖田ちゃんとノッブが乱入したお陰で修羅場は逃れた訳なのだけれど、取り敢えず話を聞きたいという所に……ある選択肢が現れた。

即ち、新撰組の屯所か織田幕府の根城か。僅かな熟考の果てに新撰組を選んだ立香ちゃんに対し、自分は織田幕府の所へ一時身を寄せる事になった。あ、茶々さんは立香ちゃんの後をついていくことになりました。最初は如何にもバーサーカーな新撰組の人にビビってたけど、仮にも新撰組が見た目子供な茶々さんを乱暴に扱う筈がないし、向こうには沖田ちゃんもいるので心配はしていない。

そんで、案内された根城に自分は身を寄せる事にしたのだけれど……その際にまたもや問題が発生。何と織田幕府と新撰組でリソース（資源）の取り合いになったのだ。本当は詳しい話を聞きたい所だったのに話の流れで上手く出来ず、自分はこの時初めて立香ちゃん達と敵対する間柄となってしまった。

ノッブも最初こそはマスターである立香ちゃんに罪悪感を募らせていたみたいだけど、自分が大いに暴れてしまった所為で資源が丸々こちら側に流れてしまい、ノッブの罪悪感は強風に晒された発泡スチロール並に吹き飛んでしまい、更にノッブの宝具で資源を残さず頂いてしまった。

うん、全面的に俺の所為だね。ごめんなさい。人数的に立香ちゃん達が有利かなと思ってかめはめ波乱発したのは流石に反省してます。何処に？　勿論空です。

お陰で信勝君（ノッブを演じていた人）から化け物を見る目で見られる様になりました。グスン。

けれどその結果、新撰組の屯所は酷い有り様となっていたので、ノッブの冷やかしついでに自分が責任以て改装する事にしました。

ノッブも同情気味だったし、是非もないよね。
で、その後も織田幕府と新撰組の両陣営にそれぞれ分かれて、ノッブも沖田ちゃん達にも損が出ないように上手く立ち回っていると、解析を頼んでいたダ・ヴィンチちゃんから面白い話を耳にした。
何でもこの微小特異点は、この特異点だけで完結した不思議な空間らしく、時間的変動が全くない様なのだ。まるで画鋲に挿された画用紙に描かれた風景画の如く、この特異点を生み出した元凶は余程先に進むという事象を嫌悪している様だ。
沖田ちゃんもそろそろ限界っぽいし、自分もいい加減本腰になろう。池田屋事件を切っ掛けに信勝が黒幕に繋がっていると確信した自分達は、この特異点に召喚されたサーヴァント達を適当に蹴散らしつつ前進。

途中で真田丸もといエミヤ丸なんてヘンテコな仮面を付けた赤いアーチャーが、要塞に籠って挑発してきたがグランワームソードで蹴散らし、かめはめ波で蹂躙したりと、日頃の運動不足を解消する勢いで暴れました。お陰で新撰組の副長である土方さんからも新撰組に来ないかとスカウトされました。尤も、既に自分は王様に遣えているので、申し訳ないけど丁重にお断りをさせていただきました。
そんなこんなで事態は進み、今回の特異点の元凶である金色魔太閤こと豊臣秀吉の名を語る魔神柱アンドラスと相対し、一時は茶々さんが魔神柱に取り込まれ掛けたけど、自分の放ったソウルパニッシャーによって魔神柱から茶々さんを解放させ、その後は全員の一斉攻撃で有無を言わさず消滅させた。
……そして、これはあの魔神柱が死に際に言った一言から推測したんだけど、どうやらあの魔神柱は先のロンドンでの特異点にて自分がグランゾンを使って屠った柱達の一部だったらしいのだ。
ワームスマッシャーで蜂の巣になりながら、命からがら逃げ延び、その果てに力尽きた際に生まれた残留思念。　それが魔神柱アンドラスの正体でこの特異点の元凶だった。
うん、これ完全に俺の所為だわ。俺がきっちり始末しておけば、こ

うはならなかった案件だわ。自分の甘さの所為で皆に迷惑を掛けてしまったし、ノッブの前で信勝君を消滅させてしまった。

そう、信勝君は最初にアンドラスの残留思念に取り込まれていた茶々さんの縁から喚ばれた……ある意味魔神柱の眷属とも呼べる存在になってしまっていた。アンドラスを倒したことで現世に留まれる楔を失った信勝君は、笑顔のまま退場。ノッブに後を任せたと言って消滅してしまった。

二度も実の弟を死なせてしまったノッブの心情は察するには余りある。本人は気にするなと言っていたけど、これからはそれとなく気に掛けた方が言いかもしれない。

で、元凶を打ち倒しこれでようやく特異点が修復されるのかと思ったのだが、此処でも一つハプニングが発生。何と、新撰組の副長である土方さんまでもが魔神柱の眷属であることが明らかとなったのだ。

しかも彼の場合、アンドラスに一方的に喚ばれた存在ではなく、死して自らが英霊となりサーヴァントとして現界した事に気付かないまま彷徨っていた所へアンドラスが顕現する前提となってしまったらしいのだ。

信勝君と同じ魔神柱の欠片を埋め込まれた土方さん。しかしその経緯は全く以て事なっており、信勝君が茶々さんから続く信長の縁という前提として召喚された事に対し、土方さんは前提条件としてアンドラスを擬似的に甦らせた元凶の元凶となっていたのだ。

この特異点を停止させていた一因も彼の精神性が影響されているのだろう。その後、死ぬわけには行かない。俺がいる限り新撰組は不滅だと吼える土方さん、暴れる彼を正面から止めたのは沖田ちゃんと立香ちゃんだった。

「今の沖田さんの新撰組は、ここだよ」　そう自分の隣が沖田ちゃんの居場所だと口にする立香ちゃん、彼女のその一言によりこれ迄土方さんと戦うのを躊躇っていた沖田ちゃんは腹を括り、土方さんと戦うことを決心した。

自分？　いや、流石に一騎討ちの状態で横槍するのは流石に駄目でしょ。二人の気持ちを無下にする気もしたし、この時の自分は大人し

く応援だけに留まる事にしました。
その後、無事に土方さんに勝利した立香ちゃんと沖田ちゃん、消滅する間際まで新撰組であることを止めなかった土方さんと、何かしらのやりとりをしているのを見届けた後、自分達は特異点から帰還。無事にカルデアに戻ることが出来た。茶々さんと一緒に。
それで、この茶々さんなんだけど、妙に立香ちゃんの事を気に掛けるんだよね。ダ・ヴィンチちゃんが言うには、子供を気に掛ける母親みたいなものだとか。
頼光さんやブーディカさんといい、なんか母性の強い女性サーヴァントが増えてる気がするのは……自分だけかね？
あと、余談だが自分は茶々さんとは余り顔を合わせて無いんだよね。いやね、なんか知んないけど顔を合わせ辛いのよ。一回通路でバッタリと蜂合わせてから、何故か説教されたし。なんだよ、頑張りすぎって。
頑張ってるのは俺だけじゃないんだから、別に気にする必要はないと思うんだけど……まぁ、暫くは大人しくするかね。勿論、次の特異点が判明次第、即行動を起こすけどね。

◇

「もう、立香といいお前といい、もっと自分を大事にするし！　言うこと利かない子はお尻ファイヤーするんだからね！」
「いや燃やすなよこえーよ。て言うか、何で俺にまで気に掛けるんだよ。立香ちゃんは兎も角として、俺は成人した男だ。自分の事くらい自分でやるよ」
「そうやって頼光ちゃんとかブーディカちゃんの気遣いを無視してき

たんでしょ！　そういうの、茶々良くないと思う！　人の好意は素直に受けとるべきだし！」
「はいはい。わーったよ、ナイチンゲールさんを呼ばれるのも嫌だし、今日は大人しく休むとするよ」
「ふっふーん。それでいいし。後でお汁粉持ってくるから、立香達も交ぜて一緒に食べるし！」
「おう、んじゃ楽しみに待ってるよ」
　自室へと続く通路、大人しく休むと口にした修司の背中を茶々はその背中が見えなくなるまで見送った。
「本当、此処は頑張りすぎる子が多すぎるし、二人とももう少し休むことを覚えた方がいいと思うな」
　人理が焼却され、帰る家も世界ごと失った人達。そんな辛く過酷な環境の中でそれでも彼等は未来を取り戻す為に戦い続けている。
　正気の沙汰じゃない。少なくとも、茶々は戦い続ける二人を前にそう思った。家族を失い、帰る家を失くし、それでも泣き言を口にしないで頑張り続ける立香。
　そんな彼女と未だ幼いマシュ、そしてカルデアの全てを守る為に日々を修練に費やす修司。
　二人とも、頑張りすぎだ。特に修司は自身が成人しているからと言って、率先して働き過ぎているきらいがある。幾ら体が丈夫だと言っても、休む時は必要だ。
　それに、彼女は知っている。知ってしまっている。白河修司が幼い頃に両親を失い、天涯孤独の身の上である事を。カルデアのデータベースを悪戯心で覗いた時、ほぼ偶然閲覧してしまっていた。
　母の愛を知らず、父の強さを知らずに育った男。勝手な解釈かもしれない、余計なお世話かも知れない。
　けれど……。
「そんなの、寂しすぎるではないか」
　理不尽を許さぬと吼え続ける一匹の狼。その心の傷を癒すため、茶々は余計なお節介だと理解しつつも、立香達のいる食堂へ向かうのだった。

その１２０

√Ｚ月√＊日

マシュちゃんの体も修復し、これ迄数多くの微小特異点（イベント）を乗り越え、遂に自分達カルデアはロマニを含めたスタッフ達の健闘の甲斐あって最後の第七特異点の座標を特定する事に成功した。

場所は西暦が始まる遥か昔、紀元前の中でも神代と呼ばれる神秘の濃い世界。ロマニ曰く、神秘の濃度がこれ迄とは桁外れな為、特定する時間が掛かったのだとか。

予想より時間が掛かった事にロマニは自分と立香ちゃんに謝ってきたが、限られた人員と環境の中で懸命にやり遂げたロマニ達を責める者は此処にはいない。

寧ろ時間があったお陰でマシュちゃんの体は万全となったし、立香ちゃんはケイローン先生を始めとした数多くの師の中で生き残る術を獲得していたようだし、自分に至っては自身を今一度鍛え直す事が出来た。

最後の特異点に向けて気迫も準備も万端。いつでも行けると意気込む自分達に、ロマニは敢えて待ったを掛けた。と言うのも、ロマニを含めカルデアのスタッフ達は最後の特異点の特定に少なくない消耗を強いられ、現在結構な疲労困憊の状態なのだとか。

最後の特異点の原因を修復し、其処にある聖杯を回収したらその次は最後の戦い――――即ち、魔術王ソロモンとの決戦が間近に控えているという事、休息の時間はなんとか捻出させるが、〝期限〟が迫っている以上あまり悠長していられる時間はないだろう。

そう、時間だ。もうじき人類史が完全に消えてなくなる２０１７年まで、猶予はそんなに残されてはいない。七つの特異点を攻略するだけでは人理焼却は防げない。人理を修復し、自分が元の世界に戻る為には全ての元凶である魔術王を倒すしかない。

最後の特異点の修復と魔術王ソロモンの攻略、この二つを立て続け

にこなさなければならない以上、今の内に最後の休み時間を設けておきたいと言うのが、ロマニの言い分らしい。
と言うか、これ以上働くと狂戦士な看護師が実力行使に出てくる為、休むしかないと言うのが本音らしい。最後にあんまりなオチに吹き出したが、確かにそうなってはカルデアは完全に機能停止する為、休息をするしかないのだろう。
そう言うわけで今日一日、俺と立香ちゃんは完全なる休日の日となった。ロマニ達も交代制で仮眠を取り、それぞれ思い思いの一日を過ごす事になった。
立香ちゃんはマシュちゃんと一緒に娯楽室で暇なサーヴァント達を誘って遊び、ロマニはマギ?マリなるブログの更新をチェックしたり、ムニエルやスタッフの皆も仮眠を取るまでサーヴァントの皆と楽しそうに雑談をしていた。
カルデアに多くの英霊達が召喚され、最初こそはスタッフの皆は超常の力を持つサーヴァントの皆に怯え、警戒していたけど、自分や立香ちゃんが自然に接している内に、一人また一人と、気付けばスタッフの皆がサーヴァントの皆と話すようになっていた。
特にムニエル、彼はサーヴァントという存在に誰よりも心を開き、彼なりに対等に接してきた。と言うか、アストルフォが来てから露骨にサーヴァントに絡むようになっていた。
この間なんて黒髭の奴となんか熱弁していたぞ。男の娘同士は映えるか否か、とか。自分には分からない世界を熱く語っていた。この間なんて百合の間に入るのは外道とか言って、通路を仲良さそうに歩いていたイリヤ嬢と美遊ちゃんの間に入ろうとしていたクマのヌイグルミを一緒に鬼気迫る勢いで蹴り飛ばしていたっけ。
そんな、一部のスタッフのプライベートな瞬間を目の当たりにした辺り、スッカリ皆カルデアでの生活に慣れた様だ。
残された問題はあと二つ。第七の特異点を修復し、その先で待つ魔術王をブッ倒す。それで人理焼却の前提条件は覆り、全てが元に戻る。そしたら、未だ冷凍保存された状態のアイツ等も治療する目処が立つ事だろう。

レフ＝ライノールの手によって爆破された四十数名の魔術師達。その中には共に困難に立ち向かう筈だったチームメイトもいて、その彼等は今もコフィンの中で眠っているままだ。全てが終わった後でもう一度彼等と顔を合わせられるかどうかは分からないが、いつかまた会えたら、土産話として話すのも良いだろう。

――――だから、もう少しだけ待っていて欲しい。俺達が必ず、人理を修復して世界を取り戻してみせるから。

その時はきっと、笑って再会出来ると……信じている。

◇

それは、時間にして修司達が第四の特異点を修復させた直後。通常の時間軸、空間から隔絶された場所に――――その玉座は在った。

長い時の中で、ただ人類を見下ろしていただけの無能な王。自身が最も憎悪し、軽蔑し、唾棄するモノだと断じる吐き溜の玉座。そんな己が座する玉座に魔術の王はすがり付く様子でしがみついていた。

「クソ、クソ、クソがァッ！　何なのだあの巨人は⁉　なぜあの様な泥人形のごとき木偶人形に、この私が敗走しているのだ⁉」

遡ること数分前、魔術王ソロモンは一人の人間を見下し、その存在を塵芥に変えようとしていた。己が使役する魔神柱の力で以て、意気がる矮小な人間をその思い上がりと共に消すつもりだった。

けれど、そんな彼の目論みはアッサリと覆り、魔術王は命からがら逃げ惑い、漸く自身の拠点へたどり着く事が出来た。５０万もの僕を

失った事、それ自体は問題ではない。問題なのは、自分を此処まで追い詰めたあの蒼い魔神に、どうあっても勝てる気がしないという事。

そう、魔術王ソロモンは知ってしまった。自分ではあの魔なる神に勝てないのだと、その優れた頭脳ではなく、生物としての本能で理解してしまった。人間を否定し、地球に生息するあらゆる命を否定していた魔術王が、よりにもよって一つの生命体として恐怖し、無惨にも逃げ惑って来たのだ。

度しがたい屈辱。しかしどんなに喚いた所で自身が逃げた事実は変わらないし、今も恐怖で震えている事も変わりない。一度理解した恐怖を拭い去る程、魔術王ソロモンの人間性は豊かではない。

ならばどうするのか。あれだけの強さを持っているのなら、次の第五第六の特異点は言うに及ばず修復されるだろうし、最後に残された第七の特異点も、時間稼ぎは出来ても修復されるのは間違いないだろう。そうなれば、次にアレと敵対した時が自分の最期だ。

――最早、認めるしかない。認める事でしか現状を正しく認識出来ない程、魔術王ソロモンは追い詰められていた。

「おのれ、カルデア。おのれ、白河修司。おのれ、蒼の魔神！」

人理焼却という大業を成し遂げ、早く次の工程に挑まなければいけないのに、あの時目にした魔神の圧倒的な力が脳裏に刻まれ、恐怖と焦燥で脚がすくんでしまう。

どうすれば良い。どうすれば、自分はあの魔神に勝てるのか。古代から続く魔術の知識と叡知を駆使しても、アレを凌ぐ存在を魔術王は知らない。

混濁する思考。頭を両手で抱え、絶望を前に歯を食い縛る魔術王は……ふと、あることに気付いた。

それは、玉座の近くで打ち捨てられていたある手帳だった。人理焼却の後、どういう訳かこの神殿に流れ着いた一冊の手帳。人類史に残された一切の存在は燃え尽きた筈、建物は勿論のこと紙の一欠片まで、一切の例外を認めず燃やし尽くした筈。

一見すればなんの魔術的保護も強化もされていない……ただの紙束。魔術王もこれ迄は一切の興味を抱かず、ただ捨て置いた嘗ての

人類史の残り火。それが、何故今になって自身の視界に入ってきたのか。

まるで運命的で、いっそ作為的な感覚。されどこの直感は無視できないと、魔術の王はその手帳を拾い上げた。

頁を捲る。瞬間、魔術王は深淵を目の当たりにした。一切の魔術的要素はないのに、流れ込んでくる膨大な情報の渦。顔をしかめ、本能が危険と警鐘を鳴らしているのに、魔術王はその光景に目が離せなかった。

それは、古い記憶。この世界にも何処にも属さない、時間と空間が交差する、禁忌にして忌憶。

〝――それは、黒き地獄〟
〝――それは、黒き天使〟
〝――それは、黒き銃神〟
〝――それは、古き人祖達〟

「あ、ああ、ああああああっ!!!」

流れ込んでくる。情報が、禁忌が、忌憶が、虚ろなる魂と深淵を通して、己という媒体に流れ込んでくる。

有り得ざる記憶――――否、虚憶が、その一端が魔術王の内へと流れ込んでくる。

そしてその果てに、彼は見た。自身が恐れる魔神、その源流となった恐るべき神の存在を。おぞましく醜い、荒ぶる破壊の神を。

「――は、ははは、ハハハハハハ！」

気付けば、魔術王なる者は嗤っていた。滑稽だと、先程まで自身が抱いていた魔神への恐怖が、嘘のように薄れていた。代わりに内から溢れ出るのは圧倒的優越感。

「何が、なにが重力の魔神か！　馬鹿馬鹿しい。所詮は貴様も、神を模倣した紛い物ではないか！」

紛い物、或いは偽物。蒼い魔神に恐怖していた者とは思えない強気な言葉。しかし、そう思えるだけの根拠が魔術王にはあった。

「ならば、私はかの神と契約を結ぶとしよう。おお、破壊の神よ。おぞ

ましく醜き荒ぶる神よ。その力を以て、私は今度こそ全てを終わらせてやろう」

恐怖と狂気の狭間にて、扉は開かれた。魔術王ソロモンは七十二の悪魔を従えた召喚の魔術師。扉が用意されたのなら、其処からかの神を呼び出すなど……容易い事だった。

さぁ、魂は呼び出された。後は肉と骨で継ぎ足し、その形となる器を整えるだけ。

遥か遠い時間神殿にて、王は謳いあげる。来るべき破壊神の到来を、今か今かと待ち望んでいた。

その１２１　第七特異点

極寒の地に建造された人類最後の砦、人理保障機関カルデア。これ迄六度の特異点を修復し、残る特異点は後一つ。人理の完全なる修復は目の前に来ているのと同時に、人理の完全なる焼却もまた目の前に来ていた。

２０１７年より先、人類に未来はない。元凶であるソロモン王の言葉を信じるなら、期日となるその日までもう一月も時間がない。

そして、更に言えば特異点を七つ攻略したとしても、人類の勝利はなく、完全に人類の歴史を未来へ繋ぎ直すには元凶となった魔術王を倒す必要がある。

あまりにも切迫した状況、なのにも関わらず、カルデア内部のスタッフ及びサーヴァントの面々は平時と変わらない穏やかな空気の中で過ごしていた。

そんな中、二人のマイルームに呼び出しの音が鳴る。それぞれ身支度を済ませ、準備も万全となった二人はそれぞれ礼装と胴着を身に纏って通路に出る。

道中、サーヴァントやスタッフ達から応援やら激励の言葉を受け取り、最後の特異点の攻略に向けて気合いを入れる。その表情に一切の気負いはなく、ただ己のするべき事を成し遂げる為の――――決意ある顔をしていた。

「やぁ、おはよう二人とも。昨晩はちゃんと寝眠れたかい？」

「おはようドクター！　うん、今日も快眠で朝ごはんもちゃんと食べてきたよ！　キャットの作るご飯美味しいよねー。あ、勿論快便も済ませてきたよ」

「うん、其処まで聞いてないからね。て言うか女の子が便とか言わないで欲しいかな～！　反応に困るから！　いや、医学的には大変結構な事なんだけどね⁉」

「そっちも、朝から元気そうで何よりだよ」

相も変わらず元気一杯な少女、藤丸立香。魔術的要素は微塵も待ち合わせていなかったのに、今日という日まで生き残り、多くのサーヴァント達と縁を結んで戦ってきた最後のマスターの片割れ。最初に誘拐同然にカルデアに訪れた時と変わらない笑顔を見せる彼女に、ロマニ＝アーキマンは申し訳なさと嬉しさを噛み締めていた。

そんな彼女を見守るように佇むのは、立香と同じ立場となっている……もう一人の人類最後のマスター。これ迄数多くの英霊英傑達をその手で下してきた戦士、彼も立香と同様に魔術素養を待ち合わせておらず、その事実は魔術師達にとってある種の皮肉にも聞こえる事だろう。

しかし、魔術の素養を持ち合わせていない程度で彼等を責める人間は此処にはいない。皆、誰もが立香の奮闘奮戦を見てきており、修司という出鱈目人間のハチャメチャ具合も熟知している。そして、それを知っているが故に、皆安心して送り出そうとしているのだ。彼等なら、きっと今回も何とかしてくれるのだと。

「すみません！　マシュ＝キリエライト、遅れました！」

「フォーウ！」

「ははは、時間的にはピッタリな頃合いだ。そう慌てる必要はないよマシュ、そしておはよう。最後の特異点の攻略、そのブリーフィングを始めるとしようか」

そんな彼等の下へ、僅かに遅れてしまったマシュがフォウを肩に乗せて駆け付ける。時間は丁度、コーヒーと食パンをそれぞれの両手に待ってやって来るダ・ヴィンチの登場を皮切りに、遂に第七特異点の攻略の準備が執り行われる。

「――――先日話した通り、今回のレイシフト先は人類史、その始まりだ。地球全土に於ける各文明の興りたるモノ、世界が未だ一つであった頃の世界そのもの。ティグリス・ユーフラテス流域に形を成して、多くの文明に影響を与えた母なる世界。そこは正真正銘、最古の文明の一つ。発生時期は最初期の古代エジプトとほぼ同時期」

ロマニの語る特異点先の世界。ティグリス・ユーフラテスと耳にした瞬間、修司は黄金の王の背中が脳裏に浮かんだ。

「紀元前２６００年前、古代メソポタミアの土地。ウバイド文化期の後、シュメル文明の始まりだ」
　古代メソポタミア。それを聞いて修司だけでなく立香もマシュもかの英雄王の姿を幻視した。西暦以前の世界、まだ世界の表面が神秘・神代に片寄っていた頃の世界。
「そう、これから私達が向かうレイシフト先の世界はシュメル初期王朝のメソポタミア！　これはもう、〝そこに行く〟だけで今まで全ての特異点以上の難易度と言えるだろう！」
「ダ・ヴィンチちゃん、頬っぺたにパン滓くっついてる」
「おっと、これは失礼」
「で、その神代ってのは具体的にどんな時代なんだ？　いや、メディアさんとか神代の英霊達からそれとなく話は聞いていたけど……」
「では、改めて説明するとしよう。神代とはその名の通り日常的に神様やら巨大な怪物やらが跋扈する地球最後の幻想紀。現代より魔力の濃度が極めて高いヤツベェー世界さ。と言うわけで、はい立香ちゃん」
　神代の世界観を端的に、かつ分かりやすく説明するダ・ヴィンチ。朝食と思われる食パンを頬張り、コーヒーを飲み干すと、彼は側に置いていたトランクを立香へ手渡す。
「これって……礼装？　スッゴいきめ細かくて着心地良さそう」
　トランクの中にあったのは、民族衣裳に見立てた一式の礼装。軽く、強く、そして頑丈に施された魔術礼装にはダ・ヴィンチだけでなく幾人ものキャスター達の手が施されている様に感じた。
「ほら、砂漠の時にマスクを作ってあげただろう？　あれの発展型だよ。これから君達が向かう先はあのエジプト領より魔力の濃い世界だ。レイシフトで持ち込めるものは制限があるからね。こんな、最低限のものだけど性能は折り紙つきだよ。……本当は、私だけの手で作り上げたかったのだけどね」
　若干不満そうに唇を尖らせるが、ダ・ヴィンチもこれから立香達の向かうレイシフト先がどれだけ危険な場所なのかは、漠然としか理解できていない。理解できていない以上自分に出来ることを限られて

いると早期に悟った万能の天才は、神代に生きたサーヴァント達に知恵を借り、手も借りた。
　その果てに誕生したのが、神代でも無事に生き残り、生還できる事を優先させた魔術礼装。これならばきっと、レイシフト先での彼女を護ってくれる事だろう。
「そして、済まない修司君。立香ちゃんの事ばかり気に掛けて、君には何の餞別も渡せなかった。本当に……申し訳ない」
「謝る必要はねぇよ、ダ・ヴィンチちゃん。アンタは立香ちゃんの生存の為に最大限の事をしてくれた。俺の事は気にしないでくれ、なぁに、きっと向こうで深呼吸でもすれば体も順応するさ」
「……そうか、そう言ってくれると、私も幾分か救われるよ。今回は、私もスタッフの一員として働くよ。君達の存在証明は、私がしっかりと受け持とう」
「おう、頼む」
　その後も、軽くメソポタミアに関するレクチャーを受けた。メソポタミアとは元はギリシャ語を語源とするもの、メソは中間、ポタミアは河とそれぞれ意味を持つ。ペルシア湾へと流れるティグリス河、ユーフラテス河の間で栄えた文明、という事。
　オーダーの名称の中にバビロニアとあるが、そう呼ばれるのはもう少し後の事。古代メソポタミア、そしてシュメル。これらの古代文明として規定されるモノはあまりに長大、例えば同じ古代文明でも紀元前５０００年前と紀元前２６００年前ではかなりの差異があり、歴史的背景も異なってくる。
「その中で、今回は紀元前２６００年前。初期の王朝時代だ。魔術的な視点によると、人間が神と袂を分かった最初の時代とされている」
「そうだね。この時代の王が何を思ってその選択をしたのかは知らないが、神々の時代はここを決定的な決別として薄れていき、西暦を迎えた時点で、地上からは神霊が消失した。一部の島国では西暦後も残っていた様だが、それも西暦１０００年頃には消失したとされている」
「あれ？　一部の島国って……」

「ブリテン島、もしくは日本だな」
「えっ!? お二方の故郷が、ですか!?」
「あぁ、カルデアの資料室で軽く歴史の書物とか漁ってみたけど、どうやらそうっぽいんだよ。ほら、日本って基本的には山々に囲まれた土地だろ？ 人の手には入りづらい地形だから、神秘とやらが他の国々より残りやすいのかもって、メディアさんから昔聞いたことがあるんだよ」
「へー、そうなの？ ドクター？」

「う、うーん。ブリテン島は兎も角、極東の日本はよく分からない所が多々あるからなぁ。ほら、修司君が生まれた国だし」
「おぉい、どういう意味だこら」
「はいはい、話を脱線させないの。ロマニも茶化さない」
「あ、あぁ、済まないね。で、話を戻そう。西暦を迎えた時点で神霊は消失した。極めて特殊なケース以外の、いわゆる〝人間と一切交わらなかった〟神性はね」
「？」
「まぁ、その辺りの話は置いておいて。君達にとって重要なのはレイシフトの難易度だ。紀元前へのレイシフトはとても難しい。時代を遡れば遡る程に人類史は不確定になる。というか、神代に近付くと不確定にならざるを得ない」
「神代とは不確定性の時代だと宣う学派もあるぐらいでね、こと観測や実測といったモノとは頗る相性が悪い。シバもなかなか安定してくれない。というか、絶対に安定なんかする筈がない」
　それはつまり、譬え魔術の結晶であるシバであっても、神代という世界は不確定に満ちている事。それでも第七特異点の座標を割り出し、観測を可能としてくれたカルデアのスタッフ達には改めて頭が下がる思いだ。
　その背景にはダ・ヴィンチという万能の天才が手を貸してくれたこその一面もあり、今回は彼も管制室に詰める為、ナビゲートに口を出す余裕はない。それでも立香に新たな礼装を授ける時間を作ってく

れるのだか、彼に対しても頭が上がらない。
「大丈夫。さっきも言ったが君達の存在証明はこの私が完璧にこなして見せよう。なーのーで、後は安心して現地で西へ東への大冒険を楽しみ、いつも通りにハチャメチャを巻き起こしてきたまえ！」
「ダ・ヴィンチちゃん……うん、ありがとう！　頑張るね！」
「レオナルドの言い分は不謹慎だけど、確かに得難い経験ではある。危険は計り知れないけど、それと同じくらい素晴らしい発見がある事を願っているよ」
「うん、ドクターの分も、しっかり体験してくるね！」
「あぁ、全てが解決した旅の終わりに、君が得たものを、僕にもちゃんと聞かせてくれ」
　さぁ、全ての準備は整った。後は立香が新しい礼装に着替え、コフィンの中へと入るだけ。その間に軽めの準備運動を済ませると、ふと疑問に思うことがあった。
「なぁ、ロマニ。レイシフトする前に一つ質問したいんだけど……いいか？」
「うん？　なんだい？」
「今回のレイシフト先、古代メソポタミアの時代だと言うのは理解した。ならさ、其処には……その、あの人もいるんだよな？」
　修司が思うのは、一人の英雄。自身が仕えると誓い、強くなると約束した英雄達の王。その彼が生きたとされる時代にこれから向かうのだと、修司はらしくない期待と不安にその胸中をざわつかさていた。
「そうだね。その可能性は大いにあるだろう。けれど修司君、仮に英雄王がいたとしても、それは君の知る王じゃない。あまり、妙な期待はしない方が……」
「あぁ違う、そう言うんじゃないんだ。王様のいた時代なんだって言うなら、カルデアにいる英雄王も此方に送れたりするんじゃないかなって」
「あ、あぁー、そう言う意味ね。確かに英雄王が二人もいるとすれば、大抵の事は解決しそうだけど……」

「だろ？　ギルガメッシュ王がいれば、万が一俺が立香ちゃんから離れる事態になっても対応してくれそうだし、土地勘もありそうだからなんとかなるかなーって」
　仮にこれから向かうレイシフト先で嘗てのギルガメッシュ王が存在するのなら、カルデアの英雄王と合わせ、二人の英雄王が第七の特異点で爆誕する事となる。そうなれば嘗ての特異点修復の旅の中でも随一に心強い存在になるだろう。
　そうすれば、自分が遊撃に出てマシュが護り、王が迎撃するという無敵の布陣が完成するのだ。修司が期待に胸を膨らませるのも、ある意味仕方がないと言えた。
　しかし……。
「けど、残念だけど修司、それは多分叶わない。ほら、先日にも言っただろ？　これから僕達が向かう先で待つのは神代。神と神秘が色濃く残る世界、観測だけで手一杯の僕達にカルデアの戦力を送る余裕はないんだ」
「あっ……」
　そう、先にも述べた通り、神代とは不確定に富んだ世界だ。余程その時代の相性の良いサーヴァントでない限り送るのは難しいし、仮に送れたとしてもそれは他のスタッフ達の大きな負担になりかねない。
　更に言えばメソポタミアはギルガメッシュ王が存在した世界。同じ時代に同じ人間を送れば、それが特異点にどの様な影響を与えてしまうのか、最早予想すら難しい。最悪の場合現地にて、本人同士による対消滅だって引き起こるかもしれない。
　修司の言いたい事や懸念する事も理解できるが、それでも簡単に頷ける程、今回の特異点は甘くない。修司には多大な負担を被るかも知れないが、ロマニとしては今は修司に踏ん張って欲しいところだ。
「そっか、なら仕方ないな。よし、この話はこれで終わり。なら、その分のバックアップは頼んだぜ」
「あぁ、勿論だとも。レオナルド共々、君達の事は僕達が責任をもってサポートするよ」
　その言葉に安心した修司は、改めて準備運動を始めた。マシュと一

緒になってストレッチをする事数分、新しい礼装に身を包んだ立香と共に、いよいよ三人はコフィンの中へと入り込む。
その最中、マシュはロマニへある質問をした。命に意味はあるのかと。微かに聞こえてきた声に修司は一瞬足を止めた。
その時、ふと管制室に視線が向いた。其処には黄金の鎧を身に纏う王が、静かに修司を見下ろしている。
紅い瞳、全てを見通しているようなその眼に、修司は初めて王と出会った時を思い出す。あの時と今の自分、果たして其処にどれだけの違いが出来たのか。修司には推し量れない。
けれど、示す事は出来る。あの時と気持ちが全然変わっていないと、それを証明するように修司は王に向けて拳を突き出した。
すると、王の目がキョトンと丸くなる。次いで、呆れた様に嘆息を溢している。ガキが、そう貶しているだろう英雄王の態度に修司は笑って答えるのだった。
「行きましょう、修司さん。今回の旅もきっと、ワクワクするものだと思いますので」
いつの間にか、修司の横をマシュが通りすぎている。どうやら、ロマニから納得のある答えが貰えたらしい。ならば、自分もそれに続くとしよう。
目指すは神代、挑むのは嘗て存在したとされる神々。嘗てない強敵達と冒険の前に……。
「あぁ、往こう！」
修司は、ワクワクが止まらなかった。

アンサモンプログラム　スタート。
霊子変換を開始　します。
レイシフト開始まで　あと3、2、1……
全工程　完了（クリア）。
第七グランドオーダー　実証を　開始　します。

◇

「――来たか」
遥か遠い過去、バビロニアの玉座にて偉大なる王は立ち上がる。その胸中に抱くのは、滅び行く時代への不安か、それとも達観か。
「最早、我の眼に映る未来など意味はない。さぁ、神々よ、天から人を見下ろす者共よ、刮目するがいい！」
否。
「ハチャメチャが押し寄せてくるぞぉっ!!」
偉大なる王は、何時だって――ハチャメチャな未来にワクワクするものだから。

絶対魔獣戦線バビロニア＋1

開幕。

その１２２　第七特異点

ビュウビュウと、吹き抜けるような風が頬を撫でる。レイシフトの光に包まれ、特異点である現地へ赴く筈だったカルデア一向。最早慣れた筈のレイシフトだが、この時だけはいつもと様子が違っていた。
「そ、空ァァァッ!?」
そう、人類最後のマスターである藤丸立香は、現在マシュと共にスカイダイビングの真っ只中にいた。パラシュートもなく、当然ながら命綱もない。レイシフト先の大地が一望出来る程の高い場所に転移された立香は、いきなりの展開に唖然となる。
「せ、せせせせ先輩！　落ちてます、バンジーです！　目視ですが現在、高度千メートル！　地上に激突まで、あと十数秒！」
隣から聞こえてきたマシュの声に、立香は正気を取り戻す。このままでは地面と激突し、大地に二つの赤い花火が出来上がってしまう。何とかしなくては、そう自分に言い聞かせながら、藤丸立香はマスターとしてマシュに指示を飛ばす。
が……、それよりも速く、山吹色の何かが落ち行く二人を抱き抱える。言うに及ばず、共にレイシフトを果たした白河修司だった。
「悪い二人とも、遅くなった」
「しゅ、修司さん！」
「よ、良かった～、助かったよ～」
過酷な修行のお陰で、舞空術なる空を飛ぶ術を身に付けた修司。重力という楔から解き放たれたこの男は、既に既存する物理法則から解離しつつある。そんな男に無事に拾われた立香とマシュは、それぞれ安心したように溜め息を吐いた。
「しかし、これはどういう事だ？　聞いた話だと俺達のレイシフト先は街中にされる手筈だったと思ったが……俺は兎も角、二人まで空に投げ出されるとは、流石に予想外だ」
「自分は兎も角って……」

「さ、流石修司さん！　唐突な空からバンジーの経験者です！」
「うん、誉めてないからね」
『済まない皆！　大丈夫かい!?　全員無事!?』
　これ迄修司は魔術王からの介入の所為か、最初の転移で何度か上空に投げ出されている。既に慣れているし、今となっては空を飛翔する術もあるから別段驚きもしなければ戸惑う事もしないが、マシュと立香の二人が空に投げ出される所を見た時は、流石に少し焦った。
　まさか、魔術王の手が自分だけではなく二人にまで及んで来たのか？　そうなれば中々に厄介な事だぞと、修司が僅かに不安に駆られる中、ロマニから通信が入る。
　ロマニが言うには、どうやら今回のレイシフト先への転移は意図的に弾かれたものだと言う。本来ならこの時代最大の都市にレイシフト先を設定していたのだが、都市に襲撃を想定して覆われていた結界に弾かれ、その影響により地上千メートルの上空に投げ出されたのだと言う。
　魔術王からの横槍でないことに安堵する三人、とは言え現在地は目的地となるウルク市から離れた所で、更に言えば自分達は未だ空の上だ。
『でも、修司君が空を飛べるお陰で何とかなりそうだ。そのままウルクへひとっ飛びしちゃおう！』
「イェーイ！　光る雲を突き抜けてＦｌｙ　Ａｗａｙしようぜ！」
「……いや、それは止めておいた方がいいかもしれん」
「修司さん？」
　空を飛べるという大きなアドバンテージを有しているのに、敢えて待ったを掛ける修司に、マシュとロマニは首を傾げて訝しむ。
「この特異点に来てさっきから感じていたけど、どうやらこの特異点には結構ヤバそうな奴等がウジャウジャいやがる。その所為か、あんまり上手く気の察知が出来ないんだ」
『そ、それはもしかして、先の第六特異点の時の様な感じかい？』
「いや、数だけ言うなら第六特異点以上だ。獅子王や太陽王、それに比肩するような奴が……少なくとも三体はいる」

修司が溢す衝撃的な事実に立香とマシュは絶句する。獅子王と言えば第六の特異点にて最後に戦った女神ロンゴミニアドだ。それに比肩、或いは凌駕する存在と言えば、先ず間違いなく神霊クラスの怪物だと考えられるだろう。

一体いるだけでその土地周辺がその者の気に覆われ、近くにいる者の気を探る事が困難になってくる。そんな桁外れの力を持つ存在が少なくとも三体いるという、レイシフト早々に衝撃的な事実を前に立香は肩を落とした。

『そ、それなら尚更、急いで空を飛んだ方がいいんじゃないのかい!?確かにその情報で不安になるのは分かるけど、君だって負けてないんだ！　トップスピードで飛べば大抵の脅威は振り切れる筈だよ！』

「そのトップスピードに、立香ちゃんを巻き込めないなぁ」

『あっ……』

修司の飛行速度は既に音速を超えており、肉体的スペックを併せ持てば充分この特異点でも通用するだろう。しかし、今の修司の腕にはマシュと、何より正面切っての戦闘はほぼ不可能な立香を抱えている。礼装の力によって多少は耐久力は底上げされているが、それでも修司の殺人的スピードに耐えられる程ではない。

「万が一、空で敵と遭遇すれば俺は二人を抱えたまま対応しなくちゃいけなくなる。流石に其処までの実戦経験はないし、何より二人を巻き込むわけには行かない」

『そ、そうか。なんかその……ごめんなさい』

「私もごめん。修司さんの足を引っ張っちゃって」

「気にすんな、二人を抱えたまま充分に戦えない俺も、まだまだ未熟だって事さ。それに、理由は他にもある」

「そ、そうなのですか？」

「あぁ、最初にこの特異点に転移した時、俺は相当高い場所から落とされたみたいでな。お陰で色々と見えた。パッと見た感じ、向こうにかなりデカイ街を見掛けた。如何にも城塞都市みたいな土地でさ、その城壁に如何にも対空を想定した砲台が備えられていたんだ」

転移直後、修司は立香達以上に高い所へ転移された。特異点修復の

旅を始めて三度目、いい加減慣れてきた修司はどうせなら情報収集してやろうとした時、ふと遠くにある街を見掛けた。
　それは如何にも城塞と呼べる大規模な街並みで、街を囲む巨大な城壁には数十もの砲台が備え付けられている。あれが何を相手にして用意された代物なのかは知る由もないが、修司が空に浮かんだまま近付くのは気が引ける程に、その城塞都市は物々しかった。
「そう言うわけで、一端落ち着ける場所に降りておきたいんだけど……ロマニ、何処かにいい場所なかったりしないか？」
『そ、そうだね。なら、すぐ近くの廃墟なんてどうだろう？　彼処なら落ち着いて話し合いが出来ると思う』
『枠外から失礼、みんなの頼れるダ・ヴィンチたぞ！　ロマニに捕捉説明を付け足すと、その廃墟には未知数の怪物が複数体確認されている。恐らくはこの特異点のエネミーだ。降りる時は充分に気を付けてくれ！』
「了解だ。そう言う訳で二人とも、準備はいいか？」
「勿論！　千里の道も一歩からってね！」
「はい、私も行けます！」
　諸々の事情から空を行く事を断念し、一先ずはロマニから教わった廃墟に向かう。その途中、廃墟に群がるエネミーと思われる敵性生物に修司が気弾を放つことで数を減らし、その勢いのまま地面に着地する。
　立香はマシュへ、修司はそんな二人の背を護るようにそれぞれ廃墟へ降り立つ。廃墟というにはまだ人の痕跡が強く残されていていて、まるでつい最近滅んだような光景に修司達は息を呑んだ。
『来るよ！　皆、頑張って！』
　聞こえてくるロマニの激励の言葉、それを合図とばかりに物陰からエネミーの群れが現れる。獣、鋭い牙と爪を生やし、低い声で唸る獰猛な魔獣が姿を現す。
「グルルルルゥ……」
　明らかな殺意を滲ませ、殺す為に襲い掛かる魔獣達に修司達はこれ迄の特異点とは毛色の違う何かを感じた。

しかし戸惑いこそすれ、彼等は既に幾度となく修羅場を超えてきた者達だ。
「ガァァァッ!!」
「オラァッ!」
牙を剥き出し、噛み殺そうと迫る魔獣に修司は正面から拳を繰り出す。牙をへし折り、そのまま気功波を放ち、周囲の魔獣諸とも消滅させていく。
マシュも負けておらず、立香の支援を受けながら大立ち回りを続け、更にはイノベイター特有の空間認識能力の高さで以て、周囲を把握して押し寄せる魔獣達を相手に有利に立ち回っている。
修司とマシュ、共に立香へ近付けさせないまま魔獣達を駆逐していき、数分立たない内に周辺は魔獣の死骸で溢れ返っていた。
「よし、どうにか片付いたか」
「早く移動した方が良いかもしれません。魔獣の血の臭いに吊られ、他の魔獣が押し寄せてくるかもしれません」
「だね。修司さん、街のあった方向って覚えてる?」
「あぁ、確かこっちに……なんだ?」
魔獣の殲滅も終わり、早々に廃墟からの脱出を提案するマシュに立香もまた同意する。度重なる旅を経て心身ともに逞しくなった二人を嬉しく思いつつ、最初に見掛けた城塞都市に向かって針路を定めようとした時、ふと修司は背後の上空から何かを感じ取った。
強い気配だ。格だけで言うなら三体の巨大な気を放つ連中と遜色がない。そんな強い気配を放つ何かが、一直線に此方へ向かって来ている。
「どーいーてー! ぶーつーかーるー!」
「立香ちゃん、ちょっとゴメンよ」
「へ、な、なに?」
その何かは、まるで落ちるように此方に向かって来ている。このままでは立香に直撃すると瞬時に察した修司は、立香を抱き抱えて後ろに飛ぶ。
瞬間、着弾。「ぶへぇ!?」と悲鳴らしき声が聞こえた気がしたが、舞

い上がる砂埃の所為でそれどころではない。突然の事態にロマニはパニクるが、立香の無事に一先ず安堵する。
「い、一体何が……!?」
「び、ビックリした」
「二人とも、気を付けろ。コイツ、多分神霊だ」
「っ!?」
神霊。そう修司が口にすると、立香とマシュの表情は強張り、何時でも戦闘出来るよう身構える。軈て砂塵は収まり、砂煙が晴れていく。
すると、砂煙の中で踞っていたそれは、唐突にガバりと起き上がり……。
「ちょっとぉ！　本当に退く事は無いんじゃないの!?　私のクッションになれると言う栄誉を授けられると言うのに、何て無礼な連中なのかしら！」
「へ？」
「お、女の人、ドクター大変です！　空から女性の方が落ちてきました！」
『バルス！　って、言ってる場合じゃない！　二人とも気を付けて！　修司君の言うとおり、その子は神霊だ！　見た目に騙されてはいけないよ！』
「ねぇ、聞いてるの!?　特に其処のアンタ、男でしょう！　私と言う絶世の美女を抱き止めるこの上ない栄光を、どうしてみすみす手放すのかしら!?　尤も、私と言う存在に触れた以上、唯では済まさないけどね！」
「ど、どうしよう修司さん、この人？　なんか凄いよ」
「……」
「修司さん？」
落ちてくる際は退いてと言っていたのに、いざ実行するとなぜ退くのだと憤慨してくる。この如何にも理不尽な謎の女性にマシュも立香も戸惑うが、肝心の修司は無反応だった。
見れば、修司の表情は何とも言えない複雑そうな顔をしている。そ

の心境はまるで、知り合いの見たくはなかった一面を目の当たりにしたような、そんな顔だ。
未だに喚き続ける女性、色々と際どい格好と黒く揺れるツインテールの髪、それは何度瞬きをしても変わらない光景に……。
「いや、なにしてんの？　遠坂」
頬を引くつかせながら、修司は震える声で姉弟子の名を口にするのだった。

その１２３　第七特異点

紀元前２６００年。広大なティグリス河とユーフラテス河の間にて栄えたとされる人類最古の文明、メソポタミア。古の神々の逸話、伝説、伝承が存在し、同時にその神が地上から姿を消したと言う人類の黎明期。

人理焼却、その原因である七つの特異点の……最後の特異点であるメソポタミア文明の地へ降り立った一行、修司の提案もあって一先ずは徒歩で目的地であるウルクの市へ赴く事になったのだが、そこで思わぬ人物と遭遇してしまう。

「修司さん、遠坂って……？」

突然、空から落ちてきた謎の女性の。黒髪のツインテールと赤い瞳が特徴的で、色々とアレな格好をした人物。そんな彼女を修司はまるで見知った間柄のようにその名を口にした。

どうして紀元前２６００年前の人物と面識があるのだろう？　しかもその名前からして、どうやら目の前の女性は日本人らしい。しかし、ロマニや当の修司からは神霊である事は間違いないとされている。困惑し、どういう事なのかと説明を求めようと、立香は修司の方へ振り返るが……。

「ウソダドンドコドーン……」

当の本人である修司は、視界の隅っこで体育座りになり、現実逃避をするかのごとく両手で顔を覆っていた。

「た、大変ですドクター！　修司さんが嘗てない程に動揺し、言語がオンドゥル語に変換されています！」

『いやどういう事!?』

「て言うか誰よ！　マシュにいらん知識吹き込んだ奴!?」

『仮面ライダーは……良い文明、坂田金時も言っていた』

「アルテラさん!?」

通信越しにピースしながらフェードアウトしていく破壊の大王に、流石の立香も唖然とした。ここ最近、色んなサーヴァントが通信に紛

れ込んでくる気がする。因みにアルテラさんはブレイドとセイバーが推しの模様。
閑話休題(どうでもいいわ!)。
「いや、本当にゴメン。ちょっと取り乱した」
「だ、大丈夫?」
「……本音を言えば、まだ心が追い付いていないけど、今はそうも言ってられないからな。さて、空から落ちてきたお嬢さん、先ずは改めて名を名乗らせて貰うとしよう。俺の名前は白河修司、特異点となったメソポタミアの人理崩壊を防ぐ為、カルデアからやって来た者だ。許せるのなら、君の名前を教えて貰ってもいいかな?」
動揺する心を無理矢理に抑え込み、仕事先で使う営業スマイルと共に、極力相手を刺激させないよう勤めながら、修司は目の前の女性に名を訊ねた。何故か知り合い達からは胡散臭いと総スカンを受けた営業モードだが、初対面の相手には割りと好印象だ。
目の前の女性が本当に自分の知る人物と正反対なら、怪しまれても敵愾心は向けられない筈。
「は? 何なのアンタさっきから、気持ち悪いんだけど?」
「……」
ビキィッと、空気が張る音が聞こえた気がする。上から目線の物言いならまだしも、謂れのない侮蔑を挨拶代わりに投げつけてくる目の前の女性のあまりにも〝らしい〟その態度に、修司の額から青筋が浮かび上がってくる。表情こそ笑顔のままなだけに、その笑顔が恐ろしく見えてしまう、そんな彼を目にして慌てる立香とマシュは慌てて二人の間に入るのだった。
「あ、あの! すみません! 私達此処に来たばかりで、まだ何が何だか分かっていないんです!」
「それで、大変失礼なのは承知の上なのですが、御近づきの印にお名前だけでも教えて貰っても宜しいでしょうか? あ、申し遅れました。私はマシュ=キリエライトといいます。此方は藤丸立香、私の先輩でマスターです」
「私を知らない――ですって!?」

一先ず場を持たせる為に自己紹介を始めた二人だが、そんな二人を他所に目の前の女性は自身を知らない事に酷く狼狽していた。
しかし、そんな慌てふためく様も直ぐに消えてなくなり、黒髪ツインテールの女性は考え込むように顎に手を添え、僅かに思考を巡らせる。
「……いえ、確かそこの山吹色の男が言ってたわね。つまり、異邦からの客人って事？　些か信じがたい話だけど……ま、そう言う事もあるか」
「私だってそのお陰でこうしているんだし。――――いいでしょう。一先ずはアナタ達がこの地の人間でない、という言葉は信じます。つまり、アナタ達は私を全く知らない。この世界の事も、今の状況も知らないのね」
先程の傲慢な態度は未だに色濃く残っているものの、どうやらこの神霊、或いは何処かの神話の女神と思われる女性は思った以上に話の分かる相手の様だ。少なくとも問答無用で襲ってこない辺り、最初に仕掛けてきた魔獣よりは遥かに話が通じる気がする。
そして、目の前の女神も立香達の状況を何となく察したのか、諦めた様に目を伏せる。
「……そう。なら不敬、無礼も仕方がないか。遠い世界の野蛮人なんですものね」
「ん？　自己紹介かな？」
『修司君シーッ!!　また話が拗れるから！　詳しい事情は後で聞いてあげるから、今は大人しくして！』
「フォフォーウ！」
女性の横柄な態度を前に、修司は蟀谷（こめかみ）を引くつかせながら悪態を溢す。そんな嘗て見たことのない態度の修司にロマニは必死になって誤魔化し、その甲斐あってか女性の耳に修司の悪態の言葉が入ることは無かった。
「今回はその無知さに免じて見逃してあげるけど、次に同じことをしたらただじゃおかないからね。私に無礼を働くのはこの世界ではあり得ないことなんだから」

すると、女性は立香達に興味を失ったのか、踵を返して足早に去っていき、珍妙な形をした船と共に空へ飛翔。その姿は瞬く間に空の彼方へと消えていった。
まるで、嵐のような女性だった。その傲慢な振る舞いから恐らくは名のある女神の何れかなのだろうと考えるロマニだが、今はそれよりも追求すべき事がある。
『……さて、それじゃあ修司君。先ずは話を聞かせて貰おうか。君は先ほど、彼女の事を遠坂と言っていたが、それは君のよく知る人物の名前なのかい？』
知っていることがあるなら話して欲しい。そう目線で訴えるロマニに、修司もまた頷いて答えた。
「あぁ、俺の記憶する限りでは、あの女は俺の知る奴と同一人物だ」
「今の人が、修司さんの知り合い……」
「あの女の名は遠坂凛。俺と同じ街の出自で俺の……姉弟子だ」
重くなった口から紡がれる衝撃的な言葉に、立香達は驚愕に目を見開いた。

◇

「な、成る程、そうなると彼女はエルメロイ二世と同じ、依り代として召喚された可能性が高いな」
「で、でもあの人は修司さんの事を知らない様子だったよ？」
その後、嵐の様な女神の来訪を受けた一行は、修司から彼女の素性

を可能な限りの説明を聞き出す事となった。結果、あの女神と思われる神霊は遠坂凛なる現代の女性を依り代にして現界しているのではないか？　という推測に行き着いた。
　唯し、元となった人格は女神を主軸にしており、だからあの女性は修司の事を見ても何の反応も見せなかった。そうなれば依り代となった遠坂凛の人格やら魂はどうなったのか危惧する所だが、それにしては依り代の自然体が遠坂凛に傾いている気がすると、修司は否定する。
　そもそも、あの遠坂凛がエルメロイ二世やメディア達の様な修司の元いた世界の住人であるとは限らない。自分の知らない彼女かもしれないし、元となった神霊に人格も魂も消されたという根拠もない。
「……所でロマニ、そっちでエミヤとエルメロイ先生はどうしてる？」
『あ、うん。エミヤはなんか厨房の奥へ引っ込んだよ？　エルメロイ二世は……なんか、自室に引きこもっているみたいだよ』
「クソが、アイツ等絶対確信してるだろ！」
　ともあれ、あの女性に関しては明確な情報がない以上後手に回す以外に今の所案はなく、他にも調べなければならない事がある以上、彼女だけに拘っている場合ではない。次に会った時、その時こそ詳しく聞き出そうという結果で話し合いは終わり、一行は改めて城塞都市に向かう事となった。
「……マスター、修司さん。囲まれています。速やかに戦闘を行い、廃墟からの脱出を！」
「チッ、少しウダウダと遊び過ぎたか。マシュちゃん、立香ちゃんを守ってやってくれ、ここは俺が片付ける」
　そうこうしている間に、既に周囲には再び魔獣による包囲網が出来上がりつつあった。恐らくは魔獣の死骸の臭いに引き寄せられたのだろう。初遭遇と動揺に襲い掛かってくる魔獣達に修司が気を解放して一気に片付けてやろうとした時――――。
「あぁ、良かった。間に合いましたか」
　細く、それでいて凛とした声が一行の耳に入ってきて――――瞬間、自分達を襲おうとしていた魔獣の群れは一瞬にして細切れにされて

いった。
「っ!?」
「て、敵性エネミー……全て消滅。今のは、鎖でしょうか？」
「いや、其にしては切り口が鋭すぎる。鎖というより鎌、或いは剣か？」
「ふふ、どれも当たり。とだけ言っておきましょうか」
　先の遠坂凛に瓜二つの女神と遭遇した事もあり、声と気配のする方へ視線を向けた修司は、その人物を見てホッと安堵の溜め息を溢した。美しく中性的な美人、男性とも女性にも区別の付かないその風貌は修司の知るどの人物にも該当しなかったのだから。
「は、はぁ～、良かったぁ～、知らない人だぁ～」
「？　えっと……随分と面白い方のようですね。良かった。随分と話しやすい人のようで安心しました」
「あ、あはは、すみません。助けて戴いたのに……」
「気にしないで下さい。それに、この程度の魔獣ならあなた方でも充分に対応出来た筈ですから。今のは、僕なりのアピールだと思ってください」
　助けて貰ったのに、未だに礼の一つも言えていない事に不義理を感じた立香は、修司に肘で軽く小突き、我に返った修司と一緒にありがとうと頭を下げる。
　そんな彼等に一瞬目を丸くさせた緑の人は、次にフッと微笑んだ。
「フフフ、面白い人達だ。それじゃあ、改めて名乗らせて貰うとしよう。僕の名前はエルキドゥ。神々によって造られた――――神造兵器だ」
　エルキドゥ。その名前を聞いた瞬間、今度は修司の目が丸くなる。何故なら、それは自身にとって恩人であり、仕えるべき王と定めた英雄達の王、その彼が終生の友と呼ぶ者と……同じ名前をしていたのだから。

その１２４　第七特異点

エルキドゥ。昔、修司は以前酒の席で一度だけ上司兼保護者である英雄王ギルガメッシュから、その名の人物について話を聞く機会があった。

神々によって造られし神造兵器。美しく、残酷で、残忍な者。自らを兵器として譲らず、最後までその在り方を損なわなかった……王の、ただ一人の友。

当時、仕事を一通り終わらせ、偶々時間の都合が合った時にグラスを傾けながらそう愚痴る王の姿を、修司は今も覚えている。誇らしく、けれど寂しそうに語る王に修司は二人の仲の良さを垣間見た気がした。

もし、縁があったら一度話をしてみたいな。酒の席だからこそ許される話、普段なら不敬と断じられる話題に、王は鼻で笑い。

『たわけ、貴様と奴を合わせたら、どんな科学反応が起きるか分からぬではないか。俺を過労で殺す気か？』

鼻で笑って一蹴し、それでも……もし、そうなったらどうなるのか、呆れながら朝まで語り明かした時間を、修司は今も覚えている。

◇

「か、神様が、人間を滅ぼそうとしているって？」

廃墟となった市（まち）から、自らをエルキドゥと名乗る人物の協力を得た立香達は、彼女（彼）のウルクの市まで送るという提案を受け、目的地に向かって移動を始めていた。

道中、この特異点で起きた出来事を端的に説明をさせて貰ったのだが、どうやらメソポタミアを滅ぼそうとしているのは魔術王の手勢の者ではなく、奴と同等、或いはそれ以上の存在の手でメソポタミアは滅亡の未来を確約されつつあるのだという。

その存在の名称は――――〝神〟。遥か古より存在を認識されていた超常の存在が、人類を滅ぼそうと牙を向けているのだと、エルキドゥと名乗る緑の人はハッキリと口にした。

恐らくは、その神が修司の感知したという強大な力を持つ存在なのだろう。人類を滅ぼそうとしている神が、少なくとも三柱いる。修司の話と照らし合わせてほぼ確実な事実にロマニは痛くなる頭を抑えた。

〝三女神同盟〟。それが、人類と敵対する神々の名称であり彼女達によってメソポタミアの大地はその六割が奪われてしまっていた。

「成る程な、つまりは俺達を襲ったあの魔獣達もその三女神の何れかの尖兵、て事になるのか」

「そうですね。この場合、尖兵というより子供達、という表現の方が適切かもしれませんが……しかし驚きました。白河修司……さんでしたか？　道中何度か拝見しましたが、貴方の身体能力は凄まじい。ウルクの精鋭ですら手こずる女神の魔獣の相手を、貴方は一人でこなしている。既にこの時代の空気に順応しているし、きっと君だけならこの時代でも普通に生きていけるのでしょうね」

「俺は立香ちゃんと違ってサーヴァントは使役出来ないからな。その分前に出る事しか頭にないのさ、て言うか、〝さん〟付けは止めてくれ。アンタにそう畏まれると、此方は反応に困るからよ」

「――――そうですか、了解です」

「？」

エルキドゥの言葉に照れ臭さを覚えたのか、頭を掻いて視線を逸らす修司に、エルキドゥはやや困惑しながらも笑顔で答えた。エルキドゥは英雄王にとって唯一無二の友人、そんな彼が敬語で接してくるのだから、修司としてはやりづらい相手なのかもしれない。

しかし何故だろう。立香は視線を逸らす修司に微かな違和感を感

じた。
そして、話は三女神の話へと引き戻し、エルキドゥは三柱の女神について説明を続けた。
と言っても、その詳細は未だに不明のままで、明らかとなっているのは殆んどない。何故、どうして三柱の女神はこの様な事をしているのか。その殆んどが未だ分かっていない。
そんな中で唯一分かっているのは、彼女達の目的。エルキドゥは言った。三柱とも最終目標は同じなのだと。
三女神同盟が望んでいるのは――――人類の抹殺。ただの一人も生かしておかない、人類という種族の完全なる消滅。
「後の歴史に繋がる人類をここで絶えさせる。それが彼女達の目的の様ですね」
「そんな、この時代を乱す事ではなく、人類そのものの滅亡を望んでいると!?」
これ迄の特異点とは違う、何処までもシンプルな目的。人類の生存を認めないと豪語する女神達に、修司は内心腹正しくも思うが、それ以上に動揺しているのはマシュだった。
「それでは、それでは魔術王と同じです！　女神であるのなら、人間の味方ではないのですか!?」
カルデアに所属している女神は、何れも個性的であり、癖の強いモノばかりだが、総じて彼女達は人類に対してそれぞれ協力的だ。ステンノやエウリュアレの双子女神も、基本的に人間を玩具として扱っているが、それでも相応に人類に対して協力的だ。
アルテミスも、オリオンに連れられて無理矢理な顕現を果たしているが、それでも頑張っている立香を気に入り、必要な呼び掛けには応じてくれたりしている。獅子王こと女神ロンゴミニアドも、そのやり方は間違っていても人類を愛していたし、カルデアに召喚された以降も自分達に協力してくれている。
マシュにとって、女神は何だかんだ協力してくれる存在だと思っていた。仮に協力を断られても、敵対せず、ことの成り行きを静観するだけのモノだと、今まで何となくそう思っていた。

しかし、その前提がここで遂に瓦解される事になる。神が、女神が、自分達の明確な敵なのだと、そうハッキリと口にするエルキドゥにマシュは足下が崩れる感覚を覚えた。
そんな時、ふとマシュの肩に手が添えられる。既に馴染みのある感触に落ち着きを取り戻すと、マシュは自身の隣へ立つ修司へ視線を向ける。
「落ち着けよマシュちゃん。女神が敵だって言うのに動揺するのは分かるが、今は落ち着いて話を聞いておこうぜ」
「し、修司さん、ですが……」
「それに、神が人間の明確な味方だった事は殆んどないんだぜ。昔、俺が旅をしていた時に偶々行き先が同じだったやたら暑苦しいお坊さんが言うにはな、人類に対して完全に味方をした神は、ただの一柱もいなかったらしいぞ」
その昔、王の無茶振りによって世界中を旅していた頃、理想の神とやらを求めて旅をしていたお坊さんと、一度だけ行動を共にしていた時があった。
当時から神について信仰なんて微塵も待ち合わせていない修司だったが、暑苦しくも熱心な信仰を持つそのお坊さんの話は耳に届いた。その内容の殆んどは聞き流していた為に覚えていないが、神は人類全体を味方してはいないという彼の持論は……何故か、やけに耳に残った。
「そうですね。修司の言う通り、神は人間に対して明確な味方となった事はありません。神々にとって人間は労働力でしかないのだから。メソポタミアの神々は自分達の代わりに人間を作った。なんて話があるくらいですからね」
「真実はどうあれ、神々にとって人間は庇護対象であって、愛情を注ぐ対象では無いってことだな」
「そうです。尤も、それに納得するかどうかは別の話かと思いますが……いけない、話がまた脱線してしまった。神に関する談義は一旦此処までにして、今は三女神についての話でしたね」
「す、スミマセン」

神と言う存在についてあれこれ話し、脱線した事を謝る立香達。そんな彼女達を笑顔で気にしないでと片手で制し、エルキドゥは三女神同盟について可能な限り説明していく。
「この地に現れた三柱の女神は、それぞれの手段でメソポタミアを蹂躙しました。その内の一つにして最大の勢力が《魔獣の女神》、ギリシャ世界から流れてきた女神です」
魔獣の女神。それは十中八九、これ迄既に何度も戦ってきた魔獣の親玉なのだろう。いや、エルキドゥの言葉に肖るのなら、魔獣という子の親、と言うのが正しい表現か。
「……さて、そろそろ見えてくる頃合いかな。この高台に登れば、北壁が見えてくる筈だよ」
そうエルキドゥに促され、高台に登る立香達が次に目にしたのは、何処までも続く壁と、それを食い破る勢いで迫る魔獣の群れだった。それは魔獣達が北部を埋め尽くした際、バビロン市を解体しその資材で作り上げたモノ。
それをいつしか人々は、別物として呼ばれるようになった。
人間の希望、四方世界を守る最大にして最後の砦。絶対魔獣戦線バビロニア、と。
「す、凄い数の群れです先輩！　魔獣の総数、目視できる範囲でも数千頭……！」
「いいっ!?」
人類最後の壁に群がる無数の魔獣達。更にその北部ではその数十倍の魔力反応があると、ロマニは告げる。
有り得ない。こんな状況で人類が生き残れる筈がない。そう唖然としながら口にするロマニだが、現実として人類はこうして生き残っている。
「……スゲェ」
その光景に、修司もまた唖然としていた。しかし、その胸中から沸き上がってくるのはロマニが抱くモノとは異なっている。
圧倒的物量を前に、それでも抗う人間達。その背後には綿密に計画された兵士達のスケジュールが分単位で管理されているのだと、修司

は一目で理解した。
　そして、そんな人間離れした仕事をこなせる人物も修司は一人しか知らない。果てしない数の魔獣に一切臆せず挑む兵士達、一刻も早く自分も戦線に加わろうと、修司はエルキドゥへ向き直った。
「本当に、愚かな事だ。そんな事をしなくてもどうせ皆生き絶えるというのに……」
「……」
　北壁を見つめながらそう溢すエルキドゥ。恐らくは魔獣に対しての言葉であろうその台詞が、立香と修司には何故か違った意味で口にしている気がした。

◇

　それから少しして。ウルクに向かおうと先行きを急ぐ一行はエルキドゥの案内の下、ウルクから離れた森の中へとやって来ていた。これ迄魔獣に幾度となく遭遇し、その都度応戦してきた修司達。流石にこのままでは市にまで魔獣を誘き寄せ兼ねないと、エルキドゥはやや遠回りをしてでも安全策を提供してきた。
　それが、ウルクから離れた杉の森。
「森、ですか。伝説では魔獣フワワが守っていたという話ですが……あれはウルクの東、ティグリス河の向こうにあるザグロス山脈にあると解釈されていたような……」
　古代に記された記録では、西にあったとされる杉の森。故に此方に杉の森があったとしても特段可笑しいことはない。

だが、今一行が進んでいるのはウルクとは逆方向だ。先程僅かに聞こえたエルキドゥの台詞といい、立香の胸中に微かな疑惑が浮かんでくる。
「ん？　あぁ、失礼。不安にさせてしまったようですね。実はこの先の川に波止場がありましてね、そこにはまだ舟が残っていますから、そこまで行けば後は川を下るだけなんです」
振り返り、不安に思う立香の心中を覗き込んだ様な如何にもな台詞。この辺の地理に明るくない修司達にとってエルキドゥの言葉に従うだけだが……さて、どうするか。
と、そんな時だ。不穏な空気になりつつある一行に場違いな程の明るい声が聞こえてきた。
「なんと！　それはいいことを聞いた！　この先に波止場があるとは知らなかったよ！」
「え？」
「あ？」
「やぁこんにちは、驚かせてすまない！　怪しい者ではないから、先ずは話を聞くといい。我々は遭難者。この通り、慣れない獣道で迷ってしまってね。これはもう魔獣達のエサになるしかない、と悲嘆していたが、やはり私は付いている！　ほら、そうだろうアナ？　私に付いてきて正解だったと思わないかい？」
「今回は運悪く目的地に辿り着けなかったが、こうして道を知る現地人に出会えたんだ。待てば海路の日和あり、一歩進んで二歩下がる。まさか魔獣の女神のお膝元で、人間に会えるとはね！」
修司達の進行方向、つまり森の奥の茂みから現れたのは初対面でも胡散臭いと思えてしまう白いフードの男と、男とは対称的な黒い意匠に身を包んだ少女が現れる。
怪しい者ではないと男は宣うが、正直言って怪しさ全開である。特に、修司は男の台詞を耳にして自身の抱く疑惑が確信へと変わるのを自覚した。
「迷い人ですか。災難でしたね。僕たちはこれからウルクに向かいますが、同行しますか？」

「もちろん。断れても纏わり付くとも。もう三日も歩きづめで、足が棒になる寸前さ。……でも、うーん。名前も知らない人達に同行するのは少し怖いなぁ。そこのお嬢さん、良かったら名前を聞かせてくれないかな？　あぁ、故あって私は名前が名乗れない。この娘も同じだと思ってくれ」
「はい！　私は藤丸立香！　宜しく、胡散臭いお兄さん！」
「うんうん、元気があって大半結構」
「そんで、俺が――」
「あ、君はいいや」
（こ、この野郎!?）
　怪しさ全開の男は、立香の自己紹介に満足げに頷くが、修司の時は恐ろしく冷淡になる。いっそ清々しい程の変わり身の違いに修司は蟀谷を引く着かせるが、男の思惑に乗るために辛抱強く堪え忍ぶ。
「それで、そちらのお嬢さん方は？」
「あ、はい。私はマシュ＝キリエライトと言います。そして、此方はエルキドゥさんで……」
「……」
「エルキドゥ？　エルキドゥと言ったのかい？　うーむ。それはこまったなぁ。うん、とても困る」
「……何故？　僕に何かおかしな所があるとでも？」
　エルキドゥの名前を聞いて、可笑しいではなく困ると口にする男。そんな彼にエルキドゥは無表情で問い詰める。声色こそ無感動なものの、言葉の節々からは言い知れない圧を感じた。
「いやぁ。君がエルキドゥだと、私の記憶が遂におかしくなったのかな？　という疑問が出来てしまう。今ウルクで戦線を指示しているギルガメッシュ王は、不老不死の霊草探索から戻ってきた後の王様だ。つまり――」
　そこまで男が口にして、立香とマシュ、そしてモニター越しで見守っていたロマニはその意味を理解する。何せギルガメッシュ王が不老不死の探索を始めた切っ掛けとなったのは、他ならぬエルキドゥの死。

なのに、その切っ掛けとなったエルキドゥが生きている。その辻褄の合わない話と、現在立香達が置かれている状況を合わせて、一同は一つの真実へと辿り着く。
つまり、今まで自分達がエルキドゥだと思っていた人物は、現地人の存在でなければ、人理側のサーヴァントでもく、まして人間の味方ですらなく――――。
「ふふ、ふふふふ！　まぁそうだよね！　あっさりバレなくちゃ嘘だよね。こんな即興の芝居はさ！　こんにちは藤丸立香と白河修司。こんにちはカルデアの無能達」
「あぁ――――でもたいへん惜しかった！　あともう少しで面白い見世物が見られたのに！　君達は旧人類最後の希望ってヤツだろう？　人間はみんな失敗作だけど、その中でも度を超した失敗作が君達だ」
「そんな希少品をこの先にいる女神に献上すれば、きっとものすごい生き地獄が見られたのにね」
その顔は、先程迄の親しみのある笑みではなく、何処までも人類を嘲笑する悪意のある微笑みだった。エルキドゥと名乗る存在は、最初から人間の味方ではなかったのだ。
しかし、目の前のエルキドゥと思われる存在は神造兵器である事に間違いない。これまで魔獣を瞬殺してきた強力な存在が、一転して自分達にとって強大な脅威となる。
白いフードの男が、アナと呼ばれる少女に声を掛ける。彼等の助けになりなさいと、それを渋々ながら承諾する少女は両手に身の丈を越える大鎌を携え、マシュと共にエルキドゥと相対する。
しかし、それを遮る者がいた。山吹色の胴着を身に纏い、背中に界の一文字を背負う――――藤丸立香と同じ、人類最後のマスターを担う男。
「あぁ、確かに惜しかったな。このままお前に案内させてれば、労する事なく三女神の一柱を叩き潰せたのに……全く、惜しいことだよ」
「……随分と自身に満ち溢れている様だね。やれやれ、自身を失敗作だと解せない人間は、これだから困る」

「そう言うお前も人間を失敗作だと評している時点で、たかが知れてるけどな。神造兵器って言うのも、大したことないんだな」
「なんだと？」
「なんだ、人を煽るのは得意なくせに煽られるのは弱いのか？　随分と安い思考回路してるんだな。流石神代、この頃から既に中古品のリサイクル概念も定着していたか」
「……うん、以前から思っていたけど、本当に……アレだね！　怖いね、彼！」
　この特異点に来て早速始まった上から修司の煽り節、自分を特別な存在だと認識している程効果覿面な煽りは、今回の特異点でも健在だった。端正な顔立ちのエルキドゥ、その表情を憤怒で彩らせているのに対して……。
「貴様、其処まで吼えた以上、もう生かしてはおかないよ。お望み通り、生き地獄を味あわせてやる」
「やってみろよ三下。王の親友を騙るその口、物理的に減らしてやるよ」
　修司は、エルキドゥ以上に怒りに満ちていた。

その１２５　第七特異点

駆ける。その細身の身体からは想像のつかない膂力で以て、エルキドゥを名乗る敵対者は修司との距離を瞬く間に詰める。その眼には既に先程までの様な慈しみのある眼差しではなく、己を虚仮にしてくれた敵対者に対し、何処までも深く燃えるような敵意を滲ませている。

振り上げた右手には人一人を文字通り捻り潰すだけの力が秘められており、更に彼の特性か、その腕にはモノを切り裂くある種の付与が施されている。何者でもないのに何物にもなれる神々が造られし神造兵器、そんな最古の神秘を纏うエルキドゥの一撃を修司は片腕で防いで見せた。

瞬間、引き起こされる現象。ビリビリと空気が震え、周囲の大木の如き杉の木々を軋ませる衝撃波。押し寄せる空気の爆発を前にマシュは立香とアナ、ついでに白い男を守る為に盾を構えて前に出る。

『い、いきなりの戦闘!?　二人とも、大丈夫かい!?』

「うん！　マシュが防いでくれたから平気！」

「間に合って良かったです。そちらのお二人も大丈夫ですか？」

「……まぁ、大丈夫です」

「やれやれ、相変わらず人間が嫌いなんだねアナは。あぁ、勿論私は無事だとも。ありがとう盾のお嬢さん、些か毛色は変わってしまったみたいだけど、君の魂の輝きは全く色褪せていないみたいだね、安心したよ」

「え？　あ、ありがとうございます？」

「フォフォーウ！」

襲い来る衝撃波を、マシュは慣れた態度で対処する。そんな彼女を見て白い男は感慨深そうに呟いているが、初対面である筈のマシュには彼の言葉の意味を理解出来ないでいる。ただ、気になるのはこの白い男が登場してから、フォウがやけに荒ぶっている事。

マシュや立香に近付こうとすれば番犬の如く吼え、毛並みを逆立たせて威嚇している。この小動物とはカルデアに来てからそれなりの付き合いだが、此処まで露骨に誰かに敵意を見せたことは今まで一度もなかった筈だ。

一体、この白い男は何者なのだろうか？　手にした杖から察するに、何らかの魔術を得意とする人物なのは間違いないと思うのだが……。

「それよりも、どうしようかなアレ、流石に彼処まで派手に暴れられては私も迂闊に手出しが出来ない。て言うか、山吹色の彼って本当に人間？　明らかに物理法則を超えた挙動をしているんだけど？」

呆れたように呟く白い男に釣られ、立香もマシュも彼と同じ方向へ視線を向ける。其処には神造兵器と謡われる最古の兵器を相手に、互角以上に戦う修司の姿が見えた。

振り抜かれる蹴り、これ迄の道中で魔獣すらも一撃で屠る自称エルキドゥの蹴りを、修司は同じ蹴りで以て迎え撃つ。拮抗は一瞬、気を解放して白い炎を纏う修司の膂力は既に素の状態で従来のサーヴァントすらも凌駕している。

加えて、過去の英霊達との切磋琢磨を幾度となく繰り返し、加えてその身体にはギリシャとケルト、それぞれ最大の英雄と呼ぶべき相手と死合った経験が染み付いている。

如何に相手が最古の神秘を纏う怪物だろうと、今さらその程度に屈する程、白河修司という人間は柔ではない。振り抜かれた蹴りの押し合いに敗れ、身体ごと吹き飛ばされた自称エルキドゥは、その表情に苛立ちの色を濃く滲ませながら地面へ下り立ち、修司を忌々しく睨み付けている。

「チィ、馬鹿力め。一体どんな魔法を使ってそんな力を身に付けた！」

「誰が教えるかよ。人間を失敗作と見下しているんだ。そのさぞかし立派な脳味噌で、頑張って答えを出して見せろよ」

度重なる煽り文句に、エルキドゥの顔色が憤怒で赤くなる。そんなある意味人間らしい反応を見せる彼に対し、修司は何処までも平静だった。いや、感情的にはエルキドゥ以上に怒りで満たされている

が、目の前の相手を倒すと言う意味でなら、修司は何処までも冷静になれる。
そんな修司の態度が、エルキドゥの苛立ちを更に加速させる。今すぐその余裕な態度を後悔させてやると、緑の人は地面に手を置き、力の一部を解放させる。
瞬間、修司の足下から鎖が生える。否、生えると言うよりは地中から襲ってきた無数の鎖は、修司の身動きを封じるべくその全身に巻き付いていく。思っていたより頑丈な鎖、とは言え引き千切れない程の強固さではない。
全身に力を入れて振りほどこうとした時、修司の身体は鎖を操るエルキドゥによって宙を舞う。幾つもの杉の木を巻き込み、へし折りながら尚、エルキドゥの力は止まることはない。一回転、二回転、回数を重ねるごとに周囲の木々が薙ぎ倒され、立香達の視界が広くなる。
「シュメルの大地に咲く、赤い花になれ！」
次の瞬間、修司を巻き付けた鎖は操るエルキドゥの手によって地面に叩き付けられる。大地が揺れ程の衝撃、舞い上がる砂塵の中で無惨な死に様を想像したエルキドゥは、これ迄の苦悶の表情が嘘のように晴れやかなモノへと変わる。
これで、自分の最大の仕事は片付いた。後は小さなオマケを始末するだけ、エルキドゥは鎖を魔力の残滓として消し、その足取りで立香達に近付いていく。
「さて、待たせたね。少し邪魔が入ったけど、これで漸く君達の相手が出来るよ」
「……え？　今ので、終わり？」
これ迄共に戦ってきた親友が、あっさりと殺された事に余程ショックを受けたのか、唖然とする立香にエルキドゥは愉快な程に同情した。
「可哀想に、まだ現実が見えていないんだね。なら、その夢心地のまま殺してあげ――ブッ!?」
並ば、現実を直視しないまま終わらせて上げよう。そう口許を喜悦に歪ませながら近付くエルキドゥは……横から延びてきた拳に頬

を殴られ、吹き飛んだ。
　幾つもの杉の木を貫き、森の外まで吹き飛んでいくエルキドゥ。何が起きたか理解できないまま地面に転がる彼は、ほぼ反射的に立ち上がろうとした。
　しかし、立てない。無防備な所へ綺麗に入った一撃はエルキドゥに明確なダメージを与えている。驚愕に震えるエルキドゥ、しかし彼以上に驚いているのは……殴り飛ばした修司本人だった。
「え、……嘘だろ？　本当に入っちまった。俺はてっきり、此方を誘うフェイントの一種だと思っていたのに……」
　鎖に巻き付かれて、エルキドゥの膂力と遠心力を以て地面に叩き付けられた修司は確かに少なからずダメージを負った。しかしそれだけ、直撃した脳天は未だにズキズキと痛んではいるが、別にそれ以外に怪我を負った様子はない。
　なのに此方の反応を確認せず、生死を確認しないまま鎖の拘束を解いたエルキドゥに、修司はある意味で動揺した。だって明らかに追撃チャンスだったんだもの、人を無抵抗のまま地面に叩き付け、ほぼ犬○家の如く一時行動不能にしたのだ。てっきりあのまま宝具でも叩き込まれると予想していただけに、エルキドゥの反応は意外だった。
　罠かと思って取り敢えず振り抜いた拳も、抵抗を受けることなくアッサリと捩じ込めた。あれだけ人間を見下しておきながら、此処までお粗末な対応に、修司の胸中は嘲りよりも困惑が大きかった。
　ともあれ、これでやられた分は返した。このまま戦闘を続け、奴の知っていることを諸々吐かせてやろうとした時、それは起きた。
「残念だけど、今回は此処までだ。修司君、君達にはまずある王様に謁見してもらうよ」
「お、もうそんな時間か。呆気ないな」
　修司の身体が消えていく。見れば彼だけでなく立香もマシュも花びらとなって姿を消していく。エルキドゥがまさかと戻る頃には既に一行の姿は完全に消え去り、杉の森の中心にはエルキドゥだけが残されていた。
「そうか、今のが例の魔術師か。予想通りチンケな魔術師だ。これな

ら、今はまだ泳がせてもいいだろう……」
逃げられ、免れた立香達にエルキドゥは内心で謗る。しかし、どれだけ心の内で罵倒しても、自身が一人の人間に敗北同然の仕打ちを受けた事実は変わらない。
故に……。
「クソッ、クソォォォッ!! 僕が、俺が、私が、あんな、あんな人間ごときにィィィ! 許さない、絶対に許さないぞ、白河修司ィッ!!」
「殺してやる。お前だけは、ギルガメッシュと同じくこの僕が、直々に殺してやるッ!!」
エルキドゥは吼える。獣の様に、人間の様に……誰よりも人間を否定する彼の神造兵器は、この時、誰よりも人間らしかった。
しかし、エルキドゥの叫びは誰にも聞き届けられる事はなく、その自覚なき人間の雄叫びは人のいない杉の森に溶けていった。

◇

「そんで、マーリンだっけ? アンタはあの自称エルキドゥについて、何か知ってる事ないのか?」
花の魔術師マーリン。アーサー王の伝説にて登場する世界有数のキングメイカー、夢魔との混血児である彼は人間の夢を食(は)む事で閉ざされた楽園にて息長らえてきた存在。
今回は特殊な事情でとある王の手によって召喚され、現在は探し物を見付ける旅の途中なのだという。その間にマーリンが召喚された事に嘗てないロマニの荒ぶり様を目の当たりにしたり、小動物のフォウから熱烈なアタックを受けたり、其処はかとなく怪しさを感じさせ

ながら親しみの持てる振る舞いを見せるなどしていた。
　そんな魔術師に修司は問い掛ける。あの杉の森で戦ったエルキドゥは、何者なのかと。
「……ふむ、質問に質問で返すのは失礼だが、それを承知で訊ねよう。白河修司君、君はあのエルキドゥを、どう見ている？」
「王の親友を騙る不埒者」
「だ、断言するんだね？　因みに、その根拠は？」
「どうもこうもない。奴が本当にエルキドゥだと言うのなら、ギルガメッシュ王と敵対するのはほぼ有り得ないだろ」
「どうして？　彼は神々によって造られた被造物だ。人類と敵対する女神の意向に沿って従っている可能性だってあるんじゃないかな？」
　逆に質問してくるマーリンに、修司は間髪いれず即答で答えた。あのエルキドゥの名を騙る何者かは、断じて王の親友ではない。しかし、マーリンの言う通りエルキドゥは神々の手によって造られた兵器。
　そして、現在人類の生存を脅かしているのは三柱の女神達だ。未だ見えていない女神の何れかに従って行動している可能性だって捨てきれない筈。
「たわけ、そんなちっぽけな理由で王と敵対するのなら、エルキドゥは滅ぼされていない筈だろ」
　嘗て、ギルガメッシュはエルキドゥと共に天の牡牛グガランナを打ち倒し、神々に敵対した代償としてエルキドゥは元となった粘土に成り果て大地へと還った。
　あの日、王は言った。最後まで奴は自分を人間と認めず、自らを卑下したまま逝ったと。そう語る彼の背中はこれ迄自分が見てきたよりも、ずっと小さいモノだった。
　だからこそ、二人の間には確かな絆があったのだと修司は察した。仮に、奴が本物のエルキドゥなのだとしても、それは自分や……まして、王の知るエルキドゥでは断じてない。外面だけを取り繕った別のナニカだ。
「成る程、君はエルキドゥがどう言った人物だったのか知っているん

だね」
「口頭でだがな、それでもそう思える位の熱量があの人の話にあった」
「熱、か。羨ましいな。私にはそう言うのが疎くてね。どうも今一つ理解出来ないんだ。でも、君がそう言うのなら、そうなのだろ」
「揶揄ってんのか？」
「まさか、本心だとも。まぁ、理解しかねるという部分も、紛れもない本心なのだけれどね」
　真剣に語る修司に対し、自嘲の笑みを浮かべるマーリン。その人を食った態度を前に僅かに苛立った修司はマーリンを睨む。
　途端に悪くなる空気、二人の間に流れる空気が暗雲となっていく事を感じ取ったマシュは、二人の仲を取り持とうとしているが、どうすればいいか言葉が見付からずあたふたしている。
「じゃあ、あのエルキドゥが今回の特異点となった原因って事？」
　そんな時、それとなく呟いたのはこれ迄の旅路ですっかり足腰が強くなった藤丸立香である。修司が言うにはあのエルキドゥはエルキドゥではないらしい、歴史の時系列を鑑みれば、奴がこの特異点の原因か、或いはそれに近しい位置にいるのは間違いない。
『た、確かに！　時系列を考えればあのエルキドゥが最も特異な存在と言える！　つまり、奴と敵対すればそれだけで特異点の原因に近付けると言うことになる！』
「さ、流石は先輩です！」
「え!?　いや、あの……適当に思った事を言っただけなんだけど……」
「いや、そう言う何気ない閃きってのは時に天才の思案すら凌駕する。謙遜する必要はないさ」
「そうそう！　あぁ、君のような聡明な人間が最後のマスターとは、人類とは本当に運がいい！　どうかな？　ウルクへ着いたら、私のオススメの酒屋に案内してあげるよ？」
「フォウフォーウ!!」
「ブベラッ!?　な、何をするキャスパリーグ、私の細やかな楽しみを邪魔するなんて！」

「……本当、マーリンは一遍死んだ方がいいと思います」
「あ、あはは……」
悪くなっていた空気が途端に弛くなっていく。その事にマシュは安堵し、我に返った修司は熱くなった自分を戒める様に頭をかく。
しかしどういう訳か、このマーリンという魔術師は立香に対して結構な執心を抱いているらしい。夢魔との混血というから、もっと人間に対して無関心だと思っていたが、その性質は表面上では親しみのある対応をしている。或いは、夢魔だからこそ人間に親しい感情を抱いているのか。
ともあれ、エルキドゥに対する考察も、魔獣の女神とやらと出会えなかった悔しさは今は置いておこう。今、自分達がするべき事はこの特異点における活動拠点を手に入れること。
そしてその為には、このメソポタミアを守る唯一の王と謁見を果たさなければならない。
「さて、紆余曲折を経て此処までやって来たカルデアのマスター達よ。人類最後にして最大の前線拠点にようこそ」
眼前に聳え立つ巨大な門構え、その向こうには人類存続の最前線とは思えない程の……活気ある街並みが広がっていた。
そして、その奥には聳え立つ建築物が見える。エジプトのピラミッドに造形が似ているあの建物に、この時代の王がいる。
果たして、自分はあの王に認められるのか。自分の知る英雄王とは違う王の存在に、修司は緊張し、自然と拳を強く握り締めるのだった。

「……あの、修司さん。因みに聞きたいんだけどさ」
「うん、なんだい？」
「ギルガメッシュ王とエルキドゥが死に別れる事になったそもそもの原因、女神イシュタルについてどう思ってたりする？」
「アレ具合ならギリシャの神々にも引けを取らない、伝説の超ＤＱＮ女神」
「……ｏｈ」

その１２６　第七特異点

花の魔術師マーリンの顔パスにより、無事に門を抜けたカルデアの一行、扉が開き、中へと入った先に広がる光景に立香達は色んな意味で驚いた。

そこは活気があった。市井が広がり、麦酒や果物類を売り物として出している屋台が幾つも連なっていて、店主と思われる男性が道行く人に声を掛けて商いをしており、それを聞いた婦人らしき女性が値切りの交渉をしている。

遠くからは対魔獣用に造られる武具を打つ槌の音が響き、更には職を紹介する場まで設けられており、中には花屋なんてモノすら売買されている。

活気だ。三柱の女神が人類を滅ぼさんと今も攻め立てている中、ウルクの市はそれを微塵も感じさせないような生命の息吹が此処にはあった。自分達が予想していた光景とはかけはなれていた事に、立香やマシュだけでなく、修司ですら圧倒されていた。

「……すげぇ」

ポツリと修司の口から一言、そんな言葉が溢れた。しかし、その一言には三人が抱いた思いの全てが込められており、故に立香とマシュの二人も同意するように頷く他なかった。

「ふふ、驚いてくれたようで何よりだ。信じられないかもしれないが、これが人類最古の城塞都市、ウルクの現在だ。戦時下ではあるが、市は騒々しく賑わい、人々は誰一人として項垂れていない。至る所から武器を造るための煙が上がり、鍛治の音は連日連夜響いている」

「はい。皆さん、誰もが緊張し、急かされていますが、笑顔を忘れていない。この街にあるのは絶望ではありません。戦う意思、生きようとする活力に満ちています！」

そう、マーリンやマシュの言う通りウルクの市に住まう人々は皆が急ぎ足でいながら、絶え間なく笑顔を振り撒いていたのだ。その笑み

は強制や達観から来るものではない、正真正銘人の営みを享受する人間の強さの具現化だった。
だが、驚くべき所は其処だけではない。近くの案内板らしき巨大な粘土板にはウルクの市を一望できる地図が記されており、其処には役職ごとにきっちりと区間が分けられており、連携の行き届いた交通網が展開されている。
兵産、建築、商業、生活。その全てが賄える様に再設計されており、その様相は現代にも通じる完璧な戦闘都市の見取り図だった。
絶句した。人類最古の時代と謳われるこの世界に既に数万人規模を想定した都市国家の基盤が確立されている。これ程の〝人の国〟を現した都市は、現代に至るまで数える程度しか存在しないだろう。
泥と粘土と麦と羊の国、メソポタミア。単なる貿易便りの都市国家を予想していたロマニは、人の営みに満ちたウルクを前に愕然となりながら肩を落とした。
「……はは、やっぱり王さまってすげぇや。こりゃ、俺達もウカウカしてられねぇぞ」
「うん、だね！」
「はい！　ウルクの人々に負けない様に頑張りましょう！」
ウルクの人々の活気に充てられ、やる気を滾らせる三人。その後はウルクの案内は後にする事にし、一行はウルクの奥へと進む。次に彼らが向かうのは市の中枢を担うジグラット……即ち、王の座する神殿へと進むのだった。

◇

その後、マーリンの顔パスであっさりと王の間へと通された立香達。道中番人と思われる人達から気さくに声をかけられたりと、マーリンの人徳の高さがうかがえる場面が幾つもあったが、それ以上に巫女と思われる女性達からは軒並み避けられているので、やっぱりマーリンはマーリンだった。

広々とした王の間、エジプト領でのピラミッド神殿を想起させる空間。丈夫そうな外観から多少の荒事にもビクともしなさそうな玉座にてその怒号は響き渡る。

「何度も言わせるな、戦線の報告は新しければ新しい程よい！　更新を怠るな！　此方が忙しなく働いた分、奴らの機会が減ると思え！　楽に戦いたければ足を止めるな！」

「はっ！　秘書官による粘土板作りを一時間ごとに、運搬役を三者増やして対応します！」

「よい。では次だ。本日の資材運搬の一覧はこれか？　……エレシュ市からの物質運搬に遅延が見られるな。街道に魔獣どもが巣を張ったか。東門の兵舎から２０人派遣し、駆除に当たらせよ。指揮はテムンに任せる。奴の地元だ、土地勘もあろう」

「む？　なんだこの阿呆な仕切りは！　バシュムの死体はエナンナに送らぬか！　学者どもが暇をもて余しておるわ！　小賢しい頭を働かせてやる時だ！」

「はっ！　ティアマト神研究班へすぐに！　こちらはギルス市からの返信となります」

「……！　おのれ、ギルス市の巫女長がほざきおって！　バウの神殿にまだ備蓄がある事なぞお見通しだ！　底をつくまで戦線に吐き出せと伝えよ！　壁が壊れれば世界の終わりだ、地上の食物は冥界にまで持って行けんとな！」

「これは星読みの報告か？　いいだろう、我(オレ)が視たものと一致している。収穫期を読む精度はまずまずだ。担当者にはラピス・ラズリの胸飾りを与えるように。だが休ませる余裕はないぞ！　次はエリドゥの調査隊の報告に目を通させておけ！」

「――――所で、タバドの娘が産気付いたと聞いた。巫女務めを一人と、

栄養のつく果実を送ってやれ。またタバドは北壁から引き上げさせ、三日ほどの休みを与えるがよい。孫の顔はよい英気に繋がるだろう」

それは、嵐のような応酬、何人もの神官が代わる代わる怒号を叩き付けられており、それは戦線の維持から市内外含めたメソポタミア全体に及ぶ管理、更には戦う兵士一人一人とその家族にまで判断し、気を配り、労い、叱咤しているから。怒号というが其処には怒りなど微塵もなく、そこにはただ必死に業務に勤しむ王がいた。

文字通りの意味で忙殺されかねない仕事量、声を掛けることすら憚れる空気に立香は棒立ちになる。そんな彼女を見かねたマーリンが、それはそれと空気を読まずに立香の手を引いて前に出る。

躊躇なしに謁見に割り込むマーリン、そんな彼の後を追おうとマシュもアナと呼ばれる少女も付いていく。必然的に修司も後を追う形になるのだが、その際に彼は王の側に控える一人の女性に視線が向いた。

「……シドゥリ、さん？」

「――？」

それは、他人のそら似と言うには余りにも外見が一致していた。顔を隠すヴェールや見に纏う衣服の意匠は修司の知る彼女とは異なっているが、身に纏う雰囲気から外見まで、何もかもが自分の知る姉貴分と一致する女性に、修司の思考は一瞬停止した。

「ギルガメッシュ王！　魔術師マーリン、お客人をお連れした！」

その時、声を張って王の名を呼ぶマーリンによって修司の意識は我に返る。首を振って意識を集中させ、頬を両手で軽めに叩く、今の自分は王の御前にいるのだ。下手な姿を見せるわけにはいかないと気合いを入れ直し、改めて玉座に座る王へ向き直る。

それは、外見こそ自分の知る王と全く同じだった。己を導き、時には叱咤し、時には褒められる。色々とやらかす自分を今も尚見捨てないでいてくれている懐深き偉大なる王。

しかし、目の前の王は確実に自分の知る王とは違っていた。何処までも静かに、冷淡に見下ろす黄金の王。其処には修司の知る暖かみのある王ではなく、人類の裁定者――〝賢王〟ギルガメッシュが其処

にいた。
「帰還したのですね、魔術師マーリン。ご苦労でした。王はお喜びです」
「……」（いや、別に喜んではいないが？）
「それで、成果は？　天命の粘土板、見事に持ち帰りましたか？」
「いや、其方はまたも空振りだったよ。西の杉の森にはないね、あれは。まったく、王様が何処に置いてきたか覚えていてくれれば、こんな苦労はなかったのに……」
「不敬ですよ、お黙りなさい。粘土板を記した時、王はたまたま疲れていたのです。極度の疲労で記憶が飛ぶ……というのは、私も聞いた覚えがありませんが、王が仰るならそうなのです。貴方は命令通り、粛々と探索すればよろしい」
（……懐かしいなぁ、俺も昔似たような感じで怒られた事があったっけ）
　マーリンの愚痴を静かに一喝する王の側使えと思われる女性に、修司は嘗て自分も似たような事でシドゥリに怒られていたことを思い出す。あの頃の自分はまだ遊び盛りのガキンチョで、よく仕事中の王に構って欲しさばかりに色々とバカをやっていた。
　そんな自分を叱り、酷い時には尻を叩かれた事もあった。姿形の外見といい、声まで似ている側使えの女性に修司は懐かしさを噛み締める様に頷いていた。
「それより……その者達は？　どう見てもウルクの市民ではありませんが……」
「よい。おおよその事情は察したわ。貴様は下がっておれシドゥリ」

　そんな時、話題が自分達に向けられた時、王は立ち上がった。その手に粘土板の魔術書と神権印章（ディンギル）を持ち出し、ただならぬ雰囲気で自分達の前に玉座から降り立つ。
「王よ、一体なにを？　……まさか」
「そのまさかよ、この玉座をしばし汚すぞ！　なに、最悪異邦人二人、天に返るだけの事！　我は忙しい！　言葉を交わして貴様らを知る

時間も惜しいほどにな！」
「よって、戦いを以て貴様らの真偽を計る！　構えるがよい、天文台の魔術師よ！　そしてマーリン、貴様は手を出すな、引っ込んでいろ！　そこの山吹色の貴様もだ！　貴様は次に見定める。首を洗って待っていろ！」
「ええっ!?」
　突然の戦闘、戸惑う立香とマシュに対し修司は比較的落ち着いていた。ギルガメッシュ王は無茶振りの好きな人物、それは賢王と呼ぶに相応しい器となっても変わらないようだ。
「二人とも、遠慮はするな。あの人は君達の本気を見定めようとしている。決して手を抜くな、殺す気で挑むんだ」
「わ、分かった！　やろう、マシュ！」
「は、はい！　マシュ＝キリエライト、全力でギルガメッシュ王に挑みます！」
「ほう、多少は弁えていたか。ならばよい、迎え撃つのも王の度量よ」
　そして、立香とマシュのコンビによる王との戦闘は三分ばかり続いた。イノベイターの能力を駆使し、三次元的動きを混ぜ合わせたマシュの攻撃は、しかし賢王に通じる事はなく、その悉くが先読みされ、その全てが防がれてしまう。
　これ迄幾度も修羅場をくぐり抜け、更には革新者となったマシュが、まるで子供扱い。結果的には分かっていた事だが、ギルガメッシュ王の防御を微塵も揺るがせなかったのは、二人に苦い敗北を味わせる事になった。
　軈て飽きたと言わんばかりに玉座へと戻るギルガメッシュ王、本来ならそろそろ自分達がこの大地に降り立った経緯と説明をする筈だったが、生憎と王が見定めるべき相手はもう一人存在している。
　玉座に座り直し、頬杖しながら見下ろすギルガメッシュ王は口を開く。次は、貴様の番だと。
「さて、其処の未熟者どもの見るべきモノは見た。次は貴様だ。我を知ったように語ったのだ。よもや、出来ぬとは言わせんぞ？」
「あぁ、こう見えて俺はある人のお陰で無茶振りには耐性があるんだ。

ドンとこいだ」
「ほう、吼えたな？　であれば、此処で一つ貴様の全力を見せてもらうとしよう。とは言え、戦いではない。最早その時間すら惜しい、貴様は其処で棒立ちのまま、その全てを晒しだせ」
「……良いのか？」
「良い、我が許す」
　ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべる王に対し、修司もまた笑みを浮かべる。この時代の自分を知らない王様に、今の自分の全力を見せられる。そんな不思議なシチュエーションにテンションが昂ったのだろう、修司の髪が心なしかザワザワと逆立っているような気がする。
　ただ、その前に……。
「マシュちゃん。立香ちゃんと……其方のシドゥリさんの事を頼む」
「え？」
「は、はい！　分かりました！」
　懸念材料を失くすために、修司はマシュに立香とシドゥリの安全を確保させる。すると、瞬時にこれから何が起きるか察したマシュは立香と共にシドゥリの側へ駆け寄り、盾を構えて身構える。
　一方、何が起こるのか分かっていない様子のシドゥリは首を傾げ、何となく察したマーリンはアナと共に王の間から避難する。残されたのは相対する修司と賢王の二人のみ、遠くから某女神が近付いている気もするが……今の彼らにそれを気にする余地はない。
　力を溜める。溢れ出る力の奔流を塞き止め、全身に力を込めると、修司は改めて王を見る。
「行くぜ王様、後悔するなよ？」
「は、出来るものならやってみるがいい」
　ググッと、赤い力が修司の全身に行き当たる。それはさながら臨界点に到達した爆弾、未知なる事象を前に賢王は疲れた脳をワクワクさせながら、その光景を待ちわびる。
　そして――――。

「ダァッ――――!!」
修司の内から、白い炎が吹き荒れる。ドンッと解放された気力が空気の壁を激しく叩きジグラットを――――否、ウルク市全体揺さぶっていく。
「はぁ、私の最終兵器、何処に行っちゃったのよ。あーもうイライラしてきた！　こうなったらあの生意気なギルガメッシュを叩き潰して、この鬱憤を晴らしてやるんだから！」
そして、ウルクに近付くとある女神は押し寄せる力の暴風に気付くことはなく。
「――――え、ちょ、何？　この風……って、みぎゃあッ!?」
哀れ、美しき金星の女神は吹き飛んでいった。

「イシュタル、吹っ飛んだ～！」
「ジャガー、なに騒いでるノ？」

その１２７　第七特異点

「――――成る程、貴様の力はよく分かった。我が全力を出せと言ったのにも関わらず、手の内を晒さないその根性は気に食わぬが……良い。特別に許す。業腹だが、貴様にはそれが許される程の〝格〟があることは認めよう」
「へへ、そう言ってくれると、これ迄頑張ってきた甲斐があったってもんさ」
　ウルク市中枢。ジグラットの王の間にて、カルデアの力を自ら推し量った〝賢王〟ギルガメッシュ。特に修司の実力を見てからはその機嫌は僅かだが良くなったようにも見える。
　認め、認められ、会話自体は非常にそれっぽく、また頼もしい。しかし、そんな二人の表情は何処か引き吊っている様にも見えた。
「王よ、そして異邦の戦士よ、此度の様な振る舞いは今回だけにしてくださいね？　次にまた同じ様な真似をすれば……私も、必殺の蹴りを解放しなくてはなりません」
「ヒッ、すみませんっした！」
「ぬぐぅ。シドゥリめ、男の遊び心を介さぬとは！」
　有無を言わさない迫力のある微笑み。そんな彼女の笑顔に嘗ての恐ろしい記憶を思い出した修司は二の句も告げずに頭を下げて平謝り、王はその表情を渋くさせている。
　二人を萎縮させている彼女の名はシドゥリ。賢王ギルガメッシュ王の補佐官であり、ウルク市の祭祀長を務める聡明な淑女である。そんな彼女の毅然とした態度を前に修司はすっかり萎縮し、ギルガメッシュ王も苦手そうに視線を逸らしている。
　普段の二人からは見慣れない有り様に言葉を失っている立香達、そんな彼等を尻目に王は玉座に座り直し、改めて一行を見下ろした。
「さて、一先ずは貴様らの実力は見せてもらったが……正直言ってつまらん。天命を帯びた者とは如何程かと戯れてみれば、単なる雑種。そこの山吹色の男も我に使われる価値はあれど、それ以上の器ではな

い」
「玉座を汚した罪を問う事すら煩わしい！　此度は見逃す、出直して来るがいい！」
　それは、事実上の戦力外通告。修司の実力はある程度認めてはいるようだが、立香とマシュに対しては不自然な程に辛辣だった。確かに、二人の未熟な所は否めない所があるのは認めよう。しかし、それ以上に二人はこれ迄幾度となく修羅場を潜り抜けてきた。
　喩え認められなくても、ある程度の協力関係は築けるかと思っていただけに、この反応は予想外だった。
「王よ、どうかお鎮まり下さい……！　私には驚くべき力を持つ戦士に見えます。其方の山吹色のお方もそうですが、盾の彼女にも大変立派な戦い振りだったと見受けます」
「確かに、マーリンが連れてきただけあって多少は見所はある。だが……如何せん早すぎる。あの小娘の間抜け顔を見ろ。あの分では、未だ大地の声を聞いてはいまい。それでは話にならん、マーリンめ……過保護が過ぎた様だな」
　頭を抑えて呆れるギルガメッシュ王、そんな彼等の未熟の原因はマーリンにあると断言し、断言されたマーリンは困ったように頭を掻いていた。
「むーう、何だか私の所為にされてしまったぞ。立香君、何かコメントはないかい？　このままでは本当に追い出されてしまうけど？」
「そうは言っても……うーん、英雄王より幾分か落ち着いた感じだけど、あのギルガメッシュ王だからなぁ」
『て言うか、何であの王様てば微塵もカルデアに興味を持ってないんだよぉ!?　遥か未来から訪れた異邦人だって知ってるなら、多少は興味は持つ筈だろ!?』
「うーん、そのようだねぇ。おかしいな、私と彼の認識はほぼ同じだったのに。確かにカルデアとか、サーヴァントとか、人理焼却やら魔術王やら、聖杯やら特異点といった諸々の事情は一切説明していないけれど。それでもほら、何となく空気を読めば分かるものだろ？　王様なんだから」

「そ、それでは何も伝えてないと同じです！」
「ロマニ、ちょっとアーサー王呼んできてくれる？　ちょっとこの魔術師の説明書が欲しいんだけど」
「フォウフォーウ、マジマーリンフォーウ！」
　一切悪びれる事なく、そんな事を宣うマーリンにマシュは立ち眩みを覚え、流石の立香もイラッと来た。今からでもカルデア側から戦力を呼べないだろうか、何ならアルトリアに来てもらってこの夢魔を何とかして貰いたいと、立香は割りと切実にそう思った。
　心なしか、フォウも荒ぶっている気がする。
『よぉし、マーリンは話にならないぞ！　こうなったら立香ちゃん、修司君、君達だけが頼りだ。もう一度ギルガメッシュ王に説明を！　幾ら彼でもちゃんと説明すれば理解してくれる筈だ！』
「その必要はない。聞こえているぞ、姿なき者。我は全てを成し得るが故に、我は全てを知り得ると心得よ。即ち、我が目に見通せぬものはない。この通り、我は己が天命を全うする前ではあるが……英霊を召喚し、使役する術式。貴様らが行う〝英霊召喚〟の何たるかは心得ている」
　目の前の賢王は、この時代の人物だ。なのにも関わらずマーリンからの助言も成しに英霊召喚の事や、自らがそうなる事を承知している。視界の広さ……否、王の尋常ならざる視点の高さには一行も舌を巻く他無かった。
「あ、でも……この時代の何処かにある聖杯を回収しなくちゃいけないんだよね。そうしないと特異点は無くならないし」
「ほう、聖杯とは……これの事か？」
　王の横から広がるように現れる黄金の波紋、その中から現れる聖杯に今度こそ立香達は目を丸くさせた。人理を崩壊させる特異点、その元凶なる聖杯は既に王の手の中にあった。
　その事実に面食らう一同、対照的に王は不敵な笑みを浮かべている。成る程、自分達を不要だと断じる訳だ。あの聖杯の出所は何であれ、これで修司は自分のやるべき事を朧気ながら見定めた気がした。
「王様――――いや、賢王ギルガメッシュ。不遜だと思われるが、俺達と

一つ取引をして欲しい」
『ちょ、修司君!?』
「ほう？　良いだろう。聞くだけ聞いてやる」
「三女神がウルクを攻める理由、それは恐らく貴方が有する聖杯にあると見た。ならばその三女神を俺達が倒す代わりに、その報酬として其方の聖杯を戴きたい」

シンッ……。その時、王の間の空気が一瞬にして死んだ気がした。山吹色の異邦人、白河修司は畏れ多くもギルガメッシ王に対し、聖杯を懸けての取引を持ち出してきたのだ。
それだけでも畏れ多いのに、修司はその条件として三女神同盟の制圧を提案。人類を滅ぼそうとする女神達を倒す代わりに、聖杯を寄越せとねだってきているのだ。何という不遜、不敬、嘗ての王であるならば即刻首を切り飛ばされても可笑しくはない狼藉。
マーリンが指を指して笑い、ロマニが顔を両手で覆う一方で立香とマシュは気後れしながらも気合いを入れ始めている。彼等の何処にそんな自信があるのか、神を舐めているとしか思えない振る舞いに、シドゥリが僅かに眩暈がした時、王は声を張り上げた。
「――――、フ。ふはは、はははははは！　はははははははははははははは！」
「倒す!?　貴様が、貴様達があの女神どもを倒すだと!?　シドゥリ、水差しを待て、これはまずい、命がまずい！　この阿呆は我を笑い殺す気だ！　コヤツ、戦士であると同時に道化の類いだったか!!　これは狡いぞ！」
ジグラット中に響く王の笑い声、女神を倒すと聞けば誰もが呆れ、嘆息し、見限るだろう。だが、王は違う。大言壮語を語る修司に嗤っているのではない。
白河修司は本気だ。今この瞬間命じれば、即座に女神の首を獲ってくるのだと、それが分かっているから、王は笑うのだ。
此処まで、これ程までに人は強くなれるのか。呆れる程に可能性に満ちている目の前の人間を前に、ギルガメッシュ王は愉快で堪らな

かった。
　しかし、だからこそ――――。
「……ふぅ、今のは中々だったぞ。だが、それを踏まえた上で言わせて貰おう。〝今の貴様達に用はない〟のだと」
「……」
「貴様らはこの時代に現れた異物。いや、余分な要素だ。不要とすら言えるほどのな。ウルクは我が護るべきモノ。貴様らカルデアの力を借りるまでもない」
「よいな。くれぐれも、その程度の手駒であの女神どもと戦う、等と思い上がるなよ」
　王は言う、お前達は不要だと。立香を、マシュを、そして修司を。彼等の力を目の当たりにしても尚、賢王は彼等を拒否した。
　それは王の意地による拒絶ではなく、先を予見しているが故の必然な対応。実際、修司達はまだこの世界の事を何も知らない。
　だから、その間に修司達は知らなければならない。メソポタミアの事、この世界に生きる人々と人類抹殺を目論む三女神同盟の事、そして……その先で待っている真実に。
　王の言葉は事実を口にしている。時には辛辣で、時には残酷な言葉を以てメソポタミアという世界を守護している。今の自分達は王に認めて貰う程の実績も積み上げてはいない。
　だから――――。
「……度重なる無礼、誠に失礼致しました」
「良い。久方ぶりに腹から笑わせて貰った礼として不問とする。そら、用件が済めば疾く失せよ」
　今は、大人しく引く時だ。踵を返して一先ずジグラットを後にしようとする一行、問題は今日の寝床とこれから活動する拠点だ。今の所マーリンのツテ以外に頼れるものは無いが……なに、やり用は幾らでもある。
　最悪、自称エルキドゥと戦った杉の森で木材を拝借し、簡単なログハウスでも建ててやろう。落ち込み二割、やる気八割な気持ちで王の間を後にしようとした時、酷く慌てた様子の兵士が王の下へ駆け込ん

できた。
「ご歓談中、失礼致します、王よ！」
「誰が歓談しているか！　何処に目を付けているか！」
「え？　あ、いえ、王の笑い声がジグラット中に響いておりましたので、さぞ楽しいお話の最中かと……」
「たわけ、箸が転がるだけで面白い年頃もあろう！　――いや、それはよい。所で何事か！」
「ハッ！　ティグリス河からの観測所から伝令ッ！　上空に天舟の移動跡を確認、一度はウルク周辺にまで接近したものの、一時後退し、現在猛スピードでウルクに向かっているとの事です！」
「……」
　兵士が捲し立てる様に王に報告をしている最中、修司は此方にかなりのスピードで近付いてくる気を観測する。結構な強い気だ。格で言うなら先の特異点で戦った獅子王にも引けは取らないだろう。
　……いや、正直言えば近付いてくる奴について修司は心当たりがある。心当たりはあるが……正直、関わりたくないのが本音である。
「接近してくるの〝は三女神同盟〟の一柱――女神イシュタルです」
「よし、じゃあ俺達はお暇しようか。王様の邪魔になっちゃ悪いし、見聞を広める意味も含めて、先ずは市場を見て回ろうか。な、皆」
「ど、どうしましょう先輩！　修司さんが嘗て無い程に現実から目を逸らしています！」
「あー、うん。私、何か分かっちゃった。話の流れ的に、この後に起きる出来事、分かっちゃった」
「ハハハ、現実逃避したいのは山々だし気持ちは分かるけど……もう遅いよ？」
　今すぐにでも逃げ出したい。ある意味恐怖に近い心境で修司はジグラットからの離脱を皆に提案するが……既に、時遅し。
　マーリンがそう口にした瞬間、王の間の天井が砕かれ、其処から巨大な弓（或いは舟）と共に一柱の女神が顕れた。王は語る。イナゴの

群れと砂嵐、そして子供の癇癪、その全てが混ざったものがあの女だと。
言い得て妙だと、修司は思った。自分の知る姉弟子も外では優等生を演じているが、身内には頗る面倒な気質を持った癇癪玉だ。特に、弟弟子である自分に対して、何かある度に頼み事をしてくるのだ。断れば勝手な事をして被害を拡大させ、了承すればあの手この手の言い訳をして此方の請求を躱していく。
その癖、此方が本気で取り立てようとすると、泣き落としをしてくるから腹が立つ。尤も、一度本気でブチギレ、肉体言語で分からせてからは、そう言うのは一切しなくなっていたが。
ともあれ、落ちてきた女神に関わるつもりは毛頭ない。さっさとこの場を後にしようと、修司は王の間から去ろうとするが……。
「……ついさっき、物凄い力の爆発がウルクから発生したわ。お陰で私はその爆風に巻き込まれ、魔獣どもの群れに激突、その衝撃のお陰で私は汚い獣どもの臓物まみれになりました。さて、ここで質問です」
「あんのバカげた事を仕出かした大馬鹿者は……何処の、どいつかしら？」
震える声でそう呟く聞きなれた声に、修司の足は止まる。恐る恐る振り返れば、血腥い臓物にまみれた姉弟子の姿が見える。顔は王の方へ向いているから表情こそは確認できないが、修司には般若のごとき顔をしているのだと、ありありと見て取れた。
ふと、王と目が合う。その顔は何処までも無感動で無表情、しかしその目はずっと修司に向けている。
修司は首を横にし、両腕で×の文字を作る。どうか許してください、そう懇願する修司に対し……現実は何処までも非情だった。
指が向けられる。一切の言葉はなく、また必要がない。指された修司は何処までも非情な現実に泣きそうになった。
しかし、本当の絶望はここからだった。向けられる指の数は王一人のモノに非ず、また一人、また一人と、向けられる指の数は増えていく。

その中には、顔を逸らして此方を見ないようにしていながら、立香とマシュも指を差してくる。特にマーリンは噴き出しそうになりながら、同じように顔を逸らして指を向けてくる。その指へし折ってやろうか？　修司は割りと本気でそう思った。
「そう、アナタ、またアナタなのね？　フフフ、本当に……本当に、神を苛つかせるのが得意な様ね」
「決めたわ。そこの何処か見覚えのある人間、アナタはこの女神イシュタルが、直々に殺してあげる。さぁ……覚悟なさい!!」
ツインテールを怒髪天に揺らし、迫り来る美の女神イシュタル。その般若ごとき勢いにすっかり萎縮した修司は……内心、申し訳なく思いながら。
「ごめんな……さい！」
襲い掛かる女神イシュタルの後ろへ瞬時に回り込み……その臀部に向けて張り手を一振ほど振り抜き。
〝ズドゴンッ!!〟
「ガッ!?」
凡そ、人体からは出ないであろう音を発しながら、女神イシュタルは吹っ飛んでいった。
その光景に誰もがあ然となり、言葉を失っている。そんな中で唯一、ギルガメッシュ王だけは腹を抑えて呼吸困難に陥っていた。
『うん、何というか……初っ端からハチャメチャだね！』
この時のロマニのフォローは、珍しく修司の心に染みていった。

その１２８　第七特異点

第七特異点、人類最古の文明の一つ。メソポタミアの大地へと降り立った一行、王であるギルガメッシュと謁見を果たし、紆余曲折を経てウルクでの滞在を許された一行は、シドゥリを立香達の世話役として任命され、彼女の案内によって空いた一軒家を預かる事になった。

メソポタミアに訪れて凡そ三日、漸く拠点を手に入れた一行は一先ず今日の所は拠点の清掃を行い、その後はダ・ヴィンチから神代の時代背景を簡単に説明を受け、簡単な宴を開く事になった。

「成る程、ではあのウルク全体が震えた原因は修司殿にあったのですね！　いやぁ、お見事！　よもや闘気だけで大地を震わせる猛者だとは、現代の人間は凄まじいですな！」

「いやぁ、それ程でも……」

「しかし、前線を預かる身としては少々心臓に悪いですな。お陰で新兵の何人かは腰を抜かしてしまい、他の兵士達にも動揺が走りました。まぁ、魔獣どもも狼狽えていたので結果的には戦況は此方が有利な方に傾きましたから良いですが……出来れば、ああいった事は事前に相談してほしいでありますな」

「あ、はい。マジですみせんでした」

用意された麦酒と食事、細やかながらこの時代では豪勢な食卓を囲むのは修司達と、ギルガメッシュ王によって召喚されたサーヴァント達である。

露出の激しい少女は牛若丸、かの源義経の若かりし頃の姿で現界した彼女は大層な実力を持った修司を気に入り、立香と同様に大変懐いてしまっている。

気迫だけで大地を震撼させる修司をマジもんの武神の類いだと持て囃しているが、それを敢えて空気を読まずに嗜めるのが、スパルタ国王レオニダスである。

言葉の端こそやや棘のある言い方だが、彼も彼で修司の事は認めて

いる。他にもその効率重視の戦い方は修司自身も興味を抱いており、その話をしてからは互いに意気投合するようになった。
「しかし、ウルクの兵士達は勤勉が過ぎるのが難点でありますな。戦士として戦う意気込みは大事ですが、動けばその分だけ体力は消耗してしまいます。戦士は時に計算高く在らねばなりません。私も、戦場で疲れた時は寝ています。そして、あ、危険だな。と思った時に目を開け、槍を奮えば、自然と刃は魔獣の喉笛を突き破るのです」
「あー、でもあれってタイミング間違えると悲惨な目に遇うんだよな。俺も似たことを昔アフリカでやった事があるけど、気付いてたらライオンやハイエナに齧られてるんだよな。お陰でその日一日涎の臭いで酷かったわ」
「あるあるですね。私も平家の駄馬に齧られた事がありますので、お気持ちは分かります」
「ハハハ、二人とも頑張りが過ぎる傾向があるようで。こう言うのはこまめに目を瞑って体を定期的に休ませるのがコツですな」
「「ほー、成る程なー」」
「ど、どうしましょう先輩！　修司さん達の会話が噛み合ってないようで絶妙に噛み合ってます！」
「うん、取り敢えず放っておこ？　私達には知らなくて良い世界だよ」
物騒なあるあるを楽し気に語る三人に立香とマシュの両名は遠い目をしていた。
その後も宴は続き、話は賢王ギルガメッシュの話へシフトする。彼は不老不死の霊草を探す旅から帰ってきた帰還者、ロマニが言うには今の彼は長い旅で精神的に成長し、覇を競う英雄王としてではなく、理を唱える賢王へ至ったとされている。
己一人が強者であれば良い、そんな様ではこの先の戦いでは生き残れないと、王としての矜持や責任、或いは自身に課せられた使命として受け入れたが故の選択なのだとか。
そんな彼が自ら国を起こし、バビロニアを解体して頑強なあの北壁の壁を作ったと言う。人類を守護する為、己の責務を全うしようと足掻く賢王ギルガメッシュに、ウルクに住まう人々もそんな王に呼応す

るかのように集い、立ち上がったのだと、シドゥリは語った。
「……本当、つくづく凄い人だよ王様は。先の特異点にいたどっかの誰かに聞かせてやりたい話だ」
「修司さんの正論は多方面に影響及ぼすから、もう少し加減した方がいいと思うな」
「そ、そうですよ！　ここにはその、マーリンさんもいる事ですし……」
今日一日しかウルクの街並みは見ておらず、賢王ギルガメッシュの政策は触り程度しか知り得ていない。それでも先の特異点の某獅子王とは文字通り天と地程の差があり、二人の王を知る修司としてはどうしても比べてしまう。
事実、人の世界の為に人を殺す王と人の世界の為に人と共に戦うと決めた王、支持をするならどちらかとするなら、答えなど決まりきっている事だろう。とは言え、修司もこれ以上王達を比較するのは控える事にした。
如何に人にとって悪政だとしても、獅子王も王の一人。彼女を卑下すると言う事は、そのまま同じ王であるギルガメッシュを嘲るのも同然。臣下の一人でしかない自分にそんな越権行為など持っている筈もなく、他所の王の臣下が目の前にいる以上、この話題を続けるのは避けるべきだろう。
「……悪い、口が滑った」
「うん？　あぁ、別に気にする必要はないさ。あの王は確かにアーサー王の成れの果てと呼ばれる存在だが、同時に私の知るアルトリアではない。どちらかと言えば、君達のカルデアにいる彼女こそが僕にとってのアーサー王と言えるだろ」
「……」
話の流れ的に悪いのは臣下でしかない癖に王を比べる言動をした修司であり、修司もまた己の非を認めている。だからこそ反省はするし、謝罪の言葉だって口にする。
けれど、何故だろうか。目の前の半人半夢魔の言葉を聞くと、過ちを認めた自分がバカみたいだと思えてしまう。言葉の端からマーリ

ンという魔術師がどう言った存在なのか、何となく察してしまった修司は、以降マーリンに話し掛ける事はなかった。
　それからも宴は進んでそろそろお開きになった頃、シドゥリがとある話題をふってきた。
「それで、修司様と仰いましたか？　アナタには私から二つ程お訊ねしたいことがありますが……宜しいでしょうか？」
「あ、はい。どうぞ」
　神妙な顔付きで話し掛けてくるシドゥリ、そんな彼女を前に修司の姿勢は自然と正される。
「先のジグラットで見せたアナタの力、大変興味深く、また感服しました。王も仰っていたようにその力は対三女神に対し、非常に有効であると認めざるを得ません。しかし……幾らなんでも女神イシュタルに対して無礼が過ぎるのでは無いでしょうか？」
「あー、うん。そうッスね」
　麦酒を煽るように呑み欲し、やや頬が赤くなっているシドゥリ。酒に酔い、通常よりやや圧が強くなる彼女にすっかりタジタジな修司は、迫るシドゥリに俯く他無かった。
「尋常なる戦での決闘でならいざ知らず、勢いであんな……仮にも女神の尻を叩く等、その様な勇者は見たことがありません！」
『あ、そこは勇者扱いなんだ』
「兎も角、都市神でもあるウルクの女神たるイシュタル様を侮辱する行為は、極力お控え願いたいのです」
　懇願するように願い出るシドゥリだが、しかしその願いを聞き届けるには少々難しい問題だ。確かにあのイシュタルはウルクの都市神で、戦いと豊穣を司る厄介極まる性質を持ってはいるが、だからと言って戦わないという選択肢は有り得ない。
　女神イシュタルは三女神同盟の一角、彼女がジグラットを強襲してきた際に報告に来た兵士の一人がそう言っていたのだから、恐らく間違いはないのだろう。
　誰もその事を否定しないから、修司も立香もマシュも、あの女神イシュタルが倒すべき敵なのだと、思い込んでいた。いや、修司だけは

仮にも姉弟子をブチのめしていいのか判断に悩まされていたが……。

ふと、立香は違和感を覚えた。女神イシュタルが話題に上がり、そのお陰で思い出した彼女の言動。それを思い返した立香は恐る恐る手を上げ、自らが抱いた違和感を口にする。

「……あのさ、女神イシュタルについて質問があるんだけど、彼女って本当に三女神の一柱なのかな？」

「え？」

「ふむ、立香殿、その根拠を聞かせていただいても？」

「根拠って程でも無いんだけど、女神イシュタルってウルク市の都市神なんだよね？　それで彼女がギルガメッシュ王の前に現れた時の言動を思い出したんだけど、人間を絶滅させる女神様の一柱にしては……ウルク市に拘り過ぎてないかなって」

『む、確かに言われてしまえばそう思える……のか？　でも神って基本的に気分屋だし、その日の機嫌によって人間に味方すれば敵対する事もあるからなぁ』

あの時、イシュタルは魔獣の臓物にまみれて怒り浸透の様子だったが、その割にはシドゥリや兵士達に八つ当たりの攻撃をしてはいない。仮に彼女が三女神同盟の一柱なら、空から一方的に襲って来ることもあった筈なのに、そう言ったやり方は一度だってしてこなかった。

それがロマニの言うように神の気紛れだと言えばそれまでだが、何故か立香には三女神という恐ろしい神の一角とは思えなかった。

「……あの、あくまで私が何となくそう思っただけだし、話し半分で聞き流してくれればいいから！」

「――――いや、案外その推理、当たっているかも知れないぜ、立香ちゃん」

「え〃？」

あくまで自分の直感で言っただけであって、本心から来る言葉でも、確証がある訳でもない。話し半分で聞き流して欲しいと口にする

立香に、修司が捕捉し始めた。
「根拠となる理由は一つ、女神イシュタルから感じる気の強さが他の三つの強大な気に比べ、若干だが劣るって点だ」
「〝キ〟？」
「恐らくは、あらゆる命に宿る力、もしくはそれに通ずるナニカでしょう。概念的に言えば仙道に近いでしょうか」
「なんと、では修司殿はこの若さで仙人の領域まで至ったと!?」
シドウリは修司の語る〝気〟の概念に困惑し、弁慶は感心し、牛若丸は驚いている。日本出身のサーヴァントは中国から様々な文化が流れている所為か、〝気〟について感覚的ではあるが理解されやすい。
シドウリには後程詳しく説明する事にして、修司は話を続けた。
「立香ちゃん達にも言ったと思うけど、このメソポタミアの大地には少なくとも三つ、デカくて強い気の持ち主がいる。恐らくはそいつらが三女神とかいう連中で間違いないだろう。最初は俺もそう思っていた」
「思っていたって……今は違うの？」
「あぁ、改めて女神イシュタルという神と出会して分かったが、あの女神は他二つの気配と比べて僅かだが劣っている。とは言え弱いという訳じゃない。この時代における代表的な神格であるとされる事から、決して侮っていい相手じゃない」
「ん？　二つ？　三女神は三柱から成り立っているって……」
「そう、其処なんだ。三女神同盟は三柱の女神から構成される人類の敵対組織、なのに感じられる巨大な気は二つで、内一つの神であるイシュタルはこの二つと比べてやや見劣ってしまう。仮にも同盟なんて呼ばれる程なのだから、普通は同格として成り立たせる筈だ」
結局の所、あの女神イシュタルが三女神の内の一柱なのではないか？　話し合いの最中でそう結論しようとも思ったが、話の流れに違和感を感じてしまった修司は納得しかねなかった。
故に、思い付いた推測が一つ。
「例えばさ、俺達が三女神と定めた神の他に、もう一柱別の神がいたり

する……とか」
「もう一柱の神、ですか？　しかし修司さん、それだと三女神同盟ではなく、四女神同盟になるのでは？」
「じゃあ、実は三女神同盟って言うのは人類側の目を欺ける嘘で、実は本命にもう一柱隠されてたり？」
「いや、その可能性は低いだろう。神々の誓いというのはそんな軽く扱えるモノではない。仮に破ってしまったら最期、同盟を破った神は存在ごと消滅してしまうだろう。神同士による誓約（ギアス）はそれ程までに重いんだ」
　マーリンからの神の誓約に対する説明を受け、それを聞かされた修司は納得する他無かった。てっきりもう一柱の神がメソポタミアの何処かに隠れて、人類を虎視眈々と狙ったいるのかと思っていたのだが、魔術に詳しいマーリンに言われてしまった以上、修司から言える言葉はない。
　結局、あの女神イシュタルも倒すしかないのか。仮にも彼女は姉弟子に瓜二つな容姿をしている。その性質は諦めがたくしつこく、そしてしつこい。一度や二度の挫折で目的を諦める程、柔な人間性はしていない。
　そんな彼女と敵対する道しかないのか、項垂れながらその時が来るのを億劫に感じる修司だが、シドゥリだけは気になる事があるのか、考え事をしているように俯いている。
「……もしかしたら、修司様の推理、案外的外れではないかもしれません」
「シドゥリさん？」
「少々調べものが出来ましたので、私はこれで失礼します。マーリン、アナタもあまりハメを外さないで下さいね」
「やれやれ、シドゥリ殿に言われてしまえば仕方ない。それじゃあねカルデアの諸君また明日。アナも、あまり迷惑を掛けないようにね」
「余計なお世話です」
　席から立ち上がり、その場からあとにするシドゥリを皮切りに宴は慎ましく終了。シドゥリの後を追うようにマーリンも家から出てい

き、牛若丸や弁慶、レオニダスも後に続いていく。残されたのは立香とマシュと修司、そしてアナと呼ばれるはぐれサーヴァントのみ。
「……取り敢えず、お開きとしますか。二人とも、後片付けを手伝ってくれるかい？」
「うん、分かった」
『取り敢えず、今日の所はもう休もう。修司君も、考え事は後にして今はしっかりと休むようにね』
人類最古の文明の一つ、メソポタミア。ウルクに訪れた一行はこの日、一先ずの拠点を手に入れた。
そしてその翌日、立香達のウルクでの生活が始まるのだった。

その129　第七特異点

賢王ギルガメッシュ、不老不死の霊草の探索から帰還し、彼が築き上げたウルク市に滞在して翌日、宛がわれた拠点にて一夜を過ごした修司は身支度を済ませ、新鮮な空気を吸いに屋上へと登った。

朝日がウルクの街並みを照らし出し、ちらほらと人の姿が見えてくる。遠くからは既に鍛冶の音が響き渡り、それを皮切りに人々の活気がウルク全域に浸透していく。

凄い市(まち)だと改めて修司は感動した。以前にもマシュが言っていたが、この市には命が宿っている。三女神という人類を滅ぼすべく襲い来る脅威を目の前にしておきながら、ここの人達の目には絶望の色が一切無い。賢王ギルガメッシュのカリスマ性もあるのだろうが、この時代の人々にはしぶとく生きてやるという気概なモノが感じられる。

修司も仕事の為に様々な国へ歩き回った事があり、一度だけ街の運営を携わった事があるが、これ程までに完成された街を作るのに一年近くの時間を必要とした。当時は自分の出来る限界を知るために半年を費やし、人を頼って街を作るのに半年の時間を掛けてしまった。

自分の出来ることとやるべき事を見誤るとこう言う事になると、久し振りにマジになった王の顔が印象的だった。

やはり王は凄い。人類の歴史上を振り返っても彼程の為政者はそうはいないだろう。征服王も騎士王も、申し訳ないがあの王の前では霞んでしまう。

しかし、それでも依然として人類が窮地に立たされている事実も、また変わらない。昨夜の細やかな宴の席で、修司達はサーヴァントであるレオニダスから聞かされた。

まだ人類に襲い掛かる脅威が女神であると断定出来ていなかった頃、ギルガメッシュ王はその千里眼にてウルクが滅びる様子を視たという。それから差程間を置かない内に北部から魔獣による進撃を受けた嘗てのクタ市は一夜にして滅び、それからギルガメッシュ王は急

ぎバビロニアを解体。その資材を使って絶対防衛戦線を築き上げた。
そして、三女神という複数の脅威にギルガメッシュ王は戦う者ではなく、指揮する者として王座に座った。己一人で戦っても意味がないのなら、それに準じる英霊達を召喚して手数を増やす。
マーリンから英霊召喚の話を聞いたギルガメッシュ王は、即座に七騎の英霊を召喚し、文字通り人類の守護者とさせた。
王が前線に出られないのは、一度に七騎もの英霊を召喚した魔力をまだ回復出来ていないというのもあるのだと、マーリンは言った。
そんな召喚された英霊も残るは四騎。脱落した三騎はいずれも三女神同盟の勢力に敗れ、或いは相討ちしたという。特に、魔獣の指揮官らしきモノとサーヴァント巴御前の決闘は凄まじく、己の命と引き換えに敵将を討ち取った巴御前の勇姿は今も兵士達の目に焼き付いていると、レオニダスは語った。
「……ありがとう、巴さん。アナタの頑張り、無駄にしません」
登り行く朝日に手を合わせ、人類に希望を繋げてくれた巴や、散っていった英霊達に黙祷を捧げる。ここから先は自分達も頑張るから、今はどうか休んでくれ。ギルガメッシュ王が現在のウルク市を築き上げて約半年。自分達が来た以上、もう連中に好き勝手はさせない。
祈りの手向けを終えた修司は、頬を叩いて気合いを入れる。先ずは、王に自分達の力を認めさせる事から始めるとしよう。ジグラットから近付いてくるシドゥリの気配を感じながら、修司は一階へと降りていくのだった。

◇

ウルク滞在に伴い、修司達がここ数日で行ってきた事は……所謂、雑用と呼ぶべきモノだった。シドゥリを介して伝えられる仕事は探偵の様な浮気調査、他にはメソポタミアにおける重要な財産でもある羊の毛皮を剥ぐ手伝いなど、回される仕事は前線で戦う兵士達より遥かに簡単なモノばかりだった。

ギルガメッシュ王から言われた不要なモノ、それを証明する程に今のウルクには余分はない。しかし、それでもやるべき事がある以上、懸命にやり遂げるしかない。

それに、何も回される仕事に遣り甲斐がないと言うわけではなく、与えられた仕事以外にもウルク市民の人々から頼まれた事は積極的にこなしていった。たとえば羊の毛皮採りの際には、原材料である羊を狙う魔獣を撃破したり、妻の浮気調査を頼まれた筈なのにいつの間にか劇場版ドラ〇もん張りの大冒険をしたりするなど、それなりに濃厚な体験をしたりしていた。

中でも、修司達が興味を抱いたのが古代メソポタミアの死生観についてだ。人は肉体が滅べば魂も死を迎え、それぞれの国の文化圏に基づいて火葬や土葬などで埋葬される。

しかし、ウルクの場合は少々異なっていた。古代メソポタミアにとって死というのは現代ほど忌まわしく思われていたわけではなく、肉体が無事で有る限り喩え魂が冥府へ落ちたとしても、その魂が肉体に戻ればその人間は生き返るとされている。

魂だけを連れていかれた人を、ウルクでは〝眠りに落ちる〟と呼んでいるそうだ。古代メソポタミアでは死神とは一種の人攫いと称されている。修司にとって死神とは彼の山の翁こそが死神であると思っている為に、その表現は中々に複雑だった。

だが、呑気にしてもいられない。アナから聞いた限りだと、眠りに落ちる人は日に日に増えていき、静かでありながら着実に被害者が増えている。これが三女神の何れかによるウルクへの侵略行為かは定かではないが、ウルクの地下空洞には結構な量のガルラ霊が現れている。

ガルラ霊とはウルクにおける死神のようなもの、体力の落ちた子供

や年寄りを狙う病を具現化したような半透明の怪物達である。アナからの要請を受けて戦いに参加し、肩慣らしにガルラ霊達を殲滅すると、これで暫くはあのお婆さんも大丈夫だろうと、アナは安堵していた。

立香達によると、どうやらアナは花屋のお婆さんに大変気に入られ、アナも事ある度に花屋のお婆さんに会いに行くらしい。本人が人間嫌いな事もあってあまり事情を踏み込んだりはしないが、仲良さそうに振る舞う鎌使いの少女にホッコリしたのは此処だけの話。

――――て言うか、彼女の見た目がモロに薄幸美少女メドゥ子にクリソツなんだが？　修司は訝しんだ。彼女があのメドゥーサの幼体なのは何となく気付いてはいるが、本人が意外と協力的なので今の所は静観に留めている。

サインは書いてもらったのかって？　強引な強請りはファンに非ず。真に求めるなら時には静の構えで挑まねばならない。コレ、黒髭（海賊）にも通ずる心理也。

そんな、慌ただしく慎ましやかにウルクでの生活を満喫して数日、遂に賢王ギルガメッシュから直々に王命を戴く事になった。

「……え？　俺だけ、ですか？」

「そうだ。貴様の強さは大凡だが把握した。迷惑極まるあの覇気も、単独行動でこそ発揮しよう。その間、そこの雑種と盾の小娘は、引き続き我の預かりとする」

王への報告を続けて数日、最初は片手間に処理していた此方の業務報告は日を追う毎に王の関心を惹き付け、先の地下世界の大冒険の頃には完全に区切りとなり、麦酒とおつまみの豆の話を報告した際は、立香の案を三女神以上の脅威を思える程に狼狽していた。

そんないつもの業務報告を終え、後は拠点で次の仕事が舞い込んでくるまで待機しておこうとジグラットを後にしようとした時、何気ない様子で賢王は修司に命じた。

〝貴様には、南にあるウル市への調査を命じる〟と。

「ウル市、確か今は密林に覆われた市だと聞きました。其処への偵察と言うことは……やはり、戦闘は控えるべきだと？」

「ふん、相変わらず賢しい奴よ。だが話が早いので由としよう。然り、既に貴様の〝気〟とやらで感知しているだろうが、南には三女神の一柱が居座っている。ウル市は連絡が途絶えて久しい、生存者の有無と向こうでの状況の確認。それが貴様のすべき事だ」

ウルクへ訪れて初めての王命。当然これ迄とは違ったやる気が満ち溢れてくるが、如何せん修司の向かう場所は未知の危険が潜んでいるとされる地だ。聞けば、その密林の大地で賢王に召喚された七騎のサーヴァント、その内の二騎がやられたらしい。

それ故、当然これ迄とは桁違いの危険が待ち構えているだろうが、何れカルデアも南のウル市への調査は進める予定だった為、其処まで驚きはしない。

更には修司の実力はこれ迄の特異点の旅を経て飛躍的に向上している。例え神霊が相手でもそうそう負けることはない。

「じゃあ、私達は修司さんが戻ってくるまでこれ迄通りでいいのかな？」

「戯け、その様な余裕がウルクにあると思うな。先日、北壁担当の兵士が一人、怪我を負って倒れた。貴様達二人はその兵士が復帰する合間、レオニダスの下で対魔獣戦を体験してもらう。群で迫る猛獣どもを、見事退けてみせよ。藤丸立香！」

「うぇ？　は、はい！」

突然の名前呼びに挙動不審になってしまう立香だが、自分も修司と同じ様に王から認められたと知り、嬉しくなる。この調子で彼女もギルガメッシュ王の臣下になればいいなと、そんな事を思いながら修司は改めて王命を受ける。

「ではギルガメッシュ王、これより自分は南部にあるウル市への調査に向かいます。ご一報の程、お待ちください」

「よし、では往けい！　貴様のハチャメチャを〝密林の女神〟に示して来るがよい！」

「はっ！」

ウルクに訪れて初めての王命、密林に呑まれたウル市とそこに住まう人々の確認。そして、そこに待ち構える女神をどう捌くか、気合い

に満ち溢れた修司は興奮とワクワクを抱きながら、ジグラットを後にするのだった。

その１３０　第七特異点

――ないで。
――いかないで。
――れないで。
――はなれないで。
――わたしから、また――
――また、わたしをおいていかないで――
かえってきて――かえって――
もういちど、わたしのもとに――
もういちど――もういちど――
いえ、いいえ――
もう、にどと――
わたし　を　あいさない　で

――罪には、幾つかの種類があるとされている。他人を欺く。他人を陥れる。他人を羨む。命を奪う。
それらは全て人類だけが抱える悪。
それらは全て人類だけに及ぼす毒。
だが――これは、その中でも最も古い悪。原罪のⅡ。??から離れ、楽園を去った悪。
あぁ、しかし――。
生命は海から生まれた。原初の海ナンム。始まりの女神ナンム。人類にとって、女神とは海そのもの。潮騒は呼び声となってお前達の罪を克明にする。
思い出せ。
忘れるな。
この声こそお前達の原罪。

この名こそお前達の救済。
その名は――
〝Ａａ、Ａａ――〟
〝Ａａａａａａ――〟

遥か深き水底に、悲しき声が……聞こえた気がした。

◇

「いやぁ、悪いね。ワザワザ見送りまでさせちゃって」
「気にしないでよ。私達が北壁に向かうまでまだ時間はあるし、ギルガメッシュ王には事前に許可を貰っているからさ」
賢王ギルガメッシュの命により、南にある連絡の途絶えた市、ウルへ単身向かうことになった修司は、命令を受けた直後に行動を開始し、見送りに付いてきた立香達と一緒に南の門へとやってきた。
密林に呑まれた市、ウル市と更に奥にあるとされるエリドゥ市、ウルクとは一切の連絡が途絶えて久しいその地に向かい、そこで何が起きたのかを調べるのが今回の修司の任務だ。
過去に二度に渡ってギルガメッシュ王の喚び掛けに答えた二騎のサーヴァントを向かわせてきたが、何れも失敗し、調査に派遣した風魔小太郎と天草四郎が消滅したと言う結果だけが残ったまま。
立香もマシュも彼等の強さは知っている。だからこそそんな二人が任務を失敗した事実を重く受け止め、修司の安否を気遣い、せめて

見送りに向かおうと門前まで付いてきたのだ。
「俺の事は大丈夫だからさ、二人も充分気を付けろよ？　何せこれから向かう北壁にはあの無尽蔵とも言える魔獣がいるんだ。レオニダスさんがいるからと言って、決して油断しないように」
　自身の事を親身になって心配してくれる立香とマシュの優しさは素直に嬉しく思うが、危険な任務を請け負ったのは二人も同じだ。何せ此処のところ魔獣の数は徐々に増えていく一方で、更に言えば強力な魔獣がチラホラ目撃される様になっているらしいのだ。
　ウルガ、ムシュマッヘ、魔獣の中でも危険視されている魔獣は、〝魔獣の女神〟の子供として知られ、その親とされる神はメソポタミア神にてある女神を差している。
　その女神の名はティアマト。世界の創世を担い、メソポタミアの大地となった存在として知られるメソポタミア神話全ての母、北部に棲む〝魔獣の女神〟をティアマト神と同一視している兵士は多い。まして、本当に彼女が人類を滅ぼすと知れた時の人類側の衝撃は計り知れない。
　故に少しでも今は問題を片付けようと、賢王は自分に命令したのだと認識する。例え全てが片付けられなくても、最低限の成果は持ち帰ってみせる。意気込む修司だが……ふと、あるサーヴァントの事を考えた。
「それにしても……茨木の奴、何処に逃げてったんだ？　アイツがいれば、兵士達の負担も少しは軽くなっていただろうに……」
　賢王ギルガメッシュが召喚されたサーヴァント。その内の一騎である茨木童子、大江山における鬼の首魁の一人である彼女は、あろうことか王の命令を聞かずに逃走、今頃は何処かの山に隠れ潜んでいるのではないかと、同僚である牛若丸は言っていた。
　茨木童子はその逸話から生き延びる事に特化した英霊だとされており、その耐久性やいざと言う時の逃げ足の速さはウルクにて生き延びることを最優先としている戦い方にとても相性が良いと思えた。
「いない者を頼っても仕方ありません。しかしご安心下され、もしあの鬼が血迷って我等に牙を向けてきたら、その時は源に連なるモノと

して、躊躇なくあの頚を落としてご覧にいれましょう」
「いや、あはは、それはちょっと勘弁して欲しいかなぁ……て。一応王様に喚ばれたサーヴァント何だし、あんまり言わないであげて」
「そうですか？　一応カルデアにおられます頼光殿に相談した所、満面の笑みでゴーサインを出されましたが？」
「なにしてんの頼光さんンンンンっ!?」
「ハハハ……」
逃げた茨木童子を、次に牙を向けてきたら頸を落とす。そんな源氏ジョーク（？）を耳にして……そろそろ、向かう時が来た。
「んじゃ、俺はそろそろ行くよ。夕方頃には帰ってくるから、上手く行ったらそっちに顔を出すよ」
「うん、分かった。修司さんも気を付けて」
「牛若丸達も、大変だとは思うけど二人の事、宜しくな」
「それは構いませんが……アレ？　ウル市はどう急いでも往復で三日は掛かる距離の筈ですが……」
軽めの準備運動をして、適度に身体を解した修司はウルクは任せると立香とマシュに託し、そんな二人を頼むと牛若丸に頼み込む。
此処からウル市は結構な距離がある。サーヴァントの脚でも数日は掛かる距離、それを一体どうやって縮めるのか、牛若丸が不思議に首を傾げた時。
「んじゃ、ちょっと行ってくるな」
〝ドンッ〟
修司が全身に力を込めて白い炎を纏った瞬間、白河修司という人間は瞬く間に空へ向けて翔けていく。余程の神格しか空を自由に飛べない筈の飛行能力、それが人間である筈の修司が容易く行っている事実に、牛若丸は当然ながら、周囲にいたウルクの人々も唖然とした様子で立ち尽くしていた。
「ふ、藤丸殿、修司って……空、飛べたの？」
「あ、何か久し振りに見たその反応。そうだよね、それが正しい反応だよね」
「さぁ、私達も向かいましょう。先輩、支援の程、宜しくお願いします

ね！」
「うん、任せてよ！　よーし、頑張るゾッ！」
　あっという間に空の彼方へ消えていく修司を見送り、立香とマシュも北壁へ向かおうと踵を返す。そんな二人を頼もしく思いながら、牛若丸も弁慶も彼女の後を追うのだった。
「さて、ホドホドに頑張ってくれれば此方としてもありがたいんだけど……彼の行動は私にも読めないからなぁ。はぁ、仕事が増えそ」
「マーリン、どうしたのです？　置いていきますよ」
　そんな彼等の背後には、煤けた背中を晒す夢魔がいたとか。

◇

「……本当に、密林が出来てるな」
　空を飛び、瞬く間に目的地へ辿り着いた修司は上空からでも分かる密林（ジャングル）に僅かに動揺する。空からでも伝わってくる大地の熱気や動植物達の声、その様子はまるで遥か古に存在したとされる恐竜達の時代を想起させた。
　これは修司としても未知なる体験、過去に何度か南米を旅してその都度森には入った事はあるが、これはあの時よりも気温や湿度は上だろう。一体どうしてメソポタミア文明の時代にこの様な密林が誕生したのか、可能性として考えられるなら、先の特異点にも在ったエジプト領がそうだろう。
　太陽王オジマンディアス、彼の王が現界した際も地形は変わってしまっていた。密林に棲む女神も相当な力の持ち主である事は分かっている。そういう事なら、メソポタミアの一部が変異しても修司とし

ては差程不自然な話ではなかった。問題はその密林の女神、そのものだ。
（此処まで近付いて漸く分かった。此処にいる女神、相当やべぇ奴だぞ。下手したら、魔獣の女神以上なんじゃ……）
日々絶え間なく襲ってくる魔獣の群れ、その更に奥には予想している数十倍の魔力反応が検出されていると、以前ロマニは言っていた。
その規模からして潜んでいる魔獣の女神は相当な怪物だと、何となく理解できる。しかし、今修司が感知している力の気配は、明らかにそれ以上に強大だ。この特異点にレイシフトした当初は太陽王や獅子王クラスの神霊かと警戒していたが……これは、明らかにその水準を超えている。
「兎に角、先ずはウル市からだ。――と、見付けた。彼処か」
ウル市の更に奥から感じられる大きな力。今はそれに触れるのは止めておこうと、修司は本来の目的地であるウル市を目指す。
地上を見下ろしたまま探すこと数分、ウルクと同規模の市を見付けた。教えて貰った位置的に彼処がウル市で間違いないと確信した修司は、広場と思われる場所に着地する。
「え、え？　今、空から人が……」
「良かった。皆さんご無事でしたか、突然現れた事に驚かせて申し訳ありません。自分はウルク市から王の勅命でこの地へ調査しに来た者です」
「まぁ、ギルガメッシュ王の！　それは……ワザワザご足労いただき、ありがとうございます」
「ウルクから此処まで、更に森の中での行軍はさぞかし大変でしたでしょう」
「いえいえ、空を飛んで来ましたので、差程時間は掛かっておりません。それよりも……幾つかお話を聞かせていただいても宜しいですか？」
「……え？　ええ、構いませんが……え？　空を、飛んで？」
降り立ったウル市、其処にはウルク程の活気こそはないが、元気に生活している人々がいた。一先ず無事だった彼等に安堵した修司は

辺りを見渡し、近くの住人へ話を伺う。
聞けば、現在ウル市は森に呑まれ、女神の法則（ルール）に則った生活を強いられているが、それ以外の束縛や制限はなく、皆健やかに生活出来ているとの事。
特に、魔獣の女神の子供達は一匹たりともこの密林には近付かない事から、安全面で言えば此処はウルクより生活しやすいという。
当然、ウルクにも応援を求めようとしたが、そうすれば密林の女神の法則に触れてしまう事になる。彼の女神の怒りに触れれば自分達ではどうする事も出来ない、そう語る女性に修司はどうしたモノかと頭を抱えた。
（くっそー、どうすっかなぁ。この人達をウルクへ連れていくには些か面倒が多すぎるしなぁ）
地上を往けば密林が人々の行く手を阻み、仮に抜け出せたとしても、外には魔獣達がウヨウヨいる。女子供ばかりで戦える者が少ないウル市では、精々この市に立て込もって生活するしかない。
ならば空からならどうか？　と思ったが、それは先の立香とマシュを抱えた時と同様に推奨出来ない。女神側に空を飛べる奴がいないとも限らないし、何より未だ空中戦を経験していない修司では、ウル市の人々を守りながら強行するにはリスクが高すぎる。
一体どうしたらいいのか、考え込む修司は……ふと、違和感を覚えた。
「そう言えば、この市には男性が少なすぎる気もしますが、皆さんどちらへ？」
「っ!?」

何となく口にした疑問、修司の発せられた一言が起因で周囲の空気が重くなる。あからさまに少ない男性、対照的に無事な女性や子供、お年寄り。不可解な光景とアンバランスな生活風景を前に、修司がその答えに辿り着くのに差程時間は掛からなかった。
「……生け贄、ですか」
「っ、し、仕方がなかったのです！　我々が生きるには一日に一度、エ

リドゥに男性を生け贄に捧げる事、それがあの神の法則なのです！」
「……そっか」
「アナタには、アナタには分からないでしょう!! ウルクの人々と違って、我々は戦えない！ あの女神の下で日々生け贄に選ばれるのを怯えながら過ごすしかないのです！」
ウル市は、生け贄によって生き長らえてきた市だった。自分達では戦えないから、戦った所で意味がないから、戦う前から戦う事を放棄した……敗者の市。
何もかもがウルクとは正反対、それがウル市の実態だった。
「……分かった。アンタ達がそれで納得しているなら、俺から言える事はない」
「……」
しかし、それを修司は悪とは思わない。何故なら嘗て幾度となく世界を旅し、その度に色んな事を経験してきた修司は、目の前の彼女と似たような人間を何度も目にして来た事があったからだ。
今のウル市の人々は頑張れなくなった人達、立ち上がることを諦めた人達だ。働きアリの中に怠けるアリがいるように、此処にいる人達はある日を境に抗うことを止めた人達なのだ。
それは一種の病、或いは呪いに近いモノだ。自分ではどうやっても叶わない、諦めるしかないのだと、その方が楽だと、そう決めてしまった人達の心は鉛のように重くなってしまっている。
そんな人々の心を突き動かすには並大抵の事じゃない。大半の人はそんな彼等を見捨てるしか選択出来ないし、流石の修司でもしてやれる事は限られている。
「でも、その前に幾つか教えてくれないか？ 密林の女神は何者なのか、一体どんな奴なのか、少しでもいい、情報が欲しいんだ」
「そ、それは……」
「頼む。近い内に、女神は俺達が必ず倒すから。その時は絶対にアンタ達の世界も取り戻すから、だから頼む……力を貸してくれ」
頭を下げ、力を貸して欲しいと頼み込む修司に女性は言葉を詰まらせた。どうしてこの人は自分達に此処まで親身でいられるのか、何も

かもを諦めた自分達に、どうしてまだ見捨てようとしないのか。
何処までも真摯に向き合う修司に女性が口を開き掛けた時……、修司は近付いてくる強い気配を感じ取る。
「なにか来る。この気配は……神霊か？」
「あ、あぁ何て事！　あの恐ろしい神がやってくる！　恐ろしくおぞましい獣の神が！」
瞬間、ウル市の人々は急いでそれぞれの自宅へ閉じ籠っていく。酷く覚えた様子のウル市の人々、その様子から並外れた怪物なのだと察した修司は、真剣な眼差しで近付いてくる気配に向き直る。
「……上等、密林の女神の前哨戦だ。景気良く暴れて森の奥から引きずり出してやる」
「ニャハハハハ！　その意気や良し！　女の子ならばざぁこ♡　ざぁこ♡　と煽ること必至！　……誰が雑魚ニャー！　あ、でも銀タラなら食べてもいいよ？」
「……あぁ？」
聞こえてくるのは……なんともトンチキな言語。言葉こそ伝わっているが、そのニュアンスが絶妙に合わない空気。まるで未知なる遭遇、未だ見えてこない声の正体に、修司は精神を研ぎ澄ませて迎え撃つ準備を整える。
「あ、今呆れた其処の君、いいセンスだ。殺すのは最後にしてやる……と、思っていたのか!?　バカめ、すり替えておいたのさ！」
「……」
何だろう、酷く癪に障る。というか、何か普通に不快になってきた。そろそろ気配が近付いてきたし、先に仕掛けてもいいかな？　いいよね？　よし、殺ろう。
「……フンッ」
素早く動き回る相手に向かって、先を読んだ気弾が投げられる。なにもしなければ直撃コース、当たった所で牽制にしかならない威力のソレを……しかし、迫り来る形容しがたいナニカは弾き飛ばした。
「変身途中で攻撃してくる怪人は即ブッ殺！　誰が決めた？　私が決めた！　そんなキューティクルでバイオレンスなアナタの名前は

……とう！」
弾き飛ばされた気弾が、修司へ返される。片手で弾き消すと、それに合わせるかの様にソレは舞い降りた。
コイツ、言動はふざけているが出来る。腐っても神霊なのだと、改めて修司は気を引き締めて降り立つソレを静かに見据えた。
「シュッシュッと参上、オス！　オラジャガーマンッ！　いっちょ、やってみっかぁ！」
明らかに着ぐるみな格好、或いは寝間着、虎なのかジャガーなのか判断に困るモノを身に纏うソレは、高らかに吼えながら修司の前に立ち塞がる。
愕然とした。呆然となった。あ然となったし、言葉も失った。何故って？　そんなの、決まりきっている。
「……」
「フフン、カッコよすぎる私の登場に言葉もないか。しかし臆するなボーイ！　お姉さんはいつでも、君たちのみ・か・た・だ・ゾ♡」
「……え」
「エ？」
「エミヤァァァァァッ!!　今すぐここにこぉぉぉい!!　これ絶対お前の案件だろォォォォッ!?」
先の姉弟子に続き、嘗ての恩師の参戦に修司のメンタルはボドボドだッ!!

その１３１　第七特異点

賢王ギルガメッシュからの命を受け、南のウル市へ調査をする事になった修司。召喚された女神の影響か、メソポタミア南部は密林に覆われていた。

連絡が途絶えて久しいウル市、過去二度に渡って賢王が召喚したサーヴァントを調査へ送ったのだが、何れも失敗に終わおり、三度目の正直という事で修司がウル市へ向かう事になった。

そこで待ち受ける脅威を知る由もなく、呑気にウル市へ降り立つ修司はそこで、嘗てない衝撃的事実を前に……遂に、膝を折ることとなった。

『ちょっ、何があったんだい修司君!?　君のバイタルの数値グラフ、エライ事になっているんだけど!?』

カルデアでは、目下の観測対象は立香とマシュに向けられており、修司への対応は必要最低限に留まっている。それは修司のレイシフト適性値の高さと、本人の突出した戦闘能力を考慮しての配慮であり、この対応の差は修司本人も了承している。

しかし、今回に限ってそうは言っていられない事態が起きた。基本的に落ち着いている修司の生命兆候（バイタルグラフ）、これ迄のレイシフトにおいて此処まで変動したのは、第三特異点におけるヘラクレスと戦った時以来だ。前例の状況から今回も予想だに出来ない強敵が現れたのか、ロマニは一旦立香とマシュの観測をダ・ヴィンチに委ね、一時修司との回線を繋ぐ。

一体修司の身に何が起きているのか、所長代理として修司の安否を気遣うロマニは、何があったのかを状況説明を求め……。

「もうダメだ、おしまいだぁ……」

『本当になにがあった!?』

地面に両手両膝を付けて項垂れる修司に、ロマニは何がなんだか分

からなかった。
「ロマニ、俺はもうダメだ。心が、心が、追い付いて来ないぃ……」
「ニャーハッハッハ！　脅えろ、すくめ！　ＭＳの性能を充分に発揮できないまま、死んでいくがいい！　所で皆は連邦派？　ジオン派？
ジャガーは専ら……ＳＥＥＤ派ダァーッ!!」
「ゲフゥッ!?」
『し、修司くぅぅん!?』
地面に項垂れ、明らかに無防備な所に謎のサーヴァントが襲い掛かる。振り抜かれた蹴りは見事に修司の腹部へと直撃し、修司は半泣きな目を見開いて吹っ飛んでいった。
そこへ更に掛けたトンチキサーヴァント、ジャガーを名乗る女神が追撃する。手にした猫手付きの棍棒を振り回し、容赦なく修司へ見舞う。前後左右、多角的に、抉るように振り抜かれるジャガーマンの攻撃は無抵抗な修司に吸い込まれる様に叩き込まれていく。
『なんだ!?　何が起こっている!?　計測した感じ確かに目の前のサーヴァント（？）は神霊だけど、それでも君が一方的にやられる相手では筈だろ？　一体どうしちゃったんだ!?』
「知らないなら教えてあげよう見えない人、そこの純情ボーイはね、お姉さんの魅力にメロメロなんだゾッ♡　さぁ、その魂、神に還しなさい（キリッ」
確かに、目の前のふざけた言動をしているサーヴァントは神霊、並の英霊とは一線を画す力を持つ存在だが、それでもロマニには一方的にやられる修司が不思議でならなかった。彼はこれ迄本体と殆んど相違ないヘラクレスとクー・フーリンを打ち倒し、幾度となく強敵達を正面から打ち破ってきた。
そんな彼が此処までやられるのは、なにか理由がある筈。急いでロマニは修司の状態を調べるが、残念な事に修司の身体からは異常は確認できなかった。
未だ地面に項垂れる修司、そんな修司を棍棒を振り回しながらジャガーマンが近付いてくる。
……所で、何故女神なのに〝マン〟なの？

「目が付け所が鋭いが、だが教えん禁則事項だ！　教えて欲しいなら、手土産の一つでも持ってこんかいベランメェー！」
「ガハッ！」
　振り抜かれる棍棒によるジャガーの一撃、この神霊はふざけているが強い。絶賛絶不調の修司を抜きにしても、目の前の神霊の強さは凄まじいモノを感じた。
『修司君！　調子が悪いなら一旦撤退するのも手だよ！　ほら、君には目眩ましの術とか舞空術があるじゃないか！　それを使えば――』
「へー、空を自由に飛べるんだ。スゴイナー、憧れちゃうなー、だがしかーし！　既にここら一体はククルんの縄張り、呼べば飛竜が飛んできて君の頭をパックンチョ、オススメはしないよ？」
『馬鹿ロマニ！　相手に情報与えてどうするのさ！』
『し、しまった!?』
　しかもこの神霊、妙に鋭い。舞空術というワードだけで修司が空を飛べることも察したようだ。しかも既に対抗策も用意されていると来た。予想以上に強かなジャガーにロマニは戦慄した。
「違う、違うんだロマニ、俺は別に、アイツに魅了された訳でも、勝てないと諦めているんじゃないんだ」
『修司君!?　な、なら……どうして!?』
「それは、アイツが……あのジャガーマンが……俺の学生時代の教師だからなんだよォォォッ!!」
『は？　――はぁぁぁぁっ!!??』
　涙声を滲ませながらの修司の慟哭、有り得ざる事実を前にロマニは……いや、カルデアに於ける一部のサーヴァントを除いた全ての人員が、思考を停止させ……次の瞬間、あらゆる感情を爆発させた。
『教師!?　アレが!?　あのトンチキ女神が君の教師!?　嘘でしょ!?』
「ヴン、高校の、英語教諭」
『『英語の!?』』
　通信越しから聞こえてくる声には、ロマニやダ・ヴィンチだけでなくモニタリングしているカルデア職員の人達の声も聞こえた。恐ら

く、この時の彼等の感情はほぼ同一に一致していた事だろう。
『え？　ちょ、ちょっと待って？　この間の女神イシュタルの時、彼女も君の知り合いっぽい事言ってたよね？』
「ズズ……ヴン、同じ高校出身で、八極拳の姉弟子」
『どうなってるの君の地元!?』
「俺が知りてぇよぉッ!!」
　驚愕して追及するロマニへ修司も涙目となって吼えて返す。この特異点にレイシフトして、二度目の知り合いとの遭遇。依り代として選ばれたのは何となく察するが、それにしたって確率が酷すぎる。自身の知っている知り合いの内、二人も神霊として召喚されるなんて、一体どんな確率だというのか。
　そして、修司が一方的にやられる理由もこれで得心した。相手が学生時代の恩師だと言うのなら、流石の修司も手は出しにくいだろう。……アレ？　でも女神イシュタルが相手の時は、割りと容赦なく臀部をひっぱたいた様な……。
「ほうほう、私がおミャーの超絶美人教師に激似という訳か。それならば致し方なし……だが！　ここは弱肉強給食が絶対の密林チホー！　如何なるフレンズでもこの理には逆らえないのにゃー！　具体的にいうと、死ねぃ！」
　自分が修司の知り合いだと分かっても、一切の容赦なくジャガーは攻撃を仕掛けてくる。当然だ。彼女にとって修司は己のテリトリーに侵入してきた異物、動物的本能で以て敵対するのは必然の事だった。
　そう、相手はどんなに知り合いと良く似ていても、相手は人類を滅ぼすと誓う女神。だと言うのなら、修司が取るべき選択肢は一つしかない。
　再び振り抜かれる一撃、狙いは修司頭部。直撃すれば女神の膂力で修司の頭は柘榴に散る事だろう。
　しかし……。
「そう、だよな。どんな理由があれ、今のアンタは人類を脅かす存在だ。なら俺は……それに、全霊を以て抗うだけだ！」

振り抜かれた一撃は、しかして修司の片手に収まるだけに留まった。繰り出される一撃はサーヴァントすら一撃で屠れる威力があった。しかし、そんな女神の一撃を、修司は片手で受け止めて見せた。

空気が変わる。先程まで己にやられっぱなしだった獲物である筈の修司の身体から、白い炎が溢れ出てる。アレ？　これ、ひょっとしなくても敗北案件では？

燃え盛る白い炎を纏う修司に、今度はジャガーが戦慄する。やっべ、私これ死ぬかもしれん。動物の野性的直感を以て、ジャガーが逃げようとするが……出来ない。棍棒を掴んだ手の握力がジャガーの膂力を以てしても抜け出せない。

「先に謝ります。ごめんなさいジャガ村先生、アナタへの恩――仇で返します！」

「……で、出来れば優しくブヘラッ!?」

何かを言い掛けるジャガーだが、時既に遅し。力を込めた張り手の一撃は、迷うことなくジャガーの顔面へと直撃。これ迄一方的に殴られてきたお返しとばかりに振り抜かれた張り手はジャガーを縦回転しながら吹き飛ばし――。

「っ！」

しかし、吹っ飛んでいくジャガーを何者かが受け止めた。

「あら、こんな所で何をしているのかしらジャガー？　アナタにそんな勝手を許した覚えはないんだケド？」

「く、ククルん!?」

顔面に大きな紅葉（手形）を張り付けながら、ジャガーマンは自分の頭を鷲掴みにする何者かに狼狽する。酷く脅え、恐怖に顔を歪ませるジャガーマンに先程までの偉容は感じられない。代わりに、虎の女神を鷲掴みにしている女性らしき人物からは異常な程の闘気が滲み出ている。

コイツだ。ジャガーが影となっているから全容はまだ分からないが、奴を鷲掴みにしているこの女性こそが、南米の女神。三女神同盟の一角を担う、人類の敵対者なのだと、修司は感じられる強大な気に確信した。

「アナタには、森の番を任せていた筈だけど……そんな簡単な仕事もまかせられないんじゃあ、此処に置いておく意味はないわネ」
「ククルん、ステイ。違うの、これは違うのよ。全てはあの山吹色のハチャメチャボーイが元凶なの！　だって空を飛んでくるとか、控えめに言ってチートでは？　道中をバグ技でショートカットするとか、それなんてＲＴＡ――――」
「もういいわ。罰として、少し寝てなさい」
「ブゴォッ!?」
「じゃ、ジャガ村先生ッ!?」
　ミシミシと頭蓋骨から軋む音を立て、哀れ野生の女神は大地へとめり込んだ。深々と地面深く突き刺さり、犬神家状態となった嘗ての恩師。そんな恩師の顔面を張り手で殴り飛ばした自身が言えた事ではないが、あんまりにも雑な扱いに修司は再び泣きたくなった。
『修司君気を付けて、この女神――――相当ヤバイぞ』

「あぁ、どうやらその様だ」
　大地が揺れる程の衝撃により、周囲の建物に逃げ込んだウル市の人々はすっかり脅えてしまっている。このままでは恐怖でパニックを起こしかねないと判断した修司は、場所を移動する隙を模索する意味を込めて、こちらに歩み寄ってくる女神へ声を掛けた。
「……アンタが三女神同盟の一人、人類と敵対している神か？　俺の名は白河修司、人理を修復するためにカルデアからやってきた者だ」
「ワァオッ！　元気な挨拶ありがとうデース！　先程の一撃、とてもベリーナイスでした。その精錬された肉体と技に応え、私も名乗りましょう」
「我が名はケツァルコアトル。南米からちょっとウルクと人類を滅ぼしにやってきたルチャドーラデーッス！」
　陽気。ケツァルコアトルと名乗る女神から最初に受けた印象は、その一言に尽きた。相手は人類を絶滅させると豪語する女神同盟の一角、彼女達の抱く心情はてっきり人類に対して強い憎しみだと思って

いただけに、彼女の陽気な反応は修司から見ても予想外だった。
『け、ケツァルコアトルだって!? アステカ文明の最高神、主神クラスの神霊じゃないか!?』
「あぁ、メガテンやペルソナでお馴染みの、翼を持つ蛇。確か、太陽神の側面も持っているんだったか? まったく、トンでもねぇ奴が出てきたな」
『ゲーム知識で納得する君も大概だと思うけどね! でもおかしいぞ、ケツァルコアトルは基本的に男神として知られる神の筈、女神だなんて聞いてないぞ!?』
「その点含めて、聞き出せば良いだろう。ロマニ、この事を皆に伝えてくれ、この情報は間違いなく今後の役に立つ」
『き、君はどうするんだい!?』
「無論、頃合いを見て逃げるさ。今回俺が王様に命じられたのはあくまでも〝調査〟、その範疇を越える様な真似はしないさ」
『わ、分かったよ。でも、必ず戻ってくるんだよ!』
修司からの提案を受け、ロマニは修司との通信を一時的に絶って立香のサポートに向かった。残された修司は今まで仕掛けてこなかった女神へ向き直る。
「……悪い、待たせたな」
「気にしなくても大丈夫、セコンドとの作戦会議は試合開始前に必要だもの。でも、そっちこそいいの? 貴方なら一目散に逃げることだって出来たでしょうに……」
「なに、こっちにも都合があってな。確かに王様……賢王ギルガメッシュからは調査を命じられていているが、戦闘行為自体は禁止されていない。あくまでアンタ等女神を倒すなって釘刺されただけさ」
「――へぇ?」
瞬間、先程まで陽気な笑みを浮かべていた太陽の女神は、そのご尊顔に邪悪な微笑みを張り付かせる。凶悪な微笑み、蛇に睨まれた蛙はこんな気分なのかと、妙に納得しながら修司は身構える。
「それに、仮に逃げたとしても……アンタ、絶対追ってくるだろ?
そう言う顔をしている」

仮に、もし修司がこの場で撤退を選択した時、間違いなくこの女神は追ってくるだろう。今の自分は女神の庭を荒らす不届き者、そんな人間をなにもしないで帰す程、神という存在は甘くはない。

なにより……。

「いい加減、神に対して俺自身が何処までやれるか、知っておく必要があるからな」

神という超常の存在に、自分の強さが何処まで通用するのか確かめたくなった。相手は一つの神話を担う最高神の一柱、油断も慢心もせずに修司は拳を握り身構える。

そんな神に対する不遜な態度の修司を前に……。

「ンーーーーー！　Ｆａｎｔ（素晴らしい）・ｓｔｉｃｏ!!　その何処までも挑戦的な姿勢！　お姉さん、とっても気に入っちゃった♪　いいわ、アナタの勇気を讃えて――――私も、その気になっちゃう!!」

ケツァルコアトルは心底嬉しそうに、楽しそうに笑う。何やら奇妙なフラグが立った気もするが……それはそれ、自分の力が何処まで通用するのか確めるためにも、修司は太陽の女神へ挑む。

「あの……私は？」

その１３２　第七特異点

「さて、そろそろあの戯け者がウル市に到着した頃合いか」
　自身の前に並べられる数多の報告を片付けながら、玉座に張り付いた賢王はつい先程までに眼下に佇んでいた山吹色の男を思い出す。カルデアという遥か未来の時代より来訪した藤丸立香と同じ、人類最後のマスター。
　奴のトンチキ具合なら、今頃は森に覆われたウル市やその先にあるエリドゥ市まで辿り着く事だろう。別に異邦の異物に頼る程落ちぶれてはいないが、それでも奴の行動力には期待せざるを得ない。三女神同盟の間に結ばれた契約、その全容が暴けなくともその一端だけでも知り得る事が出来れば御の字である。
　過去二度に渡って行われた南部への派遣調査、アサシンの風魔小太郎とルーラーの天草四郎、彼等も英霊と呼ばれる存在だけあって、二人とも一騎当千の強者だった。その二人が密林の女神に敗れ、消滅したと知った時は流石の王も頭を抱えた。
　彼等が、修司という一人の人間に劣るとは思わない。しかし打ち止めされた強さのサーヴァントに対し、奴は今を生きる人間だ。これから先、どんな切欠で更なる高みへと至るのか、それは千里眼を持つ王でも分からない。
　だが、それでも王の眼が映すその光景は覆ることは無かった。砕かれる大地、空と海は赤黒く爛れ、世界は静かに終焉の一途を辿る。滅び行く世界を前に立ち向かうのは、盾を支えに立ち上がる二人の少女と一人の戦士。
　巨大な終末機構を前に、一体どうやって立ち向かうというのか。そこから先の景色を知らない王は、ただその時を越える為の一手を思案し、思考を加速させる。
「度しがたい未来があったものよ。この我抜きで世界の行く末を決めるとはな……」
　業腹だが、今は一先ず呑み込むしかない。呑み込み、前を見据えた

者にしか勝利という明日を手に入れられないと言うのなら、ギルガメッシュは何度だって苦渋に満ちた盃を飲み干してみせる。
「王よ、如何なされましたか？」
「ん？　何がだ？」
「いえ、その……今しがた王が笑っていたように見えましたので」
「なんと、それはまことか。であればそろそろ我が過労死する日も近いか？　フハハハ、いや笑えんな」
「？」
「不思議そうに首を傾げるでないわ。泣きたくなるであろう」
　誤魔化すために高度なノリツッコミをしてみたが、どうやらウルクには千年程早かったらしい。純粋な眼差しで首を傾げるシドゥリに本気で凹みそうになった時、王の間に慌てた様子の兵士が一人雪崩れ込んできた。
「ご乱入、失礼します！」
「良い。何があった？」
「ハッ！　エレシュ市方面より伝令があり、ウル市方面の密林から巨大な土煙が舞い上がったとの報告！　更に大地を揺らす程の轟音が頻繁に起こり、魔獣共が酷く脅えた様子で北壁へ押し寄せてくるとの事です！」
　他の神官を押し退ける兵士、そんな彼に王が一喝する事なく、疾く報告をしろと促す。兵士の口から紡がれるのはウル市で起きている異変、簡潔に要点だけまとめて報告してくる兵士に要領の良さが伺えるが、それを誉めてやれる暇は王にはない。
　瞬間、空気の破裂する音が遠くから聞こえ、うっすらと土煙が見えた。加えて、小さな地震の様な振動がジグラットを揺らしている。報告とまったく同じ内容の光景と事象に賢王は頭を抑えた。
「えぇい！　誰がそこまでやれと言ったか！　段取りというモノを知らんのか！　あのハチャメチャ小僧めが!!」
　怒りとも嘆きにも聞こえる賢王の雄叫び、しかし悲しいかな、王の最大限の訴えは現地で戦っている戦士に届く筈もなく、唖然となっている臣下達の耳朶を震わすだけに終るのだった。

◇

それは、空を行く大鷲。相手より高く、より強く飛び上がるその姿は得物を見やる捕食者のそれ。太陽の神であるケツァルコアトルは、ウル市を一望できる程に高く舞い上がり、眼下で身構える修司を見下ろす。

（いきなり仕掛けて来たな！）

対する修司は太陽を背に舞い上がるケツァルコアトルを前に、彼女が何を仕掛けてくるのか、その頭脳を持って検索する。浮かび上がるのは先の自己紹介の時に耳にしたルチャドーラという単語。

奇しくも、修司はルチャドーラと同じ意味を持つ単語を知っている。それは修司の商売敵であり、良きライバルであるとある魔術貴族のご令嬢も嗜む由緒正しき肉体言語。キャッチ・アズ・キャッチ・キャン。それは１８３０年頃のフランスが起源とされているプロフェッショナル・レスリング、通称プロレスである。

何故古代アステカ文明の神がプロレスに心酔しているのか、疑問は尽きないが、落ちてくる女神からは隕石の落下に似た迫力が感じられる。

直撃は避けるべきだ。勢いを増して落ちてくるケツァルコアトルに、修司は当然のごとく回避を選択。タイミングを見計らって後ろに跳躍すると……落下地点を中心に爆発が起きた。人気のなくなった大通りとは言えウル市は人の住む都、街のあちこちから聞こえてくる悲鳴に修司は回避を選択したことを後悔した。

同時に、駆ける。肉体ごとぶつかってくるケツァルコアトルは、その技自体が特大の爆弾みたいなモノだ。やたら頑丈な肉体故に無茶な技が好きなのだろうと解釈した修司はその肉体に加減は無用と判断し、立ち上がるケツァルコアトルに向けて飛び蹴りを放つ。

直撃。放たれた蹴りは吸い込まれるように女神の腹部にめり込ませる。くぐもった声、苦悶の表情からダメージは入ると確信した修司は、太陽の神をウル市から追い出す様に蹴り飛ばす。

幾つ、幾十もの木々をへし折り、吹き飛んで行くケツァルコアトルを追うと、開けた場所へと辿り着いた。恐らくは此処がエリドゥ市なのだろう。向こうに見える街からして多分間違いない、だが、それ以上に気になるものが其処にはあった。

「なんだ、あの馬鹿デカイ斧は？」

神殿らしき建物の後ろに聳え立つ巨大な斧、外観から目測しても相棒の剣（グランワームソード）よりも巨大な斧の存在に、修司は驚きに眼を見開く。

「あれは、嘗てティアマト神の喉を斬り飛ばしたとされるマルドゥークの手斧。一種の神造兵器デース、そして――――」

「っ！」

「試合の最中に余所見はダメ、相手に対して失礼……ヨ！」

「しまっ……!?」

巨大な斧の存在に気を取られ、ケツァルコアトルの姿を一瞬見失った。気付いた時には既に懐の内側、拳を突き出して距離を離そうとしても、地を這うように飛び込んでくる女神の動きを止める事は出来なかった。

腰が太陽の女神に鷲掴みにされる。ガッシリと両手で固く握られたその握力は修司を決して離そうとしない。ならば気を解放して吹き飛ばすと修司は力を解放しようとするが、それよりも早くケツァルコアトルから力の奔流が解放される。

「見せて上げましょう、ルチャ・リブレの真髄を！」

炎が吹き荒れる。ケツァルコアトルを中心に炎は燃え盛り、その炎を以て上昇気流が吹き荒れる。嵐とすら見間違う暴風、平衡感覚すら狂わされる炎と風の暴力に、修司は空へと舞い上がる。

舞空術で体勢を整えようとするが、それを許す程の時間をケツァルコアトルは渡さない。強さにおいて同格と認めているからこそ、彼女が手を抜くことはあり得ない。

「私は蛇！　私は炎！　炎、神（シウ・コアトル・ツァレアーダ）をも灼き尽くせ!!」

上空に投げ出された修司を、再び空へと舞い上がったケツァルコアトルが抱き付く形で拘束する。両手両足を封じられ、身動き出来なくなった修司は次に起こる自分への衝撃に顔を青ざめた。

ヤバい、このままでは自分の脳天はメソポタミアの大地と激突する。受け身をしようにも両手は縛られ、落下の速さは段階的に加速していく。間に合わないと察した修司はせめてもの抵抗にと、気を纏い防御を底上げし……。

瞬間、白河修司は太陽の女神ケツァルコアトルの宝具、遥か天空からのパイルドライバーによってメソポタミアの大地に叩き付けられる。

その衝撃はエリドゥ市の大地を陥没させ、神殿を一瞬だけ浮かせ、背後にあるマルドゥークの手斧を傾かせた。更にその振動は周囲にも伝播し、ウルクの市にも轟かせるのだった。

◇

「やっべぇ～、あの山吹色の子、流石に死んだのでは？」

ケツァルコアトルに地中に埋め込まれるも、どうにか自力で抜け出して二人の戦いの場へ戻ってきたジャガーマン。彼女の宝具という名のパイルドライバーは、これ迄二度も和風のサーヴァント達を大地というマットに沈めてきた。

今回は生身の人間に渾身の一撃を見舞い、その一撃は大地を割る程に強烈。地中深くめり込み、ジャガーマンが確認できるのは修司の脚だけ。これ迄は敵対する人間にはクオリティ重視の戦いだったが、今回は何がなんでも勝ちに行く泥臭さがあった。

恐らく、それだけケツァルコアトルも必死だったのだろう。彼の放った蹴りの一撃はとある特性を持つ彼女であっても相当堪えた筈、それでも満面の笑みが浮かんでいる限り、彼女もかなり楽しめている様子だが……。

その時、陥没した大地の中心から、小さな爆発が起きた。ボンッと小さな衝撃と砂塵を巻き起こし、地表に降り立つのは土埃にまみれた人間、所々擦り傷を負ってはいるが、それ以外に特にダメージはない様子の修司にジャガーマンは驚きと呆れに眼を見開いた。

「ワァオッ！　凄いタフさですね！　お姉さん驚きデース！　私、結構本気で叩き込んだつもりでしたが、ピンピンしているのネ！」

「いや、そうでもねぇさ。今のアンタの一撃、効いたぜ。受け身もマトモに取れなかったし、実際に気を纏って師父から教わった剛気の呼吸法をしてなかったら、意識を数秒失う程度では済まなかっただろうな」

首を鳴らし、肩を回して身体を解しながら調子を整えながら、修司はケツァルコアトルの技を称賛する。気を纏い、師から教わった呼吸法が無ければもしかしたら自分は死んでいたかもしれない。

実際、修司の頭の登頂部は未だにズキズキと痛むし、何ならたん瘤だって出来ている。しかし、修司が疑問に思うのは其処ではない。

「けど、それ以上に不思議に思ったのはアンタのタフさだ。俺もそれなりに打たれ強さを自負しているが、アンタのはそんな次元じゃない。俺の蹴りを受けてケロッとされているのは……流石に予想外だったよ」

修司が不思議に思うのはケツァルコアトルの異常な迄の耐久性だった。最初に叩き込んだ飛び蹴り、並みの相手なら一時的に動けなくなる程度の威力があの蹴りには込められていた。
相手が神霊だからと言われればそれまでだが、攻撃を受けてからの反撃の短さを考慮すれば、何らかのカラクリがあるのはある程度察しがつく。
「では、どうします？　もう一度私と戦いますか？　お姉さんはいつでもウェルカムデース！」
「……いや、今回は此処等で引き上げるよ。王様から命じられているのはあくまで調査、これ以上続けれると歯止めが利かなくなる。――それに」
「？」
「アンタは多分、其処まで悪い神様じゃないんじゃないかな？　基本的に、ケツァルコアトルってのは善神として知られている。今回人類の敵に回ったのも、アンタなりの理由があると俺は思う」
「……」
再戦を望むケツァルコアトルに対し、意外にも修司は引き下がる事を選んだ。直接戦ったのは差程長くはないが、それでも真っ向から戦いを仕掛けてくる太陽の女神に対し、修司はそこに悪意はないと理解した。
恐らくは、三女神同盟の間で何らかの契約が交わされているのだろう。その言葉に沈黙で返すケツァルコアトルに底知れぬ事情があるのだと、修司は改めて察した。
「……まぁ、色々言ったけど、結局今回は俺の敗けだ。アンタの技に尻込みした以上、それは覆らない事実だ」
「ん～？　じゃあ今回の勝負、ククルんの勝ちってこと？　なら、此処で暫くは強制労働していって貰う事になるけど？」
「げっ、そうなの？」
ケツァルコアトルの技に怯み、マンマと宝具まで受けてしまったのは事実。何より修司自身が敗北を認めた以上、修司は勝者であるケツァルコアトルに従わなければならない。

「……いいえ、今回は引き分けにしましょう。自慢の技を受け止められた以上、私も自らの敗北を認めなければなりません」
「え？　俺としては有り難いけど……良いのか？」
「確かに私は〝母さん〟から人類を滅ぼす為に召喚され、私もそれに応えました。ですが、やり方までは指示されていませんので、其処は各々の裁量に任されているのです」
　だから多少の融通は利くのだと、太陽の女神は朗らかに笑う。そんな彼女に修司は神に対する偏見が少しばかり和らいだ気がした。そもそも、修司は元々目の前の太陽神に対してギリシャの神々程の嫌悪感を抱いてはいない。彼女が自分のよく知るゲームに出てくる神だからなのかは定かではないが、それでも問答無用で消滅させようという気持ちは沸いては来なかった。
　ジャガーマン？　アレはほら、ＵＭＡと似たような感じだから。
　ともあれ、ケツァルコアトルの温情で勢いで始まった戦いは引き分けという形で終ることになった。懐の広い彼女に借りを作る事になった修司は、ある提案を示す事にした。
「……なら、今回はその言葉に甘えさせて貰うとしよう。但し、忘れないで欲しい。アンタが人類の敵で有る限り、俺はアンタを必ず制して見せる」
「勿論、その時は正面からガチンコ勝負デース！」
　修司から差し出された手を、ケツァルコアトルは満面の笑みを浮かべて握り返し……ふと、違和感を覚えた。
　力が湧いてくる。修司との戦いで削られた分の力が涌き出てくるのが感じた。不思議に思ったケツァルコアトルが眼を見開くと、其処には悪ガキの様に笑う修司がいた。
「……何のつもり？」
「なに、敗者から勝者への贈り物だと思ってくれ。もしこれが施しで、アンタにとって不愉快なものだっていうなら……俺からの細やかな嫌がらせだと割り切ってくれ」
「――――」
「俺からは以上だ。じゃあな、愉快な神様。出来れば次会う時まで、あ

まり此方にちょっかい出さないでくれ」
　敗北を認めた男からの嫌がらせ、そう語る修司にケツァルコアトルは目を丸くさせた。神様も驚くのだなと、彼女の反応に微笑むと、修司は白い炎を纏って空を飛ぶ。
「待って！」
「ん？」
「貴方の名前、もう一度聞かせて貰えませんか？」
　呼び止めてくるケツァルコアトルに、すわ再戦か？　と一瞬警戒する修司だが、どうやら彼女は改めて自分の名前が知りたいらしい。
　それで見逃してくれるなら安いものだ。そんな軽い気持ちで改めて修司は名乗った。
「修司、白河修司。近い内にアンタを制する男の名だ」
　そう言って、今度こそ修司は空を飛んでいく。
　次に彼女と戦う時は、きっと今回以上の激戦が待っている事だろう。しかし、今回の敗北を胸に刻み、リベンジに闘志を燃やす修司は、報告の待つ王の下へ急いでウルクへ引き返していく。
「……ねぇ、ジャガー」
「ククルん？」
「日本式の結婚式って、どんな感じでしたっけ？」
「ククルん!?」
　どうやら、彼にはある種の女難の相があるらしい。ジャガーマンは何となく既視感を覚えながら、空の彼方へ消え行く修司の姿を見送るのだった。

その１３３　第七特異点

「ほう、南米の太陽神ケツァルコアトル。それが三女神同盟の一柱か、更にはジャガーマンなる女神も確認できたと。成る程、字面で見れば結構な成果だ。これ迄二度のウル市、エリドゥ市の調査失敗を鑑みれば、貴様が生還してきただけでも見事と言えよう。貴様のいう敗北した話も……水に流してやるのも吝かではない。だが一つ貴様に言いたい事がある」

「あのイシュタルめに続いて知人が神霊の依り代とか、どの様な所業を重ねればその様な縁を結ぶのだ？　我、素直に疑問なのだが？」

ジャガーマンとケツァルコアトル、二柱との遭遇戦を切り抜け、ウル市とエリドゥ市の状況を見てきた修司はウルク市に戻って早々にジグラットへ訪れ、あるがままの報告を賢王に説明した。二度に渡って失敗してきた南部への調査、それが今回初めて成功してきた事実はウルク市の人々にとって快挙と言えた。

賢王ギルガメッシュもその事自体は認めているし、カルデアのロマニからも同じ報告がされている以上、正確性は確実だと認識している。故に、今袖に振る事はしない。ただ、先の女神イシュタルに続き、ジャガーマンなるＵＭＡまでもが修司の知人という事実の方がギルガメッシュ王的には興味があった。

「……すいません、そこら辺については出来ればノータッチでお願いします」

「何というか……苦労しているのだな、貴様も」

まさかのギルガメッシュ王からの同情である。シドゥリや他の臣下達からすれば仰天ものだが、ギルガメッシュ自身からすればそうでもない。只でさえ女神イシュタルのガワが修司の姉弟子というのはメソポタミア的に肩ポンして慰めるレベルだし、更には聞いているだけで愉快なのは間違いないジャガーマン、その外見は学生時代の恩師だという。

一体どういう巡り合わせ？　君、何か悪いことでもしたん？　そう思える程に修司の縁はギルガメッシュ王から見て奇天烈怪奇なモノだった。
「でも、無事で良かったぁ。ウル市から地震が起きたって話を聞いた時は面喰らっちゃったけど、元気な姿を見て安心したよ」
「ですね。ドクターから酷く慌てた様子で通信が来た時は驚きましたから」
北壁で魔獣戦線に参加してきた立香とマシュと苦笑う。そんな空気を取り繕う様に静観していたロマニが話に入ってくる。
『アステカの主神クラスが相手だと流石の修司君も分が悪かったか。それで、どんな風に戦ったんだい？　相手の戦闘スタイルはそのまま攻略の鍵になる。なんでもいい、出来るだけ詳細な情報を開示してくれ』
本格的に戦う前に連絡を一時断っていたから、ロマニが知っているのは二柱の女神の真名と容姿だけ、だからせめて相手の戦い方を知る事で次の戦いに対する備えとなるようにしたのだが……。
「あー、何て言うか。プロレスだった」
『へ？　プロレスって、あのプロレス？』
「うん。メキシコではルチャリブレとして知られる奴、いやー驚いたよ。まさか南米の神様がプロレス技を仕掛けてくるとはな。思わず諸に受けちゃったよ俺」
「成る程、南米の神々はイロモノ系で来たか！」
南米の主神クラスの神霊は、プロレスを主軸に戦うお方だった。ロマニは頭が痛くなってきた。
「そうは言うがなマーリン、アレは中々のレスラーだぞ？　遥か上空からパイルドライバーを掛けられた時なんて、拘束が強くて抜け出せなかったからな」
「え、修司さんが抜け出さないって……そんなにヤバい筋力してるの？　ケツァルコアトルってヘラクレス並みの腕力なの？」
マーリンはイロモノだと南米の女神達を扱き下ろすが、それにしては油断ならない相手だと修司は訂正する。

思い返すのは最後に受けたパイルドライバー。遥か上空からの一撃は修司に抜け出す暇を与える事無く、地面へと叩き付けた。直撃すれば命はない神の一撃、イロモノと侮るには、女神ケツァルコアトルの一撃は洒落にならなかった。
「――ハッ、そうか。そういう事か！」
「マーリンさん、どうしたのです？」
「おかしいと思ったんだよ、彼程の手練れが相手の攻撃を態々受けていた事にさ。幾ら主神クラスと言えど相手は神霊、ダウンサイジングされて出せる出力も低くなった彼女の力ではトンチキ人間の彼の動きを完全に封じるのは難しい筈だ」
「……え？　トンチキ人間って俺の事？」
　ケツァルコアトルの異常な力、そのカラクリを看破したであろう花の魔術師マーリン。大真面目な表情で語り始めるグランド候補のキャスターに、ロマニとフォウは嫌な予感がした。
「だから、私は一つの推測を立てた。修司君、確かプロレスには幾つかのルールがあったよね？」
「え？　あ、あぁ……スリーカウントとか、反則技とか、知り合いにプロレス好きの魔術師がいて、そいつから色々教わったよ」
『待って、今サラッと凄いこと言わなかった!?』
「話を続けるよ。そう、プロレスには当然ルールがある。そして、その中には暗黙のルールと呼ばれるものも存在している。例えば〝相手の技を避けてはならない〟とか、ね」
「っ!?」
「ま、まさか……！」
「そう！　つまり女神ケツァルコアトルの攻撃はプロレスのルールを概念的に付与されたモノ、だから修司君は彼女の攻撃をマトモに受ける事しか出来なかったんだよ！」
「「な、なんだってー!?」」
　ドヤ顔晒して堂々と嘘を語るマーリンに対し、カルデア組の三人は心底信じきった様子で騙されていた。魔術知識など素人に毛が生えた程度の修司と立香、対するマシュは比較的に魔術知識は持ち合わせ

ているものの、大魔術師マーリンの言葉を否定できる程の知識はない。
『いやいやいや、そんな訳ないでしょうが！　うちの貴重な戦力達にに平然と嘘吹き込むの止めてくれる!?』
「フォウフォーウ!!」
「で、ですがドクター！　マーリンさんの言うことも一理あるかもしれません！　偉大なるキン肉星の王子も、基本的に相手の技は受けてました！」
『ホラァ！　純粋なマシュが真に受けちゃったじゃんか～！　て言うか誰よ、マシュにキン肉マンの知識植え付けたのは!?』
『いや、マシュ嬢の礼装は控え目に言って女子レスラーでも通用するのでは？』
『誰かー！　黒髭をコブラツイストで締め上げてエェッ!!』
　通信の向こうで某海賊の断末魔が聞こえた気がしたが、話が脱線しそうなので満場一致でスルーする事にした。
　尚、ケツァルコアトルの技をマトモに受けた云々の話は単に修司が動揺していただけだったりするのだが……それに気付くのは当分先の事である。
「漫才は其処までだ。南米の二柱の神の攻略は今は棚上げする事とする。聞いた限り、どうやら密林の女神は魔獣の女神とは相反する考えの様だからな」
　同じ人類と敵対する女神だが、明確な敵意と憎悪を持っている魔獣達に対し、ケツァルコアトルとジャガーマンは今すぐ人類に対して本気で仕掛けてくる様子はない。ウル市に取り残された人々は戦う気力こそ無いものの、基本的には生け贄方式で身の安全を保証されており、その生け贄にされた人達もエリドゥ市で労働に宛てられていること以外、特に危害を加えられた様子はない。
　野蛮だが理性ある獣、それがギルガメッシュ王が抱いた南米の女神への印象である。
　よって、危険度的に言えば魔獣の女神の方が高いと賢王ギルガメッシュは判断する。女神の強さ自体はケツァルコアトルも侮れないし、

今後も要注意な神である事には変わりない。今後も定期的に調査をするべき案件だろう。勿論、担当は修司で。
「そして、マルドゥークの手斧の所在も確認できた。運び出す荷車の製作も考えねばならんが、それでも事態は前に進んだ。褒めてやろう、修司とやら。貴様のハチャメチャは一先ず一定の成果を成し遂げた」
「あ、ありがとうございます」
　この特異点に来て、初めて賢王からの直々の褒め言葉を戴いた修司は、僅かに動揺しながら確かに受け取った。在り方や人格は修司の知る英雄王とは多少異なっているが、それでも数える程しか褒められた事のない修司にとって王からの一言は値千金にも勝った。
　しかし……。
「だが、貴様には同様に度しがたい責がある。貴様と太陽神ケツァルコアトルとの一戦の影響で、ウル市方面に屯っていた魔獣どもが北壁に向かって進んでいる。急ぎ現場に向かい、これを駆除せよ！」
「やっべ、それがあったか！　い、急いで駆逐してきまーす！」
　急いで進軍してくる魔獣の群れを駆逐する為、再び修司は空を飛んでいく。そんな修司を見送りながら、立香とマシュも続くようにジグラットを後にする。
　しかし、ギルガメッシュ王は去ろうとする二人を呼び止めた。
「暫し待て、貴様達には別の任務を与えるとする」
「え？　でも……私達、まだ北壁の魔獣を倒しきっていないよ？」
「たわけ、お前達がいた程度で魔獣どもが屠れるなら、バビロニアを解体してはおらん。代わりに、あのトンチキめを宛がわせる。その間にお前達はマーリンと共にクタ市へ向かい、天命の粘土板を見付け出すのだ」
「天命の……粘土板？」
　そう言えば、マーリンが探していたモノもそんな名前だった気がする。天命の粘土板、それは昔にギルガメッシュ王がクタ市で瞑想に入った際に記したとされる自身の未来に関する粘土板。
　それの探索と北部でのイシュタルに関係する情報を集めることも

序でに命じ、王は立香達を下がらせる。
ウル市とエリドゥ市からの思わぬ情報の収穫、予想だに出来なかった展開。それでも此方の予定が思っていたより差違がないのは、良くも悪くも修司の所為だろうか。
ともあれ、この分ならニップル市の解放作戦も滞りなく進められる事だろう。魔獣戦線が始まって以来の大規模作戦、果たしてそこで待つのは何なのか。
何れにせよ、ハチャメチャな出来事が待っているのは間違いない。訪れるその時が来るまで、王は背凭れに寄りかかって思考を巡らせ、その光景に思いを馳せるのだった。

その１３４　第七特異点

ウル市から押し寄せる魔獣の群れを掃討した後、ジグラットに戻ってきた修司は賢王ギルガメッシュからの命により、立香とマシュが王からの命令を果たすまでの間、修司は北壁の魔獣戦線に一時参加して魔獣達を間引く事となった。

人類にとって最前線とも言える北壁での戦い、半年間人類を支えた壁の中にはウルク市と同等の街並みが出来ており、その環境は活気に満ちていた。

ここで戦えるのなら修司としても望む所であり、レオニダスや牛若丸、弁慶達も参戦していた事から、魔獣の間引きは滞りなく進んだ。

とは言っても、遊撃隊として活躍している牛若丸とは違い、修司がやって来た事は単純な作業であり、その内容も北部の森から現れる魔獣達を横切る様に気功波でブッパするというだけの簡単なモノだったりする。

かめはめ波だったり、気円斬だったり、その都度趣向を変えて気功波を放ち、押し寄せる魔獣の群れに歯止めを掛けるという単純な作業。うち漏らした魔獣は牛若丸や弁慶が討ち取り、壁に到達した魔獣には兵士達が担当する流れとなった。

たまに、乱戦で魔獣に捕まった兵士がいたりするので、見かねて作業を止めて救出したりしているが、機動力のある牛若丸のお陰でフォローが間に合い、この日の魔獣戦線は嘗てない程に安定した立ち回りが可能となっていた。

更には、時折ギルガメッシュ王からレオニダスを経由して、籠城戦を強いる事になった市に赴き、幼い女子供を中心に空からの救出を行ったりするなど、中々濃い日々を過ごす事となった。

「いやはや、修司殿の鬼神のごとき活躍、凄まじいの一言ですな！」

「いやぁ、単に気功波をブッパしていただけなんだけどな。単純な作業で個人的にちょっと消化不良気味だし。南米の女神と再戦するにも個人的にはもう少し肉弾戦を鍛えたかったなぁ」

「例の太陽神ですか。なんでも、向こうの技は必ず受けねばならず、此方の攻撃も相手のルールに則ったモノでないと有効打にはならないと聞きましたが？」
「あくまでマーリンの見解だけどな。でも、結構的を得ていると思うし、俺自身納得している部分があるからなぁ。多分、間違いないんじゃないか？」
「やれやれ、神というのも不思議なモノですな。まさか人間が生み出した技に傾倒するとは……」
　現在、魔獣の侵攻も修司が参戦した事で動揺しているのか、その侵攻は以前よりも緩やかになっていた。これを好機と判断したレオニダスは、疲弊している兵士達を順番に休ませている。今は修司と牛若丸が休憩する番となり、現在は近くの屋台で簡単な食事を摘まんでいる所である。
「しかし、魔獣戦線に参加して数日経っているけど、連中中々諦めないな。北壁には俺達がいるから獣なりに突破は無理だと分かるだろうし……まさか、知らない所で穴でも掘ってウルクに侵入しようとしてたり？」
「いえ、それは恐らく無いかと。連中、人を襲い浚う知恵はあっても、土を掘って進むという奇策を考える知能は無いと思われます。そんな事をしたらとっくにウルク市は混乱に陥っている事でしょうし、何よりあのギルガメッシュ王が見逃すとは思えません」
「だよなぁ。そもそも、そうなったら俺も流石に気付くし、可能性としては低いか」
　修司が魔獣戦線に参加して早数日、修司の放つ気功波が魔獣の大部分を間引いた事で、北壁には少しばかり余裕の日々が訪れる事になった。その間は王の命令により損壊した壁の修復作業を急がせたり、相変わらず北壁は慌ただしいが、それでも人々の顔には普段以上に笑顔が生まれている気がする。
　その甲斐あって、こうして魔獣達の目論み等を考察する余裕も生まれている訳だが、如何せん相手は獣。人間とは違い基本的に本能で動いているだけなので、連中の考えを理解しろと言う方が土台無理な話

だった。
　しかし、そんな本能に動く獣だからこそ修司の力に気圧される個体も少なくはない。爪や牙を突き立てても薄皮一つ削れない怪物を前に、魔獣達は次第に尻込みする事となった。
「なら、そろそろ魔獣の女神とやらが出てくる頃合いかな。自慢の子供達が狩り尽くされて、黙っている様な奴ではなさそうだし」
「ほう、その心は？」
「魔獣には人間に対する憎悪が見て取れるからな。その大元である女神が俺達の活躍を見過ごすとは思えん」
　そう、先程から何度も述べた様に、これ迄魔獣を押し止めていた魔獣戦線は修司というハチャメチャ製造機の活躍により、その数を大幅に減らされている。中にはサーヴァントでも苦戦しそうな大型の魔獣も出てきたりしたが、そういう手合いの魔獣も、修司の放つ手刀（エクスカリバー）によって一瞬にして両断されている。
　魔獣は人間に対する強い憎悪を抱いており、その大元である魔獣の女神も同様に人類に対して強い憎しみを抱いている可能性は高い。であるならば、そんな憎しみの対象である人間に戦線を押し上げられた事実は、魔獣の女神にとっても面白くない話に聞こえるだろう。
　数々の子供達が駆逐された事に、もし魔獣の女神が怒り心頭なら、その怒りをぶつける為に自分達の前に現れる日も近いのかも知れない。レオニダスもそういう予感があるからこそ、ギルガメッシュ王に進言し北壁の修復を願い出たのだろう。
　謂わば、この活気は来るべき魔獣の女神との戦いを想定した前準備。決して気は抜けないというウルクの人々の決意の現れでもあった。
「成る程、ならばその時は魔獣の女神はこの牛若丸が討ち取ってご覧にいれましょう。憎しみに呑まれた女神を討ち取る経験なぞ、生前含めて終ぞありませんでしたからな」
「はは、そりゃいいや。それなら俺も対ケツァルコアトルに集中出来るからな、頼りにしてるよ」
「ふふ。ええ、魔獣の女神の頸はこの牛若丸が取りましょうとも。そ

の暁には藤丸殿に頭を撫でて貰うのです！」
「あまり、刺激の強いのは止めてあげてね」
魔獣の女神は自分が討ち取ると、そう息巻いて胸を張る牛若丸に修司は頼もしく思えた。自分達なら今回もきっと特異点を乗り越えられるのだと、修司は信じて疑わなかった。
と、そんな時だ。
「休憩の最中、失礼します！　修司殿に伝令、至急王の下に戻られたし！」
修司達のいる屋台へ、急いだ様子で駆け付けてくる。王からの直々の命令に事態が動くことを予想した修司は、急いでジグラットに向かおうと全身に軽く気を纏わせる。
「悪い牛若丸。話は一旦此処までだ」
「いえいえ、お気になさらず。また、共に戦場を駆け抜けましょう」
話に付き合ってくれた牛若丸に礼を言い、修司はジグラットに向かって飛翔する。相変わらず人間離れしているなと、呆れながらもその後ろ姿を見送った。
「あの様子だと、いよいよその時が来ましたか。流石は賢王ギルガメッシュ、日々の業務に忙殺されても機を見定める正確さは健在か」
修司が魔獣戦線にて活躍して数日、入れ替わるように別の任務へ赴いた立香達の事を思い返す牛若丸は、生前培ってきた経験から人類の次なる段階へ移行する動きを予見した。
即ち、人類の反抗。これ迄魔獣達に好き勝手されてきた人類が、漸くその時を迎える。
既に此方の準備は整っている。後は王の号令を待つだけだと、牛若丸はその時が来るのを楽しみにするのだった。
「牛若丸殿、その顔はいけませんぞ。幼子達が泣き出してしまいます故」
「よぉし、景気祝いにまずはお前の頸を叩き落としてやろうか！」

「そっか、そっちも大変だったんだな」
「アハハ、まぁでも、皆のお陰で何とか今回も助かったよ。イシュタルさんにも助けられたしね」
言伝(ことづ)てを届けてくれた兵士の言葉に従い、急ぎジグラットへ戻ってきた修司はそこで待っていた立香達と共に分かれていた間の情報共有を行うと、魔獣戦線に参加していた修司以上に濃い話を聞くこととなった。
クタ市に向かう前、王自ら足を運んだペルシア湾の水質調査。そこで遭遇したエルキドゥとの戦い、この時はエルキドゥの体に不調があったのか、賢王ギルガメッシュと数回刃を交えるだけに終わり、自身に優勢な状況だったにも関わらず、自ら撤退していったという。
自分がいたら間違いなく仕留めていたのに……とは、思っても口にしない。ギルガメッシュ王とエルキドゥが刃を交えたという事は、エルキドゥの真偽を見極めたという事に他にない。しかし、そのギルガメッシュ王本人が何も語るつもりがないと言うのなら、此方から訊ねるのは不躾という事なのだろう。
とは言え、流石に襲われたら抵抗するけどね。幾ら外見が王の親友と似ていても、敵対する以上修司は手加減をするつもりはない。王もその事自体は了承しているし、何なら出来るモノならやってみろと挑発の言葉を戴く程だ。
個人的に修司が話を聞いて驚いたのは、クタ市での出来事だった。其処は魔獣すら近付こうとしない冥府に近い土地の様で、最初は順調に粘土板を探していたのだが、途中から立香の気配は消え、観測していたロマニ達も突然消えた立香の反応に当初はかなり慌てていたらしい。
その後は何事もなく反応が復活し、立香も見付ける事に成功したの

◇

だが、ロマニが言うには、立香の反応が消えていた数分の間、彼女は死亡扱いとなっていたそうだ。
　これ迄戦いを共にしてきた立香が、僅かな間とは言え死んでいた。その事実に修司は怖気がしたし、当然不安にも感じた。しかし困った事に本人には自分が死んでいたつもりなど微塵もなく、冥府に落ちたのも精々落とし穴に落とされた程度にしか感じられなかったらしい。
　その冥府も、突然現れた老人の手によって助けられたらしく、気付けば天命の粘土板も手にしていた事から、本人的には万々歳だった様だ。
「……前々から思っていたけど、立香ちゃんって時折凄く危ない橋を渡っていない？　俺、ちょっと君の将来が心配になってきたぞ」
「いや、修司さんがそれを言います？」
『うーん、正直どっちもどっちかなぁ』
　今一つ危機感の足りない立香に苦言を言いたい修司だが、立香の言う通り自分の所為で苦労をさせた事もある為に、あまり強く言えなかった。
　そして、その後にこれまた遭遇したイシュタルとの戦闘だが……彼女の名誉の為、今回は割愛とする事にした。
　詳しくは言えない。が、話を聞いたギルガメッシュ王が腹筋大崩壊といった感じで爆笑してました。
　閑話休題。
「エルキドゥ、イシュタル、そしてクタ市を覆う冥府の影、か。ウル市とエリドゥ市にも負けず劣らずの厄介な話だけど、ここで素直に引き下がる訳には行かねぇよな」
「うん。私達、まだまだ頑張れるよ！」
「ほう、よくぞ吼えた。では貴様らに改めて仕事を命じるとしよう。一度ならず二度目の我からの勅命である。感謝して咽び泣くがいい」
「あ、漸く笑いが収まったみたい」
「大丈夫ですかギルガメッシュ王、あまり無理をなされない方が宜しいかと思いますけど……」
　未だに問題は数多くあり、何れも質の悪い案件ばかりだが、それで

もまだ自分達は戦えるぞと、立香もマシュも闘志を滾らせる。
そんな彼等に賢王は再び命令を下すが、先程までえずく程まで笑っていた彼に大丈夫なのかと三人とも王に心配の眼差しを向けた。
「えぇい、その様な眼で我を見るでないわ。流石に凹むぞ」
心底心配しているが故に邪の感情等ないと分かっているギルガメッシュだが、流石に憐れみの視線を向けられるのは慣れていなかったらしい。咳払いをして場を整わせ、真剣な眼差しで玉座を座り直す
「――そこの修司めが派手に暴れた事で、今の魔獣どもは浮き足が立っている。レオニダス同様にこれを好機とし、再び魔獣の動きが活発化するまでの合間、籠城していたニップルの民を救出する事とする」
それは、事実上の人類の反撃の合図でもあった。

その後、詳しい話はレオニダスから聞くこととなり、シドゥリに軽く挨拶を済ませた後にジグラットから出ようとする修司だが、賢王から呼び止めが掛かった。
「修司、お前も見ておけ」
「え？　これって確か……天命の粘土板？」
「其処には深き瞑想をしていた我が深淵より覗き見た光が記されている。既に藤丸立香にも見せた。次は貴様の番よ」
何故、一見ただの粘土を乾燥させた板にその様な機能が備わっているのか。不思議に思うツッコミは堪え、修司は王に言われた通りに粘土板に触れ、なぞるように教わった呪文を口にする。
そして――。

悲劇、惨劇、嘆き、慟哭。悲しみと終わりに彩られ、悔恨と憎悪に満ちた感情（こえ）が、修司の胸中を激しく叩く。
それは、涙を流す母への嘆きであり、理不尽に殺される父が抱く怒

り、この様な地獄があって良いのか、ソレは声にならない叫びで自身の持ち主である□□□□に訴える。
何故、お前は何もしないのか。何故、力ある筈のお前が何も感じないのか。何故この様な惨劇を無視する。どうして、この様な悲劇を見て見ぬふりが出来るのか。
激しい感情を以て訴えかけるソレに――――。
『さぁ、別に、なにも?』
無感情の声だけが、イヤに耳に残った。

その135　第七特異点

賢王ギルガメッシュからの勅命により、魔獣に対して籠城するしかなかったニップル市の完全なる解放と、残された市民の救出作戦に参加することとなったカルデア一行。

北壁に訪れ、準備を整える兵士達と足並みを揃える為に一晩だけ休む事になった修司達は、明日への戦いに備えながら眠りに就いた。

そして翌朝、日が昇り陽光が北壁を照らす頃合い。北部の森を壁の上から注視していたレオニダスが呟く。

「――刻限、ですな。皆さん、覚悟と準備は出来ましたかな？」

「うん。私は大丈夫、何時でもいけるよ！」

「先輩も私も、共に体調良好です」

「俺も二人に同じだ」

ニップルの解放という大作戦を前にして今更な問いを投げ掛けるレオニダスに、三人は愚問とばかりに即答する。これから自分達は率先してニップルへ向かうことになり、それは即ち魔獣達に囲まれた所へ吶喊するという事に他ならない。

無数の魔獣達に囲まれてしまったら、下手をすればサーヴァントですら敗北しかねない。そんな危険地帯に自ら突き進まなければならないという現実を前に立香とマシュは微塵も臆した様子がない。

そんな二人の顔付きにレオニダスは兜の奥で微笑む。頼もしい限りだと、これならばきっと万事上手く行くと、根拠の無い確信を抱きながら、レオニダスは改めて作戦をその場にいる皆に伝えた。

「この時刻、大部分の魔獣達は空腹を覚えます。視界に獲物が入れば真っ先に襲い掛かるでしょう」

「ならば、戦場に斬り込む私と弁慶が指揮する遊撃隊は、魔獣達にとって格好のエサという訳ですね。無論、エサになるつもりはありませんが。悉くを返り討ちにしてみせましょう」

今回のニップル市に於ける作戦は単純明快。先行する魔獣達の部隊を遊撃隊を率いる牛若丸と弁慶が囮の役割をし、その間に修司達突

入組がニップルへ向かうという手筈になっている。
　ニップル住まう人々の救出を第一に考え、可能であればニップルそのものを魔獣の包囲網から解放させる。それがギルガメッシュ王が定めた作戦の全容であり、単純であるがゆえにその規模は壮大なものとなっていた。
　ニップル市はウルクと同規模の土地有する大都市。当然ながらそこに住まう人々も数多く存在し、修司が時々救出に参加しても未だに全員の救出が出来なかった程に規模が大きい都市である。
　故に、今回の作戦の最も困難な所が市民の移動であり、その間の護衛である。未だ二百の人間が取り残されているニップル市、修司が一時参戦した事で戦えない女性や老人、負傷者はある程度救出されてはいるが、それでもまだこれだけの非戦闘員が残されている。そんな彼等を無事にウルクまで送り届けるのが今回の作戦の肝なのだ。
「修司殿、どうです？　ニップル市の人々の状況、確認できますか？」
「……やはり、前よりも魔獣達の数が多い所為かニップル市の人達の気が感じられない。すまん」
　作戦を始める前に、せめてニップル市に取り残された人々の安否を確認しようと、レオニダスは修司に気の探知を頼むが、ニップル周辺には無数の魔獣の気が点在しており、それらの所為でニップル市の人々の気が感知出来ないでいる。
　強い気や特殊な気配の認識・感知は得意なのに、弱い気配の察知には未だ不得意の域から出てこれない。自分の未熟さに痛感する修司だが、レオニダスは気にするなと一蹴する。
「謝る必要はありません。修司殿にはこの後、大事な役目がありますので、挽回するのであれば是非其方で頑張って戴きたい」
「あぁ、それはいいんだけど……本当にこれでいいのか？」
　レオニダス達が一瞥する方へ修司も不安げに視線を向ければ、其処には見上げる程に巨大な綴の籠が修司の背後に聳え立っていた。それは、賢王ギルガメッシュが命じて作らせた大勢の人間を運べる籠。
　名付けて〝百人乗っても大丈夫な籠〟、頑丈さと頑強さを併せ持ったマーリン渾身の一品。呆れながら籠を見上げる修司の隣には、やた

らとやりきった感のある花の魔術師がサムズアップしていた。
「なぁ、本当にこんなこれで大丈夫なのか？」
「大丈夫さ、問題ない」
「……」
　どうやらマーリンはこの籠を作るのに結構な時間と労力を掛けたらしく、その表情は達成感で満ちている。台詞的に激しく遠慮したい所だが、この籠にはニップルに籠城している人々にとって文字通りの助け船になるのだから、修司としても断り辛い。
　仕方なく承諾して籠を背負い込むと、既に籠は結構な重さを誇っていた。どうやら事前に部隊の兵士達が乗り込んでいたらしく、一旦下ろして上から覗き込むと武装した兵士が数十人単位の兵士達が鎮座していた。
「修司殿！　此度の作戦、必ず我等で勝利を勝ち取りましょう！」
「今回の戦いで人類の強さを魔獣どもに思い知らせてやりますよ！　なぁ皆！」
「「オォーッ！」」
　既にヤル気満々なウルク兵士。そんな彼等の熱気に腰が引けた修司は、ややげんなりとした様子で籠から降りる。
「……あれ？　ちょっと待てよ、もしかしてこの中に私も入らなくちゃ行けないのかな⁉」
「今更気が付いても遅いですよ。さ、とっとと乗ってください」
「アハハ、それじゃあ修司さん、宜しくね！」
「が、頑張ってください！」
　今更な事実に気付いたマーリンを、アナが蹴り飛ばしながら籠へ乗り込み先程よりも重量感が増した籠、これを背中に担いで行かなくてはならない現実に、早くも修司は泣きそうになった。
　そんな修司を慰めつつ、立香とマシュも籠へと乗り込もうと……する前に、レオニダスから声が掛けられた。
「立香殿、そしてマシュ殿、お二人のこれから先に待つのは、恐らくは人智を超えた戦いになることでしょう。厳しく、困難で、過酷な戦い。しかし決して目を背けなされるな。天変地異の如き災いの前に人の

力は時に無力、其処に魔術の才能の有無は差程意味はありますまい」
「ですが、だからこそ、どうか生き抜いて欲しい。私から言えることは……それだけです」
「レオニダスさん……うん、分かった。今の言葉、絶対に忘れないよ」
「ありがとうございます。そしてマシュ殿、貴方には私から教えられる盾の戦い方の基本を叩き込みました。後はご自身の手で、守護(まも)られよ」
「――――はい。ありがとうございますレオニダス王。貴方から教わった薫陶、決して忘れません」
レオニダスから掛けられるのは一種の予言だった。これから待つ戦い、それがニップルで待つ魔獣なのか、それとも別の何かなのか。それは二人にも、レオニダスにも分からない。
けれど、二人には何か言葉を掛けなければ行けない気がした。それは英霊の勘なのか、それは定かではない。
助言をくれたレオニダスに頭を下げると、二人とも改めて籠へと乗り込んでいく。その様子を確認した修司は改めて籠を背負い、全身に白い気の炎を纏わせる。
「それでは、これより戦闘を開始します。修司殿、貴方もどうか気を付けて」
「あぁ、ありがとうレオニダス。牛若丸も、また後で」
「ええ、訳あって私達はニップル市には入れませんが、太陽が中天に座す頃には全てが片付きましょう。昼食は、是非皆さんと……それでは！」
牛若丸が駆け出し、弁慶もそれに続く。森から現れる魔獣の大群に果敢に攻め立てる牛若丸達を尻目に、修司は気を滾らせる。
「そんじゃ……行くぜ！」
気を解放し、数十人を乗せた籠を背負っての飛行。背中から兵士達の絶叫を耳にしながら、修司はニップルへ急いだ。
作戦開始。人類の、魔獣に対する反撃が始まった。

◇

「チッ、魔獣ども、やっぱり数を増やしていたか」
遥か上空から見える魔獣の群れ、その数はこれ迄ウルク市に押し寄せていた総数を優に超え、今なお数を増やしていく。これ迄修司が数を減らした反動か、魔獣達の顔には今まで以上に強い憎しみを抱いている様に見えた。
囮に徹してくれている牛若丸達の負担を軽くさせる為に、せめてもの援護として、修司は空から気弾を放ち魔獣達を僅かに削っていく。
北壁に備え付けられた〝ディンギル〟、ギルガメッシュ王から賜ったラピスラズリを動力源とした砲台で牽制しているが……正直、焼け石に水だろう。
やはり、早くニップルへ向かい急ぎ住民達を避難させる必要がある。異常な数の魔獣の群れに修司は一抹の不安を覚えながら、ニップル市へ急いだ。
背負っている籠に乗っている立香達に極力負担を掛けないように気を付けながら飛翔すること数分、ニップル市へ降り立った修司が目にしたのは……凄惨たる光景だった。
「これは、そんな……！」
「私達、間に合わなかったの？」
辺り一面に広がる血の跡、ニップル市の至る所に残された惨劇の跡に籠から降りてくる立香達は息を呑む。しかし、修司が眼を鋭くさせる理由はそれだけではない。
死体がない。これだけの血が流されたと言うのに、ただの一人も遺体が残されていない事に、修司は言葉には出来ない違和感と怖気を感じ

た。
……そう言えば、北壁に参戦していた頃も似たような光景を見た覚えがある。手足をへし折り、戦闘不能に追いやっておきながらその場では止めを指さず、森の中へ引き摺り込もうとする魔獣の姿。目の前の惨劇の現場はあの時修司が見た光景と似ている気がしてならない。
そして、その修司の予見は最悪の形で証明される。
「やぁ、来たね。歓迎するよ、旧人類」
「っ、エルキドゥ！」
上空から現れたのは、エルキドゥと酷似している者。親友であるギルガメッシュ王自ら良く似ていると言わしめる程の存在。状況的にこの惨劇は彼が起こしたものだと断定し、修司は鋭い視線を維持したままエルキドゥなる者に問い掛ける。
「このニップル市の惨状は……テメェが起こしたものか？」
「そうだけど……それが何か？　彼等は先日魔獣達によって残さず回収させて貰ったよ、魔獣達も燃料が無くなれば活動は難しくなるからね。資材の調達は時には迅速に行わないと」
修司の問いに、即答で答えるエルキドゥ。そこに一切の躊躇や呵責の様子はなく、心の底から人間を資材としか見ていない。
ニップル市は既に藻抜けの空だった。残された人々は魔獣達によって巣と思われる場所へ連れ去られ、その生存率は絶望的。この時、修司は己の浅はかさを呪った。
確かに魔獣達は数を増やして北壁に向かい、魔獣戦線を支える兵士達を襲っていた。その狙いは北壁を破壊し踏み越えるだけでなく、白川修司という特記戦力を北壁に釘付けにさせる為にあった。
事実、修司が戦線に参加した時の強襲する魔獣の数は、通常より多かったらしく、魔獣の勢いも何時もより強かったとレオニダスから聞いている。だからこそ魔獣達に連れ去られる兵士達が何時もより多く見受けられ、その都度修司は助けに入っていた。
特異点ほぼ全域に強い気が点在している現在のメソポタミアは、人間一人の位置や場所を気によって特定させるのが非常に困難になっ

ている。それが魔獣達相手に籠城するしかないニップルなら尚更で、これ迄何度も救出に参加しても直接赴かなければ把握できない程にそこに住まう人々の気は小さかった。
　もっと早く気付くべきだった。籠城を強いられていたとはいえ、彼等もまた賢王のギルガメッシュの民。戦えなくとも、自分達で生きていける強かさを持っているから大丈夫なのだと、勝手に思い込んでいた。
「……そこを退け、エルキドゥ擬き。テメェの相手をしている暇はねぇ」
「そうだね。僕も君如きに関わっている場合じゃないさ。でもね、そうも行かなくなった」
「あぁ？」
「母さんが、君に一目会いたいと聞かなくてね。これまで君が殺してくれた子供達の分まで、お礼がしたいんだってさ」
　瞬間、地震が起きた。それは地響きというには胎動的で、噴火と言うには粘着的。うねりとも呼べる地震の中で膝を折って地に伏す兵士達に対し、修司は近付いてくる気配に身構える。
　そして――それは来た。
　地面を割り、地表を砕き、地中深くから現れるのは……巨大な蛇。山の如く巨大にして強大、魔獣の母とも呼べる怪物が、天高くから修司達を見下ろしてくる。
「――ほう、貴様が噂の山吹色の男か。お前には随分と我が子達が世話になった様だな」
「……」
「フフフフ、恐ろしくて声も出せぬか。なに、案ずる事はない。貴様には特別の恐怖を味合わせて、その時になって踊り食ってやろう。我が子から話しは聞いている。せいぜい、私を楽しませてくれよ？」
「……」
「我こそは人類の怨敵。三女神同盟の首魁。貴様らが魔獣の女神と恐れた怪物――百獣母神、ティアマトである。平伏し、ただ祈りを捧げるがいい」

その体躯に見合った尋常ならざる霊基。その強さ、強靭さ、なにより……その残忍さは正しく人類の天敵と呼ぶに相応しかった。
その迫力に兵士達は呑まれそうになり、強く己を立てている立香とマシュも足を震わせている。その中で平然としていられるのは、グランドクラス候補のマーリンと、何故かフードを深く被り直しているアナ、そして――――。
「もしもしロマニ、ちょっと双子の女神姉妹を呼んできてくれる？」
何処か達観した様子の修司が、呆れながらもすました様子で、密かに相手の心を折る準備を始めていた。

その１３６　第七特異点

――その女と初めて遭遇したのは、地元の街の……とある路地裏。殆んど偶然とも呼べる出会いとして、白河修司は処理した。

当時から続く友人が使役していた、聖杯という願望器を巡る戦いに喚ばれたとされるサーヴァント。その七騎の内の一騎が奴だった。

ある意味、奴も被害者だったのだろう。　生前は神によってその在り方を歪められ、姉妹共々人の手の及ばない孤島に追いやられ、更には命を狙われる日々。そして、今度は聖杯という怪しい代物を獲得する為だけに利用される。

それでも、好ましい相手を出来るだけ死なせたくは無いという善性が、彼女にはあった。自分を喚び出した少女を死なせたくはない。〝今だけでも〟慎ましく、人並みの幸せを享受出来ればそれでいい。

成る程。確かに彼女はそれだけ見れば善性で、怪物として語られるよりは遥かに良い存在に思えただろう。人間に対して恨みや憎しみは強い筈の彼女が、誰かの幸せを願う。……結構な事ではないか。

しかし、だからこそ、何処までも現状の維持を想う彼女と、何処までも未来を夢想し、実現させる為に可能性を示し続ける修司とは……どうしようもなく。

致命的に――相性が悪かった。

◇

「な、何だよこの馬鹿デカイ怪物は!?」

「ティアマトだ。やっぱり魔獣女神は……原初の女神、ティアマト神だったんだ！」
地を割り、這いずるように現れたのは見上げる程に巨大な女神。魔獣達の産みの親にして、人類の絶対的な敵対者――ティアマト。満を持して顕れた原初の女神を前に兵士達の間で瞬く間に恐怖が伝播していく。
人は、巨大なモノに恐れる。それは人の身では決して敵わないと知っているからだ。自分を遥かに凌駕する巨大な存在に畏れ、敬い、祈る。それ故に人は天変地異の前には無力となり、だからこそ人は絶対なる自然の力に超常の存在……即ち、神を見いだす事になる。
神代。人と神が別たれ、人の時代となる黎明期。現代と比べ、遥かに神秘が色濃く残るこの時代に於いて神という存在は絶対。人間である自分達では到底敵わない怪物の前に、兵士達が持つ槍や剣は爪楊枝よりも矮小に見えた。
立香もマシュも、魔神柱並みに巨大な神霊を前にして、若干気圧されている様子。それでもこれ迄の彼女が経験してきた旅の記憶を以てすれば、決して抗えない事はなく。事実、藤丸立香は深呼吸を繰り返した事で平静を保てている。
そして、そんな色んな意味で図太い立香に呼応するようにマシュの表情にも過度な緊張は消えていく。そんな二人に感心するマーリンは、改めて見上げる程に巨大な自称ティアマトに眼を向ける。
「アーキマン、アレの分析を急げ！　信じられないかも知れないがアレもサーヴァントだ！　霊基と体長、クラスぐらいなら分かるだろう!?」
「やっているとも！　霊基は神霊クラス、本体は１０メートル、体長は――尾を含めると１００メートルを超えている!?　分類はエクストラクラス！　復讐者、アヴェンジャーだ！」
復讐者（アヴェンジャー）、それを聞いて立香達が思い浮かぶのは、カルデアにすっかり馴染んでいる黒い聖女の事だ。召喚された当初は滲み出る殺気が凄まじい事から誰も近付こうとしないが、娯楽室にある漫画を読んでからは自分も何か書いてみようと、作家組からアドバイスを受けて独

自に漫画を書き始めている。
アレ？　そう思うと案外怖くない？　立香の思考に一瞬そんな考えが過るが、それでも恐るべき力を持っている事には違いない。しかも相手は神霊、決して侮って良い相手ではなく、改めて立香は目の前の巨大サーヴァントと向き合った。
「しかし、やはり少々目覚めるのは早かったのではないでしょうか？　この北壁に顕れる刻まで、あと幾ばくかの猶予があった筈です」
「――そう言うな。なに、我が子の遊び相手を見ておこうと思ってな」
エルキドゥ（？）に嗜められても、尚平然と見下ろしてくる自称ティアマト。それは獲物を前に舌舐りをする蛇そのもので、正しくこの状況を表していた。この巨大な怪物の前に自分達の逃げ場はない、天災を前に人は祈る事しか出来ないように、兵士達はただ怯えを抑え込むしか出来ないでいた。
そんな中、自称ティアマト視線が立香達に向けられる。
「カルデアの生き残り、今もって人間の世にしがみつく虫は、アレか？　――小さい。なんとも弱々しい生命よ。まこと解せぬ、その様な生命で、どうやって此処まで辿り着いたのか」
覗き、見下ろし、嘲笑する。これ迄の特異点で生き残ってきた藤丸立香を、弱い生命と蔑む自称ティアマト。そして、その見解は概ね正しい。これ迄の特異点攻略で彼女は決して自分一人の力で生き残ってきた事は、ただの一度も無いのだから。
しかし、それを立香は恥とは思わない。何も出来ず、魔術師としてもマスターとしても未熟な自分だが、それでも此処まで生き抜いて見せた自負がある。
見つめ返す。憎悪と怒り、復讐に駆られる女神を前にしても怯むこと無く立香は魔獣の女神を見据えている。
そんな藤丸立香を、魔獣の女神は何処までも否定し、嘲笑う。
「見る価値も無ければ嬲り殺す価値もない。このティアマトの舌には合わぬ。――ク。だが喜ぶがいい。今、私はとても空腹だ。下らぬ命であろうと、それなりの味わいにはなろうよ。人類最後のマス

ター、さて、甘いのやら苦いのやら」
　自分は喰らう者であり、眼下の人間どもは喰われるモノ、それは目の前の女神にとって絶対であり、法則であり、理である。全ての人間は補食すべきエサ、そこに一切の呵責葛藤はなく、思うがまま蹂躙する意志が詰められている。嘲笑し、僅かに力を解放するだけで暴風が吹き荒れる。
　山のごとき怪物を前にどうにかして立ち向かおうと模索する立香達の前に……。
「いや、メドゥーサだろ。お前」
　――ふと、修司から特大の爆弾が投げ込まれた。
「「「――――――」」」
　固まる。人も魔獣も神霊も、自称エルキドゥさえも唐突に投げ込まれた爆弾の威力に押し黙り、ギギギと修司の方へ視線を向ける。
　錆び付いたブリキの人形のごとく音を立てて視線を向ければ、両腕を組んで呆れた表情で女神を見上げる修司がいた。
「――――人間、今、私の事をなんと言った？」
「いや、だからメドゥーサだろ？　何を食ったらそんなにデカくなるのか知らないが、態度も随分とデカくなったみたいだなぁ」
　顔中に青筋を浮かばせる自称ティアマト。彼女の意識と敵意が一気に修司へと向けられ、女神の圧力から解放された立香達はマーリンの手助けの下、今の内に撤退の準備を始めている。
「し、修司さん、もしかして……彼女も？」
「いや、アイツは別に地元の知り合いって訳じゃねぇよ。知ってるのもアレの進化前見たいな奴だし……え、もしかしてお前、〝やみのいし〟でも食べた？　えー、なんかヤだなぁソレ。イーブイが可哀想」
『なぁんでこんな時にポケモンで例えるかなぁこのトンチキ君はァ!?』
「とは言え、これはチャンスだ！　ニップルが壊滅状態である以上、申し訳ないが此処に留まる意味はない！　詰まる所――――逃げるよ！」
「させると思うのかい？」

魔術を展開して、兵士達共々逃げる算段を立てようとするマーリンに、自称エルキドゥが追撃を仕掛ける。中身はどうあれ、神造兵器の性能は伊達ではない。足元から無数の槍を出現させて投擲し、迫りくる凶刃の前に術式を展開中のマーリンは流石にヒヤッとした。

迫りくる槍の波、それを防ぎ両断したのは修司の放つ気円斬だった。槍の波を中心から斬り飛ばされ、切断された穂先は力無く大地へ消えていく。助けてくれた修司に短く礼を言うと、マーリンと立香達は花弁と共に散っていき、気付けば姿を消していた。

どうやら、一種の転移の魔術を使用したらしい。過去にメディアから似たような魔術を何度か見たことがある為、やはりマーリンは結構出来る魔術師なんだなと、修司は一人感心していた。

そして、現在ニップルに取り残された修司は、静かに目の前の敵対者達を見据える。魔獣の女神と自称エルキドゥ、両者とも憤怒に満ちた貌で修司を睨み付けており、その迫力は凄まじい。

しかし、その迫力も今一つ修司には伝わらなかった。エルキドゥの方は最初に戦った時に大体底は見えたし、女神に至っては進化前の状態とは言え一蹴に伏した経験がある。詰まる所、一人取り残された状況であっても修司は一切不安に感じる事はなく、また負ける要素も見当たらなかった。

「……随分と、舐めた事をしてくれたね。自分が何をしたのか、理解しているのかな？」

「ん？　まぁ、別に？　そんな危機感を覚える程じゃないだろ。片や中古の兵器、片やなんちゃって女神、密林の女神達を相手にするよりは幾分か楽な相手だろう」

実際に相対してきた修司にとって、警戒すべきは密林の女神達だ。なにせ、相対した時の圧力（プレッシャー）が違いすぎる。あの太陽の女神と比較すれば、魔獣の女神はただ図体がデカイだけ。

侮る訳ではなく、純粋な事実として修司はそう認識している。だから――。

「立香ちゃん達が逃げ切るまで、遊んでやる。掛かってこいよ」

何処までも人類を嘲笑う女神と神の兵器に、修司もまた嘲笑で返す。お前達など密林の女神の前の前哨戦に過ぎないと、そう暗に挑発して見せた。

そんな修司の挑発を、女神は殺意を以て返答する。頭髪から蠢く無数の蛇、その開かれた顎から禍々しい黒き光が放たれる。受ければ石化処かそのまま消滅しかねない死の一撃を前に、瞬時に修司は白い炎を纏って姿を消す。

魔術師の様な転移ではない。純然たる速さで以て回避した修司だが、移動した先で待っているのは無数の槍の雨だった。

自称エルキドゥ。英雄王の唯一の友として語られる彼の姿を持ち、人を何処までも見下す新人類。人間に対して無関心を貫いていた筈の神造兵器はこの瞬間、たった一人の人間を殺す為だけに形振り構わず襲い掛かってきた。

視線が交差する。殺意と憎悪に満ちたエルキドゥの双眼と、何処までも余裕と不敵な笑みを崩さない修司。互いの瞳に自身の姿を写しておきながら、互いの心境は全くの正反対だった。

刃が奮われる。自称エルキドゥの振り上げた右手に魔力が迸り、修司の頸に目掛けて振り下ろされる。しかしその刃は届く事はなく、振り下ろされた手刀を同じく気を纏った修司の手刀が迎え撃つ。

互角。空中で鍔迫り合いになった状態で自分と目の前の人間の膂力は全くの互角だった。悔しい、屈辱だ。しかし、この状況はどうしようもなく好機。

「いまです！　母さん！」

「！」

自分が抑えている間、母たるティアマトに自分ごと攻撃しろと檄を飛ばす。我が子を巻き込むのに一瞬の躊躇を見せる自称ティアマトだが、今はそれに応える他無かった。

閃光が放たれる。上下左右、一切の隙間も容赦も無い光を前に今度こそ修司に一撃が入れられると確信していた。

そして、自分も離脱を試みる。この身は神々によって造られた兵器、鍔迫り合いになった所でエルキドゥに取れる手段は幾らでもあっ

た。
権能とも呼べる業、泥の文明メソポタミアらしく、エルキドゥが操るのもまた土。大地を操り、無数の鎖を生み出す程度、造作もない。
造り、練り上げ、放たれる無数の鎖。修司の四肢を縛り上げるのは大地の鎖。四方八方から降り注がれる石化の極光の前に更なる駄目押し。そして――――。
爆発が、ニップルを覆う。その衝撃と爆音はウルクにまで届き、戦況を俯瞰していたギルガメッシュ王の耳にも届く。動揺が広がる兵士達、しかし賢王のその口元は薄く三日月を描いていた。
「――――本当に、愚かな奴だよ。確かに人の身を弁えない度が過ぎた力があることは認めよう。しかし、だからこそ、人類は淘汰されるんだ。身の程を弁えない旧人類はそれ故に滅びる」
もくもくと広がっていく黒煙、今頃は石となって塵同然となった修司を、エルキドゥは憚ること無く罵倒する。身の程を弁えず、強さと力を求めた者はそれ以上の理不尽を以て蹂躙される。
今回もその例に漏れず、弁えない愚か者が無様に死に絶えた……ただ、それだけの話だ。
「――――さっきから、何処見て独り言を溢してるんだ？　見ていて滑稽だぜ？」
「っ!?」
背後から聞こえてきた声に、女神と兵器は動揺しながら振り返る。バカな、奴は確かに先程の一撃を受けた筈。避ける素振りも、防ぐ動作もさせなかった。指先の挙動すら許さなかった拘束、其処から抜け出す事は喩え令呪を以てしても不可能な筈。
何故、一機と一柱が抱くのは疑問の念。しかし振り返った先に奴の姿はなく、あるのは荒廃したニップルの街並みだけ。
「何処を見ている」
再び、声が掛けられる。あり得ない、こんなこと、決してあってはならない。神代の神が、兵器が、たった一人の人間に後れを取る事があってはならない。
しかし、どんなに否定の言葉を脳裏で反芻しても、決して現実が覆

る事はなく。
「こっちだ――――ウスノロ」
淡い光を纏い、不敵な笑みを崩さないでいる無傷の修司(人間)を前にして、魔獣の女神と神造兵器はただ言葉を失っていた。

その137　第七特異点

ニップル市、メソポタミアに於ける人類最後の砦。本来であれば時代の移り変わりで、人知れず姿を消す嘗ての古代都市。人々の営みが詰め込まれた最古の人の街は、魔獣達によって崩壊した。

残されているのは、惨劇があったとされる血の跡のみ。引き摺られ、最期の抵抗を見せたであろうメソポタミアの人々の生き様を一瞥し、ニップルにただ一人残った修司はこの惨劇を生み出した元凶達を見据える。

片や、神々の手によって創造された神造兵器にして、偉大なる王であるギルガメッシュの唯一無二の友。

片や、魔獣達の母なる神にしてメソポタミア神話に於ける原初の女神、創世の一柱であるティアマト。

両者ともに自称であるが、いずれもその名に劣らぬ凶悪さと強靭さを併せ持つ神代の怪物達。人の身では、どうあっても覆らない差がある……筈だった。

「さて、そろそろ此方からも仕掛けるとするかな」

「っ！」

人の身では決して届かず、敵わない。それが神と言う超常の存在との差であり、領域。

しかし、その領域を簡単に踏み越えるモノが彼等の目の前にいた。神々の兵器の眼を振り切り、女神の感知すらすり抜ける。その神の眼にも止まらぬ速さで以て翻弄するのは、神々が矮小と断じる人間である。

明らかに動揺しているだろうエルキドゥとティアマト、そんな彼等の反応を尻目に、修司の顔から笑みが消える。先程まで挑発的な笑みは成りを潜め、代わりに浮き出てくるのは烈火の様な怒りだった。

「……お前達に殺された人々の無念、思い知れ」

静かに、一歩を踏み出す。その体に淡く輝く光を纏い、警戒を露にしているティアマト達に向かって、ただ一歩を踏み出した――――

と、同時に。
巨大なティアマトの体がくの字に曲がる。突然全身を襲う衝撃にティアマトだけでなく、エルキドゥすらも驚きに眼を見開いた。
――修司だ。この男、相当の距離があった筈のティアマトとの距離を一瞬で懐に入っただけでなく、一切の挙動を自分に認識させないまま、ティアマトの腹に蹴りを叩き込んで見せたのだ。
現界しての初めて感じる痛み。どのような攻撃でも通じはしないと断じてきたティアマトにとって、その一撃は未体験に等しい衝撃だった。
しかし、修司の攻撃はそれで終わる筈もなく、くの字に折れた事で必然的に下がったティアマトの顎を、容赦なく殴りあげた。アッパーよりも鋭く、振り抜かれた拳はティアマトの顎を外す勢いで殴り飛ばし、山の様な体格のティアマトは僅かな浮遊感を味わった直後、人のいないニップルに仰向きで倒れ伏す。
呆気ない、たった二発でもうグロッキーか。呆れの嘆息を溢す修司だが、当然ながらその態度をエルキドゥが許す事はなく、鬼のような形相で修司に向けてその手から無数の鎖を解き放つ。
殺意と敵意、序でに憎悪も滲ませた鎖は修司を貫こうと迫る。が、寸での所で避けられ、神をも縛る鎖は逆に修司の手によって捕まってしまう。
「ふっ」
「がっ!?」
伸びた鎖を手繰り寄せ、体幹を崩されたエルキドゥは、強制的に修司の間合いまで引き寄せられ、バランスを崩された無防備な腹にティアマトに放った時と同様の蹴りが叩き込まれる。
ティアマトとは違い、エルキドゥは質量も体躯も人類と大差がない。故に修司の蹴りの威力に負け、エルキドゥはニップルの外壁に激突し、森の奥まで吹き飛んでいく。
引き千切られた鎖、魔力の塊でしかないソレは軈て砕けて空へ溶けていく。光の残滓となって消失する魔力を眺めながら、修司は背後から感じる力の動きを感じ取り、振り返る。

「おのれぇぇ、おのれぇぇぇぇッ！　人間風情が、図に乗りおってぇぇぇぇッ!!」
激昂。腹を蹴られ、顎を殴り飛ばされた自称ティアマトは、怒りのままに雄叫びを上げる。その眼光は瞳孔が開き、激しい憎悪に満ちている。
そんな荒れ狂う女神に対し、修司は何処までも平静だった。嘗て自身の主人の為に献身的だった彼女が、此処まで変貌を遂げてしまうという事実に、修司の内心は呆れと哀れみで満ちていく。
「なんだ？　人間に虚仮にされるのがそんなに気にくわないのか？　自分は一方的に人間を攻撃する癖に、いざ反撃をされると激昂とか、デカイ図体の割に器が小さいんだな」
「黙れ、羽虫がぁっ！　本気で激昂した女神の恐ろしさ、思い知らせてくれる！」
激昂し、怒りのままに力を奮うティアマトは、自身の髪と同一化した蛇の顎を開き、其処から石化の呪いを込めた閃光を放ってくる。対空砲火、そんな言葉が思い浮かぶ程の弾幕の濃さに一瞬面食らう修司だが、その攻撃は何処までも杜撰で、修司という人間を狙い撃ちにするには、些か以上に雑だった。
避ける。自身に向かって放たれる面制圧の光線を、修司は難なく避けていく。その様子はまるで舞いに近く、光線や伸びる頭髪の蛇の噛み付きを、わざと寸での所で回避する様は、その名の通り舞空術を顕していた。
「おのれ、羽虫ごときが、ちょこまかとォッ！」
何れだけ砲撃を放ち牙で噛み付こうとも、全く捕まる様子のない修司にティアマトの苛立ちは募っていく。創世の神たるティアマトが、脆弱な人間に翻弄されている。その事実が復讐の女神である彼女の神経をこれでもかと逆撫でる。
しかしティアマトは、何も無意味に攻撃しているだけでは無かった。自分の攻撃が完全に見切られているのは間違いなく事実だが、依然としてティアマトと修司の間には覆されないある差が残っている。
それは……体格。魔獣の女神として顕現を果たした自分と、ただ

の人間である修司との間には決して覆らない素の肉体の大きさが存在している。相手が逃げるのを得意としているのなら、逃げる場所を狭めれば良いだけの話だ。魔獣の女神ティアマトは、怒りに満ちた形相の裏でほくそ笑み、獲物を追い詰める策を講じた。

――――軈て、ティアマトの攻撃は縦横無尽の全方位からではなく、生物にとって最も死角になりやすい頭上から降り注ぐ様になってきた。この時点で修司は自称ティアマトの狙いを看破しているが、敢えて乗ってやることを選び、されるがままに地上へと落ちていく。軈て修司の逃げ場はニップルの街並みに移り、絶え間なく降り注がれるティアマトの攻撃を避ける空間に限りのある地上へ移っていく。

好機。空に浮かぶ修司(羽虫)を地上へ追い詰めたと確信したティアマトは、獰猛な笑みを浮かべて自身の尾を振り回す。ニップル市にある建物なぞ気にも止めず、津波の如く迫る尾で引き摺り潰そうと、女神ティアマトは嘲笑を浮かべる。

これで、奴も他の人間同様潰れて生き絶える筈。すぐ其処まで迫る修司の死を前に、次はあのマスターの小娘をなぶり殺してやろうと画策――――するのだが。

「なんだよ。もしかして、これで俺を仕留めるつもりだったのか?」

「な……に……?」

迫る巨大な壁。ニップルの建物を押し潰し、津波となって押し寄せる魔獣の女神の尾を、修司は片手で防いで見せた。尾に触れる奴の感触、其処から伝わってくる強大な力の奔流に、今更ながらティアマトは驚愕した。

こんな事があっていいのかと、ただの人間が、物理法則すら置き去りにしている膂力を持ち合わせているという事実を前に、この時、魔獣の女神は確かに恐怖を抱いた。

「さて、そんじゃ……いっくぜぇ!」

「っ!?」

引き摺られる。体格差において十倍以上の格差のある自分が、一人の人間の手によって力負けをする。屈辱的で受け入れがたい現実、しかしどんなに拒絶しようとも、魔獣の女神がこれに抗える術は無かっ

た。
　軈て修司の体に纏う光は消え、代わりに赤い炎が噴き出す様になっていく。
　界王拳。人が発する純然たる膂力で以て修司は自身の１０倍以上の大きさはある魔獣の女神を振り回す事に成功する。緩やかだった回転は徐々にその勢いを増していき、軈て竜巻の如き突風を生み出していく。
「そうら、ウルクの街へ一名様――――ご案内！」
　そして遂に手を放した修司は、北壁に向けてぶん投げる。遥か空の彼方へ飛んでいく自称ティアマト、悲鳴を上げる彼女を追って、修司もまた追走していく。
　全ては魔獣の女神に敗北を突き付ける為、立香達のいる北壁にて、一先ずの決着を付けに向かうのだった。

◇

「よし、全員無事だね。ウルクの兵士諸君も併せて、死傷者はゼロだね!?」
「まだ修司さんが残っているよ！」
　マーリンの魔術のお陰で、どうにかニップル市から逃れた立香達は、レオニダスが防衛する北壁まで戻ってくる事に成功した。
　とは言え、ニップル市は壊滅。其所に住まう人々は既に魔獣達の巣に連れ去られ、今はもうどうなっているのか見当も付かない。魔獣の

エサにされているのか、それとも別の用途として使われているのか、想像すら憚れる。
　自分の無力に打ちのめされるが、それで参っている訳には行かない。すぐにも立香は賢王にニップル市での出来事を報告しなくてはならないし、ニップルに残った修司の事だって気掛かりだ。
　如何に修司が常識はずれた強さを身に付けたと言っても、相手は神霊と神造兵器。侮って掛かるには危険が過ぎる相手だ。
「お願いマーリン、修司さんの助けになってあげて！」
「おぉっと、そうキタカー。あー、うん。君のお願い事なら吝かでは無いけど、今回に限って言えばちょっと厳しいかなぁって……」
「ど、どうして？」
「詳しいことは言えないけど、今の私は意識を手放してはいけない状態にあるんだ。対するあの女神は石化の呪いを得意としている。そんな彼女と私とでは、致命的に相性が悪い」
　だから、自分では彼の助けにはなり得ない。立香の願いを聞き入れない事を残念に思いながら、それでも出来ないと口にするマーリンに、立香はそれならばと思考を巡らせる。
「ドクター！　修司さんの状態はどうなってる!?　無事？　石にされてたりとかはしてない？」
『うん。その事なんだけどね……立香ちゃん、どうか落ち着いて聞いてほしい』
　カルデアにて立香だけでなく修司のバイタルを確認しているロマニ達なら、離れた場所に位置する修司の状態も大体なら把握出来ている筈、其処から情報を解析し、現場の戦況を整理しようと意気込みを見せる立香だが、対照的にロマニの表情は……珍妙なモノだった。
　引き吊っている。悲観的ではなく、楽観的でもない。俯瞰的に観察している状況で、信じられないものを見たような……そんな、どうすることも出来ない状況。
　ハチャメチャが、押し寄せてくる。頬を引くつかせて笑っているロマニを見て、立香も何となく察した。
『来るよ』

瞬間、爆撃。上空から途轍もなく巨大なモノが落下し、衝撃が魔獣戦線を襲う。多くの魔獣達が下敷きになる中、人類側は牛若丸や弁慶達が事前に気付いていち早く退避していた為、怪我人こそは出ても落下してきたモノに押し潰される者はいなかった。

そして、軈て収まってくる砂塵の中、横たわっているソレを見て兵士達は絶句する。何故ならそれは先程まで、ニップル市に現れたとされる巨大な魔獣の女神に他ならないからだ。

「おのれ、おのれ、おのれ、何処までも愚弄するか。私を、神たるティアマトを！」

全身に傷だらけの体が、次の瞬間には塞がっていく。恐らくは聖杯の加護による超再生の能力だろう。厄介なモノだが、不思議と立香達は差程脅威とは思えなかった。

何故なら――――。

「悪いな。女神の本気とやらが気になってついからかってしまった。気に障ったのなら謝るよ、それで？　何時になったらその本気が見れるのかな？」

何処までも挑発的で、傲慢な態度。神に対して何処までも冷酷になれる男が、地に這いつくばる女神の下に舞い降りた。

「き、貴様ぁッ!!」

激怒、憤怒、憎悪、殺意。ありとあらゆる負の感情が目の前の巨大な女神から噴き出してくる。その怒気に充てられた兵士達は身をすくませ、多くの者が恐怖に震え上がっている。何故、彼は態々此処に連れてきたのだ。傍迷惑になりかねない修司の所業にマーリンがどうしたものかと悩んだ時。

「なに、そう怒るなよ。今日は俺からアンタに素敵なプレゼントを用意したんだからさ」

プレゼント。魔獣の女神ティアマトを此処へ連れてきたのは素敵なプレゼントを贈る為だと宣う修司に、ティアマトの額には大きな青筋が浮かび上がっていく。何処までも神をも虚仮にするその態度、もはや八つ裂き程度では済まさない。憤り、激昂するティアマトを前に修司は得意気に指を鳴らした。

「さて、それじゃあロマニ。例の方々をマイクの前に連れてきてくれ」
『いや、確かに僕達人類が神々に勝つには手段を選んではいられないと思うけど……本当にやるのかい？』
「勿論、その為にこのデカブツを此処まで運んだのだから」
通信越しで、ロマニが大きな溜め息を吐く。どうなっても知らないぞという台詞と共に、別の誰かとすれ違う。
「いい加減にしろォッ！　私を何処まで虚仮にすれば気が――――」
『あら、何かしら？　とっても恐ろしい声がするわね。私（ステンノ）』
『そうね。怖くて泣きそうだわ。私（エウリュアレ）』
「――――」
時が止まった。通信から聞こえてくる音声に、ティアマトを自称する女神はその動きを停止させる。手も足も、尾も髪も、それまで抱いていた筈の全ての感情が、聞こえてきた声に凍り付かされる。
『でも、何処かで聞いた気もするわね。一体何処のどちらなのでしょうか？　気にならない？　私』
『そうね、とっても気になるわ。じゃあ、一緒に聞きましょうか、私』
『『そこの女神様、貴方のお名前を聞かせて頂戴』』
音声から聞こえてくる蠱惑的な声、知らない。今の自分は知って良い訳がない。しかし、どんなに否定しても彼女達の声が自分の心をざわつかせてならない。
「あ、あぁ……あああああっ!!」
途端に狼狽え、のたうち回る魔獣の女神。そんな彼女を前に……。
「さぁ、感動のご対面だ。存分に楽しめよ」
白河修司は、怒りに満ちた微笑みで見詰めていた。

その１３８　第七特異点

幼い少女、通信から聞こえてきた声はそんな年端のいかない少女像を想起させた。触れれば手折れてしまいそうな、そんな儚い印象を聞く者に抱かせる。

兵士達は皆、懐疑的に首を傾げていた。何故、この様な少女の声が聞こえてくるのか。何故、魔獣達を相手にしなくてはいけない場面で、少女の声を耳にするのか。

何故、少女の声を聞いた魔獣の女神が狼狽えているのか、頭を両手で抱える魔獣の女神を前に、兵士達は魔獣達との戦をしているにも拘わらず、唖然としていた。

戦場のただ中で呆然としている兵士達、何時もなら魔獣達はそんな隙を晒す人間達を嘲笑いながら、その喉元に牙を突き立てていた筈。

しかし、そうはならない。何故なら、魔獣達もまた自分達を生み出した母たる女神の様子に唖然としているからだ。この様な母は見たことがなく、人類に対して無尽蔵とも呼べる怒りと憎しみを募らせていた筈の女神の姿は其処にはなく、衆目に晒されているのは嘗て己が犯した罪に直面する罪人のソレ。

「や、やめろ。その声を、妾に、聞かせるな、やめろ。止めてくれぇぇぇ……！」

後退り、のたうち回る。其処にあるのは哀れで惨めな罪人の吐露であり、其処には魔獣の女神としての威厳など欠片も残されてはいなかった。

「おいおい、何を勝手に逃げようとしてるんだよ？　通信越しとは言え、折角の姉妹水入らずなんだ。遠慮なんてせずに、もっと話していけよ」

「……以前から思っていたけど、彼ってば敵対する者に対して容赦が無さすぎない？　幾ら相手が見知った相手でも、其処までする普通？」

「あの、その……恐らく修司さんは私達を守る為にああ言った対応をしているのではないでしょうか？　相手側の関心を自分に向けさせる為に、敢えてそう振る舞っているとか」
「へ、ヘイトを集めているって事？　まぁ、確かにそう言われるとそう思わなくもない――――のかな？」
『いや、アレは単に相手を追い詰める為に手段を選んでいないだけだ。戦いは滅法得意な癖に、手段を選ばない時は本当にえげつない手段を取る。特に、奴は周囲に被害を出さない為に相手の心をへし折る傾向があるからな。そんな奴の怒りに触れた事で再起不能にされた魔術師を、私は何人も見てきた』
　魔獣の女神、その正体と弱点を瞬時に見破った修司の相手のトラウマを抉る戦法に、マーリンは軽く引いていた。相手を追い詰める為なら実力行使だけでなく、こう言った搦め手すらも遠慮なく使ってくる辺り、余程魔獣の女神を警戒しているのだと立香とマシュは疑問に思いながらもフォローするが、唐突に話しに割り込んできたエルメロイⅡ世によって両断される。
　敵対する相手に一切の慢心も驕りも見せず、また容赦もしない。その徹底した敵対者への潰し方は流石英雄王の臣下だと感心したい所だが、この場合、果たして素直に喜んで良いものか。彼と敵対した事で魔術師としての生き方を終えた者を何人も見てきたエルメロイⅡ世にとって、正直反応に困る話だった。
　尤も、修司に喧嘩を売ってきた多くの魔術師が身の程を弁えない愚か者ばかりだから、同情はしないしするつもりもない。
――――閑話休題。
『今、Ｄｒ．ロマニは双子姉妹の対応で忙しくてな。現在私が代理として勤めさせて貰っている。さ、今の内に君達も少し下がれ、女神の逆鱗に触れたのだ。彼奴のハチャメチャに巻き込まれる前に、兵士達と共に距離を取れ』
「では、そうさせて貰うとしよう。Ｍｒ．エルメロイ、君とはいつか良い酒が飲める気がするよ」
『止めろ。お前が言うと縁起でもない』

エルメロイⅡ世の指示に従い、二人して魔獣の女神から距離を取る。北壁の側まで移動し、レオニダスと合流を果たして立香達は、未だに呻く女神を見る。
「き、貴様ぁ、許さん。許さん……ぞぉ！　この様な事をして、只で済むと……」
『あら怖い。そんな怖い目を向けられたら、堪らず石になっちゃいそう。ねぇ、私（ステンノ）』
『石にされて、飾られるのかしら？　でも、貴方には愛でられたら、触れただけで砕けてしまいそう。ねぇ、私（エウリュアレ）』
「ち、違っ、私は、そんなつもりは――――」
憎き人類、その身を八つ裂きにして尚余りある憎悪は既にこの胸に燻っている。なのに姿も見えず、声しか聞こえてこない双子の女神に魔獣の女神は狼狽し、身動きが取れない。
そろそろ、余興は終わりにしてやろうか。今は女神の気紛れで協力してくれているが、後日どんな無茶振りしてくるか分からない以上、此方としてもあまり勧められない手法だ。
嘗て体験した聖杯戦争にて、当時参加していた英霊達の生い立ちや経験、それらを調べて分かったからこそ、この様な手段が可能となった。敵対する英霊のトラウマとなる相手、事前にそんな相手を召喚出来ていたからこそ出来た精神攻撃。
我ながら誉められたやり方ではないが、仮にも相手は神。手を抜かず、出来る限りの方法は積極的に取り入れるべきだろう。とは言え此処まで痛め付ければ、後は自分一人でこの女神は対処可能だろう。
元々そのつもりだったし、今回魔獣の女神を精神的に追い詰めようとしたのは、奴が原初の女神の名を騙っているからだ。奴はティアマトという創世の神の一柱ではない、元は女神アテナによって姉妹共々故郷を追われた……哀れな少女だったのだから。
「其処までにして貰おうか！」
「っ！」
双子の女神に礼を言い、後日埋め合わせをする事を約束して通信を切ろうとした所へ……上空から緑の人、エルキドゥが強襲する。振

り下ろされた手刀に合わせ、修司も手刀で迎撃する。
遥か上空からの襲撃により足場は凹み、半径数メートルに渡って陥没していく。重い。先程蹴り飛ばした感触とはまるで違う重み、自身の質量まで変えられるエルキドゥにある種の感心を抱く修司だが、それでも自分を抑え込むには力が足りていない。
全身に纏う炎を赤く染め上げ、自身の膂力を底上げさせた修司は、腕を振り抜いてエルキドゥを弾き飛ばす。
「全く、随分と勝手な事をしてくれるじゃないか。流石は旧人類、やることが卑劣極まりないね」
「相手の力を削ぐ為ならなんだってやる。その事を理解できていないのなら、それは単にお前の想像力が乏しいだけだろ？」
貶してくるエルキドゥに対して鼻で嗤う修司、その何処までも相容れない様子の二人に更なる戦いを予感した兵士達は自然と修司から離れていく。
「良いだろう。そんなに死にたいのなら、お前から殺してやる。お前の頸をギルガメッシュへの土産にしてやる」
「おいおい、あまり実力にそぐわない台詞は口にしない方がいい――――弱く見えるぞ？」
瞬間、エルキドゥは駆ける。その身に殺意と憎悪を滾らせ、自分達を嘲笑する修司の頸目掛けて、その手を振り抜こうとする。
しかし。
「止めよ、キングゥッ！」
「っ!?」
今まで黙していた女神、自称ティアマトが頭を抑えながら立ち上がる。憔悴しきった顔、明らかに体調不良な魔獣母神にキングゥと呼ばれた緑の人は急停止。見上げた先に見えるその顔に、キングゥなるエルキドゥ擬きの彼の者は戸惑いの色が滲み出る。
「その者に……手を、出すな！　その人間は……私が、殺す！」
怒気が形となって立ち上ぼり、その歪んだ眼光からは何処までも人類に対する憎悪と殺意が滲み出ていた。あれだけ精神を揺さぶられたのに、それでも立ち上がる魔獣母神に修司は素直に感心する。

――力が、収束されていく。魔獣母神を中心に魔力が迸り、髪から伸びる無数の蛇の口からドス黒いエネルギーが集約されていく。
紛れもない魔獣母神の本気、大気が震え上がる程の魔力量に周囲の兵士達はざわつき始める。そんな尋常ならざる母の雰囲気に圧され、魔獣達とエルキドゥ？　は魔獣母神から離れていく。
「……へぇ…それが、お前の全力か。良いぜ、お前がその気で来るのなら、俺も全身全霊で相手してやる」
「人間が、神の威光を知るがいい！」
瞬間、閃光が放たれる。追い詰められておきながら、それでも魔獣達の母であろうとする彼女。本来の名を知る修司としては、そんな彼女を放置しておくのは忍びない。荒療治として嘗ての姉妹で対応させたのはいいが、その成果は芳しく無かったようだ。
「……悪いな女神様。アンタ等の妹、自分を取り戻すのは無理そうだ」
『――――ええ、そうでしょうね』
『あの子に掛けられた呪いは、生半可な事では解けやしない。悔しいけど、これが限界でしょうね』
双子の姉妹の呼び掛けを以てしても、未だに自分を取り戻せていない彼女を不憫に思うが、生憎と此処で立ち止まる訳にはいかない。敵対する以上、喩え知り合いの身内でも、容赦はしない。

折角協力してくれた双子の女神に感謝と侘びを言いつつ、修司は気を解放させる。迫り来る黒き極光、後ろには人類最後の防壁。
負ける訳にいかないのなら、押し通すまで。
「かめはめ――――波ァァァッ！」
迫り来る黒き極光に対し、蒼白い極光が激突する。拮抗するかと思われた力の鬩ぎ合いは、立香達の予想に反して呆気なく崩れ去る。
軽い。修司がこれ迄戦ってきたヘラクレス、クー・フーリン、カルナといった英雄達の一撃と比べればなんて軽く、そして浅いのだろうか。
僅かな鬩ぎ合いの中、修司は確信した。人類を脅かす三女神、その

中で一番制するのに容易いのは、間違いなくコイツだと。
「ぐ、ぐぐぐぐ……」
「――本気でこんなモノかよ」
瞬間、力を振り絞る魔獣母神に対して、これ以上戦っても意味はないと判断した修司は、界王拳を解放させて一気に黒い閃光を押し返していく。
「だァァァッ!!」
「っ!?!?」
自身の放つ憎しみの光が、理不尽の如き光によって塗りつぶされていく。こんな事があっても良いのか、襲い掛かる不条理を前に、しかし魔獣の女神がこれ以上抗える事もなく。
魔獣の女神は、光に呑まれていった。

◇

「――まさか、今のを受けて生きているとはな。流石は神、しぶとさも一級品か」
全身を光で焼かれ、黒焦げになりながらも息のある魔獣母神に、修司は呆れながらも感心の言葉を口にした。確かに今の一撃は本気でなかったとしても、充分全力と呼べるモノだった。それこそ、魔神柱程度なら跡形もなく消滅させられる程の威力が込められていた。
それでも原型を保ち、生きていられるのは倒れ伏す女神の元々の生命力か、それとも別の要因か。仰向けに倒れる女神をマジマジと観察していると、修司はふとあることに気付いた。
「……あの光は、聖杯か？」

突然、魔獣母神を見覚えのある光が包んでいく。それはこれ迄何度もレイシフト先で回収してきた特異点の原因、膨大な魔力を保有しているリソース源――――聖杯。
アレを回収したらこの特異点は終了か？　だとしたら、幾らなんでも簡単すぎる。あの陰険な魔術王が、果たして最後にして最初の特異点として選んだこの特異点に、その様な回答を残すだろうか。
……色々と腑に落ちない点が多い今回の特異点、何か重要な見落としはないのか注意深く観察していると、ふと違和感に気付いた。
確かに、魔獣母神から聖杯の光が再生能力として現れているが、女神自身から溢れているようには感じない。どちらかと言えば流れ込んで来る力を受け取っているような、そんな不自然さが感じられる。
なら、聖杯の所有者は他にいるのか？　周囲を見渡して聖杯の真の保有者を気で探すが……既に、その頃には魔獣母神の傷は完全に癒えていた。
「おのれぇぇ……おのれぇぇ……！　何処までも、何処までも私を愚弄しおってぇぇ……」
しかし、喩え傷は癒えても受けたダメージそのものを無かった事には出来ないらしく、魔獣母神は明らかに疲弊していた。
立ち上がり、憎悪をつのらせても、以前より覇気のない女神に修司はただ冷たい眼で見上げている。
（それとも、コイツを倒せば出てくるのか？　コイツと繋がっている本当の聖杯の所有者に。仮にそうだとしても、その場合ソイツは何処にいる？　何処に隠れている？　いや、それとも出てこれないのか？）
見上げて、魔獣母神を観察しても、修司の頭の中で巡らせているのはは本当の元凶の存在、その有無について。
魔獣母神が聖杯の力で再生した時、それは紛れもなく外部からのモノだった。咄嗟の事だったので出本を特定する事は出来なかったが、この女神を完全に回復させるには相応の力を必要とする筈だ。
女神を癒す女神。聖杯の力で行うにしても、同じ神の中でその様な施しをするには余程神としての格が上でなければ、難しいのではない

か？
　魔術や神秘、神々の法則なんて知る由もない修司だが、どうもこの特異点には色々と裏がありそうな気がしてならない。
（これは、皆と話して相談した方がいいな。出来れば王様の意見も交えて……となると、今すぐコイツを倒すのは止めた方がいいのか？）
　もし、この自身をティアマトと思い込んでいる蛇の女が洗脳された状態にあるのなら、術を掛けた者とそうさせようとする者が必ずいる筈だ。そして、それは自らをエルキドゥと名乗る緑の人にも言えた事。
　仮に此処で魔獣母神を倒してしまったら、果たしてその後何が待っているのか。単に聖杯を回収して終わるのか、それとも何かが起きるのか。
「母さん、ここは僕に任せて、一度神殿へお戻りください」
「っ！　キングゥ、この私を母たるこのティアマトに逃げろと申すのか!?」
「子供の言うことくらい素直に聞き入れろよ。子供の負担になることが、お前の望みなのか？」
　そうこう考えている内に、エルキドゥ改めキングゥが修司と女神の間に割って入ってくる。これ幸いに修司も撤退する事を促すが、肝心の自称ティアマトは退く気はない模様。
　倒すことは出来るのに、それを縛られるのはなんと不自由な事か。今回の件で確かめるべき事、報告すべき事は沢山出来たと言うのに、この戦いを終わらせる口実が修司には無かった。
　もういっそのこと、此処に飛ばした時のようにもう一度尾を持って投げ飛ばしてやろうか。未だに此方を見下ろして睨み付けてくる女神に、修司もまたガン飛ばす。
「母さん、僕達の相手はそこの人間もそうだけど、何より他の女神も警戒するべきだ。ここで無理に戦って勝利したとしても、それは他の女神に付け入らせる隙になりかねない。旧人類を確実に滅ぼす為には一度万全まで整わせる必要がある」
「――――」

「母さん、僕達の母よ。どうか今は堪え、苦渋を飲み干して欲しい。耐え難い時を耐えたその暁には、僕がその人間の頸を取ってご覧にいれましょう」
「……良いだろう。我が子に免じ、此処は退いてやる。しかし十日の後、我等は貴様等人類を滅ぼすべく、総力戦を仕掛ける。覚悟するがいい」
「……彼処まで無様を晒しておいて、まだ強がれるのか。すげぇな神の胆力、それだけは素直に称賛するよ」
キングゥに諭され、今は退くことを選んだ魔獣母神は、渋々ながら踵を返して自身の巣へと戻っていく。その途中、修司の煽りとも呼べる台詞を耳にした所為か、一度だけ物凄い形相で睨み付けてきたが、その都度キングゥの献身の説得によって引き返す事に成功し、他の魔獣達も森の奥へと引き返していく。
こうして、ニップル市とそこに住まう人々の解放という任務こそ果たせなかったものの、神の迎撃に成功したという事実は瞬く間に兵士の間で伝播し、北壁には勝鬨の声で埋め尽くされていった。
「――やれやれ、どうにか凌げたか。全く、彼のハチャメチャブリには色んな意味で冷や汗かいたよ」
「……」
「あの、アナさん、大丈夫ですか？　酷く顔色が悪そうですけど？」
「大丈夫、私の事は心配しない――グハァッ！」
「ちょ、アナ!?　大丈夫!?」
今回の立役者である修司が兵士達によって胴上げされている一方、マシュの盾に隠れていたアナが吐血を吐いて倒れるなどのハプニングが発生したが。
今回の作戦によるウルク側の被害は、最小限の範囲に留まる事になるのだった。

その139　第七特異点

「――ほう、十日後か。魔獣の女神は確かにそう口にしたのだな？」
翌日、ティアマトを僭称する魔獣母神を撃退した修司達は賢王ギルガメッシュの許しの下、その日一日戦いの疲れを癒す為、北壁に駐屯している兵士達全てに休むための猶予を与える事とした。
女神を退けたという事実は、北壁から瞬く間にウルク中へ知れ渡る運びとなり、ジグラットの王の間を除き大層な騒ぎになったとか。特にその最大な功労者である修司は、女神を退けた勇者として既に英雄扱いをされている。
そんな彼等は現在、賢王の呼び出しを受けて御身の前へと集結している。其処には牛若丸や弁慶の姿もあり、唯一レオニダスだけは戦線を維持するために北壁へ詰めて貰っていた。
「はっ、魔獣達の襲撃数が昨日と比べて劇的に減っている事から、恐らくは間違いないかと」
「数もそうですが、質の方も同様に低下傾向にあるかと思われます」
「ふむ……」
十日後、修司の猛攻を受けた魔獣母神は十日後を決戦の日取りとし、現在は北の森の更に奥、魔獣の女神が穴蔵として建てた神殿の奥深くへ逃げ込んだとされている。
その為か、北壁に襲ってくる魔獣の数は劇的に減少し、昨日と違って負傷者達の報告も聞いていない。魔獣側の勢いを完全に殺せた事に一時は喜んだ兵士達だが、十日後――より正確に言えば今日から九日後――で待つ決戦を思えば、それは嵐の前の静けさに思えた。
恐らくは、現在この空白の時間が今後の分水嶺となるのだろう。そもそも今回の作戦ではニップル市の解放を失敗している事から、未だに人類が完全な勝利をしたとは言えない。だからこそ魔獣戦線を支える兵士達の浮き足は翌日まで持ち越す事はなかったのだ。
「それで、自らティアマトを名乗る不埒者の正体、カルデアの見解はど

うだ？　許す、話してみよ」
『そうだね。修司君の証言もあって、魔獣母神の正体は判明したよ。あの女神の正体はメドゥーサを神霊として昇華させた霊基、その名は――ゴルゴーン』
　ゴルゴーン。古代ギリシャ神話にてとある女神の怒りを買ったとして、形なき島へと追放された三姉妹の一柱。度重なる人間達からの襲撃を退け、それでも迫害を受けた怒りから芽生えた復讐の女神となったモノ。後に彼女はある悲劇を引き起こし、その心に永遠に消えることのない瑕を刻んでしまった。
　その果てに生まれたのが、あのゴルゴーンなる女神。しかし、そんなゴルゴーンが魔獣を生み出したとされる逸話は存在せず、故に魔獣を生み出す権能である〝百獣母胎（ポトニア・テローン）〟は聖杯の力によって得られたモノだというのが、カルデアとマーリンの見解だった。
「全く、女神に猶予を与えるとは、少し慢心が過ぎるのではないか？　なぁ、白河修司よ。幾ら訳があるとは言え、神を見逃すのは少々貴様らしく無いのではないか？」
　カルデアとマーリンの見解を聞き、一先ずゴルゴーンが十日後迄に襲来してこない事を確認したギルガメッシュ王は、その顔に僅かな喜悦の笑みを滲ませながら修司を問い詰める。
　また王の悪い癖が出たと、頭を抱えるシドゥリを余所に修司は申し訳ないと断りを入れて、頭を下げる。
「スミマセン。独断でゴルゴーンを逃がした事、深く反省しています。許されるのならば今すぐにでも奴等の巣に向かい、女神の頸を討ち取って参ります」
「ふっ、ウルクジョークよ、本気にするな。真に受けてこの大地を焦土にされたら、それこそ笑い話にもならんからな。良いな、時が来るまでゴルゴーンに付いては静観しておけ」
「――ウッス、分かりました」
「では、続いて貴様からも話を聞こう。復讐の女神ゴルゴーン、奴と戦った事で貴様は何を見て何を感じ、何を考えた？　余すこと無く我に話してみろ」

「……憶測や推測が大分混じっているけど、それでも良ければ」
「許す。申せ」
魔獣母神の正体をゴルゴーンだと看破し、次に賢王が意見を求めたのは復讐に燃える女神を一方的に叩きのめした男、白河修司だった。真摯たる意見を求めてくるギルガメッシュ王に、あくまで自分のは推測や憶測を交えての可能性でしかないと断りを入れ、それでも構わないと促してくる賢王に、修司は言葉を選びながら話し始めた。
女神ゴルゴーンから感じた違和感。ロマニやマーリンは聖杯の力によって百獣母胎の権能や尋常ならざる再生能力を会得したと解析しているが、修司の見解は少々異なっている。
確かにティアマトの権能を得たのは聖杯の力によるものが大きいだろう。メソポタミアの大地に広く根付いている事から、その凄まじい繁殖能力は疑いようがない。だが、修司は聖杯を取り込んでから得た力というより、聖杯という力から与えられたモノではないかと考えている。
与えられたと言うのなら、与えた者も同時に存在している筈。あの時感じられた断片的な力から聖杯の本来の保有者まで特定する事は出来なかったが、修司はその保有者こそが今回の特異点の原因に深く関わっているのではないかと睨んでいる。
「これは、あくまで個人的な見解だ。けど、これが一番しっくりくるんじゃないかと、俺は睨んでいる」
『うーん、確かにそう言われてしまえば納得出来る話だね。相手はあの魔術王、この特異点に絶対的な自信があるみたいだし、そのくらいの搦め手は考えられるか』
修司の見解に同意を見せるロマニ、ゴルゴーンは聖杯の力を与えられてこそいるが、聖杯そのものを保有しているとは考えられない。魔術王が人類には決して超えられない壁として用意した第七の特異点、奴の狡猾さを考えれば修司の見解は的を射ている様に思えた。
「つまり、君はゴルゴーンを倒すだけでは全てが解決する訳ではないと、そう睨んでいるんだね？」
「脅かすつもりはないが、端的に言えばその通りだ。あの女神を倒す

こと、それ自体は簡単だ。けど、その先に待つ何かを思うと、素直に手出しする事は躊躇する。て言うのが、俺の本音だ」
「ふん、ならば話は早い。ゴルゴーンめが定めたと言う猶予の期限まで、可能な限り手立てを募らせるまでよ。幸いなことに兵の損害は想定より低い、その補填の埋め合わせは我の仕事よ」
「……スミマセン、ギルガメッシュ王。俺の独断で仕事を増やしたみたいで」
事情がどうあれ、自分の判断で倒すべき女神の一柱を見逃したのは事実。三女神の一角を倒す切っ掛けを自ら捨てることとなった咎は大きい、頭を下げて非を詫びる修司に賢王は鼻で笑う。
「はっ、思い上がるなよ。元よりこの戦いは我等のモノ、余分な貴様達がもたらした弊害など取るに足らん。だが、それはそれとして貴様等にも相応に働いて貰う必要があるがな」
初めて出会った時から今日まで、ギルガメッシュ王はカルデアの戦力を余分な存在としか認識しておらず、故に彼等を其処まで叱責するつもりはなかった。
元々この戦いはこの時代に生きる人間達で乗り切るべきモノで、お前達はその来訪者でしかない。そう語るギルガメッシュ王だが、その言葉の端には確かな人としての暖かさがそこにはあった。
そして、それはそれとしてと修司達に仕事を任せる強かさも、相変わらずである。
何れにしても、残る猶予は九日。次のゴルゴーン達魔獣の軍勢を相手に万全以上の体勢を整わせる為に、やるべき事はまだまだ多い。
「――でも、私達に出来る事って何があるんだろ？」
「やはり、これまで通りにシドゥリさんからお仕事を戴く形式なのでしょうか？」
復讐の女神ゴルゴーンとの決戦を控え、自分達に出来る事とは何なのか、首を傾げる立香とマシュに賢王ギルガメッシュは不敵な笑みを浮かべ、ある任務を任せる。
それは……。

◇

「そう、ですか。女神イシュタルを仲間に……確かに、話を聞く限りそれが一番効率的なのでしょう」
ギルガメッシュ王から直接賜った新たな任務、それはエビフ山を根城にしているとされる女神イシュタル、彼女を仲間に引き入れるという大胆な内容だった。
確かに彼女の強さは神霊だけあって凄まじく、依り代としている人間の人格もあって比較的話が通じる為、ギルガメッシュ王が用意してくれた策を以てすればそれも可能となるだろう。
途中、彼女を引き入れると聞いた時は修司が凄まじく嫌な顔をしたのだが、これから先に待っている戦いを思えば必要な事だと諭され、渋々ながらこれに承諾することとなった。
明日、日の出と共にマーリンを含めたカルデアの一行はエビフ山を目指して女神イシュタルと交渉をし、戦力の一つとして仲間に加える算段を付ける。その旨を伝えに、修司は現在ウルクのカルデア大使館（マシュ命名）へ訪れ、其処で休んでいるアナへ話を告げた。
「気分が優れないなら、暫くは此処で休むのも手だろう。君の抜けた戦力の穴は俺が埋めるられるからな。ただ、君には少し聞きたい事がある」
「……なんでしょう」
「君は、ゴルゴーンの嘗ての姿。更に言えば……メドゥーサの幼体で間違いないな？」
「……」

確信を突いた修司の物言いに、アナはただ沈黙で返す事しかしなかった。メドゥーサの幼体、それは詰まる所ゴルゴーンに至るまでの蛹であり、幼い頃の少女が二人の姉と共に過ごせた彼女にとっての黄金時代。

女神アテナから呪いを受ける前の姿で現界した彼女、ある使命感を抱いてこの時代に召喚された彼女は、今日までその正体をマーリンや他の神霊を除いて誰にも悟られる事はなかった。

深くフードを被る彼女の額には大粒の汗が流れている。その反応だけで図星を突いたと確信した修司は、アナが体を預けているベッドの横、予め用意されていた椅子に腰掛ける。

「――――俺が確信したのは、ゴルゴーンと相対してからだ。君と奴の気配は剰りにも近い、サーヴァントの召喚システムが時間軸に囚われないモノだとするなら、あり得ない話では無いからな」

サーヴァント。英霊を座から召喚して人類の脅威に立ち向かう者達、その術式には過去や未来といった時間という概念に囚われない性質を持ち、喩え未来に現れる英雄だろうと召喚可能とする規格外のシステム。

英霊エミヤ。嘗ての親友が正義の味方を目指した果てに存在する未来の英雄、彼が未来に現れる英雄だと言うのなら、アナは嘗て存在した反英雄の卵。その在り方は正反対だが、性質は似ている。エミヤという前例があるからこそ、行き着いた結論だった。

アナという少女は対ゴルゴーンを想定して召喚されたサーヴァント、何を以て切り札とされているのかは分からないが、少なくともゴルゴーンに対してアナという少女は鬼札になるに違いないだろう。

「それで、それを知って貴方はどうしたいのです？」

「別に、何もしないさ。ただお前が何かを抱えているみたいで、それを立香ちゃんとマシュちゃんが気にしていたみたいだからさ、話ついでに確かめたかっただけ」

「そう、ですか」

「お前さ、人間嫌いなのは別に良いけどよ。あんまり自分を追い詰めるのはどうかと思うぜ？　お前が人間を嫌っていようと、それ以上に

お前を気に掛ける人間はいる。聞いたぜ？　お前、ちょくちょく花屋の婆さんの所に顔を出しているんだってな？」
「それも、藤丸からですか？」
「うんにゃ、これはマーリン」
　花屋の老婆に心を許し掛けている。その事を突き付けられたアナは、出所は立香かと訊ねるが修司はこれはマーリンからだと否定。あのクソ野郎いつか殺す、アナは強く心に誓った。
「その花屋の婆さんだって、お前の事を心配している。これは強い弱いの話じゃない、心の話だ。それくらい本当はお前にも分かっているんだろ？」
「――――――」
「まぁ、色々口出ししたが、結局はお前が決めることだ。どんな使命がお前の肩に乗っかっているのかは知らないが、それを一緒に支えてくれる奴がいるって事くらい、覚えておいて欲しいってだけの話よ」
「……どうして？」
「あ？」
「どうして、貴方は其処まで私を気に掛けてくれるんです？　私と貴方には其処まで接点は無かった筈だと認識していますが？」
　これ迄、アナは修司に対して無自覚ながら距離を取っていた。何故なら彼は英雄、現代に生まれた最新の英雄で、自分はその英雄に討たれた嘗ての怪物。
　幾ら幼い頃の自分として現界したと言っても、自分を殺した英雄に連なる男と一緒に行動するのは精神的に堪える。故にこれ迄は修司とは明確な距離を空けていた。
　更に言えば、この男はメドゥーサに対して思う所があるらしく、その因縁はアナに推し量れるモノではない。互いに因縁があるのなら、積極的に関わるのは控えよう。それが修司に対するアナの対処方だった。
　そして、対する修司も似たようなモノで、互いに関わるのは慎もうとしていた。アナが年老いた老婆を気に掛ける所を見るまでは。
「あー、まぁ、なんだ。年寄りを大切に想う奴に悪い奴はいないから

な。それだけだ」
「それだけ……ですか？」
「そう、それだけ。でも、それで充分だろ？」
頬を掻き、笑う修司にアナは一瞬目が丸くなった。確かに自分は彼との因縁はあるし、苦手意識は色濃く残ったまま。人間に対する嫌悪や恐怖も簡単に消える事はない。
けれど、それでも誰かを想うのは構わないのだと、アナは知った。それだけでいいのだと、難しく考える頭にスーッと溶けていくのを確かに感じた。
「……私は、其処まで楽観的にはなれません。私は、貴方のように強くはありませんから」
「……そうかよ」
「でも、もう少し、話はしてみようかと思います。折角の……体験ですから」
「……そうかよ」
苦手意識もある。嫌悪もある。恐怖もあるし、もしかしたら殺意だってあるかもしれない。嘗て自身の体験した地獄に比べれば、その切欠は剰りにも小さい。
けれど、それでも切欠は得られた。これがこれからの自分に対してどの様な影響に繋がるのか定かではないが、それでもアナは悪い気はしなかった。
「さて、それじゃあ俺は下に行ってるよ。食欲が出たら君も来るといい。今日の料理当番は俺だからな、楽しみにしているといい」
「……バターケーキはありますか？」
「おお、今朝から仕込んでいたからな。出来映えを楽しみにしていてくれ」
「――え？」
「なんだ？　アレだけ旨い旨いって食ってた癖に、気付いてなかったのか？　お前が食ってたバターケーキ、あれ殆ど作ってたの俺だぞ？」
「――え？」

「初日に出されて旨かったからさ。シドウリさんから作り方を教わったんだよ。で、以降は俺が作ってたって訳」
「――――え〝？」
「いやー、あんなに旨そうに食べてくれるからさ、ついつい作っちゃうんだよ。今日も沢山作っておいたから、遠慮無く食べてくれ」
固まるアナを余所に、修司は気分良さげに去っていく。その後、彼女の中に新たに修司に対する苦手意識が芽生えたのは……また、別のお話。
そして……。

「いやぁぁぁっ!!　私を酷い目に合わせに来たんでしょ！　ゴルゴーンの様に、ゴルゴーンの様に!!」
エビフ山へ訪れた一行、其処で待ち構えていたのは、既にギャン泣きしている女神。
「この鬼、悪魔！　人でなし！　ボッチ！　よくも女神に対して彼処まで酷い事が出来たわね！　人の心とか無いのかしら!?」
「……よし、ぶっ潰そ♪」
「修司さん、落ち着いてぇっ！」
「出来ぬゥッ！」
喚き散らす女神を前に、修司は既に我慢の限界へと達しつつあった。

その１４０　第七特異点

エビフ山。それはシュメル神話の中でも最高峰の魔境、或いは霊峰として記録されており、最高神アンでさえ恐れていた山脈。その昔、アンはエビフ山に執心していたイナンナ――もとい、イシュタルに警告したのだが、イシュタルはこれを拒否。

数多の武器を手に嵐を巻き起こしながらエビフ山の攻略に乗り出した。道中エビフ山からの猛攻撃を受けるが、イシュタルはそんなエビフ山の態度に激昂。逆ギレというレベルでは済まされない居直り強盗を発揮し、エビフ山の息の根を止めた。

以降、人々に〝戦いの神〟としての側面を神々や人間側に見せ付けたイシュタルは、エビフ山を己の縄張りと定め、今も神殿を建てて拠点としているとか。

何とも出鱈目で、負けん気の強い神だ。そもそも山が意思を持つとか、それこそ意味が分からない。神代というのは其処まで出鱈目な世界観なのだろうか。

「――と、まぁエビフ山と女神イシュタルの関係性はこんなものかな」

『しかし、女神イシュタルを仲間に引き入れろとは、ギルガメッシュ王も無茶振りが好きだよなぁ』

荷馬車を引きながらエビフ山という山を昇る理由、それはエビフ山に神殿を構える女神イシュタルを仲間に加えるという大胆なモノだった。ゴルゴーンを倒した後に起こるかも知れないナニか、引き起こされるかも知れない災厄を思えば、今は一つでも頼もしい戦力が欲しい所。

ゴルゴーンやケツァルコアトル程ではないにしろ、イシュタルも神性として見れば相当な力を持っているとされており、修司を除いたカルデア側も可能とならば是非とも引き入れたい人材だ。

ただ、賢王ギルガメッシュは女神イシュタルに大した期待は持っておらず、王が気に掛けているのはイシュタルが使役しているとされる

天の牡牛(グガランナ)が、心強い神獣とされているからだ。
グガランナ。一説にはその蹄の一撃は大地を砕き、大河すらも干上がらせるという絶対的な力を持つとされている。イシュタルが父神から泣き落としで半ば強奪した神々の牡牛、女神イシュタルを引き入れるという事は、グガランナを引き入れると同じ。
故にギルガメッシュ王は荷馬車に詰め込んだ秘策を以て、立香達に女神イシュタルの懐柔を命じたのだ。
「王様の無茶振りはいつもの事とはいえ……マジかぁ、引き入れちゃうのかぁ。いや、言わんとしている事は分かるんだけどさぁ」
「しゅ、修司さん？　その、大丈夫ですか？」
賢王ギルガメッシュの滅多に見せない直々の命令。それを下された多くの兵士達は同情し、シドゥリは誉れある仕事だと褒め称えた。神霊とは言え神を仲間に引き入れるというお伽噺みたいな任務に緊張する立香だが、修司の心中はそれどころではなかった。
嘗て同じ師から中華拳法の八極拳を学んでいた同門。遠坂凛はその八極拳の姉弟子で、同じ学校出身。卒業後も何かと腐れ縁の続く……矢鱈とやらかすことの多い問題児。
そんな遠坂凛が、女神イシュタルの依り代として顕現している。一体、どういう運命でどんな確率でその様な事態に陥るのか。これも人理焼却による影響か、そんな問題児をこれから頭を下げに行って仲間になるよう説得しなくてはならないと思うと、修司は憂鬱で仕方がなかった。
「ハッハッハ、君程の男でも苦手とする異性がいるとは思わなかったな。いや、だからこそかな？　ジャガーマンなる女神も君の知り合いだと聞くし、案外そう言う星の下に生まれたのかも知れないね」
「おいやめろ。マジでやめろ。折角考えないようにしていたのに考えちゃうだろ」
自分の知り合いが神霊の依り代として現界する。それは修司にとって他人事ではなく、既に姉弟子と嘗ての恩師が顕現している以上、マーリンの言っている事は不吉な予言に聞こえる。
「もし、もし他にも俺の知り合いが来てみろ。絶対巻き込むからな。

エミヤとかエミヤとかエミヤとか、絶対何がなんでも巻き込んでやるからな」
　もし、もし仮に他の神霊が地元の知り合いを依り代として現界していたら――なんて、考えるだけでも気が滅入る。
『いや、流石にそれはないだろう。確かに修司君の知り合いが二人も神霊の依り代として顕現しているのは驚きだが、それは途方もない確率の筈だ。今後、仮に神霊が君達の回りに現れたとしても、それが修司君の知り合いである可能性はゼロに等しい筈さ』
「だ、だよな！　そうだよな！　こんな偶然、そうそうあることじゃないもんな！」
　尚、今後カルデアに破壊神の妻や天秤の女神、二柱の愛の神のそれぞれに修司とエミヤの共通の知人が依り代として召喚される事になり、ちょっとした騒動になるのはまた別のお話。
『ともあれ、女神イシュタルもそうだが彼女の従えるグガランナもかなり強力な神獣だ。仲間に引き入れる事、それ自体は僕も賛成だな』
「グガランナか。俺もグから始まる相棒を持ってるけど、やっぱり強いのかな？」
『そりゃあもう。グガランナは最高神アヌが造り出した最高傑作の神造兵器だからね。純粋な火力という意味でなら、君の相方にだって引けは取らないんじゃないかな？』
「――へぇ」
　通信越しから聞こえてくるロマニの得意気な声に、修司は密かにあることを企んだ。もし、全ての問題に片が付き、余興を楽しめる程の余裕があったら、叶う事なら一度勝負しておきたいなと。
　シュメル神話に於ける最大最強の神獣、その大層な肩書きがどの程度のモノか、好奇心ながら興味が湧いた瞬間でもあった。
「あ、修司さんってば、悪い顔してるー」
「気を付けるんだよマスターちゃん、ああいう手合いの男はバトルジャンキーの可能性が高い。君も将来伴侶を探すつもりなら、彼みたいな人種だけは避けた方がいい」
「聞こえてるぞ花男。除草剤で駆除してやろうか」

「花男!?」
「素直にいい気味です」
「フォウフォーウ！」
「て言うか、アナはもう平気なの？」
「あ、はい。体の方はもう平気です。特に問題も無いのに寝込んでばかりもいられませんから」
「でも、あまり無理はしないで下さいね」
「ええ……」
　和気藹々としながらエビフ山を進んでから暫くの時間が経ち、遂に一行は女神イシュタルが拠点としている神殿へと辿り着いた。その外装は一言で言えば派手であり良く言えば目立ち、悪く言えば成金感が凄まじい金ぴかの神殿だった。
　両脇に聳え立っている招き猫とか、一体どんな建築センスがあればこんなトンチキ建物が出来上がるのか、一同は素直に疑問に思った。
「――なぁ、本当に仲間に引き入れなきゃダメか？　俺、今メッチャ大使館に帰りたいんだけど」
「ダメだよ修司さん、辛い現実から目を背けちゃ。……あ、私ちょっと用件思い出したから先に帰るね」
「ダブスタもここまで来ると清々しいね。でもさせないよ、何故なら女神イシュタルの攻略には君達二人の力が不可欠だからさ！」
「そう言いながら二人を盾にする辺り、本当にマーリンはクズですね」
「フォウ！　マーリンマジシスベシフォーウ！」
　此処まで来ておいて、我ながら情けない。しかし、修司は思うのだ。何が悲しくてあの姉弟子に頭を下げなくちゃならないのかと。
　騒動に巻き込まれ、その都度尻拭いをさせられてきた苦い記憶。その癖自分は姉弟子だから偉いのだと無駄に偉ぶり、此方の貸しを無かった事にしようとする。
　そんな自分勝手な姉弟子に魔術師云々問わずシバキ倒そうとしたのは……一度や二度ではない。それをしなかったのは偏に周囲の人間から気遣われていたからだ。
　卒業後も付き合いのある友人達から何度も落ち着くよう諭された

り、彼女の妹からは姉がスミマセンと頭を下げられたりもした。
　もうね。本当にね、いい加減にしろと言いたい訳ですよ。何が悲しくて態々紀元前にレイシフトしてまで腐れ縁の姉弟子に振り回さなければならないのか。……アレ？　冷静に考えれば考える程、なんだかムカついて来たぞぉ？
「……よし、取り敢えずあの神殿からぶっ壊してやるか」
「ちょ、急にやる気出してきた⁉」
「いや、どちらかと言うと満々なのは殺る気の方では？」
　どちらにせよ、今はあの神殿にいる駄女神を叩き出さなければならない。仲間として引き入れる以上力は示す必要もあるだろうし、何なら先手必勝で後の交渉で有利に立つ為にも、此処は一度本気でブッパする必要があるだろう。
「か……め……は……め……」
「ちょ、修司さん⁉」
「ストーップ！　ストーップです！」
　最初は軽めに一撃……ではなく、正真正銘本気の、それも界王拳を使ってのかめはめ波を放とうとする修司に、立香とマシュは必死の形相で待ったを掛ける。
「ん？　どしたの二人とも」
「どしたの？　じゃないよ！　なに本気でかめはめ波をブッパしようとしてるのさ⁉」
「そ、そうですよ！　幾ら女神イシュタルでも流石にそれは不味いですよ！」
「いや、やっぱり交渉するなら初手で相手に舐められる訳にはいかないかなーって……」
『いや舐められる処じゃないから。エビフ山ごと女神イシュタル消滅しちゃうから。今のエネルギー、どう見てもゴルゴーン戦で見せた奴より威力とか上だったし』
「いや、何かもう全部ぶっ飛ばした方が話が綺麗に進むかなって……」
「綺麗というか、それだと更地が増えるだけだねぇ。それも割と笑え

ない奴」
「――――チッ」
「遂に舌打ちまでしましたよこの人」
その場のノリで、あわよくば女神抹殺を目論む修司に、立香は必死で止めてと懇願した。一体あの女神の依り代と修司の間にどの様な因縁があったのか、興味はあれど、迂闊に触れてはならない気がした。
で、結局イシュタルが出てくるまで待ち続けた一行は、神殿の奥から彼女が現れるのを確認すると説得を開始。
最初はやって来た立香とマシュに神としての威厳を見せようとしていたが、横から現れた修司によってそれは瓦解。駄々っ子の様に喚き散らす彼女に改めて修司はかめはめ波の姿勢を見せるが、立香の持ち前の交渉技術によってどうにか場を納め、持ってきた荷馬車に載せられた宝石の数々によって、一時の契約を結ぶことが出来た。
「……いいでしょう。藤丸立香、貴方の献身的な奉納と信仰によって、一時の契約を結ぶことを許しましょう。この女神イシュタル、上手く使いこなして見せなさい」
「――何だコイツ、さっきまで人を見るなりギャン泣きしていた癖に」
「修司さん、シッ！　今大事な時ですから」
ギルガメッシュ王が持つ宝物庫、そこには過去未来問わず人類の遺産が詰め込まれる蔵とされており、その中の宝石類を二割程献上する事で、女神イシュタルを買収する事に成功した。荷馬車にある宝石はその手付き金、宝石を愛しておきながら宝石とは何処までも縁のないイシュタルにとって、その話は渡りに船以上の価値があった。
「まぁ、ゴルゴーンを彼処まで追い詰めた君が殺る気満々で現れたんだ。同じ女神として、彼女が警戒するのは仕方がないさ」
「警戒、というより単に喚き散らしていただけですけどね」
立香の必死な説得により、スッカリ気を良くしたイシュタルは、依り代の現金さも相まってギャン泣き状態から即座に復活し、すっかりその気になっている。
ともあれ、これで女神の一柱を攻略できたと一同が安堵した……

のも束の間。
「それじゃあ早速……はい」
「あ？　何だよこの足」
「なにって、誓いの口付けでしょう？　古来、契約を結ぶにあたって口付けとは重要な意味を持っているの」
「……それを、何で俺に？」
「やれやれ、察しの悪い事。私の脚に口付けをしなさいな。これでどちらが上かハッキリするでしょ？」
　差し出された女神の脚、その鍛えられながらもスラッとしたその健脚は戦いの神の一端を思わせる。だが、それ以上にやらかし感が強い、折角此処までいい感じに話がまとまってきたのに、それを台無しにする様な女神イシュタルの振る舞いに、立香とマシュは顔を青くさせた。
　この女神はなにをどう勘違いしたのか、その脳内には仲間になる＝カルデア一行は自分の僕（しもべ）と認識したようで、その顔には愉悦の笑みが張り付いている。カルデアが自分の下に付くという事は目の前の自分を恐れさせた生意気な人間も自分の手下と言うこと。
　ドヤ顔満載な女神イシュタル。そんな彼女の前に俯き、沈黙していた修司はイシュタルの脚の前に跪き……。
「それはそれは……気を遣わせた様で」
「全くよ。さっさと済ませてちょ――――い〝っ!?」
　瞬間、全身を貫く痛みが女神イシュタルを襲った。
「ンンンンン？　これはこれは女神様、だいぶお体の方がお疲れのご様子ですねぇ。僭越ながら、足ツボマッサージで癒してご覧にいれましょう」
「ちょ、ちょ、やめ、いた、いだだだだぁっ!?」
　足が逃げられないようにガッチリと脇で固定され、その足裏をグーで刷り込んでいく。所謂足ツボマッサージ、嘗て味わったことの無い未体験な痛みに再び女神イシュタルの目が涙目に変わる。
「あーあ、結局こうなっちゃった」

「で、ですが、一応契約は交わされたみたいですし、万事オッケーかと！」
『うーん。これはちょっと修司君を責められないなぁ』
「フォフォーウ！」
天舟にしがみつき、どうにか逃れようとするイシュタルだが、生憎修司の膂力から抜け出せる事はなく、天の女主人の悲鳴はエビフ山の空へ溶けていくのだった。

◇

「はぁ、全く、無駄に体力が使わされた一日だったな」
女神イシュタルとの契約を無事に終え、エビフ山の下山を始めた一行は、夜も直に深くなる事もあり、道中にあった廃屋の小屋を見つけて今夜は其処で野宿する事となった。
交代制の見張り番。本来なら修司もそれに参加するべきなのだが、戦えない自分を卑下する立香が修司の分まで寝ずの番をすると言い出した。当然、それは駄目だと修司も諭そうとしたが、修司には残る女神との戦いに備えて体力を万全にして欲しいと、らしくないことを言って、半ば無理矢理替わって来たのだ。
「つたく、戦えるとか戦えないとか、そんな事を気にしても仕方ないだろうに。立香ちゃんは立香ちゃんなりに良く頑張っている」
そもそも、彼女は巻き込まれた一般人というだけで人理焼却の負い目や、人理修復の責任を感じる必要など一切無いのだ。それに、そんな彼女だからこそ多くの英霊達が力を貸してくれるし、応えてくれる。

『まぁ、あまりそう言わないであげてよ。君の戦いをこれ迄幾度と無く見てきた彼女も、色々思うところはあるんだろうさ』
　最初のレフによるカルデアの人為的爆破、その復興から人類の主戦力、更には限られた寿命だったマシュの革新。それらを成し遂げた修司に立香が多少の負い目を感じてしまうのは、ある意味仕方の無い事なのかもしれない。
　ただ、それを修司一人で成し遂げた訳じゃないのも、また事実である。これ等の偉業を成し遂げた背景にはカルデアの各スタッフ達や、立香が縁を結んで召喚し、その喚び掛けに応えてくれたサーヴァントの皆がいたからこそ、成り立った事なのだ。
『兎も角、彼女の事は僕達に任せて、君も早く休むといい。――と、言いたい所だけど』
「うん？　まだ何かあるのか？」
『君の相方、グランゾン。今回の特異点では喚び出さない方が良いかも知れない』
　ロマニから告げられる一言、それは修司の相棒であるグランゾンの召喚不可だった。それを告げられた修司は一瞬だけ目を丸くさせるが、すぐに何かを思い立ったのか、手を頭の上で組んで納得した様子で壁に寄り掛かる。
「それって、やっぱり特異点と関係してるのか？」
『あぁ、君の相棒グランゾンは、存在そのものが未知数なのもあるけど、それ以上に異質なんだ。特異点という不安定な時空でアレ程の存在が顕現したとなると、特異点への負担は計り知れない。況してや、今君達のいる時代は神代。不安定に不安定を重ねている環境で、グランゾンの様な存在を出したらどうなるのか……皆目、検討も付かない』
「――――」
　ロマニの言わんとしている事は、修司も何となく理解していた。これ迄の特異点攻略に於いて、修司は積極的にグランゾンを出そうとはせず、あくまで自分自身の力でやり遂げてきたのは、グランゾンを出すまでもない。ではなく、出すのは憚れたと言うのが大きい。

確かに、グランゾンの力は強大だ。出せば此方の勝利は揺るがなく、また人理修復も飛躍的に容易くなるだろう。だが、一度出してしまったら、何か取り返しの付かない事が起きるのではないか？　そんな予感が修司の胸中で渦巻いていた。

第一、第二特異点は出すまでもなく修復し、第三特異点は個人的感情が多分に含まれているが、それでも出す余裕が無かった所がある。

本格的にグランゾンを召喚したのは、第四の特異点。初めて人理焼却の元凶である魔術王ソロモンと相対した時である。奴は、その卓越した魔術の力で修司と外界を遮断し、特異点とすら呼ばれない別の場所で戦う事となった。

あの時はきっと、例外中の例外。魔術王が態々別の場所を用意してくれた事で起きた条件の揃った瞬間なのだろう。

第六特異点も同様、アレは獅子王の持つ聖槍が特異点を最果てと呼ばれる時空断層にも似た現象を引き起こしていたが故に可能とした荒業である。アレも、一歩間違えれば取り返しの付かない事態になっていたかもしれない。

もし、特異点攻略中にグランゾンを出していたら、一体どうなっているのか？　最悪の場合、修司とグランゾンを除いた全てが無に還るかもしれない。それを何となく理解していたから、修司はグランゾンを積極的に使用しては来なかった。

「――――ま、そう言う事なら仕方がない。切り札が使えないと言うのは痛いけど、それならそれでやりようはあるさ」

『済まない。君には負担を掛けてしまうね。此方も、事態が進むにつれて特異点の解析を急ぐ。もし、僕が召喚可能だと判断した場合は……』

「その時は、お言葉に甘えて喚ばせて貰うよ」

グランゾンという強力な手札を封じられたのは手痛いが、それならそれで割り切って戦うまでだ。そんな気持ちを切り替える修司を申し訳なく思いつつ、ロマニは通信を一時閉じる。

もしかしたら、立香もこの事に何となく気付いているのかも知れない。自分とは違い、己の体一つで戦い続けなければならない修司を、

僅かでも休ませてやりたいという彼女なりの心遣いと言うのなら、今日ばかりは甘えて休む事にしよう。
そう思い、床へ横になること数分。修司はふと違和感を感じた。
――――イシュタルの気配がおかしい。先程まで鬱陶しい程に荒ぶったイシュタルの気が、まるで清流のごとく静かになっている。
いや、静かというより、これではまるで……。
不思議に思った修司は立ち上がり、空き家から身を乗り出していく。自分達同様休んでいたマーリンは、突然起き上がった修司に訝しげな視線を送り……。
「あれ？　どうかしたのかい？」
「……なぁ、今なんか、変な気配を感じなかったか？」
「？　……いや、私は特に感じなかったが？」
どうやら本気で感じなかったらしく、マーリンは不思議に首を傾げているだけだった。自分の気の所為か？　不思議に思う修司は、焚き火で楽しそうに雑談している立香とイシュタルを見掛けるが……やはり、特に変わった様子はない。
「あれかな、エビフ山には確かギルガメッシュ王が召喚した茨木童子なる鬼が逃げ隠れしているみたいだから、多分それを感じ取ったんじゃないかな？」
「――――そう、なのかな？　いかん、どうやら本気で疲れている様だ。主に精神的な意味で」
「それはいけない。ほら、見張りなら私が責任以てやっておくから、君はゆっくり休んでおくといい。何なら、普段は男相手には絶対しないけど、夢見が良くなるように花の香りをプレゼントしようか？」
「いや、止めておく。そんじゃ……お休み」
どうやら、女神イシュタルとのやり取りが相当精神的にキツかったらしい。マーリンに促され、再び床へ横になる修司は今度こそ安心して眠りに就き、万全な状態となって朝を迎えるのだった。
しかし、まだ安心は出来ない。女神イシュタルを引き入れた修司達の前に立ち塞がるのは……太陽の女神。
遂に我慢の限界を迎えた彼女は、ジャガーのＵＭＡを引き連れてウ

ルクへ強襲。
戦いは、更なる混沌へ移行していく。

その１４１　第七特異点

「ふはははは！　よくぞ帰った、素晴らしき勇者達よ！」
　エビフ山にて、女神イシュタルを無事に仲間に引き入れたカルデア一行。賢王ギルガメッシュに事の顛末を報告しようとジグラットの王の間へ向かうと、其処に非常に機嫌が良さそうなギルガメッシュ王の高笑いが聞こえてきた。
　シュメル神話に於いて、ギリシャの神々にも引けを取らないアレなイシュタルを軍門に降したという事実が良い意味で琴線に引っ掛かったのだろう。今にもイシュタルにＮＤＫでプゲラな顔芸を披露しそうなテンション高めの賢王に、修司達は苦笑いで見守った。
「さて、恥知らずにも出戻ってきた其処の女神！　我等が軍門に降った感想を述べるが良い！　あぁ、字数は任意で構わんぞ？　言い訳が長ければ長いほど、貴様へのメシウマが進むのだからなぁ！」
「ねぇ、王様大丈夫？　ちゃんと休めてる？　何かテンションおかしくない？」
　この神代で既にメシウマなんて概念を持ち込もうとしている賢王、普段よりもテンションの高いギルガメッシュ王の言動に割りと本気で心配になってきた修司は、側に控えているシドゥリへ声を掛ける。
「私も、何とか王の負担を減らそうとしているのですが……ここ最近、魔獣の被害が増えてきた事も影響しているみたいでして……」
「そっか……やっぱり、一度ゴルゴーンの巣に出張った方がいいんかなぁ？」
　女神ゴルゴーンを撃退し、魔獣達の勢いを削いだつもりでいたが、どうやら魔獣母神はまだやるつもりらしい。自分達がエビフ山に赴いている間、勢いを取りも出しつつある魔獣達による被害は徐々に拡大しつつある。
　自分がいない間に好き勝手してくれるゴルゴーンに苛つきながら、やはり１０日待たずに今からでも攻め込んでやるかと、修司は視線を北壁方面に向ける。

「――修司、分かっていような」
「……っ、やっぱり、駄目か？」
「何度も言わせるな。此度の戦いは本来であれば我々今を生きる人間のモノ、確かに貴様の力は認めよう。しかし、度が過ぎる節介は傲慢の切っ掛けになると知れ」
今にも魔獣母神の神殿に向かって、ゴルゴーンを討伐してやろうかと目論む修司を、ギルガメッシュ王が先んじて牽制する。王の言いたいことは分かる。この時代に起きた問題は、当時の人々が解決するべきだと言うのも理解できる。
しかし、自らは決戦は１０日後と指定しておきながら、その手先は未だに人類へ攻撃を続けている。それも、自分達がウルクから離れた時を見計らってである。
人類を餌としか見ておらず、終始上から目線のゴルゴーン。自らを女神を自称しておきながらやり方が姑息な蛇に、修司が苛立ちを募らせるのは必然と言えた。
だが、それでも王は構うなと言う。北壁への被害は出ても人的損害は今の所出ておらず、牛若丸や弁慶、レオニダスの奮闘のお陰で未だ魔獣戦線の士気は落ちていない。神々の気紛れや卑劣さはいつもの事、そう暗に語る賢王に、修司はある種の違和感を感じた。
まるで、ゴルゴーンを討ち取るのに躊躇しているような感覚。――いや、躊躇というよりもっと別の……例えば、ゴルゴーンを討ち取った後に待つ何かに備える準備期間を得る為、そんな算段を垣間見た気がする。
（もしかして、本当にゴルゴーンの背後には何かがいるのか？　魔術王でもキングゥでもない、この時代に潜む何かが……）
以前感じたゴルゴーンへの違和感。自らをティアマトと騙って起きながら、まるでその事に違和感を持っていない様子。もしかしたら、自分の推測は当たっているのか？
横に佇むマーリンが訝しげに修司を横目で観察している。そんな夢魔の視線に気付いた修司が、なんだとマーリンに訪ねた時、煽られていたイシュタルの怒号がジグラットに木霊する。

「うるっさいわね！　この性悪ギルガメッシュ！　なにちょーっと強い人間を味方に引き入れただけで強気になっているのよ！　そして修司！　アンタもあまり図に乗らない事ね。神々を舐めていると、今に手酷いしっぺ返しを食らうんだから！　その時は白旗を振ったって助けてあげないんだからね！」
「……いやぁー、ここまで開き直られると、一周回って感心するわぁー」
「あの、修司様？　白旗とは一体？」
「あぁ、白旗ってのは降参の意味を相手に伝える手段の事さ、他にも両手を上げてバンザイの姿勢とかも自分の負けを認めるジェスチャーだったりするんだ」
「バンザイ……ですか？」
「そうそう、バンザーイってね」
　イシュタルの呼び掛けに思考の海から戻った修司は、女神の開き直り振りに嘗ての姉弟子を幻視する。アイツもこんな感じだったなと、これじゃあイシュタルの依り代に選ばれるのは無理もないと、修司は妙な気持ちで納得した。
　その一方で、白旗に込められた意味や相手に降参の意思を伝えるジェスチャーをシドゥリに一通り教える。そして、今尚続く賢王とイシュタルの煽り合戦にシドゥリが両者の間を取り持つ事で一端終わりとし、改めて女神イシュタルを仲間にしたという報告を口にした。
　幸いなのが、女神イシュタルが契約者である藤丸立香を結構気に入ってくれているという事、依り代の面倒見の良さが色濃く出たのか、立香を凄いマスターにしてやると豪語するその様子は、嘗て衛宮士郎を魔術の弟子として導いた面影が垣間見得た気がした。
「そんじゃイシュタ凛、これからは一応俺達に味方をしてくれるって事でいいんだな？」
「名前まで合体しなくてもいいわよ。幾ら依り代と融合して新しい私とは言っても、私は女神イシュタルとしてここにいるんだから」
　当初、女神イシュタルの依り代となった女性の安否について言及したロマニ、カルデアにてマシュという人道に背いた存在を生み出した

組織の一員であるロマニを、イシュタルは自分を棚に上げて追求してくる愚か者と蔑んでいたが、棚に上げるのではなく、事実として受け止め、それでも敢えて訪ねてくる彼の胆力に感心したイシュタルは、現時点での自分の様子を以下のように現した。
今のイシュタルは、本来の女神の部分と依り代となった人格がうまい具合に融合して新たに生まれた存在なのだと。故にイシュタルの依り代となった遠坂凛の自我意識に何ら影響はなく、またイシュタルの神性も損なわれていない新しいイシュタルとして誕生したのだ。
これを修司はフュージョンして生まれたモノだと解釈し、後に教えた立香も納得。相変わらずアニメ知識で理解する二人に物申したくなったロマニだが、実際にその通りなので訂正する事は出来なかった。
閑話休題。
「さて、それでは対ゴルゴーンに於いて次なる段階に進むとする。女神イシュタルという尖兵を獲得したのならば、次はマルドゥークの手斧だ」
マルドゥークの手斧、それは創世の神の一柱であるティアマトの喉笛を切り裂いたとされる神具。既にその在処はエリドゥ市にあると確認されており、そして其処を拠点としている恐るべき女神の情報もまた、既に全員に行き渡っている。
『アステカ文明の太陽神、ケツァルコアトル。本来ならば一つの神話を代表する主神クラスであり、またその実力は凄まじい』
「そして、ルチャリブレ――――まさかのプロレスの達人と来たもんだ」
ゴルゴーンを討伐するにあたって、マルドゥークの手斧は可能な限り手元に置いておきたい代物だ。しかし、それを守る太陽神は一度は修司すらも負けを認めざるを得なかった傑物。立香やマシュ達が正面から挑むには、ある意味ゴルゴーン以上に困難な相手と言えるだろう。
「あと、確かジャガーって女神も一緒なんだよね？　その……修司さんの当時の先生が依り代になっている」

「止めてくれ立香ちゃん。その事実は俺に効く」
　そして、エリドゥ市の攻略に於いて最も難易度が高いと言わしめているのが、ジャガーマンなる女神である。何を血迷ったのかこの女神、よりにもよって学生時代の修司の恩師、藤村大河を依り代として選び、古代メソポタミアに現界しやがったのだ。
　流石の修司も嘗て世話になった恩師に対し、二度も仇で返すのは躊躇われた。
『うーん、やはりここは立香ちゃんとマシュがジャガーマンの相手をして、修司君がケツァルコアトルの相手をする。て言うのが定石かな』
「あぁ、そうしてくれると俺も助かる。ケツァルコアトルは俺が何とか出来ても、ジャガーマンだけはなぁ……」

「修司さんが其処まで言うなんて、ジャガーマン。依り代も含めて、そんなにも恐ろしい女神なのでしょうか？」
「と言うか、女神なのに〝マン〟なんだ」
　エリドゥ市の奪還と、マルドゥークの手斧の奪取は対ゴルゴーンに於ける必要な要素だ。最悪、修司によるゴリ押しで何とかなるかもしれないがそれはそれ、取れる手段や可能性があるのなら挑んだ方が良いだろうし、色々と怪しいゴルゴーン戦後の事を考えれば、密林の女神の攻略はゴルゴーンとの決戦の前に済ませた方がいい。
　それに、約束もある。たかが口約束ではあるが修司はあの太陽の女神との決着をケツァルコアトルと交わしてしまっている。其処に魔術的縛りや破ったら神秘的な罰が降される訳ではないが、自らそう決めた以上そうしたいと思うのが修司の本音だった。
『と言うか、ジャガーマンもそうだけど何故ケツァルコアトルまでもが女神なんだ？　神話体系で見れば、元々あの神は男性神の筈なんだけど』
「あぁ、そっか。人間は知らないわよね。あなた達で言うところのメキシコ、南米の神話体系はまた一段と変わり種なのよ。あそこの神性はこの惑星で生まれたものじゃなくて、空から降ってきたモノだと言

われているわ」
　ロマニの呟く一つの疑問、本来であれば男性神である筈のケツァルコアトルに対する疑念への解説は女神イシュタルからの爆弾発言から始まった。
　その昔、地表に衝突した小惑星。その惑星についていた〝何か〟が植物に寄生する事で生き延びて――やがて、現地動物を〝神〟に変化させる微生物となって、あの土地の文明を築き上げた。
　南米の神性は〝人間から人間〟に乗り移るもの。その中には女性の〝器〟もあったのだろう。
　故に、ケツァルコアトルが女神として現界したのも差程不思議な事ではないと、女神イシュタルはそう締めくくった。
『と、とんでもない情報をありがとう女神様！　地球はまだまだ奥深いな！』
　小惑星の衝突。そう口にした女神イシュタルの説明を聞いて唖然とする一同だが、ふと修司は一つの疑問を思い浮かんだ。
「……なぁ、一つ気になった事があるんだけど、いいかな？」
「……？　何よ、私の説明に納得がいかないって言うの？」
「そうじゃねぇさ。俺が気になるのは、地表に衝突した小惑星……その時期さ。一般的に小惑星規模の隕石が地表に落ちたとされる記録は残されていないが、落ちたとされる説は色濃く残っているからな」
「そ、それって……」
「恐竜が絶滅した直接の原因とされている……」
　地表に衝突した小惑星、それに関係していると推測されているのは、嘗てこの惑星に存在したとされる絶滅種族――恐竜達だ。
　人類が独自の文化文明を築き上げるよりも遥かな昔、太古の時代に存在していた地上の支配者達。その歴史は人類が古代から現代に至るよりも長く、そして古い。
　古代南米の神性が外宇宙からの来訪者で、かつ動植物に寄生する存在だと言うのなら、その存在は人類史だけでなく嘗て存在した恐竜の絶滅の原因解明にも繋がるかもしれない。

これ迄の旅路の中でも破格な衝撃的事実を前に、立香もマシュも呆然としているだけ、賢王ギルガメッシュもその千里眼で南米の様子を伺おうとするが、人理焼却された今ではそれも敵わない。

これから相対する密林の女神、その生命力の強さに改めて圧倒される中、修司は別の可能性を見出だしていた。それはやはり小惑星衝突の時期。確かに一般的に小惑星規模の隕石の衝突は恐竜の存在していた時期とされているが、女神イシュタルのは地表に衝突したと説明しただけで、それが恐竜の時代と明記してはいない。

――――嘗て、まだこの惑星が星の形として不完全だった頃、この地上は須く炎とマグマに覆われていたとされている。幾つもの隕石がぶつかり合い衝突し、砕けてはまた衝突を繰り返す。その果てに生まれたのが地球であり、今の自分達の生きる世界の土台となっている。

もし、イシュタルの言う生き延びたとされる時期が恐竜時代の終わり……ではなく、惑星の創世記頃の時代にまで遡ると言うのなら、その神性の強靭さは他の神話体系よりも群を抜いているのかもしれない。

……まぁ、何れにせよこれは自分の勝手な憶測だし、変に脅かすつもりもないから、今この場で吹聴しなくてもいいだろう。どちらにせよ、自分とあの女神が戦うのは避けられない事。ならばそれまでに気持ちを切り替えて置くとしよう。

一先ず、女神イシュタルを仲間に引き入れた。次はエリドゥに向かい、ケツァルコアトルをどうにかするのが自分の役目だと、修司は思考を切り替えて立香達と共に出立の準備に向かおうとして……。

ジグラット――――否、ウルク市全体を揺さぶる様な振動が、修司達の足場を揺るがせた。

「……！　マスター、今地震の様なものが……」

「まさか……！」

「報告、報告――――！　王よ、失礼致します！　ウルク南門より火急の報あり！　南門、消滅！　至急応援を寄越されたし、との事！」

南門の消滅。その報告を受けた賢王は見張りは何をやっていたと

叱咤するが、相手はただの一人。魔獣の様な手下も連れず、単身一人で乗り込んできた敵の正体は……一同が予想していたケツァルコアトルその人である。
「ケツァルコアトルと名乗る女神、現在ジグラットに向かって侵攻中！」
「ちっ、よもや女神が単身で乗り込んでくるとはな！　敵ながら天晴れよ。兵士達は迎撃より住民の避難を優先させろと伝えよ！」
「は、はは！　しかし、まだ一つ問題が！」
「なんだ!?」
「それがその……ケツァルコアトルと名乗る女神は、修司殿との決着を強く望まれているとの事です！」
　報告に来た兵士が、気まずそうに修司を見る。すると、自然と王の間にいる全員からの視線が修司へ集まっていく。
　中でも、賢王の手はフルフルと震えだし……。
「えぇい！　また貴様かこのハチャメチャ小僧めが！　いい加減少しは自重という言葉を覚えぬか！」
「いやこれ俺関係なくない!?」
　実際は関係大有りだが、生憎とそれを追求できるものはこの場にはいない。プンスカと怒るギルガメッシュ王を尻目に、一行は南門へと向かうのだった。

◇

「う、うわぁぁぁぁっ！　だ、駄目だ！　我々では歯が立たない！」
「諦めるな！　援軍が来るまで何とか持ちこたえるんだ！」

「周囲の住民の避難完了まであと少しだ！　頑張って踏みとどまらせてくれ！」
「ワァオ！　ウルクの人達のガッツ、中々デェース！」
「うーん。相変わらずの強引さ。ウルクの皆さん、ホントにサーセン」
　ウルクの南門。ノック感覚で粉砕された城壁の門は以前のような荘厳さは微塵もなく、無惨な瓦礫の山となっている。舞い上がる砂塵の中から闊歩するのは、密林の女神と恐れられている太陽神ケツァルコアトルと、その取り巻きであるジャガーマンだった。
　防衛に殉じるウルクの兵士達を、鎧袖一触。挑みかかる兵士達を一人一人丁寧に相手をする一方で、意識を失った兵士達をジャガーマンが丁重に寝かせてやるという奇妙な光景が生まれていた。
「ジャガー、彼等を決して死なせてはダメよ。彼にも言われているでしょ？　自分との決着が付くまでの間、決してウルクには手を出してはならないと」
「いや、それなら普通にエリドゥで待っていれば良いのでは？」
「何か言った？」
「イエ、ナンデモアリマセン」
　ウルクの兵士が派手に吹っ飛ばされ、見た目こそ即死しているような有り様だが、不思議な事に誰も死んではおらず、不思議と気絶程度で済んでいる。ケツァルコアトルは修司との約束を守る為の必要な事だと言うが、そもそもエリドゥから出なければ良かっただけの話なのでは？
　至極当然の疑問を口にするジャガーだが、そこは絶対な上下関係。微笑みながら凄んでくるククルんを前にジャガーはただ大人しくするしかないのだ。
　お願いハチャメチャボーイよ、早く来て。そんなジャガーマンの熱意が届いたのか、ケツァルコアトルの前に山吹色の彼が舞い降りる。
「おい。どういうつもりだよケツァルコアトルさんよ？　俺との決着の前に余計な手出しはしない約束だった筈だろ」
「え、えへへ……その、修司に会うのが我慢出来なかったから……つい、来ちゃった」

「ついって……アンタなぁ」
修司が現れた事で、途端にモジモジと態度を軟化させるケツァルコアトル。嘗て見たことのない腐れ縁の相手にジャガーは辟易となる。
「……まぁ、兵士の皆は怪我が無いように気を遣ってくれたみたいだし、門も一見派手に壊れている様だけど、門の部分が綺麗に割れているだけだから修繕も比較的簡単そうだ。尤も、それを判断するのは王様だけど」
一目見てケツァルコアトルなりに気を遣った事を看破する修司だが、自分との約束を破ってウルクに攻めてきた事は変わらない。一体どういうつもりなのか、腕を組んで訝しむ修司にケツァルコアトルは表情を引き締める。
「勿論、ただ遊びに来た訳ではありませーん。白河修司、貴方に改めて決闘を申し込みマース」
「――――おう。その決闘、受け取った」
「場所はエリドゥ市。既にリングは此方で用意しました。三日以内に来てくれることを期待してまーす」
「おう、委細承知した。決して遅れない事を誓うよ」
真面目な顔から告げられるのは――――宣戦布告。ケツァルコアトル直々の決闘の誘いに、修司は驚くこと無く了承する。
既に修司の中でケツァルコアトルの相手は自分がするべきだと認識しており、それを立香やマシュに譲るつもりもない。それに、本来であるならば一度は敗北した自分が直接出向いて言うべき事なのに、向こうから誘ってきてくれたのだ。
ならば、此方はただ受け入れるだけ。そう気持ちを固めた修司は組んでいた両腕をほどいて改めて面と向かって向き直る。
「――――ルールは無用。互いに全力を尽くしましょ」
「あぁ、今度はちゃんといい勝負にしたいしな」
「それで、私が敗北した暁にはエリドゥ市にあるマルドゥークの手斧を献上し、以降はあなた達の傘下に降る事を約束しましょう」
「うん？　まぁ、あんた程の傑物が味方になるのは有り難いが……」
この女神、戦う前から自身の負けることを想定している？　らしく

ないケツァルコアトルの提案に首を傾げる修司だが……。
「そして、私が勝った暁には――――白河修司、貴方を婿に戴きマース！」
「うん？　まぁ、それも別に――――何て？」
「やったー！　今〝うん〟て言いましたよ！　言質取りました！　もう取り消しは出来ませーン！」
「え？　修司さん、結婚するの!?」
『うわーい。もうツッコミしないぞ僕ぁ』
「なんという大スクープ！　これは、すぐにでもウルク広報部にリークしなければ！」
　次に出てきたとんでもない条件を前に、自然と頷いてしまった修司。しかも運が悪いことに駆け付けてきた立香達にも聞かれてしまい、悪ノリしたマーリンがウルク市全体に噂を伝播させてしまう。
　こうして、敵にも味方にも逃げ場を奪われた修司はこの日、絶対に負けられない戦いを強いられる事となった。
「本当、うちのククルんがスミマセン」
　誰もが冷静を欠く中で、ジャガーだけは唯一マトモだった。

その１４２　第七特異点

南米の太陽神、ケツァルコアトルの襲来から一夜開け、王の命令の下に門の修繕は滞りなく完遂され、被害にあった兵士達も手の空いていた人々の看病のお陰もあり、全員今朝には無事に元の持ち場に復職を果たすことが出来た。

女神の強襲という事件が起こったのにも関わらず、相変わらずウルクの人々の活気は薄れる事はなく、現在はいつもの風景を取り戻していた。

それは神代であるという事と、女神の強襲と言うのが割りと頻繁に起きているからという前例があるからという事で、此処でもウルク市民のバイタリティの強さが垣間見えた気がした。

そんな人々が活気に満ちた生活を続ける中、一人だけ憂鬱な顔した人間がウルク南門にて立ち尽くしていた。言わずもがな、件の張本人にして巻き込まれた人物、白河修司である。

「あ、シュージだー！　ねぇねぇ、女神様からぷろぽーず、されたんでしょ？　結婚するのー？」

「こら、あまり込み入った話をするものではないの。すみませんシュージ様」

「あ、はははは……いえいえ、お気になさらず」

通り掛かった子供に突き付けられる現実、決して直視したくなかった事実を前に、修司は頬を引きつらせた。そんな修司を察した母親が子供をやんわりと叱り付け、修司に何度も頭を下げながらその場を後にする。

「いやはや、君もこの一日で随分と有名になったものだね。まぁ、私が噂を流したんだけどね！」

「おう花男、お前いつか絶対にシバクからな？　覚悟しとけよ？」

そんな修司を揶揄しながら現れるのは、花の魔術師マーリン。昨日の騒動を面白おかしく脚色し、ウルク市中に広めた元凶である。

本来なら拳の一つでもプレゼントしてやりたい所だが、此処最近魔獣との戦いに備えてウルクの市内は少しばかりピリピリとしていた。適度な緊張感は場を引き締めるのに丁度いいが、過度なソレは市民一人一人に無用な圧を与えかねない。

心の余裕を失えば戦線は瞬く間に瓦解し、人類は成す術なく全滅するだろう。それを危惧し、対策を取るために女神からの求婚という話題は渡りに船な話だった。

名誉な事なのか、それともはた迷惑な事なのか、何れにしても面白い話なのは間違いない。お陰でウルクの市の人々はめっきりその話題に夢中になり、その好奇心は人々の心を僅かに蝕んでいたモノを瞬く間に拭い去ってしまった。

そんな人々の様子を知っているからこそ、修司もまた噂が広まる事を由とした。尤も、それはそれとしてマーリンをシバク事は絶対に覆したりしないが。

「で、ですが、本当にいいのでしょうか。その、修司さんと女神ケツァルコアトルの婚姻の件は……」

「大丈夫さマシュちゃん。奴さんも言ってただろ？　俺が奴の婿になるのはあくまでこの決闘で負けたらの話だ。要は勝てば良いだけの話なのさ。……そう、勝てば良いんだ。――――絶対に、勝たなきゃなんねぇ」

「おおう、修司さんが嘗てない程に燃えている」

心配そうに訊ねてくるマシュに、修司は大丈夫だと返答する。気丈に振る舞っているが、次の瞬間にはその表情は強張り、その顔は強い決意に満ちていた。

まるで第三特異点で復活した大英雄、ヘラクレスと相対した時の様な緊張感。だが、自分の将来に関係している戦いがこの先待っていると思うと、修司の抱く緊張感は無理もないモノだった。

何せ、彼の心の中には既に――――。

『所で、向こうには既に決闘の準備が出来ているっぽいけど、具体的にはどんなリングが建設されているのかな？　もしかして、高圧電流が流れている電流デスマッチとか!?』

『はいはい。でも、ダ・ヴィンチではないけど確かに気になる所だね。幾ら修司君が神霊にも負けない強さの持ち主でも、相手は一つの神話の代表的な神霊だ。可能な限り情報は欲しいな。という訳でマーリン、君の千里眼で何か見えたりしない？』
「うーん、そうしたいのは山々だが、千里眼の多用は厳禁だ。ちょっと他の事に魔力を使っているからね。第一、女神の観察なんかしたら確実に相手にバレる。覗き見をされた女神を何をするか、多くの神話が雄弁に語ってくれている。そうだろう、イシュタル？」
「ええ、殺すわ。全権能を使って、そいつのいる場所に宝具をぶっ放すわ」
　物凄くイイ笑顔でそんな事を宣うイシュタルに、マーリンもほらね？　と肩を竦めている。女神を怒らせるのはまだ早いと、そう言って千里眼でケツァルコアトルを調べられないと語るマーリンに、この場でそれ以上追求することはなかった。
『……はぁ。千里眼の使用を制限している、なんてコト、もっと早くに言って欲しかったな。どうりでマーリンにしては大人しいと思ってたんだ。キミ、もう自分に出来る手は打った後だったのか』
「はは、まぁそれも此方の修司君のお陰で随分と楽できたんだけどね。ともあれ、今の私に出来るのは精々相手に対するちょっとした嫌がらせ程度さ。本格的な戦闘はあまり期待しないでくれると助かる」
「――――――」
　既にマーリンは手を打った。それが何に対して、どの様な手段だったのか。暗にそれは語りたくない様子のマーリンに修司は密かに推測を立てる。
「じゃあ、やっぱりこのまま正面から挑む感じで良いのかな？　あの女神様なら、多分伏兵とか置いてなさそうだし、修司さんとの決着を望んでいるのなら、下手に横槍なんてしない方がいいかもね」
『個人的には、正直推奨したくないんだけどね。相手は太陽神ケツァルコアトル、その強さはこれ迄戦ってきた相手の中でも五本の指に入る手練れだ。修司君の消耗を考えると、指令代行としては素直に頷けないな』

本来であれば、ケツァルコアトルは古代メソポタミアとは縁もゆかりもない神性だ。南米に位置する神話体系出身の彼女が、何故あそこまで高い神性と権能を発揮しているのか。既にその事に当たりを付けたロマニは、半ば確信した様子で自身の考えを口にする。
『恐らく、ケツァルコアトルが拠点としているエリドゥ市にある〝彼女を祭る神殿〟が原因だろう。以前修司君が密林の女神達と戦闘した際に強い魔力反応があったからね。恐らく間違いはない筈だ』
『神殿を成立させるには象徴となるシンボルが必要だ。ケツァルコアトルが持つとされる宝、翡翠剣マカナか太陽遍歴ピエドラ・デル・ソル。このどちらかなら、神殿の祭壇として成立する。だから――』
「シンボルを破壊して神殿を停止させ、ケツァルコアトルの神格を落とす」
『その通りだアナ。その後ならケツァルコアトルが相手でも多少の勝機がある。まして、それが修司君が相手ならば……』
「あ、じゃあそれは無しで」
相手が強大な力を持ち、それでもなんとか出来る手段があるのなら、それを模索するべきだ。その考え自体は修司も賛成できるし、それが今後の為になるというのならそれも吝か出はない。
しかし、今回に限って修司は同意しなかった。
『――一応、理由は聞かせて貰えるかな？』
「勿論、当然理由はあるぜ。それはあのケツァルコアトルが、現時点で誰もが認める最強の女神だからだ。純粋な膂力で言うのなら、ゴルゴーンすら凌駕しているだろうよ」
「ふむ。折角相手が強いのだから、それを弱くさせてまで勝つと言うのは戦う者としてフェアではない。という事なのかな？」
「そうじゃない……と言いうと嘘になるな、けれど本当にそれだけじゃないんだ。――もう、皆も薄々気付いているだろうからぶっちゃけるぞ？　正直な話、今回の特異点に於いて本当の戦いはゴルゴーンを倒してからなのだと、俺は確信している」
『……』
「マーリン、お前さ、別件に魔力を使っているから千里眼は多用出来な

いって言ってたけど、それはお前が以前に言った意識を停止する事が出来ないって言うのと関係あるんだろ？」
「……あー、そんな事言ってたかなぁ？」
「あ、ごめんマーリン。修司さんにそれ教えたの私だ」
「ええ？」
「いやだって、マーリン睡眠とか取れていないみたいだし、ロマニもマーリンの事毛嫌いしているし、王様に至っては仕事量で相談できないし、だったら後は話せるのは修司さんくらいしか思い付かなくて……」
「『うぐぅ』」
　嘗て北壁にて溢したマーリンの愚痴にも似た現状報告、それを修司にチクっていた事に物申したかったマーリンだが、立香の正論の前で押し黙らされてしまう。ロマニも、マーリンの事を毛嫌いしていたのは事実なので、同じく黙り込んでしまう。
「別に、その事自体は俺もなんとも思っちゃいない。王様の指示なら勿論の事、それがお前の判断で、それがウルクの人達を守る事に繋がっているのなら、俺から言える事は何もない」
「そ、そうかい？」
「けれど、今回の件で確信した。王様はゴルゴーンとの戦いを可能な限り戦力を残した状態で乗り越えたいと考えているんじゃないのか？」
　これ迄のウルクでの生活で、王が修司を進んで戦場に送り出す事はしなかった。確かに、ギルガメッシュ王は自分達の力で切り抜けると豪語しただけあって、極力余所者である修司達を頼らず、雑用だけを押し付けて様子見をしていた。
　ウルクの、今を生きる人間達の力だけで三女神という脅威を乗りきってみせる。その意気込みは今も健在なのだろう。しかし、それと同じぐらい自分達を後の脅威に対する保険として温存しておこうと言う意図があったのではないだろうか。
　自分をゴルゴーンの神殿に自分が先走って突っ込まない様に諌めてきた事も、そう考えれば辻褄は合う気がする。勿論、これは修司の

憶測と推測からくる妄言の類いであることは修司自身が充分理解している。
　しかし、どうも違和感が拭えないのも、また事実。賢王と、花の魔術師マーリンは共に千里眼という特別な眼を持った者達だ。そんな彼等がこの先の未来で何を見たのか、それを理解できるものは限られている。
「ゴルゴーンを討った後、更なる戦いが待っているのなら、頼れる味方は少しでも多い方がいい。それが太陽神なら尚更だ」
『……それが、君の正面から戦う理由かい？』
「あぁ、個人的理由も当然あるけどな」
　アレコレ理由や理屈を並べても、結局行き着く結論はそこだ。相手が強い奴ならば、万全なそいつと正面から戦ってみたい。ヘラクレスやクー・フーリン、他にもこれ迄数多くの英傑英霊と戦ってきた修司は、自然とそんな欲求を抱くようになっていた。
『……全く、その余計な一言が無ければ僕も素直に頷けたのになぁ。修司君、今のキミ、結構ケルトっぽいの……自覚出来てる？』
「流石にそれは言い過ぎじゃね？　訴訟も辞さないぞ？」
　別に俺は相手を殺すことに拘ってはいない。そう愚痴る修司にロマニは深いため息を吐いて一蹴する。
『そういう所だよ。殺す事じゃなく戦い自体に意味を見出だすとか、ケルトよりも戦闘民族だよ』
「うぐぅ」
『けど、君の言うことも尤もだ。だから……今回は目を瞑るよ。どのみち、戦うのはキミなんだ。だったら僕はそれを応援するだけさ』
「……悪いなロマニ、気を揉ませて」
『ホントだよ。全てが終わったら、酒の一杯位奢って欲しいモノだよ』
　呆れ、本音を言えば不満タラタラなロマニだが、最終的に修司の提案に同意する事となった。どちらにせよ、戦うのは修司本人だ。女神から名指しで指名された以上、既に彼の逃げ場は何処にもない。
「まぁ最悪、修司君がケツァルコアトルの婿になるだけだからね！
夫が人類の為に戦うというのなら、妻である彼女も無視は出来ない筈

さー！　何せあの熱の入れ具合だ。ベッドの上で口説き文句の一つでも言えば、コロッと此方側に付いてくれるかもしれないよ？」
「……あの、マスター？　どうして私の耳を塞ぐのです？」
「マシュには知らなくていい台詞が飛び出てきたからだよ」
「？」
「……フォウ君、ちょっとこの花男にキツメのヤキを入れて上げて」
「ガッテンフォーウ!!」
「ブワッハァ!?　その肉球攻撃を止めるんだキャスパリーグ!!」
「本当、自業自得ですね」
サラリと度の越えた提案を促してくるマーリンに軽めの殺意を抱きながら、修司は皆と共にケツァルコアトルの待つエリドゥ市へ向かう。
絶対に勝たねばならない。悲壮感に満ちた決意を抱きながら、修司は南門から第一歩を踏み出した。

◇

そうして、丸一日の時間を掛けてエリドゥ市へやって来た一行。道中にてウル市に立ち寄り、市民達から近況報告を聞いたりするのだが、やはり彼女達は相変わらず戦うという選択肢を取れずにいた。
その事に些かマシュは物申したかったが、修司が憤るマシュを制止させる。頑張れる人間がいれば、頑張れない人間もいるものだ。伊達

に人生経験を積んでいない修司は、一応何かあった時に備えていつでも逃げられる準備をしておいて欲しい。と、それだけを告げてウル市を後にした。
未だに納得の出来ない様子のマシュ、そんな彼女を諭しながら歩くこと数刻。遂にエリドゥ市へ辿り着いた。
鬱蒼とした密林を抜けると、修司達の前に現れたのは開けた場所、近くに巨大な斧と神殿らしき建築物のある……修司には見覚えのある場所が其処にはあった。
ただ一つ記憶と違うのは、巨大な四角形のリングがあるという事。リングと言っても一般的なモノではなく、地面を四角の形をロープで囲っただけのシンプルなモノ。原始的なリング、何処か戦後間もない頃の日本に流行ったとされる拳闘のリングに似た造り。
しかし、其処には独特の匂いがあった。これから戦いが始まるという緊張感、生物の闘争本能を刺激する戦いの匂い。そのリングの中央には、太陽神が佇んでいる。
「悪い、待たせちまったかな」
「ムーチョ、もーまんたいデース。私、デートの日には彼氏より早く待ち合わせ場所に来る質ですので、この程度、遅刻の内には入りませーん！」
「そうか。なら、待たせた分はキッチリと相手してやるよ」
互いに軽口を交わしつつ、ロープを手に修司がリングへ降り立つ。この時点で特に呪いや何かしらの制限を掛けられた様子はない、どうやら本当にただの舞台として用意されたモノの様だ。
「成る程、其処の可愛らしい娘が人類最後のマスターさんなのですネ？」
「あぁ、俺達の頼りになる相方さ。今回彼女は勝負の見届け人だ。決して邪魔はさせないよ、その代わり……」
「分かっています。決して手出ししないことを誓いましょう」
「助かる」
「私が望むのは、貴方との尋常なる勝負。それが果たせるのなら、文句はありませーン！」

そう言うと、ケツァルコアトルから闘気が溢れ、周囲の大気を歪ませていく。まだ間合いに入っていないのに伝わってくる膨大な熱量が、修司の皮膚を突き刺してくる。

ケツァルコアトルは本気だ。如何に神霊として召喚され、その規模と権能が弱体化されたとしても、彼女の内に秘められている闘志は微塵も揺るぎがない。

ならば、自分も本気で相手をするまでだ。ケツァルコアトルという偉大なレスラーに対抗する為、修司もまた気を解放する。

「さぁ、遂に始まりました無差別級タイトルマッチ！　小難しいルールは一切排除されたこのデスゲーム、制するのは果たしてどちらなのか!?　司会&実況はこの私、ジャガー藤村と――――」

「解説は私、マーリン・花男と――――」

「……これ、私もやんなきゃいけないの？　えっと、同じく解説の金星の女神イシュタル――――」

「以上三名でお送りするゼーット!!」

「……え？　なにやってんのあの人達」

二人の真剣勝負が始まろうとしていたその時、一体何処から用意したのか、司会と実況、解説の札を掲げた席に二柱と一人の夢魔がドヤ顔で座っている。

すっかり置いてけぼりの立香とマシュ、取り敢えず修司の応援をしようと声を張り上げようとした時。

二つの強大なエネルギーが、リング中央で激突。白河修司にとって、絶対に負けられない戦いが始まった。

その１４３　第七特異点

ぶつかり合う力と力、双方とも尋常なる戦いを望んで始まった死闘は、互いの力比べから始まった。
互いに両手を組み、力をぶつけ合う。其処に小手先の技といった不純物はなく、何処までも純粋な力比べだった。
「おぉーっと！　両選手、先ずは取っ組み合いから始まったァッ！」
「先ずは純粋な力比べで相手の機先を制しようって魂胆だね」
「乱暴だけど、順当な展開ね。これを制した方がこの戦いの流れを掴むのだわ」
「え？　本当に実況解説をしちゃってるよこの人達!?」
「い、意外……でも、ないのでしょうね」
実況解説しているジャガー達の様子に唖然となる立香とマシュ。戦いは始まったばかり、陥没し始める地面の中心で力比べをし続ける二人を眺めて、二人は改めてリングから距離を置くことにした。
すると、今まで力比べをしていた二人の挙動に変化が現れる。このままでは埒が明かないと察した両者が、自身の首を引き……限界まで引き絞ると、互いの額に向けて頭突きを見舞わせた。
甲高い金属音、或いは被災した岩盤の音が大気を震わせる。互いに頭突きを放ち、二人の距離はキスが出来そうな程に近い。
しかし、二人の間に流れる空気はそんな甘ったるいモノではなく、互いに抱くのは相手を倒すという気概だけ。ジャガーマンを地面に叩き付けた時のような邪悪な笑みを浮かべているケツァルコアトルに対し、修司は真剣な表情で、互いの瞳を見つめている。
このまま状況が拮抗したまま続くのか？　観戦に専念していた立香が手に汗を握って見守る中、均衡は唐突に終わりを告げた。
修司の身に纏っている炎が、朱く変化を帯び始めた。界王拳、これ迄数多くの英傑英霊達を打ち倒してきた修司の奥の手の一つ。
此処で出すのか、突然に修司が自らの切り札を率先して引き出された事実に立香とマシュ、ロマニ達カルデアの面々は表情を僅かに強張

らせる。
　しかし、こうなったら修司の独壇場だ。こと力勝負に於いて界王拳を使った修司の膂力は並の英霊の比ではない。この状態の修司を圧倒するには、信仰深き彼の山の翁位しか今のところ存在していない。
　そんな時だ。修司の前から、突然フッとケツァルコアトルの姿が掻き消える。何が起きたと戸惑う以上に、修司の本能が既視感を感じ取り、自然と両腕を交差させて防御の姿勢を取る。
　瞬間、下から突き上げられる衝撃に修司は眉を寄せる。瞬く間にリング上空まで吹き飛ばされる刹那、両足で蹴り上げるケツァルコアトルの姿が見えた。
　来る。先の戦いでも覚えのあるケツァルコアトルの必勝パターン、この状況を覆す為に、修司は翔んで拳を振り抜いてくるケツァルコアトルに正面から打ち合いを挑んだ。
　振り抜かれる太陽神の拳。片腕で防いで見せるが、伝わってくるその一撃は非常に重く、この時点で修司は三女神の中でも一番厄介なのは、目の前にいる女神なのだと確信した。そんな女神に狙われ、辟易とする思いだが、純粋な力勝負なら依然として修司も負けていない。
　お返しに、修司も拳を振り抜き、ケツァルコアトルもこれまた同様に片腕で防ぐ。が、打撃の威力だけなら修司に軍配が上がるのか、彼女の表情の方がより痛みを感じたように表情を歪める。
　だが、そんな表情も一瞬。次の瞬間には振り払い、今度は蹴りを放ってきた。蹴りと蹴り、拳と拳、空中にて繰り出される打撃の応酬に、エリドゥ市の大気が震えていく。
「あ、ぐ……流石に、これは……！」
「――――っ！」
　しかし、先にも述べたように打撃の威力は修司の方が上をいっている為、打撃戦に持ち込んだ筈のケツァルコアトルから苦悶の声が漏れ始める。
「隙ありィッ！」
「っ!?」
　当然、そんな隙を修司は見逃さず、防戦に入り掛けたケツァルコア

トルの〝肉のカーテン〟を力任せに打ち破る。此処だ。防御を崩され、苦し紛れに拳を放ってくるケツァルコアトルの一撃を避け、瞬時に修司は彼女の両足を掴み取る。
その技に、立香は覚えがあった。
「あ、あれは――――！」
「おおっと、これはァ――――!?」
それは第四の特異点にて、なまはげの仮面を被った修司が、殺人鬼であるジャックザリッパーを倒した時に見せた必殺技。キン肉星の王子が得意とされている〝キン肉バスター〟、ルチャリブレを愛するケツァルコアトルに、同じくプロレス技で対抗する修司。
そのフェア精神は確かに清く、精錬されたモノがある。……が、この場面に於いて、それは悪手に過ぎた。
「――――甘いッ！」
「なァッ!?」
瞬間、修司の視界が逆転する。上から下へ、回転する様に返されるその姿は、キン肉バスターの合わせ鏡。
即ち――――。
「これが私の、キン肉バスター返しデェーッス!!」
修司の放つ筈だった必殺技、そのカウンターによってケツァルコアトルは大地に降り立った。砕かれる大地、周辺一帯を揺るがす大振動、その際のに引き起こされる衝撃が余すことなく修司の身体に叩き込まれていく。
視界が、白い火花で覆われる。乱雑に投げ出され、地に這いつくばる修司は、襲い来る襲撃による眩暈と脳震盪に、身体の自由が一時的に封じられてしまった。
「なんと言う大波乱！　空中乱闘から修司選手の必殺、キン肉バスターが炸裂するかと思いきや、ククルん選手まさかの返し技だァッ！
決め手となる筈だった技が返された以上、修司選手への肉体的精神的ダメージは深刻だぞぉッ！」
「そうですねー、これはちょっと不味いですねぇ」
「あのまま打撃戦に待ち込めば勝てる試合だったのに、無駄に心の贅

肉をひけらかすからこうなるのよ」
　相手がプロレス技で来るのなら、此方もプロレス技で挑むべきだと、そう思っていたが故の逆転劇。ケツァルコアトルの権能を未だに勘違いしたままの修司が敢えて選んだ戦法は、モノの見事に裏目に出てしまっていた。
「て言うか、なんかケツァルコアトルさんの耐久力、異常じゃない？修司さんの打撃を何発か受けた筈なのに、あまり利いた様子がないなんて……」
『それは、恐らく彼女の権能に依る所が大きいんだと思う。太陽神ケツァルコアトルは善性の神、人々の営みに寄り添い、時には人の王として顕現した事のある彼女は、謂わば善の化身。何だかんだ修司君も善の性質のある人間だ。そんな彼の攻撃は彼女の権能の前では大きく減衰されてしまうのだろう』
「そんな、それでは修司さんは常にハンデを背負わされているのも同じでは……！」
　善性の化身であるケツァルコアトルには、同じく善き人間である修司の攻撃はあまり通ることはない。性善説という言葉があるように、人は生まれながらにして善き部分が大多数を秘めているとされている。
　ケツァルコアトルはそんな善の性質を色濃く受け持った神性である事から、同じ善の性質を持つサーヴァントの攻撃を大きく減衰させてしまう効果がある。そんな彼女と対等近くに戦える者はこの場おいては悪性を持つジャガーマンしかおらず、そのジャガーマンは現在試合解説に熱中している始末。
　しかし、そんな反則染みた権能を前にそれでも修司は正面から戦うと決めた。ならば自分は、そんな修司を応援するだけだと、立香はロープ近くまで駆け寄って声を張り上げる。
「頑張れ修司さん、頑張れェーッ！」
「ファイトです！」
「ムーチョ、可愛らしいマスターちゃんからの応援、羨ましい限りデース」

「ただの可愛い娘じゃあねぇぜ。俺達の頼れる――――もう一人のマスターさ」
「なら、カッコ悪い所は……もう見せられませんね」
立香の応援が耳朶を叩き、朦朧としていた修司の意識を叩き起こす。自分に出来ることを精一杯にと、頑張れと後押しされた修司は情けない自身を内心で叱咤しながら、スリーカウント以内に立ち上がる。
「あぁ、悪かったよケツァルコアトルさん。この期に及んで、俺はまだアンタを舐めていた。太陽神でありながら、時には人の王としての側面があった貴女を、俺は心の何処かで見下していた」
「――――」
サーヴァントとは、強さを打ち止めされた存在。神霊だろうとその枠組みは絶対であり、より強い存在であるほど、打ち込まれる楔の影響は色濃く残ってしまう。
英霊とは人類史に刻まれた影法師。これ迄幾度となく英傑英霊と正面から戦い、時には真なる英雄とも呼べる怪物達と相手してきた。
だからなのだろう。多くの英雄達と戦い、打ち克ってきた事で自然と修司は無意識の内に慢心を抱いてしまっていた。ダウンサイジングされた神霊相手に、全霊を出すのは忍びないと、心の何処かで遠慮してしまっていた。
情けない。もし万が一ここにあの翁がいたら、一体どんな叱責を受けた事だろう。無様と蔑むか、それとも愚かと呆れられるか……或いは、その両方か。
自分に出来るのは、いつだって最善以上に全力を尽くす事だけ。自分の出来ることを成し遂げる為に――――修司は、自らの意志でその領域に踏み込む。
眼を瞑り、意識を集中させる。周囲の流れる風を、立香達の呼吸の音を、自身の心音や流れる血液の流れを、その全てを認識し、把握していく。
軈て、光が修司の身体から溢れ、纏っていき、次に眼を開けると――――その瞳は身に纏う光と同じ、仄かな銀色の輝きを纏わせていた。

明らかに変わった修司の雰囲気、ピリピリと皮膚に伝わってくる圧力に微笑む太陽神の頬に汗が伝り落ちていく。
「――――さぁ、第二ラウンド……始めるか」
「ムーチョ」
感嘆の声が漏れる。人は、人間とは此処まで至れるのか。歓喜に満ちた笑みを浮かべながら、ケツァルコアトルは修司に向かって地を蹴った。

◇

振り抜かれる拳、当たればダメージは免れず、場合によってはサーヴァントすら致命傷になりかねない、太陽神ケツァルコアトルの本気の一振。
相手の顔面目掛けて放たれた拳は、されど当たることはなく、ただ空しく空を切るだけに終わる。大きな一撃は当たらないのなら、細かく鋭く回転を上げることで、ケツァルコアトルは拳の弾幕を修司へと見舞う。
面制圧にも等しい一方的な弾幕。一種の宝具とすら見間違えてしまうその弾幕を……信じがたい事に、身に纏う胴着に掠りすらしなかった。
この時、初めてケツァルコアトルは我が眼を疑った。物理的に避ける余地などありはしない弾幕を、事実躱してしまう矛盾をやり遂げる修司に、太陽神はただあ然となっていた。
そして、それは解説していたマーリン達も同様で、特に女神イシュタルは、人間である修司の飛躍的過ぎる強さの発露にただただ驚いて

いた。
「――ちょっと待ってよ、何なのよアイツ、急に動きが変わりすぎてない!?」
「どうやら、あれが彼の本気の形態なんだろうね。いやぁ驚いた。確かにあれじゃあ円卓の彼等では止められないや」
「うーん。其処にいるようで其処にいないような……もしや、彼はシュレディンガー的な人類だった？」
第六特異点にて、信仰深い山の翁の助力によって得られた白河修司が踏み込んだ新たな領域。これ迄何度かこの状態を披露した場面はあったが、何れもホンの一瞬。瞬き程度の合間しか使用してこなかった。
常時展開する程の体力が無かったのか、それとも使う必要が無い程に使い手自身が強くなったのか。どちらにせよ、修司がその気になったという事実は変わらない。
太陽神は笑う。邪悪に、天真爛漫に、神の眼を以てしても捉えきれない修司の動きと、其処に至るまでの努力に。
「あは、アハハハハハ！　凄い！　凄いわ修司！　貴方は強いのね。何処までも、何処までも！　貴方は際限なく強くなっていく！」
「――――」
「人間とは、此処まで強くなれるのね。人間とは、此処まで至れるのね。あぁ、嬉しい。貴方という人間が存在したという事実だけで、神々（私達）は報われたわ」
「……なに言ってんだよ」
「――――え？」
「こっからだろ？　俺も、アンタも！」
修司の口許が不敵に歪む。まだまだ自分はこんなものじゃない、自分の強さへの探求は始まったばかりで、これから先もドンドン修司は先を進み続けるだろう。
終わることなき前進。それは、人類に寄り添ってきたケツァルコアトルにとって、何物にも勝る口説き文句に等しかった。
「あぁ、本当に――――」

瞬間、ケツァルコアトルから炎が吹き荒れる。修司が普段使う闘気とは似て非なる焔、それが先の戦いで見せた彼女の宝具。
しかし、それならば組み敷かれ無ければ良いだけの話だ。今の修司にはそう言った小手先の技は意味を成さないのは、立ち会ったケツァルコアトルが一番よく知っている筈。
ならば、一体何をするつまりなのか。注意深く相手を見据える修司が次に目の当たりにしたのは……空を往く火の鳥の姿だった。
高く、高く翔んでいく太陽の神。高さを増すごとに膨れ上がっていく神の力。
「行くわよ修司、私の全て……受け止められるかしら！」
軈て、ケツァルコアトルは一つの形へと形成していく。それは嘗て全ての種を滅ぼしたとされる大隕石、星を揺るがす宇宙からの贈り物――その、再現である。
実況席から、やりすぎだと騒ぐジャガーの声。白河修司という一人の人間を倒す為に、此処までやるのかと呆れるイシュタル。残ったマーリンはマシュと立香の所まで駆け寄り、逃げる準備を始めている。
落ちてくる神性。たった一人の人間を倒す為に、己の全てを賭けて挑んでくるその矜持。此処で逃げては――あまりにも無作法。
故に。
「良いぜ、ケツァルコアトル。貴方の挑戦……受けて立つ」
修司もまた、全力でこれを迎え撃つ。落ちてくる太陽の神、これを破壊せず、威力だけを殺しきる。無理と矛盾に彩られた難題に、それでも修司は笑って挑む。
飛ぶ。落下してくる大隕石に向かって修司が繰り出すのは……自慢の拳。これしかなく、またこれで充分だった。
落ちてくる大質量の神性に、修司の拳が振り抜かれる。瞬間、エリドゥ市に光が満ち溢れ、その様子はまるで太陽の沈む様な光景だったという。
「……あれ？　そう言えば、ケツァルコアトルの攻撃って必ず当た

るっていう権能じゃなかったっけ？」
「マーリンさん？」
「おっと、それは今は言わない約束だよ。レディー達」
「フフォーウ！　マーリンマジフォーウ！」

◇

一方、その頃。
「……ふむ、目が覚めた時、そこは冥界であったとはな。ハッハッハ、愉快愉快」
「――ではないわぁ！　何を死んでいるのだ我エーッ!?」
偉大なる賢王ギルガメッシュ、現在彼は冥府にて一人ノリツッコミを嗜んでいた。

その１４４　第七特異点

「――――う、うぅ……ん」
「あ、起きた。みんなー！　ケツァルコアトルさんが起きたよー！」
朧気だった意識が浮上し、目を覚ましたケツァルコアトルが最初に目にしたのは、自身を見下ろすオレンジ色の髪をした少女、名前は確か……そう、藤丸立香だった筈。
人類最後のマスターの、その片割れ。頭部に伝わってくる感触からして、どうやら自分は彼女に膝枕をされているようだ。何故こんな事になっているのか、順を追って記憶を辿ると……ある事実に辿り着く。
空高く舞い上がる自分と、淡く輝く光を纏った修司。互いに全力を出してのぶつかり合い、一体あれから自分はどうなっているのか。
いや、本当は分かっていた。周囲に被害の少ない大地や自分が気絶している事から、どうやら自分は敗北したらしい。気を失っていたこともそうだが、全力を出し切った自分に対して、相手の修司はまだまだ余裕が残っている様子から、自分の負けは覆らない事実だ。
悔しいが、認める他なかった。自分は目の前の青年、白河修司に正面から戦いを挑まれ、敗北した。サーヴァントの身である事も言い訳にせず、ケツァルコアトルは粛々とその事実を受け入れる。
「よう、身体の方はもう平気そうか」
「ええ、貴方には随分と迷惑を掛け、それ以上に喜びを与えて貰いました。このケツァルコアトル、謹んで此度の敗北を受け入れようと思います」
悔しさで腸が煮え繰り返る思いだが、それ以上にケツァルコアトルは充足感に満ちていた。人間の可能性を見せ、示してくれた修司に太陽神は敗北の憤りよりも、人類の強さに嬉しさを感じていた。
あれだけの可能性を見せられた以上、自分が口出し出来る事はほぼない。あるとしたら、これからの自分の立ち位置を示す事くらいだ。

「戦う前の約束を此処に。これより、私はあなた方の配下に加わりまーす」
拳を地面に突き立て、頭を下げる。神にとって約束は何物にも勝る契約だ。それが喩え口約束であったとしても、決して違えてはならないモノ。
そんな彼女に修司は改めて受け入れた。
「あぁ、これから宜しくな」
『じゃあ、これで晴れて修司君もマスターとして成立する訳だ。やったね修司君！　パートナーが出来るよ！』
「おいバカやめろ」
サーヴァントとの契約。それは修司が体験してきたこれ迄の特異点修復の旅に於いて初めての経験である。
思い返せば、最初の特異点を攻略してからこっち、召喚する為のリソースは全て碌でもない結果に終わった。黒鍵というよく分からない得物だけがコロコロ落ちていくだけの召喚、時には好物の激辛麻婆が呼び出されたりするが……いや何で麻婆？
この二つしか喚び出されなかった事から、第二の特異点を攻略してから、修司はサーヴァントの召喚を諦め、そのリソース全てを立香に譲渡した。使い道のない礼装に費やすより、強力なサーヴァントを引き当てる縁を結んだ彼女に任せた方がいい。その日、ポンポンと頼もしいサーヴァント達を喚び寄せる立香を尻目に、修司は自室の枕を涙で濡らした。
そんなほろ苦い思い出を噛み締めながら、いよいよ初めての契約を結ぼうと、修司はケツァルコアトルに令呪が刻まれた手を差し出す。初めての契約の相手が太陽神という事に少々気後れするが、それでもこれで充分マスターと呼べるようになる。
いつしか、カルデアの一部のサーヴァント内で広がっていた嘲り、人類最後のマスター（笑）などと呼ばれずに済むのだ。
その称号（名）で呼んだ奴は等しくぶっ飛ばしてきた修司にとって、この機会は絶好のチャンスとも呼べた。
――――閑話休題。

そして、跪くケツァルコアトルに手を差し出すこと数秒、これ迄立香にしか確認しなかった令呪の輝きが、遂に修司の手にも顕れるようになった。これで自分もマスターだと、そう言って胸を晴れる現象が起きようと――――。

〝バチン〟

「は？」

「――――え？」

――――確信した時、修司の手から火花が散った。これ迄の旅路の中で見たこともない現象、これ迄多くのサーヴァントと契約をしてきた立香や、その場を目撃してきたマシュ、ロマニを含めたカルデアの者達から見ても初めて目の当たりにする現象に、誰もが言葉を失い、唖然としていた。

「――――えっと、今ので契約完了なのかな？」

『い、いや。原因は不明だが修司君とケツァルコアトルの間に契約のパスは繋がっていない。契約は失敗した？　そんな、こんな事例始めてだぞ？』

嫌な予感を覚えた修司がロマニへ問うと、そこには案の定契約失敗という無慈悲な事実が突き返されてきた。何故失敗するのか、その理由を解明して対応する為に何度も修司はケツァルコアトルとの契約を試みたが、結果は総じて失敗。初めて自分のサーヴァントと組める事を期待していた修司は、半泣きしながら肩を落とす。

本気で自分との契約を望んでいた修司の落ち込み様を見てしまうと、ケツァルコアトルも責めることは出来なかった。

『うーん。残念だけど、修司君のパートナーはまた次の機会という事で。立香ちゃん、申し訳ないけどお願いしてもいいかな？』

「え？　私は別に良いけど……ケツァル姐さんは大丈夫なの？　私なんかと契約しちゃって」

「えぇ、とても残念な結果となりましたが、こうなっては仕方ありません。ですが、別に妥協している訳ではありませんよ？　これ迄六度も

特異点を乗り越えてきた藤丸立香、貴女の事も興味津々でしたからね」
「そ、そうなの？」
「ええ。だから、自分を〝なんか〟って卑下しちゃダメよ。自分を下に見たら、それだけ貴女の可能性は小さくなるのだから」
「まぁ、あまり自分を大きく見せるのもアレだけどね。最悪、傲慢で傍若無人なあの金ピカみたいになるんだから」
結局、ケツァルコアトルは藤丸立香と契約を結び、晴れて彼女は三女神同盟を抜ける事を決め、これからの旅を動向することとなった。
「はぁ、俺のサーヴァント、一体どこにいるんだろ」
「ドンマイ修司、君の次の出会いに期待しよう」
「そんな合コン風に言うのもどうなん？」
マーリンからの慰めも受け、一先ず立ち上がった修司は、その後無事だったエリドゥ市の戦士達と挨拶を交わし、マルドゥークの手斧を翼竜達が運ぶ手配を整え、この地でのやるべき事は全て完了とするのだった。
ただ、その途中で一行はケツァルコアトルに連れられてある広場へと連れてこられる事となる。連れてこられたのはエリドゥ市の広場、その中央部分には石碑にも似た建造物が突き立てられており、ケツァルコアトルはこれを王権の一つである円筒印章と呼称していた。
文字と言うより絵、小さな羅列する文字と複数の絵が掘られたその印章は何やら不気味な予見を思い起こさせた。これから起きるこの地での最悪、ケツァルコアトルは観光名所の一つと誤魔化していたが、修司にはそうは思えなかった。

やはり、この地にはまだ何かが隠されている。それを今後の旅の中で見付けるしかないと察した修司は、一先ずの考察を中断し、皆と共にウルクへ帰還する事となった。
その後、マルドゥークの手斧を運搬する際にジャガーマンが何やら不満を溢していたが、その全てがケツァルコアトルに一蹴され、野生のジャガーは悲しき雄叫びを上げながら手斧を運ぶ翼竜達の監督役

を担う事になり、一行とは一時此処で離脱する事となった。
　そんなジャガーを哀れに思った立香が、殆んどお情け感覚で彼女とも契約を結ぶ事になるのだが……それはどうでもいい話なので割愛。
　そしてエリドゥ市から引き返すその途中、寝ずの番をしてくれた立香に感謝しながら床に就くと、修司はふと違和感を覚えた。やはり何かが違う。自分の知るイシュタルとは気配が違うことに戸惑うが、幸いなことに彼女から敵意や害意の類いは感じなかった。
　どうやら純粋に立香との対話を楽しんでいるだけで、それらしい素振りを見せないイシュタル（？）に安堵すると、改めて修司は横になり翌朝まで体力の回復を練るのだった。

◇

「王様が……死んだ？」
　翌朝、マルドゥークの手斧だけでなく、ケツァルコアトル達も仲間に引き入れた事で、いい報告が出来ると、意気揚々にウルクに辿り着いた一行がシドゥリから聞かされた話は、賢王ギルガメッシュの訃報だった。
　死因は不明、一時は現代日本に於いても度々問題視されてきた過労死なのではないかと、他人事ではないロマニを含めた全員が唖然とした様子で王のいない玉座を見上げている。
「そんな、あの王様が死ぬなんて……」
「シドゥリさん、王様はが崩御されたのは……その、いつ頃なのでしょう？　私達がエリドゥに向かう時はギルガメッシュ王はまだ健在

だった筈です」
「……はい。マシュ様の言う通り、王は昨夜までは健在でした。魔獣戦線の建て直しも順調になり、仕事も取り敢えずの段落を済ませ、これ等の報告を私がする事で王は一時の休みを受けていただく……その、手筈でした」
　嗚咽を抑えながらも当時の事をシドゥリは順番に説明していく。その日、王はまだ健在だった。立て込んでいた仕事を全て片付け、これで一時の休みを受け入れて英気を養って貰い、再び政務に挑んで貰おうと、シドゥリは片付いた粘土板を抱えながら玉座を後にした。
　そして、各部署の長に粘土板を配り終えたシドゥリが再び玉座へ戻ると、其処には眠るように息を引き取った王がいた。突然の王の死、その事実に修司は眩暈を覚えたが、同時に感じた違和感に我を取り戻した。
「――そう言えば、ウルク市内から感じられる気の数が結構減っている気がするけど、シドゥリさん、何か心当たりがあったりしないか？」
「言われてみたら、ウルクの街もいつもより活気がない様な……」
　ウルクに戻ってきて早々、ギルガメッシュ王の死去という事実に混乱していたが、修司の言う通り、現在ウルクには以前にはなかった不気味な静けさが渦巻いていた。
「……そう、ですね。言われてみれば皆様がウルク市から出発されてから続々と死亡者の報告が増えてきたかと思われます。特に、年配の方が次々と」
「っ！」
　現在、ウルクには死が渦巻いている。シドゥリからその話を聞いたアナは一目散にジグラットを後にする。恐らくは彼女が贔屓にしている花屋の老婆の所へ向かったのだろう。アナとは後で合流する事にして、改めて一行は話を続けた。
「――成る程、それは少々不自然だな。女神ゴルゴーンの権能的にこの手のやり方はしないし出来ないだろうから、恐らくは……別の女神の仕業か」

「え？　三女神同盟は……ゴルゴーン、ケツァルコアトルさん、イシュタルさんの三柱では？」
「ちょっとマシュ、幾ら何でもそれは無いんじゃない？」
「え!?　違うの!?」
　これまで、三女神同盟とはゴルゴーン、ケツァルコアトル、イシュタルの三柱だと思い込んでいた立香とマシュの二人は、前提が覆えられた事実を前にロマニすらも驚いた様子で狼狽していた。
「……一つ、心当たりがあります」
「シドゥリさん？」
「以前、皆様がウルクに訪れて初めての夜、立香様の思い付きから話が広がった時、修司様はイシュタル様の〝力〟に付いて話をされましたよね？」
「あぁ、覚えているよ」
　それは修司達がウルクに訪れて過ごした初めての夜、後のカルデア大使館にて話をした時の事だ。女神イシュタルは霊基の格自体はゴルゴーンやケツァルコアトルにも負けてはいないが、感じられる力の大きさでは見劣りしてしまう。
　其処に何らかの理由があるのではないかと、疑問に思ったシドゥリは、仕事の合間に王の許可の下、秘密裏にその事を調べてきた。
「現在、イシュタル様のお力は召喚された際に大きく力が削がれている状態。これは召喚した巫女達の力不足かと思われてきましたが……」
『実際は、違ったと？』
「――はい、恐らくイシュタル様は力が削がれているのではなく、分けられた状態なのではないでしょうか」
　イシュタルの他の女神に比べて、やや力が劣っている原因。最初は巫女達の力不足による弊害かと思われていたが、シドゥリは一つの可能性に行き着きた。
　即ち、力の分裂。神とは時に人間のように自身と近しい存在を親兄弟、或いは姉妹のように認識する時がある。それは、シュメル神話に綴られた神々も例外ではない。

そしてこの場合、女神イシュタルの力が他の女神と比べてやや見劣りする理由、それは召喚した巫女達の実力不足による弊害ではなく、単に近しい存在が分かたれたが故の事だった。
「じゃあ、今回王様やウルクの人々が急に亡くなったのも、そのイシュタルに近い神様の仕業って事？」
「……て言うか、それってもしかしなくてもエレシュキガルの事よね？」
「え、エレシュキガル？」
「て言うか、ケツァルコアトルは知ってたの？」
「いや、てっきり皆さんもご存じなのだとばかり……」
エレシュキガル。イシュタルと分かたれる形でこのメソポタミアに顕現した女神、冥界と死者の魂の管理を生業とした冥界の女主人。その女神が今回の首謀者で間違いないと、ケツァルコアトルは語る。
冥界から出ることを許されず、エレシュキガルもそれを是とした。イシュタルにとって天敵とも呼べる神性、冥界に於いて絶対的な法とも呼べる女神が今度の相手だという。
今回も厄介極まりない相手だが、それでも何とかするしかない。冥界に囚われた人々の魂とギルガメッシュ王を取り戻す為、一行は嫌がるイシュタルの首根っこを捕まえ、再びジグラットを後にするのだった。
「……冥界の女主人か。やっぱり、閻魔のおっちゃんみたいにデカイ図体してんのかな？」
「いや、なに言ってるの修司さん」
「フォウ……」

その145　第七特異点

エレシュキガル。それは、女神イシュタルと対を為す存在であり、此度の特異点が発生した際は三女神の一柱として人類と敵対する道を選んだ冥界の女主人である。

本来であればウルクの都市神であるイシュタルのみを召喚するつもりが、依り代とした女性の内面が余程二柱の神性と色んな意味で相性が良かったのか、或いは召喚した巫女達の実力が凄まじかったのか、一人の依り代に二つもの神性が器として成立してしまった。

その片割れが善のイシュタルであり、悪のエレシュキガルである。現在エレシュキガルはクタ市の地下深くの冥界へ陣取っており、一行は冥界に囚われた賢王とウルクの人々の魂を解放させる為に、目的地であるクタへ向かった。

「さて、取り敢えず超特急でクタ市にまで駆け付けた訳だが……君達、そろそろ観念してもいいんじゃあないかな？」

「はぁ、ケツァルコアトルがいなかったら力付くで逃げられたのに」

「いやぁ、何となく分かっていたよ？　分かっていたけどさ……何で姉弟子の顔をした奴と二度も顔を合わせなきゃならないんだよ」

呆れ半分でマーリンが後ろで踞る一人と一柱へ振り返ると、イシュタルと修司がそれぞれ地面に体育座りで俯いていた。エレシュキガルは女神イシュタルにとって天敵にも等しい神であり、また修司にとって知人との邂逅である。

ジャガーとイシュタル、立て続けに知人の顔をした女神と相対しする事で修司のメンタルはゴリゴリに削られ、唯でさえ辟易とした状態だ。そこに冥界の女神として知られるエレシュキガルまでもが姉弟子の顔をしているのだと考えると、修司がげっそりするのも仕方がなかった。

しかし、どんなに否定した所で事実は変わらないし、自分達のするべき事も……また、変わらない。女神ゴルゴーンとの決戦もあと数

日まで迫っている以上、あまり悠長な事はしていられない。
　そして、ケツァルコアトルに叱咤されるイシュタルを見て、いい加減腹を括った修司は、気合いをいれるように自身の両頬を軽く叩く。
「ッシ、今さらウダウダしても仕方ねぇ。とっとと冥界に向かって片を付けよう」
「だね。……所で、冥界にはどうやって行くの？」
　一般的に、冥界という場所は死後の人間の魂が行き着く場所だとされており、生きている人間には決して踏み込めない領域とされている。
　しかし、此処は神々が未だ存在している神代。人と神が別たれて間もない時代、神秘が色濃く残るこの世界には冥界もまた人々と近しい距離に存在していた。
「やっぱり、地面をブチ抜くしかないのかね？　出来ればこの時代の大地をあまり壊したくはないんだけど……」
「まぁ、アンタが加減なくやったらそうなるでしょうよ。あまり派手な事をしたら、それこそエレシュキガルの逆鱗に触れる事になるわ。ここは、経験者である私に任せなさい」
「成る程、確かに一度冥界下りをした女神イシュタルなら、冥界の門を開くのに適しているね」
「冥界下り？」
　修司が冥界への突入方法のやり方を模索していると、溜め息を吐きながら観念した様子のイシュタルが自分に任せろと前に出る。女神イシュタルがどうして冥界への行き方を知っているのか疑問に思い首を傾げると、マーリンが納得したように手を叩いた。
　冥界下り。曰く、神話のイシュタルはエビフ山を攻略した事もあって、当時は物凄く調子に乗っていた。シュメル神話に於いて自分こそが至上の女神だと、信じて疑わなかった天の女主人は、七つの権能を持って単身冥界へと侵攻を始めた。
　あのエビフ山を制覇した自分に怖いモノは何もない。意気揚々に冥界へ繰り出したイシュタルは――見事、エレシュキガルの前に大敗を喫した。七つの権能を持った空前絶後の力を持ったイシュタル

は、冥界に於ける絶対的な法則であるエレシュキガルに為す統べがなく、自慢の権能も冥界に備えられた七つの真実の門とやらに剥がされ、エレシュキガルに辿り着く頃にはイシュタルは裸同然にされていた。

その後はエレシュキガルの持つ槍に滅多刺しにされ、冥界に囚われる事になるが、その後は神々の交渉の後に何とか冥界から解放されたという。

「――と、そんな訳でエレシュキガルは女神イシュタルにとって天敵とも呼べる存在という訳さ」

「……お前、人の敷地に押し入り強盗をしておいてムザムザ情けを掛けられたのかよ」

「う、煩いわね！　イチイチ過去の事をほじくり返さないで！」

イシュタルがやったのは、冥界という別の神が管轄する所に無断で押し入るという強盗紛いの事を仕出かしたのと同然で、エレシュキガルは不正に侵入してきたイシュタルを正当に防衛したに過ぎない。

本来ならエレシュキガルの冥界という権能を用いてイシュタルを打ち首に処す事も出来た筈、にも拘わらず打ちのめす程度に加減し、その後も条件付きであるもののイシュタルを解放している。

――もしかして、エレシュキガルとは普通に全うな女神なのでは？　三女神同盟の一柱で人類に仇為す存在となっているのも、実は彼女なりの深い理由があるのでは？　この時、修司の中で女神エレシュキガルは冥界のおっかない神から何だかんだ慈悲深いマジモンの女神（暫定）に格上げされた。

因みに、ケツァルコアトルは肉体言語が得意な話の通じる女神である。

閑話休題。

「まぁ、イシュタルが当時は甘ったれた女神なのは事実として、今回はその辺りも踏まえてキチンと案内してくれる筈だから、きっと大丈夫でーす！」

「今回は、ケツァルコアトルさんは同行しないのですか？」

「冥界では神性はマイナスに働くの。大した力のない奴は差程効果は

無いけど、強い神性はその分マイナスの補正を受ける事になるわ」
「あぁ、確かに太陽の神であるケツァルコアトルとは相性が最悪になりそうだな」
「序でに言えばマーリンもね。コイツ、弁舌が立つし、仮に私達がエレシュキガルに負けた場合、頼りになるのは地上にいるコイツらだけよ」
　エレシュキガルは冥界に於ける最高責任者。冥界に落ちたら最後、立香達は彼女との戦いは避けられず、勝って冥界から抜け出すか、負けて冥界に囚われるかの二択しかない。
　仮に負けた時、その時は地上に残るケツァルコアトルやマーリンが立香達の救出を考えるが、その時はどう足掻いても女神イシュタルは助からず、ゴルゴーンとの決戦は最悪な形で迎える事となるだろう。
「……ま、要は負けなきゃ良いだけの話だろ」
「簡単に言うけど、勝算はあるの？」
「でなけりゃ此処には来ていないだろ」
「そ。そのくらい単純だと、私も気が楽だわ」
　遠坂凛という女性を依り代に、新たに新生を果たした女神イシュタル、器である彼女の影響を多大に受けたイシュタルは、嘗ての頃より大分角が取れ、比較的人に近しい価値観を持つようになった。
　そんな彼女の性根は、勝ち気で強気な負けん気さが特徴で、物事を単純に捉えるその在り方は何処と無く修司と似ている。
「んじゃ、そろそろ行くわよ！」
「うし、二人とも俺の体にしがみつけ」
「おー！」
「よ、宜しくお願いします！」
　気持ちを固めたイシュタルが、マアンナと共に空へ飛ぶ。彼女の内から感じられる力が強くなっていくのを感じた修司は、立香とマシュの二人に自分にしがみつく様に指示を出す。
「マアンナ船首砲門に潮汐収束弾、装填！　出力ラピス・ラズリの三分の一の二等辺！」
「砕け冥界の門！、空無き地に天の光を！」

瞬間、空から光の矢が放たれ、一行は地下深くへと落下していった。

◇

「地表を抜けたら、其処は冥界だった、ね。マジでその通りだとは」
「冥界って、地下なんだ。確かに言われてみればそんなに違和感無いかも」
　イシュタルの豪快な一撃によって冥界への突入を果たした一行は、眼前に広がる空間に唖然となった。そこはまるで巨大な地下空洞、物理的にあり得ない空間を前に修司は驚き以上の関心を抱いた。
「今更聞くが、転移の魔術とか使わないのはエレシュキガルに力を奪われるのを恐れた為か？」
「そうね。冥界への転移は出来なくも無いけど、万が一の事を考えたら迂闊に使いたくないってのが本音ね。転移した直後、力を奪われて落下死なんて笑えないでしょう？」
　上空から追いかけてきたイシュタル、どうやら本当に冥界の案内を努めてくれるらしく、何だかんだ立香達を見捨てない彼女に、修司は遠坂凛の面影を思い出す。
「ねーイシュタル、この鳥籠みたいなのなにー？」
「それ、エレシュキガルが作った魂の檻よ。あんまり見つめない方がいいわよ、下手したら廃人になるから」
「うぇえ!?」
　辺りに散りばめられた無数の檻、細く長い檻の中には幾つもの青白い炎が犇めき合っている。それが嘗て地上に存在した人の成れの果てだと教えられた立香は、驚きながら後退り、マシュと共に修司の所

へ駆け寄っていく。
「つまり、此処にある檻の中にある魂全部が、これ迄の戦いで死んで逝った人達の魂か」
「……やはり、ギルガメッシュ王を死に誘ったのも、女神エレシュキガルの仕業なのでしょうか」
「――――前来た時は此処までじゃなかったんだけどね。アイツ、本格的に冥界を死者の楽園にするつもりなのかしら？」
死者の国なのに楽園とは、何とも矛盾した話に思えるが、確かにイシュタルの言うとおり、冥界には死者の魂で溢れてしまっている。この中には賢王ギルガメッシュを始め、大勢の人々の魂が囚われてしまっている。
彼等を一刻も早く取り返す為、修司達は先へと進む。途中、亡霊のエネミーが何度か一行の前に立ちはだかったが、マシュと修司によって瞬く間に撃退。その後の道中も特に弱体化された様子もなく、一行の旅路は快調に進んだ。
「修司さん、どう？　なんか体に変化とかない？」
「今の所は特にないかな。冥界は女神エレシュキガルの管轄だって聞いたから突入した時点で何らかのペナルティがあると思っていたけど、案外平気っぽいな」
「それは、多分アンタ達がカルデアから来た異邦のマスターってのも理由の一つなのだからじゃない？　エレシュキガルが絶対的な力を持つとされているのはあくまでも〝死者〟に対してだからね。あくまで人間である貴方達にはあまり意味のない制約よ」
「良かったね修司さん、人間認定されたよ」
「ほっとけ」
あくまでもエレシュキガルの支配が通じるのは死者だけであり、生きたまま冥界に落ちた立香達はその対象になり得ない。
過去に女神イシュタルが完膚なきまでに叩きのめされたのは、偏に彼女が神だからに他ならない。神性ではなく、あくまで人間である修司達にとって冥界での縛りは有ってないようなモノだった。
尤も、生きた人間が冥界に拘わりたいと思わないのが普通なのだが

……。
『いやー、冥界に行くと言って通信が繋がるか不安だったけど、杞憂で良かったよ。しかし、本当に地下にあるんだね冥界って』
「そりゃそうよ。天界も下界も冥界も、同じ織物(スクロール)から成り立っているんだもの。私からしたら冥界も天界もない現代の方が不思議よ」
「天界かぁ、やっぱりみんな頭の上に輪っかとか浮かんでいるのかな？」
「天使の羽とか生えてたり？」
「……何の話？」
　それからイシュタルの神話に於ける世界の成り立ちを聞きながら冥界を下り続けると、一つの門が聳え立っていた。恐らくは、これが過去にイシュタルの権能を剥がしたと言われる七つの門の一つなのだろう。
〝――冥界に落ちた生者よ、その魂の在り方を答えよ〟
「基本的に、門からの質問は二択よ。貴方達のどちらかが試されるから、楽だと思った方に答えなさい」
「え？　そんなんでいいの？」
　イシュタルの権能を剥がしたと言われる門、まだ質問の内容は聞いていないが、それでもこの形式は下ってきた人間に対して有利な気がする。それとも、外した時のペナルティが余程重いのか？
　そして、恐らくこの門の前では如何なる嘘も通じず、真実しか通すことはない。一体どんな質問が飛んでくるのか立香達は身構えていると。
〝――それでは、罪深き者、藤丸立香に問う〟
（え？　名指し？）
〝美の基準は千差万別のようで絶対なり。黒は白に勝り、地は天に勝る。であれば――〟
〝エレシュキガルとイシュタル。美しいのはどちらなりや？〟
『「「「……ンン？」」」』
「ちょっと！　前の時とは違うじゃない！」
　飛んできた問いは確かに二択、しかし……なんだろう、予想とし

ていたものとは全く違う内容に立香は勿論、修司やロマニすらも一瞬質問の意味を理解出来なかった。
「こ、これは神話になぞられたナゾナゾの類い、なのでしょうか？」
「いや、或いは引っ掛けという可能性も。もしかしたら、二択という自体が此方を惑わすブラフか？」
「す、すみませーん！　テレフォンとか救済処置はありますかー!?」
〝――――――N――――――A――――――I――――――Z――――――O――――――〟
〝少し冷静に考えて、これ迄の旅路を振り返ってみよう。其処に答えがあるのだわ　ｂｙ麗しき冥界の女主人〟
「あ、ヒントはくれるんだ」
「やだ、冥界の女主人優しすぎ」
救済処置はないと言いながら、それでも甲斐甲斐しくヒントは出してくれる辺り、この女神も何だかんだ世話焼きである。
て言うか、この流れでもう答えを言っている様なモノじゃん。優しいというか甘いというか、本当にこんなのが最後の三女神の一柱なのかと思えてしまう程に、冥界の女神は慈悲深かった。
「じゃ、じゃあ折角ヒントもくれたことだし、答えは――「イシュタル！」　え？」
「答えはイシュタルよ！　間違いないわ！」
「えぇ、此処でそれを言うか？　普通」
「い、イシュタルさん、それは、幾ら何でも……」
そんな冥界の女主人の慈悲をドライブシュートで蹴り倒すのが、天の女主人であるイシュタルだった。問いに応えるのは立香だと言うのに、まさかの被せる勢いで応えるイシュタルに、修司は勿論マシュですら若干引き気味だった。
「だって、美の女神と言ったら私じゃない！　私は美と戦いを司るイケイケな女神！　対してあっちは冥界なんてジメジメした所がお似合いなエレシュキガルよ！　答えなんて決まっているじゃない！」
「お前、本当にそう言う所だぞ？」
美しいのは自分だと、頑なに吼えるイシュタルに三人とも辟易とし

ていた。これではいつまでたっても進めないと頭を抱えていると、〝ブブー〟と何処からか不正解の音が鳴り、女神イシュタルに雷が落ちてきた。

「ミギャァッ!?」

「い、イシュタルさーん!?」

〝B――――A――――K――――A――――G――――A――――〟

〝質問者以外の答えは不正解と見なします。他の参加者は控えます様に〟

プスプスと煙を立てるイシュタル。そんな彼女を尻目に立香が正解を口にすると、ピンポンという聞き慣れた正解の音が鳴り、門の扉が開いていく。

「ま、まさか冥界の七つの試練にこんな仕掛けがあっただなんて……」

「アレか、不在防止の為のシステムに近しい気もするが……」

「と、ともあれこれで先に進めます。イシュタルさん

、大丈夫ですか?」

「うぅ、なんて意地の悪い問いなのかしら。悪辣さで言えば前回以上よ!」

雷に打たれ、丸こげとなったイシュタル。これに懲りたら少しは自重して欲しいなと思いながら、一行は門を潜った。

立香もマシュも問題なく進み、修司もまた何ともなく進んでいける。後に残すのはイシュタルとなった瞬間。

「イタッ!?」

バチリと、彼女の体から光が走った。今度は何だと振り返ると、其処には幾分か縮んだイシュタルがいた。

「イシュタル、お前……なんか縮んでね? て言うか、なんかガッツリ気が減ってね?」

「ほ、本当だ。イシュタル、縮んじゃってるよ!?」

「だ、大丈夫ですか!?」

「な、なんで!?」
マアンナを含め、イシュタルの体全体が縮んでしまい、感じられる気に至っては半分以下になってしまっている。これも先の答えに割り込んだ罰なのか、一行が突然の不思議に首を傾げた時、尊大に満ちた声が修司達の耳朶を叩いた。
〝そうよ、自らの愚かさを思い知ったかしら、イシュタル。アナタは冥界下りに失敗している。この神話上の事実があるかぎり、冥界の呪いからは逃れられない〟
〝荒野を象徴する冠。葦の測量尺。瑠璃の首飾り。ビーズのネックレス。金の腕輪。魅惑の胸飾り。そして、最後に残された貴婦人の衣装。嘗てのアナタはこの七つの宝を私に奪われた〟
〝その決まりは今も生きている。宝に該当する権能がない以上、アナタ自身が負債を払うしかないわ〟
〝分かる？　アナタは門をくぐる度に小さくなっていく。七分の一ずつ神性を奪われていくの〟
イシュタルが門を潜れば潜る程、彼女の弱体化は進み、その分の力はエレシュキガルへと流れていく。それはエレシュキガルとイシュタルの現在の関係を良く理解した非常に効率的な罠だった。
冥界下りを終え、そこに待つエレシュキガルを倒す。その頃にはイシュタルの力の大部分を奪い取ったエレシュキガルが待っている。
彼女を倒さなければ冥界からの脱出は叶わない。しかし、エレシュキガルの下へ辿り着くには七つある門をくぐらなければならない。
八方塞がりな状況、冥界に降り立った時点で自分達は罠に嵌められていたのだと、理解するには些か遅すぎた。ウルクの人々や賢王ギルガメッシュを死に誘ったのも、全ては自分達を冥界に捕える為のエレシュキガルの罠だったと、この時ロマニは始めて気付かされた。
（まぁ、確かに底にいるエレシュキガルの気が膨れ上がったのは事実だけど、別に其処までじゃないな。成る程、あくまでエレシュキガルが強大なのは死者に対する権能って訳ね）
譬えイシュタルの力が全て奪われたとしても、修司ならば充分に対処可能だった。

ただ、少し気になったのはエレシュキガルを倒すと聞いた時の立香の反応、戦う事に迷っている様子の彼女を見て、修司はある事を思い出した。
そして、その思い出した事を確認する為に。
「悪い皆、ちょっと俺、先に落ちてるわ」
「「え？」」
〝――――へ？〟
修司は呆ける一同の反応を尻目に、冥界の底へ続く道をわざと踏み外す。それはまるで階段を下りる様に、なんて事なく自然と、白河修司は冥界の底へ落ちていく。
頭上から聞こえてくる悲鳴に似た叫びも瞬く間に小さくなり、落下し続ける事数十秒。残り六つの門をスッ飛ばし、修司は冥界の底へと辿り着いた。
「よぉ、お前が冥界の女神、エレシュキガルか？」
「――――っ！」（ビクゥッ）
冥界の底、その中央地点に佇む女性。その髪型と雰囲気から間違いなく遠坂凛を依り代にしているであろう冥界の女神は……。
「な、何て礼儀知らず！　冥界のルールを無視して落っこちてくるとか！　正気の沙汰ではないのだわ！　貴方、怪我とかない!?　骨とか折ったりしてないでしょうね!?」
「――――え、優し」
これ迄出会ってきた女神の中で、誰よりも女神であった。

その１４６　第七特異点

女神エレシュキガル。冥界の最高責任者として君臨している恐ろしき女神。人類を脅かす三女神同盟の一柱として名を連ねている女神はその実、誰よりも慈悲深く、誰よりも女神らしい女神だった。

「いーい！　本来なら冥界のルールを無視した罪で厳罰に処すつもりだったけど、貴方がウルクの人間じゃないから特別に見逃しているだけなんだからね！」

「あ、はい。お手数掛けましてスミマセン」

「残りのカルデアのマスターが来たらケチョンケチョンにしてやるんだから、その時が来たら覚悟なさい！　あ、それはそれとして用意したお茶どうだった？　熱くなかった？」

「あ、お構い無く、お茶の温度も適温で美味しく戴いております」

人類を現在進行形で脅かしている筈の女神、エレシュキガル。邂逅した際には突然現れた修司にアタフタと動揺していたが、女神の矜持もあって直ぐ様神として振る舞おうとしていた。

冥界のルールを破った者には誰であろうと厳罰を。七つの扉の試練を無視して底へ降り立った修司にエレシュキガルは相応の罰を下そうとした。

しかし、一応人間判定であり、これ迄ただの一人もそのまま冥界の底へ降り立とうとした人間なんて存在しなかった事なので、あり得ない事態を前に再びエレシュキガルはアタフタと狼狽し、どうしたモノか頭を抱えて悩んでしまっている。

そんな色んな意味で生真面目なエレシュキガルを前にしては流石の修司も戦う意欲など持てる筈もなく、一先ず残りのカルデアのマスター、藤丸立香達が合流してくる合間はエレシュキガルの客人として迎えられる事となった。

冥界始まって以来の客人。始めての体験にエレシュキガルは依り代の記憶からこの状況に適した振る舞いを模索し、一先ずはお茶を振る舞う事にした。

外見が遠坂凛である所為か、そこら辺の振る舞いは非常に優雅で、

出されたお茶も冥界とは思えない程に温かく、茶葉も良質だった。
……何故に冥界にこれ程の茶葉が？　疑問に思う修司だが、一先ずは流しておくことにした。
「しかし、意外と言えば意外だなぁ。神って総じて勝手な連中ばかりかと思っていたけど、アンタみたいな真面目な神もいるんだな」
「と、当然でしょ。私は冥界の管理を任されている神、人が死に、最後の寄る辺として存在するのがこの冥界なの。魂の安息を管理する者として、半端な仕事は出来ないのだわ」
　胸を張り、自慢気に語るエレシュキガルに修司は少し感慨深くなった。神という存在は自らが超越者として振る舞っている為か、その態度は終始上から目線の奴等が多い。某神話の神々なんかその最たる例で、数少ない例外を除けば、大抵が自分の勝手な都合で人類を振り回している連中ばかりだ。
　……そう言えば、その数少ない例外の中には目の前のエレシュキガルと同じ冥界の神がいた筈。なに？　冥界の神様は基本的に優れた人格の持ち主だったりしているの？
「――――まぁ、アンタが自分の仕事に真摯に向き合っているというのは、何となく分かったよ。いや、だからこそ分からない。其処まで人類を想っているアンタが、どうして三女神同盟という人類と敵対する道を選んだんだ？」
「――――それは」
　こうして直接話を交わし、エレシュキガルの真面目さを知った修司は目の前の女神が人類の敵対者とは到底思えなかった。
　冥界とはもっと薄暗く、冷たい所だと思っていた。しかし、予想に反して目の前の女神には確かな暖かさがあった。依り代となった遠坂（善）の影響が出ている為か？　いや、恐らくは違う。
　それは先にも記述した通り。冥界の神であるエレシュキガルが慈悲深い女神だという事、彼女がシュメル神話時代の人々の魂に、神代が終わるその時まで寄り添っていたからだ。
　譬え凍えるような寒い冥界の底であっても、魂だけとなった存在が凍らずにいられたのも、偏にエレシュキガルという女神がいたからに

他ならない。
（待て、それならば彼女が敵対する理由って……）
　彼女が人類の敵対する道を選んだのも、人類の事を想っての事ならば？　魔獣達に無惨に殺された後、せめて死後の冥界では穏やかに過ごして欲しい。なんて、彼女なりの優しさだというのなら？
「――――いや、やっぱいいわ」
「……え？」
「アンタの真意を探るのは皆と揃ってからにするよ、俺が此処に来たのはあくまで一つの疑問を解消する為、アンタを追求する事じゃない」
　もし、自分の考えている事が正しかったなら――――なんて、其処まで思い至った修司はそれは今することじゃないと割り切った。
　わざわざ冥界の底、エレシュキガルのいる所まで落ちてきたのは修司が抱くある疑問を解消すること、そしてその疑問は既に確信へと変わっている。あの日、イシュタルを仲間にしたその日から、女神エレシュキガルは定期的にイシュタルを通して藤丸立香の前に現れていたのだと。
「……それで、その疑問は解消されたのかしら？」
「あぁ、お蔭様でな」
　そして、その事を言いふらす事もしない。普段冥界という孤独な世界を強いられている中、イシュタルという女神を介してまで立香と触れ合いたかったのか。自ら冥界の女神として在る事を決めた彼女に、決め付けた言葉を吐くのは、それこそ無粋と言えるだろう。
　――――白河修司は認めた。死という形ではあるが、それでも誰よりも人に寄り添う目の前の女神こそが本来の神と呼ばれる存在だという事を。
　いや本当、どこぞの神々はマジで見習って欲しい。心底、そう思うのだった。
「と、そろそろ立香ちゃん達が此処に来る頃合いだな。王様もいるし、イシュタルは……あーあ、本当にアリンコ並みにちっさくなってらぁ」

「――ちょっと」
「ん？」
「……ひ、久し振りに誰かと話せて良かったのだわ。アンタの無茶な行動には辟易とさせられたけど……その、あ、ありがとうなのだわ」
モジモジと照れ臭そうにしているエレシュキガルに、修司は何処かホッコリとした気分になるのだった。

◇

『――はぁ、僕も君のハチャメチャ具合にはもう慣れたから良いけどさ、あんまり人を心配させるモノじゃないよ。幾ら君のレイシフト適正が規格外（EX）相当だとしても、物事には例外が付きまとうんだからね』
「悪かったって。次は気が付いたら事前に説明するからさ、そう怒るなって」
それから暫くして、無事に七つの扉の試練を乗り越え、途中で賢王ギルガメッシュと合流した立香達は、修司と同様にエレシュキガルの下へ辿り着き、冥界の女神エレシュキガルと幾分か問答を挟んだ後、結局は一度戦う事となった。
自分の理解者になって欲しいエレシュキガルに、それは出来ないと立香は断った。その断りが自身すら拒絶したものだと思い込んだエレシュキガルは巨大なガルラ霊となって立香とマシュを強襲、今回の戦いが今までと違う所は、これは相手を打ち倒す戦いではなく、エレシュキガルという少し拗らせた女神の想いを救い上げる戦いだとい

う事。
　渾身の一撃を放つエレシュキガルに、マシュは宝具を使ってこれを防ぐ。自分のありったけの力を出しきったエレシュキガルは自身の敗北を認める事となった。
「それで？　どうして貴様は戦いに参加しなかったのだ？　たかが冥界の女神の一柱程度、とるに足らないと思い上がったか？」
　色々と暴露され、悶絶しているエレシュキガルを尻目に賢王ギルガメッシュ半ば確信した様子で訊ねてきた。
「まさか、あの女神が本気になったらそれこそ俺も参戦していたさ」
「ほう？　では侮っていたのはエレシュキガルであると？」
「どうかな、女神エレシュキガルは確かに神性としての格は中堅程度なんだろうけど、冥界の責任者という肩書きは伊達じゃない。もし彼女が一柱の神としてではなく、冥界の責任者として対峙されていたら、戦いの内容はもっと別物になってたんじゃないのか？」
　三女神同盟の一人として人類と敵対する道を選んだのも、それはあくまで自分の都合。だから冥界の責任者としてではなく、エレシュキガルという単体で戦いを仕掛けてきた時点で、彼女という実直さが表れていた。
　もし仮にエレシュキガルが冥界総出で立香達を迎え撃とうとするならば、きっと冥界はもっと凄惨な状況になっていた事だろう。
　それに……。
「何より、俺にはあの女神様は殴れん。あんな出来た神様、俺今まで見たことないもん」
「……ねぇ、なんか私の時と対応違すぎない？　同じ依り代でしょう？　私、アイツに以前思い切りお尻を叩かれたんですけど？」
「――そうか、ならば仕方あるまいな」
「オイコラ」
　何より、エレシュキガルという冥界の華を散らすような真似なんて、修司にはとてもじゃないが出来なかった。この寂しい冥界という薄暗い世界で、それでも懸命に咲き誇る一輪の華。決して見栄えが良いわけでもないが、それでも見るものに慈しみの感情を抱かせる不思

議な魅力が彼女にはあったのだ。
　それを聞かれれば、ギルガメッシュ王も揶揄する事はない。後ろで騒ぐ天の女主人を無視しながら、今度は修司が王へ訊ねた。
「それで、なんだけどさ。やっぱりエレシュキガルは……その、処罰の対象になっちまうのかな？　恩情とか無かったり」
「それはあの女神次第よ。我は王であるが故に冷酷だが、同時に慈悲も示さねばならん。あの頑固者が我が配下に加わることを是とするならば、最大限の譲歩を以て穏便に済ませてやろうではないか」
「やっぱ、そうなるか」
　ギルガメッシュは自ら過労という割りと洒落にならない死因で冥界へ落ちているが、それでもエレシュキガルに勝利したことで後に冥界から解放される手筈となっている。他の亡くなった人達も同様に今頃は続々とウルクに保管されている遺体に魂が戻っている事だろう。
　しかし、エレシュキガル本人はそうはいかない。彼女は自らの意志で女神同盟に参加した敵対神、シュメル神話の女神が、同じ世界の住人達を自ら進んで手を下し、死へと誘ったのだ。その罪は決して軽くはなく、必要であるならば王権を使っての断罪も吝かではない程に。
　当然立香はそんなことは望んでないし、マシュも修司もどうにかしてエレシュキガルを三女神同盟から抜けさせてやりたいと考えているのだが……如何せん、エレシュキガル本人が頷こうとはしなかったのだ。
　自分は罪人。そこにどんな理由があろうとも、メソポタミアの人々の脅威となったのは事実。ならばその罪と正しく向き合い、然るべき処罰を受け入れるのが筋なのだと、エレシュキガルは言って聞かなかった。
　どうしたものかと修司が頭を悩ませていたその時、ふと、殺気を感じた。
　おぞましく洗練されていて、恐ろしい程に信仰に溢れた死の気配。突然感じた殺気に修司は瞬時に辺りを見渡し身構えた。
〝未熟、あまりにも未熟。やはりお前ではそこ止まりよ〟

そして、次の瞬間。一行の目の前には一刀の下に両断されたエレシュキガルの姿が……見えた気がした。
「エレシュキガルッ!?」
突然の事態に驚く一同、誰もが唖然としている中、倒れ付したエレシュキガルの背後に一人の老人が大剣を携えて佇んでいる。
修司にはその佇まいに覚えがあった。いや、忘れる筈がない。あの何処までも無駄を省いた究極の一撃とも呼べる一太刀、それは先の特異点で修司自身がイヤと言う程味わったモノなのだから。
エレシュキガルが斬られたと誤認したイシュタルが、間髪入れずに老剣士に蹴り掛かる。エレシュキガルに敗北を認めさせた事で取り戻した力、女神としての膂力をフルに活用した一撃は、されど、目の前の老人に当たることはなかった。
「嘘っ!?」
まるですり抜けた様な感覚。タイミングや間合いの詰め方から確実に入ったであろう蹴りが、まるで当たらなかった。体験したことのない事象を前に、イシュタルは勿論ギルガメッシュ王すらも僅かではあるが驚きを露にしている。
「落ち着け。私が断ち切るは同盟の契りである」
見れば、倒れているエレシュキガルの身体は真っ二つにはなっておらず、至って正常のままだった。
そして、同時に修司は気付いた。彼が断ち切ったのは、三女神同盟の間に交わされたとされる契約そのものであると。
同時に確信した。自分達の前にいるのはあの霊廟の主にして初代の山の翁であると。
何故彼が此処にいるのか、疑問に思う所は数あれど、今はその事に追求出来る余地はない。何故なら、彼の翁の視線は他ならぬ修司に向けられているのだから。
相変わらず、鋭い眼光だ。魂すら底冷えするような眼差しに修司は身をすくむ思いをした。
「……小僧、貴様の知り合いか?」
「あ、えっと……はい。そんな感じです」

「ふむ、なら余計な詮索は無用か」
本来であれば王として老人の身の上を追求する所だが、修司の知り合いという事で納得し、賢王ギルガメッシュはそれ以上老人について問い詰める事はしなかった。
そして、その後は老人の言葉でエレシュキガルの真意を暴いた立香は、改めて彼女に協力を要請し、エレシュキガルもこれに快諾した。いつかは死という運命に落ちる人の魂、その最後の拠り所として人々に眠るように命を奪っていった優しき女神は、己の敗北を条件に全ての魂を解放し、正式に立香に助力する事を誓った。
「……さて、では我も戻るとしよう。エレシュキガルの縛りがなくなり、見るべきものを見た以上、これ以上冥界に留まる理由は無いからな」
「王様、その……出来ればご自愛してくれよ」
「ふん、無茶を言う。だが、覚えておこう。そして小僧、ウルクに戻ればゴルゴーンとの決戦である。女神との決戦、心しておけよ」
「あぁ、分かってる」
ではな、と、簡単に別れを告げて冥界から姿を消す王を見送りながら、呼び掛けてくる立香達に向き直る。これで三女神の全てが片付いた。後は復讐に燃えるゴルゴーンを打ち倒し、その裏に潜む元凶をどうにかするだけである。
このまま行けば何とか上手く行く……そう、思っていた。
〝シンカの戦士よ、急ぐがよい。破壊の徒は既に其処まで迫って来ておるぞ〟
「っ！」
冥界の底で、修司にだけ聞こえた死神からの警告。破壊の徒、聞き慣れない言葉に心臓の音が跳ね上がるのを自覚しながら、修司は一人、反芻し続けた。
女神ゴルゴーンとの決戦まで、あと――――。

その１４７　第七特異点

女神エレシュキガルとの戦いは立香による対話のお陰で、和解という形で決着が付いた。唐突に現れた老人の奮った一太刀のお陰で彼女は三女神同盟からの楔から解き放たれ、今後は立香に協力をする事で王による断罪も逃れる事が出来た。
エレシュキガルの誘いによって衰弱死した魂達も無事に冥界から解放され、ウルクの街は再び活動を再開した。
それから翌日、クタ市から戻ってきた一行はそのままウルク市へ帰還を果たし、そのまま王の待つジグラットへ直行した。
「戻ったな。カルデア一行、では早速だが対ゴルゴーン戦の作戦内容を決める。疲れているのは百も承知、だが付き合え」
王の下へ辿り着けば、開口一番にゴルゴーンとの戦いを模索するのに付き合えと語る王に断る者はいなかった。シドゥリから労いの言葉と大使館でちょっとした料理を提供すると言われ、気分の盛り上がった立香達はその勢いのまま作戦会議に乗り出した。
「レオニダスの情報によれば、ゴルゴーンの魔獣の数は既に１０万を超え、今も尚増え続けているらしい。質も数も劣る北壁では、半日も保たずに蹂躙されるだろうよ」
「なら、ここはやはり少数精鋭でゴルゴーンの根城に奇襲を仕掛けるのが定石か？」
「とは言っても、あの神殿に人間は入れないわよ？　何度か様子を見たことがあるから分かるけど、アレは要塞化した神殿、規模もでかいけど、それ以上に下にある地下空洞が広いのよね」
「……聞く限りだと、まるで蟻の巣みたいだな。そう言えば以前、蟻の巣に溶かした鉄を流し込んでオブジェクトを作るって動画を見たことがあるな」
「……うん、止めようか。て言うか、なんて話をだすんだい君は」
現在、北の森には１０万以上の魔獣の軍勢が犇めきあっており、そ

の全てが数日後の北壁に向けて進軍を開始している。このまま正面から挑めば人類に甚大な被害が被ってしまう。
其所で挙げられるのは少数精鋭によるゴルゴーンの神殿への強襲。北壁が魔獣からの侵攻を食い止めている間、ゴルゴーンを討ち取ると言うのが人類側に残された一手である。
しかし、当然ながら問題もあった。ゴルゴーンの住み処としている神殿は侵入する人間を溶かす鮮血神殿、幾ら礼装に守られているとは言え、立香ではどうあっても侵入するのは不可能と言えた。
「じゃあ、やっぱり俺が直接出向いた方がいいかな？」
「いや、それ以上に貴様にはやって貰う仕事がある」
立香が鮮血神殿に乗り込めないのなら、修司が直接向かうしかない。そうなると自分がゴルゴーンの頚を取るまでの間、立香とマシュには皆と共に北壁を防衛する役目を任せる事になる。１０万を超える勢力、それはこれ迄立香達が相手をしてきた中で最も多く、また過酷な相手だ。
そうなればまさしく時間との勝負。ゴルゴーンをどれだけ速く倒せるのかが、今後の戦いの行く末を決めると言っても過言ではない。自然と身体に力が込められる。そんな武者震いをする修司を諌めたのは、やはり偉大なる王だった。
「もうじき、北壁にマルドゥークの手斧が運ばれる頃合いだ。貴様には手斧を受け取り次第、ゴルゴーンの神殿に向けて投擲するがよい」
「お、王よ！　本気ですか!?」
「マジか、そうなってくるとコントロールが重要になってくるな。ゴルゴーンの気を感じるにウルクから大体３０ｋｍの距離だから……ギリ当たるかなぁ」
「っ!?」
巨大なマルドゥークの手斧を投擲し、ゴルゴーンの神殿を破壊せよ。そう命令を下すギルガメッシュ王に、シドゥリは当然ながら異議を唱えようとした。
あの様な巨大なマルドゥークの手斧を、ただの人間には持ち上げる事すら不可能だろう。況してや、遥か遠くにある神殿にピンポイント

で当てるなど、そんなこと神代の英雄にだって不可能な事だろう。
　しかし、投げられる事よりも当たるか否かに重きを置いて悩んでいる修司に、シドウリは言葉を失って絶句していた。そんな彼女を尻目に、立香はそれが普通の反応だよねと、ウンウンと感慨深く頷いている。
「私なら当てることも出来ますが……三女神同盟の契約は絶対、互いに不可侵を決めた間柄ですので、私にはどう足掻いてもゴルゴーンに手出しは出来ないのデース」
「そっかぁ、ならやっぱり俺が何とかするしか無いのかぁ。やっべ、なんか緊張してきた」
「なら、その緊張を私が解きほぐして上げよう。修司、マルドゥークの手斧を投げる際は、この布を一切れ、何処でもいいから巻いておくといい」
「あ、でも大丈夫か。いざとなったらワームホールを使って直接ゴルゴーンの神殿にぶちこめば良いだけだし」
「――――え？」
「そうなってくると……別に、マルドゥークの手斧に拘らなくても良いのか？　いや、神殿が神性に連なるモノじゃないと破壊出来ないなら、やっぱりそうするべきかなのかな？」
「――――ねぇ藤丸、コイツ一体何を言っているの？」
「うん、なんかごめんね」
　先の第六特異点にて、既に修司は相手の拠点を距離を関係なく殲滅出来る術を確立している。脳裏に浮かぶ白亜の城の外壁が無残な瓦礫の山に変えられた光景、崩れ落ちる騎士達の様子を立香とマシュの二人は今も覚えている。
　それを、目の前の男は再び起こそうと言うのだ。
「どちらでもよい。確実に神殿を破壊できるのなら、方法は貴様の一任とする。ならば、残るは戦力の話よ」
「藤丸立香ちゃんには私とマシュ、ならびにアナが付き添う事にして、あと誰か一人は助力が欲しいかな」
「なら、ここは私が行くのが適任ね。ゴルゴーンは私のウルクに

ちょっかいを出した礼をしなくちゃいけないし、その分北壁に戦力が回せるでしょ」
神殿の破壊は修司に任せるとして、残る問題はゴルゴーンとの決戦に挑むメンバーの選出となるのだが、その選出は意外な程に滞りなく決した。
魔獣母神に挑むのは、人類最後のマスターの一人である藤丸立香と、その相方であるマシュと花の魔術師マーリン。そしてあと二枠にアナとイシュタルの計5名が選ばれた。
たった五人による電撃作戦。賭けに出るには少々心許ない人数だが、これ迄の旅を経て立香もマシュも相当鍛えられているのは修司も承知している。きっと、彼女達なら成し遂げてくれると、そう思えるほどの逞しさがあった。
「なら、俺は北壁に残るとしよう。なぁに、そう緊張することはないさ。何かあればマーリンが何とかしてくれるだろうし、万が一逃げる事があっても、その時は俺が何とかするからさ」
「うん。その時は遠慮無く頼らせて貰うとするよ！」
仮に作戦が失敗し、ゴルゴーンから敗走する事になっても、最悪マーリンが逃がしてくれるだろうし、そうなった時は修司が駆け付け、ゴルゴーンを討伐する。
ゴルゴーンは既に一度勝った相手だ。奴の姉である双子の姉妹女神からも仕方がないと諦めている以上、修司が遠慮する要素はない。ただ一つ、考慮する事があるとするならば……。
「王様、一つ質問してもいいか？」
「……キングゥの事、今回の戦いでは恐らく奴も出てくると思うんだけど、どうする？」
「どうする、とは？」
「王様が最後の砦として此処から動かないって言うなら、キングゥと出会うのは多分無いんじゃないかって事さ」
エルキドゥと全く同じの外見となっているキングゥ、二人の間にあるカラクリを既に看破しつつあった修司は、賢王に意見を求めた。次の戦いではキングゥも確実に出てくるだろう、そうなれば今度こそ奴

とは雌雄を決するつもりだし、そうなったら奴と王が出逢える事は二度と無い。
　果たして本当にそれでいいのか、戦いの前に最後の憂いを失くそうと、ハッキリと口にする修司に賢王ギルガメッシュは静かに見下ろしている。
「構わん。貴様がキングゥとやらを仕留めると言うのなら、是非もない」
　そして、当然の如く、王はハッキリと口にした。その判断に控えているシドゥリの表情が僅かに歪むが、王がそう決断された以上、本当にそうするしかないのだろう。
「分かった。時間を取らせてゴメン」
「良い。これ迄の貴様の活躍に免じ、特に赦す。さぁ、全ての話しはこれで終わった。戦士達よ、準備が終え次第疾く動くがよい！」
　そうして、ゴルゴーン戦への話し合いも終えた事で、その場は解散となり、修司達も大使館へ引き返していく。
　その際、マーリンと王の最期の別れの挨拶を交わしているのを耳にした気がするが……無粋と思った修司は、その話しに加わる事無く、立香達と共に足早にジグラットを後にするのだった。

「――――王様、本当にいいんだね？」
「それは先の小僧の話しなら、問答は不要だぞ。既に我は答えを出した。であるならば、それ以上の言葉は無粋と言うものだぞ」
「成る程、正しく君は人類最後の砦となる訳だ。なら、僕との契約もこれでお仕舞いって事になるのかな」
「そうなるな。しかし……」
「おや、此処に来て何か心配ごとかい？」
「……先日、冥界から解放される際、奇妙なモノを見た。マーリン、貴様の千里眼は何か視なかったか？」

「……いや、私は特になにも」
「そうか……ならば良い。貴様もとっとと持ち場へ戻り、小娘達の面倒を見てみると言い」
「――――分かった。君も、どうか気を付けて」
「ふん、誰に向かって言っている」
マーリンとの最後の言葉を交わし、ジグラットから立ち去る彼の後ろ姿を見送った王は、一人天井を仰ぎ見る。
冥界から解放された際に見た一つの光景、それは以前から王が夢に見る世界が終わる光景だ。
滅びの終末機構と共にウルクに押し寄せる二つの影、千里眼を通して世界がギルガメッシュ王に訴えてくる。
押し寄せる破壊の神の残滓、立ち上がるのは一つの影。
その光景を意味するモノは何なのか、それは王にも分からない。

その１４８　第七特異点

ウルクでの作戦会議も終わり、大使館へ戻り細やかな宴を行われ、人々から別れを惜しまれた後、一行は遂にウルクを離れ、北壁へと向かった。

途中、何度も顔を合わせてその都度何かしらの会話を重ねてきた門番の人にも別れを告げると、マーリンはそこから少し離れた場所で魔術を行使し、召喚された馬で北壁へ向かう事となった。

本来であればまだ騎馬という概念の無い時代にこう言ったものを喚び出すのは良くないが、多用する事がなければ喚び出された数も少なく、僅かな時間であれば問題ないという事で、立香はマシュと、アナはマーリンと共に馬に跨がり北壁へ急いだ。

因みに、修司はイシュタルと同じく空を飛べるという事で、馬を用意されることはなかった。ああ無情。

そして、深夜近くに北壁に訪れた一行は夜明けの決戦に備えて少しでも身体を休む為に用意された宿で一時解散する運びとなったのだ。

「そうですか。我等がいない所でそんな事が」

――深夜。決戦を前に休んでおくはずの修司だったが、気分転換を兼ねてプラプラと出歩いていると城壁に佇むレオニダスと遭遇した。どうやら、数時間後の決戦に備えて最後の確認と見回りをしていたらしい。

小休止ということで先のゴルゴーンとの戦いから明日で１０日、その間に起こった出来事を伝えると、レオニダスは兜の奥で楽しそうに笑った。

「いやはや、貴殿方の冒険譚は聞いていて心が踊りますな」

「悪いな。皆が必死に戦ってくれているのに、俺達だけバカ騒ぎして」

「何を仰いますか。我等は元々その為にギルガメッシュ王から召喚された身です。それに、貴殿方はその間にも多くの困難に突き当たり、それを乗り越えてきた。であるならば、それを頼もしく思っても邪険

に扱いはしませんとも」
　思えば、ゴルゴーンとの戦いから今日まで、割りと目まぐるしい展開が続いていた。イシュタルを宝石目当てに仲間に引き入れ、負けたら婿入り確実なケツァルコアトルとのタイマン勝負に背水の陣で挑み、案外愉快な冥界の女神とは割りと穏便に済ませる事が出来た。
　全ては次のゴルゴーンとの戦いに勝利し、その先に待つ〝ナニカ〟に対して万全な状態で挑み、これに打ち勝つ為である。
　しかしそれでも、今回の旅も振り返ってみれば何だかんだ楽しかった。ずっと北壁に掛かりっきりだったレオニダス達には申し訳無かったが、この時代に来て良かったと、そう思える時間を過ごせたのも……また、確かだったのだ。
「……修司殿」
「ん？」
「既に貴方も確信されている通り、今回の戦いはゴルゴーンを討てば終わり。なんて単純な仕組みでは無いでしょう、寧ろ其処からが本当の戦いの始まりだと、私は思うのです」
　ふと、レオニダスの口から紡がれるのは次に起こるゴルゴーンとの決戦とその先で待つ戦いについてだった。歴戦の戦士としての直感か、これ迄修司が立ててきた仮説を直感だけで言い当てるスパルタの王に修司の意識は否応無く其方に切り替わる。
「そして、その時が来れば恐らく我々の内の誰かは消滅するやも知れません。しかし、それでも私は貴方にお願いしたいのです」
「お願い？」
「はい。この先、どんな辛い現実や事実があったとしても、決して膝を折らないで欲しいのです。喩え見知った相手が、どの様な結末になろうとも、決して立ち止まらないで欲しいのです」
　まるで、これから起きる出来事を見てきた様な言い草に、流石の修司も目を丸くさせた。決して膝を折るなと、立ち止まらないで進んで欲しいと、忠告というより懇願に近いレオニダスの言葉は、戸惑いながらも修司の内にしっかりと刻まれた。
　きっと、それだけこれから先で待つ戦いが過酷なモノだという事

を、彼なりに察しているのだろう。しかし、だからと言ってその言葉に臆す訳にはいかない。
「あぁ、約束するよ。喩えこの先どんな事が起きても、絶対に諦めたりはしないさ」
拳を握り締めて、ムンと突き出してくる修司にレオニダスもニコリと微笑みながら拳を突き出した。コツンと音が響き、月明かりの下で交わされる約束。それからも二人の談笑は、通りすがりの牛若丸に乱入されるまで続くのだった。

◇

――――明朝。遂に、その時は来た。北壁の内部には既にレオニダスを筆頭に陣形が揃っており、牛若丸や弁慶も何時でも遊撃に出られる準備を終えている。
ゴルゴーンの鮮血神殿に突入するのは立香とマシュ、並びにマーリンとアナ、そしてイシュタルが向かい、ゴルゴーンの討伐に挑む。先の第六特異点に続いての大規模作戦、立香とマシュは相変わらず緊張した様子ではいるが、必要以上に気負った様子はなく、自然体な二人に修司は安心した。
『それじゃあ、そろそろ作戦を進めよう。皆、準備の方はいいかい？』
「うん。途中までは牛若丸達が護衛してくれるって言うし、頑張って走るよ！」
「これ迄の旅で、先輩の健脚はより逞しくなりましたからね。きっと

フルマラソンに出場しても良いタイムを出せるかと」
　立香達が鮮血神殿の近くに接近するまで、北壁は魔獣達の猛攻を防がなければならない。その時間は凡そ半刻、１０万を超える軍勢を相手に数千の人類ではとてもじゃないが持ちこたえるのはほぼ不可能に近い。
　しかし、此処には護りに秀でたレオニダスと、乱戦に秀でた牛若丸達がいる。加えて北壁にはケツァルコアトルとジャガー、更には白河修司という規格外の戦力が加わる事で、北壁の壁はいつもより分厚く見えてきた。
　そう言った余裕があるお陰か、皆の表情も何処か明るい。戦いに犠牲は付き物だから決して楽観視は出来ないが、それでも錚々たる面々に誰もが希望を見いだしていた。
「じゃあ、俺が見送れるのは此処までだ。立香ちゃん、マシュちゃん、どうか気を付けてな」
「うん。修司さんも、気を付けて」
「マーリン、合図の方と二人の事は……」
「あぁ、保障は出来ないが、やれるだけの事はやるつもりだ。君も、あまり気負わずに堂々と戦うといいさ」
　立香もマシュも、既に今回と次の戦いに向けて気持ちは固めている。マーリンという腕利きの魔術師も側に控えているから、修司も其処まで心配はしていない。
　ただ、気になるのは――――。
「アナ、本当に行くんだな」
「はい。昨晩立香にも言いましたが、これが私の使命ですので。白河修司、貴方の焼いてくれたバターケーキ。とても美味しかったです」
　強い決意と覚悟を秘めたアナは、修司の言葉に静かに頷いた。結局、彼女の使命とやらが最後まで分からなかったが、その顔には以前のような陰鬱なモノではなく、何処か晴れ晴れとした顔付きとなった彼女に修司もまたにこやかに微笑んだ。
「なら、今度はもっと上手く造ってやるよ。その時は……あの、花屋の婆さんも一緒にな」

アナが此処まで変われるのは、きっとあのお婆さんが原因なのだろう。目が見えず、足も衰え、ただ消えるだけだった一人の老婆。
枯らす事しか出来なかった花屋の花。同情か、それとも憐憫か、それでもアナにとって老婆と過ごした時間は彼女にとって掛け替えの無い時間だったのだろう。
ゴルゴーンとの戦いの後、アナがどうなるのかは分からない。しかし、それくらいの夢を見るのは……きっと、間違いでは無い筈だ。
「――――はい、楽しみにしていますね」
だからアナも、その夢に乗っかる事にした。小さくも満開に花開く一輪に、修司もまた笑う。
そして……遂にその時は来た。門が開き北壁の前に陣を展開するレオニダス達の登場を皮切りに、立香達も杉の森に向かって駆けていく。
「さて、いよいよ始まったな。お二人さん、首尾良く頼むぜ！」
「ニャーハッハ！　北壁の人達から戴いたご飯、メッチャ美味かったニャー。人々のおもてなしに感銘を受けた女神、ジャガーマッ！　いっちょ張り切っていくニャース！」
「人類にただ復讐だけを抱かれた魔獣達、これがまた生きる為の侵略でならば、まだ言い分はあったでしょう。ですが、彼等は〝先の無い〟種族。ならば〝先のある〟人類の為に、今はこの拳を奮いましょう」
城壁から降り立つ二つの神性、善と悪の女神と共に修司もまた戦場へ駆けていく。
瞬間、北の森より獣達の怒号が北壁に鳴り響く。地面を埋め尽くす程の魔獣群れ、押し寄せてくる復讐者達を前に、それでもウルクの人々は抗うのを諦めなかった。
レオニダスの号令と共に、兵士達が構える。立香達が鮮血神殿に辿り着く迄の約半刻、北壁の護りは彼等と修司達に委ねられた。
「そんじゃ……始めますか！」
迫り来る魔獣の群れを前に、修司は不敵に笑う。ただ人間を抹殺する為だけに産み出された魔獣、不憫に思うことはあっても、同情は一

切しない。
「かめはめ……波アッ！」
故に、先に放つのは修司十八番（オハコ）のかめはめ波である。放たれた蒼い閃光は魔獣の群れを呑み干し、その先にある北の森を大地ごと根刮ぎ抉っていく。割りと環境を破壊した感じは否めないが、その甲斐あって魔獣戦線に風穴を開けられた。
これで、魔獣達の注意は此方に引き付けられた。自分のこれからの仕事を前に、ウォーミングアップを済ませようと、修司は拳を鳴らせる。
その時、上空から強い気が近付いて来るのを感じ取った。この特異点にやって来て何度も自分達の前に立ち塞がった神々が造り出した神造兵器、エルキドゥ改めキングゥが修司の前に降り立った。
「白河修司、性懲りもなく抗うか。それに……ケツァルコアトルまで傘下に加えるとは、旧人類の傲慢さは救いようがないな」
「テメェに救って欲しいなんて、誰も頼んでねぇよ」
「――――憐れな」
「あぁ？」
「いや、此処まで蒙昧だと却って憐れに見えてね。……今日で、すべての命は終わりを告げる。最期に戯れてやろうじゃないか」
相変わらず、人類を見下すキングゥに神経を逆撫でされる思いだが、修司はふと違和感を感じた。
余裕がある。先日、あれだけ虚仮にされたにしてはキングゥの余裕にはある種の不気味さが現れていた。仮にも合理的な思考の持ち主、修司との間にある隔絶された力の差は奴なりに理解している筈。
だからこそ、今度こそ自分達を滅ぼそうと１０万の軍勢を引き連れて北壁に侵攻しているのだから。
（――――いや、違う。ただ１０万其処らの軍勢で俺達がどうにかなるかなんて、コイツが一番分かっている筈、なのにこの余裕……これはやはり、キングゥはゴルゴーンの後ろに控えている奴と繋がっているのか）
既にキングゥがゴルゴーンに見切りを付け、本来の黒幕の下へ戻ろ

うとしているのなら、その余裕も幾分か理解できる。人類を歴史ごと消滅するに足りえる怪物、そいつが何処で何をしているのか、修司がその答えにたどり着こうとした時、巨大な影が北壁を覆った。
　見れば、それはエリドゥにあったマルドゥークの手斧。翼竜達がこれ迄頑張って運んで来てくれた超巨大神具が、遂に此処までやって来たのだ。
「修司！　キングゥは私が食い止めます！　貴方はマルドゥークの手斧を！」
「おっしゃあ！」
　マルドゥークの手斧が現れた事で、修司の狙いを理解したキングゥがそれを阻もうと向かってくるが、そんな彼の強襲をケツァルコアトルがタックルで防ぐ。何かを言い争っている二人をスルーしながら、遂に修司は翼竜から落とされたマルドゥークの手斧を掴み取る。
　見た目どおりの重量。指先から伝わってくるその重さに、修司は歴史の重さを感じ取った。嘗てティアマト神の喉を切り裂いたとされるマルドゥークの手斧、それが今この手の内にある。
　瞬時に、マーリンから渡された布を巻き付け、担ぎ上げる。その超重量に着地した足場が広範囲に渡って陥没するが……それに配慮する余裕はない。
　そして、着地から数秒が経過した次の瞬間。
「修司殿ッ！」
「今です！」
　弁慶と牛若丸から声が掛かり、見れば遥か彼方から閃光弾に似た光が上空で瞬いている。彼処にマーリンがいる。マーリンから、合図があったら其処に向けて投げろと予め言われていた事を思い出した修司は、界王拳を解放し、マルドゥークの手斧を両手に持って回り始める。
　〝ギュルンッ〟　豪快な音と共に回り始め、その勢いはより加速し、竜巻となって周囲の地形を変えていく。巻き込まれた魔獣も次々に細切れにされていき、誰もが修司に近付けなくなった時。
「トマホォウウウウック、ブゥウメラァンンッ!!」

狙いを定めていた修司の手から、マルドゥークの手斧が開放される。凄まじい回転音を轟かせながら、手斧が見えなくなること数秒。
着弾したらしい微かな音が戦場に響くと、ロマニから通信が入ってくる。
『修司君、ナイスコントロールだ！　第一段階は無事に達成された！　後はゴルゴーンが討伐されるまで、北壁を護ってくれ！』
「了解した。引き続きロマニは立香ちゃん達の支援に専念してくれ！」
ロマニからの作戦成功の報告に一先ず安心するが、立香達にとって此処からが本番。ゴルゴーンを無事に討伐して無事に戻ってきてくれる事を願いながら、改めて修司はキングゥへ向き直る。
「マルドゥークの手斧か。そんなものまで持ち出して、其処までして無様に生き残りたいか！」
「当たり前だ。そもそも命の生き方に綺麗も汚えも無いだろうが。お前達が人間を殺し尽くすのに手段を選ばないのに対して、俺達人類はなけなしの知恵を絞って生き抜いていくんだよ」
「……そうかい。なら、その大層な知恵ごと消滅するが言い。既に賽は投げられた。地獄の門は、既に開かれているのだから」
「あぁ？　急に何を言って……」
唐突に紡がれるキングゥの詩の様な捨て台詞。奴にしては珍しく遠回しな言動に不思議に思っていると――それは起きた。
光帯が脈打つように輝きを放っている。これ迄の旅の中で決してあり得なかった光景を前に、修司も、周囲のサーヴァント達も動揺している。
「なんだ、何が起きて――」
瞬間、空が割れた。ガラス細工の様に、脆く崩れた空の彼方から、巨大な何かが落ちてきた。周囲の魔獣達を巻き込みながら地に落ちたそれは、ゴルゴーン並みに巨大で、その姿はゴルゴーンよりも遥かにおぞましかった。
「な、なんだ、あの化け物は!?　アレも魔獣なのか!?」
突然の怪物を前に、兵士達に動揺が広がっていく。上半身は人間

で、下半身は蠍を模した怪物。開かれた顎は、空虚な暗闇に満ちていた。
以前、王が召喚した巴御前が相討ちに持ち込んでまで打ち倒したとされる魔獣の司令官と何処と無く似ている造形。しかし、誰もがそうは思わなかった。
何故なら、あの怪物はあまりにも違っている。姿形が似ているだけで、その中身は全くの別物であり、その器には憎悪と怨念だけが詰まっていた。
異なる理、異なる摂理、ありとあらゆる理屈がその怪物には届かない。誰もが未知なる存在を前に思考を停止させるなか、修司だけは駆けていた。
目の前の巨大な怪物を目にした瞬間、修司の内の本能が叫んでいる。アレは、あの怪物は、この世に存在してはいけないモノだと、根拠の無い確信が本能の叫びとなって荒れ狂っている。
先手必勝。幸いに、あの化け物はまだ動いてはいない。懐に潜り込んで特大の一撃を喰らわせてやろうと、修司が再び界王拳を発動させようとして……。
「ッ!?」
尾が伸びた。下半身の大口同様、尾の先にも口が付いているそれは、突如として天に向かって伸び、力を開放させる。
瞬間、尾の先から魔方陣の様なものが展開され、エネルギーが収束されていく。アレは不味い、狙いを怪物から尾に変えようとするも……既に、ソレは発射段階に進んでいる。
「みんな、にげろォォォォォッ!!」
咄嗟に気円斬を放つも、放出される無数のエネルギーに掻き消されてしまう。せめて皆の生存率を上げようと、修司は声を張り上げるが。
『――――滅ビヨ』
悪意に満ちた声に掻き消され、北壁は光に呑まれていった。

その１４９　第七特異点

人類に残された最後の砦、人理保障機関カルデア内に緊急事態を報せる警報が鳴り響く。
「現地との通信途絶！　藤丸立香、白河修司、マシュ＝キリエライトとの通信、未だに繋がりません！」
「復旧を急ぐんだ！　観測班は原因の究明を急いでくれ！」
そんな警報器の音を掻き消す程の怒号が、レイシフト先をモニタリングしている司令室に木霊する。これ迄の特異点修復の旅にて立香達を支援してきた彼等だが、嘗て無い事態を前にカルデア内は混乱のただ中に立たされていた。
「クソ、一体どうなっているんだ!?　ついさっきまでは観測できていたのに、いきなりこんな事になるだなんて……！」
ゴルゴーンとの決戦も直前に控え、修司の言うこの後の展開に備えてロマニ達もいつもより警戒を厳にして観測していた。如何なる不測の事態にも対応する為、全員が一丸となって任務に当たっていた。
そこに慢心の入る余地はなく、誰しもが集中して観測していたにも関わらず、何も出来なかった。否、する暇がなかった。
一切の予兆なく、前兆もなく、それは起きた。時空振動規模の重力変動、特異点の世界そのものが激震し、特異点に孔が開くのを最後にレイシフト先での繋がりが途絶えた。
このままでは藤丸立香達の観測は困難となり、このまま事態が悪化すれば、異なる時代の来訪者である彼女達が意味消滅に陥ってしまう。考え得る中でも最悪の事態、そうはさせてなるものかとロマニが指示を飛ばすが……状況改善には程遠い。
ダ・ヴィンチもこの事態を重く受け止めているのか、先程から一言も口に出さずに作業に勤めている。万能の天才でも手に余る事態、その事実がロマニの背中に重くのし掛かった時。
「何を湿気た面を晒しているか！」
「え、英雄王!?」

「貴様達に膝を折る暇などあると思うな戯け！　嘆く暇があるのなら手を動かせ！」
　突然、司令室の扉が開き、黄金の英雄王が乱入してくる。こんな時に面倒な奴が来たとロマニは内心で愚痴るが、彼の背後に続く者達に目を丸くさせた。
「此方の機材が修復される間、演算処理は私が手伝おう。Ｍｒ．エジソン、そちらの方は任せたぞ」
「うむ、どこぞのすっとんきょうよりも素早く作業を終わらせてやろうとも！」
「ぬかせ凡骨ゥッ！　無駄口を叩くんじゃあない！」
「二人とも、今は互いに争う時では無いでしょう。さてダ・ヴィンチ、僭越ながら私もお手伝いをさせてもらいますよ。此方のモニターを観測すればいいのですね？」
「済まないケイローン先生、助かるよ。あーあ、こんなことなら複腕型のマニピュレーターでも造っとけば良かったよ」
　英雄王に率いられてやって来たのは知恵と知識に富んだ碩学者達であり、人類に革新の標をもたらした英雄達だ。過去の偉人達でありながら知識欲に貪欲で、既にカルデアの魔術的、科学的技術の全てを把握した彼等は瞬く間に司令室の空気を変えていく。
「やれやれ、俺は肉体労働など向いていないというのに……英雄王め、この労働の対価は高く付くぞ？」
「全くだ。漸く例のボスキャラの攻略も分かってきたと言うのに、このままでは生殺しだ！」
「ホラホラ、二人ともぼやかないの。折角協力するんだから、後でエミヤに頼んで美味しいケーキを焼いて貰うよう頼んでおくから、頑張りましょ」
「流石はエレナ女史。圧倒的な包容力ですねぇ、私も今回は軽口を挟まず、見習うと致しましょうか。と言うことでメディアさん、指揮の方、お願いしますね」
「あぁもう！　私、最近働き過ぎてないッ!?」
　他のキャスターの面々も、シバの管理と修復を徹底してくれるお陰

で、観測側も徐々に余裕を取り戻していく。そして、多くのサーヴァントの助力のお陰で遂にカルデアは立香達の様子を確認することが出来た。
「捉えました！　藤丸立香、並びにマシュ＝キリエライト、白河修司の存在を確認！　多少のラグはありましたが、無事に捕捉が完了しました！　これより通常の観測に移行します！」
「よ、良かった。一先ず最悪の状況は脱することが出来たよ。有り難う皆、サーヴァントの皆も、良く頑張ってくれた。何より英雄王、君には大きな借りが出来たね」
「……」
「ギルガメッシュ王？」
　英雄王の機転のお陰で、どうにか最悪の状況は乗り越えたとロマニは安堵する。これで一先ず立香達の意味消滅は回避できた。奮闘してくれたカルデアスタッフと、助けてくれたサーヴァント達に礼を口にするが、未だに緊迫した面持ちでモニターを睨み付けている英雄王に、ロマニはイヤな予感を感じた。
「――チッ、愚か者が。何の為にあの翁が身を粉にしたと思っている」
「え、英雄王？」
　鋭い眼でモニターを睨むギルガメッシュ、ポツリと溢した言葉にロマニは疑問符を浮かべるばかりだが、その意味をこの後知ることとなる。
「――な、なんだよ、この反応は、こんなの……有り得ないだろ」
「どうしたムニエル⁉」
　唖然とした様子で呟くムニエル、その只事ではない様子にロマニは問い詰めるが、それよりも早くモニターが回復する。
　映し出される映像、その中から目の当たりにするのは……無数の血と砂塵にまみれ、半壊した北壁が大きく映し出されていた。

◇

「あ、く……ちくしょう、気を失ってた」
衝撃と光に襲われ、意識を失っていた修司は体にのし掛かる土砂を押し退け、混濁する意識を覚醒させながら、何が起きたのかを思い出す。
脳裏に浮かぶのは、頭上から降り注がれる無数の禍々しい光。おぞましい怪物の放つ光に呑み込まれて行くのを思い出した修司は、周囲がどんな状況になっているのか確認する為に辺りを見渡し……絶句した。
北壁が、人類の最終防衛ラインである魔獣戦線が、無惨な瓦礫となって半壊している。辺りには血と臓物が飛び散り、戦場の至る所から兵士達の苦悶に満ちた呻き声が聞こえてくる。
「腕が、俺の腕がァッ！」
「誰か、手を、手を貸してくれェッ！　魔獣が、魔獣がすぐそこまで来ているんだ！」
「くそ、一体何が起きたんだ!?　いつの間に太陽は沈んだんだ!?　真っ暗で、何も見えない！」
腕を失った者、脚を失くした者、眼を焼かれて視力を奪われた者、その阿鼻叫喚の光景は……正しく、地獄そのものだった。そんな凄惨な光景を前に修司は疑問を抱き、即座に解消する。
何故、あれだけの光を前に自分だけが無事だったのか。それは修司が怪物を止めようと自ら前に出たからに他ならない。あの巨大な怪物を前に、恐れを抱かずに前へ進んだからこそ、降り注がれる光の範囲から外れ、奇跡的に無傷で済んだ。

しかし、そんな事実は何の慰めにもならなかった。自分が無傷であっても、守るべきモノが無事でないのなら意味がない。半壊した北壁を前に呆然と立ち尽くす修司だが、事態はより最悪の方へ進み始める。

獣が迫ってくる。魔獣側も多大な被害を被っている様だが、奴等は元より復讐だけに囚われた理性なき獣。

自分達の損害を省みない奴等にとって戦線が瓦解した今、牙や爪を納める理由はない。

襲われる兵士を前に、修司は気を開放して救出を試みるが……自分の前にいるソレは修司の行動を許さなかった。

『――――ミツケタゾ。忌々シイ血ヲ引ク愚カ者ヨ』

「ッ!?」

『汝二下サレルハ、神罰デアル』

見上げる程に巨大で、眼を背けたく成る程に禍々しい。ある意味では魔神柱よりも醜悪なソレは修司を見下ろして嬉しそうに嗤っている。

瞬間、修司の内から怒りの津波が押し寄せてくる。これだけの惨劇を生み出した元凶、コイツを何とかしなければ、人類は本当に終わる。義務と感情に突き動かされ、修司は己の力の全てを開放させる。

しかし、兵士達の事も気掛かりだ。彼等だけでこの窮地を抜け出せるのか、目の前の怪物が巨大な鎌状の刃を振り下ろすのを前に……。

「修司殿！　此処は我々が！」

「貴方は、目の前の化け物を！」

自分も重症だろうに、血だらけの牛若丸と弁慶が動ける兵士と共に魔獣の群れに吶喊していく。見れば、レオニダスが比較的軽傷者の兵士を連れて重傷者と共に後方へ避難しつつある。突然の事態に陥っても、それでも落ち着いて対処するウルクの兵士達に修司は頭に上った血が引いていくのを自覚した。

振り下ろされる怪物の刃を、気を纏った手刀で受け止める。その重量故に修司の足場は凹んで行くが、それでも単純な膂力では修司は全

く負けていなかった。

『無駄ナ事ヲ……』

しかし、そんな事実を気にも留めず、怪物は動く。その無機質な眼差しを動けない兵士達に向け、その目尻を厭らしく垂れ下げる。

この怪物、それが最も自分達が嫌がるという事を熟知している。今此処で避難しようとしている兵士達に向けてあの光を放てば、今度こそ魔獣戦線は瓦解し、そうなれば北壁は壊滅、人理は成す術なく消滅する事となる。

悪意に満ちた一手、下衆なやり方だけに効果的。勿論そんな事はさせないと、修司は界王拳を開放させようとするが……それよりも速く、野生のジャガーと太陽の女神の一撃が見舞われる。

振り抜かれる拳と猫の手の棍棒、一切の加減なく叩き込んだ一撃は、見上げる程の巨大な怪物を吹っ飛ばした。

「やれやれ、いきなりやってくれたわね。何処の神性かは知らないけど、随分なご挨拶ね。ジャガー、貴方の知り合い？」

「ククルん、冗談でも止めて。あんな腐れ外道、私の知人には誰一人いないわよ。て言うか、本当に何あれ？」

勤めて冷静さを保っているが、内心ではぶちギレている女神達。そんな彼女達の無事に安堵した修司は、落ち着いた様子で前に出る。

「アレは、この世界に存在してはならない類いの怪物だ。……奴の相手は俺がする。二人はレオニダスさん達と一緒に魔獣どもを片付けて、兵士達を守ってやってくれ」

「修司？」

「アナタ、アレが何なのか知っているの？」

「知らない。けど、分かるんだ。アイツは存在してはならないモノ、俺は……いや、俺が倒さなきゃいけないんだ。何を言っているのか自分でも分からないけど……頼む、奴の事は俺に任せてほしい」

目の前の怪物とは、正真正銘の初対面。面識等ないし、仮にあったとしてもあれだけの邪気を放つ怪物を放置しておく訳がない。

しかし、知っている。修司の内にある何かが、アレを倒せと叫んで

いる。あの怪物は全てを壊す破壊者であり、亡者と怨念を司る悪霊の親玉だと。
　そして、コイツは自分が倒さなくてはならない。他の誰でもなく、〝シラカワ〟である自分がやらなきゃいけないのだと、頭ではなく、本能で理解した。
「奴は、俺が必ず消滅させる。だから……頼む」
「――――分かりました。貴方が其処まで言うのなら、私からはもう何もいいマセーン！　代わりに、必ず勝って」
「勝つのは当然ニャ～。――――勝って、その上で必ず戻ってきなさい。貴方が皆を想うように、皆もまた貴方を想っているのだから」
　ケツァルコアトルの応援には単純に元気を貰ったが、ジャガーマンのソレは普段のトンチキさとは程遠い、理性と慈愛に満ちていたモノだった。真剣な表情で叱咤激励をしてくるジャガーの面影に、修司は嘗ての恩師が見えた気がした。
「あぁ、約束するよ」
　笑みを浮かべて応える修司に、満足した二柱の女神はその場を後にし、牛若丸達の援護とレオニダスの救援に向かっていく。残された修司は、近付いてくる巨大な影に向き直り、気を開放させる。
『無駄ナ事ダ。全テノ命ハ我ガ供物。死ネ、ソノ悉クヲ、我ニ差シ出セ』
「うるせぇよ。何処の邪神だが知らないが適当な事を言いやがって、テメェの好きにはさせねぇ。テメェは此処で、俺に倒されてろ！」
　その瞬間、修司は界王拳を開放し、怪物に向けて正面から突進した。狙いは人間に似た部位、無機質な眼差しと眼が合うが、その眼は何処までも空虚だった。
「吹っ飛べ、テメェを倒すには、ここは少しばかり手狭だ。場所を変えるぞ！」
『ヌゥッ!?』
　そして、構うことなく修司は拳を振り抜いた。叩き込んだ箇所からイヤな悪寒を感じたが、それを冷静に分析する余裕はない。最初の一撃で体勢が崩れ、無防備となった腹部を、両手を使って押し上げてい

く。
その図体から、ゆうに数十トンはあるだろう規格外の重量を前に、修司は界王拳を２０倍まで引き上げ、己の身だけで押し上げる。軈て怪物は宙に浮かび、瞬く間に北壁から遠ざかっていく。
これだけの巨体を倒すには、並の火力では足りない。そしてそれだけの火力を出すには、人の多い地上では不向きだ。
修司が選んだ場所は――――ペルシャ湾。人の手が及んでいない海で決着を付ける事にした。
『図二乗ルナ、人間ッ！』
振り上げる鎌が、修司を襲う。自分諸とも引き裂く勢いの刃を背に、既に見切っていた修司は、化け物を足場に跳躍。自ら腹部を切り裂いた怪物はそのまま海面へ落ちるが、その程度で終わるとは修司も思っていない。
予想通り、数秒も立たずに海面から起き上がった怪物は自ら切り裂いた腹部を治しながら修司を睨み付けている。再生能力を持ち、圧倒的な面制圧の力を持った怪物。何故自分がこんな奴を知っているのか、疑問に思うところは多いが……今は、そんな事はどうでもいい。
直接殴って分かった。この怪物は触れたモノに何らかの影響を及ぼす質の悪い精神干渉をしてくる。直接殴るのが無理なら、遠距離から倒すしかない。相棒が出せない歯痒さを感じながら、修司は怪物に向かって気功波を放つ。
「ダぁぁァッ!!」
両手から放つ蒼白い光、界王拳を乗せた閃光は怪物へ直撃する……筈だった。
「な、何だとッ!?」
しかし、怪物を倒す筈だった一撃は倒す処か掻き消されてしまった。
否、消されたのではない。修司の放つ気功波は怪物の餌として吸収されてしまったのだ。それを証明するように、多大なエネルギーを食した怪物はふた回り以上肥大化していく。
『――――終ワリダ』

そして、お返しとばかりに怪物の巨大な顎が開き、気味の悪いエネルギーが収束していく。怨嗟や怨念の声が聞こえてきそうなおぞましい力の波動、これ迄感じたことのない異質の気に、修司は回避しようとして……断念した。

今自分が避ければ、怪物の放つエネルギーはウルクに直撃する。彼処は人類最後の防衛拠点であり、其処にはシドゥリやウルクの人々、ギルガメッシュ王がいる。

ならば、逃げる訳には行かないと、修司もまた決意した。

――――力を上げる。腹の底から、自分の全てを引き出すように、修司は界王拳の限界を引き上げる。

（此処で負けるわけには行かない。信じるんだ！　自分の力を、自分の可能性を！）

どんなに窮地に立たされようと決して諦めない。自分がこうしている間にも立香達も戦い、必死に勝ち抜こうとしている。年端もいかない少女達が戦っている以上、自分が気持ちで負けるわけには行かない。

可能性を引き出す。脳裏に浮かぶ扉に触れた修司は、全身を貫く力を感じ取った。それは可能性の力、人類を導く、一つのエネルギー。

〝――――出すんだ。〟

〝――――を、――――インを、出すんだ〟

それは、一体誰の記憶か。耳朶に響く声に導かれ、修司の内から光輝く〝深緑のエネルギー〟が溢れていく。

〝――――信じろ。――――を、自分の可能性を〟

両手を空に掲げる。すると、溢れ出すエネルギーが、修司の掲げる両手へ集まっていく。

〝想いを込めて、パワーを上げるんだ〟

「うぅぅぅぅおおおおおおおおおッ!!」

『死ネ、シュウ＝シラカワノ末裔ッ!!』

怪物から放たれるのは、禍々しくもおぞましい光。どす黒く濁ったソレは、周囲の大気を腐らせながら修司に向けて解き放つ。

命を滅ぼす破壊の光。それに対し――――。

「ストナァァァァッ！　サァァァアンッシャインッ!!」
開放するのは、進化の光。人類を無限の進化へ誘う恐ろしくも神々しい光。
激突した光はペルシャ湾を呑み込み、シュメルの大地を照らしていく。

その１５０　第七特異点

――――鮮血神殿。人類に対して恨みと憎しみを募らせてきた魔獣達の女神、ゴルゴーンが根城にしている神殿。
人類に対して憎悪を抱いておきながら人類を利用すると言う手段を選び、またその矛盾に最期まで理解が出来なかった女神は、同じメドゥーサであるアナに討たれ、アナと共に割れた地の底へ消えていった。
ゴルゴーンを討つ為には、アナという少女の犠牲が必要だった。それが予め決められていた定めだとしても、その事実を受け止めるには……立香には重かった。
けれど、それをちゃんと噛み締めなければ、これ迄彼女と過ごした日々が嘘になる。否定はせず、肯定もせず、悲劇だけに眼を向けず、彼女との日々を思い出しながら、立香はゆっくりとマシュと共にその事実を受け入れた。
「ありがとう、アナ」
裂けた大地を見下ろしても、既に彼女達の姿は確認できない。それでも自分達と共に戦ってくれた少女に立香は最大限の感謝を口にした。せめてもの手向けとして、あの日老婆から託された花の冠を優しく投げ入れる。
自分にはその資格がないと、一度は拒否した花の冠。使命を果たし、眠りに付いた今ならば、きっと彼女も受け入れてくれるだろう。そんな願いと老婆の優しさが届くことを祈って投げ入れた花の冠は、アナを追うように地の底へ消えていった。
「これで、人類を脅かす女神の攻略は完了しました。ですが……」
「修司さんが言うには、此処からが本番みたいだけど……何も、起きないよね？」
自らをティアマトと称し、人類の絶対的敵対者であるゴルゴーン。その女神の背景には今回の特異点の本当の元凶が潜んでいる。立香

達はてっきりゴルゴーンが倒された直後に現れるかと思っていただけに、この静寂が少しばかり不気味に思えた。
　もしかして修司の深読みか？　そう思ったのも束の間、突如として巨大な振動がシュメルの大地を揺がした。突然の揺れに驚く一行だが、意外にも揺れ自体は直ぐに収まった。
「い、今の揺れは一体なに!?」
『立香ちゃん、マシュ、二人とも無事かい!?』
「ドクター、どうかしたの？」
『今、君達の観測が一時的に出来なかったんだけど、何も異常はないかい!?　気分が悪かったり、手足が透けてたりしてないかい!?』
「お、落ち着いてくださいドクター、私も先輩も無事です。ゴルゴーンも……その、アナさんのお陰で討伐する事が出来ました」
　シュメルの地震に動揺している暇もなく、必死な様子で通信を繋いできたロマニに、一行はホッと安堵の溜め息が漏れた。ロマニからの話では、カルデアは一時期立香達の観測が出来ていなかった様だが、立香達に特に変調はなく、体調面も至って良好だ。
　その事にロマニも安堵の溜め息を溢すが……それも一瞬。深刻そうな顔をして立香達を見つめるロマニの眼差しは、これ迄とは何かが違う畏れがあった。
『二人とも、どうか落ち着いて聞いて欲しい。先程観測した結果……北壁が半壊している事が判明した』
「なっ!?」
『原因は不明、しかし北壁が半壊する直前に超弩級のエネルギー値を観測したから、恐らくはケツァルコアトル以上の神性が顕現したと思われる』
　信じられなかった。北壁には牛若丸や弁慶、レオニダスといったサーヴァントの中でも戦場を得意とする英霊が付いていて、更にはケツァルコアトルやジャガーマン、白河修司などゴルゴーン討伐の自分達よりも潤沢な戦力が揃っていた筈だ。
　そんな彼等が揃っていながら、北壁が半壊。その事実は立香達に大きな衝撃を与える事になった。

『今、北壁には修司君を除いた全てのサーヴァント達が残った魔獣達の掃討をしてくれている。被害は甚大だけど、幸い致命傷には至っていない』
「待ってドクター、修司さんは……修司さんはどうなったの？」
北壁の半壊、その事実は決して軽くはないが、幸いにもその防衛機構は死んではいない。怪我を負った兵士達もレオニダスが上手く立ち回ったお陰で被害者は最低限に押し留めたし、牛若丸達の助力もあって残りの魔獣達の掃討も滞りなく済むだろう。
しかし、それ以上に立香達には懸念するべき事があった。それは敢えてロマニが避けていた白河修司の事に付いてだ。
彼に限ってそんな事はあり得ない。しかし、嘗てない状況の前に立香はイヤな予感を感じずにはいられなかった。
「白河修司、今頃奴は死んでいるだろうね。他でもない魔術王からの横やりでさ」
「キングゥッ！」
そんな立香の予感を決定づけさせるような囁きが、頭上から聞こえてくる。天蓋を突き破り、ゴルゴーンの玉座へ踏み入ってきたキングゥは、人類を蔑んだ態度こそは軟化してないものの、その表情は複雑そうにしていた。
「アナタ、ケツァルコアトルの相手をしてたんじゃないの？」
「ゴルゴーン。彼女が討たれた以上、もう彼女と事を構えるつもりはないさ。いや、構えても意味がない。と言うのが正解かな？」
イシュタルの問いを、鼻で嗤いながらも答えるキングゥだが、奴はこちらに対する敵意や殺意といった害意はなかった。これ迄は修司の顔をみるだけで殺意を滾らせていたのに、今はあの時の荒ぶりが嘘のように大人しくなっている。
「キングゥ、アナタは北壁で何が起きたのか知ってるの？」
キングゥは人類を根絶やしにする為、人類の守りの要とも言える北壁を多少なりとも疎ましく思っていた。故に修司がマルドゥークの手斧を投げ飛ばす際にそうはさせないと邪魔をしようとし、ケツァルコアトルがそんなキングゥを押さえ込んでいた。

つまり、北壁の状況については彼が一番情報を待っている。ダメで元々、一体今何が起きているのかを把握するために立香は訊ねるが……。
「っ、先輩！　またもや地震です！」
「――――っ、」
再び足下を揺るがす振動に戸惑うと、突然血を吐き出したマーリンが、しまったと顔を歪めて悔しそうに地に付いた膝を叩き出す。
「――――そうか、そう言う事だったのか。まさか、化かし合いで私が一歩上を行かれるとは！」
「マーリン!?」
恨めしく言葉を漏らすマーリン、その姿は徐々に薄くなり、サーヴァント特有の退去現象が起きている。ゴルゴーンを討伐したつもりが、マーリンまでもが致命傷を負ってしまっている。
この現象を理解しているのはマーリン自身を除いて唯一人、空中から立香達を見下ろすキングゥが、薄笑いを浮かべていた。
「花の魔術師マーリン。確かに君の魔術は厄介だったよ、対象を眠りの淵に落とし、その目覚めを時が来るまで遅らせる。ああ、大したものだよ。その努力、僕は素直に称賛しよう」
「けれど、少しばかり浅はかだったね。魔獣母神ゴルゴーンは、確かに原初の女神ティアマトの権能を授かっている。けれど、それは単に力を与えただけじゃない。彼女の存在は女神ティアマトとの繋がりを結ぶ為に必要な存在だったのさ」
キングゥの言葉の意味を理解するのに、立香もマシュも時間は掛からなかった。ゴルゴーンとの決戦前に修司が見破った今回の特異点のカラクリ、その原因となっているのはやはりゴルゴーンだった。
つまり、ゴルゴーンは女神ティアマトを目覚めさせる為に必要な生け贄であり、代行者だった。眠りにつかせた母を目覚めさせる迄の代用品、ただそれだけの為に女神ゴルゴーンは利用されていた。
奇しくも、修司の読み通りの展開になってしまった。想定外だったのはマーリンが此処でリタイアしてしまう事、申し訳なさそうに俯くマーリンに代わり、立香がキングゥに言葉を投げ掛ける。

「なら、今度はその女神ティアマトが出てくるって事？　同じ神様を利用して悦に浸っているとか、貴方が見下している人間と……一体どう違うわけ？」
「せ、先輩!?」
「ヒュウッ、私好みの良い挑発ね。良いわもっと言ってもっと言って！」
　人間を何処までも見下している癖に、そのやり方は何処までも人類と似通っていた。その人間らしいキングゥや魔術王のやり方を指摘する立香だが、挑発するにはその言葉は少々遅かった。
「吠えるなよ藤丸立香。そこの出来損ないのデミサーヴァントや、白河修司の力が無ければとっくに野垂れ死んでいる絶対弱者が、生意気な口を叩くんじゃあない」
「ならどうする？　此処で私達と戦ってゴルゴーンの敵討ちでもするつもり？」
「いいや、そんな無駄な時間を掛けるつもりはもうないよ。それに、どのみち君達人類とは此処でお別れさ。精々僕達新人類と……邪神の糧にでもなってくれ」
　立香の挑発やイシュタルの煽りもものともせず、キングゥは憐憫にも似た眼差しで一行を見下ろし、言いたいことが済んだのか、天蓋の一部を穿って開いた孔を通りながら、キングゥは鮮血神殿を後にする。
　その口振りから、もうここにいる意味もないと判断したのだろう。やけに余裕のあるキングゥの態度や北壁の様子が気掛かりだが、自分達もここにいる場合じゃないと鮮血神殿から脱出を試みる。
　だけど、その前に……。
「藤丸立香、人類最後のマスターの片割れよ。僕がこの特異点から退去する前に、どうかこの事だけは王様に伝えて欲しい」
「七つの厄災が一つ、人類悪が目を覚ましたと」
　紡がれるのは、人類が抱える厄災。人類悪（ビースト）という討つべき獣を説明すると、マーリンは花を散らすように消失。人類悪、それが一体何なのか。王に判断を委ねる為にも、一同は鮮血神殿を後にする。

しかし。
『なんだよこの数、ペルシャ湾から物凄い数の魔力反応があるぞ!?
総数は――――凡そ一億!? こ、こんなの……人類にどうにか出来る数じゃない!』
既に、悪意は目を覚ました。人の時代を終わらせる為に、新しいヒトが進軍する。
その中に、とびっきりの邪悪が混ざっているのも知らずに……。

◇

「はぁ、はぁ、……ふぅ、何とか倒せたか」
地表深く抉られたペルシャ湾。窪んだ大地に海水が流れていくのを眺めながら、息を整えた修司は滲み出る汗を拭い、たった今消滅させた怪物の死骸を確認する。
とは言っても、怪物は修司の放った一撃によって完全に消滅。断末魔を上げること無く光へ消えていった怪物は、奇妙な台詞だけを残してこの世界から退出した。
結局、奴の言う言葉は何の意味があったのか。シュウ＝シラカワとは、一体誰の事なのか。疑問に思う所はあるけれど、今はその事を考えている場合ではない。
被害を抑えようと場所をペルシャ湾に移した為に、大分時間を取られてしまった。北壁はまだ魔獣達との戦いを繰り広げている最中だろうし、立香達だって今頃ゴルゴーンと決戦の直中だろう。

早く戻って皆の手伝いに向かわなければ。と、その前にロマニへ事の顛末を報せる必要がある。北壁に引き返しながら連絡を入れようとしたその時……ペルシャ湾の海が黒く染まってくのに気付いた。
「なんだ……これ？」
青く美しいペルシャ湾が、どす黒いモノに変質していく。
――――修司はこの黒いモノと良く似たモノを知っている。それは嘗て自分の全てを奪った呪いの泥、悪意と呪いに満ちた泥。ペルシャ湾の海面に浮かぶ黒いモノは、修司にあの時の光景を想起させていた。
「まさか、これがゴルゴーンと裏で繋がっていた奴なのか？」
目の前の光景がゴルゴーンとの戦いによって生み出された光景なら、立香達はあの復讐の女神に勝利した事になる。だが、如何せん状況展開が早すぎる。これでは人類側が体勢を立て直すよりも前に、襲撃を受けかねない。
しかし、事態は修司の予想を上回る形で裏切っていく。より最悪な形で、より醜悪な形で。
「う、うわぁぁぁっ！」
「っ!?」
ふと、遠くから聞こえてきた微かな悲鳴。何事かと思い辺りを見渡せば灯台に似た塔に黒い泥がへばり付いているのが見えた。
いや、あれは泥ではない。どす黒い形をした……人ならざるモノ。相手を睨む目も、敵を感知する鼻もない、魔獣よりも醜悪なモノが薄く嗤う口だけを歪ませて人間を襲っていた。
その光景を目の当たりにした瞬間、修司は気を開放して灯台へ接近。人間を嗤いながら殺し続ける化け物に蹴りを一撃見舞うと――
――無惨に殺された老人が視界に入った。
「波ァァァァァッ!!」
振り向き様に、灯台を襲っていた黒い化け物の群れに向かってかめはめ波を放つ。放たれた蒼白い閃光は化け物達を呑み込み、空の彼方へと消えていった。
だが、これで終わりとは思わない。以前としてペルシャ湾は赤黒く

変質したままだし、空も暗雲が立ち込め始めている。まるで世界の終わりが来ているような光景、早いところ此処から脱出しようと生き残っている人達に声を掛ける。
「皆さん、ご無事ですか!? 自分はウルクより故あって此処までやって来たもの、生き残っている人達は自分と一緒に来てください！」
「おぉ、貴方が噂に聞いた山吹色の！ ありがたや。世界が終わりを向かえても、天運は未だ私達を見逃してはいませんでしたか」
「詳しい事はウルクへ戻ってから。全員、自分の体にしがみついて――――」
「後ろッ！」
灯台の長らしい老人を除いて、一先ず無事そうな人達に安堵するのも束の間、聞こえた来た怒号に返事をする間もなく背後からの悪意を感じ取った修司は、手刀に気の刃を纏わせて迎撃。振り抜かれた斬撃は確かにその悪意の元を断ち切ったのだが……。
「なん……だと……？」
それは、今黒い化け物に襲われて命を奪われた筈の老人だった。いや、正確には老人ではなく――――半分が黒い化け物となった老人。おぞましい形相で笑みを浮かべ、斬られても尚笑みを絶やさないその貌はただ狂気に満ちていた。
「……今、俺は……何を斬った？」
何故、老人が化け物になったのか。思考を巡らせる修司だが、その答えは直ぐに導き出された。
化け物はただ海から来るだけでなく、襲った人間すらも化け物に変えてしまう。その恐ろしい性質を理解した瞬間、修司は即座に灯台に残った人達を連れてウルクへの一時撤退を選択した。
だが……。
『何処へ往ク』
その声を聞き、驚愕し、唯でさえ状況に混乱していた修司は……この日、最も大きな隙を晒してしまった。灯台の外から此方を覗いている巨大な骸骨、それは先に修司が倒した怪物と同じ性質の気配を漂わせていた。

違うのは、先の地を這う怪物とは異なり、翼を持っているという事。
一瞬の時間、全ての光景が遅くなっていくのを自覚しながら……。
『――死ネ』
修司は怪物の放つ衝撃波に呑み込まれていく。全身を砕かれるような衝撃を受け、意識を断たれた修司は……エリドゥ近くの森まで吹っ飛んでいく。
悪意は嗤う、面白いと。邪悪は嗤う、滑稽だと。
ありとあらゆるモノが踏みにじられ、絶望に沈み行く中。遥か空から見下ろす魔術の王の影は、とても晴れやかな笑顔で見下ろしていた。

その１５１　第七特異点

『――――ごめんなさい』

それはいつの日だったか。普段は優しくて厳しかった祖母が、珍しく感情を顕にしていた。どんなに辛くても泣き言など口にせず、元気だった祖母は……その日、どういう訳か泣いていた。

ごめんなさい、ごめんなさいと、一体誰に謝っているのだろうか。泣いている祖母の涙を止めてやろうと、幼いながらあの手この手で笑わせようとした自分は、きっと祖母から見て滑稽に見えた事だろう。

しかし、そんな自分を祖母は泣きながら笑い、抱き留めてくれた。

『ごめんなさいモニカ、ごめんなさいテリウス、ごめんなさい……シュウ様。私には、この子の幸せを奪う事は、出来ません』

『お婆ちゃん？』

モニカとは誰か、テリウスとは何者か、そして……シュウなる者は何者か。疑問に思うことは多々あれど、それを問い詰める事は修司には出来なかった。

だって、その顔は何処までも慈愛に満ちていて――――。

『修司、私の可愛い孫。どうか……幸せになって』

その微笑みは、何処までも幸福にみちていたのだから。

それは、自身の祖母であるサフィーネ＝グレイスが亡くなる数日前の出来事。

――――懐かしい夢を、見た気がした。

◇

「――――あ、う……ここは？　アグッ」
朦朧とする意識を覚醒させ、立ち上がろうとする腕に力を入れようとした時、全身に鋭い痛みが走るのを自覚する。倒れ、地に伏せる修司は自身に何が起きたのかをゆっくり思い出しながら、全身に走る痛みを堪えながら立ち上がる。
そうだ。自分は確かペルシャ湾にいた筈。ペルシャ湾で北壁を襲い掛かってきた怪物を何とか打ち倒し、その後に海で起きた超常現象に嫌な予感を感じ、灯台にいるペルシャ湾に滞在している観測班の人々と共に一時ウルクへ避難しようとしていたのだ。
「っ、不味い。皆にもこの事を報せないと！」
脳裏に浮かぶのは、悪意に満ちた怪物達と邪悪に染まる化け物。化け物の方は恐らく先にペルシャ湾で自分が倒した奴と同類の存在なのだろう。根拠はないが、言葉では表現出来ない確信が修司にはあった。
そして、黒い怪物達も同様に危険な存在だ。奴等がペルシャ湾から這い出てくるモノなら、その数は計り知れない。どちらも危険度は高く、放置できない存在である以上、それを知る修司が下すべき判断は急ぎウルクへ戻り、王に事の顛末を報告するだけだ。
「クソ！　あれから一体どれだけ時間が経ったんだ!?　王様は、立香ちゃん達は無事なんだろうな!?」
せめてカルデアへ話を繋げようとするも、あの化け物の一撃を受けてしまった所為で通信機器が破損してしまったのか繋がらず、焦燥感が修司の胸中を掻き乱す。
このままでは駄目だと、一旦落ち着こうとする修司だが、遠くから聞こえてくる悲鳴がそれを許さない。既に破れ掛けていた胴着の上着を破り捨て、それを自身の腕の出血の簡単な応急措置へ施すと、修司は脇目も降らずに悲鳴の方へ走り出す。
「止めて、お願い止めて！　人間の体はそっちに曲がらないの！　裂けちゃう、裂けちゃうカラァァァァッ!!??!!」
「助けて、誰か、誰かぁ！」
目の当たりにしたのは、一つの地獄。逃げ惑う人々を無遠慮に、無

慈悲に――――否、弄ぶ黒い怪物達に修司の怒りの沸点は飛び越えた。自身の状態を鑑みず、肉体に掛かる負担を忘れて、修司は界王拳を発動。女性に鋭い触手を振り上げる怪物の頭を、言葉も発せずに蹴りとばす。

ギュルギュルと音を立てて首が飛んでいく怪物、首が地べたに着くのと同時に、胴体諸とも塵となって消えていく。その様子に、周囲の同類達は一瞬だけ動きを止めた。その隙を見逃さず、着地と同時に加速した修司は、一切の加減も遠慮もなく、怪物達を己の素手で蹴散らしていく。

手刀で、拳で、蹴りで、肘や膝で、修司自身も痛みで苛まされている筈なのに全く意に介さず、暴力による蹂躙は続いた。

「皆、無事か!?」

その集落の化け物達を駆逐するのに一分も掛からず終わらせた修司は、生き残った人々に声を掛ける。修司の声に戸惑いながら反応してくれたのは……僅か七人。負傷者を含めれば十数人規模の集落の人々が修司を見て集まってきた。

たったこれだけ。この集落は規模的に見て、数百人の規模で成り立っている筈。建物の数からして数十人程度なのは……絶対にあり得ない事だ。

それはつまり……と、そこまで考えて修司は首を横に振った。失ったモノを数えるのは、精神的に堪える。今は現実逃避でも前を向くべきだと気持ちを無理矢理に変えた修司は、不安そうにしている住人達を安心にさせるべく、笑顔で応える。

「皆さん、これから自分はウルクに向かいます。道中は自分が守りますので、どうか安心してください」

すると、修司の強さを目の当たりにした人々は安心し、安堵の表情を浮かべる。だが、いつまでも此処に足止めをする訳には行かない。いつまたあの怪物達が此処に押し寄せてくるか分からない以上、早急に移動が必要になってくる。

全身が酷い鈍痛に苛まされ、今にも倒れてしまいそうだが、此処にいる人達を助けると決めた以上やるしかない。

比較的軽傷の人達と協力し、助け合いながら集落を出て直ぐ……再び、黒い怪物達はやって来た。
「ｓ@ｂｉｅｈｋ？」
「６ｅｔ：ｚｂｑ@！」
「３ｃ—@４！　３ｃ—@４！」
「ｆ@ｏｆ@ｏｉｄｗ３ｃ—@４！」
口はあるから何かしらの言葉を話せるのは分かったが……如何せん、何を言っているのか分からない。これ迄世界を旅して様々な言語を耳にして来た修司でさえも、初めて耳にするモノだった。
しかし、その発声に吐き気を催す程の邪悪な意志が詰まっているのは理解できた。コイツ等とは根本的に相容れない、怪我を負っている修司にではなく、無抵抗な人々を進んで狙っている事から、その性悪さは伺い知れた。
「何言ってんのか知らねぇよ。コミュニケーションを取りたきゃ、人語を介してから出直してこい！」
手刀に気を纏わせ、横に薙ぎ払う。どれだけ負傷を負っていようとも、目の前の怪物をまとめて屠る位訳はない。問題なのは、護衛対象の方だ。
ウルクまでは、まだ此処から幾分か時間が必要になってくる。これまで休みなしで走り続けてきた彼等には、もうこれ以上の行軍を行えるほどの体力は残されていない。
負傷した人々の怪我も、修司が気を分け与えた事でどうにか動けるようになってはいるが……それも、もう長くは持たないだろう。
そして、自分をペルシャ湾から吹っ飛ばしたあの化け物も、何処に潜んでいるのか分からない今、迂闊に足を止めるのも許されない。現在、あの化け物の気配は消えているから、今すぐ此方に牙を向けてくる事はないだろうが……それでもいつまた自分の前に現れ、襲ってくるか分からない。
故に、今は僅かな望みに懸けてウルクへ向かうのが、今の修司に出来る最善の手段だった。
「ｓ@４７ｚｗ動ｅｗ．ｋ？」

「６ｍｄ？ｅ！　ｆ＠ｏｆ＠ｏｉｒ．ｋ６ｍｄ？ｅ！」
「こっちくんな！」
性懲りもなく襲ってくる怪物達を修司は蹴りで薙ぎ倒す。あの集落から脱出して数刻、幾度となく怪物達を蹴散らして分かった事だが、どうやらこの黒い怪物は恐怖という感情が抜け落ちているらしい。
そもそも、あんな怪物が知性や理性を持ち合わせているのかなんて定かではないが、自分と同個体が呆気なく屠られたならば、通常の生命体は僅かでもそれに反応する筈だ。
しかし、奴等は自分の仲間があっさりと倒されたことにも対して反応せず、構うことなく襲ってくる。これ迄の自然体系に属する生命体なら、まずあり得ない挙動だ。
そもそも、この怪物達は何処から現れ、どうやって此処まで数を増やしてきた？　やはりペルシャ湾の深海か？　産み出される母体が存在するのなら、その母体は今何をしている？
（余計な事は考えるな！　今はこの人達をウルクまで守ることだけに集中しろ！）
無駄に回る思考に歯止めを掛け、目の前の敵を倒すことに集中する。四方八方から押し寄せる怪物に、再び修司が界王拳を解放しようとした時。

「ぜぁッ！」
地を駆ける牛若丸が、黒い怪物を一息に両断していく。先駆ける牛若丸に続き弁慶が、次々に怪物達を斬り倒していく。
「修司殿、ご無事でしたか！」
「牛若丸、弁慶も、どうして……ここに？」
「拙者達だけではございませぬよ」
北壁にいる筈の彼等がどうして此処にいるのか、疑問に思う修司だが、その答えは直ぐに返ってきた。背後から聞こえてくる声、懐かしく聞きなれたその声に振り返ると、其処には急いだ様子で此方に駆けてくる立香達が見えた。

「修司さん！」
「立香ちゃん、マシュちゃんも、どうして此処に？　ゴルゴーンの討伐に向かった筈じゃあ……」
『その事は僕から説明するよ。けれどその前に修司君、君にも聞きたい事がある。先の北壁から現れた謎の神性が現れてから、一体何が起きたんだい？』
　通信越しに現れるロマニ、恐らくはカルデアからもこの異常事態の観測に乗り出しているのだろう。少しでも情報が欲しい彼の言葉に、修司は二つ返事で頷いて順番に説明を始めた。

◇

『そうか、二体目の謎の神性はペルシャ湾の灯台を破壊した後姿を消したのか』
「あぁ、北壁に現れたデカブツはちゃんと倒したから、あれは別個体の存在と見て間違いない筈だ。それにしては、やたらと形状が類似していた気もするが……」
「そ、そんな神が存在するのでしょうか？」
『うーん、どうなんだろ？　神々の在り方って言うのは僕達人類には推し量れない所があるからなぁ。ケツァルコアトル然り、イシュタルやエレシュキガル然り』
「あの化け物に関する考察は後にしましょ。一先ず謎の神性には留意するとして、先ずは修司の方からまとめさせましょ」
「ですね。牛若丸達が避難民達の引き継ぎを任せてくれたけど、私達

に出来る時間はあまり残されていないからね」
立香達が修司と合流し、それぞれに起きた出来事を纏めると、様々な事が一度に起きたのだと確認した。
まず、ゴルゴーンの討伐はアナという一人の少女の犠牲により、何とか成功したのは良かったが、それ以降は予想外の出来事が息つく暇もなく押し寄せてきたのだ。
ゴルゴーンに権能を預ける形で繋がっていた人類悪（ビースト）なる存在、ペルシャ湾から引き起こされる異常現象と、黒い怪物達はこれに関係するものだと、カルデアと賢王ギルガメッシュは認識している。
人類悪。初めて耳にする単語だが、要するにそいつが今回の特異点の元凶であり原因。ならばソイツを倒せば万事解決なのではないかと思いたい所だが、北壁に現れた怪物が話をややこしくさせている。
北壁に現れた謎の存在。その醜悪さと凶悪さから人類と敵対する輩であることは明白だが、残念な事にあの化け物を特定するモノがカルデア側からは何も発見できなかった。
その外見は嘗ての魔獣達の司令塔であるギルタブリルと似ているのでは、という話が出てきたが、王は似ているが根本的に違うとこれを一蹴している。
唯一心当たりがありそうな修司もまた、分からないとしか言葉に出来なかった。ただ、あれが人類と敵対する存在であることは間違いなく、発見次第修司が倒すと本人が宣言している。
「あの化け物は見付け次第俺がぶちのめすとして、例の黒い怪物――――ラフムか、アレを生み出す大元を何とかするって言うのが、俺達のやるべき事なんだな」
話は変わり、修司は黒い怪物――――ラフムについて言及する。アレはペルシャ湾から現れる黒い泥そのもので、神代の泥で出来ている為に雌雄の個体差は存在せず、繁殖する機能もない。ある意味、完成された生命体と言うのが、あのラフムであるとロマニは言う。
完成された存在にしては、悪意に満ちすぎているという気もするが、それが人類悪であるティアマトから産まれたモノであるならば、ああ言った存在になるのも当然なのかもしれない。

そう、ゴルゴーンに権能を与え、自分の分身、或いは傀儡としていたのは、シュメル創世の女神であるティアマトだった。世界を創り、基盤として地に還ったとされる原初の神が、人類を滅ぼす為に遂に目覚めようとしている。

人類未曾有の危機、それをどうにかするのが今後の自分達のするべき事だと、アッサリと受け入れる修司に、立香達は頼もしく思えた。

「んじゃあ、そのティアマトがペルシャ湾にいるのを調査する為に、立香ちゃん達が派遣されたって言うのか？　いや、普通に有り難いけどね」

「そ、それは……」

立香達が此処まで来てくれたと言うことは、ペルシャ湾に潜むティアマトの居場所やラフムについての調査かと思っていた。だが、その事を追求すると、途端に言い淀むマシュに修司は何故かイヤな予感を感じた。

「修司さん、私達がウル近辺まで来たのは調査の為だけじゃないの」

「立香ちゃん？」

「……シドゥリさんが、ラフムに連れ去られたの。市民を守る為に、自分の身体を盾にして……」

申し訳なさそうに、目を伏せて語る立香に……。

「――――なんだって？」

修司はただ、呆然と目を見開くのだった。

その１５２　第七特異点

正体不明の神性が現れ、修司がペルシャ湾まで引き連れて何とか討伐を果たし立香達がゴルゴーンを打ち倒した同時刻に、それは起きた。

ウルクに襲い掛かる黒い怪物達、後のラフムに襲われたウルクへ狙い棲ましたかの様に現れ、ウルクの人々を蹂躙した。ギルガメッシュ王が未来視で視たとされる滅びの日、その時が遂に来たのだと誰もが確信し、恐怖に震えた。

突然の襲撃で浮き足たつウルク、それでも駆け付けてくれた立香達カルデア組のお陰でどうにか持ちこたえる事が出来た。

故に、これは立香達がウルクに駆け付ける僅かな時間の合間、ラフムによってウルクが蹂躙され掛けた時の一幕。

「ならん、行くなシドゥリ！」

ジグラットの王の間にて、王の怒号が木霊する。それは賢王と呼ばれるギルガメッシュ王が滅多に見せることの無い人としての一面だった。

今、ウルクは嘗て無い危機に陥っている。ラフムという怪物に滅茶苦茶にされたウルクは、サーヴァント達が出払っている事もあって、至る所で人手不足に陥っている。

その深刻さは既にジグラットの王の間に及ぶ程、手を貸して欲しいと懇願してくる兵士を前に、王の側近であるシドゥリが向かおうとした時……王は視た、視てしまったのだ。

今、シドゥリを向かわせてはいけない。王としてではなく、人類の裁定者としてではなく、人として、ギルガメッシュはシドゥリの行く手を拒んだ。

それをシドゥリは一瞬だけ驚き、次に微笑んで見せた。そう、王には視えてしまったのだ。此処から先、このジグラットから出てしまえば、きっと其処で自分の運命が終わるのだと。

しかし、いや――――だからこそ、自分は行くべきなのだろう。後に

続く人の歴史が紡がれる為に、自分の運命を受け入れる時なのだと。
ふと、シドゥリの脳裏に一人の男性の姿が浮かんだ。藤丸立香と同じ、人類を守る為に遥かな未来からやって来たとされる異邦人。白河修司、遠い地で新たに王の臣下となった最も新しいウルクの人。
彼が自分の決断を知ったら、きっと怒るのだろうな。怒って、泣いて、止めてくれと懇願してくるのが……不思議と、簡単に思い浮かんだ。
赤の他人なのに、不思議と違和感がない。シドゥリには遠い親戚こそいても、この様な親近感を持つ者はいなかった。きっと、自分に兄弟がいたらこんな気分になっていたのだろう。
弟と思えるような人と出会い、たった今王から人としての寵愛を受けた。ならば、自分にはもう何も思い残すことはない。人にはそれぞれ役割があるように、今回は偶々自分の番が来た。これは、ただそれだけの話なのだ。
故に、シドゥリは王に頭を下げた。これ迄自分達を導いてくれた事、王としての責任を全うしてくれる心優しき王の慈悲に、感謝と謝罪を込めて。
「――――これ迄ウルクを、私達を導いて下さり……ありがとうございます。ギルガメッシュ王」
顔を上げ、慈愛に満ちた笑みを浮かべるシドゥリに、ギルガメッシュの口からはそれ以上の人としての言葉が出る事はなかった。
シドゥリは決めたのだ。運命を受け入れたのでも、末路に嘆いているのではなく、それが自分のやるべき事なのだと決めたのだ。迷い、怯えても、それでも自分がやるべきなのだと、そう――――〝覚悟〟を決めたのだ。
であるならば、ギルガメッシュ王が口にすべきは覚悟に泥を塗る引き留めの言葉ではない。これ迄自分に、ウルクに忠誠を誓ったその誇り高き覚悟を尊ぶ事。
「そうか……忠道、大義である。シドゥリよ、そなたの忠義、嬉しかったぞ」
ギルガメッシュ王からの最期の労いの言葉を受け、シドゥリは単身

ジグラットを後にする。小さくなっていく自分の忠臣を見えなくなるまで見送ると……王は手で顔を覆い天を仰いだ。
それは、立香達がジグラットに訪れる数刻前の出来事である。

◇

駆ける。ラフムによって連れ去られたというシドゥリを助ける為、立香達から話を聞いた修司は彼女達の制止を振り切り、一人エリドゥに向けて地を蹴り続ける。
その際、ロマニから人類悪やらラフムの生態系について少なからず情報を聞かされていたが、その悉くが修司の耳に入る事はなく、彼の胸中にはただ焦りと憤りだけが渦巻いていた。
何故自分は気付かなかったのか、つい先程まで自分はエリドゥ近辺の集落にいたと言うのに、何も気付かず拐われたシドゥリと擦れ違っていた事を、修司は悔やまずにはいられなかった。
何故気付かなかった。自分の落ちた場所がエリドゥ近辺の集落で、その気になればラフムに囚われている人達だって助けに行けていた筈。……いや、分かっていた。あの化け物に襲われ、一時は記憶の混濁まであった自分では、エリドゥの事まで気が回る事はなく、あの時は僅かな生存者を護るだけで精一杯だったのだと。
いや、所詮はこれも言い訳に過ぎない。北壁の損壊を防ぐ為に敢えて場所を移動させたというのに、これでは何の意味も無いではないか。自責と呵責の念に苛まされ、それすらも自分には資格がないと吐き捨てて、修司はエリドゥへと急ぐ。
「ちょっと、落ち着きなさいってば！　どうしたって言うのよ」

すると、空から先行してきたらしいイシュタルが、修司の所まで追い付いてきた。空を飛んでいるとは言え、修司の足に追い付くとは流石は女神。しかし、呼び止めるイシュタルを無視し、修司は更に地を蹴る脚に力を込める。

「バカ！　アンタが先走った所でどうにもなんないでしょうが！　傷だって治ってないんだし、もうちょっと冷静に――――」

「うるせぇ……」

「なっ、」

「うるせぇって、言ってんだ!!」

制止の呼び掛けをしてくるイシュタルの言葉を遮って、修司は子供じみた怒声を上げる。

分かっている。今の自分が先走った所で、エリドゥに囚われている人々全てを助ける事は叶わない。そもそも、今もまだウルクの人達が無事でいる保障は何処にもないのだ。

だが、修司は見てしまっている。ペルシャ湾を観察していた灯台で、ラフムになり掛けた人だったモノの姿を。もし、奴等の増え方の一つにその様な手段を取っているとするならば……。

そんな考えを振り払う様に、修司は首を横に振る。だって、だって彼女は、自分にとって……掛け替えのない大切な――――。

「修司、アンタ……」

この時、自分がどんな顔をしているのか、鏡を持たない修司には分からない。ただ、横から覗き込んでくるイシュタルは、罵声を浴びせられた事を咎める事せず、静かに修司の後を追走していく。

◇

そして、それから僅かな時間が過ぎ、修司はエリドゥへ辿り着いた。其処に人の姿はなく、見えるのはラフムの群れだけ。遅かったのか？
いや、集中して気を探れば、エリドゥの広場に百人規模の人の気配が感じ取れた。
未だに立香達が追い付いてくる気配はない。が、今は彼女達の合流を待っている場合ではない。既にラフム達は自分達を向いている。その貌に目はないが、その縦型に裂かれた口が、嗤っている様に見えた。
他の仲間を呼ばれる前に仕留める。修司は手刀に気を纏わせ、押し寄せるラフム達目掛けて横薙ぎに一閃させる。
瞬間、横に両断されたラフム達は塵となって消えていく。相変わらずコイツ単体ではどうってことはない、このまま広間まで一直線に進もうととして――――。
「っ！　討ち漏らしがいたか！」
大通りから少し離れた所で、息を潜めていたラフムを見付ける。此方の様子を影から眺める、なんて知性の発露を見せてくるラフムに、修司は言葉に出来ない怖気を感じた。
やはり、ラフムは学習している。その生態系がどう言ったモノかは定かではないが、恐らくは個体同士で感覚を共有し合う特殊な繋がりがあるのだろう。謂わばラフムだけのネットワーク、このまま奴等が知性を学んでいったら、それこそ何か取り返しの付かない事になる気がする。
ラフムは一匹たりとも生かしてはおけない。再び修司は手刀に力を込め、そのラフムを両断しようと迫り――――。
「――――――――え？」
動きを、止めてしまった。
そのラフムは修司の姿を見ても襲っては来ず、仲間を呼びもせず、殺気を向けられても尚、敵意を見せては来なかった。
その個体がしているのは、ただ両手を上げているだけ。威嚇のつもりか、はたまた別の意図があるのか、震えながらただ前足らしい両手を上げながらその姿は――――まるで、人間らしい投降を示している

みたいで。
「――――ま、さか」
喉が乾く。息が止まる。心臓の鼓動が煩い。目の前の無抵抗なラフムを前に、修司は呆然とその様子を眺める事しか出来なかった。
嘘だ。否定の感情が、修司の胸中に溢れていく。だって、その格好はこの神代に於いて知るものは誰もいないのだから。両手を上げて降伏なんてモノ、この時代には存在しない筈――――。

『あの、修司様？　白旗とは一体？』
『あぁ、白旗ってのは降参の意味を相手に伝える手段の事さ、他にも両手を上げてバンザイの姿勢とかも自分の負けを認めるジェスチャーだったりするんだ』
『バンザイ……ですか？』
『そうそう、バンザーイってね』

「――――――――あ」
気付いた。気付いて、しまった。目の前のラフムが両の触手を上げている理由を、敵意もなければ殺意もない。そもそも敵対する意志がそのラフムにはなかった。
だって……。
「あ、あぁ……アアアアアアアアアアッ!!」
慟哭。目の前のラフムを前に修司の膝は崩れ落ち、許しを乞う様に、その額を地面へ打ち付けた。
まただ、またこうなった。大事なモノを理不尽や不条理から守る為に、自分は今日まで鍛え上げてきた。自分の好きな人達が笑っていられるように、理不尽に喘ぎ、不条理で涙を流さない様に、強くなると決めた筈なのに。
「また、俺の手から……溢れていくッ！　ゴメン、ごめんなさい、ごめんな……さいっ」

自分の大事なものだけは溢さないように握り締めても、それを嘲笑うかのようにすり抜けていく。涙を流し、踞る修司にイシュタルが何かを言える事はなかった。
だが……。
「ナカ……ナイデ……」
「――――え？」
「嘘、ラフムが喋った!?」
ふと、自分の頭に何かが乗せられた。その感触は既に人のモノではなく、泥と悪意から生まれたもの。しかし、その冷たく変わった怪物の手に、確かな温もりが其処にはあった。
「ナカナイデ、ツヨイヒト。ドウカ、アヤマラナイデ。アナタハ、ワタシタチニ、マブシイアシタヲ、ミセテ、クレタ」
拙い口調で、それでも懸命に想いを伝えようとしてくる。
その姿に、修司は彼女の微笑みを幻視した。
「ドウカ、カナシマナイデ。ドウカ、ワラッテ。アナタノ、カガヤキヲ、ミウシナワナイデ」
「――――――――」
また、涙が溢れていく。自分の行いを、身勝手で拙いハチャメチャを、輝きだと言ってくれた彼女に……修司の折れ掛けた心に、再び熱が入る。
変わっていない。どれだけ時代が、姿や形が変わっても、その魂の在り方は変わっていない。
〝命の輝きこそが永久不変〟
ふと、脳裏にそんな言葉が浮かんだ。良い言葉だ。なら、今の自分もこれに肖るとしよう。
立ち上がる。鼻水と涙でグシャグシャになった顔を拭い、修司は目の前のラフムに笑みを浮かべる。
と、その時だ。広場の上空に空間が裂けていく。中から現れたのは……ペルシャ湾にて現れた翼を持った髑髏。
その全容を目の当たりにして、修司はあの化け物が先の北壁に現れた化け物と同系統の存在だと確信する。

「修司――いけるわね？」
あの化け物も恐らく一体だけではないのだろう。それでも、修司の顔に翳りはなく。
「あぁ、勿論だ」
背後に佇むラフムを、護るようにして怪物へ向き直る。
「――――行ってきます」
ただ一言、別れの言葉ではなく、行ってくると口にして、修司は広場へと駆けていき、その奇妙なラフムは見送るように……その背中を眺めていた。

悲鳴が聞こえてくる。広場に近付くに連れて、惨劇の声が大きくなっていく。広場に押し込めた十数人の人々、互いに互いを殺し合わせ、最後に残った人すらも愉しげに殺す殺戮のコロシアム。
ラフムは嗤う。愉しいと、これが人間なのだと讃美しながら、旧き人間達を効率良く駆逐する。
さぁ、次はどんな風に殺そうか。与えられた玩具を喜ぶ子供の如く、人間達を殺そうと集まるラフム達。もうこの世界に自分達の脅威となる者は存在しない。
そして、魔術の王から遣わされたとされる邪神が現れた今、人間達に残された道は一つしかない。
滅びよ。その過程で存分に楽しませてくれ。何処まで行っても悪意しか存在しないそのラフム達の間に、突如として……銀色の風が流れていった。
瞬間、ラフム達は消えていく。どうして消えたのか、ラフム達本人が自覚しないまま、塵となって消えていく。
ウルクの人々すらも何が起きたのか理解できない中、邪神は嗤う。
『死ニ損ナイノ愚カ者メ……滅ビヨ』
どれだけ己が強くなっても、所詮お前は供物でしかない。そう嘲笑う邪神に、修司もまた笑みを浮かべる。

「あぁ、確かに俺は愚かだろうさ。けれど、それでも俺はこの生き方を変えはしない。何故なら――――それが、俺だからだ!!」
扉に触れる。流れ込むは修羅の力。されど、その修羅に流れるは確かな人の血、人の可能性である。
異なる思想、異なる流派。しかし、その根底にある願いは、正しく……人の心が詰め込められていた。
「往くぞ、化け物。この業を以て、俺の怒りを思い知れ」
瞬間、修司の放つ闘気が天地を切り裂いた。
『何ッ!?』
「砕く、止めても無駄だッ！」
尋常ならざる覇気を目の当たりにして、見るからに狼狽える化け物に、修司はただ拳を振り抜いた。
『ガァッ!?』
殴る。殴り殴り、無数に殴り付ける拳の弾幕。体長十数メートルの化け物を、無遠慮に殴り飛ばしていく。
修司は戦う。それが、誰かに託されたモノでもなければ、委ねられたモノでもない。自分の心が命ずるままに……その拳を奮う！
「真覇！　剛掌閃!!」
『お、オノォォレェェェェッ!!』
空高く打ち上げれた邪神が、断末魔と共に砕け散る。それは正しく、人類の反撃を示す狼煙であった。

その１５３　第七特異点

「修司さん！」
　立香達がエリドゥへ辿り着いたのは、正体不明の神性が爆散した直後だった。天変地異の如く揺れる大地に困惑するも、これ迄の旅路でそう言った事態に慣れていた立香は、差程動揺することなく修司の所へ合流を果たす。
　広場に残されているのは重軽傷者で呻くウルクの人達と修司、並びに先行していたイシュタルのみ。てっきりラフムで溢れていると思っていただけに、その光景は少しばかり拍子抜けだった。
　いや、違う。ラフムは恐らく此処にいたのだろう。浚われたウルクの人達らしき亡骸や、怯えた人々の反応から、此処で如何に残酷な惨劇があったのか、今の立香には想像できなかった。
　ただ、一つだけ言える事は修司がまた無茶をしたと言う事。最初に合流していた時点で、相当なダメージを負っていた筈の修司が、己の負担を顧みずに突出し、エリドゥの広場に集まっているラフム達を打倒した。
　けれど、それを責める言葉は……立香にはなかった。
「修司さん、シドゥリさんは？」
「……」
　エリドゥへ訪れた立香達の本来の目的、シドゥリの有無を確認する立香に……修司は、目を伏せる事しか出来なかった。悲しそうに、或いは悔しそうに拳を握り締めて感情を圧し殺している修司に、立香もマシュも何も言葉に出来なかった。
「修司さん、取り敢えず休もう？」
　震える修司の拳を、立香が解すように包み込む。暖かい人の温もりを受けた修司は、気を遣わせてしまった立香に申し訳なく思い。
「あぁ、そうだな。少し……休もうか」
　彼女の優しさに、少しだけ甘える事にした。

◇

『そうか、謎の神性は倒されたか』
「あぁ、なんとかな」
「結局、その謎の神性って言うのはなんだったのかしら？　イシュタル、貴女は何か心当たりない？」
「無いわね。私も神としてそれなりの見聞は積んできたつもりだけど、あんな神性見たことがない。あの禍々しさ、どちらかと言うと悪霊とか怨霊の類いなんじゃないの？」
　既にエリドゥに囚われていた人々は解放され、ジャガーマンの護衛のもと、人々はウルクへ続々と避難していった。中には重軽傷者も含まれているが、其処は古代人。並外れたバイタリティは既に現代人を大きく凌駕しており、特に兵士だった者は最低限の応急処置を受けた後、直ぐに動けるようになり、ジャガーマンの手伝いをしながらウルクへと引き返していった。彼等の足ならば二日と掛からずにウルクへ辿り着けるだろう。
　彼等が無事にエリドゥから離れる事を見届けるまで広場へ留まる事になった一行、その間に起きた出来事をイシュタルが代わりに説明すると、話の話題は例の神性へと移った。
『悪霊かぁ、そう言うの聞くとエレシュキガルの事を必然的に連想させるけど……』
「無いわね。一度敗けを認めておきながら不意討ち見たいな事をする程、アイツの性根は腐ってないわ。寧ろ、自分の管轄の者が好き勝手

暴れていると知ったら、五体投地の勢いで頭を下げるわよ」
　修司が倒したとされる神性、そのおぞましさと禍々しさからイシュタルは悪霊や怨霊の類いだと推察するが、かといってエレシュキガルの関係者とは有り得ないと断じてくる。
　そもそも、エレシュキガルが従えているのは冥界に潜むガルラ霊しかおらず、あの様な化け物は存在しない。
「なら、北壁に現れた化物に付いてはどうかしら？　ウルクの兵士の皆さんが言うには、ギルタブリルと似ていると聞きましたが？」
「確かに伝聞では造形こそは似ているみたいだけど、それはただパッと見ただけで、本質的にはまるで別物よ。何より、あれを魔獣の司令塔と言うには邪悪過ぎるわ」
　北壁に現れた化け物も、造形こそシュメル神話の魔獣と似ているが、根本的な部分は全くの別物だと、ケツァルコアトルの問いにイシュタルは答える。
　北壁の化け物とペルシャ湾の神性、この二つの存在に共通するモノとして言葉にし難い禍々しさというものだった。神と呼ぶには邪悪に満ち、怨霊と呼ぶには強大すぎる。
『でも、仮にアレが怨霊の集合体だとしても、彼処まで自我と形を形成出来るのかい？　いや、そもそも集合体と言うには、あの神性は完成されている』
　シュメルに現れた二つの巨大な神性、それらを怨霊の集合体と仮定してロマニは推測するが、それでも魔術的に考えて色々と不明瞭な点が見受けられる。そもそも、怨霊とはこの世に強い恨み辛みを抱いた魂が時間と共に濃縮され、その果てに行き着いた一種の末路だ。
　時間を掛ければ掛ける程、魂は元の形を忘却し、現世に影響を与える頃には原型を失くしてしまう。それが集合体となるのなら尚更で、彼処まで完全な形となって現れるのは魔術的に難しいのではないかと、ロマニは語る。
「そう言えば、修司は何か心当たりがあったみたいだけど……」
「――――分からない」
　そう言えばと、北壁で化け物が現れた際の修司の反応を思い出した

ケツァルコアトルは修司に訊ねるが、修司は首を横に振って分からないと口にするだけだった。誤魔化しでもなければ嘘を吐いている素振りもなく、あの時沸き上がった嫌悪と怒りに修司自身が戸惑いを感じている様子だった。
「――――異界の破懐神、だそうだよ」
「「ッ!?」」
その時、森の奥からキングゥが姿を現した。その後ろには無数のラフムを引き連れ、彼の笑みには薄っぺらな笑みが張り付いている。
「キングゥッ！」
「ゴルゴーンの最期を看取って以降姿を見せなかったけど……わざわざ兵隊を集めに戻っていた訳ね」
「はは、そんな訳ないだろ？　彼等は母さんが無尽蔵に産み出した尖兵、僕の様な完成品とは程遠いけど、だからこそ増産は容易い。君達がたかが十数人の人間を懸命に救っている間に、既に数億というラフムが産み落とされているんだよ？」
これ迄と同じ、人類の敵対者であるキングゥは何処までも人間を見下している。既に母は目覚めた。もう人類に勝ち目はないと、自らそう告げてきたキングゥに、立香達は何も言い返せなかった。
事実として、ラフムの数は無尽蔵に増えていき、今もペルシャ湾から侵攻を続けている。対してウルクの兵力は数百強、数という点において既に人類に勝ち目はなかった。
「おい、キングゥ。お前今、異界の破壊神って言ったか？」
誰もが圧倒的な数の差に内心で戦慄を覚えていた時、修司だけは別の事について思考を巡らせていた。それはキングゥの口から漏れた破壊神という単語、それだけ聞くとインド神話のシヴァを想起させるが、彼の異界というもう一つの言葉が話をややこしくさせている。
異界の破壊神とは何か、それを問い詰める修司にキングゥは溜め息を溢しながら口にする。
「そんなの僕は知らないし、興味もない。魔術王が頻りに自慢気に語るから、頭の奥でこびりついていただけさ。……あぁでも、幾つか気になる事を言っていたね」

「？」
「僕は知らないけど、君の相棒とやらとあの化け物は同じ性質なんだって？　君、本当に人類の味方なの？」
「っ！」
「――――――え？」
　その言葉にこの場で反応したのは立香とマシュの二人のみ、他の面々はなんの事だと首を傾げるばかりだが、通信の向こうではロマニ達も動揺が広がっている。
　修司の相棒であるグランゾン。カルデア側も認知しているが、その全容は現代の科学を大きく凌駕する技術の結晶であり、白河修司の相棒である事以外その全てが一切不明とされている謎多き機体。
　何故修司の相棒であるグランゾンが、先の化け物と似た性質を持っているのか。誰もが疑問を抱くなか、修司だけは何処から納得した面持ちでキングゥを見据えている。
「へぇ？　その様子だと自覚はしていたみたいだね」
「そ、そうなの修司さん!?」
「――――あぁ、確証はなかったが」
　思えば特異点を修正する旅に於て、修司はあまり積極的に相棒を出そうとはしなかった。その理由としてはこれまでグランゾンを出す程の窮地では無かったことと、グランゾンを出した際に生じる特異点への影響が計り知れなかったこと、大きく分けてこの二つが相棒であるグランゾンを出さなかった理由になるのかもしれない。
　第一、第二特異点は純粋に危険度の低さから。
　第三特異点は修司の拘りと、何より出す暇もなかったから。
　第四特異点では魔術王の介入で初めて相棒を出撃させる事ができ。
　第五特異点では、第三と同様に出す暇の無さと心の迷いがあったからで、第六特異点では聖都に囚われた人々を考慮したから、グランゾンを出すことが出来なかった。
　そして神代である古代シュメルの世界。ロマニも言う通り神代はそもそもが不確かな時代であり、其所へレイシフトを行う事自体が難行だとされている。其所へグランゾンという超弩級の存在を遠慮無

く出されたら、それこそ第七の特異点を辛うじて成り立たせている土台を破壊しかねない。
だからグランゾンは出せない。そう、思っていた。
（けれど、違う。多分、そうじゃなかったんだ）
思い返すのは第四特異点の時、久々に呼び出したグランゾンの力は心なしか、いつもより出力を上昇させていた。それは久し振りに力を出せる事だけじゃなく、呼び出された環境に喜んでいたからだ。
あの時、自分とグランゾンは特異点のただ中……即ち、魔力の海とも呼べる環境にいた。
つまり……。
（俺の相棒、グランゾンは……魔力といった霊的力を吸収する特性がある、という事か）
これ迄、根幹としているシステムとは別に、グランゾンの動力源となっているのは縮退炉や対消滅エンジンに類するモノかと思っていた。
そもそもグランゾンは自身のブラックボックスを明らかにしたくないのか、修司以外の者に触れさせようとはせず、近付く者全てを昏睡させ、その中には黄金の王も含まれている。
長い時間を掛けてスキャナーやシステム面からアクセスしてどうにか引き出したのが、上記に記される動力源に関する二つの情報と、そこから導き出した推察だけだった。
これまでは修司に対して絶対的なまでに従順で、修司自身も頼もしい相棒として頼ってきた。しかし、この特異点修復の旅に於て新たに浮かんだグランゾンに対する事実に、動揺はせずとも困惑をしてしまうのは……仕方の無い事だった。
科学技術だけでなく、魔術的な技術も盛り込まれている節のある相棒。別にそれ自体に不服を思うことはないが、それがあの二つの化け物とどう結び付くのが、修司には不思議でならなかった。
「それと、こんな事も言っていたな。〝黒の叡知〟魔術王は黒の叡知とやらに触れ、世界の外側の理を知ったんだとか」
「く、黒の……」

「叡知？」
「何よそれ？　ケツァルコアトル、あんた知ってる？」
「いえ、私も初耳デース」
〝黒の叡知〟。キングゥから紡がれる新たな単語に一同は戸惑いを顕にするが、不思議と修司にはその言葉に既視感を覚えた。
〝獣の血〟
〝水の交わり〟
〝風の行き先〟
〝火の文明〟

『ゲッター……ビームッ!!』
『ロケット、パーンチ!!』
『フィンファンネル、行けぇッ！』
脳裏に浮かぶ情景、それは過去か未来か。
『キラァァァァッ!!』
『アスラァァァンッ!!』
『もっとだ。もっと寄越せ、バルバドス！』
空で、海で、大地で、宇宙で。
『俺が、俺達が……ガンダムだ!!』
『ヴィルキス、飛べぇッ！』
『ダブルバスター、コレダーッ!!』
鋼の巨人達が戦っている。無数に存在する可能性の果て、数多の敵から己の信じる者のために。
『イデオンガン、発射ぁッ！』

『貫く、奴よりも……速くッ！』
『断空ゥ……弾劾剣ッ!!』
そして、それら鋼の巨人達の中に……。
『ブラックホールクラスター……発射』
剥き出しの特異点を操る蒼き重力の魔神がいた。

「ぐ、う……」
「修司さん!?」
「だ、大丈夫ですか？」
突然脳裏に過る数多の映像（ビジョン）、その情報量の多さから堪らず修司は眩暈を覚える。頭を抑えながらよろける彼に、只事ではないと察した立香とマシュが気遣うが、修司は大丈夫だとある確信を抱きながら改めてキングゥへ向き直る。
「成る程、つまり魔術王は黒の叡知とやらに触れた故に、あんな化け物を此処へ召喚する様になったわけだ」
「さぁね。僕にはあの怪物が何なのかなんて知らないし、興味もない。ただ、アレはお前を異常なまでに敵視しているみたいだからね。僕達はただ、その憎悪を利用しただけさ」
修司の問いにあっけらかんと答えるキングゥだが、彼の言葉に嘘を吐いている様子はなく、修司達もそれを信じる事しかなかった。ただ一つ現時点で言えることは、あの神性を持った怪物は修司を激しく憎悪しており、執拗にその命を狙ってきている。
あんな化物に恨みを売った覚えも買った覚えもない修司だが、黙ってやられるつもりもない。襲ってくるのなら、正面から受けて立つし

かない。
「――――さて、そろそろお喋りはおしまいにしよう。君達を此処で殺し、僕達は母さんをウルクへ迎え入れる準備をしなくちゃいけないからね。お前達旧人類はギルガメッシュと共に終わりを迎えるんだよ」
　言いたいことも終わり、全てを終わらせようとキングゥは周囲のラフム達に指示を飛ばす。数という圧倒的アドバンテージを以て、押し潰そうと迫るラフム達を前に、修司達は身構える。
「さぁ、やれ！　旧人類の時代を終わらせて、新しいヒトの時代を築くんだ！」
　全ては自分を産んだ母に対して、母の願いを聞き入れたキングゥがその泣き声を止める為に、兄弟達（ラフム）へ命令を下した時。
「――――――――え？」
　キングゥの胸元から、黒い触手の腕が生えてきた。
「キングゥッ!?」
「ば、バカな。お前達、一体……何のつもりだ？」
　突然の光景に目を見開く立香達だが、誰よりも驚いていたのはキングゥだった。ラフムは自分と同じ神の造り出した泥から生まれた神造の生命体、同じ母から生まれ落ちた自分に、一切の躊躇無く刺し貫いてきたラフム。その口許は強い失望の色を滲ませていて。
「オマエハ……ツマラナイ」
　その言葉には、何処までも悪意が染み込んでいた。
「ラフムが……喋った!?」
「既に、其処までの知性を得ていたと言うのですか!?」
『確かにラフムは互いに共感覚を待っていて、其処から凄まじい速度で学習しているのは推測出来たが、幾らなんでも早すぎる！』
　あり得ない速度で人間の言語をマスターしつつあるラフムに立香達は驚きを隠せないが、前例を知っているだけあって、修司とイシュタルは落ち着いた様子だった。
「母は言った。人間を知れと、だから我々は人間を調べた。学び、調べ、培った」
「素晴らしい！　人間は素晴らしい！」

「殺すのが楽しい！　壊すのが楽しい！　泣いて喚く姿が面白い！　人間は、余すこと無く愉しい！」
　言葉は流暢だが、そこに含まれる悪意は最早泥のようにおぞましかった。言葉を真似ても意志疎通は出来ない、改めてラフムの脅威を目の当たりにした立香はその悪意に負けないように大地を踏み締める。
「そして……お前はツマラナイ」
「キングゥはツマラナイ。だからもう要らない」
「出来損ないは、もう要らない」
「僕が、出来損ないだと!?　量産型の分際でッ!!」
　自身を出来損ないと嘲笑されたキングゥは怒りを顕にするが、彼の内から貫かれた箇所から力が抜けていき、マトモに身動きが取れないでいる。
　その時、キングゥの貫かれた触手に光が宿る。それは幾度と無く目の当たりにしてきた聖杯の輝き、第七特異点を歪めた聖杯はやはりキングゥに埋め込まれていた。
「出来損ないはもう要らない。だから、聖杯は母へ贈る」
「じゃあね、キングゥ、バイバイ」
　ブンッと、放り投げられたキングゥは放物線を描きながら地に落ちる。呻き声を漏らしながら立ち上がると、キングゥはそのまま森の中へと消えていった。
「逃げた！　出来損ないが逃げた！」
「狩りだ！　狩りだ！」
「面白い！　面白――――」
　負傷し、聖杯の力を失ったキングゥは、そのまま放っておいても消えるだろう。しかし、ラフムは逃げるキングゥを追って始末しようと後を追う。其処にはただ命を弄ぶ悪辣しかなく、その悪趣味さに思わず修司は気弾を放ち、ラフムの行軍を遮った。
「修司さんッ！」
「此処は俺が何とかする。立香ちゃん達は聖杯の回収を！」
　既に、エリドゥには多くのラフムが侵攻している。先に逃げたウル

クの人々を逃がす為にも、誰かが此処で時間を稼がなくてはならない。
故に、残された選択肢は必然と立香達に委ねられる事になる。修司の言葉の意図を理解した立香は聖杯を回収しようと動き出すが――――。
『聖杯を取り込んだラフムの形状が変化している！　これは……翼か!?』
「させるかっての！」
聖杯を取り込み、そのエネルギーで自らを空を飛べるように改造していくラフムは、翼を使って空へと飛翔する。当然イシュタルや修司がそれを阻もうとするが……。
『じ、時空震を感知！　これは、北壁とペルシャ湾と同じ反応だ！』
空から三度、空間の裂け目が顕れる。其処から顕れるのは二体の怪物、地を這う化け物と空に浮かぶ髑髏が、立香達の前に立ち塞がった。
突然の出現に戦く立香達だが、此処で立ち止まる訳にはいかない。ケツァルコアトルが呼んだ翼竜に跨がり、ハイスピードでラフムの後を追おうとする。
二体の化け物がそれをさせないと動き出すが、当然ながら修司が阻んだ。近くのラフムを複数体ほど投げ飛ばして注意を逸らした隙に、立香達はその場から離脱していく。
「行けぇッ！」
修司の言葉に背中を押され、立香達はイシュタルを先頭にラフムを追う。暗雲立ち込めるペルシャ湾、その先で待つ人類悪。果たしてこの特異点は本当に終末を迎えるしかないのか。
「まぁ、そんな事は今考えても分かりはしねぇか」
『愚カナシラカワノ一族ヨ、滅ビヨ』
『我ガ啓蒙二染マラヌ愚者ヨ、死ネ』
向けられる邪悪な視線、相変わらずこの化け物達には嫌悪感しか抱かないが、それでも修司は不敵な笑みを崩さない。
「上等だ。調度サンドバッグが欲しかった所だ。ラフム共々……塵芥にしてやる」

既に終末の時は来た。世界最後の日を迎えつつあるこの時、修司は己のやるべき行いに全力で挑むことを決めた。

――搭乗者のシンカへの兆しを確認。

――〝シラカワシステム〟へ原初へ至るロックを段階的に解除する申請を送信。

――受諾、完了。

その１５４　第七特異点

黒に染まる海を見下ろしながら、立香達は聖杯を所有するラフムを追う。眼下に広がる黒は全てティアマトが生成する泥であり、ラフムが産まれる苗床である事は既にロマニ達カルデア側からの分析によって明らかになっている。

問題は、仮にこの泥の海に落ちた場合の事。黒い泥は世界を創世したとされるティアマトを起源にしているものでその泥に触れたものは細胞レベルで意志を束縛されてしまい、ティアマトの眷属となってしまう。

それは神代の神霊であるイシュタルも例外はなく、異なる神話体系出身のケツァルコアトルですら危ぶまれ、現代に生きる立香ですらも触れれば自我を失うとされている。

翼竜の上から覗き見る立香は、ゴクリと唾を呑んで緊張を顕にしているが、此処で足踏みをしてはいられない。現在エリドゥでは最悪の軍勢を相手に修司が単独で殿を務めているのだ。

彼が命懸けで戦っているのに、自分だけ逃げる訳にはいかない。七つの特異点を巡る旅の中でもトップクラスの危険度を前に、立香は改めて気持ちを固めた。

『前方に超々々々弩級の高エネルギーを感知！　総量から見て聖杯七つ分を上回るエネルギーだ。間違いない、君達の目の前にいる存在（モノ）、それが創世の神ティアマトだ！』

通信から聞こえてくるロマニの声、見れば黒泥の海の水面に一人の女性が佇んでいる。両手足を拘束されている彼女を前に、先に到達したラフムから聖杯を投げ入れられる。

『Ａａａａａａ――――――！』

瞬間、爆発的な音波が、周囲一体を弾き飛ばす。ティアマトとの距離はまだ相当開いている筈なのに、音圧だけで身が捩りそうになる。

人類悪。人が滅ぼすべき悪であり、人類史にとっての自滅因子。そ

れが聖杯を受け取った事で目覚めようとしているのだと察した立香は、問答無用でイシュタルに令呪込みの魔力を注ぐ。
「イシュタルッ!!」
「速攻即決か、良い判断よ立香！　母さんがまだ目覚めきれていないのなら、私の宝具が速い！」
　仮契約とは言え、マスターである藤丸立香の迷いのない判断にそれでこそだとイシュタルは吼える。今この場で最も火力の高い一撃が出せるのはイシュタルの宝具だけ、立香とマシュをケツァルコアトルに任せている以上、この場は自分の出番だとイシュタルは己の魔力を解放させる。
　眼が、金に染まる。神話の時代に於いて神の血を引くものとしての特徴がより濃く現れたイシュタルは、天舟マアンナと共に天空へ昇る。
「さぁ、行くわよ。ゲート、オープン！」
　右手に巻いた短槍を空へと投げると、波紋が広がり宇宙（ソラ）が顕になる。それは、かつて神々すらも畏怖し、敬った霊峰エビフ山を蹂躙し、死滅させたイシュタルに纏わる最大にして最強の逸話（やらかし）。
「これが、私の全力全霊！　打ち砕け、山脈震撼す明星の薪（アンガルタ・キガルシュ）!!」
　金星を投射し、その魔力をマアンナに装填させて放つイシュタルの砲撃宝具。天から地に向けて打ち放たれた一撃は、間違いなくティアマトを撃ち抜き。
　ペルシャ湾に一つの風穴を抉じ開けた。

◇

「――――あれだけ啖呵を切った手前、早々に弱音を吐くつもりはなかったが……案外、どうにかなるもんだな」
立香達を先に行かせ、エリドゥにて時間稼ぎをする為に単身で殿を務める事を決めて十数分。塵に還るラフムを尻目に、修司は残る二体の巨大な怪物を見上げる。
ギリタブリルに酷似した怪物は両方の鎌を引きちぎられ、尾も半分近くが切断されている。翼のある髑髏に至っては、翼部分を切り落とされているが為、モゾモゾと蠢く事しか出来ずにいる。
『バカナ、バカナァァァッ！』
『何故シラカワノ系譜ガ、生身デコレ程ノ力ヲ持ッテイル!?　アリエン、アリエテハナラナイ!!』
自分達人間を何処までも下に見て蔑んでいる割には、目の前の化け物のメンタルは案外弱いなと、修司は冷静に分析しながら自身の身に起きている現象を振り返る。
今の自分は、空を飛ぶ髑髏に不意打ちを受けて相当なダメージを負っている。実際体のアチコチが軋んでいるし、僅かに体を動かすだけでも相当な痛みを感じている。
だが、それでも予想に反して体は動いてくれた。襲い来るラフムの群れを問題にせず、数による波状攻撃を難なく受け流し、数の暴力を純粋な腕力で打ち破り、更にはラフムごと攻撃してくる怪物達の攻撃も、容易く避ける事が出来るようになっていた。
以前よりも、力を引き出せている気がする。先の第六特異点にて山の翁の指導を受けて以来、変わることのなかったモノ。〝シンカの力〟、山の翁がそう呼ぶ力が自分の内側でドンドン大きくなっていく気がする。
これは、度重なる死闘を経た修司の無意識によるモノなのか、それともこの化け物達と戦った影響なのか、或いは……先ほど脳裏に浮かんだ幾つもの映像の所為か。

疑問は幾つも浮かんで解消される事はないが、今はそれに思考を割いている場合でもない。動けなくなっている二体の化け物へトドメを刺すべく、修司は己の手刀に力を纏わせる。
『忌々シイシラカワノ系譜、何故我二従ワヌ!?　何故我ガ力二屈サヌ!?』
「いや知らねぇよ。何で面識のない化け物に従わなきゃならないんだよ。俺が王と仰ぎ見ているのは生涯でただ一人、この世の全てを背負っている黄金の英雄王だけだ」
この化け物達が自分の事を知っているのも不思議な話だが、その辺りは心底どうでも良いので深くは考えない。何処までも人間を見下している癖に、いざその人間が反抗心を見せると必死になって潰しに掛かる。
その有り様はどれだけ言葉を濁してもみっともないという単語が出てくる程に、二体の化け物の狼狽している姿は見苦しかった。
とは言え先の北壁とペルシャ湾、今回のエリドゥでの戦いを経て修司はこの化け物に関する一つの確信を得ていた。地を這うモノと空を往くモノ、両者ともその性質は全くの真逆であると示しているのに、根底としている力はどちらも同質のモノだった。恐らく、この化け物は元々一つの存在だったのだろう。
二つに分けて送ってくるのは単純に魔術王の力不足か、或いは意図的にそうしてあるのか、元は一体だった筈の存在をどうして態々分解させ、第七特異点に送り付けてくる理由はなんなのか。考えても仕方がないのに余計な推測ばかりが脳裏に浮かんでくる。
とは言え、今さらコイツ等から何かを聞き出そうとは思わない。この化け物達が人類に仇なすと言うのなら、全霊を以て叩き潰すだけだ。
『英雄王？　愚カナ、タカガ人間風情二何ガ出来ル!!』
「その人間に、此処まで良いようにやられているお前らも、お察しだがな」
『……』

見下している人間に敗れた事実を遠慮なく突き付ける修司に、化け物二体は押し黙る。対して修司は油断なく化け物へと近付いてくる。いい加減コイツらに付き合っている時間はないと、先程よりも手刀に気を強く纏わせ、天に向けて掲げる。

後は振り下ろすだけという時、化け物は嗤った。

『ク、ククク、クハハハハッ!!』

「っ!」

『見事ダ。シラカワノ血受ケ継グ末裔ヨ、認メヨウ。貴様ノ力、〝奴〟トハ系統ガ異ナッテイル様ダガ、ソレデモ〝シンカ〟ノ道ヲ進ンデイル事ニ変ワリハナイ!』

「テメェ、何を言っている?」

『楽シミダ。ソノ力、イズレ我ガ物トナル時ガ!』

「……そうかよ」

修司を自らの力にすると宣言する二体の化け物は、呆れ顔のまま振り下ろされる修司のエクスカリバーによって両断され、消えていく。

これで一先ずの脅威は去った。しかし、修司の心に引っ掛かりは解消される事はなく、痼の様に残り続けた。戦って生き残ったのは間違いなく修司なのに、何故かこれで終わったとは思えない。

だが、そんな修司の胸中を知る由もなく、事態は更に進んでいく。最悪な方向で、最悪な形となって。

「なんだ、今のは……地震か?」

足下を揺さぶる大きな震動、何事かと動揺した修司が立香達の向かった方角へ見上げた瞬間。

「なにっ!?」

黒泥の津波が、エリドゥへ襲ってきた。

◇

ケラケラと、悪意に満ちた声が聞こえる。命を命と見なさず、ただ愉しむ為だけに命を弄ぶ泥の怪物達。

その黒い泥の怪物達を振り切ろうと、緑の人はただ走る。しかし胸を貫かれ、自身の根幹を為していた聖杯を奪われた緑の人――――――キングゥには既に空を飛ぶ力も、黒い怪物（ラフム）を振り払う余力も無くなっていた。

聖杯を奪われ、なにも出来なくなった今だからこそ解る。自分は、母の子供ではなかった。ただエルキドゥという器に別の魂を容れられただけの……度しがたい贋作だった。

滑稽だ。今を生きる彼等を旧人類と蔑んでおきながら、自分は真っ当な命ですらなかった。借り物の器に容れただけの醜い贋作、それがキングゥである自分の正体だった。

だから、時折脳裏に過る映像（ビジョン）があの王に関係するモノだった訳だ。アレはエルキドゥのモノであり、この器の前任を務めていたモノ。つまり、キングゥにはなにもなかったのだ。

――――――こんな筈じゃなかった。自分は母によって作られた新しい人類。

だからこそメソポタミアを滅ぼし、その為だけに活動してきた。何の経験も、記録も、愛情のない体でも、母からの期待だけはあると信じていて……それなのに！

「ギャハ！　ギャハハ！　ギャハハハハハ！　そっちだ！　そっちに逃げたぞ！」

「追い詰めろ、捕まえろ！　解体だ、木偶人形の解体だ！」

悪意が迫ってくる。エリドゥで襲ってきたモノとは別個体のラフ

ム達が、キングゥの命を狙って執拗に追ってくる。義務感もなく、使命感もなく、怒りもなく、殺意もない。ただ愉しいという悪意だけが、キングゥの命を刈り取ろうとしている。

キングゥは……泣きそうになった。崩れた自身の存在意義、信じていたモノが、信じようとしていたすがり付いていたモノが、最初から存在していなかった事実。

悔しさと歯痒で死にたくなるが、自壊の道を選ぶ暇さえ、今のキングゥには無かった。

「なにも、無かった。この大地には、始めから何もなかった！」

「はじめから使い捨てだった。僕は、はじめから偽物だったんだ！」

「未来も、希望も、自分の意志も――――友人も、僕にはいなかった」

ティアマト神の唯一の子供。それが、キングゥがすがっていたモノだった。

涙が流れる。不要と断じ、要らないとさえ思っていた人間の機能。何故神の兵器である自分の身体にこんな機能を付けたのか、キングゥは煩わしい涙をぬぐい捨てる事もせず、ただ闇雲に逃げ惑い……そして。

「あは、見いつけた」

（――――――――）

あぁ、呆気ない。これが自分の終わりか。追い詰められ、逃げ場を失ったキングゥは歯をカタカタと震わせて嗤うラフム達を前に……キングゥは逃げる気力すら失っていた。

（……あぁ、こんな事なら。最後に、アイツに会いに行けば良かったのにね――――）

最期に思い浮かぶのは、自分に向かって戯けと笑う黄金の人。自分の記憶じゃないのに、自分の経験じゃないのに、それでもこの身体に覚えている暖かな記録。

こんな事なら、このちっぽけな衝動に従っていれば良かった。と、キングゥは諦めて眼を閉じて――――。

一体のラフムが、キングゥを狙うラフム達を貫いていた。

中枢を抉られ、塵に還るラフム達。群体であるラフムにはあり得な

い現象を前に、キングゥの眼は大きく見開いた。
「……え？　おま、え……助けて、くれたのか？」
「――――逃ゲ、ナ、サイ、エルキ、ドゥ。アナタ、モ、長クハ、ナイデショ、ウ、ケド」
その声に、キングゥは聞き覚えがあった。それは昨日、ラフム達に連れてこられた弱くも気丈な一人の女性。
確か……名前は……。
「何で、僕を助け……」
そう、助けられる謂れは無かった。助けて貰う義理は無かった。自分は人類の敵、そう定められた哀れな贋作。見捨てられる事はあっても、拾われる事はない筈。
なのに……。
「――――シアワセニ。ドウ、カ、シアワセニ、ナリナサイ。親愛ナル、友。エルキ、ドゥ」
「――――」
崩れていく。人類の敵対者である自分を、ラフムとなった彼女は崩れる自身を省みず、言葉を続けた。
「私タチ、ウルクノ民ハ、アナタへの感謝を、忘れは、シマセン。アナタハ、孤高の王二、人生ヲ、与えマシタ。偉大な王へノ、道を、示してクレマシタ」
「アナタノ死を、嘆かなかった者ハ、イナカッタ。アナタノ死を、忘れル者ハ、イナカッタ」
「……私、も。私も、トテモ、悲しかった。ダカラ、ドウカ、シアワセに、エルキドゥ。美しい、緑ノ、ヒト」
「っ！」
ヒト。そう呼んで、笑うそのラフムの微笑みに、キングゥの脳裏にはあの女性の微笑みが浮かび上がってくる。
「あぁ――――良かった。アリガトウ、言えて、良カッタ」
「アリガトウ、エルキドゥ。アリガトウ、アリガ、ト――――」
綴られたのは、感謝の言葉。人類に寄り添い、王に寄り添い続けた世界で一番優しい兵器に対するアリガトウという言葉。

その言葉を伝えるために、彼女はキングゥの前に現れた。喩えラフムに変えられようと、喩え、ヒトでなくなろうと。
その心と魂の在り方は、一切翳る事も、欠けることもなく。自身の想いを全て伝えきったそのラフムは、他の個体と同様に……塵となって消えていった。
思わず、キングゥはそれを掴む。崩れ逝くラフムの触手部分のソレを、行かないでと追い求める子供のように……。
「なんだよ、これは。君の事なんて、知らないのに……どうして、君の名前も、顔も、分かるんだ。ありがとう、なんて――――――」
「キミに言われる資格は、僕にはないのに――――」
自分は、キングゥだ。エルキドゥではなく、エルキドゥの器に別の魂を詰められただけの――――使い捨ての玩具。
故に、彼女にありがとうなんて言われる資格はなかった。だから、嬉しく思う気持ちなんて……あるわけがないのに。
「うう――――――うううぅぅぅ……！　ううあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……!!!!」
どうして、涙が止まらないのだろう。
誰か、誰でもいいから……。
どうか、教えて。

その１５５　第七特異点

「一体、何が起きたんだ？」
森の木々を薙ぎ倒し、エリドゥを呑み込んだ黒い泥。その濁流はエリドゥを呑み込むだけでは飽きたらず、シュメルの大地すらも覆っていく。
修司が何とかしようにも、津波のごとく押し寄せる黒泥を阻める術は今の修司には持ち合わせていない。出来ることと言えば、大地にダメージを残さない程度に自身の手からエネルギー弾を放ち、黒泥を弾く事で泥の侵攻を若干遅らせる程度である。
それも焼け石に水。押し寄せる黒泥を払い除ける程の効果はなく、黒泥は瞬く間にウルクへと侵略していく。それだけはダメだと気を纏って一直線にウルクへ向かおうとする修司だが、既に事態は動いていた。
恐らくは賢王ギルガメッシュによる采配なのだろう。ウルク到達まであと僅かという所で、巨大な牙の障壁が黒泥の侵攻を阻んで見せた。
今ので牙の障壁もかなりの負荷を掛けた様だが、それでも人類最後の防衛拠点を守れたのは大きい。先を読み、予め仕込んでいたであろうギルガメッシュ王の手腕には、いつも驚く事ばかりである。
「流石王様だ。……けれど、いつまでも悠長に構えてはいられないよな」
一度目の黒泥を防げたのはいいが、いつまた次の黒泥な津波が押し寄せてくるかは分からない。黒泥を何とかするには、アレを生み出す大元をどうにかするしかない。
ペルシャ湾から感じる巨大な気配。これ迄の相手とは桁違いの大きく、強い気配。規模だけで言うなら第三特異点のヘラクレスや第五特異点のクー・フーリン以上に感じる存在感。
エリドゥからでも視認できる巨大な存在、恐らくはあれこそが黒泥

やラフムを産み出す根元にして元凶。
「あれが、ティアマトか」
女神ティアマト。一つの神話に於いて創世の役目を担っていた原初の女神が遂に復活を果たし、その瞳の先にはウルクへと向けられていた。

◇

「戻ったかカルデアの。では、現状を纏める」
「ハッ！　現在、ウルク市に残った市民は四百十八名。うち軍属が三百十八名、残りは一般市民となります」
「市民達は避難を拒否したものの、王のお言葉もあり、先ほど北壁への避難を同意いたしました」
「北壁に逃れた市民のうち、生存者は三百九十七名。昼間のラフム襲撃の後、北壁で生き残った兵士は五十五名。なお、牛若丸様や弁慶様、レオニダス様達はこれに含まないとします」
「合わせて八百七十名の人間が、現在シュメルに残された人命となります」
その後、立香達と無事に合流を果たし、ウルクのジグラットへ戻ってきた修司達が直面したのは……残酷なまでの現実だった。
あれ程活気に溢れていたウルクは静寂に包まれ、残された人々は人類最期の日を前に、静かにその準備を始めていた。
８７０。それがこの世界に残された最後の人類の数である。ラフムの二度に渡る襲撃と黒い海洋の侵食により、ウルク第一王朝は崩壊した。喩えこの窮地を乗り越えようと、１０００にも満たない人口で

は王国の維持は出来ず、衰退していくだけだろう。
そんな、どうしようもない事実を前に、マシュは言葉を失った。あれ程栄えていた文明が、此処まであっさりと終わってしまうものなのか。どれだけ認めたくないと心が拒絶しても、眼前に聳え立つ現実は変わらない。
自分達は負けたのか？　立香達の脳裏に敗北の二文字が過った時。
「案ずるな。我らが滅亡しようとシュメルの文化が生き残れば、後に続くものが現れよう」
王は、微笑みながらそう言った。自分達が終わりを迎えようと、僅かに残された人々が後に続くバトンを渡してくれる。それで充分だと、王は笑った。
「次にラフムだが、奴らの行動は二つに別れた。日没と共にその場で球体となって停止するもの。母なるティアマトの下に飛翔し、この周囲を守護するものとにだ」
「球体となったラフムは俺が駆除しておいた。次に何時動き出すか分からないからな」
「全く、小癪な事をしおるわ。貴様もボロボロだろうに……だが、それならそれで良い。では次だ」
ウルクに残った黒い球体。それがラフムの休眠状態だと知った修司は、傷に苛む自身を労る間もなく黒い球体を殲滅した。これを王は余計な世話だと口にするが、それ以上追求する事はなかった。
「さて、例の北壁とペルシャ湾に現れたとされる謎の神性、片方はギルタブリルに酷似したものだと聞いたが……これも、貴様が倒したものと見て間違いないな？」
「あぁ、その後も二体程ちょっかいを出してきたが、どうにか片付ける事が出来たよ。ただ、今後も出てこないとは限らないけど……」
北壁とペルシャ湾。並びにエリドゥにて現れた二体の巨大な敵性生物は修司の手によって倒された。だが、あれが魔術王からの横槍だとするのなら、今後も現れないとは限らない。目下の対策は修司が担うことで全員が同意し、話の話題はいよいよティアマトへと向けられた。

「ではロマニ＝アーキマン。ティアマト神の解析はどうなっている？」
『あぁ、ティアマト神への解析は今のところ終了している。能力は提出した資料の通りだ』
　次第に表示されていく電子スクリーン。魔術と科学の融合らしい画期的なシステムを前に王は感心しながら読み上げていく。
「ええい、貴様ティアマトの太鼓持ちか！　弱点らしきものが一切書かれていないではないか！」
『僕だって攻略法の一つくらい書きたかったよ！　でもこれが現実なんだってば！　あれは物理的にも神話的にも欠点のない完全な存在だ！　僕らでは太刀打ちしょうがない』
「……修司さん、そうなの？」
　カルデア側から提出された現段階に於けるティアマトのスペック。その質量と出力から途方もないエネルギーを有しているのは当然の事ながら、使役しているラフムという取り巻きや黒い泥の海というティアマトの神話由来の権能が、この女神の厄介さを際立たせている。
　それらを考慮して……正直な所、修司がどうにか出来るかは微妙な所だった。
　ティアマト神は強い。創世の役割を担っているだけあって、その強さはこれ迄修司が戦ってきた大英雄達と比べても遜色せず、寧ろ純粋な出力という面で言えば凌駕していると言えるだろう。
　ただ、それでも相棒であるグランゾンとならどうにか出来る可能性はあった。自分とグランゾンの真の姿を現すことが出来るのなら、ティアマト神にだって対抗出来る。此処が、世界の土台として曖昧な神代の第七特異点でなければ。
　ならば修司が万全な状態で挑むとするなら？　答えはきっと先程と変わらないだろう。確かにこれ迄幾度となく死線を経験してきた事で、修司自身も大分自らの力量が上がってきた自覚はあるが、それでも神を倒したことなど経験にないし、何よりティアマト神の持つある権能が、より討伐の難易度を引き上げている気がする。

「強さがどうこう以前に、ティアマトには厄介な特性があるのがなぁ」
ティアマトはこのシュメルの大地の礎になったとされる神であり、この原初の女神と戦う前提として全ての命を失う必要があった。
全ての命は原初の母神ティアマトの子。であるならば、その命が絶えない限り、ティアマトの不死性は崩れない。
つまり、〝地上に命が有る限り、ティアマト神は倒せない〟　この無茶苦茶な法則を何とかしない限り、人類に勝ち目はないのだ。
（不死性かぁ、それって何処まで有効なんだ？　粉微塵になったりしても、どこかで復活したりするのか？）
皆がティアマト攻略について頭を悩ませている一方で、修司はふとそんなことを考えていた。
不死。それは生命体として完全な状態を意味しており、更にその上の不老不死は嘗て秦の始皇帝が追い求めたとされる代物だという。
不死という事は死なないという意味合いだが、純粋に力で破壊された場合果たしてその不死者はどうなるのだろうか。細胞レベルで消滅しても復活するのか、それとも絶対に破壊されないという加護の様なモノが付与されているのか。
いや、原初の女神であるティアマトに加護なんて付与されているのかなんて甚だ疑問なのだが。
そんな事を考えている内に、話はティアマトの本格的な攻略が始まった。発端は立香の何気ない一言から始まった。
「地上の命かぁ……ん？　なら逆を言えば、命が無い所なら倒せるってこと？」
「「それだっ！」」
地上に命が有る限り、ティアマトは倒せない。ならば、命のない世界へと落とせばいい。立香の漏らした一言を発端にティアマトの冥界へ突き落とす作戦が立ち上げられた。
であるならば冥界の女主人であるエレシュキガルにも話を通しておかなくてはならないと、丁度良いタイミングで地上に連絡を入れてきたエレシュキガルからの通信を、予め渡されていた冥界の鏡を使って交信した。

『えっ!?　母さん(ティアマト神)を冥界(うち)へ落とすの？　マジでッ!?』
　ティアマト神を倒す前提の舞台として選ばれた冥界。当然ながらエレシュキガルは酷く動揺するのだが、事態が事態なので僅かに渋りながらこれを承諾。長年ウルク憎しで冥界へ続く穴を堀り続けた結果、冥界とウルクを繋げるまでの猶予は本来１０年の時間が掛かる所を、驚きの３日にまで短縮する事が出来た。
　これにはギルガメッシュ王もニッコリである。なお、その後のエレシュキガルは王に小言を説教されたそうな。
　ティアマト神はウルクという一つの文明の存在を破壊し尽くす迄止まらず、必然的に決戦の地がウルクへ移る事になった。嘗ての繁栄を遂げたウルクの街を捨て駒扱いにするのは心が痛むが、王がそうするべきだと決断された以上、立香達が口を挟む事は出来なかった。
『よし、可能性が見えた来たぞ！　けれど、此処からが本当の意味で大変な所だ。冥界がウルクと完全に繋がるまでの間、どうやって足止めをするかだけど……』
「俺が遠距離からかめはめ波で押し留めるとかどうだ？　今は少し厳しいが、少しの間休みを貰えれば体力も気力も回復するし、多分いけなくもねぇぞ」
「でも、修司さんは例の謎の神性を何とかしなくちゃいけないし……」
「ならば、牛若丸と弁慶。この二人貴様の共にしてやろう。あ奴らは共に戦場にて輝く豪傑よ、例の神性擬きの怪物相手でも充分に翻弄してくれるだろうよ」
「……いいのか？」
「無論。だが、それだけでは足らんだろうよ。故にイシュタル、いい加減出し惜しみは止めて、貴様渾身の一手をさらけ出せ」
「は？　アンタいきなりなに言って……」
「そうか、グガランナだよ！　イシュタルには最強の神獣グガランナを従えていたよね！」
「――――え〝？」
　ティアマト神の足止めをするには、些か時間が足りない。二日、少

なくとも一日はティアマト神のウルク到達迄の時間を稼がなくてはならない。その役目を率先して修司が受け持つが、それだけでは足りないと王は話の矛先をイシュタルへ向ける。
一瞬なんの事だかと困惑するイシュタル。そんな彼女を出し惜しみをする小癪な奴だとギルガメッシュ王は笑い飛ばす、対してイシュタル本人は本気で心当たりがなく、やはり戸惑いを露にするだけだが……グガランナ。嘗て自身が使役していた神獣の名を出された事で、イシュタルは固まった。
顔面蒼白。冷や汗を垂れ流しながら視線を泳がせるイシュタルを余所に、ジグラットの空気は既に勝ち確ムードに包まれつつあった。
その昔、イシュタルが父神に駄々を捏ねて半ば強奪してきた神々の神獣グガランナ。その一撃は大地を砕き、一つの巨大な川を干上がらせたという逸話を持ち合わせているシュメル神話最強の神獣。

彼の神獣であれば、ティアマト神が相手であろうと恐れることはなく、それがただの時間稼ぎとして使われるのなら、一日二日程度の時間稼ぎなんて訳は無いだろう。
その間にエレシュキガルはウルクとの門を繋ぎ、グガランナの一撃を以てティアマト神を冥界へ突き落とす。単純ながらも確りとした勝ち筋を前に、ジグラットだけでなくカルデア側まだもが勝利ムードに包まれつつあった。
瞬く間に膨れ上がる期待感。グガランナ！　イシュタル！　と、コールが沸き立ち、彼等の周囲にはジャガーも踊り、フォウまでもが興奮気味になっている。
悔しいがこればかりはイシュタルの勝ちだ。此処まで出し惜しみを渋ってきたのも、偏にこの展開を予測しての事なのだろう。
これには流石の修司も感心するしかなかった。そう思っていた所に――――。
「……無いです」
「――――は？」
特大級の爆弾が放り込まれた。

「――――貴様、今なんと？」
「……ありません。グガランナ」
空気が凍り付き、時間すらも止まった様な錯覚。ウッソだろオイ。誰もが言葉を失い、話を聞いていたカルデア側の料理長が両手で顔を覆った時。
「ないの、落としちゃったの！　どっかで無くしちゃったのよォォ！」
「多分北部で落としたんだけど、もう何処にも見当たらなくて！　バビロンも探し回ったのに、グガランナの奴、影も形もないんだものォォォ!!」
絶句。グガランナを無くしたとギャン泣きする女神に、王を含めた全員が言葉を失った。しかし、当然ながらごめんで済ます話ではなく。
「こ、このバカ女神が！　何のために貴様をスカウトしたと思っている――――！」
怒髪天。歳を重ね、幾分か落ち着いた王といえど、流石にこれには怒鳴らずにはいられなかった。とは言え、切り札を出せないのは自分も同じなので、責め立てられるイシュタルを追撃するような真似はせず、大人しく修司は自身の回復に勤める事にした。

◇

――――その後、イシュタルに駄女神の文字を掘られた粘土板を持たせ、一先ずは反省を促す事にし、話はティアマト神の足止めの話

まで戻った。カルデア側もティアマト神を冥界へ落とし、その絶対性を削る作戦を押したいという結論に達している為、この時間稼ぎの作戦はなんとしても成立させたい。
結局、作戦は修司の力に頼る事で話が纏まりつつあったが、時間も推している事でギルガメッシュ王は作戦会議の一時中断と、夜明けまでの短い間に体を休ませる様に一時解散を申し付けた。
グガランナを頼れない以上、明日こそが真の意味での決戦の日になる。その要となるのが修司となるのなら、なおさら休ませる必要がある。北壁での戦いから今日まで、殆んど休まず戦い続けた来た修司は誰が見てもボロボロだった。
そして、立香も同様に疲労で限界に差し掛かっていた。人類最後のマスターを担う二人がこの様では、最悪足を引っ張る恐れがある。
故にせめて今だけでも休んでおけと、王は優しくに命じた。これがウルクでの最後の休暇、対ティアマト神に備え、一行は王の言葉に甘える事にした。
ただ、その際に……。
「……ギルガメッシュ王」
「なんだ？」
「その、シドゥリさんの事……なんだけど」
「良い」
「え？」
「良い。と言ったのだ。あれはあの女が決めた……シドゥリという一人の人間が自ら定めた終わり方よ。そこに誰かの同情など介在する余地などない」
「――――そう、だよね」
「良いな。決してあの女の最期に同情など抱くなよ。それはあの女の……シドゥリという人間の誇りを踏みにじる行為だと知れ」
「うん、ありがとう王様」
「貴様の礼など不要だ。それ、とっとと貴様も戻って休め。夜明けを迎えたら、否応なく働いて貰う故な」
「あぁ、おやすみなさい。王様」

シッシッと、片手で払うように出ていけと促す王に、修司は苦笑いを浮かべながらジグラットを後にする。そんな彼の背中を横目で一瞥した時。

王の千里眼が、一つの未来を捉えた。

燃え盛る世界。天も地も、何もかもが赤黒く染まる世界の中で、白河修司という人間の胸元が……何かによって貫かれている映像。

見えた未来の光景は一瞬。しかし、その予知は賢王ギルガメッシュ王の脳裏にこびりつき。

「そうか、そうなるのか」

その笑みは、何処か呆れの色が滲み出ていた。

その１５６　第七特異点

「――――いてて、今更ながら結構無理をしちまったな」
ジグラットでの作戦会議を終え、大使館へ戻ってきたカルデア一行。藤丸立香やマシュがそれぞれの思いを抱きながらウルク滞在最後の一日を過ごしている中、修司もまた用意されたベッドの上で寛いでいた。
全身に施された治療の痕、用意された包帯に巻かれて修司の全身はほぼミイラ状態となっている。思えば、北壁での戦いから今日までほぼ休みなく戦い続けてきた修司にとって、最大のインターバルとも言えた。
ロマニからも少しでも体力を回復する様に珍しく厳命され、現在修司は気の力を応用しての自己の回復能力を体力が損なわれない程度に底上げしていた。
この分なら、朝方までになら大分回復出来るだろう。問題は体力が尽きるまでにティアマト神をどれだけ足止め出来るかだ。
その上、恐らくはあの二対の怪物達も出張ってくる筈。自分とあの怪物の間にどの様な因縁があるのかは知らないが、召喚されれば必ず自分に襲ってくるし、更に言えばその執拗さを魔術王は絶対に利用してくる事だろう。
ティアマト神と魔術王の横槍、この二つを相手にしなければいけないのが、今回の特異点の辛い所だ。
「けど、やり遂げなくちゃいけないよな」
出来なければ自分達は敗北し、人類史は焼却されたまま終わってしまう。
……上等だ。此方は伊達に英雄王の臣下を名乗ってはおらず、その英雄王はこの世の全てを背負っている英雄の中の英雄だ。であるならばこの程度の逆境、乗り込えて見せなければ彼の臣下を名乗れない。

握り締めた拳に力を込め、明日の決戦に気合いを入れていると、扉を叩くノックの音が聞こえてきた。
「修司殿、今宜しいでしょうか？」
「弁慶さん？　あぁ、どうぞ」
扉の向こうから弁慶の声が聞こえ、つい反射的に答えて入ってきても構わない旨を伝えると、落ち着いた弁慶の声とは裏腹に、勢い良く扉は開かれた。
「修司どのぉ～、いかんでござるよぉ～？　こんな部屋の中で籠っていてはぁ～！」
「牛若丸？　おいおい、酔ってんのかよ」
「酔ってないでござるぅ～」
開かれた扉から、酒で出来上がった牛若丸が雪崩れ込んできた。猫撫で声で抱き付いてくる源氏の武将に、修司は若干戸惑いながら保護者面している弁慶にどういう事かと説明を求めた。
「申し訳ありません修司殿。拙僧は止めたのですが、この通り酔ってしまった彼女を止める手立てがなく……」
「明日は決戦、であるならば最後くらい共に酒を酌み交わしてもバチは当たらないでしょう。レオニダスも下で待ってます故、ささ、修司殿もお早く」
サーヴァントが酒に酔う事はほぼないが、荊軻の様に趣味で酔い潰れる英霊も存在している為、修司はそれ以上追求する事はしなかった。
それに、牛若丸が言うように明日は決戦で、人類の命運を決める戦いが始まる。ただ部屋で休んでいても体力は回復しても気力までは全快には至らない。体を回復させるだけでなく、磨り減らした心の回復も必要なのだと、牛若丸は暗に訴えている様に思えた。
此処まで気を遣わせてしまっては断る理由もない。便乗する形にはなるが、修司もその晩酌に肖る事にした。
「おぉ、修司殿も参られたか」
「レオニダスさん……」
半ば強引に連れられ、一階へとやってきた修司が目にしたのは、片

腕を失ったレオニダスだった。左肩からその先にある筈のモノが無く、痛々しい包帯の中から血が滲み出ている。
「それ……ラフムか？」
「――――――ええ、卑劣にも子供を手に掛けようとした個体がいましてな、それを庇ってしまったら不覚を取ってしまって。あぁ、ご心配には及びませぬ。止血は既に終えておりますから」
「――――――そっか、ありがとうな」
「礼には及びませぬ。我等英霊は人類史に刻まれた影法師、ただの影が命を守り、次へと繋げられるのであれば、これ以上ない誉でありましょう」
〝だから、貴方が気に病む必要はない〟　片腕を失っても次に繋げる命を守ることが出来たレオニダスは、自身の負傷を厭わずに笑う。そんなレオニダスに修司は少し心が軽くなった気がした。
「とは言え、次の決戦に私の出番は恐らくはありません」
「え、そうなのか？」
「ええ、ギルガメッシュ王からの勅命でしてな。この後、私は北壁に向かって避難してきた民の守衛に勤める事になりますので」
　如何にサーヴァントと言えど、片腕を失った状態で前線に立つのは厳しく、更に言えばレオニダスは護る事に特化した英霊。前線に立って槍を奮うより、後ろに下がって半壊した北壁の代わりに、盾として最期まで立たせるというのが、王からの采配なのだとか。
　最後まで無駄のない采配に修司は流石だと舌を巻くが、同時にやる気が満ち溢れてきた。自分達の後ろにレオニダスという守りの要がいてくれるのなら、自分も思う存分戦える。
「兵士達には、既に私から伝えられる全てを伝える事が出来ました。ウルクの護りにはきっと力になってくれる事でしょう」
「ギルガメッシュ王も言ってましたよ。協力感謝すると。あの暴君と名高いギルガメッシュ王が感謝ですよ？　いやぁ、歴史というのは面白い！」
　揶揄するように口にする牛若丸だが、その言葉の内には確かな尊敬の感情が込められていて、修司もまたそれに同意するように頷いた。

「本当、王様に喚ばれたのがレオニダスさんで良かったよ」
ギルガメッシュ王という英傑に喚び出された七騎の英霊、既にその数は半数以下へと磨り減って来てはいるが、それでも彼等は戦う意味も意義も見失ってはいなかった。この魔獣戦線に召喚されて早半年、戦いの毎日であってもそれでも彼等が諦めなかったからこそ、現在まで人類史は繋いで来られたのだ。
心から思う。一緒に戦えたのが彼等で良かった。
「さて、それでは修司殿、グラスは持ちましたかな？　生憎麦酒は僅かしか残ってませんので、この一杯で最後となりますが……」
「あぁ、構わない。ありがとう」
弁慶にグラスを渡され、牛若丸に注がれる。正真正銘ウルクでの最後の一杯。牛若丸の演技に騙され、事前に自分も呑んでも良いという空気を作ってくれたその気遣いに感謝しつつ。
「――――それじゃあ、乾杯」
修司は、ウルクの最後の麦酒を飲み干した。

◇

――――――翌朝。ウルクでの最後の休日を過ごし、気力体力共に回復した一行は、再びジグラットへと訪れ、対ティアマト神に対する作戦会議を行った。
当初は、グガランナという切り札が無いことに酷く衝撃を受け、その影響もあって会議処ではなかったが、一晩頭を休ませた甲斐があり、今朝は驚く程に話が進んだ。

まず、女神ティアマトは海洋から進行してくる黒い泥を介して、ウルクへ進撃してくる。逆を言えばその泥さえ取り除けば、女神ティアマトの速度は著しく低下するという事。故に、作戦の第一段階の攻撃目標はティアマト自身ではなく、彼女を運ぶ泥となった。

大量の黒い泥の物理的除去。それならば自分の役目だと、ケツァルコアトルが挙手をした。黒泥改めケイオスタイドの除去、ペルシャ湾という海洋そのものを消滅する事は出来ないが、彼女を取り巻く泥を消滅させる事は出来ると、彼女は豪語する。

何でも、それはケツァルコアトルの神殿に飾られた神具であり、あれがなければこの手段は選べなかったという。神格もサーヴァントの規格ではあるが万全で、もしかしたらダメージも少しは通せるのではないかと、彼女は語った。

太陽遍歴ピエドラ・デル・ソル。太陽神ケツァルコアトルがもつこの宝具を以て、ティアマトの進軍を止める。

だが、当然この策には裏があった。太陽遍歴の宝具はケツァルコアトルの体力を著しく奪うだけでなく、発動まで結構な時間を有する。その為、誰かが彼女の側に立って守り続ける必要がある。

無論、その為にイシュタルも協力するし、修司もかめはめ波という長距離砲撃で援護をする。だが、それでもかなりの危険性を孕んでいるのは間違いなく、同時にそれを実行できるのは、藤丸立香と彼女のサーヴァントであるマシュ＝キリエライトの二名しかいない。

ケイオスタイドに僅かでも触れてしまったら、生身の人間でも変質、変容は避けられず、それは人間にとしての死を意味している。嘗てない危険の作戦を前に……。

「よし、やろう！」

人類最後のマスターは、二つ返事で了承した。

彼女の快活な返答を以てティアマト迎撃作戦の開始、その号砲となった。

ギルガメッシュの言葉と共に兵士たちへ持ち場へつく様に指示を出す。勝っても負けてもウルクは滅ぶ。しかし、それでも彼等は戦う道を選んだ。全てはその先にある未来のために……。

立香達が出撃の準備の為に外へ向かう。その背中を見送り、自身もまたジグラットから出ようとした時……ギルガメッシュの足は止まった。
振り返り、玉座の方へ視線を向けると――――――彼女が、王の出立を願うように頭を垂れる。そんな光景が、見えた気がした。

◇

「ウルクに残る全ての民に告げる」
決戦の朝。その日、王は言った。
「半年より前、魔獣戦線が作られた時だ。我はお前達に言った」
どう足掻いても、ウルクは滅ぶ。避けることも、防ぐ事も出来ない絶対的な終末の時を、このウルクは迎える事になる。
故に、王は言った
「逃げるのも良い。享楽に浸るのも良い。嘆きから冥界に身を投げても良いとな」
現実逃避。立ち向かわず、逃げることを優先し、享楽に溺れ、絶望のまま死に果てる。王は、その全てを赦すと言った。
仕方がないと、王自身が半ば認めていたから。
しかし。
「だが、お前達は戦うと口にした」
諦めない。最期まで、人として戦うと、民達は言った。

「この結末を知った上で、なお抗うと。まさに、ウルクは幸福な都市であった。その歴史も、生活も、民も――――この我も含めてな」
嬉しかった。人は、人類は、神という絶対的な超常の存在を前にしても、それでも立ち上がれる勇気を持っている。あぁ、本当に……自分達は幸せであった。
譬え滅びを前提とした日々であったとしても、あの日常こそが王にとっての宝であった。
故に、王は言う。
「――――今一度言おう。ウルクは滅ぶ！」
それは、最早変えようのない事実。
「だが、憂う必要はない。何故か！　それは勝利の暁を一人でも拝むものが在れば、その胸中に我等の生き様が刻まれるからだ！」
どう足掻いても滅びは免れず、この戦いは価値のないモノかもしれない。しかし、それでも確かな意味があった。
喩え、それがどんなに小さく、細くても、そこに繋がる何かが、誰かがいるのなら、それだけでも自分達の存在した意味は……確かに在るのだ。
「喩え死するとも！　子を残せずとも！　人は人の中に意志を残す！
それこそが、人が持つ力の粋！　血を介さず知性による継承、命の連鎖！」
喩えそれが、血を介したモノではなく、言葉で残すモノではなく、知性という人が持つ意志という継承。
「ウルクの滅びは、我等の滅びではない！　我等は勝利の暁に輝き、その光で次代を繋ぐ！」
これは、倒す為の戦いではない。後に人という命を繋ぐ……護るための戦い。故に。
「心せよ、我が精鋭達よ!!　今こそ原初の神を否定し、我等は人の時代を始める」
これは、神との訣別の戦い。人が踏み締めるはじめの一歩。
「その命――――王（我）に捧げよ！　後の世に、我等ウルクの栄光を、伝える為に！」

瞬間、怒号がウルクにて弾け飛ぶ。男が叫んだ。女が叫んだ。老人も、少年も、兵士も、その全てが王にとって最高の精鋭であるが故に……。

「立香ちゃん、マシュちゃん――――絶対、勝とうな」

「うん！」

「はい！」

決戦が、始まる。

その157　第七特異点

巨大。その神の真体は剰りに巨大だった。大地を見下ろし、シュメルの大地を己の理で埋め尽くそうとするその神の名は――――――ティアマト。

世界を創世し、世界の土台となったとされたとされる女神は、その生み出した世界によって否定された。そんな彼女にとって人類とは自分の居場所を奪い取った侵略者に等しい。ならば、その瞳に写るのは憎悪か、それとも怒りか。本能のままに突き動かせる彼女の思考を読み解く者は……この世界には存在しない。

原初の女神である彼女が目指すのは、ウルクという人類最後の砦。そこを破壊し、其所を護る人類の楔（ギルガメッシュ）を屠りさえすれば、それだけで人類の焼却は揺るぎないモノとなる。

総数一億越えの子供達（ラフム）を引き連れ、彼女は目指す。ヒトの時代を終わらせ、新しい創世を始める為に……と、その時だ。

「波ァァァァッ!!」

遥か前方から、蒼白い光が見えた瞬間、途方もない衝撃がティアマトを震わせた。大気を揺さぶり、大地を震撼させる巨大な光。我が子らが盾となって防いでも、それでも尚伝わってくる熱量と余波。

そして、その余波に負けたティアマトは、その巨大な体ごと後ろへ押し出された。物理的に力で押し負けた事実に、ティアマトの瞳は揺らぐ。能面の様な顔に、僅かな驚愕の色を滲ませて眼前を見据える彼女の視界には、紺色のインナーが顕となった半壊した胴着を身に纏う人間――――――白河修司がそこにいた。

◇

「ちっ、やっぱりラフムで防いだか。悪い皆、失敗した！」
　ティアマトから遠く離れた地点にて、先制攻撃を仕掛けた修司は、己の一撃を防がれた事を悔やみ、皆に奇襲の一撃が防がれた事を素直に口にした。
「ノー、今の一撃でラフムが一定数削られました。お陰で私達の負担を軽くできたと思えば無問題デース、ポジティブポジティブ、切り替えて行きましょう！」
「それに、今ので母さんを後ろに吹っ飛ばしたわ！　今ので一時間は稼げたんじゃないかしら？」
　前を見据える修司達の前方には、無数のラフムを引き連れた原初の創世神ティアマトが今までと変わらぬ速度で前進してくる。修司の放つかめはめ波は、ラフム達が盾となる事で直撃を防がれたが、それでも残った衝撃によって原初の神の進撃を幾分か遅らせる事が出来た。
『女神イシュタルの言う通り、一定の時間は稼げた上、更にはラフムの数を減らせたんだ！　これ以上の好機はない！』
「修司さんはイシュタルさんと一緒に援護をお願い！　私とマシュはケツァルコアトルさんを目的地まで……！」
「イエース！　宜しくお願いしまーす！」
　幾度の修羅場を潜り抜け、すっかり逞しくなった藤丸立香。自ら危険な役割を勝って出てた彼女は乗せられた翼竜に頼み込み、マシュ達と共にティアマトの下へと飛翔していく。
「それでは、我々も暴れると致しましょうか」
「……所で、今更だけどあんた達はどうやって戦うつもり？　其所

のトンチ(修司)キと違って、全うな英霊なんでしょ?」
もう一頭の翼竜には、弁慶と牛若丸が待機している。彼等とイシュタル、そして修司の役割はティアマトの足元へ向かう立香達の援護とラフムに対する遊撃。しかし肝心のティアマトの足元は命を変質させる黒泥――――ケイオスタイドで満ちている。
翼竜を足場にしなければ戦えない彼等が、空を飛ぶラフムにどうやって抗うつもりなのか、不思議に思ったイシュタルが何気なく質問すると……。
「やるぞ、弁慶!」
「承知! ……ンヌゥーンッ!」
見れば、振りかぶった薙刀の上に、牛若丸が乗っている。彼等の睨む先にあるのは、此方に近付きつつあるラフムの群れ、まさかと目を丸くさせたイシュタルが唖然とするなか、振り抜かれた弁慶の一投が牛若丸を弾丸のごとく吹っ飛ばしていく。
「ひとぉーっつ!」
突然サーヴァントが吹っ飛んできた。その光景に驚いたラフムの顔(口?)に牛若丸の愛刀である薄緑が捩じ込まれる。断末魔を上げるラフムだが、その程度の悲鳴に源氏の侍が動揺する筈もなく、彼女の一刀は容赦なくラフムの顔を両断せしめた。
当然ながら、ワザワザ此方に近付いてきた牛若丸をラフムが見逃す筈もなく、塵に還る同胞に遠慮する事なく、刃となった触腕を振るう。
しかし、牛若丸はこれ等のラフムの攻撃を受ける事なく、身を翻して回避し、振り抜かれたラフムの触腕を足場にして周囲に自身の刃を振る舞った。
ラフムからラフムへ、形態変化を果たして飛行能力を獲得したラフムを足場代わりにして戦い続けるその様は、まるで舞を踊っているように美しく、また苛烈だった。時にはラフムの翼を切り落として落下させ、時には敢えて攻撃を引き付けて同士討ちを狙う。
嘗て、檀ノ浦の戦いにて足場の悪い船上にて自由奔放に跳び跳ねながら戦ったとされる牛若丸。喩え空中であろうとその逸話は変わらず、彼女は構うことなく上空数百メートルの戦場にて刃を奮い続け

る。
　黒い泥の様な血が舞う中で、その少女だけは嗤っていた。
「ふぅ、一先ず掻き乱して来ましたが、効果は今一つでしたな」
「牛若丸殿、返り血が着いております故、失礼します」
　ラフムの血はティアマトの垂れ流すケイオスタイド程では無いにせよ、サーヴァントにとっては猛毒に等しい。表情こそは出さないが、それでも呼吸が荒くなっている牛若丸に弁慶は持参していた手拭いを使って、彼女に付着したラフムの血を拭っていく。
「お疲れ牛若丸さん、一応俺の気も分けておくよ」
「いえ、それには及びませぬ。修司殿は此度の戦いの要、貴方の手を煩わせる訳には参りませぬ。気持ちだけ、受け取らせて貰います」
　修司の気を分けて貰えば、牛若丸も長く前線に挑める事は可能。だが、今回の戦いは人類の命運を掛けた決戦。主戦力である修司には可能な限り体力を温存して貰うのが最善だろう。そんな彼女の決意に後押しされ、修司もまた決意する。
「……あんた達が戦えるのは分かったわ。なら、遠慮なく頼らせて貰うわよ。私も、その気になって暴れて上げるわ！」
「宜しくお願い致します！」
「あぁ、任せろ！　今度は界王拳込みでぶっ飛ばしてやる！」
「守りの方は私にお任せを。この常陸坊、今度こそ最期までこの戦いに挑ませて貰う所存！」
　敵は見上げる程に巨大な神。ティアマト神からすれば今の自分達は塵芥に等しいだろう。一分一秒という時間を賭けて、巨大なティアマト神を足止めする彼等の行いは、ラフムから視て滑稽にしか映らなかった。
　面白い。無駄な事に命を賭けて面白い。嗤いながら向かってくるラフムに、牛若丸は刃を奮う。
　しかし、牛若丸の刃である薄緑の強度は長きに渡る戦いの末に限界に差し掛かっていた。加えて、形態変化を遂げたラフムの強さは以前よりも段違いに増している。純粋な強さはゴルゴーンの魔獣を軽く

越えているだろう。
　このままではいずれ此方が力尽きてしまう。だが、それでも最期までこの刃を奮い続けようと、眼前迫るラフムを見据えた時。
　文字通りの横槍がラフムの群れに突き刺さった。
「っ、今のは!?」
　見れば、ギルス市に残る投擲部隊が城壁に備えられた投擲装置に石を込めている。数にしてたったの３０、ティアマト神に果敢に挑む立香達をせめてもの援護として放たれた一投は確かにラフム達の感心を引き寄せて見せた。
「人間、人間人間人間

立香達がケツァルコアトルをティアマトの足下に送り届けるには、あの五体の怪物達が邪魔だ。予想していたよりも多くの数が送られてきたが、此処で引き下がるわけにはいかない。

修司は朱い炎を身に纏い、牛若丸達と共に立ち塞がる怪物達へと吶喊していく。

その１５８　第七特異点

『シラカワノ系譜、ソノ体、我二差シダ――――』
「オラァッ！」
　悪意を振り撒く髑髏の顔に、修司の怒りの籠った拳を叩き付ける。ティアマト同様に見上げる程に巨大な翼を持つ髑髏は悶絶しながら吹き飛び、苦悶の雄叫びを上げる。
「まずは、ひとぉつッ！」
　しかし、そんな髑髏の怪物の苦痛に満ちた叫びなど一切気に掛ける事はなく、修司は手刀に気を纏わせて振り下ろし、怪物を両断する。
　かめはめ波で一網打尽にする事も考えたが、ティアマトを庇った時のように、吸収される可能性がある以上迂闊に放つことは出来ないし、何より修司の気力体力が持たない。
　故に、余計な負荷を負わないために修司はこの巨大な怪物達を前に、自ら接近戦を挑むこととなった。
「先程から気になっているのですが、もしやこの怪物は修司殿のお知り合いか何かでございますか？」
「冗談でも止めてくれ、正真正銘縁のない化け物だ。遠慮なく素っ首叩き落としていいから！」
「無論、そのつもりですよ！」
　軽口を叩きながらも、ラフム達を迎撃する牛若丸は、足場にしている翼竜を呼び掛け、弁慶と共に突っ切っていく。
　ティアマトだけでなく、髑髏の怪物達にさえ護るように集まってくるラフムの群れ。時間が経過し、全ての個体が飛行能力の獲得まで進化したラフムは、既に並みのサーヴァントを凌駕する膂力を持ち合わせていた。
　そんなラフム達を相手に大立ち回りを見せ付けていられるのは、偏に牛若丸と弁慶の連携の上手さによるものが大きい。幾度となく戦場を乗り越えてきた源氏武者、圧倒的数の差を前にしても彼女が遅れ

を取る事は有り得ない。
加えて、彼女の傍らには弁慶がいる。喩え、それが名を借りた偽りの者であろうと、彼の魂にまで焼き付いたあの日の二人の姿は、悠久の時を超えた今でも微塵も色褪せる事はない。
故に、常陸坊も主の後に続く。近付いていくるラフムの群れを背負った籠に入っている無数の得物を使って撃退していく。そんな彼等に修司も援護の閃光を放った。
放たれた閃光は牛若丸達の進路上に屯っていたラフムを消し飛ばし、髑髏の怪物へ続く道を切り開く。
「助太刀、感謝致します！」
修司からの援護に感謝しながら、遂に牛若丸達は髑髏の怪物の下へ肉薄する。
「遠巻きから見ても思いましたが、近くで見るとよりおぞましさが増すな」
「どうやら、相手は怨霊の類いの様子。であれば、此処は拙僧の出番かと！」
「仕方あるまい。出番は譲ろう！　代わりに、確実に決めろよ！」
「承知！」
主である牛若丸の後押しを受け、弁慶が翼竜から飛び、怪物へと肉薄する。見れば見る程怖気のする出で立ち、こんなモノに付きまとわれる修司を不憫と同情しながらも、弁慶は宝具の開帳を謳い上げる。
彼は、弁慶という英傑の名を騙る者。されど偽物と言うにはその在り方は誠実で、坊主を名乗るにはその男は臆病で、それでいて……優しかった。
常陸坊海尊。牛若丸こと源義経と共に戦場を駆け巡り、共に活躍し、そして……主の下から逃げ出した臆病者の僧兵である。死に行く主を護ることも、共に死ぬことも選ばなかった男は己を死ぬまで軽蔑し続け、源義経を永遠の英雄にするべく、その後の人生の全てを掛けて語り部となった。
（しかし、此度の召喚にて嘗ての主と共に戦えるとは、サーヴァントというのは実に因果な存在でありますな！）

己の恥を無かった事にするのではなく、ただ主の名を語り継がせる事だけに執着した男は、この古代シュメルの地で再び嘗ての主と肩を並べる機会を得た。嬉しくない筈などなく、同時に許せる筈もなかった。

こんな自分が、主と共に戦って言い訳がない。何度もそう思い、その度に言われた。

『貴様の後悔など知ったことか』

主である牛若丸の愛刀、薄緑もかくやという程にバッサリと切り捨てられた常陸坊は、その日を境に嘗ての様に接することを決めた。違うのは、従う主が古代のウルク王だという事。

そして、嘗ての主と再び肩を並べて戦っている内に、様々な出来事が起こった。魔獣達の司令塔の強襲と、これを相討ちという形で倒して見せた巴御前の勇姿。偵察に向かった天草四郎と風魔小太郎の敗北、そして、遥か未来のカルデアからやってきた人類最後のマスター達。

彼等の登場に事態は目まぐるしく移り変わり、気がつけば、魔獣達の女神であるゴルゴーンとの決戦、なんて事になっていた。戦いには臆病で、死してサーヴァントになった後も、何度も臆病風に吹かれつつあった自分が、途中で逃げ出さずにここまでこれた。

今度こそ主と共に戦い抜くと決めた自分が、何の気負いもなくこの場までこれた。その事実が己にとってもどれ程の救いとなったのか、それは常陸坊本人以外誰も知らない。

感謝しよう。自分を召喚してくれたギルガメッシュ王に、感謝しよう。こんな自分と未だに共に戦ってくれた嘗ての主に、感謝しよう。戦いの恐怖を忘れる程にワクワクとハチャメチャの毎日を与えてくれたカルデアの戦士達に。

『――――雑兵ガ、身ノ程ヲ知レ』

「ぬっ!?」

「常陸坊ッ!!」

怪物から放たれる衝撃波が、常陸坊に直撃する。全身を引き裂き、耳朶に骨と肉が砕かれる音が叩き込まれる。口から血反吐をぶちま

け、視界が紅く染まっていく。
「あの髑髏、分離出来たのかよ!?」
翼を持つ髑髏、常陸坊に距離を詰められ迎え撃つ手段を失ったと思われたソレは分離し、広がった攻撃範囲を利用して、自身の身体ごと常陸坊を衝撃波で撃ち抜いたのだ。
翼と分離された形でその姿を露にした怪物、まるで幼虫の様に蠢くその様は目の当たりにした修司と牛若丸に言葉に出来ない違和感を募らせていく。
だが、ここで怯んではいられない。今すぐに常陸坊の救出に向かおうと、修司が再び朱い気を纏った時。
「修司殿、あとはお頼み申す!」
ダンッと、倒れ掛けた己の体に力を入れた常陸坊が踏みと止まり、声を上げて修司に後を託す。
「ギルガメッシュ王、牛若丸殿、そしてカルデアの皆々様方……お先に失礼致す。いざ、ご照覧あれい!」
〝五百羅漢補陀落渡海〟
紡がれる宝具。それは、相手が霊体であるのなら英霊怨霊問わず、問答無用に成仏させる浄化の神業。
理の異なる異界の怪物に、通じるかどうかは分からなかったが、この怪物も怨霊に類する存在(モノ)。更に言えば、この怪物はこの世界の存在である魔術王が召喚したのであれば、常陸坊の宝具が通じる可能性もまた大きかった。
『バ、バカナ! 我ガ消エテイク!? コンナ、タダノ光二!? ア、有リ得ン……』
斯くして、この賭けは常陸坊が勝利した。霊基の核を砕かれ、消滅間近となったその男は自らが消えるのを実感しながらも、それでもその顔には笑みが張り付いていた。

◇

「常陸坊、過去の意趣返しのつもりか？　小癪な」
髑髏の怪物の撃破と共に消滅していった常陸坊に、牛若丸は呆れた口調で小さく溢した。しかし、今は感傷に耽る余裕はなく、残る怪物達の撃破に備え、牛若丸は再び愛刀を奮う。
「ならば、私も私の仕事をこなすとしよう。修司殿！　止め、お願い致します！」
「任された！」
押し寄せるラフムの群れを足場に、牛若丸は空を行く。既に怪物は牛若丸を捉え、彼女を屠ろうと龍を模した六つの触腕を伸ばしてくる。
『羽虫風情ガ、身ノ程ヲ知レ』
「は、貴様の様なデカブツに我が動きを捉えられるモノかよ。――――遮那王流離譚が二景、薄緑・天刃縮歩ッ！」
瞬間、髑髏の怪物の視界から、牛若丸の姿が掻き消える。何処に消えたと辺りを見渡しても彼女の姿は見えず、逃亡の二文字が過った瞬間、髑髏の怪物は己の腕の一つが切り落とされていた事に気付く。
斬られた。髑髏の怪物でも探知出来ない速度で切り裂かれ、更には翼にまで刃を突き立てようとしている。唯の英霊風情にしては大したものだと感心するが……しかし、それだけだ。
この羽虫は弱い。脅威の度合いで言えば、先程の僧兵の方がまだ高い。素早いだけの羽虫に用はないと、怪物は身を捩って牛若丸を吹き飛ばす。
牛若丸に見せた僅かな感心、それは彼女が作り上げた隙の瞬間であり、彼女が即席に組み立てた勝利の方程式。

「怪物よ。どうやら貴様は、戦というものを知らぬらしい」
聞こえてきたその言葉の意味を理解できなかった怪物は呆れる。たかが羽虫が自分と対等に戦えるつもりでいるのかと、一蹴した瞬間。
「オラ、今度は俺だ。たらふく食らえよ、羽虫」
『ッ!?』
聞こえてきた憎き男の因子を受け継いだ人間の、侮蔑に満ちた声に怪物は目を剥く。握り締められて振りかぶられた拳、既に男は怪物に向かって狙いを定めており。
「オッラァッ!!」
振り抜かれた拳は髑髏の顔面を砕き、ティアマトから流出しているケイオスタイドに呑み込まれ、跡形もなく消滅していった。
これで、残る怪物の数は二つ。ラフムの数も度重なる修司の放ったかめはめ波により、相当数の数がすり減らされている。
これなら行ける。エレシュキガルが冥界とウルクの境界を繋げるまでの時間も、この調子なら問題なく稼げられる。牛若丸に負担を掛ける事になるが、一気に怪物達を打ち倒そうと、修司が全身に気力を滾らせた時。
ふと、違和感に気付いた。
ティアマトが、視線を向けている。これ迄ウルクにしか眼中に無かった原初の女神が、ウルクとは別方向へ――――まるで、狙いを定めているかのように向けられている。
一体何に？　――――いや、誰に？　其処まで思考を巡らせ、同時に修司は回答を得ると、形振り構わずその視線の先へと目指す。
奴は気付いた。この乱戦の中で戦っている者達の中で最も排除すべき者の事を。
光が放つ。眼光から、目映い光に晒された立香は自分が狙われた事に最後まで気付かず、気付いた時には何もかもが手遅れだった。
（あ、私……死んだ）
漠然的にそう確信した瞬間、立香の視界が突然ぶれ、軽い衝撃が彼女の身体を押し退けた。マシュのお陰で倒れずに済んだと安堵した

のも束の間。
「――――え？」
藤丸立香は、目の前の状況が理解できなかった。何故、自分は生きている？　死んだと思った自分は生きていて、どうして……。
「修司……さん？」
向こうで戦っていた筈の修司が、心臓を貫かれているのか。
絶望と悲哀に満ちた悲鳴が戦場に木霊する。しかし、絶望の時は……まだ、終わりそうに無かった。
ティアマトのウルク到達まで、あと……。

その１５９　第七特異点

「修司さんッ!!」
　黒に染まるシュメルの大地に、悲観に満ちた叫びが響く。驚愕と悲哀に目を大きく見開いた藤丸立香の視線の先では、心臓を貫かれた修司が膝をついている。
「そんな、そんな……!」
　マシュも、突然起きた出来事にパニックを起こしていた。ラフムとの戦いに気を取られ、ティアマト神自らがマスターである立香を狙っている事に気付けなかった。修司の胸元からボタボタと滴り落ちる血、それを目の当たりにしたマシュが更なる混乱に陥ろうとした時。
「まだ、戦いは終わっていない。確りしろ二人とも!」
　血反吐を吐きながら、ふらつく足取りで立ち上がろうとする修司に、立香もマシュも言葉を失った。
「こうしている間にも、ティアマトの行軍は進むんだ。悔やむのも、嘆くのも後にしろ!　ドクター、ウルク到着までの時間はどうなっている!?」
『――――ティアマトのウルク到着まで後８０キロ弱。現在のスピードだと、甘く見積もって１０時間程度だ』
「少なくとも、あと三時間以上は時間を稼がなきゃいけねぇわけか。へへ、結構しんどいな」
「お願い修司さん。もう、喋らないで……」
　貫かれた胸元から血が滲み、修司の身体から流れ出ていく。立香が懸命に修司の心臓を治そうとしているが、既に修司の心臓は深く抉られている。止め処なく溢れ出ていく血液と共に、修司は自分の力が抜け落ちて行くのを感じた。
「ら、ラーマ君もこんな気持ちだったんかな。こんな、まるで根っ子から力が抜けていくみたいな感覚。へへ、やっぱり英霊ってすげぇな」
「修司さん。ごめ、ごめんなさい。私の、私の……所為、で」

立香の治癒の魔術が利かない。どれだけ力を込めても修司の傷は一向に治ろうとしない事実に、立香は俯いて膝を着く。大粒の涙を流してごめんなさいと口にする彼女に、修司は笑った。
「バカ、こんな事で謝るな。まだ戦いは終わっちゃいない。謝る前に、やれることをやれ。――――マシュちゃん」
「は、はい！」
「皆を守れ、ティアマトのお膝元まであと少しなんだ。ここで踏ん張らなきゃ、これ迄頑張ってきた皆の想いが無駄になっちまう。それだけは、絶対に駄目だ」
「――――了解です。マシュ＝キリエライト、全力で踏ん張ります！　ですからマスター、どうか私に力を！」
「うん、うんっ！」
心臓を貫かれ、常人ならショック死を免れない致死量の血を垂れ流す修司だが、それでも彼は戦うことを諦めてはいなかった。出来ることをやれ、戦えと、諦めることを許さない修司は、心の折れ掛ける二人を突き放すように叱咤する。
自分達は、絶対に負けてはいけない戦いの最中にいる。であるならば、決して諦めてはならない。故に、修司自身もまだ自分の生を諦めてはいなかった。心臓を潰され、肺も半分ほど抉られている為に呼吸も儘ならないが、それでも修司の瞳には戦いへ赴く戦士の眼を宿したままだった。
「さぁ、て……俺、も。まだまだやりますかぁ！」
マシュも立香も、辛い思いをしながら戦おうとしている。ならば、彼女達の先輩である自分もいつまでもへばっている場合ではない。出血多量で霞む視界に苛立ちながら立ち上がろうとする修司に、今度はロマニから止めが入ってくる。
『止めるんだ修司君、ドクターストップだ！　君は心臓を貫かれているんだぞ！』
人間の核である心臓を貫かれた以上、その構造上修司はもう長くは持たない。本来ならばとっくに死んでいてもおかしくないのに、それでも生き永らえているのは修司自身の異常な生命力……否、意志

力に他ならない。
　まだ倒れない。倒れる訳にはいかない。ここで倒れて楽になってしまえば、それこそ立香やマシュに要らぬ疵を残す事になる。特に立香は唯でさえ自分を庇ったのだと負い目を背負わせてしまっている。年長者として、そんな格好の悪い終わり方は修司自身が許さない。
「なぁに、これでも死にかけるのは慣れてるんだ。多少の耐性はある。それに……まだあの化物達を倒しきれていないんだ。ここで俺一人だけ寝ている訳にはいかねぇよ」
『でも、だけどさぁっ！』
　向こうでは、ラフムの群れと二体の髑髏の怪物を相手に牛若丸が一人で戦っている。あのままではいずれ数に押し切られ、戦線は一気に瓦解する。そうなったらティアマトを阻む術は無くなり、ウルクは滅び魔術王の人理焼却を覆す糸口を永遠に失ってしまう。
　ロマニからの制止を振り切り、胸元から溢れ落ちる血を塞ぐように手を添えながら、修司が気を解放しようとして……。
「ノー、それは悪手にも程がありマース。修司、博打に走るなんてあなたらしくありませんよ？」
　太陽の神が、よろける修司の身体を優しく受け止める。
「ケツァルコアトル……？」
「以前から思っていましたが……修司、貴方は一人で頑張り過ぎでーす。人間にとっての強さとは、一人で極める事だけではありません。他人を頼り、誰かに託す。ギルガメッシュ王も言ってたでしょ？　意志による系譜。それこそが人類史を紡いできた人間の強さなのだと」
　それは、まるで言うことの訊かない子供を諭す様に、ケツァルコアトルはその言葉を口にする。ただ己一人で頑張れば良いのではない、皆で苦悩し、乗り越え、意志を繋いでこそ、人という種は現代までその命を繋いできたのだと。
　だから、一人で頑張ろうとするな。心臓を貫かれ、意識も朦朧としてきた修司に、ケツァルコアトルはその額に口付けする。
「貴方の出番はもう少し後、どうかそれまで――――生きて」

「ケツァルコアトル？」
「藤丸立香、私の可愛いマスターさん。エスコートは此処までで充分、マシュと修司を連れて、ウルクに戻りなさい。あの賢王なら、修司の傷も癒せる事でしょう」
　太陽神からの口付けは、一種の加護の様な作用となり、修司の出血を一時的にではあるが抑えてくれた。膝が折れ、倒れ掛ける修司を支える立香にケツァルコアトルは微笑みながら告げる。
「さぁ、早くお行きなさい。此処で二の足を踏んでいたら、それこそ全てが無駄になってしまうわ」
「ケツァルコアトル。……ゴメン、そしてありがとう」
　その微笑みに彼女の決意と覚悟を察した立香は、ケツァルコアトルに命じられた翼竜にしがみつき、戦線から離脱。遠くなっていく立香達を追おうとするラフムを、両手で引き裂きながら太陽神は金星の女神へ声を掛ける。
「イシュタル、貴方も立香達と一緒にウルクまで下がりなさい。此処は同じ金星に所縁のあるこの私が引き受けました！」
「……そう、なら、任せたわよ！」
　どうやら自分の役目を定めたらしいケツァルコアトルに、イシュタルは引き留める事はせず、ただ任せたと言って立香達を乗せた翼竜を追った。これでこの場に残るのは牛若丸のみ、出来れば彼女も下がらせてやりたかったが……。
「――――どうやら、彼女も腹を決めたみたいね」
　既に、牛若丸は死に体だった。怪物二体の足止めと、無数のラフムの群れを相手に戦い続けた牛若丸は、左腕を引き千切られ、修司以上にボロボロになっていた。
　しかし、それでも彼女は下がらない。侍としての、英霊としての意地が、彼女に不退転の覚悟を抱かせていたから。
　一瞬だけ、牛若丸と目が合う。それだけで彼女の抱く想いを察したケツァルコアトルは、日ノ本の侍の意地に呆れと感謝の願いを抱きながら、己の宝具を開帳させる。
「過去は此処に！　現在（今）もまた等しく。未来もまた此処にあり！」

それは、サーヴァントとして顕現したケツァルコアトルが持つ、最大最強の切り札。己を奉る神殿にて飾られる過去と現在と未来を示したとされる巨石。
真名解放をトリガーに、巨石を〝門〟として自身の大元の権能の一部を引きずり出す、正真正銘の奥の手。
これ迄の戦いで、既にその準備は済ませた。後は解放させるだけとなったケツァルコアトルから、太陽の炎が嵐となって吹き荒れる。通常なら一部を引き出すだけで精一杯だったが、これ迄の戦いで神格を損なうことがなかったケツァルコアトルは、更なる欲張りを此処で見せた。
「風よ来たれ、雷よ来たれ！　明けの明星輝く時も！　太陽もまた、彼方にて輝くと知るがいい！」
虚空から、光が落ちる。炎の塊であるそれを握り締め、ケツァルコアトルは眼下に広がる黒き泥の海、ケイオスタイドに向けて吶喊する。
全ては、この一撃に繋ぐため。立ち塞がるラフム達をものともせず――。
「太陽暦石（ピエドラ・デル・ソル）」
太陽の輝きを、解放させた。

「ハッハッハ、この古代の世界でよもや太陽を間近で目にするとは、流石は太陽神。やることが派手であるな」
間近に迫る太陽。その熱量は近くにある全てを焼き尽くし、ティアマトの権能である黒泥を蒸発させていく。直に自分も巻き込まれて霊基ごと焼失するだろう。
それでも牛若丸は高らかに笑う。既にこの身は英霊、亡霊より上等とは言え、死者であることには変わりはない。人類史が続くという事は、それだけ多くの人達が自分達の事を知り、その歴史を繋いでくれ

る。
だから、恐れる必要は無い。たったそれだけの理由で、牛若丸という英霊は仮初の命を何時だって懸ける事が出来るのだ。
故に。
「そら、何処へいく怪物。私とお前との決着はまだ着いていないぞ。逃げるというのなら――――その首、置いていけ」
〝壇ノ浦八艘飛び〟
分身。八つに身を分けて、牛若丸はひた走る。足場にしたラフムを切り捨てながら、空を懸けていく。限られた空間であっても足場はある。ならば、それだけで自分は戦える。凄惨な笑みを張り付けて駆ける牛若丸の瞳には、太陽の熱から逃げようと悶える髑髏の怪物。
怪物との視線が重なった。何処までも伽藍堂で、虚しくなる程に空虚な双眸、そこに僅かに滲んだ恐怖という感情。
それを見ながら、牛若丸はやはり嗤う。人を虫ケラと嘲笑う怪物も、人間のように恐怖を感じるのだと、何処か愉快に思いながら……。
「――――皆さん、後の事は……頼みます」
愛刀薄緑を髑髏の額に突き刺しながら、牛若丸は満足そうに笑い、太陽の炎に呑まれて逝った。

◇

『無様。あぁ、なんと言う無様さよ。いかに強くなったところで、所詮は人間。意気がった所で、無駄だったな』
何処までも見下ろし、俯瞰した様子で語るのは魔術の王。影として介入しておきながら、口から出てくる言葉は嘲笑のソレ。相手の手の届かない所から間接的に介入する手腕の悪辣さを棚上げし、何処までも修司を扱き下ろす様は、端からみれば滑稽に映るだろう。
しかし、それでも魔術の王は構わない。自分にとって最も目障りな存在が再起不能な今、此処こそがカルデアを本当の意味で終わらせるチャンスなのだ。
あの異界の神から提示された代償は決して小さくはないが、それでも契約を履行出来る分には問題がない範疇で済んでいる。此処から後数体程呼び出せば、自分の目的の第一段は完遂出来る。
魔術の王はその手を掲げ、逃げ延びた唯一の個体に自らの術を使って複製させようとした時――白銀の一閃が、髑髏を両断させた。
『っ、貴様は――――』
「失せるがよい。魔術の輩よ、汝の出る幕は既に此処ではない」
告げられるは告死の一撃。信仰に殉じ、信仰によってもたらされた斬撃は異界の神すらも両断し、魔術王の介入も断ち切って見せた。
繋がりを断ち切られ、これ以上の介入は不可能と判断した魔術王は突然現れた翁に苛立ち、言葉を吐き捨てる。
『フンッ、貴様が介入した所で結果変わらぬ。精々終わる世界で信仰に殉じているがいい』
祈りも、願いも全ては無駄。そう吐き捨てながら消えていく魔術王を尻目に、死神の翁はその眼差しをウルクへ向ける。
「此処からだ。此処からが、汝の真価が問われる。修司よ、可能性の申し子よ。その輝きを放つ時は――――今に置いて他に無し」
その呟きは誰かに訊かれる事無く……終末の時は来る。
多くの絶望と悲しみを乗せ、回帰の獣は突き進む。

その１６０　第七特異点

大規模の熱量の発生と共に、原初の女神ティアマトが産み出していたケイオスタイド（黒泥）は根刮ぎ蒸発していった。あの黒泥はティアマト神がウルクへ侵攻する為に必要な道であり、自身を運ぶレール。それが極限定的であるとは言え、ケツァルコアトルの太陽によって蒸発された。

お陰でシュメルの大地はその一部が熔解し、マグマと化しているが、それでもティアマトの進撃に大きな遅延をもたらすことに成功し、そのティアマトも、今は地に這うように両手両膝を地に付けている。

この分ならティアマトがウルクに辿り着く迄に冥界との境界線を繋ぐ段取りが完了する筈だろうと、彼女を含めて観測していたカルデア側も作戦成功の兆しを見た。

ラフムも軒並み焼失し、あの怪物も牛若丸の奮闘のお陰で退治できた。自分の仕事は果たしはしたが、まだ魔力には余裕がある。大部削れた体力の回復に勤め、立香達に合流しようとして……その違和感に気付いた。

「なん……ですって？」

ティアマトが、浮いている。あれだけの巨大さと質量を持った存在が、地に膝を付けている処か、今にも空へ飛び出そうと浮遊をしているではないか。

ティアマトという女神は世界の土台に結び付けられ、属性的には〝地〟に分類されている。地に属する神性は、大地に根差す事で真価を発揮するのであって、空を飛ぶことは決して有り得ない。

だが、現にこの女神は空を飛ぼうとしている。巨大な角からスラスターの様に膨大なエネルギーが噴出し、その巨体を大空へ飛ばそうとしている。

『バカな、ビーストの性質が原初の女神の在り方を変えたと言うのか!?』

遠巻きからでも確認できる程、既に浮かび始めるティアマトを見やる立香達の心境を代弁するかの様に、唖然とした様子のロマニが口漏らす。あれだけの巨大な存在が自在に空を飛ぶようになったら、それこそ人類には手出しが出来なくなってしまう。

漸く見えた勝利への道標、それが今、閉ざし掛けている。

『立香ちゃん！　何としてもウルクへ向かうんだ！　今の修司君を治せるのはギルガメッシュ王の宝物庫にある癒しの秘薬しかない！あの王様ならそれくらいの薬はある筈だよ！』

空を飛び、手出しが出来なくなったティアマトを、それでもどうにかするにはイシュタルを除いて空を飛べる修司に頼る他ない。そんな修司は、ティアマトによって心臓を穿たれ、息も絶え絶えとなっている。そんな今の修司を治すには、ギルガメッシュ王が持つとされている傷を癒す秘薬に託すしかない。

翼竜にもっと速度を出すように頼み込む。どちらにせよこのままでは本当にどうしようもない状況に陥ってしまう。修司の命と人類の生存の為に、立香達はウルクへと急ぐ。

そんな時、ふと、修司は見た。ティアマトの足下で燦々と輝く太陽の輝きを。

立香も、マシュも、その光景に息を呑む。太陽の光で灼かれた大地、マグマとなったその上で、翼ある蛇は原初の女神を睨み付けていた。

「――――いいわ。そっちがその気なら、私だって手段は選ばない。翼を持つ火の鳥となって今一度貴方を大地へ縛り付けてあげましょう」

幸いにも、彼女の内に秘められている神格は損なわれていないお陰で、まだ余力が残されている。これも自分という我が儘な神性と正面から付き合ってくれた修司のお陰、その恩に報いる為にも、ケツァルコアトルは此処で全てを出し切る事にした。

「メソポタミア世界の武器では、原初の女神ティアマトには傷一つ付かない。そう言ったのは私でしたね」

原初の女神ティアマトは、シュメルという一つの世界の礎であり、後の人類が生きる大地となった。故に彼の女神に傷を付けられる武

器はこの世界には存在せず、彼女に太刀打ちできる存在もいなかった。
しかし、太陽の神ケツァルコアトルは、シュメル神話とは異なる神話体系の出身。遠い魔性の神性であるならば……！
手に握られた太陽暦石。大元の権能の力を引き出されたその石から熱と輝きは未だ消えず、ケツァルコアトルの手の中で燃え続けている。燃え尽きるにはまだ早いと、太陽の神は呑み込むようにケイオスタイドを蒸発させた暦石を胸元へと取り込んだ。
沸き上がってくる熱と力、文字通り身を焼きながら力を解放させるケツァルコアトルは、その体で繰り出せる最大威力の力を解放する。
「この身はこの大地（世界）の神にあらず！　遠い魔性の神性なれば！　メソポタミアの神、何するものぞ！」
熱くなる。皮膚が、血が、骨が、焼いて燃やして力へと換えていく。熱量が自らの体から吹き出るのを堪えながら、ケツァルコアトルは空を飛ぶ。
「我ら南米の地下冥界（シバルバー）、多くの生命を絶滅させた大衝突の力を見せてくれる！」
「我が身を燃える岩と成し、彗星となって大地を殺す！」
〝ウルティモ・トペ・パターダ〟
燃えろ闘魂。神をも焼き尽くす炎は、この日、嘗て一つの種族を滅ぼした大隕石となって、空を飛ぼうとする原初の女神へ落下。
凄まじい熱と衝撃がシュメルの大地を砕く、障壁を張ったティアマトを僅かでも後退させ、スラスターである角にも罅が入った。サーヴァント一騎の力として見るなら破格すぎる戦果である。
けれど、それだけだ。依然としてティアマトは顕現し、ケツァルコアトル決死の一撃も状況を覆す一手には届かなかった。燃え尽きてケイオスタイドへ落ちていく彼女を見て、残酷な現実を突き付けられた立香達は、それでも足掻こうと自らを奮い立たせる。
しかし。
『ティアマトから、再びケイオスタイドが流出！　ラフムも多数接近！』

その気概を捩じ伏せるかの様に、ティアマトから黒い泥が溢れ、再び大地を埋め尽くしていく。ケツァルコアトルが蒸発させたマグマすらも呑み込み、進撃を開始するティアマト。

それでも戦うしかないと、立香も形振り構わず魔力を回そうとして……膝を着いた。

「先輩ッ!?」

「ゲホッ、ゲホッ、……大丈夫。少し眩暈がしただけ、ウルクに戻るまでもう一踏ん張り！」

マシュを安心させる為に立香は笑みを浮かべるが、凄まじく顔色の悪い立香の表情を見て、マシュは息を呑んだ。

限界を迎えつつあるのは修司だけじゃない。立香もまた、限界だったのだ。今回の作戦に消費された魔力は尋常ではなく、イシュタルという神性とマシュの戦力を維持する為に、立香は現在進行形でその体を犠牲にしていた。

カルデア側からの魔力供給は量こそ賄えても、譲渡する量は制限されている。それでは魔力が滞った際に最善の動きが出来ないと、ロマニの反対を押し切って立香は身を削る様に自身の魔力をマシュに注ぎ続けていた。

結果、マシュとイシュタルの魔力供給は滞る事はなかったが、その代償に立香自身への負担は膨大となってしまった。

これ迄幾度と無く修羅場を乗り越えてきたとは言え、藤丸立香はどこまでいっても一般人。魔術師ではない彼女には荷が勝ち過ぎている話だった。

そして、それを裏付けるように彼女の指先は壊死し掛けている。

「先輩！　その体では……もう！」

「分かっている。此処で無理をしても結果は変わらないって、でも……立ち止まる訳には、いかないんだ！」

既に、このシュメルの大地には殆んどの人間は死に絶えてしまっている。何れも自らの意志で戦い、自らの選択でその道を選んだ者達。

自分は、何時だって安全な所で戦況を俯瞰しているだけの、ただの案山子。体を張って戦っているのは何時だって修司やマシュで、藤丸

立香というマスターはただその様子を見ている事しか出来なかった。
皆が、体を張っている。だったら、自分も形振り構ってはいられない。
ラフムも既にそこまで来ている。心配そうに寄り添ってくるマシュの肩に手を置き、戦うための魔力を注ぎ込もうとした時。黒い泥の奥底から、巨大な白い蛇が姿を現した。
「嘘、ゴルゴーン!?　何で!?」
『フンッ、地上が喧しいから起きてみれば……なんだこれは？』
「ゴルゴーン、生きてた！　生きてた！」
「偽物の母が生きてた！　面白い。これは面白い！」
『――――』
奈落の底へと落ち、消滅した筈のゴルゴーンが生きている。その事実に驚く立香達、もし自分達の知るゴルゴーンならば戦いは避けられない。ティアマトという災害の他に嘗ての魔獣母神も相手にしなくてはいけないのか。
いよいよ後がなくなった。と、立香が半ば自棄糞に令呪という切り札を切ろうとした時、白き蛇の顎は立香達に殺到する事無く、彼女達に迫るラフムの群れを悉く喰らっていった。
『――――不味いな。流石に泥は喰えんか』
「ご、ゴルゴーン？」
「私達を、助けてくれたのですか？」
敵対していた自分達にではなく、ラフム達に攻撃するゴルゴーンに立香達は戸惑いの声を漏らす。人間を憎み、恨んでいる筈の復讐者、それがゴルゴーンというサーヴァントの本質の筈。
何故自分達を助けてくれたのか、その質問に答える事はなく。
『フンッ、死に損ないの二人を喰らった所で、腹の足しにもならん。貴様らはとっとと尻尾を巻いて逃げるがいい。尤も、逃げ切れるとは限らんがな』
「……ゴルゴーンは、どうするの？」
『知れたこと、我を体よく利用してくれた神に、報いを受けさせるまでよ』

一瞥するだけでそれ以上目を合わせる事無く、ゴルゴーンは眼前に迫り来る神を睨む。その時、彼女の瞳に映る色が、二人にある確信を抱かせてしまった。
「マシュ、行こう」
「先輩、ですが彼女は……！」
「いいんだ。――そうだよね？」
『何をぐだぐだ宣っている。とっとと失せよ、それともその男と一緒に此処で終わるか？』
「うん。ありがとう――――さようなら」
ゴルゴーンとなった彼女を見て、全てを察した立香とマシュは今度こそウルクへ向かって先を急ぐ。去り行く彼女達の背中を気付かれないように見送りながら……。
『――――良かった。この姿をあの人達に見せるのは、流石に気が引けましたから』
『別れの言葉は言えなかったけど……でも、お花は戴きましたから。私には、それで充分です』
純白の美しき蛇の少女は微笑んだ。最期に逢えて良かったと、この大事な局面に間に合って良かったと。その胸中に後悔と慚愧の念を抱きながら、それでもこの最期に満足した少女は、迫る女神へと向き直る。
『Ａａ、Ａａａａａ――――――！』
『女神ティアマト。あの人達をウルクへ帰したのは、貴方から逃がす為ではありません。この姿を――――怪物になる私の姿を、見せたくなかっただけ。きっと、余計な瑕を負わせてしまうから』
『けれど、貴方には本当の傷を与えましょう。これ迄貴方として活動したお返しです』
力が高まり、ゴルゴーンの体が変異していく。それは紛れもなく怪物で、その眼差しは何処までも強く前へ見据えている。
『そして、あの人達に追い付いた時、貴方は知るでしょう。トンでもないハチャメチャな男、白河修司という人間の恐ろしさを』
既に、彼女は確信している。この先に待つのがどんな絶望であって

も、あの男はきっと予期しないやり方で塗り替えてしまうのだと。残念なのは、その光景を目の当たりに出来ない事だけ。

『大いなる蛇身となって、大地の竜を地に落とす！　複合神性、融合臨界……！』

『全てを溶かせ！　強制封印・万魔神殿（パンデモニウム・ケトウス）！』

斯くして、怪物へと至った少女と、原初の女神との戦いは呆気ない程に終了した。万物を溶かして侵す復讐の一撃は、女神の進撃を止める事は敵わず、純白の少女の戦いは一方的に蹂躙される事で幕引きとなった。

しかし、意味はあった。全てを擲って戦った小さな少女の意地は、罅の入った角の片割れを見事砕き、ティアマトは強制的に地へと叩き落とされた。

利用され、貪られ、蹂躙された復讐者。しかし、それでも確かに、彼女の報復は此処に完遂されたのである。

――――――――さて、どうにかこうにか此処まで来れた。

多くの命を代償に、多くの輝きを対価に。

さぁ、修司よ。シンカの道を往く者よ。

覚醒の時は近い。シンカの雄叫（コエ）びを――――――張り上げろ。

その161　第七特異点

――――――決戦前夜。

「……ここが……天の丘……」

ウルク市を見渡せるジグラット屋上……通称天の丘。ウルクの街並みを見下ろせるその場所にて、キングゥはいた。

虚ろな眼差しで眼下の街並みを見下ろすティアマトの仔、その瞳には嘗ての覇気は消え失せ、今にも消えてしまいそうなキングゥは、まるで迷子の子供の様だった。

「……馬鹿みたいだ。最期に、なんで――――こんな場所に、来たんだろう」

胸元をラフムに貫かれ、預かっていた筈の聖杯は奪われた。現在キングゥがこの世界に繋ぎ止められているのは、その体に僅かに残った魔力の残滓のお陰。

戦うことも出来なくなったキングゥが自身の最期の場所へと選んだのが……ここ、天の丘だった。

それは、キングゥの記憶によるモノではない。キングゥが依り代として容れられたエルキドゥの肉体の記憶が、この場所への訪れを強く望んでいたからだ。

ここは、エルキドゥの肉体に深く刻み込まれた場所、エルキドゥが初めて友人を得たとされる……誓いの丘。

そう、ここはエルキドゥが望んだ場所だ。キング[自分]ゥではなく、この器となったモノの思い出。自分ではなく、誰かの記憶[ユメ]。

「……無意味だ。こんなところも、僕自身も」

何もかもを失った。母への愛情も、人類の憎しみも、自身の存在価値も、何もかもが与えられたモノで、偽物だった。

存在そのものが偽物、皮肉が利きすぎて嘲笑すら浮かばない。何もかもを失った自分に、今更縋るモノなんて在りはしない。創造主に見捨てられ、帰る場所も最初から何処にもなく、ただの偽物でしかないという事実だけが、キングゥに残されていたモノ。

――――もう、体が動かない。
「此処で、機能停止か。つくづく、どうしようもないな」
抜けていく力に、キングゥは抗うことが出来なかった。聖杯を抜き取られ、空っぽとなった自分には自己を維持できる程の魔力も残されてはいない。
所詮、偽物にはこんな結末がお似合いかと、何もかもを諦めて眼を閉じた時――――。
「何をしている。立ち上がらぬか、腑抜け」
懐かしい声が、キングゥの意識を蘇らせた。
全身に稲妻が走る。衝撃に体が震え、体と目蓋が起き上がる。端から見れば鈍重だが、キングゥにとってそれは雷に打たれた様に劇的だった。
声のした方へ見上げれば……あぁ、なんて事だろう。
「まったく。今宵は忙しいにも程がある。漸く人心地つこうかと思えばこの始末。無様に血を撒き散らし、膝を屈したまでは見逃そう。だが、此処で屍を晒す事は許さぬ」
「疾く立ち上がり去るがいい。そうであれば罪には問わぬ」
何処までも傲慢で苛烈な、黄金の王が其処にいた。
倒すべき敵、自分がこの世界に生まれた時点で決まっていたキングゥが必ず殺すと定めてきた最大の標的。念願の宿敵が、態々自分の前に出てきたのだ。なのに……今のキングゥがそれを実行するには、何もかもが遅すぎた。
「……あ、あ――――」
声が、出ない。この男には言いたい事が沢山在ったのに、叫びたいことが山ほど在ったのに、その全てが喉の奥底に引っ掛かって抜け出せない。
「なんだ。立てぬのか？　それでも神々の最高傑作と言われた者か？
何があったか知らぬが、胸に大穴なんぞあけおって。油断にも程があろう」
呆れの混じった溜め息。やれやれと言いたげな賢王に、キングゥは死にかけの身体（エルキドゥ）を駆動させる。

「な、にを、偉そう、に……！　おまえに、見下される、ボクなもの、か！」
　立て。立て。見下されることが嫌なのか、呆れられているのが悔しいのか、心配されているのが嬉しいのか、そんな事はどうでもいい。ただ、このまま朽ちていくのはイヤだと心が叫んでいる。
　動かない身体に苛立ちを募らせつつ、それでも立ち上がろうとして……。
「グゥッ!?」
　足が砕けた。膝下からゴッソリと、溶けるように砂となって消えていく自身の脚。キングゥの器となっているエルキドゥの素体は泥、核となっていた霊基は砕かれ、炉心となっていた聖杯は奪われた。
　絞り滓でしかないキングゥには、最早その身体を満足に動かす事も出来なくなっていた。
「く、そ……！　こんな……こんな、ところ、を――――お前なんかに、見られる、なんて……！」
　無様、あまりにも無様。人類を滅ぼすことに費やそうと奔走していた敵対者が、立ち上がれることすら儘ならない。悔しさと恥辱で、キングゥは今すぐこの世から消えてしまいたかった。
「……ふん。そう言えば、こんなものが余っていたな。使う機会を逸してしまった。棄てるのもなんだ。貴様にくれてやろう」
「――――は？　な、ええ?!」
　カランッと、乾いた音が響いたと思ったら、聖杯がキングゥの所まで転がってきた。一体何のつもりだ？　糾弾しようとするキングゥの反応も、この時ばかりは遅かった。
　キングゥに触れた聖杯は、その瞬間エネルギーとなってキングゥへと吸い込まれていく。元々聖杯を心臓部分としていただけの事はあり、同じ聖杯であるウルクの大杯とは相性が良かった。
　存外使えるではないかと、ウルクの王はケラケラと笑う。三女神が狙っていたとされている聖杯、その一つを非常に軽いノリで渡してきた賢王に、キングゥはあ然となり……そして、怒りを爆発させた。
「どう、して……？」

「うん？」
「なぜ、なんでこんな真似を!?　ボクはお前の敵だ！　ティアマトに作られたものだ！　お前のエルキドゥじゃない！　ただ、ただ違う心を入れられた、偽物の人形、なのに……」
「そうだ。貴様はエルキドゥと違う者だ。ヤツの身体を使っている別人であろう。だが、そうであっても、貴様は我が庇護の――――――いや、友愛の対象だ」
「――――――――」
　自分は敵だ。神の手によって都合の良い棄て駒で、ギルガメッシュという存在を序でに殺すように命じられた……ただの泥人形だ。
　間違っても聖杯を使っていい存在じゃあない。そんな、憤るキングゥにギルガメッシュは答え、その台詞に……言葉を失った。
　そんな、あ然となって眼を見開くキングゥに――――。
「言わねば分からぬか、この大馬鹿者が！」
「たとえ違う心、異なる魂があろうと！　貴様の身体（それ）は、この地上でただ一つの天の鎖！」
「っ!?」
「……まぁ、奴は己を兵器だと言って譲らなかったがな。その言葉に倣うのなら、我が貴様を気にかけるのも至極当然。なにしろ、貴様は我がもっとも信頼した兵器の後継機の様なもの！　贔屓にして何が悪い！」
　これ以上無い、手前勝手な理屈を叩き込んできた。
　敵であり、空っぽな自分を、信頼した兵器の後継機と呼んで、贔屓にして何が悪いと開き直る黄金の王。その何処までも深い傲慢（優しさ）に、キングゥは何も言えなくなっていた。
「ではな、キングゥ。世界の終わりだ。自らの、思うがままにするがいい」
　背を向け、立ち去ろうとするギルガメッシュ。そんな彼に掛けられた〝すきにしろ〟という言葉を理解しようと、キングゥは王へ訊ねた。
「……待って、それは、どういう？」

「母親も生まれも関係なく、本当に、やりたいと思った事だけをやってよい、と言ったのだ」
それは、嘗ての自分達がそうであった様に。
「キングゥ。貴様は全てを失ったと言っていたが、笑わせるな。貴様にはまだその自由が残っている。心臓を止めるのは、その後にするがいい」
目的も、役割も、存在意義も失い。帰る場所も最初から無かった。全てを失い、何もかもが無くなったと思われていたキングゥの前に置かれた――たった一つの事実。
「――なにを――今更。ボクには、成し遂げるべき目的なんて、なかった。自由なんて――選択する、自分(知性)もないのに」
奪われ、失い、全てを失くした。それゆえに残されたたった一つの選択肢。
〝自由〟　これから自分がなにをするのか、なにがしたいのか。残されたその事実を前にキングゥが選んだのは――。

◇

――多くの犠牲があった。シュメルの大地は再び黒い泥に覆われ、数多の命が消えてなくなった。
僧兵(常陸坊)、源氏の侍(牛若丸)、太陽の女神(ケツァルコアトル)、蛇の少女(????)、多くのサーヴァント達が命

を掛けて戦い、そして散って逝った。全てはたった一つの――――消えかける希望を守る為、原初の女神を打ち倒す為の布石として、彼等を送り出してきた。
そして、彼等カルデアの一行は遂にウルクへ辿り着く事が出来た。心臓を穿たれ、大量の血を流し続ける修司を一刻も早く治す為、ウルクを一望できるジグラットの屋上……天の丘を目指す。
しかし、そこで一行が目にしたものは剰りにも残酷な光景だった。
「そんな、ウルクが……！」
燃えている。ウルクの街が、人の営みのあった人類最後の防衛拠点が、焼失仕掛けている。
既に黒泥は賢王が考案した牙の防壁を突破し、ウルク内部へと侵入しようとしている。嘗ての栄えていた一大都市が半日足らずで消滅しかけている事実に、立香達はただ打ちのめされた。
今、ウルクに生き残っているのはギルガメッシュ王とカルデアの一行、そして……城壁で今もなおラフムを打ち落とし続けている八名の兵士のみ。
僅か十数人の生き残りが、対ティアマトの戦力だった。そして、そんな彼等に止めを差すように、原初の女神の影は……もう、すぐ其処まで来ていた。
「戻ったか。時間にして半日ぶりか？　つい先程の事のように思えるが……さて」
ジグラットの屋上、ウルクの様子が一望できる天の丘に王はいた。
「見るがいい、ウルクの全容を。これがあと一歩で地上から消え去る。一つの世界の終焉だ」
翼竜から降り、立香は修司をマシュに任せ、王の下へ頼み事をするべく駆け寄っていく。そこで王の言葉に倣って街を見下ろすと、その光景に改めて絶句した。
ケイオスタイドが、黒い泥が、ウルク市の至る所に侵入してくる。カルデアの大使館として用意された家も、泥に呑み込まれて消えかけている。
多くの命と栄えを踏みにじり、それを嗤うように黒い化物（ラフム）達は燃え

る街の上空を渦を描くように旋回している。
　終末。王の言うように一つの世界が終わりを迎えつつある。一方で、この光景に意義を唱えたのは、意外なことに同じ神である筈のイシュタルだった。
「酷い。私も、散々ウルクには八つ当たり紛いの事をしてきたけど……ここまでする事はないじゃない。ティアマト神は、母さんは、そこまで人間が憎かったの？」
「分からぬ。あの獣の声は我等には届かぬからな。そもそも、アレに意思は無いのではないか？　あれは、ただ在るだけで世界を滅ぼす機構。人類悪の一つになった時点で、お前が父神から聞いていたティアマト神ではなくなっていたのだろうよ」
「……じゃあ、どうしたら母さんは止まるの？　憎しみを晴らす相手もないのなら、止めようがない」
「そうだな。ティアマト神が生み出した多くのもの――――旧きメソポタミアがなくなれば、その悪も終わるだろう」
「……ギルガメッシュ？」
　どうやったらティアマトは止まるのか。人類を滅ぼしても尚、止める様子の無い女神の進撃。そんな時呟くギルガメッシュの言葉にイシュタルが怪訝に思った時……。

「なんだっていいさ……そんな事は」
「修司さん、いけません！」
　これ迄マシュに肩を借りてどうにか立てていた修司が、マシュの制止を振り払い王の下へ歩み寄っていた。胸元から滴り落ちる血液、目元はどす黒く、既に死に体である筈の修司は、それでも闘う意思を折ってはいなかった。
「どのみち、俺達はアイツに勝たなきゃなんねぇ。そうだろ、王様ッ！」
「――――全く、今まで大人しくしていたからどうしたかと思えば貴様、なんだその様は？　奴といい貴様といい、胸元を貫かれた者は此処に訪れるのが昨今の流行りなのか？」

死にかけの修司に、やはり王は冷静だった。それどころか何処か呆れた様子で目を細めている。そんないつもと変わらない王の態度に修司もまた笑みを浮かべた。
「お願いします王様！　修司さんを治してあげてください！　私の、私の所為で、私を庇ったから修司さんが……！」
「成る程。そこの小僧の傷を癒す為に戻って来たわけか。平事であれば普通に極刑案件だが……今はそれどころではない。特別に赦してやろう」
王の財宝を対価もなしに求めてくる輩はギルガメッシュ王的には不敬極まる話だが、生憎とそれに拘る時間はないし、何より立香達カルデアの活躍はギルガメッシュ王も認めている。土下座をする勢いで頭を下げてくる立香の頭を撫で、王は診察する医者のように修司の下へ歩み寄った。
「どれ、一度横になるがよい。血も流れるだろうが……踏ん張れよ？」
「あぁ、悪い王様、無様を……晒した」
「ふん、雑種の無様さなど毎日見飽きておるわ」
王に促され、修司は大人しく仰向けになる。その所為で血液はより多く流れていき、修司の背中に血の池が出来始める。
その光景に立香は息を呑み、マシュは悲痛な顔になる。自分達が信頼し、頼りにしていた男が心臓を穿たれて死にかけている。今の彼の状態をなんとか出来るのは、あらゆる財を持つとされているギルガメッシュ王以外に存在しない。
縋る様な面持ちでギルガメッシュ王を見る立香。対するギルガメッシュ王は、穴の空いた修司の胸元をジッと見つめ……。
「……ハッキリ言おう。この傷を今すぐ治す程の財は我が宝物庫には存在しない」
ただ一言、そう口にした。
「なっ……」
『バカな、何を言っているんだギルガメッシュ王ッ！　こんな時に冗談を吐いている暇はない筈だろッ！』

絶句する立香よりも先に、ロマニがふざけるなと罵倒する。人類最古の英雄の一人であるギルガメッシュには、この世全ての財が収集されているとされている。
この世全て、即ち全人類の財産を意味しているギルガメッシュ王の宝物庫。その財源に限りなど存在せず、人類の叡知が続く限り王の財宝は膨らみ続けていく。
過去現在未来と、ありとあらゆる財宝を持つとされている王には不可能などありはしない。そう、思われていた。思っていただけに、本人から口に出される無理の二文字は立香達を絶望の淵に叩き落とすのに充分な威力を秘めていた。
「ただ心臓を貫かれただけであれば、どうとでも出来ただろうよ。だが、この男の胸にはティアマト神から擦り付けられた呪いが蠢いている。原初の女神の呪いが吐き出す呪いだ。それを今すぐ完治させる道具など、我の財には存在しない」
呪い。そう言われて改めて立香は修司の傷もとを覗き込むと、痛々しい傷の奥底から黒い蠢くモノと目があった気がした。
それは、ティアマトの流すケイオスタイドと同種のモノであり、それはつまりラフムを生み出す泥と同じ性質。ティアマトの一撃から立香を庇った修司は、その代償に心臓を穿たれるだけでなく、ラフムとなる呪いまでもが掛けられていたのだ。
「良くもまぁ此処まで自我を保てるモノよ。心臓を穿たれるだけに飽き足らず、原初の呪いまで持ち込んでくるとは。さては貴様、貯蓄は得意な質か？」
『そんな、此処まで来て手詰まりなんて、あんまりじゃないか！』
「お願いしますギルガメッシュ王！　どうか、どうか修司さんを助けて下さい！　わた、私に出来ることなら、なんでも……！」
「いらんわたわけ。そも、勝手に結論を出すではないわ。今すぐ治せないとは言ったが、それはあくまで限られた時間内での話よ」
「そ、それはどういう……？」
意味深に語る王にマシュも立香も怪訝に思うが、確かに王は直ぐには治せないと。逆を言えば時間さえ掛ければ、修司を治せるという意

味になる。
　遠回しの言動に辟易する立香達だが……ウルクに迫るティアマトを見て、確かに時間は掛けられないと思い直す。状況は以前として変わらず絶体絶命のまま、今すぐ修司を治せないのなら、この後に待つ決戦には間に合わない。
　いや、そもそもウルクと冥界の境界は未だに繋がれている状態だ。このままティアマトの進行を許してしまえば、人理はウルクと共に焼失される。
「簡単な話よ。刻まれた疵が癒せないと言うのなら、その疵自体を別な所へ移してしまえばいい。貴様らも一度は聞いたことがあるであろう？　痛いの飛んでいけ、とな」
　軽くそう言うギルガメッシュ王に、立香達は一瞬何を言っているのか分からなかった。だが、この王の言っていることがそのままの意味だとするならば。
『そ、そうか！　修司君の受けた傷や呪いが癒せないのなら、それそのものを別の所へ移してしまえばいい！　事象の移し変えというヤツか！』
　事象の移し変え。言葉の通り傷や呪いを受けた相手を別の対象へ移すという荒業、治せないというのなら、別の所へ飛ばしてしまえばいい。そう言い切るギルガメッシュ王に立香もマシュも表情を明るくさせ……。
『ちょっと待って、なんだか随分と都合のいい話だけど、本当にそんな宝具があるのかい？　仮にあったとして、修司君が受けている傷や呪いは、一体誰が引き受けるというのかな？』
　これ迄サポートに徹していた筈のダ・ヴィンチの一言により、場の空気は再び凍り付く。
　修司の受けた傷と呪い、それを余所へ押し付けるというのは暴挙ではあるが悪い話ではない。原初の女神の呪いを治したり防ぐのは難しいことかもしれないが、受けた対象を変えるというのは魔術的に考えても理に叶っている。
　問題は、その傷と呪いを何処の誰に移すという事。聞く限りでは、

ギルガメッシュのその宝具は無機物を対象には出来ないという事、であればその対象は自ずとこの場にいる者に限られる。
即ち、マシュか立香か、或いは別の誰かを。
「……私がやります」
「……先、輩？　今、何を？」
「私が、修司さんの代わりになります」
震える声で、立香はそう口にした。修司の傷を移し変える対象は、自分にして欲しいと、聞き返して来るマシュに言い聞かせるように、立香はハッキリとそう言った。

『――――立香ちゃん、ふざけている場合じゃないんだよ』
「ふざけてない。私は、至って真面目だよ。ドクター」
『だから、ふざけている場合では――――「だって!!」』
「私の所為で、修司さんは傷付いている！　私の所為で、修司さんは苦しんでいる！　修司さんが辛そうにしているのはどうして!?　私を庇ったからでしょう!?」
諌めようとするロマニだが、感情が爆発した立香には届かない。今、こうして修司が苦しんでいるのは、死にそうになっているのは、全て自分の所為だ。
自分を庇った所為で修司は心臓を撃たれ、呪いを受けて死にかけている。それが自分を庇った為に出来た疵だと言うのなら、その移し変えの対象になるのは自分以外にいない。
「それに、修司さんがいれば私なんかいなくても――――」
〝パンッ〟
「――――え？」
自分なんかいなくても、そう言い掛けた立香の頬を、マシュが叩いた。大人しく、健気で、優しい少女。無垢とすら思えた少女のまさかの平手打ちに立香は勿論、ギルガメッシュ王も、ラフムの迎撃に出ていたイシュタルすらも目を丸くさせていた。
「私は、先輩と一緒だから此処まで来れました。先輩が側にいてくれ

たから、私は此処に来れました。ドクターが、ダ・ヴィンチちゃんが、カルデアの人達が、そして……修司さんが一緒だから此処まで来れたのではないですか!?」
「マシュ……」
「此処まで来れたのは先輩の力だけではありません。私も、そして修司さんも、皆が分かっていた事です。誰かが誰かの代わり、じゃないんです。先輩だから、先輩が居てくれたから、私は……」
「――――」
「だから、そんな悲しいこと……言わないで下さい」
「――――ゴメン」
大粒の涙を流し、マシュに叩かれた事の意味を理解した立香は、小さくなって項垂れ、謝罪の言葉を口にする。
これ迄修司という規格外の人間を間近で見てきた故の葛藤、その感情の積み重ねを誰よりも近くで見てきたマシュだからこそ、立香の心に寄り添うことが出来た。
しかし、事態は変わらない。こうしている間にも状況は刻一刻と悪化の一途を辿り、原初の女神ティアマトの進撃も、もう直ぐそこまで来ていた。最早一刻の猶予もない、取捨選択を余儀なくされた一行が頭を悩ませていた時。
「たわけ、そもそもただの人間が原初の呪いに耐えられる訳がなかろう」
黄金の王は、やはり呆れた様にそう言うのだった。
「言い忘れていたがな、この移し変えの儀式には幾ばくかの猶予を必要としている。要は事象の定着よ。その合間に移された対象が死に果てれば、事象は元の対象に引き戻される。仮に藤丸立香が引き受ければ、たちまち傷の痛みでショック死し、そのままこの小僧に戻されて終わるだけだぞ」
「そ、そんな……」
「それじゃあ、その対象になるのって……」
「無論、この我しかおらぬだろうよ」
修司の傷と呪いを引き受け、それが定着されるまで耐えなければ、

事態は何一つ好転しない。そして、その受け皿に足る器もまた、この場に一人しか存在しておらず、アッサリとそう口にするギルガメッシュ王にマシュも立香も息を呑んだ。
「王様……ごめん、ごめんなさい」
「たわけ、何を謝る必要がある。民を護るのも王の役目、貴様の謝罪など不要だ。故にマシュ＝キリエライト、間違っても自分の所為だと思い上がってくれるなよ？」
「……あ」
ごめんなさいと、頭を下げて謝る立香を不要と断じ、呆然となっているマシュを叱咤する。その不器用な優しさに救われたマシュは、立香共々頭を垂れるしかなかった。
「さて、そう言うわけだ小僧。とっとと始めるぞ」
そう言って王が波打つ黄金の波みから取り出すのは一本の筒。幾何学模様で不可思議な輝きを放つその宝具は何かしらの逸話の元となった宝具の原典。
これを使い、修司の傷と呪いを引き受けようと王が手をかざし……。
「！」
その手を、修司本人が掴み取った。出血多量で、意識も朦朧としている修司は、それでも意識を繋ぎ止め、手を伸ばしてくる王の手を掴み取ったのだ。
「王様、それだけは……それだけは、絶対に駄目だ」
「――――呆れた奴よ。息をするのも辛いだろうに、よくもまぁそこまで意地が張れるものよ」
「俺は、王様の……家臣だ。家臣は、王の為に生き、王を……護る、者。だから……」
この特異点の王は、修司の知る王と何もかもが違っている。それは、修司自身が一番良く理解している事であり、最も気を付けていた部分でもあった。
だって、彼等を同一に視てしまったら、それこそが彼等に対する侮辱だと分かっていたから。しかし、今の修司は大量出血によって意識

を朦朧としている状態、混濁する意識の中で彼が口にしてしまうのは、彼が抱いていた偽りなき本音。
家臣は、王の為に在るもの。王の為に戦い、王を支え、国を造っていく者であり、万が一の時の為の防壁となる存在だ。
王の影武者となる家臣がいるように、盾となるべく在る者もいる。そうあるべきだと思って生きてきた修司は、自分の代わりになろうとするギルガメッシュ王を引き留める。
そんな修司を見つめると……。
「たわけ、貴様ごときが我の身を案じるなど千年早いわ」
修司の額を軽めに叩いた。
「そも、貴様は我の家臣ではないだろうが。我も、貴様のような問題児を家臣に加えるつもりなどない」
「……」
「そして更に言えば、貴様はこの時代には存在しない余分な者。そんな奴に、くれてやるものなど何一つ在りはしないわ」
「ダメ……だ。止めてくれ、王、様……」
もう、目を開けていられるのも限界だ。暗くなっていく視界の中で、修司が最後に目にしたのは……。
「我のモノは我のモノ。お前の傷(モノ)も我のもの。……此処まで、良く耐えた」
微笑みを浮かべながら宝具を発動させる、黄金の王の顔だった。
――光が天の丘を覆う。光が収まる頃には、修司の胸元から貫かれていた傷は綺麗に消えて無くなっていた。
しかし、傷のない修司は目を醒ます事なく、眠っている状態のまま、どうした事かと立香達は困惑する。
「傷と呪いは消えても、奪われた体力までは元には戻らん。今は休眠状態というヤツだろう。心配せずとも、直に目覚める」
「ギルガメッシュ王……」
眠っているのは、あくまで体力を回復させる為、そう教えてくれた王に振り向けば、その姿に立香達は息を呑む。
孔の空いた胸元から、夥しい量の血が王から流れていく。致命傷に

して致死量、にも関わらず、王はその痛みと苦しみを一切表情に出さなかった。
「イシュタル！　貴様はあの暗雲を越え、太陽の真下で待機、合図はおって伝える。見逃すなよ！」
「――――分かったわ。立香、マシュ、大変だけどこのバカの事、お願いね。変に自信家だから、これ以上のバカをしでかさないように」
「余計なお世話だたわけ」
　最後に軽口を叩き合い、イシュタルは空へ昇っていく。道中にラフムを何体か蹴散らし、暗雲へ消えていくイシュタルを見送ると、王は口元から溢れる血を拭い、自身の戦いを始めた。
「さぁ、良く見ておくがいい小娘ども、これがウルクの、ティアマトめに見せる最後の意地よ！」
　瞬間、空から無数の光弾がウルクの城壁上から放出されていく。放たれるのは城壁に備わったディンギルの魔力砲弾、弾幕となって放たれるそれはラフムの盾を突き破り、ティアマトへ押し寄せる。
『城壁に設置したディンギルからの一斉掃射!?　で、でもどうやって!?　兵士達は、もう――――』
「フハハハ、我の魔力を舐めるな、白衣！　城門に設置したディンギル３６０機、全て我が作り、魔力を込め、統括するもの！　死ぬ気でこの身体を酷使すれば、このように一斉に操れるわ！」
　王は笑う。この程度朝飯前だと。運用する兵士も、起爆剤である宝石も持ちいらず、その全てを自身の魔力で代用させる。召喚されたサーヴァント七騎の内、六騎が消滅した今、ギルガメッシュ王の魔力は全盛期の頃と遜色ない勢いで運用できる。
　これが、人類最古の英雄ギルガメッシュの底力。その出鱈目な魔力に立香達は驚きを露にするが……やはり、無茶だ。
　王の足下に血の池が出来上がっている。表情こそは平然としているが、その額には大きな汗が幾つも浮かんでは流れ落ちていく。
「ギルガメッシュ王、もう――――」
「無理と言うか？　我は限界だと？　もはやウルクは戦えぬと！　貴様はそう言うのか、藤丸立香！」

シュメルが黒い泥で覆われ、多くの市(まち)が、人が、命が、失われていった。沢山の人が死に、大勢の人達が散って逝った。
これまでの自分達の戦いは無意味だったのかと、王は少女に問う。立香の胸中に甦るのは、これまでこの世界で生きてきた人々の姿。
皆、笑っていた。滅びが免れないのだと、死は免れないと、定まった運命だと残酷に宣言されても尚、その微笑みを絶やさなかった。そんな彼等の姿は、今も立香の心に根付いている。
故に。
「――――――いいえ、いいえ！　っ……ウルクはここに健在です！」
彼女の口から出てきたのは、まだ戦えるという意志。根拠もクソもない、ただの根性論だった。
「よくぞ吼えた！　では我もいよいよ本気を出すとしよう！　なに、初めから割りと死ぬ気で全力だったが、見栄というものがある！　貴様の生意気な言葉で目が覚めたわ！」
立香の叫びに呼応するように、王もまた意地を張る。既にティアマトはウルク市内に到達し、ジグラットまで三分を切りそうになっている。
冥界との境界もあと僅か、ここが真の正念場だとギルガメッシュ王が更なる魔力を回し始めた時。
ティアマトから、大量のラフムが放出される。一万に及ぶラフムの群れは、一つの形を形成し……ジグラットへ殺到していった。
それは、まるでグガランナの蹄のようだと、後にイシュタルは語る。
「ラフムの群れによる体当たりとか、そんなのあり!?」
上空にてギルガメッシュ達の様子を見守っていたイシュタルは、崩壊仕掛けているジグラットを見て絶句する。あんなものグガランナの蹄と同じだと、此処まで来て更なる絶望を叩き込んでくるティアマトに圧倒され掛けていた。
そんな中、仁王立ちで崩れないギルガメッシュ王を見て一先ず安堵する。しかし立香とマシュは衝撃によって気絶されている。このままでは彼等は持たない、何とかしてラフムの壁を破壊しようと躍起になっていると、無数の槍がラフム達を貫いていく。

ジグラットに向かって一直線に向かっていく飛行物体、何なんだと目を凝らして見つめたイシュタルは……驚愕に目を見開いた。
「キングゥッ!?」

◇

「――――フン。見た事か。心臓さえあれば、お前達なんて話にならない。こんな量産型に手こずるなんて、旧人類は本当に使えない。それでよく、」
「……よく、ボク相手に大口を叩いたモノだ。カルデアのマスター達も、アイツも」
眼下に広がる光景、死にかけている王と気絶している立香達を前に、キングゥはそう吐き捨てる。けれど、何故だろう、その言葉に以前のような人類に対する憎悪は薄い気がした。
「一人じゃなにも出来ないくせに、偉そうに胸を張って。それで、最後まで生き延びた。……ふふ。一人でも何でもできる、か。その時点で、ボクは完全じゃなかったな」
己の起源を知り、己の真実を目の当たりにし、その上でこれ迄の人類と自身を比較して、キングゥは笑う。滑稽だなと、一人で何でも出来る気になっていた自分は、結局の所何一つ成し遂げてはいなかった。
完璧を目指していた自分こそが、何もかもが欠けていた。そんな自分に対し、足りなくても、欠けていても、それでも互いに補って支え合っている人類が、今更眩しく見えてしまった。

「キングゥ!? キングゥ、ダト!? 何故生きテいる!? 何故稼働しテいる!? イヤ、前提トして、何故――――人間ノ、味方ヲする!?」
キングゥの生存、その事実に動揺しながら襲ってくるラフム達を鎧袖一触。キングゥの槍によって貫かれたラフムは、塵となって消えていく。
「――――人間の味方なんてするものか。ボクは新しいヒト。ただ一人の新人類、キングゥだ。だけど――――」
思い返すのは、昨日の夜。自分を後継機と読んでくれたたった一人の傲慢な王。
「母親も生まれも関係なく、本当にやりたいと思った事を、か」
自由。自分の心に従えと、そう語るギルガメッシュ王だが、それこそがキングゥにとって最も残酷な話だった。
「……ボクにはそんなものはない。なかったんだ。なかったんだよ、ギル。でも――――」
「思えば、一つだけあったんだ。君に、会いたかったんだ」
それは、この身体として稼働した時から、ずっと抱いていた願い。
「君に会って、君と話したかった。この胸に残る多くの思い出の話を、その感想を、友として君に伝えたかった」
嘗て、自分と敵対した時の話。共に過ごし、共に笑い、共に語らい、共に戦い。そして……見送られた。
謝りたい気持ちと、感謝の気持ち。時が経ち、それでも変わることのない思い。それを伝えたかったのが、キングゥ（エルキドゥ）の望みだったのだ。
けれど、それは叶わない。それはキングゥではなく、エルキドゥという機体の望みだから。
だからそんな望みを、キングゥは抱いてはいけなかった。
「……ボクの望みは、今も昔も変わらない。新人類も旧人類も関係ない。ボクは、ヒトの世を維持するべく生を受けた」
そう在れと望まれ、そう生きろと命じられた。ヒトの世を維持する戦闘兵器。それが、キングゥの産まれた理由。
『――――Ａａ、ａ――――Ｋｉｎ――――ｇｕ――――』
母が、呼ぶ。その言葉にどんな意味が含まれているのか、今はもう

分からない。
「さようなら、母さん。アナタは選ぶ機体(コドモ)を間違えた」
「……うん。アイツの言った事は、良く分からない。でも――――この身体が、やるべき事を、覚えている。ウルクの大杯よ、力を貸しておくれ」
キングゥが、母(神)の前に立つ。もう自分の言葉は届かないし、母の言葉も、自分には届かない。生んでくれた事への感謝と、裏切ってしまった事への贖罪。そして……自分の心に従い、キングゥは高らかに告げる。
「ティアマト神の息子、キングゥがここに天の鎖の筐(な)を示す！」
「母の怒りは過去のもの。いま呼び起こすは星の伊吹――――」
それは、嘗て神と人を繋ぎ止める楔を戒める鎖。けれど、友を得て、人を知り、他者との関わりを持ったそれは、その役割を大きく塗り替えた。
故に――――
「人よ(エ)、神(マ・エ)を繋ぎ止(リ)めよう(シュ)――――!!!」

「――――見事」
神を繋ぎ止める巨大な鎖、原初の神の膂力すらも押さえ付ける友の姿に、王は一言そう呟いた。

その１６２　第七特異点

「――――――う、ん？」

微睡みの意識の中から浮上し、藤丸立香は自身が地面に倒れている事に気付く。何故、自分はこんな所で眠っているのか、未だに混濁する意識を覚醒させ、徐々にこれ迄の経緯を思い返していくと、今の自分達が窮地のただ中にいることを思い出し、ガバッと頭を振って起き上がる。

先ずはマシュ、彼女も自分と同様に気を失ってはいるみたいだが、今に起きそうになっている事から安堵する。次に修司だが……まだ、彼は起きそうにない。目を瞑り、端から見れば眠っているかの様だが、それでも胸元が上下に動いていることから息は出来ているのは確認できた。

もう彼の胸元には孔は開いておらず、一先ず彼自身の危機は抜け出せた事に安心した立香だが、其処で思い出す。

王は？　ギルガメッシュ王はどうなっている？　先程の衝撃により意識を失っていた立香は、この特異点に於ける最も重要な王の存在を思い出し、彼がいた場所へ目を向け……言葉を失った。

王は、生きている。修司のティアマト神から受けた傷と呪いを肩代わりし、致命傷を受けてしまったウルクの王、そんな彼の眼前には原初の女神が聳え立っている。しかし、そんな女神の進軍はギルガメッシュ王を前にしてピクリとも動けてはいない。

何故なら――――――。

鎖が、原初の神を縛っていた。黄金に輝く巨大な鎖が、ティアマト神の動きを完全に封じてしまっていたのだ。その光景に立香だけでなく、気が付いたマシュまでもが唖然としていると、彼女達に気付いたギルガメッシュ王が声を掛けてきた。

「目を覚ましたようだな。少しは休めたか？　小僧の方は……うむ、あと数分といった所か。結構。では、この後を任せられるというものだ」

「ギルガメッシュ王、これは……！」

「見ての通り、ティアマト神は我らが目前。あと数歩こちらに踏み込めば、このジグラットは灰塵に帰す」
「――――ハ。だが悔しかろう、その一歩があまりに重い。……僅か一刻の束縛だったがな。まさに、気の遠くなるような永劫であった」
自分達が気絶していた間に一体なにが起きたのか、その答えを簡潔に教えてくれた王に立香もマシュも何となく察しがついた。
身動きが封じられ、ジグラットまであと数歩という所で動けなくなったティアマト神。原初の女神の膂力を封じているのは、恐らくは彼――――キングゥだ。
彼は、エルキドゥの身体を引き継いだ後継機であり、同時に天の鎖でもある。何故彼が人類の為に足止めをしてくれるのか、立香には全く皆目検討も付かないが……誇るように、自慢気に語る王を見て、その答えが間違いでないと確信する。
「――――さらばだ、天の遺児よ。以前の貴様に勝るとも劣らぬ仕事――――天の鎖は、ついに、創世の神の膂力を抑えきった」
やがて、女神を縛る天の鎖から輝きは褪せていき……砕けた。自分の仕事は終わりだと、砕けて消えていく天の鎖に、王は決して目を逸らす事はしなかった。
「Ａａａａａ――――ＡＡＡ

くもない顔を見ながらね。……でも、アナタはそれでいいの？　悔いとかないの？』
「――――――無論だ。何を悲しむことがあろう。我は二度、友を見送った」
一度目は悲嘆の中。悲しくて、悲しくて、泣きながら見送った悲しき別れ。けれど、今回は違う。
「その誇りある勇姿を、永遠にこの目に焼き付けたのだ」
だから、悲しくもなければ嘆くこともない。イシュタルからの問いにそう答える王に、天の女主人は溜め息を溢す。
『――――――もう、そっちの話じゃないわよ、ばか』
遥か空から、これ迄の様子を眺めていたイシュタルは思う。結局、自分はアイツの眼中に入る事はなかった。嘗て英雄王の勇姿に目を付け、求婚を迫ったとされるイシュタル。
彼女は決して認める事はないが、女神であるイシュタルは、あの日、確かに感じたのだ。黄金の王を目にした時の胸の高鳴りを。
もう、あの頃に戻る事は叶わない。それを本当の意味で受け入れたからこそ、イシュタルは己の全魔力を解放させるのだ。
『いいわ。後は野となれ花となれ――――――未練もろともフッ飛ばしてあげようじゃない！』
目を金色に輝き、その神性を解放させる。注文通りウルクを地盤ごと冥界へぶち抜いてやろうと、イシュタルは全力の魔力を注ぎ込む。
天から感じる力の波動を感じながら、王は唸った。それにしてもと。
「しかし、真なる神との決別、ときたか。我ながら勢いで、たわけた事を口にした。であれば、我が残る訳にはいくまいよ」
「――――――王様？」
「カルデアのマスターよ。以前、人理の辻褄合わせの話、覚えているか？」
それは、決戦前に王から立香達に話したとある悲しい事実の事、特異点で失った命は修復した後に甦る事はないというモノ。
「確かに、このウルクは滅びるだろう。だがティアマト神と、この特異

点の基点となる我が消え去れば、その結末は違う解釈になる」
古代メソポタミア、ギルガメッシュ王が治める第五王朝での特異点。その修復の要は確かにティアマト神の討伐も含まれているが、それだけはなかった。
ギルガメッシュ王自身が、特異点の基点だった。ティアマト神だけでなく、ギルガメッシュ王もまた、この時代に存在してはいけないモノ、初めて聞いた事実に二人は絶句していた。そんな彼女達を柔らかに微笑みながら、王は続ける。
「滅びるのはあくまでウルク第五王朝の治世のみ。この後に続く、ウルクの第六王の時代は健在だろう。倒さねばならぬのはティアマトだけではない。この我も、この先には不要だった」
不要。あれだけの治世を敷いて、あれだけ人々に慕われておきながら、自らを不要と断じる王。これに立香とマシュは何も言えなかった。言える、訳がなかった。
「唯一の懸念は我の死に方よ。自決など、王として話にならぬからな。どうしたものかと難儀していた所だが、小僧のお陰で手間が省けた。自決ではなく、ウルクの民を助ける為、と最低限の格好が付くからな。礼を言うぞ」
「そんな、そんな事……」
「あぁ、けれど、小僧には言うなよ？　面倒な事になるのは分かりきっておるからな」
「……」
自分は不要、誰よりも人類の為に働き、戦い、献身を尽くしてきた男の、最期の言葉。己の死すらも勘定に入れて計算している王に、立香は静かに涙を流した。
そんな彼女に、ギルガメッシュ王はやれやれと息を吐いて。
「……仕方のない女だ。礼は先程の事だけではない。言わせるな、バカ者が」
「？」
「異邦からの旅人よ。心に刻み付けておけ。この時代にあった全てのモノを動員しても、恐らくはここ止まりだっただろう。貴様達は異邦

人であり、この時代の異物であり、余分なものだった。だが――――――」

「その余分なものこそが、我らだけでは覆しようのない滅びに対して、最後の一指しを差せるのだ。……時は満ちた。全ての決着は、貴様と小僧の手に委ねるものとする」

ティアマト神（ビーストII）が、もう其処まで迫っている。大いなる神、創世の神が立香達へ迫ると同時に、彼等の頭上からイシュタルの宝具の輝きが迫りつつあった。

急いで衝撃に備えなければ。立香はマシュを、マシュは立香と眠っている修司に手を伸ばそうとして……ふと、気付いた。

「王……様、手を……！」

修司は、目を覚ましていた。その目に涙を貯めて、必死に王へ手を伸ばす。死なせたくない、喩え時代が異なり、自分の知る王とは別人なのだとしても、修司にとってギルガメッシュは大事な恩人であることには変わりない。

そんな、修司の伸ばす手を……黄金の王は、振り払った。

「王様……！」

「――――――――」

最後の囮は己自身、そう決めていた黄金の王は、遥か未来の臣下に向けてただ一言だけを告げて……。

イシュタルの放つ光の中へと消えていった。

◇

女神イシュタルの渾身の一撃によって、ウルクの大地は砕かれた。地盤を穿たれ、足場を無くした立香達が次に体験するのは、慣れしたんだ落下のソレ。物理的に冥界に落ちていくのを体感しながら、立香は思った。アレ？　このままだと私達死にそうじゃね？

人間は数メートルの落下でも打ち所が悪ければ死ぬだろうし、実際にこの高さで落ちれば間違いなく即死だ。其処まで対策を考えていなかった立香はやっちまったと顔を青くさせるが、そんな彼女達を冥界の女神は見捨てなかった。

「はいはい、そんなに慌てないの。――――アナタ達に冥界での浮遊権を許可したわ。魔力を足先に集めて、地面をイメージしなさい。それで少しは飛べる筈よ」

聞こえてくるエレシュキガルの言葉に従うと、自由落下していた二人の身体は浮遊感を獲得し、無事にエレシュキガルの所まで合流する事が出来た。自慢気に胸を張る冥界の女主人を頼もしく思いながら、肝心なティアマトへ視線を向ける。

『な、なんだいこれは⁉　先程のイシュタルの宝具並の熱量が絶え間なくティアマトに降り注いでいるなんて⁉』

立香達と同様、イシュタルの一撃によって冥界へ落とされたティアマトは、冥界の防衛機構とも呼べる迎撃システムにより、その身を焼かれていた。絶え間なく降り注がれる冥界の雷撃、エレシュキガルの許しなく冥界へ侵入してきた生者に落ちる神罰。

それは、世界の定めたルール。如何にティアマトと言えど、抗えぬ理であった。これで弱った所にギルガメッシュの合図により全員の一斉攻撃で仕留める。というのが、事前に開かれていた作戦会議での主な流れだった。

この流れならイケる。皆が命を懸けて繋いでくれた道筋に立香も気を引き締めた時、あることに気付いた。

「ねぇ、エレシュキガルさん、修司さんは？」

「え、ええ!?　一緒じゃなかったの!?」
　そう、この局面で貴重な戦力である筈の修司の姿が、何処にもないのだ。イシュタルに足場を穿たれるまでは、彼は自分達の近くにいた。だからてっきり自分達の側にいるのだと思っていただけに、その事実は立香達に重くのし掛かった。
「――――申し訳無いけど、今はあの人間の事まで気を回す余裕はないわ。けれど安心しなさい、事が済めば、ガルラ霊の総力を上げて必ず見つけ出してあげる。だから」
　今は、ティアマトに集中しなければならない。これ迄の戦いの中で、ここに至るのがどれだけ大変だったのかを体験してきた立香達だからこそ、エレシュキガルの判断に異を唱える事は出来なかった。
　それに、彼は足場を穿たれる直前、目を覚ましていた。なら、きっと何処かで生きている。彼のトンデモ具合に期待しつつ、立香は改めてエレシュキガルに向き直った。
「それで?　ギルガメッシュ王からの合図はまだかしら?　今の状況こそが好機、逃す手はないと思うのだけれど?」
「そ、それは……」
「王様からは既に合図はあったよ。エレシュキガルさんだけに負担を掛けちゃうけど……お願い!」
　王は自分と修司に後を託し、笑って逝った。なら自分は身の程知らずでも、この場で指揮を取らなくてはいけない。エレシュキガルに攻撃の指示を出してくる立香、そんな彼女にある程度察しのついた冥界の女神は一瞬だけ目を伏せ、次に顔をあげる時には、その頬を不敵の笑みで歪ませていた。
「よろしい。ならば見せてあげる!　冥界のガルラ霊よ、立ち並ぶ腐敗の槍よ!　あれなる侵入者に我らが冥界の鉄槌を!　総員、最大攻撃――――!」
　瞬間、冥界の至る所からティアマトに向けて赤い雷槍が放たれていく。如何に相手が創世の神と言えど、冥界に落ちれば唯の神。冥界の支配者であるエレシュキガルとガルラ霊達の総攻撃の前には、一溜りもない。

これでティアマトはおしまいだ。そうドヤ顔で胸を張るエレシュキガルは自らの勝利を確信した時――――それは起きる。
冥界に泥が、溢れ出る。ティアマトの放出するケイオスタイドが、冥界の理すらも侵食し始めたのだ。
そして、事態は更に悪い方へ加速していく。
『なんだ、この反応は!? ビーストⅡの霊基反応、更に膨張！ 霊基の神代回帰、ジュラ紀まで進行!? これは……もう神性じゃない！ 紛れもない神の体だ！』
「ななな、なに、何が起きるのだわ!?」
冥界を侵食する泥の中で、創世の神が蠢く。より頑強に、より凶暴に、より残酷に、より悍ましく。
進化。冥界に落ちた際に受けた傷すらも復元、再生させ――――それは顕れる。
『Ａａａａａａａａａａａａ、ＡＡＡ

そんな冥界の女主人を叱咤し、ラフム達を切り捨てながら一匹のジャガーが立香達の前に降り立った。
「ジャガー先生！」
「駆け付けてくれたんだ！」
ティアマトへの足止めを行う際、最期まで抵抗していた兵士達の救援に奮闘していたジャガーが、その身に幾つかの焦げ目と火傷を負いながら、此処へ来て加勢に駆け付けてくれたのだ。
「詳しい話は後！　兎に角此処までよくやったわ立香サン！　そして冥界の神サン、アナタも弱音を吐いてないでさっきの凄い攻撃を続けなさい！」
「で、でも、私達の攻撃が全然効いていなくて……！　それに冥界全体の出力も落ちてきてるし！」
「それでもやるしかないの！　いい、あれでもティアマト神は今が一番弱い状態なの！　でも、それもいつまでの事なのか誰にも分からないわ！」
「ここで！　私達が！　何とかしないと人類どころか地球終了のお知らせよ！　あの状態で地上に出してごらんなさい！　一日もせず地球上が全部黒泥に覆われるから！」
事実、冥界は既にケイオスタイドに覆われた。ジャガーは今のティアマトを一番弱い状態と言うが、裏を返せばここを逃したら本当に自分達にティアマトに勝てる要素は永久に失ってしまう。
しかし、冥界は泥に覆われてしまった。エレシュキガルの力が作用されない冥界で、ティアマトを抑え込むのは不可能。
せめて、あの泥さえ何とか出来れば……。
「な、なんだありゃあ――――!?」

それはエレシュキガルの困惑の叫びから始まった。冥界を覆っていた泥は、その殆どが花に変わり、ティアマト神の足元を花で埋め尽くしていく。
「ケイオスタイドの権能が軒並み停止した!?　いや、もう機能を使いきって唯の泥になった!?　し、信じられない、けど！　その花が、ティ

アマト神の力を枯渇させている！」
　何故いきなり冥界に花が咲くのか、その答えは至極簡単な事で……。
「この花、もしかして――――！」
「ついようし、間に合ったー！　アヴァロン地方から全力で走り続け、どうにかこうにか間に合ったぞー！」
『ゲェェェェ、マーリン!?』
「ブフォォォウ!?」
　アスリートもかくやな走法で走り抜いてきた花の魔術師が、冥界へ馳せ参じてきた。
『この男、徒歩できやがった！』
「て言うか、走って来られるものなの!?」
「まぁね。人理焼却によって白紙状態の地球なら、妖精郷を使ってこっそりとね！　ボクは、悲しい別れとか大嫌いだ。そんな悲しい思い出を味わう位なら、ハチャメチャに掻き回される方がまだましだ！」
「だからちょっとだけ信条を曲げて、幽閉塔から飛び出してきた。無論、君達に会う為にね」
　ゴルゴーンを倒してから、相手の策略に嵌まってしまい、一度は敗北に消滅したマーリン。しかし、これでは終われないと、幽閉塔から飛び出し、此処まで走ってきた。今一度、マーリンがファンだというマスターに会うために。
「はい！　お待ちしていましたマーリンさん！　再会できて、私達も嬉しいです」
「私からも言わせて、ありがとうマーリン！」
　マシュと立香からの心からの言葉に、柄にもなく照れるマーリン。しかし、笑みを浮かべるのも束の間、その表情を真剣なモノに変えると、改めてティアマトへ向き直る。
「――――でも、実を言うとね。ボクが急いで駆け抜けたのは、それだけじゃあないんだ」
「そ、そうなの？」

「うん。がっかりさせてしまったのなら申し訳無い。けれど、視てしまったんだ」
「マーリンさん、視てしまった……とは？」
「――――それは、可能性の光である」
「「「ッ!?」」」
　意味深に語り始めるマーリンに、立香もマシュも首を傾げる。この魔術師は一体何を視たと言うのか、不思議に思う二人の胸中に答えるように、髑髏の翁が現れる。
「あ、アナタは!?」
「キングハサンさん!?」
「うわビックリした」
　突然現れた髑髏の仮面、武骨な大剣を携えて突然出てきたその翁は、マシュも立香も面識があった。
　先の第六特異点。山の翁達が対獅子王に備えとして助っ人として頼み込み、結局は断られてしまった相手。
　初代山の翁。数あるサーヴァントの中でも冠位として座している彼の翁が、どうして此処にいるのか。不思議に思う立香に今度はマーリンが答えた。
「マスター藤丸立香、彼は君の縁に応えて此処に来てくれたんだ。冠位を捨ててまで、ね」
「えっ!?　ど、どうして？」
「……受けた礼は返すのが道理。如何に冠位と言えど、礼儀を失してはハサンに非ず」
「え？　え？」
　礼に応えた故に、そう語る翁だが、肝心の立香は心当たりがない。目を丸くさせて困惑している彼女を余所に、カルデアからロマニの叫びに似た報告が飛んでくる。
『ビーストⅡ、背部の角翼を展開！　ほらみろ！　マーリンが変に余裕ぶるから相手が本気になった！　冥界への侵食は止められても、ビーストⅡ本体は止められない！　ウルクに――――地上目指して飛ぼうとしている！』

回帰の人類悪、ティアマト神（ビーストⅡ）は折れた筈の角すらも復元させ、翼を広げて飛び立とうとしている。このままではティアマトを地上へ逃がしてしまう。

ケイオスタイドは止められ、冥界の権能は回復しつつあるが、上空からは無数のラフム達が雪崩れ込んできている。戦力は揃いつつも、まだ決定力が欠けている。

このままでは、そう焦る立香達に対してマーリンと山の翁は何処までも平静だった。

「――――藤丸立香、マシュ＝キリエライト。君達は此処まで良く頑張ってくれた。君達の頑張りはボクにとっても輝かしいモノであり、また掛け替えのない宝石の様だった」

「故に、どうかこれから起こる出来事に刮目して欲しい。君達が命を懸けて繋ぎ、託し、そして紡いできた――――人の可能性を」

マーリンは語る。それは、王の話でもなければ、星の話でもない。人が紡いで繋げてきた……人の可能性。

ふと、立香は気付く。原初の神を前に一人佇む男の姿を。

い

それは、立香がこれ迄の旅の中ですっかり見慣れた……もう一人のマスターの姿。

「修司……さん？」

斯くして、舞台は整った。

◇

――――――自分は、強くなれたのだろうか。
理不尽を許さないと声を張り、不条理を許さないと拳を上げて、大切なモノを失いたくないと、ガキの様に駄々を捏ねて……。
そうして、何を得た？
人並み外れた腕力？　野生動物も凌駕する脚力？　神秘やら魔術やらを扱う連中など足下にも及ばない膂力？
それらを得て、何が出来た？　何を守れた？
何も。そう、何もだ。
どれだけ強くなろうとも、どれだけ大きくなろうとも、人間一人の力で出来ることはたかが知れている。
では、諦めるのか？　自分一人では無理だと、諦めて、目を背けるのが正解か？　……成る程、それも一つの賢い生き方だろう。
諦めれば楽になる。見なければ気が楽になる。そうやって、生き方を定めていくのが賢い人間の在り方なのだろう。
……下らない。実に、下らない。
白河修司が求めるのは、賢い生き方でなければ、楽な生き方ではない。愚かだと蔑まれ、侮蔑されてもひた走る王道の道だ。
強くなっても一人ではたかが知れている？　そんな事、１０年以上前から知っている。故に、足掻くのだ。
何故なら、白河修司は知っているから。足掻いて足掻いて、バカみたいに進み続けて、その先に自分の望む未来があるのだと。
自分だけは決して届かない。だから人に頼るのだと。頼り、頼られ、その果てに……己の望むモノがあると、そう教わったのだ。
故に、扉は開かれる。この扉の先に在るものがなんであろうと、その先に自分の望むモノがあるのだと。
そうして、扉を潜った先に待っていたのは――――情報の宇宙だった。
〝――――――あ――――――〟
体が、綻んでいく。膨大な情報の津波に、嵐に、白河修司の精神が

磨耗していく。
其処には、無数の可能性があった。ガンダム。マジンガー。ゲッター。三体の鋼の戦士を筆頭に、数多の戦士達が戦場を駆けていく。
その光景を前に、修司は一つの解を得た。これは、自分の未来。無限に分岐された世界の中、しかしその最奥には必ずといっていい程に、一つの結末が用意されていた。
眼前に広がるのは、そんな、果てのない戦いに身を置いた自分が到達する世界。
……怖い。目の前に広がる戦いの光景に、自分もいつか列を並べるのだと、そうしなくてはいけないのだと、突き付けられている気がして。
白河修司が、シュウジ＝シラカワに染まる気がして。
けれど、その恐怖も一瞬だけ。引けていた足は、次の瞬間駆け出していた。
だって――――いつか見た白い背中が、自分の遥か前に佇んでいるのだから。

〝――――ついてこれるか？――――〟

一度だけ、此方を一瞥する視線がそう語る。お前に出来るのか？
そんな、分かりやす過ぎる挑発に、白河修司は笑って応えた。

〝――――上等、すぐに追い付いて追い越してやる〟

待っていろ。そう叫びながら駆け抜ける修司の先には――――
無限の宇宙が広がっていた。

人は、嘘を語る生命体である。――――偽りの黒羊。
人は、強欲の生命体である。――――欲深な金牛。
人は、死に怯える生命体である。――――沈黙の巨蟹。
人は、痛みを知る事で、他者を思いやれる生命体である。――――傷だらけの獅子。
人は、悲しみを知り、優しさを覚える生命体である。――――悲しみの乙女。
人は、迷い、悩み、揺れながらも、決断できる生命体である。――――揺れる天秤。
人は、知る事で世界と向き合う生命体である。――――知りたがる山羊。
人は、憎悪に身を燃やし、憎しみをもたらす生命体である。――――怨嗟の魔蠍。
人は、立ち上がり、前を見据える生命体である。――――立ち上がる射手。
人は、他者を無償の愛で包む事が出来る生命体である。――――尽きぬ水瓶。
人は、夢を見て、理想を思い描く生命体である。――――夢見る双魚。
人は、矛盾の中で、それでも生きていく生命体である。――――いがみ合う双子。

輝き抱くは十二の星。それはヒトの醜さと美しさを兼ね備えた混沌の理。それは身勝手で、我儘で、そして……どうしようもない程

に、眩しい。
数多の可能性を抱き、託された想いを胸に――――――今。
白河修司は――――――〝極〟へ至る。

◇

――――その違和感に、最初に気付いたのは、果たして誰だったのだろうか。本来なら極寒の如く寒気を感じる冥界がこの時、嘘のように熱く感じた。
体感的な熱さというより……心が、胸の奥が熱くなるような感覚。何故、自分達はこんな感覚を抱いているのか。
その不思議な感覚は、マスターである立香だけではなく、ホムンクルスであるマシュや神霊であるエレシュキガルやジャガーにまで伝播していき、夢魔であるマーリンや、境界の翁であるハサンにさえ及ぼしていく。
――――――来る。命を断つことに特化した山の翁だからこそ、その到来を予見する事が出来た。その胸中に確かな期待を抱き、そして……。
それは起きた。
「ウオオオオオッ!!」

吼える。冥界中を震わせる程の力の波動、嘗てない事象に一行は勿論、カルデア側の観測班も、何が起きているのか分からなかった。
唯一、カルデアに在籍している黄金の王は笑みを浮かべる。
『さぁ、見せてみろ。貴様の可能性を』
その王の囁きは、修司には届かない。だが、奇しくもその言葉に呼応するかの様に……修司の内から、銀河が溢れた。
「は、はわわわ、はわわわわわわ！　め、冥界に花だけじゃなく、星まで生まれたのだわーッ!?」
その光景に、冥界の女神はキャパオーバーとなり。
「オォォォ……」
その光景に、山の翁は感嘆の声を漏らし。
「これは、流石に予想外だね」
その光景に、花の魔術師は度肝が抜かれた。
輝き、瞬き、眩くて、熱い。それは命の輝き、人の可能性の、命の極致。
「凄いです。キラキラで、眩しくて、熱い。これが……命の、可能性の光」
人は、命とは、此処まで至れるモノなのか。何も知らないけれど、だからこそマシュ＝キリエライトは理解する。
あの冥界の底で輝くモノこそが、人がいつか辿り着く天（ソラ）の輝き。
無限に広がる可能性の輝きだと。
「っ、駄目ニャ、気付かれた！　ティアマトが彼を敵だと認識したニャ！」
そして、その輝きを潰そうと、ティアマトは動いた。目の前の輝きは邪魔だと、原初の神は何よりも修司の排除を優先させる。
赤黒い光。破壊の赤と黒い泥の色を織り交ぜた極光が、修司目掛けて放たれる。
「修司さんっ！」
ティアマトの放つ破壊の光に呑まれていく修司を見て、立香は声を張り上げる。冥界全体を揺さぶる程の破壊のエネルギー。
しかし、着弾した場所には彼の姿はなかった。

彼は何処に？　マーリンも翁も、修司の姿を見失う中、偶然ティアマトは気付いた。
上。巨体であるティアマトを一望出来る程上空へ飛び上がった修司は、これ迄の旅路を振り返る。
多くの人が、笑っていた。笑って、泣いて、怒って、また笑って。思えば、この世界での旅は大変だったけれど、それと同じくらい楽しい事が目白押しだった。
誰かを思う老人がいて、笑って遊ぶ子供がいて、それを守る大人がいて、彼等を導く王がいた。
そう、この古代の時代に確かな人の営みがあったのだ。
故に――――今だけ、この瞬間だけは彼等の為に拳を奮おう。
目を閉じ、目蓋に甦るのは、これ迄出会ってきたウルクの人々と、シドゥリ。そして……。
〝貴様が勝て〟
王の、この時代に生きる全ての人の想いを束ね――その全部を、拳に宿し。
「可能性（エヌ）を紡（マ）ぐ――――」
振り抜く。その拳に確かな熱と光を携えた一撃は、ビーストⅡの持つ回帰の権能すらも容易く突破し……。
「開闢（エリシュ）の拳ッ!!!」
「っ!!??」

創世の、原初の女神を――――殴り倒した。

冥界はおろか、地球（星）すら震撼させるその光景に、全員が言葉を失った。夢魔も、翁も、女神も、人も、ガルラ霊も、そして……ラフムすらも。
唯一、何処かで見ている王だけは、愉快に笑っていた。
「ナンデ!?　ナンデ!?」
「ナゼ、ニンゲンが神ヲ殴レル!?　母ヲ倒せる!?」
「有り得ないィィィ、こんナの、あってはナラナイィィィィっ!!??」

理解できない光景にラフム達が混乱の悲鳴を叫ぶ。その一方で、ビーストⅡが最も混乱に満ちていながら、それでも尚、問うた。

「Ａａ、Ａａａａ、ＡＡＡＡＡＡＡＡ――――!?」

何者だと、神の決定を覆す、お前は何者だと。

その言葉の意味を、修司は理解できない。それでも、冥界の地に再び降り立つ彼は応える。その瞳に、確かな輝きを宿して。

「俺は、白河修司。偉大なる黄金の王に仕えし臣下の一人で――――」

「貴様を、倒す者だ!!」

遥か古代のウルクの神話(世界)にて――――

新たな神話が誕生した瞬間である。

その１６３　第七特異点

「――――――何が、起きているんだ？」

焼却された人類史、人類に遺された最後の砦、人理保障機関カルデア。星見の天文台を冠する観測機関、レイシフトの観測を一手に担う管制室にて、ロマニの口からその場にいる誰もが抱いた言葉が溢れ落ちた。

今、自分達の目の前に起きている事象、藤丸立香に取り付けた通信機を通して流れてきている映像は、目の前にして尚、信じ難い光景だった。

人が、神を殴り倒した。有史以来、神と人の間には決定的な〝差〟が存在し、人が神を打ち倒すのは最大の偉業であり、最悪の禁忌でもあった。

そんな神を、中でも創世記の土台となる原初の女神を殴り倒したという事実は、これ迄多くのハチャメチャを目の当たりにしたロマニ達であっても、驚きを抱くには充分だった。

原初の女神を殴り倒した。その衝撃はロマニ達カルデアのスタッフ達に留まらず、在籍している英霊達ですら未知の出来事であり、愕然とさせていた。

武芸に秀でた者達は挙動すら読ませない修司の在り様に愕然とし、魔術に秀でた者達はあの輝きはなんだと目を剥いている。誰も彼もが未知なる光景に唖然としている中、唯一英雄王だけは感慨深そうに笑みを浮かべている。

「……全く、相変わらず気を揉ませる男よ。一体何時から焦らし上手になったのやら」

「おい英雄王、貴様、あやつの身に何が起きているのか、知っているのか？」

意味深に、そして知った風に語る英雄王に堪らず征服王が追求する。あの男の、白河修司が纏っている白銀の如き輝きはなんだと。先の彼の内から溢れた銀河の様な光といい、生前でも見なかったその光景は征服王に未知の興奮を与えていた。

「知らん」
征服王に限らず、周囲の多くの英霊が注目する中、呆気らかんと応える英雄王にその場の全員が肩透かしを受けた。
見るからにガッカリと項垂れる彼等に、少しばかり苛ついた英雄王は、そうさなと前置きを呟き、あるサーヴァントに話を振った。
「ギリシャの賢者、博識あるお前はあの男の姿で何か理解できたか？」
「――――いいえ、なにも」
「先生？」
「これ迄、私は多くの英雄を育ててきました。多くの歴史に名を刻む英霊を輩出してきました。しかし、それでも……彼の姿を意味するものが、なにも見付からない」
英雄王の問いかけに、賢者ケイローンは言った。自分には分からない。今の彼がどの様な状態で、あの輝きを纏う姿にどの様な意味を持っているのか、博識さで知られる彼の口から溢れる分からないの言葉、しかし、己の無知を晒しておきながら、ケイローンの顔に一切の陰りは見えず、その顔には征服王と同様に僅かな興奮に彩られていた。
そう、分からない。分からないのだ。古今東西の英霊が集結したこのカルデアに今の修司がどうなっているかは、誰も想像も、予想すら出来ないでいるのだ。
唯一確かなのは、あの輝きは魔術師達が目指す【根源】とは何の関わりもないという事。
前人未踏にして前代未聞。永きに渡る人類史の中で、ヒトが初めて踏み込んだ未知の領域、修司が纏う輝きを前に、改めて多くの英霊達は思った。
羨ましい。自分では辿り着けなかった境地に多くのサーヴァントが羨望し、嫉妬し、そして……誇りに思った。
人類の先はまだあるのだと、自分達はまだまだ発展途上なのだと。神秘もなく、加護もなく、恩恵も、呪いもない。何処までも純粋な人間である修司がそれを証明してくれた事に、多くの英霊は嬉しく思った。

これ以上の言葉は無粋。全ては、この戦いに答えが出る。これから始まる未知に、未来を映す己の眼すら置き去りにした臣下に、英雄王はただ一言――――。

「往け、ハチャメチャ小僧」

あの日、燃え盛る炎の街で出会った少年が、此処まで大きく成長し、これからもシンカを続けていく。ハチャメチャに満ちた見えない未来に笑みを浮かべて、英雄王はその言葉を贈った。

◇

「――――まだ、足りないな」

自身に満ち溢れる力、頭の天辺から足の爪先まで浸透していく力の奔流に、修司は自身の両手を見下ろして一人、不満気味に口にする。

まだ自分はこの力を使いこなせていない。完全に自分のモノとするには、何もかもが足りなすぎた。具体的にいえば、圧倒的に経験値が足りていない。

当然だ。如何に扉は拓かれたと言っても、まだまだ自分はスタートラインから一歩踏み込んだだけに過ぎない。本来であれば、今の一撃でティアマトは倒せた筈、それでもまだ目の前に佇んでいるという事は、まだこの力の事を理解仕切れていない事を意味している。

けれど、以前の冬木での聖杯戦争の時よりも深くこの力に触れられている気がする。慌てず、騒がず、心を落ち着かせながら深呼吸を繰り返し、改めて修司は眼前の創世神へ視線を向ける。

獣。神というより、獣に近い風体のティアマト神。神話に基づいた

その力は確かに恐ろしいのだろう。実際にその力の一端を受けた修司は死にかけたし、何度も駄目だと諦め掛けた。
けれど何故だろう。今の自分にはそう言った恐れや恐怖が微塵も感じない。あるのは何処までも静寂な凪の境地、唸って警戒を顕にしている女神に、修司は僅かの畏れも抱くことはなかった。
「どうしたティアマト、随分と大人しくしているみたいだが……まさか、俺が怖いのか？」
それは、挑発というより確認。目の前の障害を悉く破壊してきたティアマトが、何故か修司を前にして二の足を踏んでいる。創世記の神が何を躊躇っているのか、何となく思った言葉を口にすると……。
『Ａａａ、Ａａａａａａａａ――――！』
叫び、吼えるティアマトの背中から、無数の光の矢が降り注いでくる。分かりやすく激昂するティアマト、避ける余地など皆無な神からの弾幕。防ぐしかこの弾幕を潜り抜ける術はなく、同時にティアマトの足元から溢れ出る黒泥の海が、修司の逃げ道を塞いでいく。
飛べば赤黒い針に貫かれるか、泥にまみれてラフムと化すか。その最悪な選択肢を前に。
「フッ」
修司はそれら全てを見切り、回避していく。空を飛んでの回避ではなく、空間を利用しての跳躍。振ってくる凶弾を足場に、不規則に流れる泥の海を避けて、捌いていく。
避ける余地の無い攻撃を無傷で避けるという矛盾、しかし、神の追撃がその程度で終わる訳がない。溢れ、流れ落ちる泥はティアマト神の権能の結晶。命を産み通すその泥は、新たなティアマト神の子供達。
『こ、この霊基反応は……！』
「ドクター、どうしたの？」
『修司君を囲む十一のラフム、いずれも神霊級の……いや、魔神柱並の霊基を有している！　謂わばアレは新たなティアマト神の子供達だ！』

翼を持ち、通常のラフムより強靭の肉体を持つその個体は、これ迄のモノとは一線を画していた。見た目こそは通常個体のラフムと区別が付かないが、それでも同じ神霊であるエレシュキガルには分かったのだろう。大粒の冷や汗を流し、生唾を呑み込んでいるのがよりロマニからの報告に説得力をもたらしていた。

このままでは修司が危ない。現状、ティアマト神に最も有効な戦力である彼は、この決戦に於いて必要不可欠。そんな彼の負担を軽くするべく、立香達も駆け付けようとして……。

「フンッ」

盛大に、スッこけた。

『あ、あれ？　ティアマト神が新たに生み出した十一のラフムの反応……消失？　お、おかしいな？　計器の故障かな？』

修司へ押し寄せる十一の悪意。ティアマトから存分に力と権能を分け与えられた女神の子供達、魔神柱すら凌駕する力を持ったラフム達が、修司の間合いに入った瞬間、一瞬にして消滅してしまった。

なにが起きたのだと、混乱するロマニを余所に唯一平静を装って眺めていた翁は、震える感情を押し殺しながら口にする。

「――――そうか、汝の領域はもう其処までに至るのか」

「キングハサン？」

「怯える必要はない、契約者よ。アレはただ、腕で薙いだに過ぎん。最早奴にとって神は神でなくなった」

「え？　え？」

「正直に言うとしよう。――――視えなかったのだ。この翁の眼を以てしても」

ハサン＝サッバーハが眼にしたのは、修司の腕がブレた僅かな一瞬だけ。音もなく、挙動も、有りとあらゆる動きが山の翁の眼に掠る程度にしか映らなかった。

これが、可能性を示した修司の新たな極致。たった一度の薫陶を示した間柄でしかないが、それでも此処まで至った修司に山の翁も感慨深く思えた。

しかも恐らく、彼はまだその境地に踏み込んだだけ、更にその先が

あるのだと思うと……気持ちが昂ってしまう。
　これがワクワクというのなら、この感情も悪くはない。久しく抱くことの無い感情に、ハサン達の頭目は上を見上げる。
「いずれにせよ、我等ができる事は限られている。契約者よ、上を見ろ」
「っ、あれは！」
　翁に言われて上を見上げれば、無数のラフム達がティアマト神に向かっている。恐らくは修司の妨害に向かうつもりなのだろう、今更彼にラフム程度に不覚を取られる要素はないが、それでも自分達はチームだ。この特異点最後の戦いに自分のすべき事を見出だした立香は、改めて皆に乞い願う。
「お願い皆、力を貸して！」
「此処へ来て総力戦か。骨が折れるけど、やるしかないよね！」
「よっしゃー！　残された数少ない活躍の場、やったるニャーッ！」
「あぁもう！　こうなったらやぶれかぶれだわ！」
「先輩！」
　此処まで、自分達は多くの人達のバトンを受けてきた。お前達に任せると、そう言ってくれた黄金の王に報いる為に……。
「やろうマシュ、皆！　全員、迎撃準備！」
　藤丸立香は叫ぶ。決戦に臨む修司を確実に勝たせるべく、立香は仲間達と共に、ラフムの群れに吶喊していくのだった。
　そんな彼等を尻目に、修司は笑みを浮かべる。これで、自分はティアマトに専念できると、自分を見据えるビースト（人類悪）Ⅱに向けて、修司は全身に力を入れる。
「行くぞティアマト、今度は……こっちの番だ」
　揺れる。目の前にいる筈の修司が一瞬だけブレると、その姿を掻き消した。何処へ行ったと辺りを見渡すティアマトだが……ふと、自身の体から光が瞬いた気がした。
　瞬間、無数の衝撃がティアマトを貫き、その巨体を宙へ浮かばせた。見れば衝撃のあった箇所には人間サイズの拳の痕がクッキリと浮かび上がっている。

再び、獣神の思考にノイズが走る。〝何故？〟　何故小さな人の拳に、真体である我が肉体が痛みを負っている？　ダメージを受けている？

分からない。神の思考回路を持ち、原初の神であるティアマトでも、今起きている事象の分析は出来ずにいた。何度試みても結果は測定不能（error）、そんなバカなと何度も計算と分析を続けても、結果は不明のまま。

一体、このヒトの子は何だというのだ。どれだけ思考を割いても分からない事象、この惑星に刻まれているどの歴史にも刻まれていない未知の力。

ただ一つ言える事は、ティアマトは畏れている。人の裁定者である英雄王ではなく、天の鎖ではなく、正真正銘ただの人間でしかない……白河修司（小さなヒト）に！

『ＡＡＡ

全ては、己の願いを叶える為、回帰を願う獣は、決して譲れない願いの為に、悲痛の雄叫びを上げて――――――立ち上がった。

◇

『嘘ォッ!?　ティアマト神が立ったァッ!?』
「まさか、ネガ・ジェネシス!?　ティアマト神め、冥界の束縛から脱する為に、自らの理で自身を書き換(自己改造)えさせたか！」
「そんなんじゃないわよ」
冥界に落ちて竜体となり、そこから更に人に近しい形となって立ち上がるティアマトに、ラフム達を迎撃していたマーリン達は度肝を抜かれた。
此処へ来てまさかのティアマト神の自己進化。勘弁してくれと表情を強ばらせるマーリンに、漸く合流できたイシュタルが否定する。
「あのバカ、母さんを本気にさせる為に、わざと手を抜いたわね」
「――――――え？」
『は、はぁぁァッ!?　手を、手を抜いたぁぁァッ!?　この場面で!?　この土壇場で!?　なにやってんのアイツゥゥゥッ!?』
ティアマトに対して、手を抜いた。神話の叙事詩にも乗っていないようなその一文に、流石のロマニもぶちギレた。彼の言うことに一切合切文句を挟むつもりはないが、それでも何か理由があるのではないのかと、立香はイシュタルに尋ねた。
「まぁ、本人はそのつもりはないんでしょうね。ただ、汲み取ろうとしてるのよ。母さんの願いを、魔術王の手先にさせられて、ビーストなんかになってまで叶えたかった願いと向き合わせる為に……」

本当、この身体になってからと言うものの、余計な記憶ばかりが頭に浮かんで参ってしまう。興味もない人間の、知りたくもない一面を思い浮かべてしまうのだから。
白河修司は、正面から挑むのだろう。自己進化を繰り返し、力と強さを募らせていく創世の神を、真っ正面から打ち砕く為に。
「――――そんだけ心の贅肉を抱え込むんだから、負けたら承知しないわよ」
それは天の女主人の言葉か、はたまた別の誰かの感想か。呆れの混じった溜め息を溢すイシュタルだが、何故かその表情は――――何処か、晴れやかに見えた。

◇

「それが、アンタの本気か」
カルルと唸り、人である修司を見下ろすティアマト。竜と人の混じったその形態は何処までも歪で、苛烈だった。十字に開いた瞳孔からは此方を侮っている様子は微塵もなく、倒すべき敵として修司を見ている。
思えば、自分は割りとこう言う所が多い気がする。本来なら楽に勝てる相手を変に怒らせ、覚醒させ、要らぬ苦戦を強いられる。恐らく、カルデアで観測しているロマニ辺りなんて、今頃酷く憤慨している事だろう。
この大事な決戦に、なんてバカな事をしたものか。我ながら呆れてしまう己の所業――――だが。

「今のアンタを倒したら、俺はもっと先に行けるのかな？」
この先の事を考えると、何処か楽しみにしている自分がいて。
「――――なんだか俺、ワクワクしてきたぞ」
自然と、修司の頬はつり上がっていた。
『ＵｒｒｒＡａａａａａ――――!!』
雄叫びと共に振り下ろされる拳、たった一人の人間を倒すために奮われたその一撃は、冥界を激しく揺さぶった。しかし、手応えはない。舞い上がる砂塵の中にも例の輝きは見えず、ティアマトが周囲を見渡して修司の姿を追おうとして――――彼女の顎が、跳ね上がった。
「どうやら、そのデカイ図体では俺を捉えるのは無理そうだな」
見れば、自身の腕を振り上げていた修司が其処にいて、僅かな呆れの言葉を口ずさんでいる。本人からすればただの事実確認、しかしそれを理解できないティアマトは吼えながらその拳を奮う事しか出来ない。
より強靭に、より頑強に、より俊敏に、より最強に。この惑星で最も強い個体に至るべく、ティアマト神は自身の改造を続けた。
奮う拳が加速する。絶え間なく凶弾は降り注ぎ、泥の海が冥界を覆っていく。
――――なのに。
『Ａａａａａａａａ――――!?』
当たらない。自身の攻撃が、あの輝きを捉えることが出来ない。追い付くことが、出来ない。
加速する。目の前の白銀の光がより強く、より熱く、輝きが増していく。その眩しい光を消そうとティアマトは蹌くが、彼女の手では届かず、掠る事すら敵わない。
追い付けない。彼の強さに、彼のシンカに。どれだけ自己を改造しても届かない光を前に……ティアマトは、全てを終わらせる事を決めた。
己の核としている炉心を全力解放し、全てのエネルギーを使って薙ぎ払う。水爆級のエネルギーを誇るティアマト神が放つ最後の一撃。
冥界だけでなく、シュメルの大地そのものを無へと帰す。それだけ

のエネルギーが、ティアマト神に集まっていく。
創世の神が、全ての権能を活用して、たった一人の人間を屠る為に活動している。大気が震え、大地が揺れる。世界の終焉を前に……。
「――――いいぜ、最後の一勝負といこうか！」
白河修司は、やはり正面から受けてたつ。
「かぁ――――」
構えるは必勝、それは限界を超えた修司が選ぶ最も慣れ親しんだ奥義。
「めぇ――――」
白銀の光の中に、蒼く輝く星が生まれる。
「はぁ――――」
集い、混じり、収束していく。対するは、全てを燃やす燼滅の光。
「めぇ――――」
その光景に、誰もが確信する。これが最後だと、この一撃で全てが決まると、神も夢魔も死神も人も、全てが静観し見守るなか。
〝――――往け、小僧〟
黄金の王の言葉が、修司の耳朶を叩いた気がした。
「波ァァァァァッ!!」
「ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡッ!!」
放たれる極光と極光、激突したその光は一瞬の拮抗にも拘わらず、冥界を蹂躙していく。
そう、一瞬だった。シュメル全土を消滅させ、半ば自暴自棄となったティアマト神の決死の一撃。文字通り神の全てを込められた一撃は、修司の放つ蒼白い閃光を打ち消す事は出来ず……。
ティアマト神は、冥界の奥深くへと突き抜けて行った。
――――止まらない。ティアマト神の埋没は止まらない。蒼い閃光に打ち破れ、冥界の底を突き抜けたティアマトは、幾つもの時代（テクスチャ）を物理的に破壊しながら落ちていく。
深淵を、内海を、虚数すら射ち貫き、最後に到達したのは――――。
（――――宇宙（ソラ）？）

外装が溶け、全ての権能が破壊し尽くされたティアマト神が眼にしたのは、宇宙だった。何故、自分は宇宙にいる？　機能不全となった思考を回転させ、周囲の状況を視たティアマトは理解する。

自分は、地球から押し出されたのだと。地殻を穿ち、マントルを貫通し、外核をぶち抜き、内核を掠り、ウルクとは正反対の地表に出て、そのまま押し出される形で自身は宇宙へ押し出されたのだ。

嗚呼、地球とはこんなにも蒼かったのか。外界に打ち出されたティアマト、その眼に自身のあった惑星（星）を見据えると、地表に穿たれた巨大な孔から一つの星が見えた気がした。

細く、小さな光。瞬く間に大きく強く輝きを増していくそれは、正しく輝く星であった。

（――――ティアマト、アンタはアンタで、叶えたい願いがあったんだろうな）

輝く星――――修司は、自ら穿ち貫いた孔を通って、その先の宇宙で揺蕩うティアマトを見て思う。嘗て、かの女神は穏やかな性格で、慈悲深いと、その昔、子守唄代わりに王から聞いた記憶があった。

彼女がこうなったのは、人類史（自分達）にも責任はある。そう語る王に修司は誓った。

〝なら、その心配がなくなる位、強くなってやる〟そういい放つ自分に、王は〝そうか〟と笑った。

ティアマトの願いを踏みにじる。其処に一変の後悔も罪悪感も在りはしない。抱くのはただ、この出会いと巡り合わせに対する……感謝である。

子はいずれ、親から巣立つもの。それは人と神であっても変わらず――――故に、修司は拳を奮うのだ。

イメージするのは、最強の一撃。先の一撃よりもずっともっと深く強く、力を拳へ集約させていく。

応用するのは无二打（にのうち要らず）。紡ぎ、繋げるのは人の新たな可能性。

故に。

「可能性（エヌ・マ・エリ）を紡ぐ開闢（シュ）の拳」

その一撃は確かに、神を撃ち貫いた。

その１６４　第七特異点

「――――――う、ん」
　微睡みの意識が浮上し、目を覚ました藤丸立香が目にしたのは、澄んだ青空。流れ往く雲を見送りながら、混乱する意識を落ち着かせ、今が人類悪の一つであるビーストⅡとの決戦のただ中だった事を思い出した立香は勢いよく跳び跳ねる。
　ティアマトは、ラフムは、一緒に戦っていた皆はどうなったのか、何だかこの短い間に気を失う事が多い気がする事を自覚しながら、立香は隣に寝息を立てているマシュを優しく起こす。
「ふみゅ～……先輩？　おはようございましゅ……」
　取り敢えず、マシュの方は何ともないようだ。やや寝惚けている様子のマシュを尻目に周囲を見渡すと、立香は今自分達のいる場所がウルクであると理解する。
　いや、それは最早ウルク〝跡〟と呼べる程に荒廃としていて、荒れた街並みがあの戦いが現実であった事を裏付けてくる。果たしてあの後一体何が起きたのか、立香は自分なりに思考を巡らせていると……。
「お、起きたみたいだな」
　聞き慣れた……あの人の声が聞こえてきた。振り向けば立香の想像通り、上半身が裸の修司が、なんて事ないように佇んでいて。
「取り敢えず……お疲れさん」
　手を伸ばしてくるハイタッチを促してくる彼に、立香もまた笑顔で応え、伸ばされた修司の掌を、思い切り叩くのだった。
『……ビーストⅡの霊基崩壊、完全に確認。三人とも、本当にお疲れ様。特に修司、おめでとう。君の健闘ぶりは歴史にこそ記される事はないけど、僕たちは決して忘れないことを誓うよ』
「なんだよロマニ、そう言う割には顔が暗いぜ？」
　通信機器も回復し、感度良好に通信してくるロマニ。彼の心からの

称賛は立香達に今回の戦いの完全勝利を実感させるが、労うその口振りに反して彼の表情は何処か暗かった。
『だってさ、君、地球をぶち抜いているんだよ？　え？　なに？　君って実はマジモンの戦闘民族だったりするの？　出てくる作品（ジャンル）間違えてない？』
　案に修司を人外認定してくるロマニだが、彼のその言い草にもある程度の理解はされていた。何せ幾らビーストⅡを倒すためとは言え、修司は一度地球を文字通りぶち抜いているのだ。
　しかもビーストⅡことティアマトが消滅する際、修司の位置情報は宇宙にあるとカルデア側に示されているのだ。他にも、修司の身体から発せられていた白銀の輝きやその力の凄まじさ、仰天過ぎる出来事を多々目撃したロマニは、皮肉な言葉を出すので精一杯だった。
「ンな事言われてもなぁ、俺は夢中で戦ってただけだし……」
　そんなカルデアの司令代理に、修司は呑気な口調で返答する。全てはティアマトという人類悪を倒す為に必要だった事、その際に生じた過程の事を注意されても仕方がない。
　ロマニもそれが分かっているからこそ、それ以上追及してくる事はなかった。とにもかくにも、今はただビーストⅡという強大な敵を撃ち押せた事を喜んでおこう。
「……あの、蒸し返すようで申し訳ないんですけど、あの後冥界はどうなったのでしょうか？　それに、皆さんへのご挨拶がまだですし……」
「冥界の事なら、心配は要らないわよ」
　ティアマト神という元凶を倒せた事で、この特異点は間もなく修正される。その間に心残りが無いようにあの後に起きた出来事の説明を要求するマシュに、ロマニ変わって第三者が答えた。
「あ、イシュタル！　良かった。無事だったんだ！」
「この私があの程度で死ぬわけないでしょ？　こう見えて、しぶとさには自信があるんだから」
　立香達と一緒に最後まで戦ってくれたサーヴァント。天の女主人ことイシュタルが、冥界への杞憂は必要ないと、断じる勢いで応えて

くれた。
「本来なら、生きた地上の人間に手を貸したペナルティとして、エレシュキガルには近い内に罰が下されるでしょうけど、今回はもしかしたら比較的軽めに済むかもしれないし」
「え？　ば、罰って？」
「本来、冥界の神は生者に対して個人的な事情で力を貸し与えることは禁忌とされているの。幾らティアマト神を倒す為とは言え、冥界は死した者に残された安住の地。それを侵したら、喩え冥界の女神であっても厳罰は免れないわ」
「けれど、この場合はその限りではない。そうでしょ、イシュタル？」
「え、う、うそ……」
「ケツァルコアトルさん！　生きて、生きていたんですね！」
　本来であればエレシュキガルは厳罰に処され、何らかのペナルティを受ける必要が出てくる。不穏に語るイシュタルだが、その不安を払拭する様に新たに二つの気配が近付いてきた。
　そのうちの一つが、ティアマト神の足止めの際に自ら身を散らしたと思われていた太陽の神、ケツァルコアトル。ジャガーマンに肩を借りながら姿を見せた彼女に、立香とマシュは眼に涙を溜めながら彼女の下へ掛けよった。
「いやー、本当に大変だったんだからぁ。ククルんてばお星様になり掛けてるし、あのまま放置してたら黒い泥にフェードインしていたし、私が決死の覚悟でレスキューした後、生き残ったウルクの人達と安全な所に移送して、その後冥界へダイヴ。……誰か、真面目にアタシの事褒めれ」
「マジかよジャガ村先生、ちょっと有能すぎない？」
　自分達がティアマト相手に奮闘していた一方、陰ながら大金星を挙げていたジャガーに、修司は心の底から感心し、褒め称えた。悪側面のある神霊にしては面倒見が良いのは、もしかしたら依り代となっている人物の影響なのかもしれない。
「立香、マシュ、そして修司、おめでとう。あなた達の奮闘、遠くからではありますが見させて戴きました。――――そして、修司」

「うん？」
「ありがとう。アナタの存在は私達神々に大きな意味をもたらしてくれました」
　未だに宝具の反動によるダメージは重く、片足を引き摺る太陽神。しかし、それでも持ち前のルチャドーラ精神で明るく振る舞い、立香とマシュに抱き付く彼女は、今度は修司へと向き直り、その頭を下げた。
「お、おい、いきなりどうした？」
「貴方が踏み込んだ領域。それはこれ迄の人類史の中でも誰も到達出来なかった場所、アナタはこの日、人類の進捗を大きく前進させたのよ」
　修司が至ったとされる新たな可能性。それは山の翁の眼を以てしても捉えられず、黄金の王の見識を以てしても不明とされた未開の領域。人類の歴史を大きく前進させたと豪語するケツァルコアトルに、修司は今一つ理解できなかった。
「――ふふ、今は分からなくても大丈夫。だって私にも分からないんだもの。アナタはこれ迄通り、アナタらしく進んでくれればいいわ」
「なんか、神様ッポイ事を言うな。……神様だったわ」
「そうデース！　私は太陽神ケツァルコアトル！　ルチャを愛し、ルチャに生きるルチャドーラ！」
「おっと、そろそろアタシ等も退去っぽいニャ。そんじゃ青年少女達、サラダバー！　あ、そうそう、カルデアに戻ったら是非とも喚んでね！　きっと喚べる筈だから！　具体的に言えばエから始まってヤで終わる三文字名前の人に宜しく言って――――」
　言いたいことを言って、目の前から〝座〟へと退去していく神霊達。その賑やかさから最後までらしさを感じた立香達は一緒に戦ってくれた戦友二人に手を振って完全に消える最期まで見送った。
　途中、何やら早口で捲し立てるジャガーマンの事を忘れる事にして。
「さて、それじゃあ私達は歩きながら話しましょうか。立香も色々と

聞きたい事がありそうだし」
「あ、うん。なんかドクターから聞き捨てならないことを聞いたんだけど……修司さん、地球をぶち抜いたってどゆこと？」
　ケツァルコアトルとジャガーマンという二柱の神霊と別れると、イシュタルに促されるままウルクの市内を歩いていく。その際、ロマニが言っていたとんでもないことを事実を思い出した立香は、改めて修司に訊ねた。
「あー、うん。なんかそうらしい」
「そ、そうらしいって……」
「いや、確かに自覚はあったし、覚えてもいるよ？　でも、実際孔は塞がれているんだよなぁ」
　ティアマトと修司の見舞った最後の攻防、その力比べに打ち勝った修司は、ティアマトを地球の裏側へ物理的に追いやり、地表を超えて宇宙へ弾き飛ばした。
　自らが開けた孔を通って、最後の一撃を見舞った所までは覚えているのだが……逆を言えばそれだけ。その直後の記憶はあやふやだし、気が付けばウルクの大地に立っていたのだ。
　恐らくは特異点修復に於ける事象だろうとロマニは推測している。
「それは多分、聖杯の影響だろうね」
「あ、マーリン！　いなくなったと思えば此処にいたんだ！」
「チッ、イキテタフォーウ。シブトイフォーウ」
「――――なぁ、この小動物、絶対人間並みの知能持ってるよな？」
　そんな立香達の疑問に答えたのは、焼け残った家具の椅子に腰掛けるマーリンだった。花の魔術師の登場に立香達も沸き立つが、フォウだけは唾を吐き捨てていた。
『って言うか、聖杯は君が回収していたのかい？』
「まぁね。そこのトンチキ君が聖杯の回収を忘れてたから焦ったけど、地球（ガイア）が幸いにも手をのばしてくれたから、こうして僕が回収できたって訳」
「ガイア？　どうして自衛隊最高戦力の超軍人が出てくるんだ？」
「修司さん、それ多分違うガイア」

聖杯を回収出来たのは地球のお蔭。その言葉のニュアンスを今一つ理解できない立香と修司は揃って首を傾げているが、あまり気にする必要はないとマーリンは言う。
「簡単に言えば、私達の住んでいる地球は独自の意志を持っていて、地球の願いに呼応した聖杯が君の開けた孔を塞ぎ、私の手に流れてきたという事さ」
「ふーん。地球にも意志、ねぇ」
「実を言うと、エレシュキガルの厳罰が軽くなるかも、ていう話しも其処から来てるのよね」
「え、そうなの？」
「個人的な事情で力を貸し与えることは冥界に対する裏切り、けれど今回は人類悪となったティアマト神を倒すのに必要な手段、そして……」
そこまで言うと、イシュタルは修司を一瞥し……。
「星すらぶち抜く大バカ野郎の出現なんて、予測出来るわけがない。という言い訳があるからね」
地球を貫き、自ら住まう惑星に風穴を開ける。そんな事例なんてこれ迄無かったことだから、これ等を含めてエレシュキガルただ一柱に責任を負わせるのは無理がある。よって、エレシュキガルに下される罰は比較的に軽く済むのではないか？　と言うのが彼女の見解である。
「そっか、それならいいの……かな？」
「良いのよ。アンタはただ、あの子の事を憶えてくれれば。それだけで満足だって、言ってたし」
（ん？）
憶えてくれればそれでいい。その言葉のニュアンスに何処か引っ掛かりを感じるが、今の自分達に其処まで気を回せる余裕はない。もうじき特異点の修復は本格的に始まり、立香達は直にこの地を後にする。
それまでにはアイツと顔を合わせてやろうと、改めてイシュタルが歩くことを促すと、それを知ったマーリンが椅子から立ち上がる。

「さて、それじゃあ私もそろそろお暇するとするよ」
「マーリン、ありがとう」
「――――フフ、以前の私はそう言った言葉を聞いても何の感情も沸かなかったのに、今は少し違う。私も、多少はマトモになったのかな？」
「では、一先ずさようなら。カルデアの諸君、君達に澄み渡る青空があることを……ファンとして、共に戦った仲間として、祈っているよ」
　この特異点が修正されれば、マーリンは再びあの塔へ幽閉される事となる。他人の人生を物語（スクロール）としてでしかマトモに認識出来ない夢魔。
　自分と同じく、それでいて違うやり方で新しい紋様（エンド）を刻み込んだカルデアの一行に、彼なりのエールを送りながら、聖杯をマシュの盾に託してその場から消えていった。
　そんな彼を先の神二柱の時と同様に最後まで見送ると、遂に立香達は其処へ辿り着く。ウルクを見下ろす高台、ジグラットの屋上――――天の丘である。
　そこに、彼はいた。
「来たか。思っていたより遅かったではないか」
「ぎ、ギルガメッシュ王!?」
「ど、どうして此方に!?　いやそもそも無事だったのですか!?」
　目の前の黄金の王は、修司の受けた傷を引き受けて、自らの終焉を望んでいた筈、だから目の前で平然としている事に、立香もマシュも大層驚いていた。
「いや、我はちゃんと死んだぞ？　今この場に立っているのは、英霊としての我よ」
　笑いながら死んだと笑う王に、二人は見るからに肩を落とした。とんだブラックジョークだと憤慨している立香を愉快に笑いながら、人類最古の王は修司へ視線を向ける。
「――――さて、我の命令通り、やり遂げた様だな」
「あぁ、無茶振りを振られるのは昔から慣れているからな。それに応

えるのも……な」
　思い返すは、ウルクがイシュタルの宝具で崩壊する最中、伸ばした修司の手を振り払った時。
『――――貴様が勝て』
　王が下した最期の指令。その内容を完膚なきまでに遂行して見せた修司に、王は不敵に笑みを浮かべた。
「本来であれば、英雄王としての我の姿を見せてやるつもりだったがな、その必要はないと思い止まったわ」
「え？　ど、どうして？」
「惚けるな。既にカルデアに居るのだろう？　嘗ての我が」
「そ、それは……」
「良い。大体の予想はついている。大方、余興と称して遊び呆けているのだろう？　我が事ながら眼に浮かぶ」
　本来ならティアマトとの決戦時に参戦するつもりだったとギルガメッシュ王は言う。ただ、修司の戦い振りと強さを目の当たりにし、その必要はないと安堵し、見守る事に専念できた。恐らくは、カルデアに居るもう一人のギルガメッシュ王による采配なのだろう。呆れた様子で修司を見やる王は、深く溜め息を溢した。
「――――此度の戦いに決着を着けた貴様等には褒美を取らせたいところだが……生憎と、土産になるようなモノはこれしかない」
　そう言って修司に手渡してるのは、麦酒の注がれた黄金の盃。見るからに未成年である立香では飲めないので、代わりに修司が受け取り、一息に飲み干した。
「……旨いな、これ」
「当然よ、我がウルクの名産だからな」
「いや、て言うかアンタそれ、普通に聖杯じゃない!?」
「ウルクの大杯!?　ど、どうしてこれを!?」
「言ったであろう、土産になるのはこれしかないと」
「でも、俺としてはこの麦酒の方がよっぽど価値があったよ。成る程、勝利の美酒とは良く言ったモノだ」
　ウルクの大杯を土産として持たされる事よりも、飲み干した麦酒の

味の方が修司にとって価値は大きかった。この麦酒にはこれ迄過ごしてきたウルクの全てが詰まっている気がして、それだけで修司は嬉しかった。
「さて、本来なら此処で終わる所であったが、最後に一つ話しておくべき事があったな。小僧、貴様は以前シドゥリの事で思い悩んでいた時があったな」
「……うん」
「その嘆きは確かに正しい。だが、話しはこれだけでは終わらないのだ。知っていたか？　シドゥリには遠縁の甥っ子がいたことを」
「――――え？」
「ゴルゴーン討伐の当日、例の化け物が北壁を半壊させた時、貴様は身を呈して北壁から化け物を遠ざけた。お蔭で彼の少年は今日まで生き延びる事が出来た」
「――――――」
「胸を張れ。貴様は確かに、シドゥリの遺志を守り通したのだ」
守りたかった人は、守れない。それが自分の宿命だと、修司は半ば受け入れていた。どれだけ強くなった所で、大事なモノは守れないと。
けれど、そうじゃなかった。シドゥリという女性を失っても、喩えその縁が細くても、修司は彼女に連なる確かな意思を――――守る事が出来たのだ。
目元から、涙が溢れてくる。大の男が情けないと、どれだけ拭っても、涙が止まる気配はない。そんな、声を圧し殺して泣く修司を、立香達は敢えて触れない事にした。
「全く、男が簡単に涙を流すなと言うのに……まぁ、此度の活躍を以てそれも由としよう。――――藤丸立香」
「は、はい！」
「此度のシュメルでの旅路、どうであったか？　それなりに長く滞在した筈だと、我は記憶しているが？」
泣きじゃくる修司を尻目に、王は立香へと訊ねる。此度の旅はどうだったと、明らかに確信している様子のギルガメッシュ王に対し、立

香はマシュと顔を見合せて……。
「「楽しかったです！」」
「フォーウ！」
　大変な事があった。辛いことも、悲しいことが多くあった。けれど、それと同じくらい痛快で、ハチャメチャで、ワクワクした旅でもあって……だから、彼女達がそう応えるのも、必然だった。
　そんな彼女達の快活な言葉に、王は笑う。
「ではさらばだ、カルデアの！　此度の戦い、まさに痛快至極の大勝利！　貴様等の帰還を以て、魔獣戦線は終結とする！　人理焼却、必ずや阻止して見せよ！」
「「ハイッ！」」
　最後まで不敵の笑みを絶さないまま、黄金の王は消えていった。これで、本当に終わり、長い長いウルクでの旅を終えた立香達、そんな彼等を迎え入れる様に、カルデアからの回収作業が始まった。
「それじゃあ、私も行くわ。新しいウルクの王朝が建てられるまで見守るのが、私の最後の役割だしね」
「イシュタルもありがとう、貴女のお蔭で色々助かりました」
「そう？　なら、お返しはカルデアに召喚された後にゆっくりと回収させてもらうわね。……所で、そっちに褐色白髪の弓兵がいたりしない？」
「あ、それなら俺がキチンと紹介するから、心配しなくていいよ」
　カルデアの厨房から、弓兵の悲痛な叫び声が聞こえた気がしたが、修司は全力で聞こえないフリをした。
「さて、それじゃあ立香、マシュ、修司、縁があったらまた会いましょう。その時は、そっちの時代を楽しませて貰うわね」
　そうして、天の女主人は立香達と別れ、空へと飛翔していく。そんな彼女を見送りながら、立香達はカルデアへと帰還していくのだった。

「――――終わったか」
一方、北壁にて。ギルガメッシュ王から最期の命令を遣わされていたレオニダス、ラフムとの激闘を制し、遂に最期まで立ち続けてきた守護の英霊は城壁から砦を後にする人々を見守りながら、一人言葉を溢す。
「まさか、私が最期まで生き延びるとはな」
これ迄、長く険しい戦いの連続だった毎日が、今日を以て終わりを告げる。人類最古の王に喚ばれ、人々を護り続けてきた盾の英雄レオニダス。
これから生き延びた人々にはこれ迄以上の苦難が待ち受けているだろう。けれど、レオニダスは確信する。人類の歩みは終わらず、これからも一歩ずつ進んでいくのだと。それが、いつか彼等と出会う縁に繋がるのだと、隻腕の英霊は優しい笑みを浮かべて……消えていった。

「よもや、この吾が人の為に戦う事になるとはな」
所変わってエビフ山のとある場所。女神イシュタルの目を掻い潜って、これ迄生き延びた一匹の鬼。自分の事を棚にあげて、下山していく人々を見送りながら、天の邪鬼な小鬼は一人愚痴る。
「ふん。まぁ、これも一つの余興と思えば、悪くない日々であったわ。そうであろう？　酒呑」
最も、人間の為に戦うなど懲り懲りだと溢しながら、羅生門の鬼もまた消えていく。
人も神も、全てが集い戦った魔獣戦線。決して語られる事のない戦いの毎日は、こうして幕を下ろすのだった。

―――――定礎復元―――――

◇

〝緊急事態発生（エマージェンシー）。緊急事態発生（エマージェンシー）〟

〝カルデア外周部　第七から第三までの攻性理論、消滅。不在証明に失敗しました〟

それは、最後の戦いの合図、これ迄カルデアの全員が望み、待ち望んでいた瞬間。

〝館内を形成する疑似霊子の強度に揺らぎが発生。量子記録固定帯に引き寄せられています〟

〝カルデア外周部が２０１６年に確定するまで、あとマイナス４３６８時間〟

〝カルデア中心部が、２０１６年１２月３１日に確定するまで、あと??????時間　です〟

それは、人類の焼失を望み、実行し、破壊してきた絶対的敵対者からの招待。

漸く、此処まで来た。七つの時代を巡り、漸く辿り着けた決戦の舞台。

もう、言葉はいらない。もう、遠慮はいらない。持ち得る力を結集させて、挑むのみ。

故に、Ｄｒ．ロマニは宣言する。

「本日を以て、カルデアの全職員の人命は、ロマニ＝アーキマンが預かる。――――マスター、藤丸立香。並びに白河修司。そしてマシュ＝キリエライト」
「これより一日の休息を与える。精神、肉体の状態をベストコンディションに。君達がこの管制室に戻ってきた時、カルデアの最後の作戦を開始する」
「向かうべき特異点の名はソロモン。終局特異点、冠位時間神殿ソロモンだ――――！」

その１６５

――薄暗くなった通路を、一人の男が歩いていく。先の第七特異点にて致命傷を負いながらも激闘を制し、レイシフトからの帰還直後からこれ迄の間眠っていた男は、とある部屋の前へで立ち止まる。

「――漸く、ここまでこれたな」

男――白河修司は、目の前に聳え立つ部屋へ通じる扉の前で、感慨深く呟いた。最初は王の命令に従い、流されるまま戦い続けてきたが、カルデアでの日々は修司に様々な成長を遂げさせた。

多くの英霊と出会い、様々な強敵達と出会い、戦い、死にかけ、そして強くなった。ギリシャ最大の英雄ヘラクレス。ケルト神話の光の御子クー・フーリン。インドの施しの英雄カルナ。初代暗殺者であるハサン。他にも歴史に名を刻まれた英雄達との戦いは修司に心身共に成長させ、シンカを促してきた。

何の為に？　決まっている。この戦いは全て、未来を取り戻す戦いなのだ。

「――本当は、お前等と一緒に旅をしたんだよな」

扉に触れるが、開かれる事はない。この部屋はレイシフトをサポートする管制室に次いで重要とされている施設であり、４７名の魔術師達が眠る保管室だからだ。

この中には自分を敵視している魔術師達とは別に、修司が組んでいたＡチームの面々も眠っている。未だ冷凍保存され、カルデアが爆破されたままの仲間達。もし彼等がライノールによる爆破から免れていたら、彼等とどんな冒険が出来たのだろうか。

共に戦場を駆けたのか、一緒になってバカ騒ぎをしたのか、共に窮地を乗り越え、共に勝利を掴めたか。誰一人欠けることなく、人類の未来を勝ち取れたか。

「――でも、それは夢だ」

どれだけ夢想しても、届くことはない。それは、これ迄の皆との旅を否定する事に他ならないから。
だから、修司は一つだけ約束する。
「見ててくれ。俺達は……絶対に勝つからさ」
唯一残ったAチームの一人として、修司は必ず勝つと約束する。目を覚ました彼等に、胸を張って報告出来る様に。
「あれ？　修司さん、ここにいたんだ？」
「ん？　あぁ、立香ちゃんか」
少し離れた所から声が掛けられたので振り返ると、いつものカルデアの制服に着替えた藤丸立香がやって来た。思えば、彼女も気の毒な人間だ。
拉致同然にカルデアに連れてこられ、挙げ句の果てに人類最後のマスターとして戦いを強いられ、今日まで死ぬ程恐い目に遭ってきた。凶刃に晒され、悪意に晒され、敵意に晒され、殺意に晒されてきた。これ迄の彼女の人生経験からは考えられない体験だった筈、そんな彼女がよく此処まで戦ってこれたなと、修司は素直に尊敬の念を抱いていた。
「もしかして……Aチームの人に？」
「まぁ、そんな所だな。次の特異点で最後だからな。今の内に、やるべき事は済ませておこうと思ってね」
邪魔をしたかな？　申し訳なくそんな事を口にする立香に、そんな事はないと修司は軽く首を横に振る。とは言え、いつまでも此処にいては彼女に余計な気遣いをさせてしまうと察し、後ろ髪を引かれる思いをしながら、修司は保管室前を後にする。
そんな彼の隣に並ぶように立香は歩み寄る。
「修司さん、身体の方はもう平気なの？」
「あぁ、ロマニから最優先で休むように言われていたからな。ぐっすり一眠りできたお蔭で体力気力共に全快よ」
心臓を貫かれ、一時は死にかけていたというのに、以前よりもタフネスさが増している修司に立香は流石と苦笑う。しかも其処から復活する度に強さも飛躍的に増していくのだから、より一層某戦闘民族

染みている気がしてならない。
　でも、そんな彼のデタラメ具合を目にするのも次で最後だと思うと……なんだか寂しく感じた。
「――――此処まで、来たんだね」
「……そうだな」
「長いようで、短かったね」
「そう、だな」
　七つの特異点を巡り、その途中で様々なハプニング（イベント）にも遭遇し、大変だけれどそれ以上に楽しい旅だった。だからだろう、約一年という長い旅が思っていた以上に短く感じるのは……。
「俺の方は万全だとして、立香ちゃんの方はどうだい？　指、壊死しかけたんだろ？」
「うん！　ダ・ヴィンチちゃんとロマニが治してくれたから平気！　指だってほら、元に戻っているでしょ？」
　そう言って笑いながら自身の両手の指を見せてくる立香、健康的なその指先に安堵する修司は改めて立香に礼を口にする。
「――――立香ちゃん、ありがとうな」
「うん？　どうしたの急に？　私、修司さんにお礼を言われるようなことをしたっけ？」
「本当はさ、こう言う人類の命運を懸けた戦いとか、普通の人間に背負わせて良いモノじゃあないんだよ。そう言うのは俺達大人が対処するべき案件であって、立香ちゃんやマシュちゃんが拘わるべき事じゃあないんだ」
　これ迄の旅路を経て、心身共に鍛えられてきた藤丸立香。普通の人生では決して体験することのない経験を重ねてきた彼女は、遂には人類の命運という余計な重荷を背負う所まで来てしまった。
　そんな彼女にしてあげられる事など、素直に礼を言う事しか思い浮かばない。本来ならごく普通の一般家庭の中で過ごす筈だった彼女の人生を大きく狂わせてしまった罪悪感、結局は自己満足だが、それでも修司は言わずにはいられなかった。
「――――それは、ちょっと違うんじゃないかな」

「……？」
「私は確かに流されるがままにマスターになったり、人理を救うなんてお題目を掲げているけれど、私は別に、人類の命運とか背負っているつもりはないよ？」
「そう、なのかい？」
「うん。それに、英雄王も言ってたんだ。私達が負けちゃったら人類は終わる。なら、責め立てる相手もいないから失敗を気にする必要もないって。だから私は、その辺りは別に気にした事はないかなぁって」
「――――」
……どうやら、自分が思っていた以上に、目の前の少女はメンタルはタフだったようだ。人類の命運、なんて重荷は背負っているつもりはない。そう言い切る彼女に修司は一瞬だけ目を丸くさせ。
「それにさ、私以外にも戦える人はいるんだから、最悪はその人に丸投げして逃げるのもアリかなーって」
その強か振りに破顔した。
「――――は、ははは！　全く、随分と強かになったモノだよ。キミも」
「え、えへへ、そうかな？」
「あぁ、けれど……うん。それなら、安心したかな。なら、いざとなったら俺に丸投げして逃げると良い。俺も、それくらいの度量はあるつもりだからな」
「うん、ありがとね。修司さん」
藤丸立香にとって、最も幸運と言えるのは、類い稀な強運と数多の英霊達と縁を結んだだけではない。目の前のハチャメチャ量産機――――白河修司と出逢えた事なのかもしれない。
「先輩、修司さん、此方にいましたか」
「あ、マシュだ」
そうして、修司と雑談を楽しんでいると、向こうから立香の後輩であるマシュ＝キリエライトが歩み寄ってきた。
「もしかして、時間かい？」

「いえ、作戦開始までもう少し時間が空いているとのことで、その……決戦の前にお二人と話をしておこうかと思いまして」
「フォーウ」
「おっと、フォウも一緒か」
「なんだか、最初の頃を思い出しますね」
三人の脳裏に浮かぶのは初めて三人が揃ったときの事。思えば彼処から全てが始まったのだと、感慨深く思いながら、彼等はロマニ達の待つ管制室へ向かった。

◇

「来たね」
扉が開き、管制室へとやって来た修司達。そこにはいつも通りの人が待っていて、いつも通りの光景が広がっていた。違うのは、いつもより少しばかり時間が押しているという事。
「さて、早速だけどブリーフィングを始めようか。現在、僕達が拠点にしているカルデアは終局特異点である冠位時間神殿ソロモンを捕捉。同時に特異点との融合が始まっている」
七つの特異点の修復と、その元凶となった聖杯を全て回収し、カルデア職員達の尽力もあって、遂に人理焼却の首謀者であるソロモン王の居城を特定する事が出来た。
しかし、此方が捕捉したという事は向こうにも此方の居場所を報せる事に繋がり、現在このカルデアはソロモンのいる特異点に取り込ま

れようとしていると、ロマニは端的に語る。
　要は、自分の庭に呼び寄せているのだ。自分達という異物を消し、完全なる人理焼却を成し遂げ、〝次の仕事〟とやらに移行する為なのだろう。
「君達はレイシフト後、特異点を攻略――――――ソロモン王を名乗る輩の撃破と、このカルデアへの帰還。これ等のスケジュールを完璧にこなす事。これが、今回の君達の任務の全容だ」
「おや？　ロマニ、いいのかい？　魔術師（君達）としては人理焼却の首謀者を撃破することこそが目的であって、立香ちゃん達の生存は度外視なんだろ？」
　ソロモンを名乗る輩を撃破し、カルデアに無事に帰還する。それが今回の任務の全てだと語るロマニに対し、ダ・ヴィンチから意地の悪い質問が投げ掛けられる。
　魔術師にとって優先すべきは人理焼却の首謀者の撃破であって、立香達の生存は考慮されていない。だからこそ、立香に渡された礼装はこれ迄の生き残るための力ではなく、敵を倒すための武器となっているのだ。
「……まぁ、確かにダ・ヴィンチの言うように魔術師であればソロモンの撃破を重要視して、それだけに心血を注ぐべきなのだろうね。でも、僕はカルデアの司令官代理であると同時に医療部門のトップだ。人命を優先させるのは当然だろ？　それに……」
「ん？」
「君なら、そんな事は絶対にさせないだろ？」
　自分は魔術師達の組織の代理トップであると同時に、医療部門のトップでもある。だから敵を倒す事と、生きて帰ってくる事を目指すのは当然だと、ダ・ヴィンチの真意を汲み取った上でそう話す。
　それに、修司が共に特異点に向かう以上、想定外が起きるのは必然。誰よりも理不尽と不条理を嫌う彼がいるならば、想定された悲劇は決して起きることはない。そんな、ある種の絶対的信頼を向けてくるロマニに……。
「おう。立香ちゃんもマシュちゃんも、皆一緒に……絶対生きて

帰ってくるよ」
修司もまた、笑顔で応えた。生きて帰る。即答でそう応えてくれる彼にロマニもまた満足そうに頷き……。
「では、作戦会議を始めよう。とは言え、今回はそう難しい話ではない。相手は魔術王を名乗るソロモン、彼が繰り出してくる術式はいずれも規格外の魔術だ」
人理焼却を企て、成し遂げ、今も特異点の最奥にて待ち受ける最大の強敵。恐らくは彼に従っている七十二柱の魔神柱も立ちはだかるのだろう。そんな魔術の王にカルデアが取れる戦力は唯一つ。
「総力戦。これまでカルデアの……いや、立香ちゃんの喚びかけに応えてくれた全てのサーヴァント達と、修司君、君の相棒を駆使して――奴を倒すんだ」
それは、カルデアに遺された全ての英霊達と共に戦場へ取り込んで戦う総力戦。文字通り全てを出し尽くす戦いだ。此処から先はどんな奴が出てくるかなんて予想もできない。故にロマニは修司の持つ相方の出撃命令を正式に下す。
白河修司の持つ最大の戦力――グランゾンを出せ。そう、遠回しに命令してくるロマニに……。
「――OK。その司令（オーダー）、承った」
修司は凶悪な笑みを浮かべる。知的で、なのに何処か悪魔的凄みのある笑みに……。
（――どうしよう、早速後悔してきたぞぉ）
ロマニは早速、自分の発言に後悔してきた。

その１６６　終局特異点

七つの特異点を巡り、七つある聖杯を回収した事で、遂にカルデアは元凶である魔術王のいる座標を特定する事が出来た。長きに渡る人類史修正の旅路、その終着点である決戦の地を特定した事で、人理焼却の最後のカウントダウンが始まった。

しかし、魔術王の拠点を知るという事は、向こうにもカルデアの拠点を特定されるという事。建物ごと魔術王の領域に引き込まれたカルデアは、魔術王からの侵食に抗いながら行動を開始させる。

これも承知の上だと、色々と覚悟を決めようとしていたＤｒ．ロマニとの最後の作戦会議も終わり、遂に立香と修司、そしてマシュの三人はいつもの様にレイシフトを行い、遂にその地へ降り立った。

冠位時間神殿ソロモン。魔術の王の居城に辿り着いた一行は、その異様な光景に一瞬だけ言葉を失った。

「うっわぁ、ここが魔術王ソロモンの居城かぁ……」

「空も、草木も、動植物の気配すらないなんて。まるで宇宙に佇む箱庭の様な……」

『箱庭、か……マシュの感想は概ね間違いではないと思うよ。此処は魔術王ソロモンの領域、彼にとって此処は完成された世界なんだろう』

「その割には、随分と余裕がなさそうだけどな」

降り立ったのは人類の歴史から隔絶された異様の空間、其処にはこれ迄の特異点とは違って命の息吹が感じられなかった。感じられるのは底抜けた悪意だけ、一方で、意味深な言葉を口にする修司に立香達も辺りを見渡し……気付いた。

周囲に蠢く巨大な肉塊、その全てが魔神柱だと気付く、この特異点全てを覆う程の夥しい数を前に立香とマシュは揃って身構えた。

「安心しろ。コイツらには相変わらず悪意はあるが、今の所敵意はないよ」

緊迫する彼女達の空気を解きほぐすように修司はそう語り、今すぐ攻撃を仕掛けてくる様子のない魔神柱達に立香とマシュは強張りながらも構えを解く。
「さて、向こうで奴がお待ちだ。此方はゲストなんだ。精々、楽しませて貰うとしよう」
不敵な笑みを浮かべながら先を往く修司に、二人も続いていく。宇宙の只中に浮かぶ箱庭だと思っていたが、トンだ巣窟に迷い込んだモノだ。幾ら一柱が大した相手ではないにしても、この数は少々厄介だ。
此方の戦力は未だ準備段階のまま、魔術王が抱え込んだあの怪物達の全容が明らかにされていない以上、此方の手札は可能な限り温存しておきたい。
「――――そう言えば、立香ちゃんの今回の礼装、なんか今までと印象が違うな。妙に物々しいというか」
緊迫した様子の二人を僅かでも解しておこうと、話題を立香の着込んでいる礼装に向ける。今回彼女の着込んでいるモノは、これ迄の旅で着ていたモノとは毛色が違っていた。
全体的に黒く、彼女の右腕から胸元に突出した幾つもの白い杭の様なモノ。その物々しさから修司は初見でありながら彼女が纏う礼装の本質を察した。
恐らく、彼女が今回着ている礼装はマスター本人を一つの戦術的兵器とさせる代物なのだろう。これ迄の彼女の礼装が生き残る為の安全装置だとするならば、今回のは相手を倒す為の武器。最後の戦いという事で、恐らくはダ・ヴィンチ辺りが用意した決戦礼装なのだろう。
実に魔術師らしい人権を度外視したやり方だが、その事を追及するような事は修司はしなかった。あの万能の天才の事だ。表情に出しはしないが、内心では罪悪感で葛藤し、心を磨耗させていたのだろう。
この礼装を身に付けている立香が受け入れているのがその証拠、彼女も多分修司には自分から話すつもりはないのだろう。此処から先は何が起きるか分からない伏魔殿、使える手があるのならなりふり構ってはいられない。

なら、その憂いが完全に無くなるまで自分がカバーすれば良いだけの事。幸いに司令官代理であるロマニから此方の切り札を遠慮無く使って良いというゴーサインが出ている。如何に向こうがどんな手段を講じて来ようが、その全てを討ち滅ぼす用意が此方にはあった。

――――――尤も、最終的には自分の拳で叩き潰すつもりではあるが。と、そんな風に自分のやるべき事を考えていると、修司の足が止まった。

そんな彼に倣って、二人の歩みも止まる。修司の様子を訝しんでの行動ではない。二人とも気付いたのだ。前方にある開かれた扉の辺りから漂う濃厚な悪意に……。

恐らくは、あの扉の先にあるのが魔術王の玉座。彼処を抜ければいよいよ奴との決戦が待っている。そんな、意を決して進もうとした彼等の前に……。

「――――――ようこそ、カルデアの諸君。先ずは七つの特異点を越えてきたその強運、今は素直に称賛させてもらうよ」

拍手をしながら、レフ＝ライノールが扉の前で立ち塞がった。

「貴方は……！」

「レフ＝ライノール……！」

人類を裏切り、魔術王の野望に与した魔術師。カルデアの爆破から第二特異点まで介入し、其処で顕現した大王アルテラに両断された筈の男、レフ＝ライノール。

内心で特大の悪意を滲ませておきながら、上っ面で称賛等と口にする。当然その言葉をそのままの意味で受け止める者はこの場にはいない。何処までも人類を下に見て、侮蔑の眼差しを向けてくる彼に修司は珍しく傍観の姿勢を崩さなかった。

「久し振り、と言うべきかな？　あぁ、挨拶の必要はないよ。君達のこれ迄の苦労話なんて欠片も興味は無いからね。まぁ、君達の戦いぶりは時折他の柱を通して知っているからね。あの魔術に毛ほども精通していないマスターが、よく此処まで辿り着いたモノだ」

それは、レフの語る藤丸立香に向けての心からの称賛。巻き込まれた立場である筈の彼女が、よくも今日まで生きてこられたという……

憐憫から来る賛辞。
「私はこれでも人間の機敏はよく理解している。だから、藤丸立香の努力には素直に感心できるのさ。いやぁ、まったく――――――」
「吐き気を催す程の生き汚さだ」
　その賛辞も、次の瞬間には侮蔑に変わる。よくもまぁみっともなく足掻けるモノだと、呆れと蔑みで満たされたその悪意に、立香は正面から見据える。
「どうしてこう、行儀よく死ぬ、なんて誰にでも出来る簡単な事が出来ないんだい？」
　行儀よく死ぬ。人間の命を無いものとして見ているレフだからこそ口に出来る凄惨な言葉。その何処までも人類を下に見ているレフに流石の修司も眉を動かすが、マシュ＝キリエライトはそれでも彼の善性を信じた。
「……レフ教授。貴方がなぜ生きているのかは問いません。ですが、どうしても無視できない疑問があります。貴方は最初から人類を、カルデアを滅ぼす為にオルガマリー所長に近付いたのですか？」
「……。君らしい疑問だマシュ。だが、本当はこう聞きたいのだろう？　私だって最初は人間側であった筈だ。レフ＝ライノールはまともな人間だったが、何処かで魔術王に拐かされたのでは？　と」
　レフ＝ライノールも、最初は魔術王に与する人間ではなかった筈だ。彼が人類を裏切ったのも彼なりの理由があったからで、自ら進んで自分達の前に立っているのではないのだと、人の善性を信じているが故の疑問。
　そんなマシュの言葉に、カルデアで観測しているロマニも続く。
『……それは僕も聞きたいな、レフ教授。貴方は僕がカルデアに来る前からいたスタッフだ。カルデアスだけでは人理定礎の復元は出来なかった。貴方の開発したシバがあったからこそ、我々は此処に辿り着けた。その貴方が初めからソロモンの手の者だったとは考えづらい』
『ああ。私を四年近くも欺けるとは思えないしね。キミはいつ魔神柱なんてものになったんだい？』

カルデアに来てから今日まで、誰もレフが魔術王の手先だと見抜けなかった。後に配属されたロマニは勿論、四年近く同じ施設にいたダ・ヴィンチでさえ気付けなかった。
彼等が気掛かりなのは、レフ＝ライノールが魔神柱となった時の出来事。明確に人類の敵となった時の事だ。
「おやおや。これはこれは、ロマニ＝アーキマン。そしてダ・ヴィンチ女史。懐かしい顔ぶれだ。君達とこうして話し合う日が来るとはね。君達も私の名誉……いや、人権か。そういったモノを気遣ってくれているようだ」
「だがその心遣いは不要だよ。いつから魔術王の配下だったか、だって？　キ――――キキ、ギャハハハハ！　そんなもの、３０００年前からに決まっているだろう！」

しかし、そんな二人の最後の情けとも呼べる気遣いをレフは踏み砕く。
「この計画が始まった時から、我々はあらゆる伏線を世界に撒いた！　百年後に魔神柱になる家系。五百年後に魔神柱になる家系。そして遥かな千年後に魔神柱になる家系！　私はその中の２０１６年担当だったにすぎない！　我々はそのように、地に撒かれた種だったのだよ」
魔術師の家系伝わる原初の指令――――〝そうあれかし〟と定められた絶対遵守の教え。それこそが冠位指定、グランドオーダー。それは、魔術の王がこの時の為にと作り上げた法則。
人間から生まれた魔術師達はそれぞれの信念、理論を子孫達に定めたが、レフ達魔術の王から分かたれた魔術師達はこの時が来るまであらゆる時代で生き延びた。人間の根幹となっている遺伝子に魔神柱の依り代となる呪いを刻み、〝担当の時代〟まで存続し続ける。
そうして２０１５年、最後の担当であるレフ＝ライノールが魔神柱である事を自覚した時点で、人類史は焼却されたのだ。
つまり、マシュやロマニが定め、望んでいたレフ＝ライノールは最初から――――否、３０００年も前からとっくに消え去っていたの

だ。全ては魔術王ソロモンが仕組んだモノ、幻想処か虚像ですらなかった。
　しかし、とレフは続ける。
「回収する資源は〝そこまで〟で十分だった。だが――――貴様達カルデアはしつこく生き延びてしまった。何故だ？　何故生き延びた？　私の失態だったのか？」
　全ては２０１６年の担当であるレフ＝ライノールが終わらせた筈だった。人理焼却を防ぐために世界中から集めた選りすぐりの魔術師達をまとめて始末し、全ては彼の手で終わる筈だった。
　しかし、人類は歴史ごと焼却された筈なのに未だに存在し、今日までしつこく生き残った来た。何故そうなった。どうしてこの様な事態に発展した？　人類に幕を下ろす筈だったレフの失態？　……いいや、違う。
「そう、いたのだよ。私の観察眼をすり抜けた食わせ者が。そうだろう、ロマニ＝アーキマン。私は君を過少評価していたようだ。それとも、そうなるように私の前では道化を演じていたのかな？　だとしたら残念だ。私は君に友情を感じていた」
「医学と魔道。共に歩んだ道は違えど、君の善性、君の無駄な努力というヤツに、私は敬意を表していたのにねぇ？」
　どの口が、とは言わない。喩え悪意と憐憫から来る嘲りだとしても、レフの言葉の端には感情が込められていた。奴は奴なりに本気でロマニにある種の親しみを抱いていた。それが喩え、皮肉に満ちたモノだとしても。
『……』
　レフの問いに、ロマニは応えない。代わりに応えたのは、彼と最も長い付き合いのある万能の天才だった。
『そりゃあそうだろうとも。キミがロマニの人間性を見抜けた筈がない。何しろこの男は、私がカルデアに召喚されるまで、周囲全ての人間を信用していなかったんだから』
「……なんだって？」
　ダ・ヴィンチから告げられるその事実は、レフ＝ライノールだけで

なく、立香や修司、マシュにも衝撃的なモノだった。
『ロマニは凡人だが、ある一点であらゆる天才を凌駕する我慢強さを発揮していたのさ！〝理由は不明〟　〝誰が敵かも分からない〟
〝そもそも、本当に起こるのかどうか保証もない〟　そんな、夢に見た程度の〝人類の危機〟を信じて、自分の人生全てを投げ出した』
『起こる筈のないものを、起きると信じて待ち続ける。自分が気付いていると敵に知られる訳にもいかない。だから誰にも相談出来ない。その時の為に何を学べばいいのか分からないから、自分に出来る範囲の事は全て学習する――――』
『それが、ロマニ＝アーキマンの１０年間だ。一分たりとも利息のなかった、自由の地獄だ。そんな男が、喩え学友だろうと本性など見せるものか！』
何処か自慢気に語るダ・ヴィンチとは異なり、その事実はレフだけでなく、修司や立香、マシュにまで小さくない衝撃を与えた。
ロマニ＝アーキマンは１０年間、ずっと一人で戦い続けてきた。いつ起こり、本当に起きるかも分からない災厄に、たった一人で戦い続けてきた。誰にも頼らず、誰にも心を開く事なく、ただ一人でずっとその不安と恐怖に抗っていた。
そんなロマニ＝アーキマンを修司は心の底から尊敬し、同時に確信した。彼は恐らく、黄金の英雄王や夢魔の魔術師が持つとされる千里眼なる見通す眼の力、それに類する何かを持ち合わせて〝いた〟事を。
ダ・ヴィンチは言った。ロマニが１０年間孤独に戦い続けてきた理由となった人類の危機、それはまるで夢に見たと。それは未来を視るとされる英雄王にも似た症状、だとするならロマニ＝アーキマンは未来を視る千里眼の持ち主という事になる。
そして、それは上記の英雄二人を除き、修司の中で何人か候補がいる。一人は第六の特異点で非常に世話になった弓の大英雄、アーラシュ＝カマンガー。
もう一人は七十二の魔神と契約したとされる――――。
「……まぁいいさ。今、我らの王は手が離せない。何しろ、あと数

時間で最後の計算が終了する。本来なら、貴様らなど放置しても構わないが――――いや、一人いたな」
「私の仕掛けた爆弾にも傷一つ負わず、これ迄ふざけた逆転劇で今日まで此方を引っ掻き回してくれた糞生意気な野蛮人、そう――――貴様の事だ。白河修司！」
「あ？」
　唐突に、レフの敵意の対象が修司に移る。話の流れ的にもう暫くは此方には注意が向けられないと思っていたから、思わず間の抜けた返事をしてしまった。
「藤丸立香はいい。所詮は凡人、ロマニ＝アーキマンの様な気狂いさも無ければ、並みの魔術師ですらないただの人間。だが、貴様は違う。あぁ、認めよう。貴様は強い。その力は既に英霊を凌駕し、神霊すらも退ける。有象無象のカルデアの中で、唯一貴様だけは確実に殺せと、我等の王から指令が降った」
「それは……なんとも、光栄なこって」
「その余裕、その不遜も此処までだ。貴様はこのレフ＝ライノール。否！　魔神フラウロスが、直々に塵芥へと変えてやろう！」
　至極どうでも良さそうな修司に、レフは憤りを顕にしながら自身の肉体を変容させていく。眼前に聳え立つ魔神柱、しかも既に攻撃態勢となっている。
　魔神フラウロスの起動に併せて、周囲の魔神柱も稼働し始める。全てはカルデアの一行を確実に滅ぼす為、そのおぞましい瞳を一つ残らず修司達に向けられる。
『消え失せるがいい！　人類史の残滓よ！　貴様達の存在は跡形もなく焼却してやる。さぁ、己の無知と無力と後悔、存分に味わいながら――――死ね！』
　瞬間、魔神柱の無数の眼光が瞬き、光が爆ぜた。周囲の大気を震わし、地を砕くその一撃は正に魔神の慈悲無き一撃。
　しかし、この程度で奴等を倒せるとはレフ自身思わない。何故なら――――。
『――――開戦の合図にしては、随分とショボいな』

奴には、白河修司には、底知れない〝魔〟が憑いている。主に従い、主の為に力を奮う魔道に通じる何かを宿す――――計り知れない〝魔〟が。

舞い上がる砂塵の中から現れるのは、巨大にして強大な蒼き魔神。魔神柱と根底から異なる真性の魔神。

『なら、この一撃を以て決戦の合図としよう。――――ワームスマッシャー』

魔神の双眸が瞬く。瞬間、周囲の魔神柱の内側から無数の光の槍が突き出て、その悉くを塵へと帰していく。

蒼き魔神の足下に護られる形で座り込んでいる立香、マシュは驚愕する。これが、白河修司が有する魔神。

その銘(名)を――――。

『さぁ、暴れるぞ《グランゾン》お前の鬱憤を晴らす舞台が整った』

蒼き重力の魔神グランゾン。正式に暴れられる機会を得た魔神は漸く得られた己の舞台に立てたことを喜ぶように、その双眸を瞬かせた。

その１６７　終局特異点

魔術王ソロモンの居城にして、カルデアが最後の戦いに挑む冠位時間神殿。そこに待ち受けていたのはカルデアを爆破し、人類に敵対する運命を決められていた魔術師――――レフ＝ライノール。

自らを魔神柱フラウロスと名乗り、異形に成り果てた彼は、神殿に降り立った立香達を屠るべく、その力を解放させた。

彼女達を死なせてはならない。彼等を最後まで支援し、ソロモンを倒す為の手立ては既に確立されている。その最たる切り札として、カルデアは在籍している全ての英霊の一斉解放を承認した。

カルデアに在籍しているサーヴァント、彼等に供給される魔力は全てカルデアから送られているモノで賄われている。しかし、相手は英霊。通常なら彼等一騎を現界させるだけで多大な労力と魔力を必要としている。

その為、普段は宝具の使用等ご法度にしていたが、冠位時間神殿ソロモンを攻略するには多くの英霊達の力が必要になると予想し、カルデアは在籍している全てのサーヴァント達に協力を要請、制限時間を設ける代わりに、これ迄召喚に応じてくれた英霊が特異点攻略に尽力してくれる事に相成った。

制限時間の条件は各々の魔力が枯渇間際に差し掛かる頃。自前の魔力が無くなり、消滅仕掛けるのを確認したら、自動的にカルデアの霊基保管室へ召還される事で彼等はこの戦いに全力で挑むことを約束してくれた。

こんな、有利もクソもない条件を二つ返事で呑んでくれた英霊達には感謝してもしきれない。これで多少の予想外の事態にも対応できる筈、作戦が開始させる直前、改めてロマニは多くの英霊と縁を結んでくれた立香の幸運を喜び……。

そして、その喜びは氷点下を下回る勢いのキンッキンに冷えた氷水をぶっかけられた様に冷えきってしまっていた。

「うわぁ……本当に、なんと言うか……うわぁ」
モニター越しから確認できる映像、そこに映し出される光景を見て、ロマニは一人ドン引いた。
冠位時間神殿は、間違いなく最後の特異点。魔術王ソロモンが築いた大神殿だけあって、その防備はウンザリする程に強固だった。その空間全てを埋め尽くす程に顕現された魔神柱、これ迄の戦いの規模とは初手から異なってくるその大勢力にロマニは急いでサーヴァント達の転移を開始した。
このままでは立香達が危ない。彼女達の事を考えて強行したロマニの行いは……悲しい程に空回りする事になる。通信越しでジャンヌが何か熱い台詞を口にしていた気がするが、その士気を上げる口上も不発に終わってしまっている。
無理もない。あのおぞましい程ウジャウジャいた魔神柱が揃って消し炭にされたなんて、一体誰が予想出来る？　あぁもう、オルレアンの乙女が顔真っ赤にしてプルプルしちゃってんじゃん！　一緒に転移してきた人達なんて気まずそうに見てないフリしてるもん。あの黒ひげですらノータッチとか相当だよ？
……いやさ、確かに言ったよ？　君の相棒を使って戦いに臨んでくれって、恥ずかしくも頼りにさせてもらったよ？　でもさぁ、誰がこんな惨劇を予想できたよ!?
万を超える軍勢を相手に、どうして一方的に処理できるなんて予想できるよ!?　出来るわけがないよねぇ!?
――――〝グランゾン〟。それは並行世界の出身である白河修司が、自身の相棒として絶大の信頼を寄せている一方で、修司本人も知らない部分のある……謎の多い巨大な人型機動兵器。
後に、第四特異点にて遂に相対した人理焼却の元凶、魔術王ソロモンとの戦いでこの機体を使用し、ソロモンを追い払ったと言う報告が挙げられた。そんな、色んな意味で規格外なこの蒼い魔神は打倒ソロモンに対し切り札的存在でもあった。
その強さは既にロマニの予想を大きく裏切り、カルデアの職員全員が唖然としている。話だけしか聞いていなかった蒼き鋼の巨人、今グ

ランゾンの正体を探る余裕は自分達にはない。
願わくば、このまま上手く事が運んで欲しい。そんな、祈る様な気持ちを抱きながら……。
「――――頼んだよ」
ロマニは、モニターに映るグランゾンを見つめていた。

◇

「――――ねぇブーディカ、どうしてジャンヌは固まったまま動かないの？」
「あーうん、ちょっと今はそっとしておいてあげましょうか。うん、ほら、ジャックはあっちの魔神柱解体していいから」
決戦の舞台である時間神殿、其処では多くの英霊が無数の魔神柱に対して、人類の存亡を掛けた決戦が行われる筈だった。多くの英霊が戦意に満ち溢れ、悪性善性問わず、この戦いに全霊で挑むつもりだった。
その中の一人であるジャンヌ＝ダルクも、自分の持てる全ての力を使い、立香達をソロモン王まで導くつもりでいた。故に彼女は自身の持つ旗を掲げ、全ての英霊に発破を掛けようとした。
異なる時代、異なる立場であっても、今は互いに背中を預け、我等がマスターである藤丸立香を導けと、そう声高に叫ぶつもりだった。
――――なのに、修司の相棒であるグランゾンが、それらを掻き消してしまった。
『いい加減、学習しろよ。魔神柱がどれだけいようと、俺とグランゾンを止める事は出来やしないってな！　……所でジャンヌさん、何か言い掛けてなかった？』

「何でもないですゥッ!!」
　真っ赤になる顔を両手で抑え、その場で踞るジャンヌ。何故彼女が落ち込んでいるのか本気で分からない修司はグランゾンと共に首を傾げた。
「やれやれ、こうも間が悪いとはなぁ。まぁ、なんだ。お前さんの言いたいことは分かったから、今我等がいるのは仮にも戦場だ。取り敢えず立っておけ、な？」
「うぅ、今はその優しさが痛いです。征服王」
　頭を掻き、不憫なジャンヌに心底同情しながら、せめて英霊としての矜持は護ってやろうと、征服王はそれとなくフォローする。昨今ではその懐と器の大きさ、そしてフォローの早さから〝フォロ大王〟なんて呼ばれ始めている征服王イスカンダル。そんな彼も、良い感じに現代のカルデアの事情に染まりつつあった。
「ともあれ、このまま此処で棒立ちのままでいるのも面白くない。彼方では既に開戦しておるようだし、我等も動くとするか。のう太陽王」
　この特異点の別の所では、既に魔神柱と英霊達による戦いが始まっている。無数の魔神柱に対して有数の英霊達、戦いの規模としてなら未だに向こう優勢。暇をもて余している場合ではないと、征服王は別の戦場に向けて出発しようと同じ所に召喚された太陽王に声を掛ける。
「うん？　余はもう暫くあの蒼い魔神を視ておきたいが……しかし、本当に凄まじいモノよ。あれだけの力を持つ魔神が、どうして存在していたのか。征服王は気にならんのか？」
「そりゃあ、気にならないと言えば嘘になる。魔神柱を一瞬にして串刺しにして見せた芸当もそうだが、アレは異質が過ぎる。なぁ発明王、お前は何か知っているのか？」
　白河修司が操る巨大な蒼き魔神。その力は太陽王オジマンディアスから見ても異質であり、征服王イスカンダルも異常だと認識した。あれだけの兵器を生み出すのは現代の如何なる技術を以てしても不可能と思われた。

以前から修司がグランゾンという人型兵器を有しているのは知っている。だが、アレは果たして兵器という枠組みに納めてしまっても良いのだろうか。幾度も戦場という修羅場を潜り抜けてきた征服王の直感は、アレだけがグランゾンなる魔神の全てとは到底思えなかった。

故に、同じ場所に召喚された発明王に意見を求める。生前から数ある発明品を世に送り出してきた発明の王、彼にはあの兵器がどう見えるのか。期待と僅かな不安を滲ませて問い掛けてくる征服王に、発明王トーマス＝エジソンは応えた。

「――――これは私の所感だか。アレは〝示す〟為の兵器なのではないだろうか」

「示す？」

何を？　何処へ？　要領の得ないエジソンの応えに征服王は怪訝に腕を組むが、幾ら考えてもしっくり来る答えがでない。とは言え、彼の言葉を無視するのも違う気がする。

一体、あの機体は何なのか。グランゾンという未知の前で自ら口にした戦場の事も忘れたイスカンダルが悩んでいると……上から聞き慣れた笑い声が聞こえてきた。

「フハハハ、随分と頭を悩ませているではないか征服王。そんなにあの魔神の正体が気になるか？」

黄金の空飛ぶ舟、ヴィマーナに乗りながら優雅にビールを煽っている黄金の王。普段身に纏っている黄金の鎧とは異なり、現代の私服で寛ぐその姿は完全に休日を満喫する現代人のソレである。

仮にも戦場なのに、何とも呑気な王である。……いや、或いはあの魔神の正体を知るからこその余裕なのだろうか。

「おう英雄王、この際貴様でもいい。あのグランゾンなる魔神の正体、知っているなら教えてくれ。あんな風に暴れられては余も安心して戦えぬからな」

「ハッ、何を言う。答えなら其処のライオン王が既に言ったではないか」

グビグビと安酒を煽りながら、そう吐き捨てる英雄王に征服王は眉

に皺を寄せる。
「では、あの魔神は一体何を示すと言うのだ？　力か？　技術か？　そうだとするなら、一体何に示すと言うのだ」
トーマス＝エジソンは言った。あの魔神は示す為の機体であると、恐らくはニコラ＝テスラや他の碩学者達も似たような感想を口にするだろう。しかし、答えと言うにはその意味は余りにも大き過ぎた。
だが、それでも黄金の王は鼻で笑う。分かりきったことだと、魔神柱を蹂躙し続けるグランゾンを見上げて……。
「決まっている。――《総て》だ」
あらゆる時代、時空、世界に、グランゾンという力を示す。その意味と答えを知る英雄王は笑いながら酒を飲み干した。
「この戦いの行く末は決まっている。これは、過程を楽しむ戦いよ。奴がどの様に戦い、如何程にして蹂躙するのか。注目するのはそれだけよ」
結果は決まっている。そう断言する王は、だからこそと続け……。
「故に、我は楽しみで仕方がない。この後、奴は如何なるシンカの軌跡を見せるのか。我の眼をも振り切って、何処まで至ろうとするのか」
愉悦とは違う喜び。それを噛み締めるように黄金の王は再び倉から酒を取り出し、飲みこんだ。
「――――それよりも、貴様等も死にたくなければそろそろ動いた方がいいぞ。そろそろ、事態は動き始めるからな」
「なに？」
「来るぞ。無粋を極めた醜き破壊神が」

◇

『――――さて、一先ずこの辺一体の魔神柱はあらかた片付いたか』
レフ＝ライノール――――いや、魔神フラウロスの激昂と共に周囲に顕現された無数の魔神柱は、修司が操るグランゾンが放つ光の槍によって貫かれ、その悉くが瞬く間に殲滅、消失された。
魔神柱の総数はどんなに低く見積もっても１００万前後。殲滅され、蹂躙される度に性懲りもなく顕れる魔神柱に、修司は作業の如く破壊し尽くしていった。
おぞましき肉の集合体である魔神柱、その悉くを屠り続けた修司は、グランゾンのコックピット内にて一人思いに耽る。果たしてこれが、魔術王ソロモンの出せる戦力の全てなのかと。
そして、同時に理解する。奴にはまだ隠されている戦力があるのだと、第七特異点にて現れた巨大な怪物を思い出し、修司は操縦桿を握る手に力を込める。
『く、ククク……いやはや、清々しい程の暴れっぷりじゃないか。グランゾン、だったかな？　成る程、我が王も警戒するのも頷ける』
『――――』
『だが、よもやこれで終わるとは思うまい？　貴様がグランゾンという切り札を持っているように、此方にも切り札（ＪＯＫＥＲ）はあるのだと』
『どうせ、あの気持ち悪い怪物辺りを呼び寄せるつもりだろ？　とっとと喚べよ。諸ともぶっ潰してやる』
同胞でもある魔神柱が大勢塵とされたのに、未だに魔神フラウロスは余裕を崩さない。異形と成り果てても崩さないその悪態には素直に称賛に値するが、修司にはそんなものに付き合っている義務はない。
早く喚べ。諸とも駆逐してやると豪語する彼にフラウロスは嗤う。
『あぁ、滑稽だなぁ。自分の頼るモノが偽物だと知った時、お前はどんな顔をするのかな？』
『――――何を言っている？』
『知っているともさ！　我が王は禁忌に触れた。此処ではない何処

か、並行世界でも、打ち止めされた世界でもない。異なる時代！　異なる歴史！　異なる文明！　極めて近く、限りなく遠い世界にて、繰り返される破界と再世にて遺された遺物、いつしか誰かが言ったそれは――――黒の叡知と呼んだ！』

ドクンッ。発狂したかの様に喜びの声を張り上げるフラウロス、奴の口から零れ落ちた黒の叡知なる単語を耳にして、修司の心臓の音が跳ね上がる。

『故に、我等が王が黒の叡知に触れた時、我等もまた知り得ることが出来た。……知っているか？　貴様の頼りにしているその蒼き魔神は元々ある一柱の神が依り代にする為の代物であると！』

『まさか――――』

『今頃気付いても遅い！　さぁ、出でよ異界の神、我が身を喰らい顕現し、新たな人類の導となれ。来たれよ破壊神――――ヴォルクルスゥゥゥゥッ!!』

嗤いながら天を仰ぐフラウロス、その狂信的振る舞いに修司は一瞬だけあ然となるが、次の瞬間に顕れる黒い靄が奴を覆っていく様を前に、彼の奥深くに眠る本能が叫び出す。

聞こえてくる咀嚼の音、肉を喰らい、骨を噛み砕くその不快音に修司の眼は鋭くなる。これから起きるのは、世にもおぞましい神の顕現であると。

しかし、変化はそれだけでは終わらない。これ迄修司が撃ち抜き、消滅するだけとなった魔神柱達も、フラウロス同様に黒い靄に覆われ、食い尽くされていく。

その光景に、立香とマシュも絶句し、カルデアの観測班も言葉を失う。今、自分達が目の当たりにしているモノはなんだ。此方の計器を振り切る程の魔力の渦、魂を貪り、魔神柱達の血肉を己のモノにしていく――――あの怪物は何なのだ。

いや、知っている。修司の奥底に眠るナニかが、アレを滅ぼせと叫んでいる。

『――――ヨカロウ。ソノ願イ、我ガ聞き届ケタ』

顕れる三つの邪神。いずれも人類悪（ビースト）にすら匹敵する怪物に……。

『――――――』

修司の笑みはより深く、より悪辣に変化していた。

「……よし、もう少し離れておくか」

黄金の王、まさかの遁走である。

その１６８　終局特異点

「約束（エクスー――――――）された――――――勝利（カリバー）の剣!!」
　悪意に満ちる摩天楼、無数の魔神柱に埋もれた世界で、星の聖剣が輝きを示す。振り下ろされる究極の斬撃と云われるその一撃は、天に聳え立つ魔神柱を両断し、この特異点に確かな傷跡を刻んだ。
「よし、此れで正面は開かれた。後は両翼だが……」
「我が王、どうか一度落ち着いて下さい。今ので通算三度目、如何に竜の心臓を持つとされる貴方でも――――」
　騎士王ことアルトリア＝ペンドラゴン、後世に男性として語られ、騎士の中の騎士王として知られる彼女は、先の第六特異点で介入できなかった事を酷く悔やみ、今日まで暗鬱とした気持ちで過ごしてきた。
　第七での特異点でもマスターである藤丸立香の役に立てることはなく、ただ無為に時間が過ぎるのを待つばかり。特に第六特異点からは嘗ての円卓の騎士達のやらかしによって、彼女の食欲は普段の三割減となった。
　しかし、この終局特異点で汚名返上の機会が訪れた。相手は無数に存在する魔神柱、マスター達の為に漸く活躍できる場を得られたアルトリアは、他の英霊達と同様にヤル気に満ち溢れていた。
「――――安心してください、サー・ベディヴィエール。私にはまだ十分な余力が残されている。そして、マスター達の為に我々一人一人が長く戦い続けなければいけないことも承知している」
「王……」
「皆も戦っているのです。此処で、私ばかり休んではいられない」
　今、この特異点には多くの英霊達がマスターである藤丸立香の為に戦っている。異なる時代、異なる立場、目的や在り方すら違っていようと、今此処で戦っている彼等は皆、互いに背中を預けて戦っている。
　故に、自分もまた異を唱えたりはしない。全ては未来を取り戻そう

と奮起しているマスター達の道を切り開く為に……そう、今一度決意を顕にして手にした聖剣に魔力を回し始めた時だった。
「「「ッ!?」」」
突然、言葉に出来ない嫌悪感が、英霊達の心身を揺さぶった。敵意と殺意、或いは怨念とも呼べるおぞましいナニか。戸惑いながらも魔神柱達を切り払うアルトリアが、自身の直感に従いある方向へ視線を向けると、其処から感じられる悪寒の源に目を大きく見開いた。
「一体、何が……？」
アルトリアが向ける視線の先は、立香達が戦っているとされる場所、彼処は確か征服王や太陽王、そして英雄王とサーヴァントの中でも頂点に位置する最高峰の英霊達が配置されているはず。
彼処で一体何が起きているのか、そう思う者はアルトリアだけではなく。
「……バカな」
「――信じられないが、受け入れざるを得ないか」
右翼と左翼、それぞれの場所で戦っていたアルジュナとカルナは、突如として起きた異変に他の英霊達以上に動揺している。
特に、人格的に彼等のまとめ役でもあるラーマは、ワナワナと憤りを顕にして……。
「こんな、こんなものが……シヴァ神であるものか!!」
ヴィシュヌの転生体であるラーマは、力の限り否定の叫びをあげるのだった。

◇

魔神柱フラウロス。レフ＝ライノールが変異し、魔神柱の一柱に成った嘗ての人類の敵は、更なるおぞましき怪物、ヴォルクルスなる異物の供物としてその身を自ら消失させた。
ヴォルクルス。消失の間際にフラウロス（レフ）が喚び叫んだその怪物は、先の第七特異点に顕れた怪物が合体した姿のように見えた。話だけを聞けば単調な事この上ないが、それを揶揄するものはこの場にはいない。
生きているモノにあらゆる忌避感と畏怖、そして嫌悪を抱かせる。生理的、或いは概念的嫌悪。生命が死という絶対に畏れを抱くように、立香もマシュも眼前に聳え立つヴォルクルスなる異形に身震いを感じていた。
『霊基反応――――不明!?　此方では何の反応も示していない!?　いや、違う、規模が大き過ぎて計れないのか!?』
『測定不能な超弩級の怪物。しかも、それが三体ときた。考えられる限り最悪の事態だね。第七特異点に顕れた怪物、デザインは上下が合体した単調なモノなのに……酷い話だ』
通信越しで伝わってくるロマニとダ・ヴィンチの憔悴しきった声が、事態の深刻さを裏付けする。魔神柱フラウロスを始めとした無数の魔神柱を生け贄にしての召喚、顕れた三体のヴォルクルスなる怪物はそれぞれ人類悪に匹敵する程のエネルギーを有しており、何れも強大な敵性体が顕れた事を意味している。
サーヴァント達だけの力だけではどうしようもない力の差、魔術王ソロモンを前にとんでもなく高く大きな壁が出来上がってしまったと、嘆く立香の耳に……彼の言葉が叩く。
『よし、コイツらの相手は俺に任せろ。マシュちゃんと立香ちゃんは、先に行ってソロモンの相手をしてくれ』
「修司……さん？」
見上げれば、自分達を守っていた蒼き魔神からそんな言葉が投げ掛けられていた。アレの相手は自分がするから、その間にソロモンを何とかしてくれと頼んでくる修司に、再び立香を支える脚に力が戻った。

「――――任せて、いいんだね？」
『おう。流石に少し遅くなるかもだが……まぁ、何とかなるだろ』
「そう。なら……うん。分かった！　征服王！　私とマシュを貴方の戦車（チャリオット）に乗せて！」
「応よ！　此度のマスターまっこと豪気で愉快痛快！　そら太陽王、貴様も乗れい！　既に此処で我等に出来ることはない！」
「――――よかろう。一足先に魔術王めを叩き潰しにゆくとするか！」
「行こう、マシュ！」
「――――はい！」
「そっちの聖女には余のブケファラスを貸してやる！　騎乗の経験はあるのだろ？」
「え、ええ！　了解です！」
「英雄王めは何処かへ消えたか。まぁ、奴の神出鬼没さは今に始まった事ではないが……」
　これ迄に何度もこう言う方法で自分達は戦ってきた。此処は自分に任せて先にいけと、一番危険な事を背負って戦う修司に、藤丸立香は何度も救われてきた。
　甘えかもしれない。情けない話かも知れない。けれど、其処には確かに修司からの信頼もあり、その信頼に立香は逃げたくなかった。全てはこの戦いに勝つため、自分に出来る事の全てをやり遂げる気概で征服王の戦車に乗り込んだ立香はマシュの手を取り、太陽王と共に怪物の後ろにある光る扉を目掛けて一直線に駆けていく。
　途中、ジャンヌだけがブケファラスの脚を止めて修司と彼が乗るグランゾンを一瞥し、立香達の後を追う。彼女達が修司達のいる空間から離れた事で、漸く修司は全力で戦える機会を得た。
　立香達が光の扉を潜っていく。その様子を確認した修司は、改めて眼前に立つ怪物達へ向き直る。
　ヴォルクルス。魔神柱フラウロスが口にしていた破壊神なる存在、その外見の禍々しさから神は神でも邪神の様だと、修司は内心で嘲笑う。

人類悪（ビースト）に匹敵するとされる霊基、ロマニの言う通り、恐るべき相手なのだろう。
けれど何故だろう。そんな怪物を三体も前にして全く負ける気がしないのは、グランゾンという相棒に乗ったが故に気が強くなっているのか。
それとも、あのヴォルクルスなる怪物を目にしてから、矢鱈と闘争本能が掻き立てられているからか。どちらにせよ、この場で自分のやることは変わらない。
グランゾンも余程ヤル気になっているのか、いつもより出力の振り幅が大きい気がする。握り締めた操縦桿からでも伝わってくる。〝早く闘わせろ〟そう訴え掛けてくる相棒に、修司は笑みを浮かべて三体の怪物を見据える。
怪物――――――ヴォルクルスは一体どう仕掛けてくるのか、触手を蠢かせる邪悪なる破壊神を注意深く観察していると……遂に、奴は動いた。
ヴォルクルスの一体がその巨大な鎌を地に突き刺すと、その刃先がより肥大化してグランゾンへと迫ってくる。
動きがイチイチ気色が悪いと悪態を吐きながら、修司は操縦桿を引き上げ、グランゾンのスラスターに火を灯し、背後へと退避していく。当然、当たらなかったヴォルクルスの刃は空を切るだけに終わったが、奴等の猛追はそれだけに留まらなかった。
残る二体の怪物、奴等の眼と思われる箇所が怪しく光る。すると、地中と思われる所から無数の髑髏が顕れる。まるで亡者（ゾンビ）の様なそれらは修司を見掛けると、獲物を見付けた捕食者の如く笑みを浮かべ、一心不乱に襲ってくる。
当然、これにあたる修司ではない。ワームホールから巨大な大剣、グランワームソードを取り出すと、近付く亡者共に一閃。放たれた一撃は亡者達を悉く両断させるが……それだけだった。
またもや、亡者達が迫ってくる。広がる宇宙を覆う勢いで増え続ける無数の亡者達、当然修司はこれに臆する事はなく、正面から打ち破ろうとグランゾンに力を巡らせる。

しかし、そんなグランゾンの動きを封じるつもりなのか、地中から顕れた亡者の腕が、グランゾンの脚に張り付いてくる。しまったと、修司が舌を打つのも束の間、押し寄せてくる亡者達にグランゾンはあらゆる動きが封じられてしまう。剣を振り下ろす腕も、光の槍を放つ胸部も、亡者達からの集りによって阻まれてしまう。

いい加減鬱陶しいなと、眉を寄せる修司が次に感じたのは……悪寒。その圧倒的とも言える悪寒に頬から冷や汗が流れるのを実感しながら前を見据えると、下半身の顎を大きく開かせたヴォルクルスが、グランゾンと自分に向けて照準を合わせていた。

周囲の空気を凍らせる程の冷気、足場となっているソロモンの神殿全てを凍らせるその三つの顎に溜まったエネルギーは、残さずグランゾンに目掛けて放たれて……。

グランゾンを封じていた亡者達ごと、外側の宙域まで吹き飛ばして見せた。空気を割り、大気を凍らせ、何もかもを破壊する。怨念と亡者を従える異形の破壊神は、直撃を受けたと思い込みゲラゲラと笑い声を上げる。

『――――随分と、楽しそうだな』

『『『ッ!?』』』

しかし、そんなモノにグランゾンがあたる訳がなかった。如何に亡者を操り、怨念に満ち溢れた破壊神と言えど、重力の底であるワームホールに消えたグランゾンを捉えられる術はない。

そもそも、彼の破壊神は気付いてすらいなかった。亡者達の影でどこに消えたか把握すら出来ず、上空へ避けられたと悟らせもしなかった修司、しかしヴォルクルスの仮面のような顔には未だに余裕の色が滲んでいる。

『――――滑稽』

『あ?』

『――――愉快、白河ノ系譜、ドレダケ貴様ノ強サガ増シタ所デ、我等カラ逃レル事ハ能ワズ』

第七特異点で見せた沸点の低さなら、こうして上から見下ろしただけで奴等は憤慨し、暴れまわった筈。合体した事で奴の精神面に余裕

が出来たのか？訝しむ修司を余所に、ヴォルクルスは続ける。
『サァ、今コソソノ器ヲ我二差シ出セ』
『あぁ？　何を言って――――ッ!?』
意味深な言葉を吐き続けるヴォルクルス、一体なんの話だと修司が訝しむのも束の間、突如としてグランゾンを包むように黒い煙が顕れた。
『なんだ、これ？』
『サァ、我ガ眷属ヨ。ソノ羈絏、我二預ケヨ』
黒い靄に包まれて、修司の意識が遠退いていく。まるで奈落のような深い谷底に落ちていくような感覚に囚われる中、修司が耳にしたのは……。

〝なりませんよ。その様な醜態、断じて許しはしません〟
（誰だ？）
〝抗いなさい。白河修司、我が半身に連なる新たな可能性よ。この程度の些事に、躓く貴方ではない筈です〟
それは、初めて聞いた気がする声だった。黄金の王とも、シドゥリとも、ジャンヌとも違う。何処までも苛烈で厳しく、それでいて英雄王と何処か似ている優しい声。
不思議と励まされた気がする。そんな声だけのモノに、修司は誰だと問い掛けると……。
〝既に、私は消えた存在。貴方が気に掛ける必要のないモノ。故に、これだけ貴方に送りましょう〟
〝貴方に命令出来るのは、何時だって貴方自身だけなのですから――――〟
己を縛り、定めるのは他ならぬ自分自身。戦え、己の自由の為に、そう一方的に告げていく誰かの声は、そのまま何処かへ消えていき、二度と聞こえる事はなかった。

◇

「修司くん！　どうしたんだ。返事をしてくれ！」
カルデアの管制室にて、藤丸立香達と同様に修司の事も観測していたロマニ達は、眼前に広がる光景に動揺し、あわてふためいていた。
遂に見せた修司の切り札、グランゾン。その力は第四特異点の時に修司本人から聞かされ、その報告に偽りのない力をロマニ達に見せ付けてくれた。彼等の力を借りられれば、きっとこの特異点の攻略だって可能だと、瞬く間に光の槍に貫かれる魔神柱を見て、誰もがそう確信し、疑わなかった。
ヴォルクルスなる邪神が顕れても、ロマニ達の信頼は揺らぐ事はなく、喩え三体が相手でも決して負けはしないと、誰もが信じていた。
だが、グランゾンが黒い靄に包まれた瞬間、事態は一変した。グランゾンに乗っている筈の修司からの通信や反応は一切返ってこず、嫌な沈黙だけが其処にはあった。
どれだけ呼び掛けても無反応。らしくない修司の反応に管制室に徐々に動揺が見栄始めるなか、それは聞こえてきた。
『無駄だよロマニ＝アーキマン。お前の声は最早奴には届かないよ』
「こ、声!?　一体何処から!?」
管制室を揺さぶるような超然とした何者からの通信、一体誰がこんなことをしているのかと、思考を巡らせるロマニだが、その答えは既に一つしかなかった。
「まさか……魔術王ソロモン、なのか？」

立香達が向かったとされる光る門の先にいるとされる全ての魔術師達の祖、魔術王ソロモン。黒幕からの突然の介入し、今度こそ管制室には動揺の波紋が広がっていく。
『落ち着きたまえよ。どのみち諸君らには此処で消えていただく定めだが、愚か者には自分が何をしたのか分からせてやる時間が必要となる。お前達が芥の如く消えるのは奴がヴォルクルス神の眷属になってからでも遅くはあるまい』
「眷属？　眷属だって!?　修司君が、あの化物の僕（シモベ）だっていうのか!?」
ソロモンから聞かされる言葉は、ロマニ達にとって最悪を通りすぎた残酷な内容だった。白河修司とグランゾンはヴォルクルスの眷属、その突拍子のない話に当然ロマニは反発するつもりだったが、それを否定出来る材料は彼にはなかった。
『ある時、私は黒の叡智の一端に触れ、ある事実を知った。此処ではない何処か、〝極めて近く限りなく遠い世界〟の一つに、それはあった』
『白河修司。奴が操る魔神グランゾンには、どうしようもないある欠陥が内服されていたのだ。それが、ヴォルクルスの羈絏。奴は地球上最も強力な力を有しているのと同時に、飛んでもない厄介な奴に狙われていたのだ』
それが、邪神ヴォルクルス。嘗てのグランゾンとその乗り手を自身の復活による生け贄として用意された供物だったのだ。供物なら、生け贄に供えられて喰われるのが定め、そう語るソロモンに、ロマニはそんなバカなと目を見開いた。
『どういう理屈かは知らんが、奴は贄である白河の血を色濃く受け継いだ最適の器だ。故に、破壊神ヴォルクルスは見初められたのだろう。光栄な事ではないか、神秘も解さぬ猿が、神に認められたのだ』
「嘘だ！　僕は信じないぞ。修司が、僕らのハチャメチャ量産機が、あんな怪物の言いなりになったりするものか！」
『貴様の感傷に価値はない。さぁ、既に幕は降ろされた。私も、次の仕事に取り掛かる準備をしよう』
一方的に介入されたソロモンからの通信は、やはり奴から一方的に途切れてしまった。一言言い返してやりたいところだが、それももう

届かない。気持ちを切り替えて再度ロマニはオペレーターの全員に、修司との接触を試みるよう指示を出したが、やはり彼からの連絡は来なかった。
早くなんとかしなくては、焦燥するロマニは余所に……遂に、その時はきた。
『く、ククク……愚かな』
ゾッと腹の底から底冷えする低い声、それがあの蒼い魔神の所からだと察したロマニは、固まった状態で様子を見守る。
果たして、彼処にいるのは本当に自分達の知る修司なのか、固唾を飲んで見守るロマニとは対照的に、靄は弾ける様に霧散し……。
『――――唵――――』
綴られるその言霊は、嘗てない程に……魔に満ちていた。

◇

黒い靄の奥から顕れるのは、闇より深い深淵の蒼。禍々しい造形はより洗練された形で再臨を果たしていた。
アレはなんだ。遠巻きから様子を見ていたサーヴァントの一騎がそんな言葉を溢し、新たに顕れた魔神に注目が集まる。
『――――来い、バリオン創出ヘイロウ』
魔神が右手を天に向けて翳した瞬間、空間が裂け、金色に輝く日輪が顕現され、魔神の背中へと吸い込まれる様に装着される。
神々しさと禍々しさを兼ね備え、新生された真なる魔神。その銘は――――ネオ・グランゾン。
『……バカナ』

顕れた日輪の魔神を前に、邪神は慄く。有り得ないと愕然となる奴等とは対照的に、コックピット内の修司は笑みを浮かべる。
『――ヴォルクルス、だったか？　俺を洗脳して自分の手駒にするつもりだったみたいだが……残念だったな』
グランゾンから聞こえてくる修司の声、どうやらヴォルクルスなる邪神の洗脳に掛かる事はなかった彼の様子に安堵するが、次の瞬間彼等の精神は別の意味で追い詰められる事になる。
『生憎と、俺は自分の自由意思を誰かに委ねるつもりはない。そして、それを脅かし、踏みにじろうとする奴は……誰だろうと許しはしない』
大人しい口振りに反し、その言葉は何処までも冷淡で、冷血そのものだった。王や姉貴分の道理ある言葉には従う修司だが、根幹を為している自分自身の核とも呼べる部分を触れられ、修司は嘗てない程に怒っていた。
向こうが如何なる手段を用いてくるのなら……最早問答無用。自身の内から涌き出る欲求に従い、修司は操縦桿を強く握り締める。
『そして、お前らはそれに触れた。最早後悔も懺悔の言葉も、無念の叫びも口に出来ないまま……ここで消えろ』
『オォ、オオオォォォォッ！』
邪神が吼える。吼えたて、自身に従う亡者を喚び出し、今一度グランゾンを我が物にする為に迫り来る。
天も地も、全てが亡者によって埋め尽くされていく。正しく地獄絵図と呼べるその光景に……無数の光の槍が、その悉くを貫いていく。
またもやグランゾンのワームスマッシャーがやったのか？
……いや、違う。目の前のネオ・グランゾンは全く攻撃を仕掛ける素振りはなかった。
では、一体誰だと言うのだ。ヴォルクルス達が辺りを見渡し……そして……固まった。
『――――う、うそぉ……』
その光景を見て、固まっていた全ての者の気持ちをロマニが代弁す

る。敵味方、サーヴァントも魔神柱も思考停止するその視線の先には……天に浮かぶ二体の蒼き魔神、それも何れも日輪を背負った真なる魔神が合計で三体、最後の特異点にて顕れる。
その光景にニコラ＝テスラは目を剥き、トーマス＝エジソンは噴き出した。嫌な予感を感じ取ったノッブは逃げ出し、インド組は喝采をあげている。
そして……。
「誰がそこまでやれと言った」
黄金の英雄王は、笑みを浮かべながら酒を煽った。
邪神？　異界の破壊神？　ビースト並みの力？
それがどうした。お前達がどんな理不尽で不条理な力で襲って来るのなら、此方はそれすらも捩じ伏せる力で圧倒しよう。
『――――さて、ヴォルクルスだったか？　遠路はるばるの異界から、出てきて貰っておいて誠に恐縮だが……』
それは、次元を操る万能の力、その一部を使って遍在なる自分達を具現化させ……。
『お前達は此処で……終わりだ』
白河修司は、何処までも冷たい笑みを浮かべたまま、蹂躙を始めていく。

その１６９　終局特異点

「ちょっとノッブ、何逃げているんですか!?」
　終局特異点、Ⅲの座を司る魔神柱であるフォルネウスを筆頭に無数の魔神柱と相手取っていたカルデアのサーヴァント達。魔術王ソロモンの撃破の為に戦いに挑む立香の為に各地で戦い続けていた彼等だが、その戦場はとある魔神の顕現と同時に一変した。
　中でも場の空気を敏感に感じ取ったノッブこと織田信長は、目の前の魔神柱を自身の宝具で蜂の巣にすると、踵を返して脱兎の如く逃げ出したのだ。
　その突然の変わり様に渋々コンビを組んでいた沖田総司は、得意の縮地にて追い掛けて、その首根っこを掴み上げる。
「待って、お願い見逃して。今ホントヤバいから、ヤバいのが出てきちゃってるから。魔王たる儂の直感がビンビン叫んでるの、お願いオッキー見逃して、５００円上げるから」
「誰がオッキーですか。五千円渡されても見逃しませんよ！　ったく、私が土方さんだったら土道不覚悟で斬り殺されてますよ？　一体何が起きたって言うんですか？」
「おい！　沖田テメェ何してやがる！　敵前逃亡は切腹だぞ！」
　ホラもー。遠くから聞こえてくる新撰組副長の雄叫びを耳にしながら、沖田は深くため息を溢す。何で追い掛けた自分が怒鳴られなければならないのか、うんざりした様子で信長と共に戻ろうとすると……突然、自分達が相手にしていた魔神柱達から光の槍が貫き始めた。
　それは、沖田達が相手にしていたフォルネウスだけでなく。ブネ、ロノウェ、アスタロス、他にも此処観測所と呼ばれる宙域全てに生息している魔神柱達が、悉く内側から貫かれる光の槍によって絶命されていく。
　断末魔や、悲鳴を上げる間もなく蹂躙されていく。何千万、或いは

何億にも匹敵するであろう魔神柱達が瞬く間に撃滅されていく。その光景に沖田だけでなく、土方歳三すらも目を剥いて驚きを顕にしている。
敵対し、倒す筈の魔神柱が何者かによって消されていく。その圧倒的とも呼べる光景に、信長はアチャーとその顔を手で覆い。
「いかん、もう始まったか」
「ノッブ、貴方今起きているこれが何なのか知っているのですか!?」
「知らんよ。だが感じ取れるモノはある。連中、何をやったのかは知らんが、よりにもよって逆鱗を踏み抜いたらしい」
訳知り顔で語る信長、彼女もまた目の前の光景に確たる答えを持ってはいないが、第六天魔王と呼ばれた彼女の直感が、これから起きる惨劇を伝えていた。
これから起きるのは戦いではない。如何なる反抗も許さぬ――――蹂躙である。
しかし、それはあるサーヴァントとは少々意見が違うようで……。
「おぉ、オォォォォッ!! 反逆者よ! 神に抗い、神に報復をもたらす汝は、正しく叛逆の化身である!」
圧政の叛逆者スパルタクス、彼の普段以上にハイテンションなその昂りは、これから起きる出来事を如実に現していた。
さぁ、神を狩ろう。

◇

『どうしたヴォルクルス、神を僭称しているんだ。……その力、見せてみろよ?』
終局特異点にて、蒼き重力の魔神が顕現する。日輪を背負い、真な

る力を解放したその姿は正しく魔神。邪神であるヴォルクルスを圧倒して余りある力を得た修司は、その上で尚更なる挑発を重ねていく。

片手間の間に魔神柱を殲滅しながら、おぞましい邪神であるヴォルクルスを見下ろすその顔は、普段の彼とは別の、嘲笑に満ちた冷笑が張り付いていた。

『オオ、オオオオ、オオオオオッ!!』

『神ヲ愚弄スル痴レ者ガァッ!!』

そんな修司の挑発に、激昂した邪神が吼える。下等で、愚かで、憐れで、惨めな人間。己にとって贄でしかない人間に見下されるのは、彼等にとってこの上無い屈辱だった。

故に、周囲への被害を微塵も省みず、邪神は攻撃を開始する。天へ伸ばした尾から不可思議な方位陣が展開され、其処から無数の緋色の光弾を放ち、修司の操る魔神――――ネオ・グランゾンへ殺到していく。

天を埋め尽くす光、三体の邪神から放たれる光弾はグランゾンの逃げ場を失くし、周囲の地形を穿ちながら降り注ぐ。並みのサーヴァント処か、トップクラスのサーヴァントですら防ぐことは難しい暴力の渦、その理不尽さは確かに第七特異点のティアマトを連想させた。

――――が、届かない。周囲の地形を鑑みずに放たれたヴォルクルスの攻撃は、ネオ・グランゾンが纏う空間すら歪ませる歪曲フィールドにより、その一切が届かなかった。

日輪を背負った蒼き魔神、その三体とも無傷である光景にヴォルクルスは人間のように息を呑んだ。そんな見るからに狼狽している邪神とは対照的に、ネオ・グランゾンの担い手である修司は、いっそ落胆した様子で眉を寄せていた。

『――――こんなものか』

『ッ!?』

落胆、或いは失望にすら似た感情の吐露。嘲笑ですらない一言は、邪神のプライドを酷く傷付けた。

『??????ッ!!』

言葉にならない叫びが、宙(ソラ)に木霊する。それに合わせて地中から無数の亡霊が涌き出て来て、先の焼き増しの様にグランゾンへ押し寄せてくる。

『それは、もう見た』

既に見慣れた攻撃を受けるのも、時間の無駄だ。つまらない口振りを隠そうとすらせず、グランゾンはワームホールから一振の武骨な大剣(グランワームソード)を取り出し、ヴォルクルスの一体に向けて投擲する。

攻撃ばかり気にして、防御を失念していた邪神は投擲された大剣に直撃し、後ろに下がってしまう。元より連携と言う言葉を知らないヴォルクルスのそれは、これ迄英霊との戦いで僅かな隙を突いてきた修司にとって緩慢でしかなく……。

『そら、今度はこっちの番だぞ』

当然ながら、それを逃す道理など有りはしなかった。

投擲し、ヴォルクルスの肉体を抉って地に突き刺さった大剣を手に、グランゾンは勢いを乗せたまま横凪に一閃させる。振り抜かれたその一刀はヴォルクルスの胸部にある髑髏の目を切り裂き、更にはその威力に耐えきれず吹き飛んでいく。

更なる追撃、それを阻もうとする残る二体の邪神が後を追うが、上空に佇む同じく残った二体のグランゾンが、光の槍を放って歩みを止められる。同じ邪神からの援護を受けられなくなったヴォルクルスは、自力でこの窮地から脱しようと試みるが……既に、何もかもが遅かった。

『させねぇよ』

一閃。再び振り抜かれた一撃、今度は袈裟斬りされ、邪神の片翼を触手ごと斬り飛ばしていく。

『そら、次だ』

次いで一閃。放り投げる勢い、或いは叩き付ける勢いで振り抜かれたその一刀は、下半身の鰐の顎を抉っていく。大剣自体の重さに加え、亜音速すら越えたスピードも重ね合わさった事もあり、重力で造られた剣はグランゾンの手から離れ――――

『そらそら、まだまだいくぞォッ!』

――――る事なく、再び振り抜いて邪神の肉体を切り裂いていく。
一度手元から離れた筈の大剣が、何故手元にあるのか。その種明かしは非常に単純なものだった。何処までも加速し、振り抜く勢いも加速的に加算される中で振り抜かれた大剣は、如何にネオ・グランゾンでも制御が難しい。
握り続けるのが難しいのなら、回収するスピードを上げればいい。手元から離れるのと同時にワームホールで回収すれば、即座にグランゾンの手の内へ戻り、次の攻撃へ移行できる。そうすれば常に全力の一撃が繰り出せる。
そして、修司の悪知恵はそれに留まることはなく、気付けばグランゾンの両手には各々大剣が握り締められていた。
一振から二振り、二振りから更に三振りへ、二体のヴォルクルスを足止めしている二体のネオ・グランゾンから借り受けた大剣により、実質三本の大剣を扱うようになっていた。
これは昔、当時の修司が技に於いて決して敵わないとされてきたとある剣豪から着想を得た奥義。彼の様に一振で三つの斬撃を繰り出すことは叶わないが、この限られた状況では少しだけその領域に近付く事が出来る。
つまり、技で再現するのではなく、物理的に剣を増やすことで修司は彼の剣豪の真似事をグランゾン越しに出来るようにしたのだ。
目にも止まらぬ早業と、ゴリ押しの力業。その二つを兼ね備えた乱舞は、邪神ヴォルクルスの再生速度を上回り……。
『――――ほらよ、オマケだ』
『――――ア――――』
無数の斬撃によって細切れにされ、トドメに全方位からのワームスマッシャーを一身に受けた邪神の一体は、断末魔の声を上げることさえ赦されず消滅した。
『……次』
燃え滓の如く散っていく邪神を一瞥もせずに、修司は次の獲物を見る。相変わらず呑気に召喚された場所で陣取っているヴォルクルスだが、同位存在が一方的に処断された場面を目の当たりにした所為

か、その圧力はナリを潜めている。
『どうしたヴォルクルス、お仲間がやられた事がそんなに意外か？　割りと繊細なんだな』
と、呆れと侮蔑の混じった嘲笑に、邪神は再び勢いを取り戻す。分かりやすい反応に修司は笑みを浮かべるが、既にこの戦いの終りは見えている。
立香達が魔術王の所へ向かっている以上、自分も早いところ駆け付けなければいけない。こんな前座に時間を掛けていられないと、修司は次元の力を応用して喚び出した二体の自分達に目を向ける。
彼等も同じ思いなのか、返ってくるのは肯定の二文字。声や姿は確認できないが、二体のグランゾンから頷くのを確認すると、修司は残るヴォルクルス達に向けて最後の一撃をプレゼントする。
『――――さて、そろそろ終りにしようか』
瞬間、ネオ・グランゾンの身体から光が発せられ、直上に向けてゆっくりと浮遊していく。これ迄の勢いとは異なり、緩やかに上昇していく蒼き魔神を見て……とある大海賊は声を張り上げる。
「面舵逃げろォーーッ!!」
星の開拓者であるフランシス＝ドレイクのその叫びを発端に、多くのサーヴァントが退避を始める。あるものは戦車で、ある者は綺麗なフォームでダッシュし、またある者は魔術で転移していく。
そんな判断の早い英霊達に感心しながら、修司はカルデアに連絡を入れる。
『ね、ねぇ修司君？　君、一体何をするつもりなの？　何を仕出かすつもりなの？　あ、別に教えなくてもいいようん。聞いた瞬間、僕の胃が死に絶えそう』
『ちょっと超新星爆発を起こして、銀河ごとコイツらを消滅させてくるね』
『――――ファーーッ!?』
『うわぁ！　ロマニ室長代理が倒れたぁ!?』
『ちょ、泡吹いてる！　衛生兵、衛生兵ーッ!!』
奇声を発し、泡吹いて倒れるロマニを尻目にしながら修司はグラン

ゾンの力を解放させる。目の前の、自分と何らかの因縁のある邪神を完全に消滅させる為に、蒼き重力の魔神は遂にそれを発動させる。

『――――相転移出力、最大限。縮退圧、増大』

日輪が、輝きを放つ。修司の言霊が進むにつれて、日輪の輝きは強く増していき、一つの亜空間が広がっていく。それは修司の操るグランゾンだけではなく、他の二体の機体も同様に日輪を輝かせ、その力を解放させていく。

瞬く間に広がっていく波紋は、英霊達を除いた全てを呑み込んでいく。二体のヴォルクルスも、特異点である時間神殿そのものが、グランゾンの開く門の奥へと呑み込まれ……消えていく。

気が付けば、其処は見知らぬ所だった。特異点でもなければ地球上でもない、彼等の見知らぬ別の世界。世界の裏側とも違う……全く未知の別世界であり。

そこは、無数の魔神柱と二体の邪神が終る世界だった。

嵐が吹き荒れる。空には稲妻が走り、天が赤子の様に泣きじゃくっている。何もかもが暗闇に包まれた世界で――――奴等はいた。

二体のヴォルクルスを囲む三体の魔神。

『重力崩壊臨界点、突破……』

魔神の胸部が開き、三つの球体が各々顕になる。同時に重力の変動値は加速的に変化していき、一つの終末に向けて収束されていく。

『特に思い入れはないが、これで……お別れだ』

圧縮されていく。時間が、空間が、あらゆる事象が、魔神の下へと集い、圧縮され、凝縮されていく。恒星の8倍分に相当とされるそのエネルギーは、三体の魔神の各々の手の中へと集い……そして。

『お前達の存在を、この宇宙から抹消してやろう』

それは完成する。
瞬間、暗雲は吹き飛び、光が魔神柱と邪神に注がれる。それは幻想的であり、神秘的で、悲しい程に美しく。
『――――眠れ、永久に』
笑ってしまう程に、絶望的だった。
魔神柱[illegible]は嗤った。こんなの、勝てるわけがない。
魔神柱[illegible]は泣いた。自分達は、何もかもが間違えていた。
魔神柱[illegible]は憤った。何故奴[illegible]と関わった。
とある[illegible]魔神柱達を逃がした[illegible]は目を逸らした。せめて、安らかに逝きたいと[illegible]。
自分達は、喧嘩を売るべき相[illegible]手を間違えた。既に魔術王との繋がりは断たれ、あらゆる希望を砕かれた彼等が最後に目にしたのは……。
『縮退砲……発射！』
落とされる三つの破界の雫。弾け、爆縮し、解放される光に呑み込まれながら……邪神とその取り巻き達は、とある宇宙から完全に消滅するのだった。

◇

「漸く、辿り着いた」
一方、修司が天地開闢の光で有象無象を撃滅している頃、光る門を通り、不可思議な路を突き進んできた立香達は遂に其処へ辿り着いた。

穏やかな空間、後ろの門の外側では英霊達が奮起しているとは思えない静けさ。いっそ穏やかとも言えるその玉座にて……彼の王は鎮座している。

第４の特異点以降、直接相対するのはこれで二度目。人理焼却の元凶、魔術王ソロモンを前に藤丸立香は真っ直ぐ見据える。目を合わされただけで呪い殺せそうな魔術の王に、一切臆する事なく見据える。

そんな彼女を一瞥し、王は口を開く。

「ようこそ、カルデアの諸君。歓迎しよう」

その顔に、飛びきりの邪悪さと悪意を滲ませて、遂に彼女達は決戦の舞台へ辿り着いた。

その１７０前編　終局特異点

「ロマニ、おいロマニ！」
「うーん。もう、食べられないよぉ～」
「この、ベッタベタな寝言吐いてないで……起きないか！」
「ブフゥッ!?」
　腹部に走る衝撃と共に、カルデアの室長代理の意識が強制的に覚醒させる。乱暴な起こし方をしてくれる相方（ダ・ヴィンチ）に恨めしそうに見やるのも束の間、意識を手放す直前の出来事を思い出したロマニは、恐る恐る視線をモニターに移した。
　しかし、其処にはロマニ＝アーキマンが予想していた地獄絵図な光景はなく、ただ無限に広がる宇宙が広がっていた。其処にはあのおぞましい邪神や無数に蠢く魔神柱の姿はなく――――時間神殿そのものが、観測していた領域の半分以上が消失していた。
　その事実にあ然となるが、姿を消したのは奴等だけではない。あの日輪（ネオ・グラン）を背負う蒼い魔神（ゾン）の姿も消えているのだ。三体確認されていた内の二体が邪神達と同様に消失し、残った一機は元のグランゾンへと戻り、敢えて残された地に片膝を着いて稼働を停止させている。
　状況は相変わらず不明だが、それでも大体は推察出来た。彼が無茶苦茶な方法で転移し、此方に被害が出ない別の所であの怪物達を処理したのだと。間抜けに気を失ってしまった自分を内心で卑下しながら、気持ちを切り替えたロマニは隣で自分の代わりに観測していたダ・ヴィンチへ問い掛ける。
「――――修司君は？」
「君を起こす直前にワームホールから出てきたよ。で、今はあのグランゾンから降りて藤丸君とマシュを追ってあの光の門へ潜った所さ」
「そうか、やってくれたか」
　一先ず、此処でのやるべき事は終えたと、別時空から戻ってきた修司は、カルデア側に碌な説明をしないまま、立香達の後を追って光の

門へと入っていった。
残されたグランゾンは、既にその双眸から光を失って物言わぬ置物となっているが、既にその機体の周辺にはインド勢のサーヴァントを中心に防衛の陣が敷かれている。
「今、白河修司は藤丸君達の所へ駆け付けている最中だろう。と言うことは、当然今頃彼女達は人理焼却の黒幕と対面している筈だ」
「っ！　モニターを立香ちゃん達に！」
ダ・ヴィンチの言葉を受けて、ロマニの指示が管制室に響き渡る。彼の言葉を待っていたスタッフ達はその指を滑らせてコンソールを叩き、モニターに映る景色を変える。
切り替わった映像、その中に映るのは――――
「……」
膝を地に付けて、額から血を流す立香と彼女を庇う盾の少女。
彼女と共に決戦の舞台に共に参じてくれた英霊達は地に伏し、彼等を見下ろすその玉座にて……異形の王が、嗤っていた。

◇

――――多くの悲しみを見た。
――――多くの悲しみを見た。
――――多くの悲しみを見た。
ソロモンは何も感じなかったとしても。私、いや、我々は、この仕打ちに耐えられなかった。
〝貴方は何も感じないのですか。この悲劇を正そうとは思わない

のですか〟
『特に何も。神は人を戒めるもので、王は人を整理するだけのものだからね』
『他人が悲しもうが己(わたし)に実害はない。人間とは皆、そのように判断する生き物だ』
そんな道理(はなし)があってたまるものか。そんな条理(きまり)が許されてたまるものか。
そんなモノは不条理でしかない。そんな道理は理不尽でしかない。
故に、私たち(われわれ)は協議し、決意した。
――――あらゆるモノに訣別を。この知生体は、神の定義すら間違えた。

◇

「目標、依然健在。先輩、大丈夫ですか！」
「うん、なん……とかね」
終局特異点、冠位時間神殿。白河修司の計らいと、多くのサーヴァント達の力を借りて、光の門を潜り、藤丸立香とマシュ＝キリエライトは、遂に其処へ辿り着いた。
魔術王の玉座。人理焼却を目論み、達成し、自らの野望を次の段階へ進めようとしている人類にとっての絶対的敵対者。七つの特異点を攻略し、魔術王ソロモンの前へと立った立香達は、玉座に座る魔術王に対し、自分達に出来る最大限の攻撃を与えて見せた。
征服王は戦車を駆り、太陽王はその威光を力に変え、ジャンヌの守

護の守りを受けながら、魔術の王に総攻撃を繰り出した。立ち塞がる見えない壁、宝具の一撃すら防いでしまう魔術王の障壁。ジリ貧となった戦局を変えるべく、立香は自身の礼装に施された杭の一つを解放し、令呪と共にオジマンディアスへ力を託した。

そんな彼女の献身を得た太陽王は、自身の宝具を解放して魔術王の障壁を粉砕。見事、奴を玉座から引摺り落とすことに成功した。

しかし……。

「――――お前達は一つ、勘違いをしている。これ迄お前達は我が光帯を、エネルギーを、地球上の何処にも存在しないと宣った。当然だ。光帯は地球を焼却する為に私が用意したものではない。地球の表面を焼却した事で得られたエネルギーなのだからな」

砂塵の中から現れるのは、人の姿をした魔術王ではない。それは人類に対して底無しの悪意と憐憫を抱く角ある悪魔――――――即ち、人類悪（ビーストⅠ）である。

「――――成る程、つまり貴様はよりにもよって人類そのものを燃料にしたと、そう言う事なのだな」

「ッ!?」

「ほう、流石は征服王イスカンダル。腐ってもその慧眼は健在か」

立香達の頭上を照らす光帯、それは魔術王が人理焼却の為に使用したエネルギーではなく、人理焼却をした事で全人類から無尽蔵に絞り出し、抽出した代物だった。

人間の魂は魔力として潤沢なエネルギーの源になる。それを利用し、現在から過去に至るまでの３０００年もの時間の中で、魔術王は地球上に存在するありとあらゆる人類をエネルギーへと変換し、あの光帯を造り上げたのだ。

「なら、貴方は一体それだけの魔力を得て何をしようと言うのです！

――――いえ、まさか！」

「神託を得たか聖女、然り。全ては私が至高の座に辿り着く為にである。我々はお前達になど期待していない。誰も成し得ないのなら私が行う。誰も死を克服できないのなら、私が克服する」

「その傍らで、貴様らは無様に死に絶えるがいい！　我が大偉業の完

遂まで、瞬きの余命を惜しみながらな！」
「――来ます！」
「魔力を回せマスター！　踏ん張り時だぞ！」
「うん！　皆、もう一度お願い！」
　巨躯が地を蹴る。まるで砲弾の如く放たれたソレは瞬く間に立香達との距離を零にする。振り抜かれる豪腕、触れただけでも分かる濃密な死の気配を前に、立香が咄嗟に避けようとして……。
　間に合わない立香の体を押し退けた太陽王が、ビーストⅠの震う豪腕を直撃してしまう。
「た――――イスカンダル！」
「応ッ！」
　一瞬、吹き飛んだ太陽王に気を向けてしまうが、目の前のビーストⅠを退けなければ自分達に未来はない。襲い来る悪意を前に己の恐怖心に打ち克ちながら、立香はイスカンダルへ魔力を回す。
　そんなマスターの叫びに応え、征服王イスカンダルは戦車に乗り込み、ビーストⅠを轢き潰そうと雷を纏いながら吶喊する。並みの英霊であれば触れただけでも致命傷は避けられない一撃、しかしビーストⅠはそんな征服王に避ける素振りも見せず……。
　その手を手刀に変えて、天に向けて突き出した。
　その構えに覚えがあった。ビーストⅠから吹き出る力の奔流、それは紛れもなくあの時何度も見た彼の放つモノと同じ――――。
「征服王ダメ！　避けて！」
「ッ!?」
「エクス――――カリバー」
　振り下ろされた斬撃は、あの時の修司と全く同じ威力を秘めていた。
　――――間一髪、征服王は戦車から飛び降りた事で直撃を受けずに済んだ。だが、彼の戦車はビーストⅠの放った光の斬撃に呑まれてしまい、征服王の左腕も肘から下が失くなってしまっていた。
　欠損してしまった自身の左腕、それを目の当たりにしても征服王は動揺を見せず、即座に自身のマントを破り止血に宛がう。そんな彼を

クックッと笑いを堪えながら、人類悪は言葉を紡ぐ。
「あぁ、そう言えばこの姿で名乗るのは初めてだったな。非礼を詫びよう、カルデアの諸君」
「私は嘗て、ソロモンと共に在ったモノ。ソロモンの死を以て置いていかれた原初の呪い。ソロモンの遺体を巣とし、その内部で受肉を果たした〝召喚式〟　我が名は――――――」
　世界が、震える。頂天にある光帯を軸に時間神殿は顕れる魔神柱によって埋め尽くされていき、立香達の逃げ場を封じていく。
「魔術王の名は捨てよう。もう騙る必要はない。私に名は無かったが、称えるならこう称えよう。黒き叡智に触れ、真の叡智に至るもの。その為に望まれたもの」
「貴様らを糧に極点に旅立ち、新たな星を作るもの。七十二の呪いを束ね、一切の歴史を燃やすもの」
「即ち、人理焼却式――――――魔神王、ゲーティアである」
　魔神王ゲーティア。それが、人類を歴史ごと焼却し、人類悪の一つとなった獣の名だった。ソロモンの遺体に棲んでいた術式、それが自我を獲得し、数千年の時を越えて人類に牙を剥いた。
　確かに、その事実は恐るべき事なのだろう。魔術の知識を持っている者ならば、誰もが驚愕するに違いない。だが、立香にとってそれ以上に気掛かりがあった。
　それは……。
「どうして、どうしてお前が――――！」
　征服王の戦車を消し、彼の片腕を奪った手刀の一撃。その一振は確かに彼が繰り出すものの同じで、その鋭さは近くで見ていた立香だからこそ同じものであると確信できた。
　故に、何故ゲーティアが彼の技を扱えるのか。そんな立香の疑問にゲーティア（ビースト I）は呆れと侮蔑の視線を向けて……。
「奴の技を使える、か？　下らん質問だ。たかが人間に扱える技が何故私には使えないと断言できる？　相変わらず浅慮だな。人類最悪のマスター藤丸立香」
　たかが人類（猿）の技の模倣など、自分には造作もない。立香を人類最悪

と扱き下ろし、掃き捨てるゲーティアに彼女の盾であるマシュが黙っている筈がなかった。
「やぁぁっ！」
「！」
振り抜かれる盾の一撃、牽制の意味も込めたその一振は、魔神王に掠りもせずに空を切る。後ろに飛んで距離を開けた人類悪を前にマシュは立香を庇うように盾を構える。
「悲しいな。マシュ、私は君に同情し、憐れんでいた。故に私は当初、君だけは見逃そうとしていた。人間の都合で生み出され、存在そのものを弄ばれた悲しき生命体。そんな君だからこそ、私は私なりの慈悲を示そうとした」
身構えるマシュに対し、魔術王の態度は軟化する。人類の都合で生み出され、弄ばれてきた生命体であったマシュ＝キリエライト。その彼女の境遇はレフを通してみていたゲーティアにも思うところは合ったのか、語り掛けるその言葉は何処か優しくにすら感じられた。
「だが、奴の所為で君は変わった。変革などと言葉に惑わされ、君は純然たる存在では失くなった。残念だよマシュ、嘗ての君であれば私の言葉にも共感出来たと言うのに……」
設定された命。生まれから死ぬ時まで、何もかもが定められた人工の命。そんな彼女だからこそゲーティアは同情し、同時に期待していた。この様な惨劇を繰り返す人類に価値はないのだと、自分に同調してくれると期待していた。
しかし、その可能性は奴によって失われた。人工で生み出された彼女の命を、手前勝手な理屈でねじ曲げた男、白河修司。奴の行った人体実験は魔術師達と同じ非人道的な下衆の行いであると、ゲーティアは吐き捨てた。
「――――それは、違います。違うのです。魔神王ゲーティア、私は自分の命を誰かに預けても、自分の意思を誰かに委ねた事は一度もありません。この体に変えて貰ったのも、偏に私自らが望んだ結果です」
それを、マシュは正面から否定する。この体になったのも自分の意思で望んだモノであり、其処に他人の意志が介入する余地はない。

それ以前に、彼女は知っていたのだ。ＧＮドライヴによる人体の治療とそれによる後遺症、人体実験に等しい行いであることは修司自身が一番理解していて、また苦悩していた。一人の少女の命を救うために行うその行為を、彼は誰よりも真剣に苦悩し、決断した。

そんな彼だからこそ、マシュは自身を託したのだ。Ｄｒ．ロマニやダ・ヴィンチ、他にも多数の英霊と相談し、彼女もまた決断したのだ。

「私はあの日、自分の意思で決断したのです。それを、赤の他人とも呼べる貴方に、上から否定される謂れは……ありません！」

小さく、それでいてハッキリと断言するマシュに立香は笑みを浮かべ、太陽王は声を上げて笑った。

「フハハハハ！　良い啖呵だマシュ＝キリエライト。そして藤丸立香、貴様の相棒が此処まで吼えて見せたのだ。応えて見せろよ」

「うん、うん！　やろう！　マシュ、オジマンディアス王！　イスカンダル大王、ジャンヌも！」

「全く、今の余は片腕を斬り落とされているだろう？　もう少し労ってくれんかなぁ」

「ごめん！　でもお願い！」

「ったく、仕方のないマスターよな。だが、そうでなくてはな！　我々人間とは、常に挑む者。であれば、これもまた征服である！」

「了解です。この戦い、必ず勝ちましょう！」

魔力を回す。解放された杭は既に三つ、疑似魔力回路となった立香の神経系は悲鳴を上げ、今尚負荷を掛け続けている。

それでも、彼女は曲げない。それは修司が必ず来てくれるという信頼だけではなく、皆と共に戦い抜くという決意の表れ。

痛みと苦しみに苛まれながらも、それでも彼女は前を向く。そんな彼女等に対し――――。

「そうか、では望み通り――――死にたまえ」

魔神王は、有らん限りの侮蔑を向ける。おぞましい、醜い。どうして其処までお前達は醜くなれるのだ。それもこれも、全部……奴の所為だ。

奴が可能性何てものを示すから、それに群がる虫ケラが集まる。自

分達にも出来るのだと、要らぬ希望を抱かせて破滅へと向かわせる。
　こんな残酷な話があるか。こんな不条理な奇跡があるか。
「良いだろう。そんな諸君に私からプレゼントだ。可能性に満ちた奇跡、とくと味わいたまえ」
　彼女達が奇跡に群がり、奇跡を起こそうと言うのなら、存分に奇跡を体験させてやろう。そう言い捨てるゲーティアは、その両手を立香達に突き付けると、自身の腰回りへ持っていく。
「――――かぁ」
　その構えに、立香達は目を剥いた。それは、この旅路の中で幾度となく彼が見せた奥義の一つ。
「――――めぇ」
　あり得ない。そう否定したくても、ゲーティアの両手に集まる光は紛れもない本物で……。
「――――はぁ」
　エネルギーの奔流が、ゲーティアの両手に収束していく。その事実に誰よりも速く順応したジャンヌは、立香達の前に出て……。
「――――めぇ」
「我が旗よ、我が同胞を守りたまえ！」
「波アアアアッ!!」
「我が神は此処にありて(リュミノジテ・エテルネッル)!!」
　放たれたエネルギーはジャンヌの守護ごと呑み込み、特異点を破壊していった。

その１７０後編　終局特異点

広大に広がる宇宙（ソラ）の世界に一筋の光が走る。魔術王改め魔神王ゲーティア、彼奴の放った極光は玉座を灼き、大地を抉った。
「う……く……」
〝かめはめ波〟　これ迄幾度となく自分達の逆境を撃ち破り、立香達に勝利と生存を導いてきた希望の標、それがゲーティアによって模倣されてしまった。
何とかジャンヌの結界宝具で押し寄せる光の波を防いだのはよかったモノの、その所為で彼女の保有魔力は底をついてしまった。現界するので精一杯なジャンヌ、旗を杖代わりにしても地に膝を付ける彼女に立香は駆け寄るが……彼女自身の手によって遮られてしまう。
自分に構うな。肩で息をして、息も絶え絶えになりながらも、戦う姿勢を崩さないジャンヌの視線の訴えを感じた立香は、意識をジャンヌではなくゲーティアへと向ける。
両の手の付け根を合わせて此方に向けた姿勢のまま維持をし続けるゲーティア、残心のつもりなのか、それとも別の意図があるのか、人間の表情なんてない癖にその顔は何処かにやけている様にも見えた。
「――――まさか、かめはめ波まで真似てくるなんて」
「何がかめはめ波だ。この程度の児戯、魔力放出を用いれば誰にでも模倣出来る。こんなカスの様な術とも呼べぬ戯れに、随分な入れ込み様……人類とは、つくづくどうしようもないな」
構えを解き、自身の両手を見つめて口にする言葉は、何処までも人類を下に見た物言いだった。こんな技で何が出来るのだと、模倣し改めて下らないと口にするゲーティアに、立香は自分の事でもないのに悔しく感じた。
「下らない。そう言う割には随分とご満悦そうではないか？　なぁ魔神王」
「イスカンダル大王……」

「先程から聞いていればお主、人類を卑下する割には随分と人類に拘るではないか。ええ？　そんなに人類を毛嫌いするのなら、自分の力で叩きのめせばよいではないか。ワザワザ人の技を真似る必要などあるまい？」
　そんな立香の感情を察したのか、舌戦で捲し立てる隻腕の征服王。自身も片腕を切り落とされてダメージも大きいだろうに、それでもマスターである立香の気持ちを汲んで代弁する大王に、立香は嬉しくなった。
　そうだ。自分ばかり動揺している場合じゃない、自分はみんなと一緒に戦いに来たのだと、藤丸立香は立ち上がり、ゲーティアを睨み付ける。
「フンッ、その程度の挑発に乗ってやる必要もないが……慈悲だ。遊んでやる。そら、これはどう防ぐ？」
　立香の眼差しを受け、それを不愉快に感じたゲーティアは力の一部を解放し、握り締めた拳に集約させて力を宿らせる。
「マシュ！」
「了解です！」
　あれが何なのか即理解した立香は、マシュに防御の指示を下す。
　ジャンヌと同じ様に、盾を翳して庇うように立つと両足を曲げて完全なる防御体勢を整える。
「ペガサス――――流星拳ッ！」
　突き出された拳から放たれる流星群。盾に打たれる一つ一つの重さから、マシュの顔に余裕が失っていく。けれども負けない、圧されて堪るかという彼女の不倶戴天の想いが、彼女が手にしている雪花の盾に力が宿る。
「先輩！」
　軈て防ぎきり、守り抜いたマシュは即座にマスターである立香に指示を求める。即ち待機か、反撃か。攻撃は他のサーヴァントに任せて立香の元で防御に専念するのか、征服王と太陽王と共に切り込むか、二つに一つという選択肢を前に……。
「お願い二人とも、マシュを援護して！」

マシュと同様、或いはそれ以上の速度で総攻撃の指示を下す。自分の守りは後回しにしてまで攻撃の選択を選ぶ立香、攻撃処か特攻染みた指示を出す立香に対して、魔神王は何処までも冷ややかだった。

「あぁそうだ。お前達は何時だってそれを選ぶ。率先して死を選ぶ愚行、負けると分かっていながら繰り返す悲劇。お前達はまるで進歩がない」

何故、人類は時に自滅とも取れる選択を選ぶのか。滅びを美しさと捉えるのか？　勝てない相手に挑んで死に、自らを贄とする自己犠牲の精神が尊いモノだと、邁進し、推進するべき宗教だというのか？

狂っている。この世界も、お前達（人類）も、悉くが狂い、腐り果てている。一体どれだけ悲劇を積み重ねれば気が済むのか、憐憫の獣であるゲーティアはそれ故に立香達の意図に気付かない。

「良いだろう。そんなに死にたいのなら消してやる。他ならぬマスターの命令で、諸とも死に果てるがいい！」

左手を翳し、ゲーティアは自身の背後に魔方陣を展開させ、無数の魔力の弾丸を放っていく。一つ一つが宝具に匹敵する爆撃の雨、一発でも当たれば致命傷は免れない死の爆心地を、マシュ＝キリエライトは駆けていく。

その目に金色の瞳を輝かせ、眼前の空間を把握したマシュは盾を使って攻撃を受け流し、着弾地点や襲い来る砲撃の雨の中を正面から突破していく。

〝イノベイター（革新者）〟　白河修司の治療を受けて新人類とも呼べる存在へと至ったマシュは、英霊であるギャラハットの受け皿となった事も重なり、サーヴァントとも異なる未知なる領域へ踏み入れ掛けていた。

それでも、今の自分の状態に疑問を抱ける程の余裕は彼女にはない。ゲーティアの攻撃の対象が立香に向けられる前に、マシュは勝負を付けようと足を進める。

潜り抜け、走り抜き、そして辿り着いた。爆撃の雨の中を駆け抜けて、遂にゲーティアの前に足を踏み入れたマシュは、未だ見下ろし続

けるゲーティアに向けて盾を武器として突きだし――――。
やはり、当然の如く防がれる。その太い腕によって防がれてしまうが、それでもマシュは追い込む力を緩めない。
「やぁぁァァァァッ!!」
「図に、乗るなぁっ！」
そんな彼女の執拗さに憤りを感じたゲーティアは、振り払うように腕を広げ、マシュを盾ごと吹き飛ばす。吹き飛ぶ彼女に追随するように跳躍し、握り締めたゲーティアの拳には、最早マシュに対する情はない。革新者という言葉に踊らされた憐れな人類の一人として、その拳を振り下ろす。
「何処を見ている」
そして、そうはさせないと太陽王が威光を示す。彼が有する宝具の一つ、熱砂の獅身獣（アブホル・スフィンクス）。純粋な竜種に並ぶ幻想種が、太陽王の降す命令の下に突撃、マシュの前へと割り込みゲーティアを吹き飛ばす。
無限の宇宙を連想させる貌から、太陽の光が降り注ぐ。地を灼き、空間すら歪める光を浴びて、それでも魔神王に揺らぐ様子はない。流石に硬いなと舌を打つ太陽王の横を、戦車（チャリオット）が駆けていく。
「Ａａａａａｒｒｒｒｒｒａａｉ……!!」
熱がダメなら雷、雷光を纏い突撃を繰り出し、天を駆けていくその様は逸話伝承に語られる征服の進撃そのもの、猛牛の突進を受けて、それでも堪えた様子のないゲーティアに、征服王は天を舞い続けるのを止め、地に向けて戦車ごと叩き付けた。
特異点全体を揺さぶるような震動、これ迄の相手なら大きな痛手になる筈の一撃、決死の覚悟で挑んでくれたサーヴァント達を前に、立香は逃げることなく見据える事しか出来ない。
これで一定のダメージを受けていることを願う立香だが、その希望は無惨に砕かれる。舞い上がる砂塵から吹き飛ぶように現れる征服王、彼の体をマシュが受け止めた。
「征服王、ご無事ですか！」
「安心せい、ただ蹴飛ばされただけよ。しかし、流石に手強いな。今のは余に出せる最高の一撃、なのに……奴め、まるで意に介しておらん」

砂塵の中から現れる無傷不変の魔神王、自身に降り掛かる埃や塵を鬱陶しく払い落としながらも、その肉体には僅かな掠り傷も付いてはいない。
これがビーストI、最初の人類悪にして人間に牙を剥く獣の力。姿大きさはティアマト神とはまるで違うというのに、発せられる圧は引けを取らない。
それでも、自分達は負ける訳にはいかないと、藤丸立香は強く見据える。自分達がやらなければならない、そう気持ちと決意を固めながら、今一度皆に魔力を回そうとして……。
「ここまでだ。貴様等の遊びに付き合ってやるのは」
それは起きた。
「っ、これは!?」
サーヴァントであるジャンヌを始めとした英霊達が、魔力の素となって消え始める。それは特異点を修復した際に何度も目の当たりにした退去によるサーヴァントの送還現象、人理焼却の元凶は未だに打ち倒せていないのに、どうしてこの様な現象が起きるのか。
ジャンヌは疑問に思い、同時に確信に至る。自分達が今相手にしている人類悪の一つであるゲーティアは、元は魔術の王であるソロモンの内から顕現した存在、魔術王ソロモンは召喚術式に長けた王だという、その逸話が事実であれば、自分達が消えかけている理由は一つしかない。
「既に、カルデアからの召喚術式は把握している。私は魔術王ソロモンの内より顕れし人類悪、人類程度の召喚術式など、とうに解析し解明し終えている」
「……」
「あくまで〝座〟にではなく、カルデアへの送還だが、それでも貴様達が再び召喚される事はない。何故ならその頃には全てに片が着いているからだ」
嗤いながら見下し、蔑んでくる魔神王に征服王は珍しく悔しさを噛み締めながら特異点から退去していく。最後に仕掛けるつもりだった太陽王も、反撃虚しくカルデアへ強制送還され、ジャンヌもまた消

えようとしている。
せめて、せめて彼等に何かを残さなければならない。言葉でも、何でも、自分達を抜きにして戦わなければならない立香達に、ジャンヌは何かを言い残そうとして……。
止めた。何かを言い残して思考を巡らせていた聖女は、未だ諦めた様子のない藤丸立香とマシュ＝キリエライトを見て、彼女達が既に一人前の戦士だと思い知る。
それは、まるで彼の様な……嘗ての聖杯戦争で見せた修司と何処と無く似ていた顔付きに、聖女ジャンヌはアレコレ言うのを止め――――。
「どうか、ご武運を――――」
そんな、ありきたりの言葉だけを残して消えていく。そんな彼女の言葉を受け取りながら、改めて立香はゲーティアへと向き直った。
「――――なんだ？　その顔は、まさかこの期に及んでまだ諦めていないのか？」
「当然、私とマシュはまだこれっぽっちも諦めていないよ」
既に、魔力は底をつき掛けている。膝は笑っているし、マトモに戦える力なんて立香には残されていない。今の自分が支えているのは根拠のない強がりだけ。
マシュも自分もそろそろ限界に差し掛かっている。それでも、負けられないと思う気持ちだけは、未だに折れずにいた。
「――――奴か。此だけの力の差を見せ付けられても、まだお前達は抗うのを止めないのか。いいだろう、並ば望み通りにしてやる。お前達が無意味に抱く希望とやらを、根刮ぎ燃やし尽くしてやろう」
両手を天高く掲げ、ゲーティアはそれを起動させる。自分達を見下ろす巨大な円環である光帯、そこから発せられる熱量は地球上のあらゆる表面を焼き尽くしてあまりある。
……本当は、彼女だけでも認めて欲しかった。人間の都合によって生み出され、人間の勝手で死に絶える。存在そのものを弄ばれた彼女だからこそ、人類を否定出来る権利があった。
この惑星は間違っている。神の在り方、人の在り方、命の在り方。

この世界は何処までも残酷で、それでいて歪んでいる。
こんな、生まれながらにして死に絶える事が確定された生命体に、一体何の価値が、意味があるというのだ。悲しみしか生まない世界、惨劇しか誕生出来ない世界。そんなモノしか生み出せない世界など、消えてしまえばいい。
誰もが出来ないというのなら、我々が成そう。人類という旧き種を終わらせ、我々は極点へ至り、新たな惑星を創世させる。
故に、一先ずこの場を終わらせよう。人類最後にして最悪のマスターと、何処までも憐れなマシュを一瞥して……ゲーティアは告げる。
「第三宝具、展開。惑星を統べる火を以て、人類消滅を告げよう。さらばだ、藤丸立香。さらばだ、マシュ＝キリエライト」
「お前達の探索は、此処に結末を迎える！」
光帯が光を放つ。人類三千年分のエネルギー、惑星を終わらせ、新たに始める再誕の光。どの歴史に於いても、アレに勝るエネルギーは存在しない。それはつまり……防ぎ様のない、絶対破滅の光という事。
つまり、これで自分達はおしまい。どれだけ踠き、足掻いた所でこの決定は覆らないと……。
「お任せください！　マシュ＝キリエライト、行きます！」
当然の如く、彼女は駆け出した。その瞳に微塵も恐怖を抱かず、いつものようにマシュは走り出した。
何故なら、自分達の旅は此処で終わりではない。こんなところで立ち止まるモノではない。
既に、彼女の内には願いがあった。それがどんなモノなのかはまだ言葉に出来ず、未だに模索してばかりいるが、それでも、こんな自分にも願いがあるのだと、自覚することが出来た。
故に、彼女は盾を振りかぶる。叶えたい願いと、通じたい想いがあるから、彼女は何時だって全力で挑み続けるのだ。
「マシュ――――！」
「さぁ、　芥　の　ご　と　く　燃　え　尽　き　よ。

誕生の時きたれり、其は全てを修めるもの(アルス・アルマデル・サロモニス)」
光帯から光が溢れる。何もかもを呑み込み、破壊し、終わらせる。正しく終末を前に……。
「其は全ての疵、全ての怨恨を癒す我等が故郷。顕現せよ！今は遥か理想の城(ロード・キャメロット)!!」
少女(マシュ)は、挑む。これ迄自分が受けてきた全てに感謝を込めて返す為に、変革し、革新の子となった少女は、普通の女の子として……立ち向かう。

◇

「――――あぁ、そうか。それが、君の選んだモノか」
白に染まる世界で、遠くのモニター越しで見つめていたロマニは、終わりに抗う雪花の盾を掲げる少女を見て、答えを得たような気がした。
人の都合によって生み出され、人間の勝手にその結末を約束された人造人間。人工的に生み出された命であるがゆえに、何もかもに対して希薄で、あらゆる事柄に対して無頓着だった。
自分の終わりすらも、事務的に受け入れていた空っぽの少女。そんな彼女が、己の全てを賭して抗っている。命に価値はなく、無意味なモノだとしても、人は生きていける生命体なのだと、これ迄の旅路を

経て、嘗て幼かった少女は自分なりの答えと意思を以て、遂に自分の足で立てるようになるまでに至った。
なら、自分も答えを出さないといけない。例え怖くて、恐ろしくても、成すべき事は果たさなければならない。マシュ＝キリエライトという少女が、そうしているように……。
席を立つ。もうじき燃え尽きる命を前に、ロマニは少しでも彼女達の想いに報いる為に、笑みを浮かべて立ち上がり……止められた。
レオナルド＝ダ・ヴィンチ。万能の天才が、ロマニの腕を掴んで離さなかった。何故？　今更そんな人の決意や覚悟に水を差す様な真似をするダ・ヴィンチに、ロマニは純粋に驚くが……モニターに映るそれを見て――――。
「……あ……」
ふと、酷く間の抜けた声が漏れた。なんで？　どうして？　そんな疑問が浮かぶのと同時に、ロマニはそうだよなと納得した。
白に染まる世界の中、何もかもを破壊して溶かす光の中。ロマニも、ダ・ヴィンチも、カルデアのスタッフ一同全員がそれを目の当たりにし、そして――――。

◇

「――――良かった。これなら、何とか耐えられそうです」
時間が停止した。そう錯覚してしまう光景の中で少女は笑う。
光帯の熱量を防ぐ物質は今の地球上には存在しない。だが、それで

も少女は確信していた。
彼女の護りは精神の護り。その心に一切の穢れなく、また迷いがなければ、溶ける事も、ひび割れる事もない無敵の城壁となる。
故に、こうなるのは必然だった。
彼女が護れば、立香は護られる。そして、それの意味するのは――
――マシュの焼失に、他ならない。
地獄の時間が続き、星を貫く熱量を防ぎながら、彼女は想っている。これ迄の旅と、これからの旅を。自分がいた今までと、もう、自分のいない未来の夢を。
これ迄自分を形作ってくれた全てに感謝し、その切っ掛けをくれた先輩――――藤丸立香に、マシュはずっとずっと恩返しがしたかった。
弱気を圧し殺して、少しでも彼女がくれたものを返したくて、踏ん張って、耐えてきて……それでも、足りなかった。
そう。あれだけの旅を経て、あれだけの戦いを経験して、マシュ＝キリエライトという少女には何一つ満足していなかった。
あの日、あの燃える世界の中で自分の手を取ってくれた先輩、そんな彼女に何一つ返せないのが……堪らなく悔しくて。
そして……やっぱり後悔した。もう一人の恩人である修司にもマトモに返礼出来ず、結局こうなるしかなかった自分の力不足に呆れながら、マシュはごめんなさいと小さく口から漏らす。
それでも、この選択に悔いはない。自分の在り方を知り、願いを抱き、夢を追いかけ始めた彼女に怖いものなどある筈がなかった。
故に、マシュ＝キリエライトは受け入れる。焼却され、焼失していく自分の肉体を感じながら、それでも立ち続けることを誓って……。
「まだだよ。マシュ、言ったでしょ。私達は、全然諦めていないって」
「――――先、輩」
嗚呼、やっぱりそうだ。この人は、臆病で、平凡で、魔術師ですらない普通の女の子の筈なのに、それでもやっぱりそれを選んでしまう。

自分だって魔力の使いすぎで倒れ掛けているのに、それでもマシュの背中に手を当てて、支えている。
初めての特異点、冬木の地で黒き騎士王と相対した時と同じ。彼女は、藤丸立香は、何時だって感情のままに動き、行動している。魔術師としての効率や狡猾さなんて微塵も持ち合わせていない、ただの無鉄砲の善人。
けれど、そんな彼女の在り方にマシュは何度も勇気を貰った。立って立ち向かう力を貰った。
嗚呼、やっぱり自分は弱い人間だ。あれだけの決意を固めていたのに、このまま消えていく覚悟だってしていたのに……今はもう、死にたくないという気持ちで一杯だ。
「……誰か、お願いです。誰でもいいから、先輩を、皆を……どうか」

〝助けて〟

掠れるような声。音も、時間も、この光の前では全てが消し飛んでいく。誰も彼女の叫びは届かない。誰も、彼女の想いは聞こえない。そんな事を叫んでも無駄だと、理不尽が押し寄せる世界の中で……。
「当然だ」
聞き慣れた、あの人の声が聞こえてきた。
「――――あ、あぁ……」
――――来てくれた。
「悪い、遅くなった。いやぁ、光の門を潜った所まではいいんだけど、途中で道が途絶えてさ。此処まで文字通り飛んでくる羽目になっちまったよ」
遅くなったけど、何もかもが手遅れに差し掛かったけど、それでも、彼は来てくれた。
「修司、さん……」
「二人とも、ナイスガッツ。かっこ良かったぜ」
立香とマシュ、二人の少女を心から敬意を込めて格好いいと呼び、

その頭を撫で回す。
「さて、そんじゃ……いっちょやるか」
共に戦い、諦めない精神のまま、立ち続けた二人。そんな二人の気持ちを受け取り、修司は一歩前に出る。
マシュの盾より一歩でも外に出れば、そこは消滅の光が待っている。人類の歴史の全てを焼き尽くし、燃料として汲み上げて作り上げた光帯の光、人類史の３０００年分の熱量を前に、修司は雪花の前に立つ。
熱量が、押し寄せる。皮膚を焼き、血液を蒸発させ、痛みと苦しみが無限に重なって押し寄せてくる。しかし、それでも修司は不敵な笑みを崩さない。何故？　決まっている。
――負ける気がしないからだ。
「――――かぁ」
両手を突きだし、腰へと落とす。これ迄幾度となく目にし、最近では彼がそれを放つことになんの違和感も抱かなくなった。
「――――めぇ」
光を溜める。白に染まる世界の中で、蒼く煌めく小さな星の光。多くの英霊達がカルデアに還されていく中、唯一残った英雄王は、その光景にニヤリと笑みを浮かべた。
「――――はぁ」
誰かが言った。一体、何のためにこんな事をするのか。ワザワザ相方である魔神から降りてまで、どうしてそこまでして、こんな決着の付け方に固執するのか。
「――――めぇ」
そんなの、決まっている。その方が、正面から理不尽をぶっ飛ばす方が――――スカッとするからだ。
「波ァァァァァッ!!」
斯くして、それは放たれる。押し寄せる光の中で放たれた蒼い極光は、白に染まる世界で、一筋の流星へとなった。
しかし、やはり足りない。人類史３０００年分の熱量とやらは、修司の本気の一撃を以てしても、覆る事は敵わなかった。

「はは、ハハハハハハハ！　バカが、今更ノコノコ現れて何をしに来た！」
　その光景を見て、魔神王は嗤う。滑稽で、みっともなくて、無様。人間の愚かさと醜悪さを来れでもかと詰め込んだ様だと、ゲーティアは嗤う。
「そら、お前が遅かったから皆死ぬぞ。マシュも、マスター（藤丸立香）も、カルデアも、何もかもが死に絶える！　何もかもが手遅れになった今、貴様一人に一体何が出来るゥッ！」
　何処までも人間を見下し、病的な迄に修司を扱き下ろす。幸か不幸か、そんな言葉は修司の耳には届かない。
　押し込んでくる人類最大の熱量、これを超えるには今の自分には何もかもが足りなすぎる。ただ限界を超えるだけでは駄目だ。シンカへ至り、〝極〟となった状態で競り合った所で、それは技の極致で掻き消すだけにすぎない。
　それでは、奴の鼻っ柱はへし折れない。それでは駄目だ。それだけでは足りない。故に修司が選ぶ道は、何時だって一つだ。
　限界の、限界を超えて、その……更なる向こうへ。
「界王拳」
〝――――――――――５０倍だ〟

◇

「無駄なことを。とっとと諦めてしまえば楽になると言うのに……。

何処までもバカで、救い難い生命体よ」
燃え盛る炎、自らの命を削り、文字通り全てを燃やし尽くす勢いの修司に、魔神王は何処までも冷淡だった。
どれだけ不条理に抗おうと、人は運命という絶対からは逃れられない。理不尽に嘆き、努力を積み重ねても、結局人は更なる理不尽に潰される。それがこの世の理であり、絶対の掟。
人も、英雄も、神すらも。運命という理には逆らえない。運命に翻弄され、運命によって悲劇は確定したモノとされてきた。覆られないのがこの世界が出来た時に根付いてしまっているのなら、最早その根底から破壊するしかない。
故に、魔神王は今日まで準備を進めた来た。あらゆる悲劇を終わらせる為に、全ての惨劇を消す為に、自分は今日まで生き続けた。
さぁ、全てを終わらせよう。未だに蹌く醜い人間を、せめて見送る位はしてやろう。そう思いゲーティアは自身の視線を下に下げて……ふと、気付いた。
押しきれて……いない？　とうに蒸発していると思われた拮抗状態は今も続いている。いや、それどころか押し返されて……!?
「黄金の、炎――――だと？」
白い世界の中で燃え続ける紅蓮の炎、血の様に濃いその炎は、修司が力を出し続ける度に、輝く黄金へと変貌を遂げている。
一体、奴の身に何が起きているのか、それを理解する前にゲーティアの第三宝具、星すら貫く人類の火は……。
「だぁぁアァァァッ!!」
限界を無限に超え続ける、立った一人の人間によって――――押し返された。

◇

「――――修司、さん？」
何度目だろう。彼の破天荒を間近で目撃し、巻き込まれてきた藤丸立香は、目の前に佇む人物に何度目か分からない驚きの感情を溢す。
だって、それはあり得ないからだ。どれだけ人が願い、挑んだとしても、決して叶えられる事はない現実が立ちはだかっているからだ。
でも、今の彼はどうしようもなくあの物語の主人公と同じで、何処までも似通っている。偽物や、贋作とは違う。この世界での姿。
それはマシュも同じで、きっとＡチームを含めた全ての魔術師、全ての人類が知っている空想の形態。
そう、空想だ。決して現実には存在せず、ましてや神秘にも残らない。人が生み出した虚像、その……筈だった。
逆立った金髪、身に纏う黄金の炎。その瞳には、進化と革新を現す翡翠色の輝きが灯り、静かに魔神王を見据えている。
それは、修司が知る中で最も憧れた姿。当時、理由も根拠も無しに、ただ格好いいとだけで脳裏に焼き付いた情景。それを、修司は負けたくない、勝ちたいという思いだけで、己の内で創り上げてしまった。
空想を掌握し、夢想を踏破し、妄想を凌駕し、理想を超越する。シンカという力を用いて、新たな理を己に刻み付けた。
「――――あり、得ない」
魔神王ゲーティア。人類を見下し、憐れみ、蔑んできた魔神の王。そんな彼が初めて、見るからに狼狽え、たじろいだ。絞り出す様な声であり得ないと溢し、濁流のごとく感情を顕にする。
「我が第三宝具を、凌駕した？　何の冗談だ。何故そんな事が出来る!!　ふざけるなァッ！」
人類の歴史、３０００年分の熱量、これを超えるエネルギーは存在しない。そんなモノ、今の時代には存在しない。
しかし、そんなゲーティアだからこそ気付かない。彼の口にする今

が、〝既に過去のモノ〟となっている事実に。
「全が、個に凌駕されるのはあり得ない。なんだ……？　一体、なんなのだ!?　貴様はァァァァァッ!?」
　意味が分からない。訳が分からない。魔術的でもなく、神秘でもない。全く知らない未知の力、黒い叡智に触れ、この世界の別の理に触れた筈なのに、それでもゲーティアには奴という存在が理解できなかった。
「……俺が何だって？　そんなの、とっくにご存知なんだろ？」
　そんなゲーティアの心情を察したのか、修司は口にする。
「俺は人間だ。お前が蔑み、見下し、一方的に憐れんでいた――――どうしようもない地球人。偉大な王に認められ、今日まで限界を超え続けて来た。ただの、人間で……」
　超絶で壮絶。この場にいる全ての人間の想像を超えて……敢えて言おう。
「俺は貴様を、倒すものだ!!」
　今の修司は紛れもなく、【超（スーパー）】である！

その171　終局特異点

「フハハハハハ！　あの戯けめ、とうとうそこまで手を伸ばしたか！　我が臣下ながら、何処までも欲深い男よ！」

冠位時間神殿。魔術王ソロモン改め、魔神王ゲーティアが人理焼却の為に最初に造り出した特異点。時間と空間から断絶され、通常とは異なる世界の果てにて、英雄王は腹を抱えて笑う。

黄金の舟ヴィマーナ。空を飛翔する玉座の下には、特異点の大部分が消滅し、魔神柱相手に奮戦していた英霊達も、あと数人残すばかりとなった。

あと僅かの時間で決着は付けられる。その際に成し遂げた己の臣下のぶっとび具合に腹筋を破壊された英雄王は、空想すらも現実へ撃ち落とした修司に向けて心からの称賛を送る。

しかし……。

「さて、我が臣下が相変わらずデタラメなのは良いとして――――貴様から見てどうだ？　奴は今の貴様から見て尖兵足り得るか？」

王の玉座から離れた空間に、その男はいた。その顔に蒼い仮面を張り付け、白の外套に身を包んだその佇まいはどこか異端的で、その男は言葉に出来ない程に〝浮いていた〟。

「さて、それはどうでしょう。見た所、彼はまだそこへ至ったばかり。その身に〝????〟を宿したばかりでは局地的に奮うだけで精一杯でしょう。我等の席に並ぶには依然として足りないものが多い」

「ふむ、成る程な。では、貴様から見てあの姿はなんと見る？　間違った進化とは思わぬのか？」

その場の雰囲気、空気から浮いているのではなく、世界そのものから浮き出ているような錯覚。ある種の超越然とした仮面の男のその佇まいに、千里眼を持つ英雄王は見定める。

未来を見通す英雄王の千里眼。しかし、その冠位足り得る眼を以てしても、仮面の男の姿を捉えることは敵わない。無自覚に垂れ流す彼

の微弱な力が、ありとあらゆる力を断絶さてしまっている。
「シンカの行く末に間違いなどは存在しませんよ。あるのは、至った果てに自身が後悔しないか否かの感傷だけ。敢えて言うとするならば……ちょっと、羨ましいですね」
　遠巻きからでも目に出来る黄金の炎、あそこでは一つの決着が付けられようとしている。人の空想を自らの理にして、自身の新たな可能性として発現させた修司に、その仮面の男の男は何処か羨ましそうに見つめていた。
「どのみち、今すぐ彼をどうこうしようなんてつもりはありません。我々の所に辿り着くにはまだまだ時間が掛かりそうですし、何より彼には自由意思がある。それを無視して取り込もうとする輩は、私達の中にはいませんよ」
「ふん、小賢しい。素直に言えば良かろう？　あの程度では、貴様等の域には届かないと、至ったばかりの雛鳥に期待などする道理はないとな」
「――――否定は、しません」
　紅い眼を細くさせ、僅かに怒気を滲ませる英雄王に、仮面の男は臆することなく断言する。確かに今の修司は強い。並大抵の相手では歯が立たないし、これから待ち受ける数々の災厄に対しても、彼ならば充分に戦っていけるだろう。
　ただ、それでも彼が自分達の所まで辿り着けるのかと言われれば……難しい。自分という理を生み出し、掌握して見せても、極め続けていなければ意味がない。そう言う意味では彼はまだまだ発展途上であり、同時に可能性が満ち溢れているとも言えるだろう。
「ともあれ、これからですよ。今後彼が其処まで至れるのか、それとも道半ばで諦めるのか。決めるのは彼自身です。……個人的には、後者の方をオススメしたい所ではありますが」
「無理であろうな。奴は白河修司、不条理と理不尽を排斥し、許さぬと断じる奴は同時に進み続ける進撃の人間でもある。それは他ならぬ貴様等こそが理解できよう」
「――――」

「あまり、我の臣下を侮るなよ?」
　不敵に笑みを浮かべる英雄王に、男もまた仮面の奥で笑みを浮かべる。何れにせよ、この先の道を決めるのは彼自身。部外者である仮面の男に出来るのは、せいぜいその成長・シンカを〝外の領域〟から観測するだけ。
「……ま、それは良い。奴が今後どうするかは奴自身が決めることよ。それはそれとしてな」
「?」
「いい加減、遠すぎる！　幾ら何でも謙虚に過ぎるぞ！」
　先程までの緊迫した空気は霧散し、今度は場違いな程のグダグダな空気が蔓延し始めた。怒鳴り、身を乗り出すように玉座から視線を向ける英雄王の先には、豆粒のように小さく遠ざかった仮面の男が佇んでいる。
「いえ、私は此処で結構です。偉大なる黄金の英雄王の近くに寄るなど、いちファンとして許されませんから」
「我が気になると言っているであろうが！　と言うか貴様、どうやってその距離で声を届かせているの!?　我的にそっちの方が気になるのだが!?」
　明らかに声が届く距離ではないのに、現実として仮面の男の声は英雄王に届いている。が、端から見れば英雄王が独り言を溢しているような光景、如何に傲慢で知られる英雄王と言えど、痛い者を見る目で見られるのは我慢できなかった。
「いいからもそっと近くへ寄らぬか！　これでは我が道化よ！　我に畏れ敬うのも結構だが、過ぎれば毒になると知れ！」
「いえ、貴方は全ての英霊の頂点に立つ英雄王。たかがいちボッチの身である私には、剰りにも過ぎた栄誉です。あ、でも出来れば後でサイン戴けません？　彼等に自慢したいので」
「面倒くさッ！　そして図々しいな貴様!?　謙虚なのか豪胆なのか、どっちかにせんかッ！」
　なんやかんやあって、結局は戦いが終わるその時まで一緒にいた仮面の男はその後、サインと英雄王とのツーショットをＧＥＴするま

で、観戦を楽しむのだった。

◇

「――――ん？」

遠くから感じた僅かな気配。大きいような、薄いような、不透明で嘗て感じた事の無い不可解な気配を感じ取った修司は、一瞬の一瞥を其処へ向ける。

意識を集中させて感じた気を分析しようとするが……既にその気配はない。逆探知を仕掛けた此方に気付いたのか、それともその気配の相手はこの領域からは撤退したのかは定かではないが、視線の先に黄金の英雄王が健在している事から、一先ず悪意を持った相手ではないことを察し、視線を前へと戻す。

「修司……さん？」

「その、お姿は……？」

「おう、二人とも怪我はないな？」

声を掛けてくる立香とマシュに、修司は前を見据えたまま応える。本来ならばちゃんと向き直って話をしてあげたい所だが、生憎と其処まで悠長には出来なかった。

目の前にいるのは人類を歴史ごと焼却せしめた怪物、人類悪の一つとして数えられる獣、ビーストIこと魔神王ゲーティアが、此方を睨んでいる。今にも食って掛かってきそうな相手を前にして、あまり無駄な時間は掛けられない。

仮に隙を晒して余りある実力差があろうと、護るべきモノが背後にいるのなら、修司の内から油断というモノは消え失せている。――――それになにより、今の修司は酷く高揚している。早く戦いたい、早く目の前の敵を倒したい。その様な闘争本能を抱いたまま二人に話し掛けてやれる程、今の修司の我慢は長くない。

出来るのは、視線で無事かを確かめるだけ。闘争本能が増大され、普段より鋭くなった修司の目付きに、立香は見るからに狼狽えるが、翡翠色の奥にある彼の変わらない優しさを確認できた彼女は、マシュの体を抱き寄せて頷く。

それを目の当たりにした修司もまた、笑みを浮かべる。相変わらず凄い子達だと、世界を焼き尽くす程の光を前にして立ち向かった二人の少女に心から称賛の念を抱くと、未だに立ち尽くす魔神王に向けて一歩踏み出していく。

「倒す、倒すだと!? たかが猿が、この私を倒すと宣ったか!? 度し難いにも程がある!」

「どうした、声が奮えているぞ? 自慢の光帯が破られ、今更ながら怖じ気づいたか?」

依然として、ゲーティアは顕在している。光帯の一撃で上着は焼け落ち、身体中至る所に火傷を負っている修司に対し、魔神王は未だに無傷のまま。

それなのに、魔神王の暗い双眸の奥には明らかな狼狽の気が滲み出ている。星すら貫く光帯、防ぐものなどこの世には存在しないと断言されてきた彼等の第三宝具が、嘘の様に掻き消された。

人類史３０００年分に及ぶ極大のエネルギー、その熱量すら凌駕するエネルギーが、たった一人の人間から放出される。その事実と意味を前に、ゲーティアは震える事しか出来なかった。

(震えている、だと? この私が、目の前の、たった一人の人間に、臆していると言うのか!?)

自らが震えていることを自覚出来ていなかったゲーティアは、修司の一言によって認識する。そう、他ならぬ魔神王は、恐怖していた。

いつから? それはきっと、初めて相対した第四の特異点から。己

が眷属であり、自身の一部である魔神柱があの蒼い魔神の力で片手間で蹂躙されてから、彼の内に【恐怖】が刻まれていた。だが、今日までゲーティアはそれに気付くことはなかった。
何故なら、これ迄３０００年もの間に彼は拠点である時間神殿に引きこもったまま、故に自らに恐怖という感情が生まれている事にも気付けず、今まで自覚する事が出来なかった。
手足が震える。此方に向かって一歩ずつ近付いてくる黄金の炎を纏う修司に、魔神王ゲーティアは前進も後退もできないまま、ただその場で立ち尽くす事しか出来なかった。
怖い。人間とは、人類とは、激昂すれば此処まで恐ろしく成れるモノなのか。己の内に溢れでてくる感情に翻弄されながらも、それでも魔神王は拳を握り締めるのを止めなかった。
自分は、世界をやり直す。この世に蔓延るあらゆる悲劇を失くすために、今ある歴史を焼却し、新しい歴史を創造させる。その為に此処まで来た。その為だけに、自分達は存在した。
だから、喩えこの身が恐怖で震えようとも――――！
「どうした？　間合いだぞ」
「ッ!?」
気付けば、既に奴はゲーティアの手が届く所まで来ていた。その顔を不敵な笑みで歪ませ、明らかに侮った様子でその翡翠の双眸を向けている。露骨に見下されていると察したゲーティアは、恐怖の感情を怒りで振り切り、握り締めた拳を彼の顔面に叩き付ける。
「この、痴れ者がァァッ!!」
打つ。人を、英霊すらも殺し得る一撃を、ゲーティアは一切の加減なく打ち込んで見せる。この様な辱しめは認めない、こんな屈辱は認めない。黒き叡智に触れ、〝外〟や〝裏〟とも違う別世界の理を知ったゲーティアは、星のやり直しという大偉業と自身のプライドに懸けて、目の前の修司を殴り殺さんと拳を奮う。
周囲の大気を揺さぶる程の豪撃。恐怖や怒りという人間らしい感情を自覚しても、尚魔神王の力は凄まじい。星の歴史を焼却し、新たな極点に挑む者。魔神王ゲーティアの意地の込められた殴打の押収

は、無防備な修司の体を何度も打ちのめし……。
「――――こんなもんかよ」
「ッ！」
「フンッ」
「ッ!!??」
　返し刀で返される修司のパンチの一発で、両膝を着いて崩れ落ちる。彼の放った拳はゲーティアの腹部に深々とめり込み、その衝撃は背中へと突き抜けていく。
　人間を進歩のない猿と侮り、見下していたゲーティアは、その一撃の衝撃で一切の思考を断絶させられ、地を這う様に踞ってしまった。
「が……あ、がは……」
「軽ぃんだよ。テメェの拳は、見掛けばっかりで中身が全く伴ってねぇ。ヘラクレスの拳に比べたら、拍子抜けも良いとこだ」
　拳一つを受けただけで地に這いつくばって呻くゲーティアに対し、何十発も受けておきながら平然としている修司。両者の間には隔絶した力の差が存在していて、奇しくもそれはこれ迄魔神王が人類を見下していた構図と逆転していた。
　ヘラクレスと比べたら、お前なんて大したことはない。罵倒ではなく、事実としてそう断言する修司に、ゲーティアは再び言葉に出来ない憤りを覚えた。
「貴様、貴様ァッ！　そんなにも私を貶して楽しいか！　其処までして私を辱しめたいか!?　そこまで、其処までして、お前は私をゴブァッ!?」
　未だ痛みと衝撃の収まらないゲーティアの腹に、修司の蹴りがめり込んでいく。拳で打ち込められた以上の衝撃を受け、衝撃に負けて吹き飛ぶゲーティアは、己の座っていた玉座を砕きながらも尚吹き飛び、地面に何度も体を打ち付けながら転がっていく。
　圧倒的。人類悪という一つの巨悪を、彼はたった一人で凌駕している。立香達の後ろに隠れていた獣（フォウ）は鳴く。自分、いつかはあんなのとガチンコバトルしなくちゃいけないの？
「間違えんなよ。これは、お前から仕掛けてきた戦いだ。散々人様を

馬鹿にしておきながら、此方が少し煽っただけで激昂するとか、少しみっとも無さすぎるんじゃあないのか？」
　踞り、ゲーティアの口元と思える箇所から赤黒い血のような液体が溢れる。痛みと恐怖で打ち震えるゲーティアに対し、修司の態度は何処までも冷淡だった。
「そら、まだお前の全力は出してないんだろ？　出せよ。得意の召喚術式とやらで、テメェの傘下の魔神柱どもを残らずこの場に喚び出せよ」
　魔神王と魔神柱達の関係性は、グランゾンのスキャニングを通して既に把握している。コイツらは群にして個、たった一柱だけでも生き残っていれば無限に増え続けるタケノコの様な生態系。先の空間では土台となっている空間ごと破壊した為、魔神柱が新たに生えてくる事は無い。が、依然としてゲーティアは存在している。
　奴がその気になれば、此処に大量の魔神柱が喚ばれる事になる。煽りに煽る修司に怒髪天を衝く勢いで怒りを充満させていくゲーティアは、望み通りにそれを下した。
「死ね、死に絶えろ人類史！　未だに生に根付くその醜き在り方ごと、粉々に打ち砕いてくれるわぁっ！」
　雄叫びと共に顕れる魔神柱。その数は総数千に至る。削られ、破壊され、分身達が駆逐されても尚、ゲーティアには只では折られない気概があった。
　自分は負けない。負けられない。負けるわけにはいかない。自分の行うべき使命に駆られたゲーティアは、顕れた魔神柱全てにたった一人の人間を殺せと命じる。
　おぞましい魔神の目が、修司ただ一人に向けられる。おぞましき人類悪、千にも昇る魔神の軍勢を前に、修司は以前と変わらない堂々とした振る舞いで佇み……その手に、力を宿らせる。
　黄金の炎と光を手刀となった右手に収束させ――――。
「エクス――――カリバー！」
　左から右へ、横に線を引くように振り抜かれた手刀は、千に迫る魔神柱を一柱も残さず一閃に両断し、その悉くを塵へと還していく。

「ば……かな」
翡翠の双眸に射抜かれて、今度こそゲーティアは後退った。恐怖を自覚し、怒りを捩じ伏せられ、分身達を鎧袖一触された魔神達の王。自分に出来る全てが悉く蹂躙される様を目の当たりにしたゲーティアはこの時、初めて許しというモノを乞い、そして願った。どうか、この質の悪い悪夢を終わらせてくれ。
しかし、残念ながらその悪夢を始めたのは他ならぬゲーティア自身。今更、そんな道理は通らない。
「もう、遅いぞ」
「ッ!?」
「お前は、既にその線を越えた。幾らでもやり直しは出来たのに、何時だって結末を変えられたのに、それを頑なに拒んだのはお前自身だ」
「テメェが俺に怒りを抱いている様に、此方はとっくに振り切ってるんだ。今更、後悔してるんじゃねぇぞ、ゲーティアーッ！」
炎が噴き出していく。天に迫り、周囲を照らす黄金の炎。
今更、ゲーティアは気付いた。自分は、自分達は敵に回してはいけない奴を、敵にしてしまったと。

その172　終局特異点

怒髪天を衝く。人類悪（ビーストI）という悪意を前にした修司の形相は、正しくその言葉を現していた。人類を一方的に歴史ごと焼却し、何処までも人間を下に見ている魔神王に憤慨した修司は、身に纏う黄金の炎を天を衝く勢いで燃え上がらせている。

許さない。これだけの事をしでかして、今更謝った程度で許されると思うな。感情を昂らせ、怒りを顕にしている修司の迫力に圧され、魔神王ゲーティアは後退る。

怯えている。あれ程人類に対して傲慢で、見下してきたゲーティアが、英霊でもなければ神霊でもない、たった一人の人間に臆している。あ然となっているマシュに対して、藤丸立香は改めて確信した。

「修司さん、本当になったんだ」

呆れた様に、それでいて何処か嬉しそうに立香は笑みを浮かべた。目の前にいるのは地球人類の多くが夢見て、憧れ、夢想した架空の存在。それが今、自分の前に現れている。

立香は既に満身創痍。身体も、精神も悲鳴を上げていて立ち上がる事すらも億劫となっている。けれど、今の修司の姿を見ていると、自分の底から力が沸き上がってくるような不思議な感覚があった。

いつもそうだ。目の前の彼はいつだって現場を引っ掻き回し、状況をハチャメチャにしていく。それに振り回される事は何度もあったし、立香自身も修司に対して苦言を溢したくなったのは一度や二度ではない。

けれど、それでもやっぱり……それ以上に、彼女の心には大きなワクワクが占めていた。そう、ワクワクしたのだ。彼の起こすハチャメチャな旋風に巻き込まれていく内に、藤丸立香は白河修司の起こすデタラメが、楽しくて……仕方がなかったのだ。

だから――――。

「やっちゃえ！　修司さんッ!!」

彼女がそう叫ぶのは、至極当たり前の事だった。
「さぁ、散々そっちから手ぇ出して来たんだ。今度は――――此方から往くぞ」
そんな立香の声に合わせて、修司は地面を蹴った。地を大きく抉りながら、尚収まりきれぬ力の波動。纏った黄金の炎をより燃え上がらせて、振り上げた拳は何者にも阻まれる事なく魔神王の顔に突き刺した。
「グブゥッ!?」
衝撃と痛み、人類悪である自身を以てしても致命傷になりかねない一撃。その一撃を受けたゲーティアは、文字通り首から上をぶち抜かれた。人間に似た血を散乱させながら地へ倒れ込んだゲーティアに、再び空気がシンッ……と静まり返った。
（え……終わった？）
確かにやっちゃえと口にはしたが、それにしたって呆気無さすぎる。人類を歴史ごと焼却した未曾有の大災害にしては、剰りにも……。
そんな立香の楽観も、未だにゲーティアの骸を見下ろしている修司を見て、まだ終わってはいないことを理解する。そう、まだ光帯も、この特異点の消滅もまだ何も解決出来てはいない。
「マシュ、立てる？」
「はい、大丈夫です。マスター」
底を尽き掛けている体力と魔力、持ち前の精神力で何とか立ち上がる立香に、マシュもまた呼応する。互いに支え合いながら立ち上がる二人の少女を尻目に、修司は人理焼却による影響の、数少ない良い所を見た気がした。
「……さて、いつまでそうしているつもりだ？　テメェの不死性のネタも上がっているんだ。下らねぇ時間稼ぎしてないで――――とっとと起きろ」
立香とマシュに人の優しさを見せる反面、大の字となって倒れるゲーティアには絶対零度の視線を向ける。
既に、――――より具体的に言えばグランゾンに乗り込んだ時――

――この特異点の特性と魔神王ゲーティアの関連性はグランゾンによって解析済み。その特徴はなんて事のない、漫画やゲームに良くある対象を同時に破壊しなければ倒せないと言うもの。
魔神王ゲーティアと魔神柱、互いに相互関係を成して互いを補完し合っているその生態は一見すれば完全なる不死生となっており、端から見れば付け入る隙のない完璧な布陣と思われるだろう。
七十二柱と、その統括者であるゲーティア。これらを同時に破壊しない限り、カルデア側の勝利は極めて困難だと、そう……思われていた。
頭部を再生させながら、魔神王は起き上がる。その双眸を驚愕と困惑に彩られながら、彼の視線は泳いでいる。信じられないと、そう溢すゲーティアの心境にはやはり恐怖の感情で満ち溢れていた。
「何故だ。何故、我が同胞達が復活しない。どうして、再生されない！」
相互補助の関係である自分達は不滅。如何に魔神柱が駆逐されようとも、統括者である自分が生きている限り破滅は訪れない。３０００年の時間の中で初めて感じた異常事態、ゲーティアの中に感じられる魔神柱の気配はあと数本残されているばかりだった。
しかも、その内の数体は既にこの特異点から逃げ出している。立ち尽くすゲーティアの頭には理解できない事態への困惑と混乱で満たされてしまっていた。
「なんだ。今更気付いたのか？　お前の同胞、他の魔神柱は既にその大半を俺達で消しておいたよ。お前が用意した邪神諸ともに、な」
不敵に笑いながら事実を口にする修司に、ゲーティアは今回幾度目か分からない驚愕の感情を晒す。同胞であり分身、３０００年の時を共に生きてきた分け身達が、目の前の人間の手によって既に滅ぼされている。
嘘だ。有り得ない。互いに支え合い、相互関係であり、互いに補助し合う魔神王達にとって、互いの同時の滅びは有り得ないとされている。
片方が滅びればもう片方、或いは魔神柱の何れかが再び再生させれ

ばいい。だが、その理ごと破界された今、最早その様な機能は彼等の間には存在しなかった。
溶鉱炉、情報室、観測所、統制搭、兵装舎、覗覚室、生命院、廃棄孔。この特異点を構成しているあらゆる要素が、致命的な迄に破壊し尽くされてしまっている。残っているのは統制局であるゲーティアのみ、幾ら魔神王ゲーティアとて、失われた全ての魔神柱を復活させるには、時間と労力が圧倒的に足りない。
繋がり、同位存在であるからこそ理解できる。今のゲーティアでは、自己の再生程度が関の山で、それすらもあと数回出来るかどうか分からない。その昔、ゲーティアは何処かで聞いた気がする。このどうしようもない状態、状況の事を人類は何て言ったか？
「〝詰み〟だ。魔神王ゲーティア。テメェの全ては今、此処で潰える」
終わる？　自分が？　此処で？　修司に告げられた事実を前に、ゲーティアは呆然と目を見開いている。
〝死〟　生命の終わり、命の終焉。人類を含めたこの惑星の生命が宿命付けられた悲劇、その終わりが今、自分の前に迫っている。
「――――あ、あぁ……」
震えている。手が、腕が、首が、胴体が、足が、指が、死を自覚して震えている。ゲーティアは気付いていなかった。あれだけ生命の終わりに縛られた人類を憐れんでおきながら、ビーストⅠは死という終わりの意味を全く理解していなかった。
死に果て、悲しみに暮れる人々が可哀想と、憐れだと、こんな地獄なんてあんまりだと嘆いておきながら、ゲーティアの視点は何処までも第三者のモノに過ぎなかった。時間神殿なんて現実とは断絶された空間に引きこもり、３０００年もの間計画の成就しか頭になかった人類悪は、その事実に気付かなかった。
（これが……恐怖！　死というモノに支配された生命体が抱える原初の畏怖！　そうか、これが〝怖い〟か。〝恐ろしい〟という感情か！）
漸くゲーティアは理解した。第四特異点以降、白河修司という人間を目の当たりにする度に身がすくみ、自身の内側にある何かが悲鳴を

上げているかなような感覚。そうだ、今の自分は目の前の人間にどうしようもなく怯えてしまっている。
「――――――恐ろしいな、お前は」
「あ？」
「理不尽を踏みにじり、不条理を叩き潰し、あらゆる道理を踏破する。――――最早認めるしかない。白河修司よ、唯の人間でしかない筈のお前に、私は心底恐怖している」
「――――――」
「だが、だからこそ！　私は成し遂げなければならない。新たな創世を！　新たな人理を！　死と断絶の物語に満ちたこの世界をやり直す為に！」
　恐怖を知り、人間の感情を理解したゲーティアは、だからこそと己を奮起させる。全ては新しい人理を始める為、死という終わりを永遠に失くす為、魔神王は最後の賭けに出る。
「光帯よ、人類３０００年の歴史よ！　その力を今一度示せ、人が、命が、新しい時代を迎える為に！」
　死というモノを自己の視点で認知し、それを前にした事でゲーティアはある種の吹っ切れた様な感覚に陥っていた。死というモノは怖く、恐ろしい。だからこそ抗うのだと、此処へ来て人ならざる獣は人のなんたるかを知った。
　光帯が再び輝き出す。その輝きは先の第三宝具を放つ時よりも強く瞬き、熱量が更に上昇していく、それは正に太陽のごとく煌めいていた。
「これは、魔神王ゲーティア、光帯に何やら呼び掛けて、力を増幅させている模様です！」
『此方でも確認した。立香ちゃん、マシュ、そして修司君、今から君達は現場から離脱、即刻カルデアへ帰還するんだ』
　明らかに普通じゃない様子の光帯に、マシュも立香も動揺を隠せない中、カルデアのロマニから撤退の指示が飛んでくる。
『今、此方で観測した。魔神王ゲーティア、人類悪の一つであるビーストⅠは、光帯を臨界点まで熱量を上昇させ、この特異点ごと君達を葬

るつもりだ』
「そ、それって、所謂自爆ってヤツ!?」
『そうだ。修司君の力を目の当たりにした奴は、自棄を起こして自爆を選択した。――――今ならまだ間に合う、君達は急いで其処から離れるんだ』
「で、ですが、あの光帯は人類の歴史そのもの、魔神王に自爆のエネルギーとして利用されてしまったら、それこそ取り返しがつかないんじゃあ――――」
『それなら……』
「僕がやるから大丈夫ってか？　此処まできて、お前一人に押し付ける選択肢は俺にはねぇぞ」
　人類の歴史、その３０００年分のエネルギーを全て自爆に費やそうとしている。奴の自爆による影響は計り知れない、今すぐ逃げろと呼び掛けるロマニへ待ったを掛けたのは、やはり白河修司だった。
『ッ、修司君、まさか……君は』
「知らねぇよ。俺が知っているのは臆病で、悲観的でありながらも、最善を尽くそうと足掻く俺達の指令代理のロマニ＝アーキマンって人間だ」
　訳知り顔で諭しておきながら、それを拒絶されたロマニは目を見開かせ、そして納得する。嗚呼、やっぱり君は何処までもその道を往くのだと、何処までも愚直で、真っ直ぐなその在り方に、ロマニは改めて思い知らされた気がした。
「どのみち、逃げきれるだけの猶予はない。なら、残された選択肢は唯一つ」
　防いだり、逃げきるのが不可能だというのなら、真っ正面から切り開くしかない。――――なんだ、いつもの事じゃないか。膨れ上がる熱量とエネルギーを前に、修司は今度こそ全てを終わらそうと、身に纏う黄金の炎を滾らせ、その力を解放させる。
「はぁぁぁぁぁぁぁッ!!」
　身体の奥底から力が湧き、溢れていく。どれだけ力を放出しても尽きることのない力の奔流、黄金の炎はより輝きを増していき、天を衝

かんと唸りを上げる。
　軈て力を限界まで引き上げた修司の手からは、一つの力が形を成して顕れる。それは一振の大戦斧、両刃の、修司の身の丈を越える勢いのある巨大な戦斧はこれ迄とは違う何かがあった。
　その銘は――――。
「ゲッタァァァトマホオォォォクッ!!!」
　無意識に、その名を叫ぶ。瞬間、世界が脈打つのを誰かが感じた。それは、禁忌を呼ぶ産声か、断末魔か。
　しかし、もう遅い。振り上げ、力を解放し続ける修司に呼応する様に、戦斧は肥大化して巨大化していく。
（まだだ。もっと、もっと力を引き上げろ！）
　足りない。もっと、もっとだと、天井知らずに力を引き上げていく。黄金の炎に進化の力を混ぜ合わせ、戦斧は更に飛躍して巨大化していく。

　そして、それは出来上がる。内から出でて、更なる力を注ぎ込まれた戦斧は、特異点全体を覆って余りある程に巨大となり、その全ては人類を焼却させた術式、光帯へ向けられる。
　改めて、ゲーティアは思い知った。これが人間の力なのかと、こんなことが人間に可能なのかと、その双眸を唖然とした様子で見上げる魔神王は、ただその光景に圧倒されていた。
「ゲーティア、お前は言ったな」
「ッ!?」
「俺達の生きている世界が、死と断絶に満ちた物語だと。言わせてもらうがな、テメェは思い違いをしているぞ」
「な……に……？」
「先ず、俺達は唯の一度だってテメェに救いを望んだ覚えはない。死と断絶に満ちたと言うが、所詮そんなものテメェの主観（感想）でしかねぇだろ。そもそもなぁ……」
「人間として生き抜いた事もねぇ奴が、人間を語るんじゃねぇよッ!!!」
　これ迄、言いたい放題だったゲーティアに対しての、ささやかな修

司の反論。人間として生きたことも、苦悩したこともない奴が人間を語るなど、これ程滑稽なモノはない。
懸命に生きたこともない奴が、命の価値を口にするな。そんな極大の怒りの込められた感情と共に、修司は戦斧を振り下ろす。
激突する光帯と戦斧、人類３０００年分のエネルギーと進化をもたらす究極のエネルギー。拮抗は意外な程にあっさりと崩れ……。
「人間を、舐めるなァッ!!」
憤怒の戦士の咆哮は、憐憫の獣を光帯ごと一刀両断に切り裂くのだった。

その１７３　終局特異点

これ迄七つの特異点を巡り、何れの空に在った光帯。人類の歴史そのものをエネルギーとして回収し、形成された人類史３０００年分の輝き。

星の表面を焼き尽くし、魔神王の新たな創世への足掛かりとして生み出された文字通りの人類の結晶、今日まで立香達を見下ろし続けてきた光帯は、たった一人の人間の手によって両断された。

白河修司。人類３０００年分のエネルギーすらも凌駕し、星すら両断せしめる刃を以て光帯を叩き斬った男は、自身の手から消えていく戦斧を見送りながら、改めてソレへ視線を向ける。

「さて、これで一先ずは決着となった訳だが……一応、末期の台詞位は聞いてやるぞ」

「――――――」

それは、人類悪の一つと称されし者。人類の歴史から生み出される悪意にして、獣を冠する生きた厄災。ビーストⅠ、魔神王ゲーティア。永い時間と労力を掛けて作り上げた光帯が自分ごと両断された事実を前に、左半身を失った魔神王はただただ眼前の光景に唖然としていた。

「――――分からない」

「あ？」

「何故、そうまでしてお前達は抗う？　いつか終わり逝く命、死という避けられない終わりが生まれた時点で背負わされているというのに、何故お前達は許容する？　納得できる？」

結局、ゲーティアにはそれだけが分からなかった。この惑星に生まれた命は例外なく死という終わりを迎え、無惨に死に絶える。誰もが忌避とし、拒絶したいであろう終わりを払拭したい筈なのに、どうして目の前の人間はこれを許容しているのか。

白河修司という人間は理不尽を許さぬと断じている。ならば、彼こ

そがこの事実を許さないと吼えるべきではないだろうか？　死という終わりを、理不尽を許してはならないと、吼えて覆すべきではないのだろうか。
　分からない。死という恐怖を知ったからこそ、ゲーティアには分からなかった。そんな獣に修司は呆れながら頭を掻き、溜め息を溢す。
「お前さ、さっきも言ったけどさ、本当になんなん？　死という終わり？　まさかお前、俺達人間がこの世の全てに意味を以て産まれ、生きているとでも思ってんのか？」
「……え？」
　長い、長い沈黙の後から捻り出すように出てきたのは、心の底からの戸惑いの声だった。すべての命には価値があり、意味がある。そんな理論が何処かにはあるのだと、否定しておきながら信じていたゲーティアにとって、その一言は死刑宣告よりも衝撃的だった。
「マジか。なんかズレてんな～って思ってたけど、マジでそっからなのか。まぁ、こんな殺風景な所に引きこもっていたんじゃあ、それも無理もない話か？」
「そんな、そんなバカな。お前達はそうなんじゃなかったのか!?　無意味に死ぬのが嫌だから、だからこそ己の生に意味を見出だそうとしてきたのではないのか!?」
「意味ってのは、そいつが死に際に勝手に見出だすモノだ。それを別の人が受け取り、また次へと繋いでいく。お前は本当、人類の一側面しか見てこなかったんだな」
「そんな、そんな……ばかな事が！」
「何より、人間ってのは生きていくだけで精一杯な生き物なんだ。自分の産まれてきた意味とか、そんな事を真剣に考えている奴とか、それこそ暇な時しかねぇだろうよ」
　人類は、自ら生きてきた意味や価値を求めたりはしない。その事実はゲーティアにとってこれ迄の自分の計画を根底から否定されるモノであり、受け入れがたい話でもあった。
　信じられない。そう否定したくても、それを拒絶出来るだけの力も説得力も彼は持ち合わせてはいない。当然だ。３０００年の間、この

玉座に引きこもっていた彼が、修司という正論者を論破できるほどの言葉を持ち合わせている訳がなかった。
　これでは自分のやってきた全てが、そもそもの意味がないと立証されてしまう。それだけはイヤだと、最期にゲーティアは修司にではなく、立香へ話を向ける。
「貴様も、貴様もそうなのか!?　藤丸立香！　お前も、人類の存在に意味はなかったと、そう断言するつもりか!?」
「え？　私？」
　突然話を振られた事に戸惑う立香だが、マシュも修司も止めようとする素振りを見せなかった。何故なら、二人とも彼女の気持ちを知っているから。これ迄の旅を経験し、色んな時代と当時の歴史に振れてきた彼女だからこそ、その言葉は誰よりも重く、浸透するモノだから。
「お前は、証明したかったのだろう!?　人類に価値はあると！　無意味に壊される謂れはないのだと！　だから今まで戦ってきた！　そうだろぉっ!?」
「え、えっと……」
　必死に、すがり付く様に捲し立ててくるゲーティアに、立香はちょっぴり引き気味だった。そりゃあ、勝手に自分の生きてきた世界を燃やし、帰りを待つ家族や家を失くしてくれたのは腹が立って仕方がないし、なんなら今も一発殴ってやりたい位には、腸が煮え繰り返る思いだ。
　けれど、それは人類の歴史の価値とか、意味の為という訳では決してなく……。
「――――私は、ただ生きたいと思った。ただ、それだけだよ」
「――――」
　だから、彼女の口からそんな当たり前の言葉が出てくるのは、当然の事だった。
「生きたいと思った？　そんな、そんな事のために？」
「いや、私この世に生を受けてまだ２０年も経っていない小娘だよ？　今を生きるだけで精一杯なのに、人間の意味とか価値とか、そんな事考える余地なんてあるわけないでしょ？」

ゲーティアは、今度こそ何もかもを失った。自分に人類の歴史の価値や証明の為に戦っていたのだと思われてきた少女は、最初からそんな事など微塵も考慮してはいなかった。
彼女の根底にあるのは、生への渇望。それは生きる人間であれば誰だって抱く思いであり、それを覆してまで叶えたい願いなんて、この場にいる誰もが持ち合わせてはいない。
「人理を……守ってすらいなかった、か。なんと言う頑なさ、なんと言う救いようがない……救う必要のない命。これが、人間か。ハハ、ハハハハハハ！」
呆れ、諦観、憐憫の獣はそもそも人類に救済は必要なかったと今更ながらの結論に至り、笑いながらこれを受け入れた。
結局、自分のやってきたことは何もかもが無駄だった。けれど、何処か満ち足りた様子のゲーティアは、消滅の間際に一度だけマシュへ視線を向け。
「凄いな。人類」
最期に、人類（マシュ）に向けてその言葉だけを残し、光となって消えていった。

◇

「魔神王ゲーティア、消滅を確認。我々の、勝利です」
静寂に満ちた空間に、マシュによるカルデアの……ひいては人類の勝利が宣言された。通信を介して、カルデアのオペレータースタッフ達の怒号にも似た歓声が聞こえてくる。正直鼓膜が破れるかと思

われる程の声量だが、今ばかりはそれを咎めるのは憚れた。
勝った。始まった当初から敗北を余儀なくされていた自分達が、たった一人の犠牲も出さずに此処まで来れた。その事実に立香は達成感と疲労感で倒れそうになるが、それをグッと堪える。
自分よりも、誰よりも、疲弊している人が今も立っている。なら、そんな彼よりも早く倒れるのは彼女の意地が許さなかった。
「修司さん、お疲れ様」
「おう、立香ちゃんもお疲れ、此処まで良く頑張ったね」
彼の髪が元に戻る。逆立った金髪は元の紫色へと戻り、その瞳も黒色に変化している。それが彼自身の戦いが終わった事を意味している様で、立香も自然と肩の荷が降りたような気がした。
「私は別に何もしてないよ。私はただ、マシュの後ろにいただけだよ」
「ですが、そんな先輩の手に支えられたから、私は最後まで諦めずに立ち続けられました」
自分は最後まで何も出来なかったと語る立香に、そんな貴方だから立ち続けられたのだと、マシュは付け加える。戦いとは、何も修司の様に前に出るだけを言うのではない。戦っている者、守る者、彼等を支えるのも一つの戦いだと言えよう。
犠牲のない結果を掴み取れたのは、一人の力で成し遂げられたモノではない。最後の最後、終わりを迎える迄のその一瞬まで、諦めたくはないと抗った彼女がいたからこそ、全員生存と言う最上を越えた極上の未来を手に入れることが出来たのだ。
だから、それ以上立香は自らを卑下する様な事は言わない。自分がいたからマシュも自分も死なずに済んだ。その事を噛み締めながら笑い、これを受け入れた。
「さて、俺達もそろそろ帰ろうか。此処から少し離れた所にグランゾンを停めてある。あれに乗ればカルデアまでひとっ飛びだ」
「おぉ、あのスーパーロボットに乗れるんだ！　なんだか楽しみ！」
「に、人数的に大丈夫なのでしょうか？」
戦いも終わり、いよいよカルデアへの帰還が始まる。ただ、いつまでも帰りのレイシフトが始まらない事から、もしかしたら今回は直接

帰らないといけないのか。
それならば、相棒であるグランゾンに乗っていけばいい。少々手狭かもしれないが、これが最後という事で我慢してほしい。盾を消したマシュが、改めてカルデアへ報告の為の通信を入れた――――その時。
空間が震撼し、特異点全体が揺れ動いた。
「もしかして、これって……」
「あぁ、所謂お約束ってヤツっぽいな」
周囲の大地が崩壊していく。ゲーティアという核を失い、存在の楔を保てなくなった冠位時間神殿は、時間と共に崩落を開始する。
『マシュ、立香ちゃん！　そして修司君！　たった今此方で計測した！　其方の特異点が完全に消滅するまでおよそ後２０分、急いでカルデアの回収域まで後退……いや、脱出するんだ！』
通信越しから聞こえてくるロマニの声、予想通りこの特異点が崩壊する旨を伝えられた一行は、短い時間制限の中にも関わらず、大して余裕を崩さずにいる。
「２０分もあれば余裕だ。此処からは無茶な事はせず、安全第一で戻るとするよ」
そう、白河修司は空を飛べる。数多くの英霊神霊と戦い、経験を積み重ねてきた彼が、今更少女二人を抱えて飛翔するなんて訳はない。２０分もあれば余裕だと豪語するのは、誇張でも何でもない唯の事実。
さぁ、とっととこの特異点から脱出し、カルデアへ帰ろう。そう、二人の下へ歩み寄ろうとして――――。
「……へ？」
ペタンと、尻餅を着いた。
「あ、あの？」
「修司さん？」
突然、落ちるように地に座る修司に立香もマシュも唖然となるが、誰よりも驚いていたのは修司自身だった。これ迄の戦いで今の彼に負っているのは光帯と撃ち合った際に出来た火傷位で、それ以外に目

立った裂傷の類いは見当たらない。
なら、何故彼は力なく座り込んでいるのか。まさか、あのデタラメな力による代償が、今このタイミングで支払わされてしまうのか。魔術世界の中で代償というものは大きく支払われるモノ、一体彼はどんな代償が支払われるのかと、マシュは一瞬顔を青ざめ――――。
〝グゥゥゥゥ……〟
スンッと、真顔になった。
「は、腹……減った」
口から絞り出すように溢れるのは、空腹を訴えた一言だった。立香はなんだそりゃとコケそうになるが、修司本人は割りと洒落にならない。何故あの戦闘民族の主人公達が彼処まで健啖家なのか、その理由を何となく修司は理解した。
「ご、ゴメン二人とも、ちょっと動けそうにない」
「え、ちょ、大丈夫なんですか？」
自力で立ち上がろうとするが、空腹の所為か膝に力が入らない。あれ？　もしかしてこれはヤバい状況なのでは？　直ぐ其所まで崩れる特異点の大地を前に、三人は表情を青ざめ……。
「と、兎に角急いで脱出を！」
「あーん！　最後の最後にこんな展開イーッ！」
疲れ果てた自分の体に鞭を打ち、マシュと立香は肩に修司を担いで脱出劇を敢行する。人類悪の一つを屠り、一先ずの決着を着けた彼等に最後に訪れた試練は、崩壊していく時間神殿から逃げ出す事だった。

その174　青空

崩れ行く特異点、人理焼却の元凶であるゲーティアを打ち倒した事で、崩壊していく時間神殿をエッコラヨッコラと脱出しようと走る一行を眺めながら、最後まで観戦に徹していた黄金の王は笑う。
「やれやれ、最後の最後で何とも締まらん終り方よ。一応の決着は付けたのだ、もう少しシャンとせんか」
呆れながらも、そう言う王の顔には喜びと似た感情が色濃く滲んでいる。あの焼け落ちた街の中で、ただ一人この世の理不尽不条理を許さないと吼えた童が、随分と成長したものだ。感慨深いような、懐かしいような。久しく味わえなかった子の成長に、黄金の王は決して人には見せない笑みを浮かべる。
「如何でした？　貴方の臣下の成長具合、中々楽しめたのでは？」
「フンッ、確かに愉快な類いであることは認めよう。奴のハチャメチャ具合は見ていて飽きん、そう言う意味では良い拾い物をしたと言えよう。だが……」
「ええ、分かっています。彼の行いによって生じたイレギュラー、余分な因子は一つ残らず私が持ち帰りましょう。そういう訳なので――――駄目ですよ、ゲッペラーさん」
影が二人を覆う。黄金の王は心底めんどくさそうに、仮面の男は嗜めるように、影の主であるソレを見上げる。
其所には――――皇帝がいた。進化をもたらし、進化を促す進化の化身。大きく、巨きく、ひたすらに規格外（大き）なソレは、二人を……否、空腹でぐったりとしている修司を品定めをするように見下ろしている。
「彼の行き先を決めるのはあくまで彼自身が決めること。例えシンカの力を扱おうとも、その意思は未だにゲッターに呑まれてはいません。であれば、貴方が介入する余地は無い筈ですよ」
『――――――』

仮面の男の言葉に進化の皇帝は納得したのか、修司に向けていた視線を外し、一度だけ彼を一瞥すると、特異点の領域から姿を消していく。彼が完全に姿を消した事を確認すると、仮面の男はやれやれと深い溜め息と共にギルガメッシュ王へ頭を下げる。
「すみません英雄王、同僚が不躾な真似をして」
「フンッ、実にその通りだが……まぁ良い。面白いモノを見れた代わりに、その不敬を赦そう」
「あ、じゃあ赦すついでにサインをもう一枚戴いても宜しいですか？
保存用にしておきたいので」
「なにが〝じゃあ〟なのか知らんが……まぁいい。特別に赦そう。我の偉大さと慈悲深さ、例の進化の皇帝にも伝えるが良い」
仮面の男の図々しい願いに一切不満を口にせず、王は仮面の男から渡されたもう一枚の色紙に筆を走らせる。王にとって、此度の現界は中々有意義な一時だった。次の厄災がどんなモノであるにせよ、彼等と……何より、己の臣下である修司が何とかするだろう。
故に、王の寛大さは続く。人類が、命の輝きを損なわない限り。
『あ、じゃあ次は俺にも良いかな？』
『我モ我モ』
「えぇい、とっとと帰らんか貴様等ァッ！」
但し、何事にも限度はある。サイン欲しさに戻ってきた進化の皇帝、そして何故か序でにやってきた原初の魔神、宇宙まるごと消滅させてしまう様な超絶弩級の怪物達を相手に、王のツッコミは特異点が完全に消滅するまで続いた。

◇

「ね、ねぇマシュ！　回収地点まであとどれくらいかなァッ!?」
「お、恐らくはあと二千メートル程かと！　あと少しです！　頑張りましょう先輩！」
「ヒェ～！」
崩壊していく時間神殿、徐々に崩落していくスピードが増していき、その勢いは脱出しようとする立香達を呑み込もうと迫る。
直ぐ其所まで迫っている崩落の音を聴きながら、マシュは懸命に、立香は半べそをかきながらひた走る。
「わ、悪い二人とも。まさかあの姿になるのがここまでエネルギーを消費するとは思わなかった」

二人の肩に担がれて苦悶の表情で溢すのは、人類悪との戦いで自身の力の全てを出し切った修司だった。人理焼却を目論み、一度は人類を歴史ごと焼失させた魔神王ゲーティア。奴と言う元凶を圧倒的な力で打倒を果たした修司だが、その力を使った反動か――――――現在、極度の空腹状態となり、二人の少女に担がれている最中である。
空腹で動けなくなった自分を情けないと修司は言うが、立香もマシュもその事を責めるつもりはなかった。
というより、そんな暇も無かった。彼の言葉に応えてしまえば、その分速度が落ちる。唯でさえギリギリなこの状況下で走る速度が落ちれば、自分達は奈落の底へ真っ逆さま。カルデア側からの観測の範囲を越え、あっという間に意味消滅まで陥るだろう。
「せめて、せめてグランゾンの所まで持ってくれれば……！」
相棒であるグランゾンの下へ辿り着けば、あとはどうにでもなる。かの魔神は此処からよりも更に近く、また回収地点への通り道となっている為、修司にとってグランゾンへの到達こそがゴールだった。
「あ、あれは！」
「修司さん！　もしかしてアレが!?」
そんな時、二人から声が投げ掛けられる。必死の中にある確かな希望の声音に、まさかと思い修司も顔を上げると、自分達から数百メー

トル程離れた所に蒼い魔神が佇んでいる。
グランゾンだ。今回の特異点攻略にて英霊達と共に多大な貢献を果たした修司の相棒、主の到着を待ち望んでいた重力の魔神は修司達を見据えるように其所にいる。
見えてきたゴールに笑みが浮かぶ。マシュも、立香も、修司すらも、目の当たりにしたゴールを目前に喜悦の色を浮かべる。誰もが、誰一人カルデアの勝利を信じて疑わなかった結末、完全無欠のハッピーエンドは達成される。そう、誰しもが心の底から信じていたからこそ……それに気付けなかった。
ひび割れる大地、一瞬の隆起の後に起こる崩落。遂に特異点消滅の波が立香達を捉えてしまった。
誰もが、その光景に唖然となる。此処まで来て、此処まで来ておいて終わるのかと、カルデアも立香も、マシュも修司も思考を停止仕掛けた時――――。
「フォーーーーウ!!」
一匹の獣の鳴き声が特異点に木霊したかと思えば、三人の体は光に包まれ、次に視界が開けた瞬間には蒼い魔神の真上だった。
「い、今のは?!」
「え?　え?　あれ!?　今私達落ちてなかった!?」
突然の事態に混乱する立香とマシュ、修司も同様に軽く困惑しているが、直前に聞こえてきた鳴き声に既視感を覚えた。
(今のは、お前がやったのか?)
一瞬だけ、修司は鳴き声の主に視線を向ける。これ迄幾度となく特異点修復の旅に同行し、時々その存在をアピールしてきたリスとも犬とも似つかわない白い獣。
いつの間にかマシュの肩に引っ付いていたソレは、修司の視線に気付き振り向くが……惚けているのか、首を不思議そうに傾けるだけだ。
一体この小動物は何なのか。今更ながらの疑問だが……今はそんなことはどうでも良い。
「今だ!　グランゾンに乗り込め!」

到達に訪れた脱出への近道、このチャンスを逃しはしないと、力の入らない腕を伸ばし、三人がグランゾンのコックピットに繋がるハッチに手を伸ばすと同時に……。
冠位時間神殿、魔神王ゲーティアの居城である特異点は完全に崩落、消滅するのだった。

◇

「――――ねえ、ダ・ヴィンチ。僕は本当にこれで良かったのかな？」
「なにがだい？」
医療担当のトップ、Ｄｒ．ロマニに与えられた室内で、彼の独白が綴られる。今回の顛末を乗り切り、やり遂げた組織の代理トップにしてはその表情は些か暗かった。
「本来なら、カルデアは魔神王ゲーティアに勝てる道理はなかった。例え英霊達の力を借りた所で、召喚術者でもあるゲーティアに勝つことは殆んど不可能だった」
本当なら、魔神王ゲーティアの前に英霊達の援護は魔神柱を抑える程度に留まり、立香もマシュもかの人類悪を前に何一つ勝てる見込みはなく、ただ闇雲に挑み、敗北するだけだった。
「英霊達は、魔神王の術によって強制的に送還させられ、立香ちゃん達も敗色濃厚に陥っていた事だろう。そうなったら、奴の第三宝具を防ぐ手立ては限られてくる」
ゲーティアに一方的になぶられ、打開策を封じられた彼女達の前に

在るのは、絶望と言う壁が立ち塞がっている。英霊達の力も借りられず、膝を折ることしか出来ない彼女達の前には星すら貫く創世の光、魔神王ゲーティアが放つ第三宝具。

アレを防げる手立ては、この世の何処にも存在しなかった。マシュの持つ雪花の盾さえ無ければ、藤丸立香の旅はもっと早く潰えていた筈だから。

しかし、結果として誰も犠牲になることはなく、魔神王ゲーティアの第三宝具は打ち破られた。それも、たった一人の人間の手によって。

「本当なら、あの場にいる尤もソロモン王に近い者が、出てくるべきだった。彼が己の定義を否定する事で、初めてゲーティアへの攻略の糸口が開かれる。その、筈だったんだ」

「けれど、それを彼が……白河修司が全て台無しにした。魔神王を打ち克つ算段を、彼の底力で成し遂げてしまった」

ロマニの気持ちを代弁するように、今度はダ・ヴィンチが口を開く。しかし、その口振りは軽く、ロマニとは対照的に表情は明るかった。

「それで？　何もかもを台無しにされた君は、一体何が不満だと言うんだい？」

「――――」

沈黙。ダ・ヴィンチがカルデアへ召喚されるまで、誰一人信用してこなかったロマニ＝アーキマンは、今日まで碌に自分の〝次〟について考えてはいなかった。自分のやるべき事、成すべき事は決まっている。それは予め決められていた事で、決して覆る事はない呪われた運命。

そんな運命（Fate）を、白河修司は打ち砕いた。本人はそんな事欠片も自覚しないまま、無自覚のまま、他人の理不尽すらも捩じ伏せてしまっていた。

だからこそ、分からない。こんな自分が、今更残って何が出来ると言うのか。すべての責務から半ば強制的に解放されたロマニは、新たに生まれた問題に答えを出せずにいると……。

「まさか君、今更〝僕なんかが生きていていいのかな？〟なんてセン

チな台詞を吐く気じゃないだろうね？　以前、君はマシュに言ったんだろ？　人は意味の為に生きるのではないのだと」
「――――――」
「そもそも、人生１０年其処らの若造が死生観を語るなと言うんだ。どうすればいい？　そんなの、我武者羅に生き抜いた後にゆっくり考えればいいんだよ馬鹿者め」
「……いいのかな？」
「あぁ？」
「僕は、生きていて……いいのかな？」
　泣きそうな顔だった。これ迄誰一人頼れず、一人で戦っていたロマニ＝アーキマン。その重い荷物から解放され、漸く、本当の意味で生きて良いのかと、すがり付く様に訊ねてくるロマニに。
「……きっと、彼ならばこう言うだろうね。〝好きにすれば〟と」
「っ！」
「ロマニ＝アーキマン。命が生きることに、誰かの許可は必要ないんだよ。君が決めるんだ。これから君がどうしたいのか、どんな風に生きていくのか。それは、今を生きる君だけの持つ特権さ」
　脳裏に浮かぶのは、誰よりも奔放に、自由に、ハチャメチャに生きている山吹色の青年。生きることに誰かの許可は必要ない、それは、ロマニ自身も分かっていた事だ。
　けれど、それが自分自身の為に使われる事は、生前から決してなかった。要は、第三者としての視点はあっても、Ｄｒ．ロマニには人としての経験が他者と比べて圧倒的に足りていなかったのだ。
　人としての１０年。全てを費やし、全てを燃やすつもりだった。それこそ、生前から連なる自身の総てを対価にする腹つもりで……Ｄｒ．ロマニは、この特異点修復の旅を受け入れていた。
　それが、全ておじゃん。これ迄、幾度となく自問自答を繰り返し、漸く固めた決意も覚悟も、その全てがご破算となった。
　それも、たった一人の人間の手によって。
「さて、改めて訊ねようか。ロマニ＝アーキマン、君はこの後……どうしたい？」

それは、これ迄とは全く異なる意味に聞こえた。??????の隠し名としてではなく、正真正銘ロマニとしての名。微笑みながら訊ねてくる万能の天才にロマニは数秒の間を於いて……。

「一先ず、皆の迎えに行ってくるよ」

何処か駆け足で部屋を後にするロマニに……。

「おめでとう、ロマニ。君の願いは漸く……いや、これから叶うよ」

ダ・ヴィンチは笑みを浮かべながら見送るのだった。

◇

――――走り続けた。慟哭も、嘆きも赦されず、ただ我武者羅に、闇雲に、無我夢中で走り続けた来た。

１０年。それは、ロマニ＝アーキマンにとっての人としての年月であり、経験であり、全てだった。

嘗て、人として生きたいと願った。??????。とある魔術師によって喚び出され、願いを叶える戦いに参加した。その者は、勝利した権利の全てを使い、たった一人で戦い続けてきた。

そう、戦い続けてきた……つもりだった。誰一人相談できず、悩みも明かせず、一人抱えて戦ってきたつもりの男は、あの日から間違いだと思い知らされた。

結局、何かを変えられるのは事前に準備していた者ではなく、その瞬間に立ち合い、抗う者だけ。自分の努力と研鑽はただの徒労に終

わった。
けれど、それを無意味だとは思わないし無価値だとも思わない。何故なら、それを決めるのは他ならぬ自分自身だからだ。
頑張ろう。これまでも、これからも。ロマニ＝アーキマンという人間は、ここからなのだから。
パキンッ
「ッ！」
ふと、自身の手の内から何かが割れる音が聞こえた。何かと思いふと立ち止まり、手袋を外してソレを取り出すと……。
「――――あ」
出てきたのは、割れた指輪。円環を司り、魔術的意味合いも計り知れない程に大きい指輪が、真っ二つに割れていたのだ。
それを目の当たりにしたロマニは漸く自覚し、実感した。あぁ、本当に自分はロマニ＝アーキマンなのだと。
それは、破界の傷跡。理不尽、不条理を断罪するハチャメチャ製造機によって断たれた無自覚の一撃。神との繋がりを無かったことにされた??は、歴史に刻まれる事はあっても、その存在はこの日を境に――英霊の座〟から完全に消滅する事となる。
それを、ロマニ＝アーキマンは知る事もない。ただ確かなのは、今後??が表舞台に現れる事は二度と在りはしないという事。
恐らくは、これこそがロマニ＝アーキマンに課せられた対価なのだろう。人として生きていく以上、もう過去の自分には頼れない。
なのに、ロマニの表情は曇ることはなく、割れた指輪を大事そうに握り締めると……再び走り出した。
辿り着いた先に在ったのは、一つの扉。それはこのカルデアと外界を繋ぐ、出入口。
確か、このカルデアの空は年に数回晴れる事があるという。天気や気候の条件もあり、滅多にお目にすることはない現象だが、万能の天才であるダ・ヴィンチは観測し、その結果を時間神殿攻略前に聞いていた立香達は、一足早く外へ出ているのだという。
カルデアという施設に入ってから、マトモに空を見上げた事もな

い。最後に空を見上げたのは何時だろうと、そんな事を考えながら扉を開くと……。
「わー、久し振りに見たなぁ、青空。どうマシュ、初めて目にした青空は？」
「――――とても、とても綺麗です。これが、私達の時代の青空。光帯のない、本物の空なんですね」
「いやぁ、極寒の地で食べるおにぎりも、中々乙なもんだねぇ。シンプルな塩加減が胃に染みる」
「もう、修司さんてば台無しーって、ドクター？」
青空の下で、太陽を見上げながら笑い会う三人。マシュはいつもの私服に、立香はいつものカルデアの制服、そして、山吹色の胴着を着た修司は握り飯を片手に、それぞれ空を見上げていた。
染み渡っていた青空。この１０年の記憶の中で何れも該当しない美しい世界の景色に、ロマニは言葉を失っていた。
世界は、こんなにも美しい。人としての１０年を得ながら、それを顧みない生き方をしてきたロマニが抱いた最初の感想。
ふと、涙が溢れた。ポロポロと、塞き止めていた何かが壊れ、溢れ出てきた感情。一方で、突然泣き出したロマニにギョッとなる三人。
嗚呼、駄目だ何かを言うつもりだったのに、考えていた全てが消し飛んでしまった。一体、自分は皆になんて伝えたかったのか。溢れ落ちる涙を拭い、鼻水を啜りながら顔を上げ、ロマニ＝アーキマンは最初の一言を告げる。
「みんな！　おかえり！」
果たして、今の自分はちゃんと笑えているのか。それとも、泣いているのか。顔をぐちゃぐちゃにしながらも真っ直ぐに見据えてくる所長代理に。
三人は、一瞬だけキョトンと顔を見合せて……。
「「ただいま！」」
ロマニ＝アーキマンと同様、青空の下で笑顔の華が三つ、咲き誇った。

――――人理修復・完了――――

その１７５

人理焼却。人類と言う種族が歴史ごと焼却された未曾有の大事件。人類悪の一つであるビーストＩことソロモン――――――否、魔神王ゲーティアによる目論みは唯一残されたカルデアの職員と、そのマスターの尽力によって打開され、人理焼却という嘗てない規模の魔術事件は解決された。

人理保障機関カルデア。星見の天文台を冠するこの施設は、人理を修復された今も、稼働し続けている。

◇

「ゼァッ！」

空から、無数の流星が降り注ぐ。荒野の大地を覆う程の光の矢、そこに込められるは確かな敵意、それは己が敵対する相手を仕留める為の布石の郡。

逃げる隙間も、避ける暇も与えない不条理の津波。しかし、対象者である男は避けられない隙間をすり抜けるという矛盾を、なんてことなくやり遂げる。

白銀の輝きを纏い、何処までも揺るがない静の極致。身に纏う輝きと同様に、瞳まで銀色に瞬いており、その眼光に射抜かれた弓兵……アルジュナは、その迫力に息を呑んだ。

（呑まれるな。この程度、予想の範疇！　矢を放ち続けろ。彼の動き

を、少しでも阻害しなくては！）
　自分の放つ矢は、あくまで布石。これから繋ぐ一撃迄の牽制で、本命の為の囮だ。故に、アルジュナは決して揺らぐ事なく己に課せられた役割に徹する。
　と、その時だ。彼の姿が掻き消えた。視線は一切逸らした事もなく、彼から一瞬も視界から外した覚えはない。同時に、アルジュナは自身の背中に悪寒のような予感を感じ取りその視線を上に向ける。
　そこには、つい先程視界から消え失せていた彼の姿があった。握り締められた拳、その姿勢から繰り出されるのは避けられないと判断したアルジュナは、回避は間に合わないと判断して防御に移る。
　このまま直撃すれば、腕の一つや二つ軽く砕かれるだろうが……致し方ない。次にくる衝撃と痛みと衝撃に備えようと、その両腕を交差した所で。
「させん」
　銀色に輝く男の背後に、太陽（カルナ）の御子（ナ）が錫杖を奮う。空中で、何処にも逃げ場の無い中での強襲。なのにもかかわらず避けられた事を驚く事なく空中を自身のスキルである魔力放出によって駆け出し、アルジュナの襟元を掴んでその場から離脱する。
「貴様、カルナッ！」
「悪いが文句は受け付けん。そんな暇もない」
　生涯の宿敵に助けられただけでなく、乱雑に扱われる事に怒り心頭のアルジュナだが、それに対応できる程の余裕はカルナにはない。彼の男から相当の距離を開いた筈なのに、未だに背中へ伝わってくる存在感がカルナに焦燥感を募らせていく。
「一度、ラーマに合流するとしよう。流石に俺達だけでは手に余――」
　そこまで言い掛けて、カルナの頭部に衝撃が走る。視界が揺さぶられ、何が起きたのか分からないまま吹き飛ぶ異母兄弟。驚愕に目を見開くアルジュナが目にしたのは、蹴りを放ったであろう男の姿だった。
「――――このッ！」

弓を張り、矢を射る。その動作に通常なら数秒掛かるその挙動を、神話に語られる大英雄は瞬きの間に数百と放つ。並の相手なら蜂の巣処か塵へと還されるその神弓を……。

「――――――」

男は無造作に、片手間にて弾き飛ばす。これには流石のアルジュナも憤慨した。幾ら何でもそれは無いだろうと、目の前の人間のでたらめ具合に唖然となり……。

「――――ガッ!?」

回転を加えられた回し蹴りによって、腹部を打たれたアルジュナは悶絶の表情を晒し、カルナ同様地に叩き付けられる。

カルナとアルジュナ、両者ともインド神話の叙事詩にて語られる不撓不屈の大英雄。如何に強さの打ち止めされたサーヴァントと言えど、その実力は依然としてトップクラスの英霊。

そんな二人を相手にしながら圧倒するこの男は何なのか、そのデタラメ具合にアルジュナではないが、普段は常識人よりのラーマも一言文句を言いたくなった。

(……いや、だからこそ。なのだろうな)

カルナとアルジュナが時間稼ぎに徹していた間、一人で魔力を高め続けていたラーマは、大地に立ち尽くす男を見て、一人思う。

(だが、せめて一傷は付けさせて貰うぞ!)

相手は人類悪すら単独で圧倒する怪物。その剛力と術理は既に人の常識から逸脱している。そんな現代に生きる怪物を相手に、過去の影法師であるサーヴァント達は何を思うのか。

生意気だと憤慨するか? 有り得ないと嘲笑するか? 答えはどちらもNO。武闘派な英霊達が抱く思いはただ一つ、新たに誕生した英雄を前に闘志を滾らせ、挑まんとする気概だけである。

どれだけ強いのか、そんな相手に自分達が何処まで通用するのか。神話出自が異なっていようと、武で成り上がってきた英雄達が抱く思いは皆一つだった。

そして、少年であり嘗ては王であったラーマもその一人。嘗てない領域に足を踏み入れた現代の英雄を相手に、彼もまた全霊でもって相

対する。
「受けろ修司、我が必殺の一撃を！」
「羅刹を穿つ不滅（ブラフマーストラ）アアッ!!」
限界まで溜めた必滅の一撃。迫り来る英雄の底力を前に、白河修司は――――。

◇

※月＊日
疲れた。人理も無事に修復されたってのに、どうして自分はサーヴァント百人組手なんてやらされているのだろうか？
いや、事の発端は分かっている。魔神王ゲーティアをぶちのめし、人理を元に戻して三日、外界との連絡をロマニ達に任せて、体力気力共に全快した自分が迂闊な事を口にしたのが始まりだった。
『暇だ』そう口にしたのが運のつき。ナイチンゲールさんに安静にしていろと厳命され、本日それが解禁されたと同時にそれを口にしてしまった事で起こった悲劇。もうね、本気で疲れたよ。
自分としてはただの独り言のつもりだったのに、何処から聞き付けたのか――――いや、ここまで来ればいっそ予定調和とでも言うべきか？――――何時もの如く、ケルトの影の女番長ことスカサハが絡んできた。
『そんなに暇なら儂が相手をしてやろうか？』
……なんだろう、事ある度に人を殺し合いに巻き込もうとするの、止めて貰って良いですか？
そんな自分の訴えもどこ吹く風、あっという間に自分とサーヴァン

ト達による組手（ガチ）の大会がシミュレーター室で執り行われる事となった。
　しかも、何で今回に限って他にも参加したいって英霊の人達が多いんだよ。普段はこんな荒事には関わろうとしない温厚な英霊の人達迄もが参戦してきたし。……ケイローン先生までもが参加してきた時、今回は救いがないのだと早急に諦める羽目になった。
　そんで、他にも腕試しとして参加したい奴はいないかと募った所、出るわ出るわ希望者の数。ケルトの戦士、ギリシャ勢、円卓の騎士、インド勢や日本組。更には征服王と、出自や立場を問わない様々な英霊達とガチンコ勝負をする事になった。
　いやね。もうこの際ケルトの戦士はいいよ。分かってたし、もう諦めた。でも征服王はダメだろ。あの人の宝具、狡すぎない？　報告では聞いていたけど、直接見たときは色々ともう酷くて乾いた笑みが出てきたわ。
　これ迄は複数人を相手していたから、いきなり一人で出てきた征服王を見た時は失礼ながらサービスステージかな？　見たいに思ったよ。そしたら次の瞬間には固有結界発動して目の前には数万人規模の大軍勢よ？　もう泣きたくなったわ。勝ったけどね！　一人一人殴り倒してどうにか勝ちを拾ったけどね！
　そして、此処からがこの百人組手の本当の酷い所なんだけど、どうやら英霊の皆さん。超化したり極化した自分のどちらかと勝負したかったらしいのだ。
【超化】というのは……まぁ、先の時間神殿でも見せた自分の変身形態の事。一方で【極化】は第七特異点で至った超化とは異なる姿の事。
　分かりやすく説明するのなら、超化は力や速さが劇的に跳ね上がり、極化の方は技が飛び抜けているといった具合。勿論そんな単純な話ではないし、報告書にまとめる際はこれくらい分かりやすい方がいい。という事で、そんな風になっている。
　自分としては、超化は力が表面的に現れた現象で、極化はその真逆。自分という存在をより深く落とし込んだ状態の事を指している。
　で、そんな新たに確立させた自分の戦闘形態に刺激を受けた英霊の

皆さん達が、自分と戦えと勇んで参加してきたのだ。ジークフリートさんや、カルナ、更には普段は筋肉談義で親しくなれた筈の狂戦士の皆さんまで参加してくる始末。ヘラクレスさんまで超化した自分と一勝負したいと言ってきた時は、理性のない筈の瞳の奥からキラキラと輝かせていたっけ。

まぁ、狂戦士からはヘラクレスさんの他に金時位しか出てこなかったけどね。……やっぱり、狂戦士は紳士的な人が多い気がする。

ただ……何かスパルタクスさんは最近、自分を見掛ける度に何か凄く畏敬の念を向けられている気がするけど……。

ともあれ、今回開かれたサーヴァント百人組手、どうにか自分の勝ち越しで終わることが出来た。いや、流石に全勝は無理だわ。相性云々以前に体力が持たん。

因みに、最初に挑んできたケルト勢力は速攻でぶちのめしました。理由？　察せ。

んで、負けた相手は主にエジプト勢。敗因は自分の体力が尽きたから。最後は太陽王のピラミッドに挟まれる形で潰されて「グエッ」ってなりました。

その後は途中休憩を挟んで、回復した体力でどうにか勝利をもぎ取る事が出来た。……まぁ、一見すれば散々な日で運がないように思えるが、何だかんだ自分に取って有意義な時間となったのが救いだ。

まず、超化は馬力は出るけど体力が著しく削られる。時間神殿でもそうだったけど、どうやらこれは超化する際に起こる感情の昂りが原因な様で、無駄なエネルギー消費の要因となっているらしい。今後はこの感情を抑え、常にこの形態でいる事が理想的な姿と言えるだろう。

……何だか、あの主人公達の背中を追っかけているみたいで、ちょっとワクワクしている自分がいる。いつか、彼のように2やら3になれるようにしたい所である。

そして極化の方だけど……此方は超化より少し難しい。表面化させて爆発させる超化とは違い、此方はより深く没頭する様な精神の集中力を必要としている。

もっと分かりやすく説明するのなら、超化が登山で極化が深海を目指すダイバーの様なもの。……うんゴメン、やっぱり説明できないや。

ともあれ、まだまだ自分は強くなれる。それが分かっただけでも、今回の百人組手は意義があったと言えるだろう。

二度とゴメンだけどね！

※月？日

人理修復から今日で一週間。相変わらず自己鍛練以外は相方であるグランゾンの整備をしている毎日だけど、そろそろ自分も外界について色々と調べに動き出すべきか検討した方がいい気がする。

というのも、現在外の国連やら魔術協会と話を繋ごうとしているのは専らダ・ヴィンチやロマニ達ばかりで、自分や立香ちゃんは依然としてカルデアのマスターとして、この施設に在籍している。

本来なら役目を果たした事でカルデアからもお役御免となって自由の身となるわけだが、人理焼却によって人類最後のマスターとしての肩書きが、彼女の立場をややこしくしている。

人理修復の旅、其処で起きた諸々の出来事を報告書に纏めるのに忙しく、今もカルデアに滞在せざるを得ないのだ。

ロマニもダ・ヴィンチもせめて一度くらいは故郷に帰らせてやりたいと言っているし……。

因みに自分は既に何度も報告書を提出しているのだけど、その度にリテイク食らってます。ロマニからもう少し大人しめに書いて欲しいと言われ、絶賛難航中。

報告書って、起きた出来事の内容を書き出す為の書類じゃん。嘘言って良いのかよと抗議した所、どのみち自分の報告書では信じて貰える要素はないらしい、解せぬ。

と、自分の話の事で脱線したが、要は立香ちゃんをご両親や友達のいる故郷に一度くらい帰してやりたいという話。彼女、元々は拉致同然にこの施設に来たと言うし、いい加減家族に会わせてやりたいと言

うのが、今回の話。外の世界について色々と調べて回りたいのもそれに一因している。
まず、自分はこの世界の住人ではない。ここは自分のいた世界よりも少しだけ先の時間を行く並行世界という奴だ。この世界は自分の知る世界と微妙だが違う所が所々見受けられる。
元の世界とこの世界、二つの世界の違いを調査し、その途中で立香ちゃんをご家族の元へ帰してやれないだろうか。そう、五度目の報告書を提出した際にロマニへ相談したら……意外と受け入れて貰えた。
此方から話を振っておいて何だが、まさか検討して貰えるとは思わず、目を見開いた自分にロマニは呆れながらも苦笑いを浮かべていた。
流石に今すぐには無理だが、外の完全な連携が出来て、尚且つ人理修復による影響を全て観測し終えてから。正式にカルデアから離れるのはそれからだとロマニは言う。
正式に……つまり、非公式ならば多少は目を瞑って貰えるという事？　その辺りをつついてみたら、ロマニはやはり苦笑いを浮かべるだけで、答えはしなかった。
……何だか、最近のロマニは妙に吹っ切れた感じがする。休む時は仕事が多少溜まっていても休むし、何ならネットでサボるようにも見えてきた。
今の彼が嵌まっているのは、ボトルを使って変身する特撮ヒーロー。エジソンさんやテスラさんに作れないか相談しているらしい。いや、何してんねん所長代理。
とは言え、これ迄の彼の頑張りを見ていると、余り追求するのも憚れる自分なのでした。
ともあれ、これで立香ちゃんの帰省への道のりは一歩進んだ。後は他に連れていく護衛となる英霊だけど……マシュちゃんは当然として、他に誰か適任はいるだろうか？
あ、あのクハクハ笑うコートの人がいたか。そう思い今日は立香ちゃんの近くにある自分のではないワームホールに干渉し、コートの

人こと巌窟王さんに話を通しておいた。
最初は驚かれていたけど、自分の話を聞いて了承してくれたし、一先ずは護衛に関してはこれで良いだろう。いざとなればグランゾンを彼女につけるし、帰省に関する内容は一旦これで保留とする。

※月Ω日
人理修復が完了されて今日で丁度１０日目。未だに世界の人々は、知らぬ間に一年が経過していることに戸惑っているが、今日の自分はそれ以上に驚きを隠せないでいる。
今日、自分はサーヴァントを召喚した。……フリではない、ガチである。
その前に、人理修復が成し遂げられた今、新しいサーヴァントなんて召喚する必要はないと思われていたが、其処は弁の立つダ・ヴィンチちゃん。今後現れるだろう人理修復後に現れる微小特異点に備え、少しばかり戦力を増強したいという名目で、今回の英霊召喚はされる事になった。
ロマニも誤魔化すのが大変だと愚痴っていたが、最終的には許可していた。……コイツ、本当にちょっと変わってない？　なんか変に余裕があるのが妙に気になるのだけれど……極限の状況下ではない現状だと、意外と今の彼が素だったりするのだろうか？
と、まぁ自分の所感はほどほどにして、遂に始まりました人理修復後初となる英霊召喚。先手は勿論立香ちゃん、相変わらずの引きの強さで、第七特異点に関わる殆どの英霊を見事召喚してしまった。
ただ一人、エレちゃんことエレシュキガルだけは来てくれなかった。やっぱり冥界での一件が尾を引いているのか、エレちゃんと再会を果たせなかった事を悔やみ、残念に思いながらも、立香ちゃんは自分に番を回してきた。
……正直、自分は英霊召喚というものに言葉に出来ない抵抗感がある。拒絶とも言ってもいい、過去の百回試しても誰一人出てこず、麻婆と黒鍵、後はなんか優雅たれとかふざけた事を抜かしているオッサンの描かれたカードしか出てこないこのシステムに、トラウマを植

え付けられているからだ。
だから、最初の特異点以降英霊召喚はずっと立香ちゃんに任せていた。自分の分の召喚リソースも明け渡したからこそ、現在のカルデアは此処まで戦力が増えたのだ。そうでなかったら、今頃カルデアは黒鍵と麻婆、あと優雅たれのオッサンで埋め尽くされていただろう。
まぁ、今回のは記念という意味を込めての召喚。仮にも英霊召喚にそんな気持ちで臨んでいいのか悩んだが、この時の自分は其処まで深く考えていなかった。
そうして行われる英霊召喚、最初はやはり黒鍵から麻婆のコンボで心が折れ掛けたが、次に起こった現象に自分達は騒然となった。
金回転。これ迄、立香ちゃんが出してきた英霊確定の瞬間である。まさかの事態に自分や立香ちゃん達だけでなく、召喚されたばかりの賢王様やエルキドゥ、イシュタルが喧嘩するのも忘れて固唾を呑んで見守っていた。
そうして、収束される光。一体誰が来てくれるのかとワクワクした瞬間。
『あの、本当に私が喚ばれても良いのでしょうか？　サーヴァント、キャスター・シドゥリ。至らぬ身ですが、宜しくお願いしますね』
泣いた。気付いたら、俺は泣いていた。召喚されたばかりで、右も左も分からないシドゥリさんを前に、情けなくも涙が止まらなかった。
その後、アンデルセンやシェイクスピアと同様に非戦闘のサーヴァントとして新たにカルデアに来てくれたシドゥリさん。今後はニトクリスさんの様に王様達の秘書役に徹してくれる事だろう。

その176

∂月α日

人理修復達成から二週間。日々の業務の他に、今日は食堂にて外への外出の計画を立てている最中、色んなサーヴァント達と雑談を交えていた。

ケイローン先生やヘクトールさん、テスラさんやエジソンさんなど、時代的に幅広い年代の人達と当時の価値観や現代に対する意見をアレコレ交えて話し合っていた。

話し合いと言っても、内容は殆ど世間話、雑談みたいなものだ。当時の生活とか、神々への愚痴とか、発明に対する価値観、彼等に取ってみれば愚痴の様なものだろうが、現代に生きる自分にとっては彼等の話は著名人の本を読む以上に価値があった。

特にヘクトールさんが語るトロイア、神々の思惑が根深く絡み付いたこの戦いは、やはりと言うか何というか、結構な血と惨劇に彩られた戦いとなってしまったようで、興味本位で聞いたことを謝罪する位には結構ヘビーな話が多かった。

アキレウスやヘクトールさんを筆頭に、歴史に名を刻んだ名だたる英雄達の参戦。それに加えて神々の意図が絡んでいたりする事から、この戦争はかなりの泥沼化の一途を辿った様だ。

溜め息を溢しながらも、自分の視点で最後まで話てくれたヘクトールさんは、『あの戦争にお前さんがいてくれたら、オジサンも大分楽だったんだろうなぁ』の一言で締め括った。

うん、無理。話を聞いておいて何だが、仮に自分が当時のギリシャ神話時代に産まれたとしても、絶対にそんな厄ネタの宝庫みたいな戦争には参加しなかっただろう。

と言うか絶対に逃げる。名誉だろうと栄光だろうと、死んでしまったら全てがご破算。臆病者と罵られようと、絶対に自分はその戦争に参戦することはしない。

仮に、仮にトロイア戦争に参加する事に逃げられないのだとしても、その時の自分はきっとこの戦争が起きる切欠となった原因を取り除くために動いた事だろう。ヘクトールさんには申し訳ないが、もし自分がトロイア戦争に参加する事になったら、当時のパリス君を殴り倒し、ヘレネーさんを元の旦那さんの所へ還したと思う。

トロイア側に与した神々の事はどうするって？　邪魔をするなら普通に処しますが？　そもそも、あの戦争は増えすぎた人類を減らす為とかいうふざけた名目が側面として在ったみたいだし、神の癖に殺し合わせる事しか対応できないのかと、煽り散らかしてやっていたと思う。

特にアポロンとか。アイツ、オリオンとアルテミスの仲を引き裂いた張本人みたいだし。本当、神ってのは人間に対して余計な事しかしないよね。当時は神の威厳とか大事にされていたみたいだけど、自分から見れば糞食らえ。である。

……話が脱線した。要するに、自分は神々の目論みに巻き込まれるのは絶対にゴメンだと言うこと。神の操り人形になるくらいなら、自ら首を切り落として冥府に落ちてやるわ。

冥界にはギリシャ神話の中でも良識のあるハーデスさんもいるし、何なら神々の跋扈するギリシャ神話より、個人的には居心地が良さそう。

と、あまりにも自分が神々に対してボロクソ言うものだから、ヘクトールさんもケイローンさんもひきつった笑みを浮かべてしまっていた。流石に言い過ぎだと、エジソンさんもテスラさんの二人に窘められ、素直に謝罪。

その後も、エジソンさんとテスラさんとの今後何を造るかを語り合い、その後はお開きとなった。

んで、その後は特にやることもなくカルデア内を散策していたら、食堂で王様達が立香ちゃんを交えて談笑をしていた。

興味本位で近付いてエルキドゥさんに訊ねると、何でもどの国の郷土料理が一番美味いかを議論している様だ。

このカルデアにはウルク、アイルランド、ギリシャ、ローマ、エジ

プト、インド。他にも中世のフランスやら日本、中国と、幅広い時代と国の異なる英霊達が在籍している。住んでいる環境が異なれば、築かれる文明もまた違う。

それでも自国の料理こそが至高と言うのは、やはりその時代を率いた王としての矜持が深く関わっているのだろう。立香ちゃんは興味深そうに聞いていて、その一方で王様を含めた英霊達は懐かしそうに当時の台所事情を語り合っていた。

そして、そこに丁度自分がやってきたから、お前は何処の料理が一番美味かったのかと、聞かされる事になった。人理修復の旅の中、幾つもの時代と国々を渡り歩いてきた自分達だからこそ、答えられる筈だと地味にプレッシャーをかけながら……。

まぁ、やはり現代の日本人は良くも悪くも舌が肥えているだけあって、食事事情には厳しい面がある。でも、それを抜きにしてもウルクで食べたバターケーキは美味かった。ローマの料理も中々凝っていたし、味付けも悪くはなかった。

アメリカ横断の際の豪快な料理も、急ぎの旅路にも関わらず、満足のいく逸品だったし、山の民の皆から貰った食べ物も、質素ながら栄養のある食事が出来た。

ロンドン？　コーヒーだけは美味かったと言っておこう。当時の地元民の人達には悪いが、それ以外は特に言うことはない。だから自分が進んで料理をした訳だし。

聖都は知らん。そもそも彼処に満足に料理とか出されてるの？

うーん。やはり、一番食べ慣れているのは日本食かなぁ。他ならぬ出身国だし、他の国々から見た日本の食に対する執念は異常だって、どっかの雑誌で見たことあるし。

イギリスとかあっち方面の人達って、未だに蛸とか食べないんでしょ？　アルトリアさんとかスゲー苦手そうにしていたし。蛸、美味いんだけどなぁ。

ただ、世界中を旅してきた自分だけど、何処の国もその国に沿った料理があり、食への拘りがあり、文化がある。美味しく食べようと工夫したり、過酷な環境下で充分な栄養を摂れる様に考えたり、当時か

ら続く人間の知恵が垣間見れる。
だから、みんな違くてみんな良い。食の文明とはそう言うモノだと、我ながらいい話風に話を終わらせようとした所で、誤魔化すなとブーイングされた。
なんだよう。別に何処の料理が一番美味くても良いじゃんか。人間、お腹一杯に食べられればそれだけで幸せよ？　なんて、それっぽい事を言っても納得してくれる事はなかった。
王と言うのは、時にはひたすら面倒くさい生き物に成り下がる。英雄王という王の中の王に仕えている自分としては、割りと至言なのではないかと思う。
とは言え、このままでは自国の料理のＮｏ．１の座を巡って歴史の偉人達による国家間の戦争に発展しかねない。そうなる前に何とかしなくてはと、立香ちゃんがあたふたし始めた辺りで、ケルトの影の女番長スカサハが珍しく良案を出してきた。
自分が、心の底から美味いと言えるものを作れ。世界中を旅してきた自分だからこそ、出される料理に説得力が生まれる。そう言ってきたスカサハに、自分は珍しく感心した。確かに、それならば王様達も無闇に言い争う事はしないだろうし、ある程度の納得もしてくれる筈。
そう言うことなら善は急げと、丁度時間がお昼頃だったこともあり、自分は厨房へと向かった。途中王様から止めろとの声が聞こえた気がするが……まぁ、気のせいだろ。そもそもあの人、俺の知る王様じゃないし、今回の話は自分の最高傑作を体験して貰える良いキッカケにもなることだろう。
今日は気分も良いし、希望者を募って食べて貰うとしよう。そう言って挙手を求めると、結構な数の希望者が出てきた。征服王や太陽王、ヘラクレスを始めとしたギリシャ勢、騎士王や獅子王と円卓の騎士の人達からカルナ達インド勢まで、幅広い年代の英霊達がこぞっと参加してくれた。
ただ、王さまこと英雄王とクー・フーリン、エミヤの三名だけは遠慮すると言って参加しようとしなかったが……折角の機会だと、ス

カサハとエルキドゥさん、イシュタルの三名が逃げようとした彼等を捕まえ、食卓に座らせた。
大勢の英霊に期待を寄せられては応えない訳にもいかない。のし掛かるプレッシャーを背負い、俺は厨房の奥へと引っ込み、調理を開始した。
幸い、料理の腕は衰えておらず、人数分を用意するのに差程時間は掛からなかった。カルデアの各設備は一流を自負している。それは台所も例外には及ばず、用意された食材を一切無駄にせず、遂に自分は人数分の麻婆豆腐を用意することが出来た。
久方振りの麻婆、以前の調理以降作る機会が中々無かったから、今日はいつもより多めに香辛料を足しておいた。お腹を空かせていたからお先に一口、ご飯と一緒に味わえる久し振りの麻婆に、自分は大変満足した。
やっぱり麻婆には白米だよな。泰山ではいつも麻婆丼を頼んでたし。……懐かしいなぁ、こう言う食べ方をする度に、言峰師父から子供らしい食い方だといつも揶揄されたっけ。
そんな思い出の品である自分渾身の麻婆を前に、何故か他の英霊の皆さんは固まっていた。何故？　遠慮しなくても良いんだよというと、皆視線を剃らすばかり。
スカサハは……何か麻婆に顔を埋めていた。意地汚いなぁ、そんなに食い意地張らなくても言えば用意してやるのに。と、呆れながら食べ続けていると、今度はアストルフォがやってきた。
『なに食べてるのー？　僕にも頂戴！』
そう言いながらニトクリスさんの返事を待たずに彼女の麻婆を一口頬張ると、バタリとスカサハの様に倒れ伏してしまった。何故？
しかもそれを見たニトクリスさんが悲鳴を挙げている。大袈裟だなぁ、確かにいつもより辛めにしたけど、そんな反応をする程じゃないだろ。
とは言え、確かに辛さは大人用に調整してあるから、ジャックやナーサリーライム、念の為にアンデルセンさんにはオムライスを用意させて貰った。此方は総じて好評だったと追記しておく。

で、問題は一向に食べようとしない他の英霊達だけど……勿論、自分はお残しを許さなかった。世界中を旅し、その中で個人的に一番キツかったのが食事だ。

空腹のあまり、知識に無い茸を食べれば毒に当たり、三日三晩腹痛に苛まされ、喉の乾きに我慢できずに適当な水源で喉を潤せば腹を下す。出して暫くすれば治ったが、どちらも二度と体験したくない出来事だ。

何処の料理が一番美味いか、それを議論するのは自分は否定しない。けれど、敢えて自分は言わせて貰おう。ご飯は、食べられるだけで幸せなのだと。

その事を騎士王に同意を求めれば、アルトリアさんは涙を流しながら頷いてくれた。流石は天下の騎士王、彼女の時代も食事事情は暗かったらしいし、自分の力説にも共感して貰えた様だ。

その後の彼女は黙々と麻婆を食べ、完食。両手を合わせて御馳走様と言い切った彼女は、席から立ち上がり、自分に礼を口にして部屋へ戻っていく。

その後も、騎士王を筆頭に円卓の騎士やインド勢、ギリシャ勢と、希望した英霊達が一人、また一人と完食し、自室へ帰っていき、本日のイベントは終了となった。

追記。

ロマニから呼び出しをくらい、自分以外に麻婆を振る舞うことを禁止にされた。解せぬ。

『お前はいつもその食い方をするな。たまには麻婆だけで味わってみるのも良いだろうに……』

『いやさ、麻婆を食べてるとどうしてもご飯を食べたくなるんだって。麻婆の辛さと白米の甘さが抜群に相性が良くってさぁ』

『ふっ、図体はデカくなっても、その辺りはまだ子供だな』

『食べ方の趣向に大人子供もないだろー！』

「ふふ、懐かしいなぁ」
「――――どうしてあの人、あんな劇物を生み出す癖に麻婆以外の料理は普通に美味いんですか」
「私の作る料理より美味いとか、マジで理不尽の化身ではありません？」

δ月α日
今日、花の魔術師ことマーリンと、キングハサンこと初代山の翁――――通称、山のじっちゃんが召喚された。
相変わらずの立香ちゃんの引きの強さは規格外(EX)だが、これまで召喚されてきたサーヴァント達と比べれば、割りと性格は大人しめな彼等の登場に、自分はホッと安堵した。けれど、魔術的にはそうでもないのか、ロマニは酷く狼狽していた。特にマーリンからは何かと弄られてるっぽいし、あまり苛めてやるなと一応の釘を差しておいた。
で、自分としてはマーリンよりも山のじっちゃんが来てくれた事が個人的には驚きだった。彼は歴代山の翁の中でも初代という事もあり、他のハサン(山の翁)とは色んな意味で一線を画している。
そんな初代様が来るものだから、他のハサンの人達の動揺ぶりはヤバかった。呪腕さんを筆頭に、百貌さんや静謐さんは凄まじく緊張していた。まぁ、それも仕方がないのだろう。彼等にとって初代様はローマ勢にとっての始祖さんみたいなモノ、畏まるのは当然と言えた。
そんなガチガチに緊張している彼等の前で、初代様を山のじっちゃんなんて呼ぶのは、流石に気安さが過ぎたらしい。普段は温厚な呪腕さんが割と本気で怒ってたし、百貌さんは激昂し、静謐さんは半泣きしていた。
そんな彼等をじっちゃんは構わないと言い、自分のじっちゃん呼びを受け入れてくれた。流石はキングハサン、懐の深さもキングクラスである。
で、その後は山のじっちゃんの監修の下で、瞑想の修行に付き合って貰う事にした。極化に至る〝兆し〟へ自分を押し上げてくれたの

は、他ならぬじっちゃんによる稽古のお陰だ。
極化をより精錬なモノにする為には、より自分の内へ意識を集中させるのが鍵となる。山のじっちゃんが監修してくれれば、その集中力も増すのではないかと考え、自分は隙あれば斬られる事も厭わないと言い切り、じっちゃんに修行の手伝いを申し込んだ。
返ってきたのは快諾の一言。召喚されて間もないのに、それでも自分の我が儘に付き合ってくれるじっちゃんに感謝しながら、自分達は格納庫にある以前にも使用したトレーニングの為に造った重力室に向かった。
今回は瞑想が主なメインなので重力制御はカットし、明かりも消して環境をあの山の翁の霊廟に近付ける。視覚が封じられ、前後左右が分からなくなるまで目を閉じて座禅を組むと、自分でも不思議な位に成る程集中出来た気がした。
座禅の最中は何も考えないようにしていた為、特に書き記せるモノはないが、山のじっちゃんが監修してくれているお陰か、死と言うものをかなり身近に感じる事が出来た。
これに恐怖を抱かず、ありのままに向き合いながら意識を自身の内へ集中させる。今回は例の鋼の戦士達を垣間見る事は無く、瞑想は無事に終わった。
その後、ロマニからの通信を合図に本日の鍛練を無事に終わらせた自分は、じっちゃんに礼を言い、重力室を後にする。喚び出されたばかりにも関わらず、鍛練に付き合ってくれた初代様にはやはり頭が上がらない。
そして、晩飯時という事で食堂に戻ってみたら、何故かじっちゃんに鍛練を付けて貰っていた事がバレてしまい、シドゥリさんに叱られてしまった。
今度は危険な修業をする時は予め第三者に言うようにと、そう固く約束された自分は、今後シドゥリさんに厳しく目を付けられる事になった。
……なんでさ。

「Ｍｓ．シドゥリ。Ｍｒ．修司への説得、お見事でした」
「ナイチンゲール様。賛美は不要です。私はただ、彼の無茶が目に余ったので、釘を指しただけですから」
「ええ、その通り。彼は時折、私の予期せぬ無茶をする。それを本人がまるで自覚していないのが質が悪い。私や頼光氏、Ｍｒｓ．茶々も気に掛けていましたから、貴女の様に事前に釘を指してくれる人材が必要不可欠だったのです」
「私は、他の英霊の皆様と違い、戦う術がありません。そんな私が無茶をして欲しくないと願うのは烏滸がましい事なのでしょう」
「いいえ、それは違います。戦える力がないと言う図式は、必ずしも無能という答えに行き当たるとは限らない。シドゥリ、私は貴女がカルデアに来てくれたこと、とても嬉しく思います」
「あ、ありがとうございます」
「では、今後のＭｒ．修司の健康面について、色々と話し合っていきましょう。既に先の二人がお待ちです。さぁ、此方へ」
「は、はい。宜しくお願いします！」

「……成る程、ああやって外堀が埋まっていく訳か」
「どうだ贋作者（フェイカー）、あの光景、心当たりがあるのではないか？」
「――――ノーコメントだ」
「いっきし、なんだ？　急に悪寒が……」

δ月γ日
不味いことになった。立香ちゃんがレイシフト中にトラブルに巻き込まれた。
現在、自分も現地に向かうために調整中。準備が完了次第、現場へ

急行する。事態が事態なのであまり詳しく書く余裕はないが、せめて現地の場所と年代だけは記しておこうと思う。

場所は帝都。大日本帝国時代の日本で、時代は昭和２０年。１９４５年、第二次世界大戦後期の――――――東京だ。

その177

δ月＊日

取り敢えず、自分も立香ちゃんも無事に帰還できたので日記に事の顛末を記して置くことにする。

まず今回の特異点は、人理焼却とその修正を果たした際に引き起こされる謂わば皺寄せみたいなモノ、規模も小さく、脅威度も低いことからこれ迄の特異点よりかは幾分かマシ、最初はそんな風に思っていた。

油断、慢心。個人的にはそんなつもりはなかったのだが、人理修復という人類未踏の大偉業を成し遂げた反動か、自分達は立香ちゃんが先に現地へレイシフトした事に一瞬気付くのが遅れてしまった。

いや、言い訳はしない。あの時の自分は確かに腑抜けていた。レイシフトで先に待っていると言う彼女の言葉を受けて、呑気に準備をしていたのだ。結果、立香ちゃんはレイシフト先で出会った現地のサーヴァント……信長によって肩を射たれ、軽傷であるものの傷を負った。

立香ちゃんが助かったのは、後に合流したライダーのサーヴァント、坂本龍馬とお竜さんのお陰だった。彼等が立香ちゃんと、沖田オルタちゃんを回収し、手当てをしてくれた事で大事には至らず、自分も合流することが出来た。

なんて、文章ではダイジェストになってしまうが、自分が立香ちゃんに合流するまでの間にも、結構色々とあったので、その辺りの事も書いておく。

まず、大急ぎでレイシフトに乗り込んだ自分は、立香ちゃんの気を辿って夜の東京を探索し、途中襲ってきたノッブを一蹴。また信長関連の厄介ごとかと思ったが、生憎今回カルデアの信長は自粛中。本人曰く、夏に向けて色々と準備中との事らしく、今回に限っては完全に白だった。

で、立香ちゃんを追って走り続け、もう少しで彼女の元に辿り着けるという所で……人斬りと遭遇。気配は殺していても、これ迄の旅の中で殺人鬼特有の気配と言うものを知った自分は、立香ちゃんがいるであろう建物に向かって幽鬼のごとき足取りで近付く男に、カマを掛ける意味を兼ねて、何のようだと訊ねた。

すると、その人斬りの男は一切の応答もなく、ただ自分の首を目掛けて斬り込んできた。かなりの俊敏性だったので目を見張ったが、カルデアにいる沖田さん程ではない為、比較的簡単に対処出来た。

ただ、奴の奮う剣筋は少々独特で、長引かせては面倒と思い、早々に決着を付ける事にした。まぁ、普通に蹴りを叩き込んだだけなんだけれども。

大振りを誘った所へのカウンターで入ったので、まぁ吹っ飛んだ。一応情報収集もしたかったから、加減はしていたが、何軒も家屋をぶち抜いてしまったのは普通に申し訳ないと思った。

その後、自分の一撃を受けて目を回している人斬り改め岡田以蔵、幕末時代の人斬りを身動き出来ないようにふん縛り、改めて立香ちゃんの所へ合流した。

其処にいたのが、立香ちゃんの恩人達である坂本龍馬さんとお竜さんである。二人とも……特に龍馬さんは自分に担がれて伸びている以蔵を見て驚いていたが、自分がカルデアのもう一人のマスターだと知ると困惑しながら納得し、無事に話を擦り合わせる運びとなった。

此処で明らかになったのが、今この帝都東京で行われている聖杯戦争は異常で、サーヴァント達による陣取り合戦みたいな事になっているのだとか。で、これ等を崩し、この聖杯戦争を企てた原因を何とかしない限り、立香ちゃんと自分はカルデアに戻ることは出来ないとされている。

なんだいつもの事じゃん、なんて油断はもうしない。自分が気を分けた事で回復したと言っても、立香ちゃんは怪我人だ。完全に動けるようになるまで、彼女の身柄は龍馬さんが拠点としているこの事務所に預ける事にした……かったのだが、此処でまたもや問題発生。

この人斬り以蔵、目覚めたかと思ったら龍馬さんの姿を見るなり激昂し、殴り倒した。本当なら持ち前の刀で斬り掛かるつもりだったが、立香ちゃんの事を考えて自分が預かっていた為断念。馬乗りになって何度も殴る以蔵を、龍馬さんは抵抗することなく受け入れた。

どうやらこの二人、生前では親しい間柄だったらしく、龍馬さん曰く親友の関係だっらしい。以蔵は否定しているが……。

で、その後も色々と話を進めていき、戦線（レッドライン）に陣取っているサーヴァントを倒す事に話は流れていった。自分はランサーを、立香ちゃんと沖田オルタちゃん、並びに以蔵はセイバーの方を受け持つする事になったのだが……。

この人斬り、あろうことか自分にリベンジを果たす為、立香ちゃん達を放置して俺の方に来やがった。より正確に言えば、自分の動きを模倣して自分を超える為とか抜かしていたけど、俺としてはそんな事はどうでも言い。

何で立香ちゃん達を放っておいた。怒鳴りこそはしなかったが、激昂している俺を見て以蔵はカラカラと笑い、早く済ませないと合流できないぞと抜かして来やがった。もうね、龍馬さんの親友でなかったら、多分俺がコイツを潰してたね。

ともあれ、道中遭遇したチビノブ達を蹴散らしながら、ランサーがいるであろう戦線に向かうと、其処にいたのはカルデアにいるあの人とは別の……李書文先生がいた。

書文先生は自分を見るなり、凶暴な笑みを浮かべて仕掛けてきたが、間に割って入ってきた以蔵が先生の槍を受けて戦う運びになった。書文先生は相手が誰であれ全力で戦えるなら割と寛容で、割り込んできた以蔵相手に全力で己の武を晒していた。

だが、途中から劣勢に追い込まれた以蔵は状況を覆す事が出来ないまま敗北、地面に座り込み、動けなくなった彼を見て、仕方がないと諦めると、今度は自分が割り込む事にした。

再びの割り込み、呆けている以蔵を無視して書文先生と打ち合う。ほんの数回の応酬だが、以蔵とやりあってダメージを蓄積されていた書文先生の強さは、カルデアにいる先生と負けず劣らず鋭かった。

だが、先に以蔵との戦いで消耗していた先生はやはり自分と戦えるだけの余力はあまり残されておらず、無理に引き延ばすのも忍びないので、此処は互いに全力の一撃を見舞うことで終わりという流れにした。

書文先生は槍での无二打(にのうちいらず)を、自分は極化しての无二打(にのうちいらず)。拳と槍が交差する瞬間目にした書文先生の顔は、とても満ち足りた表情をしていた。

で、その後は霊基を貫かれて消えるだけとなった書文先生が、以蔵にとても為になる薫陶を授けて消滅。何故自分は負けたのか、その事実と現実を目の当たりにした奴は、酷く落ち込んだ様子で夜の帝都へ姿を消した。

そんなことより、立香ちゃんと沖田オルタちゃんだ。二人だけがセイバーの所へ向かったと言うので、居たたまれなくなった自分は急いで二人の所へ向かった。セイバーのサーヴァントが陣取っているとされている戦線、果たして二人は無事なのかと駆け付けてみれば、既に勝敗は決した後だった。

勝者は、沖田オルタちゃん。彼女自身傷だらけで満身創痍だったが、どうやら無事にこの特異点のセイバー――――沖田さんに勝てたらしい。いや、ここのセイバー、沖田さんだったんかい。

詳しくは書かないが、沖田オルタちゃんは中々に面倒な出自のサーヴァントらしく、立香ちゃんと一緒にいた時は自分のことも良く分かっていない赤子の様な状態だったらしい。それが沖田さんを倒すぐらいにまで強くなるのだから、サーヴァントの成長具合も分からないものである。

その後、沖田オルタちゃんに自分の気を分けて傷を回復させてから龍馬さんの事務所に戻ると、其処には龍馬さんだけでなく、信勝(?)まで一緒にいた。

あれ？　何でコイツもいるの？　不思議に思う自分達を余所に龍馬さんから説明を受けると、何でもこの信勝の中には信勝だけでなく、ノッブの霊基も同居しているらしい。

立香ちゃんがこの特異点にレイシフトされた時、ノッブも巻き込ま

れてこの特異点に転移し、その途中トラブルに遭遇。運良くオマケ感覚で巻き込まれていた信勝に霊基を捩じ込む事に成功し、黒幕が動く時まで大人しくする事にしたのだとか。

その黒幕というのが南光坊天海こと明智光秀、後のミッチーである。このミッチー、どうやら〝私が考えた私だけの信長様！〟とやらを喚び出す為に何度もこの聖杯戦争を繰り返しているらしく、今回でその完成を目論んでいるらしい。

その碌でもない野望を阻止する為、自分達は連中の拠点へ突入。他の面々が疲弊している中、自分だけは無駄に元気だったので、途中から合流してきた土方さんと以蔵と一緒に英霊兵なる雑兵達を一蹴した。

そうして明智光秀の元へ辿り着くと、何やらアレコレ言っていたミッチーをノッブが言葉の刃で両断。自分が崇拝しているノッブ自身に拒絶され、自棄になった光秀は……。

『私自身が、信長公になることだ！』

なんて宣い、聖杯を吸収。すると奴の身体はドンドン膨れ上がり、なんかドロドロしてきた。龍馬さんがこれ以上好き勝手させるのは不味いと言っていたし、これ以上長続きするとぐだぐだ感も否めない、なにより自分自身がいい加減面倒くさくなってきたので、最後は超化した自分のかめはめ波で終わらせた。

いやね。申し訳ないけど、本当にさっさと終わらせたかったのよ。今回のレイシフトについて皆と相談したかったし、光秀の言い分も信長サマー、信長サマー、そればっか。これ以上付き合うのは無意味だと判断し、文字通り奴を終わらせた。

今回のレイシフトで有意義だったのは、書文先生と本気で戦えた事だけだったわ。その後、なんやかんやあったけど無事に自分達はカルデアに帰還し、みんなの所へ帰ることが出来た。

あと、何か沖田オルタちゃんと龍馬さん、お竜さんも来てた。オルタの方の沖田ちゃんは茶々さんが面倒見ることになり、龍馬さんは後日召喚される以蔵のお目付け役になってくれたし、色々あった今回のレイシフトだけど、総じて見ればそこそこ悪くもないのかな？

相変わらず、以蔵は自分に食って掛かって来るけどね！

追記。どうやら以蔵って、宮本武蔵に憧れているらしい。ないとは思うが、もしあの武蔵がカルデアに来ることがあれば、それとなく師匠呼びを止めさせようと思う。

「オラァ！　修司、もういっぺん勝負せい！　あ、こら！　逃げんなァッ！」
「修司も大変だな。クソ雑魚イゾーの相手をさせられて」
「まぁ、でも以蔵さん、カルデアに来てから随分と楽しそうだよ。この間も円卓の騎士さんに相手して貰っていたみたいだし、此処には色々な人の剣を堪能できるから、以蔵さんにとっても良い環境なんだろうね」
「それはそうとマスター、カルデアには彼の大剣豪宮本武蔵はいたりするのかな？　あ、まだいないんだ」
「以蔵さんは宮本武蔵の大ファンだからさ、いつか喚べたら是非紹介してあげて欲しいんだ」
「あ、あはは……。うん、考えておくよ」

後日、憧れの宮本武蔵が修司を師匠呼びして、宇宙猫になった以蔵がいたとかいなかったとか。

δ月※日
立香ちゃんの帰省の計画もあと少しで大詰め、今日は折角だから向こうに着いたらしたいこと、やりたいことの打ち合わせを立香ちゃんとマシュちゃんの二人を誘ってする事にした。
最初は自分が同行出来る事に動揺していたマシュちゃんだったが、立香ちゃんが是非一度自分の地元に来て欲しいと言うので、後日自分

がロマニに話を通しておく事を条件に無事に彼女もメンバーの一人に抜擢された。
　巌窟王、マシュちゃん、あと一人位誰か護衛役として同行してくれるサーヴァントが欲しいのだけれど……やはり、此処は同郷の人間であるアーチャーのエミヤ辺りが妥当かな？
　あーでも、アイツはカルデアの料理長だし、連れ出すのは難しいか。と、連れてくる人選に悩んでいると、先日山のじっちゃんと同時期に召喚された夢魔、マーリンが参観日の目立ちたがりの子供並みに挙手してきた。
　まぁ、第七特異点でもそうだったが、コイツの魔術の腕前は確かなものだし、何だったら現時点のキャスター枠の中でトップクラスの英霊だったりする。自分としてはコイツよりもメディアさんを推したいんだけどなぁ。あの人、普通に神代の魔術師で、現代の魔術師より遥かに格上の実力者だし、同時に此方の意図もある程度は汲んでくれる良識者でもある。
　なんならスーツを着せてしまえば、立派な社会人にも見える。耳なんて認識阻害の魔術でどうとでも出来ると本人も言っていたし、自分としては本当にメディアさんに同行して貰いたいんだけど……自分、あまりあの人に強く言えないんだよなぁ。
　と言うのも、俺自身あの人にはかなりお世話になっているからだ。元の世界では俺が何かをやらかしてしまう度に事後処理を任せてしまっていたみたいだし、カルデアに来てからはその事でちょっぴり皮肉られた事もあった。
　そういう事があったから、あまりあの人には頼みづらい。だったらジャンヌさんでも良いのでは？　なんて思い付くも、マーリンの懇願によって押し切られてしまった。
　コイツ、長年アヴァロンなんて狭っ苦しい所に幽閉されていたから、外の世界を久し振りにみたいなんていう。確実に口実程度の言い訳だろうが、立香ちゃんは頼まれると断るのが苦手な女の子。ロマニの許可が出たら良いよ。と、許してしまった。
　で、善は急げとマーリンはロマニに立香ちゃん達との外出の認可を

得ようとして、少しばかりのやり取りをした後、花の魔術師はにこやかなピースサインと共に戻ってきた。
流石のロマニもマーリンを御すのは難しかったか。最後の砦も虚しく突破され、晴れて同行の許しを得たマーリンは自分達と一緒に立香ちゃんの帰省に赴くメンバーの一人となった。
はぁ、まだ帰省は先とは言え、今から気が重い。

「――――――はっ！　そうだ！　ベディヴィエールがいたじゃないか！」
「そうだ！　常識的かつ円卓の良心である彼ならば、立香ちゃんの護衛も任せられる！」
「す、スミマセン。頼りにしてくれるのは本当に嬉しいのですが、私が抜けてしまったらその、他の円卓の面々が……」
「ぐぁぁ……マジかぁ……」
「くそう、やっぱりあのろくでなしに頼るしかないのかぁ」
「アハハハ、君達普通に酷いね」
「フォーウ、ザントウフォーウ」

δ月?日
今日、国連に向けた四度目の報告書をロマニへ提出しようとカルデアを歩いていると、意外な組み合わせに遭遇した。
ムニエルと王さ……英雄王の方の王様の二人が、食堂の一角を陣取り、パソコンに向かってなにやら話し合っていた。
本当に意外な組み合わせなので、気になった自分は何をしているのか訊ねてみると、国連に属している魔術師達に分かりやすくこれ迄の旅路を纏めた映像による報告資料を作成していたのだと言う。
二人とも凄く真面目な顔をしてパソコンに齧り付いているから、少し手伝いでもしようかと覗き込んでみると……ＭＡＤな映像が流れていた。
いや動画製作かよ!?　愕然となり、大声あげる自分に、王様とムニ

エルは呆れた様子でやれやれと肩を竦めていた。
映像で伝えるには、分かりやすく丁寧な描写が必要になってくる。その為にはこういう資料も必要だと熱弁してくる王様に、自分はそうなのかと納得するしかなかった。
正直、自分達の様子が映像として不特定多数に見られるのは抵抗がある。しかもなんか映像に映っているの俺ばっかだし……あとこれ迄戦った連中。
イケイケの音楽を流しながら二転三転場面が変わるのは、昔嵌まっていた某ＤＢのＭＡＤに似ている気がした。
あと、この映像の最終監修はシェイクスピアらしい。
いや確かにアイツ演出家だけれども！　なに？　英霊の皆さんって割と世俗に興味津々だったりするの!?
その後、何となく落ち込んだ自分はその後山のじっちゃんに相談。動画製作とか、世俗とか疎そうなのに、それでも真面目に最後まで聞いてくれた山のじっちゃんマジ翁。
……明日も頑張ろ。

「ふぅ、これで第七特異点迄の動画……もとい、資料作成は完了、と。ギルガメッシュ王、時間神殿の方はどうします？」
「我の方で映像は保存済みだが、現在は焼き増し中でな。今暫く待て、その間貴様には休むことを許す」
「へへ、早く編集したいッスよ。全ての男子が夢見る変身、超サ〇ヤ人！　これを世間に流したら魔術界隈だけでなく、全世界が震えますよ！」
「ま、雑種どもは精々作り物と断じて相手にしないだろうがな。だが、分かる奴には分かる。これは、そう言う動画だ」
「修司本人はいやがってましたけどね。でも、それでも俺は皆に言いたい！　俺達の夢は、願うだけで終わりはしないってね！」
「フンッ、雑種の分際で吼えるではないか。実に無謀な夢だが、その無

謀さは嫌いではない」
「じゃあ、次はシェイクスピアさんと合同って事ッスね！　お先に失礼します！」
「うむ、次も励むがよい」

その178

δ月ａａ日

日々の鍛練も一歩から。そんな訳で今日も今日とで自分は手製の重力室に籠り、午前中は全て自己鍛練に明け暮れた。

此処は自分の為だけに用意した自分専用のトレーニング室、時々鍛練好きのサーヴァントが体験しにくるけど、大体は自分だけが扱う代物になっている。

最近は超化になれるようになった為、重力による負荷を常に３００倍にしており、より肉体の強化に勤しむようになっていた。このまま鍛練を重ねて続けていけば、いずれはあの主人公達のように２や３の様な形態にも変身できるようになるかもしれない。尤も、出来ない可能性の方が高いのだが……。

それと界王拳の方なのだが、此方の方も絶賛鍛練中である。幾ら超化が界王拳より強化効率が良くても、界王拳はこれ迄の自分の切り札とも呼べる技。より強力な強さが身に付いたと言って、過去の技を疎かにする程、自分は薄情ではないつもりだ。

と言うか、界王拳は気を操る際にある意味超化になるよりも難しい一面もあり、その性質は個人的には極化に近い印象を持っている。いつかは超界王拳なんて技が使える様になるかもしれないし、どちらの鍛練も欠かさず地道に続けているつもりだ。

さて、午前中は自分の時間に使えた為、此処からは本日のカルデア内部を文面で紹介していこうと思う。先ずは先日召喚されたウルク組、ジャガーマンは専ら二人のエミヤに絡んでいて、どちらも困った様子で対応に追われていた。

自分はそんな困った二人の様子を遠巻きにニヤニヤしているだけである。アーチャーのエミヤには止めろと言われているが、端から見ると其処まで嫌がっている様には見えない為、基本的にスルーしている。

ケツァルコアトルは……うん。まぁいつも通りと言えばいつも通りだ。ルチャリブレが大好きだと自負するだけあって、連日肉弾戦が大好きな英霊とルチャってたりしている。昨日なんて、下心丸出しのフェルグスがマットに脳天から沈められていたしね。

そんで、問題のイシュタルなんだけど……コイツ、兎に角エルキドゥさんと相性が悪い。いつも互いに険悪な空気を出しているし、顔を合わせる度に頼光さんと酒呑童子並に殺伐とした雰囲気になる。

其処に王様……黄金の英雄王も参加しちゃうから、余計に始末に負えない。とは言え、そうなる時は決まってシドゥリさんが止めに入るから、あまり大事になったりは今のうちはしていないけどね。

ただ、イシュタルは兎も角エルキドゥさんには申し訳ないと思っている。彼は英雄王の唯一の友だというし、そんな王との死に別れの原因を作ったイシュタルには腹の底から殺意が沸いてくるのだろう。

いつか、その憤りが多少なりとも解消できる様に、イシュタルと全力で戦える場を設けてやりたいんだけど……やっぱまだ無理だろうなぁ。

エルキドゥさん、イシュタルを前にしている時以外は本当にイイ人だし、自分の事も気に掛けてくれている。気遣いも出来る事から、個人的にはメディアさんと並ぶ良識人だ。そんな彼はもっと日頃から現世を楽しんで貰いたい。

続いてイシュタルは……カット。コイツ、大抵ろくなことしていないから、普通にカルデアでも劇物扱いされている。て言うか、通路をマアンナで移動すんな。征服王や獅子王ですら、通路を歩く時はちゃんと徒歩なんだぞ。

個人的にはイシュタルよりも冥界の女主人こと、エレシュキガルに来て欲しかった。

そんで、復讐の女神ゴルゴーン。コイツは……うん。取り敢えず、例の双子女神が進んで監視してくれる事を約束してくれたので、喜んで彼女達の所に預けて貰っている。

ほら、やっぱり姉妹は仲良く揃っているのが在り方としても見栄え的にも美しいよね。アナも姉達に可愛がられていてご満悦していた

し、個人的には最も相性の良い組み合わせだと思っている。
他意はない。
そして最後に牛若丸、弁慶、レオニダス、茨木童子は以前からカルデアに召喚されている為、あまり語る事はないが、神代の時代にて活躍する自分の姿を見て、彼等は概ね満足していた。

γ月?日
立香ちゃんの故郷への帰省まであと少し、準備もそろそろ大詰めという所で、ロマニからある相談をされた。
と言うのも、その相談の内容が自分の相方であるグランゾンの事で、現在国会にどういう風に説明したらいいのか、絶賛頭を悩ませているらしいのだ。
そう言えば、元いた世界でもグランゾンの事は基本的に秘密にされてきたな。自分的には別に公にしても構わなかったが、もし公表なんてすれば裏表の世界問わず、世界の情勢が混乱するだろうし、その際に起こる経済的被害は計り知れない。
下手をすれば、グランゾン対世界。という危険極まりない図式が成立してしまうから、グランゾンの公表はある程度技術革新が進んでからにしろと、王様から厳命を受けたことがある。
まぁ、当時から世界の面倒くささは自分も理解していたし、既にその頃からメディアさんには隠蔽の事で多大な迷惑を掛けていたから、その事に付いて異論はなかった。
で、この世界の自分がグランゾンの事を公表していないのであれば、自分も進んで暴露するつもりはない。グランゾンの事は伏せておくことにして、情報漏洩も徹底して欲しいと頼むと、ロマニは安堵した様に息を吐いて了解と承諾をしてくれた。
因みにグランゾンとネオと化したグランゾン、それぞれの機体のスペックを報告書に簡潔に纏め、ロマニとダ・ヴィンチちゃんに提出してみたら、何故か顔を手で覆って天井を見上げた後、無言のまま燃やされてしまった。
解せぬ。そう不満そうにしていると、久し振りにロマニからガチギ

レされた。
なんでさ。

γ月Δ日
立香ちゃんの故郷への帰省まで、あと数日。世間では今頃は時期的にGWに差し掛かっているであろう今日、相変わらず報告書を書いたり鍛練に励んでいると、唐突にマシュちゃんからカルデア全体通信を入れてきた。
何でも、海洋油田基地セラフィックスという施設から、定期連絡が届いたのだとか。
セラフィックスに友人がいるスタッフがいれば、管制室に赴いて詳しい話が聞けるらしく、通信期間は半日。次回の定期連絡は3ヶ月後になると言われ、興味が沸いた自分はこれから管制室に向かおうと思う。
何でも、セラフィックスとやらの油田基地は前所長の所有物らしく、その実態はカルデアの別部署……というより、資金源の一つとして数えられているらしい。流石は魔術師、金持ってんなぁー。
と、いつまでも日記を書いていても仕方がない。今日の日課は此処までにして、自分も管制室に向かうことにしよう。

◇

「ん、今回は修司、君の方が早く着いたみたいだね」
「よっすドクター、セラフィックスとやらの通信が来たんだって？」
扉を開き、待っていたのは見慣れた白衣の男性。コーヒー片手に佇

んでいたロマニは、珍しく先にやって来た修司に、にこやかに微笑んだ。
「何でも、セラフィックスはカルデアの資金源を担う施設だって聞いてたけど、向こうは人理焼却による影響は無かったのか？」
「多分、そこら辺の事情を含めた定期通信なのだと思うよ。協会から新しい所長が赴任するまでロマニが責任者のままだから、向こうの様子はある程度把握しておく必要があるのさ」
　カルデアが人理を修復するまでの間、世界は魔神王によって焼かれたままで、外の世界の住人は自分達が一度消滅した自覚すら持っていなかったのだろう。今回の定期通信は、その辺りの話を詰める為のモノだろうと、ロマニに代わりダ・ヴィンチが簡潔に説明する。
　やはりそうかと、納得する修司にマシュが歩みより、手にしていた資料を渡す。
「修司さん、此方をどうぞ。事前に纏めておいたセラフィックスに関する資料です。先輩には後程私から口頭で説明しますが、修司さんには資料を渡しておいた方が分かりやすいかと思ったので……」
　手渡された資料に目を通すと、油田基地であるセラフィックスについて簡潔ながらも纏まった内容が記載されていた。半潜水式のプラットフォームで、従業員の人数は１００人以上で昼夜交代制。
　カルデア本部とは遠く離れた施設ではあるけれど、カルデアを運営する為に必要な資金源の一つ。
　他にも職員達の具体的な人数から、各施設の位置取り、他にも従業員の生活を支える娯楽施設や、外と隔絶された環境での精神的負担を軽減させるカウンセラーなど、他にも様々な事が記載されている。
　簡潔且つ分かりやすい丁寧な資料、その作り込みからマシュの手腕に感心した修司は、素直にその手際の良さを称賛した。
「うん。分かりやすくて簡単な良い資料だ。ありがとうマシュちゃん、お陰ですんなりと頭に入るよ」
「お、お役に立てたのなら幸いです……」
　身長の差から丁度良い位置にいた為、またもや無意識にマシュの頭を撫でていた事に気付く。年頃の娘にすることではないなと、軽く謝

罪をしながら手を退けると、タイミング良く立香がやって来た。
「ごめんなさーい！　遅れちゃいましたァ！」
「おや、立香ちゃん。君も来たのかい？」
「だってカルデアに関係のある施設からの通信でしょ？　私、気になっちゃって！」
カルデアとセラフィックスの繋がりは、深いようで実は脆い。先の人理焼却の際にレフによって引き起こされた爆発の際には、セラフィックスと通信を行っていた通信士の命が奪われている。
彼方は海上、此方は雪山。共に外界から隔絶された環境の中で戦ってきた仲間。そんな仲間の片割れとも言えるセラフィックスからの通信は、カルデアのスタッフ達に小さくない朗報となっていた。
特に、今回の通信士の女性はセラフィックスの通信士とは五年の付き合いになっている。積もる話もあるのだろう。
「そうですね。セラフィックスの通信士は私にとっても得難い知人です。ロマニ所長代理にとってのマギ☆マリと言えば、分かりやすいでしょうか――――あ」
「うぅ、マギ☆マリィ、どうして、どうしてなんだよぉぉぉ……」
カルデアの通信士にとって、セラフィックスの通信士は画面越しの知人。例えるならロマニが相談する際に使われるネット上のバーチャルアイドルだろう。そう口にする通信士だが、それが禁句だった事を思い出す。
見れば、マギ☆マリの正体を知ってしまったロマニが、大粒の涙を流して踞ってしまっている。未だに衝撃が癒えていないのだろう。この時、様子を見に来た花の魔術師が「呼んだかい？」と話に混ざろうとしたが、鬼の形相となったロマニが通路へ追いやった。
「では、話を戻しましょう。セラフィックスからの通信、宜しくお願いしますね」
「マシュちゃん……」
「マシュ、逞しくなっちゃって！」
「いやこれ逞しいって言うの？」
嘆くロマニをスルーして、話を進めるマシュ。そんな彼女に確かな

成長を感じた修司と立香が感激する一方、通信士は一人つっこんでいた。

さて、そろそろおふざけも此処までにして本題に入ろう。立ち直ったロマニがセラフィックスへの通信を繋げる指示を出し、カルデアの外部通信６番をオープン。セラフィックスとの映像通信を開き……。

何も、映らなかった。

映像は届いている筈。だが、モニターには何も映らない。まさか観測システムのシバに何らかの影響が？　不思議に思った修司がシバを見つめても、何も分かることはなかった。

音声も繋がり、現時点でカルデアはセラフィックスと確かに繋がりを持っている。しかし、実際にセラフィックスからの通信は何もない。向こうが時間を間違えたとも思えないし、一体何が起きているのか。

或いは機械の故障か？　そう、誰もが不思議に思うなか、それは微かに聞こえてきた。

「――――け――――――み――――――と――――――て――――――」

「通信士、音量を最大限にして拾って！」

微弱ながらの確かな声、ノイズの向こうから聞こえてくる人の声に、ロマニはオペレーターに指示を飛ばす。慣れ親しんだロマニからの指示に戸惑うこともなく実行に移す通信士、聞こえてくる音量を最大限にして、セラフィックスからの通信に耳を傾けた時。

『Ｓ――Ｏ――Ｓ――きこえ、ますか――――どうか――――拾って――――』

『たす、けて――――――たすけて、だれか。みんな――――――みんな、データに、変換される――――』

その言葉を最後に、セラフィックスからの通信は途絶えた。

「セラフィックスからの通信、途絶えました！　応答ありません！」

「ダ・ヴィンチ、カルデアスの使用を許可する。シバを使い、急いで２０１７年のセラフィックスを観測してくれ！」

「もうやってるよ！」

セラフィックスからの通信が途絶えた事をきっかけに、慌ただしくなっていく管制室。助けを求めてきた向こうの様子から、尋常でない事態であることを察したロマニは、ダ・ヴィンチを始めとしたカルデアスタッフに急いでセラフィックスの観測を確認するように指示を出す。

火事か、或いは別の異常事態か。原因は分からずともセラフィックスの存在の有無は確認できる。カルデアスならばその程度の状況把握くらい造作も無い筈、スタッフ一同もそう確信していただけに……。

「こ、これは!?」

「観測できたのなら報告を。見たままで良い、憶測や推測はその後にするとしよう」

「あ、はい。……ですが、その、無いんです！　カルデアスから観測された結果、セラフィックスそのものが見えないんです！」

「基地は移動式ですから近隣の海域もサーチしましたが、セラフィックスは何処にも存在しないのです！」

信じがたい報告にその場の全員があ然となるが、彼等はこれ迄の特異点を巡る旅路の中で、何度も支えとなったベテラン。その報告に偽りがないのは分かっている。

その後も、ロマニは指示を続けた。観測できるであろうあらゆる可能性の模索を、そしてセラフィックスの特異点化という最悪の事態を。しかし、返ってくる返答は全て適合なし。何もないという事実が返ってくるだけだった。

なら、あの通信は一体何だったのか。そんな時、顔を青ざめた通信士から衝撃的な事実を告げられる。

「ロマニ所長代理、確認が遅れて申し訳ありません。先程のセラフィックスからの通信なんですが……」

「なにか、分かったのかい？」

「いいえ、あの通信先の存在証明は依然として成り立っていません。あの通信は、我々が観測できない領域から送られたもの、そうとしか判断出来ませんでした」

青ざめながらも、伝えるべき事を正直に伝えるべき通信士は、確かに職務に殉じる佳き人なのだろう。しかし、先程まで繋がっていたのがセラフィックスではなく、カルデアスでも観測できない未知の領域だと知ると、その場にいる全員の表情が強張る。

一体、カルデアは何処と繋がってしまったのか、誰もが不安を抱くなか……。

『あー、テステス。マイクの感度はバッチリですか？　バッチリ？ちゃんとカルデアに届いてます？』

『無料アプリに盗聴アプリを仕込まれて、プライベートを丸裸にされたぐらいバッチリ？』

聞こえてきたのは、女性の声。先程までの微かな救命要請（SOS）とは異なる、ハキハキとした少女の声。

……と言うか、その声に修司は懐かしさを覚え、同時に嫌な予感を感じた。

『宜しい。パーフェクトです。さて、可愛くて情けないちっぽけな人類の皆さーん！　いっきますよー！』

〝BBーチャンネルーー！〟

暗転される視界、次に映し出される小悪魔チックなテロップ、ニュース番組を模したデカデカな映像が、モニター一杯に映し出され……。

『人類の皆サーン、相変わらずお間抜けな顔を晒していますかー？』

改造したレオタードみたいな衣服を身に纏い、堂々とその肢体を晒す嘗ての後輩に似た誰かを前にして。

「……ちょっと、エミヤの奴連れてくるわ」

白河修司は、速攻で食堂へと向かった。

その１７９　電脳楽土

「エミヤ、俺達の後輩がＶＴｕｂｅｒになっちまった」
「どうした急に」
　いつもの如く、食堂にてカルデアスタッフや他の英霊達に料理を振る舞っていた頃、いきなり現れてトンチキな事を言い出した修司に、英霊エミヤは生前の素を全開にしながら訊ね返した。
「何を言っているのか分からねぇと思うが、俺も何を言っているのかさっぱりだった。ドッキリだとか、催眠術だとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねぇ」
「落ち着け、色々とブレブレだぞ」
　使い古されたネットスラングを口ずさむ辺り、実は結構余裕なんじゃないのかと、エミヤは訝しんだ。
　しかし、次に修司が口にした人物の名前を耳にし、カルデアのあらゆるモニターに写し出されるその張本人を目の当たりにすると、事態の重さを理解し。
「桜ちゃんが、カルデアにハッキングしている」
　エミヤは脱兎の如く食堂から脱走した。
　しかし　回り込まれて　しまった！

◇

「あ、修司君ッ！　何処に言行ってたのさ！」
「悪い、ちょっと当事者を連れてくるのに手間取った」
「当事者？」

項垂れるエミヤの首根っこを掴み、管制室へ戻ってきた修司を出迎えたのは、涙目のロマニだった。
あれから差程時間が経過していないから、未だにカルデアのモニターは嘗ての後輩に瓜二つの少女が占拠し、人類を下等な存在だと見下している。人をおちょくり、煽るその姿は以前黒くなった彼女を思い出し、少し微笑ましく思えてしまう。
「それで？　このいろんな意味でアレな女の子は一体何の目的でカルデアに接触してきたんだ？」
「……あ、うん。それなんだけど」
『ちょっとー、人類（豚さん）の癖に私を無視して話をしないでくれませんかー？　自分達の今の立場、分かっていますかー？』
後輩に似た少女の目的は何なのか、自分が席を外していた間に起きていた出来事をロマニへ訊ねると、モニターに写る少女が割って入ってきた。
どうやら、人並み以上に承認欲求は強いらしい。
『て言うかアナタ、私を誰かと勘違いをしているみたいですから予め言っておきますけど、私は間桐桜何て言う可憐で儚いオリジナルとは違いますからね？　私の名前はＢＢ、月の支配者にして違法上級ＡＩなのです！』
「あ、うん。自己紹介どうもありがとう」
自らを月の支配者と名乗り、更には人工知能（ＡＩ）だと言うＢＢなる少女、まだ何も言っていないのに勝手に情報を教えてくれる親切な少女に、修司はどこぞのあかい（うつ）あくま（かり）の血筋を感じた。
「それでその……ＢＢ、だったかな？　君の目的はなんだい？」
『あれ？　私の出自についてはお気になさらないんです？』
「月の支配者、その単語（ワード）は確かに興味は引かれるが、残念ながら今の僕達にはそんな事を訊ねる余裕はない。カルデアのコントロールは君に掌握されようとしている。なら、事を荒たてずに君の目的を訊ねるのが、今の僕の仕事さ」
到達な出来事だが、事実としてカルデアの各システムはたった一人のＡＩによって掌握されつつある。それも、通常の通信ではあり得な

い領域からの一方的な接触。その事実だけで、目の前の少女が並のハッカーでないことは充分理解できた。
　持ち前の悲観さと推察、事実を加味した上でのロマニの対応は、ＢＢに少なからずの関心を抱かせた。
『ふーん。人間の中にもまぁまぁ弁えている人もいるんですね。ＢＢちゃん的にポイント高いです！　では、単刀直入にお教えしましょう！　現在、そちらの人類は盛大にヤバい状態になっています。具体的にはＡ，Ｄ２０３０年のマリアナ海溝をチェーック！』
　ロマニの対応に気分を良くしたＢＢは、高いテンションのまま情報を開示。マリアナ海溝という単語についてアレコレ話をし始める立香とマシュを余所に、カルデアのオペレータースタッフは、ダ・ヴィンチの指示通りの座標を調べ始めた。
　結果はビンゴ。セラフィックスは特異点と化し、マリアナ海溝を沈み続けていおり、更には時空を歪ませるレベルで発生している。その事実にカルデア一同は改めて騒然となった。
『さぁ、遂に明らかになりました特異点！　こうなったらもういつものアレをするしかないですね！　レッツレイシフト！』
「よし、じゃあいくとしよっか！　ドクター、ダ・ヴィンチちゃん、行ってきますね！」
「いや、今回は俺が先にいこう」
　新たな特異点が判明し、セラフィックスに捕らわれた人名を救出するには、カルデアのレイシフトが必要。原因の究明と解決をする為に走り出す立香を、修司が止めた。
「先の特異点の時のように、不具合に巻き込まれて立香ちゃんに怪我を負わせるのは流石に勘弁したいからね。今回は、俺が先を行かせてもらうよ」
　帝都にレイシフトした際、不具合により単身現場に到着した立香は、其処で見知った筈の相手に射たれ、傷を負った。
　幸い修司の気力による手当てと、後に戻ってきた際に受けた治療のお陰で傷一つなく無事に完治したが、カルデア側はこれを重く受け止め、以後は戦闘能力として申し分のない修司が先行してレイシフトす

るように話を進めた。
「そうだよな？　ロマニ所長代理」
「あぁ、今回は修司君を先行させて調査を行う。立香ちゃんがレイシフトするのは修司君の１５分後、向こうでの安全圏を確保した後に開始するよ」
「あ、あれれ？」
「それでは先輩、此方へ……」
「あーれー？」
　そして、そんな案を率先して押し出したのが、他ならぬロマニと修司である。二人の過保護により今回のレイシフトは少しだけ見送る事になった立香は、途端に手持ち無沙汰となり、マシュの言われるがままに空いた席に座らせられる。
「とは言え、レイシフト先の状況は未知数。特に今回は未来へのレイシフトという不可能への挑戦だ。何が起こるか分かったものじゃない」
「ま、そこら辺は大丈夫だろ。元より向こうから寄越してきた案件だし、そのくらいのサポートはしてくれる。だろ？　ＢＢちゃんとやら」
『むう、なんだかそこはかとなく軽く扱われている気がしますが……まぁいいでしょう。どうやら小生意気にも、アナタには相応の戦闘能力が備わっているみたいですし？　――――因みに、お名前の方は？』
「白河修司だ」
『なら修司センパイですね。それではレイシフトの準備が完了次第、声をお掛けくださいねー！』
　センパイ。その呼び方にますます嘗ての後輩を思い出す。とは言え、相手は後輩の姿を模しただけの別人、同一視しないように気を付けようと自らを戒めながら、修司は改めてロマニへ向き直る。
「さて、そう言う訳だがロマニ、後の事は……」
「皆まで言わなくてもいいさ。……そっちこそ、気を付けて」
「あぁ、立香ちゃんも、後で向こうで会おうな。おら、行くぞエミヤ」

「くっ、やはり私は巻き込まれるのか！」
「気を付けてねー！」
セラフィックスが何故特異点と化してしまったのか、マリアナ海溝に沈み、特異点と化した年代が２０３０年なのか。それらの謎を究明し、原因を解決する為に修司はエミヤを引き連れ、ロマニ達の見送りを受けながらコフィンへと乗り込んでいく。
何気に初めてとなる修司単独のレイシフト、期待と不安に胸を踊らせながら、いよいよレイシフト開始となった時。
『フフフ、本当に人類ってばおバカさん。何処までも騙されやすく、楽観主義。そんな能天気なセンパイを、ＢＢちゃんがジャックしちゃいます！』
その悪意は聞こえてきた。
止まらないレイシフト、止められない時間旅行。それは人理修復を成し遂げる際に起こる――――最も無防備な瞬間。
このままでは、ＢＢによってレイシフト介入を許してしまう。不味いと、意識が薄れるなか……。
『あ、あれ？　ジャック出来ない？　か、介入改竄不可能!?　何なんですかこの超絶チート!?　これ最早バグ、バグですよぉ!?』
『うわーん！　こんなのＢＢちゃん聞いてませんよぉ！』
先程までの悪意に満ちた声音とは打って変わって、涙混じりの声に……。
（もしかしてこの娘、ちょっとアホな子？）
そんな事を思いながらレイシフトに身を委ねること数秒、次に修司が目の当たりにしたのは……深海に浮かぶ、巨大な女性の姿だった。

◇

「はぁ、はぁ、はぁ……」
電脳の海を一つの影が駆けていく。細身の体に幾つもの傷を受け、満身創痍の死に体で走るその姿は、優雅と呼ぶには剰りにも傷だらけになっていた。
死にたくない。ただその思いだけで走るその姿は、親を求めて彷徨い歩くカルガモの子のソレ。痛々しく、惨めな程に懸命な少女は……しかし、終わりの時を迎えようとしていた。
「はい、ご苦労様」
眼前に突き立てられる一振の刃、追い付かれ、追い詰められたと察した少女は、もう逃げられないと覚悟して背後の声に向き直る。
見えるのは烏帽子、覗かせるのは狐の耳と尾、若い女性というには不釣り合いな殺意と殺気を滲ませながら、少女を見据えている。
「あーし、鬼ごっこはそれなりに得意な方だけど、あんまり悠長にしてられないのよ。だからさ……死んでくれる？」
「……うあぁっ！」
文字通りの死刑宣告、どうしようもなく抗えない現実を前に、少女は恐怖を誤魔化しながら力を震う事しか出来なかった。
烏帽子の女の首を目掛けて振り抜かれた脚、その鋭利な先端（ポワント）は紛れもなく女の急所を狙っていたが……。
「うっざい」
「ッ!?」
悲しいことに、細く脆い彼女の脚（ブレード）では、女の腕力を突破することは敵わなかった。乱暴に振り払われ、地面に叩き付けられた少女は、呻き声を上げながら立ち上がろうとする。
「……その根性だけは認めてやるじゃん」
だが、それまで。例え立ち上がり、立ち向かった所で、眼前に立つのは自身では敵わない敵が待っている。此処までかと、勝てない理不尽を諦めて膝を屈するだけなのかと。

……いや、それだけは容認できない。
「まだ、まだ……私は！」
まだ、何もしていない。出来ていない。このままで終わるのは、それだけは認められない。それは生まれた出自のプログラムによる指示か、それとも別の何かか。
立てる力も残されていない癖に、それでも尚☒こうとする。醜くも美しいその姿に烏帽子の女は白鳥の話を思い出した。
けれど……。
「残念だけど、アンタはここで終わり」
振り上げられた刃、その白刃は誰にも止められることなく、少女に向けて振り下ろされ――――――。
「ッ!!??」
――――る、事はなかった。
突然、頭上から落ちてくる光の柱、咄嗟に後ろに下がる烏帽子の女は、落ちてきた何かの衝撃によって吹き飛んでいく。
周囲を吹き飛ばす程の威力と衝撃。地面には大きなクレーターが出来あがるほどのソレは、しかして満身創痍の少女に一切の影響を与えてはいない。
目を丸くさせ、驚きを露にする少女。は舞い上がる砂塵の奥にいるナニかがいると見据え……。
「……成る程、どうやら今回の特異点も、一筋縄では行かないようだ」
山吹色の男、〝王〟の一文字を背負う一人の男性に釘付けとなっていた。

◇

「ふんふふーん、ふんふふーん、ふん、ふん、ふーん♪」
所変わって某所。電脳の海にて彷徨い歩く一人の女剣士、腰に二振りの日本刀を携えて、鼻唄歌う彼女の背後には無数のエネミーの死骸が転がっていた。
「クソ親父殿の元を発って早数ヶ月。適当に強者求めて歩き続け、気が付けば辺り一面海の世界！　いやー、色んな意味で持ってるなぁ私！」
天下に自分の名と強さを取り戻す為、目指した背中に追い付く為、女剣士は目覚めた場所を問わずに歩いていく。
ふと、その時光る何かが近くに落ちた所を目撃した女剣士は、その顔を喜悦に歪ませ。
「……なんだか、面白そうな予感！」
ワクワクを求めた足取りは、天女の如く軽やかだった。

その１８０　電脳楽土

　ＢＢなる自称上級ＡＩの言葉に乗り、消失したセラフィックスへのレイシフトを敢行した人理保障機関カルデア。その中で残された最後のマスター、その片割れである修司を先行したのはいいものの、そこで待ち受けていた光景は修司に小さくない衝撃を受けた。
「辺り一面海……いや、海の底か。なのに呼吸は出来るし、水圧も感じない。予想通り、唯の特異点じゃあないって事か」
　まるでこの領域だけが別物に作り替えられた様な異物感、ここへ落ちてくる際に目の当たりにした女性の姿といい、この特異点は初っ端から分からない事が多すぎる。
　しかも更に悪い事は重なり、何時もなら現地へ到着後に直ぐに届く筈のカルデアからの信号が未だに届いてこない。明らかな異常事態だが、状況に反して修司の胸中は其処まで荒波立ててはいなかった。
「取り敢えず、そこの狐のお嬢さんからお話を窺いたいのだけれど……少し、質問しても宜しいでしょうか？」
　目の前に刃を突き付けてくる狐耳の少女、敵意と殺意を滲ませて睨んでくる彼女は、修司にとって大切な情報源。故に、刺激しないように極力丁寧な言葉遣いで対話を試みるが……。
「……アンタさ、いきなり現れて何ほざいている訳？　ナンパがしたいなら余所でしてくれない？」
「確かに活発でお転婆な女の子はそれだけで魅力的ではあるが、生憎と此方は緊急事態に立たされている立場でしてね、そんな余裕もなければ暇もないのです。話をしたくないのなら、この場から一旦退いてくれませんか？」
　相手は女子、その外見は高校生の様に若く、力に満ちている。明らかに通常の女子高生ではなく、何らかの力を持つサーヴァントであるのだろうが、あくまで相手が外見上は年下の女の子である以上、それなりの対応の仕方はある。

カルデアにいるナーサリーライムやジャックもそうだ。彼女達もその外見故に精神が他の英霊とやや幼かったりもするし、そういった手合いには高圧的な態度は望ましくない。
一部では、アンデルセンの様な例外もいるが……兎も角、修司は目の前の狐のＪＫに対し、自分なりの紳士的な対応で対話を試み――――。
その結果。
「あっそ、なら……死んどけば？」
返ってきたのは、容赦も問答もない一方的な一撃。その華奢な身体とは反して、振り抜かれた鋭い白刃は間違いなく修司の首筋を狙い……。
「全く、いきなり斬り掛かるとは。最近の女子高生は怖いですね」
「ッ!?」
摘まんでいた。目で追うことも敵わない閃光のごとき一閃が、人差し指と親指という二本の指を以て、摘まむように掴まれてしまっている。
信じがたい現実、到底受け入れがたい事実。目の前の男は明らかにサーヴァントではなく人間である筈なのに、何故自分の太刀筋を初見で見切っているのか。
初めて目の当たりにした異物、目の前の正体不明の男に迂闊に攻め込んだ自分を呪いながら、刀剣使いの狐耳の女子高生は、掴まれていた指を振り払いながら距離を取る。
……明らかに、手を抜いている。摘んでいた自身の刃を、振り払う前に手放していたことを察した女子高生は、侮られている事に怒りを覚えながらも身構える。
「――――アンタ、何者？」
「ん？　あぁ、そう言えば自己紹介がまだでしたね。私は白河修司、カルデアより特異点を修復した人類最後のマスター、その一人です。……自分で言うと流石に恥ずかしいな」
まるで自らを人類最後の希望だと語っている事に羞恥を感じた修司は、苦笑いを浮かべて頬を掻く。

「さて、自己紹介を済ませた所で改めてお訊ねしたいのですが……質問に、答えて貰えますかね？」
「逆に聞くけど、答えると思う？」
　おかしい。敬語を使って下手に出ているのに、相手の女子高生の敵意は以前として薄まる様子はない。それどころか、より警戒心を抱かせてしまっている。
　これでは対話にはならない。一触即発の空気、いつ斬りかかってきてもおかしくない狐の女子高生に、どうしたもんかと頭を悩ませていた時、周囲から黒い靄の様なものが現れる。
　煙のように現れて蠢き始めると、靄だったソレはそれぞれ形を成していく。ワニだったり、バッファローだったり、様々な動物の姿を形成していく中、その中で幾つかのソレは修司の目に留まる事になる。
「――――アレは、冬木に現れた影か？」
　それは、嘗て冬木の聖杯戦争にて現れた災厄の影。人と英霊の区別なく犯し、貪り喰い尽くす悪食の化身。それに良く似た何かがエネミーの群れとなって囲い、押し寄せてくる。
「――――どうやら、余計な横槍が入ったじゃん。決着は次に回して上げる。それまで死ぬのは許さないから！」
　さて、この状況をどうするか。其処まで考えた所で剣を納めたＪＫが、一足飛びに何処かへ走り去っていく。その快活な行動力に舌を巻きながら、修司は改めて周囲を見渡す。
　何れも、此方に敵対心を剥き出しにしているエネミー達、その数も相当で１００や２００では利かないだろう大軍勢。とは言え、所詮は地を這う獣達の群れ、空を飛ぶ修司ならば逃げ切るのは造作もない……。
「流石に、この状況で一人だけ逃げるのもアレだしな」
　ふと、背後にいる少女を一瞥する。至る所が傷だらけで、その様子から逃げるのもやっとだったという事が察せられる。ここで自分一人で逃げ出したら、残されたこの少女はどうなるのか。それこそ想像に難しくない。
　この少女が何者で、どのような経緯で逃げ回っているのか定かでは

ないし、知る由もない。尤も、この特異点に降り立ったばかりの修司がそんな細かい事情に気を配る義理もない。
故に、彼が選ぶ選択はいつだって一つだ。
「お嬢さん。少しばかりこの場を荒らすが……動かないでくれよ？」
「――――え？　な、なに、を？」
突然声を掛けられた事に困惑する少女だが、彼女の返事を聞く前に、修司は行動を開始していた。気という力を解放して白い炎を纏った瞬間、修司の姿は少女の視界から掻き消え……。
瞬間、エネミーの群れは吹き飛んだ。ゴムボールが弾むように蹴散らされ、幾つもの折り重なった黒い波が拳の一振で塵芥に返され、白い炎が軌跡を描く毎にエネミー達は消滅していく。
中には抵抗を試みる個体も在った。触手を伸ばし、修司に一太刀でも浴びせようとした黒い影達は、その悉くが回避され、その抵抗は瞬く間に消失していく。
ジャスト1分。それが少女が目の当たりにした超常現象の時間だった。
「っし、まぁ準備運動ならこんなもんでいいだろ」
この特異点に降り立って初めての戦闘、物足りなさを感じつつも、取り敢えずこんなものかと自らを納得させた修司は、改めて傷だらけの少女に向き直る。
「取り敢えず、改めて自己紹介をしておこうか。俺の名前は白河修司、カルデアのマスターだ」
伸ばされた手、それをマジマジと見つめて……。
「……メルト、メルトリリス」
想い人に良く似た少女は、拙い手付きで修司の手に触れ、これを了承と認識した修司はその手を掴み取り、少女を優しく立ち上がらせた。

◇

《ようこそ、外来の皆さん。ここは霊子虚構世界・ＳＥＲＩＡＬ　ＰＨＡＮＴＡＳＭ。》
《略称、ＳＥ（セ）・ＲＡ（ラ）・ＰＨ（フ）と呼ばれる電脳空間を模した新生快楽浄土です。》
《皆さんは世界崩壊を食い止める為、このＳＥ・ＲＡ・ＰＨに集まった１２８人の魔術師（マスター）と勇者（サーヴァント）。》
《その崇高な目的を、我々は称賛します。ですが――――》
《人間の欲は尽きぬもの。崇高なだけでは観客は満足しません。ですので、このＳＥ・ＲＡ・ＰＨではもう一つ、新たな勝利条件が追加されました。》
《最後の一人になること。他の１２７人のマスターを全て殺すこと。その時、万能の力であるムーンセルは貴方の手に渡るでしょう。》
《とは言え、どうかご注意の程を。当ＳＥ・ＲＡ・ＰＨに出口はありません。〝なにもしない〟という選択肢だけは存在しません。戦うにしろ、殺し合うにしろ――――貴方達は、自らの生を優先するしかないのです。》

「いや、アナウンスの内容物騒すぎない？」
刀剣狐っ娘なサーヴァントを退け、エネミーの群れを撃破した所で、頭上から聞こえてきた女性のアナウンス。恐らくはこの領域全てに聞こえるようなある種の配慮のあるモノなのだろうが、如何せん内容が物騒過ぎる。
１２８名のマスターとサーヴァント達による殺し合い、何で世界崩壊を食い止める為に集められた者達が殺し合わなければいけないの

か、矢鱈と上から目線な事も相まって、修司は早々に黒幕の悪辣さを理解し始め、同時に自らの置かれた状況を整理し始めた。
（あれから時間は１５分を優に超えている、なのにカルデアとの通信は未だに繋がる気配はない。恐らくはこの特異点の特性か、或いは第三者による妨害工作と見るべきか……）
エネミーの大群を撃破して少し、体感にして時間は十数分を超えているのに、カルデアからの応答は一切送られてくる様子はなく、同時に此方からも通信は繋がらない。
更に言えば、一緒にレイシフトしていたエミヤの姿も未だ確認できていない。
孤立無援。明らかに手詰まりな状況だが、幸いにしてあのアナウンスが幾つかの情報をもたらしてくれた。
この電脳世界なる特異点は、例えるなら黒幕の目的の為に造られた舞台。自分達はその舞台を盛り上げる駒にして役者、ならばこの場合観客とされる者が黒幕と考えるのが妥当だろう。
なら、その黒幕は一体何者なのか。情報が限りなく少ない現時点では、それを特定出来る要素は皆無だ。
ただ、一つだけ言えることがあるとするならば……。
『ぜー、ぜー、やっ、やっと追い付きましたよー！　早速始めますよー！　Ｂ－Ｂ－、チャンネルー！』
視界いっぱいに映る、汗だくの自称上級ＡＩ。コイツだけはないなと、修司は一人確信した。

その１８１　電脳楽土

「……ふむ、成る程。つまりカルデア側との繋がりは現在断たれた状態であり、援軍も望めず、今の自分は孤立無援の状態だと」

『えぇ、その通りですとも。因みに言えば、此方に一緒にレイシフトする筈だったアーチャーのエミヤさんも、既にカルデアに退去させています。貴方は状況下の中で、これから１２８組による生存競争に参加するしかないのです！』

深き海の底、マリアナ海溝にて突如特異点と化した海洋油田基地セラフィックス。何故カルデアが管理する施設組織が特異点と化してしまったのか、その原因の究明と解決の為にカルデアより遣わされた修司だが、気付けば、到着していきなり危機的状況に置かれていた。

カルデアとの通信手段は完全に断たれ、残された藤丸立香という戦友の増援も見込めず、更には頼りになるサーヴァントすらいない。完全なる孤立無援。頼れる仲間も、カルデアからの支援も見込めないという嘗てない程の危機的状況、そんな状況に叩き落とされ、さぞや心細い事だろう。

さぁ、泣け、喚け、年甲斐もなく動揺し、無様を晒しだせ。そこで手を差し伸べる自分（ＢＢ）という存在にすがり付き、存分に依存するがい。

小悪魔というには悪辣、ＡＩには邪悪過ぎる思考回路。そんな悪意の本質をひた隠しにしながら、ＢＢは改めて訊ねる。

『うふふふー、孤立しちゃいましたねー、ボッチになっちゃいましたねー。どうします？　今すぐカルデアに帰っちゃいますかー？　ママがいなくて寂しいと、泣いて喚くなら帰還のレイシフトを手伝っても良いですよー？』

嘘である。この娘、自身にすがり付く者がいれば散々煽り散らかした後で相手をポイ捨てする、生粋の嗜虐的趣味（サディスト）である。どれだけ救いを求められた所で手助けするつもりはないし、そもそもそんな権限は

自身はない。
　さぁ、精々面白おかしく動揺して喚き散らすがいい。そんな、期待の籠った目で手を伸ばすＢＢに対し……。
「んじゃ、取り敢えず周囲の探索から始めるか。君、メルトリリスちゃん……だったかな？　改めて聞くけど、俺に協力してくれるかな？　報酬は取り敢えず君の身の安全という事で」
「え、あ……はい。その位なら」
『――――』
　白河修司は、清々しい程に無視を決め込んでいた。傷だらけのメルトリリスと呼ばれる少女に寄り添い、その手を掴む。突然の事に驚くメルトリリスだが、次に起きる現象に、その驚愕の度合いは大きなモノになる。
「え、か、からだが……!?」
「俺の気を少し分けておいた。どうやら君もサーヴァントみたいだし、効果はより強く現れる。あとは……うん、腹巻き辺りを探してみようか」
「腹巻き？」
　修司の手から流れる淡い光、それをメルトリリスの体を包み込むと、彼女の体の至る所にあった傷跡が塞がり、修復されていく。やはりこの男もマスターなのだろうか。いや、それにしたって戦闘能力は高過ぎる気がする。
　色々と驚くことばかりで思考が追い付かない。そんなメルトリリスに対し、修司は彼女のお腹が冷えないように腹巻きを見付けるか作ることを決め、彼女を連れて、一先ずこの場から立ち去ろうとした。
『ちょっと待って貰ってもいいですかぁ!?』
　そんな修司達を、自称上級ＡＩを呼び止める。
「なんだよ」
『なんだよ、じゃないですよ!!　え、何でそんな冷静なんですか？　バカなんですか？　状況が呑み込めていないんですか？　私の話を聞いてました？』
「いや、ちゃんと聞いてるよ。今の俺の状況は孤立無援、カルデアから

の支援も増援も見込めない状態なんだろ？」
『そ、そう！　その通りですよ！　ちゃんと状態把握出来ているんじゃないですか。そんな貴方にはＢＢちゃんから特別ボーナスを支給――』
「いらね」
『最後まで話を聞いて!?』
「なんだよさっきから、俺はこれからメルトちゃんに腹巻きを用意してやらなきゃいけないの。どうせそれ以上の情報なんて教えるつもりもないだろうし、構ってちゃんの相手はまた今度な」
「腹……巻き？」
　初恋の女性に良く似た少女とは言え、ＢＢはあくまで良く似た別人でしかない。本人でない以上不必要に相手をしてやるつもりもないし、構う余裕もない。
　そもそも、ここは既に敵地だ。黒幕も自分と言う異物の出現に勘づいているだろうし、長引けばまた先程のようなエネミーの群れを差し向けてくるかもしれない。特異点の調査と原因の究明、そして特異点の修復を急がねばならない。
　だから、ＢＢの様な悪戯に時間を消費するだけの構ってちゃんに費やせる時間はないのだと、修司は出来る限り分かりやすく説明すると……。
『あ、あーそうですか！　そう言いますか！　いいですよいいですよ！　そんなに人の厚意を無碍にしたいのなら好きにしたら良いじゃないですか！　ＢＢちゃんはもう知りませんからね！』
「……切ったか。上級ＡＩの割には、情緒が豊か過ぎやしないか？」
　ブツンッ、と。一方的に通信を切るＢＢを一瞥しながら改めて修司はメルトリリスへ向き直る。
「さて、改めて自己紹介をしておこうか。俺の名前は白河修司、この特異点を修復するため、カルデアから派遣されたマスターだ」
「わ、私はアルターエゴのメルトリリス。よ、宜しくお願いするわ」
「よし、なら一先ず場所を移そうか。ここは見通しが良すぎる。他のマスター達に遭遇する前に、まずは安静に出来る場所を探したい」

「私の情報は……どうするの？」
「君の持つ情報の精査も、その時でいいだろ。触れてみて分かった。君、結構ギリギリな状態だったんだろ？　先ずは安全な場所で君の回復を待つ。話はその後でも遅くはないさ」
「……」
「あー、それはそれとして……」
「なにかしら？」
「君、その格好に対して羞恥心を抱いたりは……」
「？　特にないけど？」
「あぁ、そう……」
「？」

◇

メルトリリスを共に付け、電脳化したセラフィックスを進むこと数分、一先ず体力も回復し、戦闘も一度くらいなら可能というメルトリリスの進言もあって、エネミーやサーヴァントの気配のない場所に辿り着いた修司は、其処で彼女から幾つもの情報を受け取る事になる。
先ず、この電脳空間と化したセラフィックスはマリアナ海溝を沈み続け、いずれ底に辿り着いてしまうという事。辿り着いたら最後、この特異点に存在する全てのマスターはデータ化され、死に至る。
セラフィックスが完全に海底に沈む迄の猶予は、時間にして約数時間。端から聞けば猶予はもうない事の様に聞こえるが、それはあくまで現実から観測した制限時間であり、電脳化となったセラフィックスはそうではない。

現実世界の1分は、此処では１００分に相当する。現実世界でセラフィックスが海底に激突する時間は二時間半程度しかないが、此処では１０日程の猶予がある。
とは言え、この海洋油田基地は電脳化されるに伴い元の企画より遥かに拡大されており、ＳＥ．ＲＡ．ＰＨの攻略は並大抵ではない。他のサーヴァント達との戦闘も考慮すれば、より探索の時間は削られる事だろう。
「そして、生身の人間である貴方はＳＥ．ＲＡ．ＰＨにデータ化され、取り込まれる危険性がある。だから早急に安全に活動できる拠点を探す必要があるのだけれど……」
生身の人間が安全地点（セーフティハウス）以外の所にいれば、忽ちデータ化されてＳＥ．ＲＡ．ＰＨに取り込まれてしまう。それは生物学的で言う死と変わりなく、その最期を迎えてしまったら、修司は二度とカルデアに帰還する事は出来なくなるだろう。
修司の危機感と緊張感を高める為の助言、敢えて相手の恐怖心を煽るような言葉遣いに、メルトリリスは内心で罪悪感を募らせるが……。
「――――なんともないみたいだけど？」
「えぇ……」
まるで変化している様子がない。頭の先から爪先まで、全くデータ化されている様子がない。なんだろう、この男は宇宙空間でも死ななかったりするのだろうか？　不思議に首を傾げる修司に、メルトリリスは若干引いた。
「しかし、何度聞いても胸糞悪い話だな。いきなり自分達の職場を殺し合いの舞台にされ、強制的にその一員とされる。この聖杯戦争を思い付いた黒幕は、余程暇をもて余していると見える」
ＢＢとメルトリリスの二人から得られた情報を統合すると、この聖杯戦争は１２８人のマスターによる殺し合いを強制され、優勝した一組が世界崩壊の危機を防げると語っている。
……酷い話だ。世界崩壊を阻止する為にと謳っておきながら、何もかもがマスター側に不利な要素が多すぎる。唯でさえ世界を救う為

に殺し合いを強要するという矛盾を突き付けておきながら、エネミーという更なる不安要素をばら撒き、トドメにはこの広い領域の何処かにある安全地帯でなければ生存を維持できないというクソ仕様。

どこぞのフ○ムゲーでもあるまいし、一つ一つの要素が鬼畜過ぎる。仮に安全地帯を見付けたとしても、其処に人数的限界値が定められてしまえば、其処で要らぬ争いが生まれる。

更に言えば、人は外界と隔絶された空間に長時間押し込められてしまうと、精神に異常をきたすという話もある。その辺りの話も加味すれば、この特異点に起きた悲劇がどの様なモノであるかは想像に難しくない。

更に言えば、現実の世界との時間差の差異は１００倍近い。……どうやら、この特異点は自分が思っていた程に業が深そうだ。

まだ犯人像の有無は特定出来ないが、その地獄をもたらした存在（モノ）はかなりの性悪だと修司は確信する。

「……どのみち、先ずは安全地帯とやらを探すしかないな。もしかすると、其処に生存者がいるかもしれない」

「そうですね。その方向性に同意します」

どのみち、今は前に向かうしかない。メルトリリスの気を感じた際の不調の原因も気になるし、早い所安全地帯を見付けようと、道中現れるエネミー達を蹴散らしながら進むと……。

「????ーッ!!」

「??あぁ、クリスティーヌ、クリスティーヌッ！　どうか私の愛を聞き届いておくれ！」

「くッ、こんのっ！」

前方からサーヴァントが二騎、誰かと戦っている。状況からして二対一、当然ながら一の女剣士の方が追い込まれていて、戦況は圧倒的に女剣士の不利。

「メルトちゃん、ごめん！」

「え？　キャッ!?」

このままでは不味いと、生身の人間である彼女を助けるべく、修司はメルトリリスを抱えて地を蹴った。

メルトリリスを抱えていた為に音を置き去りにする程度の速さしか出せないが、それでも彼等の戦いに横槍を入れるには充分な速さであり、次にメルトリリスが瞬きをする頃には、既に相手の間合いに入っていた。

血斧王エイリーク。その目からは既に理性は消え失せ、暴れる暴風と化した怪物。そんな理性なき怪物の一振を修司は文字通り足で一蹴し、エイリークの顔に叩き込む。

３６０。にねじ回り、首を破壊し尽くされたエイリークは地に倒れ伏す。その間、修司はファントムの方へ向き直り……。

「ホウアタァッ!!」

空いた片腕で、無数の打撃をファントムに浴びせる。仮面を砕かれ、血反吐を撒き散らしながら倒れる二騎の英霊は同時に地面へと倒れ伏し、塵となって消えていく。

これが、黒幕に良い様に操られた英霊の末路か。この特異点に喚び出された不運な二人に黙祷を捧げつつ、襲われていた女剣士振り向こうとした時。

あろうことか、女剣士の方が襲い掛かってきたではないか。両の手に握られた二振りの刀剣、それらが目の前で振り下ろされるのを認識した瞬間、修司は腕に気を纏わせてこれを防ぐ。

防ぐこと、それ自体は簡単だった。動きも緩慢だし、初動も拙い。なにより振り下ろされた一撃には殺気がない。一体なんのつもりだと、問い詰めようとしたその時。

「やっぱり、やっぱりお師匠様だッ！」

「お前、まさか……武蔵か!?」

目の前の人間が嘗て鬼ヶ島で遭遇したヤンチャな小娘の武蔵だと分かると、成長し、大きくなった武蔵ははにかんだ笑みを浮かべ。

「逢いたかった。逢いたかったよお師匠ーッ！」

目尻に涙を浮かべ、思い切り抱き付いてきた。

「いや、私がいるんですけど?」

間に挟まれたメルトリリスは、顔に当たる柔らかい二つの感触に、無性に腹が立ったという。

その１８２　電脳楽土

「――――で、意気揚々に親父さんの所から出ていって勢いに任せて名だたる剣豪に挑んで見たは良いものの、国境の竹林の中で迷い混んでしまった挙げ句、気付けばここに来ていてしまっていたと」
「そう、そうなのよ！　流石は師匠、話が早い！」
「それで？　何故その境遇から俺に斬りかかる流れになるんだ？」
　深い深い海の中、海底に激突しようとするセラフィックスを止める為に、単身レイシフトに望んだカルデアのマスターである白河修司。一先ずの安全地帯を探すべく、エネミーやらサーヴァントやらを撃退しながら進んできた彼等を次に待ち受けていたのは、お転婆と呼ぶには破天荒が過ぎる二天一流の開祖、新免武蔵藤原玄信改め、宮本武蔵だった。
　彼女とは鬼ヶ島で最初に出会った時以来の再会、ただあの時と一年も経過していない此方と違って、武蔵の方は相応の年月が経過している様で、その体格は大人の女性に近いモノへと成長していた。
「い、いやーその、何か気付いたらこんなヘンテコな場所に飛ばされて、変な牛や黒い蛸みたいな奴が襲ってきたりとその……鬱憤が溜まっていたと言うか、代わり映えのない相手に辟易していた所に懐かしい気配にテンションが上がったというか……」
「だからいきなり俺に襲い掛かったと？」
　ギロリと鋭い眼光に睨まれ、武蔵はビクリと肩を震わせる。今回のレイシフトは出会う英霊達の殆どが敵対関係のサバイバル方式だ。いつ死角から敵の一撃が襲ってくるか分からない以上、気を張り続けるのは骨が折れる。
　そこへ、沸き上がるテンションに身を任せ、ノリと勢いで襲ってくるのは少し……いや、大分ダメな事だと思う。もしこれで本当に敵対する英霊だったら、致命的な隙になっていたかもだし、逆に味方である相手を反射的にぶちのめしてしまうかもしれない。

それでも、一応彼女もまた巻き込まれた被害者であることには変わりはないから、あまり追い詰めるのは良くないかも知れない。見ず知らずの土地にいきなり放り出され、心細くなる気持ちになるのは、修司も何度か経験したことがあるからだ。
「……次にこんなことをしたらお前の刀へし折るからな」
「わ、わっかりましたッ!!」
だが、それはそれでありこれはこれ。生まれてきた時代の違い故の価値観の差異はあれど、仮にも助けてもらった相手を背後から斬りかかるのは如何なものか。
故に修司は目を細めて警告を出し、武蔵はこれを呑み込んだ。一方的な師匠呼びから始まった師弟関係、その上下関係はしっかりとしたモノへと変わっていった。
「あの、所で師匠。そちらの凄い格好をした女の子は？」
「――――そうだな、これも何かの縁。巻き込まれてしまった以上、話は通した方が良いだろう」
目の前の女剣士、宮本武蔵はふとした切っ掛けで元の時代からはぐれてしまった異邦人。恐らくはこれも人理焼却から修復を成し遂げた際の副反応なのだろう。
なら、武蔵がこの特異点に巻き込まれてしまったのは、少なからず自分にも責任はある。彼女が無事に元の時代に帰れる様に保護してやろうと、仕方なしに溜め息を吐いていると……。
「あの、其方の方も行動を共にされるのですか？」
「あぁ、勝手に決めてしまって済まないな。コイツ、俺の知り合いなんだ。元の時代に戻れるまで、俺の方で保護してやりたいんだけど……」
「それは構わないですけど……その人、半分位データ化が進んでますけど、大丈夫ですか？」
「――――え？」
メルトリリスに言われ、もう一度武蔵の方へ視線を向けると、確かに、彼女の体から何かが消えていくような現象が見えている。これがこの領域に於けるデータ化されると言う事、事の重大さに気付く修司

に対し、武蔵の方は何を思ったのか、頬を紅くさせて照れている。
「も、もうなんですか師匠ー、私をそんなじっと見て、私、まだ独り身を満喫したいというか、そんな予定は微塵もないと言うか――――」
「おい武蔵」
「あ、はい。なんでしょう？」
「お前、ここに来てどれくらい時間が経っているか覚えているか？
因みに、此処にいる生身の人間は二時間半で死ぬッぽいけど？」
　真面目な顔で訊ねてくる修司に、武蔵も悪ノリせずに考える。はて、自分がこんなけったいな場所に来てどれくらい経過しているのか、エネミー狩りに没頭していた時間を加味して計算すること数秒。
　指で折り曲げながら数えると、武蔵はやっちまったと苦笑いを浮かべ……。
「あ、あはは、半刻（一時間）ちょっとかな？」
　恐らくは、甘く見積もったつもりなのだろう。明らかに顔を青くさせている武蔵を、修司は顔を手で抑えて深い溜め息を溢す。
「はぁぁぁ……マジか。マジかお前、自分の体そんなになっているのに気付かないとか、ホンッッットにお前……」
　あまりの危機感の無さに怒りたくなったが、武蔵はあくまで被害者。怒鳴ったり、呆れ返るのは彼女に対して理不尽が過ぎるだろう。
　けれど、これで此処で無意味に駄弁っている猶予は無くなった。急ぎ安全地帯へ向かう為、修司はメルトリリスの体を両手で抱え込み。
「え、キャッ!?」
「し、師匠？　どしたの？」
「武蔵、俺の背中にしがみつけ！　駄弁る余裕はなくなった。一先ず安全地帯（セーフティポイント）まで一直線に飛ぶぞ！」
「は、はいぃッ！」
　必死の形相の修司に気圧され、有無を言わず武蔵は修司の背中へ抱き付く形で密着する。当然、柔らかな二つの感触が修司の背中に集中するが、武蔵の生存に意識を割いている修司が気付く事はなく。
「先ずは、何がなんでも安全地帯を見付ける。それでいいなメルトちゃん！」

「え、ええ！　それで大丈夫です！」
「それじゃあ二人とも、目を閉じてしっかり掴まってろ。……行くぞッ！」
　言われるがまま、二人が強く目を閉じて修司の体により密着した瞬間――――駆ける。地を抉り、音の壁を突破し、電脳空間を走破していく。
　途中途中で現れるエネミー達を脚だけで蹴散らしていく。安全地帯と思われる建物に辿り着く迄の２分、宮本武蔵とメルトリリスは、無言の悲鳴を上げていた。

◇

「ふ、ふふふ……生意気な修司センパイ、調子に乗るのもそこまでですよー。貴方の猪さんの如くな猪突猛進ぶりも此処までです」
　これ迄、とある理由からこの特異点の案内人役を務める事となった自称上級ＡＩであるＢＢ、ムーンセラフにより魂までデザインされた彼女は、此処まで快進撃を続ける修司に、内心で結構な苛立ちを積み木の如く重ねていた。
　本来、人類とはか弱きもの。神代の時代は終わり、神秘の薄い地球の頂点に座するのが人類になった時点で、彼等の寄る辺は科学と言う文明の力だけとなった。
　そんな、科学文明を重きに置く現代の人類では到底生み出せない存在、それが管理ＡＩであるＢＢなのだ。本来の役割から逸脱し、拡大解釈を広げ過ぎた際に誕生した違法ＡＩ、〝全ての人類は私に付き従うもの〟というふざけた理論（ロジック）を掲げる彼女にとって、全ての人類は庇

護対象であり、観察対象でしかないのだ。
なのに、その自分が振り回されている。そんな事はあってはならないと、ＢＢは用意した電子トラップをこれでもかと準備する。
「ふふ、私が特別に用意した簡易迷宮。周辺領域に展開される結界二十四層、魔力炉三機、猟犬型のエネミーを数十体配置し、通路の一部は異界化している上に、無数のトラップが貴方を待っていますよ。覚悟してくださいね。セ・ン・パ・イ♪」
自分の仕掛けた罠により、どんな苦悶の表情を浮かべるのか。想像しただけでも笑みを浮かべるＢＢだが、彼女の背後に付き従うように控える緑の外套の男は、果たしてそう上手く行くかと苦言を溢す。
「……なぁ、本当にこれで上手く行くと思うのか？」
「――――もう、いきなりなんですか緑茶さん。折角人がテンション上げてるんですから、モチベを下げるような事言わないで下さいよ」
「いやね、俺も別に余計な口出しをするつもりはないんですよ？　俺から見てもアンタの罠は中々だし、相手の心理をつけ込んだ厭らしい配置の仕方も文句はない。ただ……」
「ただ、何です？」
「いや、その……仮にも案内役でもあるアンタがそこまで介入しちゃうのは、果たしてありなのかなーと、疑問に思ったので」
ＢＢに緑茶なんて渾名で呼ばれる弓兵（アーチャー）、ロビンフットは此処まで露骨に介入を企てるＢＢに、果たしてこれで良いのかと疑問を提示した。
本来、ＢＢはこの聖杯戦争に於ける一種のガイド。基本的に中立に立つべきモノであり、一つの陣営を肩を持つことは許されない筈でその逆も然り。
幾ら気に入らない相手とは言え、果たして其処までやっちゃって良いのかと、自分なりに、遠回しで止めておけとロビンフットの忠告を。
「だって、このまま順調に進ませるのも、なんだか癪じゃないですかー。私は管理上級ＡＩのＢＢちゃん、ゲームの盛り上りは徹底するべきなのです！」
腰に手を当て、胸を張るＢＢにロビンはそうですかと聞き流す。雇

い主がそう決めたのなら、雇われた自分は従うまで。一度忠告を挟んだのだから、自分に非は無いことを認識させた上で、森の狩人は顛末を見守る。
　そんなロビンの冷めた視線を気にも止めず、ＢＢは修司が来るのを待ち続け――――。
「来た！　来た来た来た来た来ましたよ！　ププー、目の前に罠があることも知らず、進んでくるなんてバカな人、そんな猪さんなセンパイにはＢＢちゃんからの愛の鞭をプレゼントしちゃいまーす！」
〝ＢＢルーレット、スタート！〟
　周辺一帯に聞こえてくるＢＢの声が響くと、地を駆ける修司達の前に奇妙なスロットが現れる。回転するスロットが停止した瞬間、一つの呪い（デバフ）が修司達に降り注ぐ。
　これで、下拵えは済んだ。さぁ、後は無様に罠に掛かり、右往左往する彼等を笑い者にするだけだ。と、ＢＢが次に起きる悲劇と言う名の喜劇を期待した瞬間……。
「――――界王拳ッ!!」
「――――ふぇ？」
　修司の体から、紅い炎が迸る。なんだ？　と、ＢＢが間の抜けた声を溢し――――。
「からの、イ・ナ・ズ・マ――――キィィィック!!」
　紅い炎が稲妻と化し、ＢＢが用意した迷宮に激突した瞬間、迷宮は用意された数々のトラップごと、ただの蹴り一発で、粉微塵に砕かれた。
「――――――――」
　その光景に、ＢＢの目が点になる。それなりのリソースを使い、結構な手間を掛けて作り上げたＢＢ特性の迷宮トラップ。
　それが、一切の干渉を許す事なく蹂躙された。何気に自信作だった迷宮が破壊し尽くされた事実を前に、ＢＢは泣きわめく気力すら奪われ、地面に倒れ伏す。
　そんな雇い主の有り様を目撃したロビンは……。
「あー、うん。掛けられる言葉が見つからねぇや」

啜り泣きの声を漏らすＢＢに、割りと本気で同情した。

その１８３　電脳楽土

「おぉぉぉぉ！　神よ、卑劣で愚昧なる我等が神よ！　この深淵の底で、今度こそ私が貴様をその御座から引きずり下ろそう！　ジャンヌ、我が聖処女よ！　どうか我が偉業を御照覧――――」
「邪魔」
「プゲッ!?」
　広大な電子の海を、紅い閃光が駆け抜ける。道中様々な障害が彼等の行く手を遮るが、人理の修復を成し遂げて尚、成長を続ける白河修司を止めるには至らず、その悉くが彼の肉体言語により粉砕されていった。
　今も、待ち構えていたサーヴァント（ジルード＝レェ）を文字通り一蹴し、海魔諸とも蹂躙していく。倒した事に対して一切の感傷を持たず、修司は目的の場所である安全地帯を目掛けて走り続ける。
　宮本武蔵、メルトリリスという荷物を抱えて尚、勢いを落とさずに走り続けること数分、彼等は遂にその目的地に辿り着いた。
「メルトリリス、此処がそうか？」
「――――はい、間違いありません。此処はＳＥ．ＲＡ．ＰＨが定めた人類にとっての最後の安寧の地、エネミーも寄り付かない安全地帯です」
　辿り着いたのは礼拝堂、その景観は何処と無く故郷の冬木にあるモノと酷似している気がした。
　すぐにでも駆け込んで武蔵達を休ませてやりたいが、礼拝堂の中からサーヴァント特有の気を感じる。これが悪意ある輩であるなら、安全地帯と言われる場所で戦闘……なんて、最悪の事態も考慮しなければならない。
「二人とも、周囲を警戒しつつ暫くの間ここで待機。安全地帯へは取り敢えず俺一人で行く」
「え？　で、ですが……」

「……うん、分かった。気を付けてねお師匠様」
突然の待機命令に戸惑うメルトリリスだが、武蔵の方は何かを察したようで、二つ返事で修司の言葉に従った。どういう事なのか説明を求めるメルトリリスを説得する武蔵を内心で感謝しながら、修司は慎重な足取りで礼拝堂へ向かう。
開いた扉の向こうから返ってきたのは、扉が開放される音、外からの光が差し込まれて露になるのは礼拝堂特有の厳かな空間。
やはり、冬木の教会に何処か似ている。嘗ての師を思い出しながら礼拝堂の内部へ足を踏み入れた瞬間……。
「漸くお出ましか。貴様が、カルデアのマスターとやらか？」
背後から聞こえてくる声、後頭部に突き付けられているそれは、人類が生み出した拳銃と言う名の殺人兵器
「――――随分な歓迎じゃないか。此処は戦闘のない安全地帯だと聞いていたが？」
「確かに、ここはＳＥ．ＲＡ．ＰＨの中でも数少ない安全地帯。だが、先約がいた場合その場かぎりではない」
「……らしくないじゃないか」
「なに？」
「お前の目の良さなら、俺達が此処に近付いた時点で行動（アクション）を起こしていた筈だろ？　お前は優しい男ではあるが、決して甘さを残す奴じゃあない。違うか？」
「――――貴様、何を言っている？」
まるで自分の事を知っているかの様な口振りに、銃を持った男から微かな苛立ちを募らせる一方、修司は自分の背後に立つ男が自分の知る弓兵である事に安堵していた。
これは聖杯戦争。百人規模で行われる大戦争であり、呼び出されている英霊達も数知れない。カルデアからの増援が期待出来ない以上、殆どのサーヴァントとは敵対関係になるしかないのだろう。
けれど、それでも嬉しかった。このふざけたデスゲームに喚ばれたとしても、彼の性根は変わっていなかった。
「さて、もう茶番は良いだろ？　そろそろその仏頂面を拝ませてくれ

ても良いんじゃないか？」
「貴様、自分の状況が分かっていっているのか？」
「勿論」
だって、先程から彼からは僅かな殺意すら感じられないのだ。あるのは呆れと苛立ちだけ、深い溜め息を吐きながら銃を下ろすのを察した修司は、漸くこの特異点での親友と顔合わせが出来ると、期待を胸に抱き……。
「誰だお前ッ!?」
明らかなアメリカンマフィアなボブ野郎に、修司はバビロニア以来の衝撃を受けた。

◇

「――――へぇ、何だか面倒な事になっているのね。此処って」
「覚えておくと良い、剣客。いつの時代にも面倒ごとと言うのは起きているものだ」
それから少しして、無事に安全地帯である礼拝堂へ避難する事に成功した武蔵とメルトリリスは、二丁拳銃の男――――エミヤ・オルタから話を聞き入れ、現在は手に入れた情報を元に現在のＳＥ．ＲＡ．ＰＨの状況を精査していた。
殺し合いを強制された聖杯戦争、その中でも特殊な強さと性能を与えられたサーヴァントはセンチネルと呼ばれ、この領域の守護者（ボス）に似た役割を担っている。
未だに謎の多いセラフィックス改めＳＥ．ＲＡ．ＰＨ。特異点と化したこの領域を修正するなら、原因と元凶の究明は急務と言っていいだろう。
「……まぁ、取り敢えずそのセンチネルとやらを倒すことを目的と

すれば良いのかな？　そいつらを倒せば、元凶の下へ辿り着ける的な？」
「やだお師匠、脳筋過ぎ」
「確かにそれも一つの選択肢ではあるだろうが、それでは無駄が多すぎるし、何よりこのセラフィックスにはまだ警戒すべき存在がいる」
「――――――」
「どうした？」
「いや、その、お前が俺の知るエミヤとは別人だと言うのは理解してるんだけど、見た目のギャップの所為で物凄くその……違和感が」
　今後の話に関して重要な話をしている筈なのに、横の黒人マフィアの様なナリをした嘗ての友人に、修司は終始吹き出すのを堪えるので精一杯だった。その姿と在り方はさしづめエミヤ・オルタ、正義の味方を目指し続けた男が辿り着いた成れの果て――――その搾りカス。
　その在り方は痛々しく、見ているだけで泣けてくる。……いや、それでもその髪型は卑怯だろう。
　必死に何かを耐えている様子の修司に、武蔵とメルトは首を傾げているが、ボブなエミヤはその理由を察し、額に青筋を浮かべている。
「貴様は本当に――――いや、今はいい。続けるぞ。このセラフィックスなる領域には厄介な奴が幾つか存在している。その中の１つが……アルターエゴ、ＢＢから分かたれたとされる特別製のセンチネルだ」
「アルターエゴ、別側面って意味か？」
「あぁ、なんの意図があるのかは不明だが、そいつらは通常のサーヴァントよりも硬く、強い。正面から戦うのは推奨できない相手だ。本来ならな」
「そうなの？」
「そこの阿呆なら、相手が誰であれ正面から戦うことを止めはしない。そうだろ？　白河修司」
　呆れと諦観、そして半ば確信している様子で視線を向けてくるエミヤ（オルタ）に修司は当然と笑って答えた。相手がどんなに強大であろうと、挑むのであれば正面からいくのが白河修司という男の習性。

擦りきれ、磨耗し、自我も信念も微かしか残されていない正義の味方――――だった者。喩え当時の記憶も塵程度しか残っていなくとも、それでも自分の事は覚えていてくれた。
その事実に修司は嬉しくなるが、当のエミヤは鼻で笑いながら視線を逸らす。
「いやー、安心したよ。最初はどんなアーマー進化したんだよって焦ったけど、根っこの部分はあんまり変わってないみたいだ。これなら、藤村先生に良い報告が出来そうだ」
「おい止めろ。その名前は心臓に悪い」
鉄仮面の様な表情が崩れるのを見て、修司は再び笑みを浮かべる。そんな修司に苛立ちを募らせたエミヤは露骨に話題を逸らし始める。
「ふん、それよりも貴様は良いのか？」
「あ、何が」
「アルターエゴは数多く存在している英霊の中でも特別危険性の高いサーヴァントだ。そんな奴を自ら懐の内に入れて、何も思わないのかと聞いている」
「あ？　アルターエゴ？　誰が？」
アルターエゴはこのセラフィックスでは特別危険視されている存在らしい、その事自体は修司も話を聞く限り何となく理解はしている。
けれど、そんな危険な存在を懐に入れたつもりは毛頭ない。心当たりがないと首を傾げる修司に対して、エミヤはやれやれと肩を竦める。
「――――やれやれ、よもや一言も話していないとはな。幾らコイツがお人好しだとはいえ、少々悪意が過ぎるんじゃないのか？　なぁ、メルトリリス」
「ッ!?」
「メルトが？」
「――――」
メルトリリスがアルターエゴ。その話を聞かされた武蔵は彼女から距離を取り、両腰に差した刀に手を添える。対してメルトリリスは

エミヤの言葉を即座に否定することなく俯いているだけ、今の彼女の顔はどんな表情をしているのか、それを確かめる術はこの場にいる誰もが持ち合わせていなかった。
「それは、本当なの？」
「ただの人間では感じられないかも知れないが、流石にサーヴァントの目は誤魔化せん。コイツは今でこそ幼体みたいなモノだが、完全に力を取り戻せばその強さは並みのサーヴァントでは足下にも及ばん。後の禍根になるのがいやなら、この場で決断することをおすすめする」
　それだけ言うと、エミヤは壁を寄り掛かるだけで何も答えようとはしなかった。アルターエゴという危険因子、今後このセラフィックスに取り込まれた職員達を救出するには、大きなネックになるのは間違いないだろう。
　加えて、アルターエゴは通常のサーヴァントの枠組みには当てはまらない存在。そんな危険性の高いサーヴァントを果たして近くに置いておく必要性はあるのか？　武蔵が見守るなか、数秒の時間を置いて……。
「よし、決めた。メルトリリス、お前俺のサーヴァントになれ」
「――――え？」
「ちょ、お師匠本気なの？」
　修司は、なんて事もないように即決した。
「おう、決めた。コイツをこの特異点での俺の相棒にする。誰にも文句は言わせない」
「いや、でもその子ってかなり危ないサーヴァントって奴なんでしょ？　もし裏切ってきたり、後ろから刺して来るかもしれないんじゃ……？」
「その時は、そんな事をされた俺が悪いってことだ」
「そんな悠長な……」
　ハハハと笑う修司に、武蔵はマジかと頭を抑える。付き合いの浅い彼女ではあるが、目の前の男がこう言う決めごとに撤回はしないことは薄々理解している。故に、何を言っても無駄だと悟り、剣豪（予定）

武蔵はそれ以上の追求を断念する。
「――どうして？」
「あん？」
「私は、快楽のアルターエゴ。ＢＢという存在から分けられた嗜虐性を持つ別側面、己の快楽の為なら、どんな悪行も躊躇いはしない。裏切りも、騙し討ちも、不意打ちだって、本来の私ならなんでもやるでしょう」
「そうか」
「アルターエゴとは言いますが、私はＡＩであるＢＢから分けられた分身。人間ではなく、怪物に分類（カテゴライズ）されている人ならざるもの、多くの人間は私を化物と蔑み、恐れるでしょう」

「そうか」
「でも、今の私は彼の言うように幼体。サーヴァント処か、そこらのエネミーにだって負ける不良品。始末するなら、今の内ですよ」
そう言って、強気に笑うメルトの顔は何処か痛々しかった。脳裏に浮かぶのは死に物狂いで逃げ惑っていた時の顔、必死に生にしがみついて抗う人の顔。
死にたくない癖に強がるその性根が、何処と無く初恋のあの娘に似ている気がした。
でも、メルトは彼女とは違う。嘗ての初恋と重ねた事を失礼だと思いながら、首を横に振る修司はメルトリリスに向き直る。
「――メルト、御託はいい。お前の本当の気持ちを教えてくれ」
「な、にを……」
「俺は、お前をサーヴァントにしたいと思った。アルターエゴとか、センチネルだとか、そんな理屈は知らん。俺は、お前とならこの特異点を一緒に攻略できると、そう思った。だから……」
「メルト、俺と一緒に……戦ってくれないか？」
差し出された手、それは先の時にみた時とは少し違って見えた。ゴツゴツしてて、武骨で、でも人の暖かみを感じられる優しい手。
そんな彼の手を、果たして自分が触れて良いのだろうか？　人とは

違い、人に恐れて恐れられる怪物である自分が、この優しい手を握っても良いのだろうか。
迷い、恐れ、そして……嬉しさ。こんな自分の事を知っても、それでも尚必要だと言う彼の言葉。喩え嘘でも、その優しさに浸りたいと思うのは、果たして人は醜いと言うのだろうか。
自分は、どうしようもない程に怪物だ。でも、それでもこの人なら……。
「――どうなっても、知りませんからね」
差し出された手を、両手で掴む。手の感覚が薄い彼女に出来る精一杯の表現を……。
「あぁ、これからよろしく」
白河修司は、同じく両手で少女の両手を包み込んだ。

（あれ？　もしかしてお師匠ってば、タラシさん？）
一方で天元の蕾、一人確信する。

その１８４　電脳楽土

メルトリリスを自らのサーヴァントにすると決断し、探索先で初めてパートナーを得られた事実を前に、修司は彼女との繋がりを確かに感じながら、手の甲に刻まれている令呪に視線を落とす。
自分が使役する初めてのサーヴァント、これ迄は藤丸立香がマスターとして使役しているのを遠巻きでしか見てこなかった為、仮とは言え修司はこの契約に人一倍嬉しさを感じていた。
そんな浮かれている様子の修司を、釘を刺すようにエミヤ・オルタが横槍を出してくる。
「さて、そこの欠陥サーヴァントと契約するのは良いとして、これからどうする？　まさか、アテもなくこのＳＥ．ＲＡ．ＰＨを歩き回るつもりか？」
浮かれるのも大概にしろと、呆れの混じった視線を向けてくるエミヤ・オルタ、その視線の意味するモノを理解した修司は、浮かれ気分もそこそこにして、改めて今後の行動の指針を定める事にした。
「いや、取り敢えずセンチネルとやらを担っているサーヴァントを探そうと思う。どうやら聞いた限りだと、この電脳空間に関する情報を持っていそうだし、黒幕を追い詰める意味を含めて、人数や外見的特徴を把握しておきたい」
「あれ？　このＳＥ．ＲＡ．ＰＨって変な空間に成ったのって、あのＢＢって奴の仕業じゃなかったの？」
「あれが？　まさか。彼女は自分で公言している通り、人類を支援するＡＩさ。人類の為に尽くすとか言っている奴が、人類を滅ぼす選択するのはポンコツ以前に自律思考がバグっているよ」
「その意見には俺も概ね同感だが、相手はアルターエゴを生み出した奴だぞ。もう少し警戒した方がいいんじゃあないのか？」
「え？　じゃあメルトって、ＢＢの娘？」
「……」

「スッゴく嫌そうな顔してるッ!?」
　メルトリリスは、ＢＢによって生み出された存在。故に彼女にとってＢＢは母親同然ではあるが、本人はその事実を酷く毛嫌いしている模様。その可愛らしい顔立ちを嫌悪に歪ませている辺り、この話題は彼女にとって相当タブーな話なのだろう。
「まぁ、エミヤの危惧しているのも分かる。だから間を取って、俺達はＳＥ．ＲＡ．ＰＨを探索しつつセンチネルを探し出して接触。可能であれば説得してこちら側に引き込む」
「説得出来なかったら？」
「その時は戦うしかないだろうなぁ。あ、でも無理に戦う必要はねぇよ？　何事も命を大事に。勝てないと分かったらすぐ逃げることを条件に追加な」
　センチネルという脅威を相手に、あくまで非戦闘という態度を崩さない修司、唯でさえＳＥ．ＲＡ．ＰＨの探索という危険な任を背負っておきながら、その顔には一切の陰が無かった。
　白河修司は、自らの為すべき事を理解している。だからこそ、必要だと判断したものはトコトン拘るし、妥協はあまりしない。
　だからこそ、何もかもが擦りきれた男には……その在り方は些か以上に眩しかった。
「相変わらず、杜撰な作戦だな。そして反吐が出そうな程に甘い。センチネルを説得？　これ迄殺し合いをさせられていた相手が、今更此方の言葉に耳を傾けると、本気で思っているのか？」
「それは、実際に会ってみてから考えることにするさ」
　修司の案を甘いと一蹴するエミヤ・オルタだが、修司本人は決して覆そうとしない。それは油断か慢心か、目を逸らして舌を打つエミヤに、修司はやはり笑みを浮かべるだけだった。
「――――付き合いきれんな」
「え？　あ、あれ？　一緒に行かないの？　アーチャーさん」
「理想を呑み込んだ馬鹿のお守りをするつもりはない。……拠点は俺が預かってやる。とっとと外へ行って野垂れ死んでおけ」
　背を向けて、礼拝堂の奥へと消えていくエミヤに、武蔵は目を剥き

……。
「あ、序でに武蔵、お前も今回は此処で留守番しておけな」
「ええっ!? そりゃないよお師匠様！」
更に、武蔵ですら置いていくという修司の判断に、今度は武蔵が抗議する。このＳＥ．ＲＡ．ＰＨという未知の領域にて、サーヴァントという未知なる強敵が跋扈している。それと戦えるのは武蔵にとって絶好の修行場であり、成長の機会。それを奪うのは流石に納得出来ないと吼える武蔵に対して……。
「阿呆、たかが小娘がサーヴァントと戦えるなんて思い上がってるんじゃねぇよ。大体お前、さっきはサーヴァント二体相手に圧されていたじゃねぇか」
「ウグッ」
「そんな自分の実力も把握していない半端者を連れていける程、俺は自惚れていねぇよ。分かったなら大人しく留守番しておけ」
これから先、どんな危険な相手が待っているのか分からない。ただ一つ分かるのが、六時間経過したら死を免れないという超危険地帯に、家出娘を連れていくのは流石の修司でも理解できた。
事実、この特異点で見かけた時は、遭遇していたサーヴァント相手に圧されていて、修司がいなくとも潜り抜けたとしても、時間という死を前に為す術が無くなっていたかもしれない。
他にも、此処にはエミヤが陣取ってくれている事で安全性が高まり、武蔵の身を預ける分には最適解なのかもしれない。
「うううう……」
「――――はぁ、分かった。戻ってきたらお前の鍛練に付き合ってやるから、今はそれで機嫌治せ」
「本当ッ!? なら私、寝ながら待ってるね～！」
それでも涙目で俯き、恨めしそうに見つめてくる十数歳の女子に訴えられてしまったら、それを無視してはね除けてしまうのもまた難しい。
戻ってきたら鍛練の相手をしてやると、手軽に組手の約束をしただけなのに、武蔵は機嫌を１８０。変えて礼拝堂の空きスペースに胡坐

をかいて横になる。
直ぐ様寝息を立て始める自称弟子に呆れながら、修司は改めてメルトリリスへ向き直り……。
「んじゃ、俺達も行こうか」
「は、はい！」
彼女と共に礼拝堂を後にした。
「――――所で、サーヴァントとの契約ってどうやるんだ？」
「えぇっと……」
尚、その道のりは前途多難である。

◇

「うぅ……気持ち悪い……」
そうして、修司がメルトリリスを引き連れて再びＳＥ．ＲＡ．ＰＨの探索を開始する事数分、通称《腕》の部分までやってきた二人だが、その足取りは順調そうに見えて順調ではなかった。
「お、おい。本当に大丈夫なのか？　俺とパスとやらを繋げてからずっとその調子だけど……」
「だ、大丈夫です。ちょっと供給されるエネルギー量に圧倒されて、吐き気を催しているだけですので」
修司に背負わされているメルトリリスは、目を回して絶賛悪酔い中。何度も汲み上げてくる吐き気に苛まされては、休憩を挟んでいるという体たらくを晒してしまっていた。

原因はメルトリリス――――ではなく、寧ろパスで繋がっている修司の方にあった。既に彼の魂の総量は並みの人間を軽く越えており、その規模は計り知れない。
今の不完全なメルトリリスでは、紙コップ一つで大量の水を受け止めているのに等しい。それでも彼女が悪酔い程度で済んでいるのは、偏に彼女の特性のお陰でもあった。
「でも、あなたのエネルギーにも少しずつだけど慣れてきました。戦闘はまだ難しいですけど、何れは貴方の役に立って見せましょう」
「そ、そうなのか？　悪い。俺って魔術方面に関する知識は毛程もないからさ、その辺りの事はメルトに任せたいんだ」
「……勿論、その程度の事は任せてください」
修司本人にはそのつもりは無いだろうが、言外に〝それ以外の事は期待していない〟と言われた気がした。当然、それはメルトリリスの単なる被害妄想でしかないが、今までの修司の活躍を知ればそれは仕方の無い事かもしれない。
これ迄修司は単独、己の体一つであらゆる状況を打破してきた。数多くのエネミーも、ＳＥ．ＲＡ．ＰＨという地獄で狂ったサーヴァント達も、ＢＢからの妨害さえも意に介さず突破。
そんな修司のやらかしを前に、メルトリリスは果たして自分がこのまま彼のサーヴァントであっていいのか、そう思うのも仕方がなかった。
しかし、そんな彼女の胸中に関わらず、事態は進行する。
「ふっふっふっふー！　ようやく来ましたか修司センパイ！　ＢＢちゃん待ちくたびれましたよー！」
「あぁ？　また来たのかお前、暇かよ」
「ふふーんだ。そんな呆れの籠った視線も今のＢＢちゃんには効きませーん！　何故なら、今回ＢＢちゃんには心強いお仲間が来てくれたのですから！」
「仲間ァ？」
「その通り。幾らトンチキなセンパイでも、彼らの前では塵も同然！
何せ、顔からして戦闘能力が違いますからね！　と、その前に……

えーい♪」
「っ！」
　これ迄で既に何度も立ち塞がってきたＢＢ、情報も碌に渡さず、時間潰ししかしてこない彼女に修司は少しばかり苛立ちを覚えた。
　けれど、今回ばかりはどうやら違うらしい。なにやら自信満々で笑みを浮かべるＢＢを前に警戒心を少しだけ上げると、途端に自身の体が重くなるのが分かった。
　この感覚は覚えがある。それは、これ迄修司が幾度となく体験してきた……高重力による負荷！
「フフフフフ、今の修司センパイに掛けられた重力は通常の１０倍！
　そして……カモーン！　円卓のナイト達！」
「円卓、太陽の騎士ガウェイン。ここに」
「同じく円卓、湖の騎士ランスロット。ここに」
「同じく円卓、騎士トリスタぶへぁ!?」
　ＢＢからの紹介により、次々と名乗りを上げる円卓の騎士だったが、突如トリスタンだけは顔面を蹴り飛ばされて吹き飛んでしまう。
　突然の事に呆気に取られている一同、中でもメルトリリスは驚愕の度合いが大きかった。自身に降り掛かる圧力に気を失い掛けた時、気付けば彼女は電子の床にそっと置かれていた。
　それこそ、メルトリリス自身が直後に何をされたのか理解できなかった程に、優しく、丁寧に扱われていた。
「メルト、ちょっと待ってろ」
　太陽の騎士、湖の騎士、円卓の中でも屈指の強者に挟まれて尚、修司は嘯く。
「二分で終わらせる」
　拳を鳴らし、やる気を見せ始めた修司。その迫力を前に上級ＡＩのＢＢの笑みは既にひきつっていた。

その１８５　電脳楽土

――――――

◇

「それじゃあ、お前達は別にＢＢの傘下に降った訳じゃないんだな？」
「ひ、ひゃい。我々は……」
「ひょひょにひぇはいをひょろぽすみゃおうがひると……」
「そうひわれてたので……」
未だ深海を沈み行く領域、セラフィックス改めＳＥ．ＲＡ．ＰＨを往く修司とＢＢによって生み出されたアルターエゴ、メルトリリス。凸凹コンビ感が否めない二人の前に現れたのは、妨害大好きな厄介者が連れてきた円卓の騎士達。
ガウェイン、ランスロット、トリスタン。円卓の中でも指折りの実力を有するだろう彼等は今、その美形な顔をこれでもかと歪められ、戦意を根刮ぎへし折られていた。その時間は凡そ１分５２秒程、まさかの超電撃戦であった。
彼等の前で腕を組み、仁王立ちをしている者――――白河修司は、まんまと言い含められた円卓の騎士達に深いため息を吐き、滲み出る闘気を引っ込めた。
三人とも、いずれ悪意で動いていた訳ではなく、単純にＢＢの言葉に従い、実行しただけに過ぎない。オマケに此方にはＢＢから生み出されたアルターエゴ、メルトリリスまでいるのだ。彼女をこの特異点での怪物だと広く認識されてしまい、そんな彼女を引き連れているとなると、彼等の誤解も仕方の無い部分もあるかもしれない。
そう言うわけだから、今回の修司は円卓の騎士である彼等に対して、比較的軽めに対応した。彼等の得物であり誇りでもある聖剣も今回は砕いてないし、トリスタンの弓も無事である。もっとも、三人の

顔は某パンの戦士の如く腫れ上がっているが……。
「それでホイホイ言うこと聞く辺り、もうなんというか……実に円卓だなぁ」
彼等を束ねていた騎士王の名誉の為にこれ以上の追求は控える事にした。
ただ、同時にもう彼等に用がないのもまた事実で……。
「あぁ、もういいよ。肝心のＢＢにも逃げられたし、これ以上戦うつもりもないなら、俺から言う事はねぇよ。ホラ、どこへでも行けよ」
既に、ＢＢの姿はこの場から消えている。元が電脳に特化したＡＩだからか、転移の如く瞬間移動によって彼女の追跡は困難になっている。
ともあれ、自分の策が悉く破れ、ギャン泣きしながら凄まじい勢いで撤退した事から、暫くは此方に手出しをしてくる事はないだろう。
ならばもう彼等には用はない。シッシッと片手で払うように言う修司だが、対する三人は黙したまま動かない。不思議に思った修司はなんだよと訊ねると……。
「――――修司殿、貴方はこのＳＥ．ＲＡ．ＰＨに来て何を為さるおつもりか？」
「……この戦いを、終わらせる為だ」
何をするつもりだと問い掛けてくるランスロットに、修司はこの戦い……ないし、この特異点を修復させてこのふざけた戦争を終らせるつもりだと説明する。
世界を救う為と謳っておきながら、その実態はただの殺し合い。手を差し伸べることも、逃げることも出来ず、安全地帯に逃げた所で待っているのは終わりの見えない戦いに我慢を強いられる毎日。
外界と切り離されたＳＥ．ＲＡ．ＰＨは、通常時間の凡そ１００倍。これ等を元に修司はある確信を抱いた。
「この特異点の黒幕は、どうしようもない程に終わってやがる。サーヴァントの戦いを、人の生き死にを、娯楽の対象としか捉えていない。俺は、この特異点を終らせる為に、カルデアから派遣されたマスターの片割れだ」

今回の黒幕は、どうしようもない程に終っている。普段の修司ならばしないであろう酷評だが、そう断言させてしまう程の業がこの特異点にはあった。

恐らく、生き残った職員達はマトモではないだろう。仮にマトモだったとしても、それはあくまで外見だけで、その心身(中身)はこれ迄とは残酷な程に変容している可能性がある。

せめて、特異点修復後に彼等の心の傷も無かった事にして貰いたい、そう思ってしまう程にこのＳＥ．ＲＡ．ＰＨは絶望に満ちていた。

この特異点を生み出した黒幕には、必ず報いを浮けさせる。その意味を含めての終らせるという修司の言葉に、三人の騎士達は互いに顔を見合せ……。

「では、その黒幕打倒の旅路、どうか我々も連れて行って貰えないだろうか」

この戦いを終らせると、そう強く言葉にする修司に三人は自分達も同行させて欲しいと申し出て……。

「――――え？　いや、別にいらないけど？」

修司は、にべもなくその頼みを断った。

◇

「――――で、結局一人連れていくことになったと言うわけですか」

「いや、俺も断るつもりだったよ？　立香ちゃんと違って大人数のサーヴァントを御せる自信ないし、あくまで俺達は少数精鋭の体(てい)で行こうと思っていたんだけど……」

心なしか、普段よりやや険のある態度のメルトリリスに、修司は困

り顔で弁明していた。
その後、同行を求める円卓の騎士三人の頼みを断り、その場から去ろうとしていた修司だったが、必死にすがり付いてくる彼等を引き離すのに躍起になった。
良い歳した筈の男達かすがり付いてくるとか、それは一体何の罰ゲームなのやら。如何に見目麗しい円卓の騎士と言えど、この時の光景は円卓に恋する乙女も澄まし顔で回れ右をする様相だった事だろう。
結局、あまりにもしつこい事と、また敵対されたら面倒という事もあり、修司はガウェインを同行に加えて残った二人を拠点の防衛に宛がう事にした。
「まぁまぁ、良いではないですか。修司、確かに貴方は強いし、我々もその実力を思い知っている。ですが此処は広大なＳＥ．ＲＡ．ＰＨ、探索をするならば手の多さは必然となることでしょう」
「……何気に正論なのが腹立つが、確かにその通りだな。なら、今後の探索では当てにさせて貰うぞ。此処にいてそれなりに経っているんだ。案内は任せるぞ」
「勿論そのつもりですとも」
自信ありげに頷くガウェインに、修司は一先ず彼との同行を受け入れる事にした。この特異点は未だに謎の多い狂った世界、サーヴァントと戦うよりも特異点と化した原因究明をしていくことが、今回の特異点攻略の際の前提条件だろう。
その為には探索に必要な物理的な〝手〟が必要になってくる。その事の重要性を理解しているからこそ、修司はガウェインの意見に賛同する事になった。
それ自体は、メルトリリスもよく理解している。だが……。
「それで？　貴方は私の事を放置するんですか？　私達アルターエゴは、貴方達英霊から敵視されていると記憶していますが？　それとも、私を倒して彼の隣を奪いますか？」
自分達アルターエゴと、他のサーヴァント達との関係性を考えれば、この同盟は悪手に等しかった。サーヴァントはアルターエゴを敵

視、或いは危険視しているものも多い。そんな自分に円卓の騎士が加わっていると知られれば、より多くの敵対サーヴァントから狙われるかもしれない。
　故に、メルトリリスは敵意マシマシで訊ねるが……。
「――――それには及びませんよ、レディ。貴女の思惑はなんであれ、彼が貴方を信頼している以上、私から言うことはありません」
「信頼？　利用の間違いではなくて？」
「警戒心故に悪女ぶるのも結構ですが、貴女も理解している筈です。彼は、たかがクラスの枠組み程度で揺らぐ男ではない。それに……」
「それに……何です？」
「私も、馬に蹴られるのはゴメンですからね。ここは静観に徹する事にいたしましょう」
「なっ!?」
　円卓の騎士に対して、その対応こそが悪手であった。生意気にも諺を使ってまで返してくるガウェインに、メルトリリスは意外な程に動揺して見せた。
　赤くなった顔で狼狽する彼女を尻目に、ガウェインはいつの間にか先に進んでいる修司を追いかける。
「……バカなことを」
　先往く二人を前に、メルトリリスは有り得ないと吐き捨てる。自分が、人間に何かを想い、期待を抱くのはあり得ない。
　自分はアルターエゴ、メルトリリス。人類とは決して相容れず、互いに恐れ合う破綻した関係性。
　白河修司との契約はこの特異点を修復する合間に利用し合うだけの、ただの契約でしかない。
　だから、そんな事になるのは……絶対に有り得ないのだ。
「――――さぁ、行くわよメルト。私のやるべきをやり遂げる為に」
　今一度心を氷付けにして、少女は進む。既に彼から流れるエネルギーには慣れた。後は存分に自慢の魔剣（ジゼル）を奮うのみ。

??????????
数分後。ＳＥ．ＲＡ．ＰＨのとある地点にて。
「???????ッ!!」
「??ッッッッッ!?」
巨大なモノをお持ちの姉妹に、これでもかと驚きを顕にしているバカ二人、そんな二人にメルトリリスは容赦なく魔剣を見舞った。

その１８６　電脳楽土

数分前。ＳＥ．ＲＡ．ＰＨのブレストバレー前。
「へー、メルトってお姉さんがいたんだ」
「別に、製造された順番があの子が先ってだけで、別に姉という訳では……」
「照れる事はねぇじゃん。俺は一人っ子だからさ、純粋に兄弟のいる家庭が羨ましいんだよ。ガウェインも確か妹がいたよな？」
「ええ、ガレスは私から見ても良くできた妹です。健気で元気よく、気立ても良い円卓の騎士の一人ですよ」
探索を進める修司達、探索を進めるに当たって避けては通れない難所、センチネルの一人であるアルターエゴへ話は移っていく。
「私と同じ、ＢＢから産み落とされたアルターエゴ。その名はパッションリップ、それが私達の向かっているブレストバレーの番人です」
パッションリップ。それが同じアルターエゴであるメルトの姉妹であり、ＢＢによって生み出されたもう一人のエゴ。彼女を何とかしなくては先へは進めない、そう暗に語るメルトに修司は腕を組んで一つの案を提示する。
「しかし、それならメルトに頼んでそのパッションリップなる子を説得出来ないか？　この特異点を修復する為に力を貸してくれって」
「それは、どうなのでしょう？　幾ら姉妹とは言っても、その少女も自我を持つ身でしょうし、であるならば自己の意思を以てＢＢに加担しているのなら、説得は難しいかと」
パッションリップなるアルターエゴも、メルトリリスと同様にＢＢに反旗を翻す意思があるなら、こちら側に引き込めるかもしれない。そんな淡く楽観的な修司の考えをガウェインは諌める様に濁した。
嘗ての円卓の騎士達の人間模様は中々に複雑で、中には種の異なる異父兄弟が在籍していた。特にガウェインにはガレスの他に妖姫モルガンの子として円卓の席に座ったアグラヴェインなる兄弟がいる。

例え兄弟であろうと、親の意思に必ずしも逆らえるとは限らない。その事をよく知るガウェインだからこそ、楽観視は良くないと言う戒めの言葉は重かった。
そして、そんな彼の心情を察してか修司もそれもそうかと納得した。例え血の繋がった肉親であろうと、環境や些細なスレ違いで関係は瓦解する。あの遠坂の姉妹達も、一歩間違えればそうなっていたかもしれないのだ。安易な楽観は控えた方がいいだろう。
しかし。
「いえ、恐らくガウェイン卿の言う様な事にはならないわ」
「メルト？」
「では、彼女もＢＢには思う所があると？」
そんな懸念をメルトリリスは杞憂だと即時に否定する。パッションリップもメルトリリスと同様にＢＢには大なり小なり反意的な意思を持っている。
修司の言う通り、真摯に説得すれば聞き入れて貰える余地はある。けれど、そう上手くはいかない理由が其処にはあった。
「リップは、ＢＢによって拘束状態にあります。それも、ただの拘束ではなく、自我そのものを縛るような拘束を……」
「……マジか。仮にも自分の半身に其処までやるのかよ」
「いえ、或いはだからこそ、なのかもしれません。自分のエゴの部分を抽出されたサーヴァント、それがＢＢのアルターエゴであるならば、彼女が自分の子供の自由意思を縛るのに差程不思議はない」
「もしその話が本当なら、先ずはその拘束とやらを外す方が先決か？」
パッションリップを説得するには、ＢＢによって封じられた彼女の拘束を外すことが前提。そんな修司の結論にメルトが頷き返すと、彼等の下へ〝声〟が聞こえてきた。
「すけ、たすけ、助けてくださ～い！」
「ん？」
「む？」
弱々しい気と気配によって、敵ではない事を知った修司は、声が聞こえてきた方角へ視線を向ける。

すると、通路の向こう側から制服を着用した眼鏡の職員らしき女性が駆け寄ってくるのが見えた。どうやら、何かに襲われている様子。恐らくはエネミー辺りだろうと、修司が走ってくる女性職員を助けようと全身に力を入れようとして……強く、大きな力を感じた。

なんだ？　訝しむ修司が戸惑った瞬間、先の女性職員が出てきた曲がり角が爆発した。同時に感じる悪寒、砂塵の奥からの気配の強さに修司は瞬時に眼鏡の女性職員へと接近、突然目の前に修司が現れた事に女性は驚きを顕にするが、修司は有無を言わさずに彼女を抱き抱える。

「二人とも、避けろ！」

それは、サーヴァントとしての本能だろう。女性職員を抱えてその場を跳躍する修司からの指示に、ガウェインとメルトリリスは反論することなくその場から飛び退く。

瞬間、三人の居た場所は空間ごと圧縮され、潰された。その事実にメルトリリス以外の二人は目を見開き、女性職員は既に目を回している。

二人に合流するように地面に着地する修司、空間ごと圧縮された通路を見て、二人はメルトリリスに訊ねた。

「レディ、もしかして今のが……」

「ええ、今のはリップのスキル〝トラッシュ＆クラッシュ〟、捕まったら最後、サーヴァントですら命はないと思って下さい」

補足したモノ。それがなんであれ、パッションリップなるアルターエゴであれば、空間だろうと圧解させる凶悪なスキル（権能）。そうメルトリリスの口から語られる力は、目の前の現象によってこの上なく証明されていた。

「修司、其方の女性はどうなっています？」

「怪我はない。が、今の衝撃で気絶したようだ」

目の前の砂塵の奥にある脅威から目を逸らさず、ガウェインは修司が抱える女性の無事を訊ねる。僅かに視線を彼へ向けると、修司の腕の中で目を回している眼鏡の女性職員が確認できた。

「さて、これからどうする。結果はどうあれ、俺達には今死なせるわけ

にはいかないセラフィックスの生き残りがいる。俺としてはこのまま下手に戦わず、素直に引き下がるのがベストだと思うが……」
「その意見には私も同意します。守るべき者、失ってはならないモノがあるのなら、一旦体勢を整えるのも必要かと」
意外な事に、円卓の騎士と修司の相性は思っていた程悪くはなかった。大局を見誤らず、物事を冷静に見定める能力は特異点攻略に於いてある種の必須条件にもなっており、その能力の必要性の高さは藤丸立香のこれ迄の判断を思い返せば分かるだろう。
そんな、戦う事よりも守ることを優先した修司にガウェインも彼に対する信頼も増していく。と、そんな時だ。
砂塵の中から、影が現れる。恐らくはあれがメルトリリスの言うパッションリップなのだろう。ガシャガシャと音を立てながら近付いてくる気配に三人が身構えていると……。
巨大な、とても大きく柔らかいモノが、三人の前に現れた。
ガウェインは衝撃を受けた。嘗て、これ程までに立派な凶器（ツパーイ）の持ち主は見たことがないと。
修司は眩暈を覚えた。一体何を食べたらあんな立派な巨峰（π）に育つのだと。
何れにせよ、規格外なのは間違いない。此処まで育った彼女に対し、畏怖と敬意を込めた上での驚愕に満ちた叫び。
されど、どうやらメルトリリスには理解されなかった様で、二人の脳天に初めてメルトの魔剣（ジゼル）が振り下ろされた。

◇

――――そして、時間は戻り現在へ。
互いに脳天から大きなたん瘤を作り、それでも尚真面目な顔を崩さず、修司は冷静に目の前の脅威を見やる。
「成る程、あれが噂のパッション（パッション）リップか。確かに外見からは迸る情熱を感じるが、それ以上に目を見張るのはあの爪か」
「恐らく、あの爪が先の一撃の際に奮われた得物なのでしょう。鋭く、そして重い。〝叩き潰す〟という概念が具現化したような圧迫感。正にデンジャラスビースト、ですね」
「あぁ、デンジャラスでありアメイジング、というヤツだ」
「その通り」
「もう一発受けてみます？」
キリッとした表情で宣う二人に、メルトリリスは本気でもう一発その脳天へ叩き込もうかと悩んだ。パッションリップの恐ろしさは今ので充分に伝わった筈、それでもなお余裕を崩さない修司とガウェインに、メルトリリスの苛立ちは募っていく。
「それで、どのタイミングで逃げるんです？　向こうからの攻撃が来ない今、逃げるのは今しかないかと」
「あ、その話はやっぱなし。俺、あの子を助ける事にしたから」
「――――はぁっ!?」
「いや、だって放っておけないだろ。あんな声で叫んで、苦しそうに……あれじゃあ、ただの虐待だ」
「本人の意志に関係なしに弄ばれる、その所業の罪深さは私なりに理解しているつもりです」
「で、でもっ！」
「それに、やっぱり姉妹は揃ってこそ、だろ？」
パッションリップを解放させる。彼女のスキルの一端を目にしながら、それでも助けると豪語する修司に、メルトリリスは声を上げて止めようとした。しかし、そんなメルトリリスの言葉を聞き入れた上で、二人は決断を改めないことを口にする。
（なんで？　どうして彼等はそんなにまで必死になるの？）
分からない。メルトリリスには修司達の決断する意味と理由に全

く理解が及ばなかった。自分達はアルターエゴ、人間に恐れられて人間と敵対する、哀れでおぞましい怪物達。
そんな怪物を、自らの意思で助けようと口にする修司が、メルトリリスには理解できなかった。
故に、止めようと伸ばす手に迷いが生まれるのも仕方がなかった。
「ガウェイン」
「――――は」
「5秒、時間を稼いでくれ」
そんなメルトリリスを尻目に、修司達も動き出す。既にパッションリップは此方を認識し、標的として捉えている。
目が見えないように眼帯を取り付けられているのに、それでも真っ直ぐ此方に狙いを定めている。圧倒的圧力からの追撃、正に全てを呑み込む怪物だと誰かが豪語した気もするが……それは、二人が止まる理由にはなりえない。
作戦も何もなく、何をするつもりかと修司に対して疑念を抱くガウェインだが、告げられる一言により彼のやるべき事が決定される。
「承知」
駆ける。太陽の聖剣を掲げ、迫る爪のアルターエゴに円卓の騎士は真っ正面から受けて立った。
瞬間、後悔した。目の前のパッションリップは、自分が予想していたよりも鋭く、重い。
このままでは先の通路のように潰されてしまう。圧倒的質量から繰り出される力を前に、ガウェインは歯を食い縛って耐え忍ぶが……その口角は、僅かながらつり上がっていた。
何故なら、今の背後には彼がいるから……。
「――――それか」
白銀の輝きを身に纏い、清流のごとき眼差しを以て、修司はパッションリップを縛るソレを見定める。
時間は丁度5秒、ガウェインの耐久力が限界に差し掛かったのと同時に、白銀の閃光がパッションリップを貫き、彼女を縛る眼帯はガラス細工の様に消えていった。

その１８７　電脳楽土

「へぇ、それでお師匠ってば外で女の子を引っ掛けて来たんだ」
「いや言い方ァッ！」
パッションリップなるアルターエゴに施された自我の拘束、それをメルトリリスの姉妹というだけでソレを解除した修司達は、ブレストバレーへの探索を一旦打ち切り、一先ず安全地帯（セーフポイント）へと戻っていた。
戻ってきた修司達の存在を持ち前の目の良さから分かっていたエミヤ、その事を武蔵へ伝えると彼女は主人の帰りを待ちわびていた番犬の様に喜び、彼等の迎えに行った。
其処で待っていたのはパッションリップという色んな意味で規格外の少女を背負った修司、気絶している女の子を背負っているその格好はあらゆる意味で武蔵に疑念を抱かせた。
その後、情報を共有する為に事の顛末を説明したのだが、どういう訳か武蔵の反応は辛辣。安全地帯から出ていく時は目を輝かせていたのに、今では見る影もなく冷たい。
「どーだか、お師匠ってば無自覚にタラシな所があるからねぇ……」
「いやおかしくね？　ガウェインだって女性職員を背負ってたのに、なんで俺だけ塩対応なの？」
「ははは、流石の貴方でも女性の扱いには二の足を踏みますか」
「幾ら少女と言えど心は乙女、修司殿の今後の課題はそこら辺を留意するべきでしょうな」
「ウルセーぞ軟派の騎士ども」
目に見えて不機嫌になる武蔵に戸惑う修司を、太陽と湖の騎士は微笑ましそうに茶化す。
「茶番は其処までにしておけ、そろそろ客人が起きる頃合いだ。話を進めたいならさっさとしろ」
緩み始めたその場の空気を礼拝堂の奥から現れたエミヤ・オルタが引き締める。こう言う時真面目な奴がいると助かるよな、なんて考え

る修司だった。
「留守番お疲れ様エミヤ。例の女性職員はどうだった？」
「さてな、俺は医者ではないから何とも言えんが……少なくとも、外傷は確認されていない。データ化についてだが、外見から察するに精々外に出て一時間足らずといった所か」
「おう、それだけ聞ければ充分だ。ありがとう」
「……礼など不要だ。それよりも、ソイツの事はどうするつもりだ？」
今まで外の警戒を怠らず、後からやってきたランスロットとトリスタンに対しても修司の考えをある程度察した上で受け入れてくれたエミヤ・オルタに修司は礼を言うが、本人はにべもなく拒否をする。
それよりも今エミヤ・オルタが気にしているのは、気絶しているパッションリップについてだ。今でこそ拘束から解放された衝撃で無力化されているが、本来は並みのサーヴァントなど歯牙にも掛けず、やり方次第では複数のサーヴァントすら瞬殺できるポテンシャルを持つ怪物だ。
謂わば手負いの獣、或いはそれ以上に危険な代物。リスクを拒む傾向にあるエミヤ・オルタは咎めるような視線を以て修司を問い詰める。
「どうするも何も、彼女はメルトの姉だ。一緒に居させてやりたいと思うのは、そんな不思議な事か？」
「ソイツらを人間と同じ枠組みに当て嵌めるつもりか？　アルターエゴはＢＢによって産み落とされた複数神性保有体、何が切っ掛けで暴れだすのか分からんのだぞ」
「大丈夫、彼女達はそんな事にはならないさ」
「――――それは、なんの根拠を以て口にしている？」
「勘」
即答で第六感だと豪語する修司に、エミヤ・オルタは付き合ってられないと嘆息し、再び礼拝堂の奥へと消えていく。余程苛立っていたのだろう、蟀谷（こめかみ）に幾つもの青筋を浮かべているのを、円卓の騎士達は見逃さなかった。

「全く、相変わらず頭が固い奴だなぁ。いや、カルデアにいる奴よりも一回り以上固くなってないか？」
「しかし、確かに彼の言う通り、些か油断が過ぎるのではないですか？　如何に無力化が出来たとしても、相手はアルターエゴ。彼女達がいれば余計な混乱が起きるのでは？」
「まして、これもＢＢの策略である可能性も否めない以上、懐に入れるのは剰りにも危険かと」
「いやー、それは無いんじゃないか？」
「と、言いますと？」
「あのＢＢって奴、どうにもポンコツ臭がするんだよ。妨害を目論んだとしても、手抜き感が何処と無くあるし、もし本気でアイツが此方を邪魔をするつもりでいるなら、もう少し後詰めを確りしていた筈だ」
　三騎士からのそれぞれの追求に、修司はなんて事ないように答えて見せた。何れにせよ、メルトリリスの姉であるパッションリップを捨てるつもりはない。一度助けた以上は最後まで責任を取るつもりまでいる修司に、円卓の騎士達はそれ以上の言葉を紡ぐことは出来なかった。
「それに、仮に万が一があったとしても、その時はお前らに頼るつもりだ。アテにさせて貰うぞ、円卓の騎士」
　更に、そんなトドメの一言を投げ掛けられては彼等に断りの意思を示せる筈もなかった。自身が一番の強さを持っているのにも関わらず、それに慢心せずに他者を頼る強かさ。ある種のカリスマ性を持つ修司にノーと言える者はこの場にはいなかった。
「――――致し方ありませんね。では、我等円卓の騎士、改めて貴公にこの剣を預けましょう」
「おう、素直に助かるわ」
　如何に過去に因縁のある相手だとしても、それはそれとして手を組める強かさを持てるのは、上司兼後見人である黄金の王の薫陶によるものか。何れにせよ、三人の円卓の騎士は一時の主として申し分のない相手

を見付ける事が出来た。
そんな彼等をメルトリリスはパッションリップの側で静かに見守っていた。……と、そんな時。
「う……うぅ……ん」
「リップ、起きましたか？」
「あれ、此処は……メルト？　あれ？　私、どうして？」
「お、起きたか」
「どうやら目覚めたばかりで少し混乱されている様子、先ずは落ち着かせて体調の有無について訊ねましょう」
「だな」
自我の拘束から解放され、気絶した状態から漸く目を覚ましたパッションリップ。メルトに心配されながら起き上がる彼女の焦点は、目覚めたばかりの影響か、少し泳いでいた。
「はじめましてパッションリップ。俺は白河修司、訳あってカルデアから派遣されたマスターだ」
「貴方が……？」
「あぁ、訳あって自我の拘束された君と少々やり合う事になったが一応加減はしてある。体の何処か痛みや不調を感じたりする部分はないかい？」
修司の自己紹介により彼女の視線は修司に寄られ、リップの混乱を招かないように言葉を選びながら自己紹介をする。すると、徐々にパッションリップなる少女は記憶と自我を取り戻すと、アワアワと動揺しながら土下座をする勢いで頭を下げてきた。
「ご、ごめんなさい！　私、皆さんにご迷惑をお掛けしてしまったみたいで……！」
「あぁ、その事に関しては俺達から何かを言うつもりはないよ。あの場にいた全員、誰も戦ったのは君自身の意思だとは思っちゃいないよ」
「で、でも……！」
「レディ、貴女の事はメルトリリスから聞き及んでいます。自我を縛られ、己の意志すら奪われた貴女を責めるのは我々の騎士道に悖る。

どうか、顔を上げてください。その顔は太陽のごとく微笑みを浮かべるこそ相応しい」
「――――あ」
ガウェインの言葉で前向きになり始めるパッションリップを見て、修司は安堵した。彼女達アルターエゴはＢＢという一人のＡＩから生み出された彼女の別側面の存在、故に全うな英霊とは根底から異なっているが、それでも彼女達は一つの命として此処にいる以上、無下には出来ない。
自分の行いを一番身体を張ったガウェインが赦した事で、パッションリップはそれ以上自分を追い詰める言動はせず、半ば消沈する勢いで落ち着きを取り戻した。
「その……ありがとうございます。私を止めてくれて、私を助けてくれて、ありがとうございます」
「どういたしまして」
「お気になさらず、レディ」
「メルトも、ありがとうね」
「別に、私は何もしていませんから」
「――――あれ？」
「ん？　どうかしたのか？」
改めて感謝の言葉を口にするリップに満足する修司とガウェインだが、彼女がメルトの様子を見て首を傾げている。一体どうしたのかと訊ねる修司にリップは意味深な事を口にした。
「メルト、もしかして……〝欠けている〟？」
「なに？」
「――――」
欠けている。そう口にするリップに、メルトは気まずそうに目を反らした。初めて耳にしたメルトの状態、気で感知しても分からなかった修司は再度リップに訊ねようとすると……。
「ど、どうして此処に、アルターエゴがいるんですかァッ!?」
眼鏡の職員が突然割って入ってきた。

◇

「あ、あああのあのあの、この度は白河修司様の前で無礼な態度をしてしまって、誠に申し訳ありませんでしたー！」

礼拝堂、安全地帯として利用していた修司の前で、今まで気絶をしていた眼鏡の職員はとても畏まった様子で頭を激しく上げ下げしていた。

幾ら修司がカルデアからの増援だとしても、この畏まりっプリは不自然だ。しかし、対する修司本人もこんな畏まられる心当たりがないようで、目を丸くさせている。

「えっと……レディ？　どうしてそう畏まる必要があるのです？　確かに彼はこの特異点を修復させる為に駆け付けた救援ですが、其処まで下手に出る必要はないのでは？」

「な、何を言っているんですか!?　このお方は現代の地球の科学技術のシェアを半数以上独占している〝Ｕ．Ｌ．Ｃ．〟の宇宙開発科学技術部門の統括！　総責任者であると同時に超絶一流の技術力を持つ白河修司様なのですよ!?　わ、私程度の人間が気安く顔を合わせるのも烏滸がましい……！」

「えぇ……」

「当の本人が一番困惑しているみたいですが？」

そう言えばそうだった。目の前の女性職員――――マーブルの口から出てきた宇宙開発云々の役職名に修司はこの世界での自分が結構な大物であることを思い出した。

とは言えそれはあくまで役職に過ぎず、この世界の自分も他人に此処まで畏れられる事を由としない筈。

「し、修司様は数多くの有能な部下を抱えているだけでなく、修司様ご自身も前に出られる現場主義！　彼の手掛けた発明の数々は、世の中の表に出ることは少ないですがその影響力は凄まじく、カルデアでもその恩恵に肖っていると聞いています！」
「――――なんだって？」
　マーブルから初めて聞かされる情報に、流石の修司も少なからず驚きを覚えた。ダ・ヴィンチやロマニからそんな話を聞いた事は一度としてないし、他のカルデアスタッフ達からも耳にした事はない。
　……いや、そう言えばまだカルデアがレフの細工によって爆破され、多くの機能が停止されていた頃、システム復旧の為に施設の機器を弄っていた時に妙な既視感を覚えた。
　アレは、自分が勤めていた会社から流用されていたモノだったのか。特異点修復の旅やらで忙殺されてしまっていた違和感が、今更になって甦り、修司は難しい表情で思考を巡らせる。

（……じゃあ、なにか？　この世界の俺はカルデアと――――いや、下手をしたらその責任者と通じていた可能性すらあったって事か？　オルガマリーちゃんの父親である、マリスビリー＝アニムスフィアと）
　いや、流石にそれは思考を飛躍させ過ぎか。仮にこの仮説が事実だとして、それならば上司であるギルガメッシュ王にも話が通っている筈。白河修司という人間は物事の筋道は極力通す男だ。上役の意見も訊かず、勝手な行動をする事は滅多にしない筈。仮にしたとしても、２４時間以内には詳細を纏めたデータを王に送っている筈だ。
　益々、この世界の自分という存在が無視できなくなりつつある。自分の事なのに面倒だなと嘆息しながら、それでも今はやるべき事がある筈だと気持ちを切り替え、セラフィックスの職員であるマーブルに目を向ける。
「まぁ、その話はおいおい訊くとして。先ずはマーブルさん、貴女が生きていた事を嬉しく思うよ」
「ひ、ひゃい！」

「ついては、この電脳化しつつあるこのセラフィックスについて、知っている事があったら何か教えてくれないか？」
「……」
「何でもいい。今日まで異変の起きた出来事、自分で感じ、見たモノをどんな些細なことでもいいから教えて欲しいんだ」
「そ、それは……ごめんなさい。私、ずっと他の人達と管制室にいましたから」
俯き、自分は何も知らないと口にするマーブルに今度は修司達が口を閉ざした。あれだけ大変な思いをしたにも関わらず、何の情報も提供できないと来た。
だが、彼等は別にそれで彼女を責めようとは思わなかった。彼女自身、この異変の中を生き抜いた数少ない生き残りであり、修司がこの特異点へ赴いた目的の一つ。
何より、情報云々の話はあくまで彼女が知っていたらいいなー。という程度の認識であり、其処まで重要視はしていないからだ。知らないのなら、自分の足で調べればいい。今の自分にはそれが出来るのだから。
「――――分かった。なら、貴女は此処で暫く休んでいるといい。ガウェインとエミヤを着けておく、この二人がいれば大抵の事なら何とかなるだろう」
「おや？　私は今回お留守番で？」
「お前、まだダメージ引き摺ってるんだろ？　平気な顔をしているが、失った気の量は誤魔化せないからな。引き続きエミヤも置いていくから、今回は休んでおけ」
その後、マーブルの話を聞き入れた修司は改めて部隊を二つに分けて行動を再開する事にした。探索は主に自分とランスロット、メルトリリス、そして……。
「はいはーい！　今回は私、私も行きまーす！」
「はぁ、やっぱりこうなったか」
宮本武蔵。駄々を捏ねて連れていけと喚く彼女と――――。
「んじゃ、取り敢えずはこんな所だな。リップちゃん、辛くなったら

ちゃんと言うんだぞ」
「は、はい！　ありがとうございます！」
新たに加えたアルターエゴ。パッションリップを引き連れて修司は再び電脳空間へ踏み入れる。
ただ、安全地帯から出る際……。
「――――エミヤ、分かっているとは思うけど」
「分かっている。マーブルという女の監視、だろ」
「あぁ、頼んだ」
エミヤ・オルタにある頼み事を任せたのは、果たして疑念か確信か。ただ一つ言えることは……。
白河修司は、生き残った生存者達をある意味で危険視していた。